空っぽの姫と溢れた艦娘

緋寺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦いの中で姉を失い、自らも死の危機に瀕していた春雨。しかし、死を覚悟した瞬間、彼女の身体に異変が起きるのでした。

２０２２／１２／０５：完結

目次

孤独の中で 1
溢れたモノ 9
もう1人の姫 18
溢れた仲間達 25
みんな仲良く 33
深海棲艦とは 40
本来の居場所では 47
要であり不要 54
幸せアレルギー 61
連鎖するトラウマ 68
焦燥、憔悴 75
友達 82
帰還した仲間 90
秘密裏の作戦 98
精神の限界 105
艦娘としての 112
交錯 119
その判断は如何に 127
初めての対話 135
再会する姉妹 143
未知なる外交 151
艦娘と元艦娘 159
施設を知り 167
再来島 174

人深対談 182
空っぽの姫 190
対話を終えて 197
楽しく生きる 204
する側される側 211
友達の姉妹 218
話がわかる人 225
旅する穏健派 233
謎の同胞 240
朗報を届けに 247
施設から鎮守府へ 254
帰路にて 262
未知の敵 269
姫の力 277
鹵獲された槍持ち 284
姉にするために 291
薄雲の過去 298
大敗の後 305
好転か否か 313
艦娘への憎悪 321
ホットライン 328
少しずつ前へ 336
槍持ちの素性 343
劇的な変化 350
余計な心配 357

怒りの理由 365
繋がる回路 372
姉の真実 380
戦いはまだ 387
きっかけは何か 394
最後の詰め 401
理不尽への怒り 408
新しい自分 416
それは恥で無く 423
頼れる先輩 430
戦いから離れて 437
施設の表側 444
対等な対話 452
第三の選択肢 459
共通の敵 466
まだ謎は深く 473
旅人の本能 480
ひょんな来客 487
人懐っこいイ級 494
戦艦との別れ 501
全幅の信頼を 508
新たな仲間 515
新たなる調査隊 522
怒りの対象 529
心通わせる仲間 536

敵意の無い威圧 543
戦艦の目 550
艦娘再来 557
本質は曲がらず 564
溜め込んだ感情 571
ストレスの限界 578
最初の溢れた者 586
対面 594
叢雲の答え 602
未知の海域にて 609
戦艦の帰投 617
目覚めを待つ 624
その者達は仇 631
施設の平和のために 638
対話再び 645
同じ場所を見る者 652
次に向けて 659
第二次調査隊 666
大将の艦娘 673
山風の不安 680
艦娘の心 688
奇跡の船 695
愚かな過去 702
堕ちた白露 709
その声は届くか 717

湧き上がる何か 725
姉との決別 733
白露の謎 740
一歩先へ 747
騒然とする施設 754
人間への戒め 761
悔恨 768
目覚めつつある力 774
海風の希望に 781
絶望を塗り潰し 788
壊れた海風 796
海風から山風へ 803
何が最善か 810
痕跡を目にして 817
疑問であるが故 824
要らぬ過去は捨てて 831
再びの悪寒 838
覚悟の上で 846
戦場に集う者達 853
古鷹の実力 860
辿り着く真相 867
想像の力 874
白露の中には 881
自分の仇 888
姉としての意地 895

春雨の神業 902
白露の特性 909
選択 916
画面越しの再会 924
追い求めるものは 931
施設の一員として 938
泥の恐怖 945
『観測者』 952
器と中身 959
姉妹姫の気持ち 966
彼女と彼 973
真実を知っても 980
４人分だからこそ 987
束の間の平和 994
最高の後ろ盾 1001
海の記憶 1008
平和の維持 1016
大将の艦隊 1023
春雨と海風 1030
さらなる敵の存在 1037
夜襲 1043
折れぬもの 1051
強者 1058
魂の混成 1065
その中にいる者 1072

秘めた鬼 …… 1079
駆逐艦達の意地 …… 1085
北上の力 …… 1093
仲間がいるから …… 1100
謎の潜水艦 …… 1108
悪意の塊 …… 1116
不安の排除 …… 1123
海中の泥 …… 1131
姉と妹 …… 1138
その脅威を排除して …… 1145
理不尽な悪夢 …… 1152
仇敵との関係は …… 1159
古鷹の選択 …… 1167
久々の来島 …… 1174
最悪を知る者 …… 1181
叢雲と古鷹 …… 1188
黒幕の狙いは …… 1195
科学者明石 …… 1202
対策は常に …… 1209
叢雲の謎 …… 1217
取り込まれた悪意 …… 1225
その存在のおかげで …… 1233
同じ境遇の者 …… 1240
夜の密談 …… 1247
黒幕の狙い …… 1254

贖罪など必要なく 1261
ドロップ艦 1268
見守るだけでなく 1275
悪意 1283
侵蝕 1291
白露も知るモノ 1299
特別な悪意 1307
兆 1315
光の道 1322
1人で2人の姫 1330
仲間 1337
最高の援軍 1345
完膚なきまでに 1352
本当の目的 1359
忍び寄る者 1366
次に向けて 1373
心の力 1380
決意の力 1386
痛みを知る者 1393
狂気の科学者 1400
一致団結 1408
克服 1415
目醒めし者 1423
開き直るためには 1430
人生の先輩 1438

真実を知り 445
ジェーナスの苦悩 452
２人の覚悟 459
２人の安堵 467
平和のためには 474
古鷹の前進 481
束の間の休息 488
共有される秘密 495
兵器としても 502
珍しい雨 508
高高度からの罠 515
因縁の相手へ 523
優位はあれど 530
迷い 537
一欠片の容赦も無く 545
怒りを乗せて 553
叢雲の覚醒 560
哀れな人形 567
同郷の友 575
無感情の２人 581
その危機を救うのは 588
それは疑問ではなく 596
ヒトのカタチ 603
残された跡 610
戦いは終わっても 617

危機に立ち上がる ―― 624
狂科学者来島 ―― 630
山風の成長 ―― 637
それは正しいこと ―― 644
解放の薬 ―― 651
尋問 ―― 658
示された道 ―― 665
取り戻した休息 ―― 673
心の休息 ―― 680
笑顔を守る者 ―― 687
プライド ―― 694
正反対の在り方 ―― 701
救いの女神 ―― 708
鍛錬の日々 ―― 714
いざ出向 ―― 721
その鎮守府には ―― 728
内通者 ―― 735
手段選ばず ―― 742
風となる者 ―― 749
その足の先に ―― 756
司令を護る者 ―― 763
秘書艦である意味 ―― 770
あの姉妹の1人 ―― 777
この鎮守府のやり方 ―― 784
涙の再会 ―― 791

結束 …… 799
姉妹とは何ぞや …… 806
自力で答えに …… 814
顔を合わせるため …… 821
荒潮来島 …… 827
因縁の対面 …… 834
まだ残る謎 …… 842
再来 …… 849
黒幕の特性 …… 856
最初の器 …… 863
彼との協力 …… 870
無理難題 …… 877
優しすぎるが故 …… 884
その溢れた感情は …… 891
繭の謎 …… 898
確実に着実に …… 905
依存 …… 912
悲しい笑顔 …… 919
恐怖に呑まれた者 …… 926
一員として …… 934
各々のすべきこと …… 941
理由のない恐怖 …… 948
潮の選択 …… 955
記憶より …… 963
明石と大淀 …… 970

遠縁の妹 ―― 1977
隙間時間 ―― 1985
擬似深海棲艦化 ―― 1993
対策の対策 ―― 2001
溢れる激情 ―― 2009
将を射んと欲すれば ―― 2016
その道は消えて ―― 2023
真紅の狂犬 ―― 2032
怒りの理解者 ―― 2040
身を滅ぼす怒り ―― 2049
道を化かす者 ―― 2058
その声は届くか ―― 2066
憤怒を塗り潰し ―― 2074
春雨の怒り ―― 2082
心折る尋問 ―― 2090
笑顔の拷問官 ―― 2097
二度目の溢れ ―― 2105
怒りの向き ―― 2112
天秤 ―― 2119
残った傷 ―― 2128
豹変した春雨 ―― 2135
不要な力 ―― 2142
それぞれの立ち直り方 ―― 2149
それぞれの進み方 ―― 2157
準備を重ねて ―― 2164

会えない理由 171
それぞれの道で 177
可能性の塊 184
互いの譲歩 191
3人の道 198
黒幕の居場所 205
泥の意思 212
滾る怒りの抑え方 219
植え付けられた罪 226
その対策は 233
今やりたいこと 240
あちら側の策略 247
嫌がらせ 254
決断の時 261
姉姫の苦悩 269
怒りの発露 276
子供好きの北上 283
3人の努力 290
捻じ伏せる決意 296
根幹との再会 303
戦力は揃い 311
前哨戦前夜 318
準備を終えて 325
小さな空母 332
大混戦 339

練巡の力 ―― 346
岩礁帯の罠 ―― 353
解放の刃 ―― 360
恐怖を与える者 ―― 368
仲間同士 ―― 375
悪意の雨 ―― 382
炎に油 ―― 388
挑戦状 ―― 395
望む存在へ ―― 402
影響の内外 ―― 409
前哨戦 ―― 416
無差別の悪意 ―― 424
北上の手品 ―― 431
掌の上 ―― 438
死を受け止め ―― 445
前哨戦を終えて ―― 452
水葬 ―― 459
どちらが外道か ―― 466
これからのこと ―― 473
決戦に向けて ―― 481
悪性を善性に ―― 488
新たな生 ―― 495
生まれ変わった龍驤 ―― 502
最も知る者 ―― 508
和解 ―― 515

それに納得して ―― 522
まだある悩み ―― 528
特殊な亡霊 ―― 534
自分との戦い ―― 541
屈服させる教育 ―― 548
主導権を持つ力 ―― 555
次の段階へ ―― 563
監査に向けて ―― 570
監査役 ―― 577
割り切る方法 ―― 584
施設の在り方 ―― 591
旧友との再会 ―― 598
施設の者達 ―― 605
監査の結果 ―― 612
監査を纏める者 ―― 619
春雨の弱点 ―― 626
艦娘としての春雨 ―― 632
見つめ直して ―― 639
互いの成長のために ―― 646
決戦のために ―― 653
同型の邂逅 ―― 660
逆恨みの進化 ―― 667
施設のために ―― 673
一致団結 ―― 679
特化した回避 ―― 686

訓練は続く　2693
生粋のサポーター気質　2700
頼り頼られて　2708
本来の風景　2714
妹姫の力　2721
協力者達　2728
事前に知るべきこと　2735
念願の帰投　2742
本来在るべき場所　2749
交流の場　2756
親善試合　2763
真の帰投　2771
心の成長　2778
特別ゲスト　2785
縁の下　2792
例外の者　2799
経験の力　2807
大戦艦の戦い　2814
笑顔の帰還　2821
その身体には　2828
影響は大きく　2835
知らざるを得ないこと　2842
持つべきものは　2849
侵蝕を受けた者には　2856
体内の罠　2863

姉姫の夢 …… 870
遺された卵 …… 876
見据えるのはその先 …… 883
不安を振り払い …… 890
液化した望み …… 896
水と油を乗り越え …… 903
持ちつ持たれつ …… 910
熱を持った対策 …… 917
阿鼻叫喚の治療 …… 924
治療は施設へ …… 931
紅く染める治療 …… 939
その効果は …… 948
頼るのならば姉を …… 955
細胞の結果 …… 963
中の問題 …… 970
最後の戦いに向けて …… 977
最後の1日 …… 984
施設のために …… 991
末妹の悩み …… 998
それぞれの決戦前夜 …… 1004
最後の戦いへ …… 1011
元凶の2人 …… 1018
仏艦の引き金 …… 1025
防衛戦 …… 1032
天性の才能 …… 1038

加護 ―― 045
侵蝕せずとも ―― 052
依存の力 ―― 059
強すぎる姫 ―― 067
始末以外の結末 ―― 074
依存の在り方 ―― 080
獅子搏兎 ―― 087
真骨頂 ―― 094
靄を掻き消して ―― 101
厄介な姫 ―― 109
Ａｕｓｂｉｌｄｕｎｇ（教育） ―― 115
監査の力 ―― 121
祝福の刃 ―― 128
Ｓｐｅｚｉｅｌｌ（とっておき） ―― 135
孵化 ―― 142
怨敵 ―― 149
理性燃やして ―― 156
親友といえど ―― 162
姉妹姫の苦悩 ―― 169
仲間を守る拳 ―― 175
引き金は旧友 ―― 182
消耗が重なり ―― 189
主の力 ―― 196
心に刺さる棘 ―― 203
親心 ―― 210

艦隊集結 ―― 217
感極まる再会 ―― 243
楽しい時間を経て ―― 231
最終決戦 ―― 238
泥の傀儡 ―― 245
トリガー ―― 252
その目は何処に ―― 259
舐めるような視線 ―― 266
泥鯨 ―― 273
敵潜水艦の群れ ―― 280
壊れた心の埋め方 ―― 287
道を開き ―― 293
最後の姫 ―― 300
勝つためには ―― 307
思いを背に ―― 313
拠点を守る者 ―― 320
別個体の春雨 ―― 327
涼風の奮起 ―― 334
異様な強さ ―― 341
思いやりの焔 ―― 348
防波堤の戦い ―― 355
信頼からの本気 ―― 362
防空巡棲姫の力 ―― 368
空母の意地 ―― 375
芽生えた感情 ―― 382

解放 390
代弁者 397
固定観念 333
本来の進化 340
導く者 410
代弁者の救出 416
黒幕の核 424
共通の策 430
皆の目に映る道 436
猛攻 433
泥の巨人 443
勝ち筋を探して 449
巨人の弱点 456
決死の攻防 463
降り注ぐ泥 470
負の感情の塊 477
最後の領地 484
天を穿つ 491
限界を超えて 497
覚悟 504
最後の干渉 510
その目に映る道 516
自棄 522
仲間が開く道 529
最後の導き 536
355 544 553 563 529 352 235 163 510 350 434 973 491 348 434 777 347 034 633 456 344 934 433 436 343 034 243 416 341 034 033 973

導かれる者 ―― 3
全てが終わり ―― 5
心穏やかに ―― 9
最後の話し合い ―― 13
ただいま ―― 35
お墨付き ―― 58
満たされた姫と賑やかな艦娘 ―― 59

孤独の中で

その艦娘――春雨は、ボロボロになりながらも夜の暗い海を駆けていた。背中に背負った艤装からは煙が上がり、定期的に火花を散らす。稀に小さな爆発まで起きていた。

本人も身体の至るところから血を流し、海を駆ける脚には力が入らずフラフラ。本来の速力など出すことが出来ず、いつ止まってしまってもおかしくない程だった。

「う……うぅ……姉さん……姉さん……」

泣きそうな声で姉を呼ぶが、反応はない。むしろ周りには誰もいない。春雨はたった1人で戦場から撤退していた。

彼女の姉達は、先程までは一緒にいた。しかし、想定を超えた敵の出現により、なすすべなく無残に散った。春雨の目の前で。

春雨は姉達の死に際の顔が忘れられなかった。死の恐怖に歪んでいるようなことは無かったが、悔しそうに、しかし明日を繋ぐために、彼女に最後の望みを託して逃がそうとしてくれていた。頼んだぞと、死に行く者の濁った瞳で。

しかし、残念ながら彼女も重傷を負ってしまった。簡単には逃してもらえない。姉達が命を懸けたにもかかわらず、敵のその手は、彼女に届いてしまっていた。その場で死ぬことは無くとも、いつ死んでもおかしくない程にまでやられている。

だからだろう、瀕死の春雨を追ってくることすら無かった。春雨は振り返ることが出来なかったが、あの時、あの敵は春雨の背中に向けて笑みを浮かべていたことだろう。

「……ごめんなさい……姉さん……春雨は……もうダメかもしれません……」

何も無い海の上、独りごちる。その声は暗闇に吸い込まれるように消え、誰の耳にも届くことはない。

しかし、謝罪の言葉は嫌でも出てきた。せっかく逃してくれたのに、志半ばで力尽きてしまいそうだ。鎮守府には妹達も残しているのに、姉の最期を伝えるためにも戻らなくてはいけないのに、脚がすぐ

にでも止まりそうだった。
痛い。疲れた。寒い。目が霞む。辛い。もう終わりたい。楽になりたい。負の感情ばかりが湧き上がる。それがいけないことだとわかっていても、折れた心ではその感情は止まることが無い。
「……ケホッ……」
少女が小さく咽せると、口から血の塊が吐き出された。それはベチャリと海に落ちた後、そのまま何も無かったかのように掻き消える。それを見た彼女は、いよいよ死を覚悟した。
もう自分が今、何処にいるかもわからない。本当に鎮守府に向かっているのかも判断が出来ない。何も無い、本当に何も無い海の上。この消耗し切った身体では、方向感覚は疾うの昔に壊れてしまっている。
事実、彼女の向かう先に求める物は無かった。望まぬ場所であてもなく彷徨い続けるだけ。その間も消耗は止まらない。
「……誰も……いない……」
死を間近にして、強烈な孤独感に苛まれた。一緒に戦っていた姉達はもういない。呼んでも誰も来ない。手を伸ばしても届かない。もし助かったとしても、あの姉達とは、二度と逢えない。
艦娘という種族である都合上、同じ顔の別人はいるかも知れないが、それは当然この春雨が慕っていた姉達とは違うモノだ。むしろ、姉が死んだことを否が応でも思い出すことになって、余計に心が痛い思いをするだろう。
それを考えてしまった瞬間、何処にそんな力があったのだろうと思えるほどに身体が動いた。止まっていたら孤独感に押し潰されてしまいそうだった。
だから駆けた。縋れるモノがあると信じて、ガムシャラに駆け抜けた。心の何処かにそんなことはもう無いのだと理解していても、その脚を止めることは出来なかった。
「誰か……誰か……誰かいませんか……！　敵でも味方でもいい！
誰か……」
敵の存在にすら追い縋った。自分の死に際を見届けてくれるだけ

でいいと、介錯してくれても構わないと、春雨は霞む目を凝らして、機能を失っていく耳を澄まして、その存在を求める。
無論、反応は何も無い。叫び声も暗闇に溶けていく。夜なのも悪い。光すらも無いため、孤独感をより引き立たせてしまった。
結果として、体力はさらに消耗することになった、底力と言えば聞こえはいいが、それは滅びに向かう最後の輝き。少女は最後の力すら振り絞ってしまった。
しばらく進んで止まってしまったら、もう1歩も動けない。背中の艤装がうんともすんとも言わなくなった。海の上に立つことも、そろそろ出来なくなるだろう。
そうなったら本当の終わり。ただ沈むだけ。何も無いこの海のど真ん中で、たった1人で散っていく。その姿を仲間に知らせてくれる者は、ここにはいない。
「もう……ダメ……」
死を悟った少女は、海面に膝を突き、ガックリと項垂れる。そうしてしまったことで、脚だけではなく身体全てがピクリとも動かなくなってしまった。指先1つ動かない。そのせいで、最後まで握りしめていた壊れた主砲も、海の底へと落としてしまった。
「……怖い……怖いよ……死にたくないよ……」
見る人が見れば、戦乙女の端くれたる艦娘なのに往生際が悪いと嘲りそうだが、力を持ち、死と隣り合わせの戦いに身を投じていたとしても、春雨の見た目はそのままずばり女の子。身体に心が引っ張られるのはどんな生物でも同じであり、春雨も例に漏れずに見た目の年齢通りの精神構造をしていた。
純粋で、大人しく、真面目。本来なら戦いには向かないような性格。だが、世界を侵略者の手から守るため、勇気を振り絞り続けたのだから、最期にこんな言葉が出ても誰も責めやしない。そもそも責める者すらこの場にはいないのだが。
「寂しい……寂しい……独りは嫌だ……どうせ死ぬなら、誰か……誰かに看取られたかった……」
再び孤独感が舞い戻ってきた。死の恐怖よりも、誰もいないことの

恐怖の方が強くなっていた。
あの戦場で自分も死んでいたらまだ良かったのにと考えてしまう程に、春雨は追い詰められていた。それは、本来持ち得なかった狂気を生み出してしまいかねないくらいに。
「嫌だ……独りは嫌だ……嫌だ……ハハ……寂しい……こんな終わり方なんて……アハハハハ……」
そして、春雨は壊れた。孤独に耐え切れず、恐怖に耐え切れず、心が壊れた。自暴自棄から堪らず笑いが溢れてしまった。
「ハハ……ハ……」
しばらく笑った後、ついに笑う力も尽きた。ただ心が壊れ、孤独のまま死ぬ。笑い声すら無くなると、この空間にあるのは虚無だけだった。
「ハ……は……？」
ここで春雨は自分の異変に気付いた。もうピクリとも動かない手が、少しだけ動いた。しかし、何かがおかしい。身に着けていた手袋の向こう側、手の甲に、チリチリと痛いような痒いような、しかし不快ではなく、むしろ心地よいと思えるような不思議な感覚。
その隙間から見える素肌。そこから黒い泥が見えた。
当たり前だが、春雨にはそんなものを手袋の中に入れるような趣味は無い。そもそもが初めて見るモノ。
その泥は、少女の体力が失われれば失われるほど、その面積を増やしていく。死にかけだからか、もう手袋から溢れ出し、そのまま腕を包み込もうとしていた。
「なに……これ……」
不思議と泥に塗れていく自分の腕を見ていると落ち着いた。姉達から思いを託されたのにもかかわらず、何も出来ずに死んでいくことを、より無様に演出してくれているのだと、壊れた心が落ち着いていくようだった。
艦娘として戦いの中で死ぬのではなく、得体の知れない泥で死んでいく。それも、たった独りで。それが実に滑稽で、もっともっととその侵蝕を望んでしまう。

「アハ……こんな死に方……惨めな私には……お似合いかも……」
望んだ途端、泥はより早く拡がっていく。身体全てを包み込むまではそう時間は必要が無かった。
手袋から溢れ出した泥は腕を包み、肩から服の中へ。胸も、腹も、脚も、あっという間に呑み込まれていく。
その過程で、少女は全てを失った。今身につけている衣服も、戦うための艤装も、そして、艦娘としての尊厳も。
「う……アア……もういいや……これで……終ワレル……」
最期の言葉を口にした瞬間、泥は口内にも拡がり、春雨の体内(なか)まで侵していく。苦しさすら感じない。こんなに心地よい死ならば、抵抗せずに受け入れようと、春雨は目を閉じてその場に倒れ伏した。
その状態でも、手の甲が発端となった黒い泥は滾々と溢れ続け、春雨の身体を覆い、体内で暴れ狂う。溢れた先から塊、さらにそれを上塗りし、ついには人の形すら失われ、全てを包み込む球体となる。
春雨は真っ黒な繭となって、ゆっくりと沈んでいった。

繭となった春雨は、海中でも死ぬことは無かった。しかし、外から内まで余すところなく侵し尽くした黒い泥は、春雨自身の在り方を書き換えていく。
春雨は深海棲艦になろうとしていた。
生まれ変わろうとしている春雨には、その身体に起きていることが何も自覚出来ない。痛みもなく、むしろ心地よい眠りの中、知らず知らずの内に本来の在り方から反転させられていた。
その中で春雨は、その心地よさから幸せな夢を見ていた。姉達と鎮守府で共に生活し、寝食を共にする夢。今はもう失われた、幸せだった現実。
それは死の間際の走馬灯と感じても無理はない。しかし、今の春雨には、何ものにも代え難いくらいに縋り付きたい光景。孤独で心が壊れたのだから、姉の温もりは春雨にとっては強すぎる程の癒しであった。それが夢だとわかっていても、いや、むしろ夢とわかっているか

らこそ、永遠にここに居座りたいと思える程に。
しかし、その夢も長くは続かない。生きている限り、目覚めの時は必ず訪れる。幸せな夢は、すぐに現実と違わなくなる。
姉達と共に出撃し、強大な敵と立ち向かい、そして自分以外の全員が次々と散っていく光景を夢の中でも見せられた。今度こそはこうはならないと力を尽くしても、やはり結末は同じだった。1人、また1人と姉が散っていき、再び強すぎる孤独感に苛まれる。
「嫌だ……嫌だ……独りは嫌だ……」
現実だけでなく、夢でも同じことを呟くようになった。溢れ出した感情は泥となり、夢の中ですら春雨に纏わり付く。
現実と夢がリンクする。表も裏も、何もかもが塗り潰された。
「嫌だ……嫌ダ……嫌ダァァ！」
その叫びに呼応するように、春雨の目の前にヒビが入った。夢の終わり、目覚めの時。同時に繭にもヒビが入り、まるで卵が孵るかのように崩れていく。
そこから現れたのは、身体の全てを真っ白に染めた春雨だった。外の空気を感じ取り、閉ざしていた目蓋をゆっくりと開くと、今まで真紅だった瞳は青白く輝く深海の瞳へと変化していた。
「っ……あ……私……私は……」
追い縋るように腕を伸ばしたことで、自分の身に起きたことが理解出来た。真っ白に染まった腕。結んでいた髪も今は解けており、髪の色も変わったことが目に飛び込んでくる。
まるで、今まで自分が戦ってきた深海棲艦と同じ。自分は深海棲艦になってしまったのだと自覚した。
そう気付いた瞬間、壊れた心が真っ黒に染まっていくかのようだった。身体に合わせて心までも侵略者になろうとしていた。春雨にそれを止める力はなく、嫌でも受け入れてしまう。
「あ、ああっ……私……私ぃ……」
「落ち着きなさいな」
頭を抱える春雨に、何者かの声が届く。声の持ち主の方を向くと、今の春雨と同じような髪も肌も真っ白な女性がそこにいた。

今までに顔を合わせて戦ったことがないタイプの深海棲艦。しかし、その存在を春雨は知っている。鎮守府で名前も聞いたし資料も確認した。

コードネーム『飛行場姫』。それが人類が決定したこの深海棲艦の名である。

「落ち着いてアタシの言葉をよく聞きなさい。アンタはまだ堕ち切ってないの。ここに運び込まれたんだから、ちゃんとした形にしてあげる。だから、今からアタシが言うことを、何の疑いもなくやりなさい。いいわね？」

飛行場姫からの言葉に、春雨は小さく頷いた。訳がわからない状態ではあるが、この言葉は疑わずに従うべきだと、本能的に理解した。むしろ、この深海棲艦は自分よりも上位のモノであるとも。

「周りの繭を集めて、その上に手を置きなさい。そして、それを取り込むイメージを持つの。いい？　繭はアンタ自身から溢れたもの。それが取り込まれれば、アンタはアンタとして形を持つ。本能のままに暴れ回る同胞（はらから）とはベツモノになれるわ」

心が歪んでいく中、飛行場姫に言われた通りに周りに散らばる黒い破片を掻き集める春雨。そして、これもまた言われるがままに手を置き、破片の山を取り込むイメージ――手のひらから吸収するような、そんな感覚を想像した。

瞬間、破片は次々と泥へと姿を戻し、春雨が想像した通りに中へと取り込まれていく。その衝撃は激しく、春雨はくぐもった声をあげてしまうが、飛行場姫は耐えろの一言で一蹴。

「アタシ達みたいな最初からこちら側だった奴とアンタは違うのよね。だから、それを乗り越えられればいいの。ただのバカになるよりこっちの方がマシよ」

今の春雨に、飛行場姫の言葉をちゃんと聞いている余裕なんて何処にも無かった。自らが生み出した泥を取り込んでいくのに必死だった。壊れた心が修復されるような感覚ではないのだが、少なくとも黒く染まり歪んでいく感覚は失われていた。

そして、その全てを吸収し切ったことにより、今までで一番大きな

衝撃が身体を駆け抜けた。呼吸が止まる程の一撃に天を仰ぎ見て何度か痙攣した後、大きく息を吐く。
「っはぁぁぁ……」
「はい、お疲れ様。多少はスッキリしたでしょ。全部ぶっ壊したいとか、人間に恨みとか、何にも無いわよね？」
余裕が無いようではあるが、春雨は小さく頷いた。
飛行場姫の言う通り、今の春雨の心は黒く染まり切っているわけではなく、艦娘としてのそれも持ち合わせた不思議な状態だった。
身体は誰がどう見ても深海棲艦なのだが、だからと言って侵略者に成り果ててしまったわけでは無い。人間に害を与えたいという気持ちは一切無く、むしろ中身は艦娘のままであると言っても過言では無かった。
「どうせ聞かれると思うから先に説明しておくわ。アンタは繭の状態でここに運び込まれたの。で、こういうことにそれなりに理解があるアタシ達が保護したってわけ」
息も絶え絶えではあるためか、言われても簡単には理解出来ない春雨。それを察したのか、小さく溜息を吐いた飛行場姫が、続けて話した。
しかし、それを聞いても春雨には全く理解が出来なかった。
「ここは、アンタみたいな溢れた艦娘を保護する場所なのよ」

溢れたモノ

黒い泥に覆われて繭となったことで、深海棲艦と化した艦娘、春雨。繭から孵り、黒い感情に呑み込まれかけていたその時、春雨を保護したという陸上施設型深海棲艦、飛行場姫がそれを抑え込んだ。

今の春雨は、身体は深海棲艦だが心は艦娘という、少し歪な状態で維持されている。飛行場姫が言うには、それ以上おかしくなることはないらしい。

そもそもこうなるにあたって壊れてしまった心はどうにもならなそうではあるが、今のところ飛行場姫はおろか、春雨本人もそこには気付くことが出来ていない。

「少しは落ち着いてきたかしら」

「……はい……ご迷惑おかけしましたぁ……」

「別に。溢れた艦娘ってのは、最初はみんなそんなモンなのよ」

変化後に少し時間を貰ったことで心身共にようやく落ち着いてきた春雨は、改めて飛行場姫の方へと向き直った。ここに来て頻繁に出てくる言葉、『溢れた艦娘』の意味を聞くためである。

「あの……その溢れたっていうのは」

「ああ、そうね、そこから説明しなくちゃいけないわ。でもその前に、そのままで話すのはアンタのためにはならないんじゃないかしらね」

言われて気付く春雨。現在、繭から孵ったばかりであるがために全裸である。この施設が心地よい気候であるためか、寒さも暑さも感じていなかったために春雨自身もこの事実に気付いていなかった。

それに対して、あっと声を上げた春雨だが、その程度で終わってしまっている。壊れた心の弊害が少し垣間見えた瞬間だったため、飛行場姫は少しだけ疑問に思ったものの、今すぐ考えることでもないかとスルー。

むしろ、そんなことよりももっと凄まじい変化があるのだが、春雨自身は意図的にそこから目を背けていた。

「説明の前に、まずはアンタのお色直しからにしようかしら。さっきみたいに、私の言う通りにしなさい。何の疑いもなくやればいい」

「は、はい」
　一度出来ているため、飛行場姫の言葉に対してはもう何も疑いはない春雨。上位種かどうかなど関係無しに、既に信頼を勝ち取れているようなものである。
「深海棲艦（アタシ達）は、艦娘（アンタ達）でいう制服ってのまで含めて艤装なの。艤装は出したいと思った時に構築されるのは艦娘も同じよね？」
「そう……ですね。整備の時には手放しますけど、基本的には艤装は必要に応じてその場で構築を意識します」
　艦娘の艤装は、必要に応じて念じることにより、何も無い空間から取り出すことが出来る。ガチャガチャと音を立てながら背中に機械が構築されていくというイメージがわかりやすいだろう。
　海の近くでなくては出来ないという制限があり、取り外す場合は適切な処置をしないと艦娘本人に影響が出るという不具合もあるのだが、鎮守府で生活している艦娘達にはこの制限も不具合もあってないようなものである。
　飛行場姫が言うには、深海棲艦は艤装だけではなく今着ている制服のようなものですら艤装の一部なのだという。つまり、念じれば服まで出来るということだ。
「艤装が本人に適した形で出来るんだから、制服も適したものが出来るわ。ある程度意識したら自由なものが着れるから楽しいわよ。ここは艦娘（アンタ達）とは違うわね」
「そ、そうなんですか……確かに便利かも」
「ほら、同胞（はらから）が人間の文化を見に行くために……なんて言ったかしら、ヒャッカテンだったかしら、そこに行ったらしいのよ。その時も、人間にバレないようにおめかししたって聞いてるわ」
　これは艦娘の中でも有名な話だった。老舗百貨店に深海棲艦が買い物に来ていたという、疑問しか浮かばないような噂。それが事実だったということに驚きが隠せない。
　飛行場姫のこの態度を見るに、人間相手に敵対心を持っていない深海棲艦もそれなりにいるのだと春雨は理解した。
「ちなみに……貴女のそれは」

「実用性半分、趣味半分」
ちなみに飛行場姫の今の服装は、身体のラインを惜しみなく曝け出しているグレーのレオタード状ボディスーツである。バストサイズをより魅せるような装甲があったりする辺り、余程自分のスタイルに自信がある様子。
実用性の部分は、おそらく深海棲艦としての戦闘面であろう。無駄に服を着るよりは動きやすいことは目に見えている。右腕を包み込む装甲もそこに関わっているのだと春雨は勝手に納得した。
「アタシのことはいいから、アンタもやってみなさいな」
飛行場姫に振られたため、春雨は言われるがままに服を着るようなイメージを持った。イメージした制服はやはり、一度死ぬ間際、姉達と共に戦っていたときの、艦娘としての姿。一番馴染んでいる白露型駆逐艦の制服である。
すると、シュルシュルと潮風が糸を紡ぐかの如くインナーと制服が編まれていき、想像通りの制服――とはいかず、何処かやはり深海棲艦のテイストが見える、丈が短かったり露出度が上がったりしている制服が出来上がった。
チラリと見えた程度の腹は大々的に出てしまっているし、半袖だった制服も今やノースリーブである。トレードマークだったベレー帽も、何やら角のような意匠がある真っ黒なモノに。
「……制服は出来ましたね。でもコレ……少し考えてたのと違います」
「最初はそんなモンよ。多分、同胞（はらから）としてのアンタはそれが適した姿なんでしょうね」
慣れたらもっと自由度が利くから我慢なさいと飛行場姫。今は深海棲艦としても力が足りていないので諦めざるを得ないのだと理解した春雨。
そしてここで、春雨が目を背けていた事実を飛行場姫が突き付ける。
「あとはそれよね。痛くないでしょうけど、そのままだと生活が難しいわ」

飛行場姫が指をさす先。それは、春雨の下半身。服が出来上がったのに、そこには何もない。そう、本当に何も無いのだ。
今の春雨には、両脚が無い。
腿の中間辺りからバッサリと、まるで丁寧に切断されたかのように。綺麗に皮膚でコーティングされている辺り、深海棲艦と化した春雨はこうであると定められていたかのようだった。
このため、春雨は自力でその場から動くためには、腕の力を使って這いずり回るか、身体を回転させて転がるくらいしか手段が無い。
「……あー……どうしましょう。動けないです」
今気付いたかのような反応を見せる。やはり、意図して見ようとしていなかった。とはいえ、気付いたところでこの程度の反応しかしなかった。
しかし、その後すぐに春雨の表情が歪んでいく。
「あれ、動けない……動けないってことは……誰にもついていけない……独り……独りになっちゃう……」
「ん？　ちょっとアンタ」
「嫌、嫌だ、独りは嫌だ！　嫌ぁ！」
突然狂乱して暴れ出しそうになる春雨に対し、飛行場姫はそれを見越していたかのように飛びかかりその腕を押さえ込んだ。脚が無い分、それだけで春雨の動きは止まる。むしろ、飛行場姫に触れられていることで心を落ち着けていくような雰囲気。
ここで飛行場姫は春雨の状況が完全に把握出来た。彼女は極端すぎるほどに孤独を嫌う。そして、それ以外の自分への問題点を軽視しすぎる。
相手が同性とはいえ、全裸であるのを見られても少し声を漏らした程度で終わらせるくらいに羞恥心が欠落しているし、脚を失っていることを見て見ぬフリをしつつ、気付いたところで最初は全く狼狽えすらしなかったのは、自分のことはどうでもいいとすら思っている。
しかし、孤独に繋がることに気付いた瞬間、発狂する程にまで暴れ出してしまった。そうで無いことすらも孤独に繋げようとする可能性すらあった。

「大丈夫よ。アンタは独りじゃない。こっちを見なさい。アタシの顔を見なさい」
「ヒッ……嫌ァ……独り、嫌だぁ……」
「目を瞑ってたら見えるものも見えないわ。ほら、目を開いて」
優しく、なるべく孤独を感じさせない言葉を選び、春雨をあやしていく飛行場姫。
力んでいた力が緩んだところを見計らって、狂乱を押さえるために掴んでいた腕から手を放し、頭を撫でた。温もりを与えることで、孤独感を払拭してやることに専念した。
それだけは足りないかもしれないと、力強く抱きしめもした。流石に硬いかと胸付近の装甲はその場で消し、柔らかさのみで春雨を落ち着かせた。
「ほら、見なさい。アタシの綺麗な顔があるでしょう。アンタは独りじゃないでしょう」
「……ふぁい……」
「アンタがここにいる間は、誰かしらが必ずアンタの側にいるわ。側にいたいヤツをアンタが決めてもいい。ここではね、何をしたっていいのよ。だって、それが深海棲艦（アタシ達）なんだもの」
深海棲艦は本能のままに生きる生物。それが破壊衝動やら侵略欲やらに傾いているモノが多すぎるために、艦娘の敵、延いては人類の敵となってしまっているだけだ。
心は艦娘とはいえ、春雨も深海棲艦の端くれとなってしまったのなら、その例に漏れず本能のままに生きればいいと、飛行場姫はあやし続けた。

少しして泣き止んだ春雨から離れようとするが、まだ孤独を引きずっているのか手を離そうとしない。それ故に、飛行場姫は隣に座り直して話を続けることにした。何度も何度もその存在を確かめるように手を握ったり撫でたりしてくる辺り、これは重症である。
失われた脚に関しては少し置いておくとして、孤独を感じて狂乱す

る理由を先に話す方がいいと判断した。それは最初の春雨からの質問、『溢れた艦娘とは何か』の説明で解決する。
「さっきのアンタの質問に対して説明するわ。溢れた艦娘の意味なんだけれど」
「あっ……は、はい」
「それはね、感情が溢れた艦娘のことを指しているの。アンタから溢れ出した感情は『寂寥』……寂しいって感情ね。それが、理性をぶっ壊す程にまでになっちゃったから、溢れ出して黒い泥になったのよ」
春雨の腕から溢れ出た黒い泥は、春雨自身の感情。孤独により心が壊れたことにより、艦娘が持つ理性の壁が破壊され、その結果、心を壊す原因となった感情、寂しさが泥となって溢れ出した。
それは春雨を侵略、蹂躙し、黒い繭となって包み込み、深海棲艦へと変貌させるに至った。この施設で処置が施されていなければ、理性無き侵略者となるまで蹂躙され、艦娘春雨の心を消滅させていただろう。
「さっきの処置は、アンタの理性の壁の再構築なのよ。溢れ出した感情を取り込み直せば、壊れた理性も元に戻るもの。ただし、一度壊れたものは正しく修復されない。理性が戻るだけで感情はグチャグチャ。それはアンタがもう実感したわよね？」
小さく頷く春雨。孤独を感じた瞬間、理性の壁が脆くも崩れ去った感覚はしていたと正直に話す。ただし、しっかりと処置をされているおかげで、崩れた壁は再々構築されてくれた様子。
つまりは、一度壊れた理性の壁は、簡単に壊れて簡単に元に戻るということを繰り返すことになる。ひょんなことで突然暴れ出すし、それが済めばまた元通り。春雨は事あるごとに孤独を感じて狂乱し、それが無くなればまたいつもの調子に戻るという、恐ろしく不安定な状態になってしまったのだ。
「溢れた艦娘ってのは、何処か傷を負ってる子なのよ。アンタみたいに」
「……そう、なんですね。それが、一生ついて回る……」
「そうね、アンタの心が壊れてることはよくわかったわ。自覚症状は

無いかもしれないけど」
　それを突き付けられたことで、少しだけ落ち込んでしまった春雨。しかし、ドン底に落ちるようなことはなく、そっかで済ませてしまうのが今の春雨である。心が壊れたことで、逆に前向きになれているのかもしれない。
　自分の問題点は完全に二の次。孤独で無ければ何がどうでも関係ない。逆を言えば、ここをこうすればより孤独で無くなると助言してやれば、どんなことでもやってしまうかもしれない。
「まぁ、ここにいれば痛い目を見ることは無いはずよ。アンタは今の自分をゆっくり受け入れればいいわ」
「……わかりました……」
「とりあえず、その脚は生やしちゃいましょ」
「……わかりま……はい!?」
　正確には生やすわけじゃないけど、と後付けするものの、似たようなことが出来るということだけでも動転してしまっている。
　脚が無いことで孤独に繋がったのだから、逆に脚が得られることは孤独の払拭に繋がる。そうなると、今の春雨には喉から手が出るほど欲しいモノになるわけで、それこそ理性を失ってその手段を聞き出そうと動き出してしまう。
「脚も艤装で作っちゃえばいいのよ。ほら、例を見せてあげる」
　そう言うと、飛行場姫は装甲に包まれた右腕を春雨の前に突き出した。その瞬間、艤装が消えていくようにその腕も消えていき、最終的には今の春雨の脚と同じように、二の腕から先が失われた状態となった。
　飛行場姫も片腕が存在しない深海棲艦だった。それを補完するために、艤装の展開を腕にも実行していたのだ。まさに、春雨が求めている力そのもの。
「制服と同じよ。イメージで艤装を構築するだけ。特にアンタは、元々脚を持っていたんだからイメージしやすいでしょ。出来ちゃえば何も考えることなく歩けるでしょうし」
　そしてもう一度腕を構築する。艤装と同じように組み上がってい

き、先程まで見ていた腕がもう一度出来上がっていた。これで組み上がるイメージも出来たので、成功率も上がる。
「や、やってみます」
　意気込んで脚に集中する。制服を作り出したように脚をイメージすると、制服の時とは違って機械が組み上がっていくような音が鳴り響く。
　カチャカチャと小気味良い音と共に構築されていき、最終的には飛行場姫の右腕のような装甲に包まれたような両脚が完成していた。
「で、出来ました……！」
「よろしい。見た目が機械的なのが嫌なら、その上から何か穿けばいいわ。アタシは気にしないからこのままにしてるけど」
「そうですね……じゃあ私は」
　と言い終わらないうちに構築され、艤装の脚どころか下半身を包み隠すような真っ黒なタイツが出来上がった。繋ぎ目も見えない程分厚いおかげで、脚が作られたモノにはまず見えない。
　考えた瞬間にそれが実行されたのは、イメージの力が正常に働いているからであろう。制服がうまく作れなくともこれは完璧に作り上げられたのは、それだけ春雨が求めていたことなのかもしれない。
「へぇ、いいじゃない。ならこれで、アンタはここを自由に歩き回れるわね」
「ですね。これで独りにならなくて済みます」
　得た脚を使って、飛行場姫の前に立ち上がる。最初だけは支えてもらっていたが、元々持っていたモノの再構築であるため、バランスを考え直す必要すら無かった。
「はい。では……えっと、今日からお世話になります……で、いいのかな」
「ええ。ようこそ、歓迎するわ」
　しっかりと握手をして、春雨は新たな人生を受け入れることを決意したのだった。

真っ暗闇の艦娘としての人生は終わりを告げ、新たな深海棲艦としての人生が始まる。それが明るい道か暗い道かは、まだわからない。

もう1人の姫

施設の一員として飛行場姫に受け入れられた春雨は、まずこの施設がどのようなものであるかの説明と、施設内の案内を受けることとなった。

説明は歩きながらでも出来るということで、飛行場姫に手を引かれながら春雨は繭として寝かされていた部屋を出ることになる。艤装と同じように作られた義脚の慣らしも必要だろうというのもあり、早速歩けと飛行場姫からのお達し。

しかし春雨はというと、手を引かれるという行為が孤独から掛け離れた喜ぶべき行為であるため、ニコニコしながらついていく。

「最初に言ったけれど、ここはアンタみたいな溢れた艦娘を保護する場所。そんなに広い場所じゃないけど、そこそこ暮らしてるわ。アンタみたいに、寂しさが溢れた子もいるのよ」

「そうなんですね。じゃあ……独りじゃないですねっ」

「そうね。アンタだけってわけじゃないから安心なさい」

同類がいるというのも孤独から離れられる要因。自分だけが寂しさから深海棲艦になったとなると、孤独を感じてしまって狂乱という流れになりかねない。

「でもまぁ、まずここの一員になるなら一番に会っておかないといけないヒトがいるの。溢れた艦娘の紹介はその後にさせてもらうわ」

「そうなんですか？」

「ええ。ここにはアタシ以外にも根っからの深海棲艦がいるんだもの。というか、ぶっちゃけアタシよりも力あるし、ここの施設の半分……いや、それ以上はあのヒトの土地なのよね」

飛行場姫は陸上施設型深海棲艦という少し特殊な存在である。自らの陣地として島を1つ得た状態で生まれ、その上で生活をし続けるという、その名の通りの陸上施設。

自分のみの陣地では、ここまでの施設は出来なかったと飛行場姫は語る。彼女の他に、もう1人の陸上施設型深海棲艦が一緒に暮らしていることで、陣地の面積が増えると同時にやれることが増えた。

田舎娘のようにキョロキョロと周囲を見ながら歩いている春雨だが、言われてもここが陸上施設型深海棲艦の陣地には見えないくらいに整備されていることには気付いていた。
鎮守府と見紛う程の綺麗な建物がある時点で何かがおかしいのに、窓から見える外の風景も海と砂浜と綺麗に揃えられた芝生までである、何処その慰安施設なのではと勘ぐる程だった。
「……私の知ってる陸上施設型って、もっとゴツゴツした岩のような陣地を使ってるイメージでした」
「最初はそうだったんだけどね。まぁ、あのヒトがこうしたいって言うから、アタシも手伝ったのよ。他にもいろいろあるんだけど、ほら、陣地もアタシ達にとっては艤装みたいなものだから」
「規模が違いすぎますよぉ……」
艤装と同じようなモノであると言うことは、自由に着せ替えられる服と同じなわけで、陣地もある程度自由に出来るということになる。流石にあっという間に建物が出来上がるようなことはないようだが、時間をかけてここまでにしたのだとか。
電力の部分もなんだかんだ艤装のシステムでどうにかしてしまっているらしい。そこは飛行場姫ではなくもう1人の陸上施設型深海棲艦の艤装がそこに繋がっているとのこと。
「今の時間は……ああ、外か。何処にいるかはわかってるから、このまま会いに行くわよ。……見ても驚かないように」
最後の飛行場姫の言葉に首を傾げつつ、仲良く手を繋いだまま春雨は引かれるがままに施設を進んで行った。

向かった場所は、建物から出て裏手に回った場所。そこには建物以上に陸上施設型深海棲艦の陣地とは思えない光景が拡がっていた。
「は、畑……!?」
「ええ。ここは自給自足もしているの。食糧は多く必要でしょう」
「それは確かにそうですけど……ここ陣地ですよね……?」
眼前に拡がる畑。視界いっぱいというわけではないが、家庭菜園と

いうレベルでもなく、出来る限りのあらゆる食用植物が育てられていたのである。これを見た春雨は、開いた口が塞がらなかった。
「やっぱりココにいたわ。手伝いの子もいるし、説明しやすいかもしれないわね」
そしてその中央、畑の真ん中で農作業をしている女性の姿が目に入る。その隣には2人の少女の姿も。
その女性達は、熱中症対策に麦藁帽子を被り、汚れ対策で上から下までをジャージで包んでいた。飛行場姫が会いに来たのは、この中の女性なのだろうと勘付いたものの、やはりそれが深海棲艦であるというところに繋がらない。農作業をする姿からは、同胞(はらから)とは思えないでいた。
作業が一段落ついたのか、3人が3人、よっこらしょと腰を上げる。小さな伸びをしながら額を濡らす汗を手拭いで拭いた時、少女の片方が春雨の存在に気付いた。
「おっ、起きてんじゃん。アレだろ、この前運び込まれた黒い繭のさ」
「あ、ホントね。しっかり同胞(はらから)になってるみたいだわ」
少女の反応を見たことで女性も振り向き、春雨と目が合った。途端にパーッと表情が明るくなる。
「あら、あらあら、あの繭から孵ったのねぇ」
振り向いて理解出来たのは、そこにいたのは例外なく深海棲艦であるということ。少女2人はかなり艦娘に近い外見をしているのだが、女性の方は首筋、鎖骨の辺りから口を隠すかのように甲殻の襟のようなものが出来上がっていた。角が生えているどころではなく、そこだけ見れば確実に異形。
飛行場姫以上に深海棲艦のテイストが強い女性なのだが、何処となく2人は似た部分があった。髪の色だとか瞳の色だとかは深海棲艦特有のそれであるため考えないものとしても、雰囲気、空気感が同じだと、春雨は感じ取っていた。着ているものは似ても似つかないのだが。
「こんにちは、お嬢さん。身体に不調とかは無いかしら。動かない部分とかは……ああ、脚が無くなってしまったのね。でも、艤装で補う

ことが出来ているのなら良かったわぁ」
「え、えっと、は、はぃぃ……」
「姉姫さん、ちょっと押しが強いっスよ。引いちまってる」
「あらいけない。ごめんなさいねぇ、目を覚ましてくれたのが嬉しくてつい」
　この圧に春雨もタジタジである。見知らぬ場所で深海棲艦に囲まれるという状況に置かれているのだから、こうなっても無理はない。
「えぇと、お嬢さんお名前は何と言うのかしら」
「あ、そういえばアタシも聞いてなかった」
「は、春雨ですっ。今日からお世話になりますぅっ」
　名乗りながら深く深くお辞儀。しかし、声が裏返ってしまっていた。それを聞いた畑の3人は苦笑。一方、飛行場姫は緊張しなくていいと春雨の背中を優しく撫でてやっていた。
　あちらは和やかに笑みを絶やさず話しかけてきているのだが、たった今深海棲艦になったばかりの春雨には、緊張感が普通では無かった。
　少女2人の方はさておき、女性の方が問題だった。近くまで寄られたことで、この女性が何者かにようやく気付くことが出来たからだ。
　過去、艦娘がまだ発生して間もない頃に、世界では類を見ない程の大きな戦いがあった。今でこそ人類と艦娘の連合軍は深海棲艦と五分五分のところまで持っていけているが、当時はまだ艦娘の解析も碌に出来ておらず、運用も四苦八苦していたような時期である。
　その時の敵艦を率いていた深海棲艦は、飛行場姫のような陸上施設型。海のど真ん中を陣取り、砲撃も航空戦もこなして艦娘達と激戦を繰り広げた。結果的に勝利を収めたのは人類と艦娘の連合軍だったが、その時の被害は計り知れなかったという。
　さらにはその裏側で本土決戦までしたのだ。主力を自らに引き付けつつ、本来の目的である陸への直接攻撃を押し通すという、今までの海戦まで見てもそこまでの策をやってのけた深海棲艦はいない。
　故に、人類にも艦娘にも大きな傷を負わせたものとして、資料にも大きく掲載されていた。知らぬ者はいないとすら言わしめている、最

初の天敵。
　コードネーム『中間棲姫』。海の中間、戦いの中間にて最終決戦を企てた、現在までの海戦上５本の指に入る戦いの最悪の姫。それに人類が与えた名だ。
「そんなに緊張しなくていいわよぉ。取って食おうってわけじゃないんだもの。それに、春雨ちゃんはもう私達の仲間なんだから、気を楽にしてちょうだいねぇ」
「は、はいぃ」
　それが、この軽さである。
　艦娘もそうだが、深海棲艦は艦娘以上に同型、同じ顔の別人がいる種族だ。それはバケモノの形をしていようがヒトの形をしていようが変わらない。同じ姫が３人並んで出てくる、なんてことだってあり得るのだ。
　なので、春雨の目の前にいる中間棲姫も、その時の中間棲姫とは別。そもそもその時に完全に撃破したことが確認されているため、同一人物なわけがない。いくら深海棲艦とて、爆発四散したら治療は不可能である。
「お姉、やっぱり有名人なのよ。アタシらにはわからないけど、艦娘って顔合わせすると大概腰が引けてるじゃない」
「そうなのかしらねぇ。私には何が何やらさっぱりなんだけれど。多分アレよね、同じ顔の別人が昔悪さしたのよ。そうに違いないわぁ」
　中間棲姫と顔を合わせると基本的にはこうなってしまうというのが通例だった。今でこそ和やかに農作業をしている少女２人も、初対面の時は今の春雨と同じように萎縮していたとのこと。
　そもそも深海棲艦と面と向かうだけでも緊張しかねないのに、春雨のような鎮守府出身の艦娘ならば資料により恐怖が刻まれているのだから尚更である。
「春雨、ビビんなくていいぜ。このヒト達は、ガチでいい深海棲艦なんだ」
　ここで場を和ませるためか、少女の片方、やけに強気で男勝りな少女が春雨に肩を組んできた。もう片方の少女が止めようとしたもの

の、飛行場姫が問題ないと制す。
「いい……深海棲艦……ですか？」
「ああ、悪いことなんて微塵も考えてない、艦娘にもここまでの聖人君子いるのかよってくらいのいいヒトなんだぜ。そっスよね、姉姫さん」
「そうよぉ。私もこの子も、人間を襲いたいとか艦娘を壊したいとかそんな気持ちは何処にもないの。だからこういう陣地に造り替えたんだし。楽しく生きるのが一番よねぇ」
春雨には、中間棲姫が今の言葉を本心から言っているのが理解出来た。
中間棲姫にも、飛行場姫にも、悪意と言えるモノが1つも無い。特に中間棲姫は、雰囲気も善意の塊と言える程に良く、相手が上位種であるという緊張感さえ失われれば、この眩しいほどの笑顔と柔らかく温かい空気によって骨抜きにされそうになる。
魅了の力があると言うのなら、それが正しくそれなのではないかと思える程だった。そして、それを拒否する術も無い程のカリスマ性。
「っと、名乗ってもらっといてこっちが名乗らないのは失礼だよな。ってことで、俺は竹。松竹梅の竹だ。で、こっちは俺の姉の」
「松よ。溢れた感情は2人揃って『依存』ね」
「松姉ぇ、それは別に言わなくても良かったんじゃねぇの？」
「どうせ最後はみんな知ることになるんだから、先に言っておいてもバチは当たらないわよ」
少女2人は姉妹。松型駆逐艦の松と竹。仲のいい姉妹なのだが、溢れた艦娘であることは春雨と変わらず、理性の壁が崩れている。
その感情は『依存』。どちらか片方が少しだけでも欠けた瞬間は暴走する。松は竹に、竹は松に対して徹底的に依存しているため、何をするにも2人1組で行動している程である。
そして残るは飛行場姫と中間棲姫。2人とも自分から名乗るようなことをしないため、春雨もだんだんと焦り始める。
「あ、あの……お二人のお名前は……」
「ああ、それも伝えてなかったわね。深海棲艦（アタシ達）に名前とかそういう概

念は無いから、好きに呼んでくれて構わないわよ。艦娘（そっち）の呼び方でもいいし」
「私は姉姫でこの子は妹姫って呼ばれることの方が多いわぁ。春雨ちゃんも好きに呼んでくれて構わないからぁ」
　飛行場姫がそう呼ぶように、この2人は姉妹関係である。実際に血が繋がっているかと言われればそうでは無いのだが、艦娘と同じように艦種や型番などからの姉妹と似たようなモノ。この場所に先に生まれたのが中間棲姫で、後に生まれたのが飛行場姫というだけ。故に、姉姫と妹姫。
　おそらく最も手っ取り早い呼び名であり、松と竹もこの呼び方を使っている。事実この2人も気に入っているようなので、春雨もそれに準ずることにした。
「それなら……姉姫様、妹姫様、春雨を今後ともよろしくお願いします」
「ご丁寧にどうも。よろしくお願いねぇ。春雨ちゃんにも、農作業を手伝ってもらえたらなって思うんだけど、いいかしらぁ」
「は、はい、私で良ければ喜んで！」
　どんなことでも一緒に作業するということは孤独ではないことに繋がるため、是非ともとお手伝いの予約を入れていた。その素直な反応に中間棲姫も大喜び。
「それじゃあ、次の案内に行くわ。お姉、それと松竹、結構汚れてるからちゃんと洗っておきなさいよ」
「ええ、作業は一区切りついたから、このままお風呂に行こうかしらねぇ」
　世話焼きな飛行場姫の言葉に和やかに相手をする中間棲姫。お互いを尊重し、共存している仲であることがよくわかる光景だった。

　この中間棲姫こそが、この施設のキーパーソン。無くてはならない存在であるとわかるのは、今からまたしばらくしてからである。

溢れた仲間達

飛行場姫と並び、溢れた艦娘を保護する施設を管理する陸上施設型深海棲艦、中間棲姫と邂逅を果たした春雨。その姿は到底深海棲艦とは思えない農作業スタイルであったものの、保護した艦娘と仲良く畑で作業する様子は、この施設がそれだけ穏やかに生活出来ることを如実に表していた。

そのおかげで、春雨の心は大分落ち着いていた。最初は中間棲姫という戦史に残る大悪と対面したことで緊張し続けていたが、その人柄に触れたことによって調子を戻している。孤独感も刺激されるようなことが無かったため、むしろ惹かれている程。

「姉姫様……素敵なヒトでした」

「でしょ。あん時はちょっとアレなカッコだったけど、普段はもっと綺麗よ」

飛行場姫による施設の案内が続けられるが、その際の話題は専ら中間棲姫のことだった。春雨が魅了されてしまっていることに気付いた飛行場姫は、苦笑しながらもそれを良しとしている。

飛行場姫も愛すべき姉として中間棲姫のことを見ているため、嫌われているわけでもないことに内心喜んでいた。好かれているのなら何も問題はないと、状況を楽しむことに専念している。

「それにしても農作業……流石に驚きました。妹姫様も畑仕事を手伝ったりしてるんですか……？」

「アタシ？　アタシは殆どやってないわね。代わりに釣りに出てるのよ」

「釣り、ですか」

「野菜だけだと飽きるでしょ。だから、魚も獲ってるのよ。保存食で干物とかも作ってるから、食事は困らせないわ」

なんとも庶民的な深海棲艦だと、春雨は妙に感心した。ここ数分だけで、深海棲艦に対しての考え方が１８０度変わってしまっている。自分自身が深海棲艦になってしまったことも含めて、ただの侵略者ではなく、派閥や生き方があるのだとつくづく思い知った。

春雨が拾われたここは、特にのんびりとした穏健派。戦いなんて考えず、ただ生きていくことに喜びを見出すタイプ。やりたいことを本能的にやっていくのが深海棲艦だが、ここまで欲が無いのもそれはそれで恐ろしい。
「アンタも好きなことやんなさいよ。さっきお姉が農作業一緒にやろうって言ってたでしょ。少しでも楽しそうと思ったら、まずやってみるといいわ」
「はい、そうさせてもらいます。釣りもお手伝いしてみてもいいですか？」
「ええ、歓迎するわ。まずはいろいろやってみなさいな。ここは自由に生きていく場所なんだから」
小さく笑って春雨の頭を撫でる飛行場姫。その温もりで顔を綻ばせる春雨。この瞬間は、２人も姉妹のように見えた。

畑から始まったため、施設の案内は外からになった。この時間なら外にいる艦娘も何人かいるからである。早いうちに施設の艦娘と対面させ、ここには仲間が多くいるのだということを春雨に刻み付けたいというのが飛行場姫の考え。
数え切れないほど艦娘がいるわけではないが、その全員が何らかの傷を負い、心が何処か壊れた者。自分と同じである艦娘がいれば、孤独感は払拭される。
「ほら、ああやって暇なときはみんな適当に暮らしているの。で、片方はアンタと同じ『寂しさ』が溢れた子よ」
歩いて行った先は、畑に出る前に見かけた芝生の広場。小さな公園くらいのスペースであるそこには、ビニールシートを拡げて日向ぼっこをしている艦娘がいた。
飛行場姫の言う片方の艦娘は、真っ白なロングヘアーにちょこんと生えた黒い角が特徴的な少女。春雨と同様に駆逐艦であろうが、色合い以外で深海棲艦らしさを全く感じないくらいである。
もう片方はくすんだような色合いの金髪のショートボブにフリフ

リなドレス姿の少女。こちらも駆逐艦であり、深海棲艦らしさはほとんど感じられない。
「薄雲、ジェーナス、ちょっといいかしら」
飛行場姫が声をかけると、それに反応して2人して飛び起きた。日向ぼっこでちょうどうつらうつらしてるタイミングだったようで、何事かとキョロキョロ周りを見回した後、飛行場姫の姿が目に入ったことでホッと安心した様子。
ロングヘアーの少女――薄雲は、すぐに気を取り直して飛行場姫にお辞儀。それに対してショートボブの少女――ジェーナスは驚かせないでと少し怒っているような表情。しかし、飛行場姫の隣にいる春雨の姿を目にした瞬間、驚きつつも近付いてきた。
「妹姫さん、そちらの方は」
「さっき目覚めた例の繭の子よ。見ての通り、ここの一員になることが決まったわ」
「ならお仲間ですね。今よりもっと寂しくなくなりますね」
この薄雲の発言で、薄雲は自分と同じ考え方をしていると理解出来た春雨。自分と同じである者がいるというだけで、また孤独感が失われる。
「Ｈｉ！　私の名前はＪａｎｕｓ（ジェーナス）！　アナタのお名前は？」
「は、春雨、です。よろしくお願いします」
「ハルサメね。Ｔｈａｎｋ（これ）ｙｏｕ（から）ｉｎ（よろ）ａｄｖａｎｃｅ（しくね）」
英語で捲し立てられて春雨は頭にハテナマークを浮かべていたが、そんなことは気にせずにジェーナスは握手を求めた。にこやかに手を差し出されたことで、春雨もおずおずと手を差し出すと、ジェーナスはそれに掴みかかるように握る。
ジェーナスは春雨より少しだけ小さかったが、その分温かな手をしていた。ヒトの温もりが何よりの癒しである春雨には、これもまた孤独感からはかけ離れた喜ばしい出来事。
「ほら、ウスグモも！」
今のはジェーナスが気を使ったのが見て取れた。自分の握手はそこそこに、薄雲の手を取って春雨と強引に握手をさせる。

この施設にいるものは、何が原因で溢れたのかを全員が全員分把握している状態。薄雲の溢れた感情が『寂しさ』であり、ほんの少しだけでも独りを意識するとダメであることは周知の事実。それ故に、ジェーナスは薄雲を孤立させないようにすぐにこの行動に出たのだ。
「は、はい。私、薄雲です。春雨さん、よろしくお願いします」
「よろしくお願いします。私の溢れた感情も『寂しさ』なんです」
だからこそ、春雨もその気持ちを汲み取ったかのように自分の溢れた感情のことをすぐに話す。先程の松の時のように、どうせ最後には皆が知ることになるのだからと、春雨も躊躇しなかった。
同じであるということを知らされた薄雲は目を丸くして驚くものの、すぐさま表情を緩ませ、まるで春雨のことを旧友であるかのように扱い始める。
「春雨さんもですか!? すごい、そこまでお仲間だなんて、これならもっともっと寂しくないですね」
「はい、寂しくないです。私達は孤独じゃないです」
手を握り合いながらキャッキャッと一瞬で意気投合している2人の姿を見て、飛行場姫とジェーナスはニンマリ笑みを浮かべた。
特に飛行場姫は、同じ傷を持つ者が出会えばこうなるだろうと見越して薄雲とすぐに引き合わせたようだった。結果は大成功である。
「私も交ぜなさーい! ウスグモだけじゃなくて、私も仲間なんだから!」
「はい、ジェーナスさんも仲間です。寂しくないです」
その2人のはしゃぎっぷりを見ていたら我慢出来なくなったか、ジェーナスもその輪の中に入っていった。子供3人が仲良さそうにしている光景に、飛行場姫の表情はより柔らかくなっていたのだった。

一頻りはしゃいだ後は、同行すると言って聞かなくなった薄雲とジェーナスも連れて、春雨の施設の案内を続行。2人が日向ぼっこのために使っていたビニールシートは飛行場姫が小脇に抱え、外はこれ

で終わりだからと今度は建物の中へ。
当初は施設から向かうことが出来る海の方まで出る予定だったらしいが、ジェーナスからの情報で海には誰も行っていないことが判明したため、無駄足になる前に施設に戻った。
「お風呂は今頃お姉達が入ってるだろうから後回しにして」
「先にお部屋を見てもらった方がいいのではないでしょうか。今日からは共同生活ですし、みんなで一緒に寝るんですよね？」
「そうね。少なくとも寝るときはアンタと春雨を同じ部屋に入れるわ」
ワクワクしながら話す薄雲に、飛行場姫は苦笑しながら答えた。
施設での生活で1日の最後になるであろう就寝は、全員とは言わないがある程度纏って同じ部屋で眠ることになっていた。
私室と言える部屋もあるにはあるし、そこにもシングルサイズのベッドは用意されているのだが、寂しさが溢れているせいで独りになることが出来ない薄雲ではまともに就寝には使えない。むしろ、どんな状況でも隣に誰かいなくてはいけないのだから、プライベートな空間そのものが無理。春雨もその先例に倣う形になることは目に見えている。
その部屋は、キングサイズのベッドがドカンと置かれ、周りには誰かが作ったのであろうぬいぐるみが置かれているような少しファンシーなデザイン。
ベッドが大きいおかげで、駆逐艦サイズなら3人から4人は余裕で一緒に寝られるため、薄雲は今までも重宝してきた。時にはジェーナスが、時には中間棲姫や飛行場姫までもが薄雲のために添い寝をしてあげていたくらいだ。
今後は春雨もここを使うことになるわけだが、部屋を見ただけで目をキラキラ光らせていた。孤独を払拭出来るものなら何でも受け入れられる春雨には、このベッドルームは最高最善の物。
「わぁ……これならみんなで一緒に寝られますね」
「そうね。基本は薄雲が真ん中になって、2人か3人が便乗してるわ。で、昼でも暇ならあんな風に1人で寝てたりするわけ」

飛行場姫が指差す方、その大きなベッドの上には、1人の少女が気持ちよさそうに寝息を立てていた。
その少女は、外見に深海棲艦のテイストがほとんど出ていない春雨達とは違い、明確にそれらしさがあった。それが、頭の両サイドに大きく突き出た、翼のような角。寝るのにはとても邪魔そうではあるが、そこは器用に体勢を変えてどうにかしている様子。
そしてもう1つ。飛行場姫と同じように、両腕が装甲のようなモノに覆われていた。見えている腕そのものも若干黒ずんでおり、余計に異形感を増している。
腰よりも長く伸びた髪が身体の大半を隠しているため判断はしづらいが、わかりやすい異形部分以外はやはり艦娘とほとんど変わらない外見。幼い雰囲気はあるものの、この中で外見的には最も幼いであろうジェーナスと同じくらいか。
「ん、んんぅ？　もうご飯の時間？」
春雨達の気配を感じ取ったその少女が、目を擦りながら身体を起こした。髪に隠れて見えていなかったが、その少女は当たり前のように全裸で寝ていた。
「ヨナ、服着なさい」
「寝るときは裸ん坊の方が気持ち良くてぇ……ん、着まぁす」
飛行場姫に注意されたことで艤装を展開するように服が構成されていく。春雨達駆逐艦のような制服が出来るのかと思いきや、構成されたのはどちらかといえば飛行場姫のそれに近いボディスーツ。いや、これは水着である。その上にセーラー服の上だけが出来上がり、小さく息を吐いた。
「あ、新人さん……あの黒い繭のヒト、だよね」
「はい、春雨と言います」
「ヨナは伊４７、潜水艦のヨナ」
伊４７は潜水艦。春雨達駆逐艦とは違う、海中での戦いを生業とする艦種である。故に、普段着も水着。飛行場姫は趣味が半分と言っていたが、ヨナの場合は実用性が１０割。
その気質は深海棲艦化しても変わることはなく、今でこそこのベッ

ドルームで眠っていたが、定期的に近海に潜りに行くというそれらしい行動に出ている。残念ながらこの施設には伊４７以外の潜水艦がいないのだが、本人はそれを気にしていないようだ。
「繭になったアンタをこの施設まで持ってきたのはこの子なのよ」
「そうなんですか!?」
「海の底にあったから、放っておけなくてぇ。ここまで運んだんだぁ。輸送班のヨナ」
　海の真ん中で繭となり海底にまで沈んでしまった春雨は、伊４７の手によってこの施設に運ばれていなかったら、もしかしたら適切な処置を受けることも出来ずに、本能のまま人間を襲う侵略者となっていたかもしれない。
　そういう意味では、伊４７は春雨の命の恩人とも言える存在だった。艦娘としての心を残したままでいられるのは、伊４７のおかげである。
「ヨナさん、ありがとうございます。私、ここに来れてよかったです」
「どういたしましてぇ」
　ニヘラと笑って春雨の手を取る伊４７。装甲に覆われた両手はその質は硬くても、人肌と同じ、いや、それ以上に温もりを感じるものだった。
「でもどうやってここまで運んでくれたんですか？　自分で言うのもアレですけど、結構重たかったんじゃないかって思うんですけど」
「んー、じゃあ今度見せてあげるねぇ。ヨナの艤装さん、とっても力持ちだから」
　何やら伊４７の艤装にはタネも仕掛けもあるようだが、今は見せられないということで保留となった。潜水艦の艤装であるため、海でなくては展開することすら出来ないためである。
「今ここにいるのはこれで全員ね。ちょっと遠出してる子もいるから、その子は戻ってきたら改めて紹介するわ」
「はい、ありがとうございます」
　施設の案内はもう少しだけ続くが、現在施設内にいる溢れた艦娘は今はこれだけ。あと数人いるのだが、今はこの施設内にいないため紹

介が出来ないとのこと。

この少ない時間でも、施設内の雰囲気が理解出来た春雨は、これならここでもやっていけると喜んだ。

全員が全員、これだけ仲良く出来るのだから、孤独なんて感じる暇もない。

みんな仲良く

保護施設内の案内を終え、春雨は一時的にフリーな時間を手に入れた。ずっと案内をしてくれていた飛行場姫は、中間棲姫と話があるということで一度退席。ここからは途中から便乗していた薄雲とジェーナスが春雨の相手をすることになった。伊４７はもう一眠りとベッドルームから出てくることは無かった。

場所を移し、お茶をしながらということでダイニングルームへ。

保護施設は一部鎮守府をモチーフに造られているところもあり、全員で食事をする場所としてダイニングルームが用意されている。春雨や薄雲のような独りでいられない者にとっては、最も憩いの場になる部屋。談話室と称しても良いだろう。

ティータイムは任せてと、ジェーナスがさらりと紅茶を淹れて振る舞った。紅茶の国出身の本領を発揮したようで、初めて飲んだと春雨も大いに喜ぶ。

「わぁ、とっても美味しい」

「でしょ。この施設ではｔｏｐ　ｃｌａｓｓだと思うわ！」

「本当に美味しいですよね。真似出来ないんですよ」

舌鼓を打ちながらの談笑。ここに来たばかりだというのに、春雨は既に大分馴染んでいた。特に薄雲とは、旧知の仲であるかのように距離が近い。

薄雲は春雨と同じ感情が溢れた結果、今の身体になっているため、やたらと仲が良くなっていた。お互いが『寂しさ』に弱いことが理解出来ているが故の自己防衛である。

「同じ理由が揃うことって、あまり無いんです。私は春雨さんと運が良いことに被りましたが、みんなバラバラなんですよ」

「そうなんですね。あ、でもあの時畑にいた……松さんと竹さんは」

「あの２人はあれで１人ってｃｏｕｎｔしても良いと思うわ。離れられないんだもの。でも、それが普通なんだから何も感じないわよねー」

現状でこの施設にいるメンバーと全員顔合わせをした春雨だが、こ

こに来るに至った理由は誰からも聞いていない状態。溢れた感情も、同じだからという理由で薄雲と、どうせ知られるのだからと先に話した松竹姉妹しか知らない。眼前にいるジェーナスの理由も今は聞いていなかった。

しかし、聞くに聞けない状態でもある。その理由そのものがトラウマを抉る可能性が無くはないためだ。春雨自身、姉が死んだ状況を説明してくれと言われたらおそらく狂う。それくらい心が壊れているのだから、本能的にそれは聞いてはいけないものと察知している。

そのため、原因については中間棲姫や飛行場姫に説明を受ける場合、本人から口に出す場合、そして発作が出てしまった場合以外には問い詰めないという暗黙の了解があったりする。春雨はそれを無意識のうちに掴み取っていた。

「だから、関係を邪魔しちゃダメよハルサメ。あの2人、Ｌｏｖｅで繋がってるんだから」

「ら、ラブ……ですか。本人から依存って聞いてますけど」

「そうかもですけど、そんな感じには見えないくらい愛し合ってる2人ですね。見ていて微笑ましいですよ」

松竹姉妹の関係性は女性同士、しかも姉妹同士という禁断の愛となっているようだった。話しながらもジェーナスは興奮気味だし、薄雲は顔を赤らめている。

艦娘というのは、やはりそういった色恋沙汰とは少し無縁。鎮守府で提督と恋仲になる艦娘がいるらしいが、春雨にとってはやはり縁遠い話である。

「あ、そうだ。マツタケからそうやって聞いてるなら、一応私も話しておこうかな。私がこうなった原因」

「……聞いていませんでしたもんね。聞くのは抵抗があったので」

「うん、それが正解。私もちょっと意気込みが無いと話せないような内容だから。落ち着いて話さないとダメなの。聞いてくれなくてｔｈａｎｋ　ｙｏｕね」

深呼吸で心を落ち着かせるジェーナス。そこまでしなくてもいいのにと春雨が口走ろうとしたが、こういうことは自分の口から伝えな

いとジェーナスは紅茶を置いて真剣な表情に。
「私の溢れた感情は『自己嫌悪』。私、自分が大っ嫌いなの」
「自己嫌悪……」
「今は大分抑えられてるのよ。姉姫と妹姫のおかげ。でも、自分のことだけはどうしても好きになれなくてね。だから、その分みんなが楽しくなってくれたらなって、思ってるの」
少し硬い笑顔で話すジェーナスに、春雨は少し複雑な気持ちになった。
一歩間違えば、春雨はジェーナスとも同じところに着地していた可能性があった。姉達が死んだ理由を自分の力の無さだと悔やみ、そのまま心が壊れてしまっていた場合、溢れた感情は自己嫌悪だったことだろう。それより先に孤独による寂しさが溢れたことで今に至っている。
ジェーナスも春雨や薄雲とは違う理由で独りになれない。２人は孤独感で発狂してしまうが、ジェーナスの場合は余計なことを考えすぎておかしくなっていく。考えなくてもいいことまで深く深く考え、最終的に自己嫌悪に辿り着いて壊れるのである。
ただ暴れるだけならまだいいのだが、ジェーナスの場合は自己嫌悪のあまり、自殺に走ってしまう可能性がある。それを抑えるためにも、薄雲とは常に一緒に行動をしていたのだ。これからはここに春雨も加わることになるだろう。
「はい、おしまい！　私、こういうしんみりした空気が自分の次に嫌いだから、もっと明るく明るくね！」
「は、はい……その、話してくれてありがとうございます」
「いいのいいの。だって仲間だもんね」
硬い笑顔から普通の笑顔へ。そうなってしまった理由に関しては、余程のことがない限り話すことはない。春雨も姉の死がきっかけだなんて施設の誰にも話すつもりは無いのだから、他人のきっかけを聞くつもりは無い。
自分が嫌なことを他人に強要することがダメであることくらい、子供でもわかること。この場ではそれがさらに顕著なだけ。故に、興味

すらわかない。
「あ、そうだ。タニンギョーギもやめてほしいな」
「えっと……それはどういう」
「敬語とか禁止！　一緒に暮らすんだもん。それに、同じ駆逐艦なんだし、私とハルサメはｅｑｕｉｖａｌｅｎｔよね」
　突きつけられ、春雨は少しだけあたふたしてしまった。しかし、自分はさておきジェーナスがそれを望んでいるのなら、叶えてあげたいとも考えた。
　春雨もジェーナスと似たようなものだ。自分が嫌いなのではなく、自分に一切の興味が無い。孤独に繋がらなければどうなっていても構わないのが今の壊れた春雨である。
　だからこそ、他者を、仲間を気にかける。自分のために仲間に優しくする。情けは人の為ならずを地で行くような形に。酷く打算的な考え方ではあるのだが、壊れた心で生きていくのなら、これくらいがちょうどいい。その原点の部分が本来の優しさから来ているのだから、責められる理由もない。
「それじゃあ……ジェーナスちゃん、でいいかな」
「Ｏｋａｙ！　私だけじゃなく、ウスグモともね！　ウスグモ、わかった？」
「あはは……うん、大丈夫。私も春雨さん……ううん、春雨ちゃんともっと仲良くなりたいから」
　深く仲良くなれるタイミングを作ってくれたのはありがたいと、春雨は内心思っていたりする。こういうきっかけが無かったら、しばらくの間は敬語が続いていたかもしれない。
「その……改めて、これからよろしく……ね？」
「うん、よろしく、春雨ちゃん」
「……えへへ、よろしく、薄雲ちゃん」
　ここからこの３人は特に仲良くなっていくだろう。お互いがお互いを気にかけ、誰もが孤独を感じないように。誰も自己嫌悪に陥らないように。

一方、春雨達から離れて姉の元へと向かった飛行場姫は、施設の少し奥まったところから地下に入っていく。そこには示し合わせたかのように中間棲姫が待っていた。農作業をしていた時のジャージスタイルから一変、真っ白なロングドレス姿で地下設備の確認をしており、不具合が起きていないことがわかるとニコニコしながら指差し確認で次へ。

この地下設備が施設内の電力を全て賄っており、その中央に鎮座しているのが中間棲姫の艤装の核となる部分。本人を覆い隠せる程のサイズの球体であり、実際に中に乗り込むことも可能である。今は電気系の配線がビッシリと張り巡らされているため、そういったことは出来ないのだが。

「春雨の案内は終わったわ」

「ありがとうねぇ。やっぱり妹ちゃんは頼りになるわぁ」

真正面から褒められると、飛行場姫も少し顔を赤らめながらそんなことはないと謙遜。

「お姉が言ってた通り、薄雲に会ってもらったわ。ジェーナスとも相性が良さそうだったから、3人で行動してくれそうね」

「そうねぇ。あの3人なら噛み合わせがいいものねぇ。お互いの欠点を補える、いい組み合わせだと思うわぁ」

中間棲姫も飛行場姫も、施設内に住まう溢れた艦娘のことについては全て頭に入れてある。どの感情が溢れたか、発狂のトリガーは何か、他も諸々。そこから施設内での組み合わせを決めて、団体行動をさせることでトラウマを緩和させていく。

春雨の処遇に関しては、姉妹でも意見がすぐさま一致した。自分に興味がなく、孤独を払拭するために他者を気遣う者が2人いるのなら、相互監視させるのが一番手っ取り早く本人のためになる。3人なら尚更だ。現にしっかり友好関係を築けているのだから、この狙いは百点満点だったと言えよう。

「明日くらいから、春雨には深海棲艦としての戦い方も覚えてもらおうと思ってるの。必要ないかもしれないけれど、万が一の時にね」

「そうねぇ……ここにいれば不自由させないつもりだけど、何も無いとは言い切れないものねぇ」
「ええ。戦いたくないって言わない限りは覚えてもらった方がいいと思うわ。アタシとしても心苦しいけど」
　この保護施設は普通には訪れることが難しい辺鄙な場所に存在する。それこそ海のど真ん中なのだが、人類が生活する場所、通称『陸』からは大きく離れた場所であり、わざわざ向かうにしてもそれなりの時間と労力が必要になる。普通にしていても隠れ里のような場所だ。
　それでも、何者かの手によって襲撃されることが無いとは言えない。それが今のご時世というものでもある。深海棲艦だからという理由でこの施設を探し当てて襲撃してくる人類や艦娘もいるだろうし、戦うつもりがない同胞（はらから）を襲撃する深海棲艦というのもいるだろう。
　そうなった時、自己防衛のためにも戦える手段はちゃんと覚えておくべきだというのが飛行場姫の考えだった。せっかく戦える力があるのに、いざそれが必要となった時に何も出来ないで嬲り殺しにされるというのは笑えない。あくまでも、敵を倒すためではなく施設を守るための力を持ってもらいたいということだ。
「前みたいなことは二度と起こさせないから。誰が傷付いても嬉しくないわ」
「……妹ちゃんは優しいわねぇ。でも、お姉ちゃんもその意見には賛成。せっかくあの姿になって第二の人生を歩めるようになったんだもの。ここにいる子達にはここで幸せになってもらいたいわぁ」
「アタシも同じよ。お姉がそう思ってるなら、尚更ね」
　それが一般的に見て歪んでいようとも、幸せなら問題ない。それが2人の考えだった。その考え自体が少し歪んだものかもしれないが、それこそ悪いことをしようとしていないのだから、咎められるものでもない。
　戦いから離れた場所でひっそりと暮らす。ただそれだけに幸せを感じられるのなら、それはもう静かにしておくのが普通なのである。
「よし、それじゃあ点検も終わったし、ご飯の準備をしましょうか。今

日は春雨ちゃんの歓迎会にもなるし、腕によりをかけて作らなくちゃねぇ」
「アタシも手伝うわ。魚料理はアタシの方が得意だもの」
「任せるわぁ。私はお野菜専門だもの。美味しいご飯は妹ちゃんの方が上手だものねぇ」
　少しだけ重たい雰囲気になりそうだったのを中間棲姫が振り払い、再び柔らかい空気を作り出す。飛行場姫は姉のこういうところが好きなようで、苦笑しつつも安心したように側に寄った。
　その感情を感じ取ったか、小さく抱き寄せて頭を撫でる。こんな姿は溢れた艦娘達には見せられないなと思いつつも、飛行場姫は姉の温もりに身を委ねた。
「いつもありがとうねぇ。私、妹ちゃんがいないとここまで出来てなかったわ」
「アタシもよ。お姉がいないとこの施設の維持なんて夢のまた夢よ」
「ふふ……私達も、お互いがいないと成立しないわね。みんなとおんなじ」
「そうね。この保護施設は、あの子達だけのものじゃなく、アタシ達にも必要なのよね。ホント、つくづく実感するわ」
　ほんの少しだけ姉妹の憩いの時間を堪能した後、２人は地下を出て行く。その時にはここまで緩い雰囲気は無しにして、いつも通りに戻っていた。

　保護施設はここにいる者全員を癒す施設だ。少しずつ、少しずつ、全員がいい方向に向かうために。

深海棲艦とは

その日の夕食は春雨の歓迎会ということで少し豪勢な食事が用意された。とは言っても、この施設は説明した通り、『陸』からかなり離れたところにあるということもあって、食糧は自給自足。基本的には魚と野菜でどうにかしている。

それでも歓迎会を開くくらいのことは出来るようで、食卓の真ん中には飛行場姫が捌いたという魚の刺身がズラリと並び、自家製の野菜で作られたサラダや焼き物が全員分用意されるという手の入れよう。特に刺身は一流の職人が捌いたのではと思える程の腕前。

「す、すごい……私、こんなお刺身見たの初めてです」

「今日はアンタの歓迎会だもの。たまたまヨナが獲ってきた大物があったし、こういう機会でしか出せそうに無かったからやってみたのよ。鮪包丁で解体するのも面白いものね」

ケロッと言ってのけるが、こんなことが出来る深海棲艦は他にはいないだろう。春雨のみならず、中間棲姫を除くここにいる者全員の意見が一致した瞬間である。何者なのだこのヒトはと。

「今日だけは特別で明日からは質素になるわよ。だから今はたらふく食べなさい。アンタは明日からいろいろやってもらうんだから」

「農作業とか、釣りとかですよね。了解です。教えてもらうところからになりますけど、全身全霊でやらせてもらいます」

「そんなに気合入れ過ぎなくてもいいわよ。続かなくなるわ。あくまでも楽しんでちょうだい」

案内中に見た農作業も、松竹姉妹は好きでやっているという点に尽きる。いやいややっているわけではない。今日は日向ぼっこをしていたが、薄雲とジェーナスも楽しいからという理由で施設内の掃除を定期的にやっているらしい。勿論農作業や釣りもやりたい時に手伝うと言った感じ。

春雨にもやりたい時にやりたいように手伝ってくれと話す。頑張りすぎたら潰れてしまうのだから、その楽しさに気付いて率先してやってくれればいいと、飛行場姫は念を押した。そこはやはり、壊れ

た心に対しての優しさが含まれていた。
などと話していたところで、全ての準備を終えた中間棲姫もダイニングへ。農作業時のジャージ姿しか知らなかった春雨には、今のドレス姿はとても煌びやかに見えた。
「さぁさぁ、今日の主役はしっかり食べてちょうだいねぇ」
「ここまでしていただいて……ありがとうございます」
「どういたしましてぇ」
この歓迎会を経て、案内の時に軽く挨拶しただけだった面々とも仲良くなっていく春雨。この施設にギスギスしたところは1つも無いし、むしろ全員が仲がいいのが売りである。仲間意識は凄まじく、誰がどのような状況でも嫌な感覚は何処にも無い。
これならここでやっていけると、春雨も笑顔を絶やさなかった。これからの居場所として受け入れられていることがヒシヒシと伝わってきたからこそ、春雨からもここの住人であるという事実を受け入れることが出来た。

食事の後はお風呂に入って後は寝るだけでの時間。春雨、薄雲、ジェーナスの3人はベッドルームへ。3人は今後一緒に眠るということが事前に決められており、全ての事情を知っている面々からは否定すらされずにそうすればいいとほぼ二つ返事。
その溢れた感情の特性から、松と竹はどちらかの私室で2人で眠るのが基本になっているし、伊47はちょっとした事情があるため1人で眠ることが多いらしい。結果、ベッドルームは3人の寝室として常用されることになる。
「寝るときは脚は消して……っと」
艤装と同じ質感の義脚そのままだと、寝るときに周りに迷惑をかけてしまいそうということで、しっかり消してベッドに横になる春雨。寝返りを打ったら隣の者にダメージを与えかねない。
飛行場姫や伊47のような腕が無い者はいるが、脚が無い者は初めて見るようで、薄雲とジェーナスは興味津々。

「バッサリなのね。妹姫やヨナの腕もそうだけど、脚ってのは初めて見るわ」
「やっぱり少し不便？」
「今のところは不便ではないかなぁ。これ、艤装と同じ質だから湯船の中にも入れるし。洗う時だけ消して、歩く時にはまた出してってやれば、不潔にもならないし」
　ベッドに乗ってしまえば、脚があろうがなかろうが関係なくなる。また歩きたくなったら艤装を構築して作り出せばいいという、なかなかどころかかなり便利な身体となっていた。
　しかし実際は、出し入れは春雨の体力をほんの少しずつ奪い取っていたりする。微々たるものすぎて本人は気付いていないものの、大きく消耗してしまっているときは、義脚を構築するのも難しくなるかもしれない。それこそ、重傷を負ってしまった時とかである。
「その……深海棲艦の身体って、本当に便利なんだなって。艦娘の時はこんなこと全然思わなかったから」
「そうだね。好きでなったわけじゃないけど……いざ使えるとなると、すごく便利……かな」
「お洋服も好き勝手変えれるし、ハルサメの脚もそうよね。私も初めて出来た時は物凄く驚いちゃった」
　事実、風呂上がりは制服ではなく寝間着だと考えた時点で、各々自分に合わせた寝間着がしっかり構築されていた。深海棲艦にそう言った概念があるかはさておき、艦娘の思考を持ったままの深海棲艦というのは、そういうところにも影響があるのかもしれない。
　ちなみに現在の姿は、春雨は脚を考慮したショートパンツ状のパジャマ、薄雲は作務衣のような和服、ジェーナスはネグリジェ。三者三様ではあるが、それぞれにあったモノである。パッと思いついたモノがしっかり構築されているため、深海棲艦の不思議な性質が如実に表されている。
　そしてこれは、艦娘には存在しない機能である。そもそもが人類と協力するために設計されているような艦娘は、自らの意思で構築出来るのは艤装のみ。人類に用意してもらえる制服は勿論のこと、義肢な

んてモノも構築は出来ない。代わりに『高速修復材』という生きているのなら超短時間で全てを治療出来るという賢者の石のような奇跡が扱えるので、深海棲艦と比較するなら五分五分と言ったところ。このアイテムのおかげで、艦娘に今の春雨のような欠損など考えられない。
「いざって時は、私とウスグモが抱えて運んであげるわ」
「だね。もしかしたら脚が出せなくなっちゃうとかあるかもしれないし」
「あはは、そうなった時はお願いね」
どうやって運ぼうなどとわちゃわちゃとしている時、ベッドルームに新たな影。
「仲が良さそうで嬉しいわぁ。少しの時間だけど、大分慣れてくれたみたいねぇ」
中に入ってきたのは中間棲姫。歓迎会の後片付けも終わったようで、こちらも後は眠るだけであるようだ。3人と同じように、風呂上がりのいい匂いを漂わせている。
「あら、姉姫、おねむの前にここに来てくれるってことは、添い寝してくれるのかしら」
「そうよぉ。春雨ちゃんは初めての夜だもの。初日は私達が一緒に寝るって、なんだかんだで決まっちゃってるものねぇ」
「だからアタシも来たわ」
その後ろから飛行場姫も姿を現す。2人とも3人と同じように後は眠るだけという状態なのだが、歓迎会の時に見た姿と同じで、中間棲姫はロングドレス、飛行場姫はボディスーツ。おおよそ寝るには向いていない見た目ではあるが、やはり深海棲艦には寝間着という概念は無さそうである。
「添い寝もそうだけど、春雨に1つ話しておきたいことがあったの」
「そうなんですか？」
「ええ、明日からのことなんだけど、アンタには深海棲艦の戦い方ってのを知ってもらいたいと思ってるのよ」
戦いという言葉が出たことで、春雨が小さく震えた。戦場を思い出

し、姉達が散っていったあの夜が頭をよぎったからである。
「薄雲ちゃんやジェーナスちゃんには前に話したと思うのだけど、今は平和でも万が一があるの。ほら、私達は曲がりなりにも深海棲艦、しかも、戦いを好まないタイプじゃない。人類にも、艦娘にも、同胞(はらから)にすら、私達の存在が気に入らないって考えるヒト達っていうのはいるのよ」
「だから、自己防衛のためにも力の扱い方は知っておいた方がいいと思ったわけ。ハッキリ言って、艦娘のときとはまるで違うはずよ。ねえ、薄雲？」
薄雲は無言で首を縦に振る。経験があるからこそ、嘘偽りなく肯定の意思が出た。
艦娘は人類を護る力であることに対し、深海棲艦は全てを破壊する力だ。心持ちが艦娘であっても、扱う力はどちらかと言えば闇。心と力が相反する状態では、ぶっつけ本番ではうまく使うことは出来ない。大きすぎる力に翻弄される可能性もあるし、その場で力に呑み込まれる可能性だってある。
それ故に、ある程度の練習、深海棲艦が何たるやを知っておく必要があると考えているわけだ。中間棲姫も飛行場姫も、春雨のことを考えてのこの言葉。
「先に言っておくけれど、私が貴女に知ってもらいたいのは、多分艦娘の時と同じ。護るものが変わっただけ。自分を護るというのは実感が湧かないかもしれないけど、仲間達を護るために、今の力を知っておくのはいいことだと思うの」
心が壊れた春雨は、自分に一切の興味がない。どうなってもいいと思っているし、極端な話、死ぬことすらそこまで怖くないような心境である。
だが、仲間が死ぬというのはダメだった。これは孤独に繋がる。自分だけが生き延びてしまったら、また独りになる。艦娘の時の最期と同じになる。
「……嫌だ、みんなが死んだら、また独りに、独りになる。独りは嫌、嫌だ、嫌だぁ！」

孤独を思い出し、発狂。まだ深海棲艦になったばかりであるため、不安定になりやすい。孤独を忘れることはないのだが、縁遠くなるのはまだまだ先。

ここはすぐさま飛行場姫が押さえ、暴れるのを防ぐ。本日二度目ともなれば、動きを止めるのも慣れたものであった。脚を消した後であったため、余計なダメージも受けずに済む。

「大丈夫よ、アンタは独りにはならない。ほら見てみなさい。アンタの仲間が、友達が、ちゃんと側にいるでしょう。薄雲、ジェーナス、そうよね？」

「はい、私は春雨ちゃんの側にずっといます。大丈夫です」

「Ｏｆ（もちろん）ｃｏｕｒｓｅ！　私はハルサメの友達だもの、ずっと一緒にいるわ！」

飛行場姫だけでなく、薄雲もジェーナスも春雨に抱きつくように温もりを与え、孤独感を忘れさせようとしていた。

特に薄雲は同じ境遇だからこそ、こうすれば落ち着けるというのを理解している。ジェーナスも自己嫌悪に陥らないようにするための手段を温もりに見出している節があるため、同じ手段を用いた。

「ごめんなさいねぇ。でも、最初に話しておかなくちゃいけないことだったから、ここでお話しさせてもらったわぁ。でも、これだけは保証する。貴女を独りになんて、絶対にさせないわ。誰も死なない。そんなお別れなんて、私も嫌だもの」

最後に、中間棲姫からの心強い言葉。本人の実力は知らずとも、この言葉には信用出来るだけの力があった。まるで、過去に何かがあったかのような言い方。

ここまでされたことで、春雨も落ち着いてくる。深呼吸しながら心を落ち着けていき、涙も止まっていく。

「戦うことが嫌なら、無理をしなくてもいいわ。そうなった場合、アタシ達が全力でアンタを護る。そうなってもおかしくないのはアタシ達も理解しているつもり。だけど、決断はアンタに任せる。力を知らずに平穏の中で生きるか、力を知って平穏を護る側になるか。どちらの選択をとっても、誰もアンタを責めやしない。間違っていないんだ

から」
飛行場姫の言葉を聞き、春雨はようやく落ち着いてきた頭で考える。護る側になるか、護られる側になるか。
戦いは好きじゃない。大切なモノを失うきっかけになっているのだから、それに対して恐怖だって感じるし、嫌悪だって感じる。戦わずに農作業や釣りだけしてのんべんだらりと生きていけるのならそれに越したことは無いだろう。
しかし、万が一、この平和な施設が戦禍に巻き込まれてしまった場合、それを護る力があるはずなのに護ることが出来ず、また孤独になってしまったら。それを考えたら、戦うことよりも怖かった。孤独を嫌うからこそ、あらゆる恐怖よりも何も出来ない恐怖の方が上回った。
「……やります……私……自分の力を知ります……もう誰も失いたくないから……もしもの話かもしれなくても……意味がないかもしれなくても……みんなを護りたい……ですから」
そして、春雨は決心する。戦うことは怖い。しかし、失うことはもっと怖い。ならば、失わないようにする力を知ることで、万が一戦うことになったとしても、孤独にはならない。何より孤独を嫌うのだから、そこに辿り着くのは必然的。

護るための力を得るため、春雨は新たな戦場へと歩き出す。身体が深海棲艦になったとしても、心が壊れてしまったとしても、その本質は艦娘そのものだった。

本来の居場所では

溢れた艦娘の保護施設から遠く離れた『陸』の鎮守府。軍の中の地位は決して高いわけではないのだが、精鋭の駆逐隊の活躍によって確実に制海権を取り戻すという、燻銀の活躍を続ける優秀な戦力。大本営からの信頼も厚く、所属する艦娘達もイキイキとしていることで有名だった。

そこは、かつて春雨が姉達と暮らし、海の平和を護るために戦ってきた本来の居場所である。

「……第三次捜索部隊……戻りました」

「うん、ありがとう。結果は……聞かなくてもわかるね」

「……はい。痕跡1つも見つかりませんでした。連絡が途絶えた場所を虱潰しに探したんですが……何も……」

提督に報告する艦娘――海風の声が、徐々に詰まっていく。

海風は春雨の妹。つまり、あの戦場で失われた者達全員の妹になる。姉達が消息を絶ってから数日間、捜索隊を結成してその痕跡を探し続けていた。生きていれば御の字、もし死んでいたとしても、何かしらの遺留品があればと。

しかし、小さな手掛かりすら見つかっていなかった。遺体、艤装、服の切れ端すらも、何もかもが忽然と姿を消していた。本当にそこに姉達がいたのかと疑ってしまう程に、何も無かった。

「海風、今は休みなさい。根を詰めすぎたら、見つけられるものも見つけられない」

「……了解……しました。また明日……捜索に向かいます」

「ああ、そうしよう。だから、今はとにかく心を落ち着けるんだ」

一礼して、執務室から出て行く海風。その背中は、悲壮感に満ち溢れていた。

一緒に戦い続けてきた大切な姉達が、突然姿を消したのだ。命を懸けた戦いを繰り広げているとしても、それは簡単には受け入れられない。死んでいるとしても、その痕跡が無いとなると話は変わる。弔うことも出来ないことが歯痒い。

「……海風も相当参っているようだ。だが、気持ちもわかる。今は休んでもらって、明日また全力で捜索をしてもらおう」
「提督も休んでくださいね。そうだ、私お茶淹れてきます。だから、今だけでも身体を休めて」
「そうだね……部下に休めと言っておきながら、僕が倒れてしまったら提督失格だ。すまないけど、お茶を頼むよ」
　秘書艦の五月雨にお茶を頼みつつ、大きく息を吐いて身体を落ち着けた瞬間、どっと疲れが押し寄せてくる。目を瞑ったら眠ってしまいそうだった。この提督もほとんど寝ずに調査をしていたため、疲れがピークに達していた。
　大本営を筆頭に、情報が手に入りそうなところには全て掛け合い、例の海域についても出来る限りのことはやっている。しかし、未だにカケラも情報が出てこない。駆逐隊5人の行方どころか、そこで何が起きたのかもわからず。
　精鋭の駆逐隊を失うという大惨事は、勿論大本営には報告済み。元々考えられていたモノとは大きく食い違う敵の規模や強さであることは間違いないため、失態とはされずに信頼を失うことも無かったものの、戦力が激減したことは言うまでもなく、鎮守府の再建に力を入れる必要もある。
「……なんでこんなことになってしまったんだ」
　失った5人のことを考えると、涙が出そうになっていた。提督という立場上、そんな弱いところを見せてはいけないのはわかっている。しかし、今までは分不相応な出撃などはしてこなかった。あくまでも『いのちだいじに』を作戦の中心に置いていたのだ。
　危険な戦闘はあれど、命に関わるようなことがあれば撤退を優先するようにしていた。それすらも許されない敵が現れたとしか思えない。
「すまない……すまない……みんなすまない……」
　誰にも聞かれないことをいいことに、弱音を呟く。誰にも話すことが出来ない言葉を、独りで口に出す。腹に溜め込んでいてはダメだと、落ち着くためにも出来る限りのことはこの場でしていく。

この提督はそうやって最善手を掴み続けてきた。今回は想定外中の想定外が起きてしまったのだ。
「あの海域には強力な深海棲艦はもういないはずだ。確認も怠っていない。敵性の生命体を殲滅したのはこちらでもわかっている。なのに何故……」
春雨達をあの海域に向かわせたのは、戦いの後始末も兼ねた哨戒である。もう敵性深海棲艦がそこに残っていないかの確認を定期的に行なっていただけ。
一度は強大な敵がいたが、鎮守府の戦力を総動員し、見事勝利を勝ち取った。その時は怪我人は出たものの損失はなく、ほぼ回復したと言っても過言では無い状態だった。
「事が済むまで海底に隠れていたのか……いや、それなら潜水艦が調査出来ているはずだ。ならば、つい最近誕生したのか……いや、それなら前兆があるはずだ。それを確認出来ていないわけがない。ならば……何処かから移り住んできたのか……？」
深海棲艦の生態は未だにわからない部分が多い。どのように生まれるのか、どのように生活しているのか、どうして人類を襲うのか、その何もかもが憶測の域を出ていない。その知らない部分のせいで、駆逐隊を失ったのかもしれない。
考えられることを全て考えていく。元々別の場所にいた深海棲艦が、すでに攻略済みの海域に新たに住み着くということがあったなら、一応は辻褄は合う。今までは、発見される群れにいるボス級の深海棲艦は死ぬまでその場所を動かないとされていたが、その大前提から崩していく。
「……待てよ。あの海域……昔にあの戦いがあった海域に近いのか。とっくの昔に終わった大激戦だったはずだけど……まさか関連性があるなんてことは……」
ふと思いついたことを調べていく提督。あの戦いとは、凶悪な陸上施設型の姫と激戦を繰り広げた挙句、本土決戦にまで持ち込まれてしまったという、最初の海戦からカウントしても5本の指に入る大海戦。

被害を出しながらも人類と艦娘の連合軍が辛勝を掴み取った、最悪の姫である陸上施設型の姫との戦い。その戦いがあった海域に近い場所。

その時に倒したはずの姫が、実はその場から逃走しており、またそこに戻ってきたなんてことはないか。陸上施設型だから尚のことその場に留まり続けるという前提から崩した方が良いのではないか。

そこまで考えたところで、執務室の扉が開く。そこにはお茶と茶菓子を持って少し危うい震え方をしている五月雨が立っていた。

「お茶淹れました。お茶菓子もあったので休憩しましょう」

「ああ、ありがとう。五月雨、溢さないようにね」

「だ、大丈夫ですよぅ。今回は加減しましたし、足下も片付いていますから」

慎重に慎重に運んだことで、お茶は台無しにならずに提督の手元に。2人してホッと息を吐いたところで目が合い、何処かおかしくなってクスリと笑う。

熱いお茶をズズっと啜った後、茶菓子を口に放り込み、甘味で脳をリフレッシュ。そこで、提督は五月雨に自分の考えをどう思うか聞いてみた。

「五月雨、少し聞いてもらいたいんだが……」

提督が簡単に突拍子もないような考え――陸上施設型がそこから姿を消し、もう一度同じ場所に現れるなんてことがあるか――を聞かせたところ、五月雨はいろいろな表情をしながらも否定はしなかった。

「ある……かもしれないですよね。実は島も艤装と同じとか。とんでもなく大きな艤装で、あのウォースパイトさんのような玉座の艤装の形が変わってるって思えば」

「島が海上を滑走する……なんて考えたくは無いんだが、可能性が無いとは言えないだろう。それで、過去の戦いで実は逃げ果せていて、今このタイミングでまた現れた……とか」

「だったら、海風がその島を見つけてますよね。近場にまで行ったわけですし。そこで姉さん達をどうこうした後、またその場から離れた

……とか？」
　それなら痕跡が一切残ってなくてもおかしくない、と五月雨は少しドヤ顔をしながら話した。事実、それは有力そうに思えた。
　そもそも海戦の痕跡が何も残っていないというのがおかしな話である。今回の事件の犯人がわざわざ片付けたとしか思えないくらいに鮮やかな手口。
「深海棲艦はそこまで賢いのか……？　今まで戦ってきた深海棲艦は、真正面からの侵略が基本で搦手を使ってくるようなことは……やはり奴が」
　何かに確信したように目を見開いた提督は、休憩中だというのに束ねていた資料を手に取り、パラパラとめくっていく。
「ど、どうしました提督。そんなに急に」
「いるじゃないか。それくらい賢い深海棲艦が、過去に」
　該当のページを開き、五月雨に突き出すように見せつけた。まさに先程まで考えていた過去の激戦が記されたページを。
「過去には今よりも狡猾な深海棲艦が多くいた。日を跨いだ瞬間に装甲が治癒する奴もいたし、海流を操って部隊の到着を逸らした奴もいた。だが、その中でも群を抜いているのがコイツだ」
「これは……陸上施設型ですか？」
「ああ。自らを囮にして、別働隊で本土決戦を仕掛けた程の猛者だ。もし、もしもだ、僕達の固定観念から、あの時あの深海棲艦を撃破したつもりでいたとしたら……実は生きていて今の今まで雌伏の時を過ごしていたとしたら……彼女達を消し去ったのはこの深海棲艦が一番有力だと思わないか」
　荒唐無稽な考えではあるが、今までの大前提を覆して考えるのならば、全てが有力な案となる。
　陸上施設型はその場から動かないという前提を取っ払い、その陸地ごと移動が可能であるとするならば、全てが引っくり返る。
　それ程までに、この提督は失われた艦娘達の身を案じていた。勿論、既に最悪な状態になっていることだって予想は出来ている。一縷の望みをかけて、出来る限りのことをやっているに過ぎない。

「陸上施設型深海棲艦……最悪の姫……『中間棲姫』ですか……」
「この海戦の後、コイツは一度たりとも表舞台に姿を見せていない。僕達は斃したつもりでいたが、実は逃げ果せていたとしたら」
「まさかそんな……でも……ここまで何も出てこないと、そういうのを疑う気持ちはわかるというか……」
なんて返していいかわからない五月雨は、当たり障りのない言葉を紡ぐことしか出来なかった。
勿論提督もこれが絶対だと言うことは無い。あくまでも憶測、しかも突拍子もない夢物語レベルの仮説だ。実際にそういう生態をしているところを見たわけでもなく、何の痕跡も無いのだから調査すら出来ない。
しかし、何もわからないのなら、全ての仮説が候補になる。あり得ないは、あり得ない。
「僕も疲れているのかもしれない。こんな案しか出ないのが悔しい。だが、縋れるものには全て縋り付きたい。だから、明日からの捜査は少しだけ範囲を拡げよう。それこそ、今まで踏破出来なかった海域まで手を拡げるくらいした方がいい」
「了解です。万全の準備をしてもらって、海風達には行ってもらいましょう」
「ああ。だが、この仮説が正しかった場合、あまりにも危険すぎる。それこそ、撤退すら許されないかもしれない。彼女達の二の舞だけは避けたい」
一度ならず二度までも同じことが起きてしまったら、もう取り返しがつかないだろう。ただでさえ今回の件で鎮守府内の空気が暗くなってしまっているのだから、これ以上のことが起きてしまったらこの組織そのものが瓦解しかねない。
「準備だけは怠らずに行こう。敵の力は未知数なんだ。万が一憶測が正しかったとしたら、当時よりも遥かに強くなっているということにもなる。僕達だけでは手が出せないかもしれない」
「……そうですね。そうなった場合……いろんな鎮守府と協力して総力戦になっちゃうかもですね」

「ああ。今までの海戦の中でも、さらに輪をかけて大きな戦いになるかもしれない。覚悟だけは今のうちからした方がいいかもしれないね」
　改めて少し温くなったお茶を啜り、ボソリと呟く。
「この仮説は、仮説のままであってもらいたいものだ」
「何か言いました？」
「いや、何でもない。疲れているのは確かなんだ。僕も少し仮眠を取ろうかなと思ってね」
　それがいいですと五月雨が執務室横のスペースを片付けに向かった。根を詰め過ぎて正しい判断が出来ないのはよろしくない。それは戦場に出る艦娘もそうだし、それを指揮する提督もである。
「提督、寝る前に一度シャワー浴びてくださいね！　ほとんど寝てないのはわかってますから！　今の提督、ちょっと臭いますよ！」
「そ、そうか……それはすまなかった」
「仮眠の後は間宮さんにご飯用意してもらいますから、一度グッと休んでくださいね―！」
　隣の部屋から聞こえる五月雨の声は、提督のことを本気で心配する声。苦笑しながらも、言われた通りに身体を洗い流そうと席を立った。

　駆逐隊の1人、春雨が奇跡的にも生きており、さらには深海棲艦化を果たしていることを知るのは、まだ先の話。

要であり不要

深海棲艦と化した春雨の初めての夜は、中間棲姫と飛行場姫まで含めた添い寝のおかげで気持ちよく乗り越えることが出来ていた。悪い夢を見ることもなく、むしろ夢そのものを見ることなく、気付けば朝。混乱と狂乱で疲れ果てていたか、深い深い眠りについている。

だからか、中間棲姫の声で目を覚ますことになった。開いた目の真正面には、豊満な胸が鼻先すらも届く位置にあった。どうやら、眠っている間に子供のように蹲り、抱きついて温もりを求めていたらしい。

「おはよう、春雨ちゃん。よく眠れたようで安心したわぁ」

後頭部を撫でながら、まるで胸に押し付けるように抱きしめられていることにようやく気付いた春雨は、顔を真っ赤にして飛び起きた。自分のことには全く興味が無くとも、中間棲姫に迷惑をかけてしまったのではと焦りに焦る。

その時には春雨以外の一緒に眠ったメンバーは全員目を覚ましており、春雨が最後まで眠っていた。それ故に、薄雲もジェーナスも、飛行場姫すらも、ベッドから離れてニヤニヤしやがら目を覚ますのを待っていた。

「ご、ごご、ごめんなさい！　私、その、あの」

「大丈夫よぉ。私はこうやって甘えてもらえるのはとっても嬉しいし、慣れない環境で疲れてたのよねぇ。最初はみんなこんなモノだから、心配しなくていいわぁ」

などと言いながらも、ハグをやめようとはせずにまだまだ撫で続けていた。意外と腕力があり、簡単には抜け出せそうにない。

「わかるなぁ。私も最初は姉姫さんにすごく甘えちゃった」

「Me（私）too（も）・　姉姫ったら、なんだかいい匂いするのよね。とっても落ち着くわ」

どうやら基本的には全員が通る道らしい。当然ながら深海棲艦化なんて誰も起きたことがない変化であり、繭から孵った初日は明るく振る舞えても心身共に疲れ切っているのが普通。それを見越して初

日は中間棲姫と飛行場姫が添い寝をすることが通例となったようだ。
　大概中間棲姫の方に抱き寄せられているのもいつものこと。そして、このハグを中間棲姫が堪能し切るまで続けられる。その間にハグされる側はどんどん蕩けていくらしい。春雨も例外では無かった。
「落ち着くのは……すごくわかるかも……」
　最初は中間棲姫からだったのが、今や春雨から抱き着きに行っていることで、薄雲とジェーナスは春雨が堕ちたと確信した。自分達もそうだったのだから間違いないと。
「お姉の母性は凄まじいもの。でも、そろそろ起きないと朝ご飯が遅くなるわよ」
「ああ、そうねぇ。じゃあ、最後にぎゅーってして終わりにしましょうねぇ」
　宣言通り、今までで一番強く抱き締められて、春雨から離れた。まだポヤポヤしているようだが、温もりが無くなってようやく正気に戻る。
「はい、じゃあ1日を始めましょうねぇ。朝ご飯を食べたら、昨日の夜に話した通り、春雨ちゃんは今の身体のことをよく知ることにしましょう。薄雲ちゃんとジェーナスちゃんも、それに付き合ってあげていいからねぇ」
「そうさせてもらいます。みんな、一番最初は戸惑いますし」
「Ｏｋａｙ！　ハルサメがちゃんとやれるように私達でしっかり見届けるわ！」
　ここでもこの3人組は1つのチームとして動くことになる。
　深海棲艦としての自分の力を理解し、戦い方を知ることで、施設を、そして自分自身を護るための知識を得る。艦娘である時とは勝手が違うと散々言われているため、少しだけ緊張してしまうものの、友達が一緒にいてくれるということで、孤独感は無い。
「頑張ります。深海棲艦としての私がどんなものか、ちゃんとここで理解します」
　気合を入れて中間棲姫にそれを表明し、ベッドから降りようとしたところで、脚をまだ構築していないことに気付いて転げ落ちることに

なってしまった。

朝食後、予定通り海へとやってきた春雨。この施設は当然ながら鎮守府とは違うため、わかりやすく出撃出来るような場所は存在しない。工廠はおろか、整備に使えそうな場所そのものが無いのだ。故に、ちょっと出ていきやすそうな浜辺から海に出て行くことになる。

艤装を展開して、そのまま海の上を歩いていき、そして海上へ。これがここでの出撃。実際は、本当に何事もないかを調査するために、誰かしらが島の周りを軽く見て回る程度くらいしかしたことがない。

「まずは艤装を出してみればいいよね」

「そうだね。それは艦娘の時と同じだから」

「わかった。じゃあ……」

艤装を装備した自分をイメージする春雨。艦娘の時はそれだけで背中や脚に艤装が構築され、戦う準備が整った。武装として主砲や魚雷も同時に構築されるため、完全な出撃準備にはほんの少しだけ時間がかかる。

それは深海棲艦とて同じことだった。脚が構築される時と同じように、戦うための艤装がガチャガチャと構築されていく。

しかし、艦娘の時のそれとは違い、艤装は主に腰の辺りから構築されていった。春雨の深海棲艦としての艤装はどうやら艦娘の時とは大きく様変わりしているらしい。

「あ、思ったより違う」

「そういうものだよ。ジェーナスちゃんとかとんでもないことになるし」

「後から見せてあげるわ。今は集中して自分の艤装を展開しちゃいましょ」

「そうだね、私の艤装はどんな感じなんだろう」

腰の両サイドにガチガチと歯を鳴らす生き物のような艤装が展開され、さらにその横に魚雷発射管。シンプルだが、春雨の艤装はこれで終わりになる。

駆逐艦の艤装は艦娘の時も意外とシンプルな物は多かった。背中や腰に主機を装備するのみの者もいるし、ランドセルを背負ったような者もいる。春雨もそこそこシンプルだったため、それを継承したのかもしれないと勝手に解釈することにした。

背中から腰に位置が変わったことで、バランスがかなり変わっているが、誂えられたように動かしやすい。自分のモノであるという前提があるからこそ、最初から違和感が無かった。

「わぁ……代わり映えは凄いけど、結構シンプルだよね」

「私も似たようなものだよ。ほら」

春雨と並んで海へ出るため、薄雲も艤装を構築していく。本人が言う通り、その見た目は殆ど艦娘の時と同じで、腰から主機が生えただけとかなりシンプル。

薄雲自体が深海棲艦化したことによる外観の変化が乏しいこともあり、艤装を構築したとしても思った以上に艦娘に近い姿をしていた。本来の薄雲の色が塗り変わっただけと言われても、信じてしまいそうなくらいだ。

「ジェーナスちゃんは？」

「私？　私はねぇ、結構凄いよ？」

そしてジェーナス。ガチャガチャと艤装が構築されていくが、春雨や薄雲のように腰から主機が出来上がるわけではなく、ジェーナスから離れた位置に膜を張るように装甲が出来上がっていく。

春雨が驚く間もなく、装甲は次々と張り巡らされ、ジェーナスの姿を包み隠したかと思いきや、艤装の下部から中にいる本人の脚がニョッキリ生えて構築終了。

「じゃーん。どう、ハルサメ、私の艤装は」

自分達の艤装がオモチャに見えるほどのとんでもない形状が出てきてしまったため、春雨の思考は完全に固まってしまっていた。春雨自身、艦娘の時に多種多様な深海棲艦と戦ってきているが、ここまでのモノは見たことが無かった。

薄雲はその結果を知っているため、春雨が驚く姿を見るためにノーコメントを貫いていた。この反応を見てクスクス笑っている辺り確

信犯である。
「素晴らしすぎて声も出ないようね。この駆逐艦とは思えないほどの頑丈な装甲は、戦艦の砲撃すら弾くわ。これぞ深海棲艦の真骨頂、カンシュサギ！」
「いや、まぁ、うん、駆逐艦に見えないことはないけど、私の思ってたのと違う」
　実際、深海棲艦には人型をしていないモノも沢山おり、いわゆるイロハ級の駆逐艦はバケモノの魚のような形状をしている。
　今のジェーナスが纏っている装甲は、まさにそれの親玉のような形状であり、本人の言う通り、そんじょそこらの砲撃なら傷一つ付かない程の強固なモノ。主砲など使わず、このまま体当たりをしても、適当な敵ならば粉砕出来るのではないかと錯覚してしまう。
「はい、じゃあハルサメのことに戻るわ。まずはちょっと近所を疾ってみましょうよ。やっぱり海の上を駆け抜けるのは気持ちいいから！」
「そ、そうだね。まずはそっちで慣らしていこう」
　改めて春雨の訓練へ。まずは保護施設近海をただ駆けてみて、運動性の確認。艦娘の時からは艤装が大きく変わっているので、馴染んでいるように見えてうまく動けない可能性もある。
　事実、海上に立った途端に今までとは違う不安定さを感じてしまった春雨は、その場から動けなくなってしまった。脚がカクカクと震え、まるで生まれたての子鹿のような状態に。
「あ、あれ？　なんかうまく立てない……」
「艦娘の時と同じだよ？　身体がそうするように出来てるはずだけど」
「私もそのつもりだったんだけど……な、なんで……わひゃあ!?」
　ついにはひっくり返ってしまい、水浸しになってしまった。
　艦娘も深海棲艦も、生まれた時点で海上航行の方法は身体に染み付いている。何も考えることなく、それがさも当然というように海を踏み締めて移動することが出来るのだ。本来訓練なんて必要ないし、どうやればいいかなんて考えることもない。

しかし、春雨は他と少し違っていた。義脚であるためか、足の感覚は艦娘の時と違う。思い通りに動かすことは出来るが、肌に触れられている感覚などは殆ど存在していないのである。
普段陸で生活するよりも繊細なコントロールが必要となる海上では、この脚の感覚が必要不可欠だった。そのため、今の春雨には艦娘と同じようなことは出来ない。
「こんなの初めてだよ……うわぁ、ビショビショ……ちょっと今だけは脱ごう」
海面に腰掛ける形になり、本来濡れるところがないようなところまで濡れる。義脚を隠すために穿いているタイツに海水が染み込んで、艦娘のときでは感じたことのない不快感を醸し出していた。服が濡れるよりも気持ちが悪いと、嫌そうな表情を顔に浮かべる。
そのため、不快感を払拭するために今はタイツを消した。義脚ではあるが、春雨にとっては生脚という状態になる。素肌が海面に触れて、少しだけ冷たく心地よさを感じた。
艦娘の時なら人前で脱ぐような真似は羞恥心が邪魔をして拒んでいそうだが、自分に対する心が壊れている春雨にはその辺りの感情はカケラも無い。その中のインナーが見えようがお構いなしである。
「あれ、もしかして……」
曝け出された春雨の義脚を見た薄雲が、何かに気付いた。
「春雨ちゃん……その脚が邪魔なんじゃない？」
深海棲艦として生まれ変わった春雨には、そもそも脚が存在していなかった。生活するのに不便だから艤装の応用で脚を生やしていたに過ぎない。つまり、深海棲艦として行動する際には、脚は余計なものでしか無かったのである。
「ウスグモ鋭いわね。艤装が腰の横にあるのって、あのこけるの防ぐためのＦｌｏａｔ代わりになってるのかもしれないわ。脚を消してやってみたらどうかしら」
「う、うん、ちょっとやりかた変えてみる」
友人２人のアドバイスを受け、歩くために必要不可欠であった義脚を消す。すると、今までは綺麗に切断されたようになっていた脚の断

面に蓋がされるかのように新たな艤装が構築された。
海面に尻餅をついていたようなものの春雨も、これが出来上がったことで途端に安定性が増す。いつもより海面が近いが、むしろそれがさらに安定感を増す要因にもなった。
「あれ、すごく安定する。これが正解だったのかな」
この艤装こそが今の春雨の真骨頂。薄雲やジェーナスの履いている靴型艤装の足裏と同じような機構が搭載されており、海上に立つための全ての機能が蓋に集約していた。
腰の横の艤装も、ジェーナスが言う通りの性能をしていた。バランスを保つための舷外浮材（アウトリガー）の役目を果たす。そのさらに外側に魚雷発射管が接続されているのも、海面スレスレから雷撃を放つためだった。
「うわ、うわっ、艦娘の時よりずっと速い！」
そして、実際の性能。深海棲艦はジェーナスが言う通り艦種詐欺をしている者が多数いる。春雨もそこに該当するものだったらしく、運動性の伸びが普通では無かった。
脚を失って小柄になった分が全てそこに集約されているようで、艦娘であった頃の倍は速力が出ている。それが腰の艤装のおかげで安定性も上がり、猛烈なスピードで海上を滑走した。

時々クルクル回りながら踊るように駆け回る春雨の姿を、薄雲とジェーナスは楽しそうに眺めているのだった。

幸せアレルギー

海上航行をある程度こなし、続いて武装の訓練に入る春雨。海上航行のときは義脚が不要であるという域に辿り着いているため、今までとは視線の位置が違う。そのせいで、こちらも艦娘の時の感覚ではうまく扱えなかった。

「今やっておいてよかったよ。これ、艦娘の時と勝手が違いすぎて」

「わかるなぁ。私も全然勝手が違ったから、最初はすっごく苦戦したわ」

「ジェーナスちゃんは……ねぇ。艤装が艤装だし」

航行用の主機から追加で、武装も構築した春雨だが、魚雷発射管は腰の両サイドに構築された生き物のような舷外浮材（アウトリガー）のさらに外側に最初から備え付けられているため、新たに手に入れたのは主砲のみ。

左手を包み込むように構築された主砲は、艦娘時代に使っていたものよりも若干小型化されているのだが、威力は地味に上がっているという深海棲艦ならではの装備。

それを撃つのは流石に問題があるため、構築の段階で模擬弾――砲弾がほぼ水風船と同等――にする方法を薄雲に習うことで事無きを得た。そのおかげで、ジェーナスがその強固さを利用して的役を買って出て、砲撃訓練と洒落込んでいる。

「そろそろお昼だし、今日のところはとりあえずこんな感じでいいんじゃないかな。海の上を疾ることも出来るようになったし、砲撃もある程度出来るようになったから、覚えておかなくちゃいけないことは覚えたよね」

「そうね。これならいざって時に戦えるわ。まぁ、その時はこの私の強固な艤装でみんなを護ってあげるけど！」

「あはは、心強いよジェーナスちゃん」

この訓練により、3人はより強い絆で結ばれたようだった。相互監視による孤独の回避は大成功と言える。春雨と薄雲は孤独感に苛まれることもないし、ジェーナスは自己嫌悪に囚われることもない。

3人が3人、自分のことをどうでもいいものとして扱っている分、

仲間に対する思い入れは異常に強い。だからこそ、この相互監視は思惑通りに運んでいるのだろう。
「ま、私がここに来てからはそういうこと何にも無いのよね」
「この施設は平和そのものだから、こういう訓練も宝の持ち腐れになる可能性は全然あるよ。覚えておくだけ」
「それならそれでいいわよね。わざわざ戦いに行く必要もないし」
艦娘の時ならば考えられないような言葉であるが、それには春雨も同調していた。戦わなくていいのなら戦わない方がいい。今が平和ならそれでいいと。
春雨だけではなく、薄雲もジェーナスもこの施設で適切な処置を受けたことで、心は壊れているが艦娘の心は失わずに深海棲艦化出来ている。しかし、身体に心が引っ張られている部分が一部あった。
それが、人類の平和のために戦禍に身を置くことを二の次にすること。艦娘は率先して人類に味方し、協力して侵略者たる深海棲艦を撃破するために尽力するのだが、戦いそのものがトラウマのようなものである春雨達は、そもそも戦わないという選択肢を優先的に取ることが出来るようになっていた。
そうなると、もう艦娘とも深海棲艦とも言えない謎の勢力と言える。自己防衛のために戦う力を持つ第三勢力のようなものだ。強大な力を持っているのは確かなので、その存在がバレた瞬間に総攻撃を受けてしまいそうではある。
「さ、お昼ご飯にしましょ。やっぱり艤装を出していろいろやってると、お腹が空くのよねー。Ｉ，ｍ　ｈｕｎｇｒｙ」
「ジェーナスちゃんは私達よりも規模が大きいからじゃないかな。私は艦娘の時と似たようなものだし。春雨ちゃんは？」
「私も……あ、ちょっと艦娘の時よりはお腹空いてるかも。艦娘の時よりもスピードが出たからかも」
和やかな会話。こうやって聞いている限りでは、これが深海棲艦の会話とは思えないであろう。この姿を人類や艦娘が見た場合、それでも斃すべき侵略者だと思うのだろうか。

昼食後は完全にフリーとなっている3人組。
昨日に見た農作業は、連日やるようなことではないために今日は無し。飛行場姫による釣りも、先日に伊４７を連れていった漁によってしばらく必要な分は獲れているとのこと。歓迎会でそれなりに消費したものの、まだまだ在庫はあるようだ。
結果、またダイニングルームに集まってティーパーティーを嗜む時間となる。ジェーナスもノリノリでお茶を淹れていた。
「私達もお呼ばれしちゃっていいのかしら」
「構わないわよ。大勢の方が楽しいじゃない。それに、今は新人のハルサメがいるんだから、みんなでＴａｌｋｉｎｇするべきよ」
「それもそうだな。松姉ぇ、こりゃ便乗しようぜ」
昨日と違うのは、農作業をしていないため、松竹姉妹もこのティータイムに参加していること。中間棲姫と飛行場姫は施設の管理人としてやることがあるらしく不参加。伊４７は１人でブラブラしているらしく捕まえることが出来ずに不参加。なかなか捕まらない猫のような性格である。
春雨としては、自分の恩人である伊４７と仲良くしたいという気持ちは強いため、不参加を残念がっていた。
「ヨナさんは……来ないんですね。いろいろお話ししたかったんですけど」
「あー、アイツはそっとしておいてやってくれ。これは俺が話していいことかわかんねぇけど、アイツの溢れた感情がちょっと厄介なんだよ」
ここにいる理由であり、深海棲艦化のきっかけともなる溢れた感情。春雨は『寂しさ』なわけだが、今この施設にいるメンバーの中で、伊４７のそれだけはまだ聞いていない状態だった。
薄雲は春雨と同じ『寂しさ』。ジェーナスは『自己嫌悪』。松竹姉妹はお互いへの『依存』。薄雲の証言では、ここにいる者達は全員がバラバラであるということで、伊４７はこの中のどれにも該当しない。
暗黙の了解として、本人に問い詰めないというものがあるが、他者

からそれを伝えられることを良しとするかは何とも言えない。中間棲姫や飛行場姫に伝えられるのは、施設の長からの言葉であるが故にまだセーフではあるらしいが。
「別に、話してもいいよ？」
突然の声に一同が飛び上がる程驚いた。施設内をブラブラしていた伊４７が、ダイニングルームの入り口のところからヒョッコリと顔を出していたからだ。
「みんなの後ろにヨナ～。いい匂いがしてきたから来ちゃった」
「ホンットに気まぐれな奴だなぁ！」
潜水艦を体現するかのように神出鬼没。海中だけでなく、陸でもその性質は健在。
「せっかくだし、ヨナのことはヨナが話した方がいいヨナ～。春雨ちゃんには教えてあげるね」
「は、はい、不都合で無ければ」
「じゃあ、ヨナもティーパーティー参加するね。でも、あんまり長居はしないようにするんだけど」
長居があまりいいことではないようで、少しお茶を貰ってからまた施設内をブラつくとのこと。伊４７の事情を知っている春雨以外はそれでも参加してくれるなら嬉しいと喜ぶが、春雨としては最後までいてほしいと願うばかり。
しかし、ヨナの事情を聞くことで考えが変わることになる。
ジェーナスが淹れた紅茶を啜り、ホッと一息吐いてから、改めて春雨の方を向く伊４７。真剣というわけでは無いのだが、話しやすいか話しにくいかで言えば、当然話しにくいことなので、いつものふんわりした笑みは今は鳴りを潜めている。
「ヨナの溢れた感情はねぇ……『諦め』」
今までに無かった感情。春雨達のように発狂に繋がるような感情には思えないが、少なくともこの伊４７はその感情によって心を壊し、今でも何かしらの爆弾を抱えている。
「生きることをね、幸せになることをね、諦めちゃったの。もう死ぬからどうでもいいやって。そしたら、みんな知ってるあの泥が溢れ出し

ちゃった。多分、『自暴自棄』も溢れた感情に入っちゃってるんじゃないかな」
　伊４７も他の者と同じように詳細に自分の過去を語ることはしなかったが、一応はこの施設に住まわせてもらっていることで、当初よりは緩和されてきたらしい。
「そのせいかね、ヨナは幸せを感じ過ぎると、泡吹いて倒れちゃうの。妹姫さんは、幸せアレルギーって言ってた」
　幸福を得ることを諦めてしまった結果、心を壊して深海棲艦化した伊４７は、逆にそれを得られる状況になると身体が拒絶反応を引き起こしてしまうようになってしまったと、飛行場姫は考えたようだ。それを簡単に表す言葉として、『幸せアレルギー』という言葉を使ったらしい。
　添い寝を断っているちょっとした理由というのもそれ。春雨は実感しているが、中間棲姫に包み込まれるように眠ると、心が落ち着き幸福感が得られる。それだけの母性を内包しているだけなのだが、伊４７にとってはそれがそもそも毒となってしまう。
　結果、眠ることが出来ないどころか、春雨達でいう発狂状態、本人のいう泡を吹いて倒れるという状態にまで行ってしまうそうだ。最初はただこうやっておしゃべりしているだけでも手が震え、数分もしないうちに拒絶反応を見せたそうだが、今は体質改善が進んである程度は一緒にいられるようになったのだとか。
「だからね、ヨナはなるべく独りでいるの。だって、幸せになったらみんなに迷惑をかけちゃうし、そもそもヨナが苦しいの。面倒くさい身体だよね」
「治る見込みは……」
「無いヨナ。だって、ヨナが深海棲艦でいるのはそれがあるからだもん。それが無くなったら、ヨナは泡になって消えちゃうかも」
　いつものニヘラとした笑いを浮かべるが、その言葉はあまり冗談が感じられなかった。
「こうやってみんなとおしゃべり出来るの、ヨナはとっても楽しいよ。でも、そろそろ危ないと思うからお暇するね。ほら、手が震えてきた

でしょ？」
　持っている紅茶の表面が波打ち始めている。この場が揺れているわけではなく、伊４７の手が震えているからそうなっているのは誰が見ても明らかだった。
　春雨以外はそれに納得はしている。爆弾を抱えているのは全員同じ。しかし、やはり仲間同士なんだからもっと仲良くしたいとは考えているようだ。
「ジェーナスちゃん、紅茶、すごく美味しかった。また飲ませてもらってもいい？」
「勿論。欲しくなったらいつでも言って。出来れば、短い時間でもいいからティーパーティーに参加してもらいたいわ」
「これくらいが限界だけど、ヨナで良かったらまた参加させてね」
　ニコニコしながら伊４７はダイニングルームを出ていった。その表情の裏側に悲しみは感じられない。本心から喜んで、本心から楽しんで、このティーパーティーを去っていった。
　結局、春雨はまともに伊４７と話をすることが出来なかった。幸せアレルギーというとんでもない爆弾を抱えてしまっている伊４７に対して感謝の言葉を伝え続けるのは、逆に爆発させる原因になりかねない。
　最初に御礼を言ったあの時も、実は無理していたのではと勘繰ってしまう。握手は出来たし、その時は手も震えていなかったが、あの後どうなっていたかは知る由もない。もしかしたら、春雨と幸せな交流をしたことによって、悶え苦しんでいたかもしれない。
「春雨さん、ここは割り切ってあげてね」
　少し落ち込みそうになっているところを、すかさず松がフォローする。
「私達もヨナさんとは仲良くなりたいの。というか、仲はいいつもり。なんだけど、距離が近いとヨナさん倒れちゃうから……」
「俺達はアイツのこと嫌いじゃないんだぜ。むしろ好きだ。漁とかも率先して手伝ってるらしいし、ほら、お前の繭拾ってきたのもアイツなわけだしさ」

誰も伊４７のことを嫌っているわけではない。むしろ、もっとお近付きになりたいとさえ思っている。しかし、それは伊４７が抱える爆弾が許さない。

発狂して暴れ回るよりも深刻なアレルギー反応を引き起こさないようにするためにも、お互いが不干渉でいることが最善となってしまっているのである。トラウマを穿り返される辛さを知っているからこそ、そこに触れることが苦しいことも理解出来ている。

「……わかりました。私もヨナさんのことは嫌いませんから。命の恩人を嫌うなんて失礼ですし」

「それでいいと思うわ。仕方なく距離を取るのは苦しいかもしれないけど、それがヨナさんのためになることだから、割り切りましょ」

それが伊４７のためになるというのならと、春雨も割り切ることにした。そうするしかないのだから、今はそれに倣う。それがこの施設で選び取られた最善手なのだから。

施設の者の在り方はそれぞれである。孤独を嫌う者もいれば、孤独で無ければ維持出来ない者もいる。

それでも、共存が出来ているのがこの保護施設だ。

連鎖するトラウマ

夕食を終え、後はお風呂と眠るだけとなったところで、飛行場姫からお呼び出しがかかる春雨。まだこの施設に身を寄せてから1つの夜しか越えていないということで、まだまだ心配事は多い。それをケアするためにも、飛行場姫が今日やったことなどを聞いているようだ。

施設の管理者として、物理的に施設を管理している中間棲姫に対して、精神的に施設を管理するのが飛行場姫である。勿論、春雨以外にも全員が同じ道を通っている。

「今日は深海棲艦としての在り方を知ってもらったわけだけど、どうだったかしら」

「はい、うまく海上も航行出来ましたし、武装の扱い方も薄雲ちゃんやジェーナスちゃんに教えてもらって、ちゃんと知ることが出来ました」

さながら個人面談である。春雨もまだ来てすぐとはいえ充実した1日を過ごせているため、飛行場姫としても安心していた。

海上航行の際に義脚を消さなくてはいけないことを聞いたときには、やっぱりなという顔をしていた。繭から孵った時に脚が無かったのだから、深海棲艦として活動する際にはその時の姿に準じた方がいいと、その時に想像した通りの答えが来た。

「海に出る時は脚は無しで行こうかと思います。でも陸では生活出来ないので、これは使っていきますね」

「そうね、その時その時で臨機応変に使った方がいいわね。ある状態にも無い状態にも慣れておくといいわ」

タイツに包まれた義脚を撫でる春雨。日常生活ではこれのおかげで全く支障なく、それこそ艦娘の時と同じように活動出来ている。歩くだけでなく、走ることまで可能なのだから、義脚という枠組みを大きく超えているようにも思えた。

片腕が義腕である飛行場姫もその辺りは理解が深い。そもそもそのように出来ている深海棲艦とはいえ、生まれたばかりの頃は苦労す

ることもあったのだとか。感覚が本来の腕よりも薄い上に、痛覚なども感じないのだからそれは仕方のないこと。今でこそマグロの解体までやってしまうのだから、それも努力の賜物と言えよう。
「基本的には無いとは思うけれど、義脚にガタが来るようなら言いなさいね。それはアンタの体調に関わってくる話だから」
「そうなんですか？」
「ええ。深海棲艦だって体調を崩すことくらいあるわよ。そうじゃ無かったら、爆弾なんて抱えないわ」
　言われて納得する。心が壊れ、多種多様な問題が発生しているのだ。体調不良だって当然ついて回る。伊４７の幸せアレルギーもその典型的な例。一定の基準の幸福感を得た途端に体調不良である。
　それに、あの中間棲姫ですら農作業では熱中症対策に麦藁帽子を愛用するくらいなのだ。そういうところは艦娘だからか人類に近い。外的要因による体調不良も普通にあり得るわけだ。
「アンタはまだ目覚めたばかりだから、少し過剰に心配するくらいがいいのよ。だからアタシがこうやって話を聞いてるんだもの」
「心配してくださって、ありがとうございます」
「それが管理者ってモンだからね。みんなに言ってるけど、何かあったらアタシかお姉に頼りなさいよ。お姉は忙しいことが多いから、基本的にはアタシに来なさい」
　中間棲姫が思わず甘えたくなる母性の塊だとするならば、飛行場姫は頼れる姐御肌。相談事などはまず飛行場姫からと考えるのが当たり前になっていく。この施設で起こり得る相談事なんて高が知れているのだが。
「昨日は初日だったからアタシとお姉が添い寝に行ったけど、今日からは大丈夫かしら」
「……た、多分、大丈夫です。薄雲ちゃんとジェーナスちゃんもいてくれますから。何も無い……と思います」
「まぁ何かあったらアタシかお姉が気付くだろうから、安心して寝なさいよ」
　実際、この施設は中間棲姫と飛行場姫の陣地のモノ、つまり艤装の

一部のようなモノである。その中で特別おかしなことが起これば、確実に2人の姫が気付く。いくら眠っていたとしても、艤装内で何か特殊なことが起きたとなれば嫌でも目を覚ますことになるだろう。
そういう意味では、ここに住んでいる時点で軽度の監視下に置かれているようなものだ。危機的状況に陥った場合にのみ反応するのみ。しかし、一切の嫌みはなく、若干過保護気味と言えるくらいに心配をしているからである。
その事実を突きつけられても、嫌がる者は今のところ誰一人としていない。そもそも春雨は自分への興味が何もないため、寝ている姿を見られていようが何も感じない。見られて困るものもない。
「どうしても必要なら、また添い寝くらいならしてあげるわ」
「ありがとうございます。もしかしたらお願いするかもしれません」
「はいはい。その時になったらね」
飛行場姫としては、その時が来ないことを祈っていた。

その日の深夜のこと。春雨は両サイドを薄雲とジェーナスに挟まれ、2人の温もりの中眠っていた。昨晩のように姫2人がいなくとも、充分過ぎるくらいに心が温まり、気持ちよく眠ることが出来ていた。
しかし、その時に見た夢がよろしくなかった。
黒い繭の中で見せられた、姉達と鎮守府で過ごす夢。二度と戻ってこない、幸せだった過去。心を壊していたとしても、深海棲艦として新たな人生を歩み出しても、こればかりは忘れられない、忘れたくない現実。
この夢を見てしまった原因は、心を許した仲間の温もりだった。初日はいろいろとありすぎて夢を見る余裕すら無かったが、今は2日目である程度心に余裕が出来ている。そのせいで、トラウマを穿り返された。
明晰夢ではなく、ただ自らの記憶を反芻させられているだけ。故に、より鮮明にあの時の絶望を思い出すことになり、その刃は心の傷

を抉った。
　キッチリと姉達の死の寸前まで再生されたことで、忘れるわけがないのに、多少はボヤけていたところが再び鮮明に映るようになった。
「っ……あ……独りは……嫌だ……」
　眠っているのにその時の言葉を呟き始めた。瞑っている眼には涙が溢れ、苦しそうに悶える。呼吸も詰まり始め、熱に魘されるかのように汗ばむ。時折その夢での出来事を拒絶するかのように首を横に振った。
　隣でこんなことになっていれば流石に薄雲もジェーナスも気付く。目を覚まし、苦しむ春雨を目の当たりにしてすぐに行動を開始した。2人とも自分が同じ経験をしているため、処置の方法は頭の中に入っている。
「ここってｔｏｗｅｌとかあったわよね」
「うん、前に私がこうなった時から、姉姫さんが完備しておいてくれてる。すぐに用意するよ」
「Ｏｋａｙ．　私はハルサメを起こすわ」
　パタパタと動き回り、適切な処置を施していく。薄雲は室内に用意されているタオルを取り出し、その間にジェーナスが春雨を目覚めさせるために呼びかける。夢の世界からこちらに戻ってこいと、少し強引に肩を揺すった。
　悪夢のせいで眠りが浅かったおかげか、声をかけるまでもなく目を覚ました。涙目でボヤける視界の先には、心配そうに見つめるジェーナスの顔。足りない酸素を掻き集めるように呼吸は荒く、時折ビクンと身体を恐怖で震わせる。
「ハルサメ、大丈夫よ。独りじゃないわ。嫌な夢を見たのよね。私達も経験があるから、貴女の気持ちはすっごくよくわかるの」
「ヒッ……いっ……私……私は……」
「落ち着きましょ。大丈夫、私達はいなくならないわ」
　見た目ではジェーナスの方が歳下なのだが、精神的には同等、むしろ深海棲艦となってからの経験から言えばそれ以上である。その経験を活かし、春雨をどうにか落ち着かせようと、撫でたり声をかけた

りを繰り返した。
実際、ジェーナスはこの施設の中では古参だった。薄雲が黒い繭として施設に運び込まれた時には深海棲艦としてそれなりに経験を積んでいたため、すぐに対処出来ている。
そのジェーナスも、中間棲姫や飛行場姫にしてもらったことをそのまましているだけなのだが。
「私……独り……独りは嫌……嫌ぁ……」
「独りじゃないわ。ここにはみんないるわ」
「はい、タオル。汗びっしょりだから、一度拭いちゃおう」
薄雲も加わって、春雨の事後処理を続けた。冷や汗で湿ったパジャマは一度消してもらい、全身に溢れ出した汗を丁寧に拭き上げていく。興奮しているものの、春雨は素直に従っていた。
その間も春雨は譫言を呟き続けた。独りは嫌だという言葉以外には、追いすがるように姉さん姉さんと。
その春雨の譫言が耳に入ったことで、薄雲にも異変が起き始める。ジェーナスがまずいと思った瞬間、持っていたタオルを持てないほどに震え、膝から崩れ落ちて自分を抱きしめる。
「ね、姉さん……私、姉さんを……あ、ああ……っ」
薄雲のトリガーも引かれてしまった。
溢れた感情が同じである薄雲は、そのきっかけとなる出来事も春雨と殆ど同じである。
大きな海戦で最愛の姉を失い、自分も死にかけた。撤退も間に合わず死を待つのみとなり、しかし簡単には死ねず、孤独感、寂しさが溢れ出して黒い繭となった。状況は違えど、境遇はまるで同じである。
不安定な状態できっかけとなる姉の存在を示唆されてしまったことで、その時の孤独を一気に思い出してしまったのだ。目の前に友達がいようが関係ない。
「独り、独りになる、なっちゃう、嫌だ、嫌だ、姉さん助けて……私……」
1人を対処するのもかなり厳しいのに、2人目も同じように発狂しかけている状況に、ジェーナスは頭を抱えてしまった。2人で1人をどうにかするならまだ大丈夫だったが、1人で2人はどうにもならな

い。
　さらにこれは追い討ちになる。今のジェーナスにはこの状況は非常によろしくない。話せる相手がいなくなってしまったことにより、一気に自己嫌悪が加速する。
「……私がもっと強かったら……2人を立ち直らせることが出来たのに……私、私はこんなだから……」
　ふっと瞳から光が消え、春雨への処置の手が止まってしまった。ジェーナスがきっかけでなくとも、自分の手が尽くせなくなったと思ったら瞬間にトリガーが引かれてしまった。
　ジェーナスのきっかけは、他者が救えなかったことによる自己嫌悪だ。自分がもっと強ければ最悪な目に遭わなくて済んだのにという思いが、弱い自分を嫌うことによって心を壊した。
　故に、今のようなどうにもならないような状況に陥った場合、孤独でなくても自己嫌悪に押し潰される。何もかもを自分のせいだと思い込んでしまうのだ。
「……は、ハハ、私のせいでこんなになっちゃった……」
「はいはい、そんなことあるわけないじゃないの」
　そこへ扉を強く開けて入ってきたのは飛行場姫である。
　危機的状況になったら反応する監視がしっかりと働き、本当に最悪な状況になる前に対処に来ることが出来た。
「お姉は春雨と薄雲お願い。アタシはジェーナスをどうにかするわ」
「ええ、任せてちょうだい」
　飛行場姫の後から中間棲姫も部屋に入り、すぐさま春雨と薄雲を2人纏めて抱きしめていた。友達の温もりだけでは足りなかったところを、バケモノじみた母性の塊で対処する。その実、2人は中間棲姫の温もりを感じた途端に少しずつ落ち着いていった。
　同じように飛行場姫もジェーナスを抱きしめ、頭を撫でる。自己嫌悪を処理する方法は簡単ではないが、落ち着かせて思考能力を戻すことは可能。
「ジェーナス、これはアンタのせいじゃないでしょ。アンタも含めてだけど、ここにいる子達は何かしら抱えてるってことくらい、アンタ

自身が割り切ってるはずよね」
「……私……私……」
「アンタは頭がいいんだから、少し考えればわかるはずよ。大丈夫、誰もアンタを責めやしない。アンタはよくやれてるの。アンタのせいなはずがないじゃない」
　より落ち着かせるため、顔を胸に押し当てて温もりを与える。ボディスーツの触り心地と柔らかさでジェーナスも徐々に落ち着いていき、数回ビクンビクンと震えた後、そのまま動きが止まった。
「……妹姫、ｓｏｒｒｙ……。私また……」
「いいのよ。いつも気を張ってることはわかってんだから。むしろアンタはもっとアタシ達に甘えなさい」
　中間棲姫の方も2人同時に抱きしめ、子供をあやすように撫でると、2人とも幼児退行したかのように大人しくなり、その温もりに身を委ねて眠りについていた。
「春雨ちゃんは特に重症のようねぇ。こうなってから時間が浅いというのもあるけど、まだ私達無しで眠るのは難しいかしらぁ」
「かもしれないわね。ある程度落ち着くまでは一緒に寝てあげた方がいいかもしれないわ。トラウマが連鎖するの見るの久しぶりだもの」
「なら、今日も今からここで寝ちゃいましょうかぁ。せめてグッスリ眠らせてあげたいものねぇ」
　結局、その日の夜も途中からではあるが姫2人の添い寝により朝まで眠ることが出来た。それでもまだ春雨は危ういということで、しばらくは添い寝が必要と判断された。

　トラウマは簡単には払拭出来ない。深海棲艦となったきっかけでもあるのだから、これは永遠に付き纏う問題となるだろう。壊れた心が元に戻らないように、この心の傷は、治ることは無い。

焦燥、憔悴

行方不明となった哨戒部隊の捜索任務も、第四次――４日目となっていた。

ただ哨戒に向かい、以前に殲滅した侵略者の残党がいないか確認していただけのはずだった。なのに、哨戒任務に向かった駆逐隊が、誰一人として戻ってきていない。提督が言うには、現場確認の報告中に突然ノイズが入り、そのまま通信途絶。その後、待てども待てども戻ってこないという事態に発展した。

激しい戦闘の中、通信途絶というのは無いことは無い。敵の攻撃の当たりどころが悪かったり、激戦であれば通信が混線して鎮守府とうまく連絡が取れなくなったりと、鎮守府側が不安になるようなことはそれなりにある。

しかし、哨戒任務でここまでの大事は、未だかつて無かった。そこでの戦闘は終わったはずなのに、それ以上の残党がいたとしか思えないような状況。撤退すら許されていないのだから、そう考えるしかない。

「こんなに静かな海なのに……なんで見つからないの……」

捜索部隊として毎日のように出撃している海風が泣きそうな声で呟いた。

行方不明となったのは、海風にとっては大切な姉達。さらに言えば、鎮守府でも特に精鋭と言われている駆逐艦だった。慢心しているわけではないのだが、残党くらいに後れを取るだなんて考えられないくらいの力を持っている。それなのに、もう４日も姿を見せていない。

最初は何かしらの問題が起きてしまい、無人島か何処かで救護を待っているのではと考えたものの、この海域には手近な島は存在せず、休息出来そうな場所すらない。

そうなると、既に本当に強力な深海棲艦と遭遇してしまい、通信することも出来ずに沈んでしまっているかもと考えてしまうものの、遺留品すら見つからない。それが一番の不安だった。

「海風の姉貴……ちったぁ休めって。目の下、クマやばいよ」
その海風を心配しているのが、その妹の江風。本来は勝気で男勝りなのだが、姉の憔悴する姿を見てそれは鳴りを潜めている。
駆逐隊では一番の姉である海風が引っ張っているが、江風は精神的なリーダー気質。その明るさで周りを引っ張っていた。しかし、この現状ではどうしてもそういうことをすると空回りになってしまう。
「心配なのはわかっけどさぁ、身体壊してちゃあ意味ないよ」
同じく、海風の妹である涼風も海風を気にかけていた。江風と同様に涼風も比較的喧しいタイプではあるのだが、姉が行方不明となってからは静かに。
リーダーの座は海風に譲っているものの、駆逐隊の４人の中では最も古参だったりする涼風は、経験値が他の３人とは段違い。それでも今回の事態は初めてのことなので、大雑把ながらも慎重に事を進めようとしている。
「……海風姉の気持ち……わかるから……私も辛い……」
そして、もう１人の妹、山風は海風の雰囲気にあてられ、涙目になっていた。元々後ろ向きなタイプだったのが、より一層後ろ向きになってしまっている。
姉達が哨戒任務から戻ってこないと聞き、最初は引きこもりになっていた山風だったが、海風の懸命な捜索を手伝おうと第三次捜索部隊から自分の意思で参加した。
この４人は春雨の妹達。春雨が深海棲艦化したことは勿論知らない。
「なんでもいいから痕跡が欲しい……千歳さん、千代田さん、お願いします」
「いいけど……江風や涼風の言う通り、集中出来ないのならちゃんと身体を休めた方がいいわよ？」
「ホント、後ろから見ていてもちょっと危なっかしいわ」
「大丈夫ですから……」
海風の指示を受け、その焦燥感を心配しつつも言われた通りに動き出すのは、駆逐隊のみでは調査力不足であるということで編成された

軽空母、千歳と千代田の姉妹。
空母による航空戦力で視野を拡げ、今までの3日間で見つけられなかったものを見つけたいと、海風が提督に直談判をしていた。
最初は捜索にここまで苦戦するとは思われていなかったため、海風が率いる駆逐隊のみで調査していたが、初日、二日目とまるで当たりがなく、三日目には調べられるところは調べ尽くしたといえるところまで来ていた。
駆逐艦の足と目では、探せる範囲は限られている。海風としては夜までかけて徹底的に捜索をしたいと訴えたのだが、ただでさえ行方不明の原因がわからないところに、危険度が跳ね上がる夜の海を行かせるのは良しとしなかった。
結果、日中でも調査範囲が拡げられる空母に頼ることにしたのだ。艦載機を飛ばして海風達では見えないところまで確認出来れば、何かしらの痕跡が発見出来ると信じて。
「それじゃあ、正面の方向に。あっちはまだ調査していないのよね？」
「今まではここまでが限界でした。帰投までに時間がかかるので……」
「了解。千代田、艦戦を半分出してちょうだい」
「オッケー千歳お姉」
甲板を模した絵柄の箱を一撫ですると、正面が開く。その中にあるのは、ギッシリと詰められた艦載機の模型。逆側の手に持つ操り人形の吊り手のようなパーツを翳すと、何処からか糸が伸び、艦載機の模型に一本一本が貼りつく。
その瞬間、命を持ったかのようにエンジン音が響き、手を振るうと同時に意識した数の艦載機が一斉に飛び立つ。舞い上がった艦載機達は、すぐさま散開して海風の手が届かない遠方へと飛んでいった。
「なるべく広範囲に、でも少し慎重に行くから、時間は貰うわね」
「大丈夫です。……これで何かしら見つかってくれれば」
「まだ別方向もあるんだから、あまり期待しないでよ」
縋る思いで2人に託し、艦載機による広範囲捜索を開始。この間は動き回ることは控え、2人の軽空母に全て任せることとなる。

艦載機には基本、『妖精さん』と呼ばれる搭乗員が存在する。空母はその妖精さんからの報告――と言っても声で聞こえるわけではなくモールス信号的な通信――で、その状況を把握出来る。先んじて飛ばし、敵の状況を確認してから進軍という流れが、空母を部隊に入れた場合の戦い方。

一度発艦すると、艦載機の操縦は妖精さん頼りになるため、着艦するまではあまりその場所から離れられない。妖精さんと言えども万能ではなく、発艦した場所から大きく離れられると、着艦するのが難しくなるからである。

代わりに艦載機は艦娘が海上航行するより速く移動し、1人の空母から多ければ数十機が飛び立つことが出来るため、その場から動かなくても自分達の足で稼ぐより広範囲かつ正確に調査が出来た。

「……こんなに静かな海なのに……」

同じことを何度も呟いてしまう海風。それだけ切羽詰まっているのは誰が見ても明らかだった。

先程江風が指摘したように、目の下にはクッキリとクマが浮かんでおり、まともに眠れていないことを如実に表している。そんな状態では正確な判断は出来ないのではと考えられていたが、捜索部隊の参加を見送ることは出来なかった。自分の手で姉達を救出したいという気持ちが、海風を奮い立たせていた。

「姉貴、一回マジでガッツリ休ンだ方がいいって。判断力鈍ってンじゃないか？」

「そうだそうだ。いっちゃん冷静でいなくちゃいけない隊長様がそれじゃあ、あたいらも不安になるってもんだい」

そう言う江風と涼風だって、姉の行方不明は心配である。こんなに長いこと顔を合わせていないことが無かったため、日に日にその不安は蓄積されていく。

何もそれは妹達だけでは無い。今調査に参加している千歳と千代田も、鎮守府初の被害者となってしまいそうな駆逐隊の行方には不安を覚えているし、頼まれた時に進んで調査に参加するくらいには心配している。

鎮守府全体に大きな衝撃を与えているこの事件は、早急に解決する必要があるのは確かだ。それ故に、動けるものが率先して動き回っている。

「……海風姉まで倒れたら……私……嫌だよ……」

スカートの裾をクシャクシャと掴みながら、俯いた山風が呟く。

山風はこういう精神的な機微に非常に敏感だった。特にマイナスの感情への反応は人一倍早い。そのせいで山風自身も前向きになれず、いつも誰かの後ろにいるほど。

今回の件、山風にとっては、鎮守府に苦痛を覚える程に辛い状況に変えてしまっている。最初は引きこもっていたが、鎮守府でも苦痛ならば外に出て調査をした方がまだマシであると考えたのも、捜索部隊に加わる一因だったりした。

江風と涼風よりも重くのしかかる山風の言葉に、海風は返す言葉もなく俯くのみ。

隠してはいるが、海風は既に体調に影響が出ていた。不眠症から始まり、出撃中は耐えられているが、嘔吐や腹痛、風邪のような症状まで出始めている。全てはこの数日間のストレスが引き起こしている問題点だった。

そんな状態で冷静な判断が出来るわけがない。提督に休めと言われても、まともに休めていないくらいなのだから重症である。

「大丈夫よ山風。私は、大丈夫。姉さん達の痕跡を見つけるまでは、これくらい」

「大丈夫そうには見えねぇんだっての！　姉貴よぉ、気持ちはわかるけどマジで休めって！」

ここでついに江風が爆発してしまった。心配に心配を重ねているのに、海風は聞く耳持たずで身体を壊してまで調査を続けている。山風が危惧している総崩れに向かって突っ走っているようなものだ。姉妹だからこそ不安になるのはわかるが、同じことになったら余計にダメになる。

一番冷静に動けるからこそ駆逐隊のリーダーを仰せつかっている海風がこれでは、部隊そのものに影響を与えかねない。江風としては

自己防衛のためにも海風には休んでもらいたかった。
「あたいも江風の意見に賛成。海風姉、ちょいとダメになってんだよね。いつもの海風姉なら、もう少し自分のこと考えて動いてんじゃないかな」
「涼風まで……私はまだまだ平気よ」
「そう言って倒れてるヤツ、結構いるんだよなぁ。あたい、海風姉よりも鎮守府見てんだよ？」
古参ならではの言葉に、海風は口を噤むしか無かった。
艦娘という存在が現れ、それを総括する鎮守府が設立して間もなく、暗中模索状態で運用されている時、今の海風のように体調不良を押し隠して出撃するものや、それを理解出来ずに出撃させるものが横行した。そのせいで勝てる戦いも勝てずに撤退ということもよくあり、艦娘をもっと人間のようにケアする方針になった程である。
海風達の提督も、当然ながら部下である艦娘のケアは優先的に行なっている。だからこそ今まで被害者が出ずに済んできた。しかし、今回は海風の意思を尊重して捜索部隊に組み込んでいる。精神的な問題は簡単には対処出来ないがために、仲間、妹からの叱咤で休息を選択するように仕向けていた。
「私もあまりオススメ出来ない、かな。厳しい事を言うようだけど、そんな体調の艦娘が旗艦を務めている部隊なんて、普段の半分くらいしか力を発揮出来ないと思うわ」
艦載機からの通信を待っている千歳も、海風には苦言を呈した。焦る気持ちも理解しているが、それを前面に押し出しすぎていて余裕がない。この状態でいざ行方不明の原因となった可能性がある強大な敵が現れた場合、まず間違いなく冷静な判断なんて出来やしない。
1人でどうにかなるのならまだしも、今は部隊、団体行動中なのだ。1人のやらかしが、全滅に繋がる。それは誰も看過出来ない。それこそ、その原因になろうとしている海風ですら。
「妖精さんからの通信来た。今のところ何も発見出来ずって。千歳お姉は？」
「私の方も同じね。何も見つけられてないみたい。もう少し周辺を探

してもらうわ」
「了解。こっちも同じ方針で捜索を続ける」
話を遮るようになってしまったが、千代田からの提言で言い争いは一時的に中断。むしろそれを見越して割り込んだようにも思えた。千歳もそこは少し安心している。
範囲を拡げ、目を増やし、それでもまだまだ何も痕跡を見つけられない。まるで最初からそこにいなかったかのように、綺麗さっぱり姿を消している。空母の目からしてもそれなため、疑問は深まるばかり。
「海風の姉貴、江風は諦めろなンて絶対に言わない。だけどさ、壊れるまで頑張るのは、違うと思うンだ。だから、今日帰ったら、一回ガッツリ寝た方がいいよ。提督に頼ンで入渠させてもらってもいいと思う。あそこなら眠れないとかないしさ」
「……そうするわ」
ギュッと拳を握る音が、ここにいる全員に聞こえた。

結局、第四次捜索部隊でも、行方不明者は発見出来なかった。今回は調査したい方向の半分しか捜せなかったため、翌日以降に逆方向を捜索することを決め、その日は終わる。
海風は提督の計らいで入渠ドックによる休息を命じられた。

友達

深夜にトラウマが連鎖して総崩れを起こした春雨達だが、中間棲姫と飛行場姫の迅速な介護で事なきを得た。そこで2人の手が入らなかったら、おそらく全滅していただろう。

翌朝、発作も無くなってグッスリ眠った春雨達は、結局添い寝してくれていた中間棲姫と飛行場姫に平謝りである。仕方ないことだからという2人の言葉で、薄雲とジェーナスは終わったのだが、春雨は薄雲とジェーナスを巻き込んでしまったために罪悪感も酷く、それだけでは終わらずに土下座すらしそうな勢いだった。

「大丈夫、大丈夫よハルサメ、今ちゃんと目が覚めてるんだから、何も問題は無いわ」

「そうだよ春雨ちゃん、私も同じ爆弾抱えてるから、春雨ちゃんの辛さはわかるよ。ああなっても仕方ないんだから」

同じ立場だった薄雲とジェーナスも、春雨がそこまでしてきたことにアタフタし始めた。確かに巻き込まれた側かもしれないが、やってしまったことは同等。ひとまずは春雨を慰める。2人は春雨のことを責めてなんていないし、むしろ自分が同じ立場になる可能性がかなり高いのだから、これくらいならと気にもしていなかった。

慰めの言葉をかけられても、春雨の気は済まなかった。自分のことはどうでもいいとして、仲間を、友達を命の危機に晒してしまったことがどうしても許せなかった。溢れるまでは行かないまでも、自己嫌悪に押し潰されてしまいそうになるほどに。

「春雨ちゃん、落ち着いてちょうだいねぇ」

それを見越した中間棲姫が、相変わらずその母性を使って落ち着かせる。今は焦りに焦っているので義脚を構築すらしていないため、中間棲姫の腕力でも軽々持ち上げることが出来てしまう。

そのまま自分の膝の上に座らせて、後ろから抱きしめながら温もりを与えていく。春雨はそれでも震えが止まらなかった。

「辛いことを思い出しちゃったのよね。夢だもの、抵抗も出来ないわぁ。だから、今日からしばらくの間は私と妹ちゃんも一緒に添い寝

してあげるわね。グッスリ眠れるように、落ち着けるように」
ただただ当たり障りのない言葉だけを選んで今後のことを説いていく。叱ってもらいたいと思っていたかもしれないが、中間棲姫がそういうことをしない人であることは、この短時間で理解している。
「……姉姫様……迷惑をかけてごめんなさい……」
謝罪の気持ちを口に出す。どうしても何度も言っておきたくて、謝罪の言葉が止まらない。これからも何度も何度も起こることだ。春雨の性格的に、こういう事態が起こるごとに謝罪の言葉を口にするだろう。
「1つだけ。お友達が慰めてくれているのなら、それは素直に受け入れること。甘えてもいいの。これだけは守ってちょうだいね」
それに対して、中間棲姫が耳元で呟いた。まるで子供をあやすような、優しい優しい口調。
「春雨ちゃんも、お友達が同じようになったら慰めるでしょう？　それなら、同じことをしてあげればいいの。それで全部元通り。みんなそうやって割り切るの。それだけ」
一旦落ち着かせてから、たった1つの助言。説教でも何でもなく、深海棲艦として、この施設で生きていく上での処世術。むしろ、人類でも艦娘でも同じような生き方をするべきこと。自分がされたことを相手に返すというだけ。
全員が同じことをしたら、それだけでこの施設は平和。心の爆弾を抱えていない中間棲姫と飛行場姫がその信念を貫いているのだから、まず間違いなく問題は起きない。
それに、中間棲姫の言葉は、深海棲艦の本能に届くような感覚がした。春雨も、耳元でその声を聞き続けることで心が落ち着いていき、今の言葉を心に刻んでいく。
「……私がこういう性質であることは痛いほどわかりました……。みんなに迷惑をかけちゃうかもしれないですけど……なるべく気にしないことにします」
「そうよ、ハルサメ。気にしないで。私達もきっかけになっちゃうかもしれないけど、気にしないことにしてるもの」

「私は特に迷惑かけちゃうかもだけど、気にしないでね。私も春雨ちゃんの発作は気にしてないから」
薄雲とジェーナスも春雨に抱きつく。中間棲姫の温もりに2人分も加わったことで、心がより温かくなる。
「……あはは、わかった。みんなが何が起きたとしても、気にしないよ」
深夜の騒動はこれで決着。春雨は少しだけ心が強くなった。

朝食後は農作業の手伝い。ここに参加するのは以前と同じで松竹姉妹。薄雲とジェーナスは、飛行場姫の作業を手伝うとのこと。
いつもの3人組から1人外れての作業となるが、むしろ人数が増えたことで心は落ち着いたまま。孤独感など無い。
「こんな感じでいいですか」
「ええ、それなら作業出来るわぁ」
制服はおおよそ作業に向いていないということで、パジャマを作る感覚でジャージを構築。中間棲姫や松竹姉妹のそれを真似るようにしたことで、同じようなものがちゃんと出来ていた。麦藁帽子も完備。
義脚に土が噛むと面倒くさいことになるかもしれないという助言を受けて、普段使いのものよりもさらに厚手のタイツを身につけ、準備完了。実際は一度消して再度構築し直せば事足りるのだが、手間がかかるのでこの形に。
艦娘の時代でもこんなことをしたことがないため、若干緊張していた。陸での活動をしないとは言わないが、ここまでのことをする者はいない。趣味でやるにしても小さめの花壇や家庭菜園程度である。
「何かわからないことがあったら、いくらでも聞いてくれて構わないからね」
「俺らもこっちに関しては大分熟練者になってっからな。草の毟り方から鍬の使い方までいけるぜ」
その緊張を感じ取ったから、松竹姉妹がしっかりフォロー。真面目

に励ます松と、少し戯けた話し方の竹に、春雨の緊張は少し解れる。
「今日は良さそうなお野菜を収穫するわぁ。果物も出来ているものがあるから、デザートに穫っちゃいます？」
「姉姫様、小麦はどうしちゃいます？」
「そっちも良さそうなのは穫っちゃいましょうかぁ。パンが作れるわねぇ」
　ニコニコしながら作業の指示をしていく中間棲姫。まるで小学校の教師のように優しくやんわりと丁寧に教えていくため、初めての春雨も楽しく作業が出来た。
　コツを掴むのも早く、初めての作業だというのにあっという間に一人前と言えるくらいにまで覚えていく。みんなの教え方がいいというのもあるが、春雨の吸収力もなかなかのもの。
「自分で育てたモンを食うってのは、すっげぇ美味いんだよ。春雨もわかる時が来るぜ」
「そうなんですね……その時が楽しみです。私が一から始めるものはまだ無いですから」
「じゃあ、何か植える時は春雨さんにやってもらわなくちゃね。育っていくところを見ていると、我が子のように思えるのよ」
　この作業を通して、松竹姉妹とも仲良くなっていく春雨。先々日、先日と、同じ境遇である薄雲、ジェーナスと親密になっていったが、同じ施設で暮らすのだから全員と仲良くなりたいと春雨は考えていた。お茶会は一緒にしたものの、やはりより親密になるのならこういう作業を一緒にやることが一番だろう。
　この２人、溢れた感情がお互いに対する『依存』であり、距離感が他の仲間達よりも大分おかしいことになっているものの、根っこは真面目で優しく仲間思い。作業中の会話も今のように春雨に対して好意を以て接している。
　施設の先輩として作業を覚えてもらいたいし、施設の仲間として親密になりたいという気持ちは一切隠さない。それこそ名前通り竹を割ったような性格。見た目は深海棲艦かもしれないが、心は艦娘のままであることが如実に表れている。

「あー、それとさ、俺達ともタメ口で頼むよ。薄雲やジェーナスとはそうしてんだろ？」
「そうそう、昨日のお茶会の時にも気になってたけど、ちょっと距離感じちゃうのよね。私達も仲間……友達なんだし、同じ駆逐艦なんだから、ね？」
「あ、は、はい……じゃなくて、うん、そうさせてもらうね」
「それでよし。俺達も楽しくやっていきたいからさ、お互い他人行儀は無しにしようぜ」
ニカッと笑って作業を進める松と竹に、春雨は心の底からの信頼が芽生えた。２人の発言は嘘偽りない本心であるため、何の抵抗もなく春雨の心に染み渡る。
深海棲艦化して春雨自身も理解しているが、本能のままに動くためか嘘が吐けない。心が艦娘であろうが、性質は深海棲艦なので、そういうところは気質が引っ張られるのは仕方なかった。そのおかげで仲間同士の信頼関係が築きやすいというのもあるのだが。
その様子を少し遠目に見て、穏やかな笑みを浮かべていた中間棲姫。短時間で春雨が施設に馴染んでいくのを見て、この施設を作ってよかったと実感していた。
実際、この施設を設立してそれなりの時間が経過している。それこそ年単位で成立しているからこそ、今のような畑や設備が整っているのだ。これは中間棲姫と飛行場姫の努力の賜物である。
「ふふ、よかったわぁ。これなら孤独を感じることもないし、楽しく生きていけそうねぇ」
何も隠し事がない、本心からの言葉。施設の住人のことを思っての、管理者としての言葉だった。

農作業もある程度終わり、今は収穫した野菜や果物を水で洗っていく時間。そのまま施設内に運び込んでもいいのだが、やはり余計な汚れなどは先に取っておいた方がいい。
畑にはしっかりと水道管まで用意されており、島の中のインフラ整

備は完璧。４人で流し台を使っても余裕があるほどのサイズである。
何度も言うが、ここは陸上施設型深海棲艦の陣地の上である。ここまで整えている深海棲艦はまず確実にいない。
「これだけあれば、またしばらくは大丈夫ねぇ。妹ちゃんもお魚を釣ってきてくれるしねぇ」
「お漬物作っておかなくちゃ。糠ってまだ大丈夫でしたよね」
「ええ、大丈夫よぉ。松ちゃんと竹ちゃんのお漬物は美味しくて大好きだから、またお願いねぇ」
基本的には保存食にしているようだが、出来ないものは今日から消費していくらしい。足が早いものから消費していくのは何処でも一緒である。
「あー、でもそろそろ砂糖が切れそうなんだよなぁ。姉姫さん、サトウキビか甜菜育てねぇ？」
「育てたいのは山々なんだけれど、なかなか手に入らなくてねぇ。手に入ったとしても、ここの気候でどうにか出来るのかしらぁ」
ここで少し疑問が芽生えた春雨。そういった調味料とかはどうやって手に入れているのか。油とかはまだしも、砂糖は今の段階では簡単には出来ないようである。
お茶会の時にしても、茶葉は何処から出てくるのか。少なくともこの畑には茶葉の栽培をしているようなところは無かった。それなのに、春雨がここに来てから毎日ジェーナスの淹れた紅茶が飲めている。
「あ、あの、姉姫様、１つ質問いいですか？」
「あらあら、何かしら」
「その、明らかにこの施設ではどうにも出来ないようなものがありますよね……調味料とか、あとお漬物の糠とかも。そういうのってどうやって手に入れているんですか？」
春雨に聞かれて、話してなかったっけと驚く中間棲姫。てっきり飛行場姫がちゃんと説明しているものだと思ったらしい。
「春雨ちゃんは、今この施設からお出掛けしている子達がいるのは聞いているかしら」

「はい、妹姫様から少し」
「その子達が遠出している理由がそれなのよぉ。この施設で手に入らない食材とか消耗品とかを、纏めて手に入れてもらってきているの」
以前に飛行場姫が言っていた、ちょっと遠出してる子というのがそれの答えのようだ。
深海棲艦が老舗百貨店に買い物に来ているという噂の信憑性も、飛行場姫によって真実であると理解させられたのだが、この施設に同じことをしているものがいたということで、春雨は驚きが隠せなかった。
「勿論、人間の社会のルールに則ってよぉ。ここで作ったお野菜とかを持っていってもらって、ちょっと私はよく知らないんだけれど『ミチノエキ?』とかいうところでお金に替えて、それを使って私達のために買い出しをしてくれているの」
「なんかすげぇらしいよ。あの人達がそこに行ったら、歓声が湧くんだと。で、持ってったモンが飛ぶように売れて、あっちゅー間に買い出しが出来るくらいの金になるんだってさ」
「凄いわよね。料理もプロ級に上手だから、その場で調理して簡易レストランでも開いてるんじゃないかしら。しかも人間達には深海棲艦ってバレてないんだもの」
鎮守府にいるときには、流石にそんな噂は聞いたことがなかった。そこまで巧妙に自分の姿を変えられるものなのかもしれない。もしくは、バレていないと言いつつも協力者がそこにいたりするのかもしれない。
「そ、そうなんですか……」
「多分今日くらいに戻ってくるわよぉ。出て行ってからどれくらい経つかしらぁ」
「今日で半月くらいだな。いつもの調子なら、多分今日明日くらいだぜ」

その頃、施設近海。

２人の深海棲艦が大量の荷物を持って施設に向かって航行していた。本来の最短距離からは大きく外れつつ、誰にもバレないように遠回りに遠回りを重ねて、ようやく島の姿が見えてくる。
「久々に戻ってこれたわね」
「Ｏｕｉ．　皆さん、元気にしているでしょうか」
「あの子達なら大丈夫でしょ。喜ぶ顔が目に浮かぶわね」

帰還した仲間

農作業が終わり、汚れた身体をお風呂で洗い流す中間棲姫達。春雨も義脚の中に土が噛んでいないことを確認しつつ、一度消した後に再構築して綺麗さっぱりに洗い流した。

初めての農作業ということで、どうしても慣れている者と比べると汚れが目立っている。深海棲艦の特性上、汚れた服も消してしまえばすぐに元通り。お風呂に入る理由は汗を流すことと気分的な話である。

「ふぃー、今日もいい仕事したな」

「お疲れ様、竹。やっぱり力仕事には貴女の力が必要ね」

「松姉ぇの丁寧な仕事もありがたいぜ。ホント、お疲れさん」

人目を憚らずに湯船の中でイチャつく松竹姉妹ではあるが、この2人がこういう形で成立しているのは周知の事実。この農作業中も2人1組で常に作業していたため、これもその延長線上と思うことが出来た。

ジェーナスは何も感じず、薄雲も微笑ましいと感じていると話していたのを思い出し、春雨は納得した。あの関係が溢れた感情から来る共依存だとしても、それを恋愛という形で昇華しているのなら別に普通なことだし、あの距離感も微笑ましく感じる。自身にも抱えるものがあるからこそ、容易に理解出来た。

「春雨ちゃん、初めての畑仕事はどうだったかしら。楽しかった？」

「はい、本当にやったことが無いことだったので、とても楽しめました。艦隊で戦っている時とは違った疲れがありますけど、こういうのもいいですね」

「そうでしょうそうでしょう。自給自足、楽しいわよねぇ」

中間棲姫は他の深海棲艦のように侵略のことなんてまるで考えておらず、ただ生きていくだけというこのスローライフを心の底から楽しんでいるようだ。

溢れた艦娘の保護もその一環。戦いに身を寄せ、結果的に心を壊した艦娘達をその道から引き離し、のんびりと生活してもらうための施

設として管理している。共同生活というのも楽しいと感じているからだ。
現に、今この施設に住う艦娘(深海棲艦)で、中間棲姫のやり方を否定する者は誰1人としていない。心の奥底では、艦娘も戦いを辞めたいと思っているのかもしれない。
「またお願いするかもしれないけど、いいかしらぁ」
「はい、またやらせてください。その時は、私も種蒔きからしたいですね」
「調達してくれると思うわぁ。竹ちゃんが言ってた通り、今日か明日くらいには」
と、話している最中に風呂の前が少しバタバタと騒がしくなる。
「走ると危ないわよぉ。ヨナちゃん、そんなに慌ててどうかしたのぉ?」
足音だけで何者かをきっちり把握している中間棲姫である。春雨や松竹姉妹も、何やら急な用事があるのかもと少しだけ身構えた。
「姉姫さぁん、あの人達が帰ってきたのぉ」
「あらまぁ、噂をすれば何とやらねぇ」
すぐに行くわと返して、すぐに湯船から出る。松竹姉妹もいてもたってもいられなくなったように中間棲姫に続いた。ただ1人、訳の分からない春雨は、このまま独りになるのはまずいと中間棲姫についていく。
「あ、あの、あの人達って?」
「それは勿論」
春雨に向き直った中間棲姫は、久方振りの友との再会を喜ぶように満面の笑みだった。
「お出掛けしていた、私達の最後の仲間達よぉ」

手早く身体を拭いて施設の外に出ると、そこには山積みになった荷物がこれでもかというほどに鎮座していた。飛行場姫を筆頭に、別の場所で作業していた他のメンバーがその荷物の中を確認し、事あるご

とに感嘆の吐息を漏らす。
　今この場には、新人の春雨から遠出をしていたという最後の仲間達も含めて、施設に所属する者が勢揃いしている状態となった。当然ながら春雨は初対面である。
　その仲間というのは、控えめに言っても美女が２人。しかも、管理者の２人と同等くらいの大人の女性である。
　春雨がここに所属している今までの時間、ここにいたのは駆逐艦ばかり。伊４７が潜水艦ではあるが、幼い雰囲気を持っているため、やはり子供ばかりというイメージがあった。春雨が一番歳上になるのではというくらい。それを覆す２人の登場。
「大分買い込んできたけれど、これで良かったかしら」
「充分すぎるわ。今回はどれだけ売れたのよ」
「Ｔｏｕｓよ。当然じゃない」
　飛行場姫と談笑している女性は、地面まで届きそうな髪を持つ、中間棲姫に匹敵する程にグラマラスで長身の女性。深海棲艦特有の真っ白さがその髪のボリュームでさらに際立ち、側頭部の辺りにある羊の角を想起させるような癖っ毛が特徴的。
「Ｄｕ　ｓｕｃｒｅに、Ｓａｕｃｅ　ｓｏｊａ、あとＦｉｂｒｅもちゃんと手に入れてきました。▪ｔａｉｔ―ｃｅ　ｂｉｅｎ？」
「ええ、何言ってるかはちょっとわからないけどおおよそのニュアンスは掴めたわ。ちゃんと欲しいものばかりだから助かるわね」
　そしてもう１人の女性は、ところどころに黒が交じっている髪色と少し大きめな帽子が特徴的だった。片方の女性より小柄ではあるのだが、大人の女性には変わりなく、スタイルもいい。
「あら、Ｑｕｉ　ｅｓｔ　ｃｅｔｔｅ　ｐｅｒｓｏｎｎｅ？」
　その帽子の女性が春雨の存在に気付く。自分達が外に出て行っている間に新人が入ったことなど知る由もないのだが、この狭いコミュニティに１人知らない顔がいるだけでもすぐにわかる。
　声をかけられたことで一気に緊張してしまうが、ここにいるということは自分と同類であることは確かだ。溢れた感情が何かはさておき、仲間なのだから挨拶しなくてはと前に歩み出る。

「あ、あの、私、つい最近ここに加わった春雨と言います」
「あら、D・butant（新人）が入ったのね」
グラマラスな女性の方も春雨の方へ。2人に詰め寄られたようなものなので、緊張感がさらに増す。
「Enchant・e（はじめまして）.
Je m'appelle（私の名前はコマンダン・テスト）Commandant Teste（です）」
「Commandant Teste、その子、多分貴女の言葉が理解出来てないわ。もう少しゆっくり話してあげなさい」
まずは先に声をかけた帽子の女性から自己紹介。とても丁寧に話しかけたのだが、母国語があまりにも出過ぎていて、春雨としてはちんぷんかんぷんだった。もう片方の女性にも突っ込まれる始末である。
帽子の女性――コマンダン・テストは、改めてゆっくりと自己紹介をし、ようやく春雨にも名前を理解してもらえた。他の面々と比べると長い名前だから好きに呼んでくれればいいと話し、結果的に『コマさん』と呼ばれることに。
「Richelieu（リシュリュー）よ。この子とは同郷なの。これからよろしく」
「は、はい、よろしくお願いします」
グラマラスな女性――リシュリューが手を差し出し、春雨はそれにすぐに反応して握手をした。
同郷と言われると確かにそんな感じはすると、春雨は2人を見比べてしまう。姉妹と言われればそうかもしれないと思えるくらいには似ている2人は、それもあってか共に行動することが多い。
「さ、挨拶はこれくらいにして、荷物を運び込むわ。都合よく全員揃ったんだから、総出で一気にやっちゃうわよ。必要なら艤装も出してくれて構わないわ」
「リシュリューちゃんとコマちゃんはお風呂に行ってきていいわぁ。荷物は私達でどうにか出来るものねぇ」
「そう、ならお言葉に甘えて。Merci（ありがとう）」
ここからは管理者2人の指揮の下、積まれた大荷物を全て施設内に移動させる仕事が発生。そのまま外に置いておくわけにもいかない

ので、全員で力を合わせて適所に運び込む。
この作業も初めてである春雨は、合流した薄雲とジェーナスに場所を教えてもらいつつ、失敗なくこなすことが出来た。

作業自体は小一時間ほどで終了。細かい配置は後からゆっくりやればいいと、ひとまずは全てを施設内の適切な部屋に置いておくことは出来ている。
ダイニングの少し奥には食糧庫が存在しており、巨大な冷蔵室まで完備。おそらく先日の歓迎会のマグロはこういうところで保存されていたのだろう。相変わらず至れり尽くせりだと改めて感心する春雨。
「ＲｉｃｈｅｌｉｅｕもＴｅｓｔｅもセンスがあって助かるわ。仕入れてくれる紅茶、いいものばかりなんだもの」
荷物から早速紅茶を取り出したジェーナスが大喜びしながらお茶を淹れていた。
いつもお茶会で美味しく飲めていた紅茶は、遠征組の２人がいい茶葉を取り寄せていたからだった。当然ジェーナスの腕前も最高級なのだが、素の良さがそれをさらに引き立てていた。
「片付けは午後から？」
「そうだよ。春雨ちゃんは場所とか把握していないだろうし、一緒にやろうね」
「うん、よろしくね」
いつもの３人組が集まってお茶をしていると、長旅の疲れを落とすためにお風呂に入っていたリシュリューとコマンダン・テストもダイニングへ。まだ見慣れていない春雨は一瞬緊張してしまうが、すぐにいつもの調子に戻る。
「ふぅ、さっぱりしたわ。やっぱりここが一番落ち着くわね」
「Ｏｕｉ（はい）・　ここが私達のＯ（居場所）・ですものね」
湯上りで火照っているからか、やたらと色っぽく、春雨はその姿に目を奪われていた。

ここまで航行してくるための深海棲艦としての制服ではなく、寝間着とも違うラフな姿であるため、綺麗な肌も存分にさらけ出している状態。

人の世界で活動することが最も多いであろう2人だからか、こういう場所でもそのスタンスは崩さない。今でこそ見て深海棲艦とわかる姿をしているが、遠征先ではそれすらも隠しているのだ。常在戦場と言ったら物々しいが、常日頃から擬態をしているという感覚が染み付いていた。

「あら、ハルサメ、だったわね。ここには慣れたかしら」

「……あっ、は、はい。みんなが良くしてくれるので、まだ2日目ですけど、大分慣れてきました」

「それなら良かったわ。知っての通り、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達はこの施設から離れることが多いの。今日からはしばらく居られるけれど、また出ていくことになるだろうから、それまでは仲良くしてちょうだいね」

さりげなく春雨の隣に腰掛けるリシュリュー。お風呂上がりであるため、爽やかな香りまで漂い、春雨はそれに魅了されかけた。

中間棲姫のバケモノじみた母性や、飛行場姫の頼り甲斐のある姐御肌とはまた違った、リシュリューの大人の色香にやられ、うっとりしている。おかげで孤独感とは無縁になっているのだが。

「相変わらずバレていないんですか？」

そんな春雨の姿に苦笑しつつ、薄雲がコマンダン・テストに問う。

「Ｂｉｅｎ（もちろん）ｓ・ｒ．　ちゃんと人間のフリをしてますから。おかげさまであちらの方々とも仲良くさせてもらって、楽しいですよ」

リシュリューとコマンダン・テストが遠征をしている理由はいくつかある。この施設の中の大人であるという点もあるのだが、春雨や薄雲と大きく違うところが、元々の国籍である。深海棲艦特有の真っ白な肌も、海外の人間であるとしてしまえば違和感は大分薄れる。そこに擬態まで加えれば、より一層馴染めるだろう。

さらに2人とも日常会話に母国語が交じるので、それらしさに拍車がかかっていた。リシュリューの方が比較的流暢であり、頑張ってこ

ちらの言葉を覚えてきたという感じも、人間にはウケていたりする。
　そういう理屈ではジェーナスも遠征組に入れそうではあるのだが、その性質的にここ以外の場所だと自己嫌悪に陥りやすいので残念ながら見送られている。ジェーナスとしては不服のようであるが。
「まぁ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達は発作が起きづらいもの。ああいう場所にはＲｉｃｈｅｌｉｅｕ達が行くべきよね」
「Ｏｕｉ」
　この２人も溢れたことで今の身体になっているのは他と同じ。しかし、見ている限りでは大分安定している。
「ああ、ハルサメにはちゃんと伝えておきましょうか。もう他の子の理由は把握しているの？」
「はい、全員から聞いています」
「なら尚更ね。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、貴女も話せるわよね」
「Ｏｕｉ．　おそらく私が一番Ｌ▪ｇｅｒ（軽い）ですから」
　コマンダン・テストも春雨の側へ。美女２人に囲まれてより一層魅了されていくようである。
「私の溢れた▪ｍｏｔｉｏｎｓ（感情）は……Ａｔｔａｃｈｅｍｅｎｔ、『執着』です。死にたくないっていう気持ちが溢れて、私は壊れました」
　コマンダン・テストの溢れた感情は『執着』。死を恐怖し、生にしがみつき、どんなことをしてでも生き延びてやるという強い感情が溢れ、心が壊れた。結果的に、発症のトリガーは自他共に死に繋がる可能性をその目にした時。それを排除するために暴走するという。ある意味、死への恐怖を暴力で解決しようとする形に昇華されたとのこと。
　逆に言えば、平和であれば一切発作が出ないということにもなる。故にこの場所は最も落ち着ける場所であることは確かだった。
　そんな感じには見えないなと春雨は思いつつ、溢れる感情は人それぞれなので否定はしない。どんな相手でも腹の底では何を考えているかわからない。
「ＲｉｃｈｅｌｉｅｕはＶｅｎｇｅａｎｃｅ、『復讐心』ね。こんな身

体になっているけれど、深海棲艦への恨みでこの姿になったのよ。Ｔｏｍｂｅｒ（末）ｓｕｒ（転倒）よね」
「毒を以て毒を制す、ですよ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ」
「そう簡単な問題じゃ無いのよ。全部への恨みは無くなっているけど」
　そしてリシュリューの溢れた感情は『復讐心』。詳細を語り出したら暴走しかねないので語らないとのことだが、深海棲艦に命を奪われることになった際に、激しい恨み、憎しみ、怒りが心を壊し、溢れ出した。故に、その原因となったとある深海棲艦が目に入った時点で誰も抑制が出来ない鬼と化す。
　こちらも制御がとてもしやすい。何せ、トリガーがかなり限定的であり、深海棲艦全体への恨みも自分が深海棲艦になってしまったことで中和というか相殺されているため、壊れているものの最も軽いと言える。
　聞いてしまえば確かに、この２人が最も遠征に適していると理解出来る。外見から内面まで、むしろこの２人しかいないと言える程だった。
「まぁこんなところね。次は貴女のことを知らなくちゃいけないわ。またゆっくりお話ししましょ」
「はい、是非とも」

　帰還した仲間、リシュリューとコマンダン・テスト。春雨の深海棲艦としての人生は、この２人によってさらに華やかなものとなる。

秘密裏の作戦

保護施設の最後の仲間、リシュリューとコマンダン・テストが帰投。施設内では賄えない食糧や消耗品を大量に購入してきたことで、施設の運営がより一層盤石のものとなった。

午後からはその荷物の片付けをここにいるもの全員で行う。春雨は勿論それも初めてのことなので、薄雲やジェーナスに聞きながら仕事をこなしていく。

「結構量あるね」

「だね。私達だけだと時間がかかるんだ」

「綺麗に並べておくと、後から使いやすいからお願いね。あ、茶葉はこっち。砂糖はあっちよ」

いつもの3人組は小さいものを食糧庫に並べていく係。細かい作業ではあるが単調でもあるので、初心者である春雨にも難易度は低い。とにかく数が多いので、人数で攻略していく。

ここでの料理担当は専ら飛行場姫なのだが、オヤツ程度ならジェーナスが作ったりするので、その辺りの配置は少し細かく指示していた。そのうち春雨も料理のためにキッチンに立つことになるかもしれないため、ここで場所を把握しておく必要はある。

「今度お菓子作りしましょ。これだけ用意してもらえてるなら、多少は使ってもいいはずだから」

「うん、やってみたい。一応私、料理は出来る方だよ。薄雲ちゃんは？」

「私は少しだけ、かな。教えてもらいながらなら多分出来るよ」

いかにも女子トークというものをしながら作業を進めていく。3人の相互監視は今はいい方向に向かっているため、総崩れになる心配は無い。むしろこの3人が組んでいる理由の一番いい状態を維持出来ていると言えよう。

「でも、今日のお夕飯は多分ＲｉｃｈｅｌｉｅｕとＴｅｓｔｅが作ってくれると思うわ」

「あ、松ちゃんからプロ級に上手だって聞いたよ」

「ええ、半端ないわね。お夕飯っていうより、ｄｉｎｎｅｒよアレは」
話題はやはり、帰ってきた２人のことに。春雨は今日初めて出会ったのだが、薄雲とジェーナスは勿論面識がある。そのため、春雨の知らない２人のことをいろいろと教えてあげていた。
松が言っていた通り、リシュリューとコマンダン・テストの料理の腕前は並ではなく、施設内では間違いなくトップクラス。人様に出しても恥ずかしくないどころか、相手が平伏するレベルだと２人は語る。
この施設で使える材料はかなり限られているのだが、それでそこまで言わしめるのだから、余程なのだろう。なんでも飛行場姫ですらリシュリューから学んだ部分があるらしい。
「……素敵な人だったなぁ。なんだかいい匂いがしたし」
そこまで聞いて、春雨の中のリシュリューに対する憧れにも似た感情は膨れ上がる一方だった。
「春雨ちゃんはリシュリューさんにお熱かな？」
「さっきもＦａｓｃｉｎａｔｉｏｎされてたものねぇ。わかるわ、その気持ち。あの２人はなんというかレベルが違うわ」
今まではほぼ同年代だけで構築されていた元艦娘達の中に、突然現れた大人の女性。薄雲やジェーナスから見ても彼女らは美女であるという認識ではあるのだが、春雨の中ではさらに上位の存在に位置付けられたようだ。
あれでも自分と同じで心が壊れて深海棲艦と化したというのが、春雨には信じられなかった。見た目は深海棲艦かもしれないが、その振る舞いは明らかに淑女然としていたし、前兆というか、それらしさが何処にも見当たらなかった。
「溢れた感情を聞いても、あの人達が私達と同じって全然思えないよ」
「壊れるトリガーが私達と違って物凄く限定的だからね。戦わなければ何も起きないってことだし」
「ここは戦いとは無縁だもの。あの２人にはある意味一番いやすい場所よね」
事実、２人がこの施設に住まうことになってから、発作が起きたこ

とは2人合わせて片手で数えられる程しかない。リシュリューは深海棲艦化した当初に1回、コマンダン・テストは他の溢れた艦娘がここに流れ着いた際に何かの弾みで1回くらいとのこと。
　薄雲はまだしも、古参であるジェーナスすらそれくらいしか知らないレベル。トリガーが限定的というのはそれだけでも生きやすいようである。
「そういえば、その2人は何処に行ったのかしら」
「ああ、姉姫さんと妹姫さんに遠征先のことをちょっと話してから合流するって言ってたよ」
「人間のいるところで活動していたんだもんね……なんだか尊敬しちゃう」
　もうそれを隠さない辺り、やはり春雨の中ではリシュリューは敬意を払う相手として認識されたようである。薄雲もジェーナスも苦笑するしか無かった。

　一方、姉妹姫達に人間の社会の話をすることになっているリシュリューとコマンダン・テストは、2人の私室と言える部屋――地下設備の傍らに造られた寛ぐための場所へと訪れていた。
　本来ならダイニングでお茶でも飲みながらとかが普通なのだが、今は片付けの最中であることと、他のメンバーに聞かれると少しまずいことを話す可能性があるため、なるべく離れた場所で話すことに。
「悪いわね、本当ならここで話すなんてあまりしないと思うけど」
「構わないわぁ。ここは飾りっ気が無いから話していても楽しくないと思うだけよぉ」
　中間棲姫の艤装が真ん中に鎮座しており、それ以外は施設全体の管理のために配線が伸びているような部屋の隅であるため、本人が言うように何か面白いものがあるかと言われれば何も無い。
　寛げるように机とソファくらいは用意されているが、それ以外は何もない管理室のようなものである。それすらももう不要なくらいに艤装は安定稼働中。

「それで、アタシとお姉をここに連れてきてまで話すことって何かしら」
「ここに戻る最中、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅが知らないものを見つけたのよ」
「知らないもの？」
　いつも野菜などを売るために使っている人間の社会から施設までは、それなりに距離がある。それこそ、一昼夜に近いくらいの時間をかけて移動しなくてはいけないほどだ。２人は合間に無人島での休憩を挟んで、かつ、本来の最短距離から遠回りして施設まで戻ってきているくらいである。
　その道中、コマンダン・テストが何やら見慣れないものを発見したらしい。その航路は何度も使っているのだが、それを見たのは今回が初めてだと言う。
「アレは間違いなくＡｖｉｏｎｓ（艦）　ｅｍｂａｒｑｕ（載）・（機）ｓでした」
　中間棲姫が珍しく真剣な表情でその話に耳を傾ける。いつもはのほほんとしたお姉さんなのだが、今この時は、施設の仲間達を守るために動く管理者そのものだった。
　ここからは中間棲姫の思考の邪魔をしないように、飛行場姫がコマンダン・テストから話を聞き出していく。
「あの辺りにはＳｙｓｔ（軍）・ｍｅ（事）ｍｉｌｉｔａｉｒｅ（系）のものは無かったはずです。何度も使っているＲｏｕｔｅ（航）ｍａｒｉｔｉｍｅ（路）なので間違いありません。なのに、それを見たということは……」
「近くに艦娘ないし深海棲艦がいたかもしれないってことね」
「Ｏｕｉ．　あの艦載機は艦娘の……空母系のもの……おそらくサイウーンという偵察機です。以前に見たことがあるものでしたので」
　その艦載機を見たのは、休息のために立ち寄った無人島から出て、この施設に戻るまでの間。遠回りを重ねている最中である。つまり、今日の午前中。水平線の向こう側にチラリと確認出来たと、コマンダン・テストは話す。
　深海棲艦と化したコマンダン・テストは、極端に目が良かった。元々水上機母艦であり、艦載機も使って周囲の探索なども出来ていた

のだが、今のコマンダン・テストは裸眼でも普通ではない視力を持ち合わせている。リシュリューには見えなかったそれを詳細に捉える程に。

　それで見たものは彩雲。艦娘が扱う艦上偵察機の一種である。広範囲に高速で索敵をかけられる、敵情偵察に長けた機体。何かを探しているように飛んでいたらしいが、コマンダン・テストがいち早く気付くことが出来たおかげで、その索敵範囲から逃れることが出来たそうだ。

「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕには確認出来なかったわ。でも、艦載機を飛ばして細かく確認するわけにはいかないでしょう。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅのおかげでやり過ごすことが出来たけれど、本来よりも余計に遠回りにしたわ」

「お互い、余計なＦｒｏｔｔｅｍｅｎｔ（揉め事）は嫌でしょう。あの時ばかりはアレが正しいと、私は思います」

「ええ、助かったわ。最悪トリガーが引かれていたかもしれないんだものね」

　もし帰投中に艦娘達と戦闘に入ろうものなら、厄介なことにしかならない。本人達は心が艦娘のままで戦うつもりが毛頭ないとしても、艦娘側からしたら深海棲艦が妄言を吐いているくらいにしか思わないだろう。

　それに、この時は施設の者のための荷物をこれでもかというほど輸送している状態だ。戦闘をするということは、それが全て失われてしまうかもしれない。勝ってもそれなのに、負けたら尚更だ。

　リシュリューもコマンダン・テストも、自分達が施設の明日を支えているという自負があった。その発作のトリガーとの兼ね合いもあるため、戦闘は確実に避けている。

「それにしても……この辺りに艦娘が来ることなんて基本的には無いはずだけど、何かあるのかしらぁ。妹ちゃん、毎日周りを見てくれているのよねぇ」

「ええ。最低限、島の周りは哨戒してるわ。本当にざっとだけど」

　中間棲姫が施設の管理をしている分、飛行場姫が施設の周囲を管理

している。基本的には飛行場姫から発艦される艦載機で３６０度全てを見回し、施設に危害を及ぼしそうなものが無いかを監視。時には伊４７の力も借り、海上も海中も全てを確認している。それを朝昼晩と３回、毎日繰り返しているのだ。

　それでも、不審なものは何一つとして見つかっていない。当然気を抜いているわけでもなく、ざっととはいえ常に丁寧な仕事を心がけている。

「Ｃｈｅｒｃｈｅｒ（探）　ｑｕｅｌｑｕｅ（何）　ｃｈｏｓｅ（を）……そんな感じにも見えました」

「探している……か。まぁ、サイウーンなんて出してきている時点でそうよね。問題は、何を探しているかよ。取り逃した敵とかならいいけれど」

　この施設は他者の目に触れることを極端に避けている。そのおかげでトラウマを刺激されることを防ぎ、今まで平和に暮らしてきているのだから、そこに一番の力を注ぐのは当然のこと。

　黒い繭だって、たまたま近海にまで来ることが無い限り、基本的には放置。わざわざ探し出してまで保護することはしない。それによって足がついたら元も子もないからだ。

　中間棲姫としてはなるべく全員を保護したいとは思っているものの、そもそもこの施設にも限界がある。今はまだまだ余裕があるものの、手当たり次第救うとなったら、すぐさまパンクしてしまうだろう。

「ここを探してるなんてことは無いわよね」

「無いでしょ。まだ誰にもバレていないのよ。とはいえ、別のものを探しているついでに見つかることもあるかもしれないけれど」

「こんな海の真ん中で何を探すのかしらねぇ」

　今まで現れなかったような場所に艦娘が現れたのは何故か。艦載機を持ち出して探しているものは何か。この施設の存在に気付いていないか。考えても考えても答えは出ないし疑問は尽きない。

「うん、ひとまずは保留としましょう。ここまで来ないことを祈って、でも万が一のことがあったら……ううん、無いと信じて過ごしましょう。このことは私達だけの秘密にした方がいいかしらねぇ」

「あの子達を不安にさせない方がいいでしょ。アタシは秘密がいいと思うわ」
「はい、Ｓｅｃｒｅｔ（秘密）がいいと、私も思います。もしそれでも何かあったら……内密に私達だけで」
　大人組と違って、子供達はより不安定である。妙なことがあれば、そのまま総崩れがあってもおかしくない。ただでさえ3人組で眠らせたら連鎖が起きたくらいなのだから、余計な心配はかけない方がいいだろう。
　こういう時に一番まずいのはジェーナスだ。ストレスから自己嫌悪という最悪な流れが無いとは言えない。
「哨戒の回数を少し増やすわ。あとヨナにも勘繰られない程度にさりげなくお願いしておく。海中の目があった方がそういうことはわかりやすいでしょ」
「そうねぇ。その辺りは妹ちゃんに一任するわぁ」
「ありがと。コマ、アンタも手伝ってもらえる？　アタシ、アンタほど目が良くないから」
「Ｏｕｉ．　お任せください。このＩｎｓｔｉｔｕｔｉｏｎ（施設）を守るため、尽力いたします」

　秘密裏に進められる施設防衛作戦。何事も無いことを祈りながら、子供達の明日を守るために大人は戦い続ける。

精神の限界

第五次捜索部隊が鎮守府に帰還する。成果はまたもや０であり、入渠により体力回復を図った海風は、やはり精神的に参っているようだ。

前回より取り入れた軽空母２人による広範囲の捜索は、今のところは残念ながら空振りに終わっている。しかし、駆逐隊のみによる捜索よりは格段に効率は上がっており、第三次捜索部隊による捜索から比べると数倍の範囲を捜索することが出来ていた。

「海風には先に休ませているので、私達が報告に来ました」

「ありがとう、助かるよ」

執務室に結果を報告に来たのは千歳と千代田。本来なら捜索部隊の隊長を務めている海風が報告に来るのだが、体力は回復したものの精神的にかなり厳しいところまで来ていたので、千歳が交代を申し出た。

海風自身は自分でやると聞かなかったようだが、妹達に強く説得されたことで、交代を渋々受け入れ、今は休息中である。山風に監視されていたら休まざるを得ない。

「捜索範囲を教えてもらえるかな」

「はい」

捜索部隊ということで、旗艦は海図が入力されたタブレットを手にした状態で哨戒を行なっている。おおよその場所を把握しながら、海図上を塗り潰しつつ、隈なく捜索できているかを逐一確認していた。

画面上は捜索範囲でカラフルに彩られ、第一次から第五次までの捜索範囲が一目でわかるようにされていた。千歳と千代田が参加するようになってからは、その色の範囲が見てわかるほど広くなっており、当然隙間なく埋め尽くされている。

「昨日が鎮守府付近北部、今日が鎮守府付近南部。規模をなるべく大きくして、２人がかりで捜索しています」

「隈なく塗り潰せてるし、妖精さんの目は確実だから漏れもないはず」

「それでも痕跡１つ残っていませんでした。確認出来そうな無人島も

見てもらっていますが、何も無かったようで」
　この無人島にリシュリューとコマンダン・テストが休息として立ち寄っていたのだが、この2人には知る由もない。
　コマンダン・テストの持つ、良すぎるくらいの深海の眼によりいち早く確認され、無人島を確認する前にそこから離れていたのだ。結果的に艦載機が無人島上空に辿り着いた時、その眼が2人を映すことは無かった。
「南部には無人島も少し多いからね。手当たり次第探したのか」
「勿論。海風がそうしてほしいと頼んでくるから、艦載機を少し多めに使ったの。彩雲多めに持って行ってたからさ」
「捜索がメインだし、2人とも彩雲を使っていたものね。搭載数が多いスロットに入れさせてもらっていたし」
　空母2人は海風のためにとなるべく索敵能力の高い艦載機を採用していた。彩雲はそのうちの1つであり、扱えるものの中でも特に高いものである。
　それを2人がかり、かつ多めに扱えるように装備して捜索任務に挑んでいる。それなのに見つからないのだから、前回と今回の捜索範囲には何も無いと確信出来る状態となる。
「そうか……なら、時間は経っているがまだ生存していて、鎮守府に向けて戻ってきているということは……」
「難しいと思いますね……時間もそうですけど、付近に痕跡が見当たらないということは、無人島に辿り着いているということも無いでしょう。あの子達のことですし、無人島で立ち往生したのなら、何かしらの痕跡を残すはずでしょうし」
　艦娘であろうが、人間と同じように遭難をすることだってあり得る。艤装が突然故障したり、想定外の戦闘により燃料が無くなってしまったりした時がその時だ。そうなってしまった時の緊急手段として、休息可能な無人島、ないし、岩礁帯などで留まり、救援が来るのを待つように教育されていた。
　今回行方不明となっている駆逐隊にも当然、その教育は施されている。旗艦を務めていた長女――白露や、どのような状況でも冷静に物

事を判断出来る次女――時雨、サポートに徹することが多い五女――春雨は、その辺りは特に頭に入れていたはず。それが出来ない状況に置かれたとしか考えられなかった。

実際、春雨はそれが出来ない状況だった。通信機器は全滅し、方向感覚も失われ、戦闘中に居場所もわからなくなり、無人島や岩礁帯すら発見出来なかった。

それが海のど真ん中で死を覚悟して、恐怖に苛まれ、姉達を失ったことで孤独を強く覚え、心を壊すことに繋がる。学んでいたことが何一つ出来なかった。

「……それならそれで、何故痕跡が残っていないんだ。艤装のカケラなり、制服の切れ端なり、小さな痕跡くらい残していてもおかしくないだろう」

この数日間で考えても考えても答えに辿り着けない悩み事。それが、痕跡が残されていない理由である。

あの海域に昔にいた最悪の姫、中間棲姫がまだ生きており、長い時を経てあの場所に帰ってきたのではと考えたりはしたが、一切の痕跡を残さないように片付けた理由だけは全く理解出来ない。

陸上施設型深海棲艦の陣地が、島のように見えてそれそのもので動き回ることが出来るため、その上で戦っていた駆逐隊の痕跡ごと運び去ってしまったというのが、提督の考えた荒唐無稽ではあるが一番有力な理由だが、自分で考えておきながらあまりにも突飛すぎて首を傾げるレベル。

「まだ諦めずに捜索を進めますよ。哨戒する場所はまだ残ってますから」

千歳がタブレットを指差しながら言う。今は現場であろう場所から鎮守府側に調査したのみ。まだそこから離れた場所は調査し切れたわけではないのである。

しかし、残す捜索範囲には基本的に無人島などなく、細かすぎて海図にも描きづらい岩礁帯がちょくちょくあるくらいだ。この海図自体が数年前から更新されていないというのもあるのだが、地図が変わるということは人工島でも造らない限り起き得ないことである。

「こっち方面は時間かかるかもしれないなぁ。島もないってことは、目印が何もないってことでしょ」
「それでも、やらなくちゃいけない仕事だもの。もしかしたら、ギリギリ耐えてるあの子達が助けを求めてる可能性だってあるのよ」
「わかってる」
少し愚痴っぽいことを言ってしまった千代田だが、それを千歳が戒める。
仲間の生死に関わる任務だ。ここまで時間がかかると、生きている可能性は著しく低くなるのだが、まだ無いとは言えない状況。ならば、出来る限りのことを全力でやるべき。
既に轟沈してしまっているにしても、轟沈している証拠、痕跡が無くてはそれも確定出来ない。
「すまないが、よろしく頼むよ。千歳、千代田」
「はい、お任せください。何かしらの痕跡を探し出せるように、全力を尽くします」
「千歳お姉がそう言うなら、千代田もね」
真面目に答える千歳と、戯けて答える千代田。性格は少し違えど、仲のいい姉妹に、提督も疲れた心を癒される気分だった。

休養を命じられた海風は、山風の監視の下、私室でベッドに押し込まれて殆ど軟禁状態にされていた。入渠によって体力に関してはリセットされたものの、精神的な部分はどうにもならない。
じっとしていても病んでいく一方なのだが、焦燥感に苛まれながら外に出ていてもいいことは何もない。そのため、なるべく落ち着けるようにと姉妹と共に部屋に押し込まれた。
「……山風」
「ダメだよ……外出ちゃダメ。海風姉……おかしくなってる」
いつもは消極的で引っ込み思案な山風も、姉のこととなれば話は別。少し強めに拘束する。
せめて体力は回復してもらいたいし、どうにかしてでも癒されても

らいたい。そのためなら何でもすると、山風は自分が癒されそうなものを海風の部屋に持ち込んでいた。
「眠れないなら……音楽。ヒーリングミュージック……っていうんだって。あたしもたまに使ってる……」
「そういうことじゃ」
「ぬいぐるみ……ギューって抱き締めると、ちょっと気分が楽になる。アロマキャンドル……いい匂いで気分が落ち着く」
　次々と出てくるヒーリングアイテムを見て、海風は呆気に取られていた。
「……心のことは、多分あたしの方が海風姉よりもわかってる……。海風姉……本当に酷い顔してる。気持ちはわかる……あたしも辛いから……」
「……そんなことは」
「ある。焦ってる。寝ても覚めても、嫌なことしか思い浮かばない……あたしもそうだから……わかる」
　いつもならこんなに前に前にと言ってくるようなことは無かった。むしろ山風はそういうことを言われる側だった。人付き合いも苦手で、提督と面と向かって会話することも少ない。休息の時は1人でいることの方が多いレベル。
　しかしそのおかげで堅実な戦いが出来る。状況の把握が早く、顔色を窺うのも得意。それでいて、戦場で逃げることはなく、どちらかと言えば好戦的に戦闘に躍り出る。性格に難があれど、実際は他者のことを一番理解出来るリーダー気質。
　だからこそ、提督はそれとなく海風の監視を山風に命じている。ダイレクトに言うと山風は逃げてしまうので、江風や涼風経由で。姉妹からの言葉の方が山風には届く。
「いつもの海風姉に戻って……っていうのは、難しいかもしれないけど……もっと冷静になって。自分の手で見つけたいのはわかるけど……それで倒れたら意味がない」
　山風から説教を受けるなんて思っていなかった海風は、何も返す言葉が無かった。誰に対しても、それこそ一番親密であろう姉妹に対し

てすら、目を合わせて会話することが出来ないような山風が、海風をまっすぐ見据えて淡々と話していた。
　それだけ海風が精神的に参っているということであり、周囲にそれがわかるほどに疲弊しているという証拠だった。海風自身は気丈に振る舞っているつもりでも、ガタガタなのは周知の事実。鎮守府全体が海風のことを心配している程である。
　勿論、行方不明になっている駆逐隊のことを心配していない者など誰1人としていない。痕跡が見つかることを皆願っている。諦めてもいない。
「……山風……私は……そんなに疲れてるように見える？」
「誰が見ても」
「……そっか。ごめんね……心配かけて」
　現在進行形で心配をかけ続けていると山風は思ったが、口に出すことは無かった。今はこれだけ話をしたが、山風はそもそも会話が得意ではない。人の顔色を窺うために、相手からの言葉を待つタイプ。
「……姉さん達がもう生きていないのも……正直わかってる。こんなに長い間見つからないなんておかしいもの。でも、どんな敵がそんなことをしたのかが知りたくて仕方ないの。私の復讐の相手が何者かを……早く知りたいの」
「……あたしも同じ……仇討ちがしたい……。でも、焦ってたら……何も出来ないから」
「そうね……そうよね。焦っちゃダメよね……わかってる。わかってるんだけれど……」
　山風からの言葉を受けても、海風の焦燥感は払拭されない。理解していても、受け入れたくなかった。生きていないとわかっていても、もしかしたらまだ何処かで救援を待っているかもしれないと、小さな小さな希望に追い縋ってしまう。
「寝るまで見てるから。はい、これ」
「……ぬいぐるみ……ギュッとしたら気分が楽になる……のよね」
「うん。大きいのがオススメ……だからいい感じのを持ってきた」
　山風が持ってきたのは、自分と同じくらいの大きさのクマのぬいぐ

るみ。抱き枕としても使えるからと、山風がそういう時に愛用している一品。それを海風に提供するくらいなのだから、余程心配しているのがわかる。

海風はそれを強く抱きしめた。山風の言う通り、少し落ち着いた。いつも使っているだろう山風の匂いと、人の温もりと錯覚出来るような温かさに、ほんの少しだけ焦燥感が薄れていくような感覚だった。

だが、その温もりのせいで涙が出そうになった。姉の温もりを思い出してしまった。

「……温かい、ね」

山風に悟られないように表情に出さないようにしていたものの、山風はそういうところに敏感であるため、すぐに気付く。しかし、引き剥がそうとはしなかった。

「……？」

その時、山風は不思議なモノを見た。海風の手の甲に、黒い泥のようなモノが付着しているように見えた。まばたきをした瞬間にそれは無くなっていたため、何か幻でも見たのかと目を擦る。

「山風……どうしたの？」

「う、ううん、何でもない。何でもないよ。海風姉、じっくり休んで。さっきも言ったけど、海風姉が寝るまで、あたしがここで見てるから」

「視線を感じてる方が寝づらいと思うんだけど」

苦笑しながらも、ぬいぐるみを抱きしめながら横になる。眠れそうには無かったが、少しだけ気分が落ち着いた。

海風の心は、限界に近かった。

艦娘としての

翌朝、まだ誰も目が覚めていない状態で目覚める春雨。外が薄暗いわけでもなく、白んだ部屋で温もりを感じながら朝を迎えることになった。

両サイドには薄雲とジェーナス、その更に外側に中間棲姫と飛行場姫。キングサイズのベッドでも結構ギリギリな詰め込まれ方をしている分、強く抱きしめられることになったことで、仲間を実感出来て孤独感が払拭される気持ちいい温もりに繋がっている。

義脚を消した状態で眠っているので、薄雲とジェーナスからしたら抱き枕に近しい感覚で抱き付かれているようにも思えた。春雨には心地よい締め付けだが、密着の仕方が友達相手にしてはかなり近いのがその証拠である。

「……ふふ、気持ちいい」

悪い夢も見なかったし、身体の疲れなんて何処にも無いくらいに回復していた。これくらいの近さであることが、それに繋がったのかもしれない。

「楽しかったな……昨日の夜は」

目を瞑って二度寝に入ろうとしつつ、昨晩の夕食を思い出していた。

帰投したリシュリューとコマンダン・テストによる、この施設で食べることが出来るであろう最上級のディナーが振る舞われた。いつも食べている魚や野菜も、調理の方法が変わるとここまで違うのかと驚いたモノだった。

更には、この施設では絶対に手に入らず、外から持ち込む以外に食べることが出来ない肉料理まで出てきた時には、驚きを通り越して言葉を失ってしまった。2人が帰投した時にのみ食べられるという高級品に、春雨のみならず全員が舌鼓を打った。

「ふふ……リシュリュー御姉様……なーんて。断られたんだから、やめないとね」

亡き姉を投影しているわけではないのだが、春雨にとってリシュ

リューは憧れの存在であることは間違いなかった。そのため、勇気を出して姉と呼ばせてくれと言ってみたものの、リシュリューにはそれとなく断られてしまっている。春雨の本当の姉妹に申し訳ないと。

そう言われてしまったら、引き下がらざるを得なかった。姉妹の存在を引き合いに出されては、何も言えなくなってしまう。

当然、春雨は姉が散った瞬間を忘れていない。忘れるわけがない。今の身体になるきっかけだったのだし、春雨には４人の姉は尊敬に値する存在だった。だから、その時を悪夢として反芻してしまっている。

「……いいのかな、私。こんなに幸せで」

死んだ姉のことを思い出し、独りごちた。両サイドからの温もりのおかげで、そのままドツボにハマって発作が起きることは無かったのだが、過去の自分、艦娘としての自分を思い出していた。

自身が幸せになっていいのかという、あまりよろしくない自問自答なのだが、春雨には気がかりなことがあった。自分の目の前で散っていった姉達のこともそうだが、その最期の瞬間を本来の居場所である鎮守府に伝えられていないことがそれだ。

本来やるべきことを成し遂げることも出来ず、志半ばで散った春雨。心を壊したことで黒い繭となり、その結果ある意味奇跡的に助かった。艦娘である春雨は、姉達と共に死んだと考えてしまえば、鎮守府というしがらみから外れたとも考えられる。

「……鎮守府……かぁ」

姉のことを思い出したことで、妹達のことも流れで思い出した。尊敬に値する存在が姉達ならば、生きていく理由を作ってくれる存在が妹達だった。

秘書艦を務めている優秀な妹、五月雨。もう一つの駆逐隊として活動し、その隊長を務めていた海風。少し後ろ向きだが、状況をよく見ている山風。やんちゃでムードメーカーな江風。五月雨と同様に古参であるため、その態度とは裏腹に経験値が非常に高い涼風。

５人の妹達のことを思い出したことで、ホームシック的な感情が少しだけ湧いた。姉の最期を伝えたい。妹達とまた会いたい。だが、今

の身体では鎮守府に帰るどころか、出会うことも出来ない。何せ、今の春雨は深海棲艦だ。その心が艦娘であり、侵略するつもりが無いとしても、妹達にとってはただの侵略者だ。

行っても無駄、むしろ会ったら余計な面倒が起きる。自分は別にどうなっても構わないが、鎮守府(あちら)にも施設(こちら)にも迷惑がかかる。そう考えた途端、鎮守府を焦がれる気持ちは自然と冷めていった。

今の状況を失わないため、余計な命のやり取りを防ぐため、戦いから避けるため、もう、本当にやりたいこと、本当はやりたかったことは、何もかも諦めるしかない。妹達とは今生の別れとなってしまうが、今の春雨にはそれも仕方ないという気持ちが出てきた途端に、あっさりとそれでいいという気持ちに切り替わった。

そして、艦娘としての春雨ならまず考えないし、そんなことは言わないであろう言葉が口から出る。

「まぁいいか」

そのまま微睡んでいき、二度寝に入っていく。次に目を覚ましたときには、この時の感情はより薄れているだろう。鎮守府に思いを馳せることは度々あるだろうが、一度冷めた時点で帰りたいとは思わない。あくまでも、昔いた場所はこうだった、程度の考え方。この施設から出てまで、鎮守府に戻ろうなんてもう考えることもない。

深海棲艦となり、身体に心が引っ張られている一番の証拠となる。心は艦娘であろうが、春雨はやはり深海棲艦と化しているのだ。艦娘を敵だとは思わなくとも、無理して交流するべきものでも無い。距離を置くことが、お互いにとってのベスト。故に、このままを望んだ。

あちらがどうなっているかなんて、春雨にはもう想像すらしないようなことだった。

その日の春雨の仕事は、飛行場姫の手伝いをするため、釣りを教えてもらうことになっていた。メンバーは飛行場姫と春雨の他には薄雲。ジェーナスはリシュリューとコマンダン・テストの方を手伝うとのこと。そこに伊４７も加わり、海中の獲物を確認しつつ、釣りのサ

ポートをする。
　本日も煌々と照り付ける日の下での作業のため、農作業の時と同じように麦藁帽子着用を義務付けられた。ジャージでやる必要はないため服までは替えず普段着としての制服。万が一波などで水浸しになったところで、服は簡単に着替えられる。
　使っている釣竿は大分前にリシュリューとコマンダン・テストが陸から仕入れてきたものらしく、そこまで高価なものでは無いが、必要最低限の機能は持ち合わせている。
「竿は3本だから、1人1本ね。教えると言っても、結構適当よ。餌をつけて、投げて、食いつくのを待つだけ。時間だけが過ぎていくこともあるから、その間は……まぁたわいない話でもしましょうか」
　昨日農作業をした畑とは逆方向には、釣りに最適な堤防が造られていた。そこには、腰を据えて釣りが出来るように椅子が用意されており、さらにはある程度沖に出られるためにか、壊れた大発動艇を修復したような小船が鎮座していた。オールが用意されている辺り、完全に手動である。
　艦娘や深海棲艦ならこんな船なんて必要ないのではと春雨が質問するも、飛行場姫からは意外な言葉が返ってきた。
「あら、艦娘って意外と知らないのね。アタシ、深海棲艦だけれど、泳げないの」
「えっ!?」
「アタシ達みたいな陸上施設型の特性よ。こんな陣地を持ってる代わりに、アンタ達みたいな海上航行能力が無いのよ。だから、海に落ちたらアタシはおしまい。無様に溺れるから本気で助けてちょうだい」
　なんでもそつなくこなす飛行場姫の唯一の弱点と言えるところ。それが、いわゆるカナヅチというやつである。
　艦娘には全く無縁であるそれは、陣地を持つ陸上施設型の宿命とも言える弱点。その代わりに、ここまで大規模な陣地を艤装のように扱うことが出来るのだから、その価値はイーブンということなのだろう。
　なんでも中間棲姫は、迷惑をかけるわけにはいかないと泳ぎの練習

をしようとしたそうなのだが、それがまさかの大失敗。そもそも浮かぶことが出来ず、もがいても進むことは出来なかったらしく、見事に溺れてしまったそうだ。
　その時にはもう伊４７がいたため、沈んでいく中間棲姫を救出したそうだが、それ以来、中間棲姫も飛行場姫も、自分の特性を上回ろうとすることをやめたとのこと。
「それじゃあ、まずはこの堤防からにするわ。沖に行かなくてもここで多少は釣れるから、やってみましょ。その後に沖も体験するのがいいわ」
「了解しました。初めてのＦ作業ですが、頑張ります」
「ええ、オカズ１品がかかってくるから、気合入れなさいね」
　ちょっとした冗談を交えつつ、３人はそれぞれ別方向を向いて釣りがスタート。
　視界に誰も入らない場合、春雨と薄雲はかなりグレーな状態になってしまうため、絶えず話しながらの仕事になる。会話する相手がいるということを自覚させることで、孤独感を払拭する作戦だ。薄雲で効果的であることが実証されているため、春雨も同じように扱う。
「春雨、アンタ昨日はお姉と農作業したのよね。どうだった？」
「楽しかったです。今度は私が種を蒔くところからやらせてもらえるらしくて」
「いいわね。最初から自分の手がかかってる野菜は美味しいって、お姉や松竹がよく言ってるわ」
　何のことはない世間話をしながら、釣れるまではボーッとする。余りある時間をこれでもかというほど使う、艦娘の時では考えられないスローライフ。それが心を鎮め、より安定に導いた。
　それだけダラダラと話していたら、いつか話題が尽きてしまいそうだったが、飛行場姫の会話のレパートリーは凄まじく、孤独を感じさせる暇すらも与えない。施設の過去の話、他の深海棲艦の話、あとは余計なことを考えさせないようにしりとりなんかまで組み込み、喋っていない時が無いほどだった。
　春雨よりも長く施設にいる薄雲ですら、まだ聞いていない話が出て

くるらしく、飛行場姫の頭の中にはどれだけの話題が詰め込まれているのかが不思議だとまで話す。冗談交じりに話すことは2億はあるなんて言っていたが、実際どうかは飛行場姫にしかわからない。
「や、やりました、釣れました！」
「なかなかのサイズね。これなら2人分の刺身には出来るかも」
「わぁ、凄いね春雨ちゃん！」
　そうこうしているうちに春雨も釣ることが出来た。春雨にはまず成功体験が必要だろうという飛行場姫の考えから、海底で伊47が釣りやすい場所に魚を追い込んでいたことで、無事初めての釣りを成功させることが出来ている。
「わっ、わっ、当たりが大きい！」
「薄雲ちゃん、頑張って！」
「逆方向に引っ張って疲れさせるのよ。焦らず、時間をかけてやれば必ず釣れるわ」
　仲間に当たりがあれば、それを自分のことのように喜ぶ。それが大きければより一層喜ぶし、小さくても次があるからと励まし合う。実際、大きさなんて関係なく、飛行場姫の腕前ならどんな魚でも美味しく調理してしまうので、まず釣れることが重要だった。
「春雨は料理はある程度出来る方かしら」
「はい、一応は」
「なら一緒に捌いてみましょうか。鮪包丁は危なっかしくて使わせられないけど、これくらいのなら捌けるようになってもいいでしょ。元々出来たりする？」
「魚は流石にやったことが無いですね……やらせてください。私、なんだか色々なことに挑戦してみたいです」
「なら、今晩辺りにでもチャレンジしてみましょ。自分でやれるようになると楽しいわよ。釣って、捌いて、食べる。これがなかなかハマるのよね」
　無意識に、艦娘の時のしがらみを振り払うかのように、ここでの生活でやれることを何でもやってみたいと考えるようになっていた。挑戦したいという気持ちは、過去を捨てて生きていくことに繋がっ

た。
艦娘とはかけ離れたことをすればするほど、春雨はより深海棲艦へと堕ちていく。それが穏健派としてのそれだとしても、艦娘である春雨はもう戻ってこない。戦いを拒み、平和を満喫し、のんべんだらりと過ごしていく。ただそれだけでいいと考えるようになっている時点で、艦娘春雨は死んだと言い切ってもいいのかもしれない。
「よし、人数分は釣れたわね。あんまり釣り過ぎても食べきれないし、今日はこれくらいにしておきましょうか」
「了解です」
釣果も望むところまで来たところで作業終了。バケツにはそれなりの数の魚が入っており、ちゃんと食べられることも調査済み。春雨の挑戦は、成功に終わった。

艦娘であった時の春雨には考えられないくらいの生活だったが、僅か3日でもう馴染み、それが当たり前だと思えるくらいにまでになっている。
春雨はもう深海棲艦であり、艦娘ではない。身体も、心も。

交錯

第六次捜索部隊は、予定通り今までの捜索範囲からさらに先の場所へと到着した。一昨日、昨日と鎮守府に近い場所を総浚いしたが、今回は鎮守府から遠い方。その南部を調査することになっている。

山風の監視下で癒し系グッズを使ってじっくりと休まさせられた海風は、絶好調とは言わないまでもある程度は回復していた。精神的な部分も比較的落ち着いており、捜索部隊の隊長として、真剣に任務に就いている。

その後ろ姿を見ながら、江風と涼風はまだ心配をしていた。今でこそ先日先々日より回復しているかもしれないが、空元気なだけではないだろうかと。精神的な疲弊はまだまだ残っており、それを押し込めてここに立っているだけなのではないかと。

「山風の姉貴、海風の姉貴はどうだったンだ？」

「……一応眠れてた。あたしがずっと監視してたけど……熟睡は……出来てなかったかもしれない」

山風の計らいは少なからず効いてはいるものの、何も無かったことにはならない。記憶そのものを失うくらいしなければ、海風の悩みは最後まで取れないだろう。強いて言うなら、姉達の痕跡が僅かにでも発見出来れば話は変わるとは思うが。

死んだ痕跡でも、無いよりはマシ。生き残っていてくれれば尚更だ。しかし、後者はもう万に一つも無いだろう。まず時間が経ち過ぎているし、この場所には無人島のような休息が取れるような場所もない。いくら艦娘とはいえ、海のど真ん中で幾日も待機することは不可能だ。

だから、今望んでいるモノは、大きなモノで言えば亡骸、そうでなくても艤装の一部、制服の一部、もう戦闘の痕跡でもいい。先に繋がるモノならば何だって良かった。

「よし、到着。千代田、ここから艦載機を飛ばすわ」

「オッケー千歳お姉」

出撃前に予定していた場所に到着し、今までの通り彩雲を飛ばす。

時間はおおよそ正午。昼食時ということで、事前に持たされていた戦闘糧食（おにぎり）を腹に入れながら、妖精さんからの反応を待つ時間となる。
海風は正直食欲なんて無かった。しかし、空腹のままでは十全の働きが出来ないことは自覚しているし、食べなければ妹達に何を言われるかわからない。それ故に、ゆっくりとでも腹を満たしていた。
「ほい、海風姉、漬物食うかい」
「えっ、あっ……うん、貰うね」
「そうそう、これくらい食っておかないと、マジで身体壊すからね」
江風と山風が少しだけ距離を取って海風を監視する中、涼風はズカズカと海風にお節介を焼いている。関係は妹であっても、艦娘としての歴は涼風の方が大先輩。それもあってか、気にかけ方には年季が入っているように思える。
「とにかく今は待ちなんだから、ドーンと仁王立ちで構えてりゃいいのさ。なぁ、千歳さん、千代田さん」
「ええ、今回こそ何か持って帰ってきてくれるはずよ」
「期待しておけとは言えないけど、流石にそろそろ何か出るでしょ。今日出なかったら明日は確実かな」
千歳と千代田も、海風を気遣って希望を持った言葉をかける。２人も今回の捜索で何かしら見つかると信じて艦載機を飛ばしているのだから、これは本心からの言葉。今回で捜索範囲の４分の３を調査し終わることになるので、そろそろ何かしらの痕跡が見えるはず。
「とはいえ、この辺りは本当に何も無いのよね。島くらいあればいいのだけど」
「海図もすごいよねコレ。周囲全部真っ青」
海風の持つタブレットで周辺の海図を表示してもらうと、千代田の言う通り海しかないため真っ青な画面が映し出される。鎮守府近海ならば、この海図に僅かながら無人島を示す小さな点が描かれたりするのだが、今はそういったものが本当に何も無い。
その海図も、２人の空母の艦載機によりゆっくりと塗り潰されていく。妖精さんからのデータは即座に反映されるようにされており、艦娘がその場から動かなくても捜索が進んでいることが視覚的に理解

出来るようになっていた。
「さっすが彩雲、塗り絵も結構早いねぇ」
「妖精さんも練度が高いもの。こういう時のための精鋭達よ」
艦載機を捜索のために飛ばしている間は、艦娘達は何も出来ない。千歳と千代田は定期的に妖精さんと通信しているらしいが、駆逐隊は周辺警戒くらいしかやることがなくなる。
だが、海風はこのタブレットをじっと凝視し続けていた。祈るように、願うように、この捜索の動きが止まることを待っていた。止まってくれたら、そこで何かを見つけたということに他ならないから。
「早いけど、まだまだ時間がかかるから、海風はもう少し気を抜きなさいよね。タブレット見つめてても何も変えられないんだから」
「っ……は、はい……。まずはお腹を膨らませます」
「そうしときなさいね」
千代田に言われて、タブレットから目を離して戦闘糧食（おにぎり）を頬張る海風。途端、おかしなところに入ったか、ケホケホとむせてしまった。無理しているのが嫌でもわかる。ああもう、と涼風が背中をさすりつつ、お茶を渡した。
「まぁ、今は待ちよ。落ち着いて、その時が来るまで待ちましょ」
苦笑しながら、千歳も昼食で腹を満たしていた。この後にもしかしたら何かを発見出来るかもしれないと、しっかりと腹拵えをしてその時に臨む。

一方、保護施設。みんな揃って昼食を食べ終えた後、片付けをしている裏側で飛行場姫とコマンダン・テストが施設から外に出た。その理由は勿論、施設近海の哨戒のためである。
昨日に彩雲を見たというコマンダン・テストの証言からして、もしかしたらこの島を発見される可能性がある。そうなったら最後、この静かな生活は終わりを告げ、最悪戦闘が始まる。艦娘に対して敵対の意思がないのに、あちらが許してくれないだろう。
「コマ、どうかしら」

「Ｊｅ（何）ｎｅ（も）ｔｒｏｕｖｅ（見）ｒｉｅｎ（当たりません）．　今はこの▪ｌｅ（島）を周った方がいいかと」
　まずは施設イチの視力を誇るコマンダン・テストによる目視確認。余計な哨戒機を出すと、そこから勘付かれる可能性もあるため、哨戒前にはまずこれでざっと確認するところから。
「早いところ航空隊が使いたいところだけれど、慎重に行きたいところよね」
「Ｏｕｉ．　ここが見つかってしまったら、今までの▪ｐｒｅｕｖｅｓ（苦）がＢｕｌｌｅｓ（水）ｄ（の）’ｅａｕ（泡）になります。私は艦娘と交戦するのは……嫌です」
「わかってるわ。アンタ達からしたら、仲間と戦うことになるんだものね。アタシもそうならないようにしてあげたいわ」
　この施設は艦娘とも深海棲艦とも戦わないが基本方針である。戦闘力を持っているとしても、それを無闇には振るわない。自己防衛以外には使わない。
　しかし、自己防衛のためには戦いたくない相手と戦わなくてはならなくなる瞬間がやってきてしまうだろう。中間棲姫と飛行場姫は自分の陣地を守るためなのでまず気にしないだろうが、元艦娘達は本来の仲間と相対することになってしまう。飛行場姫としても、それは避けたかった。
　戦うだけでも精神的な負荷は酷いのに、それが艦娘だった場合はもう計り知れない。施設のためにも避けたいのである。
「アンタも戦いは避けたいでしょ」
「Ｏｕｉ．　勿論です。戦いは死を思い出しますから、余計に嫌ですね」
「アタシ達がアンタ達を死なせないから安心なさい」
　リシュリューはまだしも、コマンダン・テストは戦いそのものが発作に繋がる。深海棲艦化したことで艦娘の時とは比べ物にならない程の力を手に入れてしまったものの、僅かにでも死の可能性があるのなら、それはもうダメだ。
　このように話しながらも、コマンダン・テストは少し手が震えてい

た。もしかしたら戦闘になるかもしれないと考え、発作の前兆が出始めている。
　長くこの発作に付き合っているからこそ、前兆はこれで済んでいるが、実際本当の戦闘に入ってしまったら、制御不能となって暴れ出すか全く動かなくなるかになる。コマンダン・テストはそれも怖いと思っている。
「私が昨日見たのは、あちらの方でした」
　施設の外周を歩きながら、飛行場姫に詳細を話すコマンダン・テスト。リシュリューと共に帰投する際の航路がどちらの方向なのかは把握しているため、次現れるなら何処から来るかを2人して計算していく。
「来るなら北側ね」
「Ｏｕｉ．　私もそう思います。Ｃ・ｔ・（北）　ｎｏｒｄ（側）からこちらに向けて捜索しているように見えましたので」
「なら、そっちの方を注視しましょ。もし何か発見した時は……施設に退避かしらね」
　万が一、本当に偵察機を発見してしまった場合、出来ることなら戦闘を回避したいとは思っていた。
　深海棲艦と見るやこちらの言動を確認することなく殲滅に走る艦娘が多いのは、飛行場姫も理解しているつもりだ。だが、この海の真ん中で戦闘を回避することはかなり難しい。
「無いなら無いに越したことはないけれど、万が一が起きた場合はお姉に指示を仰ぎましょ。一応、念のため、ほんの少しの可能性に賭けて、対話を試みるかもしれないわね」
「……私達の素性を話すのですか？　私達は元々艦娘だったのだと」
「アンタ達はそれでもいいわ。もしかしたらそれで何かしらの温情が貰えるかもしれない。でも、アタシとお姉は純正だもの。戦うつもりは無いと言っても、それで放っておいてもらえるかはわからないわね」
　姿形が変わってしまっているので、自分は元々艦娘だったのだと話しても世迷言と切り捨てられる可能性は高い。多少は本来の姿の痕

跡は残しているのだが、全身の色合いが変化している時点でなかなかわかってもらえないだろう。
それでも、戦わずに済むのなら可能性に賭けたかった。いざとなったら、後ろから撃たれることを覚悟しながらも説得するしかないと考えていた。
ここまで非交戦的な深海棲艦が存在していることを、鎮守府は知らない。深海棲艦と侵略者がイコールで繋がっているため、その考えにはまず至らない。だからこそ、相対した瞬間から戦いが始まる。
他の深海棲艦はそれが普通と考えているし、むしろ自分から探しに行って艦娘や鎮守府を侵略しようとする者もいる。深海棲艦としてはそれがデフォルトなのかもしれない。
しかし、中間棲姫も飛行場姫もそんな考え方は微塵も無かった。出来ることなら人間とも仲良く共存してもいいと思っている。出来ないとわかっているから、こんな辺鄙な場所、海のど真ん中でスローライフを送っているのだ。そんな中でも陸に遠征しているリシュリューとコマンダン・テストには、感謝してもしきれない。
「まぁ、絶対にそうなるとは限らないから、そうなった時に考えれば」
「……もう考えなくちゃいけないみたいです」
話しながら、コマンダン・テストが何もないようなある一点を見つめていた。その手は強く震え、握り合わせて震えを止めようとしている。
「見つけました。サイウーンです」

戦闘糧食（おにぎり）も食べ終え、妖精さんからの連絡を待つ捜索部隊。食欲が無かった海風だが、食べてしまえば満足感が得られた。精神的な問題で気付かなかっただけで、実際は身体は空腹を訴えていたらしい。
「これでおおよそ半分……かしらね。ノルマ通りに出来てるわ」
「彩雲の動きが止まらないなぁ。これくらいだとまだ痕跡は見つからないか」
千歳と千代田がタブレットを確認しながら妖精さんに通信をして

いた。定時連絡という形で、艦娘側からも連絡を要求することも出来るため、何も無くとも一応は意思疎通をしている。
「……ん？」
「どしたの千歳お姉」
「妖精さんが……ちょっといつもと違う反応」
　海風が飛び跳ねるように顔を上げた。必死に捜索しても何も見つからなかった1週間弱。それがもしかしたら報われるかもしれないと、千歳の次の言葉を待つ。少し離れて海風を監視していた江風と山風も、千歳の言葉で一旦近付く。
　タブレットの方の塗り潰しも、一部の動きが極端に遅くなっていた。何かに警戒するかのような、ふらふらとした動き。
「……え？　島……!?」
　海図にそんなものは存在しない。休息出来そうな無人島が存在しないからこの辺りは捜索が難しいと話していたところだったにもかかわらず、あり得ない場所にあり得ないものが発見された。
　それが駆逐隊の痕跡に繋がるかはわからない。しかし、普通ではないものであることは確かである。
「この海図っていつのだったかしら」
「多分4年……いや、5年前だねぇ」
「人工島を造ってるなんて話は聞いてないもの。ここ最近なのかはわからないけど、陸上施設型深海棲艦と考える方が妥当……よね」
　ならば、それが姉達の仇なのでは。海風の頭の中では一気に繋がっていく。復讐の相手が見つかった。それだけで、力が湧き上がってくるような感覚だった。それがよろしくない感情であることを理解していても、止まらなかった。
「え、ちょっと待って、妖精さんからの新しい情報」
「何が来ましたか。敵の姿ですか。仇は誰ですか」
　すぐにでも攻め込みたそうに千歳に縋る海風の首根っこを千代田が掴む。通信が聞き取れなくなるから黙ってろと言わんばかり。
「え、えーっと……ごめんなさい、ちょっとよくわからない。何、本当に言ってるの……？」

「何があるんですか。敵でしょう。私達の姉を奪った敵が」
「海風ステイ。落ち着きなさい」
そんな海風のことをあえて無視して、千歳は妖精さんからの報告を聞き続ける。しかし、だんだんと困り果てたような表情になっていく。
「千歳お姉、どうしたの」
「妖精さんが、ちょっとよくわからないことを言ってるの」
一呼吸した後、心底疑問を持った状態で言葉を紡いだ。
「その島……建物と畑があるらしいの」

運命は交錯する。

その判断は如何に

「そう……本当に来てしまったのねぇ」
　飛行場姫とコマンダン・テストの報告を聞き、普段はまずしないであろう真剣な表情になる中間棲姫。まだ昼食の片付けが全て終わったわけでは無いので、一旦ダイニングから離れ、子供達には聞こえないように話を始める。
「……お姉、どうする」
「私と妹ちゃんが行きましょう。何と言っても、私達はここの責任者なんだもの。相手が何であろうと、まずは私達が前に出なくちゃね」
　この施設は中間棲姫と飛行場姫の管理する場所であり、万が一脅威が差し迫った場合は、管理者である2人が矢面に立って対応すると決めていた。
　ここは、感情が溢れてしまい深海棲艦化してしまった元艦娘を保護するための施設。ストレスを感じさせず、スローライフを楽しみ、壊れてもう治らないであろう心を癒す場として、2人が作り上げた新たな居場所なのだ。
　ここでは決して嫌なことが起きてはいけない。ただでさえトリガーが引かれてしまえば平時でも苦しんでしまうのだ。それ以上のことがあるのは、確実によろしくないこと。
「あの時の二の舞にならないことを祈るしかないわ。話のわかる艦娘ならいいんだけれど」
「ええ、本当に……。私達を侵略者としか見ない艦娘だと……お話は難しいわよねぇ」
　重い腰を上げるように、中間棲姫が施設の外へと向かう。飛行場姫もその後ろをついていくが、コマンダン・テストは逆に施設内に留まるように指示を出した。
　今でこそリシュリューもいるが、子供達を施設の外に出さないように、2人で中の仕事を割り振ってもらいたいとのこと。あくまでも2人でまずは対話を試みて、それで何かがあった時に初めて力を貸してほしいと訴えた。

そもそもコマンダン・テストの発作は戦闘中に起こり得るものだ。あまり表には出せない。
「頼むわよコマ。アタシ達がどうにかしてくるから」
「Ｏｕｉ．　何かしらのＴｒａｖａｕｘ（仕事）を与えて、外に出ないように仕向けます」
「お願いねぇ。リシュリューちゃんにもそれとなく伝えておいてちょうだい」
それだけ言い残して、２人は外へと出て行った。心配ではあるが、今は管理者に任せるしかない。
コマンダン・テストは、指示通りダイニングへと戻る。外に出ないように、迷惑をかけないように、延いてはこの施設のために尽力する。

施設の外に出ると、目がいいコマンダン・テストでなくとも彩雲が近くに飛んでいることが確認出来た。あちらも施設を攻撃しようという気は無いらしく、現れた２人の深海棲艦のことを舐めるように眺めているように見える。
事実、この彩雲の持ち主――千歳と千代田は、あまりにも不可解な陣地であるため、攻撃を躊躇っていた。
陸上施設型深海棲艦の陣地というのは、草木一本生えていない荒れ果てた岩礁帯というのが常。何処で生活しているのかすらもわからない、謎多き生命体だった。
しかし、今目の前にある陣地は、殆ど鎮守府と変わらない、むしろそれよりも生活水準は高そうな、人間の住う場所のような見た目。木は無くとも草は生え、それどころか畑まであるような陣地だ。実は深海棲艦ではなく、秘密裏に造られた人工島なのではとすら思っていた。
「好戦的では無いようねぇ」
「攻めあぐねてるんじゃないの？　こっちが敵だとわかった途端に爆撃してきたり」
「ううん、今は大丈夫。敵意は無いみたいよぉ」

彩雲に対して小さく手を振る中間棲姫。まるで挨拶するような仕草に、彩雲の妖精さんは激しく混乱した後、クルリとUターンして持ち主の居場所に帰って行った。
２人が表に出てくるまでに、空から見る限りの島の全容は報告済み。捜索部隊が近海にまで移動するまで待機していたのだが、２人を得体の知れない相手と認識したことで帰投を選択した。
「あら、嫌われちゃったかしらぁ」
「これは多分、怖くて逃げ帰ったのよ。敵が手を振ってくると思う？」
「攻撃してこなかったのなら、まだ話し合いの余地はありそうよぉ。ただあの飛行機では出来なかっただけかもしれないけれど」
苦笑しながら、彩雲の向かって行った方に２人も向かう。島のギリギリで待ち構えるつもりのようだった。
万が一対話も出来ずに戦闘することになったとしても、離れておけば施設に被害は及ばない。対話の内容を聞かれることもないだろう。ただでさえ不安定な施設の面々が艦娘の顔を見てしまった場合、どんなことが起きるか想像が出来ない。
「妹ちゃん、わかっていると思うけど」
「ええ、ギリギリまで艤装は出さない。アタシ達は今は非武装。攻撃の意思はない。ただそっとしておいてくれればいいってことを訴えるだけよね」
「そうよぉ」
あくまでもここは第三勢力としてそっとしておいてほしいと知ってもらうのが２人の望み。戦う力は深海棲艦なので持ち合わせてしまっているが、こちらから侵略をするつもりなど毛頭無いので、この小さな小さな居場所を壊さないでくれと、人の心に訴えかける。
そもそも陸上施設型深海棲艦はその場から動けないのだから、侵略なんて出来やしない。人類からはイロハ級と呼ばれる部下を使うのが基本だが、この２人はその部下すら持っていない。陸に攻め入るなんて出来ないのだ。
それでも侵略者の仲間なのだから始末しなくてはならないと言われてしまったら、そこからはもう戦闘しかない。だが、中間棲姫はそ

れでも訴えることをやめないつもりである。攻撃されても反撃しないことを見せれば、こちらに侵略の意思がないことを信じてもらえると考えて。
「……来たみたいね」
「ええ。お話が出来ればいいのだけれど」
２人が陣地の北端に到着したところで、水平線の向こうに人影が確認出来た。彩雲からの報告を受け、この施設についての捜索まで乗り出したようだ。一度戻って総攻撃という流れにならなかったことには安心していた。
これは中間棲姫が妖精さんに対して手を振ったことがあまりにも謎の行動すぎたため、深海棲艦であるかもわからなくなったというのが理由。
こんな形で油断をさせてくる深海棲艦は今までの戦いの中で１人たりとも発見されていない。頭のいい姫は何人もいたが、それでも気質は侵略者なのだ。友達感覚の行動など取った試しがない。
「白旗でも振っておく？」
「その方がいいかもしれないわねぇ」
飛行場姫が艤装を出す感覚である程度わかりやすい大きさの白旗を構築すると、向かってくる艦娘達に向かってそれを振って見せる。
すると、あちらの動きが明らかに変わった。困惑するように動きが止まり、何か相談しているように固まる。
「やっぱりこれくらい堂々と非交戦の意思を見せなくちゃダメね。それでも撃ってくる可能性はあるけど」
「その時はその時よぉ。それでもこちらからは手を出すつもりはないんだもの」
ひとまず艦娘からの攻撃は無い。白旗の意味を知らないわけでは無く、深海棲艦だからと無差別に攻撃をするような相手でも無いようである。臨機応変にその場で考えることが出来る相手なら、対話の余地がある。

遠くに見える白旗を確認して、捜索部隊は騒然としていた。深海棲艦との戦いが始まってから今まで、白旗を振る深海棲艦なんて一度たりとも確認されていない。まだ生まれる前の戦いにも、そういった資料は残されていなかった。
「あ、あンな深海棲艦見たことも聞いたこともねぇよ。涼風も無い、よな？」
「うん、あたいも知らない。今まで戦ってきたヤツらは、みんな見境無しにこっちのこと攻撃してきた。白旗とかガチで初めてさ」
この部隊の中でも誰よりも早く鎮守府で活動していた、最古参である涼風が言うほどなのだ。本当に初めての出来事。
「しかもアレ、中間棲姫と飛行場姫だよ。中間棲姫とかめちゃくちゃ前に1回だけ出てきた最悪の姫じゃん」
涼風はそれにも気付いていた。過去に陸にまで部隊を嗾けてきた最悪の姫、中間棲姫であると、すぐにピンと来ている。実際に戦ったわけではないにしろ、その姿は過去から有名である。
とはいえ、その時に撃破されていることも知っているので、あれは別個体なのではと考えていた。過去に現れた中間棲姫とは別物の、何か違う中間棲姫。
「でも深海棲艦です。あれはどうであれ、深海棲艦なんですよ。姉達の仇です。いつも通りの殲滅でいいのでは」
復讐心に取り憑かれている海風は、深海棲艦だからという理由で白旗を無視して攻撃をすることを提案している。
実際、今までの深海棲艦なら艦娘が白旗を振っていても容赦なく攻撃してくるだろう。意味がわかっていても撃つだろうし、わかっていないなら尚更。
しかし、あの深海棲艦は何かが違う。深海棲艦だというのに、全く攻撃の意思がない。従者（イロハ級）すら連れていない丸腰である。自分達は非武装ですと、こちらに伝えてくるような相手だ。
「提督に聞いてみましょう。ここからの判断は、私達だけでやっていいものじゃないわ」
「……わかりました」

「私が話すから、通信機を貸してちょうだい」
一応、捜索部隊の隊長は海風だ。鎮守府との通信が出来るのは海風になる。しかし、今の海風の心境ではまともな報告が出来ないと判断した千歳は、海風から通信機を借り受けて、冷静な判断で提督へ現状を伝える。
その間も海風は早く行かなくてはと気を逸らせていた。ようやく見つけた姉の痕跡が、姉の仇である可能性が高いのだ。それに相手が深海棲艦なのだから、普通なら殲滅対象。話など聞く余地なんて無い。
「……海風姉、今は耐えた方がいいと思う」
そんな海風を見兼ねたか、その袖を摘んで山風が訴える。
「……もしかしたら……別の深海棲艦が本当の仇で……その情報を持ってるかもしれない」
「なら、深海棲艦と話をしろと？」
「……あたしは……戦わなくてもいいなら戦いたくないから」
今回の部隊はあくまでも捜索部隊だ。交戦するにも準備万端とは到底言えない。勿論、姉達が未知の強力な深海棲艦に襲われた可能性を考えて、ある程度は戦えるようにはしているが、少なくとも陸上施設型深海棲艦とまともにやり合える程の装備では無かった。
イロハ級がいないなら、ある程度はやれる。それに、刺し違える覚悟だってあった。
「……提督の判断を伝えるわ」
鎮守府との通信が終わった千歳が海風に通信機を返しながら話す。その顔は、どうも困惑しているようだった。
「あの深海棲艦と、対話を試みます」
一瞬、シンと静まり返る。殲滅対象であり、容赦なく人類の居場所を侵略してきた敵と、今更話し合いをしてみようと、自分達を統括する者が言い出した。
この言葉に一同困惑。特に戦う気でしか無かった海風は、怒りまでこみ上げてきた。だが、袖を摘んだままの山風のおかげで拳を振りかざすようなことまではしなかった。

「マジかよ……白旗振ってるとはいえ、話し合えンのか……？」
「あちらは私達との対話を望んでいると、提督は判断したみたいよ。もし騙し討ちをするようなことがあるなら、容赦無く撃てばいいとも。まずは話を聞いてみることは必要ではないかともね」
その言葉を直に聞いた千歳も半信半疑だった。あちらはあの中間棲姫なのだと伝えても、提督の采配はそれだった。
相手の出方を見てから打って出ることが出来るのだろうか。騙し討ちをしてくるならとは言うが、それをされた時点で1人はやられているのでは。
「あたしは……賛成。何か知ってるかもしれないから……話を聞く価値は……あると思う」
「あたいもいいと思うぜ。でも、妙な動きしたら撃てるように、あたいと山風姉が見張るってのでどうだろ」
「ええ、提督もそう言っていたわ。山風と涼風に深海棲艦の機微を見てもらうと。対話するのは私と千代田でするわ。海風と江風は、護衛としていてちょうだい」
海風は不服そうだったが、それを千代田に宥めさせつつ、千歳が江風にこそっと伝える。
「今の海風はちょっとおかしいわ。江風、貴女が海風を監視して」
「……ン、了解。本来なら山風の姉貴の方がいいと思うけど、深海棲艦の監視の方が重要だもンな。今の海風の姉貴なら、江風でもどうにか出来ると思う」
「ええ、いざとなったら羽交い締めにしてもいいから、お願いね」
ここまで決まったところで、意を決して陣地へと進む。今のままでは海風がいつ暴走するかわからないので、言われた通り江風がすぐ真横に付いた。不審な動きを見せた瞬間に取り押さえるつもりで。
「海風の姉貴、冷静にいてくれよな。江風達は姉貴達の痕跡探しをしてンだ。もしかしたら、あの深海棲艦が何か知ってるかもしれねぇんだから、まずは話を聞こうぜ。それが提督の判断で、江風達はそれに従わなくちゃなンねぇんだから。な？」
「……わかってるわ」

本当にわかっているか疑問だったが、今は静かにしてくれているので、安心まではしないまでも冷静にいることが出来た。
しかし、海風の腹の中はグツグツと燃え滾っている。姉達の仇を討つために。その命を懸けてでも。

そして、艦娘と深海棲艦は相対した。

初めての対話

施設管理者の姉妹姫と捜索部隊の艦娘がついに相対した。姉妹姫は最初から攻撃の意思が無いと白旗を振り、艤装すら出していない状態。対する艦娘は半信半疑ながらも提督からの指示で対話を試みる。

艦娘側の対話役は千歳と千代田。２人が前に出つつ、山風と涼風がその両サイドから姉妹姫を監視。残った海風と江風は少し後ろで待機しつつ、周辺警戒。江風は様子がおかしい海風の監視も仰せつかっている。

「初めまして、艦娘さん」

第一声は中間棲姫からだった。柔らかい笑顔からの歓迎に、艦娘達は困惑を隠せないでいる。

対話に応じたものの、相手は深海棲艦。最大級の警戒をしながら臨んでいた。油断させておいていきなり攻撃をしてくる可能性も考えて、武装からは手を離していない。何かあればすぐに攻撃出来る。

海風は中間棲姫の声を聞いても、今のところは耐えることが出来ていた。この深海棲艦から聞き出せることは聞き出し、姉達の仇であると断定出来たなら誰の言うことも聞かずに撃つ気でいた。

「私達の白旗に応じてくれて、どうもありがとう」

「いえ、こんな深海棲艦を見るのが初めてだから……少しどころか大分困惑しているわ。艦娘（私達）と深海棲艦（貴女達）は、出会えば必ず戦いになるじゃない」

「そうねぇ、お互いそういう存在なのはわかってるわぁ。でも、私達は貴女達の考える深海棲艦（それ）とは違うの。他の同胞（はらから）と違って、侵略とかには全く興味が無いのよねぇ。ただ静かに暮らしたいというだけ」

警戒する千歳に対して、一切の躊躇いなく、嘘偽りない本心を伝えていく中間棲姫。戦いたくないという気持ちが強く、そういう感情に敏感な山風は、後ろから見ながらでも中間棲姫は自分達を騙そうとしていないと感じ取れていた。

しかし、まだ他の者達はその存在そのものを疑問視している。中間棲姫がどのような感情でどれだけ好意的に話をしたとしても、

「でも、迷惑をかけない場所に陣地を置いていたのだけれど、まさかこういう形でバレるだなんて思ってもみなかったわぁ。ここまで念入りに探されると、この場所もバレちゃうのねぇ」
　あくまでも誰にも迷惑をかけないようにするためにここにいるのだと、艦娘達に話す中間棲姫。一歩後ろの飛行場姫もうんうんと頷きながら肯定。
「信じてもらえるかわからないのだけど、さっき言ったことは私達2人の本心なの。私も、妹ちゃんも、ただここで静かに暮らしたいだけ。誰からも攻撃されることなく、のんべんだらりと毎日を過ごすの。戦いなんてしたくない。好きな時間に目を覚まして、好きなように楽しんで、眠たくなったら眠るだけ」
「私もお姉も、同じように暮らしてるのよ。まぁあとはちょっと訳ありな子というか、同調してくれる同胞（はらから）と一緒に暮らしてるわけ。あっちの施設にはそういう子達が生活してるのよ」
　飛行場姫が口を出した後、少し遠くにある施設を指差す。ここには真の意味での同胞、仲間達が、侵略行為などすることなく、同じようにスローライフを楽しんでいるのだと伝えた。
　2人で住むには大きすぎる施設であり、畑もそれなりの規模。誰かしらと共同生活をしているようには見えたが、そこも包み隠さずに話した。
　姿は見せていないが、自分達のような深海棲艦は他にもいるのであると理解してもらいたかった。無益な戦いはやめたいと。
「白旗もそれが理由？」
「ええ。施設の中にいる子達は、心にいろいろと抱えている子ばかりなの。だから、余計に戦いたくないのよぉ」
　深海棲艦から出たとは思えないような発言である。それにより、千歳も千代田も余計に混乱してきている。
　今までの深海棲艦とは違う、侵略者という概念を完全に覆す存在。ここまでやっても騙し討ちの要素が1つも出てこないのだ。ならば信じていいのかと言われれば、それも違う。まだ信用してはいけない。

「ところで、艦娘さん達は、何か探しているのかしらぁ。私達のこの施設を見つけるくらいなんだから、余程大事なものを探しているのだと思うのだけどぉ」
そして、本題に入る。この艦娘達は何かを探しているというのは誰にでもわかることだった。偵察機を飛ばし、この近海を隈なく眺めているくらいだ。そのせいでこの場所がバレてしまったのだから、2人の陸上施設型深海棲艦も当然警戒している。
中間棲姫も飛行場姫も、千歳と千代田の言動に注視していた。自分達を殲滅するためにここに訪れていたとしたら、ここでの反応次第で打って出なくてはいけなくなるからである。
なるべくなら戦いたくない。誰にも害が無いのなら、お互い見なかったことにして終わりにしたい。そんな気持ちを強めに表に出していた。
「……私達の鎮守府に所属する艦娘達が、哨戒中に消息を絶ったの」
少し苦しそうに、しかしあえて包み隠さず、千歳は中間棲姫に告げた。本来なら馬鹿正直に話す必要は無いかもしれないが、ここでの反応次第で、目の前の中間棲姫が犯人として断定出来るからである。
ついに見つけた痕跡の鍵となる深海棲艦が、予想外にも艦娘に対して友好的に接してくるのだ。ボロを出してくれればさらに良い。
当然ここから海風の聞き耳が鋭くなった。攻撃するための口実を、深海棲艦側から提供してくれれば、誰が止めようが知ったことなく攻撃に打って出られる。
「……この近海で？」
「近いとは言いづらいかもしれないけれど、少なくともここからそこまで時間をかけずに向かえるくらいは近場ね」
「いつ？」
「今から1週間弱前のこと。何か知らないかしら」
中間棲姫と同様に、嘘偽りない情報をぶつける千歳。情報が欲しいのは確かであるため、友好的な深海棲艦ならば何かしらの情報を知っているかもしれないと、縋るような気持ちで話した。
勿論、そうしながらも警戒は解いていない。海風に至っては殺意す

ら隠していない。
千歳からの問いに対して、2人で顔を見合わせながら知っていることを思い返す。
当然この2人は、この艦娘達のことを何も知らない。それ故に、タブーが何かもわかっていない。
「妹ちゃん、大体1週間前って言ったら」
「ヨナが春雨の繭を回収した時ね」
春雨。その名前が聞こえた瞬間、海風の首がグリンと中間棲姫の方を向いた。そして、江風が即座に取り押さえる。流石にその名前が出てしまっては、反応をしないわけが無かった。殺意もダダ漏れで、すぐさま襲いかかりそうだった。
「なんでその名前を知ってる！　なんで、なんで！」
「海風の姉貴、抑えろっての！　今はダメだ、気持ちはわかるけど冷静でいろって！」
「春雨姉さんの何を知ってるのよ！　早く言いなさい！　言え！」
明らかに正気ではない海風の姿を、妹達は初めて見た。ここまで怒り、乱れ、焦っている海風は、鎮守府の誰も見たことがない姿だっただろう。
海風といえば、普段から落ち着いており、真面目に仕事をこなす、どちらかと言えば自己主張が控えめな面倒見の良いお姉さんだった。
だが今はどうだ。ここ1週間追い詰められ続け、精神的に限界が来ていることにより、感情に身を任せるだけ。落ち着きはなく、指示も聞かない、ただの暴走した艦娘に過ぎない。
心が壊れかけている証拠だった。
「正直に話すわ。行方不明になった艦娘の名前は、白露、時雨、村雨、夕立、そして春雨。この5人よ。千代田、写真を見せてあげて」
「わかった」
千代田がタブレットを取り出し、海図ではなく行方不明者の顔写真を映し出す。それを見た2人の深海棲艦は、そのうちの1人の写真の少女には見覚えがあった。
今でこそ姿は変わってしまっているが、艦娘としての春雨の姿がそ

こにあった。深海棲艦とは違い、髪の色も肌の色も正しい春雨が。
「他の4人は知らないけれど、この子、春雨ちゃんならここで暮らしてるわぁ。貴女達の探している春雨ちゃんと同じかは知らないけれど」
「……お姉、多分同じよ。春雨のトリガー、寂しさだったでしょ。薄雲のトリガーを同時に引けたくらいだし」
ここまでの話で中間棲姫と飛行場姫の中でいろいろと繋がっていった。トラウマを刺激してしまう可能性が高いからと、深海棲艦化した理由は聞かないようにしていたが、ここでおおよそが把握出来た。
姉達の死が心を壊すきっかけだったのも理解した。孤独を感じるのも。何せその写真は集合写真。仲の良い姉妹が5人で写っている、見ていて笑顔が溢れそうになる程の写真だからだ。ここまで仲がいいのなら、1人を残して全滅したらああなってもおかしくない。
「なるほどねぇ。だから溢れたのねぇ。ああなっても仕方ないのかもしれないわ。それだけ大きなショックだったのでしょう」
「その、何か知って……」
「ええ、おそらく私達は、貴女達の求めているモノを持っているわぁ。でも、貴女達が望むモノでは無いわねぇ」
言っている意味がわからない艦娘一同。そのせいか海風の苛立ちはさらに高まり、江風1人で押さえ続けることが難しくなってくる。
「勿体ぶらずにっ、早く、言って！」
「海風の姉貴！　抑えろって！」
「そうね、あまり勿体ぶらない方がいいわね。でも貴女達艦娘の知らない、深海棲艦（私達）の生まれ方を知ってもらう必要があるわ」
春雨をここに連れてくること自体は、中間棲姫としては悪くないことだと思っていた。しかし、艦娘が深海棲艦に変化するという事象を艦娘は知らない。ここにいる元艦娘達は全員、変わり果てた自分を見てまず動揺していたくらいだ。
本当に話していいのか迷ったものの、その辺りをしっかり伝えないと今の春雨を見たところで余計に混乱するだけだ。ならば、そこはもう話してしまってもいいだろう。

中間棲姫と飛行場姫は、来訪者達にここにいる溢れた艦娘達のことを話した。
トラウマのせいで心を壊し、理性が失われたことで強すぎる感情が溢れ出してしまうこと。その結果が黒い繭に包まれ、その中で深海棲艦として生まれ変わってしまうこと。深海棲艦となっても艦娘としての心を失わないようにここで処置していること。
そこに春雨の名前が出てきていることで、誰もが察することが出来た。春雨が同じように黒い繭となり、この施設で保護されたのだと。目の前の深海棲艦達のおかげで心の底から侵略者になることは免れているが、最早艦娘ではなくなっているのだと。
それ故に、海風は絶望の淵に立たされていた。探し求めていた痕跡を見つけることが出来た上に、春雨がまだ生きていることはわかったものの、それが自分の知る姉では無くなっていると言われたことになる。
だから、信じられなかった。
「嘘だ」
「姉貴……？」
「そんなの嘘だ！　姉さんが、姉さんが深海棲艦になっているなんてっ、嘘だ！　貴女達の戯言でしょう、私達をここから追い払うための！」
そうあって欲しくないという思いから、海風はますます暴走していく。怒りが頭の中を染め上げ、理性を焼き尽くす。
「やっぱり貴女達が犯人だ。私の復讐の相手だ。姉さん達を殺したのは、貴女達だ！　今、今ここで、今ここで私が貴女をっ、殺すっ」
「やめろ姉貴!?」
もう限界だった。江風が必死に押さえ込んでいたものの、何処から出たのかわからない力によって振り払われ、吹っ飛ばされてしまった。
こうなってしまったら海風はもう自由だ。誰かが止めようとする間もなく、その主砲を中間棲姫に向け、間髪を容れずに発射。やめろという声もまるで聞こえておらず、2発、3発と撃ち込んでいく。

「海風やめな！」
「姉さんの仇！　姉さんの仇！　姉さんのっ、仇っ！」
千代田の叫びにも耳を貸さず、砲撃を止めることは無かった。弾切れになるまで撃ち続け、それでもトリガーを弾き続け、ガチガチと空撃ちの音が響く。まだ収まらない怒りを表すかのように、泣きながら撃ち続ける。
仲間の艦娘達は、海風が止められなかったことを後悔していた。心の何処かで、中間棲姫の言葉を信じられなかったのもあるだろう。

「貴女の気持ちはわかるわぁ。錯乱しても仕方ないもの。でも信じてほしい。私達は、決して貴女のお姉さんを殺してなんていない。だってそうでしょう。今ここで初めて春雨ちゃんのお姉さんのことを知ったんだもの」

しかし、海風が撃ち続けたことで爆煙に包まれていた中間棲姫が、さも当然のように話し出す。飛行場姫も何の心配もなくそれを眺めているだけだった。
真隣でここまでの攻撃を受けたら、反撃くらいしてくるだろう。それなのに、全く気に留めていない。
突然風が起き、爆煙が一気に振り払われた。無傷の中間棲姫がそこにいた。
宙に浮かぶ3本の滑走路が全ての砲撃を防いでいた。海風の怒り任せの砲撃を受けても、その滑走路が全てを受け止めていたのだ。さらに言えば、そこまでやっても滑走路には傷一つ付いていない。完全なノーダメージである。
「妹ちゃん、春雨ちゃんを連れてきてちょうだい。ここまですれば、多少は落ち着いたと思うもの」
「ええ、本人を見てもらった方がいいわね。納得いかずにまた撃たれても困るし」

飛行場姫が施設の方へと歩いていった。それを止めようと考える者もいなかった。暴走していた海風も、こんなものを見たら冷静にならざるを得なかった。

力の差があり過ぎた。中間棲姫が本気を出せば、ここにいる艦娘達は肉片も残らずに海の藻屑になっていただろう。艦娘に対して敵意も無ければ侵略の意思もなく、むしろ穏便に済ませようとしているため、これで済んでいるのだ。

再会する姉妹

飛行場姫が春雨を連れてくるまでの間に、中間棲姫が今の春雨のことを説明していた。春雨はここに来るまでの間に心を壊しており、その結果、感情が溢れて黒い繭となって深海棲艦化を果たしたのだと。その心を壊した理由が、この艦娘達に必要な情報なのだろうと懇切丁寧に。

先程までは怒りに狂っていた海風も、自分の攻撃が一切通らなかったことで冷静さを取り戻し、他の艦娘達も海風の攻防を目の当たりにしたことで完全に萎縮してしまっていた。駆逐艦の砲撃とはいえ、殆ど無防備だった中間棲姫に、ありったけの弾薬を撃ち込んでも傷一つ無いとなったら、こうなってもおかしくはないのかもしれない。

中間棲姫が温厚だからこそ命があり、本気で怒りを買った場合、ここにいる艦娘は片手で捻るレベルで殺されてしまう。そう考えてのことだった。ここからは行動を慎重に行わなくてはならない。艦娘側の緊張は、今まで以上に膨れ上がっている。

「えぇと、そこまで緊張されると、私困っちゃうわぁ。最初はお互い見なかったことにしたかったんだけれど、ここにいる子の関係者だというのなら、どちらかといえば仲良くさせてもらいたいもの。そちらはどう考えているかはわからないけれど」

苦笑しながら説明を続けるのだが、艦娘達としてはその態度を改めることは難しかった。もう完全に蛇に睨まれたカエル。

だが、このままでは話が進まないと考えた千歳は、カラカラに渇いた喉から絞り出すような声で中間棲姫に問うた。

「春雨は……元の春雨とは違うと考えていいのかしら……」

中間棲姫は艦娘の心を失わないように処置したと話していたが、心が壊れているとも話している。何かが変化していると考えるのが妥当。

中間棲姫の話で理解出来たのは、春雨は心が壊れるほどのショックを受けていること、『孤独』をトリガーに発狂すること、そして外見は完全に深海棲艦であること。

「どうかしらねぇ……艦娘の春雨ちゃんを知らないから、一概に何もかも違うとは言えないけれど、少なくとも私達の考え方とは同調してくれているのよねぇ。戦うことなく、ゆっくりとここで過ごしていくことも楽しいと言ってくれているし。勿論、私が強要しているわけではないわぁ」

勇気を振り絞り、あの精鋭たる駆逐隊についていくことが出来ていた姉が、戦いから身を引いてスローライフを楽しんでいるという事実を聞き、妹達は喜んでいいのか悲しんでいいのかわからなくなっていた。

姉達に決して後れを取らず、完璧なサポートをこなし続けていた春雨は、多少無理をしていたのかもしれない。個性的な姉と並ぶとどうしても見劣りしてしまうかもしれないが、それでも努力と根性で完璧な戦いをし続けてきた。その春雨が、こういった形で引退するという事態に、少なからずショックを受けている。

「姉姫様、お呼びですか……？」

ここまで話したところで、ついに飛行場姫が春雨を連れてここまで来た。自分達の知る春雨とはやはりいろいろと違っていたため、妹達は息を呑む。驚きで誰も言葉が出なかった。

真っ白に染まった髪と肌。瞳も青白く輝き、もう艦娘では無いのだと嫌でもわからせてくる。服装が違うのは１００歩譲れるが、足音が明らかに普通とは違うのもわかった。厚手のタイツで隠されているが、アレが義脚であることに気付けた者も少なくない。

「あ……」

ここまで来たら流石に妹達がここにいるとわかる。この身体になってしまったことでもう二度と会えないと察していた妹達の姿を目の当たりにしたことで、いろいろと失われつつあった感情が戻ってきた。

特に、この日の朝にまぁいいかと切り捨ててしまった鎮守府への未練。より心を深海棲艦に堕とすことになる思考の変化は、その未練そのものを目にしたことで無かったことになった。もう少し長くこの施設で暮らしていたら、切り捨てた状態が長く続いていたら、妹達の

姿を見ても何も感じなかったかもしれない。
そういう意味では、今日見つけてもらったのは、春雨にとって本当にギリギリだった。艦娘としての心が消えていく寸前だったものを、鎮守府の仲間、妹達に掴み取ってもらえたのだ。
春雨は涙目になっていた。手も感激で震えていた。再会に驚きすぎて、言葉もすぐに出せなかった。
「みんな……もう会えないと思ってた……」
なんとか思いを言葉に出来た。この春雨が同じ顔の別人なら、こんな言葉は真っ先には出ない。ここにいる6人と面識があるからこその言葉である。いろいろな感情が綯交ぜになりすぎてどんな表情をしたらいいのかがわからず、どうしても無表情になってしまう。
心が壊れかけていた海風は、変わり果てているとはいえ、生きている春雨の姿を見たことで涙腺が決壊した。心配に心配を重ね、心が壊れかけるほどにまで追い詰められたため、感情が抑えきれなくなっていた。
「姉さん……姉さん、姉さん！」
感極まって、主砲を投げ捨てて春雨に飛びついてしまった。これは誰も止めようとしなかった。それ程までに海風は誰からも心配されており、ようやく肩の荷が下りたとも言える。
深海棲艦と化していても姉が生きていたということで、江風や涼風もホッと肩を撫で下ろしていた。唯一、山風だけはまだ不安そうな表情。その深海棲艦が春雨であることがわかっていても、やはり深海棲艦なのだから、どうしても警戒してしまう。
「ご、ごめんね、心配させちゃって。ほら、私こんな身体になっちゃったし、帰れたとしても絶対迷惑かけちゃうでしょ？　それに、変なことをしたらこの場所にも迷惑かかっちゃうし。だから連絡も取れなくて……」
あたふたとしながら言葉を紡いでいく。施設でリラックスして過ごしていた分、予想外の出来事が起きてもしっかりと最善の判断が出来ているようだった。
壊れた心は、自分のことをどうでもいい存在として認識しているだ

けで、他者を思い遣ることはまだ忘れていない。身体に心が引っ張られても、仲間意識までは失われていなかった。おかげで、海風の壊れかけの心に刺激を与えずに話が出来ている。
「いいです……いいんです……春雨姉さんが無事でいてくれたのならそれで……」
「い、いやぁ、これは無事とは言えないかなぁ。私も死にかけたし」
泣きついてくる海風をあやす。実際は身長は海風の方が高く、スタイルやら何やらまで海風の方が大人びているのだが、春雨の方が姉なのだから、こうなって当然である。
海風はそういう上下関係を大切にするくらい真面目であり、春雨を自分より下と見たことなんて一度も無かった。むしろ、あの個性的な姉達と同じ部隊に組み込まれて、サポート役を一任されている程の実力者であることに尊敬の念すら抱いていた。
実際、春雨は努力によりその立場を勝ち取ったのである。春雨の力を認める者は多く、下に見る者など誰1人としていない。海風のように好意的な者も沢山いた。
「春雨の姉貴……その、大丈夫なンだよな？」
「うん、大丈夫。姉姫様と妹姫様のおかげで、私は艦娘春雨としての考え方を残してるよ。鎮守府のみんなのことも忘れてないから安心して」
切り捨てかけたけど、と呟きかけて咄嗟にブレーキ。自分がどう思われようが別にどうでもいいのだが、今この場でそんな言葉を出したら、まず間違いなく海風が傷付く。それに即座に気付けたことで、余計なことを口走らなくて済んだ。
「……春雨、聞きづらいことなんだけど……生き残ったのは貴女だけなのかしら」
今度は千歳が恐る恐る訊ねる。話に聞いているため、この質問は春雨に対して残酷な話になることはわかっていたが、駆逐隊の痕跡を探しているのだから、どうしても重要な情報となる。誰もが聞くに聞けないだろうからと、千歳が悪役を買って出た。
中間棲姫と飛行場姫はこの感動の再会に水を差したくないため無

言を通したが、この質問は春雨のトリガーを引きかねないので少しだけ心の中で身構えた。
「千歳さん……はい。姉さん達は……死にました」
「やっぱりそうなのね……」
「私の目の前で……死んでしまいました……。それで私は独りに……独り、独りは嫌、嫌だ……嫌ぁっ」
その時のことを鮮明に思い出してしまい、案の定発作が始まってしまう。姉のことに触れるのはもう殆ど禁忌のようなモノになってしまっている。
急にガタガタと震え出したことに驚いた海風が困惑していると、ごめんなさいねとやんわりと引き剥がし、中間棲姫が春雨を抱きしめて後頭部を撫で回す。
「春雨ちゃん、大丈夫よぉ。ほら、今日は鎮守府のお仲間さんも、妹さん達もいるのよぉ。だから大丈夫。春雨ちゃんは独りじゃないわぁ」
「ヒッ……ヒッ……嫌ぁ……独りは嫌だぁ……」
「ゆっくりと落ち着いていきましょうねぇ。大丈夫、大丈夫よぉ」
まるで赤ん坊をあやすように、泣きじゃくる春雨を抱きしめながら撫でる中間棲姫。その光景に、海風を筆頭に艦娘達は複雑な心境だった。
今までの受け答えはまだ知っている春雨だったが、この言動は艦娘の時には一度たりとも見たことのないモノ。事前に春雨の心が壊れている旨を聞いていなければ、ここでまた一波乱あったかもしれない。
「悪いわね。こういうことなのよ」
話が出来そうに無いため、飛行場姫が補足していく。深海棲艦と化した春雨はこういうものなのだと、包み隠さず、しかし嫌味にもならないように説明した。
それでも、海風の中では消えかけていた怒りが再燃し始めている。一度煮え滾っていたものが、絶対に勝てない存在を目にしたことで鎮火されたように思えたが、まだその炎は消えておらず燻り続けていた。

精鋭である姉達を殺害し、心から尊敬する姉をここまで壊した敵が許せなかった。今すぐにでも殺したいほどに。しかし、暴走したせいで今の海風は弾切れ状態。万が一その敵の居場所がわかったとしても、戦うことが出来ない。

「誰が姉さんを……」

「それを知ってんのが、春雨姉だけだからね。今は聞くのはやめとこ」

海風がまた危ない状態になりそうだったことを察してか、涼風がさりげなくフォローする。

中間棲姫と飛行場姫の監視は必要ないと判断した。いや、むしろ監視など無駄な程に実力差がありすぎるため、その温厚さに頼り切ることにしていた。今は再会出来た春雨のことに専念したいというのもある。

「……あの」

今まで全く口を開かなかった山風が、不意に飛行場姫に話しかける。中間棲姫は春雨に付きっきりになっているので、こちらに話さざるを得なかった。

中間棲姫よりも少しキツめの印象があったので、山風としては話しかけるのも怖いくらいだったのだが、中間棲姫の妹ということで多分大丈夫と踏んだ。

「何かしら」

「……黒い繭のこと……もう少し知りたい」

先程は中間棲姫がチラッとだけ話した黒い繭。春雨を深海棲艦へと変えたものではあるのだが、感情が溢れ出したとしか言われておらず、それ以外のことはわからない。心を壊したら繭になると言われても、どうやってその形になっていくのかは、艦娘達には理解出来ないでいた。

山風には1つだけ、不安なことがあった。それを知っているのはこの中でも、いや、鎮守府の中でも山風だけ。その時は何かの見間違いかと思っていたが、今までの話からして、それに該当するのではと考えていた。

「ああ、そのこと。感情が溢れるのよ。春雨の場合は『寂しさ』が」

「……そこは……あっちに聞いた。どうやって溢れるのかが知りたい」
「そういうことね。私も現場をハッキリ見たことがあるわけじゃあ無いんだけれど、お姉が言うには泥が溢れるそうよ。確か……大概手の甲から始まって、黒い泥が全身を覆い尽くすの」
　黒い泥という言葉が出たところで、山風が目を見開いた。想像していたことは間違っていなかったと確信した。
「海風姉の手の甲に……泥がついてるように見えた時があった……今は何も無いけど……1回だけ」
「なんですって？　ちょっと詳しく教えてちょうだい」
　手が離せない中間棲姫に代わり、飛行場姫が山風の知っている事情を聞くことに。まだ飛行場姫に若干の恐怖感を持っている山風ではあるが、このことは早めに有識者に話しておくべきであると判断した。
「……なるほどね。確かにアンタの言う通り、あの子……海風だっけ？　限界に近いかもしれない。溢れかけたってことは、もう表面ギリギリまで泥が来ているってことだもの」
「うん……海風姉も……深海棲艦になっちゃうの……？」
「ここから心が落ち着いていけばまだいいけれど、難しいわよね」
　その海風は、春雨をあんな姿に変えてしまったまだ見ぬ深海棲艦に対して、怒りを滾らせ続けている。焦燥と憔悴により心をガリガリと削り続け、制御も出来ずに中間棲姫を撃ち続けるくらいに狂いかけているのだ。
　今でこそ春雨と再会出来たことで落ち着いているが、怒りに身を任せて泥が溢れる可能性は十二分にあった。それこそ、今すぐにでも。
「……アンタ達の鎮守府で繭になったら困るでしょう。アタシからの提案は、海風をここに置いて安静にしてもらうってことくらいね。ここは知っての通り、戦いから離れた場所。誰もがのんべんだらりと過ごしている場所だもの」
「……海風姉は真面目だから……そんなことしてたらもっと焦る」
「艦娘ならそうかもしれないわね。本来の居場所から離れて療養なん

て、逆に心が休まらないか。なら早々にその仇ってヤツを探さないといけないわね」
若干他人事のように、だが心配はしているように提案する飛行場姫。今はそれくらいしか言うことが出来なかった。

春雨と妹達の再会は、波乱はあるものの間違った方向に行くことなく終わることが出来た。妹達は春雨が生きていることと、それ以外の姉達がもういないことを知ることになった。
まだまだ問題は多いが、事態を前進させることは出来ただろう。

未知なる外交

本来の隊長である海風ではなく、千歳からの報告を受けたことで、鎮守府で待つ提督は正直気が気でなかった。その千歳が深海棲艦が白旗を振っているとまで言うのだから、余計に困惑した。

深海棲艦は侵略者とイコールで結ばれる存在だ。話なんてしても無駄だし、目と目が合った瞬間に戦いが始まるのが常。それを長いこと続けてきたのだ。騙し討ちのようなことをしてくることはまず無く、基本的には真正面から、絡め手としても数を増やすというのが今までの深海棲艦（あちら側）のやり方だった。

それが中間棲姫であると聞いた時には、声を荒げそうにまでなった。自分の予想が半分近く当たってしまったことにも驚いた。

だが、その深海棲艦は何もかもが違った。白旗を振るだけでなく、部下であろうイロハ級もおらず、陣地に建物や畑まである陸上施設型なんて聞いたことが無かった。

故に、この提督は対話を選択した。

「そうか、無事に話が出来たのか。よかった」

中間棲姫と飛行場姫が艦娘に対して好意的な深海棲艦であるという報告を受け、ようやく息が吐けた提督。精神的に限界が来ていた海風が発砲してしまったが、それを受けてもその態度を崩していないということで、本当に攻撃の意思がないとわかる。

しかし、そんな相手に撃ってしまったというのは、いくら相手が深海棲艦だとはいえ、申し訳ない気分だった。本来なら交渉決裂で皆殺しにされてもおかしくないというのに。

どっと疲れが出たが、報告はまだ終わっていないため、どっぷりと椅子に腰掛けたものの、まだ気が抜けない。捜索部隊の本来の目的、行方不明者の痕跡についてを聞かなくてはならない。

「それで、痕跡は……は、春雨が、生きていた!?」

流石にこの事実を知ったことで大声を上げてしまった。秘書艦の五月雨もその声に驚きつつ、その言葉でもう一度驚いた。

ほぼ1週間もの間消息不明だったのだ。口にはあまり出さないで

いたが、正直生存は絶望的だと考えていた。生きていることはなく、死んでいることの痕跡を見つけるための捜索部隊になっていた。
しかし、予想外の報告。しかも、喜ばしい報告だ。どうしても声は大きくなってしまうし、疲れが吹き飛んだかのように立ち上がってしまう。
「春雨は……えっ……は？　どういうことだ。理解が全く追いつかない」
一瞬素が出てしまうほどだった。艦娘が深海棲艦化するという事象は、当然この提督も知らないこと。前例が無いために資料も残っていない、正真正銘初めての問題。
現場にいる捜索部隊ですら困惑しているのに、又聞きである提督には理解すら出来なかった。つい先日まで自分の部下として生活していた艦娘が、今では深海棲艦として穏やかに暮らしていただなんて、信じたくても信じられない。
そんな情報が次から次へと溢れ出てくるため、提督は状況を纏めるために一旦説明を止めてもらった。この疲労の溜まった頭で言葉だけで理解するのは難しく、これからいつもよりも多めに休むことでスッキリし、改めて話を聞きたいと返した。
「そのままそこにいるのが難しいようなら、一度帰投してくれて構わない。明日改めて話を聞かせてほしいと伝えてくれ……ああ、そこの中間棲姫にだ。頼んだ」
報告が終了し、また深く息を吐いた。今まで痕跡の1つも見つからなかったのに、いざ見つかった瞬間にこれでもかと訳のわからない情報を叩きつけられたことで、先程以上に疲れが溢れ出た。
そっと置かれていたお茶を一気に呷り落ち着きを取り戻そうとしたが、報告の内容のせいで全く気が休まらない。
「て、提督、春雨が生きていたって」
「ああ……だが……深海棲艦になっていたらしい」
「しっ、深海棲艦!?」
「五月雨、声が大きい！」
五月雨も声を荒げてしまう。あまり大きな声を出すと鎮守府にい

る他の者に聞かれかねないので、今は少し声を落とすようにお互いに注意する。
　これはすぐには公開出来ないような情報だ。混乱が混乱を招くし、艦娘によってはいてもたってもいられず、提督の制止を振り切ってでも出撃してしまう者が現れてしまいかねない。
　今はこの事実は表沙汰にしない方がいいと、２人だけ――捜索部隊を除く――の秘密にしておこうという結論に達した。最終的には大本営に報告もすることになるだろうが、理解する前に公表するのは早計だ。
「あちらの深海棲艦……中間棲姫が詳しいらしくてな。それについて詳しく聞いているそうだ。だが、今の僕には正直理解が出来なかった」
「そうなんですか……じゃ、じゃあ」
「深海棲艦となった春雨を保護してくれていたそうだ。そこにはそういう艦娘が何人もいるらしい。千歳達が目にしたのは春雨だけらしいんだが……」
　五月雨もちんぷんかんぷんなようである。提督が理解出来ないものを、艦娘が理解出来るかと言われれば、やはり難しい。中には人間以上の頭脳を持つ艦娘もいるだろうが、五月雨は外見通りの少女である。学がないわけではないが、知らない事象をこれでもかとぶつけられたら、理解出来ないのは仕方ない。それは人間も同じ。
「……五月雨、あまり褒められたことでは無いと思うんだが……僕の考えを聞いてくれるか」
「はい、多分褒められたことでは無いんでしょうけど、聞きます」
「直に会いに行こうと思う」
「本当に褒められたことでは無いですよぉ！」
　五月雨は初期艦。この鎮守府が設立され、提督が着任してから今まで、ずっと側に居続けた最古参である。最初からずっと秘書艦を務め続け、誰よりも提督を見ており、誰よりも艦隊を引っ張っている。
　それ故に、心の何処かでは、この人はこういうことを言うんじゃないかと思っていた。艦娘のことを第一に考え、誰も死なないことを大

前提にした作戦しか立てないくらいだ。春雨の現状を、さらには他の艦娘にも起こり得る深海棲艦化の事実を詳しく知るためにも、その有識者に直接話を聞きに行こうと考えるのは自明の理であった。
「そういう重要な話は上の人間が出るべきだろう。あちらも施設とやらの管理者が出てきてくれているわけだし、対話も可能だというのなら、直に話すべきではないかなと」
「ただでさえみんなが行方不明になってるのに、その方面に生身で行くとか、自殺行為みたいなものです！　もし同じ敵が現れて提督が沈められたらどうするんですか！　自重してください！」
　五月雨は長く一緒にいるためか、こういう時には上司と部下という関係から逸脱し、共に歩く仲間として叱咤する。しかしながら、見た目は下手をしたら親子ほどに離れてしまっているため、提督としては少し恥ずかしい姿に。
「せめてこの通信で終わらせましょうよ。別にこのやりとりが常に録音されているとかそういうわけじゃないんですよね？」
「まぁそうだね。ここまで逐一録音されていたら流石に困る。僕達がやっていることも、大本営に筒抜けというわけじゃない」
「それなら尚更です。提督がわざわざ出向くのは良くないですよ」
　プリプリ怒りながら五月雨が続けるが、提督としては通信だけではわからない部分をその目に焼き付けたかった。春雨が生きていたという事実もそうだし、人間と艦娘（こちら側）に対して好意的な深海棲艦についてもそうだ。
　とにかく今回の件は今までに無かったことが多すぎる。すぐに納得しろと言われても無理だ。
「明日は私も捜索部隊に便乗しますから、その時にカメラで相手側が見られるようにしましょう」
「僕も直に」
「どうやって行く気ですか？　艦娘は誰も賛同してくれないと思いますよ」
　提督が直に顔を合わせるということは、何かしらの手段でそこまで送り届けられるということだ。一番有力なのは、艦娘によるコント

ロールが可能な上陸艇、大発動艇による輸送である。限られた艦娘にしか扱えないものの、荷物を運ぶのには最適な装備。
鎮守府に所属する艦娘達は、この提督の特性をしっかりと理解している。こんな状況なら自ら行くと言い出すことも、なんとなくわかる。故に、そもそも大発動艇を装備することを拒むだろうし、装備したとしても提督を乗せることを拒む。強引に行こうとしても容赦なく引き摺り下ろすだろう。
「むぅ……流石に諦めるしかないか。だが、五月雨が行くのかい？」
「はい。私も春雨の姿が直に見たいですし」
「……ズルくない？」
「おかげさまで、鍛えられましたから。身体も、心も」
なんとも健(したた)かに成長したものである、と提督も苦笑。
出会ったばかりの頃は、何に対しても一生懸命で少し空回りもするくらいの健気な少女だったが、長年共に連れ添っているうちに強く正しく成長を遂げた。それでもドジをする癖が治らないところは可愛らしい。
「とにかく、詳しく聞くのは明日にしましょうね」
「ああ。しっかりと理解するために、今日は早いがもう休ませてもらうよ。頭をスッキリさせないと、この件は本当にわからない」
「それがいいですね」
何度目かわからないが、大きく息を吐いて身体と心を落ち着ける。今まで溜め込んできた疲れが、殊更に溢れ出た。
これまでの不安が1つ取り除かれたことと、これからの苦労を感じ取ったことで、業務に手が付かないレベルだった。

鎮守府への報告が済む頃には、発作で泣きじゃくっていた春雨は落ち着きを取り戻していた。中間棲姫の温もりを全身に受け続けたことで、また会話が出来る程に。
「姉姫様、ありがとうございます。落ち着きました」
「いいのよぉ。春雨ちゃんはそういうものなんだもの。気にしなくて

いいわぁ」
　あれだけ荒れても、発作が終われば元通りとなる辺りは深海棲艦特有のもの。今までの春雨を知っている分、妹達にはこういうところも違和感を覚えるところである。
　今の春雨に羞恥心が欠如してしまっていることは、この様子からも一目瞭然だった。艦娘時代にこういうことがあった後は、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていたはず。それなのに、何も気にせずに次の話に進もうとしているのは、心が壊れていることを如実に表している。
「今回のことを提督に報告させてもらったわ。あちらも大分混乱しているようで、明日改めて話を聞かせてほしいと」
「そうよねぇ。こんなこと、すぐには納得出来ないわよねぇ」
　中間棲姫はそういうところの物わかりもいい。そのおかげで、艦娘側も最善の道を取ることが出来る。
「なので、私達は一度帰投して、話を聞く準備をしてから改めてここに来させてもらいます。それでいいかしら」
「どうぞどうぞ。次はちゃんと歓迎するわぁ。施設のみんなも紹介したいわねぇ」
　終始笑顔の中間棲姫。本人はお客様に対して心からの接待をしようと思っているのだが、艦娘側からしたらそれすらも若干恐怖を煽ってくるもの。やはり海風との交戦が尾を引いている。
「次は何人来てくれるのかしらぁ。お茶の用意をしておかなくちゃねぇ。今回はこんな感じだったけれど、こういう話は腰を落ち着けてお話ししたいでしょうし、ちゃんとそういう場を作っておきましょうかぁ」
「お茶会をするのなら、この辺り……よりもう少し施設側がいいわね。テーブルと椅子を用意するわ。お茶菓子も作っておきましょうか」
「あ、なら私もお手伝いします。ジェーナスちゃんもそういうの得意みたいですし、私もやりたいです」
　和気藹々と話す深海棲艦勢を見て、もう何度目かもわからないが呆気に取られていた。艦娘と深海棲艦で空気感がまるで違う。本来なら逆ではないのかと思える程だ。

「でもその前に。お姉、ちょっといいかしら」
「あら、どうかした？」
　飛行場姫が山風から聞いた海風の異変のことを中間棲姫に伝える。すると、何かを思い付いたような表情に。
「えぇと、海風ちゃん」
「っ、な、なんでしょうか」
　艦娘の中でも最も警戒していた海風。中間棲姫に発砲している分、その緊張感も他より強い。それが、撃たれた張本人に名指しで話しかけられたのだから、ビクンと震える程に驚く。
「貴女にはこの施設のことをいち早く知ってもらいたいから、今日は帰らずに残ってくれないかしらぁ」
「え、えぇっ!?　そんなこと、出来るわけ」
「説明も大事だけど、ここがどういう場所かを体験してくれる子がいると、もっと話が早いと思うのよねぇ。それは貴女が適任だと思うのだけど、どうかしらぁ」
　急な提案だが、艦娘達はやはり気が気でない。海風をここに置いていくということは、人質みたいなものだ。得体の知れない深海棲艦の陣地に滞在させるなんて、その方が気が休まらないというのに。
　しかし、中間棲姫からしたら完全なる善意からの提案。心が壊れかけているということを聞き、1日でもいいから戦いから身を離してもらいたいという思いやりである。
「それに、再会出来たお姉さんがどうなっているのか、今から1日でも知っておいてもいいと思うのよねぇ。結構いい提案なんだけれど、どうかしらぁ」
「……私の一存で決められるようなことじゃないですし……」
「なら、ちょっとズルい言い方しちゃおうかしら。私、貴女に撃たれたのよねぇ」
　それを言い出されると、海風には何も言えなくなってしまう。海風だけではなく、他の者もこの不始末については何も言えない。
「……う……それを言われると……私は従うしかありません」
「なら決まりねぇ。別に人質にしようというわけじゃないのだけれ

ど」

姉妹姫の在り方を知ってもらうため、海風は1日だけ陣地に滞在することが決まった。

この報告を後から受けた提督は、胃がキリキリする思いだったと後から語る。

艦娘と元艦娘

艦娘と深海棲艦の初対談が無事終了。今回はまず顔合わせということとなり、ある程度の話はしたものの詳細があまり理解出来ないという段階で幕を閉じた。

話の続きは翌日改めてということになり、艦娘達は一時帰投。しかし、中間棲姫からの要望により、その内の1人、海風が施設に残ることとなる。この施設がどういう場所であるかを、その身で体験してもらった方が話が早いというのが理由である。

実際は海風の精神状態を多少なりとも良くするためというのも含まれていた。飛行場姫が山風から伝えられた、海風からほんの少しだけ溢れ出た黒い泥の件を解消するために、一時的に常在戦闘の状況から離れてもらうという試み。

とはいえ、今まで敵対して戦い続けてきた深海棲艦の巣窟に1人残されるというのは、海風からしても、帰投中の仲間達からしても、気が気で無かった。中間棲姫や飛行場姫がとても好意的であることは対話でわかったが、それでも深海棲艦は深海棲艦。即座に気を許すことは出来やしない。

「海風……大丈夫かしら……」

「大丈夫だと思うけど……」

捜索部隊の隊長を引き継いだ千歳と千代田が、やはり心配そうに呟いた。帰投中も何度も何度も振り返り、遠のいていく陣地を眺めていたが、一応悪いことはされていないようだった。

そこに春雨も一緒にいたので、ほんの少しだけ安心は出来ている。しかし、その春雨自体も深海棲艦と化しているため、本当に安心していいのかはわからなかった。ああ見えて実は手遅れなんてことだってあり得るのではと、どうしても考えてしまう。

とはいえ、話している間は自分達の知る春雨だった。その姿はさておき、突然泣き出した時には何が起きたのかと思ったものの、それ以外はしっかりと春雨。ならば信じていいのかもしれない。

「大丈夫……海風姉は大丈夫。あの人達……信用出来るから」

こういう時にはまず発言をしない山風が、殆ど聞かないような力強い言葉で２人に返す。
中間棲姫と飛行場姫に対して、ある程度の信頼をいち早く置いていた山風。相手が深海棲艦であろうが関係ない。感情の機微に敏感な性質から、あの２人は本心から海風に対して心配していることも見抜いている。
だからこそ、真っ先に飛行場姫に相談したのだ。姿だけではなく、心まで見抜いていく山風は、今回のＭＶＰとすら言えた。
「山風の姉貴がそこまで入れ込むってことは、マジで信用出来るのかもしンない、なら江風もあの深海棲艦は信用しておくぜ」
「だね。あたいも賛成。ありゃあ深海棲艦って考えない方がいいかもしれないよ」
山風に続いて、江風と涼風もそれに同調した。こうなってしまうと、表向きは信用している方向に向いておいた方がいいと判断した。
警戒だけは怠らず、しかしこうなってしまったものはもう覆せない。千歳も千代田も、この件を提督にさっさと話しておこうと、帰路につきながらも通信を開始した。

一方、施設に残された海風である。艤装を消すことを促された後、早速連れて行かれたのはダイニング。この施設にお客様をもてなすような場所は残念ながら存在していないため、そこが一番順当な場所。
そこには狙い澄ましたかのように施設内の全員が集合していた。幸せアレルギーの伊４７もである。
部屋に入った瞬間、視線が一気に集中したため、思わずたじろいでしまう海風。だが、好奇心のみで敵意は無く、歓声が上がるわけではないが戦場では感じられないお客様大歓迎ムードだった。
新しい仲間が増えるのではなく、この施設ではまずあり得ない来客ということで、いつもよりも全員のテンションが高いようにすら思えた。しかも、ここで過ごしている間ではまず見られない艦娘である。

過去、自分自身も艦娘だったにもかかわらず、その存在に物珍しさすら感じる模様。
「ほ、本当に……深海棲艦だらけ……」
「私もそうだしね」
孤独を感じたくない自分のためというのもあるが、海風が落ち着けるようにとずっと手を繋いでいる春雨。その温もりは知っている姉の温もりと同じであるため、海風としても多少は落ち着ける。しかし、ここがアウェーであることは変わらない。
海風もそれなりに長く戦場に立つ者。練度も高く、選ばれし者に施される強化、第二改装も受けた、名実ともに鎮守府の主戦力と言える者である。その経験から、深海棲艦と相対した時には、戦場特有のヒリついた空気のようなものを感じ取ることが出来る。
先程までは冷静ではなく、精神的に追い詰められ続けていたので、そういったところは麻痺していたが、今ならそれも判断出来るくらいには落ち着いていた。
目の前にいる深海棲艦達からは、そういったものは一切感じ取れない。そもそも戦うつもりがないのだから、海風に対して誰も敵意を持っていない。それは中間棲姫や飛行場姫も同じ。元艦娘だからではなく、この施設の者だからという特有の空気だった。
そのおかげでか、覚悟を決めたとはいえ、海風は多少気を許すことが出来た。戦うつもりがないのは再三言葉にされているし、空気もそうではない。落ち着かなくともこのまま生死を賭けた戦いに雪崩れ込むようなことは無いだろう。
「この子がハルサメの妹なのね。Nice to meet you.（はじめまして）私はジェーナス。ハルサメと友達をさせてもらってるわ！」
「薄雲です。ええと、海風さん、でよかったですよね。よろしくお願いします」
「薄雲ちゃん、海風は私の妹だから、私と同じように接してあげてよ」
「あ、確かにそうだね。じゃあ、海風ちゃん、よろしくね」
早速春雨の友人であるいつもの2人が海風に絡んでくるが、その姿

はやはり深海棲艦。真っ白な肌と髪に、要所要所が深海棲艦の雰囲気を持っているため、握手を求められてもすぐに応じることが出来なかった。

仕方ないわよね、とジェーナスが苦笑しながら強引に手を取って握手をした。流石の海風もそれを振り払うことはしなかった。緊張で動くことが出来なかったとも言う。

「海風、リラックスしよ。みんな私と同じようなモノだし、とっても優しくて楽しい人達だから」

「は、はぁ……これでリラックスしろは無理があるのでは」

「みんな姿が違うだけで艦娘なんだから、大丈夫。心は何も変わってないんだよ。私と同じ」

そう言われてもと返そうとするものの、春雨は艦娘の時と同じ笑みを浮かべているのみ。

それを見たことで、やはりこの春雨は自分の知る春雨なのだと実感した。少し疑ってしまっていたところもあるので、それは心の中で謝罪する。

「……わかりました。私もここに残されたんですから、覚悟を決めます。1日だけですが、この施設の全貌を見て、本当に信用が出来るのかを見定めます」

「うん、それでいいよ。絶対に気にいるから。自信を持ってみんなを紹介出来るしね」

改めてジェーナスからの握手に応じる海風。その後は薄雲とも。2人はそれによって満足げに笑った。

薄雲は姉妹という関係に対してトリガーが引かれかけるのだが、ここでは発作は起こらず。ここに来た直後ならダメだったかもしれないが、中間棲姫と飛行場姫というわかりやすい姉妹が基礎にあるため、その辺りは多少慣れているようだ。

「明日また艦娘の部隊がここに来るのよね。なら、Ｈｏｓｐｉｔａｌｉｔ（おもてなし）の準備をしておきたいわ。何人くらい来るか、事前に知りたいのだけれど、貴女わかるかしら」

今度はキッチンにいたリシュリューが表に。当然ながら敵意など

無く、明日の艦娘との対話のことを見据えて、もてなすための準備をしたいと海風に質問。
「えっ、あ……っと、おそらく6人……かと」
「ふむ、部隊1つね。なら、それ以上になることも想定して10人分くらいは用意しておきましょう。Commandant Teste、今から取りかかった方がいいわね」
「Oui. Commen▪ons.（取り掛かりましょう） もし余っても、誰かが食べてくれるでしょう。腕によりをかけて作りますね」
同じくキッチンにいたコマンダン・テストがリシュリューの言葉を受け、早速明日の準備に取り掛かる。
その光景を目にして、海風は少しだけ見惚れてしまった。緊張感はあるものの多少は気を許した結果、美形の女性2人がテキパキと動く姿はとても煌びやかに見えたようだ。誰が見てもそう見えたので、流石は春雨の妹だと納得した。春雨までも。
「なぁ、松姉ぇ、アイツちょっと俺らと同じ匂いしないか？」
「なんとなくわかるわよね。同類だからかしら」
続いて松竹姉妹。海風の雰囲気から何かを感じ取ったらしく、こちらも自分から海風に仲良くしようと接近。
「俺は竹だ。で、こっちは松、俺の姉貴」
「よろしくね、海風さん」
こちらもジェーナスや薄雲と同じように握手を求めた。先程とは違い、今度はしっかりと握手に応じる。
しかし、その直後に竹が海風をグイと引っ張り、耳元で囁いた。
「なぁアンタ、春雨のこと……ちょっと、いや、かなり好きだろ」
「えっ、ちょっ」
「私達、そういうのわかるのよね。尊敬……かしら。でも、ちょっとその域を越えようとしてる感じ。初々しいわね」
春雨には聞こえないように、海風だけに聞こえるように。言われた途端、海風の顔が赤く染まっていく。それはもう図星であると証明しているようなものである。
海風は春雨のことを艦娘として心の底から尊敬していた。それが

自分の姉であることに誇りもあった。だが、松竹姉妹に言われた通り、それ以上の感情を抱きつつもある。
　艦娘というのは色恋沙汰とは無縁ではあるのだが、心の内に秘める者がいないわけではない。海風がその中の1人であることは、松竹姉妹には簡単に見抜けるくらいのものだったようだ。
「そ、その、それ以上は」
「いやぁ悪い悪い。俺達ぁそういうの相談に乗れっから、仲良くしてくれよな」
「私達は共依存し合ってる仲だけど、それは誰にでも言えるくらいの恋愛感情だからね。もし何かあったら、私達が話を聞いてあげる」
　このまま話し続けるとまずいと感じた海風は、握手を離してそそくさと一歩後ろへ。
「海風、何かあった？」
「な、なな、なんでも無いです。お二人も良い人だなと」
　姉妹2人揃ってニマニマしながら椅子に戻っていくが、海風は違った意味で気が気じゃ無かった。
　とはいえ、こんな会話をしたことで緊張が若干ほぐれたのもある。元艦娘とはいえ、深海棲艦にも色恋沙汰があるとわかったことで、親近感が湧くような存在に思えるようになった。
「最後はヨナ～。ヨナはちょっとした事情であまり人前に出られないけど、仲良くしてくれたら……嬉しいな」
「ヨナさんは私を救ってくれた人なの。もし救われてなかったら、私は艦娘の心も忘れて侵略者になってたかもしれない。だから、恩人なんだ」
「そうなんですか……ヨナさん、姉を救ってくれて、ありがとうございます」
　幸せアレルギーが故に挨拶もそこそこに部屋から出て行ってしまうが、春雨から伊47はそういう存在なのだと説明されて、納得せざるを得なくなった。
　春雨自身も何かの弾みで突然泣きじゃくるようなことがあると知ったのだから、伊47もそういったことを何か抱えているのだと察

することが出来た。そのため、何も言うことなく受け入れる。
「これで全員。姉姫様と妹姫様がこの施設の管理者で、私達は生活のお手伝いをしながらのんびり暮らしてたんだ。だから、艦娘には迷惑をかけないようにするし、戦いもしない。侵略なんて以ての外だよ」
「そうなんですね……その、まだ少しだけしか話していませんが、ここがどういう場所なのか、少しだけわかった気がします」
ここにいる者は確かに全員が深海棲艦だ。しかし、感覚は艦娘、むしろそれ以上の一体感があった。人数が少ないというのもあるのかもしれないが、全員が全員を思いやり、喧嘩などもなく、お互いに支え合って生きていく、一種の家族のような関係。
別に鎮守府が殺伐としているわけではない。海風が所属し、春雨が元々いた鎮守府は、どちらかと言えばアットホームな雰囲気の場所だろう。心身共に健康的に暮らすことで、戦いを最善に進めることが出来ると、あの提督もその空気感は大切にしている。艦娘にとっては、あの場所は帰るべき場所としては最高の場所であろう。
しかし、ここの雰囲気はそれ以上である。発作という負の要素を抱えている分、それ以外が全て正の要素とすら思えた。
「艦娘のみんな……提督にも、この施設がいい場所ってことを知ってもらえたら嬉しいな。こっちは不干渉を貫くから、深海棲艦だからって攻撃してこないでほしい」
「わかってます。私も今、自分の行いを激しく後悔しているところです」
この施設の在り方について理解し始めたことで、中間棲姫に対しての発砲が問題ある行為であることにすぐに気付く。それを軽々と受け止め、さらにはそこまでの悪態を不問にした中間棲姫の寛大さに、早くも屈服しかけていた。
強大な力を持つからこそ、人生に余裕を持てる。それを体現しているかのような存在。しかし、その力を一切振りかざさず、自分のためではなく他者のために使う中間棲姫は、人間にも艦娘にもなかなかいないくらいの聖人君子である。
「ここを知るために、よろしくお願いします。春雨姉さん」

「うん、よろしくね。出来れば手を握っててほしいかな。ほら、私……知ってると思うけど、独りになると壊れちゃうから」
「了解です。大丈夫です」
春雨の手をギュッと握って、小さく笑顔を返す。それは種族は違えどしっかり姉妹としての姿をしていた。

海風はここから、元艦娘の保護施設の実態を知ることになる。しかし、それは悪いことではない。活動の全てを見ることで、よりその良さを感じるだろう。
穏健派の深海棲艦がなんたるかを、他の艦娘達に伝える第一人者となる日も近いかもしれない。

施設を知り

姉妹姫の管理する保護施設の全容を知るために置いていかれた海風は、ダイニングで開かれたお茶会を皮切りに、施設内で行なわれているスローライフの一部始終を見せつけられることになった。

翌日の対話のための準備に関しては、海風はもてなされる側になるのだから見ているだけにしろという指示を受けたくらいで、あとは春雨と一緒に施設の隅から隅までを案内されたり、改めてこの施設にいる者達と交流をすることになったりと、残り半日を満喫させられた。

「農作業や漁をする深海棲艦なんて聞いたことありませんよ」

「みんなそうだよ。でも、やってみると結構楽しくてね」

「姉さん、どちらもやったんですか？」

「勿論。今度、私が一から育てるんだ。収穫が楽しみだよね」

もしかしたら艦娘の時よりもイキイキとしているのではないかと錯覚するほど、春雨の表情は明るい。

この施設の無害さは嫌というほど味わうことが出来た。姉妹姫が言う通り、ここはあくまでも保護施設。戦いから離れ、心を落ち着かせ、ただやりたいことをやるだけ。侵略者としてのそれは皆無である。

「……飾りじゃないこともわかります。これは本当に人畜無害です。あの深海棲艦2人も、本心からこれを望んでます」

「うん、うん」

「こんな深海棲艦ばかりなら……戦いなんてしなくても済むんですけどね」

見て回ったことで、ここにいる深海棲艦が全員敵ではないことを納得出来た。関わり合いを持たない第三勢力であり、完全なる中立。元艦娘はまだしも、純粋な深海棲艦ですらそれなのだ。

ここは破壊しなくてはいけないと考える必要は無いと、海風は判断した。これで深海棲艦だからという理由で全勢力を嗾けてでも滅ぼそうとするのなら、それは憎むべき深海棲艦と何も変わらない。人類の平和を護る艦娘なのだから、無害なモノにわざわざ手を出すのは違

う。
「もう少しだけ、見せてください」
「うん、まだ時間はあるしね。好きなだけ見て行ってね」
繋いだ手に力を込める。尊敬する姉とこういう形で日常を楽しむなんて考えたことも無かったため、海風としては少しドキドキしていた。

そして夕食、歓迎会とまでは行かずとも、普段通りの食事に少しだけ色が付いた品が並んだことで、また驚いた。昨日の料理担当がリシュリューとコマンダン・テストだったからか、今回は飛行場姫の手製。普段どういう生活をしているかを見せるためのため、それはそれで都合が良かった。
深海棲艦が料理をするなんて当然ながら聞いたことがないし、その味も絶品と来たら何も言えず、ただただ舌鼓を打ち続けることになる。
「……間宮さんのご飯に引けを取りませんね」
「だよね。私もビックリしちゃった。初めてここで食べさせてもらった時、妹姫様、マグロの解体したんだって」
「ええっ!?」
春雨はもう慣れてしまっているが、鎮守府でのそれよりも充実しているのではないかとさえ思える施設での生活は、戦いに身を置く海風にとっては驚きの連続だった。
極端な話、やっていることは艦娘達が守っている人間と殆ど同じ。深海棲艦としての力は自衛の手段として持っているだけで、施設の防衛のための哨戒以外では使うことはない。強いて言うなら、釣りの時に沖に出るくらいだ。それ以外では武装なんて以ての外。
結局のところ、ここにいる者達は種族が違うだけで人間と何も変わらないということである。やはり、わざわざ破壊する必要はないと結論付けた。絆されたわけではないが、ここが信用出来る場所であると理解した。

「ウミカゼ、半日ここにいてどうだった？　楽しかったでしょ？」
「楽しかったかはちょっとわかりませんが……戦いに身を置く私としては、とても心が休まったように思えました」
ジェーナスに聞かれ、素直な感想を返す海風。その表情は、ここに来たばかりの時とは打って変わって穏やかだった。
鎮守府でも丸一日を休息に使うことはあるが、それはあくまでも鎮守府内での待機に等しい。あの提督はなるべく娯楽などで精神的な負担を減らそうとしているようだが、鎮守府という場所が戦場の一環のようなものなので、真に気を休めることというのは出来ないのかもしれない。
それが、ここは全く違う。２人の管理者のおかげで平和は完全に守られており、ここにいれば安全であるということが保障されているようなもの。それもあってか、いつでも出撃出来るという気持ちは微塵もなく、本当にやりたいことをやりたいようにやっているだけ。
戦いから切り離されれば、艦娘も同じように心休まる時が得られるのかもしれないと感じる。少なくとも今の海風はたった半日間それを体験しただけでこれである。
「ずっとここにいてほしいなんて言えないけど……また時間があったら来てほしい……かな」
「はい、必ず。私も姉さんの元気な姿が見れるのは嬉しいので」
最初は嫌々だったとすら言えるこの施設の滞在も、今では次を望むまでに。その理由の１つは、間違いなく春雨の存在にあるだろう。
以前からそういう感情を持っていたとしても、今の状況になってそれがさらに深くなっている。松竹姉妹のような依存までは行かないまでも、海風はその存在そのものに心が支えられているのも同然だった。
「春雨ちゃん、今日は海風ちゃんと寝る？」
「そう、だね。そうしようかな。なんだか今日は悪い夢も見ない気がするし」
「見たとしても、私が姉さんの側にいるのでどうにかしますよ」
薄雲からの提案で、いつもは姉妹姫と３人組の計５人で眠るところ

を、姉妹水入らずで夜を迎えることになった。春雨としては最も心が許せる相手でもあるし、海風としても姉妹で話したいことくらいあるだろう。

これまでの1週間、心を壊しかけながらも姉達を求め続けた海風だ。翌日に帰投することも確定しているので、ここで出来る限り春雨との交流をしておきたい。

もしその場でまた発作が起きるようなことがあったとしても、中間棲姫があやす姿を見ているため、海風でもどうにか出来るだろうと考えた。それに、そうなった時の姉に頼られるのは海風的にも少し嬉しかったりする。

「なら、お願いね。海風となら……いい夢見れそうだし」

「任せてください。いい夢を見てもらいます」

「頼もしいね」

こんな会話を聞きつつも、松竹姉妹がニヤニヤしていたのは言うまでもない。

そして夜。お風呂上がりでホクホクのまま、ベッドルームではなく、春雨にあてがわれていた殆ど使われていない私室へと向かう2人。

ここで住むようになってからは寝るときは必ずベッドルームでみんなと一緒であり、それ以外でも独りになることが出来ないために私室に入るということが無かったため、あてがわれても新品同様の部屋。むしろ使うのが初めてというくらいである。

「まさか深海棲艦に服の概念が無いとは思いませんでした……」

「艤装と同じで作れちゃうからね」

艦娘と深海棲艦の違いとして、服まで艤装扱いというものがある。春雨は風呂上がりにサクッといつものパジャマを作っていたのだが、海風にそんな芸当は出来るわけがない。その時には明日着るために制服も洗濯——と言っても軽く水洗いして部屋干しする程度——に出していたため、着るものすら無かった。

結果的に、服も作れない程に疲労してしまった時のことを考えて用意されたフリーサイズのTシャツとインナーでギリギリ難を逃れている。これを使ったのは初めてだと中間棲姫は話していたので、新品であることは確定。
「自分のは作れても、他人のは作れないみたい。出来たらお揃いのパジャマになってもらえたのにね」
「それは……まぁ、はい」
ニコニコしている春雨。海風としてもお揃いは魅力的ではあったが、無理なものは仕方ない。
「あ、じゃあ私がシャツになればいいんだ。はいっ、どうかな」
「似合ってます。あまり見たことがない姿なので新鮮です」
気付いた時にはパジャマは失われ、海風と同じTシャツとインナー姿に。こういうラフな姿は艦娘の時にもしたことがないと春雨も少し楽しそう。
何度見てもこの服を作る原理は理解出来なかった。艤装を構築するのと同じだと言われても、あちらは機械でこちらは布だ。そもそも性質が違う。
そういう意味では、深海棲艦は艦娘よりもより高度な技術を初めから持っていると言えるだろう。
部屋に到着したものの、まだ眠るには時間が早いということで、2人並んでベッドに座って会話の時間とした。
「2人きりですから改めて……姉さん、無事で本当に良かったです」
「無事とは言いづらいけどね。私は深海棲艦になっちゃったし、妹姫様からは心が壊れてるって言われてるし」
たははと笑いながら、自分でトリガーを引かないようにしつつ、ここに来てからのことを海風にしみじみと語る春雨。
「その……ね。海風が来てくれたの、本当に嬉しいんだ」
「良かったです。来るなと言われたらどうしようかと」
「そんなことないよ。私だってみんなに会いたかったもん。海風もそうだし、山風も、江風も、涼風も、勿論五月雨にだって」
姉としての表情になる。妹達の顔を思い浮かべては、また会いた

い、話したいという気持ちを隠すことなく顔に出す。
しかし、すぐに少しだけ暗くなった。
「でも、この身体がそれを許してくれないでしょ？」
反応に困る海風。何も情報が無い状態で、私は春雨ですとこの姿で鎮守府に来られたら、海風はどうしていたか。
その時の精神状態からして、まず確実に激昂して話すら聞かずに撃つ。何と言われようが知ったことではなく、むしろ愛する姉の名を騙る深海棲艦など神経を逆撫でするような存在を生かしておくわけにはいかないと、海風すらも心を壊しかねない程であろう。
そういう意味では、春雨の選択は間違っていない。艦娘の心を持ち合わせた深海棲艦という利点を最も有効に使えたと言っても過言ではない。
「だから……だからね、私、一度全部切り捨てちゃったの。ここから出たら、鎮守府にもこの施設にも迷惑がかかっちゃうから……だから、海風達との再会を諦めて、まぁいいかって。今考えたらコレ、すごく怖いことだよね。妹達のこと、どうでもいいものになりそうだったんだ」
発作のトリガーとは違う理由で手が震えていた。未練を切り捨て、この施設でのスローライフに馴染み、艦娘としての心まで静かに消えていきそうだったのだ。
海風達に再会出来たことで切り捨てたモノを拾い直すことが出来たが、そのせいで今朝まで考えていたことが怖くなってしまった。
「どうでもいいわけないじゃない。海風は、みんなは、私の大切な妹で、仲間なんだから。切り捨てちゃダメ。私、みんなに酷いことしそうになっちゃった」
ツゥーっと、目尻から涙が溢れた。今までここで過ごしていた時には忘れていた心が、海風との再会でまた戻ってきていた。
自分のことはどうでもいい存在であることには変わりない。しかし、自分の行いで他者が傷付くのは涙が出るほど許せない。そのはずだったのに、最も身近な妹達を傷付けそうになった。その自己嫌悪が涙を呼び寄せた。

「姉さん……大丈夫です。今はそうじゃないんですよね」
震える手を取って、両手で握る。温もりを与え、落ち着けるように。
「私は、私達は、そんなこと気にしません。姉さんがこうやって生きていてくれているんですから。ここから出られない身体なら、私達が会いに来ます。どうせこの辺りは何度も哨戒しないといけない場所なんですから、その都度会いに来ますよ。私じゃなくても、誰かしらが」
春雨は発見出来たかもしれないが、まだ他の面々の痕跡は何処にも見つかっていない。それを探し出し、犯人を撃破する。そうすることで全てが終わるのだ。
発作があるので春雨にその詳細を伝えることは出来ないが、海風の戦いはまだまだ続く。しかし、今は焦りが無かった。壊れかけた心は、この半日で大きく改善されている。
「……海風、ありがとうね。私、海風みたいな妹を持てて、本当に幸せ」
「そう言ってもらえると、妹冥利に尽きますね」
グシグシと溢れた涙を拭い、笑顔を取り戻す。その顔に胸がときめくような思いをした海風だが、今は余計なことはしないし言わないように努力した。艦娘なのだから理性くらいはちゃんと利く。
「よし、じゃあもう寝よっか。海風も疲れてるでしょ？」
「そう……ですね。ここ最近よく眠れなかったというのもあるので」
「あはは……私のせいでもあるよね。ごめんね、心配かけて」

その日は今までにないくらいよく眠れたと海風は語る。溜まりきっていた疲れが全て無くなり、心も休まる、最高の眠りだったと。
それはおそらく、脚まで消して殆ど抱き枕のようになった姉を抱きしめながら寝たからだろう。

再来島

海風が施設で一晩を過ごした翌朝。宣言通り悪夢を見ることなく、妹の温もりのおかげで孤独も感じることが無かった春雨が目を覚ます。すぐ傍にはまだ眠っている海風の顔。脚まで消した状態だったからか、ちょうどいい抱き枕にされていたため、ガッチリとホールドされていた。

余程疲れていたのか、心身共に癒されるために深く深く眠っているのがよくわかる。春雨が拘束から抜け出すためにモゾモゾと動いても、目を覚ます気配が無い。

「そろそろ鎮守府では総員起こしの時間かな……でも、ここならいつまで寝ててもいいからね」

窓からは日の光が差し込み、今日もいい天気である。艦娘、そして提督との対話を外でやる予定だったので、気持ちいいくらいの晴天になったのは、それが大成功を収める予兆にも思えた。

なんとか抜け出した春雨は、義脚を構築した後にいつもの制服姿に変化。そのまま部屋を出るのは自殺行為なので、海風が目を覚ますまでジッと待っていることにした。

自分のためにこの1週間奔走し続けてくれた妹には、正直頭が上がらないとまで考えている春雨。この場所から離れることは出来ないだろうが、何か望みがあれば叶えてあげたいとまで考えていた。今すぐでなくとも、また次の機会があれば。

この時には、鎮守府のことをまぁいいかで済ませるような心では無かった。艦娘との交流、妹との再会は、春雨にも劇的な変化を齎していた。

「ありがとうね、海風」

眠る海風の頭をやんわりと撫でる。見た目は春雨の方が幼いため、知らない者が見たらどちらが姉かわからないくらい。

「ん……んん……もう朝……？」

「おはよう、海風。今日もいい天気だよ」

頭を撫でたことがきっかけになってしまったか、ここで海風も目を

覚ます。疲れが全て取れるほどの熟睡だったからか、ぼんやりした目で身体を起こしつつ、小さく欠伸。
あまりにも無防備な姿に、春雨は何だか嬉しくなっていた。深海棲艦の巣窟とも言えるこの施設で、ここまでリラックス出来ているのだから、この施設に対しての感情はもう言うまでも無い。

朝から施設の外では対話の準備が進められていた。おそらく6人の部隊が来ると考えられているが、10人来るかもと考えて、テーブルと椅子もそれ相応のものが用意され、まるで庭でのお茶会のような体裁になりつつある。昨日からリシュリューとコマンダン・テストを筆頭にしたお茶菓子も次々と作られ、テーブルに並べられていった。
艦娘と深海棲艦の対話という、今までの戦いでは前代未聞の出来事。それをなるべくリラックスして進められるようにと、中間棲姫も飛行場姫もおもてなしの精神を前面に押し出している。
「な、なんだか大事に」
「だって艦娘さんとこんなに親身になってお話しすることなんて初めてなんだもの。こちらも誠意を見せなくちゃねぇ」
ニコニコしながら中間棲姫が椅子を並べていく。その光景に、春雨は海風と共に目を丸くしていた。
今回はほぼ全員が参加するくらいで考えているらしく、これだけの深海棲艦が一箇所に集結しているのに、侵略はおろか、その存在すら今までひた隠しにし続けてきたのだという証明をするとのこと。
真面目な話もあるのだが、あくまでも目的は交流。そのため、お茶会形式にした。1日ここで生活した海風という証人もいるため、信用度はさらに増すことだろう。
「妹ちゃんが迎えに行ってるけど、来るのならそろそろなのかしらぁ？」
「はい、おそらく。あの場所からここまでの時間を考えれば、朝イチに出港したならそろそろではないかと」
春雨はここから鎮守府までの航路を知らないため、海風が説明す

る。片道でもそれなりに時間がかかることは言うまでもなく、だからこそ長い時間を隠住出来ていた。
「……あの、姉姫……さん」
「はぁい、何かしらぁ？」
「昨日は申し訳ありませんでした。正気では無かったとはいえ、あんな失礼なことを」
海風が謝罪するのは当然、見境なしに殺意を込めた攻撃を放ったことだ。中間棲姫の余りある力のおかげで全くの無傷で済んでいたが、万が一にも怪我を負わしていたら、こんな関係になっていなかったかもしれない。そう考えると、自分の行いがとても恐ろしいものに思えた。
そんな海風に対して、中間棲姫は何も気にしていないような表情。笑顔を絶やさず、安心させる口調で慰める。その母性は施設の者だけではなく、知った者全てに対して発揮するようだ。
「貴女のしたことは、艦娘としては間違いじゃないわぁ。まぁもう少し話を聞いていてくれれば嬉しかったけど、もう過ぎたことだもの。私は気にしていないから、貴女も気にしないでちょうだいねぇ」
「……はい、貴女がそう言ってくれるのなら」
これでもう水に流しましょうと、その話題はすぐに終了。続けていても海風が落ち込んでいくだけ。
「お姉、来たわよ」
そうこうしている内に、鎮守府からの部隊が到着。飛行場姫を先頭に、昨日見た面々がこちらに向かってきていた。今回は交戦しないことが大前提であるため、陸に上がった時点で艤装は消している。昨日はまだ海沿いで留まっていたが、今回は施設に近い陸地にまで来ているため、まるで田舎者のようにキョロキョロしながらである。
そうなるのも無理はない。昨日もそうだったが、ここがあまりにも陸上施設型深海棲艦の陣地とは思えないのだ。駆逐艦はまだしも、大人の外見である千歳と千代田もここは流石に興味と警戒で周囲を見回している。
そして、海風がここに滞在したため、今回の部隊には五月雨が参加

していた。提督に対してもそのように伝えているため、部隊の面々は納得している。海風も何となく五月雨が追加されるのではと想像はしていた。
だが、春雨はその辺りに思考が向かっていなかったようで、五月雨の姿を見た途端に大きな声を上げてしまう。
「五月雨！」
「みんなが言ってた通りだ……生きててよかった……！」
駆けてくる五月雨を抱きしめようと春雨が構える。が、その寸前で何もないところで躓き、抱きつくどころか体当たりをぶちかますように突撃してしまった。秘書艦を務めているときでもちょくちょく出してしまうドジっ子気質を、この一番重要なところで発揮し、春雨に渾身の一撃を入れてしまう。
その勢いでゴロゴロ転がってしまうが、回転が止まったところで2人して笑い合った。こうなるのも艦娘の時には一度や二度ではない。春雨としては喰らい慣れた一撃。
「あはは、やっぱり五月雨はこうで無くちゃね」
「もしかしてこうなること予想してた……？」
「勿論。だって五月雨だよ？　要所でドジるのが五月雨だよね」
「もーう！　私だってちゃんと成長してますー！」
そんな光景も微笑ましい。春雨の隣にいた海風も、それを見てクスクス笑っていた。
「海風姉……元気になった？」
「山風、うん、少し落ち着けた。心配させちゃってゴメンね」
昨日とはまるで違う海風の表情に、山風のみならず江風と涼風もホッとしていた。
あれだけ顔色が悪く、憔悴しきっていた海風が、今は全盛期と言えるほどの落ち着きよう。これでこそ海風と納得出来るところまで回復している。この施設の効果は絶大だということを証明することとなった。
「準備は殆ど出来ているから、好きなところに腰掛けてちょうだいねぇ。今回はちゃんと腰を据えてお話しした方がいいでしょうから」

春雨と五月雨の再会をある程度見届けてから、中間棲姫が艦娘側にも指示を出す。深海棲艦から艦娘に何かを言うなんてことは本来あり得ないのだが、中間棲姫の存在そのものがあり得ないようなものなので、これだけではもう驚かなくなっていた。

既に中間棲姫と面識のある者はその指示に従い、その場に並んだ椅子へと次々と腰掛けていく。警戒はまだ解いていないが、海風がここまで回復しているところを見たことで、信用度は昨日から随分と上がっている。

その様子を確認したからか、五月雨も一旦信用する方向で考えた。目の前にいるのは最悪の姫、中間棲姫と同一個体。警戒するに越したことは無いのだが、聞いていた通りの雰囲気であるため、仲間としての感覚で今は接する。

「お気遣い感謝します。あ、私は鎮守府の提督秘書艦、五月雨と言います」

「あらあら、ご丁寧にどうも」

「あと、提督も貴女と直にお話ししたいと言っていたのですが、流石にここまで連れてくることは出来ず、後から通信上で申し訳ないのですけど、参加させてもらっても」

「全然構わないわぁ。人間さんと話すのは本当に初めてだもの。私からもお願いしたいくらいよぉ」

秘書艦としての責務を全うする五月雨は、さっきのドジっ子気質が何処かに行ってしまったかのように凛としている。これがずっと続けばいいのにと思ったものの、五月雨もそこは気にしているので、春雨は考えるだけに留まった。

「あと、こちらも見てもらえる全員を出させてもらうわぁ。見ればわかると思うけれど」

艦娘が着席したところに、ジェーナスがすかさず紅茶を淹れて並べていった。昨日には見ていない深海棲艦の登場に、若干緩んでいた緊張感がまた戻ってきそうだったが、姉妹姫と春雨の仲間であるということを考えれば、そこまで深く考える必要はない。

「……何人もいるのは聞いていたけど、ここまで並ばれると壮観ね

……」
「一斉に攻撃されたら絶対勝てないよねコレ……一応今回は戦える装備にしてきたけど」
「本当にね。友好的で本当に良かったわ」
千歳と千代田がコソコソと話すのも無理はない。目の前にいる深海棲艦は、大なり小なり全員が姫。春雨もその中に含まれる。
たった1人でも強大な力を持ち、艦娘が1対1で戦ってもまず勝利することが難しい存在が姫級だ。一番の新人である春雨ですら、今のスペックは艦娘時代を軽く凌駕するものになっているのだが、周りがコレなので本人は全く気付いていない程である。
それが今この場に10人。伊47は陸上では機能停止しているようなものなので数には入らないかもしれないが、だとしてもこんな敵部隊が現れようものなら、何処の鎮守府でも苦戦どころか呆気なく滅ぼされてしまうだろう。
「怖がらなくていいわよ。アタシ達はアンタ達を歓迎してるんだから。アタシとお姉はさておき、他の子達は全員、元々はアンタ達と同じ艦娘よ。それに、みんなその時の心は忘れてないんだから」
その呟きが耳に入ったか、飛行場姫が即座にフォロー。恐怖や警戒の中で話を聞いても昨日と同じになってしまう。もっとリラックスしてもらわないと困ると言わんばかりに、軽い態度で話していた。
「え、ええ、勿論。こうやってもてなされているんだもの。お互いを対等として扱うのが礼儀だと思います」
「よろしい。話し合う前に用意した甘いものでも食べてちょうだい。落ち着くために作ったんだもの」
言うが早いか、完全に無警戒で江風がクッキーを1つ口の中に放り込む。
「うわっ、うっめぇ！　なンだコレ、間宮さンのと同じくらい……いや、それ以上かもしれねぇ！」
「マジで？　じゃあ、あたいも1つ」
江風に倣って涼風も1つ摘んで食べる。すると、見る見るうちに顔が綻び、その味に歓喜していた。

「ここのものはＲｉｃｈｅｌｉｅｕとＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、あとはそこのお茶を淹れてるＴｈ▪（紅茶）を振る舞ってるＪａｎｕｓが作ったものよ。楽しんでちょうだい」
「Ｉｌ　ｙ　ａ（おかわり）　ａｕｓｓｉ（もあり）　ｕｎｅ（まず）　ｒｅｃｈａｒｇｅ（からね）」
　重要なことを話すのは当然忘れていないのだが、お互いに警戒しあった状態では話も耳に入りづらい。それを緩和出来たのだから、おもてなしとしてお茶会を開いたのは大成功と言えるだろう。
　また、ここにいる元艦娘の深海棲艦達とも交流をすることで、より和やかな空気にしていき、緊張感を薄れさせた。これだけお膳立てをしておけば、お互いのことをより知ることが出来るだろう。
「それじゃあ、そろそろ本題に入りましょうかぁ。五月雨ちゃん、そちらの提督さんとの通信をお願いしてもいいかしらぁ？」
「はい、すぐにやりますね」
　お互い、いい感じにリラックス出来たところで中間棲姫が切り出した。この集まりをただのお茶会にしたいのはやまやまだが、人間には知りたいことが沢山あるはずだ。中間棲姫としても話せることは少ないのかもしれないが、話さないよりは役に立つだろうと全面的に協力していく。
　五月雨がタブレットを取り出し操作をすると、その画面は鎮守府の執務室と繋がった。すぐにマイクとスピーカーの設定をした後、中間棲姫の方に向けてテーブルの上に立てる。
「あら、なかなかイイ男」
「妹ちゃんってば、ああいう人間（ヒト）が好みなのかしらぁ」
「そうなのかもしれないわね」
　人間の顔を見ること自体が初めてである姉妹姫。逆に提督の方も、こういう形で深海棲艦の顔を見るのは初めてである。というか、人類の中に深海棲艦と対話をするために通信で顔を合わせた者など存在しない。
『こういう形での顔合わせで申し訳ない。僕はこの子達の……そして、君達に保護をしてもらった春雨の所属していた鎮守府を治める提督だ。このような場を設けてもらい、心より感謝する』

世界で初めての対談が始まる。この結果は、世界の命運がかかっているのかもしれない。

人深対談

鎮守府からの部隊が陣地に到着し、交流の後に対話が始まる。本来話をしたいであろう鎮守府の提督は、秘書艦五月雨の持つタブレットからビデオ通話によって参加することとなった。

『こういう形での顔合わせで申し訳ない。僕はこの子達の……そして、君達に保護をしてもらった春雨の所属していた鎮守府を治める提督だ。このような場を設けてもらい、心より感謝する』

「ご丁寧にどうも。私がこの施設を管理している者よぉ。そちらが言う名前という概念は持っていないから、みんなからは姉姫と呼ばれているわぁ」

そしてこちらが妹姫と、飛行場姫を指差す。飛行場姫は若干警戒しつつも、小さく手を振って無害をアピール。

『聞きたいことは沢山あるのだが、その前に1つだけいいだろうか』

「春雨ちゃんのことねぇ。勿論、ちゃんと動いているところを見たいわよねぇ。春雨ちゃん、元気な姿を見せてあげて」

中間棲姫に手招きされ、春雨もおずおず画角に入る。こんな姿になってしまいましたと言わんばかりに苦笑しながらも、タブレット越しの提督の顔を見たことで感極まりそうになった。

春雨だって鎮守府の一員。それを統括する提督には少なからず尊敬の念は持っていた。上司と部下という関係だけでなく、兄妹や親子という感情を持つ者だっている。春雨も恋愛ではなく親愛として、提督のことは大切な存在であると考えていた。

故に、こういう形でも再会出来たことを心の底から喜び、まだ自分のことを大切に思っていてくれていることもわかってさらに喜ぶ。

「司令官……春雨、生存しました。また話すことが出来て嬉しいです」

『僕もだよ春雨。よく生き残っていてくれた』

「はい……ありがとうございます」

ここで春雨は、意を決してあの時のことを提督に伝えようとする。艦娘としての死の瞬間、姉達が散っていく瞬間をなるべくボヤかして思い出し、端的に説明。

「姉さん達は……全滅です。私の前で……はい。見たことのない……深海棲艦でした……」
　ギリギリのところで、提督に対してその結果を告げることが出来た。今の春雨にはこれが精一杯。
「春雨ちゃん、無理はしないようにねぇ。ええと、提督くん、聞いているかもしれないけれど、春雨ちゃんは精神的に大分不安定なのよぉ。だから」
『春雨のことは聞いている。無理はさせないようにしてあげてほしい。どのような姿でも、その子は私の部下であり、仲間である艦娘なんだ』
「ええ、それは保証するわぁ。この子に無理は絶対にさせないから安心してちょうだいねぇ」
　深呼吸で落ち着こうとしている春雨に対して、提督の気遣う声。中間棲姫としても、その言葉から提督のことは信用に値する人間であると理解した。
「リシュリューちゃん、春雨ちゃんのことをお願いしていいかしらぁ」
「Ｏｕｉ」
　今の一言だけでも発作が起こりかけているため、春雨はリシュリューに抱かれて画面外へ退場。
　心が壊れているということだけはしっかり聞いていたが、実際にそれを目の当たりにすると言葉を失ってしまう。その時のことを少し話しただけでコレだ。トラウマになっているのはわかるが、ここまでとは思っていなかったようである。
「さて、と。じゃあ、提督くん。私に聞きたいことというのは何かしら。それはもう沢山あるでしょうけどねぇ」
『なら、まずは艦娘が深海棲艦になってしまう仕組みからお願いしたい』
　心が壊れ、感情が溢れ出した結果、黒い繭に包まれて深海棲艦と化す。それはどんな艦娘にも起こり得る脅威である。これについて知っておけば、事前に対策が出来るため、部下思いの提督としてはいの一番に聞いておきたいことだった。

『深海棲艦が艦娘に戻ることは』
「出来るのかもしれないけど、その方法は私にはわからないわねぇ。少なくとも、壊れた心が元に戻ることはないもの。割れたお皿が割れる前に戻るかしら。直したとしても、継ぎ目は残ったままになるわよね」
一度深海棲艦化してしまった艦娘は、もう艦娘に戻ることは出来ない。これに関しては、ほぼ間違いなかった。
中間棲姫が言う通り、深海棲艦化のきっかけとなる精神的な状態は、一度そうなってしまったらまず治らない。この施設の古参勢、例えばジェーナスは、もうここに月ではなく年で滞在しているが、自己嫌悪は未だに治療不可能。先日も発作の連鎖があった程なので、どれだけ癒されても治らないことは実証済み。
理論上、心が壊れたら深海棲艦化するというのなら、その傷が治れば艦娘になれるのかもしれない。しかし、心の傷がそのままなのだから、艦娘に戻ることは出来ない。つまり、この変化は不可逆である。
『なるほど……心は艦娘のままだと言っていたね』
「ええ。それは春雨ちゃんがたった今証明してくれたわぁ。ここでの処置……簡単に言うと、壊れた理性の壁の再生成で、艦娘の心、考え方までは壊れないように出来るの。ここにいる子達は全員、その処置をしているのよぉ」
ただし、それは繭から孵った直後にしか出来ないということも付け加えられた。繭がその場にある時にのみ可能ということになる。
『君の下に繭の状態で辿り着くことが出来れば、孵った直後にその処置を施して艦娘としての心を失わずに深海棲艦になれる、ということでいいかな』
「そういうことねぇ。方法さえ知っていれば、私じゃなくても処置は出来るわぁ。念のため後から教えるわねぇ」
『ありがたい、是非とも聞かせてほしい。そして、黒い繭となる条件は、何かしらのトラウマにより心が壊れた時、精神的な問題点によって艦娘が深海棲艦化する……。ならば、艦娘と深海棲艦は同一存在なのだろうか』

艦娘もその生態が完全に解明されていない存在だ。深海棲艦と同じくして現れ、侵略を阻むように人類に味方をしてくれた救世主のようなモノであり、姿形は人類と同じだが、艤装を構築して戦い、修復材で傷を治すことが出来るなど、明確に人類とは違う部分がある。
それ故に、深海棲艦化も艦娘の特性と言われれば、納得出来ないわけではなかった。今まで戦ってきた深海棲艦も、実は壊れた艦娘だったという可能性だって充分あり得る話だ。
そういう意味では、艦娘も深海棲艦も根源は同じ海の者なわけで、性質が違うだけの同一存在と言い切ってもいいのかもしれない。
そんな話、大本営はおろか、艦娘や深海棲艦の研究をしている部門でも上がったことのないことだった。長い年月をかけても、謎が謎を呼び続けているくらいなのだ。
もしかしたら公表されていないだけで、そこまで辿り着いている可能性はあるのだが、こんなことを言われたらいい方向には向かわないかもしれないため、わざと秘匿事項としているというのも考えられるが。
「私は、艦娘も深海棲艦も同じものとして括ってるのよねぇ。だって、同じ母なる海から生まれたもの同士なんだもの。いがみ合う必要は無いし、なんなら手を取り合うべきだと思うのよぉ」
『そういった考えを持つ深海棲艦が多ければいいのだが』
「そうなのよねぇ。私達の同胞(はらから)は、本能的に侵略侵略って動いちゃうのよ。人類は弱いモノっていう考えが染みついちゃってるのかもしれないわぁ」
勿論、私達にはそんな気持ちは微塵もないとすぐに付け加えた。そうじゃなければ、こんなことをせずに他の深海棲艦と同様侵略を始めてしまっているだろうとも。
この優しい姉妹姫のことしか知らない元艦娘達は、中間棲姫の言葉を聞き、そんなこと言うのはやめてくれと詰め寄るかのように群がる。対談の場だというのに、そんなことお構いなしだ。
「ごめんなさいねぇ。今のはちょっと私の失言。本当に侵略とかそういう気持ちは無いから安心してちょうだいねぇ。そんな危ないこと

するくらいなら、ここでみんなと一緒にお野菜育てながらゆっくりマイペースに過ごしていた方が楽しいもの」
「ホントよ。誰が好き好んでヒトにちょっかいかけないといけないのよ。侵略しようなんて気持ち、生まれてこの方、微塵も感じたことないわ」
　嘘をついている素振りもなく、この2人は本当に侵略者とは別物の存在であると改めて理解させられる。
「とまぁ、アタシ達はこういう存在なのよ。多分艦娘に近い深海棲艦なんじゃないかしら」
「深海棲艦も一枚岩じゃないってことねぇ」
『……そういうことにしておこう。ここは冷静に聞いても理解が難しいところだ』
　人間にも艦娘にも善人と悪人がいるように、深海棲艦もそうなのだということで納得することにした提督。同じ知的生命体なのだから、同じように思考回路が複雑であるのは当然のこと。深海棲艦だけが全員悪虐非道というわけではないのだ。
　中間棲姫としても、そうやって対等の存在として認識してもらえることが一番自分達のためになると考えていた。自分達がどういう存在であるか、なんて哲学的すぎて辿り着けないものだが、ただ単純に、『ヒトは皆同じである』ということだけ知ってくれればいいと。
『ならば、君達と同じような考えを持つ深海棲艦というのは他にもいるのかい』
「ええ、いるわぁ。会ったこともある。彼女達のことを考えて素性は隠しておくけれど」
　春雨がここに所属するようになってからは顔を見せていないが、他にも同じ考え方の深海棲艦はいるし、この施設に客として訪れたこともあるとのこと。
　何処にいる何者かというのは本人のために言わないものの、他にもいるということを示唆する発言。ここで例の老舗百貨店へ買い物に行く深海棲艦の噂に提督も辿り着いた。にわかに信じられないが、このような深海棲艦がいるのなら、そんな深海棲艦がいてもおかしくな

いだろうと考える。
　なるべくバレないように人間と同じような姿に擬態しているということで、最初は潜入工作の類だと括っていたが、今の話によって考え方が変わった。中にはそういう者もいたかもしれないが、基本的には人間に迷惑をかけないようにしていたわけだ。
「だから、そういう子達を見ても、そっとしておいてあげてほしいの。貴方達の社会に溶け込んで、迷惑をかけないように楽しもうとしているのだから。好意的になれとは言わない。ただ、不可侵でいてほしいだけなのよ」
　少しだけ悲しそうな瞳で、提督に訴えかけるように伝えた。過去に何かあったかのような振る舞いだが、それについては聞くことが出来なかった。
　この訴えに対し、提督は少しだけ考える素振りをする。この要求を呑むことでの利点は、余計な戦いが起きなくなること。延いては、艦娘達がより傷付かずに済むことに繋がる。
　それがどれだけいいことなのかは、痛いほど理解していた。失ったことで、戦いをなるべく避けたいという気持ちも生まれていた。
　そのため、この中間棲姫の言葉への回答はすぐに決まった。
『了解した。僕の独断となってしまうが、少なくとも僕の鎮守府では、戦う意思のない深海棲艦はこちらから干渉しないこととする。あちらから干渉してこないのなら、だが』
「ええ、それでいいわぁ。私達は、余計な争いが起きることが一番嫌なの。だから、滅多なことではわざわざ貴方達のようなヒトに近付いたり話しかけたりなんてしないわぁ。万が一があるかもしれないけれど、その時はお互い知らないフリをしてちょうだい」
　これは、この施設の資源を手に入れてくれているリシュリューとコマンダン・テストを護るための要求でもあった。今のところはバレる節はないようだが、万が一がある。
「こちらばかり要求するのもどうかと思うから、私達の知ることは全て話すし、一切の嘘をつかないことを約束するわぁ」
「アタシ達、嘘がつけないもの。今言ってることは全部真実だと考え

てくれていいわ」
「あ、でもあんまり踏み込んだことを聞かれても、答えづらいこともあるからお願いね。さっきの別の同胞(はらから)のこと、とかね？」
　画面越しではあるものの、この2人が全く嘘をついていないということはヒシヒシと感じていた。ある程度隠すことはしても、話す言葉は全て嘘偽りのないものだ。信用を勝ち取るためではなく、今までそうやって生きてきたからこそ。
『ならば……1つ気になっていたことがある』
「何かしらぁ」
『君達はその知識をどう手に入れたんだい。この画面越しに見ても、君達の文化は人間のそれに近い、いや、そのものだ。元艦娘の仲間達から聞くだけでここまでのものは出来ないだろう』
　施設の在り方から、畑や漁などの生活基盤、お茶会を開くなどの文化的な娯楽など、深海棲艦のみならず、艦娘ですら独自でそこに辿り着くのは難しそうなことを、この姉妹姫はやってのけている。
　この提督は、生まれてすぐにこれだけのことが出来たとは考えていない。侵略の意思が無いからといって、人間の叡智をこれほどまでに使いこなせるのは、流石に無理がある。
　それ故に、これを誰かに教わったのでは無いかと考えていた。
「提督くん、鋭いわねぇ。貴方、結構やり手とか言われてないかしらぁ」
『……いや、そんなことはない。僕も必死なんだよ』
「まぁでも、そこまで細かいことは話せないわよね。アタシ達も、あの人のことは詳しく知らないし」
　突然出てきた3人目の存在。中間棲姫も飛行場姫も、知識は最初から持っていたわけではなく、聞いたことによってそれを実行したのだと話す。
「私達に人間の文化を教えてくれたヒトはいるわぁ。その人は生まれたばかりの私にこういう知識を授けてくれたのぉ」
『……君の原点と言える者なのかい』
「ええ、空っぽだった私に、こういう生き方を教えてくれたヒト。いわ

ば恩人ね」
　ここでまた気になるワード。
『空っぽだった……とはどういうことだい？』
「ああ、そういえばそういうことも話してなかったわねぇ。これはこの子達にも話してなかったわぁ。いい機会だし、みんなにも聞いてもらいましょうか」
　少し過去を懐かしむような表情の後、たった一言、自分の素性を話した。

「私、なんの記憶も持たずに生まれた深海棲艦なのよぉ。身体だけある空っぽの存在、それが私なのよねぇ」

空っぽの姫

「私、なんの記憶も持たずに生まれた深海棲艦なのよぉ。身体だけある空っぽの存在、それが私なのよねぇ」

中間棲姫は、提督にそう言った。艦娘は勿論のこと、施設に所属している者すら知らない事実である。この言葉を聞いて、飛行場姫以外の全員がザワつき始める。

空っぽとは、記憶を持たないとはどういうことか。これは説明が必要だと、中間棲姫もコホンと咳払い。

「ちゃんと説明するわねぇ。これは艦娘も同じだと思うのだけれど、みんな生まれた時に何かしらの記憶を持っているわよねぇ。例えば、名前。姉妹のこと。自分が何者であるか」

これは艦娘や深海棲艦には常識的なこと。そして、人類もその事実はしっかりと理解していること。艦娘から伝えられているのだから知っていて当然である。

艦娘は、生まれた段階で自分が何者かを把握している。自分が艦娘という存在であり、かつての艦船の力を持っている生命体であると。艤装の扱い方も、海の駆け方も、生まれた直後から全て知っているのが当然だった。

それは深海棲艦も同じ。艦娘と違うところは、そこから侵略へと舵を切ってしまうこと。本能がそちら側へと偏っていることで起こることらしい。それ故に、そもそも人型をしていないものも沢山いる。姿形すらも本能に近付いてしまっているからだ。

つまり、そういうところからして、艦娘と深海棲艦は同一存在なのである。本能に忠実すぎるか、理性を持つために誠実な心を持ち合わせるか。そして、また艦娘の面々はこの両方の要素を持っているということに他ならない。

しかし、中間棲姫は自分がそういう枠組みから外れてしまっている存在なのだと話す。それが空っぽ。

「私は自分が何者なのかもわからなかったのよねぇ。海の上に放り出されて、あ、勿論この陣地は持っていたけれど。でも、右も左もわか

らず、本能すら何も無くて、何をしていいのかわからないのに、どういうことを考えればいいのかもわからない。何がわからないのかわからない。そんな状態だったのよぉ。極端だけど、私最初は言葉すらわからなかったくらいだし」

今の中間棲姫を見るとそんな風には一切見えないのだが、嘘をついているようには全く見えなかった。最初からバケモノのような母性を内包した頼れる管理者なのだと思っていたら、実際はまるで違う。

生まれたばかりの頃は、知識のないただ生きているだけの存在だったのだと話す。流石に呼吸の仕方くらいは本能的に出来ていたが、それ以外は全くわからず、言葉はおろか、歩くこともままならない程の、赤ん坊のような存在だったのだとか。

「アタシは違うんだけどね。お姉の妹であるという確固たる意志があったから、お姉が言うような感じでは無かったの。そういう意味では、アタシだけが艦娘に近い深海棲艦かもしれないわね。お姉は完全に別モノ」

飛行場姫は空っぽでは無く、最初から妹であるという意志が存在し、深海棲艦としての知識も持っていた。しかし、姉である中間棲姫に引っ張られてか、侵略に関しては1mmも興味が無かったらしい。こちらは生まれた時から今の状態で形成されているようなもの。

ちなみに、飛行場姫が生まれた時には、中間棲姫は既に今のような性格だったらしい。こんな姉を持ったら、深海棲艦といえども穏やかになる。姐御肌なのは、元々深海棲艦の知識を持っていたからかもしれない。

『これは聞いていいのかどうかはわからないんだが……その恩人というのは深海棲艦なのかい？』

「ええ、それは保証するわぁ。私達の同胞（はらから）なのは間違いないわねぇ。その人も少し変わったヒトだったのよぉ」

『変わった……というのは？』

「だって、男の深海棲艦だもの」

声を上げそうになる提督だったが、その前にその場にいる全員が叫ぶように声を上げた。リシュリューに慰められてようやく落ち着い

てきた春雨も、今までの感情が引っ込むくらいの驚き方だった。
今までの戦いの中で、男性型の深海棲艦など一度も確認されていない。艦娘がその名の通り娘であるため、深海棲艦も女性型しかいないものだと考えられていた。バケモノ型の深海棲艦も、そう考えるのは難しいもののメスであると考えられている程である。
しかし、中間棲姫は男性型を知っていると言い出した。飛行場姫も顔を知っているようで、皆が何故驚いているかがわからないようである。それが当然だと思っていたので、自分だけのことが本来あり得ないことであることをココで知った。
「そんなの聞いてないわ！　姉姫、何処の誰なのよ！」
「ジェーナスちゃん落ち着いてちょうだいねぇ。貴女がここに所属する前には姿を消していたし、それからここに来ることは無くなってしまったから、知らないのも無理はないわぁ」
「いやいや、落ち着けって方が無理だろ！　そっちがそンななら、こっちなンてもっとわかンねぇって！」
ジェーナスが詰め寄り、江風も声を荒げる。管理者の2人のみが知る情報は、この対談を混乱させた。真っ先に反応したこの2人以外もザワつきが一向に治らない。
これでは対談も進行不可能になりそうなので、一旦静かになってもらい、中間棲姫がまたゆっくり話し出す。
「えぇと、私が生まれたのは大体5年だか6年だか前なんだけれど、生まれたばかりの私が途方に暮れていた時に、ふらりと陣地にやってきたヒトだったの。見た目も中身も紳士のようなヒトで」
「アタシが生まれた時にはもう陣地にいたものね。結構イイ男だったわ。少し話し方がキザっぽかったけど、こちらのことを思ってくれてるのがわかったのよね」
「ええ、私達に親身になってくれているのがとてもわかったわぁ。この施設も、そのヒトが陸で見たモノをモチーフに私が造り上げたの。私と妹ちゃんが、彼から聞きながら、ね」
本当に原点に立つ者のようである。中間棲姫を今のような性格に育て上げ、飛行場姫も一緒にこの道に導き、結果的に手の届く範囲の

溢れた艦娘達を救うことに貢献しているのだ。
　それが深海棲艦の中におり、しかも今まで確認されていない男性型であるという。提督からしてみれば、冷静な気持ちで対談に臨んだのに、予想以上の話が次から次へと出てきて案の定情報過多である。
『それで……その彼は今は』
「何処で何をしてるのかしらね。アタシは少なくとも見てないわ。今ジェーナスが言った通り、この子がここに住むようになった時にはもう出て行った後だもの」
「彼自身、自分のことを観測者だと話していたわぁ。私の存在が見るに堪えないから表舞台に出てきちゃったのかしらねぇ」
　観測者。深海棲艦だというのに傍観に徹しているということかと、提督は人目を憚らず考え始める。ただでさえ画面の先にいる深海棲艦達が今までにない存在だというのに、それ以外にも今までにない存在が示唆されてしまった。
　しかし、ただ見ているだけの深海棲艦ならば、中間棲姫や飛行場姫のように、不可侵を貫くべきだろう。深海棲艦（あちら側）から仕掛けてこない限りは不可侵を貫くというのが姉妹姫との約束だ。その観測者に対してもそれは有効。
『そういう存在がいるということで今は終わりにしておこうか。わざわざ探し出す必要もない。あちらが干渉してこないのなら、こちらからも干渉はしない。というか干渉出来ないだろう。今までに発見された例が無いのだから』
「そうねぇ。私達もわざわざ彼を探したわけじゃないもの。ヨナちゃんも、海底で見たこととかあったかしら？」
「うーん、そういうヒトは見たことがないヨナ」
　深海棲艦であるが故に海底にいるかもということで、潜水艦である伊４７に聞いたものの、当然発見したことは無いようである。どのように姿を晦ましているかは誰にもわからない。
　極端な話、２人は存在していると言っているが、本当に存在しているかはわからないのだ。今生きているのかもわからない。わからない尽くしの謎の存在。

「彼には感謝しかないし、また会いたいとは思うけれど、探してまでとは思っていないの。機会があればお礼は言いたいけどねぇ」
『もし万が一見かけたら、君に伝えよう。そんなことは無いと思うが』
「ええ、よろしくお願いねぇ」
　ここで恩人である観測者の話は終わり。これ以上話せば、事が進まなくなる。
『艦娘が深海棲艦になってしまう事実と理由もわかった。君達が信用に値する深海棲艦だということも理解出来た。謎の存在が示唆されたが、そちらも充分に信用出来るだろう。何より、君達はあくまでも不可侵を貫くという意思を知ることが出来た。今回の対談は有意義なものになったと、僕は思っている』
「私もよぉ。こんなにわかってもらえる人間で本当に助かったわぁ」
『だが、これは何処までを大本営に伝えればいいのやら……』
　この対談の内容は当然、大本営にも報告するつもりである。人類に仇をなすとされていた深海棲艦にもこういう者達がいるということは知っておいてもらいたいし、そもそも鎮守府の活動として執り行われた対談なのだから、その業務の報告は必須。内密に進めるということが、そもそも処罰を受けることに繋がる。
　しかし、深海棲艦側も一枚岩で無かったように、大本営、人類も一枚岩ではない。深海棲艦は須く鏖殺せねばならないという考え方で行動する者もいる。穏健派だと言われようが、それは深海棲艦だろうと言われてしまえば反論しようがないわけで、さらに言ってしまえばそれが中間棲姫であるというのも大きい。過去に現れた最悪の姫と同種となれば、より悪い方向に行きかねない。
「身勝手な言い分なのだけれど、私達の存在は貴方の中だけに秘めておいてほしいわぁ」
『僕個人としてはそうしてあげたい。そうしたいのは山々だが、もし僕達以外の鎮守府の者が君達の存在に気付いた時、止めようなく君達を襲うだろう。ならば、事前に君達のような存在がいるのだと知っておいてもらうのは間違いでは無いと思う』
「貴方達は話がわかるヒト達だけれど、他の人類がわかってくれるか

と言ったら、そうでもないものねぇ……。本当、人類も深海棲艦も似たようなものだわぁ」
　そこは中間棲姫も納得していた。彼女の中では、人類も艦娘も深海棲艦もひとまとめに考えられるくらいの知的生命体だ。自分が本来の深海棲艦から逸脱していることを自覚していることで、その辺りはとても寛容。
『僕は大本営の中でも話のわかる上司を持っていると思うから、その人に相談することにしよう。決して悪いようにするつもりはない。そうでなければ、このような対談は不可能だったんだ。恩を仇で返したくはない』
「そう言ってくれるのは嬉しいわねぇ。貴方とは長く良い付き合いをしていきたいものねぇ」
　中間棲姫と提督の間では、早くも同じ束ねる者としての絆のようなものが生まれようとしていた。
　自分だけでなく、そこに所属する者を危険に晒すわけにはいかないと、最善の道を選び取っていく苦労は、上に立つものにしかわからないものである。
『機会があれば、またこうやって話がしたいのだが、構わないかい』
「勿論。むしろここまで来てくれても構わないわぁ。お客様はたっぷりもてなしたいし、私としても人間さんとは顔を突き合わせてお話ししたいものぉ」
『そうしたいんだが、そこの秘書艦に物凄い剣幕で叱られてしまってね。申し訳ないが、僕は毎度こういう形での対話となってしまう』
　五月雨が抗議しかけたが、まぁまぁと他の艦娘達が落ち着かせた。
『最後に、この機会を設けてくれたことを改めて感謝する。お互いに有意義な対談になったことを祈ろう』
「私達は人間さんと話せただけでも有意義よぉ。貴方からは疑問はあっても敵対心は感じられなかったものぉ。実は探求者だったりするとかかしらねぇ」
『否定はしないさ。僕だって提督の端くれ、世界を平和にするまで戦い続ける者だ。その道を探し求める者と言われれば否定はしない』

提督は緊張を振り払い、とても優しげな笑みを浮かべる。
『戦いが終わるのなら、殲滅ではなく休戦、和睦という形に持っていきたい。無駄な命のやり取りはそれこそナンセンスだ。僕達だけじゃない。艦娘も深海棲艦も同じ生きとし生けるものだからね。戦わなければ生き残れないわけじゃない』
「同意するわぁ。なら私が筆頭となろうかしらねぇ。私達は貴方達の鎮守府と和睦の協定を結ぶことを誓うわ」
画面越しのため握手も指切りも出来ないため、言葉だけの約束。しかし、ここにいる者はそれを破ろうだなんて誰一人思っていなかった。

まだまだ小さな和睦協定だが、これが全人類、全深海棲艦に拡がっていくことを願いながら、その第一歩として、ここで対談は終わった。
人類にも深海棲艦にも、これは有意義な結果になったと言えるはずだ。

対話を終えて

和睦協定が締結されたことにより、人類と深海棲艦による初の対談はいい方向で終了した。元艦娘の保護施設は、たった1つとはいえ鎮守府にその存在を認められ、戦いとは無縁の関係として今後は付き合っていくことになる。

そう簡単に来れるような場所ではないし、来るための口実がなかなか無いというのはあるのだが。

「それでは、私達は帰投します。海風のこと、ありがとうございました」

「いえいえ、またいらっしゃいねぇ。これ、お土産だから持っていってちょうだい。ここに来れなかった提督くんに食べてもらってね」

今回は捜索部隊ではなく単純に遠征部隊なのだが、隊長は海風に代わって五月雨が務めている。その隊長が、最後に中間棲姫と握手。対談もそうだが、妹がお世話になったことに対しての礼が大きい。

そのついでと、中間棲姫はお茶会で出されたお茶菓子の類を袋に詰めて五月雨に渡した。タブレット越しでしか対談が出来ない提督に対してのせめてもの気持ちとして。

握手をしつつ、中間棲姫は小さく五月雨を引っ張った。何やら小声で何かを伝えたいらしい。

「海風ちゃん、ここで大分心が穏やかになったと思うけれど、注意だけはしてちょうだいねぇ。あの子、根がとても真面目な子なんでしょう。何かあったらまた崩すかもしれないから」

「気を遣っていただき、ありがとうございます。肝に銘じます」

「ええ、何かあったらまたここに来てくれて構わないから」

などと誰にも聞こえないように伝えている中、その海風は春雨のところへ。

「姉さん、機会があればまた来ますね」

「うん、待ってる。海風がいると、私も何だかグッスリ眠れた気がしたから」

「そのためにも、また来なくちゃいけませんね」

中間棲姫と五月雨がやっているように、春雨の手を取って握手。今生の別れにならないように願掛けも込めて、その温もりを心に刻む。
見た目は今までの姉から逸脱しているとしても、おおよそ丸一日付き合ったことで、その心は姉のまま何も変わっていないことを理解している。ならば、ここから離れられない春雨には、定期的に会いに来る必要があると感じた。
勿論、海風的には違う感情もある。松竹姉妹に見抜かれている、本来の姉妹間のモノとは違う感情。それを満たすためには、尚更ここに来なくてはいけない。
「……必ず仇は取ります」
「うん、よろしくね。でも、気負わないでね。海風が倒れちゃったら、私も悲しいから」
「はい、姉さんを悲しませるわけにはいきませんから、無理しないようにします。少し……反省しました」
春雨との再会のおかげで、山風達の心配事も1つ取り除かれた。しかし、まだまだ予断は許さない状態であるのも確かである。五月雨には中間棲姫から直に伝えられたが、山風としてはそれを聞くまでもなく海風に対して注意をしておくつもりであった。
今までは捜索部隊は何でもいいから痕跡を探すことが目的だったが、次からは仇討ちのための痕跡を探すことが優先される。春雨から姉は既に死んでしまっているという事実を伝えられたことで、その辺りの焦りは無くなったのは大きい。
それでも、仇討ちという感情はあまりいいものではない。精神への負荷はどうしてもかかってしまうため、今までよりはまだマシかもしれないが、海風の精神はここからもジリジリと削られていくことになるだろう。
ダメだと思ったら、山風が海風をここに連れてくるつもりだった。ギリギリまで使った後に回復させるというのは、ブラックな感覚がしてあまり褒められたものでは無い気がするが、壊れるよりはマシと判断。
「それでは、今後ともよろしくお願いします」

「ええ。帰りも気をつけてねぇ」
今出会ったばかりだというのに、五月雨は旧知の仲であるかのように振る舞う。それがまた中間棲姫としては嬉しい扱われ方であり、水平線の向こうに姿が消えるまで、ずっと見送り続けていた。

初めての艦娘の客を迎え終え、ここからは片付けの時間。外に持ってきていたテーブルや椅子、お茶会に並べられた食器をテキパキと片付けていく。
お茶菓子は江風と涼風がしっかり食べていったので、残り物などは全く無し。取り置きしていたものもお土産として渡したので、昨日準備したモノは全て消えていた。
「本当に楽しい時間だったわぁ。あんな大人数でお茶会をするのも初めてだけれど、人間さんと艦娘さんと一緒に楽しむことが出来るなんて、本当に初めてだものぉ」
そもそも中間棲姫は人間というものを見たことが無かった。それ故に、今回の対談は心の底から楽しんでいたようだ。
「姉姫様は……人間のことをどう思ってたんですか？」
ここで一応という感じで春雨が聞いた。そもそも誰に対しても友好的な態度で接するのが中間棲姫であり、敵対という言葉自体を知らないようにすら思えた。
「それは勿論、一緒に楽しく生きていく尊い者っていう認識よぉ。無駄な戦いはする必要ないし、出来ることなら手を取り合って生きていきたいものよねぇ」
艦娘でも深海棲艦でもない、戦う術を持たない代わりにそれ以上の頭脳と文化を手に入れた、か弱くも逞しい愛すべき生物。中間棲姫の中では、人間はそういう存在としてインプットされている。
勿論これも『観測者』からの受け売りだ。空っぽの状態から今に至るための教育を受ける際に、人間のことをそう教えられたから。中間棲姫はその教育をスポンジのように吸収していったに過ぎない。
つまり、中間棲姫の考え方は、その『観測者』の考え方に等しい。中

間棲姫独自の部分はいくつもあるだろうが、根幹にはその存在がある。
「私もそう思います。みんなが手を取り合って生きていければ……寂しい思いをすることも無くなりますよね」
「ええ、そうよ。こうやって隠れ住むこともなく、人間も艦娘も深海棲艦も関係なく、一緒の場所で楽しく暮らすことが出来るはずなのよねぇ。でも……」
笑顔は崩さないが、ほんの少しだけ翳りが見えた。
「考えることが出来るっていうことは、悪いことが出来るっていうことでもあるのよねぇ。勿論私はそんなこと考えないわぁ。戦うなんて嫌だものぉ」
特に深海棲艦という生物は、人間や艦娘よりも攻撃性の高い性格を持っていることが多い。侵略者として生まれ、他者を滅ぼすことに至高の悦びを見出してしまう者は沢山いる。むしろ半分以上はそういう形で生まれているのだ。
中間棲姫は空っぽという特性上例外ではあるが、飛行場姫だって、生まれた場所が悪ければ、他の深海棲艦と同じように侵略者となっていた可能性がある。中間棲姫の側で生まれ、その性質に当てられたことにより、口調は少しキツめとはいえ心優しい性格になっているに過ぎない。
考えることが出来るということは、つまりそういうことである。その生まれた環境によって善にでも悪にでもなるということだ。艦娘は善になりやすく、深海棲艦は悪になりやすい。その傾向のせいで、艦娘と深海棲艦は簡単には相容れない存在になっている。
そもそもその善悪だって、何に対してかがわからない。あくまでも人間基準ならそれだが、基準を変えたら善悪が逆転することだってあるだろう。深海棲艦が善で、艦娘が悪の可能性だってある。
「だから、せめて私だけは戦わないようにしていこうって思っているのよぉ。話し合いで解決出来るのならそれで終わらせたいし、それでも戦わなくちゃいけないってなったら……ううん、それでも滅多なことではするつもりはないわぁ。昨日海風ちゃんに撃たれたときは、流

石に死ぬわけにはいかないから自分を守るくらいはしたけれど」
だから、どちらにも行かない。善でも悪でもない中間に立つ。それが中間棲姫の考え方であり、『観測者』の考え方。
争いにならない一番の方法は、何もしないことである。『観測者』は深海棲艦ながらもそこに辿り着いていた存在だったわけだ。実際に対面して話したわけではないのでそうなのではないかというところにしか行かないが、中間棲姫を見ていればそうであろうと理解出来る。
春雨はひとまずそれで納得した。身体は深海棲艦だが心は艦娘であるという特殊な状況に置かれたことで、春雨自身も同じ考え方になっている。そのため、中間棲姫の、延いては『観測者』の考え方には全面的に同意出来た。
戦わなければ平和に向かえないかもしれないが、どちらにも疎まれてしまうような存在になった今では、何もしないを選択することも容易だった。
「今日の対談は、私にとってもいいものになったわぁ。悪いものとして見てたわけじゃないけれど、人間さんにもああいうヒトがいるってことがわかったのはとても嬉しいわぁ」
「はい、私達の提督は、とてもいいヒトなんです。優しくて、強くて、私達のことをとても大切にしてくれるんです。少し自分のこと蔑ろにしちゃうところが残念なんですけどね」
提督のことを話す春雨は、それはそれは楽しそうだった。
この対談は、春雨の心にも大きな影響を及ぼしている。海風との再会によって切り捨てたはずの未練が戻ってきたが、提督の顔を見たことで壊れた心にすら光が差していた。
自分のことをどうでもいいと思うところは何も変わっていないのだが、もう未練を切り捨てるようなことはしないだろう。再会出来た妹達に思いを託すことが出来たし、またここに顔を出してくれると約束してくれているので、今まで以上に明るく生きていける。
「何もないことを祈って、私達は今まで通り暮らしていきましょうねぇ。そうそう、リシュリューちゃんとコマちゃんが新しいお野菜の

種を手に入れてくれたから、春雨ちゃん主導で作っていきましょうかぁ」
「わぁ、楽しみです。自分で最初から最後までお世話した野菜、きっと美味しいんでしょうね」
「美味しいわよぉ。丹精込めた分、何倍も美味しく感じるんだから」
本来の艦娘としての生き方から外れているのは自覚していても、春雨は今の生活を楽しんでいる。
これからもずっとこんな生活が続いていくのだろうと、心を躍らせた。

初めての人間と深海棲艦の対談が執り行われていた頃、誰からも干渉出来ないような海の底では、一人の男が海上を眺めながら微笑んでいた。
「彼女は、良き成長を遂げた」
視線の先には中間棲姫。今の生活を楽しみ、保護された艦娘と共に生きていく姿は、彼にとっても喜ばしいものだったようだ。
その隣には、2人の少女が踊るように付き従っていた。同じように海上を眺めながら、クスクス、ケタケタと笑いながら彼に同調している。
「まだ見守ろう。私は表に出てはいけない。出過ぎた真似は、『観測者』にあるまじきことさ」
従者達がニヤニヤしながら指をさす。その姿に、彼は肩を竦める。
「確かに、彼女の最初に立ち会ってしまったのは私の落ち度かもしれない。しかし、あれだけの良き成長ならば、干渉は間違っていなかったと思えるよ」
従者達はニッコリと笑い、大袈裟に首を縦に振った。彼の行動は間違っていないと言わんばかりに、力強く同意。
その姿を見てフッと小さく笑い、手に持つ杖をクルリと回して踵を返す。従者の少女達もそれに倣い、クルクルと踊りながら反転。見据える方向を別の場所へと変えた。

「問題は、こちらだ。彼女は、悪しき成長を遂げている」
中間棲姫を見る目から一変、怒りを孕んだような鋭い目付きに変わる。従者の2人も、大袈裟に怒っているようなジェスチャーをしながら、それを眺めた。
あくまでも『観測者』として、簡単には干渉しないと考えているものの、彼の言う彼女は目に余る成長であるらしい。
「彼女を、どう思う」
従者達に問う。すると、シャドーボクシングのような仕草。まるでやってしまえと言わんばかりに攻撃的。
「ふむ、確かに。これ以上の狼藉は、『観測者』としても見過ごしているわけにはいかないかもしれない」
被っている帽子を少し目深に被りなおし、杖で海底を突く。
「しかし、私は『観測者』だ。直接手を出すのは憚られる。それに、悪は善により裁かれるべきだ。私は悪でも善でもない。今は見守ろう」
今度は従者達が肩を竦める番だった。どうせ手を出さないのなら口に出さなくてもいいのにと呆れたような顔。しかし、彼の性質を最もよく知っている従者達は、それすらも楽しんでいるようだった。

楽しく生きる

鎮守府と保護施設の対談が無事に終了した翌日。施設では平和な一日がまた始まっていた。

リシュリューとコマンダン・テストの遠征はまだまだ先。それまでは施設内でみんなと同じように平和な日々を満喫するらしい。食事当番は飛行場姫と交代制を続け、その中でも他の面々に料理を教えたりなどもするとのこと。

春雨も憧れのリシュリューから料理を習えるということで、随分と張り切っていた。朝食の準備からそれは始まっており、ある程度出来るにしてもよりその技術は上がっていく。

「Ｔｒ▪ｓ（とてもいい）ｂｉｅｎ．　ハルサメ、なかなか筋がいいわね」

「ありがとうございます。リシュリューさんにそう言ってもらえると嬉しいです」

料理の腕を褒められてご満悦な春雨。朝食のため、その料理自体は簡単かつ軽めなものではあるのだが、それでも基礎がしっかり出来ていないと味にバラつきが出てしまう。春雨はその辺りはしっかり出来ていたので、リシュリューも教えた甲斐があると大喜び。

その光景をダイニングから眺めているのは、薄雲とジェーナス。春雨がニコニコしながら朝食の準備をしている様子を見て、こちらはこちらでニヨニヨしていた。

「本当にお熱みたいだね、春雨ちゃん」

「いいことじゃない。あれでもっと寂しくなくなるわ」

春雨の壊れた心を癒すのは、こういう形での充実感。より一層寂しさから逃れられるのなら、誰だってそれを祝福するだろう。

誰もがその傷を知っていることで、思いやりの精神が艦娘の時以上に育まれている。

「仲良きことは美しきかな、ですね。私も見ていて楽しいです。生きているって、素晴らしい」

「Ｔｅｓｔｅはこういう場が好きそうよね」

「Ｏｕｉ．　みんなが仲良く暮らしていれば、誰もが死から遠ざかり

ますから」
　生への執着がきっかけで深海棲艦化したコマンダン・テストとしては、こういう生を実感出来る時間が一番満たされる。同じように、リシュリューは戦闘から離れているこの時が、薄雲やジェーナスもみんなと一緒にこうやって楽しんでいる空間が最も落ち着ける。
　このお料理教室のような調理風景は、ここにいる者には抜群の効果があった。朝ということで松竹姉妹と伊４７はまだ起きてきていないが、あちらはあちらで最高の朝を迎えているため、全く問題がない。
「おはようみんな。あら、今日は春雨が朝食当番だったかしら」
　飛行場姫もダイニングに現れる。既に朝の哨戒を済ませてきたようで、一仕事終えたと言わんばかりにドカッと所定の席に腰掛けた。示し合わせたかのようにコマンダン・テストがお茶を出し、ありがとうと礼を言いつつ一口。
「せっかくなので、リシュリューさんに教わっているんです。レパートリーが増えれば、私も同じように出来るかなって。２人はまた施設から出て遠征に行くことになりますし」
「あら、それは頼もしいわね。なら私も春雨に仕込んで行こうかしら。薄雲とジェーナスもどう？」
「私は大歓迎！　お茶菓子以外もどんどん覚えていきたいわ！」
「私もお願いします。みんなとお料理なんて楽しそうですよね」
　こうやってより繋がっていく。お互いがお互いの癒しとなり、発作を起こさないように毎日を過ごし、そしてさらに癒されていく。正しい連鎖を起こし続けて、幸せな一日を作っていくのである。

　朝食の場、団欒の時間。中間棲姫は勿論のこと、松竹姉妹や伊４７も集まる、おそらく１日のうちに３回しかない、全員勢揃いのタイミング。
　鎮守府で行なわれるような朝礼は、この施設でも行なわれている。とはいえ、そこまで大それたものではなく、今日は何やろうか程度の軽い空気。

「今日は農作業をやろうと思うわぁ。誰かついてくる子はいる？」
「はい、はい！　種があるんですよね。でしたら私が！」
「春雨ちゃんは確定ねぇ。他には誰か」
「農作業っつったら、俺と松姉ぇだな。いつも通り手伝うぜ」
「そうね、なんだかんだで私達の仕事って感じだものね」
　農作業はいつものメンバーと言ったところ。松竹姉妹はここにいる者のなかでも、中間棲姫に次ぐ農作業のスペシャリストになりつつあるため、募集をかけると必ずやることにはなっていた。薄雲やジェーナスもたまに参加するが、おおよそこれで人数が足りるので、大体はこのままでおしまい。
「その裏で私はまた漁をするわ。今回は沖に行くから、誰か小舟の曳航してほしいんだけど」
「なら私達の出番ね。妹姫、私と薄雲に任せてちょうだい！」
「ジェーナスちゃんの艤装なら安定感ありますし、そこに私もついていきますね。釣りは楽しいですし、妹姫さんのお話もまた聞きたいですし」
「ヨナも行きまーす。海底からのサポート、あった方がいいヨナ？」
「ええ、お願い。ヨナのおかげで大物が釣れるときもあるもの」
　海に出るメンバーも大体決まっている。春雨が農作業に入ると、残りの２人は一緒に行動することになるため、必然的に２人して飛行場姫についていくことになる。そしてヨナも、海底散歩がてら大物をおびき寄せるという大役があるので、漁には大概参加。
「なら、ＲｉｃｈｅｌｉｅｕはＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅと休ませてもらおうかしらね。ｌｅ　ｄ▪ｊｅｕｎｅｒ（昼食）とｄ▪ｎｅｒ（夕食）の仕込みまではまだ時間があるもの」
「Ｅｓｔ（そう）―ｃｅ（で）　ｖｒａｉ（すね）．　まったり、しましょう」
　そして、遠征組２人は今日は休息の日とした。食事当番として活動するまでにはまだ時間があるため、それまでは心を落ち着かせることに努めるとのこと。
「はい、それじゃあ今日の予定は決定ねぇ。昨日はちょっとバタバタしちゃったけど、今日からはまたいつも通りに戻るから、楽しく生き

ましょうねぇ」
楽しく生きる。こうなってしまったものは覆せないのだから、せめて今を楽しめるようにと、中間棲姫が掲げているモットーのようなものだ。
戦いから離れ、本来のお役目から離れ、それでも生きていくことは悪いことではないと言い聞かせるための苦肉の策だったりしたのだが、今ではそれが最も自分達にあっている言葉だと感じているため、毎日のようにこの言葉を言うようになっている。
これは『観測者』からの教えではない、中間棲姫自身が辿り着いた信念だ。それも良き成長と言えるだろう。

農作業をある程度終え、ふぅと一息吐いた春雨。言われていた通り、畑を耕して種を蒔くところからやらせてもらったことで、とても有意義な時間を過ごせたようだった。
初心者かもしれないが、中間棲姫も松竹姉妹も親身になって教え込み、たった半日で農作業の基礎を完全にマスターするまでに至っている。みんなの教え方がいいのか、春雨の吸収がいいのか。おそらくそのどちらもだろう。
「これがしばらくしたら収穫出来るんですよね」
「ええ、流石に明日明後日なんてことは無いけれど、1ヶ月から2ヶ月で成長するものなの。ここで過ごしていたらすぐよねぇ」
「そんなに早いんですね！　もう今から楽しみです」
今日の春雨は、朝食の準備を手伝っているとき、朝食のときもそうだったが、やけにテンションが高い。中間棲姫とは違う方向でニコニコしており、それがまた空回りではなく全力で楽しんでいるように見える。まるでいろいろなしがらみから吹っ切れたかのような表情。
「なんだか妙に楽しんでるな春雨」
「本当に。今までの1週間と比べたら、大分違う気がするわ」
松竹姉妹が早速そこに触れる。誰が見ても今までと違うと感じたようで、中間棲姫はそこに触れるのを控えていたようだが、この姉妹

はズケズケと切り込んでいく。
　それが悪い方向に行くとは思えなかったので、中間棲姫もそれを止めようとはしなかった。
「あはは、そうかな、そうだね。なんだか気分がすごく楽になったからかな」
「楽に……って、今まで重かったのかよ」
「ううん、そういうことじゃないんだけどね」
　農作業後で疲れた身体を伸ばしながら、それでも笑顔は崩さずに語る。
「私……その、やっぱり鎮守府のことが結構な未練だったんだ。この身体になって、妹達にも提督にももう会えないって思って。……姉さん達の死に際を伝えるってことも出来てないのにって」
　あの時のことを思い出したために小さく震えたが、誰の支えが無くても崩れることはなかった。
「でも、一昨日みんなが来てくれて、海風がここに泊まってくれて……昨日は提督と顔を合わせることも出来たから、何というか、肩の荷が下りた感じなんだ。未練が無くなったってわけじゃないけど……でも、最期にやらなくちゃって思ってたことが、全部出来たからね」
　その時は発作を起こしかけるくらいに必死で、でも全てを伝えることが出来たことで、春雨の気持ちは大きく澄み渡っていた。艦娘としての春雨が最期に残したことを実行出来たということで、未練が失われて晴々とした気分になっているらしい。
　だからといって艦娘としての心が失われていくのかと言われればそうではなく、やらなければならないことがやれたという達成感が、春雨のテンションを上げている要因だ。それに加え、またこれからも鎮守府の面々とは顔を合わせることが出来るという希望もある。
「だから、次にまたみんなが来てくれる日が楽しみで、それまでは元気に楽しく生きていけそうだなって思ったら、なんだかハイになっちゃったみたい。それに、朝から楽しかったしね。リシュリューさんとのお料理とか」
「なるほどなぁ。いやぁ、それはなんだかわかる気がするぜ」

「次があるってわかってると、やっぱり楽しいわね。この畑もそれに繋がると思うわ」
　今蒔いた種が育っていくところを見るのも楽しみになり、生きようと思える活力になる。
「それなら、もっともっとお野菜を育てなくちゃねぇ。それに、それ以外の花を育ててみるのもいいかもしれないわぁ。種から育って綺麗な花を咲かせるところを見たら、もっと嬉しくなっちゃうわよぉ」
「あ、確かにいいかもです！　でもお花の種なんてありましたか？」
「今は無いけれど、また遠征の時にあったら手に入れてもらえばいいのよぉ。いつになるかはわからないけど、そういうことがやれるっていう気持ちがあれば、これからを楽しく生きていけるでしょう？」
　小さくてもいいから目標を持っておくことで、これからの時間を楽しむことが出来るだろうと、中間棲姫はいろいろな案を出してくれる。花畑も作ってみようかとか、木とか生やすことが出来ないかとか、夢だけはいくらでも語れる。そんな話をしている最中も、春雨はずっと楽しそうだった。
「そりゃあ楽しみだ。松姉ぇ、俺達も野菜以外育ててみるのも悪くないんじゃね？」
「そうね。たまには実用性がない、ただ愛でるだけの花というのもいいかもしれないわ。見ていたら心が洗われるんでしょうね」
「違いねぇ。でも、俺には松姉ぇがいれば充分だぜ」
「竹……ふふ、私もよ。貴女がいるだけで私は楽しく生きていけるわ」
　急にイチャコラ始める松竹姉妹に、春雨は顔を赤らめながらもニコニコしながら見守る。
　共依存はお互いがいればもうそれだけで充分な状態だ。どんな作業でも2人でやれれば全てが楽しく、2人の時間を共有出来て心が満たされる。辛いことが無いといっても過言では無い。代わりに離れられないだけ。
　そういう意味では、中間棲姫のモットーを最も忠実に守り続けているのは、この姉妹かもしれない。現に、ここ最近は発作らしい発作を起こしていないとのこと。常に2人1組でいればいいだけなので、リ

シュリューやコマンダン・テストよりも発作は起こさないのかもしれない。
「ふふふ、仲がいいのは良いことよねぇ」
「そうですね。本当に仲がいいです。なんだか見ていると顔が熱くなってきちゃいますけど」
「それだけ2人は親密ってことよぉ」
2人も春雨と同じように羞恥心の欠如があるからか、人前でもお構いなしにこういうことをやってしまうものの、そういうものであるという理解があるため、誰も何も思わない。まずいことは流石に中間棲姫や飛行場姫が止めるが、今くらいなら問題無しと判断されている。
「みんな楽しく生きることが出来ているみたいで、私は嬉しいわぁ。やっぱり、悲しいことは良くないもの。春雨ちゃんも、何か悩みがあるようならすぐに言ってね。悩まないようにする努力はしているけど、それでも不満があったりはするかもしれないものねぇ」
「了解です。でも、不満なんて1つも無いです。ここでの生活は本当に楽しくて。艦娘としての活動が出来なくなったことはちょっと悲しいですけど、やることがやれたので吹っ切れました。改めて、これからもよろしくお願いします」
「ええ、こちらこそ。貴女のおかげで人間さんとの繋がりも出来たんだもの。感謝してるわぁ」

掲げられたモットーは、この施設にいる者全員に刻み込まれている。心が壊れ、感情の幾つかが欠落していようが、みんなで楽しく生きていく。それだけで、未来は明るいものとなっていくだろう。

する側される側

農作業は午前中で終了。昼食後の午後からの時間、春雨はフリーとなった。この施設での作業は余程のことが無い限り、こうなることが多い。午前中にざっとやって、午後はのんびり。これを曜日など関係無く毎日やる。みんなが最低限のルールを守って好き放題にしていることが、最も心を癒して楽しく生きるための道だ。

「私がここに来た時、2人で日向ぼっこしてたよね」

「そうね。あの時はとっても天気が良かったし、やることも無かったから外でお昼寝しようって薄雲が言い出してね」

「あれだけ気持ちいいお日柄だもん。ヨナちゃんもベッドルームで寝てたくらいだし、私達も寝ようかなって思って」

その時と同じように、ビニールシートを持ち出して3人で広場に寝転んでいた。今回も春雨が中央で、両サイドに薄雲とジェーナスという配置。夜のベッドルームと同じ位置である。

気候がよく、ポカポカ陽気に照らされて、横になっているだけで微睡みそうになる程。現に、薄雲は早くもトロンとした表情である。

「……艦娘の時にはこんなことやろうとすら思わなかったなぁ」

「そんなスペース無かったよね。私のところは少なくとも無かった」

「こっちもよ。カッチリしてるってわけじゃなくても、こんな寝転がれるようなところは無かったわ」

艦娘だった時にはまずあり得ないことだった。1日休暇を貰えていたとしても、わざわざ外に行って昼寝をするようなことは無かったし、そんな場所も無かった。お日柄が良くても出来て散歩くらい。

身体と心を休めるためにも、少ない休みの間は好きにして欲しいと考えていたのがあの提督なのだが、残念ながらここまで出来るスペースが鎮守府になく、昼寝は自室でするしかなかった。3人が3人同じようなことを言うくらいなので、鎮守府の造りというのは何処も似たようなものなのかもしれない。

「気持ちいい……芝生ってこんなに気持ちいいんだね」

「本当にね。私もここに来て初めて知ったよ」

「ここは知らないことばかりだったものね。今は慣れちゃったけど、驚きの連続よ」
春雨はここに来てまだ1週間。まだまだ知ることは沢山ある。それがいつも新鮮で、その何もかもが楽しいのだから、この施設にのめり込んでしまう。それが誰にも咎められないのだから、尚更である。
事実、春雨は吹っ切れたことによって、その感情がより強くなっている。今まではなんだかんだで未練が付き纏っていたが、それすらもない。のんびり過ごすことに罪悪感すら感じなくなっている。
「こうやってお喋りしながらウトウトして、自然に眠っていくのが本当に気持ち良くて……ずっとこうしていたいなって、思えるんだ」
早くも薄雲は大分おねむ。それに引っ張られるように、春雨とジェーナスも睡魔に襲われていく。しかし、抵抗なんてするつもりは無い。抵抗自体不要である。
「だから……こんな毎日がずっと続きますようにって……願うよ」
それを最後に寝息を立てる薄雲。
「それは私もだよ。ね、ジェーナスちゃん」
「Ｏｆ（もちろん） ｃｏｕｒｓｅ！ みんなでまたこうやってお昼寝しなくちゃね」
この望みはみんなの望み。中間棲姫も飛行場姫も、それを永続的に続けるために手を尽くしているのだ。施設全体がそれを望んで、ひた走る。
誰だって命のやり取りなんてしたくないはずだ。中には戦いの中でしか自分の価値を見出せないような者もいるかもしれないが、死んでしまっては元も子もない。出来ることなら、みんながこの生き方が出来るようになればいいのにと思いながら、春雨も一時の眠りについた。

しかし、それは長く続かない。少し眠ってから突然のことだった。薄雲が眠りながらも何かを呟き始めたのだ。
その言葉を耳にしたことで、まずは春雨が目を覚ます。太陽の位置

から、お昼寝開始からそこまで時間が経っていないことを知った。
「薄雲ちゃん……？」
「……さん……姉さん……っ」
完全に魘されていた。ここ最近は見ていなかったその時の悪夢を、今見てしまっていた。
「……りに……独りは嫌……姉さん……」
「ジェーナスちゃん、ごめん、起きて！」
「ん、んんぅ……Ｗｈａｔ（どう）ｈａｐｐｅｎｅｄ（たしの）……」
割と深く眠りかけていたジェーナスが目を擦りながら目覚めるが、薄雲の様子を見たことで飛び起きる。
春雨は自分が無事な状態で仲間が発作を起こすという状況に立ち会うのが初めてだった。そのため、咄嗟に何をしていいかわからず、本能的にジェーナスに頼ったのだ。それが大正解で、自己嫌悪の塊であるジェーナスは他人のためならとことん尽くすほどなので、すぐさま適切な処置を開始する。
「これ、多分ハルサメの方がいいわ。私じゃちょっと……Ｐｏｏｒ（貧相）すぎちゃう。ウスグモを起こして、ハルサメが抱きしめてあげて！」
「わ、わかった。薄雲ちゃん、薄雲ちゃん！」
魘される薄雲を揺すり起こす春雨。悪夢のために眠りは浅くなっており、少し触れただけで目を薄く開いた。その瞬間に、溜まっていた涙が溢れ出る。
自分が発作を起こしたときもこんな風だったのかと思いつつ、自分が中間棲姫や飛行場姫にやってもらった時のように、薄雲を抱きしめる。自分にあそこまでの包容力は無いにしろ、出来る限りをしようと。
「大丈夫、大丈夫だからね。薄雲ちゃんは独りじゃないからね」
「うっ、うぁぁ、姉さん……姉さん助けて……」
姉という単語で春雨もトリガーが引かれかけるが、今はダメだと必死に我慢する。今ここで自分まで崩れたら、以前にあった総崩れになってしまう。その散々な結果を思い出し、ギリギリのところで踏み止まる。

妹達と再会し、艦娘としての未練を吹っ切れることが出来たおかげで、春雨の心は以前よりも少しだけ強くなっていた。発作は当然治っていないのだが、当初よりは我慢出来るようになったのだ。
「大丈夫だよ、ほら、私がいるから、ね？」
「うぅ、うぅぅ……ヒッ、独りにしないで……」
縋り付くように春雨に顔を擦り寄る。春雨にも経験があるからその行為もわかった。
相手が中間棲姫や飛行場姫なら、その豊満なモノに対して温もりを感じるためにこうする。しかし、今回の相手は春雨である。この施設にいる駆逐艦の中ではいい方、むしろトップに立つのだが、あの２人には遠く及ばない。
しかし、薄雲には春雨のそれが最も効果的だったらしく、春雨に抱きついている内に、少しずつだが落ち着いていった。
「うぅ……ヒッ……姉さん……姉さん……」
「大丈夫、大丈夫。みんなここにいるからね。独りじゃないからね」
「そうよ、私達がいるわ。ウスグモは独りじゃない」
落ち着けるように顔に胸を押し当てて、ゆっくりと撫でていく。自分がされた時に最も落ち着けたことを返していく。ジェーナスもそれに加わり、２人がかりで温もりを与えていった。
される側からする側になり、多少は戸惑いがあった。だが、落ち着いてそれを対処出来たのは、やはり親身になって介抱されたからだろう。それだけ中間棲姫や飛行場姫の対処の仕方は適切であり、される側はそれを覚えてする側へと成長していく。
「私も独りじゃないから……大丈夫、大丈夫」
自分にも言い聞かせるように、だが薄雲を最優先にして、介抱を続けた。
過呼吸気味だった薄雲も、少ししたら落ち着いてくる。しかし、震えはまだ止まらず、春雨に縋り付いたままで離れる気配もない。発作が完全に終わるまでは、まだまだ時間がかかりそう。
むしろ、途中からあまり変わらなくなってきている。２人がかりでも温もりが足りないのだろうかと少しだけ焦り始めてしまった。

ここで、ジェーナスが苦肉の策を思いつく。
「えーっと、そうよ、ハルサメ、ちょっと案があるんだけど」
「薄雲ちゃんが落ち着けるなら、私なんだってするよ」
「服、姉姫か妹姫に寄せてみたらどうかしら。ほら、私達もあの2人に抱きしめられたら落ち着くじゃない。私じゃいろいろ足りないけど、ハルサメなら大丈夫、なはず！」
実際、ここにいる者達の発作は、最終的には中間棲姫か飛行場姫のどちらかが治めてくれる。施設に所属する元艦娘だけで全て終わらせることはなかなか出来ない。
施設内ならば即座に反応してもらえるのだが、今は外。2人の監視が完璧だったとしても、すぐにここまで来てもらえるかどうかは違う。きっと向かってくれているのだろうが、少なくとも今はまだ来ない。
それ故に、自分達が姉妹姫の代わりになってみようというのがジェーナスの案。しかし、ジェーナスは体型が比較的どころかかなり幼い。それに対して春雨は駆逐艦平均と同等か少し上くらいのモノを持っているため、行けるのではないかと考えた。
「わかった。姉姫様や妹姫様ほどじゃないけど、それでなんとかなるかもしれないならやるよ」
言われて思い浮かんだのが、初めて発作を起こした時に飛行場姫に抱き締めてもらった時のことだった。その時は初めてだったというのもあり、特に温もりを強く感じられたような気がした。
中間棲姫は母性の補正があるため、抱き締められた時の温もりのベクトルが違う。しかし、飛行場姫は単純に落ち着ける。春雨としては、そちらの方がそれらしく出来ると考えた。
「それじゃあ、妹姫様の服に……！」
念じれば服も替えられる深海棲艦の特性を最大限に利用した作戦。もう1週間も見ているのだから、完璧とは言えずともその再現は出来る。
胸元の装甲などを取っ払ったボディスーツ姿を9割方再現し、薄雲をより密着させた。今までの制服とは密度が変わったかのように温

かく、薄雲は一気に落ち着いていく。
「ふぁ……姉さん……」
そして、そのまま再び眠りについた。あれだけ発作で苦しんでいたが、今はそれを感じさせないくらいに安らかな寝顔だった。
「……ふぅ、よかった。落ち着いてくれたね」
「大分Ｌａｓｔ（苦）ｒｅｓｏｒｔ（肉）（の）（策）だったけど、うまくいってよかったわ。やっぱり姉姫と妹姫のＰｏｗｅｒは絶大よね」
そのまま膝枕と行きたいところだったが、春雨の義脚では酷いことになってしまうため、そのままお昼寝スタイルで寝かせることに。傍で見守っていてあげれば、もし目が覚めた時でも寂しさでまた発作を起こすようなことはないだろう。
「ごめんなさい、ちょっと手間取ったわ。薄雲が発作を起こしたみたいだったけれど」
と、ここでようやく飛行場姫がこの場に現れた。なんでも、施設の外で起きたことだったので感知が少し遅れたらしく、そういう時に限って姉妹共々資材整理をしていたとのこと。
そちらの方は中間棲姫に任せて、飛行場姫が大急ぎでここまで来たようだが、その時には春雨とジェーナスの機転でどうにか出来ていた。
「あら、春雨はなんでアタシのカッコしてんのかしら」
「この方が薄雲ちゃんが落ち着けるかなと思って……実際、これですぐに発作が治ったんです」
「へぇ……多分、アンタのそれが薄雲の姉さんに近しかったのかもしれないわね」
こんな格好の艦娘なんて見たことが無いのだがと疑問を持ったが、そういうことじゃないと即座に否定される。
飛行場姫としては、春雨のスタイルが薄雲の姉に近いのではという予想をしていた。身長や体格が似たようなものなら、抱き締めていた時にその温もりに近くなるはずと。
いつもの制服もそれなりに露出度があるのだが、今は身体のラインがよりよく出ているおかげで、その再現性がより強くなったのは間違

いない。
「なら、薄雲ちゃんが発作を起こした時は、私が抱き締めてあげた方がいいですかね」
「そうね。アンタが大丈夫そうなら、その方がいいかもしれないわね。というか、アンタ達は大丈夫なの？」
トラウマの連鎖を危惧したものの、ジェーナスは総崩れした時のトドメになるだけのため問題なく、春雨は薄雲のためになんとか耐えることが出来たため、今は大丈夫。
しかし、耐えられていたもののかなり限界が近かったようで、薄雲がなんとかなった時点で少しずつ震えてくる。他者のために力を発揮したものの、それが終わった途端に自分が崩れるのは、春雨の優しさかもしれない。
「なるほど、今度はアンタになりそうね。大丈夫よ、わかってると思ってるけど、ほら、独りじゃないわ」
「むぐ」
腕を引っ張り、そのまま顔を胸に押し当てる。それだけで一気に落ち着いていった。
発作が起きている最中ではなく、起きる前に処置を施されたおかげで、それ以上に悪くなることは無かった。

施設の一員として、仲間の発作を処置する方法を覚えた春雨。みんなで楽しく生きるためには必要不可欠なモノであるため、これからはより一層、仲間のことを思いながら暮らしていくことになるだろう。
元々の仲間思いな優しい性格は、深海棲艦と化しても失われていない。未練から吹っ切れることが出来たとしてもだ。

友達の姉妹

薄雲が発作を起こしたものの、ジェーナスのアドバイスを基に春雨が適切な処置を施すことが出来たため、そこでは事なきを得た。悪夢から起きた発作だったが、二度目の眠りはそういった夢を見る事なく、スヤスヤと気持ちよく眠れているようだった。

その薄雲は飛行場姫が運び、春雨とジェーナスはビニールシートを片付けた後にその後ろをついていく。薄雲の発作が抑えられたことを素直に喜びつつ、目が覚めるまでまた傍にいてあげようと話し合う。

「夢は避けられないもんね……私もそうだったし」

「忘れた頃に突然来るんだもの。それも、結構Ｃｌｅａｒ（鮮明）なのが！困っちゃうわよね」

ここにいるものは一度ならず何度も経験したことのあること。その度に発作を起こして、その場にいるもの、もしくは姉妹姫のお世話になってどうにか抑えてもらう。

リシュリューやコマンダン・テストはその内容がかなり限定的であるため、悪夢を見ても発作まではいかないらしいが、この３人組はそういうところで難しい問題を抱えていると言える。発作の起きやすさというのは人それぞれ。

「何かしら不安定になる周期っていうのはあるわ。そういうのは諦めてちょうだい。なるべくアタシとお姉でフォローするから、アンタ達は普段通りを崩さなければ問題ないわ」

「はい、そうします。また私も起こしちゃうと思いますが……その時はよろしくお願いします」

「ええ、任せてちょうだい。頼れる相手がいれば、その分気も楽になるでしょ。遠慮せずにどんどん甘えればいいわ」

こういう言葉を何の恥ずかしげもなく言ってのけるのが飛行場姫である。羞恥心が欠如しているのではなく、単純に本心のままに語っているに過ぎないのが、さらに凄いところ。

姉妹姫は管理者というのもあり、施設の全員からの信頼が厚い。そ

の性格上、一切嘘をつかないため、言うこと成すこと全てが信用出来る。だからこそ、こういう施設の管理が出来るのかもしれないが。
薄雲はそのままベッドルームに運ばれ寝かされ、春雨とジェーナスは先程と同じように両サイドに寝転がる。これなら目覚めたときに必ずその姿が目に入って寂しい思いをすることは無い。
「それじゃあ、薄雲のこと、頼んだわよ。今のアンタ達なら大丈夫よね」
「はい、お任せください」
「C(私)ount(に) on(任) me(せて)!」
万が一、また薄雲が発作を起こしたとしても、今なら大丈夫だと胸を張って言えた。春雨はまた飛行場姫の服装を使わせてもらうと冗談交じりに話し、それが有用ならバンバン使えと本人から了承まで得ることに成功。
「妹姫様の格好ってちょっとドキドキしちゃうけどね」
飛行場姫が部屋から出ていった後、春雨がボソリと呟いた。今までにない姿なのは間違いなく、少し新鮮だった様子。以前までの春雨だったら、まず確実に羞恥心が全開だっただろう。しかし、今の春雨はそう言った感情は存在しない。ドキドキするというのは、おそらく興奮の類い。
対するジェーナスは、ほんの少し不貞腐れたような、羨むような視線で春雨をつつく。
「私がこれくらいスタイル良かったら代わってあげたんだけどね。残念ながら、私はちっちゃい状態で艦娘になっちゃったし、深海棲艦になっても据え置きだったから無理なの。ハルサメに全面的に任せちゃうわ」
「うん、大丈夫。私が任されるね」
その反応に、ジェーナスは苦笑せざるを得なかった。

しばらくして、薄雲2度目の起床。この時には大分落ち着いており、慰めてくれた春雨とジェーナスにお礼と謝罪。以前から気にしな

いことと自分でも言っていたこともあり、土下座するようなことまではしない。
「ごめんね、突然発作を起こしちゃって。どうにかしてくれてありがとう」
「いいのいいの。私も前にやっちゃってるし」
「そうそう。みんなおんなじだもの」
以前の中間棲姫の教えをしっかり守っている。謝られたら、慰める。そして全部が元通り。みんながそうやって割り切っている。
自分もそうなのだから、1回や2回の発作でとやかく言うことも無いし、むしろ自分が起こしてしまう可能性も考えたら口が裂けても言えない。それにそもそもが優しく仲間に尽くすタイプなのだから、そんな悪意が交じったような言葉は頭の中に思い浮かぶことすら無かった。
しかし、春雨には薄雲が悪夢を見るきっかけが1つだけ思い浮かんでいた。もしかしたら、自分のせいで悪夢を見たのではと。
「……もしかして、私が姉妹の話を出したから……引っ張られちゃったのかな」
昨日の対談や、一昨日の海風の件で、ほとんど同じ境遇である春雨が姉妹仲のいいところをこれでもかと見せつけている。海風に至っては一晩を共にした程であり、普段とは違い自室に行くほどだった。
実際、それに対してトラウマを穿り返されるような感覚は無いとは言い切れなかった。薄雲は特に姉妹仲が良かったようで、春雨と一緒にいた海風に当時の自分を投影しかけていたのもあった。
自分も艦娘のときにはあんな感じだったなぁと、添い寝までは行かなくとも、一緒の鎮守府、一緒の部隊で戦っていたなぁと、ただただ思い返していた。それで発作を起こさなかったのは、薄雲も深海棲艦になってそれなりに時間が経過しており、未練を切り捨てるなどの思考変化が起きているからである。
しかし、自分の知らないところでストレスにはなってしまっていたのかもしれないと、薄雲自身も思ってしまった。
「その……正直なことを言うと、それが関係無いとは言えない……か

な。姉姫さんと妹姫さんや、松ちゃんと竹ちゃんの関係は見慣れちゃってるからもう何も感じないけど……初めて見る姉妹だったから……」

こういうところは嘘偽りなく本心を曝け出す。そう思ってしまったことは事実。こういうところで隠したりする方がよろしくないと、施設で生活していくうちに教訓として染み付いている。それに、深海棲艦化の影響か、嘘がつけない。

だからと言って春雨のせいとは絶対に言わない。そんなことはカケラも感じていない。むしろ自分がそんなことを考えてしまったせいで春雨に嫌な気持ちをさせてしまっていると自己嫌悪を感じてしまうほどである。

これがジェーナスだったら、まず間違いなく発作が出ていただろう。自分のせいで春雨が悲しむと感じて。

「でも、それは春雨ちゃんのせいじゃないからね！　春雨ちゃんが幸せになったのは私も嬉しいし、ほら、艦娘と交流出来るっていうのはこの施設でも嬉しいことでしょ？　私だって嬉しいもん。いつもと違うヒトがここに来るの、楽しかったから！」

わたわたとしながらも本心を次から次へと曝け出していく。妬み嫉みを春雨に抱いたわけではなく、単純に刺激されただけだと。

薄雲自身も、春雨が姉妹と再会出来たことは、心の底から祝福していた。叶わなくなった望みが、ひょんなことから叶ったのだから、そんなことで気分を悪くするほど心は狭くない。

薄雲も元が優しく真面目な性格も相まって、仲間を悲しませるようなことはしたくないと考えているためか、そもそもそういう思考に至らないようになっている。

「だから、だからね、春雨ちゃんは気にしないで！　これは私の責任だから。ちょっといろいろ思い出しちゃっただけだし、それが溢れちゃっただけだから、ね？」

「……うん、わかった。多分私も同じようになっちゃうと思うし。薄雲ちゃんと私、いろんなところが似てるもんね。だから、わかるよ」

同じように、薄雲の姉妹がこの施設に現れていたら、春雨はどう

なっていただろうか。おそらく薄雲のように悪夢を見ていた、もしくは姉妹の交流を目の当たりにした時点で発作を起こしていたかもしれない。

それがわかるから、薄雲の今回の発作に対して不快感のようなものは感じていない。むしろ共感しかなかった。そんな相手に対して、悪い感情なんて浮かぶはずがない。同族嫌悪なんてあり得ない。

だから、気にしない。この施設の教訓としてもそうだし、自己防衛としてもその方がいい。いざ自分が同じ立場になったときに、何も言えなくなってしまう。

「でも……春雨ちゃんに抱きしめられてるとき、姉さんのような温かさを感じたのは確かなんだ」

「そうなの？」

「うん。だから……その、またやってほしいかも。すごく落ち着けたから。もし私がまた発作を起こしたら、お願いしていい？」

「勿論。発作が起きてなくてもやってもいいんだからね」

それはまたいろいろ思い出して発作を起こしかねないからと、この場でもう一度はやめることとなったが、薄雲の表情は明るかった。ジェーナス考案で春雨が施した処置は、薄雲には最善だったようだ。

そんな薄雲を見て、一番満足そうにしているのは、ジェーナスだった。自己嫌悪を刺激せず、友達が楽しそうに話している姿を見るのが、彼女にとってはこの上ない幸せとなっていた。

その日の夜、いつものようにベッドルームに集まるが、今までは春雨が中央で眠っていたものを、今回は薄雲が中央となる形で横になる。

発作を起こした日は真ん中になるというルールがあるわけでは無いのだが、一度悪夢を見ると連続する可能性もあるため、なるべく落ち着けるようにこの配置になった。絶対に悪夢を見ないということは無いのだが、こうされていると落ち着くのは確か。

「今日は大変だったのねぇ。ごめんなさいね、全部任せちゃって」

「い、いえ、大丈夫です。姉姫様もここの管理で忙しいと思いますし」
まだ春雨が深海棲艦化して日が浅いので、姉妹姫が一緒に眠ることは変わらない。眠る前にはこうして雑談のようなことをするのも日課になっていた。
今日の話題は、専ら春雨とジェーナスによる薄雲の処置の話になる。当事者の薄雲は真ん中でたははと苦笑し、春雨とジェーナスへの感謝を熱弁。中間棲姫はその場にいなかったというのもあり、それをしっかり聞いてから、褒めに褒めた。
「春雨ちゃんも、もう一人前ねぇ。この身体になってそろそろ1週間になるけど、もう大分慣れたかしらぁ」
「はい、おかげさまで。みんなのおかげで落ち着いてますし、こうして仲間を助けることも出来たので」
「ふふ、それは良かったわぁ」
一人前になったからと言って、仕事が増えたりするわけでは無いのだが、中間棲姫に認められたという事実が、春雨を少し昂揚させる。
「春雨ちゃんに抱きしめられると、なんだかすごく落ち着けるんです。また発作を起こしたときはお願いしようかなって思って」
「それがいいわね。アタシ達じゃないと落ち着かせてあげられないってことがないのは助かるわ。ジェーナスもよく機転を利かせたわね。褒めてあげる」
「んふー。これでも私、Ｓｅｎｉｏｒ（先輩）だもの。ちゃんと見てるのよ！」
とはいえ、春雨だって爆弾を抱えているのは確かなので、連鎖してしまった場合は姉妹姫が出るしか無くなる。あくまでも手段として、春雨は薄雲に力を尽くせばいいということになった。
実際、ここにいる3人は一緒に活動することも多い。春雨と薄雲がお互いの寂しさを緩和し、ジェーナスがそこに入ることでさらに纏まり、落ち着ける。寂しさも無くなれば、自己嫌悪を感じている余裕も無くなる。ある意味ベストメンバーでもあった。
「それじゃあ、これからも3人で仲良くしてちょうだいねぇ。私としてもとっても安心出来るわぁ」
「はい、勿論。みんな仲間で友達ですから」

これだけは断言出来た。境遇とか関係なく、この施設で共に生きていく仲間なのだから、仲良くしない理由がない。それが友達なのだから尚更だ。

お互いのことを理解出来るのだから、仲違いすらも存在しない。お互いがお互いを敬い、助け合う。ただそれだけで、これだけ幸せな空間が出来上がる。

こんな毎日がずっと続けばいいのにと願いながら、春雨はそのまま眠りについた。戦いから離れ、今までと違った幸せを得られたことで、それを手放したくないという欲が生まれていた。

話がわかる人

春雨が薄雲の発作を抑えている裏側。本来の居場所である鎮守府。そこは、中間棲姫と飛行場姫の話題で持ち切りになっていた。

秘書艦である五月雨が現場に赴いて話をしてきたこと、そして海風が一晩そこで過ごしたことにより、その深海棲艦は信用出来る者として認識され、自分達も会ってみたいだの、この鎮守府に招いてみたいだの、好意的な話ばかりである。

春雨が深海棲艦化してその施設に滞在していることも公表され、大いに驚かれた。しかし、それもすぐに受け入れられる。資料として提督と中間棲姫との会話はデータとして残されており、その際に映し出された画面も録画されている。それも公開されて、姿は違えど、春雨が元気にしていることが確認出来たのは大きい。

深海棲艦は駆逐隊1つを壊滅させ、命を奪った憎っくき侵略者という認識も当然持っている。勿論敵対する深海棲艦は殲滅が目的なのも変わってはいない。

しかし、例外も存在するのだと提督をはじめ、現場でそれを見てきた五月雨達が言っているのだから、それは納得せざるを得ない。

「みんなが納得してくれて良かったよ」

その様子を見て、ホッと安堵の息を吐く提督。今まで敵対していた種族に対して和睦協定を結んできたと言ったら、文句の1つや2つ出るとばかり思っていたようだ。

そこにすかさず五月雨が口を挟む。その表情はいつになく笑顔。

「みんな、提督の意思を支持してるからこの鎮守府にいるんですよ。そうじゃなかったら転属願いとか出してます」

「だったらいいんだがね。嫌われているよりは好かれている方がいい。僕は僕の意思を強制したいわけじゃないからね」

艦娘にだって人間と同じように意思や感情がある。好意も嫌悪も表現出来るのだから、嫌なものは嫌とハッキリ言う者だって沢山いる。

それでも、今回の提督の行動と判断を否定する者はいなかった。こ

の鎮守府に所属した者は、提督の意思に従うことを良しとする者ばかりだった。心優しく、平和的に解決出来るのならそれを優先しようとする。和睦はその最たるモノであり、むしろ一番望むモノでもある。
「おそらくだが、海風の回復が決め手になったんだと思う。みんな心配していたろう」
「そうですね……ずっとギラギラしていたというか、命を削って動いているようにしか見えませんでしたから。私も姉として随分心配しました」
春雨の無事――とは言いづらいものの生きていることの証明――が確認出来たこともそうだが、やはり海風の問題が軽めでも解決出来たことは大きかった。
目の下に深いクマが刻まれ、疲れもまともに取れていないのに、やる気だけは異常なほどあった海風は、鎮守府の全員から心配されていた。しかし、その気持ちもわかるのでなかなか触れられず、結果的に腫れ物のように扱われてしまっていた。
だが、今はそんな焦燥感に苛まれていた姿は夢だったかのようにピンピンしており、帰投してからは打って変わっていつも通りの冷静沈着。逆に心配になったものの、施設効果であることは一目瞭然である。
「まぁ、この鎮守府は満場一致であの施設との共存を目指していくことは確かだ。全ての鎮守府にそれを受け入れろなんて口が裂けても言えないが、こういうことがあったということを大本営には伝えなくちゃいけない」
「ですね……そろそろ到着ですかね？」
「ああ、時間としてはそろそろだ」
時計を気にしながら話す提督と五月雨。
中間棲姫にも話していた、話がわかる上司という者が、今日鎮守府に客として訪れることが決まっていた。そこで今回の件を詳細に説明する予定である。
「提督、お客様がお見えになられました」
執務室の扉の外から声。任務の取りまとめなどを行なっている艦

娘、大淀の声だ。
　鎮守府と上層部を繋ぐ役である任務娘として活動している大淀は、この鎮守府でも当然その役目を仰せつかっている。言ってしまえば事務員のようなものではあるものの、お互いに信頼し合っている仲でもある。
　勿論、この大淀も提督の言い出した深海棲艦との和睦協定に対して、他の艦娘と同様に肯定派。提督の決めたことだからというのと他に、争いのない世界をそういう形で目指すのも悪くないと考えているためである。
「ああ、ありがとう。通してくれ」
「了解しました」
　それからすぐに執務室の扉が開き、その客が執務室に入ってくる。
「お久しぶり、今日はとても重要な話だと聞いてやってきたのだけれど」
　ゆっくりと入ってきたのは、老齢だが独特な雰囲気を纏う貴婦人。着ているモノが提督と同じ軍服であり、その姿を見る前から提督が起立して出迎える程であるため、立場としてもかなり上の存在であることがわかる。
　この貴婦人こそが、鎮守府を取り纏める軍の大本営に所属する者。あらゆる鎮守府の提督よりも立場は上である。階級は大将。この鎮守府の提督の階級が大佐であるため、まず頭が上がらない人物。
「お待ちしておりました。どうぞこちらへ」
「ええ、ありがとう。吹雪、手を貸してちょうだい」
「はい、司令官」
　貴婦人の隣に立つのは、彼女の秘書艦である駆逐艦、吹雪。五月雨とも面識があるようで、顔を合わせた時にお互いに小さく手を振っていた。関係は良好な様子。
「ご足労いただき申し訳ありません。本来なら僕がそちらに出向くべきだと思ったのですが」
「いいのよ。私もたまには外に出たいもの。貴方の呼び出し、年甲斐もなく大喜びしちゃったわ」

吹雪に手を貸してもらっている通り、この貴婦人は片脚を悪くしており、ここに来るまでも杖を使っていた。そのため、本来なら提督自ら大本営に出向して今回の件を報告するべきだったのだが、そのせいで部屋に押し込められていることを気にしていた貴婦人が、むしろ自分からここに来ると言い出したことでこの場が設けられたようなもの。

よっこいしょと椅子に腰掛けると、吹雪がすぐに杖を受け取った。ここまで来るのにも体力を使ったようで、ふぅと小さく息を吐いた後、すぐに本題に入る。

「それで、私に話というのは？」

「こちらをご覧頂けますか」

そう言って取り出したのは、例の録画された対談のデータが入っているタブレットだ。手早く操作して、その時の一部始終を見てもらう。

画面に中間棲姫の顔が映った瞬間、貴婦人は目を見開いた。吹雪も声を上げて驚いた。ここまで近くで深海棲艦を映した動画は何処にもなく、また、ここまで穏やかな表情をしている深海棲艦も何処にもいなかった。

「これは、僕が深海棲艦、中間棲姫と対談したときの動画です」

「対談……そう、対話が出来る深海棲艦がいたのね」

「はい。以前にお伝えした、駆逐隊が消息を絶った事件の痕跡を調査中に発見しました」

動画を一時停止して、知る限りの中間棲姫の詳細を提督は話した。

そこにいた陸上施設型の姉妹は部下のイロハ級を一切連れておらず、艦娘（こちら）の姿を見た途端に白旗を上げていたこと。対話を選択しても不意打ちなどをすることなく、真正面に立っても穏やかに対話に臨んできたこと。事故で攻撃してしまった際、圧倒的な力を見せつつも攻撃に対して気にした素振りもなく休戦を求めたこと。

とにかく、あちらには一切の侵略の意思がなく、むしろ人類や艦娘と手を取り合いたいと望んでいる。それを知ってもらいたかった。

それともう1つ。春雨のこと。

「この中間棲姫の陣地に、行方不明となっていた春雨が発見されました」
「保護してくれていたということかしら」
「はい。ですが……春雨は艦娘では無くなっていました。深海棲艦となっていたのです」
　動画を進めたところで、画面の端から深海棲艦化した春雨が現れる。申し訳なさそうな表情でこちらを見つめた後、思い詰めた表情で、残りの行方不明となった姉達のことを語る。見たことのない深海棲艦にやられて全滅したと。
　すぐに体調を崩して画面外に行ってしまったものの、その姿はしっかりと映し出されている。春雨の面影を残しつつも、誰がどう見ても深海棲艦の姿となっていた。
　貴婦人は言葉もないようだった。吹雪もついには声が出なくなっていた。それもそうだろう。今までに前例が無かった艦娘の深海棲艦化が、動画とはいえ目の前で証明されていたのだから。
「この春雨は、この鎮守府に所属していた春雨と同一であることは確定しています」
「その根拠は？」
「この施設に、僕の艦娘であり春雨の妹である海風が1日滞在しました。あちらからの発案ではありますが、常に春雨の近くにいたそうで、その仕草から記憶まで、全てが一致すると」
　その時に海風の精神的な状況が著しく改善したということも添えて。姉達が消息を絶ったことで精神的に追い詰められていた海風が、戻ってくる頃には殆ど普段と変わらないくらいにまで回復していたのだ。
　それが中間棲姫の侵略の手口であり、実は精神に干渉出来る特殊な能力を持っていると言われてしまったらそれまでなのだが、対話をすることが出来た提督はそうは感じていない。中間棲姫は本気で平和を望んでいる。
「……なるほど、貴方がそう言うんですもの、この中間棲姫は本当に侵略の意思が無く、私達と手を取り合って生きたいと考えているので

しょうね」
「はい。直接話をしたので、僕としてはそれが断言出来ます」
春雨を保護し、海風を回復してくれた恩人であり、無礼なことをしてしまっても笑って済ませるくらいの寛大さまで持ち合わせている。そして、対話の際にも敵意は一切なく、嘘をついている素振りも見せない。
信用に値すると、提督は力強く中間棲姫の正当性を論じた。人によっては、そんな発言自体が気が狂っていると一蹴してしまいかねない。しかし、この貴婦人は真摯に受け止めて、それが真実であることを理解する。
「わかりました。私はその話を信じ、そういう深海棲艦もいるのだということを知っておきましょう。人間に善人と悪人がいるように、深海棲艦にも善いものと悪いものがいたと。今までは悪いものしか見てこなかったんだもの、敵対心を持って当然だけれど、少数でもこういう存在がいるのなら、認識するしか無いわね」
話がわかる上司というだけあり、動画と提督の説明で、ひとまずは納得してくれた。今すぐ殲滅に行くとも言わず、現状維持、すなわち対話の続行を良しとした。
「五月雨ちゃんも話をしてきたの？」
ここで吹雪から、この現場にいた五月雨に対しての質問。
「うん、素敵なヒトだったよ。話し方に嫌味が無いっていうか、こっちに気を使ってるわけじゃなくて、心の底からこちらと仲良くしたいっていう気持ちが見えたというか」
「そうなんだ……私も会えたら会ってみたいかも」
「うーん……どうだろう。出来れば私達の中だけに秘めておいてほしいって言われたくらいだから、対話には応じてくれたけど、悪目立ちはしたくないって思ってるんだろうなって」
中間棲姫のことを知っている者が増えれば増えるほど、あの施設が危険に晒されるのは誰にだってわかることだ。今回は痕跡を調査するということでたまたま発見出来てしまったが、本来ならばずっと見付からないままでいたはずなのだし。

「そこの関係は、貴方が続けていくということでよかったかしら」
「はい。僕とこの鎮守府とは和睦の協定を結んでくれると約束してくれました。お互いに不可侵ということにしています。また話せる機会があれば話そうとも」
「そう、なら私からはその関係を続けるようにとしか言えないわ」
　強大な力を持っているにもかかわらず、こちらに対して友好的でいてくれる深海棲艦となれば、その関係をなるべく続けて戦いにならないようにするのが最善であると考えたようである。触らぬ神に祟りなしという言葉もある。
「そういう形での平和も、私は悪くないと思うわ。無駄な戦いで命を落とすくらいなら、和平が結べるなら結んだ方がいいわね。仲良く出来なくても、お互い不可侵なら平和だものね」
「はい。僕もそう思います」
　貴婦人のこの思いが提督にも引き継がれていた。良き上司に良き部下となっている。
「だけれど、1つだけ看過出来ないことがあるわ」
　艦娘の深海棲艦化。こればっかりは知っておかなければならないこと。もしその事象が起きてしまったとしても、映像の中の春雨のように自我を失わずにいられる手段がわかればまだマシだし、そもそもそんなことが起きないようにしてやる必要がある。
「このことについては、詳しく教えてちょうだいね。これはどんな艦娘にも関係してくることだもの。それこそ、貴方の五月雨や、私の吹雪にだって」
「了解です。中間棲姫からの受け売りになりますが、そうなってしまう条件と、心を失わない処置の仕方を聞いていますので、それを伝えます」
　万が一の時のために誰もがそれを知っておけば、知らなかったでは済まない事故も起きなくなるだろう。しかし、聞けば聞くほど貴婦人の表情は曇る。
「どうかされましたか？」
「……艦娘を酷使するような鎮守府は、深海棲艦化が起きてしまって

いるのではないかと危惧したの。心が壊れることで感情が溢れる……艦娘のことを考えずに好き勝手に使う者もいないとは限らないわ」

いわゆるブラック鎮守府では、艦娘の酷使による使い潰しが問題になっている。勿論軍としては罰則を設けており、そんなことをする輩は責任者から降りてもらう上に咎人として罰を受けるようにされているのだが、それでも後を絶たない。

そんな場所では、今初めて知ったであろう深海棲艦化も実は起きてしまっているのではないかと考えたのだ。それをひた隠しにしているだけで。処置の仕方もわからないから、繭になった時点で殺しているなりなんなりしているのではと。

「……正直、なんとも言えません。僕は艦娘に対してそんなことが起きるようなことは絶対にしませんから、その考え自体が理解出来ない」

「それが普通なの。でも、それこそ万が一があるわ。この件に関しては、少し慎重にいく必要があるわね」

自分にだけ話してくれてありがとうと貴婦人は微笑み、それ以降は今後の鎮守府運営についての話となった。

ついでだものと査察までされて提督はタジタジだったものの、やはり話がわかる人だったと内心では喜んでいた。こんな重たい話、自分1人では抱え込めないと。

旅する穏健派

翌日。施設は相変わらずの平和な1日のスタート。毎日続いている静かで穏やかな始まり。

春雨も1週間も経てば慣れたもので、朝は陽の光を受けて目を覚まし、朝食の準備の手伝いまでするようになっている。昨日の手伝いが余程楽しかったか、誰かに頼まれずともキッチンに立つようになっていた。

「リシュリューさんに振る舞えるくらいに上手になってみせますね」

「J（楽）ａｉ（し） ｈ（み）・ｔｅ（ね）・ ハルサメは腕はあるから期待出来るわ」

楽しそうに料理をする春雨の姿は、これからの朝の代名詞になりそうである。そして、それをニヨニヨしながら眺める薄雲とジェーナスも。

リシュリューとコマンダン・テストが帰投してから、春雨は本当に多趣味になっていた。元々ある程度は出来た料理をさらに伸ばし、農作業や漁も楽しく取り組めている。毎日がやりたいことをやれているので、ストレスもあまり溜まらない。

ここ最近は酷い発作も起こしておらず、薄雲のそれを抑え込む役回りにも参加出来るようになり、中間棲姫が言った通り一人前と言っても問題ないほどにまで成長していた。安定していると称した方がわかりやすいか。

「リシュリュー、コマ、あと春雨も準備中かしら」

そんな中、朝の哨戒をしていた飛行場姫がいつもよりも早くダイニングに入ってくる。まだ朝食の準備をしている最中に戻ってくるのは珍しい。

「悪いんだけど、もう1人分追加で作ってもらえるかしら」

「え、どういうことです？」

「言葉通りよ。ここで食べるのが1人増えるって意味」

こんなことは今までに無かったことであるため、春雨は混乱してしまった。そもそも食事の人数が増えるなんてことは本来あり得ない。客でも来ない限り。

そこでようやくピンと来た。時間などお構いなしに自由に動き回っており、この施設に普通に入ってくるような客なんて、どう考えても関係者しかいない。つまり、その追加の1人というのは、施設の理解者である穏健派の深海棲艦だ。
「はぁい。悪いわね、突然お邪魔しちゃって」
などと考えている内に、春雨の知らない女性がダイニングに入ってきた。
その女性は、黒いロングヘアーに少し短めの角が2本、額から生えている美女。中間棲姫や飛行場姫に負けず劣らずな抜群なスタイルを、ネグリジェのようなワンピースで惜しみなく曝け出している。
特に目立ったのは、そのせいでしっかりと見えている鎖骨付近の4本の小さな角。中間棲姫の甲殻の襟よりは目立たずとも、額の角と一緒に、明確に異形であることを証明しているパーツである。
「わぁ、Ｌｏｎｇ（おひさしぶりね） ｔｉｍｅ ｎｏ ｓｅｅ！」
「そうね、大体1ヶ月ぶりかな。久しぶり、ジェーナス」
その姿を見たジェーナスが駆け出して飛びつく。薄雲も顔見知りであるようで、満面の笑みで出迎えた。
この中では新人である春雨だけが面識のない相手。しかし、その姿は知っていた。艦娘の時に大規模作戦で何度も手合わせした深海の姫、戦艦棲姫。その女性は完全に同じ個体である。
しかし、明らかに顔付きが違った。春雨の知る戦艦棲姫は、もっと敵意が剥き出しであり、冷ややかに微笑みながら殺意の塊である大口径の主砲を放ってきたものだが、この戦艦棲姫は中間棲姫や飛行場姫と同じように殺意も無ければ敵意も無い、穏やかすぎるくらいの柔らかい笑顔。
「あら、新人じゃない。私が前に来た時にはいなかったわよね」
早速気付かれたことで、心臓が跳ねる思いをした春雨。完全に萎縮してしまっているが、戦艦棲姫としては慣れっこのようで、ケラケラ笑いながら春雨に近付く。
「初めまして。ここの姉妹と仲良くさせてもらってる……って言っても、ここに来るのは1ヶ月とか2ヶ月に1回くらいなんだけど、まぁ

そんな感じのお姉さんよ。ここに住んでいるのなら、これからちょくちょく会うことになると思うけど、まずはよろしく、お嬢さん」

中間棲姫もダイニングに来たことで、みんな揃っての朝食が始まる。今までと少し違うのは、その中に戦艦棲姫が含まれていることだ。

「戦艦ちゃん久しぶりねぇ。最近そちらはどうなの？」

「楽しんでるわよ。人間の社会ってのは興味深いものが沢山でね。ホント飽きないわ」

この戦艦棲姫は、中間棲姫や飛行場姫と同じくらいの穏健派。しかも、陸上施設型ではないためか、リシュリューやコマンダン・テストと同じように、たびたび人間達の社会に紛れ込んでその文化を楽しんでいるらしい。その際にはどうしても角は消すことが出来ないため、服や装飾品で隠しているのだとか。

「やっぱり服飾関係は特に興味深いわ。人間ってば本当にオシャレで。おかげでウィンドウショッピングが捗る捗る」

「一度見てしまえば、服は自分で作れるものねぇ」

「ええ。でも、そのアイディアには脱帽しちゃうわ。あんなの私達じゃ思い浮かばないもの。最近はオシャレな同胞（はらから）も増えてきてるらしいけどね」

当然ながら、戦艦棲姫はお金なんて持ち合わせていない。人間の社会に潜り込んだところで、やることはただ見て回るだけである。本人はそれが楽しいのだと熱弁する。

中間棲姫も言う通り、服に関してはその目で見てしまえば同じものを艤装と同じように作ることが出来てしまうため、深海棲艦にとってはウィンドウショッピングでも充分に身になるレベルなのである。

旧友との再会に中間棲姫もニコニコしながら会話し、周りも顔見知りであるため、その話を穏やかな空気で聞き入っているのだが、春雨だけはまだ頭の上にハテナマークが飛び交っている状態である。

それに気付いた中間棲姫が、ごめんなさいねと話を一時中断。春雨

に戦艦棲姫をちゃんと紹介する。
「ああ、春雨ちゃんは初めてよねぇ。このヒトは私達と同じ、人間と戦いたくないって考えの同胞(はらから)よぉ」
「貴女もここにいるってことは、同じ考え方なのよね。なら、貴女も私の同志よ。改めてよろしくね、春雨」
「は、はい、よろしくお願いします！」
　人見知りというわけでは無いのだが、戦艦棲姫は中間棲姫や飛行場姫と違って大規模作戦では必ずと言っていいほど艦娘の作戦行動を妨害してくるレギュラーのようなものだ。そのせいで、妙に警戒心が取れない。
　同じ食卓を囲んでいてもまだそれが難しそうなのを見て、戦艦棲姫は苦笑。
「いやぁ、この感覚も久しぶりね。新人ってのは大概私のこと警戒するのよ。ここでそんな顔しなかったの、ヨナくらいじゃない？」
「ヨナは海の上のヒトはそこまで怖くないヨナ」
「潜水艦だものね。私も潜水艦にだけは手が出せなくて困るわ」
　警戒されることに慣れているというのは少し悲しいことだが、今が良ければ過去はどうでもいいという、ある意味楽天的な考え方もしているので、全く気にしていないようである。
　ただ、ここまでの言動から信用出来る相手であることは理解出来た。中間棲姫も飛行場姫も完全に心を許しているし、先程ジェーナスも飛びつくくらいに懐いている。そんな相手が突然攻撃してくるわけがない。
「時間をかけて慣れてとは言えないけど、仲良くしてくれると嬉しいわ。あ、そうだ。この姿だから警戒しちゃうのかもしれないわね。せっかくだし、服を替えましょ」
　言うが早いか、食べながらでもその服装が変化していく。元々着ていた黒のネグリジェ風ワンピースが消滅したかと思うと、明らかに人間に擬態していると言わんばかりのオシャレな私服姿に変化。
　胸元の角も隠すくらいの少し厚着であり、帽子で額の角まで隠しているため、知らない者が見れば深海棲艦とは到底思えない状態に。

「わぁ……すごい、綺麗……」
「ふふ、ありがと。人間の社会にも潜り込める姿だもの、自慢の一品よ」
「ホント、こういうところのセンスは見習いたいところだわ」
飛行場姫も戦艦棲姫のこういうところには一目置いているらしい。戦艦棲姫は陸側の知識が豊富であるため、そういう話をしては楽しんでいるとのこと。
「えぇと……なんてお呼びしたら」
「ああ、そうね、それも人間の文化だものね。そこは適当に戦艦と呼んでくれればいいわ。ここの連中は貴女も含めて全員姫だし、特別な呼び方は難しいと思うし」
現に中間棲姫がその呼び名を使っているし、他の者も戦艦さんやら戦艦の姐御やら艦種で呼んでいたりする。それに倣うのが一番だろう。
「それじゃあ、戦艦様、今後ともよろしくお願いします」
「ええ、よろしく。そんなに畏まらなくてもいいんだけどね」
再度苦笑しつつ、朝食を再開。春雨からも警戒が取れ、改めて和やかな食事風景となった。

「そういえば、戦艦はなんでここに立ち寄ったわけ？　いつものようにたまたま？」
朝食が終わり、後片付けをしている最中に飛行場姫が問う。戦艦棲姫がこの施設に訪れるのは、決まったタイミングではなく基本的にはたまたま。
人間の文化を楽しむため、特定の場所で暮らすようなことはしないのがこの戦艦棲姫だ。旅人と言ってもいいほどに、そこら中に行ってはそこの文化を見て出て行く。一箇所に留まるとしても、長くて僅か数日。基本的には日帰りである。
それ故に、ここなら訪れるのは世界をグルリと回ってから近くを通ったから立ち寄ろうという程度。その都度、旅の記憶を物語のよう

に語ってからまた旅に出るという風来坊のような女性。
「たまたまってのはあるんだけど、話しておきたいことがあってね。この近くってわけじゃないけど、ちょっと変わったモノを見たのよ」
「変わったモノ？」
　ここに立ち寄ったのはいつものたまたまだけではないと戦艦棲姫は語る。この施設の近海には本当に何も無い。そうだからこそここに施設を置いている。何も無いということは、何も事件が起きないということでもある。
　それが、戦艦棲姫としても変わったモノであると認識出来る何かがあったというのだから話は変わる。
「ほら、ここいらでも一応は同胞（はらから）が自然に生まれたりするでしょ。この施設には来ないかもしれないけど、知性のないような連中」
「そうね。海の上なら、何処で生まれてもおかしくないわね」
　戦艦棲姫が言っているのは、いわゆるイロハ級のこと。イロハ級は姫達と違って、割と適当な条件で生まれたりする。
　それは知性と言えるモノが殆どなく、それこそ本能のままにやりたいことをただやるだけ。侵略がその大半を占めるため、なんだかんだで徒党を組んで陸を襲おうとしては、艦娘に駆除される。
　そうでないと少し賢い者だと、陸に近付かずのんべんだらりと海の上で生活し、そのまま自然に還っていくというのも普通だった。
　その流れを否定するわけでもなく、そういうものだと受け入れているのが深海棲艦。知性のないものは放置するのが一番だし、本能に任せて生きているのだから口出しもしない。
「それっぽいのをチラッと見たのよ。でも、なんだか様子がおかしくてね」
「どういうことかしら」
「正直、私でも見たことがないタイプのヤツだったのよね。人型ではあるんだけど、私達みたいな姫ではないような、なんか得体の知れない感じのヤツなのよ」
　見たことがないタイプのヤツというワードに、春雨がピクリと反応する。それだけではない。この施設の者全員が少なからず反応した。

春雨がこの姿になったのは、見たことのない深海棲艦との交戦の結果だ。姉４人がやられ、自分も半死半生の状態にまで持っていかれている仇。
「そいつとは話したの？」
「しようとしたんだけど、こっちのこと無視してるっていうか、気付いてないっていうか。焦点が合ってない目をしてたから、知性が無いんじゃないかと思ったのよね」
「確かに、それは変わってるわ。普通なら懐いてくるなり警戒されるなりするでしょ」
「ええ。野良犬みたいなモノだからね。私は大概懐かれるけど」
知性のないイロハ級は、姫級との力の差を本能的に理解しているのか、大概は懐いてくるらしい。逆らったら殺されると思っているわけではないのだろうが、上位種に対して首（こうべ）を垂れるのが深海棲艦としては一般的。
それを無視するというのはなかなかいない。最初から壊れているくらいでないと考えられない。
「生まれ方が悪かったのかしらね。人型なのに知能はもっと下になってるのか、それとも何か別の要因があるのか。意図的だったら怖いわよね」
「ふぅん……まぁ何もしないならそれでいいんじゃないかしら。ボーッとしているうちに海に還るだけでしょ」
「それならいいんだけど」

戦艦棲姫が見かけたという、見たこともないタイプの深海棲艦。それが春雨達の仇かどうかはまだわからないが、少なくとも何かが動き出そうとしているのは確かだった。

謎の同胞

穏健派の深海棲艦であり、人間の文化に興味津々である風来坊、戦艦棲姫が施設にやってきた。なんでも1ヶ月か2ヶ月に1度くらいは近くを通りかかるらしく、今回もその旅路の合間にちょっと寄ったということらしい。だが、用はそれだけでなく、変わったモノを見たから中間棲姫と飛行場姫に話しておきたいという。

その内容というのが、ここに来るまでに変わったモノ、謎の深海棲艦を見かけたというものだった。目の焦点が合っておらず、声をかけようとしても無視。そもそも知性を持っているかもわからない、見たことのないタイプの同胞(はらから)だったと語った。

「生まれ方が悪かったのかしらね。人型なのに知能はもっと下になってるのか、それとも何か別の要因があるのか。意図的にこちらを無視しているんだったら、結構怖いわよね」

「ふぅん……まぁ何もしないならそれでいいんじゃないかしら。ボーッとしているうちに海に還るだけでしょ」

「それならいいんだけど」

現場でそれを見た戦艦棲姫は、その謎の深海棲艦に対して違和感を覚えているようだが、飛行場姫は害がないのなら放置でいいという考えでいるようである。

しかし、中間棲姫は口元に手を置き、少し考える仕草。謎の深海棲艦に心当たりがあるわけでは無いのだが、その存在がこの施設に脅威を与えるかが重要。

そんじょそこらの深海棲艦では、中間棲姫には傷一つ付けることが出来ないのだが、施設の者はと言われると話が変わる。無論、全員が姫級であり、新人の春雨ですら艦娘の時とは比べ物にならない力を手に入れてしまっているのだが、それでも相手は何かがわからないのだ。心配はどうしてもする。

「警戒するに越したことは無いわねぇ。それが私達にどんな影響を与えるかはわからないけれど、もし今までにないタイプの同胞(はらから)で、私達とは違う侵略者気質だった場合、みんなが危ないかもしれないもの」

「まぁ、確かにね。アタシとお姉でこの施設をどうにか護るけど、みんなのことまで手が回るかって言われたら何とも言えないものね」
「ええ、だから念のため、ね。悪いことに繋がりそうなことは、前以て対策をしておくべきよぉ」
　中間棲姫がそう言うのだからと、満場一致で警戒の方向に動く。放置でもいいと考えていた飛行場姫も、姉が警戒するというのなら文句を一切言うことなく即座に考えを切り替えた。
「戦艦ちゃん、ありがとうねぇ。そういう情報は、やっぱり外にいる子達からしか手に入らないから、本当に助かるわぁ」
「こういう時は助け合わなくちゃね。こうやって勝手に来てはご飯ご馳走になっちゃってるわけだしさ」
　これで貸し借りが無くなるだろうと戯けて話す。元々そんなことを考えていないため、これも友人としての付き合い方。中間棲姫にこんな軽口を叩けるのは、妹である飛行場姫か、この戦艦棲姫くらいなものである。
「あの……戦艦様、いいですか」
　その戦艦棲姫に対し、今までの話を静かに聞いていた春雨が真剣な顔で詰め寄る。先程とは打って変わって積極的に来たので、戦艦棲姫も少しだけ驚く。
「どうしたの春雨、怖い顔して」
「その見たことのないタイプの同胞（はらから）というの、詳しく教えてもらえませんか」
　話しながらも、春雨の手は震えていた。見たことのない深海棲艦というキーワードによってトラウマが刺激され、発作の前兆が出かけている。それでも、それが姉の仇の情報に繋がるかもしれないのなら、ここで情報を手に入れておきたかった。
　切羽詰まっているような表情だったからか、そのまま素直に話し始める。戦艦棲姫自身はそこまで重要な話とは思っていなかったのだが、中間棲姫が警戒するとも言い出しているため、詳細な情報も共有しておくべきと判断する。
「まず姿形なんだけれど、見た目は貴女達に近い駆逐艦だったわね。

まぁ駆逐艦にしてはそれなりに成熟してたようにも見えたけど」
この時点で、春雨は少しだけ安堵していた。姉の仇であり、春雨に瀕死の重傷を負わせたのは、駆逐艦では無かったからだ。
春雨の見立てでは、その深海棲艦は見たことがないものとはいえ重巡洋艦くらいに見えた。小柄ではなく、だからといって大柄でもなく。鎮守府の仲間達と照らし合わせたら、おそらく重巡洋艦程度ではないかと思えた。
「艤装もそこまで大きなものじゃ無かったわ。ただ、変わってるなって思ったのは、武器みたいなものを持ってたのよね。アレは槍だったかな」
「槍を持った同胞(はらから)なんていたかしら」
「私はいろいろ見て回ってる時に知り合ってるけど、こっちの方ではまず見かけない子だし、そもそもその子は戦艦なの。駆逐艦じゃないわ」
武器を持つ深海棲艦というのは、いないわけではないらしい。少なくとも春雨には見当が付かなかったようだが、それならそれで仇からはかけ離れてくれるため、若干安心出来る。
「髪は長かったわ。あと服装なんだけど、ボロボロでよくわからなかったのよね。服作れるのにそれをそのまま着てたから、余計に不審に思ったんだけどさ」
「わざとボロボロのままでいるってこと？」
「どうなのかしらね。そこに気を配るほど頭の中が出来てないとか？
ほら、知性のないタイプのヤツらは、そういうところ無頓着じゃない。必要最低限があればいいみたいな」
知性のない深海棲艦は、人型すらしていない場合が多い。一部人型というモノもいるはいるが、そういうモノは服も微妙だったりする。大事なところが隠せれば充分と言わんばかりに、布を巻いているだけのようなモノもいる程である。それすらないモノもいるくらいだ。
戦艦棲姫が発見した謎の深海棲艦は、それっぽさがあったという。人型はしているが、知性はない。ならば姫である戦艦棲姫に対して何らかの反応を見せるはずなのだが、それすら無いのはまた謎。

「それくらいよ。おかしいというか、珍しいタイプだとしか」
「確かにねぇ。知識が少ない私が言うのも何だけど、見たことも聞いたこともないわねぇ」
　世界を回っている戦艦棲姫だからこその違和感なのかもしれないが、中間棲姫や飛行場姫も、見たことも聞いたこともないタイプのようである。
　しかし、今までの説明を聞いて大きく反応する者がいた。薄雲である。
「ど、どうしたのウスグモ、顔色が悪いわ」
　薄雲のその様子を心配するジェーナス。しかし、薄雲の様子は悪くなる一方である。今の戦艦棲姫の説明に、発作に繋がる何かがあったのかもしれない。
「……そ、その特徴……姉さんに、姉さんにそっくりなの……」
　長い髪の駆逐艦というだけならいくらでもいる。それこそ、春雨だって結んでいる髪を解けばそれなりの長さはあるし、最近ここで交流のあった五月雨や江風だってかなり長い方である。
　しかし、槍を持っている駆逐艦という強すぎる個性は、薄雲の姉にしか存在しないものだった。そのせいで、薄雲のトラウマが大きく刺激され、発作を起こしかけていたのである。
「この話はしない方がいいかもしれないわね。ごめんなさいね薄雲」
「いえ、いえ……私の方こそ……うぅっ……姉さん……っ」
　トリガーは引かれかけている。いつ発作を起こしてもおかしくない状況であるため、すぐに飛行場姫が動き出した。
　薄雲を抱きしめながら、少し席を外すとダイニングの外へ。このまま話を続けてくれて構わないということのようだ。
「どうする？　まだ話す？　もう私の見たことは全部伝えたわけだけど」
「……えっと……私は大丈夫です。姉さんの仇とは……違う深海棲艦だったみたいなので」
　春雨も薄雲に引っ張られて危険な状態になっている。いつ発作を起こしてもおかしくないギリギリの状態であるため、大丈夫とは言っ

ているものの中間棲姫がケアにあたる。
先程の飛行場姫と同じように春雨を抱き寄せてから、今回は部屋から出て行くことなく頭や背中を撫でて行く。そうしているうちに、春雨はゆっくりと眠りについた。先程の言葉はやはり強がりだった模様。
春雨がその話を聞かなくなったため、そこからもう少しだけ話を続ける。春雨は抱きついたままだが、眠っているのなら大丈夫と踏んだようである。
「この子と薄雲ちゃんは、同じ理由で同胞(はらから)になったみたいなの。今までの話を聞いている限り、お姉さんに何かがあったみたいなのよねぇ」
トラウマを刺激しないように、誰からも詳細は聞いていない。ここにいるのなら経緯はそこまで重要ではないし、何が溢れたかは中間棲姫が黒い繭から解析出来てしまうようなので、聞く必要すらない。
そのため、春雨と薄雲の元々の原因というのは推測の域だったのだが、流石にここまで大きく反応しているのなら疑いようが無くなった。春雨に関しては先日の対談によりおおよそ見当がついていたが。
「そうだったのね。だから春雨はあんなに必死な顔をしていたのか。薄雲は私が見たのがそのお姉さんにそっくりみたいだから」
「ええ。でも、聞いている限り、その見かけたっていう子は春雨ちゃんの仇でも無ければ、薄雲ちゃんの実のお姉さんというわけでも無いと思うのよねぇ。だって、薄雲ちゃんがここに来たの、半年は前だもの」
中間棲姫の頭の中には、その謎の深海棲艦は元艦娘なのではという考えが生まれていた。
見たことのない深海棲艦というのは大概が自然発生ではなく、心を壊した艦娘が黒い繭により深海棲艦化し、適切な処置を受けずに終わってしまったという悲惨なモノ。
ここにいる元艦娘達は姉妹姫のおかげで適切な処置を受けたことで艦娘としての意思を残しているが、戦艦棲姫が見かけたという謎の深海棲艦は深海棲艦化の際に壊れたままで変化を終わらせた。その時に艦娘としての意思を失い、変化で知性すら失ってしまった可能性

もある。
　もしそうだとしたら、半年もあれば新しい自我――侵略者としての意思――が生まれているか、何もせずに海に還るかしているはず。そのため、薄雲の目の前で死んだのであろう実の姉とは考えづらかった。艦娘も深海棲艦程ではないが同じ顔の別個体が当たり前のようにいる種族だ。姉は姉だろうが、薄雲の知る姉ではなく、別の生まれの姉。
「とはいえ、それが薄雲ちゃんのお姉さんであると確定しているわけでも無し。見たわけじゃないから判断は出来ないわぁ」
「まぁそうね。貴女達はちゃんと警戒しておいた方がいいって話よ。大体どの辺りで見たかも伝えておくわ」
「そうねぇ、それを知っておけば万が一の時にいろいろ出来るわぁ。それに、あのヒト達にもこのことは伝えてもいいかもしれないし」
「あのヒト？　ここに新しい客が来たわけ？」
「ええ、ついに人間さん達とお近づきになれたのよぉ」
　これは流石に予想していなかったらしく、戦艦棲姫も初めて声を荒らげた。自分が擬態などをして社会に潜り込んで堪能している間に、この場所から動けない中間棲姫かどうやってと疑問ばかりだったようだが、春雨がきっかけとなって繋がりが出来たことを伝えると、妙に納得した様子。
「なんて羨ましい。私もそれくらい仲良くしたいわねぇ。人間はともかく、艦娘はどうしても私の顔を見ると攻撃してきちゃうし」
「それはまだ仕方ないわぁ。でも、今回の交流からそんな関係がうまく拡がっていってほしいとは思っているのよぉ」
「そうね。無駄な争いをするくらいなら、共通の文化で一緒に楽しめばいいのよ。服飾なんて一番わかりやすく交流出来ると思うんだけれどね」
　自分の別個体が忌々しいと冗談を交えつつ、この話は一度終わりにした。彼女から中間棲姫に話したいということはこれだけだったし、これ以上話しても何の進展もしなそう。それに、話せば話すほど発作の被害が拡大しかねない。

ここで手に入れた情報は、次に鎮守府から誰かやってきた時に提供される。これで時間の解決に繋がることを祈りつつ、施設全体でも少しだけ警戒の方向に動くように。

これが吉と出るか凶と出るかは、まだわからない。

朗報を届けに

戦艦棲姫から詳細を聞き、施設側の対応としては、一応の警戒という形で話は纏まった。その深海棲艦が施設に害があるモノかどうかは現状わからないが、万が一のことを考えるのなら、最初からそこを視野に入れておく方がいい。

この話を聞いて発作を起こした薄雲と起こしかけた春雨は、少しして回復。その姿を見て戦艦棲姫は心底安堵の息を漏らした。自分がきっかけで倒れたとなれば、寝覚めも悪い。

なんでも、こんな明るい時に表立って動くのはまずいということで、外が暗くなってから出て行くことにしているらしい。つまり、今日明るいうちは、この施設に滞在させてもらうとのこと。食事を提供してもらう代わりに、漁を手伝うとのこと。自分の食べる分は自分で獲れということのようだ。

「でしたら、せっかくですし私も漁に行っていいですか」

「いいわよ。アンタは戦艦とは初顔合わせだし、今日の短い時間でしっかり付き合っておきなさいな。そいつも結構話せるヤツだから」

ということで、漁のメンバーは春雨。そこに薄雲とジェーナスが加わり、いつもの3人組と戦艦棲姫という組み合わせとなった。いつもなら飛行場姫や伊47も加わるのだが、今日は別件で動くとのこと。

別に食べ物が無いというわけではなく、むしろまだまだ有り余るほどに保存されているのだが、そういう気持ちで行った方が楽しいという戦艦棲姫の言葉から、これで獲れなければ昼食は無いくらいの意気込みで向かうことになった。

みんなで少し沖の方に行き、釣りをスタート。別方向を向くのは堤防で釣りをしていた時と同じであるため、ここからはしばらくお喋りの時間。寂しさを紛らわすための会話で春雨と薄雲の発作を抑え込む。

「あの2人とは付き合いが長いんですか？」

「そうねぇ、初めてここに来たときは、もうジェーナスがいたときくらいだったかしら」

「ええ！　私も初めて見たときはすっごく驚いちゃった！　敵が来たのかと思ったのよ！」
　そんな中、ちゃんと聞いていなかったから戦艦棲姫の人となりを聞いていく春雨。そうやって仲良くなっていこうとしていくのは、春雨なりの努力である。
　ここの施設の者は、深海棲艦化したからなのか、コミュニケーション能力がかなり高い。春雨もそれに倣って前向きに進む。戦艦棲姫も穏健派だからか同じようにその能力が高いので、それでも普通に会話は進み、進めば進むほど仲良くなれる。
「私みたいな深海棲艦が他にいるなんて知らない時だったから、あの2人の存在は本当に心強くてね。仲間がいるっていうのを知ってるだけでも、毎日が楽しくなるのよ。ここだけじゃない、他の場所にも同じ考え方の子がいるんじゃないかって思えるから」
「いたんですか？」
「ええ、いたわ。例えば、物集めが好きな陸上施設型のメガネ。私が艤装で連れ出して、一緒に百貨店に行ったりもしたのよ？　服を見繕ってあげたりして。あの子は私みたいに角が無いから、擬態が簡単そうで羨ましかったわ」
　楽しそうに話す戦艦棲姫の声を聞いていると、春雨達も自然と楽しくなってくる。寂しさなんて全く感じず。
　深海棲艦と化してからは、この施設が世界の全てになっている。その世界の外側に、自分達を受け入れてくれそうな同胞（はらから）がいることを実体験も含めて話してくれたことで、生きていく励みにもなる。
「この1ヶ月ではどこに行ってきたんですか？」
「そうねぇ、いろいろ回ってきたけど、北の方にここと違う姉妹の陸上施設型がいてね……」
　話しながらも釣りは続き、戦艦棲姫も自分の取り分くらいはしっかりと手に入れていた。これなら食べる分には困らないなと笑いながら、最後まで戦艦棲姫の口が止まることは無かった。
　楽しい時間を過ごせたことで、発作が起きていたことを忘れる程にまで回復している。春雨も薄雲も、精神的な部分の回復に繋がってい

た。

午前中いっぱいを使って漁を終わらせ、大漁とまでは言わないものの充分な釣果を得ることが出来た帰り道、陣地に入ろうとしたところで戦艦棲姫が不意に後ろを向く。そちらにあるのはいつも見ている大海原であり、さっきまで漁をしていた沖。

「戦艦様、どうしました？」

「何かこっちに来てる気がするんだけど」

海の向こう側、３人が見ても何も見えない。施設の者の中では、おそらくコマンダン・テストしか確認が出来ないような場所を、戦艦棲姫はしっかりとその目に捉えていた。

旅をしているという特性上、周囲の危険をいち早く察知するために、目が非常にいい。コマンダン・テスト以上のそれのおかげで、今まで一度も人間や艦娘に見つかることなく旅を楽しむことが出来ている。

今回もその力のおかげで誰よりも早くその存在を察知した。拙いものだった場合は、すぐに中間棲姫か飛行場姫に伝えなければならない。嫌でも緊張が走る。

「何アレ、真っ直ぐこっちに向かってきてるわ。艦娘……？」

それを聞いた瞬間、３人組はすぐにピンと来た。ここ最近で艦娘と言ったら、もう先日の和睦を結んだ相手しか考えられない。それ以外の艦娘にはまだこちらのことがバレていないはずだし、哨戒機すら飛んでいない状態で無警戒でこちらに来るだなんて、こちらのことを理解している証拠だ。

「えっと、それってもしかして……銀髪で三つ編みですか？」

「そうね、１人はそれだわ。あと似たような制服の子が何人かいるわね」

確定した。真っ先に聞いたのは海風がいるかどうか。該当する特徴に対して、いると答えられた上、似たような制服もいると言われればもう絶対である。おそらく山風と江風だ。

和睦協定からまだ2日しか経過していないが、新たにここに来る用事が出来たらしい。またいらっしゃいと言っていた中間棲姫は、これを大歓迎することだろう。
「大丈夫、私達の味方です。姉姫様から和睦協定を結んだことって聞いていますか？」
「ええ、ここに出る前にね。もしかしてアレがそうなの？」
「はい。さっき言った子は、私の妹なんです。ここに来る場合は、その子が基本的には来ると思いますので」
自然と春雨の声はテンションが上がっていた。また会いに来るという約束が守られたことと、単純に妹に会えることに、喜びが隠せない。薄雲とジェーナスも、そんな春雨に引っ張られるように楽しそうだった。
逆に戦艦棲姫は、初めて艦娘とまともに話す機会が与えられると感じて、別のベクトルで緊張感が高まっていた。ただでさえ自分は艦娘に警戒されやすいため、姿を見られた瞬間に攻撃を受けるなんてこともあるかもしれないと思ったからである。
「警戒されないように、服だけは替えておくわ。いつもの通りだと艦娘って落ち着かないでしょ」
「あー……そうですね。すみません……」
「春雨が謝ることは無いわ。ホント、私の別個体のせいでいい迷惑よ」
そのままだと本当に攻撃されかねないので、今だけは人間味のある服装にチェンジ。そもそも海の上に立っているというだけでも艦娘か深海棲艦のどちらかになるのだが、素の状態よりはマシだろう。
ということで、戦艦棲姫はいつものネグリジェ風ワンピースから、かなり落ち着いたブラウスとパンツスタイルに。さらにはすぐに戦艦棲姫とわからないように髪まで結んだ。ぱっと見、どこかのモデルかと見間違う程に似合っており、またもや春雨は見惚れることに。
「流石よね。ウィンドウショッピングでいろんなブランド見て回ってるだけあるわ」
「私達には真似出来ないセンスです。背も高いですし、美形ですよね」
「ありがと。貴女達にも合う服があるから、今度見繕ってあげる」

ジェーナスと薄雲も、戦艦棲姫のその姿に惚れ惚れしていた。深海棲艦の中でも屈指のセンスの良さのおかげで、きっと艦娘側も警戒を解いてくれるだろう。

そうこうしているうちに、春雨達にもその姿が見えるくらいになっていた。戦艦棲姫が言っていた通り、先頭には海風。その後ろに江風と涼風、そして山風の姿が見えた。

駆逐隊失踪事件の影響もあり、万が一敵と交戦した時のことを考えて、駆逐隊だけでここに来ることは無く随伴艦が配備されていた。千歳と千代田という軽空母2人は今回も一緒だが、それよりも戦力を高めるために、戦艦1人が追加。

「Ｈｅｙ、春雨ぇー！　久しぶりネー！」

「金剛さん！　お久しぶりです！」

その戦艦というのが、飛び抜けて明るく独特な言葉遣いをする高速戦艦、金剛。春雨の艦娘時代には一緒に出撃することもよくあった大先輩。鎮守府の主力戦艦であり、その持ち前の明るさと、こちら側の深海棲艦に負けず劣らずのコミュニケーション能力で、こういう場に出てくることも多い。

秘書艦としては五月雨の方が場数が多いので任せられることは多いが、金剛は2番手と言えるほどだろう。提督からの信頼も厚く、中間棲姫達に是非とも会ってほしいということでこの部隊に組み込まれたようだ。

「姉さん、2日ぶりです」

「うん、海風、元気だった？」

「はい、体調も戻ったので、いつも通りだと思います」

海風は真っ先に春雨の側へ。施設に一晩宿泊する前のような疲れ果てた表情では無くなっており、春雨のよく知る元気で真面目な海風に戻っている。

実際は壊れかけの心が完治しているわけでは無いのだが、鳴りを潜めているのは確かであり、このまま行けば完治も見えるだろう。そういう意味でも春雨は安心している。

「そちらの方は先日に見かけませんでしたが……」

「ああ、このヒトは今日の朝に施設に来た人で、姉姫様と妹姫様のお友達なの」
「私も艦娘とは仲良くしたいと思ってるのよ。だから、攻撃しないでね？」
「あ、は、はい、よろしくお願いします」
　服と髪型を変えたことで、すぐに戦艦棲姫とはバレなかったようで、海風達もすぐに受け入れることが出来ていた。謎の深海棲艦ということで簡単に納得出来る。
　ここにいるということは、基本的には人間や艦娘に対して悪い感情を持っていないということに他ならない。それを知っている状態でここに来ているのだから、初めて見る者がそこにいたとしても、それが誰であれ春雨の仲間であるということはそうなる。
「Ｏｈ・・・ 敵意のない戦艦棲姫というのは、わかっていてもビックリしちゃうヨー」
　金剛だけはその正体を一瞬で見抜いていた。しかし、攻撃をするつもりもなく、艤装も動かすことが無かった辺り、非常に寛容である。
　逆に戦艦棲姫という名前を聞いた途端に身構えたのは他の６人。やはりその名前だけでも警戒に値する存在らしい。
「もう、せっかくこういう風にならないようにいろいろ変えていたのに。貴女、目がいい代わりに空気が読めないのかしら」
「Ｓｏｒｒｙ．　そんなつもりは無かったんだけどネ」
「まぁいいけど。この子達にも言ったけど、ホント別個体が面倒なことしてくれてるのよね」
　戦艦棲姫の気苦労が見える。
　流石にそんな態度を見せたら身構えるのも失礼と感じ、海風達はすぐに臨戦態勢を解いた。穏健派の深海棲艦なのだから、相手がなんであれこちらに攻撃するつもりは一切ない。だからこそ和睦協定を結んでいるのだ。艦娘側からそれを破るようなことがあってはならない。
「なんだか、他人のような気がしないのよね、あの戦艦のヒト。コンゴーだっけ」

「そうなの？」
「私のお姉ちゃんにちょっと似てるのよ。あんなに大人じゃあ無いんだけどさ」
ジェーナスはジェーナスで、金剛に対して不思議な感覚を得ているらしい。そのおかげか、ここでは初顔合わせではあるのだがすぐに懐いた。
「あ、それで今日ここに来たのは何かあったの？」
挨拶もそこそこに、ここに来た本題を聞き出す。本来なら中間棲姫がいる場で聞くべきだとは思うのだが、施設まで通していいかの判断は一応しておくべきと考えた。
別に警戒する相手では無いことも理解しているのだが、念のため。施設を守るために、例え相手が実の妹だとしても、そこは怠らない。
「そ、そうでした、今回は良いニュースです」
「良いニュース？」
「はい。提督が大本営の話がわかる人にこの件を掛け合ってくれました。その結果、現状維持を優先してもいいということです」
つまり、さらに人間の一部の者が、穏健派の深海棲艦のことを認めてくれたということである。詳細は中間棲姫のいる場所で話したいということのようだが、今はそれが知れただけでも喜ばしいことだった。

さらに進んでいく和睦の道。謎の深海棲艦の件もあるが、穏健派の深海棲艦としては、未来は明るい方向に進んでいることは間違いない。

施設から鎮守府へ

朗報を届けにやってきた艦娘達の部隊は、漁を終えた春雨達が施設へと連れていく。連絡を取る手段を作っていないため、どうしてもアポ無しでの突撃になってしまうのだが、施設側がいつでもフリーと言っても過言では無いような状況なので、何も問題は無かった。

今日の中間棲姫は農作業ではなく施設内の掃除をしていた。そのため、施設に入ったらちょうど一段落ついているところに遭遇。都合よく飛行場姫もいたため、ここにいる純粋な深海棲艦は、戦艦棲姫も含めて勢揃いとなった。

「姉姫様、妹姫様、お客様です」

「あら、アンタ達、また来たのね」

「あら、あらあらあら、いらっしゃい。また来てくれて嬉しいわぁ」

いつものペースの飛行場姫と、満面の笑みで対応する中間棲姫。穏健派の深海棲艦が訪れるだけでも喜ぶのに、艦娘の客が来ようものなら、それ以上に大喜びである。頻繁に会うわけではないとはいえ、長年の友人である戦艦棲姫すら見たことのないテンションだったようだ。

「Ｈｅｙ、貴女が噂の優しいＡｂｙｓｓａｌ（深海）ｐｒｉｎｃｅｓｓ（棲艦）達ですネー！」

「あらあら、新しいヒトも来てくれたのねぇ。どうも初めまして。私はここで姉姫と呼ばれているわぁ」

「私は金剛デース！　よろしくお願いシマース！」

金剛は金剛でテンション高く中間棲姫と挨拶を交わす。初対面とは思えないくらいの距離の近さであるが、それがお互いの良さでもあるので、誰も文句は言わない。驚きはするが。

「早速デスが、貴女達との和睦の道が、大本営の人に認められたデース！」

「あらぁ！　それは嬉しいわぁ」

「あの時の提督がどうにかしてくれたのね。良かったわ」

細かく言うとひとまずは現状維持ということになっただけなのだ

が、それでも鎮守府に強引な討伐命令が出たわけでもなく、今の関係を続けていけばいいという方向になったのは、どちらの組織としてもありがたいことだった。こうやって艦娘が直々に施設を訪ねることも、何も問題視されない。

しかし、通信機器を置いていくということは出来ず、真の意味で現状維持を徹底させられている。情報交換をするのは構わないし、鎮守府側の情報も多少なら伝えてもいいが、技術を与えるのはＮＧとされた。

とはいえ、割と自由に行き来することが許されたことにより、姉妹姫や所属する元艦娘が許すかどうかはさておき、慰安施設のように心を癒しに来ることは可能となっている。

特に海風は、中間棲姫からも指摘されているくらいに心がギリギリな状態だ。山風から直談判されるというとてもレアな事件が発生し、提督がここに遣いを送るときは必ず海風を入れると決めた程だ。

「今日はそれを伝えに来てくれたのかしらぁ」

「そんなところデース。あとは私が顔合わせに来たのもありマース」

鎮守府の艦娘達は、全員が提督の意思に同調する者。ここにいる深海棲艦達が話せる相手であることが実証されているのだから、敵対する理由が無い。ここで裏切るような相手では無いことも、提督自身が話しているために理解している。

そこに金剛という中間棲姫達にとっては新たな艦娘を見せ、それが攻撃の意思を見せない上に、望んでいるほどに仲良くしようとしてくるのだ。ここの深海棲艦達の信用を勝ち取るための布陣だった。元々信用はされていたが、それをさらに押し上げることを目的とした最善の策。

この場に戦艦棲姫がいたのも好都合だった。中間棲姫と飛行場姫以外にも穏健派がいるという証拠にもなり、さらに友好関係を築くことが出来れば、今後の和平に向けて次々と道を進むことが出来るはずだ。

「突然こんなにヒトが増えるとは思っていなかったから、お昼ご飯が全く足りないわぁ。どうしましょう妹ちゃん」

「少し待っていてくれたら振る舞えると思うのだけれど」
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍデース。私達は私達で戦闘糧食（おにぎり）を持ってきてるからネー。それに、突然押しかけておいてご飯を寄越せだなんて、そんなＩｍｐｏｌｉｔｅｎｅｓｓ（失礼）なことはしませーン」
　テンションが高く、底抜けに明るいが故に油断しがちだが、金剛は鎮守府の艦娘の中でも古参も古参。五月雨の次くらいに鎮守府に配属したくらいの艦娘である。
　長く艦娘という姿で生活しているため、この辺りの礼儀はしっかりとしており、ここに来る前に菓子折の１つでも持っていくかを提督に聞いていた程である。
「こちらもそちらにお話があるのよねぇ。この子がちょっとした情報を持ってきてくれたの。これは貴女達にも聞いてもらいたいから、本当に都合が良かったわぁ」
「だから、遠慮せずここでお昼を食べて行きなさい。すぐに、えーっと……７人分ね。追加してあげるから。おにぎりがあるなら米は要らないでしょ。オカズなら用意するからちょっと待ってなさいな」
「んー、話があるというのなら、お言葉に甘えマース。海風、良かったデスか？」
「あ、は、はい。大丈夫です。提督にはこちらで多少時間を使ってもいいと言われていますので」
　一応この部隊の隊長は海風ということになっているようだが、金剛の方が立ち位置としては上にいるようである。
「姉姫さん、妹姫さん、今日も少しの時間ですが、よろしくお願いします」
「はぁい、私達はいつでも歓迎だから、大丈夫よぉ。海風ちゃんも、春雨ちゃんと遊んでていいからねぇ」
「うぇっ!?　え、は、はぃぃ……」
　顔を真っ赤にして俯く海風に、その場は小さな笑いに包まれた。

　飛行場姫を中心に、リシュリューとコマンダン・テスト、そして春

雨も手伝ったことで、追加の7人分はすぐに完成。しかし、ダイニングにそんな人数が入れるわけもなかったため、子供組は外で食べようとジェーナスが提案。そして駆逐艦全員と伊４７はそのままピクニック感覚で食事となった。

そうなるのではと最初から考えていた飛行場姫は、施設組の食事もおにぎりに変更。オカズもそれらしく外で食べやすいものを取り揃えるという柔軟性を見せつけた。

「何でも出来ますね妹姫さん……」

「ね。お弁当まで作れちゃうんだもんね。ああ、お漬物美味しい」

海風はちゃっかり春雨の隣を陣取っている。むしろ、山風が筆頭になり、海風の心を癒すために画策した結果そうなるように仕向けていた。春雨は気づいていないかもしれないが、薄雲やジェーナスもそこに参加していたりする。そして一番乗り気だったのは松竹姉妹だったことは言うまでもない。

「そっちの鎮守府のこと、いろいろ教えてほしいわ！」

「はい、私も気になります。春雨ちゃんがいた場所って、どんなところなのかな」

そして、暇をさせないようにすかさずジェーナスと薄雲が話題提供。2人の仲を取り持つかの如く、しかしそういうことは感じさせないくらいに自然に、鎮守府の駆逐隊全体への質問。

海風だけではない。山風だって、江風や涼風だって、表には見せていないだけで今まで大分ストレスを溜め込んできたはずだ。それを見越して、ここで癒されてもらおうという算段である。

「お、いいねぇ。海風の姉貴、いろいろ話しちまおうぜ」

「な、何から話せばいいのやら……」

「春雨姉が鎮守府でどんな感じだったかとか話せばいいんじゃね？」

江風と涼風が囃し立て、山風がそれを見守るという立ち位置がしっかり出来上がっていた。

海風の壊れかけの心は、ここでさらに癒されていくだろう。完全に壊れたわけではないのだから、癒され続ければ、そのヒビはわからない程にまでになるはずだ。

一方ダイニングには大人組が集まっていた。先程の中間棲姫がしたいと言っていた話を、この場でしてもらおうという算段である。
子供達には少し聞かせづらい話のようで、ジェーナスの提案は渡りに船だった。先程同じ話を戦艦棲姫からしてもらった時点で、薄雲が発作を起こし、春雨が起こしかけたことを考えると、発作を起こしやすい子供達は席を外してもらっていた方が都合が良かった。
「それで、話というのは？」
「この子がねぇ、見たことのない同胞（はらから）を見たっていうのよ。もしかしたら、何かに役に立つかと思って」
そこから、それを見た本人（戦艦棲姫）からの説明となる。
艦娘としては、見たことのない深海棲艦というのは普通なこと。大規模作戦が展開される場合は、基本的にデータベースに存在しない未知の深海棲艦が現れた時が殆どである。大きな戦いの時には知らない敵と戦うのが当たり前だったりする。
それが深海棲艦の視点になったら話は変わる。同じような個体が多いからこそ、別物かもしれないが大概は知っている。知らない個体でも、侵略者気質か穏健派気質かの2択になるので、話せば大体決着がつく。
しかし、今回はそれでわからないから戦艦棲姫も少し困っていたのだ。ただ懐いてくるわけでもなく、警戒や敵対もない。知性も見えず、こちらの行動を無視するような振る舞い。
侵略者気質でも同胞（はらから）なら話は出来たそうだ。一緒に人間滅ぼさないかというスナック感覚で侵略を勧められたりして遠慮したり、放っておいてくれと素っ気ない態度を取られたりと様々ではあるが、少なくとも会話は成立している。
「深海棲艦も不思議な性質なのね……」
一通り話を聞いた後、納得が行っているか行っていないかわからないように千歳が溜息交じりに呟く。
艦娘側からしてみれば、敵の生態なんて知らないことばかりだ。普段何をしているか、どういう考えを基に行動しているかなんて、艦娘

と同じだとは思っていない。
「深海棲艦でもわからない深海棲艦……デスカ。確かに、春雨達を襲った深海棲艦と何か関係があるかもしれませんネ」
「千歳お姉、前の対談の時、春雨が見たことのない深海棲艦だったって言ってたよね」
「ええ、あの子なら知ってる深海棲艦ならコードネームくらいは言うはず。本当に見たことがないモノだったと思う」
その姿を思い返すだけでも発作を起こしかけた程なのだから、詳細を聞くことは出来ない。姿形を鮮明に伝えてくれというのは酷である。
しかし、話を聞く限りでは、何かしらの関係を持っていてもおかしくは無かった。戦艦棲姫だから何もされなかっただけで、それが艦娘だった場合は容赦なく襲いかかっていた可能性は充分にある。
「それで、特徴が槍を持っている駆逐艦……でしたっけ」
「ええ、服はボロボロだったから判断がつかなかった。艤装は小さめ。髪が長くて、槍を持ってる、おそらく駆逐艦って感じね。薄雲が自分の姉さんと特徴が似てるって言っていたけれど」
「薄雲の姉……槍を持っている……叢雲ですね」
薄雲の姉、叢雲。大本営の貴婦人が隣に控えさせていた吹雪の妹でもある彼女は、姉妹の中では少しだけ異質な存在ではあるものの、どちらかと言えば普通な艦娘である。
その大きな特徴が、槍。近接戦闘が可能な兵装を持つ艦娘は少数だが存在しており、叢雲もその1人に該当する。槍を使う者というだけでもレアであり、駆逐艦では叢雲しかいない。それも、改装を進めるうちに使用しなくなってしまうのだから、よりレアだろう。
「こう、なんだかウサギの耳みたいな艤装はありませんでしたか？」
「それはあったら真っ先に言ってるわね。そういうのはなかった。パッと見でわかったのは槍だけ」
そして、叢雲の最大の特徴が、今千歳が聞いた艤装。頭の上でウサギの耳のように浮かんでいる特殊な艤装で、電探などの各種機能が備わっている万能艤装らしい。それが無いというのなら、その深海棲艦

は叢雲であるとは少し言いづらい。似ているだけの別物。
　しかし、黒い繭によって深海棲艦化したとなれば話は変わってくる。春雨を始め、ここにいる元艦娘は元々使っていた艤装とはかけ離れたモノを手に入れているのだ。それが叢雲では無いとするのは早計。
「わかりましタ。この件は提督に伝えておきマショウ。何処で発見したか教えてくだサーイ」
「ええ、海図とかあるかしら」
「はい、これ」
　千代田がタブレットを取り出し、近海のマップを表示させる。周りは本当に海ばかりで、何の目印もあるわけがないのだが、戦艦棲姫はおおよそここの辺りだと目星をつけて指差した。
　そこは、駆逐隊が襲われて消息を絶った場所からは大分離れた位置。捜索部隊が痕跡を調査している範囲からも離れた、海のど真ん中。この施設の近海とも言えない場所。陸からもかなり遠い。
「こんなところ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達も通らない場所よ。ねぇ？」
「Ｏｕｉ．　ここからだと、私の目でも見えません」
「哨戒機も届かないような場所ね。これだとアタシ達にもわからないわ」
　施設組でも知らないような場所である。そのため、わざわざ調査に行くこともせず、施設は警戒だけして放置の方向に持っていこうとしている。下手に行動したら藪蛇になりかねない。触らぬ神に祟りなし。
「これは鎮守府で調査するべきデスネ。ここからの帰りにちょっと寄るというのもやめた方が良さそうデース」
「しっかり準備をしてからってことですね。提督に指示を仰ぐべきよね」
「下手したら主力部隊を投入しなくちゃいけないかも」
　艦娘側も未知の深海棲艦ということで警戒は怠らない。かつて駆逐艦の姿をしておきながら、並の戦艦の数倍の力を持つ者もいた。それ故に、どんな相手にも手を抜かないのが基本方針である。

戦艦棲姫が見かけた謎の深海棲艦は、調査を鎮守府側に委託することで決着がついた。その場所は鎮守府からも施設からも遠く離れた海の真ん中。そこを調査することが、吉と出るか凶と出るかは、まだわからない。

帰路にて

昼食が終了し、大人組の情報交換会もそのまま終了。姉妹姫と戦艦棲姫の話は、金剛と千歳千代田姉妹がしっかりと聞き入れ、深海棲艦からしても未知の存在を必ず伝えると約束した。

ここに来るのは初めてである金剛は、そのコミュニケーション能力のおかげで、施設の長である中間棲姫と飛行場姫ととても仲良くなっており、先に来ていた千歳と千代田も呆気に取られる程であった。

その頃、その情報交換会の裏側で行なわれていたピクニック感覚の食事会も終了。海風は春雨と共に食事をすることで、壊れかけた心が今まで以上に癒されていた。

海風だけではなく、山風達海風の妹も、他の元艦娘達とはいい具合に仲良くなっていた。そういう時はジェーナスが中心となり、次々と会話を拡げていき、常に誰かしらが話している環境を作り上げていた程である。

「いやぁ、ただ飯を食ってるだけなのに、すっげぇ楽しンじまったなぁ」

「おにぎりもやけに美味く感じたよ。またこうやって話しながら食いたいもんだねぇ」

江風と涼風もご満悦。海風が元気になっていくところを見ているのも楽しめた要素の1つのようである。

「……海風姉……楽しそうだったね」

「そうかな……うん、そうね。楽しかった。姉さんともいっぱい話せたし、施設の人達とも随分仲良くなれたもの。ここは本当に……その、癒されるから」

「……良かった」

心底安心している山風。海風のことを一番心配しているのは、間違いなく山風である。ここでの海風の癒しは山風にとっても有益であり、不安の種を取り除くために必要なことであった。

その姿に松竹姉妹が反応しないのは、純粋に姉妹として気にかけているからだろう。海風は少し違う。尊敬からの心情ではなく、姉妹と

しての心情。
「私も沢山話せて楽しかった。海風、また来てね」
「はい、是非とも。またこうやって話したいですから」
「だね。私達はここから動かないから、いつでも来てね」
春雨も海風達がここに来るのはとても嬉しく、壊れた心に温かいものが染み渡るような感覚を得ている。ただ話すだけでも気分が良く、一緒にいるという実感がより身体に力を与えてくれた。
春雨としては、出来ればずっとここにいてほしいとすら思えていた。しかし、自分は深海棲艦であり、海風達は艦娘。関係性を現状維持にしてもいいとされているとしても、種族の違いはまだまだ超えられない。いくらそうなる前は姉妹だったとしても、今は完全な別物になってしまっているのだ。
ほんのりと、寂しさが膨らんできた。発作を起こすほどでは無いが、気分が良いものではなかった。帰したくない。ずっと側にいてほしい。そんな気持ちが少しずつ芽生えてくる。
だが、春雨は我慢した。それは確実に迷惑をかける言動だ。心が壊れていようが、艦娘としての考え方が残っているため、ちゃんと自制が利いた。
「Ｈｅｙ、海風ぇ――！　こっちの話も終わったデース！」
「わかりました。そろそろ帰投ですね」
金剛達が施設から出てきたことで、全てがお開きとなる。寂しさはさらに増したが、どうにか我慢した。
「姉さん、また来ます。必ず」
「うん、待ってる。気をつけてね」
「はい、勿論。姉さん達の仇を討つためにも」
姉という言葉に反応しかけるが、ここも我慢する。迷惑はかけられない。その気持ちを強く持って、どうにか。
それに気付いたか、薄雲とジェーナスがさりげなく春雨の隣に立った。松竹姉妹や伊４７も一緒。妹達とは離れ離れになるが、自分達が代わりにいるぞと言わんばかりに。
「皆さんも、姉さんをよろしくお願いします」

「任せて！　ハルサメは友達だから、ちゃんと守り続けるわ！」
「おはようからおやすみまで、春雨ちゃんには私達がついてるからね」
ジェーナスは胸をドンと張り、薄雲は春雨の手を軽く握る。それだけで、寂しさは少しだけ緩和された。
「俺達もいるからよ。安心してくれよな」
「そうそう、みんなが手を取り合って生きているから、ずっと大丈夫よ」
松竹姉妹も後ろから親指を立てた。任せろという気持ちがハッキリと出た、最も単純でわかりやすい行動である。
伊４７も無言ながら手を振ってアピールしていた。こちらも幸せアレルギーが少し危ないところまで来ていたが、せっかくのお客様なのだからと少し我慢していた。振っていない方の手は、小さく震えている。
「よかった。姉さんはここでも楽しめているんですね」
「うん、勿論。みんなのおかげで。だからさ、改めてまた来てよ」
「はい、それではまた」
これを最後の挨拶として、金剛達と合流。そのまま施設から発つことになった。金剛も大きく手を振って、満面の笑みで海へと戻っていく。また来るとしっかり約束して、ギリギリまで手を振っていてくれた。
水平線の向こう側に姿が消えるまでずっと見守り、あちらからも施設が見えなくなったところで、カハッと大きく息を吐いた。発作を耐えるのにも限界に来ていた。
今まで気丈に振る舞っていたのが嘘のように崩れ、自分を抱きしめるように腕を組んでから膝をつく。もう震えが自分で止められそうにないようで、蹲って。
「っあ……寂しい……寂しいよ……もっと、もっと話していたいのに……嫌、嫌だ、独りは嫌ぁ……」
「大丈夫、大丈夫よ。ハルサメ、あの子達はまた来てくれるし、今は私達がいるもの。独りじゃ無いわ」
ジェーナスを中心に、発作を起こした春雨を慰めていく。春雨の頑

張りはみんながよく理解しているので、囲むように陣取って独りではないことを証明していった。
「姉姫達が来てくれるまでは、私達でなんとかしましょ。これだけいれば充分だもの。ね？」
「うん、そうだね。春雨ちゃんの友達なんだから、みんなで仲良くしないとね」
ジェーナスと薄雲が両サイドから抱きつくことで、温もりを与えていく。包容力は姉妹姫には及ばないものの、同世代の友人の温もりをというのが大きく、春雨は徐々に落ち着いていった。
「見守っててやるのも、友達だもんな」
「ええ、私達はただ受け入れてあげるのが一番よ。受け入れてもらっているんだから」
流石に松竹姉妹まで囲うのは春雨が大変なことになってしまいそうなので控えていた。４人で抱きついても逆効果になりかねない。
「ヨナさんは大丈夫？　さっきもギリギリだったと思うけど……」
「……ありゃ？　ヨナがいねぇ。まぁ自分の身は自分が一番わかってるはずだもんな。大変だよなぁ幸せアレルギーってのは」
伊４７もギリギリだったが、申し訳ないと思いながらも早々にここから離れていたようだ。これ以上の幸せを感じたら、最悪春雨よりも酷い発作に苛まれることになる。彼女にとって、これは英断だった。
「うし、じゃあ春雨の傍にいてやらないとな。大丈夫、独りじゃあ無いぜ」
「そうよ、春雨さん。私達はいつでも傍にいるからね」
抱きつきはしないが、松竹姉妹も春雨に存在をアピールし、孤独を払拭させることに尽力した。

一方、帰路に就いた艦娘の部隊。金剛達大人組が姉妹姫と戦艦棲姫から聞いた謎の深海棲艦についての話を、帰りながらも共有していた。
対談の時のようにビデオ通話は出来ないが、通信機器は持っている

ため、施設から離れたところで鎮守府とも連絡を取り、金剛の口から語られるその話を全員で聞いていく。
とは言っても、通信出来るのは隊長である海風のみ。通信機器を一旦金剛に貸してからのことになる。
『なるほど、やはり謎の深海棲艦はいたということだね』
「Ｙｅｓ．　あちらでもわからない個体だそうデース。それをＲｅｓｅａｒｃｈ（調査）することが、事件の真相に繋がると思いマース」
部隊の中でも満場一致。駆逐隊が消息不明になったのは、その謎の深海棲艦が原因と見てもいいと考えている。春雨に話が聞けないので何とも言えないが、関係者である可能性は高い。
その謎の深海棲艦が駆逐艦叢雲に近い外見をしているということも、何かしらの繋がりがあるのではという話にもなってきた。それこそ、黒い繭による深海棲艦化で、適切な処置をされなかった結果、強大な力を持ったにもかかわらず、周囲の艦娘達に怒りと恨みを振りまくような存在になってしまっているのかもしれないと。
「場所は聞いてマース。私としては、主力部隊を使ったＲｅｓｅａｒｃｈ（調査）をすることが、一番だと思いマスネ」
『そうだね。金剛の意見を採用しよう。今日はこのまま帰ってきてもらって、明日から全力で調査をした方が良さそうだ』
「Ｙｅｓ．　その時は、私も力を貸しマース。みんなで力を合わせて、解決に向かいまショウ！」
その話を聞きながら、海風もやる気に満ち満ちていた。関係者ならば仇と同罪。話が出来るのなら、姉達を奪った張本人の居場所を聞き出して、この手で決着をつける。
少々黒い思考がついて回っているのも、海風の心が壊れかけている証拠だった。普段の優しい真面目な性格が、この事件のことになると薄れてしまうのだ。仕方ないにしても、妹達からしてみれば戦々恐々である。
「……海風姉……落ち着いてね」
「わかってる。これでも落ち着いてるつもり」
春雨との再会をする前よりは格段に落ち着いているため、山風もそ

れで一歩退く。だが、不安は取り除けない。いつか本当に壊れてしまうかもしれないと思うと、山風の方も胃がキリキリとしそうだった。
「それでは、このまま帰投しマース。朗報を待っててくだサーイ」
『ああ、楽し……てる……』
突然、通信の音声が不安定になった。ザリザリとノイズが走り、まるで電波妨害を受けているかのような状態に。話の最後ではあったのだが、今までに無かったことなので、すぐに通信を切ることはしなかった。
「提督ぅー？　私の声、聞こえてマスか？」
『少々聞こえ……いよう……何か……』
これを最後に通信が切れた。その瞬間、金剛の顔が真剣そのものに。
「おかしいデスね。こんな海の真ん中で障害が起きるなんて……皆サン、警戒してくだサイ。何か嫌な予感がしマス」
今までの経験上、こういうときには何かあると感じた金剛は、その場で全員に警戒態勢を指示した。常に電波良好な通信機器にノイズが走るだなんて、今までに無い。戦闘中でも破壊されない限りはまともに会話が出来たものである。
外部から干渉されている以外に考えられない状況だった。しかし、ここは周囲に何もない海のど真ん中。それこそ、姉妹姫の施設と同じ、むしろそれ以上に何もない場所。
「……哨戒機から報告。深海棲艦を発見……数は1」
千歳が艦載機からの報告を告げた。たった1体とはいえ、深海棲艦が見つかったらしい。しかし、そこからの様子がおかしい。
「……今までのデータベースとは照合出来ない、未知の個体と推測……ですって？」
「オイオイオイ、そりゃもしかして……」
「こっちでも確認！　多分、千歳お姉と同じ個体！」
千代田の艦載機からも同じ報告が来たようだ。やはりたった1体であり、謎の深海棲艦が近くにいる。
「撤退デス。そいつに見つからないように、最大戦速で鎮守府に向か

いマス。海風、いいデスね？」
「……倒さないんですか」
「やまやまデスが。私達の装備は戦える装備デス。でも、今は情報を届けることが先決デス。もし、万が一、その未知の個体に私達が全滅させられたら、あの子達の二の舞になりマス。それだけは避けなくちゃいけない」
　ただでさえ電波障害が引き起こされ、提督と連絡が出来ない状態だ。言ってしまえば、駆逐隊が消息不明になった時と同じ状況。ならば、同じようにやられるのは絶対に避けなくてはいけない。
「戦うことも大事デス。海の平和のためにはそれが一番デショウ。でも、それよりも大切なのは、命なんデスよ。死んだら元も子もないデス。それはわかりマスね？」
「……でも」
「少なくとも私は、こんな状況でヴァルハラに行くのは嫌デスね。万全な態勢で、全力でぶつかって、それで惜しくもというのなら、それが運命デース。受け入れマショウ。でも、今は違う。私達は、イイ深海棲艦との交流をして、世界の平和に向けて進んでいるところなんデスよ。だから海風、ここは折れてくだサイ」
　まだ不服そうではあったが、わかりましたと小さく呟いて、金剛に従った。隊長権限として全員に突撃を指示しそうではあったが、命が大切なのは海風自身も理解している。自分1人ならまだしも、他の者の命を背負っているのだ。
　施設で癒されていなければ、まず間違いなく突撃を選択していただろう。そこは、姉妹姫達に感謝している。
「撤退です。すぐに、急いで！」
「……ダメ、あっちの方が速い！」
　千歳が叫んだ時点で、もう視界にそれが入っていた。
　ボロボロの服を身に纏った、見たことのない深海棲艦だった。

未知の敵

施設から鎮守府へ帰投する艦娘達の前に、未知の深海棲艦が現れた。それはボロボロの服を身に纏った、今までに見たことのない姿をした者。施設で戦艦棲姫から伝えられていた者と同じである。

「槍持ち……戦艦棲姫が話していた個体ですね」

視界に入ったことで、その特徴もよくわかるようになった。千歳が呟いた通り、その未知の深海棲艦は、妙に黒ずんだ槍を携えていた。艦娘にも深海棲艦にもレアな武器を手にした個体。他にもそういう個体がいたとしても、ここ最近で話題になったのは戦艦棲姫が見かけたと言っていた存在のみ。

本来はもっと遠く、帰路には全く関係ない場所で発見されていることは、それを見た本人から伝えられている。ということは、その場所から移動してここにいるということに他ならない。

「……あのヒト達みたいに、穏健派ならいいんデスけどネ」

冗談交じりにそんなことを言いつつ、ジワリと冷や汗が出ている金剛。長く戦い続けているからか、見て相手の実力がある程度理解できた。

相手は駆逐艦の見た目をしているが全く別物の存在だ。いわゆる艦種詐欺が横行する深海棲艦界隈では、見た目で実力は測ってはいけない。アレは最悪、戦艦並みの力を有している可能性がある。

それを他所に、その姿を目にして頭に血が上ろうとしているのは、やはり海風だった。

自分達を襲ってくるであろう謎の深海棲艦ということは、姉達を殺し、春雨をあのカタチにした張本人と何かしらの関係があると考えてもおかしくはない。そう思うだけで、怒りが込み上げてきた。

「海風、抑えるデス。ああいう手合いにこそ、いつもの冷静さで行くべきデスよ」

先んじて金剛に注意された。その言葉は先程までの明るさは微塵もなく、冷たいものだった。いつ暴走して突っ込んでしまってもおかしくない状態ではあったが、大先輩の戦艦からの言葉のおかげで、頭

が一気に冷えた。
海風だって今まで幾度となく戦いを潜り抜けてきた歴戦の艦娘の1人だ。練度も高く、第二改装も済ませている。今までは姉達の頭抜けた才能に埋もれていた部分もあるが、捜索部隊の隊長を任せられる程の実力者なのだ。公私はちゃんと分ける。かなりギリギリだが。
その怒りは治らずとも、冷静にここを乗り切る。敵を沈めたい気持ちは今まで以上に強いが、今の目的は死なずに鎮守府に戻ることである。迎撃よりも撤退を優先。
この会話を聞いているのだから、ここにいる全員の意思は撤退という1本に絞られた。たった1人の深海棲艦相手に撤退戦というのは今までに無かったが、未知の相手にはそれくらい慎重に行っても足りないくらいである。
「まずいわね……あれだけ速いと空母はかなり不利よ」
「発艦だけはしておく。当たらないにしても、牽制にはなると思うから」
「そうね。金剛さん、私達はそうしておく」
「OKデース。ちとちよは回避に専念してくだサーイ」
空母はこういう時にどうしても不利になる。手が足りないとかでもないのだが、相手の回避性能が高すぎると、艦載機ではどうにも出来なくなる。ただでさえ動き回る敵に当てるのは、熟練の妖精さんでもなかなか上手くいかない。
逃げながらも未知の深海棲艦からは視線を外さない。追い付かれるのも時間の問題ではあるのだが、それでもギリギリまで鎮守府に近付いておきたかった。
通信が切れたことで、消息を絶った駆逐隊の二の舞にならないように、提督が援軍を出してくれる可能性は高い。それが合流してくれればまだ逃げやすくなるはず。
「第一次攻撃隊、発艦！　難しいかもしれないけど、がんばって！」
「攻撃隊、発艦開始！　出番よ、上手くやってね！」
追い付かれる前に千歳と千代田が艦載機を発艦。撤退をサポートするように、哨戒機ではなく攻撃隊を発艦した。足止めにすらなら

い可能性はあるものの、多少はあちらの速度を落とすことが出来るかもしれない。
そして、即座に攻撃を開始する。真正面からの射撃により牽制し、当たらないにしても足を止めてもらえれば撤退しやすくなるはずだ。
しかし、それが簡単にいくわけがなかった。
「なンだありゃ……」
江風が呆気に取られるのも無理は無かった。
その未知の深海棲艦は、その攻撃機からの射撃を全て、手に持つ槍で弾き飛ばしてしまっていたのだ。そもそも回避すらしていない。
近接武器を持つ艦娘は少数だが存在するものの、ここまで出来る者は、少なくとも彼女達の頭の中にはいなかった。あくまでもそれは、敵の懐に入った時の隠し技程度にしか考えていない。
中には今のようにその武器で敵の弾を斬り払う者もいるのかもしれないが、そんな神業のような所業を命懸けの実戦で行う余裕など、思い付く限りでは無かった。
「速度が落ちてねぇ！　迎撃するかい!?」
「私がやりマース！」
攻撃機の射撃は、言ってしまえば威力はそこまで高くない。1発1発が駆逐艦の主砲と同じくらいだが、複数の攻撃機が纏めて放つことで威力を高めているに過ぎない。
そのため、涼風の言葉に応じるように、それ以上の火力を一撃で叩き込める金剛が全員の前に躍り出た。元々殿（しんがり）だったのだが、盾となるかの如く移動し、向かってくる存在に向けてその主砲を全て向ける。
「撃ちマス！　Ｆｉｒｅ！」
轟音と共に放たれる砲撃。その精度は非常に高く、攻撃機の射撃を弾く未知の深海棲艦を葬り去る渾身の一撃となっている。まず間違いなく避けられないタイミングでの砲撃となったことで、その砲弾は真っ直ぐ向かっていった。
これすらも弾かれたら万事休す。砲撃は全て効かないということになってしまう。打つ手が無いとは言わないが、かなり厳しいのは確かだ。

しかし、悪い予感というのはよく当たる。
その砲撃を弾くことはしなかったが、代わりに真正面から斬り払った。真っ二つになった砲撃は左右に分かれ、未知の深海棲艦の真後ろへと飛んでいって着水。大きな水飛沫を上げるだけで終わった。
流石にここまでの大技をする場合は足を止める必要があるようだが、戦艦の主砲を真っ向から受け止めて無傷である。回避されるよりも、弾かれるよりも酷い有様。
「アー……これは困りマシタネ。私の砲撃もどうにかしてしまいマスか」
あまりに想定外な出来事に笑えてきてしまった金剛。一切の回避をせずに真正面から突っ込んでくる駆逐艦を、全力で砲撃を放っても止めることが出来なかった。
妙に冷静に、あれなら駆逐隊がやられてしまっても仕方ないかもと思ってしまった。春雨達が戦った未知の深海棲艦がどんなスペックをしていたかはわからないが、少なくとも初見でアレは無理だ。どれだけ実力があっても、呆気なく踏み潰される。春雨が生き残っただけでも奇跡なのかもしれない。あれが生き残ったと言えるかはさておき。
金剛でも止められないとなった途端に、絶望感が部隊から漂い始める。金剛でダメなら、自分達では確実に止められない。成す術なくやられる可能性すら出てきてしまった。いつもは騒がしい江風や涼風も、今回ばかりは今までにない緊張感で小さく震えた。
「怯んじゃダメ！」
それを払拭するべく叫んだのは、海風だった。冷静でいられなくなりそうだったが、この絶望的な状況の方が拙いと判断し、怒りを振り払った。
それでもギリギリだ。向かってくる深海棲艦に対して、今すぐにでも飛び出したくて仕方ない。姉の仇に繋がるであろう敵を、その手で沈めてやりたい。そんな気持ちは常に沸き立っている。
「力を合わせれば、この状態を打開出来る！　しなくちゃいけないの！　姉さん達の仇を討つまでは、私は死なないんだから！」

その根底にあるのは復讐心。それにより心を奮い立たせているのだから、ただでさえ壊れかけの心のヒビは、より深く刻まれようとしていた。
施設で春雨と話し、心は癒されていても、一度入ったヒビはもう元には戻らない。あくまでも壊れづらくしていただけに過ぎないのだ。きっかけさえあれば、いつでも壊れていく。
「海風の言う通り、力を合わせて迎撃するデース！　撤退はもう厳しいでしょうカラ、今度は持久戦に入りマース！」
必ず来るはずの援軍を待つため、撤退よりまともに攻撃を加えることに専念する方向に作戦変更。斬り払いと弾き飛ばしはあるかもしれないが、ここにいる全員で撃ち続ければある程度は動きを抑制出来るはずだ。そう信じて。
いずれ弾切れは来る。そうなった時が本当の絶望だろう。しかし、それまではいくらでも考える時間がある。それすらも許されない可能性があるが、そんなことを考えている暇なんてない。
「足止めなら、魚雷！　みんな、雷撃準備！」
海風の号令で、駆逐艦達は一斉に魚雷を構えた。４人同時に広範囲に魚雷を放てば、先程の主砲斬り払いと同じように動きを止めるはずと信じて。
だが、それに対しても先手を打つかのように、未知の深海棲艦も魚雷を放っていた。自分の前に来る魚雷のみを破壊するように、進路を妨害するモノのみを消し飛ばすように、魚雷に魚雷を直撃させて一気に突撃。
魚雷同士の爆発を突き抜けるように、海水を引っ被ることなど関係なしに直進してきたことで、速さを誤認してしまう。この瞬間だけはどんな艦娘よりも速く見えた。
「まずいネ……！　海風狙われてるヨ！」
「……っ!?」
未知の深海棲艦の狙いは海風。今の号令をしたことで、この駆逐艦の中でリーダー格なのだと認識された。そこが崩れれば、この部隊は完全に終わると判断していた。

水柱のせいで距離が計算出来ず、うまく動くことが出来ない瞬間を狙われたため、海風はほぼ無防備の状態だった。
声をかけても無視の一点張りだったと戦艦棲姫が話していたのを、金剛は思い出した。なのに今はどうだ。そんな姿を全く想像させず、艦娘に対して無表情に攻撃を仕掛けてくる。
つまり、艦娘にしか反応しないのだ。深海棲艦、同胞(はらから)には用がないので無視。しかし、艦娘は始末する対象なのでコレ。たまたま生まれた深海棲艦だとしても、この考え方はどこかおかしい。
これでは、侵略者でも何でもない。艦娘を殺すためだけに生まれたロボットだ。正しく思考しているのかすらわからない。
「やらせないネ!」
未知の深海棲艦は基本的に槍しか使わない。海風を狙っているかもしれないが、魚雷を放つわけでもなく、ただ突撃して槍による刺突で殺害するつもりでしかない。
ならばと海風を守るように立ち塞がった金剛が、ドンピシャのタイミングでその槍を掴んだ。刃を掴むわけにはいかないため、海風に刺さる前にその柄を握りしめる。
明るく楽しい金剛だって、艦種は戦艦。他のどの艦種よりも膂力を持ち、主砲が無くとも戦闘力はピカイチである。いくら深海棲艦と言えども、武器そのものを掴まれては刺突は出来ない程に。
そして今の金剛は、仲間を守るという一点で、本来の力の数倍は出ている。その槍が普通の槍ならば、握り締めて折ってしまうくらいの握力だった。無論、金剛自身にも影響がありそうだが、そこは命を落とすことに比べれば安いモノと飄々と言ってのけるだろう。
「……シノ……ギル……メ……」
何かを呟いているのが聞こえた。その瞬間、小さめの艤装の横に、駆逐艦の主砲が生成された。深海棲艦なのだから、艤装を自由に出し入れするのは金剛でも理解している。むしろ、こうやって掴まれることを期待しての突撃だったと、今更ながらに気付いてしまった。
この深海棲艦の真の狙いは金剛だった。そうでなければ、今までの調査の段階で海風達が狙われていないわけがない。今回の部隊に金

剛が加わったことで、初めてここまでの反応を見せたのだ。
「……シズメ」
槍を掴んだ状態では超至近距離の砲撃なんて避けられるわけがない。しかし、今ここで咄嗟に回避した場合、真後ろにいる海風に直撃してしまう。どちらが犠牲になるかを選択しなくてはいけなくなった。
金剛はそんな時、仲間を犠牲にするような性格ではない。自分が犠牲になることを考える。だからこそ、咄嗟に身体が動く。
「Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｌｏｏｏｖｅ！」
槍を引っ張るように身体を捻り、自らの艤装を敵にぶち当てるかのように前に押し出す。当たらずとも、砲撃から身を守るための最善の動き。
自分も海風も守れる。犠牲になるのは金剛の艤装のみ。その主砲の威力が駆逐艦のそれではないことも理解しているが、次に繋ぐためにはその程度の痛みは恐れない。それが金剛である。
しかし、ここで金剛が艤装を失ったら、まず間違いなく勝ち目が無くなる。援軍到着の気配は未だにない。それだけ離れた場所なのだ。最速で出撃したとしても、到着はまだまだ先。この行動は、一時の延命処置に過ぎない。
砲撃は思惑通りに艤装に直撃し、海風は無傷。しかし、金剛はその爆風でダメージを負い、艤装も半壊まで行かない程度に破壊されてしまった。やはり駆逐艦の主砲の火力を凌駕している。
「金剛さん！」
「私はまだ、やられないヨ！　だから、みんなも諦めたら、Ｎｏだからネ！」
その言葉で鼓舞された。震えは止まり、艦娘としての矜持を取り戻す。恐怖など何処にもない。だが玉砕も考えていない。勝ちに行く。

そして、その言葉、思いが、この事態を好転させる。
激しく海面が波立った瞬間、その未知の深海棲艦のみを串刺しにす

るかの如く、謎の角が海中から突き出された。
寸前で回避されてしまったものの、その角を持つ何かがそのまま浮上し、金剛を巻き込んで姿を現す。
「なんか騒がしいと思ったけど、こういうのは良くないヨナ。こんごーさん、ヨナ、加勢します」
現れたのは伊４７。深海棲艦としての巨大な艤装を携えて、この絶望の海戦に参戦した。

姫の力

未知の深海棲艦と遭遇した艦娘の部隊。艦載機の射撃は全て弾かれ、戦艦主砲は斬り払われ、駆逐艦達の魚雷にも魚雷をぶつけて回避するほどの圧倒的な力を前に、主力戦艦である金剛すらも手玉に取られてしまう。

そして、その攻撃はついに金剛に届いてしまった。海風を狙った敵の槍による刺突を金剛が受け止めたことにより、その隙を突いて零距離射撃を喰らってしまった。咄嗟に身を翻したことで、艤装を犠牲に自分の命を守ったのだが、それによりジリ貧状態に。

だがここで、艦娘側に援軍が現れた。施設側からここまで来ていた伊４７が、この戦いに気付いていたのだ。

「なんか騒がしいと思ったけど、こういうのは良くないヨナ。こんごーさん、ヨナ、加勢します」

伊４７と同時に現れたのは、本人の倍以上はある艤装。それは額に鋭利な角を携え、筋骨隆々としたヒト1人分の大きさの腕を一対生やした、イッカクのような生態兵器。その胴体部分にちょこんと腰掛けた伊４７は、黒ずんだ両腕を所々真紅に輝かせ、敵として認識した未知の深海棲艦を見据える。

今は幸せアレルギーによる体調不良は抑え込まれているようで、顔色も悪くない。いち早く施設から離れたことが功を奏していた。

「貴女は……施設の子デスね。よく気付いてくれマシタ」

「ヨナ、ずっとあの場所にいすぎると、幸せアレルギーで体調崩しちゃうの。だから、あの後すぐに海に入ってたんだけど……うん、そうしておいて良かった。みんなを、仲間を、助けられるヨナ」

本来なら潜水艦、海の上で活動するような深海棲艦ではないのだが、今回は艦娘達を守るために、ここまで出てきていた。十全の力を発揮出来るわけではなくとも、充分に戦えるのが姫級であるヨナの実力である。

「Ｓｏｒｒｙ……私は艤装が危ないデス。海風……ここから離れるのを手伝ってくだサイ」

救われた海風だが、そのせいで金剛が傷を負ったことで、またもや心が悲鳴を上げる。復讐心で奮い立たせた心は、今度は罪悪感によりガタつき始めた。
中間棲姫からも心配される程に心が不安定な状態である海風が、次から次へと揺らぐことばかりが発生しているので、春雨と再会する前までとは違った理由で崩れかけていた。
「海風姉……しっかりして……！　あたしも手伝うから、金剛さんを、ここから……！」
「えっ、あ、ご、ごめんなさい……すぐに」
山風からの声掛けで正気に戻った海風が、２人がかりで金剛を曳航して戦場から少しだけ離れる。
未知の深海棲艦はそれを見逃すほど甘くなく、即座にそれを食い止めるために動き出したが、先程とは状況が違う。ここには艤装を展開した伊４７がいるのだ。
並ではない速度で動き出したというのに、それに追いつく速度で艤装が動き出し、その豪腕で進路を塞いだ。
「行かせるわけがないヨナ」
その大きさからは考えられない速度で動き回り、金剛には触れさせないように立ち回る。そんな動きの中でも伊４７が振り落とされるようなこともなく、まるで飼い慣らしているかのように自由自在に操った。
それだけされても、敵はしっかりと回避をしている。しかし、先程までとは違い、その手に持つ槍を使った弾き飛ばしや斬り払いなんてやっている余裕がないようで、回避一辺倒になっていた。
獣の如く獰猛に立ち向かってくる伊４７の艤装の質量を相手にしたら、そんなことをしている余裕なんて何処にもない。掠るだけでも重傷になるであろう豪腕を、とんでもない速度で振り回しているのだ。それが敵であっても同情してしまう程のパワフルな戦い方。
先程まで手も足も出ない相手だった未知の深海棲艦が、伊４７が１人で肉薄している。しかも、伊４７は敵を沈めようとしていない。加減をして尚、圧倒している。その姿はまさに姫級の深海棲艦であっ

た。
「味方だと……心強いデスネ」
傷を負いながらも、伊４７の勇敢な姿を目にして微笑む金剛。仲間として扱ってもらえて本当に良かったと、心底喜んだ。
あの施設と敵対するという選択をしていたら、この伊４７も敵になっていた。中間棲姫や飛行場姫がそういう性格でないとしても、戦う可能性が出てきてしまう。
そんな不安は絶対にない。そのための和睦であり、共存が目的なのだから、お互いに裏切るつもりはない。こういう場でも手を取り合って共に苦難を乗り越える。
「くそっ、手伝いてぇのにそんな隙がありゃしねぇぞ！」
「あたいら、あん中に入ったら完全に足手纏いになっちまうね。今は金剛さんのこと優先にしとこう」
「だね。任せ切っちゃって申し訳ないンだけどな！」
江風と涼風も、今一番危険な状態であろう金剛の側へ。海風が危険なことも遠目に気付いており、今は全員が同じ場所にいるべきだと判断した。
本来ならある程度バラけて敵の攻撃を分散するべきなのだが、それを伊４７が全て引き受けてくれているのだから、今は素直に任せる。
「ちとちょ、他に敵はいそうにないデスか？」
「大丈夫、敵はあの１体、槍持ちだけ。周囲に他の深海棲艦の姿は見えないみたいです」
「同じく。千歳お姉と別方向に飛ばしたけど、そっち側にも敵の姿は無いって」
何をしても伊４７の足手纏いになりかねない。そのため、千歳と千代田は他に敵がいないかどうかを先んじて探してきた。飛ばした艦載機は哨戒のためのそれではないのだが、それくらいの確認くらいは出来た。
敵は本当に１体。後から来ることも無い。今のところはかもしれないが、少なくとも今は撤退のチャンスではある。
「何のために、艦娘を襲うの？」

足止めをし続ける伊４７は、未知の深海棲艦に話しかける。どういう立ち位置であれ、お互い深海棲艦。そして未知の深海棲艦はおそらく、黒い繭に包まれた結果生まれた、処置が出来なかった成れの果て。

どんな感情が溢れてああなってしまっているかは、伊４７には見当がつかない。しかし、同じように生まれ変わってしまったのなら、対話くらい出来るかもしれない。そう考えて、戦いながらも言葉を投げかけた。

「話くらい、出来ない？」

質問に返答は無い。深海棲艦相手には徹底した無視。回避一辺倒になっているのは、攻撃出来ないからではなく、攻撃する気が無いから。

あくまでも狙いは艦娘のみ。同胞（はらから）には一切の興味がなく、今も伊４７の行動に対して何を思っているかはわからないが、ただそれを避けて金剛を始末しようとしているのみである。

「答えて」

少しだけ強めに問いただす。姫の問いに対して、未知の深海棲艦はビクリと身体を震わせた。並の深海棲艦ならば、即座に平伏するか逃げるかするレベルのそれに対し、震えるだけで行動は止めなかった。

言葉は通じている。先程の呟きは、その意味を理解して放った言葉。艦娘に対して、殺意がある言葉だ。

「答えないなら……沈めなくちゃいけないヨナ」

未知の深海棲艦が人型でも知性のないモノだとわかれば、話してどうにかなる相手ではないと判断。艤装の豪腕だけではなく、額から突き出た鋭利な角まで使い始め、さらに圧倒していく。

掴みかかる豪腕はヒラリと躱し、鋭利な角は槍で受け止める。その動きだけ見れば、姫級の中でも中堅くらいの力は持っているだろう。まともな知性があれば、平和を脅かす侵略者にも、平和を愛する穏健派にもなれるだけの資質はある。

「……ムス……メル……」

「なに？」

呟きが聞こえたため、猛攻を少しだけ緩めた。その言葉が本人の意

思かはさておき、何かを伝えようとしているのは確かだ。
「カンムス……シズメル」
「……そっか。でも、やらせないヨナ」
返答があったため、沈めるのはやめる。代わりに、ここで捕らえて施設へと連れて行く。伊４７はこの場でそう決めた。
この場から離せば、艦娘達は怪我人の金剛を伴って撤退も可能だろうし、中間棲姫や飛行場姫なら何か解析してくれるだろう。後のことを考えれば、沈めるよりも調査の方が堅実だった。
もしかしたら、このまま知性を持って施設の仲間になってくれるかもしれない。そうも考えていた。先導する者がいなかったから、こんなことになっているのではと。
「ちょっと乱暴になっちゃうけど、ごめんね」
途端に速度が上がった。今までも相当なモノだったのに、それを超える素早さで豪腕を振り、ついには未知の深海棲艦を掴み上げた。大分加減したようだが、それでも衝撃は激しかったようで、カハッと息を搾り出させられた。
その掌だけでも未知の深海棲艦の胴体を軽々と握りしめ、やろうと思えばそのまま手折ってしまうことも出来るだろう。
しかし、未知の深海棲艦は咄嗟に両腕だけは掴まれないようにしていた。艤装も主砲も握り締められているものの、一番の武器である槍はフリー。つまり、この状況でも攻撃は出来るということである。
今までは同胞（はらから）だから無視し続けていたが、ここまでされたら敵として認識してもおかしくない。艦娘達ばかりを目で追っていたが、今初めて明確に伊４７を邪魔者として認識を改めた。
「ワタシノマエヲ……サエギル……オロカモノメ」
ギュッと槍を握り締めたかと思うと、艤装の上に座っている伊４７に穂先を向け、一撃の下に貫こうと刺突を繰り出した。狙いは分かりやすく胸、心臓。即死狙いの一撃。
しかし、今はその身体が握り締められているのだ。少し力を入れられただけで、槍を握る手が緩むほどのダメージになる。肺の中の空気を搾り出すかのようにゆっくりと強く握られ、骨もミシミシと悲鳴を

上げる。
「ダメ。やらせない。貴女はヨナ達の居場所に連れていく」
もう言葉すら紡げない程に圧をかけられ、最終的には槍も手から離れた挙句、気を失った。
「逃げ切れた……ヨナ。うん、それじゃあ、これを持っていこう。姉姫さんなら何かわかるかもしれないし」
これだけやっているうちに、艦娘達はうまく撤退してくれたようである。この場にはもう伊４７しかいない。
無事にここから離れることが出来たことに安堵しつつ、伊４７は握り締めた未知の深海棲艦を施設に輸送した。

伊４７に任せることで、窮地を脱した艦娘達は、怪我を負った金剛を曳航しながら大急ぎで鎮守府への帰路を駆けていた。死に至る程の重傷ではないにしろ、艤装は半分近くを破壊され、金剛自身も疲労が目に見える程である。
「危　な　か　っ　た　デ　ス　ね　……　こ　れ　が　Ｇｅｔ（九）　ａ（死）　ｌｉｆｅｔｉｍｅ（に）　ｉｎ（一）　ｎｉｎｅ（生）　ｄｅａｔｈｓ（を）　と（得）　いうヤツかナ？（る）」
「かもしンないっスね……あそこでヨナが来てくれなかったらどうなってたか」
「援軍も間に合ってなかったかもしんないねぇ。おっかねぇ」
今が大丈夫なのだからそれでいいと金剛は楽天的に話すが、本人の言う通り、これは九死に一生。あのまま誰の助けもなかったら、そのまま全滅していた可能性が非常に高い。
それほどに未知の深海棲艦の力は異常であるということを思い知った。戦艦と空母が含まれた遊撃部隊（七人艦隊）でも、たった一人にいいように弄ばれて傷一つつけられなかったのだ。
「……アレが……姉さん達の仇……」
海風が呟く。それが実行犯ではないが、先程の敵の仲間が駆逐隊を全滅させたのは間違いない。再び海風の心がガタガタになりつつあ

る。しかし、それは今回の戦いでの無力感で帳消しになっていた。
　自分の力は仇討ちをする域に到達していない。７人がかりでもあのザマと考えると、怒りよりも悔しさが滲み出てくる。
「……海風姉、今は余計なこと考えないで」
「山風……？」
　少し怖い顔で山風が海風の前に立つ。こんなに強く出てくる山風は殆ど無いので、その表情に驚いてしまう。
「仇討ちしたいのはわかる。あたしだって……みんながやられたのは悔しい。でも、焦ったら絶対上手くいかない。海風姉だって、それくらいわかるでしょ。あたし達よりも頭いいんだもん」
　淡々と心を抉るように言葉を紡いでいく。少し涙目だが、海風の心に言葉を届かせるために、勇気を振り絞って思いを言葉にしていく。
「みんなで強くなろう。今よりもっと。でも、無理はしちゃダメ。壊れちゃうから」
「そんな……私は……」
「壊れちゃうから」
　キッと睨み付ける。より強い感情をぶつけられ、海風は返す言葉を失った。
　山風がさりげなく海風の手の甲を確認する。やはり、ほんの少しだけ黒い泥が付着しているように見えた。また瞬きする間に消えたようだが、危険であることは確かである。
「海風姉に壊れられたら、あたし達が困る。だから、落ち着いて。海風姉だけの問題じゃないから」
　手を震わせて、心から訴えた。
「……わかった。わかったから、そんな顔しないで山風」
「本当にわかってる？」
「わかってる。私１人でやろうなんて思ってないし、みんなの仇なのもわかってるから」
　まだ不安は残っているものの、ひとまずは抑え込めたようである。そちらの方が山風としては気が気で無かった。

鹵獲された槍持ち

艦娘達を急襲した未知の深海棲艦は、援軍として駆けつけた伊４７により撃破、鹵獲された。その間に怪我人の金剛は部隊と共に撤退完了。無事とはとてもじゃないが言えないものの、ひとまずは誰も命を落とすことなく戦いが終わる。

未知の深海棲艦を艤装で握り締めながら施設に到着した伊４７。そうしている間もそれは目を覚ますことなく、終始ぐったりとした状態。気を失った時点で艤装は消滅しており、生身の状態となっている。

当然命は奪っておらず、怪我すらも負わせていない。豪腕による強烈な締め付けで気管を圧迫したことで気を失わせている。しばらくすれば目を覚ますことだろう。その辺りの力加減も、伊４７はしっかりしていた。

「Ｂｉｅｎｖｅｎｕｅ（おかえり）・ｌａ（な）ｍａｉｓｏｎ（さいい），ヨナ」

「テストさん、もしかして最初から最後まで見てた？」

「Ｎｏｎ（いいえ）・　でも、あちらの方に向かったのが見えていたので、戻ってくるのを待っていました。そうしたら……それを」

幸せアレルギーの悪化を防ぐためにみんなの元から離れたところを、たまたまコマンダン・テストが見ていたらしい。

こうなった時に海に向かうのは、伊４７のいつもの行動。海中なら独りになれるため、仲間達の温もりをそれ以上感じることを無くすことが出来る。そのため、少し海で過ごしてから戻ってくるのが基本だった。

しかし、今回は様子が違った。戻ってくるまで待っていたら、いつもは海の中から出てくるところを、最初から海の上、しかも艤装を展開した状態で戻ってきたのだ。

他の誰もが見えない位置でも、コマンダン・テストにはそれがわかったため、尚のこと戻ってくるのを待っていた。

「こちらの方は……」

「多分、戦艦さんが言ってた子ヨナ」

「Ｏｕｉ．　聞いていたＣａｒａｃｔ（特）・ｒｉｓｔｉｑｕｅ（徴）がそのままあります。ここまで来ていたのですね」
伊４７の艤装は、潜水艦という都合上、ここから陸に上がることが出来ない。そのため、ここからはコマンダン・テストに引き渡されることになる。
そのままでは未知の深海棲艦を持ち上げることが難しいため、コマンダン・テストも艤装を展開。その艤装は、身体の倍近くの長さを誇る尻尾である。
これがコマンダン・テストの膂力よりも強い力を持っているため、やんわりと巻きつけて陸に引きずり上げた。艤装も無いため軽々と。これで伊４７はお役御免。
「ヨナ、姉姫さんと妹姫さん呼んでくるね」
「Ｓ（お）’ｉｌ（願）　ｔｅ（い）　ｐｌａ（し）・（ま）ｔ（す）」
艤装を消して陸に上がった伊４７は、そのままパタパタと施設へ。コマンダン・テストは起こさないようにゆっくりと運ぶ。
ここからこの未知の深海棲艦がどうなっていくのかはわからないが、施設なら悪いようにはしない。ひとまず、コマンダン・テストは療養食のレシピを考えるのだった。

そこからは、施設内は大騒ぎとなる。外から深海棲艦を拾ってくるというのは、中間棲姫がこの施設を立ち上げてから初めてのことになるらしい。
さっきまでここにいた艦娘達が帰り道で襲われたということに驚き、その窮地を救ったのが伊４７だったことにさらに驚き、その時の未知の深海棲艦を鹵獲してきたことで誰もが言葉を失った。
「ええ、私が見たのはこの子よ。この子がさっきの艦娘達を襲っていたのよね？」
「うん。そこをヨナが助けたの」
「私の言葉を無視したのに、艦娘には襲いかかるか……。やっぱり知性のない同胞（はらから）みたいなものなのかしらね」

「一応話は出来たの。話になってたかわからないけど」
「なら多少の知性はあるのね。正気を失ってるって考えた方がいいか」
一室を用意し、姉妹姫と戦艦棲姫、そして拾ってきた伊４７がその中に。今はベッドに寝かされ、安らかに寝息を立てているのだが、目を覚ましたらその場で暴れ出しかねないため注意が必要。
狭い部屋の中で再び艤装を展開されたら大惨事になる。部屋が壊れるだけならまだしも、近くにいる者は確実に怪我をすることになるだろう。ここにいる者が全員姫級だとしても、無防備の状態で撃たれれば怪我はするし最悪死ぬ。
今のところ、この未知の深海棲艦の顔まで見ているのはここにいるメンバーと、ここまで運んだコマンダン・テストのみ。駆逐艦達は、ここに鹵獲されて運び込まれたということしか知らない。
「ひとまず、この子の名前は『槍持ち』としておきましょうかぁ。素性がわからない以上、正確な名前とかはわからないんだけれど、ここにいるのなら必要よねぇ」
「そうね、賛成。呼び方が無かったら不便だもの」
未知とはいえ、同胞（はらから）であることは変わらない。そのため、便宜上名前をつけることになった。名前という概念がない深海棲艦とはいえ、これだけ人数が揃ってくると、あるに越したことはないと感じるようだ。
それは安直に、槍を持つ珍しい深海棲艦であるため、仮名『槍持ち』。いずれ正式な名前を付けることになるだろうが、今は簡単にそれで統一する。
「姉姫、今日出てくって言ったけど、前言撤回するわ。この子が、槍持ちが目を覚ますまで……いや、まともになるまでは、ちょっと住ませてもらえる？」
「ええ、いいわよぉ。でも、貴女は大丈夫なの？　旅をすることが本能のようなものでしょう？」
「乗り掛かった船よ。この子の話をしたのは私だし、もしかしたら私が声をかけたからこの近くまで来たって可能性もあるじゃない。憶

測ばっかりだけど」
　自分の責任とまでは思っていないが、自分が見かけ、無視されたにしても声をかけた相手が今こうなっているのだ。それが穏健派であろうと侵略者であろうと、目を覚まして全快したところを見るまでは心配だという。
　そういうことならと、中間棲姫は快諾した。飛行場姫も姉に同意。この2人が許可を出すのなら、施設に所属する元艦娘達も文句は言わないだろう。
「ただ、これ薄雲に見せていいのかしら。アタシとしてはちょっと心配なのよね」
　槍持ちの外見が、薄雲の感情を溢れさせるきっかけとなった姉の要素を持っている。飛行場姫の心配はそこにあった。戦艦棲姫に説明を受けた時ですら不安定になったのだ。実物を見たら、それこそ激しい発作を起こしかねない。その槍持ちと同じ施設で暮らすことで、何かしらの問題が起きないかどうか。
「こればっかりは難しいわねぇ。そのままそこに置いておいたら、艦娘さんを直接襲っちゃうかもしれないし、ここに置いておいたら薄雲ちゃんや春雨ちゃんも心配よねぇ。だからといって」
「始末するつもりはない、よね。わかってるわ。アタシもそうだもの。生まれがどうであれ、今がどうであれ、生きているのなら種族関係無しで救いたいってのがお姉でしょ」
「ええ、勿論。せっかく出会えたんだもの。この子にも楽しく生きてもらいたいわぁ」
　慈悲深い笑みを浮かべ、眠る槍持ちの頭を優しく撫でる中間棲姫。まともな知性を持ち合わせているようには見えなかったが、そうされたことで寝息が穏やかになったようにも思えた。
「起きてみなくちゃわからないし、会わせてみなくちゃわからないわ。薄雲には嫌な思いをさせるかもしれないけれど、一度見てもらった方がいいのかもしれない」
「……そうねぇ。ここで一緒に暮らしていくことになるのなら尚更ねぇ」

姉妹姫の言葉に、何か思い付いたような顔を見せる戦艦棲姫。
「ここにいるのがまずいようなら、私の旅に連れていってあげるわ。それなら大丈夫でしょ」
「あら、確かにそれなら安心ねぇ。貴女になら全面的に任せられるわぁ」
「一人旅も良かったけど、仲間がいてもいいなって思うこともあるのよ。万が一の時には私が引き取ってあげる」
多少は偽装してもらわないと困るけどねと付け足す。そのままのボロボロな服でいたら嫌でも目立つし、深海棲艦らしさをなるべく消してくれるならというのも追加。
本来ならここにいるのが最も安全で確実であるが、それによってここに不和を齎すのなら、嫌でもここから出て行かなくてはならない。にもかかわらず、槍持ちも独りにするのは気が引ける存在だ。
ならば、信用出来る者に託すことがベスト。戦艦棲姫もいざという時はそれでもいいと言ってくれているのだから、その時は任せることになるだろう。
「とにかく、まずはこの子が目を覚ますかどうかねぇ。ヨナちゃん、どれくらいで起きると思う？」
「んー……ヨナにはちょっとわからないヨナ。加減はしたからずっと寝てるみたいなことは無いと思うけど」
「今はゆっくり眠らせてあげましょ。この子は私が見ておくわ」
ここで率先して動いてくれるのは戦艦棲姫である。もしかしたら自分の旅の仲間になるかもしれないというのもあるだろうが、基本は自分が最初に見つけたのだから面倒が見たいという気持ちが大きい。
戦艦棲姫も姉妹姫と同じように面倒見のいい性格だった。旅の途中で出会った穏健派の深海棲艦にお節介を焼く程度には優しい。
「それなら、戦艦ちゃんに任せるわぁ。私達は先にやらなくちゃいけないことがあるもの」
「薄雲のことよね。顔を見せるより先に、ちゃんと伝えておいた方がいいと思うわ」
このことはまず、薄雲に伝えておくべきと判断した。事前にちゃん

と話しておけば、いざ見たときのショックはある程度薄れるはずだ。
むしろ、身構えていったら似てるだけの別人だったという可能性もある。それならその方がいい。
「それじゃあ、お願いねぇ」
「ええ」
槍持ちは戦艦棲姫に任せ、姉妹姫はこの部屋を出て行く。伊４７も今回は姉妹姫について行くことにした。戦ったのは伊４７であり、微妙であるとはいえ対話もしている。そのときのことを薄雲に伝えるべきと考えた。

駆逐艦達はダイニングに集められていた。ジェーナスがお茶を淹れてみんなを落ち着けようと試みているものの、薄雲だけは気が気でない様子。ちゃんと話していなくとも、なんとなく察しがついている。
春雨も薄雲程ではないが俯き気味。艦娘時代の仲間達を襲撃した深海棲艦がここにいるというだけでも、緊張感が高まる。もしかしたら、自分の姉達の仇に繋がるかもしれないと思うと、余計に苦しい。
「お待たせ。あの子は今、戦艦ちゃんに任せてきたわぁ。貴女達にはちゃんと話しておかなくちゃいけないものねぇ」
「姉姫さん、さっきの、さっきの同胞（はらから）は……！」
食い気味に薄雲が問いただした。いてもたってもいられないのは理解出来るが、落ち着かなければ正確な判断が出来なくなる。
それ故に、中間棲姫は落ち着くように促し、すぐ近くの席に腰掛けた。
「端的に言うと、戦艦ちゃんがここに来るまでに会ったっていう同胞（はらから）と同じだったわぁ。今は持ってないけど、ヨナちゃんが戦った時に槍も持ってたって」
中間棲姫の後ろで伊４７が小さく頷く。
ここで今は仮名として槍持ちと呼称することを前提に、伊４７との交戦のときの様子を説明した。

その知性はほとんど見受けられないこと。深海棲艦には全く興味がない代わりに艦娘に対しては沈めるという感情しか持っていないこと。というか感情と呼べるものが存在しているかも怪しいこと。

力自体は姫級である伊４７を前にすれば劣るもののようだが、艦娘達は７人がかりでも圧倒されるレベルだったことも忘れずに話した。金剛が怪我をしていたことを聞いて、春雨の顔は心配に埋め尽くされるものの、しっかり撤退出来たことも教えられて安堵の息を吐く。

「やっぱり……姉さんなんでしょうか……姉さんなんですよね……」

震えながら薄雲が呟く。ここにいるものは薄雲の姉のことを誰も知らないので、一概にそうだとは言えない。実際に見てもらわないとそれは何とも言えない。

とはいえ、もしそれが薄雲の姉だとしても、それは薄雲の知っている姉でないのは確かだ。薄雲に何があったのかは聞いていないが、その時に死んだのであろう姉とは別人。同じ個体であるだけである。

「……会わせてください」

「今は目を覚ましていないの。だから、目を覚まして面会が出来そうなら、薄雲ちゃんにも顔を合わせてもらうわぁ。だからそれまでは我慢してちょうだいねぇ」

「……はい。私の姉さんではない姉さんかもしれないけれど、姉さんであることには変わりありませんから……」

発作を起こしかけているが、薄雲は何とか耐えていた。いや、耐えられるようになっていた。

姉の存在が、薄雲の中で何かを変えようとしていた。

姉にするために

鹵獲され施設に保護された未知の深海棲艦、槍持ち。正体は現状謎であるが、春雨の姉の仇に繋がる可能性はありその姿が薄雲の姉に似ているということで、目を覚ましたら面会をすることになっていた。

伊４７が交戦した時は、意思の疎通が出来ているのか出来ていないのかもよくわからない状態。会話になっているようでなっていないのがそのときの槍持ちだった。そのため、面会したところでショックを受ける可能性も非常に高い。

「……私の知ってる姉さんじゃないのは……私でも理解してる。でも、でも……諦めきれないの」

震えながら、薄雲が呟いた。その声には、いろいろな感情が交じっていた。

今は不安定であるということで、春雨と薄雲、そしてジェーナスのいつもの３人組で面会可能になるまで待機している。この３人は以前の夜のように総崩れの可能性もあるのだが、今回は待機しているダイニングにリシュリューもいるため、何か問題が起きた場合は対処出来るようになっている。

「姉さんがやられたのは……半年も前だもん……でも、もしかしたら私と同じように黒い繭で深海棲艦になっていたのかもしれない……」

「うん……だよね、私達が生き証人になってるもんね。死んだと思ったら深海棲艦になってたっていう……」

しかしそうなると半年間何をやっていたかという問題が出てくる。侵略者としての思考に堕ちた上に、誰にも見つからずにフラフラとしていたとは考えづらい。

その点から考えると、やはり別の個体の姉が何かしらの被害に遭ったことで深海棲艦化したと考えるのが妥当なのだろう。薄雲だってその可能性はずっと考えている。

「でも、戦艦のヒトは無視されたって言ってたのよね。どんな状況があったら、同胞（はらから）は無視して艦娘だけ襲おうって思うのかしら」

ジェーナスが言うそれも疑問点である。ただ侵略者に堕ちたとし

ても、同胞(はらから)を無視するという現象に対しては説明がつかない。こればっかりは本人に聞くくらいしか手段が無いだろう。そしてその本人に知性が残っているかもわからない。

結局その辺りの謎は何も解けないというのがオチではないかと、ジェーナスは考えていた。薄雲には申し訳ないので口には出さないが。

「とにかく、今は落ち着いてその時を待ちなさい。ほら、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕがお茶を淹れてあげたわ。お茶菓子もあるから」

「ありがとう……ございます」

ひとまずは待つしかない。リシュリューが淹れてくれたお茶を口に運びつつ、その面会の時を待つことにしたのだった。

その時が来たのは、もう夕食の準備が始まろうとしていた頃。件の交戦は昼を少し過ぎた頃だったため、かれこれ3時間ほど。伊４７は強く握ったつもりは無かったようだが、消耗していたのか単純に眠りが深かったのか、それなりに時間がかかったようである。

その間もずっと薄雲は俯いたまま。だが、春雨とジェーナス、そしてリシュリューのおかげで、ある程度の覚悟を決めることが出来た。考える時間が与えられたことで、いい方向も悪い方向も想定は出来た。その際に発作を起こしかけたので、また春雨がコスプレによる慰めを敢行することとなったが、それも込みで考えが纏まったようである。

壊れた心での決意は、普通よりも難しい。それを可能にしたのは、薄雲の強い信念の賜物である。姉のためにと振り絞っていた。

「どうであれ、姉さんは姉さんだから……」

「そうね。それでいいと思うわ。もし嫌なことがあっても、私とハルサメが慰めてあげる」

「ありがとうジェーナスちゃん。春雨ちゃんも……ごめんね？」

「ううん、いいよいいよ。これくらいならいくらでも」

春雨はまた制服を着直して、お呼びがかかった別室へ。そこは施設

の者の私室から少し離れた場所に配置された部屋。中の構造は他の部屋と同じらしく、万が一の時に他の者に被害が無いように、中間棲姫や飛行場姫が配慮したカタチ。
　戦艦棲姫もそこに住まうとのこと。槍持ちの傍にいてあげるということらしい。それも必要ないのなら、また新たに部屋を用意してもらうようだ。
　部屋の前には飛行場姫が陣取っていた。中には中間棲姫と戦艦棲姫が既に入っており、目を覚ました槍持ちに対していろいろと処置をしている。
「来たわね。一応目を覚ましたけれど、いろいろ覚悟をしておくように」
「……はい。待っている間に、みんなに励まされてきたので」
　一度深呼吸をした後、3人で部屋の中へ。
　今回は春雨も崩れる可能性があるため、この中では最も関係のないであろうジェーナスも便乗することにしていた。中間棲姫と戦艦棲姫、部屋の外には飛行場姫と万全な状態ではあるのだが、同世代がココにいるという心強さもあった方が崩れにくくはなるだろう。
「姉姫さん、薄雲参りました」
「ええ、槍持ちちゃんが目を覚ましたわぁ」
　中間棲姫の向こう側、ベッドの上には、上体を起こして座っている槍持ちの姿があった。ボロボロだった服もそのままであり、運び込まれた時から何も変わっていない。戦闘後で風呂にも入っていないので、ベッド共々少し汚れてしまっている。
　その姿を見た瞬間、薄雲は大きく目を見開いた。薄雲の中にある姉と、殆ど同じ姿。深海棲艦化したことで肌は真っ白に染まっているものの、元々色素の薄い髪色をしていたため、今の白髪には違和感が無かったようだ。薄雲と同じように小さな角が生えているのは確認出来たが、元のカタチから変わっているのはその程度。春雨のような欠損も無い。
「姉さん……叢雲姉さんだ……」
　戦艦棲姫から話を聞いていただけなので、本人をちゃんと見るまで

は、実は姉と同じ個体ですらないという可能性も考えてはいた。しかし、見た時点でその考えは失われる。
薄雲の姉、叢雲。艦娘の時も槍を扱い、近接戦闘も可能であったレアケースの駆逐艦。元は自分にも他人にも厳しいクールな少女なのだが、今は虚ろな瞳で中空を眺める惚けたような少女。それらしさは微塵も感じられない。
「槍持ちちゃん、貴女の名前は叢雲というそうよぉ」
「……ムラ……クモ……」
鸚鵡返しするくらいの知性はあるようだが、その視線が中間棲姫の方を向くことは無い。何処か心ここに有らずといった感じで、声が聞こえても視線を変えることも無かった。
自分の名前を聞いても、何か思い当たるモノが無いような反応。まるで何も覚えてないような仕草。
「……私達を襲った深海棲艦とは違います。これだけは言えます」
「そう、なら犯人は別にいるということねぇ」
改めて確認して、春雨の仇とも違うことが判明。そこと繋がりがあるかはまだわからない。そのおかげか、春雨が途端に崩れることは無かった。周りにヒトが多いため、孤独を感じることもない。
仇に繋がる未知の深海棲艦という存在だけでも危なかったが、妹に会えたことで少しだけ変わった春雨だからこそ、この状況には耐えることが出来た。
中間棲姫が手招きをして、薄雲を槍持ちの近くに。妹が近付いても、何の反応も見せない。中間棲姫の言葉には多少は反応するが、それ以外には無反応。戦艦棲姫のことを無視したというのもコレだろう。
「姉さん……姉さん……私です、薄雲です……何か思い出せませんか……」
薄雲の涙ながらの言葉も、槍持ちには何の感情にも訴えかけられない音になってしまっている。何を言われても表情すら変えず、ぼんやりと何処かを見ているだけ。
リミッターが外れているようなものだから、近くに艦娘が来ようも

のなら、本来なら出ないような力ですぐに反応して襲撃する。それしか思考能力が無いような雰囲気。
「姉さん……何も思い出せませんか……」
声だけではなく、腕に触れて訴えかけた。死人のように冷たい肌だったが、薄雲の温もりでほんのりと熱を帯び始める。
「……ア……」
だからか、槍持ちが少しだけ反応した。今までに無かった感覚を得たのか、触れられた場所に視線が動いた。冷たすぎる肌に触れられたのだから、槍持ちにとっては温もりも肌を焼く熱量に感じたのかもしれない。
だが、今はそれだけ。痛みを感じているようでもなく、ただ触れられているとわかったから反応したに過ぎない。
「妹に触れられてもコレか……やっぱり、黒い繭に知性ごと持っていかれたと考えるのが筋かしら」
「そうねぇ……処置が出来なかったのなら、孵った時に全部持っていかれたとしか思えないわねぇ……。そこに本能的に侵略者の感情が生まれてしまったから、目に付く艦娘を襲うようになっちゃったのかもしれないわぁ」
ここにいるものは、黒い繭から孵った直後に適切な処置を受けているために、艦娘と同じような振る舞いをすることが出来る。一部壊れている部分があるので不安定ではあるのだが、それさえ無ければ艦娘と殆ど変わらないだろう。
しかし、槍持ちはその処置が出来ていない。溢れ出した感情をもう一度取り込むようなことが出来ていないのだ。外に出てしまったモノが返ってきていないのだから、壊れた心も相まって、槍持ちの心は艦娘としてのそれを失ってしまったわけだ。
「この子の溢れた感情は……おそらく『怒り』ねぇ」
自分を殺した深海棲艦への怒り。自分を救わなかった艦娘への怒り。そして、弱かった自分への怒り。そのせいで、今の槍持ちが構成されてしまったと、中間棲姫は考えた。
自分が許せないために記憶を失い、艦娘が許せないために近付いた

ら襲いかかる。深海棲艦が許せないが、自分も深海棲艦となってしまったことで相殺し、無視という手段を取った。
そう考えれば辻褄は合うため、そこにいる誰もがその考えに共感し、納得した。
「それなら……私がその怒りから解き放ちます。記憶を失っているのなら、また覚えていけばいい。艦娘を襲うのなら、襲わないように教えてあげればいい。そうやって私が姉さんを……姉さんを救います。救いたいんです。やらせてください」
涙を拭い、決意したような表情で中間棲姫に宣言した。その時には、発作の前兆すら無くなり、確固たる意志で自らのトラウマを振り払った。だからといって壊れた心が修復されるわけでは無いのだが、確実に一歩前進したと言える。
中間棲姫は少し悩んだようだが、この施設内にいてくれれば全員の行動を監視出来るため、万が一の時には手を貸すことも出来る。それに、今は戦艦棲姫もいるのだ。
「姉姫、貴女の考えてることはわかるわ。私はこの子に任せてもいいと思う。でも、何かあったら困るし、私も一緒にいるわ。それでいいでしょ」
「戦艦ちゃんもついていてくれるのなら、私は何も言うことは無いわねぇ」
薄雲だけなら不安もあるだろう。今でこそ前向きになっているとはいえ、トリガーを引きやすい状況であることは変わりない。そこに戦艦棲姫も手伝ってくれるというのなら百人力だ。
「薄雲、先に言っておくわ。もし槍持ちがどうにもならなくて、この施設の害になりそうなら、私の旅のお供に連れていく。外の世界を見せた方が何か変わるかもしれないもの。勿論人間を襲わせるようなことはしない。それはいいかしら」
「……はい、覚悟しておきます。でも、そんなことにならないように私が頑張りますから」
「ええ、そうしなさい。私は応援や手伝いこそすれ、貴女の邪魔はしない。もう無理だと感じたら、貴女がどうであれ私は槍持ちを連れてい

く。いいわね？」
「はい、それで」
戦艦棲姫から何を言われても、その決意は揺らがない。槍持ちを叢雲にするため、薄雲は次のステージへと立った。
「姉さん……必ず、必ず正気に戻しますからね」
「……ウ……ァ……」
声をかけても反応は無いのだが、薄雲は挫けない。いつかきっと、自分の知る姉のように振る舞ってくれると信じて、今から付き合い続けるのみ。

新たな深海棲艦、槍持ちを加えたことで、施設の命運はまた違った方向に向かっていく。今までののんべんだらりとした毎日から少しずつ変化していくことに、中間棲姫はほんの少しだけ不安を覚えていた。
だが、自分や妹、みんなの力があれば、そんな不安も払拭出来る。それだけみんなを信じている。目指しているのは明るい未来だ。そのために、楽しく生きるために、誰もが力いっぱい歩いていく。

薄雲の過去

その日の夜。薄雲はいつもの3人ではなく、槍持ちと共に眠ると話し、いつものベッドルームには来ずに槍持ちの寝かされている部屋で一晩を過ごすことになった。

ベッドルームには春雨とジェーナス、そして中間棲姫と飛行場姫の4人。いつものメンバーから1人欠けるだけでもベッドが広く感じる。そのせいで春雨のトリガーが引かれかけたものの、中間棲姫が即座に対処。結果的に、ほんの少しの寂しさを感じつつもいつも通り眠れそうだった。

「……薄雲ちゃん、大丈夫かな」

やはり心配そうなのは春雨。同じ感情が溢れた者同士であるため、どうしても気にかかる。

「大丈夫よ。ウスグモは自分で槍持ちの傍にいるって決めたんだもの。誰が何と言っても譲るつもりは無かったみたいだし、信じてあげるのがFriend(友達)よ!」

それに対してジェーナスはカケラも心配していないような態度である。勝算があろうが無かろうが、薄雲が自分からやりたいと言って行動を起こしたのだから、否定する理由はないし笑って送り出してあげなくては失礼だとも話す。

その言葉を聞き、飛行場姫もジェーナスの頭を撫でながら深く頷いた。信じてあげるのも薄雲のためだと、ジェーナスの話したことを復唱するように同意。

「発作も起きていないようだし、薄雲ちゃんも槍持ちちゃんと出会って何か変わってきているのかもしれないわぁ。だから、今は信じてあげましょう。戦艦ちゃんもついてるしねぇ」

反応のない槍持ちと二人きりというのは、薄雲のトリガーを簡単に引いてしまいそうであったため、戦艦棲姫も共に眠ることにしていた。

槍持ちがまともになるまではこの施設にいると宣言したその初日からしてコレである。少しだけ過保護な感じがしないでもないが、気

にかけてくれるのはありがたいこと。
薄雲も快くＯＫを出した。おそらく自分でも不安だったのだろう。万が一のことを考えると、他に誰がいてくれる方がいい。それが発作も何もない純粋な深海棲艦なら安心感もさらに増す。
「わかりました。私も薄雲ちゃんを信じることにします。少し不安だけど、大丈夫ですよね」
「ええ、大丈夫。あの子が自分で決めることが出来たんだもの。成し遂げてくれるわ」
みんなで信じることが第一歩。不安がっていたら、薄雲だって全力が出せない。
「さ、アタシ達はさっさと寝ましょ。明日からはアタシ達も槍持ちにちょっかいをかけていくわ」
「そうねぇ。もう少し刺激を与えたいわねぇ」
今日は薄雲のみが槍持ちに付きっきりだったが、明日からは他の者も槍持ちに話しかけたりしていく。周囲からの刺激によって、何かしらいい方向に向かってくれるかもしれない。

その頃、槍持ちの部屋。ベッドはベッドルームのものより小さいため、槍持ちのベッドには薄雲のみが入ることになり、戦艦棲姫は中間棲姫に許可を貰って艤装をその場に構築してそれを使って眠る。
戦艦棲姫の艤装は、本人よりも二回りほど大きな生態兵器。人の身体ほどの太さを誇る豪腕と、それに持っていかれたかのように短い脚を持つそれは、戦艦棲姫を抱きかかえたかと思うと、あぐらをかくように座ってベッド代わりになった。
「戦艦さん……すみません、ベッドを……」
「いいのいいの。私、旅の時は結構野宿とかもしてるんだけど、この子を使ってこうやって無人島で眠ったりするのよ。その時に比べたら、布団まで貰えてるんだから快適も快適。むしろベッドの方が寝られなくてね」
気遣いも多少あるようだが、この眠り方が基本であるために薄雲に

譲ったというのもある。慣れというのは恐ろしいもので、他人から見たら恐ろしく眠りにくそうなそれも、戦艦棲姫にとっては最高のベッドのようである。
「それに、貴女が槍持ちの傍にいてあげなくちゃダメでしょ？　姉妹なんだもの」
「……はい。この姉さんは私の知っている……私の目の前で死んだ姉さんではないですが、どう見ても私の姉、叢雲なんです。だから……私は傍にいてあげたい」
　今もずっと手を繋いでいた。これは松竹姉妹からの助言。お互いの温もりを感じ続けることが最も落ち着くのだという言葉は、この2人ならではであり説得力がある。姉妹で共依存である2人の言葉は、今の薄雲には参考になることばかりだった。
　その手は風呂に入れた後にもかかわらず、やはり死人のように冷たかった。まるで凍えそうなほどであるのだが、温かい布団に包まることで耐えられる。むしろ、少しずつでも槍持ちの体温を上げていきたいと、眠る時にはもっと強く密着するつもりである。
「私はあくまでも、貴女達が危ないと思った時のストッパー。だから、私のことは気にしなくていいの。貴女が気にしなくちゃいけないのはそっち」
　こう話していても、槍持ちはやはり無反応である。薄雲の方に視線を向けることもなく、やはりぼんやりと宙を眺めているのみ。瞳は虚ろなままだし、薄雲が触れた瞬間は反応したものの、それ以降はピクリとも動かない。
「こんなに冷たくなってしまっているのは……やっぱり私達と違って処置をされていないからでしょうか……」
「断定は出来ないけど、可能性はあるわね。感情も何もかも壊れて、熱すらも失ってしまったと考えると、少し嫌な感じ。何があってそんなことになったんだろう」
　小さな疑問だったが、以降はあまり考えないことにした戦艦棲姫。この話をふくらませすぎると、薄雲のトリガーが引かれることになるだろう。

「私が一緒に寝て、温めてあげようと思います」
「それがいいわね。せめて温かくなれば、何かが変わるかもしれないもの」
「はい。ちゃんとお布団を着て、私が抱きついて温めます。あ、でもこういう時って裸の方がいいんでしたっけ」
「どうなのかしらね。良さそうなことは全部試してみなさいな。誰も否定しないわ。私もね」
少しだけ安心して、薄雲は宣言通り槍持ちに抱きつく。手を握っている時よりも、よりその冷たさを感じることになったが、布団を被っていればそれくらい耐えられる。むしろ、相手が姉なのだからこれくらい平気だと言わんばかりに、より強く抱きしめた。
それでも槍持ちは何も反応しなかったものの、自然と眠りについていった。夜の闇の中では眠るものと、本能的に理解しているのかもしれない。それが確認出来ただけでも、薄雲としては安心出来た。

その日、薄雲はまた夢を見た。感情が溢れた、その時の夢だった。槍持ちと触れ合ったことで、それを鮮明に思い出すことになってしまった。
薄雲はいわゆる報酬艦。大本営によって建造され、特定の戦果を挙げた鎮守府に贈呈される新たな戦力として生まれた。能力は一般的だが、その分器用に立ち回れる、安定感のある艦娘。それが薄雲。
その薄雲が報酬として配属された鎮守府は、まだ立ち上げて間もない場所。新参の提督が、秘書艦の手を借りながら四苦八苦運営しているようなところだった。
その秘書艦というのが、薄雲の姉、叢雲。その鎮守府では最高練度を誇り、凛々しくクールなその姿に薄雲は魅了された。そんな艦娘が自分の姉であるというのも誇りだった。
叢雲も薄雲は貴重な妹だと可愛がっていた。むしろ、その報酬を得るために提督を後ろから急かし、引っ叩き、何とか新人でも努力で勝ち取れるほどまでに仕立て上げたのだ。

そういう意味では相思相愛。恋愛とは違うものの、姉妹愛はその鎮守府でも他の追随を許さなかったと思われる。小さな鎮守府だし、姉妹が揃っている方が珍しかったくらいなのだが。

しかし、それは長くは続かなかった。

薄雲にとってはいわゆる練習航海。遠征などの訓練のために、長期間鎮守府を離れ、大海原をグルリと一周するコースを航海中のことだった。

薄雲のそれだからと、秘書艦であるにもかかわらず叢雲が引率するということになり、外海でも安全であるというコースを回っていた。2人でやっているわけではなく、他にも新たに鎮守府に加わった駆逐艦達が参加し、合計6人での遠征。

勿論緊急時のために武装も完璧。叢雲もその中でのリーダーとして、最大の練度を活かすための装備を整えていた。件(くだん)の槍もしっかり携えて。

その練習航海中に事件が発生した。これは後に、何処の鎮守府も予測出来なかった事件として大々的に取り上げられることになる。

練習航海のコースというのは、基本的には安全が確保されているはずの航路を辿るもの。緊急時と言っても、現れるのはイロハ級くらいであり、駆逐艦が6人もいれば悠々と勝利することが出来るようなものだった。

それなのに、その時に現れたのは、よりによって準姫級との呼び声の高いイロハ級、重巡洋艦のネ級の強化改造版、ネ級改。それが率いる強力な艦隊が突如交戦する羽目になったのである。

叢雲は流石にまずいと判断し、早急に撤退を指示した。薄雲を含めた新人駆逐艦達は、半恐慌状態に陥りながらも叢雲の指示を全うしようと動き出した。

しかし、ネ級改が率いる敵艦隊の練度は、新人駆逐艦には荷が重すぎる。逃れようとしてもその手が届いてしまい、次から次へと沈められていく。仲間の死を目の当たりにして、さらに恐慌。負の連鎖が始まった。

薄雲はそんな中でも、殿(しんがり)で奮戦する姉に支えられながら必死に逃

げていた。鎮守府に近付くことが出来れば、そこにいる主戦力の援軍が来てくれると信じて。
だが、そうなる前に最悪な事態が起きた。
叢雲がネ級改に致命傷を負わされたのだ。すぐに鎮守府に戻ることが出来れば入渠することで一命を取り留めることは出来たかもしれない。しかし、それすらも許されなかった。
その時に残っていたのは、叢雲と薄雲だけだった。その叢雲がやられてしまったことで、一番頼れる者が倒れてしまったことで、薄雲の心はバッキリと折れてしまった。
「私は……私は姉さんを守ることが出来なかった……」
仲間が全員目の前で死に、最愛の姉すらも倒れた。そうなったら、薄雲はもうたった独りになる。その孤独感に耐えられなかった。姉がいない世界に耐えられなかった。
そして、壊れた。
「嫌だ、独りに、独りにしないで、姉さん、助けて、助けてよ、姉さん、姉さん」
孤独感に押し潰され、寂しさが溢れ出し、それを具現化するように手が黒い泥に呑み込まれていった。
何が起きているかは理解出来なかったが、姉と共にここで死ねるならもういいやと諦めた瞬間、泥は一気に拡がった。泥に包まれ、繭となっていく間も、ずっと死にゆく姉の姿を見つめていた。

暗闇の中、薄雲は目を覚ました。酷い夢を見せられ、全身が冷や汗でビショ濡れだった。眠りながらも発作を起こしていたようで、側には心配そうな表情の戦艦棲姫がいた。
「大丈夫？　酷く魘されていたわ」
既にタオルを用意してくれていたようで、震えが止まらない薄雲を優しく撫でながら汗を拭いてくれていた。
「ひっ、独りに、独りにしないで……」
「大丈夫よ。貴女は独りじゃないわ。今ここには私もいるし、ほら、槍

持ちもいるもの」
発作の最中でもしっかりと抱きついて離さなかった槍持ちも、薄雲のただならぬ状況に視線をそちらに向けていた。表情は変わらないものの、薄雲に対して何かしら考えているような仕草である。
「姉さん、姉さん……　温かい、温かいです……」
縋っても、槍持ちは何も反応しない。しかし、そこにいてくれるだけでも、孤独感は今まで以上に払拭された。それがどんな存在でも、姉というだけで薄雲には満たされる存在であった。抱きついているだけで温かい。そう感じられる程に。
そしてここで戦艦棲姫は気付いた。
「待って。今温かいって言った？」
眠る前からずっと、槍持ちの肌は死人のように冷たいと話していた。風呂に入れても何も変わらなかったはずなのに、一晩薄雲と一緒に眠っただけで体温が上がっている。
その瞬間だった。
槍持ちの手が動き出したかと思うと、薄雲の頭を撫で始めた。表情は相変わらずだったが、その身体の動きはまさしく姉のそれだった。
「……そっか、壊れた子も、こうやって一緒に寝るなり何なりすれば、状況が改善されるのか」
死人のような肌の冷たさは、仲間の温もりで改善される。身体が芯まで冷え切っているから、感情なども凍りついている。
だが、このまま身体も心も温めていけば、何かしらの改善になるかもしれない。それに気付けたのは大きかった。
「姉妹でないと無理そうね……。槍持ち、ここに薄雲がいて良かったわね。貴女、元に戻れるかもしれないわよ」

あくまでも憶測の域から出ないが、槍持ちの状況を一変させるのは、薄雲の温もりであると戦艦棲姫は考えた。
薄雲が決意したことにより、1人の深海棲艦が救われるかもしれない。

大敗の後

一方、鎮守府。槍持ちによる襲撃で傷を負った金剛は、入渠によって無事完治していた。ドックから出たところで腕をグリグリ回しつつ、ふぅと息を吐いて提督の待つ執務室へ。

「Ｈｅｙ、提督ぅ―！　金剛、入渠終わったデース！」

「ああ、お疲れ様」

帰投が完了したのは夕方に差し掛かる直前くらい。そして今はもう夜である。深夜とまでは行かないものの、所属艦娘はそろそろ消灯の時間。秘書艦の五月雨も、もうその業務を終えている。執務室にいるのは提督のみ。金剛の入渠終了を待つため、この時間まで残っていた。

「こんな時間まで待たせてＳｏｒｒｙネ」

「いや、仕方ないだろう。７人がかりで手も足も出なかったと聞いている」

金剛が入渠している間に、千歳と千代田からその時の様子を聞いていた提督。本来なら隊長である海風に聞くべき内容かもしれないが、案の定、海風はそれどころではない精神状態だったため、姉妹に引っ張られて強制的に休養を取らされていた。

あの戦場で最も余裕があったのは、艦載機に攻撃を任せている空母の２人。その戦闘のことを一部始終説明してもらったとのこと。

「謎の深海棲艦……砲撃と艦載機の射撃を槍で弾き飛ばすどころか、金剛の砲撃を斬り飛ばしたんだったね」

「Ｙｅｓ．　しかも並の駆逐艦より速かったデスね。こっちは全速力で撤退しているのに、悠々と追いついてきたデス」

明らかなオーバースペック。まさに深海棲艦の姫と言わんばかりの性能。それを身を以て体験することになった。金剛も困ったような表情で笑い、どうしたものかと腕を組む。

実際、あの部隊で傷一つつけられなかったというのは非常に困る戦果だ。失われた駆逐隊の仇であろう深海棲艦も同様の力を持っていると見て間違いないのだから、仇討ちなんて夢のまた夢になってしま

う。
　今の力ではまだまだ勝利には程遠い。より強くならなくてはならない。焦りたくはないが、嫌でも意識してしまう。
「提督、海風はどうしましタ？　あの戦いの後、海風はまた春雨と再会する前に戻ってしまったみたいになったデス」
「……ああ、五月雨にも以前聞いたし、山風からも直に話されている。海風の心は壊れかけているとね。山風が必死に食い止めているらしいが……」
　その話は提督もちゃんと聞いていた。五月雨と山風は、共に姉妹姫からその話を直に聞いている存在。海風が意識していなくとも、この2人はそれについて意識している。
　海風に黒い泥が付着しているのを見たのは、今のところ山風だけ。そして、今回の戦いの後にもそれを見たと提督に説明している。いつもなら執務室に来ることすら渋るような山風が、自ら率先して来て話したくらいだ。虚偽なわけでもないし、見間違いでもない。
　だが、それを公表する、むしろ海風自身に伝えることは憚られている。それが最後のトリガーになってしまいかねないため、どうにかその事実を隠し続けながら、仇討ちを完遂させるのがベスト。海風のためにはそれくらいしか選択肢が無い。
「今は前と同じように休ませてるよ。山風が監視している」
「それなら安心デスね。あの子が一番不安デスから」
　金剛も入渠中ずっと海風のことが気にかかっていたらしい。
　戦場からここに帰投するまでの海風の様子は、誰が見てもおかしかった。復讐心に呑まれかけているような、捜索の時とは違ったベクトルの焦り方をしているような、そんな感じである。
　春雨と再会出来たことでその日はかなり安定していたのだが、僅か2日でこの大惨事である。もっと休息の時間があれば、海風もまだ精神的な余裕を取り戻していたかもしれない。最低でも1週間は必要だったと思われるが。
「私も海風のことは気にかけておきマース。あの施設に行く時は、部隊に必ず私を入れてほしいデース」

「ああ、そうさせてもらうよ。山風からも似たようなことを言われているんだ。海風が出撃する場合は、二十四駆は必ず勢揃いさせてほしいとね」
「そうデスね。妹達がいれば多少は落ち着けるデショウし、それは必要だと思いマース。そこに私も加えてくだサイ」
古参であり、今までの鎮守府をずっと見続けてきた金剛になら任せられると、提督も快く許可を出す。
いつも明るく、周りを常に見て、キャラに似合わず冷静に物事を判断出来るため、海風の機微にも反応出来るだろう。山風が最も早くそれに気付くだろうが、金剛も負けてはいない。
「で、だ。金剛から見て、その槍を持った深海棲艦はどうだった。千歳と千代田からは、正直二度と戦いたくない相手だとまで聞いているが」
「アー……ちとちよの言いたいことは嫌なくらいわかりマース。私も出来ることなら二度目は嫌デスね」
他の面々とは違い、傷まで負った金剛だからこそ感じたこともいくつかある。その1つが、駆逐艦とは思えない膂力だ。
槍を扱っているというのもあるためか、金剛が掴んでその攻撃を捉えた時、戦艦の膂力と拮抗することが出来ていた。さらにその状態から新たな武装、主機に主砲を構築させてゼロ距離砲撃まで仕掛けて来た。
槍を押し込みながら砲撃をするのはかなり難しい。戦艦と拮抗しながらなら尚更だ。なのに、槍持ちはそれをやってのけた。
「アレは間違いなく戦艦に匹敵……いや、凌駕する駆逐艦デス。一筋縄ではいかないデショウネ。1対1ではまず勝てませン。もっと重い編成で押し潰すことが出来るかどうかという感じデスね。それも全て躱されてしまいそうデスけど」
「ふむ……途中で増援が来たようだが」
「ハイ。ヨナ……伊47が来てくれなかったら、私達はあの場で全滅してたと思いマス。駆逐隊の二の舞デシタ」
その伊47は、金剛達が大苦戦した槍持ちを圧倒する程の力を持っ

ていることも付け加えた。千歳と千代田もそのことは話していた。
「最後どうしたかは確認出来ていませンが、おそらく勝ってると思いマース。沈めたのか鹵獲したのかはわかりませンがネ」
「あちらのことだ、おそらく鹵獲だろう。僕達にはまだまだわからないことだらけだが、あの中間棲姫や飛行場姫には、ああいう深海棲艦をどうにかする力があるのかもしれないしね」
提督の予想は半分正解と言ったところか。鹵獲はしているが、姉妹姫も槍持ちをどうにかすることは簡単ではない。今でこそ深海棲艦に囲まれているため、無反応を貫いているようなものだが、艦娘が近付けば沈めるために動き出す可能性は高い。
とはいえ、手も足も出なかった相手を鹵獲出来る程の実力を秘めているのは確かだ。苦戦している様子もなく、撤退が完了するように立ち回っても余裕すら見せた。
だったらと、金剛は突拍子もないことを言い出した。
「施設のヒト達に演習とかお願いできませんかネ。ヨナがあれだけの力を持っているんデス。他の子達も相当だと思うんデスヨ」
確かに、圧倒された敵を圧倒する力を持つ者がいる施設だ。そこの誰かに鍛えてもらうというのは、結果がどうであれ今以上に強くなれることは確定しているようなもの。一度も勝てないにしろ、特訓としてはこれ以上ないくらいだろう。
しかし、施設の深海棲艦は戦いたくないからああいう場所にいるわけで、演習も擬似的とはいえ戦いである。中間棲姫が引き受けてくれるとは限らないし、むしろ話題を持ちかけたら難色を示しかねない。今の関係を崩すことになる可能性すらある。
「手段の1つとして考えておく。僕としてはいい案だとは思うが、それであちらの機嫌を損いたくない」
「デスヨネー。でも、一応こういうのもあるっていうのでお願いしマース」
金剛としても、案を出すだけ出したがそれだけ。提督の考えていることは金剛も理解しており、一応言ってみた程度の考えだったようだ。

あの施設の者達と少しだけでも交流したことで、その信用度はかなり高い。春雨がいるというのも相まって、その言動に嘘が無いことは充分理解している。だからこそ、その信用を損なうことはしたくない。

だが、案として必要であると考えるのなら、それを口には出しておく。本人の前でそれを言うかはさておき、こういう考え方もあるんだよというのを周りに伝えることを怠らないのが金剛である。

「ともかく、今よりも力を付けなくてはいけないのは確かだ。別に今まで何もしていなかったわけではないんだが、次の戦いの相手が強大であることは間違いない」

「Ｙｅｓ．　私もそう思うネ。明日からは、うんと特訓するデース！」

「いきなりハードにするのは皆のためにならないからね。少しずつ、だが確実に練度を上げていこう」

鎮守府の方針としては、槍持ちに勝てるくらいの力を得るために日々努力するということになる。今まで通りとはいかないだろう。しかし、確実に前進するためには、堅実な行動が必要になる。

その頃、海風。部屋に押し込められて、山風がしっかりと見張っている状態。今回は山風だけでなく、江風と涼風も同じ部屋にいる。これは山風が呼び込んだもの。

複数の、しかも実の妹達の監視の目があれば、いくら海風とて無茶はしない。春雨ほどでは無いにしろ、その存在で心落ち着けるはずなのだ。

「……山風、何もそこまでしなくても」

「ダメ。海風姉、焦りすぎ。反省したって言ったの嘘？」

「……何も言い返せない」

それこそ落ち着かせるために、山風は常に真横にいる。寝るときも添い寝の方向で考えている程である。

「でも、強くなンなくちゃいけねぇのは、江風もわかンだよね。アレはマジで強すぎだぜ」

「だよなぁ。砲撃弾くって何さ。何もさせてもらえないってことじゃん」
この駆逐隊の中では好戦的な江風と涼風は、こうしながらも槍持ちに対しての対策を考えていた。
最終的には提督の判断になるのだが、戦うのは提督ではなく艦娘。そういうこともあり、提督は艦娘の意見を積極的に取り入れる。それが間違ったことならば、ピシャッと否定もする。
そういうカタチで提督と艦娘の関係は良好。お互いに言いたいことを言えて、良いも悪いもしっかり判断出来る。お互いに腹の内を全て晒しているので、一切の不安がない。故に信頼出来る仲となっている。
「駆逐艦で戦艦に勝つ場合はどうすンだっけ？」
「小回りを利かせて、隙を突くのが定石」
「さすが海風の姉貴。教科書通りの答えならすぐ出てきてくれるぜ」
事実、戦艦というのは駆逐艦よりも身体は大きい。施設で出会った戦艦棲姫も、生身は駆逐艦より当然大きいし、艤装はさらに大きい。強固な装甲であるのも当たり前なことである。
その代わりに、高速戦艦といえど駆逐艦の素早さと小回りには劣る。それを活かして、攻撃を全て避け切ってチマチマと攻撃を当てるのが定石。隙さえあれば、魚雷だって使う。
しかし、今回の敵はそうはいかない。戦艦と同じ力を持つ駆逐艦である。その駆逐艦よりも速いのだから、この定石は通用しない。それに加えて、攻撃を弾き飛ばすという今までにない行動までしているのだ。
今までの常識は全て捨て去って、新たな戦い方を編み出すしかないのかもしれない。そうなると、簡単には思い浮かばないだろう。
「せめてアレより速く動けるようになれりゃなぁ。まだ勝ち目はあるぜ」
「それなら、缶とタービンでも積んでみるかい」
「そうすると今度は武装が積めなくなンじゃン。ダメージ入ンないンじゃないか？」

「確かになぁ」
対策はパッと思い浮かばない。あまりにも強大な敵となると、思考停止しているわけではないにしろ、袋小路に入ってしまう。
だが、ここでその話を聞いていた山風が何かを思いついたように話した。
「……春雨姉、春雨姉に特訓してもらう……とか」
伊４７がアレほどの力を持っているのだから、同じような存在に生まれ変わった春雨も近しい力を持っているのではないか。山風はそう考えた。奇しくも金剛のアイディアと全く同じ考えが、この場でも生まれていた。
「それイイネ！　山風の姉貴、ナイスアイディアじゃン！」
「いや、そりゃダメだろ。あっちは和睦協定結んでるんだよ。戦いのために力を貸してくれってのは、なんか違う気がしないかい」
「かもしれねぇけど、今は結構切羽詰まってるって。あっちのヒト達もわかってくれるンじゃね？」
このアイディアが強くなるためだけではない。春雨と海風が一緒にいられることに意味がある。
海風の心を癒す存在が春雨であることは、山風も承知の上。実際、施設に一晩滞在しただけで、劇的に改善されているのだ。それをまた引き起こしたかった。
「……今は何を言っても状況は変わらないから。明日、今の話を提督に話してみましょう」
「だね。海風の姉貴の言う通りだ。打診だけはしていいンじゃね？ダメならダメって提督なら突っぱねてくれるさ」
「そうさね。最後の判断は提督に任せるしかないし、今こんなこと言ってても始まらないか。あたいにゃ判断出来やしないよ」
海風の一言で、江風も涼風も納得。明日にでも打診してみようということになった。金剛との話のことは、当然知らない。
鎮守府でも、未知の深海棲艦に対しての行動が始まろうとしてい

る。それが施設にとっていい方向に向かうのかは、定かではない。

好転か否か

施設の朝。目を覚ました春雨は、早速ジェーナスと共に槍持ちの部屋へと向かった。薄雲が槍持ちと一晩を過ごしたことで、何事も無かったかをいち早く知りたかったためである。

あの槍持ちは意思の疎通が出来ない存在だ。それと一緒の部屋にいるということは、予想が出来ないことが起きているかもしれない。それだけはどうしても気になるところだった。

「あれだけ反応していなかったら、一緒に寝ても何も起きてないんじゃないかしらね」

「かもね。でも、薄雲ちゃんが発作起こしてるかもしれないよね……お姉さんと一緒に寝てるんだもん」

「そうね……でも、戦艦のヒトがいるんだもの。あのヒト、姉姫や妹姫くらいに面倒見がいいのよ」

「それなら安心……かな？」

ジェーナスは戦艦棲姫との付き合いもそれなりにあるため、その人となりも多少は知っている。

その時にわかったのは、穏健派の深海棲艦だからか、やたらと面倒見がいいこと。別のところにいる穏健派の深海棲艦と買い物に行ったり話に行ったりと、いろいろな海を駆け回っているだけある。

部屋の前は静かなものである。まだ眠っているのか、既にいないのかは扉を開けてみなくてはわからない。

「ウスグモ、起きてる？」

軽くノックしたところで、中の応答を聞くこともなく扉を開けたジェーナス。中でもし着替え中だったりしたとしても、同性かつ一緒に風呂に入るような仲なため、気にすることすらない。

中に薄雲達がまだおり、まだ起きたばかりだったようで、戦艦棲姫は艤装を片付けてもいなかったため、それに気付いた春雨がギョッとした。

「わぁっ、ビックリした」

「っと、ごめんなさいね。春雨はこうやって見るの初めてだものね。

この子、私の艤装。今はベッドの代わりになってもらっていたのよ」
「そ、そうなんですか……。別個体と戦ったことがあるので一応知っていますけど、こんなに近くで見ることは無かったので」
春雨もよく知る大きな艤装が春雨に対して小さく一礼した後、解体されるようにその場から消えていった。全てが失われるまで、戦艦棲姫がその頭を撫でていた辺り、意識すらも持つ生体艤装のように見える。
どうしても戦闘中のシーンが頭から離れなかったのだが、知っているそれは獣のように獰猛で暴れ回っていたイメージだったため、目の前の戦艦棲姫の艤装はとても紳士に見えた。
「ウスグモ、Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ」
「うん、おはようジェーナスちゃん」
深夜の発作は戦艦棲姫がその時に止めてくれたため、朝になるまでそれを引っ張るようなことは無かった。ちゃんと気持ちよく朝を迎え、スッキリした表情で返事をする。
気持ち良く眠れた理由はそれだけではない。発作を起こした後に槍持ちに撫でられながら眠れたことが大きかった。悪夢によって発作を起こしたものの、その後はとても幸せに眠れたようだ。
「姉さん、朝ですよ」
その槍持ちに声をかける薄雲。それに対して槍持ちはやはり無反応である。春雨とジェーナスはやっぱりねという顔をしたものの、薄雲としては昨日とは違うことを理解していた。
そもそも撫でてもらえたことが大きいが、さらに体温が少しだけ上がっていることが重要だった。温かさを感じ取ることが出来たというのは、死人のような状態から少しは改善されたということに他ならない。
「槍持ちさんって、ご飯って食べられるのかな」
「ＴｅｓｔｅがＲｅｃｕｐｅｒａｔｉｏｎ（療養）ｆｏｏｄ（食）のＲｅｃｉｐｅを考えてるらしいわ。だから、槍持ちのためのご飯が出来てくると思うの」
「そうなんだ。じゃあ、それは私が姉さんに食べさせてあげます」

そもそも無反応な槍持ちがご飯を食べられるのかは甚だ疑問だが、やってみなくてはわからないということで、薄雲はとても乗り気である。コマンダン・テストも念のためと療養食――お粥などの食べやすい朝食を用意してくれているらしい。それなら反応が無くても食べてもらうことが出来るかもしれない。
「姉さん、それでいいですか？」
勿論これにも無反応。と思いきや、視線だけは薄雲の方へと向いた。
春雨とジェーナスからしたら、それはただただとやかく言ってくるものに対しての反応なのではと感じる行動であったが、昨日の夜の出来事を知る薄雲と戦艦棲姫からしたら、この行動自体が進歩の１つと感じられる。
寝ている時に限り、さらには薄雲が発作で苦しんでいる時に限り、反射ではなく殆ど自分の意思で薄雲を撫でるという行動に出ている。
本当に少しずつとはいえ、槍持ちは温もりによって少しずつ変化してきているのは確かだ。
「春雨ちゃん、ジェーナスちゃん、今日から少しの間、ご飯はここで食べるね。姉さんに食べてもらわなくちゃいけないから」
「うん、大丈夫。みんなわかってくれるだろうし、槍持ちさんが元に戻ったらダイニングに戻ってくるもんね。その時を待ってるよ」
「ハルサメの言う通りね！　お姉ちゃんのためにやるんだもの。誰も文句は言わないわ！」
姉妹という時点で松竹姉妹はまず文句を言うことはないし、伊４７はむしろアレルギーのせいで独りで食べることもある。リシュリューとコマンダン・テストもその辺りは寛容。姉妹姫に関しては言わずもがなである。
むしろ、薄雲がここまでやる気になっているのだから、みんながそれを上手く出来るようにサポートする程だろう。そもそもが槍持ちにちょっかいをかけていきたいという思いもあるわけだし、それの延長線上になるはず。
「姉さんはきっと快復する。昨日だけでも少し変わったんだから。だ

から私、姉さんのために頑張るね」
「うん、応援してる」
いつになくやる気満々な薄雲。それに対して、一切の不安は無かった。

宣言通り、今までの3人組から薄雲が抜け、槍持ちに付きっきりとなる。薄雲だけでは発作が起きた時に何も出来ないため、夜と同じように戦艦棲姫がついてあげることにもなっていた。
その誠意に応えるように、みんなが率先して手伝ってあげていた。農作業や漁などは当然やっているのだが、そうではないとき、薄雲や戦艦棲姫が他の者にも力を貸してもらいたいと感じた時は、快く手助けをしてあげる。
とはいえ、2人いれば基本的には手助けが必要になる場面など無く、やはり必要なのは槍持ちに対する刺激。いつもは無いようなことを起こすことによって、より体温を上げて冷え切った思考回路を回せるようにしてあげることが目的。
「そっか……夜に温かくなったんだね」
薄雲の精神的な部分の負担が減るように、ちょっかいをかけるのは春雨とジェーナスが多く引き受けることになる。その時は戦艦棲姫も中間棲姫や飛行場姫に現状報告をするために退室していた。
「そうなの。ずっと抱きしめて寝てたからかもしれないんだけど、お風呂に入っても何も変わらなかったのに、私が抱きついてたらなんだもん。同じことをやり続けていたらもっともっと良くなっていくはずだよ」
話している薄雲は、槍持ちの眠るベッドに座り、常に何処かに触れている状態。今は手を握って熱を与えている。
たまに視線がうごくようなことはあるのだが、春雨とジェーナスに対しては向かない。あくまでも薄雲に対してのみの反応である。そこはやはり、相手が妹だからというのがあるのかもしれない。
「今も温かいの？」

「うーん……ちょっとまた冷たくなってきてるかも。でも、昨日ほどじゃないよ。触ってみる？」
薄雲に促されて、春雨は槍持ちに触れてみた。手は薄雲が握っているため、腕に触れてみると、言われてみれば確かにと思えるくらいには熱を帯び始めているのがわかった。
布団に包まれていたという補正はあったが、薄雲の温もりが槍持ちに移っているのは確か。手からだけでは微々たるものだろうが、全身を包んでいればそのうち全てが温まる。
「壊れた心が、凍りついちゃってるんだと思う。だから、私が姉さんの心を溶かしてあげようって思ったんだ。昨日の深夜に発作を起こしちゃったんだけど、姉さんが私のこと撫でてくれて」
「撫でてくれたの？　今まで無反応だったのが？」
「うん。今はまた無反応になっちゃったけど、少しずつは改善されてるんだよ。ご飯も食べられたしね」
コマンダン・テストが用意したのは、やはり食べやすさ重視の流動食。それに、身体を温めるものがいいと先んじて薄雲がお願いしたので、栄養たっぷりのリゾット風。スプーンで流し込むようにしたところ、しっかりと咀嚼と嚥下はしていたようだ。
生まれてどれだけ経つのかは誰にもわからないが、少なくともここに保護されるまでに、まともな食生活を送っていたとは到底思えない。槍持ちにとって、初めての食事であろう。
それもあってか、薄雲にだけはまた反応を返すようになっていたらしい。食事により身体が温まり、心も温まっていく。まともな生活で、壊れて凍りついた心は少しずつ少しずつ溶けていく。
「私達なら姉さんを姉さんにすることが出来ると思う。だから、これからも続けていくよ」
「私達が全力でＳｕｐｐｏｒｔするから！」
「うん、よろしくね」
晴れやかな笑みを見せる薄雲。発作は起こすものの、槍持ちの介護は薄雲の心も癒しているようだった。
敬愛する姉を失った結果溢れ出した寂しさは、姉の傍にいることで

癒されるのは必然だった。

一方、戦艦棲姫は姉妹姫に今までのことを説明していた。特に深夜、槍持ちの体温が上がったこと。

これは施設にとっても重要なこととなり得る。もしまた似たような存在が流れ着いたり、黒い繭から適切な処置をしたとしても溢れた感情によって同じような症状を引き起こしたりした場合、同じことをすることで改善が見えるかもしれないからだ。

「私の予想なんだけど、薄雲は槍持ちの妹なのよね。姉妹が関わると、なんやかんや改善していくんじゃないかしら」

戦艦棲姫の予想は、それなりに正鵠を得ていた。

以前よりも発作を起こすことが少なくなり、考え方もしっかりしてきた春雨も、その改善は鎮守府の面々、特に海風を筆頭とした妹達と再会してからだ。槍持ちもある意味近しい。むしろ姉と再会したようなものの薄雲の方にも影響がある。

姉妹とは言わず、縁の深い者と交流することが、状況の改善に繋がるのではないかと考えた。それこそ姉妹だけではなく、元々所属していた鎮守府で仲が良かった者とか。

「確かにそうかもしれないわねぇ。春雨ちゃん、最初と比べるとすごくいい顔をするようになったものねぇ」

「一番の新人が真っ先に改善されたのよね。春雨だけだもの。姉妹に再会出来たっていうのは」

「そうなると、戦艦ちゃんの言うことは一理あるのよねぇ」

とはいえ、そんなことが起きるのはレア中のレア。この施設ではまず起こらないことだ。

別個体でもいいとはいえ、姉妹に自分から会いに行くことも出来ず、出会えたとしてもあちらから攻撃される可能性が高い。そうなったら余計に心が壊れてしまう。このやり方は、まさに諸刃の剣。

「あの鎮守府と付き合っていくうちに、人間や艦娘にアタシ達の存在がちゃんと認められたら、もしかしたら姉妹とかに会わせてあげるこ

とは出来るかもしれないけど、あまり高望みはしない方がいいでしょ」
「……そうねぇ。あそこの、春雨ちゃんの鎮守府は信用出来るわぁ。提督くんは直に来たいと言ってくれていたくらいだし、ちゃんと顔を見ながら話すことが出来たもの。あの言葉に裏はないわねぇ。でも、他の人間がどうかと言われると」
「なんとも言えないわよね。それこそ、同胞(はらから)に恨みを持っている人間も数え切れないくらいいるだろうし。ほら、私の別個体で怖がられるわけだし」
だから相容れない存在となっているのだ。たった1人が信じてくれても、残りの人間が牙を剥いてくることは充分にあり得る。今でこそ現状維持としてくれているものの、実は虎視眈々と寝首をかこうとしている可能性すらあるのだ。
勿論、中間棲姫は人間達を信じたいと考えている。戦うつもりはないし、戦いそのものが好きではない。農作業や漁と比べると、戦争はあまりにも非生産的である。平和主義には酷な状況であることは間違いない。
「だから、現状維持が一番なのよぉ。あの子達はゆっくりと改善されてくれればいいわぁ。ハイリスクはハイリスクでしか無いんだものぉ」
「アタシもお姉の意見に賛成。そりゃ人間達とは仲良くしたいわ。でも、それを許してくれない存在もいるわけで」
「ええ。私は人間達と手を取り合って生きていくのが夢よぉ。でも、それは夢でしか無いのかもしれないのよねぇ。数少ない理解者と仲良くするのが一番なのかもしれないわぁ。増えてくれることを祈るけれどねぇ」

勿論、諦めているわけではない。現実を見ているだけである。中間棲姫も飛行場姫も、その辺りは理解している。
でも、夢を見るのは罪ではない。いつか隠れ住むことなく人間達と

仲良く出来る時を願って、今を続けていく。

艦娘への憎悪

槍持ちに刺激を与えるため、午後からは部屋から外に出て風を感じてもらうことになっていた。

槍持ち自身は自分の足で歩くこともしないため、車椅子か何かがあればそれで行こうと考えていたものの、流石の中間棲姫もそこまでは用意していない。背負っていくのも厳しいかと思っていたところ、そういうことが容易く出来る戦艦棲姫の艤装が車椅子代わりに動き出した。

「凄いですね……昨晩はベッド代わりになって、今回は車椅子代わりだなんて」

「でしょ。この子は万能な相棒なのよ。私以外にこういうことをするのは初めてだから、ちょっと照れてるみたいね」

戦艦棲姫の艤装が持つ豪腕は、掌だけでも椅子1つ分のサイズが優にある。大人である戦艦棲姫にすら余裕があるそれに槍持ちを腰掛けさせて、のっしのっしと歩いていた。

自分の力で自分を支えられない槍持ちを振り落とさないように指をうまく移動させて固定し、振動で振り落とさないように丁寧な移動を心がけている辺り、この艤装はやはり紳士的である。

その隣を歩くのは、やはり薄雲との兼ね合いもあって春雨とジェーナスである。午前中を使って他の者達との交流もしているが、なんだかんだこの2人が落ち着いている。

いろいろな感情を教えているようなものなので、槍持ちにはいい刺激にはなっているはずだった。松竹姉妹からは姉妹愛を、リシュリューとコマンダン・テストからは遠征した先の思い出を語られたりしていた。

伊４７は真っ先に戦闘をしてここに鹵獲された相手ではあるものの、面と向かっても過剰な反応をするわけでは無かった。伊４７はそれだけは少しホッとしていた。

「そろそろ槍持ちにもちゃんとしたお洋服を着せてあげたいわね」

ジェーナスが言うのは、槍持ちの見た目である。車椅子代わりの生

体艤装が心なしか照れているように見えるのは、それもあった。
　昨日の風呂の時には、どうにか脱がすという方向で入ってもらうことには成功したが、深海棲艦の服は艤装のようなもの。脱がした時点でその場で消滅してしまった。そこからの再構築を槍持ちがするわけがなく、そのままだと全裸になってしまうため、どうにか服をあてがった。
　今の槍持ちは、襲撃したときの服から一変、海風に着せていたようなシャツ1枚とインナーのみとなっている。槍持ちはおおよそ春雨と近しい体型だったおかげで、それで何とか全てを隠すことが出来ているものの、割と色々と足りないのでギリギリ。
「自分で考えることが出来るようになれば、その辺りも全部解決だよね。あのボロボロの服になっちゃうかもしれないけど」
「そこは慣れでどうとでもなるわ。ハルサメだって妹姫の服になれたんだもの」
「まぁそうだね。槍持ちさんもすぐにそういうこと出来るようになるよね」
　槍持ちが正気を取り戻し、薄雲の姉となることを前提として話をしている2人。ここからもう治らないだなんてカケラも考えておらず、既に仲間として受け入れている姿勢。
「農作業とか、気に入ってくれるかな」
「あら、この子はどちらかと言えば漁じゃない？　槍で大物を一突きにしてもらうなんていいと思うのだけど」
「海釣りだと難しくないかなそれ。浅瀬とかあればいいかもだけど、ここって堤防から釣るか沖に出て釣るかの2択だし」
　2人は槍持ち――叢雲がどんな艦娘だったかを知らなかったりする。そのため、農作業や漁に進んで参加するようなタイプなのかもわからない。なので、今話している内容は捕らぬ狸の皮算用に過ぎない。
「ウスグモ、この子はどっちが好きになれそうかしら！」
「薄雲ちゃんから見たらどうかな。農作業一緒にやれそうだったりする？」

「漁で一緒に食料調達してほしいわ。楽しんでくれるタイプ？」
そんな質問をされて、なんと回答をすればいいのか本気で困っている。だが、薄雲は心の底からこの２人が友達で良かったと思えた。
薄雲は当然姉と一緒にいたい。だが、この２人とも一緒にいたいと思っている。優先順位がどうしても姉に傾いてしまうのだが、春雨もジェーナスもかけがえの無い友人。手放したくないという欲が次から次へと溢れ出してくる。
わがままなのはわかっていても、この思いは止められない。薄雲が楽しく生きるためには、自分が求めた者が一緒にいてくれるだけでいいのかもしれない。代わりに、それを強く欲するのみ。
「姉さんなら、どっちもやってくれると思うよ。最初は抵抗がありそうだけど、やると決めたら自分を曲げないヒトだったから」
「なるほどね。なら、どっちの楽しさも知ってもらえればいいんだ」
「Ｏｋａｙ．　それなら私達でも充分に伝えられるわね！」
「農作業には最初難色示すかもだけどね。なんで海の者が陸で働かなくちゃいけないのって」
楽しそうに話す３人を、戦艦棲姫は心穏やかに見守っている。艤装の腕を小さく撫でながら、この穏やかな日々を過ごすのも悪くないなんて考えていた。そこに槍持ちが加われることも望みながら。
しかし、ここから少し話が変わる。
無反応を決め込んでいた槍持ちが、突然何かを察知したように動き始めた。いつもは何もしようとしなかったのに、そんなことが嘘だったかのように身体が跳ねる。
そんなことがあると思っていなかったせいで、生体艤装も反応が少しだけ遅れてしまった。固定していた指をすり抜けるように立ち上がり、自分の現状を省みることなく一点を集中するように眺める。
「えっ、ね、姉さん!?」
そんな動きをする槍持ちを見るのは当然ながら初めて。薄雲が驚いて声を上げた瞬間には、もう艤装の掌から飛び出していた。
向かっているのは明らかに海の方向。さらに言えば、いつも鎮守府の艦娘達が施設に来る方向である。

「まさか……艦娘を察知した!?」
そう考えるのが妥当だった。ここの誰からも、目のいい戦艦棲姫ですらまだわかっていない場所にいる艦娘に反応したかのように動き出したかと思ったら、まるで獣のように飛び出していってしまった。
心が壊れ、凍り付いたことで、溢れ出した感情によって生まれたことが、その攻撃性に特化した動きを可能にしていた。艦娘に怒りを持ち、沈める対象として認識しているせいか、それを察知した途端に動き出す。察知の範囲も尋常ではない。
「まずい、すぐに追います！　戦艦様、姉姫様か妹姫様に連絡を！」
「ええ、わかったわ。私だと多分槍持ちに追いつけない。貴女達に任せる」
ここで役割分担。戦艦棲姫は戦艦であるが故に、駆逐艦の速さより少し劣る。ただでさえ槍持ちが駆逐艦以上の素早さを持っているのだから、ここに参加するよりはすぐに援軍を呼ぶ方がいい。
そのため、いつもの3人組が槍持ちを追うことになった。春雨が即座に反応出来たため、薄雲もジェーナスもそれに倣うカタチで動き出す。
薄雲は動揺が隠せなかったものの、姉の一大事と考えてそれをどうにか振り払った。もう発作も起こしている余裕がない。
「多分誰かがまた施設に来てくれたんだと思う！　槍持ちさんがどうなってるか知らないから！」
「昨日の今日で来ちゃったのね。危険だと思わなかったのかしら」
昨日槍持ちに襲われたというのに、またここに来るのは何故だと考えたものの、そもそもの連絡手段が無いのだから、何か用がある場合は直にここまで来るしかない。それこそ、話に来る用は、槍持ちが関係していることなのかもしれない。
しかし、その槍持ちは施設にいる。槍持ちをどのように管理しているのかなんて、鎮守府が知る由もない。
それこそ、槍持ちがまた襲ってくるかもしれないことだって、わからない。
「なんて速さなの!?　私じゃ追いつけない！」

「姉さん、速度重視に生まれ変わっているのかも！　槍での接近戦が主体みたいだし！」
　追いかけながらも冷静に分析。槍持ちとの戦闘は伊４７しか経験しておらず、槍を使ったやたら速い戦い方ということくらいしか知らないため、実際に見てみるとそんな言葉じゃ言い表せないくらいの速度であることが理解出来た。
　ジェーナスも薄雲も、全速力で駆けているのだが、差が詰まることはなかった。海に差し掛かったところからは、むしろ引き離される程だった。
「私が先に行く！　どうにか足止めしておくから、後から追いついてきて！」
　そこで駆け抜けたのが春雨だ。海の上でのトップスピードは、この３人の中では一番上。今まで使っていた義脚を消し、さらに小回りが利く状態になってから全速力で追う。
　春雨ならば槍持ちにも追いつくことが出来る速度を出せた。見る見る内に差が詰まっていき、その背中に触れられるくらいに。
「槍持ちさん、止まって！」
　声をかけても無視。戦艦棲姫が初めて槍持ちを見た時がこの状況。どんな状態で声をかけても、何の反応もしない。艦娘以外には興味が無いと言わんばかりである。
「槍持ちさん！」
　どれだけ声をかけても、速度を落とすどころか、振り向くことすらしなかった。槍持ちにとっては、春雨はいないものとして扱われている。
　これはもう実力行使しかない。どうにか捕まえてその場に止めるしかない。
「ああもう、ごめんなさい！」
　その速度を活かして、槍持ちの真後ろに立った瞬間に飛び込む。脚が無い分体勢が低いため、槍持ちの膝に向かって体当たりをぶちかますカタチになった。
　後ろも振り返らずに駆け抜けていたところに突然の下半身への衝

撃は、槍持ちの体勢を崩すのには充分すぎた。トップスピードで転けることになり、槍持ちは顔面から海面に滑りこむことになる。
「やっと止まってくれた！」
その状態から改めて義脚を構築し、槍持ちを跨ぐように押さえ付けた。俗にいうマウントポジション。移動するための脚を浮かせているのだから、それさえ海面から離してしまえば槍持ちは動くことが出来ない。抜け出そうともがくが、深海棲艦化した春雨の力もそれなりにあるため、このポジションを取られた時点で簡単には抜け出すことは出来ない。
こうしてようやくわかった。薄雲が言っていた通り、槍持ちの肌は死人のように冷たかったのだが、今は確かに冷たいものの言うほどでは無くなっている。
一晩薄雲と眠ったことと、午前中に施設の者達と交流したことで、少しずつでも熱を帯び始めている。今だって、春雨の温もりを少しずつ少しずつ得ているのかもしれない。
「なんで飛び出したんですか！」
返答は無いだろうが、一応問うてみた春雨。無言でマウントを取っているのもどうかと思ったのと、２人がここまで辿り着くまでに何かしらの交流をしておきたかったと考えて。
すると、槍持ちは明確に春雨を見据えて、たった一言。
「カンムス……シズメル」
伊４７にも言った、今の槍持ちが持つ１つの意志。深海棲艦化したことによって強く刻まれた感情。侵略者気質なのか別の要因なのかは、槍持ちがこうなので判断出来ないが、少なくとも察知した瞬間に攻撃に出てしまうくらいには艦娘への憎悪を抱いていた。
対する春雨は、説得するためにはどうしたものかと考え始めた。伊４７のようにその場で気絶させることも出来ない。だからといって暴行を加えるわけにもいかない。
「ダメです。艦娘は仲間、友達です。沈めたら全部台無しになっちゃいます」
「……カンムス……シズメル」

「貴女がどんなことが起きてこうなってしまったのかはわかりません。でも、貴女のためにも、その考えはやめましょう。変わることは怖いことかもしれないけど、大丈夫、私達がついてます。私もジェーナスちゃんも、貴女の妹の薄雲ちゃんもいますから」
薄雲の名前が出た途端、ピクリと反応する。
「……ウス……グモ……」
「そうです。薄雲ちゃんです。艦娘を沈める必要なんてありません。憎いかもしれないけれど、それを続けていたら身を滅ぼすだけです。だから、今は抑えてください。薄雲ちゃんが悲しみます」
力が少しだけ緩んだ。短い時間でも親身にしていた薄雲には、少なからず感情を持ち始めているのかもしれない。
「……ウスグモ……ウスグモ……」
「薄雲ちゃんだけじゃないです。私もジェーナスちゃんも、みんなみんな、貴女のことを仲間だと思っているんです。だから、悪い道に向かう姿は見たくないんです。わかってもらえませんか」
槍持ちはそれで動かなくなった。相変わらず虚ろな目で空を見つめるだけ。しかし、艦娘が近くにいる状態で。
ここでようやく薄雲とジェーナスが春雨に追いついた。春雨が槍持ちを押さえ込んでいるところを見て驚いていたようだが、ちゃんと止まってくれていたのには喜んだ。

薄雲の名前に反応するくらいには変化してきた槍持ちだが、艦娘の存在を察知したところで襲い掛かろうとしてしまうのは問題だ。まだ交流には程遠いのだろう。

ホットライン

まだ誰にも感知出来ないような場所の艦娘の気配を発見したことで、突如として動き出した槍持ち。そのままでは、再び艦娘を襲ってしまうため、その速さに追いつくことが出来た春雨がどうにか押さえ込み、薄雲の名前を出すことでその動きが止まった。薄雲とジェーナスが合流する頃には、春雨が押さえつけることなく大人しくなっている。

これで槍持ちが艦娘を襲撃しようものなら、今までで得た信用も失われてしまうだろうし、最も避けたいであろう艦娘達との戦闘にまで発展してしまう。施設のためにも、ここで食い止めることが出来たのは喜ばしいことだった。

「槍持ちさん、施設に戻りましょう。薄雲ちゃんが迎えに来てくれましたよ」

「姉さん、大丈夫です。今から艦娘が来るんでしょうけど、敵では無いです。私達と仲良くしてくれる、れっきとした仲間です」

薄雲が槍持ちに話しかけることにより、一層安定しているように見えた。春雨ももう押さえつけるために力を入れておらず、マウントポジションも緩めようとしているほどだ。

先程飛び出して捕まえるまでにそれなりに時間はかかっているので、槍持ちが感知したであろう艦娘も大分こちらに近付いているはず。このままここにいたら、それを目の当たりにしてまた押さえつけることになってしまうため、合流してしまう前に早々に撤収をする。

「姉さん、立てますか」

薄雲の言葉を受けても、起き上がることはない。先程は暴走したものの、止まってしまえばまた動かなくなる。流石にこのまま海面を引きずって帰投するというのもどうかと思われたため、3人がかりで槍持ちを持ち上げた。

春雨は脚が無い分、高さがうまく合わせられないのだが、そこは薄雲もジェーナスも艤装を装備して海の上に立っている身。いくら槍持ちが艤装を装備していようが、2人である程度安定させられる。

「帰ったら着替えてもらった方がいいかしら。艤装じゃない服だからビショビショのままよ」
「そうだね。これは洗濯物に出して、新しいのを用意してもらった方がいいかも」
春雨が押さえ込むためにマウントポジションを取ったことで、着ているシャツは海水でビショビショ。余すところなく濡れて、肌に張り付いてしまっている。本来なら不快感を持ってもおかしくないのだが、槍持ちは相変わらず無表情。
せめて服を自分で作れるくらいにまで回復してくれたらと淡い期待を持ちつつも、無い物ねだりするのもどうかと思い、結局そのまま施設へと連れ帰った。
帰投中に姉妹姫に報告を終えて追ってきてくれた戦艦棲姫に引き渡すことが出来たことで、槍持ちは身体を拭かれて替えのシャツを着せられ、そのまま薄雲と戦艦棲姫に連れられて私室に篭ることとなった。

それから遅れること十数分。施設近海までやってきたのは、予想通り春雨の鎮守府の艦娘達だ。おそらくそれだろうと予測していた中間棲姫は、春雨とジェーナスを連れてそれを迎えに来ていた。
そのまま施設に入ってこられた場合、また槍持ちが反応して襲いかかってしまう可能性もある。ここまで来ているのなら流石に感知し続けているだろうが、今は大人しくしてくれているため、なるべく離れた位置で事を済ませたかったというのもある。
勿論、槍持ちがここにいるということも艦娘達に伝えるつもりだ。ここに来ると危険を伴うため、少しの間は施設には来ないようにしてほしいとも。
海の向こう側にうっすらと姿が見えてきたため、春雨が大きく手を振ると、あちらからも反応が見えた。部隊の先頭にいたのは意外にも五月雨であった。秘書艦業務として、ここへの遠征をまた引き受けていた。

しかし、今回は意外にも海風の駆逐隊はその中に含まれていない。五月雨の他には、いつもの千歳と千代田、金剛、そしてもう1人。万が一の時のことを考えて、さらに戦力として上昇させる存在。
「金剛お姉さまが信用出来るというのだから、この比叡も信用させていただきます！　それが中間棲姫であろうとも、中身が違うのであればそれはあの中間棲姫ではありません！」
「あらあら、また元気な子が来てくれたのねぇ」
金剛の姉妹艦、比叡。鎮守府の高速戦艦姉妹として、こういった重要な局面では度々駆り出される実力者である。
金剛を心酔しているため、その言葉を全て鵜呑みにするという欠点があるものの、今回に関しては、その性質は施設にとってもありがたいことである。金剛が仲良くしようとしているのだから、比叡も仲良くしようと考えてくれる。
「比叡さん、お久しぶりです」
「うん、春雨久しぶり。お姉さまに聞いてたよ。元気そうで何より！」
帽子ごと頭をグシャグシャと撫で回す比叡に、懐かしさを感じながら受け入れる春雨。あの姉があってこの妹あり。
金剛から古参特有の余裕を取っ払い、明るさに全て振ったような存在が比叡である。それ故に一切の嫌味はなく、されるがままでも不快感がまるで無い。
「えぇと、今日はどんな御用が？」
「あ、そうデース。五月雨、今日はすぐに本題に入りまショウ」
「ですね。こちらでいろいろと相談しまして、この施設にプレゼント……というか、和睦という間柄で必要だと思うものを持ってきました」
そう言いながら五月雨が取り出したのは、いつも使っているものとは違うタブレット。どう見ても新品なのだが、艦娘達が使っているものとは少し違うそれを、五月雨の手から中間棲姫に差し出す。
「これは、この前提督くんとお話しさせてもらった時のモノかしらぁ？」
「はい。性能はほとんどオミットされているんですけど、これを使え

ば、私達の鎮守府と連絡が取れます。今からやってみてもらいたいんですが、いいですか？」
「そうねぇ、試してみなくちゃ、やれるかわからないものねぇ」
早速タブレットを弄ろうとするが、中間棲姫には動かし方がわからない。そこでその説明は金剛と比叡が行なう。五月雨はこういう時に限ってドジったりしそうなのでと、満場一致の信用の無さである。
五月雨もぷんすか怒っていたものの、本当に大丈夫かと言われた時に言い返せないくらいに自分の体質を自覚していた。
渡されたタブレットは一応の防水仕様。勿論海の中に放り込むのは控えた方がいいが、ある程度はこの施設の環境に合わせたものが用意されている。海図を表示する機能などの艦娘が出撃するための機能は外されており、出来るのは通話のみ。
代わりに、前回の対談と同じようにビデオ通話は確実に出来るようになっており、充電もこの施設の電力で可能であると判断されていた。念のためと電源タップまで用意されている気の配りよう。
「ここを、こうねぇ」
言われるがままに画面をタッチして、いよいよ電話の時。小さな呼び出し音の後、画面が少しブレたかと思ったところで、その向こう側の提督の姿が画面上に現れた。
『もしもし、繋がったようだね』
「ええ、お久しぶり提督くん。これをプレゼントしてくれると聞いているのだけれど」
『ああ、以前にも話したと思うが、話のわかる上司と相談してね、そちらとは常時連絡が取れる手段を持っておいた方がいいという判断に至った』
それを許可したのは、ここの提督と関係を持つあの老齢の貴婦人。大本営所属である彼女からの指示で、この手段を実行に移したと話す。
またもや未知の深海棲艦による襲撃を受けたということで、流石にこれは大問題だと貴婦人に連絡を取ったそうだ。今回は全滅を回避することが出来たにしても、一度ならず二度までもまともではない深

海棲艦と交戦したとなれば話は別。
　そして、その窮地を救ってくれたのがこの施設の深海棲艦だ。元々和睦というカタチを取っているが、今回は明確に手助けしてくれたのだ。友好的な深海棲艦であることを如実に表した実例として、後世に伝えていかなくてはならないくらいの出来事である。
　そんな深海棲艦なのだから、また話をしたい時にアポ無しで施設に突撃するのは失礼に当たるのではと考えた。結果、事前に連絡が取れるようにそれが出来る機器を貸し出すべきと判断したという。
　電話だけで済むならそれでいい。今から行っていいかと子供の口約束のようなことでも、出来ればお互いに気も楽になるだろう。施設側から鎮守府に連絡をすることはそうそう無いとは思うが。
「なるほどねぇ。確かに、事前に連絡してもらえれば、こちらとしてはありがたいわぁ。今日もちょっと危なかったもの」
『そうなのかい？　それは申し訳ないことをした。そういう意味でも、今後はこちらから使者を送る時は事前通達が必要だろう』
「そうねぇ。なら、次はこちらから連絡させてもらうわぁ。少しの間、艦娘がこの施設に近付くのは難しいかもしれないもの」
　ここで今度は中間棲姫から槍持ちについての話をする。あの時に艦娘達を襲撃した深海棲艦は伊４７の手により沈黙させられ、現在は施設内で保護観察中であると。そして、薄雲を筆頭とした施設の者達により介護され、正気を取り戻す可能性が早くも見え始めていることを。
　しかし、たった今艦娘が近くに来たことを感知して襲撃に乗り出してしまった。事前に来ることがわかっていれば、私室から表に出さないように出来たし、薄雲と戦艦棲姫による監視がより強固になっていただろう。
『……なるほど。それは本当に申し訳ない。件（くだん）の深海棲艦についてはこちらも注意して、この部隊を君達のところに遣わせたのだが』
「こちらも連絡の手段を持っていないんだもの。これは仕方ないわぁ。でもこれからは、事前にお話が出来るようになったんだもの。お互いにチャラにしましょうねぇ」

『寛大な配慮、度々感謝する。手伝えることがあれば何でも言ってほしい。出来る限り力になりたい』
提督のその言葉に、そうだと思いついたように中間棲姫が笑みを浮かべる。
自分達には動くことが出来ず、この提督なら信用して託すことが出来るお願い事。
「それなら、1つ調べてほしいことがあるのよぉ」
『僕達で出来ることならば』
「今保護している子……こっちでは槍持ちちゃんと呼んでいるんだけれど、あの子の素性を調べてもらっていいかしらぁ。おかしなところがあるのよねぇ」
それは、第二第三の槍持ちを生み出さないための一手。
中間棲姫が見る限り、槍持ちの溢れた感情は『怒り』であり、特に艦娘に対して憎悪を抱いていることがわかっている。それを生み出した原因を探してほしいと伝えた。
それが駆逐隊全滅に繋がるかはわからない。しかし、槍持ちの存在がその事件の犯人に繋がる可能性が無いとは言えない。
『その槍持ちという深海棲艦は、元は何者なのかはわかるのかな』
「えぇと、薄雲ちゃんはあの子のことを叢雲と呼んでいたわねぇ」
『叢雲……駆逐艦叢雲か。了解した。こちらの上とも掛け合って、必ず素性を突き止める。これは我々だけの問題では無さそうだからね』
それこそ、貴婦人の大将が話していた艦娘を酷使するような鎮守府が関わっている可能性がある。
酷使に耐えられず、怒りが溢れ出し、この世の全てに恨みを持ってしまった、なんてことが考えられるため、槍持ちの素性を突き止めるのは鎮守府だけではなく大本営にもいい影響を与えるはずだ。
『では、少しの間は使者を遣わすことを控えさせてもらう。何かがあったら、この端末を使って連絡させてもらうよ』
「ええ、そうしてくれると嬉しいわぁ。ここに来た子達も、もてなしたいのは山々なのだけど、今は施設に入れてあげることが難しいの。ごめんなさいねぇ」

「いえいえ、構いません。こちらもアポ無しで来ているんですから、門前払いでも文句を言えない立場です。むしろ、ご迷惑をかけてごめんなさい」
　改めて五月雨の方からも謝罪。本心からの言葉であるため、より一層の信頼を勝ち取っていくのだが、これは本人の知る由もないことである。
「貴女は初めてなのに、こんなことになってごめんなさいねぇ」
「大丈夫です！　この目で見れば、ここの良さはわかります。この比叡、貴女のことは信頼出来る相手だと確信していますから！」
「比叡はこういう子なのデース。元気が有り余ってマスけど、素直で優しい子デスから、仲良くしてあげてくだサーイ」
　比叡は中間棲姫としっかり握手までして、またここに来ると宣言した。
「あの……海風はどうしていますか」
　ここで春雨が気になることを聞く。
　どういう状況であれ、春雨に会うためにここに来るのが当たり前のようになっていた。珍しく部隊には海風達がいないのは、どうしても気になった。
「海風は今、山風の監視の下で療養中。また心にガタが来てて……」
「……そっか。なら、海風と話をするためにも、この端末はあって嬉しいかも。司令官、そういうカタチで使わせてもらってもいいですか」
『ああ、僕としてもそれはありがたい。海風の憔悴は正直見ていて辛いからね。春雨と話すことが出来れば、また改善されるだろう』
　通信端末はそういうカタチでも使えるだろう。声だけでなく姿も見せられるのだから、海風にとってはありがたいことこの上ないはずだ。
「それなら、この端末はダイニングにでも置いておきましょうかぁ。でも、これをそんな私的利用みたいにしちゃってもいいのかしらぁ？」
『一向に構わない。艦娘達のメンタルを管理するのも僕の仕事だ。それが最善だと言うのなら、多少のリスクは考えないものとするよ。そ

れに、君達は信用に値する存在だ。リスクにもならない』
「ふふ、ならありがたく使わせてもらいましょう。世間話が出来るというのも、いい刺激になるわぁ」
これにより、鎮守府と施設を繋ぐホットラインは確立される。今後何かあった場合、即座に連絡が取れることで、迅速に事の解決に動き出すことが出来るようになった。

しかし、演習の依頼については出来ず。施設も今、槍持ちという存在でそんなことを言っている余裕が無いのは確かである。部隊の者達も、これに関しては余計なことを話さずで終わった。
今はまだ、鎮守府だけで戦う力を鍛え上げる必要がある。少しハードになるかもしれないが、未知の敵に打ち勝つためには多少の苦難は考慮しなくてはならない。

少しずつ前へ

鎮守府からの遣いである艦娘の部隊から、通信端末をプレゼントされた施設。一種の友好の証であり、お互いに連絡が取りたい時に自由に出来るようにすることで、困った時には力を合わせるという意思の表明にもなる。

また、春雨が海風と話すためにも使っていいということで、鎮守府の端末にもかかわらず私的利用も問題ないという好待遇である。鎮守府側の艦娘と施設の元艦娘、どちらのメンタルケアにも使える可能性がある。

艦娘の部隊が帰投後、通信端末は施設で最もヒトがいるであろうダイニングに配置されることになった。なんだかんだで誰かしらいるのがその部屋であり、誰かが応答出来れば最終的には姉妹姫のどちらかに伝わる。そういう意味ではここが最適な場所。

「これを使えば、また鎮守府の子達と話せるのよね」

「うん。登録されてるのは鎮守府の番号だけみたいだから、本当にこと鎮守府の通信だけのモノみたい」

ダイニングに配置しながら、春雨とジェーナスはこれについて話していた。

この端末を特に使うことになるのは春雨だろう。海風から連絡が来るだろうし、自分からも寂しさを紛らわせるために話をしたくなるかもしれない。逆に、あの鎮守府に用があるものが施設にいないというのもある。

基本的には、施設側から連絡を取ることの方が少ないだろう。何と言っても、施設側から話さなくてはいけないことが無いからだ。この端末を使ってすることなんて、言ってしまえば交流だけ。たわいないお喋りで精神的な癒しを得ることくらいである。

「顔を見ながら話が出来るっていうのが嬉しいね。声だけだとやっぱり物足りないもん」

「そうね。やっぱり顔を見ながらお喋りしたいわよね。それで一緒のお茶が飲めれば最高！」

「あはは、確かに。画面越しでもティータイムをしたいね」
　あちら側にそんな余裕があるかはわからないし、こちらと違って鎮守府では管理も提督が行なっているだろうから、簡単にそういうことは出来なそうである。望むくらいはいくらでもするものの、それが叶うかは今はわからない。
「そのときは、ウスグモや槍持ちも一緒に出来ればいいんだけれど」
「……そうだね。私もそうしたい」
　薄雲は今、槍持ちの部屋で暴走しないように監視中。春雨達が艦娘達と話をしていたとき、槍持ちがどういう反応を示したかは知る由もない。しかし、何事もなく対面し、端末を渡されて帰投するまで、施設では何も無かったようなので、再びの襲撃は抑え込めたようである。
「まずは槍持ちとティータイムよね。どんな子かもわからないんだもの」
「うん、槍持ちさんも入れて、４人で楽しみたいね。人数が増えれば増えるほど、寂しくなくなるから」
「ええ。ハルサメもウスグモも、寂しいなんて思わせないわ！」
　そんなことを話しながら、ジェーナスはいつものように紅茶を淹れていく。いつもならここにいる人数分なのだが、今回はジェーナス自身と春雨の分に加え、追加で３人分の紅茶を用意していた。先程部屋に引っ込められていた槍持ちのところに持っていくつもりのようだ。
　ジェーナスは普段のダイニングでのティータイムから趣向を変え、槍持ちの私室でそれをしようと考えていた。薄雲と戦艦棲姫にも振る舞いたいというのと、槍持ちも含めた仲間達でそれを楽しみたかったからである。
「お茶菓子もＯｋａｙ．　ハルサメ、持ってもらっていい？」
「うん、いいよ。カートとかあればいいんだけど」
「大丈夫大丈夫。これくらいなら軽いものよ」
　５人分のお茶が入ったティーポットとカップをお盆に載せ、軽やかなステップで槍持ちの私室へと向かうジェーナス。春雨もお茶菓子を手にそれを追った。

ジェーナスの前向きな行動は空気を明るくする。今はテンションが低いわけではないので、余計に楽しくなれた。この施設の成果を体現するのがジェーナスなのかもしれない。

槍持ちの私室。部屋の前に紅茶を持つジェーナスが現れたことで、薄雲も戦艦棲姫も快く中に通した。ちょうど甘いモノが欲しかったと、2人の来訪に小さく喜んでいるようである。

槍持ちは相変わらずベッドの上でぼんやりとしていた。午前中よりもほんの少しだけ熱を得たような雰囲気はあるのだが、正気を取り戻すまでにはまだまだ程遠い。

「私達がみんなと話してるとき、どうだった？」

「一度落ち着いたからかな、何事も無かったよ。戦艦さんの艤装も陣取っててくれたんだけど、姉さんはずっとこんな調子だった」

扉の前には槍持ちが部屋から出ていかないようにと戦艦棲姫の艤装が待機していた。流石の槍持ちも、この図体の艤装相手に部屋から抜け出すことは出来ないだろう。

窓から飛び出すというのも考えられるものの、そもそも薄雲が手を握ったままだ。一応薄雲相手には何らかの反応を見せるようになった槍持ちが、その手を振り払ってまで本能に忠実に行動するかは何とも言えない状態。

薄雲としては、そんなことをしないと信じているからこそ、ただ手を繋いでいるだけで、この部屋に繋ぎ止めることが出来た。

「一度春雨ちゃんが抑えてくれたから、姉さんはまた暴走しちゃうようなことは無かったのかも。ありがとう、春雨ちゃん」

「ううん、困ったときはお互い様だもん。力になるからね」

「私もよウスグモ。力を貸してほしかったら、何でも言っていいんだからね！」

槍持ちの存在があったとしても、この3人組は仲がいい。春雨が望んだように、槍持ちが正気を取り戻したら、この輪の中に入れて4人組にだってなれるはずだ。

「ねぇ、ウスグモ。私槍持ちの分のお茶も淹れてきたのよ。飲んでもらえるかしら」
「どうだろう……でも、ご飯も食べられたから大丈夫かも。お水はコップからだと難しそうだからストローを使ったんだけど、ちゃんと飲んでくれたんだ」
　流石に淹れたばかりの紅茶をストローで啜らせるわけにはいかないと、みんなと同じようにカップに注いで薄雲に渡した。
「姉さん、ジェーナスちゃんが紅茶を淹れてくれましたよ。飲めますか？」
　薄雲は渡された紅茶を、まだ反応があるかはわからないものの、槍持ちの口元に近付けてみた。そのまま飲ませたら火傷必至なので、まずは匂いだけでも堪能してもらうように。すると、槍持ちの鼻がヒクリと動いた。その香ばしい匂いに反応したようである。
　飲むことは出来ないまでも、視線は薄雲の方に動いた。薄雲の声掛けにも反応するようにはなっていたが、今回はそれに加えて匂い。聴覚と嗅覚を刺激することで、その凍りついた思考回路を溶かしていた。
「うーん、流石に飲んでくれないか。仕方ないわよね。でも匂いはわかってるみたい」
「姉さんって、ちょっとだけその、美味しいものに目が無くて」
「Ｇｌｕｔｔｏｎｏｕｓなのね！　ならもっと美味しいもの食べて貰わなくちゃ！　ハルサメ、お茶菓子とかも食べさせてみましょ！」
「食べられるかなぁコレ。少し硬いものでもちゃんと噛める？」
「ど、どうだろう。今まで流動食ばかりだったから」
　和気藹々とした光景に、戦艦棲姫も穏やかに微笑んでいた。今までいろいろなところを旅してきたが、同胞がこんなに賑やかに暮らしているところはここしかない。だからこそ、旅の途中でもふとしたタイミングでここに立ち寄るのだ。
　今までの施設とは少しだけ違う感覚ではあったものの、子供達がわちゃわちゃと暮らしているところを見ると、母性本能が刺激されるような感覚を覚える。自然と笑みが溢れるようなそんな生活も悪くは

ないかもと思えるほどに。
「ふふ、楽しいわね」
念のため扉前を陣取っていた艤装の顔を撫でた。艤装もその雰囲気を楽しむかのように小さく頷いた。

そんなこんなで夕食時。準備をしている最中に、ダイニングに設置されている端末から突然着信音が鳴り始めた。
今日の夕食当番は飛行場姫。その手伝いに春雨とジェーナスがいたため、早速来たかと飛行場姫がそれを取る。一応使い方は聞いており、そもそもがかなり簡単な設定なので、画面をタッチするだけで電話を取ることは出来た。
「はいはい、早速かけてきたのね」
『時間は大丈夫かな』
「問題ないわ。今から夕食の準備をするところだったから」
『なるほど、では今後はこの時間を外すようにしておこう。我々のせいで食事が遅れるのはよろしくないだろう』
そういったところに気が使える提督に、飛行場姫は少なからず好感を覚える。これで図々しく用件を伝えてくるようなら、軽く叱ってやろうと思っていたくらいだ。
「それで、何か重要なことかしら」
『いや、そちらの姉姫にも話しているが、世間話程度の電話のつもりだった。いや、ただただ話したいという子がここにいるのでね』
画面がガタッと揺れると、提督から映像がグルリと切り替わり、執務室の逆側が映し出される。
そこには、早速そういう理由で端末を使おうとした海風の姿が。後ろには妹達まで勢揃い。海風のメンタルケアのために、春雨との会話を望んでいるようである。
飛行場姫から見ても、海風の表情はまた疲れが溜まっているように見えた。初めてこの施設を訪れたときの焦燥感や憔悴は薄れているものの、それがまた蓄積されているようにも感じる。

「なるほどね、ちょうど良かったわ。これをこのまま運んでいいのよね確か」
　飛行場姫も端末をそこから外し、キッチンへと運んだ。そこには和やかに夕食の準備をしている春雨とジェーナス。海風がある意味望んでいる映像が映し出される。
「あ、海風！　あんまり調子が良くないって聞いたから心配したよ」
『うっ……すみません……』
　提督から端末を渡され、海風のアップに。その画角に入ろうと、江風や涼風が後ろから顔を押し付けていた。
『いぇーい、春雨の姉貴、元気にしてるかい？』
「うん、大丈夫。ここで楽しく生きてるよ。今もほら、妹姫様に教わりながら、お刺身を用意してるの」
『うへぇ、すげぇな姉貴。どンどン腕上げてンじゃン』
　話しながらもしっかりと刺身の切り出しは止めない。元々料理が出来る春雨だが、ここに来てますます腕を上げている。飛行場姫の他にも、リシュリューとコマンダン・テストという達人のおかげである。
『こっちはこっちで元気にやってんだけどさ、海風姉がこんなだから、春雨姉にちょいと元気付けてやってほしいのさ』
『涼風……春雨姉さんだってやることが……』
「ううん、それくらいならお安い御用だよ」
　キリがついたところで包丁を置き、ちゃんとカメラを見据えてから海風に言葉を紡ぐ。
「私、みんなが鎮守府に帰った後、また発作起こしちゃったんだ。みんなと話せたことが嬉しくて、それが無くなったから寂しくなっちゃった」
『姉さん……』
「だからさ、また元気な姿でここに来てね。今はちょっと難しいけど、きっとまた会えるようになるから」
　映像の海風が複雑な表情を見せる。春雨に声援を受けて嬉しいのと、こんな言葉をかけてもらえた申し訳なさ、不甲斐なさが入り交じって、素直に笑えなかった。

「海風、私も約束してほしい。絶対に無理をしないで。死んだら元も子もないんだから」
『……はい。私も、姉さんと直に話したいです。映像だけじゃなく、触れ合いながら話したいです』
「私もだよ。だから、その時が来るまでは無茶はダメ。身体に一番気を遣って、毎日を生きてほしい。大丈夫、私はずっとここにいる。もう心配なんてかけさせないから」
ニッコリと笑みを送ると、海風は少し涙目で頷いた。
これで本当に無理をやめるかと言われれば何とも言えないのが現状だが、最も尊敬する春雨からの激励を受けたら、その言葉を守るために尽力しようと考える。
「山風、江風、涼風。海風のことをよろしくね。私はここで応援することしか出来ないけど、みんななら大丈夫。きっと困難にも打ち勝てるよ」
『うっす。春雨の姉貴にそう言ってもらえたなら百人力だぜ！』
『あたいらなら大丈夫。みんなでしっかりやってくからさ』
山風も無言で頷く。むしろ一番力が入っていたのは山風である。海風がこれ以上酷いことにならないように、春雨の思いを継いで、ここにいる。
『そンじゃあさ、今から時間があるなら海風の姉貴と話しておくれよ。海風の姉貴、春雨の姉貴と話をするだけで元気すっげぇ出るからさ』
『ちょ、ちょっと江風!?』
「うん、いいよ。時間が許す限り、お喋りしよっか。海風が元気になるのなら、私も嬉しいからね」

通信端末の初めての利用は、海風のメンタルケアに使われることになった。これにより春雨も楽しむことが出来て一石二鳥。
この端末を準備出来て良かったと、提督はそれを見ながら喜んでいた。私的利用でも、艦娘がより伸び伸びと生きてくれているのならそれでいい。少しずつでも前に進めているのだから。

槍持ちの素性

海風達が施設との通信を終える。時間にしてざっと15分程度なのだが、海風はそれだけでも心が癒されているように見えた。春雨と話をすることがメンタルケアに繋がり、肉体的な疲れも少しだけ癒されているようにも思えた。

こういう機会を作れたことは、提督にとって、とてもありがたいことだった。艦娘の身体的な部分は入渠や休日を作ることでケア出来るが、精神的な部分はどうしても本人次第になる。身体を休めるのとは違って、そのケアの方法が人それぞれだからだ。

今鎮守府の中で特に精神的に疲弊しているのは、満場一致で海風である。そのケアの方法が、いなくなった姉との交流という実現不可能なモノ。それが、予想外なカタチで実現出来たのだから、使わない手は無かった。

結果は上々。海風もこの件を話した時点ですぐに使いたいと言い出す程であり、使ったことにより回復の傾向も見えている。

あちらにも都合というものがあるだろうから、頻繁に使い倒すことは出来ないだろうが、定期的に使わせてもらって、ガタガタになった海風の心を回復させていく方向で進めていくように決めた。

「五月雨、休憩終わりましたぁ」

海風達と入れ違いになるように五月雨が執務室に。午後イチの施設への遠征から帰投し、お風呂に入ってからの秘書艦業務再開。実際は業務そのものがもう少しで終わるくらいの時間なのだが、五月雨は律儀に執務室にやってきた。

「さっきすれ違ったんですけど、海風、すごく嬉しそうでしたよ」

「それは良かった。これで少しでも良くなってくれればいいんだが」

「あはは……なんとも言えませんね。でも、顔色は良くなってましたから、いい傾向なんじゃないですかね」

秘書艦としての定位置について、残り少ない時間の雑務を始めていく。最古参で当初から秘書艦を続けているため、ドジっ子でも手慣れたものである。

「五月雨が戻ってくるまでに、こちらで例の件を調べておいたよ」
「例の件……って、槍持ちのことですか？」
「ああ。ここ最近で行方不明、もしくは轟沈報告がされた駆逐艦叢雲がいないかどうかをね」
　中間棲姫からの依頼である、槍持ちの素性の調査。それは艦娘達には出来ない、提督のみに与えられた仕事である。
　やれることといえば、資料を片っ端から確認することと、大本営への問い合わせ。資料に関しては、事務員の役目も果たす大淀の手も借り、最近の轟沈報告に全て目を通すことになる。
「それで、どうだったんですか？」
「こちらの方にまで出回ってくるような大きな戦いが最近は無かったようで、轟沈報告は残念ながら見つかっていない。しかし、その事実を隠蔽しているとなったら話は変わるんだがね。叢雲が轟沈しているという条件で絞ると、直近がおおよそ半年前だ」
　大きな戦いも無ければ、小さな小競り合いもあまり無いようである。一番最近の駆逐艦叢雲の轟沈報告は、半年ほど前に練習航海中に想定外の敵勢力が現れたことにより艦隊全滅という事件くらいであった。
　言うまでもなく、これが施設の薄雲が深海棲艦化するきっかけとなった事件。その当時は怖いこともあるものだと思い、哨戒でも気を抜くことなく万全を期して挑んでいた。それでも今回のことが起きてしまったので、酷く落ち込んでしまったのだが。
　自分達に降り掛かった事件に酷似しているということで、それは強く目に留まった。練習航海用に使われている航路だというのに、強力な深海棲艦が現れる。これは、既に戦いの終わった海域に哨戒に向かった駆逐隊が行方不明になるのと殆ど同じ。
　もしかしたら関連性のある事件なのかと疑ったものの、今は状況が違うだけの別物だと考えている。時間が随分と空いているからだ。流石に半年前の叢雲が、今になって深海棲艦化して現れるとは到底考えられない。
　しかし、深海棲艦は未だに生態が全く解き明かされていない謎の生

命体だ。中間棲姫達や深海棲艦化する艦娘の存在により、より一層謎だらけになってしまっているのだ。それ故に、半年かけて蘇ったと言われてもそうかもしれないと考えてしまう。
「そうなることも見越して、先んじて大本営の話が通る人……いつもの大将に連絡をしておいた」
「ああ、あのおばさまですね」
「あの人なら、大本営の力も使って、僕達では触れられないところまで調べてくれるはずだ。勿論、僕達も出来る限りのことはするつもりだがね」
　ここで出てくるのがあの老齢の貴婦人。大本営所属という大きな地位を余すことなく使い、槍持ちの素性を調べてくれると約束してくれたそうだ。
　その観点としては、やはり艦娘を酷使している鎮守府。深海棲艦化が、心が壊れて強い感情が溢れ出すことで発生する事象である事を事前に聞いているため、それが起こりやすい場所に当たりをつけるためにもその方向性で調査をするとのこと。
「これで大将の方が大当たりだった場合……なんとも胸糞悪い話になりそうだ」
「鎮守府で酷使されて、使い捨てみたいにされたってことですもんね……同情しちゃいます。ああなってもおかしくないよねって」
「ああ。僕は絶対にそんなことをしないから安心してくれ」
「勿論です。それがわかっているから、みんな自分の意思で提督について行くんですよ」
　艦娘は『ヒトのカタチをした兵器』であるという考え方をもって運営している鎮守府も少なからずある。そういう鎮守府は一様に殺伐とした雰囲気で、この鎮守府のような和気藹々とした空気はあまり無い。それこそ、艦娘達は兵器のように淡々と任務を遂行する。
　実際その方が、今回の海風のようなメンタルケアなども必要なく、余計な手間がかからないだろう。身体のケアだけしておけば、あとは確実に侵略者を殲滅する。それこそ、兵器をメンテナンスするくらいの考え。だが逆に、艦娘を丁寧に扱うという意味でもある。殺伐とし

ていても、生き生きとしていないわけではない。
だが、艦娘だってモノを考え、人間と同じように生きているのだ。根幹は兵器かもしれないが、姿は知的生命体。人間と変わらない。それ故に、『人間と同じだけの権限を与えるのが妥当である』という考え方をもって運営している鎮守府も存在する。その1つがこの鎮守府だし、貴婦人の大将がトップを務める鎮守府もそれだ。
見た目が子供である艦娘だっているのだから、それ相応に扱う。勿論、存在そのものが機密の塊であるため、必要最低限というのはルールとしてあるのだが、その中でしっかり娯楽も与え、人間と同じように生活してもらうことで、最大限の力を発揮してもらう。
「僕は別に艦娘を兵器として扱うなと思っているわけじゃない。だが、僕は今のように艦娘と手を取り合って戦った方が、効率がいいと思っているんだ。勿論、ヒトとして扱っているからこそ生まれた考え方だとは思うけどね」
「ありがたいですよ。私達、結局のところ人間では無いですから。でも、ここは居心地がいいので、張り切って戦えます。死ぬのは当然怖いですけどね」
「ああ、そうあってくれ。それが僕の方針だからね」
どっちがいいとか悪いとかは、おそらく答えが出ないだろう。どちらにもメリットはあるしデメリットもある。それはお互いに認め合っている。
故に、お互いが基本的には干渉しない、やり方に文句を言わないことで、バランスをとっていた。人間同士の争いは、今最も非生産的な行動だからだ。和気藹々としていようが殺伐としていようが、向かっている場所は同じ『海の平和』なのだ。やり方云々に口出しをするのはナンセンス。
「だが、艦娘を使い捨ての道具だと思っている連中は見過ごせない。正式に罰する法が無いのが厄介なところだが、今回の件……深海棲艦化の件が公(おおやけ)になれば、考えを改めるところも出てきてくれるだろう」
「そうですね……いくら別個体がいる私達でも、自分と同じ個体が蔑ろにされているところは見ていて気分の良いことじゃないです」

その運営方針の結果、深海棲艦が増えているというのなら話は変わる。『艦娘は兵器である』という考え方が激化して、『壊れても替えがある』というよろしくない思想の下で運営している、いわゆるブラック鎮守府のせいで、この戦いが一向に終わりに進まないのなら、今以上に厳しく罰するべきだ。

精神どころか身体のケアすらも怠り、壊れたら次の艦娘を使うというのは、どちら側の鎮守府から見ても忌避すべき思想。前者から見れば、そこまでしなくては戦果が挙げられない無能。後者から見れば、非人道的な手段に出ている外道。

それ故に、大本営も最初から罰を与えるように軍規を整備しているのだ。そういうことが許されないように。

と、五月雨と話していると、今度は内線が鳴り響く。施設との端末は直通のモノになっているが、外部からの連絡は一旦大淀がそれを受け取り、必要とあれば提督に繋ぐ。

こちらは施設との端末とは違ってただの電話。ビデオ通話なんてものは搭載されていない。その代わりに、大本営との通信であるために逐一録音される仕様になっており、おかしな言動は出来ないようになっている。

『大将からお電話です。今よろしかったですか？』

「ああ、問題ない。繋いでくれ」

淡々とした事務的な大淀の声はすぐに終わり、電話が繋がる。

「お電話代わりました。どうかされましたか」

『さっきの件だけれど、ある程度目星がついたから連絡させてもらったわ』

「早すぎません!?」

思わず声を荒げてしまった提督。叢雲の件の調査を依頼したのは、ほんの数時間前だ。提督が大淀と連携して資料を片っ端から読み解いている間に、何かしらの手がかりに辿り着いているらしい。

『困ったことに、良くない方向になりそうよ。不正な資源の使用が見つかった鎮守府があるの。叩けば埃しか出ないようなところね』

その鎮守府はそこまで古い鎮守府ではないらしく、新人であるが故

に、手柄を立てることに躍起になっているような提督が運営しているような場所だとか。今までは巧妙に隠し続けてきたようだが、ついにボロを出したらしい。頭がいいのか悪いのか。
『その叢雲は、この鎮守府所属だった可能性が高いわ。明日以降に視察と称して洗いざらい話してもらおうかと思うの』
「そう……ですか。了解しました」
『その結果はまた追って連絡させてもらうわね』
　この鎮守府に訪れたときなどは、朗らかな笑みを浮かべたり優しい声で艦娘達と話をしたりと、とても接しやすいお婆ちゃんといったイメージなのだが、この電話越しの声は淡々とした執行者のような冷たいもの。大本営所属の大将という強さを遺憾なく発揮しそうである。
「黒い繭……深海棲艦化のことは、大本営は」
『伝えさせてもらったわ。実例についてはまだ詳しく話せないけれど、そういう事象が確認されたということをね。全鎮守府に通達されることになるとは思うけれど、そこは慎重に行くでしょう』
　こればっかりは誰にでもいち早く知ってもらいたい事実。艦娘は扱い方を間違えると敵になり得る存在なのだと。しかし、逆にこれによって艦娘に対して不信感を覚える提督がいないとも限らない。
　故に、この事実を全鎮守府に通達するのは今すぐではない。大丈夫であると確認出来てからである。ただでさえ大本営すらも大混乱に陥ったのだから、それ以下の鎮守府がその事実を聞いても、簡単に受け入れられないだろう。
『大本営のみんなは、全員納得はしてくれたわ。これを知ったからといって、自分の艦娘を解体するような子達はいないみたい』
「それは安心しました」
『ただ……こういう事実を耳に届かせちゃいけない連中もいるの。だから慎重に行かなくちゃね』
　その連中というのが、艦娘や深海棲艦について研究している機関である。艦娘が深海棲艦に変化するなんてことを知ったら、どうにかして実験しようと艦娘に対して非人道的な実験を繰り返して、無理矢理感情を溢れさせたりするだろう。

『それじゃあ、こちらからの連絡は以上。引き続き、彼女達との交流を続けてちょうだい』
「了解しました。タブレットの件もありがとうございます。早速使えました」
『それは良かったわ。仲良くなれることはいいことだもの。戦うのではなく、仲良く共存していければ、戦いも早く終わるものね』

槍持ちの調査はあっという間に進んでいく。この後、中間棲姫も鎮守府を頼って良かったと思えるほどになるだろう。
こうやって信頼を紡いでいき、共存の道はより前進していく。

劇的な変化

翌日。それはまず朝食の時から始まった。コマンダン・テスト手製の療養食を薄雲が運んだところ、いつもは視線が少し動くだけだったところが、首から動いた。明確に身体を動かして反応したため、戦艦棲姫がいたから事なきを得たものの、薄雲は驚いて朝食を落としかけてしまったほどである。

「ね、姉さん、反応してくれた……」

「ちょっと私も驚いたわ。昨日からまた良くなってるじゃない」

昨日あったことと言えば、ジェーナスの紅茶に反応したことと、近海にまで来た艦娘の部隊に反応して襲撃に向かったことくらい。紅茶は今までに無い刺激であるが、ここまで回復するようなモノでは無いと感じていた。

だとすると、襲撃が理由となってしまうのだが、それは艦娘の部隊相手にも行なっているので、目新しい刺激にはならない。そうなってしまうと、一番これの理由と考えられるのは、春雨に止められたこととなる。

「春雨ちゃんに食い止めてもらったことが、いい刺激になった……？」

「一番の可能性がそれよね。でも、襲撃を食い止められるのはヨナにもされてるでしょ。代わり映えあるかしらね」

言われてみればと薄雲は考え直す。しかし、思い当たる節はもうそれくらいしか無かった。

「姉さん、今日はもう人並みの熱を感じるくらいになってきました。私の熱が移ってくれたのかなとは思うんですけど」

「どれどれ」

戦艦棲姫が槍持ちの手に触れると、確かに初期と比べたらその違いは歴然としていた。温かいとまでは行かずとも、死人のような冷たさは鳴りを潜め、少し体温の低いヒトと感じるくらいにまで変化していた。

「確かに、最初と比べたら雲泥の差ね。生きてるってわかるわ」

「ですよね。手でそれなら、頭も大分温まってますよ。考える力も

戻ってきてるかもです」
この施設で沢山の刺激を短期間で与えられ、温まってきた思考回路。そこに艦娘の気配を感知して即座に行動したが、春雨によって食い止められるという、また新しい刺激が入った。さらには、薄雲はこの時知らないが、その時の槍持ちは薄雲の名前を聞いたことで動きを止めているのだ。ならば、もうそれしか理由はない。
実際、槍持ちの思考回路は、当初から比べれば格段に回復していた。薄雲という実の妹の存在が常に身近にいる安心感が、槍持ちに本来の艦娘の感情を蘇らせようとしているのは確かである。もう少し時間がかかるかもしれないが、確実に一歩一歩進んでいる。
「とりあえず、朝ご飯にしてあげましょ。槍持ちが待ち構えてるわ」
「あっ、そ、そうでした。あまりに驚いてしまって忘れてました。姉さん、今日もコマさんの手製ですよ」
昨日と同じように匂いにも反応し、薄雲の顔を見た後に療養食も見る。視線だけではなく、顔まで動かして。まだ無表情で、かつ言葉も発しないが、今までのことを考えれば劇的な変化。
「姉さん、食べられますか?」
ここでも今までにない反応。薄雲の問いに対して、首を小さく縦に振った。これもまた驚いてスプーンを落としかけた。
無反応が基本で、口元に近付けてようやく食べてもらえる程度だったのが、自主的に口を開けて待っている程だった。
日に日に回復していく槍持ちの姿に喜びが隠せない薄雲だったが、それは朝食を終えてからみんなの前に持ち越すことにした。しかし、薄雲はこの部屋から離れるわけにはいかない。そのため、朝食後に戦艦棲姫が皆に伝えに行くということとなった。
薄雲と戦艦棲姫は、この数日間で今まで以上に仲良くなっている。おかげで寂しさも感じず、槍持ちのおかげで、発作も最初の深夜以外は起こしていない。非常に安定した毎日を過ごしている。
槍持ちが施設に加わったことで、姉妹と再会出来た春雨と同じように、薄雲も少し上の段階へとステップアップ出来たのかもしれない。

朝食後、薄雲に話していた通り、戦艦棲姫が姉妹姫に槍持ちの近況を話していた。ダイニングの面々は朝食を少し前に終えており、姉妹姫は各々の作業に向かうべく準備をしているところ。タイミングがあって良かったと、戦艦棲姫は安堵した。

　掻い摘んで話すと、２人とも大いに驚いていた。この施設に保護されてたった２日でそこまで回復するとは、飛行場姫どころか中間棲姫でも思っていなかったようである。

「やっぱり前に私が言った通りなんじゃないかしら。実の妹と関わると、状況がどんどん改善されるのよ」

「こうなってくると、それを信じざるを得ないわよねぇ。春雨ちゃん然り、槍持ちちゃん然り、好転してるのはみんな、自分の姉妹に出会えている子なんだもの」

　春雨だけだったらまだたまたまかなで終わっていたかもしれないが、槍持ちの回復と薄雲の成長まで見たら、もうこれは事実として受け入れるしか無くなる。

　心を壊したことにより感情が溢れ出し、深海棲艦と化した艦娘は、実の姉妹と触れ合うことで、壊れた心が修復されていく。完治することはあり得ないが、劇的に改善されることは実証された。

「でも、アタシらがそれを用意してあげることなんて出来ないわよ。春雨も薄雲も、たまたま運が良かっただけよね」

「それはそうでしょうねぇ。私も妹ちゃんも、ここでそこそこ長く生活しているけど、姉妹が揃ったときなんて無かったもの、ねぇ？」

「そうね。松と竹くらいだものね。あの２人は共依存だから２人とカウントしていいかもわからないし」

　黒い繭の状態で流れ着いてくることは稀。ここにいる全員が、繭の状態で近海にいたから拾われたという程度である。伊４７が近海をフラフラとしていた時に見つけたというのが殆どだ。島にダイレクトに流れ着いたのは、その伊４７と、それよりも前にいたジェーナスくらいかもしれない。

　ただでさえそんな状態なのに、ここにいる者の姉妹をピンポイント

で拾うことなんて、まず不可能である。まず姉妹が心を壊す環境にいるかどうかもわからない。当然、このためだけに艦娘をわざと壊すなんてことは以ての外。
「前にも言ったけれど、あの提督くん経由で姉妹と話せるようになれば変わるかもしれないのだけれどねぇ。そもそも姉妹はいるのかしら。そういう話を聞かないのだけれど」
「あー、そうね。コマ辺りは一人っ子の可能性が高いわね」
　実際、この施設に属している元艦娘達の中では、コマンダン・テストだけは姉妹艦がいない一人っ子。また、リシュリューや伊４７は姉妹艦がいるはいるのだが、艦娘としてはまだ発見されていないという、なかなかシビアな状況である。
　姉妹限定というのなら、このカタチでの状況改善が見込めるのは、あとはジェーナスくらい。松と竹にも姉妹はいるが、既に姉妹でセットという都合上、効果的かどうかは不明。
　姉妹がいない艦娘は詰みかもしれないが、そこは姉妹と同様に親しい関係の艦娘と触れ合うことで、同じ効果が得られるのではないかとも考えた。祖国が同じだとか、同じ艦種だとか。
　しかし、これもまた困ったことに、コマンダン・テストと同じ祖国であり、現在発見されている艦娘はリシュリューのみ。つまり、この２人に関しては打つ手無しだったりする。とはいえ、溢れた感情と発作のトリガーが他の者より軽いため、そこまで苦ではないのだが。
「姉妹であること以外にも条件はあるんじゃないの？　ほら、薄雲はここ２日間、槍持ちとずっと一緒にいるでしょ」
「一緒にいるどころじゃないわ。常に何処かに触れている状態を維持してるのよ。一時的に離すのは食事の時だけね。あと昨日のアレか」
　これも改善の理由なのかもしれない。常に自分の熱を送り続け、凍りついた心を溶かしていった結果がこれなのではと。
　それこそ、卵を孵すための親鳥のような行動と同じ。温め続けることによって凍りついて閉じこもった思考を表に出す。今回の場合は、薄雲が親鳥、槍持ちが雛。
「とりあえず、現状が一番いいっていうのはわかったわぁ。もしかし

たら槍持ちちゃんも近々正気に戻るかもしれないわねぇ」
「そうね。それまではここにいさせてもらうわ」
「ええ、私としてはずっといてくれても構わないのよぉ？」
「それは私の性に合わないの。そういう本能なのよ多分。帰る場所があるってわかってる状態で、行きたいところに好きなように行くことが出来るって、素敵なことだと思わない？」
「確かにねぇ。なら、ここに留めておくことは出来ないわぁ」
　戦艦棲姫も槍持ちのことは常に気にかけていることだろう。今まで以上に、この施設に立ち寄ることが多くなるかもしれない。今までは1ヶ月から2ヶ月に1度という程度だったが、これからは1ヶ月に数度というくらいにまでなるか。
「それじゃあ、またお願いねぇ」
「ええ、私の言い出したことだし、槍持ちのためにも力を尽くすわ。こういうのも楽しいからね」
　もうしばらくは滞在することになるだろう。姉妹姫がそれを受け入れているのだから、誰も何も文句はない。

　一方、槍持ちの部屋。薄雲だけを置いておくわけにもいかないため、春雨とジェーナスが様子を見に来ているのだが、その中の光景に少し驚いていた。
「えーっと、薄雲ちゃん、それは」
「姉さんは温めれば温めるほど正気に戻っていくの。だから、優先的に頭を温めようかなって」
　春雨がこんなことを言い出すのも仕方ない。今の薄雲は、横にした槍持ちの頭を抱きかかえるようにして座り、後頭部から頭頂部にかけて全身を使って温めている状態。膝枕とかでもなく、頭部を包み込むようにしているため、槍持ちの顔は薄雲の腹に引っ付いているという異様な光景である。
　さらには、薄雲が温もりを一番感じた状態を再現するために、飛行場姫の服を模したボディスーツ姿だったのも驚くべきところだった。

春雨にそうされたことが印象に残っているらしく、自分も槍持ちにやってあげようという良心からの行動。
　実際、素肌とは言わないが、いつもの制服とは違うため、温もりを強く感じるようにはなっている。最初は全裸のつもりだったようだが、一応心がそれにブレーキをかけたとのこと。制服の腹の部分だけはだければいいのではという疑問は、あえて呑み込んだ。
「まるで親鳥ね。姉妹が逆転してない？」
「あはは……今の見た目だけはそうかもしれない」
　ジェーナスも今の薄雲と槍持ちを親鳥と雛の関係性に例えていた。頭を包み込んでいる姿は、まさに大きな卵を温めて孵化させようとしているように見える。
　時折頭を撫でつつも、槍持ちの髪を手櫛で梳いたり、首が痛くならないように身体の向きを変えさせたりと、甲斐甲斐しくお世話をしている。それこそ、卵を大事そうに温める親鳥。
「でもね、姉さんの頭、ちゃんと温まってるの。最初は本当に冷たかったんだけど、今は人並みに温かいんだ。私の熱が移っているだけにしても、昨日よりもずっとね」
　本当に愛おしそうに撫でながら、槍持ちの顔を胸に押し付けるように抱きしめる。着ている服が服なので、槍持ちの吐息を感じてしまうのだが、薄雲の中ではそれも落ち着ける要因になっていたりする。
　今の薄雲は、春雨やジェーナスがここにいなくても、寂しさを感じることはない。姉（槍持ち）がいれば、発作は起きないというくらいにまでに来ている。少し松竹姉妹と同じ気質になってきているが、本人は気にしていない。
「槍持ちさん、元気になるといいね」
「うん、本当に。姉さんと一緒にここで楽しく生きていきたいからね」
　感極まったか、槍持ちの頭をギュッと抱きしめる。この施設に住まう者全ての目標である『楽しく生きる』ことを、姉と一緒にやっていきたいと願う。
　だが、これがまた1つの変化を齎す。
「……ウスグモ……」

槍持ちがボソリと呟いた。一番近くにいた薄雲は勿論のこと、春雨やジェーナスにもその言葉は聞こえた。
「……クルシイ」
思い切り抱き締めていたせいで、槍持ちの息が止まりかけていたらしい。今までならそんなことを訴えることすらしなかったが、僅かにでも感情を取り戻したことにより、そういう言葉を紡げるようになっていたのだ。
「ね、姉さん、ごめんなさい！」
すぐに顔を離す。やはり無表情ではあるのだが、息切れしているような。ほんの少しだけ顔が赤らんでいるようにも見えた。
「すごい、すごいすごい！　本当に回復してるよ！」
「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ（素晴らしい）！　これは期待出来るわね！」
春雨とジェーナスも自分のことのように喜んだ。薄雲は感無量のようで、少しだけ涙目だった。

ついに会話らしきものが可能になりつつある槍持ち。薄雲の献身が、近々実を結ぶことになりそうだ。

余計な心配

槍持ちが自分の意思で言葉を発するようになり、明確な回復の兆しが見えてきている。

薄雲の献身的な介護が強く効いているようで、そこから戦艦棲姫は、実の姉妹からの介護と、毎日のように行なわれる触れ合いがそこに繋がっているのだと考えた。実際この2日間、薄雲は食事の時以外のほぼ全ての時間、何処かしらに触れた状態を維持し続け、眠る時も抱き枕のように抱きついていたほどである。

それだけのことをやったおかげで、薄雲の願いは通じた。ここまで回復したことで、かなり拙い状態ではあるものの、会話が出来る様になったのだ。

「姉さん、私のこと、ちゃんとわかりますか」

「……ウスグモ」

「自分の足で歩けたりしますか？」

「……デキル」

自分の意思さえ持ってしまえば、それを使って身体を動かすことは出来る。そもそも艦娘の気配を感知した時点で動き出し、この中では春雨しか追いつけないような速度で海を駆け抜けるくらいだ。歩こうと思えば歩けるし、艤装の展開だって可能。

今まではそういうことをやろうとする意識があまりにも希薄だったために、薄雲の手を借りなければ何も出来なかった。だが、今ならもう全てが可能になる。

薄雲に促され、ベッドから立ち上がる。それは薄雲の手を借りることなく、支えも無しで自分の力で地を踏みしめていた。そんな光景を見るだけでも、薄雲は感無量。今にも泣いてしまいそうなくらいに震えていた。

しかし、質問にはある程度答え、言われたことをただただやるだけな部分もある。完全に自我が目覚めているわけではなく、心が完膚なきまでに壊れているのは誰が見ても明らかだった。

「薄雲ちゃん、嬉しそうだね」

「ホント、今一番望んでることが起きてるんだもの。Ｔｅｎｓｉｏｎも上がっちゃうわよね」
　春雨とジェーナスは、そんな槍持ちの姿を少しだけ遠目に見ていた。薄雲がそれはもうベタベタと槍持ちに構っているので、今は槍持ちに近付くことは難しいと判断した。
　とはいえ、薄雲がこうなってしまうのも無理はないだろう。姉が死んだことで感情が溢れた薄雲が、姉を手に入れることが出来そうなのだ。精神的にも安定しているのだから、それに対して若干の依存性を持ち始めても、仕方ないと思える。
「でも、もう少しって感じだよね。まだちょっと機械的だし」
「そうねぇ。こっちの言ってることに反応するだけじゃなくて答えることが出来るようになったのは物凄い進歩だと思うけれど」
　春雨の言う通り、今の槍持ちは少し機械的だ。薄雲に問われていることに対して、ただ返事をするだけ。動けるかと言われたら動いて見せた。それだけ。無反応から考えれば劇的な進歩ではあるのだが、ヒトらしさはあまり感じない。先程の苦しさを訴えたのは危機的状況だったからかもしれない。
　実はこの槍持ち、意思は少しずつ戻ってきているのだが、自分が何者なのかを理解していないのである。それ故に、問いに対してただ返すという機械的な反応になってしまっている。
　薄雲は姉さんと呼んでいるものの、槍持ちからしてみればその意味がわかっていない。薄雲という言葉に聞き覚えがあるような無いような感覚であり、言われたから知っているという程度。しかし、何処か懐かしい感覚だけはしていた。一緒にいて気分が落ち着く。頭の中に渦巻く怒りと恨みが、薄雲といる時だけは薄れるような。
　そんな感覚が得られる薄雲は、もしかしたら大切なモノなのかもしれないという感情も芽生えていた。だから、薄雲の言葉、薄雲という言葉には反応する。最初からある程度反応していたのは、これがあったからだ。
「そうだ、姉さん。お洋服を変えることは出来そうですか？　私達は自分達で着るものを作れるんですが」

槍持ちを温めるためにボディスーツ姿だった薄雲も、実例を見せるためにいつもの黒い制服に着替えた。
「……デキル」
念じたことにより服が紐解かれ、同時に新たな服が出来上がっていく様子をジッと見た後、槍持ちは少しだけ力を入れた。すると、初めてここにやってきた時のようなボロボロの服が紡がれていく。今の槍持ちには、これが正しい制服であり、まともなモノが纏えない程に精神が擦り切れているとさえ思えた。
こういうところにも精神的な部分が如実に現れていた。やはり、槍持ちは適切な処置が行なわれていないことで、今着ている服のように心がボロボロなのだろう。
「もっと回復したらこれも改善されるのかな……」
「大丈夫だよ。自分を取り戻せば、服も元に戻ると思うよ」
槍持ちの服を見て落ち込んでいた薄雲だったが、春雨に慰められて少しだけ笑顔を取り戻す。確証が無い言葉ではあるのだが、少なくとも正しい心を持っていれば、自分で考えて自由に服が作れるのだから、こんなボロボロな服を選択するとは考えられない。
ただでさえ薄雲の姉、叢雲はそういうところは大いに気にするタイプである。食い意地に関しては一旦置いておくとしても、身嗜みはしっかり整え、弱点らしい弱点を簡単には見せない。いつでもどこでもパリッとキメる、デキる女だった。
そんな艦娘が、今の自分の服を見たらどう思うか。まず間違いなく綺麗に整えるだろう。当時の服装を模すかもしれないし、心機一転全く別のモノを作り上げるかもしれない。とにかく、現状を打破するのは予想がつく。
「そうだよね。姉さんが姉さんになってくれれば、こういうところも元に戻るよね」
「勿論よ。もし治らなかったとしても、そこは私達で教育してあげましょ！　槍持ちに似合う、可愛い服を見繕ってあげればいいんだから！　今はそういうのに詳しい戦艦のヒトもいるしね！」
万が一のことがあっても、服装に関しては教え込むことでどうとで

も出来るだろう。今の思考回路では難しいとは思うが、正しく自我さえ目覚めてくれれば。
「姉さん、ゆっくりでいいですから、前に進んでいきましょうね」
「……ワカッタ」
その言葉の意味も、薄雲の意思も、理解しているかどうかはわからないが、薄雲に対してはしっかりと反応を見せる。
槍持ちの中にある大切なモノがもっと増えていけば、今以上に回復していけるのかもしれない。

春雨の本日の作業は農作業。槍持ちのことは薄雲と戦艦棲姫に任せ、与えられた仕事をちゃんとこなしてから、また槍持ちに刺激を与えに行く予定。
「春雨、春雨、槍持ちの様子はどうなんだ？」
「大分回復したって聞いたけど」
いつも通りジャージ姿になり、先日種まきから始めた野菜の成長具合を確認しつつ周囲の雑草を抜いていると、松竹姉妹から話しかけられる。話題はやはり、槍持ちのことである。
農作業は黙々とやっているわけではなく、このように仲間達と世間話をしながら和気藹々と行なわれる。漁のときと同じだ。
常に誰かが話し相手になったり、誰かが話しているのを聞いていたりすることで、春雨の孤独感を払拭するのが目的。そうでなくても、仲がいいのなら自然と会話になる。
松竹姉妹も、たびたびとは言わないが槍持ちにちょっかいをかけに行っている。薄雲からのお願いもあり、真新しい刺激を何度も与えるためだ。しかし、頻度はどうしても偏る。春雨やジェーナスが薄雲のこともあって頻繁に向かう一方、松竹姉妹は1日に1回か2回。他もそうである。あまり押しかけるのも良くないと、多少は自重している節もあったりした。
それ故に、槍持ちの様子を一番詳しく知っているのは、薄雲達を除けば春雨とジェーナスということになる。そこに聞くのが手っ取り

早かった。
「すごくいい感じだよ。さっきなんて、自分の意思でベッドから降りられるところまで来てたんだ」
「そりゃすごい。ほんの少し前まではこっちから何話しても無視してたってのにな」
　これに関しては中間棲姫も初耳。朝食の際に視線だけでなく首を動かすくらいにまで反応したのは聞いていたが、それが起きたときはちょうど戦艦棲姫と話している間の出来事だったため、槍持ちがそこまで回復しているのは知らなかった。
　そのため、春雨のその話には中間棲姫も興味津々。何をしても無反応だった槍持ちが短期間でここまで回復している事実には、素直に喜んでいる。
「薄雲ちゃんがね、卵を温める親鳥みたいに温めてたら、自分から言葉を話すようになってくれて。妹姫様の服で抱き締めていたところを見たときはちょっと驚いちゃったけど」
「うわ、それ見たかったなぁ。薄雲さんがそこまで積極的に動くのってすごく珍しいし」
　松竹姉妹から見ても、薄雲は結構大人しい性格だと感じているようだ。そんな薄雲が、そこまで突飛な行動を起こすというだけでも興味が唆られるものらしい。
「なーんか薄雲の気持ちは俺にもわかんだよな。ほら、ご存知の通り俺って松姉ぇ一筋だろ？　今の薄雲も俺と同類の匂いするんだよ」
「私もそれわかるわ。ちょっと依存体質になってるっていうか。私達くらいに極端ではないと思うけど」
　２人は、薄雲は槍持ちに対して軽度の依存性を持っているのだと話す。これは春雨が薄雲に対して感じたモノとほとんど同じ。発作となる寂しさを槍持ちという存在で満たしているのだから。
「薄雲、姉ちゃんのこと大好きだったんだろうな。あいつの過去のことなんて聞いてないけどさ」
「普通聞かないものね。ここにいるヒト達の素性なんて。私達も話すつもりないし」

薄雲のあの手の尽くし方からして、艦娘の時から姉に対しては少々強めな感情を抱いていてもおかしくない。それが、姉(槍持ち)と出会ってしまったことにより爆発してしまった。そう考えたら、いろいろと辻褄が合う。

実際のところ、この松竹姉妹の想像は正解である。自分と出会うために尽力してくれて、成長するまで親身になってくれていた姉に対し、尊敬から始まるあらゆる愛の感情を持っていた。

相手が実の姉であるというところで無意識のうちにセーブはしていたのだが、深海棲艦化で心が壊れ、そこに依存出来る対象が現れてしまったのだから、その思いは斜め上の方向にまで上り詰めてしまったわけだ。

「私達は何も思わないわ。むしろいいぞもっとやれって感じ。それで落ち着けるんだもの。何も間違ってないわ」

「だよな。姉ちゃんがいるってのは、マジで落ち着くんだよ。俺達がいい例だ」

「そう、だよね。薄雲ちゃん、すごく幸せそうだったし」

しかし、春雨には少しだけ気にかかることがあるようだ。

「薄雲ちゃんは私やジェーナスちゃんと一緒にいることが多かったけど……槍持ちさんに付きっきりになって、少し離れちゃってるから。槍持ちさんが正気を取り戻したら、また一緒にいろんなこと出来る仲に戻れるかな」

いつもの3人組を4人組にしようと口では言っているものの、実際は分裂してしまうのではないかと少し心配な様子。信じていないわけではなくとも、ほんの少しの不安が壊れた心を刺激してしまう。

同じ施設で暮らしているのだから、離れ離れになるわけではない。会おうと思えばいつでも会えるし、むしろ毎日のように一緒にいるのだから何も問題は無いのだ。それでも、例えば姉との時間のためにと煙たがられるとかされないかとか、不安が不安を呼ぶ。

「いや、そりゃあ心配要らないだろ」

「うん、それは余計な心配ね」

しかし、松竹姉妹はあっけらかんと言い放つ。春雨のその不安は、

不必要な心配だと。
「薄雲、結構お前達のこと頼りにしてんだぜ？　特に春雨にはな」
「同じ感情が溢れてるんだもの。仲間意識が一番強いのは春雨さんでしょ。それに、ジェーナスさんがいなくちゃ纏まらない部分あるし。そこに槍持ちさんが加わるだけで、何も変わらないわねコレは」
「ああ、松姉ぇの言う通りだ。お前達は何も変わらねぇよ。槍持ちが加わって、むしろ今までよりも仲良くなれると思うぜ」
　力強い保証。これこそ何の根拠もない言葉なのだが、不思議と説得力があった。姉妹での依存というカタチで今を生きている2人だからこそ、周りが客観的に見えすぎているのかもしれない。
　心の中のモヤモヤを口に出したことで、そしてそれを聞いてもらい、無駄な心配だときっぱり否定してもらえたことで、春雨は随分とスッキリしていた。思ったことを言葉にして吐き出すことが出来れば、その分つっかえは取れる。
「……うん、そうだよね。そもそも同じ施設で暮らしてるんだもんね。お互いに頼って頼られて生きてるんだもん。大丈夫だよね」
「おう、だから心配すんな。何かあったら、またこういう時に俺達に話してくれよな」
「姉姫さんもしっかり聞いてくれているしね」
　振り向くと、そこにはニコニコしている中間棲姫。悩みを打ち明けて、それを解決していく様子を、微笑ましく見守っていた。自分が手を貸さずとも、自分達の力で全て終わらせられたことを、心底喜んでいた。
「何かあったら私も相談に乗るわぁ。でも、そんな心配は必要ないと思うのよねぇ。ここにいる子達でそんなことになったこと、今までで一度も無いんだもの。大丈夫、不安になるのはわかるけれど、私が保証するわぁ」
　中間棲姫からの保証で、尚のこと心配事は無くなる。心が離れ離れになることを強く拒む春雨だったが、これだけ言ってもらえれば不安では無くなった。

槍持ちが快復し、正気を取り戻した時に、その答えは出るだろう。
だが、離れ離れになることはまず無い。みんなで手を取り合って、
楽しく生きる。それは誰もが望んでいることだ。

怒りの理由

施設の午後。作業は基本的に午前中に終わらせるため、午後はフリータイムになることが多い。この日は例に漏れず姉妹姫も含めてフリーの時間となった。

薄雲と戦艦棲姫は、今まで通り槍持ちの部屋に篭ることになり、気が向いたタイミングで誰かがちょっかいをかけに行く。槍持ちが薄雲の言葉に対してしっかりと反応をしている様子を見て、みんなが驚くのも、流石に薄雲は慣れてきたようだ。

「姉さん、みんなと顔を合わせましたけど、顔は覚えましたか？」

「……マダ」

思考回路の凍結は、温もりによって溶けてきてはいるのだが、まだ記憶力などは曖昧。常に一緒におり、その存在から大切なモノという意識がある薄雲のことはハッキリと覚えているものの、他の者に対してはまだまだ曖昧。常にいる戦艦棲姫と、頻繁にやってくる春雨とジェーナスは、ようやく名前を呼べるようになった程度であり、この施設の主である中間棲姫と飛行場姫の名前すらまだあやふや。

しかし、あの2人は自分よりも上位の存在であるというのもあるので、顔は覚えずとも敬服する相手と認識は出来ていた。跪くわけでは無いが、逆らえないモノと感じている節はある。

「着実に出来るようになってますよ。焦らずに行きましょう」

「……ワカッタ」

ぼんやりとした表情ではあるものの、受け答えはそれなりにしっかりとしてきた。しかし、薄雲くらいにしか反応を返さず、春雨やジェーナスはおろか、戦艦棲姫にすら反応をしない。

やはり、毎日ほぼ全ての時間、おはようからおやすみどころか眠る時すら触れ続けている薄雲は、槍持ちにとっては大切であり特別な存在となっている。艦娘としての記憶を取り戻したらどうなるかわからないものの、今は完全に依存状態。

とはいえ、薄雲はそういう関係を望んでいるわけでは無い。松竹姉妹のような共依存ではなく、仲のいい姉妹関係を望んでいる。それは

自分の知っている姉でなくとも、艦娘叢雲としての意識さえあればそれは可能なのだ。
だからこそ懸命に介護をしている。割と打算的にも思えるが、薄雲としてはそういう気持ちは一切ない。姉を仲間として迎え入れて、一緒に楽しく生きたい一心である。
「そろそろ食事も自分の力で食べてみてもいいかもしれませんね。食べさせてあげるのも、それはそれで私は嬉しいんですけど、それだけだときっと良くないですし」
「……ワカッタ」
今日も今日とて、この2人はこの調子である。これでも順調に槍持ちが回復しているのだから、誰も何も言わない。むしろ、微笑ましくも感じていた。
それを一番身近で見ている戦艦棲姫も、穏やかな空気に気持ちを落ち着けている。稀にうつらうつらと船を漕ぐこともあるが、それだけこの空間が温かいということだ。

一方その頃、ダイニング。また槍持ちに紅茶を振る舞おうと、お湯を沸かしているジェーナスと、お茶菓子の準備をしている春雨。今日のお茶菓子は、コマンダン・テストから習ったという春雨手製のカップケーキである。
「うん、完璧！　今度、海風達が来るときにも作ってあげようかな」
「Ｔｈａｔ（それは），ｓ（いい）　ｇｏｏｄ（わね）．　海風なんて大喜びするわよ」
春雨手製のスイーツなど食べようものなら、海風の心の癒しは最高潮まで上り詰めるかもしれない。それも見越しての発言である。
などと話していると、突然タブレットが着信音を響かせる。昨日に引き続きであるため、また海風と話してメンタルケアに使うのかと、ニコニコしながらそれを受け取る春雨。
「受け取りました。司令官ですね？」
『ああ、今回は春雨が取ってくれたんだね。元気そうで何よりだ』
端末の向こう側にいる提督も、比較的元気そうではあった。しか

し、少し表情は硬い。何かあったとしか思えない雰囲気を出されているため、春雨は少し気を引き締めた。
　艦娘だった時にはこの提督の下で世界の平和を守っていたのだから、この表情をするときの提督がどういう気の持ち方をしているかは何となく察することが出来た。これは海風のメンタルケアではなく、真面目な話を姉妹姫にするつもりで連絡を取ってきている。
「姉姫様か妹姫様を呼んできますね。今ここにはいないので」
『ああ、よろしく頼む。例の件と言えば、察してくれるだろう』
　提督の言う例の件。それは槍持ちの素性調査のこと。昨日依頼して今日何かしらの結果を持ってきたとすると、とんでもない速さである。
　春雨もその件であることを察しており、すぐに見当がつくところに2人を呼びに向かった。見当をつけていたところ、庭に2人ともおり、ちょうど良かったとダイニングから持ち出したタブレットをそのまま渡す。
　独りになることを避けるため、ジェーナスも一緒についてきてくれていたのだが、せっかくだからとこの話を一緒に聞くことになった。タブレットを渡されたときのメンバーに飛行場姫を追加したのみであるため都合がいい。
「ちゃんとお湯の火は止めてきたから問題ｎｏｔｈｉｎｇよ」
「そう、それなら一緒に聞きましょうかぁ。薄雲ちゃんにももしかしたら関わってくるかもしれないものね。提督くん、構わないかしらぁ」
『ああ、だが今回の話は少し酷だ。大丈夫かい』
「はい、大丈夫です。これからのこともありますので」
　庭から少し離れてテーブルと椅子を用意し、タブレットを置いて改めて提督との会話に臨んだ。
『それでは、調査の結果を伝える。とは言っても、実際は僕が直に全て調べ切ったわけではなく、僕の上司に説明したところ、昨日の今日で結果を出してくれた』
「素晴らしいわねぇ、貴方の上司というのは」

『ああ、だからこそ今の地位にいると思ってくれればいい。大本営所属の大将だ。僕では足元にも及ばないよ』
その大将とも話をしてみたいと思いつつも、話を横道に逸らさないように口を噤む。
「それで、槍持ちちゃんはどんな子だったのかしらぁ」
『……君は知っているかわからないのだが、人間には艦娘を兵器として扱い、酷使している者が存在している。その子は、その鎮守府の出身であることがほぼ確定した』
明らかに嫌そうな顔をした中間棲姫。飛行場姫も嫌悪感を隠すことが無かった。
春雨やジェーナスは、逆に少し悲しそうな表情に。元艦娘であることもあり、そういう扱いをされている艦娘がいることは知っていた。自分が恵まれた環境にいるということも。
『大将の調査で、その鎮守府ではいわゆる捨て艦という忌まわしき戦術が使われていることが判明した。そのうちの1人に、駆逐艦叢雲がいたこともだ』
捨て艦。それは、同じ個体が何人もいることを利用した効率のみを重視した戦術。
鎮守府の設備で建造出来るようなコストの安い艦娘を囮にして、本来の目的を悠々とこなしていくという、いくら艦娘を兵器と見ていたとしても、その存在をあまりに軽く見過ぎである酷い作戦である。
行った先から帰って来させないため補給の必要すらなく、造っては犠牲にしを繰り返すことで戦果を挙げていくのである。
無論、この手段は殆どの鎮守府で忌避されている。艦娘を命あるモノとして扱う鎮守府では、当然それを失わないように。艦娘を兵器として扱う鎮守府でも、全ての道具を大切に使うのは至極当然であるとして。
しかし、戦果に目が眩んで命を軽んじているような輩は、効率最優先にした戦術すら使ってしまうのだ。その結果がコレ。
『叢雲が捨て艦として扱われ沈んだのは、今からおおよそ1週間前だそうだ』

「そちらの部隊を襲撃して、ここに保護されたのが3日前だったわよね。なら辻褄は合うわ。繭になってから孵化するまで、早くても1日、遅ければ3日はかかるわ。どちらにしても、槍持ちが繭で同胞(はらから)になったタイミングとピッタリよ」

忌々しげに飛行場姫が呟く。人間や艦娘でも嫌悪感しかないようなその行いに対し、姉妹姫も同様の感覚を持っているようである。

深海棲艦からしてみれば、捨て艦なんて日常茶飯事である。イロハ級を囮にして姫級が痛恨の一撃を放ってくるようなことばかり。春雨としては、そういう戦い方をしている深海棲艦しか見ないというくらいだ。

しかし、姉妹姫はそれを嫌悪している。それこそ、人間や艦娘と何も変わらない。種族が深海棲艦なだけで、考え方は同じなのだ。だからこそ友好関係を結びたいと感じる。

『気分を害するようですまない』

「いいのよぉ。そちらがこちらに感じていることと同じ感情だと思うもの。それに、調査してくれって言ったのは私なんだから、こういう結末だって、予想してなかったわけじゃないの」

(人間と艦娘 深海棲艦)

怒りが溢れている時点で、元々暮らしていた鎮守府で大切に扱われていなかったのだろうという予想はついていた。実際それを突きつけられると辛いものの、予測出来ていた分、ダメージは少なくて済んだようである。

『……何も言い返せないな。だが、僕は君達にはそんな感情は持っていないよ』

「そう言ってもらえると嬉しいわねぇ。私達は貴方達と同じ考え方なのよぉ。だから、仲良くしてくれると嬉しいわぁ」

共通の考え、同じ道を目指しているのだから、仲良く出来ない理由がない。

「貴方には言っていたかしら。槍持ちちゃんの溢れた感情は、『怒り』よぉ」

息を呑むような声を上げる提督。ブラック鎮守府で捨て艦として利用されたという素性を知ったからこそ、その感情は全て肯定出来

る。
　生まれてすぐにそんな扱いをされたのだ。この世の全てを憎んでもおかしくはない。槍持ちは、何も間違ってはいない。
『そうか……そうだね。怒りに呑まれても仕方あるまい。元凶を叩いてもその怒りは失われないだろうし、人間にも艦娘にも牙を剥くだろう。我々は、それを甘んじて受けなければならない程の罪を犯してしまった』
「貴方が気に病む必要は無いわぁ。だって、貴方が槍持ちちゃんをあしたわけじゃ無いんだもの」
『しかし、これは人間の罪だ。槍持ちの襲撃には正当性がある』
　この結末に、提督は本気で悔やんでいた。そこに嘘は無い。そんな彼に、姉妹姫はさらに好感を得た。
「無いわよ。あの子が恨んでいいのは、元凶だけ。で、そいつらはどうなったの？」
『そこを治めている者は処罰し、艦娘達は更生施設に入ってもらった。捨て艦を良しとするような思考を持たせられていたのでね。あれはもう洗脳に近い』
「そう。なら心配はいらないのね。槍持ちが増えるなんてことがあったら大変だもの」
　そのブラック鎮守府は解体。提督は断罪され、艦娘も再教育というカタチで更生しているとのこと。更生が終わった艦娘達は、大本営のスタッフとなったり、素性を隠した状態で戦力の足りない鎮守府に移籍したりと、第二の艦娘人生を送ることになる。
　一応ではあるが、これで同じ場所からまた槍持ちのような不遇な深海棲艦が生まれることは無い。しかし、ブラック鎮守府がここ１つだけでは無いということも伝えられた。
「それはもう、アンタ達に任せるしかないわ。アタシ達が粛清なんてしようものなら、和睦の意味がないもの。腹は立つけど、最優先はこの施設を維持することだから」
「そうねぇ。提督くんに任せるしかないわぁ。人間は人間に罰してもらわなくちゃねぇ」

『ああ……二度とこんなことを起こさせない。艦娘の命を蔑ろにするような鎮守府は、人間の手で根絶やしにする。そんなことを考えられないくらいに、意識改革をするべきだ』

これをきっかけに、大本営から鎮守府に向けて、意識改革を促すとのこと。しかし、この施設のことは公表せず、うまくお茶を濁すように事実のみを知ってもらうように苦心すると、姉妹姫に伝えられた。

『今回の報告は以上だ。槍持ちの素性調査はここまでとする』

「ええ、ありがとう提督くん。助かったわぁ」

『こんな事実を伝えることになってすまない』

改めて謝罪をする提督に、中間棲姫はいいのいいのと苦笑しながら宥める。こういうことはお互い様。

姉妹姫もその辺りは理解している。深海棲艦にも良い者と悪い者がいるように、人間にも良い者と悪い者がいる。それがあまりにも顕著に出ただけだ。

「この件は、私達の中で留めておくわぁ。薄雲ちゃんにも隠しておくし、槍持ちちゃんにも伝えない」

『ああ、そうしてくれて構わない。我々は調査を任されただけだからね』

この事実を伝えることが、槍持ちをいい方向に向かわせるかはわからない。もっと別の理由なら伝えても良かったのだが、これは伝えられない。

槍持ちの怒りは、誰もが納得出来るものだった。しかし、だからといって襲撃を容認するわけにはいかない。槍持ちには、また別の方向で楽しく生きてもらうのである。

繋がる回路

槍持ちの素性を知ることは出来たものの、捨て艦という忌むべき戦術により命を落とし、怒りの中で深海棲艦と化した槍持ちには、その事実を伝えるのは憚られた。その記憶が今あるかはわからないが、知らなくていいことは知らないままの方が楽しく生きることが出来るからだ。

そしてそれは、薄雲にも言えることである。自分の姉が、そんなカタチで身を今の姿に堕としてしまったと知ったら、まず間違いなく良くない思考に取り憑かれるだろう。

それこそ、多くの深海棲艦の本能とも言える侵略者気質。適切な処置を受けられなかった槍持ちが今持っている一番大きな恨みの感情に、薄雲も目覚めてしまいかねない。

「春雨ちゃん、ジェーナスちゃん、これは私達だけの秘密にしましょうねぇ。槍持ちちゃんが正気を取り戻した時に思い出してしまうかもしれないけれど、知らない間はわざわざ言う必要は無いわぁ」

「はい、わかっています。こんなこと、知る必要はありません」

勿論、この話を一緒に聞いていた春雨とジェーナスも、薄雲と槍持ちのことを考えて黙秘の方向。友達が狂う様なんて見たくない。

「でも……槍持ちが本当に可哀想ね。せっかく生まれたのに、そんな一生だなんて」

ジェーナスが悲しそうに呟いた。同情の念が強く、元々が正気に戻るようにバックアップしていたものが、より強くサポートしたいと思えた。

せっかくこの世に新たな生を得たというのに、就いた場所が悪く、怒りと憎しみに苛まれて死んでいくだなんて、あまりにも悲しすぎる。特に槍持ち――駆逐艦叢雲は、正義感の強い戦場の乙女だ。そんな悲惨な使われ方をしたら、否が応でも怒りが溢れ出すだろう。

「他にも槍持ちさんと同じようなヒトがいたのかもしれないね……なんだか悲しいよ」

「そうよね……槍持ちはたまたまここに来れたからいいけど、1人や

2人じゃないわよね。それなら、その鎮守府は自分で敵作って自分で敵倒してBattle（戦）results（果）にしてるってことなのかしら。Match（マッチ）pump（ポンプ）じゃない！」
「本人がそれに気づいてないっていうのが余計にタチが悪いわ。そんな人間はごく一部だと思うけれど、反吐が出るわね」
飛行場姫も吐き捨てるように話す。今回の件はどうしても嫌な気分にならざるを得ない。
「それでも、それはあの人の上の人が粛清してくれたのよねぇ。なら、深く考えるのはやめましょう。こんな言い方をしたくはないのだけれど、いくら私達でも全てを救うことは出来ないわぁ」
「終わったことは終わったこととして、考えないようにしましょ。もうこれ以上は増えないってことがわかっただけでも良しよ。アタシ達は槍持ちだけで手一杯なんだもの。いいわね？」
春雨もジェーナスも静かに頷くことしか出来なかった。
手が届かないところまで救うことなんて、どんなに力を持っていても出来やしない。中間棲姫も飛行場姫も、深海棲艦としては絶大な力を持っているかもしれないが、救えるのはこの島の上だけだ。別のところで同じような境遇の誰かがいたとしても、それを見つけては全て救うなんてことはやりたくてもやれない。
だから、今ここにいるものを全力で癒し、救い、楽しく生きられるようにしているのだ。許容範囲を理解しているからこそ、ここで割り切っている。
「さ、話は終わったから、解散としましょ。ジェーナス、薄雲達にお茶を淹れてる最中じゃなかった？」
「そうだったわ！　また湯を沸かし直さなくちゃだけど、振る舞ってあげなくちゃ！」
「だね。少しでも気分を落ち着けてもらいたいし」
これで一旦、鎮守府との通信は終了。タブレットはダイニングに戻し、その前にやろうとしていた槍持ちの部屋でのお茶会の準備を再開した。
お茶会の時にもその話題は一切出すことなく、表情にも出さず、余

計な心配をかけることはしない。他の者達のこうなった理由を聞かないようなものであり、いざ知ってしまったところで同情はしてもそれ以上追求もしない。

その日の夜。いつも通り、薄雲と槍持ちは同じベッドで抱き合って眠っていた。今まではされるがままであった槍持ちも、今はある程度考える力が戻ってきているため、自分の意思で薄雲の頭を撫でつつ眠りについていた。

しかし、そういうことが考えられるようになったということは、ある程度自分のことを思い返すことが出来るようになったということにもなる。

それが、槍持ちにも悪夢を見せることになる。

「ッ……ア……」

今までに無かった槍持ちの反応に、眠っていた薄雲がぼんやりと目を覚ました。

ここで一緒に眠るようになってから、一度眠ったら起きるまでピクリともしないのが槍持ち。魘されることはおろか、息をしているかも不安になるほどの静かな眠りにつく。

しかし、今は明らかに魘されていた。艦娘を襲撃するときですら無表情を極めていた槍持ちが、苦しそうな表情を見せていた。

薄雲を抱きしめる腕が強く締め付けられ、息使いも荒くなる。強く歯を食いしばっているのもわかった。

「姉さん……どうしました？」

「ハァ……ウ、ウスグモ……ッア……ワタシハ……ワタシハ……」

ここまでの強い感情の表し方は、ここに来て初めてのことである。薄雲もその反応を見た瞬間に飛び起きるのだが、槍持ちの締め付けがかなり強く、簡単には抜け出せそうにない。

そうなると、言葉で説得するしかない。温もりを与えるだけでは無理だというのなら、語りかけて落ち着かせるしかない。

「姉さん、落ち着いてください。大丈夫です。大丈夫ですから」

「ワタシ、ワタシが……なんでこんな目に……！」
噛み合った。
ずっと正気ではなかった槍持ちが、今この時だけ悪夢により艦娘の記憶を取り戻していた。
声も薄雲達と同じ声質になっていた。正気に戻った証拠であり、槍持ちではなく艦娘叢雲としての存在となっている。それは一時的なものかもしれないが、元に戻る前兆だとわかり薄雲はどうにかして冷静になる。
「姉さん……落ち着きましょう。大丈夫、ここはもう嫌な場所じゃないです。私と、姉さんと、仲間達が住まう戦いから外れた場所です。姉さんを……姉さんに嫌な思いをさせる連中はもういません」
「嫌、嫌、なんで、なんてこんな目に、私は、この世界の平和のために……！」
完全に錯乱しており、目の前の薄雲のことすら見えていない。強く抱き締めているのにもかかわらず、その存在が槍持ちの中から消えてしまっているような言動。
違う意味で正気を失っており、死ぬ間際の記憶に囚われてしまっている。悪夢を現実と思い込み、感情が溢れる直前をこの場で再現してしまっているのだろう。
「姉さん！」
その槍持ちに対し、薄雲が耳元で叫ぶ。鼓膜が破れるのではないかという程の大声を叩きつけたことで、同じ部屋で眠っていた戦艦棲姫も目を覚ました。
「姉さん、落ち着いてください！　姉さん！」
目の前にいるのに姿が見られていないという状況に、薄雲も発作を起こしかけていた。だが、槍持ちの酷い状況に発作なんて起こしている余裕がないと気力を振り絞り、震える手でギリギリ届いた槍持ちの手を握る。
「私達は姉さんを見捨てません！　ここで一緒に楽しく生きるんです！　だから姉さん、落ち着いて！」
「っ、あ、うす……ぐも……」

ようやく目の前の薄雲の姿をその目が捉えた。涙目だが、その表情は溢れ出した怒りと憎しみに染まりきっていた。
ずっと虚ろな瞳だった槍持ち。それが、瞳に光が宿っていた。暗い光だったとしても、壊れた心がほんの少しだけ修復されているような目。
「私は……薄雲、あんた……っあああああっ！」
薄雲に回していた手を解くと、這い回る蟲を払い除けるように頭を掻き毟る。記憶が戻りかけ、悪夢に苛まれ、怒りと憎しみが再び溢れ出そうとする苦痛をどうにか振り払うように。
しかし、それでは肌を傷付けてしまうだろう。それを見越した戦艦棲姫が先んじてその両腕を掴む。外見に気を遣う戦艦棲姫だからこそ、自傷行為には人一倍敏感なのかもしれない。
「ダメよ。辛いかもしれないけど、そんなことしたら綺麗な肌が傷付いちゃうわ」
「いぎっ、あああっ!?」
錯乱は止まらない。髪を振り乱し、苦痛から逃れようと暴れる。だが戦艦棲姫はその名の通り戦艦、駆逐艦と違って大人の身体と力を持ち合わせている。槍持ちがどれだけ暴れようが、その膂力で完全に押さえ込んでいた。
「薄雲、いつものように温めてあげなさい。そうね、頭がいいわ」
「あっ、は、はい！」
槍持ちの豹変に呆然としてしまっていた薄雲だったが、戦艦棲姫に指示されてすぐに行動に移す。
体勢を強引に変え、振るわれる頭を抱きしめるとすぐに胸の辺りで温もりを与える。暴れるのを押さえつつ、落ち着かせるように頭も撫でる。
「大丈夫です姉さん、大丈夫。落ち着いて、落ち着いて周りを見てください。今は私だけでもいい。大丈夫ですから」
物凄い力で振り解かれそうになるが、冷静に対処して落ち着かせる。薄雲の声だけは聞こえているはずの槍持ちなのだから、薄雲のその行為は心にダイレクトに響くはずだ。

結果として、さんざん暴れたものの槍持ちに傷は無く、髪がボサボサになったくらい。薄雲のおかげで落ち着き、なんとか静かになった。
「良かった……酷い夢を見たんですね。私も経験があるからわかります。辛いですよね……その時のことを思い出すのは」
「ウ……ウウ……ナンデ……」
落ち着いた時点で残念ながらまたいつもの槍持ちに戻ってしまった。噛み合っていた記憶の回路はまた崩れ、目は虚ろに。声質も元通り。
とはいえ、一度噛み合ったのだから、今後もまた噛み合う可能性はある。それこそ、今から眠ってもう一度目を覚ましたら、艦娘叢雲としてでは無くとも、何かしらの進展を見せそうである。
「回復したことの弊害かしらね……記憶を取り戻すってのはそういうことだものね」
「はい……姉さんは特に酷い仕打ちを受けていたんだと思います……。さっきの言葉からして、仲間に裏切られたりしたんじゃないかなと」
「そうね。なんでこんな目にって言ってたもの」
槍持ちがブラック鎮守府で捨て艦にされていたことを、2人はまだ知らない。しかし、今の槍持ちの言葉でこの辺りはピンと来ていた。捨て艦とまでは行かなくとも、作戦行動中に仲間に裏切られて死ぬことになったのだと。
実際は近しいものだ。生まれたばかりの状態で戦場に駆り出され、意気揚々と戦いに挑んだら練度が全く足りない状況。仲間達に助けを求めても無視をされ、囮としてむしろもっと前に突き出され、結果として死ぬほどの重傷を負った。
帰れば入渠で助かるだろうと追い縋ったが、事もあろうに仲間達はその場に放置して先に進む。あとは沈むだけという状態で独りにされ、怒りと憎しみに呑まれて、感情が溢れ出し、今に至る。
「……こうなってしまっても仕方ない境遇なのかもしれませんね」
「人間や艦娘にも悪いヤツがいるってことね。そんなヤツらが、私達

のことを一方的に侵略者として扱ってくるのは気に入らないわ」
そうこうしているうちに、槍持ちはそのまま眠りについた。薄雲の温もりでようやく安定したらしい。
脱力されたことで、薄雲と戦艦棲姫もようやく落ち着ける。今は真夜中であるため、またすぐに睡魔に襲われる。
「戦艦さん……今はひとまず寝ましょう。おやすみなさい……」
「ええ、おやすみ。貴女も身体を休めないとダメよ」
「はい……」
そう言うと、薄雲は槍持ちの後を追うように眠りについた。暴れる姉を取り押さえるのに体力も使ったせいで、気が抜けた瞬間に寝落ちした。
それを見届けたことで戦艦棲姫も小さく欠伸をし、艤装のところへと戻る。と、その前に。
「妹姫かしら。別に中に入ってきても良かったのに」
部屋の外に声をかける。そこには、槍持ちの騒動に気付いて部屋まで駆けつけてきた飛行場姫がいた。中間棲姫も起きてはいるのだが、春雨とジェーナスから離れるのはやめておこうと妹に任せたようである。
中で処置が繰り広げられているのはわかったので、あえて中に入らずに事の成り行きを見守っていたとのこと。
「槍持ちの素性、なんとなくわかったわよ。あの子、鎮守府で相当酷い目に遭わされてたみたいじゃない」
「……そうね。アンタには話しておこうかしら。薄雲には秘密にしてくれるなら」
「聞かなくても大概わかるわよ。あんな譫言聞かされたら。だから、今はいいわ」
知ってしまったら口を滑らせてしまいそうだと、戦艦棲姫は素性を聞くのをやめた。
「でも、薄雲には話してあげてもいいとは思うけれどね。今の騒動でおおよそ理解してるわよ。だから、知っても耐えられるわ」
「……かもしれないわね。お姉と相談だけはしておく」

「そうしてちょうだい」

槍持ちが正気を取り戻す日は、もうすぐそこまで来ている。もう一度噛み合ったとき、彼女は何を思うか。

姉の真実

翌朝、槍持ちが一時的に噛み合ったことを中間棲姫に報告した薄雲。ベッドルームでの報告だったため、春雨とジェーナスもそれを聞くことになる。この時、薄雲と仲良く手を繋ぎ、自分の足で部屋まで歩いてきた槍持ちもいたため、それはそれで大いに驚いた。

「そう……そんなことを」

その時の槍持ちの言葉、『なんでこんな目に』というのが耳に焼き付いて離れなかった。あの姉がそんなことを言うほどなのだから、余程酷い目に遭ったのだろうと薄雲は予想していた。

薄雲は知らないが、ベッドルームにいた４人は全員が槍持ちの境遇を知っている。囮にされて鎮守府に捨てられた結果、怒りと憎しみに呑まれてしまったことを。

「姉さんは……どんな目に遭ったんでしょう。艦娘を沈めることが本能になるほどの出来事です。余程のことですよね。イジメを受けていたとか、裏切られたとか……でも沈むほどのことだったということは、最悪鎮守府包みとしか思えません……」

姉に関わることだからか、薄雲の推理力はやけに鋭い。殆ど正解に辿り着いているようなものだ。

昨晩のうちに、飛行場姫は戦艦棲姫から薄雲なら耐えられると保証されている。既にここまで推理出来ているのだから、説明をしても確かに問題は無さそうである。

「わかったわぁ。薄雲ちゃん、最初は秘密にしておくつもりだったのだけれど、今の貴女になら話せそう」

「えっと……ということは」

「提督くんに槍持ちちゃんの素性の調査をしてもらっていたの。それが、物凄く調査が早くて……昨日のうちに報告されていたのよぉ」

秘密にしておくつもりだったと話されても、薄雲には怒りなど無かった。自分のことを考えたら、その選択は無くはないモノだと感じられる。

これは中間棲姫の優しさだ。薄雲の心が今以上に壊れてしまう可

能性があるのなら、それが薄雲のためでは無いとしてもそちらを選択する。薄雲にもそれがわかっている。
「……教えてください。姉さんは……どういう仕打ちを受けていたんですか」
薄雲に話すのはいいとして、槍持ちがここにいる状態で話すのは少し憚られる。それがきっかけで再び噛み合い、その場で暴れ出すなんてことが起きるかもしれない。
知らなければ知らないままの方がいいような内容だ。だから、槍持ちだけは席を外してもらいたかった。
「ねぇ姉姫、これじゃダメかしら」
ジェーナスが槍持ちの耳を塞いだ。触れられても殆ど反応がないものの、流石に突然耳に触れられたので、小さく身震いする。
これなら一応、今からの会話の内容は槍持ちには届かない。読唇術など出来るわけでもないだろうから、余程大きな声で会話をしない限り、これで大丈夫だろう。不安なら目も隠せばいい。
「わかったわぁ。なら、私達が聞いたことを全部伝えるわねぇ。覚悟は……いいかしらぁ？」
「はい。お願いします」
槍持ちの手を強く握り、覚悟を決めて中間棲姫の話を聞くことにした。春雨もジェーナスも、何事も無いことを祈って、それをただ見守るだけだった。

「これが、提督くんから私達が聞いた、槍持ちちゃんの真実よぉ」
中間棲姫から捨て艦の話を聞き、絶句する薄雲。
薄雲の鎮守府は、新人提督だったということもあり、命を軽んじるようなことは一切無い場所だった。秘書艦であった叢雲もそれを許していないため、まずそんな考えに至ることすら無かった。
世の中にはそういう場所もあるということくらいは知っていたが、今それが関係してくるなんて夢にも思っていなかった。そして、推理が殆ど正解だったことも。心のどこかで、推理が外れていることを望

んでいたのかもしれない。
「酷い……」
おおよそ予想がついていても、それが現実だと知らされるとショックは大きかった。耐えることは出来ても、心がぐらつくのは抑えきれない。
「薄雲ちゃん……大丈夫？」
「……大丈夫、大丈夫。辛いけど……姉さんの方がもっと辛いんだから。私が挫けちゃダメだもん」
深夜に発作を抑え込んだ時と同じように、奮い立たせて耐える。その場で崩れ落ちてもおかしくないダメージを受けているのだが、姉の前では倒れるわけにはいかないと、震える脚をどうにか抑え込む。
「そんなことになった姉さんは私が支えなくちゃ……だから、私が倒れるわけには……いかないよ」
「薄雲ちゃん……無理しないで。私も救ってもらったんだから、薄雲ちゃんを助けてあげたい。だから、辛かったらすぐに言ってね」
片方の手は槍持ちの手を握っているが、もう片方の手は春雨が握る。姉だけの温もりでは足りない。そこに春雨が上乗せした。友達の温もりは、姉の温もりと同じ、いや、それ以上に温かく、ぐらついた心が静かになっていくのを感じた。
こういう時に、第三者の優しさは心に染みる。どうにか抑え付けていた発作が、表に出てしまいそうなくらいに。
「っ……はぁ……ぅ……姉さんも寂しかったと思う……独りにされて……全部に裏切られて……っぁ……」
姉の寂しさを自分の寂しさと感違いしてしまい、そのまま発作へ。壊れた心には、他人の寂しさも辛い。春雨も引っ張られかけるが、今回もどうにか呑み込む。しかし、足がガタつき、かなり危険な状態になってしまった。辛かったら言ってと伝えたばかりなのにこの体たらくと、自分の弱さを痛感する。
しかし、春雨は薄雲の手だけは離さなかった。温もりを与え、温もりを貰い、お互いにギリギリのところで止まろうと必死に耐えた、
「無理しないの。アンタ達は成長はしているけど壊れてるのには変わ

りないのよ？」
「こういう時こそ、みんなを頼ってちょうだいねぇ」
それをさらに姉妹姫が抱きしめることで抑え込む。寂しさには他者からの温もりが最適解ではあるため、数が増えれば増えるほどより効果的だ。春雨には中間棲姫が、薄雲には飛行場姫がつき、落ち着きを取り戻すまでは撫で回す。
「もういいわよね。じゃあ、私はハルサメの方に」
槍持ちの耳栓役が不要になったため、ジェーナスは春雨の方へ。中間棲姫に加え、ジェーナスの温もりが加わったことで、より早く発作が抑え込まれる。
そして薄雲の方には、
「……ウスグモ……ダイジョウブ」
槍持ちが参加。抱きしめるまでは行かずとも、空いている手を薄雲を撫でることに使う。今の薄雲にはこれが一番の薬になる。
少しの間これを続けたことで、春雨も薄雲も落ち着きを取り戻した。以前から比べれば復帰が格段に早くなり、発作を克服することは出来ないまでも、生活に支障をきたすレベルがワンランク下がったくらいに思える。
「す、すみません……覚悟をしていたのに結局発作を起こしてしまって」
「いいのよぉ。薄雲ちゃんはそういう子なのはみんなわかってることなんだから。むしろ、やっぱり配慮した方が良かったかなって思っちゃったわぁ。ごめんなさいねぇ」
「いえ、真実を知れたことは私にとって嬉しいことですので」
自分の知る姉とは別個体ではあれど、姉であることには変わりない。そんな姉をここまで狂わせた原因を知ることで、今後の姉との付き合い方を考えることが出来るだろうと考えた。
だから、発作は起こしたものの、薄雲の気分は悪いものでは無かった。無論、そんな鎮守府があり、そのせいで姉がこうなったというのは気分が悪いのだが、知りたいことが知れたという意味で。
「……大丈夫です。だからといって人間や艦娘を嫌いにはなりませ

ん。本当に一部の心無い人間のせいであることは理解しています。一握りの人間のせいで、人間全部が嫌いになることはありません」
「そう……それなら良かったわぁ」
中間棲姫が危惧していたのはそこ。姉の仇であると人間そのものを嫌いになり、侵略者気質に目覚めてしまう可能性が僅かにでもあったからだ。艦娘としての心を取り戻しているとはいえ、その心は壊れており、身体は深海棲艦なのだから、今からそうなってもおかしくはない。
しかし、薄雲は元いた鎮守府は叢雲の力添えもあり、春雨の元いた鎮守府と同様に健全に健全を重ねた素晴らしい鎮守府だった。そこの記憶を持っていたおかげで、人間には良い者も悪い者もいるという事実をしっかりと理解している。おかげで、薄雲は侵略者に心を堕とさずに済んだ。
「……その鎮守府は今、どうなってるんでしょうか」
「提督くんの上司が断罪したって話よぉ。それ相応の罰を与えてるみたいだから、安心してくれって」
「わかりました。それでまだのうのうと生きているのなら気分が悪かったですが、それなら確かに安心出来ます」
発作も治まったため、少し疲れているようだが何とか立ち上がる。その間もずっと槍持ちの手は握ったままだった。
やはりある程度思うところはあるようで、ほんの少しだけ口が悪くなっていたが、それだけで済んでいる。姉の仇に対しては、どうしてもそういう感じにはなってしまいそうだった。
「姉さん、部屋に戻りましょうか。朝ご飯まではまだ時間がありますし。あ、今日から試しに自分の手で食べてみますか？」
「……ヤッテミル」
「なら頑張ってみましょう。大丈夫です、姉さんなら出来ます。あと、出来そうなら自分の足でお散歩とかもしてみましょうか。新しい刺激はきっと姉さんの役に立ってくれるはずです」
気を取り直して、槍持ちを連れて部屋へと戻っていく薄雲。その背中は、今までよりも力が入っているようにも見えた。

姉の真実を知ったことで、より強く支えていこうと決意した、そんな雰囲気。依存とまでは行かないが、不幸であった姉を幸せに導くために尽くしていこうと考えているのが、誰の目にも明らかだった。
「大丈夫かしらねぇ……薄雲ちゃん、変に気負っちゃってないかしらぁ」
「真実を知ったことで、変な方向にやる気が出ちゃってなきゃいいんだけど」
姉妹姫もその辺りは心配なようだ。自分のことを顧みずに介護を尽くすようなら、それは献身でも何でもない。
春雨は薄雲の今の状態に、何処か憔悴した海風の姿を重ねていた。海風と違うのは、原因もわかっており、当人が目の前にいるということなのだが、だからこそリミッターが外れてしまっている危うさも感じる。
侵略者気質に目覚めるようなことはなくとも、別の方向でダメになってしまっては本末転倒だ。それは槍持ちのためにもならない。
「薄雲ちゃんのことは……私とジェーナスちゃんでも気にかけておきます。今は戦艦様もいますし」
「ええ、任せてちょうだい！　ウスグモは私達の友達なんだもの！」
そこで、春雨とジェーナスが薄雲のことをサポートすることにした。戦艦棲姫の存在も大きいが、友達である2人がいつでも力添え出来るという環境は、薄雲にも槍持ちにもいい方向に繋がるはずである。
「なら、よろしく頼むわ。アタシ達よりもアンタ達の方が手を貸しやすいでしょ」
「そうねぇ。友達として、薄雲ちゃんを見守っていてあげてちょうだいねぇ」
「はい、任せてください。私は発作を起こしてしまうかもしれないけど……」
「そうなったら私が何とかするから安心しなさい！　今度は総崩れなんてしないんだから！」
胸を張って語るジェーナスに、春雨は何処か安心した。友達だって

頼れる仲間。誰かが崩れたら誰かが支える。これがこの施設のやり方だ。
今は薄雲が危ういのだから、それをみんなで支える。その経緯で誰かが崩れそうなら、それをまた支える。支え合っていけば最後は固い絆になって崩れることは無くなるだろう。
今後はそこに槍持ちも加えるつもりなのだ。今はまだ噛み合っておらず、正気ではないかもしれないが、この空気に慣れてもらえれば、最終的には仲間として一緒に暮らすことが出来るだろう。

ここからは４人組としての助け合いが始まることだろう。春雨が心配していた、心が離れるなんてことは起こり得ない。

戦いはまだ

施設で槍持ちの介護にさらに力を入れようとしている頃、鎮守府では毎日と同じような朝を迎えていた。その時間はまだ早朝。総員起こしされて間もない時間である。

その中でも提督は誰よりも早く目を覚ましており、執務室にて朝食前のコーヒータイムを楽しんでいた。毎日３６５日の提督業の中でも数少ない、業務のことを一時的に忘れて落ち着ける時間。そういう時は必ずこうして自分で淹れたコーヒーで気分を落ち着ける。

紅茶派の金剛と一悶着起こしかけたが、別に紅茶を飲まないとは言っていないし、これがモーニングルーティンとなっているのだから勘弁してくれと折れてもらった。心落ち着ける時間まで取り上げられたら、流石の提督も心労で倒れる。

「おはようございまーす。総員起こし、終わりました」

「ご苦労様」

そこに入ってくるのが秘書艦の五月雨。秘書艦も朝が早く、総員起こしという大役を仰せつかっているため、それが終わり次第執務室にやってくる。

この鎮守府が設立されてから今まで、一度も秘書艦を降りていない五月雨。総員起こしももう長いことやっているため、慣れたものである。最初の頃は朝起きるのも辛そうにしていたものだが、今ではそんなこともなく、シャキッとした笑顔で秘書艦の定位置へ。

五月雨もこの時間はなんだかんだで執務室にいることが一番落ち着けるようになっている。戦場とは完全に切り離された基本的に最も安全な場所であり、戦いに身を置いている艦娘にとってはそういう場所は、心が癒されるのだ。

「コーヒー、飲むかい」

「あ、じゃあ今日もいただきます」

「五月雨のためにミルクと砂糖もちゃんと置いてあるからね」

提督手製のコーヒーを貰って、笑顔で口をつける。ホッと一息ついた。

「海風の様子はどうだった？」
「元気そうでしたよ。山風達が同じ部屋で一緒に寝てたみたいで。あとやっぱり、春雨に声援を貰ったのが大分大きかったみたいです」
「そうか。なら、タブレットを施設にプレゼントしたのは大正解だったみたいだ」
　最も心配されていたであろう海風は、妹達の監視の下で平穏を取り戻していた。端末越しだとしても春雨と面と向かって話すことが出来た上に、無理をするなと叱咤激励を受けたことで、その言葉を心に刻み込んだらしい。
　槍持ちに敗北した経験は、しっかりと訓練に役立てている。今までよりも少しハードな訓練が金剛と比叡が先導して行なわれており、海風はそれに率先して参加し、日々その力をメキメキと上げていた。
　しかし、春雨の教えの通り無理はしていない。疲れ果てて倒れる程に訓練したい気待ちはあっても、そうなったら春雨と会えなくなるし話せなくなる。それは避けたいから、努力しつつも適度に力を抜くことを覚えた。
「白露達が消息を絶って、鎮守府の空気は少しどんよりしていたが……春雨が生きていたことと、新しい敵の存在がわかったことで、また活気が戻ってきたな。良いことなのか、悪いことなのか……」
「姉さん達のことを忘れたわけじゃないですから、良いかはさておき、悪くはないですよ。どんよりしてたら戦うことにも支障が出ますし」
「まぁ……そうだな。あの子達が沈んでしまったことも、春雨の口から聞けた。割り切ることも出来るだろう」
　今までは消息不明生死不明というカタチで捜索が続いていたから、鎮守府全体が暗くなっていた。そこで春雨本人から顛末を聞くことが出来たことで、仇討ちというカタチで前向きになれている。
　決して褒められたモノでは無いとは思うが、先に進もうと全員が決意出来たことは悪いことでは無い。
「あとは……その未知の敵だ。今施設に保護されている未知の深海棲艦……槍持ちが、何か関係しているかを知りたいところだが」
「それとは違うんですよね。あの大将が調査してくれた結果的には」

「ああ。槍持ちは捨て艦の成れの果てだ。それに、春雨が違うと言うんだから違うさ。それは保証出来る」
春雨達を襲った未知の深海棲艦は、黒い繭から生まれたであろう元艦娘だろうと提督は想定していた。金剛から聞いている限り、槍持ちの力は尋常では無い。春雨達だって歴戦の駆逐隊なのに、呆気なくやられてしまったという時点で似たような存在だ。
ならば、件(くだん)のブラック鎮守府で捨てられた艦娘が同じように深海棲艦化し、近海で無差別に艦娘に襲いかかっているのかもしれない。マッチポンプのための敵を作っているだけでは飽き足らず、他の鎮守府にまで迷惑をかけるだなんて言語道断だ。
「戦いはまだ始まったばかりだ。困ったことにね」
「ですね……私ももっと強くならなくちゃ。私だって、姉さん達の仇は取りたいですからね」
「無理だけはしないでくれよ」
「勿論。無理せず強くなって、必ずその深海棲艦を探し当ててやりますとも」
フンスと胸を張る五月雨。最初に比べれば頼もしくなったものだと、まるで親が子を見るような目で五月雨を眺める提督。
五月雨だけでなく、鎮守府にいる全員が同じ心持ちだ。必ず仇を突き止めて、勝利を収める。それが今の望みである。
「さて、朝食まではもう少しかな。仕事は……まだ始めなくていいか」
「やると言ってもダメですからね。まーた徹夜しかけましたよね。大淀さんと」
「いや、叢雲の資料集めでいろいろと」
「まず真っ先に無理しちゃいけないのは、艦娘じゃなくて提督ですからね！　大淀さんにもちゃんと言っておきますから！」
こういうところも強くなったなと苦笑。長年の秘書艦業務のおかげか、精神的にも成長している。駆逐艦ながら、鎮守府を引っ張っていけるくらいの胆力を身に付けていた。間違いなく鎮守府代表の艦娘と言えるだろう。
「わかった、わかったから。時間まではのんびりしているよ」

「それが普通なんです。何処の提督も仕事中毒（ワーカホリック）なのか知らないですけど、まずは自分の身体を……」
などと五月雨が提督に説教しようとした瞬間、電話の音が鳴り響いた。
施設のタブレットではなく、鎮守府の端末。ここにかけてくる者は、大本営を筆頭とした軍の者である。朝も早いため、中継も無く直接執務室の端末が鳴った。
五月雨は言葉を呑み込むために咄嗟に口に手を当て、どうぞどうぞと手を端末の方へ。
「こんな時間に連絡とは珍しいな……」
業務開始前に連絡をしてくることというのはなかなか無いことだった。特殊な任務が発生した時や、余程重要な連絡が発生した時くらいだ。ならば、今回は後者であろう。
待たせるのも悪いと、提督は間を置かずに電話を取った。
『朝早くからごめんなさいね』
電話の主は、貴婦人の大将。少し申し訳なさそうではあるものの、こんな時間に電話をしてきたくらいなのだから、何か重要な事実が判明したからこそ連絡をしてきたのだ。
「いえ、問題ありません。何かわかったんですか？」
『ええ、例の件のことで。知っているでしょうけど、昨日鎮守府を制圧した後、その持ち主に尋問をしていたの。叢雲のことはそこで判明したから、すぐに貴方に連絡したのだけれど、その後にもさらに尋問を続けて、わかったことがあったのよ』
むしろ、そちらの方が重要と言わんばかりだった。
『そこの鎮守府が叢雲を捨て艦にして攻略しようとしていた敵……深海棲艦が、未知の深海棲艦だったらしいわ』
「それは……」
『ええ。もしかしたら、貴方の駆逐隊を葬ったそれと同じモノなのかもしれない』
そのブラック鎮守府は、戦果を挙げることに躍起になっていた。それ故に、分不相応な敵にも、生まれたばかりの艦娘を囮に使ってむり

くり倒していた。毎回犠牲を払い、ギリギリのところでも戦果を挙げていた。
今回もそれだったらしいのだが、その相手というのが、今までに発見されていない未知の深海棲艦である。それこそ、春雨達を襲撃し、駆逐隊を全滅させた仇と同じモノの可能性だってある。
「それはどんな深海棲艦だったか……わかりますか」
『ええ。そこで出てきた敵は2体だったらしいわ。そのうちの片方は駆逐艦、もう片方は重巡洋艦だったそうよ。その時はまた別の艦娘を犠牲にして逃げ果せたらしいけれど、最初から勝ち目が無いと考えて相当無理矢理撤退したみたいね。その時の部隊は、トラウマを負ってしまっていたの』
駆逐隊のように全滅させられたわけではなく、他者を犠牲に他の者が生き残っているというのが気に入らない話ではあるものの、そのおかげでその情報が手に入ったのなら苦しいが妥協する。
槍持ち(叢雲)の犠牲によって進んだ先というのは、前ではなく後ろ。強力すぎる敵を前にして、何をやってもダメと即座に判断したことで、叢雲を犠牲にして撤退したわけだ。
ボロボロにされた叢雲はその無念と逃げ果せた艦娘への憎しみ、こんな作戦を立てた人間に対しての怒りで感情が溢れ出し、今に至る。
「それが今から1週間前……ですか」
『ええ。貴方の駆逐隊が消息を絶ったのは、確か今から10日ほど前だったわね。おおよそ3日でその場所まで移動したと考えてもおかしくはないでしょう』
「確かに。どういう概念でその行動をしているかはわかりませんが、可能性としては無くはないですね」
そのブラック鎮守府が相手取ったという深海棲艦が、この鎮守府における仇と同一の存在だというのなら、次の戦場はその付近になるかもしれない。これは大きな情報だ。
しかし、3日でやたらと移動しているというのなら、今はもう全く別の場所にいてもおかしくない。捜索は困難を極めそうである。
「了解しました。重巡洋艦と駆逐艦の特徴がわかれば教えてもらいた

いのですが」
『それはまだ。トラウマを負った艦娘からも聞いているから、時間がかかるわ。もう少し時間をちょうだい』
「なるほど、では焦らずに待たせていただきます。その間に準備をしておくことにします。槍持ちとの戦闘のおかげで敵の実力は多少わかりましたから」
『ええ、そうしてちょうだい。また何かがわかり次第連絡するわ』
貴婦人の大将からの連絡はここまで。電話が切れたことで、緊張感漂う空気が弛緩する。椅子に深く腰掛け、少し冷めたコーヒーを呷る。
「……重巡洋艦と駆逐艦の未知の深海棲艦だそうだ。そのうちのどちらかが、僕達の戦うべき仇である可能性がある」
「そう……ですか。そうですか」
五月雨は少しだけ心が燃えるような感覚を覚えた。仇の姿が明確になりかけ、艦娘が持つ闘争本能に火がつく。
「それとの戦いに向けて、僕達は邁進して行こう。今は力を溜める時間だ。前を向いて先に進めようか」
「はい！」
鎮守府はここからさらに活気を取り戻す。戦いはまだ始まったばかりだ。

電話を切った貴婦人の大将は、大きく息を吐いた。隣に構える吹雪が気遣って身体を支えようとするが、大丈夫と手を添えてそこから立ち上がる。
「要所は話したから、とりあえずこれでいいでしょう」
「そうですね。でも良かったんですか？　重巡洋艦はさておき、駆逐艦の方は特徴がわかってるじゃないですか」
「あの鎮守府には今は話せないわ。混乱するだろうし」
苦笑しながらも、今の判断が正しかったのかを思案する。今の安寧のためには、ほんの少しの前進で終わらせるべきと判断した。事実を

すぐに話すことが正しいとは限らないのだから。
「さすがに言えないですか……」
「ええ」
ふぅ、と小さく息を吐いて、絞り出すように呟いた。
「駆逐艦が白露型の特徴を持っていただなんて、話せないでしょ」

きっかけは何か

その日の朝食は、なんと槍持ちがダイニングにやってきた。ベッドの上での食事を続けてきたものの、これまでの回復から鑑みて、自分の手で食べることに挑戦してみるとのこと。勿論隣には薄雲がつき、甲斐甲斐しくサポートをする。

そもそもダイニングに槍持ちが来ることが初めてであるため、一同が大いに驚いた。対面したことがない者はさすがにいないが、ここまで動けている槍持ちを見ている者は少ない。

「おー、すげぇ。そこまで回復したんだな」

「ちょっと前までは動きもしなかったのに、随分と良くなったのね」

「うん、短期間でここまで来てくれたんだ。そろそろ完治するかもだよね」

まず口を出したのが松竹姉妹。薄雲の献身に食いついているようである。この2人のそれとは質が違うとは思うのだが、やはり仲の良い姉妹というのには何か感じるモノがあるようで、この2人の仲をより進展させたそうにしていた。

薄雲もその空気を感じ取りつつも、適度にあしらいながら槍持ちへの献身を止めない。

「自分で食べられそうですか？」

「……デキソウ」

その槍持ちはというと、薄雲の手を借りず、朝食を摂ることが出来ていた。まだ念のため療養食ではあるものの、スプーンを使って上手に食べる様子は、つい先日まで身体を全く動かさなかった者とは到底思えない。

とはいえ、動かせないわけではなく動かさなかっただけなので、意思さえ持てばこれくらいなら出来るのだろう。

その扱い方は、何処か上品さも感じられるのだが、薄雲の手を借りずに食べているからか、いつもよりも食べる速度は格段に速い。飲み込みやすいお粥などにされているのもあり、さらりと食べ終えてしまった。

「次からのＲｅｐａｓ（食事）は、みんなと同じモノにしますね。ウスグモ、それで良かったですか？」
「はい、よろしくお願いします。姉さんも大分食べられるようですし」
「……オイシカッタ」
　自分で食べたことで、より満足感を得られたようである。
「まだお仕事は出来なそうだけれど、お散歩くらいは出来そうかしらぁ？」
「はい、試してみようと思います。ここまで歩いてくることは出来ましたから、お外も歩けるんじゃないかなって。姉さん、どうですか？」
「……タブン、ダイジョウブ」
　薄雲の言葉に肯定の意思。昨日までは刺激を与えるために戦艦棲姫の艤装を使っての散歩だったのに、今日からは自分の足での散歩である。僅かな時間で劇的な回復を見せているのは、ひとえに薄雲の介護のおかげだろう。今だって身体の一部に触れたままで熱を与え続けているのだ。
　死人のように冷たかった肌も、今や一般的な熱量を取り戻しており、凍りついた思考も随分と溶けてきている。深夜に一度噛み合ったこともあり、またああなる時も近いだろう。その時はまた錯乱してしまうかもしれないが、薄雲を筆頭として仲間達がいれば、きっと大丈夫である。

　午前中からその散歩は始まり、基本的には外をブラブラと歩くだけ。戦艦棲姫の艤装の手の上でただ見て回っただけとはまるで違う、自らの足で薄雲と一緒に歩き回るというのは、今まででも一番の刺激になっている。さらには、向かう方向は全て槍持ちが決めているのだから、より一層強い刺激になるだろう。
　勿論その後ろからは戦艦棲姫がついてきており、万が一の時のために待機。例えば、艦娘の気配を感知したことで暴走をするなどしたら、どうにか止めるために。それは今のところ考えられないことだが、それ以外にも何かしらの問題が発生するかもしれない。

「姉さん、すごく良くなりましたね。あとは……記憶とか、ですね」
「……キオク……」
深夜に噛み合ったことは、今の槍持ちの頭からは綺麗さっぱり抜けているようにも見えた。思い出したくない記憶を思い出してしまった出来事なのだから、忘れたままでも良いだろうというのが薄雲の考え方である。
とはいえ、槍持ち――叢雲がその時のことを知りたいと言うのなら、思い出せるように全面的に協力するつもりである。それで槍持ちが苦しむことになったとしても、本人がそれを望んでいるのなら、心を鬼にして知っている限りを話そうと考えていた。限られた真実ではあるのだが、死の真相は知っているのだから。
ただただ思うがままに歩いているだけなので、ある程度進めば何処かに辿り着く。
今回辿り着いたのは、よく釣りをしている堤防。今日は沖ではなく堤防釣りを敢行中のようで、飛行場姫を筆頭に、春雨とジェーナス、そして伊４７もそこにいた。伊４７は釣りではなく、潜水してからの追い込み漁のためなのだが、今はそれもせずに待機中。日向ぼっこに近しいことをしていた。
「ちょうど釣りの最中でしたね」
薄雲の声が聞こえたからか、飛行場姫がまず反応。薄雲と槍持ちの後ろで戦艦棲姫も手を振ったため、飛行場姫も小さく手を振っていた。
「姉さんも、完治したらみんなとここで一緒に釣りとかすることになりますよ」
「……ツリ……」
戦いとはかけ離れた生活様式を見て、あまりピンと来ていないようである。虚ろな瞳でその光景をただ眺めているのみ。
本来深海棲艦はおろか艦娘でもなかなかやらないようなことである釣り。中にはＦ作業と称して趣味で釣りをする艦娘も数人いるし、鎮守府でも漁業組合との連携で活気的に漁を行なう祭りもあるようだが、槍持ち――叢雲にはそういう趣味も無ければ、祭りに対する心

構えも普通。
「槍持ちが漁に参加してもらえるなら、大物も獲れるかもしれないわね。ほら、槍で一突きにして」
「あはは、じゃあまたマグロ1匹行けますか？」
「チャンスはあるわね。その時には春雨にも解体教えてあげるわ」
今回も春雨の発作を起こさないように話を絶やさないようにしながらの釣りなのだが、槍持ちが訪れたことで話題がそちらに切り替わる。
自分のことを目の前で話題にされているのだが、槍持ちはただボーッとしているのみ。自分から話が出来るのは、まだ薄雲だけのようである。
「Ｈｅｙ，槍持ち！　貴女も早速ツリやってみない？」
そんな槍持ちにジェーナスが声をかける。今までなら声をかけられても無反応に徹していたが、今は違う。自分の意思が芽生え始めているのだから、しっかりと反応をする。とはいえ、どうすればいいのかわかっていないようで、思考が停止しかけていた。
「やってみますか、姉さん」
「……ワカッタ」
薄雲に思考を戻され、すぐに肯定。今の槍持ちは、薄雲の指示は全て従うような状態に近しい。否定という意思自体が抜け落ちているようにも見える。肯定するか、訳もわからず思考停止するかの2択。
思考停止が否定と見えなくもないが、薄雲に指示されればそれも肯定に変わる。結局、まだ意思は希薄だった。
言われるがままに竿を持たされ、言われるがままに釣り糸を垂らす。それこそ、今まで以上にボーッとする時間。こういう時間でお喋りを続けるのだが、槍持ちには話題も無い。
「こうやって心を落ち着ける時間があるのはいいことだよ」
「ね。穏やかに暮らしているって本当に幸せなことだもん」
春雨と薄雲の言葉を聞いても、やはりピンと来ていない。戦いに身を置いていた者として、怒りと憎しみが溢れ出した元艦娘として、穏やかな日常なんて縁も由縁も無いものとして認識してしまっている

のは仕方ないことなのかもしれない。
だからだろうか、まずは釣りの楽しさを知ってもらうために、伊47が動き出していた。誰にも知られることもなく、こそっと海の中に入っており、槍持ちの持つ竿に食いつくように追い込み漁を秘密裏に行なっていた。
それが実を結び、追い込まれた1匹が餌に食いつく。瞬間、竿がグンと引かれた。そこそこの大物がうまいこと釣れそうになっている。
「姉さん、かかってます！」
そこからは薄雲の指示も込みで魚との戦いに。逆方向に引っ張ったり、リールを巻き上げたりで疲れさせ、徐々に追い込んでいく。バラさないように丁寧に、しかし時には大胆に。
これが本来身を置く戦いと近しいものであると気付けるかどうかは槍持ち次第。
「ああっ、ちょっと危ないかも……！」
薄雲もそれなりにここで釣りをやっているため、近くで見ていればそれが釣れるか釣れないかが多少はわかる。今の状態は釣り上げられない可能性が濃厚になってくる予兆。
海中が見えるわけではないのだが、事実食いついた魚は、針から逃れられそうになっていた。これ以上長引かせるとバラしてしまうことになる。
しかし、ここで槍持ちの意思が小さく宿る。本来の艦娘叢雲が持つ勝ち気な性格に火がついたように、今までにない力が入った。
「……ニガサナイ」
言われたことは即実践し、的確な動きにより予兆を吹き飛ばす。結果、初めてにしてはなかなかの大物を釣り上げることに成功した。
「わっ、やったやった！　姉さん、やりました！」
「結構いい感じのサイズね。それなら2人分は捌けるわ」
槍持ちが釣り上げた魚を見て大喜びの薄雲。飛行場姫も軽く褒めた。2人分ということは、槍持ちの釣り上げた魚を自分に加えて薄雲にも提供出来るということに他ならない。
その時、槍持ちの口角が小さく上がった。今まで一度も見せたこと

のない、感情が乗った表情をついに見せたのだ。
この施設では死活問題に関わるかもしれないが、やっていることは娯楽の一環。しかし、魚との1対1の戦いとも言える。本能のままに暴れるのは戦いとは言わないが、自らの意思で競い合う道を見つけたことにより、槍持ちはまた感情を取り戻すことになる。
本来は繋がりが無いと思っていた行為でも、何がきっかけになるかなんてわからない。散歩だけではこうも行かなかっただろう。
「こういう娯楽も効くみたいね」
「ええ。やれるならいろいろやらせた方がいいのかもしれないわ。お姉の農作業にも参加させてみましょうか」
その表情の変化を、戦艦棲姫と飛行場姫は見逃していない。釣りにも槍持ちを完治に向かわせるきっかけがあることがわかった時点で、ここでやれることをひとまず全部やらせる方向に持っていかれそうだった。
それを槍持ちが拒んだら拒んだ時。否定するというヒトらしい思考回路が正しく芽生えることになるのだから良しと出来る。
「ここでやれることなんて限られてるけど、その分うまく成長出来るかもしれないわね。お姉だって空っぽの状態から今みたいになれたんだし」
「ここでの生活だけであそこまで行けたっていうなら、槍持ちも同じように行くんじゃない？　時間はかかるかもしれないけれど」
「それならその時よ。ここは一応平和なんだから。時間はいくらでもあるわ」
元来、叢雲は勝ち気で高飛車、クールで負けず嫌いと、艦娘の中では戦場に向いている性格をしている。それ故に、ただただ私室で治療を受け続けるという生活だけでは、完治までに長い時間がかかっていただろう。
だが、釣りのような擬似的な戦いを経験させることで、完治までの時間を飛躍的に短く出来そうだった。いろいろなことをやらせるというのは、槍持ちにとっては大正解なことだったのである。
「よーし、槍持ち、もっともっと釣ってみましょ！　私の竿を貸してあ

げるから、ここでどんどん釣っちゃって！」
「あ、でも薄雲ちゃん、散歩の途中じゃなかったっけ」
「ううん、大丈夫。本当に近くを適当に歩いてただけだから。こうやっていつもはやってないことをやってもらった方が、姉さんのためになるよ」
その槍持ちが竿を離そうとしないのだから、今の成功体験で味をしめたのだろうと思えた。
その後、釣れたり釣れなかったりを繰り返し、最終的にはそれなりの釣果を得ることになる。槍持ちとしても、3匹程度は釣ることが出来たことで、より感情は豊かになっていった。

こうして槍持ちはさらに自分というものを確立していく。ここで手に入れたのは、戦いへの感情。勝てたことへの喜びと、負けたことへの悔しさ。駆け引きをきっかけに、より艦娘らしい感情が芽生えていく。
槍持ちが叢雲となるまで、あと少し。

最後の詰め

午前中は釣りというカタチで刺激を受けたことで、今まで最も失われていたであろう感情の方が芽生えてきた槍持ち。それは一時的なモノではなく、ずっと続くものとなり、昼食の時にも朝と比べれば格段に表情が豊かになっていた。それどころか、薄雲だけでなく他の者との会話も可能になっていたのだ。流石に自分から話しかけることはしないのだが、簡単な受け答えなら誰に対しても出来ていた。

その時には療養食ではなく、他の仲間達と同じモノを用意されていたのだが、それもしっかり食べることが出来ていたし、槍持ちの完治はもう時間の問題。それには施設の全員が喜んでいた。最初の状況から考えれば、ここまでの回復が超短期間で成功しているのだから、今後同じようなことがあっても上手く行くと希望が持てる。

「……ゴチソウサマ」

「C'▪taitpauvre.（おそまつさまでした）　食べれたようで、何より、です」

「……オイシカッタ」

以前に薄雲にバラされた食い意地の件がここで影響しているのか、こと食事に関しては妙に楽しんでいるようにも見える。提供者のコマンダン・テストに普通に感想が言える程にまでになっていた。

そもそも、いただきますとごちそうさまが言えるようになっただけでも相当な進歩だ。食べさせてもらうのをクリアしたその日のうちにコレ。

「姉さん、午後からはどうしますか？　午前中は釣りのお手伝いをしましたけど」

「……ウスグモガキメテクレレバイイ」

「そうですねぇ……ここに来たら一度はやっておきたい戦闘訓練も、姉さんには多分必要無いですし……」

春雨も一度だけやった戦闘訓練。槍持ちについては、それはどちらかと言えば不要。何せ、戦闘中に保護されたのだから、戦いに関してはむしろ誰よりも出来ると言っても過言ではない。

だからといって、完治に向けての最後の詰めをやっていくのはやは

り抵抗があった。それは、記憶の追求。槍持ち本人より、中間棲姫達の方が理解している素性を思い出してもらうことだ。自力で思い出してもらうために少しずつヒントを与えたり、キーワードとなり得る言葉を聞いてもらったりといろいろ考えられる。

だが、槍持ちにとって本当に思い出してもいい記憶かはわからない。思い出した時点でまた初期の状態に逆戻りという可能性もある。それを考えると、怖くて先に進めないというのもあった。

「午後はまたティータイムがあるわ。今まではベッドの上だったけど、今度はここでしない？　ちゃんとお茶菓子も用意するから」

そこでジェーナスが提案。いつもは槍持ちの私室にまで全てを運んでいたが、せっかく部屋の外に出ることが出来たのだからと、みんなと同じようにティータイムを楽しんでほしいと、槍持ちを誘う。

断る理由がないので薄雲は許可。槍持ちも、なんだかんだジェーナスの淹れる紅茶は気に入っているようなので、首を縦に振った。

そして、おやつの時間になりティータイム。参加者はいつもの3人、否、4人。それに加えて、槍持ちの臨時保護者である戦艦棲姫、そしてリシュリューである。

なんでも今回はお茶菓子の提供者がリシュリューらしい。春雨達がチャレンジするクッキーのようなものとはレベルが違う、名店のような精度のシュークリームが出てきたときは、槍持ちの表情が変わる程であった。

「P▪tissier（パティシエール）と呼んでちょうだい。Richelieuは何でも作れるの」

「本当に凄い……こんなの見たことが無いです。ナイフとフォークで食べればいいんですか？」

「そんなに▪l▪gant（上品）じゃなくてもいいわ。これは、みんなで楽しむL'heure（お茶の時間）du th▪なんだもの。がっつけとは言わないけれど、手掴みでガブッと行きなさいな。Servietteは用意しておいたから」（ナプキン）

これも槍持ちへの新たな刺激のためである。療養食から抜け出し、普通の食事が出来るようになったのだから、おやつに極上の甘いモノを提供してあげようというリシュリューの優しさ。材料もまだまだ残っていたというのもあり、かなり張り切ってしまったところもあるようだ。

無論、施設にいる者全員分が用意されているため、後ろめたさもない。先んじて食べるというだけ。

「そういう甘味に合う紅茶も用意したわ。甘いモノには、少しＢｉｔｔｅｒなモノが合うからね」

ジェーナスもそれに連携するように紅茶を振る舞う。最高のスイーツには最高のドリンクを。これにより、槍持ちへの更なる刺激とした。

早速槍持ちがリシュリュー手製のシュークリームを手で掴み、口を付ける。がっつくわけではないのだが、どうしても豪快にかぶりつく形になってしまうのは仕方ない。

その味を知った瞬間、目を丸くして喜ぶ。心を壊して深海棲艦化してしまったとはいえ、槍持ちも見た目通りの女の子である。甘味には目が無いようだった。

「……オイヒイ」

「そう、それは良かったわ。こういう場ではそうやって思い切り食べてくれた方が、作った側としても嬉しいわね。でも、口の周りがどうしても汚れちゃうから、そこは食べ終わった後に拭きなさいね」

コクリと頷き、モフモフと食べ続ける。小動物とまでは言わないが、その食べる仕種は周りを幸せにするような光景だった。

槍持ちに追従するカタチで他の者達も食べ始め、その上質すぎる味に舌鼓を打つ。薄雲やジェーナスはともかく、春雨もリシュリューの全力を出したスイーツを食べるのは初めてなため、目をキラキラさせながらも槍持ちのようにモフモフ食べる。

「リシュリューさん、作り方習ってもいいですか？　これ、また鎮守府から誰か来た時に振る舞いたいです」

「ええ、いいわよ。少し難しいけれど、手順と分量を守れば誰でも出来

るから、教えてあげる」
　これだけ美味しいのなら、是非とも鎮守府の仲間達に食べてもらいたいと、春雨もやる気満々だ。特に精神的に疲弊している海風には、こういう甘いモノでリラックスしてもらいたい。
　しかし、今はまだ来てもらうのは難しい。槍持ちが完治に限りなく近付いてきたとはいえ、艦娘に対しての感情はまだまだ憎悪一辺倒だろう。面と向かうどころか、気配を察知しただけで襲いに行ってしまう程の状態では、スイーツを振る舞うのはまだまだ先になる。それまでに練習期間があると思えば気は楽だが。
　と、ティータイムを楽しんでいるところで、ダイニングに設置してあるタブレットが着信音を鳴り響かせる。そんなに大きな音ではないのだが、突然だったので全員がビクッと震えた。
「ある意味ちょうどいい時間なのかもしれないわね。ここにいることも多いし」
　鎮守府側も、こちらの状況を鑑みて連絡を取るようにはなっている。夕食の準備をしているときは外したり、食事時は勿論してこない。今のおやつ時も、おおよそ終わっているかどうかというタイミングを狙ってきているので、緊急の連絡でも無さそう。
　そんなに着信音を続かせてもよろしくないので、リシュリューが端末を手に取った。
「Ｂｏｎｊｏｕｒ（もしもし）」
『連日の連絡申し訳ない。今日はリシュリューかい』
「ええ、タイミングも良い方よ。ほら」
　リシュリューがカメラを春雨の方に向けると、ちょうどシュークリームを食べ終えたばかりの春雨が映し出された。そんなことされるとは思っていなかったため、あたふたしながら手や口を拭いている様子を見て、提督と隣にいた五月雨は苦笑する。
『慌てなくて大丈夫だよ春雨。今日は重要な連絡でも何でもない。また海風と話をしてもらいたいと思ってね』
「そ、そうでしたか。海風は元気ですか？」
『ああ、今は無理せずに力をメキメキと付けている。ほら、見てあげて

くれ』
今度は提督側の映像がガタガタと動き、画面に真反対が映し出される。そこには、以前よりは格段に顔色がいい海風と、その妹達が待ち構えていた。
「海風、元気にしてる？」
『はい、おかげさまで。姉さんの教えを胸に、毎日頑張ってます』
今の海風に焦りは見えない。仇を討つために努力をし、今まで以上に力を付けていると笑顔で話が出来ていた。
海風だけズルいと江風や涼風も割り込むように画角に入ってきては、手を振ったり笑ったりと、少しだけ騒がしい。それだけ元気に暮らしているということにもなるので、春雨としては気が休まる思いだった。
「今、リシュリューさんにシュークリームを作ってもらったの。作り方を教わるつもりだから、今度こっちに来れるときは、それを振る舞えるようにしたいな」
『姉さんのシュークリーム……はい、是非食べさせてください。それを食べるまでは死ねませんね』
物騒な言い方ではあるものの、どういうカタチであれ、命を賭して戦うようなことが回避出来るのならそれに越したことはない。生きていくための活力となるのなら、いくらでも提供しようと春雨も心の中で決意する。
「Ｈｉ．　ウミカゼ、こっちではハルサメも元気よ。見てわかると思うけどね」
『はい、施設の方は何事も無いようで安心です』
「平和も平和よ。ねぇ、ハルサメ？」
「うん、危ないことも何もないよ。最近は発作も起こしてないしね」
つい今朝に起こしかけたのだが、海風を心配させないようにするためにそこは黙っておく。完全に錯乱し切ったわけではないので、起こしていないといえば起こしていない内に入ると思われるし。
『あれ、そういや薄雲はどうしたンだい？　姿が見えないけど』
江風がこちら側を覗くようにアップになる。近くで見ても施設側

の映像が変わることは無いのだが、画角に春雨とジェーナスしか入っていないことが気になるようだ。
ここで春雨は少し悩む。薄雲の方を映すということは、槍持ちの姿も映すということに他ならない。あちらに、特に海風に槍持ちの姿を見せていいものかどうか。
それに、あちらに槍持ちの姿が見えるということは、槍持ちに艦娘の姿が見えるということにもなる。ただでさえ艦娘に対して憎しみを持っている槍持ちが、艦娘の姿を見たらどういう感情を持つか。
「薄雲ちゃんは近くにいるんだけど、今は手が離せなくてカメラの前に来てないだけ」
とりあえずお茶を濁す。薄雲も今はそれがありがたいと春雨に小さく謝った。
実際、薄雲もどうしたものかと悩んでいた。槍持ちに艦娘の姿を見せることは、完治への最後の詰めに繋がるのではないかと考えているからだ。
艦娘の姿、鎮守府の映像、この声を聞いているだけでも何かしらの刺激になっているのではないかと思える程、この通話には記憶を紐解くキーワードが詰まっている。
『なら仕方ない。やっぱ顔くらい合わせときたいかなって思ったンだけどさ』
「うん、ありがとう。薄雲ちゃんも、また次の機会でって」
『だね。次は余裕があるときに顔見せてくれよなー』
物わかりのいい妹で助かったと、春雨は内心ホッとしていた。ここで変に追求されたら、お互いのためにならなそう。
「カンムス……チンジュフ……」
しかし、やはりこの声を聞いているだけで、槍持ちには刺激になっていた。薄雲が考えていた最後の詰めの部分に抵触する、完治に向けての一手。
甘味や娯楽などの正の感情で解された思考が、負の感情による刺激によってこじ開けられるような一撃。
「ワタシハ……私は……」

再び噛み合った。楽しく生きてきたことで緩んでいた思考に一撃を加えられたことで、ズレていたものがカチリとハマった。
一度襲い掛かった艦娘の声であることは理解しているかはわからないが、一番辛かった思い出の部分に触れているのは確かだ。
薄雲がまずいと思った時には、槍持ちの奥から様々な感情が溢れ出ていた。艦娘だった時ならば、それこそ黒い繭を形成しかねない程に強い感情が。
「っあっ、あああっ、あぁあああっ!?」
思考を刺激され、記憶が溢れ出し、最悪しかない思い出に纏わり付かれ、大きく目を見開いて頭を抱え、ただ叫ぶことしか出来なくなった。
流石にこの声は施設中に響き渡るほどになり、すぐに中間棲姫と飛行場姫が駆けつけた。
『えっ、えっ、どうしたンだそっち!』
「えっと、ごめん、1人発作を起こしたの。ごめんね、今すぐに対処しなくちゃ。またこっちからかけ直すってことで今は」
『は、はい。また話せるのはわかっていますので、そちらのことを優先してください』
「ありがとう。それじゃあ、ごめんね!」
鎮守府側はこちらの様子がわからないはずだが、施設の内情というのは理解してくれている。春雨が通話をぶつ切りしても許してくれる。

槍持ちの最後の詰め、記憶はこの瞬間に開かれた。あとは、その絶望に耐え切れるかどうかである。

理不尽への怒り

「姉さん、しっかりしてください！　姉さん!?」
「あぁあああっ、あああぁぁあっ!?」
　春雨が鎮守府の面々と話しているその声を聞いたことで、槍持ちの中で再び噛み合ってしまった。負の感情、最悪の記憶の奔流に押し潰されかけ、頭を抱えながら悲惨な叫び声を上げ続ける槍持ちをどうにか落ち着かせようと、薄雲が必死に呼びかける。しかし、薄雲の声が聞こえていないかのように叫び続け、その場でのたうち回る。
「薄雲ちゃん、抱きしめてあげなさい。声も届いていないなら、いつも通り温もりを」
「は、はいっ、姉さんしっかり！」
　中間棲姫に言われるがまま、悶え苦しむ槍持ちを必死に抱きしめた。動きを止めるという理由もあるが、いつものように温もりを与えるように、思いを込めて。
　それでも槍持ちは止まらない。薄雲を振り払うかのように身を揺すり、その苦しみから逃れようと暴れ続ける。
「ジェーナスちゃん、私達も！」
「Ｏｋａｙ！」
　薄雲だけでは止まらないと判断し、春雨とジェーナスも温もりを与えるために抱きつく。ここには仲間達がいるのだと教え込むように、3人がかりの力で槍持ちを食い止め、落ち着かせる。
「姉さん、しっかりしてください！　大丈夫、大丈夫ですから！」
「ここには敵はいないよ！　みんな仲間だから！」
「楽しく生きる仲間なの！　勿論槍持ちも仲間なんだからね！」
　三者三様ではあるものの、語りかける言葉は同じ。槍持ちは独りではない。ここには仲間がいる。憎むべきものは存在しない。だから、今は落ち着いてほしい。その気持ちをぶつける。
　暴れるのは止まらず、振り回す腕が3人の身体を殴りつけるようなカタチになってしまったが、歯を食いしばってそれを耐えた。
「うぁあああっ！　艦娘っ、艦娘は許さない！　人間も許さないんだ

からぁ！」
「今は落ち着いてください！　姉さんが憎む理由も全部知ってます！
でも、今は、今だけは、暴れないで心を鎮めてください！」
薄雲の必死な呼びかけがあるが、怒りと憎しみに呑み込まれて、周囲全てが敵に見えてしまっているかのように暴れ続ける。
今までとは違い、瞳には光が戻ってきていたものの、真っ赤に燃え上がるように光を放ち、鬼のような形相になっていた。壊れた心がさらに悲鳴を上げ、艤装さえも構築しようとしていた。
ここで艤装まで出して暴れようものなら、ダイニングはおろか施設そのものが壊れてしまう。それだけはどうにか避けたい。
「これは本格的にまずい！　どうにか押さえ込まなくちゃ……！」
「少しＲｏｕｇｈ（荒手）になるけど、許してよね！　ハルサメ、ウスグモ、ちょっとだけどいて！」
ジェーナスがそう言うと、２人は暴れる槍持ちから咄嗟に離れた。瞬間、ジェーナスの巨大な艤装が展開される。身体全てを包み込む球体状の艤装が構築されたかと思うと、艤装展開が間に合っていない槍持ちに押し潰すようにのしかかり、かなり強引に動きを止めた。
ここにいるものの中では、春雨や薄雲では力が互角になって食い止めることが難しい。中間棲姫は艤装を常に施設の電力として使っているため使用不可。飛行場姫は可能かもしれないが質があまりにも違うため使っても意味がない。リシュリューはさらに巨大すぎて、構築しただけでダイニングが破壊されてしまう可能性が高かった。そうなるとジェーナスか戦艦棲姫になるのだが、ここは小回りが利く駆逐艦のジェーナスが先行して発動し、こうなった。
巨大とはいえ、駆逐艦の身体を覆い隠す程度の球体。ダイニングを破壊することもなく、槍持ちだけを綺麗に押し潰す。戦艦棲姫も艤装を展開していたが、少しだけタイミングが遅かった。
「あぐっ!?」
「頭冷やしなさいな！　気持ちはわかるけど、ここで暴れても何にもならないわよ！」
艤装の下で蠢くものの、圧はより強くなり、身動き一つ取れなくな

る。しかし、記憶の奔流という思考に叩きつけられる苦痛は取れるわけではない。
「っあああああっ!?」
一際大きな悲鳴を上げたかと思うと、槍持ちは目を見開いたまま気を失った。まるで死んだかのような見た目であるものの、キチンと息をしていることは確認出来る。
「姉さん、姉さん!?」
「何処も怪我はしていないわぁ。ジェーナスちゃんの艤装の圧力と、叫び続けていたことで酸欠を起こしたようねぇ」
「無傷で動きを止めるにはこれしか無かったわ。無茶しちゃったけど、最善だったと思うの」
「ええ、これなら大丈夫。今は寝かしておいてあげましょうか」
鬼のような形相のままでは可哀想と、中間棲姫が顔を整えてあげる。そうなると、見た目だけは安らかに眠っているように見えるようになった。
動かなくなったことが確認出来たため、ジェーナスも艤装を消す。そこには、侵略者へと堕ちかけていた槍持ちの姿があった。
「……姉さん……」
「薄雲ちゃん。今は信じて待ってあげてちょうだい。目が覚めたとき、改めて説得してもらえないかしらぁ」
不安で不安で仕方ない薄雲だったが、中間棲姫からそう言われると、静かに首を縦に振った。

ダイニングで倒れた槍持ちは、戦艦棲姫に抱きかかえられて私室へと運び込まれた。今でこそ安らかな眠りについているが、先程までは艤装まで展開しかけていたという酷い有り様だったのだ。誰もが心配し、部屋に押しかけている。
しかし、私室は狭いため、入れるのは選ばれた数人のみ。薄雲と戦艦棲姫はいつも傍にいたというのもあり、部屋に入ることを許可された。あとは診察と言えるかはわからないが確認のために中間棲姫が

入るのみ。飛行場姫も今は部屋から退散し、静かにその時を待つことにしている。
　そのため、部屋の外には飛行場姫と、薄雲が心配だからと春雨とジェーナスが待機している状態。万が一のことを考えると、追加の要員がいる方が心強い。特にジェーナスは、押さえ込むことに成功している実績がある。
「姉さん……思い出してしまったんですよね……多分」
「春雨ちゃんの鎮守府の話を聞いてしまったことで、記憶が戻ってしまった……と考えるのが妥当よねぇ。そうでなくても、もうギリギリのところまで来ていたのだと思うわぁ」
「遅かれ早かれ、槍持ちは思い出してたんじゃないかしら。何かのきっかけがあれば。それがあの鎮守府との通話だったってだけね」
　眠る槍持ちの手を握って心配そうに付き従う薄雲と、その様子を少し離れて見ている中間棲姫と戦艦棲姫。戦艦棲姫は詳しいことは聞いていないものの、槍持ちの境遇は大体予想がついていたため、思い出した時にこうなってしまうのも覚悟していた。
　悪夢により一時的に噛み合った時よりも酷い錯乱だったため、これはもう噛み合ったままと見てもいいだろう。次に目を覚ました時も、記憶は取り戻しており、錯乱する可能性は高い。それだけならまだマシだ。怒りと憎しみに呑まれ、侵略者気質に目覚め、この施設ごと破壊してしまうかもしれない。
「一時的な酸欠で倒れただけだもの。多分、すぐに目を覚ますわ。だから、薄雲ちゃん」
「わかってます。姉さんが姉さんになるための、大詰めなんですよね。私が……私がやります。最後の一手を」
　今まで薄雲にだけは反応してきたのだ。錯乱状態でも薄雲の言葉だけは耳に入れてくれると信じて、槍持ちが叢雲へと至るための一手を、薄雲が詰める。
　そうこうしているうちに、槍持ちが小さく呻めき、薄らと目を開けた。気絶は本当に一時的なものであり、落ち着いたら目を覚ましたようである。

先程から変わらず、その赤い瞳には光が戻っており、そこから赤い炎のように光がチラついていた。典型的な深海棲艦の目なのだが、錯乱して暴れていた時とは違って、ある程度落ち着いている。
短時間とはいえ、眠ったことによって錯乱していた思考が若干落ち着いたようだった。目が覚めた途端に暴れ出すようなことはない。理性も取り戻しているために、衝動を抑え込むことが今は出来ていた。
「姉さん……落ち着きましたか」
ずっと手を握り続けていた薄雲の顔を見て、何処か安心したような、しかしまだ感情の渦に呑まれているような、複雑な表情を見せた。
「……薄雲……私は……」
「姉さん……正気に戻りましたか……」
「……わからない。今も……腹が立って仕方ないもの……」
怒りが溢れての深海棲艦化というのは、そういう弊害があった。イライラが簡単には治らず、何に対しても怒りを覚えているような感覚が、常について回る。
「人間が憎い……艦娘が憎い……深海棲艦が憎い……この世界そのものが憎い……。薄雲……私はアンタにすら怒りを持ってしまってる。でも、一番憎いのは……何も出来なかった私自身よ……」
ギリッと歯軋りが聞こえる。
「こんな弱い感情に呑み込まれて……感情のままに暴れることを良しとするなんて……屈辱……！　でも抗えない……イライラする……」
記憶を取り戻したことで、思考は真っ赤に染まっていた。全方位に向けての怒りと憎しみは、外だけではなく内にまで拡がり、身を滅さんとする炎となっていた。
まだ槍持ちのままの方が穏やかだったかもしれない。最悪な記憶を全て思い出したことで、元の艦娘叢雲としての思考が戻ってきたことによって、その感情は怒りと憎しみに埋め尽くされそうになっていた。
「貴女の怒りと憎しみは、人間にも、艦娘にも、深海棲艦にも、全てに向けられたもの……では無いわぁ」

ここで中間棲姫が少しだけ口を出した。ただでさえ最も近しい薄雲に対してもイライラが募っているような状況で、一種の部外者からの言葉は余計に苛立ちを加速させるもの。横になりながらもその声がする方を睨み付ける。

「貴女はね、理不尽に対して怒っているの。モノに対してじゃない、理(ことわり)への怒りが溢れているのよぉ。だから、見るモノ全てが憎い。だって、世界の在り方が憎いんだもの」

事実を突きつけられ、口を噤む。言われてみればと納得もしてしまった。直近で憎らしい人間と艦娘には今にも襲いかかりたいくらいの衝動を持っているものの、元はと言えば理不尽によって死んだことが原因だ。

心が壊れ、理不尽に対して怒り、この世の全てを憎んだ。結果がこの深海棲艦化である。怒りの権化、憤怒の化身と言っても過言ではない感情に支配されていても仕方ない。

「でも、無意識のうちでも薄雲ちゃんとの交流を楽しんでいたところはある。美味しいものを食べたら嬉しそうにしていた。全てに対して怒りを振り撒こうと、根幹は変わってない。貴女は、槍持ちちゃんは……ううん、叢雲ちゃんは、今後どうやって生きていきたいのかしらぁ」

槍持ちから叢雲へ。扱いが艦娘へと変わったことで、思考にもほんの少しの変化があった。

意識すら出来ていなかった自分の根っこの部分を揺さぶられ、怒りと憎しみが若干だが治った。無論、その憤怒の炎は消えることは無いが、少しだけでも冷静に物事を考えることが出来るようになった。

「……私は……戦場(いくさば)にしか居場所が無い艦娘よ……でも、それすら人間の理不尽に奪われたわ……なら、どうすればいいというのよ……」

「それは貴女が考えるの。貴女の意思は、貴女にしか決められないわぁ」

ここであえての放任。叢雲には叢雲の考え方がある。それを強制するわけにはいかない。考えて考えて、考え抜いた結果が侵略者へと身を堕とすことならば、もう何も言えない。それが叢雲の意思なのだ

から、甘んじて受け入れることになるだろう。
ただし、施設にだけは迷惑をかけてくれるなと念を押すだろうし、敵対するようならば容赦無く叩き潰すかもしれないが。
「姉さん……私達と一緒に生きましょう。楽しく、平穏に、ここで」
無言の叢雲に、涙目で訴える薄雲。怒りを取り払うことは出来ずとも緩くすることは出来る。その手を両手で握り、温もりを与えるように叢雲の腕を抱きしめた。
「姉さんの痛み、苦しみ、怒り、その全てを理解しているとは思っていません……でも、ここはそんな理不尽から解き放たれた楽園なんです。ここにいればきっと落ち着けます。私も力を貸しますから……どうか一緒に、一緒にいてください」
槍持ちであった時から常に貫っていた温もりのおかげで、叢雲の心は自然と落ち着いていった。全てを燃やし尽くさんとする怒りの炎は小さくなり、篝火程度にまで縮む。それにより、物事をより冷静に見えるようになった。
涙ながらに訴える妹の言葉は、常に燃え続けている心に沁み渡るようだった。じんわりとその思いを感じ取ることが出来た。
「……あんなことをする人間を知ってしまったら、護りたいだなんて思わない。滅んでもいいと思ってる」
「姉さん……」
「でも……アンタに苦労はかけたくないわ。薄雲……アンタが近くにいてくれるなら、この怒りの炎は極限にまで小さくなってくれるのかもしれない」
怒りに呑まれながらも、薄雲に笑みを向けた。槍持ちとしての数日間で得られた温もりを忘れているわけではない。
「わかってるわよ……ここにいる深海棲艦達は、本当に私のことを心配してくれていた。その時の記憶は大体残ってる。あやふやな部分もあるけれど」
「姉さん……それじゃあ……」
「……姉姫で良かったかしら。今日から……ここで世話になるわ」
「ええ、是非とも。貴女のような子を保護するのが、この施設の存在理

由だものぉ。歓迎するわぁ」
感極まって、薄雲は大泣きしてしまった。悲しみではなく、喜びの涙をボロボロと流して、叢雲に抱きつく。叢雲もそれを受け入れて、薄雲の頭を小さく撫でた。

槍持ちは叢雲へと戻る。怒りの炎は治らないが、抑制は出来る。しかし、これは綱渡りのようなバランスだ。いつ崩れてもおかしくない。

新しい自分

槍持ちは叢雲としての自分を取り戻し、この施設の一員として生活することに決めた。溢れ出した感情、怒りは常に心の中で燻っている状態ではあるのだが、薄雲が近くにいればその炎は燃え上がることが無くなる。

外部からの刺激があった場合はその限りではないが、少なくとも施設ではそのトリガーが引かれる事は少ないだろう。

「姉さん、さすがにそのボロボロの服では生活がしづらいんじゃないですか？」

叢雲が元に戻ったことで感激して泣きじゃくった薄雲も気を取り直し、今度は叢雲の今の姿を心配し始めた。

槍持ちとしての姿でここにいるため、今の叢雲はボロきれのような黒い布を巻き付けているだけに過ぎない。今までは、思考能力もあって無いようなものだったため、羞恥心も無かったが、今の叢雲は思考能力が戻ってきている。

春雨のように心が壊れていることで羞恥心自体が無くなってしまっている可能性はあるため、薄雲は叢雲に聞いてみた。ちなみに薄雲もその辺りが壊れているため、春雨と同じで羞恥心はあって無いようなモノ。

「そうね……これは確かに見窄らしいわね。流石に少し変えておこうかしら」

「はい。そこのところも……元の姉さんに」

「……どうせだから、艦娘としての私はここで全部捨てるわ。あの時の服にはしない」

艦娘への怒りが深いせいか、艦娘としての自分も怒りの対象になってしまっている。それを振り払うためにも、叢雲は深海棲艦としての自分に生まれ変わろうと考えているようだった。

自分のことが好きになれずとも、明確に嫌いだった自分を模すよりはマシである。

「そうですか……でもどんな感じにするんです？」

「そうね、私が一番落ち着けたのは、アンタに抱きしめてもらった時なのよね。ならアレにするのもいいかもしれないわ。それなりに私のアレンジをするとして……あと深海棲艦らしくするなら、こうね」
ボロ布の服が消えると、以前薄雲も模していた飛行場姫のボディスーツをアレンジしたような衣装が出来上がった。元々の艦娘叢雲は自分のスタイルに自信があったのか、そのアレンジされた服装も随分とさらけだす仕様。見るものが見たらバニーガールとでも形容しそうな格好である。
特に変化したのは、艦娘の自分を捨てるという割には艦娘の時から愛用していた黒いタイツと上半身の上部分を埋める黒いインナーが出来上がっていたことだ。
それを見て薄雲は、表に出さずに少しだけ安心した。捨てると言いつつ艦娘である自分は捨てられないのだ。ボディスーツもどことなく艦娘時代の名残があるように、若干のセーラー服の意匠が残っている白いモノであることもそれを物語っている。
未練があるからこそ、この服が捨てられない。艦娘であることは忘れられない。もしかしたら、薄雲への配慮も無意識に行なっていたのかもしれない。
「ついでに髪も結んでおこうかしらね」
「わ、印象大分変わります」
最後に、長い髪をポニーテールのように結んでおしまい。そうすることで、艦娘のときからは随分と印象が変わった。
それでも、髪を切るという選択肢が出てこない辺りは、やはり未練はあったりするのだろう。薄雲は勝手にそう納得していた。
「よし、これでいいわね。新しい私よ」
「似合ってます、姉さん」
「ありがと」
怒りの対象であった艦娘としての自分が消えたことで、また少し怒りの炎は沈静化した様子。表情も何処か晴れやかではあった。
「それじゃあ、みんなのところに行きましょうかぁ」
「ええ、そうね。今までの礼もしておきたいし」

槍持ちとしてここで保護されていた記憶は、一部あやふやな部分もあるもののしっかり残っている。ここの深海棲艦達は信用出来ると、怒りの中でも叢雲は考えることが出来た。

故に、この施設はまだ居心地のいい場所であると、ハッキリ言えた。これが鎮守府だったりしたら、そういう場所であるというだけでも怒りの炎は燃え上がっていただろう。施設には癇に障るものは、今のところ何処にも無かった。だからこそ、施設の一員になろうと言えた。

「先に伝えておくわねぇ。何かあったら、誰でもいいから頼ってちょうだいねぇ」

「そうね、ここはそういうやり方みたいね。善処するわ」

プライドが高くとも、困ったことがあれば誰かに助けを求めるくらいはしろという、中間棲姫からの遠回しの忠告。叢雲だってそこまで子供ではない。誰かに協力してもらうことに対して、プライドが邪魔をすることは無いだろう。

ただでさえ、ここにいるもの達は全員がお互いを信用し、隠し事すら無しにして最高の付き合い方をしている。叢雲もその中に加わってもらわなくてはいけないのだから、心を隠さずに生きてもらいたい。

部屋の外に待機していた春雨とジェーナスが叢雲の姿をその目にした瞬間、驚きよりも先に喜びが溢れ出ていた。念願叶って叢雲が正気に戻ったのだから、こうなっても仕方ない。

薄雲と殆ど同じように、春雨とジェーナスも飛びつくように抱きついた。この2人は槍持ちの時から親身に付き合ってくれていると理解しており、特に春雨は自分の暴走を身を以て食い止めてくれた者であるとも認識している。それ故に、2人とも仲良くなれそうだと、最初から思っていたようである。

「ええい、暑苦しい！」

「いいじゃない。私達は槍持ちにずっとこういうことしてたんだもん」

「そうだよ。薄雲ちゃんもいつも抱きついてたんだし」
「もう私にそういうのは必要ないの！　あと槍持ち言うな。私はもう叢雲って名前があるんだから！」
わちゃわちゃと仲間同士で騒ぐ姿に、飛行場姫もホッと安心したような表情を見せた。
部屋の外で待機する春雨とジェーナスは、発作を起こしてしまいかねないくらいに中の様子を心配していたのだ。それをどうにかあやし、今に至らせたのは大きな功績。
「ひとまずは安心ね。でも、あの子が溢れてるのは『怒り』だったでしょう。普段の生活は大丈夫なのかしら」
「今のところは大丈夫だと思うわぁ。あの４人で組ませておけば、怒りの炎は燃え上がることは無いと思うもの。でも、心配事はいくつかあるわねぇ」
中間棲姫の言う心配事。その筆頭となるのが、端末を使った鎮守府との連絡である。
今回はその時の声を聞いたことで記憶が噛み合ったくらいである。思い出したくないような記憶を呼び起こしたのは、まず間違いなく怒りの矛先である鎮守府というキーワード。それが自分の鎮守府でないことはわかっていようが、全方位へと怒りを振りまいている叢雲には、関連性があるだけで気に入らないものになる可能性が高い。
そうなると、今後連絡をするときに、その声を聞かせるのはよろしくないと考えられる。特に、あの端末から流れてくる声は、提督や艦娘という、一番憎しみが深いところにあるモノだ。叢雲が発作を起こしかねない。
「そこは一度見てみないとわからないけれど、叢雲ちゃんが難しそうなら、ここに来てもらうのはまたしばらく控えてもらわなくちゃいけないわねぇ。電話もなるべく席を外している時にしなくちゃ」
「そうね。そこは気をつけないといけないわね。春雨にもそこのところは伝えておかなくちゃいけないわ」
「ええ。気の毒だけれど、今は特に大事な時期だもの。このまま回復するわけじゃあ無いしねぇ」

今はなんだかんだ楽しそうにしている叢雲だが、一度火がつけば、怒り狂って暴れてしまうだろう。
「戦艦の。アンタはどうする？　叢雲は正気に戻ったけど」
「そうね。もう少しだけ様子を見て、良さそうならまた旅を続けるわ。あまりにもここに迷惑をかけそうなら、叢雲を旅に連れていくことにしようかしらね」
これは前々から話していたことだ。叢雲がここでの生活も難しいようなら、戦艦棲姫の旅に同行させ、世界を見ることでどうにか気分を落ち着かせると。世界に対して怒りを持っている叢雲であるが、戦艦棲姫の行く先々は叢雲の知らない楽しい世界でもある。そこでなら、怒りの炎はより鎮まるかもしれない。

そのままダイニングに向かい、全員が集まっている場で叢雲が改めて一員となることが公表される。今回は叢雲自身の意思であるため、誰もが歓迎した。誰も服装のことに関して触れない辺り。
叢雲自身は相変わらずプリプリしているものの、祝福されることは悪い気分ではないようで、適当にあしらいつつも顔は綻んでいる。
「今まで迷惑をかけたわね。今日、たった今から、私は叢雲としてこの施設で厄介になるわ。よろしく頼むわね」
「おう、なら明日からでも仕事してもらわねぇとな」
「そうね。叢雲さん、働かざる者食うべからずってことはわかるわよね？」
ニヤニヤとした笑顔で叢雲に近付く松竹姉妹。今までは看護される側だったが、今この時をもって施設の一員。タダ飯が食らえると思ったら大間違いだと言わんばかりに圧をかける。
槍持ちの時からそれは見ているので、そうなるだろうということは叢雲も理解している。何かしらの作業をして、施設に貢献するからこそ、この施設の一員なのだ。
「わかってるわよ。でも……その、ね」
理解はしていても、何か不都合があるような物言い。そこにひょ

こっと現れた薄雲が、ニコニコしながら暴露する。
「姉さん、戦い以外は不器用なんです」
「薄雲、余計なこと言わなくても！」
「事実じゃないですか。私の知っている叢雲姉さんは、戦場では強くて美しくて見ていて惚れ惚れするような戦い方をしますけど、私生活は結構グダグダで」
　戦うことが本懐であるという叢雲は、戦場とそうでない場所ではかなりギャップがあるらしい。料理は出来ず、掃除なども得意ではない。ぐうたらしているわけではないのだが、得手不得手というのはある。指図は出来ても自分でやれない。
　鎮守府では基本的にそれを自分でやることの方が少ないので、何も問題なく過ごせていたが、この施設ではそうはいかない。不器用だろうがなんだろうが、関係なしに、動いてもらう。
「うぐぐ……アンタねぇ……叢雲という個体がそういうものなんだから仕方ないじゃないの！　私だって好きで不器用に生まれたわけじゃないわ！」
「大丈夫です。それも姉さんの持ち味で可愛いところじゃないですか。ギャップ萌えってヤツですよね」
「何処でそんな言葉覚えたわけ!?　わ、私の威厳が……」
「威厳なんて、この施設では不要なモノですよ。みんなが対等ですし、全部曝け出すことになるんですから」
　薄雲は終始笑顔。姉と一緒にこうやって話が出来ることが相当楽しいのか、発作の予兆なんて一切無く、叢雲弄りまでするレベルになっていた。
　一方叢雲も、薄雲にいろいろと暴露されつつも怒りの炎が燃え上がってはいない。薄雲が特別というのもあるが、やはりこの施設の者達にはしっかりと心を許しているため、こんな状況でも恥ずかしがるだけで止まっている。
「完全無欠の存在なんて無いわ。料理はＲｉｃｈｅｌｉｅｕとＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅが教えてあげるわよ。一流のＣｕｉｓｉｎｅｒ（料理人）に仕立ててあげるわ」

「俺達は農作業な。漁は誰でも教えられるだろ。ほら、持ってる槍で大物突いてきてくれよ。適材適所っつってな」
恥ずかしげに頭を抱える叢雲に対して、慰めるように声をかけていく仲間達。それもまた楽しそうであり、新たな仲間を迎え入れているのがよくわかった。
「……まぁ、世話になるんだから私もやれることはやるわよ。でも、わかってると思うけど最初は上手く行かないんだから、文句言うんじゃないわよ!?」
「誰だって最初は初心者よぉ。大丈夫、ゆっくり成長していけばいいんだもの。出来るようになるまで、何度もやっていけばいいわぁ」
「ええ。ここでは時間は腐るほどあるんだから、心配しなくていいわ。アタシ達もいろいろサポートしてあげるから安心なさい」

改めて叢雲は施設の一員として受け入れられた。最初は慣れるまでに時間がかかるだろうが、ここにいれば嫌でも成長出来る。
戦いから離れた楽園で、新たな生を知ることになるだろう。怒りの炎は鎮まらずとも、楽しく生きることは可能だ。

それは恥で無く

叢雲が自分を取り戻したのは、午後でももう夕方に近いくらいの時間。自己紹介を終えた時点でそのまま夕食の準備へと移行された。今回は叢雲の歓迎会ということで、春雨の時と同じように少し豪勢な食事となる。

流石に飛行場姫が大物を捌くということは無かったが、今回はリシュリューとコマンダン・テストが仕入れてきた肉があるため、そちらを提供するとのこと。この施設ではなかなか食べられないレアな食材。歓迎会ということで大盤振る舞いである。

時間も時間なので、もう全員がダイニングに集まった状態で準備が始まった。料理はプロ級の腕前を持つリシュリューとコマンダン・テスト、そして飛行場姫のトップ3が提供することになる。

歓迎される側の叢雲だが、薄雲の隣で食事を待つことに。怒りの炎は大分抑え込まれているようだが、やはり何処か苛立ちのようなものが見え隠れしている。

「……まともなご飯食べるの初めてかも」

「そんなに酷い環境だったんですか？」

「酷いなんてモノじゃないわよ。私みたいな捨てられる艦なんて、最後の晩餐すら栄養剤みたいなものだけで済まされたもの。捨てるヤツに資源どころか食糧だって渡したくなかったんでしょうね」

思い返すだけで燻っていた怒りの炎が燃え上がる感覚を覚え、明らかに不愉快そうな表情を見せた。苛立ちを一切隠さないのが今の叢雲である。

ブラック鎮守府で生まれ、すぐに捨て艦として扱われたため、鎮守府での生活にもいい思い出が全く無い。それは食生活にも現れていたようで、まともな食事すら経験が無いようである。

それもあってか、叢雲は食い意地が張っているようでもあった。元々の性質からしてそれのようだが、この個体の叢雲は、艦娘時代のそれもあって輪をかけて食い意地が張っている様子。

「貴女、本当に苦労していたのね。なら、量も多めにしておいてあげ

る」
　その小言が聞こえたリシュリューは、叢雲のことを不憫に思ったか、叢雲に出す肉の量をそっと増やしていた。正式にこの施設の仲間になったのだから、食事というカタチでも幸せになってもらいたいという配慮である。
「好き嫌いも無さそうだし、出せそうなモノ全部出してあげるわ。美味しいものを食べれば気分も良くなるでしょ」
「腕によりをかけて、作りますね。私達の料理で、La satisfaction（満足）、してください」
　同情も多少は交じってしまっているものの、仲間を思いやる気持ちはみんな同じ。叢雲にはまず食事でガツッと幸福感を味わってもらいたいと考え、3人は全身全霊で用意した。
　結果、叢雲はこの食事で想定以上の満足感を与えられ、怒りが溢れているとは到底思えないくらいの惚けた表情を晒すこととなった。やはり、心を癒すのはまず美味しい食事からだったということだ。

　叢雲としてでは初めての夜になるのだが、その前に風呂へ。槍持ちの時からそうだったが、便乗は薄雲の他にも春雨とジェーナス。
「はぁ……なんだかここだと醜態を晒し続けている気がするわ」
　湯船に浸かり、しみじみと呟く叢雲。槍持ちの時は仕方ないと諦めがつくが、叢雲としての意思をしっかりと持った後に早速やらかしていることを後悔しているようだった。
　叢雲も心が壊れた仲間達と同様に、羞恥心が半壊している。しかし、叢雲としてのプライドも持ち合わせているために、無様な姿を見せることは屈辱と感じているところはある。スタイルを見せたり、なんなら裸を見られる程度では狼狽えないのだが、後指を指されそうな行為をすることは嫌うのである。
「美味しいものを食べて美味しいって顔することに何か問題あるかしら。誰も何も言わないでしょ」
「そうかもしれないけれど、私がちょっと引っかかるのよ」

ジェーナスは心の底から疑問に思っているようだが、叢雲はピシャッと反論する。
感性は人それぞれ。自分がそうは思わないかもしれないが、他人はそれを気にするタイプだったりするので、そんなものかとジェーナスも話題を引っ張らない。
「でも、あの時はいろいろ忘れて楽しめたんじゃないかな」
今度は春雨からの言葉。これに対しては反論出来なかった。
あの夕食が楽しかったのは紛れもない事実。食べたこともないような美味しい食事と、仲間達に囲まれた温かい空気。ブラック鎮守府ではカケラも感じられなかった幸福。それに包まれることが楽しかった。
言われてみれば、全てに対して怒りを感じていたはずなのに、あの時だけはそれも薄れていた。自分の醜態には怒りを覚えたものの、それだけ。
「……正直言えば、確かにそうなのよね。今はまた腹が立ってきてるけど、あの時だけは……なんだか温かかった」
怒りを振りまく者かもしれないが、だからといって素直な言葉が出せないわけではない。むしろ、誰よりも真っ直ぐに生きていると言ってもいいくらいだ。
嘘をついたら自分に腹を立てることになるだろうから、最低限、自分をこれ以上嫌いにならないようにするために、真実しか口から出なくなっている。叢雲は、そういう本能が目覚めていると考えればいい。
「それ、すごくわかる。ここにいると、あったかいよね。壊れた心に沁み込んでくるような、癒される感じしないかな」
「ハルサメの言う通りね。ここでみんなといると、とっても穏やかになるもの！」
春雨の言葉にジェーナスも賛同。どれだけ辛い過去があっても、ここでは詮索もされないどころか一切触れられない。むしろそれを忘れさせようとする程に楽しい毎日を提供する。
ここは辛い過去を忘れて、新しい自分を受け入れ、戦いから離れた

幸せな日々を過ごすための施設だ。壊れた心を穏やかにして、毎日を楽しく生きることが出来るのだ。
それは怒りに身を焦がされている叢雲も例外ではない。その痛みを極限にまで減らし、仲間達との共存により怒りを忘れさせる。温かい雰囲気により、苛立ちを鎮静化させていた。
怒りが溢れた叢雲でもこの空間を温かいと思えるくらいなのだから、施設の癒し効果は絶大だろう。
「居心地がいいと思うんだけど、どうかな」
「……そうね。妹(薄雲)もいるし、悪い気分ではないわ。アンタ達に対して、そこまでイライラは感じないもの。私の本能だから、誰に対しても苛立ちを感じるのは仕方ないとしても、ね」
一番身近であり、親身に面倒を見てくれた薄雲にさえ、言いようのない苛立ちを感じてしまっているのだから、これはもう叢雲の根幹となってしまっている。怒りによって今の叢雲が構築されているようなもの。
「それに、なんだかんだアンタ達も不遇な目に遭ってんでしょ。ここにこういうカタチでいるんだから」
「まぁ……そうですね。でも姉さん、詮索は無しですよ」
「わかってるわよそんなこと。イライラしても、他人にそれを押し付けるようなことはしないわ。私はそんな野暮な艦娘(おんな)じゃないの」
そこは艦娘叢雲としての思考が生きていることの証明。真面目で誠実な性質をそのまま残しているため、仲間達の嫌がるようなことはしない。むしろ、そんなことをしてしまったら最も嫌っている人間達と同類になってしまう。そう自分を戒めている。
「でも、我慢出来なかったら言ってください。スポーツでも模擬戦でも、なんでもお付き合いします。身体を動かせばストレス発散出来ますよね」
「……そうね。運動でも何でもさせてもらうわ。ここ、土地はかなりあるみたいだし」
「はい。仲間を頼っていいんですよ。それは何の恥でも無いですから」

春雨もジェーナスもニコニコしながら叢雲に協力すると宣言する。みんなが叢雲のために動いてくれている。それを実感して、少し恥ずかしそうに湯船に沈んでいく。表情が崩れそうになったらしく、それを見せるのは嫌だと感じたようだ。
「寝るときもみんな一緒だから、叢雲ちゃんもね」
「はぁ？　なんでアンタ達と」
「私も春雨ちゃんも、独りでいられないからです。私は姉さんと一緒に寝たいんですけど、ダメですか？」
薄雲のお願いに若干たじろいだものの、この言葉には逆らえないと感じた。そもそも槍持ちの時から添い寝は基本だったし、思考があやふやでも自然と落ち着いた感覚だったと覚えている。
それに、薄雲のためになるというのなら、やぶさかではない。なんだかんだ、妹という存在は心の支えになっている。なら、姉としてその思いは無下にしたくはなかった。
「わかった、わかったわよ。一緒に寝ればいいんでしょ」
「はい、お願いします。発作を起こしてしまう可能性はありますが、その時はよろしくお願いしますね」
「はいはい、出来ることはしてあげるわ。春雨とジェーナスも、それでいいでしょ」
「Ｏｋａｙ！」
小さく溜息をついたものの、その表情は特に嫌がったようなものではなかった。

その頃、姉妹姫は戦艦棲姫も交えて端末から鎮守府へと連絡を取っていた。槍持ちが叢雲へと戻ったことを、いち早く連絡する必要があると考えたからである。
「ごめんなさいねぇ、変な時間に」
『いや、問題ない。そちらからかけてくるくらいだ。余程のことが起きたのだろう』
「ええ。槍持ちちゃんが、叢雲ちゃんになったわぁ」

画面の向こう側の提督が目を見開いて驚いていた。保護してまだ3日ほど。こんなに早くに艦娘としての意思を取り戻すとは思っていなかったらしい。

しかし、それは素直に祝福出来ることだ。心が壊れ、処置すら出来なかった深海棲艦が、事後処理によって艦娘としての心を取り戻したという実績が出来たのは、今後の戦いを大きく変える一手になる。

明確にそれが黒い繭により深海棲艦化した元艦娘だとわかったのなら、撃破ではなく鹵獲を目的にする価値が出来たということだ。無論、確定で事後処理がうまくいくとは限らないのだが。

『よかった。だが、その顔を見る限り、まだまだ問題は山積みということかい』

「ええ。叢雲ちゃん、やっぱり鎮守府や艦娘のことが大嫌いみたいなの。ここでなら伸び伸びと暮らせそうなんだけれどねぇ」

そもそものきっかけが、この通信を耳にしたことであることは、提督も理解している。海風達と春雨が話をしている最中に発作を起こした時、執務室でその会話が執り行われていたのだから。

「まだあの子には話していないのだけれど、貴方達との和睦を良しとしない可能性もあるわぁ。怒りが溢れ出してるだけあって、常にイライラしている感じなのよぉ。私達にはまだ穏やかなんだけれど、貴方達の声を聞いたら……」

『爆発してしまいかねない、ということだね。同類として見なされて』

「そういうことねぇ。私達は貴方がそういうのではないことくらい理解しているわぁ。艦娘のことを大切にして、平和的に解決しようと考えていることくらい、この端末越しでもわかるんだものぉ」

しかし、それを叢雲が理解出来るかと言われたら話が変わる。いくらこの提督が施設に利益を齎す者だとしても、それが提督であるというだけで叢雲にとっては怒りを全開に解き放つ対象としてもおかしくはない。

艦娘もそうだ。海風を筆頭に、施設に理解を示して交流を望む者であっても、叢雲の中では自分を裏切った存在に他ならない。別個体だろうが関係なかった。

「だから、こちらに来れないのは継続ということでいいかしらぁ」
『ああ、それは仕方ないことだ。叢雲のことを優先してもらえればいい』
「ありがとう提督くん。あと……そちらからの連絡もうまく取れない可能性があることを知っておいてほしいわぁ」
　端末が鳴り響いた瞬間に、叢雲が壊れる可能性がある。向こう側に鎮守府並びに提督、艦娘がいることがわかっているのだから、怒りが制御出来ない程に燃え上がっても誰も文句は言えない。
　最悪、端末を破壊し、鎮守府を突き止め、わざわざ襲撃に行ってしまうことまで考えられる。それだけは起こしてはいけない。
『了解した。それはこちらでも海風に話しておくことにする』
「ごめんなさいねぇ」
『いや、君が謝ることではないよ。元はと言えば人間の不始末だ。艦娘も深海棲艦も悪くない。全て人間の問題だ』
　誠実な態度にますます好感度を上げていく提督。本人は知ってか知らずか、深海棲艦側からの信用はうなぎ上り。
『叢雲をあした人間は、こちらで正しく罰しているから安心してほしい。それに、同じような輩がいないかどうかを徹底的に調査している。二度と同じことは起こしてはいけないからね』
「ええ、よろしくお願いするわぁ。怒りが溢れた同胞（はらから）は、基本的には手が付けられないもの。敵を作って困るのは貴方達自身であることを理解してくれると嬉しいわぁ」
『無論だ。艦娘はいわば、我々の同胞（はらから）だ。尊重こそすれ、蔑ろにする理由などどこにもない。人間と同等の権利を持つべきだとすら思う。今回の事件をきっかけに、こちらも一層気を引き締めようと思う』

　槍持ちが叢雲へと至ったことは、これで鎮守府側にも伝わった。その事実をどう扱うかは、人間次第。

頼れる先輩

鎮守府では、槍持ちが叢雲として覚醒し、新たな元艦娘として施設の一員になったことが知らされた。あの時に槍持ちと戦った金剛を始めとした艦娘達は、こてんぱんにやられていることで少し複雑な表情をしたものの、無事に艦娘としての思考を取り戻したことは素直に喜んだ。

感情が溢れた結果、処置も間に合わずに侵略者となり果ててしまっても、また別の処置を施すことによって元に戻る可能性があるということに他ならない。万が一の時の対処法が確立されたことは、いざという時の希望となる。

「で、だ。海風、あの施設への連絡は、少し頻度を落とすこととなった」

海風のメンタルケアのための手段として使っていた、施設の深海棲艦――主に春雨――との対話が、叢雲の心を揺さぶり再び壊してしまいかねない。

勿論、完全に止めてくれという話ではないので、タイミングを見てまた連絡を取ればいいのだが、頻繁な連絡をするとなると、施設でまた何かしらの混乱が発生する可能性がある。

「なるほど……わかりました。姉さんと話が出来なくなるのは悲しいですけど、今生の別れではないですし、あちらの施設も忙しいことは私もわかっているつもりです」

「すまない。あちらからも謝罪を受けたよ」

「いえ、私のワガママで施設を混乱させるわけにはいきません。せっかく和睦協定が結べているんですから、そのままを維持出来るようにしたいと思います」

口ではこう言ったものの、内心、春雨との会話のチャンスを減らされることに対して、思うところはあった。金剛に怪我を負わせ、自分達も実際に殺意を持って襲われ、それでも施設に保護されて今は楽しく生きるために毎日を過ごしている。それを邪魔しないようにするために、我慢を強いられることになった。そう考えてしまった。

槍持ちがあの海域に現れなければ、今日の通話のぶつ切りも無かっ

ただろうし、翌日以降もまた春雨と話せる機会が頻繁に手に入っていただろう。
海風の中に、嫌な感情が渦巻いていた。それを自覚出来てしまったために、余計に落ち込むことになる。
本来なら艦娘としての思考能力を取り戻したことを喜ぶべきだと思っていても、海風が心に秘めている春雨への想いを邪魔する者としての認識が出来てしまったため、考えれば考えるほどドツボにハマっていく。
「また姉さんと話せるようになったら教えてください」
「ああ、そこまで長くなることは無いとは思う。すまないが、今は耐えてもらえるだろうか」
「大丈夫ですよ。私は鎮守府の意思に従いますから」
完全な作り笑顔だったと海風も自覚している。提督も察しているだろう。少し困った顔をしていた。
これ以上話しているとボロを出してしまいそうと、海風は一礼してその場から離れた。
考えてはいけないことばかりが頭を過ぎる。艦娘として恥じるべき考え方だと思っても、それを振り払うことが出来ない。
「おっとっと……Ｈｅｙ，海風。そんなに急いでどうしたデース？」
そんなことを考えながら前も見ずに歩いていたせいで、たまたま金剛とぶつかってしまった。体格差のせいで海風はその場で倒れ伏してしまう。
金剛の隣には比叡もおり、海風が倒れてしまったことを心配するような表情。第三者から見れば、かなり強めにぶつかったように見えたらしい。
「す、すみません。少し……考え事をしていて」
「そうデスか。私達で良ければ、相談くらいには乗りマスよ？」
「だ、大丈夫、ですので」
ニコッと笑みを浮かべて、海風が立ち上がるのを手伝うために手を差し出す金剛。その手を掴んで立ち上がると、先程提督にしたように一礼をして立ち去ろうとする。

だが、ここで金剛が何かを察したようで、すれ違いざまにその肩を掴んだ。割と力が強く、体勢を崩しかける。
「っとと……金剛さん、まだ何か」
「海風、今から時間ありマスか？」
時間としては夕食後。あとは身体を休めるだけであるため、やることといえば風呂のみ。そこに金剛からの突然のお誘いが入った。
「大丈夫といえば大丈夫ですが……」
「それなら、今から私達の部屋に来てくだサーイ。よく眠れるようになる美味しい紅茶がありマース。比叡、すぐに準備は出来ますネ？」
「勿論です！　この比叡、気合い、入れて、淹れます！」
「いつも通りでお願いネ」
金剛にお願いをされたため、比叡がすぐに部屋へと戻った。海風はまだちゃんとした返事をしていないのだが、本人の意思に関係なく話が進んでいくため、呆気に取られていた。
「え、えっと……」
「海風、結構考えていること顔に出やすい方じゃないデスか？」
笑顔を崩さない金剛だが、何もかもお見通しという目で海風を見ていた。
艦娘として間違った感情を持ってしまったことを見透かされているような気分になり、徐々に海風も心拍数が上がっていく。
「Ｒｅｌａｘしましょうネ。さっきも言ったデスが、相談には乗りマス。話しづらいことかもしれませンけど、大丈夫。むしろ口に出した方がスッキリしマスよ」
勿論、最終的には海風の意思で決めればいいと忠告した。先に比叡に部屋に戻らせてお茶の用意をさせているのだから、拒否権なんて殆ど無いようなものなのだが。
少し悩んだ海風だが、最終的には金剛の優しさに折れた。金剛の言う通り、口に出した方がこのモヤモヤが晴れるかもしれない。
自分に生まれた黒い感情を他者に知られるのは少し抵抗があったが、ずっと秘め続けていたら、山風辺りに何を言われるかわからない。そして何より、春雨を心配させることも避けたかった。ならば、恥な

ど捨てて相談に乗ってもらった方がいいだろう。

この鎮守府では、全員が1部屋ずつ、全く同じ部屋が貰えるのだが、金剛の部屋は海風の部屋と比べると少し違って見えた。物の配置だけでこうも変わるかと感心しつつ、こちらへドウゾと促され、お客様席へと着席する。すると、先んじて部屋で準備していた比叡が、ティーカップとソーサー、そして淹れたての紅茶をキビキビと用意した。

こうやって鎮守府の仲間達を招いてティータイムをするのは一度や二度では無いらしく、その都度、今のように比叡が準備し金剛が接客するというのを繰り返していたらしい。

「それじゃあ、洗いざらい話してみましょうカ」

「お姉さま、それだと尋問です」

「Ｏｈ，　ｓｏｒｒｙ．　私は海風を責めてるわけじゃありませーン。何か悩み事があるなら、私が全部聞いてあげるって話デース」

ここまで来て、お茶を飲んで帰るということはもう難しい。少なくともそんな空気ではないし、せっかくの金剛の好意を無駄にすることになってしまう。

意を決して、海風は今の自分の心の内を話した。定期的に春雨と話が出来るということを心の支えにし、事実それによって体調も良くなっていたのが、先日こちらを襲ってきた深海棲艦にその機会を奪われたことで、苛立ちが強くなってしまったことを。

ポツポツと話し始めたが、少しずつ語気が荒くなっていく。一度吐き出し始めると止まらなくなるようで、思いの丈を金剛にぶつけていった。

金剛はそれを笑顔で聞き続ける。途中からは比叡も相席してその話を聞く。時々うんうんと頷き、海風の感情に同意するような仕草をするため、金剛もそれには苦笑していた。

「わかる！　わかるなぁ！　私もそういうこと考えるときあるもんなぁ！」

心底わかると言わんばかりに身を乗り出す。その勢いに海風も気圧されそうになるものの、金剛が比叡の首根っこを掴んで席に戻したことで事なきを得る。
「お姉さまが他の子と楽しんでるところを見てると、私もたまーに心がキューッてなる時があるからね。海風の気持ち、すごくわかるよ。それだけ春雨のことが大好きってことだね」
比叡が言っていることは別に恋愛とかそういうのではなく、単に金剛のことを心から尊敬し、心酔しているだけに過ぎないのだが、今の海風にとってはいろいろな意味に捉えられる言葉である。
それ故に、言葉にされた瞬間から海風の表情には恥ずかしさが滲み出てきた。勿論、金剛はそんな表情の変化を見逃さない。
「海風、貴女の考えてることは、何の問題も無いことデスよ」
「金剛さん……？」
より優しい笑みを浮かべて、海風に語りかける金剛。
「好きなヒトを盗られたと思ってしまったんデスね。そんなの、私達みたいに人間と同じように考えることが出来るのなら普通なことデス。ただ、それであちらの叢雲を沈めてやろうとか、そういうことは考えてないんデスよネ？」
「も、勿論です！　いくら深海棲艦だからと言っても、元々は艦娘ですし、それに……酷い鎮守府のせいで心が壊されているのも理解しています。同情も出来ますし、艦娘のことを嫌ってしまうのもわかります。そんなヒトを沈めるだなんて、それこそ艦娘としてやっちゃいけないことです」
「そこまでわかっているのなら、充分デスネ。でも、それで海風が我慢し続けるのはあんまりよろしくないデス。そのうち本当にＥｘｐｌｏｓｉｏｎ（爆発）しちゃうかもデスよ」
ある程度は発散しないと、感情が篭りに篭って爆発してしまうと、金剛は心配していた。事実、海風の今までの体調不良も、感情の溜め込み過ぎなのではないかと考えている。
海風は艦娘の中ではかなり真面目な性格だ。駆逐隊の隊長として妹達の面倒を見つつ、今は亡き姉達に追いつけるように努力も怠らな

い。気の休まる時があるのかもわからないような状態だ。
それを春雨という尊敬出来る存在で癒されていたものが、それすら断たれてしまったことで、癒されることもなく悶々とし続けて、結果的に体調に異常をきたしていたわけだ。
「海風がその気持ちをあまり周りに知られたくないというのなら、私達だけに話してくだサイ。解決させることは出来なくても、話をするだけでも大分楽になると思いマス。今もそうデショ？」
今の海風はある程度スッキリした顔をしていた。心の内を口に出すことが出来たことで、溜め込んでいた鬱憤が吐き出せた。
身体が楽になったというわけではないにしろ、心が楽になったのだから、その分違う考え方も出来るというもの。
「私も相談に乗るよ。海風はどちらかといえば私側だもんね。千代田とも話したりするから、機会があったらまたお茶会しよっか」
比叡も海風に同じ匂いを感じたか、親身になってくれると約束してくれた。金剛のみならず比叡も心の内を聞いてくれて、しかも同意すらしてくれたのだ。妹達とは別のベクトルで心が許せる相手となっている。
実際は、比叡が金剛に対して抱いている感情は、海風が春雨に対して抱いている感情とは少し違うのだが、方向性としては似たようなもの。そのおかげで、海風の気持ちもちゃんとわかってくれている。
「……ありがとうございます。自分のダメなところがよくわかりました。１人で溜め込んじゃダメですね」
今回は悩みが出来てすぐに金剛達に話せたからこれだけで済んだが、これを溜め込んでいたら、また妹達を心配させるほどに憔悴していただろう。冷静に物事が見られるようになって、そこに気付けたのは大きかった。
「Ｙｅｓ．　せっかくこれだけ仲間がいるんデスから、頼れる時にはさんざん頼ればいいんデスよ。誰も迷惑には思ってないデスし、むしろ頼られて嬉しいと思ってる子もいるデス。私みたいにネ」
「そうそう。私達は海風の味方だから。いくらでも聞くよ。代わりに、私達の話も聞いてくれると嬉しいかな」

にこやかな金剛と比叡に気持ちを認められ、少し泣きそうになってしまっていた。比叡はわたわたし始めるが、金剛は慣れた仕草で海風をあやした。泣いてもいいよと言わんばかりに抱きしめて、頭をポンポンと撫でる。

「うわぁ、お姉さまのハグ！　海風いいなぁ！」

「海風、比叡ほど感情を表に出せとは言わないデスが、この場所では好きにしてくれて構わないからネ」

「……はい、ありがとうございます。助かります」

泣きじゃくるようなことはしなかったものの、金剛によって落ち着きを取り戻した海風は、本当にスッキリした表情をしていた。妹達にも見せられない表情を心許せる存在に見せたことで、焦燥感は払拭された。

また春雨に会えないことで鬱憤が溜まってきたら、金剛と比叡に頼ることになる。それで体調を崩さずに毎日を過ごせるのなら、それに越したことは無い。

海風はまたここから、心を強くしていく。

戦いから離れて

叢雲が施設の一員となった翌日。ベッドルームではいつもの３人組に叢雲を加えた４人組として朝を迎えた。一員となった初めての夜は、中間棲姫と飛行場姫が必ず添い寝をするというルールで行なわれてきたのだが、人数も増えてきたというのと、春雨と薄雲がかなり安定してきたということで、この晩はまず４人だけで過ごさせたようである。

戦艦棲姫も今回からは叢雲から離れることになった。槍持ちの時は何をするか不安だった部分もあるが、今ならある程度の理性は利く。そのため、姉妹姫と同様に別室を借りての就寝。

叢雲としては戦艦棲姫の目が無いところで一晩を過ごすのは初めてのことだったが、薄雲が傍にいるために不安は無かった。

事実、４人が４人、気持ちよく朝を迎えることが出来ている。全員が崩れた時に一緒に崩れるのがジェーナスであり、叢雲は常に崩れているようなものであるため、今回は総崩れは起きなかったようだ。

「姉さん、朝ですよ」

３人は毎日同じ時間に起きているため、外が白んで部屋が明るくなってきたときには目を覚ましていたが、叢雲はまだそういう生活には慣れていないのか、薄雲の声で目を覚ますことになった。

「ん、んん……もう朝……？」

「グッスリ眠っていましたもんね。緊張感が抜けましたか？」

「……そうかもしれないわね……」

寝ぼけ眼で身体を起こす。今までは三者三様の寝間着で眠っていたが、叢雲は薄雲と揃いの作務衣のような和服。薄雲からのお願いで叢雲は渋々着ることになったそれだが、いざ着てみればなかなかイイとすぐに受け入れていた。

怒りの炎は常に燻っているため、妹の懇願にもまずは反発したものの、結局は折れた辺り、叢雲としての考え方もしっかり生きている。

「今日から施設のお仕事もすることになるからね。働かざる者食うべからず、だからね」

「わかってるわよ。再三言われたんだから」
春雨の言葉に若干嫌気を見せつつも、小さく溜息をついてそれを受け入れる。苛立ちはあるとしても、言っていることは全て正論。ここに置いてもらうのだから、その分何かしらの仕事をするのは当たり前のこと。
仕事をしたくないから施設を出ていくというのは、叢雲としてはプライドが許さなかった。それは明らかに逃げだし、外に出た方が嫌な気分になるというのもある。敵ばかりの場所に出ていくくらいなら、ここで生きていくために艦娘からかけ離れた仕事をする方がマシと判断した。
「ムラクモは、農作業と釣り、どっちがいいかしら」
ベッドから出て準備をしているジェーナスに聞かれ、小さく悩む。釣りは槍持ちの時に経験があるが、農作業は全くわからない未知の作業。そして、釣り以上に艦娘や深海棲艦に縁がない作業でもある。
興味が無いわけではないが、やりたいかと言われるとそうでもない。しかし、通らなければいけない道なような感じもするので迷う。
「もう少し考えるわ。何やらされるかは知らないけど、あんまりイライラさせないでほしいわね」
「どっちも忍耐力とか使う作業だから何とも言えないかなぁ。強いて言うなら、農作業の方が体力使うかも」
今日は農作業の予定である春雨が、叢雲に軽く説明。土弄りもやってみれば楽しいとか、一から育てたモノを食べる時が楽しみになるとか、ポジティブな感想ばかりを伝えていく。
しかし、話されても簡単に理解出来ないようで、叢雲のイライラが少しだけ上昇。
「まぁやってみてから考えればいいと思うよ。釣りはやったことがあるから、今日は農作業にするとか、一応そのどちらでも無い作業もあるはずだけど」
「あとは何があるのよ」
「施設の掃除とか、料理の手伝いとかですね。私としては、どれも似たようなモノだと思います」

明確に、叢雲は嫌そうな顔をした。薄雲により全員の前で不器用であることを暴露されているため、その表情の理由を春雨もジェーナスも察して苦笑。
「姉さんには……多分外で作業する方が適しているんじゃないかなって」
「ああそうね。私は不器用だものね」
「食器とか壊してしまうと、補充が難しいんですよ。なので、そういうことをなるべく避けるという意味では、姉さんに向いているのは、さっきジェーナスちゃんが言った2つの内のどちらかだと思います」
結果、まだやったことがないという理由で農作業に行くことに決める。その時は春雨とペアになり、薄雲に託されることになるだろう。
今からが叢雲の本当の始まりとなる。昨日までとは違う、これからずっと続けていく平和な日常。その初日を、明るく楽しく始めていきたいところである。

朝食後、朝礼のように中間棲姫が役割分担をしていくが、そこで春雨達の進言により、叢雲は農作業チームに割り当てられる。朝起きたときからそれをやっていこうと決めていたのだと伝えたところ、中間棲姫が大喜びしてその案を採用した。
「で、こうなるわけね……」
施設の裏側、畑の前。いつもの農作業メンバーは早速ジャージに服を替える。叢雲も流石に制服のままでやるとは思ってなかったが、中間棲姫までがガッチガチの作業スタイルになったのには驚きを隠せなかった。
作業をするなら着替えろと言わんばかりの視線を受け、小さく溜息をついた後に叢雲もジャージ姿に。あの姿(ボディスーツ)でこんな作業なんてやっていられないし、まず間違いなく全員が止める。汚れもそうだが、怪我をしやすいのは見てわかること。
「ほい、叢雲。今日は雑草取りだから、こいつで掻き回してくれよ」
そう言いながら竹が叢雲に渡したのは、三本爪の鍬。耕すわけでは

なく、耕されている場所の周囲を穿り返すことで雑草を根こそぎ処理するのが目的。自分の手でやっていくのもいいのだが、使える道具をガンガン使って効率化していくことも大事。
「雑草も引っこ抜いた後そのままにしておけば肥料になるのよぉ。だからこれも、とっても大事な作業なのぉ」
「ふぅん……」
「でも、作物を傷付けるのだけはダメよぉ。そこはちゃんと指示するから、叢雲ちゃんはそこのラインをお願いねぇ」
　既に何度も経験のある春雨や松竹姉妹は、ザックザックと穿り返しては、そこをまた均して整える。叢雲は当然初めてであるため、中間棲姫がしっかりとサポートして1つ1つを丁寧に教えていた。
　どうしても他の者よりは作業が遅くなってしまうが、初心者なら当たり前。誰も急かすようなことはしないし、むしろゆっくりと叢雲に合わせて作業を進める程だ。
「……意外と難しいわね……」
「そうねぇ。でも、コツを掴めば誰にだって出来ることよぉ。いくら叢雲ちゃんが不器用だと言っても、こういう柄物を使うのは苦手ではないんじゃないかしらぁ」
　中間棲姫の言う通り、叢雲は槍を扱うだけあって、鍬の扱いが割と上手く出来ていた。そのおかげで、不器用ながらも言われたことをキチンとこなしていく。丁寧に教えられれば、不器用ながらも少しずつは上達するものである。
　最初は抵抗があったものの、言われたことがちゃんと出来ているというのは、叢雲にも好感触だったようで、最初は上手く出来ない自分に対しての苛立ちがどうしても湧き上がっていたものの、徐々に緩和されていく。
「ふふ、上手よぉ。叢雲ちゃん、やっぱりこういうものを使った作業が得意なのねぇ」
「そ、そうかしら」
　そして中間棲姫は教え上手である。相手のことを一切否定せず、失敗しても文句を言わない。とにかく褒めて伸ばす達人である。

褒められて気分が悪くなる者など早々いない。叢雲も怒りは燻っているが、褒められることに対して否定的ではない。これで自尊心を傷付けられたと考えるのなら重傷だが、幸いにも艦娘叢雲としての性質がそうでは無かったことで、中間棲姫との相性は抜群だった。プライドは高くとも、良く言ってもらえたことは素直に受け入れることは出来る。

「いや、マジで上手いな。さんざん不器用って聞いてたから余程だと思ってたんだが」

「私、最初からそこまで出来なかったと思うわ。叢雲さん、農作業の才能あるんじゃない？」

「それ艦娘や深海棲艦に必要な才能⁉」

松竹姉妹も中間棲姫と同じように叢雲をベタ褒め。褒めれば褒めるほど気分は良くなり、キッチリと仕事をこなしていくようになる。

これで調子に乗っていたらまた面倒くさいことになっていたものの、今度は深海棲艦叢雲としての性質がうまく働いていた。どれだけ褒められても自分に対して怒りがある分、自制が利く。

「でも、こういう作業をしてると、思ったより苛立ちは抑えられるわ。そういうところから離れられるからかしらね……」

しみじみと話す叢雲。戦いの中で怒りと憎しみを滾らせたのがきっかけであるため、そこから遠く離れた今の生活は、叢雲を落ち着かせるのに一役買っているようだ。

戦わないのなら落ち着ける。逆に、戦いを想起させることに対しては怒りが湧き上がる可能性は非常に高い。

槍持ちの時は、釣りのような生死と無関係な競い合いで意思を覚醒させようとしていたが、それが終わった今では逆に、戦いから離れた方が叢雲のためになりそうである。

そういう意味では、この施設は叢雲にとっても最高の居場所になり得る。そもそも主である姉妹姫が戦いを好まず、鎮守府との和睦を結んだとしても関わり合わないとしているくらいなのだから。

ある程度の作業が終わり、軽めの休憩。用意された水分を飲みながら一息つく。
「あっつ……いい天気すぎるのも考えものね……」
懸命に作業をしていたため、汗ばんでいる叢雲。ジャージも暑いようで、上をはだけ、手を団扇のようにして涼をとる。その手には土が付き、農作業を堪能したことを表していた。
「ここ、あんまり雨が降らないみたいでね。だから、姉姫様がちゃんと毎日水をやってるんだ」
「へぇ……まぁ作物がカラカラに乾いたら台無しだものね」
持ってきたお茶を飲みながら、春雨は叢雲の隣に座る。こちらもジャージをはだけて、流れた汗を拭きながら。
日陰でも動いた後は暑い。松竹姉妹は何処に持っていたのか団扇で互いを扇ぎあっているくらい。
この施設は毎日が大体いい天気。雨が降らないとは言わないが、頻繁ではない。晴天が何日も続いてたまに一日雨が降り、そこからまた何日も晴れが続く。その割には生活がしやすい温度らしく、それもあって毎日が楽しく過ごせている。
これで陸のように梅雨があったりしたら、ただ生きているだけでも叢雲の苛立ちは普通より上がっていそうである。
「と言っても、私もまだここに来て2週間くらいなんだけど」
「そう、じゃあ結構新人なのね」
「そうだね。叢雲ちゃんは、私の初めての後輩になるかな」
「先輩風吹かせる気？」
「吹かせられるほど一人前じゃないよ。私もまだまだ勉強中。楽しいけどね」
叢雲の中のランクとして、一位が薄雲であることは不動なのだが、春雨もそこそこ上にいる。薄雲の友人であり、暴走したときに止めてくれた者。信用出来る者として、話しやすい相手でもあった。
若干喧嘩腰の話し方でも、春雨はまるで気にしていない素振り。叢雲の性質を理解しているし、そんなことで腹を立てる程小さくはない。

「……正直、戦いから離れられることが良いことかわからないのよ。苛立ちは抑えられるけれど、それが私にとって正しいことなのか」
叢雲がポツリと呟く。この農作業は確かに楽しめた。ただの雑草取りで、鍬を持って地面を穿り返しているだけでも、やったことが無いことだからというのもあり、妙に熱中出来た。
しかし、それが本当に自分に必要なことなのか。それがわからない。わからないからイライラする。この刻まれた本能には逆らえない。
だが、春雨はそれに対して実に簡単な答えを出した。
「なら正しいかどうか、ここでみんなと探していこうよ」
「……探す……ねぇ」
「正しいか正しくないかはやらないとわからないし、それが無駄だったとしても、やったことは後に残るからね。ほら、あそこの畝、私が植えた種なんだ。もう芽が出始めてるの」
春雨が指差す先。そこには、ポツポツと新芽が出始めた畝があった。僅か数日でも成長しているそれを見て、春雨はとても嬉しそうに笑みを浮かべる。
「自分がやってきたことが、文字通り実になるからね。あ、あれは実が出来るタイプの野菜じゃなかったっけ。根菜だし」
「そういうことじゃないでしょ。……でも、そうね。アンタの言う通りだわ。やらずに文句言うくらいなら、やって文句言った方が実になるわね」
「そうそう。だからさ、毎日を楽しもう。私達も一緒に楽しむからさ」
叢雲も小さく笑みを浮かべた。これからの毎日を楽しむ覚悟が出来たようだった。

そこからの作業も、叢雲は楽しく出来たと思われる。力の入り方が、最初とは違った。

施設の表側

昼食後はフリータイム。午前中を農作業に使った春雨と叢雲は、午前中を漁に使った薄雲とジェーナスと合流し、いつものようにまったりとした時間を過ごすことになる。これがこの施設の日常であり、午前中に施設のための仕事、午後からは休息。それを毎日続ける。

ダイニングに集まった４人は、ジェーナスが淹れた紅茶を飲みながらまったりしていた。しかし、叢雲だけは何処かそわそわしているような雰囲気。表情も険しい。

「ホント、何もしない時間があるなんて贅沢な話ね」

叢雲が溜息交じりに呟く。艦娘時代は捨て艦として扱われていたことで、休息の隙間もなく戦場に駆り出された挙句、何も出来ずに死ぬという不幸な目に遭ったわけだが、艦娘叢雲としての考え方でも休息というのは少し落ち着かないようである。

艦娘とは敵と戦うモノであり、戦いの中に生きるモノ。そういう認識を持っているからこそ、この何もしないという時間が勿体なく感じている。この叢雲は、どちらかと言えば艦娘を兵器として扱うタイプの鎮守府向きな人材であった。

「私達はそういうくびきから解き放たれたんだと思った方が気が楽ですよ姉さん。現に、もう艦娘では無いんですから」

「そこは割り切った方がいいわ。変に考えると発作起こすわよ」

薄雲とジェーナスが声を揃えて叢雲のその言葉に返す。自分はもう艦娘では無い別モノであると自覚し、思考はそのままだとしても考え方は変えた方がいいとアドバイスをした。

そもそも叢雲は鎮守府にも艦娘にも怒りを覚えているのだから、艦娘と同じ考え方というのは捨てた方がいい。それ自体が叢雲にとっては負担になる。

発作を起こすとジェーナスは言っていたが、それは自分でも経験があるから言ったことだ。

ジェーナスは艦娘の時とは全く違う生活を始めたことで、自己嫌悪に陥ってしまったことが何度もあった。本当にこれでいいのかとい

うところから、こんなだからあの時にと思考が飛躍し、最終的には自傷行為にまで発展しかけている。
　自分がそうなるならまだしも、仲間がそうなっているところは見たくない。故に、叢雲にはすぐに考えを改めるように伝えた。春雨にはそういう傾向が無かったため安心していたものの、実際はこういう考えに至る元艦娘はいないわけではない。例えばリシュリューとか。
「考え方を変えることは善処するわ。忌々しい艦娘の思考だなんて気分が悪いし。のんびり過ごせるように努力するわよ」
「努力とのんびりって、相反してるよね」
　春雨のツッコミに、確かにと納得してしまった。そして、４人で笑い合う。
　この３人と共に過ごすのは、叢雲としても心が落ち着くものであると認識出来るようになっていた。同じ駆逐艦であり、同じ元艦娘、槍持ちの時から介護もされ、度々話しかけてくれた仲間。それ故に、ある程度は心許せる相手と認識している。
「まぁ、ここにいれば私が特に嫌いなモノに触れることはないでしょ。ならある程度は落ち着けるわ。性質的に燻ったままなのは仕方ないけれど、燃え上がることはまず無いわね」
　これで少し黙ってしまった。叢雲の特に嫌いなモノと言ったら、それはもう鎮守府と艦娘に関わることしかない。
　このダイニングに置かれているタブレットが、鎮守府と関係しているところに繋がることは理解しているはずだ。そこから流れてきた鎮守府の音と艦娘の声がきっかけで、槍持ちは叢雲を取り戻したのだから。当時の記憶がぼんやりの可能性はあるものの、そんな重要な場面の記憶があやふやなことは少ない。
　しかし、それが春雨の元々の居場所であることや、この施設が鎮守府と和睦協定を結んでいることは伝えていない。それを知ったらどうなってしまうのだろうか。
「何よ。私、何かおかしなこと言ったかしら」
「あっ、い、いや、何でもない何でもない。叢雲ちゃんにも、もっと穏やかになってほしいなって」

春雨の反応に訝しげな視線を向ける叢雲。明らかにおかしな反応であるため、何か隠し事をしているのではないかと疑ってきている。
怒りに支配されている叢雲は、相手が仲間であろうと完全に信じきってはいない。心が落ち着くのと、心を通じ合わせるのは別事である。故に、少しでも疑問があれば途端に態度を悪くする。
「春雨、アンタ何か隠してるでしょ」
「そ、そんなこと、ナイヨー」
動揺が隠し切れていない。目を逸らし、冷や汗をかきつつ、何も話すことはないと素知らぬフリである。
当然叢雲の目を誤魔化すことは出来ない。疑いは苛立ちに変わり、苛立ちは自然と怒りに変わる。ただでさえその辺りへの自制が利きづらい叢雲には、その段階まで上っていくのはすぐだった。
そもそも春雨は隠し事が苦手な性格。こういう時に大きく動揺してしまうのは必然でもあった。
「春雨じゃなくてもいいわ。薄雲、ジェーナス、アンタ達も何か隠してるでしょ。春雨がこれなら、施設ぐるみね。私に何か言えないことがあるってわけ？」
表情も怒りに染まっていく。これも叢雲にとっては発作に近い。
艦娘叢雲ならば、ここでわざわざ詮索してまで聞き出そうとはしないだろう。心の中で気にする程度。話したくないのなら話さなくていいの精神。
しかし、今の叢雲にはそれが無理だった。自分に不利益がありそうと無意識に判断したか、ボルテージはすぐに上がってしまう。
「姉さん、落ち着いてください」
「落ち着いてなんていられないわよ。ああイライラする。隠し事とか何のためにするわけ？　もしかして、この施設も私を裏切ろうっていうの!?」
そんなわけがないのに、考えは悪い方へ悪い方へと飛躍していく。怒りからの被害妄想まで発生し出した。このままでは収拾がつかなくなる。
「……私のせいだ……ちゃんと説明出来てればこんなことにならな

かったのに……」
　しかもここで辛いことに、ジェーナスの自己嫌悪の念が高まってしまった。自分が叢雲に話していなかったからと自分を責めて、そんなことがないのにどんどん落ち込んでいく。
　瞳からは光が消え、叢雲の声すら聞こえなくなり、スカートを握りしめながら泣きそうな顔で俯いていた。このままでは自己嫌悪がさらに悪化して自傷行為に走るだろう。
　叢雲とジェーナス、どちらもまずいことになっている。かたや怒り狂い、かたやいつ死のうとしてもおかしくない精神状態。
　春雨も薄雲も、正直困り果てていた。鎮守府の話を叢雲にしていいのかがわからない。今までは秘匿としていたものの、いつかは話さなければならない時が来るだろう。しかし、それが今かはまだ判断が出来なかった。とはいえ、話さなければ叢雲は悪化する一方。
「怒鳴り声が聞こえたわよ」
　そこに顔を出したのが飛行場姫と戦艦棲姫。叢雲の怒声を聞きつけて、何事かとここまで来た。２人にとっては最高の援軍が来てくれた。
「ああもう、ジェーナス。こうなったのは誰のせいでも無いわ。大丈夫よ」
「……でも……でも……」
　飛行場姫は即座にジェーナスのケアに。以前に３人で総崩れした時もそうだったが、飛行場姫とジェーナスは相性がいい。自己嫌悪に対して、姐御肌の叱咤激励はよく効く。
「叢雲、どうしたの大きな声で」
「コイツらが私に隠し事してんのよ！　私に話せないことって何よ！　裏切ろうとしてるわけ!?」
「ああ、なるほど、そういうことね」
　戦艦棲姫は叢雲の方へ。叢雲としても、飛行場姫よりは心が許せる相手。今の春雨と薄雲では、ランクが高くても話は出来ない状況。ここは戦艦棲姫に任せるしかない。
「まぁ落ち着いて聞きなさい。薄雲達は、叢雲のことを思って隠して

いるの。聞いたら今以上に錯乱するだろうし、ボルテージも上がる可能性が高いから」
「はぁ？　何よそれ、私のことを信用していないってわけ!?」
「怒りが溢れてる子に対して、それを助長するようなこと言えると思ってるの？」
　叢雲が押し黙る。自分の感情の昂りのことを理解しているからこそ、施設の全員が叢雲に隠し続けている。しかし、それだけ重要なことが施設に存在しているという事を自分だけが知らないという事実にまた怒りが溢れ出す。
　自分でも相当面倒くさい性質だと思いつつも、叢雲はそれが止められなかった。何故なら、怒りが湧く自分に対しても怒りが湧くからである。無限ループでボルテージは一切下がる気配がない。
「どちらにしても腹が立つなら、真実を教えなさいよ」
　結果、どちらも気に入らないなら全て知っておくべきと判断した。知らないでキレ散らかすより、知って文句を言った方がまだマシ。
「妹姫、話しちゃっていいの？」
「あー……まぁいいわ。いずれ話すつもりだったし、早ければ早い方がいいわ。お姉にも後から伝えておく。春雨、いいわね？」
「……はい。覚悟はしています」
　この話に一番関わっているのは春雨。叢雲がこの真実を知ったことで、春雨に対してどんな感情を得るかは、話してみなければわからない。
「でも、私が話しても断片的だし、最初から知ってる妹姫が話してちょうだい」
「そうね。アンタも知ってることなんて途中からだものね。いいわ、叢雲。全部教えてあげる。その代わり、後悔しないように」
「わかってるわよ。早く教えなさいよ」
　自己嫌悪で塞いでいるジェーナスをあやしながら、飛行場姫は春雨がここに来てからのことを叢雲に話し始める。境遇までは聞いていないにしろ、ここで起きたことは全て丁寧に。
　話している間にジェーナスは泣き疲れて眠ってしまったものの、あ

る程度は真実を伝えることは出来た。
　叢雲は、聞けば聞くほど表情がおかしなことになっていた。この施設が人間どころか鎮守府や艦娘と和睦協定を結んでいることに対して、怒りを隠そうとはしなかった。しかし、話を全部聞くまではどうにか抑え込んで腰を折らないように努める。
　拳は震え、歯を食いしばり、物に当たりそうなのをどうにか堪える。それが誰からもわかるような状態で、どうにもいたたまれなかった。
「おしまい。これがアンタに伝えなかったこの施設の裏側……っていうか、これが表側。私達は余計な争いが起きないように、理解がある鎮守府と人間、艦娘と和睦を結んでいるの。直接的な関わり合いは極力避けてるけど」
「何よそれ……人間なんかと、艦娘なんかと、仲良しこよししてるわけ!?」
「ええ。だってそれが一番施設を守れる方法なんだもの。私とお姉でそれを決めたの。春雨には感謝してるのよ?」
　姉妹姫の一番の目的は、この施設の安寧。最も平和的に解決出来る手段が、この施設のことをそっとしておいてくれる鎮守府と仲良くすることである。
　事実、その鎮守府からは和睦の証として端末を貰っているし、そのおかげで叢雲の素性をいち早く知ることも出来ている。春雨のメンタルケアも完璧に行なわれており、姉妹姫と提督の付き合いは好調過ぎるほどだ。
「少なくとも、私達の知る春雨の元々いた場所の提督は、誠実なヒトだったわ。自分よりも艦娘のことを第一に考えていたし、私達にも一切の敵意は無かった。それに艦娘の方も、私達のことを認めてくれてるの」
「それがフェイクって可能性もあるでしょ！　私の知ってる司令官や艦娘はそうだった！　最初は歓迎ムードだったのにすぐに捨てて！」
「人間にも艦娘にも、それこそ私達の同胞（はらから）にだって、良いヤツ悪いヤツってのはいるわ」
　そうとしか言えなかった。どんな種族にもいろいろな思想はある。

侵略者だと思っていた深海棲艦にも平和主義の穏健派がいるくらいなのだから、世界を守るはずの艦娘にも破壊的な思想はいるし、人間にも愚か者は沢山いる。
　こればっかりは何とも言えない。飛行場姫は口に出さなかったが、叢雲はとにかく運が無かったとしか言えなかった。逆に春雨はあの良い鎮守府に所属出来ていたことが運が良かった。
「いい、叢雲。これはアタシ達の考え方、施設のやり方なんだけど、ここは施設の存亡に関わるところだから、アンタの意見なんて関係ない。私とお姉で考え得る最善手を取り続ける。それが、鎮守府との和睦なの。敵対したら、多分この施設は無くなるわ」
「そんなの、全部滅しちゃえばいいのよ！　敵がいるなら全部倒す！　鎮守府と艦娘は全部敵よ！」
　叢雲の言葉に、飛行場姫は大きく溜息を吐いた。和睦のことを叢雲に話したらこうなるのではないかと、姉とも話していたからだ。想定通りすぎて、逆に笑いそうになった。
　しかし、叢雲を見捨てるという選択肢は絶対に出てこない。本来なら思想の違いで施設から追い出してもおかしくないような状況だ。だが、そんなことはするつもりがない。叢雲も元々は艦娘なのだ。処置が出来ていないにしろ、自分を取り戻したのだから、施設の考えは理解出来るはず。
　ここで、飛行場姫はとんでもない作戦に打って出た。
「……アンタ、一度あの提督と話をしてみなさい」
「はぁ!?」
　せっかくここにタブレットがあるのだ。面と向かって話せる相手がいるのだから、それを使ってどうにかする。あの提督なら、怒りに呑みこまれた叢雲も説得出来るのではないかと考えたのである。
　見る者が見たら、これはもう完全に投げたとしか思えない。春雨からしても、正気の沙汰ではないと感じる程だった。しかし、提督に希望も見出していた。姉妹姫がここまで信用しているのだから、きっと何とかしてくれる。そう思って。いざとなれば、春雨自身もその人間性を詳細に話すことが出来るのだ。

「叢雲ちゃん、私からもお願い。私の司令官とお話ししてみてほしい」
春雨からも懇願。真っ直ぐな瞳に射抜かれて、叢雲の怒りは全く鎮まらないものの、若干冷静さを取り戻した。
「……わかったわ。話してやるわよ。その代わり、信用出来ないようなら今すぐ殺しに行く。人間は全部殺す。私を裏切った連中の仲間は皆殺しよ」
「なら、この施設を敵に回すってことでいいのかしら」
「ええ。それでいい。アンタ達も人間や艦娘と組してる愚か者なんでしょ。なら私の敵よ。信用して損したわ！」

怒り狂った叢雲をどうにか出来るのは、もう誠実な提督しかいない。しかし、飛行場姫は勝算があるからこそ、このアイディアを出したのだ。
勿論、こうしようとしていたのは中間棲姫。本当にいざという時は、あの提督と話をさせることがベストであると、最初から考えていた。
知っている提督とは別の、艦娘のことを思いやる提督と触れ合わせることが、何かしらの解決に繋がるはずだ。
これで失敗した場合は、もう叢雲は施設の敵となる。

対等な対話

施設と鎮守府が和睦協定を結んでいることを知った叢雲は、案の定怒り狂ってしまった。人間と艦娘に肩入れしているとわかった途端、和やかな雰囲気は何処かに行き、ピリピリとした空気に。

そこに飛行場姫と戦艦棲姫が宥めに来たのだが、叢雲の深海棲艦化の原因が『怒り』であるため、まず沈静化は出来ない。怒りの原因たる鎮守府という存在に対して、その怒りを鎮めることはないだろう。しかし、鎮めてもらわなければ施設のこれからの在り方にも関わってくる。

そこで出た案が、叢雲に実際に提督と話してもらうという、最も危険で、かつ、最も確実な手段である。叢雲の知る提督とは別に、誠実な人間もいることを知ってもらいたい。しかし、一歩間違えればより人間を憎むことになる。これはもう賭けに近い。

「どうせ人間なんて信用出来ない生き物なのよ。何を話されたって無駄ね」

「ううん、私の司令官は違うよ。本当にいいヒトだから。艦娘のことを第一に考えてるんだから。ちょっと無理しちゃうところが玉に瑕だけど、それだけ私達のことを思ってのことだし」

「そんなもの上っ面なだけよ。内心ではアンタ達のことも捨て駒や自分の地位のための道具くらいにしか思ってないわ」

どんなことを言っても自分の考えは変えない。あくまでも人間は艦娘を騙している底辺であり、滅びても何の問題のない種族だという認識。

春雨も、自分の尊敬する提督がここまでボロクソに言われたことで、内心では苛立ちを覚えていた。しかし、叢雲の性質もちゃんと理解している。叢雲はこういう存在なのだから、この言いようも仕方ないと諦めることで、何とか怒りを抑え込む。

一方、飛行場姫はタブレットを弄って、鎮守府へと連絡を取る。時間としてはまだ業務時間。連絡がつかないわけでもなく、こちらから動いたらまず確実に反応してくれる。

『おや、以前に連絡も差し控えた方がいいと聞いていたが、何か問題でも起きたのかい』
施設どころか、深海棲艦全体としてもまず聞かない男の声。それが端末から聞こえたことにより、叢雲の怒気がより一層強くなったことがわかる。
叢雲の知っている提督という存在は男。既に男の声を聞いた時点で恨み辛みが爆発しかねない状況ではあった。それでも即座に手を出さないのは、艦娘叢雲としてのギリギリの抵抗か。
「ええ、先に謝っておくわ。貴方に任せることになっちゃった。ごめんなさい」
『急にどうしたんだい。また何か頼み事があるというのなら、我々は力になるさ』
声色からして優しい性格が滲み出ているのだが、叢雲にそんな内情が届くわけがない。どれだけ優しくとも、それは演技であると決め付けているのだから、疑惑が解消するのは簡単なことではない。
「例の叢雲の件よ」
『……調査後の状況を知りたくなったのかい？』
「それもあるけれど、貴方に叢雲本人と話をしてほしいのよ」
端末越しの提督も、さすがに言葉を失っていた。一旦連絡を控えると言われたばかりなのに、昨日の今日でこれである。
「アタシ達の言葉も聞いてくれなくてね。貴方と直に話すべきと判断したの。さっきも謝ったけど、頼ることになってごめんなさい」
『いや、頼ってくれてありがとう。そういうことなら、力になろう。しかし、僕の話を聞いてくれそうな心境なのかい？』
「……信用出来ないなら殺しに行くとは言っているわね」
『そうなってしまっても無理もない仕打ちを受けているんだ。その考え方を否定することは出来ないよ』
溢れんばかりの殺意を間接的にぶつけられていても、提督は恐怖はおろか、嫌悪すら感じない。
叢雲はそうなってしまっても仕方ないと納得しており、ブラック鎮守府での生活を覚えているのなら、人間や艦娘に対して常に敵対心を

持ち続けていてもおかしくないと考えていた。そのまま他の侵略者と同じようになっていないだけ、叢雲は自制が出来ていると感心するほどに。

『了解した。僕が話をしよう』

「たびたび言うようだけど、ごめんなさいね。本当に助かるわ」

今回の件に関しては、ここの姉妹姫でもお手上げと感じるものだった。叢雲が意固地とか、そういうことではない。そういう性質なのだから仕方ない。考えを変えることが出来ないくらいに心が壊れているのだ。

これが適切な処置をされているのなら、まだ違ったかもしれない。多少は妥協が出来て、苛立ちを覚えるものの理解は出来るくらいの心持ちになれた可能性はある。

しかし、叢雲は処置すらされずに壊れていたものが、施設の者、特に薄雲による渾身の介護により、ギリギリ心を取り戻しているに過ぎない。施設に住まう他の元艦娘達とは、根本的に違う。

結果、自分達よりも艦娘に詳しい者に頼ることにした。本来ならば問答無用で敵対するような鎮守府の長が力になってくれると言うのだから、きっといい方向に向かう。そう信じて。

『君が……槍持ち、叢雲かい』

端末に映し出された、変わり果てた叢雲の姿を見て、小さく驚いた。これまでに、この施設に住まう者を見ていたためにある程度は慣れていたものの、やはり何処からどう見ても深海棲艦となってしまった艦娘を見ると、悔しさが滲み出てくる。

逆に叢雲は、自分の姿を見て驚く相手に対して、また怒りを募らせていた。というか、どんな仕草を見せられても怒りに直結する。人間の一挙手一投足が、叢雲にとっては癇に障るモノなのである。

「そうよ。人間と仲間にゴミのように捨てられた、哀れな艦娘の成れの果てよ」

最初から喧嘩腰。殺意も隠さない。端末越しではなく直に会っていたら、間違いなく手を出していた。

『僕は君の上官のことは耳にした程度なのだが……その手段は一切譲

歩の出来ない非道なモノであることは聞いている。その被害者である君のことも、詳しくはないが聞いているよ』
「なら話が早いわね。私は人間を許さない。それに乗った艦娘も許さない」
　最初から提督の言葉には耳を貸さないと言わんばかりである。早く対話を終わらせて、目の前の人間を殺しに向かいたい。そんな気持ちが画面越しにも見て取れる。
『我々の……君達の言い方で言えば同胞（はらから）が、本当にすまないことをした。無関係な僕の謝罪が意味を成すかはわからないが、人類の失態であることには変わりない。申し訳ない』
　本来なら一切無関係である提督が、叢雲に頭を下げる。軍であるというだけでも関係者となるかもしれないが、見ず知らずの同業者の悪行のために、まるで自分がやったかの如く心を痛め、被害者に謝罪を述べた。
　それに対する叢雲は、無論謝罪をされても許せないほどに怒りが渦巻いている。これだけのことをされ、今でこそ意思を取り戻し、死んだことを帳消しにしているかもしれないが、実際には死んでいるのだ。それをごめんなさい1つで許せるかと言われたら、それはどう考えてもＮＯである。
「そんな口先だけの謝罪で私の怒りが晴れると思ってるわけ？　やっぱり人間は揃いも揃ってゴミクズね。これだけやらかしておいて、当事者にそれくらいしか出来ないんだもの。死んで詫びなさいよ」
　被害者であるが故に、ここまでの言葉が出てくる。思考は怒りの熱で焼き切れ、罵詈雑言でしか提督と向き合わない。最初からそのつもりでここにいるのだから、何を言われようが何をされようが許すつもりはない。
『君以外にも被害者は沢山いるのだろう。その者達のことを思えば、謝罪の言葉1つで片付けようなんて思ってはいない。君の怒りは正当性のあるものだ。人間の滅亡を願うことにも、僕としては何も間違っていないと思う』
「理解が早くて助かるわ」

『だが、申し訳ないが命を張るわけにはいかない』
凛とした態度で、叢雲に真っ向勝負を挑んだ。叢雲の表情がより怒りに染まる。
『ここで僕1人が死んだところで、世界は何も変わらない。君の気持ちが少しだけ晴れるか、今以上に怒りに呑まれるだけだろう。むしろ、君のその行為、思いが、より酷い惨状を作り出すかもしれない』
「何が言いたいのよ」
『人間を脅すような深海棲艦がいるのなら、こちらも手段を選べないと、君のような被害者が増すということだ』
叢雲がどれだけ怒りに呑まれていようが、提督は淡々と話す。同じように感情的になっていては、叢雲がより悪化するに違いない。感情を押し殺して対応することで、なるべく穏便に事を成していこうとしているのが、画面越しからでもわかった。
『現在の軍規では、君のような被害者を出さないように厳しい罰則を設けている。それでも秘密裏に捨て艦という非道な戦術を行使し、被害者が後を絶たないのは、完全に人間の落ち度だ。艦娘は兵器かもしれないが命ある一種の生物であるというのに』
「規則があろうが無かろうが、人間ってのは結局そういうヤツらなのよ。自分のことしか考えてない。そんなヤツらは滅んで然るべきよ」
『しかし、僕が君の意思に屈し、命を落としたとしたらどうなると思う。こちらも君のような手段に打って出る者が増える。下手をしたら、君がされたような捨て艦が推奨される可能性すらあるんだ。深海棲艦は何としてでも滅ぼさねばならない存在なのだと認識されたら最後、この世界の綱渡りのような均衡は簡単に崩れ去るだろう』
深海棲艦に人間や艦娘を人質にとる者などいないし、搦手を使うと言っても陽動作戦や罠を仕掛けるくらい。明確な意思と悪意の下で、人間を滅ぼそうとしてくる者はいない。本能のままの破壊行為であるから、真正面からの侵略を繰り出してくる。だからこそ、人間側は理知的に事に当たれる。非道な行いを罰し、正々堂々と深海棲艦を迎え撃つ。
それが、叢雲の今の言動1つで全て崩れる。知恵のある深海棲艦が

悪意をもって人類を滅ぼしに来るというのなら、手段を選んでいられなくなる。犠牲に出来るモノを犠牲にしてでも、勝利を勝ち取ろうとするだろう。
やむを得ない犠牲（コラテラルダメージ）を気にしなくなる。
『僕は、それを引き起こしたくない。特に今は、その施設に住まう者達のような穏健派、平和主義の深海棲艦がいることがわかったのだから尚更だ』
「そんなこと知らないわよ。アンタ達の行いがそれを招いたんだから、後悔しながら死になさいよ」
『君のその行いによって、その施設の者達が死ぬことになるとしてもかい。深海棲艦叢雲としては別にどうということはないかもしれないが、艦娘叢雲としてのプライドがそれを許すのかい』
突き刺さる言葉。怒り任せに罵詈雑言を並べ立てているのは、深海棲艦としての叢雲の本能である。しかし、少しでも蘇った艦娘としての叢雲は、それを許さない。
仲間の前に立って煽動する役目を担うリーダー気質を持つ叢雲は、自己犠牲をも厭わないとは言わないが、失態によって自分以外が傷付くのは、プライドが許さなかった。それ故に、失態を起こさぬように努力し、周りを鼓舞する。その思考が今の叢雲に僅かにでも残っていれば、この言葉に対して何かしら感じるものがあるはずである。
言い分としては脅しに近いかもしれないし、交渉としては褒められたことでもない。しかし、この現状を打破するために、提督はほんの少しだけズルい言い方をした。
「……何よそれ」
提督の少しだけ強気な物言いが、叢雲の心に突き刺さっていた。
プライドが高い叢雲だからこそ、下手に出るような対話をしたら余計に怒りを買うことになる。しかし、上から押さえ付けようとすると反骨心から怒りを助長する。
対等に並び立つことこそが、叢雲とまともな会話が成立する唯一の手段。故に、提督は真正面から切り込んだ。言い分に対して、言い分を返す。対等な応酬により、その心に一本の楔を穿つ。

『無論、先に手を出したのは人類であり、君には一切の非はない。それに関しては否定しようのない真実だ。それには何度謝罪を繰り返しても許されることはないだろう。だが、それによって君自身の同胞(はらから)を傷付けるのは……違うのでは無いだろうか』

「私に説教しようっていうの!?　人間のくせに!?」

『そんなつもりは毛頭無い。先にも言ったが、君の怒りには正当性がある。それほどの怒りに呑まれてもおかしくないほどに。だが、ほんの少しでいい、周りを見てもらえないだろうか』

提督に言われて、叢雲は不意に自分の周りを見た。

成り行きをじっと見つめる飛行場姫と戦艦棲姫、いろいろな感情を耐えている春雨、叢雲の言動によって崩れたジェーナス、そして、心配そうに祈るようにしている薄雲。

全員裏切り者だと言い切ったものの、この姿を見てしまったことで、艦娘叢雲としての精神が揺らいだ。自分のせいでこの表情をさせてしまっているのだと自覚した。

『それでも、その怒りが絶えないことは理解している。僕のこの言葉が、火に油を注いでいる可能性だってあるだろう。それでも、僕は君に謝罪を続けるしか出来ない。この世界のために』

提督が再度頭を下げる。その姿を、叢雲が見ることは出来なかった。

第三の選択肢

叢雲と提督の対話は、ある意味一進一退となった。叢雲の意思は変わらず、人間も艦娘も信用出来ず、滅ぼしてもいいという考えはそのまま。対する提督も、それで命を落とすわけには行かないために、叢雲にもう少し周りを見てほしいと訴える。

結果的には、現状維持というカタチで終わりそうではあった。提督の言葉を聞いてから、叢雲の中の深海棲艦としての思考と艦娘としての思考がぶつかり合っており、気持ちが揺らいでしまったからだ。

『叢雲、何度も言うが、僕は君の怒りは正当性のあるものだと理解している。あれだけのことをされたんだ。人間を、艦娘を、滅ぼしたくなるほど憎らしく思うのは当然の権利だ。だが……』

「提督、少し待ってちょうだい。叢雲が、貴方の話を聞けない状態になっているわ」

ツラツラと続けようとした提督だが、叢雲はそれどころではなかった。気持ちの揺らぎは表にも出てしまっている。周囲の音が聞こえておらず、焦点も定まっていない。

『……対話は、もう不可能かな』

ボソリと提督が呟く。そんな提督の言葉も届かない。目の前の映像が目に入っていないほどなのだ。

提督の言葉通り、自分の周りを見たことで、叢雲は狼狽していた。艦娘叢雲としての思考が強く出ていることの表れであり、壊れた心に強く突き刺さったことにもなる。

特に、この対話を身近で見ていた薄雲。何事も起きないようにと、祈るような表情を見せていたことで、余計に揺らいだ。実の妹という、この施設の中ではトップクラスに大事な存在にそんな表情をさせたことで、深海棲艦となってから一度も感じたことが無かった罪悪感までもが湧き上がっていた。

「ええ、一度切るわ。叢雲がこの調子だと、これ以上は難しいわね。また後日、叢雲と話をしてもらってもいいかしら」

『ああ、是非とも。叢雲がまた対話可能になったら、そちらからかけて

くれればいい。今日中は無いだろうが、明日でも構わないよ』
「助かるわ。この一晩でまた何か変わるかもしれないものね。じゃあ、また」
最後まで謝って、飛行場姫は提督との通話を切った。画面からその姿が消え、声もしなくなる。途端に、叢雲は力が抜けたように崩れ落ちた。感情の制御が難しいのか、荒い息を吐きながら、頭を押さえる。
「ね、姉さん……大丈夫ですか……？」
薄雲が寄り添おうとするが、その手を強く振り払った。
「っ……あ……私は……」
「姉さん……」
薄雲の悲しそうな顔を目の当たりにして、揺らぎはさらに激しくなる。
深海棲艦叢雲としての思考は、薄雲も裏切り者という認識だ。憎むべき人間や艦娘に与し、在り方を良しとしている時点で同罪。薄雲すらあの時の艦娘と同じだとしたら、実の妹が自分を捨てて裏切るという最悪な事態に発展する。
しかし、艦娘叢雲としての思考は、薄雲は心優しい施設の者達の中でも特に気が許せる、寄り添うべき妹だ。毎日手を握ってくれた、恩人とも言える存在。
そんな薄雲に対して、どう接していいのかわからなくなってしまった。自分がどうすればいいのかも、何も考えられない。
ここで薄雲は、意を決して叢雲に尋ねる。
「……姉さん、今の姉さんは……どちらなんですか？」
「どちら……って……」
「艦娘なんですか。深海棲艦なんですか」
思考が乱れ、グチャグチャになっている叢雲には、この問いへの回答が思い浮かばなかった。
今までは、自分は艦娘であることを捨てて、深海棲艦として生きると意気込んでいた。怒りと憎しみもあるため、あちら側の自分は必要ないとすら思っていた。だからこそ、艦娘の時とは別物の姿を選び、艦娘の時には考えもつかないようなことをやってきた。

しかし、提督の一言で、自分がまだ艦娘であることを捨てきれていないことに気付いてしまった。仲間の辛そうな顔を自分が引き出してしまっていることを自覚した途端に、自分は何をやっているのだと後悔の念が生まれる程である。

艦娘としての自分は捨てたい。だが、捨てたくても捨てられない。それを、あの提督に理解させられた。

こんな姿に成り果てても、自分は結局艦娘なのだと。忌々しいものと同じ存在なのだと。

「……わからない……わからないわよ。なんなのよ、私は、一体どうすればいいのよ！」

ここで叢雲の思考は爆発した。考えてもわからなくなり、発作を起こしたかのように怒り狂う。現に、叢雲の中で燻っていた怒りの炎は、また激しく燃え上がろうとしていた。

その怒りの対象は、今まで話していた提督でも、目の前にいる薄雲でもない。自分自身だ。

「私はアイツらへの怒りと憎しみで深海棲艦に身を寠（やつ）したわ！　艦娘の時の感情なんてゴミのように捨てて、復讐のために生きたいわよ！でも、でも捨てられないのよ……艦娘としての私が！」

感情が昂りすぎて、本音をぶちまける。殺意も隠さないし、考えていることが全て口から出て行くようだった。

「何も知らない槍持ちのままなら、こんな辛い思いをしなかったのに……記憶を取り戻して、怒りと憎しみを溢れさせて、艦娘の時よりも心が締め付けられる思いよ！」

本来のプライド高い叢雲ならば、まず間違いなく言わないであろう弱音すら吐き始める始末だ。

悲痛な叫びは施設内に響き渡り、なんだなんだと仲間達が集まってくる。叢雲に提督と話をさせるという策を元より考えていた中間棲姫も、ここまで錯乱している叢雲を見たことで、少しだけ慌てた。心の何処かでは、あの提督なら叢雲でも綺麗に宥めすかすのではないかと思っていた。

それほどまでに叢雲の心の傷は深く、壊れすぎている。処置が出来

なかった状態での復帰は、ここまで状況を悪化させる。
「叢雲、冷静になりなさい」
「うるさい！」
飛行場姫の訴えにも耳を貸さない。怒り狂いすぎて、どんどん視野が狭くなっている。
先程の提督の一言は、この視野を一時的に拡げるための言葉だった。自分の置かれている状況を認識することで、少しでも冷静になれるようにという提督の思いやりだ。今やそれが逆効果になりそうではあったが、思考の幅が拡張されたと考えるのなら効果覿面である。覿面すぎるが。
「私は、私はっ！　もうどう在ればいいのかわからないの！　アンタ達みたいに割り切れない！　吹っ切れられない！　深海棲艦みたいに全部壊すのにも抵抗があるのよ！　私は一体なんなの!?　艦娘なのか深海棲艦なのか、わかんないのよぉ！」
思いの丈を叫んだ。あるがままに生きていこうとしても、相反する思考がぶつかり合ってそれを邪魔する。だからといって、思考を偏らせることが出来ない。怒りと恨みが艦娘の思考を邪魔し、本来の優しさが深海棲艦の思考を邪魔する。負の要素ばかりが表に出てこようとする。
一度燃え上がった心は、簡単には沈静化出来ない。槍持ちから叢雲へと戻ったとかのように、一度気絶させてから強引に鎮めるにしても、実績のあるジェーナスは崩れている。そうなると、即座にやれそうなのは戦艦棲姫だ。
その戦艦棲姫は、本当にまずいと思った時に動くつもりのようで、まだ動かない。今は叫ぶだけ叫ばせて、その感情をありったけ吐き出させるようだった。言いたいことを好きなだけ言って、仲間達に聞いてもらえれば、その分スッキリするはずだ。そう信じて。溜め込んでいるより、心にいい。
「教えてよ！　私は一体どっちなの!?」
泣き叫びながら、集まった仲間達に問うた。自分ではもうわからないから、他者にその答えを委ねた。

しかし、どちらと言われても否定するだろう。艦娘だと言われたら、その怒りと憎しみの対象と同じだとは言われたくないと憤慨し、深海棲艦だと言われたら、侵略者としての思考に抵抗を持つ自分はそれではないとやはり苛立ちを露わにする。

明確な答えのない問いに対して、一石を投じたのは春雨だった。

「どちらかじゃないといけないのかな」

この一言で、叢雲は途端に静かになった。燃え上がった怒りはそのままだが、叫びは一時的に止まり、春雨に目を向ける。先程までは複雑な表情をしていた春雨だが、今は凛とした表情で真正面から叢雲を見据えていた。

提督を侮辱された苛立ちや、叢雲の性質を考えた妥協、提督の言葉を聞いた時の感心、そんな感情が今は抜け落ちていた。叢雲に対してのみ意識を向け、提督の代わりに言葉を紡ぐ。

「私もつい最近こちら側に来たけど、そんなこと意識してないよ」

自分が艦娘か深海棲艦か、そんなことは全く重要なことではなかった。それを、叢雲に知ってもらいたかった。

「艦娘だろうが深海棲艦だろうが、私は春雨だもん。姿形が変わっても、心が壊れているとしても、私は私だよ。それは、叢雲ちゃんも同じじゃないかな」

春雨が春雨でいるためには、身体なんて関係ない。心を真っ直ぐに持っていれば、それでいい。自分が思うがままに、自分として生きていく。たったそれだけのことだ。

ある意味、第三の選択肢である。艦娘でも深海棲艦でもない、自分というただ一つの種族。こうなってしまったのだから、艦娘としても深海棲艦としても違う、別の生き方をしていけばいい。

それが、この施設では可能である。艦娘のように世界を守る必要もない。深海棲艦のように侵略する必要もない。ただただ自分の好きなように、のんべんだらりと生きていくだけでいいのだ。

「そうです。姉さんは姉さんです。どちらかとか関係ありません。姉さんは艦娘であろうが深海棲艦であろうが、叢雲であることに変わりありません。艦娘叢雲でも無ければ、深海棲艦叢雲でも無いです。姉

さんは『叢雲』なんです」
その春雨の言葉に同意するように、薄雲が一歩前に出る。種族なんて関係ないのだと言い聞かせるように。
「あ、あれ、自分でも何言ってるかわからなくなってきちゃった……。姉さんは叢雲ですよ。そう、叢雲なんです。どんな姿でも、どんな心でも、私の姉さんです。何か問題がありますか！」
何処かビシッと決まらない感じだが、薄雲が叢雲に突きつけた。
対する叢雲は、何とも締まらない薄雲の言葉に、妙に冷静になっていた。そんな心境だからこそ、先程の提督の言葉がまた反響する。少し周りを見てみろと。周りというのは、今目に映るものだけではない。短い時間ではあるが、共にこの施設で過ごしてきた仲間達の生き様を見返してみる。
誰もがその第三の選択肢を選び取って、この施設で好きに暮らしている。時々発作は起こしてしまうが、それでも自由に伸び伸びと、楽しく生きている。みんな、殆どが笑顔だ。
そして、その全員が、こんな叢雲を快く受け入れてくれていた。怒りという最も面倒くさいであろう感情を溢れさせたのにもかかわらず、そんなことを気にしていない。これだけ癇癪を起こしても、誰も見捨てようなんて考えていない。
「私は……私……」
それを理解した瞬間、相反していた思考が混ざり合うような感覚を覚えた。今までとはまるで違う3つ目の思考、艦娘叢雲でもなく、深海棲艦叢雲でもない、『叢雲』の思考が生まれようとしていた。
「艦娘でも……深海棲艦でもない……私……」
無意識に、思考は折衷案を導き出していく。艦娘と深海棲艦のいいところを摘んで、新たな叢雲へと進化していく。
優しく、自由に、楽しく生きる。それが今の叢雲の中に芽生えた、新たな思考。結果的に、仲間達と近しいモノになっていく。
勿論、怒りや憎しみとは付き合っていく必要はあるだろう。だが、艦娘としての優しさで侵略までは結び付かず、深海棲艦としての自由さでその感情は好き勝手に露わにするだろう。提督や艦娘に対して

も悪態は当たり前のようにつく。しかし、攻撃性は薄れた。
「……そうか……そうなんだ……私は私だ。艦娘でも深海棲艦でもない、私なんだ」
薄雲と同じような言葉を口走った後、自分で何を言っているかよくわからなくなった。やはり締まらないものの、微かにだが、答えが導き出された気がした。
「落ち着いたかしらぁ」
ここまで口を噤んでいた中間棲姫がようやく口を開く。叢雲には自分が口を出すより、仲間、友人、妹からの言葉の方が効くのではと思っていたからである。
叢雲は晴れ晴れとした表情とはいかないものの、何処かスッキリしたような表情になっていた。発作が落ち着いたとも言える。
「……ええ、取り乱してごめんなさい。なんだか、自分の悩みがバカみたいだったわ」
何かに納得したようで、大きく深呼吸。
「春雨の言う通りね。姿形が変わっても、心が壊れていても、私は私、叢雲よ。まだ自覚が足りないかもしれないけれど、向き合っていける気はする。人間も艦娘も気に入らないけれど」
「今はそれでいいわぁ。でも、ここはあの鎮守府とお付き合いしていくわよぉ？」
「構わないわ。私から関わらないようにするだけ。それに、気に入らないことがあったらバンバン口に出していくから」
今はそれで落ち着いた。それによって新たな問題が発生するかもしれないが、怒りによる錯乱はこれでおしまい。それに、施設の和睦協定に対して文句を言わなくなっただけでも、大きな進歩だった。

叢雲は今この時より再出発することになる。艦娘でも深海棲艦でもない、新しい叢雲として。

共通の敵

錯乱した叢雲が自分を取り戻した。艦娘と深海棲艦の相反する思考が鬩ぎ合っていたりするものの、自分が艦娘でも深海棲艦でもないモノであると自覚したことで、怒りと憎しみをある程度抑え込むことに成功している。

提督との対話はこれで終わってしまったものの、また話そうと思えば話せるかもしれない。しかし、怒り自体が失われたわけではないため、嫌味なり文句なりはどうしても出てしまう。それ故に、和睦協定はそのままに、叢雲自身は自分の意思で極力関わらないようにするというところに落ち着いた。

「ごめんね、私も崩れちゃった」

全てが終わった後、発作により崩れていたジェーナスも復帰。叢雲が落ち着いていることを喜びつつも、その時に力になれなかったことを謝罪。

「別にいいわよ。アンタも厄介な感情が溢れてんのね」

「あはは、ムラクモには負けるかも」

「それはそうね。多分一番面倒よ私は」

対する叢雲は、今までとは打って変わって軽い対応をした。怒りが燻っているというのは、常にピリピリしていると言っても過言ではない。それに加えて、艦娘と深海棲艦の思考がぶつかり合っていることによって、さらにその燻りは酷いことになっていた。

だが、今の叢雲は違う。大分吹っ切れたおかげで、軽めの対応が出来るようになっていた。毒を吐いたりすることがあるものの、冗談が言えるだけでも随分違う。

「薄雲、もう心配いらない……とは断言出来ないけれど、大分落ち着いたわよ。アンタと……春雨のおかげね。いろいろ気付けたわ」

「よかった……よかったです姉さん」

感極まって涙目になっている薄雲。まだ先程のような発作を起こしかねないが、今の状態に戻ってこれるというのなら、発作を起こしても心配ではない。

ここにいる者はそういう者ばかりなのだ。発作くらい、もうみんな慣れている。
「春雨、アンタの言葉が一番響いたわ。私は私。それに最初から気付いていれば、こんなことにはならなかったかもしれないわね」
「だね。でも、今は大丈夫なんでしょ？」
「ええ、ひとまずはね」
叢雲としては、春雨への感謝が一番深いらしい。別物の自分という自覚が芽生えたのは、春雨の一言がきっかけだ。
姿形が変わっても、心が壊れているとしても、私は私だという春雨の言葉が、叢雲の中には特に刺さっている。
「それに……まぁ、あの人間にも多少は感謝しておくわ。アイツに周りをよく見ろって言われてなければ、アンタ達の顔も見ていられなかったわ」
「ふふ、そうだね。私の司令官のこと、しっかり感謝してね。足向けて寝られないくらいに」
「ない。それは絶対にない。人間って自体で私の苛立ちの対象だから。でも、少しくらいは認めてやってもいいわよ」
人間に対しての認識はこの程度。しかし、あの提督に対しては少なからず感謝はしているようである。ツンツンしているものの、その言葉のおかげで立ち直るきっかけが得られたのだから、いくら人間だろうがそれだけは噛み締めておくようである。

その日の夜、ベッドルームに4人が集まる。今回はそこに戦艦棲姫も入ってきていた。ベッドに入ることは出来ないだろうが、相変わらずの艤装をベッドにすることで、同じ部屋で眠ることにするようだ。
なんでも、叢雲のここでの生活をそろそろ見納めて、新たな旅に出てもいいかと考えているらしい。故に、この夜が最後になるかもしれないということで、ここに来た。
「叢雲もここまで回復したのなら、私も安心してまた旅に出られるわ」
「まぁ……アンタにもいろいろ感謝してるわ」

「別にいいわよ。私は大概見てるだけだったもの」
近くにいるだけでも、薄雲の安心感が違った。叢雲としてはそのことを言いたかったようだが、言葉足らず。
「今度は何処に行くの？」
「そうねぇ……行く先なんて考えずに旅に出るから、わからないわ。着の身着のまま、好き勝手にやるのが私達（深海棲艦）でしょ」
「それもそうね。また土産話、楽しみにしてるわ！」
ジェーナスも戦艦棲姫とは付き合いが長い。戦艦棲姫との別れも、再会が約束されているようなものだから、軽い気持ちで送り出せる。
「あ、そうだ、戦艦様。一つお願いがあるんですけどいいですか？」
そこに春雨が1つ、ちょっとしたお願いをしたいと申し出た。自分の足だけで世界中を旅して回っている戦艦棲姫だからこそ、聞いてもらえそうなことだ。
「ん？　何かしら」
「出来ればでいいんですけど……また未知の深海棲艦の情報があったら、教えてほしいんです。鎮守府の仲間達に、何かしら伝えられればいいなって」
それは、姉達の仇のこと。今もまだ発見されていない、姉を全滅させて春雨も深海棲艦化するきっかけとなった、完全に未知の個体のことがわかれば、鎮守府の活動に役立てられるのではないかと考えた。
春雨自身は、もうこの施設から出るつもりは無い。そうしてしまうと、施設の全員に迷惑がかかってしまう。何はなくともそれだけは避けなくてはならないのだから、自分から動くということはまずしない。
だから、仇を討ってもらうためにも動ける者からの情報が必要だ。鎮守府だけでは手が届かないところにも、深海棲艦ならば届くかもしれない。現に、槍持ち（叢雲）のことは鎮守府よりも戦艦棲姫の方が早かったのだ。
「わかったわ。何かおかしなのがいたら、ここに戻ってくる。とはいえ、私が行くところってのは人間の社会に近いから、簡単に何か見かけるとは思えないわよ」

「構いません。そもそも今まで何も見つかって無いようなものなので。目の数を増やしたいなって」
「そう、なら引き受けたわ。期待せずに待ってて」
　そういうことならと、戦艦棲姫も快諾。春雨自身は戦場に出られないが、元々の仲間達の力になりたいという気持ちは理解出来たので、同胞（はらから）として力になってあげようとした。
　その２人の会話を聞いて、叢雲が少し考えるような仕草をする。
「どうしたんですか姉さん」
「未知の深海棲艦……それって言葉通りよね。見たこともない、人間共も知らないタイプのヤツってことよね」
　未知の深海棲艦といえば、叢雲がこうなった原因の１つでもある。今は既に解体されているであろうブラック鎮守府も、最後の戦い、叢雲を捨て艦として使った戦いは、強大な力を持つ深海棲艦に圧倒されたものだ。撤退の時間稼ぎに捨てられたようなものである叢雲は、その敵の姿を知っている。
「……思い出したらイライラしてきたわ」
「姉さんはそういう性質になっちゃってますからね……どうすれば落ち着けますか？」
「悪いわね、ちょっと手を握ってちょうだい」
　言われるがままに薄雲が叢雲の手を握る。それだけで足りるかわからないと、ジェーナスが覆いかぶさるように叢雲に抱きつき、春雨も逆側の手を握った。
　槍持ちの時から温もりで落ち着けるという実績があったが、叢雲として目覚めてからもその性質は多少なり残っているようで、怒りが多少は呑み込めたようだ。
「春雨、アンタもその、知らない深海棲艦にやられたのね」
「……うん。姉さんは全員、沈め、沈められて……」
　今度はそれに揺さぶられて春雨が崩れかける。ここ最近は大分強くなってきていたのだが、本題を思い出すとどうしてもまだまだ難しい。未知の深海棲艦という話題を自分で出しても、その詳細はやはり心を揺さぶってしまう。

こっちの方がまずそうと、こちらには戦艦棲姫が事にあたった。中間棲姫や飛行場姫と同じように抱きしめて、頭を撫でることで落ち着かせた。春雨はどちらかというと大人に慰められた方が回復が早いらしい。
「っ、ぅ、叢雲ちゃん、その、未知の深海棲艦って……ど、どんなのだった？」
発作を起こしかけていたとしても、これだけは早く聞いておきたいと、叢雲に詳細を聞く。叢雲自身もそれを思い出せば思い出すほど怒りの炎が燃え上がっていってしまうのだが、他ならぬ春雨の質問だ。仲間達の補助を受け、怒りの熱に耐えながらも、その時のことを話す。
「……私は2人の深海棲艦にやられたわ。片方は重巡洋艦、片方は駆逐艦」
「重巡洋艦……!?」
春雨がやられたのもまさにそれ。たった1人の重巡洋艦に、4人の姉は沈められ、春雨自身もいずれ死ぬであろう怪我を負わされている。結果的に深海棲艦化したのだとしても、それがなければ春雨はこの世にいない。
「そ、その重巡洋艦、どんな、どんなのだった!?」
「落ち着きなさい春雨。気持ちはわかるけど、無理しちゃダメよ」
戦艦棲姫がどうにか落ち着かせようとするが、真相に近付くための情報を叢雲が持っている可能性があるというのなら、これ程までに取り乱すのも仕方ないこと。
「私は生まれたばかりだから、何型のそれなのかはわからない。でも、少なくとも重巡洋艦は何処かで見たような感じだったのよね……。1つ覚えてるのは、片目がすごい光ってたことね。オッドアイっていうのかしら、アレ」
心臓が高鳴るような感覚を春雨は覚えた。息が苦しくなり、呼吸がまともに出来なくなる。今までよりも強い発作が起きてしまい、戦艦棲姫もこれには少し慌ててしまう。
姉達の仇、鎮守府が目指すべき最大の敵は、まさにその姿をしていた。片目が燦然と輝き、常に光が漏れ出していた。昼間でもわかるほ

どに。
深海棲艦というのは瞳から炎のような光が漏れることが多く、それこそ今の春雨でも稀にそういうことが起きるくらいなのだから、そこまで気にするほどの特徴ではないはず。
しかし、叢雲が特徴的というだけあって、その輝き方は普通の深海棲艦とは違ったようである。今頃、貴婦人の大将もその詳細に辿り着いているかもしれないが、本来なら知らなくてもいい春雨にその情報が届いてしまった。
「お、同じ、だ。私、叢雲ちゃんと、同じ深海棲艦に、やられてる、やられてるの」
過呼吸気味になりつつも、その言葉だけはハッキリと口に出した。
「そう……なんだ。ならアンタをやった後、こっちまで来て、今度は私をやったってわけね」
ギリッと歯軋りの音。叢雲の怒りは別の方向に向かった。自分だけではなく、仲間の命をも奪おうとしていたことを知り、より怒りが湧き上がる。
2人揃っての発作のようなもの。特に春雨は、今までにない程に強い発作に発展してしまっているため、宥めるのには相当時間がかかる。叢雲の怒りは仲間を思っての怒りであるためまだマシ。しかし、春雨は根本を抉られるようなものであるため相当深い。
「大丈夫、大丈夫よ。今は私達がいるわ。辛いでしょうけど、落ち着きましょ」
「そうよハルサメ、今は私達がいるわ！」
ゼエゼエと息も絶え絶えな春雨に、みんなが慰めようと近寄る。そこには叢雲も含まれた。
叢雲の怒りの発作は、仲間の発作によって抑えられるようだった。他者の苦しみを見て、自分が苦しんでいるわけにはいかないと考えるのは、叢雲の本質である。
「……そうか、いろんなところで暴れ回ってるのねヤツは。腹が立つ、気に入らないわね……」
「姉さん、今は落ち着きましょう。その話題はまた後日にした方がい

いです」
「わかってるわよ。私だって春雨を苦しめるためにこんなこと話してるわけじゃないわ」
未知の深海棲艦の話題はここで止めておいた。これ以上話をしたら、春雨が死ぬほどの発作に苦しむことになる。今でさえ尋常ではないのだから、これ以上になると命に関わりかねない。

少なくとも、仇は共通の敵であることが判明した。他の情報まで加味していくと、まだまだ謎は多いものの、施設の中だけではまた1歩、謎の解明に近付いてはいる。この情報が鎮守府に届けば、また進展していくだろう。

まだ謎は深く

叢雲が正気に戻る頃、大本営。貴婦人の大将は件(くだん)のブラック鎮守府の提督や艦娘への尋問を終え、わかる限りの情報を並べていた。

春雨の鎮守府に話さなかった、駆逐艦の方が白露型に似ているという情報以外にも、もう片方の重巡洋艦の片目が輝いていることも、この段階でしっかりと聞いている。

「司令官、お茶が入りましたよ」

「ありがとう、吹雪」

集めてきた資料と睨めっこをしながら小さく息を漏らす大将に、秘書艦の吹雪がお茶と茶菓子を出した。

その尋問には吹雪も参加しており、ほとんど洗脳されていたような捨て艦推奨派の艦娘に対しても、残念でならないと憤慨していたものである。そこから更生したのなら、この鎮守府に所属してもらいたいとも。

「尋問の資料、ですよね」

「ええ。気になることが多くてねぇ」

鎮守府が深海棲艦の施設との付き合いを始めてから、深海棲艦についての考え方を少し改めていたのだが、今回の件も今までとは違う方向で考えなくてはいけないのだろう。

未知の深海棲艦というのは、基本的には新種が出てきたら、それが全てに該当する。しかし、多少は傾向が他の深海棲艦と似たりするので、未知という割には対策がわかりやすかったりする。しかし、今回は全てにおいて傾向がおかしい。

駆逐艦が白露型に似ているのは別にそこまで問題では無かった。基本的に、新たに現れる深海棲艦の姫は、艦娘に近しい外見の者がかなり多かったりする。ここ最近は特に顕著だ。

その行動が今までと違った。強さもそうだが、動きが特にだ。戦い方が艦娘のそれであり、少なくとも知能が異常に発達している。というか、艦娘のことを熟知しているような戦い方だったと、艦娘達は口を揃えて話していた。

「……正直、あの尋問は堪えました。敵に対してあんなに怯えている艦娘って、今までにいませんでしたよね」
「ええ……それ程までに強力な敵だったのね」
大将達は、槍持ち(叢雲)のことはまだ知らない。その戦い方は、深海棲艦としても見たことのないモノだった。手に持つ槍で砲撃を全て弾き飛ばし、戦艦の砲撃ですら斬り払うという異常性を発揮している。
金剛達はそれに対して絶望を感じかけていたが、伊47に助けられたことで心が折れることなく撤退が出来ており、今ではそれを乗り越えるための特訓を繰り返しているくらいである。
しかし、それは目の前で死者が出ていないからだ。ブラック鎮守府の艦娘達は、捨て艦とはいえ、叢雲があまりにも簡単にやられてしまったことによって、完全にトラウマを刻まれてしまっていた。やられ方にもいろいろあるが、それ程のものだった。
「それに……多分コレ。この重巡洋艦のせいで、トラウマは酷くなったんでしょう」
「ですね……。私も現実に見たらトラウマになりそうですよ」
重巡洋艦の特徴、片目が輝いているオッドアイというのが、該当する艦娘が1人だけ存在する。それは吹雪は勿論、大将にも覚えがある者だ。
「だってこれ、明らかに古鷹さんですよね……」
重巡洋艦古鷹。その特徴を持つ唯一の艦娘。艦娘の中でも少し特殊なタイプであり、左目に探照灯が仕込まれているような激しい輝きを放つことが出来る。
その重巡洋艦は、あまりにもわかりやすくその特徴を持っている。春雨はまだ古鷹を見たことが無かったのか、それが古鷹を模した深海棲艦であるとは気付かなかったようだが、知る者が見れば、それがそうだと気付く。
「ええ。彼から聞いている話からして、感情が溢れて深海棲艦と化した者は、元の艦娘の姿に酷似しているそうよ。彼の春雨がそのまま深海棲艦となっていると聞いているもの」
「なら、その重巡洋艦は古鷹さんが深海棲艦化したもの、と考えればい

いんですかね」
「それが……うぅん、そうとも言えないのよね」
　尋問の資料をペラペラとめくって、該当部分を出す。吹雪が覗き込むようにそれを見ると、1人の艦娘からの言葉を概要だけ並べたものだ。
「その深海棲艦が古鷹なら、この子は確実にそう言うでしょう。あれは古鷹だったって」
「ですね。だって、加古さんは古鷹さんの妹ですし」
　ブラック鎮守府に洗脳されていた艦娘の中に、古鷹の妹である重巡洋艦加古もいた。その加古の証言が、資料に記載されている。
　加古は尋問を受けた艦娘の中でも特に強いトラウマを持っており、殆ど戦線に復帰することは不可能だと判断されていた。更生が終わり次第、非戦闘員として運用されるとのこと。
　その証言というのが、かなり不思議なものだった。あれは古鷹であって古鷹ではない。そう話していた。
　その姿が古鷹そのものだったとしたら、あれは古鷹だったと証言するはずだろう。何せ妹なのだから。しかし、そう言わないということは、姿形が古鷹とは違う部分もあったということ。
「髪型が違うとか、その程度ではそんなこと言わないわよね。どういうことなのかしら」
「深海棲艦化したら酷似するっていうのは、人によって変わるとか」
「まぁ確かに、それが妥当なのよねぇ。彼の春雨がたまたまそういうカタチで深海棲艦となっただけかもしれないし」
　結局のところ、当事者の頭の中にあるだけなので、話だけ聞いていてもわからないというのが現状だ。映像はおろか、写真や絵すら残っていない未知の敵、生きて帰ってこれても、それを説明出来ないくらいにトラウマを残している程なのだから、これ以上は聞きようがない。
「そういう意味では、あの白露型の特徴を持っている……というのも、誰かとは言いませんでしたよね」
「ええ。あそこの艦娘達はそれしか言わなかったわね。白露型に見え

たとしか」
　つまり、春雨とは違って、誰が深海棲艦化したモノかは判断が出来ないような姿をしていたということに違いない。見てわかるなら名前を出すはずだ。
　古鷹のようにわかりやすい特徴を持っていても、それがそれなのかわからないくらいなのだから、駆逐艦の方はよりわかりづらいのだろう。それでも白露型と断定した程なのだから、余程わかりやすい特徴はあったようである。
「……悩んでいてもこれは解決しないわ。私達は、まだまだ知識が少なすぎる」
「深海棲艦のことですらまともにわかっていないのに、深海棲艦化なんて初めてですしね……」
　大将も吹雪も頭を捻るものの、明確な答えなんて見つからなかった。とにかく知らないことが多すぎる。
　それをよく知る者といえば、それは深海棲艦本人ということになるだろう。幸いにも今は、こちらの話を聞いてくれそうな深海棲艦がいる。
「そろそろ、私達も施設というものに接触しなくてはいけないかもしれないわね」
　深海棲艦化の傾向がまだ把握出来ていないため、この謎は今すぐ解明出来そうにない。
　ならば、自分達もその深海棲艦達と対話をしなくてはいけないのではと感じてきていた。今でこそあの提督の鎮守府だけが窓口として対話をしているものの、そろそろそれだけでは足りないのでは無かろうか。
「穏健派であり平和を望む深海棲艦との対話……ですか」
「ええ。彼だけに任せ続けるのもいいのだけど、それだと話がどうしても遅くなるもの」
「でも、私達はあちら側に信用してもらえますかね」
「そこが問題なのよねぇ……彼は施設の深海棲艦達から大きな信頼を得られているようだけれど、私が同じように出来るかと言われたら何

とも言えないのよねぇ」
あの提督だからこそ信頼を勝ち取れている可能性はある。そこに自分が入り込む余地があるのかと言われれば、なかなかに難しい。
施設の深海棲艦に少しでも疑念を抱かれたら最後、今まで提督が築いてきた人間の信用は一気に地に落ちる可能性だってある。それだけは絶対に避けなくてはいけない。
「そこは彼と相談しながら進めていきましょう。この異常事態を早急に解決する必要は勿論あるけれど、焦ったら悪い方向に向かってしまいかねないわ」
「ですね。あそことの関係はなるべく現状維持がいいと思いますし」
「ええ。少し悔しいけれど、彼以上に適任な者はいないのでしょう」
苦笑しながら資料を一纏めにした。これはまず大本営内に展開され、事の重要さを再認識した後、然るべきカタチで全体に展開される。
だがその前に、最も深い場所にいるであろう、あの提督には大本営よりも前に展開されることになる。これは大本営の決定であり、提督も伝えられていないこと。
「まだ時間はあるわね。なら、彼に伝えておきましょう」
「駆逐艦のことは話すんですか？」
「……そうね、そろそろ知っておいてもらってもいいでしょう。でも、知るのは彼だけにしておいた方がいいわ」
艦娘達にはその事実を知らせない方がいい。ただでさえ1人、明確に精神的な問題点を発露しているのだから、その艦娘に知られたら、それこそ感情が溢れて深海棲艦化してしまいかねない。それだけは控えたい。
しかし、真相を知らせないわけにはいかない。まだまだ深くまで辿り着いているわけではないが、あの提督には知っておいてもらわなくてはいけない。
「それを艦娘達に伝えるかどうかは……彼に委ねることにしましょう」
「……ですね。私達にはもう判断出来ません」
「彼に投げてしまうのは私としても残念でならないけれど、これは独

断で何か出来ることではないわ。あの鎮守府には彼の理念があるもの。私は口出し出来ないわ」
鎮守府には鎮守府のやり方が存在する。勿論根本的なルールは大本営が定めているものだが、だからといって全てを縛り付けているわけではない。ルールの範囲内ならば、ある程度の自由が黙認されている。あの提督のやり方はその中でもわかりやすく、とにかく艦娘第一主義。命を大事に、長く生きることにより戦線を維持する。
それを大本営側から文句を言うことはない。放任主義などではなく、誰もが最善を知らないのだから、各々のやり方で見出していくしかないのである。深海棲艦と同じで、艦娘も未だに謎が解明されていない生物なのだから。

大将からの連絡を受け、詳細を説明された提督。その時は、叢雲の錯乱により通信が切られて少しした後。
「……なるほど、尋問の結果がそれですか」
『ええ、貴方には酷なことを伝えることになるかと思ったけれど、隠しているのもどうかと思ったの』
「いや、ありがとうございました。それは僕だけでも知っておく必要はあります」
最初に秘書艦も席を外すようにして話をした理由がよく理解出来た。こんなこと、特に伝えにくいことだ。
この鎮守府の秘書艦が五月雨でなかったら、まだその場で聞かせていたかもしれない。しかし、五月雨だって白露型だ。自分の姉妹が深海棲艦化したのみならず、他の艦娘を襲っていると知ったら、少なからずショックを受けるだろう。
「……時期的には、あり得なくはないですね。僕の部下であった白露型の誰かが深海棲艦化し、侵略行為に走っているというのは」
『ええ。勿論確証は無いのだけれど。白露型……特に上の子達は、海で頻繁に姿を見ることが出来るもの。別の白露型である可能性は、どちらかと言えば高いわ』

「はい。僕としてもそうであってほしいですね」
あの時に失われた白露型４人のうちの１人である可能性は低いものの、そうでは無いという断定は出来ない。故に、この事実は提督の中だけで留めておく。
こんなこと、特に海風に聞かせるわけにはいかない。姉の死に一番ショックを受けており、今でも心にガタが来ていると言われているくらいなのだ。深海棲艦から直接注意を受けている程なのだから、目を離すわけにはいかない。
『ああ、そうだ。機会が出来れば、私達の存在も施設の深海棲艦達に伝えておいてもらえるかしら。私が直接話をしなくてはならない時も来るかもしれないから』
「そう、ですね。あちらの意向を絶対としますが、貴女の存在は伝えておきます。彼女らなら、快く対応してくれるとは思いますが……話してみなければわかりませんからね」
『ええ。あちらの機嫌を損なうわけにはいかないもの。打算的な考え方で申し訳ないけれど』
提督の上に話がわかる者がいるということは伝えてある。それ以上のお近付きが出来るかは、施設の者次第。
『では、こちらでも引き続き調査をしていくわ。貴方は例の施設との交流を続けてちょうだい』
「了解しました。よろしくお願いします」

真実の一部は解明されてきたが、まだまだ謎は多い。古鷹のような未知の深海棲艦が、白露型のような未知の深海棲艦と組んで艦娘を襲っていることに意味があるのか。その正体は。他にも似たような存在があるのでは無いだろうか。
この事件は、まだスタート地点に立ったに過ぎないのかもしれない。しかし、ちょっとしたことで一気に進展したりもする。あちら側がどう動くかというのもあるが。

旅人の本能

昨晩に激しい発作を起こした春雨だったが、一晩で随分と落ち着いていた。叢雲が同じ相手にやられていたということを知り、悪夢まで見かけたが、今回は総崩れも起こすことなくどうにか対処されている。

以前の総崩れは春雨に引っ張られて薄雲も崩れたことが原因だったが、今は叢雲がいるおかげで、発作の連鎖は起きずに済んでいる。起きていたとしても、叢雲だけはどうあっても起きないので、総崩れはない。

さらには同じ部屋に戦艦棲姫も眠っていたのだ。すぐに全員での介抱をすることで、より発作の連鎖は抑えられている。

「昨日の夜はごめんね……また酷い夢を見ちゃって」

「ううん、大丈夫だよ。昨日は発作もすごかったし、ああなっちゃっても仕方ないよ」

起き抜けに早速薄雲に手を握られ、ようやく落ち着いた春雨。ジェーナスも後ろから抱きついたままであり、温もりによって発作は完璧に抑えられていた。

叢雲は叢雲で、自分にも春雨の発作の責任があると少しは思っているため、自分への怒りがふつふつと湧き上がっている。

「叢雲ちゃん、大丈夫だからね。私、定期的にこうなっちゃうの。誰のせいでもないから」

「ふん……まぁそういうことにしておくわ」

イライラがどうしても治まらないようなので、春雨が落ち着いたことを確認した後に薄雲がすぐに叢雲の方へと向かう。手を握られるだけでもある程度は怒りが落ち着くようなので、定期的に薄雲の温もりが必要なようである。

「前に総崩れしたって姉姫から聞いていたけれど、叢雲がいるとそれが無いようで安心したわ」

「そう、ですね。叢雲ちゃんは私達の発作に引っ張られることがないですから、一緒にいてもらえると安心出来ます」

戦艦棲姫も、叢雲の存在で総崩れを回避出来るとわかったことを安心していた。これで叢雲ごと崩れていたら、旅に出ても少し不安が生まれてしまう。そういう意味では、叢雲はとても都合のいいカタチに落ち着いてくれたものだ。

怒りに呑まれていても、仲間のこういう発作に対して怒りを露わにすることはなく、そのきっかけを作ってしまったと自分への怒りで済ませている。常に怒りに苛まれているからか、施設の者全てが持っている発作に対しての理解は深い。

それならば、もうこの４人が集まっておけば最悪の事態にはならないだろう。叢雲が崩れても、薄雲がカバー出来る。他の者が崩れても、叢雲がカバー出来る。３人ではダメだった部分を、４人目が完全にサポート出来たことにより、この４人は施設の中でも特に強い絆で結ばれることになるはずだ。

「これなら、もう今日にでも発てるわ。一番の心配が叢雲だったんだもの」

「悪かったわね。面倒臭いヤツで」

「制御出来てるだけいいじゃない。それに、仲間も出来たわ。怒りも大分落ち着いてるでしょ」

戦艦棲姫に突きつけられ、周りを見る。春雨も薄雲もジェーナスも、にこやかに叢雲のことを見ていた。

「……まぁそうね。私１人なら無駄に怒り狂ってたと思うわ」

「これからも頼りにしてやりなさいね。私も旅の中で貴女達が楽しく生きていくことを祈ってるわ」

優しげな笑みで、叢雲の頭を撫でる。それに関しては気に入らなかったのか、ふんとそっぽを向いてしまった。しかし、振り払おうとはしていないため、怒りに呑まれながらも満更ではなさそう。

戦艦棲姫のことも仲間と認識出来ているために起きた現象である。ツン９デレ１くらいのツンデレである叢雲の、小さな小さなデレの部分だ。

「じゃあ、今日の夜には出て行くから、そのつもりでいてちょうだいね」

「夜……なんですか？」
「戦艦のヒト、あの艤装がすごく目立つでしょ。それにほら、別個体がやたら暴れ回ってるっていうのもあるし。だから、夜に行動してなるべく人間や艦娘に見つからないように動いてるのよ。余計な戦いが起きないようにね」
　現に、戦艦棲姫がこの施設にやってきたのは早朝である。夜の間に海上を移動し、明るくなったら無人島に停泊するというのを繰り返しているらしい。人間の社会に潜り込んだらその限りではないが、大きく行動するのは夜と決めているようだ。
　それ故に、このように知り合いの居場所に来たり出て行ったりするのも、夜に徹底している。下手な動きをして人間や艦娘に見つかるのを避けるのは、この施設を守ることにも繋がるからだ。
「それでは、残り今日1日、よろしくお願いします」
「ええ、よろしく。こんなに長居することも無かったから、ちょっと名残惜しくなっちゃったけどね。でも、本能が旅を望んでるのよ」
　穏健派であり、根っからの風来坊気質。今回は同胞（はらから）のピンチということで一箇所に留まったが、もうそれもおしまいだ。
　春雨としては初めての別れとなるので寂しさが込み上がりそうだったのだが、ギリギリで踏み止まった。ここで泣き叫ぶようなことがあったら、戦艦棲姫を困らせてしまう。それを避けるために、食いしばった。
「春雨、寂しがってくれるのはとても嬉しいわ。でも、また帰ってくるから、笑って送り出してちょうだいね」
「はい。本能を縛り付けるだなんて良くないですもんね。戦艦様には戦艦様の生活がありますから」
「あまり気負わないでよね」
　夜に笑顔で送り出せるように、最後まで楽しく一緒に生きていこうと決意する。残り少ない時間を大切にしたいと思って。

　朝食の時にそのことが話されるものの、春雨と叢雲以外は戦艦棲姫

の性質を理解しているので、誰もがそうかで済ませていた。勿論名残惜しさはあるものの、引き止めることはしない。ジェーナスのように次の土産話を楽しみにしたり、どうせまた来るんだからと会える日を楽しみにしたりで終わり。むしろ今回は大分長居したなとおちょくる始末である。

「なら、出て行く前に餞別を作ってあげなくちゃいけないわねぇ。戦艦ちゃん、何か食べたいものあるかしらぁ？」

「そうねぇ……なら、いつも通りおにぎりでも作ってくれる？　一周回ってあれが一番だと思うわ」

「あっ、なら私が作ります！　戦艦様にはお世話になったので！」

春雨が率先して手を挙げ、戦艦棲姫への餞別を作りたいと自分の意思を表現する。極上のモノを作り上げ、またここに戻ってこようと思えるくらいにという意気込みに、戦艦棲姫も少し苦笑してしまっていた。

そういうカタチででも、別れの悲しみを払拭出来るのなら是非ともと、戦艦棲姫も春雨の申し出を快諾。とはいえ、今すぐ作るわけではないので、それは午後からとなる。

「じゃあ、それまでは施設近海を哨戒でもしてるわ。妹姫とコマだけじゃ足りない部分あるんじゃない？」

「やってくれるんならお願いするわ。目が多い方がありがたいし、アンタ、コマ並みに目がいいから信用出来るしね」

元々は槍持ちの情報を得たことで強めていた哨戒だが、槍持ちが叢雲となった今でも、哨戒の頻度や密度は強めたままである。

槍持ちが何人もいるとは限らないのだが、警戒するに越したことはない。ただでさえここ最近は鎮守府との付き合いというのも始めているため、侵略者気質の同胞（はらから）は施設に対して脅威になりかねない。それに、叢雲が襲われたという未知の深海棲艦は、未だ鎮守府側でも発見されていないのだ。何かの弾みで施設に近付かれたら困る。

「なら、私もその哨戒お手伝いしてもいいですか？」

「そうねぇ。今日は農作業もお休みの日だし、漁も取り急ぎって程じゃ無かったわよねぇ」

「ええ。食糧は充分あるわ。今日はそれが腐らないように干物を作るつもりだったってだけね」
「なら、春雨ちゃんにも哨戒をお願いしようかしらねぇ」
寂しさを紛らわせるためか、ギリギリまで戦艦棲姫と一緒にいようとする春雨。その方が別れが辛くなりそうなのだが、本人が望むのだからそれを否定するのはナンセンスというものである。
それに、たまには海に出ることもいいことだ。漁以外の理由で施設から少し離れるというのも、気晴らしには都合がいい。海上散歩で気分転換をすれば、精神はより安定するだろう。
「春雨ちゃんだけでなく、みんなで行ってもいいわよぉ。たまにはお散歩もいいんじゃないかしらぁ」
「そうね、あんまり施設から出てないし、Ｓｔｒｏｌｌ（散歩）もいいわね！ウスグモとムラクモも行きましょ！」
「そう、だね。姉さんも行きましょう」
「私は別に……いや、行くわ。やっぱり海の上の方がこの怒りが落ち着くかもしれないし」
というわけで、午前中は戦艦棲姫といつもの４人組で施設近海の哨戒をすることとなる。
叢雲に関しては、最初は乗り気では無かったものの、仲間達と一緒に行動し、本来の戦場である海上にいることで、常に纏わりついてくるイライラが多少抑え込めるかもしれないと結果的には便乗。薄雲に誘われたというのが一番の理由だったりするのだが、本人は否定。

哨戒は、いつも鎮守府の艦娘達が来る方向とは逆方向に向かう。そちらは飛行場姫の艦載機と、コマンダン・テストの目でどうにか出来ているため、真逆の方向を確認していた。
漁ではない理由での海上に、春雨は少しだけテンションが上がっていた。相変わらず両脚は消した状態で航行しているので、誰よりも身長が低くなってしまっているものの、そんなこと気にした素振りすら見せずに楽しんでいる。

「やっぱり海の上はいいですね。自分がそういう存在なんだって再認識出来ます」
「そうね。艦娘も深海棲艦も海から生まれているんだもの。こうしているのが一番落ち着けるでしょうね」
　海の上を踊るように戦艦棲姫の周囲をクルクルと回りながら、気持ちよさそうに滑走する様は、春雨の中から寂しさを飛ばしているように見えた。トラウマを刺激されるようなこともなく、正の感情しか出てきていないようにも見える。悪くいえば、緊張感がまるで無い。
「本来の目的忘れてんじゃないかしらアレ」
「まあまあ。春雨ちゃんもああいう息抜きは必要ですよ」
　哨戒という任務のことを忘れているのではと思えるくらいのハイテンションに、叢雲は呆れ気味。
　いつも気を張っているわけではなく、あるがままに生きているだけではあるのだが、こういう時間はやはり必要。普段と違うことをするというのは、それだけでも精神的に気分が良くなる。
「ハルサメ、哨戒哨戒ー」
「あっ、そうだった。ちゃんとお仕事しなくちゃ、ですね」
　ジェーナスに突っ込まれて自分のやるべきことを思い出し、アハハと苦笑しながら周囲を観察する春雨。
　もう施設すら見えないくらいの場所まで来ているため、３６０度全てが水平線。何か特別なものがあるわけでもなく、むしろ何も無い。
「異常無し、でいいのかな」
「異常があったら困るわよ」
　何も見えないのだから、異常など無い。目がいい戦艦棲姫も何も言わないくらいなのだから、それは本当に何もないということに他ならない。
「あっちの方に野良の同胞（はらから）がいるわ。でもアレよ、知能がカケラもないイロハの何かだから、勝手に消えるか他の艦娘共に討伐されるかして終わるんじゃないの？」
「そうね。あれは私達の害にもならないフラフラしてるだけの獣よ。陸に近付かないことを祈ってやるしか、私達には出来ないわ」

非常に遠くの艦娘を感知した叢雲のセンサーが、自然発生したイロハ級を見つけたらしいが、その程度なら異常とも感じ取れない。そんなもの海の真ん中ならば適当に現れては勝手にいなくなるというのがザラ。

戦艦棲姫も浮上してきたそれをその目で確認出来たようだが、わざわざ近付いて何かする必要はないと判断した。

ちなみに叢雲が感じ取り、戦艦棲姫が視認したそれは、俗に言う駆逐イ級なのだが、2人の言う通り、人間や艦娘に敵意すら持っておらず、そこでただ生きているだけの存在。

そういうものは、放置がベストである。そういう生き方をしているのだから、他者が首を突っ込むのはナンセンス。もしあちらがこちらのことに気付いて、襲いかかってくるなら駆除せざるを得ないし、懐いてくるのなら施設に連れていくくらいする。

「でもまぁ、こんなところにも生まれるのねとは思ったけれど」

「そうなんですか？」

「ええ。この辺りの海はあの姉妹の影響範囲でしょ。あの子達、仲間を増やそうなんて思ってないから、ああいうのが生まれることは無いはずなのよね」

そうなると、別の場所からここまで移動してきたという可能性もある。何故知性のない駆逐艦がそんなことをしたのかは不明。

ひとまずは今までと同じように、その駆逐艦は放置するという方向に持っていかれた。

しかし、そこにその存在がいるということが、今後に繋がってくるのだが、それはまだ誰もわからない。

ひょんな来客

戦艦棲姫との哨戒を終え、施設に戻ってくる春雨達。久しぶりに海に出たということで気分も晴れ、発作とは程遠い心境のままに昼食へ。叢雲も今だけは怒りがかなり抑え込まれており、随分と安らいだようにも見える。

逆方向を哨戒していた飛行場姫とコマンダン・テストも異常無し。施設の周辺には今のところ何ら異常も無く、夜ならば戦艦棲姫も出て行きやすいだろうと判断された。

春雨の元いた鎮守府にしか場所はバレていないため、この周辺では早々何かを見かけることはない。強いて言えば槍持ちがフラフラとこの辺りまで来ていたくらいである。同胞(はらから)はいるかもしれないが、艦娘はまずいないだろう。ドロップ艦ですらこの辺りでは見かけない。

「そういえば姉姫、こっちの哨戒ルート、野良の同胞(はらから)が紛れ込んでたわよ。ほら、駆逐艦の一番ちっちゃいの」

「へぇ、珍しいわねぇ」

昼食を摂りながらの会話で、叢雲が感知し、戦艦棲姫達が視認した野良のイ級の話題が出てくる。春雨と薄雲、ジェーナスはその姿を見ていないのだが、2人がいるというのだから、そこにそれがいることは夢でも幻でもない。

「この辺りは私も妹ちゃんも望んでいないから生まれないはずだけれど」

「そうね。私もお姉も同胞(はらから)増やしなんてカケラも考えてないから、外から来ちゃったんでしょうね」

2人とも同じ意見である上に、戦艦棲姫も元からそうなのだろうと考えていたため、あの時に見かけたイ級は何処からか迷い込んだ野良であることが確定した。

陸上施設型の陣地の周囲には、その持ち主の意思を反映したイロハ級が生まれるという特性があったりする。人間や艦娘は知らない真実なのだが、深海棲艦の中では当たり前のこと。

姉妹姫の意思は、『これ以上は必要ない』であるため、意思があやふ

やな同胞(はらから)が増えることは無かった。そのため、近海に現れるモノは全てが迷い込んできたモノである。
「それは1体だけだったの？」
「ええ、私にはそう見えたわ。叢雲は？」
「私も1体しか感知してないわ。群れから逸れたとかじゃないの？」
もふもふと食べながら叢雲も答える。視認したのが1体でも、海中に何体かいた可能性はあるが、感知したのが1体だというのなら、それはもうそれしかいないということに他ならない。
深海棲艦が群れを作るかはわからないが、1体だけがポツンといるのはそこそこ珍しいらしい。鎮守府の近海ならわからなくもないが、こんな海の真ん中だと同胞(はらから)同士で群れを作るのが一般的なのだとか。
「少しだけ知性があるのかもしれないわねぇ。獣だから私達みたいに言葉とかは話せないけど、戦いたくないっていう意思を持ってて1体だけで群れから離れたのかもしれないわぁ」
「それで自由気ままに泳いでたってことかしらね。まぁそれならその子のやりたいようにやっているだけだから、邪魔をするのも違うわね」
来るものは拒まないが、わざわざ首を突っ込むようなことはしないというのがこの施設のやり方。そういうのがいたということだけ覚えておいて、それ以上は触れないことにした。
「そういう同胞(はらから)って、今までこの施設にいたことがあったりしないんですか？」
春雨からの素朴な疑問。この施設は長年ここで生活しているのだから、実は過去にも似た感じの獣の深海棲艦が訪れたことがあったのだろうかと、何の気無しに聞いた。
対する姉妹姫は、少し間を置いてから、首を縦に振る。
「気まぐれにここに来て、何をするでもなく出て行ったっていう子はいないわけじゃないわぁ」
「来るモノ拒まず、去るモノ追わず。この施設のやり方はそれだから。ここに来たのなら餌くらいはあげたけど、出て行くのならそれで縁はおしまいってしてるのよ」

過去に数度あるらしく、古参のジェーナスも何体か見た覚えがあるそうだ。その時は今2人が言った通り、ふらりとやってきて少し近海で泳いだ後、気付いたらいなくなっていたとのこと。わざわざ餌付けしたりして、ペットのように飼おうとすることもないようだ。

迷い込んできたのならある程度は歓迎する。だが、あくまでもそれで終わり。冷たいとか情が薄いとかそういうのではなく、相手の意思を尊重しているのみ。意思が無くとも本能はあるため、施設を離れるのはそちらが働いていると判断して放置に徹するとのこと。

「もしかしたらこっちの方まで来るかもしれないけれど、その時は今言ったようにするから。どうせそのタイプは陸には上がってこれないし」

「そうねぇ。言ってしまえば、海を自由に生きているクジラやサメの類と似たようなものだものねぇ。艦娘も、航行中にそういうものを見かけたらそっとしておくでしょう？」

艦娘の時に任務のために遠出した時に、深海棲艦の領海に入る前などにそういった海洋生物を見ることがあることは、春雨にも覚えがあった。運がいいとイルカと並走出来たり、運が悪いと深海棲艦の前にサメに近付かれたりと、思った以上にそういう生物が生き残っていることを知る。

そういうときは鎮守府のやり方として、放置ということになっている。襲ってくるようでも、威嚇射撃くらいで止めて小さな怪我すら負わせることはない。あちらから離れるのを待つ。

このイ級に対しても、それと同じだと中間棲姫は語る。

同じ深海棲艦だとしても、その在り方は姫とイロハ級ではまるで違う。生き方が違うのだから、扱い方もそれ相応にする。対話が出来ないのだから、無理に近付く必要はない。

「わかりました。確かに、ありのままに生きているモノに干渉するのは良くないですね。こちらから触れに行くのはやめておきます」

「ええ、そうしてちょうだいねぇ。でも、この島まで来るようなら餌はあげてもいいわぁ。それでここに留まるってことは今まで無かったからぁ」

「そうなんですね。じゃあ、もしここで見かけるようなことがあったら、そうすることにします」
などと話している間に、叢雲が何かに気付いたように施設の外を向いた。
「姉さん、どうかしましたか？」
「んぐんぐ……今話してた同胞（はらから）、こっちの方まで来てるわよ」
叢雲の索敵範囲にその反応が入ったらしく、さらにはそれが哨戒中に見た駆逐艦と同じであるということまで察知した。
噂をすれば影と言うが、まさか立てたフラグを即座に回収するとは思っていなかったため、みんながそれなりに驚いた。
「別に私達の姿を見ていたとか、そういうことは無いと思うけど。たまたま航行してたらここに近付いただけよ」
「島を荒らすようなことをするなら、こちらもそれ相応の対応をしなくちゃいけないわぁ。それでも追い払う程度にするけど」
万が一のことを考え、食事が終わり次第イ級の動向を見に行くとのこと。確かに、フラフラしていても明確に侵略者の本能を持っているのなら、この施設に害を及ぼす可能性がある。

昼食後、姉妹姫と戦艦棲姫、そしていつもの４人組は、その駆逐艦が流れ着いたであろう島の端へと向かう。
叢雲が常に感知してくれているため、その場所は完全に把握しており、既に島から見えるどころか触れられるかもしれないくらいの場所にまで来ているとのこと。
それでも攻撃をしてくるようなことは無いため、最初に危惧していた侵略者としての本能は持っていないように見える。
「ここまで来て何もしないってことは、ただ来ただけって感じね」
「ええ、ひとまず安心だわぁ」
施設第一の姉妹姫は、まずは何もないことにホッと息をつく。これで侵略者気質を備えていたら、ここまで流れ着く前に砲撃の１つでもしてきているだろう。

「わ、ホントにいるわ！」
向かった先には、本当に見たことのある深海棲艦、駆逐イ級がいた。
バケモノのように変異した魚というイメージのそれは、口の中に主砲を備えていたり、手足も無ければヒレもない、意思のある魚雷みたいなモノ。ただしサイズはなかなかのもので、子供では持ち上げるのも一苦労しそうなくらい。パッと見で全長1メートルくらいはある。
しかし、強面な見た目とは裏腹に、かなり大人しい。いの一番に近付いたジェーナスに対して、反応らしい反応は見せず、身体をそちらに向けるだけ。鳴き声のようなものもあげず、じっとジェーナスの方を見ている。
「すごく大人しそうよ！　怖がってる感じもしないし！」
「ジェーナス、ちょっと待ちなさい」
陸にまで来ていたため、ジェーナスが手を伸ばそうとするものの、飛行場姫がそれを止める。今は大人しくても、そんなことをして突然噛みつかれたらひとたまりもない。サイズからして、顎の力は相当なモノだ。ジェーナスの腕などいとも簡単に捩ぎ取ってしまうだろう。
「えーっと、じゃあ、お話ししてみましょ！　あなた、何処から来たの？」
人語を解せるわけではないのだが、イ級に話しかけてみるジェーナス。勿論対話になっていないのだが、やらないよりはやってみようの精神。散歩中の犬に話しかけるようなものなので、その行為そのものに意味はない。
当然イ級は無反応――かと思いきや、身体を反転させて、あっちの方だと訴えるように身体を揺らす。
「え、もしかして、こっちの言葉を理解出来てる？」
戦艦棲姫の言葉に対して、小さく頷くように身体を揺らす。関節らしい関節が存在しないため、反応は全て全身運動になるのだが、少なくとも『はい』か『いいえ』が答えられるくらいの知能があるということだ。
イ級でそこまでの知能を持っている個体を見るのは、中間棲姫でも初めてだったりする。たまたまこの施設に近付いてきた同胞（はらから）は、気ま

ぐれにふらりと立ち寄って、何の反応もせずに住み着いたかと思うと、またふらりと離れて行く、ある意味野良猫のような存在。
　しかし、このイ級は違う。薄いかどうかはわからないが、明確な意思を持っている。普通の個体よりも明らかに賢い。そういう突然変異なのかはわからないが、自分の言葉は紡げなくてもこちらの言葉は理解している。
「わ、わ、こんなの初めてじゃない！　すごいすごい！」
　それを見てテンションを上げるのはジェーナスである。それだけの意思があるのなら大丈夫だろうと改めて手を伸ばすと、イ級はそれに擦り寄るように近付いてきた。頭、というかほとんど眉間のような場所だが、そこを撫でられてご満悦な様子。
　触れた感触は海水で濡れていることを加味しても少しヌルッとしているが、気になる程でもない。むしろ、ずっと撫でていたくなるくらいの不思議な感触。全身を艤装で包んでいるようにも見えるのだが、それともまた感触が違うので不思議としか表現が出来ない。
「これはまた珍しいものが来たわねぇ……扱いに少し困るわぁ」
　中間棲姫としても、これに関しては少し悩んでいる様子。それが戦艦棲姫のような姫なら、対話によって友人となるのだが、賢い獣という判断が難しい相手となると、即断出来ない。
　ジェーナスは大喜びだが、ここにずっと留めておいてもいいものか。これが新たな火種を運んでくるかどうかもわからないし、だからといって見捨てるのも気が引ける。今まで通りの放置も、これだけ知能があるとなると、何とも言えない。
「とりあえず、ここにいる間は餌を提供してあげるってことでよくない？　それならいつも通りよ。これだけ知能があるとしても、明日の朝にはふらっと何処かに行ってるかもしれないし」
「……そうねぇ。まずは何日か見てみましょうかぁ」
　簡単に答えが出せそうにないため、まずは現状維持、この場所にいるのならここにいてもらって放置するというところに落ち着いた。代わりに、ここにいる間は朝昼晩の餌は提供するし、安全は保証する。
　ただし、少しでも害があるようならば、施設から追い出すなりする

ことになるだろう。こちらの意思が理解出来ているのなら、話もちゃんと聞いてくれるはず。
「こ、こういうのって何を食べるの？」
「前は確か生魚をモリモリ食べてたはずよ。釣りが捗るわ！」
「だったら自分で食べてんじゃないかしら。ここに来るまでにも釣れるんでしょ」
「そうかもしれませんけど、ここに居着いたら食べさせてあげることも必要かも……」
４人組はもうイ級をここに匿う気満々で話をしていた。流れからしてそうなりそうだったので、もう姉妹姫はその方向で行くことで決めた。

ひょんなことから施設にやってきた知能が少し高い駆逐イ級。たまたまやってきたのか、明確な意思を持ってやってきたのかは、まだ定かではない。

人懐っこいイ級

哨戒中に発見された野良の駆逐イ級が施設へとやってきた。そのイ級は普通のそれより知性が高いようで、自分の意思を伝える力を持っており、攻撃をしてくるどころか、気まぐれに施設の周囲をふらつくこともない。

ジェーナスに懐いたかのように撫でられてご満悦のようにも見えた。表情など無いような存在なのに、そうしているように見えたのは、このイ級が何処か特別な存在なのではと思わせるのに充分だった。

「何か名前をつけた方がいいかしら」

「それは……どうなんだろう」

一応施設内でもその存在を認め、餌を与えるくらいはするということで、殆どペット扱いである。それ故に、ジェーナスが名前をつけようかと言い出した。

そのイ級に対して妙に愛着が湧いているのはジェーナス。過去にああいう存在を見たことがあるからこそ、今回のような賢いタイプには興味津々のようだ。

「Ｄｏｎｎａ（ドナ）Ｊｏ（ジョー）か、Ｓｔｅｐｈａｎｉｅ（ステファニー）か、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ（ミシェル）がいいと思うんだけどどうかしら！」

「あー、ジェーナス、名前をつけるのは今はやめておきなさい」

このままだとテンションが上がり続けていろいろとやってしまいかねないため、飛行場姫がここで止めた。特に名前をつけるのはダメだと念を押す。

今でこそ懐いているような雰囲気のイ級だが、まだこちらのことをどう考えているかはわからない。それこそ先程の反応はたまたまかもしれないし、知性があるということは突然侵略者の本能に呑み込まれて攻撃してくるという可能性すらある。とはいえ、ここにいるのは姫級ばかり。イロハ級では力の差がありすぎるため、攻撃することはなさそうではあるが。

そんなまだ扱いが微妙な相手に対して名前をつけた場合、いざ別れ

の時に辛くなる。最悪な場合、自分の手で決着をつけなくてはならなくなるのだ。愛着が湧けば湧く程、辛さは倍増していくだろう。まだ完全に懐き、施設の一員として認識されていない今、深入りするのは軽率。

「むー、前もそういうこと言ってたわよね妹姫」

「1日も経たずに出て行った野良の駆逐艦に名前つけて、知らない間に消えた時に泣きべそかいたのはアンタでしょうが。情が湧きすぎると、絶対後悔するわ。名前をつけるならもう少し後にしなさい」

「はーい。それまでに何にするか決めておくから！」

あのイ級が施設に居着くことを確信しているかのような話し方。真っ先に近づいたのはジェーナスであり、最初から頭を撫でに行ったのもジェーナス。イ級が最も懐いているのはと言われれば、おそらくジェーナスであろう。感覚的に、あのイ級がもう自分達から離れないのだと信じている。

今回のイ級は今までとは明らかに違うのは誰もが感じている。明らかに賢いし、こちらの表情も行動もしっかり見ている。そうなれば、より姫級との力の差を理解して懐いてくる。もしくはここまで多くの姫級が集まっていることに恐怖を感じて離れるか。

「前からあんな感じだったの？」

「うん、私がここに来てから1回だけ野良の同胞（はらから）が流れ着いたんだけど、その時も匿いたいって話してたね。結局その子は半日もしない内に出ていっちゃったんだけど」

薄雲も一応の経験者。その時はここに流れ着いた後、餌をやることも出来ずにさっさと施設から離れたらしい。

その時も、ジェーナスは親身に扱い、この施設で匿おうと提案した。勿論、姉妹姫はどちらも頭を悩ませたものである。まるで捨て猫を拾ってきた子供の訴えに頭を抱える両親である。

「あの子が深海棲艦化した時のことに関わってんじゃないの？　ほら、確かジェーナスって自己嫌悪でしょ」

叢雲が言うと、春雨と薄雲は確かにと納得。

自分のせいで周りが悪い方向に向かうと発作を起こすジェーナス

のことだから、深海棲艦化の理由もそれが妥当。例えば、ジェーナスを庇って誰かが沈んでしまったとか、ジェーナスのミスによって艦隊が全滅してしまったとか。勿論その理由を本人に聞くのは禁じ手であるため、真相は謎のままにしておくものの、自分達もそうというのもあり、仲間に被害があったのは確定である。

それもあるから、仲間と認定したものには誰にだって楽しく仲良く付き合う。自分が大嫌いだから、周りに楽しくなってもらいたいという本質が働いている。同胞(はらから)は全て仲間とすら考えていそうだ。

だから、見つけた仲間は放置が出来ずに名前までつけて側に置きたがる。今度こそそんな失敗をしないように。仲間が傷つくところを見たくないから。

「まぁ、優しいのには変わりないし、悪いことじゃないよね」

「うん。ジェーナスちゃんはあれでいいと思う。でも、あの子がいなくなったら確実に発作を起こしちゃうから、その時は私達で支えてあげようね」

「そうだね。私達のことを支えてくれるんだもん。私達も支えてあげなくちゃ」

叢雲も小さく溜息を吐きつつ、否定はせずしっかりと同意していた。

「でも、懐いて施設の一員になってくれたら、それはそれで楽しくなるかもね」

ペットと呼んでいいのかはわからないが、今までとは違った仲間が増えるかもしれない。そう思うと、また寂しさが薄れる。仲間が増えれば増えるほど、春雨は安定して行くのである。

時間としては昼食後であるため、午後からはフリーの時間。午前中と同じように哨戒をするのも良かったのだが、人員を増やして二手に分かれてそれを実施したので、見たいところは全て見ることが出来ている。そのため、戦艦棲姫の最後の時間は、大人達との静かなティータイムを過ごすことにした。

いつもならジェーナスが紅茶を淹れたりしているのだろうが、今はあのイ級に首ったけのようで、４人組でそちらの方に向かっている。さらには松竹姉妹や伊４７までもがそれに便乗していた。子供組と大人組がバックリと分かれた。

まずは子供組。ぞろぞろと集団でイ級のいる岸にやってきた。

「うお、ホントにイ級じゃねぇか」

「こんなに人懐っこいイ級なんて初めて見るわ」

早速松竹姉妹がその姿を見て驚く。こちらの姿を見ても、なんの警戒もなくジッと見つめてくるだけ。身体を小さく揺らして歓迎しているように見える。

早速ジェーナスが保管されていた生魚を与えると、美味しそうに食べていた。そして、頭を擦り付けてくる。ここまで来ると、見た目は完全に別ではあるが大型犬を相手にしているような感覚。

その一挙手一投足にジェーナスは喜んでいた。やはり、仲間が楽しんでいるところを見ていることがジェーナスにとっての喜びとなっているようだ。

「この子の言葉がわかればいいんだけれど、どうしてもね」

「獣と意思疎通なんて出来るわけないでしょ」

「もう、ムラクモはロマンが無いんだから」

いくら賢いイ級とはいえ、言葉どころか鳴き声すら無く、その身体の構造から表情も無いため、感情表現は全身を使ってになる。今のところは喜怒哀楽の喜と楽しか見せていないが、それは誰が見てもそう思えるように身震いなどで表現していた。

だが、どうしても細かいところまではわからない。本当に伝えたいことがあるのなら、それを知りたい。

「あっちの方から来たって言ってたよね」

春雨が見た先には、当然ながら水平線しか拡がっていない。逆側なら、行った先に鎮守府があることはわかっているのだが、こちら側には何があるのか。進んでいけば最終的に陸があるのだろうが、それがどんな場所かは誰も知らない。

「私の司令官に調べてもらおうか。あっちに何があるか」

「それ、いいわね！　私達はここから出られないけど、あの人達ならいろいろＲｅｓｅａｒｃｈ（調査）してくれるかも！」
「その前に、ここにイ級が住み着くかもしれないことは伝えておかなくちゃだしね。知らずにここに来たら、それこそ攻撃されちゃうかも」
　今はまだ叢雲との兼ね合いもあるため、艦娘が直々にこの施設を訪れることは少ないとは思うが、万が一のことを考えると、ちゃんと伝えておくべきことだ。
「アクセサリーとかつけてあげられないかしらねぇ。身体の表面ツルッツルだから、リボンとか結んであげるのも難しいわよねコレ」
「傷ならつけてあげられるわよ」
「ムラクモは物騒すぎ！　それだと可哀想でしょ！　せめて色を塗り替えてあげるとか」
「それはそれで虐待みたいで可哀想だよ……」
　まだ施設で保護することが決まっていないため、何処をどうするとかを独断で決めるわけにはいかないのだが、そのままだと他のイ級と見た目が何も変わらないため、何かしらの目印が必要かもしれない。
　それは名前と同じようにまた後日決めればいいこと。そもそも本当に居着くかはまだわからないのだ。飛行場姫が言っていた通り、いろいろと手を加えると、いざ別れた時に辛い。
「おぉ……可愛いヨナ」
　伊４７が伸ばした手にもしっかり擦り付いてきたため、ここにいる者全てが心許せる相手であるという認識をしているのは確かだ。完全に懐いていると言ってもいい。
「松姉ぇ、俺達も触ってみようぜ」
「そうね。こんなに懐いているなら、少しくらい触れても大丈夫よね」
　そうやって、叢雲を除く全員がイ級に触れていく。イ級も満更では無かったようで、触れられるたびに嬉しそうに身体を震わせた。

一方、ダイニング。大人組のティータイムは、戦艦棲姫の送別会の

ようなモノになっていた。やることはいつもと変わらないのだが。
「最後の最後によくわからないものが見つかったわね」
コマンダン・テストが淹れた紅茶を飲みながら、戦艦棲姫がぼやく。
旅に出ようと思ったその日に、また施設に新しいものが来てしまった。槍持ちの時ほどは心配が無いものとはいえ、今までに見たことのないタイプのイ級であるため、多少は気にかかるところはある。
甘く見ているわけではないのだが、駆逐艦が何をしたところでこの施設が崩壊するようなことはないだろう。しかし、今のジェーナスの入れ込みようもあり、何かあった時の精神的な部分はやはり不安である。
「ここ最近は立て続けねぇ。春雨ちゃんが来て、叢雲ちゃんが来て、次はあの子。こんなに連続で増えたのは初めてじゃないかしらぁ」
「ええ、さすがにこれは今まで無かったわ。あの鎮守府と付き合いを始めるってのも含めると、ここ2週間くらいが怒涛の日々だったように思えるわ」
中間棲姫が空っぽでここに生まれ、『観測者』に中身を与えられ、飛行場姫という妹を得て、ここまでの施設を作り上げるという一連の流れが最も濃厚な日々だったとは思うが、今の毎日はそれに匹敵するのではないかと思えるほどに、毎日何かしらのイベントがある。姉妹姫でもここまで密度の高い日々を送るのはなかなか無いと言うほどだ。
戦いから離れ楽しく生きるために、毎日を平々凡々に過ごすのがこの施設だ。細やかな変化で一喜一憂するくらいがちょうどいいのに、ここ最近はその差がとんでもない。
「旅に出るのはやめておく？」
「いや、もう出て行くわ。多少思うところはあるけど、身体が外の刺激を求めているの」
「残念。いつでも居着いてくれて構わないのよぉ」
「気が向いたら今回みたいに長居させてもらうわ。戻ってこれる場所があるってことが、旅をまた楽しくしてくれるのよ」
イ級が流れ着いたことでほんの少しの不安の種は出来てしまったが、それはもうこの施設の者に任せ切れるだろうと、戦艦棲姫は自分

の考えを曲げなかった。本能が旅を求めているのは確かだし、ここが滅んでいることはまず無いと信頼しているからこそ出ていける。
「でも、どうせ出ていくなら、あの駆逐艦の出所でも調べてみようかしらね。どうせ今回はアレを見かけた方に行こうかなって思ってたところだし」
「危ないことに首を突っ込んじゃダメよぉ」
「わかってるわよ。私だって生きている限り旅を続けたいんだから」
命を大切にしているのは、穏健派の深海棲艦の特徴かもしれない。戦うくらいなら逃げる。本能が戦いではなく別のところにあるのだから、それを優先するのは当たり前のこと。
「この海で何かが起きようとしているのは確かよね。少しの間、陸にＡｃｈａｔｓ（買い出し）に行くのも控えた方がいいかしら」
「Ｅｓｔ―ｃｅ（そう）（で）ｖｒａｉ（ね）．　まだ食材はありますし」
リシュリューとコマンダン・テストも、ここ最近の海の動向からして施設の外には危険が多いのではと考えているようである。
ここに戻ってきた時に仕入れた食糧などは、まだまだ残っている。遠征はまだまだ先だ。それはある意味都合がいい。
「海の平和に関しては、アタシ達じゃなく人間と艦娘に任せた方がいいわ。お姉、鎮守府に伝えておいたら？」
「そうねぇ。提督くんなら、何かしら見つけてくれるかもしれないわぁ。連絡してみましょうかぁ」
こちらでも、鎮守府にこの件を連絡しておこうということになった。施設は施設の運営だけで手一杯。世界の平和より自分達の平穏である。

もしかしたらあのイ級も、今調査している事件の何かに繋がるかもしれないし、何か不思議なことが起きたのなら、情報を共有しておいてもいいだろう。叢雲のことも伝えておかなくてはいけないし。

戦艦との別れ

その日の夜。夕食を終えた後は戦艦棲姫のお見送りの時間となった。春雨が少し発作を起こしかけたが、どうにか踏み止まり、餞別のおにぎりを作り終える。

「塩むすびで良かったんですか？」

「ええ、それが一番いいわ。具材があるのもいいけれど、そういうのが最終的に原点にして頂点になるのよ」

「あはは、わからなくもないです」

春雨が丹精込めて握ったおにぎりを袋に詰めて、戦艦棲姫に渡す。春雨自身の手があまり大きくなかったが、それでもちょうどいいと喜んでそれを受け取った。

外はもう暗く、探照灯をつけなければ視認がしづらいくらいの夜。それを理解してか、戦艦棲姫も黒尽くめの服装を着込んで、なるべく目立たないように移動するようだ。こうなると目立つ艤装も真っ黒であるが故に闇に溶け込んで、陸までは誰にも見つからないように向かうことが出来そうである。

今回向かう方向は、イ級の出処を調査してみるというのもあり、今日の午前に哨戒をした海域になる。それだからか、岸まで来るとイ級もしっかりお見送りに参加した。

「まだいてくれてるのね。大丈夫？　夜だけど陸に上がれないからここにいてもらうしかないんだけど」

イ級の姿を見て安心しつつ、ジェーナスが少しだけ心配しながらイ級に駆け寄ると、心配するなと言わんばかりに身体を震わせて、その存在をアピールした。

やはり知性があるようで、こんな夜でもしっかり夜目も利いているようだ。暗がりで来たとしても、それがジェーナスであるとちゃんと認識出来ているし、どんな状況でも力加減を間違えない。

その様子を見て、戦艦棲姫は心底安心したような表情になる。唯一の心配事といえば、土壇場で現れたこのイ級である。

施設に害を与えるような存在ではなさそうと確信出来た。それほ

どまでに賢く、この今の状況でもジェーナスに懐いている様を見せているのだから、おそらくこの施設に居着く。
逆に、これほどまでに賢いイ級の出処は、ちゃんと調べておいた方がいいかもしれない。まずは最初に見かけた場所から。少しだけ時間を使って、真相を知ることが出来たらいい。
旅人とは探求者。真実を知ることもまた旅の1つ。
「今回は少し長く世話になったわね」
「お昼にも言ったけれど、いつでも住人になってくれて構わないわよぉ」
「昼に言ったけど、私の本能が旅を求めてるのよ。だから、帰る場所としてずっとここにいてちょうだい」
「勿論。私達はここから動かないから、安心して旅に出てちょうだいねぇ。また来てくれるのを待ってるわぁ」
別れを惜しみつつも、戦艦棲姫の本能を邪魔するわけにはいかないため、握手して最後の挨拶とする。
これが今生の別れになるわけではない。気まぐれに戻ってくるので、いつになるかはわからないが、戦艦棲姫は必ずこの施設に戻ってくる。だからこそ、不安は無い。
「今回は戻ってくるのも少し早いかもしれないわ。一応、その子のことも調査してみるから」
「ええ、何か危ないことがあったら、すぐに戻ってきてくれても構わないわぁ。こちらでも、提督くんには話しておくつもりだから」
「ええ、お願い。鎮守府で調査してくれれば、私1人よりも細かくわかるかもしれないものね」
深海棲艦に詳しいのは勿論同胞(はらから)なのだが、たった1人で調べるよりは、人海戦術が使える鎮守府の方が調査が進む可能性は高い。その内容を聞いて、わかることを話すとかの方が、事態は進展しそうである。
「あ、もしその人間達の部隊とかち合った時に、目印的なモノが必要ね」
「なら、わかりやすく白旗を振ったらいいわぁ。私達もそうしたことで、あちらも対話に応じてくれたからぁ」

「ん、わかった。なら、それらしい艦娘達を見かけたら白旗を振ることにするわ。私がそうするということも伝えておいてちょうだいね」
基本的にはかち合わないように、調査は夜にやるつもりではあるのだが、万が一のことを考えれば、そういうことを知っておいてもらった方がいい。
艦娘達は夜に調査をすることは無いようなので、昼は鎮守府、夜は戦艦棲姫と、しっかりと役割分担するのが良さそうである。戦艦棲姫は旅の途中でやるだけというイメージであるため、鎮守府からの指図を受けるわけでは無いのだが。
「それじゃあ、そろそろ行くわ。あんまりここで話していても名残惜しくなるし」
「なってくれてもいいのよぉ？」
「姉姫、なんだか今日は押しが強いわね。まぁ、気が向いたらね」
戦艦棲姫は海の闇に消えて行くように施設を去って行った。見えなくなるギリギリまで手を振りながら、少しゆったりとした航行速度で。
それに対して、春雨も大きく手を振ってこちらの姿を見せ続けた。探照灯で照らすなんていう不躾なことはせず、その旅路に何事もないことを祈りながら、最後まで手を振り続けた。
水平線の向こうに辿り着くことなく、夜の闇に溶け込んだ瞬間、春雨はやはり膝を突く。昨晩にも発作を起こしているのだが、それに近いほどに大きな発作に襲われようとしていた。
数日間、生活を共にしていた戦艦棲姫との別れは、周りに誰がいようとも寂しさを過剰に湧き上がらせるには充分な要因。数時間でも海風達と交流し、その別れで発作を起こした時と比べると、さらに上位の苦しさを訴えるように悶える。
「ひっ……ひっ……嫌ぁ、寂しい、寂しい、お別れは嫌だぁ……」
「春雨ちゃん、よく頑張ったわぁ。戦艦ちゃんに迷惑をかけないように、ずっと耐えていたのよねぇ。本当に偉いわぁ」
即座に中間棲姫が対応。こうなることは誰もが読めていたというのもあり、戦艦棲姫のお見送りの最中も少しハラハラしていた。

「大丈夫よぉ。戦艦ちゃんとはまた会えるわぁ」
「ええ、アイツはまた帰ってくるわ。今までもそうだったんだから」
中間棲姫だけでは足りないと、飛行場姫も春雨に対応。２人がかりで春雨を挟むように抱きしめて、温もりを与える。
姉妹姫の温もりで少しずつ落ち着いていくが、激しい発作のせいで、まるで風邪でも引いたかのようにゼエゼエと息を漏らす。すぐに落ち着きを取り戻すことは出来そうにないため、そのまま２人の手助けを借りながら施設に戻っていった。

春雨はそのまま、疲れ果てて眠りについてしまった。まだお風呂にも入ってないけれどと少し心配されたものの、わざわざ起こしてまでそれをやらせるのは酷だと、そのまま寝かせることとした。
今日は姉妹姫が一緒に寝た方がいいかと話したが、薄雲やジェーナスが任せてほしいとベッドルームに運んだ。誰もいない間に目を覚ましたらまた発作を起こしてしまうだろうから、まずは子供達に風呂に入らせ、春雨を決して独りにしないように心掛けた。
「ありがとう姉姫、ここからは私達は受け持つわ」
「駄々捏ねたら私が張っ倒すから」
「姉さん、それだけはやめてくださいね……」
頼もしい子供達の行動に全幅の信頼を置いて、姉妹姫はベッドルームから離れる。あの３人なら、途中で目を覚ましたとしても落ち着かせることが出来ると信じて。
姉妹姫はそのままダイニングへ。時間は遅いのだが、繋がるようなら提督に現状を話しておきたいと考えたからである。今の状況なら叢雲にも声が届かないため、落ち着いて話が出来る。
本来なら業務時間外であるはずなのだが、連絡をしてみたら普通に出てくれた。残業中なのかと聞いてみたら、苦笑されてしまった。隣に五月雨もいるようなので、あちらにもいろいろとあるらしい。
『叢雲の件はどうにかなったのかい？』
「ええ、何とかなったわぁ。貴方のおかげで、視野が拡がったみたいで

ねぇ。怒りが大分抑え込めるようになったみたいよぉ」
『それなら良かった』
　連絡自体は昨日の今日なのだが、施設の状況、特に叢雲の心境は改善されている。話しづらいかと思われていたが、すぐに連絡再開が出来たのは、あの時の提督のおかげでもある。
　叢雲自身も多少は提督に感謝の念があると言っていたことを伝えると、提督は心底嬉しそうに笑みを浮かべた。自分のやったことが施設にとっても良い方向に進んだことを素直に喜んでいる。
『それで、こんな時間でも伝えたいことがあるから連絡してきてくれたんだね』
「ええ、叢雲ちゃんのこともあるのだけれど、もう1つ、ね」
　ここからが本題。知性のある駆逐イ級の話をする。今は大人しく、施設の者達に懐いているのだが、艦娘相手にはどういう行動に出るかはまだわからない。また、艦娘にも危害を加えようとしない可能性はあるのだが、艦娘側からしてみれば駆逐イ級なんて討伐の対象に過ぎないのだ。
　ただでさえ見た目が他の個体と全く変わらないため、施設に近付いてそれを見たら、まず間違いなく攻撃を加えるだろう。事前に知っていればそういうこともしない。
『なるほど、了解した。施設近海にいる駆逐イ級は攻撃しないよう、こちらに指示しておく。だが、何かしらの目印か何かがあると助かるんだが』
「今ジェーナスちゃんが何かしようと考えてるみたいよぉ。リボンを巻いたり、装甲に目印を付けたりするって意気込んでるわよぉ」
『それは助かるね。それを持っている深海棲艦は攻撃対象外と認識しておけば、余計な戦いは起きない』
　駆逐イ級でそういうことが起きているのは、施設でも初めてのこと。どうすれば最善の方法になるのかが確立されているわけでもないため、やれることは全てやってみる。
　とはいえ、この提督とならば、今回のこれが最善となるだろう。全く別の鎮守府相手なら、目印を付けたところで容赦なく攻撃してきそ

うなものだが、あちらからの信頼も大きいために、お互いに嘘は無い。
「あと、今日ここにいた戦艦ちゃんがまた旅に出たのだけれど、そのついでに調査もしてくれるそうなの。でも、こちらは同胞(はらから)1人だけだから、調査がまともに出来るかはわからないのよぉ」
『ならば、我々からも調査隊を派遣しよう。確かに、今までにない個体が現れるというのは何かが違う。こちらにも何かしらの影響があるかもしれないからね』
「本当に話が早くて助かるわぁ。もし必要なら、前の海風ちゃんみたいに、この施設に1泊してくれても構わないわぁ。でも、叢雲ちゃんとの兼ね合いもあるから、その時はちょっと相談してくれると助かるけども」
『勿論。全てそちらに都合に合わせるよ。あくまでもそちらが主体で構わない』
施設側は真摯に付き合う態度は一切変えない。そこに打算的な心境も無く、単に協力したいという優しさのみで接している。姉妹姫からの好感度は高まる一方。
『そうだ、こちらからも1ついいかな』
「ええ、こちらからばかりお願いをしているものねぇ。何かあれば力になるわぁ」
『僕の上司……叢雲のことを調査してくれた、話のわかる相手というのがだね、君と話をしてみたいと言っていてね。あくまでも君の意思を尊重するとは言っているのだが、どうした方がいいかな』
姉妹姫としては、この提督は最上級に信頼出来る人間として認識しているが、他の者となるとまた話は変わる。しかし、このように害を与えない人間とならば、別の者とも話をしてみたいという気持ちは少なからずある。
信頼出来る者が信頼している者なのだから、施設に不利益を与えるような存在では無いはずだ。しかも、この提督よりも立場が上ということは、人間により穏健派の深海棲艦の存在を知ってもらうチャンスとも言える。コミュニティを拡げていくのも悪くはない。
だが、やはり少しは不安があったりする。ここ最近立て続けにイベ

ントが起き続けているのは、海で何かあったのではないかと勘繰ってしまう程の出来事。
　これが長年築き上げてきた平和を崩してしまうのではないかと、どうしても考えてしまう。
「少し考えさせてもらっていいかしらぁ。貴方は信用しているのだけれど、他の人間となると話は変わってくるかもしれないもの」
『ああ、こちらもそう伝えておく。ならば、またこちらから連絡をしてもいいのだろうか』
「そうねぇ、叢雲ちゃんが貴方と話せるかはまだわからないけれど、頃合いを見てくれれば大丈夫よぉ。そちらの海風ちゃんのこともあるものねぇ」
　ひとまず話はここまで。お互いに伝えたいことは伝えられただろう。

　施設は一応の安寧を取り戻してはいるものの、まだ不安を全て拭い去ることは出来ない。
　海の平和は、小さく小さく脅かされているのかもしれない。

全幅の信頼を

春雨が目を覚ましたのは深夜。夕食後の比較的早い段階で眠ってしまったため、おかしな時間に目を覚ましてしまった。悪夢を見たわけでもなく、単に睡眠時間の谷間に入ってしまったことによる目覚め。

戦艦棲姫を見送ってから、発作を起こしている間に記憶が途切れていることもあり、そのまま泣き疲れて眠ってしまったのだろうと察した。風呂にも入っておらず、制服のままでベッドの中にいたため、少し潮風の匂いが染み付いてしまっていた。

「……お風呂……入らなくちゃ」

と思ったものの、ベッドでは薄雲とジェーナスに囲まれている状態であり、薄雲サイドの外側には叢雲もいる。ベッドから抜け出すことはまず出来ない。さらに言えば、ここから離れたいとも思えなかった。今独りになるのは絶対によろしくないと自分でも察することが出来た。

戦艦棲姫との別れで激しい発作を起こしているというのに、このタイミングで誰の助けもない状態で行くのは確実にさらなる発作に繋がる。ベッドから出るのも怖い。

「……明日でいいかな……でもなぁ……」

別に潔癖症というわけではないのだが、やはり風呂に入らずに眠っているという状況が、いざ気になり始めると妙に気になって仕方ない。

「……臭くないかな……みんなに迷惑かけてないかな……大丈夫かな……」

自分ではわからなくとも、ここにいる3人はどう思っているのか。そんなの春雨にはわからないものの、嫌な気分をさせているとしたら困る。だからと言って、ここから独りで出ていくことは出来ない。

「んん……春雨ちゃん……？」

春雨がモゾモゾと動いたからか、薄雲が目を覚ました。大分眠そうではあるが、殆どゼロ距離で視線が合う。

「あ、薄雲ちゃん……いや、あの……私、お風呂入らずに寝ちゃったから……」
「そうだね……気になる？」
「うん……ちょっと洗いたい……かも」
　独りならダメでも、２人なら動くことが出来るだろう。出来ることならジェーナスと叢雲にも起きてもらえたら助かると思いつつも、迷惑をかけるのも憚られる。そういう意味では、春雨はまだ動けない。
「どうにか抜け出そっか」
「だ、大丈夫かな……起こさないように動くの、ちょっと難しいよ」
「そうかもだけど、でもお風呂入りたいんだよね。私も一緒に行くから、ちょっと頑張ってみよう」
　薄雲がそう言うならと、春雨もどうにかベッドから抜け出そうとさらに身を捩った。一旦脚を消し、体積を小さくしてみたところ、なんとかジェーナスの拘束から抜け出すことが出来た。
　しかし、抜け出し切れるかと思った瞬間、ジェーナスの脚に手が強めに当たってしまった。
「あ痛っ!!」
「何よ……喧しいわね……」
　ジェーナスもこれで目を覚ましてしまい、その反応によって叢雲も目を覚ます。結局、４人全員が深夜に目を覚ますこととなってしまった。
　自分がただただお風呂に入りたいというだけで、周りに迷惑をかけてしまったようで罪悪感が湧き上がってくる春雨だったが、ジェーナスが即座にフォロー。
「あ、ハルサメ、具合は大丈夫？　結構大きな発作だったでしょう？　私達がいるから大丈夫だと思うけど、まだキツイなら寝てた方がいいかもしれないわよ？」
「う、ううん、大丈夫。お風呂に入ってない状態で寝ちゃったから、さっぱりしたくて」
「そっか、そうよね。それならシャワーくらいは浴びた方がいいわよね。姉姫はハルサメが朝風呂入るかもって言ってたんだけど、そうい

うの気になるものね。今出来るなら今やっちゃった方がいいわ。よし、みんなで行きましょ行きましょ！」
起き抜けなのに元気なジェーナス。対する叢雲は、まだ眠たそうに目を擦りながらも、せっかくだからと付き合う。
眠っている時だけは燻っている怒りがかなり落ち着くようで、最初は小さく悪態をついたものの、ここに1人残っているくらいなら便乗しようと考えたようである。
「ごめんねみんな……付き合わせちゃって」
「No problem（問題なわい）．　さっぱりしたい気持ちは私もすっごくわかるもの。私も似たようなことがあった時、変な時間でもshower浴びたりしたわ」
薄雲も大丈夫と手を繋ぎ、叢雲も溜息を吐きながらも当たり前のようについてきてくれる。
叢雲の性質が他の3人と少し毛色が違うものの、絶妙なバランスが取れているおかげで、なんだかんだでこの4人組はいい仲となりつつあるようだ。

深夜にシャワーを浴びるという滅多にしないようなことをしたことで、変に目が冴えてしまっていた。さっきまで寝惚け眼だった叢雲も、一緒にシャワーを浴びたため、眠気が取れてしまっている。おそらくベッドに入って目を瞑れば、そのまま自然と眠っていくのであろうが、今は朝起きたかのように眠たくない。
だからといって、ここから朝まで起きているわけにもいかないため、少しだけダイニングで休んだら、そのままベッドルームに戻るつもりだった。
「はい、ハルサメ、とりあえずお水。本当は紅茶とか淹れてあげたかったんだけど、こんな時間に火を使うのはやめておいた方が良さそうだったからね」
ジェーナスから水の入ったカップをもらい、グイッと呷る。発作を起こしたことで喉も渇いていたため、風呂以上に満たされる感覚を得

た。
「アンタも難儀なモノね。私も大概だけど」
「あはは……本当にね」
叢雲に同情され、春雨は苦笑するしか無かった。言われた通り、自覚出来るくらい難儀な性質である。
例えばまた戦艦棲姫がこの施設に訪れ、そしてまた旅立った場合、今回の焼き直しが行なわれることが確定しているようなもの。
薄雲も溢れた感情が寂しさなのだから、似たようなことが起きてもおかしくないのだが、そこは寂しさの質が違っていた。
春雨は部隊が全滅し、独りぼっちで沈んでいくことから生まれた寂寥感。対する薄雲は、慕っていた姉が目の前でやられたことで溢れた寂寥感。似ているようで本質はそれなりに違った。春雨の方が範囲が大きいと言えばいいか。
そのため、同じ状況でも春雨は発作を起こすが薄雲は起こさない。近くに叢雲がいるため、薄雲はさらに発作を起こしづらくなっているというのもある。
「死に際に、敵すらも求めたくらいだもん……お別れっていうのが、私にとってはすごく辛いんだと思う」
周りに仲間達がいても、別れがトリガーとなって激しい発作に繋がる。そこにヒトが増えるのは喜びに満ちているが、ヒトが減ることには耐えられない。それがたまたまそこに来た客だとしても、春雨にとっては別れ。
ほんの数時間滞在した海風相手でも、1回目は起きなかったが2回目は発作を起こした。精神的な成長をしたと思ったら、そこについては悪化したとすら言える。
「お客様相手でもこれだから……相当重症なんだなって、自分でもわかったよ。それが私の本質だからって言っても……これはちょっと」
「仕方ないことよ。ここの元艦娘達はみんなそういうの抱えてるわ。ハルサメだけじゃなく、私だってそうなのよ？」
ジェーナスが何かを思い出したように話し始める。
「私、この中では一番古くにこの施設に入ったんだけど、最初は本当に

酷かったのよ」
「そうなの？」
「うん。前にも言ったけど、私の溢れた感情は『自己嫌悪』なのよ？
何するにしても自分のせいにしちゃって、発作ばかり起こしてた。姉姫にも妹姫にも迷惑かけっぱなしだったわ」
ツラツラと話すのは、ジェーナス自身の過去。この施設に来たばかりの時のこと。
そうなった理由は実に簡単なことだった。恐ろしく強い敵艦に部隊を全滅させられかけた時、特に仲が良かった駆逐艦の仲間が自分を庇って沈んだ。その時の部隊は、必死に逃げる以外に選択肢が無かったのだが、その中でもジェーナスは少し練度が低かった。
誰もそんなことは思っていなかったし、庇って沈んだ仲間も恨み言の1つも言わなかったのだが、ジェーナスはその時、自分が足手纏いになってしまったから全員沈んでしまったのだと思い込んだ。その結末が、自己嫌悪の溢れ出しである。半死半生の状態で、沈みゆく仲間達の姿を見ながら、黒い繭に包まれていった。
そしてそのまま、運良くこの施設に流れ着いた。その時にはもう『観測者』はいなくなっており、姉妹姫が今の状態で確立していたおかげで、2人とも快くジェーナスの存在を受け入れた。
繭の適切な処置のことも既に知っており、目を覚ましたジェーナスは正しい処置のおかげで艦娘としての心を失わずに済んでいるのだが、自己嫌悪は当然ながら晴れない。
まず深海棲艦となった自分の姿を確認してから発作。そこから何とか回復しても、事あるごとに発作。記憶があるからこそ、毎日のように悪夢を見続け、それで姉妹姫に世話になるたびに、また自己嫌悪に陥る。負の連鎖を自分1人で起こし続けるという、この施設にはいないタイプ。
「でも、姉姫も妹姫も、私のことを絶対見捨てなかった。発作を起こすたびに抱きしめてくれて、頭や背中を撫でてくれてね。ハルサメもそうでしょ」
「……うん」

「私はね、それだけ親身になってくれる2人に聞いたの。『なんで、こんな私にそんなに気にかけてくれるの？』ってね。そしたら、なんで答えたと思う？『仲間だもの』だって。ホントそれだけ」
昔から中間棲姫はおっとりしていたし、飛行場姫は姐御肌だったらしい。ジェーナスがどんな失敗をしても叱ることもなく、自己嫌悪に陥るたびに抱きしめて自分達がいるから安心してと語る。仲間だからこうして当たり前だと。
そんな2人の言葉を聞いたことで、自分のことはいつまで経っても大嫌いだけど、仲間には全幅の信頼を寄せるのだと誓った。ここにいるのは当時はジェーナス以外は主である姉妹姫だけ。その2人が、ジェーナスに対して全幅の信頼を寄せているのだ。同じ気持ちで返すのが当たり前だと思った。
そこからジェーナスは少しずつ明るくなり、自己嫌悪で発作を起こすスパンが徐々に長くなっていき、今に至る。心構えが変われば、身体もそれに引っ張られるモノである。
「だからね、いくら発作を起こしたところで、気にすることはないわ。だって、姉姫も妹姫も何も気にしていないんだもの。それだけこちらのことを信頼してくれているんだから、私達はそれに返すだけ。発作を起こしたら、その分この施設に貢献すればいいの」
にこやかに話すジェーナスは、自分の心の内を話しているにもかかわらず、発作の前兆すら見せなかった。
仲間のことを思っているからこそ、自己嫌悪が薄れている。春雨のために話しているからこそ、発作は起きない。
「私だけじゃないわ。みんな通ってる道なの。でも、誰も気にしてないでしょ？　だから、ハルサメも気にしちゃダメよ。私達はそういうものって自覚出来てるんだもの。我慢出来るなら我慢した方がいいけど、無理して我慢するくらいなら何も気にせずに発作起こしちゃった方がいいわ」
春雨はまだ今の身体になって日が浅いのだから、余計に気にすることはないと語る。溢れた感情がなんであれ、その原因がなんであれ、時間をかければ自然と落ち着いてくるのだと、実体験まで持ち出して

伝えてくれた。
　ジェーナスも今のように落ち着くまでに、かなりの時間を要した。まだ2週間程度の春雨では、まだまだ落ち着くまでには時間が足りない。そんな状態なら、誰のことも気にせず、むしろ仲間達のことを信頼して発作を起こしておけばいい。
「……うん、わかった。これが今の私だもんね」
「そうよ。自然に良くなっていくから、ゆっくり楽しく生きていきましょ」
「そうだね。うん、みんなのこと信頼してるんだもん。大丈夫、だよね」
　落ち込み気味だった春雨も、ジェーナスの言葉で自分を取り戻す。仲間のおかげで心が軽くなり、それがまた嬉しかった。

　春雨の心持ちはまたポジティブになっていき、生きていくことが楽しくなる。
　今後はまた鎮守府とも連絡が取り合えるようになりそうなため、春雨はこれ以上に良くなっていくことだろう。

新たな仲間

真夜中に目を覚ましてしまった春雨だったが、仲間達の力でなんとか乗り切ることが出来た。ジェーナスの過去の話を聞きつつ、発作を我慢することなく起こしてしまってもいいと諭されたことで、随分と気が楽になった。

そのおかげで、その後は朝までグッスリと眠ることが出来た。仲間達の温もりの中、悪夢も見ることなく、気持ちのいい朝を迎えることとなる。

「んん、おはよう、みんな」

昨日の夜のことなど感じさせないくらいの、ゆるく朗らかな笑顔を見せる春雨。相変わらず薄雲とジェーナスに両サイドから抱きしめられた状態での目覚めであるため、身動きは取れないものの、とても幸せな朝になる。

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ.　あの後はグッスリだったみたいねハルサメ」

「うん、ジェーナスちゃんのおかげで心が楽になったんだ。だからか、本当に気持ちよく寝られたよ」

モソモソと動き出して朝の準備に。まだ叢雲は寝惚け眼だったものの、春雨が元気そうにしているところを見て、少しは安心しているようだった。怒りは燻っていても、仲間思いは変わらない。

「今日はどうする？」

「まずはあの子がまだ居てくれてるか確認するわ。戦艦のヒトの見送りにも居てくれたんだから、きっと今でもあの場所にいるわよね！」

ジェーナスが言っているのは勿論、昨日施設にやってきた駆逐イ級のことである。非常に人懐っこく、知性も高いあのイ級は、この施設にいることを選択したかどうかは、行ってみなくてはわからない。

朝食までにはまだ時間があるため、今からまず施設の岸に行ってみることにした。ジェーナスがそうしたいと言うので、みんなが従うカタチ。叢雲は相変わらず小さく溜息を吐くものの、否定的な言葉を吐かない辺り、仲間に対しての信頼の気持ちはちゃんと持っている模

様。

岸に到着すると、昨日も見た黒い影がそこにあった。眠っているようにジッとしていたが、ジェーナスが近付いたことを察知したか、モゾモゾと動き出したかと思うと、来てくれたことを喜ぶように歯を鳴らす。

「わぁ、居てくれたわ！　この子は施設の一員になってくれるのね！」

大喜びのジェーナスは、その姿が目に入ったことで走り出し、その頭を撫で回す。イ級の方もジェーナスのそれに対して擦り寄るように頭を振る。

まるで大型犬のような仕草なのだが、大きさが大きさだけに、これ以上乗り上げるとジェーナスが押し潰されてしまうだろう。それが考慮出来るところがさらに賢い。

「結局、その子はずっとここにいたみたいよ。ちゃんと眠っていたようだし」

そう言いながらやってきたのは飛行場姫。朝イチの哨戒をしていたようだが、４人よりも先にイ級の姿を確認して、まだここにいるのかと少し驚いた後に哨戒をしていたようだ。

そして今、しっかりと懐いている姿も確認出来たことで、このイ級はもう施設から離れる気が無いのだろうと理解する。ジェーナスに懐いているというより、なんらかの理由があって元いた場所には戻りたくないと考えているようなものなのかもしれない。

こちらの言葉は通じても、あちらの言葉は無いため、その真意はどうしてもわからないのだが、ここにいたいと言うのなら置いてやるのがこの施設のやり方である。

「ねぇ、貴方はこの施設にいたい？」

ジェーナスがイ級に聞く。言葉が通じるのだから、これに対しての回答を身体で表現してくれるはずと。

すると、まるで頷くように身体を縦に振った。これはここにいる誰もが、イ級がジェーナスの質問に対して肯定したと言えるような仕草

だった。
「いたいのね！　妹姫、もういいわよね、この子、ここに置いてあげても！」
「そうね、丸一日経ってもそこから動かなかったし、こちらの言葉を理解しているみたいだし」
　流石にここまでの駆逐イ級を見ることは初めてである飛行場姫は、このイ級ならもうふらりといなくなるようなことは無いだろうと思い、ジェーナスが望む施設の一員として迎え入れることを許可した。
　中間棲姫も同じことを言うだろう。ここまで長居しつつ、こちらの意思を汲み取ることが出来ているのなら、他の人型の者達と同じように扱っても問題ないと。
「でも、施設の中には入れられないわね。大きさとかでなく、自分で陸の上に上がってこれないでしょう」
　飛行場姫の言葉に、ほんの少し残念そうな雰囲気を出すイ級。出来ることなら施設の中でみんなと過ごしたいだろうが、イ級という特性上、こればっかりはどうにもならない。
　百歩譲って、施設の近場にイ級が入れるようなプールを作ってみるというのもあるのだが、そうしたら今度はここまで来ることが難しくなる。ならば、イ級にはこの施設の近海で伸び伸びと暮らしてもらった方がいいだろう。
　いわば、放牧のようなもの。時間がある時に施設の者達が岸に来ては世話をする。世話といっても、定期的な餌やりくらいで、基本は一緒に海の上を駆け回る程度なのだが。
「私達が毎日見に来るわ。それで、一緒に海を駆けましょ！」
　ジェーナスの言葉に、喜ぶように身体を振るわせる。何処か目元も微笑んでいるように見えた。
「あとは、やっぱり目印と名前よね。他のイ級と一緒にいることは無いと思うけど、何かないと間違えちゃいそうだもの。動きが違うから滅多なことでは間違えないけれど、念のため必要よね」
　もう完全にペットを飼う子供のような反応を見せている。イ級側もそうされることを望むように、ジェーナスをジッと見つめている。

「名前はさておき、目印はいるわね……鎮守府側には伝えてあるけど、そういうのはあるに越したことは無いわ」
「じゃあ、この子は鎮守府公認なのね！　間違って攻撃を受けるようなことはないわ！」
ツルンとした額に頬擦りするジェーナスに、イ級も大喜びするように身体を揺する。
身体全体を使った感情表現で、ジェーナスのみならず春雨達もイ級の考えていることが思った以上に理解出来た。それは深海棲艦となっているからとかではなく、イ級の表現力が妙に高いからである。
それだけ賢いということに他ならないため、飛行場姫もこのイ級が何者かというのは興味が出ていた。今までにないタイプというのは間違いなく、特殊な生まれであることも間違いないだろう。
それが施設に幸福を呼ぶか不幸を招くかは、今の段階ではまだわからない。しかし、知っておく必要はある。
引き離すより、近くに置いておく方が、早い段階での判断が出来る。飛行場姫としては、そちらの方が優先度が高いと感じていた。
「ジェーナス、目印はなるべく白いモノにしてあげなさい。アタシ達も、あちらには白旗を振るところから始めてるから。わかってもらいやすいでしょう？　それに、全身が黒いから、白の方が目立つわ」
「そうね、白がいいわね。でも……うーん、余ってるＳｈｅｅｔｓでも被らせようかしら。でも上手く縛れるかな」
新しい仲間を迎え入れるにあたって、ジェーナスを筆頭に楽しそうに計画を立てている。イ級を着飾らせて施設オリジナルの別個体として認識出来るようにすることに躍起だ。
その中でただ1人、叢雲だけは少し離れたところから客観的に物事を見ていた。子供の内の1人ではあるものの、怒りが燻っていることもあるので、心の底からイ級を信用することはしていない。どちらかといえば、飛行場姫と同じ視点に立っている。
あのイ級には何かあるのは確かだ。普通に生まれたのなら、いくらこちらにいるのが姫級ばかりでも、あそこまで感情を露わにして懐くことはない。

「……妹姫、本当に信用していいわけ？　賢いし人懐っこいかもしれないけど、あれは獣よ。こっ酷く裏切られる可能性があるんじゃないの？」
思っていたことが簡単に口に出来るのも、叢雲の特性かもしれない。素直に負の感情――今回は疑問を即座に表に出せるのは、燻っている怒りのおかげか。
「アンタの気持ちはわかるわ。アタシもまだ半信半疑だもの。でも、あそこまでのモノなんて見たことないでしょ。アレ、中に艦娘が入ってるみたいに見えない？」
飛行場姫の突飛な発言に、叢雲は言葉を無くす。
あのイ級の感情表現や懐き方は、中身が艦娘であると言われても、そうかもしれないと思えるくらいのモノである。それこそ、ここにいる元艦娘達と同じように、艦娘の思考能力を持ったままであの姿になっているのかもしれないと。
叢雲もそうだし、春雨達もそうなのだが、感情が溢れ出して黒い繭となり、そこから孵ったことで深海棲艦化したモノ達は、その姿を艦娘の時と同様にしている。色合いやら艤装やらは艦娘の時から一転しているが、知っている者が見ればそれが元々どの艦娘だったかはすぐにわかるレベルに。
しかし、艦娘の姿を取らずに深海棲艦化するというのなら、話は変わる。黒い繭を使っての変化かどうかはさておき、何かしらの作用で艦娘があのカタチになったとしたら、賢く人懐っこいイ級というのが生まれてもギリギリ納得が行く。
「何よそれ。じゃあ、アレも私達と同じだっていうの？」
「可能性が無いとは言えないでしょ。勿論、今アタシが思いついたコレが絶対に正しいとは言わないわよ。普通の同胞（はらから）と同じように、自然発生したときに何かが入り込んだって可能性もあるわ。それに、突然変異の可能性だってある。何とでも言えるのよ。わからないんだから」
考えられる可能性はいくらでも出てくるだろう。
いい方向ならば、最後に言った突然変異。姫のなり損ないとでも言

える。もう少し頑張れば、ここの姉妹姫や先日旅に出た戦艦棲姫のように、穏健派の姫級になれたかもしれないが、そこまでギリギリ届かなかったせいで、思考は姫でも身体が獣という存在になってしまった。

悪い方向ならいくらでも出てくる。最悪なのは、イ級が艦娘を喰ったか何かをしたことで思考能力を取り込んだとかまであるのだ。流石にこれは飛行場姫も口には出さなかったが、わからないのだから仮説は好きなだけ立てられるということに他ならない。

「とにかく、あれだけ賢いのなら、施設で匿ってあげてもいいと、アタシは判断したってわけ。姿形は違っても、アレはアンタ達に近いくらいの思考能力を持っているように見えるわ。そりゃあ、ヒトほどの高度な計算能力とかは無いかもしれないけれど、単に獣と言ってのけるには無理があるでしょ」

「そうかもしれないけど……まぁ、私もこの施設の一員になったんだから、アンタや姉姫の指示に従うわ。でも、気に入らないことはバンバン言ってもいいのよね？」

「ええ。それがアンタの性質であることは理解してる。我慢せずに言えばいいわ。でも、それが罷り通るかどうかは保証しないけど」

わかってる、と叢雲も鼻で笑い、盛り上がるジェーナス達の方に加わる。

「……でも、アレは本当に何者なのかしらね」

飛行場姫もイ級の存在には強い疑問が出てきていた。だからといって、解剖して調べるとかなんて出来やしないし、そもそもそんなことは考えも及ばない。

近くで見ていることが一番の調査になるだろう。生まれたであろう現場は戦艦棲姫や鎮守府が調べてくれるのだから、飛行場姫はイ級について調べてみることにした。

名前はまだ決まっていないものの、イ級は正式に施設の一員となった。

ジェーナスは友人としての付き合い方で。飛行場姫はその生まれの調査のため。いくつもの考えが入り交じっているものの、仲間としての認識は変わらない。

新たなる調査隊

施設がイ級を受け入れている一方、鎮守府では施設側からの依頼について艦娘達に公表されていた。いつも朝礼というカタチで全員を集め、ざっくりとした予定を展開するのは日課である。

謎の知性を持つ駆逐イ級のことから始まり、その発生原因が、現在調査中の未知の深海棲艦に繋がる可能性があるということで、施設の依頼を受け入れたと話し、そのメンバーの選出もすると。

実際は調査メンバーは決まっているようなものだ。可能ならば施設への宿泊が必要になるため、初顔合わせより一度は対話をしたことがある者がベスト。そしてたった1人、実際に宿泊を経験している者がいる。

「海域調査には、前回と同様に海風達にお願いしたいと思っている。構わないかな？」

「はい、是非とも」

力強く引き受ける海風。その表情には、以前のような焦燥感などは見られず、冷静な判断が出来る元々の海風を感じられた。

少しハードな訓練により力をつけ、金剛と比叡を筆頭に悩みを打ち明けたりして1人で抱え込むことをやめたことで、冷静さの中に小さな自信のようなモノも芽生えている。

今や、海風の実力はかつての鎮守府最強の駆逐隊、春雨の属していた姉達に匹敵する程にまでになっている。春雨と再会出来たことで吹っ切れることが出来たことと、仲間達のサポートのおかげで、いろいろと自分のことが見えるようになったことは大きい。

「調査は明日からにする予定だ。その前に、山風の改二改装が決まったからね」

「そうなんですね。山風の実力が評価され、さらに力を付けてくれるというのは、私としても嬉しいです」

一方山風は今聞かされたようで、驚きで目を見開いた後、恥ずかしそうに縮こまっていく。それを江風と涼風が冷やかすように小突いていた。

駆逐隊の中では、山風が特に海風のことを気にかけていた。一歩引いた場所から見続け、感情の起伏に敏感に反応出来たからこそ、海風は壊れずに済んだ。それが評価されたかどうかはわからないが、とにかく山風が今以上に強くなることは明白。
表には出そうとしないものの、山風としては海風のサポートをよりしやすくなるため、内心ではそこそこ喜んでいた。やはり、今のままで改二改装済みの海風についていくのは厳しかった。山風は同じく改二改装されていない涼風ほど要領がいいわけではないため、このおかげで余裕を持って並び立てるかもしれない。
「そちらの調査隊も、以前の調査隊と同じとするつもりだ。航空戦力として千歳と千代田、火力として金剛と比叡。調査隊は以上の８名にて執り行なう。よろしく頼むよ」
「ＯＫ．　私達に任せてくだサーイ！」
「気合い、入れて、行きます！」
調査隊にしては多めの人選なのだが、槍持ちの時のこともある。砲撃を斬り払うような力を持つ未知の深海棲艦が現れる可能性だってゼロではないのだ。駆逐隊だけでは調査もままならない。
事前に全滅の可能性を全て潰した上で、的確に調査をすることが出来る最大の戦力の投入。
「調査隊の８人はここに残ってくれ。では、朝礼を終わらせるよ。今日も１日よろしく頼む」
提督のこの言葉により、他の艦娘達はぞろぞろと自分の持ち場へと移動。残ったのは、調査隊と銘打たれた８人の艦娘。それと、秘書艦の五月雨と事務員の大淀。
「今話した通り、君達にはあちらから依頼された海域の調査をしてもらいたい。ただ、その海域というのが、こちらから施設に向かい、さらに向こう側にあるそうなんだ」
「それは相当遠い場所ネー。片道でも行って帰って１日使っちゃうヨー」
「ああ、それを危惧して、姉姫からも施設での宿泊を示唆されている」
海風が微かに反応した。施設に宿泊するということは、前回と同じ

ように春雨と顔を合わせることが出来る上に、一緒に眠ることまで出来ることに他ならない。
　ここ最近はかなり安定してきているものの、やはり心のガタつきは残ったままだ。それをさらに癒せるとなれば、無意識でも飛びつかない理由が無かった。
「しかし」
「何か問題でも？」
「いや、あちらには今、艦娘のことを嫌っている叢雲がいる。そうするのなら、事前に相談してくれとも言われているんだ」
　ここでもまた叢雲の名前。海風の中では、叢雲は春雨への想いを邪魔する者であるという認識が、先日から出来てしまっている。仕方ないとわかっていても、少しだけ心にチクリと棘が刺さったような感覚に。
　それを察したか、山風が海風の近くに移動し、金剛も傍に付き添った。感情が揺さぶられたことが、明確にわかったからこその間髪容れない行動。
「大丈夫ネ。ちゃんと春雨には会えますヨ」
「うん……あっちからの依頼なんだから……」
　口に出されたことで、自分がどれ程までに顔や態度に出やすいのかを自覚することとなり、一気に恥ずかしがる。
　もう海風のコレは鎮守府の誰もが把握していること。憧れの気持ちを持っていたこともバレバレだったが、今の努力の仕方がさらにそれを際立たせた。春雨のために頑張るという心持ちがわかりやすすぎるのである。
「叢雲はまだ艦娘と直に対面したことは無いのだから、いざどうなるかはわからない。それこそ、あちらにいる元艦娘達は、みんな何処かしら心に怪我を負ってしまっているのだから」
　春雨も含めて、と最後に付け足す。それがあるから、叢雲は艦娘に対して激しい敵対感情を持っているのも仕方ないことと納得出来ている。
　鎮守府に調査を依頼し、その距離もわかっているために宿泊まで示

唆しておいて、でも艦娘を嫌っている仲間がいるからやっぱりダメとされたら流石に困る。姉妹姫もその辺りは理解しているはずだ。叢雲をどうにか止めてくれるはず。
「でも、姫ならまだしもイ級って……どの個体も見た目は同じですよね」
素朴な疑問を口に出すのは千歳。イロハ級が全て似たようなモノどころか全く同じ外見のモノであることは、艦娘のみならず、人間も知っていること。どれがどれかの区別なんて簡単には出来ず、酷いモノでは動きまで全く同じ。
それは思考能力が獣と同じで、主となる姫級からの指示に対して従順に従っているからこその完璧な統率。生きているとはいえ、その殆どが機械のようなものであるため、寸分違わない行動を取れたりするのである。
「そこはちゃんと目印を付けてくれるそうだ。どうするかは僕にもわからないが、他とは見てわかるくらいにはするだろう。間違えて沈めてしまったなんて言ったらシャレにならないからね」
「ですよね、それなら安心です。私達、ああいうのは纏めて薙ぎ払っちゃうから……」
「露払いが空母の仕事な部分もあるんだ。それは仕方ないさ」
艦載機で先陣を切って雑多な敵群を薙ぎ払うのが、空母の戦闘直後の仕事だ。施設の近くにいるとしても、知らない顔の深海棲艦がいたらまず間違いなく警戒するし、イロハ級なら意思疎通すら出来ないのだから、そうしてしまってもおかしくない。それ故に、見てわかるくらいに変えてくれる。
「あと、同じように海域調査をしてくれている深海棲艦がいるそうだ。そちらも何かしらの目印を付けていてくれる」
「調査が出来るということは、姫級なんデスネ」
「ああ、戦艦棲姫だそうだ」
ガタガタと全員が狼狽えた。やはり戦艦棲姫というだけで、艦娘としては厄介な敵という認識の方が強い。
あらゆる大規模作戦で顔を出しては、その力を存分に振るって作戦

遂行の邪魔をしてくる強力な姫。３体同時に出現したという報告もあり、同じように複数体の出現を毎度の如くしてくる空母棲姫と並んで、姫級の顔とすら言える。
「あ、あー、戦艦棲姫って、あのお茶会した個体ね。ビックリした」
「千代田……脚が震えてるわよ」
「千歳お姉もでしょ！」
空母の姉妹は余程戦艦棲姫に嫌な思い出があるのか、その名前を聞いただけでもコレである。正規空母や装甲空母ならまだしも、元水上機母艦であり現軽空母である少し特殊な経歴を持つ２人には、戦艦の攻撃は脅威以外の何物でもない。過去の作戦で酷い目に遭っているようだ。
２人だけではない。駆逐艦の４人も若干のトラウマのようなものを持っていた。自分の攻撃があの大きな生態兵器のような艤装に食い止められ、まるでダメージを与えられないという戦いは、何度もやりたいモノではない。
とはいえ、比叡以外は面識のある戦艦棲姫である。名前だけを聞いたらそれよりもトラウマが刺激されてしまったようだが、改めて考えてみれば大丈夫と気付ける。
「白旗を振っている深海棲艦は、基本的に施設の仲間だという話だ。まずはそれを目安にしてくれ」
「それならわかりやすくて助かりますネ」
「はい！　比叡は戦艦棲姫見たら迷わず撃ってしまいそうですから！」
金剛としてはそれが一番不安だったようである。
「では、明日からよろしく頼む。山風は改二改装だ」
「……うん」
静かな言葉とは裏腹に、山風のやる気は充分に見受けられた。

そんなに長くかかるわけではないのだが、山風は改装のために工廠へ。冷やかしのためか、強くなる姉が楽しみなのか、江風は便乗して

そちらへ向かっていった。
　事前準備として特別にやることなんて無く、心構えだけちゃんとして、普段通りに生活するのが一番である。
「海風姉、今日も訓練かい」
「ええ、金剛さんと比叡さんが付き合ってくれるの」
「そいつはよかった。あたいも付き合おっかな」
　ニカッと笑って海風の側にいることにした涼風。実際はこそっと山風からお願いされていたりする。自分が目を離した隙に、また変に気負ってストレスを感じていたら、適当に茶化して安心させてやってほしいと。
　それに、涼風は涼風で少し思うところがあるようで、訓練と聞いたら飛びついてきた。
「やっぱさ、あたいが古参なのに先越されまくってんのは残念っていうか」
「ああ……うん、そうね、そうよね」
　涼風だって、この鎮守府では相当な実力者だ。今は亡き姉達に追いつけ追い越せで最初から努力を欠かしてはいない。改二である姉達相手に互角以上の力は持っていると自負している。
　しかし、それが認められているかは別だ。客観的に見たら、涼風に対する評価は『普通』である。勿論、ここの提督は涼風に対して絶大なる信頼を置いているのだが、それと外からの評価は違う。
「ま、あたいはそんなでもやることはやるけどね。提督が評価してくれてんだから、それでいいのさ」
「ふふ、涼風は強いね」
「あたぼうさー！　五月雨とかの鎮守府を支え続けてきたんだかんね。これまでも、これからもさー」
　それでも、涼風の心は折れない。そんじょそこらの経歴ではないのだから、簡単に折れるような心では無かった。だからこそ、今ガタガタである海風を山風と共に支えられるのだ。山風が江風ではなく涼風に頼んだのは、そういうところがあるからである。
「むしろ、あたいが海風姉をしごいてやるかい？　改二だろうがなん

だろうが、まだまだ後れは取らないぜ」
「なら、お願いしようかな。しごかれるより前に、まずは協力しての訓練になると思うけど」
「へぇ、金剛さん達と何するつもりなんだい？」
「戦艦相手でも戦えるように、ひたすら演習かな。涼風達が見てないところでも、結構付き合ってもらったりしてるんだけど」
うわぁという顔が隠せなかった。いくら槍持ちに手も足も出なかったとはいえ、やってることがハードすぎる。
駆逐艦1人で戦艦を相手取るのは、相当な練度が必要だし、よりによって相手は鎮守府でも上から数えた方が早い程の実力者である。
海風はここのところ負けっぱなしだが、それでも充実した毎日を過ごしている。演習をやればやるほど、自分に力がついていると実感出来るし、何より2人の指導が的確。
「オッケー。あたいも付き合うぜ。あたいももっと強くなりたいからね！」
「うん、じゃあ一緒にやろう。そしたら、姉さんにも追いつける……よね」
「ああ、勿論。あたいとしてはもう追いついてると思うんだけどなぁ」
海風の目標はあくまでも春雨。その力に追いつけるように。深海棲艦化した姉は、さらなる力を付けているだろうが、さらにそれを超えられるように。

仇討ちも勿論念頭に置かれているが、それだけでは無い。今は亡き姉達に代わって、この鎮守府を引っ張れる駆逐艦になれるようにと、海風は日々努力する。

怒りの対象

施設では、賢い駆逐イ級との共存が決定し、それがどういう存在であるかの調査が始まっていた。
施設の一員となるからには、中間棲姫のチェックも勿論必要。姫級となっている元艦娘達なら、心が壊れていても対話は出来るのだが、イ級は今までに無いタイプだ。ここで長年施設を運営している中間棲姫ですら初めてのことである。
「妹ちゃんは大丈夫って判断したのよね？」
「ええ、賢いって言葉では言い表せないくらいでしょアレ」
飛行場姫が指差す先。イ級と戯れるジェーナスと、それと一緒にいる春雨達。叢雲はやはり少し警戒しているが、薄雲の誘いに乗って恐る恐るイ級の額に触れたりしていた。姫級４人に囲まれているにもかかわらず、イ級は大人しいどころか４人に合わせるように楽しんでいた。
そもそも、イ級が楽しむということがありえない。思考能力が獣のソレなのだから、感情の起伏自体がまず無い。姫の指示を忠実に再現するくらいで、そもそも自分の意思すら持っているかもわからない。
それなのに、あのイ級はまるで違う。飛行場姫が言っていた通り、言葉は発せないにしても、まるで艦娘が中に入っているかのような反応を見せている。
「遠目で見ても、随分と特殊ねぇ。昨日もそうだったけれど、丸一日経ってもアレっていうのは、流石に初めて見るわぁ」
それならば、この施設の一員となっても問題ないだろうと、中間棲姫も認めた。飛行場姫と同じ考えに至ったものの、この施設のルールとして、ちゃんとイ級のことを知っておかなくてはならない。
「ジェーナスちゃん、ごめんなさいねぇ。その子のこと、少し調べさせてもらってもいいかしらぁ」
「あら姉姫、この子のことを受け入れてくれる準備ね！」
「そうよぉ。ここに住むなら、ある程度は私が把握しておかなくちゃあいけないからねぇ」

戯れていた４人組がイ級から少し離れると、岸の際で視線を合わせるようにしゃがみ込む。イ級からの視線は、好奇心のような、興味のような、少なくとも嫌がっていない感情が見て取れた。
「少し触らせてちょうだいねぇ」
先程子供達がやっていたように、中間棲姫もイ級の額に手を置いた。それで考えていることがわかるわけではないのだが、黒い繭に触れて溢れた感情が何であるかを把握することが出来るようなものなのだから、もしかしたらこれでイ級の思考がどのような方向かわかるかもしれない。
こうされても、イ級はまるで警戒していない。中間棲姫のことを全面的に信用しているかの如く、少し擦り寄るように身体を揺する。
何も感じない、が結論だった。溢れ出した感情が作り上げた繭とは違って、イ級のこれは艤装、装甲の一部。戦艦棲姫の生体艤装のもわからないのと同じ。
しかし、あちらもそうだが、それならそれなりに感情表現をしてくるため、それでも全く困らない。
「……やっぱり、繭とは違うわねぇ。この子が何者かは、私にもわからないわぁ。でも、私達に危害を加えるつもりは一切無いのよねぇ？」
中間棲姫の問いかけに、イ級は勿論だと言わんばかりに身体を震わせた。敵意などなく、むしろここで一緒に楽しく暮らしたいと望んでいる。この行動で、みんながそれを察することが出来た。
その身体は大型犬だが、瞳の奥は小型犬のような愛らしさが宿っているようにも見えた。
「この子が懐いていることは確かだし、ここにいてもらいましょうねぇ」
飛行場姫のみならず、中間棲姫からの許可も下りたことで、ジェーナスはより一層大喜びである。今までに、仲間として迎え入れようとしたら離れられるというのを何度もされているため、その喜びはひとしお。
改めてイ級のことを撫で回すと、イ級も全身を使って喜びを表現する。

「じゃあ、もう名前も付けていいわよね！　イ級なんていう物騒な名前は良くないし！」
「ええ、もういいわよぉ。この子はここから離れるつもりは無いみたいだしねぇ」
　でしょうと目配せすると、イ級は勿論だと言わんばかりに身体を縦に振る。言葉を理解しているだけでなく、今一番嬉しいであろう動きをしっかりと再現するほどに賢い。
「よーし、じゃあＭｉｃｈｅｌｌｅ（ミシェル）にしましょ！　こんなに可愛いんだもの、名前も可愛くなくっちゃ！」
「艦娘や深海棲艦と比べると、やたら毛色が違うわね……」
「まあまあ、私達は名前とか思いつきませんし、ジェーナスちゃんに任せましょう」
　ノリノリで名前を決めるジェーナスを呆れた表情で眺めていた叢雲だが、薄雲が軽く嗜める。
　ジェーナスのネーミングセンスは、まるでぬいぐるみに名前を付けるかのような可愛げのあるものばかり。イ級も他の深海棲艦と同様に、見た目からはかなりわかりづらいがメスであるため、その名前でも一応は通る。
「イ級はイ級でいいじゃない」
「いいや、ちゃんと決めてあげなくちゃいけないわ！　だってこの施設の住人になったのよ？　他とは違うってことを名前から示してあげなくっちゃ！　それに、私達から上げられる最初のＰｒｅｓｅｎｔみたいなものじゃない」
　そこは譲れないらしい。名前をつけてあげることこそが、このイ級を施設に迎え入れたという証拠であり、愛情を込めたプレゼントとなる。イ級もジェーナスが付けた名前を気に入ったようで、喜んでいるように身体を揺らした。
　ということで、たった今からはイ級改めミシェルと呼ぶこととなった。自己紹介は出来ないが、施設内ではその呼称が定番化する。他のイ級とは別個体なのだと知らしめるためにも、施設の者にはその名前を頻繁に使ってもらいたい。

「ご飯はちゃんと用意してあげなくちゃよね。あとは、毎日お風呂……は無理だけど、身体を磨いてあげるくらいは出来るかしら。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、どうかな。やってほしい？」
少しだけ考えるような仕草をした後、小さく身体を縦に振る。でも毎日じゃなくてもいいと訴えるように身体を捻る。
ずっと海に浸かっていたら、どうしても装甲は汚れていくだろう。姫級のように施設の中で風呂に入ることが出来ない分、そういうカタチで身体を綺麗にしてあげたいというジェーナスの愛情。
「じゃあ、午後はＭｉｃｈｅｌｌｅを洗ってあげるわね。朝と昼のご飯も準備するわね。昨日は生魚だったけど、今日はそれでもいいのかしら」
大丈夫と言わんばかりに身体を震わせた。基本的には、水族館のイルカのような生態のようである。むしろ凝った料理だと身体が受け付けない可能性もあるので、一番妥当な生魚を定期的に与えるのが良さそうである。他の生態がわかれば、それに準じたものを与えていけばいい。
あとは他のイ級とは違うことを表すための目印。出来れば白旗のようなものがいいのだが、その形状が簡単にはそれを許してくれない。
「あ、この子お腹の辺りに窪みがあるよ。ここなら結べるんじゃないかな」
「ホントね！　Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、ここから布を巻いても大丈夫？」
イ級の形状は殆ど魚雷に近いモノに見えるのだが、魚に例えるのなら腹の辺りに小さな握り手のようなパーツが付いていた。ここを基点にすれば、身体に何かしらの布を巻き付けることは可能だろう。そうしたことによって泳ぐことが出来なくなるのならダメだが、行動に支障が無さそうなので、ミシェル本人がＯＫを出した。
余っているシーツを加工して、大きめのリボンにしてやれば、他のイ級とは別物とわかりやすい目印が出来る。リボンならメスであることもわかるし、いい具合になるだろう。場所的には腰紐みたいになってしまうが。

「それじゃあ、そういうカタチにおめかししていると鎮守府にも伝えておくわねぇ」
鎮守府という言葉を聞いて、叢雲がピクリと反応する。
「この子のことは戦艦ちゃんも調べてくれてるけれど、鎮守府にも調査を依頼しているの。この施設の近くに来るだろうし、時間次第ではこの施設で一晩過ごしてもらうことになるわぁ」
「そうなんですね。じゃあ、また海風達に会えるかも！」
それに対して喜ぶのは春雨。最近はタブレットでの対話も出来ていないので、また少し寂しくはなっていたりする。
海風のための定期的な通信と言っていたものの、実際は春雨の精神状態の安定にも使えている。いろいろありすぎてそれが出来なくなったことは、そこそこの痛手であった。
しかし、これに対して叢雲だけは嫌悪感を露わにする。今の心持ちを得ることが出来た提督に対しては、ほんの少しくらいの感謝を感じてはいるのだが、それだけだ。艦娘に対しての怒りはまだまだ燃え滾っているようなものである。
提督との対話の際には、提督の姿しか見ていない。そのときですら、最初から最後まで怒りに呑まれた状態だったのだ。それが、提督ではなく艦娘となっても直に顔を合わせるとなるとまた変わる。
「艦娘がここに来るわけ？」
イライラを隠していない叢雲に対し、中間棲姫は宥めるように語る。
「あのイ級……ミシェルが特殊な個体なのはわかるわよねぇ？」
「んなことはわかってるわよ。それと艦娘が何の関係があるのよ」
「私はねぇ、あの子ももしかしたら貴女や春雨ちゃんがこうなってしまった原因に繋がっているんじゃないかと思っているのよぉ」
春雨と叢雲が共通の敵によって死に体にされたことは、２人はおろか姉妹姫も知っていること。艦娘に対して襲撃を繰り返す未知の深海棲艦というのは、例の鎮守府からしてみれば部下を奪った仇である。そして、それは春雨にとっても、叢雲にとってもだ。
ミシェルもある意味、未知の深海棲艦に近い。見た目は共通の個体

かもしれないが、中身があまりにも違いすぎる。ならば、鎮守府が追っている仇に繋がる情報が手に入るかもしれない。
　お互いに和睦協定を結んでおり、以前に叢雲の素性を調査してもらったこともある。今回も同じように調査をしてもらおうと考えているだけである。施設の者達だけでは調査しようがなく、調査をし出したらこの施設にも脅威が降りかかってしまうかもしれないため、鎮守府にお願いした。
　こちらのお願いを聞いてくれるのだから、ある程度は協力するのが道理であろう。あちらが信用出来る相手であることはわかっているのだし。
「私達がやらずに、あちらにやってもらうんだから、宿泊くらいは提供してあげたいと思ってるだけよぉ。信用出来るんだから」
「……私はそんなの御免よ。顔なんて合わせたくない。来られても迷惑なだけよ」
「叢雲ちゃん、大丈夫。来るの、多分私の妹達なんだ」
　春雨も説得に加わる。そこの提督のことを多少は認めてもいいと言った叢雲なら、その部下である艦娘達も信用出来るからと。
「本当に信用出来るわけ？　艦娘よ？　提督の指示に従って仲間すら見捨てられるゴミクズでしょうよ」
「私の妹達は違うよ。自分の意思で考えて、自分の意思で仲間を想ってる。そのせいで……そのおかげで、妹達はここに辿り着いちゃったくらいなんだから。私のことを物凄く心配して、精神的にも病んじゃって……でも、ここのことをちゃんと認めてくれてるんだから」
　それに、叢雲が槍持ちだった時に襲いかかった相手だとも伝えた。殺意を持って襲撃してきた叢雲に対して、それを許容し仲間として認識しているとも。
　普通、自分を殺そうとしてきた相手を許すことは簡単には出来ないだろう。今の叢雲だってそうだ。そもそも殺すつもりで運用していた鎮守府と艦娘に対して怒りを持っている。
　だが、逆の立場になっているというのに、あちらは叢雲のことを何とも思っていない。怒りに呑まれているという本質の差があるとは

いえ、あの鎮守府に所属するものは全員が優しい。
「だから……叢雲ちゃん、一晩だけ、一晩だけダメかな。叢雲ちゃんが思っているような艦娘じゃないから。絶対。約束出来る」
「私にはそういう問題じゃないのよ」
「かもしれないけど、お願い。もし鎮守府の艦娘が叢雲ちゃんに何かしたら、私をどうしてくれても構わない。命を懸けて保証する」
強い視線に、叢雲は少しだけたじろいでしまった。昨日にあれだけグズグズに崩れた春雨が、自分の妹達、元々の仲間達のことを語るときは、強い意志をぶつけてくる。それには一切の揺らぎがない。
「だから」
「わかったわよ。その代わり、何かあったら私は容赦しない。そもそも顔を合わせるつもりはないけど、艦娘なんかのために引き籠るなんて御免よ。あっちが嫌な思いをしても知らないから」
「うん、大丈夫。絶対大丈夫」

一応は調査隊が施設に宿泊出来るようにはなったようだ。しかし、叢雲は自分を譲るつもりはない。艦娘達と顔を合わせてしまったとき、一体どうなってしまうのだろうか。

心通わせる仲間

ジェーナスによりミシェルと名付けられた駆逐イ級は、その存在にはまだ謎がありすぎるのだが、人懐っこさが普通ではないことが全員の目で確認されているため、このまま施設の一員として迎えられることとなった。

主である中間棲姫と飛行場姫がそれを許したし、誰もそれを否定していないので満場一致の意思とも言える。叢雲も疑問は持っているものの、施設の主がそうすると決めたのだから、そうすればいいと容認。

「よーし、じゃあミシェルと一緒に漁をするわよ！」

今日の作業は、春雨とジェーナスが飛行場姫と漁。薄雲は叢雲と農作業となっている。

まずジェーナスがミシェルのご飯は自分で獲るのだと意気込んでいたため、漁のメンバーとして選出。その後は叢雲が漁より農作業の方が出来ることがわかっているため、中間棲姫からご指名。

叢雲が不機嫌であることを察した薄雲も農作業に参加を表明。傍にいてあげることでケアをしようという考えのようだ。そして、春雨はそれならとジェーナスについていくことに。

「じゃあ、作業の前に。ヨナちゃん、お願いしていいかな」

「うん」

ミシェルも漁に参加するのだが、その前に目印をつけることに。春雨が伊４７に使い古しのシーツを渡すと、それを器用に腹回りに巻いてやった。

伊４７がそれなりに器用だったこともあって、腰に大きなリボンを巻いているようになったことで、普通の駆逐イ級とは違うことがより強調される。海中に入るとリボンは濡れてしまうものの、無いよりはマシだし、カタチが簡単には崩れないようにしている。

「似合ってるヨナ」

「だね。可愛くなったよ」

ミシェルが嬉しそうに、だが何処か恥ずかしそうに身体を震わせ

る。ジェーナスもおめかししたミシェルを見て大喜びである。
「それじゃあ、ミシェルはヨナに教えてもらって、海の中での漁を覚えてちょうだい。私達は沖で釣るわよ」
「はーい、ミシェルとの共同作業ね！」
「いつも以上に釣れるように頑張ります」
ミシェルも伊４７と一緒に意気込んでいるような仕草をしながら海中に潜って行った。
「ヨナのことも少し心配だけれど、今はやってもらいましょ」
「心配……ですか？」
「あの子のアレルギーがミシェルとの作業することで発症しないかと思ってね」
伊４７の特性、幸せアレルギー。今までの漁では、仲間達と離れて単独で行動していたから耐えられていたが、今回からは海中でも仲間と共に作業をすることになる。それを幸せと感じた瞬間、伊４７の体調は悪くなっていくだろう。
相手がどんな姿形でも、ミシェルはもう施設の仲間だ。伊４７も勿論そういう感情を持って接するつもりである。そうなると、近くなればなるほど酷い目に遭うことに他ならない。つまり、ミシェルがアレルギーのトリガーになってしまう可能性が充分あるということ。
「それだけＭｉｃｈｅｌｌｅのことを仲間と思ってくれているのは嬉しいけど、ヨナが苦しむのを見るのは辛いわね……複雑な気分」
「だね……。もし危ないと思ったら、すぐに助けてあげなくちゃ」
実際は伊４７も距離感をある程度考えて漁を進めている。自分の身体は自分が一番わかっているとはよく言ったもので、伊４７は特にその辺りが敏感。危ないと思ったらすぐにその場を離れるようにしているのだから、自分に対しての危険察知能力は非常に高いと言える。
姿が見えない上に海中ではすぐにどうにかすることは出来ないため、無理だけはしないでもらいたいと願いながら、沖の３人は釣りを続けた。
幸いにも伊４７が途中退場することはなく、体調を崩すということ

も無かったため、ミシェルとの漁はこれからも続けて行くことになる。
そして釣果も絶好調。２人――１人と１体――の追い込み漁は、今まで以上の効率を叩き出し、倍とは言わないものの、普段よりも多く釣り上げることに成功したのだった。

昼食を挟んで午後。いつもならフリーの時間だが、今回はまたジェーナスがミシェルのために動き出す。風呂とまではいかないが、身体を綺麗にするためにといろいろと準備していた。
これにはいつもの４人組だけでなく、漁の時と同じく伊４７や松竹姉妹も参加。ジェーナスだけでなく、子供組全員がミシェルとの付き合い方を知っておくいい機会である。
「大きめのタオルの他に、一応デッキブラシ用意したけど……大丈夫かな」
道具を運んでいるものの、その道具が適切かがわからずに呟く春雨。ミシェルは装甲に包まれているような生命体であるわけで、その表面をどう綺麗にするかが迷いどころだった。
単なる艤装なら、ここには無いが水圧洗浄機などを使ってそこそこ無理矢理に綺麗に仕立て上げていくのだが、ミシェルは生きているのだ。もしかしたら、デッキブラシで擦ったら痛みを感じるかもしれない。だからといってタオルだけだと完璧に綺麗になることはない。そもそも日がな一日海に浸かっているのだから、この洗浄だって気休めみたいなものだ。
しかし、そこはやはりジェーナスが譲らなかった。いくら意味が無くても、やってやることに意味があると。今回は子供組全員が便乗してくれているからいいが、そうで無かったら１人ででも成し遂げていたらしい。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅに聞いてみましょ。どうしたら気持ちいいかとか」
ゾロゾロと岸に向かうと、ミシェルが喜びを体現しながらお出迎

え。今までは漁をしている沖とは逆方向の岸にいたのだが、今は漁をした方の岸。先程手伝ったことで、こちらに定住することにしたようである。

本当ならもっと施設の近くにミシェルが泳げるくらいのスペースを作りたいところなのだが、それは島そのものの改造であるため、やるにしても時間がかかり、そもそもやることが難しい。

「海に洗剤垂れ流すわけにはいかねぇよな」

「そうね。だから真水を持ってきたわけだし」

松竹姉妹は艤装まで展開して、大きな桶になみなみと注がれた真水を運んできている。洗浄なら洗剤まで使って汚れを落としてあげたいところだが、そんなことをしたら海が確実に汚れてしまうため、ミシェルには申し訳ないが『ただ拭くだけ』ということになった。落としづらい汚れがあるようなら、ちょっとだけ洗剤でゴシゴシ行くらしい。

松と竹の艤装は、不思議なことに何故か浮いている。そのおかげで重たい桶でも持ち上げられるし、真水も溢さずに運べている。艤装を使うのは適材適所と感じられる瞬間である。

「Ｈｉ，Ｍｉｃｈｅｌｌｅ．　言ってた通り、身体を洗いに来たわ！」

よろしくお願いしますとお辞儀するように身体を傾けた後、さぁどうぞと言わんばかりに身体をジェーナスに任せる。本当に感情表現豊かなイ級である。

「いろいろ持ってきたんだけど、何を使えばいい？　タオルに、スポンジ、たわし、デッキブラシ、こんなところだけど」

問い掛けると、ミシェルは少しだけ考えた後、デッキブラシとスポンジを指すように頭を向けた。

装甲で包まれているところはデッキブラシでいいようだが、中には包まれていない柔らかい部分もあるため、そこはスポンジでお願いしたいということらしい。

それなりに大きい駆逐イ級であるから、背中などを磨くとなると手が届かないこともあるだろう。その時は、身体を傾けたりやりやすい

体勢をとってくれるようだ。
「Ｏｋａｙ！　それじゃあ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅを洗っていくわ！」
　そのままだとやりにくいということで、わざわざ服を水着に替えて、ミシェルの洗浄を開始。ほとんど水遊びにも見えるが、むしろそれも目当てだったかのように、ジェーナスのみならず全員が水着に着替え、水で濡れることも気にせずに楽しみながらミシェルと交流していった。
「わ、思ったより汚れてる」
「これ、海に流れちゃってもいいのかな……」
「イ級の汚れは全部海由来なんだから、大丈夫よ！」
　デッキブラシでゴシゴシと磨くと、流していた真水もすぐさま黒ずんでいく。撫でている時はこんなに汚れていなかったのに、磨いてみるとここまでわかるとは思っていなかったようだ。あまり汚れていると、腰に巻き付けたシーツのリボンも汚れてしまうと、ジェーナスが力強く磨き上げていった。
　身体の表面にはどうしても海由来の汚れが付いてしまうようだ。それが油だったり人工的なものだったりしたら海に害があるかもしれないが、イ級の汚れは基本的には還元出来るもの。洗剤よりは安全であるため、そのまま流してしまうことに。実際、ミシェルの汚れが海に流れても、海が黒ずんでいくことは無かったため良しとした。
　磨かれているミシェルも、心地よさそうに身体を震わせる。装甲に感覚が通っているようには思えないのだが、それは気分的なものなのだろうか。清潔になっていくのは、例えイ級といえど気持ちの良いもののようである。
「……コイツの汚れ、あの泥じゃないわよね」
　叢雲がボソリと呟く。黒い汚れと聞いて真っ先に思いついたのがそれだったようで、嫌な思い出が蘇ったようだった。
　ここにいる誰もが経験している、黒い泥。変化が終わってしまえば繭となり、処置をしたならばそれを全て取り込み直しているし、処置がされていないにしても全て海に溶け込んでいる。それが未だにこびりついていることなんてあるのだろうか。

「んー、多分違うと思うわ。あの泥ほど粘り気無いし、こんな簡単に落ちるものでも無いでしょ」
「まぁそうね。もがいてもへばりついてくるのがあの泥だものね。デッキブラシで引っ掻いたくらいで落ちてくれるなら、私達は今頃この姿になるまでもなく死んでるわ」
とはいえ、ミシェルがあの泥によってこの姿になっている可能性が無いとは言えない。叢雲は飛行場姫から、あの中に艦娘が入っているかもしれないとも聞いているために、そういう疑問は拭えないでいる。
実際、イ級という姿が黒い繭そのものである可能性だって考えられるのだ。繭から孵化するのではなく、繭のまま深海棲艦として成立してしまっているという例外。むしろ、それが普通なのであって孵化すること自体が例外である可能性すら。
考えれば考えるほどドツボにハマっていき、叢雲の場合は苛立ちが強くなってしまう。それは控えたいので、それ以上生態について考えるのをやめた。いくらここに薄雲がいるとしても、癇癪を起こすのはナンセンス。耐えられるうちは耐える。
「うんうん、磨けば磨くほど汚れが出てくるってわけじゃないわね！」
「真水も充分だったみたいだな。また汲んでくる必要があるんじゃねぇかってヒヤヒヤしてたぜ」
「いいじゃない。私達は自分の手で運んでくるわけじゃないんだから」
水を流してもそれが黒ずまなくなったところで洗浄終了。意味がないかもしれないが、表面をタオルでサッと拭いてやったところ、ミシェルの身体の表面はキラキラと日の光を反射する程に綺麗になっていた。
そこまで綺麗になれたことで、ミシェル自身も大喜びしているかのように全身を使ってそれを表現。最後はジェーナスに頬擦りする。
「あはは、Ｍｉｃｈｅｌｌｅも嬉しいみたいね！　やってあげて正解だったわ！」
そのあと、洗浄の邪魔になるために外されていたシーツのリボンを

伊４７が巻き直して、ミシェルの姿は洗浄前と同じになる。まだ巻いたばかりだったからか、シーツが汚れているようなこともなく、綺麗なまま。
「毎日じゃないけど、１日置きくらいでやってあげるわ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、それで良かったかしら」
肯定するように身体を縦に振り、さらに身体を擦り付けた。ジェーナスには特に懐いているため、大型犬と戯れる子供のような光景に。
「漁のときもそうだったけど、ミシェルちゃん、この施設の一員としてはもう一人前だよ」
「そうなんだ。じゃあ、共存も出来るんだね」
春雨と薄雲も、ジェーナスが楽しそうにしている姿を見てホッコリしていた。

自己嫌悪の塊であるジェーナスの笑顔を引き出せるのは、心通わせる仲間の力のみ。ミシェルはそういう意味でも、ジェーナスからは切っても切れない存在になりつつある。

敵意の無い威圧

子供達がミシェルの洗浄をするために総出で外に行った後、大人組はダイニングでお茶をしつつ、鎮守府へと連絡を取っていた。駆逐イ級が正式に施設の一員になり、目印として腰にリボンを巻いたことを伝えるため。そしてもう一つは、海域の調査についてである。

昨晩か今晩かくらいに戦艦棲姫が調査しているだろうと思いつつ、昼間の調査を依頼しているため、こちらの準備が一応出来ていることを伝える。

『なるほど、リボンを巻いているんだね。了解した』

「ええ、使わなくなったシーツなんだけれど、違和感は無いはずよぉ」

ミシェルのことを話した時には、知っているはずなのにやはり驚いていた。着飾ったイ級なんてモノは当たり前だが見たことがない。実物を見るのは艦娘達になるのだろうが、逆に興味深い見た目になっているだろう。

施設の者達はその姿を可愛いと言っているが、それはあくまでも深海棲艦の感性。艦娘にはどう映るのか。

そして、調査のための宿泊の件。ひとまずは大丈夫であるとは話したものの、提督としてはいろいろと思うところがあるようである。それはやはり、叢雲について。

『本当にいいのかい？　叢雲はまだ怒りが燻っているんだろう？』

直に叢雲と話している提督だからこそ、宿泊が本当に大丈夫なのかは不安になるところである。ただでさえ艦娘に憎しみを抱いているというのに、張本人では無いにしろ、同じ種族を見ることになるのだ。施設としては、最も避けたいことが起きるかもしれない。

しかし、その叢雲は春雨が懸命に説得した。この鎮守府からやってくる艦娘達は、叢雲の思っている艦娘とは違うということを保証すると、春雨は自分の命まで持ち出して訴えかけた。

その結果、叢雲は折れた。しかし、顔を合わせるのは真っ平御免であり、だからといって艦娘のために部屋に引きこもろうという気持ちもない。顔を合わせようものなら、まず間違いなく悪態をつく。悪意

と殺意を持って接することになるだろう。それで艦娘達が嫌な思いをしても知らないぞと脅しまでした。
叢雲のその発言の一部始終を提督に伝えた。自分とのやりとり、春雨とのやりとり。その全容を。
「叢雲ちゃんからの忠告もあるわぁ。投げてしまうようで申し訳ないけれど、それでも大丈夫そうなら、私達はそちらの艦娘達を歓迎するわぁ。叢雲ちゃんは歓迎しないけれど」
『ふむ……ならば、こちらは施設の一部を借り受けるというのはどうだろうか』
施設に宿泊は出来ればしたいが、施設の中に入ると叢雲に迷惑がかかる。そこで折衷案として提督が提案したのが、島内での野宿である。
長期遠征、例えば練習航海などでは、戦闘中に遭難したときのことを前提とした無人島での1日待機という訓練も執り行われていたりする。鎮守府に所属する者は全員それの経験者であり、この施設にいる春雨も勿論野宿経験者。万が一の時に命を長引かせる方法はなるべく身体に刻み込ませるため、そういった訓練も実施しているとのこと。
今回はそれの延長線上と考え、無人島ではなく有人島での野宿。食事などは提供してもらえるが、施設には宿泊せずに夜を明かすことが前提の調査とする。
「確かにそれならお互いにやりたいことは出来るけれど……そちらの艦娘は嫌じゃないかしらぁ。こちらからは宿泊していいと話しているのに、野宿させるのは気が引けるわぁ」
『しかし、その調査はこちらとしても有益な情報が得られるチャンスではある。逃すわけにはいかない。こちらとしては、叢雲に罪悪感を与えることの方が問題ではあるのだが……』
島に来ており、雨露が凌げる建物があるのがわかっていながらも、叢雲のことを考えて野宿を選択したと知った場合、自分のせいでそれをさせているという感情からまた怒りが湧き上がってくる可能性はあった。勝手に来ておいて、自分のせいにするなと。自分は何も悪い

ことをしていないのに、なんでこんな思いをしなくちゃいけないんだと。
　島内での野宿を、配慮と見るか当て付けと見るかは叢雲次第。しかし、艦娘に対して怒りと憎しみを持っている叢雲にとっては、まず間違いなく後者として取るだろう。罪悪感から怒りに発展し、そのまま仲違いの原因になり得る。
　実際は、部屋も全員分余っているわけでもないため、野宿の方が助かったりするのだが、それは言わないことにした。何人来るかはまだ聞いていないが、何とかなるだろうと考えて。
　ただでさえ、私室を与えられていても使っていない者がいるわけだし、その辺りを上手いこと解放すれば、全員を入れることは出来るだろう。
「そこは後から叢雲ちゃんに話しておくわぁ。その結果は追って連絡すればいいわよねぇ」
『ああ、お願いする。念のため、野宿の準備だけはしておくが、しないならしないに越したことはない。君達を最も傷付けない道を選び取りたいと思っている』
　なんの下心もなく言ってのけるため、中間棲姫は心の中で流石だなと褒め称えた。相変わらず、最善を選び取ろうと必死だ。
『そちらの叢雲のことだ。元より来るなと言いそうではあるがね』
「既に言ってるわよ。でも、春雨が説き伏せようとしたの。アンタもだし、そちらの艦娘は叢雲の思ってるような酷いヤツらじゃないってね。実際は妥協くらいで終わっちゃったけど」
　飛行場姫からのこの言葉で、春雨がまだ鎮守府のために動いてくれていることを知れて喜ぶ提督。姿形は変わっても、艦娘の心は失っていない。それを実感出来るエピソードである。
「調査は明日から明後日ということにしてくれると助かるわぁ。遅くとも、朝イチにはこちらの見解を連絡するからぁ」
『ああ、よろしく頼む。どうであれ、こちらからは明日、調査隊を派遣させてもらうよ。人数は８人。戦艦２人、軽空母２人、駆逐艦４人だ。全員君とは面識がある。それと駆逐艦は』

「春雨ちゃんの妹達よねぇ。そのことは春雨ちゃんにも伝えておくわぁ」
鎮守府からのメンバーは以前から変えない。特に駆逐艦達、海風は、春雨と対面することで精神的なガタつきが癒されるのだから、選択されない理由が無かった。
施設側としても、一度顔を合わせている面々ならば安心出来る。いくら人のいい提督の部下だからといっても、艦娘は意思を持つ生物だ。腹の中では何を考えているかはわからない。新しい顔を見るたびに腹を探るのはお互いのためにならない。
『それでは明日、よろしく頼む』
「ええ、こちらから依頼したことなのだから、悪くないようにするわぁ』
通信はここでおしまい。あとは施設側では叢雲に、鎮守府側では調査隊に今回のことを伝えて、明日を待つだけである。

子供達がミシェルの洗浄から帰ってきたところを、中間棲姫が出迎えた。先程の鎮守府との通信の結果を伝えるためである。
「ミシェルのこと、鎮守府にも話しておいたわぁ。リボンを着けておけば、攻撃しないって約束してくれたわぁ」
「わぁ、よかった！　Ｍｉｃｈｅｌｌｅが鎮守府にも認められたのね！」
「施設の一員として、私達と同じように扱ってくれるそうよぉ。ミシェルにも伝えておかなくちゃいけないわねぇ」
艦娘からも攻撃対象にならなくなったことを聞き、ジェーナスは飛び上がるほど喜んだ。元艦娘以上に艦娘からは攻撃されかねない駆逐イ級（ミシェル）を、施設の一員だからという理由で見逃してもらえるのはありがたいことである。
むしろ、もっと仲良くなってほしいとまで思えた。特に精神的に病んできていた海風辺りは、ミシェルと仲良く出来れば癒されるのではとも。アニマルセラピーのような効能になったりすると、ジェーナス

は信じている。
「それと、叢雲ちゃん」
「私に直接言ってくるってことは、艦娘達がここに来るってことよね」
叢雲の機嫌が一気に悪くなる。元々その辺りの変動は叢雲の特性であるため、周囲の仲間達はそれに対してハラハラもしなくなっている。叢雲はそういうものという認識が既に拡まっているという証拠。
「ええ。そこで、あちらが1つ提案してくれたことがあるの」
「何を言ってきても、私は艦娘を認めないし気に入らないままよ」
「貴女と顔を合わせないようにするため、この島の端で野宿をするって言っていたわぁ」
叢雲は複雑な表情を浮かべた。提督の予想通りの感情を、叢雲は抱いていた。
自分のこの性質に配慮した結果が、ここに建物があるというのにもかかわらず、顔を合わせないようにそこに近付かないようにしているわけだ。つまり、自分のせいで苦行を強いることになっている。
勿論、鎮守府側からしたら、艦娘の姿すら見たくないという叢雲のことを考えての提案。しかし、叢雲からしてみれば、その存在は嫌でも感知出来てしまう。そこにいるというだけで苛立ちがあるのに、わざわざベッドがあるのに寝袋で寝るようなことをする。
怒りが溢れた自分に対する当て付けかと感じていた。お前のせいで艦娘達はこうなるのだと見せつけてくるような行為だと。それがまた、苛立ちを強くする。
「何よそれ。配慮だっていうの？」
「ええ、叢雲ちゃんは施設に来ることを許可はしてくれたけれど、顔は合わせたくないのよねぇ。だったら、この施設から離れた場所で一泊してもらって、そこから調査に出てもらうってことになりそうなのよねぇ。それならどちらの意見も摘める折衷案になってるわぁ」
鎮守府側としては、謎の海域の調査のために施設で一泊したい。施設側としては、叢雲と艦娘達を引き合わせないようにしたい。だからこその、この案である。
これにすら文句を言われたら、もうどうにもならない。どちらかを

切るしかない。しかし、叢雲は春雨からの力強い説得で宿泊の許可は出している。ならば、どちらもある程度の我慢は必要になる。
「……叢雲ちゃん。大丈夫だから、私の妹達を信じて」
ここでまた春雨が説得。鎮守府から来る調査隊のことを一番知っているのは春雨だ。絶対に裏切らない。万が一叢雲側から攻撃をしてしまったとしても、叢雲を攻撃することは無いと言い切れる。
勿論、口喧嘩くらいにはなるかもしれないが、危害を加えるような真似はしない。それだけは絶対だと話す。
「アンタ達の言いたいことはわかるわよ。あのイ級の出処がわかれば、私をこんなにしたヤツの素性に繋がるかもしれないってことも理解してるわ。それを鎮守府のヤツらが調査することで解決しやすくなることだってね。それでも、私の本能が気に入らないって言ってんのよ」
「わかるよ。叢雲ちゃんはそういう性質なんだから、何がどうなっても気に入らないんだと思う。でも、でも今回だけはお願い。朝にも言ったけど、艦娘達が、妹達が叢雲ちゃんに危害を加えたら、私に何をしてくれても構わない」
再び、あの強い瞳。強い意志を叩きつけられるような視線に、叢雲はまたたじろいでしまった。
それだけ春雨は鎮守府の者達のことを信じているし、何も起きないとわかっている。だから気軽に自分の身体も命も懸けてしまう。
「叢雲ちゃん、ダメ？」
そして、同意を求めてくる。春雨のこの圧に、叢雲は勝てそうに無かった。春雨からの敵意のない威圧は、叢雲にはキツイものでもある。
槍持ちであった時に、春雨によってマウントポジションを取られたという事実は、叢雲の中で無意識に『春雨には勝てない』という本質が刻まれてしまっているのかもしれない。実際は薄雲の名前を出されて行動が止まっただけかもしれないが、身体を動かせなくされたのは間違いない。
「わかった、わかったわよ！　今回だけは折れてやるわよ！」

「ふふ、よかった。叢雲ちゃんの知ってる艦娘とは違うってことは保証出来るから。でも、わざわざ顔を合わせろなんて絶対に言わないから安心してね。叢雲ちゃんが嫌なことはしないしさせないから」
「ふん。でも野宿だから許してやるって話だから」

叢雲を力業でねじ伏せたかのようにも見えるが、結果的に艦娘達の調査は可能となった。叢雲だって、あちら側が自分に配慮してくれているのはわかっているつもりだ。それでも譲れないものがあったから、ここまで抵抗したに過ぎない。
あとは当日、感知は出来ても自分から関わりを持たないようにすれば、万事解決になるはず。その時の叢雲には、薄雲がついていればどうにかなるだろう。

戦艦の目

その日の深夜。哨戒にて不思議な駆逐イ級、ミシェルの存在を確認した海域に、1体の深海棲艦が現れた。施設から旅立った戦艦棲姫その人である。

深海棲艦という都合上、明るいうちから動くわけには行かなかった。余計な戦いを呼び込む上に、自分が危険に巻き込まれるということは、他の者達まで巻き込まれてしまうことにも繋がる。結果、この時間。

施設から出て行ったのは前々日であり、1つ夜を越えているのだが、当日はまず身を潜めるための無人島の目星をつけることに使っている。結果的に、人間や艦娘にはバレそうに無い小さめな無人島を見つけたため、そこを拠点に今調査に入った。

「さて、と。確かこの辺りだったわよね、あの駆逐艦を見たのは」

周りを見ても何もない海のど真ん中。目印らしいものすら何処にもないのだが、戦艦棲姫の目はここであると断定出来ていた。

深海棲艦だからある技能とかではなく、世界中を旅してきた戦艦棲姫だからこその技能。何も無いように見えて、戦艦棲姫だけにしかわからない何かがあるようである。海図や羅針盤が無くてもそれが何処であるかを把握出来ているようだ。

だだっ広い海を駆け抜けて、ピンポイントで姉妹姫の住む施設に来れるのだから、それくらいの技能は持っていて当然なのかもしれない。

「まぁ、何も無いわよねぇ……。貴方はどう？」

展開している艤装に手を置き、優しく尋ねる。

生まれた時からの相棒であり、今でも従順に付き従う巨体。戦艦棲姫の意思を反映した、独自の意思を持つ紳士も、無言で首を横に振る。この艤装のお陰で戦艦棲姫の視界は３６０度を誇るが、それでもわからないものはわからない。

戦艦棲姫がわからないものを、艤装側がわかるなんてことはあまり無い。これは殆ど自問自答のようなものだ。そうやって自分の中の

疑問を整理して、先に進んでいく。
「あの駆逐艦が生まれたのは自然の摂理だったのかしらね。それにしては賢すぎるのよねぇ」
発見した現場で腕を組み、小さく俯いて考える。施設で見た行動がどんなものだったかを思い返しながら、一つずつ組み立てていく。
「こちらの言葉を理解出来ていた時点で何かがおかしいのよね……おかしいというか、賢すぎる。あんなの見たことが無い」
野良の駆逐艦くらい、戦艦棲姫は旅をしている最中に何度も見たことがある。それは総じて自分の意思のようなものは持っておらず、適当にフラついているか、他の姫に懐いておりその指示に従うのみの傀儡かのどちらか。単独で行動する駆逐艦自体が稀であり、そういうものは大概が勝手に生まれて勝手に消えていく。
しかし、あのイ級は確実に人並みの知性を持っている。言葉がわかり、全身を使った感情表現を繰り返し、挙げ句の果てには施設に辿り着いて一員となってしまった。
戦艦棲姫は今は知らないが、丸一日施設に身を寄せて、ミシェルという名を与えられてからは、より一層可愛げのある仕草と感情を見せるようになっている。特異性の塊だ。
「だったら……やっぱり艦娘があの姿になったと考えるのが妥当かしらね」
戦艦棲姫の想像もそこに行き着く。野良犬のような深海棲艦ではあるのだが、あの施設に住む元艦娘達のように、死を目前とした艦娘が何らかの力によってあの姿になってしまったのではないかと。
施設では叢雲もそこに行き着こうとしていたが、イ級の外観そのものが黒い繭である可能性も、頭をよぎっている。繭が孵化することなくそのまま深海棲艦として成立してしまっているとしたら、ならばどんな感情が溢れた結果がああいうカタチを取るに至るのかがわからない。
「ふぅむ……悩んでいてもわからないものね。貴方も何か見つけたら教えてちょうだいね」
首を縦に振り、指示通りに周囲を見回す巨体の艤装。その後、両手

を海面に当てて、周囲の海水から何か感じるものが無いかを調べ始めた。
中間棲姫が黒い繭に触れることで溢れた感情を読み取っているのと同じように、こちらは海面に艤装で触れることでそこで起きた何かを断片的に読み取る。いわゆる、海の記憶を探すということになる。
戦艦棲姫はこの技能のおかげで戦いを避けて旅を続けることが出来た。海の上での厄介事は、これによって事前に察知して避ける。戦いを好まない者には最高の力である。
「どう？」
しばらくじっと確認していると、立ち上がってあちらに何かあるかもと指を指し、戦艦棲姫を導くように動き出した。
あくまでも、わかるのはそこで何かあったであろうということだけ。具体的な何かはわからず、抽象的、断片的な物事を拾っているに過ぎない。
しかし、反応を見せたということは、そこで何かが起きたということに他ならない。やはり、あのイ級の生まれには根本的な何かがある。
「海としては普通ね。なら、知らない間に戦いがあったというのが妥当か」
現場に立っても、そこにそれらしいものがあるかと言われればそんなことはない。先程とは何も変わらない風景。波も同じで匂いも同じ。あるとしたら海底なのかもしれないが、いくら深海棲艦とはいえ海上艦の戦艦棲姫には調査が難しいところ。
艤装と共に見回しても、何か見つかるものでもなかった。いくら夜目が利くにしても、今は深夜である。月光照らす海の上とはいえ、細かいものは見えない。例えば戦いの残骸くらいがあれば良かったのだが、パッと見ではわからなかった。そこは日中に調査に来るであろう艦娘達に任せるのが良さそうである。
「戦いの痕跡も無し、ね。まぁここはあの姉妹の影響下だから、ああいうのが生まれることもないはずだし。外から流れ着いてきたって方が妥当か。辿れるところまで辿りましょ」

もう一度この場で艤装に断片的な海の記憶を読み取ってもらう。先程よりは場所が場所だけに詳細が読み取れるかもしれない。
これを繰り返して海上を行ったり来たり。進んで進んで、姉妹姫の影響下からは大分外れた場所にまで辿り着く。
勿論風景は何も変わらない。陸に近付いているはずだが、それはまだまだ遠く、夜の灯りすら何処にも見えない沖も沖。まぁ人間の目に付くような場所で何か起きていたら、真っ先に鎮守府が動いているだろう。それがないのだから、秘密裏に動いているのは当然か。
「やったヤツらが綺麗に片付けたのか、そもそもそれが起きたのがえらく前なのか……まぁすぐにピンとは来ないわね。もし艦娘由来なら、人間の方が詳しいわよね」
施設から遠く離れたこの場所なら、影響範囲外なので何かしらの痕跡がありそうだとは思ったものの、やはり見ただけでは何も無かった。
元凶と考えられる者達がご丁寧にもしっかりと片付けたのかもしれないと思うと、妙におかしくクスリと笑ってしまう。艤装の方も小さく反応した。
「それじゃあ、ここでもお願いね」
艤装がコクリと頷くと、今までと同じように海面に手を置く。ここに来るまでには痕跡らしい痕跡はなく、この場所に導かれるように記憶が連なっていた程度。
それはイ級の記憶の断片なのかもしれない。自分が生まれた理由を探ってもらいたいがために、同胞(はらから)にしかわからない痕跡を残しているようにすら思えた。実際は誰にもそんなことは出来ないため、イ級の持つ思いが強かっただけかもしれないが、そんなことを思えるイ級というだけでも異常。
「どう？」
戦艦棲姫が聞くと、艤装は小さく頷いてから、ここで読み取れた断片を伝える。身振り手振りだけではなく、艤装そのものの意思をぶつけるカタチで。
これは負荷が大きいため、なるべくやらないようにしている機能。

意思を持つ艤装だとしても、その持ち主と直接会話をするのは厳しいらしく、日に1回くらいを目安にしている。
それをやると判断した程なので、ここで手に入った情報は相当重要なものだとわかる。
そして、そこで見えたものは。
「片目が輝く……重巡洋艦……」
あくまでも抽象的、断片的な記憶だ。顔がしっかりわかるわけでもなく、この海がそれだけは強く覚えていた。
それは、春雨や叢雲が話していた、未知の深海棲艦。片方の目だけが光り輝いていた、オッドアイの重巡洋艦である。その印象があまりにも強いのか、それ以外の部分がわからないのだが、またもやここでその存在がチラついた。
その重巡洋艦がここで何をやっていたかはわからない。しかし、あの駆逐イ級が生まれることになったきっかけを作ったのは、間違いなくこのオッドアイの重巡洋艦だ。戦艦棲姫はそこまでは確信した。
「ここでも出てくるのねソイツは。そこら中で暴れ回ってるみたいだけど……目的は何なのかしら」
艤装は勿論わからないため、首を傾げるように身体を傾ける。
「叢雲みたいに、よっぽど艦娘に恨みがあるから、目に入ったやつを手当たり次第に襲っているのか、それとも何かしらの理由があるのか……」
目的があって、あらゆる場所に現れては艦娘を沈めていくというのなら、その目的は一体何なのか。ここで考えてもわかることでは無かった。
艦娘を見かけたら無差別に襲い掛かるというのなら、それは侵略者気質の深海棲艦ならば割と普通なので気にはならないのだが、わざわざ探し出して沈めているような挙動はどうしても気になる。
「考えていても仕方ないわね。今日はこの辺にしておきましょうか」
艤装もコクリと頷き、来た道を引き返す。初日に見つけておいた拠点の無人島に戻るために。
最後に周辺を隈なく観察したが、やはり何も見当たらなかった。自

分がこうやって調査をしている姿を見られているかとも思っていたが、そんなことは無かったようだ。
　戦艦棲姫は何処か安心しつつ、その海域から離れた。ここで戦闘なんてしたくないし、同胞(はらから)から襲われるだなんて不毛に尽きる。
「今日のところは帰って休みましょ。また近々艦娘達がこの辺りまで来てくれるでしょ。夜は私達が見に来たらいいし、ゆっくり行けばいいわよね」
　あちらとしては早急に解決したい事案かもしれないが、戦艦棲姫からしてみればそこまで重要なことではない。施設に何かしらの害があったら問題ではあるが、今のところはそんなことも無さそうであるため、自分のペースで見ていくことにした。
　旅の合間のことなのだから、親身になりすぎるのも違う。気が向いたからやっているだけだ。本能は旅を求めているのだから、あと1回、2回見たら終わりにしようと自分の中で取り決め、さっさとそこから離れるのであった。

　戦艦棲姫がこの海域から去った後、しばらくしてから、この場所に現れた深海棲艦がいた。数は2つ。
「誰か嗅ぎ回ってるみたいですね」
　ボソリと呟いたのは、その2つのうち少し大人びた方の深海棲艦。ここに戦艦棲姫がいたことを感じ取っているようで、小さく溜息をついた。
「探し出して殺しちゃう？」
　そういうのは、もう片方と比べると少し幼めな深海棲艦。無邪気に命のやり取りをしようとしている辺り、見た目はさておき頭の中は大分幼いように見える。
「どうしましょうね。あとあと厄介なことになるかもしれないし、始末しておくのは悪いことではないかもですけど」
「やりたいやりたい！　どんな相手でも、あたしがバーっとやっちゃうよ！」

「はいはい、でも慢心はダメですよ。楽しみたいのはわかるけれど」
相方の暴走を嗜めて、頭をポンポンと撫でると、心底嬉しそうに身震いした。随分と懐いているようである。
「相手は私達よりも格上の同胞(はらから)の可能性もあるんですから、慎重に行きましょうね」
「むー、わかった、わかりましたよー。でも、もしソイツを見つけたなら……」
残忍な笑みを浮かべて、最後に言い放つ。
「あたしが、いっちばーんに、ぶっ殺すからね！」

艦娘再来

翌日の朝。中間棲姫により鎮守府に連絡がされ、今日の昼頃に艦娘が訪れることが決まった。調査自体は翌日朝からとして、1日目は野宿の準備、一晩明かした後に、本腰を入れて調査ということになる。

島には来るものの、施設には入らない野宿というのは、理由も納得してもらっている。叢雲がそういう存在であるというのは周知の事実であり、施設のことを理解している証拠でもある。

叢雲としては、艦娘が自分のことをそこまで理解していることが不愉快なようだが、薄雲がどうにか宥めていた。艦娘が気に入らないのはもう仕方ないものとしても、自分のことを思って行動を相当制限していることに対して文句を言うのは、さすがに問題があると見たようである。

妹に嗜められては返す言葉も無いようで、舌打ちをしたものの、それ以上とやかく言うのはやめた。これ以上何か行動を起こそうとしたら、春雨が動き出す。

「あちらも準備が必要だから、ここに到着するのはお昼過ぎ、その後野宿のための設営をするらしいわぁ」

「それ、私も手伝いに行っていいですか？　その、やっぱり私の仲間達ですし、妹なので」

「ええ、問題ないわぁ。お出迎えからお願いするわねぇ」

春雨は率先してそちらの手伝いを所望した。やはり妹達と触れ合えるのは最高の癒しになる。施設よりも優先順位を上げてしまうのは仕方ないことだろう。

「場所は、以前にミシェルちゃんがここに来た岸にしてちょうだい。あそこならあちらも行動に移しやすいでしょうし、場所も広いから一晩過ごしやすいと思うわぁ」

岸にも種類があり、漁に出たり釣りをしたりする方は、野宿にはあまり向いていない。逆に、ミシェルが初めて流れ着いた岸は殆ど整備されていない代わりに野宿はしやすいような場所になっている。

今回の調査隊には、そこを使ってもらう。テントを建てるなら建て

てくれても構わないし、そこでキャンプ的なことをしてくれても構わない。最後に何の痕跡も残さないでいてくれれば、何をしてくれてもいいと伝えている。
「ご飯とかも提供していいんですよね」
「ええ、今日の昼食までは大丈夫だそうだけれど、それ以降はこちらから提供するつもりよぉ」
「それなら、私もそれを手伝いますね。やっぱり、妹達とは付き合いたいですし」
　本当なら調査にも便乗したいレベルなのだが、それはさすがに憚られた。ある程度の場所を伝えるだけ伝えて、施設からは出ないということになる。ならば、ここにいる間はずっと側にいたいと思えた。せっかくまた来れるようになったのだから。
　また寂しさに押し潰されそうではあるものの、今の春雨としては妹達のことが重要である。後のことより、今のこと。楽しめる時間は少ないのだから、後の発作のことなんて考えていられない。
　これもまた、心が壊れている故の言動だろう。自分のことを後回しにして、相手のことしか考えない。
「みんながいるところで寝ようかなって考えちゃいました。それはさすがに迷惑になりそうなのでやめておきます」
「そうねぇ。もしかしたら、簡易的な寝床もギリギリの分しか用意していないかもしれないものねぇ。でも、海風ちゃんは一緒に寝たいって思うかもしれないわぁ。そこは来てから相談してみればいいと思うわよぉ」
「ですね。もう今から楽しみです」
　いつになくテンションが高い春雨に、みんながほっこりしつつも苦笑。タブレットを使っての会話も出来ていないため、海風と話すのは本当に久しぶりだ。こうなっても仕方ないだろうと誰もが理解している。叢雲を除いて。
　逆に、叢雲は今から既に憂鬱な気分のようである。春雨とは真反対。昼には特に気に入らない艦娘が、顔を合わせないにしろ感知の範囲にずっといることになると考えるだけで、苛立ちが激しくなる。

「姉さん……気持ちはわかりますけど、落ち着きませんか」
「そうよムラクモ。一応納得してるんでしょ？」
薄雲とジェーナスにツッコまれても、叢雲は態度を改めない。そういう本質なのだから仕方ないと、春雨も納得はしている。
どれだけ説得しても、艦娘に対する怒りは絶対に晴れないのだから、今回に関しては我慢してもらうしかないのだ。
「叢雲ちゃん、後から甘い物作るから。一度納得してくれてるし、今日と明日だけだから、ね？」
「アンタねぇ……私がそういうので靡くほど食い意地が張ってると思ってんの？」
「うん」
きっぱりである。あまりにもハッキリと言われたせいで、叢雲は何も言い返せなかった。実際、甘いもの、美味しいものを食べている間くらいは、怒りが大分鎮まることを自覚しているため、春雨から言葉にされたことで口を噤まざるを得なかった。
「……詫びにもならないわよ。でも作ってはもらうから」
「勿論。とびきり美味しいのを作るから、妹達にも振る舞いたいしね。叢雲ちゃんにはちょっと多めにしておこうか？」
「配慮すんな」
リシュリューとコマンダン・テストに習った甘味の腕がようやく振るえると、より楽しそうに語る春雨。振る舞いたい甘味は午前中から用意しておけば、到着までには完成するだろう。

そして午後。昼食の後少しして、叢雲が反応する。
「来たわよ、艦娘が」
かなり遠いところにいても敏感に感知する叢雲の電探が、鎮守府の艦娘を捉えた。数は8と聞いていたため、そこもドンピシャ。
いてもたってもいられなかったか、春雨はすぐさま迎えの準備をする。それに便乗するのはジェーナス。叢雲は顔を合わせる気がなく、午前中よりも不機嫌になったため、薄雲と一緒に待機。薄雲からも、

みんなによろしくと言伝を貰う。
　実際は、今すぐにでも襲いたいという気持ちが無くはなかった。槍持ちの時には突然動き出して襲撃に向かったくらいなのだから、本能がそれを求めている。しかし、この施設で仲間達と過ごすことで、自力で抑え込むことはギリギリ可能となっていた。
「姉姫様、妹姫様、みんなが来るようです！」
「ええ、時間的にもそろそろだものねぇ。迎えに行きましょうかぁ」
　施設から岸に向かうタイミングとして、叢雲が反応する時間がかなり都合がいい。準備して出て行き、岸に到着したタイミングで水平線の向こうに姿が見え始めるかというくらいになる。
　ミシェルは一時的に逆方向の岸、野宿のために用意された場所へと移動してもらっていた。施設にやってきていきなりその姿を見るのは、事前に知っていても混乱を招きそうであるため。
　春雨が大きく手を振ると、それがちゃんと見えたのか、水平線の向こう側にチラリと見えた人影が手を振り返してくれた。春雨はコマンダン・テストや戦艦棲姫ほど目がいいわけではないので、それが誰かを特定することは出来なかったが、おそらくは海風だと直感的に思った。
　少しずつ近付いてきたことで、それがやはり海風であることがわかり、より一層嬉しくなる。久しぶりの再会、タブレット越しでなく、直である。喜びもひとしお。
「海風！」
「姉さん！　お久しぶりです！」
　声が届く範囲になって、すぐに叫んだ。海風も即座に反応し、誰よりも早く部隊から抜け出して春雨の元へと駆け付ける。
「会いたかったです姉さん。いろいろ話したいこともありますし、とにかく顔が見たかったです」
「私もだよ海風。元気そうで本当によかった」
　手を取り合って再会を喜ぶ。寂しさが溢れ出したとは思えないくらいにはしゃぐ春雨と、何度も苦境に立たされたことで精神的に病んでいるとは思えないくらいに楽しむ海風。２人にとっては、この再会

が一番の癒しである。
「Ｈｅｙ，春雨ぇーっ！　元気そうで何よりデース！」
「春雨！　変わりないみたいだね！」
「金剛さん！　比叡さん！　そちらも元気そうで！」
その後ろからゾロゾロと仲間達もやってきた。まずは相変わらず飛び抜けたテンションの金剛が来た途端に春雨を抱きしめ、それを後ろから見ていた比叡が羨ましそうに眺めつつも手を振る。
「今日から一晩だけですが、よろしくお願いしますね」
「ええ、野宿というカタチになってしまってごめんなさいねぇ」
「それはまぁ、仕方ないことだよね。こっちも理解してるつもり」
さらに千歳と千代田が中間棲姫と話す。叢雲の性質をちゃんと理解しているが故に、野宿もやむを得ないと納得してここに来ている。
提督も、野宿が嫌なら部隊から外れてもいいという指示を出しているものの、誰もそんなことで嫌な顔をするものはいなかった。
「わぁ、ヤマカゼ、艤装が変わってるわ！」
「おう、山風の姉貴、ついに改二改装したンだ！」
「前よりもめっちゃ強くなってるんだぜぃ！」
ジェーナスは最後におずおずと来た山風に反応。その姿を見て驚くが、山風よりも先に江風と涼風が自慢げに話し出した。その様子に、山風は複雑な表情をするものの、後ろを向くことは無かった。
この調査隊が結成された時に発表された山風の改二改装。それが執り行われたことにより、山風は以前よりも強く、そして万能になった。
山風の改二には二種類のコンバートが用意されているのだが、今回の山風はその１つ、無印の改二。もう１つの改装案である改二丁というのもあるのだが、あちらは艦隊旗艦としての性能が高く、今回の調査隊には少し違う性能だったため、丁にはならず。また必要な時には丁となる予定。
「ふふ、山風、改二改装おめでとうね」
「……うん、ありがと……」
「海風のこと、その力で守ってあげてね」

春雨に言われて、力強く頷く。改二改装によって得た力は、今でこそ大分安定しているが、いつ壊れるかわからないくらいに病んでしまっている海風を守るための力だと認識している。その心を支えるためならば、山風もその力を惜しみなく振るうだろう。
「さ、それじゃあ、そちらも準備が必要でしょう。少し荷物を持ってきているみたいだしねぇ」
「あ、そうです。今回は野宿ということで、野営用の設備を少しだけ運んできました。設営させてもらいたいのですが、良かったですか？」
「ええ、そのつもりで場所を用意しているもの」
飛行場姫が先導して、調査隊を逆側の岸へと案内する。野営用の設備は、海風が扱う大発動艇にギッシリとは言わないが積み込まれており、全員分の寝袋や、万が一のための簡易テントなどが準備されていた。
遭難をしているわけではないので、何も無しでそこで身体を休めろとは言われていない。あくまでも決められた野営である。練習航海も似たような状況で行なわれるため、これもまた訓練の一環として扱われていた。
「設営、私も手伝うね。経験あるし」
「私も手伝うわ！　やったことは無いけど。それにＭｉｃｈｅｌｌｅのことを紹介しなくちゃいけないしね！」
「ミシェル……？」
聞き覚えのない名前が出てきたことで、艦娘達全員が首を傾げた。そんな名前の艦娘は見たことも聞いたこともない。
「Ａｈ，　もしかして、噂のイ級のことですネ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅと名前を付けたんデスカ」
「そうよ！　可愛いでしょ！」
「Ｓｏ　ｃｕｔｅ．　Ｊａｎｕｓが付けてあげたのネ」
そうこうしている内に岸に到着。そこにいたリボンを巻いたイ級の姿を目にした瞬間、艦娘達は息を呑んだものの、事前に話を聞いていたおかげで攻撃しようとまではいかない。驚きはするが、この施設にいるのだから、艦娘相手にも穏やかな感情を失わない。

ジェーナスが駆け寄って撫でると、ミシェルは嬉しそうに身体を震わせる。そんな光景に、艦娘達は呆気に取られていた。やはり、イロハ級がこんなに懐いている姿というのは、姫級が好意的であることよりも異質。
「実際に見ると、これはまた驚くもンだなぁ……」
江風がボソリと呟く。全員が同意だったようで、それ以上何も言えなかった。
「わかっていると思うけど、この子は一切害が無いから。安心してここで野営してちょうだい」
「Ｏｋａｙ．　この子が私達の護衛をしてくれるってことカナ？」
「そう考えてくれてもいいわ。必要ないとは思うけど、いるのといないのとでは話が変わるでしょ」
陸に上がらないため岸にいるだけとも言えるが、ミシェル的には艦娘達を見守るという仕事になるようである。
「よーし、それならミシェル……だっけ。よろしくね！」
比叡が元気よく敬礼すると、ミシェルもそれに合わせて敬礼するようにビシッと姿勢を正す。
ヒトに懐いているだけでなく、こういうところのノリもいい。あまりにも異質だが、逆に安心も出来た。

無事に施設に辿り着き、一晩を明かすことになる艦娘達。調査は翌日朝からだ。その調査によって、何が判明するだろうか。

本質は曲がらず

施設に辿り着いた艦娘達は、施設の中にいる深海棲艦達とは故意に関わり合いにならないように野営の準備をしていく。自分達はあくまでも、島の一部を借りているのだという気持ちを持って、絶対に迷惑をかけないという意思の下、一晩を過ごす。

だとしても、深海棲艦達は基本的には元艦娘。それに純正の深海棲艦である姉妹姫は、仲間意識を持っている相手にはお節介を焼く方なので、誰かしらがその設営場所に向かっていた。特に春雨は、元々いた場所の艦娘達であり、妹達がここにいるのだから、施設に戻ることすらしない。設営の手伝いを自分から買って出るほどだ。

とはいえ、春雨は施設と野営の場を1人で行ったり来たりすることが出来ない。そのため、それを手伝ってくれるのは基本的にはジェーナスである。ジェーナスはジェーナスで、ミシェルがよろしくやっているかを見ておきたいという理由があるのだが。

「こうやって、みんなと一緒に何かやるっていうのが本当に久しぶりだから、すごく楽しいなぁ」

設営を手伝いながらしみじみと呟く春雨に、海風も笑みを浮かべる。

「私もです。姉さんが鎮守府からここに移ってもう2週間以上経ちましたけど、やっぱりまだ慣れることが出来ません」

「あはは、なんだかんだ一緒に訓練とかしてたもんね。顔を合わせない日が無いのが鎮守府だし」

常日頃から一緒に生活していたのだから、長期遠征でもこんなに長いこと鎮守府を離れることはない時間を過ごしているのは、簡単には慣れることが出来そうに無かった。

ただでさえ、春雨に憧れを抱いていた海風だ。目標と共に戦っていた日々が突然失われたのだから、消失感も大きい。精神を病むほどの焦燥感と憔悴に繋がるのも致し方ないのかもしれない。

「最近は端末で話すことも出来なかったから、少ない時間だけどいっぱいお話ししたいね」

「はい、時間が許す限りは。でも、姉さんは大丈夫ですか？　私達が帰った後、その……」
「あー……うん、大丈夫じゃないけど、今を楽しみたいから。私のことは心配しないで」
　親身な相手ほど、別れが辛くなるのが今の春雨だ。また会えるのがわかっていても、今その時の別れによって寂しさが溢れ出し、発作を起こす。
　だが、それを気にしていたら、もう二度と出逢いと別れが出来なくなるわけであり、当然妹達との再会も出来なくなる。春雨にとって、そちらの方が辛かった。
　だから、発作のことは気にせず楽しんでほしいと、海風に伝える。海風だけではない、仲間達全員に言えることだ。自分のことを気にしすぎて、十全の力を発揮出来ないというのはやめてもらいたいのである。
「わかりました。もう会えないなんてことは絶対ありませんから、今を楽しみましょう。楽しむと言っても、これは任務なんですから、真剣に取り組みますけど」
「うん、そうしてそうして。私達はついていけないけど、何か見つかることをここで願ってるからね」
　和やかな風景に、心が休まるような感覚。戦場に向かうような任務ではあるものの、確実に敵が来ることがない施設での活動は、それだけでも心身共に癒される時間のようだった。

　設営が完了したため、そろそろ甘いものを振る舞おうと施設に戻った春雨とジェーナス。事前に準備していたため、頃合いが来たら持っていくだけという状態である。
　それが置かれているダイニングには、苛立ちがどうしても隠せない叢雲と、それを宥めながらも苦笑しか出ない薄雲がいた。春雨達の姿が目に入っても、態度は一切変えない。
「お待たせ、叢雲ちゃん。さっき言ってた甘いもの、今から出すから」

「ご機嫌取りのつもりかしら」
「うん」
　またもやハッキリと言い放たれ、叢雲は溜息を吐く。自分のキャラ付けはどうなってるんだと頭を抱えるが、もうこうなってしまったものは仕方ない。突き抜けるわけにはいかないのだが、なるべくクールに決めたいものであると意識する。
「リシュリューさんに習ったんだ。叢雲ちゃんも好きだったよね。シュークリーム」
　取り出されたそれを目にした瞬間、叢雲の目が一瞬輝いたようにも見えた。甘いものに目が無いのはわかるが、そこまで反応するかと笑いそうになった。
　記憶を取り戻した時に食べていたのもコレである。変に印象が強い食べ物になってしまっているのは確か。
「リシュリューさんのモノのように上手く出来てるかわからないけど、教えられるがままに作ってみたからさ、食べてみて。叢雲ちゃんには特別に2つあげちゃう」
「……まぁありがたく貰っておくわ。でも、艦娘のことは許さないから」
「わかってるよ。でも、ここにいることは許してあげて」
　皿に取り分け、叢雲と薄雲の前に。その間にジェーナスも紅茶を淹れて、2人に振る舞う。多めに淹れたのは、外にいる艦娘達にも振る舞うため。時間的にはおやつの時間。この差し入れはきっと喜んでくれるだろう。
　振る舞われたシュークリームに口をつけると、叢雲はパァッと雰囲気を明るくした。やはり、甘いもの、美味しいものを食べている時だけは、湧き上がっている怒りが鎮静化される。だからといって常に食べ続けることなど出来ないのだが。
「……むぐ、やるわね春雨……」
「よかった。叢雲ちゃんが気に入ってくれるなら、みんなも喜んでくれるよね」
　艦娘の話題が出たことで、甘いものを食べながらも少し表情が曇

る。やはり、怒りは拭い切れない。
「ムラクモ、我慢出来そうにない？」
ジェーナスが尋ねると、当然だと即座に言い放つ。それほどまでに根深いのだが、それが本質なのだから否定は出来ない。
叢雲を虐げたような鎮守府や艦娘は一握りくらいしかいないのだが、叢雲にとってはそんなことは関係ない。生まれてすぐにこうなってしまったのだから、知っている世界が狭すぎるのだ。いい艦娘を知らないのである。
「今でも私の感知の範囲にチラついてるのよ。それが鬱陶しいったらありゃしないわ」
「姉さん、その電探か何か、オフには出来ないんですか？」
「出来てればとっくにしてるわ。それも私の本質なんでしょ。周りを常に警戒して、気に入らないものがあったらぶっ潰す。そのためには、このやたら範囲が広い電探は常時稼働させておかないとダメなんでしょうね。私の意思なんて関係なしに」
話している間にもイライラしてきたようなので、一度話をやめてシュークリームに口をつける。春雨の作ったそれは出来が良かったようで、口に含めば多少は落ち着くようである。
「んむ、あれよ、寝てる最中に耳元で蚊がうろついてるみたいな、そんな鬱陶しさなの。気分が悪いでしょ。私には艦娘が感知の中にいるだけでずっとそういう感覚なのよ」
すごく的確な表現をされたことで、3人とも叢雲の今感じているモノがどんなものかをしっかりと把握出来た。
感知が切れないというのも厄介で、常に誰が何処にいるかがわかっているようなモノ。仲間達なら別に痛くも痒くも無いのだが、自分が一番気に入らない艦娘がそこにいるということが常に理解出来てしまうのは鬱陶しくて仕方ないようである。
さらには、その感知した反応が艦娘か深海棲艦かの判別が出来てしまうのもさらに厄介。それが何かがわからなければ、艦娘などいないと断じてしまうことも出来ただろうに、それが艦娘であると理解出来てしまうのも向い風である。

処置を受けずに深海棲艦化した弊害なのかもしれない。槍持ちのままであれば、この能力は関係無かっただろう。必要な能力として十全に使い、本能の赴くままに艦娘を襲撃するだけだったのだが、今は思考能力が戻ってきている。
「でも逆に、施設内で悪いことしてないっていうこともずっとわかるってことだよね」
「何をしてるかまではわからないわよ。そこにいるってことしか。こそこそ何かやってるっていうなら、私にはわからない。だからこそ、イライラは増える一方なの」
話しながら、シュークリーム1つ目を完食。プラスで与えられた2つ目に手を伸ばす。
「でも、私は少数派なんでしょ。多数決で負けてるんだから、追い出すことなんて出来ない」
「まぁ……こちらのことを全力で考えてくれてる艦娘を追い出すのは、あまりよろしくないですね……。それこそ、和睦にヒビが入るかも」
苛立ちは増す一方でも、今は施設のことを第一に考えることが出来ているようで、必死に我慢することで艦娘に手を出すことを抑えている。
許可が出れば、情け容赦なく皆殺しにするくらいの心境ではある。しかし、そんなことをしようものなら、この施設が敵対視されることは回避出来ない。和睦と言いながらも奇襲を仕掛けるような輩がいるなんて、卑怯以外の何物でもない。
叢雲にもプライドがある。本能のままに行なわれた殺戮行為が、卑怯という言葉で一蹴されてしまうのは耐えられない。自分が最も嫌う鎮守府の艦娘達と同じようなものではないかと考えれば、多少なりとも我慢出来る。
「んー、ムラクモもあの子達とＦｒｉｅｎｄになれればいいんだけど」
「無い。絶対に無い。誰が艦娘なんぞと友達になんてなるか。私を裏切った愚か者なんだから」
その艦娘とは別物だと訴えても、これは完全に聞く耳を持たない。

艦娘と悪がイコールで結び付いてしまっているのは、ちょっとやそっとでは解けない。
　それこそ、叢雲のピンチを艦娘が救ってくれるくらいしないと難しいか。それか、艦娘自体が叢雲を納得させる何かをするか。
「まぁ今は何を言っても無駄だろうし、ハルサメ、私達はこれをあの子達に届けに行きましょ」
「そうだね。変につついて悪化させるのも良くないし。それじゃあ、叢雲ちゃん。その味堪能してね」
「……悔しいけど堪能させてもらうわ。本当に美味しいし。むぐ」
　ゆっくりと味わう叢雲と、それについている薄雲に別れを告げ、春雨とジェーナスはこのおやつを艦娘達のところに持っていくために、ダイニングを出て行った。わざわざカートのようなものまで持ち出して。
「姉さん、意固地になっているわけではないのはわかりますし、そういう性質で生まれ変わっているのもわかるんですが……」
　薄雲も、叢雲が知る世界が狭すぎることはわかっている。悪いところしか見ていないのだから、こうなってしまうのも無理はないということも。
　しかし、耐えられないものは耐えられない。一生晴れない怒りを背負って生きていくのは、この身体になった時に定められた宿命である。
「それ以上言わないで」
　叢雲は薄雲の次の言葉を遮った。何を言うかなんて手に取るようにわかった。艦娘にも良いもの悪いものはいるのだと。何度も何度も言われ続けた言葉だ。
　叢雲はその言葉を理解することを拒んでいるに過ぎない。怒りが理解に抵抗している。許せないが上回ってしまう。
　だから、今は細かいことを考えないようにしていた。考えすぎると壊れる。これ以上壊れたくない。

ダイニングから離れた春雨とジェーナスも、叢雲のことを心配していた。
「仕方ないことなのかな……。叢雲ちゃん、妹達と仲良くなれると思うんだけど」
春雨としては、妹達も同じ駆逐艦なのだから、自分と同じように叢雲も楽しく付き合えるとは思っている。
それが本質に根付いてしまっているとしても、良い艦娘と悪い艦娘の区別は出来るのではないかと。
「ムラクモはまだ今みたいになって短いから、時間がかかるわよ。私だって吹っ切れるまでにすごく時間かかったんだもの。だから、気長に待ちましょ。鎮守府とのお付き合いも、これからずっとあるんだろうし」
ジェーナスとしても、叢雲には良くなってもらいたいようである。しかし、自分の経験もあるため、まだまだ時間が足りないということもわかっている。
自分が自己嫌悪を持ちながらでも楽しく生きることが出来るようになるまで、かなりの時間を要している。ここにいる者達は全員がそういう道を歩いているのだ。春雨だって完全に吹っ切れることが出来ていないのに、それよりも日が浅い叢雲が吹っ切れることなんて出来やしない。
「でも、最後はちゃんと仲良くなれると思うわ。叢雲、なんだかんだ言って生真面目だしね」
「だね。今すぐっていうのは無理でも、きっと大丈夫だよね」
そう信じるしか無かった。仲違いを続けるのは、心にも良い影響を与えない。
何処かに折り合いをつけてくれると信じて、春雨達は今を見守る。

溜め込んだ感情

その日の夜。野営している艦娘達も、夜の帳が下りると共に、持ち込んだランタンを点け、夜を越える準備をしていた。遠くに見える施設の明かりを見ながらも、こちらはこちらで楽しくやれている。

今回の任務は人数もあるおかげか、今のところはピクニック気分でいられた。安全であることがわかっている場所で一晩を明かすだけなら、丸一日使う練習航海よりも緊張感が無くなってしまうものである。

夕食もなんだかんだ施設に用意してもらっており、軽食ではあるもののしっかり腹を満たすことが出来ていた。その分の食材は必ず返すと約束して、今回は美味しく頂かせてもらっている。

「寝袋で寝るの、いつぶりだっけかな」

「それこそ練習航海ぶりじゃないかい。あたいなんて年単位で久しぶりかも」

「さすが古参の涼風、でも江風もそンなもンかもしンないねぇ」

などと楽しげに話しながら眠る準備をする。江風と涼風は、こんな時でも楽しそうに寝袋を広げていた。

姉妹姫が提供してくれたこの場所は、比較的芝がちゃんとされている場所であり、寝袋を使えば身体が痛くなるような眠りにはならないくらいには柔らかい。万が一のために屋根は用意しているため、もし翌朝に雨が降っていても心配は無かった。

あとは一応ではあるが、ミシェルが近海で待機している。護衛なら任せろと言わんばかりに、何処にあるかはわからないが胸を張るような仕草をしたため、艦娘達も任せることにした。この島の中では護衛の必要は無いだろうが、やってくれるというなら頼んでおいた方がいい。

「月夜を楽しみながら、外でのティータイム……少し風情があるネ」

「はい、鎮守府でもなかなか出来ないことですし、なんだかまったりしちゃいますね」

「Ｙｅｓ．　気を張ってばかりじゃ、Ｆｕｌｌ　ｐｏｗｅｒは出せな

いからネー。明日からはしっかりお仕事デスから、今はこれでいいヨ」
安心安全であることは、心の余裕にも繋がる。ランタンの灯り1つでテーブルを囲んでまったりしているのもなかなか趣があると、金剛と比叡が紅茶を飲みながら楽しんでいた。
この紅茶も、ジェーナスが淹れて置いていってくれたものだ。わざわざ夕食後に準備してここまで持ってきてくれたのだからありがたい。温かいものを飲んで、グッスリ眠る。これがベストである。
「お風呂に入れないことくらいですかね。野宿の唯一の欠点は」
「そうネー。まぁそこは仕方ないヨ。今回の調査隊は、施設に近付かないが条件デース」
「そうかもしれないけど、目の前にお風呂があるのに入れないのは残念よね」
などと言いながら、千代田が準備していた濡れタオルで千歳の背中を拭いていた。艦娘とはいえ、不衛生はよろしくない。こういうところでも欠かさずに清潔感を維持する。
身体を拭くための湯も、金剛達が飲む紅茶と共に施設側から提供されていたものである。春雨が運んできて自分もここで眠ろうかと話したものの、そこまで面倒をかけるわけにはいかないと丁重にお断りをしていた。
海風としては一緒に眠りたかったという思いは強くあったのだが、気持ちよく眠れるベッドがあるにもかかわらず、本来部外者である自分達に付き合って野宿をする必要なんて無いのだ。ここで一緒に眠るとなったら、春雨は寝袋もないから眠りづらいだろうし。そんな寝方をしたら、いくら深海棲艦化しているとしても、明日の朝には身体がガタガタになってしまう。そんな痛みすら与えたくない。
「……海風姉」
「大丈夫よ、山風。私は大丈夫。姉さんが私達に付き合って身体を痛めたりする方が、私は辛いから。姉さんはあちらで身体を休めた方がいいの」
「……そっちじゃない。我慢してること、あるでしょ。吐き出した方

がいい」
口ではこう言うし、実際に春雨がここで付き合うことはやめておいてほしいと言う気持ちも理解しているのだが、もう1つ、海風の中には思うことがある。
それは、あまり口に出してはいけないこと。艦娘として、あまり考えてはいけないことである。
「Ｈｅｙ，海風ぇ。あんまり溜め込むのは、Ｎｏなんだからネー」
「……そうですね。悶々としていると、明日に引っ張ってしまいそうですもんね」
「Ｙｅｓ．前にも話した通り、溜め込みすぎたらＥｘｐｌｏｓｉｏｎ（爆発）しちゃうヨ」
山風と金剛に心配されたことで、海風も今の自分にある黒い気持ちを吐き出そうと決意した。仲間達に白い目で見られるかもしれないが、金剛や比叡には一度相談しているし、山風には看破されているのだから、もう半分くらいは痛みが軽減されている。
その気持ちは、やはり叢雲へのモノだ。叢雲に対して配慮に配慮を重ねて野宿をし、姉との眠りも断らざるを得なくなった。そもそもが施設から頼まれた任務を実行するのに、たった1人の感情を逆撫でしないように配慮して、頼まれた側がこんな仕打ちを受けていいのかと。
端末を使って姉と話が出来なくなったのも、施設に来ることが出来なくなったのも、そして今回の野宿の件も、何もかもが根幹に叢雲がいる。海風の中での叢雲の存在は、あまり良くないモノになってしまっていた。心の支えを奪った者として。
「鎮守府と艦娘に手酷く裏切られて、姉さんの寂しさみたいに怒りが溢れ出して、常にイライラしてるんだって聞いてますから、私達にそういう感情を持ってしまうのも、そういうモノだって理解は出来てるんです」
「それでも、納得出来ないことがあるんだよネ？」
「……はい。ろくに話もしないで嫌いと言われても……何がダメなのかハッキリ言われているならまだしも、同じ種族だからなんて理由は

納得出来ません」
　そんな理由で、春雨との時間を奪われたのだと思うと、そんな気持ちを持ってはいけないと感じながらも心が痛むのだと、仲間達に伝えた。
「素直でいい子デスネ。そうやって考えちゃうのも、無理無いヨ」
「……でも、これはあまり良くない考えだともわかってますから、自分の中で溜め込もうとしました」
「姉貴は真面目だねぇ」
　その江風も、叢雲に対してそこまでの気持ちは抱いていなかったにしろ、『アイツのせいで』という気持ちが無かったわけではない。とはいえ、何処かさっぱりと割り切っていたところもある。アイツはそういうヤツなんだと。
　江風としては、気に入らないヤツがいたとしたら、自分から関わりを持とうなんてしない。むしろ、こうやって自分から身を引いてくれるのなら、ありがとうと受け入れて距離を取る。その方が無駄が無いから。
「わかる！　わかるよ海風！　私もお姉さまが同じ立場になったら同じこと考えちゃうなぁ！」
「うーん、私もその気持ちはわかるなぁ。千歳お姉が同じ立場になったら、すごくイライラしちゃいそう」
　海風の気持ちが投影出来るのは、比叡と千代田。他の者に関係を阻まれたら、今の海風のように感情が揺れ続けるだろう。最悪、施設に殴り込みに行って叢雲本人に文句を言いつける。
「私としては、叢雲とは一度腹を割って話がしたいんだけどネ。酷い目に遭ったのは知ってるけど、艦娘が全部そうじゃないことは知ってもらいたいからネ」
　そもそも、と金剛は続ける。
「叢雲だって元は艦娘だったんだし、悪い艦娘だけじゃないことくらいわかってるはずなんだけどネ。それに、ここの仲間達は元艦娘ばかりなんだからサ」
　だからこそ、和解の道は確実にあると、金剛は希望の灯を絶やさな

い。必ず最善を掴み取ると、常に前を向いている。心が壊れ、怒りに身を焦がれ、周りにその炎を撒き散らす存在だとしても、話せばわかる相手だと信じているのだ。
　金剛が希望の光となり、仲間達に前を向かせる。たったそれだけでよかった。おかげで海風は悩みを打ち明け、スッキリすることが出来た。溜め込まず、全てを曝け出して、だが誰もがそれを否定しない。そんな考え方もあると同意し、みんなでその悩みを解決しようと力を合わせる。
「私、叢雲さんと話がしたいです。私達は敵じゃない、手を取り合える仲間なんだって、面と向かって訴えたいです」
　そしてあわよくば、春雨とまた一緒にいられるようにしたい。ここまでは言葉にはしなかったが、ここにいる誰もが海風の本心に気付いている。
「でも、こっちから施設に行くのは協定違反だよね」
　涼風のこの言葉に、海風はスンとテンションが下がった。仕方がないとはいえ、綺麗に出端が挫かれる。
「あちらから来てくれたりしてな。でも、そンな状態だと、まぁまずキレてるンだろうな」
「あっちから来てくれる時なんて、文句言いたい時だけだよねぇ。そいつは話もまともに聞いてくれないだろうねぇ」
　八方塞がりなのは変わらないのである。だが、心持ちが変わったことで、海風は幾分か気持ちが楽になった。
　もしも顔を合わせることがあったなら、自分達の、艦娘の善性を訴えたい。数少ない悪を見てしまったことで、数多い善が見えなくなってしまっていると、理解してもらいたい。
「Ｇｏｏｄ（果）　ｔｈｉｎｇｓ（報）　ｃｏｍｅ（は）　ｔｏ（寝）　ｔｈｏｓｅ（て）　ｗｈｏ（待）　ｗａｉｔ（て）
と言いマース。今は焦らず、私達の出来ることをしていきましょうネー」
「はい、そうします。今は現状維持に努めます。姉さんと会えないわけじゃないですし」
「さっきもさんざん話したもンな。そりゃあ出来ればあっちの建物の

中で話がしたいだろうけど」
　まだ明かりが漏れる施設を眺めながら、しみじみと話す。あちらはまだ夜の帳は下り切っていないようで、中では深海棲艦達が和やかに暮らしているのだろう。ちょっと羨ましいと思いつつも、今はこれが最善の道と信じる。
　それに、このキャンプのような夜もなかなか味わえないので楽しかったりはするのだ。これが雨の中でも施設に入るなと言われたら不平不満もあるだろうが、今は夜でも雲一つない、月明かりが眩しいくらいの気持ちいい天気である。もしかしたら、あちらが逆に羨んでいるかもしれない。
「時間をかければ、きっと上手く行きますよね」
「Ｙｅｓ．　気持ちの問題は、時間が解決してくれることが多いデース。叢雲の場合は、それでも治まらないかもしれないけど、あちらには我らが春雨がついてくれてマース。信じて、待ちましょうネ」
「はい、それがベストだと思います」
　海風に笑顔が戻ってきた。勿論春雨とこの夜でも会えないのは、自分達から断ったこともあるので仕方ないことではあるが、近くにいるとわかっているのだから大丈夫。
「さ、明日は早いデスし、もう寝て備えましょうネー」
「うーい。なンか結構眠たいぜ」
「わかるわかる。設営とか疲れるかんね。あたいも眠たいさー」
　金剛が本日最後のティータイムを終えると、ささっと片付けて就寝へ。制服のまま眠ることになるが、これも訓練の一環だと思えば全く苦ではない。それに、寝袋もそれ用に作られた艦娘専用のモノ。使いづらさはカケラも感じない。
「はい、それじゃあ皆さん、Ｇｏｏｄ（お）　ｎｉｇｈｔ（すみ）」
　艦娘達は施設よりも少し早めに１日を終わらせることになる。ある意味雑魚寝みたいなものなのだが、誰もがスッキリと眠れそうだった。
「……海風姉」
　眠る直前、山風から声をかける。海風もまだ眠っていなかったた

め、小さくそれに反応する。
「……スッキリした？」
単純な問いかけに対して、海風はほんの少しだけ考える仕草。そして、
「うん、ありがとう山風。溜め込んでちゃダメだってわかってても、溜め込んじゃうね。これが私の本質なんだろうね」
「……たまには……吐き出して。あたしも……話くらいは聞けるから」
山風も頼れる存在だ。改二改装のおかげで、さらに力強い。海風としても、落ち着いて眠ることが出来るだろう。
悶々としたままだと、ここで眠ることも出来ずに朝を迎えて、結局十全の力を出しきれないまであった。しかし、金剛と山風のおかげでそれがある程度払拭されたのだ。明日のために、正しく身体を休めることが出来そうだ。

叢雲とのわだかまりは、簡単には解決出来ない。だが、時間をかければきっと何とかなる。そう信じて、艦娘達は1日を終わらせた。

ストレスの限界

艦娘達が夜の岸で就寝の準備をしている頃、施設側も1日を終えようとしていた。まだ眠るには早い時間ではあるものの、風呂も終わって一段落している状態だ。

いつものように駆逐艦の4人組がベッドルームに入るのだが、案の定、叢雲は半日イライラしっぱなしである。今でも感知の中には8人の艦娘の反応はあり、常にチラついているのだ。甘い物を与えられて多少は抑え込まれていたものの、今はもう寝るだけというところまで来ているので、ここから甘味による抑制は期待出来ない。

「私も一緒に寝ようかって聞いたんだけど、お断りされちゃった。海風に、姉さんには身体を痛めてほしくないですからって」

「寝袋も無いもんね。いくらいい感じの芝でも、直に寝たら流石に身体痛めちゃうなぁ」

そんな叢雲のことは気にしつつも、海風に丁重にお断りされたことを話す春雨。最初は海風の側にいたかったのだが、言われてみれば確かに、寝袋も無い状態で一緒に眠るのには無理があった。ベッドで一緒に寝るならともかく、地面にダイレクトは深海棲艦にも厳しい。

自分のことはどうでもいい春雨にとって、身体がガタガタになるのも至極どうでもいいことなのだが、海風がそう言うのならと今ここにいる。そこにいるのに離れ離れなのは寂しいものの、気遣ってくれた結果というのは嬉しかった。心はしっかりと繋がっている。

「明日は調査に行ってくれるからね。朝ご飯も作ってあげなくちゃ」

「なら私も手伝うわ。ミシェルのことを見に行かなくちゃいけないし」

「うん、よろしくね。外で食べるものだし、簡単なものがいいよね。あとは戦闘糧食もあった方がいいかな。時間がかかるかもしれないし」

春雨とジェーナスが和やかな話をしていても、叢雲の表情は暗い。というか酷い。

夕食もしっかりと食べて怒りを鎮静化していたのだが、もう限界に近かった。艦娘がチラつくだけでも嫌なのに、艦娘の話題が展開され

ているのも気に入らない。今は何もかもが腹が立つ状態になりつつある。
「姉さん、大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃないわよ」
心配そうに問いかける薄雲に対して、叢雲は刺々しく返す。もう薄雲に対しても体裁を整えられないくらいになっているようである。
「あれだけは割り切れないわ。やっぱりわたしは艦娘のことが気に入らないのよ」
「叢雲ちゃんの気持ちはわかるけど……でも、今日だけだから」
「そういう問題じゃないって言ってるでしょ」
みんなが叢雲のことは理解しているつもりだ。だが、それで艦娘との繋がりを全て断ち切っていたら、進むものも進まなくなる。
この施設は不可侵を徹底したいという気持ちがあるが、仲良く出来るものなら仲良くしたいという気持ちだってあるのだ。春雨が施設の一員となり、それを意地でも探し出そうとした艦娘達が施設に辿り着いたことで、その一歩が踏み出せたと言える。
「正直、寝られるかもわからないわ。気になってしかたないし、今すぐにでも潰しに行きたくて仕方ないもの」
「それだけはやめてね。和睦とかそういう話じゃなくなっちゃうから」
「わかってるわよ！」
勿論、みんなが叢雲のことを考えて今まで行動している。艦娘の方も、叢雲に配慮し続けている。しかし、叢雲にはこれだけではまだ足りないのだ。
叢雲自身も、それが完全に我儘であることはわかっている。自分の性質、発言が、周りに迷惑をかけていることくらい理解している。だが、怒りがそれを上回ってしまう。頭が熱くなって、思考が纏まらない。
「……もう寝るわ。寝れば多少は気が紛れるかもしれないし」
イライラしながらも、一番最初にベッドに入った。いつも通り、薄雲の隣に居られるように、ベッドの端に。

残された3人は、まだまだ重症だと小さく溜息をついて、いつもの場所に潜り込んで就寝した。出来ることなら叢雲を真ん中に置いた方がいいのではと思ったものの、叢雲自身が端から退こうとしなかったため、結局いつも通りのポジションに。
叢雲の表情は、ずっと辛そうだった。こうしている間も、艦娘は感知の範囲に入り続けているのだから。

その夜、叢雲は酷い夢を見る羽目になった。せっかく眠れたというのに、夢の中でも追い詰められてしまった。
艦娘がいるという事実が刺激となって、艦娘であったときの記憶をハッキリと呼び起こされたのである。
「う……ううっ……」
当時のことを鮮明に思い出し、ただただ苦しかった最後の戦いを見せられ、死の間際まで再現された。2体の深海棲艦に圧倒され、他の仲間に囮にされ、蹴り出されるかのように砲撃の前に投げ出される。
攻め込むわけでもなく、半狂乱の中でただ逃げる時間を作るためだけの命と扱われた悲しみ、苦しみ、怒り、憎しみ。夢だというのに痛みすら反芻させられるかのようだった。
「っあ……ぐ……」
叢雲の本質は、怒り。怒りによって身体が動く。思考が焼かれる。黒い繭に包まれていく時も、叢雲は怨嗟の声を上げ続けていた。
生み出しておいてこの仕打ちは何なのか。何を考えればこんなことが出来るのか。そんなことで命を散らせるなんておかしくないか。そう考えていくうちに、怒りと憎しみは極限まで高まり、そして溢れ出した。
「……憎い……憎イ……ニクイ……」
魘されながらも、その言葉はよりハッキリと、しかし歪んでいく。まるで槍持ちに戻っていくように、叢雲は狂っていく。
これが叢雲の本当の発作なのだと言われれば納得は出来た。正気を取り戻したとしても、今まではまだ艦娘を感知したことが無かった

からだ。それを今日初めて感知し、さらにはその範囲内に半日以上滞在されたのだから、限界が訪れても仕方ないこと。
「姉さん……？」
ここまでしていたら流石に薄雲が気付く。深い眠りであっても、強く魘されているのだから、真隣にいる薄雲にもその怒りの激しさが伝わり、目を覚まさせる程になる。
薄雲が身体を叢雲の方に向けようとした時、叢雲はベッドから下りてふらりとベッドルームから出て行こうとした。その足取りは普通ではなく、まるで夢遊病のようにフラフラと、しかし向かう場所は理解しているかのように強い。
まだ頭が働いていなかったが、叢雲のこの謎の行動は、意識を覚醒させるには充分だった。部屋を出た瞬間に見えた叢雲の顔が、怒りと憎しみに染まっていたからだ。
「姉さん!?　何処に行くんですか！」
薄雲の言葉にも答えない。足を止めることなく、さらには寝間着からいつものスタイルへと変化した。湧き立つ怒りを顕現させるかの如く、その手には愛用の槍まで現れた。
まずいと感じた薄雲は、1人で追うわけにもいかず、春雨とジェーナスをすぐに起こす。薄雲だけで叢雲が止められるかはわからない。しかし、あまり時間をかけていると叢雲がやらかしてしまう。
「春雨ちゃん！　ジェーナスちゃん！　姉さんがまずい！」
少し揺すって声をかけるだけかけて、薄雲はすぐに叢雲を追った。最初はフラフラだったその足取りは、今や明確に艦娘達に狙いを定めたものになっていた。
悪夢に呑まれ、怒りが限界に達し、理性すら失っている。しかし、その本質だけは失われず、『艦娘を沈める』という槍持ちの時の本能が全てを塗り潰していた。
「姉さん！　止まってください、姉さん！」
薄雲に叫ばれても聞く耳を持たず、むしろその足は速くなる。確固たる意志で、感知の中にいる邪魔者を排除するために動いていた。
薄雲もこのままでは本当にまずいと感じたため、施設内ではあるも

のの艤装を展開。小型であるため、歩くことを邪魔することもない。叢雲が艤装を展開しているようなものなのだから、こちらもそこまでしなくては止められない。
しかし、それでも叢雲の足を止めることが出来ないのは勿論、そもそも叢雲がスピードに特化しているのも原因である。薄雲はどちらかと言えば万能型。特化している部分は無いため、良い言い方をすれば万能だが、悪い言い方をすれば器用貧乏である。
「止まってください！」
代わりに、薄雲にしか無い武器もあった。それが、主砲と主機を繋ぐ鎖である。
今は主砲だけは展開せず、鎖のみで運用。それで叢雲の脚を絡め取ろうという作戦。せめて止まってくれれば、話が出来る。
「……煩い！」
しかし、その鎖は叢雲の槍に切り払われた。一切止まるつもりはない。薄雲すらも決別するかのように突き進む。
今の叢雲には怒りしか無かった。それは、艦娘をどうにかしなくては治まらない。心を鎮めるためには、チラつく羽虫を振り払わなければ気が済まない。
「私はもう迷わない！　邪魔なモノは排除する！　そうしないと、この怒りは晴れないのよ！」
「排除しても晴れないでしょう！　そうやって全部振り払っても、姉さんの怒りは一生晴れません！」
「頭にチラつくアイツらがいなくなれば気が晴れる！　そうしたらココに艦娘が来なければいい話よ！」
もう聞く耳も持たない。自分の意思に従い、やりたいようにやると決め込んでしまっていた。悪夢によってストレスが限界に達したことで、思考能力が完全に奪われてしまっている。
「なんでそれだけしておいてここにいられると思っているのかしら」
しかし、それを簡単に止めてしまう者が現れた。施設の主の1人、飛行場姫そのヒトである。

これだけ騒いでいれば、施設の全員が目を覚ましていてもおかしくはない。その中でも、飛行場姫は姉よりもすぐにこの場に駆けつけた。
「この施設の意志は、今は艦娘達との和睦よ。それに、アンタのような溢れた艦娘の保護もね。こうならないようにするために、私達は監視する必要があるの」
叢雲の真正面に立ち、その歩みを止める。槍を握りしめる叢雲に対し、艤装すら出していない飛行場姫。しかし、それだけでも叢雲は先に進めなくなった。威圧感が半端では無かった。
「艦娘が近くにいることで、悪夢でも見たんでしょ。アンタは特に酷い目に遭っているんだから、同情はするわ。でもね、それでこの施設の在り方そのものを壊されたら、こっちも困るの」
「そんなの知らないわよ！　私を保護して、殺さずに生かしてるのはアンタ達のエゴでしょ！　私は、私はこの怒りのままに艦娘を全部沈めてやる！　艦娘でも深海棲艦でもない叢雲が、それを選んだのよ！」
どれだけ考え直しても、本質だけは変わらない。もっと強い衝撃がないと、叢雲は変われない。提督に多少は感謝しているという言葉も、今や頭の中には無かった。艦娘は憎むべき敵なのだという意志は揺るがない。
そんな叢雲を見て大きく溜息を吐いた飛行場姫は、今までに無いくらいの冷たい視線を叢雲に向けた。その眼光は、まさに深海棲艦の姫。人間や艦娘が恐れるモノだった。
「なら、艦娘の前にアタシをやってみなさい。そうでもしない限り、ここから通さない」
「……っ」
「何よ。意志が固いなら、アタシ如きに日和ってるわけないわよね？　ほら、かかってきなさい。アンタは柄物持ち。アタシは手ぶら。艤装も出さないであげる。ほら、ほら！」
挑発するように手招き。余程の自信があるのだろう、リーチが長い槍を目の前にしても、飛行場姫の余裕は一切揺るがない。その姿も、

叢雲の怒りを増す結果になる。
「私の前を遮る愚か者め……！　その余裕を突き崩して、後悔させてやるわよ！」
強く地面を蹴り、突撃。相手は素手。槍のリーチには到底敵わない。ならば、射程範囲外から攻撃すれば、少なくとも絶対的な優位を持ったまま戦える。
だが、叢雲は怒りのせいで何も見えていなかった。理性を失っているせいで、冷静ではないせいで、飛行場姫の実力を完全に見誤っている。
この施設、この島は、中間棲姫と飛行場姫の領域だ。つまり、完全なるホームグラウンド。艤装が無くとも十全の力を発揮する。対する叢雲は、そもそも海の上で戦う存在だ。どう頑張っても十全の力は発揮出来ない。
「はぁ……だから怒りが溢れた艦娘は厄介なのよ。情けはかけるけど」
その槍の尖端、刃を指2本で受け止めた。たったそれだけ。それだけで、叢雲は次の行動を全て封じられた。
前にも後ろにも槍が動かない。たった2本の指に挟まれているだけなのに、まるで万力に固定されているかのようにびくともしなかった。
「なっ……」
「怒りはね、本当に見境が無くなるのよ。こうやって、実力差すらも測れなくなるくらいに。アンタは違うと思っていたけど、結局同じだったわけね。残念だわ」
そしてその槍を軽く払う。強く握り締めていたせいで、叢雲ごと壁に激突。施設自体が強固であるため、ダメージを受けるのは叢雲のみ。
「アタシは、他人を恐怖で支配しようだなんて思ってないわ。でも、アンタみたいなヤツに対しては、それもアリなんじゃないかと思うわけよ」
指を少し曲げただけで、槍がグニャグニャと、まるで飴細工を作っ

ているかのように曲がっていく。
叢雲の槍だって、深海棲艦の艤装の一部だ。艦娘のそれよりもむしろ硬いまである。それなのに、そんなことを全く感じさせない。
「でもね、お姉がそれを拒むの。だから、これくらいで勘弁しておいてあげる」
そして最後は、力尽くで槍を奪い取った挙句、バキバキに折って返された。

「何よ……それ……」
槍と共に、心が折れた。

最初の溢れた者

深夜に悪夢に魘された結果、自らの意思で暴走をしてしまった叢雲。しかし、施設の岸で野営している艦娘達を襲おうと部屋を出たところで飛行場姫によって止められてしまった。

艤装まで持ち出し、飛行場姫を怒りのままに殺害しようとまでしてしまった叢雲だったが、飛行場姫の実力は怒り任せの攻撃には一切屈することなく、たった指2本で屈服することになった。

叢雲は、槍と同時に心が折れていた。

「姉さん……」

その一部始終を見ていた薄雲が叢雲に駆け寄る。しかし、差し伸べようとした手を振り払った。

「何なのよ……惨めな私を笑いに来たの？」

心が折れたことで怒りは鎮静化され、膝から崩れ落ちていた。それどころか、今の叢雲は涙目で震えていた。

本気で殺そうとしたのに、手加減をされても手も足も出なかった。本気を出されていたら、今頃自分はこの世にいない。自分が何をやろうとも、飛行場姫には敵わないだろう。完全に恐怖を抱いていた。

そんな自分の姿が、プライドの高い叢雲には醜態と感じたのだろう。怒りに身を任せている時はそんなことを思わなかったため、自分の意思と思いながらも正気は失われていたのかもしれない。それがまた、自分への怒りを呼び起こす。

そのため、薄雲に八つ当たりをしてしまっていた。そんなつもりは無くとも、苛立ちは表に出てしまう。

「惨めだなんて思ってません。姉さんはそういう性質のヒトだってことは、みんながよくわかっています。今回は発作が起きてしまっただけです」

対する薄雲は、ハッキリとした口調で叢雲に思いを伝える。叢雲からは返す言葉は無かった。

今回の行動は完全に暴走だ。悪夢によって精神が特に不安定になったところに、オフに出来ない電探から一番の怒りを駆り立てる艦

娘の反応が常に送られてきて、そもそも溜まりきっていたストレスが爆発した。そのせいで、自分の意思はストレスを発散すること、つまりは艦娘の殲滅と認識してしまった。即座に行動に移してしまうほどに。

薄雲の言う通り、これは叢雲特有の発作だ。春雨や薄雲のように、わかりやすいトリガーがあるわけではなく、叢雲の場合は常に怒りに苛まれているのだから、それが溜まり切れば発作が起きる。トリガーではなく、周期のようなもの。今回はそれが初めて発生したに過ぎない。

「気にしないでください。姉さんがあんなことをしてしまったからと言って、私達が見捨てるとかは絶対にしません。だって、仲間ですから」

発作の苦しみを理解しているからこそ、こういう言葉を建前ではなく本心で出せる。姉であるという補正もあるが、薄雲からしてみれば、まだ誰にも害が無いのだから、取り返しがつくモノとしか考えられない。

「全く……今後はストレスが溜まり切る前に発散するわよ。何ならまたアタシが相手になったげる」

飛行場姫からしても、何も起きなかったため、とりあえず反省してくれればいいくらいで終わらせるつもりである。殺意を持った一撃も、無かったことにするつもり満々。

しかし、叢雲自身がいじけてしまっては意味がない。建前だけでも罰を与えようとも考えていた。施設の方針に反した行動を取ってしまったわけで、それが発作であったとしても、命のやり取りに持っていこうとしたのは、あまりよろしくはない。

この頃には、薄雲に起こされた春雨とジェーナスも合流し、中間棲姫もやってきていた。残りの面々も続々と集結することに。

その中心で、自分の惨めな姿を見られていると思うと、余計に心がグチャグチャになっていく叢雲。暴れ倒したかと思いきや、返り討ちに遭った挙句に立ち上がれないほどに落ち込む。まるで躁鬱病である。

「なんだなんだ、発作か？　叢雲の発作は夢遊病か何かか？」
「怒りと夢遊病って繋がらなくない？」
「わかんねぇぜ？　昔の夢を見ちまったせいで、暴れたとかさ」
竹が戯けたような言葉で場を和ませようとし、松もそれに合わせる。しかし不発。叢雲は顔を伏せ、拳を握るのみ。半分当たっていたせいで、場は和むどころか更に緊張感が満ちることに。
「ひとまず、みんなは寝てちょうだいねぇ。私と妹ちゃんが後は何とかしておくから。まだ真夜中だし、眠たいでしょう？　明日に備えてねぇ」
それをすぐに終わらせるのは中間棲姫。ここでうだうだしていても何も進まないだろうから、姉妹姫のみで叢雲の面倒を見るからと部屋に戻させる。
「薄雲ちゃん、戻ろう。姉姫様と妹姫様なら、きっと叢雲ちゃんをどうにかしてくれるよ」
「そうよ、ウスグモ。あの２人を信じて、ｂｅｄｒｏｏｍで待ちましょ」
薄雲は叢雲が心配で戻ろうとしなかったものの、春雨とジェーナスの助けもあり、叢雲を２人に任せてベッドルームに戻った。
残された叢雲と姉妹姫は、一旦ダイニングへ。叢雲は立ち上がれそうに無かったが、飛行場姫がかなり強引に立たせた後、引っ張るように歩かせて椅子に座らせた。
もう叢雲は完全に萎縮している。怒りなんて溢れ出すことが無いかのようだった。しかし、これもまたストレスになり、いつどこで爆発するかがわからない危険な状態でもある。
「まず、叢雲ちゃん。少しは落ち着いたかしらぁ」
飛行場姫がホットココアを用意している間に、中間棲姫が正面から聞く。しかし、叢雲は俯いた顔を上げることが出来ない。
落ち着いているとはいえ、今でも怒りは燻っている。燻っているのだが、先程の圧倒的な力を思い出して、それは完全に抑え付けられていた。怒り任せに暴れたら、またあの力業で捻じ伏せられるのだと考えると、手が震えてしまう。

飛行場姫が少しだけ言った『恐怖による支配』が、ある程度出来てしまっていることを表していた。絶対に敵わない相手というのを、心身共にわからせられてしまった。

飛行場姫がこうなのだから、中間棲姫はさらに恐ろしい力を持っている。叢雲の中ではその構図も出来てしまっている。

実際、中間棲姫には3枚の甲板というとんでもない装備があるのだが、叢雲はそれを知らない。それでも、中間棲姫にはもっと酷いカタチで捻じ伏せられるのではという恐怖があった。

「貴女の怒りはわかっているつもりよぉ。私も少し無理をさせてしまったようで、ごめんなさいねぇ」

中間棲姫からの謝罪。最も謝罪する必要が無い者からの言葉に、叢雲は驚く。

「貴女の特性を見誤っていたみたい。貴女もここまでのことをやってしまうなんて思ってなかったの。本当にごめんなさいねぇ」

中間棲姫は叢雲を責めることは絶対にしなかった。怒りが溢れた艦娘のことを一度見ているようで、精神を逆撫でするような行為は避け、叢雲の気持ちを汲みながら宥めていく。

しかし、そうなると叢雲には疑問が出てきた。ここまでやらかした自分を、何故まだこの施設に置いておこうとしているのか。

ルールに反した者に親身になる必要はない。ただでさえ飛行場姫に手を出しているのだ。全く敵わなかったとはいえ、その時の殺意は本物だった。いわば自分は叛逆者だ。追放、ないし処刑されてもおかしくないことをしている。

「……なんでそんなに私なんかに親身になるのよ……」

その疑問を素直にぶつけた。何故ここまで温厚でいられる。何故分け隔てなく優しく出来る。怒りの化身となった叢雲には、それが理解出来ない。

「うーん、じゃあ叢雲ちゃんだけには話しておこうかしら。わかってると思うけれど、この施設には貴女以外にも怒りが溢れた艦娘がいたのよ」

戦闘中の飛行場姫の言葉や、先程の中間棲姫の言葉からして、そん

な感じはしていた。同じような艦娘を知っているからこそ、今回のような対処をしている。
いた、ということは、今はいないということでもある。その者がどうなったのか。
「そいつが何処の誰かは知らないけど……そいつに対して失敗したから、私には親身になってるってことなわけ……？」
「そんなところね。二度とあんなことにはしないために、アンタだけじゃなく、ここにいる全員を同じようにしないために、アタシ達は尽力してんの」
飲みなさいと、飛行場姫が叢雲の前にホットココアを置く。身体を温めて、ゆっくり眠れるように配慮したそれは、匂いだけでも心が落ち着くようだった。
「ジェーナスよりも前、本当の最古参が、ここにはいたの。あの子がここに来る前にいなくなってるんだけど」
「そいつが……私よりも前に怒りが溢れて深海棲艦になった艦娘……？」
「ええ。天龍っていうヤツなんだけど、アイツもアンタみたいに怒りが溢れた結果だった」
経緯は叢雲とは違うようだが、その天龍も、心を壊すほどの怒りにより黒い泥が溢れ出し、深海棲艦化した存在なのだという。
「いい子だったんだけどねぇ……怒りがどうしても払拭出来なかったの。それに、元々が好戦的だったところもあって……処置が出来ていたのに、どうしても抑え切れなかったみたいなのよねぇ」
今の叢雲よりも苛烈に周囲に怒りを振り撒いていたが、ここに拾ってもらえた恩というのも感じていたため、ある程度の協力はしてくれていた。
しかし、それこそ今の叢雲のようにストレスが溜まりに溜まり、発作を起こしてしまった。溢れ続ける破壊衝動に身を焦がれ、正気を失って暴れ回る、ただの暴君と化してしまったそうだ。
「……結果は」
「自滅よ。自分で自分が止められずに。アタシもさっきのアンタみた

いに強引に止めようとしたんだけれど、ダメだった」
「この施設も大分壊されてしまってねぇ……見境なく壊した挙句、最期は……自分の砲撃に巻き込まれたのと、怒りに身を焼かれたことでさらに酷い発作を起こしてしまって……そのまま」
いくら身体が強固な深海棲艦といえども、その身体の内側がどうにかなってしまったら、ひとたまりもない。最期は殆ど心臓発作みたいなようなものだったらしい。
春雨や薄雲の寂しさ、ジェーナスの自己嫌悪など、激しい発作を起こしても、そこまでのものにはならない。過呼吸になるくらいはあっても、普段は怒りよりは小さかった。
しかし、その天龍は怒りに身を任せすぎて、心拍数が上がりすぎ、身体のダメージと共に心臓へのダメージも入ってしまい、そのまま息絶えてしまったという。
あのままだと、叢雲も通る道であった。怒りは身体への負担が大きすぎる。
「それを知っているから、私達は二度と同じことを起こさないように、常に貴女達に気を配るようにしているのよぉ」
「ここでは何の不自由もさせないつもりだけど、何も無いとは言い切れない。だから、細心の注意を払ってるの」
それを知っているから、ここにいるものには苦しんでもらいたくない。前みたいなことは二度と起こさないように。
「私達はねぇ、誰も傷付かない道を探しているのよぉ。だって、私も痛い思いをしたくないから」
「誰も痛い思いをしないなら、アタシ達も痛い思いをしないでしょ。そういうことよ。結構打算的なんだけれどね」
少し軽い言葉ではあるものの、仲間の死がここまでの慈悲深い性格に拍車をかけていたのだと知ることが出来た。その情は分け隔てない。
「艦娘と和睦を結んだのも、その延長線上ね。戦いなんて、どっちも痛いだけじゃない。だったら、仲良くした方がいい。わかるかしら」
「……私にそれを理解しろっていうの……？」

「すぐに理解しろとは言わないわぁ。でも、私としては、死ぬよりも楽しい道だと思うんだけれど、どうかしらぁ？」
まだ艦娘に対しての怒りは晴れていない。しかし、死と天秤にかけられたら、どうするか。
衝動に身を任せてしまえば、死んでもいいから艦娘を皆殺しにするという選択肢をとってしまうだろう。しかし、先程の飛行場姫との戦いで心が折れた叢雲には、自滅してでもという選択肢は完全に省かれる。
「……艦娘は嫌い。大嫌い。私を裏切った、私をこの身体にした、そんな奴らを……」
「それは、今そこにいる子達じゃないでしょうに。恨みを持つなとは言わないし、憎しみを捨てろとも言わないけど、その方向を見誤っちゃダメね。艦娘全部がアレと同じなわけないでしょうが」
そう言われても納得出来ないのが叢雲である。ならばと、飛行場姫は禁じ手を使った。
「だったら、アンタはあっちの海風達の言い分は聞きなさいよ。あの子達はね、同胞（はらから）に姉妹を殺されてんの。同胞（はらから）全部に怒りも憎しみも持っててもおかしくないんだから」
「最初の海風ちゃんはそんな感じだったわねぇ。私、撃たれちゃったし」
「あったわねそんなことも。でも、そういうことなの。叢雲、これだけは理解してほしいわ。あの子達とアンタは同じなのよ」
そう、あちらの艦娘達も、叢雲と同じなのだ。自分か姉かの違いだけ。
やはり叢雲は周りが見えていなかった。アレだけ言われても、怒りのせいで視野が狭まり、自分のことしか考えられなかった。
「……アイツらも、私と同じ」
「そうよ。アンタを裏切った艦娘とは違うってわかるでしょ。いわば、アンタとあの子達は同志なのよ。仇まで同じっていうね」

ほんの少しだけ、叢雲の中で何かが変わったような気がした。

対面

翌朝。結局ベッドルームに叢雲が戻ってくることはなく、目を覚ました時にいなかったことで、薄雲が発作を起こしかけた。
ここ最近は常に隣に叢雲がいた状態だったため、溢れ出した寂しさが抑えられていた代わりに、いなくなった瞬間に不安定になってしまった。
「叢雲ちゃんは多分、姉姫様と妹姫様が一緒にいてくれてるんだよ。大丈夫、大丈夫だからね」
薄雲をあやす春雨だが、姉がいないという不安がどうしても寂しさに繋がってしまい、泣き叫ぶようなことは無くともその場から動けなくなってしまう。
春雨も引っ張られかけたものの、そこはしっかりジェーナスがカバー。以前にもあった総崩れの恐れも、今回はなんとか回避。
「……昨日の夜は……悪かったわね」
そこに叢雲が入ってきた。春雨の予想通り、あの深夜の話の後はベッドルームに戻ることなく、姉妹姫の部屋で一晩を過ごしていた。
怒りが溢れて不安定だった叢雲は、飛行場姫にこっ酷くやられた恐怖も相まって簡単には眠れそうになかったため、姉妹姫がそれを解消するべく力になったらしい。
２人に挟まれながらの睡眠は逆に緊張してしまいかねなかったのだが、寝る前に淹れてもらったホットココアが相当効いたらしく、落ち着いたらそのまま眠りにつくことが出来たそうだ。
叢雲の姿が目に入ったことで、薄雲はすぐに落ち着きを取り戻し、逆に叢雲が気持ちよく眠ることが出来たことを喜んだ。自分のことより他人のこと、それが姉のことならば尚更である。
「大丈夫でしたか？　よく眠れましたか？」
「……ええ、ある程度はね」
言葉の割には浮かない顔。しかし、怒りというよりは何か違う悩みを抱えて帰ってきたようにも見える。今でも艦娘の反応を感知し続けているはずなのだが、その表情はまるで違うように見えた。

「どうしました？」
「……ちょっと考え事」
逆に不安になった薄雲はおそるおそる尋ねてみたものの、少し触れづらい雰囲気だったため、それ以上聞くのをやめておいた。本当に必要なら、叢雲自身から打ち明けてくれる。いくら怒りに呑まれていても、そういうところは誠実なはず。
しかし、薄雲の不安とは裏腹に、その考え事の解決方法は既に思いついていたようである。
「……春雨」
「ん、どうしたの？」
「アンタ、今からあの艦娘共に朝ご飯を差し入れに行くのよね」
「うん、勿論そうするつもりだよ。妹達のためだもん」
昨晩の夕食は、腕によりをかけて作ったものを運んだ。その前のおやつも手製である。同じように、朝食も提供するし、調査に向かった先で食べられるように戦闘糧食も用意するつもりだ。
そのため、今からすぐに準備しようと考えていた。自分達の朝食もそうだが、野営している艦娘達の朝食もしっかりと美味しいものを作ってあげたいから。
「それ、運ぶ時間になったら教えて」
「いいけど……何かあった？」
「……アイツらと、話をする。聞きたいことが出来た」
一晩でえらい変わりようだった。あの後、姉妹姫と何を話したのかと勘繰るレベル。
しかし、ただ嫌い嫌いと拒み続けるよりは、1歩進めたことを喜ぶべき。対話を望むのなら、喜んでその橋渡しとなろうと、春雨は満面の笑みで叢雲の手を掴んでブンブン振った。
「勿論！　一緒に行こう！」
「え、ええ……」
春雨の勢いに圧倒され、悪態すらつけずにただただ何も言えなくなる。
「でも、どういう心境の変化が？」

春雨に聞かれ、少し俯いた。
今までさんざん艦娘のことを毛嫌いし、同じ島にいることすら気に入らないと文句ばかり言っていたのに、突然自分から会いに行くと言い出したのだから、疑問に思うのは当然のこと。
薄雲もジェーナスも、叢雲の心境の変化には驚いていた。まず確実に叢雲が言わないであろう言葉が出たようなものだ。
「妹姫に言われたの。海風は私と同じなんだって。だから、そのことを聞きたいと思っただけ」
叢雲と海風が同じと聞いて、春雨の中では納得が行く。確かに似た者同士だと感じた。
仇も同じであり、それに大切なものを奪われたという境遇も同じ。叢雲は命を、海風は姉妹と、少し違うものではあるが、それをきっかけに怒りと憎しみを強く持つようになっている。
海風は溢れなかっただけで、叢雲と同じようになってもおかしくない心境だった頃もあった。それは、山風を筆頭とした仲間達がサポートし続けたおかげで、最悪な事態にはならなかったが、今でも大分綱渡りなところはある。
そういう意味では、海風だって深海棲艦全てに怒りと憎しみを振りまいてもおかしくなかった。その性格から寸前のところで踏みとどまっているにしても、中間棲姫に容赦なく発砲したことは事実であり、やはりそこも叢雲と近い。
「そっか。うん、そうだね。海風と話してみて。きっと叢雲ちゃんの知りたいことを話してくれると思うから」
手を握る力がより強く。海風を信じてほしいという思いがこもっていた。

艦娘達も全員が目を覚まして調査の準備をしていた。野営という本来はなかなかやる機会のないことをやったことで、身体に不備がないことを確認しつつ、寝袋などを片付けて大発動艇に積み込んでいく。

調査の状況次第では、この日もう一晩をここで過ごさせてもらう可能性もあるため、片付け自体は軽めにされている。大発動艇もここに置いたままとして、調査終了後はまたこの場所に戻ってきてから、改めて鎮守府に帰投する方針。これは姉妹姫にも許可は貰っている。
「Ｈｅｙ，皆サーン、英気は養えましたカ？」
朝イチから元気のいい金剛の声。１日の始まりにはちょうどいい爽快感を与えてくれる。
「海風姉……ちゃんと寝れた？」
「大丈夫。少し考え事があったけど、今日の調査に支障が無いくらいには眠れたから、心配しないで」
昨晩にいろいろと吐き出したことで、ある程度はスッキリした海風。その夜も少し考えることがあったものの、よく眠ることが出来たようである。表情にも悩みがあるような感じではなく、普段の冷静な海風が戻ってきていた。
海風のみならず、全員が万全な態勢で朝を迎えている。枕が変わると眠れないなんていうこともなく、安心安全な島での休息はそれだけでも深い眠りにつくことが出来た。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅもｔｈａｎｋ　ｙｏｕネ。おかげで私達はよく眠れましタ」
近海で護衛をしていたミシェルにもしっかり声掛け。金剛に礼を言われたミシェルは、全身を使って喜びを表現していた。
実際はミシェルが護衛せずとも何も来ないことはほぼ保証されていたようなものなのだが、そこはその意思を汲み取って、やりたいことをやらせる。それでミシェルとの仲も良くなるのだから、何も問題は無いのだ。
「そうだ、朝飯ってどうなってるンだっけ？」
「春雨姉が持ってきてくれるって言ってたね。時間的にもそろそろなんじゃないかい？」
江風と涼風は、こんな寝起きなのに食べることに意識が向いている様子。鎮守府での朝のルーティンが崩れてしまうのは仕方ないにしても、即座に欲求を口に出している辺りは、やはりこの２人である。

などと話している間に、施設側から何者かの影。こんなタイミングでやってくるのは、今2人が話した食事の件に違いない。
「おーい、みんなー。朝ご飯の差し入れでーす」
朝食を持ってきた春雨と、それを手伝うためという名目がありつつもミシェルの様子を見に来たジェーナス。8人分の朝食なので結構な大荷物になっていたが、大皿に載せているおかげで難なく運ぶことが出来ている。
だが、それよりも艦娘達が驚くべきことがあった。2人の後ろにいる者である。
久しぶりに艦娘の前に姿を現す薄雲と、その隣で感情を抑えながらここまで来た叢雲。
「え、えっ」
真っ先に反応したのは、話をしてみたいと昨晩語っていた海風。実際に目の前に来られると、妙に緊張する。
叢雲も、目の前に艦娘がいるという状況に燻る怒りが燃え上がろうとしていたが、薄雲の助力で何とかギリギリで抑え込み、拳を強く握り締めながらそこに立った。
「海風、アンタに1つ、聞きたいことがある」
絞り出すように、言葉を紡ぐ。名指しされたことで余計に緊張してしまう海風だが、自分も話したいと言っていたくらいなのだから、それをどうにか押し隠して叢雲の次の言葉を待つ。
「アンタの姉は、同胞(はらから)に殺されたのよね」
いきなり心を抉るような一言。一番聞きたくなかった言葉を易々とぶち込んできた。海風も拳を強く握り締めた。それに対して江風が抗議しようとしたが、いち早く金剛がそれを止める。
叢雲も勇気を振り絞ってここに立っているのだ。言葉選びがうまく出来ないようだが、今は見守ることを選択した。
「なら、私も含めて、同胞(はらから)全部が気に入らないでしょ。見ただけでも、殺したくなるくらいに」
春雨が見つかる前までの感情を掘り起こされるような感覚。姉の仇を探していた時の海風は、叢雲に近いくらいの怒りに囚われてい

た。その結果が、制止も出来ずに中間棲姫に主砲を乱射した事件に繋がる。
だが、今は違う。ここの姉妹姫にはある程度の信頼を置いているし、そうで無ければこの島で野営なんてしない。たった1人ここに置いていかれて一晩を過ごした経験もそこに活かされている。
「なんでその感情が抑えられるわけ？」
1つはとても簡単で、敬愛する姉が深海棲艦と化してしまっていることがある。そこから繋がり、考え方が変わっている。
「……良い深海棲艦と悪い深海棲艦がいることに気付けましたから」
海風も絞り出すような声。言葉選びを慎重にし、叢雲の神経を逆撫でしないように努める。叢雲は心が壊れているのだから、ああいう物言いになっても仕方ないかもしれないが、海風はまだギリギリで耐えているのだから理性を持ってそれに応える。
「人間も、艦娘も、深海棲艦も、全部同じです。良いモノもいれば、悪いモノもいる。ここは特に顕著じゃないですか。争いを好まない、共存を望む深海棲艦は、悪いモノですか？」
叢雲は答えない。ここに関しては、善悪の分別が難しくはある。人間にとっては良いモノでも、深海棲艦にとっては悪いモノであったりする。逆も然りだ、結局は主観の問題であるため、解に困る。
「私が心の底から憎むのは、姉さんを奪った深海棲艦だけです。それはここの姉妹姫では無いですし、勿論貴女でもない。仇はただ1人であって、その種族では無いんです。ならば、貴女は私の仇となる深海棲艦の意思に賛同しますか？　私の姉達は、理不尽に死んで当然であると。それならば、私は貴女を許すことは出来ません。この場で戦います」
海風も少し感情的になっている。山風がハラハラし始めているが、そちらには比叡がついていた。小さく首を横に振り、海風の行く末を見守るように指示する。
「私は、私の姉達の仇の意思に賛同しない深海棲艦は、敵とは思っていません。ましてや、そのやり方に異を唱えてくれるようなヒト達を殺そうなんて、カケラも思いません。だって、そのヒト達は、私の仇で

はありませんから。そこに攻撃することは、ただの八つ当たりでしょう。叢雲さん、貴女はどう思いますか？」
強く、その意思をぶつける。叢雲は言葉も無かった。
怒りに身を任せて、艦娘という種族そのものに八つ当たりをしているに過ぎないことに、今更ながらしっかりと気付くことが出来た。プライドが高い叢雲には、八つ当たりという行為がとてもダサいモノに思えた。
心が壊れているとはいえ、物事の分別が全く出来ず、艦娘だからという理由で毛嫌いし、あまつさえ深夜に襲撃すらしようとしてしまった自分が、あまりにも惨めだった。これを醜態と言わずして何と言うか。
「だから、私は感情を抑えているわけではないです。感情を出す相手が理解出来ただけなんですよ。それは……叢雲さん、貴女にも同じことが出来ると思います」
そこまで言い切って、海風は叢雲からの返答を待つ。
目の前にいる艦娘は、自分を裏切った種族ではあるが、自分を裏切った張本人ではない。昨晩の飛行場姫の『艦娘全部がアレと同じなわけない』という言葉を痛感する。
同じだったら、こんな面と向かって意思をぶつけてはこない。ゴミのように蔑むような目か、そもそも目を合わせてもこないかのどちらかだ。会話すらままならない。
だが、ここにいる艦娘は違う。叢雲のことを見て、心配し、仲良くなろうと躍起になっている。それは、叢雲を仲間として見ているものの目だった。
「……理解したわ。今まで私がどれだけ愚かだったのかを。アンタは、アンタ達は、私の憎む艦娘とは別物みたい。それを統括する司令官もアレなんだものね。そういうことか」
叢雲が小さく笑みを浮かべた。目の前の艦娘達への敵意は消えていた。
海風の言葉で、自らを鑑みることがちゃんと出来た。憤怒の化身だとしても、物事の分別が出来なければ意味がない。何もかもに怒りを

振り撒いていたら、それこそ本当に最古参と同じように自滅してしまう。そうなるわけにはいかない。
「アンタのおかげで、自分の怒りが多少制御出来るようになった気がするわ」
だからといって、艦娘に対する怒りが全て払拭出来たわけではない。少なくとも、あの鎮守府にいる者、この海風の仲間達に関しては、怒りが向かなくなったという程度である。

叢雲は大きく前進出来ただろう。艦娘でもなく、深海棲艦でもない、叢雲として、新たなステージに立てた。

叢雲の答え

飛行場姫に諭され、海風とも対話が出来たことで、叢雲の怒りはほんの少しだけ安定した。艦娘を無差別に敵視することは無くなり、少なくともこの調査隊に対しては中立の態度を取る。

朝食も結局外で食べることにはなったものの、叢雲は嫌な顔をすることなくそれを受け入れた。仲間とは思わずとも、害の無い者という認識になったことで、感知の範囲内にいても気にならなくなったらしい。

「すごく……ハラハラした」

春雨の用意してくれた朝食、サンドイッチを頬張りながらも、ホッと一息吐いた山風。このままケンカに発展してもおかしくは無かったため、そうならないことを祈りながら比叡の陰から見ていた。無事に和解が成立したことで、心底安心したようだった。

山風だけではなく、他の者も一触即発の雰囲気にヒヤヒヤしたものである。叢雲が言葉を選ばずに真正面からぶつけてくるため、海風が壊れてしまいかねないと不安ではあった。だが、それももう大丈夫である。

「私も安心したわ。叢雲さん、話がわかるヒトで」

「ありゃあ話がわかるってよりは、妥協したって感じじゃね？」

江風のツッコミは綺麗にスルー。妥協だろうが何だろうが、和解出来たのだからそれでいいのだ。お近付きになれたのだから、ここからゆっくり仲良くなっていけばいい。

「調査が今日1回で終わるとは思えないデスし、次に来ることがあるなら、施設を使わせてもらえるかもデスネー」

「はい！　野営もいいですが、中を見せていただきたいものですね！」

調査範囲はかなり広い。そのため、今回1回で全てがわかるとは限らない。そもそも何もわからない可能性だってあるのだ。それならば、また次の機会も来るだろう。その時は野営ではなく、施設の中で一晩を過ごさせてもらいたいと願った。

野営が嫌なわけではないが、やはり施設の中の空気というものを

知っておきたいと金剛は語る。海風だけしか知らない、穏健派の深海棲艦の生活様式というものを、その身で感じても損はない。
「千歳お姉、調査する場所って、明確な場所ってわかってるんだっけ？」
「ううん、そこも曖昧。おおよそどの辺りかというくらいね。だから、私達が艦載機でざっくりと探すの」
「なるほどね。なんだかそういう調査も久しぶり」
春雨の行方を探している時と同じで、大海原を艦載機で一通り見ていくというのが今回の調査である。方向だけはふわっとわかっている状態で止まっているため、空母の2人の力は特に重要だった。
戦艦2人が参加しているのは、この施設の者に面識があるというのもあるが、万が一敵と遭遇した時のことを考えた結果だ。叢雲（槍持ち）との戦いで苦汁を飲まされているため、ガチガチの編成を選択している。
そう考えた場合でも、空母は必須である。事前に敵の場所がわかることはその後の戦闘を優位に進めることが出来るし、制空権を取ることはさらに優位性を強めてくれる。調査に戦闘にと引っ張りだこになるのは仕方ないことだった。
「せっかくだし、少しくらいは叢雲に聞いてみたらどうだい。アイツも多少は場所知ってんだろう？」
「そうネ。行くときにはどっちの方向かだけは聞いておきましょうカ」
戦艦棲姫はその目で見て、そして叢雲は感知というカタチで、ミシェルが現れた海域を特定している。直に見たわけではないため、あくまでも方向でしか言えないものの、無いよりはマシ。
ミシェルを調査に連れていくという選択肢もあったのだが、この施設の一員を調査の現場に連れていくことは流石に気が引けた。まず無いとは思うが、別の鎮守府の者にその姿を見られてしまった場合、言い逃れが出来ない。
「和解が無かったら、その方向すら聞けなかったんだよネ。海風、よく頑張りましタ」
「い、いえ……私も叢雲さんとはしっかり話したかったですから。こ

の調査が終わった後にも、もう少し話す機会が欲しいですね」
海風の中では、叢雲は立場は違えど同類であるという認識が出来ている。叢雲からはあまり仲間としては見られていないものの、海風からしたらまた話をしたい相手。
この調査の結果は関係無しに、施設とは長い付き合いになるだろう。ならば、もう少し仲良くなれればと願った。叢雲からも仲間、友達であると思ってもらえるのなら最高である。
「それなら、まずはしっかりお仕事を終わらせちゃいましょうネー。ミシェルの出処調査、あちら側の海に何があるか、デスネ」
「はい！　皆さーん、気合、入れて、行きましょう！」
比叡の号令で、艦娘達が拳を突き上げた。その時には暗い雰囲気なんて微塵もなく、全員が晴れやかな表情をしていた。
特に海風は、心に刺さっていた棘のようなものが抜けたかのようにスッキリしていた。

一方、朝食を届けた後に施設に戻ってきたいつもの４人組。こちらもまだ朝食を摂っていなかったため、ダイニングまで戻ってきたところから開始。他の施設の者達は既に朝食を終えていたようだが、作業の時間まではダイニングでゆっくりしていた。
品目は勿論、艦娘達と同じサンドイッチ。叢雲だけ１つ多めに配膳されて何事かと思ったが、これも春雨の感謝の気持ちらしい。
「アンタが私のことどう思ってるかよくわかるわ」
「これが一番喜んでもらえるかなって思って」
「……間違っちゃいないわ」
納得しつつも、その追加の１つを頬張る。シンプルだが、わかりやすい朝食の味に、叢雲も太鼓判。春雨の料理の腕は、簡単なものからも察することが出来るように、日々進化している。
「叢雲、結局アンタはどういう答えを出したわけ」
飛行場姫が問い質すと、叢雲は少し言い淀みつつも、先程の海風との対話のことをつらつらと話した。たまに躊躇う部分もあったが、

しっかりと全て。
薄雲が代わりに話そうとしたものの、中間棲姫にやんわりと止められる、これは、叢雲自身の口から聞く必要のある内容であり、叢雲の考えを整理させる行為でもある。
この場にいる全員、施設の者全員の前でそれを話すことで、叢雲は真にその考え方を自分のモノと出来るだろう。人前で話したことを曲げることは、叢雲の沽券に関わる問題だ。
「ふぅん、それなら良かったわ。施設のためにも、アンタのためにも」
「私のためかどうかは知らないけど、施設に迷惑はかけないでおくわ。ここに置いてもらってるわけだし」
暴走している自分を保護してくれているという恩もあるのだと言うが、それ以外の感情もあるのだろうと誰もが察した。例えば、薄雲がいるのだから離れるつもりはないとか、ここにいれば美味しいものが食べられるから離れたくないとか。
「でも、良かったです。姉さんが……その、和解してくれて」
「んぐんぐ、和解とかじゃないわよ」
薄雲の言葉に、用意されたミルクを飲みながら弁解する。
あくまでも艦娘が怒りの対象であることには変わりない。今でも沈めたいほどにイラつく。これは叢雲の本質なのだから、おそらく一生払拭出来ない。
だが、今回知り合った艦娘達に対しては、身を焦がす怒りと憎しみが緩和された。勿論、あの艦娘達がこちらを裏切るようなことがあったら、容赦なく一切の温情なく叩き潰すだろう。だが、今のままの距離感、接し方であれば、そこにいてくれても構わない。
耳元を飛ぶ蚊から、部屋の端にいる蜘蛛くらいにランクアップしたのだと、叢雲は最後に締めた。
だが、害虫から益虫にしている辺り、あの艦娘達のことをそこまで嫌っていないということに繋がる。ヒトによっては嫌う虫ではあるものの、蚊よりはまだマシと感じる者もおり、叢雲はそういうタイプ。
「まぁ、そこにいるくらいなら許せるくらいの心境にはなったわ。これも同情なのかしらね」

「どういうカタチであれ、ケンカしないでくれるならそれでいいわぁ。艦娘と深海棲艦のケンカなんて、どうやっても命のやり取りになっちゃうんだものぉ」
　こんなことで仲違いした挙句、殺し合いにまで発展するのは流石に困る。それに、どうやっても施設に被害が出るのだから、それだけは回避したい。
「叢雲ちゃん、次にあの子達がここに来た時は、施設に入ってもらってもいいかしらぁ。一晩過ごしてもらうなんてこともあり得るかもしれないわぁ」
　中間棲姫のこの言葉に、叢雲は少し考える。感知の範囲内に居続けられるのは気にならなくなったが、その姿を目にし続けるのはどうだろうか。寝るときに真横にいるなんてことは無いだろうが、それでも近くにいるというのは話が変わるかもしれない。
　だが、嫌悪感自体は抱いていない。海風という同志と、その仲間達ならば、施設を使ってくれても構わないと思えた。団欒までは行けなくとも。
「いいわ。今回は野宿で済ませてもらったけど、もう私は大丈夫。でも、次は手土産くらいは欲しいわね」
「ふふ、なら提督くんにそう伝えておくわぁ。叢雲ちゃんが甘いものを催促しているって」
「伝え方に悪意が見えるわよ！」
　朝食も和やかに進んでいく。艦娘のことを受け入れることが出来たことで、叢雲が真に施設の一員となったことを表していた。
　施設の意志は、これで本当に1つになったと言える。和睦を結んだ艦娘とは、協力関係を続けながら今後を過ごしていくのだ。それは決して悪いことでは無い。

　そして、調査隊出立の時。ここからミシェルの出処調査がようやく始まる。たった一晩だったが、ここの時間はとても長く感じるものだった。

「方向としては、あっちの方。哨戒で回っていたときに見つけただけだから、正確な位置はわからない」
「了解です。広い範囲を調査するつもりでいますから、大体の場所でも問題ないですよ」
　調査の場所を指を指して伝える叢雲。そのときにも敵意は見せず、嘘を言うようなこともない。ちゃんと協力している。相手が海風だけとなってしまっているのは仕方ない。ここからまた進んでいけばいい。
「明るい時間帯だからわからないけれど、もしかしたら戦艦ちゃんにも会うかもしれないわぁ。白旗を振っていたら私達の仲間だから、その時は何もしないであげてちょうだいねぇ」
「了解ネ。あの戦艦棲姫ということだよネ？」
「ええ、あの戦艦ちゃんよぉ」
　戦艦棲姫が先行して現場にいるのは、艦娘達にも伝えられている。あちらが活動するのは今のような明るい時間帯ではなく深夜帯ではあるのだが、もしかしたら今のような太陽が昇っている下でも活動をしているかもしれない。
　その時は間違っても攻撃しないようにと念を押された。こんなことでお互いに傷を負うことは避けたいのはお互い様。まず無いとは思うが、他の艦娘と戦闘中なんてことがあった場合は処置に困るものの、場所的にそういうことは無いと信じる。
「それでは、調査に向かいましょう。ある程度終わらせたら、またこちらに戻ってきます。そこから鎮守府に帰投するというカタチで」
「ええ、それでいいわぁ。一応お昼は渡してあるけど、何かあったらまた言ってちょうだいねぇ」
「はい。その時はよろしくお願いします」
　もう一度ここに帰ってくるということも伝えておき、艦娘達は調査に向かう。その直前、春雨が海風に駆け寄った。
「私、ここで待ってるからね」
「はい。また姉さんと会うためにも、私達は必ず戻ってきます。調査だからといって慢心はしません。万が一のことを常に考えて、命を大

事に任務に当たります」
「うん。何も無いかもしれないけど、気をつけてね」
最後に海風の手をギュッと握り、身の危険が無いことを祈りながらも、その背を見送った。
「……何も、無いですよね」
「そうねぇ……保証は出来ないけれど、あの子達ならきっと大丈夫よぉ。私達が信じてあげないと、出来ることも出来なくなるわぁ」
「そう、ですね。私達の二の舞にはなりませんよね」
一番恐れていることは、春雨自身に起きたことの焼き直しである。未知の深海棲艦に襲撃され、何も出来ないままに行方不明になる。それだけは絶対に避けたい。
本当に万が一、緊急事態が起きた時は、おそらくこの施設からも出撃するだろう。それだけの力を、ここにいる者達は持っているのだから。

いよいよ始まる海域調査。そこにあるものは、一体何か。

未知の海域にて

ミシェルの出処とされる海域の調査がついに始まった。場所が明確になっていないため、駆逐隊の捜索をしているときのような広範囲の調査になるのは自明の理であるため、最初から長期戦を想定している。

今回はその一歩目だ。ここで早速何かが見つかるとは思っていない。何か見つかればラッキー。見つからなくても次を見据えている。のんびりやりたいというわけではないが、焦らずとも済む任務に、比較的気分が楽な状態で当たれた。

特に海風は、あの時のような焦燥感で憔悴するようなこともない。頼れる仲間のこともよく見えており、体調も絶好調である。

その理由の1つに、先程の叢雲との対話もあった。納得のいくカタチで終えれたこと、道案内ではあるが、ちゃんと嫌われずに説明を受けることが出来たことが、安心感を後押ししてくれている。

「まずは案内された場所を一直線に行ってみますか」

「そうだネー。叢雲が感知したっていう場所に向かうのがいいカナ？もしかしたら戦艦棲姫とも合流出来るカモだし、そもそも何処に何があるかもわからないしネ」

相変わらず隊長を務めている海風と、この部隊では最高戦力である金剛が相談し、その進行方向にみんなでついていくという方針で現場に向かっているわけだが、今の2人の指揮には安心感がある。

その光景を見ている山風の後ろから、江風が声をかける。ビクッと震えるものの、江風であるとわかった途端に小さく溜息を吐きながら振り向いた。

「……なに」

「海風の姉貴、元気になって良かったね。山風の姉貴、ずっと心配してたろ？」

「……うん」

艦娘に憎しみを持つ叢雲という存在により、施設に立ち寄ることが出来なくなったどころか、春雨との会話すら出来なくなったことで、

海風のストレスは徐々に蓄積されていくのがわかっていた。だからこそ、昨晩にそれを発散するように話題を振っていたのだ。
おかげで海風はスッキリした表情になったため、山風は心底安心していた。昨晩もグッスリ眠れたし、寝袋だったとしても身体がしっかり休まったくらいである。
こういうところは身体より気持ちが先行する。山風も例外ではなかった。
「叢雲とも和解出来たみたいなもンだし、姉貴についての心配事はもう無くなったンじゃね？」
「……そんなことない。まだ……まだ怖いことがあるから」
それは勿論、海風自身の深海棲艦化である。今までに何度か、手の甲に黒い泥が付着しているところを見てしまっているのだから、今でも気が気でない。
この調査で姉達の駆逐隊が全滅した理由に近付けるかもしれないが、その真実は海風にとってどういう影響を与えるかわからないのだ。最悪、そこに近付いたことで心が壊れてしまう可能性だってある。
そうなったら、山風の力ではもうどうにもならない。山風だけでなく、ここにいる全員で力を合わせたところで手遅れだ。だからこそ事前に抑え込んでおく。
「山風の姉貴がそう言うンなら、まだまだ海風の姉貴は見守っててやンないとな」
「……勿論。いざとなったら……江風も力を貸して」
「任せとけ。いくらでも貸してやンよ」
ニカッと笑う江風に、少し迷惑そうな顔をしつつも口角は上がっていた。江風のことも嫌っていない。喧しいとは思いながらも、それを是としているのだから、それは一目瞭然である。
だから、こういう場合に頼るような発言が出てくる。信用していなければ、そんな言葉は出てこない。
「ま、山風の姉貴も変に思い詰めンなよー」
「……わかってる。そんなこと」

ケラケラ笑いながら肩をバンバン叩いてくる江風に、小さく嫌悪感を見せつつも、それだけで終わらせる。
思い詰めたら山風自体も泥に呑み込まれるかもしれない。姉妹を失った挙句、山風までやられたら、海風は間違いなく壊れる。それだけは避けたい。
「……調査、ちゃんとやらないとね」
「おうよ。江風は目がいいとかじゃないけど、ちゃんと姉貴達を守ってやるぜ」
「……任せたよ」
何事もなく痕跡が見つかれば嬉しいと思いながら、山風は海風の後を追った。

全く知らない海域をしばらく進んで、おおよそこの辺りかという場所に到着。施設からは大分離れており、対岸に陸があるとしても相当遠くとなっている。艦娘で無ければ、こんなところまでは来ることが出来ないだろう。
何かの残骸とかそういったものは今のところ見当たらず、今まで進んできた海と殆ど同じ光景が拡がっているのみ。今のままでは収穫無しとなるが、そんな終わりは勿論しない。
「ちとちよー、哨戒機お願いしマース」
「了解。千代田はあっち側をお願いね。同時に広い範囲を調査しましょ」
「オッケー千歳お姉。艦載機発艦！」
箱から一斉に哨戒機が飛び立ち、2人がかりで四方八方へとその調査範囲を拡げていく。ここからは基本的には空母の仕事がメイン。まずは哨戒機でざっくり確認する。
その間、他の者が暇なのかと言われればそうではなく、当然目視確認を行なっていく。艦載機から確認出来ないものを、艦娘がわかるかと言われれば何とも言えないのだが、一応の見落としを防ぐため。
特に、海面に漂う小さな物とかは艦載機の高さからだと見えないこ

ともある。そういうものを見落とさないように、艦娘達が目を皿のようにして確認していくのだ。
「私と山風は、海中の確認をします。山風、いい？」
「……うん。あたしは……パッシブソナー」
「私はアクティブソナーだね。それじゃあ、確認します」
それに、駆逐艦は別の手段での調査が可能。今回は海風と山風が装備してきたソナーである。
これは哨戒機からは確認出来ないものであり、海中の異物を探すために使用する。本来は潜水艦の探知に使うものだが、こういう海域調査にも有用であることは、過去に魚群探知機として扱ったこともあるくらいなので証明済み。
駆逐艦は簡易ソナーが艤装に搭載されてはいるが、やはり専用の物を装備しておけば、その分強い力での調査が可能だ。江風と涼風も簡易ソナーで確認していくものの、やはり効果範囲がかなり小さい。
「私達が周りを警戒しておきマスから、安心してお願いしマース」
「はい！　この比叡、気合、入れて、周辺警戒します！」
調査中というのはどうしても周辺警戒が疎かになってしまうため、そこを戦艦の２人が賄うこととなる。
前の調査任務とは違う未知の海域であるため、警戒は普段よりも強めにしておくに越したことはない。それもあって戦艦２人を組み込んでいる。
ここに来るまでに野良の深海棲艦を見るようなことは無かったが、それでもここまで来たら何かしら出てくる可能性だってあるのだ。何せ、人間と艦娘の目が行き届いていない場所なのだから。そうで無かったら、あの施設も人の目に晒されていてもおかしくない。
「あ、そうだ。千歳さん、千代田さん。この付近に無人島みたいなところはありますか？」
「無人島？」
「はい。例の戦艦棲姫が、明るい間はそこに潜んでいるかもしれませんよね。どうせなら合流してもいいかなと」
先んじてこの海域に来て、夜の間に調査をしてくれているという戦

艦棲姫にその調査結果が聞ければ、自分達の調査も進めやすいのではないかと海風が提案。
　ああいう人間の社会に溶け込もうとする深海棲艦は、明るい間は誰もいないところで息を潜める。その考え方は正しい。実際、戦艦棲姫は最初に拠点を決めて行動している。そこを探し当てることが出来れば、強力な同盟者が手に入るわけだ。
「あ、無人島は見つけたみたい」
　海風が話した途端、千代田の艦載機から無人島発見の報告があったらしい。そこそこ遠方ではあるものの、高い場所から確認すれば見えるところにはあったようなので、真っ直ぐ駆け抜ければすぐに到着しそうとのこと。
　その周囲には何も無いようなので、今ならそこに向かえるチャンスだ。戦艦棲姫がいないにしても、一度行ってみる価値はあるだろう。何かしらの痕跡がそこにあるかもしれない。
「じゃあ、そこに行ってみましょう。皆さん、いいですか？」
「Ｏｋａｙ．　Ｌｅａｄｅｒの意思に従うヨー。警戒と調査をしながら、そっち方面に行くネ。ちとちよ、哨戒は向かう方を強めにしてネー」
「了解。移動することを妖精さんに伝えておきますね」
　ということで、無人島へと向かうことに。しかし、千代田の艦載機の妖精さんからの報告は、だんだんとおかしな方向に向かっていく。
「……ん？　なんか妖精さんがおかしなこと言ってる」
「おかしなこと、ですか？」
「その無人島、なんだか焼けた跡みたいなものがあるって……」
　無人島で火が出ることなんて、そうそう無いことである。自然発火するにしても、そういう特殊な何かが無い限り、そんなことは起きない。
　つまり、人工的な何かが入ったことに他ならない。遠目から見ても煙が上がったりしているわけではないため、今燃え広がっているようなものでは無いようだが、少なくともここ最近で何かが起きたとしか思えない。

「急ぎましょう。わかりやすい痕跡が出てきたと考えればいいわけですから」
「案内する。こっちだよ！」
ここからは艦載機からの報告を聞きながら、千代田を先頭にしてその無人島へと急いだ。本当にまずいことになっている可能性もある。

その無人島は、酷い有様だった。
あったであろう浜辺は、砲撃を受けたかのようにボコボコに穴が空いており、その近辺に群生していた木々も燃えて炭になっていた。まるでここで戦いがあったような状態。
「何……これ……」
その光景を見て言葉を失う海風。その戦いは、余程熾烈を極めたのだろう。一区画だけが完全に破壊されている。
「うーん、これは確実に砲撃デスネ。威力は……駆逐艦か巡洋艦くらいデス」
「お姉さま、よくわかりましたね」
「陸上施設型の深海棲艦との戦いでちょっとネ。外れた砲撃が地面を抉った時の跡に近いんだヨ」
やはり、この無人島では戦闘があったということだ。そうで無くては砲撃の跡なんて残らない。
「……誰かいる」
近辺を調査している時、山風が何かに反応した。指を指す方向は、まだ木々が残っている森。表側は焼けているが、奥に行けば行くほど雄々しい木々がそのまま残っている。
その奥から、ガサガサと音がしてきた。その音は、ここに住み着いている動物というわけでもなさそうなくらいに大きな音。動物だとしても、猪、もしくは熊くらいのサイズ。そうで無かった場合は、敵の可能性がある。
「……総員、戦闘準備。念のため」
海風が指示を出すと、ここにいる全員が主砲を構えた。万が一敵

だった場合、先制攻撃が出来るようにしておかなければ、逆にやられる可能性もある。
「その声……海風ね。砲を下ろしてちょうだい。別個体じゃないことを祈ってるけど……」
森の奥から声。その声は聞いたことがあるものだった。
「その声……戦艦棲姫！」
海風の名前を知る戦艦棲姫となると、1人しか考えられない。施設で一度だけ出会い、その後この調査を先行して行なっているという、穏健派の戦艦棲姫である。白旗を振っている姿を見ているわけでは無いのだが、状況証拠がそれを物語っているのだから、全員が構えていた主砲を下ろした。
しかし、森の中から出てきた戦艦棲姫は、この島と同じように酷い有様だった。人間や艦娘と違う、色彩が殆ど無い血を流しながら、フラフラと向かってきていたのだ。自慢の艤装も隣にいたのだが、その剛腕は抉られ、バチバチと火花が散っている。しかし、戦艦棲姫の支えとなるために傍から離れようとしない。
戦艦棲姫の意思で艤装を仕舞うことも出来るのだが、艤装が拒否の意思を見せたことで戦艦棲姫もそのままにしている。そんな意思を見せても消せるのに、意思を尊重する辺り、戦艦棲姫の性格が出ている。
「ど、どうしました!?」
「しくじったわ……昨日の夜に同胞（はらから）に襲われてね……。撃退はしたんだけれど、沈めることは出来なかったわ」
まだ残っている木と艤装を支えにすることで何とか立っていられるようだが、移動するのも辛そう。
「アイツらは……もうこの近くにはいないのかしら」
「哨戒機からは連絡が無いみたい。周辺には私達以外誰もいないわ」
「そう……なら……良かったわ……」
警戒に警戒を重ねていたため、今の今まで意識を保っていたようだが、意思疎通の出来る艦娘達と再会出来たことで安心したか、そこで気を失った。同時に艤装も掻き消え、支えが失われたことによって倒

れ伏す。
「ちょっ……い、一度施設に戻りましょう！　戦艦棲姫をこのままにしてはおけません！」

先行して調査をしていた戦艦棲姫が襲われていた。その犯人は、もう誰かはすぐに予想がつくだろう。

戦艦の帰投

施設ではいつものように午前中の作業が進み、そろそろお昼時となりつつあった。

春雨は相変わらず農作業。自分の植えた野菜の成長を楽しみにしながら、まるで我が子のように世話をしている。雑草を抜き、水を遣り、丹精込めて育てたそれは、すくすくと芽を伸ばしていた。まだまだ収穫までには時間がかかるものの、見るたびに成長しているため、春雨はとても嬉しそうに農作業を続けていく。

「ホント、楽しそうに作業するわね」

その姿を見ながら小さく溜息を吐くのは叢雲である。槍持ちの時には釣りもやっていたものの、なんだかんだで農作業が定番の作業になってきているのは、その不器用さの賜物。これのおかげで松竹姉妹とも随分仲良くなっている。

だがもう1つ理由があり、飛行場姫に若干の苦手意識が芽生えてしまっているため、漁よりは農作業を選んだというのもあったりする。昨晩の出来事は、少なからず影響はあった。

「自分が育てたお野菜だからね。なんだか愛着がすごくて」

「ふぅん……」

食べることに喜びを見出している叢雲としては、少しだけ興味を持ったようだった。

戦いとは違う喜びを知ることは、メンタルケアには最適である。特に叢雲は怒りが常に燻っているような状態なのだから、楽しいという感情を呼び起こさせることはかなり重要。

「叢雲ちゃんも何か植えてみる？　他にも種はあるわよぉ。春雨ちゃんが植えているモノと比べると、成長まで時間はかかるものだけれど、その分愛着が湧くわねぇ」

いつもの農作業姿の中間棲姫に促され、少し迷う叢雲。

「やっとけやっとけ。どうせお前もここで永住だろ？　だったら自分で作った野菜食うことの楽しさを知っといた方がいいぜ」

「私も竹の意見に賛成。本当に美味しいんだもの。丹精込めて育てた

野菜って、倍は美味しいわ」
松竹姉妹からもオススメされて、それもいいかと思い始めて、そして。
「そ、そうなの……なら……やっておこうかしらね」
叢雲も流されるようなカタチで、春雨の跡を追うように自分が種蒔きから始める野菜を決めることに。
叢雲はより一層施設の一員として受け入れられていると実感出来る。元々が誰もが受け入れるような施設だったが、あの艦娘達と事実上の和解をしたことで、さらに全員が馴れ馴れしくなってきているようにも思えた。
そして、叢雲はそれが嫌では無かった。人間や艦娘に同じようなことをされたら、燻っている怒りが燃え上がるだろうが、相手は似たような境遇で同じように深海棲艦化した仲間だ。比較的心は開ける。
「それじゃあ……って、ちょっと待って」
「叢雲ちゃん、どうかしたかしらぁ？」
「感知の範囲内に艦娘が入った。多分これ、朝に出て行った海風」
時間的には、ここから離れて数時間。調査を始めてしばらく経っている頃。そのタイミングでこちらに反応が見えたというのは、なかなかに早いお帰りになる。
「ちゃんと調査してんのかしら。帰ってくるの早すぎてるでしょ」
「そうねぇ。本当に戻ってきているのなら、確かに少し早いくらいかしらぁ」
「またここに来るために手を抜いてるんじゃないわよね……」
ツンツンしている叢雲からは、嫌味や皮肉しか出てこないのだが、反応を見ていると徐々にその考えが変わっていく。
「いや、違う。なんか足取りがおかしい。それに数が多いわよ」
「ど、どういうこと？」
叢雲が妙に焦り出しているのを見て、それが感染するかのように春雨もドキドキしながら問う。
出て行ったのは８人の艦娘で、叢雲が感知し続けていた艦娘の数も勿論その数で一致している。しかし、今感知している数は９人分。明

確に1人増えている。
　その増えた1人が、戦艦――金剛と比叡――によって運ばれていると気付くのにはそんなに時間は必要なかった。そして、その運ばれているのが何者であるかも。
「戦艦棲姫……戦艦棲姫よ。艦娘の戦艦2人に担がれてる」
　それを聞いた瞬間、中間棲姫が即座に動き出す。深海棲艦が艦娘に担がれてこちらにやってくるとなったら、それがどういう意味かなんてすぐに察することが出来た。
「作業は中断。迎え入れる準備をしてちょうだい。多分戦艦ちゃんは怪我を負ってるわ。すぐに治療しなくちゃ危ないかもしれない」
　いつものおっとりした雰囲気とは違った緊迫感。中間棲姫がこうなるというのなら、ここからは本当に切羽詰まったモノになるのかもしれない。
　突如施設は慌ただしくなる。漁に出ている者達も連れ戻され、施設は艦娘と運ばれている戦艦棲姫の受け入れ態勢に移行して行った。

　それから十数分後、叢雲が感知した通り、金剛と比叡に担がれた戦艦棲姫が施設に到着。その服はボロボロになり、黒ずんだ深海棲艦特有の血で身体が染まっていた。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが運ぶわ。ここにうまく乗せてちょうだい」
「Ｏｋａｙ．　比叡、ｔｉｍｉｎｇを合わせてネ」
「はい、ゆっくりと、確実に！」
　そこに置いておくわけにもいかず、さりとてそのまま艦娘達に運ばせ続けるのもよろしくない。そのため、まずはリシュリューの力を使って、施設内にまで運び込む。
　リシュリューの艤装は、その身体の倍以上はある極太の尻尾。全ての力がそこに集約されており、力も戦艦であることも含めて並では無い。ヒト1人乗せても余裕で動けるくらいはあった。
　しかし、施設にそのまま入ることは出来ないため、先に施設側で待っている仲間達に送り届けるまでの間を受け持つ。

「妹姫、施設の準備は出来ているわよね」
「ええ、入り口に一番近い部屋を用意しているから、そこに運び込んで。アタシはコマのところに行くから」
「お願い。あの子は今の状況が一番辛いだろうから」
ここは施設の大人組が尽力。戦艦棲姫の血が付こうとお構いなしに、丁寧に迅速に運び入れた。
その後すぐに飛行場姫は席を外し、コマンダン・テストの側へと向かう。仲間の死に繋がりかねない今の状況が、数少ない発作のトリガーを弾いてしまうタイミングとなる。今でこそ部屋で大人しくしてもらっているようだが、限界が訪れて暴れ出しかねないため、そこには飛行場姫が派遣された。まずは温もりを与えてあやし、最悪な場合でも力業で止めることも出来る。
「ベッドが汚れる事は気にしなくていいから、まずは寝かせてあげてちょうだいね。身体を拭くためのお湯とタオルは用意してくれてある？」
「大丈夫よ！　包帯とか傷薬も用意してあるわ！」
施設で待っていた子供達は、酷いことになっている戦艦棲姫を見て絶句。つい先日まで元気にここで暮らし、また会おうと出て行った戦艦棲姫が、まさか血塗れになって帰ってくるだなんて思ってもみなかった。
事前に指示を出されていたため、治療の準備は既に出来ている。あとは適切な処置をしていくのみ。そこは中間棲姫が中心となって、リシュリューやジェーナスがテキパキと進めていく。
「せ、戦艦様……なんでこんなことに……」
「決まってんでしょ。調べてることが気に入らないっていう輩がいるってことじゃないの。野良にここまで出来るヤツなんていないわ」
震えている春雨の隣で、叢雲が拳を握り締めて苛立ちを抑えている。今怒りのままに動いたら、施設の者達以前に戦艦棲姫の治療に迷惑がかかる。本質的にそんなことを考えて動く事はないかもしれないが、叢雲はそういうことを醜態と考えるくらいにプライドが高いため、何とか怒りは湧き上がらずに済んでいた。

２人の違う理由で震える手を、薄雲が握り締めていた。薄雲だって戦艦棲姫のこの姿を見ていたら震えて泣き出しそうなのだが、３人で崩れるわけにはいかない。３人でなら、総崩れは防ぐことが出来る。
「松ちゃんと竹ちゃんは、艦娘さん達のところに行ってくれてるわね。ヨナちゃんは念のためミシェルちゃんと近くを見てくれているのかしら」
「Ｏｕｉ．　Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが運んでいる時に、海に向かうのを見たわ。Ｓｏｕｓ―ｍａｒｉｎの目で近場を見てくれてるわ」
「何も無いとは思うけれど、念のためは必要ね。わかったわ」
周辺警戒も念のためしているようで、この場にいるよりはそちらに行くべきかと伊４７が率先して出て行っている。今回は幸せアレルギーなんて感じていられないような状況だ。より的確に動く事は出来ていた。
それにあわせて、ミシェルも近場を泳いで何も無いことを見てくれているらしい。何かに出遭っても何も出来ないかもしれないが、伊４７が一緒ならばいざというときには逃げられる。駆逐艦かもしれないが、その独特な形状のおかげで、潜水艦のように潜水が出来るのだから、逃げるだけなら姫級より得意だろう。
「うん、大丈夫よ。戦艦ちゃん、命に別状は無いわ。怪我は酷いけれど、これくらいなら死に至ることは無いわね。ここで休養してもらう必要はあるけれど、同胞（はらから）だもの。何も無くても１週間足らずで復帰出来るわ」
深海棲艦は艦娘とは違って高速修復材という欠損すらも治療出来てしまうアイテムが使えない代わりに、自己再生能力が格段に高い。大怪我を負っても、しばらく安静にしていれば自然治癒で完治していく。
欠損に関しては流石に無理ではあるものの、そこは艤装による義肢を生成出来るので補完出来た。艤装が破壊されているとしても、義肢と同じように補完出来るため、完治は割と早い。
今回の戦艦棲姫は、血塗れになるほどの怪我であり、骨折などもあるが、死に至っていないおかげで自然治癒でどうにかなるようであ

る。
　それを聞いて、春雨は心底安心した。せっかく出会えた仲間をこんなことで失うなんて、寂しいなどを通り越してしまう。激しすぎる発作で、今度は春雨が危険な状態になってしまうだろう。
「まずはこのまま一晩安静にしましょう。そうしたら、目を覚ますくらいには回復するわ。動くことは出来ないでしょうから、ご飯とかは誰かが食べさせてあげなくちゃいけないでしょうけど」
「私がやります！　やらせてください！」
　春雨が率先して手伝いを買って出る。戦艦棲姫も大切な仲間だ。施設から旅に出たことで発作を起こすくらいには大切に思っている相手なのだから、親身になりたいと思うのは必然だった。
　春雨が手伝うのならと、薄雲やジェーナスも勿論手を挙げる。そして、叢雲も。
「私もこのヒトには世話になってるし、恩を仇で返すわけにはいかないわ。それに、目を覚ましたら聞きたいことが沢山あるし」
　叢雲は既に勘付いていた。戦艦棲姫を襲った相手は、自分の仇なのでは無いかと。
　そして、それは春雨にも関係してくる。姉を全滅させ、自分も瀕死に追いやり、深海棲艦化の原因を作り出した者。片目が光る重巡洋艦が、戦艦棲姫をこうしたのではないか。
「わかったわ。でも今は絶対安静にしておく必要があるから、また必要になったら手伝ってちょうだいね。あとは夜、また身体を拭いたりするから、その時もいいかしら」
「はい、是非やらせてください」
　中間棲姫もその思いを否定しない。手伝いたいというのなら、しっかりと手伝ってもらう。否定は精神的なストレスに繋がるため、余程のことが無い限りは自由にやらせるのである。
「あとはコマちゃんね。今頃妹ちゃんが抑えてくれていると思うけれど」
「あ……そうか。戦艦様が死んでしまうかもしれないっていうのがトリガーに……」

「ええ。後から少し見に行ってあげなくちゃいけないわね」
「それはＲｉｃｈｅｌｉｅｕが行きます。長い付き合いだもの、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが一番適任でしょう」
　現在錯乱中であろうコマンダン・テストには、リシュリューが側に行くことに。同じ遠征組ということで、下手をしたら姉妹姫よりも親密であるため、これ以上の適任者はいない。
「それじゃあ、今は寝ておいてもらいましょう。私も少しだけ安心したわ」
　ベッドの上には安らかな表情で眠る戦艦棲姫。中間棲姫もこれ以上の悪化は無いとわかり、ようやくホッと一息吐いた。

　戦艦棲姫は一晩経てば目を覚ますことだろう。それまでは安静に。
　ここからが、この事件の本質に繋がる話になるだろう。

目覚めを待つ

大怪我を負った戦艦棲姫が施設に運び込まれ、部屋に寝かされている間、それを運んできた艦娘達も現状どうするべきかを相談していた。

勿論だが、鎮守府とは通信出来るような状況ではあるため、待機している今のうちに提督に相談を始める。戦艦棲姫を運んでいる間にも既に一度連絡を入れているのだが、施設に到着したところで改めて。

『施設に運び込めたんだね。良かった』

「はい。今は中間棲姫に任せています。それを知る者に任せるのが一番だと思いますので」

説明をするのは調査隊隊長を任せられている海風。的確とは言えないかもしれないが、他の仲間達のサポートもあり、提督には施設の状況はちゃんと伝わっている様子。

そうしている内に、施設側からは松竹姉妹が艦娘側にやってきていた。戦艦棲姫に別状はなく、安静にしていれば深海棲艦特有の自己再生能力のおかげで回復は見込めていることを伝えると、通信先の提督も含めて心底ホッとした様子。

「アレだけの怪我が自己再生するとは、やっぱり深海棲艦は恐ろしいデース」

「いやぁ、今の俺らからしてみれば、高速修復材で無くなった腕とか脚が生えてくる方が恐ろしいぜ」

「ホントホント。昔は私達もそれを使ってたわけだけど、今考えるとね」

艦娘も深海棲艦も一長一短である。失ったモノが取り返せないのが深海棲艦だが、適切な処置が無ければ衰弱していくのが艦娘だ。どっちがいいとかは考えられない。

『松と竹だったかな。こちらから手伝えることはあるかい』

「うーん、今はちょっと無いですね。こちらで手を尽くせば、戦艦さんは大丈夫なので」

「話が聞けるのは目を覚ました後だから、今は撤収がいいんじゃねぇかな。まだ時間もあるしさ」
艦娘達には申し訳ないが、ここにいてもやることがない。一旦鎮守府に戻り、出直してもらった方が堅実である。
それに、施設は今から確実に忙しくなる。ここにいられても、追加で食事を作ってあげる余裕も無いし、やることがない状態で待機しているうちに鎮守府に帰ることが難しい時間帯になっても困る。
『そうだね。なら、調査隊は一度鎮守府に戻ってきてくれ。調査がまともに出来なかったとしても、戦艦棲姫を救えたのはいいことだ。施設も忙しいだろうし、その場を去ることも手伝いになるだろう』
「了解です。では、調査隊は一度帰投します」
踏み込みすぎるのもよろしくない。必要な時に手を貸し、不要な時には一歩引く。それが一番いい付き合い方だろう。
『松、竹、中間棲姫達によろしく伝えてくれるかい』
「はい、そう言っておきます。姉姫さんも喜んでくれると思いますよ」
「だな」
艦娘はこれで一旦施設を去る。施設が落ち着いたらまた通信で話を聞きつつ、次の調査隊派遣の話を進めていけばいい。

松竹姉妹が施設に戻り、艦娘達が撤収することを伝える頃には、戦艦棲姫への応急処置は完了。まずは安静にさせて、意識が戻ることを待つことに。今は面会謝絶という程ではないが、ゆっくり眠らせてあげるために部屋にはなるべく入らない方針となっていた。
そうするにあたって、戦艦棲姫の身体は綺麗にされており、必要最低限の清潔さを維持しているため、これ以上悪くなることはない。ここからは戦艦棲姫の回復力次第となる。
今は事が済んだので一旦ダイニングに集合。気分を落ち着けるためにお茶を飲みながら、今後のことについている者だけで相談する。
ここにいるのは駆逐艦６人全員と中間棲姫。大人組は軒並み欠席であり、伊４７もミシェルと共に近海を見に行って戻ってきていな

い。
「夜中に起きてしまった時のことを考えたら、側で寝たりとかした方がいいでしょうか」
「うーん、そこまでする必要は無いと思うわぁ。戦艦ちゃんだって大人だものぉ」
戦艦棲姫の看病に張り切る春雨だったが、空回りしかけていたため、中間棲姫がやんわりと止めた。それで春雨が無理をしてしまっては意味がない。
艦娘の調査隊が撤収するというのを聞いて、今回は崩れることは無かった。一度経験している寂しさであるため多少は耐性が出来たか、今は戦艦棲姫のことで手一杯で寂しさを感じている余裕がないか。
「でも、置いておける夜食くらいは作っておいてあげた方がいいかもしれないわねぇ。春雨ちゃん、またおにぎりくらい作っておいてあげるのはどうかしらぁ」
「そう、ですね。そうします。旅に出る時に作ってあげたおにぎり、また作って置いておきます。きっと食べてくれますし」
空回りしそうな春雨を的確な指示で留めさせた中間棲姫だったが、今はそちらよりも心配していることがあった。現在、飛行場姫とリシュリューがついているコマンダン・テストである。
状況として死の可能性が遠のいたことを伝えてもらっているはずだが、それで止まってくれるかはその時次第。今のところ騒音らしきものが聞こえないし、施設の中の様子を把握出来るのだから酷いことになっていないことはわかる。
しかし、静かにしているだけで精神的にガタガタである可能性だってあるのだから、落ち着いてくれているかはどうしても気になる。
「ふぅ……なんとかなったわ」
などと考えているうちに、飛行場姫がコマンダン・テストの部屋からダイニングにやってくる。リシュリューはまだ部屋にいるとのこと。
「やっぱり危なかったわ。戦艦が死の匂いを漂わせてたからね、コマには強すぎる刺激になってたみたい」

「そうよねぇ……でも、今は大丈夫なのよねぇ？」
「ええ、落ち着いてくれたわ。部屋は散らかっちゃってたけど、それは後から片付ければいいもの」
やはり、戦艦棲姫の命の危機に過剰反応を起こして、部屋の中で暴れたらしい。最初はリシュリューだけで止めようとしたものの、艤装まで出されかけたため、そこからは飛行場姫が力尽くで押さえ付け、何とか落ち着かせることに成功したとのこと。
リシュリューの艤装は室内では展開するには難がある。戦艦棲姫を運ぶのも入り口までで、そこからは中間棲姫や飛行場姫に任せなくてはいけないくらいに大きい。それ故に、室内で暴れられると自分の膂力しか使えなくなってしまう。
対するコマンダン・テストも、自分の背丈よりも長い尻尾型の艤装を持っているが、まだ室内で使えてしまうくらいのサイズだ。そのせいで、今回は少し危なかったようだった。
「コマさんが……そんなに？」
「ええ。『執着』が溢れ出しているんだもの、しかも心が壊れた状態での生への執着よ。戦艦をやった相手を探して始末するまで、あの時のコマは止まりそうに無かったわよ」
死の原因を排除するために暴走するのが、コマンダン・テストの発作だ。今回の場合は、戦艦棲姫を死に追いやろうとした者を排除し、これ以上の悪化を防ぐという、何処か繋がらない思考に向かってしまう。これも心が壊れている証拠。
結果的に、戦艦棲姫が死なないということを言い聞かされ、怪我はしているものの命に別状はないことを理解出来たことで、発作は治まっている。いつおかしくなるかはわからないため、最も仲がいいリシュリューが側にいるが、ここから悪化することは今まで無かったため、ひとまずコマンダン・テストについてはここで終わり。
「戦艦ちゃんが目を覚ましたら、コマちゃんにも見てもらいましょうねぇ。ああなると少しの間は不安定になるし、それを改善するには戦艦ちゃんの元気な姿が必要だものぉ」
死の匂いがする者から、その匂いが取り払われれば、コマンダン・

テストは真に落ち着くことが出来る。そのためにも、戦艦棲姫には早く回復してもらいたい。
　それが無茶なのは誰もが承知の上であるが。
「とにかく、今は落ち着いて目を覚ますのを待つのが最善よぉ。あの子が目を覚ましてくれないと、先には進めないわぁ」
　確かに、戦艦棲姫が目を覚まさなければ情報も手に入らないし、施設の者達が安心も出来ない。目を覚ましている状態で動けないのと、そもそも目を覚ましていないというのは雲泥の差だ。前者は生きていると実感出来るが、後者は生死が曖昧な状態。中間棲姫は大丈夫と言うが、このまま目を覚まさないなんてことすら考えてしまう。
「Ｏｋａｙ，今は待ちってことよね。ハルサメ、私達はおにぎり作りましょ！」
「うん、そうしよう。こんなに早くまた振る舞えるなんて思わなかったけど」
　苦笑しながら、春雨はジェーナスと共に戦艦棲姫のために動き出す。そうしていないと落ち着けないというのもあるから。

　一方、コマンダン・テストの部屋。そこでは肩で息をしているコマンダン・テストと、それを宥めるように撫でているリシュリューの姿があった。
　戦艦棲姫の死の匂いに過敏に反応してしまった結果、部屋の中で暴れてしまい、大変なことになっている。この性質を理解しているおかげで壊れるような物は基本的には置かれていないのだが、それでも多少置いてあった小物が散乱してしまっている。後から片付ければいいだけなのだが、今の心境では片付けまで気が回らない。
「Ｊｅ（ごめん）ｓｕｉｓ（な）ｄ・ｓｏｌ（さい）・，Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ」
「Ｎｅ（気）ｔ，ｉｎｑｕｉ（し）・ｔｅ（な）（い）ｐａｓ（で）」
　飛行場姫から戦艦棲姫の命に別状はないことを聞けたことでここまで落ち着くことが出来たものの、まだまだ不安定。少しでも不安を感じたら、また暴れかねない。それを防ぐためにも、戦艦棲姫が目を

覚ますまでは、リシュリューが隣にいてあげることで落ち着かせる。
　やはり同郷の友人というのは気持ちとして楽になれるようで、さらにここでは遠征組という特に深い仲間だ。お互いを理解しているからこそ、この２人の絆はこんなことでは切れない。
「あのヒトは深く眠っているだけ。明日には目を覚ますらしいから、それまではＲｉｃｈｅｌｉｅｕが側にいてあげる」
「Ｍｅｒｃｉ（ありがとう）．　迷惑をかけます」
「気にするなって言ってるじゃない。貴女のそれは、初めてじゃないでしょう。仕方ないことよ。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕにも近しいことがあるんだから」
　コマンダン・テストの発作は、勿論初めてではない。最初の頃は、ほんの少しの傷でも錯乱して暴れる程に不安定だった。他人でもそれなのに、自分ではさらにである。それが今はここまで落ち着けているのだから、充分に成長していると言えた。
「落ち着いたら掃除しましょう。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕも手伝ってあげる。むしろ前より綺麗にしちゃおうかしら」
「そ、そんなに汚くしてません。そもそも、物を置かないようにしているのですから」
「ふふ、わかってる。貴女は自分自身のことをよくわかっているものね。最悪を回避するために、とても努力していることも、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは理解しているわ」
　抱き寄せて、より強く撫でる。コマンダン・テストもこうされるととても落ち着くようで、素直に甘えるようにその豊満な胸に顔を埋めた。
　発作を起こした後は途端に甘えん坊になると、リシュリューも苦笑する。それで落ち着けるならそれでいいと受け入れているところもあるが。
「次もＲｉｃｈｅｌｉｅｕが落ち着かせてあげるから。今はゆっくり休みなさい。まだ不安定でしょう」
「……Ｏｕｉ．　休ませてもらいます。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ……側にいてもらっても」

「Ｂｉｅｎ（もちろん）．　貴女が落ち着くまでここにいてあげる。陸にいる時のようにしてあげてもいいわ」
その言葉を聞き、コマンダン・テストが途端に頬を赤らめる。
「添い寝くらいで初々しいわねＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ……陸ではよくやってるじゃないの」
「そ、そうですけれど、そうですけれど」
「ふふ、別にもっと親密になってもいいのだけれど？」
そんなリシュリューを、痛みのないくらいの拳でポカポカ叩く姿は、とても可愛らしかった。

次に進むためには、ます戦艦棲姫が目を覚ますことが必要だ。ひとまずはその時まで、施設の者達は少し緊張しながらもその時を待つことになった。

その者達は仇

その日の深夜、戦艦棲姫が目を覚ました。大怪我は当然まだ1ミリも治っておらず、身体を少し動かしただけでも小さく悲鳴をあげそうになるほどの痛みを与えてきた。

周囲を見たら、つい先日まで見ていた部屋の景色。顔見知りの艦娘達に施設に運び込まれたのだろうと容易に想像がついた。

「っ……ぐぐ……身体が……大分ガタついてるわね……」

いつもは艤装をベッド代わりにして眠っていたが、今はそんなこともなく施設のベッドの中だ。いつもとは体勢が違うのもあり、なかなか身体が起こすことが出来ない。とにかく骨が軋む。

「ったく……酷い目に遭ったわ……」

痛みに耐えつつも、どうにか身体を起こした途端、胸や腕に強烈な痛み。肋骨や鎖骨は折れており、利き腕にもヒビが入っていそうである。片手はまだ動かせそうだが、激痛でそれ以上動けそうにない。

自己再生能力が高いとはいえ、運び込まれたその日のうちに痛みが無くなるほど甘くはない。少なくとも3日はまともに動けないだろうし、動けるようになっても中間棲姫が言っていた通り1週間近くは痛みを伴うだろう。

「……はぁ……なんとかここに運び込んでくれたから良かったけれど……あのままだったら死んでたわね……。私も運が良い方なのかしらね……」

独りごちる。時間としては、まだまだ夜も深く、この施設ならば誰も起きていることはない時間。自分が施設に滞在しているときでも、この時間はグッスリ眠っていたくらいである。

安静にしていれば痛みなど無いので、身体は起こしてみたものの、何をするでもなく、むしろ何か出来るほど身体が動かないため、そのままた痛みに耐えながら身体を横にした。

その時、ベッドの横に何かが置かれていることに気付いた。この施設から旅に出る時に春雨に渡された塩むすび。今回も目を覚ました時に腹が減っているかもしれないと準備しておいてくれたようであ

る。
　思わず笑みが溢れたが、そのせいでまた身体に痛みが走ってしまい、うかつに表情すら変えられないことにまた苦笑しかける。
「あれだけは……どうにか食べないと、ね」
　春雨の思いを受け取るためにも、身体の痛みに耐えながらその塩むすびを頬張る。疲れた身体に染み渡るような味に、ほっと一息吐くことが出来た。
　とても落ち着く味で腹が満たされる感覚。さらには夜であり、疲れもまだ取れていないということで、安心した途端にまた急激に眠気に襲われた。
「ごちそうさま……」
　次は朝には起きることが出来るだろう。その時には多少は怪我が治っていればいいのだがと願いながら、その眠気に身を委ねる。

　そして朝。戦艦棲姫の様子が気になっていた春雨は、起きるや否や、すぐに服を着替えて戦艦棲姫の眠る部屋へと向かう。独りになるのは寂しさの発作のトリガーとなるのだが、そんなことすらも気にせずに。
　その後ろ姿を見て、ジェーナスもすぐさま駆け出す。春雨を独りにするわけにも行かないため、側にいることをノータイムで選択している。
「ハルサメ！　流石に独りで行くのはダメよ！」
「えっ、あっ……ご、ごめん」
　ジェーナスに言われたことで自分の状況に気付き、その場に立ち止まった。ジェーナスが来てくれたから耐えられたが、そうで無かったらここで発作を起こしていただろう。後先考えずに動いてしまった自分を呪いつつ、すぐに対応してくれたジェーナスに深く感謝した。
　それほどに春雨は戦艦棲姫のことを心配していたのだ。ジェーナスもすぐにわかってくれたし、それを追うように薄雲と叢雲もやってくる。

「アンタねぇ、自分の性質忘れてんじゃないわよ」
「まあまあ姉さん、それだけ春雨ちゃんは戦艦さんのことが心配なんですよ」
「だとしても、痛い目見るのは春雨じゃない。どうあっても自重しなさい」
　叢雲に説教され、春雨は改めて自分の性質を見直す。一番飛び出しちゃいけない存在なのだから、どんな状況であっても冷静にいなくてはいけないと実感した。
「ハルサメ、みんなで行きましょ。私達もあのヒトのことはとても心配してるの。だから、ね？」
「うん、心配かけてごめんね。ちょっと焦っちゃった」
「気持ちはわかるから大丈夫だよ。姉さんも戦艦さんのこと心配してたから、いてもたってもいられなかったみたいだからね」
　余計なこと言うなと叢雲が薄雲を軽くチョップ。食い意地の件といい、叢雲のこととなると口が軽くなるようである。
　そのまま戦艦棲姫の眠る部屋に向かったところ、部屋の前で中間棲姫と鉢合わせた。中間棲姫も春雨のように、戦艦棲姫のことを大分心配していたようだ。
　命に別状はないことはわかっていたし、完治までの時間も判断出来ていたのだが、それでも怪我で苦しんでいる同胞（はらから）のことは気になる。死なないからと言ってもほうっておけるモノでもない。
「あ、姉姫様。おはようございます」
「はい、おはよう。みんなして戦艦ちゃんのお見舞いかしらぁ？」
「起きた途端にハルサメが部屋を飛び出しちゃって」
　などと話しながら、部屋の扉を開く。そこには昨日と変わらずベッドで眠る戦艦棲姫の姿があったのだが、昨日とは明らかに違う点があった。掛け布団が少しはだけていたことと、春雨が用意した塩むすびが平らげられていたことである。
　それだけでも戦艦棲姫が回復していることがわかった。痛みと疲れから気を失ったのではなく、自分の意思で目を覚まして自分の意思で眠りについているのだ。意味合いが全く違う。

「んん……もう朝なのね……」
　みんなの話し声が聞こえたか、戦艦棲姫も目を覚ます。深夜に起きた時と同じように身体はまだまだ激痛が走るものの、疲れからの眠気は完全に取れていた。
「戦艦様！」
　思わず駆け寄りそうになったが、怪我人に抱き付くとか致命的なダメージに繋がりかねないので自重。
「痛た……ああ、春雨、おはよう。おにぎり、美味しかったわ。みんなも元気そうで何よりね」
「一番元気じゃないヤツが強がってんじゃないわよ」
　叢雲の憎まれ口に苦笑するが、それでまた身体が軋んで顔を顰める。当たり前だが、もう一眠りしたからと言っても痛みが緩和されているわけではなく、身体を動かすのも一苦労。
　とはいえ、死を感じさせないくらいにまでは顔色は良くなり、物が食べられるくらいには回復していると考えるならば、戦艦棲姫は充分に復帰の兆しを見せていることになる。それだけでも春雨は嬉しかった。
「酷い目に遭ったみたいねぇ……」
「ホントよ。首突っ込むんじゃ無かったわ」
　そんなことを言いながらも、戦艦棲姫が自分から関わりを持とうとしているくらいに世話焼きなのはわかっている。今の言葉も建前で、どんなことがあろうと調査する気満々。
「昨日のうちにヨナちゃんとミシェルちゃんが近場を見てきてくれたけど、貴女を追って誰かが来てるなんてことは無かったから安心してちょうだいねぇ」
「そう、それは良かったわ。まぁそんなこと出来ないくらいにボコボコにしてやったけど」
　昨日のうちに周辺警戒をしていた伊４７からの報告では、これと言って変わったモノは無かったようだ。明確な意思を持って何かを探している同胞（はらから）どころか、そもそも生きているモノ自体を見ていない。ずっと続いている施設近海となんら変わらなかったとのこと。

戦艦棲姫が運び込まれるのを監視していたとかそういうことは無いようだ。
　戦艦棲姫が言うには、こうはなったが敵もしっかりと叩きのめしており、沈めるところまではいかなくとも泣いて帰るくらいまでは痛め付けたという。
「……戦艦様、誰がこんなことを……」
　春雨が聞くと、戦艦棲姫は少しだけ言い淀んだ。本当にこれを話して良いのだろうかと思案しつつも口籠る。
「わかってるわよ。春雨にも、私にも、それは言いづらいんでしょ」
　そこに叢雲が口出し。変に隠されるよりは、さっさと教えてほしいという考え。
　そこまで言われれば、春雨だって察することが出来る。戦艦棲姫を襲った敵というのは、自分達の因縁の相手であると。
「そうよ。私を襲ってきたのは、貴女達が前に言ってた、片目が輝く重巡洋艦。あともう1人は駆逐艦だったわね。叢雲の時と同じ輩と考えてもいいわ」
　心臓が高鳴るような感覚を覚え、春雨が自分を抱きしめるように身体の震えを抑える。嫌でもその時のことを思い出してしまい、また発作を起こしてしまいそうになる。それをすぐに薄雲とジェーナスが支えた。
「なんで戦艦様を……」
「んなもん決まってるでしょ。ミシェルがアイツらと関わりがあるってことじゃない」
　ズバズバと切り込んでいく叢雲は、頼もしさもあるが空気を読んでほしくもあった。春雨には、この事実は少し重い。
　ミシェルと聞いても戦艦棲姫はピンと来なかったが、ここに居着いたイ級だと話したらすぐに納得した。
「この際だから、私の見解を話しておくわ。あの駆逐艦……ミシェルね、ミシェルは私を襲った輩にやられた元艦娘と見て間違いないと思うわ。そうじゃ無かったら、その出処を探っている私が襲われる謂れがないもの。ただ無差別に襲撃しているにしても、アイツらは賢すぎ

る」
　戦艦棲姫が語るのは、襲いかかってきた同胞（はらから）のこと。
　侵略者気質で、目につくモノを全て破壊するような衝動に駆られているとしても、不可解な点が多かったという。明確な意思を持って、それが探っている者であると理解しての攻撃だった。しかも、実力を値踏みするような視線もあったそうだ。
　そんなことが出来る深海棲艦は、姫級でも上位である。相手の実力を測って、本当に攻撃していいかを考えるくらいに知能が高い。それこそ私くらいにと戦艦棲姫が少し冗談を交えてくるが、春雨は笑える状況ではなかった。
「値踏みした結果、私ならやれると判断したのかしらね。結果はまぁ、返り討ちにしてやったわ。特に駆逐艦の方は抑えが利かないみたいでね。重巡洋艦の方が止めろと言ってるのに突っ込んできたから、あれはただの戦闘狂……狂犬と言ってもいいかも。犬みたいだったし」
　返り討ちと言いつつも自分も重傷を負ってしまっているので、相討ちと言う方が正しいか。結局倒し切れなかったのだから、どちらかといえば負けに近い。
「とはいえ、じゃあなんでミシェルのことを探っている私を襲う必要があったのか……それはちょっとわからないわ。探られたくない秘密があるのかもしれないけど」
「もしくは……勘違いなんてこともあるかもしれないわねぇ。全然無関係なのに自分達が探られていると思い込んで、戦艦ちゃんを襲ってしまったなんてことも」
「それだといい迷惑すぎるわ」
　どうであれ、春雨と叢雲の仇がまだフラフラと何処かの海域に出没しているのは確かである。しかも、仲間を襲ったことは明確。
　春雨のみならず、叢雲も発作を起こしそうになっていた。怒りが湧き上がり、拳を握りしめ、歯を食いしばりながら震えている。それにすぐに気付けた薄雲が、春雨をジェーナスに任せて叢雲の方についた。
「これは、例の鎮守府の子達にも伝えておく必要があるわよね。調査

をしてもらっていたら、またアレに襲われる可能性があるんだもの。私がこうされたくらいだし、艦娘で敵うかどうかはわからないわよ」
「そうねぇ……その辺りは知っておいてもらった方がいいわねぇ。遭遇した時のことをあちらに考えてもらいたいところだし」
おそらく、調査をしないということはしないだろう。あちらも春雨を含めた駆逐隊の仇討ちを考えているのだから、そこに繋がる何かであることが確定した以上、動かない理由がない。
しかし、危険なのは間違いない。戦艦棲姫がここまで追い込まれているのだ。艦娘で太刀打ち出来るかは、本当にわからない。槍持ち(叢雲)に襲撃された時から鍛えているとはいえ、相手の力は未知数すぎる。
「今日また連絡するつもりだったのよねぇ。その時には戦艦ちゃんの話も伝えておくわぁ」
「ええ、そうしておいて。なんなら私もその場に出るけど」
「無茶しちゃダメよぉ」
ベッドから自力で降りることが出来なそうなのだから、参加しろとは言わない。タブレットをこの部屋まで持ってくることは出来るが、そこまでして参加させるのもどうかと思う。

そんな話が出ていても、春雨は気が気じゃ無かった。姉を奪い、自分をこの姿にした仇が、ついに表舞台に出てきてしまったのだから。
複雑な感情が渦巻いていた。

施設の平和のために

戦艦棲姫が目を覚ましたことで、施設は安堵の空気に包まれた。特に安心していたのはコマンダン・テスト。身体はまだガタガタでも、本人が意識を取り戻して元気に話をしている姿を見たことで、発作の兆候が完全に消えた。戦艦棲姫からは死の匂いは失われ、時間による解決が確約されているようなものである。

しかし、一度発作を起こしたことで精神的に不安定になっているため、今から少しの間はコマンダン・テストも無理はしない方向で行く。ここでまた何かがあったら、また暴れ出してしまいかねない。

「Ｓｏｕｌａｇ▪（安心しました）．　目を覚まさなかったらどうしようかと」

「心配かけてごめんなさいね。でも、もう大丈夫よ。今は痛くて身体が動かないけど、そのうち治るわ」

「療養食の方がいいでしょうか」

「ガッツリ食べることは出来ないけど、おにぎりとかは食べることが出来たから、重くなければ何でもいいわ」

そのコマンダン・テストも、春雨達や中間棲姫から少し遅れた時間に部屋に訪れ、その比較的元気そうに話す姿に心底安心したようだった。コマンダン・テストに引っ張られてきたリシュリューも、ホッとしたようである。

流石にここにヒトが多すぎると思ったため、中間棲姫と薄雲叢雲姉妹は先にダイニングの方へと向かった。春雨とジェーナスはまだ残っているものの、廊下に一旦退避して、コマンダン・テストに部屋に入ってもらう。

戦艦棲姫と話をすることで、コマンダン・テストはより落ち着きを取り戻していった。ただ話しているだけでも笑顔を取り戻せるのだから、楽しく生きることが最も必要なのは、コマンダン・テストなのかもしれない。

「リシュリューさん、療養食、私もお手伝いします」

「Ｍｅｒｃｉ．（ありがとう）　Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅにも少し休んでもらいたいから、手伝ってもらえるのはありがたいわ」

春雨も朝イチに戦艦棲姫と話しているため、随分と落ち着いていた。発作の兆候は一切なく、冷静に物事を判断出来るところまで回復している。また独りで飛び出すようなことはもう無い。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅの朝ご飯も用意しなくちゃ。昨日はヨナと周辺警戒までしてくれたし、奮発してあげようかしら」
「朝からそんなに食べられるかな」
「大丈夫よ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅって、普段もモリモリ食べてるし、なんかその辺の魚もちょくちょく食べてるみたいなのよね。私達の出す分じゃ足りないのかも」
「あー……でも満足行くまであげちゃうと、私達の分が無くなっちゃうか」
ミシェルもすっかり施設の仲間としての認識が強い。昨日もヨナと楽しく泳いできたらしく、ジェーナスが少し羨ましそうにしていた。
逆にヨナは幸せアレルギーが発症しかけて危険ではあったのだが、任務と割り切っていたのでギリギリ耐えている。
「でも……突然Ｄａｎｇｅｒｅｕｘ（物騒）になったわね。怪我人が運び込まれるなんて、この施設では殆ど無いわよ」
リシュリューがぼやく。そもそもこの施設にやってくるような深海棲艦はいない。ミシェルのようにふらりと流れ着いてくる意思のないイロハ級が殆どで、姫級が来ることなんてこの戦艦棲姫くらいである。
イロハ級は稀に怪我をした状態で流れ着くそうだが、擦り傷程度で命に別状がないもののみ。コマンダン・テストの発作に繋がる程となると、むしろ初めてと言える程である。
「私がここに来てから……なんだか海がおかしくなってるんでしょうか」
「そんなことは無いと思うけれど、何かが起きそうなのは確かよね。未知のＦａｍｉｌｌｅ（はらから）が出てきてから、少しいろいろありすぎだもの」
春雨がここに訪れてから、艦娘にこの場所を発見され、和睦協定を

結んだ直後に槍持ちの出現。それを解決したかと思いきや、やたらと賢い駆逐イ級が流れ着き、それを調べてみようとしたら未知の深海棲艦が襲撃してきたのだ。
正直ここまで来たら出来過ぎと考えても間違っていない。何かに仕組まれているかの如く、イベントが発生し続けている。まるで、この施設をどうにかしようとしているかのように。
「……いや、考えすぎね。悪いことが続いてN・gatif（ネガティブ）になっているのかもしれないわ。忘れてちょうだい」
「は、はぁ……わかりました。リシュリューさんがそう言うなら」
そういうことを気にし続けても、結果がいい方向には進まないだろう。だから春雨も、今のリシュリューのボヤきは一旦忘れることにした。勿論ジェーナスも。

朝食後、その片付けも終わったところ。本来なら作業に入るところなのだが、今日はその前に鎮守府への連絡を優先することとなった。
昨日は戦艦棲姫を助けてもらったために、調査を早急に断念してもらうことになってしまったので、改めてそのことについての謝罪と感謝を伝えたい。さらには、目を覚ました戦艦棲姫からの情報も共有しておきたいというのもある。
これに関しては、なるべく早めに連絡はしておきたかった。今後の調査のことに確実に影響があることだからだ。
いつものようにダイニングの端末を使って、鎮守府に連絡を入れる。その参加者は、施設の主人である姉妹姫の他に、鎮守府を相手にするということで春雨と、それを筆頭にしたいつもの駆逐艦４人組。叢雲も渋々参加させられている。
戦艦棲姫も参加したがっていたものの、まだまともに動けない者が何を言うかとコマンダン・テストに押さえつけられ、それをさらにリシュリューに監視されているような状態。
「戦艦ちゃんが目を覚ましたわぁ。昨日はあの子を助けてくれてありがとう」

『そうか、目を覚ましたのか。安心したよ』
戦艦棲姫が目を覚ましたと連絡を受け、提督もホッとしたようだ。何があったのかを聞くことが出来れば、今取り掛かっている任務がより先へ進めるという打算的な考え方もあるが、それ以上に、協力関係を結んでいる仲間が命を落とさなくて良かったという気持ちの方が強い。
『だが、そちらには回復の設備などは無いのだろう?』
「私達はそのまま安静にしておけば自然に治るから、その辺りは心配しなくてもいいわぁ。戦艦ちゃんには少しの間、また施設に留まってもらうことになるんだけれど、応急処置だけで完治まで持っていけるわぁ」
『なるほど、それなら尚のこと安心だ。その施設は安全であることが保証されているようなものだからね』
施設に匿われているのなら、追撃されるようなこともなく、完治までゆっくり出来るだろう。野戦病院というわけでも無いのだから安心だ。
「それで、戦艦ちゃんから少し話を聞いていてねぇ。あの子を襲った同胞(はらから)のこと、貴方に伝えておかなくちゃと思ったのよぉ」
『助かる。こちらでも調査をしているのだが、わからないことばかりだ。有識者から聞けるのはありがたいよ』
そこで聞けた情報は、提督もある程度知っている情報。片目が輝く重巡洋艦と、その仲間の駆逐艦。2人がかりで相討ちだったとはいえ、戦艦棲姫に重傷を負わせることが出来るほどの手練れであることもこれでわかった。
その重巡洋艦の方が駆逐隊を全員屠った仇であることも確定している。春雨の件、叢雲の件、そして今回の戦艦棲姫の件は、全て同一犯だ。
『ふむ……なるほど。それは確かに強敵だ。戦艦棲姫の実力がどれほどかというのは我々にはわからないが、君が認めている程の仲間なのだから、相当なモノなのだろう。それを追い込むとは……』
「ええ、危険な相手なのは確かねぇ」

そもそも、その重巡洋艦は鎮守府でも屈指の実力を持つ駆逐隊を1人で殲滅してしまう程の力を持っているのだ。いくら艦娘相手とはいえ、多勢に無勢を引っくり返すほどなのだから、そうなってもおかしくはないと思えてしまう。

『その駆逐艦というのも気になるね』

「そうねぇ。戦艦ちゃんは狂犬のようだと言っていたわぁ。なんだか犬っぽいって」

それを聞いて、提督はピンときてしまう。貴婦人の大将から提督のみに伝えられている情報、重巡洋艦の仲間である駆逐艦は、白露型の特徴を持っていることに繋がる。

狂犬といえば、提督もいろいろと手を焼いた自由奔放さが売りである白露型の4番艦、夕立。勿論春雨の姉であり、駆逐隊の中でも特に強い力を持っている、自他共に認めるエースである。春雨は夕立には特訓をしてもらったり一緒に生活したりと、姉妹としての関係は良好も良好だった。

その春雨は、狂犬と聞いても夕立である可能性には繋がっていないようだ。姉が敵に回るなんて考えないようにしているし、その姉は目の前で沈んでいるのを見ているのだから。

『なるほど……』

中間棲姫は、その提督の表情の微妙な変化を見逃さなかった。しかし、触れていいものかどうかもわからなかったのでスルー。

『ありがとう。その件も、上の者に伝えておこう。今回の調査は、相当に危険であることはよくわかった』

「ええ、それに、だんだんと規模が大きくなっている気がするわぁ。私達と貴方達では、そろそろ収まらなくなってきているのかもしれないわねぇ」

そこで出てくるのが、以前に話に出た大将のこと。あちらもこの施設とはお近付きになりたいと話していたので、これを機に2つ目の仲間を追加するのもいいかもしれないと中間棲姫は考えた。

実際、自分達の存在を知る者が増えれば増えるほど、この施設が発見され、謂れのない理由で襲撃されてしまうリスクも高くなる。とは

いえ、今回の事件はそろそろ手が付けられない。鎮守府の仇とか施設の危機とかだけでは言ってられなくなる。ならば、より高い地位を持つ者が仲間になることは、ハイリターンを狙えるかもしれない。
　より心に従うのならば、最も信用出来る人間であるこの提督が頼っているような相手なのだから、まだ信用に値する存在ではないかという判断。あくまでも中間棲姫の独断ではあるのだが、おそらく施設の者達はそれをおおよそ容認してくれるだろう。ただ1人を除いて。
「私の考えとしては、以前に貴方が言っていた上の者という人間と、話をするのもいいと思っているわぁ。協力者は増えるに越したことは無いのよねぇ」
　しかし、中間棲姫のこの言葉に反応するのはやはり叢雲である。ただでさえ人間と艦娘への怒りが燻り続けているのに、信用出来る提督以外の人間が出てくるのは許容範囲を超える。
　だが、叢雲はあえて何も言わなかった。人間への怒りよりも、仇への怒りの方がより強い。出来ることなら自分の手で決着をつけたいところだが、そうするにしても協力者は必要だ。
『なら』
「ええ、少しこちらでも相談するけれど、貴方の上の者という人間さんとも、お話をしてみようと思うわぁ。いろいろと条件は付けるとは思うけれど、それでもいいかしらぁ」
『ありがたい。あの人も喜んでくれるだろう。その件も伝えておく』
　それについてはまた午後からということにして、今回の通信はこれで終わり。小さく息を吐いた後、この場にいる仲間達の方を向く。
「勝手なことを言ってごめんなさいねぇ。でも、私は協力者を増やした方がいいと判断したのよぉ。意見を聞かせてもらっていいかしらぁ」
「アタシはお姉が決めたことなら賛成よ。それに、アタシとしてもそれはアリだと思う。割とハイリスクな気がしないでもないけど、リターンも大きいわよね」
「ええ。私もそれを思ってねぇ」
　春雨達も、その意見には賛成していた。元艦娘であるために人間へ

の信用は深海棲艦よりも上。特に春雨は、今まで一緒に戦ってきた提督が信用している相手を信用出来ないわけが無かった。
そして叢雲。先程はダンマリを決め込んでいたが、短時間で考えを纏めていた。怒りの炎で思考が乱れるものの、最終的な終着点は決まっている。
「私は人間は大嫌いだけど、自分を殺した同胞(はらから)はそれ以上に気に入らないの。それを沈めるためには手段を選んでいられない。だから、それをやりやすくするためなら、別の人間との協力も許容するわ。実益を取る」
相変わらず少しツンデレな気質を見せているものの、少なくともあの提督のことは信用してきているようで、その人間が信用している相手だというのなら、まだマシだと考えられるくらいの余裕は出来ていた。
「じゃあ、お昼までに他の子にも話して、良さそうなら提督くんに話しましょう。私達の一番の目的はこの施設の平和。そのためにも、協力者を増やしましょう。これ以上は増えないとは思うけれどねぇ」

最終的に、施設の意見は満場一致となった。なんとミシェルすら許可を出した。
協力者を増やして、平和を脅かす未知の同胞(はらから)をどうにかする。施設のこれからのためにも、それは必要だ。

対話再び

午後、予定通りもう一度鎮守府へと連絡をする中間棲姫。今回は他の誰かが近くにいるわけではなく1人。施設の意見が満場一致だったことを伝えるためなので、別段他の者達はいなくても大丈夫であると判断した。

上の人間とも交流しようという姿勢であることを聞き、包み隠さず喜びを見せた提督に、中間棲姫はそんなにかと苦笑した。

『君と初めて対話した時にも言ったが、深海棲艦との和睦はこの戦いを終わらせる最も平和的な手段だ。それを僕だけで終わらせるのは勿体無さすぎる。僕の上の者はその辺りも理解してくれているからね』

「貴方がそう言うのなら信用するわぁ。それで、どうすればその上の者とやらとお話し出来るのかしらぁ？」

『その端末の番号を伝えておくことにするよ。そうすれば、直接話が出来るだろう』

人見知りというわけでは無いし、出来ることなら仲良くなりたいのだが、選択に失敗した場合は今以上の危険が舞い込んでくる可能性がある。人間のことは、一緒に楽しく生きていく尊い者という認識ではあるのだが、施設の平和と天秤にかけるなら、施設の方に大きく傾くのは必然。

この提督に関しては、艦娘達がこの施設に直接来て、直に話をし、海風に一晩過ごしてもらって、何度も対話することで信用を勝ち取っている。話せば話すほど、提督の人柄が理解出来ていき、今では完全に心を許すことが出来ている。

だが、いくらそんな人間が大丈夫と言っても、本心は直に話してみなければわからない。そして、その行為そのものがリスクを伴う。その上の者が、提督に場所を教えられることもなく、自分達の居場所を探し当てたというのなら、そこから対話を始めて通じ合うことが出来るかもしれないのだが。

「それはもう、今日中に来ると考えてもいいのかしらぁ」

『おそらく。あの人も思い立ったらすぐに動いてくるだろう。直に話してもらえれば、大丈夫だとわかってもらえると思うよ。僕が保証する……と言っても、信用に値するかはわからないが』
「いいえ、貴方に関しては全面的に信用しているもの。きっと大丈夫よねぇ」
疑いはしたものの、最も信用出来る人間が推してくるのだから、問題ないだろう。話してみようと考えられる。ここで和睦の輪が拡げられるのなら、それに越したことはない。

提督との通信が終わってからしばらくして、またもやタブレットが鳴り響いた。この時の時間はちょうどおやつ時。戦艦棲姫に甘いものを提供した後、春雨達もそれに舌鼓を打っている時間帯である。
「んぐっ……突然鳴るの驚くから勘弁してほしいわ」
「姉さん……端末は突然鳴るものですよ」
「わかってるわよ。食べてる時はやめてほしいってことよ」
鳴ると考えていなかったそれが大きな音を立てたので、叢雲が咽せかけたところを、薄雲が背中をさする。
「こんな時間にかかってくるの、久しぶりだよね」
「そうよね。ハルサメのところの提督、この時間にかけてくることは無かったものね」
春雨も小さく驚いていたものの、叢雲ほどでは無かった。そして、何の気無しにタブレットに触れる。いつも通り自分の知る提督が画面に映るものだと思って。
しかし、そこに映し出されたのは知らない背景と、何処かで見たことがあるような老齢の貴婦人。その隣には明らかに艦娘であろう少女。
『あら、貴女はその施設にいるという子ね。こんにちは』
「えっ、は、はい、こんにちは……」
不意打ちを受けて気が動転してしまっている春雨。とりあえず挨拶には挨拶を返す。

知らない声を聞き、叢雲がやはり反応する。いつもの提督とその部下である艦娘に対しては、ある程度は心を開くことが出来ているのだが、それ以外に対しては勿論真っ白な状態。根幹にある怒りは仇の同胞(はらから)に向かっているものの、少し機嫌が悪くなった。気付いた薄雲は即座に手を握る。

『私は大本営所属の者なのだけれど、そちらの管理者……中間棲姫さんはいるかしら』

「えっ、だ、大本営!?」

流石にその名前を出されると驚かざるを得ない。春雨の知る限りでは、最も立場が上である人間。提督と関係を持つ、直属の上司。だからだろう、春雨には画面越しの貴婦人に見覚えがあった。

頻繁とは言わないが、監査や大規模作戦の前などの時に鎮守府に訪れていたのを思い出した。挨拶くらいはしたことがあるものの、こうやって面と向かって話すようなことはまず無かった。そんなことをしたことがあるのは、事務員である大淀か、妹である五月雨くらいでは無かろうか。

大本営という言葉が出たことにより、薄雲やジェーナスすらも咽せてしまいそうになった。提督だと思っていたところに現れた大物に、おやつなんて言っていられなくなった。

『あらあら、ごめんなさいね。今はちょうどおやつ時だったみたい。次は頃合いを見計らって連絡させてもらうわね』

「い、いえ」

グシグシと口を拭く春雨。提督ならば食べている途中でも普通に話が出来たものの、トップクラスの地位を持つ大将となると話は別だった。いくら艦娘ではなく深海棲艦になってしまったとしても、その辺りの礼儀は心身共に覚えている。

「え、ええと、姉姫様に御用、なんですね」

『ええ、私もこの施設との和睦を結ぶため、協力者となるために、彼に話を付けてもらったの』

彼、とは勿論みんなが良く知る提督である。午前中に話題となった提督の上の者というのが、まさかこんなタイミングで対話を望んでく

るとは予想だにしていなかった。
　最初は春雨だけだったが、画面の向こうから聞こえてきたのが穏やかな老齢の貴婦人の声だとわかったことで、興味を持ったのかジェーナスがヒョコッと画面内に顔を出す。
『初めまして、貴女はジェーナスね』
「Ｗｏｗ！　私のことがわかるのね！」
『ええ、貴女の姿、本来の艦娘としてのジェーナスから何も変わっていないもの。春雨も勿論わかっていたわ。彼の艦娘だった春雨よね』
　この施設にいる元艦娘達は、基本的に本来の艦娘の姿から殆ど変わっていない。色素的なモノがモノクロになっていることがメインで、それ以外は艦娘である。元々ポニーテールだった薄雲が結ばなくなったり、逆に下ろしていた叢雲がポニーテールにしたりと、一部髪型を変えている者はいるものの、結果的にはその程度。
　そしてこの大将は、今この世界に誕生した艦娘全ての姿を覚えている。自分の部下として置いている者から、他の鎮守府に住まう者まで、全てを把握済み。そしてそれがどの鎮守府にいるかも全て頭に入っている。そうでなくては大本営直属の大将なんてやっていられない。
「姉姫は私が呼んでくるわ。Ｗａｉｔ（少し）　ａ（待って）　ｍｉｎｕｔｅ（て）」
　それだけ言って、ジェーナスがダイニングを出て行く。
『元気でいい子ね。元のジェーナスそのものだわ。深海棲艦となっても、本質は何も変わらない。貴女達は、艦娘であり深海棲艦である存在なのね』
　しみじみと語る貴婦人に、春雨は何処か自分の知る提督の姿を重ねていた。一言一言が、同じ信念を持つ者に見える。それ故に信用出来る相手。
　提督がこの施設のことを紹介したくらいなので、当然この人も問題が無い人間と判断してのことだろう。春雨は提督を信じるように貴婦人を信用する。
『そこには他にも仲間がいるのかしら？』
「えっ、あ、は、はい。ここにはあと、薄雲ちゃんと叢雲ちゃんが」

名前が出た瞬間に、貴婦人の隣に立つ秘書艦、吹雪が大きな反応を見せる。しかし、春雨はそれに気付かず、タブレットを薄雲の方へと向けた。
叢雲は明らかに不機嫌だが、薄雲は少し戸惑いつつもその画面に笑顔を向ける。
『わ、わ、本当に薄雲ちゃんと叢雲ちゃんだ！』
「吹雪姉さん……!?」
そして姉妹対面。変わり果てたと言っても先のように姿形は殆ど変わっていないため、吹雪から見てもそれが自分の妹であることがすぐにわかった。
吹雪は特型と言われる駆逐艦姉妹の頂点に立つ者、つまり長女だ。そしてその妹には、薄雲や叢雲が含まれる。
『わぁ、こんなカタチで会えるなんて、世の中よくわからないなぁ』
「あはは……吹雪姉さんも元気そうで何よりです。叢雲姉さん、吹雪姉さんですよ」
「わかってるわよ」
チラリと画面の方を見る叢雲だが、やはりまだ心が開けていないためその程度。
「アンタは信用出来る艦娘なわけ？　私は艦娘が大嫌いだから、いくら姉だろうが知ったことでは無いの」
そして早速難癖。こういう性質なのだから仕方ないと仲間達は苦笑するのみだが、初対面の相手に向かってこの態度はどうなのだろうと内心思っていたりする。相手が温厚で無ければ、和睦なんて言っていられなくなる可能性だってあるのに、叢雲はお構い無しである。
対する吹雪は、一瞬面食らったような表情になるものの、それをすぐに受け入れた。施設に住まう深海棲艦は、何処か心が壊れているという前情報があり、それが元艦娘であっても立場などは考えずに接するべきだというアドバイスも貰っていた。
叢雲がこっ酷くやられていることも把握済み。何せ、例の鎮守府を制圧したのは吹雪であり、尋問の場にもいたのだ。被害者叢雲のことは、下手をしたら叢雲本人よりも知っている。

『そこは叢雲ちゃんに任せる。私の言動で、信用するかしないか決めていいよ。信用出来ないならそれでいい』
どうするのもお前次第だと言われたことにより、叢雲は沈黙。
『でも、私は妹達と仲良くしたいかな。というか、みんなと仲良くしたい。戦う必要なんて無いなら、痛くない方がいいよね？』
「……ふん。口先だけじゃないことを祈ってるわ」
叢雲は改めてそっぽを向いてしまった。協力関係を持つと決めても簡単には割り切れないのが叢雲の性質。しかし、これ以上文句や罵詈雑言を言わなくなっているのは、充分すぎるくらいの成長。深夜に殺意丸出しで襲撃しようとした時のことを考えれば、今の叢雲は大分温厚だ。ツンの要素がかなり強いだけで、殺意も悪意も無い。
元々の叢雲の性質を知っている分、吹雪はこんな態度を取られても微笑ましい程度で終わらせられた。姉の貫禄を見せつけるかのようである。見た目は叢雲の方が姉に見えなくもないが。
『薄雲ちゃんも、私が信用出来ないようだったら好きに扱ってくれていいからね』
「大丈夫ですよ。今の言動で、吹雪姉さんは信用出来るヒト認定です」
『あはは、それは良かった』
そうこうしている内に、ジェーナスが中間棲姫を連れてダイニングに戻ってくる。今回は新たな人間との対話ということで、飛行場姫もしっかりついてきている。
提督とはこうなるであろうことを話していたが、大将からの連絡がおそらく今日中だろうくらいしかわからず、提督がこの時間を避けているため、完全にノーマークだったと謝罪。
「姉姫様、この人は信用出来る人ですので」
「ええ、提督くんからちゃんと聞いているもの。あの人が信用出来るというのなら、おそらく大丈夫でしょうねぇ。でも、まずは直に話してみなくちゃねぇ」
空いている場所に腰掛けたところで、薄雲の方に向けられていたタブレットを中間棲姫の方に向けた。
その姿を目の当たりにした大将は、まず驚きを見せた。人間の間で

は中間棲姫は最悪の深海棲艦として名高いため、反応を見せないようにするのは難しい。しかし、前情報で農作業をするくらいに温厚で、戦うつもりが全く無いことをやたらと強調されて説明されているため、驚きはそこで終わらせる。
「初めまして、新しい人間さん」
『ええ、初めまして。貴女に会えて嬉しいわ、中間……いえ、姉姫さんと呼んだ方がいいのよね？』
「そうしてもらえると嬉しいわぁ。本音を言うと、中間棲姫という呼び名は、人間の敵って感じがして嬉しくないのよねぇ。だから、こっちの妹ちゃんも、私達の呼び名、妹姫と呼んであげてちょうだいねぇ」
最初のこの一言で、多少は相手のことがわかった中間棲姫。こちらのことを真っ先に慮ってくれるということは、少なくとも敵意はない。歩み寄ろうとしてきているのもわかる。
対する大将も、中間棲姫の考え方はなんとなく理解出来た。あくまでも施設を守るために、平和を貫こうとしているのは顔を見てわかったようである。大将の知る中間棲姫とは、表情がまるで違うのだ。
『それでは姉姫さん、少し、お話をしましょうか』
「ええ、喜んで。私達のこと、理解してくれると嬉しいわぁ」

いくら深海棲艦の中でもトップクラスの力を持つ姫であろうが、いくら人間の中でもトップクラスの権力を持つ大将であろうが、今この場では立場なんて関係ない。完全なる対等な立場での対話となる。
これにより、人間と深海棲艦の和睦の輪は、さらに拡がるのだろうか。そうなるかどうかは、大将次第とも言えた。

同じ場所を見る者

おやつ時に始まった、大本営所属の大将との対話。春雨達が見守る中、施設の長たる姉妹姫がその席につき、タブレット越しとはいえ2人目の人間と相対する。

大将は、今まで話してきた提督に負けず劣らず、ここにいる深海棲艦達のことを考えての言葉を紡いでいた。

まず、姉妹のことを人間の呼び名では呼ばない。中間棲姫、飛行場姫という呼び名は、あくまでも人類が考えた侵略者に対しての呼称。同一個体だからといって、一緒くたに考えることは違うとして、2人のことは施設側の呼び名である姉姫、妹姫を使う。

そこから、お互いに対等な立場であるということを念頭に置いた状態で、少しゆっくりとしたテンポで話を進めていく。

「貴女のことはどう呼べばいいのかしらぁ。彼は提督くんとだけ呼ばせてもらっているのだけれど」

『そうね……普段は大将とだけ呼ばれているの。一応私は佐々木（ササキ）というのだけど、ちょっと普通すぎてサマにならないでしょう。なので、大将と呼んでくれればいいわ』

「そう、ならこちらもそう呼ばせてもらうわねぇ」

春雨には、中間棲姫と大将は雰囲気が近いもののように見えた。おっとりしているというか、似たような性格というか。見ている世界は違えど、平和を望んで手の届く範囲を守り続けているのは同じことだ。

そういう意味では、この2人は似た者同士と言えるのかもしれない。種族など関係なく、共通するモノがあるのなら、仲良くなれるはずだ。同族嫌悪というモノもあるが、この2人にそれは無いだろう。

「それじゃあ大将さん、何故貴女は私達とお近付きになりたいと？」

『私も彼と同じように、この世界を平和に導くために戦っているの。深海棲艦は平和を脅かす敵かもしれないけれど、貴女達はそんなことのないということは聞いているわ。それなら手を取り合える。その方がお互いにいいでしょう？　私達（人間）も、艦娘も、貴女達（深海棲艦）も、無駄に命

を張る必要なんて無いと考えているわ』
　提督と同じような言葉だ。中間棲姫を騙そうとしてるわけでもなく、本心からの言葉。戦いたくないのは誰だって一緒である。
『私はもう随分と長く生きているのだけれど、この世界がとても平和だった頃をよく知っているの。私が生きている内に、その世界に戻ってもらいたい。ただそれだけ。そして、話を聞いている限り、貴女もその平和な世界を求めているのよね？』
「貴女ほど高尚なモノでは無いかもしれないけれどねぇ」
『それこそ、私は貴女に及ばないかもしれない。だけれど、目を向けている場所はきっと同じ場所よ』
　穏やかな、とても穏やかな表情と声。しかし、その奥底には絶対に折れることのない芯があった。平和を取り戻すため、それを脅かすモノには容赦せず、共に歩めるモノとは手を取り合う。不可侵というのも考えられるだろうが、お互いに困っていることがあるのなら、それこそ協力するべきだ。
　そして、この施設は後者、手を取り合える存在であると確信して、この話をしている。そうでなければ、佐々木という本来の名前を教えることもないだろうし、そもそも面と向かって対話なんてしない。
　都合のいい仲間とか、そういうことは一切考えていない。施設に困ったことがあるのなら、全身全霊で助ける。こちらの困ったことがあったら、少しだけ手を貸してもらいたい。ただし、戦いに参加しろとは絶対に言わない。施設はあくまでも戦闘への不可侵を続けてくれればいい。代わりに、情報をくれれば、施設の敵となるモノも人間達が戦う。
　大将は、それを静かに中間棲姫に伝えた。機嫌を伺っているような素振りも無い。
「大将さんが嘘偽りない言葉を言っているのは、聞いていてわかるわぁ。私達のことを本気で考えて、敵意も何もないことはとても伝わってきたわねぇ」
『ええ、それが隠しようのない本心だもの。少し悪い言い方をするのなら、私達は平和のためなら手段を選ばないの。だって、死ぬのは怖

いもの』
　命を張る必要のない手段を選択し続けると、大将は言う。話が通じる者ならば和睦を優先的に選択するし、そうでない者ならば戦いとなっても仕方ない。今までの深海棲艦は全てが後者だった。対話に応じることもなく、ただただ侵略を推し進めてくる者ばかり。それ故に、世界規模で異種族間の戦争となってしまっている。
　しかし、ついに話がわかる者が現れてくれたのだ。大切にしたいと考えるのは必然だし、平和に繋がると考えるのも必然。協力してこの世界を平和に導きたい。
『だから、私は貴女とお近付きになりたいと願ったの。半分くらいはこの戦いでズルをするためというのもあるけれど、もう半分は単に同じ方を向いているヒトと仲良くすることに何か問題があるかという話になるわね』
　中間棲姫のことを、深海棲艦として見ていない発言である。そもそも、この大将は種族の差など一切考えていない。敵か味方かの2種類でしか判断していないように見える。おそろしく極端で、しかし合理的な考え方だった。
　そんな考え方だから、本来同類であるブラック鎮守府の制圧を容赦なく実行出来るのかもしれない。それで心を痛めないわけではないのだが。
「なるほどねぇ。貴女の考え方には賛成だわぁ。同じ場所かどうかはわからないけれど、お互い平和を望んでいるのなら、協力しない理由はないかもしれないわねぇ」
『でしょう？　お互いに、いい関係を築けると思うの。とはいえ、悩みが無いわけでは無いのだけれど』
　しかし、大将は1つだけこの協力関係について悩みがあった。それは、中間棲姫達が自分達の行為についてどう思っているかだ。
　平和を求める戦いをしているというが、その相手は中間棲姫達にとっては同胞（はらから）。どういう立場や思想であっても、同族が人間や艦娘の手によって滅ぼされることについて、抵抗は無いのかどうか。
『姉姫さん、私からも貴女に聞きたいことがあるのだけど、いいかし

ら』
「どうぞぉ」
『私達は平和のためなら、貴女達の同族と戦い、その命を奪っているわ。こちらも奪われているとはいえ、それについてどう考えているのかしら。貴方達がそれを気に入らないと思っていても、私達は命が大切だから、この戦いはしばらく終わりそうにないの』
つまり、こちらもやっていることは侵略者である深海棲艦と近しいのだと言っている。平和を求める者でなければ淘汰してしまうだなんて、本来許されていいものなのか。
やられたからやり返しているというようなものではあるが、中間棲姫からすれば心境は人間と変わらないかもしれない。それを慮って、先にどう考えているかを知りたかった。
対する中間棲姫は、とてもあっさりと自分の考え方を言ってのける。
「仕方ないことだと思うわぁ。人間さん達も、ただただやられるために生きているわけじゃないもの。そこは私達も割り切っているつもりよぉ」
自分が他の深海棲艦は根本的な何かが違うという考え方をしているのは一目瞭然だった。
いくら同族であろうと、侵略行為で人間の平和を脅かしているのだ。やり返されて然るべきであり、命のやり取りをしているのだから、それは仕方ないと。一方的に侵略が出来るわけないのだから、やられるのは因果応報であると。
「そういう意味では、私は冷たいのかもしれないわねぇ。同じ考え方を持つ同胞(はらから)以外を見捨てているようなものなんだもの」
『そんなことないわ。貴女の考え方は人間と同じ。手が届く範囲の平和を望んでいるの。それは褒められこそすれ、罵られるべきことでは無いでしょう』
人間だってそうだ。それを深海棲艦の中で悪と言うかはわからないが、自分達と思想の違う者まで擁護しているような余裕なんてない。自分と同じ種族ならば全ての行為を肯定する、なんてことは無い

のだ。
独自の善悪の基準はあれど、それは確実に死を望まない考え方だ。
大将と中間棲姫は、そういうところで同じ場所を見ている。
『私は貴女の考え方を否定しません。人間ですら同じ人間を見捨てることがあるんだもの。私達(人間)も貴女達(深海棲艦)も、同じ知能ある生き物なんだから』
終始穏やかな表情で言ってのけた。そんな大将に、中間棲姫は少なからず敬意を感じた。
「この短い時間だけれど、貴女も信用してもいい人間さんであることは理解出来たわぁ。和睦協定を結びましょう」
『ええ、助かるわ。貴女とはいろいろとお話がしたいし、今は脅威に晒されていると聞いているから、私達もそれなら救いたいと思っているもの』
お互いの考え方を伝え合い、それを理解し合うことにより、大将との和睦を良しとすることが出来た。提督と同じように、大将も誠実な人間であることがわかったのは非常に大きい。
これにより、施設は2人目の協力者を得た。もしまた不可解な事件が起きたとき、調査を外注することが容易になる。
「それで、こんな言い方はアレだけれど、貴女達はまず何をしてくれるのかしらぁ」
『そのことなんだけれど、貴女のところに籍を置いている艦娘……元艦娘と言った方がいいのよね。叢雲のことについては決着をつけました』
近くで聞いている叢雲がピクリと反応する。
『私達の間では、それをブラック鎮守府と呼ぶのだけれど、艦娘を蔑ろにして利益だけを得ようとする不逞の輩は、厳重に罰することになったの。その発端となった者……叢雲にとっての提督は、少しキツめに罰しておきました』
それで叢雲の心が晴れるわけではないのだが、悪を悪として裁いてくれたのは、叢雲としても嬉しかったりする。せいせいすると言った方がいいか。

「私が殺しに行きたかったわよ」
『叢雲、世の中にはね、死んだ方がマシという罰もあるの。安易に命を奪うのは、ただの侵略者と同じ。行いを後悔させ、二度とそんな考えに至らぬように教育し、真っ当な人間に戻してあげるのが、本当に世界を案じる者の務めだと思っているのよ』
　そんなことを笑みを浮かべながら言ってのける辺り、この大将も相当だなと、ここにいる誰もが思った。
「そう、ならいいわ。生まれたことを後悔するくらいに痛めつけてやって。アイツ、私以外にも被害者出してんでしょ」
『ええ……調査の結果として、叢雲以外にも何人もの艦娘が被害を受けてこの世を去っていた。それは決して許されないこと。然るべき処置をすることを約束しましょう。その姿を見せることは出来ないから貴女の気が晴れるかはわからないけれど』
「私は一生気が晴れない性質だから気にしなくていいわ。だから、一生後悔させてやってくれればいい。自殺もさせないでちょうだい」
『ええ、勿論』
　ほんの少しだけ楽しそうに話した叢雲。壊れた心が加虐に向いてしまっているのは少し問題なのだが、自分の心を歪ませた張本人が罰を受けていることを喜ぶのは、もう仕方ないこととして全員が割り切った。怒りの炎で身を焼き続けるよりはマシかもしれない。
『それと、私からもこうやって直に話せるラインを作ったけれど、基本的には貴女と話をするのは彼ということになるわ。あちらはあちらで、貴女達……というより、本来自分の部下であった春雨に用があるみたいだし』
「そう、それなら良かった。彼にはいろいろお世話になっているもの」
　大将との繋がりを作ったが、提督との繋がりはいつも通り。むしろ、今まで以上に親密になってくれても構わないとのこと。大本営のお墨付きとなったのは非常に大きく、堂々と深海棲艦との協力任務などもしていいと言われたようなもの。
　これを喜ぶのはやはり春雨。今までは秘密裏というわけではないが、物凄く慎重に事を成していたが、大将公認となれば話は変わる。

『貴女達が望むかはわからないけれど、いざとなったら、貴女達が彼の鎮守府を訪問出来るタイミングも作れたらと思うわ』
「あらあらあら……それはまた魅力的な提案ねぇ。だけど、それがこの施設を危険に晒す可能性があるのなら、謹んでお断りさせてもらうわぁ」
『そこは貴女達に任せます。今は必要ではないことだもの。何かがあって、どうしても必要になった時には、それが出来るように工面するということで考えていてもらえると嬉しいわ』
それくらいにこの施設のことを優遇してくれるということだ。それは素直に喜んでおいた。

これだけ話して、大将の人間性がよくわかったのではないか。ただ仲良く出来るかどうかを基準にし、種族の差なんて全く感じさせない。
これを年の功と言うのなら、そうなのかもしれない。

次に向けて

施設が大本営所属の大将と対話をしている時、鎮守府では少し緊張した面持ちで電話を見つめている提督がいた。先程の大将に施設側から許可が出たことを伝えたわけだが、おそらく今頃自分から連絡をしていることだろう。その結果が心配で仕方なかった。

実際、大将ならば施設の深海棲艦と仲良くなれるとは思うし、実際に考え方も同じだ。戦いを拒み、なるべく平和的に事を済ませたいという気持ちが大きい。

「提督、大丈夫だとわかっているのに心配するのって矛盾してません？」

「そうだとは僕も思うんだが、万が一のことを思うとね……」

呆れた顔で五月雨が提督に言うが、それでも不安そうな表情は変わらない。大将本人から大丈夫だったという連絡がない限り、この緊張は払拭出来ないだろう。

などとやっていたら、電話が鳴り響いた。わかっていても、心臓が飛び出るかのように驚き、ビクンと震える。そしておそるおそる受話器を取った。

「もしもし……ああ、どうでしたか」

『本当に彼女と話せて良かったわぁ。確実に共存出来る相手であることがすぐにわかったの。私と彼女は、種族は違えど同じ道を歩けるわね』

相手は案の定大将。提督が塩梅を聞いた途端に、マシンガンのように言葉が溢れ出してきていた。やれ中間棲姫とは気が合うだの、これからも末永くお付き合い出来そうだの、負の感情は一切なく、喜びがこれでもかというほど叩き付けられた。

提督は受話器越しでもタジタジだったが、紹介出来て良かったと心の底からホッとした。諍いが起こるようなことは無かったと思うが、お互いに信じ合えないようなこともあるかもしれない。それが無かっただけでも御の字。

さらにそこから、施設側の端末も鳴り響いた。流石に電話をしなが

らそちらを受けるのは不可能であるため、そちらは五月雨に任せることにした。
「はーい、もしもしー」
『あら、提督くんは忙しいのかしら』
施設の端末なのだから、出るのは勿論中間棲姫。おそらく、今の大将との対話の結果を伝えるために連絡を入れてきたのだろう。
電話に向かって苦笑している提督をタブレットのカメラに映してあげると、あちら側の中間棲姫もニコニコしていた。それを見た提督は、今は出られないと申し訳なさそうに手を立てて、謝罪のポーズを取る。中間棲姫もそれに対して、大丈夫だと言うように手を振った。
このタイミングで提督に連絡を取っており、五月雨のこの態度からして、提督の電話の相手がたった今対話した大将であることをすぐに勘付くことが出来たようで、笑みがより深くなる。
『あちらも同じことを考えていたみたいねぇ。ホント、気が合うヒトみたいだわぁ』
「タイミングも全く同じでしたよ」
『ふふ、そんなところまでとはねぇ』
中間棲姫の声も楽しそうである。受けている五月雨も少し嬉しくなるような声色。
『見てわかる通り、私と大将さんは和睦協定を結ぶことが出来たわぁ。良き協力者が増えたのは本当に嬉しいのよぉ』
「みたいですね。声色からしてわかります」
『あら、そんなに浮かれてるかしらぁ。でもそれくらいってことねぇ。提督くんと同じくらい、彼女も信用出来る存在だってわかったわぁ』
実際は、今でも好感度が鰻登り中の提督よりは若干劣るのだが、初期の段階と同程度と考えることは出来る。それならば、ほぼ信用しているようなもの。
五月雨としても、ここでおかしなことが起きていなかったのは安心である。上司の不手際は部下にも回ってくるため、施設に向かうことが難しくなる可能性だってあったのだ。春雨が住まうあの場所に行けなくなるのは、出来ることなら避けたい。自分のためにも、海風の

ためにも。
「これで協力者は増えましたから、また何か調査が必要なことがあったら何でも言ってくださいね」
『ええ、本当にありがとうねぇ。それに、叢雲ちゃんもある程度は心を開いてくれているから、またこちらに来てくれても問題ないわぁ。今度は外じゃなくて、施設の中に入ってくれても問題ないと思うから、みんなにそう伝えておいてもらえるかしらぁ』
「わかりました。また提督からそちらに連絡が行くかもしれませんが、伝えておきますね」
　などと話していると、中間棲姫が画面外に手招き。すると、ひょこっと春雨が現れる。
『五月雨、久しぶり』
「わぁ、春雨！　元気そうだね」
『うん、こっちは平和だからね。今のところは何も無いよ』
　姉妹の対面はお互いのテンションを上げる。精神的に強くなっている春雨も、たまには妹達の顔を見なければ変なタイミングで気が沈んでしまうかもしれない。機会があれば、こうやって話をさせる。
　こんなことが出来るのは、施設の中でも春雨だけだ。縁があるというのは、それだけでもメンタルケアになる。
『調査隊、待ってるね。そのときはまた、私が腕によりをかけてご飯を作るからね』
「あはは、それは楽しみだね。私は調査隊じゃないけど、海風とかがきっと喜ぶよ」
『この前の調査隊の時も喜んでもらえたから、今度はそれ以上に施設のことを楽しんでもらいたいな』
　ニコニコしながら世間話をしているだけで、心が穏やかになるというもの。それを見ている中間棲姫も、まるで母親の如く慈悲深い笑みで春雨のことを見守っている。
　こういう光景を見ていると、鎮守府と和睦協定を結んで本当に良かったと思えた。実際に関係性を持つ春雨だけでなく、この施設に住む元艦娘達に良い影響を与えているのは一目瞭然だ。

『それじゃあ、あまり長話もアレだから、私はこれで。五月雨、またお話ししようね』
「うん、そっちも元気で。私もまた会いに行くよ」
『楽しみにしてる』
　こう春雨と五月雨が話している間も、提督は電話越しの大将に喜びを伝えられ続けている。もう少しの間、あの電話は終わりそうにないとわかり、中間棲姫も出直すと伝えて通信を切った。
　それくらいまで中間棲姫と大将の相性は良かったと見える。ここまで行動がシンクロするとは思いもしなかった。
「提督、私、みんなに今のこと伝えてきますね」
　小さく提督にそれを伝えると、ＯＫと手でサインを送られたため、五月雨は調査隊へ今後のことを伝えに行く。さすがに重要な業務のことではドジらない。

　調査隊は現在、次の任務に向けて訓練を繰り返している。ただ調査と言っても、戦艦棲姫がああなったことを考えると、激しい戦闘になる可能性だって充分にあった。そこを乗り切るためにも、今まで以上の力を得ておく必要があるだろう。
　相手が２人であることは中間棲姫経由で伝えられているため、それも加味して連携訓練を主体としていた。特に、つい最近改二改装が実施された山風は、新たに得た力を十全に振るえるようにするため、また、海風をその戦いで守るため、必死に鍛えている。
　連携訓練ということで、相手は金剛比叡ペアという本当に太刀打ち出来るのかと思えるものなのだが、今までの深海棲艦の力を見る限りでは。これが妥当というのだから笑えない。
「エンジンかかるの遅ぇのに、かかると途端に動き良くなるンだよなぁ山風の姉貴は」
　山風とタッグを組んでいた江風がボヤくが、実際、山風はそういうタイプで、相手の動きを見てから動くいわゆる『後の先』を得意としていた。常に表情を窺ったり、状況を見てから動くことが、戦闘にも

活かされているようである。
　結果、誰よりも遅くエンジンがかかった後、誰よりも早く相手を撃つということがザラ。見ているからこそ、的確に弱点を突ける。
「いいことデスネー。山風は、そういう戦い方が得意というだけデース。江風は江風で、一番槍が得意でショウ？」
「まぁね。まず突撃して相手を崩すのが性に合ってンだ」
「無謀でもないデスから、江風はそれでいいと思いマース」
　対する江風は、山風とは逆。まず自分が動く。そこで敵に行動をさせ、そこからさらに動く。動きっぱなしである。山風からしたら、わちゃわちゃしているようにしか見えないらしい。
　実際、この2人の組み合わせが一番相性が良かったりする。山風的には海風と組みたいようだが。
「さ、今日はこの辺りで終わりにしましょう！　江風も山風も、気合、入ってていいですねー！」
「……まぁ……ね。あの戦艦棲姫を見たら……頑張るって気持ちになった」
　本来の力を知らないにしても、戦艦棲姫があそこまでの重傷を負っているのがわかっているのだ。山風としては、勝つためにも、死なないためにも、今のままでは足りないと感じたようである。
　それは、その脅威から海風を守るためにも必要だ。ただでさえ精神的にガタが来ているのだから、現場では本来の力を発揮することが難しいかもしれない。
　一方、海風と涼風も、相手がどうしてくるかはわからないため、千歳と千代田から訓練を受けている。重巡洋艦と駆逐艦とは聞いているが、それが空襲をしてこないとは限らない。
　深海棲艦は、艦種詐欺が横行しているような種族だ。味方のことを考えずに先制して魚雷を放ってくるようなモノや、水上機運用型なのに正規空母の艦載機を飛ばしてくるようなモノもいる。重巡洋艦が実は航空巡洋艦で、水上機ではなく艦上攻撃機を使ってくる可能性だって普通にある。
「千歳さん、千代田さん、ありがとうございました。今日は本気で艦載

機使ってきましたよね」
「勿論。鍛え上げるためにやってるんだし、こっちも素早い駆逐艦相手への練度を上げたかったもの」
千歳が話しているのは、槍持ち（叢雲）と交戦したときの経験からの発言。艦載機からの攻撃をことごとく避けられるどころか、その槍で全て弾かれてしまった。今後出てくる敵が、同じことをしてこないとも限らない。それ故に、艦載機の妖精さんとの連携をさらに上げ、素早い駆逐艦相手にも的確に当てられるように鍛え上げる必要があった。
つまり、この訓練もお互いのため。特に涼風は、そういった回避能力が段違いだったようで、千歳と千代田の攻撃をひょいひょい避けながら肉薄していくくらいだ。やりたいことが出来る、都合のいいものになった。
「あたい集中砲火受けたんだけど」
「そりゃそうでしょ。近付けさせないためにはボコボコにしないとダメなんだから」
涼風がボヤき、千代田が反論。それくらいに涼風の突撃は精度が高いようである。それに、そのおかげで海風の攻撃が狙いやすくなるのだ。頼れる末妹である。
「でも、連携は今までよりも出来るようになってますね。どんな敵が来てもある程度は対応出来るようになったんじゃないでしょうか」
「そうだといいんだけれど。未知の深海棲艦よ。未だ知らずなんだから、想定外のことしかしてこないと考えなくちゃ」
それこそ、駆逐艦が艦載機を飛ばしてくるくらいに考えるのがいい。例外を全てやってくるのが深海棲艦なのだと思うのがちょうどいいのだ。

訓練終了後、2組がピッタリのタイミングで工廠に戻ると、それを見計らったかのように五月雨が待ち構えていた。中間棲姫からの連絡がそれくらいの時間だったということで、その辺りのタイミングもバッチリ。

「中間棲姫から連絡があって、次に調査隊が来るときは野営じゃなく施設でいいって話してました。次はいつになるかはわからないですけど、施設の深海棲艦とは仲良くお願いしますね」
次の調査隊の日程はまだ決まっていない。実際のところ、殆どの日程は施設任せなところもある。
あくまでも施設が主体であり、この日でやりたいというタイミングがあったとしても、その時に施設が難しいと言われれば、その日は見送るしかない。逆に、少し忙しいとなっても、施設側がこの日でお願いしたいと言われれば、優先順位はそちらが上になる。
とはいえ、施設側から日程を指示してくるようなことはないため、基本的には鎮守府側からの交渉。そして、あちらが否定することも基本的には無い。そのため、やりたい時にやれるというのが答え。
「次こそは何か見つけたいデスネー」
「はい！　前回は戦艦棲姫を救うことでいっぱいいっぱいでしたが、今度は最初から最後まで調査です！」
「Ｙｅｓ．　海風、隊長としてよろしくお願いするネ」
「任せてください。今は自分でも落ち着けていると思うので」
自分で言うくらいなのだから、海風は大分ガタつきが無くなってきたと思える。しかし、山風から見ればまだまだだ。一度ヒビの入った心は、完全に癒えることは無いのだから。

次の調査隊の日程はまだ決まっていないが、またもや泊まりがけの長期遠征となるだろう。次こそは、何かしらの痕跡を見つけたいものだ。

第二次調査隊

大本営との和睦協定が結ばれた翌日。施設はまた調査隊の受け入れの準備をしていた。まだ連絡は来ていないものの、そう遠くないタイミングで来そうである。

前回の調査は、その最中に重傷を負った戦艦棲姫を見つけたことで中断され、結局施設から鎮守府へと帰投することになってしまったが、次はそういう心配は無くなっている。ただひたすらに調査をするのみ。

「今回は施設の中で一晩を過ごしてもらってもいいのよねぇ？」

「ええ、アイツらなら別に入れてもいいわ。信用してるってわけじゃないけど、悪い奴らではないことは理解してるから。同じ部屋じゃなければ好きにしてくれて構わないわよ」

叢雲からも完全な許可が得られたことで、調査隊８人のための部屋が必要となった。そのために部屋を掃除中である。空っぽのようなものだから、掃除も手早く終わりそうである。

現在部屋として使われている中でも、夜は空き部屋となる部屋が４つある。ベッドルームで眠っている春雨、薄雲、ジェーナス、そして叢雲の部屋。特にまだ施設の中では新人である春雨と叢雲の部屋には小物などもなく、殆ど片付ける必要もなく他人に明け渡せるということでもあった。

その部屋を使ってもらおうということを話すと、叢雲は少しだけ顔を顰めたものの、その部屋を使っていることなんて殆ど無いことに気付いて、仕方ないから貸してやると相変わらずの態度で許可をしている。

春雨は快諾。おそらく海風が使うだろうから、一度宿泊したときのように一緒に眠るのもいいかと思っていたりした。部屋の数的には相部屋になったりするだろうから、山風辺りが一緒に添い寝するかもしれない。

「ふぅ、私の部屋はこれでおしまい！」

やはりあまり使ってないだけあって、春雨の掃除はすぐに終わっ

た。薄らホコリが積もっているところもあったが、軽く拭き掃除をする程度で綺麗さっぱりである。
「うん、大丈夫だね。ホコリ1つ無いよ」
「ありがとう、薄雲ちゃん。手伝ってくれたおかげですぐに終わっちゃったね」
独りになるわけには行かないので、勿論それを手伝ってくれている人がいるわけだが、今回は薄雲が手伝いをしてくれていた。お互いの寂しさを補完し合えるために、抜群のチームワークも発揮出来る。
不器用な叢雲の部屋は、テキパキときっちりこなすことが出来るジェーナスが監督していた。薄雲と一緒にやったら、薄雲が甘やかすだろうし薄雲に甘えるだろという非情なツッコミもあったため、今頃は文句を言いながらもキビキビと働いていることだろう。
「これなら、海風達は気持ちよく眠れるよね」
「うん、新品みたいな部屋だもん。大丈夫だよ」
しっかりベッドメイキングまでして、自分が使う前の状態に戻した。春雨がこの部屋を使うことは無く、朝は農作業を筆頭とした施設内の仕事に精を出し、お昼は部屋では無く外だったりダイニングだったりで仲間達と過ごし、夜はベッドルームで寂しさを払拭しながら眠りにつく。
寂しさが溢れた時点で、私室を与えられても使うという選択肢が無いようなものだった。誰かの部屋に行くか、誰かに部屋に来てもらうかのどちらか。そして、春雨は後者を選択したようなものである。
「本当に良かったよ。叢雲ちゃんがわかってくれて」
「心のことを考えると仕方がないことだもんね……でも、良し悪しが判断出来るくらいに割り切ってくれたみたいだし、私も嬉しいよ」
姉(叢雲)のことを語る薄雲は、本当に楽しそうだった。妹(海風)のことを話す春雨も同じような雰囲気を持っている。姉妹を得たというのが、一番のメンタルケアになっているようだった。
春雨も薄雲も、今のような状況になる前より格段に落ち着いている。突然泣き出すことだってあるが、頻度は随分と減った。寂しさという感情に囚われているからこそ、それを払拭してくれる存在が心の

中にいるというのが非常に大きいようである。
特に薄雲はその姉と同居出来ているためか、春雨以上に落ち着いている。逆に叢雲に依存し始めている素振りを見せることもあるが、発作は起きていないので今は保留中。共依存の松竹姉妹みたいになってしまう可能性も内包している分、様子見となっている。
「このまま鎮守府のみんなと仲良くなって、しっかり共存していきたいね」
「だね。大本営の人達とも、ね。まさか吹雪姉さんがあっち側のヒトとは思わなかったんだけど」
「吹雪ちゃんとも会いたい？」
「勿論。せっかく姉さんがまたいてくれるんだから、吹雪姉さんとも会いたいなって思うよ。調査隊に一緒にいてくれたりしないかな。叢雲姉さんももっと穏やかになると思うんだけど」
それはどうだろうと口には出さないが思いつつも、確かに大将のところの艦娘も施設に訪れてくれないかなとは考えた。
鎮守府の面々は、春雨が面識のある艦娘達だから最初から信用が出来ていた。しかし、大将の艦娘達は面識が無いものばかり。こういう時にお近付きになれるといい。
とはいえ、知らない相手であるということには変わりなく、最初から全力で信用してもいいものかという問題はある。あの大将の部下なのだから、その辺りの心配は無いだろうが。
「すぐには来ないかもしれないけど、まずは通信で仲良くなってから来てくれたりしてね」
「それはあるかも。吹雪姉さんともそういうカタチから始めていきたいなぁ」
協力者が増えたのなら、その分世界を拡げていきたい。

部屋の掃除が終わってダイニングに戻った春雨と薄雲だったが、ジェーナスと叢雲はまだ終わっていない様子。春雨よりも部屋を使っていないのに時間がかかっているということは、やはり不器用さ

が表に出てしまっているのだろう。
　ジェーナスはそれでも懇切丁寧に教えているのだが、叢雲が変にムキになったりするために、５分で終わるところが１０分になったりするわけだ。
「春雨と薄雲が先に終わったみたいね。お疲れ様」
　ダイニングで待っていたのは飛行場姫。何やら先程まで端末を使っていたようで、２人が入ってきたときにはドンピシャで終わっていたようだった。
「妹姫様、外に通信していたんですか？」
「ええ。さっき彼から連絡が来たのよ。次の調査隊はどうしようかってね」
　噂をしていたら早速である。
　残っていた痕跡が時間経過で消えてしまうことを避けるためにも、調査はなるべく早い方がいい。第二次、第三次と続けていくのなら尚更だ。それ故に、思い立ったら即行動。やるべきことは、すぐにやる。
「それで、どうなったんですか？」
「早速今日の午後から来るらしいわよ。掃除しておいてよかったわね」
「わぁ、本当に即断してきましたね」
　泊まりであること前提である午後からの施設訪問。施設側も即断して午前中に準備したのは大正解だったようである。
　しかし、ここからまた別の話が出てくる。
「ただ、来る人数が少し増えるらしいのよね……あの８人だけじゃなくなるらしいのよ」
「え、そうなんですか？」
「ええ。部屋の心配とかはいらないらしいんだけど、彼も申し訳ないって平謝りしてたわ。なんでも突然決まったみたいでね」
　というのも、調査隊に突然の増員が決まったのが今朝方のことらしく、その準備もあるために午後から来ることになったとのこと。鎮守府側も今少しバタバタしているらしい。
　その増員は、ずっと増え続けているわけではなく、今回限りの可能

性もあるそうなのだが、現状の把握のために派遣される者のようである。
「じゃあ、鎮守府のヒト達ではないってことですか」
「ええ。あの大将のところの艦娘が来るらしいわ。あそこまでお姉と仲良くなったわけだし、それにダイホンエーだっけ？　あっちも今回の調査の現状を知っておきたいみたいよ」
　大将との和睦が成立したことにより、今回の未知の深海棲艦の調査は大本営公認のものとなっている。ブラック鎮守府所属だった艦娘の証言などから、その存在はかなり危険視されており、それについての調査は最優先事項とされているようだった。
　少数精鋭で強大な力を持っているにもかかわらず、神出鬼没で足取りがつかめない。そして目的も不明となったら、あらゆる協力者を集結させて調査に乗り出したいと思うのはわからなくもなかった。
「じゃあ、この施設は大本営公認になったんですか!?」
「一部らしいけどね。あの大将、実は相当力持ってるんじゃないかしら。反対意見を捻じ伏せることが出来るくらいにさ」
　実際はそんな力業を使っているわけではなく、流石にまだ穏健派の深海棲艦がいるという事実を公にするには早すぎると判断し、秘密裏に行なわれていることだ。
　とはいえ、この施設のことを認めてくれる者が少しずつ増え、平和に向けて一歩ずつでも進めているのは確かだ。施設側としても嬉しいことである。
「まずは2人。大将の秘書艦の吹雪は来れないらしいけど、信頼が置ける部下が一時派遣されるって言ってたわ。あのお婆ちゃん、足が悪いから補助が必要なのよね。吹雪はそれに必要だから離れられないってさ」
　少しだけ薄雲が残念そうな表情を見せるが、大将のことが最優先になるのは仕方ないこと。全てを施設に合わせることなんて出来ない。あちらにはあちらのやり方というものがある。
「でも部屋の心配は要らないってどういうことなんでしょう」
「突発的だから野営でも構わないってことらしいけど……ちょっとそ

の辺りはよくわからないわ。実際に来てもらって、無理があるような部屋を増やすのがいいわね」
　飛行場姫にもよくわかっていないらしい。それほどまでに、今回派遣される艦娘というのが少し特異なモノのようである。
「とにかく、午後から来客が確定したわ。新しい子も来るから、その辺りは覚悟するように」
「覚悟……まぁ、はい。仲良くなれればいいなって思います」
　施設に敵意を持っているような艦娘が来ることは無いだろうが、どんな艦娘が来るかは気になるところ。すぐに友達になれるか、付き合いやすいかなどは、来てみないとわからない。
　あと問題はやはり叢雲になってしまう。ただでさえ艦娘相手には悪態をつくのに、それによっておかしなことにならないかは心配だ。あちらはそういうこともわかっていて派遣される艦娘を決定していると思うが、どうなるかはその時次第。
「ムラクモの部屋も終わったわ！　ちょっと時間かかっちゃったわね」
　話している内に、ジェーナスと叢雲もダイニングへ。掃除がようやく終わったようだが、叢雲はいつもとは違う疲れた顔をしていた。
「ムラクモの不器用、筋金入りね。ちょっと面白いことが起きたのよ」
「ジェーナス、余計なこと言わないで」
　掃除中にいろいろあったようだが、叢雲の名誉のためにも黙っていろとのこと。ジェーナスも苦笑しながら振るだけ振って何も言わず。気になるところだが、叢雲が拒否しているのだから触れないことにした。
「何の話をしてたの？」
「午後から調査隊が来るんだって」
　叢雲が複雑な表情をしたものの、受け入れたのだから拒絶もない。面識のある者が来るのだから、落ち着きはまだある。
　しかし、飛行場姫からの言葉で、その表情はさらに歪む。
「大将のところからも2人来るらしいわ」
　信用出来るかどうかがわからない艦娘に対しては、まず嫌悪感を隠

さない。ようやく一部の艦娘に心を開いたのに、すぐさま新しい艦娘、しかも信頼の置けそうな提督の部下ではなく、大将の部下。
とはいえ、あの吹雪の同僚であることはわかっているので、怒りの炎が燃え上がることは今のところ無かった。実際に顔を合わせたらどうなるかわからないが。
「わぁ、それは楽しみね！　お茶会の準備をした方がいいかしら！」
「そこまで出来るかはわからないけど、もてなす準備はしておいて損は無いかもしれないわ。お茶菓子くらいなら私も手伝おうかしらね」
「妹姫の手伝いがあれば百人力ね！　早速おもてなしの用意をするわよ！」
そのお茶菓子には、叢雲を宥めるためという理由もあったりする。甘いものに弱い叢雲は、それで多少は落ち着くことが出来るだろう。

第二次調査隊はさらに人数を増やし、だんだんと大きな問題となってくる。これによって未知の深海棲艦の謎に、少しでも近付けることが出来ればいいのだが。

大将の艦娘

午後になり、少し時間が経った頃。鎮守府の提督からも連絡があり、こちらを出て向かっていると伝えられている。あと少ししたら到着するというのもあり、叢雲の電探を頼りつつも出迎えるために岸へと待機していた。

参加メンバーはいつもの通り、姉妹姫と４人組。松竹姉妹や伊４７は施設で待機。リシュリューとコマンダン・テストは、まだベッドから動くことが出来ない戦艦棲姫の看病に勤しんでいる。

ミシェルもお出迎えに参加したいらしく、そちら側へと移動しており、ジェーナスが撫でながら待つことになった。鎮守府の面々は面識があるが、初めて来る者もいるわけで、ここに来た瞬間に駆逐イ級とも対面するという洗礼を受けることになる。

「別に施設の中で待っていればいいじゃない。近付いてきたら私がわかるんだから」

「まあまあ、いつも出迎えはしてるんだから、いいじゃないの。時間的にもそろそろだし、お日様の光を浴びなくちゃねぇ」

叢雲のボヤきには、中間棲姫がすぐさま返す。日光を浴びるというのはさておき、今までに艦娘達がここに来た時は、その全てのタイミングで出迎えをしているのだから、これまで通りにしておくのがいいだろう。姉妹姫のみだった時もあったが、妹達が来るというのもあって春雨が率先して来たがっているというのもある。

それでも叢雲がここに立っているということは、文句を言いつつもこうすることに肯定的であることを意味していた。大分丸くなったものである。

「前回よりは時間遅いですよね。やっぱり施設で泊まれるからかな」

「そうねぇ。でも、提督くんは追加メンバーは急だから野営でも問題ないって言っていたのよねぇ」

大将直属の艦娘達は、当然ながら初対面。いきなり現れて施設の部屋を使わせてくれと言うほど図々しくないというのと、そもそも野営能力がかなり高いらしく、むしろ本人達がそれを望んだらしい。

９割方は施設に迷惑をかけたくないからというのがあるが、残り１割は知らない場所での野営が楽しみであるという少し変わったことを言っているとのこと。今までにないタイプだったため、中間棲姫も少しだけ困惑していた。
とはいえ、食事は一緒にするし、お風呂も貸してもらえるのならありがたいということなので、あくまでも部屋を割り当てなくてもいいという程度のようである。
「そんなこと話してたら、感知に入ったわよ。相変わらず群がってこっちに来てるわ」
ここで、叢雲の電探に反応。今までと同じ方向から団体がこちらに来ているようだった。しかし、叢雲はその反応から表情がおかしくなってくる。
「叢雲ちゃん、どうかしたのかしらぁ」
「あ、いや、ちょっと驚いただけ。艦娘って１０人だったわよね」
「ええ、そうよぉ。大将さんの艦娘が２人追加になったのよねぇ」
人数を聞いてくるということは、予定していたよりも多くなっているのか少なくなっているのか。
しかし、次の叢雲の言葉で春雨達どころか姉妹姫共々驚くことになった。
「……なんかクルーザーみたいなのが来てるんだけど」

それから十数分。水平線に艦娘達が見え始めたが、その中央に目を疑うものがあった。叢雲が反応として感知した通り、クルーザーがあったのである。
おそらく人間なら３人から４人は乗れるくらいの大きさであり、艤装を装備した戦艦――金剛や比叡よりも大きい。
「大発動艇よりも大きい……」
「というか形状がそもそも違うわよ。なんなのアレ。もしかして大将が直接来たとかいうわけじゃないわよね」
「そんなこと聞いてないし、大将さんは足を悪くしてるらしいから、陸

ならまだしもこんな辺境に来るわけがないわぁ」
姉妹姫すらも混乱している状況。飛行場姫が漁をするために施設に1つだけ存在している大発動艇とは似ても似つかないそれは、ぐんぐんとこちらに近付いてくる。
ひとまず海風の姿を捉えたので、春雨が手を振ると、あちらも振り返してきた。江風や涼風も飛び上がるように反応し、山風も小さく反応している。
その中の1人は、鎮守府でも見ていない艦娘だった。おそらくそれが、大将直属の艦娘。2人いるはずなのだが、それ以外に艦娘が見当たらないので、もう1人はあのクルーザーの中。
「あらあら、可愛いウサギさんが来たわ」
その艦娘のことを中間棲姫はウサギと称した。そう言った理由はとてもわかりやすく、頭に着けているリボンが、ウサギの耳のようにピンと立っていたからだ。
他の艦娘達と比べると随分と露出度が高い制服を着込んでいるようだが、飛行場姫や叢雲のおかげで全く気にならない。艦娘にもあのような感じの子がいるんだなぁとむしろ感心しているほどである。
そして、クルーザーと共に艦娘達が岸に到着。隊長である海風が前に出て、中間棲姫と今回の件の話に入る。
しかし、深海棲艦達はやってきたクルーザーに目を奪われていた。何なのだこれはとジロジロ見てしまっている。
「第二次調査隊、到着しました。先に今回からの新人……大将直属の艦娘の紹介をしなくてはいけませんね」
「ええ、お願いねぇ。ウサギちゃんと、クルーザーの中の子だとは思うのだけれど」
「ウサギ……ああ、なるほど。はい、そうですね。ではまずそちらから」
声をかける前にピョンと海風の前に出てきたウサギと呼ばれている艦娘。その仕草はまさにそれなのだが、中間棲姫を目の前にしての第一声が、
「おうっ！　ホントに深海棲艦！　敵じゃないんだよね？」

「ええ、勿論。私達は貴女達と仲良くするためにここにいるのだから、何も問題は無いわぁ」
　これである。自己紹介をと言われても、少しマイペース気味に中間棲姫をジロジロ見ていた。後ろに並ぶ飛行場姫や元艦娘達を見ても同じように目を丸くして、何処か楽しそうに眺めた。
　そしてすぐに自分のやるべきことを思い出し、改めて敬礼。マイペースではあるものの、中身はそれなりに真面目なようで、挨拶もキチンと正しく行なわれる。
「駆逐艦、島風です！　疾きこと、島風の如し！　スピードなら誰にも負けません！」
　ウサギちゃんこと島風。駆逐艦の中では屈指の力を持つ者として名を馳せており、改二改装がされていないにもかかわらず、それに匹敵する程の性能を秘めているという艦娘である。
　自分でも言う通り、そのスピードは他の追随を許さず、ここにいる者達ではその背中を捉えることすら出来ないらしい。やけに露出度の高い制服も、極限まで空気抵抗を減らそうとした結果なのだとか。
「島風ちゃんねぇ。私はここでは姉姫と呼ばれているの。貴女もそう呼んでちょうだいねぇ」
「はーい、姉姫さん、よろしくお願いしまーす！」
「うんうん、元気でいいわねぇ。見ているだけで気分が昂揚するみたいよぉ」
　周りの空気を明るくするような眩しい笑顔と性格に、空気が弛緩するような感覚になる。
「アンタは自分からここに来たいって言ったの？」
　飛行場姫の質問は至極当然だった。大将が信頼しているとはいえ、相手は深海棲艦。艦娘全てを滅ぼそうとした叢雲のように、深海棲艦ならば殲滅しようと考える艦娘がいてもおかしくない。
　この施設は深海棲艦の巣窟だ。種族単位で殺したいほど憎んでいる可能性もあり、ここに来たのもそれを実行するためという可能性すらある。
「うん。だって友達が増えるんでしょ？　早く友達増やしたかったん

だもん」
純真無垢な瞳で、なんでそんなこと聞くのかと言わんばかりに飛行場姫を見つめ返した。その言葉に何の嘘偽りもない。
ただただ友達が増やしたかった。たったそれだけの理由で、危険な任務にも飛び込んでくる。若干危険な思想な気がしないでもないが、敵意が全くないのは、誰の目から見ても明らかだった。あの叢雲からしてもだ。
「そういうことなら大歓迎よ。たびたび来てくれとは言えないけど、ここの子達と仲良くしてちょうだい」
「おうっ！　もっちろん！　また友達が増えるね！」
無邪気に笑う島風に、全員ほっこりとしていた。
島風がこうやって話している間に、クルーザーの中からゴソゴソと何者かが外に出ようとしていた。大きめなそれから出てきたのは、比較的小柄な少女。艤装を展開しているため一応は艦娘のようなのだが、それならば普通に海の上を航行してきたら良かったのにそれをしないのが不可解。
このクルーザーをここに持ってきたいから、この手段を使ったと考えるのが妥当ではあるのだが、そうであったとしても艦娘だというのに操縦が手慣れすぎている。
「えぇと、貴女は」
「特務艦、宗谷です。姉姫様、お会い出来て光栄です」
クルーザーから降りると、艦娘らしくちゃんと海上に立つことが出来ていた。艤装を装備しているのだから当然なのだが、現実にこうされないと艦娘だとも思えないくらいの雰囲気だった。
「貴女は随分と特殊なのねぇ」
「はい。私は艦娘としても武装が出来ない非戦闘艦なんです。ですが、今回は調査ということで、提督……大将から是非にと仰せつかった次第です。精一杯頑張りますね」
特務艦という宗谷しか持たない艦種を引っ提げて、調査なら任せてほしいと前に出た。非戦闘員である代わりに、海域調査などは得意であると豪語出来るほど。

「宗谷姉ちゃん、本当に凄いんだよ！　こういう任務だったら絶対必要なヒトだから！　奇跡の船だもんね！」
「い、いえいえ、そんな……私は精一杯頑張ってるだけで」
「謙遜よくなーい！」
　一緒に来た島風も太鼓判を押すほどである。今までに何度も調査任務を実施してきているらしいが、その全てに宗谷が関わっており、迅速かつ確実な情報収集をこなしたということらしい。
　島風は自分から挙手して調査任務に参加しているが、宗谷は大将直々の任命なのだから、別格なのがわかる。それほどまでに信用度が高いということだ。
「と、とにかく、今回の任務、よろしくお願いします。私も全力でやらせていただきます」
「ええ、ありがとうねぇ。それで、そのクルーザーはどうしてなのかしらぁ」
　興味を持ったのか、ミシェルがクルーザーをつんつんつついているようだが、これでこの施設に来ているだけあって、その硬さは艤装並みの特注仕様。
　しかし、これで攻撃出来るとかそういうものではないようだ。武装は1つも付いておらず、見た目だけなら人間が使っているそれとなんら変わらない。
「あ、これですね。これは私の居住区でして。長距離遠征もすることがありますから、この中は一通りの設備が入っています」
　なんと、中には寝泊まり出来る設備が取り揃えられているらしい。2人までなら余裕で入れて、野営以上に身体を休められる空間なんだとか。
　これがあれば、周囲に何もない海のど真ん中で休息を取ることすら可能であり、万が一敵を発見してしまったとしても、その強固な装甲である程度は耐えられるそうだ。実際にそうなったことは皆無らしいが。
「私と島風さんはここで寝泊りが出来ますので、お部屋の方は大丈夫です」

「そういうことでーす」
元よりこれがあるからついてくることが出来たということのようだ。施設に迷惑をかけず、施設でやりたいことが出来るということで、この2人は別働隊としても動くことが出来る。
「あ、あと私達の提督……大将から、姉姫様に贈り物があるということで、それも運んできました。すぐに出しますね。島風さん、手伝ってもらっていいですか？」
「はーい、任せて任せて！」
一通り挨拶をした後、またすぐにクルーザーの中に入っていく宗谷。何やら大将から施設のためにといろいろと持たされているらしい。
それが、各種食物。必要かどうかはわからないがといいつつも、調味料各種や野菜、消耗品。そして、冷凍ではあるが肉である。
「あらまぁ、あの人にはお世話になっちゃうわねぇ」
「信頼の証だそうです。是非使ってほしいと」
「あとからこちらからも連絡した方がいいわねぇ。直接御礼を言わなくちゃ」
中間棲姫もこれにはご満悦。つい最近友人になったばかりなのに、ここまで良くしてもらえるだなんて思ってもみなかった様子。
「あとは、前回と同じ調査隊一同です。今日から一晩と明日の調査任務、よろしくお願いします」
海風が締めて、ここで自己紹介の時間は終わり。調査任務のための準備と、交流の時間へと移っていくことになった。

調査隊に島風と宗谷が加わり、より活気付く。これだけの人材がいれば、調査も進んでいくだろう。

山風の不安

第二次調査隊が施設に到着。その中には大将から派遣された艦娘、島風と宗谷も含まれていた。そのどちらも施設の深海棲艦に対して好意的な態度を取っており、鎮守府の面々と同様に受け入れられた。

宗谷が乗ってきたクルーザーは、居住区を使うために施設に最も近い岸に運ばれ、そこにミシェルがいることで護衛とする。必要ないかもしれないが、以前の野営の時のように、ミシェルがやる気満々だったため、否定をする必要もない。

クルーザーをミシェルに任せて、調査隊は施設へ。こんな大人数のお客様というのを入れたことがなく、ダイニングにも全員入ることが出来そうにない。そのため、大将からの贈り物を運び込むだけ運び込んだ後、部屋割を決めてもらいそこで待機してもらうことに。

食事に関しては、今日も天気がいいので外で食べてもらい、お風呂も提供しつつ割り当てられた部屋に入ってもらうというカタチが取られた。今から全員で集まって話し合うような必要もない。

「海風と山風は、私の部屋でよかったかな」

「はい、問題ありません。ベッドは1つだけでしたよね」

「うん、海風は前に来てるもんね。1つしかないから、どうしても一緒に寝てもらうことになるけど良かったかな。2人ならまだ余裕があるくらいの大きさだから」

部屋割は最初から決められていたようで、海風と山風は春雨の部屋を使うことになった。その理由は、海風の心の問題が大半を占めている。

「私は大丈夫です。山風もそれでいい？」

「……うん、海風姉だったら……大丈夫」

これが江風や涼風だったら拒否していたかもしれないが、海風相手なら何も問題ない。

むしろ、ここ最近は精神的な疲弊を監視するために、同じ部屋で眠ることも多かった。添い寝でも全く問題ない。それに、それが施設の中でも一番気が許せる春雨のモノだというのなら尚更である。

「入れるようなら私も一緒に寝たいかな。ほら、ね」
「わかっています。出来ることなら私も一緒がいいです。山風は？」
「春雨姉……うん、大丈夫。でも……ベッドに入れる……？」
「そこは大丈夫。脚を消したら抱き枕みたいなものだから。一度試してみる？」
山風には一瞬理解出来なかったが、今の春雨には両脚が無かったことを思い出してすぐに納得する。
でも一応と試してもらったところ、山風が元々小柄だったこともあり、余裕とまではいかないものの3人でベッドに横になることが出来た。
ということで、夜は3人で眠るということになる。春雨の癒しのためであり、海風の癒しのためでもある。山風にも癒しになるかはわからないが、マイナスにはならないので良しとする。
「午前中に掃除しておいたから、好きなように使ってね。とは言っても、使いようがないか。私も殆ど何も置いてないし」
「そういえばそうでしたね……姉さん、自分の部屋使ってないですし」
「だね。服も必要ないし、何か置いておくものもないし、寝るときはみんなとベッドルームだし」
ここでの春雨の生活風景を知っているのは海風のみ。山風は海風経由で話は聞いていたが、実際に本当にそういう生活をしているのだとわかると、複雑な気分になってしまう。
鎮守府にいた頃の春雨は、自分の部屋にもいろいろと小物が置いてあったり、衣装ケースには私服や秋冬用のカーディガンなどが綺麗に仕舞われていた。メイド服を着ていたりもしていたのが記憶に新しい。しかし、今の春雨にはそういったものが全て失われている。そして、それに対して未練も感じていないようである。
鎮守府の春雨の部屋は、今もまだそのまま残されていたりする。もしかしたら、深海棲艦化した状態でも鎮守府に戻って来れるかもしれないと考えてだ。提督のみならず、妹達からもそうしてほしいとお願いして。だから、何か欲しいものがあれば、持ってくることだって可能だった。

「……春雨姉……鎮守府から何か持ってきてほしいものとか……ある？」
おずおずと、山風が尋ねる。海風は精神的に余裕が無かったりしたため、そんなこと思いも付かなかったようだが、この殺風景な私室に彩りがあった方がいいのではと思うのは、そう難しくないことだった。
「うーん、そうだなぁ……」
頭を捻るものの、パッと思いつかない。いや、思い出さないようにしている。
春雨の部屋にあるものは、全て姉に繋がる物ばかりだ。集合写真や、任務達成のご褒美にみんなで買った物。不要となっている衣服の類も、その全てが大概姉に繋がる記憶を持っている。
それを思い出した途端に崩れる可能性はかなり高い。寂しさが溢れ出してしまう。
だからこそ、春雨の答えはこれだった。
「これといって無いかな」
少なからずショックはあったが、これで持ってきたとして、毎日それが見えるような状態になったら、春雨は施設の中でも非常に不安定な存在となってしまうだろう。
この部屋は殆ど使ってないにしろ、姉との思い出の品がここにあるとなれば、気持ちが何処かそれに傾いてしまい、嫌でも意識してしまう。いつ発作を起こすかわからないような壊れた心なのに、そんな状態では普通に生活なんて出来ない。
「……ん、わかった」
山風はそれを見て感情の機微を察した。そして、改めて春雨の心が壊れていることを理解した。

そのまま夜となり、夕食の風景。せっかくだからと、施設の者達も調査隊に付き合い、大人数での食事。最初の対話の機会ではお茶会のようになったのだが、今回は食事担当の飛行場姫が機転を利かせて、

会食――立食パーティーのようなカタチが取られた。
　ベッドから下りられない戦艦棲姫は残念ながら参加出来なかったが、なんと島風はそちらにも既に足を延ばしていたようで、きっちりと友達になったらしい。コマンダン・テストが食事を持っていくと言った時にも、しっかりついていって交流をし続けている。
「島風ちゃんの行動力、すごいね……」
「ホントよ。私のところにもズカズカ来たわ」
　叢雲も溜息交じりにボヤく。艦娘嫌いと明言しているのもお構いなしに、叢雲とも友達になろうと、物凄い距離の詰め方をしてきたらしい。
「いやぁ、すごかったよ。叢雲の狼狽え」
「島風に無理矢理握手されたりして、怒る間もなく圧倒されてたよなー」
「んぐ、喧しいわよ。あんなのわかっててもお回避出来ないわ」
　江風と涼風がニヤニヤしているのを見て、叢雲が憤慨する。初見の艦娘に対してもこの程度で済んでいたのは、島風の人柄の為せるワザなのかもしれない。
「まぁ、アイツは絶対嘘がつけないタイプなのはわかったわ。裏が無さすぎて逆に怖いくらいよ」
「そうなの？」
「速さがどうのこうの言ってたでしょ。多分アイツ、しっかり考える前に口に出てるわ。その方が速いから」
　速さを求め続けている島風は、考えている時間すら遅いと感じているようである。おそらく本人は意識していないが、速さのために熟考すらしない。戦闘中に考えないなんてことは無いようだが、普段の生活はとにかくスピードを求めているようである。
　それがその人柄のおかげで大概いい方向に向かっているのだから、島風は何かと得をしているようにも思えた。何せ、熟考しないということは、考えたことを即座に言葉にしているようなもの。つまり、一切の嘘がつけないということに他ならない。それなのに、相手を否定するような言葉が出てこないくらいなのだから、根っからの善人。

元より友達になりたいという本心のままに動いているのだから、相手が嫌がるような選択も最初から排除されていた。それ故に、即行動即友達。
「じゃあ、叢雲ちゃんももう島風ちゃんの友達なんだね」
「不本意ながらだけど。アイツはぶっちゃけ、江風よりは信用出来るわ」
「何をーっ!? 江風だって叢雲と仲良くしてやンよ!」
こういうことを言い合える仲というのは、もう友達みたいなものだ。叢雲も小さく笑みを浮かべていたのを見逃さない。
「山風の姉貴も叢雲みたいな感じだったぜ。島風に詰め寄られてあわあわしてた」
「あはは、山風らしいね。でも友達にはなれたんでしょ?」
「だねぇ。気が許せる相手だってわかったから、普通に話せるようにはなってたかな」
人見知りの山風ともしっかり友達になっている辺り、島風のそれはホンモノと言える。最強のコミュニケーション能力であるが故に、話がわかる深海棲艦とも即友達。姉妹姫にも臆さず、最も痛い目を見せられているであろう戦艦棲姫とも仲良くなりに行く。
ある意味、本能に忠実なまま動く深海棲艦に近い存在なのかもしれない。
ここで話題になっている山風だったが、立食パーティーのような騒がしい場所は少し苦手なようで、食べ物を持つだけ持って少し離れたところで光景を眺めていた。
「……海風姉は……大丈夫」
一番心配している海風の行動を目で追うと、今は薄雲と話をしていた。その表情は、焦燥感などは一切なく、落ち着いた普段の海風そのものであった。
「おうおうどうした。こんな離れたところで」
「あっちで誰かとお話ししたりしないの?」
そんな山風に絡んできたのは松竹姉妹である。
「……あたしは人が多いところが得意じゃないから」

「あー、なるほどな。うちにもヨナがいるから、そういう奴のこともなんとなくわかるぜ」
ニカッと笑う竹だが、山風は目を逸らす。
「山風さん、何か悩みがあるのよね。私達だと不満かもしれないけど、パーッと話してみない？」
「そうそう、俺達はそういうのわかっちまうからさ。山風の悩みを解決出来るかもしれないぜ」
山風を囲むように座る。いきなり絡まれて動揺してしまう山風だが、この2人は真に自分のことを心配してくれているということがわかり、近くにいることくらいならいいかと諦めた。
松竹姉妹がわかってしまうということは、山風にも何かしらそういう感情があるということ。対象は間違いなく海風だろう。そうでなくてはここまで心配しない。
今の海風は心配がいらないくらい冷静になっているが、まだ予断を許さない状態ではある。むしろ、今の事件がちゃんと解決するまではずっと不安がついて回るのだ。それ故に、山風は常に気が張り続けている。
それに加えて、先程の春雨の部屋でのことがどうしても気にかかっていた。深海棲艦化したことで心が壊れていると話では聞いていたが、それがどういうことなのかは見た目や言葉だけではなかなかわからない。しかし、春雨のあの時の割り切り方は、以前なら考えられないこと。
「……海風姉も……春雨姉みたいになっちゃうのかなって思ったら……なんだかすごく不安になったの」
ポツリと溢した後、俯いてしまったが、そのまま先程あったことも濁らせつつ話した。
海風のことが心配で堪らないのは変わらないのだが、万が一あの時見た泥が本格的に溢れてしまって春雨と同じようになってしまった場合、自分も割り切られて見捨てられてしまうのでは無いかと強い不安に襲われている。
海風の泥のところは話さなかったが、今回の調査で万が一のことが

あった場合ということにした。
「あー、なるほどな。そりゃ仕方ない。俺らはどっか壊れてるからな。自覚が無くても、元々の仲間とかが見りゃ顕著にわかるってことだ」
「起こる可能性が低いことでも、現実にあるのなら気になるのは仕方ないわよね。うんうん、わかるよ」
　そんなことを聞いても、松竹姉妹は山風のことを否定するわけでもなく、むしろ理解してさらに歩み寄る。
「自分の好きな人が変わっちゃうかもっていうのは、不安よね」
「そっ、そんな……そういうことじゃ……」
「でもな、そこは心配しなくてもいいぜ。いや、断定は出来ないんだけどさ」
　山風を安心させるように竹が頭を撫でる。不意に触れられてビクンと震えるが、そんなことは気にせずに竹は続ける。
「春雨の場合はさ、その鎮守府にあるものってのが、どうしても寂しさに直結しちまうんだろ。だから無意識に省いたんだろうけど、海風の場合は何が溢れるかわからないだろ」
「もしも、万が一溢れちゃって私達と同じになったとしても、そういう割り切り方をしない感情が溢れるかもしれないしね」
　そもそも、溢れさせるようなことが起きなければいいんだという楽天的な言い方をする竹。そう考えられれば苦労はしない。
　そこで松の方がアドバイスをくれる。
「山風さん、その不安は、正直今考えるべきことじゃないと思うわ。考えすぎると、むしろ山風さんの方が溢れちゃうかも」
　ビクンと震えて自分の手の甲を見る。当たり前だが泥があるわけがない。しかし、不安に不安をかさねすぎると、その不安が溢れ出してしまう可能性が示唆された。
「山風さんが溢れちゃったら、海風さんがきっと悲しむわ。だから、楽観的に行こうとは言わないけど、もう少し前向きに考えてみたらどうかしら」
「そうそう、悪いことばっかり考えてたらハゲるぜ」
　いきなり前向きになれと言われても、山風の性格的に無理な話であ

る。だが、次の松の言葉で、少しだけ考え方が変わるきっかけが出来る。

「大好きな海風さんのことを信じてあげて」

不安に思うということは、海風のことを何処か疑ってしまっていることである。松はそれだけ言って、持ってきた食事に口をつけた。

山風の中で、少しだけ前向きな考え方が芽生えた。また以前のように憔悴していたら支えてあげられるように、そうでなければ不安にならないように。

艦娘の心

翌朝。春雨の部屋で眠っていた海風と山風は、鎮守府で眠るよりも深く気持ちよく眠ることが出来たような気がしていた。

今は鎮守府の朝よりも少し遅いくらい。目覚ましで目を覚ますわけでもなく、自然にこの時間に起きたので、もっと寝ていたいとか起きるのが億劫とかそういう気持ちは全く湧かない。

特に山風は、昨晩にいろいろと不安に思ってしまって心が重かったのにだ。松竹姉妹に相談出来たことで、少しだけ前向きになれたのだが、それだけでは足りないくらい。

その理由の1つは、真ん中に挟まれるように眠っていた脚を消した春雨。姉の温もりというのは、こういう時によく効く。精神状態を安定させる効能でもあるのかと思えるくらいに効果抜群であった。

「おはよう、2人とも。いつもとは違う環境だけど、よく眠れたみたいだね」

にこやかな春雨の顔から朝が始まり、海風は自然と昂揚。山風も幾分かスッキリしたおかげで大分楽になっている。

今回は寝間着の件を海風の経験からわかっていたため、宿泊のためにその辺りも準備済み。2人とも、鎮守府で使っているパジャマ持参である。

「はい、本当にグッスリと。姉さんを抱き枕にしてしまって申し訳ないんですけどね」

「……うん。ぬいぐるみを抱いて寝てるみたいだった」

「うんうん、それなら良かったよ」

妹のことを気遣う姿は、正しく姉であった。今でこそ脚を消して小柄な山風よりも小さいような状態ではあるものの、姉の包容力が出ている。

「山風、なんだかスッキリした顔してるね。そんなに気持ちよく眠れた？」

「……そうかも……しれない。昨日は少しあったから」

「そうなんだ。確か松ちゃんと竹ちゃんが山風のところに行ってるの

は見たけど、それのことかな」
「……うん、多分」
心の中で松竹姉妹に感謝しつつ、詳細は語らなかった。春雨も深く追求することはせず、山風が晴れやかな表情をしていることを素直に喜ぶ。
海風は皆目見当がついていないようではあるが、山風が元気そうならそれで良しと割り切っている。自分に対しての不安で悩んでいたことなんて露知らず。
「さ、朝の準備しよっか」
ベッドから降りると同時に脚を作り出し、そのまま寝間着からいつもの制服姿へと変わっていた。いつ見てもこの光景は驚くようで、山風は別に眠たいわけではなかったのだが眠気が飛ぶような衝撃を受ける。
「春雨姉……前の制服になることって……出来る？」
そこで、試しに聞いてみる。部屋の物は不要と言っていたためショックを受けたものの、こちらに関してはどうだろうかと。
「前ってことは、艦娘の時の制服、かな」
「……うん」
わざわざ持ってきてもらうというのもあり、春雨はあえて何も要らないと言った可能性もある。だが、服なら自由自在だ。持ってくるわけでもなく、春雨の心境のみ。
実際、艦娘の時のことを想起させる制服というのは、それだけでも寂しさが溢れ出してしまいかねない代物だ。こちらも無意識に除外してしまう可能性は充分にあり得る。
これも一種の博打だった。服を着たことで壊れてしまったら、もう艦娘としての春雨は半分以上は壊れていることになる。
「一番最初はやろうとしたんだけど出来なかったんだよね。これが深海棲艦としての私に適したものだからってことらしいんだ。でも、慣れてきたし出来るかも」
少し考えた後、よしと意気込んだ瞬間、春雨の制服は深海棲艦となる前の制服になっていた。当初は出来なかったのに、深海棲艦として

の生活を続けてきたおかげで、生成の技能が成長したようだ。
それに、艦娘としての春雨は海風と再会出来たことで失われずに済んでいる。そのおかげで、艦娘を切り捨てることなく、どちらの春雨も共存している状態だった。
「わ、なんだか久しぶりだね、この格好も。こっちはこっちでしっくりくるなぁ」
嫌がるわけでもなく、何処か懐かしむような表情で自分を見回し、艦娘の時から変わっていないことを確認。制服のみならず、被っていた帽子もしっかりと艦娘時代のそれに変化していた。
脚が艤装になっているという時点で艦娘の時からはどうしても離れてしまうのだが、それでも今の春雨は色素が薄いだけの艦娘春雨そのものである。
部屋にある小物などは姉達とのピンポイントな思い出ばかりなので無意識に避けていたが、鎮守府全体の記憶に繋がる制服なら大丈夫。制服からも思い出が溢れ出すとなったら、そもそも鎮守府との付き合いが出来なくなる。
「……っ」
「艦娘の……姉さん……」
その姿を目の当たりにしたことで、海風も山風も、姉が帰ってきたのだと改めて実感した。海風に至っては、少しだけ涙目にすらなっている。
「……春雨姉、もう1つお願い……していい？」
「ん、何？」
「あたし達がここにいるときは……その格好でいてほしい」
山風にしてはかなり思い切ったお願いである。艦娘としての感情が消えていないことを証明するその姿を見せてくれれば、山風の中の不安が1つ消える。
「私からもお願いしていいですか……？　その……勿論今の春雨姉さんを否定するわけじゃないんですが、私達にはやっぱり、その姿の姉さんの方が馴染み深いので……」
海風からも、出来ることならとお願いされる。本人が言う通り、勿

論深海棲艦としての春雨を悪く言おうだなんて微塵も思っていない。しかし、艦娘春雨が死んでいないという証拠が目の前にあるのだから、出来ることならそれを維持したい。

２人の目は、心の底からそれを望んでいるモノだった。春雨がこの姿でいるだけで、２人がイキイキとするというのなら、叶えてあげない理由は無い。

艦娘の制服を着ているからといって、寂しさが溢れ出すようなことは無かった。思い出の品とはまた別物である。心に影響が無いのなら、可愛い妹達の願いを叶えるべきだと、春雨は考えた。

「いいよ。２人が喜んでくれるなら、私はこの姿でいるよ。あ、でも脚だけは隠すようにするね。艦娘の時とは少し違うけど、それだけは許してね」

「ありがとうございます。艦娘としての姉さんがここにいるんだって実感出来ますから」

山風も無言で首を縦に振る。万が一海風が深海棲艦化してしまったとしても、艦娘の心を切り捨てることはないという明確な証拠を手に入れることが出来たのはとても大きかった。

朝食を終え、調査隊は本来の任務を実行するため、全員揃ってクルーザーのある方とは逆の岸へと向かう。ここに来るまではクルーザーが必要であったが、調査任務に持っていくのは違う装備とのことで、施設に置かせてもらうとのこと。

宗谷の艦娘としてのスペックが現状調査に特化出来ているようで、一度帰ってくることが保証されているのだから、置いていっても問題ないと判断したようである。

「Ｃｒｕｉｓｅｒは Ｍｉｃｈｅｌｌｅが護衛しているから、安心してね！」

「はい。ミシェルさんには昨晩も守ってもらいましたから、近くにいてもらえれば安心ですね」

昨晩は施設ではなくクルーザーで一晩を明かした宗谷と島風は、ミ

シェルの護衛のおかげかどうかはさておき、安心して身体を休めることが出来たようだ。
　島風も見送りにまでついてきてくれたミシェルを撫で回して、ちゃんと帰ってくるからクルーザーをよろしくとお願いしていた。対するミシェルは、まるで任せろと言っているかのように身体を震わせた。
「みんな、気をつけてね。私達はここで待ってることしか出来ないけど、うまく行くって信じてるから」
「はい、任せてください。これが事件の解決に繋がる可能性もありますから、全身全霊で任務にあたります」
「海風の姉貴、堅ぇって」
　やる気が漲っていることは見て取れるのだが、少し出過ぎにも思えた。その理由は一目瞭然で、春雨が艦娘の時の姿をしているからである。海風のモチベーションは今までで1番と言っていいほどに高まっていた。それでいて、冷静な判断も残しているのだから、今の海風は十全の力を発揮出来るだろう。
　しかし、空回りしてないかと若干心配になった江風が即座にツッコミを入れた。海風自身も基本的にこんな感じで事を進めていくのだが、今はもっと気軽に行くべきだ。
「江風達はさ、『行ってきます』でいいンだよ。ンで、戻ってきたら『ただいま』でさ」
　もうこの施設は二つ目の拠点と考えてもいいと、江風は思っていた。施設の中で一泊させてもらい、所属している深海棲艦とは気兼ねなく話すことも出来、むしろ居心地がいいとまで思えるようになっている。
　だからこそ、ここでの言葉はもっと軽いものを選ぶべきと話した。そう、任務とはいえ、ちょっと行ってまた帰ってくるみたいな感覚で、行ってきますとただいまがいい。
「……うん、そうね。またここに戻ってくるんだし、それでもいいかも」
「だろ？」

江風がニカッと笑うと、海風も笑みを浮かべた。若干あった緊張感が、これで少し緩む。
空回りはしていないにしても、力んでいたところはあった。１回目の調査が中断されてしまっているので、実質今回が１回目みたいなもの。ここであらゆる痕跡を発見したいと力が入ってしまっていた。それはよろしくない。
今回見つからなくても、何度でも来たらいい。危険と思ったらすぐに引き返す。それくらい軽い気持ちで任務に当たればいいのだ。
「アンタは軽すぎなのよ」
「いいじゃンかよー。どうせ戻ってくンだからさ」
叢雲が江風の軽さに難癖をつけるものの、全く気にしていない。むしろ、叢雲にそう言われるのを待っていたかのようである。
「お昼ご飯も用意してもらったわぁ。時間がかかるようなら、それを食べて英気を養ってちょうだいねぇ」
「Ｏｈ，今回もｔｈａｎｋ　ｙｏｕネ！　必ず何かを見つけてきマース！」
前回調査隊に渡したような戦闘糧食を今回も渡し、任務が長引いてもいいように対策をしておいた。調査は広い範囲を隈なく探すため、どうしても時間はかかるだろう。向かってすぐに何かを見つけない限りは、長々と海を眺めることになる。
「それでは、そろそろ行きましょう。島風さんも大丈夫ですか？」
「おうっ！　もう大丈夫！」
「はい。なら皆さん、行ってきます」
調査隊全員が施設の深海棲艦達に敬礼し、沖へと向かっていった。
海風や島風は、ギリギリまでこちらを向いて手を振っていた。無事に何かを見つけ出して帰ると約束して。
「全く、やっと騒がしいのがいなくなったわ」
水平線の向こう側に調査隊が消えたのを見届けて、叢雲が溜息をつく。島風だけでなく、江風と涼風も叢雲に絡んできたらしく、随分と騒がしい夜になったらしい。
それでも怒りを爆発させるようなことが無かったあたり、叢雲も成

長している。それがわかって、薄雲も安心していた。
「ふふ、叢雲ちゃんも楽しそうで何よりよぉ」
「姉姫の目は節穴なのかしら。私が楽しくしてるように見える？」
「ええ。やっぱり、あの子達と交流出来るようになったのは良かったことだと思うわぁ」
　しみじみと語る中間棲姫。
「艦娘さん達と仲良くなれるのは、とても良いことだと思うの。でも、やっぱり施設は危険に晒しちゃいかねないのよねぇ。本当に信用出来る間柄でないと」
「そうね。でも、あの提督は信用出来る相手だったわけよね。さすが、お姉は見る目あるわ」
「そんなことないわぁ。今のところは運がいいだけかもしれないからねぇ。提督くんもだし、大将さんもそうだけど、あれは人間さんがイイ人だったから成り立っているだけだものぉ」
　今のところ、鎮守府の提督、そして大本営の大将と対話をして、悪い方向に向かっているものは何一つとして無い。中間棲姫の見る目があったからかどうかはわからないが、何もかも上手く行っていると言える。

　これがずっと続いてくれればと願いつつ、深海棲艦達は施設に戻っていった。調査隊も何かしらを見つけて無事に帰ってきてくれる。そう信じて。

奇跡の船

施設を出て、まずは前回に軽くだが見て回った海域に辿り着いた調査隊。相変わらず何も変わらない海であり、一度見ただけでここには痕跡が無いとわかるくらいである。

波のせいでそこにあったものが流されているかもしれないし、別のところにあった痕跡がここまで流されてきている可能性だってあるのだが、まずここには何もないが答え。

「前回も無かったんですから、今回も無いですよね……」

「そこは仕方ないデース。でも、私達に見えていないモノがあるかもしれまセーン。宗谷にお願いしてみましょう」

海風と金剛が先頭に立ち、調査隊を引っ張っていくのだが、一旦ここでストップ。初めてこの海域に来た島風と宗谷にも、何かないか見てもらう。

島風は調査というより護衛のためにここに来ているのだが、宗谷は誰よりも調査能力に長けているので、明らかに何もないところからでも、何かを読み取るかもしれない。

「少々お待ちください」

海域の中心に立ち、目を瞑った宗谷。現状で装備している電探とソナーをフル稼働し、雲の上から海の中までを総浚いにするように調査を始めた。

勿論目視確認も必要なのだが、目に見えないようなモノまでも網羅していくのがこの宗谷の索敵である。本来海に無いモノ、空に無いモノを発見したら、それを痕跡として徹底的に調査する。

「千歳さんと千代田さんは、哨戒機を出していますか？」

「ええ、私も千代田も周辺警戒のために常に出してるわ」

「だから、おおよそのモノは見えてると思ってる」

艦載機の反応をいくつも確認したからだろう。それなりに遠くのモノまで確認出来ているため、気が付いたものに対して全て口を出していくようなもの。

「海上には何もありません。海中には……魚の類の骨……ですかね。

私達(艦娘)由来のモノも、深海棲艦由来のモノも、見つかりませんでした」
一通り確認したようで、目を開けて次の場所へ向かうことを進言する。目視確認だけではこうは行かない。
勿論、海風を筆頭とした駆逐艦達は、対空電探なり水上電探なりソナーなりは装備してきているし、金剛と比叡も戦艦が装備出来る大型の電探を装備している。
しかし、宗谷の索敵範囲はそれを優に超えているようだった。それに索敵速度がやたらと速い。ざっと見ているくらいの時間で、千歳と千代田まで加えた8人分の目視確認より手早く全てを確認していた。
「魚の死骸があるってことかい？」
「そう、ですね。でも、こういうモノなら、何処を探しても大概出てくるものです。そんなに反応することではないかと……」
涼風が不意に質問するが、宗谷は即答。海のど真ん中に魚の死骸なんて、割と普通にあるとのこと。
海中も弱肉強食の世界であり、小型の魚を餌にする大型の魚だって普通に存在する。そしてそれすらも餌にする存在だって。
とはいえ、食物連鎖で息絶えたのなら骨すら残らない。寿命を迎えたのか、それとも人為的な何かによってその命を終えたのか。
「ここいらって他にも魚がいンのか。施設の連中に教えたら、ここまで漁に来たりしてなー」
「いやいや、ここまで結構遠いから無理だろうね。春雨姉達ならまだしも、一番漁をやってるっていう妹姫が海上移動出来ないらしいし」
「あー、確かになー。ここまで来ンのも、結構大変かもな」
江風と涼風がそんなことを話しているが、宗谷はこの魚の骨の死因について考えていた。
こういった魚は魚群を成して生活しているのが普通である。こんなところに単独で存在しているというのは稀。そういうところからも、骨は何処かから流れてきたと考えるのが妥当である。
「ここに向かってくる海流から考えると、より離れた場所に何かあるかもしれません。次はそちらに向かっていいでしょうか」
「問題ありません。この辺りは海図も曖昧なので、何か気付いたこと

があるのならそれを優先します。皆さんもそれでいいですか？」
この辺りは基本的に未知の海域である。施設の存在が今の今まで誰も知らなかったくらいなのだから、近海は尚のことわからない。
そうなると、やはり索敵能力がトップである宗谷の意見を全て取り入れた方が確実である。今の海風にはそれくらい考えられる余裕はあるし、全員の意見を聞くくらいの冷静さも取り戻している。
海風の質問に、全員が首を縦に振る。ここは出来る範囲を確実にこなしていく方がいいだろう。結局のところは、海図の塗り絵を着実に進めていくのみ。

さらに施設から離れた、完全に未知の海域で調査は続く。宗谷の調査のスピードのおかげで、止まっては少し見て、次の場所へというのが度々繰り返されており、想定していた時間よりもかなり前倒しで事が進んでいた。
現在は、海流的に先程発見した魚の骨の出処と言えそうな場所。そこで宗谷がまたもや索敵を開始するのだが、そんなことをする前から1つおかしなことには気付いていた。
魚群がない。ここは生物そのものがいない海域である。最初からこうなのか、後々こうなったかはまだ不明。
「おかしいですね……ならあの骨はどうしてあんなところに」
小型の魚を捕食する大型の魚がいないとなると、本来いたはずの魚達が、何らかの理由で全滅したということになるだろう。それこそ、艦娘と深海棲艦の戦闘に巻き込まれたことによって、生態系が狂わされたとも考えられる。
海上の砲撃ならば殆ど害などないだろうが、魚雷や爆雷を喰らっては魚群なんてひとたまりもない。まともに喰らえば骨すら残らず、掠めても肉は抉られるだろう。
「魚の骨がここにもありました。でも……損傷が激しいように見えます。ここで戦闘があったと考えられます」
たまたま海流のおかげで海底まで沈んでいなかった骨をここでも

見つける。それもやはり寿命により息絶えて白骨化した結果ではなく、何かしらの人為的な損傷が与えられたとしか考えられない。
「潜水艦のヒトを連れてきた方が良かったかもしれないですね。海中にそこまで痕跡があるというのなら」
「そう……ですね。私のソナーでは、そういうものがあるということしかわかりませんから」
直に見ているわけではないので、ハッキリとそれがどういう状態なのかは言い切れない。ただ、本来のカタチとは逸脱しているモノであることだけ。
だからだろう、こういう海域では絶対に存在しないようなモノも、僅かな手掛かりから発見出来る。
「あっ……骨以外にも見つけました。金属質……何かのアクセサリ？」
海上での目視確認をしていたらまずわからないであろう場所。ソナーを使っても反応が僅かであるために普通のソナーでは反応が読み取れなかったかもしれないモノ。それを宗谷が発見した。
「でも海中ですね……手が届かない場所ですし……」
「うーん、次回は潜水艦のヒトを連れてくるとしても、今すぐに手に入れないと流されて何処かに行ってしまいますよね」
しかし、それは海中にあるもの。海上艦である調査隊には手が届かない場所だ。潜ったら間違いなく艤装がおしゃかになるし、泳げるように訓練はしているものの、誰もやろうとは思わない。
「大丈夫大丈夫、宗谷姉ちゃんが見つけたんだから、絶対手元に来るよ」
それなのに、島風は暢気にそんなことを言った。宗谷との付き合いが長いのは当然、同じ鎮守府で一緒に過ごしているからである。そのため、今回と似た状況が前にもあったのか、必ずうまく行くと断言した。
と、その瞬間、突然風が強くなった。
「おっとと……山風、大丈夫？」
「へ、平気……」

風に煽られて少しだけふらついた山風を心配する海風。風もそうだが、それによって発生した波がそこそこ高くなり、身体どころか足下も不安定に。
ここに来るまで凪いでいたというわけではないし、調査中に突風が吹くことだって度々あったが、今回はまるで狙っていたかのようなタイミングでそれが起きた。
風により波が立ち、その波により海中が掻き混ぜられ、結果、宗谷がソナーによって発見したという金属質なそれが海上に打ち上がってきた。
「Ｈｅｙ，宗谷。今言ってたのはこれデース？」
「あ、はい、それですそれです。風のおかげで海流が微妙に変化してくれたみたいですね。運が良かったです」
宗谷はそう言うものの、運が良かっただけでは済まないレベルの出来事である。そして、島風は今の光景を見て、だから言ったじゃんと言わんばかりにドヤ顔を決めていた。
宗谷が『奇跡の船』と呼ばれているのは、まさにコレ。周囲が唖然としてしまうほどの豪運である。
こうあってほしいと考えたことが運良く拾える。今回のような小さなことから、命に関わるレベルの大きなものまで様々。意図的に引き起こすことは出来ないが、この豪運のおかげで、宗谷はどんな状況に陥っても無傷で、且つ確実な成果を齎してくれる。
これもあって、大将は宗谷を派遣したのだ。調査の目も非常に心強いが、それ以上に結果を残しているこの豪運が今回は必要だと感じ取っていた。
「お姉さま、何を拾いましたか？」
「コレは……髪飾り、デスかね？」
金剛が持っていたのは、髪につけるタイプの三日月のカタチをしたアクセサリー。戦いに巻き込まれたか、傷がついているものの、その形状には問題がなく、それが何かわかるくらいにカタチが残っている。
「いろいろ洗い流されちゃってマスネ。それに傷だらけデース。誰が

身につけていたものかはわかりませーン」
「でも、こういうのつけてる子って、かなり少ないですよね。月のカタチだから……」
「睦月型、ですか」
金剛と比叡が話している中、割って入るような宗谷の発言。宗谷はそのアクセサリーに心当たりがあるようである。それが、睦月型の駆逐艦が身につけているモノ。
駆逐艦の中では比較的非力ではあるのだが、燃費が非常に良いため、長期遠征などに向いているという睦月型駆逐艦は、全員が共通してその名の通り『月』のアクセサリーを何処かしらに身につけていた。長女睦月と次女如月は当初そのアクセサリーを身につけていなかったらしく、改二改装で妹達の進言によって身につけることになったとのこと。
そのアクセサリーで、今回発見したのは髪飾り。ここまで来たら、これの持ち主が何者であるかは、殆ど絞れたようなものである。
「痕跡としては充分ですね。誰かがここで戦いに巻き込まれて、沈んでしまった。そう考えるのが妥当です。妥当ですが……」
しかし、今度は別の謎が出てくる。何故こんなわかりやすい痕跡が残っていたかだ。
春雨を含む駆逐隊がやられた時は、一切の痕跡が残っていなかった。どれだけ探しても、何も見つからないくらいに海域が綺麗にされており、それ故に海風は黒い泥が溢れそうなくらいに憔悴したのだ。
しかし今回は、明確にここに艦娘がいたという証が見つかっている。駆逐隊と何が違うかと言われると、練度とか型とかくらいしか思いつかない。
何故姉達はあそこまで徹底的に痕跡を消されていたか。それを考え始めたことで、海風はまた悶々としていく。悩み始めたらドツボにハマりそうな難題だ。
それを察した山風が、海風の裾を引っ張って一旦考えるのをやめさせる。考えてもすぐにわからないことを考えているだけで気が滅入ってくるだろう。今は任務の真っ最中だ。ここで立ち止まってい

てはいけない。
「……とにかく、今は考えていても埒が明きません。これは痕跡として持ち帰りましょう」
三日月型の髪飾りは、早速見つかった重要な証拠品として、確実に持ち帰ることに。念のためと宗谷に預けて、調査をさらに続けていくことにする。

第二次調査隊の任務は、いきなりの好転を見せた。この拾得物が何処に繋がるかはまだわからないが、解析すれば何かしらの進展に繋がるだろう。既に充分すぎる成果を見せたと言っても過言ではない。
出来ることならさらに先へ。実行犯に繋がるような痕跡を見つけたいところである。

愚かな過去

未知の海域の調査を進める鎮守府の部隊。進んでいくうちに痕跡の1つ、三日月型の髪飾りを発見し、早速前回より一歩前進している。

これを発見した時点で一度帰投するという流れになった。痕跡はたった1つではあるが、その1つが大事。これを持ったまま作戦行動を取り続けるより、調査を確実に1歩ずつ進めた方がいいだろう。

ただし、今来た航路をそのまま戻るのではなく、遠回りして近海を調査しながらということにしていた。あくまでも、帰りはするが調査は続行というイメージ。

この意見に対して、部隊は満場一致だった。この拾得物の持ち主が既に沈んでいるとして、その犯人が鎮守府の駆逐隊を襲った仇だとしても、それを草の根分けてでも今すぐに見つけてやるなんて言う者はいない。

そうしたいという気持ちはあっても、鎮守府はおろか、施設からも相当遠い場所だ。帰路についている時点でもう昼食時という時間になってしまうだろう。

とはいえ、痕跡を見つけた今の海域はもう少しだけ念入りに調査してからということになった。追加で何かが見つかる可能性も無くはない。

「ねえねえ海風、このままもっと遠くに行かなくて良かったの？」

宗谷がまた電探とソナーを張り巡らせている中、島風が海風の側へ。賛成とはしたものの、何故その判断をしたのかを海風に問う。

今は調査を進めていることで昼食時となってしまっているものの、もう少し先の海を調査しても問題は無かっただろう。その場合、施設でもう一泊という可能性はあったが。

そんな問いに対して、海風は少し考えた後、簡単に自分の考えを島風に話す。

「ここで焦ってはいけないと思って。1つでも痕跡を見つけたのなら、それを確実に鎮守府に持ち帰った方が、次のためになるかなと」

以前までの海風だったら、仲間の制止も振り切って1人でも仇を探

し出そうとしていただろう。しかし、ここ最近は随分と落ち着いてきていた。金剛や比叡に相談出来るようになり、春雨との交流の機会も戻ってきている。特に昨晩は一緒に眠ることさえ出来た。おかげで、今の海風は事件の前の落ち着いた雰囲気を取り戻したとさえ思える程になっている。

勿論、こんな状態ではあるが海風の心はボロボロだ。一度ヒビの入った心は、何がきっかけでまた悪化するかわからない。海風に自覚は無いにしても、避けてもらえるのなら避けてもらいたい。

「ふぅん、オッケー。私もそれでいいと思うよ」

「良かった。突然聞かれたので、島風さんは実は反対意見で、同調圧力で押し潰してしまったのかと思ってしまいました」

「ううん、そんなことないよ。私もここで一度帰るってのは賛成。こういう調査って、堅実に行くのが大事だもんね」

速さに拘りがある島風にしては、かなりのんびりした考え方である。そこは少し意外だと思った。

「終わりが遅くなってしまいますけど、島風さん的には……」

「早い方がいいと思うけど、頭突っ込みすぎて酷い目に遭うくらいなら、一度帰って立て直した方がいいよ。勿論、その後は速攻だけどね！」

戦いではスピードに任せた速攻戦術を得意としているようだが、戦いに繋がらないところは堅実に行く性格のようである。印象とは大分違うと海風は心の中で思いつつ、口に出すのは失礼だと呑み込んだ。

しかし、島風はそれに勘付いたか、少し悪い笑みを浮かべる。

「海風、もしかして私のこと猪か何かだと思ってた？」

「い、いえ、そんなこと無いですよ。ただ……正直言うと、何でもかんでも速く速くというヒトなのかなと思っていたのはあります」

「素直でよろしい。でも実際、昔はそんな感じだったよ。みんな遅いし、誰も追い付いてこれなかったんだもん。私より速い艦娘なんていないんだーって、ぶっちゃけ調子に乗ってた」

そんな島風だったため、この世界に生まれ落ちた直後は友達もいな

かったらしい。仲間はいても、仲がいい者はいない。そんないわゆるぼっちの子だった。
だが、今の島風はそんなことはカケラも考えていない。大将の鎮守府で心を入れ替えるような出来事があったそうだ。
それが、独断先行による敗北。島風自身も重傷を負い、あえて修復材を使われずにゆっくりと治療されるという罰まで与えられたそうだ。
「そりゃあもう反省したよね。自分のせいで負けて、おばあちゃんにもこっ酷く叱られて、傷をすぐに治してもらえなかったから走ることも出来なくて。自分がどれだけバカだったのか、これでもかってほど知ることが出来たんだ」
軽く言ってのけるが、艦娘としてはこれ以上ないやらかしをしているわけだ。最悪、解体処分まであり得るほどの。
だが、あの大将はそんな島風にも罰を与えつつも手を差し伸べ、結果的にここまで性格が改善されたのだ。
「宗谷姉ちゃんと調査任務に行くようになったのもその頃でさ、傷も治りかけてリハビリも兼ねての任務だったんだけどね、それはもう凄かったの。さっきも見たでしょ？　奇跡の船」
調査したいものを引き寄せてしまう宗谷の不思議な力。意図せずとも欲しいものが手に入るほどの豪運。さらにはその豪運を際立たせるために持っている調査能力。戦わずとも、戦況を操る力と言っても過言ではない。
走ることしか出来なくて、プライドすらもガタガタに崩された中で、戦い以外でも大活躍をする宗谷の姿は、島風にとっては眩しすぎる存在だった。それに比べて自分は何で小さな存在なのだろうと、改めて思い知ったのだと。
「ただ速いだけじゃ、何の意味もないんだって、理解したんだよね。そこから私は変わったの。みんなにごめんなさいして、失った……ううん、元から無かった信頼をどうにか勝ち取っていった。で、今の私があるんだ」
サポートの大切さを思い知ったことで心を入れ替え、自分に足りな

いモノに気付くことが出来たことで、結果的に鎮守府では誰からも信じてもらえるくらいの、自他共に認める最強クラスの駆逐艦へと成長を遂げたわけだ。

友達を作ることにも躍起になっているのも、当時の自分の愚かさを正しく受け止めているからだ。自分から独りになって粋がっていた過去があるからこそ、仲間の大切さを理解している。

「私にとって宗谷姉ちゃんは恩人みたいなものになるのかな。非戦闘員なのに、多分一番鎮守府に貢献してるんだもん。ただ突っ走ってただけの私とは大違い。すごいなー憧れちゃうなーって思って、こんな感じかな」

自分から挙手したのは、友達を作るためにというのが一番だったのだろうが、二番目くらいに宗谷が選出されていたからというのが含まれそうである。

松竹姉妹が反応しなかったのは、島風から宗谷に向けての感情が純粋な尊敬だからだろう。

「島風さんは……凄いですね。とても視野が広い」

「そうかな。私はいろいろと気付いただけだよ」

言葉では謙遜、態度では誇らしげ。

時には先行して手を引っ張り、時には隣に並び立ち、時には後押しする。仲間と寄り添い続けることに自分の在り方を見出し、その存在そのものが仲間達を鼓舞するようになった島風は、海風にも強い影響を与えそうである。

宗谷の調査がある程度終わり、そこには髪飾り以外が無いことが判明。本当にこれだけが残っていてくれた。痕跡はこれ以上見つからないと判断し、ここからは遠回りしながらの帰投となる。

ここまで痕跡が残っていないとなると、やはりこの髪飾りは罠なのではないかという疑念が浮かぶのだが、そこに飛び込まない限り調査は進まない。若干危険な賭けにもなってしまっているのは仕方ないこと。

だが、ここで不可解なことが起き始める。
「んん……おかしいですね……」
「海風、どうしマシタ？」
「鎮守府に通信が出来ないんです」
髪飾りを手に入れたこと、そして宗谷による調査も完了し、第二次調査隊はここで終了することを鎮守府に報告しようとしたのだが、通信機器がザリザリとした音しか発せずに話すら出来ない状態になっているとのこと。
この海域はかなり遠い場所にある未知の海域。通信障害が起きても仕方ないかと思えるくらいなのだが、それでも通信に使う機器は軍用の超高性能なモノだ。ちょっとやそっとでは通信障害なんて起きない。
それこそ、外部からの干渉が無い限り。
「これ……槍持ちとの戦闘と同じなんじゃ……」
ここで思い出す。叢雲――槍持ちとの邂逅時の電波妨害。理由はわからないが、何かしらの干渉を受けたことで、鎮守府との通信が途絶えてしまった。
今回もそれに近いことが起きている。つまり、何者かが近くにいるということに他ならない。
「そうだとしたら、まずいデス。遠回りなんて考えずに施設に直行するべき……いや、そうなると施設に迷惑がかかる可能性もありマスね」
「でも、この場に留まるのは余計に危険です。鎮守府から完全に孤立している状態ですし、援軍は見込めません」
「槍持ちの時みたいに、たまたまヨナが通りかかってくれることも無いでしょうからネ……」
最もよろしくないのは、この場に留まり続けることだ。通信が出来なくなるような電波妨害を仕掛けてくるような相手は、野良の深海棲艦ではあり得ない。槍持ちのような特殊な存在だろう。
だとしたら、途端に勝ち目も薄くなる。そうならないように訓練を続けてきたのだが、堅実に行くのなら戦闘は極力避けるべき。今は戦

うことよりも、見つけた痕跡を持ち帰ることが重要だ。
「遠回りはやめます。まずはすぐに施設に戻りましょう。ここから離れることが最優先です。せめて通信が回復するまで、施設に近付くことにします。皆さん、それでいいですね？」
海風の指示に全員が了解。今回は戦闘の準備はしていても、戦闘のための部隊ではない。
「では、すぐに……」
「哨戒機が深海棲艦を発見。数は2。未知の個体と推測……とのことよ」
苦々しい声で千歳が報告する。槍持ちと交戦したときと全く同じ状況に陥った。今回は人数が多いものの、そういう問題ではない。
「今すぐ撤退！　千歳さん、あちらのスピードは！」
「1体は普通だけど、もう1体はかなり速い！　槍持ちのときと殆ど同じよ！」
つまり、撤退しても追いつかれる可能性は高いということになる。しかし、逃げない理由は無かった。そういう敵は、数とか関係ない。未知の個体は未知の戦闘方法を使ってくる。
「海風、私が殿（しんがり）やるから、全員で逃げて。宗谷姉ちゃんは低速だから、上手いこと引っ張ってあげてほしいな」
島風が全員の前に立ち、迎え撃つ姿勢を取りつつも撤退を優先させる。当然島風だって撤退の意思はあるが、みんなを守るために率先して前に出る。仲間のためにと、愚かな過去を振り払う。
「Ｈｅｙ，島風。いいところを1人で持っていくのはＮｏなんだからネ」
「はい！　比叡とお姉さまも、殿（しんがり）を務めます！　やるなら3人の方が確実でしょう！」
「比叡の言う通りネ。仲間思いで突っ走るのはダメダメダヨ」
島風の隣に金剛と比叡が立つ。駆逐艦1人で最後尾というのは心許無いかもしれないが、戦艦2人まで加われば鉄壁になれるはずだ。
「おうっ！　金剛姉ちゃん、比叡姉ちゃん、よろしく！」
「Ｏｋａｙ．　島風、私達が、仲間達を守るんデスヨ」

その未知の深海棲艦が来るであろう水平線を見据えながら、金剛が叫ぶ。
「皆サーン！　私達が守りますから、撤退してくだサーイ！」
とにかく、今からは撤退戦だ。追い付かれなければ追い付かれないでありがたいが、そうならないのが今回の戦いだろう。
「宗谷さん、少しキツイかもしれませんが、手を」
「はい、低速ですみません。よろしくお願いします」
唯一の低速艦である宗谷は、海風と山風がその手を取って曳航することで強引に高速化。本来出せる速力以上の速力が出てしまうため、宗谷にはかなりの負担がかかってしまうのだが、戦闘に巻き込まれるよりはマシであるため、耐えてもらうしかない。
しかし、その敵は予想以上に速かった。
「見ーっけ！」
水平線の彼方にいるはずなのに、それはぐんぐんと近付いてくる。
どう見ても深海棲艦で、どう見ても駆逐艦。そして、どう見ても。
「白露……!?」
元々鎮守府にいた駆逐隊の隊長、春雨達の姉、白露の外見をしていた。

堕ちた白露

第二次調査隊による未知の海域調査中、痕跡を見つけたことで一度帰投しようとしたところ。通信が出来ないことに気付いた瞬間、未知の深海棲艦が調査隊に接近していることが判明。すぐさま撤退をしようとしたものの、そのうちの1体の速さが普通ではなく、逃げ切ることも出来ずについに対面することになってしまった。

「白露……まさか、貴女とはネ……」

駆逐艦は、鎮守府の駆逐隊隊長、白露の外見をしていた。いや、細かく言えば少しずつ違う。それこそ、深海棲艦化した春雨のように、眼前の白露も同じような変わりようである。真っ白な肌、真っ白な髪、青白く燃えるように輝く瞳。それは当然、白露が持っていなかった要素だ。

見た目も深海棲艦と化した春雨に近しい、ノースリーブのセーラー服。肌を惜しみなく出しているため。春雨のように欠損があるわけではないようである。

「あれ？　もしかして金剛さん？　うわ、ひっさしぶりだねぇ」

ケラケラ笑う白露に対し、金剛は酷い顔をしていた。死んだと思っていた仲間が生きていたのは喜ぶべきことなのに、その姿はどう考えても敵である。

春雨の時と同じはずなのだが、感覚がまるで違う。春雨は艦娘としての心を残していることが一目でわかったが、白露はその心が無い。艦娘の時には見たこともないような、狂気じみた目をしている。

それに、旧知の仲間がいるというのに、殺気を消そうともしない。金剛をこの場で消す気満々で、でも再会を喜ぶような喋り方。

白露も心が壊れているのが嫌というほどにわかった。寂しさが溢れた春雨の壊れ方とはベクトルが違う。限界が残らない壊れ方にすら見えた。

「生きて……いたんデスカ」

「うーん、ちょっと違うかな。あたしは一度死んでるよ。だけど、生き返っちゃったんだなぁコレが」

春雨がトラウマとして傷を負っていることを、笑いながら話している。しかし、その目は少しも笑っていない。
「金剛さん知ってる？　死んだ艦娘って、運がいいと深海棲艦になって生き返るんだって。あたしもその中の1人でね、今はこんな感じってわけ」
「……こんな感じ……とは？」
「えー、察し悪いなぁ。深海棲艦として、侵略を楽しんでるんだよ」
嘘偽りない言葉だった。狂気に染まった瞳は、この言葉を発したときは本当に笑っていた。侵略が楽しい。艦娘を殺すのが気持ちいい。本来ならば嫌悪するような事柄が、全て快楽に繋がっているような言い方。
もう、鎮守府の面々が知っている白露ではないのだと、嫌というほどにわからせてくる。
「こらこら、あんまり突出しないでくださいね」
「あっ、置いてきちゃったね。ごめんなさーい」
「心にもない謝罪をどうも」
白露の後ろから、もう1人の未知の深海棲艦。こちらが鎮守府にとっての仇であり、春雨や叢雲が深海棲艦に堕ちるきっかけを与えた者。言ってしまえば、これだけ慕っているようにも見える白露にとっても、自分を殺した相手に他ならない。
話には聞いていた、左目だけがビカビカと輝いている重巡洋艦。さらには、外見は艦娘と殆ど同じ姿である。
「あれ、古鷹さんだよ。艦娘で、重巡洋艦」
島風が金剛に小さく伝える。その言葉もギリギリ聞き取れたくらいだったが、元となっている艦娘があちらにもあったようである。
重巡洋艦古鷹。全ての重巡の姉と呼ばれており、重巡洋艦の中では少しだけ力不足なところもあるのだが、どの個体も基本的には心優しく、仲間達を導くようなカリスマ性も持ち合わせ、頼りになる存在。大天使と喩えられることすらあるような人格者である。
しかし、後から来た古鷹にはそのような雰囲気がカケラもない。白露と同じように真っ白な髪と肌に加え、鎮守府の面々ならわかる飛行

場姫のようなボディスーツに身を包んでいるのが異質。さらには、妙に特徴的な額の右側に生えた角が、異形であることを表していた。
その姿は、コードネーム『重巡ネ級改』と呼ばれる個体に近しい。薄雲の仇がそのネ級改であるが、古鷹はそれのような見た目へと変貌を遂げていた。
「何を探しているかは知りませんけど、艦娘がこんなところまで来ちゃいけません。危ないですよ？」
「わるーい深海棲艦に襲われちゃうもんね」
白露のノリは変わらない。それが自分であることをわかっていて、それでも煽るように悪い笑みを浮かべ続ける。
「先日、戦艦棲姫も何かを探しているようでしたが……もしや、貴女達もその仲間だったりします？　深海棲艦と艦娘が一緒に行動するなんて、珍しいこともあるものですね」
ペラペラと話しているが、その姿に島風は疑問を覚えていた。古鷹はあんな性格だったのかと。
白露もそうだが、あの古鷹も深海棲艦化によって心が壊れているのは間違いない。だからといって、ここまでおかしくなるだろうか。あの施設にいる元艦娘達は、基本的な性格は何も変わっていない。しかし、白露も古鷹も何かがおかしいとしか言いようが無い。
「まぁどうであれ、見つけちゃったので死んでもらうんですが……うん、戦艦の２人、あと後ろの駆逐艦２人……青いのと、赤いの。それと、あのウサミミは欲しいですね」
「じゃあ、やっちゃっていいよね。いいよね！」
「ええ、好きに暴れていいですよ。艦娘は格下ですから」
瞬間、白露が爆発的なスピードを発揮して調査隊に突撃。艦娘の時にはまず確実に出せない速力から、狙いを定められたのは島風だった。狂ったような笑みを浮かべ、手に持つ主砲を乱射しながら、一撃で沈めてやろうと速攻を仕掛ける。
「しまかっ」
「大丈夫。だって速いもん！」
声をかけられる前に島風は動き出していた。相手がスピードタイ

プの動きをするというのなら、それに真っ向勝負を仕掛けるのが島風である。
　自分の速さに自信があるのもあるが、先陣を切ることで敵の攻撃を自分に引き寄せ、仲間達を守るように動いていた。そして、その迅速な判断が仲間達を鼓舞し、戦いをより良い方向へと導いていく。
　しかし、敵がよりによって死んだはずの仲間なのだから、金剛でさえ本来の力を発揮するのは難しい。なんとか撤退を進めているが、最大戦速は出せそうになかった。動揺が速度を落としてしまう。
「はいそこ、逃げないでくださいね」
　それを見ていた古鷹は艤装を生成すると、艦娘の時には持っていなかった艦載機を発艦してきた。これでは重巡洋艦ではなく、航空巡洋艦である。いや、航空巡洋艦でも発艦させるのは水上戦闘機、ないし水上爆撃機だが、古鷹が放ったのは艦上攻撃機だ。
　ネ級改は純粋な重巡洋艦なのだが、同じネ級でも改では無い方。そのフラグシップと呼ばれる個体は、空母と同様の艦載機を扱う航空巡洋艦となっている。あの古鷹は、その力も持っているようだ。
「攻撃隊、発艦！　艦載機を迎撃して！」
「こっちも！　あんなのに負けてられるかっての！」
　そんな艦載機に対して、千歳と千代田は自身の艦載機をぶつける。目には目を、艦載機には艦載機をと、同じ土俵での戦いに打って出た。
　空母２人がかりの航空戦は、たった１人の重巡洋艦相手に互角。そもそも艦載機のスペックが違うため、数では勝っていても、制空権を完全に取るところまでは行けず。
「金剛姉ちゃんと比叡姉ちゃんは古鷹さんやって！　この白露は私が引きつけるから！」
「お、Ｏｋａｙ．　比叡、私達も行きますヨ！」
「はいっ」
　比叡も自分の頬を音が出るほど強く叩き、気合を入れ直した。動揺の色が強かった瞳は、これで一旦リセットされる。
　ここで白露を敵と割り切ることが出来るかが、今回の戦いのキモだ。しかし、簡単に割り切れないのはわかっている。

だから、島風が白露に当たった。あちらも狙ってきてくれるのだから好都合である。古鷹には縁もゆかりもないのでまだ戦いやすいが、白露相手に砲を向けることは簡単には出来やしない。いくらあちらが敵意増し増しでも。
「こらこらぁ！　あたしから目を離せるのかな!?」
「ふんっ、そんなの余裕だし。私は、友達を守るために先陣が切れるんだ！　アンタなんかに負けるわけがない！　背負ってるものが違うんだからさ！」
明らかに異常である白露に対し、改二相当な実力を持つ島風は、カタログスペックだけで見れば数段劣るものになってしまうかもしれない。
しかし、仲間という後押しが島風のスペックを格段に上げている。愚かな過去を踏み台にして、光り輝く未来を掴み取っている島風は、格上の相手がどうとか関係無い。
しかし、そんな殿（しんがり）の戦いから少し離れたところ。この戦いに、最もいてはいけない者が、白露の姿を見て撤退の足を止めてしまっていた。
「うそ、なんで……なんで白露姉さんが……」
この場から逃げなくてはいけないというのに、海風は足が動かなかった。宗谷の手を取って行動していたのだが、そのせいでみんなまとめて撤退が出来ずにいる。
「海風の姉貴！　早く逃げろっ！　江風達は意地でも逃げなくちゃいけないだろうがよ！」
「なんで……なんで……」
江風の叫びも耳に入っていない。島風と戦う白露の姿から目を離すことが出来ず、ただただ震えることしか出来なかった。
ようやく心が落ち着いてきたのに、またもやガタガタに崩れていく。むしろ、今まで以上に危険な状態に持っていかれようとしている。そんなこと、山風が我慢出来るわけがない。
「江風、涼風！　宗谷さん、引っ張って！」
山風にしてはハッキリとした大きな声で、その意思を伝えた。これ

は異常事態であるとすぐに判断出来たため、２人は疑問符すら浮かべることなくその言葉に従い、海風と山風から宗谷を引き取り、すぐに撤退を開始。
　勿論全員が撤退をしながらの戦いなのだが、その先頭を疾ることになる。低速艦である宗谷にはかなりキツイ状況になるのだが、命と天秤にかけるなら当然逃げを取る。
「海風姉、しっかりして！」
　そして手が空いた山風は、すぐに海風の手を取って落ち着かせる。撤退するために引っ張りながらも、耳元で叫ぶように声をかけ続ける。
　しかし、こんなに近くにいるにもかかわらず、山風の言葉すら耳に入っていない。その目は白露から離れることはなく、その手は今までにないほど震えている。
　最も敬愛する春雨が、深海棲艦化していたとはいえその心を失うことなく生きていたことには、涙を流すほど喜んだ。白露も同じように生きていてくれたら、同じように喜んでいただろう。
　だが、仲間だった自分達に敵意を振りまき、侵略行為を是として、嬉々として攻撃をしてきている姿は、知っている白露とは大きくかけ離れていた。
　海風の知る白露は、確かに少しお調子者の気質はあった。しかし、白露型の長女であることに誇りを持ち、『いっちばーん』になるために日々努力もし、結果妹達を纏め上げるだけの実力も手に入れた猛者だ。物静かな次女の時雨も、ムードメーカーな三女の村雨も、奔放すぎて手がつけられない四女の夕立も、白露の力には敬意を表しており、特に抑えが利かない夕立ですら白露の言うことだけはちゃんと聞くほどである。
　あんなのは自分の姉ではない。そういう思い込みまで出始めていた。それは現実逃避に近いものなのだが、心を正常に戻そうとする自己防衛能力が間違った方向に進もうとしている。
「違う。あんなの、私の姉さんじゃない。白露姉さんは、あんなことするヒトじゃない。アレは違う。別個体なんだ。同一人物じゃない」

自分に言い聞かせるように呟くが、その瞳からは光が失われていた。山風はそんな海風の顔を見て、少しだけ怯えてしまった。
その表情は、怒り狂って中間棲姫に主砲を乱射した時と同じものだった。海風だって白露型。姉の気質を持っていてもおかしくない。それこそ、狂犬の血だって持っている。
「姉さんの名を騙る偽物だ。そうだ、そうに違いない。姉さんを侮辱してるんだ。許せない。許せない！」
山風を振り払い、撤退ではなく突撃を選択してしまった。もう心はヒビだらけ。正常な判断など出来ない状態に。
「海風姉?」
「お前なんて姉さんじゃない！　偽物！」
島風と交戦する白露に対して、一気に距離を詰めた。本来出せる力を大きく上回っている。いくら鍛えているとしても、海風はここまで出来る艦娘ではない。
「おっと、乱入！　海風じゃん、久しぶりだねぇ！」
「ちょっと、アンタも余所見出来る立場？」
「いいんだよ格下。ちょっと海風と話がしたいから、離れてよねっ！」
島風を軽くいなす白露。島風は自分以外にも個別に行動する意思を持つ艤装、連装砲ちゃんを展開して戦っているのだが、そんなことお構いなしに全ての攻撃をただ素早さだけで回避し、撃つわけでもなく島風の胴を蹴り飛ばす。
気分屋というわけではないが、目の前に来た海風に興味が湧いたからか、島風を放っておく選択をしたようだった。それを簡単に受け入れる島風ではないのだが、ここまでしてようやく互角くらいだと思っていた白露がより強い力を発揮してきたことで、一時的に引き剥がされてしまう。
「海風ぇ、偽物は失礼じゃない？　あたし、ちゃんとお姉ちゃんだよ。いっちばーんのね」
「嘘だ！　姉さんの皮を被ったただの深海棲艦だ！」
「ちゃんと記憶も残ってる。残ってる上で、こういうことしてるの。何が楽しいかわかっちゃったから。艦娘が泣き叫ぶ姿ってさ、なんか

ウズウズするんだよね！」
　海風の砲撃も軽々と避けた後、軽く踏み出しただけでゼロ距離にまで近付いていた。そして、その首を掴み上げる。
　あまりにも近いため、連装砲ちゃんも攻撃を躊躇してしまった。下手をしたら海風にも当たってしまう。むしろ盾にされる可能性すらもある。
「そうだなぁ、あたしが本物って理解してもらうためには……うん、海風の知ってる白露にしか知らないことを話せばいいか」
「何をっ」
「堀内提督、元気にしてる？　あたし達がいなくなってショック受けちゃった？」
　それは、鎮守府の提督の本名。堀内という名を知っているのは、元々鎮守府にいた証拠である。嫌でも目の前の白露が自分の知る白露であることを知らしめる一言。
「なん、で……」
「だーかーらー、あたしはそこの白露だもん。で、自分の意思でこうやってるの。どうーゆーあんだすたん？」
　そんなことを言われても、理解が出来なかった。頭がおかしくなりそうだった。現実逃避していた思考が強引に現実に戻され、そうあってほしくないという現実を痛いほどに突きつけてきた。
　ここまでで充分すぎるほどに精神を磨耗させてきた海風にとって、これはトドメだった。溜まりに溜まった疲弊が、一気に解き放たれた。

　そして、ギリギリ限界だった心が、壊れた。
「は、はは、そんなの、そんなの認めたくない……姉さん、姉さん……私の、私の憧れの姉さんが……」
　海風の手の甲から、黒い泥が溢れ出た。

その声は届くか

調査隊を襲撃した未知の深海棲艦は、鎮守府に所属していた駆逐隊の隊長、白露が生まれ変わった姿だった。艦娘であった時の記憶をちゃんと持っているのだが、しかし性格は禍々しく豹変しており、元々仲間だった調査隊の面々すら嬉々として攻撃する。

その攻撃を島風が迎撃していたが、そんな白露に納得が出来なかった海風が、現実逃避をしながらも突撃。しかし、その攻撃は擦りもせず、逆に急接近された挙句に首を掴まれ、提督の本名を言われたことによって現実に引き戻されてしまった。

そして、ギリギリ限界だった心が、壊れた。

「は、はは、そんなの、そんなの認めたくない……姉さん、姉さん……私の、私の憧れの姉さんが……」

海風の手の甲から、黒い泥が溢れ出た。それは、山風が数回見たことがある泥とはまるで違う、あまりにも勢いが強い溢れ出し方だった。

これまでは、心が壊れようとしていてもギリギリで踏みとどまることが出来ていた。春雨を探し求めている時でも、希望を無くさずに精神を擦り減らしながらも何とか前を向き続けることが出来ていた。

しかし、今回は今までの衝撃とはあまりにも違っていた。春雨と同じように深海棲艦化しているのを見つけただけならよかった。その心が壊れていたとしても、春雨と同じように艦娘の心を失っていなければまだマシだった。

侵略者気質を得て、自分達の敵として立ちはだかり、こちらへの攻撃を楽しんでいる姿はダメだった。もうそれは壊れているという問題では無い。極端な言い方だが、死んでいるのなら死んだままの方が良かった。

「おっとぉ、ここで溢れ出してくれるんだ。痛めつける手間も省けていいね。さっすがあたしの妹！　死なずに溢れるなんて便利で素敵だよ」

白露はそれを大喜びで見守る。こうなってしまったらもう止めら

れないと、掴んでいた首を解き放ってその場に放り投げた。
　人質みたいなものなのに随分と余裕のある動きだが、これだけ勢いよく溢れ出したらもう元には戻れないとわかった上での行動だろう。もしくは、別の理由があるのかもしれないが。
「海風姉!?」
　宗谷を江風と涼風に任せた山風は、そんな海風を見てすぐさま駆け寄る。しかし、白露がそれを許そうとはしない。
「ちょっと山風ぇ、繭になるの邪魔しちゃダメだよ。変な感じになっちゃうかもしれないでしょ。っていうか、もしかして改二になってる？　うわぁ、山風も強くなったんだねぇ。お姉ちゃん嬉しいよ。でも古鷹さんが緑のは欲しいって言わなかったし、ただ死んでよね」
　当たり前のように山風に主砲を突き付けるが、今までに見たことのないような表情で睨み付けると、その瞬間に白露に向かって数発の砲撃が放たれていた。普段後ろ向きで人よりも前に出ようとしない山風が、初めて燃え滾る怒りを露わにしたことで、予想以上の力を発揮していた。それが自分の姉であろうとも、海風を傷付けた時点で敵として認定し、誰もが躊躇した殺意のこもった攻撃を真っ先に実行。
「おおっと!?」
「どいて」
　ハッキリと拒絶の言葉を白露にぶつけてから、黒い繭が腕を包もうとしている海風に駆け寄る。
　ゾクゾクとした快楽が白露の身体中を駆け巡った。自分の攻撃によって泣き叫ぶ艦娘を見るのも快楽の１つとなっていたが、弱いと思っていた相手が噛み付いてきたのはもっと興奮する。そして、山風を殺したいという気持ちでいっぱいになった。
「山風ぇ、それは聞けない相談だなぁ！　あたしと殺ヤり合おうよぉ！」
「やらせるわけっ、ないでしょ！」
　そこに体勢を整えた島風が、連装砲ちゃんを従えながら突撃。山風がこの白露を殺すという判断をし、友達である海風が危機に瀕していることを察知したことで、島風もキレていた。
　キレながらも冷静に、そして元艦娘ではなく深海棲艦を相手にして

いると気持ちを整理し、完膚なきまでに叩き潰すつもりで改めて攻撃を再開した。
「つたく、あたしは自分の妹と殺し合いをしたいだけなのに、なんでアンタなんかとヤリ合わないといけないのさ。でも、アンタも持って帰りたいから、ある程度痛めつけなくちゃあいけないんだよねぇ！」
海風はそのままでも構わないし、山風は別に後からでもいいと考えたようで、向かってきた島風と改めて対峙する。島風の思惑通りに、白露は引きつけられる。
だからその間に海風をどうにかしてほしいと、山風に心の中で託した。いくら友達になれたとしても、ああなっている状態で立ち直らせることが出来るのは、最も親密であろう実の妹がベストだ。その位置に立つことは、島風には出来ない。
「千歳姉ちゃん、千代田姉ちゃん！　空襲こっち！」
「やりたいのはやまやまだけど！」
「制空権維持するのに手一杯なの！」
すぐさま空母達にも指示を飛ばす。その空母達は、古鷹から発艦された艦載機の対処でいっぱいいっぱいだ。そして古鷹本体も、金剛と比叡が二人がかりでどうにか持ち堪えているレベル。
古鷹は、戦艦２人と空母２人をたった１人で手玉に取っているのだ。まだ手を抜いているようにすら見える。しかし、金剛と比叡は全力。少しも力を落としていない。
「戦艦と空母が相手とはいえ、私は格上ですから。あの戦艦棲姫とはわけが違いますし。艦娘には負けませんよ私は」
「Ｓｈｉｔ．　何も言い返せないネ。こっちは全力なんだけどネ！」
「全部撃ち込んでもっ、こんなに当たらないなんて……！」
金剛も比叡も鎮守府ではトップクラスの戦力だ。強大な敵が現れた時は必ず２人が出撃するようになっているし、それでいくつもの戦いを潜り抜けてきている。
しかし、今回は今までとは明らかに違っていた。艦種詐欺が横行している深海棲艦だとしても、この実力差は何かがおかしい。たった１人に対して、ここまでどうにも出来ないというのは今までに無かっ

た。
　金剛は自分の身に降りかかったことで、この古鷹が駆逐隊を全滅させたのだと理解した。自分達でこれなのに、哨戒用の装備だった駆逐艦がまともに戦えるわけがない。
「まぁ、好きにやってください。それでも全く歯が立たないとわかれば、自然と心は擦り減りますからね。どうぞどうぞ、全力で戦ってください。圧倒的に捻り潰しても、面白くありませんから」
「言ってくれますネ」
「だってそうでしょう。その結果があの子……白露さんなんですから」
　わかっていたことだが、この古鷹が駆逐隊を全滅させていた。自分の口からそれを伝えてくるのは、余程の自信があるということだろう。
　慢心しないように慎重に行くところがあるものの、格下だとわかるとなめてかかる。元は古鷹とは思えないくらいに傲慢な心が芽生えていた。
「あの時は5人のうち1人は致命傷を与えて逃しちゃいましたけどね。まぁあの怪我なら生きてはいないでしょうし、何も問題はありませんが」
　終始表情を変えず、薄ら笑いを浮かべている古鷹に対して、金剛もそろそろ限界だった。仲間を殺されただけならいざ知らず、その在り方を侮辱するような言動は、到底許されるものではない。
　本来の艦娘としての古鷹は、決してこんなことは言わないし、思いすらしない。仲間思いで、常に周囲に気を配る大天使と呼ばれた古鷹が、いまや堕天使である。

「海風姉！　ダメ、ダメだよっ！」
　白露を島風が引きつけてくれたおかげで、山風は海風に触れることが出来た。しかし、海風は壊れたように泣きながら笑うしか出来ていなかった。

泥が腕を包んでいく。しかし、それを振り払うようなこともせず、受け入れてしまったかのようにびくともしない。そちらの方に視線すら動かない。
「姉さん……姉さん……姉サン……」
ただぼんやりと、目の前の山風すら視界に入らずに、姉のことを呟き続ける。
「春雨姉が待ってるの！　海風姉、折れないで！」
必死に訴えながら。腕に纏わり付く泥を引き剥がそうと強引に手で払っていく。山風のその行動で、一部の泥は腕から弾き飛ばされ、海風の肌から離れた瞬間に霧散するのだが、次から次へと泥が溢れ出してくるため、山風の手だけでは全部を払い除けることは出来ない。
「ダメ！　海風姉は深海棲艦になっちゃダメ！　春雨姉が、春雨姉が悲しむ！」
海風に対しては春雨の名前を出すことが最も効果的であることくらい、山風にはわかっていた。
自分も海風に対して仄かな想いを寄せているが、それ故に海風の想いが春雨に向いていることも理解している。だからこそ、ただ見守るという選択を取っていた。海風が幸せになれるならそれでいいと、笑っている海風が見られるだけでいいと割り切って。
しかし、こんな巫山戯た理由で笑顔が奪われ、艦娘すら辞めさせられるなんて許せない。適切な処置をすれば、海風は海風のままで深海棲艦化するかもしれないが、それはダメだ。どうしても心は壊れているし、知っている海風からかけ離れる可能性だってある。
「海風姉、しっかりして！　お願いだから、あたしの声を聞いて！」
出来る限り素早く腕の泥を払い除けながら、煩いくらいに叫び続けて、海風の心に届くように訴え続けた。その言葉を海風が聞いてくれなければ意味が無いのだが、それでも絶対にやめない。
「姉サン……姉サン……」
どれだけ訴えても、海風は壊れた人形のように同じ言葉を呟くだけだった。こうなってしまうと、泥の進行もどんどん速くなっていき、山風1人だけではどうにも出来ない。払えば払うほど溢れ出して、そ

のうちにもう片方の手の甲からも泥が溢れ出す。両腕になってしまっては、もう止められない。
「海風姉！　目を、目を覚まして！」
　それでも諦めない。きっと声は届くと必死に叫ぶ。
「山風の姉貴！　江風達も手伝う！」
「海風姉を深海棲艦にはさせねぇやい！」
　ここで宗谷を引っ張っていてくれたはずの江風が海風に駆け寄ってきた。江風だけではない。涼風も、宗谷も、海風を救うために撤退を取り止めてしまった。
「とりあえず払えばいいんだよな！」
「お願い！　あたしだけじゃ止められない！」
　なんで逃げていないんだと叫びたかったが、今は誰の手助けでもありがたい。一度壊れた心は元に戻らないことはわかっているが、妹達からの言葉、それも1人だけでなく3人分の言葉があれば、海風だってきっとそれを耳に入れてくれる。
「海風の姉貴！　しっかりしろ！　江風達を引っ張ってくれる姉貴だろうが！」
「あたいらもあんなもん見せられたらキッツイけど、海風姉はもっと強いヒトでしょうが！　しっかりしろい！」
「海風姉！　お願い、負けないで！」
　3人がかりで声をかけ、溢れ出る泥を払い除け、海風が真に壊れるのをどうにか防ごうと頑張るのだが、海風にはその全てが届いていない。
　心が壊れ、憧れが砕け散り、絶望と喪失感に支配されているのが原因だった。寂しさとは違う、目の前が真っ暗になる心境。
　溢れた感情は『絶望』。
　唯一縋れる相手がいるはずなのに、今ここにいないことで、海風は失意の沼に呑まれている。ここに春雨がいれば、また違ったかもしれない。しかし、それは望めない。真の意味で、望みは絶たれた。
「ンだよコレ！　泥が溢れンの速すぎンだろ！」
「くっそ、間に合わねぇ！」

３人がかりの救出も、結果的にはなしのつぶてだった。時間を稼ぐだけ稼いだが、海風の絶望は底が深すぎた。今までの憔悴と疲弊が全て溢れ出ているようなものだった。真面目故に、折れた時の酷さは半端では無かったのである。

「あ、ああっ、海風姉……海風姉ぇ！」

山風の叫びも虚しく、泥は腕だけでなく首や足からも溢れ出てしまい、一気に身体を包み込んでいく。

こうなってしまったら、もう手の尽くしようが無かった。諦めたくない一心でずっとずっと泥を払い除けていたが、進行速度が数倍に膨れ上がったことでもう間に合わず、最後は払い除けることすらままならなくなり――。

「うそ……海風姉……うそでしょ……」

海風は、完全な黒い繭と成った。まだ諦めることが出来ず、その繭を引き剥がそうと掴み掛かるが、どんな素材で出来ているのかはわからないくらいに硬く、山風の爪が割れてしまいそうになる。

「山風の姉貴……こうなっちまったらもう……」

「諦めない！　諦めたくない！　海風姉は、まだ！」

「歯が立たねぇんだから、諦めろい！」

涼風が山風を繭から引き剥がした。その涼風だって、海風が救えなかったことで涙を堪えているのがわかる。江風だって諦めたくは無かったのだろう。口の端から血が滲む程に、唇を噛んで耐えていた。

「こうなったら、施設に運んで適切な処置をしてもらった方がいいよ。春雨姉だって、あたいらの知ってるままだったんだ。カタチは変わっても、海風姉は海風姉でいてくれる。それとも何かい、山風姉は海風姉が艦娘のままじゃないとダメだってのかい！」

涼風の叱咤で山風も正気に戻る。こうなってしまったのなら、次善を尽くすのが海風のためだ。これで処置すら怠ったら、海風は本当に海風で無くなってしまうだろう。それこそ、白露のように。

涙が溢れる眼をグシグシと拭き、きっと強い意志を表情から溢れさせる。自分も壊れるわけにはいかなかった。辛いが、前向きに生きなければ海風のためにならない。

そして、この戦いに新たな参加者が現れた。
「……その繭、誰」
現れたのは、春雨。いつもの駆逐艦を引き連れて、この戦場に現れたのである。

湧き上がる何か

時は少しだけ遡る。

調査隊が施設から出発して少し時間が経過した頃。あちらでは大体、宗谷が三日月型の髪飾りを発見したくらいのタイミング。

春雨達は、いつものように施設のための作業に勤しんでいた。時間としては午前中、例え前日に艦娘達が宿泊していようが関係なく、その日の春雨は毎度お馴染みの農作業に精を出していた。

たまには漁にも行ったりするが、中間棲姫と共に種蒔きから始めた野菜の成長を見るのが楽しみであり、農作業をやるとなった時には真っ先にその様子を見る程に可愛がっている。そのおかげか、農作業をやる比率の方が格段に上がっていた。

「これ、妹達に食べてもらいたいなって思って」

「ふふ、いいわねぇ。育ったらお漬物にして、あの子達に食べてもらえばいいわぁ。きっと喜ぶわねぇ」

中間棲姫も春雨の希望を喜んで聞いていた。せっかく作ったのだから、自分達のみならず、仲間となった艦娘達にも振る舞いたいと考えるのも、優しい春雨ならではである。

依存とは言わないが、春雨は妹達のことをとても大切に思っている。特に今は、危険な未知の海域へ調査に向かっているというのだから、無事に戻ってきてくれることを祈りながら作業を続けていた。

だからだろう、中間棲姫とこんなことを話しながら、突然理由のわからない悪寒に襲われた。

「んぇっ!?」

「ん？　春雨ちゃん、どうかしたかしらぁ」

「い、いえ、なんだかゾクッとして……嫌な予感がしたというか……」

農作業中だというのにこんなことを感じるなんて初めてのことである。ここで生活していても、悪寒なんて感じたことが無かった。ダメな時は発作が起きるため、予感などと言っている余裕がなく精神的に崩れる。

しかし、今回は何かが違った。妹達のことを考えていた時にそれが

起きたのだ。そんな状態で嫌な予感と来たら、どうしても調査隊の動向が気になってしまう。
「……海風達に何かあったのかも……で、でも、こんなの初めてだし、気のせいかもしれないんですけど」
「そうねぇ、心配なら今から追ってみる？　そういう勘って、意外と当たったりするもの。特に、同胞（はらから）なら何かしらの力に目覚めていてもおかしくないのよねぇ」
　中間棲姫の溢れた記憶を読み取る力や、戦艦棲姫の海の記憶を断片的に読み取る力のように、春雨にもそういった特殊な力が芽生えているのかもしれない。
　そうだとしたら、今の悪寒は馬鹿に出来ない。本当に何かあったから起きたモノである可能性が非常に高くなる。
　一種の予知能力のような、意識したものの現状を良いか悪いかで感じ取れるような、そんな力。無いとは一概にも言えない。
「でも、良いんでしょうか。私達と艦娘が一緒にいるところを見られたら……」
「そうかもしれないけれど、妹達が心配なんでしょう？　後悔するくらいなら行った方がいいわぁ。本当に何かあったら、春雨ちゃんは向かわなかったことを絶対後悔するものぉ」
　本来ならやってはいけないことかもしれない。施設がここにあるということを、部外者に知られる心配すらある。
　だが、その施設の主人が良いと言ったのだ。素直に受け入れて、自分の感じた嫌な予感が気のせいであることを証明するべき。
「叢雲ちゃん、春雨ちゃんと一緒に行ってあげてちょうだい。あとは、漁をしてるだろう薄雲ちゃんとジェーナスちゃんにも声をかけていいわぁ」
「はいはい。春雨は独りでいられないものね。私がお守りしておくわ」
「ごめんね叢雲ちゃん。後からおやつ1品増やすからね」
「私のキャラ、何処まで崩せば気が済むのよ。貰うけど」
　その後、すぐに薄雲とジェーナスに声をかけて、施設を飛び出した。

悪寒がただ心配しすぎであったと信じて。

そして、今に至る。ここに到着する前から、叢雲が多数の反応を感知していた。本来いないはずの２人も含めて。

まさかと思ってさらに急いだ結果、そこは大惨事だった。特に、仲間達の中にある黒い繭。仲間の１人が、自分達と同じように感情が溢れ、泥に包まれてしまったことを示している。

「……その繭、誰」

震える声で春雨が尋ねるが、聞かずともわかった。見回すこともなく、この場に海風がいない。そして、黒い繭に山風を筆頭に妹達が群がっている。つまり、そういうことだ。

「……海風姉が……海風姉が……」

強くあると涙を拭った山風だが、春雨の姿を見た瞬間にまた涙が溢れ出てきてしまった。江風や涼風も、心底悔しそうに拳を握り、唇を噛み締めている。

春雨は一言、そうとだけ呟き、黒い繭に寄り添う。これが海風だというのなら、少し時間をかけた後、自分と同じように深海棲艦として孵ることになる。その時に適切な処置をしてあげれば、最低限の艦娘の心は失われないだろう。

しかし、なんの感情が溢れたかは春雨にはわからない。伊４７のように生活に支障が出るレベルのものかもしれないし、ジェーナスのようにトリガーからそのまま死を望むタイプかもしれない。

「……ごめんね海風。私達がもっと早く来れてれば……」

黒い繭に触れながら、その表面に額を付けると、中にいる海風に向かって呟いた。まだ繭になったばかりなら、この声だって届くはずだ。そのためにも頭をなるべく近づけて。

まずは謝罪からだった。悪寒を感じたからここに来ることが出来たのだから、早い遅いは言っていられないのだが、春雨はどうしても申し訳なさが先行した。

もしもっと早く悪寒を感じていたら、海風はこんなことになってい

なかったかもしれない。自分が側にいたら、また違った結末が用意出来たかもしれない。考えてしまうときりが無い。
「海風……同胞(はらから)になっても、私は一緒にいる。大丈夫。心が壊れてしまっても、必ず傍にいるからね。もう、海風と私は一蓮托生でいようね。辛い思いは絶対にさせないから」
春雨も涙目になっていた。この声は届いていないかもしれないが、それでも言わずにはいられなかった。せめて心地よく、深海棲艦へと成れるように。
「ジェーナスちゃん、大丈夫だからね」
「そうよ。アンタのせいじゃないことくらい、誰が見ても明らかだから。自分を嫌う前に、海風をこうしたヤツに怒りを向けなさい」
海風が被害者となったことで、自己嫌悪が溢れ出しそうになったジェーナスに対し、薄雲と叢雲が先んじて対策を取った。
自分が気付けていたら、もっと速く動けたら、治す力を持っていたらと、有る事無い事で自分のせいにしていってしまうジェーナスだが、それはあり得ない。今回に関しては、海風を陥れた者が１００％悪いのだ。
「……誰がやったの」
春雨が山風達に問うた。その時、春雨の足下が小さく波打ったように見えた。
「……アレ……見て。嘘にしか見えないけど……海風姉は……白露姉を見ちゃったから……」
その名前を聞いてビクリと震える。本来ならば、春雨の発作のトリガーとなり得る姉の名前。それがここで出てきてしまった。
この場に現れて、黒い繭しか視界に入っていなかった。敵よりも仲間の状況の方が優先順位が高かったため、他には何も見えていなかった。
「白露……姉さん？」
錆びついた歯車のように重い動きで首を動かし、白露がいるであろう場所を確認する。
そこでは、山風達へ攻撃が届かないように必死に喰らい付いている

島風と、それを嬲るかのように楽しみながら攻撃をしている白露の姿があった。
それと同時に、春雨と一緒に来た叢雲もその姿を目の当たりにする。瞬間、燻っていた怒りが一気に燃え上がった。
「アイツ……私の仇……！」
叢雲が今の姿になったのは、2体の未知の深海棲艦が原因だ。そして片方は片目が輝く重巡洋艦。まさに、今目の前にいる古鷹と白露である。
こうなってしまったら、叢雲はもう止められなかった。そして、誰もその行動を止めやしなかった。未来永劫燻り続ける怒りの原因を作り出した仇に対して、攻撃するなと言う方が無理がある。
むしろ、やってしまえと言わんばかりに後押しした。ここで怒りが発散出来れば、叢雲はさらに楽しく生きることが出来るだろう。
それが、元々鎮守府にいた仲間であり、友人である春雨の実の姉であろうとも。
「うおっと!?　艦娘の次は同胞(はらから)まで来ちゃった!?」
叢雲の突撃を受けても、まだ余裕を持っている白露。島風と拮抗しているように見えていたが、1人増えてもその態度は崩れない。
屈指の力を持つ島風すらも、赤子の手を捻るようなものなのだろう。それなのにすぐに終わらせないのは、島風の実力が普通以上であることもあるが、白露がこの戦いを愉しもうとしているからに他ならない。今まで出会ってきた駆逐艦の中でもトップクラスの実力者を弄ぶことに、加虐の悦びを得ているようである。
古鷹としては慢心するなと思いつつも、心を折って溢れさせるには有効なのではと止めることもしなかった。島風のようなタイプは、どれだけやっても敵わないと感じさせることが、一番わかりやすく感情を溢れさせると信じて。
島風はこれまで個人プレイで白露の攻撃を引き付けてきたが、叢雲が乱入したことでチームプレイに移る。
前に前にと向かっていたのを、叢雲をバックアップするように一歩下がり、的確な砲撃へとスタイルを変更。

「会いたかったわよ、アンタに！」
「んん？　何処かで見たことあるっけ？」
「アンタに殺された駆逐艦の1人よ！」
「覚えてないなぁ」
　ここまで来る経緯でピンと来るような相手――今の島風のような――は記憶に残っているかもしれないが、叢雲は捨て駒にされてあっという間に沈められている。そのせいで、白露の記憶の端にすら残っていなかった。
　どうせそうだろうと踏んでいたため、それに対して怒りは沸かない。だが、その存在がここに在ることが一番の怒り。
「別に覚えてなくていいわよ。どうせアンタはここで死ぬんだから！」
「あっはは、それは無いね。だって、アンタどう見てもあたしよりレベル低いでしょ。古鷹さん風に言うなら、格下だね」
　振り回される槍を軽々避けた後、その額に向けて主砲を突きつけ、間髪容れずにトリガーを引く。だが、今の叢雲はその程度ではやられない。眼前で撃たれても回避出来るだけのスピードを手に入れている。
　もう艦娘の時とは違う。その時から比べれば、数倍の力を得ている。あの時は手も足も出ずに抗うことすら出来ずに殺されたが、今はそんなことにはならない。
「へぇ、やるじゃん。格下は訂正しようかな。あたしはそういう理解は早いので。でも、あたしには勝てないよ。その程度じゃあさぁ！」
　突然スピードが上がった。抜いていた手を入れ直したように、ギアが上がったかのように、叢雲の槍を弾き飛ばす。
　それを手から離すようなことはしなかったものの、その衝撃でよろめいてしまった。
「愉しませてよ、もっとさぁ！」
「叢雲！」
　そこに即座に島風の操る連装砲ちゃんが飛び込む。砲撃をしながらの体当たりを仕掛けたことで、白露は嫌でもその場から離れる必要

が出てくる。そのおかげで、叢雲への追撃は防ぐことが出来た。
「ったく、邪魔だなぁホントに。でも、そろそろあたしも本気出しちゃおっかな。持っていきたいけど、やっぱり瀕死にまでは持っていかなくちゃだし。どうせ皆殺しなんだから、心叩き折っちゃえば勝手にこっちに来てくれるでしょ」
ニチャリとした笑みを浮かべて、叢雲と島風を見下す白露。
「私達は折れないよ！　叢雲、組んで戦おう！」
「ちっ、仕方ないわね。私はコイツを沈められればどうでもいいわ。手段なんて選んでられない。島風、足引っ張んないでよ！」
「おうっ！　任せてよね。心を入れ替えた私は、チームプレイも得意になってるんだから！」
まだまだ折れる気配などない。島風は常に前向きだ。叢雲も溢れる怒りに身を任せつつ、その根源となる白露に向けての怒りのみに集中することで、冷静さを手に入れていた。

叢雲と島風が組んで戦う白露を見て、春雨は絶句していた。あれは自分の知っている姉であることが嫌というほどにわかった。
性格はあの時とは似ても似つかない。しかし、その戦い方は、自分が必死に食らいつき、共に戦えるようになっていた姉そのものだった。
しかし、違和感を覚えるようなところもあった。白露のようで白露ではない。そんな感覚もある。
あの白露は、止めなければならない。これ以上の暴虐は、許してはおけない。
「……海風、あとは私達に任せて。海風のためにも、私が……私が姉さんに……」
最後に海風の入っている黒い繭に抱きつくように身を寄せ、頭がありそうな場所に小さくキスをする。

「引導を渡してくる」
空気が騒めいた。

姉との決別

「新しく同胞(はらから)が来たみたいですが、貴女方のお仲間なんですか？」
春雨達がこの戦場に到着した時、古鷹はまだ余裕そうに金剛と比叡を相手取っていた。
戦艦が２人がかりで激しい砲撃を繰り広げているというのに、涼しい顔をしてヒラリヒラリと躱し、お返しと言わんばかりに強烈な一撃を撃ち続けている。
それでも手を抜いているのは丸わかりであり、こちらも金剛と比叡の心を折りに来ているのがわかった。必死にやらせるだけやらせて、それでも敵わないことを知らしめ、そこから全力で叩き潰すことで、瀕死にしながらも心を折って感情を溢れさせる算段だ。
溢れる感情なんて何だっていい。怒りでも、悲しみでも、無力感でも、自己嫌悪でも。それが何であれ、溢れて同胞(はらから)とさえなればどうとでもなるようである。
「Ｙｅｓ．　あの子達は私達の仲間デス」
「種族の差なんて、関係ないですからね！」
４人の仲間達がここに参戦したことで、金剛と比叡は俄然やる気を出していく。心が折れるなんて到底有り得ない。
特に春雨がここまで出張ってきてくれたのだ。元々の仲間の前で、無様な姿は見せられない。
「そうですか、そうですか。なら、どれほどの実力なのか見せてもらいましょう。手を抜くわけにはいきませんね」
「Ｈｅｙ，　私達はどうでもいいと？」
「いえ、そういうわけではないですよ。ただ、こちらも一応チームなので」
余裕は一切崩さない。当然金剛達相手でも慢心はせず、確実に心を折ろうとしている。故に、相手側に増援が来ようが、態度はそのままにその場で声を張る。
「白露さん！　持っていくのはどっちでもいいです！　全力で相手してあげなさい！　好きにしていいです！」

この古鷹の言葉に、待ってましたと言わんばかりに顔を歪め、その場でチームを組んだ島風と叢雲を睨みつけた。
今までは島風が欲しいということで加減をしていたが、そう言われては仕方がない。そもそもそろそろ本気を出してやろうと考えていたくらいだ。いたぶり続けるところから、一方的な虐殺へとシフトしていいという指示を受けたようなもの。
「だってさ。さっきも言った通り、本気出しちゃうよ。ここから生かして帰さない。そっちの同胞(はらから)は、私がぶっ殺しちゃったんだよね。じゃあ、二度目になるけどいいよね？」
「誰がやられるか。死ぬのはアンタよ！」
と言った瞬間だった。叢雲も島風も相当素早い方だが、白露はそれに輪をかけて速かった。自らの真後ろに爆発したかのような水飛沫を撒き散らせる程の踏み込みで突撃し、一瞬で間合いを詰めた。
主砲を持っているのに、やたら接近戦を仕掛けてくるのは、その方が相手に恐怖を与えるからである。撃っても当たらず、圧倒的な力を見せつけるために眼前まで近付き、確実に当たるところからの砲撃。力を持たない者ならば、これで心が折れてもおかしくはない。
「近付くな！」
叢雲はそんな白露の特性を理解し、間合いを取るためにも槍を振るう。既にその距離からの砲撃だって相当危険なのだが、ゼロ距離に近付かれるよりはマシ。
しかし、それすらも見透かされて寸前でブレーキを掛けられ、直後に魚雷を放たれた。その爆発力は砲撃の比ではない。まともに喰らえば、どんな相手でも致命傷になりかねない威力を誇る。
「近付かなーい。自分だけで爆発してなよ」
「させるわけないでしょ！　叢雲、助ける！」
その魚雷は、島風の砲撃により事前に破壊。今の隙に白露自身に攻撃をするという選択肢もあったのだが、島風の中にそれを選択する思考は存在しない。仲間である叢雲が無事であることが最優先。
「いい仕事するわね！　アンタは信用してあげるわ！」
その破壊による爆発を貫くように槍を突き出し、白露の喉に一撃を

決めようとする。だが、その時には白露は大きく飛び退いており、叢雲に向けて主砲を構えていた。
「馴れ合ってるヤツらがそういうことするなんて予想出来るに決まってんでしょ。水飛沫に突っ込むことなんてお見通し。んで、足を取られて簡単には避けられない。怒り任せに動いちゃって、ホントお馬鹿さんだねぇ！」
白露の言う通り、叢雲は殆ど怒りに任せたことで、真正面から突っ込むという選択肢を優先的に取ってしまう。それ故に動きがあまりにもわかりやすく、読まれてしまっていた。
とはいえ、叢雲だって力を増している。その危機を瞬時に判断し、水飛沫を強引に振り払って、白露の思い通りにはならないようにする。元より叢雲もスピードには自信がある方だ。それだけの隙が出来れば、その場から抜けられるだろう。
「おっと逃がさないよ」
「ダメですよ、白露姉さん」
そこに乱入するのが、決意をした春雨。その主砲に狙いを定めて放たれた春雨の砲撃は、見事に命中し、木っ端微塵にした。その衝撃で白露の手もダメージを受けるかと思いきや、寸前で手放したようで、残念ながら無傷である。とはいえ、放つ瞬間に撃ち抜かれたおかげで、叢雲も無傷で済んだ。
春雨もちゃんと仲間のことを優先して行動が出来ている。しかし、その表情は深海棲艦化してからはともかく、艦娘の時代にもしたことがなかったような、冷酷なモノ。
邪魔をしたモノの方に頭を向けた白露だったが、その姿を見て大袈裟に驚きながら満面の笑みを浮かべる。
「あれ、もしかして春雨？　わぁ、見違えたねぇ。ちっちゃくなった？
あの後逃げきれずにのたれ死んだと思ってたけど、まさか同胞（はらから）になってるだなんて！」
「私も驚いてます。姉さんは私の目の前で沈んだと思っていたんですが」
「いやぁ、運が良かったのかな。あの後にこの身体になっててねぇ。

今は古鷹さんと一緒にいろんなところで遊んでるところ」
引導を渡すという決意はしたものの、面と向かって話してみなければわからないこともある。それを知るために、まずはただ話した。
そんな春雨に叢雲は邪魔をするなと文句を言おうとしたのだが、その背中から殺気のような気配を感じ取り、思わず口を噤んだ。元々春雨に対しては何処かマウントを取られることが多いのだが、今回はわけが違った。
怒りが燃え上がる自分とは違う、恐ろしく静かな怒りが、春雨からは感じ取れた。怒りに呑まれているからこそ、他人の怒りもわかった。
「遊んでる、ですか」
「そうだよ。艦娘を襲うの、楽しいんだよねぇ。あたしさ、この姿になってから、艦娘なんかの時よりもすっごく強くなっちゃって。適当な艦娘くらいなら片手で捻れるくらいになっちゃった。で、本当に捻ってみたら、それはもう気持ちよくて」
意気揚々と侵略と虐殺を武勇伝のように語る白露に、春雨はそろそろ限界だった。
「もういいです。話さないでください」
「んん？　何か気に障ったかな。春雨だってわかるでしょ。この身体、力が漲るじゃん。それに、深海棲艦は人間や艦娘を襲うモノでしょ。何艦娘とつるんでるのさ。そこのヤツは、なんかあたしが殺しちゃったから恨みくらい持ってても仕方ないかなーって思うけど、春雨はあたしの妹なんだし、仲良く出来るんじゃ」
「出来ません。もう、姉さんは姉さんじゃ無くなってます。死んだことで狂ってしまった」
辛いが、涙は流れなかった。怒りがどんどん燃え上がるが、逆に頭の中は冷めきっていた。身体は熱く、頭は冷たい。
あの憧れていた姉達は、やはりあの時あの場所で全員死んだのだ。目の前にいる姉は、姉の見た目と記憶を持った別物。艦娘の時に頑張って追い付こうとした姉ではない、ただの侵略者。人類の敵であり、平和を脅かすモノ。

「じゃあ何？　どうすんの？」
「引導を渡します」
ただ冷静に、感情すら無い口調で、白露に意志を叩きつけた。その顔も、殆ど無表情だった。
脚が無いために見上げるようなカタチであり、白露は自然と見下すことになる。それだけでも白露は春雨のことを少しなめていた。
そして、白露は艦娘だった時から春雨のことを知っている。どのように戦ってきたのかも、どれだけの実力だったかも、全て覚えている。
「春雨が、あたしに？　あっははは！　冗談キツいよ。いっつも後ろからついてきてたサポート専門のアンタが、あたしに引導を渡す？　寝言過ぎない？」
完全に馬鹿にしていた。これを慢心と言わず、何を慢心と言おうか。
過去を知っているからこそ、その実力を見誤る。春雨だって、黒い繭を経由して生まれ変わった深海棲艦。力は増しているというのに。
「そんなことを言っちゃう悪い子は、先にお仕置きしないとねぇ！」
叢雲も島風ももう視界に入っていなかった。目の前の変わり果てた妹に対しての興味しか無かった。
過去そんなことを言ったことが無いくらいに大人しく、姉の後ろからまず前に出てこない、性格としても控えめな妹。極端な話、ＭＶＰなども取ったことがない完全なサポート役。それでも懸命に努力して、４人の姉が戦いやすいように戦場を駆け回り、最高の場を提供し続けた縁の下の力持ち。
今の白露は、春雨と戦っていた記憶はあれど、その辺りの感情が壊れていた。侵略者気質に目覚めてしまったことで、その時の春雨が何故姉達に追い付けたのかを理解出来なくなっていた。
艦娘だった頃の白露なら、春雨の真なる実力をしっかりと把握した上で、一緒に戦い続けていただろう。ここでもこんな慢心はしない。心が壊れたことが、力の強さを引き出すと共に、心の弱さも引き出してしまっていた。
「お仕置き、ですか。本当に白露姉さんはいなくなってしまったんで

すね」
先程の叢雲相手にもやった、爆発的な踏み込みからの突撃で、春雨のゼロ距離へと接近した白露。身長差も出来てしまったことで、踏み潰してやると言わんばかりに。
だが、春雨はそれを冷静に見ていた。怒りに呑まれつつある中で、しかし頭は冷めきっていたおかげで、その力は最高潮に達している。
「だから、そんな単調な動きしか出来ない」
逆に春雨からも突っ込む。脚が無い分、その頭は白露の腹の辺りになっているため、その間合いの詰め方はタイミングを狂わせるのに充分だった。
普段の虐殺ならば、突撃するだけで艦娘達は怯み、一歩以上下がろうとするのが常。いくら攻撃力の高い戦艦でも、近接攻撃なんて簡単にはやれない。駆逐艦なら尚更だ。
しかし、春雨は違った。まるでその戦い方を知っているかのように突撃を敢行。殆ど同じタイミングでの突撃のため、嫌でも衝突しそうになる。
「うぉっとぉ!? そこで前に出てくるなんて、度胸あんじゃん!」
「おかげさまで。これは夕立姉さんの教えです」
獰猛でやんちゃな四女夕立。何があっても退かず、常に前のめりで戦場に向かう姿に、春雨は憧れた。
「だけどぉ! それだけじゃあたしにゃあ勝てないでしょ!」
「わかってます」
ほぼゼロ距離で主砲を構えられた瞬間、まるで踊るようにクルクルと回りながら白露の真横に避ける。速さは変わらず、まるで惑わすように。
「村雨姉さんは言いました。搦め手も大事だと。白露姉さんと夕立姉さんが真っ直ぐ行きすぎるから、少し小狡い手も使わなくちゃって」
ムードメーカーな三女村雨。正面からだけでなく、その場の状況を見定めた搦め手を使う器用さに、春雨は憧れた。
「たかがその程度でぇ!」
殆ど真横にまで移動されたにもかかわらず、即座に反応して春雨の

顔面に主砲を突きつけようとする。しかし、その時には春雨はさらに移動しており、その砲撃がかすめる程度に後ろへ。
その時の最善手は、強引に突撃したと見せかけてゼロ距離砲撃を誘発させ、隙を作ること。相手を押し潰すことに快感を覚えている白露は、その手段を使ってくるとすぐにわかった。
「どんな状況でも、冷静さは失うなと、時雨姉さんは話してくれました。みんなが熱くなりやすいから、自分だけでも冷たくいるんだと」
冷静沈着な次女時雨。常に状況を見続け、その時その時の最善手を掴み取るその頭脳に、春雨は憧れた。
「普通の艦娘なら、それだけで全部どうにか出来たんでしょう。こうなる前の私も、こんなに避けられることは無かったかもしれません。でも、今は違うんです。今の私は、今までの中でもいっちばーんに強い！」
そして、それを束ねる長女白露。常に前向きに一番を目指し続けるひたむきさと、その純粋な心に、春雨は憧れた。
その姉達は、白露は、この世にはもういない。壊れてしまって、元には戻らない。ならば、自分の手でケリをつける。引導を渡して、因縁と決別する。忘れるわけでは無いが、追いすがることもない。
姉がいないことへの寂しさは、もう感じない。発作のトリガーは引かれない。自分からそれを過去にし、記憶の中で眠らせる。
「なめんなぁ！」
だが、白露はそんなに簡単には終わらない。伊達に今まで虐殺を繰り返してきたわけではないし、深海棲艦化により艦娘の時からは格段に力を増している。

お互いに主砲を突き付けあい、そして引き金を引いた。

白露の謎

姉としての白露はもうおらず、ここにいるのはただの侵略者であると理解した春雨は、引導を渡すために相対する。今までの姉の教え、憧れを胸に、暴虐の使徒と化した白露と接戦を繰り広げ、最終的にお互いに主砲を突き付けあい、そして引き金を引いた。

「つく……!?」

「だぁっ!?」

撃った直後に回避行動を取ることは至難の技なのだが、2人とも深海棲艦化によってスピード以外に動体視力も異常に上がっているため、それによりある程度の至近距離でも致命傷を避けることは出来ていた。

白露は一撃で決めるために春雨の頭を狙っていた。対する春雨は、どうしてもそれだけは出来ずに腹を狙っていた。それは、お互いにそうしてくるだろうと予想もついていたため、撃たれてからでも回避の方向を選択出来た。

互いに砲撃を掠めることになり、春雨は耳を、白露は脇腹が抉られることになる。しかし、傷自体はどちらも浅い。春雨は片耳の鼓膜までやられてしまったために小さくふらつく。

「やるじゃんさぁ、春雨ぇ!」

撃たれたというのに、一切怯んでいない。むしろ、妹との戦いを楽しむように、狂気を含んだ笑みを絶やさない。回避はしても後退はしない。

「今の姉さんに褒められても、全く嬉しくないですよ」

春雨も耳を削がれたにもかかわらず、冷静なのは変わらなかった。むしろ、頭に近いところから血を流したことで、怒りによって昇っていた血が抜けてより冷静になれている。

元々が静かな怒りであるため、頭の回転は疎かにはなっていない。それがより冷たくなっていく。むしろ、冴えていくくらいである。

「もっと、もっともっと、愉しませてよねぇ!」

腹からの血を感じていないかのように、さらに突撃してくる。その

速さは、先程からさらに上がっていた。
白露はこの場で成長していた。獰猛に、戦う愉しさだけを求めて。もう殆ど狂犬である。狂犬は白露ではなく、四女夕立の代名詞だというのに。
「お断りします。長々と付き合いたくありません」
もう記憶の中にしかいない姉の言葉を何度も反芻しながら、白露との対峙を的確に進めていった。
単純明快だが、その勢いによって強引に押し倒してくる白露には、村雨から学んだ搦め手が一番効くだろう。艦娘の時から、あまり頭を使う作戦は立てず、頭脳戦は時雨に任せっきりだった白露だ。そういう本質は全く変わっていない。
これまではその勢いだけでも充分に戦えてきたのだろうが、春雨にはそんなものは効かない。
「まるで闘牛ですね。突っ込むことしか脳がないんですか」
「何をぉ？」
「今までは自分より格下しか襲ってこなかったんでしょう。だからそんな拙い戦術でもやってこれたんですね。勝てる相手にしか手を出さずに、粋がっているだけの小物じゃないですか」
強い言葉で白露を挑発。これも村雨から学んだ搦め手の一種である。
相手がヒトの言葉を理解出来る相手ならば、口撃により乱すことも戦術の1つであると。深海棲艦相手にはなかなか効かないのだが、手段として覚えておくといいと冗談交じりに話していたのを思い出す。
それを今こんな時に使うことになるなんて、考えてもみなかった。しかも、相手はその話をしている現場にいた白露である。
「あっはは、春雨ぇ、そういうの似合わないよ。それ、村雨に聞いてた口八丁手八丁で相手の心揺さぶるって戦術でしょ。他の連中ならともかく、あたしは昔のアンタを知ってるんだから、それがそういうものってことはわかってんの」
しかし、効かず。やはり、間接的な攻撃は、事前に知られていると効果が薄すぎる。ただでさえ優しい性格だった春雨がこんな物言い

をするのは違和感しかない。いくら深海棲艦化していても、本質は変わっていないのだから。
姉というだけで若干不利なのはもう仕方ないことだ。お互いの手の内を知り尽くしているのが元々の仲間であり姉妹というもの。
「でも、気分がいいモノじゃないよ」
流れるように主砲を放つ。その際に砲撃の威力で脇腹から血を流すがお構いなし。ダメージを受けたからと言って、撤退するという選択肢は出てきていなかった。
それは春雨も同じ。片耳は殆ど聞こえなくなってしまったが、この程度のダメージで姉に引導を渡すことを後回しにするわけにはいかない。
目的が快楽犯的なモノならば、こんな同胞(はらから)を野放しにしていてはダメだ。戦艦棲姫にまで手を出しているのだから、本当に手がつけられない。だから、ここで終わらせる。過去と決別し、ケジメをつけるために。
「無理するんじゃなかったですよ」
これは本音。怒りに身を任せているとしても、それが事実だとしても、やはり揺さぶるための悪口なんて性に合わない。心の中でその戦い方を教えてくれた村雨に感謝と謝罪を述べつつ、今度は正攻法で白露を迎え撃つ。
砲撃は回避出来るため、無い脚でステップを踏みながら、徐々に近付いていく。優雅に踊るように、だが確実な殺意を表に出しながら。
深海棲艦化しても、白露の砲撃のクセは艦娘の頃から変わらない。正面から見ることなんてあまり無かったが、それでも、どのように撃ってくるかは、ずっと背を追い続けてきた春雨には手に取るようにわかった。それでも至近距離過ぎると避けることが出来ないのだから、元々の技術が凄まじいと感じる。
「ほらほら、最初の勢いはどうしたのさ!」
砲撃に加えて魚雷も入り混ぜてきた。ただでさえ体勢が低い春雨には、雷撃そのものが危険極まりない。脚だけで済むものが、一撃で命を奪ってくる必殺の武器になってしまっている。

そもそも当たる気が無いにしても、魚影のように向かってくる恐怖は、他の追随を許さない。
そして、今の春雨にはもっと危ないことがあった。
艦娘達は敵の雷撃をジャンプして飛び越えるという芸当をやってのける。そうした時に空中という最も無防備な状態になるため、余程危険な時にしかやらないのだが、緊急回避としては常套手段になっており、大概の艦娘は演習などを通してそれを学んでいる。
しかし、今の春雨には脚が無いので、ジャンプが出来ない。魚雷は砲撃よりも危険度が非常に高いのである。砲撃の回避先に魚雷を置いてこられたら、緊急回避も出来ない春雨には致命的。
「……っ」
代わりに、海面に視界が近いためにその場所、その進行方向はよくわかる。白露に対しての砲撃は、一時的に魚雷の対処のために使われるようになった。
目の前で次々と爆発する魚雷で視界を塞がれるが、それ以上に素早く動くことですぐに視界が晴れた場所へと移動し、白露から視線を外さないように努める。
砲撃と同じように、魚雷の放ち方にもクセは存在する。むしろ、砲撃よりもわかりやすい。使用した者への反動が砲撃よりも強く、力む場所などが変わってくるのだ。
白露にだってその辺りは強めのクセがある。そして、それを見続けてきた春雨には、すぐにわかる。
——はずだった。
「えっ」
ここで初めて、白露の戦い方に違和感を覚えた。思っていたクセと違う。砲撃はさておき、魚雷はどちらかといえば雑に扱うのが白露の特徴。狙いを定めるのではなく、砲撃を確実に決めるための手段として使う。
しかし、今の白露の雷撃は、それでトドメを刺すために放たれている。精度も白露のそれとは違った。まるで、全ての攻撃を精密に繰り出す次女時雨のような。

「隙ありぃ！」
一瞬考えてしまったのを白露に看破され、その瞬間に砲撃でも雷撃でもなく、錨が飛んできた。
白露の艤装から伸びた鎖が左腕に巻き付き、さらにその先端に備え付けられた錨。今までそんな装備は無かったのに、魚雷の爆発に隠れて生成していたようである。
「当たりませんよそんなもの」
その錨は砲撃で弾き飛ばして冷静に対処するが、内心では疑問が次々と出てくる。白露は鎖に繋いだ錨なんて使わない。使ったことがない。
それを道具として使っていた者といえば、搦め手として艦娘とは思えない手段を使う三女村雨。改装によって手に入れたそれを、時には攻撃に、時には拘束にと、器用に使いこなしていた。
当然それを使っている村雨を見続けていたのだから、春雨はそれの対処方法だって知っている。突然使われるから動揺するのだが、今の動体視力なら、知っているから処理出来る。
「っはぁっ！」
しかし、その錨を囮にするように、さらに自ら突っ込んで来ていた。その時には錨も消えており、勢いを殺すことすらない。
「っ……」
「もう片方の耳も潰してあげるよ！」
撃てばいいものを、勢い任せに強烈な蹴りを繰り出してきた。こんな強引な戦い方、獰猛な四女夕立くらいしかやらない。常に前のめりで、恐怖すら感じていなかったようにも見えた彼女は、どれだけ強い敵に対しても鉄砲玉のように突っ込んで、時には格闘戦まで繰り広げた。それを白露が説教する場面もよく覚えている。
そして、春雨はそれを見続けている。対処の方法は勿論理解している。格闘には格闘。春雨は徒手空拳は苦手ではあるものの、やらないよりはマシと、主砲を持つ腕でその脚を強引に食い止める。
「あっははは！」
だが、滅茶苦茶なことに、本来なら放っているであろう魚雷を手に

持っていた。やはり、この至近距離にいるというのに主砲を撃とうとしない。即殺せばいいのにそうしないのは、いたぶるのを楽しむ猟奇的な性格に変わってしまったからこそだろう。それが慢心に繋がるのだろうが。

「ほらほらぁ！」

そして、その魚雷で殴りつける。わざわざ殴るために信管が抜かれているのか、直撃しても爆発することはない。

「つぎ……っ!?」

その殴りつけは、春雨のもう片方の耳に直撃。だが、肉を斬らせて骨を断つかの如く、返しに白露の肩を撃ち抜く。

ここで倒れないのは白露の戦い方だ。どれだけ傷付こうとも、一番を目指し続けて前向きに突き進むその姿勢。それを体現するために、どれだけ攻撃されても下がらない。

「つだぁっ……!?」

撃ち抜く瞬間に姿勢を崩したか、肩の一部を削ぐ程度に終わった。そして、腹からの血もより強く流れるようになり、白露もふらつく。

だが、狂気の笑みはそのまま。この命をかけた姉妹喧嘩を楽しむように、気分が昂揚し続ける。そのせいで流れる血は勢いを止めないのだが、白露はどこ吹く風である。

白露と戦っているのに、別人と戦っているような感覚に陥ったことで、若干調子を崩しかけたが、まだまだ冷えていく思考回路で分析を続けていた。もう片方の耳をやられたことで、そちらも鼓膜に傷がつき、もう殆ど音が聞こえない。白露が何を言っていても、詳細が聞こえない。

故に、この感覚に没入出来た。五感の1つが封じられたことで、他の感覚が鋭敏になる。春雨の場合、鋭くなったのは五感のどれでもなく、第六感だった。

「……4人分……？」

そして、答えに辿り着いた。白露は、死んだ姉4人分の力を使っている。本来の白露が持つ統率する力により、時雨の持つ精密な攻撃、村雨の持つ搦め手、夕立の持つ格闘戦、その全てを自分の力のように

使う。
何故そんなことが出来るのかはわからない。艦娘の時にそんなことしていなかったし、出来なかった。聞こうにも教えてくれないだろうし、教えてくれたとしても聞こえない。
春雨が姉達の教えを見続けてきたことで再現しているように、白露もどういうわけか再現出来ている。結果として、２人は同じ土俵に立っていることになった。
そうなると、最終的には根本的な力の差になる。そこはおそらく互角。同じ時期に深海棲艦と化しているのは間違いない。白露は今の今まで侵略と虐殺というカタチで経験値を積んでいる分、戦いに慣れているという意味では軍配が上がる。
最初は春雨のことをなめていたために後れを取りそうになったが、今は違った。真剣とも言えないが、なめてはいない。春雨のことを敵として認識した上で全力で叩き潰そうとしている。
「まだまだ終わらないでしょ！　春雨ぇ！」
白露は止まらない。どれだけ血を流そうとも、その勢いは落ちることはない。敗北していないのだから、引き下がることはない。
「まだ、まだ……！」
春雨も同じだ。この白露を止めなくてはいけない。その使命感と、壊れた姉を眠らせるために、引き下がることはない。

多くの血を流しながら、戦いは続く。

一歩先へ

深海棲艦と化した白露との戦いは佳境へと向かっていく。度重なる攻撃により聴覚を失ってしまった春雨だったが、そのおかげか、第六感が研ぎ澄まされることになった。

それにより、白露には４人分の力があるのではないかと感じ取った。本来使えないはずの妹達の特徴まで発揮してきたからだ。直感に過ぎないのだが、今の白露の中に残りの３人も含まれているのではと。

「すごい違和感……白露姉さんだけなのに、４人と戦ってるみたい……っ」

時には精密な攻撃、時には格闘戦、さらに搦め手まで絡めて猛攻を仕掛けてくる白露は、入れ替わりながら戦っているのではとさえ思える。実際は白露が全てをコントロールしているようだが、それだけ使いこなせているということに他ならない。ほとんど本人である。

「何をぶつくさ言ってんのかなぁ！」

春雨にその声が届いていないことには気付かず、挑発じみた言葉を投げかけながら猛攻は続いた。

白露も肩と脇腹を抉られており、攻撃するたびに血が飛び散るくらいになっているのだが、本人は消耗しているようには見えないくらいにイキイキと、実の妹をこの場で殺すために動きを止めない。むしろ、勢いは増す一方である。

対する春雨も、その動きは鋭さを増していく。その全ての攻撃を紙一重で躱していき、時には夕立の如く大胆に、時には村雨の如く惑わしてと、白露ほどではないが、姉達の教えを忠実に再現しながら白露と互角に立ち回る。

勿論、潰された耳からの血は増える一方だ。脳に近い分、出血量も多く、あまり長々と戦っていたら白露よりも先に貧血に陥ってしまうかもしれない。

「最初にアレだけ宣(のたま)っておいて、今更泣いて謝っても許さないよ！アンタがあたしの妹だろうが、敵なんだから死んでもらわないとねぇ

！」
ここまで壊れているのなら、もう取り返しがつかない。妹だからといっても温情はかけず、殺害対象として嬉々として戦うその姿は、もう既にただの狂人とすら言えた。
そんなカタチでいっちばーんになっても意味がないだろうと、春雨は内心思う。一番狂ってるだなんて、全く褒められたものではない。
「そんな巫山戯た姉さんは、もう見ていたくありませんよ」
ここまで相対してきて、今の白露のクセはおおよそ見当がついていた。やはり、なんだかんだあっても艦娘のときのそれは抜けていない。そこに、白露以外の姉３人分まで加わっているのみ。
ならば、どのタイミングで入れ替わるその時その時で対処が出来る。長所もあれば、短所もあるのだ。ここまで来て、第六感が研ぎ澄まされるからこそ、直感的にそのタイミングがわかるようになった。
あくまでも感覚的なところだ。目に見えて変化があるわけでもなく、戦い方が変わる合図があるわけでもない。微妙にクセが変わる。その瞬間を見切る。
「見ていたくないのならっ、今度は目でも潰してあげるよ！」
聴覚については気付いてなくても、両耳をやられているのは見てわかる。故に、次はコイツで目を抉ってやると言わんばかりに、その手には魚雷が握られていた。
耳を片方潰したモノと同じように信管が抜かれた打撃専門のそれを、相変わらずの突撃からの格闘で、即座にゼロ距離まで詰めてくる。
春雨はそうしようとして瞬間が何となくだがわかった。動体視力などでどうにかしたわけではない。なんとなく、これが来るというのが読めた。これが研ぎ澄まされた第六感。
「させない……」
狙ってくるのが顔面だったこともあり、さらに体勢を低くすることで完全に避ける。だが、ゼロ距離であることは変わらない。そのまま真下に振り下ろされたら、相当なダメージになってしまう。
それを防ぐため、伏せた瞬間に前へ。前のめりな姉の行動を参考にした低い姿勢のタックルで、白露の腹へまともに体当たりを決める。

そんなことではダメージにすらならないかもしれないが、姿勢が低いためにバランスを崩すことは可能。
「っこの！」
それを読んでいるわけでは無かったが、白露はその体当たりを強引に受け止める。小さくバランスを崩したものの、春雨の動きを完全に止めることに成功してしまった。
こうなってしまったら、もう狙われるしかない。主砲だろうが錨だろうが魚雷だろうが、やりたい放題である。
「つーかまえたー！」
ここで、春雨は機転を利かせる。今ここで、春雨にしか出来ないことをやってのける。
艦娘のときの春雨の行動は、白露にも筒抜けである可能性はあった。しかし、深海棲艦としての春雨の行動は、初めての時だけは確実に効く。
「もっと……先へ！」
この短時間とはいえ、戦闘中は今の姿――脚が無い状態でしか戦いをしていない。故に、白露も狙いを普通より少し下げて対応してきている。深海棲艦の春雨とはこういうものなのだと見せつけていた。だからこそ、突然脚を生やせば完全なる不意打ちとして機能する。
今いる場所からさらに先へ進むように、脚を生成して前に踏み出した。脚を生やした状態での海上移動はバランスが取れなくなってしまっているが、ただ海面を蹴るだけならば問題ない。
文字通り、一歩踏み出した。白露が春雨の動きを止めることに成功し、ほんの少しだけ、普通ならわからない程度に気を抜いた一瞬を突いて、ドンピシャのタイミングで腹に一撃。
「っがっ!?」
拘束しようとしても、その一歩は大きな衝撃だったために、白露は吹っ飛ばされる羽目になる。押さえ付けられた状態で、さらに押し出されたのだから、内臓が揺さぶられるのは当然のこと。それが艤装的な脚での踏み込みならば尚更だ。普通なら吐くほどの一撃。
そして、これにより白露が一瞬浮いた。ついに無防備な瞬間が作れ

た。ここからさらに追撃をすれば、眠らせることが出来るだろう。
しかし。
「っあっ」
血を流しすぎた春雨にも限界が訪れる。今の強引な踏み込み、さらには体当たりのような身体を普通以上に使うようなことをしたので、耳からの流れる血がより多くなってしまった。
結果、白露よりも早く貧血を起こしてしまった。冷め切っていた思考回路が、急激にボヤけ、まともに照準が定められなくなった。しかし、撃たないわけにはいかないため、震える腕で無理矢理砲撃。
「ぎぃっ!?」
確実に眠らせるために胸を狙ったはずなのだが、やはり狙いがズレてしまった。それでもすっぽ抜けるようなことはなく、片脚の腿を削ぐカタチに。これにより白露の出血量も増え、同じ状態に陥った。敵意も殺意も溢れんばかりなのに、血の流しすぎで身体がまともに動かない。
しかし、それを追撃することはままならなかった。春雨ももう身体がまともに動いてくれない状態。脚を消してもバランスを取ることが難しいくらいに消耗し、意識を保っているのが精一杯である。
「っの……春雨ぇ!」
脚をやられたことで立ち上がることが難しくなった白露が、狂気も余裕も無くなった形相で春雨を睨み付ける。白露も怒りに呑みこまれ、春雨への殺意のみでここにいた。
お互いに、主砲を構えようにも力が入らず、腕すら上がらない。これ以上の戦いは不可能である。
「春雨、もうやめときなさい。これ以上動いたら本気で危ないわ」
ここでようやく、この戦いを見守っていた叢雲が春雨に駆け寄った。春雨の怒りを理解し、この戦いは春雨にやらせてやらなくてはいけないと判断していたが、これはもう戦いも終わったようなもの。
叢雲だって怒りが限界に達しており、春雨がボロボロにした白露の命をこの手で奪いたいと思っていた。だが、春雨のことを考えると、やるだけやった後で自分が手柄を奪うようなマネは、最も愚かな行為

であるとも理解している。それだけ今は怒りを制御出来ていた。春雨の怒りに当てられたからかもしれない。

だが、春雨は叢雲の声が聞こえていない。聴覚を失っているため、駆け寄ってこられても気にせずに白露に対して攻撃の意志を示し続ける。ここで終わらせるのだという気持ちだけで意識を残しており、気が抜けたらすぐに気を失ってしまうくらいの消耗。

「それはこっちのセリフでもあるんですよね」

そして、白露の方には古鷹が。今まで戦い続けていたはずの金剛達は、古鷹の猛攻により一気に消耗させられており、死にはしていないものの追いかけることもままならなくなっていた。

白露よりも格段に上の力を持っている古鷹は、まだまだ余裕を持ったままである。金剛達は全力で立ち向かってギリギリ拮抗を保ったが、古鷹が全力を出していないこともわかっていた。とは言っても手を抜いているわけではなく、金剛達の心を折るために戦っていたのは一目瞭然だった。

この戦いの始まり、古鷹は戦艦2人に欲しいと言った。どうにかして感情を溢れさせ、深海棲艦化させようとしている。そのために、圧倒的な力で踏み潰すという手段を取っていた。手を抜いているのに敵わない相手となると、並の艦娘なら心が折れてもおかしくない。

しかし、金剛も比叡も、そんなことで心が折れるような艦娘では無かった。何があっても絶対に諦めない。勝ち目が無くても後ろは向かない。どれだけ消耗していても、身体を動かし続ける。

古鷹はそんな2人を相手取って、俄然興味が湧いたようだったが、これ以上邪魔をされても困るため、欲しいとは思ったものの殺してしまえと考え始めた。しかし、そうする前に白露が春雨と殆ど相討ちのように倒れかけているのを見て、考えを変える。

「白露さんはまだまだ有用なので、今回はこの辺でお暇(いとま)させてもらいます。次は欲しいとかそういうことは言いません。皆殺しにさせてもらいます。幸い、白露さんは貴女達の鎮守府の場所を知っていますからね」

今のは間接的に『次は鎮守府に行くぞ』と言ったようなものだ。せ

いぜい怯えて過ごせと言わんばかりににっこり笑うと、古鷹は白露を引っ張ってその海域から撤退していった。そのスピードは凄まじく、消耗しきった部隊では追いつけそうになかった。

まだ消耗していなかった山風達は、この今のタイミングでも海風の入った黒い繭を奪われかねないと、そこから動くことは出来ない。薄雲とジェーナスも、その護衛として動かなかった。

結果的に、2人の深海棲艦――溢れたであろう艦娘とは、引き分けというカタチでこの戦いは幕を閉じる。

悪虐非道な存在へと変わってしまった姉に、この場で引導を渡すことが出来なかったことは、春雨に大きな悔恨を残すことになる。そして、そのまま気を失った。

2人の深海棲艦がいなくなったことで、この海域に静かな時間が戻ってくる。だが、心境は散々だった。

「……皆サン、大丈夫……じゃないデスネ。海風が……こんなことになるなんて」

消耗しきった金剛と比叡が、フラフラと黒い繭へと近寄った。その周囲には、他の仲間達も集まっている。

特に山風は、ずっとその繭に触れ続け、泣きそうな顔で見つめていた。最愛の姉がこんな姿になってしまったことが悲しくないわけがない。春雨のように生まれ変われたとしても、それが元の海風のままとは限らないのだ。

「気休めにしかならないかもしれないけれど……海風ちゃんは私達が必ずそのままで同胞（はらから）になってもらうから」

薄雲が震える声で山風に話す。施設ならば適切な処置が出来るため、今戦った白露のようなことにはならないはずだと。しかし、海風は心を壊してしまった。その壊れ方次第では、見る影もないモノになってしまう可能性だってある。だから、断定は出来ない。

しかし、ここでそんなことを言うわけにもいかず、せめてここにいる海風の妹達には、小さいながらも希望を持っていてもらいたい。

「……わかった。海風姉のこと……お願い」
耐えきれずにボロボロと涙を流す山風。一度ここで発散するためにも、声をあげて泣いた。

調査任務はここで終わる。いろいろありすぎて心がグチャグチャになってしまったが、先に進まなくてはいけない。

騒然とする施設

調査と戦いを終えていた調査隊は、春雨の虫の報せを受けてこの場に現れた施設の者達と共に施設へと戻る。その表情は暗く、また非常に疲れが溜まっていた。

古鷹と白露の襲撃は、はっきり言って敗北だ。白露はなんとか春雨が相討ちに持っていったものの、古鷹には金剛と比叡がコンビで戦っても余裕を失わせることが出来ず、まだまだ計り知れない実力を秘めているのは誰にだってわかる。

そもそも白露だって、春雨が来たことでどうにか追い返すことが出来たわけで、島風1人では手に負えなかった。叢雲と組み始めてすぐに春雨が乱入したことで、戦いを全て任せることになってしまったが、それでも敵うかわからなかった。

それ故に、島風は春雨の戦いを観察し続けていた。次は絶対に後れを取らないようにと、持ち前の才能で分析をしていた。この帰路の中で、やたらと静かに次に勝つための手段を計算し続けている。

「……春雨、軽いわね……」

気を失った春雨を運んでいるのは叢雲。白露との激戦の後、気を失った時にその脚も艤装も消えているため、思った以上に軽い。

脚が無いために少し運びづらさはあるのだが、なるべく揺らさないように運んでいるのは、血の流し方がまずいからだ。

よりによって耳。しかも、両耳ともに鼓膜が壊れてしまっており、聴覚が失われてしまっている。ここで変に動かした場合、鼓膜が再生不能になる可能性もあった。

叢雲が春雨の状況を把握しているわけではないのだが、耳はまずいと慎重になるのは良いことである。古鷹と白露の姿を見たことで怒りがまだ燃え滾っているのだが、ここで万が一春雨が死ぬようなことがあったら後悔が残る。

「叢雲、手伝う？」

「疲れたら頼むわ。アンタは私より長いこと戦っていたでしょ。私の方が体力は残ってるわ」

あの少しだけの間ではあるが、島風と組んで戦おうとした経験は叢雲の中には刻まれている。声をかけられても悪態はつかず、信用出来る相手としての認識になっていた。

「こっちも慎重にね。基本的には大丈夫だと思うけど、雑に扱うわけにはいかないから」

そして薄雲の先導により運ばれるのは、海風が入る黒い繭である。艦娘1人分を包んでいるそれは、当然ながら海風よりも重たい物。最悪な場合、海底まで沈んでいってしまう。

それだけは避けるため、江風と涼風、そしてジェーナスが薄雲と共に持ち上げていた。艤装を装備した4人がかりならば、ヒト1人分なら軽々と持ち運べるだろう。流石に姉の入っている繭だから、江風と涼風もいつになく静かである。

その後ろをついていく山風。最初は自分も運ぶと言ったのだが、江風達がそれを拒否した。今の山風は手が震えており、うまく運べるようには到底見えなかったからである。

海風のためにも前向きに生きるのだと決意したが、やはり簡単にはいかない。黒い繭を見ていると、どうしてもショックを受けてしまう。

「……気休めにもならないかもしれませんが」

その隣に宗谷が立ち、意味があるかはわからないがその手を握ってあげる。本来なら海風にしてもらうことではあるのだが、今はもういない。でも、やってもらえるだけで少しだけ心が落ち着くように感じた。

それ以降、宗谷は何を言うでもなく、山風の隣に居続けた。たまに肩を震わせるようなことはあったが、その都度手を少しだけ強く握り、温もりを与えた。

施設に到着した途端、それはもうてんやわんやだった。春雨が虫の報せを受けたということで、コマンダン・テストが向かった方向をずっと見ていたおかげで、すぐさま春雨を運び入れる。

そのコマンダン・テストは、春雨の惨状によりまた発作を起こしかけたため、リシュリューの手によってその場から退場。ギリギリまでは耐えたものの、やはりダメだったようである。ここで無理しても意味がないため、素直に休息を言い渡された。

「これなら多分2日……いや、多めに見積もって3日もあれば治るわ。でも、明日いっぱいにかけて、この子は音が聞こえないでしょうね。少し不自由だけれど、みんなでサポートしてあげてちょうだい」

春雨の怪我は、飛行場姫がすぐに手当てをしていった。意識を失っていることをいいことに、少しだけ強引に血を拭き取りつつ、止血をしっかりと施していく。

それには薄雲とジェーナスも、春雨の看護に専念すると話す。音が聞こえない生活なんて、たった数日でも辛い。ならば、友達である2人がずっと側にいようと考えた。その流れで叢雲も近くにいることになるだろう。

「春雨はまだ大丈夫。問題は……あちらね」

応急処置をしながら、同室で処置をする中間棲姫の方を確認する。そこには勿論、運び込まれた黒い繭が鎮座していた。

施設に到着した後、陸で繭を運んだのは、ベッドから降りられるくらいにまで回復した戦艦棲姫。その艤装により丁寧に施設内に運ばれ、今は春雨の時と同じようにベッドの上である。

まだ身体が痛む場所が多いようだが、短期間でここまで回復したのは流石は姫というところ。艤装の方も、戦艦棲姫の傷が治るのに並行して損傷部分が修復されており、まだ本調子では無いにしてもまともに動くところまでは来ている。

「……溢れた感情は『絶望』……かしらねぇ」

中間棲姫が繭からその感情を読み取った。詳細まではわからずとも、それが示唆されることで、何故そうなったかは現場にいたものが理解出来る。

憧れていた姉達が死んだだけでも心が壊れかねない程に精神的ダメージを受けていたのに、深海棲艦化して、さらには完全に敵対する程に心が壊れている様をまざまざと見せつけられたのだ。今まで理

想の姉として心に残り、散った後も憧れはそのままだった相手に、完膚なきまでに裏切られたようなもの。
海風の心は、そのショックに耐えられなかった。この現状に絶望し、現実を見たくないという感情に支配され、艦娘を辞めることになる黒い泥も簡単に受け入れてしまった。むしろ、無抵抗且つそれを望んでしまったが故に、泥の溢れる速度が上がったまである。
「この子は長く心を蝕まれていたのよねぇ」
「ハイ……Ｓｉｓｔｅｒｓ（お姉さん）達がいなくなってから何日も、デスネ」
この調査の場には、消耗はしているものの比較的受け答えがしやすい金剛と比叡が同席している。本来なら最も身近な妹達がいるべきなのかもしれないが、山風が今そんな受け答えが出来る心境では無い。
金剛だって思い当たる節はいくつもある。海風が長い時間悩み、心に傷を負いながらも、どうにか前を向いていこうとしていたのは誰だって知っているし、相談だって受けた。
「私が視る限り……この子の壊れ方は特に深いわぁ。でも、艦娘としての心は失わないはず。記憶だってそのまま残ってるんだもの。この子がそれを捨てたいと思っていたら別だけれど」
今までのことを忘れてしまいたいと考えることだってあるだろう。その存在が姉だと認識してしまうのだから、苦痛を味わうのだ。ならば、最初から姉ではなく敵と認識出来ていれば、そんな苦しみは無くなる。
つまり、思考回路は艦娘のままでも、記憶を全て失うという可能性も０ではない。そうなってしまったら、この海風は鎮守府の知る海風では無くなるようなもの。誰も知らない、生まれたばかりの海風となってしまうだろう。
「海風はそんなに弱い子じゃない……と言いたいところデスが、こうなってしまうと何が起きてもおかしくはないデス。私達は、そうならないことを祈るしかありません」
「ええ。ごめんなさいねぇ、私は真実を伝えることしか出来ないのよぉ。外からそうならないように弄ることは出来ないのよねぇ」

「そこまで高望みは出来ませーン。貴女達がいてくれなければ、海風をどうしていいかもわからなかったんデスから、気にしないでくだサーイ」
言いながらも、金剛は不安で仕方なかった。それを表に出さないだけで。
今まで仲良く一緒に過ごしてきた海風が、突如別人になってしまう可能性を示唆されてしまったわけで、それが怖くないといえば嘘になる。
金剛ですらそれなのだ。最も親身に付き合ってきた山風が知った場合、どういう反応をするのだろうか。むしろ、これが連鎖に繋がってしまわないだろうか。それが一番怖い。
「このこと、提督くんには？」
「今頃、ちとちよが通信で報告してくれていると思いマース。提督にも辛い報告になるとは思いマスが……」
「そうよねぇ。でも、起きてしまったことはちゃんと伝えないと……ねぇ」
勿論、この事実は鎮守府で待つ提督にも伝えられる。敵が白露であったこと、海風が黒い繭になってしまったこと、そして、次は鎮守府を狙ってくること。
ただでさえ金剛と比叡が敵わなかった相手だ。鎮守府の全勢力を古鷹に注ぎ込んだら勝てるかもしれないが、被害も尋常では無いだろう。事前に準備しておかなければ、何も出来ずに被害者が出るまである。
ここで比叡が思い立ったかのように中間棲姫へと話した。
「無理を承知でお願いしたいんですが、あの敵を倒すために、力を貸してもらえませんか！」
金剛だってそれは考えていた。艦娘だけの力ではどうにもならないところまで来ている。それに、この施設も遠目で見ているだけではいかなくなってきているのだ。
春雨がここまで痛めつけられて、白露から敵対視をされている時点で、もう一度交戦することは不可避に近い。むしろ、春雨だってそれ

を望んでいるだろう。暴虐の使徒となってしまった姉の不始末をどうにかしたいと。
それに、今はこうなっているが海風だって白露のことをどう思うかわからない。記憶を失ったとしても、敵としての認識は根っこに残るものだし、恐怖の対象となっている可能性もある。
中間棲姫も、比叡に言われる前からそれについてはずっと考えていた。施設が平和に暮らすために、基本的には自ら出向くことを極力避けてきた。生活のためにリシュリューとコマンダン・テストが陸に遠征に向かうくらいにしている。
しかし、あの2人――古鷹と白露がいる限り、施設の平和を脅かす可能性がまだあるのだ。ならば、自分から打って出るというのも必要かもしれない。
だが、戦いたくないのは確かである。こういう状況だとしても、自分から向かえばその分危険になる要素は嫌でも増えるのだ。
「少し……考えさせてもらえるかしらぁ。この施設の平和が脅かされるというのなら、私達も動かなくちゃいけないとは思っているわぁ。でも、私達は戦いたくないからここにいるんだもの。中には戦えない子だっているんだから」
言うまでもなくコマンダン・テストのことである。死を示唆する出来事が少しでも掠めるだけで錯乱するのだから、戦場になんて絶対にいけない。むしろ、敵味方問わず暴れ回ってしまう可能性すらあるので、危険度はさらに増している。
「ハイ、大丈夫デス。無理強いはしませン。提督もそう言うと思いマスし」
「ありがとう。こちらのことを理解してもらえているのは嬉しいわぁ」
そもそも中間棲姫の一存でどうこう言える問題ではない。確かに主人である中間棲姫がやると言えば、全員それに従うだろう。だが、それは本心からでは無い。
だからこその保留。それを施設の在り方という観点から理解してもらえているのは、中間棲姫としてもとてもありがたいことである。

「海風ちゃんのことは心配しないで。万が一何かがあったとしても必ず悪いようにはしないわぁ。この施設の一員として、貴女達とも交流をしてもらうから」

「Ｏｋａｙ．　海風のこと、よろしくお願いしマース」

今はそうとしか言えない。それ以上は考える時間が必要である。

大敗の末に施設に戻っては来れたものの、誰もが精神的にも疲弊していた。この施設で、ここまで酷いことになっているのは、長い時間ここにいて今回が初めてである。

人間への戒め

施設がバタバタしている頃、千歳と千代田により、鎮守府にも今回の調査任務の結果が報告された。
三日月型の髪飾りを発見したことが唯一の進展であり、それを帳消しどころかマイナスにするほどの出来事のオンパレードが語られる。
「……そう……か」
提督はかすれた声でそれだけしか言えなかった。唾を飲み込むことすら出来なかった。
敵の中に白露がいたこと、その白露に春雨が相討ちとはいえ重傷を負わされたこと、次は鎮守府を狙うと間接的に宣言されたこと、そして、海風が白露を見たことにショックを受けて黒い繭と化したこと。
その全てが重くのしかかり、強烈なストレスとなり、一気に喉がカラカラになってしまう。息もしづらく、苦しい。
「そんな……」
隣に控える五月雨も、言葉を失った。白露が敵となってしまったことも、海風の深海棲艦化が確定したことも、自分の姉妹に関わることであるせいで、ショックが大きかった。
「まだ施設にいるんだね？」
『はい、ある程度状況が固まったら帰投します。鎮守府に到着するのは暗くなってからかと』
「了解した。くれぐれも気をつけてくれ」
ここまではギリギリ話すことが出来たが、通信が切れた途端、大きく溜息を吐いた。話を聞くだけでどっと疲れた。
五月雨も力が抜けたかのようにその場に座り込み、泣きはしないものの複雑な表情で俯いていた。
「……ショックは大きいよ。本当に僕達の知る白露が敵となってしまったというのは、正直信じたくない」
「私もですよぅ……春雨がそのまま深海棲艦になれたんですから、白露姉さんも同じようになっててくれれば……」
「処置が出来なかった場合は……そうなっても仕方ないのかもしれな

い。春雨は運が良かったんだ」
　そう割り切るしかなかった。信じたくないことでも、それは調査隊が見た真実。別個体の白露ならば良かったのだが、この鎮守府に所属する者にしか知り得ない情報すら持っていたのだから、本人以外にあり得ない。
　心が壊れるというのは、春雨を見て知っていた。トリガーとなる事柄が発生することにより、錯乱する。しかし、白露はトリガーなど関係なく全てが壊れてしまっているらしい。意思も記憶も持っているが、そうであっても上から踏み潰すかの如く暴虐の使徒と化している。
　そこまで来たら、それはもう別人のようなものだ。ただ記憶を持つだけの別個体。そう考えなければ、これ以降やっていけないまである。
「海風は……どうなってるんでしょう」
「姉姫が調査をしてくれているとのことだが、少なくとも良い感情が溢れ出したわけではないだろう。また戻ってきたら改めて話してくれるそうだ」
　白露のことは大きすぎる問題なのだが、海風の方も大問題だ。昨日まで艦娘として共に戦っていた仲間が、今は仲間とも言えるか分からない状態へと変わってしまったのだから。
「……春雨に続いて、海風もと思うと……なかなかクるな」
　1ヶ月も経たない内に、仲間のうち4人が沈み、2人が深海棲艦化。沈んだと思っていた4人のうちの1人が完全に敵に回っているというのもなかなか。
　そしてその全てが白露型で起きてしまった。呪われているのではとすら感じてしまう。実際はたまたまなのだが、こうまで立て続けだといろいろ勘繰ってしまうものである。
「山風、山風はどうしてるんでしょうか。あの子、海風のことをよく見ていたから……今回のこと、すごくショックを受けているんじゃ」
「ああ、千歳も言っていた。今度は山風が大分憔悴しているようだ。江風と涼風がついているそうだが、人目を気にせず泣きじゃくったら

しい」
　代わりにそれである程度はケジメをつけているため、現段階ではメンタルケアをどうにかすることで山風は復帰は可能。しかし、根本的な部分は改善されない。
　そこはやはり、海風が目を覚ますことが最も重要になってくる。繭から孵り、深海棲艦として生まれ変わったとき、どのような存在となっているか。
　例えば、白露のような侵略者思考に支配されていようものなら、山風は連鎖的に崩れるだろう。そうでなく、壊れていようが艦娘と同じ立ち振る舞いが出来れば、崩れることは無いはずだ。
　春雨という前例がある以上、海風にはまだ希望が持てる。しかし、何の感情が溢れたかをまだ知らないため、不安ばかりが募る。『絶望』であると知ったら、どんな反応をするか。
「調査隊の面々は、少しの間……せめて海風が目覚めるまでは、休暇を出しておこう。どういうカタチであれ、ケアは必要だ。カウンセリングなんてタマでは無いのだが、話を聞いてあげることは出来る。姉である五月雨の方が有効かな」
「はい、山風達は私が話をしてみます。金剛さん達は提督の方がいいですよね」
「だろうね。では、その方針で行こう」
　提督として淡々と次のことを考えていくのだが、頭の中は思った以上にグチャグチャである。考えを纏められたから良かったものの、提督だってすぐにでも叫び出したいくらいに混乱しているのだ。
　だが、鎮守府のトップなのだから、慌てふためくような姿は簡単には見せられない。ただでさえ、春雨が深海棲艦になったと聞いた時に大きく驚いた姿を見せているのだ。誰もそれを失態だの醜態だの言うことは無いのだが、上に立つ者として仲間達の模範となるように行動をしたい。結果が、我慢である。
「五月雨、ショックが大きいなら、今日はもう休んでいいよ。僕はこれから大将に連絡をしなくてはいけない」
「……そうですね。ごめんなさい、早いですけど、今日はここで終わり

にさせてください」
ぎこちなく笑い、五月雨は執務室から出て行った。
五月雨は、姉達の駆逐隊が行方不明になったと言われた時も、大分ショックを受けていた。しかし、秘書艦だからというのもあって、すぐに気を取り直して職務に励んでいた。死に別れというのは、戦争をしているのだからある程度覚悟の上だからである。辛いものの、まだ納得は出来る。
だが、今回は訳が違う。海風の深海棲艦化は、春雨という前例があるからまだ耐えられた。それも勿論衝撃的なのだが、深海棲艦化して敵に回るというのがキツイ。艦娘の思考をそのまま持った深海棲艦化しか知らなかったからこそ、この事実は重くのしかかっていた。
「……私、目の前にして撃てるかな……」
その白露は、次に鎮守府を襲撃してくる。故郷と言っても過言では無いこの場所を滅ぼすことに、何の躊躇も無いだろう。むしろ、艦娘の時の記憶があるからこそ、嬉々としてそれを潰しに来る。そんな姿を見ることが一番の重荷だった。
勿論、五月雨だって姉達との交流はしていた。秘書艦業務もあったため、駆逐隊などに参加することは稀ではあったものの、やはり姉妹ということで戦いから離れたところではよく一緒にいたものである。そんな相手に、主砲を突きつけることが出来るか。
五月雨も優しい性格だ。戦いは戦いと割り切って、命を奪いに来る侵略者の命を奪うことは出来る。そうしなければ、こちらがやられてしまうのだから。しかし、次の相手は共に歩いていた姉だ。割り切る場所が違う。
「……ううん、悩んでても仕方ない。やらないと、みんな死んじゃうかもしれない。それは、ダメ」
それでも、五月雨は強い。ショックは受けたが、割り切ろうと決意する。いくら姉でも、その力で命を狙ってくるのなら話は別だ。戦わなければ止められない。何もせずに蹂躙されるなど以ての外だ。
今や、鎮守府に残された白露型は４人。春雨は生きているが、施設から出てくることなんて無い。そうなると、五月雨が長姉となる。妹

達のケアは姉の務めだと意気込んで、今日のところは休息とした。

少し経ち、大将の鎮守府。提督に話を聞き、こちらはこちらでショックを受けていた。今までの戦いの中、敗北が無かったとは言えない。強大な力を持つ深海棲艦相手に、犠牲が出なかったことなど無かった。

しかし、今まで仲間だと思っていた艦娘達が、1つ間違えば敵に回るという事例が作られてしまったことが大きい。

「そんなことが……」

それは艦娘自身も知らないこと。大将の秘書艦吹雪も、自分に降りかかる可能性があるため、少なからず衝撃的だった。

「……これについては、全鎮守府に公開しましょう。知らなくてはいけないことよね」

この事実は早急に全鎮守府が知るべきことだと感じた。ブラック鎮守府の件でもそうだったが、艦娘を蔑ろにした場合はこちらに牙を剥いてくるという実例が上がったのだから、これは戒めにしなくてはいけない。

ただでさえ、あの提督は艦娘達のことを愛し、その命を捨てさせることを許さず、伸び伸びと生活させているというのにコレだ。蔑ろにしている鎮守府には因果応報と言えるだろうが、考える限り最高の環境を与えている鎮守府に対してコレはあまりにも報われない。

「艦娘が知ることは無い方がいいでしょうね。私もその、自分にもあり得ると思うと気持ちが重くなりますし」

「そうね……吹雪には悪いことをしたわ。あと、現場に行ってもらった島風と宗谷も、辛い現実を見せられてしまったと思うの。何かあったら言ってちょうだい」

吹雪、島風、宗谷には、今回の件を艦娘達には秘密にするように通告されるだろう。それは、大将の鎮守府内でも変わらない。人間は知るべきことであり、艦娘は知るべきことでは無い。

大将だって艦娘を信用している。しかし、この事実を知った艦娘が

落ち込むだけならまだしも、自分の立場を悪いように使う可能性を潰しておきたかった。
　人間と艦娘はあくまでも共存、協力関係の対等の立場なのだが、自分が死んだらこうなるんだぞと脅しをかけて、人間側を支配しようとする艦娘が出ないとは断定出来ない。
　幸い、ここの吹雪は大将との関係が良好。お互いに信頼関係が築けているため、そんな考えが浮かぶことは無かったが、艦娘だって千差万別。何が起きるかわからない。
「私は、私は絶対そんなことにはならないようにしますから。そもそも死ななければいい話です」
「あちらの海風は死ぬことなく繭に包まれたそうよ」
「うっ……な、なら、心を強く持ちますからね。司令官の側に居続けたんですから、私だって成長してますとも！」
　胸を張って宣言する吹雪を、大将は慈悲深い笑みを浮かべて頭を撫でた。この吹雪なら大丈夫だと信じられるくらいだった。
「あとは、彼の鎮守府ね……。なんでも敵の古鷹は、次は鎮守府を襲撃すると宣言したそうよ」
「っ……なら、相当危険なんじゃ」
「ええ。だから、島風と宗谷はそのまま鎮守府に派遣しようと思うの。宗谷はともかく、島風は元艦娘との実戦経験があるのだから、必ず力になってくれるはず」
　一度戦っているという事実は大きい。それに、一度大きな挫折を味わっているからか、やたらと心が強く成長しているのも島風だ。傲慢だった当初から比べると、全艦娘の鑑と言えるくらいにまで逞しくなった島風に対して、大将からの信頼も厚い。
　宗谷も非戦闘員ではあるものの、その調査の力はまた今後も活かされるのではないかと考えられる。古鷹や白露が何処を根城にしているかなどを調査する時がくるかもしれない。その時には確実に活躍する。
「わかりました。なら、またあちらの鎮守府には話をしなくちゃですね」

「ええ。なんでも、今は取り急ぎ連絡してくれたみたいだけど、繭となった海風の調査は今まだ続いているそうだから、そのことが報告されると思うわ。先に姉姫に連絡をしてもいいと思うけれど、あちらもバタバタしているでしょうし」

施設側もこの事件が起きたことで、平和な日々が崩されようとしているのだから、慎重に事に当たらなくてはいけないだろう。温厚すぎるくらいの中間棲姫だって、今はピリピリしているかもしれないのだから。

「今回は、事が大分大きくなってきているわ。今までに無いくらいにね」

「はい。私達も、明日は我が身と肝に銘じておきます」

「そうね……お願いね」

ただの戦いでは無くなってきた今回の事件。真相はまだ闇の中かもしれないが、立ち止まる事なく進んで行かなくてはならない。

悔恨

その日の深夜。姉との戦いによる消耗で気を失った春雨が目を覚ました。まだ身体は軋み、特にやられた両耳は身体を動かそうとするだけでも嫌な痛みが走る。

それだけなら良かったのだが、それ以外の音が聞こえなかった。戦闘中でも途中で鼓膜がやられていたのは自分でもわかったが、それの後遺症のようなモノが今でも残っているようで、周囲に誰かがいるのはわかるのだが、全く音がないために恐怖感が増した。

「私は……」

夜であるため、当然暗い。夜目が多少利くにしても、首を動かそうとしたら身体が軋んでうまく動かなかった。あの戦いの後に気を失ったのだとすぐに理解出来るのだが、それ以上に何も聞こえない中での昏闇というのが恐怖を掻き立てる。

さらには、いつも添い寝してくれているはずの薄雲やジェーナスがいないことも不安に繋がる。温もりが無いため、寂しさのトリガーが引かれようとしていた。

「目を覚ましたのね、春雨」

そんな春雨に声をかけたのは、春雨と同様に療養中の戦艦棲姫。こちらは大分回復したようで、槍持ちの時と同じようにベッドの外で艤装をベッド代わりにして眠っていたようだ。

春雨が目を覚ましたことに気付き、すぐさまフォローするためにその手を握る。温もりを与えることで、発作のトリガーをうまく妨げた。

今この施設には春雨と戦艦棲姫、2人の怪我人がいるわけだが、その2人は同じ部屋に入れられており、看病などは同時に出来るようにされている。とはいえ、戦艦棲姫は本調子ではないというだけで怪我らしい怪我はもう見えず、もう少し療養するだけで完治と言えるくらいになるだろう。

「多分聞こえないわよね。とりあえず、電気つけるわよ」

戦艦棲姫が話しても、春雨は無反応。声が聞こえないのだから仕方

ない。手を握ったことで何とか
「戦艦様……」
「大丈夫？　まだ耳が痛いでしょうけど、身体くらいは起こせる？」
そんな問いかけも全く聞こえていない。春雨からしたら、戦艦棲姫が口をパクパクしているだけで何を言っているかがわからない状態。だが、表情などから自分の心配をしてくれているのはわかった。
「耳が痛いですけど、身体の方は比較的大丈夫です。すごく疲れてるだけで」
当たり障りのない、おそらくこういう回答を望んでいるのだろうという言葉を紡ぐ。
その言葉を聞いて、戦艦棲姫は少しだけ安心したような表情を浮かべる。聞きたいことを答えられたようで、春雨も安堵。
「そうだ、私はこれを渡されてるんだった。筆談なら出来るわよね。書くのはこちらだけだけど」
そう言いながら取り出したのは、小さなホワイトボードとそれ用の水性ペンとイレーサー。
リシュリューやコマンダン・テストがダイニングに置くために陸で手に入れたもので、基本的にはダイニングで使われているのだが、今は春雨のために必要だろうということで、戦艦棲姫に預けられている。
療養中は戦艦棲姫が常に側にいることになり、日が昇ったらまた他の仲間達が見舞いに来ることになる。その時に話せないのは辛いため、耳が聞こえない間だけこれを使うことに。
「一応夜食とかは置いてあるわ。帰ってきたから何も食べていないのだから、お腹も空いているでしょう。食べられそうなら食べるといいわ」
話しながら、同じような文章をホワイトボードに書いて、春雨に意思を伝える。陸で人間の社会を楽しんでいるおかげで、戦艦棲姫も人間の文字くらいは書けるようになっていた。
話されている声はわかっていなそうだが、それを見た春雨は、ああと納得したように頷いた。

「お腹、確かに空いてます。傷を早く治すためにも、ちゃんと食べなくちゃですよね」
「なら、こんな遅い時間だけれど、食べた方がいいわね」
出されたのは、春雨が戦艦棲姫が旅立つときに渡したようなおにぎり。漬物まで添えられていたため、一気に空腹感が増した。
「おにぎりは薄雲達が作っていたわ。漬物は勿論、姉姫の手製よ」
「わぁ、美味しそうですね」
疲れが溜まって軋む身体に軽く鞭を打って、ベッドから起き上がり、戦艦棲姫に差し出されたおにぎりに頬張る。程良い塩味で腹が満たされていき、疲れが吹き飛ぶかのような感覚を得る。
しかし、少し気分が良くなったところで、気を失う前の戦闘を思い出してしまった。当然忘れているままではいられない。
おにぎりを飲み込んだ後、すんと表情が暗くなったかと思えば、泣きそうな顔で俯いた。
「……戦艦様を襲った未知の深海棲艦……片方が私の姉さんでした」
ポツリと呟く。
一応、戦艦棲姫は古鷹と白露については聞いていた。自分を襲って、おおよそ返り討ちにした相手のことは知っておきたいと、帰投直前の調査隊達に聞いていたからである。
春雨の、調査隊の駆逐艦達の、そして今繭として別室に安置されている海風の姉、白露。死んだ仲間だと思っていたら敵対していたとなれば、こうなっても仕方ない。戦艦棲姫はその辺りの理解もある。
「本当の姉さんは……ちょっとやんちゃが過ぎる時もあったりしたんですけど、強くて、勇敢で、とても前向きで、私達のことを引っ張っていってくれる、リーダー気質なヒトでした。ただ気持ち良くなるために艦娘を襲って沈めて回るなんて、絶対に考えないようなヒトです」
この世界に生まれ落ちてから壮絶な人生を送っていたせいで性格が捻くれてしまったとかあったなら話は別だが、最初から深海棲艦みたいなことをやらかす艦娘というのはいない……とはいえないが非常に少ない。春雨はそう思っている。少なくとも姉達は絶対に違う

と確信していた。
　春雨の姉達は、あの提督の下にいたこともあって、稀に子供っぽく暴走することがあるにしても、悪いところなど何処にもない人間との共存を愉しむ艦娘の中の艦娘である。裏表のない性格で、嘘すらつくようなことがないような４人だった故に、あんな姿を見せてきたことが大きなショックとなる。あの変わりようは酷すぎた。
　深海棲艦化がそれを誘発したと言われればそうかもしれないとは思う。心が壊れて適切な処置を受けることが出来なかったら、狂いに狂って性格が反転する可能性はある。自分の意思を失って、ただ感知の範囲に入った艦娘を襲うだけという叢雲（槍持ち）という前例があるため、変わってしまうのは仕方ない。だとしても、意思を持ってアレなのは違う。
「何が……あったんでしょう。少なくとも、私が知っている限り、姉さんの溢れてしまった感情に、あんなことになる要素は１つも無い……はずです」
　白露の死に際は、春雨も嫌なくらいに覚えている。あの古鷹に一方的にやられ、どうにか逃がそうとしてくれたその姿を。
　少なくとも、心が壊れるような感情は見られなかった。いや、死ぬ寸前に恐怖するということはあったかもしれないが、だとしてもあんな変貌を遂げるような感情ではない。春雨はそう信じている。
「それに……あの姉さんは何かおかしかった。まるで、４人の姉さん達と同時に戦っているような感覚がしたんです。演習で何度も相手をしてもらいましたから、これだけは確信を持って言えます」
　それが一番よくわからない。見た目は完全に白露だった。春雨のよく知る白露の姿を、自分と同じように深海棲艦化させたような、誰がどう見ても白露型。要所要所が別物に置き換わっていたものの、白露であると一目でわかるレベル。だから海風が壊れた。
　あれで外見がまるで違うというのなら、それはそれで納得が出来た。何も変わっていないのがさらに問題。
　そんな白露が、時雨、村雨、夕立と同じような力をその場で発揮してきたのだから、わけがわからない。まるで混ざり合っているような

雰囲気すらあった。
姉からの教えを再現している春雨とは違う、真に自分のモノとして使ってきていた。考えて起こすのではなく、考えずに起きる。クセまで完全再現されていた。
戦艦棲姫は、そんなこと言われてもわからない。あの敵がどうであれ、自分を襲ってきたのなら返り討ちにするだけ。
しかし苦戦はした。たかが駆逐艦とは思っていなかったが、隣にいた古鷹もあわせると、自分をここまで追い込む相手になってしまっていた。古鷹と1対1（タイマン）なら、おそらく戦艦棲姫が勝っていたかもしれないが、白露が加わったことでコレ。
いや、むしろ古鷹相手でも勝ち切れていたかはわからない。戦艦棲姫が追い込まれつつある中でも、あの余裕そうな態度は最後まで崩していなかったようだ。
「確かに違和感はあったわね……妙にクセが変わるような、戦いづらい感じはしたわ。駆逐艦の方もだけど、重巡洋艦の方からも。返り討ちには出来たけど、あの重巡洋艦がさらりと諦めたから撤退させることが出来ただけなのよね……」
戦艦棲姫も、春雨の言葉で思うところがあったようである。戦っている最中に別人に変わるような錯覚はあったようだ。
「……姉さんが何故ああなってしまったのか、私は知りたいです。鎮守府のためとか、人間や艦娘のためというよりは……私が私のために知りたいんです。私を逃がそうとして命を散らした姉さん達が、何であんな酷い性格になってしまったのか……謎を解きたいです」
そう言いながら、布団の端をギュッと握る。あまり力を入れると、耳の痛みが増えるのだが、春雨にはそんなことが気にならないくらいになってしまっている。
どうして白露は艦娘を襲って悦ぶようになってしまったのか。それを自分から選択したのは何故なのか。その全てを知りたい。あの憧れの姉が壊れた理由を。
「……どうであれ、あの場で姉さんを倒せなかったのは……すごく悔しいです。あんなカタチに変わり果ててしまった姉さんが、まだまだ

世界で暴虐の限りを尽くすのだと思うと……妹としてとても辛い。なら、私が引導を渡さなくちゃいけないって、思いました。勿論、鎮守府にいる妹達も一緒に……ケジメをつけたいと、思ったんです」

姉の不始末は妹がつける。春雨はそう考えて、あの戦場では怒りに呑まれた。そして、寂しさのトリガーから姉を切り離すことが出来た。

しかし、その姉はまだ生きている。決着はつけられていない。それが悔恨として春雨の中に残っている。寂しさの代わりに悔しさが心を支配しかけている。

「考えすぎよ」

そんな春雨を見て、戦艦棲姫はそっと抱きしめた。聞こえないことはわかっていても、耳元で囁くように思いを伝える。

「気持ちはわかるけど、別の感情を溢れさせるのはよした方がいいわ。貴女は優しい子なんだもの。そうじゃなきゃ、寂しさが溢れるようなことなんてないの。悔しいのはわかるけど……貴女がケジメをつけないといけないわけじゃないのよ」

聞こえずとも、戦艦棲姫の思いは伝わるようだった。温もりで心が落ち着いていく。

むしろ、聞こえないからこそ、その心の声を感じ取ることが出来るようだった。五感の1つが失われたことで、第六感が研ぎ澄まされ、そんなところまでわかるようになっている。

「……戦艦様……」

グスグスと鼻をすする音。耐えられそうになく、そのまま泣きじゃくる。戦艦棲姫は、それをただ受け止めるだけだった。

まだ春雨の心は晴れない。

目覚めつつある力

改めて、朝。春雨は戦艦棲姫のおかげでもう一眠りすることが出来たようで、スッキリ目を覚ますことが出来た。この少しの時間でも、深夜に起きた時より耳の痛みが薄れている辺り、改めて自分の身体が深海棲艦だと実感することになる。

深海棲艦は艦娘と違って、自然治癒能力が段違いに高い。それは春雨とて同様であり、入渠が出来ないデメリットを全て打ち消す程である。痛みが長く残るのも嫌なところではあるが、それもそこまで気にならない。

「おはよう、春雨。まだ耳はダメそうね」

隣で眠っていた戦艦棲姫が声をかけるものの、やはりそれには反応は無い。痛みは薄れても、聴覚の修復はまだ完了していなかった。

飛行場姫の予想では、今日いっぱいは耳が聞こえず、本調子に戻るまで2～3日というところ。今日から3日は、作業などもせずに療養に努めることになる。

聞こえないため、戦艦棲姫はわかるように動いてまず手を取ってから、ホワイトボードでの会話を試みる。昨晩それが出来ているので、そうしてしまえばちゃんと意思疎通は出来る。

起きた瞬間に独りと感じれば、嫌でも寂しさのトリガーが引かれてしまうため、スピード勝負。今回戦艦棲姫の方が一歩早かったおかげで、春雨は錯乱する前に落ち着くことが出来た。

「おはようございます、戦艦様。夜はすみませんでした」

「どうってこと無いわ。貴女は溜め込みすぎるタイプなんじゃないの？」

大丈夫だと表すために、首を横に振る。少し大袈裟に表現するくらいが春雨に伝わりやすいと考え、意思を書きながらもまずはジェスチャーでどうにかする。

と、春雨が何かに気付いたように扉の方を向いた。すると、戦艦棲姫でもわかるくらいに足音が聞こえ、部屋の前で止まる。音から感じ取れるのは、春雨が心配で少し急ぎ足で部屋の前には来たものの、ま

だ寝ているかもしれないと躊躇しているような雰囲気。
「みんなが来てくれたんですか？」
戦艦棲姫にはまだ誰が来たかはわかっていない。しかし、春雨は部屋の前にいる人物が何者かを言う。
そもそもここに誰かが来たかどうかは、音以外に判断材料がない。しかも、人数に至ってはさらに微妙だ。この部屋に来るものなんて、この施設にいる者なら誰だって考えられる。
「入っていいわよ」
戦艦棲姫が部屋の外に声をかけると、ほぼノータイムで扉が開き、春雨が予想していた通りの者達、いつも一緒に寝ている薄雲とジェーナスが心配そうに部屋に入ってきた。騒がしくしないようにか、その後ろには少し呆れ気味な表情の叢雲まで。
「ハルサメ、大丈夫？　って、今日だけは私達の声聞こえないのよね。どうすればいいんだっけ」
「戦艦さんがホワイトボードを持ってるって姉姫さんが言ってたけど……」
「アンタ達ねぇ……一応病人がここにいるんだから、あんまりわちゃわちゃするんじゃないわよ」
三者三様の言葉を紡ぎ出すが、春雨にはそのどれもが届いていない。しかし、雰囲気だけは伝わってきた。
3人が3人とも、叢雲ですら、春雨のことを心配していた。壮絶な姉との戦いで消耗して倒れたこともあり、精神的なダメージも受けているのではないかと考え、朝に真っ先にここまで来たわけだ。
実際、姉を倒せなかったことを悔やんで戦艦棲姫にそれを溢し、思い切り泣きじゃくっている。それが無かったら、今頃この3人に泣きついていたかもしれない。
「ありがとう、みんな。まだ耳が痛いけど、大分良くなってると思う。今はみんなの声が聞こえないのが辛いけど……うん、大丈夫な方だよ」
当たり障りのない返答。聞こえていないのだから、その状況から予測して、最善の言葉を紡ぎ出す。今回はおおよそ会話のようなカタチ

になったので、スムーズに事が進む。
　とはいえ、細かいことは判断が出来ない。そういうのはホワイトボードを使って伝えてもらう必要がある。早速それを使って薄雲が春雨に聞いたのは、朝食はここに持ってきた方がいいかだった。春雨はにっこり笑ってよろしくお願いしますと頭を下げた。
「今日1日は、基本的にこの部屋で過ごすことになると思う。耳のこともあるけど、身体もまだ本調子じゃないから、戦艦様みたいに療養中ってことになると思うんだ」
「そっか、仕方ないよね。昨日の春雨ちゃん凄かったし」
「疲れも取れてないわよね。うん、ハルサメ、今日はゆっくりするべき！」
「何も聞こえない状態で彷徨かれる方が鬱陶しいわ。大人しくしておくのが吉ね」
　春雨には休息が必要であると、すぐにそれを良しとした。叢雲が悪態をつくように言ったそれは大正論で、普通にしていても耳が痛く、何も聞こえないというのなら、今は何かをやらせるのは危険極まりない。
「あ、でも……海風の様子は見に行きたい、かな。繭、施設に運び込まれてるんだよね」
　勿論と頷くジェーナス。今は別室に安置されている海風の繭は、基本的に誰かが監視をするというカタチで安全性を保たれている。今は朝イチであるために部屋には誰もいないが、姉妹姫の監視下に置かれているようなモノなので安心。
　誰だってその様子を見に行くことは出来るのだから、動けるのなら春雨が見に行っても何の問題もない。一緒に寝たいと言い出してしまった場合は、中間棲姫が許可を出すかはわからないが。
　見に行くのなら誰かを付き添いでつけることが条件となるだろう。そもそも単独行動が出来ないのだから当然である。
「それじゃあ、私達は朝ご飯の準備してくるね。早く治るように、栄養いっぱいのご飯を作らなくちゃ」
「Ｔｅｓｔｅも療養中だものね。今は私達が動かなくちゃよね！」

コマンダン・テストも現在は発作の後の療養中。立て続けに起こしているので大分憔悴しているらしく、今もリシュリューが側にいることで精神的に落ち着けているところである。
それもあるため、食事の用意は飛行場姫を中心に、料理の出来る駆逐艦達が手伝うことでそれを進めることになっている。こういう時は、松竹姉妹まで総出で準備するとのこと。
と、そんなことを話している最中に、またもや春雨がピクリと反応する。
「コマさんかな。誰か来るからちょっと扉の前を空けてあげて」
今回は足音すら聞こえなかった。ここにいる駆逐艦達が心配でバタバタと歩いてきたのに対し、こちらは足取りが重そうにゆっくりと向かってきていた。
五体満足でも誰か来たかもという程度なのに、聴覚を失っている春雨が真っ先に勘付いた。その前に気付いていたのは、感知の力を持つ叢雲のみ。
「いや、確かにこっちに来てるけど、この部屋に来るとは限らな」
「Ｅｘｃｕｓｅ―ｍｏｉ（すみませんの）．　もう起きていらっしゃいますか」
叢雲が否定する直前にその反応は部屋の前で止まり、その扉をノックした。声は勿論、コマンダン・テストである。
死の危機に瀕した春雨を見たことで発作を起こしたため、その危機を脱したことを真っ先に確認しに来たわけだ。死から遠退いたことがわかれば、コマンダン・テストは落ち着きを取り戻せる。
「入ってきていいわ。春雨も目を覚ましてるから」
戦艦棲姫の声を聞き、おずおずと扉を開く。少し顔色の悪いコマンダン・テストがそこにいた。勿論その後ろには、コマンダン・テストの看護役としてリシュリューもいる。
流石にこれだけの人数が部屋の中に入ることは出来ないため、コマンダン・テストとリシュリューが入るために、叢雲と戦艦棲姫が入れ替わって部屋の外へ。
「Ｔｅｓｔｅ、ハルサメは今、耳が聞こえてないの」
「話は聞いております。私の声は届いていないのでしょうけど、元気

そうで何より、ですね」
普通に話している春雨の姿を見て、心底安心した様子のコマンダン・テスト。死の危機から遠退いたことがわかったおかげで、コマンダン・テストも発作から遠退いた。
そんな様子を見て、春雨も安心していた。自分が危険だったことはわかっており、それがコマンダン・テストに悪影響を与えていたのは何となくわかる。それが払拭されたのは、素直に嬉しいところ。
「コマさん、心配かけてごめんなさい。治り切るにはまだ時間が必要ですけど、春雨はちゃんと生きていますから、安心してくださいね」
「Ｏｕｉ．　良かったです。あとは、ゆっくり身体を休めてください。私も全力でＳｕｐｐｏｒｔいたします」
話した瞬間、聞こえていないことに気付き、苦笑しながらホワイトボードにさらさらと書き連ねる。しかし、それが他言語だった上に物凄い達筆だったことで逆にわからない。春雨でなくてもリシュリュー以外は読めないという珍事が発生し、部屋の中は穏やかな空気に包まれることとなった。

そんな光景を見ながらも、部屋の外に出た叢雲が眉間にシワを寄せて何か考えていた。それは勿論、先程の春雨のこと。
「叢雲、貴女の考えてること、私もわかるわよ。貴女達が部屋に来たこと、私よりも早く勘付いてた」
誰かが来ているということは、叢雲なら手に取るようにわかる。切りたくても切れない感知の力のせいで、今でも施設内の仲間達の場所が常に頭の中に入ってくるのだから。
しかし、場所がわかるだけであり、次の行動まではわからない。扉の前に来たところで、中に入ってくるか素通りするかは判断出来ない。春雨はそれを言い当てた。
「春雨、本当に耳が聞こえていないのよね」
「ええ。私が隣にいて話しかけても、反応はしなかったわ。それなりに近くで話したつもりだけど、今の私の声は届いてないわね。物理的

な面で」
　それに関しては実証済み。音に反応したのではなく、直感的に何かが来たというのがわかっていた。そしてそれが駆逐艦3人であることも。
　足音だけでは誰が来たかなんて簡単にはわからない。戦艦棲姫は3人分くらいかということでジェーナス達かなと思えるくらいだが、春雨は確信を持ってこの3人だと言った。
　コマンダン・テストが訪れた時は完全に名指し。多少曖昧で、多分コマンダン・テストだろうくらいのニュアンスではあったものの、それは正解だった。
「あれ、なんなの」
「わからない。でも、同胞(はらから)って艦娘達とは違った力を持っていたりするから、春雨もそういう力を持っている……いや、目覚めたのかもしれないわね」
　中間棲姫の繭から感情を読み取る力しかり、戦艦棲姫の海から記憶を読み取る力しかり、艦娘には無い能力を持っているのが深海棲艦である。叢雲の感知の力もそれに含まれていてもいいのだが、今の春雨のコレはそれに準ずるモノにも思えた。
「よく言うじゃない。感覚の1つが潰れると、別の感覚が鋭くなるって」
「そうかもしれないけど、春雨の場合はベクトル違わない？」
「そこが同胞(はらから)なのよ。人間や艦娘と同じ考え方をしちゃダメね」
　そう言われると言い返せない。自分もそのうちの1人なのだから。あと艦娘と同じという言葉で、叢雲は少しムッとする。そういう意味じゃないとわかっていても、怒りの対象と同類と扱われるのは気に入らないらしい。
「とにかく、この件に関しては少し様子見しましょ。耳が聞こえない今だけかもしれないし」
「……そうね。それに、別に気にするほどのことでもないわ。それが私に悪影響を与えるわけでもないんだから」
　あまり考えていても仕方ないし、春雨がそれで苦しんでいるわけで

もない。仲間に迷惑もかけていないのだから、気にはなっても気にしなくていいようなことだ。
「ひとまずは元気になってもらわなくちゃね。叢雲、貴女もあの子のサポートしてちょうだい」
「わかってるわよ。どうせ薄雲に引っ張られるから」
春雨の力に関しては、一旦そこで話を終わらせる。これ以上話していても何も変わらないのだから、今は現実に目を向けた方がいい。

春雨に生まれた直感の力は、今後強力な武器となっていく。勘がいいだけでは済まなくなっていくことは、すでに確約済み。

海風の希望に

施設の者達は各々の作業があるため、春雨は戦艦棲姫とコマンダン・テストによる看護の下で午前中を終える。２人が無事な姿を見ることでコマンダン・テストは落ち着くことが出来て、春雨も２人が近くにいてくれれば発作を起こすことが無くなる。音が聞こえないにしても、常に何かしらの会話――ホワイトボードを使ってのたわいのない話――が繰り広げられていたことで、楽しい時間を過ごせたようだった。

春雨は白露を倒すことが出来なかった悔しさに苛まれていたが、ここでの話題はそんなものを感じさせないものばかり。例えば、戦艦棲姫の旅先の話。例えば、コマンダン・テストの遠征の話。どちらも陸で起きた楽しい出来事の話なので、暗いところは一切無い。

相変わらずコマンダン・テストの書く文字が読めなかったのはご愛敬。自分の国の言語は得意でも、春雨達の国の言語はうまく書けないらしい。そこは戦艦棲姫が教えるという、普通は立場が逆なのではという光景が繰り広げられたことで、とても穏やかな空気に満たされている。

「そろそろＤ▪ｊｅｕｎｅｒ（お昼ご飯）ですね。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが作ってくれているでしょう。ちゃんと、ハルサメさんに合わせたモノを、作ってくれているはず、です」

時間もいい具合になり、お昼時。部屋の扉は閉まっているが、何処からともなくいい匂いがしてくる。聴覚は失われていても、嗅覚は衰えていない。むしろ、第六感と同じように敏感になっているのではないかと思えるくらいにわかる。

そして、グゥと腹の虫が鳴いた。朝はちゃんと食べて、ここから全く動いていないというのに、なんだかんだで空腹を感じられるのは、身体の調子が良い証拠。代謝も良い。

「あはは、お腹が鳴ってしまいました」

「春雨、貴女はここから動かなくていいわ。誰かしらが持ってきてくれるだろうし、何なら私が取りに行ってもいいから、療養中ってこと

をわすれないようにね」
と話すものの、当然聞こえていないため、今の言葉をある程度掻い摘んでホワイトボードに書き出して見せる。それを見た春雨は、わかりましたと苦笑しながら頭を下げた。
午前中は終始こんな感じだったため、時間の流れがとても遅かった。戦艦棲姫も、コマンダン・テストも、春雨を放置してお喋りするようなことは一切しない。ちゃんと3人での会話を楽しんだ。
そのおかげで、寂しさなんてまず溢れることはない。怪我人らしく療養も出来て、音の聞こえない長い時間を楽しく過ごせた。やはり、この施設の仲間達はどういう状況でも団結力がある。
「あ、そうだ、戦艦様、コマさん、お願いを聞いてもらってもいいですか」
と、お昼の前にどうしてもやっておきたいことがあると春雨が口にする。今までの穏やかな空気から少しだけ真剣な表情で。それに対して、ホワイトボードを使うことなく、どうしたと反応する。
「海風のところに……行きたいんです」
午前中はこういうカタチで療養に励んだが、やはり妹のことは心配で仕方なかったようだ。
まだ孵るには時間がかかるだろうが、安定して深海棲艦化が進んでいるのかは見ておきたかった。繭が知らない間に壊れている、なんてことはないだろうが、それでも。
今は施設内であるということで、姉妹姫の監視下にあるようなものである。何かおかしなことが起きればすぐに伝えられるし、そもそもそんなことが起きないように管理はされている。
今はとある一室のベッドの上だ。繭に外からの衝撃が加わらないように、しっかりと布団まで被せられている。これなら、孵るその時まで余程のことが無い限り傷一つつかない。その上で、余裕がある者がその部屋に滞在して、その様子を常にその目で見てくれているくらいだ。
「歩けるの？」
今度はホワイトボードを使って端的に問う。対して春雨は、無言で

首を縦に振る。
怪我による療養中とはいえ、大部分は耳へのダメージだ。身体の部分の消耗は充分に回復している。歩くとその振動で耳の痛みに響くかもしれないが、ゆっくり歩けば問題ない。
「ならいいわ。安静にしろとは思うけれど、多少は動かないと気が滅入るもの」
「Ｏｕｉ．　動けるのなら、Ｆｌ・ｎｅｒはいいですね。気分転換にもなりますし、運動にもなりますから」
春雨が動けるのなら、抑え付けておく必要は無いと判断し、２人が手伝うように春雨をベッドから起こしてやり、部屋を出ることにした。
いざとなったら戦艦棲姫の艤装があるため心配は無いのだが、施設内は流石に狭いため、それを使うのは緊急事態のときのみ。使えるとしても、春雨がそれを却下するだろう。妹のいる場所には、自分の足で行きたいと訴えることだろう。
「痛た……でも、大丈夫です」
半日動いていないので少しふらついたものの、問題は無さそうである。念のため、コマンダン・テストが手を繋いで身体を支えてあげることで、なんとか真っ直ぐ歩くことが出来た。

海風の繭が安置されているのは、春雨の眠っていた部屋から少し離れた場所。調査隊が１泊するということで掃除しておいた空き部屋の内の１つである。
その部屋の前に来たことで、春雨は何処となく心が落ち着く感覚を得た。この中に妹がいると知っているからだろうか。
「いらっしゃい。海風ちゃん、何もなってないヨナ」
今日の繭監視役は伊４７。ベッドは繭が占拠しているため、隣に椅子を置いて、ただじっと見ていただけ。繭に触れることもなく、ただ側にいるのみである。
アレルギーのせいで誰かの役に立つことが出来ないとなると、それ

はそれで心苦しい。だが、仲間と一緒にそれをやろうとすると、幸福感を得てしまうためにアレルギーを発症と、なかなかに面倒くさいことになっている。
　それ故に、こういう個人で何かのためになる仕事は、伊４７が率先して行なうことになっていた。伊４７もそれが自分の在り方であることを自覚しており、仲間達もそれを理解している。
「海風……」
　春雨の視線は、ベッドの上へ。
　まるで誰かが眠っているかのようにされている黒い繭。自分がここに運び込まれた時も、こうされていたのだろうかと感慨深い気持ちになる。
「触っても……いいんですか？」
　伊４７に聞くと、少し考えた後、首を縦に振った。この状態になってしまっているのなら、軽く触れるくらいで中身がどうこうなることはない。そもそもこの繭は艤装並みに硬く簡単には壊れないため、優しく保護はしているものの、実際はここまでしなくても心配はいらない。繭に砲撃などをしたら流石に壊れてしまうかもしれないが。
　許可が出たことで、まだ少しふらつきながらも繭に近づいて、そしてその表面に手を付ける。ヒンヤリとした、硬い感触。しかし、中には海風がいるのだと実感させるような脈動を感じた。こんなカタチでも、海風は生きている。無事に生まれ変わっている。
「……海風、私がついてるから、何も心配しなくていいからね。目を覚ましたら、ずっと一緒にいようね」
　戦場でも似たようなことを言ったが、この落ち着いた空気の中でもその思いを伝える。
　ここに保護されているのなら、海風は海風のままで深海棲艦へと成れるはずだ。心が壊れて、何処か歪んでしまうかもしれないが、それが海風であることは変わらない。春雨にとっては愛すべき妹であり、ずっと気にかけていたい相手なのだ。
　それは海風が春雨に向ける感情とは別物ではあるのだが、海風自身もそれでいいと思っていたものだ。変わり果てても向けられる感情

が変わっていないのなら、海風は幸せを感じることだろう。
「だから……無事に生まれ変わってね。待ってるから」
頭のありそうな場所に額をつけて、その気持ちを呟いた。きっと声が届くと信じて。
瞬間、繭が一瞬蠢いたように思えた。春雨の声に反応したかのように、僅かに。周りから見ている者には気付くことが出来ない程度だが、その繭に触れていた春雨ならば小さな小さな動きにも気付ける。
「海風……頑張って。私にはこんなことしか出来ないけど、もう辛い思いなんてしなくていいから」
自分の声が聞こえているとわかっただけでも大きかった。今頃きっと、艦娘の時の夢を見ているのだろう。実体験からそう考えた春雨は、ありったけの思いを囁き続ける。
実体験から、今頃海風は走馬灯のような夢を見ているのはわかっている。そうだとすると、最初は幸せだが徐々に嫌な記憶に辿り着き、苦しむことになるだろう。思い出したくない過去、発作を起こすきっかけとなる記憶を穿り返され、そこで目を覚ますことが出来なければ無限に苛まれる。
そんな苦しみ、海風に感じてもらいたくなかった。だからこそ、出来る限り声をかけ続けた。
「……うん、今はこれだけで。またお昼に来るよ。海風……またね」
やりたいだけやった後、そこまで長居してもアレだと、そこから離れる。これで今日が終わりというわけではない。この施設にいる限り、いつでも会いに来れるのだから。

また部屋に戻ってベッドの上。繭とはいえ海風と交流出来たことで、春雨の心は大分晴れやかになっていた。
「海風は……きっと何事もなく同胞(はらから)になりますよね」
「ええ、大丈夫よ。貴女があの子の希望になれるだろうからね」
戦艦棲姫は、海風の溢れた感情が何かを知っている。むしろ、春雨以外は中間棲姫から聞いている。

その感情は『絶望』。憧れていた姉に裏切られたのがトドメになり、ヒビだらけだった心がついに砕けてしまった。全ての望みが絶たれて、その感情が溢れ出してしまったのだと。

だが、戦艦棲姫はそれを踏まえて、春雨に優しく伝える。言葉では聞き取れないので、ちゃんと文字にして。

「私が……希望に？」

「海風の最後の希望は春雨よ。勿論妹達もいるでしょうけど、今から一番身近になるのは春雨だもの。ここにいる間は向こうに行くことも無いでしょうし」

絶望が溢れ出した同胞（はらから）は、今のところいない。中間棲姫が知っている中では、瀕死の重傷を負うことなく繭に包まれた者自体も初めてのこと。

命の危機すらなく、ただ単に心が壊れるというのは、この施設では前例が無かった。それ故に、誰よりも深い壊れ方をしている可能性がある。

しかも、それが絶望だというのだから余計に難しい。伊４７の幸せアレルギーのように、希望アレルギーになってしまう可能性だってある。不幸でなくては生きていけないなんて可哀想すぎる。

だが、戦艦棲姫はそれでも、春雨が海風にとっての最後の希望だと断言した。それは、海風の元々の感情もある。

海風の春雨に対する感情は、松竹姉妹でなくてもわかりやすいところがあった。それがそういうものとは感じないにしても、確実に春雨だけ特別視しているのは目に見えている。どのようなカタチであれ、それは愛だ。

「……そっか、そうですよね」

それに、悪い方向にはいかないと春雨の直感が告げていた。繭から孵った海風は、元気に自分達とここで暮らしてくれるのだと。

「お互いどんなカタチでも、私と海風は姉妹ですから。海風が私のことを希望だと感じてくれるなら、そう思ってもらえるように頑張りたいです」

「そうね。じゃあその前に、貴女自身が元気にならないとね」

本調子になるまでは数日かかるが、耳は今日いっぱい。まずはそれを治すために、今日1日は安静にしておけと戦艦棲姫が釘を刺した。たまに海風の様子を見に行くのは構わないから、まずは休むんだと。

春雨も自分の身体のことなのだから、自分が一番よくわかっている。海風のためにも、まずは全快しなくてはいけない。

海風の目覚めは近日中。その時までに身体を治して、最高の状態で海風を出迎えたい。

絶望を塗り潰し

その日の午後も、療養期間として安静に過ごす春雨。基本的にはベッドの上から降りることなく、身体を治すことに専念する。

たまに誰かに付き添ってもらってまた海風のところに行っては、きっと聞こえていると思いながら声をかけ続けた。春雨だけでなく、薄雲やジェーナスなども加えて。

みんな海風のことを温かく迎え入れる準備は出来ている。海風がどのように壊れているとしても、もうこの施設の仲間だ。

海風自身がそれを拒絶してしまった場合はまた考え直すことになるのだが、ここに春雨がいる時点で海風の選択は決まったも同然と誰もが感じている。

「繭から孵ったら、今度は一緒に楽しく生きていけるわよね」

繭に触れる春雨を眺めながら、ジェーナスがボソリと呟く。まだ耳が聞こえない春雨には届かないが、他の者にはしっかり聞こえる声で。

「勿論。私達は海風ちゃんを仲間として受け入れるよ。元々友達だったけど、こうなっちゃったら尚更だよ。そうですよね、姉さん」

「……私に振らないでくれる。でも、海風も壊れちゃったんなら、私だって多少は気にかけるくらいはするわ。艦娘じゃなく、同胞(はらから)なんだもの」

相変わらずの物言いではあるものの、叢雲としても海風の今後については気になるところのようだ。悪態の中に、真なる怒りは何処にもない。性質として怒りが節々に出てしまうだけであって、本心はまた違うところにある。

いい艦娘と悪い艦娘の判断が出来るようになるきっかけを与えたのは、紛れもなく海風だ。最初の調査隊の時に対話をしたことで、あの鎮守府の艦娘は信用出来ると理解出来た。海風は特に、叢雲の中では大きな存在となっている。

その海風がこうなってしまったのだ。しかも、海風に深海棲艦化のトドメを刺したのは、叢雲にとっては自分の仇と言える存在、白露。

そちらに対しての怒りは、今まで以上に燃え上がっている。
「孵化はいつになるんだっけ？」
「早いと今晩には孵るかもしれないわ。遅くとも明後日」
黒い繭が孵化するまでには、1～3日という時間が必要。これは中間棲姫や飛行場姫も実際に見ているモノ。
例えば春雨はおおよそ3日だった。ここにいる薄雲やジェーナスは2日に近いくらいというほど。叢雲は実際は2日かからない程度。1日と少しで孵化したのは、伊47だけである。
「何か法則とかあるのかしらね」
「その辺りはわからないわ。でも、一応ここで全部見てきた私としては、入渠時間が関わってるんじゃないかって思ってるわね」
伊47が特別早かったのは、艦娘の時の入渠時間が潜水艦の特性上特別早いからではないかというのがジェーナスの予想。この施設で孵化した仲間達を全て見ているからこそ辿り着いた考えである。
リシュリューは特に長かったそうで、キッチリ3日かかっている。それは戦艦であるが故。松と竹はかなり早く、2日かからずだが薄雲やジェーナスよりも早かったとのこと。
ジェーナスの予想は概ね正しそうである。瀕死の重傷を負った状態で繭に包まれ、深海棲艦化した時には傷は全て治療済み。ならば、繭の中で入渠しているようなものなのかもと考えれば、孵化までの時間は予測出来そうである。
海風は全くの無傷の状態で繭に包まれた。入渠の必要がない状態だ。そうなると、傷を癒す必要もなく、ただただ身体を変質させることにのみ時間を使う。ということは。
「……海風、今晩くらいに孵るかも」
そんなことを話している時に、その会話が聞こえていないにもかかわらず、春雨がそれを言ってのけた。
ジェーナスの説が正しいとするのなら、入渠の必要がない海風は考え得る最速の時間で孵化することになるだろう。となると、丸一日が最速。海風が繭と化したのは、昨日の昼である。既に1日は経っている状態。ならば、そろそろ孵ってもおかしくない。

その孵化のタイミングを、春雨が何か感じ取ったようである。動けるようになってから頻繁に繭に触れに来ているため、何か感じるものがあったのだろうか。
「それなら、ハルサメは今日はここで寝る？」
とジェーナスが言っても聞こえていないので、預かってきたホワイトボードに薄雲が書いて春雨に見せた。
「やっていいなら、私、海風と一緒に寝たい……かな」
春雨はそれを望む。1人で繭の隣で眠ると、まず確実に発作を起こしてしまうため、誰かしらに付き合ってもらう必要はあるだろうが、なんとなく今晩が山場だと思えたために、少しだけ我儘を言った。
春雨の意思は誰もが尊重した。そのため、海風の隣で春雨が眠り、同室で中間棲姫が眠るということで手が打たれた。
春雨だってまだ療養中の身。誰かしらの目が届くところにいてもらわなければ困る存在。そのため、中間棲姫がその役目を買って出たのである。

そして、深夜。春雨が直感的に予想していた時間。既に誰もが寝静まった時間であるのだが、不意に春雨は目を覚ました。朝から晩まで療養というカタチで何もせず眠ったりもしてしまったことで、夜中に眠気が失われた。
春雨の耳は、丸一日の安静と栄養のある食事、そしてこの時間までの睡眠で、殆ど治っていた。周囲の音が聞こえる――例えば、中間棲姫の寝息とか――ことで、ようやくいつもの生活が戻ってくると安心した。
目が冴えているため、隣にある海風の繭を見る。勿論、寝る前から何も変わっていない。
大きく存在感のある繭のおかげで、春雨が寂しさを感じることは無かった。それに、隣に海風がいるという安心感もあった。
「海風……まだ頑張ってるのかな。私達は、海風が無事に孵化するのを待ってるからね」

小さく呟き、額を繭に押し当てる。そうすることで、繭の中の海風に近付けている気がするからだ。
今日、話せる時があったら毎回これをしている。早く戻ってきてほしいという気持ちと、そのままでいてほしいという気持ち。海風のことを思い続けながら、その無事を祈って呟き続けた。
そして、その願いが今、成就しようとしていた。
「――――」
僅かに、本当に僅かに、小さく何かが蠢いた。
「海風……？」
繭に額を押し付けたまま、春雨はその感覚に集中する。海風がいい方向に向かっているのか、悪い方向に向かっているのか、それを知るために。
「――サン」
微かに、声が聞こえた。それは、春雨の知る海風の声だった。
「春雨ちゃん、落ち着いてちょうだいねぇ。私にもちゃんと聞こえたわぁ」
先程まで寝息を立てていた中間棲姫も、繭の様子が変わったことで目を覚ましていた。施設内を全て管理下に置いているのは伊達ではなく、こんな小さな異変でもしっかりと反応する。真隣にいるのだから尚更である。
繭の中からの声は、中間棲姫にも届いていた。繭が孵ろうとしている前兆としてはよくあることだ。長い夢から覚め、生まれ変わって現実に戻ってくる始まり。
「孵ったら、すぐに処置をするわぁ。でも、私が説明するよりも、春雨ちゃんが説明した方が、海風ちゃんは受け入れやすいと思うのよねぇ」
「了解です。私が妹姫様にしてもらったように、海風を導きます」
「ええ、そうしてあげてちょうだいねぇ」
そうこうしている内に、繭がカタカタと揺れだす。僅かな蠢きを超え、集中していれば気が付くというところから、誰が見ても動いているとわかるくらいに。

孵化まであと少し。その間に、中間棲姫は部屋の電気をつける。夜だからといって、暗い中で目を覚ますのは少し可哀想。
「海風、私がいるよ。だから、頑張って」
春雨が呟いた瞬間、繭の表面にヒビが入った。姉の言葉に応えるように、その存在を求めるように、ヒビはどんどん拡がっていき、そして。
「姉……さん……!」
繭を内側から突き破って腕が伸びた。その手は、春雨を求めていた。
「海風……!」
その手を握って、海風の完全な孵化を待つ。ここまで来たら、後はもう時間の問題だ。
一度崩壊を始めた繭は、あっという間に音を立てて崩れていく。そして中には、見事に深海棲艦と化した海風の姿が現れた。
その姿は基本的には春雨と同じで、本来の海風から色素を薄くしたモノ。髪も肌も真っ白に染まり、瞳も青白く輝いていた。そういったところも、春雨を意識しているのではと思えるくらいに、深海棲艦化の要素が全く同じ。
しかし、艦娘の時から大きく違うところもある。それが右腕。春雨の両脚のように、海風の右腕は綺麗に切り取られているかのように失われていた。先程伸ばした腕は左腕である。
「えっ、あ、私……私……は……」
「ごめんね海風。時間勝負だから、まずはすぐにやらなくちゃいけないことがあるの。繭を掻き集めて、そこに残された手を置いて。その破片を取り込むみたいに、イメージするの」
生まれたてで混乱する海風だが、春雨の言葉は素直に聞く。自分が深海棲艦化していることや、右腕が無くなっていることよりも、春雨の言葉を優先してすぐに実行に移した。
片腕で掻き集めるのは難しかったようで、そこは春雨も手伝う。1人でやらなくてはいけないわけではない。ここは、姉妹による共同作業で迅速にこなした方がいい。

「そう、そこに手を置いて。私もこうやってどうにかなったから」
「こうして……取り込む……イメージ……っひっ!?」
　言われるがままに繭の破片に手を置いた海風。その瞬間、破片は泥へと姿を戻し、海風の中へと戻っていく。同時に強烈な衝撃を受け、妙な声を出してしまっていた。
　ビクンビクンと震えている海風を支えるように、春雨が回り込んで抱きしめる。これが終われば元に戻れるのだ。耐えてもらわなくてはいけない。
「っあっ、あっ、あっ」
「頑張って。大丈夫。私がついてるから」
　春雨の声を聞くことで、海風は身体も心も落ち着かせる。そのせいで破片を取り込む衝撃に対して何の抵抗もなく声を上げてしまうのだが、全く気にしていない。
「っあっ、あぁああっ……」
　全て取り込んだことで一際大きく震えた。春雨にも経験のあることだから、この衝撃は理解している。身体中を駆け巡る衝撃は普通ではなく、海風も例外ではない。震えながらも天を仰ぎ見て、何度も何度も痙攣する。
「はふぅ……」
「お疲れ様、海風。これで海風は大丈夫だよ」
　こうなってしまえば、海風は侵略者になることはない。心の壊れ方次第ではあるが、艦娘としての心を持ったままの深海棲艦として、心身ともに落ち着いていく。
　海風が息を整えている間に、春雨は改めて海風の正面へ。
「姉さん……私は……」
「うん……海風も私達の同胞（はらから）になったんだよ。感情が溢れて、同じになっちゃった」
　事実を突きつけるようで申し訳ないのだが、しかし知ってもらわなくてはいけない。それは、姉である自分が伝えるべきだと感じて、真正面からぶつけた。
「……姉さん、今こんなことを言うべきかはわかりませんが……あり

がとうございます」
「んん？」
「姉さんのおかげで、私はこれで済んだんだと、思います」
片方の腕で春雨の手を握る。海風も春雨の温もりを求めるかのようだった。
「私……ずっと暗闇にいたんです。周りが何も見えない、声を上げても誰もいない、真っ暗闇に。それこそ、狂ってしまいそうなくらいに辛かった」
絶望の淵に立たされ、さらに前に進んでしまったことで海風は深海棲艦化した。それを象徴するように、繭の中で眠る間は、真っ暗闇の中に放置されていたらしい。
手を伸ばしても何にも届かず、声を上げても残響すら無い。何も見えず、何も聞こえず、何も感じない。そんな全ての望みが絶たれた空間に、ただ独りにされた。
そんな状態が続けば、誰だって狂う。人間だろうが艦娘だろうが関係ない。意思を持つものが本能的に拒むような空間だ。絶望とは、そういう状態なのだろう。
「でも、そんな真っ暗闇に、一筋の光が差したんです。それに、声も。それがあるだけで、私は、私は自分を捨てずに済みました」
その一筋の光と声というのが、春雨だ。繭の中に聞こえるように呟いたその言葉は、海風にちゃんと届いていた。むしろ、それがあったからこそ、海風はこれ以上壊れずに済んだのだ。
春雨が声をかけていなかった場合、海風は繭から孵っても、何も見ず、何も聞こえない存在になっていたかもしれない。望みが絶たれて、周りを見ることも聞くことも放棄する。ただの抜け殻になっていただろう。
それを回避させたのが、春雨の存在だ。光の先に春雨がいるのだとわかったことで、海風の心は現状維持を選択することが出来たのだ。
とはいえ、繭に包まれた時点である程度は壊れている。それが何なのかは後から知っていくとして、いの一番に壊れたところを見せつけることになる。

「だから、姉さん。本当にありがとうございました。姉さんのおかげで私は、海風は、ここにいます」
「うんうん、よかった。声が届いてて」
「はい。愛する姉さんの声と光、ちゃんと届いていました」
おや、と中間棲姫が首を傾げる。秘めていた想いを真正面からぶつけているようにしか見えない。

「姉さん、私の道標、いてくれて本当に良かった。愛しています。姉さん」
海風は、箍が外れていた。

壊れた海風

深夜に黒い繭から孵化をした海風は、絶望を溢れさせた結果の深海棲艦化ではあったものの、目も当てられないような壊れ方はしておらず、元の性格を残したままの復活となった。

しかし、艦娘であった時と大きく違う点として、箍が外れてしまっているというのがあった。今までは仄かに秘めていただけであった春雨への感情を、何の躊躇もなく曝け出してしまう。

「姉さん、私の道標、いてくれて本当に良かった。愛しています。姉さん」

心の底からの感謝と、強すぎるくらいの愛情。目の中にハートマークが見えそうなくらいに感情をぶつけてくるようだった。

「え、えーっと……」

対する春雨、そんな海風の勢いに押されて、少しだけ混乱してしまう。

「姉さんがいなければ、私は今、悲惨なことになっていたと思います。絶望に身を焼かれ、死にたくなるほどの気持ちに苛まれ、まともに生活も出来なかったでしょう。それを救ってくれたのが姉さんなんです。流石は愛する姉さん、いつも私を導いてくれます。だから私は姉さんのことが憧れなんです」

まだ目を覚ましたばかりだというのに、口がやたらと回る海風。今まで押し留めていた感情が、心が壊れたことによって箍が外れて垂れ流し状態となっていた。

今の海風はもう止まらない。深夜という時間帯すら考えず、目の前の春雨に向けて想いをひたすらに伝える。それが春雨に全て伝わっていなくとも、言いたいから言う。ストッパーが壊れているとしか思えない。

「海風ちゃん、海風ちゃん、今は止まりましょうかぁ」

その一部始終を見ていた中間棲姫が一旦海風を止める。今は夜というのもあるし、このままでいたら春雨がより深く混乱してしまう。

「あっ、ごめんなさい姉さん、今まで溜め込んでいた姉さんへの想いが

次から次へと溢れてくるようで、止められそうにありませんでした。姉姫様も止めていただいてありがとうございます」
　春雨に固執するような性格に変貌してしまい、止めようとした自分にも食ってかかってくるようなことになっているのでは無いかと危惧していたのだが、そういうところの理性はまだ残っているらしい。中間棲姫としては、また少しだけ安心した。
「海風、まずほら、腕のこととか、服のこととかあるから、ね？」
「そうでした。姉さんへの想いでその辺りのことが完全に頭から抜けていました」
　こういうところも変に素直。思ったことが口から出て行っているのではと感じるくらいに、本心がダダ漏れにも見える。
　それが全てのことについてなのか、春雨のことについてだけなのかはわからない。中間棲姫に悪態をつくようなことはしないため、実際は後者だろうか。
「今からは寝るだけだから腕はまた朝でもいいかもしれないけど、服はね」
「はい、では姉さんとお揃いに。確か、イメージしたら艤装のように作れるんですよね」
　今まで施設で聞いていた話から察して、早速順応していく海風。艤装の生成は毎日のようにやっているのだから、服を作るくらい簡単だろうとやってみたところ、見事に春雨の着ているものと色違いのお揃いが出来上がっていた。春雨は脚のことを考慮したショートパンツ状だが、海風は腕を考慮した半袖になっている芸の細かさ。
　春雨は最初の頃はうまくイメージしたものが作れなかったものだが、海風はそういうところは器用らしい。
　初めてのことにわぁと驚きつつ、春雨と同じになれたことを素直に喜んでいる海風。春雨もそれには嫌な感覚もせず、同じように喜んでいた。
「細かい話は、朝にしましょう。眠くないかもしれないけれど、今は寝てちょうだいねぇ。あまり騒がしくするのもアレだもの」
「はい、海風、今は寝ようね」

「わかりました。姉さん、抱き枕にさせてください」
そういうところまで垂れ流しであるため、春雨は苦笑せざるを得なかった。抱きしめられると寂しさも吹き飛ぶため、断る理由もない。

そして、翌朝。海風の片腕でしっかり抱きしめられた状態で、春雨は再度目を覚ます。他者の温もりで落ち着くことも出来ているため、発作の兆しはカケラも無い。
「おはようございます、姉さん。寝顔を堪能させてもらいました」
海風はもう目を覚ましていたようで、春雨の眠りを妨げないようにピクリとも動かなかったようである。
「おはよう海風。気分は悪くない？　昨日の今日だから、何かおかしくなってるとか」
「……その、眠った時に、やっぱり悪い夢を見ました。いろいろな記憶を走馬灯のように見せられて……正直なところ辛かったです」
苦笑しながら語る海風。絶望を感じた瞬間を、その感情も一緒に思い出させられ、暗く沈んでいく感覚を味わう羽目になったそうだ。だが、すぐ傍に海風にとっての希望の光が存在してくれたことで、絶望の発作を起こすことなく事無きを得ることが出来たそうだ。
それもあったせいで、海風は春雨よりも早く目を覚ましていたようである。魘されていたのなら春雨も気付いていてもおかしくないのだが、海風の寝相があまりにも良かったために気付くことが出来なかったようである。
「ごめんね、私が気付くことが出来れば、魘されてる最中に起こすことくらい出来たのに」
「いえいえ、そこまで手を煩わせるわけにはいきません。姉さんは私のことは気にせずにグッスリ眠ってくれれば。私も姉さんが近くにいるというだけでも発作が抑えられるので、今の距離感で充分です」
海風のストッパーは、完璧に春雨の存在になっている。これはもう、依存と言っても過言ではない。松竹姉妹の共依存と殆ど近しいモノだろう。

「そっか。じゃあ、これからも一緒に寝た方がいいね。私も寂しくないから、一緒にいるのは大歓迎だし」
「ありがとうございます。よろしくお願いします」
　春雨は海風のことが心配であるために持ちかけた添い寝ではあるのだが、海風の中では別の視点での喜びがある。違うとはわかっていても、春雨が受け入れてくれたのだという幸福が身体中を駆け巡るかのようだった。
「姉姫様は先に起きて朝の準備をしているそうです。私達もそろそろ」
「うん、そうだね。まず海風の腕の件と、あと鎮守府にも連絡しなくちゃ」
「はい。私のことで心配をかけてしまっていると思うので、無事……とは言えませんが、艦娘の心のままに深海棲艦となったことを伝えなくてはですね」
　春雨も海風も、山風の海風に対する秘めた想いのことは知らない。だが、海風のことを一番心配しているのは、紛れもなく山風であろうと理解はしている。故に、今この状況を山風には真っ先に伝えたかった。
　絶望が溢れ出す寸前まで気にかけ続けてくれた山風には、申し訳なさすら感じる。親身になってくれたのに、結局こんな結末になってしまったことを山風には謝りたいとさえ思えた。
「腕は服と同じで、イメージで構築出来るからやってみて。ほら、私の脚みたいに」
　まだベッドの上だったので構築していなかった脚を、海風の前で構築する。以前調査隊が1泊した時にも見せているが、今回はただ見せるのではなく教えるようにゆっくりと。
　海風もそれに倣って腕をイメージすると、元々持っていた細く綺麗な腕が機械的になった形で構築された。その掌を握り締めると、カチャカチャと小気味良い音を立てる。
「出来ました！　でも、感覚が少し違いますね……」
「最初は細かい動きに苦労するみたい。妹姫様も片腕が艤装だけど、

最初は苦労したみたいだよ」
「そうなんですね……でも、頑張ります。平常な毎日を、姉さんと共に過ごせるようになるために」
　朗らかに笑う海風。ここ最近、駆逐隊が行方不明になってからは、こんな表情など見せたことが無かった。そこも心を壊していることに繋がるのかもしれない。

　朝の準備を終え、部屋から出たところで海風のことを心配したジェーナス達と対面。海風が孵化していることに驚きつつ、元気そうに歩いているところを見れたところで大いに喜ぶ。無事に孵化が出来なかったことというのは今まで無いのだが、やはり短時間で深海棲艦として生まれ変わるというのは少しだけ不安は残る。
　それに、溢れ出した感情が『絶望』であると知っているため、生まれ変わってもまともに動けない可能性だってあった。見た感じ、そんな兆しは1つも無いので安心。
「ウミカゼ！　ちゃんと孵化出来たのね！」
「はい、海風、無事同胞（はらから）となりました。身体の不調もありません。右腕はありませんでしたが」
「だから腕の部分を春雨みたいに隠してるのね」
　今の海風は、春雨と同様に比較的艦娘の時に近い姿をしている。制服も器用に作り上げたが、海風の制服は少し特殊で、元々がノースリーブ状のセーラー服とロンググローブだったのが、グローブが失われて首から下の上半身を覆うタイツのようなインナーとなっていた。
　これはまた春雨を意識しているものになっており、春雨がタイツで両脚を隠しているように、海風もインナーで両腕を隠そうと考えた結果である。春雨が脚なら自分は腕だと、姉妹艦であることを強調したがっているように。
「アンタ、同胞（はらから）になっても殆ど変わってないわね。もっと人生に悲観してるかと思ったわ」
「姉さん……もう少し言い方を」

「だってそうじゃない。海風の溢れた感情って『絶望』でしょう？　死にたがりになるか、私みたいになるかと思ってたわよ。元凶を叩き潰さないと気が済まないくらいにね」
　叢雲から言われると、海風は少し苦笑した後に瞳の中がドロリと濁る。
「勿論、元凶は潰しますよ。一応白露姉さんですけど、あのヒトは私に絶望を味わわせるのみならず、春雨姉さんを裏切ったようなものですから。万死に値します」
　嘘を一切ついていない、本気の言葉。これを見る限り、海風の中身は変わり果てているのだと実感する。
　見た目も言動も殆ど艦娘の時と同じではあるが、心持ちがまるで違う。春雨の敵は自分の敵。春雨を裏切った者は、春雨が許そうが敵。
　自分のことはどうでもよく、仲間のことを気にかける春雨と少し近いが、仲間ではなく春雨のことを気にかけるのが海風だ。
　普段は艦娘の時と同じでも、春雨が絡むと途端に変貌するようなモノ。そこに溢れ出した感情である『絶望』は全く関わりが無い。
「ふぅん、なら私と気が合いそうね。アイツらをぶちのめすために、協力しましょ。同胞（はらから）なわけだし」
「はい。姉さんを傷付けた報いを受けてもらわなくてはいけないので、協力しましょう叢雲さん。少し前にも仲良くなれそうでしたしね」
「……そうね。アンタにはいろいろ教えられたから、信用してるわよ」
　叢雲と海風はうまく同調出来ているようだ。艦娘であった頃から悪くない仲になれそうだったところを、同胞（はらから）となったことで完全に友人としての感覚になった様子。
「でも、本当に凄いね。海風ちゃん、発作とかも無いの？」
「そう……ですね。今のところは発作らしい発作は起きてません。姉さんが近くにいてくれるからだと思います。姉さんは私の希望、一筋の光、無くてはならない存在ですから」
　春雨のことを語る海風は、今までに見たことのない程に饒舌。次から次へとその良さが溢れ出して、春雨すらも圧倒する。言われる側は

堪ったものではないようで、恥ずかしがりながらアワアワし始めた。
この説明で海風がどうしてこんなことになっているかは察したようだ。絶望が溢れて世界が真っ暗闇に包まれてしまっているところを、それを救うように差してきた光に依存するのは仕方ないだろう。
一日中、繭に向かって話しかけ続けたのが大きかったようだ。しかし、海風には０か１００しか無かったというのがなかなか辛いところ。この依存体質に変貌しなければ、絶望に苛まれて人格や価値観までもが暗く落ちぶれていた。ならば、まだ明るく過ごせそうな今の方がマシ。
とはいえ、何がきっかけで絶望が溢れ出して発作を起こすかはわからない。春雨が近くにいようが、それは関係ないだろう。こればっかりは、ここで生きていかなくてはわからないことだ。
「と、とにかく、海風は施設の一員となるよ。みんな、今後ともよろしくね」
「よろしくお願いします」
改めてお辞儀する海風に、薄雲やジェーナスは握手したり抱き合ったりと思い思いの感情表現で受け入れた。

海風は確実に壊れている。だが、明るくなっているのならまだいい方だ。生きていけるのだから。

海風から山風へ

海風が繭から孵ったことは、すぐに鎮守府に伝えられることになった。あちらでも海風のことが気になっているだろうし、無事であるなら早く知りたいだろう。それについては朝イチ、朝食後に全員が集まった状態で行なわれることになる。元気な海風の姿を見せてあげたい。

それに、山風のことも心配だ。海風のことを最も心配していた山風は、海風がこうなってしまったことで精神的に参ってしまっている可能性が高い。それこそ、第二の海風になってしまう危険性すらあった。それだけはよろしくない。

「それじゃあ海風ちゃん、鎮守府に連絡をするけれど、大丈夫よねぇ？」

「はい、問題ありません」

この報告の場に参加するのは、姉妹姫の他には春雨と海風。部屋の外では、その話の内容を聞こうと施設の者達がそれなりに集まっていたりするのだが、気にしないことにした。

海風が深海棲艦化したことに加え、今後のことも考える必要がある。そこで、鎮守府と施設の橋渡しが出来る2人がいれば、話もしやすくなるだろう。

それに、海風は春雨がいなくてはまともに行動出来るかもわからない。絶望を打ち消すくらいの依存に変化しているようなものなので、2人が同時にこの場にいる必要がある。

「提督にも私の現状を知ってもらいます。そういうのは、自分の口で説明した方が早いと思いますし」

「そうねぇ。発作を起こさないのなら、自分で話した方がいいわねぇ。自分のことを一番わかるのは、やっぱり自分だもの」

「はい。なので、繭の中でのことも、今の私の心持ちも、全て話そうと思います」

深夜に中間棲姫から言われた細かい話は、ここで纏めてやってしまおうということにもなっている。海風の今、そして今後のことを、こ

こで全て決めてしまう感じ。
とはいえ、海風の今の状況からして、施設の一員としてここで暮らしていくことになるのは間違い無い。深海棲艦化してしまったのだから鎮守府に戻ることは出来ないのだから、春雨と同じ道を歩くことになるだろう。それをあちらにも理解してもらうのが、今回の報告のメインになる。
中間棲姫がタブレットを操作し、鎮守府へと連絡を取ったところ、数コールも待つことなく提督が出た。待ち構えていたかのようなタイミングだったため、かけた中間棲姫が驚く羽目になる。
それだけ鎮守府側は海風のことを心配していた。繭から孵るのを今か今かと待っており、この通信はその結果であると確信を持っていた。
『海風のことかい？』
表情はいつもと変わらないが、開始早々この言葉である。対する中間棲姫は、ええと一言だけ話した後、タブレットを動かして海風の姿を映した。それを見た提督は、流石に驚いて息を呑んだ。
つい先日まで自分の部下として一緒に戦ってきた艦娘が、姿はおおよそ同じでも深海棲艦となっているのだ。春雨の時にも驚いたものだが、流石に慣れるようなことはない。
「提督……このようなカタチで戦線離脱してしまって申し訳ありません」
まず海風は謝罪から入った。艦娘をやめ、深海棲艦となったことで、これ以上一緒に戦えなくなってしまったことは、やはり残念だと思えるようである。
これが絶望に苛まれているようなら、海風はこんな言葉すら言えなかっただろう。まだ受け答えが出来る分、やはり今の方がマシであると言える。
『いや、謝らなくてはならないのはこちらだ。君が精神的に疲弊していたのは目に見えていることだったのだから、そうなってしまうことも予期出来たはずだ。それなのに、結果的に君に辛い思いをさせてしまった……』

提督側も海風に対しては申し訳なさが強かった。最善の行動を取っていたと思っていても、今回の結果は悪い部分がどうしても目立つ。

それは指揮を執っている提督の責任だと考えていた。敵のことを見誤ったのは自分のせいであると。もう少し考えていれば、海風がこんなことにはならなかったはずだと、後悔が尽きない。

『海風、君の溢れた感情は絶望と聞いている。トラウマを刺激するようですまないが……この場に立っても大丈夫なのかい？』

調査から戻ってきた金剛から、海風は絶望が溢れた結果、黒い泥が溢れ出して繭となったと聞いている。それ故に、海風とこうやって話すのに緊張感があった。

しかし、画面越しの海風にそんな感じは見えない。姿が少し違うだけで、艦娘の時と殆ど同じ。

「それについて、お話させていただきます。私は春雨姉さんに救われたんです」

ここからは海風の独壇場。朝にも話していた内容を提督に対しても語り出す。

春雨は絶望の淵に立たされた自分に差し込んだ一筋の希望なのだと。暗闇を照らし出す光なのだと。そのおかげで溢れ出した絶望は大分緩和されており、春雨が近くにいる限り、希望を感じることが出来るのだと。

その勢いたるや、提督どころか他の誰もが口を挟むことが出来ない程だった。これをこの場で初めて聞く飛行場姫も、流石に呆気にとられていた。

海風はこのことを話すことでまた春雨に心酔し、依存していく。絶望という闇から助け出してくれた、最愛の姉。その命を捧げるに値する相手であると。

明らかに行きすぎた思想なのだが、海風はそうやって壊れたということで決着をつけるしかない。本来の絶望によって入ったヒビに、春雨という存在が染み込んだことで隙間を埋められたのだ。

「ですので、私から溢れた絶望は払拭され、別のカタチへと変質したん

です。春雨姉さんが機転を利かせてくれたおかげですね」
『そ、そうか……わかった。よくわかった』
この時の提督の表情は、少し引き攣っているようにも見えた。艦娘であった頃の海風から考えると、ここまで積極的に自分の意見をイキイキと話す姿は少し異様。冷静で真面目な分、激しく感情を露わにすること自体が稀である海風とは思えないくらいの変わり様である。
提督の隣の五月雨も、海風のこの様子には言葉も無かった。妹の変わり果てた姿と考えると、複雑な感触を得る。この変わり方を悲しむか、何事も無かったことを喜ぶか。
発作のトリガーが無い代わりに、常に壊れ続けている。春雨とは近しいようで遠い壊れ方。それを嫌という程に理解させられた。
「ともかく、海風は無事目を覚ましたわ。このこと、山風には伝えておかなくちゃいけないと思うのだけれど」
海風が止まったところを見計らって、飛行場姫が次の話題を切り出す。海風のことを一番心配していた山風に、海風が無事であることを見せてあげなくてはならない。
飛行場姫は、山風から直に相談を受けているためか気にかけていた。海風が溢れてしまうことを山風が危惧していたように、山風も不安定になってしまっているのでは無いかと心配している。
『ああ、少し待っていてくれ。五月雨、山風達を呼んできてくれないかい』
『わ、わかりました。すぐに連れてきます……って、うわぁ!?』
五月雨が退出……しようとした瞬間、執務室の扉が音を立てて開かれた。何かを感じ取ったのか、執務室の前には山風が待機していたらしい。江風や涼風の声まで聞こえる。
『海風姉！　海風姉無事なの!?』
焦り、声を荒げる山風。まるで、姉妹を失った直後の海風を見ているようだった。クマがクッキリ浮かぶような憔悴の仕方はしていないものの、眠れていないのは間違いない。
その後ろにいる江風と涼風も、疲れていないと言われれば嘘になるような状態だった。朝イチだというのに疲れが取れていないような、

朝イチから振り回されているような、そんな表情をしている。
「山風……心配かけてごめんね」
『海風姉……よかった……。ただ深海棲艦になっただけなんだ……』
見た目が変わっただけだと安心したようで、わかるくらいに大きな安堵の息を吐く。絶望が溢れたと聞いて、海風が豹変してしまっているのではとずっと気にしていた。
「うん、春雨姉さんのおかげで、私は絶望に呑まれることが無かったの。姉さんが私を救ってくれたの」
この辺りで、山風は海風の精神的な異変に気付く。絶望によって入った心のヒビを春雨が埋めたのだとも、精神的な機微に敏感な山風にはすぐにわかった。
艦娘の頃の優しい海風は当然残っている。山風を含めた妹達のことを、その時と同じように見ているのも。姉妹愛はそのまま残っているため、山風に向ける視線は何も変わらない。心配をかけて申し訳ないという気持ちはある。
しかし、心の向きは常に春雨の方を向いていた。妹を見ていないわけでは無い。優先順位が今まで以上に顕著だった。春雨の話をする時の声の抑揚は、今までには無いほどに昂揚している。それこそ、秘めていた想いを隠さなくなったように。
『そっか……うん、そうなんだね。良かった』
何か吹っ切れたような表情の山風。
『また……会えるかな』
「私が決めていいことかはわからないけど……勿論、施設に来てくれれば、また会えるわ。私からそちらに行けなくなっちゃったのは残念だけど」
これだって海風の本心だ。鎮守府のことを切り捨てているわけがなく、この身体になったことで本来の居場所に戻れなくなったことを本当に残念に思っている。
「遊びに来てちょうだい。私達は、貴女達の来島を快く受け入れるわぁ。もう充分に仲間と言える間柄になっていると思うもの」
中間棲姫も再会を斡旋してくれる。今日にでも来てくれて構わな

いとまで。
この施設は山風のメンタルケアにもなるだろう。仄かな想いを秘めていた海風と一生離れ離れとなってしまったら、それこそ連鎖的に山風も崩れる。海風がこうなってしまった今、それだけは絶対に防がなくてはいけないことだ。
中間棲姫も、この鎮守府の艦娘に対しては大きな信用を持っている。これまで行なわれた数度の対話と、２回の宿泊によって、施設に害の無いものである認識は絶対的なものとなっているのだ。
ならば、山風にもこの門は開き続けることになるだろう。来たい時に来てくれればいい、いつでも待っていると話し、山風をより安心させた。
『……提督、いい？』
『勿論だとも。山風、君には海風から引き継いで、調査隊の隊長を任命したいんだが、良かったかな。調査内容は、深海棲艦化した艦娘の実態。春雨や海風と交流して、何事もないことを確認し続けてほしい』
これ以上調査することがあるかと言われれば難しいところではある。ミシェルのいたであろう海域からは痕跡らしき髪飾りを持ち帰ったが、目下の問題は古鷹と白露からの鎮守府襲撃がちらつかされたことだ。
だが、『海風の役割を山風に与える』ということ自体が、山風の心には響く行為だと考えた。調査隊はその名前の通り、施設に向かって穏健派の深海棲艦の生態を調査するという部隊となる。山風に最も必要な役割だ。
当然、施設を信用していないわけでは無い。体裁としてこの調査は必要になるのは当然であり、そもそもが互いに信頼しきっている関係。調査という行為そのものがその信頼を裏切るカタチになってしまいそうだったが、姉妹姫はどちらも提督の考えを理解している。
『っ……うん、やる。あたしが、海風姉の後を継ぐ。施設との交流、あたしが頑張る』
力強く頷き、新たな隊長として意気込む山風。その様子に、山風のメンタルを心配していた江風と涼風も一安心。

「来るときに事前に言ってくれれば、こちらも受け入れる準備が出来るから、今まで通りお願いねぇ」
『了解した。早速だが、こちらも1つそちらに向かいたい用があってね』
「あら、そうだったの？」
　言いながら提督が机の引き出しから取り出したのは、前回の調査で発見された、三日月型の髪飾り。
『これを、そちらに定住している駆逐イ級……ミシェルだったかな。その子に見せてあげてほしい。その時はバタバタしていたため、確認は出来なかったが、本来の調査内容はこちらだ』
　海風が繭となり、春雨が重傷を負ったことによって、調査隊そのものがバタバタしたまま帰投することになってしまったが、この髪飾りがミシェルと関係あるものなのかは重要なところ。
『この髪飾り、本来の持ち主が判明した。同じ艦娘の別個体で確認が取れたため、確定している』
「なるほどねぇ。もしそれに反応したら、ミシェルちゃんはその艦娘だったということになるわけねぇ」
　駆逐イ級という姿を取っているが、あれも黒い泥が溢れ出した結果の成れの果てである可能性はずっと考えられていた。それが確定するのなら、また話は変わってくる。
　知らない間に古鷹達に襲われ、ああなってしまったというのなら、この事件の被害者になる。

　そして、提督は言葉を続けた。ミシェルが本当は何者だったのか、その可能性の1つを示唆した。
『この髪飾りの本来の持ち主は、睦月型駆逐艦、４番艦の卯月だ』

何が最善か

調査によって手に入れた三日月型の髪飾りの持ち主が判明した。その持ち主は、睦月型駆逐艦の４番艦、卯月。

駆逐艦の中では若干力は劣るものの、その燃費の良さを遺憾無く発揮し、鎮守府を支える縁の下の力持ち。戦うばかりが艦娘ではないというのを、その存在によって証明する者である。

その卯月が、ミシェルの正体なのではという疑惑が浮上している。この髪飾りは、ミシェルが発見された海域付近で発見されているので、髪飾り自体がミシェルの持ち物である可能性は無いわけではない。

それ故に、一度髪飾りを見せてみるということになった。調査隊が帰投したときは、春雨と海風の件もあってバタバタしており、そんなことをしている暇が無かったのだが、今ならば全てが一度落ち着いているため、そちらが進められる。

「じゃあ、お昼から来るということで良かったかしらぁ？」

『ああ、そうさせてもらうよ。こちらも少し準備してからそちらに向かう。昼食はこちらで済ませておくから、心配はいらない』

「あら、それはありがとう。来る子達は前と同じで良かったかしらぁ」

『ああ。島風と宗谷も派遣が続行されているのでね。調査隊に同行してもらうよ。万が一がある』

この調査隊の移動中、古鷹と白露が襲撃してくる可能性を加味した結果である。

あの戦闘から2日が経過したわけで、あちらも全回復している可能性は充分にあり得るのだ。今この時だって、鎮守府襲撃を企てているかもしれない。まさに向かっている最中かもしれない。むしろ、調査隊が鎮守府を出るのを待ち構えているかもしれない。

そのため、鎮守府から孤立することになる調査隊は、万全な態勢で向かうことになった。もし襲撃を受けたとしても、あちらがどういうものかわかっている者達で構成されている方がいい。分が悪くとも、善戦は出来るはずだ。古鷹はまだまだ底が知れないが。

「くれぐれも気をつけてちょうだいねぇ」
『お気遣い、感謝するよ。なるべく君達の手を煩わせたくは無いからね。なんて、僕が言っても仕方ないのだが。僕はここで無事を祈ることしか出来ないんだ。いつも頑張ってくれるのは艦娘達ばかりだ』
苦笑しながらも、提督は施設の者達になるべく迷惑をかけないことを約束して、通信を終えた。
「……すごいわね、彼。比叡が言ってた力を貸してくれって話、一度も切り出してこなかったわ」
飛行場姫が言うように、この通信の間に支援要請については一言も話さなかった。提督だって、比叡がそれを持ちかけたことくらい聞いているだろう。しかし、施設のことを思うと、鎮守府防衛の援護をしてくれなんて頼めなかった。
今回の事件に、施設は本来無関係。戦いたくないから隠棲しているのに、そんな戦いに駆り出すこと自体がまず違うのではと、提督は考えている。
「こちらのことを第一に考えてくれているわぁ。私達がそういうことを嫌っているのがわかっているから、あくまでも協力者であって戦力として見ていないんでしょうねぇ」
「ありがたいといえばありがたいけど、無理していないかしらね」
ここまで仲良くなれたのだから、何かしら協力してあげたいと思うのが、心優しい姉妹姫の内心である。しかし、最優先は勿論、施設の平和だ。
今でこそ、仇を討つために戦いを望む者も出てきてはいるものの、それによってこの施設の平和が脅かされるというのなら、処遇を考えなければならなくなる。気持ちはわかるが、戦いたくない者、戦えない者もいるこの施設が戦火に包まれるようなことがあってはならないのだ。
「貴女達は……どうしたい？」
春雨と海風に問う中間棲姫。これはもう、回答がわかっている者に対する問い掛けである。
「私は姉さんに従います。でも、鎮守府を守りたい気持ちは大きいで

す」
海風は即答。最優先は春雨の意志ではあるが、やはり鎮守府への支援が出来るのならやりたいというのが本心のようである。
艦娘の時の心を残したままでいられているおかげで、鎮守府への思い入れも失われていない。かつての仲間達、妹達が住まうその場所があんな輩に襲われるだなんて、気分が悪いを通り越して反吐が出るとのこと。
「姉さんはどうですか？」
「私は……」
春雨はというと、逆に答えがなかなか出せないでいた。理由は単純に、姉妹姫と同じようなことである。
鎮守府は当然守りたい。元々仲間だった顔と記憶を持つ敵と戦うなんて、簡単には出来やしない。躊躇いだって出てしまって、十全の力を発揮することはかなり難しいだろう。割り切れたとしても、心の奥底では抵抗が出てしまう。
だからこそ、深海棲艦として戦える自分が手伝いたい。既に完全に割り切って、白露と一戦交えているのだから、次も何の抵抗も無しに戦えるはずだ。
しかし、そのためにはこの施設から鎮守府に出向く必要が出てくる。鎮守府から施設にやってくるのとは、リスクが段違いだ。何せ、鎮守府は人間が住まう陸にあるわけで、近付けば近付くほど、嫌でも人間の目に晒される可能性が増える。
そんな中に深海棲艦が行ったとして、それがバレてしまった場合、鎮守府だって糾弾されるだろうし、春雨の出処すら徹底的に調査されるだろう。結果、施設が見つかって、何もしていないのに人類の敵認定すらあり得る。
「私は、どちらにとっても最善になる手段が思いつかないから、今は何とも言えない……かな。鎮守府は勿論守りたいよ。でも、この施設も、今の私には大切な場所だから、少しでも危険を引き込むようなことはしたくない……」
話している間も考え込んでいき、俯いていく。姉妹姫ですら迷って

いる問題を、春雨が即答出来るわけがなかった。
「流石は姉さんです。なんて慈悲深い考え。どちらも救うという難しいことのために心を痛めるなんて、姉さんは私だけでなく世界の希望となり得る存在ですね」
「海風……それは言い過ぎだよ」
「私は本心を包み隠さず話しているに過ぎませんから」
相変わらずの海風であるが、どちらも救うというのが誰が考えても難しいのは当たり前である。
どちらの優先順位を上にするかというのがヒトによって違うのは言うまでもない。まだ深海棲艦になったばかりの海風からしたら、所属したばかりの施設より今まで暮らしてきた鎮守府の方に重きが置かれるのはわかる。しかし、他の者達はそもそも鎮守府に思い入れがないのである。
それこそ、姉妹姫すらも鎮守府に対しての思い入れは無かった。優しさのみで悩んでいるに過ぎない。
どちらにも思い入れがある春雨は特に頭を悩ませていた。どちらも平和であってほしい。どちらかに偏らせると、もう片方の平和が脅かされる。どちらも平和にするためには、どちらも救う最善の選択肢を選び取らなくてはならない。
そんなこと、出来るわけが無かった。そもそも春雨は1人だけ。どちらも選ぶなんてことは不可能。
「アタシ達はもう少し保留にするつもりよ。切羽詰まったら嫌でも選ばなくちゃいけなくなるとは思うけど」
「そんな時が来たら、もう遅いって可能性もあるのよねぇ……悩みどころではあるわぁ」
「ホントに。平和のために戦うってのは、実際矛盾だらけよね。戦いが平和と真逆なんだから」
平和を勝ち取るために戦うのは仕方ないとしても、平和なところから戦いに向かうのはそれはそれで抵抗があるというものである。施設の平和を優先させる姉妹姫には、ここが大きな問題となっていた。
心優しい深海棲艦達は、仲間のために力を尽くすが、如何に優しく

とも出来ることと出来ないことがある。
「私も……その時まで考えさせてください。何が最善か」
「ええ、そうしてちょうだい。他の子達にも意見は聞くけども、救ってあげたいという気持ちはあるのよぉ」
この問題の解決は、もう少し先延ばしとなる。そうこうしている間に鎮守府襲撃となってしまうかもしれないが、鎮守府側からの支援要請が正式に行なわれていない以上、勝手なことをしたら逆に迷惑をかけてしまいかねない。
「これはあの大将さんにもちゃんと連絡をした方が良さそうねぇ。提督くんよりも立場が上にいるって話だし」
「そうね。ある程度は相談しているとは思うけど、こちらからも直に聞いてみるのはいいかもしれないわね」
大将が上手いこと手を回してくれれば、堂々と鎮守府を支援出来るかもしれない。如何に深海棲艦でも、友軍として扱ってもらえる手段を用意してくれるかもしれない。そして、それが施設に一切の被害を齎さないならば最高である。
自分達の独断では絶対に出来ない以上、この辺りは慎重に事を起こしていかなければならない。

一方、鎮守府。通信が終わったところで、山風がソワソワしながら作戦指揮を待つ。
今この通信の最中に調査隊の隊長を任命されたことで、今からやることなんて大概わかっているのだが、正式な任務を言い渡されるまでは動けないのが艦娘の立場。
「さて、山風、ならびに江風、涼風。聞いての通り、調査隊としての任務を言い渡すよ」
「……うん」
来た、と身体を震わせて、提督を見据える山風。その姿はどうも隊長というイメージからは少し遠いものの、やる気だけはヒシヒシと伝わってくる。江風と涼風も、そんな山風の様子を後ろから見てニヤニ

ヤしていた。
「大将に調査してもらったこの髪飾りを、施設にいる駆逐イ級、ミシェルに確認してもらう。もしこれで何かしらの反応があった場合、ミシェルは駆逐艦卯月の深海棲艦化した姿ということになるからね。そうなった場合、近隣鎮守府での卯月の轟沈事例を洗い出す必要が出てくる」
「……うん、わかった。みんなで行って、ミシェルに髪飾りを見せる。それが、１つ目、だよね」
　そうだ、と提督が頷いた。あくまでもこの調査がメインなのだが、実際の本題は次の任務。
「そして、深海棲艦化した海風の調査もお願いしたい。通信で見た感じでは、元気そう……元気すぎるようにも見えたが、何か内面にある可能性がある。深海棲艦化は心が壊れている１つの結果だ。海風も、何かしらの危険な兆候を抱えている可能性だってある。それを見てきてもらいたい」
　口ではこう言っているものの、提督は単に山風に、海風と会って話してきなさいと言っているだけ。任務という仰々しい言い方になっているだけで、姉妹が離れ離れになるのは辛いことだろうから、定期的に顔を合わせてこいということだ。
　山風は勿論、その意図を汲み取っている。小さく微笑みながら、大きく頷いた。調査隊隊長としての初めての任務は、変わり果てた姉との再会である。
「この結果次第では、こちらも大きく動かなくてはならなくなるだろうからね。穏健派の深海棲艦との付き合い方が、より良い方向に向かってくれる事を祈ろう」
　これも、提督が今の最善を掴み取ろうとしている結果である。誰もが最も幸せになれる手段を選び、鎮守府も、施設も、どこもかしこもを平和でいられるようにするため。
　だからこそ、施設側に支援要請はしていない。それが施設側の平和を崩さない手段だからだ。鎮守府のことは、鎮守府で終わらせる。それが敵わないくらいの強敵だとしても。

「では、今から調査隊には準備してもらう」
「……了解。行くね」
表情はあまり変わっていないが、山風のソワソワはウキウキになっている。海風とまた会えることがそれ程までに嬉しいようである。
しかし、気分としてはどうしても複雑なようだ。春雨至上主義となっていることは、先程の通信で痛いくらいに理解している。もう自分の方を向いてくれないかもしれない。だが、そんな海風でも、山風にとっては最愛の姉である。会えないより、こちらの方がいい。
「ンじゃあ、江風達も準備してくっかい」
「だねぇ。あたいは島風達に声かけてくるよ。正式に任務として言ってくれるんだろう？」
「ああ、放送してもいいが、呼んできてくれるならそれでも構わないよ」
「あいよ！　それじゃあ、山風姉のためにもサクッと集めて準備しなくちゃあねぇ！」
２人の妹も、山風が元気になる事を願って動き出す。山風は少し恥ずかしそうにするが、２人の行動力に感謝した。

世の中の最善を掴み取るのは難しい。だが、今の選択が最善になるように努力していくのは、当然のことである。

痕跡を目にして

鎮守府との対話が完了。調査を進めるために、また昼から来るということになった。その時は、ミシェルの出処で発見された三日月型の髪飾りを持参し、それを見せることで何かしらの反応を見せるかどうかの確認がメインとなる。

ミシェルがその髪飾りを知っているのなら、駆逐艦卯月である可能性が非常に高くなる。そうなった場合は、近隣鎮守府などでの卯月の轟沈事例を洗い出すことになる。それから、古鷹達の目的にまた繋がるかもしれない。

「そうなのね、Ｍｉｃｈｅｌｌｅの素性がもしかしたらわかるかもしれないのね」

その話を春雨と海風から聞いたジェーナスは、少し驚きつつも喜んだ。

ミシェルに一番肩入れをしているのは間違いなくジェーナスである。駆逐イ級の姿でも、ペットではなく友達として扱っている辺り、特に可愛がっていることがわかる。毎日のように食事を届けているし、午後は大概一緒に遊んでいるくらいだ。実際、ミシェルもジェーナスには特に懐いている。

そんなミシェルが本来何者なのかがわかったら、より親密になるつもりのようだ。姿形はまるで違うとしても、生まれ方は完全に自分の同じ。施設にいる元艦娘達と同じなのだ。異種ではなく、同種。まさに同胞（はらから）。

「そのウヅキというのはどんな子なのかしら。私でも仲良くなれそう？」

「私達はちょっとわからないかな……うちの鎮守府にはいなくて。でも、同胞（はらから）になってるならあまり関係ないんじゃないかな」

「確かに！　今のミシェルがあれだけ懐いてくれてるんだもの。それで充分よね！」

ミシェルがその艦娘だからといって何か変わるかと言われればそんなことはないだろう。ミシェルはミシェルであり、元が卯月であっ

ても今はあの姿なのだから、何であろうがそこまで関係がないのである。
　あのイ級が、何かの異変が起きて春雨達のような姫級に変異するというのなら話は変わるが。
「あのミシェルちゃんも、私達のような被害者なんでしょうか……」
「そうかもしれないんだよね。ミシェルちゃんも何かの感情が溢れ出してあの姿になったってこと、あり得るよ。私は、何となくだけどそんな感じするんだ」
　最近勘がいい春雨が言うと、妙に真実味が湧いてくる。海風は心酔しているからまだいいとして、ジェーナスからしても春雨のこの直感は信じているところは大きい。
「ハルサメは、ミシェルってどんな感じに見える？　ただのイ級じゃないとは思うんだけど」
　不意にジェーナスが春雨に問うた。対する春雨は、少しだけ頭を捻った後、思いついたことをそのまま口にする。
「何となく、何となくなんだけども、ミシェルちゃんって繭っぽさはあるよね。ちょっと前まで海風も繭だったわけだけど、その時の海風とミシェルちゃんって、ちょっとだけど雰囲気が似ていた感じがするんだ」
　それが第六感に頼った春雨の見解。以前に飛行場姫が叢雲に話したモノと近しい言葉である。
　繭と雰囲気が似てるということは、ミシェルの中に何かが入っているということにつながる。繭が孵化することなく深海棲艦化した姿と考えることだって出来るのだ。
「ふぅん、じゃあ、ミシェルからウヅキが孵ったりするかもしれないってこと？」
「そういうわけじゃないけど……そんな感じに見えるなって思っただけだよ。あくまでも、勘だからね？」
「姉さんがそう言うのですから、ミシェルちゃんはそういうものなのかもしれませんね」
　海風は即賛同。春雨の言うことは絶対であるために否定をするこ

とは無い。勘だろうが何だろうが、春雨が発言すれば、海風の中では白も黒になる。
「ま、どうであれＭｉｃｈｅｌｌｅは私達のＦｒｉｅｎｄ（お友達）だもの！
もし春雨の言う通りになっちゃったとしても、私はあの子との付き合い方を変えることは無いわ！　ヒトのカタチになったら、それはそれで楽しそうよね。今のままでも充分に可愛いけど！」
　どうであれ、ジェーナスのミシェルに対する感情が変わることは無い。他人のことを第一に考えるのだから、どんなカタチになろうとも友達だ。ミシェルも嫌がる様子が無いのだから尚更である。
「そうだね。ミシェルちゃんが元々誰だったかは、正直そこまで問題じゃないよね。私達には」
「はい。あの敵に繋がる情報を齎したとしても、あの子はあの子ですね」
　その情報は、ある意味施設にはそこまで必要のないモノだ。鎮守府が今起きている事件を追うために必要というだけであり、ただ一緒に暮らしていくだけなら殆ど不要なモノ。
　この施設の者が、その境遇がどうであれ知らないままでも付き合っていけているのだから、ミシェルも例外では無かった。

　調査隊が施設に到着したのは、昼食は不要と言っていただけあって昼過ぎ。今回はミシェルの件をさらっとやるだけという名目上、日帰りということになっている。
　やってきたのは前回の調査隊の面々。そこから海風を抜いただけのメンバーである。宗谷は相変わらずクルーザー。
「ちょ、調査隊、到着……したよ」
「ええ、お疲れ様ぁ。待ってたわぁ」
　隊長として、中間棲姫に頭を下げる山風は、初めての大役を任されたからか少し緊張していた。いつもは海風がやっていたり、海風が不安定だった頃は金剛や千歳が代わりにやっていたことだが、今回からは山風がしっかりやっていこうと頑張って前に出ようとしている。

それもこれも、海風の後を継いだというのが大きい。仄かな想いを寄せていた相手がその立ち位置から退くことになってしまい、自分がその場所に収まったことで、その役割を全うしようと張り切っていた。

とはいえ、中間棲姫の後ろにいる海風の方に意識が行っていたのは言うまでもない。そちらの方にはいち早く江風と涼風が行っていた。

「海風の姉貴、あンま変わってなくて良かったぜ！」

「ホントなー。見た目は春雨姉くらいで終わっててよかったよ」

「あはは……こっちの腕は姉さんの脚みたいに艤装なんだけどね」

「うおー、マジで艤装だ。硬ぇ！」

インナーに包まれているものの、動かすたびに少し違う音がなる右腕を見せると、興味深そうに江風がベタベタ触る。肌とは違う硬質な感触に、変に興奮していた。

そんな姿がチラついたことで、山風が少しだけ不機嫌になったのを、中間棲姫は見逃していない。

「山風ちゃん、貴女もお姉さんのところに行くといいわぁ。今回の調査の件、海風ちゃんのことも、でしょう？」

「えっ、あ……うん」

調査任務の内容は2件。1つは髪飾りとミシェルの関連性の調査。そしてもう1つは、深海棲艦化した海風の詳細調査だ。

通信というカタチで内面がほとんど変わっていないことは確認済みではあるものの、1回や2回でそれが本質的なモノなのかは判断が出来ない。それに、時間経過でより壊れていく可能性だって捨てきれないのである。

実際、春雨がそれを体験している。艦娘達に見つけてもらったから今の精神で落ち着けているが、施設で落ち着いていたことによって、本来の居場所のことを『まぁいいか』で済ませてしまいそうになっている。海風もそうなってしまう可能性は充分にあった。

それを防ぐためにも、定期的に施設に会いに来て、調査という名の交流を続ける。そうすることで、海風は艦娘らしさを失わずにいられるようになるだろう。勿論、それは春雨もだ。

「Ｈｅｙ，山風ぇ。ここは私達に任せて、海風に挨拶してきなヨー。そっちも任務なんだからサー」
金剛にも後押しされたことで、山風は一礼だけして海風の方へとむかっていった。
隊長としてはそこまで許された話ではないかもしれないが、この任務、３つ目の隠された理由として、山風のメンタルケアもあった。
海風を失って、心を強く持とうとした山風だったが、一緒に暮らしているのとたまに会えるのとでは精神的な部分がまるで違う。一時期の海風のように憔悴しているわけではないが、やはり落ち込んでいるところはあった。空元気を見せる時もあったので、提督がすぐにでもこの任務を作ったわけだ。
「ごめんネ姉姫。山風もやっぱり不安定なんデス」
「そうよねぇ。そこは仕方ないわぁ」
山風の不安定は周知の事実。いつも通りに接しつつも、内心ではそれを気にかけている。勿論それは山風も気付いているが、今は甘えさせてもらっていた。
「そうそう、貴女達には先に伝えておかなくちゃねぇ。比叡ちゃん」
「はいっ!?」
突然声をかけられて声が裏返った比叡。
「この前、力を貸してほしいって言ってたじゃない」
「は、はい、言いました！　鎮守府の襲撃を仄めかされたので、是非ともと」
「その件についてね、大将さんに話を持ちかけたのよぉ」
「ひ、ヒエー!?」
大将の名前が出されたことで、自分の発言が非常に大きなことになってしまったのではないかと驚いてしまった。
比叡だからといってヒエーと悲鳴をあげるのはどうかと思いつつも、中間棲姫は続ける。
「結論から言えば、この件はまだまだ保留なのよねぇ。大将さんもわかっていてくれたのだけれど、私達深海棲艦が鎮守府に近付くというのは、とても危険なことだもの。私達にとっても、貴女達にとっても」

大将も同じような考えに行き着いていたようだった。
島風と宗谷から古鷹と白露については聞いていたようで、それを相討ちとはいえ撃退した春雨がいる施設側に支援を求めるのは当然考えている。
しかし、そもそも施設は戦場から離れて隠棲している者達の住まう場所だ。その者達を戦場に駆り出すわけにはいかない。そして、もし出てくれたとしても、鎮守府の防衛ということは陸に限りなく近付くということ。理解者は僅かであるというところから考えると、深海棲艦と与している鎮守府というだけで批判の的になり、最終的には守るべき人間からの弾圧で鎮守府そのものが崩壊しかねない。
大将がどうにか出来る手段を考えているそうだが、今のところはかなり難しいというところで纏まっている。鎮守府と施設は手を取り合えるのに、周りがそれを許さないのならば、今はどうにも出来ないのである。
「比叡、今は私達の力でアレをどうにかする方向で考えるネ」
「はい……こんな大事になるなんて……」
「いいえ、貴女の考え方は全く間違ってないわぁ。でもごめんなさいねぇ。私達にも、やれることとやれないことがあるのよぉ」
唯一無二の力を持ち、おそらく古鷹と白露を撃退出来るほどの力を持つであろう姉妹姫であろうとも、深海棲艦であるというだけで人類は淘汰しようとするだろう。それだけは避けなければならない。
そもそも2人はここから動けないのだから、救援には向かえないのだ。
「だから、まずは貴女達の責務をお願いするわねぇ。そろそろミシェルちゃんもこちらに来てくれるからぁ」
話しているうちに、ジェーナス達がミシェルを連れてこの場へと現れた。ついさっきまでミシェルの洗浄をしていたらしく、やっていた駆逐艦達は全員水着姿で水浸し。代わりにミシェルは太陽光で装甲が輝くほどに綺麗になっていた。
「Ｓｏｒｒｙ．　せっかくミシェルのことをしてくれるなら、ちゃんと綺麗な姿がいいかと思って、急だけどミシェルを綺麗にしていたの

！」
「Ｗｏｗ．　みんなに洗ってもらったんデスネー。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ，とっても綺麗デース」
　金剛に言われて、嬉しそうに身を震わせるミシェル。綺麗になるのは嬉しいらしく、洗浄中も終始気持ちよさそうにしていたようだ。
「それじゃあ、本題に行きましょうカ。宗谷、お願いしマース」
「はい、こちらですね」
　クルーザーから降りてきた宗谷の手には、前回の調査で発見された三日月型の髪飾りがあった。
「これが、前回の調査で発見した現物です。海を漂っていたので大分汚れてしまっていますが……あえてそのままにしてあります」
　戦いに巻き込まれたかのように傷がついた髪飾りを、ミシェルの見える位置に掲げる。
　これで反応を見せたら、ミシェルはそれに対して何かを知っている、もしくは持ち主であるということになる。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ，　これが何かわかる？」
　ジェーナスもミシェルに問うが、珍しくミシェルがジェーナスの声に反応しなかった。宗谷の掲げる髪飾りをじっと見ている。まるで、何かを思い出そうとしているように見えた。
　そして、

「え、み、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……!?」
　初めて見せる反応。感情を身体で表現しているミシェルが初めて、涙を流した。

疑問であるが故

山風が隊長となった調査隊が施設に到着し、早速任務である三日月型の髪飾りをミシェルに見てもらう。しかし、ここで初めて見せる反応が起きてしまった。それを見たことで、感情表現が激しいものの表情というものを持たないミシェルが、突然泣き出してしまったのである。

それを見たジェーナスは大慌て。いつも楽しそうにしているミシェルがみせる、初めての悲観的な感情。一瞬、何が起きたのかわからないという顔すらした。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ，Ｗｈａｔ（どう），ｓ（し）ｗｒｏｎｇ（たの）!?」

泣き出したミシェルに抱きつくように触れ、泣き止むように撫でるが、ミシェルの眼からはボロボロと涙が溢れたまま。表情が変わらないため、何故涙を流しているかもわからない。

しかし、ミシェルの視線は髪飾りから動いていない。それを見て何かを思い出そうとしているようにも見えたが、それ以降はいつものような行動による感情表現すら無かった。

「そ、Ｓｏｒｒｙ！　ソーヤ、それ一度仕舞ってもらってもいいかしら！」

ミシェルを正気に戻すためには、髪飾りを一旦目の前から無くさなくてはと考えた。それを見ているからこんな状況に陥っているのなら、まず見せない方がいい。宗谷も慌ててそれを懐に仕舞い込む。

これでミシェルの目の前から髪飾りは無くなった。しかし、ミシェルの様子はなかなか元に戻らない。一度目にしてしまったことによって、それが何なのかをずっと考え込んでいるような仕草である。

「ジェーナスちゃん、ごめんなさいねぇ。ちょっと私にも」

そこへ中間棲姫が割り込むように入り、額の辺りに手を置いた。それはまるで、繭に触れて溢れた感情を読み取るような仕草。

当然、ミシェルがこの施設に滞在するとなったその時に、中間棲姫は同じように触れて、感情が読み取れるか試してみたことはある。しかし、その時には何もわからなかった。ただの駆逐イ級にやった場合

と同じ結果である。
だが、今回は明らかに挙動が変わったので、改めて実行した。それにより、前に同じことをした時とは違うことがわかる。
「なるほどねぇ……ようやくこの子の素性がわかりそう。前回わからなかった理由も」
安心したような、しかし少しの不安を残しているような、そんな複雑な表情の中間棲姫。
「姉姫、何がわかったの……？　Ｍｉｃｈｅｌｌｅはどうしちゃったの？」
それをすがるように問うジェーナス。思い入れがある分、こんな状態になってしまったことを一番不安に思っているのはジェーナスだ。ミシェルがこうなってしまったのは自分のせいだと、自己嫌悪の発作を起こしてしまいかねないものの、今は理由を聞くためにギリギリで耐えている。
「ミシェルちゃんの溢れた感情が今、わかったの」
「じゃあ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅは……ハルサメの言ってたのが正解で、繭そのものなの？」
「私の見解から言ってしまえば、そうなるわねぇ。この子は本当に、繭のまま同胞（はらから）になってしまったみたい」
この辺りの予想は正解だったようである。繭から孵ることなく、繭のまま変化してしまった特異個体。
普通ならあり得ないことでも、その溢れた感情がそれを実現するに至るものであったようだ。それを伝えるために、中間棲姫は続ける。
「この子の溢れた感情は……『疑問』」
「Ｑｕｅｓｔｉｏｎ（疑問）？」
「そう、ここは私の憶測も入るけど、何故撃たれたのか、何故死ぬことになったのか、何故こんな目に遭ったのか……そんな疑問で頭の中が埋め尽くされて……溢れたのよぉ」
わからないしか無い状態で沈むことになったことで、考えるための心が壊れた。その結果、疑問の感情が溢れ出して、繭となってしまったわけだ。

ならば、何故孵ること無く繭のまま深海棲艦化してしまったのか。ここからも中間棲姫の憶測が進む。
「『わからない』が溢れてしまったことで、この子は自分すらわからなくなってしまった……という感じかしらぁ」
心を壊した結果の記憶喪失。いや、記憶自体はあるのかもしれないが、それが何だかわからなくなってしまったと言う方が正しいかもしれない。
そもそも理解していることが少ない状態で、さらに訳の分からない状況に陥り、何もかもがわからなくなってしまった結果、自分という存在すらわからなくなってしまい、結果的に自分のカタチを作ることが出来なかった。そう考えるのが最も妥当だと、中間棲姫は語る。
髪飾りを見て涙を流したのも、他の施設の者達でいう発作である。わからないものを思い出そうとして、壊れた心が拒絶反応を起こし、涙となって溢れ出た。むしろ、何かわかりそうなのに、わかることが出来ないことに悲観した結果の涙かもしれない。
「もしかして、この子は元々ドロップ艦だったのかもしれませんネ。まだ何も知らず、海の上で発生したところで何者かに襲われて、そのまま……姉姫が今話した通りになったというなら、全部繋がりマース」
理解していることが少ない状態ということは、まず鎮守府などに所属していない状態と考えられる。この世界に生まれ落ちて間も無い時に、何かがあって沈む羽目になったと。
ならば、その沈む羽目になった何かとは何か。ここで思い当たるのは、今なら1つしかない。
「もしかして……仲間だと思っていた古鷹や白露に撃たれた……!?」
比叡が叫ぶように考えを口にした。そして、全てが繋がる。
古鷹も白露も、見た目だけで言えば少し変わった感じの艦娘と言っても差し支えがない。知識が無いのなら尚更だ。明らかな異形ならまだしも、自分と近しい存在であることなんて見たらわかること。
そのため、生まれた直後に出会った古鷹、ないし白露を、自分の仲間だと考えたミシェルの本来の姿である艦娘は、それこそ救援要請か

何かをしたのかもしれない。自分はドロップ艦なので、保護してほしいなり何なり。
　そして、疑問が溢れ出すようなことが起きたというのなら、まずその要請を受け入れたところで、油断しているところを撃った。ここまで来るともう卑怯である。生まればかり、戦い方もまともに知らないであろう艦娘を、信用をさせながらも裏切って殺してしまうだなんて。
「同胞（はらから）にやられたならまだしも、同じ艦娘にやられたというのなら、『何故』に苛まれてもおかしくないわね。アタシ達は見てないけど、その古鷹とかいうヤツは艦娘に似てるんでしょ？」
「Ｙｅｓ．　私達はその違いがわかるからすぐに艦娘では無くなっていると判断出来マスが、ドロップしたばかりの艦娘だと……ちょっと判断出来ないかもしれませんネ」
　古鷹のことを未知の深海棲艦と称したのは春雨だ。見ただけでそれが艦娘とは違うとわかるのは、ある程度鎮守府で生活をしているが故。
　しかし、生まれた瞬間というのはどんな艦娘だって知識が乏しい。自分が艦娘であるという根幹は理解していても、本来の敵と呼べるモノを一度たりとも見ていないのに、普通に会話が出来る者が敵だとは思わない。
「仮に判断出来たとしても、あの力の前では生まれたての艦娘ならひとたまりもありませんよ……多分一方的に嬲り殺されたとしか……」
　知っているからこそ、事実を言ってしまうのが比叡である。素直すぎて嘘をつけず、やめておいた方がいいこともポロリと口から出る。
「でも、何故突然わかるようになったんデス？」
「そうねぇ……さっきの髪飾りを見たことで、『わからない』がちょっとだけブレたんじゃないかしらぁ。思い出しかけて、でも思い出せなくて、また溢れた……とかかもしれないわねぇ」
　駆逐イ級というカタチを取っているが、未だに泥が溢れ続けているのかもしれないとも話す。既に繭から孵った元艦娘ではあり得ないことなのだが、繭のまま深海棲艦化しているという非常に特殊なパ

ターンであるミシェルならば、そういう例外もあり得るかもしれない。
　そうなると、ミシェルは未だに完全ではないという可能性すらある。
「ともかく、今はミシェルちゃんの発作を抑え込むのが先よぉ。ジェーナスちゃん、ミシェルちゃんの様子はどうかしらぁ」
「大丈夫。涙は止まったみたい。でも、さっきまでの元気は無くなっちゃったわ……」
　発作の後だからか、どうしてもテンションが低くなってしまっているミシェル。今はこれ以上何かを知ろうとすることがよろしくなさそうである。
　ただ、一度思い出そうとしてしまったことだ。今後、ミシェルが不安定になる可能性は否定出来ない。その在り方の謎が解けた代償が、明るく楽しいミシェルが失われるということに繋がってしまいかねない。
「……Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、貴女が何であっても、私達はみんな仲間だからね。わからないことはわからないままでいいのよ。ＭｉｃｈｅｌｌｅはＭｉｃｈｅｌｌｅなんだから、過去のことなんて忘れちゃえばいいわ。今が大事なんだもの」
　撫で回すだけではなく、頬擦りしながら刻み込むように囁き続けた。溢れ出してわからなくなってしまった過去より、生まれ変わって楽しく生きる今を見ていた方が、精神的にも健全だ。悩み続けて身を滅ぼすなんて以ての外。
　それが簡単に出来ればいいのだが、簡単に出来ないのが知性ある生物の性（さが）である。本来なら知性のない駆逐イ級だが、ミシェルは特殊すぎるため、この悩みは払拭出来ないかもしれない。
「だから、元気出して」
　ミシェルの額にキスをして慰める。ジェーナスの思いが伝わったかはわからないが、少しだけ元気を取り戻したミシェルは、ジェーナスに応えるように小さく身体を震わせた。
　ジェーナスが側にいれば、少しは解消出来るかもしれない。出来て

いるかどうかを表情から読み取れないのは辛いところではあるものの、感情が身体で表現されるので、まだわかるはずだ。ミシェル自身が隠そうとしない限り。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅについては、姉姫の今の見解を鎮守府に持ち帰りマース。髪飾りに対して何かしら思うところがあるのはわかりマシタしネ」
「ええ、それでお願いするわぁ。これだけで何か進展するかはわからないけれど、わかっただけでも良しよねぇ」
「Ｙｅｓ．　少なくとも、今の敵は艦娘を無差別に沈めているということには繋がりそうデース」
　ミシェルが理不尽に沈められた可能性は非常に高い。今までの中間棲姫の話はあくまでも憶測ではあるのだが、事実に基づいた憶測が多いため、真相に最も近い意見であることは間違いなかった。
　ミシェル自身が、『疑問』が溢れ出した結果こうなったということは確定だ。それがわかっただけでも大きな進展とすら言える。
「山風、こっちはこんな感じで終わりそうデース。良かったデスか隊長？」
　突然金剛に振られてビクッと震える山風。メンタルケアのために春雨や海風と戯れていたものの、ミシェルが髪飾りを見て泣き出してからは、そちらの方にも集中していた。
　調査隊の任務のうちの１つなのだから、隊長としてその件もしっかりと確認している。会話には参加出来なかったものの、その内容はちゃんと理解していた。
「うん……大丈夫。話は聞いてた。調査の結果は、今言った通りのことを伝えるってことで……」
　むしろ今から通信端末を使って伝えてもいいくらいだ。施設にもタブレットは用意されているし、調査隊は通信くらい出来るようにされているのだから。
「Ｓｔｒｉｋｅ（善）　ｗｈｉｌｅ（は）　ｔｈｅ　ｉｒｏｎ（急）　ｉｓ（げ）　ｈｏｔとも言いマース。今から提督に伝えちゃいましょ。山風、よろしくデース」

「う、うん、わかった」
金剛がわざわざ振ったのは、山風がちゃんと隊長をやれているところを海風に見せてやりたいからである。それで山風のモチベーションも上がるのなら一石二鳥。

ミシェルの謎については一気に進んだ。未だにわからないのは、ミシェルが髪飾りの持ち主本人かどうかだけである。
しかし、ミシェルが自分自身をわかっていない状態なのだから、これに関しては仕方ないことだ。

要らぬ過去は捨てて

ミシェルが発作を起こしたことから、その素性の一部が判明した。やはりミシェルは繭そのものと言える存在であり、春雨達と同様に元々は艦娘だった存在。そして、溢れ出した感情が『疑問』であったことにより、自分の過去全てがわからないものとなってしまった成れの果てであった。

本来の自分の姿すらわからなくなってしまったことで、繭のまま深海棲艦化したというのが仮説ではあるのだが、かなり有力であるため、ミシェルはそういうものであるという認識になっている。

「提督……今、調査の結果を伝えたい」

金剛から推されて、今この場で鎮守府に連絡をすることとなった調査隊。金剛のちょっとしたお節介で、山風がちゃんと隊長をやれているところを海風に見せてあげるためである。

隊長が持たされている通信機器で鎮守府へと連絡。勿論感度は良好、普通に話すことが出来る。

『そうか……髪飾りを見たことで発作を』

「うん……それで、姉姫さんが……ミシェルも元々艦娘だったって……」

ここからは、中間棲姫が説明したことをそのまま提督に伝えていく。その言葉を聞くたびに、提督は驚きの声を上げているようだった。

そもそも艦娘が深海棲艦化するということ自体がつい最近知ったばかりの事実だ。それなのに、新しい事例が次から次へと出てくる。繭から孵らないでそのまま駆逐イ級となるのは、施設の姉妹姫ですら初めて。

『了解した。では、その髪飾りは持ち帰ってくれて構わない。ミシェルに見せるのは酷だろう』

「うん……あたしもそう思う……。見るたびに泣いてたら……いつかおかしくなるだろうから」

『ああ。それはよろしくない。それに、今回の任務で、ミシェルについ

てはおおよそわかったようなものだ。深入りして彼女を辛い目に遭わせるのは、僕としても避けたい』
　ミシェルがドロップしたばかりの艦娘が襲われた結果だということは、仮説とはいえ非常に有力な情報。何処かの鎮守府に所属していたわけではないために、大本営の資料にすら残っていない。これ以上調査しようが無いというのが結論だ。
　何処でどの艦娘がドロップしたかが即座にわかるのなら話は別だが、大本営とてそうではない。今回のミシェルの件は、未知の海域でドロップしてしまったという相当運が悪いものである。
『ミシェルの件は一度ここで終わりとしておこう。我々の知る新たな被害者として認識すると共に、施設側で保護してもらえるのならば我々は今以上に関与することを控えた方がいい。また発作を起こしてしまうのは、よろしくない』
「わかった……じゃあ、この調査はこれで終わり……だね」
『ああ、任務完了だ。後で資料にすることで、ミシェルの件はおしまいとしようか』
　充分な進展として、ミシェルへの調査は完了ということとされた。髪飾りは被害者の遺留物として保管し、これ以上の追求はしない。これで終わり。
『では、任務も終了ということなら、頃合いを見て帰投してほしい。くれぐれも気をつけて』
「うん、了解……。暗くなる前に、戻るから」
　通信はこれで終了。やっていることは、いつもの提督との会話に過ぎないのだが、隊長としての責務を全うし、説明出来る部分は全て丁寧に説明もしている。前々から海風がやっていたことは、おおよそ出来ていると言えた。
「お疲れ様、山風。私の後、継いでくれてありがとう」
「……ううん、あたしはまだまだだから」
　謙遜する山風だが、海風に褒められたことで少し顔を赤らめてモジモジしている。金剛のお陰で海風にも認められたような感触を得ることが出来たので、表には出さないが心の中でしっかりと感謝してい

た。
　そんな姿を後ろから見ている江風と涼風は、あからさまにニヤニヤ。また、ミシェルの洗浄を手伝い一緒にここまで来ていた松竹姉妹も、同じようにニヤニヤ。
　海風が春雨に憧れていたように、山風が海風に憧れているのは周知の事実。その立ち位置に近付けることが出来たことを祝福する。
「……まだ時間、あるよね」
「そうデスネ。暗くなる前に帰るとなると、あと小一時間くらいはありマスヨ」
「だったら……少しだけここで休ませてもらってから、帰投する。それで……いい？」
　山風からの指示に、満場一致で賛成の意思。鎮守府から施設までは長丁場だ。ここまで来るだけでも多少は消耗してしまうのだから、帰りはそれを引きずりつつさらに消耗する羽目になる。
　ならば、少しだけでも疲れを取って、そこから帰ればいいだろう。幸いにも時間もあれば場所もある。
　というのは建前で、山風の中では勿論、もう少し海風と一緒にいたいというのがあった。海風だけではない。春雨ともだ。
　仄かな想いを寄せている海風が憧れ、一緒にいるだけで幸せそうな表情を見せる相手である春雨は、山風にとっても憧れの存在。話が出来るだけでも嬉しいものなのである。
「そう言うと思って、オヤツを用意しておいたわぁ。甘いモノで心身共に休んでちょうだいねぇ」
　前回の来島の時に宗谷が大将からの贈り物として貰った食材などから、簡単なオヤツを作っていた。貰った分をお返しするという信念で、艦娘達に還元する。
　リシュリュー特製のクッキーが調査隊に配られ、みんな心身ともに癒されるのだった。

　一方、発作を起こしたミシェルは、ジェーナスの献身により元気を

ある程度取り戻していた。笑ったりすることは出来ないが、身体の震わせ方による感情の表現は戻ってきている。
「はいＭｉｃｈｅｌｌｅ、私達みたいなオヤツは食べられなかったけど、これなら大丈夫よね」
いつもの生魚を口の中に放り込むと、それを嬉しそうに咀嚼する。
以前にオヤツとしてクッキーを上げてみたものの、そもそも大きさ的に食べている感じはせず、首を傾げるように身体を傾けていたため、やはり生魚が一番だということになった。一緒に甘味が食べられればいいのにと思いつつも、生態系が違うのでそこは諦めていた。
しかし、このミシェルの中には自分のカタチすらわからなくなってしまった艦娘が入っていると思うと、少し可哀想になる。
本来ならここの面々のように甘味を楽しみ、農作業や漁をして楽しく生きることが出来ただろう。だが、駆逐イ級の身体ではそれも叶わない。
「さっきも言ったけど、私達はＭｉｃｈｅｌｌｅの仲間、友達だからね。わからないなら、わからないままでいいのよ。過去のことなんて全部捨てちゃって、今を楽しみましょ。大丈夫、ここにいればみんなで楽しく生きていけるんだから」
生魚を食べているミシェルに抱きつき、身体を撫で回すジェーナス。それを受けて、気持ちよさそうに身震いした。
「そうだよー！　私も友達だからね！」
友達という言葉に反応したか、島風も飛びつくようにミシェルに抱きついた。洗浄したばかりなのでスベスベでツルツル。肌触りも良かったか、ジェーナスと同じように頬擦りした。
施設の者だけでなく、外の者にも受け入れられたことで、ミシェルはより嬉しそうに身体を震わせる。表情も変わらず、鳴き声すらないが、その感情は今まで以上にわかりやすくなっていた。
「みんな、ちょっと聞いてもらってもいい？」
ジェーナスがここにいる者達に向けて自分の意思を話す。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅはそんな過去があったかもしれないけど、今のＭｉｃｈｅｌｌｅにはもう関係ないことだと思うの。だから、その時の

ことには触れずに、今のＭｉｃｈｅｌｌｅを見てくれないかしら」
　生まれたばかりの段階で不意打ちを受けて沈むことになったのだとしても、それはもう過去の話。ミシェルはそうであったことも思い出せない、わからない状態にあるのだ。そして、それを掘り返そうとしたことによって発作を起こした。
　ならば、もう過去のことには一切触れず、ミシェルはミシェルとして扱ってあげてほしいと願った。自分達も知らないことなのだから、わざわざ知ろうとする必要もないだろう。知ったところで何も変わらないのだから。
「私も最初はどんな子なのかなって思ったけど、そう思うこともやめる。だって、Ｍｉｃｈｅｌｌｅは何があってもＭｉｃｈｅｌｌｅなんだもの。こんなに可愛い、私達の友達なんだから」
　その言葉を聞いて、ミシェルはさらに嬉しそうに身を震わせる。抱きついている島風に合図するように身体を傾けて、放された瞬間にジェーナスに飛びついた。
　そこそこの大きさがあるのでジェーナスは押し倒されるようなカタチになるのだが、小さくとも深海棲艦であるジェーナスには、その程度はダメージにすらならない。ビショビショになるが今はちょうど水着姿なので都合もいい。
「あはは、Ｍｉｃｈｅｌｌｅもそうしてほしいのね！　そうよ、わからないことはわからないままでいいの。今が大切なんだもの！　思い出さなくていいのよ！」
　辛い過去がわからないなら、捨ててしまえばいい。他の者達にはそんなことは言えないが、ミシェルに関してはそれが正解であろう。過去を思い出そうとすることで苦しむのなら、もう思い出さなくていいのだ。
　過去どんな艦娘だったのかはわからない。それこそ、髪飾りの持ち主である卯月かもしれない。だが、今ここにいるのは艦娘ではなく、ミシェルなのだ。ならそれでいいじゃないか。ジェーナスはそう語る。
「アンタがそれでいいならいいけど」

最初に反応を見せたのは叢雲。多少投げ槍のように聞こえるが、洗浄にしっかり参加しているくらいにはミシェルのことを仲間だと感じている。オヤツをモフモフ食べながら、いの一番に意見を口にした。

過去にあったことで怒りが途切れないのが叢雲。ミシェルをミシェルにした張本人が自分の仇であることはわかっている。ならば、ミシェルの分まで自分が怒ってやろうと、自分の怒りを肯定。

「そう……だね、うん。ミシェルちゃんはミシェルちゃんだもんね。誰であろうと、何も変わらないよ」

薄雲も同意。本当にそれでいいのかと考えることはあるかもしれないが、発作を起こすよりは、過去を捨てた方が建設的だと思える。

ここから全員が同意していき、ミシェルはミシェルであるというカタチで扱うのが、施設の総意となった。この世界には、捨ててもいい過去もある。

「みんながこう言ってくれてるわ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、一緒に楽しく生きていきましょ！　ね！」

勿論だと言わんばかりに、さらに身体を震わせた。

仲間達に改めて友達として認識してもらえたのが嬉しかったようで、先程の発作で過去のことが少しチラついていたようだが、それを振り払って今の自分に向き合えていた。

初めて、ここにいる誰もがミシェルが笑ったように見えた。動いていないはずなのに目を細め、口角が上がった。瞬きをしたらまたいつもの見た目だったのだが、確実に感情が表に出ていた。

ミシェル自身も、ここで生活することで成長している。過去は何もわからないけど、仲間達が、友達が思い出さなくていいのだと言っているのなら、捨ててしまえばいい。ミシェル自身も、新しい自分になるのだと改めて決意していた。

「今！　今笑ったわよね！　Ｍｉｃｈｅｌｌｅ完璧に笑ったわよね！」

「おうっ！　私にもそう見えた！」

ジェーナスが激しく反応し、近かった島風もそれにつられる。

キャッキャッとミシェルを2人で抱きしめながら、その変化を素直に喜んだ。

駆逐イ級であるミシェルだって、思考能力があるのなら成長をする。今回はそれが顕著だった。

辛い過去を捨てて、明るい未来を見据え、ミシェルも施設の者達と一緒に歩いていくのだ。

再びの悪寒

少しの休息を終え、調査隊は施設を発つことになった。任務自体は短時間ではあるものの、ミシェルの素性を知ることになり、大きく進展したといえる。

「それじゃあ……今日はこの辺りにする」

「ええ、ご苦労様でした。提督くんにもよろしく言っておいてちょうだいねぇ」

隊長である山風が改めて中間棲姫に挨拶をし、今回の調査任務は終了。あとは帰投するのみとなる。今の時間から鎮守府に一直線に戻れば、暗くなる前、夕方くらいには到着出来るくらいになるだろう。

「海風姉、春雨姉……また来るから」

「うん、待ってるね」

「調査隊の隊長、最後まで頑張ってね。鎮守府に戻るまでが任務だからね」

笑顔で見送る春雨と、少しだけ過保護な海風。山風は初めての隊長任務をしっかりとこなすことが出来ているものの、やはり妹のそういうカタチの初陣というのは嫌でも気になってしまうようで、ギリギリまで心配しつつもしっかりやるように言い聞かせていた。

対する山風は、そこまで言われなくてもやれると反論したそうで、でも海風に心配されるのが嬉しくて、なんだか複雑な表情でそれを受け入れていた。それをニヤニヤしながら江風と涼風、そして松竹姉妹が見ていたのは言うまでもない。

「……うん、調査隊、帰投します」

気が入ったか、最後に凛々しい顔を見せて、全員に指示を出す。その姿はまさに隊長。かつて海風がやっていたその立ち位置に、山風がちゃんと立っている証拠となった。

海風は帰っていく山風の背中を眺めながら、何だか懐かしい気分になりつつも、あの場所に戻れないことを実感する。

隊長の座は山風に明け渡して、自分は敬愛する春雨と共に隠棲。それが正しいことなのか、間違っていることなのか、そればっかりはわ

からない。しかし、身体がそれを許してくれないのだから、今の立場を受け入れるしかないだろう。
　幸いにも、絶望ではなく春雨への依存へと変化しているおかげで、申し訳なさは若干緩和されていた。これが絶望側に倒れていたら、何があってもあらゆる負の感情に苛まれてしまっていた。それが無いだけでも、海風はまだ楽しく生きていける。
「海風、どうしたの？」
「……いえ、本当だったら、山風の場所に私がいたのかなと思って」
「そう……だね。でも、こうなっちゃったものは仕方ないよ。海風は何も悪くないからね」
　ちゃんと海風の左手を握ってあげる春雨。温もりを感じて、より強く依存すると共に、マイナスなイメージが失われていく。春雨の発言が絶対となっている海風にとって、春雨からの慰めはこれ以上無いくらいに心強い。春雨が悪くないと言えば、それだけで開き直れるくらいである。
「ありがとうございます、姉さん。私は、海風は、ここで姉さんと楽しく生きていきます」
「うん、気にしないで生きていこう」
　２人笑い合って、調査隊の姿が水平線の向こう側に消えるまで、ずっと見送り続けた。
　だが、ここで春雨にまたもや理由のわからない悪寒が駆け抜けた。
「ひぁっ!?」
「ね、姉さん？　どうかしましたか？」
「今の……海風のときみたいな嫌な予感がしたんだ。ゾクッとするというか……」
「私のとき……って、もしかして私が繭になったときの」
　この感覚は、海風が白露と対面したことで絶望が溢れ出したとき以来である。僅か数日前であるために、この感覚は変に覚えていた。
　相変わらず発作でも何でもなく、ただ単に悪寒。虫の報せが来たと言っても過言では無い。
「じゃあこれは、山風達に何かが起きるっていう前兆なんじゃ……」

「か、かもしれない。あの、姉姫様」
「まだ今からならすぐに追いつけるでしょう。前にもそういう勘を当てているんだもの。次も何かあるかもしれないし、跡を追った方がいいかもしれないわねぇ」
今回は未知の海域に向かうのとは違う、陸に近付くような行為だ。慌てて飛び出すのには躊躇が出てしまうものの、あの激しい悪寒は、それだけ山風達調査隊に危機が訪れるのではという不安を呼び起こす。
中間棲姫は、調査隊の跡を追ってもいいと春雨に許可を出した。勿論、そのまま陸に行ってしまうのはよろしくないのだが、見送りということで絶対に人の目につかない場所までなら問題ないと考えて。
「ありがとうございます。じゃあ、私と海風が……」
「今回は俺らもついてくぜ」
「ええ、山風さんとは少し縁が出来たしね」
そこで加わってくるのが松竹姉妹。山風とはそういう感情を持つために仲良くなっていた2人は、春雨の虫の報せを聞いて協力を買って出た。下心ではないが、山風のその想いの行く末を見届けたいという気持ちがあるのかもしれない。
「なら、春雨ちゃん、海風ちゃん、松ちゃん、竹ちゃん、この4人でお見送りに行ってあげてちょうだい。そう何人も行っても、あちらに迷惑がかかっちゃうでしょうし、人の目にもつきやすくなっちゃうからねぇ」
大人数の深海棲艦が群れをなして移動しているところを、何かの間違いで知らないものの目に留まってしまった場合、そのまま施設の特定に繋がってしまう可能性もある。
そのため、出来ることなら施設から全員向かわせたいところだが、そこは少数精鋭で抑えることにした。
「姉姫、悪いんだけど、私も行かせてくれない？　春雨がこういうってことは、アイツが出てくるかもしれないから」
そこへ叢雲も参加表明。前回の春雨の勘が当たっていたことから、今回の悪寒も白露が戦場に現れると考えた。

叢雲にとっても白露は沈めたい天敵。自分の知らぬところで沈まれても気に入らないという、若干捻くれた感情を向けている。現れるというのなら、必ずその場に向かいたい。
「何事も無ければ何事も無いでいいのよ。でも、出てくる可能性があるなら私は必ずそこに行く。姉姫が何を言おうと知ったこっちゃないわ」
「そうねぇ、別に文句を言うことはないわよぉ。叢雲ちゃんの感知の力は役に立つでしょうし、ついていってもらいましょうかぁ」
叢雲のその感情に文句を言うつもりは無い。しかし、そのあと念を押すように1つだけ忠告する。
「叢雲ちゃん、この施設が他のヒト達に知られることのないようにお願いねぇ。ここはみんなの居場所、楽しく生きていくための場所なんだから」
「わかってるつもりよ。私だってね、ここでのんべんだらりと暮らすのは捨てたもんじゃないって思い始めてるんだから」
この施設にいる間は、燻り続ける怒りが多少は緩和されるようだ。餌付けのように甘いモノを出されたり、妹に懐かれたりする生活も、なかなかどうして悪くないと思っている。
「代わりに、向かう5人にお願いがあるの。なるべく、出来る限り艦娘のときの姿に戻ってちょうだい。制服を替えるだけでも多少は誤魔化せると思うから」
万が一、本当に僅かだとしても、最悪を招く可能性は潰しておきたかった。幸いにも全員が艦娘にかなり近い姿をしているため、制服を替えるだけで深海棲艦らしさが大分失われる。
言われるがまま、施設から調査隊のもとに向かう5人は制服を切り替えた。春雨と海風は、毎度お馴染みの白露型の制服に。春雨は脚を隠すためのタイツ、海風は腕を隠すためのインナーを身につけているため、正確には艦娘のときと同じ姿とは言いづらいが、そういう個性であると言えばまだ誤魔化せる。
叢雲は嫌々ながらも艦娘のときの制服、ワンピース風なセーラー服姿に。艦娘である自分が気に入らないから服を替えていたのに、また

これを着ることになるとはと苛立ちを隠していない。
そして松竹姉妹は、今までの簡素な黒いセーラー服から一転、非常に複雑な構造のセーラー服へと姿を変えた。竹に至ってはスカートではなくホットパンツ。この独特な見た目から、一目見ただけでは松型の姉妹であり深海棲艦とは思わない。
「艤装は誤魔化しようがないけど、それでも制服さえ艦娘なら、そういう部隊だと言い張れるでしょう。でも、危険なマネだけはしないでちょうだいねぇ。前の場所に行くのとは訳が違うから」
最後まで心配そうに語る中間棲姫。施設のことを考えてのこともあるが、優先順位は向かう5人のことだ。何かあった場合に、本当に取り返しのつかないことになりかねない。
「姉姫様、許可を出してくれてありがとうございます。施設には絶対に迷惑をかけません」
「気を張りすぎるのも良くないわぁ。でも、それを覚えておいてくれるなら、私は嬉しいわねぇ」
これで準備が出来たため、早速5人で出発。駆逐艦5人であるため、これだと即席の駆逐隊だなと思いながらも、春雨は調査隊に合流するために一気に速度を上げた。

一方、調査隊。施設から離れた後、鎮守府に今から帰投すると連絡を取り、真っ直ぐ帰路についていた。戻るだけではあるものの気は抜かず、だからといって速度を上げすぎることもなく、安定した速度を維持しながら航行を続けていた。
その先頭を駆ける山風は、短時間ではあるものの、施設での海風との交流を思い返していた。
姿は確かに深海棲艦のように色素は薄くなっていたが、話している感覚は艦娘そのもの。確かに心は春雨の方を常に向いているような感覚はしたものの、優しい姉であることは変わらなかった。
それだけは本当に安心した。全てが変わり果てていたら、山風の心も折れていたかもしれない。それが無かっただけでも、強くいられ

る。
「良かったな、山風の姉貴。海風の姉貴と大分話せたンだろ？」
それを冷やかすように江風が横に並ぶ。帰路であるため陣形などは殆ど考えておらず、合間合間に周辺警戒として千歳と千代田が哨戒機を飛ばすくらいで、後はかなり自由。遠征と言うより遠足になりつつあったが、今回の任務は戦闘目的ではないため、そんな雰囲気でも誰も咎めない。
しかし、古鷹と白露の出現はいつになるかわからないため、この任務中だって気を抜いていない。それこそ、この帰路を狙って襲撃してくる可能性だってあるのだから。
「……うん、短い時間だけど、結構話せた」
「全然変わってなくて良かったよね。あたいもちょっと安心したさー」
涼風もそこに加わる。妹達は海風が変わり果てているわけでは無いことを知れただけでも充分に安心出来たようだった。
タブレットによる通話越しでは、わかるものもわからない場合がある。やはり、直に会って話さなければ。そしてその結果、海風は何も変わっていなかったのだ。そうしてくれた施設の者、特に親身になって世話をしてくれた春雨に感謝した。
「毎日ってわけにゃ行かないだろうけどさ、行けるときは何度も行こうな。江風も海風の姉貴には会いたいしさ。勿論、春雨の姉貴にもね」
「次は五月雨も連れていきたいねぇ。直に会いたいって思ってるでしょアレ」
「だね。提督説得して、五月雨の姉貴も調査隊の一員にしちまおうぜ。でも隊長は山風の姉貴な！　そこは変わっちゃダメだよ！」
２人で盛り上がっていくところを見て、山風も穏やかな気分に。鎮守府に残された姉妹は少ないものの、力を合わせて戦い抜ける覚悟は出来ている。
だからこそ、その姉妹のうちの長女が敵対していることが辛い。しかし、もう揺らがない。

ここにいる者達は、もうあの白露に対して一切の容赦をしないことを誓っている。記憶は仲間のモノを持っているとしても、やっていることは侵略者そのものなのだ。ならば、他の深海棲艦同様、撃沈しなくてはならない。

むしろ、白露の姿を取っているからこそ、鎮守府の艦娘達が一丸となって対処に当たらなくてはいけないとさえ感じている。仲間の不手際と言ってはアレだが、鎮守府の責任として。

「……うん、ありがと。あたし、頑張れる気がする」

心を強く持って、調査隊の隊長として、山風は改めて強く歩いていこうと決意した。海風の後を継いだのだから、恥ずかしくない生き方をしたいと。

「ちょっと待って。哨戒機から連絡！」

などと話しているところに、千代田が叫ぶように報告。その切羽詰まった声で、調査隊に一気に緊張が走る。

「嘘でしょ……本当に来ちゃったわけ!?　未知の……ううん、もうわかってる、古鷹と白露出現！　って、あの２人だけじゃない！　イロハ級とかも引き連れてる!?」

危惧していたことが現実になってしまった。念のためと鎮守府に通信しようとしたが、案の定通信妨害されているかのように声が届かない。まさにあの２人が現れるときの前兆。

しかも今回は、２人だけではなく周りに配下のようなイロハ級まで連れてきているという。完璧に鎮守府を潰すつもりで来ている部隊だ。

「このタイミングを狙ってたんデスかね……。いや、流石にたまたまでしょう。こちらを狙うタイミングなんていくらでもあったんデスから。でも、今回は迎撃の準備はしてありマース！」

「はい！　こうなることを想定して、装備も調査ではなく戦闘用です！」

金剛と比叡が殿（しんがり）を務めるが、最初から戦う予定の装備でもあるた

め、一目散に逃げるようなこともしない。
前回は後れを取ったが、今回はそうは行かない。ここで決着をつけられるように準備をしてある。
「ええっ!?　施設からも来てる!?」
今度は千歳が叫んだ。施設側から虫の報せを受けた春雨を筆頭とした援軍が、交戦前から調査隊に合流をしようと向かってきている。
今までより敵が多いことを考えると、これは朗報。どうやってこの事態に気付いたかはさておき、来てくれること自体がありがたい。

このタイミングで、鎮守府防衛に繋がる戦いが始まろうとしていた。

覚悟の上で

調査隊が施設から帰投中、ついに古鷹と白露による襲撃を受けることとなる。そして、それを虫の報せで勘付いた春雨達も、調査隊の救援をするために施設から向かっていた。

「感知、出来てるわ。山風達は捉えてる」

こういう時に叢雲の感知の力はとても役に立つ。ＯＦＦに出来ないデメリットはあるが、常にそれを知り続けることが出来るため、その範囲内に何者かが入った瞬間に気付くことが出来る。常時ＯＮで無ければこんなにすぐには反応出来ない。

「反応は山風達だけ？」

今回の悪寒も調査隊が襲撃を受けることを予知した結果だと考えていた春雨は、叢雲に問うた。調査隊が施設を発って、そこまで時を待たずに虫の報せが届いたので、まだ襲撃を受けているとは思っていない。

しかし、あちらのスペックが並ではないことも理解している。特に古鷹は、戦艦２人に空母２人を相手取っても悠々と戦ってのけた挙句に、疲れすら見せずに白露を連れて帰ってしまった。まだまだ実力が未知数。

そんな相手なら、こちらよりも遠くとも、こちらより速く調査隊に接近していてもおかしくない。なるべく状況を把握しておきたかった。

「今のところはない。いや、あれは千歳さんの艦載機か。哨戒はしてるみたいよ」

「なら、すぐに合流しよう。なんか嫌な感じが止まらない……」

春雨はまだまだ何かを感じ取っている。得体の知れない何かというよりは、迫りくる脅威を先んじて感知しているような、そんな感覚。

春雨の直感は、いいことよりも悪いことに反応しやすいネガティブな能力のようだった。

「姉さん、大丈夫ですか？」

「うん、それは大丈夫。なんていうか、肌が粟立つ感じっていうか。嫌

なことが起きそうっていうのがわかる感じ」
「それで私がこうなることを感知したんですね。流石は姉さんです」
　こんな状況でも海風は変わらない。しかし、春雨の言うことは全て正しいと考えるのなら、調査隊が危険な目に遭うことが確定しているようなもの。春雨第一であっても、妹達のピンチは望んではいない。むしろ、自分と同じようになるなとさえ思っているくらいだ。
　春雨が急ぐように、海風も山風達が無事であることを祈って海を駆けた。深海棲艦と化した身体は、艦娘だった時よりも速く、そして軽い。艤装も春雨と同様に異形化しているが、むしろ使いやすさまで感じるほどだった。
「先に聞いておくんだが」
　ここで竹が2人に問う。松も竹と同じ意思のようで、同じ表情をしている。
「もし調査隊が襲撃を受けたとして、だ。それは春雨と海風の姉ちゃんなんだよな？」
「……うん、多分」
「殺っていいんだな？」
　叢雲は古鷹と白露にやられたせいで深海棲艦化しているし、怒りに呑まれているため聞くまでもないとした。だが、春雨と海風は違う。躊躇しないかも知れないが、それでも相手は実の姉だ。それでも本当に戦っていいのか、ここでちゃんと聞いておいた。
　春雨は白露と相討ちするくらいに激戦を繰り広げたわけだが、海風はその場で繭となっただけ。もしかしたら、別の方向で発作を起こしてしまいかねない。いくら春雨を裏切った敵であると認識していたとしても、一応はつい最近まで慕っていた相手なのだ。
「……うん、構わない。あの白露姉さんは、そうしないと止まらないくらいに壊れちゃってる。生きている限り、周りに害を振り撒き続けるんだと思う」
「姉さんに同意です。あの姉さんは、艦娘の記憶を持っていたとしても、今は殺戮を楽しんでいます。それは生かしておいちゃダメですよ」

春雨も海風も、白露を沈めることを良しとしていた。春雨は自分の手でやろうとしたのだから、もう覚悟が出来ている。自分の手で決着をつけたいとか、そういうのもない。今回は逃がすつもりはない。

海風も、春雨がそう言うのなら即断。そもそも、春雨に害を与える存在と成り果てているのだから、痛い目を見せようとは考えていたが、自分でも言っているように殺戮を楽しむような輩を野放しにしておけない。

「了解、2人の気持ち、理解したわ。私と竹も、全力で戦うから。もしかしたら、手柄を取っちゃうかもしれないわね」

「それならそれで。あの姉さんを野放しにするわけにはいかないから」

松の言葉にも力強く返答する。あの白露を止めてくれるのなら、誰がどうしてくれても構わない。そういうことで自分を納得させて。

「っと、来たわ。調査隊以外の反応！」

声を荒げる叢雲。合流前に、別の反応を感知した。それはぐんぐんと調査隊の方に向かっており、一度見たことがあるような2つの反応の他に、かなりの量の同胞（はらから）の反応まであった。

「アイツら、2人だけじゃないわ。雑魚共を束ねて向かってる！」

「鎮守府を襲うからかな。なら、尚更人数がいた方がいいね」

こんな状況でも、冷静に物事を判断していく春雨。ここはやはり、鎮守府でも屈指の駆逐隊のサポート役として、仲間達を見続けてきた実績があった。いざ戦場に立てば冷静でいられる。

そんな春雨を、海風は尊敬したのだ。だからこそ、春雨に追いつけるようにと、冷静沈着に考えられるように努力し続けていたのだ。

「先に合流しちゃおう。あっちがそれだけ多いなら、こっちもバラバラでいる理由無いし」

「そうですね。鎮守府のみんなと力を合わせて処理しましょう」

一層速度を上げて、春雨達は調査隊と合流すべく突き進んだ。嫌な予感がしっかり当たっていたことに気を病みつつも、むしろ事前に知れたのだから良しとしなくてはと心を強く持って。

一方、調査隊。向かってくる自分達に向かってくる2つの深海棲艦の部隊の存在に気付き、迎撃の準備をしていた。
このまま逃げ帰ったら、鎮守府にそのまま全てを持っていってしまう。そこに所属する艦娘全員で対処すれば、撃退は出来るだろう。
しかし、鎮守府自体が攻撃を受ける可能性は非常に高い。艦娘が無傷でも、鎮守府という居場所を破壊されるかもしれないのだ。そして、そうなった場合、最も危険なのは、一番上に立つ非戦闘員である提督。白露があちら側にいる以上、執務室の場所を把握していることに他ならない。まず確実に提督を狙ってくる。
頭が失われた組織は脆い。鎮守府の襲撃は、そこも狙っているのではなかろうか。
「……よし」
そこで、山風が決意したような表情を見せた。いつも後ろ向きで、他人の表情を窺っているような仕草が多い山風が、今はハッキリと隊長としての意思を表に出している。
「施設側の部隊……友好的な深海棲艦との合流を優先する……！」
全員に聞こえるように、出来る限り大きな声で指示を飛ばした。
「了解！　このまま施設側に移動すれば、早く合流出来るわ！」
「でも古鷹達の行動もやたら速い！　早く行かないと先にかち合うよ！」
2つの深海棲艦部隊の状況を確認している千歳と千代田から、逐一それを発信してもらい、確実な行動を選択する。
「こっち……！」
合流を目指すのならば、施設側に戻るのが一番手っ取り早い。しかしそれでは鎮守府から離れることにもなる。鎮守府への被害を確実に失わせることは出来るが、万が一の時に撤退がしづらくなるのは考えもの。
そのため、施設から少しずつ離れながらも施設側の友軍へと近付き、かつ敵深海棲艦の部隊からは離れる、鎮守府と施設の中間を取る航路を選択。離れているわけでもなく、近付いているわけでもない。

しかし、敵からは離れて、施設側の友軍とは近付く、最善の道。
「ええっ、また白露が突出してきてる！　あの時と同じ！」
　しかし、その選択を簡単には許してはくれないようだ。前回の襲撃と同じように、敵部隊から白露が1人だけ離れて、先制攻撃のために突っ込んできているらしい。
　周りには古鷹だけでなく、イロハ級まで加わっているにもかかわらず、お構いなしに自由に戦場を駆け巡るその姿は、まさに狂犬だった。
　そんな姉を、山風は知っている。白露も暴走気味なことがあったがここまでではない。ここまで落ち着きがないのは、夕立。
「相手が白露なら、私が迎撃する。山風、私が殿(しんがり)やるから！」
　そう言って金剛達よりも前に出たのは島風。前回の戦いで白露の動きを分析しているため、自信があるかどうかはさておき、最善の戦いが出来るはずだと信じていた。
　実際、島風にはそれだけの才能がある。一目見ておけば、その動きを何度も反芻するように思い返し、その対策を頭の中で練り上げ、さらにはそれを実行するだけの力があるのだ。それすらも上回ってきそうなのが今回の敵なのだが。
「無茶しちゃダメですヨ！」
「大丈夫！　1人で戦う気なんて、さらさら無いから！」
　金剛に注意されるが、当然身の程を弁えている。仲間を守るために前に立ち、同じ志の者達と手を取り合う。島風は、今回も一緒に殿(しんがり)を務めている金剛と比叡と共に迎撃をするつもりだ。
　かたや戦艦でかたや駆逐艦ではあるが、だからこその連携も出来るだろう。島風は戦場を引っ掻きまわし、金剛と比叡が大火力にて敵を殲滅する。古鷹には通用しないかも知れないが、少なくともイロハ級の一掃には余裕が出るくらいだ。
「さぁさぁ、来なよ、白露！」
　島風が叫ぶと同時に、水平線の向こうに白露の姿を確認した。それ以外の敵はまだ視認出来ない位置。
　相変わらずのとんでもない速度である。こうなると空母の2人は戦力外となってしまっても仕方ない。艦載機からの攻撃はことごと

く外れるだろうし、艦娘自身が狙われてしまう。
故に、速さには速さをぶつけるのが的確であると島風は考えた。艦娘の中であれば、自分が一番速い。それは自負している。そして、施設側の友軍からは春雨や叢雲。
1人に対して3人がかりになってしまうが、命懸けの戦いに四の五の言っていられない。あちらは自分の存在すらも武器にして、精神攻撃で揺さぶりながら圧倒的な力を見せつけてくるのだ。人数差はあれど、こちらは正々堂々のスタンスを崩していない。
「見いつけたっ！　やっぱりいるよねアンタ達ぃ！」
水平線の向こうにいると思った時にはさらに速度を上げていた。ぐんぐんと近付いてくる白露は、既に魚雷を放ち、主砲すら構えていた。
挨拶がわりの攻撃を島風に浴びせかけ、さらに突き進もうと勢いを止めようとしない。
「速い、速いよね。でも、私の方がもっと速いんだから！」
対する島風は、その砲撃も魚雷もしっかりと回避し、白露の突撃を迎撃するべく同時に突撃を始めていた。
白露が搦め手を使ってくることは、春雨との相討ちのときに見ている。戦闘のスタイルが突如変化することも。
「アンタは眼中に無いんだ！　また春雨が来たりしないわけ!?」
「何それ、春雨にやられたから気分が悪いってこと？　妹に負けちゃったから」
「あっはは、それもあるかな。でもさぁ、弱いヤツより強いヤツと戦いたいじゃんさぁ！」
あくまでも島風のことは格下として扱っているようだ。しかし、手を抜くこともない。格下であろうが、全力で叩き潰すのが、今の白露のやり方のようである。
何故なら、圧倒的な力で相手が絶望する姿が見たいから。艦娘の頃の白露からは考えられないくらいに残酷な思考。
「そういうの、良くないと思うよ。自分より上の相手なんていくらでもいる。だから仲間が大切なんだから。そうだよね、金剛姉ちゃん！

比叡姉ちゃん！」
「Ｙｅｓ！　相手が例えｐｏｗｅｒｆｕｌであろうとも！」
「気合、入れて！　突き抜けます！」
相手が白露であろうともお構いなしに、島風の後ろから金剛と比叡が同時に砲撃。島風はそうしてくれるとわかっていたかのように回避し、その砲撃が白露にのみ命中するように仕込んだ。
「なめんな格下ぁ！」
しかし、白露はそれを当たり前のように避けた。今この時だけは島風よりも速度が出ていた。しかも、その回避は前に進む回避。退くこともなく、回避したはずの島風との距離を詰める。
「あたしはそんなもんじゃあ、負けんのさぁ！」
そして、島風を叩き潰すかのように主砲を振り下ろし、同時に撃つことで一撃の下で沈めてやろうと画策していた。
撃たれる直前の艦娘は、それはもう絶望的な表情をする。それを見るために。
しかし、島風は絶望なんて感じていない。むしろ、笑っていた。
「視野が狭いんじゃないの？」

白露の真後ろには、自慢の槍を振りかぶった叢雲がいた。
「臓物（はらわた）ぶちまけなさいよゴミ虫！」
そして、全力でそれを薙ぎ払った。

戦場に集う者達

調査隊が施設の者達と合流する前に突出してきた白露と交戦。それを殿(しんがり)を務めていた島風が迎撃に出る。金剛と比叡のバックアップの下、即やられるようなことは無かったが、前方への回避という荒技を見せつけてきた白露が、島風との距離を一気に詰めた。

「あたしはそんなもんじゃあ、負けんのさぁ！」

そして、島風を叩き潰すかのように主砲を振り下ろし、同時に撃つことで一撃の下で沈めてやろうと画策していた。

撃たれる直前の艦娘は、それはもう絶望的な表情をする。それを見るために。

しかし、島風は絶望なんて感じていない。むしろ、笑っていた。

「視野が狭いんじゃないの？」

白露の真後ろには、自慢の槍を振りかぶった叢雲がいた。

「臓物(はらわた)ぶちまけなさいよゴミ虫！」

そして、全力でそれを薙ぎ払った。狙いは宣言通り胴。上半身と下半身をお別れさせるための、渾身の一撃。

「つざけんなぁ！」

ここで白露のスタイルが変質。その薙ぎ払いを動体視力のみで見極め、島風ではなく叢雲の方へ主砲を瞬時に向ける。そして、槍を主砲で受け止めつつ、叢雲の脚を撃ち抜くために即座に砲撃。

その砲撃をギリギリのところで回避した叢雲だったが、体勢が崩れる羽目になる。白露はその隙を見逃さず、叢雲を引き剥がすために新たに生成した錨を振り回した。当たれば儲け物。外しても槍が届かない位置まで移動させる。

案の定、叢雲はしっかりと回避。槍の間合いから離れる羽目になった。

「チッ……勘がいいヤツ。そういうのは春雨だけでいいのよ」

悪態を吐きつつ、アイコンタクトで島風に『やれ』と伝える。島風もその意を汲んで、即行動。叢雲に注意が行っている白露に対して、容赦なく連装砲ちゃんが飛びかかる。

「わかってんのさ、それくらい！」
言葉とは裏腹に、その攻撃も冷静に対処。まるで背中に目があるかのように小さな動きで回避した白露は、振り向き様に主砲を島風に突き付ける。
「そういうのは、Ｎｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕデス」
そこに立ち塞がるのは金剛だ。島風と白露の間に割って入るように立った瞬間、艤装が変形した。
それは、仲間達を守るために特化された艤装。両サイドの装甲が前方へと移動し、シールドとして白露の砲撃を完全にシャットアウト。金剛も無傷である。
「うへ、そういえばそんなのあったねぇ金剛さん」
「この艤装の仕掛けを知っているということは、私の知る白露デスネ。ならば、こちらの手段は全部お見通しってことデスか」
その金剛の上から跳んできた比叡。金剛と同じように艤装を変形させた結果、それはどの艦娘も持ち得ないウィングとなり、さらにはそれを取り外したかと思えば、近接戦闘用の刀剣となる。
空は飛べないが、跳躍力を増すためのサポートにはなり、そしてそれが強烈な一撃を誇る武器だ。金剛が守るのならば、比叡が攻める。姉妹としての役割分担も完璧。
しかし、この機能を使うにはそのための整備が必要。前回の調査の時には使用出来なかったが、今回は迎撃も考えた戦闘用。この機能もしっかり解禁。
「知ってるよ。比叡さんがそういうことが出来ることくらいさぁ！」
そこへ白露は、とんでもない手段に打って出た。太腿付近に装備した魚雷発射管から魚雷を数本引き抜き、突撃する比叡に向けてダイレクトに投げつけたのである。
魚雷が海中で無くミサイルの如く飛んでくるなんて考えていなかった比叡だが、その手に持つ刀剣により、見事に信管のみを叩き斬る。
その間に白露も大きく間合いを取って仕切り直しとした。叢雲は容赦なく突っ込もうとしたが、それは魚雷に阻まれる。

「滅茶苦茶するなぁ！　その思い切りは白露だけど！」
「でも、瞬時の判断は時雨みたいデスネ。それに、錨は村雨デスヨ」
　ここで金剛も春雨と同じように白露が何かおかしいことに気付いた。手合わせすることで、敵の内面がある程度わかる。それが熟練者でありエースである金剛の実力。
　突然、回避性能が上がり、物事を冷静に判断し始めている。最初は叢雲の突撃をギリギリまで気付いていなかったのに、気付いた瞬間から動きが確実に変わった。
「ったくさぁ、あたし1人に寄ってたかって恥ずかしくないわけ？　しかも勝てないんだから」
「別に恥ずかしくなんてありませんよ」
　ここまでしたことで、春雨達も合流。前回の戦いの時よりは怒りは抑えられているが、相変わらず変わり果てている白露の姿を見ていると、気分が悪いようで眉を顰めていた。
　そしてその隣、海風。春雨の意思を汲み取っているかのように苛立ちを隠さず、白露に対しては敵意のみを表していた。
「っと、来たね春雨。それと、あの時に勝手に繭になった海風じゃん。無事に孵ったんだねぇ」
「おかげさまで」
　素っ気なく返答をする海風。そんな態度を見て、白露は首を傾げる。自分の知っている海風ではないと言わんばかりに、ニチャと笑った。
「あっはは、海風もちゃんとぶっ壊れてくれたねぇ。でも、あたし達が欲しい感じの壊れ方じゃないかな。だったらもういーらない。春雨と一緒にここで死んでもらおうかな」
「簡単に出来るとお思いで？」
「出来るでしょ。成り立ての素人に負けるわけないじゃん」
　ケラケラ笑うが、目は全く笑っていない。
「それに、そろそろこっちも仲間が合流すんの。今は多勢に無勢だけど、すぐに形勢逆転だから」
　白露が言う通り、水平線付近に古鷹率いる深海棲艦の群れが現れて

いた。それと同時に、とんでもない数の艦載機も群れを成して戦場に向かってきている。
　その一部は古鷹のモノであり、他は全て周囲のイロハ級。どれもが実力が上な、フラグシップと呼ばれる上位体だ。
「あれは抑えきれない……！　空襲来ます！」
　その数の艦載機を出されては、制空権の確保は不可能だ。千歳と千代田の艦載機は、墜とされることは無かったにしてもその数に圧倒され、あっという間に侵攻を許してしまう。
　あちらの空襲は、白露がその場にいてもお構いなしに行なわれるようだった。それは白露も承知の上。むしろ、自分に敵のターゲットを集中させて、そこを空襲で狙わせるまであったようにすら思える。
　白露が猪突猛進なのを止めることなく、むしろ利用して一網打尽に使ってしまおうという古鷹の非情な作戦なのかもしれない。そして、白露を信用しているからこそ出来るとんでもない作戦でもある。
「あたしはあの程度避けられるけどさ、アンタ達はどうなのかな」
　意地の悪い笑みを浮かべて、白露は空襲を待ち構えた。
　空襲は対策をしないと一掃されておしまいである。雨のように降る爆撃は回避以外にどうにかする手段が殆どない。対空砲火をしようにも、今出来る面々を総動員しても全てを撃ち墜とすのは厳しいだろう。
　しかも、眼前に敵（白露）がいるような状況だ。防空に専念すると、海上が疎かになる。その隙を突かれて、1人ずつやられてしまう。それも避けたい。
　だが、ここで新たな乱入者。施設側の友軍からの追加戦力。
「お前らはアイツに専念してくれよ」
「対空なら、私達が得意だから任せて」
　戦場の真ん中に突っ込んできた松竹姉妹が、2人同時に対空砲火を始める。その量は想定以上であり、敵艦載機群を次から次へと墜としていった。
　空から降るであろう爆撃も、密度の高い対空砲火の前では着弾する前に爆発。破片だけが降り注ぐのみとなる。

「あたし達も……対空砲火……！」
ここで山風達も打って出る。白露相手にはかなり厳しいかもしれないが、制空権の取り合いには参加出来る。力が及ばないなんてことは無い。
あれほどまでに強力な力を持つ白露や、未だに実力が未知数な古鷹には手が届かなくても、その周りにいるイロハ級ならやれるはずだ。いくらフラグシップであろうが、今までの戦闘経験から問題なく撃破出来る。防空が済んだら次はあちらだと、的確に指示。
「なになに、また援軍？　いやはや、ホント懲りないねぇ。でも、まだまだこっちの方が数が多いし、ちゃんと合流しようかな。古鷹さんはあたしよりもっとヤバいからね」
そんな想定外な戦力を一瞥して、一旦退くことを選択した白露。しかし、それを逃がそうだなんて誰も思っていない。
「退かせるわけないでしょう」
即座に動き出したのは春雨と海風である。暴徒に堕ちた姉を制裁するために、２人揃って突撃開始。
「おっとぉ、まだまだ歯向かうのかな？　前は相討ちなんてしちゃったけどさぁ、春雨アンタ手の内見せてんじゃんさぁ！」
低い体勢からの突撃は事前に予測している白露は、最初から魚雷を乱発してきた。
春雨相手に最も有効なのは魚雷。脚が無い状態で戦っているのだから、これはどうしても避けられない。緊急回避（ジャンプ）が出来ないというのはそれ程までに大きい弱点である。
横に避けられないレベルに魚雷を密集させられると、春雨にとっては殆ど詰みである。砲撃によって眼前の魚雷を破壊する以外に回避する手段がない。
そして、それは春雨の行動を固定化させることに他ならない。魚雷を対処するのにその時の力を注ぐということは、別のことが疎かになるということ。無論、寸前で脚を生やして跳ぶという荒技もあるのだが、それは魚雷の破壊以上に無防備になる。その隙を狙えば春雨は簡単に倒せると踏んだのだろう。

それが春雨しかいなければ、であるが。
「春雨姉さんに何をしようと言うんですかね」
その魚雷への対策は、海風がしっかりとやってのけた。
春雨の邪魔をするものは全て敵であると考える海風には、その魚雷すらも攻撃対象となる。白露よりも優先順位が上がり、春雨に害を与えそうなモノのみを確実に破壊した。その爆発によって発生する水飛沫すら、春雨の害にならないように砲撃で散らしていく徹底っぷり。
「貴女の相手は、春雨だけじゃありませーン！」
「そうです！　こちらにはまだまだ戦力がいます！」
当然、春雨だけに任せるわけがない。金剛と比叡も白露に向けて攻撃体勢。金剛はシールドを変形させて砲撃によって魚雷を一掃。その爆炎を突き抜けるように比叡が刀剣を握りしめて突撃。
「アンタには恨みしか無いのよ！　春雨の手を煩わせることなく、私がぶち殺してやるわ！」
叢雲も同時に突撃。向かってくる魚雷は島風が的確に除去し、叢雲の道を作る。
誰が通ってもいいという、まさに多勢に無勢な戦い。春雨、比叡、叢雲の突破によって、白露は窮地に立たされる。
はずだった。
「やっぱり、突っ込ませるのはよろしくなかったですかね？」
その攻撃をする直前、突如速度を上げてきた古鷹が白露の隣に出現。尻の辺りから生えた凶悪な艤装を力一杯振り回すことで、突撃してきた３人をいなしつつ、白露の首根っこを掴んで一時的に避難させる。
その艤装による薙ぎ払いは、比叡の刀剣や叢雲の槍を叩き折りかねない質量であったため、嫌でも止まらざるを得なくなる。小柄になっている春雨の顔面狙いな部分もあったため、突撃はどうしても出来ない。
「まったくもう。自分でやれるって言うから突撃させたのに、なんですかこの体たらくは」

「ごめんって。でもほら、あたしのところは主戦力集まってきたからさ、一掃出来るでしょ」
「ただただ結果オーライなだけですよね。もう、後からお説教ですよ」
「えーっ!?　古鷹さんのお説教長いから嫌だなぁ」
　敵の前だというのに、やたらと余裕のある物言いである古鷹。白露の方に視線を向けているため、酷いことに春雨達には背を向けているほどである。
　しかし、隙すら見えなかった。ここで同じように突撃したらやられる。そんな雰囲気まで醸し出され、怒りに呑まれている叢雲ですら、その場から動けないでいた。
「さて、と」
　白露にある程度話が出来たことで、改めて春雨達の方を振り向く古鷹。その表情は穏やかなのだが、これでもかというほどの敵意がぶつけられる。

「今から鎮守府を襲撃に行くつもりだったんですけど、途中で出会ってしまったのなら仕方ないですよね。貴女達を前哨戦とさせてもらいましょうか」
　ニコリと笑うと、片目が雷光のように輝いた。

古鷹の実力

「今から鎮守府を襲撃に行くつもりだったんですけど、途中で出会ってしまったのなら仕方ないですよね。貴女達を前哨戦とさせてもらいましょうか」

ニコリと笑うと、片目が雷光のように輝いた。

その輝きに見覚えがあるのは、春雨と叢雲。自分達をこうした元凶であり、最も強い恨みと憎しみがある相手。しかし、見ているだけでその強さがわかるほどであり、緊張感が支配した。

心の奥底に手も足も出なかったというトラウマが刻まれているというのも無くはない。それは深海棲艦化したとしても、拭えないものだ。自分を殺した相手が眼前にいるというのは、嫌でも恐怖を感じてしまうものである。

「姉さん……大丈夫です。私もいます。頼りないかもしれませんが、姉さんを支えます」

春雨の緊張を察したか、海風が小声で励ます。少しだけ緊張感は取れたが、やはり古鷹の威圧をヒシヒシと感じているせいで、冷や汗が止まらない。

それは叢雲も同じだった。艦娘の時と同じ姿をしているため、手には滑り止めの指抜きグローブを嵌めているのだが、それがギュッと小さな音を立てた。無意識に力んでしまって、槍を強く握りしめてしまう。

「後ろのイロハ級は私達がどうにかしておく！　本命は任せたから！」

「空襲は絶対にこっちにやらせない！」

千歳と千代田が筆頭になり、古鷹と白露が連れてきたイロハ級はこの戦場にまで来れないように抑え込んでいた。空襲も相当量あるのだが、そこは山風達が必死に拮抗状態を維持している。

他のイロハ級は松竹姉妹が一網打尽にしていた。自分達に害をなす者と判断しているため、それが同胞（はらから）であろうとも容赦無し。むしろ、あちらから襲いかかってくるのだから、お返しされても仕方ない

だろうと、憐みながら一掃する。
松竹姉妹も当然姫級。普通の艦娘とは一線を画した力を有しており、そんじょそこらのイロハ級では、それがフラグシップであろうがお構いなしに捻り潰す。数の暴力はあるかもしれないが、着実に数は減らしていった。
「後からそっちに加わっから、頼んだぜ！」
「さっきあれだけ大口叩いたものね。当然参加させてもらわなくちゃ」
「だな。だが、先にあっちやらねぇと話にならん。他の連中のためにも、きっちり仕事してからな！」
白露を沈めてもいいかと聞いたのは竹だ。なのにその戦闘に参加しないというのはよろしくない。
だが、イロハ級をどうにかしなければ、春雨達がまともに戦闘も出来ないだろう。仲間達が戦いに集中するためにも、松竹姉妹はサポートを買って出たわけだ。
「うーん、やっぱり量産型はあまり強くないですね。数で圧倒すれば、艦娘くらいなら淘汰出来るはずなんですけど、あんな例外が出てくるなんて。あれはなかなかの格です」
笑顔は崩さずに松竹姉妹のことを褒め称える古鷹。あくまでも『格』で表現するのは、元々の性格からは考えられないモノである。
深海棲艦化により性格が歪んでしまった結果なのはわかるが、どこかおかしな部分を感じ取れた。それが出来たのは、経験数が多い金剛と、直感から得体の知れない何かを感じた春雨。古鷹からも、白露と同じように何かを感じた。
「貴女達はどうでしょうか。艦娘の方々は……残念ながら。でも貴女達はこちら側に来てくれると、私としてはとても嬉しいです。心が壊れるほどに、完膚なきまでに痛めつける必要がありますね」
金剛と比叡、そして島風には、完全に見下しているような物言い。艦娘というだけで格下扱い。
事実、それほどの力を持っているのかもしれないが、それをひけらかすような真似をするのは、おちょくっているというよりは冷静さを

欠かせようという策略。
「1つ、いいデスか？」
　戦いの前にベラベラ喋っている古鷹に、金剛が問いかける。話がわかる相手では無いとわかっていても、会話が出来るなら一応試みてみるようだ。
「はい、何でしょう」
「貴女の目的は何なんデスか」
　真に迫る質問。何故こんなことをするかをここで聞いておきたい。
「今から死ぬヒト達に、教える必要は無いでしょう。私、冥土の土産というのも差し上げたくないタイプなので」
　しかし、古鷹は語らず。いくつもの可能性から考えて、こんな状況で気分良く真相を話すタイプではないらしい。余計なことを言いそうな白露が何も言えないように睨みを利かせるまであった。
　そういうところからも、饒舌に煽ってくるのは策略だとわかる。精神攻撃も織り交ぜてくる上に、実力も相当高い。
「ですので、話すのもこれでおしまいです。白露さん、調子に乗って変なこと喋らないようにしてくださいね」
「はーい。お口にチャックしておこうかな。こんな感じで」
　言いながら口元に艤装を生成。まるで狂犬が噛み付くのを防止するためにつけられるマスクのようなそれのせいで、白露は一切喋らなくなる。代わりに、その瞳は殺意と愉悦でギラギラと輝いていた。
「うん、そういう判断が出来るのは、ちゃんと調整出来ている証拠ですね。でも何故あんなに突撃癖があるんでしょうね。白露さん、今後はそういうのは自重してくださいね」
「んー」
　話せない代わりに指を立てる。
「調整……？　白露姉さんは、何かされたってこと……？」
　白露への『調整』。古鷹のそれは失言とも取れるが、わざと突き付けるために言った言葉にも聞こえた。これも精神的な揺さぶり。真偽はわからなくとも、そういう言葉が出ただけでも気になるモノである。

「姉さんに何かしたんですか？」
「何かって、まぁ、何かしましたね。暴れん坊でしたから、私が少々教育を」
　含みのある笑みを浮かべる古鷹。教育という言葉を使っているが、まず確実にそれだけではないだろう。
　つまり、白露はなるべくしてああなったわけではない。本来ならば、春雨や海風のような溢れ方をしていたのに、古鷹が何かをしたことによって、あんな残虐で非道な性格へと変貌してしまった。そう考えるのが妥当である。それでもまだそれを信じていいかはわからないが。
「そんなことどうでもいいでしょう。白露さんもどうでもいいと思っているでしょうし」
　うんうんと頷く白露。今の自分が過去の自分とあまりにも違うことに何も違和感を持っていない。艦娘の時ならばあったであろう罪悪感もカケラも見当たらない。
「では、こちらから吹っかけたお喋りみたいなものですが、ここで終わりにしましょう」
　二度目の切り上げ。そして、古鷹が早速動き出す。
「全員、ここで沈んでもらいますから」
　片目が輝いたと思ったら、尻尾のような艤装から魚雷が放たれていた。その速度は普通のそれとは全く違う。さらには1人1人を確実に終わらせるための命中精度まで持っていた。
「甲標的?!」
　島風が叫ぶ。見た瞬間に異質だと思えたそれに、島風は見覚えがあるらしい。その名前を聞いたことで、春雨達もその危険性を一瞬で理解した。
　艦娘の甲標的は、その内部に妖精さんが乗り込み、艦載機のように操縦しながら敵に接近し、確実に当たると言える場所で搭載された魚雷を放つ兵装。妖精さんが見ながら放つのだから、精度は非常に高く、さらにはその高速性能から、敵の攻撃よりも前に放たれることが一般的。いわゆる、『先制雷撃』である。

古鷹という艦娘はそんなことは出来ない。深海棲艦化によるスペックアップで手に入れたものかもしれないが。
「それでは、行きましょう」
甲標的が放たれたかと思いきや、今度は艦載機が発艦。空母と同様のスペックを持つ艦載機が、春雨達目掛けて飛び立つ。
「どれだけ耐えてくれますかね」
それだけやったのに、そこから主砲を構える。その主砲も並ではなく、重巡洋艦なのに威力が戦艦と近いという詐欺。
先制雷撃、艦載機、そして砲撃。1人で3つの動きを同時にこなした。そんな深海棲艦がいないとは言わないが、艦娘でここまで出来る者は限られている。
「甲標的は私が壊すから！　みんなで本体狙って！」
考えている暇もなく、速攻で動き出したのは島風。いの一番に甲標的をどうにかしなくては話にならない。上からの攻撃でも厳しいのに、下からの攻撃まで加わったら訳が分からなくなる。
「私が上をやりマース！　対空砲火だって、やれるんだからネ！」
そして艦載機には金剛が。本来対空が出来るであろう三式弾は装備していないが、金剛が持つ主砲は対空性能も持つ両用砲に近いモノ。
古鷹の艦載機だけでも、1人で抑え込むのはかなり厳しいが、やらないよりはマシだ。空襲が半分になるだけでも戦いやすくなる。
「お姉さまの思いを背に！　比叡は、気合、入れて！　行きまぁす！」
そして、真っ先に飛び出したのは比叡だ。古鷹の砲撃を潜り抜け、高速戦艦という名に違わぬ動きで一気に近付く。
「私の怒りと憎しみを！　思い知れ！」
それに続くように叢雲も緊張を振り払って突撃。比叡よりも素早く砲撃を潜り抜け、古鷹の喉元に槍の切っ先の狙いを定める。
叢雲のことを考えて、比叡は砲撃を選択しなかった。戦艦の主砲は範囲が広いため、叢雲も巻き込んでしまう可能性は高い。一緒に接近戦が出来るのなら、そちらの方が確実に戦える。
「貴女達の思いとかは私にはわからないですが、こちらからの攻撃に

対して反撃してくるのは当然の権利だと思いますので、それを咎めることはしませんよ。当たるかはさておき」
叢雲の槍を軽く避けると、その柄を握りしめつつ、比叡の刀剣による斬撃を強引に止めるために槍を引っ張る。その握力は戦艦に匹敵するのではと思えるほどであり、叢雲は体勢を崩すことに。
比叡も叢雲のそれを見て、攻撃をほんの少し躊躇した。そのまま斬り下ろしたら叢雲を斬ってしまいかねない。
「その優しさが艦娘の強いところでもあり弱いところでもあると思うんですよね。そのまま振り抜けば私に一撃入れられたかも知れないのに」
笑顔を崩さず、叢雲を振り回して比叡にぶつけようとする。
叢雲も咄嗟に槍を消すことでそれを回避したものの、その時にはもう叢雲に力が伝わっていたため、大惨事にならないだけで吹っ飛ばされた。
しかし、その瞬間は隙になるもの。叢雲が振り回されたタイミングを見計らって、春雨と海風が回り込んでいた。誰もいない場所からの砲撃で、仲間に迷惑をかけずに古鷹のみを狙う。
ほとんど後ろからのようなものだが、その尻尾のような艤装が邪魔。それでもお構いなしに砲撃を放った。一撃で沈めることは難しくとも、生身が曝け出されている脚にならば攻撃は通るはず。
「チームですから、そういう戦い方をするのが当然ですよね。ですが、こちらもチームなんですよ。少し頼り無いですが」
「んー!」
異議を申し立てるように呻いて、白露が春雨と海風の前に躍り出た。その砲撃は白露の砲撃によって妨害され、古鷹には当たることはなかった。
「姉さん……!」
「んっんー」
何か悪態をついているようだが、自分で嵌めた口枷のせいで何を言っているかはわからない。だが、その目から何を言いたいのかはわかった。やらせるわけないだろ、と。

「白露さんはどうしても妹と決着をつけたいそうなので、頑張ってください。残りは私が受け持ちましょう。だとしても、前回より戦力は減ってしまっているようですが」
「貴女が仲間をいっぱい連れてきたからネ。でも、すぐにこっちに来てくれるヨ」
　金剛も比較的余裕を持った言動で対応している。ここで焦っては、十全の力を発揮出来ない。
「貴女も全力でかかってくることデス。手を抜いて勝てると思っているんデスカ？」
「それはもう」
　吹っ飛ばした叢雲に追撃をしようとする古鷹だが、それは比叡が刀剣によって強引に妨害。しかし、傷どころか当てることすら出来ず。
　見てからの行動の速さが普通ではなかった。それこそ、その一瞬の速さだけで言えば島風すら上回っているようにすら見える。艦種詐欺が横行する深海棲艦の中でも、古鷹は特におかしい。
「でも、確かに格下とはいえ貴女達に失礼でしょう。いくら前哨戦でも、わざわざ長引かせる必要はありませんしね」
　そう言った瞬間、古鷹は比叡との距離を詰めていた。そして、その尻尾のような艤装を振り回し、比叡を薙ぎ倒す。ギリギリのところで刀剣によるガードはしていたが、その強烈な質量による一撃で、なすすべもなく吹っ飛ばされた。

「まず1人」
　そして追い討ちをかけるように比叡に主砲を放つ。1発や2発ではない。瞬間で何発も連射し、肉片も残さないと言わんばかりに的にし続けた。

辿り着く真相

「まず1人」

そして追い討ちをかけるように比叡に主砲を放つ。1発や2発ではない。瞬間で何発も連射し、肉片も残さないと言わんばかりに的にし続けた。

「比叡！」

金剛が叫びながら艤装を変形させ、即座に比叡の救援に向かう。いくら古鷹の砲撃が強力であろうとも、金剛のシールドは戦艦の砲撃も食い止められる程に強固。古鷹の乱射であろうとも、傷は付くだろうが全て防御することが出来るはずだ。古鷹を攻撃するのではなく、比叡を守ろうとするのは、金剛の性格上であろう。

しかし、既に何発も砲撃が放たれている。金剛が守りに特化している代わりに、攻めに特化している比叡には、その数発でも致命傷になりかねない。

「この比叡！　お姉さまより先にぃ！　散ることはありませぇん！」

爆炎の中から、力強い比叡の声。しかし、少し苦しそうな声色である。

爆音で聞こえづらいが、古鷹の砲撃を自慢の刀剣で必死に斬り払っていた。攻撃は最大の防御とは言ったものだが、斬り払いはそれとはまた違う技能だ。やればやるほど腕を痛めることになり、また、爆炎や爆風はどうにも出来ず、肌を傷付けていく。

「無茶しちゃダメデース！」

「すみませんお姉さま！　でも、比叡は無事ですから！」

金剛が救援に入ったときには、比叡の持つ刀剣は折れる寸前。もう少し時間がかかっていたら、耐久力が保たなかった。金剛のシールドと同じ素材で作られており、相当頑丈だったはずなのだが、本来の使い方ではないせいか本当にギリギリだった。

比叡自身も満身創痍に近い。見えている肌は傷だらけで、服もあらゆる場所が破れている程だ。髪も焦げたり、頭から血を流していたりと、見た目も痛々しい。比叡の技量があったからこそコレで済んでい

たが、そうで無かったら今ので死んでいた。
「あらすごい、ちょっと感心しちゃいました。よくもまぁそんな細いモノで私の砲撃をどうにか出来ましたね。ビックリです」
笑顔の内容が若干変わるものの、見下しているのは変わらない。驚いたのは本当のようだが、それだけ。
古鷹にとっては、比叡の努力と結果もその程度にしか感じない。まるで曲芸を見た後のようである。
「っと、勿論ダメですよ」
その隙を突いて再び突撃していた叢雲には、尻尾の艤装から砲撃、魚雷、艦載機による同時攻撃。砲撃を潜ろうとしても、魚雷が避けられない。逆も然り。上すらも艦載機が許さない。その全てを避けようとするのなら、前に進むことを諦めざるを得なくする。
「見下すな！」
叢雲はそのどれとも違う選択肢を選び取る。砲撃も魚雷も跳び越え、低空飛行の艦載機を槍で叩き落としつつさらに上へ。古鷹の艦載機が頑丈であることを逆に利用し、棒高跳びでもするかの如く上空へと舞い上がる。
そこで槍ではなく艤装に生成した主砲で、下の古鷹に向けて乱射。さらには槍を古鷹へと向けて、砲撃をしながら重力を使っての突撃。回避を捨てた代わりに攻撃力に全部乗せた、諸刃の剣。
「見下してなんていませんよ。特に同胞（はらから）は、艦娘よりは上に見ています。ですが、誰も私に届いていないので、どうしてもそう見えてしまうのでしょう」
その叢雲の攻撃ですら、軽くいなしてしまう。砲撃は艤装によりガード。叢雲本人の質量は、まるで闘牛でもしているかのように、艤装を狙わせて自分はさらりと回避。そして、叢雲が着水したと同時にその背中を蹴り飛ばした。
本来の古鷹に、接近戦の心得なんて一切無い。そもそも艦娘が接近戦をすること自体が稀ではあるのだが、少なくとも艦娘古鷹という個体がその手段を選択することはまずあり得ない。なのに、当たり前のように脚が出た。

「なんだか、昔の自分見てるみたいで腹が立つんだよね！」
　叢雲が蹴り飛ばされる瞬間に、島風が連装砲ちゃんを操り、自分の魚雷も含めて４点同時攻撃を敢行。逃げる方向を無くした全方位からの攻撃で、どれが当たっても致命傷を与えられる一撃。
「そうなんですか？　でも、私は貴女とは違いますよ？」
　だが、やはりその攻撃は届かない。連装砲ちゃんの砲撃は案の定尻尾に弾かれることで島風本人の魚雷を避けるだけとされ、その魚雷も軽く跳び越えるだけで終わり。
「やはり艦娘は脆い。だから赤子の手を捻るように殲滅出来てしまうんですよ」
　そして、スピードに自信を持つ島風に対して、同等もしくはそれ以上のスピードで接近し、腹に拳をめり込ませる。
　ここで撃たない辺り、本気でやっているにもかかわらず、まだまだ遊んでいるようにすら思えた。
「貴女達は仲が良さそうですし、仲良く死んでみましょうか」
　その後、島風を叢雲のように蹴り飛ばし、２人揃ったところに艦載機による空襲を集中させた。まともではない爆撃が２人に降り注ぎ、比叡以上の爆炎に包まれてしまう。
「簡単に！　やられるかぁ！」
「ったりまえ！」
　槍を振り回しながら艤装からの主砲を高角砲に切り替え、ギリギリのところで持ち堪える叢雲。島風も連装砲ちゃんを使ってギリギリの防空へ。
「私が救いマス！　少しだけ耐えて！」
　そこに金剛も加わる。比叡が危険であるが、現状押し潰されかねない２人は比叡以上に危険な状態。しかも、対空砲火に専念してしまったら本人の防御が疎かになってしまう。追加の戦力が無ければ持ち堪えることすら出来ない。
　金剛が全く攻撃に参加出来ない状況を作り出されている。１人が守りに徹しなければ、身を守るだけでもギリギリ。攻めに転じても軽くいなされてしまっていた。

白露が間に入っていたために横目にそれを見ていた春雨は、トラウマを刺激されるような感覚を覚えた。
古鷹のあの砲撃で、姉がやられている。それを知っているからこそ、古鷹が攻撃をする様を見せるだけで、嫌な気分になる。
「姉さんだって、あの古鷹さんに、ああやってやられたんですよ。何も感じないんですか」
そのトラウマを振り払うように、忌々しげに呟く春雨。睨み付けるような視線で白露を見つめるが、古鷹が元々の仲間達を攻撃する様子を見ても、何も感じていないような仕草。自ら嵌めた口枷があるために余計なことも言わず、今の心の内を口に出すこともない。
「なんなのこの感覚……やっぱり4人分……でも変だ。全部姉さんだったら、少なからずアレを見て何も感じないわけがない」
相対しながらも、春雨は冷静に白露のことを分析していた。
前回の戦いで、白露は本人含めた姉4人分の力を、まるで自分のモノであるように扱っていた。春雨のような再現ではなく、まさに本人の如くである。
そこから春雨は、あの白露は4人が混ざり合ったモノであるという仮説を立てていた。白露の中に残り3人の技能を詰め込んだのではなく、そもそもアレが4人をグチャグチャに混ぜて出来上がったモノなのだと。どうやればそんなことが出来るかはわからないが、直感がそう告げている。
しかし、それだけでは証明出来ない部分があった。それが性格だ。混ぜ合わせるだけならば、多かれ少なかれ艦娘として持っていた何かが残っていてもおかしくない。特に春雨の姉達は個性的であり、混ぜ合わされてもそこが如実に外に出てしまいそうなくらいの存在感だ。
なのに、それが殆ど見受けられない。全ての技能が混在している代わりに、致命的な何かが失われているような、そんな感覚。
「姉さん危ない！」
考え事をしていると、戦闘が疎かになってしまう。海風が春雨の危

機をいち早く察知して、引っ張るようにその場から退避させる。
　瞬間、簡単に視認出来ない位置からの魚雷が爆発した。体勢の低い春雨をえぐるように突き進んでいたそれは、一撃で粉砕するほどの威力。
「ご、ごめん海風」
「あんなことになった白露姉さんを思うくらい慈悲深い姉さんですから仕方ないです。どれだけでも好きなだけ考えてください。私が愛する姉さんを確実にお守りしますから」
「ありがとう。ちょっと気になることがあるから」
　いつになく饒舌。戦場という限られた場で、姉の命を救うという状況に軽く酔っているが、その分力を発揮するので誰も咎めない。春雨のやることなすこと全てを肯定するのは、精神的な依存によるもの。
　そして、姉を攻撃した白露に対して姉という以上に憎しみを持つ相手であるという認識を持っている。姉とは呼んでいるものの、既に姉としても見ていないかもしれない。
「その答えに私が繋ぐことが出来るかはわかりませんが、少なくとも姉さんが痛い目を見る必要はありません。私が必ず、アレをどうにかします。考えて、考えて、考え抜いてください。それがこの戦況を一変させる光となるのでしょう」
　春雨を肯定し、讃え続けた後、白露の方へと向き直る。その瞳は恐ろしく冷たく、敵どころかゴミを見るような目である。艦娘の頃の海風からはまず想像出来ないような表情に、白露の目は妙にニヤついたようなモノに。
「姉さんを困らせますね、貴女は」
　冷たく重い声。
「万死に値します。私の光を曇らせる者は、この世にいる必要はありません」
「んー、んっふふ」
　そんな物言いを聞くのも初めてのことだろう。口が隠れていても、その表情は満面の笑みを浮かべていることを示していた。
「故に、私が貴女を殺します」

その冷酷な表情から、ノータイムで主砲を構えて放った。狙いは一撃で死を齎す顔面。その顔を見せるなと言わんばかりに。
そう簡単にはやられるわけがないと、白露は軽く避けた後に前に跳んだ。海風との間合いを一気に詰め、接近戦を仕掛けるのはやはり夕立の戦い方。しかし手に持つのは錨。これは村雨。
「姉さんもそれで殺すつもりなんですか。尚更許しません」
瞳が燃え上がったと思いきや、海風の拳が白露の顔面にめり込もうとしていた。接近戦すらも選択肢にない海風からのその一撃は、少なからず白露を動揺させる。
だが、口枷は艤装と同じ材質。余計なことを喋らないようにするために嵌めたそれは、顔面を守るためにも作られている。拳を叩き込んでも破壊すら出来ない。故に、避けることすらしなかった。
「んっんっ」
いくら深海棲艦化して膂力が上がっていても、白露も同じだ。拳が叩き込まれようが、首を捻じ切るほどまではいかない。
拳を顔面で受け止めた後、目元が確実に意地悪い笑みに歪み、ゼロ距離で海風の腹を狙った。この位置なら避けられないと考えて。
「そういうことをやることくらいお見通しなんですよ。貴女の意地の悪さからして！」
しかし、海風はそれを読んでいる。撃たれる前に脚を蹴り飛ばし、体勢を崩した。さらには踏みつけるかのように脚を振り下ろすかなり乱暴な一撃。
「んっ」
無論、白露も一筋縄ではいかない。その脚を逆に蹴り飛ばし、海面を軸にブレイクダンスのような要領で回転して立ち上がる。そういうことをやるのも夕立。
それを見続けている春雨は、考えに考えて、白露が何かを探る。姉4人を見続けてきた春雨だからこそ気付けることがあるはずである。
そして、辿り着くところがあった。
「あれ……？」
確かに姉の動きをそのまま自分のモノにしてしまっているところ

はある。そして、それの軸になっているのは他ならぬ白露だ。個性的な妹達でも、白露の指示にはちゃんと従う。姉だから、いっちばーんだからというだけではなく、白露自身のカリスマ性がそれを現実としていた。あれだけ妹達の力を使っていけるのは、それが白露だからというのが答えだろう。白露で無ければあんなカタチにはならない。

しかし、その使い方の中に、白露ではない別のナニカを感じ取った。白露が妹の力を使うのなら、もう少し丁寧に扱うだろう。いくら性格が変わっていたって、姉であることには変わりない。しかし、その扱い方は全てを道具としてしか見ていないとすら思える。違う意思が挟まっているような感覚。

「……5人目!?」

ここで春雨の直感が1つの答えに辿り着いた。白露の中に他の姉達がいるというのは、何となくわかった。金剛もそれに気付いていた。しかし、さらにそれを統括、支配する5人目の存在には気付かなかった。そこに春雨は辿り着いたのだ。

その5人目が何者であるかはわからない。しかし、それが全ての元凶であることはわかる。それが失われれば、元には戻ることはないが話は通じるようになるのではないか。そう考えた。

それをどうするかはまだわからないが。

「どうであれ……どうにかしないと話は始まらない、よね!」

考えが纏まったわけではないが、動かないとどうにもならない。故に、春雨は一旦行動する。殺す殺さないは一旦置いておいて、白露を止めなければ次の段階には進めない。

「まずは倒す。その後に考える!」

海風の後ろから、春雨も突撃。ここからは2人がかりで白露を止めることになる。

春雨が気付いた、白露の中にいる5人目の存在。それが今回の事件の鍵になることは、この段階では春雨すらも辿り着けないことである。

想像の力

海風と白露との戦闘を観察し、考えたことで、１つの仮説へと辿り着いた春雨。それは、白露が姉４人の混じり合った存在であるという仮説をさらに超えた、５人目の存在。４人の姉全てを支配し統率するナニカが今の白露に混じり合っているのではないかという新たな仮説である。

戦い方からして、白露のようで白露ではない。姿形から記憶までが白露なのだが、何処か違和感があった。常に姉達を見続けてきて、さらには直感という五感ではない６つ目の感覚による特定であるため、それが確定であるとはハッキリと言うことは出来ない。

「まずは倒す。その後に考える！」

海風の後ろから、春雨も突撃。ここからは２人がかりで白露を止めることになる。

白露の目は、２人がかりかと非難するような感情がこもっていた。海風と１対１（タイマン）の時はまだまだ涼しい顔をしていたようだが、そこに春雨が参戦するとなったら、口枷が無ければ罵倒の嵐だったかもしれない。

しかし、その目からはまだ余裕が失われていない。負けるかもしれないという感情は何処にもない。そもそもそんな感情が破綻しているという可能性すらある。

「んっんー！」

「海風！　ごめんお待たせ！」

２人の戦いに乱入する春雨。勿論脚は生やしていないため、低い姿勢から主砲を構えながらの突撃である。そこから脚を生やして急に伸びるという一撃を、前回の戦いで喰らっている白露としては、春雨が近付いてきたら間合いを取るという認識になっているようで、海風からも離れることに。

しかし、離れながらもしっかりと魚雷を置いていっている辺り抜け目無い。春雨にはそういう置き土産が危険であるため、海風が間髪容れずに破壊した。結果的に、白露は大きく離れて２人を見据える位置

にまで退いていた。
白露としても、春雨と海風が組んだ状態というのは多少警戒しているらしい。負けるとは全く考えなくとも、遊んで勝てる相手でもないと判断出来ているようだ。
「海風、白露姉さんの中に5人目がいるかもしれない」
「5人目……!?」
「うん。どう考えてもおかしいもん。白露姉さんじゃなさ過ぎる」
海風の隣に並び立った時にボソリと呟く。今までの経験則で仮説とはいえ説得力のある言葉になる。
「ならアレは、白露姉さんの姿形を使ってる別人ってことですか?」
「あと記憶もね。そうなんじゃないかなって、私は思ってる。そもそも、姉さん達の力を全部使ってくるでしょ」
「確かにそうですね……あの錨は村雨姉さんのですし、そもそも突撃を多用するのは夕立姉さんです。それに、妙に冷静なんですよね……時雨姉さんみたいに」
海風にも思い当たる節があるようである。直接ぶつかり合ったことで、あの白露がやはりおかしいとわかったようだ。
海風だって、白露達とは演習を繰り返している。春雨ほどではないが、4人の特徴は身体に叩き込まれているのだ。それもあって、白露の戦い方が使われていることに言われて気付けた。
「多分、多分だよ。私がふと思ったのはさ、白露姉さんがいないと、他の3人が言うこと聞かないんだ。で、その白露姉さんを5人目が支配してる。そこから流れ流れて、全員支配してる。っていうのが私の憶測」
春雨の考えたことが正しければ、あの白露は白露であって白露でない。というよりは、見た目も戦い方も姉妹だが、完全な別人であると言える。
白露の姿形と記憶、そして1番艦としての在り方を全て奪い取って暴れる何者か。それが今の白露の正体。
あくまでも憶測だと付け加えるが、春雨が言っている時点で海風にはそれが100%正しい情報となる。

「そうですか。なら、アレは一切の躊躇も遠慮も必要なしに沈めてしまっても構わないということですね。そもそも抵抗なんてありませんでしたが。春雨姉さんに仇なす者は全て万死に値するので」
そして、これである。白露ではないという疑惑が出てきたことにより、余計に抵抗が無くなった。
元々白露に対しては敵対の意思以外無かったのだが、見た目と記憶が白露であるだけの別人とわかれば、その怒りと憎しみは余計に増すというもの。
「私としても、この憶測が当たっているなら気に入らないね。姉さんの存在を冒涜してる。使えると思ったから使ってるんだろうけど、気分が悪いね」
「姉さんが気に入らないというのなら尚更です。姉さんにその首が差し出せるよう、共に頑張らせてもらいます」
海風が発揮する力はこれにより１００％になる。春雨が嫌うものは、自分も嫌うものだ。その思考はより過激に、殺意のみに呑まれているとすら思えるものになってしまっているが、そういう壊れ方であると理解出来ているため、春雨は小さく苦笑する程度でそれを流した。
白露をここで撃破するのは変わらない。アレが白露でないというのなら、尚のことここで終わってもらわなくてはいけない。姿形も記憶も利用されて、悪虐非道の限りを尽くされるのは、気に入らないを通り越して呆れてしまう。
その白露は、話は終わったかと言わんばかりに据わった目で２人のことを見つめていた。ただボーッと待っていたわけではない。確実に勝てるようにするために、ある程度は作戦を立てていたのだろう。そういうところは時雨。
「行こう、海風！」
「はい、姉さん！」
２人同時に白露に向けて砲撃。これが戦いを再開させる合図となった。
その砲撃はさも当然のように潜り抜け、白露は改めて２人を殺すた

めに動き出す。そこに妹への情なんて一切感じられない。まるで踊るようにステップを踏みながら、攻撃を全て躱して逆に撃つ。
そして、口枷の下は不気味な程に口角が吊り上っていることだろう。2人相手でも全く臆すことなく、むしろ余計に愉しんでいるようだった。妹を殺すという背徳的な快楽は、何ものにも代えられない至上の幸せとなりつつある。そのせいで、春雨と相討ちをする程だった力は、この期に及んでより一層高まっている。
「前より……強い……！」
それをすぐに感じたのは、やはり互角だった春雨だった。砲撃にしろ、雷撃にしろ、その全ての精度が前回戦った時よりも上がっている。むしろ、戦えば戦うほど上がっていく。
砲撃をしようとすれば、それに合わせるように砲撃を重ね、まともに狙いを定められない。魚雷を放とうとすれば、それも同じように重ねて狙いが合う前に魚雷同士が接触して爆散。そしてそれを、春雨と海風2人分に対応していた。
白露は自分が不利になればなるほど力を即座に増していくという、艦娘ならば誰も持たないような特性を発揮している。おそらくこれが、白露に混ぜ込まれた5人目の特性ではなかろうか。
だから、いろいろな戦場に出して育てようと古鷹は連れ出しているのかもしれない。その暴走気味な突撃癖に文句を言いながらも、何だかんだ笑って済ましているのは、あくまでも白露を育てるため。白露も春雨と同様、まだ生まれて間もない新参の深海棲艦なのだから。
ここで倒さなければ、どんどん手がつけられなくなる可能性が高い。ただ戦うだけで、どんなものよりも強くなっていくだなんてインチキにも程がある。
「海風、畳み掛けるよ」
「はい！」
2人同時の攻撃もいなしてしまう白露でも、今はまだ互角レベルだ。おそらく、一度見た攻撃を覚えてしまうようなもの。春雨の突然脚を生やしての体当たりももう効かない。むしろ、最初から警戒しているせいで届かない。

こういう場合に一番効果的なのは、今までに見せていない攻撃だ。白露のこうなってからの戦闘経験は知らないが、少なくとも艦娘相手には強力な耐性を持っているようなものだ。つまり、この白露を倒せるのは、艦娘とは逸脱した行動が出来る同胞(はらから)しかいない。そして、その手段を見せたら一撃で屠らない限り、次はもう効かなくなってしまう。

おそらく、今の白露には施設で療養している戦艦棲姫でも厳しいかもしれない。戦い方を知られてしまっているのだから。

「海風、出来るなら……艦娘の時とは違う攻撃、出来るならしてみて。白露姉さんが見たことがないようなヤツ」

「うえっ!? が、頑張ってみます。愛する姉さんがそういう指示をしてくれるのなら、私はなんだって出来ますよ。私は姉さんの妹、海風なんですから!」

春雨の指示は相当な無茶振りである。しかし、海風はやる気満々。今までやったことがないようなことをやろうと思考を巡らせる。

海風としてはまずやらないような徒手空拳なんてものも見せているが、それは効かなかった。おそらく、そういう手段に出る相手は何人もいたのだろう。誰がやろうと似たようなものなので、効かないのは当然の話だったかもしれない。

「知らないこと、思い付くこと、普通ならやらないこと、出来そうなことは全部やっていくしかないですよね」

海風は思案する。艦娘のときには無くて、深海棲艦と化した今あるもの。それは。

「……右腕」

艤装化した右腕である。春雨で言えば、出し入れ自由な両脚。艦娘だからか、深海棲艦でも割と稀なモノだ。

「……そうか、これなら!」

そこで海風は思い付いた。インナーで隠しているとはいえ、右腕は完全に艤装として構成された義腕。それは今まで使っていた腕を想像して作られた腕である。だから、今まで使っていた通りの腕が出来上がり、今まで通りに動かせる。

ならば、この腕を違うものに出来たなら、それは白露も知らない必殺の一撃に出来るのでは無かろうか。海風はそう考えた。
春雨からの無茶振りによって思考回路が活性化したようだった。春雨の指示で無ければここまでの効果は得られなかっただろう。依存がこういうところで役に立った。
「姉さん、海風行きます！」
姉に見られているのなら、どんな苦行でも楽しんで喜んで実行出来るだろう。モチベーションは今までに感じたことがないくらいに高かった。昂揚が激しく、後ろを向くことは一切無い。
白露が自分から接近してくることが多いので、右腕を試すタイミングはいくらでもある。特に、錨で殴りつけてくる瞬間。この時は白露も無防備に近い瞬間があった。
そしてそれは、すぐに訪れる。魚雷に魚雷を重ねられて水柱が立ち昇った瞬間、それを突き破るように白露が突撃してきた。春雨よりも前にいた海風は、当然その餌食となる。
「んっんー！」
目元が完全に命を奪ったと確信したように歪み、片手には主砲を、そしてもう片手には錨を握りしめ、同時に攻撃を繰り出した。
海風は当然、放たれた砲撃を回避することに専念する。しかし、回避方向には振りかぶられた錨。回避の勢いも合わせて、その攻撃は致命傷に近い衝撃となるだろう。それが直撃したら、であるが。
「やらせるわけないでしょう！　姉さんの前で！」
やられたら春雨が壊れる。そんなことは考えずともわかる。故に、海風は負けない。
白露の錨が海風を薙ぎ払おうとした瞬間、海風の右腕が瞬時に変化。インナーを突き破り、腕そのものが盾となった。
「んんっ!?」
「艤装はイメージの力。制服も同じ。だったら、ここも同じ！　私は姉さんを守る、盾となる！」
その盾は錨を弾き飛ばし、白露の体勢を見事に崩すことに成功。
「姉さん！」

「ありがとう海風。海風がいなかったら、私そんなこと思い付かなかった。海風のおかげだよ！」
その白露の隙を見逃すわけがない。海風が腕を盾にして食い止めたことで、春雨にも次のイメージが出来ていた。
突発的に脚を生やすことで、驚異的な速度で白露に突撃。そして接触するかもしれないという瞬間、春雨の脚は比叡の持っているような刀剣へと変化する。

「姉さん、永遠に、眠ってぇ！」
そして、脚を大きく振り上げることにより、白露の胴を斬り払った。

白露の中には

「姉さん、永遠に、眠ってぇ！」
刀剣へと変化させたその脚を大きく振り上げたことにより、春雨の一撃は白露の胴を斬り払った。
「んぎっ……!?」
身体が真っ二つになるようなことはない。そこまで深く出来たわけでも無く、白露自身も春雨が突撃した時点で後ろへと下がっている。
しかし、その距離を見誤った。蹴りが斬撃になるなんて考えていなかった上に、刀剣へと変化した瞬間、本来の脚よりも長くなった。結果、白露の胴は綺麗に斬り裂かれ、その口枷すらも叩き割った。
その時に春雨の脚の刀剣もヒビが入り、そのまま砕け散ったが、あくまでもそれは今作ったばかりの仮初の脚だ。反動で少しの間はまともな脚が作れないかもしれないが、また壊れた状態で作られるわけではない。
「春雨に……やられるなんて……ね」
口枷が破壊されたことで、再び言葉を紡ぐことが出来るようになった。今までは古鷹に従順に外すことなく戦い続けたが、口枷が無くなった時点で全てが自由になっていた。
だが、白露の瞳にはまだ殺意が灯ったままだ。腹から胸にかけて斬り上げられたことで、制服はもう血塗れ。戦う力なんてそこまで残されていない。それなのに、まだやろうと倒れることすらない。
「だけど、だけどさぁ……あたしはまだ、やれる……やれるんだよねぇ！」
狂気に染まった笑みを浮かべて、血塗れになりながらもまだまだ戦いは終わらないと言わんばかりに主砲を構えた。腕は震えているのに、力なんて殆ど入っていないのに、殺意だけは一人前。
「ならば、その心が折れるまで戦いますよ。私は春雨姉さんを守り続けるだけです。その砲撃は、絶対に届かせない」
その主砲の前に立ち、腕を変形させた盾を構える。錨を受け止めた

ことで大きな傷が入り、海風自身もその衝撃でダメージを受けていたものの、致死量には全く届いていないのだから、春雨の側にいることを優先する。
盾があることによって、お互いの身体は守られている状態。そのまま耐え続ければ、白露は勝手に消耗し切って倒れるだろう。
「あっはは、海風ぇ……あたしに同じことは二度も通用しないんだよ！　次はそれもぶっ壊して、アンタの目の前で愛しい春雨を殺してあげるよ」
「やれるものならやってみなさい死に体が。姉さんを守る盾で、もう何もやらせません」
「口だけは達者になっちゃってさぁ！」
さも当然のように怪我をする前の速度で突撃を敢行。一度見た盾なのだから、真正面から破壊してやろうと、錨を振りかぶった。
「げほっ!?」
だが、やる気だけではダメだった。春雨の渾身の一撃は内臓を傷付け、口からも血が吐くことに。そして、脚から力が抜けたか、その場で跪いて倒れ伏してしまった。
海が血の色で染まるが、震える腕で上体を起こし、春雨と海風を睨みつけながら立ち上がろうとする。
「っは、はぁ……はぁ……負けてない、負けてないんだ。あたしはぁ……もっと……おぶっ!?」
しかし、ここで白露に異変が起きる。吐き出されるものが血だけでは無かった。
艦娘も深海棲艦も、血液の色は人間と同じ赤だ。強いて言うならば、深海棲艦の方が少し色が黒に近く、色素自体が薄いため、肌が白くなるようである。それでも、それが赤であることがわかるくらいには色付いている。
だが今、白露の口から吐き出されたのは純然たる黒。それは、春雨や海風にも見覚えのある色。溢れ出した感情の泥と同じ色。
「姉……さん……？」
春雨が恐る恐る声をかけても、泥を吐き出すことをやめない。ゲホ

ゲホと咳き込めば咳き込むほど、その量は増えていく。気付けば、胴から流れる血も、一部が黒ずんでいる程だった。
「つかはっ……え、え……」
咳が止まった時、白露の瞳は今までと違っていた。一切の怒りも憎しみもない、綺麗な光が灯っている程である。
「あたし……今まで何を……」
今までと確実に違う、正気に戻ったかのような言動。その言葉が聞こえたことで、春雨は大きく動揺した。今の白露は、自分の知る姉だった。
「姉さん、姉さん!?」
「あれ……深海棲艦……あれ……」
目に光は戻ってきているが、今までの自分がわかっていないように震えている。たった今まで殺意を向けていたのに、目の前の春雨が春雨と認識出来ていないような表情。
流石にそんな様子を見たら、海風すら動揺を隠せないでいた。春雨を苦しめた張本人である白露なのに、その怒りの対象から外れてしまった。
「私です！　春雨です！　今はこんな姿になってしまっていますが、姉さんの妹の、春雨です！」
「春雨……ああ、春雨、あの後、逃げ切れたんだね……でも、なんで深海棲艦に……あれ……」
話が噛み合っているようで噛み合っていない。だが、春雨が逃げ切れたと言えるということは、紛れもなく春雨の姉であった白露であることに間違いはない。
今話しているのは、春雨が直感的に気付いた5人目の存在が失われたような存在。あの頃の白露なのだが、白露自身が頭の中がグチャグチャになっているようだった。さらには、未だに血は流れ続けているわけで、刻一刻と死に向かっている。
「なんか変……何これ……こんなの覚えがない……知らないことが……あたし、なに、何なの、何が、何が……起きて……」
「姉さん、落ち着いてください！　大丈夫です、私達がいますから！

海風！」
「は、はい、正気に戻ったなら、春雨姉さんのためにも生きていてもらわないと困りますから、まずは落ち着いてください」
白露に駆け寄る春雨と海風。一度正気に戻ったが、今度は違う意味で正気を失いかけている。全く知らない記憶の奔流が頭を駆け巡っているせいか、許容量を大きく超えてしまっている。それにより、思考回路が焼き切れかけていた。パンク寸前どころか、既にパンクしてしまっているレベル。
それを繋ぎ止めていたのが５人目の存在なのだろう。それがいたから白露はまともではないがまともでいられたわけだ。
つまり、先程さんざん吐き出していた黒い泥が、その５人目そのもの。そこに辿り着くのに、そこまで時間は必要なかった。
「泥に人格があったってこと……？　全然意味がわからない。でも、でも姉さんが正気に戻ったなら、話が聞けるかもしれない！　絶対に救う！」

「そんなこと、させるわけないでしょう」
古鷹の声と同時に、主砲が放たれた爆音が戦場に鳴り響いた。

古鷹と戦っていた４人――金剛、比叡、叢雲、島風は、古鷹たった１人に圧倒され続けて、今や満身創痍だった。
最初に傷だらけにされた比叡は、その後も戦い続けた。気合だけで立っていたものの、刀剣は殆ど意味をなさないくらいに破壊されていた。主砲に切り替えて攻撃を続けたものの、戦艦の大振りな砲撃は古鷹に掠ることもなく、逆に撃ち返されて傷がより一層増え続けるのみ。
爆撃を受けていた叢雲と島風は、対空砲火を集中させたおかげで致命傷は避けたものの、爆風を喰らい続けたせいで消耗が激しい。攻撃に転じようと、爆撃を潜り抜けて接近したが、それを甲標的に邪魔さ

れ、結局攻撃の対処に尽力せざるを得なくされる。島風は消耗しすぎて自分のスピードが出せなくなり、叢雲に至っては槍を杖にして膝をついてしまっている。
そして金剛は、その3人の命を守るためにシールドを張り続け、攻撃すらさせてもらえないままにボロボロにされた。シールドは傷だらけで何とかそのカタチを留めているに過ぎない。仲間を守る術を失いかけており、戦う手段すらギリギリ。
「春雨ぇーっ！」
金剛が叫ぶ。もっと体力が残っていれば、今の古鷹の砲撃は無理してでも止めていただろう。しかし、身体が動いてくれなかった。
古鷹は白露諸共春雨達を葬ろうとしていたのだろう。白露自身も、本来呼び起こされないであろう記憶が戻ってきてしまいそうなので、口封じのために皆殺しを選択した。
ここで春雨がやられたら、まず間違いなく戦況はグチャグチャになる。一部の者は感情が溢れて黒い繭となってしまうかもしれない。そうならなくても、トラウマになって再起不能になってしまうかもしれない。どうあっても、今まで通りにならないことは確実だ。
「姉さんは、姉さん達は、私が守ります！」
その砲撃の前に、海風が立ちはだかる。腕を強固な盾へと変形させ、春雨と白露を包み込むように作られたそれにより、古鷹の砲撃は完全に防いだ。
しかし、その衝撃でグラリとふらつくが、春雨のためにと踏ん張る。守るための力を得たのだから、最愛の者を守り切るために。
「へぇ、そういうことも出来るんですね。厄介極まりないですし、貴女達はここで確実に始末してしまいましょう。艦娘は正直後からでもどうとでもなりますが、貴女達はダメです。やたらと成長が早い」
満身創痍な4人に背を向けて、海風の張る盾を叩き割るために、爆撃も魚雷も全てを集中させた。
砲撃は盾で受け止められるだろうが、上と下からの攻撃まで手が回らない。全ての攻撃が同時に放たれると、覚えたての海風には重荷すぎた。

だが、その攻撃は届かない。まずは真っ先に魚雷が破壊された。
春雨は白露に寄り添い、それに対して反撃する手段はすぐには出せなかった。ならば誰が。
「おいおいおい、せっかく姉妹の仲が元に戻るかもしれないんだぜ。茶々を入れるんじゃねぇよ」
その攻撃を食い止めたのは、竹。群がる同胞(はらから)の群れを全てどうにかしたことにより、ようやく戦線に参加出来るようになった。もう古鷹が連れてきた敵群はいない。松竹姉妹が筆頭になり、ここには古鷹しかいない状態にまで持っていった。
「上から下から器用ね。でも、春雨さん達には届かせない」
爆撃は松が全て防いだ。艦載機は全て撃ち墜とし、爆撃そのものも消し飛ばした。これにより、春雨達には破片すら落ちてこない。
「俺達はさ、別にお前が何をしたいかとかはあんまり興味ないんだ。俺には松姉ぇがいりゃそれでいい」
「私も、竹がいれば他はどちらかといえばどうでもいいのよね」
「だけどな、俺達と同じように想い合ってる姉妹の仲を裂こうっていうなら、容赦しねぇよ」
古鷹が放ったモノとは比べ物にならない量の魚雷が、竹から展開された。本来ならば、周囲の全てを殲滅するために放たれるであろう物量が、全て古鷹に集中しようとしている。
「これはこれは……もしや貴女達は格上ですか？」
「そんなこと知らないけれど、少なくとも、在り方は貴女より上なんじゃないかしら。静かに平穏に、竹と一緒に暮らしていければそれでいいんだもの。周りに迷惑をかけようだなんて、カケラも思ってないわ」
「おう。そういう意味では、お前は格下も格下だぜ。力だけで格上だっつってるヤツよか、俺達は格上だ」
それだけ言い、魚雷が全て古鷹に向かっていく。あらゆる方向、あらゆる速度で、回避をさせる気が一切ない、密度しかない雷撃。殺意しかこもっていない。
これを回避するためには、その魚雷全てを破壊する以外に無いだろ

う。だがそれは、松が許さない。魚雷と同時に同じくらいの密度の砲撃が古鷹目掛けて放たれていた。
「これは……流石に私1人では分が悪いようですね。残念ですが、一度退きましょうか」
これだけされても古鷹は余裕を持っていた。松からの砲撃は、致命傷になるところのみ艦載機を盾にして防ぎ、迫りくる魚雷もしっかりと砲撃で対処。結果的に、古鷹は無傷のままだった。
これだけやっても、疲れの1つも見せない。誰も死ななかったのはいいことではあるが、怪我人は多数である。
「白露さんも、そう長くはないでしょう。それに……別にその子が治療されたとしても、何の役にも立たないでしょうから。まさか吐き出してしまうとは思っていませんでしたよ。もしかしたら春雨さんは……ふふふ、また会いましょう」
そしてそのまま古鷹は消えた。それを誰も追うことも出来なかった。

戦いはここで終わり。白露は正気を取り戻したようだが、その命は刻一刻と失われていっている。

自分の仇

古鷹が撤退したことで戦いは終わった。しかし、春雨と海風には、そんなことはどうでもいいことだった。今までアレ程までに敵意と殺意を振りまき、命の奪い合いをした結果、白露が最後の最後に正気を取り戻したのである。

春雨渾身の一撃が入ったことにより血と同時に泥まで吐いたことで、今までのことを忘れてしまったかのように純粋な表情となり、深海棲艦化した春雨を認識出来ない程になっていた。春雨だと言われてすぐに受け入れることは出来ていたものの、頭の中には自分の知らない記憶が存在し、死にかけの身体なのにもかかわらず激しく錯乱していた。

「姉さん、姉さん！　今は落ち着いてください！　私がやってしまったことではありますけど、傷が酷いんです！」

白露の錯乱に釣られて春雨も錯乱しかけていた。そもそも白露が死にかけているのは春雨が与えたダメージによるものだ。

こうやって正気に戻るなんて思っていなかったから、永遠に眠っていてほしいと命を奪うつもりで一撃を入れたのだが、今やなんてことをしてしまったのだと後悔しか無かった。こんなもの、たられば でしか無いし、こうしたことで泥を吐き出すことが出来たとも考えられる。

「つぐ……なに……何これ……わけがわからない……あたし、いったい……」

「白露姉さん、春雨姉さんのためにも落ち着いてください。傷は深いですが、今の私達なら、まだ治療出来る範囲内のはずです」

古鷹が去り際に、白露はもう長くないと言っていたが、適切な処置を施せばこの傷も治せると海風は考えていた。むしろ、そうなってもらわなければ春雨が傷付く。そんな姿を見たくない。故に、白露の治療に専念する。

しかし、今ここにあるのは戦うためのモノだけだ。血を止めることも出来なければ、包帯すらない。

いや、それはすぐに調達出来る。
「応急手当程度ですが、クルーザーにある程度は積み込んであります！　使ってください！」
非戦闘員であるためにこの戦場から逃げ回っていた宗谷が、戦いが終わったタイミングを見計らって戻ってきていた。怪我人が出たときに鎮守府に戻るまでの時間をどうにか稼ぐため、あらゆる手当ての手段をクルーザーに載せていることがここで役に立つ。
それに、艤装を消せば満身創痍な仲間達を運ぶことも出来るだろう。そういうことをするためにも、宗谷がいてくれるのはありがたい様子。
「春雨さん、使うのは包帯だけでいいわ。薬はむしろダメ。多分逆効果」
そこへ松が口を出す。
「傷口をしっかり押さえつけて塞いだ方が治りやすいわ。内臓まで行っちゃってるとしても、まずは完全に塞ぐこと。出来ることなら、白露さん自身に艤装なり何なりで塞いでもらいたいんだけど」
冷静ならば、服や艤装を作る感覚で傷口を押さえ込むように何かしらのモノを作り出すのだが、今の白露は錯乱し続けている。例え冷静だとしてもすぐに出来るかと言われればそうでもない。
結果、宗谷が用意してくれた包帯で傷口を覆うようにグルグル巻きにしてやることで自己再生に頼ることにした。傷が開いていたら一生治らないが、閉じていたら修復が始まる。そうなれば後は白露の体力と気持ち次第。
「姉さん、少し我慢してください……！」
傷が開かないように、それこそ文字通り血が止まるくらいに包帯を締め付ける。当然それも激痛を伴うため、白露は悲鳴のような呻き声を上げた。
巻かれた包帯はあっという間に白露の血に染まり、白い部分の方が少なくなる。しかし、それ以上血が出なくなれば死からまた遠のくので、なるべくキツくキツくと強く縛った。
「わけがわからないとは思いますが、事情は後からいくらでも説明し

ます。今は私達の施設に来てください。そして……一緒に生きてください」
春雨の言葉に対して、まともな反応は見せられない。頭の中がグチャグチャな状態に、激痛まで加わってしまっている。
だが、視線は春雨の方を向いていた。自分のことを心配してくれる妹の姿は、ちゃんと目に入っていた。
白露の頭の中には、白露も含めた4人分の思考が混じってしまっている。そのせいで、白露には知らない記憶もあり、白露の考え方とは違うモノが湧き上がる。
思考と感情が4人分あっても、その全てが1つの方向を向いていることもある。それが春雨の存在だ。4人を常にサポートしていたからこそ、4人が常に頼りにしていた最高の裏方。信用と信頼しかないのだから、錯乱していても春雨の言葉は心に響く。
「……よく、わからないけど……生きるさ……っが……」
まだ自分のことすらよくわかっていないが、春雨の言うことは聞いた。死を望むようなことはせず、むしろ生きようとする意志を感じる。激痛で気を失うことも出来ず、だが体力は削られていくので、苦痛以外の何ものでもない。
「そいつは俺か松姉ぇで運んでやるよ。なるべく揺れない方がいいだろ」
「私達の艤装は、そういうことには優秀だからね。任せてよ」
そう言う2人の艤装は、他の者達と明らかに違うところがある。それが、僅かに浮いていることだ。空高く舞い上がることは出来ないのだが、海面ギリギリを滑空するように移動している。故に、うまく持てば一切揺れることなく怪我人を運ぶことが出来るだろう。
自分の姉は自分で運びたいと考えるかもしれないが、今の春雨は脚が生成出来ていないため、怪我人を運ぶには少し向いていない。強いて言うなら海風の方が上手く出来そうだが、おそらく気持ち的な問題で難しそう。
「じゃあ、私が白露さんを運ぶわ。竹は叢雲さんを」
「っといけねぇ、アイツだって満身創痍だもんな。ちょっくら行って

くる」
松が白露を艤装に乗せる間に、竹は古鷹と戦ったことで動けないほどに消耗している叢雲の方へと向かう。同じように宗谷も向かい、金剛達の応急処置へ。
金剛と比叡は、誰がどう見てもかなり危険な状態ではある。死には至らないまでも、もう戦えない状態だ。島風も疲れ切っているために自力で動くことは難しいだろう。鎮守府まで安全に運ぶためにも、宗谷のクルーザーを使って鎮守府に戻ることに。
そして叢雲。島風と同様に疲れ切っており、立ち上がることすらままならない。傷は少なくとも、これでは施設に戻ることは難しいだろう。
「叢雲、俺の艤装に乗りな。施設まで運んでやるよ」
「……悪いわね……クソッ……」
古鷹に一方的にやられたことで、怒りがまだまだ滾ったままのようである。
竹も苦笑しながら引っ張り上げた。自分の力で自分の身体を支えられないくらいに消耗しているため、乗せられても支えが無いと厳しいようである。
「Ｓｏｒｒｙ，宗谷……貴女のクルーザーを血で汚すことになりマース」
「汚れは後でいくらでも取れますが、命は今救わなければ取り返しのつかないことになりますから。何も気にせず乗り込んでください」
「私達はまだ死なないよー！」
島風が元気に返すが、言葉だけで身体は動かない様子。そこは松竹姉妹と同じように周囲の敵を処理していた山風達がサポートしていた。しかし、山風は海風の方が心配な様子。
「あー、山風。悪ぃんだけど、叢雲がずり落ちないように支えてやってくれ。あっちまでいい」
「あ……う、うん」
機転を利かせた竹が、山風にサポートを頼んだ。こうすれば、叢雲を運びつつも山風が海風の側に行ける機会が作れる。

「松姉え、叢雲は回収したぜ」
「うん、ありがとう竹。これで撤収出来るわね」
山風に支えてもらいながら、施設の仲間達と合流。その間も、叢雲の苛立ちは増す一方だったのだが、応急処置をされて松の艤装に乗せられている白露の姿を見たことで、その怒りは一気に爆発した。
「そいつ……何助けてんのよ！　そいつは」
「姉さんは、何かよくわからないものに操られてただけなの！」
叢雲の叫びに対して、春雨が叫び返す。自分の姉だからというのもあるのだが、実際に黒い泥を吐き出したことで正気に戻っている。そして、言動からしてその時のことを覚えていないようにも見えた。錯乱しているだけで全て覚えている可能性もあるが。
そんな相手から何も聞かずに葬るなんて出来やしない。怒りで動いている叢雲には申し訳ないが、ここは納得してもらうしか無いのだ。その時の白露と、今の白露は、本人であって別人なのだから。
「だから、お願い。話だけは聞いてあげて。このままま死ぬなんて、あんまりだよ……」
松の艤装の上で激痛に呻く白露に縋り付くような春雨の姿に、叢雲は口を噤んだ。
怒りは最高潮に達しようとしているが、身体が動かない分、何処か冷静に物事を見ることが出来るようになっていた。
正直なところ、叢雲としては春雨の言い分なんて知ったことでは無い。自分を殺した相手なのだから、こんな状況になっていたらザマァ見ろという感情が先立つ。あれだけのことをやらかしておいて、いざ重傷を負ったら救うだなんて都合が良すぎる。まだ死んでいないのなら、そこから自分がトドメを刺してやってもいいとさえ思えた。
だが、春雨の言いたいことが理解出来ないわけではない。叢雲は古鷹と交戦していたために白露のその時の様子を知らないのだが、よくわからないものに操られていたと言うのなら、何故そうなったかくらいは聞いておかないと気が済まない。それが納得出来ないのなら殺してやる。叢雲はそう考える。
「……いいわよ。ならちゃんとそいつ自身に全部話してもらうわ。そ

れで私を納得させなさい。なんで私を殺したのか」
「うん……そうして。でも、姉さんは操られていた時のこと、あまり覚えていなそうなんだ……」
「はぁ？　だからコイツは私を殺した白露とは別人だっていうわけ？　そんなのは納得出来ないわね」
怒りのボルテージは下がることを知らない。白露（自分の仇）が目の前にいるのだから、下がる理由すらない。
「叢雲さん、春雨姉さんを困らせないでください」
そこに海風が淡々と言う。今の海風の中では、白露が助かるかどうかより、春雨が悲しむかどうかの方が優先度が高い。ただでさえ白露のことで心を痛めている春雨が、叢雲のせいでさらに落ち込んでしまった場合、海風にとっての叢雲は敵となってしまいかねない。
海風の威圧で叢雲は怯むことはないが、気分の良いものではない。そのまま睨み合いに。
「海風姉……抑えて。今はそんなことしてる場合じゃないから……。叢雲も……今は我慢してくれると……嬉しい」
そんな2人の状況を見兼ねたか、山風が口を挟んだ。完全な第三者になるとはいえ、現状を客観的に見ることが出来ていたおかげで、2人を諌める方向に自分を持っていけた。
「……まぁいいわ。そいつが助かるかどうかはそいつ次第なんでしょ」
「うん、姉さんは今頑張ってる。ギリギリだけど、生きてくれるって、言ってくれたから」
「じゃあ、私の怒りを晴らすためにも生きなさい。意地でも死ぬな。私が殺せなくなる」
それだけ言って、叢雲は白露達に背を向けた。話しているだけでも消耗はしていくようで、これ以上の言い争いは体力の無駄だと考えたようだ。
施設で暮らしていくことで、怒りの制御は多少出来るようになっているようで、ここで体力のことを考えずに向かっていかなくなったのは成長とも言えるだろう。

「姉さん……死なないでください。みんなのために……姉さん自身のためにも……」
「……わ、わかってらい……あたしが何したかあたしだって知りたいんだい……」

白露の消耗は激しいが、応急処置のおかげで多少は保つようになった。それでも死に向かっているのは確かなのだが、白露の意地でそれを払拭する。

姉としての意地

春雨達は戦場で調査隊と別れ、各々自分達の施設へと帰投。調査隊で消耗が激しい金剛、比叡、そして島風は、鎮守府で入渠による回復に努めることになる。

そして施設側。元艦娘の中で最も消耗しているのは叢雲だが、大怪我を負っているわけではないので休息によって翌日には全回復となるだろう。

しかし、重傷を負って危険な状態である白露は、救出されたとはいえかなりギリギリなところになっている。意地でも死んでやるものかと話していたものの、施設に運ばれたときには衰弱著しく、気合でどうこう出来る状況では無かった。

「死んで……やるもんか……」

寒気すら感じるのか、白露はガタガタ震えながらも激痛によって意識を繋いでいる。包帯で身体を締め付けて傷口が塞がるのを少しでも早めているだけであるため、気を緩ませたらおしまいの可能性すらある。

そして、白露は死の恐怖を知る者だ。記憶が混濁していたとしても、そういうマイナスな感情は忘れようとしても忘れられないのがヒトというもの。震えているのはその恐怖があるからかもしれない。

「ごめんなさい……姉さん……私が……私のせいで……」

致命傷を与えたのは、他ならぬ春雨だ。故に、この白露の惨状を一番悲しんでいるのは春雨。

ここで白露が息絶えてしまった場合、春雨には致命的なトラウマが残ることになるだろう。

「大丈夫だっての……むしろ……春雨のおかげであたしは……正気に戻れたんでしょ……だったら誇りな……あたしは春雨に感謝してんだからさ……」

話すことにより体力を消耗してしまいそうだが、話し続けることでも意識を繋ぐことは出来る。こんな時でも、白露は春雨のことを思って、絶対に悪いことは言わなかった。トラウマを残すことを避けてい

る。
今までの白露とは雲泥の差である。白露型の長姉としての威厳とカリスマ性が戻ってきており、他者を虐げることに悦びを得るような侵略者では無い。正しく艦娘白露の心を持っている。
やはり、春雨に斬られた時に吐き出した黒い泥が白露を狂わせていたのだと考えるのが妥当であり、アレを口から傷口から全て外に排出したことで、白露は元に戻ったとするのが良さそうである。
「あたしは絶対に死なない……春雨のためにも……みんなのためにも……あたしの……ためにも……！」
その目は光を取り戻し、前を向き続ける。そんな白露を見て、春雨は本当に姉が帰ってきたのだと実感した。

なんとか施設に到着したものの、そこからは重傷の戦艦棲姫が運び込まれた時や、聴力を失った春雨が運び込まれた時よりもてんやわんやだった。
春雨が直感から出て行ったことで、みんなが心配そうに岸で出迎えたのだが、今までで一番死に近い怪我人である白露が運び込まれたことで、コマンダン・テストが3度目の発狂。今回は特に酷く、リシュリューが無理矢理押さえ込んだ挙句、飛行場姫がうまく気絶させて、その時は事なきを得た。
「Ｌａｉｓｓｅ（後は任せ）ｌｅ ｒｅｓｔｅ（た）．（わ） Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕはこの子の看病をするから」
「ええ、事が済んだら後からアタシもそちらに行くわ。最近はその子に酷な事が多すぎるわね……」
リシュリューがコマンダン・テストを抱きかかえて退場。死に近いことをトリガーとするのは、現状が最も辛い状況であろう。
施設はそういうことが無いから安心出来るというのに、ここ最近は立て続けだ。リシュリューも、少ししたら陸に遠征に向かうことも考えている程であった。
竹の艤装に乗せられた叢雲は、施設に戻るまでに少しだけ回復して

おり、フラフラではあるものの身体が自分で動かせないということは無くなっていた。
艤装から降りた叢雲は、薄雲の肩を借りてすぐに休息に入る。しかし、先に退場する前に、白露の方を睨み付ける。
「死ぬんじゃないわよ。私に殺されるまでは生きてなさい」
「……ったりまえ……」
もう話すのも辛そうだった。意識を失うまいとしていたが、その分消耗し続けてしまうのは否めない。白露はそれ程までに疲れ切っている。
「後から全部話します！　姉姫様、妹姫様、姉さんを、姉さんをどうか……！」
「春雨ちゃん、落ち着いてちょうだい」
「アンタが焦っていても仕方ないわ。戦艦、この子運んで」
「ええ、うちの子なら丁寧に運べるわ」
まずはそのまま外で何かするわけにもいかないので、戦艦棲姫の艤装が松の艤装に乗せている白露をやんわりと抱え、まだ空いている部屋へと運んだ。
その迷惑になるわけにはいかないと、春雨はそこで足を止めた。白露のことは心配だが、自分がやれることはおそらくしばらくはない。ならば、白露のためにも今は一度離れて、無事に助かることを祈るのが懸命であろう。
「春雨姉さん……白露姉さんはきっと大丈夫です。あれだけ死なないと断言したんですから。白露姉さんは艦娘の時に一度も嘘をついたことないじゃないですか」
白露は艦娘のときから、自分で言ったことを違えたことは無かった。やると言ったことは、成功するにしろ失敗するにしろ必ずやり遂げるし、約束も必ず守る。嘘だってついたことはない。
それだけ、『いっちばーん』に拘っているのだ。一番誠実で、一番正しく生きる。それが本来の白露。個性的な妹達に少し埋もれてしまうところもあったが、それでも妹達が白露を慕うのは、その精神面があったからだ。だからこそ、ああなっていたことに心を痛めていた。

だが、今の白露ならば、命の灯火が燃え尽きかけているとしても、そこから盛り返すだろうと信じられる。意地でも這い上がってくると。それが白露なのだから。
「……だよね。うん、あの姉さんだもんね」
「そうですよ」
海風も投げ槍になって言っているわけではない。春雨程ではないが、白露のことを理解しているからこその発言だ。無論、最優先は春雨ではあるのだが。
「……待とう。きっと姉さんのことだから、ケロッとした顔で私達の前に来てくれるよね」
「ええ。いっつも前に出ては夕立姉さんと同じくらいに汚れたり怪我したりで大変だったんですから。今回も同じように、戻ってきますよ」
「うん……そうだよね。うん」
春雨も心を強く持って、白露の治療を待つことにした。

部屋に運び込まれた白露の傷を見て、中間棲姫は驚いた。
「鋭利な刃で、一太刀で斬り裂かれてる……逆にこれなら、すぐにくっつくわぁ」
「本当だわ……断面が全然傷付いてない。まるでそのままくっつけてくれって言わんばかりじゃない」
春雨の一撃は惚れ惚れする程の斬れ味だったようで、傷の断面が見たことのないほどに綺麗なのだという。飛行場姫の言う通り、そのままくっつけてしまえば、深海棲艦特有の自己再生能力のおかげで傷痕一つなく元通りになるだろうとまで。
しかし、それが内臓の一部にまで達しているのは問題。腹を掻っ捌いて無理矢理くっつけるわけにもいかず、縫合すらも難しい。
「どんな手段でも……いい。あたしが痛いだけなら、耐えられるから……何をしたら……すぐに治るのかな」
呻くように白露が問う。朦朧としているようだが、気合のみで生き

ながらえているようなもの。
「……アンタは自分がもうアタシ達と同じモノってことは理解してる？」
「一応……はね……」
「なら話が早いわ。いい、アンタには大分辛いことをさせるけど、治すために何でも出来るのなら耐えなさい。いいわね」
　飛行場姫に言われて、小さく頷いた。
「アタシ達は艤装がイメージで作れるの。春雨の脚や海風の腕は見た？」
「……うん……機械になってたね……変形もしてた……」
「アンタもそれをやるの。いい、内臓をピッタリとくっつけるイメージで、身体の中に艤装を作りなさい」
　とんでもないことを言い出した。腕や脚は見えているところだからこそイメージがしやすいのに、内臓を艤装で補うなんて出来やしない。
　だが、白露はぼんやりした頭で飛行場姫の指示を受け、何の疑いも抵抗もなく、言われた通りにイメージする。内臓を包み込むように、薄い艤装の膜を作るような感覚で。
　自分の身体の中なんて、どんな構造になっているか知るわけが無いのだが、常に一緒にあり続けたそれは抽象的なイメージだけでもそれなりに補完が出来た。
　代わりに、白露に新たな激痛を伴って。
「つぎっ、いぁあああっ!?」
「大丈夫、出来てるわ。傷付いた内臓が、正しく真っ直ぐにくっついてる。イメージの仕方も正しい。簡単にただくっつけと考えた方が、今のアンタには合ってるみたいね」
　傷付いた臓器がコーティングされるように艤装の被膜が生成されていき、斬られる前の状態で押さえつけるように固定されていく。
　だがこれは、麻酔無しで腹の中を捌かれているようなもの。しかも、自分の意思で自分の手で腹を捌いているのだ。これは余程の度胸が無ければ出来ることではない。

「んぎぎぎぎ……！」
「アンタ……すごいわね。死にかけの状態でも、そこまでやれるだなんて。何処にそんな根性があるのよ」
あまりにも凄惨な光景。しかし、生きるために痛みすら厭わない白露の意地に、飛行場姫は感嘆の息を漏らしながら聞いた。
激痛に次ぐ激痛に耐えているため、その問いに対する回答はすぐには出来ない。しかし、白露はそんな状況でも口角を上げて言い放つ。
「あたしは……お姉ちゃんだからね……っぐぐぐ……妹を泣かせるわけにゃ、いかんのさ……っがぁっ!?」
たったそれだけのため。無実を弁明するためなどの自分のためではなく、あくまでも妹のため。
春雨のように自分のことがどうでもいいという壊れ方をしているわけではない。１０人姉妹の長姉としての意地だった。妹にカッコ悪いところを見せたくないし、自分のせいで妹が泣くのも気に入らない。そういう意味では、白露も他と大差なくシスコン気味な部分はあるのかもしれない。
「……っははは、いいわねそういうの。なら、アタシもアンタの回復を全力で手伝ってあげる」
「じゃあっ、もっと痛み無くすこと、出来ないかなぁ！」
「出来ないわ。耐えなさい」
「無茶言いなさる！」
冗談のようなことも言えるようだが、そういうことを言えるくらいで無ければ挫けて意識を手放してしまいそうだった。今ここで気を失ったら、そのまま命まで失われてしまうような気がして、白露は我慢し続ける。
腹の中をコーティングし、さらには腹自体もコーティングし、傷口をピッタリと合わせることにより、最低限くっつくのを待つしかない。自己再生能力が高くとも、ある程度の接着には半日くらいはかかるのではと考えられる。
つまり、白露は今から日を跨ぐまでは苦しみ続けるわけだ。眠ることも出来ず、痛みが引いていくわけでもなく、ずっと。

「お姉、お湯とか用意しておくわ。この子の身体とか拭いてあげた方がいいでしょ」
「ええ、そうしてあげましょうかぁ。不衛生なのもよろしくないものねぇ」
怪我人の介護は当然経験済み。ここまでの重傷患者は初めてみたいなものではあるが、適切な処置をするために、姉妹姫も奮闘する。
白露がここで力及ばずとなったら、施設は半壊するだろう。春雨が姉の死によって壊れ、それに連動して海風が跡を追う。そして死をトリガーとしてコマンダン・テストが限界を超えてしまう。パッと考えるだけでもこれだけあるのに、まだまだ不安要素は多い。
「白露ちゃん、だったわねぇ。この施設の平穏のためにも、貴女には元気になってもらいたいの。ちょっと辛いと思うけれど……頑張ってちょうだいねぇ」
「もちろん、さぁ……！」
歯を食いしばりながら、自らを治療する痛みに耐え続ける。それを見守るしかない中間棲姫は、歯痒い思いをしつつも、適切な処置に動き出す。痛みを伴うのはもう仕方ないこと。それを耐えてくれるというのなら、最低限命を続けさせるための処置を施すしかない。
「これ以上痛くなることは無いはずだけれど、そうなっちゃうことも覚悟してちょうだいねぇ」
「嫌だなぁその宣言！」

ここから半日。白露は喉がおかしくなるまで叫び続けることになる。なるべく他の部屋にいるもの達に聞こえないようにしたかったが、壁が薄いわけでなくともこれは響いてしまうもの。
とはいえ、声が聞こえるということは白露が生きている証拠ともなる。

春雨の神業

白露の声は深夜まで続き、日が変わるくらいのタイミングで途切れた。その声のせいで誰も眠れていなかったのだが、無くなったら無くなったで不安になる。その声が聞こえる限りは白露が生きていることを意味するわけで、それが無くなった途端に生死不明となってしまう。

ずっと気にしていた春雨は、いつもの仲間達とベッドルームにいた。5人でベッドで眠るのには流石に無理があるのだが、温もりのためにぎゅうぎゅう詰めの状態である。叢雲はとても迷惑そうにしていたものの、薄雲に引っ張られて結果的にベッドの端に寝かされている。

「声が……止まった……？」

春雨も例に漏れず眠ることが出来なかった。そして、声が聞こえなくなった瞬間に不安に押し潰されかけ、モゾモゾと動き出す。

「姉さん……やっぱり不安ですか」

春雨の隣には当然のように海風が陣取っていた。その海風も、白露の呻き声が聞こえなくなったことには不安を覚えている。

「……海風、姉さんのところに行ってみようか。姉姫様と妹姫様がずっと看ててくれてるから、大丈夫だと思うけど……」

「はい、姉さんがそれを望むなら、私はお供します」

春雨と海風がベッドから出ようとすると、勿論他の3人もそれについていくと起き上がった。

白露のことが心配なのは何も妹達だけではない。薄雲やジェーナスだって、自分と同じように深海棲艦化した駆逐艦というだけでも仲良くなりたい。叢雲は仲良くなりたいという気持ちは微塵も無いが、自分を殺した相手がここで死なれては困るという気持ちが大きい。

「こんな夜中だけど、私達も行きましょ。シラツユが無事なところを見に行かなくちゃ！」

「うん……ありがとうジェーナスちゃん。姉さんはきっと無事だよね」

どうしても不安は拭えない。その目で無事であることを確認しなければ、春雨は確実に発作を起こす。それに、気になって眠れないだろう。
そのため、5人揃って白露が眠っているであろう部屋へと向かうことにした。叢雲は大分渋い顔をしていたが。

夜の暗がりの廊下を歩く足は少しだけ速くなる。特に春雨は義脚であるため、嫌でも少し大きめな足音が出てしまう。
それに気付いたか、白露の部屋の前を陣取っていた戦艦棲姫が、そちらの方に手を振った。夜も深いので艤装を展開してベッド代わりにしていたため、艤装の方も小さく手を振っていた。
「貴女達は来ると思ってたわ」
「明るいうちから度々来てましたからね」
「ええ。声が聞こえている間は来るなって言ってるのにね」
戦艦棲姫自身は治療を手伝えることは無かったため、治療中に誰も部屋に入らないように見張っていた。実際、春雨は何度も部屋の前に来ては帰れと追い返されている。
待つしかないと思っていても、どうしても手持ち無沙汰になってしまう。そして心配は積もる一方だ。そのため、暇さえあれば部屋の前に行っては、何も変わっていないものの声だけは聞こえる白露のことを思ってトボトボ帰るのみだった。
「今回はいいわよ。処置が終わったようだから」
「良かった……じゃあ、入らせてもらいます」
扉の前から艤装が動き、真っ先に部屋の中に入る春雨。しかし、その部屋の中の匂いで顔を顰めてしまった。自己再生をしながらも流し続けた血が、ベッドの上を汚し続けていた結果、あまり広くない室内はその匂いで埋め尽くされていたからだ。
大きな戦いの後などでこういう匂いを嗅いだことはあるが、艦娘は入渠することでどうにか出来てしまうので、ここまでのものはなかなか無い。少なくとも、春雨達の鎮守府でここまでの大惨事になったこ

とはまず無かった。
「姉さんは……」
ここまでの匂いがすると、最悪を考えてしまう。いくら深海棲艦が傷の治りが異常に早くても、これだけ血を流していたら致死量に達してしまっているのではないかと。
「春雨ちゃん……」
白露の側にいた中間棲姫が春雨の声に振り向く。なかなか見られない随分と疲れた表情。農作業をしていてもここまでの顔は見せない。
それほどまでに、白露の治療で消耗したということに他ならない。実際は白露の根性を見守りながら、不衛生にならないように身体を綺麗にしたりするのみではあったのだが、目の前で苦しむ姿を半日見続けるというのは、精神的に辛いところである。
隣の飛行場姫も、ひとまずは落ち着いたと言わんばかりに大きく溜息を吐いた。中間棲姫と同様に、大分疲れている。
「姉さんはどうですか……声が聞こえなくなったということは、眠ったのかなとは思うんですけど……」
「ええ、今はようやく眠れたわぁ。ついさっきまで激痛を耐え続けていたんだもの。ゆっくり眠らせてあげましょうねぇ」
ベッドで横になっている白露は、先程までとは打って変わって安らかな寝顔だった。布団もベッドも血塗れではあるが、今は起こしてまでそれを取り替えてやるのは酷だということで、そこは翌朝にやることにしている。
「もう安心よぉ。峠は越えたわぁ」
叫び続けたおかげで、ついに命に別状が無いところまで来たらしい。あとはゆっくり休めば健康体になれるだろうと、中間棲姫が保証した。それで春雨はようやく安心出来る。
「この子、恐ろしいくらいの根性ね。長い時間ずっと激痛に耐え続けて、それでも挫けないでいたわ。アンタ達のためにも死んで堪るかってずっと言ってたわよ」
結局腹の中に艤装を作り出すというとんでもない治療は、白露の心

持ちのおかげで無事終了した。あんなことをやったら、まず痛みで気を失う。そうでなくても気が狂う程の痛みに半狂乱になって暴れ出してもおかしくない。
しかし、白露は声を上げ続けるだけで終わらせた。消耗しすぎて身体を動かすことが出来なかったというのもあるのだが、気を失わずにこの時間まで耐え続けた。飛行場姫も感心する程の根性である。
「最初の時は、気を失ったらそのまま目を覚まさなくなる可能性もあったからアレだけど、それでも正直驚いてるわよ」
「本当にねぇ……とても頑張ってくれたわぁ」
安らかに寝息を立てる白露の頭を優しく撫でる中間棲姫。この程度では目を覚まさないくらいの熟睡だった。まだ傷の痛みは残っているだろうから、今はぐっすり眠って回復させてやるべきである。
姉としての根性を見せなければ、古鷹が言っていた通りにもう長くはなかっただろう。それこそ、施設に到着する前にその命の灯火は消えていた可能性は高い。
「この白露の傷は、春雨がやったの？」
飛行場姫の言葉に、春雨の身体が強張る。白露が長い時間激痛で苦しんだのは、春雨の渾身の一撃が綺麗に入ったからだ。
「……は、はい」
俯いてしまった春雨。それを見て海風がその手を握った後、飛行場姫に敵意を剥き出しに。姉を困らせる者は許さないと言わんばかりに睨み付けるが、飛行場姫は何も責めていないと続ける。
「完璧な太刀筋だった。これ以上ない、最高最善の一撃だったわ」
激痛に苦しむ白露の身体を拭いてやっている時、改めてその傷を観察していたらしい。それは飛行場姫のみならず、中間棲姫も確認していた。その時に、この切り傷は完璧なモノであると思ったらしい。
その切り傷に、ほんの僅かにこびりついていた泥。全て流れ落ちていたかと思ったが、血と一緒に肌に付着していたらしく、中間棲姫はそれから感情を読み取っていた。最初は飛行場姫も触らない方がいいと注意したのだが、乾き切ってカピカピとなったそれだから大丈夫と、繭と同じように扱った。

そこから感じ取ったモノは、悪意、敵意、殺意――ありとあらゆる『負の感情』だった。白露を歪ませ、本来の性格を塗り潰し、ただの暴虐の使徒へと変貌させたのは、確実にこれだとわかるくらいだった。
そして、それを身体から外に出すためには、今回の春雨の一撃が本当にちょうどいい傷だったらしい。これ以上浅かったら、泥が外に出ることなく白露は元に戻っていなかった。これ以上深かったら、泥は出ていたかもしれないが白露の命も無くなっていた。この今の傷が、白露が耐えられて、かつ泥が外に出るギリギリのラインだと、飛行場姫は判断した。
「直感的にこの深さって読み取ったのかしら。だとしても、これは神業よ。深くてもダメ。浅くてもダメ。ズレててもダメ。躊躇してもダメ。ありとあらゆるところで完璧」
「そうねぇ。容赦なく行ったから、こんなに傷の塞がりが早いのよねぇ。あまりにも傷が綺麗で驚いてしまったもの」
最近の春雨の直感は目を見張るものがあったが、こんなところでも発揮されていたらしい。その力も、白露に一度耳を潰されたことによって覚醒しかけている力だ。
直感的に何かを感じ取ったり、虫の報せを受け取るだけでなく、起こしたことが最善になるところまで来た。深海棲艦化によって春雨に目覚めたその力は、まだ詳細までは掴めないが、第六感だけでは言い表せないくらいになりつつある。
「とにかく、白露ちゃんはもう無事よぉ。明日の朝になれば元気に目を覚ますはずだから、安心して眠ってちょうだいねぇ」
「はい……良かったです」
ここまで聞いて、心底安心した様子。先程は俯いたものの、今はしっかりと白露の顔を見ることが出来た。
艦娘の時から知っている、気持ちよさそうな寝顔。痛みすら感じていない、身体を休めているものの顔である。
「それじゃあ……姉さんをよろしくお願いします」
「ええ、だから今は寝ておきなさい。不安も無くなったでしょ」
「はい……それでは」

白露の命が助かったことで安心したか、春雨も眠気に襲われる。このままなら気持ちよく眠れそうであるため、駆逐艦達はそそくさと白露の部屋から撤収した。

春雨達が去っていった後、中間棲姫と飛行場姫は軽めに部屋を掃除しつつ、先程の白露のことを改めて話し合っていた。
「あんな泥……初めてねぇ。1つの感情じゃ無かったわぁ」
「繭は溢れ出した感情だけなのよね。なのに、白露の中に入ってたのは、1つどころか数え切れないくらいの感情だったんだっけ」
「ええ……しかも、あれは確実に後付けよぉ」
今の白露を見ればわかることだが、泥によって狂わされていたのは間違いない。
中間棲姫が知る限り、泥は心が壊れて内側から溢れるものであり、外から入れられるようなものではない。入れられるにしても、泥が生成されるのは心が壊れた時限定だ。好きに出すことなんて出来るものはいない。
ならば、その常識そのものが間違っていると考える。ここにはいないだけで、好きに泥を出すことが出来るものが存在し、他者にそれを注ぎ込むことによって意のままに操る、ないし、性格を変貌させて同志に仕立て上げることが出来てしまう者が存在するのかもしれない。
考えれば考えるほど謎は多いが、まず確実に言えることは、白露を変貌させた者は、この世界に対して強い負の感情を持っているのだろう。繭にならずに泥のまま溢れ続けているくらいに壊れている。
「何処のどいつよ、そんな迷惑なことをやらかす輩は」
「さぁ……でも、前例が出来てしまったのだから、注意するべきよねぇ」
施設に関係ないこととは言えなくなってきている。白露を匿うのは何も苦では無いのだが、それによって平和が壊されたら堪ったものではない。
「……あのヒトなら何か知っているのかしらぁ」

「あのヒトって……まさか」
　中間棲姫が頷く。
「ええ、『観測者』よぉ」
「あのヒト、呼んで来てくれるようなヒトじゃないでしょ」
「そうかもしれないけれど、頼ってみるのは悪いことじゃないでしょう？」

　この黒い泥について、彼なら知っているかもしれない。しかし、頼れるものでもない。

白露の特性

翌朝。目を覚ますと同時に春雨は行動を開始する。以前にジェーナスに注意されたために独りで行動することは控えているが、今は春雨が動こうとした時点で海風が必ず隣にいるため、寂しさが刺激されるようなことはない。それもあってか、ジェーナス達も春雨に対しての心配事は緩和されている。

「姉さん……起きてるかな」

「どうでしょう……あれだけの怪我だったわけですし……」

激痛に半日近く苛まれた後、疲れ果てて眠ってしまったのだから、まだまだ眠り続けるというのが妥当だろう。

入渠という最もお手軽な手段が使えないのだから、体力の回復にはそれ相応の時間が必要だ。丸一日寝た挙句に、それでも体調が戻らないまである。

「今もグッスリだったりして」

「フラフラで起きてるかもですかね？」

「どっちもあり得そうだね」

不安は無くとも、無事であるかはまだわからないため、足早に白露の眠る部屋に向かった。

部屋の前には相変わらず戦艦棲姫の姿が。まずあり得ないだろうが、白露が当然目を覚まして外に出ようとしたら、力尽くで部屋に押し戻すためである。まだ本調子とは言えないというのに、優しい深海棲艦である。

廊下でも艤装を使って眠っていたおかげか、しっかり身体は休まっていたようである。野宿のスペシャリストであるため、布団が与えられているだけで普段よりも気持ちよく眠れたらしい。

「おはよう2人とも」

「おはようございます、戦艦様。姉さんの様子は見ましたか？」

「いいえ、まだよ。でも中で小さく声が聞こえたわ。寝言なのか独り言なのかは知らないけど」

白露はよくわからない寝言を言うようなタイプではある。あまり

にもベタな『もう食べられない』まで披露した過去があったりする。そのため、寝言くらいなら驚かない。
普通にそういうことを言っているということは、絶好調と言っても過言ではないだろう。だが、まだ傷が完全に塞がっているわけでも無さそうだし、少しの間は部屋から出られなそうだ。
「姉さん、起きてますかー？」
あまり大きな音を立てないように、その部屋にそろりと入っていく春雨と海風。部屋の中は暗くはなく、窓から日の光が入ってそれなりに明るい。
そして、その部屋の真ん中。そこには白露が全裸で立っていた。
「おーう、おはよう2人とも」
「なんて格好してるんですかぁ！」
この春雨の第一声はごもっともである。まだ眠っているかとか本調子は程遠いだろうとかいろいろと考えていたのに、その張本人は窓に向かって全裸で仁王立ちである。絶好調にも程があった。
「いやいや、起きたら服脱がされてるし、着るもの無いからさぁ」
「だとしても！」
「それどうやってやんの？　艤装みたいに作ってんの？」
自分の今の状態を全く気にしていないような仕草。白露の壊れ方はこういうものなのかもしれないが、艦娘の頃から夕立と突拍子もないことをやったりしていたので、こういうことをしていてもこれが白露なのではとも思えてしまうくらいである。
それはそれで諦めるとして、今の白露には違和感があった。元気なこととか全裸であることとかではなく、思っていた姿と違う部分があった。
「え、あの、姉さん……傷はどうしたんですか」
そう、胴にバックリと出来ていた傷口が、たった一晩で綺麗に無くなっていたのである。

ひとまずは全裸のままではアレだということで、白露に服を着せる

ことに。傷が無いのなら、服を着るにも支障は無いだろう。
春雨と海風が懇切丁寧に服の作り方を教えたことで、ようやく体裁として整った白露。体内に薄く艤装を這わせられただけあって、制服も即座に思い通りに作れたようである。しかし、本来の白露とは少しだけ違っていた。
「えっと……姉さん、それは……」
「無いと落ち着かなくてさ」
白露は身につけていなかったマフラーが作られていた。それは艦娘の時の夕立がいつも巻いていた物と同じ物である。水着の時ですら身につけていたくらいのお気に入りだった。
さらには、制服自体は白露の物を再現しているのだが、その内側にはかなり複雑な形状のインナーが形成されていた。それは艦娘の時の村雨が愛用していた物で、その抜群のスタイルを余すところなく表していた。
それに、胸につけていたリボンは何故かネクタイに。それは艦娘の時の時雨がよく使っていた物。そういうところもあって時雨はボーイッシュな艦娘だと評判も良かった。
つまり、白露は1人で4人分を再現している。落ち着かないと言っているくらいなため、記憶どころかセンスや趣味まで混ざり合っているようだ。
「なんだろうね……まぁ大体わかってるんだけどさ。あたしの中にみんながいるんでしょ」
混じり合っているということを如実に再現した姿となっていたため、春雨も海風も少し複雑な気分になっていた。
外見は完全に白露なのだが、服の一部をそうやって変えていることで、何処となく4人が入り混じった存在ということが嫌でも理解出来る。
「一晩寝てさ、なんか自分のことがちょっとわかったよ。あたし、今みんなの分の記憶も持ってるんだね」
「そう……ですか」
「多分ね。だって、あたしの知らない記憶があるからね。多分この記

憶は時雨のだなー。で、これは村雨で、あれは夕立。あたしが知らないことがわかるんだもんよ。おかしな話でしょ」
混ざり合っていることを自覚出来ているようである。だから制服もそういう改造をしている。妹達と共にあるのだと自覚するために。
「だからかな。夢、見たんだよね。みんなが出てきてさ、後は任せたって」
少しだけ目が潤んでいた。それは本当に夢だったのかはわからない。しかし、今は亡き妹達から、笑顔で託されたのだから、それを叶えないわけにはいかない。
自分が春雨を逃がして沈んだことまでは覚えている。妹達が一緒に散ったことも、ちゃんと覚えている。自分も含めて、やり切ったのだと思いながらも死にゆく恐怖に苛まれながら、それでも前向きに。
だからこそ、昨晩は妹達が夢枕に立ったのだと白露は考えている。何故自分がこの身体になったのかはまだ理解していない。それでも前向きに進んでいけるだろう白露に、妹達は全てを託したのだ。
「……妹に恥じない第二の人生が送れるかはわからないけどさ、後を任されたんだから、前向きに生きていくよ」
「私達もサポートします。ね、海風」
「はい。春雨姉さんと一緒に、白露姉さんのこともしっかり見ていきますよ」
「あはは、ありがと」
どうも海風の言い方に引っかかるものがあったようだが、妹達が自分のことを思いやってくれることに感激していた。自分の中にいる妹共々、いい関係に恵まれていると実感する。
「あたしさ、気付いたらこの身体になってたって感じなんだよね……死んでから救出されるまでのこと、ふわっとしか頭に無いんだ……」
「そうなんですか……」
古鷹の下で悪虐非道の限りを尽くしていた時のことを、ぼんやりとしか覚えていないという白露。その辺りのハッキリとした記憶は、吐き出した泥と一緒に外に出てしまったらしい。
なので、過去のやらかしについては、他人事のようにすら思えてし

まうのだと語る。自分がそんなことをやっていたと感じず、しかしながらその時の感触と感情を朧げながら覚えているという最悪な状態。
苦笑しながらも自分の在り方は受け入れているようである。そうでなければ即座に服や艤装を作り出すようなことはないし、そもそも深海棲艦化自体で混乱するはずだ。ぼんやりと覚えているおかげで、その辺りへの錯乱は比較的少なめの様子。
「やらかしは帳消しにならないし、どうしたもんかな……」
しかし、その間にやらかしたことに関しては、どうしたものかと頭を抱える。白露の手にかかって散ったものは当然ながらいる。むしろ、この施設には叢雲という生き証人すらいる。
「……あ、そうそう、傷のことだよね。朝起きたら無くなってたよ。多分……まぁぼんやりとしか覚えてないんだけど、あたしがこうなったことで手に入れた特性なんだと思う」
深海棲艦化した際に発現する特異な力。春雨の直感や叢雲の感知のようなモノが、白露にもあるという。
それが、超回復。死にかけの状態からの復帰には時間がかかったが、もう心配が無いとわかった途端に身体が一気に回復した。あれほどの重傷もたった一晩で回復してしまうくらいなのだから、その力は相当なモノだろう。ある一定のラインからなら休息が入渠みたいなモノとなる。
戦艦棲姫にやられてから割と早い段階でまた出撃して、春雨と相討ちした後も数日後にはピンピンしていて、そして今もコレだ。その場で回復することはなくとも、ゆっくり休めば半日と経たずに全回復してしまう。
この身体があれば、いくらでも侵略行為が出来るだろう。古鷹もそれを理解した上で戦場に駆り出させ、虐殺行為を是として好き勝手やらせていたのだろう。呆れた口調で突撃を咎めていたものの、こんな身体だからこそ容認もしていたと考えるのが妥当。
しかも、やられればやられるほどに強くなるおまけ付き。そちらがまだ残っているかはわからないが、敵側であれば間違いなく厄介極まりない力だ。

「こんな身体だから……そこら中に喧嘩を売って、やりたい放題やって……ホント酷いヤツだねあたしは」
苦笑は崩していないが、妹達のことを思い返しているときよりも涙目になっていた。ヘラヘラしているわけではなく、そうやって笑い飛ばさなければ、ストレスで押し潰されてしまいそうになっている。
「姉さん……今の姉さんは、あの時の姉さんと違う、私達の知ってる姉さんなんですよね」
「勿論……とは言い切れないけど、あの時とは違うと思うよ。やりたいって思わないし。ていうか、あんなこと反吐が出るし」
あの時の行動に抵抗があるというだけでも充分。他人事のような自分のやらかしたことに対して嫌悪感が持てるのなら、二度と同じことをやることは無いだろう。
「でも、奪った命は戻ってこないんだよ。ふわっとしか覚えてなくても、あたしがどれだけやったかわかってんだからさ……。ここの叢雲もそのうちの1人ってこともね。だからまずは、叢雲に謝らなくちゃいけない。謝っても許してもらえないことはわかってるし、余計に焚きつけちゃうかもしれないけど、やらないよりはやった方がマシだと思う」
自分のやったことと向き合うつもりはある。それがいくら黒い泥のせいだったとしても、自分の意思では無かったとしても、やったのは自分の身体だ。出来る限り償う。
「叢雲もそこにいるんでしょ。なーんとなくわかるなぁ。多分これ、夕立の勘の強さかな。あの子、犬みたいに匂いがどうのこうの言ってたくらいだし」
扉越しに声をかける。春雨と海風が振り向くと扉が開き、そこには白露の言った通り叢雲が立っていた。薄雲とジェーナスも側に立ち、突然飛び込んで白露に襲いかかるのでは無いかとヒヤヒヤしていた。
「……そろそろ、我慢出来ないわよ」
成長した叢雲は、多少なり怒りが制御出来てはいる。しかし、白露はそもそもこうなる元凶だ。ここまで耐えることが出来ているだけでも上出来過ぎた。

「うん、あたしは叢雲にどうやって償えばいいかなって考えたけど、まだ時間もそんなに経ってないから、物凄く簡単なことしか思い浮かばなかった」
「へぇ……で、アンタは何をしようっていうの？」
叢雲の苛立ちは最高潮。いつでも艤装を出して殺しに行けるという心持ちで白露を睨みつけている。手が出ない分、随分と心が強くなってはいるのだが、我慢の限界は近い。
「あたしの身体、死なない程度の傷だったらゆっくり休めばすぐに治るみたいなんだよね。死んじゃう怪我でも、あたしが頑張って耐えることが出来ればこの通り」
制服をめくり、インナーを一時的に消すことで、胴にあった傷が綺麗さっぱり無くなっていることを見せる。叢雲が息を呑んだのがわかった。あれだけの酷い怪我がたった一晩で失われているなんて思ってもいなかったから。
「ということはさ、あたしには死なない程度にどれだけでも出来るってことなんだよね」
白露は一歩前へ。叢雲は拳を握る。
「だから……あたしが叢雲にやってあげられることは、たった1つだけ」
さらに一歩進み出て、小さく息を吐いた後、意を決したように言い放った。

「今日から毎日、死なない程度にあたしをボコボコにしてよ。毎日、気が済むまで」

選択

「今日から毎日、死なない程度にあたしをボコボコにしてよ。毎日、気が済むまで」

白露は、苛立つ叢雲に向かって、真っ直ぐそう言い放った。

「……は？」

対する叢雲は、その言葉を耳にして唖然とした。謝るわけでも無く、開き直るわけでもなく、ただ自分に非があることを認めて、叢雲の怒りを全て痛みとして受け止めようとした。

怒りが溢れ出した叢雲は、白露が何をしてもその苛立ちが湧き上がる要因となる。

謝られても気に入らない。許せるわけがないだろうと怒り狂う。開き直られても気に入らない。自分をここまでしてふざけるなと怒り狂う。何もしないでも気に入らない。自分に何か言うことがあるのだろうと怒り狂う。とにかく、白露が何をしても何もしなくても叢雲は怒りを露わにするつもりだった。

しかし、白露はどの選択も取らなかった。謝罪の言葉を言うわけでも無く、だからといってあれは泥のせいだと開き直ることもなく、何も言わずにまごまごしているわけでもなく、単にその怒りを発散するために好きに使ってくれとだけ言った。それ以上でもそれ以下でもない。

「あたしが何を言っても何をしても、叢雲はあたしを許さないと思う。あたしだって同じ立場だったらそう考えると思う。だから、あたしは叢雲に何をされても何も言えない。言っちゃいけないんだ。それだけのことを、あたしはやらかしたんだから」

淡々と、感情を殆ど乗せずに叢雲に説明した。その中にも、謝罪はあえてしていない。そして、叢雲の感情を一切否定しない。綱渡りのように偏ることなくど真ん中を行く。

「だから、叢雲の好きにしてくれて構わない。全部、叢雲に任せる」

叢雲の前に立った白露は、完全な無防備。どれだけでも嬲ってくれと言わんばかりに、ただただ棒立ちとなる。抵抗する気がないこと

が、誰の目にもわかるほどである。
この場にいる叢雲以外の者もハラハラしていた。叢雲が今から何を起こすのかを、見守るしかなかった。いざという時は動き出すかもしれないが、今は何をしても悪いことにしか繋がらなそうだった。
部屋の外にいる戦艦棲姫も、その様子を眺めていた。艤装を一時的に消し、いつでも叢雲を取り押さえられるようにスタンバイしている。
「そう、アンタは……そういう選択をするのね」
ギリギリと拳を握りしめ、顔を怒りで歪ませる。白露はそれに対しては何も言わない。はいもいいえも間違っていそうな場合、正解は沈黙となる。
「なら、私の選択はこれよ」
その握り拳を大きく振りかぶって、白露を殴り飛ばそうとした。瞬間、海風がそれを止めようと動こうとしたのだが、春雨がすぐに手でそれを食い止めた。これも直感。今叢雲を止めるのは違うと、なんとなく判断した。
ジェーナスや薄雲も止めようとしたものの、春雨が海風を止めたことに驚き手が出せなかった。戦艦棲姫も同様である。
そして、叢雲の拳は白露の顔面スレスレで止まった。鼻先にギリギリ触れていないくらい。
しかし、白露は瞬きすらせずにその拳を見続けていた。恐怖に顔を歪ませるわけでもなく、避けようとすらしない。そうされるのがさも当然と言わんばかりに、完全に受け入れていた。
「……止めるって、わかってたの？」
「ううん、振り抜かれてもいいと思ってた。鼻血は出ちゃうだろうけど、明日には多分元通りだし」
痛みも、感情も、何もかもを受け入れるつもりだった白露は、目を瞑ることすらなくその拳を見つめていた。
今のまま振り抜けていたら、まず間違いなく鼻の骨は折れ、最悪目にも影響が出ていた。吹っ飛ばされて壁に激突なんてこともあったかもしれない。それでも致命傷ではないのだから、充分な休息を取れ

ば元通りである。超回復というとんでもない特性は、こんな時にでも強く発揮される。
「私の怒りは何をしても拭えないわ。アンタを殴ろうが、斬ろうが。それが私の特性なんだもの」
叢雲は自分の特性を理解している。何をされても苛立ち、何をやってもそれは払拭出来ない。
怒りの根幹をなしているであろう白露という存在が泥が吐き出されずあのままで、その怒りをもって粛清して命を奪っていたとしても、叢雲は何も変わることはない。その時は失われるかも知れないが、本質がそのままならば、次の対象に怒りを向けるだろう。直近は古鷹。それが終わったらまた次。敵という敵がいなくなっても、永遠に終わらない。
「殴りたいほど苛立つことをしたら、容赦なく振り抜いてたわ。でも、アンタは避けるつもりも無かった。無防備で、無抵抗で、ただ受け入れるためにここにいる。そうよね」
白露は首を縦に振った。抵抗なんてしたら、それは償いにならない。だからこそ、叢雲の拳を受け入れる。
「最初はアンタに怒りしか無かったわ。今すぐこの場で痛めつけて、許しを請うても踏みつけて、無様に嬲り殺しにしてやるつもりだった。でもそれは、アンタがあのときのままだったらよ。今のアンタからは、あの時のクズさがカケラも感じられない」
拳を下ろさないが、そのまま振り抜けるつもりはないらしい。白露を殴りたいという気持ち自体が大分薄れているようである。
目の前にいる白露は、姿形こそ叢雲を殺した張本人であるが、中身があまりにも違いすぎた。それが滲み出ているかの如く、表情も違う。
艦娘や深海棲艦には同じ顔の別個体がいるのは周知の事実。今回は別個体でも何でもないのだが、そう思えてしまうほどである。
それがあるからこそ、この白露に対して別個体であるという認識が出来そうなのだ。深海棲艦化した白露なんて、後にも先にもこの白露しかいないのだが、艦娘や深海棲艦の常識のおかげで、考え方を改め

ることは出来そうである。
「そんな奴をボコボコにしても、それは私がただの悪い奴にしか見えないじゃない。アンタが抵抗するなら別だけど。私はいじめっ子じゃないんだから」
理不尽な怒りに呑み込まれそうでも、理性だけは残っているのが今の叢雲。ただのサンドバッグを怒りに任せて殴って楽しむようなゲスではないと、叢雲の高いプライドでは許せないようである。
こういう時はプライドもいい方向に動く。これで叢雲にプライドが無かったら、容赦なく白露を殴り続けていたかもしれない。
「だからといって許すわけじゃない。現に私はアンタに殺されてる。馴れ合うつもりはないし、気を許すわけでもない。ただ、今までより怒りは滾らなくなってるのよ」
突きつけた拳で、力一杯デコピン。深海棲艦の力によるデコピンはそれだけでもかなりのものであり、近接戦闘に特化された叢雲のそれはさらに上。白露は上体が仰け反るくらいの衝撃を受けた。
しかし、痛いという声も上げず、表情すら変えず、倒れることも無かった。何発でも受けるという覚悟の下、白露は叢雲の前に立ち続ける。
「今回はこれで終わりにする。一応アンタも被害者って聞いているもの。私の怒りはアンタ次第で猛り狂うわよ」
「うん、それで構わない。あたしは叢雲に何されても文句言わないから。我慢出来なくなったらいつでも何してくれても構わない。あたしから関わり合いを持たない方がいいかな」
「……ここは狭いから嫌でも顔を合わせるわ。関わらないってのは無理。あと、こそこそされるのは腹が立つ」
結局のところ、白露が何をしようが叢雲の癇に障るのは間違いない。
「だからといって、出ていかれても私の目が届かないところに行った途端本性を表すかもしれない。それはもっと許せない」
否定をしない。この白露がもう自分の悦楽のために艦娘を襲うようなことはないのだが、叢雲の中ではそこまで信用出来ていないとい

うのが大きい。
　故に、叢雲は1つの選択をする。
「アンタが誠実であることを、私に証明しなさい。言動に嘘はつくな。隠し事をするな。本心のままに行動しろ。それで少しでも疑問を持ったら、私がアンタを痛めつける」
「いいよ、それで。むしろそれがいい。あたしはあたしの思うままに生きろってことだね」
「ええ。アンタみたいな輩は、中身がまだクズならそのうちボロが出るわ。でも、本当にアンタにそんな要素が無くなってるっていうなら、どれだけ生き続けてもボロなんて出ない」
　これだけやっておいて、白露の中にはまだ5人目がいるのだとなった場合、こうやって生活している間にでも何かしらのおかしな部分が出てくることになるだろう。それが出た時点で、叢雲が成敗する。
「春雨、海風。お願いがあるんだけど」
「なに？」
「白露を監視してちょうだい。アンタ達は妹なんだから、何か違和感があったら私に言って」
　妹にそれを頼むというのはどうかと思うが、それはそれで叢雲が2人のことを信頼しているという証拠だったりする。
　実の姉を監視しろと姉の前で頼むとか、不正を容認しているようにすら思える。中立の立場でそれを監視出来るとは到底思えない。
「うん、わかった。姉さんに不審な点があったら、ちゃんと教えるよ」
「ええ、お願い」
　だからか、春雨は快く了承。白露が正しく生きていけるようにするためにも、春雨がそれを保証し続ける。
　それに、春雨だって姉がおかしいとなったら問い詰めることにするだろう。姉の、姉達の中に澱みがあるのなら、それが許せないのは妹として当然だ。
「姉さん、それで良かったですか？」
「うん、それでいい。春雨も海風も、あたしがお姉ちゃんだからって情けをかける必要はないよ」

「勿論です。白露姉さんがおかしかったら、結果的に春雨姉さんが嫌な思いをしますから。そうなったら、叢雲さんの前に私が白露姉さんを制裁しますので」
なんの躊躇もなく言ってしまう辺り、海風も相当歪んでいる。
「……叢雲、あたしからも1ついいかな」
「気に入らないこと聞いたらぶん殴る」
「本当にいいの？」
たった一言、叢雲の意思を問う言葉。その一言だけで、いろいろな意味が含まれていた。
自分をこのままにしておいていいのか。その湧き上がる怒りを我慢出来るのか。ここにいていいのか。共存出来るのか。生きていていいのか。
「いいわよ」
一言に対して、叢雲も一言。握りしめた拳はギリギリと音を立てるように力が込められ、言葉以上に感情が表れているようだった。怒りの制御が出来ている。
最初の叢雲だったら、誰かが止まるまで白露を殴り付けていただろう。それこそ、白露が死ぬまで。しかし、今はここでの生活によって心に若干の余裕が出来ていた。そのおかげで、理性とプライドが強く出ていた。
それだけ言って、叢雲は部屋から出て行った。これ以上話すことは無いというのもあるが、今はまだ我慢しているというだけであるため、これ以上面と向かっていると、これだけ言っておいて殴りかかってしまいそうだった。
薄雲はそれについて行った。叢雲の側には、妹がいた方がまだ落ち着けるだろう。
「……ここにいるのはいいヤツばかりなのかな」
白露がボソリと呟く。春雨は無言で頷いた。
そんな様子を、遠隔ではあるが姉妹姫も確認していた。その場に戦

艦棲姫がいるから自分達まで出ることでは無いとは考えていたようだが、本当に止まらないようなら妹姫が出ることを考えていた。
「叢雲ちゃん、強くなったわねぇ。ここでの生活で心に余裕が出来てきたのかしらぁ」
心底安心するように中間棲姫は笑顔を見せた。
正直、叢雲が一番のネックではあった。そういう本能であり根幹、抗いようの無い叢雲としての性質なのだ。しかし、施設内での争い事はやめてもらいたい。平和のための施設なのに、不和を齎す存在にいいことは無いのだから。
白露もそうだ。本人にはいろいろとあるようだが、存在そのものが元々敵。平和を破壊する者。それ故に、治療はしたものの状況次第では何か考えなくてはいけなかった。
そういう意味でも安心している。白露は泥が外に排出されたことによって誠実なお姉ちゃんへと戻り、叢雲は喧嘩っ早い性質を制御出来ている。いい方向にへと向かっているのは確信出来る。
「ひとまずは、白露にも生活してもらうわ。妹達と一緒にいてもらう方がいいわよね」
「ええ、そうしましょう。あの子も平和なここにいてもらう方がいいわぁ。それに、いろいろと聞いておかなくちゃいけないしねぇ」
これだけ話が出来るのなら、当時の記憶が朧げでも話は聞いておく必要はあるだろう。そうで無ければ、ここで生きていくにあたって本当に適正かが判断出来ないからだ。
「話が出来るのなら、まずは白露と話をしましょ。その情報、鎮守府の方にも必要でしょ」
「そうねぇ。提督くんにもちゃんと伝えないとねぇ。話は提督くんも交えてやった方がいいかもしれないわぁ」
白露の素性については、今回の事件に関わる全ての者が知っておく必要があるだろう。白露が何か隠しているとは思えないが、施設の者が全員納得出来る者でなくてはいけないだろう。

果たして、白露は本当に受け入れられるのか。

画面越しの再会

叢雲と和解したわけではないが、施設に住うことは良しとされたことにより、ひとまずは全員の前に出ることとなった。時間もちょうど朝食時。新たな住人の歓迎はその場で行われることになる。

今まで敵対していたというのもあるのだが、住人の誰もが白露も事件の犠牲者であることは理解しているため、ぎこちないものの受け入れる姿勢ではあった。春雨と海風の姉なのだという事前情報があるおかげで、多少なりはとっつきやすい。

とはいえ、元々は完全に敵対していた相手。槍持ち時代の叢雲と違い、理性を持った状態で侵略を選択していた経歴を持つのが白露だ。その時とはもう全く違うと言われても、どうしても警戒心は取れない。

「えーっと……今日からよろしくお願いします？」

「ええ、貴女を歓迎するわぁ。行く当てが無いのだし、ここには妹達もいるんだもの。ここが一番居心地がいいはずだから、ここの一員として生活してちょうだいねぇ」

鎮守府には戻ることは出来ず、外に出ても何をしていいかわからない。ならばこの施設に身を寄せるのは当然だと、中間棲姫は既に歓迎ムード。飛行場姫も、姉の考えを尊重しながら同意。

勿論ぎこちなくとも全員歓迎の心持ちであるため、仲間としての認識は出来ている。

「そういえば……貴女もみんなと同じような溢れた艦娘……なのよねぇ？」

中間棲姫が聞く。元艦娘の深海棲艦ならば、そうなってしまった条件というのは基本的に同じなはずだ。

この場にいる元艦娘達は、何かしらの感情が溢れ出したから深海棲艦と化している。海風は若干特殊な例になったものの、その溢れた感情による発作のトリガーを持ってしまっているのも共通。

今の白露は、正直よくわからない存在ではあった。春雨は白露達が死んだと思っていたが、現にこうやって深海棲艦化して生きている。

しかも、一緒に死んだ3人の妹と融合しているような状態で。ただ溢れただけではこうはならないだろう。
とはいえ深海棲艦化した元艦娘なのだから、発作の条件だとか、苦しむ環境などがあるのではないかと考える。施設ではそういうものを先に知っておいて、発作を起こしたら全員で助け合うのが常だ。
こういう場でそれを聞くのはマナー違反な気はしたが、白露の境遇からすぐに馴染めるようにするためにあえて話題にした。
「あたしはその、溢れたっていうのがよくわからないんだよなぁ……」
「あら、そうなの？」
しかし、白露にはその辺りすらもわからないという。自分が何故こうなっているのか。そもそも自分から泥が溢れ出したことすらピンと来ないらしい。
侵略者として活動しているときの記憶がぼんやりとしか覚えていないせいで、自分が何故こうなっているかという部分はスッポリと抜けてしまっていた。
その辺りはおそらく、春雨の一撃によって身体の外に排出された黒い泥が持っていってしまったと考えるのが妥当である。白露にとって悪い記憶すらもぼんやりにして、黒幕にとって損になる情報は綺麗に抜けてしまっているという、なんとも敵側に都合のいい状態になっている。
「貴女の治療中に多少は調べさせてもらったのだけれど、もうカタチとして成立しているからわからなかったのよねぇ。なんの感情が溢れたのかしらぁ」
「感情が溢れる……かぁ。ちょっとわからないなぁ」
「それって重要なわけ？」
先んじて朝食を食べ始めていた叢雲が、中間棲姫に言い放つ。
「私に重要なのはそいつが気に入らないことをするかしないかだけよ。何が溢れてようが知ったこっちゃないわ。発作を起こしたらそれ相応に対応してやればいいだけでしょ」
言いながらも食べることはやめない。白露のことで食事を邪魔されるのが気に入らないと言いそうなくらいである。

だが、その言葉で中間棲姫は、確かにそうねと話題を切り上げる。今の白露はそういうものなのだと納得し、発作が起きたときに改めて介護することでどうにかすることにした。死に至るような発作はまず起きないため、常に誰かが側にいれば大丈夫であろう。
「なら、私と海風が姉さんの側にいるので大丈夫です。まだ姉さんには謎が多いですけど、妹２人でサポートしますので」
「春雨姉さんがやると言うのなら、私も勿論全力でお手伝いします」
ある意味、白露にまだ眠る謎を解明するためにも、春雨と海風が離れないようにするということで決着がついた。

朝食後は各々施設での作業に入ることになるのだが、その前にやらなくてはいけないことがあった。白露の知っていることを全て話してもらうことである。
これは鎮守府側にも白露が無事に目を覚ましたことを伝えつつ、わかる限りの敵の情報を伝えるために設けられる場だ。
その席についたのは、いつも通り姉妹姫と、白露。その白露のために春雨と海風も同席し、必要あるかどうかはわからないが、ダイニングの外に残りの面々が待機。
叢雲はここでの言動も白露の判定に使う気満々。他の者達も、白露が信用に値するかを見極めるために、ここでの言動を確認するつもりである。ここにいないのは、アレルギーが発症しそうな伊４７と、この場に来れずまだ顔すら合わせていないミシェルのみ。
「提督と話すのか……ちょっと緊張しちゃうなぁ」
「大丈夫ですよ。いつも通りに接してくれます」
「それはそうなんだけど、まぁちょっといろいろとあるんだよ」
そうこうしている内に、中間棲姫がさくっと鎮守府に通信を始める。出た途端にガタガタと鎮守府側から音が聞こえ、少し焦っていたような表情の提督が映った。
『す、すまない。あまりにもタイミングが良くて、驚いてしまった』
「あら、そうなの？」

『こちらからかけようとしていたんだ。白露の容態を聞きたくてね』
白露が正気を取り戻していることは、鎮守府も報告されているために理解済み。ただし、生きるか死ぬかの瀬戸際であったことも聞いていたため、一晩明けた今、様子を聞きたかったらしい。
「そのことを話すためにこちらからもかけようと思っていたの。先に結論から行きましょうかぁ」
タブレットを持ち上げて、カメラを白露の方に向けた。昨日まで瀕死の重傷を負っていたはずの白露が、完全に無傷でそこにいることを知り、提督は喜びと驚きが入り交じった複雑な表情を浮かべた。少なくとも悪いことではないため、大きく息を吐いて落ち着いた後、いつも艦娘達に対して浮かべる笑顔に。
『よく、戻ってきてくれた』
一言。これが全ての感情が詰まった言葉だった。対する白露も、涙目で小さく頷いた。
「先に伝えておきましょうかぁ。白露ちゃんの特性は超回復。致命傷でなければ、一晩で完治出来るそうよぉ」
『なるほど。昨日のうちに致命傷をどうにか乗り越えたおかげで、今は完治してここに座ってくれているわけだね』
「ええ。私達も驚いたわぁ」
少し恥ずかしそうに顔を赤らめる白露だが、今はまだ口が開けていない。やはり緊張しているのか、もしくは何か別の感情を持っているのか。
ここで春雨の直感が光った。白露の持つ感情は、悪い感情ではない。別に表に出す必要がないものであるだけで、何かを企んでいるわけでもないと、直感的に理解した。だから、白露がこうしているのも放置。
『白露、話せる範囲で構わない。何があったんだい』
提督が聞くと、白露は真剣な表情に。仲間内ではおちゃらけることも多いが、作戦事項の通達などの仕事に関わることになるとこの表情になる。自分の、妹達の命が左右されるのだから、真面目に聞くのも当然。

「……大分ぼんやりのところは多いけど、話せることは全部話す。少し長くなるかもしれないけど」
『ああ。ゆっくりでいい。疲れたら休んでくれていい。話したくなければ話さなくていい。君のやりたいようにやってくれ。戻ってこれただけでも、僕としてはとても嬉しい』
今は画面上に提督しか映っていないが、音だけは何者かの泣き声を拾っていた。それはどう考えても秘書艦である五月雨。死んで敵になってしまった白露が今この場にその時と同じ思考を持って戻ってきたのだ。感極まってこうなっても仕方ない。画面内に入れないのは提督の優しさである。
春雨も貰い泣きしそうになったが、話の腰を折らないように耐えた。今は白露の話だ。自分はあくまでも、隣に立って白露が別人でないことを判定するだけ。
「大分抜けてるところもあるし、春雨達に聞いたから知ってるってところもあるから……それが絶対っていう保証も出来ないけど、聞いてね、提督」
そこからはゆっくりと、自分の身に降りかかった全てのことを語り始める。全部を語れるわけでもなく、本当に欲しい情報は少ないかもしれないが、白露が知る全てを曝け出す。
隠し事なんて1つもしていない。それが自分を信じてもらう手段と理解して。
「あたしは……あの時確かに死んだ。死んだはずだった。痛くて寒くて眠くて、命が無くなる瞬間も覚えてるもん。でも、気付いたらこうなってた。そこから今までは本当にふわっとした記憶しかない」
『……侵略者として動いていた時の記憶、だね』
「うん……他人事みたいにしか思えないんだけど、自分でやった感触も残ってる。感情も。血の温度とか、悲鳴とかで興奮していた自分がいたのは確かなんだ。今はそんなの気持ち悪さしか感じないけど、あの時は本当にそうだった」
侵略者だった自分の記憶も朧げに残っており、その時にやったことを淡々と話す。感情を押し殺しながら、自分のやらかしを語るその姿

は、神に懺悔する罪人にも思えた。自分の本来の意思とは捻じ曲げられたその行動を、自分のことのように語る白露が、本当に可哀想であると、この話を聞く者は思った。叢雲ですらだ。

叢雲は未然に防がれたため白露のような思いをすることは無いのだが、伊４７に止められていなかったら、調査隊の誰かの命を奪っていたかもしれない。金剛には怪我をさせているのだから、白露ほどではないが罪悪感があってもおかしくはないのである。それを上回る怒りに苛まれているのも考えもの。

提督も白露がやらされていたことを聞いて言葉を失っていた。自分の部下である艦娘が虐殺の限りを尽くしていたかと思うと、かける言葉も思いつかなかった。故に、白露に対してそうかとしか反応が出来ないでいた。

「でも、なんでそんなことをするようになったかだけは、いくら頭を捻っても思い出せないんだ。妹達があたしの中に入っちゃってるのもわかってるけど、どうやってこうされたのかは全然……」

『つまり……今の白露は白露だけではない、ということになるんだね』

「うん。時雨も、村雨も、夕立も、あたしの中にいる。その記憶も、考え方も、戦い方まで、全部あたしが持ってる」

『そういう意味では……君達白露型姉妹は全員、ここにいるわけだ』

画面外に五月雨がいることはわかっていたが、さらに外側には山風達も待機しているらしい。

白露のことが心配で、早く施設に連絡をとってほしいとせがんでいたとのこと。そのタイミングで施設から連絡が来たことが、最初のバタバタに繋がるようだ。

『白露……それに、時雨、村雨、夕立』

提督に呼ばれて、ビクンと震える白露。４人の名前を呼ばれたのに、その全てが自分を呼んでいるものに思えるのは、思考も融合してしまっている証拠。

話しているうちに俯いていた白露が、呼ばれたことで顔を上げる。その画面には、慈悲深い笑みを浮かべた提督の顔があった。

『改めて言おう。よく戻ってきてくれた』

堪えきれず、白露の目から大粒の涙が零れ落ちた。それはおそらく、４人分の涙だ。もう二度と会えないと思っていた提督に、画面越しとはいえ顔を合わせることが出来た上に、今までやってきたことを咎められるわけでもなく、ただただ帰還を喜んでもらえる。

「……ただいま、提督」

それだけ言って、白露は我慢出来ずに大泣きしてしまった。４人分の感情の昂りが一気に押し寄せたことで、いつもなら耐えられそうなものも耐えることが出来なかった。

今までのやらされてきた非道を嘆く涙と、あり得なかった再会を喜ぶ涙で、白露の顔はグシャグシャになった。

こんな白露を否定することは、誰も出来なかった。加害者でもあり被害者でもあるが、今はどう考えても被害者の１人。

そんな白露は、もう施設の一員だ。朝食の時にぎこちなかったみんなの態度は、これをきっかけに改善されていくだろう。

追い求めるものは

白露が泣き止むまでに少し時間はかかったが、通信を切ることもなく、みんながそれを待った。提督や姉妹姫、春雨と海風という妹が声をかけることで、どうにか落ち着いていく。

グシグシと涙を拭い、真っ赤に腫れた目で画面を見たが、白露の表情はとても晴々としていた。提督に再会出来たこともあるが、白露以外の3人の存在もここにいると認めてもらえたことがとても嬉しかった。

「よし、ウジウジするのはおしまい！　今日からはこの施設の一員として、改めてよろしくお願いしまっす！」

「はぁい、私達は歓迎よぉ。ここは楽しくのんびり平和に生きる場所なんだもの。少し働いてもらうけれど、一緒に生きましょうねぇ」

「働くの？　何するのかな。あたし、結構何でもやれるよ。何せ、今は4人分だからね！」

この辺りを開き直れているのはかなり大きい。妹の存在を自分のモノにしてしまったことに対する複雑な感情があるだろうが、それを感じさせないくらいに明るい。

元々お調子者な部分もあったが、今は空元気というわけでもなく、本来の性格がちゃんと表に出せているといえる状態。今後も落ち込むことはあるだろうが、白露のことだからすぐに開き直れるだろう。

「あたしにわかることは少ないかもしれないけど、またわからないことがあったら言ってよね。頑張って思い出してみるから！」

この事件の真相を探るのは施設ではなく鎮守府。それをしっかりと理解した上で、その手助けになれるように最も近い位置にいたであろう白露に聞けることを全て聞いていこうという話に。

『そちらは何か白露に聞きたいことはあるかい』

「そうねぇ……今気になっていることといえば、白露ちゃんが吐き出した泥のことなのよねぇ」

傷口に付着していた乾燥した泥。そこから負の感情を読み取ったのだが、まず間違いなく白露自身から溢れ出した泥ではない。白露

も、感情が溢れて泥となると聞いて初耳だと言っているほどだ。
『その泥というのが僕にはまだよくわかっていないのだが、艦娘が深海棲艦に変化するにあたって、それは必ず起きるものなのかい？』
「私も又聞きみたいなものなんだけれど、基本的にはそうみたいねぇ。少なくとも私達は、こうやって処置の方法は知っているけれど、現実に目の前で繭になっていくところを見たことが無いのよぉ」
　泥に関しては、全て『観測者』の受け売りなのだという中間棲姫。流れ着いたり、伊４７が拾ってきたりした繭に対して適切な処置は出来るのだが、実際にその瞬間は一度も見たことがないらしい。
　そういう意味では、山風達調査隊が海風の泥が溢れる瞬間を見たのは、この世界でも相当レアなことになるのかもしれない。褒められたものでもないが。
「泥、泥かぁ……姉姫さんにはもう話してるんだけど、全っ然ピンと来ないんだよね。あたしの中にそんなものが入ってたっていうのも。自分から溢れ出したってのもわからないし」
　何がきっかけで発作が起きるかとか、そういうところはもう気にしないことにしているものの、やはり本来とは違うカタチで深海棲艦化しているというのは、鎮守府側にも知っておいてもらいたい内容だ。
「アタシ達の見解としては、白露の泥は後付けよ。白露自身の泥じゃなく、他人の泥によって同胞（はらから）にされたかもしれない可能性だってあるわ」
　つまり、艦娘を深海棲艦に変える泥を持つ深海棲艦がいるということになる。中間棲姫や飛行場姫はそんな存在を見たことはおろか聞いたことも無い。世界中を旅している戦艦棲姫も知らないことである。
『白露、君が……その、あちら側にいた時に、今の話で思い当たることはあるかい』
　嫌なことを思い出させるような質問に提督も少し抵抗があったようだが、白露は何も問題が無さそうに過去のことを思い出そうと頭を捻る。
「うーん……あたし、基本的には古鷹さんとしか行動してないんだよ

ね。あたしをこんな身体にしたヤツがいるかもしれないけど、それが誰かってのは全然思い出せないなぁ……。あたし以外にも利用されてるヒトがいるかどうかも全然思い出せない……」
そういうところばかり記憶が抜け落ちるのは、敵がこうなることも見越して白露に最初から仕込んでいたからなのか、たまたま白露の記憶がすっぽ抜けているだけなのかは定かではない。
意図的に白露からその記憶が抜けるように仕込んでいるとしたら、敵の力はあまりにも強大である。艦娘の頭の中を弄るなんて、人間ですら出来やしないのだ。ブラック鎮守府のような洗脳教育とは訳が違う。
「なんで一番重要なところが抜けちゃったかなぁホント！　」
『無理はしないでくれ。白露も昨日の今日だろう。まだ本調子ではないだけかもしれないんだ』
「うん、何か思い出したら必ず伝えるから。あたしだってこのまま黙っていられるかっての。あの古鷹さんだけは絶対に痛い目を見せちゃる」
自分を操り、妹達を酷い目に遭わせた相手は気に入らないと憤慨する白露。今のところは真っ先に思い出し、自分を利用するだけした古鷹に対しての敵意が強いようだ。
白露が敵では無くなった時点で、当面の目標は古鷹一本になる。鎮守府も、謎の古鷹を第一目標として捜索と撃破に乗り出すだろう。
「こちらでも、あの謎の泥のことについて調べられたら調べておくわぁ。同胞（はらから）のことは、人間さんに調査は無理でしょう」
『そうだな、頼めるのなら頼みたい。しかし、君達の平和が脅かされる可能性も』
「これに関しては、黙っておくわけにはいかなそうなのよねぇ。なんだか嫌な予感もするのよぉ」
本来なら、中間棲姫側から首を突っ込むなんて言語道断。戦いに身を置きたくないから施設を運営しているというのに、泥の調査はその平和を自分から崩しに行くようなもの。
しかし、事前に知っておくことで対策も取れる。平和のためには、

少しだけでも足を踏み入れなくてはいけないこともある。
無論、戦う気は全く無い。力を持っていても、気持ちがそこに行かないのだから仕方ない。平和に、何事もなく、穏やかに、楽しく、この施設でみんなで生きていく。それが最初から最後までを占めている。
だが、何かあった時に無抵抗で降伏するつもりも一切無い。それは永劫に平和が失われることに繋がる。ならば、一時の苦痛で次の平和を掴みたい。今までにこんな状況になったことが無いため、姉妹姫にとっては初めての決断とも言える。
『だが、どうやって調べるんだい。島から出ることも出来ないだろうし、所属する者が動き回るのも難しいだろう。確かに君達(深海棲艦)にしかないものを僕達(人間)が調査するのは不可能に近いが』
「当てはあるようで無いのよねぇ……でも、一応いろいろと手を尽くしてみるわぁ」
自信は無いけれど、と続ける中間棲姫。何せ頼る先が今までに顔を見せたことがない『観測者』なのだ。そのことを話すと、提督も困った顔をする。
呼んでくるような相手でもなく、探して見つかるような相手でもない。そして、その名の通り世界を観測する者。見ているだけの存在である。人間や艦娘はともかく、同胞(はらから)の命運が混迷を極めても、ただ見ているだけを貫く可能性は非常に高い。空っぽだった中間棲姫を今のカタチになるように育て上げたのかは謎ではあるが。
『そうか……いや、僕達が君達のやり方に対して何か言うべきではない。1つだけ言えるのは、くれぐれも気をつけてとしか』
「ふふ、ありがとう提督くん。勿論気を付けるわぁ。だって、私達は本当に戦いたくないんだもの」
戦うために調べるのではなく、平和を掴み取るために調べるのだと、中間棲姫は自分に言い聞かせているかのようだった。
「……『観測者』？」
ここで白露が妙な反応を見せた。少なくともこの名前は聞いたことが無い者の方が多いはずだ。むしろ、この施設にいる者、そして関

係を持った鎮守府の一部の者以外に知る者はいない。
なのに、白露はその名前を聞いたことで何かを知っているような雰囲気。
「姉さん、どうしました？」
「なんか聞き覚えがあるような……耳に引っかかるような……」
白露がこういう反応をするということは、敵の黒幕が『観測者』のことを知っていると考えるのが妥当。それが古鷹に対してなのか、他にいる何者かに対してなのかはわからない。
『姉姫、その『観測者』は、君達以外と関係を持っているような仕草はしていたかい？』
それを疑問に思うのは勿論提督だ。噂にしか聞いていない存在なのだから、あらゆることに疑問を持ってもおかしくない。
その提督の問いに対して、中間棲姫は深く考える仕草。『観測者』に育ててもらったのは、今からもう何年も前のことだ。そこで別れてから今の今まで姿形も見ておらず、何処にいるのか噂すら聞いたことがない。
「私が覚えている限り、そんなことは話してなかったわねぇ……。私のところにいる時は、ずっとここにいてくれたもの」
「アタシが加わってからよ。ふらりといなくなって二度と戻って来なくなったんだけれど」
『ならば、君達と別れてから何処かの深海棲艦……君達の同胞（はらから）と関係を持ったのかもしれない。そしてそれが、白露をそうした張本人と考えるのが妥当だろう』
この事件の根幹には、『観測者』の存在がかなり重いところにあると言える。春雨達は、それに巻き込まれたに過ぎない。そういう意味ではいい迷惑かもしれないが、彼がいなければ中間棲姫はこうなっていなかったと考えると、不要な存在では無いと感じる。
とはいえ、姿を現さない者が事件を巻き起こしている可能性も出てきているのは厄介だ。調査しようにも調査が出来ず、基本的には受動的に耐え忍ばなければならない。それはあまりにも気長。
『我々も探せるものなら探してみよう。人間や艦娘の手が届く場所に

いるとは到底思えないが』
「そうねぇ……こちらでもヨナちゃんに頼んでみようかしらぁ。近場にいるとは思えないけれど」
ここからは、真相を知る可能性のある『観測者』探しも任務に加わる。何処にいるかわからない。姉妹姫以外はその姿すら知らない。そんな男の深海棲艦が見つかれば、この事件は劇的に解決に進むことだろう。

などと鎮守府と施設が話している頃、誰からも干渉出来ないような海の底では、一人の男が海上を眺めながら少し困った顔をしていた。
「やれやれ、まさか私を追い求めるとは」
男の言葉に対し、従者であろう2人の少女は、クルクル踊りながら誰のせいだと言わんばかりに意地の悪い笑みを浮かべている。
「何も言い返せないね。本を正せば、観測者たる私が干渉したことが原因だろう。彼女達に成長を促したのは、他ならぬ私だからね」
ふぅ、と小さく溜息をついた後、中間棲姫から視線を離し、もう片方を見つめる。
「やはり、見過ごしてはおけないか。これでは犠牲者が増える一方だ。それも世の摂理であると観測を続けていたが、彼女のやり方は目に余る。摂理を覆そうとしている」
従者達も同意を示すように頷き、やはりシャドーボクシングのような仕草。片方は悪役のプロレスラーのように指で首を掻き切るような仕草まで見せる。なかなかに過激な表現に、男は苦笑した。
「観測者という枠組みを越えるのは、褒められたものでは無い。しかし、先に域を越えようとしているのは彼女だ。平和を脅かすのはまだ真理の内だが、アレはよろしくない」
従者達は、早速動くのかと聞くかのように顔を覗き込む。対する男は、少しだけ考える仕草。行くなら早くしろと手を引っ張るが、待ちたまえと従者達を諌める。
「急ぎすぎてもいけない。急いては事を仕損じるという言葉もある。

我々は焦ってはいけない」
しかし、行かないとは言っていないことで、従者達は喜ぶように周囲を踊っていた。

施設の一員として

鎮守府との通信を終了し、一旦は普通の生活に戻ることになる施設。ダイニングの外に待機していた仲間達は、通信が終わった途端に雪崩れ込むように部屋に入ってきて、白露のことを真の仲間として完全に受け入れていた。

やはり、提督との再会で大泣きしたのが大きかった。感情をそのように見せる者に悪い者はいない。誰がどう見ても嘘泣きでは無いとわかる程だったのだから。

「いやはや、なんか恥ずかしいとこ見せちゃったかな」

「そんなことないわ！　シラツユが悪いヒトじゃないってわかったもの！」

泣きじゃくる姿を見られていたことに気付き頬を赤らめる白露だが、ジェーナスがフォロー。そういう姿を見せられるということは、本心から優しい者であると保証出来ると話す。

「Ｓｏｕｌａｇ・（安心しました）　傷ももう治っているようですし、Ｄ・ｃ・ｓ（死）から遠退いてくれたのは、Ｊｅ（嬉）ｓｕｉｓ（い）ｈｅｕｒｅｕｘ（で す）」

「えーっと、ちょくちょく何言ってるかわからないけど、サンキューサンキュー」

コマンダン・テストも、白露のこの体質のおかげで調子を取り戻していた。最も死が近かった白露が、翌日にはピンピンしているのだ。

今まで発作を起こす理由となっていた戦艦棲姫や春雨は、本調子に戻るまでに時間がかかったために不安は増す一方だったが、白露は全く違う。一切の不安が無くなるため、最初のダメージは今まで以上に酷かったが、それが嘘のように治っているため不調の持続力は小さいらしい。

「Ｄ・ｊｅｕｎｅｒ（お昼ごはん）は歓迎会にするわ。期待しててちょうだい」

「わぁ、歓迎会！　ゴチになりまぁす！」

「元気でよろしい。期待していなさい」

今朝に復活したばかりなので、まともに歓迎もされていないため、リシュリューがちゃんと白露を仲間と見なすために少し豪勢な昼食

を用意するとのこと。
施設の仲間であるということをそういうカタチで表して、より意識を高めていくことにも繋がるだろう。白露が喜ぶのもあるが、施設のためにもなる。
「白露ちゃんは、今日は施設のことを知ってちょうだいねぇ。春雨ちゃん、海風ちゃん、任せていいかしらぁ」
やはり最初から気心が知れている者に案内してもらう方がいい。春雨と海風は勿論と快諾した。
歓迎会もそうだが、白露にこの施設の一員であることを自覚してもらう儀式みたいなものだ。特に白露は、海風と違ってここのことを何も知らない状態で加わるため、尚のこと案内は必要。
「それじゃあ、いつもとは違うタイミングだけれど、今日も一日よろしくお願いねぇ」
「うーし、んじゃあ俺達はいつも通り農作業な。叢雲もこっちで良かったか？」
「そうね、いつも通り畑でいいわ。薄雲、アンタは漁だったわね」
「はい。いつも通りジェーナスちゃんと。多分ヨナちゃんも向こうで待っていると思うので、またお昼に」
深海棲艦はおろか、艦娘でも出てこないような会話が交わされていることで白露は若干混乱したが、春雨と海風から、ここはこういうところなのだと言われて納得せざるを得なくなった。

案内といっても施設の中はそう広いものでもない。適当に歩いて回っているだけでもあっという間に見る場所が無くなる。
「いや、本当に農作業やってるなんて思わなかったんだけど」
「みんなそう言いますよ。ね、海風」
「はい……漁はまだしも、畑があることが一番驚きますよね……」
案の定、深海棲艦の住まう島に畑があるというのが一番の驚きだったようだ。そして、先程までの真っ白なロングドレス姿とは打って変わって農作業用のジャージ姿の中間棲姫にさらに驚いた。あまりに

も違いすぎて、別人かと疑ったレベルである。
少し前までは喧嘩腰だった叢雲も、農作業の時にはジャージ。松竹姉妹も勿論ジャージ。もう深海棲艦とは言えない生活を営んでいることで、驚きながらも和やかな雰囲気に心が休まっていた。
「あたしもどれかに参加しなくちゃなんだよね？」
「そうですね。働かざる者食うべからずなので」
「オッケー。あたしは……漁かなぁ。ほら、村雨が釣り好きだったでしょ。あたしにもそれが備わってるからね」
白露型の三女であり、今は白露の一部となっている村雨は、艦娘の中でも数人いる釣りを趣味とする艦娘だった。今やその記憶や思考も白露のモノとなってしまっているため、白露自身は素人同然なのだが、村雨のおかげでやり方が全てわかっている。
今は亡き妹達のことも、自分のことだから当たり前のように話す。春雨と海風からしてみれば複雑な気分ではあったが、考えるだけで落ち込むよりはマシだろう。
「そういえば……漁のところにイ級がいたよね。ちらっと見ただけだから挨拶は出来てないけど、あの子も仲間ってことでいいんだよね？」
「はい、勿論。ミシェルちゃんって呼んであげてください。ジェーナスちゃんが名前を付けてあげたんですよ。……あ」
ここで春雨は思い出した。ミシェルも春雨達と同じような犠牲者であり、そうしたのは白露である。
自分の物である可能性が高い三日月型の髪飾りを見て、『疑問』の発作を起こしてしまっているくらいなのだから、自分をこの姿に追いやった白露の姿を見たら、それ以上の発作を起こしてしまうのではないか。
「あのー……姉さん、すごくその、不躾な質問をするかもなんですが……」
この件は早急に知っておかなくてはいけないこと。もし知らずに2人を対面させたら、大変なことになりかねない。
「ん？　どうしたー？　今のあたしにゃ怖いモノ無いから、いくらで

も古傷えぐってくれて構わないよ？」
「いやまぁ多分えぐることになるので覚悟して聞いてもらいたいんですけど……」
　そう言われたら流石に覚悟しなければならない。白露も一旦歩みを止めて春雨の方を向く。
「……ミシェルちゃん、仲間だと思っていたヒトに沈められたことでああなったらしいんです。それで……その……」
「ああ、その犯人があたしってことか」
　流石の白露も、春雨が何を言いたいかは察しがつく。そして、白露にもその記憶がある。
「ドロップ艦を後ろから撃った覚え、あるよ。何も知らない子があたし達のことを仲間だと思い込んでるところをズドンと」
　白露はあまり表に出さないものの、白露は自分がやったその行いを悔いている。自分の意思ではなく、あの黒い泥の意思でやらされていたこととはいえ、その時の感情も感触も何もかもが自分のモノなのだ。
「そっか、あたしと顔を合わせると、嫌なことを思い出させちゃうかもしれないんだね。そうなると、あたしが釣りに出るのは控えた方がいいかもしれないね」
「そう……ですね。まずはジェーナスちゃんにも話をした方がいいかもしれないですけど。ミシェルちゃんはジェーナスちゃんの管轄なので」
　髪飾りで発作を起こしたとき、ジェーナスがミシェルをあやし、周りにも過去のことはもう捨てて今のミシェルを見てあげようと話していた。しかし、白露はその存在そのものが捨てたい過去を引き起こす要因になる。
　見ただけで発作を起こすのなら、白露とミシェルを対面させるのは憚られる。せっかく不要な過去を捨て去る決意をしたのに、また引き戻されるようなことがあるのはよろしくない。
「ホント、あたしって最低なヤツだったね。あたしでもぶっ殺したくなるくらいに」

自分に対して苛立ちを覚えているようである。黒い泥に操られている時の白露は、本来の性格を完全に塗り潰した侵略者。あれは泥の性格なだけであり、白露ではないため、自分のことでも客観的に見ることが出来る。
「それを償うためにもさ、ここでいろいろとやらせてよ。本当に謝らなくちゃいけない相手はいろんなところにいるだろうし、もうこの世界にはいないと思うけど……」
「姉さんはやらされていただけです。確かに……その、いろいろありましたが、私達は姉さんのことを責めません。本当に悪いのは、姉さんを利用したあちら側なんですから」
「あはは、そう言ってもらえると嬉しいねぇ」
笑顔は見せられるものの、内心ではかなりダメージは大きいようだ。それこそ、夜には悪夢に苛まれることにもなるだろう。
春雨としては、そんな姉を放っておけない。姉妹だからというのも関係なく、寄り添っておかなければならない存在だと認識する。
「姉さん、今晩からは一緒に寝ましょう。独りは絶対寂しいですし、嫌なことがあっても頼れる誰かが側にいる方がいいです」
白露の手をギュッと握った。それを見て海風が目を見開いたものの、実の姉に対しての行動だ。いくらなんでもこれに怒りを見せるのは狭量過ぎると自重。むしろそんな姿を見せたら春雨にどう思われるかわからないので、尚更自重。
「私、今は海風と寝ているんですけど、姉さんも一緒に。私も寂しいと発作を起こしてしまうので、姉さんが一緒だと心強いんです。勿論、海風も一緒にいてくれるだけですごく頼もしいからね？　頼りないってことじゃないからね？」
しっかりと海風側にもフォロー。海風が自分に依存しているのは理解しているので、本心からの思いを告げる。それだけで海風は昂揚し、心の底から喜び、白露の前であるにもかかわらず春雨に抱き付いた。
艦娘だった頃の記憶はしっかり残っている白露からしたら、こんな海風の仕草は初めて見るものであるため、それはそれで驚くことにな

る。
「私は絶対に春雨姉さんの隣を譲りませんが、春雨姉さんは挟んだ方が心身ともに温まると思うので、白露姉さんは私とは逆側を担当してください。春雨姉さんには温もりが必要なんです。悔しいですが、最高の温もりは私1人では賄えません」
「そ、そっかー、じゃあそうさせてもらおうかな。確かに、あたしも夜はちょっと不安かもだからね。自分のことじゃないのに自分のことな嫌な思い出がこれでもかってほどあるから、独りはやっぱりキツいや」
「心優しい春雨姉さんからの温もりは、それだけでも幸福感に繋がりますので、悪夢なんて見なくなります。今の白露姉さんには、偉大なる春雨姉さんの温もりが必要なんでしょう」
　春雨のことを話す時はやたらと饒舌になる海風の圧に押されつつも、妹達が自分のことを心配してくれているのを感じ、素直にその気持ちを受け取ることにした。
「ひ、ひとまずだね、あたしの今後の方針として……えぇと、ミシェルちゃんだっけ、あの駆逐イ級にはなるべく近付かないってことと、夜はアンタ達のお世話になるってことでいいかな」
「はい、大丈夫です。姉姫様も妹姫様も、それくらいなら確実に許可してくれます。ここはかなり自由主義なので」
　楽しく生きることが出来るのなら何をしてもいいというのが施設の方針だ。辛いことがあるのなら仲間を頼ればいい。夜なんて特にそういうことが必要になってくるのだから、許可を取る必要がないレベル。
「ミシェルちゃんのことに関しては要相談ですけどね。ジェーナスちゃんと、姉姫様、妹姫様にいろいろと話をしてみましょう。今は少し忙しいかもしれませんけど、相談にならいつでも乗ってくれますから」
「そうしようかな。いやホントここのヒト達は優しいヒトばっかりだ。今のあたしもそうだけど、深海棲艦にもいろいろいるんだなぁ」
　しみじみと語る白露。自分もその一員となることを自覚し、それを

喜んだ。

白露は正式に施設の一員として受け入れられ、ここで楽しく生きていくことを許された。

今までやらされてきた虐殺行為の罪は、嫌でも逃れることは出来ないかもしれないが、それはあくまでも泥のせい。今の白露は、他の者と同じように艦娘としての心を取り戻した優しい同胞(はらから)だ。これはもう誰も否定はしない。

泥の恐怖

白露の歓迎会と称された少し豪勢な昼食を終えた後、施設の者達は思い思いに過ごすことになるのだが、中間棲姫と飛行場姫、そして伊４７の３人で島の岸の方へと出てきていた。白露が吐き出した黒い泥について何か知っているかもしれないということで、自分をここまで育ててくれた『観測者』を探すためである。

施設側から接触を考えるのは、姉妹姫が彼と別れてから初めてのこと。長い年月その存在を確認もしておらず、そもそも何かを聞きたいことも無かったわけだが、今は緊急事態ということで追い求める。

「それじゃあヨナちゃん、お願いしていいかしらぁ」

「うん、わかった。でも、会える可能性の方が低いんだヨナ？」

「ええ、だから深追いとかもしなくてもいいわ。アタシ達も、運が良ければ来てほしいって程度だから」

彼が海底に住んでいることはわかっている。しかし、海底散歩を何度もしているような伊４７も、これまでに一度も見たことがなく、痕跡すら無い。

故に、伊４７の探索は念のために他ならない。まず見つからないと考えて動き出す。伊４７もそれは理解した状態で探索に向かう。

「いつもはあまり行かないところまで散歩してくるね」

「ええ、行ってらっしゃい。何かあったらすぐに戻ってきてちょうだいねぇ」

「はぁい。じゃあ、行ってくるヨナ～」

それだけ言って、トプンと海中に潜り、そのまま島から離れていった。

地上ではのんびりとした伊４７も、海中では無類の強さとなる。敵が徹底して潜水艦対策をしてきても、ある程度は回避可能。さらには、簡単には索敵されないような海底をブラブラするというのもあり、危険性は皆無。しかし、それで慢心しては例外的な何かで痛い目を見る可能性があるため、海底散歩にもルールが定められていた。

危ないものには近付かない。興味を持っても控える。コースは自

由だが明るいうちに戻ってくる――などなど、まるで親が子供にお使いに行かせるときのようなルールである。ただし、今回は『観測者』の探索がメインにあるため、多少なり近付いたりすることになるだろう。
「……見つかるかしらねぇ」
「まぁ十中八九無理でしょ」
ボソリと中間棲姫が呟く。対する飛行場姫は考えるまでもなく即答した。
「でも、動かなくちゃお話にならないから」
「そうよねぇ。ヨナちゃんには苦労をかけるわぁ」
伊４７に頼んだものの、それは本当に一縷の望みに賭けたもの。確率が非常に低いそれに対して、飛行場姫は現実からそう答えた。
だからと言って行動しないわけにもいかない。買わないと宝クジが当たらないのと同じである。僅かにでも可能性があるのなら、分が悪くてもやってみなければわからない。
「でもこれで見つかったら、お姉は彼に何て言う？」
何気ない一言ではあったが、中間棲姫には割と難問だった。一種の育ての親とも言える『観測者』と離れて数年、いろいろと話したいことが積もり積もっているようである。
「とりあえずは……お久しぶり、かしらねぇ」
「それくらいしかないか。アタシ的には、立場とかそういうのは知らないけど、一度会ってんだからまた顔を見せるくらいしろって思うけどさ」
そんな飛行場姫の言葉に、否定的な意見は出なかった。『観測者』という立場上、頻繁に会いに来ることは出来ないにしても、たまには成長の具合を直に見に来るくらいしてもいいとは思う。だからと言って、頻繁に呼びつけることも出来やしない。
「まぁ……また会いたいとは思うわねぇ。出来れば、こんな理由ではなく、ただお茶をするくらいで」
「そうね。アタシもそう思うわ」
事件の解決のために頼るとかは無しに、ただただお茶をしながら和

やかに話がしたい。姉妹姫の願いは、それだけだった。

島を離れた伊４７は、あっという間に海の底まで移動した後は、ブラブラと近海を泳ぐ。もう光も届かない暗闇の中を、当たり前のように進んでいた。

伊４７は深海棲艦化する前から夜目が利く。むしろ、それは潜水艦としての特性。海底は基本的に暗闇の世界であるため、そこを進む潜水艦達は、ほぼ必ずと言っていいほどに夜目が利くという特性を持っている。

だが、伊４７の目はそれ以上にいい。暗闇の世界でも昼間のように見えるくらいだ。深海棲艦化による全スペックの強化が、そういうところにも出ている。

「この辺は何も変わらないヨナ～」

近海は殆ど毎日見ているようなものなので、僅かにでも変化があればすぐにわかるほどになっていた。それだけ伊４７は海底に来ることが多い。

施設の者達と仲良くすると相当な確率で発症する『幸せアレルギー』は、最初期から比べれば大分軽くはなったものの、不治の病のようなものなので、重さは違えど何かしらの被害を受ける。

それを避けるためにも、伊４７は孤独を選んだ。幸いにも、施設には他に潜水艦がいないため、海底は独りになるのに最も適した場所となる。

そのおかげか、海底は誰よりも知っていた。だからこそ、今回の任務を買って出た。『観測者』がいた痕跡が見つけられるのは、物理的にも精神的にも伊４７しかいない。

「そもそもどんなヒトなのかな。男のヒトって言ってたけど」

人間達が知らないのだから、当然艦娘達も知らない。深海棲艦ですら限られた者しか知らないような存在。パッと見てわかるかどうかもわからない。

例外中の例外である、男性型の深海棲艦。それが『観測者』だ。確

認された前例が無いのだから、それが深海棲艦であると認識出来るかどうか。明らかに深海棲艦であるという特徴があればいいのだが、無かったら人間と勘違いしてしまうかもしれない。
とはいえ、海のど真ん中に立っている、もしくは海の底にいるとなれば、艦娘か深海棲艦のどちらかしか無いのだから、すぐにわかるだろう。
「男のヒトどころか、ここら辺で他のヒト見たことないんだヨナぁ」
伊４７も施設にはそれなりにいる。その間に殆ど毎日のように施設の近海を泳いで回っているが、その間に見つけたのは既に黒い繭になっている状態のみ。生身の艦娘や深海棲艦は、近海に来ることはない。
それだけ姉妹姫が陣取っている場所というのが誰にも見つからない場所であり、そのおかげで平和が保たれているわけなのだが。
「っと、アレは」
そうこうしている内に、伊４７は先日の戦場へと来ていた。調査隊が帰投中に襲撃され、虫の報せのおかげで春雨達が救援に向かうことが出来たあの戦い。
今は戦いの痕跡が無いはずだし、そもそも海上艦のみで行なわれた戦いだ。海底にいる伊４７には尚更影響が無いはず。
しかし、そこには妙なモノが存在した。
「……？」
伊４７の視線の先。そこには、海底まで沈んできたであろう黒い泥の残滓が漂っていた。
春雨に斬られたことによって白露が吐き出した黒い泥。傷口からも溢れ出し、その全ては海へと消えていったはずだった。その一部は乾いて白露に付着していたものの、大部分は海に零れ落ちている。
それが今、伊４７の目の前に存在した。海中だというのに霧散することなく、個体としてそこにあるそれは、パッと見ではよくある海中を漂うゴミに見える。しかし、伊４７は事前に白露から泥が吐き出されていることを聞いているので、それは近付いてはいけないモノとして認識している。

「触らぬ神に、祟り無し、だヨナ～」
後からそういうものがあったと報告するとして、今はそれを求めていたわけでは無いため、見つけた時点ですぐに離れることを選択。
そもそもが謎の存在なのに、何も知らないで近付くとか何をされるかわからない。例えそれが泥であっても、謎であることには変わりない。
なのだが。
「……動いてる……？」
その泥は、泥だというのに蠢いていた。それはまるで意思を持つかのようにうぞうぞと、生理的に受け付けなさそうな動きをしていた。
その行動は、こんな海中でも何かを探しているかのように見えた。それが何かはわからない。もしかしたら、本来入っていたモノ、白露を探しているのかもしれない。
「まずいかも……逃げよう」
元々触れずに去ろうとしていたが、その動きを見たことで余計に危険だと感じ取り、伊４７は急いでその場から立ち去る。なるべく静かに、しかし出来る限り素早く。あれは泥かもしれないが、何かを探す動きをしているということは、明らかに意思を持っている。
そして、それを決定付ける行動を取った。
「……えっ」
その伊４７を発見したのか、明確な意思を持って泥が行動を始めた。狙いはどう考えても伊４７の身体である。泥とは思えないほどに素早く、まるで海蛇の如く伊４７目掛けて動き出した。
「こ、これは、まずいヨナ！」
あれに捕まったらまずい。ただでさえ白露の中に入り込み、本来の性格を歪ませていたような存在だ。それにやられたら最後、伊４７も白露のようになってしまいかねない。
しかし、その泥を施設まで運ぶのも問題だ。海中だからあの動きを見せているだけで、海上に出たら動けなくなるかと言われれば、どうなのかはわからないというのが答え。
「ま、まずは、上に！」

瞬時に判断し、一旦浮上。幸いにも、泥の動きは素早いが伊４７の速力以上の速さは出ていない。頑張れば引き剥がせる。だが、遅いわけでもない。気を抜くと追い付かれるくらいには速い。常に全力でいなければまずい。足を止めたら、海中から捕まる。

やはり、あの泥は海の上に出ようとはしていない。海の水分が必要なのか、それとも空気に触れることが出来ないのか。そういう意味では、伊４７にとっては相性が悪すぎた。

「なに、なにあれ、なになに」

伊４７は恐怖すら感じていた。得体の知れないモノに追われ、最悪の場合乗っ取られる。それだけは避けなければならないのに、どうすればいいのかわからない。

上に行くというのは間違っていなかったのだが、伊４７自身、ホームグラウンドは海中だ。海上では速力も下がるし、十全の力は発揮出来ない。そうなると、ジリジリと這い寄られてしまう。

「戻っていいのかな、あんまり良くないかな、施設に迷惑かかっちゃうかも、でも多分陸だと何も出来ないヨナ。この辺無人島とか無いし、施設以外の陸って近くにないヨナぁ」

考えて考えて、あくまでも施設に被害が出ないように行動するにも、海のど真ん中であるというのがネック。

深海棲艦であるという時点で陸に持っていくことも出来ず、そもそも泥が艦娘に対しても何かしらの影響を与えかねない。だからといって自分が餌食になってしまったら本末転倒。

「ど、どうする、どうする。ヨナはどうするべき」

施設に戻りながらも、迷いがあるせいで最速の行動が出来ない。結果、向かってくる泥との距離は徐々に詰まってくる。そしてその動揺がさらに速度を落としてしまい、そして泥はさらに接近。むしろ、泥も調子が出てきたのか速度を上げているようにすら感じた。

「嫌だ、嫌だ、あんなのに捕まりたくない……！」

伊４７は既に涙目だった。いくら幸せを感じてはいけない身体だとしても、周りに不幸を振りまく存在にはなりたくない。あれに捕まったら、良くても死、悪ければ侵略者とされる。それは最も望んで

いない結末。
「嫌、嫌っ」
泥に手があれば、もう伊４７に届くというところまで来てしまった。捕まれば海中に引き摺り込まれ、そのまま乗っ取られる。その恐怖に、伊４７は完全に錯乱していた。

「それはよろしくない。摂理に反している」

知らない声が響いた瞬間、伊４７を捕らえようとしていた泥は突然霧散した。
「え……え……？」
茫然とする伊４７。そこにいたのは、男の深海棲艦。
「出過ぎた真似かと思ったが、こればかりは度が過ぎていたのでね。手を差し伸べさせてもらった」
泥を霧散させたであろう２人の少女も海中から飛び出してきて、可愛らしくポーズを取った。まるで道化師のような２人は、伊４７に笑顔を向けると、男の側へ。
「あなたは……」
心の奥ではそれが何者かはわかっていたが、彼が何者かを問う。
そして、それに対する反応は、予想通りだった。

「『観測者』といえば、わかってもらえるかな？」

『観測者』

「『観測者』といえば、わかってもらえるかな？」
白露の吐き出した黒い泥に襲われていた伊４７の前に現れた男の深海棲艦は、そう名乗った。今まで噂にしか聞いておらず、姉妹姫がその存在を示唆しているのみだった『観測者』が、ついに表側に姿を現したのだ。
「あなたが……」
「君達は私を追い求めているようだね」
小さく微笑む『観測者』に対し、伊４７は茫然とするしかなかった。現れるとは思っていなかった求めていた存在がまさに目の前におり、しかも自分の危機を救ってくれたのだ。ときめかないわけがなかった。
しかし、そんな伊４７の雰囲気を察したのか、『観測者』の隣に並ぶ従者２人が、救ったのは自分だと主張するように手を振る。実際、『観測者』はその場に現れただけで、泥を消し飛ばしたのは従者の謎の力。海中で突然吹き飛んだので何をしたのかはわからない。
「ああ、礼はこの子達に言ってあげてくれたまえ。私は何もしていない。何も出来ないのでね」
「あ、は、はい、ありがとう、ございます」
言われるがままに従者に礼を言うと、大袈裟に喜んで伊４７に握手を求めた。拒否する理由がないので、その手を握る。
「アレは存在を侵すモノ。捕らえられれば最後、君は君で無くなっていた」
予想通り、泥に捕まってしまったら、白露のように存在を歪められ、侵略者にされていたようだ。逃げを徹底したのは大正解だった。
しかし、施設に持っていくのは憚られるので、助けが入らなかったら本当にまずい事になっていた可能性が高い。そういう意味でも、『観測者』と２人の従者には感謝しかない。
「えっと……施設に、来てくれる……？」
何故ここに現れたのかは、伊４７にはわからない。今までさんざん

潜伏しておいて、今更になって表に出てきたのは、何か理由があってのことのはずだ。それが施設であると信じて、おずおずと誘った。
従者の2人はニヤニヤしながら『観測者』を見て、『観測者』は肩を竦めながら小さく息を吐いた。
「君を施設に送らせてもらおう。救った縁もある」
従者達がハイタッチを決める。『観測者』はここまで来ておいて結局施設には行かないと言い出しかねなかったので、従者達もここで施設へと向かうことを決めてくれたことを喜んだ。
伊４７は、泥に襲われるという恐怖から未だに涙目であり、よく見れば手もまだ震えている。そんな同胞（はらから）を放っておくのも気が引けるだろう。いつものように海底で見ているだけならば、どうであっても何もしないだろうが、手出しをしてしまったのだから仕方ない。
「君達、あまりはしゃぐんじゃない」
主人の決心を喜び続けている従者達は、今や周囲で踊っている程だった。その様子がおかしくて、伊４７も震えが止まっていくのを感じた。

伊４７が『観測者』を連れてきたということで、施設は騒然としていた。まず春雨が直感的に戻ってくるタイミングに気付き、叢雲がさらに何者かが近付いてきていると感知するのだが、なんだか人数が多いと感じて全員で出迎えたところ、まさかの『観測者』登場である。
一番驚いていたのは、まず見つからないだろうと考えていた姉妹姫だった。数年ぶりの再会であり、中間棲姫にとっては殆ど育ての親みたいなもの。その顔を見ることが出来ただけでも、
「お久しぶり……ねぇ」
「ああ、久しぶりだ。元気そうで何よりだよ」
「全部知っていたんでしょう。観測、し続けていたのよねぇ？」
「勿論だとも。それが私の在り方なのだからね」
事前に飛行場姫と話していた再会の挨拶を口にした中間棲姫。対する『観測者』は、被っていたシルクハットを脱いで優雅にお辞儀。昔

から何もかも変わっていない、出会い別れた時そのままの『観測者』がそこにいた。
　中間棲姫が飛行場姫にすら見せたことの無いような表情を見せたのはその時だった。再会を喜んでいるような、過去を懐かしむような、怒りやら悲しみやらまでもが綯交ぜになったような、そんな複雑な表情。
「なら、私達が貴方を求めていたことも」
「無論、知っているとも。そして、君達が知りたいことも知っている。私は『観測者』なのだから」
　今までのことを全て海の底で見続けていたのだ。泥のことも伊４７には多少話したくらいなので、出処だって知っているし、極端な話、古鷹の居場所も知っている。
　そして、『観測者』の視線がチラリと春雨に向いた。突然見られてビクッと震えてしまい、それに反応した海風がキッと睨み付ける。クスリと笑いつつ、中間棲姫に視線を戻した。
「彼女――伊４７が襲われているところを見つけ、助けさせてもらった。そこで１人にするには酷だと思ってね。ここまで送らせてもらったよ」
「襲われた……!?」
「うん……すごく、怖かった……。でも、本当にギリギリのところで、このヒト達に助けてもらったんだヨナ」
　ここに戻るまでに従者達のおかげで大分落ち着いていた。だが、心に刻まれた恐怖は、簡単には払拭出来ない。陸に上がったところでようやく完全に安心出来たからか、へたり込むようにその場に座る。腰が抜けたというわけではないが、どっと疲れが出てきてしまったようだ。
「ヨナは何に襲われたの。何処で何があったかは知らないけど、この子だって相当やる子よ」
　そんな伊４７を抱きかかえながら、飛行場姫が『観測者』に問う。
「君達が泥と呼んでいる物質。白露と言ったかな。彼女が失っていた我を取り戻した時に吐き出したそれが、未だ海を漂っていた」

「えっ、アレが!?」
　それを聞いて驚くのは白露である。自分が正気を取り戻した時にさんざん吐き出した血と泥がまだそこに留まっており、さらにはそこを通りかかった者を襲うというわけのわからないことが起きてしまった。
　そもそも吐き出した泥は、そう表現する通り泥、すなわち流動体だ。海中で霧散せずに形を保っていたこともおかしな話だが、意思を持つかのように動き回っているなんて、ホラー以外の何ものでもない。
「そのことについて、アンタに聞きたかったのよ。何せ観測し続けてんだから、出処とかも全部知ってるわけでしょ」
　飛行場姫が突っかかるように問い質すが、『観測者』はああと一言だけ。
「お、教えてほしいな。何があたしをあんなゲスにしてたのか。妹達があたしに混ざっちゃったのも関係あるの？」
　白露も飛行場姫と並んで聞く。つい最近まで自分を侵略者へと変えていた物質の正体なのだから、その真相が最も知りたいのは、その餌食となった白露自身だろう。
　その必死さに、『観測者』の従者達はちゃんと話してやれと言わんばかりに袖を引っ張る。
「あれは、彼女の無念の塊。未だ止まらぬ感情の物質。その念が強すぎるため、他者を侵す存在と化してしまっている」
　一瞬何を言っているかはわからなかったため、白露は首を傾げる。しかし、そういう言い回しを何度も聞いたことがある姉妹姫は、『観測者』が何を言いたいのかは推理が可能。
「その彼女ってのは何者なのよ。多分同胞（はらから）なんだろうけど、傍迷惑過ぎるわ」
「そうねぇ……自分の力だけで何かするわけじゃなく、他人も巻き込んでってなると、それは迷惑よねぇ」
　勿論、その存在に対しては疑問が出てくる。施設に直接的には関係ないかもしれないが、今ここに白露がいるし、懇意にしている鎮守府がその深海棲艦の脅威に立ち向かうことになるのだ。ある程度は情

報を手に入れておきたい。
「君達の同胞(はらから)であることは間違いがない。だが、少しだけ違う。彼女は不定形だ。今でこそ形を取っているが、その実態は概念のようなもの」
　またわけのわからないことをと飛行場姫は溜息を吐いた。同胞(はらから)ではあるが、違うもの。形はあるが、概念である。さっぱりわからない。
「あの……もしかして……魂的なモノ……なんですか？」
　ここで春雨が直感的に思い浮かんだ言葉を紡ぐ。概念のようなモノでもそこに存在しているというのなら、そういう少し曖昧なモノとして表現するのが最も適しているのではないかと考えた。
　対する『観測者』は、小さく首を縦に振った。従者の２人は大正解と言わんばかりに、何処から取り出したのかカラフルな紙吹雪を舞わせる。それは舞い上がった後すぐに消えたので、艤装を生成するのと同様の技術か。
「これ以上は語れない。私の特性は『中立』。世界の均衡を、海の底から見守る者。基本的には手を出さない」
「そういうところ、ホント変わんないわね。こっちが大変だって時もただ見てるだけとか」
「そう言われてしまうと、何も言い返すことは出来ないね。だが、私が出来ることは、艦(フネ)の鎖を磨くことのみなんだ。理解してもらえると助かる」
　相変わらず表現は謎ではあるが、つまり、助言はするが手助けはしないということである。艦娘や深海棲艦の明日のために、鎖を磨いて見守る存在であると。
「じゃあ、何故ヨナを助けたのよ。勿論それはこっちとしても本当にありがたいことだけど、アンタのやり方に反するんじゃないの？　中立って言うなら、そこにあるがままを受け入れるってことでしょ」
　自分の特性を『中立』として置いているのなら、どちらが有利でどちらが不利だなんて何も考えないはずである。手を出さず、見守るだけ。
「摂理に反していたからさ」

「摂理？」
「艦娘と深海棲艦、その戦いは宿命付けられたものであり、それが世界の摂理だ。故に、私はそれを見ることしか出来ない。偏ることなく、力を貸すこともしないだろう。だが、彼女はその摂理に反している。例えば……白露、君だ」
　突然名指しされて素っ頓狂な声を上げかけるが、どうにか呑み込んだ。従者達がニコニコしているため、ここで弱みを見せるのはよろしくない。
「実の妹とはいえ混ざり合うなど、そもそもおかしいとは思わないかい。これは摂理に反している」
「ま、まぁ、そうだよね。そりゃおかしいよ。艦娘ってのは、今は深海棲艦だけど、1人に1つの魂だもん。でも今のあたし、4人分だよね」
　自覚出来るくらいにおかしい存在にされているのは、白露自身で理解出来ている。艦娘を混ぜるということがそもそもおかしい。
「魂の混成、そして魂の侵蝕。彼女は2つ、摂理に反している。それは世界を冒涜する行為に等しい。中立であり観測する者である私としては、これは均衡が崩れたと言っても過言ではない。ならば、その均衡を取り戻すのも私のやるべきことだ」
　均衡を見守る存在は、均衡を保つために動くこともするらしい。
「だとしたら……私を育てたのも均衡を保つためなのかしらぁ？」
「一環ではあるが、私の意思も少しだけあった。君の存在はあまりにも不安定だったからね。干渉は憚られるべきだとは思ったが、あるがままに育てたまでさ。驚くほどに正しく、頼もしく成長してくれて、私も喜ばしかった」
「そ、そう、面と向かって言われると、少し恥ずかしいわぁ」
　育ててもらったことには大きな恩があるのは間違いなく、それが世界のためと言われても何も苦ではない。
　それに、『観測者』であれ中間棲姫には情が湧いたというのもあるようである。
「で、結局その摂理とやらに反してるっていうクズは何者なのよ。勿体ぶらずにさっさと言ってもらえる？　正確に、明確に」

淡々と話をする『観測者』に対して、痺れを切らしたか叢雲が強めの口調で問い質した。薄雲がアワアワするものの、従者達がそうだそうだと囃し立てるように『観測者』を小突くような真似をしたため、空気がそこまで冷えずに済んだ。

「春雨、君なら答えが出ているんじゃないかい？」

なのにあえて自分の口から語らず、春雨に振った。まず間違いなく、春雨はそこには部外者に等しい。巻き込まれただけの艦娘に過ぎない。

だが、今の春雨の直感は何かが違った。『観測者』との接触で、さらにその力は増しているかのように見えた。

故に、敵の正体に辿り着こうとしている、今までの話を独自に整理して、直感的にこうではないかという答えを導き出した。

「……憶測ですけど」

「言ってみたまえ」

「わかりました……結構突飛な考えですけど」

そして春雨はその考えを口に出す。

「その敵は……姉姫様の中身だったんじゃないでしょうか」

器と中身

白露の中に潜みその性格を捻じ曲げ、吐き出された後もその場に残り続け、伊４７を襲撃したという泥。その正体について、『観測者』によって語られた。それは、何者かの無念の塊。その念が強すぎて、他者を侵す存在となっているモノ。この世界の摂理に反した存在。

そして、その存在が何者であるかという問題に真っ先に辿り着いたのは、ここ最近で直感が凄まじいことになっている春雨。『観測者』から振られて、少し自信なさげに言い放った。

「その敵は……姉姫様の中身だったんじゃないでしょうか」

この言葉に対して、『観測者』の従者達が拍手を送った。つまり、その考えが正解であることを示している。

「私の……中身？」

そう言われて一番おどろいているのは、他ならぬ中間棲姫である。白露や伊４７に対して甚大な迷惑をかけた泥と自分との関係性が、言われたところでまるでピンと来ない。当然、中間棲姫だけでなく、そこにいる者達は誰もが騒然とする。

「姉姫様……以前に言ってましたよね。自分は空っぽの存在だったって」

「ええ、確かにそう話したわねぇ。その状態から彼に育ててもらったってことも」

「姉姫様は、もしかして器だけの存在だったんじゃないですか？　だから、中身が何も無くて、空っぽ……記憶も本能も何も無い、身体だけの存在だった。じゃあ、本来入っていたはずの中身は……？」

それがあの泥。むしろ、泥はその存在の一部であり、本体は泥を生成し続けている何者か。春雨はそこに辿り着いた。

中間棲姫は本来、記憶も本能も持って生まれるはずだったのだが、何かの手違いで器と中身が別々になってしまったという結論である。

目の前の中間棲姫が器を持っているのだから、中身の方は肉体すら持っていない概念的なモノ。記憶と本能だけの存在。故に、泥という流動体、不定形でその存在を保っている。

そしてその泥は、泥故に分離可能。他人に与えることによって侵蝕し、自分のその本能を植え付け、侵略者へと変える。概念となっているのなら、それくらいは可能だろう。
「……言われてみれば、全部辻褄は合うわねぇ……困ったことに。なるほど、私はただの器で、本当はそちらの中身の方が『中間棲姫』なのかもしれないわぁ」
それには誰も何も言えなかった。今みんなの前にいる中間棲姫は、本来悪虐非道の限りを尽くす侵略者の深海棲艦であったのかもしれないと思うと、言葉を失ってしまう。
しかし、そんなみんなの反応を見て苦笑しつつ、中間棲姫は続ける。
「でも、私はみんなの姉姫だから、気にしなくていいわよねぇ。今の私には新しい中身があるんだし、それが間違っているとも思っていないもの。もう、器だけの存在じゃ無くなってるわぁ」
全員が納得する。本来はそうだったかもしれないが、今の中間棲姫は誰もが認める優しいお姉さんだ。侵略なんて絶対に考えることはない。そんな深海棲艦が、自分の島で農作業を楽しんでいるだなんてあり得ない。
ここでまだ1日しか生活していない白露ですら、このヒトが侵略者だなんて考えられなかった。自分がそういう感情を持たされたせいで、尚更だった。
「だから、あの泥の持ち主は私とは完全に別モノって考えればいいわぁ。極端な話、私が死んだとしてもあちらは死なないし、逆も然り、よねぇ？」
少し物騒なことを『観測者』に問うたところ、その通りだと頷いた。
器から抜け落ちた中身は、その時点でもう別の存在だ。離れているために関連性もなく、生まれが同じでも繋がりは無い。本を正せば同じかもしれないが、本は正さないため、繋がることは二度とない。
「じゃあ、尚更気にしなくていいわぁ。幸い、艦娘にも同胞（はらから）にも、同じ顔の別人という概念があるんだもの。つまり、そういうことよぉ」
今まで考えていた通りのことだ。艦娘達には最悪の姫として名高い中間棲姫のイメージがあるが、この中間棲姫はそのイメージとは真

逆の存在と言っても過言ではない。穏やかで優しく、戦いを嫌う、今までの深海棲艦という概念を打ち払うような女性だ。
　それを知ったのだから、その中身である泥は中間棲姫かもしれないが、別個体として認識出来る。２人同時に存在しているのに同一とみなす方が難しいのだ。
「そうよね。ここにいるお姉がおかしいわけじゃないもの。その泥になってるヤツがおかしいだけ。長いことお姉に付き合ってるけど、そんな巫山戯たヤツとなんて同じなわけがないわ」
　真っ先に飛行場姫が肯定した。妹として生まれたのだから、別モノがいると言われても姉はこの中間棲姫１人だけだ。泥の持ち主、器の中身がいくら侵略者気質を体現する者であっても、姉はこのヒト以外にあり得ない。
「あの……『観測者』様、でいいんですか？」
「ふむ、そう呼んでくれて構わない」
「なんとなく、なんとなくなんですが……姉姫様は空っぽで生まれたと話していましたが……その、それは本当に生まれたんですか？」
　またしても突拍子もない発言。生まれる時に器と中身が分離したというだけでも相当なのに、そもそも生まれたかどうかすら危ういとなると、訳がわからなくなる。
「何故そう思ったんだい？」
「……私達は、中間棲姫という存在を知っています。過去にあった大きな戦いで現れた、最悪の姫と称されている中間棲姫を。姉姫様は同じ顔の別個体だと思っていたんですけど……実は同じであるなんてことはありませんか」
　春雨の直感はまた別の答えを導き出そうとしている。
　過去にあった戦いで現れた、海戦史上でも類を見ないために『最悪の姫』と称されている深海棲艦、姉姫と同一個体である中間棲姫。資料ではその中間棲姫を撃破することにより戦いを終えることに成功した旨が記載されており、逃がしたという表記は一切されていない。
　しかし、実はその時に生き延びていたのだとしたら。本当は倒し切れておらず瀕死の重傷を負っただけであり、それがきっかけで器と中

身が分離されたのだとしたら。
奇しくも、最初に提督が思い浮かんだ消息不明となった調査隊の犯人像と同じところに辿り着いた。提督は悩みに悩んだ末に、藁にも縋るような思いで出した1つの仮説。
その言葉に対し、『観測者』はほんの少しだけ驚いたような表情を見せる。従者に至っては、吃驚仰天と言わんばかりに身体で表現。
「そこまで辿り着けるのか。流石といえば流石だ」
この解答により、過去脅威だった中間棲姫と、施設の主である中間棲姫は同一人物であることが確定する。自分から明確な情報は言わない代わりに、答え合わせくらいはしてくれるらしい。
「でもでも、姉姫様はアレとは別人ですよね。中身が違うんですから」
「その認識で構わない。人間も、艦娘も、深海棲艦も、それを決めるのは器ではない、中身だ。彼女の魂は、君達に姉姫と呼ばれている魂が定着している。新たに生まれたそれは、もう最悪の姫ではない。安心してくれたまえ」
心底ホッとした春雨。そんな姿を見て、海風も安心する。
ここで中間棲姫の真実に辿り着いたことで気に病んでいるような雰囲気を出していたが、すぐにそこから正しい選択を出来たおかげで気分が沈むことはなかった。
まだ他の面々よりは中間棲姫との付き合いは短いが、その短い間でもその寛大で温かな内面に触れ続けてきたのだから、この中間棲姫があの中間棲姫と同じとは全く思えない。悪意がカケラもなく、真に平和を望む気持ちに偽りもない。隠している感情すら存在しない。
ならば、あの泥を生み出す中身とは確実に違うモノであると断定出来る。『観測者』もそう言うのだから間違いない。この中間棲姫は、姉姫という完全な別個体であると思えばいいだけの話である。今までもそう思えていたのだから、何も変わらない。
「とりあえず、私達の真の敵は、その泥を生み出している姉姫から分かれた中身ってことでいいわけ？」
静かに話を聞いていた叢雲が、苛立ちを抑えずに口に出す。叢雲にとっては姉姫が何者かというのはどうでもいい話であり、自分の怒り

の矛先が何者かであることの方が重要。それを斃したら姉姫が死ぬと言われても、今の叢雲は容赦なく戦いを挑むだろう。
　対する『観測者』も、首を縦に振る。敵味方の概念自体、中立である『観測者』には少し曖昧ではあるものの、叢雲、延いては施設、鎮守府の敵という表現をするのであれば、中間棲姫の中身が真の敵ということで間違いない。
「じゃあ、あの古鷹はなんなの。アイツが姉姫の中身ってわけじゃあ無いのよね」
「彼女もまた、白露と同様に魂を侵蝕され、魂を混成された存在だ。それを実行した者こそが、君達の敵と言えるだろう」
　施設の者達は知らないことだが、あの古鷹と交戦して生き残り、トラウマを刻まれて艦娘としての活動がほぼ出来なくなった者の1人、加古の証言でも、あの古鷹は古鷹であって古鷹ではないと言われていた。白露のように、他の艦娘が混ぜ込まれていることからそう感じたのだろう。
　古鷹が張本人だった場合は、おそらくそんなことにはなっていない。真の黒幕によって処置を施された結果が、あの膨大な力を持ち、悪虐非道の限りを尽くす古鷹だ。
「春雨が叩き斬ったら、あの古鷹も白露みたいに正気を取り戻すかもしれないってわけ？」
「可能性が無いとは言わない。春雨の刃に、彼女の呪縛から解き放つ力があるのかと言われれば、それは確実では無い。しかし、実際に白露からは泥が吐き出されている。これは私にも不可解なんだ」
　みんなの視線が春雨に向いた。急に注目されて慌て出す春雨と、それを庇うように前に出る海風。しかし、海風も春雨のその力には尊敬以外の感情を持っている。
　あの時は脚を刃に替えるという荒技を咄嗟に思いつき、白露を終わらせるつもりで斬ったに過ぎない。今でこそ救われた白露であるが、その時には殺すつもりで戦った。
　だが、結果として仲間にとって最善な結末を掴み取っている。白露は正気を取り戻し、覚悟を持って死を乗り越えた。そこは白露の努力

の結果ではあるが、そのスタート地点に立たせたのは、他でも無い春雨だ。生かして泥の呪縛から解き放ったことで、それが叶った。
　それ自体が春雨の力かと言われればそうではない。しかし、直感だけでは言い表せない何かが働いているようにすら思える。
「君達は、深海棲艦となった時に何かしらの力に目覚める者が多いことは理解しているね」
「ええ。私は感知の力があるわ。白露は傷が1日で治るってヤツ。それに、姉姫はアレでしょ、繭に触れたら感情が読み取れるのよね」
「そうねぇ。あと戦艦ちゃんも、海から記憶を読み取るなんてことが出来るわぁ」
「春雨にも、目覚めた力が存在する。それは彼女自身にも一部自覚があるだろう」
　それが直感、第六感。なんとなくこうなると感じたことが、本当にそうなっていることが多々ある。
　最初は白露との戦いで耳を潰された時。白露の中に複数人が入っていることを直感的に勘付いたこと。そこから音も聞こえないのに誰かが部屋に来ることを察知したり、叢雲よりも先に誰かが島に向かってることに気付いたりと、いろいろと正解を引き当てていた。
「これを中立である私が伝えるのは憚られるかもしれない。しかし、今回はあえて伝えさせてもらおう。おそらく、春雨には自分のことには辿り着くことは出来ないだろうからね」
　心が壊れていることにより、自分のことに興味がないという大きな欠陥を抱えているため、春雨は周囲には敏感でも自分のことには鈍感だ。そのため、自分の力が何であるかは周囲が気付くしかない。
　叢雲や戦艦棲姫は少し気付いていたが、それだけではないことも理解していた。その時は聴覚を補うために発達した直感であると考えていたが、今はそれだけでは例えようがないレベルになっている。
「春雨、君の力は、辿り着く力だ」
「辿り着く……？」
「今はまだ確実性が無い確率の高い直感という程だろう。だが、真に覚醒したとき、君は凄まじい力を発揮する。そしてそれは、間違った

道には乗らないはずだ。君は優しい。正しくその力を使うことを祈るよ」

やはり曖昧。言葉には表したものの、それがどういうものかは春雨を含め首を傾げるのみだった。

姉妹姫の気持ち

深海棲艦化により春雨が手に入れた力は辿り着く力であると、『観測者』は本人に伝えた。しかし、その表現が曖昧すぎて、誰も理解出来ず、首を傾げるのみである。

単純に辿り着くと言われても、何処に辿り着くかはさっぱりわからない。例えば、何かのゴールに辿り着くのか。それとも行きたいところに行けるのか。直感とそれが結び付くようには思えず、考えれば考えるほど謎が深まるばかり。

「答えは自分で見つけてくれたまえ。そうでなければ、君自身の力にならない」

「は、はい、わかりました。ありがとう……ございます」

訳はわからなかったが、『観測者』が言いたいことは理解したつもりだった。確かに答えばかりを聞いていたら自分で考える力は衰えてしまう。ただでさえ、春雨の持つ力はそういったショートカットをしてはいけないような力な感じがした。直感的に。

自力でその答えに辿り着いた時、『観測者』の言う真の覚醒というモノに近付けるのではないだろうか。

「春雨姉さん、私にはわかります。春雨姉さんは常に他の姉さん達に追いつけるように努力してきたじゃないですか。きっとそのことです」

そこに海風がここ最近の勢いで春雨の手を握りながら話し出す。

「春雨姉さんは改二の実装をされていなくとも、あの実力者集団な姉さん達に追い付ける程の力を手に入れていました。それはその域に辿り着いたと言っても過言ではないでしょう。つまり、目指しているところに必ず辿り着けるということではないでしょうか。流石です私の敬愛する姉さん。だからこそ私は尊敬しているんですが、もっともっと敬うべき相手だと確信しました」

怒涛の勢いで話しているが、要所を掻い摘んでしまえば、春雨の望む領域に辿り着ける力なのではと海風は考えたようである。

「海風の言う通りかもしれないねぇ。あたし達、春雨のサポートは

すっごい頼りにしてたから。ほら、夕立って結構突撃癖あったでしょ。それをどうにかしてくれるの、多分春雨だけだったしさ」
海風の言葉に白露も同意した。妹の名前を出すものの、今やそれは自分の記憶でもあるため、そういう意味でも春雨に感謝しているようだった。
確かに艦娘時代、1人だけ改二実装がされていないにもかかわらず、改二実装済みの姉達に当たり前のようについて行っていた春雨は、努力のみでその域に辿り着いたと言える。
そのときの経験が、深海棲艦化によって特性として顕現しているのかもしれない。前例が無いために何とも言えないが。
「白露姉さんもそう思いますよね。『観測者』様が認める程なんですから、春雨姉さんの努力は最大限に報われているのだと思います。艦娘の時の努力がこの身体になっても役に立つだなんて、やはり春雨姉さんは偉大ですね。本当に素晴らしいです。最愛の春雨姉さんはそういうところまで」
「オッケー海風、ちょっと落ち着こう。春雨の素晴らしさは後からあたしがたっぷり聞いてあげるから。話が進まない」
こういう時に冷静な時雨の気質が役に立つようで、一人でヒートアップしていく海風に対して冷ややかにツッコむ。まず間違いなく白露ではこんなことをしないため、ここは記憶と思考が入り混じっていることを如実に表していると言える。
「さて、では私はこれでまた観測に戻らせてもらう。話さなくてはならないことは話せたのでは無いだろうか」
白露が海風を止めたことで、『観測者』がここで切り上げようとした。
しかし、それを許さないとでも言わんばかりに飛行場姫が待ったをかける。
「いや、まだ話すことはあるわよ」
「ほう、何かあったかな」
「世間話くらいしていきなさい。アンタは全部知っているかもしれないけど、アタシ達は話すこと自体が楽しいの。お茶を用意するから、

多少はここで寛いでもいいでしょ」
　要点だけを曖昧に話してくる『観測者』に対して苦言を呈しつつ、もう少しここにいろと強めに訴える。
　以前に消えた時もあまりにも急であり、別れの言葉すら言えなかった。今回はそれを言えそうではあるものの、あまりにも素っ気なさすぎて再会したという感動すら持てない。時間が許す限り適当に一緒に過ごすことで、今までの埋め合わせをしてもらいたいのである。
　飛行場姫がズケズケと言うのも、中間棲姫が自分からそういうことを言うタイプでは無いからだ。こういう時は、妹が率先して姉のために動く。
　対する『観測者』は少し困った表情をする。中立であると謳っているのに、ある一箇所に長く留まるというのはあまりよろしくない。
　しかし、一度空っぽである中間棲姫を育てたという経歴がある以上、今更何を言ってるんだというのもある。飛行場姫はそれを間違いなく口に出す。
「さて、どうしたものか……」
　そう呟いた途端、従者の2人は『観測者』の両手を引いて、お茶会に行くことを強制した。中立である『観測者』の従者の割には自由気ままに感情を出して行動している2人に、小さく溜息を吐きつつ諦めたような表情を見せた。
「わかった、いただこう」
「最初からそう言えばいいのよ。それに、他にもいろいろ聞きたいことはあるしね。その子達のこととか」
「彼女らは私のアシスタントさ。そうだな、道化と呼んであげてほしい」
　道化と呼ばれた従者の少女2人は、最初の『観測者』のように一礼をした。まるでパフォーマンスをするような仕草は、道化と呼ぶように少しピエロのような雰囲気を醸し出す。口を利かないのも、らしさのためかもしれない。
　見た目も深海棲艦にしてはカラフルであり、男の深海棲艦である『観測者』と同様、少し異質なイメージがあった。まるで、どの勢力と

も違うということを表しているようにも見える。
「じゃあ道化達も一緒にお茶にしましょ。お姉的には、コイツと1対(サシ)1の方がいいかしら」
「妹ちゃん、私はそこまで高望みはしないわぁ。一緒にお茶が出来るだけでも嬉しいんだもの」
中間棲姫はいつになくニコニコとしていた。やはり、『観測者』との再会は喜ばしいものであり、念願であった。
「それじゃあ姉姫様、『観測者』様との団欒をお楽しみください。ずっと話がしたかったんですよね。私達はお邪魔しませんので」
「あらあら、そんなに気を遣わなくてもいいのに」
「私達は初顔合わせですけど、姉姫様は数年ぶりの再会ですから。積もる話もあるでしょうから」
その表情からいろいろ察し、春雨側から一歩引く。2人きりになりたいとまでは思っていないだろうが、そこは余計な話が出ないように、姉妹姫だけに任せることにした。
過去に共に過ごしていた者同士、ほんの少しの時間だけでも楽しんでもらいたい。

姉妹姫と『観測者』一行がダイニングに入っていったのを確認し、各々いつも通り好きなように午後を楽しむ時間。一番ヒトが集まるダイニングを使ってもらっているため、春雨は私室に入った。姉妹姫のお茶会が終わるタイミングはおそらく直感的にわかるため、何処にどういようが問題はない。
ちなみに、ジェーナス、薄雲、叢雲はミシェルのところへ。ミシェルは何があるかわからないため『観測者』にも顔を合わせずにいたので、その埋め合わせに。他の面々もいつも通りである。
「流石は完璧な春雨姉さんです。姉姫様の心情にいち早く気付いて一歩退くなんて、私にはすぐには思い付きませんでした。ヒトの気持ちを即座におもいやることが出来る優しさに感服しますね。私も敬服する春雨姉さんのようになれるように日々一層努力しなければ」

「あ、あはは……私はそこまで考えてなかったんだけどなぁ」
部屋に入るなり詰め寄るように手を握って怒涛のように言葉を投げかける海風。最近この圧もどんどん強くなっているような気がするが、気のせいだと思いたい。
「辿り着く力ねぇ……春雨ってば、そういう才能あったんだねぇ」
白露もしみじみと話す。深海棲艦化の影響が顕著に出ている白露と違って、春雨のそれはとても曖昧。説明した者がそういう言い方をしたからというのもあるが、即座にピンと来るような力ではない。
「才能……というか、私にもまだよくわからなくて」
「そりゃそうでしょ。艦娘の時にはなかった力なわけだし。あたしだって超回復とか言われてもビックリしたもん。ま、いつも通りにしてればいいんじゃない？」
「そう……ですね。そこまで気にしないことにします」
ただ勘が強いというだけでは収まらないのは理解出来たものの、こういうのはおそらく、意識すればするほどうまく使えなくなるような力だ。慢心は良くないのと同じように、普段通りに過ごすことが大切。
「海風は何かそういう力はあったりしないの？」
「私はわかりません。こうなってからの戦闘経験が白露姉さんとのそれしかないですし。義腕の形を変えることなんて、素晴らしい春雨姉さんでも出来ることですから」
インナーに包まれた義腕を見せる海風。これは艤装と同じであるためにその場で形状を変えることが出来たに過ぎない。とはいえ、それを咄嗟に思い付いたというのは一種の能力と言ってもいいかもしれない。
別に深海棲艦化したからといって、全員が全員、そういう特別な力に目覚めるというわけではない。もしかしたら誰も気付かないくらい小さな力かもしれないが。
「そういう力があれば、もっと春雨姉さんのお役に立てるんですが……まだまだ未熟です」
「そんなことないよ。海風は本当に頼りになるから。あの戦いの時

も、海風がいなかったら姉さんは救えなかったんだからさ」
「春雨姉さんにそう言ってもらえると、海風は生きていて良かったと実感出来ます」
春雨に褒められるだけでも気分が昂揚しているようである。満面の笑みで春雨の隣に座る。しっかり義腕ではなく生身の腕を春雨の腕に絡めて。
「今頃、姉姫様は楽しんでるかな。なんかいっぱい話したいことがあったと思うし」
ダイニングの方を見る。当たり前だが私室からその様子を確認することなんて出来やしないのだが、アットホームな場面がそこで繰り広げられていることを祈っている。
「あの『観測者』ってヒト、すっごい胡散臭さあったけど、信用していいんだよね？」
そこは白露も思っていたようで、包み隠すことなく堂々とその言葉を口にした。流石に真っ直ぐすぎる言葉に春雨は苦笑せざるを得なかった。
「大丈夫ですよ。だって、あの人が姉姫様をあの性格に育て上げたようなものなんですから。中立とは言ってましたけど、そこは常識的なんだと思います。……深海棲艦の常識って何かなとは思いますけどね」
姉妹姫はともかく、『観測者』は中立という立場であるためか、相手のことをあまり考えていないようにも思えた。しかし、その教育のおかげで中間棲姫は今の性格へと成長している。自分には問題があっても教育は得意という稀なケースなのかもしれない。
「春雨姉さんがそう言うんですから、あのヒトは信用出来ると思います。何せ、春雨姉さんがそう言うんですから」
「わかったわかった。海風、春雨絡みになると途端におかしくなるよね。同じこと2回言ってる」
「それだけ春雨姉さんを愛しているということです。おかしくないです。これが当然なんです。相手は偉大な春雨姉さんですよ？」
「はいはい。春雨はスゴイネー」

とにかく、『観測者』が信用出来るかどうかというのは、信用出来るという方向で収まる。話し方が曖昧で、最終的なところは相手に考えさせるというだけだ。キザったらしい部分は、もうそういう性質なのだと思うしかない。
「白露姉さんには春雨姉さんがどれだけ偉大かを叩き込まなくてはいけないようですね。ではお教えしましょう。私を救ってくれた春雨姉さんの素晴らしさを」
「それ、本人の前で言うのやめてくれるかな……」
「春雨姉さんが望まないのなら海風はやめます」
春雨に対しては従順すぎる海風は、何処か危うさもあった。

姉妹姫と『観測者』一行のお茶会が終わるまで、それなりの時間を要した。やはり、積もる話がそれほどまでにあったということである。

彼女と彼

「では、我々はこれで失礼するよ」
　しばらくして、『観測者』は施設を去ることになる。姉妹姫との団欒はとても有意義な時間となったようで、何処かツヤツヤしているようにも見える。
「また来てちょうだいねぇ。せっかくなんだし、もっとお話ししたいもの」
「善処しよう」
「その言葉って、まず来ない奴がいう言葉よ。いいから絶対来なさい。お姉のためにも」
　飛行場姫が圧をかけるが、『観測者』は素知らぬ顔。とはいえ、道化の方はまた来たいと表現するように手を振るので、おそらくまた来ることになるだろう。余程ここで飲んだお茶に思い入れが出来たようである。
　今は中立を保つために行動しなくてはいけないというのもあり、頻繁に海底から浮上してくることもあるだろう。今回こそ白露が吐き出した泥であったが、もしかしたらまた海中に泥が漂っているかもしれない。そちらの観測が必要になる。
「今まではただ見ているだけだった。しかし、あの怨念の塊をばら撒かれるようなら、摂理が完全に乱れる。それはよろしくない。こちらは先んじて排除をする必要がある。海は広い。常に観測する必要があるだろう」
「そうねぇ。そればっかりは私達にはどうにも出来ないものねぇ」
「我々の目ならば、アレを誰よりも早くどうにかすることが出来るだろう。摂理に反するモノに対してならば、我々はいくらでも対処方法を持っているのでね」
　今のところ、『観測者』による観測でも他の場所に泥がばら撒かれていることは確認されておらず、実は既に誰かに入り込んでいるということもないようなので安心出来た。
　しかし、これ以降にそういうことが行なわれないとは限らない。今

までやってこなかった理由はさておき、あの古鷹ならば手段なんて選ばないだろう。こちらが困ることを優先的に実行する。
「しかし、我々も見ての通りの頭数しかない。その全てを排除することは難しいだろう。あちら側は、アレを君達をどうにかするための手段として用いてくる可能性もある。その時は」
「こちらで対処する。泥は触れずに撃てばいいのよね」
　ある程度の火力の砲撃であれば、泥は霧散するとのこと。海中にいる場合でも、砲撃の衝撃さえあれば、ある程度は対策になるらしい。
　しかし、その動きはなかなかの速度。命中率などを考えると、雷撃や爆撃などは当たらないと見た方がいい。そういう意味では、伊４７はあらゆる理由で不利だったようだ。
　対処に最も適しているのは、強大な火力を持つ戦艦であるリシュリュー。それ以外でも、海上艦ならば大体どうとでも出来る。何せ、駆逐艦とはいえ艦種詐欺と言われるほどに強化されてしまっているのだから。
『観測者』たる私が君達にここまで話すのは適していないとは思う。だが、君達は摂理のままに生きていることを理解している。ならば、あるがままに生きてほしい。姉姫、特に君は、自らの手で自らの思う幸せを掴み取るんだ」
「勿論。今の私は楽しく生きることが出来てると思うわぁ。私の本来の中身が世界に迷惑をかけているのは気にかかるけれど、大丈夫よぉ。今は人間さんとも仲良くさせてもらっているんだものぉ」
　施設の平和を脅かされるのならば、姉妹姫は本気で抵抗をするだろう。『観測者』の話を聞いている限り、施設が狙われることすらもあり得そうなのだから。
「ならば、君達は君達の道を行ってくれたまえ。君達ならば、その道を違えずに進むことが出来るだろう。今の君達には、辿り着く者もいるのだから」
　相変わらず曖昧で、根幹には答えは自分で見つけ出せという厄介なところはあるものの、今回の言葉は非常にわかりやすかった。『観測者』なりに、これからの施設を激励してくれているのだ。

それに、『観測者』は春雨の存在をかなり大きめに見ていた。白露を救った実績と、その目覚めた力は、『観測者』にとっては想定外であり頼れるモノであった。
「さらばだ。……また会おう」
最後の一言に、中間棲姫は声を上げる程に喜び、その後ろ姿に大きく手を振った。こんなに子供らしい姿を見せるのは滅多になく、仲間達も心が温かくなるような感覚を覚えた。
道化達は最後まで施設に向けて手を振っていた。まるで『観測者』の内に秘める気持ちまで体現するように。
「また会おう、ですってぇ。二度と来ないなんてことは無いわねぇ」
「そうね。数年待たせたんだから、次はすぐに来てもらいたいものよ。明日でもいいくらいだわ」
飛行場姫も静かに喜んでいた。それはまた『観測者』と会えることよりも、姉が再会に喜んでいることに対してであることは言うまでも無い。

「Ｈｅｙ，　姉姫。『観測者』とはどんなことを話したの？」
お茶会が行なわれたダイニングの片付けをしながら、ジェーナスが中間棲姫へと問う。その時の空間を邪魔しないように誰もがダイニングに近付くことすらしなかったが、やはりどんなことを話していたかは気になるようである。
同じように片付けをしていた中間棲姫は、少し考える素振りをしたものの、いつもの柔らかな表情を崩すことなく、実に簡単な言葉でその時の時間を表現していく。
「本当に世間話よぉ。今まで会えなかった時のことを、延々話していたわぁ。勿論、観測されていたから全部知ってることなんでしょうけど、ちゃぁんと正面から聞いてくれたのよねぇ」
「それじゃあ、とっても素敵な時間が過ごせたのね！」
「ええ、おかげさまでぇ。いっぱいお話が出来て、いつになく楽しんじゃったわぁ」

今までで一番いい笑顔をしているとさえ思える。なんだかんだ、中間棲姫は『観測者』にずっと会いたいと思っていたようだ。
それは親愛か、敬愛か。少なくとも、『観測者』には特別な感情を持っているのは確かである。育ててくれたことに感謝をしているのは当然あるのだが、それ以上の気持ちがあるかは誰にもわからない。
「本当に、本当に積もる話があったんだもの。もっともっと時間が欲しいくらいだったんだけれど、彼にもいろいろとやらなくちゃいけないことがあるんだから、ワガママ言っていられないわよねぇ」
「そんなことないと思うわ！　姉姫は彼にくらい何でも言ってもいいのよ！　また一緒に住みたいとか、せめて1泊くらいしていけとか！」
「そうしたいのはやまやまなんだけれどねぇ」
苦笑する中間棲姫。
「私が引き留めている間は、あのヒトは観測が出来なくなるの。その間に、もしまた私の中身が何かやらかしてたら、私が後悔しちゃうわぁ。引き留めなければよかったって」
自己嫌悪の塊であるジェーナスには、そんな中間棲姫の気持ちが痛いほどわかった。
自分のワガママで相手の仕事を止めて、その間にとんでもないことが起きていたら、確実に落ち込む。後悔は一度してしまったらずっと心に残り続ける。そんな苦しい思いを、中間棲姫にはしてもらいたくない。
「本当はね、提督くんや大将さんにも顔を合わせてほしかったのよぉ。提督くんには捜索まで依頼しちゃってるからねぇ」
「でも、それは流石に嫌だって言われちゃった？」
「やんわり断られちゃったわぁ。本来表に出るような存在ではないし、自分の存在が世に知れ渡りすぎるのもよくないってねぇ。道化ちゃん達も、これぱっかりはやめてくれって感じでジェスチャーしてたわぁ」
とはいえ、こういう存在がいたということだけは伝えているので、それ以上の拡大はやめてもらいたいということになったようである。

道化の存在も秘密にしておいてもらいたいとまで。
　再会することが出来たということと、今のところ伊４７が襲われた以外に泥がばら撒かれていないこと、そして泥への対策は聞けたということが鎮守府側に伝われば、今回の件はひとまず良しとする。
「彼の存在を知るヒトは、少なければ少ない方がいいわよねぇ。本来のお仕事がやりづらくなっちゃうもの。あのヒトのお仕事は、あくまでも世界の均衡を整える観測。私の中身が摂理に反してそれを崩そうとしているから表に出てきただけなんだもの」
「でも、姉姫にはちょっと違う感じあったわよねー。やっぱり育てたっていうのが結構大きいのかも」
「かもしれないわねぇ。むしろ、私がおかしくなったらそれこそ摂理に反しちゃうのかもしれないわぁ。彼にはそれ以上でもそれ以下でも無さそうじゃないかしらねぇ」
　中間棲姫としては、『観測者』が自分に構ってくるのは、元々が最悪の姫と呼ばれていたような存在だからではないかと思っている。
　中身が空っぽになったとはいえ、そのまま新たな魂を得たときに、今までの魂をもう一度構成してしまう可能性だってあった。何せ、身体はそのままなのだから。
　中身が怨念の塊として残っている状態で器がまた新たな中身を得たら、それはただの増殖である。それは摂理に反していそう。
「うーん、私としては、『観測者』は姉姫にもっとＬｏｖｅな感情を持っていてほしいわ」
「無いわねぇ、それは。あのヒト、多分そういう感情はそもそも持ってないわぁ。だって中立なんだもの。誰か１人に靡くことなんてあり得ないわねぇ」
　少しだけ諦めたような表情を見せた。それはもう、靡いてほしいと言っているようなものである。
　姉姫にもそういう感情があるのだとわかり、ジェーナスはだんだんとテンションが上がってきていた。『観測者』の立場上、どうしてもその思いが成就することは無いだろうが、それでももっといい雰囲気にしたい。艦娘でも深海棲艦でもなく、１人の女の子としてそんな感情

を持っていた。
「姉姫、私は応援してるわ！　姉姫なら『観測者』ともっと仲良くなれるはずよ！」
「そうねぇ、もう少しお話はしたいし、一緒に暮らしていた時間は恋しいけれど」
　これは本音。『観測者』としての立場を捨てろだなんて絶対に言えないが、もう少しこの施設に来てくれると嬉しい。あちらは何でも知っている全知な存在かもしれないが、一緒に同じ部屋で話している時間が大切なのだから。
「また来てくれたときも、今日と同じようにお茶会がしたいわねぇ」
　小さな願望ではあるものの、中間棲姫が姉姫として確立していることで証明するような感情であることは間違いなかった。

　本来の居場所に戻ってきた『観測者』も、何処か今までよりは雰囲気が明るいように見えた。道化達もそんな主人の様子を見て、戯けるように周囲を踊る。
「私としても、有意義な時間を過ごせただろう。彼女は、本当に良き成長を遂げていた。観測だけではわからないこともある」
　直に話したことで気付いたこともあった。見ていた以上に、中間棲姫は独自の魂を成長させていた。最悪の姫に戻ることは絶対にないと断定出来るほどに。
「では、我々は我々の役目を全うしようじゃないか。器はもう心配はいらない。問題は中身だ」
　施設とは真逆の方を向く。その視線の先には最悪の姫の中身がいた。
「悪しき成長は止まらない。摂理に反するのならば、我々も手を出さなくてはならない」
　当然だと言わんばかりにシャドーボクシングを始める道化達。施設でお茶を貰ったからか、２人の情は完全に施設側に向いている。『観測者』の従者だというのに、中立という立場のことはまるで考えて

いないようだった。
「我々は、彼女の断片の排除を優先する。今でこそこの海には存在していないが、何がきっかけで世界にばら撒かれるかは、私にはわからない」
勿論だとサムズアップをする道化達。そして、大袈裟なポーズでそこら中の海を観測し始めた。何処にもそれが無いことを確認し、万が一発見したら即座に排除。
それによって、鎮守府と施設の戦いをサポートすることになる。これでは本当に中立かわからないが、摂理に反するものは全て排除するという方針で、『観測者』はこれからも海を観測していくだろう。

「また会おう、か。ガラにも無いことを言ってしまったか」
クスリと笑い、『観測者』もその役目に戻る。また施設に向かう日は、そう遠くない。

真実を知っても

『そうか、見つかったか』
「ええ、話もすることが出来たわ」
施設からの連絡を受けた提督は、『観測者』が見つかり、かつ情報をいろいろと得ることが出来たことを伝えられた。本日の通信の参加者は、午前中に話せたこともあり、姉妹姫のみ。
今回の件は、施設だけでなく鎮守府も知っておく必要のあるような内容だ。今でこそまだ例の泥が海にばら撒かれているようなことはないが、これ以降にそうされないとは限らない。
対策を知らなければ、最悪な事態に陥ることは確実だ。深海棲艦化した白露があそこまで捻じ曲がるのはわかるが、艦娘に入り込んだ場合どうなってしまうのか見当がつかない。そうならないためにも、早急にそれを伝え、鎮守府でも対策を考えてもらうべきであろう。
「泥は相当危険なモノみたい。彼自身でも排除に動いてくれているほどなんだもの」
『そこまでか……ならば、こちらでも対策をしておきたい。どうすればいいのか教えてもらえるかい』
「ええ、そのためにすぐに連絡させてもらったんだもの。後でこちらから大将さんにも話しておくわぁ」
対処法は至って簡単で、ある程度の火力を持つ砲撃。施設の者達は全員が深海棲艦であるために、駆逐艦でも並ではない火力を叩き出すが、艦娘はそうはいかない。機銃程度ではどうにもならず、駆逐艦の主砲では火力が足りないくらいで考えるべきだ。
そうなると、そもそも主砲を装備出来ない空母と潜水艦、そして火力が基本的に足りない駆逐艦と海防艦は、単独で行動すること自体が危険となる。軽巡洋艦でもどうにか出来るかわからない。
『……なかなか難しい状況になるな。今までのような哨戒メンバーでは危険ということか』
「念には念をとするのなら、そうなっちゃうかもしれないわぁ」
泥が確実に放たれるとは限らない。しかし、放たれないとも限らな

い。そうなると、警戒を厳にする必要はどうしても出てくる。
せっかく重要な情報が伝えられたというのに、警戒せずに飛び込んで大惨事になったら目も当てられない。最悪、ここまで培ってきた信用も何もかもが壊れてしまう。
『助かるよ。これがわかっただけでもいろいろと対策は出来る。出来ることなら全てこちらでどうにか出来ればいいのだが……』
艦娘の力が深海棲艦より若干劣ってしまっているのは、提督も艦娘自身も嫌というほど理解していた。施設側からの増援が無ければ、白露を元に戻すことはおろか、撤退させることすら難しい。ここ最近は負け戦が嵩んできているため、モチベーションにも繋がってしまう。
援軍として鎮守府に滞在している島風が周囲を鼓舞しながら訓練に精を出しているらしいのだが、それでも本当に対処出来るかはわからないのがさらに不安を煽る。
だからといって、施設の者達に頼り過ぎることは絶対に出来ない。戦いを嫌い、平和を望む姉妹達を戦場に駆り立てるのは間違っていること。自分達の力不足のせいでやらせるなんて以ての外だ。
「私達が言えることは少ないかもしれないけれど……きっと、きっと私達には出来なくて、艦娘さん達にしか出来ないことがあるわぁ」
『……ああ、そうであると嬉しいね』
「アンタが艦娘を信じてやらないでどうすんのよ」
飛行場姫も口を出す。負けが込んできて不安になっているのはわかるが、トップである提督はなるべくそういう姿を見せてはいけないだろうと叱咤した。
『勿論信じてるさ。彼女達なら討ち倒してくれる。だが、実力差がありすぎる古鷹と、その裏側にいるかもしれない未だ正体不明の黒幕の存在がある。命を大事にするためにも、慎重に慎重を重ねなくてはいけない』
黒幕の正体という話題が出て、中間棲姫が小さく震えた。注視していなくては気付かないくらいの変化。
この通信の間に、今追っている黒幕、そして対策を講じている泥が、最悪の姫の断片であり、自分がその器であることは伝えるつもりだっ

た。しかし、いざ提督の顔を見ていると、それを話すことに抵抗が出ていたのである。
本人である飛行場姫もそうだが、飛行場姫もなかなか伝えられずにいた。ただでさえ自分のことでも無いのだから、余計な口出しは出来ない。これは、中間棲姫自身が話さなくてはいけない真実。
施設の者達には最初から開き直っているような態度でいることが出来たが、今回の相手は人間だ。いくら信用出来る相手とわかっていても、同胞(はらから)ではない。
特に彼らは最悪の姫について知っており、明確に敵対している。斃したと思っていた相手がこういう形であるとはいえ生きていたと知ったとき、どんな態度を取るかは想像が出来なかった。
「……そのことで、話さなくてはいけないことがあるの」
『どうしたんだい。神妙な顔をして』
テーブルの下では覚悟をしたように強く拳が握られていた。飛行場姫もそこに手を置いて落ち着いてもらう。
そして、『観測者』に伝えられた真実を、提督にも話していく。いつもの雰囲気とは違い、その声も少し小さく感じた。
「私は、貴方達が言う最悪の姫だったみたいなの」
空気が凍りつくような感覚。いきなりの告白に、提督も流石に言葉を失った。もっと回りくどく言った方が良かったのかもしれないが、中間棲姫は気が逸ったか、真っ先に本命を口にしてしまった。
「あー、ここからはアタシが話すわ。お姉が言いたいことはわかるから」
中間棲姫もそこから言葉が紡げなかったようなので、ここからは飛行場姫が代弁していく。
「正確には器。お姉はアンタ達が昔に戦ったヤツではあるらしいんだけど、アンタ達に斃されたのよね？」
『あ、ああ……資料にもそう残っている』
「その時に、器と中身が分かれちゃったらしいのよ。で、お姉は器ってこと。今回の事件の黒幕は、お姉から出ていった中身の方よ」
飛行場姫が淡々と説明し、提督はそれを静かに聞くのみ。

「アンタのことは信用してる。だからお姉も話そうとしたんだと思う。アンタなら、お姉が実はそういうヒトだったって知っても、見る目を変えないと思うもの」
　まるで断言するような飛行場姫の言葉。まだ付き合いを始めてそこまで長くない提督に対してでも、絶対的な信頼を寄せている物言いである。
　直に会ったこともなく、画面越しの関係だとしても、今までの言動――特に春雨や海風、白露の件――で人柄がよくわかっている。だからこそ、彼にこのことを話すことが出来た。
『……僕はね、白露達が行方不明になったときに、実は最悪の姫が生きていて、今の今まで潜伏していたのではないかと考えたんだ』
「あら、まさに大正解だったわけね」
『ああ。だから正直、今の君達の話に驚きが隠せない。まさか疲れているときに出た冗談みたいな想像が正解だったなんてね』
　小さく息を吐いて額を押さえる。
『だからといって、君達との関係を断つことはしない。姉姫が最悪の姫の器であろうとも、今は分離しているのだろう。別人であることは、こう話していて理解しているつもりさ』
　慈悲深い笑みを浮かべる提督。驚きが隠せないことも正直に話し、しかし姉姫が最悪の姫と同一の存在とは考えていないと語る。
　この中間棲姫は裏表がない性格だ。嘘はおろか、隠し事すらしない。今回の件だって、提督に対して話さなくてもいいことだっただろう。黒幕は最悪の姫であり、自分とは別個体であるとでも言っておけばいい。
　それなのに、あえて自分が器だったことを暴露してきたくらいだ。それを隠し続けることを苦しいと考えて、もしかしたらせっかく仲良くなれたのに関係を失うかもしれないと恐れながらも、真実を共有することを優先した。
　そんな相手が、信用出来ない理由はない。それすらも作戦と言われればそうかもしれないが、表情からしてみても、声のトーンからしてみても、裏がないのは丸わかりである。

『僕もそれなりに長く提督をやっているからね。ヒトを見る目はあるつもりだ。姉姫も、もちろん妹姫も、僕は信用に値する相手だと思っている。種族なんて関係ない』

多くの艦娘を従え、さらには誰からも信頼を得ている提督という存在だからこそ、その目は確かなもの。これがブラック鎮守府だったらこうも行かなかっただろうが、この提督はホワイトもホワイトだ。それ故に能力も高い。

『僕からはこれくらいしか言えないが、どうだろうか。端的に言えば、君が元々何であろうが、今はそれではないのだろう。だから、僕達の関係は何も変わらない。それでいいじゃないか』

「ええ、ありがとう。本当に心強い人間さんね」

中間棲姫は少しだけ泣きそうになっていた。無論、提督のことを信用していないわけではない。こう言ってくれると信じて話したところもある。しかし、僅かにでも態度を変えられる可能性もあった。それが一番不安だった。

だが、それは杞憂だったようだ。この提督は、過去のことを全く気にしないでいてくれた。それが中間棲姫にとっては一番嬉しいことだった。

『しかし……最悪の姫の中身、か。それがどういうモノなのかはわからないのかい？』

「ええ。あの『観測者』、そういうところは曖昧に話すのよ」

「泥に感情が乗っちゃってるのは確かなんだけれどねぇ……泥そのものが黒幕なのかどうなのか。概念らしいんだけど……」

そこはまだハッキリしていない。いざ中身と言われても、それがどういう形をしているかは見当がつかない。少なくとも、白露の体内に入り込んだ泥という姿はあるだろうが、それはあくまでも切れ端みたいなものだろう。

何かしらの器を手に入れて活動しているというのが妥当なのだが、その器が何かがわからない。古鷹が器なのではという考えもあったが、『観測者』が言うには、古鷹も白露と同じように侵蝕と混成をされた被害者みたいなもの。つまり、古鷹とは別に存在しているというこ

とである。
　それがどんな姿をしているのかは不明。泥がその場に存在しているだけかもしれないし、誰かしらの艦娘や深海棲艦の身体を使っているかもしれない。そもそも何もないという可能性すらある。
『ここは、我々で調査しよう。大将にもその件を伝えて、全鎮守府で総力を挙げて探し出す』
「くれぐれも……気をつけてちょうだいねぇ」
『ああ。それに、君達のことは公表しないように進めていく。それでいいかい？』
「ええ、私はそれでいいわぁ」
　ある意味、自分の片割れが迷惑をかけているようなものなので、少し気に病んでいるような中間棲姫。飛行場姫もそんな姉の姿を見て、表には出さないくらいに心を痛めていた。
　自分であって自分ではない存在が、世界中に恨みと憎しみを振り撒いていると思うと、気分がいいものではない。自分だけでやっているならまだしも、艦娘すらも利用して摂理に反していくのは、さらによろしくない。
　中間棲姫も、自分に何かが起こるのは別に問題はないのだが、他者が痛い目を見るのは苦しいと考えるタイプだ。だから自分に対する視線は開き直れても、それによって鎮守府が苦しむのは辛い。
『姉姫、僕からなんと言葉をかけていいかはわからないが……だが、あえて言わせてほしい。我々に任せてくれ』
　力強く、提督は宣言した、今までは敵の力に圧倒され続け、撤退に次ぐ撤退ばかりだったが、もうそうはいかない。平和を求める者達から、対策や情報を常に貰っているのだ。それだけの後押しがあって、負け続けは許されない。
　だからといって、力みすぎているわけでもない。いつも通りより少し前に進んで、あくまでも命を大切にしながらも、世界のために戦う。言ってしまえば、鎮守府としてやらねばならないことを懸命にこなしていくのみ。
『君達の平和は、僕達が守る。戦いたくないものが戦うなんて、間違っ

ているからね』

「……ありがとう、提督くん」

真実を知っても、鎮守府は接し方を変えない。そんな相手を見て、施設側はより一層、仲良くなることを誓う。

４人分だからこそ

翌日。施設としては『観測者』と再会出来たことで一段落ついており、また仮初とはいえ平和な時間がやってきた。いつまた戦いに巻き込まれるかわからない上に、その戦いの火種は全く無関係なものではない。とはいえ、束の間の静かな時間は有意義に使いたいと思うのはヒトの性（さが）である。

「何があるかわからないから、しばらくは私が近場をグルッと回ってくるわ。哨戒くらいはした方がいいでしょ」

みんなで揃っての朝食中、ようやく本調子へと戻った戦艦棲姫が姉妹姫へと提案した。戦艦棲姫の火力ならば、万が一泥が近海にあったとしても吹き飛ばすことが可能であり、充分すぎるほどの熟練者であるために心配もほとんどない。

だからといって安心してはいけないため、戦艦棲姫の哨戒には誰かしらがついていくことにはなるだろう。１人だとどうにもならなくとも、２人いれば解決出来ることが多い。３人になればもっとだ。

「じゃあ、よろしくお願いしていいかしらぁ」

「ええ、それくらいやらせてもらうわ。出て行くって言っときながら戻ってきて、なんだかんだまた長居させてもらってるんだもの。何かしらやっておかないと立場が無いわ」

「別に気にしなくてもいいのに。賑やかなのは楽しいわぁ」

結局、戦艦棲姫は次の旅路を保留している状態。この施設ならば何も心配はいらないとは思うが、戦いを好まない者達のために、本調子に戻った今、自分が率先して動くべきと判断したようである。

戦いが無いなら無いでいい。そうこうしている間に鎮守府が解決してくれれば尚更だ。安心出来るまでは、この施設のために行動するべき時期では無いかと考えている。

それに喜ぶのはやはり春雨だ。ここ最近は海風や白露まで加入したことにより寂しさの発作は起きていないが、単純に仲間が増えるというだけでも喜ばしい。発作はさらに遠退く。

「Ｎｏｕｒｒｉｔｕｒｅ（食糧）のＳｔｏｃｋ（在庫）は大丈夫かしら。少なくなって

るならＥｘｐ（遠）・ｄｉｔｉｏｎ（征）に行くわよ」
「そうねぇ。提督くんと大将さんから贈り物を貰ったりしてるから、まだ大丈夫ねぇ。それに、今ここから離れるのは少し怖いかもしれないわぁ」
「そう、それならいいわ」
　それを聞いたのはリシュリュー。この施設が１００％の平和では無くなりつつあるため、コマンダン・テストの発作が立て続けに起きていることを憂いての発言だった。
　最後に運び込まれた白露が、超回復のおかげであっという間に本調子になっているおかげで、今でこそコマンダン・テストも体調を崩さずに済んでいるものの、またいつ巻き込まれるかわからない状況。
　一旦施設から離した方がいいのでは無いだろうかとも考えたものの、今こんな状態で施設から出ていくのも抵抗があったりする。単独行動というわけでは無いにしろ、ここにいることと、陸に行くの、どちらが平和かと言われれば、誰も答えられない。故に、まだ食糧が潤沢に残っているのなら遠征はやめておく。
「私達は、今まで通り過ごしていきましょう。提督くんが、私達の平和を守ってくれるって言ってくれたんだもの」
「そう言ってくれてんのに、こっちが信用せずに動くのもね。哨戒くらいはするけど、基本はあの人を信じるわ」
　昨日の鎮守府との通信で、提督が最後に言い放った言葉が、姉妹姫には強く心に残っているようだった。
　今でこそ敗走が続く鎮守府だが、だからといって諦めることはしていない。突破口は必ずあると、今でも常に対策を練り続けている。努力と根性なんていう精神論でどうにか出来る相手では無いが、気持ちが折れていないのならまだ負けていない。
「だから、今日からはまた、いつも通りに過ごすことにしたの。どうかしらぁ」
　中間棲姫の言葉に、全員が納得した。特に、元々あちらの鎮守府で過ごしていた春雨達は、提督の意思を尊重してもらえたことに心の中で喜んでいた。

復讐の相手が定まったものの、今どこにいるかもわからないという叢雲も、今はいつも通り過ごすことには同意した。怒りは燻ったままではあるものの、多少なら冷静に行動は出来るようになっているため、無理して動き回って消耗するよりは、施設でその時が来るまで待ち構えた方が建設的と判断したようだ。
「それじゃあ、今日も作業をお願いねぇ。農作業は今日はお休みでいいわぁ」
「漁も今日は大丈夫よ。魚は大分あるから、これだけの人数いても充分振る舞えるわ」
そうなると、やることは掃除くらいになる。施設内も施設外も、やるところは多い。
「あ、そうだ。じゃあまたＭｉｃｈｅｌｌｅを洗ってあげてもいいかしら。その時にシラツユもＭｉｃｈｅｌｌｅに紹介してあげたいわ！」
ジェーナスの無邪気な発言だが、白露的にはそれが本当に大丈夫かわからなかった。
ミシェルをミシェルにした張本人が白露である可能性が非常に高い。その姿を見たら、髪飾りを見たとき以上の発作を起こしてしまうかもしれないと思うと、本当に顔を合わせて大丈夫かと考えてしまう。
「あ、あのねジェーナスちゃん、白露姉さんはちょっとまずいかも……」
「どうして？　シラツユも施設の一員、ならＭｉｃｈｅｌｌｅの仲間よ？」
「また発作を起こしかねませんが」
春雨は抵抗があったが、海風にはその辺りの抵抗がない。白露がミシェルに不意打ちを喰らわせた張本人であると躊躇いなく言い放った。
ジェーナスもすぐに察した。今でこそ白露はここにいるし、施設の全員から認められる存在になっているが、泥のせいでやらされていたことは変えようのない事実。そしてミシェルはその被害者の１人で

ある。
「あ、あー……でも、顔を合わせないってとっても悲しいことだと思うの」
「そうかもしれないけど、そのミシェルって子が苦しむのはあたし的にも辛いんだよね」
白露本人も悲しそうに笑う。白露としても、自分が嫌われるのは何ら問題が無いとは思っているようだが、自分のせいで他人が苦しむのは気分が悪い様子。
「んぐっ、これでもしミシェルが発作起こしたら、アンタも確実に発作起こすでしょ。無理言うんじゃないわよ」
そこで叢雲もモフモフ食べながらジェーナスに言い放つ。
ミシェルと白露を近付けたいと考えて行動を起こした結果、ミシェルが発作を起こしたとしたら、まず間違いなく自己嫌悪が膨れ上がってしまう。自分がこんなことを言い出さなければと考え、周囲に迷惑をかけた自分なんてに繋がり、そしてそのまま死を望む発作へ。
「んじゃあよぉ、白露ってわかんねぇくらいに変装してみたらどうよ」
その話を聞いていた竹が提案。白露が白露とわからなくなるくらいに変装すれば、ミシェルも自分をそうした本人であるとは気付かずに済むのではないかと。
髪飾りのように明確な物は、見た瞬間発作を起こした。だが、ミシェルの溢れた感情は『疑問』であるため、見た目から違う姿だった場合、白露を自分を殺害した者と判断出来なくなるかもしれない。
「んー、まぁ多分出来ないことはないよ。あたしは白露であって妹達でもあるから……」
艤装を作るようにいろいろと自分を弄った結果、簡単ではあるが変装は成功した。
今回はミシェルと一緒に行動することも考え、釣り好きだった村雨の姿を取った。下ろしていた髪は2つに結び、被っていなかった帽子も被る。それだけで大分白露っぽさが失われている。着ているものは一切変えていないのに、大分雰囲気が違った。
やはり4人が混じり合っているというのは、記憶や技能だけでな

く、雰囲気もらしい。そんな白露の姿を見て、春雨も海風も、白露ではなく村雨がそこにいると感じる程だった。
「んんっ、こほん、はいはーい、白露じゃなくって、村雨だよっ」
声までしっかり似せてきた。声を聞いてもミシェルは反応してしまうかもしれないため、それを考慮した結果がこの声帯模写。姉妹であるため、最初からある程度声は似ていたところはあったが、いざ似せてみたら本人と言っても過言では無いレベルになっていた。
「混ざり合うってこんなことが出来るのね。ちょっと驚いたわ」
これには飛行場姫も驚きを隠せなかった。見た目を弄ることが出来るのは、別に深海棲艦だからとかそういうのは全く関係ない。変装なんて人間でも出来る技能だ。だが、内から外からほぼ本人になれるというのは、今は白露にしか出来ないことだろう。
白露は白露であり、時雨であり、村雨であり、夕立である。白露はその基礎、主人格と言えばいいだろう。混じり合っているうちの１つの姿になるのは、意識さえしてみれば簡単なことなのかもしれない。
「あたしもこんなに簡単に出来ると思ってなかった。あ、大丈夫、モノマネしてるだけであたしは白露だから」
「そこは変わらないんですね。ちょっと安心しました。多重人格みたいな感じになっちゃうのかなって」
「いやー、それはまたちょっと違うね。だってあたし達、本当に全部混じり合っちゃってるんだもん、そういう意味では白露でも無いかもしれないね」
たははと笑うが、結構重いことである。人格も記憶も何もかもが混ざり合っているというのは、突然あることないことを思い出して混乱することだってあり得るのだ。
それなのに正気でいられる白露は、主人格となるに相応しい精神力を持っているといえよう。
「これならＭｉｃｈｅｌｌｅとも顔を合わせられるわよね！」
「大丈夫だといいけど、さっきよりはマシなんじゃないかな？」
「それなら、シラツユもＭｉｃｈｅｌｌｅと一緒に遊びましょ！　みんなでｂｒｕｓｈとか使ってＭｉｃｈｅｌｌｅを洗ってあげるのよ

！」
「お、おー……なんか艤装を洗浄するみたいな感じだ」
白露の変装に大興奮のジェーナス。これならミシェルが発作を起こすことも無いと大喜びである。
「それじゃあ、今日も1日よろしくお願いねぇ」
日程は決まり、また1日が始まる。ここ最近は波乱だらけであった施設の朝も、久しぶりにのんびりとしたものとなった。

予定通り、駆逐艦達はミシェルの待つ岸へと向かう。ただし、今回は松竹姉妹は戦艦棲姫の哨戒に便乗するため欠席。
「洗浄だからみんな水着ってことね」
「どうしても濡れちゃいますからね」
向かっていく中でも、既に全員水着姿になっていた。白露も例に漏れず、見様見真似で水着に。両脚が艤装な春雨や、右腕が艤装な海風とは違い、白露は同じ白露型でも身体には何も無い。
「……アンタ、水着なのにマフラー取らないの」
叢雲が訝しげに言う。白露は今から濡れる仕事だというのに、マフラーだけは身につけたままだった。
「いやー、これはあたしの中の夕立がそういうのだったからなんだよね。あの子、何するにもこのマフラー巻きっぱなしでさ」
「流石に雨合羽着ている時は巻いてませんでしたよ」
「でもそれ以外は巻いてたじゃん。だからかな、これ巻いてないと落ち着かないんだよね。だから気にしないで」
頭は村雨、マフラーは夕立。そして水着は以前時雨が身につけていたパーカーとパレオ。そして肉体自体は白露と、姉4人の融合を水着姿でも披露。春雨と海風からしてみれば、少し複雑。
しかし、海風は白露のそれにも反応はあったが、それ以上に春雨の水着姿を凝視していたことは言うまでも無い。
「とにかく、あたしもちゃんと施設の一員としてミシェルとお付き合い出来るように努力すっからさ、格好は言いっこなしでよろしくどう

ぞ」
「はいはい。仕事さえしてくれればいいわよ」
「ふふ、叢雲姉さんも、白露ちゃんのことしっかり認めてますもんね」
「薄雲、余計なこと言うな」
相変わらずプリプリしている叢雲に苦笑しつつ、岸に到着。そこには既にミシェルが待ち構えており、ジェーナスが駆けていくと同時に喜んでいるように身体を震わせていた。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、今日は新しいＢｕｄｄｙ（仲間）を紹介するわ！」
ジェーナスが引っ張るように白露をミシェルの前に連れ出した。若干緊張しつつも、抵抗せずに前に立った白露。
「よろしくミシェル。昨日からここの一員になったんだ」
声をかけても、発作を起こす予兆は見えない。あくまでも新しい仲間だと思ったようで、歓迎するかのように身体を揺らした。
ミシェルは発作も起こすことはなかった。自分を殺した相手とは思ってもいなかったようだった。

ひとまずは乗り越えた白露とミシェルの問題。しかし、それは本当に正しい手段なのかはわからない。あくまでも、白露は自身を多少偽って接しているのだ。
とはいえ、施設の平和はそれで保たれるため、白露は喜んでこの変装を受け入れていた。変装とも思っていないのだから。
余計なことが起きなければ、この仲も壊されるようなことはないだろう。

束の間の平和

ミシェルの洗浄作業は、ジェーナスが慣れてきていることもあってかなり早く終わる。まるで洗車のようなその作業も、みんなで集まって同じことをするというだけでも楽しいもの。一番の新人で、早くこの施設に馴染みたい白露も、この作業を通してより一層仲間意識を高めることが出来た。

「さすがにこういうことするのは初めてだよ。結構疲れるねぇ」

やり切ったという顔で額の汗を拭く白露。馴染むためにもと、ジェーナスに次いで力を入れていたと誰もがわかるくらいだった。

そうしている間にミシェルに白露の正体がバレるということも無かった。髪を結んでいるだけでも大分印象が変わるが、もっと良かったのは夕立のマフラーだった様子。当時身につけないようなものがあったことで、より白露には見えなかった。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅも嬉しそうにしてるわ。ね！」

みんなに磨かれたミシェルは、太陽の光でキラキラと輝いて見えた。白露の磨き方はミシェルにとっては最高に気持ち良かったらしく、それはもう喜んでいるように身体を揺らす。

感情表現が一層わかりやすくなったようで、ほとんど初めて見るような白露でも、ミシェルが何を考えて何を訴えたいのかは手を取るようにわかった。それくらい大袈裟で、かつ心の底からの感情を表に出している。

「本当だねぇ。喜んでもらえてよかったよ」

綺麗になったミシェルの額を撫でてやると、嬉しそうに白露に身を寄せた。誰がどう見ても仲の良い２人である。ジェーナスも満足げ。

「……発作は起こさないみたいだね」

ミシェルに聞こえないように、ボソリと呟く春雨。結局、ミシェルは今の白露を見ても発作を一度も起こすことはなかった。わからなくなってしまった自分の過去に繋がる存在であることには気付いておらず、ただ増えた仲間であるという認識となっている。

白露が村雨に変装した状態で接しているおかげというのもあるだ

ろう。心持ちはミシェルがミシェルとなったその時とはまるで違うし、今は姿すら変えている。ただでさえ『疑問』が根幹にあるミシェルには、その時の白露と一致させるのは難しい。
「ですね。白露姉さん、あれなら仲良くなれそうです」
「よかったよかった。でも、騙してるみたいに感じてそうだから、後から姉さんの方もケアしておかないとね」
「はい」
実際、やっていることは素性を隠して接しているのだから、ミシェルを騙していると言われても何も文句は言えない。しかし、それを包み隠さず伝えた場合、ミシェルがどうなるかわからないというのもある。
正直なところ、どの選択がいいのかはさっぱりわからないのである。最初から会わないというのがベストだったかもしれないが。
「姉さんも施設の一員なんだもんね。辛いかもしれないけど……やっぱり全員と楽しく生きていける方がいいよ。素性は隠すことになるかもしれないけれど、その方が丸く収まるなら……」
「白露姉さんのことをそんなに気にかけて……本当に春雨姉さんは慈悲深いですね。誰にでも分け隔てなく愛を振り撒く姿は、流石としか言いようがありません」
ニコニコしながら語る海風に、春雨も大分慣れてきていた。
「まだまだ時間もあるし、Ｍｉｃｈｅｌｌｅと遊びましょ！　最近いろいろありすぎなんだから、Ｒｅｌａｘ（気休め）は必要よ！」
ジェーナスの提案に、全員が賛成。叢雲は最初はやはり渋ったが、薄雲が手を引っ張るために仕方ないと遊びに参加する。
遊びと言っても何をするでもなく、適当に島の周囲を駆け回ったり、そこから追いかけっこや水の掛け合いになったりするのみ。ただ、そうしているだけでも心が休まる。
何も無い今だけは、そんな緩く穏やかな時間を楽しむ余裕があってもいいだろう。戦いで心が擦り切れ消耗するより、遊んで疲れている方が有意義だ。

そろそろ昼食時というタイミングで、施設近海を哨戒に出ていた戦艦棲姫一行も帰投。施設が見える範囲で一通りグルッと一周回り、何も無いことを確認したとのこと。
松竹姉妹も同行していたが、一緒に伊４７も便乗していたらしく、海の上と下両方に注意しながらの確認となった。一度伊４７が海中に漂う泥を見てしまっているため、今度はそういう形で設置されている可能性も加味していた。
哨戒部隊の帰投を出迎えた姉妹姫は、少なくとも何も無いことが確認出来たため、ひとまず安心。
「ひとまずは何も無かったわ。昨日の今日だもの、簡単に何か出来るとは思えないわね」
久しぶりに海を駆けたからか、何処か楽しんできたような声色の戦艦棲姫。やはり、海の上にいることの方が気分が落ち着くらしい。旅人として活動しているのはそれもあるからのようだ。
「私達も戦艦さんと一緒に見てたけど、静かな海だったわ」
「おう、前までと同じ何にも無ぇ海だったぜ」
松竹姉妹からも保証されるくらい、今の海は戦いなんて感じさせることのない静かさ。
「海の中も何にも無かったヨナ。あんな怖いのは微塵も無かったヨナ」
伊４７も海中は異常無しと断定。特に酷い目に遭っているため泥に対しては脅威を感じているので、海上の３人以上に目を皿にして確認し続けていたほどだ。
その伊４７が海中は大丈夫だというのだが、この周辺には本当に何もないということだ。
「よかったわぁ。すぐに何かされるようだったら、平和とは程遠くなっちゃうものねぇ」
「ホント、迷惑な話ね。アタシ達はここで静かに暮らしたいだけだってのに」
「一応今は平和が戻ってきているから、たっぷり堪能しましょうねぇ」

それが嵐の前の静けさと感じるかどうかはヒトそれぞれだが、少なくとも施設には、久しぶりに舞い戻ってきた束の間の平和である。心を穏やかにし、心身共に休息を取る貴重な時間。以前までは毎日のようにこんな時間が過ごせたのだが、この数週間でこの施設を取り巻く環境があまりにも変わりすぎている。

ようやく全員が本調子に戻り、戦いの傷痕が無くなったくらいに思えるようにはなってきたものの、いつまた同じことが起きるかビクビクしながら待ち構えるのは、精神衛生上あまりよろしくない。

「次に行くときは少し遠くまで見に行くようにするわ。今はまだ施設から見える範囲だったから」

「そうね。それくらいの距離だと、アタシやコマが自分の目で見れる範囲だものね」

「前の戦場くらいにまでは足を延ばそうかしら」

施設近海にまで来られていたら、流石にお話にならない。むしろ、誰かが来たら叢雲の感知が発揮されるし、本当に悪いことなら春雨が虫の報せを受けることだろう。

次に哨戒をするときは、時間をかけてでも叢雲の感知外まで向かうということに決まった。かなり遠いところになるため、1日で周辺全部というわけにはいかないが、時間はまだまだある。それまでに解決してくれれば何も問題はないし、そうで無くても施設だけは確実に守る。

「基本的には私が行くわ。他に来たい子がいたら自己申告でお願い。毎回同じメンバーでも別に構わないけど」

「そこは当番制でもいいかもしれないわねぇ。哨戒っていうと物々しいけど、ちょっと遠くまでお散歩に行くってことなら、みんなやりたがりそうだしねぇ」

「そうね。気分転換にはちょうどいいかもしれないわ」

施設に住まうにしても、海の上を駆け回ることはそれだけで気分転換になる。海で生まれたものなのだから、海の上が落ち着くのは自明の理。陸上施設型の姉妹姫には少しわからない感覚ではあるのだが、定期的に海に出るのは精神的にもいいことかもしれない。

「そんじゃ、次も誰かが２人１組で戦艦さんに便乗するって感じでいいんじゃねぇかな。人数的にもわちゃわちゃ行くのはアレだし」
「そうね。海の上は私と竹でちょうどいいくらいだと思ったから、これくらいでいいと思うわ」
　戦艦棲姫も合わせて３人１組、そこに伊４７が加わることが最も効率がいいと松竹姉妹が話す。３人いれば３６０度確認出来て、海中も網羅しているおかげで漏れはないはず。
　強いて言うなら、海中が伊４７しかいないのが難点になる程度なのだが、伊４７の張り切り方が他の面々と違うために、１人でも賄えていたりする。
「アタシ達とリシュリュー、あとコマは島の上から周囲を見回すくらいはしておくわ。遠くの方は駆逐艦の子達に行ってもらいましょ」
「ええ、問題無いわ。万が一泥があっても、私が吹っ飛ばしてあげる」
「心強いわねぇ。でも、気をつけてちょうだいね。貴女だって、私達の心強い仲間なんだもの。傷付くのは見たくないわぁ」
　ただでさえ大怪我を負ってこの施設に運び込まれた経緯があるのだ。何度も何度も傷付く姿を、中間棲姫は見たくないと訴えた。
　対する戦艦棲姫も、次はああは行かないとやる気満々。そもそも戦わないに越したことはないのだが、次があるのなら容赦なく沈めるつもりで行くと宣言した。
「午後からも行くつもりなんでしょう？」
「ええ、勿論。出来ることなら夜にだって見回りたいくらいよ」
「それはダメよぉ。夜は英気を養う時間。グッスリ休んでしっかり疲れを取ってちょうだいねぇ」
　流石に哨戒は明るいうちにのみ。夜の散歩というのも乙なものかもしれないが、それで休息が出来なかったら意味がない。最初のうちはピンピンしていても、いずれ倒れるだろう。それが深海棲艦だったとしても、無理が祟る可能性は充分にあり得る。
　戦艦棲姫が夜もやりたいと言っているのは、自分が古鷹と白露から夜襲を受けているからである。あちらは昼夜問わず動き回っているので、それこそ夜に施設を襲撃してくる可能性だってあるのだ。

実際はまだこの施設の場所は誰にもバレてはいないのだが、脅威として認識し、注意するに越したことはない。突然発見されて大変な目に遭ったら目も当てられないのだから。
「ま、ここの主人の言うことはちゃんと聞くわよ。私だって居候みたいなものなんだから」
「みたいなものじゃなく、そのまま居候じゃないの。というか、アタシ達としてはもう一員よ」
「妹ちゃんの言う通り、戦艦ちゃんはもう私達の仲間、施設の一員だもの。でも言うことを聞けって言うわけじゃあ無いわぁ。危ないことはやめてほしいってだけよぉ」
「結構な強制力あるわよそれ。でも従うわ。私だって危ない目に遭うのは真っ平御免だもの」
危険なことにそこまで足を突っ込まず、施設の平和を守り続ける。それが施設の者達の願いだ。
勿論鎮守府のことだって心配ではあるが、いの一番に守らなくてはいけないのはこの施設である。居場所が無くなったらどうにもならない。
「まあまあ、難しいことは後にして、飯食いに行こうぜ。俺腹減っちまったよ」
「もう、竹ったら。でも、ここで立ち話よりは、お昼ご飯を食べながらこれからのことを決めて行った方がいいと思いますよ」
「そうねぇ。お腹が空いていたらまともな意見も集まらないでしょうし、食べながらでもいいでしょう。他の子達にも方針を伝えなくちゃいけないしねぇ。みんな、施設に入ってちょうだいねぇ」
この話は一旦切り上げる。今回の件は、施設の者全員で周知する必要のある内容だ。

施設の平和のためにも、今は一丸となって行動に移すときになっているだろう。そしてそれは、誰も反発するようなことはない。誰だって平和を求めているのだから。

それが束の間の平和だとしても、それを維持出来るように、全力で生きていく。それが楽しければ尚更いい。

最高の後ろ盾

施設側が平和を維持するために行動を起こしている頃、鎮守府の方でもいろいろと準備が始まっていた。今は既にわかっている敵である古鷹と、未だ姿はわからない黒幕である最悪の姫の魂への対策を練っているところだ。先日の戦いから全員の入渠も終わっているため、改めて対策会議が開かれている。

黒幕の方はさておき、当面の問題は強大な力を持つ古鷹。鎮守府ではトップクラスの力を持つ金剛や比叡、さらには大将の援軍である島風、そして施設の叢雲が加わった４人がかりでも手も足も出ず、あちらは無傷で疲れすら見せていない。これは大問題である。

一応、松竹姉妹による総攻撃を受けたことで撤退を選択してはいたものの、まだまだ余裕はあった。姉妹のことを格上とは言っていたようだが、雰囲気からして一切本気を出していない。

「困ったものデス。まるで戦艦レ級を相手にしているみたいでしたネー」

「あれは、恐ろしく賢いレ級という感じでした……お姉さまも私も手も足も出ないなんて……」

金剛が言う戦艦レ級は、イロハ級の順列を与えられた雑多な兵隊の中で、屈指の力を持つ存在。数が少ないために精鋭であろうそれは、戦艦という名目ではあるものの、古鷹と同様に航空戦と雷撃を仕掛けてくるトンデモ戦力である。

しかし、古鷹はレ級とは比べ物にならない程に強い。何故なら、レ級は明らかに賢くないからである。ただの戦闘狂であり、真正面から圧倒的な力を振るって突撃してくるのみであるため、その火力にさえ気をつければ手も足も出る相手である。

「重巡なのに火力も深海の戦艦並みだったよねー。それに、すごく速かった。私の攻撃も当たんなかったもん」

島風も忌々しそうに呟く。スピードに自信がある島風が速いと言うくらいなのだから、古鷹はその全てが艦娘以上のスペックを誇っているのだろう。

火力は戦艦、スピードは島風と同じかそれ以上。そして何人分かの能力すら持っている。1人を相手取っているのに、4人はいるようだった。
「速すぎて空母があまり役に立たないんですよね……絨毯爆撃が出来ればまた変わるかもしれませんが」
「そんなことやっちゃったら、みんなに迷惑がかかっちゃいそうだもんね」
千歳と千代田も、今回の戦いでは周囲の敵部隊を蹴散らすくらいしか仕事が無かったことを悔やんでいた。絨毯爆撃なんてやろうものなら、あのとき最も近くに寄っていた比叡と叢雲が巻き込まれて大変なことになっていただろう。
「全てのスペックのトップクラスを1人に掻き集めている、と考えればいいのか」
「Ｙｅｓ．　それが一番わかりやすいデス。しかも、トップクラスを1段階上に上げてるくらいに考えるべきデス」
「白露と比べると別格だよアレ。どっちともやった私は身に染みてる」
白露も相当なモノではあった。4人分が混じり合っているだけあり、春雨と海風の救援と、未だ知らぬ渾身の一撃が入ったことでどうにかなったに過ぎない。知れば知るほど強化されていく白露は、あそこで倒せなかったら古鷹並みかそれ以上に厄介な敵になっていただろう。初見の島風相手でも対応されたのに、そもそも手の内がバレている鎮守府の艦娘達は、白露にも勝つことが出来なかった。
それでも古鷹は別格となると、それこそ勝ち筋は1つも見えないのではないか。何かやっても即対応される。
「でもでも、絶対何処かに弱点があるよ」
「島風としては、何が弱点に見えました力？」
「うーん、例えば、あんなに有利だったのにさっさと帰ったから、実は体力が無いとか。アレだけやれるんなら、燃費が酷くてもおかしくなくない？」
一切の疲れを見せていなかったのに何をと考えたものの、金剛はそ

の意見を一蹴するわけでもなく、そうかもしれないと考え込む。
実際、戦いの最中も余裕で、表情に疲れなども一切出していなかったのに、あんなタイミングであっさり帰ったのは少し疑問ではあった。いくら松竹姉妹が古鷹よりも格上だったとしても、軽々と回避していたのは確かだし、何故か反撃しなかったくらいだ。
疲れを見せていないのは演技だったのか、それとも、本当にギリギリまで表情に出ないタイプなのか。もしくは本当に疲れていなかったのか。
「全力を出せと言っても手を抜いていた気がしマース。島風のそれ、もしかしたら当たってるかもデース」
「だよね。むしろそれくらいしか穴が見えないよ。それが無かったら、本当に完全無欠になっちゃう」
何処の誰にでも長所があれば短所もあるはずだ。あっちが立てばこっちが立たぬというのが常。全部出来るということは、何処かに皺寄せが行くのでは無かろうか。
「……島風さんの言うこと、あながち間違いではないかも知れません」
ボソリと、非戦闘員であるが故に一歩引いた位置から話を聞いていた宗谷が呟く。
あの時の戦いでは、戦えないために逃げ回っていた宗谷だが、持ち前の調査能力を使って古鷹のことを見ていたのだ。必要なくなるかも知れないし、焦りながらの観察だったために正確ではないかも知れないが、ほんの少しだけ違和感を覚えたところを話す。
「どちらかといえば受動的な戦い方をしていたように見えます。必要な時にのみ自分から動くというか……」
「なるべく体力を温存するようにということか」
「はい……私が慌てながら見ていたことなので、信憑性はそこまでですが」
比叡は突撃を受けているが、それ以外では基本的に自分から向かっていくようなことはなかった。激しい動きを極力抑えているように見える。
考えてみれば、まず白露を突っ込ませるのもそれが理由なのではと

考えた。あの場では突撃したことを説教するなんて言っていたが、体力温存のために容認している可能性もあった。
「宗谷姉ちゃんが言うんだから間違いないよ。戦ってる私達より見れてるもん。だから、弱点はそれ！」
島風が断言。宗谷の言うことは基本的には正解であるという認識。
「ふむ、では持久戦の方が有効ということになるのか」
「かもしれないデース。でも、その分攻撃は猛烈デース」
「アレ相手にどれだけ耐えられるかもありますよね……」
砲撃を刀剣で弾き続ける羽目になった比叡には、あれを耐え続けるのはかなり厳しいと感じた。
比叡でそれなら、他の者はさらに厳しい。金剛は変形させたシールドで食い止めることが出来るかもしれないが、それでもあの戦いの後は艤装もボロボロにされている。
などと話し合っていると、会議室の扉をノックする音。
「提督、お客様が」
「ああ、もうそこに来ているのかな。入ってもらってくれ」
その声は大淀。提督はこのタイミングでの客に見当がついたが、他の者達はこの会議に割り込む形で入ってきた客に怪訝な表情を浮かべる。
この対策会議よりも大切な客、むしろ対策会議の場に入ってくるような客。そうなると、大概誰が来たかはわかるものである。
「直接はお久しぶりね。端末越しではよく話していた気がするけれど」
その来客は大将である。秘書艦の吹雪に支えられながらも、会議室に入ってきた。
その姿を見た鎮守府所属の艦娘は驚きを隠せなかった。むしろ緊張が走る。逆に島風は満面の笑みで手を振って歓迎した。
「おばあちゃん！」
「島風、元気にやれてるようで何よりだわ。宗谷も力になれているようね」
「はい、おかげさまで」

流石に抱きつくなどは出来ないため、吹雪の支えで椅子に座るのを手伝うだけに止める。
何故そんな大物がこの場所に突然現れたのかと騒つく一同。何故教えてくれなかったのだと疑問の視線を送る金剛のそれを尻目に、提督は大将に先程まで話していた古鷹対策について説明する。
「そう、持久戦を」
「はい。勿論、攻勢に出られるならそれに越したことは無いと思うんですが、消耗を強いるためにも、耐久力の増強は必要不可欠かと思います」
それならば、と大将は今回ここに来た目的を話す。
「私がここに来たのは、この鎮守府で試作兵装のテストをしてもらうため。ここまで強力な敵が現れるとは思っていなかったけれど、持久戦というのなら有効かもしれないわ」
そう言うと、吹雪に合図。小さく頷き、後ろ手に持っていた鞄から書類を取り出して並べる。
そこに記載されていたのは、専門の者でなければ読み解くことが出来なそうな計算式の羅列。そしてその真ん中に、金属のイラストと艤装への組み込みのような図が描かれていた。
「新たな艤装用合金よ。ここで言えば、金剛と比叡に必要な物だと思うわ」
「今まで以上に強固で、攻守どちらにも使えるという話だ。金剛のシールドと比叡の刀剣に練り込めば、前回のようには行かなくなるはずだ」
だからといって今までよりも重くなるのかと言われればそうでもなく、むしろ少し軽くなるほどらしい。そんな合金を裏で開発していたとは、艦娘の誰も聞いていなかった。
それもそのはず、これはここ最近ようやく完成した第一号である。艦娘のそれよりも強固な深海棲艦の装甲を解析し、艦娘でも扱えるようになるようにデメリットを排除して再現した、いわば擬似深海合金と言える至高の一品。
ちなみにこの兵装の最大のデメリットは、生産コストである。金剛

と比叡のために使う合金で、鎮守府１つの艦娘の艤装が全て生産出来るくらいなのだから笑えない。
「攻撃に使えばありとあらゆるものを斬り裂く矛に、防御に使えばありとあらゆる攻撃を防ぐ盾になるでしょう。貴女達にピッタリだと思うのだけど」
「Ｙｅｓ！　これなら打倒古鷹もやりやすくなりマース！」
「はい！　お姉さまと私が、前線でみんなを守れます！」
　金剛と比叡の新装備に関しては、既に今工廠に深海合金が持ち込まれたことで実装中。組み込むだけならばそこまで時間がかからないらしく、今日中にはそれを使って戦えるようになるとのこと。
「でも、２人だけが強くなっても意味が無いわよね。だから、いろいろと最新鋭の装備を持ってきたわ」
「通信でも話しましたけど、そこまで力を貸してもらっていいんですか？」
「ここは乗り越えなければいけない正念場でしょう。それに、姉姫達の平和を守るためにも力を尽くす必要はあるわ。出し惜しみしている場合ではないの」
　大将も、姉姫達の手を煩わせることなく、今回の一件を終わらせたいと思ってくれているようだった。それ故に、解決に向かって出せる力は全て出し、惜しむことなく投資する。
　大将がそう言うということは、これは大本営の総意と考えてもいい。この鎮守府が巻き込まれたこの事件は、今後の深海棲艦との戦いに大きな変化を齎す可能性があると考えられたのだ。
「勿論、これだけじゃ終わらないわ。新しい装備をただ渡されただけでは意味が無いでしょう。演習のための人員も連れてきているわ」
「何から何まで……ありがとうございます」
「いいのよ。私も姉姫達の平和を望む者だもの。戦いを避けたい者達を駆り出すなんて言語道断。なら、全力で私達だけで戦わなくちゃいけない」
　大将も提督と同じ気持ちでこの戦場に立っている。施設の者達がいくら深海棲艦だとしても、平和を望むのならその思いを尊重しなく

てはいけない。戦いたくないものと戦う趣味はないし、仲間だからといって共闘を強要するわけもない。
演習くらいなら手伝ってもらえるかもという淡い期待も、それが戦いに繋がるのなら避けるべきだと考え、あくまでも艦娘のみでの対策で決戦に挑む予定である。
「抗うわよ。そんな摂理に反しているような輩の襲撃なんて」
「勿論。我々は全力で抵抗し、それを上回らなくてはいけない」
「そのためなら、大本営は協力を惜しまないからそのつもりで」

これ以上ない後ろ盾を得て、鎮守府は対古鷹への準備を進める。その時は近付いてきているのだ。

海の記憶

午後。午前と同じように、戦艦棲姫先導で施設近海を哨戒。今回の便乗は、春雨と海風。海中では相変わらず伊４７も確認している。

午前中は施設が見える範囲内で周囲３６０度全てを見て回ったが、この午後からは施設が見えなくなるくらいまで遠くに行く代わりに、1方向を重点的に見ていくという流れとなっている。

「あまりこっちの方はいい思い出が無いわね……」

「はい……」

戦艦棲姫と海風が少しだけ項垂れる。向かっているのは、戦艦棲姫が襲撃を受けた島が近い場所であり、さらに先に行けば海風が黒い繭となった現場に行き着く。

春雨もそこでは白露と相討ちして聴覚を一時的に失うという重傷を負っているため、2人ほどでは無いがいい思い出があるとは言えない。哨戒中だというのに、若干げんなりしている。

「こういうところにも現れる可能性があるってわけだし、ちゃんと見ておかないと行けないわね」

一度ならず二度も古鷹が現れているような場所であるため、もしかしたら拠点なり何なりが近くにあるのかもしれない。とはいえ、深入りは禁物。あくまでも施設に対して何も無いことを調査するのがこの哨戒の目的だ。

直接ここに来られても困りはするが、ここにいつでも立ち寄れるような場所に居を構えており、いつでもこの周辺に泥をばら撒くことが出来ると言われたらもう目も当てられない。

とはいえ、この海域は施設から見てほぼ逆方向と言えるような場所。この海域に泥がばら撒かれるようなことがあっても、施設にそれが行き着くまでには、施設からわかる位置に来るだろう。大回りされたら話は別だが。

「見ているだけでは何もわかりませんね」

「そうですね。姉さんがわからないものを私如きがわかるわけが無いんですが、やはり何も見えません」

「私もここでは何も見えないわ。この子もみたい」
戦艦棲姫は自身の艤装を撫でる。それも含めると、海上は４人分の目がある状態だ。見逃すものなど無い。
広がるのはただの海。今は戦艦棲姫が傷を負って潜んでいた島も視界に入らない場所のため、周囲全てが水平線である。視界が開けすぎていると言っても過言では無い。
それで普通海に無いようなものが漂っていないかを見ているところなのだが、やはり何も見当たらなかった。それは普通に喜ばしいもの。
「ヨナの方はどうかしら」
海面をトントンと叩くように爪先でつつく。すると、少ししたところで伊４７が浮上してきた。
ちょくちょく見せていた巨大な艤装を展開しているため、向かってくるだけでもそれなりに圧を感じる。
「そっちで何かあった？」
「何も無いヨナ。何かがあった感じも無いヨナ」
あの時の戦場の痕跡すら無いようなので、ここに居を構えているようなことは無い様子。あの戦いが発生したのは、たまたまこの辺りに来ていただけと見て良さそうである。
「一応ここを見ておくわ。お願い」
戦艦棲姫がそう言うと、艤装が静かにその手を海面に置いた。ここで起きたことを断片的に読み取る戦艦棲姫の能力をここで使う。
少しの時間ジッとした後、艤装が海面から手を離す。そして、首を横に振った。何もない、もしくは誰でも知っているようなことしか読み取れなかったという程度であろう。
「やっぱりここには何も無いわね。次行きましょ」
ここまで見ればここは用済み。断片的な記憶を読んでも何も無かったとなれば、ここに気になることは何一つとして無いということになる。
まだここは施設が近いと言えば近い。何せ、やろうと思えば飛行場姫の哨戒機でもここまでなら届きそうである。さらに先、それこそ先

程話題に上がった戦艦棲姫が潜んだ島や、海風の運命が変わった戦場まで行けば、また何か違うものが見えるかもしれない。
「先に……私の因縁の場所で」
「そうね。このまま一直線だっけ？」
「はい。私がこの身体になるきっかけを与えられたあの場所でお願いします。あの付近でミシェルちゃんの痕跡も見つけていますし」
海風が少し項垂れる。やはり抵抗があるようである。あの場所での思い出は、言ってしまえば最悪である。
それを察した春雨がすぐに手を握ってあげた。今は海上で脚を消しているため、身長差はかなり出来ていたものの、そうされたことで海風は一転その温もりに昂揚。
「行きましょう。優しい姉さんのおかげで気分が良くなりました」
「はいはい。気分が良いうちに見に行っちゃいましょ」
呆れ顔の戦艦棲姫だったが、艤装の方はまあまあと戦艦棲姫を宥めるような仕草をしていた。

続いて、白露と初めて戦った海。ここも周囲に何か見えるわけでもなく、先程と同じような広い海。
「ここにも何も無いですね」
「ええ。目視で見えるようなところに何か置いてるとは正直思ってないけど。それに、何も無いなら何も無いでいいのよ。静かに暮らせるんだから」
「確かにそうですね。無いことは喜ばなくちゃですね」
この辺りは他の鎮守府でもよくわかっていないような未知の海域。潜伏するならこういう場所だとは思うが、流石にぱっと見てわかるようなところにいるとは思えない。
「海風、大丈夫？」
「だ、大丈夫です」
しかし、海風にとっては心を重くする場所。そんな海風のために、春雨はずっと手を握ってあげていた。勿論生身の左手側である。

いくら春雨の温もりであっても、ここが現場となると話は変わる。やはり先程までの開き直り方は出来ないようで、小さく深呼吸を繰り返していた。
「私の溢れた感情は絶望かもしれませんが……姉さんのおかげで変われたんです。こんな場所くらいで……私は姉さんに迷惑なんてかけませんよ」
これが絶望に苛まれていたら、ここに来た時点で発狂していただろう。生活に支障が出るレベルの壊れ方をしていたことは簡単に予想出来る。
だが今の海風は、春雨のおかげで絶望を乗り越えて過剰な依存にシフトしている。充分に壊れていると言えるのだが、これと言った発作の予兆を今まで全く見せてこなかったのは、この性質の変質のおかげだ。
春雨が隣にいるのなら、発作は起きない。起こさない。その思いだけで完全に抑え込んでいるため、海風の異常性は本当に特化されている。
「辛いならすぐに言ってね。私が出来ることは何でもしてあげるから」
「その思いだけで充分なんですが、そこまで言ってもらえるならお願いが、いや、これはちょっと憚られるかも。でもでも、姉さんの心遣いを無下にするわけにも。何でも、今何でもって言いましたよね。なら、でも、なら、でも、うーん……本当にお願いしていいのかどうか。でも海風は意を決して言っちゃいます。姉さん、ちょっと抱きつかせてください」
何かいろいろ葛藤があったようだが、結局のところ、春雨の是非を問うことなくその身体を持ち上げて、まるで大きなぬいぐるみのように抱きしめる。今の春雨は脚を消しているために、そんなことも簡単に出来てしまう。
持ち上げられた瞬間に小さく声を上げたものの、それだけで発作を起こす前兆のような不安が無くなるのならと、春雨はすぐに海風を受け入れた。むしろその状態から頭まで撫でてあげたものだから、海風

は不安が何処かに飛んで行ったかのように興奮。曝け出されている春雨の腹に顔を押し当てる始末。
「あー落ち着きますー」
「あはは……それで落ち着けるならどれだけやってくれても構わないよ。ここだと不安定になるのは仕方ないもんね」
海風が落ち着いていくのを見て喜ぶ春雨だが、昂っているのは見て見ぬフリをしているのは言うまでもない。いや、本当に気付いていないだけなのかもしれないが。
「はいはい、本来の仕事のことを忘れちゃダメよ」
春雨と海風がわちゃわちゃしている間に、戦艦棲姫が艤装を使って海の記憶を読み取っていたが、やはりここで行なわれた戦闘と、海風が黒い繭となった記憶が強く染み付いていたらしい。
別に強すぎる記憶が優先されるとかは無いのだが直近で起きた事件がそれなので、即座に読み取れるのはそれくらいということになる。
「9割方、海風のそれがここの記憶としてあったけど、もう1つだけ。ミシェルのことが本当に少しだけどわかったわ」
髪飾りをこの付近で見付けているのだから、それに関する何かを発見してもおかしくはないだろう。
「やっぱり、あの子はあの……何と言ったかしら、卯月……そう、卯月ね。あの子はここで繭になったと見て間違いないわ。その断片的な記憶だけは読み取れたから」
ここでミシェルの正体が卯月本人であることが確定する。
戦艦棲姫と艤装が読み取った記憶は、卯月がこの海域で運悪くドロップした瞬間だった。髪飾りを見て反応したのは、やはり本来自分が持っていた物だからということになる。
8割方そうであろうという憶測が、10割になったというだけなので、そこまでの驚きは無かった。ここが現場であるということがわかっただけで充分。もしミシェルが同じように哨戒に出るとしたら、この辺りには連れてこない方がいいということが確定した。
「でも、あの古鷹については何も無し。この辺りにもふらっと現れた

だけなんでしょう。逆に言えば、こっち方面は安全と考えてもいいわね」
「確かに。拠点がこの辺りにあるってわけではないですもんね。安心していいかはさておき」
「ええ。まだ１００％では無いけれどね」
　警戒する方向が少なく出来るのなら、それに越したことはない。とはいえ、神出鬼没なのは間違いなく、そうやって気を抜いていると、こっちの方から攻め込んでくる可能性だってある。慢心はいけない。

　そのまま次は戦艦棲姫が潜伏した無人島へ。そこはまだ傷が癒えておらず、熾烈な戦いの痕がそのまま残っているような場所。よく見てみれば、戦艦棲姫が当時流した血液も僅かながら付着している場所が存在するくらいだ。
「ここで海風達に助けてもらったのよね。あそこで来てもらえたのは本当にありがたかったわ。そのまま死ぬ可能性もあったもの」
「あの調査の時に合流しようと考えたのは正解でした。間に合って本当に良かったです」
　まだ春雨を抱きかかえたまま、海風は島の中などを確認する。あの時には戦艦棲姫が潜んでいたものの、実はここが敵の拠点でしたと言われたら目も当てられない。
　それに、こういう入り組んだところだからこそ、泥が仕込まれているなんて可能性もある。あれが海の中でしか活動出来ないとは限らないのだ。
「見た感じでは何も無いですね。姉さん、どうですか」
「海側にも何も無いかな。嫌な予感みたいなのも感じないし」
「なら安心ですね。姉さんがそう言うのなら、ここも安全でしょう」
　それは流石に早計だと春雨が軽く頭を叩く。それでも海風は喜んでしまうのには苦笑するしかなかった。
　海上には異常が見られなかったが、
「海底、爆雷の痕とかがあったヨナ～」

浮上してきた伊４７が言うには、海底で何かあったような痕があるという。戦艦棲姫が戦ったときには、爆雷なんてまず使わない海上艦のみの戦闘。爆雷の痕となるとまた話が変わる。そこにいた潜水艦がやられたくらいしか考えられるものはない。もしくは生まれたばかりの同胞（はらから）が何かしらの理由で爆散したか。

「ここでも見てみましょうか」

先程と同じように、この海域でも海の記憶を読み取ってみる。

「まぁ大体は私がここにいた時のことよね……島がこんなことになったのは私がここで暴れ散らかしたからだし」

先程の海風の記憶と同じように、この海に強く刻まれているのは戦艦棲姫の戦いの記憶。古鷹と白露から襲撃を受けた際に、重傷を負いながらも撃退した時の記憶である。

自分が関わっていることだからか、戦艦棲姫としても鮮明に理解出来るくらい深く刻まれている。そのせいで、他の記憶が若干読み取りづらい程である。

そして、僅かに残っていた別の記憶が確認出来た。

「なるほど、爆雷の痕はここで私じゃない戦闘があったからのようね。古鷹以外にももう１人いたようよ」

「白露姉さんではなくてですか？」

「ええ。まだ他にもいるみたい。それはそうよね、あちらだって組織の可能性はあるんだもの」

泥で支配された組織が、自分達の与り知らないところで構成されていると思うと、なんとも複雑な気分になる。それが侵略のために行動しているというのも。

「そのもう１人というのが何者かはわかるんですか？」

「流石にそこまでは。でも駆逐艦なのはわかるわね。貴女達みたいに少し小柄だもの」

戦艦棲姫がわかったのはそこまで。この近海に立ち寄り、また別の仲間を使って暗躍していることがわかっただけでもかなり大きなこと。

ここでわかったことは、鎮守府側にも伝えるべきだろう。素性はま

だ不明だとしても、古鷹以外にもいるということを覚悟しておかなければ、万が一の時に圧倒される。

午後の哨戒はこれで終了。施設の安全はまだ確保されているが、安心出来ない状況なのは変わらない。

平和の維持

戦艦棲姫先導の哨戒を終了し、施設へと戻ってきた一行。この哨戒によって確認出来たのは、以前戦艦棲姫が潜んでいた無人島の近くで、新たに戦闘があったことくらい。それ以外は平和な海であり、施設に害を為すモノは無さそうということである。

しかし、その戦闘があったというのが大問題。伊４７が発見した爆雷の痕から、古鷹以外にもまだあちら側の何者かが存在していることが確定した。戦艦棲姫は駆逐艦ではないかというその存在により、潜水艦があの場所でやられていることはわかった。

「なるほどねぇ……白露ちゃんは正気に戻ったけれど、他にもまだまだあちら側にいる子というのはいるのねぇ」

「ええ、少なくとも1人はいるのが確定ね。それ以上いそうな気はするけど」

「困ったわねぇ。とりあえず提督くんや大将さんには伝えておいた方がいいわよねぇ」

戦艦棲姫から話を聞いた中間棲姫は、真っ先に連絡することを思い付く。施設の場所はまだあちらに知られていないが、鎮守府の場所は知られており、そもそも襲撃に向かおうとしていたことだってあるのだ。

今でこそ白露はその呪縛から解放されて施設の一員となっているが、だからといって後は古鷹のみというわけではなかった。仲間がどれだけいるかは今はわからない。それこそ、鎮守府のように沢山の同胞（はらから）が所属しているかもしれない。敵の戦力は、未だ不明。

「鎮守府襲撃の時は、確か古鷹と白露、あとはあまり知性を持たない子達を使って向かっていたのよね」

「白露ちゃんから聞いているのはそうねぇ」

「なら、またそいつを使って鎮守府を襲うつもりなのかしら」

飛行場姫も会話に加わる。飛行場姫としても鎮守府のことは心配しており、なるべく多めの情報を提供したいと思っている。

今回の情報は、施設よりも鎮守府に必要なものだ。まだ日が暮れる

までには時間があるくらいなので、今すぐに連絡をしてもいい。
「これはすぐに連絡しましょう。まだ夕飯の準備まで時間があるわよねぇ」
「ええ。そこは大丈夫よ。今すぐでもそこまで迷惑にはならないはず」
時間的にもおそらく問題はない。あちらからもこの時間に連絡があったことがあるくらいなのだから、こちらからしても大丈夫だろう。

ダイニングに集まり、鎮守府に連絡。今回は元鎮守府所属の３人も便乗。白露は知っていることは少ないものの、もしかしたら話しているうちに何かしら思い出すことがあるかもしれない。
「提督くん、今良かったかしらぁ」
『ああ、大丈夫だ。あと、今日は大将も相席出来る』
『用事があって、私もここにいるの。３人で話をするのは初めてね』
「あら、それなら尚更都合がよかったわぁ」
画面の向こう側に提督と大将がいることに少し驚くものの、どうせ後から大将にも話すつもりでいたので、その手間が無くなったのは良かった。
逆に、白露は大将までいることに驚きを隠せない。今回の件が相当大事になっていることを今更ながら思い知る。そもそもあの戦場に島風がいたことがそれに繋がるのだが、泥による洗脳中はそこまで細かいことが考えられなかった模様。
『それに、いつも通り五月雨もいる』
『こちらには吹雪もね』
「なら、大分大人数になっちゃうわねぇ。こちらも、はい」
タブレットを動かして、春雨達の姿を見せた。元気そうに暮らしている３人を見たことで、提督はまた一安心する。
画面の向こう側にいる五月雨も、姉妹がそこにいるのは嬉しいらしく、また、情報共有という話し合いのように見えて、ただの談話な空

気感も強いため、何も気にすることなく姉妹に対して小さく手を振った。春雨達もそれに対して同じように反応する。
『それで、今回の話は何なんだい？』
「そうね、これは早急に知ってほしかったからすぐに連絡させてもらったわぁ。戦艦ちゃん達が施設の近くを哨戒してくれたんだけれど、そこでちょっとおかしなものを見つけたのよぉ」
戦艦棲姫からの又聞きみたいなものなのだが、現場にいた春雨と海風の証言も基に、その時の話を再現する。海底に爆雷の痕があること、戦艦棲姫が海からまた別の敵の存在の記憶を読み取ったこと。この2点を重点的に伝えた。
提督も大将も、古鷹以外にもまだ敵がいるというのはある程度予想はしていたのだが、ここまですぐにそれがわかるとは思っていなかったようである。さらにはおそらく駆逐艦だという憶測まで来た。
『対潜性能の高い駆逐艦なのか、混ぜ込まれたことでその力を得たのかはわからないが……厄介であることには変わりないか』
『古鷹だけでないことがわかっただけでも充分でしょう。そう来るとは思っていたんだもの』
そして、鎮守府側で話していたことも施設側にも伝えられた。古鷹は実はスタミナ面に難があるのではないかという予想の件である。
それを聞いた白露は、言われてみれば確かにと少し納得したように頷いた。
「あたし、よく突撃してたでしょ。それ、まぁ性格的な問題もあるんだけど、古鷹さん絶対に許してくれるんだよね。叱られた覚えもあるんだけど、まず真っ先にあたしに行かせるの。文句言う割には」
性格的な部分、と自分で言えたのは、白露としての性格の中に夕立の性格が混ざり込んでいる自覚があるから。他人のような自分の特性が把握出来ている証拠。
だが、今ここで冷静にことを思い返すことが出来るのは、時雨の特性。感情に乱されることなく、その時の状況がきちんと見えている。
「あれって、あたし使って体力温存してたってことなのかな」
『可能性はある。そのため、現在こちらでは持久戦狙いの訓練をして

いるくらいだ』
　それが正しいかどうかはわからない。しかし、やたらと格を言ってくる今の古鷹にとって、艦娘達は格下の存在だ。その格下に対して一向に勝てないとなれば、話が変わってくるだろう。認識を改めるか、慢心したまま撤退をするか、それはわからない。
　だが、それでも負けない戦いを続ければ、確実に鎮守府は守り続けられる。それであちらがムキになってきたらまたどうしたものかとなるかもしれないが。
『勿論、それだけで勝てる相手ではないと理解はしているつもりよ。でも、それが出来なければ勝つにも勝てない。せめて負けないようにして、そこから徐々に追い詰める』
　大将の眼光が鋭くなる。その表情は、大本営所属の大将というべき勇ましいモノ。これを持つからこそ人の上に立つことが出来るのだと感じられる強さ。
『以前にも話したが、今回は我々に任せてくれ。奴らはまたこの鎮守府を狙ってくるだろう。それは、絶対に君達の手を煩わせるようなことにはしない』
『ええ。だから、朗報を待っていてちょうだい。貴女達の平和は、私達が守りましょう。その前に私達の平和を掴み取らなくてはいかないけれど』
　今まで負け続きだった鎮守府も、決して折れることなく立ち向かおうと前向きだ。こんなことで心が折れていたら、世界の平和を求めることなんて出来やしない。
　提督達がこうだからこそ、艦娘達も非常に前向き。勝ち目が無いと思えるほど強大な敵であっても、負けていないのならまだ戦える。勝つまでやればいいのだ。
「ありがとう。その思い、私達にも届いたわぁ」
「でも、本当に気を付けてちょうだいよ。アンタ達に死なれたら、アタシ達も気分が悪いんだから」
『勿論だとも。僕達は皆の平和を維持するために戦うんだ。それは心の平和も例外では無い』

施設の平和を維持出来たとしても、精神的にやられてしまっては意味がない。心身共に平和であるからこそ、世界の平和は守られたことになる。

それは、鎮守府の誰かの命を犠牲にして得たものではいけないのだ。だからこそ、完勝を目指して日々鍛えている。

「提督、今もみんなは訓練中なんですか？」

小さな疑問をぶつける春雨。ここに大将がいるとしても、メンタルケアの観点から、こういう場所でも山風達がやってきていてもおかしくはなかった。しかし、今回はそんな気配が何処にも見えない。

『ああ、ここからなら少し見えるだろうから、みんなの努力を目にしてもらおうかな。大将、良かったですか？』

『ええ』

あちら側もタブレットを持ち上げ、カメラを窓の外へと向けた。そこからは海が見え、そこで行なわれている演習がしっかりと見えた。

今回の戦いで中心となるであろう金剛と比叡、防空という観点からも確実に出撃することになるであろう千歳と千代田、そして最も今回の敵との交戦歴がある山風達残された白露型姉妹は、春雨達としては見慣れない相手と演習をしていた。

その相手というのが、大将の主力ともいえる最強の戦艦、武蔵と、装甲空母へと改装されている海外の空母、Ｓａｒａｔｏｇａ（サラトガ）。そして、雷撃の名手と名高い重雷装巡洋艦である北上と大井。

この４人を大将が連れてきた理由は、単純に古鷹の性質を鑑みてである。甲標的を使った先制雷撃、空母と同様の航空戦力、そして重巡洋艦とは思えない程の高火力。その全てを同時に相手しても負けない力を得るために考えられた最善の演習艦隊。

古鷹だけではないとわかった今でも、そもそも４人の状態から演習がスタートしているため、敵に増員があったとしても対応出来るようにはなっていた。

「相手は４人でも……７人がかりで拮抗してますね……」

「ううん、あれ、こっちが押されてるよ」

海風から見れば拮抗だったようだが、春雨から見たら数の優位があ

るにもかかわらず、鎮守府側が押されているという状況だった。
新装備の試験というところもあるため、まだ完全に使いこなせていないのかもしれない。それ以上に、大将の演習艦隊がとんでもない実力者の集まりであるというのもある。
実際、金剛と比叡は2人がかりでも武蔵相手にギリギリ。千歳と千代田も2人がかりでサラトガとギリギリ。山風達は北上と大井に完全に翻弄されているくらいである。
『古鷹はあの4人を1人に凝縮しているようなものであると私は判断したの。実際は違うのだろうけど、擬似的に再現するなら、私の艦隊ではあの子達が一番適切だと思ってね』
『艤装そのものによる突撃だけはどうにもならないにしろ、人数差というところでそれを補っているわけですね。本当に助かります』
『2日から3日、あの子達に貴女の艦隊を鍛えてもらうつもりよ。それで良かったわよね？』
『はい、ありがとうございます』
この演習艦隊は島風や宗谷と同じように少しの間鎮守府に滞在することになるらしい。大将本人はどうしても自分の鎮守府に戻らなくてはいけないようだが、艦娘はそこそこ自由に動けるのが功を奏した。
短期間の詰め込みみたいなものになるのだが、やらないよりは全然マシ。むしろ、この短期間で一気に力を上げるためには、それくらいしないと難しいというのもある。
「こちらからは応援しか出来ないけれど、健闘を祈っているわぁ」
『ああ、待っていてくれ。朗報を届ける』
自信はあっても慢心はしていない。堅実に、確実に、負けない戦いを繰り返すのみだ。
『そうそう、1つだけ聞いておきたいのだけれど、いいかしら』
ここで最後に大将が中間棲姫に質問。
『今回の古鷹……それ以外にもいるのでしょうけど、その子達、もし、万が一白露と同じように泥を吐き出すようなことがあった場合、どうすればいいのかしら』

勿論沈めるつもりで戦わなければ勝てるものも勝てないだろう。しかし、白露という前例が出来てしまったため、同じように沈む瞬間に泥を吐き出して正気に戻る可能性もある。そうなった場合の処遇は正直人間側では判断が出来ない。
「生きているのなら、こちらに連れてきてくれて構わないわ。そうで無かったら……丁重に葬ってあげてちょうだい。その子の意思に任せます」
白露は生きるという意志が強かったおかげで助かったところはある。しかし、そうなってしまったことで死を望んだ場合は、無理強いはしない方向で考えたようである。
『わかったわ。なら、助けられるなら助けます』
「ええ、こちらでも受け入れられるようにはしておくわぁ」

決戦の時に向けて、準備は続く。

大将の艦隊

鎮守府で行なわれている演習は夜間まで続いていた。付け焼き刃で詰め込んでいるというのもあるのだが、あらゆる状況で戦えるようにするためというのもある。

あちらはどんなことでも躊躇なくやってくるくらいの侵略者。それが高度な知性を持っているようなもの。鎮守府としては最も戦力が減るであろう夜に襲撃してくる可能性もあるのだ。

夜戦は覚悟の上。そのための準備も当然してある。だが、今以上に練度も必要であろう。そのため、大将の演習艦隊の旗艦である武蔵も『その意気込みや良し』と夜間演習に付き合っていた。

「武蔵さんは元気だねぇホント。あたしゃもう休みたいよ」

などとボヤいているのは、演習艦隊の北上である。この艦隊の中では最もやる気がない艦娘ではあるのだが、実力は本物。それに、大将からの指示は否定もしないしサボるようなこともしない。やる気はなくともやることはやる。

「私達は演習には参加していないんですから、休んでいるようなものですよ」

「そうかもしんないけどねぇ」

その隣に付き従うのは北上の相方である大井。今は北上も大井も演習に参加することなく、武蔵、サラトガ、そして鎮守府側ではなく演習艦隊側として島風も参加している夜間演習を現場で眺めているだけ。

その演習は、金剛、比叡、山風、江風、涼風の5人が、演習艦隊の3人に立ち向かうだけという実に単純なもの。古鷹の艦載機の量から鑑みて制空権争いで参加出来ないことも考慮して、千歳と千代田は北上と大井のように休憩中。

本来、空母は夜間に艦載機を飛ばすことが出来ないのだが、サラトガは専用の艦載機を使用することで夜間でもそれを可能としている。深海棲艦の空母は夜でも容赦なく航空戦を仕掛けて来るために、それを意識した装備だ。

「北上さんとしては、誰か良さそうな子はいます？」
「そうさねぇ……あたしが見る限りだけど、やっぱ涼風かねぇ。あいつは年季が違うからね。ほら、殆ど被弾してないっしょ」
今回は演習であるためペイント弾を使っており、涼風以外は至るところにペイントが塗りたくられているような状況だが、涼風だけはかなり綺麗な状態で演習を続けている。
ただ1人、改二改装をされていない艦娘ではあるのだが、古参の意地をこういう場所でも発揮している。ある意味、上の姉達の駆逐隊でいう春雨と同じ立ち位置であった。
「島風みたいな最初から改二レベルのスペック持ってるわけでもないのに追い付けるってことは、あいつはそういうことなんだよね。ああいうのは戦場でキーパーソンになる」
うんうんと楽しそうに話す北上。隠れた才能を発掘したような表情に、大井も少し楽しくなってくる。
「北上さんがそう言うのならそうなんでしょうね。それにしても、本当によく見てますね」
「いやもうそんなつもりはないんだけどさぁ」
北上は駆逐艦嫌いを公言しているような性格。なんでも、妙に懐かれるために鬱陶しく感じているそうだが、言葉とは裏腹に面倒見が非常に良い。だからまた懐かれて、そしてウザいウザいと言いながら、結局また世話を焼く。
そこから転じて、駆逐艦の様子は変に見守ることが多かった。結果的にその目は鍛えられ、そもそもよく見ているのか駆逐艦に対してはさらに強い目を持つに至っている。
「北上さん、子供好きですもんね」
「いやいや大井っち、それは違う。鬱陶しいから逆に目が行くだけ」
「ふふ、そういうことにしておきますね」
北上の良き理解者である大井は、北上のこの発言の真意も全て理解済み。だが、尊厳のために一切口には出さない。そんな北上の傍に居続けることが、大井が最も望むことなのだから。

夜間演習も終了。本来はもうとっくに夕食と風呂も終わっているくらいなのだが、参加メンバーはここでようやく1日が終わることになる。ある意味残業。
「はっはっは！　皆揃って筋がいい！　この武蔵、かなり楽しませてもらったぞ！」
豪快に笑い飛ばすのは、演習艦隊旗艦の武蔵。夜間演習を快く引き受け、むしろ持ち前の若干好戦的な性格によって自分から夜間演習を持ち出そうとしていたまである。
今回の演習で、特に金剛と比叡を気に入ったらしく、演習で疲れ果てている2人に肩を組み、その健闘を称えるように激しく揺さぶった。ちなみに武蔵は息ひとつ乱していない。
「ムサシ、2人とも疲れているのだから、あまり激しくしちゃダメですよ」
「おっとすまない。気分がアガってしまった」
サラトガに指摘されて、パッと手を離す。金剛は苦笑していたが、比叡は目を回しかけていた。
この演習、特に動き回っていたのは比叡だ。近距離戦闘も遠距離戦闘もこなしつつ、周囲の動きも見ながらの大立ち回り。ある程度は金剛がシールドで食い止めてくれるにしても、攻撃手段が多いというだけでも体力を倍は使うことになる。
古鷹にスタミナが少ないという疑惑が上がっている一方、比叡もスタミナが必要である。
「Ｎｏ（問題）ｐｒｏｂｌｅｍ（ないデス）．　私達ももう少し体力をつけなければ、デスネ」
「はい～……比叡はフラフラです……」
「なに、この程度であればそのうち慣れる。繰り返せば繰り返すほど身になるさ」
バンバンと肩を叩くが、その衝撃も普通ではない。そのため、サラトガが後ろからストップをかける。
「もう、ムサシったら、Ｈｉｇｈ　ｔｅｎｓｉｏｎになるとすぐにコレ

なんだもの。Ｓｏｒｒｙ（ごめんなさいね），コンゴウ、ヒエイ」
「いいんデスヨ。今日会ったばかりでこんなにＦｒｉｅｎｄｌｙでいてくれるのは、こちらとしてもありがたいデス」
「そう言ってもらえると嬉しいわ」
　旗艦がコレだからか、補佐として隣にいるサラトガの方が艦隊の重鎮みたいになっているのは仕方ないこと。しかし、武蔵は武蔵で恐ろしいほどの寛大さにより、それこそ一瞬でその懐に入り込んでくる。気付けば仲良くなっているようなものだ。
　ここまで豪快でも、誰も嫌味を感じておらず、頼もしいリーダーとして存在感を示し続けている武蔵に、金剛も友人としての感覚を得ていた。
「あとは飯を食って風呂に入って寝る。これが一番の成長の近道だ。私もそうだったからな。無理して詰め込むのなら尚更だ」
「Ｔｈａｔ（その通り），ｓ ｒｉｇｈｔ（デスネ）．　明日も鍛えてもらうんデスから、今日はもう早く寝まショウ」
「寝ることも大切だが、一番大切なのは飯だ。失ったものを取り戻すために、その分を取り入れる必要がある。寝るだけでは全快するだけで上には行けん。だからガッツリ食え。特に肉だ。血肉を喰らい、自らの身とするのだ」
　妙に説得力があるのは、武蔵の体格のおかげ。戦艦の中でも特に大きく、筋肉質である。それでいて女性らしさも失われていないのだから、武蔵の肉体は完璧とも言えた。
　それを作り上げたのが、今言った通りの生活を続けたこと。ガッツリ鍛えた後は、ガッツリ休む。一切の不摂生をしておらず、ここまでやってきたことの成果である。
「これはムサシの言う通りですね。まずは空腹を満たし、ゆっくりと身体を清め、失ったものを取り戻すためによく眠りましょう」
「はぁい……比叡はフラフラですが、なんとかやりまぁす」
「比叡、肩くらい貸しマスヨ」
「ありがとうございますお姉さま……」
　最も消耗している比叡は、金剛の肩を借りて休息へと向かった。や

はり最も身体を酷使したのは比叡。明日に響かせないためにも、ここは早急に休息をした方がいいだろう。
「いやはや、本当に筋がいい。攻守をハッキリと分けているおかげで、やることに専念出来るのはいいことだ」
　その背中を追いながら、武蔵が呟いた。余程気に入ったのか、ずっと金剛と比叡のことを気にかけているようだ。
「特に金剛は素晴らしい。仲間を守るために尽力し、それが実現出来るに値する艤装を用意しているのは称賛に値する。もっと伸ばしてやりたいと思える程だ」
「でも、敵の攻撃の前に身を投げ出すなんて危なくないかしら」
「そうならないように鍛えるんだ。資本となる身体も、それをさらに尖らせる技もな」
　自分を鍛えるのを好む武蔵は、仲間を鍛えるのも好むようで、金剛をここからどうやって育てるかずっと考えていたようである。
　自分とは毛色が全く違う戦闘スタイルであろうが、むしろ相手をしたからこそわかることもあり、自分に勝てるように強みも弱みも全て教えるのだ。こうされたら辛い、こうあったらこちらが楽であるなども全て伝えることで、より精度が上がっていくだろう。
「むしろ、あんなことは金剛しか出来んだろうな。私でも躊躇ってしまいかねない」
「そうなんですか？」
「ああ。サラは敵の攻撃がどんなものかわかっていてもわかっていなくても、その目の前に身を投げ出せるか？」
　言われてみればと納得する。
「金剛は、この鎮守府の中で最も心技体が高みにある艦娘だろう。特に心だ。仲間を守るために容易に身を投げ出すことが出来る。しかし、死ぬ気は毛頭ない。捨ててないんだよアイツは」
「それは……とてもＣｏｕｒａｇｅ（勇気）がありますね」
「だろう。そんなもの、余程の度胸と覚悟が無いと出来やしない。何の躊躇もなく、仲間に傷を負わせないように自分が傷付く。だが、今までやれてきているんだ。何処か壊れているとさえ思えるぞ」

そうなると危うさすらあるのだが、それを感じさせないくらいの力を秘めているため、心配すら起こらない。
ならば、その部分をさらに伸ばすべきだと考えた。より硬く、より強く、盾としての力を発揮すれば、戦場の中心で最も目立つものとして、その力を遺憾なく発揮出来るだろう。
「まぁいいさ。我々も明日のために休もう。くくく、明日は明日でより扱いてやれる」
「楽しそうですね、ムサシ」
「楽しいさ！　滾っているとでも言おうか！」
またもや豪快に笑い飛ばし、武蔵も鎮守府に戻っていった。その背中は本当に楽しそうで、サラトガもそれに釣られて微笑みながらついていった。

一方駆逐艦組もフラフラになりながら鎮守府へ。特に山風は、今はここにいない姉達に負担をかけないようにと静かにやる気を出していたためか、消耗が激しい。大将からの新装備も扱っているため尚更である。
「山風、大丈夫？」
心配する島風だが、山風は大丈夫だと証明するように手を上げて反応した。どう見ても疲労困憊なのだが、ここまで自分の足で帰ってこれたのは意地か無意識か。
「こらこら、そこまで無理しちゃあいけないよ」
そんな姿を見ていた北上が、山風の同意を得る前に抱き上げた。突然のお姫様抱っこに慌ててジタバタするものの、疲れ果てているせいで力もない。
「気負うのは勝手だけど、それで身体壊しちゃ意味ないから。明日のための体力くらい温存出来るくらいにサボんな」
「さ、サボ……」
「なんで最初から最後まで全力出さにゃならんのさ。任せられるもんは仲間に任せて、自分はちょい気を抜くくらいでいいんだよ。アンタ

だけで戦ってるわけじゃあないんだから」
北上の愚痴なのかアドバイスなのかわからないような言葉に、山風は黙ってしまった。
確かに、今や調査隊の隊長として任命され、姉達の平和を維持するために戦わなくてはと気負っていたところはあった。演習ですらその気負いは表面化されていたらしい。
「北上さんがここまで親身になってくれてるんだもの。素直に言うことを聞いておきなさいな」
「親身になっちゃあいない。あたしの前で倒れられたらウザいだけ」
「素直じゃないんですから。でも、倒れるのは本当によろしくないわ。山風、今は北上さんに身を任せて、ゆっくり休みなさいね。あ、でもご飯だけはちゃんと食べること。身体が資本だから。江風も涼風もよ」
まるで母親のように気遣う大井に、江風も涼風も何も言わずに言うことを聞くほど。
「あ、そうそう、涼風」
「あたいかい？」
「アンタ、明日はあたしが鍛えてやんよ。その力を伸ばしてあげよう」
北上からの名指しで、涼風が飛び上がるほどに驚いた。
「ほい、それじゃあ休め休め。明日は今日よりもっとしんどいぞー」
駆逐艦組もそのまま休息へ。思うところはいろいろあれど、まずは休まなくては話にならない。

鎮守府側も、仲間達によってより高みに向かっている。その成長は目を見張るものとなるだろう。

春雨と海風

翌日、施設の方は先日と同じように戦艦棲姫先導で哨戒を続けている。今回のメンバーは、戦艦棲姫と伊４７は変わらず、薄雲と叢雲が便乗。

残された者達は、平和である時と同じように農作業と漁に勤しむことになる。基本的にやる仕事というのは変わらないもので、松竹姉妹は農作業、ジェーナスとミシェルが漁というのはほぼ固定。そこに春雨、海風、そして白露の姉妹が何処かに加わるという形になる。リシュリューとコマンダン・テストは基本的に施設の中で食事の用意や掃除洗濯をやっている。

「それじゃあ、あたしは漁に行こうかな。ジェーナスとミシェルがいるんだよね？」

「そうですね。村雨姉さんの得意なところを使ってあげてください」

「あいよー。なんかあたしも釣りはやりたいんだよね。多分村雨の気質だと思うよ」

３人が纏まってどちらかの作業に向かうのはバランスが悪く、海風は春雨から離れようとしないため、結果的に白露が漁、春雨と海風が農作業となる。春雨はなんだかんだ漁より農作業の方を多くこなしているため、この分配がちょうどいいだろう。

それに、白露は変装する必要があるとはいえ、ミシェルとの交流を望んでいた。ミシェルは気付いていないが、白露にはあちらに対しての罪悪感がどうしても付き纏う。それを逆に望み、むしろ仲良くなろうと前向きに取り組んでいた。

「ジェーナスとミシェルが仲良くしてくれるなら、あたしはここでも楽しく暮らしていけるよ。叢雲も今のところは何も言わないしさ」

白露と叢雲の仲も比較的良好だ。怒りの抑制が大分出来てきている叢雲は、自分の仇である白露に対してその怒りを露わにしない。例の泥が全ての原因であることは理解しているし、白露に何かしたところで怒りは絶対に晴れないのだから、やるだけ無駄。

なので、白露が誠実であることを一生見せ続けることで決着をつけ

ている。少なくとも白露が一員となってから、叢雲の怒りを湧き上がらせるようなことは今のところない。話し合うことも殆ど無いが、喧嘩腰になることも無いのだ。若干の緊張感はあれど、それで終わるだけ。
「姉さんは被害者ですから、ここで心を落ち着けて一緒に楽しく生きましょう。私達もサポートしますから。ね、海風」
「勿論です。この施設は平和に暮らすための場所ですから。白露姉さんも例外では無いですよ」
春雨至上主義の海風も、白露のことは当然気遣っている。優先順位がおかしいだけで、姉に対して姉妹愛が無いわけではない。優先順位がおかしいだけで。
「うん、そうだね。みんなに託されたんだし、その分も楽しく生きるよ。まずは村雨の分ってことで、釣りを楽しませてもらうね」
「はい、釣果期待しています」
「まっかせて。いっちばーん大きい魚釣っちゃうよ」
若干空元気なところも見え隠れしているが、前向きになろうとしている気概も見えるので、春雨も海風も白露に何か言うことは無かった。
そのままジェーナスやミシェル、あと漁担当の飛行場姫と仲良くなっていければ、もっと楽しく生きていけるはずだ。それを期待して、漁の方へと送り出した。
「じゃあ、私達は農作業だね。海風、初めてだと思うけど大丈夫？」
「はい、姉さんに教えてもらえれば大丈夫だと思います。手取り足取り教えてください」
「早く慣れてほしいからね。頑張ろっか」
こうして施設の時間は流れていく。裏側では戦いの準備は進められているが、この施設は平和を貫くのだ。
勿論、春雨も海風も鎮守府が心配でないわけがない。だが、施設の平和を守ると言ってくれているのだから、それを信頼する。その信頼の証が、いつもの生活を続けるということだ。

何事もなく午前中の作業は終了。春雨は自分が植えた野菜が順調に育っていることに喜び、海風は慣れない作業ではあったが鍬の使い方くらいはしっかりと覚えることが出来た。
「こういうことを実際にやると、この施設の一員になったんだって実感が湧きますね」
「あはは、そうかもしれないね。艦娘の時には絶対にやらないような作業だし」
土で汚れた手で汗を拭ってしまったことで顔まで汚れてしまっている海風。こんな汚れ方はこの施設でなければ起きないことである。
鎮守府でも花を育てたりする者はいたりしたが、ここまで本格的な、生きていくための農業をすることは流石に無い。
「なんだか、気持ちいい疲れです。自分達の食べるものを自分達で作っているというのも新鮮ですし」
「そうだね。自給自足なんて縁が無いものだと思ってたけど、いざそこに足を踏み入れると楽しいよね。大変なこともあるけど」
「はい。私もそのうち、種まきから収穫までやってみたいですね」
この農作業をすることで、精神的にもっと穏やかになっているような気がした。叢雲だって農作業をしているときは怒りがより鎮静化されているようにすら思えた。
精神的に参ってしまっているときは、艦娘から最もかけ離れているであろう農作業に勤しむのは悪いことではないかもしれない。
「松さんと竹さんも仲良くしてくれますし」
「あー、なんかすごく仲良さそうにしてたね」
「私は同じ匂いがするからということです。いろいろとアドバイスも貰えましたし、あの2人の在り方には感心するところもあります」
そこを共感するのは本当にいいことなのだろうかと春雨は思いつつ、自分以外の仲間達ともちゃんと交流出来ていることに素直に喜ぶ。
絶望が溢れ、春雨の献身により依存へと変わった海風は、その複雑な経緯から春雨以外には懐かないということだってあり得た。基本

的には春雨と一緒に行動はしているものの、仲間達との仲は良好も良好。特に松竹姉妹は、海風に対して結構親身に接してくれているようだ。
「海風も施設に馴染んでくれて嬉しいよ。これからもよろしくね」
「はい、こちらからもよろしくお願いします。末長く、末長く」
春雨と海風には若干温度差があるようだが、お互いに幸せなので問題は無いだろう。今の問題は、それを脅かす敵の存在である。
「……姉さん、1つ聞きたいことがありました」
「んん？」
「鎮守府との通信のことです」
海風が途端に真剣な表情に。通信の時に話した内容といえば、敵にはまだまだ増員があるということ。白露を撃破し、こちら側に戻ってもらえても、その分の穴はすぐに埋められるくらいにあちら側にはいるということに外ならない。
「敵は減らないけど……でも、鎮守府のことは心配はいらないよ」
「そこは私も心配していません。今まで私もあそこにいたので、不安はあっても負けるだなんて考えていません。問題はそこではなく……もし古鷹さんを救えた時のことです」
通信の最後。大将が中間棲姫に問うたこと。あの場に春雨もいたので覚えている。
古鷹も救えるのなら救う。白露と同じように泥を吐き出し、かつ生きようと命を繋いだ場合は、この施設で受け入れられるようにすると話していた。
古鷹は春雨にとっても仇だ。春雨を瀕死にまで追い込み、深海棲艦化するきっかけを作っている。そして、本来ならばあそこで死んでいた白露達を、どういうことをしたかはまだ全くわからないが蘇らせ、さらには泥を組み込むことで悪逆の使徒へと変貌させている。
恨みはこの施設の中でトップクラスに持たれていてもおかしくない。勿論海風らも古鷹に対しては堪えることが出来ないくらいの怒りを持っている。最愛の姉である春雨を心身共に傷付けた存在なのだから。

「この施設で受け入れると話していました。姉さんはそれでいいんですか」
端的に、真正面からぶつける。自分を痛めつけ、白露を狂わせた張本人を、春雨は許せるのかと。
「……いいよ。多分、古鷹さんも白露姉さんと同じように被害者なんだと思うし。泥が頭をおかしくしちゃってるんだよね。白露姉さんを見れば全部わかるもん」
古鷹だって、黒幕である『最悪の姫の中身』によって狂わされた哀れな子羊に過ぎない。古鷹が黒幕本人である、もしくは、何かがあって自分からその道に入ったと言われたら話は変わるが、その時はその時である。今は、白露と同じような存在と考えるのが妥当。
「私が恨むのは、その黒幕だけだよ。だから、古鷹さんがこの施設の一員となったとしても、別に大丈夫。むしろ、私達がケアしなくちゃいけないよ」
本心から言った。今の海風には、春雨の感情の機微はよくわかる。本当に、純粋な気持ちから、春雨は全てを受け入れようとしていることを。
海風としては怒りが冷めることは無いだろう。だが、春雨が大丈夫というのなら、それは大丈夫なのだ。春雨を困らせることはしたくない。
「……姉さんがそう言うのなら、私は何も言いません。姉さんの選んだ道が私の道ですから。でも、古鷹さんが姉さんを傷付けるようなことがあれば、私は容赦しません」
「まだここに来るかもわかっていないんだから、今から気負わなくてもいいよ」
少しだけ悲しい笑みを浮かべた。春雨からその表情を引き出してしまったと感じ、海風の鼓動は少しだけ速まった。
自分の言動が春雨にとって重荷になってしまったのかもしれない。そう思った瞬間、発作の予兆のような精神的な揺らぎが発生してしまったのだ。
海風の発作はここにあった。根幹となっている相手が自分から離

れてもダメだが、自分の言動で根幹がマイナスの感情を得ることも良くない。自己嫌悪が一気に湧き上がる。
春雨もそれを察したか、取り繕うわけではないが海風の手をすぐに握った。海風は何も悪くないという思いを伝えるために。
「私のことを大切に思ってくれるのはすごく嬉しい。そういう性質になっちゃったんだとしても、思われて嫌だと思うことは無いからね。ありがとう海風」
手を握っているだけでは難しいと感じ、少し身長差はあるものの抱き寄せて背中を摩ってあげた。それだけで海風は落ち着けるはず。自分が発作を起こした時に姉妹姫によくやってもらったことをやり返しているだけなのだが、海風には大変効果的。
それだけでは足りないかもと、以前薄雲の発作を止めようとした時のように、温もりをもっとダイレクトに伝えられるように飛行場姫のボディスーツ姿に替わる。服越しだった温もりがさらに強くなり、海風の発作は見る見るうちに抑え込まれた。
「……ごめんなさい姉さん。私が変なことを聞くから……」
「大丈夫大丈夫。誰だって疑問に思うし、私や海風だけじゃないよ。多分叢雲ちゃんだってすっごく我慢してるだろうし、薄雲ちゃんがケアしてると思うよ。哨戒に出て行く時、なんかそんな感じしたからさ」
今の春雨と海風と同じようなことを、薄雲と叢雲が哨戒の最中にやっている可能性はそれなりにあった。戦艦棲姫もそこにいるため、何の心配もない。
「海風、そういうのも我慢しなくていいからね。海風の意思は、海風のモノなんだから。私のために意思を曲げるのは違うからね」
「……はい……はい……」
「私は、海風も楽しく生きてほしいんだ。一緒に、ね」
そのまま少しだけじっとしていたら発作は治まる。だが、海風はもう少しもう少しと甘え、気分を昂揚させることで精神的にも安定した。

海風の発作がどういうものかがわかり、春雨も姉として仲間として海風を守っていかなければと感じるようになった。

２人の仲は、これからより一層深いものになるかもしれない。それが海風の望む関係かはわからないが。

さらなる敵の存在

午後からの哨戒は、漁の間に仲良くなった白露とジェーナスが便乗。残りの者はいつものようにゆっくりとした時間を過ごすことになる。

毎日毎日戦艦棲姫と伊４７が哨戒に行くため、たまには休んだ方がと話したこともあったが、２人とも好きでやってるんだから大丈夫だの一点張り。戦艦棲姫としては、旅に出ていない分を哨戒で補完しているというのもあるらしい。伊４７は幸せアレルギーの件もあるため、こういうところで役に立ちたいとのこと。

午前中に哨戒に出ていた薄雲と叢雲からは、施設に対して危険になりそうな情報は無し。昨日の春雨と海風の得た情報以上のモノは何も無かったと言える。

その話を聞きつつ、哨戒に出ていた叢雲と薄雲を労うため、春雨と海風がリシュリューやコマンダン・テストから教わりながら作ったちょっと難しいおやつを振る舞う。今哨戒に出て行っている者達の分はちゃんと残しており、それでも叢雲の分は少しだけ多めという気の配りようである。

「ま、何も無いなら何も無いに越したことは無いけど」

「ですね。施設が平和ならまだマシですし」

何も無いことに対しては怒りが燻る程度で済んでいる叢雲。表舞台になかなか出てこない古鷹に苛立ちはあるようだが、施設の平和が脅かされていないことについては良しとしているようである。

「出てくるならとっとと出てきてもらいたいもんだわ。確実にぶちのめしてやるってのに」

とはいえ、古鷹は叢雲の中では自分の中で痛めつけなければ気が済まないくらいの怒りの対象。裏に黒幕がいるだろうが、それの姿がまるでわからない以上、矛先は古鷹に集中するのは仕方ない。

「この施設の場所はまだバレてないと思うから、ここで戦うことは無いと思うよ？」

「そうだけども、こっちから出向く可能性はあるでしょ。むしろ出向

く。居場所がわかったら乗り込んでぶちのめす」
　想像しただけで湧き上がってきたか、それを抑え込むようにおやつを頬張る。甘味で落ち着こうとしているのは明らかなので、それを見越して量を少し多めにしていたのは言うまでもない。
「でも、もし泥を吐き出したとしたら……」
「わかってるわよ。そうなったらそうなった時に考えるわ。白露みたいならまだマシ。死にたがってるなら私が引導を渡す。ウジウジしてるなら……まぁどっちかに偏るようにボコるわ」
　意思をハッキリと持っているのなら許せる。だが、優柔不断にいじけているようなら、考えが纏まるまで殴り続けるという。かなり尖ったやり方ではあるものの、叢雲のその考え方を誰も否定しない。
　白露が自分を殴れと言い出したのが、その考えに至る理由になったのかもしれない。恨みがあるのなら、気が済むまでいくらでも攻撃してくれて構わないと言ったのが白露だ。全員が同じ考えを持っているとは到底思えないものの、似たようなことを考える者は出てきそうではある。
「とにかく、私はある程度はここのやり方には従う。でも、アイツが気に入らない素振りをしたら、誰が何と言おうと私が引導を渡す。白露にも言ったように、誠実であることを見せてくれれば私はまだ怒りが抑えられるもの」
「姉さん……成長しましたよね」
「当たり前でしょ。私だって日々進化してるの。ただの暴れ回るだけの知性のない同胞（はらから）とは違うのよ」
　プリプリと怒りを振り撒きつつ、紅茶を一気に煽った。そして、ティーカップを薄雲に突きつけるようにお代わりを要求。薄雲は苦笑しながら紅茶を注ぐ。
　果たしてこれが成長と言えるのかはさておき、どういう形であれ、怒りが抑えられていることはいいことだ。最初の頃のままなら、顔を見た時点で怒りが爆発しており、白露には常に攻撃を繰り返していただろうし、今このようにティータイムを楽しむなんてことは出来やしない。

「成長というか、甘いもののおかげというか……」
「……否定はしないでおいてあげる」
少なくとも、この施設で食べられる三食とおやつで精神的な部分が落ち着いているのは否めない。叢雲にも自覚がある。
最初に薄雲からの暴露があったことで叢雲のキャラが決定したようなものだが、そのおかげで今の怒りを制御出来る叢雲が在ると思えば、その暴露も悪いことでは無かっただろう。叢雲はどう思っているかは知らないが。

夕暮れ時に午後の哨戒も終了。戻ってきた白露は、相変わらず村雨に変装中。服などは一切替えずとも、髪型が変わるだけでも印象が大分違うため、遠目で見ると一瞬白露とは思えない。
そろそろ夕食時であるために、残されていたおやつはまた後からということにして、今はその時間まで休息を取ることに。
「岸にはミシェルがいるからね。外に出るときは基本的に村雨の格好で行こうかなって」
「それがいいかもしれませんね。漁の時もずっとそうだったんですよね？」
「うん。ミシェルには嫌な思いさせたくないからさ」
室内に入り、ミシェルの目が絶対に届かないところに来た時点で、結んでいた髪を下ろして白露に戻る。
「シラツユ、ミシェルととってもＦｒｉｅｎｄｌｙになったのよ！Ｆｉｓｈｉｎｇ（釣り）のときも協力して魚を追い込んだりしてね」
「あの子、ホントに頭いいからね。手伝ってくれるなら手伝ってもらうよ」
ジェーナスも太鼓判を押すほどに友好関係を育めているようだ。
白露も罪悪感は当然持っているのだが、それを表に出したらそれはそれで周りに心配をかけることになるだろうし、何よりミシェルがそういうところに勘付く可能性がある。
それ故に、白露は基本的に本心を隠して生きていた。辛い思いを内

面に秘めて、誰にも知られないように。その代わり、寝る前に訪れる姉妹の団欒の時間に吐き出せるだけ吐き出すということもしている。弱音は妹達にしか吐かない。
　結果的にストレスは溜めずに生きていけているので、心配するようなところは無かった。ミシェルとの関係も良好。叢雲との関係も悪くない。
「そうそう、さっき行ってきた哨戒でなんだけど、また気になることがあったんだよ」
　と、白露が本題に入る。今頃、戦艦棲姫が姉妹姫にも話しているであろうという哨戒で発見したモノについてのことである。
「春雨達、爆雷の痕を見つけたって言ってたよね」
「はい、ヨナちゃんが海底にそういうのがあったって」
「別の場所でも見つけたんだ。結構最近出来た爆雷の痕」
　今回哨戒に向かった場所は、春雨達が向かった前の戦場とは全く違う場所。回を重ねるごとに確認した範囲を拡げるためにも、同じ場所には行かないようにしている。
「本当にいろんなところで活動してるんですね……」
「だねぇ。あたしに残された少ない記憶でも、一ヶ所に留まってるってことは無かったかな。拠点の位置だけはどうしても思い出せないのが悔しいけど」
　それにしても、また爆雷の痕である。白露とは違う、対潜攻撃が出来る仲間が古鷹にいるのは間違いないのだが、2日連続で爆雷の痕となると、まるで潜水艦を優先的に狙っているかのように思えてしまう。
　実際は海上でも戦闘しているのかもしれないが、そこは綺麗さっぱり片付けられているというだけかもしれない。現に、白露達の痕跡が見つからなかったくらいなのだから。
「爆雷の痕……もしかして、潜水艦を集めてる……？」
　春雨の直感が目覚め始める。まだたった2回ではあるが、同じように2つの場所で同じような形跡が発見されたとなると、共通点を疑うのは必然。

「集めてるって、なんで？」
「そこまではわからないけど……でも、痕跡だけで言うなら、潜水艦ばかり狙ってるっていうことになるよね。ただでさえ、その、蘇生みたいなことも出来るみたいだし……」
　ジェーナスの質問に対して、徐々に声が小さくなりつつもチラリと白露を見た。一度確実に死んでいるはずの白露がここにいるわけで、敵側にはそれが出来てしまう技術があるということに外ならない。
　そうなると、対潜の痕ばかり見つかることは、潜水艦の素材を集めているということにならないか。新たな仲間を潜水艦で作り上げるために、罪のない艦娘を始末して、それを持ち帰っては魂の混成に使用する。それが春雨の辿り着いた敵の目的。
「やりかねないなぁ……。艦娘のことをそういうものにしか見てない感じしたもん。ほら、あの古鷹さん、格がどうのこうの言ってたでしょ」
「ですね」
「艦娘は全部格下。格上の自分がどう扱おうが文句を言われる筋合いは無いみたいな感じだったよね。まぁ……あっち側にいた時のあたしはそれに同調してたわけだけどさ……」
　格下である艦娘は、自分達が事を成すための道具にすぎないと考えていてもおかしくはない。
「……それも泥のせい……なんでしょうか」
「あたしとしてはそうだと思う。泥にやられてた記憶があるから、断言……まではいかないけど、あの泥のせいでそういう考えにさせられるってのはわかるよ。だって今のあたしにはそんなの気分悪いって感覚しか無いもん」
　言ってて嫌そうにしている白露。そこには本心しかなく、心の底から嫌悪感を覚えている表情。そこに自分が与していたというのがさらに気分が悪いようである。
「そうなると……敵は最低3人以上の可能性がありますよね」
「そうだねぇ。古鷹さんと、対潜攻撃が出来る誰かと、殺し回って集めた潜水艦を使って作った誰かが最低いるって事になるか。潜水艦を

素材にしてるんだから、当然潜水艦の力を持ってるに決まってるし」
「海の中から攻撃してくるような敵がいる……って考えるのが妥当ですよね」
潜水艦そのものか、潜水艦の力を得た全く別の艦種か。むしろ古鷹が潜水艦の力を得ているなんてことすら考えられる。悪い方向でなら、いくらでも想像が膨らんでいく。
「あの、姉さん、それもしかして……夜襲をかけるためだったりしませんか」
話を黙って聞いていた海風が不意に口を開いた。
潜水艦といえば、他の艦種と違い、海の中での戦いをする者。ただでさえ昼間もその姿を確認するのは難しいのに、夜になると完全な隠密行動が出来るくらいになる。夜の潜水艦は手がつけられないというのが、艦娘の中でも常識となっていた。
「あり得る。それすごくあり得る。鎮守府にすぐに伝えないといけないくらいのことだよ」
「ですよね。夜襲を仕掛けて海上艦を引き摺り出して、それを下から一方的に狙うなんてこと、あちら側は絶対考えます。それが正しかった場合、格がどうの言ってる割にはやることが狡(こす)いと思いますが」
春雨以外に対しては当たり前のように毒を吐く海風に苦笑しつつ、あらゆる可能性を潰すためにはこのことも連絡するべきだと行動に移す。姉妹姫の許可は得る必要があるため、すぐに向かった。

敵の情報は少しずつ集まりつつある。それを全て踏まえた状態で、襲撃に備えていく。
施設側もそのサポートが出来ているのは嬉しい事であった。鎮守府の平和が守られることは、施設の平和が守られることに繋がるのだから。

夜襲

夜。施設は何の事件も起こらない平和な1日を過ごすことが出来た。近海哨戒という行動は本来必要のない仕事なわけだが、施設に何も無いことを保証するモノであり、今の状況で平和を維持するためには不可欠なモノ。それ以外は平和な時と同じことが出来ているので何も問題はない。哨戒の最中に発見した、普通とは違う痕跡に関しては、その全てを鎮守府に報告済みである。

「今日も1日お疲れ様ぁ。あとはみんな眠るだけねぇ」

施設の者全員が夕食も風呂も終え、残り少ない今日という時間を満喫する。ダイニングに揃って適当に過ごしていたが、まず伊４７が幸せアレルギー対策で自室に戻り、そこから解散の流れ。

今日の平和を喜び、明日も同じように平和を望む。楽しく生きることが出来たと実感しつつ、この幸福の中で眠りにつくことで活力とする。本来なら毎日続けていたことだが、それも今は何事もない事を祈りながらになっているのが残念である。

「それじゃあ私達もそろそろ寝ます。おやすみなさい、姉姫様、妹姫様」

「ええ、おやすみ」

「明日もよろしくねぇ」

今日という1日を終えるため、春雨もそろそろ切り上げて、海風と白露と共に自室に戻ろうと立ち上がった。

その瞬間、言いようのない悪寒が身体中を駆け巡った。

「うぇっ!?」

ビックリしすぎて腰砕けになってしまい、立ち上がった途端にまたしゃがみ込むことに。

「春雨姉さん!?」

「春雨!?」

即座に駆け寄る海風。白露も春雨の声に驚いてその場で動けなくなっていた。あまりの不意打ちにダイニングは一時騒然となる。

春雨がこういう反応をするのはこれで3回目。1回目は海風が黒

い繭となった時。２回目は施設から帰投する調査隊が襲撃を受けた時。そして今回は。
「な、なんか、すごく嫌な予感が……」
　こんな夜中に虫の報せを受け取るようなことは無かった。しかし、感じたものは感じたのだから、またそういうことが起きようとしていると考えるのが妥当。
「私の感知には何も無いわ。施設に誰か来ようとしてるなんてことはないわよ」
　いち早く叢雲が答える。春雨がこうなった時は、たまたまではあるが毎回近くにいるため、何を求めているかはすぐにわかった。
　勿論それは叢雲だって望んでいる事。近場に古鷹が来ているようなら、誰かが止めようがお構いなしに出て行くつもりだった。だが、反応がないということは何処にいるかはわからない。
「じゃあ……もしかして鎮守府が危ないのかも……!?」
　その結論に辿り着くのはすぐだった。施設が危なくないのに虫の報せを受け取るということは、ここにいない仲間達に危機が迫っているということに外ならない。
「春雨、アンタ達の鎮守府の場所を教えなさい。あの古鷹がいるんだったら、私が殺しに行く」
「い、いやいや、流石に私達が陸に近付くのはダメだよ。これでもし何も無かったら、逆に私達が侵略者扱いだよ!?」
「知ったこっちゃ無いわよ。いなきゃいないでさっさと帰るだけ。アンタの直感はやたらと当たるんだから、今回も当たったんでしょ。だから、私は行くわ」
　すぐにでも出ていこうと立ち上がった叢雲だったが、それを止めるようにその手を取ったのは薄雲。
「流石にマズイですよ姉さん。気持ちはわかりますが、陸に近付くのは危険すぎます！」
「だからどうしたってのよ。そんなの関係」
「あります！　最悪、この場所から平和が無くなっちゃいます！」
　今でこそ、あの鎮守府にしかバレていないこの施設の場所。しか

し、ここで不用意に出ていった場合、さらにバレる可能性が高くなってしまう。
何せ、向かうのは陸。全く知らない人間の目があるのが問題。鎮守府の面々は、この叢雲が味方であることを理解しているが、普通の人間にとって深海棲艦はどんなものでも侵略者とイコールで繋がる存在。そこからそのまま施設の存在にまで繋がってしまう可能性だって無いとは言えない。
とにかく、施設の者達が何の準備もなく陸に向かうのはよろしくないのだ。リシュリューとコマンダン・テストは、入念に準備をして陸に遠征に向かうが、そういう配慮が出来ない叢雲には不可能。
「ごめんなさいねぇ叢雲ちゃん。私からも、今ここから向かうのは許可出来ないわぁ」
中間棲姫からも許可が下りず、理由を聞くために睨み付ける。対する中間棲姫はそんな視線に屈することなく、笑みを浮かべたまま叢雲を見据えていた。隣に座る飛行場姫も、いざとなったら手を出そうと構えつつ姉の言葉を待つ。
「提督くんがね、任せてくれって言ってくれたの。だったら任せるのが信頼よねぇ？」
「は？　そんな理由で？」
「ええ、そんな理由。私は彼を、彼の艦娘達を信じているもの。もう次は負けることは無いわぁ」
全く見ていないのに自信満々に語る中間棲姫。提督が大丈夫だと言ったのだから大丈夫。施設の平和を守るために尽力してくれているのだから、その思いが簡単に砕かれるわけがない。
そんな言葉だけで納得はいかない叢雲だが、誰も向かおうとせず、さらには中間棲姫が鎮守府を信じてここで待つというスタンスに決めたため、動くに動けなかった。
中間棲姫もそうだが、飛行場姫からの圧も相当だった。彼がやれると言ったのだからやれるのだと。
「……これで鎮守府が滅んでましたなんてことがあっても知らないわよ」

「そんなことにはならないから安心してちょうだい。信じて待ちましょうねぇ。春雨ちゃんも、それで良かったかしらぁ」
叢雲以上に鎮守府の様子を見に行きたいのは間違いなく春雨。虫の報せを受け取った張本人であり、本来の居場所の危機を察知したのだから。
ついさっきも提督と会話し、妹達が努力している姿もカメラ越しに見せてもらっている。それが自分の与り知らぬところで全て失われているなんて耐えられない。
だが、中間棲姫の言うこともごもっともだと考えた。提督は、艦娘は、この施設の平穏のために力を尽くしてくれる。自分達が動かなくてもいいように。そして、力強くその意志を示してくれた。任せてくれと。
「はい……心配ですが……不安ですが……でも、みんなはもう負けません。いくら敵が強くても、いつもみんなで乗り越えてきました。誰も失わずに。だから……だから、私はここで、朗報を待ちます」
春雨もあえてここから動かない事を決意する。それが仲間達を信じることになるのだから。

一方、鎮守府。夜間演習も終えて、こちらも1日を終えようとしていた。提督も少し残業しつつ、しっかりと業務を終えたことで、落ち着いた時間を過ごしていた。
だが、近々決戦の時が来るだろうという不安はどうしても拭えない。夜間演習をしているのも、今この時に襲撃が起きる可能性を考慮してのことだ。
「この緊張感もあちらの作戦なのかもしれないな……」
あえて襲撃を匂わせたのも、精神的な攻撃なのかもしれない。来ると見せかけて来ず、気を抜いたところで総攻撃を仕掛けるなんてことすら考えられる。そして、そう考えさせたところでやはり早く襲撃するなんてことも。
結局、どのタイミングで来るかわからないのだから、常に気を抜け

ないのは間違いない。それで消耗させられたら目も当てられないのだが。
「考えていても仕方がない、か。今やるべきことをやっていくしか出来ないからな」
少しだけ弱気になりかけたが、提督という鎮守府の長がこれではいけないと、自ら頬を叩いて気合を入れ直す。あとは寝るだけという状態でも、気負っていたら眠ることすら出来ない。気持ちよく眠るために気合を入れた。
「提督ー、艦娘全員お風呂も終わりましたー」
「そうか。ありがとう五月雨。僕も身体を清めて休ませてもらうよ」
「はーい。夜更かしは良い作戦行動の大敵ですからね」
ホクホクな五月雨が執務室の前から声をかける。部下達が心休まる時間になったのを見計らって、提督も執務室から出ようと立ち上がった。
瞬間、窓の外にチラリと灯りが見えたような気がした。
「ん？」
振り向いた瞬間、その灯りは明らかに大きくなっていることに気付いた。そしてそれは、真っ直ぐこちらに向かってきた。
「まずい！　五月雨、爆撃だ！」
それが何かに即座に気付いた提督は、ゆっくりと落ち着いた状態から一転、人間が出せる最大のスピードを発揮して執務室から駆け出した。
非武装の五月雨くらいなら持ち上げられるのだが、提督がここまで強く言ったくらいなのだからと五月雨もすぐに戦闘モードに移行。風呂上がりの寝間着姿ではあるが、瞬きする間に艤装を展開する。
「提督、執務室壊しちゃいます！」
「構わん！　やってくれ！」
以心伝心が出来ているかのように、提督が部屋から抜けた瞬間、五月雨が部屋の中へ突入。その時には窓から見えた灯りはより大きくなっていた。そしてそれが、明らかに深海棲艦の艦載機であることが理解出来る。

窓から飛び出していてはもう遅い。だから、五月雨はそれを見越して執務室の破壊を宣言していた。室内から撃たなくてはおそらく間に合わないと判断した結果。
「撃ちます！」
窓を破壊しながらの対空砲火。室内からでも猛烈な砲撃を連射することで、爆撃を阻止し、さらにはその艦載機を撃ち墜とすことに成功した。
ここでこの判断が出来なかったら、執務室はこの程度の破壊では済んでいない。むしろ、執務室以外にも被害が出ていただろう。それこそ、鎮守府が半壊するレベルで爆撃を受けていた可能性もある。
この五月雨の対空砲火の音は、鎮守府中に響いた。そしてすぐに警報が鳴り響く。
鎮守府に備え付けられているが、滅多に使われることがない最大級の警報。鎮守府の近海にまで深海棲艦が侵入してきていることを報せる音。
「数が多いです！　撃ち続けますよ！」
「どんどんやればいい！　被害なんて気にするんじゃないぞ！」
五月雨はそのまま前進。破壊された窓から飛び出して対空砲火を続ける。
「提督ぅーっ！　無事デスかーっ!?」
いの一番に執務室までやってきたのは金剛。勿論比叡もその後ろから追うように駆けてきた。
「大丈夫だ！　今は五月雨が対空砲火をしてくれているから、金剛と比叡はそのまま海に出てもらえるか！」
「ＯＫデース！　比叡、行けマスカー!?」
「勿論！　気合、入れて、行きます！」
提督の無事を確認したため、その速度を落とす事なく半壊した執務室に突入し、そして五月雨と同じように窓から飛び出した。瞬間、その大型の艤装を展開し、一気に海に向かった。
そうしたのは金剛だけではない。執務室に来る事なく、自分達の部屋から直接海に出たものが多数。特に演習によって強化されていた

者、その強化を手伝っていた大将の艦隊の艦娘は、何か考えるまでもなく艦載機の発艦元を突き止めるべく動いていた。その先頭にいたのは、速さに定評のある島風である。
「あっち！　夜だから少しわかりづらいけど、あっちから飛んできてる！」
「流石は島風デース。いいＳｐｅｅｄデスネ！」
「もっちろん！　私、速いもん！」
　その持ち前のスピードを最大限に活かして、だが誰も追いつけないようなスピードは出さずに先導する。その間にも艦載機は次々と発艦されるが、この時には追いついていた山風達駆逐艦が対空砲火を始めていた。進路妨害と鎮守府の破壊は許さない。
「見つけた！　やっぱり群れがいる！」
　そして、その敵の姿を発見する。前回と同じように、イロハ級の群れを従えた何者か。
　その片方は古鷹であることはすぐに確認することが出来た。特徴的な光を放つ片目が、夜であるせいでより爛々と輝いているのがやたら目立つ。
　そしてその隣にももう１人。白露はもういないため、新たな仲間であろう。もしくは、ここ最近で作り出された仲間か。
「なんや、あんなもんじゃあ死なへんかったみたいやぞ古鷹」
「みたいですね。少し意外でした」
　妙な喋り方をするその１人は、古鷹と比べると明らかに小柄であり、駆逐艦と見間違える程である。しかし、艤装を見る限りでは空母、いや、軽空母の構造をしていた。
　真っ黒な陰陽師のような姿をしたその少女は、甲板と思われる巻物をクルリと纏めると、小さく溜息をついて先頭の島風を見据える。
「よう生きとったな。そこは褒めといたる。古鷹には格下や聞いとったけど、うちはお前らのこと見直したわ」
　ニッと笑みを浮かべ、その巻物を島風に突きつける。
「でも、悪いけど死んでくれへんかな」
　その笑顔が邪悪に歪んだ瞬間、巻物が主砲へと変化し、不意打ち気

味に砲撃を放った。
「おうっ!?」
それを見てから避けるのが島風である。紙一重でそれを避けた島風は、すぐに迎撃態勢に。
「おうおう、面白いヤツやんけ。古鷹、アイツはしばいてこっちに使えばええんとちゃうか？」
「出来ればそれでお願いします。ここのヒトは素材に使えそうなのが多いので」
「さよか。なら、やっちまうで。ま、その前に名乗っとこか」
主砲が再び巻物に戻る。

「うちは龍驤や。引導渡したるから、覚悟しとき」

折れぬもの

夜の鎮守府を襲撃する深海棲艦。その筆頭は古鷹であり、新たな仲間である龍驤を連れてきていた。その龍驤の力もあり、夜だというのに空襲から始まり、提督がまだいた執務室が爆撃を受けたが、タイミングよくそこにいた五月雨が対空砲火を放ったことで最低限の被害で済み、現在は精鋭が迎撃に出撃したところである。

「ほな、自己紹介も終わったところで、やろか。うちらがここに来た理由、お前らわかっとんのやろ」

「……そんな群れで来てるくらいだから、あたし達を潰したいってこと、だよね」

先行した島風に次々と追いついてくる。まずは山風が龍驤の前に現れ、そこから江風や涼風もそちらへ。

以前まではその後ろにいる群れの対処に出ていたが、今は鎮守府近海。作戦海域に出撃しているわけではないため、所属の艦娘が一斉に対処にあたる事が出来る。故に、山風は今回の明確な敵に相対することが出来た。

「駆逐艦共（ジャリ）ばっかやんか。これでもうち、軽空母のお姉さんなんやで？」

龍驤にあたる者が駆逐艦ばかりであることに苦言を呈する龍驤。島風を筆頭に、五月雨も含めた残された白露型が龍驤の相手をすることになる。5対1と数的優位は手に入れているが、それでも甘く見れないのが今回の敵。元艦娘の深海棲艦は、まず間違いなく何かしらの要素を混ぜ込まれている理解が出来ない個体。

ただでさえこの龍驤は甲板である巻物を主砲に変えて砲撃を放ってきたほどである。軽空母が扱えない主砲を当たり前のように使ってくるのだから、最低限駆逐艦の何かが混ざっていることは確定。

「まぁええか。どんだけ束になろうが、うちは簡単にはやられん」

巻物を広げて、艦載機を一気に発艦。本来空母が艦載機を飛ばさなくなる時間帯であることなどお構いなしに、搭載機全てで眼前の駆逐艦を殲滅しようと繰り出した。

この時間帯で夜戦が出来る空母は普通はいない。それを見越した人員選択は、古鷹の考えである。圧倒的な力、さらには抗いようのない手段を用いることにより、絶望を感じさせながら沈めるという意地の悪い策である。

だが、鎮守府は夜の襲撃を見越した演習も繰り返しているのだ。当然、空母を使ってくることも想定済み。

「流石は大将ね。こういうことを想定した新装備だったわけか」

「ホントに！　お姉、行けるよ！」

「それじゃあ、千代田、一緒に行きましょう！　攻撃隊、発艦！」

その龍驤の艦載機に合わせるように、千歳と千代田が艦載機を発艦した。

千歳と千代田に与えられた新兵器。それは、夜間でも艦載機が扱えるようになるための装備。夜間作戦航空要員と呼ばれる妖精さんと、夜間に飛び立つことに特化した艦載機を組み合わせることにより、深海棲艦と同等の技術を扱える。

そこにさらに、艦載機自体にも強化が入っていた。深海棲艦の艦載機はそれ自体が生命体と言える一種の無人機であるが、その反応速度に追いつけるようにするために、全艦載機が複座型。大量の艦載機の全てに対して妖精さんが2人配置されることにより、通常以上のスペックを引き出していた。

「制空権は私達がどうにかするわ！」

「だから、本体は任せた！」

2人がかり、さらには最新鋭の新兵器を使ってようやく拮抗かやや不利に持っていけるくらいなのだが、それでも充分。駆逐艦達の戦いの邪魔を最小限に食い止めることが出来ているため、戦いを有利に進めることが出来るはずだ。

「ほほーう、なかなかやるやん。普通ならうちは八方塞がりになっとるなぁ。空母が艦載機止められちゃあ、ただの木偶の坊やもんなぁ」

言いながらもまだ余裕は失っていない。先程主砲を扱っていることがわかっているのだから、艦載機を止めただけではどうにもならないのは理解している。

「ま、耐えられるだけ耐えぇや。艦載機が全部墜ちるんが先か、お前らが全員死ぬんが先か、競い合ってみようやないか」
「アンタが終わるって可能性は考えていないんだ。慢心しすぎじゃない？」
皮肉っぽく島風が吐き捨てる。そんな言葉を聞いても、龍驤はスタンスを変えることは無かった。
「そらそうやろ。うちが負けるわけが無いんやからなぁ」
少し長い袖口から魚雷が放たれることで、龍驤との戦いは始まった。

一方、古鷹と相対するのは金剛と比叡。前回の戦いでは辛酸をなめることになったが、今回はそうはいかないと、気合を入れてこの場に立っていた。
「貴女方は前回私に屈したと思うんですけど、懲りませんね」
「私達のＤｉｃｔｉｏｎａｒｙ（辞書）に、そんな言葉は書かれていませーン」
「そうですか。余程賢くないと思われますね。残念です」
微笑みは崩さない。艦娘は格下であるという絶対的な信念があるのか、どうあっても自身に敗北が無いと確信しているようである。
金剛と比叡のみならば、まだ難しかったかもしれない。装備は深海合金により強化されてはいるが、技術に関してはまだ２日の詰め込み。完全に使いこなせるとは言い切れない。
だからこそ、こちらにはさらに心強い援軍がいる。
「ほほう、確かに古鷹だ。随分と様変わりしているようだが、イメチェンにしては似合わないのではないか？」
金剛と比叡に挑発をするような言動をする古鷹に対し、こちらもまた余裕のある態度を崩さない武蔵がヌルリと現れる。
「おや、貴女はこの鎮守府のヒト……では無いみたいですね」
「見てわかるものなのか」
「はい。雰囲気が違いますし、そもそもそちらの戦力は白露さんに全部聞いていましたから」

なるほど、とケラケラ笑う武蔵に、怪訝そうな表情を浮かべる古鷹。
古鷹の中では、勿論武蔵であっても格上になることはない。まだ自分のことを知らないにしても、こうまで余裕そうにしている姿を見るのは、少々気に入らないようである。
「私もここの連中から貴様の話は聞いているぞ。なんでも艦娘のことをやたらと見下し、格がどうのと宣(のたま)っているそうではないか。余程自分の力を過信していると見えるなぁ」
値踏みするような目で古鷹をジロジロと見る武蔵に、より表情が渋くなった。武蔵の方が逆に自分のことを見下しているのでは無いかと感じているようだ。
しかし、古鷹の余裕も切れない。常に艦娘を下に見ているため、何を言われてもそのスタンスを変えることはない。
「残念ながら事実ですから。過信ではなく現実。現にそちらの方々は、私に手も足も出ませんでした。一度ならず二度までも。そして今回が三度目です」
嘘は言っていない。故に、古鷹が崩れることはない。二度の戦いにおいて、疲労を与えられることもなく、ただただ圧倒するのみである。撤退の理由は、援軍として春雨達深海棲艦の友軍が現れたからに過ぎない。
艦娘のみならば、撤退する必要もない。さらには連れてきているのが手練れの龍驤。白露とは違う。それがさらに慢心に火をつけていた。
慢心しても圧倒出来るほどの実力を持っているからこそのこの傲慢さなのだが、本来の古鷹が見たら卒倒してしまう程の変わりよう。その全てが、魂を侵蝕している泥の効果だと思うと非常に残念である。
武蔵はその古鷹を知っているために、ここまで調子に乗っている古鷹を見ていると笑いが止まらないらしい。
「ハッハハ、なるほどなるほど、古鷹の皮を被った愚か者だとは聞いていたが、ここまでとは。これは面白い。笑える」
「好きなだけ笑ってくれて構いませんよ。その笑いは後悔に変わりま

すから」
「ほほう、貴様は私も格下として見ているのだな。それもいいだろう」
笑みはそのまま、古鷹を見据える。その目は一切笑っておらず、並の者ならその眼光だけで震え上がってしまいそうなほどの鋭い眼光。
「事実、私も戦力としては貴様に及んでいないだろう。私とて最強の戦艦と持て囃されたものだが、まだまだ上がいると理解している。私は平均的な力が最強、艦娘の中で頭抜けているのかもしれないが、まだまだ」
「よく理解しているじゃないですか。身の程を知っているヒトは、長生きしますよ」
「ああ、私は私の弱さを知っている。故に慢心などしない。傲慢な貴様には到底理解出来ないだろうがな」
ほんの少し、敵の前だというのに、過去を懐かしむような瞳を見せた。
武蔵も過去は自身の力に過信していた時期があった。最強と謳われ、仲間達から持ち上げられ、傲慢になりかけていた。今眼前にいる古鷹のように。
それを諌めてくれたのが、あの大将である。表には出さなかった慢心を突き付け、武蔵のような戦艦相手にも一切お構いなしに説教をした。それは武蔵の心を解きほぐし、慢心を砕き、心身共に最強の戦艦へと歩ませることになった。そして今の武蔵はここに在る。
「理解出来ませんね。勝てないとわかっていて、何故立ち向かうのか」
「貴様は何を勘違いしている。私は自分の弱さを自覚しているが、勝てないだなんて一言も言っていないぞ。いくら貴様が格上であろうが、それ以上にこちらの方が上だ。貴様が見下している金剛も比叡も、私にとっては偉大な戦艦さ」
金剛と比叡に笑みを送る。それは大きすぎるくらいの支援。最高の後押し。
「予言しよう。貴様はここから、我々には一度たりとも勝つことは出来ん。一度たりとも、だ」
面と向かって断言する。不敵な笑みはそのままに、逆に古鷹を見下

すかのように。
　それが面白くないのは当然古鷹だ。格下の艦娘達がどれだけ囀ってもまるで気にならなかったが、ここまで強く断言されては気分が悪い。いつもの余裕な態度は崩していないが、わかるかわからないかくらいの苛立ちが表に出ていた。
「そうですか。まぁ言うだけならタダですしね。好きなだけ好きなように言えばいいでしょう。ですが、そこまで強く言うんですから、何か根拠がおありで？」
「勿論だとも。話にしか聞いていなかった私が、貴様と相対したことで確信出来た。貴様は弱いよ。私よりもな。それに、金剛や比叡には到底及ばない」
　完全に挑発である。もう今の戦場、舌戦では武蔵の独壇場。
「戦力では及ばないと言ったばかりじゃないですか。なのに、私が負けると？　そんな貴女方に？」
「ああ。戦力では及ばないと言ったな。だが、何度でも言ってやろう。貴様は弱い」
　何度でも何度でも上から捩じ伏せるような発言に、古鷹は大きく溜息をついた。
「慢心を知る私は貴様の弱さが痛い程に理解出来る。力に呑まれた者の宿命だろう。強大な力を得たと同時に心を歪まされたことで、今のようになってしまったんだろう。哀れ、実に哀れだ。なんて可哀想な奴なんだろう。なぁ、古鷹？」
「もう結構です。面白そうだから弱者の言葉を聞いていましたが、それはもう負け惜しみか何かでしょう。勝てない相手に向けて言う言葉じゃあありません」
「さっきから言っているだろう。負けんよ、我々は。いや、私がいなくとももう負けん。金剛と比叡だけでも、既に貴様に優っている」
　古鷹の目はもう笑っていない。ここまでコケにされて、黙ってはいられない。だが、挑発に乗って十全の力を発揮出来なくなるほど弱くはない。
「何処がですか？　何処が私に優っていると？」

「決まっているだろう。二度もコテンパンにされても折れず、ただ勝つためでなく他者のために身を擲てるだけのモノだ。貴様にはそんなもの無いのかもしれないな。だから理解出来ない」
握り拳を、自分の胸にトンと当てる。
「心（ココ）だ。金剛も比叡も、心（ココ）が絶対に折れん。故に、もう負けん」
カッと目を見開き、武蔵が全ての主砲を古鷹に向ける。
「不意打ちなんてしない。我々は、我々らしく貴様に勝つだろう。そうだろう、金剛、比叡」
「Ｙｅｓ．　私達はもう負けませーン。そのためのＴｒａｉｎｉｎｇだったんデスから！」
「はい！　二度と嫌な思いはしません！　させません！」
艤装を変形させ、金剛は盾を展開し、比叡は刀剣を握りしめた。

お喋りはここまで。古鷹も痺れを切らす頃合い。
武蔵の独壇場はここまで。ここからは、仲間達の力を合わせて、強大な敵に立ち向かう。

強者

深海棲艦による鎮守府襲撃。その戦いの火蓋は切られた。
まずはこの場に現れた新参、龍驤。夜でも扱える深海棲艦の航空戦力は、千歳と千代田の新兵器による迎撃により、現在制空権拮抗。
本来、空母1人でここにいる状態で制空権が拮抗となったら、なす術が無くなる。使えるのは機銃くらい。艦載機のない空母は、悪く言ってしまえば木偶の坊だ。しかも、鎮守府側は数的優位もある。
だが、龍驤は一味も二味も違う。そもそも出会い頭に島風に対して主砲を放っているくらいだ。今度は少し長い袖口から魚雷まで放たれた。
「空母って何だっけ!?」
「……少なくとも魚雷は使わない」
当然眼前で放たれた魚雷くらいなら、至近距離でも回避が出来る。最も近い位置にいた島風も、それは見てから大きく回避。島風に応えた山風は、島風が回避したところを見計らって、魚雷を砲撃で爆破する。
「わかっとるやろ。うちはお前らと違っていろいろ出来るんやで」
立て続けに主砲を構える。見た目は駆逐艦の主砲でも、威力が並ではないのが深海棲艦。先程の1発も、島風だから回避出来たものの、その火力は普通では無かった。
主砲も魚雷も空襲も、何もかもが掠るだけで重傷を負いそうな威力。慎重に行かねばいけない。
「ほな、さっさと終わらせよか」
主砲の連射が始まる。命中精度はそこまで高くないようだが、とにかく量が多く、反撃に出られないくらいに弾幕を張ってきた。
さらには、その射程が地味に長く、艦載機を扱っている千歳と千代田にまで影響を与える。一度飛ばしてしまえば艦載機の妖精さんが自分の意思で動いてくれるものの、戦場から離れられないのが空母。その砲撃はなんとか回避していくしかない。
「なんなのアレ！　こっちは制空権争いで手一杯だってのに！」

「羨ましい限りね……発艦後の無防備をケア出来るなんて！」
龍驤はあくまでも軽空母。千歳と千代田と同じ艦種である。なのに、やれることが多すぎた。本来やれないことばかりをやってくる。
「おうおう、羨ましいなら自分から屈してくれても構わんのやで。丁寧に殺して、素材として持っていったる」
当てつけのような言葉を発しながらも、その攻撃の手が緩むことはない。丁寧に殺すというのもただの建前。艦娘を見下しているからこそ、まるで虫を潰すかの如く好き勝手に始末しようとしているのが嫌というほどわかった。
実際、たった1人に向かっているのに、艦娘達は反撃に出ることが出来ないでいた。乱射される砲撃もだが、合間合間に魚雷も交じっているのが問題。進もうにも進めず、下がるか横に行くかの2択しか与えられない。
「やっべぇな、あの量。山風の姉貴、どうすンのさ！」
「……隙を探してる。魚雷は壊して」
江風の焦ったような言葉に、山風は冷静に返答。しかし、こうしながら龍驤の隙を探していても、まるでわからない。ここが隙だとわかっても、それをすぐさま埋めるように砲撃が放たれてしまうため、結果的に隙ではなくなる。精度がない分、乱雑で何処に来るかわからないような砲撃であるため、先を読むことも出来ない。
「これは……本当に厄介だね。潜り抜けることも難しそうだし」
鎮守府近海であるが故に参戦している秘書艦五月雨も、この猛攻には回避で手一杯になってしまっている。疲れを見せることなく、自分に向かってくる攻撃だけ的確に回避と迎撃をこなしているのだが、やはり前に進むことが出来ないでいた。
「とまぁ、うちはこういう雑なことがやれるわけなんやけど、こういうのはあんまりなぁ。ちゅうわけで、こういうのの合間に、精度高いのいれんねん」
突然、乱射がピタリと止まる。瞬間、一番手近であった江風に、龍驤が行なえる全ての攻撃が集中的に向かった。魚雷が真っ直ぐ、砲撃は回避方向を塞ぐかの如く、そして艦載機すらも千歳と千代田が食い

止めていたところから数機がスルリと抜け出して上空から襲い掛かる。
進めない。避けられない。下がれない。八方塞がりな状態での凶悪な一撃に、江風はほんの少しだけ思考停止してしまった。どうすればいいのかわからず、次の一手が導き出せず、どうすると考えた時にはもう遅い。
「江風ぇ、歯ぁ食いしばれい！」
そこに飛び込んだのは、涼風だった。その一瞬の間も忙しなく動き続け、江風のピンチに即座に反応した。
今この状態でやれることはたった1つ。強烈な体当たりで強引にその集中砲火から抜け出させること。そして、勢いを止めないことで、それによる自分へのダメージも回避する。
「つがっ!?」
鈍い音はしたものの、龍驤からの攻撃が当たった音ではなく、涼風と江風が衝突したことで艤装同士がぶつかり合った音である。そして、そのまま突き抜けたため、涼風もそれほどのダメージを喰らうことは無かった。衝突のダメージならば、気にするほどのことではない。
涼風の咄嗟の判断のおかげで江風は助かった。しかし、突然のことだったのでまだ思考停止が続いてしまっている。そんな江風に対して、涼風は思い切り叩くことで正気を取り戻させた。
「しっかりしろい！　次は助けられるかわかんないぜ!?」
「わ、悪ぃ涼風。つーか、よくあンなタイミングで動けたな」
今の涼風の動きは、明らかに今までと違った。まるで、江風が狙われ、動けなくなることが見えていたかのようなタイミング。
「北上さん直伝の、負けない戦い方っってな。あたい、そういう才能あるんだってさ」
涼風が教え込まれたのは、目の前の戦いに勝つ方法ではなく負けない方法。つまり、誰も死なない、死なせない戦い方。
涼風に見出したのは、長年の艦娘生活で培われた『空間把握能力』である。

夕立に次いで猪突猛進な性格であるために、真正面以外が疎かになりやすい江風や、感情の機微を敏感に感じとる代わりに、少々後ろ向きで自身への脅威にのみ強い反応する山風と比べると、涼風は格段に視野が広かった。

それが顕著に出たのが、夜間演習中。夜という戦場は嫌でも視界が狭まり、演習でも比較的被弾箇所が多くなるのが普通。それなのに、涼風は昼と同じようにその場を乗り越えていたのである。

北上はそこをたった1日で伸ばし、戦場を見通す力へと成長させた。結果、自分だけではなく仲間の危機にもいち早く察知出来るようになったというわけだ。

「あたいにゃ一応だけどここの戦場全部見えてっから、新兵器様々だねぇ」

そして、涼風に与えられた新兵器は、高性能な水上電探。本来ならあり得ない見張員内蔵のそれは、昼夜問わずに最高の視界を提供する至高の一品。さらに、今の涼風はそれを最大限に活かすため、缶とタービンの同時接続による高速化までしている。

代償として魚雷を装備出来なくはなっているものの、涼風自身が主砲による迫撃に特化しているために支障はない。むしろ、装備が極端化しているおかげで、かなり尖った戦術に寄せることが出来る。

「あたいが引っ掻き回す！　頼むぜぇみんなぁ！」

江風を救ってもまだ止まらない。すぐに切り返し、集中砲火を放った直後に硬直した龍驤に向かって突撃を始める。

だが、引っ掻き回すためと言うだけあって、突撃するも自爆しようとしているわけではない。そもそも攻撃を当てるつもりもない。超至近距離であろうが、回避に専念するつもりだ。

「ほーう、それでうちをどうにか出来る思うとるん？」

「思ってないね。でも、あたいにゃ仲間がいんだよ！」

そう、涼風は当然、1人でどうにかしようとしているわけではない。ここには沢山の仲間がいる。

「涼風！　私も続く！」

同じように突撃を始めたのは、なんと五月雨である。同じように缶

とタービンで高速化された五月雨は、涼風とは逆の雷撃特化。２人で１人分となれるように、前に前にと出て行く。
五月雨も最古参ならではの知識と経験、そして戦場限定の器用さにより、秘書艦という鎮守府内でいえば艦娘の頂点の立ち位置にいながらも、最上級のサポート役と化す。それが自分とはタイプが違う者であっても、完璧なサポートをこなしてしまう。
「何人おっても関係ないで」
再び主砲による乱射とばら撒くような雷撃が始まる。絶対に近付かせないという意思を嫌というほど見せつけて、引き剥がしたところで先程の集中砲火に転じる。おそらくこれが龍驤の必勝パターンなのだろう。勝率が相当高いのか、まずはこの戦法を優先的に使用するようである。
「おんなじことしかしないのかい？」
「せやな。今まではこれだけで皆殺しに出来てん。雑魚ばっかでなぁ」
流石にもう見続けているだけあり、近距離まで詰めた涼風と五月雨でも充分に回避が出来る。確かに弾幕の密度は高いが、缶とタービンによる高速化が出来ている２人には、大きめの回避も容易。
「だが、お前らはこれだけじゃあ無理なんやろ。今までの連中とは話が違うのはよう理解出来た。なら、レベルアップや。お前らはここでしっかりと潰したるから覚悟しや」
瞬間、艦載機が増えた。千歳と千代田の２人がかりでもギリギリ拮抗だというのに、それでも実は手を抜いていた。
この龍驤も古鷹と同じように、手を抜きつつ相手に絶望を味わわせる戦術を使ってくる。対抗出来ると思わせて、さらに上から押し潰すように圧倒的な力を発揮するのだ。その方が溢れやすいから。
「おう、さっさと全力出しなよ。アンタが手ぇ抜いてるのはあたいら百も承知なんだ」
「そうですよ。そちらのやり方は嫌ってほどわかってるんですから。私は話に聞いているだけですけど」
涼風はわかるが、五月雨もこの戦場のノリに乗っているのか、少し

だけ挑発的な言葉を放った。
五月雨だってクセの強い者が多い白露型の一員。あの白露や夕立の妹であり、やんちゃな江風の姉。心の中には熱いモノを秘めているのは間違いない。さらには数年秘書艦をこなし続けた胆力も備わっている。
「ほうほう、まぁでもお前らはまだ格下っちゃあ格下や。避けることしか出来へんみたいやもんなぁ」
「アンタ、ちょっと無礼過ぎ」
龍驤の真後ろ、超高速で走り回った島風が、今だというタイミングで砲撃を放っていた。
涼風と五月雨が翻弄する間に、島風が後ろから撃つ。これもアイコンタクトでしっかり意思疎通をした作戦。
「おう、速いやん。でもなぁ、それはうちもやねん」
振り向くこともなく島風の砲撃を回避した瞬間、まるで古鷹のように目が輝いたかと思ったら島風の腹にその脚が食い込んでいた。
「おうっ!?」
「さっき言うたやろ、うちはいろいろ出来るんやって」
まさかの徒手空拳。その威力は死ぬほどではないものの、砲撃を装甲越しにまともに喰らった時のような衝撃が島風を貫き、大きく吹き飛ばす。
近距離、中距離、遠距離、全てを網羅している強者。近付いても格闘。中距離は主砲と魚雷。そして遠距離は空襲である。余裕そうに見えて実際本当に隙がない。速さで翻弄しようとしても対応される。
「仕切り直しといこや。まだまだやれるやろ。殺しちゃおらんからな」
島風のダメージは軽くはない。だが、骨などに影響は無い。まだ戦える。そこでさらに手を抜いていることで、力を見せつけて絶望させようという魂胆が丸わかりである。
まだまだ戦いは始まったばかり。しかし、まだ勝ち目は見えてきて

いない。

魂の混成

駆逐艦達が龍驤を相手に苦戦している裏側では、金剛達戦艦が古鷹を対応する。鎮守府側は武蔵が筆頭となり、その力を分析しながらも負けない戦いを進めようとしていた。

「撃つぞ。避けろよ」

宣言してから、武蔵が古鷹に向けて開幕の1発。金剛や比叡では扱うことすら出来ない51cm連装砲を惜しみなく使い、一撃で消し飛ばすような超火力の一撃を軽々と放つ。

これに関しては新兵器でも何でもない、武蔵に装備されている主砲である。これが武蔵の当たり前。この火力あってこその、最強の戦艦。

「わざわざ宣言するなんて、やはり貴女は慢心しているのではないですか？」

流石にその一撃は避けられたが、その衝撃だけでも相当なものであり、回避も大きくしなければフラつくほど。古鷹もそれを察したか、かなり大きめに移動した。

「私は私の弱さを知っている。今にも震えてしまいそうだ。だからこそ、虚勢を張って強く見せているだけさ。貴様のように本当に慢心しているものと一緒にしないでもらいたい」

武蔵の皮肉は止まらない。舌戦を続けながらももう一撃。当然回避方向に向けての砲撃であるが、向きを変えていないため、そのままの動きで軽々と避けられ続ける。

「大柄では動きも遅いものですね。そんな攻撃では当たりませんよ」

「無論、理解している。最強と謳われようが、私には劣るものが幾つもある。それを補うのが仲間だ。何のための仲間だと思っているんだ貴様は」

その回避方向。待ち構えるように比叡が突撃していた。もう主砲ではなく刀剣を扱うつもりで、接近戦を仕掛ける。

「気合、入れてぇ！　斬ります！」

今までよりも軽く、今までよりも硬く、今までよりも鋭いその2本

の刀剣を振り、武蔵の主砲を回避し続ける古鷹の懐に飛び込んだ。超至近距離であるために、簡単には避けられないはず。
しかし、古鷹には尻尾のような艤装という質量兵器が存在する。それは攻防一体に使える深海棲艦ならではのモノであり、さらには先端には主砲やら甲板やら何もかもが配置されている万能な一品。
「やられませんよ、その程度では」
比叡の斬撃に合わせて身体を捻り、猛烈な勢いで艤装を振り回した。そんなものをモロに喰らったらタダでは済まないことは誰が見てもわかる。
だが、比叡は退かない。その勢いを眼前に見せられても、突き進む力は衰えない。
「受けてぇ！　払いぃ！」
その質量兵器の一撃を、両手に握りしめる刀剣２本で真上にかち上げる。今まで以上に強固な装甲となったおかげで、この膂力に任せた強引な回避方法でも、刀剣が折れることなく繰り出すことが出来た。
全ての勢いを殺すことは出来ずとも、致命傷は確実に避けられる。さらに言えば、こんな形で回避されるなんて思っていないため、古鷹にも僅かに驚きが見えた。
「あら」
「からのぉ！　叩き斬る！」
かち上げた刀剣をそのまま振り下ろす。２本の刀剣でそのまま袈裟斬りにする流れではあったが、瞬時に反応した古鷹は、尻尾の艤装をかち上げられた衝撃をそのまま利用し、強引にこの斬撃の届く範囲から飛び退いた。
さらには、もう一度身体を捻って尻尾を振り回し、同時に砲撃まで放った。超至近距離であることは変わらないため、その一撃は比叡にはかなり厳しい。砲撃を斬り払うためのタイミングもかなりシビア。
「つらいっ！」
だが、比叡は一味違った。そんなタイミングであろうがお構いなしに、その砲撃を斬り払った。
タイミングを合わせるために数歩ほどバックステップしたことが

功を奏した。嫌でも間合いを取ることにはなるが、やられるよりはそちらの方が確実に有利にことを進められる。
当然、鎮守府側は古鷹のスタミナ不足疑惑の実証のために、勝つ戦いではなく負けない戦いを優先している。多少の怪我なら入渠で治るために、勝ち目があるときは突っ込むという戦術もあるのだが、そんな戦い方は絶対にしない。
それ故に、どれだけ有利でも一歩引く覚悟を持った状態でここにいる。古鷹が何を言おうとスタンスを変えない。戦いが長引くことに、何の焦りもない。
「突っ込まないんですね。懸命ですが、それで私に勝てるとでも」
「Ｙｅｓ．　これで勝つんデスヨ。私達は！」
砲撃を斬り払った比叡の隙を埋めるために、金剛が間に割って入る。ここも、ダイレクトに古鷹を狙った方が確実ではあっただろうが、そうしていたら比叡が危険だったかもしれないし、金剛自身にもまずいことが起きていたかもしれない。
誰もが安全に、かつ戦いが長引いても勝利に繋がる動きというものを判断するのなら、金剛が比叡の前に立つことは必然。
「ただの盾役が何を」
「ただのＴａｎｋ（盾役）と無礼てもらっては困るネ！」
ここで金剛は今までにない動きを見せる。盾を構えたまま、先程の比叡と同じように古鷹に突撃したのだ。
主砲も構えず、ただ盾を前にしての突進は、また違った形の接近戦。比叡の刀剣による戦いと比べると大分強引で雑ではあるが、これは金剛で無ければ選択が出来ない戦い方。
盾という大型の艤装による圧力は普通ではなく、目の前が埋まる程では無いにしろ、視界がかなり狭まる。金剛の猛進を押さえられなければ、その背後にいる比叡が何をしてくるかが見えない。
「下がっていいのか？　金剛の盾に押されれば、私の火力の餌食だぞ」
そこへ武蔵も砲撃を重ねた。金剛には当たらず、古鷹には掠める程度の絶妙な位置を狙って。ダメージは確実に与え、微妙に下がると直撃。大きく下がることを強要するような、意地の悪い一撃。

どちらが侵略者なのだと首を傾げてしまいそうな言動なのだが、その実、武蔵もここまでやらなければ古鷹を確実に斃すことは出来ないと感じていた。不意打ちはしないと最初に明言しているために、やることなすこと発言するという不思議な戦い方にはなっているが。

「まったく。戦艦が寄ってたかって」

武蔵の思惑に乗ることは嫌だと思いつつも、大きく回避するため、先程の比叡のように強めのバックステップ。むしろ金剛により前に進ませて、同士討ちを誘発させようと目論んだ。

自分にギリギリ掠めるくらいということは、進ませれば金剛にも掠める、むしろ直撃するまであるということに外ならない。ならば、策士には策に溺れてもらおうと心の中でほくそ笑んだ。

しかし、古鷹の想定とはまるで違う方向へと向かう。金剛は容赦なく突撃した。

「……？　もしや貴女は」

「Ｆｏｏｌ（愚か者）と言いマスカ？　どうぞご自由に！」

むしろ、武蔵の砲撃に直撃しに行くような姿勢に、古鷹は少なからず動揺した。顔にも口にも出さないように隠したが、今の金剛の行動は明らかにおかしい。間違っている。

だが、金剛は躊躇なく進んだ。むしろ、自分から砲撃の前に躍り出るような愚かな行動。古鷹がそう思うのも無理はない。

だからだろう、武蔵がニヤリと笑ったのは見えていない。

「Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｌｏｏｏｖｅ！」

響き渡る掛け声と同時に、金剛はその砲撃を捻じ曲げた。

わざと武蔵の砲撃の前に身を晒したのはこのため。最初から、武蔵は古鷹を狙っていたわけではない。金剛が砲撃の方向を盾によって曲げる戦術を、古鷹に簡単にバレることなく実行に移すためだった。

武蔵は演習終わりにサラトガに対して、金剛は何処か壊れていると称したことがある。それは、仲間のために自分が傷付くことに何の躊躇もないことに対して話していたことなのだが、あえてそこを伸ばすことが金剛にとって最善なのではとも考えた。その結果がこの、自己犠牲を攻撃に転化する技。

金剛は自分の命を勘定に入れないという、少々難のある性格をしている。自信があるからそういうことをするわけではなく、身体が勝手に動いて仲間を守ってしまうと本人が言うほど。それは、有効であれば攻撃の前に身を晒すことに一切の躊躇が無いというところに繋がった。

だからこそ、金剛はこんな非常識な戦術の訓練にも快諾し、たった1日でモノにしている。武蔵もそれには驚くしかなかった。深海合金に改装されたそのシールドだからと言っても、武蔵の砲撃を受け止められるかどうかは一度も試していないのに、出来ると信じて訓練に勤しんだのは、やはり何処か壊れているとしか言えない。

「なっ……」

来ると思っていなかった砲撃が自分へと向かってくることに、ついに驚愕の声を漏らした。ほとんど不意打ちのようなものではあるが、それはただの想定外の攻撃。何も文句が言えない、正統派で致命的にネジの外れた渾身の一撃。

故に、古鷹も咄嗟に出せる限りの全力を出した。今まで以上に速く強く身体を捻り、その砲撃を無力化しようと尻尾を振るう。頑丈さだけで言えば、金剛の盾と同等かそれ以上。それが砲撃を跳ね返せるのだから、この尻尾でも跳ね返すことは出来る。

「無茶苦茶、しますね……！」

そして、そこに全ての思考を注ぐことで成功させる。武蔵が放ち、金剛が捻じ曲げた砲撃は、古鷹の尻尾によりあらぬ方向へとさらに捻じ曲げられ、ダメージを与えるには至らなかった。

だが同時に、比叡が金剛を飛び越えるような形で前に出ていた。

「まだまだぁ！」

「届かせませんよ、その程度は」

比叡の射程は刀剣であるがために短い。少し下がるだけでその斬撃の範囲から逃がれられる。全力で砲撃を打ち払った後の隙を見せることなく、むしろ真下に魚雷を放った衝撃すら利用してさらに離れる。

攻防一体となるその雷撃により、比叡の猛進を食い止め、間合いを

取る。咄嗟にしては最善の一手。
だが、金剛の盾は、まだ輝く。
「比叡！　行って！」
「了解ですお姉さまぁ！」
ここで比叡は、金剛の盾を壁代わりにして踏み台とした。そのタイミングを完璧に合わせて、金剛が全力で押し出す。
それはまるでバネのように比叡に驚異的な押し出す力を発揮し、古鷹のバックステップよりも速く比叡を撃ち出した。
「どりゃあああっ！」
一閃。その斬撃は、確実に古鷹の胴を斬り裂く。
はずだった。
「まだやられはしませんよ……！」
古鷹の右腕がガチガチの装甲に包まれ、その斬撃を完全に防いでいた。
今までは重巡ネ級のような尻尾の艤装のみを使って戦っていた古鷹の、本来の艤装。重巡古鷹の艤装を深海棲艦のように歪ませたそれは、右腕を倍以上に膨れ上がらせたかのような見た目の形状となっていた。
斬撃を受け止めたわけではなく、滑らせるようにガードしたことによって、完全に無傷でその一撃を喰らわずに終わらせていた。
「ほう、それが貴様の本気か」
間髪入れずに武蔵が砲撃を放つ。今なら金剛も比叡も古鷹から離れているため、砲撃に何の躊躇も無い。
「ええ、こちらはあまり出したくないんですがね！」
対する古鷹は、艤装に包まれた腕を武蔵に突きつけるように伸ばした。その瞬間、武蔵に匹敵するであろう砲撃がそこから放たれる。海を割るかのような砲撃の応酬はその場でぶつかり合い、ちょうど中間と言える場所で爆発した。
「なるほど、なるほど。その姿から重巡ネ級だと思っていたが、貴様は重巡ではないな。戦艦レ級か」
今の古鷹の見た目は艦娘の時から変わらず重巡洋艦だろう。しか

し、やれることがあまりにも幅が広い。それも混ぜ合わされた艦娘達の力を最大限に発揮しているからだろうと考えられていたが、そもそも古鷹は艦種そのものが変化している。武蔵はそこに気付いた。
　尻尾の艤装の形状も、今古鷹が身に纏っている衣装も、その全てが重巡ネ級。しかし、実際はネ級と違う場所があった。本来のネ級の艤装は腹から生えている。しかし、古鷹は尻から生えている。
　尻から艤装が生えている深海棲艦はそれなりにいるし、艦娘から深海棲艦へと成り果てた存在であるために、艤装の位置などに多少の差異があってもおかしくはない。
「ええ。私には戦艦が混じっています」
「だろうな。混ざった結果、貴様はネ級ではなくレ級に成り果てたか。その戦艦が手練れだったのか？」
「そうですよ。誰が混じっているか教えておきましょうか？」
　改めて尻尾を振り回して、全員と間合いを取る。
「貴様に混じっている艦娘に見当はいくつかついている。基本は重巡洋艦だろう。最上と鈴谷だな」
　ここは大将の憶測。しかし、その思いに至るものはいくつかある。雷撃が得意な重巡洋艦となると、改装により甲標的まで扱えるようになる最上。艦載機も扱える重巡洋艦となると、改装により軽空母となれる鈴谷。
　しかし、それだけでここまでの力を得るとは思えなかった。そしてあの龍驤の存在だ。軽空母なのに主砲や魚雷まで当たり前のように使うことを考えれば、艦種など関係ない。白露という前例だけならばそこに繋がらなかったが、この場で繋がる。
「ご名答です。ですが、１つ足りません」
「それがその戦艦とやらか」
「ええ」
　もう見下すような笑みはない。格下とすら見ていない。
「私の最後の１つのピースは、戦艦榛名です」

その中にいる者

魂の混成が行なわれた古鷹に混じり合った艦娘の正体が発覚した。含められていたのは古鷹を除いて3人。内2人は武蔵の口から語られた大将の憶測であり、改装によって甲標的が扱えるようになる最上と、改装により軽空母へと姿を変えることが出来る鈴谷。ここは正解であったが、もう1人は想定外の名前。

「榛名が……貴女の中に？」

「はい。貴女の妹さんですよね。金剛さん、比叡さん」

笑みはもう浮かべておらず、その感情の荒ぶりを表すように片目がビカビカと輝いている古鷹は、当てつけのように金剛に言い放った。

戦艦榛名。金剛型高速戦艦の3番艦である。古鷹は戦艦が混ぜ込まれたことにより、見た目は重巡洋艦ではあるのだが、戦艦の力を持ち合わせていた。

結果、模倣していた深海棲艦も重巡ネ級ではなく戦艦レ級。強大な力を持つ、最強最悪のイロハ級である。古鷹は、艦種すら塗り替えられていた。

「そう、デスカ。榛名が……」

それを聞いて、金剛は自然と眉を顰める。侵略者の中に自分の妹が混ぜ込まれているという感情は、今までに感じたことのないくらいの複雑なモノだった。何と言っていいのかわからない。悲しむべきなのか、怒るべきなのか。ただ、何も感じない程薄情ではない。

比叡も同様だった。だが、こちらはどちらかと言えば怒りの方が強い。何もしない金剛の手前、自分が暴走するわけにはいかない。歯を食いしばるように耐え、怒りを抑え込む。

「ならば、その魂を鎮めるために戦いマス。そんなカタチで使われるなんて、榛名も苦痛でしょうからネ」

「はい！　比叡も賛成です！」

あくまでも冷静に、だが心を燃やして、改めて古鷹を見据える。その金剛の瞳は、心すら見透かすかのような澄んだ瞳。武蔵が言ったように、何があっても絶対に折れない者の目だ。

対する古鷹は面白くない。笑みはやめたものの、妹が自分の中に含まれているのだという発言で、多少は動揺してもらいたかった。
だが、そういう精神状態であることが確認出来たため、本気を出したのは正解であると確信もした。舌戦で優位に立つことは不可能であることを理解し、その力量により優位に立つことに努める。絶望は、精神ではなく肉体で教え込むことだって出来る。
「と、いうことだ。折れないだろう、その姉妹は」
「嫌というほどにわからされましたよ。なら、もう何も話すことは無いでしょう。ここからは、出したくもない本気を出させてもらいます」
そう言った瞬間に、尻尾の艤装から溢れんばかりの艦載機が発艦。尋常ではない数が夜空を埋めていく。
それと同時に、右腕に生成した本来の艤装を武蔵に向け、さらには金剛と比叡には魚雷を放つ。
「いいだろう、好きにするがいい！　だが、我々も正々堂々と手段を選ばん！」
「何を突然」
「戦艦に制空権を求めるな！　それならば一方的にやれるとでも思ったのだろうが、こちらにも夜戦出来る空母はいるのだ！」
今まで姿を現さなかったサラトガが、この戦場にぬるりと現れる。夜の闇に紛れるような黒い制服で、トミーガンのような形状の甲板を構え、古鷹から発艦された艦載機に向けて、同様に艦載機を発艦させた。
千歳と千代田が扱うモノと同様のそれは、数では古鷹のそれに劣っているものの、性能は充分に争えるほどのものを持っている。
「制空権はサラの子達が抑えます。皆さん、空は気にせず！」
「流石はサラだ。金剛、比叡、変わらず行けぇ！」
武蔵は変わらず主砲を構え、あくまでも金剛と比叡のサポートに回る構え。近接戦闘が出来ないとは言わないが、この戦いのメインはあの２人なのだから、基本的には邪魔立てなどしないと裏方に回る覚悟でいた。

鎮守府の防衛なのだから、この鎮守府の艦娘が前に出るのは当然である。武蔵の中ではそれが先立っていたが、今の古鷹を構築するパーツに榛名が使われていると知った今、尚のこと2人に決着をつけさせたいと考えた。
榛名の思考、記憶、人格が残っているようには見えない。しかし、揺さぶりかどうかはさておき、古鷹自身がその名前を出したのだ。ならば、姉達が前に出るのは必然。
幸いにも、金剛も比叡も後ろ向きな感情は1ミリも出てきていない。むしろ、榛名がそこにいるというのが原動力にすらなっていた。折れない心はより強く、燃える心はより熱く、ここで古鷹を終わらせるつもりで、より前に出る。
「貴女の中に榛名が在ると言うのなら、私達がその蛮行を終わらせなければなりませン！」
「いないとしてもぉ！　この比叡の刃でぇ！　ぶった斬りまぁす！」
戦法は何も変わらない。金剛が盾を、比叡が刀剣を使い、真正面からぶつかる。
その進路を塞ぐ雷撃は軽々と飛び越え、横にも後ろにも行かない。前へ、もっと前へと突き進む。
「貴女方を格下として見るのは、もうおしまいです。艦娘にもこういう輩がいるのだと、嫌と言うほどに理解させられました。今までは歯応えのない者達ばかりでしたが、貴女達は違う。全身全霊をかけて、ここで死んでもらいましょう」
ならばと、雷撃に砲撃も加えて金剛と比叡を食い止める。武蔵からの砲撃は完全に無視。当たらないように避けるのみで、視線は近い2人へと完全に移行した。
武蔵の放つ砲撃は、火力こそ最強クラスではあるものの、装填やら何やらで連射が簡単には出来ない。そのため、最高の瞬間を狙った一撃を的確に放つ必要がある。しかし、本気を出した古鷹は、それを見ることなく避けた。
「貴女方だけでも私には負けないと、あのヒトは言っていましたね。では、本当にそうなのか試してみましょう。私の全てを、貴女達にぶ

つけます」
　もう手も抜かないと宣言した。今の古鷹の、侵略者としての本気がここで発揮される。慢心を消し、余裕を無くし、持てる力を全て使い、金剛と比叡を叩き潰すと、片目の輝きはより強くなった。
「だから、ここで終わってください。本当に、本当に、貴女達は障害にしかならない！」
　艤装に包まれた右腕を突き出し、同時に砲撃を放つ。その威力は突き出した勢いも加えられたより強いものへと昇華する。
「いいでショウ。ならば私達は！」
「それを受け止めぇ！　眠らせてあげまぁす！」
　その砲撃は、先陣を切る比叡が速度を緩めることなく叩き斬った。
　もう当たり前のように刀剣を攻防一体に扱えるのは、深海合金を組み込まれたおかげだろう。以前ならば数回斬り払った時点で刀剣が使い物にならなくなっていたが、今はこれほどに酷使しても刃毀れ１つしていない。
　同様に、金剛の盾もである。武蔵の砲撃を弾き飛ばしても、凹んですらいなかった。大将は試作兵装と言っていたが、ここに持ってこられたのは完成品と言っても過言ではない。コストがとんでもないために量産は出来ないが、この戦果は後に繋がることになるはずだ。
「相変わらずめちゃくちゃですね！」
「アンタに言われたくはぁ、なぁい！」
　比叡の射程に入った。もう真正面からの攻撃は回避すらしない。超至近距離の雷撃は自分すらも巻き込むため、この距離に詰められたら砲撃か徒手空拳以外の選択肢が無くなる。
　古鷹は格闘に自信があるようなものではない。並よりは使えるという程度であり、それも魂の混成ありき。
「離れなさい！」
「断るっ！」
　どうにかして間合いを取ろうと放ったゼロ距離の砲撃を、比叡は衝撃を受けつつも紙一重で躱した。そしてさらに前へ。
　先程はその艤装によって阻まれたが、今度はそうはいかないと、砲

撃を放った瞬間に狙いを定めて胴を一文字に斬り払う。
だが、そちらには尻尾の艤装が対応。先端がバケモノの頭のようになっているため、その斬撃を噛むように刀剣に噛み付く。
「ぐっ！」
「このまま噛み砕く！」
そして、その顎の力を使って刀剣を破壊しようとしつつ、右腕の艤装で比叡を殴りつけた。
ただの拳で殴るならまだしも、あちらも強固な艤装。しかも腕を包み込むほどの塊だ。適当に当たっただけでもダメージが大きいのに、それが見事に顔面に食い込む。
「ぎっ!?」
「なんて頑丈な……でも、本体を先にやってしまえば……！」
「させると思ってるんデスカ？」
比叡とは逆側に金剛が移動していた。比叡の頑丈さと気合を信じ、古鷹を確実に倒すために盾を押し出す。
盾は守るためだけにあらず、これこそ攻防一体の兵装。先程も構えながらの突撃を繰り出したが、それは武蔵の砲撃を弾くために前に出たようなもの。だが、今回はそれすらもなく、ただただそれで押し潰すために前に前にと突撃。
「こちらも……！」
比叡を殴っている余裕などない。金剛のこの質量兵器に押し潰されたら、いくら強靭な肉体であろうがひとたまりもない。
故に、尻尾で比叡の刀剣を押さえつつ、身体を捻りながら右腕でその突撃を強引に食い止めた。砲撃も同時に繰り出したことにより、金剛の勢いを押さえ込む。本来なら盾ごと金剛を沈めることが出来ていただろうが、ゼロ距離で受けても盾は壊れない。勢いが失われた程度。
「比叡！　気合、入れてぇ！」
「行きまぁす！」
艤装に噛まれている刀剣をそのままに、比叡は艤装を小さく変形させる。

あくまでも刀剣は主兵装として扱っているに過ぎない。比叡は本来、戦艦である。武蔵には及ばないが、重巡洋艦を優に超える威力を持つ主砲だって扱えるのだ。
刀剣に思考を向けさせ、金剛に右腕を使わせて、ここで本来の戦艦としての力を発揮する。今ここで放てば、古鷹だけでなく金剛にも、むしろ比叡にも被害が出るだろう。しかし、そんなことを躊躇している余裕はない。
「こんな、近くで……！」
「当たれぇ！」
そして、その主砲はガラ空きとなった胴に狙いが定められた。今ここで古鷹が躊躇わずに尻尾の艤装から砲撃をしていれば、また違った結末になっていたかもしれない。
しかし、ここで古鷹がとった行動は、あまりにも想定外だった。
「比叡御姉様、やめて……！」
その声色は、その瞬間だけは、古鷹の中に入っているであろう榛名だった。
榛名の魂が使われているという事前情報があるからこそ、この言葉、この声色に真実味が出てきてしまっていた。
実際に榛名の記憶、榛名の思考が残されているかはわからない。白露という前例があり、それだと思考も記憶も全てを残していてもおかしくはない。
古鷹は、最低最悪の一手を放った。泥に侵された魂が選び取った、人類の敵と言える思考回路の選択。
「なっ……」
ほんの少しだけ、比叡は撃つのを躊躇ってしまった。姿形は違う。全く違う。なのに、その声だけで主砲の狙いもブレてしまう。
「姉妹が中に入っているというのは、こういうカタチで役に立つんですね。白露さんに学ばせてもらいましたよ」
そのほんの少しの躊躇が命取り。ここで改めて刀剣を食い止めて

いた尻尾の艤装が強引に動き回り、さらに比叡の体勢を崩した。もうこうなってしまっては、砲撃しても古鷹には当たらないだろうし、刀剣もまともに扱えない。
だが、この一手は、古鷹にとっても最悪の手段となる。比叡は優しいが故にここで妹の姿を想像してしまった。そのために攻撃を躊躇した。しかし、もう1人。優しくも強い、金剛型の長姉には、その一手は逆効果となる。
「それはダメ。本当にダメ」
盾が開いたかと思った瞬間、猛烈な勢いで金剛の腕が古鷹の顔面を掴んだ。
「榛名の真似をしたよネ。わざわざ、私達に一番効くからって考えて」
その目は一切笑っていない。古鷹の頭をギリギリと締め付けながら、徐々にその身体を持ち上げていく。
あまりのことで、古鷹は金剛を撃つことも出来なかった。こめかみに走る激痛と、格下と思っていた艦娘からのこの攻撃に、動揺が隠しきれていなかった。

「妹の魂を冒涜するな」
金剛はキレていた。かつて、『鬼金剛』と呼ばれていた頃のそれを、表に出しているかのようだった。

秘めた鬼

金剛は鎮守府の中でも特に頼られている艦娘の1人だ。提督からの信頼も厚く、仲間からも慕われている。その理由はとても簡単で、誰に対しても時には優しく、時には厳しく当たり、艦隊全体の成長を促す中心的な存在として認識されているからだ。

秘書艦を務める五月雨以上に戦場に出ることが多く、そしてどんな戦場にも対応して確実な戦果を収める。ＭＶＰを取る時もあれば、仲間に対して最高のサポートに徹することもある、名実ともにエースといえる存在。

そしてそれは、戦いの場だけではなく、私生活にまで及ぶ。悩みがある者がいればティータイムを開いて相談に乗り、強くなりたいと願う者がいれば率先して訓練に付き合った。

それ故に、この鎮守府では特に目立つ、お姉さんのような存在だった。金剛型の長姉であるだけでなく、鎮守府にいる全ての艦娘の長姉とすら感じる存在感。

そんな金剛は、仲間を叱ることはあっても、怒りを露わにすることは無かった。実妹である比叡ですら、この鎮守府で金剛が本気で怒っている姿を見たことが無かった。

当然、見たいからと言って金剛を怒らせてみようなんて考える者は誰もいない。そんなもの見ても損しかないし、金剛を困らせるような真似を進んでやるような者は、そもそも考えた時点で叱られる。

それに、金剛が本気で怒るトリガーが誰もわからなかった。普段通りに過ごしていたらそんなことが起きるわけがない。戦場で何かあったとしても、沈着冷静にその場を乗り切る。前回、前々回と2回古鷹と戦い惨敗した時も、怒りはしなかった。

そのトリガーが今、古鷹の言葉によって引かれた。

「妹の魂を冒涜するな」

かつて、『鬼金剛』と呼ばれていた頃のそれを、表に出しているかのようだった。その眼光には何処にも慈悲はなく、古鷹の顔面を掴み上げ、艤装も展開しているにもかかわらず持ち上げていた。

古鷹の足はもう海面にもついていない。コメカミがミシミシと音を立てており、金剛はそのまま古鷹の頭を握り潰すつもりでいる。
「つぐっ、あああっ！」
あまりのことで動揺していた古鷹も、命の危機を感じたか、すぐに気を取り直して金剛の握力を少しでも緩めようと、右腕の艤装で激しく殴打する。
当然ながら金剛の腕は何にも包まれていない生身。美しい見た目に違わぬ綺麗で少し華奢な腕を艤装で打ち付けられようものなら、あっさりと折れてしまいそうだった。
「ふっ……っ」
そんな古鷹の思惑通りにならないように、顔面を握り締めたまま強引に引き寄せた。そして、その勢いを殺すことなく膝を叩き込む。腹ではなく、胸に。
艤装が腕をどうにかする前に蹴りを入れられたため、その攻撃はキャンセルされ、力が一瞬抜ける。
「つぎっ!?」
深海棲艦であるために頑丈になっていたものの、ダメージはそれ相応。骨が折れるようなことはなくとも、内臓は激しく揺さぶられる。
「この……っ！」
激痛に苛まれながらも、金剛を引き剥がすためにあらゆる手段を用いる。右腕の艤装ではダメだと判断し、次は尻尾の艤装を振りかぶった。未だに比叡の刀剣は噛み付いたまま離しておらず、それを先程まで握りしめていた比叡は、榛名の声色を使われたことで体勢を崩した後、尻尾の振り回しによって振り払われてしまった。
つまり、今の古鷹の尻尾は完全なフリー。金剛の手を引き剥がすために、１００％の力を発揮出来る。さらに言えば、咥えたままの比叡の刀剣までである。
「っ！」
対する金剛はさらに握力を強めた後、またもや思い切り引き寄せたかと思った瞬間、力いっぱいその脚を払う。古鷹の身体は突然、海面に平行にされていた。

そうなってしまうと、尻尾の動きは狂う。金剛に狙いを定めていたのに、意図せず空を切ることとなった。

そして、金剛はその尻尾の動きを殺すことなく振り回した後、顔面から手を離すことなく海面に叩き付ける。陸で叩きつけられるよりはダメージが少ないだろうが、背面から受ける衝撃はそれなりにあり、古鷹は大きく咳き込むことに。しかし、顔面が未だ掴まれているままであるために息が上手く出来ない。

「かはっ!?」

息がおおよそ抜けたタイミングを見計らって、空いている拳でさらに胸を殴りつける。肺の中の空気が全て抜ける感覚。

その間もコメカミへの締め付けは緩むことはない。骨が軋み続ける痛みと、息が出来ない苦しみ。それを同時に与えつつも、だが死に至ることはない。

今の金剛は怒りに任せ、無限に苦しみを味わわせるような攻撃を繰り出し続けている。生かさず殺さず、先程の行動を心の底から後悔するように、身体に教えるかの如く。あんなことをしたから今こんな目に遭っているんだぞと言わんばかりに。

「ひ、ヒエー……」

そんな金剛の姿を見て、比叡はただただ見ていることしか出来なかった。自分の知らない姉の姿を見せられて、震えてしまっていた。

温厚で、寛容で、いつも笑顔を絶やさないような大人の女性。比叡の目から見ても、姉とか関係なしに尊敬出来る、強く正しく美しい艦娘。それが金剛だ。

しかし、今の金剛は何もかもが違う。艦娘となってから見せたことのない冷たい瞳で、ただ古鷹を滅多打ちにしているその姿は、まさに鬼。鬼神とも呼べるほどの苛烈さは、あれほどまでに勝てなかった古鷹を相手にしても手も足も出させることはない。

何かをしようとした瞬間には既に対処し、その数倍の痛みを与えて黙らせる。しかし、身体に傷をつけるようなことはしない。骨を軋ませ、息が出来ないように苦しませる。

実際、金剛は既にあの古鷹には追いつける、むしろ追い抜く程の実

力を、艦娘ながら持ち合わせていたのだ。しかし、元来の優しすぎる性格と、自分のことを顧みることなく仲間のことを第一に考えることで、出せる力の半分近くしか出せずにいたに過ぎない。
自分のことは後回し。仲間達と共に歩くため、無意識に実力を下げていた。高すぎる力で孤立するより、抑えた力で仲間と一緒にいることを、無意識に選択していた。誰にも、自分ですらわからないように。
だが、今の金剛は怒りによって何も見えていない。守るべき仲間が見えなくなったことで、出せる全ての力で古鷹を完膚なきまでに叩き潰そうとしていた。
「……あれが金剛の本来の力か」
それを眺めていた武蔵も、手を出すことが出来なかった。むしろ、ブルリと身体が震える。そして、自然と笑みが浮かんだ。あの強さを自分でも相手したいと、武者震いが止まらなかった。悪い癖だとサラトガが諌めるほど。
怒りに呑まれれば本来の力が発揮される。溢れることなく、艦娘としての正しい怒りを振るい続け、結果があれだ。
「こ、このっ、突然……っ」
喰らっている古鷹は堪ったものではない。自分で呼び込んだ種であるとはいえ、艦娘にこうもいいようにされていることが許せない。泥によって歪みに歪み、あらゆることを利用しようとするくらいに下劣な性格にされているせいか、この現実が認められない。
「やられてっ、堪るか……」
「後悔しなさい。自分の行いを」
また頭を引き寄せたかと思いきや、次は腹に膝を入れる。そして、握力をさらに強めて激痛で苦しめる。
次第に古鷹は酸欠状態へと陥っていく。正常な判断が出来なくなっていき、泥により歪んだプライドが増長し、より深みへとハマっていった。格下だと考えていた艦娘に、今までに二度も圧倒した艦娘に、何もさせてもらえずやられるなんて、プライドが許さなかった。
「私が何を言われようが構わない。蔑まれようが、罵られようが、痛くも痒くもない。どうであれ、私は私だから」

言いながらもその攻撃は一切止めることはない。空いている手も使って、より苦しむように急所ばかりを狙う。腹を蹴って肺の中の空気を軒並み吐き出したタイミングで喉を殴りつけ、より窒息を狙った。

「仲間を蔑むのは許せないが、格下と言うくらいならまだマシだった。気に入らないけど、傲慢なのは貴女達の在り方だろうから、ここまでは無かった」

苦しみ、涙目になったところでさらに苛烈になる。ゼロ距離で砲撃を放ち、金剛の隙を窺っていた艤装に包まれた右腕を爆破するように撃ち貫いた。その爆発で金剛自体も傷付くが、痛みすら感じていないように表情は変わらない。

対する古鷹は余計に苦しんだ。いくら艦娘以上に強固な艤装であっても、戦艦の主砲をゼロ距離で喰らえばひとたまりもない。艤装の中にある生身の右腕も曝け出され、ズタズタにされた。

「死んだ妹の力を、戦艦の力を利用するのもギリギリだった。そういう存在であることを理解しているから、すんでのところで止まれた」

残された尻尾も同じように撃ち抜いた。再び爆風を喰らうものの、やはり金剛は一切動じない。自分が傷つくことは全く気にならない。

腕の艤装よりも強固なのか、砲撃を受けても破壊まではいかなかった。しかし、内部がおかしくなったか機能不全を起こし、今の今まで咥え続けていた比叡の刀剣をポロリと落とす。

金剛はそれを見逃すわけもなく、沈んでいく前に拾い上げた。

「でも、妹の力だけならまだしも、妹の在り方までを利用して捻じ曲げたことは、万死に値する。このゲスめ」

その刀剣を振りかぶると、腕力のみで尻尾を斬り落とした。最も使い慣れている比叡でも出来なかったことを、怒りのみで本気を出した金剛は、いとも簡単に成し遂げてしまった。

当然、金剛にも代償はある。この本気は、金剛の力を１００％どころかそれ以上の力を発揮してしまっている。今の一撃で、金剛の腕は悲鳴を上げていた。筋肉が壊れ、動かすだけでも激痛が走る程に壊れた。

だが、眉一つ動かさない。痛みがより力を発揮するための原動力となり、今では２００％の力を出してしまっている。
「何か、言うことは」
息も絶え絶えな古鷹に向けて、刀剣を突きつけながら問いただす。
「……謝れとでも、言うんですか」
歪んだプライドにより、そんなことが出来なくなっている古鷹を、金剛は冷たい瞳で睨みつけていた。
「何を勘違いしてるの。貴女に望む言葉は、辞世の句だけ。謝っても許さない。今までやってきたことを後悔しろと言ったでしょう。後悔して、後悔して、それでも許されることなく惨めに死ぬの。それでも足りない」
殺意しかないその瞳。自分が元々艦娘であり、白露のように元に戻るかもしれないということをチラつかせて躊躇わせるつもりだったが、それすらももう通用しない。
自分のダメージと同じように、古鷹の言葉は素知らぬ顔で受け流す。心に留めておくつもりもない。謝罪の言葉も、命乞いの言葉も、何も聞くつもりはない。この先にあるのは死のみ。
古鷹は深海棲艦化して初めて、心の底から恐怖を感じた。
「ま、待って」
「待たない」
今までで一番強く顔面を握り締めた後、力いっぱい真上に投げ飛ばす。腕と尻尾、どちらの艤装も破壊された古鷹は、身動きの取れない空中に投げ出されたらもう本当に何も出来ない。
そんな古鷹を見据え、比叡の刀剣を両手で握り締めた金剛は、そこへ今の怒りを全て込める。
「格下の蔑んだ相手にやられて後悔しなさい」
そして、落ちてくる古鷹の胴を、綺麗に袈裟斬りにした。

駆逐艦達の意地

時は少し遡る。古鷹がまだ榛名が混じっていることを暴露する前。

新たな敵、龍驤と戦うのは駆逐艦達。軽空母である龍驤の航空戦は、同じように夜戦が出来るようになった千歳と千代田がどうにか食い止め、残された白露型と島風によって本体を叩く。

しかし、龍驤も魂の混成がされた深海棲艦であり、艦載機を飛ばしながらも当たり前のように砲撃と雷撃を繰り出してきていた。さらには、仲間達との連携で背後を取ったはずの島風の砲撃は見ることなく避けられた挙句、お返しと言わんばかりに格闘によるダメージを負うことになった。

見た目は小柄で駆逐艦のような外見であっても、持っている力は尋常ではなかった。ただ強いだけではなく、万能。この一言に尽きる。

「島風、大丈夫かい！」

涼風が声をかけるが、大丈夫だと表すように手を挙げる。腹を思い切り蹴られてしまったものの、骨まではやられておらず、ただただ強い衝撃を受けただけにすぎない。

それだけ龍驤は駆逐艦達のことを下に見ていた。余裕しかない表情で、まだまだ疲れすら見えない。古鷹にあったスタミナという懸念点を持っていないようにも見える。

「うちが手ぇ抜いてやったから死なんで済んだんや。もうちょい楽しませてくれんか」

「……そういう慢心は、足を掬われる」

一部始終を見ていた山風が、心底忌々しげに呟いた。涼風と五月雨、そして島風が大きく動きながら龍驤の行動パターンを確認し続けたのだが、やはり隙は無かった。

雑に攻撃しているように見せかけて、その実、恐ろしく精度の高い攻撃。乱射のようで、的確にこちらの隙を作るためにわざと外していたに過ぎない。それ故に、弾薬燃料もかなり節約されていた。まるでこちらが長期戦を狙っているのを把握しているような長期戦狙い。

そうなると、実力が上の方がより長い時間戦うことが出来るように

なる。今の段階では、龍驤の方が圧倒的に上。
「残念ながら、お前らみたいな駆逐艦（ジャリ）に掬われる足は持ち合わせとらんねん。それに、掬う力も無い奴が言うたらアカン。束になっても、うちの足はビクともせんぞ」
　言いながらクルリと一回転すると同時に全方位に魚雷を放つ。回避方向まで見越した雷撃を避けるには、それ自体を破壊するしか無い。さらには、今古鷹との戦いの真っ最中である金剛達の方にまで流れていってしまっているため、それは特に対処が必要。
「あっちの魚雷はあたいが片付ける！」
　それに即反応したのは涼風だ。戦場の全てが見えているというだけあり、龍驤が放った瞬間に自分の目の前にある魚雷を片付けて、別の戦場へ向かう魚雷を破壊するために行動する。
　他の者達は、自分に向かってくる魚雷を即破壊し、龍驤への攻撃を優先した。涼風なら魚雷の破壊も任せることが出来る。そう信じているために、何の躊躇いもなく行動に移すことが出来た。
　回避方向がそれしか無い状態にされたのだから仕方ないのだが、その魚雷は明らかに火薬量が多く、破壊した瞬間の爆発が通常よりも大きい。つまり、水柱がかなり大きく立つことになる。
「っ……涼風、気をつけて！　全員動いてぇ！」
　何かに気付いた五月雨が叫んだ。その瞬間、涼風のいる方向から爆音が鳴り響いた。
　この水柱は明らかに目眩しである。破壊しなくてはいけない場所に放ったことで、次の一手へと繋いだ。
　龍驤からしたら、今ここにいる者の中で最も鬱陶しいのは涼風だ。今まで手を抜いているとはいえ必勝パターンのような流れを簡単に突破するような者は、早々にいなくなってもらいたいということだろう。
「邪魔すんじゃあないよ！」
　爆音に紛れて涼風の声も響く。水柱で視界を塞がれても、新兵器の電探のおかげで、龍驤の次の行動は多少なり把握は出来ている。自分に向かって砲撃を繰り出すことくらい想定済み。

しかし、その精度が普通ではない。龍驤だって水柱で視界が塞がれているはずなのに、さも当然のように涼風を狙い撃った。回避しなければ直撃するような場所を。
真後ろから見ずに島風の攻撃を避けたように、そもそも目に頼ることなく周囲を見渡すことが出来ているのではないか。それこそ、今の涼風と同じように。
「つぶね！」
「おう、避けるんやな。やるやんけっ！」
その砲撃はどうにか避けることが出来た涼風だが、辛うじてだったせいで腕に掠めてしまった。傷と言える傷ではないために問題は無いものの、その一瞬は大きな隙となる。
そこを狙って、龍驤は恐ろしい速さで涼風に接近していた。他はもうどうでもよく、真っ先に始末する必要があると考え、砲撃に追い付くのではと思える程の速さを発揮していた。
「はっや!?」
「魚雷を処理したのは褒めたる。でもな、時には仲間を見捨てることも必要なんとちゃうか。そのせいで、お前はここで終わるんやからなぁ！」
ここでまたもや格闘。雷撃を避け、砲撃を避けたところにとなると、それすらも回避するのはかなり難しい。ましてや、駆逐艦達に格闘の心得なんてあるわけもなく、そのものにぶつかってこられたらどうにもならない。
龍驤も素人ではない。先程の島風に対しての蹴りは、まだ殺す気が無かったので手を抜いていただけだ。本気で蹴り飛ばしたら、涼風はまず間違いなく再起不能になる。鎮守府近海であり、入渠がすぐに出来るとはいえ、一撃で致命傷にされたら意味がない。
「うちの蹴りで真っ二つにしたらぁ！」
瞬時に予測は出来たとしても、そこから回避に転じるための行動には即座に繋がらない。どうしても隙が生まれる。その瞬間を狙われてしまった。
回避は出来ないため、どうにかダメージを最小限に抑えなくてはい

けない。しかし、駆逐艦の艤装は小さく、身体そのものも小さい。ガードしきれるようには思えなかった。
腹を蹴られたら、その言葉通りになってしまいかねないため、犠牲にするなら腕。それでも主砲が持てないくらいにはされるだろう。だが、背に腹はかえられない。死ぬよりはマシ。
「涼風ぇ！」
その瞬間。激しい衝突音と共に、龍驤の姿が涼風の前から消えた。
涼風の危機を救ったのは、限界以上の速度を出した島風。水柱で周囲が見えなくなったところで、最後に見えた龍驤の姿から涼風を狙うのでは無いかという予想はついていた。
だが、島風は裏に回っていた都合上、撃とうとするとその直線上に涼風本人がいた。回避されたら涼風を余計に傷つけてしまう可能性がある。
そう考えた瞬間、身体が勝手に動いていた。涼風を救うにはこれしか無いと、爆発的な踏み込みと共に龍驤へ突撃。他の者を傷付けず、自分だけが傷付くだけで済む最善の手段を選択した。
ほとんど無意識ではあったが、仲間のために尽力するという島風の気持ちが、限界を超えた力を発揮した。
「うおっ!? どっから来た！」
それだけのことをしても、龍驤は吹っ飛ばされたことで涼風を蹴り飛ばせなかったくらいでノーダメージ。島風も大きなダメージでは無いものの、あまりにも咄嗟のことだったために脚を痛めてしまった。
「お前かい島風！ お前は二度と疾んな！」
すかさず主砲でフラつく島風の脚を撃ち抜く。
「っあああっ！」
ギリギリのところで回避したために脚を失うことは無かったものの、強めに掠めてしまったために肉を削がれるようなカタチになってしまい、まともに立ち上がれなくなってしまう。これでは完全な足手纏いになってしまうだろう。自慢のスピードも出せず、浮き砲台くらいしか出来ない。

しかし、島風はそれを悲観していない。あのままでは涼風が確実に始末されていた。それをどうにか出来たのは喜ばしいこと。自分は死んでいないのだから、この程度の怪我など安いものだ。
昔の自分ならスピードを奪われて錯乱していただろうと思いつつ、痛みに耐えながら笑みを浮かべる。まだ余裕があるのだと見せつけ、自分を囮に使う。
「何わろてんねん。先に始末したろか」
「へっ、出来るものならやってみなよ。私には仲間がいるんだから、簡単には出来ないよ」
強がりなのは誰にだってわかる。しかし、この島風の言葉は、ここにいる者全てを鼓舞した。
「そうです。島風ちゃんはやられません。私達がいますから！」
そこに割り込んだのは五月雨。水柱が無くなったことで視界が開けたため、島風を守るために龍驤の前に立つ。
「ほーん、お前らの中では島風と涼風くらいしか腕のあるのはおらんと思うんやけど、自信満々やんけ。慢心ちゃうか？」
「好きなように言ってくれていいです。でも、事実ですから」
五月雨の後ろ。そこから飛び出すように現れたのは江風。マントを棚引かせて、その目を輝かせながら、一番近付けるタイミングを狙っていた。
残された駆逐艦の中で最も近接戦闘を学んだのは江風だ。先程までは乱射によって近付くことが出来なかったが、ここまで来たら行ける。
「駆逐艦（ジャリ）がうちに殴りかかろうって言うんか」
「テメェらがこういうことばっかやってくるから、江風が特訓したンだよ！」
そして主砲を逆手に握り、砲撃を放ちながら殴る。砲撃は当然空砲であり、後ろに被害が出ないように考慮済み。その衝撃も込みで、ただの駆逐艦では出せない威力の拳が繰り出される。
無論江風にもその反動があり、一撃を繰り出すごとに腕が壊れていくことになる。しかし、その回数を増やせるように筋トレなどを繰り

返し、この戦場でも何度か使えるようにはしていた。
「うおっ、マジかコイツ。んなことようやろう考えるわ」
しかし、諸刃の剣を振っても龍驤は軽々キャッチ。片手で受け止めたかと思えば、お返しと言わんばかりに逆の手で江風の顔面を殴り飛ばす。
その速さは並ではなく、さらには顎を狙ってきたために、直撃で脳を揺らされた。
「かふっ……!?」
「わざわざ同じ土俵に立ってやったんやで？　感謝しいや！」
「でも、私にも近い！」
そこへさらに五月雨が懐に入り、その腹に主砲を構えていた。この位置から撃てば、防ぐことも出来ずに腹に風穴が空く。ゼロ距離を通り越してビタ付けのようなものだ。絶対に回避出来ない。
「させるかい！　ダボがぁ！」
しかし、トリガーを引く前に強烈な蹴りが五月雨の腹に食い込んでいた。よりによって爪先が捩じ込まれ、内臓を傷付ける程の衝撃を受ける羽目に。力も抜けて、砲撃は不発に。
「っあっ!?」
「わちゃわちゃわちゃわちゃと、いい加減離れやぁ！」
「うるせぇ！　ここでアンタは始末しないとダメなんだよぉ！」
次は涼風。正面から江風と五月雨が猛攻を繰り広げた隙に、真後ろに回り込んで抱きつくように首を絞める。いわゆるチョークスリーパーのカタチに持ち込んだ。
幸いなことに、龍驤は背部に大型の艤装は持ち合わせておらず、こういうことが可能。邪魔なものは腰に接続された基部だが、その程度なら何も問題にはならない。
「ぐがっ、お前、何してくれんねん！」
しかし、江風を殴り飛ばした腕をそのまま下げ、その肘を涼風の腹に捩じ込んだ。その威力も相当なもので、首に回した拘束が弛んでしまう程。
「くはっ!?」

「言うたやろ！　駆逐艦（ジャリ）が束になろうが、うちはやられんってなぁ！」
「そんなこと知らない」
ここまで来て、真打ちと言わんばかりに山風が主砲を放った。３人の姉妹が龍驤に纏わりついているような状態でも構わず、その誰にも当たらないであろう頭に向けて。
感情の機微に敏感な山風は、とにかくヒトを見る目だけは他の追随を許さない程である。そこから伸ばされたのが、このスナイプ。寸分違わぬ一点を綺麗に撃ち抜くために、心血を注いできた。
最終的にこういうことになるだろうと予測した提督の指示。誰かが最高のスナイパーになることは決定付けられていたが、それを山風が自分から引き受けた。
まだ成長途中であるため、今回の砲撃には少しだけ躊躇いはあった。だが、今やらなければ意味がないと、決死の覚悟で撃つ。
「うおっ!?」
しかし、やはり心の奥底では抵抗があったのだろう。僅かに軌道は上に逸れ、小さくしゃがまれたことによって回避されてしまう。
「やってくれるなぁ山風ぇ！」
涼風の顔面を殴りつけて引き剥がし、江風も振り払う。そして五月雨と島風を蹴り飛ばした後、山風を睨み付けた。
だが、明確な殺意をぶつけられても山風は怯まない。むしろ、同じように睨みつけ、主砲を構え直す。
「お前が先に死にたいんか。そうかそうか。ならお望み通りに……っ!?」
龍驤の言葉が途切れる。そして視線がゆっくりと下に。
その腹には、魚雷が深々と突き刺さっていた。

「あー、やっぱりダイレクトにぶつけたらちゃんと爆発してくれないかー。結構いい手だと思ったんだけど」
「魚雷は海中を走らせてこそ、ですよ。妖精さんが混乱しちゃってます」

「だよねー。普通の使い方してないから、誤作動みたいなのしちゃったかな」
　そして現れたのは、北上と大井。言葉は軽いが、目は一切笑っていない。
「でも、殺さずに痛めつけられるってことじゃん。これは都合がいいかもね」
「またそんなことを……北上さんがもう少し早く来ていれば、あの子達がここまで傷付くことも」
「アイツらの鎮守府なんだから、アイツらが守らにゃダメでしょ。本来あたしは手を出すつもりも無かったよ」
　そんなことを言いながらも、やる気満々。小さく息を吐いた後、龍驤を見据える。

「まぁ、美味しいとこ貰っちゃうようで悪いんだけど、あたし達もここから参戦するわ。アイツ、ぶちのめしてあげようか」

北上の力

「まぁ、美味しいとこ貰っちゃうようで悪いんだけど、あたし達もここから参戦するわ。アイツ、ぶちのめしてあげようか」

新たに戦場に現れた北上は、何の気無しにそう言い放った。隣にいる大井も、そうなるのが当然だという表情で付き従う。

不思議とその言葉に偽りはなく感じ、これ以上無いくらいに頼りになる空気を持っている。訓練に付き合ってもらっているからこそ、その強さは身に染みているのが駆逐艦達だ。

そう言われて面白くないのは龍驤である。艦娘のことは全て格下だと思っている龍驤にとって、それから余裕を持ってぶちのめすと言われたら、気分が悪いのは当然のこと。慢心しているわけではなくとも、むしろ自分が格下のように見られるのは我慢ならない。

「なんやお前は。いきなり出てきといてその言い草は」

腹に突き刺さる魚雷を投げ捨てた龍驤は、駆逐艦達を無視するかのように北上を睨みつける。

山風以外は息も絶え絶えであるため、北上が挑発してくれたおかげで今はそちらに意識が向いているのはありがたかった。特に江風は顎への一撃で脳が揺さぶられており、意識が一瞬飛んだことでフラフラ。腹に爪先を入れられたせいで吐き気が止まらない五月雨や、顔面を殴られたことで鼻血が出てしまっている涼風も、戦闘は続行可能だが少々キツイ。

そして一番危険なのは島風。脚を撃たれたことで血が止まらず、立ち上がることも出来なかった。入渠すれば全てが治るとはいえ、ダメージが大きすぎる。

北上が挑発したのは、そちらから意識を逸らすためでもあった。その間に少しでも回復してもらいたい。島風にはこの場から逃げてもらいたいという思いがヒシヒシと伝わる。

口では駆逐艦のことをウザいウザいと言いながら、大井が頻繁に言うように、北上は結構な子供好き。自然とその姿を目で追うし、特訓の手助けなんかも率先して行なったりする。

そんな北上が、駆逐艦達がやられている姿を見せられたら、ここに来ないわけが無かった。
「言葉通りだよ。ここでぶちのめしてあげる」
「じゃかあしいわ。やれるもんならやってみぃ」
「それじゃあ、遠慮なく」
言うが早いか、龍驤の眼前に魚雷が向かってきていた。またもや海中ではなく投擲。爆発しないのは先程の攻撃で理解しているはずなのだが、お構いなしに顔面を潰すために投げていた。
「またかい！　二度も三度も効くわけないやろが！」
流石にそれが通用するわけもなく、顔面に突き刺さる前に軽々とキャッチされた。しかし、その行動が間違いであることに気付くのはすぐのこと。
「そりゃあ掴むよねぇ。避けるんじゃなく、掴むと思ってたよ」
そうした時には、北上が一気に間合いを詰めていた。
顔面を狙われるということは、頭を振ることで避けるか、それを掴むことで自分に届かせなくするかのどちらかになる。だが、北上は龍驤が避けずに掴むことを確信していた。何故なら、その行為が無意識にでも染み付いた格下への対応。力の誇示に繋がるからだ。
避けるなら誰にでも出来るが、その手で食い止めるというのは誰にでも出来るとは言えない。万が一失敗したら痛い目を見るため、無意識でも避ける方を優先する。しかし、龍驤は根っから艦娘を見下すようにしているため、避けるよりも掴むを優先する。
そうすれば、嫌でも視界が塞がる。一瞬でも視線が逸れればいい。それを実証するように、北上はもう龍驤の側にいた。
「おまっ」
「先に言っとくけどさぁ、マジで本気出した方がいいよ。あたし達、ガチで強いから」
掴んだ魚雷を顔面に捩じ込むように拳で叩き込み、嫌でも回避するように仕向けた。
いくら深海棲艦化しているとはいえ、そのまま押されてしまっては避けざるを得ないが、ただでは転ばないとこれだけ近付いてきた北上

の腹に向けて主砲を構えた。
「大井っち」
「はい、任せてください」
しかし、構えた瞬間には大井がその主砲を破壊するために主砲を放っていた。龍驤よりも先にである。北上の腹に狙いを定める前に撃ち抜かれそうになったことで、嫌でも北上から離れざるを得ない状況に持っていかれた。
舌打ちしながら魚雷を離し、大井からの砲撃を受けないようにバックステップしつつも、北上に改めて狙いを定めて反撃に出る。
「どうせ退くなら撃ってくるよねぇ。そんなの誰だってわかるよ。あたしだってそうするもん」
その砲撃は悠々と回避する。まるで撃たれる場所が予想出来ていたかのように。
さらにはそのタイミングに合わせて魚雷を放つ。今回は投擲のようなことはせず、魚雷本来の使い方で。勿論それは、回避する方向を読んでいたような軌道で龍驤に向かっていく。
「はっ、んなもん喰らうかいな！」
「魚雷はね」
その魚雷も回避されることは織り込み済み。避ける方向は右か左かという程度であり、そのどちらも埋めてしまえば確実に当てられる。
故に、大井がどちらにも撃った。片手で持つ1つの主砲から、瞬間的に回避方向の両方に。1発しか撃ってないような音なのに、砲撃は2発放たれていた。
「うお、マジか」
だが、龍驤はそれもしっかり回避。スピードを一気に上げて、大井の砲撃を紙一重で躱した。
そこへ北上がさらに突撃していた。次の魚雷は海中では無く、その手に握りしめて。
「またかお前！　魚雷は魚雷らしく使わんかい！」
「こういう使い方もあるってことでしょ。固定観念に囚われてたら勝

てるものも勝てなくなるんじゃない？」
　またもや顔面に向けての投擲。今回は龍驤も学習したか、掴むのでは無く最初から回避行動へ。
「はい、北上さん」
　合図を送る前に大井がその魚雷を撃った。最初から龍驤を狙わず、回避した瞬間の魚雷を破壊することで大爆発を起こす。
「うおっ、何すんねんお前らぁ！」
「何って、そういう戦術なんだっつーの。理解出来ない？」
　その爆風を突き破るように、さらに魚雷が投擲されていた。そちらは躱すのでは無く掴むことでダメージを回避。
　しかし、そうされることを予想していたかのように北上そのものが突っ込んできていた。爆風を突き破り、握り締めた魚雷を鈍器のように振りかぶり、殺意を込めて殴りかかる。
「野蛮なやっちゃ！」
「夜襲仕掛けてくるような輩に言われたかないねぇ」
　それを受け止めれば北上は無防備になるだろう。龍驤は咄嗟にその一撃を止めるために腕を振り上げる。キャッチした後、五月雨の時と同じように爪先を叩き込めばそれで終わりだと。
　だが、次の瞬間にはまたもや龍驤の腹には魚雷が突き刺さっていた。振りかぶった魚雷に目が行っている内に、太腿に現れていた魚雷発射管から1発、ダイレクトに直撃させた。
「つぐ……一度ならず二度までも……！」
「死んでないんだからまだまだよ。あたしゃアンタを殺すつもりで撃ったってのに。やっぱ主砲くらい持つべきかなー」
　その衝撃で小さく飛ばされた龍驤は、自分でも魚雷を放ちながら間合いを取った。流石にそこから近付こうとは思わず、北上も一時的に間合いを取り、大井の隣へ。
「なんやお前……気持ち悪い。先読みか……？」
「まぁ似たようなもんじゃない？　気持ち悪いのはこっちのセリフなんだけどさ」
　小さく溜息をついた後、空の上を指差す。龍驤の表情が苛立ち以上

に驚きが溢れた。
「アレ、あたしら墜とせないんだよね。クッソ邪魔なんだけど、どうにかしてくんない？」
北上が指差しているのは、夜の闇に紛れてまるで見ることが出来ない場所にある艦載機。言われて見上げた山風だが、やはり何処かに何かがあるようには見えなかった。
その艦載機は、深海棲艦ならではの超高性能機。その重爆撃機は、艦娘達が届かない高高度を陣取り、敵に向かって爆撃を繰り出す厄介者。その見た目から通称『銀だこ』と呼ばれる。
北上はそれがあるのだと話す。それを第三の目のように扱い、高高度から戦場を見渡しているために、あの水柱の中でも的確な動きをしたり、乱射を仕掛ける場所も把握出来ているのだと。
「ようわかったな。夜やから余計にわからへんやろ」
「ああ、やっぱりそうだったんだ。上に在るんだろうなとは思ってたけど、本当にあるとはね。いやぁ、ふっかけてよかったよかった」
おちょくるように話す北上に、龍驤は余計に苛立つ。
「……なんや、おちょくってんのか」
「そう捉えちゃうなら別にそれでいいよ。でも、あたしはアンタなんかに敬意は払わない。あたしが心の底から尊敬するのは……大井っちとうちの婆さんだけだからね」
婆さんとは勿論、大将のことである。敬意を払っているという割には、上司に向かってとんでもない物言いなのだが、それが許されている辺りが大将の懐の広さ。島風もお婆ちゃん呼びなので、その辺りはいくらでも許容しているようである。
「ともかく、アンタのやり口は見破ってんの。見えないとこにある銀だこ、あと今ちとちよがやりあってる艦載機かな。アレの視界、全部ジャックしてるんでしょ。そこに深海棲艦の身体能力が重なってるから、全部頭ん中で統合して、戦場の情報を整理してる」
図星をつかれたのか、苛立っている龍驤の表情がさらに歪む。おそらく、格下の艦娘にはそこまでバレるとは思っていなかったのだろう。

「でも、ちとちょが艦載機と上手いこと拮抗してくれてるからね。あたし達がここまで近付いてきてること、しかも腹に魚雷が食い込むまでわからなかったのは、視界が潰れてるからだよね。あっちはあっちで爆発いっぱいで、銀だこからの視界も防いでたから」

わざわざ制空権争いの真下を通ってきたらしい。実際は千歳と千代田には危ないと注意されたものの、大丈夫と適当に抜けてきた。大井がちゃんと謝罪しているために、いざこざには発展しないものの、あまりにも傍若無人。

「とまぁこんな感じだけど、まずは正解でいい？」

「気に入らんがお前の言うことは当たっとる。でもな、わかったところで何も変わらへんやろ。うちの目はお前らにゃ壊せん。それに、そんなもん無くとも、うちがお前らをボコってんのは変えようのない事実や」

「まぁねぇ。でも、アンタはちょっとアイツらのこと下に見過ぎ。格下に咬みつかれるとか、クソダサいよ」

長々と話しているのは、何もおちょくるためだけではない。駆逐艦達に休息の時間を与えるためだ。

フラついていた江風はようやくまともに立てるようになり、涼風はどうにか鼻血を止める。五月雨は内臓をやられた島風と共に戦場から少しだけ離れていた。

「群れんと戦えんようなヤツらに何言われても効かんなぁ」

「お、だから1対1（サシ）でやり合おうって言うと思う？　かーっ、浅はかだねぇ。やっぱアレかな、艦載機からの視界の演算と、その場で最善の動きをしようとするところで、頭ん中いっぱいなんだろうね。アンタの弱点って、実は頭悪いことなんじゃない？」

いちいち言うことが煽り。龍驤の額に血管が浮かぶのが見えた。

「お前……先に殺したろか」

「え、マジで？　格下格下って艦娘のことをさんざん煽っておいて、自分が同じことされたらキレちゃう？　うーわ小っさ！　見た目と同じで心も小っさ！」

煽りは加速する。隣の大井も笑いが隠しきれなくなってきている。
「ま、小さかろうが大きかろうがやることは変わらないからね。ほら、あたしらは格下なんでしょ。格下が群れても、格上のりゅーじょーちゃんはあたし達に勝てるもんねー。それに、これだけ話してアンタを休ませてやってんだから喜べよ。スタミナ不足のりゅーじょーちゃん」
ピクリと龍驤の眉が動いた。今回は銀だこの件のようなふっかけではなく、確信を持った状態での言葉。
「アンタ、古鷹と同じでスタミナ足りないんでしょ。本来出来ないことがやれるようになってる分、消耗がめちゃくちゃ激しい。しかも艦載機の視界ジャックと演算まで来た。計算しながら乱射で消耗抑えてる。速攻を狙うのもそれ」
話している間も、睨みつけて威嚇している間も、自分から動こうとしない。北上が速攻で倒せるかどうかわからなくなったため、警戒に警戒を重ねて体力消耗を極力抑えているのがわかる。ムキになっても攻め込まない辺り、キレながらも冷静ではあった。
合間合間に突撃するのも、スタミナ不足を隠すため。そういう弱点が露呈しないように考慮した戦い方をしていた。なのに、北上はそれを上から看破。
「でも、もう休憩も終わり。うちの子達も大分休まったみたいだからさ、最終ラウンド入ろうか。勿論、アンタの負けで終わるラウンドだ」
「そんだけわかっといて、うちを休ませてよかったんか」
「構わないよ。何も気にならない。じゃあ、今度はこちらは勢揃いだ。1人で耐えてよ。格上なんでしょ？」
煽りはまだ止まらず。

ここからが最終ラウンド。勝っても負けても戦闘は次で終わるだろう。

仲間がいるから

龍驤との戦いは佳境を迎える。北上と大井が参戦したことによって、鎮守府側に流れが来ていた。
「今度はこちらは勢揃いだ。1人で耐えてよ。格上なんでしょ?」
来いよと言わんばかりに手招きして、最終ラウンドが始まった。敵は龍驤1人に対して、鎮守府側は5人。五月雨は脚をやられた島風を曳航して鎮守府に撤退。
涼風を筆頭に、ここにいる駆逐艦は1日だけとはいえ北上が手塩にかけて育てたいわば弟子。その実力は把握出来ている。残りでも問題なく戦えると北上と大井は判断している。
「……せやな、格下にキレとるとか恥ずかしいわ。じゃあ、お望み通りここで全員殺したる。覚悟せぇや」
「覚悟するのはそっちでしょ。意気揚々と攻め込んできて返り討ちに遭うんだから。泣いて帰んな」
早速動き出したのは北上だった。戦いの狼煙を上げるように魚雷を放つ。その速度は通常のものの倍は出ており、回避を難しくしていた。だが、龍驤は自分を格上というだけある手練れ。軽々と飛び越すことにより回避しつつ、さらには北上に一気に接近していた。
やはり煽られ続けたことが随分と頭に来ているらしく、最初の狙いは北上になるようである。今でもまだ煽り口調、龍驤のことを下に見ている視線は、一切崩さない。それが気に入らないようだった。
「泣いて帰るんはお前や」
「帰してくれるんだ。お優しいこって」
龍驤が眼前に来てもそこから回避しようともしない。迎撃すらしようとしなかった。
「北上さんに何をしようと?」
そこに即座に反応したのは大井である。急接近にもかかわらず、どの手段で来られてもいいように北上の前に躍り出る。
龍驤ならば、ここから砲撃も雷撃も徒手空拳も出来る。そのどれもが必殺級であり、直撃は全て致命傷。掠めても島風のように行動不能

に陥りかねない。
　しかし、大井はそんな相手でも関係無しにその前に立つ。何が来ようが問題ないと言わんばかり。
「死にたいらしいからな。真っ先にやったろう思うて」
「一昨日来なさい」
　大井ならば、どう来られても対応出来る。1回の砲撃音で2回撃っていたような技を持っているくらいなのだから。
　この迎撃でも勿論、同じ技を繰り出す。島風がやられたような蹴りを防ぐために脚を、砲撃に転じることが出来ないように主砲を持つ腕を、そして自爆覚悟の雷撃をも防ぐようにもう片方の腕を、3点同時に狙う超速の砲撃。
「それはさっき見とんねん！」
「ならこいつはどうだい！」
　大井の砲撃を回避した龍驤に、さらに接近していたのは江風。島風には劣るが、それでも改二改装により充分すぎるくらいの速さを手に入れた江風が、ここでまた接近戦を挑む。
　大井の攻撃を回避する方向は、正直一か八かだった。自分の方に来なかったら砲撃、来たら格闘に打って出るつもりだったが、さっきの恨みがあるからか格闘戦側に8割方傾いている。
　そして、回避方向は江風に近付く側。つまり、狙いが当たる。
「お前、またかい！」
「こンなとこで撃ったら、みンなに当たっちまうだろうが！　だから、ぶっ飛ばされろい！」
　再び主砲を逆手に構え、空砲と共に突き出す。威力と速度を併せ持った渾身の拳は、龍驤の回避行動も乗ったことでより威力を増すことになる。
　ただし、それは直撃をした場合だ。同じように格闘戦が可能な龍驤の方が経験は上であり、まだ格闘戦を始めたばかりの江風には少々荷が重い。
「お前素人に毛が生えただけやろ！　そんなヤツが首突っ込んでくんな！」

「そういうわけにゃあいかねぇンだ！」
江風の渾身の拳を、またもや龍驤はキャッチしてやろうと手を出そうとした。しかし、江風の瞳はそれを待ち望んでいるようにすら見えた。キャッチしたら最後、確実に殴り飛ばしてやるという気概がありありと感じ取れる。これは避けなくてはまずいと思わせる程に。
「っらぁあっ！」
そこでさらに空砲を二度放つ。拳を再加速させたことにより、江風の腕はさらに悲鳴を上げるがお構い無し。その拳を絶対に叩き込んでやるという意地と根性で、その一撃を繰り出す。
「んな未完成な技なんぞ喰らうかダボが！」
これも悠々と回避。江風の拳はすっぽ抜け、龍驤に衝撃を与えることもない。だが、腕が壊れる痛みに耐えながらも、江風はニヤリと笑みを浮かべた。
「何度も何度も避けられるもんでもないだろうさ！」
そこに被せるように、涼風が北上の見様見真似で魚雷を投擲していた。この戦場全てを見る者として、タイミングは完璧。
江風の渾身の一撃は避けられる前提で放たれていた。ここもまた、避ける方向は右か左かというのがあったが、今とは逆の方向に避けていたら、北上と大井に接近することになる。大井の攻撃を避けたばかりであり、先程2回も魚雷を腹に食い込まされている北上の近くに寄るのは、無意識でも回避しようとする。
だからこその、涼風の魚雷。その腕力は北上に遠く及ばず、投擲したところで本来の威力をまるで発揮しないのだが、龍驤の心には魚雷の投擲は気に入らないものとして刻み込まれている。故に、効果的。
「お前もやるんかい！　喰らうかいそんなもん！」
それも当然ながら回避しようとする。
「別に喰らってくれなくても構わないよ。なぁ！」
「当然」
その投擲した魚雷は、龍驤に届くことなく失速。代わりに、それに向けて山風が砲撃を放っていた。
艦娘の姿をする敵を撃つのには心の底に抵抗が残ってしまってい

るだろうが、魚雷を撃つのには一切の抵抗がない。それによって起きる二次被害については知ったことではない。
「おまっ」
スナイパーとしての力はホンモノ。優しさによっての躊躇は、無機質なものに対してなら発揮しない。結果、涼風の投げた魚雷は龍驤の前で爆発四散。水柱を上げることなく、強烈な爆炎で龍驤を包み込む。
「やられるかい！」
しかし、その爆炎を突き破るように龍驤が飛び出し、真っ先に北上を狙った。これだけされても最初からのターゲットを変えることなく、ひたすらに殺意を込めて。
「まだあたし狙うんだ。そういう一途なところはいいと思うよ。でも、アンタなんかに尻追っかけられても気分が悪いだけなんだけど」
もう北上の煽りには何も答えず、眼前に現れたところで主砲を突きつける。狙いは当然、一撃必殺の頭。如何に強力であろうが、ゼロ距離から頭を撃たれたら誰だって絶命する。
そこで北上はあえて前に出た。トリガーを引く前に近付くことにより照準から外れ、その拳が叩き込める間合いへ。
「そもそも、駆逐艦（ガキ）虐めて喜んでるようなゲスに負けるわけがない。泥吐いて心入れ替えて出直してこい」
そして、もう何度目かわからない魚雷の投擲。いや、叩きつけと言えるであろう、握り締めての打撃。ここまで来たらもう魚雷でなくてもいいのだが、北上としては雷巡という艦種に誇りがあるのか、徹底して魚雷を使い続ける。
狙いはやはり顔面。一撃叩き込めれば戦況が一気に変わる。死にはしないがまともに戦うことが出来なくなり、次の手に繋がる渾身の一撃。
「当たるかボケぇ！」
だが、艦娘を格下と言い続ける龍驤は、その態度を崩さないだけあって、これだけの攻撃でも咄嗟の判断で回避してくる。
ギリギリのところで身体を逸らし、北上の魚雷は紙一重で回避。そ

うしたことで、北上のガラ空きな懐に潜り込むことも出来る。
「最初はお前や北上ぃ！」
「されるかっつーの」
だが、北上はそれすらも計算に入れていた。魚雷で殴りつけたのも避けられることを考慮してである。
避けられた瞬間、手の中で魚雷を半回転させ、スクリュー部分が下向きに叩きつけられるように持ち直す。龍驤は北上よりも小柄であり、大振りな攻撃を仕掛ければ懐に飛び込んでくるだろうと予想がついていた。故に、ここからは最も残酷な攻撃を繰り出す。
「こいつは痛いよ。死ぬほどね」
北上の腹を撃ち抜こうと主砲を構える暇すら与えず、魚雷のスクリューを起動させた状態で、龍驤の背中に魚雷を叩き込んだ。ただ魚雷で殴られるだけならまだしも、スクリューが肉を引き裂き、ズタズタにしていく。
「つがぁっ！」
しかし、龍驤も黙ってやられることはない。その状態でも強引に主砲を放ち、北上の脇腹を抉る。
直撃ではないので致命傷ではないのだが、血が噴き出るような傷に北上も小さく顔を顰めた。同時に龍驤の背中を抉る魚雷からも力が抜けてしまった。
「へへっ、相討ちならまだマシでしょ。アンタは独りだけど、あたしには仲間がいるから」
「このっ」
「格下にやられな」
背中を抉られたことで相当なダメージが入ったのだろう、スタミナが一気に削られ、即座の判断が出来なくなっていた。故に、すぐ近くにまで入り込んでいた江風の存在に気を回さなかった。
「やっと当てれるぜぇ！」
強烈なアッパーカット。龍驤の顎に当たる瞬間に空砲を放ち、回避される直前に拳の速度が加速。先に江風がやられたように、綺麗に顎を撃ち抜く。

如何に深海棲艦化していようが、身体の構造は艦娘と同じ。つまり、人間と同じである。顎に強烈な衝撃が与えられれば、脳が揺れるのは必然。龍驤も例に漏れず、その一撃を喰らったことで一瞬白目を剥きかけた。

「つぎ、やら、れるかい！」

だが、直前で歯を食いしばったことで気を失うまでは行かず。その攻撃を繰り出した江風を睨みつけ、北上に放った主砲で直接殴りつけた。脳を揺さぶられたことで正しい距離感が掴めずにいたが、その一撃は江風の二の腕に直撃。それだけでもかなりのダメージになり、骨にヒビが入る。

元々空砲を使った拳の加速を多用していたことによって、腕には相当なダメージが蓄積されていたが、今の龍驤からのダメージで瓦解してしまった。

「かっ、ま、まだまだぁ！」

しかし、江風はまだ諦めていない。ヒビ程度ならと、その腕をそのまま使ってゼロ距離射撃。次は空砲ではなく、実弾入りである。

当然空砲より反動が強いため、それによって二の腕の骨のヒビはさらに拡がることになるのだが、知ったことではなかった。むしろ笑顔で自分の腕のダメージを受け入れる。

「こいつ、戦闘狂（バーサーカー）か！」

それすらも紙一重で回避したが、ここで北上が指摘したスタミナ不足が露呈し始める。僅かにだが、足元にふらつきが見えた。江風へのダメージもその程度で済んでいるのは、すでにリミットが来ているからであろう。

本来の龍驤は当然ながら軽空母。高速移動や格闘戦、主砲や魚雷など扱わず、今の千歳と千代田のように戦場から少し離れた位置から艦載機で戦場のサポートをすることがメインだ。なのに、ここまで本来とは違う行動をし続けていたら、数倍の速度でスタミナは消耗する。

格下だと思って自ら表舞台に立ち、抵抗される間も無く一掃出来るかと思いきやここまで抵抗され、さらには煽りに煽られ精神的にも不安定にさせられていたことで消耗が激しくなっている。

元々少ないスタミナならば、この場で切れるのは当然のことだった。むしろ北上はそこも狙っていたのだろう。複数人で纏わりつくように攻撃を繰り返し、消耗を誘発し、結果的にはこれである。持久戦を狙っていたのだから、この戦術は完璧に決まった。
「お前ら……ふざけんなや、うちはまだ、まだやれるんや！」
「逃がさない」
瞬間、山風の砲撃が龍驤の脚を撃ち抜いた。もう避けるスタミナも切れたから、まるで千鳥足のようになりその場で倒れる。
「やれないでしょ。あたしらはアンタとは初対面だけど、よくもまぁさんざんやってくれたよ。痛た……あたしも1発貰っちゃったしさ」
「北上さん、大丈夫ですか⁉」
「大丈夫大丈夫。致命傷じゃないから入渠すりゃいいから、大井っちはあたしよりあっち」
ここまでのダメージを受けてもまだ諦めていないのが龍驤だ。これでもまだ艦娘のことを格下と見ているのか、やけにプライドが高く、この敗北が認められない。
「さっさとやっとかないとなんかダメな気がする。誰でもいいから早く斃しちゃいな。あたしはもうしんどい」
「くそ、クソがぁ！」
だが、ここで気付いたのは涼風だ。戦場の全てを見ているというのは、海上だけではなく海中も見ていた。
「やべぇ、みんなそいつから離れてくれぇ！」
涼風が叫び、同時に動けるものはすぐにそれに従った。一番厳しい北上は大井が無理矢理曳航。江風もやられているのは腕だけのため、問題なくバックステップ。
その瞬間、龍驤の周りが突然爆発した。
そのままその場にいたらこの爆発に巻き込まれていた。命の危機まであったため、涼風の察知は大いに役立った。
「お、おお？　何が起きた。魚雷……かな」
「おそらく。でも威力が高すぎます。それに、真下から来ました」
魚雷が真下から来るということは、それを放ったのは海中にいると

いうことに外ならない。つまり、その持ち主は潜水艦。

爆発が止んだ時、龍驤の側には今まで戦場にいなかった深海棲艦が立っていた。

謎の潜水艦

仲間達の力を合わせて、龍驤を追い込むことに成功した。しかし、いざトドメというタイミングで突如、海中から魚雷が放たれた。

その爆発に巻き込まれないように一時的に龍驤から間合いを取り、誰も被害を受ける事はなかったが、その爆発が止んだ時には、龍驤の側には今まで戦場にいなかった深海棲艦が立っていた。

「誰……あれ……」

山風がボソリと呟く。龍驤を救うように現れたのだから、ただの深海棲艦ではないというのは誰にでもわかること。しかし、それは誰も見たことがない姿をしていた。

海中から現れたため、その姿は明らかに潜水艦だ。主砲などは持たず、恐ろしく身軽。魚雷発射管のような装備すら見当たらないのは、艦娘の一部の潜水艦にもある特徴。おそらく自分の力で作り上げているであろう服も、艦娘が扱うスクール水着とは違う随分と切れ込みの深いハイレグ競泳水着であるために、潜れる海上艦というわけでは無さそうである。

深海棲艦の潜水艦特有のシュノーケルのようなパーツが顔の半分を埋めているせいでその表情は読み取れない。そしてそれを除いたとしても、その顔は知り得る限りの潜水艦娘とは違う顔をしていた。見覚えがあるようでない。何にも当てはまるし、何にも当てはまらない。故に、それが誰なのかがさっぱりわからない。

「古鷹さんはもうダメ。助からない」

ボソリと龍驤に呟く謎の潜水艦。視線をそちらに向けると、金剛が比叡の刀剣を使って古鷹を袈裟斬りにした後だった。確実な致命傷であり、如何に回復能力が強力な深海棲艦といえど、あれは無理だと断じることが出来るレベル。

龍驤は少なからず驚いていたが、やられてしまったものは仕方ないと即座に割り切る。救う必要も無いと切り捨てたとも考えられる。

見たこともないような金剛の表情に、自然と震えてしまう駆逐艦達だが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「龍驤さんはまだ助かる。撤退」
「ちっ……まぁええ。うちも散々や。古鷹があかんくなったなら、うちくらいちゃんと戻らへんと迷惑かけることになるやろな」
「ん」
　その潜水艦は立ち上がることが出来ない龍驤の首根っこを掴み上げた。そのまま曳航して帰る気らしい。
「乱暴にすんなや」
「負けておいて文句言わない」
　龍驤に文句を言われても素知らぬ顔で返す潜水艦。２人は仲がいいのか悪いのかもわからないが、少なくとも仲間同士であることは確実。
「ちょいと待ってくれないかね。勝手に割り込んできて撤退とか、はいそうですかとは流石に言えないでしょ」
　そんな２人のやり取りに、北上が口を出す。当然、ここまで追い込んだのに逃がそうだなんて思ってはいない。ここで逃がしたら、確実に後々面倒なことになる。
　しかしその潜水艦はちらりと北上の姿を見るだけ。その言葉に対して返答は無い。北上や他の者達のことを格下として見ているようには見えないものの、むしろ興味のないモノくらいにしか考えていないそうな表情。それは充分に格下として見ているに値しそうではあるが。
「そもそも、アンタ何者なのさ。こっちはそいつに勝ったんだ。それくらい特典くれても損は無いと思うんだけど？」
　そう言われても感情の無い瞳を向けているだけ。返答はやはり無い。
「……アンタもしかして……自分が何なのかわかってない？」
　思いついたことを適当に言葉にした。春雨のような直感が働けば確実性が持てるのだが、現れたばかりの深海棲艦の素性なんてすぐに思いつくようなことなんて無いだろう。
　実際、施設からの連絡によって潜水艦が仕留められているのは聞いている。今目の前にいる謎の潜水艦がその結果であろうと考えるの

は容易。しかし、それが誰なのかが本当に見当がつかなかった。
そこから思いついたのが、混ざり過ぎてわからなくなっているというパターン。しかし、根幹に泥があるため、あちら側に与している。何もわからないけど本能的に侵略者気質であり、同類である龍驤には仲間意識を持っているということになるか。
直感ではなく、過去の情報と現状から鑑みた解答である。それが正解かはさておき、妥当性から導き出したモノである。
「早よ帰った方がええ。お前はまだどっか不安定やからな。アイツらの言葉に耳貸すな」
「ん」
龍驤の言うことはちゃんと聞き、何をするでもなく、龍驤を引っ張って戦場から撤退しようとする。
それをただ見届ける程優しくない。逃がすわけにはいかないと、まだダメージが少ない山風と涼風が動き出す。特に山風は体力を消耗している程度で無傷だ。大井は怪我を負った北上から離れるわけにはいかないと、２人に任せた。
「逃がすかっての！　山風姉！」
「わかってる。あたしも、逃がすつもりはない」
潜水艦といえど、今は海上に上がってきている。ならば、爆雷ではなく主砲でも充分通用する。
むしろ、潜水艦もだが龍驤を生かして帰してはいけない。ここまで追い詰めたのだから、ここで終わりにしないと後々確実に厄介なことになる。今回で鎮守府側の手段をほぼ全て見せつけてしまっているため、対策だって取られるだろう。そうなると、根本的な実力差で勝ち目がまた薄くなる。
この戦いでここまで持っていけたのはチャンスなのだ。それをどうにか手元に置いておかなくては。
「もっかいだ！」
先程龍驤にやったように、涼風が魚雷を投擲。狙いは曳航されようとしている龍驤の顔面である。そしてすぐさま山風も主砲を構え、その魚雷を撃ち抜こうと準備する。

しかし、今回は謎の潜水艦もいる。龍驤は相当消耗しているが、潜水艦は一切無傷で消耗も見えない。
「だめ」
見様見真似か、謎の潜水艦も涼風のように魚雷を投擲。それが見事にぶつかり合ってしまい、山風が撃ち抜くまでもなく空中で爆散した。
潜水艦の魚雷は、海上艦が扱う魚雷よりも火力が高いモノが多い。それが深海棲艦のモノとなれば尚更だ。予想以上の爆発が発生してしまい、それだけで龍驤と潜水艦の姿が見えなくなってしまう。
「煙を晴らすよ」
これではまずいと、山風が機転を利かせて主砲を連射。爆炎を撃つことにより、その煙をすぐに晴らした。撃つ方向が撃つ方向なので、そこにいたままならば敵の2人に掠めるくらいはしてくれる。
しかし、煙が晴れた時には、そこには誰もいなかった。今は夜であるというのもあり、潜水艦の気配は全くわからなくなる。
「逃げやがった。曳航してんのにめちゃくちゃ速かったよあの潜水艦」
戦場の全てを見通せる涼風がそういうのだから、もう追いつけない場所にまで行ってしまっているのだろう。ただでさえ今は夜なのだ。その場所はわかっても目視は出来ない。文字通り、闇に消えていってしまった。
「……逃がしちゃった」
ここまでやってコレかと、山風が少し落ち込む。
「いやいや、アンタ達は充分やってるよ。痛た……まぁ誰も死んでないなら充分さ。今はさっさと鎮守府に戻る方がいいね」
怪我人は多い。戦いが終わったのだから、早々に事後処理が必要。
ここにいる者でも、北上や江風はダメージが大きい。すぐにでも入渠しなくてはならないだろう。先んじて曳航されていった島風も、今頃はもう入渠しているはずだ。
「あの潜水艦の動向が気になりますしね。今まで何処にいたのか……涼風はいつからわかったの？」

「あたいが気付いたのは魚雷が向かってきてることだけなんだよね。だから咄嗟に叫んだけど、本体が何処にいたのかはマジでわかんなくて」
「隠密行動……よね。夜の潜水艦なんて、下手に隠れられると本当に何処にいるかわからなくなるし」
今まで何処で何をやっていたかはわからないが、この戦場に出てきたということは、身を隠す必要が無くなったということに外ならない。つまり、やるべきことをやったわけだ。
「……まさか、鎮守府に何か……」
「かもしれないね。さっさと帰るのが吉でしょ。あー、でも向こうのことも気になるか。古鷹は斃したみたいだし」
遠目に見ても、古鷹を撃破したことは見えている。鎮守府も心配だが、もう1つの戦場も心配。むしろ、この戦場を維持するために深海棲艦の群れを相手取ってくれていた鎮守府の仲間達もまだ戻ってきていないくらい。
龍驤が撤退したことで群れもいなくなっていそうではあるが、まだ心配事は山積みである。

一方、金剛達の戦場。古鷹を袈裟斬りにしたことで金剛はいつもの調子を取り戻す。
「比叡、これ返すネー。勝手に使っちゃってゴメンネ」
「は、はーい」
元に戻ってくれたことを喜びつつ、だがあの時の怒り狂う金剛を見ているために、複雑な表情をしていた。
「あれは致命傷だ。確実に殺っただろう」
武蔵とサラトガも金剛と合流。そこで斃れ伏す古鷹を眺めていた。
金剛の一撃を受けたことでそこから動けず、ビクビクと震えている。痛みに耐えながらも、反撃をするために立ちあがろうとしているのはわかるが、もう力すら入っていないようである。
しかし、ここで古鷹に異変が起きる。

「っ、ぐぶっ!?　おぼっ!?」
白露と同じような反応をし始め、口から血が混じった泥が吐き出された。命の危機に瀕すると、体内から泥が吐き出される仕様になっているのかもしれない。つまり、この死の間際に古鷹は艦娘としての意識を取り戻そうとしているのだ。
泥にも意思があることは既に知っている。古鷹は使えない身体と判断して外に出てきているのかもしれない。
「ごふっ、げほぉっ……っお……」
止め処なく吐き続けた後、もう出ないところまで来た時、古鷹の瞳はあの時の白露のように負の感情が一切ない綺麗なものへと変化していた。本当に抜けきったことを表している。
代わりにその近くには泥溜まりが出来上がっていた。何処にこれだけの量が入っていたのだと思えるほどの量である。
「……えっ……私……」
ここも白露と同じ。正気に戻ったことで、自分のやってきた今までの行いがどれほどのものだったのかを思い返してしまっていた。死に体なのにもかかわらず混乱し始め、散りゆく命をより一層使おうとしてしまっている。
そんな姿を見た金剛は、すぐさま古鷹に駆け寄る。今までの感情は何処かに投げ捨て、古鷹を救うために身体が勝手に動いたようなもの。
「古鷹！　正気に戻ったんデスネ！　すぐにそこから引き離しマース！」
怪我人ではあるが、その場に居続けるのはまずい。そのため、少し乱暴ではあるが、金剛は古鷹をお姫様抱っこのカタチで抱き上げ、すぐにその場から離れた。
そしてすぐに武蔵にアイコンタクト。やらなくてはいけないのは、この場にある泥溜まりを霧散させることだ。ここに置いたままでは、施設の伊４７のように近くを通った艦娘を襲い、その魂を侵すだろう。それだけは絶対に避けなくてはならない。
「任された。私の火力ならば、霧散させることも出来るだろう！」

金剛がある程度離れたことを確認した瞬間、容赦なくその海面に主砲を放った。泥はその場で爆散し、何発か喰らったことで完全に消滅。微塵も残っていない状態に。
「よし、これで安心だな」
「Ｙｅｓ．　後腐れはありまセーン。あとはこの子、古鷹だけデース」
金剛に抱かれている古鷹だが、潰えていく命の中、今までやらされてきた凄惨な現実に向き合わされることとなり、あらゆる負の感情が溢れ出していた。
これで古鷹が艦娘だったなら、確実に溢れて黒い繭となっていただろう。しかし、古鷹は既に深海棲艦だ。泥が溢れるようなことはなく、ただただ心が壊れ続けるだけ。
「なんで、私、なんてことを……いや、いやだ、なんで」
「落ち着いてくだサーイ。古鷹、私から１つＱｕｅｓｔｉｏｎがありマース」
金剛から受けた恐怖も心に刻まれてしまっているのか、声を聞いただけでビクンと震える。
「償うために生きたいデスカ？　それとも、解放されるために死にたいデスカ？」
非情な質問である。何も元に戻っていないのならそんなことを聞くまでもなく沈めていただろうが、今の古鷹は艦娘古鷹の思考だ。それを決めるのは本人である。
致命的なダメージを与えた手前、この質問は今更かもしれない。しかし、これは白露のときの焼き直しが出来る可能性はあった。白露は意地で自分の命を繋いだが、それはあの超回復の特性があったからに外ならない。古鷹にそれが出来るかどうかは、本人次第。
「……私は、私は、真実を知りたい、だから、生きる、生きる……！」
「Ｏｋａｙ．　よく言いましタ。なら、意地でも命を繋ぐんデス。やった私が言うのはおかしいかもしれないデスが、頑張ってくだサイ」
壊れかけの古鷹も、生きるために気合を入れ直した。それでももうダメな可能性はあるが、やれることは全てやらなくては。

鎮守府夜襲はこれにて決着。まだ謎は残っているものの、ひとまずは乗り越えることが出来た。

一部鎮守府は破壊されてしまったが、誰もが命を残しているのだ。これは勝利と言っても過言では無い。

悪意の塊

鎮守府夜襲は、龍驤を逃がしてしまったものの、古鷹を撃破したことで勝利となった。鎮守府の一部は破壊されてしまっており、一部怪我を負った者がいるものの、死者は誰一人として出ていない。

問題は古鷹である。撃破したが、その衝撃によってか白露と同じように泥を吐き出して、命が風前の灯火となっている状態で正気を取り戻した。今は真実を知るために生きると決意し、壊れた心ながらも自分の意思で必死に命を繋ごうと痛みに耐えている。

工廠では事後処理の真っ最中。怪我を負って先に撤退していた五月雨と島風は、既に休息中。島風は歩けないほどの大怪我だったため、到着してすぐに入渠。五月雨も入渠をするように言われていたが、まだ大丈夫と工廠の防衛をしていた。

「大丈夫だったか！」

「お疲れ様です皆さん！　怪我人がいるようならすぐに入渠を！」

戻ってきて聞こえるのは、破壊された執務室から工廠まで来ていた提督と、そのサポートのために艤装を展開していた大淀。

五月雨は秘書艦ではあるものの戦力として充分すぎるほどの力を持っていたため前線に出ていたが、大淀はあえて鎮守府防衛を引き受けていた。そのため、今は提督の側に付き従い、常に護衛というカタチを取っている。

「ごめん、あたし入渠お願い。横っ腹抉られちった」

「江風は多分二の腕ヒビ入ってる。痛くてしょうがないンだよね」

２人とも冷静に話しているが、島風に次いで重傷と言えるだろう。すぐにでも入渠が必要。

だが、その後ろからやってきた金剛が抱きかかえる古鷹はさらに酷い有様だった。バッサリと胴を袈裟斬りにされており、血は簡単には止まらない。誰よりも真っ先に入渠しなくてはならない状態なのは火を見るより明らか。

しかし、深海棲艦は入渠による回復は出来ない。自己回復能力が通常よりも高い代わりに、高速修復材などは一切効果を発揮しないので

ある。それ故に、古鷹はここから自力で命を繋ぎ止めなくてはならない。
「応急処置をお願いしマース！　古鷹は泥を吐き出して正気に戻っていマース！」
「何!?」
泥を吐き出したということは、白露と同じであるということに外ならない。ならば救う。提督は即断した。
先程まで鎮守府を狙い、艦娘達の命を奪おうとしていた存在。さらに言えば、ここに来るまでに何人もの艦娘の命を奪ってきた者。今でこそ生きているが、白露や春雨を深海棲艦化させた張本人。艦隊を滅ぼし、結果として海風まで壊した。それが古鷹である。
少なからず恨みや憎しみがあってもおかしくない。鎮守府の艦隊運営をボロボロにしているのだ。だが、提督はそんな思いを一切持たずに救うと決断している。
「大淀、人間のためのものでいい！　応急処置の道具を持ってきてくれ！」
「は、はい、了解しました。でも」
「いいから早く持ってきてくれ！　僕はすぐに古鷹の治療を開始する！　白露がやった治療方法は姉姫に聞いているんだ！」
大淀は流石に一瞬抵抗を見せたが、提督の本気の目に気圧され、すぐに従った。
この提督の判断が正しいのかどうかはわからない。むしろ、今の軍の考え方からしたら間違っているかもしれない。しかし、誰も間違いとは言わないだろう。素直に従い、古鷹が救えるのなら救おうと考えるはずだ。
古鷹をこうした金剛も、その時は当然殺すつもりで斬り払った。誰もが白露のように助かるとは限らないのだから、命を奪おうとした。だが、それを乗り越えて生きていこうとするのなら、追い討ちをしようだなんて思いやしない。
これがこの提督の下で戦ってきた者達の真意であり総意。大淀は事務的に抵抗を見せたが、勿論提督を信じている。生かすと言うのな

ら、生かすのだ。
「いいか古鷹、今以上に辛い目に遭うことになるが、命を繋ぐのなら僕の言うことを素直に聞いてくれ。だが、確実に痛みは倍以上になるし、それが今から長く続く。それをどうにかする手段を僕らは持ち合わせていない。根性論を持ち出したくは無いが、ここからは気力勝負だ。覚悟はあるか」
脅すように話すが、提督は心の底から古鷹のことを心配し、一切の邪念なく助かってほしいと願って今の言葉を紡いでいる。だからこそ艦隊の誰もがこの提督に従う。
古鷹も例外では無かった。艦娘の心を取り戻したことで、その覚悟を感じ取った。
「……はい、私は、死ぬわけには……いきません。真実を知るために、私は、生きる……」
「了解した。ならば――」
提督が中間棲姫に教わった白露の治療の手段を古鷹に伝える。最初は動揺しただろう。しかし、その目は本気だった。誰がどう考えても激痛という言葉では表現出来ないレベルの苦痛を味わうことは確実。
だが、古鷹は自分がやってきたことを覚えている。潰し、殺し、滅ぼし、それを愉悦と感じていた。艦娘としての古鷹は、そんな自分が絶対に許せない。ならば、その苦痛を長く長く得ることで、せめてもの償いとしたいと、素直に実行した。
そこからは、絶叫の嵐だった。嫌でも声が出てしまい、工廠中に響き渡る。深海棲艦の群れを撃退した他の鎮守府の艦娘達も、その凄惨な光景に言葉を失った。
何せ、体内に艤装を生成して内臓を強引に接着するという異常な治療方法なのだ。超回復の特性を持つ白露だって半日声を上げ続けた。そんな特性を持っていない古鷹は、白露以上に長い時間をこの激痛の中で過ごすことになる。まる一日は覚悟するべき。それだけで済めば御の字であろう。
「古鷹、頑張ってくれ。僕は君を生かしたい。いくら今まで敵であっ

たとしても、それは理不尽によって成立させられていたものだろう。そんなもの納得出来やしない。それで死ぬなんてあんまりだ」
「っあっ、ぐ、ぎぃっ!?　た、耐えます、耐えて、見せますから！　あぁあああっ!?」
艦娘ならばまず耐えられないような激痛。こんなことをされてしまえば心は壊れ、あっという間に泥が溢れて繭となる。もしくは何事もなく速やかに死に至るだろう。
しかし、深海棲艦の身体である古鷹は、艦娘よりも頑丈というのもあるが、生きるという意志があるために死に至ることはなかった。
この地獄のような時間を、工廠中に悲鳴を響かせながら耐え続けることになる。
「……あの、提督、話がある」
そんな古鷹を横目に、山風が提督に話しかけた。まだ大淀が道具を持ってきていないため、今のタイミングなら行けると踏んで。
「どうした、山風」
「……先に伝えておきたい。さっきの敵のこと。ちょっと、まずいかもしれないって、北上さんが言ってたから」
すぐにでも伝えなくてはいけないのは、古鷹でも龍驤でもなく、3人目として現れた潜水艦のこと。
戦闘中にずっと潜伏し続けて、龍驤のピンチに現れた謎の潜水艦。だが、仲間のピンチに現れるのならもっと早く出てきてもおかしくない。むしろ、古鷹がこうなる前に現れるのが普通だろう。なのに、助けられたのは龍驤のみ。
そこから考えられるのは、常時海中で待機していたのではなく、戦闘中に何かしていたと考えるのが妥当。
夜の闇、さらには暗闇に閉ざされた海底でやることとなると。
「……鎮守府に何かを仕掛けた、か」
そこに辿り着くのは必然だった。潜水艦ならではの夜間の隠密行動で、仲間の危機を放っておくほどの任務があったとなれば、格下の艦娘相手に万が一手こずった時の保険をかけたか。
そうなると、鎮守府に対して何かをしてくるはずだ。そうでなけれ

ばそもそも夜襲なんて仕掛けてこない。
「つぎっ、しかけっ、られたのは、あぁあぁっ！」
苦痛に喘ぎながらも、今の話を聞いて古鷹が反応する。せめてもの償いと、今すぐに伝えるべきだと、歯を食いしばりながら敵側の思惑を話した。
「古鷹、無理をしちゃいけない。そうでなくても話すのも辛いくらいの激痛だろう」
「でも、でもっ、私が持ってきた災厄、だからぁっ！」
苦しみ悶えながらも、その狙いをどうにか伝えた。
「ここに、ここにっ、配置されたのは、悪意の塊、です……っ」
「悪意の塊……？」
初めて聞くワード。しかし、それが何なのかはすぐに察しがついた。鎮守府や施設が『泥』と呼び、たった今古鷹が体内から吐き出したモノ。黒幕が生成しているであろう、他者を侵蝕し、侵略者へと変える概念。
それそのものが近くを通った者を襲い、その身体を乗っ取ろうとする意思を持つ泥だ。そこに漂うだけでも脅威であり、味方を減らして敵を増やす最悪の機雷。
「そうか、そういうことか。ならば、数日の内に浮上し、こちらの誰かを侵蝕すると」
「2日、です、海底からここまで、浮上するのにかかる時間は……っぐぅうっ!?」
古鷹と龍驤がこの鎮守府を滅ぼすことが出来たのなら、その原因を調査するためにここに来た者を侵蝕するために配置されたもの。そうでなくても、この鎮守府の生き残りを侵蝕することによって、内部崩壊が狙える。
恐るべきことに、ただ泥に侵蝕されるだけならば、艦娘のままであるという。魂だけを侵し、性質を変えることなく思考だけを深海棲艦へと堕とす。内部崩壊を起こすには持ってこいの性能である。
「堪ったものではないな……それをどうにかしなくては」
「砲撃で霧散させるのは難しいのか」

その話を聞いていた武蔵が訊ねる。一応ではあるが、武蔵は大将の艦隊では頭を張っている。そのため、ここでの情報を大将に伝えるのは武蔵の役目だ。わかることはここで聞いておき、後々報告するための材料は逐一探している。
「海中を撃つことは出来ないだろう」
「確かに。古鷹の吐き出した泥は沈んでいなかったからな。私が霧散させた。そこにいたものは消滅したことを確認している。なぁ、金剛、比叡」
少し離れた場所で休息を取っていた金剛と比叡にも訊ねた。あの場にいたのはこの2人とサラトガのみ。そのサラトガも深く頷くのみである。
「Ｙｅｓ．　武蔵の砲撃で完全に消えてましタ。注意は必要かもデスけど、大丈夫だと思いマース」
「私もお姉さまと同じ意見です。海面ごと抉って弾け飛んでいましたから。残骸すら残っていません」
「話に聞いていた、強い衝撃によって霧散するというのはそういうことなんだな。了解した。警戒はするが、そこは問題がないと判断しておこう」
武蔵の主砲の威力ならばひとたまりもない。無論、またあの場を見に行くことはするが、そちらはそこまで心配は無いようである。
そうなると、潜水艦に仕掛けられた泥の対処。海中にあるとなると、如何に強力な主砲の火力だとしても、そこまで届かない。そして、その泥は潜水艦の魚雷をスルリと避ける。
「浮上するまで待つしかないのか……それは流石に危険すぎる」
浮上まで2日と古鷹は言うが、意思を持っているということは、浮上するタイミングをある程度コントロール出来るということにもなるだろう。早くなるかもしれないし遅くなるかもしれない。
その間は艦隊運営を抑える必要が出てくる。当然対策のために演習や訓練は必要だし、哨戒もしておきたい。しかし、海に出た瞬間に1人犠牲になる可能性があるとなると、出撃自体が禁じられる。
何処ぞのブラックな鎮守府のように、艦娘を犠牲にして攻略すると

いう手段なんて取っていられない。それが最も簡単な手段だとしても、そのために命をぞんざいに扱うだなんて、この提督が許せるはずがなかった。
「わ、私、私が、また侵蝕、されますっ、そうしたら、私ごと」
「馬鹿なことを言うんじゃない！　君は助かったんだ。せっかく得た命を、生きるために使うと決意した命を、そんなに簡単に投げ捨てるな！」
　古鷹が自分を犠牲に泥を排除しようとしたが、勿論それも提督は許さない。散らすかと思われた命を運良く拾うことが出来たのだから、ここからは古鷹も幸せになってもらわなくては困る。
　幸いにも今、深海棲艦化した者を受け入れてくれる施設があるのだ。時間をかけてでも回復出来たなら、そちらに掛け合うことだって出来る。
「その件についてはこちらでどうにかする。古鷹、君は君自身のことを考えるんだ。そんなカタチでの償いは、他の誰もが許しても僕が許さない。生きると決めたのなら、意地でも生きるんだ」
　苦しむ古鷹を見据えて、純粋な気持ちで訴えた。最初から死ぬことを選択していたのならそんなことは言わない。諦めているのなら、無理矢理生かすなんてことは言えない。
　だが、一度でも決意したのなら、正しく生きてもらいたいのだ。今は他者のことなど考えず、自分を治すために尽力してもらいたい。ただでさえ、生と死の狭間にいるようなものだ。気を抜いたらそのまま命を散らすことになる。
「大丈夫だ。対処方法は知っているんだから、どうとでもなる」

　しかし、提督の表情は複雑な感情を表していた。握り締めた拳は、ブルブルと震えていた。

不安の排除

翌朝。春雨は少し寝不足気味。虫の報せを受けたことで鎮守府のことを心配しており、海風と白露と一緒に寝ることである程度は眠ることは出来たのだが、そういう時に限って深海棲艦化のきっかけとなった時の夢を見てしまって、発作を起こしかけたりと散々だった。

鎮守府のみんなを信じて待とうと思った矢先にこれではダメだと悩んでしまったことでまたドツボにハマり……と、結局いつもの数分の1しか睡眠時間を取ることが出来なかった。

「春雨姉さん、大丈夫ですか……？　昨日は夜中に発作がありましたし、無理せず休んだ方がいいと思います。私も勿論傍で介護させていただきますから」

寝起きで少しフラついたことで、海風が心配そうに支える。寝不足で本調子でないのは確かであり、こんな状態で施設の仕事をしたらむしろ悪化してしまうだろう。

まずは鎮守府に連絡をして安心し、その後にグッスリ眠ることで回復する。これが一番春雨にはいい1日になるはず。姉妹姫もそれを推奨するだろう。

「そう毎日やらなくちゃいけない仕事もあるわけじゃあ無いでしょ。なら春雨は海風と一緒にゆっくりした方がいいね。何かあったら、あたしもサポートするからさ」

白露からも言われてしまい、素直に今日は丸一日を休息に使うことにする。だがその前に、寝不足の原因となった心配事を解決しておきたい。

「鎮守府に連絡だけはしたい……かな。みんなに何事もないことを知っておかないと、多分眠れないから……」

「ですね。春雨姉さんの虫の報せは絶対に当たりますから、鎮守府に何かあったことは確実でしょう。姉姫様に連絡を許可してもらわなくては」

「じゃあ、朝ごはんの時に聞いてみればいいよ。というか、多分姉姫さんも連絡したがってると思うしね。春雨がそういうこと言ったわけ

なんだしさ」
昨晩の虫の報せは姉妹姫が知っていることだ。その時は鎮守府のみんなを信じて待とうということになったが、一晩経過したのだから一度連絡は取りたいと考える。
もし何か脅威が訪れていたとしても、それが未だに続いているとは考えづらい。朗報を待つとも言っていたため、こちらから連絡することを避けるかもしれないが、一応話だけはしておきたい。

朝食の場。春雨の不調は誰が見てもわかるようで、その原因も察しがつく。そのため、春雨からお願いする前に中間棲姫が連絡を取ってみようと話題を出した。
鎮守府の現状を知りたがっているのは何も春雨だけではない。元々そこにいた海風や白露だってそうだし、鎮守府はどうでもいいとしてもそこで何かあるとしたら古鷹が確実に絡むとわかっているため、叢雲も今を知っておきたかった。
「じゃあ、早速だけれど連絡してみましょうかぁ。今の時間ならあちらも活動しているはずよねぇ」
「ですね。いつも通りならもう始まっています。前にもこれくらいに連絡取り合ったことありましたしね」
「なら、もう何も心配することが無いことの証明のために、提督くんの顔を見ておきましょうねぇ」
タブレットをさらりと操作し、いつものように鎮守府へと連絡をする。以前連絡を取った時は、数コールもせずに繋がり、何かあったかと微笑みながら対応してくれたのだが、今回はすぐに繋がらなかった。
「えっ、まさか……」
いつもと違うというのは、どうしても不安に繋がる。まさかという可能性が嫌でもよぎり、春雨は悪い体調がより一層悪くなりつつある。
と、嫌な雰囲気になりそうなところでタブレットの画面が鎮守府の

映像を映し出した。
『すまない、取るのが遅れた』
向こう側の提督は、朝だというのに何処か疲れた顔をしていた。まるで今の春雨のようにあまり眠れていないような表情である。
秘書艦である五月雨もそこにはいないようで提督だけ。この時間にこれは今までに無かったことだ。それに、いつもの執務室とは背景が違う。春雨達には見覚えのある、会議室だ。
「ごめんなさいねぇ。そちらは朝から忙しそうみたいだけれど」
『あ、ああ、少しあってね。それで、今日はどうしたんだい？』
疲れていてもいつもの調子で語りかけてくる提督。むしろその方が心配になる。
「春雨ちゃんが昨日の夜に虫の報せを受け取ったのよぉ。そちらに何か悪いことが起きていなければいいと思って、連絡させてもらったわぁ」
その言葉を聞いて、提督が驚きで目を見開いた。春雨が虫の報せを受け取った時、鎮守府ではまさに夜襲を受けていた真っ最中。ドンピシャでそれを感じ取っていた。
『春雨は本当に勘が強くなったようだね。正直、驚きが隠せない』
「えっ、じゃあ……」
『ああ、昨晩、例の輩から夜襲を受けた』
これは説明する必要があるだろうと、提督も昨晩のことをツラツラ話していく。
始まりは執務室の爆撃であり、そこから鎮守府総出で襲撃に対応していた。執務室が破壊されてしまったために、今は会議室で仕事をしている。
五月雨も怪我を負っているため、今は休息中。そうでなくとも、寝る直前くらいの襲撃であったため、今朝は少し遅くからの開始としていた。
「その夜襲、どうなったの」
姉妹姫が反応する前に、叢雲が問う。夜襲を仕掛けてくる輩は当然、叢雲にとっても仇敵である古鷹に間違いないだろう。それがどう

なったかを知りたがる。こうやって話すことが出来ているのだから敗北は無いのだが、撤退されたか殲滅したかは重要。
提督も叢雲の気持ちは知っているつもりだ。今でこそ落ち着いているが、古鷹には大きすぎる恨みの憎しみを抱いていることを。
だが、嘘を吐くことは出来ない。最終的には古鷹も施設に行ってもらう可能性があるのだから。
『襲撃者は古鷹、龍驤、そして謎の潜水艦の3名。また、群れを伴っての襲撃であったため、鎮守府一同により対処し、これを撃退した』
「撃退……ってことは、逃がしたってわけ？」
『龍驤並びに謎の潜水艦は撤退。群れは殲滅を完了した。そして古鷹は……現在、鎮守府にて保護をしている』
古鷹がまだ生きている。それがわかった時点で叢雲の怒りは一気に燃え上がった。しかも今、鎮守府にいる。ならば殺さなくてはならない。
「保護ってことは、そう出来るようになったってことよね？」
しかし、それを遮るように飛行場姫が提督に尋ねた。ここであえて保護という言葉を使ったということは、今の古鷹には敵対の意思がないということになるのではないか。
『ああ。僕は現場を見たわけでは無いが、白露と同様に瀕死の重傷を負ったことで泥を吐き出した。その結果、艦娘としての意思を取り戻している。我々に協力の姿勢を取ってくれたことを確認した』
「じゃあ今は」
『君達に教えてもらった方法……体内に艤装を生成し、傷を強引に接着する手段を使い、治療中だ。君達には聞こえないかもしれないが……昨日の晩から彼女の声が響いている。激痛に耐え続けている声だ』
覚えがある白露は、途端に身体を震わせた。
半日近く続いた何とも言いようのない激痛。命を繋ぐために必死に手繰り寄せたあの時間。もう傷なんてどこにも無いのに、腹の中が痛むような感覚に陥る。
しかも、白露には超回復という特性があったからまだ半日で済んで

いるのであって、古鷹にはそんな特性は無い。半日どころではなく、丸一日でも利かないかもしれない。それだけの長い時間をあの苦しみに襲われ続けるだなんて、考えたくも無かった。
『彼女は治療のための肉体的な痛みと、今までやらされてきたことの精神的な痛みを、絶えず受け続けている』
「……だから許してやれって言ってるの？」
当然、叢雲は反発するだろう。白露に対しては面と向かって言葉を交わし、その思いを聞いている。誠意も見えているし、誠実に生き続けている姿を見せ続けているため、怒りはあれどまだ許せる範囲にいた。
古鷹はまだそれがわからない。どういう姿勢で自分の前に現れるか次第なところもあるが、それがわからない時点で叢雲にとっては殺意を向ける対象だ。
『話を聞いてあげてほしい。古鷹はもう深海棲艦の心は持ち合わせていない』
「……なら今、その苦しんでいる姿を見せなさいよ。それに、誠意を見せてもらわないと私は収まりがつかないわ」
提督が困ったような表情を見せたが、叢雲を納得させるためには仕方ないと考えた。
『ああ、苦しんでいる姿を見せるのは正直忍びないが、叢雲と和解してもらうためには仕方ないだろう』
「私は和解するつもりなんて無いわよ。私をこうしたのは、古鷹と白露であることには変わりないんだもの。でも、その根っこに例の泥があることだって納得してる。だから、白露のことについては納得してあげてるの。同じように古鷹のことも納得出来るのならしてあげる」
話しながらも、提督はタブレットを持って工廠へと向かっていた。道行く中で他の艦娘達の声も聞こえてくるが、その声は一晩経っても疲れているように聞こえた。
そして工廠に辿り着く。入った途端に呻き声や叫び声が聞こえた。かなり小さめであるが、誰の声であるかがわかるくらいに。
「古鷹さんの声だ……」

白露が真っ先に反応した。ここにいる中でも特に古鷹と付き合いが長いのが白露だ。その時は悪意の塊に支配された侵略者だったが、その時の記憶はある程度残っている。その時にさんざん聞いた声。
『叢雲、これでいいかい』
工廠のさらに奥。本来の仕事に支障が出ないようなスペースまで入る。
この鎮守府ではまず確実に使われないが、鎮守府を設立するにあたって必ず設置される設備、懲罰房。古鷹はここにいた。
工廠のど真ん中でのたうち回り、悲鳴を聞かせ続けるのは迷惑だろうと古鷹自身がそれを望み、都合のいいことに工廠から先に繋がっていたために運ぶのも簡単だった。それなのに工廠にまで声が聞こえてくるのだから、痛みを堪えるのに常に声を上げ続けているということに外ならない。
「……古鷹」
叢雲が拳を強く握った。画面の向こう側には、命を繋ぐ激痛にのたうち回る古鷹の姿があった。
懲罰房は古鷹の流した血で染まり、何度も応急処置をされたように血塗れの包帯が散乱していた。それだけ血を流しても気を失うことはせず、一晩この調子で苦しんでいた。
白露の時以上に凄惨な光景になっているのは、やはり春雨ではなく金剛がトドメを刺そうとしたからだろう。
『辿り着く力』を持つ春雨の一撃は、まるでくっつけてくださいと言わんばかりに断面が傷ついておらず、まさに治療するための怪我と言えた。しかし、金剛の一撃はあくまでも人間と艦娘によって作られた深海棲艦を殲滅するための兵器による致命傷。傷口は塞がりづらくなっているし、こうなることを想定していない。結果、より苦しむことになる。
『っあ、ぐぅぅぅっ!?』
一晩経ったことで古鷹も喉が枯れ、ガサガサとした悲鳴になっている。口からも血を吐いているために顔も血と涙でグチャグチャ。
『叢雲、この状態の古鷹から何かを聞くのは』

『つぎっ、だ、誰が、私の話を聞きたい、んですか……』
痛みを堪えながら見るに堪えない姿になった古鷹が顔を上げる。その視線の先にはタブレット。
『い、いい、です。話します。何を、話しますか……っあぅっ!?』
痛みで姿勢を変えることは出来ないが、タブレットを見据えた。
提督は古鷹の意を汲み、タブレットをひっくり返して施設側の画面を見せた。そこには怒りで表情を歪めている叢雲の姿が。
『うあっ……あ、貴女は……私達が殺してしまった……艦娘の1人……ですね。同胞(はらから)となってまで、っがっ、私に復讐をしたい気持ちは、わかります』
あの時と比べたら正反対と言えるくらいに性格が変わっていることに、叢雲は少なからず驚いていた。白露と同様、本当に泥を全て吐き出したことで本来の性格に戻っているのが嫌というほどわかった。
格に拘り、艦娘はおろか深海棲艦ですら格下と真顔で言い放つような古鷹は、そこにはいない。
『ごめんなさい、ごめんなさい、私が弱かったから、あんなことを……っあああっ!?』
もう敵対していた時とは別人だった。同じ姿をしていても、中身がまるで違う。白露は何処となく近しい性格で歪んでいたが、元が真面目で優しく丁寧な古鷹が侵蝕されると、ああも変わってしまうのだと実感した。
「……とりあえず、生きて私の前に来なさいよ。そこからどうするか決めるから」
叢雲からは、それだけしか言えなかった。今は手が届かない場所にいるので殺しに行くことも出来ず、古鷹自身がまるで違うことで変に動揺してしまった。
だから、ちゃんと傷を治して動けるようになったら、画面越しではなく直に会って話をするとした。
これも叢雲の成長。白露に我慢出来ているのだから、古鷹にも耐えられる。

戦いが終わった後の事後処理は困難を極めていた。もし古鷹が完治出来たとしても、まだまだ問題点は山積みだ。

海中の泥

古鷹の苦しむ姿をタブレットの画面越しに見せられ、複雑な気持ちで生きて顔を出せと伝えた叢雲。自分の知っている侵略者の古鷹とは正反対の存在となっていたため、滾る怒りは中途半端なところで止まってしまった。

泥による洗脳によってこうも変わってしまうのかと実感しつつも、その恐ろしさを嫌というほどに理解することになる。そして、泥の脅威がまだ続いているため、絶対に餌食になるものかと決意することにもなった。

叢雲からもこれ以上古鷹と話すことはないと、懲罰房からは出てもらった。苦しむ姿を見続ける趣味はないし、変に刺激したらそのまま命が潰えてしまう可能性すらあった。痛みを堪えることに集中してもらい、出来る限り最速で治ってもらいたいと考える。

工廠にいても微かに呻き声が聞こえるため、再び会議室に場所を移した。古鷹には今は頑張ってもらうしかない。

「……白露姉さんがこうなので、古鷹さんも近しい感じかなとは思っていました。泥のせいで捻じ曲げられて、絶対に言わないようなことも言わされて……私もやられた側ですけど、正直古鷹さんが可哀想だと思いました」

春雨がポツリと呟いた。春雨も古鷹には少なからず思うところがあった。白露達を沈め、自分を瀕死に追い込んだ張本人。今でこそ深海棲艦として第二の人生を送ることが出来ているが、こうならなければ本当に死んでいたし、仇敵と言っても過言ではない存在。

しかし、本来の性格はとても優しく自己犠牲も厭わない覚悟まで持ち合わせた聖人だ。今のほんの少しの時間でもそれがわかるほどだった。

そんな古鷹には怒りも憎しみも湧かなかった。あの状態をさらに追い込むなんて考えられないし、むしろ無事に生きて幸せに暮らしてほしいとさえ思えた。

「あたし、古鷹さんの気持ちすごくわかるからさ、出来ることなら耐え

てほしい。終わったらみんなで褒めてあげてくれないかな。よく耐えたって。ね、提督」
『ああ、勿論だ。我々が古鷹に出来ることは、環境を整えてあげることと、耐え切った時にそれを讃えることくらいだ』
白露からのお願いも、提督は快諾。本来の性格の古鷹ならば、そこで褒められても謙遜し、むしろ今までの罪を重く感じて拒絶してしまいかねない。だが、生きていてもいいのだと周囲が思わせてあげれば、少しだけでも報われるのではないかと白露は言う。
今は報いを受けているに過ぎない。その痛みを乗り越えれば、古鷹は綺麗な身体とは言えないものの新しい道を歩き始めてもいいだろう。わだかまりは数えきれないくらいありそうではあるが、それも乗り越えて。
「今は私達は待つしかないわねぇ。でも、きっと大丈夫よねぇ」
『ああ、大丈夫だ。古鷹は真実を知るのだと言っていた。自分から諦めることはしないだろう。古鷹ならきっと、長い苦痛にも耐え切るさ』
提督もそれは確信しているような口振り。消耗し続けても、命を手放すようなことはしない。
それもこれも、自分がこんなことをやらされていたのは何故か、黒幕は何を考えてこんなことを繰り返しているかを知るためである。巻き込まれたのだから、その全てを知りたい。そう考えるのは間違ってはいない。
今の古鷹にはそれくらいしか残っていないとも言える。おそらく古鷹も何者かに、もしかしたら黒幕そのものに襲われて命を落とし、白露と同じように魂を混成されながら復活させられたと考えるのが妥当。生前のモノも失い、復活後のモノも捨てた。古鷹には縋るものがもう何もないのだから、知ることに全力を尽くすのも仕方ない。
『だが、まだこの鎮守府にも不安要素が残っている。実は――』
ここで提督からも現在の状況の続きを語る。
当面の問題は鎮守府近海に仕掛けられた泥。古鷹が言うには2日後、一晩経過しているので1日半ほどで泥が浮上し、近場にいるであ

ろう艦娘に襲い掛かり侵蝕する。古鷹が言うよりも早くなる可能性も考えると、処理が出来るまで海上封鎖されたようなものである。
海中にあるために強大な火力で霧散させることも出来ず、潜水艦が魚雷で吹き飛ばそうにも泥が回避してしまう。今は八方塞がりの状態。
対処出来るタイミングとなると、浮上してきて海面にその姿を見せたところを、戦艦の主砲により霧散させる。今のところはこれしかない。
「泥の設置……またえげつないことをするわね」
飛行場姫も呆れ顔。白露が吐き出したそれがたまたま漂っていたのとはワケが違う、悪意のままに実行された最悪の手段。古鷹が災厄と表現し、泥自体を悪意の塊と称しただけある。
「それはアレじゃダメなのか？　みんなで一斉に爆雷投下して、一気に爆破するってのは」
ここで竹が発案。大きな火力が必要であり魚雷がダメならば、海中で最も火力が出るであろう爆雷に頼る。
それを普段の点の対潜ではなく、面の対潜――広範囲に一斉に爆雷を投下して、一気に爆破するという、一種の絨毯爆撃を海中で繰り出せば、泥もひとたまりもない。
しかし、その策にはどうしても穴がある。
「竹、そうするためには誰かしらが海に出なくちゃいけないじゃない。その子達が襲撃されたら元も子もないでしょ」
松がすぐに指摘した。穴とはそれ。爆雷投下を誰がやるか。
爆雷の投下は当然だが人力だ。投射器を装備した軽巡洋艦以下の艦娘が海に出て、ソナーで狙いを定めてターゲットを狙う。射程は限られており、そこまで万端に準備しても避けられる可能性がある。
今回の場合、泥がどれだけ設置されたかがまずわからない。調査をしに行った潜水艦が襲われ、侵蝕されたら本末転倒である。そして、その量に関しては古鷹も把握していないそうだ。知っているのはあの謎の潜水艦だけ。
「対潜攻撃が出来る艦載機で遠くから爆撃してやればいいじゃない。

艦娘は確かそういうもの持ってたわよね。確か……ズィーウンだったかしら」
　ここで戦艦棲姫からの言葉。軽空母は艦上攻撃機で、そして一部の艦娘は水上爆撃機なる対潜攻撃も出来る艦載機が扱える。特に戦艦棲姫が挙げた瑞雲は、後者の中でもわかりやすくその性能を持っている代表的な水上爆撃機だ。
　しかし、それは一部を除いて爆雷よりは火力が低い。専用装備の方が高性能というのはそういうところでも出てくる。
『いや、その手段を使ってみよう。整備に少し時間がかかるが、効果的な手段が無いわけではない。とはいえ、その泥はソナーに引っかからないようなので、しらみ潰しというカタチになりかねないが』
　竹の意見を聞いて思い当たるモノがあったようだ。海に出撃することなく、艦娘は鎮守府に待機した状態でも可能な対潜攻撃。犠牲になるものは誰もいない。代わりに資材が艦娘以上に必要になるのは仕方ない。
『基本的には無いと思うが、今は鎮守府近海に来るのはやめてほしい。すぐに対処しようとは思っているがね』
「わかったわぁ。私達はこの施設から出ることは無いけれど、そういうものがあるということだけは肝に銘じておくわねぇ」
　鎮守府近海に設置されたというだけではない。今後は施設の近海にすら設置される可能性が出てきてしまったのだ。まだ施設の場所はバレていないとは思うが、それでも手が届く場所に置かれていた場合、対処も出来ずに侵蝕されてしまう可能性がある。
　既にそれが実行済みであれば、古鷹なら何か知っているかもしれない。あの激痛が無くなった後なら話も聞くことが出来るだろう。
「それじゃあ、私達からは頑張ってとしか言えないけれど……」
『ああ。今回は撤退されたとはいえ、我々の勝利だ。もう連敗を続けるなんてことはない。通用するとわかったのだからね。しかし、慢心はしない。さらに上を目指して、日々精進するのみさ』
　敗北続きだった鎮守府も、今回の勝利で活気付く。鎮守府の一部が破壊されていようが、その勢いは止まらない。今の調査なら、近海に

設置されたという泥の対処もどうにか出来るだろう。
施設側としても、心配事が失われた。春雨もこの通話によって不安は失われ、寝不足気味だったのと朝食を摂ったこともあり、急激に眠気に襲われる。突然フワフワとし始めた春雨を海風が支えると、事情を説明して部屋へと連れ帰った。

「さて、と」
施設との通話を終えた提督はすぐに準備に取り掛かる。向かった先は工廠。
「明石、もういるかい」
「はーい、大丈夫ですよ」
工廠の奥から、作業服姿の艦娘、工作艦明石が現れた。まだ業務前ではあるものの、多少趣味などが先行していつでも工廠で作業をしている。現に今も、当たり前のように機械弄りをしている。
「基地航空隊の準備をする。整備は出来ていたかな」
「はい、問題ありませんよ。全機整備済み。妖精さんを配備するだけでいつでも飛ばせます。どれが入り用ですか？」
「東海だ。基地航空隊を使って、対潜哨戒をする」
竹や戦艦棲姫の話を聞いたことで思いついた、誰にも危険が無い状態での泥の対処法。それが、対潜哨戒機による近海の掃討作戦。
本来ならば、艦隊の行動を邪魔する敵潜水艦隊を駆逐するために使用される強力な対潜部隊だ。艦娘の手を煩わせることなく潜水艦を掃討していく姿は特に重宝され、艦娘に対潜装備をさせずとも潜水艦が怖くなくなるという優れもの。
しかし、それが使用出来るのは限られた場所。限られた期間である。何せ、1回1回に必要な資材の量が艦娘を超えているのだ。それ以上に資材を使う武蔵という例外はいたりするのだが、基本的には基地航空隊の方が消費が激しい。
「資材のことは考えなくていい。近海の全てに爆雷を落とすくらいの気持ちで頼む。絨毯爆撃だね」

だが、今回は緊急事態だ。このままでは敵の思う壺であり、身動きが取れないままに時間だけが経過してしまう。それを避けるためにも、多少の消耗は考えていられない。
先に準備しておいて、あとから大将に事後承諾をもらうことになるだろう。どうせ今から撃退した旨を報告しなくてはならないため、都合もいい。
「あー、なるほど。何処にあるかわからないから、いっそのこと全部やっちゃえってことですね。わっかりましたー！　予算度外視で全部吹っ飛ばすくらいにしちゃいましょう！」
「地形が変わるようなことはやめてもらえると助かるんだが」
「流石の私もそこまでしませんよ！　でも、ちょーっと火力高めの試作爆雷がありまして。東海なら扱えると思うのですやってみましょう！」
そして明石作の新型対潜兵器もあるらしく、それならば泥も全て吹き飛ばすことが出来るだろう。
場所が特定出来ないために、完全な絨毯爆撃を高火力の爆雷で行なうため、最悪海底などの形を変えてしまいかねないが、そうならないように注意しながら海中を掃討することになる。
「妖精さんにもそのように指示しなくちゃですね。午前中に配備しますから、午後から近海を全て吹っ飛ばしちゃいます！」
「ほどほどに頼むよ。だが、それくらいの気概が無ければ見つけ出して消し飛ばすことは出来ないのかもしれない。みんなにもそのようにすると通達しておこう」
「了解です！　いやぁ、楽しくなってきたーっ！」
ここの明石は少々マッドな部分が混じっているようだが、鎮守府と艦娘のことを第一に考えての行動なので誰も咎めない。

ここからは泥の排除が最優先である。しかし、こういうことが出来るということは、いつ何処で同じように設置されているかがわからなくなってしまった。

今回は近海にあるということがわかっているために基地航空隊の力でどうにか出来るかもしれないが、今後はそれだけでは足りなくなる。それをどう処理していくかは、また考えなくてはならない。

姉と妹

施設の方でも近海の警戒は怠らず、今日も今日とて哨戒は続いていた。当番としては春雨と海風が出る予定だったのだが、春雨が寝不足による体調不良だったため、代打として松竹姉妹が哨戒へ。半日ほどぐっと眠れば回復出来るため、春雨はそのまま海風に連れられて部屋で熟睡することとなる。

勿論そこには海風がついている。寝顔を見ているうちに表情が崩れていくのはいつものこと。春雨が寂しくならないようにと常に隣に座り続ける。

「春雨は熟睡中？」

こそっと白露が部屋の中へ。海風もそれに対して無言で頷くのみで済ませる。変に物音を立てて起こすわけにはいかないため、誰かがここに来ることもあまり喜ばない。

だからか、今日は施設の掃除はお休みとなっており、松竹姉妹以外の駆逐艦や、リシュリューとコマンダン・テストまでもが、今はミシェルの洗浄に精を出している。たまにはそういう気分を落ち着かせる時間も必要だろう。

特にコマンダン・テストは、ここ最近精神的に辛いことばかりである。先程の古鷹の姿も見えないようにリシュリューと共に退室していたくらいである。ようやく本調子に戻ったのだから、今は心安らぐ時間を過ごしてもらいたいものである。

「昨日の夜、大分辛そうにしてたもんね。あたしとしても安心したよ」

春雨を起こさないようにギリギリ聞こえるくらいの声で話す。海風も春雨が気持ちよさそうに眠っているのを確認して、心の底から安心したようだ。

「眠れなくなるまで心配するだなんて、やっぱり姉さんは女神のようなヒトですね。流石としか言いようがありません。でも……あの虫の報せで崩れ落ちる姿は、あまり何度も見たいものではありませんね……」

「まぁ……ねぇ。あたし達にはわからないことまでわかっちゃうよう

になってるもんね春雨は。ここからは何度もああなっちゃうかもしれないと思うと、可哀想かも」
春雨第一の海風には、他者のために苦しむ姉の姿は複雑なようである。いち早く勘付いて危機を取り払うその能力は素晴らしいと思う一方、その都度悪寒で震えて心配事を増やしていくのは辛そうに見える。
海風だって、代わってあげられるのなら代わってあげたいと常々思っているくらいなのだが、ああいう直感的なことが出来るのは『辿り着く力』を持つ春雨のみ。
ならば、常日頃から近くにいてすぐに支えられるようにしようと考えた。元々の依存もあるおかげで、コレに関しては全く苦ではない。むしろもっと近くに寄りたいとさえ思える。
「春雨のことはさ、海風に全部任せるよ」
「はい、任せてください。春雨姉さんは私の全てですから、誰よりも私が春雨姉さんの全てを守ります」
「程々にね。自己犠牲とかはダメだよ。春雨が悲しむから」
守らなくてはいけないのは身体も心もだ。海風が春雨を守るために無理をすれば、春雨は確実に気に病むことになる。それだって避けなければならない。
あまり過保護にしすぎても春雨は喜ばないだろう。程よい距離感で、程よく付き合い続ける。勿論依存という都合もあるので、常に共に居続ける必要はあるとは思うが、例えば春雨の危機に対して身体を張って海風が大怪我を負うようなことがあれば、まず確実に春雨は発作を起こすし、最悪余計にこわれるだろう。
「勿論です。私が春雨姉さんを泣かせたら本末転倒ですから。泣かせる者は全員敵ですから、それには絶対なりたくありません」
「ならいいね。それがわかってるなら安心して任せられるよ」
白露も姉として春雨と海風のことを心配している。それは白露だけで無く、中に含まれる他の３人分も含まれていた。
白露を構成する４人は、全員が２人の姉。特に春雨に対しては、駆逐隊として一緒に行動し、絶対的な信頼を置いていた程だ。海風ほど

ではないが、可愛がっていたのは間違いない。特に村雨。
「白露姉さんって……なんだか落ち着きました？」
海風からしても少しだけ違和感があったようである。春雨以上に見ていることはまず無いのだが、鎮守府に全員が揃っていた頃は姉達のことは全員尊敬し、その戦い方を学ぶためにもよく観察していた。
白露はその時から考えても妙に落ち着いている。どちらかといえば夕立のようにトラブルメーカーになりそうな性格だったのだが、今はまさしく姉という感覚を覚えた。
こんな白露は生前でも見たことがない。いい言い方をするのなら、いつも快活でムードメーカー。悪く言えば落ち着きがなく騒がしい。
「今は時雨の性質使わせてもらってる。あの子、こういう時に静かに出来る子だから」
「ああ、なるほど」
すぐに納得。四人分の性質をその場その場で選択して扱えるというのは、便利なのかどうか。完全なる融合を遂げている分、全てが混じり合って1人の深海棲艦を作り上げているため、正確には性質を選択しているというよりは、その時その時の最善が表に出てきている。
海風も時雨の名前が出たことで大いに納得した。あのヒトの性質ならば、ここでの話も静かに冷静にこなすことが出来る。
「一応、あたしもアンタ達のお姉ちゃんだからさ、何かあったら言ってよね。いっちばーん頼れる仲間として、お手伝いするからさ」
ニッと笑って海風の頭を撫でる。海風も嫌な気分ではなく、改めて白露は自分の姉なのだと実感した。
やはりつい最近まで敵であったというのもあり、この白露に対してはほんの少しだけ抵抗があった。春雨の奮戦のおかげで今の状態へと戻り、ある程度は知っている姉となっているのだが、2度も春雨を苦しめた怨敵だったのも間違いない。
しかし、叢雲に言われた『誠実さを見せろ』というのを忠実に守っているようで、どういう状況であっても正しく生きている。おそらく他意も下心もない。本心のままに生きてコレだ。
「姉さんって……本当に姉さんなんですね」

「当たり前でしょうが。そりゃあつい先日まであちら側だったけど、ちゃんと治ってるから安心しな。アンタの愛する春雨のおかげで、あたしも元に戻れたんだからさ」
小さく憤慨するが、笑みは崩さない。嘘なんて何もついていない。おどけることがあるのは白露や村雨の性質。
そういう素振りを見せられたら普通なら本当に大丈夫かと疑うものだが、白露との付き合いも長い海風からしてみれば、こういう態度を取るからこそ信用出来る。本当に姉が戻ってきたと感じる。
「それに、あたしが信用出来ないっていうのは、春雨のこと信じてないってことに繋がるんだからね。春雨の頑張りが無駄なわけがないでしょ」
「勿論です。春雨姉さんだからこそ、白露姉さんを救うことが出来たと、私は思ってます」
「あたしはいっちばーん上のお姉ちゃんなんだからさ、春雨以上にとは言わないけど、多少は頼ってくれてもいいんだからね」
海風の前では笑みを絶やさない。白露だって表に出さないだけで罪悪感が渦巻いているのに、妹のためにと空気を悪くしないように振る舞っている。
本来の気質からして、辛い時こそ戯けているような姉だ。海風もその辺りは理解しているし、春雨はもっと理解しているだろう。
「そうですね。偉大なる春雨姉さん以上というのは疑う余地もなくあり得ないですが、白露姉さんもあの白露姉さんですから、当然信用しています。春雨姉さんも落ち着きますし」
「言葉の節々に棘がある気がするんだけど、今は気のせいってことにしておく」
「気のせい……では無いですね。そういう意味では、私も深海棲艦なのかもしれないです」
海風も警戒心のない笑みを浮かべた。春雨は心酔する相手として崇め奉っているようなものだが、白露に対しては真に姉としての感覚を持つに至った。実際姉妹なのだから、元の鞘に収まっただけではあるのだが。

「それじゃあ、あたしもミシェルの洗浄に行ってこようかな。海風、春雨のことよろしくね」
「はい。この春雨姉さんの眠りは、誰にも邪魔させません。最高最善の熟睡を保持します」
「気負うなっての」
苦笑しながら白露は部屋から出て行った。これで海風は、眠る春雨と2人きりに。
「……姉さん、今はゆっくり休んでください。目が覚めた時も寂しくないように、海風がずっと側にいますから」
眠っている春雨を起こさないように手を握り、温もりを与えることで逆に海風も落ち着く。
春雨と海風は、若干一方的な部分もあるが一蓮托生だ。

その頃、中間棲姫はここ最近の施設は平和とは程遠い場所になりつつあることを気に病んでいた。そのきっかけが、分離している自分の本来の中身であることを知ってしまったことで尚更である。
「どうしたものかしらねぇ……」
小さく溜息をついて、どうにか対策出来ないかと頭を悩ませる。自分から戦場に出向くことが出来ないため、考えたところで実行に移すことは出来ないのだが。
そこが陸上施設型の良いところでもあり悪いところでもある。基本的に迎撃しか出来ないが、その分強固な護りが売りだ。だからこそ、誰の目にもつかないところで平和に暮らすということが出来ていた。
自分から攻め込もうとしないから、余計な戦いは生まない。しかし、近場で戦いが発生しても逃げる手段がない。平和主義だとそれが良い方向にも悪い方向にも行く。
「お姉、お茶淹れたわ」
「ありがとう妹ちゃん。私が落ち着かないとダメなのにねぇ」
緑茶の入った湯呑みを差し出し、隣に座る飛行場姫。少しだけ啜っ

てから、ふぅと小さく息を吐く。
「お姉のことは、アタシが守るわ。そのためのアタシの力なんだもの」
中間棲姫や戦艦棲姫が特殊な能力を持っているのに対して、飛行場姫はそういった能力を持っていない。代わりに、姉を守るための脅威的な身体能力を手に入れている。叢雲の槍を素手で受け止めて捻じ曲げる程の膂力もそうだが、全ては姉の平和を心身共に守るためだ。
だからこそ、いつも近くで付き従う。同じ海域に生まれたのはそのためなのだと、飛行場姫自身が思っているくらいだ。姉妹という関係以上に、主従関係すらあるのだと内心考えている。
「ありがとう、妹ちゃん。でもねぇ……私を守るだけだと、この施設の平和は維持出来ないわぁ」
「わかってる。あの泥のことよね。傍迷惑なヤツよまったく」
「この島は平和かもしれないけれど、提督くんの鎮守府は常に危険に晒されてるわぁ。あの人達が辛いのは、私も辛いのよぉ」
中間棲姫も春雨とは違う意味で感受性の塊だ。だから繭から溢れた感情が読み取れる。相手の感情を自分のモノのように感じ取り、表には出さないがその気持ちを汲むように行動する。
心優しき深海棲艦だからこその悩みは、自分の目につく場所にいる仲間達の不幸全てだ。手が届く場所にいる施設の仲間達だけではなく、手は届かないがその存在そのものが心の支えになっている鎮守府の仲間達もその対象。
「信じて待とうと春雨ちゃんに言ったくせにコレじゃあ、私もヒトのこと言えないわぁ」
「いいじゃない。それだけお姉が優しいってことじゃない。アタシは評価するわ。お姉も、春雨も」
他人を思い遣ることを卑下することは無い。
「アタシ達はまず、自分の身を守る。あちらはあちらで身を守ってるんだから、それを信じて同じ道を歩けばいいじゃない」
その方法が少し違うだけで、やろうとしていることは同じことだ。平和に向けて突き進むのみ。
「アタシ達はアタシ達で、泥とかはなんとかしましょう。まずは自分

達の身が守れなければ、それこそ鎮守府に迷惑がかかるわ。アタシ達が出来ることは自衛。それだけ」
「……そうかもしれないわねぇ。私も妹ちゃんもここから出ていくことが出来ないんだもの。それを徹底するしかないわねぇ」
「そうよ。それが一番平和的じゃない。実際、戦いはアタシ達の役目じゃないんだもの。でも、愚痴くらいいくらでも聞くわ。溜め込むよりスッキリした方がいいから」
中間棲姫が弱音を吐ける相手なんて、飛行場姫しかいない。ならば、今がその時だ。溜め込んだ鬱憤を口にして、少しでも心の平穏を取り戻してもらいたい。
「……持つべきものは、妹ちゃんねぇ」
「アタシがお姉にとってそういう立ち位置にいるっていうのなら光栄ね。アタシを頼ってちょうだい。ただでさえお姉は気晴らしが出来ないんだから」
「ありがとう、妹ちゃん。これからも頼らせてもらうわぁ」
ここの姉妹仲も良好。仲違いは絶対に無い。

心の平穏のために、今は休息の時。本来の平和は今は何処かに行ってしまっているが、それはきっと取り戻せるだろう。

その脅威を排除して

その日の午後、鎮守府では計画通り、近海への絨毯爆撃が実行されようとしていた。

急なことではあるが、今後の戦いのためには絶対に必要なことであり、ある程度の被害も止むを得ないものとして見ている。そのために大将にも連絡済みであり、かなり無茶な作戦も仕方ないということで許可してもらえた。

そもそもこれが出来なければ鎮守府から出撃が出来ず、施設に行くことも出来ない。泥の脅威に怯えているだけでは先に進めないのだ。

「妖精さんにも指示を出しておきました。それに、東海に試作兵器も搭載済みです。爆雷としては高火力で、爆発した瞬間は武蔵さんの主砲に匹敵するくらいの衝撃が発生するでしょう！」

イキイキとした表情で説明する明石。予算度外視で泥を全て吹き飛ばせる火力を考えた結果がコレなのだから、楽しくて仕方ないのだろう。元々考えていた広範囲対潜兵器を実現させ、さらにはそれを基地航空隊から飛ばせるとなれば、今回やりたいことにベストマッチしている。

こういう時くらいしか弾けた研究成果なんて出せないため、明石はこれ以上ないくらいにテンションが高い。同期であり特に気にかけている大淀は、若干引いていた。

「地形への影響は？」

「極力無しで考えていますが、衝撃を考慮している時点で無関係とはいきません。ただでさえ普通の爆雷でも海底に跡が出来るくらいなんですから、そこは諦めてください。とはいえ、地盤沈下を起こそうとしているわけではないので、地震とかそういうのは気にしないでください」

提督としてはその辺りが気になっていた。範囲攻撃の一番心配なことは、近海の自然を崩すこと。潜水艦の殲滅をしている時点で大きなことは言えないのだが、なるべくならば自然は現状維持にしておきたい。

今回の大型爆雷は、何も海中を汚染するようなことはないとのこと。その海域には潜水艦が潜れないなんてこともなく、ただ単に大型化された爆雷という認識で問題ないらしい。
「全部隊に搭載したので、なるべく広めの編隊飛行をしてもらう予定です。それで、近海を一気に吹っ飛ばします。ただ、1つだけ問題が」
「何があるんだい？」
「音です。こればっかりはどうにも出来ませんでした」
爆発が大きいということは、それ相応の轟音が鳴り響くことになる。駆逐艦などが扱う爆雷は、よくいってもジュースの缶程度の大きさであり、それの爆発は海面を揺らすくらいなのだが、今回はそれの数倍はある威力だ。しかもそれが纏めて爆発する。
耳を塞がないといけないというわけではなくても、とんでもない音が出るのは仕方ない。事前に知っておかないと、驚くどころの騒ぎではなくなる。
「あとは波ですね。津波とは言いませんけど、どうしても爆発で海面が揺れますから。多分魚雷が爆発した時以上の水柱が立ちますよ。しかも近海で」
「鎮守府への影響は」
「堤防などなどのお陰でそこまで被害はないでしょう。でも少し怖いのは工廠ですね。実行前にシャッター閉めておきます」
大津波が起きるということもないのだが、それなりに大きな波が起きるのは否めない。
当たり前だが、実行時に海に誰か行かせるようなことはしない。面白半分でもそれは命懸けになってしまう。海に向かうのは基地航空隊の妖精さん達のみである。
「では、最後の準備を。ここにいる艦娘の皆さんに覚悟をしてもらわなくてはいけません」
「それは音と波のことでいいのか？」
「ええ、本当に大きな音がすると思うので」
使った本人が言うくらいなのだから、それはもう余程のことなのだろう。最悪、音が衝撃となって鎮守府を揺らすまであるのだから、覚

悟の時間も必要になる。
「なら、今から全体に放送する。それから３０分後に実行でいいかい？」
「了解です。それで行きましょう。私は一応、妖精さんの状況がわかるように外には出ますので」
「危険の無いように」
「多分今なら半壊した執務室から見えますよ。提督も如何です？」
「……考えておこう」
実際、結果がどうなるのかは自分の目で見ておきたいというのはある。ならば、執務室から見えると言うなら、そこで結末を見届けるのもいいだろう。提督という役職柄、その辺りは直に見ておく責任もある。

予定通り全体放送の３０分後、基地航空隊による近海への絨毯爆撃が開始される。その様子は鎮守府からも確認出来るような場所であるため、出歯亀というわけではないが誰もが窓の外で何が起きるかを今か今かと待っていた。
こういうのには目がない江風と涼風は、開放されているという執務室へ。山風もほとんど無理矢理引っ張られるようなカタチで便乗させられた。
執務室には提督と五月雨が破壊された窓の外を眺めていた。大淀は明石のストッパーとして工廠にいる。
「提督、そろそろかい!?」
「ああ、時間だ。ここから指示を出し、基地航空隊が発艦する」
最終的な指示は当然提督の仕事である。そういうところの責任者は提督になるわけで、どれだけ無茶をしても最終的には提督の意思。
「五月雨の姉貴も見物かい？」
「秘書艦として、ね。でも何だか凄い音がするって聞いてるから、ちょっと怖いかな」
などと話す五月雨の隣に山風がそそくさと移動。江風や涼風より

は隣に居やすい相手であるという認識。妹達が元気すぎて、山風には辛い様子。ここまでも引き摺られてきたようなものだし。
「それじゃあ、よろしく頼む」
時間になったため、端末から基地航空隊の妖精さん達に決行の指示を送った。試作兵器の扱い方は明石がしっかりと教えており、絨毯爆撃の範囲も当然連絡済み。あとはその通りにやってくれれば終わりだ。
妖精さんは基本的に、教えたことはその通りに寸分違わずに実行出来る程に器用だ。そのため、具体的な指示をしておけば確実にやってくれる。
「お、行った行った。確かにあたいらが戦ったのはあっちの方だね」
「あちらの方は念のためだ。本当にやりたいのは、鎮守府に限りなく近い場所になる」
興奮する涼風に、提督が少し説明した。
謎の潜水艦が泥を仕込むなら、あの戦場の真下ということはまずあり得ない。やるのだったら、より鎮守府に近い場所、むしろ工廠にまで潜り込んで設置するのが妥当。
しかし、それが無いことは確定している。何故なら、提督と大淀が常に工廠に控えており、護衛ということで主砲メインの装備ではあったものの、緊急時のためにソナーも装備していたからだ。大淀は対潜に関してはあまり得手ではないのだが、その存在を確認するくらいは出来る。そして、何者も近付いてきた形跡が無いことは確認済み。
いくらなんでもソナーに引っかからないなんてことは、異常な性能を持っている潜水艦だとしても無いはずだ。泥は感知出来ずとも、ヒト型は感知出来る。それは涼風自身も理解していることだ。浮上してくる謎の潜水艦は感知出来ていたのだから。
「ほーん、じゃあ大淀さんが感知しなかったから、その範囲よりも内側にはいないってことかい」
「ああ、それだけは問題ないだろう。念のため、工廠近くから対潜哨戒をしようとは思っているがね」
「なるほどなー」

そうこう言っているうちに、妖精さん達が持ち場に着いたようである。爆雷を落とすであろう場所で旋回し、鎮守府に戻りながら爆雷を投下した。

それは、鎮守府から見てもその形がわかるほどの大きさだった。ドラム缶程の大きさに詰め込んでいるようなモノなのかもしれない。爆雷の威力を知っている駆逐艦達は、そのサイズから何が起こってしまうのかは想像が出来た。

「そろそろだよな。そろそろだよな！」

「おうよ。あのタイミングだし、沈むのも早いよな！」

とんでもない爆発が起こる。それだけで、江風と涼風はテンションが跳ね上がっていた。逆に五月雨と山風は、窓際から一歩二歩と下がる。

そして、ドスンと音が鳴ったような気がした。海底までは到達していないが、かなり深いところで、今の爆雷が一斉に爆発したのだろう。海中なのだからまずは小さい音。

しかし、ここからが本番。目に見えるところで海面が波打った瞬間、とんでもない爆音と共に、見たこともないような水柱が上がった。大型のクジラが現れても出来上がらないような光景に、もし泥があったとしても爆散して消滅しているだろうと確信出来る程である。

「うおっ……!?　ここまで来るのか！」

窓がない状態の執務室には、その衝撃がモロに入ってくる。音という力は並ではなく、そこに爆発力も上乗せされて、ただでさえ壊れている執務室の壁がミシリと音を立てた。

ある程度は補強されていたものの、やはり半壊しているために脆さはある。部屋が倒壊するようなことは無くとも、修繕完了が遅れることはあるか。

「うわ、うわーっ、すげぇ！　なンだありゃ！」

江風が興奮して声を上げる。窓の外、爆雷の一斉爆破によって一気に海水が弾け飛び、真上に向かって舞い上がったことにより、海面には巨大な渦潮が発生していた。

もしあの爆発で泥が消し飛ばされていなかったとしても、渦潮によ

り粉々に粉砕されることになるだろう。
「あれだけのことは何度も出来ませんね……規模が大きすぎます」
呆気に取られていた五月雨が呟いた。山風も無言で首を縦に振る。
「いろいろな理由であんなことは今回だけにしたいと思っている。何度も何度も出来る所業ではないよアレは」
提督も流石にここまでのことになるとは想定していなかったようだ。資源のことは何も考えなくていいとしたものの、あまりにも規模が大きすぎた。
実際、あの爆雷は1発でも本来の爆雷の数十倍の威力を誇っている。つまり、コストもそれだけ高くなるということ。あんなものを連発出来るのは、大本営くらいだろう。それでも回数は限られそうだが。
「お、おー、次は大雨だ」
涼風が言うように、渦潮の場所に雨が降る。正確には雨では無く、舞い上がった海水がそのまま真下に戻っているだけなのだが、現場はどしゃ降りと感じるような水滴の量になっていることだろう。
この威力でさらに海面が波打ち、もし爆発と渦潮を逃れてかち上げられた泥があったとしても、その衝撃でバラバラになるだろう。
ただの爆雷で三度の対策を立て続けに行なう兵器となった。泥に対しては紛うことなき最高の対策となるだろう。絨毯爆撃はどうしても必要になるだろうが、それ相応の価値があると言ってもいい。
「基地航空隊に何か問題は……無いか、よし。ならば、これを有効手段として大本営に打診しよう。ここだけでなく、まだ泥が設置されている海域があるかもしれない」
「ですね。でも、あまり陸の近くでやるのは……」
「勿論控える必要があるだろう。我々の鎮守府はまだマシな方ではあるが、人里に隣接する鎮守府だって存在する。そんな場所でやろうものなら、大変なことになるだろうからね」
実際はここから改めて泥が消滅したかの確認が必要になるとは思うが、あそこまで大規模に効果を発揮しているのなら、まず間違い無く全てが破壊されている。

「だが、根本的な解決にはなっていない。今は全て排除出来たが、また設置されたら意味がない。やはり、それ自体を撃破しなくては今後もこの脅威が続くということだ」
「そうですよね……その黒幕の居場所も見当がついていないのに」
「どうにかして探し当てるさ。そこは当然大将にも手伝ってもらう。人海戦術を取らざるを得ない」
もうこの鎮守府だけの問題ではない。全ての鎮守府、人類に対する脅威でもある。力を合わせて対処しなくてはいけないのだから、誰だって協力してくれるだろう。

この後に注意に注意を重ねて出撃した調査隊も、泥らしきモノの存在は確認することなく、作戦は成功に終わる。これでひとまずは出撃も可能となった。

理不尽な悪夢

古鷹が鎮守府の懲罰房に入り丸一日。もう夜も深まってきたところ。一切止まらなかった悲鳴と喘ぎ声、呻き声が、ようやく小さくなっていた。それは命の灯火が潰えたわけではない。その内臓の傷がついに接合され、艤装を展開する必要が無くなったからである。

古鷹はこの戦いに勝った。たった1人で、罪を償うために、眠ることも出来ず、休むことも出来ない孤独な戦いに、今この時に勝利したのだ。もうここまで来たら死ぬことはない。

白露の超回復を以てしても、体内の艤装を取り払うのに半日かかった。それが丸一日で終わったというのならまだ早い方だ。

そのまま一晩で完治してしまったのは白露の特性によるもの。古鷹にはそういう能力は備わっていないため、死の危険は乗り越えたかもしれないが、完治までにはまだまだ時間がかかる。

現に胴にバッサリと入った斬り傷は痛々しく残り、瘡蓋にもなっておらず今でも血を流し続けている。巻かれた包帯はすぐに赤く染まってしまう。

「っあ、ぐ、あぁぁ……」

勿論痛みは全く取れていないが、体内に異物が入っている状態よりは楽になる。叫びすぎて喉も痛く、力を入れ続けていたせいで身体中が強張ってしまっているように軋む。そして今まで血を流し続けていた胴は、歪な傷跡に変化していた。

少し身体を動かせば激痛。何処かに触れても激痛。息をするだけで激痛。古鷹の戦いは、第二ラウンドに入ったようなものである。次は血が止まるまでの戦い。

「古鷹さん、清潔にしましょうか」

懲罰房に入ってきたのは大淀だ。提督も行くと言ったのだが、古鷹の裸が見たいのかと脅したらすぐに否定して大淀に任せた。

大淀だけで無く、明石と五月雨もこの場に。蔓延する血の匂いに少しだけ顔を顰めつつも、古鷹の様子がかなり落ち着いているのを見て、心底安心したようだった。

「痛いと思いますが、我慢してください。強くはしませんから」
「……っよ、よろしく、お願いします」
振り絞った言葉は枯れた喉のせいでガサガサ。聞き取れはするが、本来の古鷹の声からは少し離れてしまっている。
「私は床の掃除しますね。血塗れですから」
「それじゃあ、私はゴミを片付けますか。ベッド置きたいし」
古鷹が落ち着けたこともあり、懲罰房とはいえ身体を休めてもらう必要がある。そのため、簡易的ではあるが明石がベッドを用意していた。
流石に血塗れのまま寝かすわけにもいかないため、大淀が古鷹を、五月雨と明石が懲罰房の掃除を受け持った。ガッツリやるのは後日にして、今は簡単にでも古鷹が休めるように。
「けほっ、っぐぅ……ご、ご迷惑、おかけ、します……」
「大丈夫ですよ。提督も言っていたように、貴女は救われたんですから」
なるべく痛みを与えないように身体を拭いていく大淀。のたうち回ったことで身体中が血と埃で汚れてしまっているため、丹念に綺麗にしていった。何処を触れられても激痛はあるが、体内に艤装を生成していた時よりはマシ。それに、清潔になった方が治りが早いようにも思える。そのため、苦しそうに呻きつつも拭いてもらえることには身を委ねていた。
「床の方はある程度綺麗になりました！　明石さん、これくらいで入れられますか？」
「うん、大丈夫ですね。包帯も全部を外に出したから、簡易ベッドを置きますよ。大淀、少しだけ移動させられる？」
「ちょっと待ってて。古鷹さん、痛いかもしれませんが、少し入り口から離れますからね」
自分の力で動けない古鷹を軽く持ち上げて移動。艤装の基部だけ展開したようである。
「はーい、オッケー。これで寝かせること出来まーす」
「よし、古鷹さんもある程度拭けましたし、ベッドに寝てもらいましょ

う。行けそうですか？」
「は、はい……痛みはありますが……大丈夫……です」
　なるべく痛くならないようにやんわりと運び、どうにかベッドに寝かせた。懲罰房の床でのたうち回るよりは当然柔らかい感触に、痛み以上に疲れがどっと外に出てきた。
「眠れるようなら眠ってください。昨日の夜から今までですから、本当に丸一日……それ以上の時間を激痛に耐えていたんですから」
「そ、その前に……教えてほしいことが……」
　痛みを超える眠気に襲われており、その目はトロンとしていたが、古鷹は最後の力を振り絞るように大淀に聞く。
「お昼過ぎ……物凄い音が聞こえました……あれは……」
「あれは私の開発した試作爆雷で、海の中に設置されたという泥を吹っ飛ばした音です。鎮守府が少し揺れるくらいの爆発でしたからね。ここまでも当然聞こえますか」
「……その、大分、ビックリしました」
　懲罰房は地下にあるため、海中での爆発の振動が伝わったのだろう。痛みに耐えながらでも、地面が揺れれば嫌でもわかる。
　事前に伝えられていない状況でのそれだったため、その瞬間だけはとても驚いたようだ。そしてすぐに痛みの渦に呑み込まれてまた悶え苦しむという負の連鎖。その爆音と振動で痛みが増えるようなことはなかったが、驚きで身体を変に動かしてしまったことで苦しむことにはなっている。
「そ、それじゃあ、悪意の塊は……」
「絶対とは言い切れませんが、確認した限り海中にはその存在を確認出来ませんでした。実験は成功、近海の封鎖は解除されました」
「そう、ですか……良かった」
　ここで素直に喜べる辺り、古鷹の心には一切の邪念がない。見た目だけが深海棲艦の艦娘という認識で問題はない。
　白露のときでもそう感じることが出来たが、それはそもそも面識があるからだ。古鷹は敵対状態でしか面識が無いため、本当に正気に戻っているかはわからなかった。だが、この状況でこれならもう一切

の不安は無いだろう。
泥があることを伝えた時点で問題はないだろうが、同じようなことを2度も3度も出来ているのなら、もう疑う理由はない。
「良かった……もう、誰も巻き込まれちゃ……行けないですから……」
安心したのか、そのまま目を瞑り眠りに落ちた。限界まで体力を使っていたのだから、気を抜けばこうなってしまうのは当然だった。
「話は後日、改めて聞きましょう。今はグッスリ眠ってもらった方がいいでしょうからね」
血塗れになることはわかっていてもこのままでは寒いだろうと持ってきている布団を被せて、ゆっくり眠ってもらうことで今回は終わりとした。どれだけ眠ることになるかはわからないが、今はしっかりと休んで怪我を治してもらいたい。

古鷹は夢を見ていた。それはその時を反芻させられる悪夢。古鷹自身があちら側にされた時のこと。
古鷹はとある鎮守府に所属している艦娘だった。古参というわけではないが力を持っており、改二改装も済んでいた歴戦の猛者。
その時は、哨戒で敵影らしきモノを見たということで、鎮守府の中でもある程度の力を持つ者達で部隊を組んでの出撃だった。そのメンバーが、今古鷹の中にいるという榛名、最上、鈴谷。他にもいたのだが、今の古鷹には加えられていない。
実際、敵影は発見した。わざわざ部隊を変更しただけあり、その敵は姫級、戦艦棲姫。勿論、施設で居候になっている戦艦棲姫とは完全な別個体である。哨戒部隊では荷が重いということで、一度撤退した後に戦える部隊で再出撃したということだった。
それを斃すことは容易とは言わないまでも、被害を出すことなく撃破した。古鷹はそこで擦り傷を受けたものの、血をダラダラと流すようなことはない程度の軽傷。
任務自体は戦艦棲姫の撃破によって完了したため、さっさと帰ろうと全員が鎮守府へと引き返す。

その時に、それが起きた。
古鷹の脚に何かが絡みついたような気がした。疑問に思い、下を見た瞬間、その絡みついたものが急激に動き出し、古鷹の口の中へと侵入した。あまりのことに驚き、慌てふためきながらゴクンと呑み込んでしまった。
その瞬間、古鷹の心は一気に黒く染まっていった。訳がわからない内に認識を書き換えられ、それこそが受け入れなくてはならないものと感じてしまった。
やけに力が漲り、今までに考えたことのないような黒い感情が湧き上がる。それがあまりにも心地よくて、もっともっとと望んでしまう。そして、目の前にいる仲間達が、仲間では無くなった。
そこからは早かった。古鷹はその場で、仲間だった艦娘達を後ろから撃ち、そして、全滅させた。それが望まれていることだから。それがやらなくてはいけない使命だから。自然と笑みが溢れた。艦娘のときには見せたことのない下卑た表情だった。
仲間達が戸惑う表情が滑稽だと感じた。死に行くときの絶望に満ちた表情に愉悦を感じた。そして、命の灯火が消える瞬間を目の当たりにして感じたことのない快感を得ていた。
全ては悪意の塊、泥のせい。しかし、その時の古鷹は、それが真なる自分なのだと確信していた。艦娘の皮を被った深海棲艦。泥を呑み込んだその瞬間から、古鷹は魂が侵蝕され、黒ずみ、黒幕の傀儡となった。
「っは、はは、あはははははは！」
歪められた古鷹には、仲間の亡骸は見ていて楽しいもの。自分の方が格上なのだと実感し、堪えきれずに笑ってしまった。愉しい。あまりにも愉しい。悪を成すことが生き甲斐となる程に。
もう古鷹は侵略者と成り果てていた。本来の性格は塗り潰され、最初からこうであったかのように。
「待っていてくださいね……今行きますから」
そして、この力と快感を与えてくれた誰かに報いなければと、亡骸を持ってフラフラと海の向こうに進んでいく。自分が何をされるか

わかっていないのに、それが絶対的に正しいと信じて、ただ導かれるがままに。
この後、艦娘すら辞めて深海棲艦となり、今運んでいる亡骸と融合することになるだなんて、この時の古鷹には想像も出来ていなかった。

「っあっ……!?」
そして、古鷹は目を覚ます。地下の懲罰房には日の光なんて入ってこないため、今の時間はわからない。だが、充分に眠気が取れるくらいには眠っていた。
身体は全身筋肉痛。胴の傷はまだ血が固まっていない。まだ時間的にはそこまで経っていないのだろう。
「うあ……あぁあ……私は、私はなんてことを……」
泥――悪意の塊のせいでそんなことをしてしまったということは理解している。だが、その時の感情も、その時の感触も、その時の快感も、何もかも覚えている。虐殺の悦びは、何モノにも変えられない至福の時だった。
今はその全てに嫌悪感しかない。二度とあんな思いをしたくない。そんなことを自分が長くやり続けていたかと思うと、吐きそうなくらいに気持ち悪い。自分が嫌いになる。
「う、うぅ……なんで……なんで……」
ただ泣くことしか出来なかった。心が引き裂かれそうな痛みに襲われた。身体の痛み以上に、心が痛かった。
「う、あぁあっ、あぁぁぁぁっ」
ただただ泣くしか出来なかった。苦しくて苦しくて、壊れてしまいそうなくらい。
「古鷹、大丈夫デスか!?」
そこに入ってきたのは金剛だった。自分の一撃による致命傷であったことを気に病み、古鷹のことを心配していたため、大淀の静止も聞かずに懲罰房に駆け込んできていたのだ。

その時は妹を使っていることを利用され、堪忍袋の緒が切れてしまったが、今の古鷹には逆に妹が入っているということでそのような感情も持っている。古鷹でもあり、榛名でもある。それだけで、金剛にとっては古鷹も妹のようなもの。

「私は、私はぁ……」

「大丈夫デス。誰も貴女を責めまセン。私も、古鷹のことは許していマス」

血で汚れることなんて一切の躊躇せず、古鷹を抱きしめた。布団を剥いでしまっているため肌寒くはなるのだが、それ以上に金剛が温かく、より心が緩んでいく。

「ごめんなさい……ごめんなさいぃ……」

「古鷹は悪くありまセン。今の古鷹は私達の敵ではありまセンから。もう仲間デース」

抱きしめながら頭を撫でる。血と涙で金剛の服は大変なことになっているが、そんなことはお構いなし。涙を拭いてあげるように古鷹の顔を胸に押し当て、ただただ温もりを与えて行った。

古鷹も自然と落ち着いた。やはり、中に榛名が入っているというのが大きいらしく、金剛に対しては姉であるという感情も湧いてくる。

「今はゆっくり休むといいデース。古鷹は、身体も心も疲れ切っていマース。必要なら、私も傍にいマスからネ」

「うぁぁ……あぁあああ……」

古鷹はただ泣くことしか出来なかった。

落ち着くまでは金剛は近くにいるつもりだった。その姿は、何もかもが違うのに姉妹のように見えた。

仇敵との関係は

施設は束の間の平和を満喫している真っ最中。しかし、昨日に古鷹が目覚め、激痛に苦しんでいることを知ったことで、違う理由で心配事が出来てしまった。

とはいえ、何か進展があれば連絡が来るだろう。特に古鷹に関しては、移動が出来るようになれば施設に運ばれてくることが確定しているようなもの。アポ無しで来ることが絶対に無いため、もしかしたら今日くらいに何かしらの連絡が来るかもしれない。

朝食を終えて少しゆっくりした時間が流れる中、話題は専らそのことになっている。コマンダン・テストも、実際に見たわけでは無いので話くらいなら参加可能。

「あたしの場合はほら、特性があったからさ、大体半日くらいで傷がくっついて、その後は一気に治っちゃったけど、古鷹さんはそういうの無いからねぇ。もしかしたら、今もまだ苦しんでるかも」

実体験として知っている白露が、その時の痛みを思い出して苦そうな顔を見せる。

内臓を艤装で補完して無理矢理接合する痛みなんて、それを実際にやった者にしかわからない激痛だ。並の異物混入とはレベルが違う。痛みのベクトルがあまりにも違うのだ。

しかも、入渠ドックに入っている時のように、眠っている間に全て終わっているというのならまだしも、その間は自分の意識は常にギンギンに漲らせておかなければ死に向かってしまうという緊張感まで。精神的にも相当なダメージになるだろう。

「もしくっついてたとしても、白露姉さんみたいに一晩で完治なんてことは無いってことですよね……」

「だね。全治何日になるか。しばらくご飯も食べられないだろうし、そもそもまともに動くことも出来ないよ」

心配する春雨に、白露も包み隠さずに思ったことを話す。あくまでも白露自身が受けた傷から鑑みたことなので、良し悪しは確実に出てくるのだが、そこまでの誤差は無いだろうと考えて。

「画面に映った古鷹を見た感じ、アタシの見立てでは今頃内臓の接合は終わってるわ。でも、まだ傷自体は治り切っていないでしょうね。あんな深々と入ってる傷だもの。戦艦の傷の完治に3日くらいかかったのよ？」
「じゃあ1週間くらいはかかりそうだなぁ。あたしの特性を分けてあげたいよ」
「出来ればいいんだけれどね。いくら同胞(はらから)同士だって言っても、無理なものは無理よ」
　飛行場姫は内臓を艤装で補う治療の発案者だ。それ故に、その辺りの見立てもそれなりに信用が出来る。そこから見て、内臓に艤装を使うのは今頃終わっているのではとなったようである。
　それは正解。今の古鷹は、内臓の艤装を消し、疲れ果てて一眠りした後である。懲罰房では時間がわからなかったが、古鷹は規則正しく目を覚ましていた。
「死なないと確定しているのなら、古鷹はここで療養するべきかもしれないわね。鎮守府は何かと狙われやすいみたいだし、ストレスもことは段違いでしょ」
　ここで飛行場姫がさらに進める。古鷹の体調のことを考えるのなら、鎮守府で療養するよりは、施設で療養する方が治りが早くなるのではと話した。
　実際それは満場一致だったりする。今まで泥のせいで艦娘を襲撃し続けていたくらいなので、艦娘の近くにいるよりは、同胞(はらから)の近くにいた方が落ち着けるのでは無いか。白露という前例もいるために、より気が楽になるはず。
　そしてこれは、叢雲ですら賛成した。白露と同じように尋問するために、なるべく早く施設に来てもらいたいと語る。古鷹の体調より、自分の怒りを晴らす方を優先するために。
　画面越しではわからないこともある。直に会って話をしなくては、本心はわからない。
「なら、次に連絡を貰ったときに話をしてみましょうかぁ。妹ちゃんの見立て通りなら、今日にでも連絡が来るでしょうからねぇ」

「そうね。まぁ流石に今日動けるかと言われると何とも言えないけど。まだまだ身体は激痛しかないだろうから」
「でももう死にはしないのよね？」
「保証するわ。古鷹はもう死なない。怪我は負ってても、死には至らない」
その言葉を聞いて、一番安心したのはコマンダン・テストである。どんな相手でも、死の匂いが漂うと錯乱してしまうが、それはもう失われたというのなら大丈夫。
むしろ、古鷹がこの施設で療養をするというのなら、最も献身的に介護するのはコマンダン・テストになるだろう。より死から遠ざけるために尽力する。
「それじゃあ、あちらから連絡が来るまではこちらはいつも通りに生活しましょうねぇ。春雨ちゃん、今日は調子は？」
「もう充分ってくらい寝させてもらいましたから、元気百倍です！昨日はお騒がせしました」
「大丈夫よぉ。そういうことになっちゃうのは仕方ないわぁ。春雨ちゃんがそれだけ優しい子っていうことの証明になるんだもの。褒めこそすれ、貶すことは絶対に無いわぁ」
ニコニコしながら春雨の頭を撫でる中間棲姫。されたことで少し恥ずかしげにしつつも喜ぶ春雨。
「じゃあ、今日も1日お願いねぇ」
そんなこんなで施設の1日が始まる。心配事が1つ減りそうだが、まだまだ多い。

そして作業を終えてお昼時。昼食を作るリシュリューとコマンダン・テストを眺めながら、春雨はタブレットの前を陣取っていた。もし連絡が来るならそろそろなのではないかと、直感的に思い至ったからである。
春雨の直感はさらに精度が高くなってきている。鎮守府で起きたことまで察知したほどだ。もう春雨が感じ取った予感は、良いも悪い

も正解ではという雰囲気になっていた。
だからだろう。それには一緒に農作業をしていた叢雲も便乗していた。連絡が来るなら古鷹のことに決まっている。ならば、いち早く状況を知るために春雨についていた方がいいと考えた。
漁組はまだ戻ってきていないため、ダイニングには春雨と海風、そして叢雲のみである。中間棲姫と松竹姉妹は今頃お風呂。
「叢雲ちゃん……古鷹さんにも、白露姉さんと同じことを言うの？」
春雨が問う。対する叢雲は、勿論とさも当然のように返した。
「誠意を見せてもらわないと、私の怒りは収まらないわ。理由があっても殺されてるのは変わらないんだもの」
「そう、だよね。全面的にあの泥が悪くても……手を下したのは古鷹さん……だもんね」
春雨としても複雑な感情を持っているのは間違いない。自分を瀕死にしたのは紛れもなくあの古鷹である。
などと話しているうちに、タブレットが鳴る。待ち構えていたとはいえ、その後にビクンと震えてしまった。
そしておずおずとそれに出ると、その画面の向こう側には勿論、いつもの提督がいた。背景が昨日と変わらず会議室であるため、執務室の修復は現在進行形のようだ。
「提督、春雨です。来るんじゃないかと待っていました」
『そろそろだとは勘付いていたか』
「はい。妹姫様が古鷹さんの傷が接合されると話していたので」
なるほど、と提督が小さく笑うと、端末を持ち上げてそのままカメラの方向を変える。
そちらには、懲罰房から出てきていた古鷹が座っていた。
内臓を補う激痛にのたうち回っていた時から一転、痛いながらも動けるところには来ていたおかげで、安静にさえしておけば血が噴き出すようなこともない。
そのため、傷口が開かないようにするためか、身体にはこれでもかというほど包帯が巻かれ、さらにその上から締め付けるように黒いインナーが生成されていた。それも以前までの重巡ネ級スタイルから

変化し、艦娘古鷹の身につけるそれになっている。
本来ならその上からセーラー服を着込むのだが、今は何を思ってか羽織る程度で終わらせていた。おそらく傷をすぐに処置出来るようにするためなのだが、服を消してしまえばいいだけなので、そこは今の古鷹の心情か何か。
『皆さん……お騒がせ、しました』
丸一日を叫んでいたことで、昨日以上にガラガラな声。内臓がようやく接合されたくらいのため、白露が予期していたように、まだ何かを食べたり飲んだりすることも出来ず、喉を潤すことすら出来ていない。
また、喋るだけでもまだまだ激痛が取れていないため、こうやって一言口に出すだけでも顔を顰める。しかし、思いは自分の言葉で伝えたいということで、提督がここにいることを許可し、その後ろにはサポーターとして金剛と比叡が控えていた。
金剛もそうだが、比叡からしても古鷹は妹のようなモノだ。金剛ほど古鷹のことを可愛がろうとすることは無くとも、保護するものとしての認識はかなり強め。
『おかげさまで……致命傷を乗り越えることが、出来ました。ここからは、安静にすることで……完治に向かうと、思います』
激痛でのたうち回っていた時もそうだが、侵略者として敵対していた時とはあまりにも違うしおらしい態度。
今までずっと虐殺を繰り返して、その最初は仲間を背後から撃つという最悪な行為から始めているせいで、そのテンションはドン底と言えるほどに低い。上げろという方が無理があるのだが。
「姉姫様を呼んできますね。叢雲ちゃん、ちょっと間を繋いでて！海風、行くよ」
「はい、春雨姉さん。提督、少し待っててください」
叢雲が何か言おうとするのも聞かず、春雨と海風はその場から去っていった。姉妹姫を呼んでくるのにはそこまで時間はかからないだろうが、結局叢雲は画面の前に1人残されてしまった。
ある意味助けを求めるようにキッチンの方に目を向けるが、リシュ

リューとコマンダン・テストは昼食のための作業中。止めるのも難しい。
「……えぇと……」
間がもたない。画面の向こうにいるのは提督では無く古鷹。怒りも湧き上がるが、そのあまりの変貌っぷりに戸惑っているのもある。同じ顔なのに、同じでは無い。
白露のこともあるので、泥のせいだということは完全に理解している。今までの古鷹は、真に別人だと言っても過言では無い。だが、簡単に割り切ることは出来やしない。
「……アンタ、何か言うことがあるんじゃないの」
こういう言い方しか出来ないのは叢雲の特性のせい。怒りが常に前に出てくるから、どれだけ仲が良くなっても口が悪いのはそのまま。相手が仲がいいわけではない、ましてや仇敵となると、こうなってしまうのも仕方ないこと。
『いっぱい、いっぱいあります……でも、私は、謝っても許されないことを続けてきました……だから、言いたいことがあっても、言ったところで……何も意味がない……』
小さく鼻を啜る音。涙目で俯き、痛みと喉の渇きからか細い声しか出せない。
『私は……あの悪意の塊のせいで、何人もの命を奪ってきた……その罪は私が背負わなくちゃいけない。正直、死んで詫びるべきだって……考えもしました』
この回答は叢雲が一番気に入らない回答である。殺すなら自分が殺す。怒りのままに、古鷹をズタズタに引き裂いてやりたいとさえ思う。だが、最初から死を望んでいるのは気に入らない。何故ならそれは――
『でも、それはダメだと思います。死んだら終わり……償うべき相手から逃げる行為だと、思います。だから、私はこの苦しみを抱えながら生き続けなければいけない……死んで終わりなのは逃げです』
これは叢雲の納得が行く回答。苦しみからの逃避なんて絶対に許さない。死にたいのなら殺してやると言いつつも、今までのことを後

悔するくらいにネチネチと時間をかけて殺すだろう。ゆっくりゆっくり、泣き叫ぶほどに。
『でも……だからといって開き直ることはしません……私は一生、この苦しみと共に生きていかなくてはいけません……。何かに操られていたかもしれませんが……私がこの手でやったことは、事実……なんですから』
　ようやくここで顔を上げた。涙目で、痛みに耐え、顔色も良くない。だが、その目には決意を感じ取れた。古鷹特有の片目の輝きが、ここで少しだけ強くなったようにも見えた。
「じゃあ、これからどうしていくわけ？　どう償うっていうわけ？　私はアンタと白露に殺された。白露は私に、死なない程度に毎日ボコれって言ってきたわ。どうせすぐ治るんだから、気が済むまで殴れってね。アンタはどうするの？」
　意地が悪い質問である。白露を引き合いに出して、どのような考えに至るのかを探る。
『……どうすれば貴女の気が済むかは、正直わかりません……いや、おそらく、何をしても気が済むことは無いのでしょう。私が死んでも変わらない……。でも、私が貴女の前からいなくなるのは、それも逃げになるでしょう』
　痛みを堪えながら、古鷹は自分の思いを伝えていく。その考え方は、白露と殆ど同じだった。
　何をしたところで叢雲の性質が変わることはない。怒りの矛先が変わるだけ。それが失われたら、また次の矛先に向かうだけ。
『なら私が出来ることなんて……貴女の気が済むまで、玩具にされることくらいしか無い……。でも、それはそれで貴女は気に入らないと言うでしょう』
　図星を指されたような気分だった。何も言い返せない。白露と同じ選択をすると言われたら、二番煎じと扱き下ろしていただろう。
『私にも……八方塞がりなんです。どうやれば償えるのか、どうやればみんなの気が済むのか。私が苦しめばいいなら、いくらでも苦しみます。それが償いになるというのなら、いくらでも。でも、それだけ

じゃもう足りないくらいに私の罪は重い……重すぎるんです』
痛みで拳を握ることすら出来ないが、古鷹は感情の昂りで震えていた。
「理解しているようで何よりだわ。アンタの罪は重い」
『はい……だから、私の生き方は、貴女が決めてください。なんと言われても、私は全てを受け入れます』
思い詰めた者の最後の言葉だった。自分で決められない。決めたところで否定される。それだけのことをしてきた。
叢雲としては一番煮え切らない言葉を聞いてしまった。死を望まない。開き直っていない。ウジウジもしていない。選択を全て、叢雲に託されてしまった。
これが一番困るだろう。古鷹の選択を全て切り捨てるくらいの怒りを持っている状態で、最後の選択肢を委ねられるというさらなる選択。自分の矛盾、面倒臭さを突きつけられたかのような衝撃。
「……なら、これも白露には言ったんだけど」
『はい』
叢雲は少し諦めたような表情で、言い放った。

「アンタが誠実であることを、私に証明しなさい。言動に嘘はつくな。隠し事をするな。本心のままに行動しろ。それで少しでも疑問を持ったら、私がアンタを痛めつける」
白露に言ったことと全く同じ言葉を、もう一度古鷹に伝えた。
古鷹は無言で、でも最高の答えを得られたと、強く頷いた。

古鷹の選択

叢雲と古鷹がお互い納得出来る選択をした後、春雨と海風が姉妹姫を連れてダイニングへ戻ってきた。

「ごめんなさいねぇ、少し時間がかかっちゃって」

「お姉、お風呂入ってたんだもの。アタシに至っては漁の後すぐにここに来たくらいよ」

この時には叢雲は既にタブレットから視線を外しており、画面も古鷹ではなく提督を映している状態。

叢雲と古鷹の会話は、提督は勿論のこと、金剛と比叡も黙って聞いていた。もし叢雲があまりにも理不尽なことを言うようなら口を出そうとしていた比叡だが、金剛は絶対に口を出すなと言わんばかりに指を手に当てて静かにしていようと合図していた。

結果がこれなら良かったと言えるだろう。古鷹は叢雲との関係を深めることは出来ないだろうが、共存は可能であるということがわかったことで安心している。

『急に連絡をしてしまってすまなかった。叢雲とは先んじて話をすることが出来たが、古鷹が致命傷を乗り越え、ヒト前に出られる程度にまで回復したので連絡をさせてもらった』

「ええ、朝にもその話題をしていたの。無事に回復し始めていて良かったわぁ」

まだ激痛は残っているものの、命の危機からは脱した。ここからは安静に療養すれば、確実に完治する段階。

そのため、中間棲姫は朝にも話していたことを切り出す。

「こちらとしては、同胞(はらから)の療養なら場所を提供してもいいと思っているわぁ。こういうことを言うべきでは無いかもしれないけれど、鎮守府よりこちらの方が、心身共に休まるかなって思ったのよぉ」

勿論、古鷹の意思だってある。その辺りは尊重するつもりだ。何か理由があって鎮守府を離れたくないとか、むしろ施設に身を寄せたくないというのなら、そうしてくれて構わないと。

提督としては、鎮守府と施設ならば、施設の方が心が休まるかもし

れないとは思っていた。ここは今まで虐殺の対象であった艦娘が所属する場所であるため、嫌でも心を削られていくのではと。
『古鷹、あちらからそういう案が出ているのだが、どうだろうか。ここでの療養がいいか、施設での療養がいいか、という話なんだが』
またタブレットのカメラを古鷹側に向ける。この選択は、古鷹自身が行なうべきもの。誰かに答えを聞くことではない。行くか、行かないか。
古鷹の心境としては、鎮守府にも施設にも迷惑をかけたくないというのが一番。今までにあまりにも罪を重ねすぎたため、今後は誰にも迷惑をかけずに生きていきたいというのが本心である。誰もが許してくれたとしても、自分自身が許せないのだから、そういう心持ちになるのも仕方ないと言える。
しかし、今の古鷹にはもう1つ、金剛や比叡に対しての気持ちが生まれている。混ぜ込まれてしまっている榛名の感情が少しだけ強く表に出てきており、姉への感情というものが芽生えてしまっている。金剛と比叡から離れることに、少しだけ抵抗があった。
とはいえ、金剛と比叡は艦娘であるが、今の古鷹は深海棲艦。さらには、別に榛名ではないのだ。榛名の感情を持っていても、主となっているのは古鷹。極端なことを言ってしまえば、他に混じっている最上と鈴谷の感情だってある。
『古鷹、心のままに決めてくだサーイ。どんな選択をしても、私達は何も咎めまセーン』
『はい、身体とか立場とか考えなくていいですからね！　迷惑とかありませんから！』
金剛と比叡からもこう後押しされた。どちらにもメリットとデメリットがあるため、どうなっても何も問題ないと。
少し俯き、黙って考えた後、古鷹は決意したように頭を上げる。
『私は……施設での療養を選択、します』
その理由はと提督が尋ねると、つらつらと考えを述べていった。
まず1つ目は、先程の叢雲との対話のこと。誠実であることを証明するためには、鎮守府にいたらそれが出来ない。怒りに呑まれている

叢雲には、言葉で伝えてもそれが虚偽と感じるだろうし、古鷹以外の言動も古鷹を庇うための嘘と解釈する可能性がある。故に、叢雲と同じ場所にいることでその誠意を見せたい。

２つ目は、２人はああ言ったもののやはり療養中の深海棲艦が鎮守府に存在するということが周囲にとっては良いものに見えないというのは確実。提督や大将は何も咎めずとも、世間の目がそれを許さない。誰にも見られない場所に留まっているというのならまだしも、今会議室に連れ出されている時点でそれも無いだろう。

３つ目、やはり艦娘の住まう鎮守府にいるというのは、精神的にキツいというのがあるようだ。今まで虐殺対象として見ており、さんざん格下格下と罵り続けていた相手に対して、引け目がある。こればっかりは何も言い返せない。

しかし、鎮守府にいたいという気持ちが無いわけではない。心は艦娘に戻ることが出来たのだから、本来の居場所は鎮守府なのだという気持ちは消えていない。

『今生の別れで無いのなら……私は、施設の方が、いいかなと』

『そうか、それが君の選択ならば、僕は何も言わない。金剛、比叡、良かったかな』

『Ｙｅｓ．　古鷹がそう決めたんデスから、私達は何も言うことはありまセーン』

『はい！　自分で決めたことを曲げさせる方が、私としては辛いですからね！』

鎮守府側は、古鷹の選択を受け入れた。叢雲の時のように、八方塞がりになったから選択の権利を相手に任せたわけでなく、しっかりと自分の意思で決めたこと。それならば、否定することは絶対に無い。

「それなら、こちらはちゃんと受け入れさせてもらうわぁ。部屋はまだ空いてるし、最高の介護士がいるのよぉ」

自分が呼ばれたと感じたか、昼食準備中のコマンダン・テストがダイニングへ。今の古鷹の姿を見て、より完治に近付いていることがわかったのだろう、満面の笑みで任せてくださいと胸を張った。

「いつ来てくれても構わないわぁ。あ、でも１つだけ注意してもらい

たいことがあるのだけれど」
『ふむ、ミシェルのことだね』
「察しが良くて助かるわぁ」
　次に話題に上るのはミシェルのこと。白露の時もそうだが、今の古鷹に対して不安が残るのは2つ。1つは叢雲との険悪な関係をどのように解決するか。そしてもう1つが、全てがわからなくなってしまったミシェルでも、その死に関する何かを見てしまった時に発作を起こすこと。
　遺留品とも考えられる髪飾りを見て思考停止したことで、これは施設の中でも強めに注意されていることだ。白露は村雨の変装でミシェルと交友関係を深めているほどなので、古鷹もそれに沿ってもらうことになるだろう。
　そのことを古鷹に説明すると、自分のせいで苦しんでいる者がまだまだいるのだと悲しい表情を見せる。
『なら……私も変装をした方が、いいのでしょうか』
「申し訳ないけれど、ミシェルちゃんの前でだけは少しだけでいいから、自分を偽ってほしいの。本当にごめんなさいねぇ」
　どういうカタチであれ、嘘をつかせるのは心苦しいのだろう。しかし、ミシェルの平和のためには必要不可欠。発作は慣れではどうにか出来ないため、周囲が合わせるのが一番安全。
　ミシェルが発作を起こす相手は、古鷹と白露に固定されていると言っても過言では無い。それ以外では何も起きない。ならばと、中間棲姫は本当に申し訳ない気持ちでお願いした。
『変装……どうすれば』
「白露はあの子に混じってる妹の姿になっているわ。村雨って子らしいけれど」
『ふむ……古鷹の中にいるのは、最上、鈴谷、そして榛名か……古鷹が変装するには難しいかもしれないね』
　髪の長さなどを考慮すると、ショートボブな古鷹ではロングヘアーだった榛名と鈴谷の再現は出来ない。そうなると最上の変装になるわけだが、それはそれで何も変わらない可能性が高い。制服は変わる

が、顔が変えられないのだから、それ以上に特殊な部分は無いだろう。
むしろ、考えるべきは古鷹の左目。この光輝く目が一番印象深い。それさえ隠すことが出来れば、ある程度は誤魔化せるのではないだろうか。
『それについてはこちらで考えておこう。ともかく、一目見て古鷹であるとわからないようにすればいいんだね？』
「ええ、何度も言うけれど、本当にごめんなさいねぇ」
全ては施設の平和のため。そこを心得ている提督は、中間棲姫のお願いを聞き入れたいと考える。古鷹も、今までのことをそれで帳消しに出来るとは思っていなくとも、それだけで他者に平穏が齎されるのなら苦ではないと快諾した。
『それでは、こちらも準備が必要だ。明日、改めてそちらに調査隊と共に派遣しよう。また明日の朝連絡させてもらうよ』
「よろしくお願いするわぁ。1日余裕が貰えれば、こちらも準備が出来るものねぇ」
ということで、古鷹は翌日に鎮守府から施設へと移送されることに。今なら宗谷のクルーザーもあるため、運ぶことは容易だろう。1日あれば、古鷹の体調も今以上に良くなるはずなので、より事を成すことが容易となる。

鎮守府との通話を終了し、改めて昼食待ちとなる中、叢雲は不意に思ったことを春雨に問う。
「春雨、アンタ私と古鷹に話をさせるために部屋から出て行ったわけ？」
別にあの場では、姉妹姫を連れてくるのは叢雲でも良かったことだ。鎮守府との縁が強いのは春雨と海風の方なわけで、最近あまり話せていなかったのだから、こういう機会に話すべきなのではないかと考えるのも無理はない。
しかし、そういうタイミングを捨てて、あえて春雨が部屋を出た。海風が一緒に出て行くのも性質上仕方ないだろうが。

「んー、それはちょっとだけ。そうした方がいいかなって思って」
対する春雨は、にこやかな表情で返す。あえて叢雲を1人にして鎮守府との対応をさせたのは、春雨としてはそこまで他意は無かった。だが、それこそ直感的に自分が姉妹姫を呼んでくるべきだと感じたため、叢雲が何かを言う前に動き出した。
結果としてそれが大正解だったのは言うまでもない。その場ですぐに叢雲と古鷹は対話することとなり、今の関係に落ち着くことが出来た。仲良くすることは無いだろうが、叢雲の成長のおかげでいがみ合うこともなく、古鷹もおそらく辿り着ける最高の答えに行けた。
「叢雲ちゃんが一番怒ってるのは知ってる。私だって思うところはあるもん。でも、古鷹さんはやっぱり被害者なんだよなって思ったら、みんなに仲良くなってほしかったんだ。そうなれなかったとしても、せめて喧嘩にはなってほしくないって。それをずっと考えてたから、あんなことしたのかも」
「……それもアンタの『辿り着く力』ってヤツなのかしら」
「どうなんだろ。私は直感が強くなってるってだけだから、辿り着いてるのかはしらないけど……でも、良い道に辿り着けたのなら、私はそれだけで嬉しいよ」
心の底からの言葉。全く嘘偽りのない本心。そんな春雨の言葉に、叢雲は疑う余地もなく、溜息をついた。そして、
「正直、助かったわ。怒りが溢れてきそうだったけど、あの古鷹相手なら……多少は耐えられるわ。ああじゃなかったらぶっ飛ばしてた」
叢雲が小さく微笑んだ。怒りのままに行動するとはいえ、古鷹が被害者であることは叢雲だって理解している。しかし、その根本的な性質がそれを許さない。
しかし、成長したことで怒りがコントロール出来るようになり、苛立ちながらも対話くらいは出来るようになったおかげで、最悪な関係にはならずにいられる。それは施設の平和に繋がることだ。
「礼だけは言っておくわ」
「どういたしまして。叢雲ちゃんのためになったなら、私は良いこと出来たって思うよ」

終始笑顔を絶やさなかった。
「流石は春雨姉さんです。叢雲さんのことを思っての行動、しかも直感的にその選択を出来てしまうなんて、なんて慈悲深い。海風、感服してしまいます。他者を思いやる気持ちが溢れているなんて、やはり神、いや女神のような存在なのは間違いないですね。そんな姉さんの妹であることを誇りに思いますよ」
「海風、それはちょっと褒めすぎだよ」
「何を言いますか。これは私の本心ですよ。そして真実なんですから」
海風は相変わらずである。

古鷹は施設に受け入れられることとなり、話はまた先へと進む。今はまだ体調がすぐれない古鷹だが、今ここにいる仲間達の中では最も真実に近い者と言える。

久々の来島

その日はそこからは何事もなく、平和な一日が終了する。哨戒に出ていた戦艦棲姫達も何の異常も発見することなく、ただ近海を見て回るのみで終わっていた。

以前見つけた爆雷の痕が増えている様子が無いということは、もう潜水艦狩りのようなことはしていないということ。襲撃に参加していた謎の潜水艦が完成しているためだろう。

何事もない1日というのが本当に幸せであるということを噛み締めて、その日はそのまま幕を閉じた。

そして翌日。古鷹が移送されることとなり、施設側も準備を終えていた。最初から怪我人であることはわかっているため、いつでも介護が出来るようにコマンダン・テストが待機出来る部屋をつかうことにして、さらにはなるべく誰かの目に入るように必ず誰かが古鷹の部屋に配置されるように時間を使う。

一時期の槍持ちや（叢雲）戦艦棲姫のような状態。ここ最近は施設にもヒトが増えてきたため、1人や2人が古鷹に専念していても何も問題が無いくらいだ。ただでさえ、農作業を中間棲姫も含めて6人でやっているほどなのだから、今の人員の多さがわかる。

「古鷹ちゃんの介護は、コマちゃんがメインとなって、追加で1人か2人が身の回りのお世話をしてあげる感じで考えてるわぁ」

「アタシの見込みでおおよそ1週間。当番制で午前と午後って感じね。別に表とか作る必要も無いでしょ。連続しないように、各々好きに受け持ってちょうだい」

言ってしまえば、別にコマンダン・テストだけでも充分だったりする。だが、あえてここで当番制にしてまで世話をするようにしたのは、古鷹にこの施設に慣れてもらうためだ。

今までやらされてきたことによって、古鷹は常に引け目を感じ続けることになるだろう。だが、この施設は平和に楽しく生きていくことが目的の場所だ。古鷹にも笑顔で生活してもらいたい。

白露はそれを既に実践に移すことが出来ている。元々の性格もあ

るが、混じり合った妹達の性格も前向きなモノが多い。そのおかげで、今を楽しく生きていた。生きていた妹達もいるというのもその助けになっているだろう。海風は少し歪んでいるが。
「特に叢雲は積極的に当番になってくれていいわよ。誠実さをその目で知るためにも、罰を与えるためにも」
「……考えとくわ」
実際はそれも狙いだろう。叢雲と古鷹はどうしても仲良くなれない。白露とも線を引いているくらいなのだから、そこは避けられない。
だが、白露にも古鷹にも、誠実であることを証明しろと言ったのは外ならぬ叢雲だ。なのにその姿を見ないというのはよろしくない。見てもいないのに否定することは出来ないのだから。
それ故に、誰かをサポートにつけてもいいから、叢雲はなるべく率先してその当番につけということになる。
「さ、そろそろ来るわぁ。お出迎えの準備をしましょう。戦艦ちゃん、古鷹ちゃんを運ぶのを手伝ってもらっていいかしらぁ」
「お安い御用よ。私が一番適しているでしょう。タンカとかストレッチャーとかあるわけじゃないんだもの」
「ええ、そうねぇ。怪我人が運び込まれるなんてそうそう無いから用意はしていないわねぇ」
古鷹が宗谷のクルーザーで運ばれてくるのは想定済み。そこから施設の部屋まで運ぶのは、やはり戦艦棲姫の艤装に任せることにしている。
怪我人を慎重に丁寧に運ぶことに定評のある艤装ならば、古鷹に今まで以上の苦しみを与えることは無いはず。
「あとはアレね、古鷹がどう変装してくれるかね。ミシェルのことは伝わってるから、何かしらの対策してきてくれるはずよ」
「あたしみたいに簡単に変えられるかな。古鷹さん、髪短いし」
「カツラとか付け毛くらいは作れるでしょ。髪結ぶ時のリボンまで繊細に作れるのよ?」
白露の疑問に即座に返答したのは叢雲だった。叢雲も農作業中は

髪を結んだりしているのだが、その時のリボンも服を生成する要領でなんとか出来てしまう。ならば、髪の毛を増やすくらいなんてことないだろう。考えないだけで。
「あ、出来たわ！」
そんな叢雲の言葉を聞いて試してみたジェーナスが、気付けばロングヘアーになっていた。とはいえ本当に髪が伸びたわけではなく、付け毛が艤装と同じように生成されたのみ。
ショートボブなジェーナスがロングヘアーになると、大分印象がかわる。元々が癖毛なので付け毛を付けても少し違和感が出てしまうくらいなのだが、それでもだ。
ならば古鷹もその形でやっていけるだろう。先にそれを思いつくことなく、ここにそのままで現れた場合、クルーザーから運び出す時にやれと言えばいい話。
「いろいろと安心ねぇ。それじゃあ改めて、出迎えに行きましょうかぁ」
ここまで纏まったので、施設総出でお出迎えとなる。今回は鎮守府の艦娘の交流も久しぶりに出来るため、施設の者達は少しテンションが高かった。悪い話も無いため、落ち込むようなことも無いだろう。

出迎えに出てすぐに叢雲が反応をキャッチ。そして少ししたら水平線の向こう側にいつものメンバーが並んでいた。
しかし、今回は少しだけ人数が多い。大将が派遣した演習艦隊も、ここでお近づきになっておけと大将自身からの命により、施設にやってきたのだ。
実際は、鎮守府から施設に向かう間に襲撃を受けないようにするためというのもある。それならば演習艦隊は鎮守府に残るべきかもしれないが、人数は確実に鎮守府側の方が多いため、こちらについたというのが実情。
それに、鎮守府は数日は安全だろうという予測もあった。襲撃で姿を現した龍驤は、謎の潜水艦の手助けが無ければ撤退出来ないくらい

に消耗させている。そんな身体ですぐに再襲撃は無いだろうという判断だった。
「なんだか久しぶりな感じ！」
春雨が手を振ると、あちらからも振り返してきたのが見えた。大きく手を振るのは江風と涼風、あとは金剛といったところか。
実際、最後に鎮守府の面々が施設に訪れたのは、白露が施設に匿われることとなった戦闘が発生した時以来。それまでは毎日とは言わないまでも、頻繁に交流をしていたため、久しぶり感も出ている。
「やけに人数が多いわね。あれが大将の部下って子達かしら」
「そうなるわよねぇ。大将さん直属の子だし、島風ちゃんや宗谷ちゃんが大丈夫なんだから、あの子達も大丈夫でしょう」
姉妹姫は追加で訪れた艦娘達のことについては、問題ないと判断。信用出来る者の部下ならば信用出来る。それに島風と宗谷という前例があるおかげで、信頼は置けた。
そう話している内に、江風と涼風、そして島風が山風を引っ張って先行してきた。
久しぶりの画面越しではない対面を山風は楽しみにしていたらしく、それを察した妹達と島風はそれをすぐに叶えるべく動き出した。山風は相当驚いていたために事前に話していたわけではないことが窺える。
「姉貴達久しぶりー！　元気にしてた？」
「久しぶりみんな。アンタは元気すぎるみたいだねぇ」
江風に対して苦笑しながら手を振る白露。今はミシェルもそこにいるので村雨の変装中。最初にその姿を見た時には流石に目を疑ったが、事前に聞いていたので動揺を表に出すことなく済ますことが出来ている。
そして、今の古鷹がそういう姿をしていることにも察しがついた。ミシェルのための変装はちゃんと出来ているようである。
「山風、久しぶり」
「う、うん、久しぶり……海風姉……」
おずおずと前に出てきた山風も、海風と対面出来たことでほんのり

と嬉しそうな雰囲気を醸し出していた。表情はあまり変わらずとも、気分が昂揚しているのは姉妹達にはすぐに見てとれる。
「ちゃんと隊長やれてるみたいね。安心した」
「うん……ちゃんと海風姉の後を継げてる……はず」
「自信を持って、山風。私はもうここから出ていくことは出来ないけど、山風のことをここから応援しているからね」
そう言われただけでも報われる気分だった。そして、これからも頑張ろうと気合も入る。
「あ、そ、そうだ……姉姫さん、妹姫さん……今日の本題」
「ええ、提督くんから聞いてるわぁ。古鷹ちゃんをこの施設で療養してもらうために連れてきてくれたのよねぇ」
「うん……そろそろ来るよ」
こちらでわちゃわちゃしている間に、宗谷のクルーザーも到着。中から宗谷が会釈し、中の古鷹を運び出しやすくするように、岸にうまく横付けした。
「戦艦、よろしくお願いしていいかしら」
「任せて。何処から運び出せばいいの？」
「こっちデース。よろしくお願いしマース」
金剛の案内で戦艦棲姫がクルーザーの側へ。その中で安静にしている古鷹の姿を見て、一瞬戸惑いを見せた。
周りの者達は戦艦棲姫がそんな反応をする理由はなんとなくわかった。戦艦棲姫も一応は古鷹の姿を知っている。その時の姿とは大きくかけ離れているということだろう。
「少し驚いたわ。大分様変わりしたのね」
「はい……話は聞いてましたから」
か細い声がクルーザーの中から聞こえた。1日グッスリ眠り、体力的には多少は回復しているものの、傷の痛みは少しくらいしか和らいでいないようなので、やはり身体を動かしたら激痛が走るようだ。喋るだけでもこれなら、まだ食事は不可能だろう。水すら飲めないかもしれない。
そして、戦艦棲姫が艤装を生成し、クルーザーの中にその手を突っ

込み、古鷹の身体を優しく運び出す。なるべく揺らさず、ゆっくりと手を抜き出したら、その手の上には古鷹らしき者が存在していた。
「……え？」
素っ頓狂な声が出たのは、古鷹に最も怒りと恨みを持つ叢雲である。その叢雲がこういう反応をするくらいに、古鷹の変装は完璧と言えた。
今の古鷹は、予想通り付け毛でロングヘアーにすることで印象を大きく変えていた。なのだが、制服までしっかりと変えて、古鷹らしさがカケラも見えない状態。
その姿は、古鷹に混じっているという艦娘、鈴谷の姿に外ならない。白露と同じで、混じっている艦娘の姿を模倣しようとすると、大分それに寄せられるらしい。感情などもその通りに持っているため、やろうと思えば口調から何から全てを寄せることまで出来る。
最初は榛名に変装しようと考えていたのだが、金剛や比叡に対して榛名の声色を使った経験がそれを躊躇わせた。最上に変装も考えたのだが、髪型の件であまり代わり映えがしない。そのため、結果的に鈴谷をチョイス。
そして一番の問題だった左目だが、かなり大きめの眼帯によって光を漏らさずに隠すことに成功していた。
眼帯といえば、この施設にかつていたという天龍が同じように左目に着けていたのだが、彼女と同じような眼帯では光が漏れかねない。そのため、目元を完全に覆うほどの大きな眼帯で完全に隠している。
「ご迷惑……おかけします」
「いいのよぉ。今もまだ身体をまともに動かせないんでしょう？しっかりここで治して、楽しく生きられるようにしてちょうだいねぇ」
小さく微笑むことしか出来ない古鷹。ここに来たからには、叢雲に誠実さを見せつつも、楽しく生きる必要がある。今は心が擦り切れてしまっているようだが、それも療養で穏やかになっていけばいい。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、新しいＦｒｉｅｎｄ（友達）よ！　ご挨拶しましょ！」
そして問題となっているミシェル。ジェーナスが戦艦棲姫に合図

して、２人を対面させた。
クリクリとした瞳で古鷹を見つめるミシェル。ここで発作を起こすなら、ここで反応を見せることなく涙を流すことになる。白露のときは大丈夫だったが果たして。
「……貴女がミシェルさん……ですね。話は聞いてます……。これからよろしく……お願いしますね」
舐めるように眺めるミシェルだったが、古鷹からの言葉に反応して、よろしくと言わんばかりに身体を震わせる。
相変わらず感情表現が豊かで、むしろここ最近はそれがより顕著になっている。この施設で楽しく生きているおかげか、賢かったのがより賢くなっているような、そんな感じ。
「……私がもう少し動けるようになったら……仲良くしてください、ね」
身体を震わせた後、ビシッと敬礼するように身体を縦に。そんな姿に古鷹も申し訳なさと共に愛らしさを感じた。
「さ、あまりここで話をしているのもよろしくないわぁ。今は休んでもらうために、部屋に運ばせてもらいましょうねぇ」
挨拶もそこそこに、古鷹は戦艦棲姫によって施設内に運ばれていった。そこには介護者としてコマンダン・テストと今日の当番として叢雲と薄雲がついていく。
「貴女達も上がってちょうだい。お話ししましょうねぇ」
ここからは久しぶりの対話の時間。今回はこの施設に初めて来る者もいるため、少し長い時間を考えている。

ミシェル問題も一応解決したため、古鷹は施設に受け入れられそうだった。後は叢雲との関係性のみ。

最悪を知る者

鎮守府の部隊が施設に到着し、移送されてきた古鷹は施設の一室に運ばれ、残りの者達は中間棲姫に案内されて施設の中へ。交流会と称した現状把握の会を開く。ここで情報を共有し、互いのこれからを話し合う予定だ。

流石にここまで大人数が一度に訪れたことがなく、全員が入れるような場所は無い。そのため、主要となるであろう大将の艦隊をメインとし、提督の艦隊は山風と金剛が代表として参加。施設からはやはり白露型の3人。そして、念のためと全員が入ったダイニングの入り口には戦艦棲姫が待機。

「先にするべきだと思ったが、今自己紹介をしておこう。私は武蔵。この艦隊の長を務めさせてもらっている」

「あらあら、ご丁寧にどうもぉ。ご存知の通り、私のことは姉姫と呼んでちょうだいねぇ、武蔵ちゃん」

「ほう、ちゃん付けとは。もしかしたら初めてかもしれん。ハッハハ、これはいいな！」

豪快に笑い飛ばす武蔵。一目で中間棲姫を気に入ったようである。大将が任せるだけあり、相手が深海棲艦であろうが何だろうが、敵では無いのなら即座に仲良くなる。島風と近しい存在か。

「Ｈｅｌｌｏ，　航空母艦サラトガです。ムサシのＡｓｓｉｓｔａｎｔ（補佐）をさせてもらってます。よろしくお願いいたしますね、Ｓｉｓｔｅｒｓ」

次はサラトガが挨拶。武蔵の補佐というだけあって、真逆の丁寧さが窺える態度に、姉妹姫共々好感触。握手を求められて、抵抗もなくそれに応じた。

「あたしは北上、んで、こっちは大井っち。この2人の部下みたいなもの。まぁよろしくー」

「もう、北上さんったら……。大井です。深海棲艦が相手と聞いて少し驚きましたけど、むしろ人間より手を取りやすくて助かります」

そして北上と大井。相手が誰であろうとも態度を変えることはな

く飄々とした態度で接する北上と、それを補うように親身にサポートする大井に、姉妹姫はなるほどと納得するような態度。
この２人に関しては、松竹姉妹に近しい何かを感じ取った。今ここにはいないが、実際松竹姉妹はこの２人の関係性に強い反応を示していたのだから間違いない。
「まずは情報共有と行きましょう。とは言っても、こちらに提供出来る情報は無いのだけれど」
話をすぐに進めるため、飛行場姫が切り出す。基本的に聞きたいこととといえば、古鷹を救うに至った夜襲のこと。春雨が虫の報せを受けたが、全てを鎮守府に託したその戦い。
結論は既に提督から聞いているため、勝利に終わったことは理解している。何者が襲撃したかも。だが、ここで戦場に立った本人達からの言葉を聞いておきたかった。
「古鷹に関しては、何も言うことは無いだろう。なぁ、金剛？」
「Ｙｅｓ．　あの子はもう私達の仲間デース。対策とかも何も必要ありませんし、聞きたいことがあれば本人から聞けばいいデース」
「だから、問題は山風や北上が交戦したという龍驤と、それを助け撤退した潜水艦に集約されるだろう。特に潜水艦はまずい。私の力業でも、海中はどうにも出来ん」
現在残っている脅威は、龍驤と謎の潜水艦の２人。特に後者は、一切気付かれることなく鎮守府近海に忍び寄り、古鷹の証言だけではあるが泥の設置を行なった。
つまり、泥は持ち運びが出来るということになる。知らぬ間に海中に設置されて、近くを通りかかった何の罪もない人間や艦娘を襲撃することになる。それが本当に厄介。
「白露姉さん、その潜水艦のことって、何か知っていたりしますか？」
ここであえて白露にその情報を聞いてみる海風。そこで無遠慮に行けるのは、春雨にそんな辛い質問をさせないため。
「うーん、あたしが向こう側にいる時のことって結構ぼんやりなんだけど、その時に潜水艦がどうのこうのって話は聞いた覚えが無いんだよね……。でも爆雷落とした覚えはある」

「じゃあ、あの潜水艦が出来上がる過程に参加していたと」
「かもしれない。でもそれなら、斃した子を拠点に運んでいくはずなんだよなぁ。なんでかその記憶だけは抜けちゃってるんだけど」
そこの部分だけがスッポリ抜けている。あちら側に都合の悪い記憶は、あの泥が引き摺り出して持っていってしまうかのように。
だからこそ、呼称が『悪意の塊』なのかもしれない。最悪の姫の中身に都合がいいように侵蝕した者を弄り回し、使えなくなったら都合が悪くならないように捨てる。まさに悪意。
「そう考えると、その黒幕ってのはマジ性格悪いねぇ。正々堂々と戦わないで、他のヤツ使ってやりたい放題。使えなくなったらさっさと捨てて次のヤツを侵蝕って」
「だからこその最悪の姫……ですかね」
「あはは、言えてる言えてる。戦い方が最悪だからってことだね。大井っち冴えてんねぇ」
元々は最悪の姫の中身。過去にあった大きな戦いで、他の深海棲艦とは違う搦め手を使ってきた屈指の頭脳派。賢いというか、狡賢いというか。
「……これからは、泥も気をつけなくちゃ」
山風がボソリと呟く。ただでさえ回避が相当困難な海中の泥が、今後は何処かに設置されているかもしれないと考えると、まともな戦闘もままならなくなる可能性がある。もう機雷のようなものだ。
ただの機雷ならまだしも、それに取り込まれたら最後、あちら側に持っていかれるという最悪な展開。しかもそれを治療する手段は確立されておらず、白露も古鷹も立て続けとはいえ運が良かったとしか言いようがない。
味方が減り敵が増えるなんて絶望的すぎる。これだけは絶対に避けなくてはいけない。
「……その、何というか、ごめんなさいねぇ」
不意に中間棲姫が謝罪する。
「何を謝る必要がある。貴様は何もしていない。むしろ、我々に力を貸してくれる仲間じゃあないか」

「大将さんには伝わっていると思うけど、私は最悪の姫の器なのよぉ？」
そのままズバリを問うた。ただでさえ深海棲艦というのは艦娘と敵対するモノなのに、何故ここまですぐにと。
提督とは、中間棲姫がそういう存在なのだと知る前から関係を持ち始め、お互いに信頼し合った状態で真実を知ったために、どうであれ関係は変えないという結論に達したわけだが、まだ初対面の武蔵がここまで呆気なく信用するのは何故か。
「我々がここに来させてもらったのは外でもなく、貴様達をこの目で見ることなのだが……いや何、まるで心配が無いではないか。強く、正しく、美しい。なんてわかりやすい良い奴なんだ」
「ムサシは少し言い方がＣｒｕｄｅ（雑）ですよ。でも、私も近い感想です。貴女方は、とてもいいヒトだと、サラも思います」
何も疑うことなく、姉妹姫は人類にとって艦娘にとって無害であると即断していた。実際そうなのだが、まるで躊躇がない。中間棲姫はあの最悪の姫の器。それを知ってのコレである。
「私が言うのはアレだけれど、何故そこまですぐに信用してもらえるのかしらぁ」
そう聞かれた武蔵は、何かを考えることもせず、とんでもないことを言い出す。
「何故と言われてもな。私は最悪の姫と交戦経験があるからだが」
流石にこれは姉妹姫共々目を見開いて驚いた。
ここまで簡単に信用出来るのは、武蔵が最悪の姫を知っているからである。資料で知っているとかではなく、直接面識があり、激戦を繰り広げ、そして撃破した張本人だからだ。
その時は確実に斃したと思っていたが、実は生き残っていたと聞いて驚愕したのも武蔵である。手応えはあったし、元々持っていた陸上施設が消滅するところも確認している。そこまでやったのだから、もういないと考えるのは普通だ。それなのに、器と中身で分離して生きているだなんて考えてもみなかった。
「あたし達もその戦いには出てないんだよね。多分、ここにいる面子

だけで言うなら、武蔵さんだけだよ」
「そうですね。私も、島風も、その時から鎮守府にいましたけど、その戦いには参加していません。サラトガさんと宗谷さんはまだその時には生まれていませんでした」
雷撃が得意な面々は、陸上施設型相手には少し不利。そのため、他の面々で最悪の姫を直に見ているものはいない。結果、武蔵の証言のみが信じられるものになる。
そして、武蔵はそのヒト柄から、あまりにも豪快すぎて嘘をつくことが出来ないくらいの単純さも持ち合わせている。そんな武蔵が、中間棲姫は最悪の姫ではないと断言すれば、それはもう正しいと思うしかない。
「私はこの中でも最も最悪の姫を知る者だろう。だからこそ言える。貴様は、姉姫はヤツとは完全な別人だとな」
実際にどんな存在だったかを知っているのなら、この中間棲姫が完全に別人であることなんて一目瞭然。こんなにおっとりもしていないし、社交的でもない。高圧的で、艦娘に対して殺意しかない空気しか無かったと、武蔵は語る。
「私は貴様達に全幅の信頼を寄せよう。他者のことを一番に考え、今まで敵であった古鷹に対しても何の疑問もなくその門戸を開く姿勢、私は気に入った。私からも仲良くしてもらいたいと願うぞ」
改めて握手を求める武蔵。驚きをまだ引きずっている中間棲姫だが、納得はしていたため、握手に応じた。力強く、頼りになる手とその温もり。
自分達は本当に恵まれていると実感する。最初に発見されたのが、深海棲艦との共存を是とする提督の使者。そして、そのまま大将も同じ志を持つ者。そうで無かったら、この施設は終わっていた。
「だが、流石の私もこの施設に関しては驚いた。右を見ても左を見ても姫級だなんてな」
「サラもです。ここまで姫級が並ぶのは、今までに見たことがありません。話を聞いていても驚いてしまいますよ」
見た目は艦娘であっても、その実力は一線を画している。そんな姫

級の深海棲艦が住まうこの施設は、見る者が見れば核を落としてでも潰さなくてはいけないと考えてしまうくらいの超危険区域としてしまいかねない。
　事前に話を聞いており、絶対に敵対しないとわかっていても、その数に驚いてしまう。それこそ、中間棲姫と飛行場姫、それに戦艦棲姫までが並んでいるだけでも脅威だというのに。
「貴女方が敵だったらと思うとゾッとしてしまいます。でもこんなにもＦｒｉｅｎｄｌｙで、とってもＬｏｖｅｌｙなんですもの。仲良くしたいと考えるのはＮａｔｕｒａｌです」
　サラトガもニコニコしながらこの光景を受け入れている。敵ならば存亡がかかるくらいの脅威だが、味方ならこれほど頼りになる者達もいない。
「やっぱ敵対より仲良くっしょ。その方が面倒臭くないからさー」
「北上さんはこう言ってますが、戦わずに仲良く出来た方が世の中が楽しいと考えているヒトなので」
「大井っちさぁ、ちょいちょい放り込んでくるよね」
「私が北上さんの一番の理解者ですから。駆逐艦のことを鬱陶しがっていても、ただただ可愛いだけですもんね」
　大井の言葉に北上が恥ずかしげに頭を抱える。ここの関係はこういうものなのだと理解出来た。
「ともかく、だ。我々はこの施設のことを気に入っている。如何に深海棲艦であろうが、志は同じ、平和を目指す者だ。そんな者達をただ種族が違うからと蔑ろにする理由があるか。いや、無い。むしろ、種族しか見ずに敵だ味方だを決めるなど、時代遅れも甚だしいとさえ思う。だろう？」
「そうねぇ。武蔵ちゃんの言う通りだわぁ。だからこそ、私達は人間さんともお付き合いをしているんだし、艦娘さん達ともこうやって話が出来ているんだもの」
「ああ、だから姉姫、貴様は自分の生い立ちなぞ考えなくていい。最悪の姫の器だろうが関係なかろう。貴様は貴様だ。最悪の姫でなく、姉姫だ。身体ではなく、心で見る。それでいいだろう」

ニッと笑って拳を突き出す。それに対してどうすればいいのかはわからなかった中間棲姫だが、飛行場姫は察したようで、そこに拳を突き合わせた。
「アンタ、男前ね。気に入ったわ」
「おいおい、こんないい女を捕まえて男前とは何事だ。だが、悪くない」
こちらはこちらで気が合うようで、これだけでお互いの信頼を勝ち取った様子。
「ところで妹姫よ。貴様、なかなかの手練れだな？　どうだ、私と手合わせなんて」
「お断りするわ。アタシはお姉を守るためだけに戦うの。余計なことはしない。それに万が一夕食が作れなくなったらどうしてくれるのよ」
「ハッハハ、そいつはすまなかった。だが、気が向いたら頼む。さらなる高みに向かいたいのだ。まだまだ私は弱いのでな」
不敵な笑み。だが、飛行場姫はあえて乗らずに終わりにした。

大将の艦隊からの信頼も掴み取り、施設はより強い絆で結ばれていく。これだけ強い繋がりがあれば、何があっても負けることは無いだろう。

叢雲と古鷹

姉妹姫達が大将の艦隊と話を進めている裏側。戦艦棲姫の艤装の手によって慎重に運ばれた古鷹は、予定通り用意された一室へと運ばれた。

介護者としてコマンダン・テストが、そして今日の身の回りのお世話の当番として、叢雲と薄雲が部屋に入る。

「降ろすわよ。痛いかもしれないけど、我慢して」

「はい……大丈夫です……ありがとうございました」

艤装が古鷹をゆっくりベッドに寝かせる。なるべく振動を与えないようにしたことで、古鷹は大きなダメージを受けることなくベッドに横になることが出来た。

そこでようやく見た目を元に戻す。ミシェルの前では常に鈴谷スタイルで過ごすことになるのだが、室内では問題ない。そのため、古鷹は古鷹としての姿となった。

付け毛と眼帯が失われて、制服も本来のもの……とはいかず、以前に端末越しに会話した時に着ていた黒いインナー姿となった。今はこの締め付けで胴についた傷を押さえているらしく、傷が完全に塞がるまではコレを欠かさないつもりらしい。包帯代わりのようなもの。

そもそも古鷹が艦娘時代から愛用しているものであるため、そういう意味でも艦娘の心を取り戻していると言えた。あちら側だった時に愛用していたネ級のボディスーツは、今では嫌悪感を覚えているとのこと。

「無理だとは思うけど、一応聞いておくわ。何か食べれたりするの？」

「多分……まだ無理、だと……思います……。痛みが……身体の奥まであるので……」

「内臓の接合は終わったけど、まだ完全に治ったわけじゃないのね。でもまぁ時間をかければちゃんと治るわ」

布団を被せてやろうとするが、それすらも激痛に繋がる可能性があるため、許可を貰ってからゆっくりと被せる。案の定、その布が擦れるだけでも身悶える程に痛みを感じており、ベッドにちゃんと寝かせ

るまでに相当消耗してしまったようだ。
宗谷のクルーザーでここまで来るまでも、かなり苦労したようである。ゆっくり駆けようが高速で駆けようが、海には波があるためにどうしても揺れてしまうのが問題。そこは島風の連装砲ちゃん達が、なるべく揺れないように身体を固定していたのだとか。
「怪我の方、まだ血は出るのですか？」
コマンダン・テストが問いかける。その手には出来る限りの手当ての道具。とはいえ、深海棲艦に薬など使えないため、傷口を清潔に保つためのモノが基本。タオルと水がたっぷり。
「えと……は、はい……少し、だけ。なので……今は押さえつけている感じ、です」
「Donc（なる）, est（ほど） tout（ど）. では、また血で汚れてきたら拭きましょう。痛いかもしれませんが、早く治すには、清潔が必要ですから」
「はい……」
まだ声を出すのも辛そうにしている。これだけ話していても、やはり喉はガラガラのまま。水すら飲めないので仕方ないことだろう。
「念のため、飲み水も持ってきています。飲んで、みますか？」
「喉を潤すことも必要でしょ。ちょっと試してみなさい」
コマンダン・テストと戦艦棲姫に推されて、古鷹はおずおずと水を貰う。吸飲みに入った少量の水ではあるのだが、それに手を伸ばすことも出来ないため、コマンダン・テストが口元に近付け、ゆっくりと傾けた。
激しく飲むことは当然ながら、ゆっくりですら難しい。ほんの少しを口に含み、コクンと飲み込んだ瞬間、古鷹の身体が小さく跳ねた。ただ水を飲むだけでも痛みに繋がった。
叫び過ぎで喉を痛めていたのも原因だろう。しかし、潤わさないとそこも癒えていかない。多少の痛みは我慢してもらう必要がある。
「はぁ……はぁ……ご迷惑を……おかけします……」
「迷惑（心配（しない））だなんて（でください）思っていません（ませんよ）。Net, en（でください） fais（いま） pas（せん）」

「そうよ。貴女はまずは自分の身体を治すことを考えればいいの。そうしたら、嫌でもこの施設のために貢献することになるんだから」
古鷹ももうこの施設の一員だ。ならば、傷さえ治れば農作業なり漁なりに参加することになる。そういうカタチでの貢献で恩を返してくれればいいと、戦艦棲姫は話した。自分も居候の身だから強くは言えないがと苦笑するが。
「キツイかもしれないけど、せめて水くらいは飲んだ方がいいわ。何もゴクゴク飲めとは言わない。水分くらいちゃんと取らないとら治るものも治らないってこと。だから、定期的にコレで飲ませてもらいなさい」
「わかり……ました……」
多少スパルタっぽくなっているが、それも古鷹のため。栄養が摂れないことは残念だが、それ以外のことはやっておくべき。特に水分は、深海棲艦であろうとも大事なモノだ。
これからは自分から飲ませてほしいと言うようにと念を押された。痛かろうが何だろうが、ひとまずは飲めと。
「それじゃあ、私は出ていくわ。一度グッと眠った方がいいでしょ。それとも、まだ眠れそうにない？」
「……そう……ですね。疲れてはいるんですが……眠気はあまり」
「そう。なら、誰かと話しているうちに、自然と眠くなるわ。叢雲、薄雲。貴女達が古鷹と話でもしてあげなさい。私とコマは一度部屋から出るから」
反発するのは叢雲である。世話係ということで部屋に入れられてはいるが、ただ話すだけというのは考えていなかった。見ているくらいなら出来るが、そこまでは考えていない。
ただ古鷹が痛みに苦しんだ時に物を持ってくるだとか、部屋が汚れたら掃除するだとか、そういうことをするものだとばかり思っていた。交流なんてするつもりはない。
「あら、でも古鷹の誠実さを見るんだったら、自分から率先して関わって行かなくちゃあねぇ。気に入らないなら尚更、口実を作るためにも関わらないと」

ニヤニヤしている戦艦棲姫に苛立ちを覚えつつも、少し納得してしまった。
自分から誠実さを見せろと古鷹に言っておきながら、早速その関わりを断つとなると、それはむしろ自分の誠実さを見せていないことにならないだろうか。
そもそも常に喧嘩腰で対面していること自体が少し誠実さに欠けるのだが、そこは叢雲の性質から仕方ないものとしてみている。薄雲も隣でサポートしつつ、ここがどうにかならないかと思いながら一緒に生活しているくらいだ。
「……わかったわよ」
渋々、本当に渋々、叢雲は戦艦棲姫の案に乗った。心底気に入らないという雰囲気を出しつつ、しかし戦艦棲姫の言うことにも一理あると納得して。
実際、叢雲は若干乗せられやすいところはある。素直なのか単純なのかはさておき、いい方向に向かうのならそういうところも別に問題はない。
本当にまずい方向に行きそうならば、まず間違いなく薄雲が何か言う。そして今の薄雲は、ニコニコしながら叢雲を見守っている状態だ。手を出しそうなら後ろから羽交い締めするだろうし、文句を言い続けるなら苦言を呈するくらいするだろう。いい相方、いい妹として、叢雲を完璧にサポートしていた。
「でも、私から話すことなんて何も無いわ。昔話でもすればいいわけ？」
「そこは好きにしなさい。コマ、少し外に出ましょう。今は安静が必要だわ」
「Ｏｕｉ．　それではごゆっくり」
戦艦棲姫とコマンダン・テストは部屋の外へ。残されたのはベッドに横になる古鷹と、それをただ見ているだけの叢雲、そしてその叢雲がやらかさないかを見守る薄雲のみに。
話をしてやれと言われたものの、いざこうなると何も話せなくなってしまう。何を話せばいいのかわからない。自分から出てくる言葉

なんて、今は上から押し付けるような高圧的な悪態しか無い。
「……叢雲……さん」
それを言い出しそうになる前に、古鷹から話しかけられた。話すだけでも辛そうだが、それでも自分から叢雲に伝えなくてはいけないことだと、その辛さをどうにか耐えながら。
「私からも……話すことは無いと思います……。それに……何を話しても、貴女には……苦痛になるかもしれない」
こうなったとしても、自分のことよりも相手のこと。特に叢雲は被害者の中で唯一、深海棲艦化したとしても生きている存在だ。謝罪の言葉を延々と言い続けたいとすら思うが、それは叢雲が望まない。そうなると、古鷹としても何も話すことは無くなってしまう。
世間話と言っても、自分の今まで行なってきたことを語ったところでそれは逆効果になるし、ならば深海棲艦化する前の鎮守府での生活のことを話したところで、本来得られるはずだった艦娘としての人生を潰したことを思い出させることになり、それはそれでまた苦しめることになる。
端末越しに言った通り、古鷹は叢雲に対しては八方塞がりなのである。何を言っても、何をしても、それは叢雲に対しては苦痛を与える行為になりかねない。静かにしていても、行動していても、生きていても、死んでいても。古鷹という存在そのものが、叢雲の怒りのボルテージを上げることに繋がる。
それほどまでに許されないことをしてきたことは自覚している。いくら泥のせいでだとしても。この居心地の悪さも罪を償う行為の内の1つと考え、古鷹は一生それを背負う覚悟でここにいる。
「……アンタだって被害者だってことはわかってるわ。泥のせいで狂わされて」
「……はい。私は生きたまま泥を呑まされて……その場で仲間を殺しました」
そこまでのものとは知らず、叢雲はまた口を噤んでしまった。白露のように黒幕辺りに殺された後、黒い繭となった挙句に泥を注がれてああなったとばかり思っていた。

だが、順序が逆だった。死に至るほどのダメージを受け、それがきっかけで深海棲艦化し、その後泥を入れられたのでは無い。泥を入れられてから何らかのカタチで深海棲艦化して今に至る。下手をしたら、古鷹は一度もダメージを受けていないのかもしれない。
「そこは全部覚えているんです……先日まで夢で見てしまいました。その時の感触も、その時の思考も、その時の快楽も、何もかもを反芻させられました……。酷い……ですよね。仲間を後ろから撃って、殺して、それを喜びながら身悶えするなんて……」
身体の痛みでは無い痛みに歯を食いしばり、自然と涙目に。
「なのに……一番大事な……あのヒトのことだけは完全に頭から抜けてるんです……吐き出した泥に持って行かれたかのように」
あのヒトとは、おそらく今探し求めている黒幕、最悪の姫の中身のこと。長い間部下として働き続けていたのに、最後の作戦で何をやろうとしていたかも覚えているのに、黒幕の居場所も思い出せなければ、自分が何をされて深海棲艦化したかも思い出せない。
助け出されたのに、次の段階に行く手助けすら出来ないことを悔やんでいた。せっかく一番情報を持っている存在なのだというのに、必要な記憶は何もかも抜け落ちている。これは白露も同じ。
「今まで罪を犯し続けていたというのに……いざ解放されたら何の役にも立てないなんて……それが一番苦しい。悔しい……すごく悔しい……！」
涙目だったのが、もう泣いていた。自分をここまで不幸にした存在に、一矢報いることも出来ないのが、とても悔しかった。
「だったら、身体治してから黒幕に怒りをぶつけてやんなさいよ」
対する叢雲は、そんな古鷹に対してたった一言。その思いを汲むように、そして自分の怒りも乗せるように。
今の怒りの矛先は、白露から古鷹へ、そして古鷹から黒幕へと変化している。勿論、白露にも古鷹にも怒りはある。殺した張本人なのだから、殺したい程に苛立つ。
しかし、叢雲だって大きく成長しているのだ。白露も古鷹も、完全な被害者であることは理解している。むしろ、自分と同じようなモノ

であるとすら思えた。
　叢雲だって、深海棲艦化したばかりの頃は、感知の範囲内に入った艦娘を無差別に襲うことしかできない知性のない存在と化していた。叢雲は幸いなことに未然に防がれただけ。最初の時にヨナが現れていなかったら、鎮守府の誰かを殺していただろう。
「私は私をこうしたヤツを絶対に許さない。だからアンタと白露を憎んだ。むしろ今でも憎んでる」
「……そう……ですよね」
「でも、その裏側にいて今でも表に出てこない黒幕が一番気に入らない。張本人だってのに、表舞台に出てこないで、他人使っていいようにやってるのが腹が立つわ。だから、私はそいつを絶対に殺してやる。アンタはそれを手伝いなさい。私と一緒に」
　譲歩かもしれないが、叢雲の選択はこれが一番最善だろう。古鷹に被害はなく、叢雲の怒りの発散にもなる。
「……はい……勿論」
　涙を拭くことは出来なかったが、小さく、力強く頷いた。

「あと」
「……？」
「その敬語やめて。下手に出られてるみたいでなんかムズムズする。私のことは呼び捨てでいいわよ」
　これもなんだかんだ和解に向かう道。せめて態度が軟化すれば、多少はいい関係になるはずだ。
「……ん、わかった……叢雲……ちゃん」
「呼び捨てにしろっつってんでしょ」
「そ、そう言われても……」
　少しだけ、本当に少しだけ距離が縮んだように見えた。

黒幕の狙いは

対話が終了し、鎮守府からやってきた艦娘達は帰投する時間に。昼食は如何かと誘ったものの、流石に人数が多すぎるというのと、今日はまた鎮守府でも対策会議が開かれるため、残念ながら一度戻らなくてはいけないと話していた。

ここの端末を使って参加すればと言おうとしたものの、止めておいた。この判断は、なるべくこの施設を巻き込まないようにするために会議の場にも参加してもらわないようにしたいという、提督の心遣いである。それならばと姉妹姫は無理を言わなかった。

鎮守府側も大人数であるため、古鷹の介護に携わるコマンダン・テスト、戦艦棲姫、叢雲、薄雲以外の全員で見送り。ミシェルも勿論その場にいるため、白露は村雨の変装済み。

そこには姫級がズラリと並ぶようなものなので、これが敵だったらとんでもないことになるなと、数人は苦笑していた。

「それじゃあ……あたし達は鎮守府に戻る」

全員が海に出た後。隊長である山風が代表となって姉妹姫に頭を下げる。

「はい、気をつけてねぇ。鎮守府に帰るまでが任務だからねぇ」

「うん……大丈夫。気をつけて帰る」

まるで母親のようなことを言いながら、にこやかに手を振る中間棲姫。また来てねとも付け加えて。

「姉貴達も元気そうで何よりだったよ。また来るからさ、江風達の活躍、期待していてくれよな！」

「江風はあまり調子に乗っちゃダメよ。そういうことしてるときにドジを踏むんだから」

「へへっ、海風の姉貴にそう言われンのも久しぶりな感じがすンな。任せとけって！　もう絶対負けねぇからさ！」

ニカッと笑う江風に小さく溜息を吐く海風だったが、内心ではその自信満々な態度に安心していた。今までも江風の空元気にならない明るさには助けられているが、今もそうだと思えるほどに。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、私達はまた来ますからネー。その時は遊びましょうネ」
　ギリギリまで送ってくれるだろうミシェルを、何の躊躇いもなく撫でる金剛に、ミシェルも喜びで身体を震わせた。
「確か前に、ここから帰る時に襲われた時があったでしょ。っていうか、襲ったのあたしなんだけど、そういうことが今から無いとは限らないから、気をつけてね。アイツら、本当に勘弁してほしいタイミングを狙おうとするから。あたしがやったからわかる！」
「自信満々に言われても……でも、わかった。気をつける」
　ここにいる面々の中では一番敵のことに詳しい白露からの忠告。ミシェルがいる場でそんなことを話すのはどうかと思ったが、姿が白露ではないおかげで何事もない。
　そんな白露の言葉に、山風もしっかりと刻み込んだ。帰路でまた襲われたとしたら本当に笑えない。今のところは春雨も虫の報せを受け取っていないが、しばらく行って叢雲の感知からも離れたタイミングで襲われたこともあるため、この忠告は割と馬鹿に出来ない。
　今回からは泥に関しても注意しなくてはいけないのだ。しかも、海中からいきなり現れ、捕まったら終わりという今までにない脅威。さらに言えば、ソナーに引っかかるかもわからないまである。注意しようが無い可能性があるのだ。
「立ち止まらない。速度を落とさない。泥っぽいモノを見たら容赦なく撃つ。んで、あたいが常にソナーをギンギンに利かせておく。これでひとまずいいってことかい？」
「そうね。あとは私と千代田が哨戒機を常に飛ばしておく。これで上から下まで見続ければ、多少は危険度は下がるんじゃないかしら」
「なら、サラもお手伝いしますね。多ければ多い方がいいでしょうから」
　艦隊は艦隊で帰路についてを相談して、万全な状態で鎮守府に辿り着けるようにしていた。
　ただ鎮守府と島を往復するだけなのに、ここまで緊張することになるとは思っていなかったことだろう。まるで地雷源を駆け回るよう

なもの。とはいえ、まずここに無傷で来ることが出来ているため、半分は安心出来ている。
「今、鎮守府で明石が頑張ってるんデスヨ。予算度外視の新兵器開発」
「あー、なんか怖い笑い方してましたね」
「泥を探知するＳｏｎａｒとかも作ってる真っ最中だそうデース。ＭａｄなＳｃｉｅｎｔｉｓｔは恐ろしいけど頼りになりますネー」
少しだけの間でも古鷹を鎮守府で匿ったのは、何もその怪我を治してもらって施設に送り届けるためだけではない。明石にはもう１つ理由があった。
それが、古鷹が流した体液から深海棲艦の成分を解析すること。わざわざ大淀や五月雨と一緒に懲罰房に入り、掃除ではなく包帯などの片付けを率先してやり始めたのは、そこに付着した体液を回収するためだ。
泥に意思があるかもしれないが、物質としては深海棲艦の成分には違いないはず。それ故に、ただの体液であろうが確認が出来るくらいのセンサー、それこそ電探やソナーに技術を転用することが出来れば、今の敵に対しての最高のカウンターが出来るだろう。
「でも今はそれがありまセーン。私達だけでどうにかする必要がありマース。充分に気をつけて、鎮守府に戻りまショウ！」
これ以上ここで話し続けても意味が無いだろう。実際に帰ってみなくてはわからない。心配しすぎても何も変わらない。ならば、いつも通り、いや、それ以上に注意しながら鎮守府に戻ればいい。
鎮守府に到着したら施設に連絡してもらうということだけは念を押した。施設を安心させるためにも、帰投が完了した旨だけは絶対である。
「それじゃあ、長々とごめんなさいねぇ。現状把握、しっかり出来ました。提督くんにもそう伝えてちょうだい。まぁこちらから今帰投したって連絡してしまえばいい話なんだけれど」
「うん……わかった。ちゃんと伝える」
「ええ、よろしくねぇ」
山風にも新たな任務を与えて、隊長としての役割を全うさせようと

する辺り、中間棲姫はヒトの使い方が上手い。
「じゃあ……また来る」
山風も小さく手を振った後、全員の先頭に立って指揮するように海を進む。調査隊の施設での任務はこれで終了となった。

水平線の向こうへと調査隊が消え、その後にも春雨の嫌な予感はしなかったため、ひとまず全員安心して施設内へ。ここからは鎮守府から帰投完了の連絡が来るまでは少しだけ緊張感がある状態が続く。
「古鷹が寝たわ。ちょっと時間がかかったけど」
「姉さんが寝るまで話を続けてくれたので、古鷹さんも安心出来たみたいで。今はグッスリ眠っています」
叢雲と薄雲もダイニングへ。古鷹が眠りに落ちたらしく、そのままいても意味がないと撤収したようだ。むしろまだ部屋にコマンダン・テストと戦艦棲姫が待機しているため、その状態で人数を増やしていても無駄になると判断している。
「はい、叢雲ちゃん。昨日の残りで申し訳ないんだけど、甘いもの」
そこへすかさず春雨が、昨日のうちに作っておいた甘味を叢雲に。残り物のクッキーではあるのだが、今の叢雲にはご褒美になるのではと残しておいたもの。
訝しげな顔はするものの、小さく鼻で笑いつつもしっかり摘まんでいく辺り、叢雲は叢雲である。
「むぐむぐ……アンタ達は私のことどう思ってんのよ。薄雲もそうだけど、甘いものがあれば何でもやるとでも思ってるわけ？」
満場一致で首を縦に振られて、叢雲は小さく歯軋りした。今の叢雲を見れば、これが通用するとは誰でもわかることである。
「今回に関しては、こういうのが無くてもやってやるわよ。戦艦に言われたんだもの。誠意見せろっつってんのに私から関係断つのはズルいって。私としても納得したわ」
古鷹に対しても、白露に対しても、誠実さを感じられなかったら手が出ると脅したようなものなのに、それを積極的に見ないようにして

いるのは、要求しておきながらそれを反故にするようなものではないかと、叢雲としても考えたらしい。
だからこそ、古鷹が眠るまでは常に話し続けた。世間話とまではいかないけど、古鷹が持ってる思いを語らせたり、その逆を語ったり。あとは、今の敵がどんなところを狙ってくるかなどを聞き出したり。覚えている部分だけでも聞いておけば、先に繋がる。延いては、この施設の平和の維持に貢献出来る。
「で、古鷹から聞いたことなんだけど、黒幕のことはまるで覚えてないけど、何しようとしてるかは朧げに覚えてたらしいわ」
「へぇ、ならそれを提督くんに伝えたら、対策出来るかもしれないわねぇ。それは何なのかしらぁ」
「アンタよ」
中間棲姫を指差す叢雲。一瞬何が言いたいかわからなかった。
「あっちの黒幕は、正しい器を欲してるらしいわ。古鷹には意味がわからなかったらしいけど。だから、最悪の姫の器を探しながら、そこら中で艦娘を沈めて仲間も増やしてたって感じらしいわよ。それに巻き込まれた私にとってはホントいい迷惑だけど」
話していても苛立ちを隠そうとしない。まるで意味がわからないのに忠誠心があるからとりあえず動いていたという古鷹に巻き込まれて殺されたとなれば、明確な理由があってやられるよりも気に入らないのはわかる。
古鷹も当時は何の疑問も持たずに動いていたようだが、今考えてみると指示が謎だった。器とは何かがさっぱりわからない。施設の者達は『観測者』からの話と春雨の直感でそこに辿り着いているが、知らないものがそれを言われても理解が出来ないだろう。
「え、それあたし聞いてないんだけど」
「アンタは新人すぎて信用されてなかったんじゃないの？」
「ぐぬぬ……何も言い返せない……」
そういうことを伝えられているのは、黒幕に近い者に限られるのだろう。古鷹はかなり長い時間をあちら側で活動しているため、そういう話を聞くこともあったようだ。古鷹自身が黒幕のことを全く思い

出せない状態にされているが、黒幕本人からそう伝えられたという覚えだけはある様子。
　白露は沈められてから深海棲艦化させられて間もない状態だったため、まだそこまで任せるほどの力を持っているとは判断されていなかったのではないか。叢雲の予想はそれだが、おおよそ正解。
「ともかく、こんだけ探しても見つからないってのは、誰かにそういう能力か何かがあったりするんじゃないの？　敵対するヤツから見つけられない力みたいな」
「どうなのかしらねぇ……。戦いたくないって考えることばかりだから、無意識のうちにヒト避けが出来ているのかしらぁ」
「じゃあ、私達がこの島を発見出来たのは？」
　海風が叢雲に問う。敵がこの施設を探していても見つけられないのに、海風達調査隊が見つけられたのは何故か。
「アンタ、敵対のためにここに来たわけ？」
「……春雨姉さんを探すため、ですね。結果的に姉姫様に牙を剥いてしまいましたが、悪意も何もありませんでした」
　それは簡単な話だ。目的が敵対ではないから。あくまでも春雨を探しているうちの延長線上だから。ここを探し当ててから感情が昂ってしまったこともあったが、何事も無かったために事無きを得ている。
　むしろ、未来でこのように仲間になることを予知していたからこそ呼び込んでいる、なんてことまで考えられた。逆に、永劫敵対とわかっていれば一生この島は見つけられない。
「仲間になりそうなヒトを判別しているのかもしれませんね。姉姫さんも妹姫さんも、戦いを拒んでいるわけですし。その性質がここをそういう領域にしているのかも？」
　薄雲がちょっとした考えを語る。侵略者としての性質を持つ者のみを拒む『結界』的なものが張られているのではなんていう、少しオカルトじみた憶測まで出てくる。感情を読み取ったり、海の記憶を読み取ったり出来るわけだし、そもそも同胞（はらから）に『観測者』なんていう例外みたいな連中もいるのだから、今更どんな能力が出てきても驚かな

い。
「まぁ、島に向かう私達の姿を見られたら勘付かれるだろうけど。どうあっても島が動くわけじゃあ無いんだから。鎮守府の連中を出しにして、この施設を探そうとしてるってのまで考えられるわよ」
「確かに……それは困るわね。一度見つけられたらアウトでしょそんなの」
「だから鎮守府の連中に泥を仕込もうともするわよ。ここの記憶持ってんだもの」
考えれば考えるほど不安になっていく現状。自己防衛は勿論のこと、ちゃんと連携していかなければ足をすくわれることになりかねない。

まだ敵には見つけられていないものの、何が起きるかわからない。今まで以上に慎重に事を起こしていく必要もあるだろう。
施設はただ平和を望んでいるだけだ。それを脅かす輩は、許されるものではない。

科学者明石

鎮守府へと帰投する調査隊一行は、今まで襲撃されていた海域を越え、そろそろ鎮守府近海に到着するというところ。

ここは以前に行なわれた対潜掃討が届いている場所。とんでもない爆発が起きたことで、近海に設置されたという泥はおそらく存在しない。とはいえ警戒しない理由が無いので、立ち止まらず、速度を落とさず、見えないかもしれないが海中に目を凝らしてそこを駆け抜ける。

「ここに来るまで何の反応も無かったけど、まだまだ不安要素は多いよねぇ。吹っ飛ばした後にまたここに来てて、改めて設置したとか言われたら厄介だ」

駆け抜けながらも、涼風が全力でソナーによる確認を走らせている。今のところは何の反応もない。

泥にソナーが反応するかどうかはわからないが、今は反応するとして確認はしている。勿論、反応しないことも考慮して、部隊の誰もが海中に気を配っていた。

「涼風……なんか、おかしなことは……無かった？」

「少なくとも今んところは、反応らしい反応は無いね。この前の基地航空隊で吹っ飛ばした時のゴミとかも、多分全部海底に積もってる」

山風が少し心配そうに聞くが、涼風は何も感知していない。安心しつつも油断は出来ない。

「哨戒機からも何の連絡も無し。誰かに見られてるとかそういうのは無さそう」

「でも銀だこはわからないんだよね……こういうことしている間も実は見られてるなんてことあるかも」

千歳と千代田はその辺りが不安なようである。こればっかりは新兵器で手に入れることが出来なかった、深海棲艦特有の手段。

北上が看破した、龍驤による高高度索敵。それは艦娘の扱える艦載機の性能を優に超えており、手の届かないところからこちらを観察し、行動を全て読んでくるという異常なスペックを見せつけてきた。

それに追いつくことが出来るものは、艦娘の扱うもので無ければ一応存在する。秋水という基地航空隊が扱う局地戦闘機だ。あれならば、高高度にいる敵艦載機を撃ち墜とすことが出来る。まさに必殺の一矢。

「それは提督に進言していマース。定期的に秋水やＫｏｍｅｔを飛ばしてもらっているので、安心してくだサーイ」

勿論そこは対策済み。しかし、その隙間を縫ってこちらを観察している可能性は充分にあるので、警戒するに越したことは無い。

「あ……鎮守府、見えた」

そうこうしている内に、何事もなく鎮守府を水平線の向こうに視認出来る位置まで到着。あと少しで帰投完了。

ここまで来ても気は抜かない。そこに狙いをすまされている可能性だって充分にある。あと少しで終わりというタイミングを見計らって泥に襲われるとかもう笑えない。

「最後まで気を抜かずに行きまショウ！　ここで捕まるなんて、ＮＯなんだからネ！」

金剛の言葉の通り、こんなところで泥に捕まり洗脳されるとか本当に笑えない。そのため、誰も気を抜かずに鎮守府までの海路を突き進む。

その結果、最後まで何事もなく鎮守府に到着することが出来た。全員で安堵しつつ、これから毎日こんな面倒なことを考えなければならないのかと思うと気が滅入った。

調査隊が鎮守府に帰投出来たことを施設に伝えた後、提督は工廠へ。今も楽しくマッドな研究を繰り広げている明石の様子を見るためである。

予算度外視での研究を許可されたことで、今までで一番テンションが上がっているのは、誰が見てもそうだった。あまりにも危ないため、その研究には一応親友である大淀が常に監視を怠らず、最低限の安全性が証明されたことしかやらせないようにしている。

むしろ、心配なのは明石本人だ。研究に没頭しすぎて食事を抜いたり、何日も徹夜を続けたりと、自分の身体を本当に大切にしない問題児。それが全て、艦隊運営が滞りなく、かつ最高最善に続くようにする、仲間のためを思っての行為なのだから、叱るに叱れない。
「あ、提督、お疲れ様です」
提督に気付いた大淀だが、早速困った表情を向けてきた。明石が何かやらかしたのかと不安になるものの、見た感じ明石は健康そのもの。いつになくキラキラしながら、研究を続けている。
「提督、いいところに！　古鷹の体液、いろいろと解析しましたよー。深海棲艦の、しかも姫級、さらには元艦娘の体液が調べられるとか、ホント運が良かったですよ！　イロハ級の体液は調べられても、姫級の体液なんてレアとかそういうレベルじゃないですからね！　むしろ私が今調べてるのが初めての事例なのでは!?」
テンションが高い。押しがやたらと強い。自分の研究成果を伝えたくてウズウズしている。ここまで来ると、待てと言っても待たずに話し始める。
「古鷹の体液、艦娘とほぼ同じだったんです。元々艦娘と深海棲艦って表裏一体なんじゃって研究されていましたから、それが実証出来たような感じです！　でもほんの少し違う部分があって。とはいえ、これは元々艦娘だったからなのかどうかは何とも言えないんですけど、でも明確に違う部分、というか構成の変化ではなく量の変化が」
「明石、少し落ち着きなさい。ちゃんと聞くし、レポートも書いてくれていると思うから、そんなに捲し立てられても困る」
提督が止めたことで明石は一度止まる。だが、ウズウズが止まらないらしく、早く知ってほしいし早く研究を続けたいという気持ちがありありと伝わってきた。
大淀が頭を抱えているのもそれが原因だろう。一度始まるとなかなか止まらないのが明石の困ったところ。
「明石、まず結論はあるかい」
「そうですね、そこから行きましょう。まず言えることは、センサーは作れます！」

胸を張って自信満々に言い放つ。この短時間でも、明確にその辺りを調査しているのだから、明石はマッドとはいえ優秀な科学者の一面を持っている。
明石が言うには、元々人間と艦娘を判別するような装置が存在しているらしい。
それは艤装に組み込まれているシステムであり、自分の意思で出し入れ出来る艤装とはいえ、整備のために身体から離すことが出来る。それを誤って人間が装備してしまうなんてことがあった場合、とんでもない事故が起きてしまう。実際それで死者が出ている事例もあるので、種族の判別はどうしても必要になっていた。そして、それは実現している。
しかし、艦娘と深海棲艦の判別というのは今までやる必要が無かったために、そんなシステムは組み込まれていない。調査すらされていない。見かけた深海棲艦は殲滅するだけだったのだから。
明石が調査したところ、艦娘と深海棲艦の体液には明確な違いがあり、さらに人間とも確実に違うことはわかった。そして、それを電探やソナーに組み込むことも、理論上不可能ではないことも。特殊な電波を発生させれば、泥にも対応出来ると確信している。その解析も既に始めているようだ。
「そこでですね提督、作るなら徹底した方がいいと思うんですよ」
「徹底？」
「泥を処理するのも大変でしょう。魚雷は避けるし、爆雷も小規模だったら消滅するほどの衝撃にはならないかもしれない。だからといって大火力が出る爆雷なんて艦娘が使ったら、その爆発に巻き込まれて大怪我、最悪沈みます。なので、泥だけを確実に消す装置です」
そんなものが出来れば苦労しないのだが、と言いかけたが、明石の意見を聞いておくことにする。
「泥は流動体です。なら、振動を与えれば霧散しますよね。つまり、海中に強い電波……と同時に強烈な振動も送り込みます。艦娘には通用しないですが、深海棲艦には通用するというものに出来れば、潜水艦も込みで一網打尽ですよ！」

夢物語のような兵装。少なくともそれを作るためには時間も予算も犠牲もかかりそうな実験。
「ちなみに、それを受けた場合、敵潜水艦はどうなる」
「血を撒き散らしながら悶え苦しんで死にます。簡単には死ねなそうですね。出力を上げたら内部から木っ端微塵、爆発四散まであるかも。爆雷を使うことなくそれが出来るとなれば、最高に便利な兵装になりますよ。駆逐艦とかだけでなく、戦艦や空母まで装備出来る超万能対潜兵装！」
目をキラキラさせながらとんでもないことを口走る。ここの明石は少し発言が過激。こういうところもあるから、大淀が疲れた顔で頭を抱えていたのである。
さすがにそんな高出力兵器の開発には容易にＧＯを出すことが出来なかった。実験の最中に誤作動を起こして、海中どころか海上にまで効果が及んでしまった場合、酷いではすまない大惨事となる。
明石がいくら優秀だからといっても、最初から全て成功するものではないことくらい、今までの鎮守府運営で痛いほどわかっているのだ。兵装の改修でも稀に失敗するくらいなのだから、完全新規兵装なんて作ろうものなら、まず１回は失敗する。
本人は失敗は成功の母だとケラケラ笑っているが、生死に関わる失敗は許容出来ない。
「僕からも提案させてくれ。流石に攻撃力が高すぎる兵装はリスクが大きすぎる。だから、泥から身を守る兵装というのは出来ないか。まとわりついた瞬間に霧散するような……そうだな、艦娘そのものをコーティングするようなものなんてどうだろう」
ここで新たな兵装案。もう少し控えめに、だが艦娘達を１００％守れるという兵装に出来ないかと提案した。
明石は少し考えた後、あっと何かに気付いたように手を叩く。
「妖精さん！　妖精さんに組み込むというのはどうでしょう！」
「出来るのかい？」
「出来ます！　兵装妖精さんには妖精さんそのものに能力があるものもありますからね。ほら、見張員とか！」

熟練見張員と呼ばれる兵装は、妖精さんそのものが見張員となって艦娘には見えないところまで観察。その意思を伝えることによって、艦娘そのもののスペックを1段階アップするという性能を持っている。ここ最近では、水雷戦隊専用の見張員なんてものも現れ、軽巡洋艦以下の小型艦のスペックを2段階ほどアップする。

それと同じではないのだが、妖精さんそのものに泥に対しての対策を組み込み、艦娘1人1人に装備してもらうことによって対策する。消滅させられないとしても、泥の存在をいち早く察知して、そこに消滅させられるほどの衝撃を与えられれば完璧。

「捗ってきたぁ！　提督の兵装案、採用です！　妖精さんに仕込めるように開発してみます！」

「ああ、頼んだ。補強増設に装備出来るようになっていれば尚更いい」

「ですよね！　見張員達と同じように運用出来るように、徹底的に改修しますとも！」

方向性が決まってしまえば、明石の手は早かった。今日中に作り上げて、明日から運用出来るように人数分準備すると言い残し、工廠の奥へと消えていく。その足取りはいつになく軽やかで、テンションも最高潮だった。

「……大淀」

「わかっています。明石のこと、しっかり監視しておきますから」

「すまないね。いつも妙な重荷を背負わせるようで」

最初期から共に鎮守府で活動するようになったよしみから、大淀は明石のことを他の者以上に気にかけている節はあった。明石がアレなこともあり、単純に心配しつつ、また別のところには淡い想いも持ち合わせて、なんだかんだで長い付き合いとなっている。

「構いませんよ。私も明石とは長いですから。むしろ私が目を光らせておかないと、何をしでかすかわかりませんからね。いわば制御役です」

「買って出てくれるのはありがたいよ。僕にも彼女を制御することは難しいからね……」

「その、苦労をかけます」

大淀も苦笑しながら工廠の奥へと向かっていった。

鎮守府の泥対策は着々と進んでいく。これが完成してしまえば、緊張感のある施設との往復は払拭され、決戦の最中に泥をばら撒かれても問題が無くなるだろう。

この装備は、勝利のためには絶対に必要なモノ。これからの戦いの行く末は、明石の手に委ねられたとも言える。

対策は常に

翌日。相変わらず平和な時間を送ることが出来ている施設。普段と同じ生活をすることで束の間の平和を満喫し、この時間の尊さを早く取り戻したいと思いつつも楽しく生きる。

鎮守府からの帰投報告がされたことで心配事は1つなくなったが、まだまだ施設の脅威は取り除かれていない。今のところはまだ憶測の域ではあるが、施設そのものに敵対者を寄せ付けない結界のようなものが張られている可能性があるものの、それに対して絶対的な自信は持てない。

そのため、今回の件の黒幕が斃されるまで、もしくは脅威として取り除かれるまでは、施設近海の哨戒は続ける方針ではあった。それ自体が施設の場所を悟られる可能性すらあるので動かない方がいいかもしれないが、だからといって何もしなすぎると何かの弾みで知られて何も出来ないなんてこともあり得る。

「やれるのならやっておいた方がいいとは思うのだけど、本当にやるべきかは何とも言えなくなったのよね……」

戦艦棲姫が呟く。今は外に出ようとしている段階で留まっている状態。古鷹が熟睡したことで介護から離れた後に話を聞き、今更ながら本当に哨戒をするべきか若干迷っていた。

方針は方針なのだが、哨戒範囲をさらに拡げるとか、むしろ狭めて結界から外に出ないようにするとか、いろいろと考えなくてはいけないことがあるかも知れない。

「春雨、貴女はどう思う？」

ここで、今回の哨戒メンバーである春雨にどうするべきかを聞いた。直感的に、この哨戒はやるべきなのか否かを判断してもらう。

「私としては……そうですね、どちらかといえば、やった方がいいかなって思います」

「理由を聞いても？」

「周りに泥が配置されたりしていたら厄介ですし。私達は守られますけど、鎮守府からこちらに来られなくなるのは困りますから。それ

に、見つけたらすぐ排除としておけば、一応はこちらの居場所が割れることは無いですよね。あと……結局は憶測ですから、慢心していて見つけられたら終わりですし」
結構安直だったりするのだが、実際泥を怖がって何もしないでいたら、最終的には正真正銘の孤島になってしまう。平和は守られるだろうが、何もしないは流石によろしくない可能性が高い。
それに、今までが良かっただけで、あちらも日々進化している。敵が増えれば手段も増える。むしろ、この施設のことを知っている者を優先して泥の侵蝕を行なうだろう。そう考えると、鎮守府の者達が最優先で狙われるのは考えるまでも無い。
あちらもその対策を考えているとはいえ、未然に防げればいうことは無い。近付けないにしろ、近場に現れたら困るのは間違い無いので、それをどうにかするのが施設の者の役目だと、春雨は考えた。
「流石姉さんです。なんて慎重で丁寧な意見。海風、感服しました。鎮守府のみんなのことを最優先に考える慈悲深さも素晴らしいですね。それに、やはり見つけて殲滅というのも必要であると改めて確信出来ました。姉さんが言うのですから間違いないのでしょう。ええ、きっとそうです。私は一生姉さんについていく所存ですので、その考えに賛同します。さぁ、哨戒に行きましょう。泥があるようなら私が姉さんに代わって全て消し飛ばします」
相変わらずの海風であるが、こう言いながらも自分でも考えていることはあり、それは自分から見つけて殲滅するということ。泥をその場に漂わせておくのはやはり気分がいいことではなく、自分の手でそれを消し飛ばすことが出来るのなら、やっておきたい。
春雨至上主義ではあるが、その泥のせいで山風達に何かあったらそれはそれで嫌だという気持ちは勿論残っている。ならば、今自分がやれることで鎮守府を守りたいと思うのも当然のことだ。
「もし、万が一泥を発見した場合、口に飛び込んでくるらしいわ。それを呑み込んだら終わり」
戦艦棲姫が古鷹から聞いた情報を伝える。体内に入り込んで侵蝕してくるため、優先的に口に狙いを定めてくるらしい。

むしろ、口だけでなく何処からでもいいから体内に入り込もうとしてくるだろう。それこそ毛穴ですら危ない。
「だから、泥の気配を感じたら、自分の身体を全て塞ぐくらいの気持ちで服を作り替えた方がいいわ。こんな感じに」
戦艦棲姫が小さく手を振るうと、今までのネグリジェのようなワンピース姿から一変、ウェットスーツのように薄い皮膜のような装甲が身を包み、頭も隙間なく包み込むようなマスクが出来上がった。
見た目のことなんて考えていられない。自分の身を守ることが最優先。穴という穴を塞ぎ切り、絶対に侵入出来ないようにする。艦娘には出来ない深海棲艦ならではの対処法。豊満な肉体美がこれでもかというほどに強調されているためか、少々艤装の方が主人の姿にソワソワしているようだが、本人は素知らぬ顔である。
「なるほど、なら私も練習しておきます。こんな感じですか」
春雨も戦艦棲姫を見習って同じように全身を包み込む。戦艦棲姫と同じように皮膜のようにピッタリと身体に吸い付いて穴という穴を隠している。
わざわざそうしなくてもいいのに、元々着ている制服を消して着ているものだから、海風が何処となくワクワクウズウズしているように見える。
「あ、あのー、姉さんのその美しい身体のラインが全て見えるのは海風としてはとても眼福すぎるのですが、別に上に服を着てもいいのでは？　戦艦様もそうですが」
「私としては服の中に潜り込まれた状態になるのが困るから全部脱いだだけよ？　これなら何処にまとわりつかれても、誰かがそれを確認出来るでしょ。服を着たら見えないところに潜伏されるかもしれないもの」
「そ、それはそうですけども……」
マスク越しのくぐもった声による反論に、海風もそうかもしれないと押されかけている。それに、春雨のその姿に完全に魅了されているため、むしろ隠すのが惜しいと邪(よこしま)な感情もチラホラ。
「まあこの姿になるのは泥を見つけた時だけよ。何も無かったらこん

なことをしなくてもいいんだから、なりふり構ってはいられないわよ」
それだけ言って、またいつもの衣装へと戻る。それに倣って春雨も元に。海風がほんの少しだけ残念そうな顔をしたが、春雨は見ていないフリをしておいた。
「ヨナも気をつけなさいよ」
海中に向けて声をかけると、ザバッと音を立てて伊４７が浮上してきた。事前に戦艦棲姫から説明を受けていたのか、いつものスクール水着姿ではなく、それこそ海の上で試しに着ているウェットスーツ姿だった。
実際コレは、海外の艦娘が使用しているタイプのモノに酷似していたりする。伊４７自身が知っている、艦娘時代の時の仲間のそれを真似たとのこと。オシャレにスカート部分まで用意しているあたり、それをかなり意識している。
「こんな感じでいいヨナ」
「ええ、問題ないわ」
伊４７は海上よりも泥の被害を受ける可能性が高いため、常時この状態で。海中ではマスクなどもしっかり身につけているそうだ。
誰もがこんなことで絶対に防げるとは思っていない。過信は禁物。だが、やらないよりはマシの対策なので、しっかりと組み込んでいく。
「それじゃあ、行きましょう。今日は鎮守府側とは真反対の方だけれど」
「了解です。鎮守府にはあまり害はないかも知れませんけど、何があるかはわかりませんもんね」
ここまでやって、ようやく哨戒開始。施設から離れていく春雨達を、ミシェルが応援するように見届けていた。

もう施設は水平線の向こうに消えて、そこからさらにしばらく進んだ辺り。距離的には、全く別の方向だが、海風のトラウマの場所に近いくらい進んだ場所。

「何も無いですね」
「いいことじゃない。緊張感はあるけど、やってるのは散歩みたいなものよ」
　定期的に海に出て適当に駆け回るのも、それなりに気晴らしにはなるものだと戦艦棲姫は語る。春雨と海風も一度は哨戒に出ているが、確かにと納得出来るところはあった。
　何度も感じていることではあるが、やはり艦娘も深海棲艦も海のモノ。陸より海の方がしっくり来ることが多い。特に深海棲艦は、艦娘よりも海の要素が濃いようにも思えるため、一層海の上の方が落ち着いたりする。
「もう少し、心穏やかに海を散歩出来ればいいんですけどね」
「ホントよ。旅に出るのも抵抗があるような状態なんて、さっさと終わらせたいわよ」
　戦艦棲姫も忌々しげに呟いた。本来やりたいことがやれないようになっていることはやはり気分がいいモノではなく、ストレスも溜まる。戦艦棲姫の場合は、好き勝手に旅に出て世界を見て回ることがそれだ。それが出来ないことで、鬱憤が溜まりかけている。
　それを少しでも発散しようと哨戒を買って出ているわけだが、同じところばかりを見ているので嫌でも飽きが出てくる。
「最愛の春雨姉さんと一緒にいるとはいえ、もしかしたら何かあるかもしれない場所というのは……やっぱり少し抵抗がありますね」
「今ここにもいないとは限らないからね……潜水艦もいるって話だし、実は海の底から見られてるなんてことも……ヨナちゃんが見てくれてるから大丈夫だと思うけどさ」
「私も海中にいければ、春雨姉さんの上から下まで全て守ることが出来るんですが。前後左右上下、おはようからおやすみまで、春雨姉さんの安全を守り続けるのが海風の使命ですからね」
　深海棲艦化したとはいえ、ホームグラウンドは海の上。遊びのように泳ぐことは出来ても、潜水艦のようにガッツリ潜るようなことは出来ない。
　ソナーの感度も艦娘の時と比べれば数倍に上がっているとはいえ、

海中はどうしても警戒が漏れる場所だ。そこは伊４７に任せるしか無い。
「おかしなものも見えないわね。残骸とかも無いから、何かこの辺りで起きてるってことは無いでしょう。私達が毎日見て回ってるからかしら」
　海面に手を付け、海の記憶を読み取る戦艦棲姫。だが、先日読んだ時と情報は何も変わっていない。この辺りには敵も来ていないのかもしれない。
「それもあるかもしれませんね。監視されてる場所にわざわざ来て、危険なことを起こそうとする程、あちらも愚かではないと」
「そうであってほしいけど、ヨナ、そっちはどうかしら」
　海面をトントンと叩いて海中の伊４７を呼ぶ。そうすればすぐに浮上してきて、海上組が確認出来ない海底までの情報を教えてくれる。
「うーん、何も無いヨナ～。こっちの方はあんまり来ないのかも？」
　海底も同様のようだ。以前見つけた爆雷の跡のようなモノも無ければ、不自然なところもない。
　もしかしたら海底に何か埋めているなんてこともあるかもしれないと注意深く確認したものの、やはりなにも無かった。
「どちらかと言えば、鎮守府に近い方に拠点を構えているのかもしれないわね。そうなると私がやられた島とか、海風の例の場所は大分遠い場所になるんだけれど」
「かもしれませんね……施設から鎮守府に戻るときに襲撃されることもあったくらいですし」
　伊４７が泥に襲われたのもそちらだ。あれは白露がそこに泥を吐き出したからそこにあっただけだが、そこに襲撃に来れたということは、普段からそれなりに近場にいるからと考えることも出来る。
「帰投中に襲われたの、２回ありますね。１回目は槍持ち（叢雲さん）で、２回目は古鷹さんと白露姉さんです」
　海風も１回目の槍持ちとの戦いにはしっかり巻き込まれている。２回目は深海棲艦化の後であるため、春雨達と共に救援に行った時。

「そっか、叢雲ちゃんも同じところで見つけたんだっけ」
「はい。ヨナさんに救われたときですね」
浮上していた伊４７がそれほどでもとニヨニヨしながら頭を掻いていた。だが、あの時に伊４７がいなかったら、最悪全滅していただろう。海風としては、今のこの生活すらも失われていたことになるため、伊４７には心底感謝している。
「……襲撃、同じようにあったのよね。あいつらも、叢雲も」
そこで戦艦棲姫が何かに気付きそうになっていた。
「海風、あいつらが来た時、その前兆みたいなものってあったかしら」
「ありましたね。鎮守府との通信が妨害されました。話している途中で電波が乱れて、そのままダメになるってことが。あれ、深海棲艦が近付いてきた時の特有の現象かと思ってたんですが」
「そんなわけ無いでしょ。だったら施設で鎮守府との通信なんて出来ないわ。だってあそこ、姉姫の艤装が常に展開されてるのよ？　それに、私だってこの子を展開させた状態で通信していた時もあるわ」
深海棲艦の艤装が通信を妨害する何かを発しているとしたら、施設では絶対に通信なんて出来ない。中間棲姫の艤装は常時展開中。戦艦棲姫も割と頻繁に施設内で艤装を展開しているため、何かあれば通信なんて出来やしない。
「戻って試してみる必要はあるかもしれないけれど、例えば白露に艤装を展開してもらって、通信妨害が起きたなら、まぁあちらの特有のモノなのかもしれない。だとしても、これは不可解でしょ。なんで叢雲の時も通信妨害が起きたのか」
それが一部の深海棲艦が持ち合わせる性質だというのならわからなくはないが、通信妨害自体が泥の性質だった場合、叢雲でそれが起きた理由がわからなくなる。
「哨戒、引き揚げましょ。一回これは確かめてみる必要があるわ」
「ですね。直感的に私も何もわからないので……」
「姉さんがわからないとなると、相当まずい問題ですね……」

ここに来て、突然疑問の中心に置かれた叢雲。あの通信妨害が何由来で発生していたのか。

叢雲の謎

哨戒を早々に終え、施設に戻ってきた春雨達。その理由は、哨戒中に生まれた疑問を解決するため。

「姉姫、ちょっといいかしら」

哨戒部隊の筆頭である戦艦棲姫が中間棲姫に話しかける。今日は農作業をしていなかったため、私室で艤装の手入れをしていた中間棲姫は、少し切羽詰まったような声に小さく驚く。

「戦艦ちゃん、どうしたのぉ？」

「気になることがあるから、ちょっと来て。施設の全員集めてくれると助かる。特に叢雲は絶対」

出来ることなら古鷹にも来てもらいたいとまで言った。なんなら戦艦棲姫が艤装を使って運ぶまですると。

そこまで戦艦棲姫が言ってくることはまず無い。この施設に住まう間は、居候なのだからと意見を口にすること自体が少ない。それなのにここまで言うのだから、何かあるのだろうと察する。

「わかったわぁ。すぐに準備しましょうかぁ」

「ええ、助かるわ」

ミシェルはおそらく大丈夫であるため、施設内にいる者のみでひとまず確認する。これで叢雲に何かあった場合、施設内は大混乱になるかもしれない。だからこそ、なるべく全員で対処出来るようにしたい。

当然、何も起きない可能性だってある。むしろそうであってほしい。叢雲が引き起こした通信妨害は、古鷹や白露が引き起こした通信妨害とは別モノであることが一番の望みである。

そこからはすぐだった。施設内にいる者は全員ダイニングに集まり、古鷹も戦艦棲姫とコマンダン・テストのサポートによってその場に現れる。

一晩ゆっくりと熟睡出来たことと、短期間ではあるがコマンダン・

テストの献身的な介護のおかげで、身体の中もゆっくり治ってきており、ついに水を飲む程度では激痛が走ることも無くなっていた。まだまだ身体をまともに動かすことは出来ないが、戦艦棲姫の艤装であれば、痛みも大分抑えられた状態でここまで移動出来ている。
「それで、アタシ達を集めて何をしたいわけ？」
　急に集まることになったので、何事かと飛行場姫が声を上げる。こういう集め方は、今のような緊急事態で無いときには一度たりとも行なわれていない。今回が初めてのことだ。
「その前にもう1つ。実験のためには提督の力も必要なの。今って連絡取れるかしら」
「いいわよぉ。これ、提督くんにも必要なことになるかもしれないのよねぇ？」
「ええ、確実に。最悪な方向にいかないことは祈ってるけれど」
　理由はまだ話さず、今度はタブレットによって鎮守府と通信。時間はまだ昼食前くらいであるため、連絡を取ったらすぐにあちらも出てくれた。これで準備は完了。
『今回はどうしたんだい？』
「戦艦が確かめたいことがあるらしくて、付き合ってもらえる？　時間はそんなに取らせないはずだから」
『ああ、今なら問題は無いだろう。何を試したいのかはわからないが、こちらで出来ることならやろう』
「このままいてくれればいいわ。今からやりたいのは、通信妨害の実験だから」
　そして実験開始。古鷹にやらせるのは酷であるため、白露に艤装を展開させる。
「あたしが艤装を出せばいいの？」
「ええ。貴女には申し訳ないけど、何の細工もせず、あちら側にいた時のように展開してくれるかしら。もし意図的に通信妨害が出来るのなら、それも再現してほしい」
「通信妨害かぁ……あんまり意識したことなかったなぁっと」
　戦艦棲姫に言われるがまま、白露が艤装を展開。白露型の艤装をシ

ンプルに深海棲艦化させたような、少しおどろおどろしい形状の艤装がその場に現れる。
　これと戦った春雨達は複雑な表情をしたものの、この艤装もこれからは１００％仲間として扱われるため、認識を改めた。
「こちらの声、ちゃんと聞こえてるかしら」
『今のところは何も問題は無いね。以前に調査隊との通信が妨害された時のようなノイズは、僅かにも確認は出来ない』
　今の白露の艤装からはそういったことが出来ないようだ。念のため、白露自身に通信妨害を意識してもらっても、結果は変わらず。
「あの……それはおそらく……もう起きないと思います……」
　ここで古鷹が口を出す。通信妨害にも覚えがある様子。
「私達が……海上で艦娘を孤立させるために使っていたモノ……ですよね……。アレは……私も白露さんも……悪意の塊に侵蝕されていたから扱えた力……だと思います。殆ど無意識でしたが……」
「自覚があるのね」
「はい……面倒が無いように……助けを呼ばせないための小技みたいなもの……なので」
　話しながらも少し辛そうにする古鷹に、コマンダン・テストが水を飲ませた。それで多少は落ち着くので、療養がうまく行っていることがわかる。提督としても、古鷹の最も酷い時を知っている分、それが確認出来たのは喜ばしい限り。
「私も……白露さんも……その全てを吐き出しているので……多分使えません。ちなみに……意識しなくても勝手に妨害します……。妨害するのは無線だけ……です」
『なるほど、だから調査隊との通信は妨害されたんだね。それ以外に害が無いのは、何というか器用なモノだ』
「はい……空母の方々と妖精さんの通信は……こういった端末とは別の次元の話なので妨害出来ず……言ってしまえば電話だけ止めるみたいなものです……。鎮守府内での通信は……無線ではなく有線であることが多いと聞きますから、防ぐことは出来ませんが……」
　あくまでも電話だけを止める。無線だけが機能しなくなるような

モノのようだ。用途がかなり狭いのも、見つけ出した艦娘が救援を呼べなくして、一方的に嬲り殺すためのようである。まさに悪意の塊の力。悪意しか感じられない意地の悪さ。

「じゃあここからが本題。叢雲、艤装を出してくれる？」

「は？　私？」

「ええ、お願い」

戦艦棲姫の真剣な表情に小さく舌打ちをし、言われた通りに艤装を展開した。白露のモノよりは大分小さく落ち着いた、かなり簡素なモノ。デザイン性はやはり深海棲艦らしく生体パーツが所々に見受けられる。

いつもの槍まで生成されたその瞬間、

『んん？　ノイズが……り始め……』

途端に提督との通信に乱れが出始めた。白露が艤装を展開しているときには起きなかったそれは、まさに以前の襲撃の時と同じ。これをこのままにしていたら、いずれ提督との通信が勝手に切れる。

驚いた叢雲が、すぐに艤装を消した。すると、すぐさま通信妨害が止まる。何事も無かったように回復し、ノイズは一切無くなった。通信が切れたわけでは無いので、提督も何故これが起きたのかは疑問に思っている。

「……どういうことよ」

一番納得がいかないのは叢雲だ。自分に何故こんなことが出来るかがさっぱりわからない。しかも、艤装を出した時限定で発生する通信妨害なんて、余計に意味がわからなかった。これではまるで、自分があちら側であると言わんばかりではないか。

叢雲には皆目見当がつかなかった。あちら側の存在、古鷹も白露も、自分を殺した存在として認識している。仲間なわけが無い。泥を発生させている黒幕には、怒りと憎しみ以外に感じるモノなんて無かった。

「考え得る理由は２つ。１つ目、叢雲自身にまるで違う力が備わっている。ほら、貴女は感知の力があるでしょう。それが常に出続けているせいで、それがあちら側の通信妨害みたいに働いてしまっている。

感知の力が止められないんだから、一種の垂れ流しじゃない」
強力な電探によって常に電波を出しているようなものと考えれば、叢雲がそこにいるだけで通信妨害が発生するのは仕方ないと考えられる。
しかし、叢雲のその力は、艤装を出していようがいまいが常時発動しているものだ。艤装が出ていない時にもそうなって然るべきだとは思うが、それがないため、可能性は薄い。艤装を展開することで出力が上がると言われれば、そうかもしれないのだが。
「2つ目、貴女の知らないうちに泥に侵蝕されている。ただし、その記憶が無いだけ。そこの2人もそうだけど、ここにいる子達と違って、どうやって同胞(はらから)になったか、覚えていないんでしょう？　そこに泥が絡んでいる可能性」
叢雲は、自分が死んだ、殺されたという記憶は嫌と言うほど存在感を持ち続けているのだが、黒い繭になった時の記憶はどうなんだと言われたら、ハッキリと答えることが出来なかった。
春雨や海風のように、手の甲から黒い泥が溢れ出して自分を包み込んでいくその瞬間を見ていたわけでは無い。殺されたのだという消えない記憶と、槍持ちとして活動していた知性のない獣だった時の記憶。その間の記憶が全く思い出せない。
「……私は、私は古鷹と白露に殺されたわ。艦娘の盾にされて、そいつらが逃げるための囮にされて、殺された。殺されたのよ。でも……どうやってこの身体になったのかが、全然思い出せない。怒りが溢れて、こうなったんだっていう漠然としたものしか、私にはない……」
鮮明な記憶を持ち合わせていない。そうなると、その記憶すら何かしらの理由で勝手に補完されたものの可能性すら出てくる。泥にそういう性質まであるとしたら、あまりにも悪意が強すぎる。
「じゃあ仮定として、叢雲に泥が入ってしまっているとしましょ。でも、叢雲自身にその自覚が無いのよね。古鷹、白露、貴女達は自覚はあったの？」
戦艦棲姫の問いに、2人とも首を縦に振った。自分には黒幕から与えられた悪意の塊が入っているのだという自覚はあった。それを

知って、それでも黒幕に従うくらいに歪められていた。自分が洗脳されていると自覚しているタイプの洗脳。
「だったら、ここから考えられるのはまた2つ。1つは、何か理由があって、泥が入っているのに叢雲を侵蝕せずに艤装に留まっている。これは黒幕の意思によってそうされているって考えるのがいいかもしれないわね。最低最悪の状態で叢雲が覚醒するように仕込まれているとか」
　ある意味地雷。何がトリガーかわからないが、何かがきっかけに――例えば、叢雲がそれを自覚した瞬間に爆発し、叢雲を侵略者へと変貌させるかもしれない。それだった場合は今爆発するだろうが。
　もしくは、何度か艤装を展開するうちに増幅されるというのも考えられる。叢雲自身この施設で静かに暮らしているためまだトリガーが引かれていないだけで、怒りに任せて戦い続けたらそのうち爆発するなんてことがあるかもしれない。
「もう1つは叢雲自身の体質によって、侵蝕出来ない」
「どういうことよ」
「例えば……怒りが溢れた同胞（はらから）には泥は効かないとか。制御出来ないから、泥がそこにあっても通用しないとかね。ある意味泥に対して無敵みたいなもの」
　そちらだったら黒幕を斃すための最高の一手になるだろう。いくら泥を撒き散らしても、叢雲がそれを全て引き受けてもよくなる。とはいえ、飽和して結局洗脳されるという可能性もあるので、慢心は出来ないが。
「逆に聞くけど、貴女は今演技しているわけじゃあ無いのよね？」
「当たり前でしょうが！　私は今でもその黒幕のことが気に入らないわよ！　誰が従ってやるか！」
「だったら、今の叢雲はいつ爆発してもおかしくない状況かもしれない。後者であることを祈るわ」
　どういう意図でそんなことをしているかはわからない。体質的に効きづらいとかはあるかもしれないが、あえてそのままにしている理由はわからない。

「もしかして……最初理性が無かったから侵蝕が出来なかった……とか」
薄雲が呟く。今までの情報をまとめていくと、叢雲にしか無い状況といえばそこだ。
深海棲艦化したとき、獣のように理性も知性もない、ただ本能のままに艦娘を襲う憤怒の化身となっていた。今でこそ薄雲を筆頭とした献身的な介護によって自分を取り戻しているが、当初は自分の力でご飯を食べることも出来なかったくらいである。
悪意の塊は知性のあるものを侵蝕して手駒にすると考えれば、当初の叢雲は侵蝕されなかったと考えてもおかしくはない。
「そもそも、叢雲はどうやってあの泥を手に入れたのかもわからないのよ。その辺りは古鷹や白露が知ってるかなって思ったんだけれど」
「いやぁ、あたしもちょっとわかんないなぁ。あの時、殺した艦娘っていい素材になるんだったら持ち帰るっていうのがデフォだったんだけど、泥ってそこで入れられるはずなんだよね。でも叢雲って持ち帰った覚えないんだよ」
「悪意の塊は……魂を混ぜ合わせる時に注がれる……はずです……。私も記憶が物凄くあやふやで……そうだったはずとしか言えないですが……」
記憶はあやふやではあるものの、白露はその辺りは覚えていたらしい。叢雲は殺した後に放置した。これは確実のようだ。誰を何処へどうやって持ち帰ったかはまるで思い出せないようだが、持ち帰って素材に使ったという概念的なものは覚えているらしい。
古鷹も全く同じ。やはり重要なところは吐き出した泥に全て持っていかれてしまったようだ。
「……私はどうしろっていうのよ！　じゃあ例えば艤装をぶっ壊して中を捌いてみる？　泥が入ってる可能性高いんでしょ!?」
「やりたいのは山々だけど、それで泥が飛び出して誰かを侵蝕するとなると危険よね。姉姫がやられたら特にまずいわ」
「じゃあどうすればいいのよ！」
テーブルに八つ当たりするように拳を打ち付ける。その大きな音

で何人かがビクッと震えたが、叢雲はお構いなし。湧き上がる怒りに身を任せ、それこそここに来た当初の如く憤怒を表に出し続ける。

怒鳴る叢雲に対して、誰も何も言えなかった。姉妹姫も、タブレット越しに施設の様子を見ている提督も、簡単に答えを出すことか出来なかった。

謎はまだ解決していないが、叢雲に何かがあることは確定した。だが、それがこれからどうなってしまうのかは、まだまだ憶測でしか無い。

いい方向に進むのならいいのだが、悪い方向に進んでしまった場合、事態は収拾がつかなくなるかもしれない。

取り込まれた悪意

叢雲が通信妨害を引き起こすことが実証された後、空気は非常にギスギスしたものになってしまった。自分が中心になってそれを引き起こしてしまっていると察した叢雲は、それに耐え切れずもう一度テーブルを強く叩いた後、ダイニングから出て行く。

「姉さん！」

それを薄雲が即座に追った。ダイニングから出て行く際に一礼していく辺り、その礼儀正しさが表れていた。

『叢雲に何かがあることはよくわかった。確かに、古鷹や白露が襲撃した際と同じ反応を示したよ。ノイズも全く同じだ』

タブレットの向こう側、提督もそこは正直に話した。隠していても仕方ないし、叢雲がこの場にいないのだから情報共有のためにも。

敵として現れたモノと同じ反応ということは、それは敵の力を持っているということになるわけで、警戒するに越したことはない。

だが、提督としては叢雲のことを敵としては見ていない。今までの叢雲の言動から、まず確実にその怒りが演技ではないことはわかっているからだ。何か事故のようなものがあったせいで、何故か泥と同じことが出来てしまっているに過ぎない。

『戦艦、僕としては君の思うところの内の1つ、最後に話したものが可能性が高いと感じている』

「侵蝕出来ないってヤツかしら」

『ああ。叢雲には何故だか知らないが泥に対する耐性がついているんじゃないかい？』

そうあってほしいというのは誰もが考えることだ。溢れた感情が怒りで、口が悪く態度もよろしくない叢雲ではあるが、今の施設の者にとって叢雲は心から信頼出来る仲間だ。農作業を共に行なった松竹姉妹は特に、叢雲のことは農業仲間としても強く信頼している。

だが、泥に対する耐性と言われてもピンと来ない。侵蝕を阻む何かが叢雲の中にあるとして、それが何かが全く見当がつかないのが現状。

『あまりこういうことは聞きたくないんだが……古鷹、白露、どちらが……その、叢雲にトドメを刺したか、覚えているかな』
少し苦い顔をしながら、聞きづらいことを真っ直ぐに聞く。それが叢雲の進退に関わるのだと伝わってくる。
「多分、あたし。少し曖昧なところはあるけど、古鷹さんと一緒に行動してるときは、メインで動いてるのはあたしだったんだ。だから、古鷹さんよりもやらかしてる数は多い。叢雲も、多分あたしがやっちゃってる」
「……私も……そう思います。私の手でやってしまっているところもありますが……叢雲ちゃんは盾にされたんですよね……だったら……白露さんがメイン……かと」
2人ともやはりその辺りの記憶は曖昧。しかし、鎮守府の面々も受けているように、白露が率先して突っ込み、それを後ろから叩くというのが古鷹のやり方だった。スタミナ不足を補うために、白露を基本的に動かしている。
そうなると、まず間違いなく白露が叢雲を殺している。それを指揮していたのが古鷹だ。そのため、2人に対して強い憎しみを持っていた。
『その時の白露は、まだ深海棲艦と化したばかりだったはずだね』
「そうだねぇ……初陣ってわけじゃないけど、慣らしのところもあったよ。それがどうしたの？」
『いや、白露の中にあった泥がどうやって入れられたかはわからないが、白露の攻撃……砲撃や魚雷に、その泥が溢れ出ていたりする可能性があったりはしないか』
艤装や兵装の展開は全て思った通りに発生するのが基本。艤装どころか、今着ている服までもが、その想像力によって作り出されている。『こうあれ』と思ったものが、適した形状で外に出てくるということだ。
そこに、泥によって歪められた思考が混じっているのだから、無意識のうちに泥そのものが混じるということが起きないかと、提督は考えた。

「……無くは……無いです。私はその時はもう、充分過ぎるほど定着していたので……そういうことは無かったかもしれませんが……白露さんは……まだ混じって間もない頃ですから……」
痛みを堪えながら、古鷹は提督のその憶測に賛同する。叢雲の中に泥が入るタイミングなんて、その時くらいしか考えられなかった。
古鷹も白露も、叢雲を沈めた時に放置したと証言している。放置したということは、そこに対して何かやったということはない。今問題視している謎の潜水艦のように、泥を設置して侵蝕を促すようなこともしていないということに繋がる。
なのに、叢雲は泥を持っているような通信妨害を引き起こすことが出来ていた。ならば、白露の攻撃を受けた時に、その泥を身に宿してしまったのではないか。そんな状態で怒りが溢れて黒い繭と化したのだから、泥の性質をそのまま取り込んでしまってもおかしくはない。
「だったら、私にも泥が混じっているかも……」
春雨が呟いた。白露と初めて海上で再会し、激しい戦闘となった時、白露からの砲撃が耳を掠めている。また、白露の血を少し浴びることにもなった。叢雲と同じだとすれば、その時に春雨の中にも泥の一部が入り込んでしまっていても、何の疑問もわかない。
だが、春雨は当然正気だ。侵蝕を受けるようなことなんて無い。黒幕に対しては斃すべき対象だと考えるし、この施設の平和を維持したいという気持ちも嘘では無い。
『なら、春雨も艤装を展開してみてくれればいい。いや、その必要も無いんじゃないだろうか。今、君の脚は艤装で補完されているのだろう？』
「あ、あー、確かに。私の両脚は提督の言う通り艤装です。叢雲ちゃんと同じだとしたら、今この時点で通信妨害が起きていてもおかしくないですもんね」
『ああ、だから春雨は侵蝕されていないよ。その時には白露にも馴染んでいたと考えるのが妥当だ。僕の憶測では、本当に限られた期間……白露があちら側になってすぐに殺された叢雲だからこそ起きた

こと、と考える』
なるほど、と思い当たる節があるのか白露自身も納得した。やはり複数の艦娘を混ぜ合わせたような存在であるためか、深海棲艦化した直後はいろいろと安定しなかったらしい。
だからといって攻撃に泥が漏れ出すなんてことがあるかはわからないが、起きている可能性は否定出来なかった。どんなことでもあり得るのが深海棲艦である。まだそうなって間もないタイミングならば、思い掛けない事故が起きることもあるのかもしれない。
「泥の量が少な過ぎるから侵蝕まで行かず、でも泥は持ってるから通信妨害は発生すると。もしかして、叢雲の攻撃的な性格は少し泥が影響してるんじゃないの？」
戦艦棲姫が思ったことをそのまま口に出した。
実際それは怒りが溢れたという特性と叢雲の元々の性格が関わっているのだろうが、泥の影響が無いとも言い切れない。
全員が叢雲の今までのことを知っているために、何を言っても温かい目で見ているのだが、状況が状況なら間違いなく不和を生むような言動もあった。そういうところが泥による小さな影響なのかもと考える。
とはいえ、甘いものに舌鼓を打つような可愛いところもある叢雲だ。性格に対する泥の影響が激しいわけでも無く、要所要所で表に出てしまうというだけ。そしてそれすらも受け入れられているのだから、今の叢雲はそのままでも問題ない。
『だが、爆弾を抱えているという可能性も捨て切れない。性質を深海棲艦化する際に取り込んだだけならいいが、叢雲の中で泥が成長しているなんてことがあれば……』
「多分……それは無い……です」
すかさず古鷹が否定する。泥は体内で成長することはないと言い切れるらしい。
「悪意の塊は……顔も思い出せないですが……あのヒトの分体みたいなものです……本体には成長性があっても……侵蝕された私達の中で成長はしません……。馴染むことはあっても……増殖はしないで

す……。それ自体が変質していると言われたら……なんとも言えないですが……」
あくまでも泥の力で強くなっているわけではなく、深海棲艦化したことと、混ぜ合わされて複数の艦娘の特性を持っていることによって、類い稀なる力を得てしまっているに過ぎない。
泥が成長して支配力を強めるということもなく、入っていれば性格が歪み、黒幕の忠実なる部下となるのみ。そこにあるだけで白が黒になるのだから、成長性なんて全く必要がない。増殖も不要だ。
とはいえ、その性質自体が叢雲と合わさったことで変質していた場合はその限りでは無いのだが、それなら逆に叢雲がコントロール出来そうではある。
『叢雲は今まで通りだ。通信をしている時に艤装を出すことは控えてもらわなくてはいけないがね』
「そうねぇ。それだけで話が出来なくなるというのは厄介だけれど、それ以外に叢雲ちゃんのことをどうこう言うことはないわねぇ」
ここにいる者の意思は一致している。いくら叢雲に敵側の力が備わっているとしても、見捨てることはない。裏切ろうだなんて思っておらず、むしろ率先して斃しにいこうとしているくらいなのだから、信用が出来ないなんてことは一切無い。
その動向は多少なり気をつけなくてはいけないかもしれないが、それは別に今に始まったことではない。誰も彼もがトリガーを持っているのだから、気をつけるのは誰だって同じ。
「艤装展開の時にだけ通信妨害が起きるのはなんなのかしら。泥が混じってるのなら、いつでも起きていておかしくない気がするんだけれど」
飛行場姫がちょっとした疑問を口にする。それに対しては、古鷹も答えられるものが無かった。基本的に通信妨害をするときというのは、艦娘を襲撃する時のみ。その時にはほぼ確実に艤装を展開しているのだ。艤装無しの状態で艦娘の前に立ったことなど一度もない。
それこそ、攻撃的な状態に自分を置いた時に限って、そういう悪意を表に出したような特性が発揮されるのかもしれない。泥はあくま

で攻撃性の高い場所に沈着し、その効果を強めると考えれば無理もない。
『そこは、艤装を展開してもらってその中を見てみるしか無いだろうが、叢雲に危険が及ぶことは避けたいね。だから、なんの保証も出来ないがそういうものという認識でいることがいいだろう。あまり叢雲のことを責めるようなこともしたくない』
泥の確認をさせろとか、艤装をバラして確認するぞとか、叢雲にとっては怒りと苛立ちを助長することにしかならないだろう。
結局、叢雲にはそういう特性があり、現状維持をしておけば何も変わらないという認識でいいという結論に達した。

その頃、施設の外。怒りのままに飛び出した叢雲は、ギュッと拳を握りしめて屈辱を耐えていた。
自分に憎しみの対象である黒幕の泥が含まれている可能性が高いとなれば、そう考えるのも仕方ない。何処にどのようにあるのか見当がつかないのも気に入らなかった。
「なんだっていうのよ……私が何したっていうのよ」
ブラック鎮守府で生まれ、散々な人生を送ってきたところで新たな生を得たのに、それですらグチャグチャに壊されている。怒りは溢れるばかりだ。
「私は私だ。叢雲だ。あんなヤツらと同じじゃない。侵略なんて興味無いし、むしろ元凶をぶち殺したいっていうのに……！」
暴れ回りたい程に怒りが抑えられない。モノに八つ当たりするのはプライドが許さないが、それすらも振り払えそうな程に怒りがピークに達している。
まるで深海棲艦化してから初めて古鷹と白露を目にした時のようだった。恨み辛みが頭を焼き尽くすような感覚。
「姉さん……！」
そこに薄雲が追いついてきた。叢雲のことを心配して追ったが、その荒れように声がかけづらかった。

「なによ薄雲。私を責めに来たわけ？　私も実は敵なんじゃないかって疑って」
「違います！　私は姉さんのことをそんな風には思ってません！」
　叢雲の怒りを抑えるように抱き着き、落ち着かせるように背中を撫でる。今の叢雲には逆効果になりそうではあったが、そんなことは無視してとにかく思いを伝えるのに必死だった。
「姉さんがそんなことするわけ無いじゃないですか！　だったらとっくに施設で暴れ回ってます！　なのに、今の姉さんは施設のことを思って行動出来ていますから！」
「口だけなら何とでも言えるのよ。現に私が艤装を出しただけで通信妨害が起きてんのよ。古鷹や白露と同じだなんて、屈辱にも程がある わ」
「でも！　でも、本当に敵なら、それを悔やむようなことはしません！　この施設に不利益を齎して悦ぶでしょう！　そんなこと思いませんよね!?」
　そんなことは全く思っていない。この泥の持つモノと同じ力が備わっていることが嫌で嫌で仕方ないだけだ。悦びなんてカケラもない。辛くて、悔しくて、腹が立つのみ。
「だから、姉さんは敵なんかじゃないです。だから……だから……落ち着いてください」
「……落ち着いてるわよ。落ち着いている上で、気分が悪いの。自分が嫌になるわ。それに煮え滾るくらいに腹が立ち続けてんの」
　だが、薄雲を振り払うようなことはしない。薄雲が自分のことを思ってくれているのは痛いほどわかる。それを蔑ろにするような気持ちは、怒りの中でも何処にも無い。
　そういう意味で、叢雲は侵略者とは程遠い性質だ。ただ怒りが抑えられないだけ。仲間を思う力は持ち合わせている。たったそれだけだ。
「散歩して頭冷やすわ。アンタも付き合いなさい」
「……はい」
　怒りは冷めない。だが、薄雲と考えていけば、何かしら答えが見つ

かるかもしれない。
施設の者達が叢雲との付き合い方を変えないと決めている中、叢雲は叢雲で自分の考えを整理した。

叢雲の特性として、泥を取り込んでいるというのは変えようの無い事実になるだろう。だが、叢雲自身は何も変わらない。変わるはずがない。

その存在のおかげで

「悪かったわね。急に飛び出して」

出て行った叢雲が戻ってきたのは昼食時を少し過ぎた後。２人以外は昼食を終え、古鷹はコマンダン・テストと共に部屋に撤収していた。

薄雲と頭を冷やしてきたということで、苛立ちは消えていなかったものの、滾る怒りは鎮静化していた。島の周りを散歩して、どうにか気分を落ち着かせたらしい。

その散歩では怒りを表に出して、心の中に留めていた鬱憤を愚痴というカタチで思い切り吐き出したらしい。いつも押し留めていたような怒りも、その時ばかりは何も隠していなかった。薄雲にだけは見せてもいいかと思い、その行動に至ったそうだ。

「ごめんなさい叢雲。貴女を疑うようなことを言ってしまって」

真っ先に戦艦棲姫が謝罪した。そんな言葉を受けて、叢雲は目を丸くした。

実際に通信妨害が発生したのだから、その時の原因となっている叢雲に対して、何故そうなったのかの推理をぶつけてしまった。それを戦艦棲姫は少し早計だったかと後悔していた。

逆に叢雲は、頭を冷やした結果、誰だって自分のことを疑うと思っていた。怒りのあまりにそんな考えにすら至らなかったが、薄雲と話をするうちにその考えに落ち着けているのは、やはり叢雲の成長の証。

「別にいいわよ。私だったらまず間違いなく私と同じ立場のヤツを責め立ててるし、最悪心折るまで罵ってるわよ」

薄雲と散歩の間に話したのはそんな話。怒りを撒き散らした後、薄雲がそれを教えてくれたのだ。

戦艦棲姫はあくまでも、叢雲の潔白を証明するために問い質し、疑いの目を向けたとしても何事もないことを確認したかったのではなかろうかと。

叢雲がこういう立場になったから、先程のように屈辱だと部屋を飛

び出したが、もし立場が違う者――例えば同じように古鷹や白露に襲われて死にかけた春雨が通信妨害を引き起こしていたとしたら、考えるまでもなく罵倒していただろう。
　そうなってしまったら、今以上の不和を呼ぶ。特に春雨や松竹姉妹を相手にしたら、その依存相手が何をするかもわからない。今よりも空気はギスギスし、それこそ居場所が無くなっていたかもしれない。
「正直、私が何でこんな目に遭わないといけないんだって気持ちの方が大きいわ。イライラして仕方ないし、今すぐにでも元凶を叩き潰したいもの。でも、そんな力が今の私には足りないことも自覚してるの。出てったところで何の成果も得られずスゴスゴ帰ってくるのがオチよ」
　黒幕の居場所は未だに不明。痕跡すら残しておらず、本来その存在を知っているであろう古鷹から記憶が消えてしまっているのだから救えない。
　叩き潰したいからといって施設から出て行ったところで、叢雲1人の力で探し出せるほど甘くない。広い海を彷徨った挙句、何も出来ずに力尽きるか、艦娘と鉢合わせになって小競り合いを起こし、そのまま討伐対象に認定されて泥沼に陥るかのどちらか。
「本当に腹が立つけど、もう八つ当たりするほど滾ってはいないわ。それに、アンタ達への苛立ちじゃない。私をこういう立場に追いやった最悪の姫の中身とかいう訳わかんないヤツに苛立ってるだけよ」
　それならいつも通りだと納得。常に苛立っているのは叢雲の性質上仕方ない。今までの生活でもそうだったのだから、普段の叢雲に戻ったと言える。
「だから、別に戦艦のことに怒りは無いわ。言ってしまえば誰にだって苛立ってんのが私なわけだし」
「そう、なら良かったわ。こちらで話したことも伝えたかったの。貴女の体質についての考察をね」
　ここで叢雲がダイニングにいない間に、タブレットの向こう側にいた提督まで含めた全員で考えた叢雲の体質。古鷹や白露の証言まで入っているおかげで信憑性は比較的高い考察を、叢雲に懇切丁寧に伝

えようとするが、その前にと薄雲が待ったをかけた。
「あの、それは姉さんの昼食の後でもいいですか。お腹を空かせていると思うので……」
「っと、そうね。空腹は余計に苛立ちを呼ぶわ。ある程度落ち着いた状態で聞いてもらった方がいいわね」
そう言うと思ったか、既にリシュリューと飛行場姫が叢雲と薄雲の分の昼食を温め直していた。その匂いが漂ってきたことにより、叢雲の腹の虫が鳴りかけた。

遅めの昼食後、改めて施設の仲間達で纏めた叢雲の体質の憶測を伝える。参加者は戦艦棲姫の他は春雨、海風、白露の姉妹と、万が一の時のための飛行場姫。他の者は一旦ダイニングを出て、持ち場へと向かっている。特に松竹姉妹は午後の部の古鷹の世話係であるため、早々にそちらへ。
「――と、いうわけよ。確証はあまり無いけど、古鷹や白露の証言から考えれば、割と信憑性は高いんじゃないかしら」
まだ泥が完全に馴染み切っていない白露に撃たれたことで、僅かな泥が叢雲に入り込んだ状態になり、さらにそのまま怒りの感情が溢れて深海棲艦化したため、泥の性質を取り込んでしまったのではないかというのが、今のところの満場一致の憶測。
叢雲もその話を聞いて、思ったよりも素直にその可能性が高いと認められた。そうであってほしいという願いもあっただろうが、理論として納得が出来るところが多かったのもある。
むしろ、そうで無ければ叢雲に泥の性質が入り込むところが無いのだ。理解出来ずとも納得はしなくてはいけない。
「なるほどね……私はまだ慣れてないアンタに殺されたおかげで、こんな力を手に入れたってわけか」
白露に視線を向ける。薄雲が姉のその行動を咎めようとするが、白露はいいよいいよと手を振った。
どうしても喧嘩を売るような態度が出てしまうのは性質上仕方な

い。白露もそれは理解している。それに、白露が殺したことがきっかけとなっているのは、否定出来ないくらいの事実である。
「だね。あたしも自分の身体がそんなことになってるなんて知らなかったから」
　当たり障りなく返答する白露。叢雲もその反応に対しては怒りが湧き上がるようなことは無し。
「感謝はしないけれど、白露が慣れていない状態で助かったわ。そうじゃなかったら今頃私は……いや、普通に溢れていただけか」
「おそらくそうでしょうね。無差別に艦娘を襲うだけの知性のない同胞（はらから）なのは変わらないんじゃないかしら」
「それはそれで嫌ね……」
　ただし、通信妨害が無いため、鎮守府からの救援部隊を相手にしていた可能性があり、事が大きくなっていた可能性が高い。今とは違う結末になっていた可能性はゼロではない。
「でも、アンタ達の憶測通りだとしたら……私もしかして泥に侵蝕されないとかあるのかしらね」
　それは無くは無い。既に泥が入っている身体にさらに泥が入ろうとするかはわからないが、泥に対しての耐性と考えてもいいのかもしれない。
　それを実証するためにわざわざ泥に飛び込むようなことは絶対にしないが、いくら纏わりつかれてもお構い無しという可能性は充分にある。
「まぁ、私がそんなことするわけないけれど。アイツらの思い通りになって堪るか。そもそも泥がばら撒かれて私達が害を被ることなんて無いだろうから、実験するまでも無いけど」
「出来たとしてもそんな危ないことしないでください。姉さんがあんなことになったら私は……」
　薄雲が少し涙目に。今は叢雲が側にいるおかげで寂しさが溢れることが極端に少なくなっている薄雲だが、ここで叢雲が泥に屈し、ましてや敵に回るなんてことがあったら、心が折れるだけでは済まない。発作を起こした挙句、最悪薄雲が自ら泥を呑む可能性すらある。

「大丈夫よ。私が自分からああなりに行くと思う？　それこそ気に入らないわ。ああイライラする」
そんなことを言いながらも、叢雲はまだ余裕が見えた。薄雲との散歩で気が張らせたのが相当効いているようだ。
この施設にいる間は、叢雲は基本的に鬱憤を溜め込むことが多くなる。仲間との共同生活では、それを思い切り表に出すことはなかなか出来ない。そこを薄雲が鑑みて、今回みたいなちょうどいいタイミングに発散させた。
やはり溜め込みすぎるのはよろしくない。適度に抜くことが必要。そうすることで叢雲はよりこの施設で生活がしやすくなる。
そのタイミングを見抜くのは、薄雲の仕事になるだろう。叢雲がプライド的に怒りを発散する姿を見せられるのは薄雲のみなのだから、定期的に息抜きをさせるためにも側にいてあげることになる。
「まぁいいわ。私も薄雲も理解出来た。私はひとまず通信の時に艤装を出すなってことでいいんでしょ。基本出さないわよ。こんなところで」
ダイニングで艤装を展開するだなんて余程のことだ。そもそも施設内での戦闘なんて有り得ない。叢雲が深夜に一悶着起こしてしまった時くらいである。それ以上のことは絶対に起きない。
そういう意味では、今後叢雲発端の通信妨害は起きないと言ってもいいだろう。戦闘中に通信しなくてはいけなくなった時に、叢雲がその戦場にいるとそれを妨害してしまうことになるが、そんな時には敵もいる。叢雲がいようがいまいが、敵側の通信妨害が働くので気にする必要は無い。
「普通に生活するだけなら、姉さんは誰にも迷惑をかけないと思います。なので、これからも今まで通りでいいですよね」
「ええ、それでいいわ。お姉もアタシもそのスタンスだから」
これでおしまい。叢雲は今まで通りで良し。何も変える必要は無い。
「改めて、疑ってごめんなさいね」
「もういいっつーの。さっきも言ったけど、同じ立場なら私が疑って

んだもの。あんまりそういうこと言うと、余計に腹が立つわ。上から見られるのも気に入らないけど、下手に出られすぎるのも気に入らないのよ。我ながら、面倒臭い性格だと思うわ」
戦艦棲姫とのいざこざも、長引かせると余計に面倒なことになるため、叢雲から切り上げる。突っかかる側から話題を止めたのだから、戦艦棲姫も了承。これ以上の謝罪はむしろいざこざを長引かせるだけになるため、ここで終わりとした。

叢雲の体質についての話題が終わったことで、仲間達はまたばらけていく。そんな中、春雨はおやつを作るためにダイニングに居残り。海風と白露もそこに付き合うことにした。
「叢雲ちゃん、今日は何が食べたい？」
早速何を作るかを叢雲に聞く。甘味に関しては、叢雲のご機嫌取りなところもあったりするので、そのメニューは基本的に叢雲が決めることになっている。
怒りが溢れた者が甘味で落ち着くというのなら、誰だって従うものだ。ここのメンバーは好き嫌いがないため、余程同じものが続かない限り文句も出ない。
「そうねぇ……今からケーキというのもどうかと思うから、簡単なものでいいわよ。アンタが作るなら文句は無いわ。不味いモノ出したこと無いんだから」
「そっか。じゃあ、サクッと作れるクッキーにしておくね。生地も残ってるから」
春雨の料理の腕は信頼しているようで、そこは全て春雨に任せるということらしい。
ここにいる料理が出来る者に対して、叢雲はいくら怒りと苛立ちが溢れていても何も文句を言わないのは、自分がやれないというのもあるが、誰もが満足出来るものを作ってくれるからだ。
「……私、この施設に拾われてなかったら、今頃大変なことになってたかもしれないわね」

薄雲にのみ聞こえるくらいの小声で、ボソッと呟いた。知性の無い時に拾われ、献身により自分を取り戻し、いざこざを起こしながらも受け入れられ、楽しく生きることが出来ている。
艦娘であった時はあまりにも不幸だったが、第二の人生を歩み始めてからは幸運が続いていた。勿論叢雲自身にはそうは思えないかもしれないし、自覚出来るものも少ないかもしれない。だが、事態を好転させているのは確かだ。
「はい。それに、私も姉さんに出会えて良かったと思います。ここで一緒に生きていきましょう。幸せに、楽しく」
「保証は出来ないわね。だって私は、黒幕をぶち殺したいんだもの。これだけは揺らがない。怒りは無くならないんだから」
「なら、私もお手伝いします。隣にいさせてください」
叢雲としても、薄雲が隣にいてくれなければやっていけないのではと思えるようになっていた。今回の件もそう。1人だけなら鬱憤は晴らせない。頭を冷やすには、1人だけでは不可能だった。
薄雲の存在は本当に大きい。叢雲を叢雲たらしめる要素の一部は、薄雲が担っていると言っても過言では無い。やはり最初の献身が強く効いていた。
「頼んだわ。私の怒りは、アンタのおかげで鎮静化出来る。弱みはアンタにしか見せられないわ」
「光栄ですね。妹として、姉さんに尽くす……は言い過ぎですけど、サポートしますよ。私の寂しさを埋めてください。姉さんの怒りを鎮めますから」
「ええ、それでいいわ」

この姉妹の仲は今まで以上に深く。お互いの弱みを見せ合うことで、絆は深まる。

同じ境遇の者

叢雲の通信妨害の件が納得の行くカタチで終了した頃、鎮守府では少し久しぶりに大将が訪れていた。端末による通信だけでなく、直に話して現状を把握するため。また、少し延びていた演習艦隊の派遣をもう少し延ばす手続きのためである。

島風と宗谷は調査のために最初から長期派遣の方向で鎮守府に籍を置いていたが、現在の演習艦隊である武蔵、サラトガ、北上、大井の４人も、今回の件を重く見た大将が改めて派遣というカタチに変更するという。

執務室は家具職人妖精さんの力により修復が完了していたため、話もそこで。提督の側には秘書艦である五月雨が、大将の側には同じく秘書艦である吹雪が付き従う。

「ありがたい話ではあるのですが、そちらの戦力を減らしてしまって大丈夫なんですか？」

最強の戦艦である武蔵まで派遣に出してもらったことは非常にありがたいが、それで大将の鎮守府が戦力不足になって……なんてことがあったら笑えない。

そのため、大将から言い出したことではあるものの、本当にそれでいいのかを提督が尋ねる。

「あら、心配してくれるのね。でも大丈夫。うちにはまだまだ艦娘はいるんだもの。１部隊分抜けたとしても、継戦能力は衰えません」

対する大将は、ふふふと上品に笑いながら返す。ここに６人置いたからといって、戦えなくなるようなことはまず無い。規模も練度も違うからこその、大本営直属の鎮守府である。むしろこういうことがあれば、率先して自分の艦娘を派遣するくらいには余裕があるようにしてあると語った。

「今回の件、大本営でも特に重く見ているの。貴方にだけ背負わせるわけにはいかないわ」

「ありがとうございます。素直にその厚意を受けさせていただきます」

「ええ、そうしてちょうだい。それと、予算の件もある程度は大丈夫だから、明石に多少好きにやらせても問題ないわ」
　むしろそちらの方が驚いた。今の明石の研究は、最悪の姫の中身への対策。最前線の艦娘を守るための手段を見つけるために奮闘している。言動に多少難はあれど、明石も人間と艦娘を守るために全力を尽くしているのだ。大将はそこをしっかりと評価している。無論、その研究の良し悪しは判定してはいるが。
　今の研究、艦娘と深海棲艦を切り分けて判定するセンサーなども、問題無しどころか研究を推奨するくらいであった。予算に関しても斡旋してくれるほどであり、好きにやらせていいというのだから、相当の期待が明石の背に乗っている。
「泥を感知する電探やソナーは、なるべく早く完成させてもらいたいもの。こちらとしても全力で支援して、その作成のノウハウを鎮守府内で共有したいと思っているわ」
「そうですね。泥がまた別の海域に設置されている可能性は充分にあり得ますから」
「ええ、今は全鎮守府に警戒を呼びかけているのだけど、それだけで対処出来るのなら苦労はしないもの。それに、実力不足が見えていない子達が慢心から飛び込んで全滅……なんてことだって考えられるわ」
　かつての叢雲が所属していたような、手柄のために艦娘を蔑ろにしているような鎮守府なんかは、そういうことをリスクも考えずにやってしまいそうである。それだけは絶対に避けなくてはならないのに。
　今の全体公開の情報は、泥による侵蝕と深海棲艦化のことである。白露のことはまだ非公開ではあるが、古鷹に関しては全鎮守府に知られていること。それが古鷹であるとは誰も知らないが、この鎮守府で今までにないことが起きたということで共有されている。
　深海棲艦を倒したら泥を吐き出し、正気に戻った。その深海棲艦は艦娘の記憶を有しており、しかし身体は深海棲艦のままだった。生死の境を彷徨った後、何とか危機を乗り越えたところで、然るべき処置としてとある施設で安静にしている。吐き出された泥は、古鷹の証言によって艦娘を侵蝕する。ここまでが何処の鎮守府でも知っている

ことになる。
　なのに、これだけ知っておきながら、そんなもの自分達には関係ないと一切慎重にならずに戦う輩というのは無くならない。まさに慢心。敵に餌を与えるだけとなりかねないのに。
「今はこちらも雌伏の時よ。今までやられてきた分をお返しするためにも、ね」
「はい、その通りですね。この鎮守府が基点となるのは光栄です」
「貴方達は戦闘面でね。こちらでもいろいろと情報を集めているわ。古鷹のこととか」
　鎮守府の面々は大将の艦隊により鍛えられ、敵部隊に対抗する力を手に入れている。その裏側で、大将があらゆる情報をその情報網を駆使して調査し、黒幕に繋がるモノを何でもいいから探し出す。
　そしてこれは、あらゆる鎮守府の協力を得ることが出来るところまで来ていた。未知の深海棲艦であり、その手段が前例の無い侵蝕という方法となれば、何処もかしこも危機感を覚えるというモノ。
「古鷹のこと、何かわかったんですか？」
「ええ。古鷹の中に混じっているという榛名、最上、鈴谷が同時に消えたような事件が過去にあったかどうかを調べたの。そうしたら、ちゃんと見つけたわ」
　大将が合図をすると、隣に控えている吹雪がカバンの中から何枚かの書類を取り出した。提督と五月雨が覗き込むようにそれを確認したところ、そこにはある意味大惨事な事件の全容が記載されていた。
　哨戒で発見された姫級深海棲艦、戦艦棲姫討伐の際に、古鷹を含む部隊がその戦艦棲姫共々行方不明になったというもの。あまりにも不可解であり、捜索をしても見つけることが出来ず、戦死ということで処理されていた。
「そこの鎮守府は今でも活動中。当時は相当堪えたようだけれど、その時の失敗を糧に、むしろ戦果を挙げているわ」
　その鎮守府は所謂、『艦娘はヒトのカタチをする兵器である』という考えで活動しているところ。それでも部下の艦娘達を大切に扱っているのは変わらない。部下を纏めて失ったことを大いに悔やみ、今後

そんなことが無いようにとより一層の研鑽を積んだとのこと。
艦娘をヒトとして見るか兵器として見るかは永遠の命題ではあるのだが、堀内提督もあちらの提督も、お互いの在り方を否定せず、良さも悪さも理解した上で共存出来ている。
そのやり方はどちらも正しい。それ故に、相手に対してどうのこうの言うべきことでは無い。そう弁えて、干渉もほぼしていないような状態だ。
「私はその提督……大塚という男に話を聞こうと思っているわ。海域の詳しい場所は知っておくべきでしょう」
「そうですね。もしかしたら黒幕がそこに近い場所を陣取っている可能性があるということですし」
「そういうことね。それに、そこで古鷹が泥にやられたということは、まだそこに泥が設置されている可能性もあるわけじゃない」
それこそ、その鎮守府内には泥に侵蝕された艦娘が交じっていても不思議では無いのだ。古鷹の時は即座に行動を起こして行方不明となったが、あえて潜伏させるという選択をしている可能性も充分にあり得る。
同じ場所で何人も行方不明になれば、人間や艦娘でも不審と見て撤退的に調査するだろう。だが、黒幕はそれを避けて行動していると思われる。部下を増やすことも必要だが、最優先は器の確保。それ故に古鷹を支配し、一箇所ではなくばら撒いた場所で仲間を増やしていた。
堀内提督がここまで徹底的に調査し、ましてや器である姉姫と接触することが出来ていることは、黒幕にとっては未だに気付けていない想定外であろう。
「泥の対策が出来上がり次第、直接見に行きたいところね。それまでは通信で話を聞いてみようと思うの。あちらも、古鷹の件と繋がりがあると言えば、協力してくれるでしょう。古鷹自身と話をするかどうかはさておき」
その時に失われた古鷹が深海棲艦化して虐殺を繰り返し、つい先日にその呪縛から解き放たれて正気を取り戻したと言われても理解出

来るかはわからない。むしろ、古鷹のことを今どう思っているかは何とも言えないところである。
「状況が整えば、僕もお付き合いさせてください。根幹は別でも、お互い同じ立場ですから」
「そうね。敵の行動によって部下を失い、それが深海棲艦と化して戻ってきているという点では、貴方も彼も同じね」
　艦娘の見方は違えど、堀内提督も大塚提督も黒幕のせいで部下を失ったという点では同じだ。そして、そこから奮起し次へ繋ごうとする信念も同じ。やり方は違っても、お互いを認められるのなら仲良くもなれるはずだ。
「それじゃあ、次は今後のことを話しておきましょう。私がここに来れる機会もそう多くないもの。やれることは今のうちに全部やるくらいで」
「はい、お願いします。まだ先は長いでしょうから」
「ええ。慎重に、確実に、被害を拡げることなく終わらせるためにも」
　その対象は、姉妹姫の治める施設のことも含まれている。誰もが平和な海を目指すため、力を合わせて進んでいくのだ。

　一方、これからも派遣というカタチで鎮守府に滞在することが決定したことを他の艦娘達にも伝えている大将の艦隊。
「ということで、だ。我々はもう少しだけ貴様達の戦いに付き合わせてもらうぞ。とは言っても、貴様達を鍛え上げ、より戦いやすくするために尽力させてもらうだけだがな」
「演習、訓練、サラ達に申し付けくださいね。求められたモノ以上のそれを差し上げますので」
　武蔵とサラトガの言葉に湧く艦娘達。戦力増強ではなく、より力を得るための演習相手としての体裁ではあるのだが、また前回のように鎮守府が襲撃を受けるようなことがあった場合は、拠点防衛にも力を貸してくれるという。
　鎮守府から出て黒幕を撃破する作戦が発動した時は、その力を防衛

に回し、それこそ最悪の姫のような陽動作戦を取られた場合でも鎮守府を守ってくれる。心強い援軍と言えるだろう。
「これでより一層、金剛と比叡を鍛えられるというものだ。ハッハハ、楽しみだなぁ！　特に金剛は、あの時の力を常時出してもらわなくてはならんからな！」
「Ａｈ，　武蔵、そのことはなるべくＳｅｃｒｅｔでお願いしマース。私としても、あまり表に出したくないことデース」
「ならば、穏やかな心であの力を発揮出来るように特訓しなくてはなぁ。そうすれば、貴様は私をも超える逸材となるだろうよ。それが楽しみで仕方ない！」
　戦闘狂の気質がある武蔵に目をつけられ、金剛は小さく溜息をついた。怒り任せに古鷹を死に至らしめようとしたあの時の自分は、あまり外に出したくないと金剛も思っているようである。
　しかし、未知の力を持つ敵を圧倒する程の力はやはりコントロール出来るようにはなっておきたいというのはある。特訓には否定的では無かった。
「駆逐艦共はあたし達が見ることになるんかね。ああ面倒臭い」
「そう言いながら、ここから離れることを惜しんでいましたよね北上さん」
「大井っち、余計なこと言わない」
　駆逐艦達の特訓は、やはり北上と大井が率先して行うようである。涼風の視野の広さを見出したところもあるが、他にもいろいろと手を出したいところはあったらしく、まだまだ時間が足りなかったと大井にだけはボヤいていた。
「そんじゃあ、あたいらにもっと戦い方教えておくれよ！」
「そうだそうだ！　江風ももっと戦えるようになりてぇ！」
「ああもう喧しいなぁもう」
　口ではそう言いながらも、北上の表情は明るい。涼風と江風に言い寄られても、別に苦ではないようである。
　一方、大井は少し離れて見ている山風の方へ。
「山風、貴女は私が鍛えてあげる。貴女の強みは涼風とは違う視野の

広さなのはわかっているわ。私が北上さんに対して使っている技法、全部叩き込んであげるからそのつもりで」
「っ……うん、わかった。よろしく……お願いします」
ペコリとお辞儀して、大井に頼る山風。あのアイコンタクトも無しに北上の欲しいところに攻撃をする大井の技法は、山風にとっては今後必要になるはずだ。
調査隊の隊長として、より広い視野と行動力が欲しい。そしてそれを身につけることで、当時の海風に追いつき、むしろ乗り越えるくらいになれればいい。山風はそう思った。

鎮守府はさらに勝利に向けて進んでいく。古鷹を救出したことで、話はより前へ向かうだろう。
戦いはまだ佳境にすら入っていないが、士気は高い。

夜の密談

その日の夜、施設。叢雲の件でいろいろあったものの、それは全員が納得するカタチで決着がついたので、安心して眠りにつくことが出来る。

春雨は勿論、海風と白露が添い寝をすることで、溢れた寂しさを刺激しないようにベッドに入っている。海風の依存も満たせるために一石二鳥。白露は春雨を挟んであげるためには必要不可欠なので、ある意味巻き込まれたようなものなのだが、妹達が必要としているのだからと進んでその場所で眠る。

海風的には2人きりがいいようだが、それだと春雨の寂しさを補完しきれないため、姉の温もりを与えるという意味でも白露の添い寝については快く許可した。全ては春雨のため。そのためなら、自分の意思など二の次。

「そういえば……私、気になることがあるんだ」

眠る前、部屋を暗くしたところで春雨がボソリと呟いた。小さな声でも添い寝をしているのだからすぐに2人は反応出来る。勿論反応速度の速いのは海風であり、白露は一歩引いた位置で2人のやりとりを聞く。

「気になること、とは？」

「私が溢れたのは『寂しさ』。海風は『絶望』……って聞いてるけど、今は少し違うよね」

「はい、私は『絶望』が溢れたそうですけど、春雨姉さんのお陰でそれが覆りましたから。今の私は、松さんや竹さんのような『依存』ではないかと姉姫様や妹姫様に言われていますね」

詳しいことはよくわからないが、海風は春雨の献身のおかげで絶望を乗り越えたことによって、本来の溢れ方から変化している。それで生活に支障が出なくなっているのだから、余計に春雨に依存するのも仕方ないことかもしれない。

「それじゃあ、白露姉さんって、何が溢れたのかなって」

深海棲艦化している艦娘は、まず間違いなく何かの感情が溢れてい

るからこうなっている。今のところ一切の例外は無い。ミシェルだって、おそらく卯月であろう艦娘が『疑問』を溢れさせた結果があの姿だ。自分すらも認識が出来なくなったことがそこに繋がる。
ならば、白露や古鷹も何かが溢れているだろうし、心の何処かが壊れている可能性は高い。というか確実。魂の混成によって壊れている部分が補完されてまともになっているというのもあり得るが、何らかの感情が溢れているはずだ。
しかし、白露は発作の前兆が一切無い。伊４７の幸せアレルギーのような常時発動型なのかもしれないが、そういう感じのものも見たことがない。
「確かに……白露姉さんはどうやって同胞（はらから）になったんでしょう。古鷹さんは、泥が入っただけでは艦娘から変わることは無かったんですよね」
そこは古鷹が実証済み。覚えている記憶、見せられた悪夢では、艦隊を自らの手で全滅させたのは艦娘の時である。泥は思考が書き換えるのみ。深海棲艦化は別要因であろう。
最近は施設が平和なので、そういうことを考える余裕がようやく出来るようになっていた。叢雲の一件はあったとしても、すぐに解決したおかげで心の余裕は維持されている。
「あたしの失くした記憶の中にあるんだと思うんだよなぁそれ。だってさ、あんまりこういうこと言いたくないんだけど、あたし……というかあたし達、確かに死んだ記憶があるんだよね」
そこも白露は保証出来るそうだ。命の灯火が消えるその瞬間までちゃんと覚えているという。しかもきっちり４人分。
そんなことを知ったら狂ってしまいそうだが、白露はそんな予兆すらなく、むしろ淡々と説明出来てしまうくらいの心持ち。
ある意味、白露はそこが壊れているところになる。４人分の記憶を全て持ってしまっているため、本来ならその情報量で頭がパンクしてもおかしくないのに、壊れているせいで素知らぬ顔で生活出来てしまう。
村雨の変装をするのにも抵抗が無い。もしかしたら、白露は自分自

身をちゃんと保てていない可能性もある。
「気付いたらこの身体だったっていうのが本音かな。やってきたことは多少覚えてるのに、何されてこうなったのか本当に思い出せなくて。思い出せないっていうか、意識が無かったんでしょ。死んでたんだし」
白露の推理では、まさに死んでいたからというのが理由。意識どころか命が無かったのだから、何をされたかなんて知っているわけがないのだ。眠っている間に全て終わっていたようなもの。
そして、泥による侵蝕によって、それも全く疑問に思わなかったわけだ。娯楽のように艦娘に襲い掛かるだけのただの侵略者とされていたのだから、経緯なんて興味がないと考えても仕方ない。
「じゃあ、あちらは亡骸を混ぜ合わせて蘇らせることが出来る……ってことですか」
あまりにも怖いやり方だが、白露の現状と知っている限りの記憶から想定出来るのはそれしかない。古鷹が白露達の亡骸を拠点に運び、何かすることでそれが混じり合い、白露を基点とした４人の融合体が完成した。
そしてその融合には、泥の力が必要になる。むしろ、４つの亡骸を泥で包み込めば、そのまま１つの身体になる。なんてことが起こり得るのではないかと春雨は考え、そのまま口にした。
「うわ……でもあり得るよそれ。春雨の直感だからとかじゃなく、物的証拠として全然あり得る。あたしもなんかそんな気がしてきた……」
心底気持ち悪そうに白露は頭を抱える。自分がそうされていたと思うと、どうしても嫌な気分になるだろう。黒幕の死体遊びの結果、生み出されたのが自分なのだから。
「じゃあ、古鷹さんは……」
「全部終わらせた後に、黒幕に殺されたか……自分で命を絶って、白露姉さんと同じように泥の力で融合させられた……とか」
そこは古鷹に聞かなくてはわからないところだろうが、その辺りの記憶は消されていそうである。謎は謎のまま。

「春雨姉さんが辿り着いたところですし、信憑性はかなり高そうですね。だとしたら、黒幕は何処までやれるんでしょう……。泥で魂を侵蝕したり、泥で亡骸を混ぜ合わせたり……尊厳を傷つけるような力ばかり……」

まさに海風が言うそれなのだろう。黒幕の力は、他者の尊厳を傷つけるところに特化している。生きているものの魂を穢し、死んだものの亡骸までをも利用する。そして、使えなくなったら捨てることまで。

艦娘に対しての恨みが強すぎる。その尊厳をこれでもかというほど傷付け、ただの使い捨ての道具として使うことにより、その恨みと憎しみを晴らしているかのようだった。

「武蔵さんにやられたことが余程堪えたのかな。負けると思ってなかった……格下だと思っていた艦娘に負けたことで、逆恨みしてたりして」

冗談のように白露が言うが、実際それが大正解なのではなかろうか。

深海棲艦の中ではトップクラスの頭脳を持つ最悪の姫は、自らを囮にするというとんでもない戦法まで使って人間と艦娘に勝利しようとしたが、それだけやっても真っ向勝負により敗北したことで、その恨みが頂点に達した。

その結果が、器と中身の分離。死に体の器を捨てて、中身だけになってもその積もり積もった恨みを晴らすために、艦娘を使い潰す形である意味同士討ちをさせているわけだ。

「なんだか、陰険ですね」

海風がボソリと一言。深海棲艦化してから少しだけ本心の出し方が荒くなっているため、その言葉に春雨は噴き出しそうになった。

「巻き込まれた側からしてみれば堪ったもんじゃないよ。あたしはただ、鎮守府でみんなと世界の平和を目指してただけなのに、あろうことか侵略に使われてたんだから。あたしのせいで叢雲みたいな犠牲者も出してるしさ……」

少しだけ、白露が落ち込んだように顔を布団に埋める。白露は加害

者であり被害者。むしろ被害の方が大きい。本来のカタチを何もかも捻じ曲げられここにいるのだから。
「姉さん、大丈夫です。みんなわかっています。私も、海風も、鎮守府のみんなも、提督だって、白露姉さんのことを責めていません」
それを春雨が慰めるように頭を撫でた。海風が少し羨ましそうにしていたが、今回は少し不安定になっている白露のためだからと黙ってもらっていた。
「どういうカタチでこうなったかはわかりませんけど、姉さんだって私達みたいに何処か壊れてしまっているんだと思います。だから、せめて妹達の前では全部曝け出してくれていいんです」
以前、薄雲が発作を起こした時のように、抱き締めるようにして温もりを与える。発作を起こしているわけではないのだが、こうされれば心が落ち着いていくのは何度も実証されていることだ。それは白露にもしっかり効くはず。
そうされたことで、白露も溜め込んでいたモノを吐き出すように、隠しておきたかったモノを搾り出すように、少しずつ心の内を曝け出す。
「……春雨ぇ……あたしやっぱ辛いんだよ……。こんなでも一応世界のために戦ってきたのにさ、ヤバいヤツに巻き込まれたと思ったら滅ぼす側に回されるなんてさ……」
いつもおちゃらけているような白露でも、今回の件は相当キテいた。叢雲とは違う意味で、溜め込みすぎると爆発してしまう。定期的に吐き出す必要があるだろう。
その聞き手の役を、妹達が買って出た。海風は春雨の付き合いというところは大きいものの、白露だって大切な姉。落ち込んでいるところを見るのは辛い。
「私達しか見てませんから、好きなだけ曝け出してください。恥ずかしいことじゃないです。泣いて泣いて、全部振り払ってください。溜め込んでしまったら、また私達が付き合います」
「うん……うん……ありがとう春雨」
この日の夜、白露はずっと愚痴を言い続けていた。簡単には止まら

ず、白露とは思えないような言葉まで飛び出す始末。何せ４人分の鬱憤だ。時折、白露以外の姉妹の言葉も乗っているようだった。

白露が泣き疲れて眠った後、安心して息を吐いた春雨。
「お疲れ様でした春雨姉さん」
「ううん、大丈夫。白露姉さんのこともちゃんとケアしないと」
中に入っているのは全員姉なのだが、まるで妹になってしまったかのように眠っている白露。春雨の腕をギュッと抱きしめて、その温もりを感じるために丸くなる。このままでは確実に動くことが出来ないのだが、春雨としても姉の温もりを感じられるのは嬉しい。
「海風も曝け出していいんだよ。……って言っても、今の海風は溜め込んでないよね」
「はい、私は春雨姉さんに迷惑をかけたくありませんから、全部全部曝け出しています。もっとベッタベタに甘えたいという気持ちも溢れ出していますよ」
白露のように、海風ももう片方の腕に抱きつく。なんだかんだでいつも眠るスタイル。春雨に寂しさを味わわせないように温もりを与える、最善のカタチ。
「白露姉さんは侵略者としての一面も与えられてしまっているので、本当に辛かったと思います。春雨姉さんがその気持ちに気付かせて、胸の内を曝け出させたのは、まさに最善だったでしょうね」
いつもの褒め称えるようなモノではなく、真にその功績を評価するような物言い。心酔だけでなく、今回の選択は全体的に見ても白露の最善に辿り着いた選択だと言える。
「でも……私としては、鎮守府の方も心配です。春雨姉さんや白露姉さん達がいなくなって、私までこんなことになってしまってから……山風に大きな負担をかけてしまってるんじゃないかって」
そこはどうしても気になるようだ。深海棲艦化して施設で平和に暮らしているものの、心は艦娘のままなのだから、元いた場所が危機に陥ったと言われればショックは大きいし、自分の後任として奮闘し

ている山風のことは気にかかっている。
春雨も当然ながら同じ気持ち。全てを任せてここでのんびりと暮らすことか本当にいいことかどうかはわからない。一度完全に切り捨てかけた分、今は手放さないように心配している。
「きっと大丈夫。みんな強くなってるもん。でも、手伝えることがあれば、私達も手伝いたいね」
「はい、是非。艦娘と深海棲艦という違いはありますけど、目的は同じですから。また山風達と、鎮守府の仲間達と一緒に」
「うん、そうだね。こんな落ち着かない平和を終わらせるためにも、力を合わせて戦っていきたいね」

今はまだ、共闘はなかなか出来ない。だが、そのうちそれも可能になるだろう。

黒幕の狙い

翌朝、愚痴が言えたからか、やたらスッキリとした目覚めの白露。跡を追うように目を覚ました春雨と海風だったが、先んじてベッドから降りていた白露の姿を見て安心した。翌日まで引っ張るようなこともなく、爽やかな笑顔で今日を過ごせるのは、昨晩しっかり吐き出すことが出来たからだろう。

「おはよう妹達！　今日もいい天気だ！」

カーテンをバッと開け、朝日を浴びる。その笑顔は、愚痴を言っていたその時とは全く違ういい笑顔。それこそ太陽のような笑顔に、春雨と海風は和む。

「おはようございます、白露姉さん」

「朝から元気ですね」

苦笑しながら2人もベッドから降り、春雨は脚を、海風は右腕を艤装によって生成。そしてパジャマを消して制服姿に。

既に姉妹折衷案の制服を身に纏った白露は、それを見届けたところですぐに2人を抱きしめる。

「昨日はありがとね。あたしも含めて、４人分の鬱憤は晴らせたと思う。アンタ達のおかげだよ」

こういうのを隠さずに出し渋ることなく言い放つのは、白露以上に夕立の特性。２人分の合致した性格を表に出したことで、何の躊躇もなく妹達に感謝の気持ちを表した。

「どういたしまして。昨日の夜も言いましたけど、溜め込んでしまったら、また私達が付き合いますからね」

「はい、春雨姉さんなら白露姉さんの悩みも全て吹き飛ばしてくれますよ。もう地母神のようなヒトですから。春雨姉さんの前では全ての悩みが解決されますね」

「海風、それは言い過ぎ。私は聞くだけだよ」

この２人のやりとりも慣れたモノで、白露はニコニコしながら仲のいい妹達を見守る。

艦娘だった頃とは関係性は変わってしまっているかもしれないが、

それでも姉妹としての間柄は変わらない。穏やかに、和やかに、この生活を続けていきたいと、白露は思えた。

朝食の場、ダイニング。少しずつでも回復している古鷹は、この時より朝食を食べてみようということになっていた。昨日の段階で水は飲めるところまで来ているため、まずは流動食で栄養を摂っていこうと考えた。

この施設に車椅子なんてものはないため、相変わらず戦艦棲姫の艤装が代わりとなり、その大きな手に座らせて運んできている。その隣にはコマンダン・テストが甲斐甲斐しく付き従い、介護を続けていた。

「まだ痛みは消えていませんが、身体の中の痛みは大分治まってきました。昨日もとてもよく眠れて……コマさんや皆さんのおかげで、ずっと穏やかな時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございます」

昨日よりも話すスピードも速くなり、激痛からただの痛みくらいにまで回復している。完治まではまだまだかかるだろうが、自分の脚で歩けるようになる日も近い。

古鷹は相変わらず艦娘時代のインナーに上着を羽織る程度で終わらせている。それを見る限り、胴にクッキリとあった斬り傷は未だに残ったまま。

完治すればそれは消えることになるだろうが、古鷹としてはこれは残しておきたい傷らしい。罪を償うため、目に見える場所にその時の証拠が欲しいのだとか。深海棲艦化している時点でこれでもかとわかりやすい証拠が残っているのだが、傷であることが重要だそうだ。

「古鷹さん、愚痴とかあったら誰かに聞いてもらうといいよ。あたし、妹達が気を利かせてくれてね。もうさんざん吐き出した挙句に大泣きして、そのまま泣き疲れて寝ちゃうまでしちゃった」

「そう……なんですね。でも、私は愚痴なんて……」

白露が昨晩の自分のことを語るが、古鷹は同じように溜め込んだ鬱憤を吐き出そうとは思えないようだ。

古鷹だって、本人含めて４人分のモノを内包しているはずである。それを手段として使ったくらいなのだから、自覚だってある。力を手に入れた分、心を壊すほどの負荷は常にかかり続けているのだ。

だが、中心となっている古鷹が性格上溜め込むタイプであるために、かかり続ける負荷を発散することが出来ない。さらには、中に含まれている榛名も近しいタイプ。『大丈夫です』と無理をしてしまうタイプだ。ここが妙に噛み合ってしまっているが故に、本心をひた隠しにしてしまう。

「もう少し落ち着いてからにした方がいいです。穏やかに過ごせたと言いましたが、夜にＣａｕｃｈｅｍａｒ（悪夢）を見たりもしているようですから」

すかさずコマンダン・テストがフォロー。今は常に古鷹と同じ部屋で休んでいるのだが、やはり眠るとその時の記憶を反芻してしまうらしく、熟睡までは出来ていないようである。

魘されて目を覚ましたところで、コマンダン・テストや同じように控えている戦艦棲姫がまた眠れるようにあやして、どうにか夜を越える毎日だ。

「もう少し身体が治ってから考えるべきね。ほら、言うじゃない。『健全なる精神は健全なる身体に宿る』って」

「Ｃ，ｅｓｔ（その通りです） ｖｒａｉ． 痛みが無くなれば、もっとＰｏｓｉｔｉｆ（ポジティブ）になれます。今は安静にしましょう」

戦艦棲姫とコマンダン・テストに言われ、古鷹はひとまず首を縦に振るしかなかった。

「ひとまず、貴女のための食事を作ってみたわ。まずは軽くＲｉｚ（リ） ａｕ（オ） ｌａｉｔ（レ）から行きましょう」

そして今度はリシュリューが古鷹の前に朝食を置く。これならば食べられるかもと、リシュリューの祖国の味だというミルク粥。

なんとか身体を動かして自分の力でそれを口に入れると、体内の痛みはまだ残っているものの、美味しく食べることが出来た。

「美味しい……です」

その幸せを噛み締めるように、ゆっくりと食べていく内に、古鷹は

救われたのだと実感したのか涙を流し始める。
　あちら側にいた時間は、白露のように短期ではない。最初期からかどうかはわからないが、かなり長い間を侵略者として生活しているのだ。ヒトらしい生活をしていたかもわからない。それ故に、こんな普通な食事でも心に染みるモノがあった。
「こういうものを食べるのは初めて？」
　リシュリューが問うと、古鷹は首を横に振った。
「私が艦娘だった時は……食生活は普通でした」
「あら、ならいい鎮守府で生活出来ていたのね」
「そう……ですね。あの提督は……艦娘は『ヒトのカタチをする兵器』と話していましたけど……生活はむしろ人間と同じようにさせてくれましたから」
　ボソボソと艦娘だった時の思い出話を語り始める。求めているがもう手の届かない場所にあるそれを懐かしむように。
　古鷹が元々いた鎮守府、大塚鎮守府は、先程本人が言った通り艦娘は兵器であるという考えの下、深海との戦争に勝利するために日々研鑽を続けていた。過酷な訓練と、徹底した規律で管理されるような場所。そこにいる艦娘の誰もが、それが当たり前であると認識しているくらいの場所。
　だが、その提督は兵器のメンテナンスには人一倍気を使うような者だったことが、幸せに繋がる一因となる。それは、艦娘という兵器を最高最善に使うための手段として、研究された食事と睡眠、そしてある程度の発散をさせることだ。
「ヒトによっては息苦しいと思えるほど機械的ではありましたけど……不思議と苦じゃありませんでしたね。自由な時間も与えられていましたし」
「へぇ、ならある意味ヒトとして扱われていたようなものなのね」
「かもしれません。艦娘という兵器の性能を最高に発揮させるための手段として、人間と同じ生活をさせるというところに行き着いたようですから。でも、あくまで私達は兵器なのだという考えは変わっていませんね」

そこは鎮守府それぞれのやり方なので口出しはしない。それで艦娘が蔑ろにされておらず、むしろ逆にイキイキとしているのなら、何の文句も無い。艦娘の運用方法に何が正しいという論は存在しないのだから。

人間として扱おうが、兵器として扱おうが、その運用方法が艦娘のことを考えてのことならば、それは間違っていない。それで艦娘が荒んでいないのだから。

「まぁ……もう遠い過去の話ですから。今はこの生活に身を寄せたいと思います。助けていただいたこと……本当に感謝しています」

改めて、頭を下げた。救われた施設の仲間として、古鷹は自分でもそういう存在なのだと認識し、これからをここで暮らしていくと決意する。

楽しく生きるというこの施設の方針に則ることが出来るかはわからない。古鷹の中には、贖罪の意識の方が大きい。むしろ、一生をかけて償っていくのだという信念の下、強く生きていこうと。

「そうだ、1つ気になってたことがあるんです」

ここで不意に海風が小さく手を挙げて発言。

「古鷹さん、以前白露姉さんを私達が救った時、春雨姉さんに向かって何か思うところがあったみたいなんですが、それは一体何なんですか？」

それは白露との2回目の戦い。義腕義脚を変形させて戦うという新たな戦術を編み出した時、1人では分が悪いということで撤退する古鷹が最後に口走った『もしかしたら春雨さんは』という言葉。まるで春雨があちらにとって何かある存在なのかと海風は気になっていた。

「ああ……アレですか。そうですね、話しておいた方がいいと思うので、話しておきます。もうその声も姿形も思い出せませんが、私達が行動していた理念については覚えています」

落ち着いて話せる状態にまで精神状態も回復しているため、ゆっくりそのことについて語っていく。

「1つは器を探すこと。姉姫さんの身体を求めています」

「言葉にされると複雑よねぇ……一度捨てたのに、今更もう一度欲しいなんてぇ」
死に体だったから器を捨てて中身だけとなったが、器がまともに生活しているのならそれをまた使いたいと言い出した。大分勝手なやり方ではあるが、悪意の塊をばら撒いているような輩なのだから、自分勝手でも全く疑問はない。
「そしてもう1つは……辿り着く者の排除」
辿り着く者。『観測者』にも言われた、深海棲艦化した春雨に芽生えた特殊な力。それが、黒幕にとっては邪魔であるという認識。
「私はあの時の戦闘で気付きました。春雨さんは、そういう力を持っているのではないかと」
「はい……私も後々教えてもらって、そういう力を持っていると知りました。まだ実感は無いんですけど」
「ぼんやりしている記憶ですが……その力に真に覚醒されたら、あちらにとっては厄介極まりないのだと思います。なので、見つけ次第排除するように言われていました。あの時は松さんと竹さんが妨害してくれたおかげで、そこまでやることはしませんでしたが」
そうで無かったら、白露を犠牲にしてでも春雨を沈めていたとのこと。下手をしたら実行に移されていたかもしれないと思うと、途端に怖くなってきた。
「春雨姉さんが覚醒すると、どうなるんですか？」
海風が問いただす。春雨のことだからだろう、大分必死。しかも、命に関わることなのだから。
「それは……すみません、私にはわかりません。でも辿り着く……ということは、あらゆる答えに辿り着くのではないかなと」
「答えに……？」
これだけではよくわからない。だが、それらしいことが何度か起きていることはわかる。
その1つが白露の救出だ。脚を刀剣として一撃で斬り払った時。春雨は殺すつもりでやったが、その一撃は最善である白露を正気に戻すという答えに辿り着いた。

音が聞こえない状態から周囲の状況を察知したのも、最善の答えに辿り着く1歩としての力の断片であろう。
「すごい、すごいです春雨姉さん。なら、姉さんが起こす行動は全て正しいと言っても過言では無いということになりますよ。本当に女神ですね。あまりにも神々しくて海風には眩しすぎます！」
「海風、だから言い過ぎだよ。それに、古鷹さんが言う感じ、私はまだ真に覚醒してないってことだと思うし」
まだ断片しか使えていないというその力は、類い稀なる直感というカタチで表面化しているだけ。答えに辿り着くのではなく、そこに繋がる道を何本か探し当てているというイメージ。まだ確実では無いため、春雨の選択したことが絶対に答えであるという確証は無い。
だから、信じ切るのは間違っていると、春雨は再三海風に言っているつもりなのだが、今の壊れた海風には神とも言うべき春雨の選択は絶対となっているため、なかなか聞き入れてもらえない。
「覚醒する前に排除する。もしくは……悪意の塊を注入して手元に置く。その手段を画策していたようです。先日鎮守府を襲撃したのも、春雨さんをどうにかするための布石だったので……」
鎮守府の危機があれば、春雨がどうにか出来ると考えての行動でもあったようだ。巻き込まれた鎮守府は堪ったものではない。
「春雨さん……貴女は……絶対に自分を守ってください。辿り着く力は、あのヒトをどうにか出来る希望の力なのかもしれないので」

まだピンと来ないが、春雨がキーパーソンになることは確定したようなもの。施設が発見されていない今ならまだマシだが、今後どうなっていくのかはわからない。

贖罪など必要なく

その日も平和な1日を送るため、各々施設内の作業へと散っていく。今回の春雨の作業は、当番が回ってきたため古鷹の世話係である。相方は勿論海風だ。

古鷹も大分回復し、ものによるが食事も出来るようになってきたため、世話係と言ってもあまりやることはない。強いて言うなら話し相手になることで、心を穏やかにしてもらうことくらい。

「海風、私のことばかり話すのは無しにしてね」

「姉さんがそう言うのならそうします。布教したかったんですが」

「勘弁して」

春雨の良さをただただ話し続けるマシンとなる海風に先んじて念を押して、古鷹が横になるベッドの隣に陣取る。海風も渋々といった感じに春雨の隣へ。

コマンダン・テストは身体を拭くためのタオルとお湯を取りに部屋を出ていた。手伝うと言おうとしたのだが、自分がやりたいと少し楽しみながら介護のために動き回る。

命への執着心が溢れているために、他者の命が救える行為はこの上ない喜びとなっているようだった。

「仲がいいんですね……」

春雨と海風の様子を見て、古鷹が微笑みながら呟く。敵だった頃とはまるで違う穏やかな表情。しかし、その奥には今までやってきたことの罪悪感が溢れている。既に深海棲艦だから泥となって溢れるようなことは無さそうだが、その分壊れることも出来ないため、自分から吹っ切れるしかない。

特に春雨は、古鷹自身が瀕死にまで追い込んで今の身体にしたのだ。白露もそうだが、その手にかけた者なのだから、罪悪感は普通以上である。ただ戦っただけでない辺りがさらに辛い。

「勿論。春雨姉さんは絶望に苛まれた私を救い出してくれた希望、光なので」

「そう……なんですね。そんなお姉さんを……私は……」

まるでジェーナスの自己嫌悪だ。何かあればすぐにそちらの思考に流れていき、どんどん落ち込んでいく。
今の古鷹は徹底したネガティブ思考と言っても過言ではない。朝食の時に痛みが無くなればポジティブになれるとは言われていたものの、そもそもの古鷹の性格に加えて、榛名の性質まで混じり合ったことにより、発散が出来ずに落ち込む一方である。
「古鷹さん、私はもう気にしていません。古鷹さんだって被害者です。私と同じようなもの……ううん、むしろもっと酷いんですから」
泥に侵蝕された結果、仲間達を後ろから撃って殺害した挙句、その亡骸と融合してしまうだなんて、瀕死の状態から寂しさが溢れた春雨よりも酷い感情に苛まれていることだろう。
そんな古鷹のことを鑑みて、春雨は慰めるような声で向き合う。実際、もう古鷹には一切の恨みはない。この古鷹は、春雨の仇ではないのだ。それはもう、金剛が斬り払ってくれた。
「だから、気にするなとは言えませんが、あまり思い詰めずに楽しく生きてください。叢雲ちゃんはああ言っていますが、割り切ってくれています。怒りが溢れたせいで口が悪いだけですから」
そう声をかけても、古鷹にはあまり効果が無いようだ。やはりまだ身体に痛みがあるため、それに引っ張られてネガティブが加速している。被害者に許されても、自己嫌悪によってそれが心に届かない。
どうしてもあの時の感触、感覚、思考が頭にこびりついていた。他者を嬲り、痛めつけ、逃げ惑うところを殺す。そしてそれを悦び、気持ちよくなっていたゲスな自分。
絶対に忘れられない。いや、忘れてはいけない。それがいつでも何処でも古鷹の心を抉る。
「……そうしたいのは山々だけどね……私はやっぱり、許されちゃいけない咎人だから……」
「そんなことは無いですよ。悪いのは古鷹さんをあんな風に変えた黒幕ですから。少なくとも私達は誰も責めません」
直接伝えても、古鷹は簡単には前を向けない。これは今まで当番として古鷹の部屋に入った全員が見ている光景だ。何か話を振ると、こ

うなってしまう。何かを考えるだけで、悪い方向に向かってしまう。
相手が叢雲であろうがお構いなし。誠実なところを見せたくとも、身体も心もそれに追いついてくれない。それがまだ叢雲の怒りを掻き立てそうになるのだが、薄雲がどうにか止めてくれていたようだ。
そして、今の部屋には春雨絡みになると感情が剥き出しになる海風がいる。
「姉さんが気にするなと言っているんですから、古鷹さんは気にしなくていいんですよ。ウジウジしていたら姉さんが悲しみますから」
少しだけ苛立ちも含まれていそうな言葉であったが、ここで当たり散らしては春雨が悲しむと我慢した。ここに春雨がいなかったら、海風は間違いなくやらかしている。叢雲ではないのに、叢雲のように怒りを見せていたことだろう。
「海風、大丈夫だから。古鷹さんだって、まだ自分を取り戻して時間が短いんだよ？　傷も治ってない時に、どうしてもネガティブになっちゃう」
だが、きっと開き直れる時が来る。春雨はそう確信しているように海風を落ち着かせた。春雨が言うことなのだからと即座に落ち着いたため、苦笑が抑え切れなかった。
「古鷹さん。まずは身体を治しましょう。そうすれば、考える余裕も出てくるはずです」
「……だとしても……」
「黒幕に一矢報いたいと思いませんか？　なんでこんな目に遭わなくちゃいけないんだって思いませんか？」
無いとは決して言えない古鷹。全て自分の手でやってきたことだが、あの泥を呑み込んで思考回路が真っ黒に染まる瞬間も覚えているのだから、あの泥のせいでという気持ちが無いわけでは無かった。
「……勿論、あのヒトには恨みも憎しみもあります。多分これは……私の中の最上さんと鈴谷さんの気持ちでしょう」
少し震えつつ、手を自分の胸へと押し当てる。ここにいるであろう、混ぜ込まれた3人。それを実感するために。
そこにはバッサリと斬られた傷があるのだが、ゆっくりと触れるだ

けなら少し痛いくらいで済んでいる。もう血が出ることも無く、デコボコした傷痕があるのみ。
「私と榛名さんは……すごく落ち込んじゃいます。でも、最上さんと鈴谷さんは……こなくそって気持ちが強いんだと思います。そんな気持ちが……私の中にも湧き上がってくるような、そんな感覚が」
目を瞑り、まるで自分の中に混じっている仲間達に問いかけるように、ボソリと呟く。
「私は……どうしたらいいのかな」
春雨にも海風にも届かない、本当に本当に小さな声。でも、自分の中に語りかけるような、確実な言葉。当然それに返答なんて無い。だが、気持ちを整理させるには充分だった。
白露のように、夢枕に立って後は任せたと言ってくれればいいのだが、残念なことに古鷹にはまだそれも無い。だから、自分だけで見出さなくてはならない。
「Ｅａｕ（お）　ｃｈａｕｄｅ（湯）、持ってきました。身体、拭きましょう」
と、ここでコマンダン・テストが部屋に戻ってきた。タイミングとしては良い方。このまま悩んでいても、古鷹はドツボにハマって抜け出せなくなりそうだった。
「古鷹さん、ゆっくり考えればいいです。答えは自分で見つけてください。私に辿り着く力があるとしても、その答えには辿り着きません」
「……はい。まだ時間はありますし……ゆっくり皆さんと考えていきたいと思います」
前向きになろうとしているのはわかる。だが、罪悪感がそれを後ろから引っ張る。
こればっかりは、春雨は手を貸さない。答えに辿り着けるとしても、それだと古鷹のためにならない。だから、辿り着けないではなく、辿り着かないと伝えた。
コマンダン・テストの手を借りて、身体を拭かれていく古鷹を、春

雨と海風は傍で見守る。
　拭く時だけは流石に服は脱がないといけないので、身につけているもの全てを消したのだが、インナー越しでも見えていた大きな傷が表に出てきたことで、その一撃の重さをよく理解できた。
　その傷は大分塞がってはいるもののまだまだ完治までは遠く、変に弄るとまた血が出てきてしまいそうにも見えた。そのため、身体を激しく動かすわけにもいかずに安静を強いられる。
「バッサリですね……それに、傷が少し歪（いびつ）……」
「春雨さんのような辿り着く刃ではなく、艦娘が作り上げた兵装なので……いくら鋭利でも限界はありますよ」
　春雨の作り上げた脚の刀剣は、その時の最善の答えに辿り着く刃だ。白露に対しての一撃も、超回復のことを知らずに放ったにもかかわらず、今を作り出した。
　だが、金剛が使った刀剣――比叡の近接戦闘兵装は、あくまでもそのために技術の粋を集めて作り上げられた至高の逸品というだけ。当然、最善の答えなんて考えていないため、一撃を喰らったモノの未来を断ち切るための刃だ。
　そんな攻撃から生き延びることが出来ただけでも幸運。丸一日以上の死より辛い激痛を耐え切ったことで未来を手に入れたわけだ。
「昨日と比べると、大分治ってきています。あと……そうですね、3日もあれば、この傷は薄くなると思いますよ。それに、痛みも同じくらいで無くなるかと」
　痛みをなるべく与えないようにゆっくりと拭いていくコマンダン・テストが、その傷を見ながら軽く説明する。
　昨日と今日の傷の治り具合から鑑みて、大体これくらいで治ると簡単に計算したくらいなのだが、傷を負ってからおおよそ1週間で完治と簡単に診断された当初の予定と大体合致する時間。
「Ｐｒｏｐｒｅｔ（清潔）▪にしておけば、自然と治っていきます。完治するまでは安静に、今まで通りの生活を続けましょう。それが終わったら、今度はＲ（リ）▪ｈａｂｉｌｉｔａｔｉｏｎ（ハビリ）ですね。体力が無いと聞いていますから、軽く身体を動かすことから始めていったりしましょう

ね」
「は、はい……そうさせて、もらいます」
　コマンダン・テストが捲し立てるように語るため、古鷹もタジタジである。それと同時に、自分にここまで親身になってくれることを驚いていた。
　やはり自分は敵に与した者であるという意識が強い。言ってしまえば、艦娘に対しても深海棲艦に対しても裏切り者と言えるような存在だと思ってしまっている。そんなことはないのに。
　それに直感的に気付いた春雨は、すぐさま口を出す。
「古鷹さん、まずは私達と仲良くなりましょう。怖いかもしれませんけど、心を開いてくれると嬉しいです」
　自分達は古鷹のことを敵だなんて思っていないと伝えるために、まずは春雨から動く。
　おそらく姉妹姫も同じようにしているはずなのだが、いろいろと引け目しかない古鷹には逆効果になっていた。春雨相手でも同じ。しかし、姉妹姫とは違う切り口で行けるのが春雨である。
「古鷹さんは重巡洋艦……でいいんですよね？」
「……戦艦の力を持たされているので、艦種は何とも」
「でも、少なくとも私達駆逐艦よりは上の立場ですから。まずは敬語をやめてください。多分これ、叢雲ちゃんからも言われてますよね」
　まずはそこから始めてほしいと訴える。敬語で話しているから壁を感じ、心の回復が遅れていく。まずは仲良くなるために、親しくするために、敬語を外す。それだけでも大分変わるはずだ。
　古鷹はそれに対してあまりいい顔をしなかった。そもそもの性格上、そういうことをするタイプでは無い。誰にだって丁寧で真面目な性格。
「難しいようなら、古鷹さんの中にいる誰かの性質を借りるなりしてやってみましょう。私達は、ただ古鷹さんと仲良くなりたいだけなんです。やられたことを忘れることが出来なくとも、その真犯人がわかっている以上、古鷹さんを責めることなんて出来ません。だから、ね？」

笑顔で古鷹の手を取る。
「……頑張ってみます。それが償いになるというのなら」
「まずその考えを捨ててください。償いとかどうでもいいです。仲良くなるのに贖罪とか必要ありません。でもどうしてもというのなら、償うために敬語を取ってください」
春雨にしてはズルい言い方である。そう言われてしまったら、そうせざるを得なくなる。
古鷹は自分の中の性質を利用して、現状を脱却しようと試みた。その結果が、
「うん、なんとかしてみます。でも……違和感があるかもしれないですけど」
「構いませんよ。古鷹さんは今日から新生古鷹さんです」

これで変わっていけるかはわからない。だが、少しだけでも前向きになれる時間が増えていけば、完治する頃には施設の仲間達と打ち解けることが出来ているかもしれない。

ドロップ艦

昼前。当番として古鷹の世話係をしていた春雨と海風も、そろそろ昼食だということで一度切り上げる。戦艦棲姫が戻ってきたところで古鷹はその艤装に乗せられ、ダイニングへと移動ということになるだろう。

「今日の哨戒って、確か白露姉さんとジェーナスちゃんだったよね。何も無いといいけど」

「そうですね。この辺りは静かな海ですし、大丈夫だとは思いますけど」

ここ最近は戦艦棲姫主導で毎日午前と午後で2回、哨戒を繰り返しているわけだが、今のところ痕跡は少し見つけたものの、それだけで済んでいる。泥が設置されているようなこともなく、何かを見つけたというわけでもない。

これに関しては、施設に敵対の意思を持つ者からは認識されないという特殊な場所になっているのではないかという憶測がある。そのおかげで、少し離れたところではあちら側の行動の痕跡が発見されるが、それ以外は何も無いというところに繋がる。

「あちらも一筋縄では行かなそうだし、充分に警戒はしないとね。ただでさえ姉姫様が狙われてるっていうことなんだから」

「それに、春雨姉さんもですよ。辿り着く力はあちらにとって排除しなくてはならない存在ということみたいですし、警戒を厳としなくては」

春雨が失われることが最もよろしくない海風にとっては、中間棲姫が狙われていること以上に春雨が狙われていることが心配なようである。

まだ充分な覚醒をしていないとはいえ、直感だけはかなり強い春雨。その状態でもあちらとしては脅威と見られているのかもしれないが、真に覚醒した時、手が付けられなくなると考えられているのだろう。

「身体が治ったら……私もみんなを守れるように頑張ります……ん、

頑張るよ」
「よろしくお願いします。みんなでこの平和を守りましょう」
古鷹も贖罪のために施設の者達を守るのだと決意していた。そういうカタチででも前を向くことが出来るのなら、誰も否定することは無いだろう。スタミナ不足は否めないが、戦闘能力が据え置きならば頼りになることは確定しているのだから。
敬語を外していくことも、何とかやっていこうと努力をしていた。叢雲相手には簡単に出来なかったが、春雨相手だと少しだけやりやすいようである。おそらく圧の違い。
しかし、まだ難しいようで、言った後でも少し表情が曇る。まだまだ先は長い。
「じゃあ、私達はお出迎えに行ってきます。コマさん、あとはよろしくお願いします」
「Ｏｕｉ．　Ａ（ま）ｐｌｕｓ（た）（後）ｔａｒｄ（で）」
哨戒部隊の出迎えというのはあまりすることはないのだが、何の気無しにやろうと春雨が言い出したので、海風も何の疑問もなくついていく。それこそ、春雨は何かに導かれるようにその行動を取った。

施設から外に出て、いつもの岸へと到着したところで、水平線の向こう側に人影。ちょうど哨戒から帰ってくるタイミングだったようである。相変わらず、行動を起こすといい感じの時間になる。
「あ、ちょうど戻ってきたね」
「ですね。でも、少し様子がおかしいような……」
遠目で見ても、何やらいつもと違う雰囲気。戻ってきたのがジェーナスだけだった。
これは異常事態である。ただの哨戒であるはずなのに、メンバーが減っているというのは普通では無い。
その事態に気付いたか、ジェーナスが到着する前に姉妹姫も表に出てきた。おそらく異変に気付いた叢雲が先んじて伝えたのだろう。戻ってくる人数が明らかに減っているのだから、感知の力によってこ

うするべきと判断した様子。
「ジェーナスちゃん、どうしたの？　戦艦様と白露姉さんは？」
出迎えた春雨が聞くと、少々疲れたようなジェーナスが息を整えながらも何とか言葉を紡ぐ。
「ど、ドロップ艦、が、いたの！」
今までに無いことが起きた。この辺りの海域でドロップ艦が発見されたことは、姉妹姫としては初めてのことだった。敵対の意思を持つ者を寄せ付けない力の存在を知る前から、他の艦娘が近くに現れるなんてことは一度たりとも無い。
とはいえ、哨戒したことで確認出来たくらいなので、大分遠いところ、今は叢雲でも感知出来ないところに現れたということだ。気付かないのも無理はないし、そこから施設の方にやってこないのも、何だかんだでその結界的な力が発揮されているからかもしれない。
「ど、どどど、どうしよう。艦娘見つけるなんて初めてだし、変に近付いたらおかしなことになりそうだし」
ひとまず白露と戦艦棲姫、そして海中の伊４７は、どうしたものかと気付かれないように遠くから見ているらしい。しかし、その場所は海のど真ん中。隠れる場所なんてない。なるべく視界に入らないように、水平線のギリギリまで離れたとのこと。
白露やジェーナスはまだ艦娘に近しい姿をしているため、接触しても誤魔化せる可能性はある。しかし、戦艦棲姫はかなり難しい。人間の社会に溶け込むための変装をしたところで、そんな者が海のど真ん中に立っているのは違和感しか無いだろう。だからといって艦娘に変装することも大変。ともかくあの艤装が嫌でも目立つ。
「ジェーナスちゃん、落ち着いてちょうだいねぇ。ひとまず提督くんに連絡しましょう。ドロップ艦なら、正しく鎮守府に引き取ってもらうことが一番いいわぁ」
流石に施設で艦娘を引き取るのは間違っている。ここはあくまでも溢れた艦娘を保護する施設であり、生まれたばかりの艦娘を保護する場所では無い。
そして、放置するのもダメだ。今はいつ何処に黒い泥があるかもわ

からない状態。その艦娘が侵蝕される可能性もあるし、そもそも敵に襲われていいように使われてしまうかもしれない。
　せっかく鎮守府と繋がりがあるのだから、それを使わない手は無かった。艦娘が本来いるべき場所に引き取ってもらうことが出来るのなら、そうするに越したことはない。
「大急ぎで説明するわぁ。ジェーナスちゃんは、戦艦ちゃん達にも伝えに行ってもらえるかしらぁ」
「お、Ｏｋａｙ！」
　中間棲姫がお願いすると、ジェーナスはすぐに踵を返してまた海の方へと駆けていった。
　それを最後まで見届けることなく、中間棲姫は施設へパタパタと戻っていく。すぐに提督に連絡をすることで、ドロップ艦を保護してもらおうという算段だ。
「お姉は提督に連絡を取りに行ったわね。じゃあアタシは念のため、周辺警戒をしておくわ。万が一は考えておいた方がいいもの」
　飛行場姫は即座に哨戒機を発艦。戦艦棲姫達がいるであろう海の向こうへと飛ばし、届くかはわからないが状況を見ておく。
「ね、姉さん、私達はどうしましょう」
「私達は待つしかないよ。狼狽えても仕方ないし」
　こうなってしまっては慌てても仕方ない。最善を選択するには、まずは落ち着くこと。施設の者がやれることなんて知れており、提督への連絡を中間棲姫が、念のための周辺警戒を飛行場姫が、そして現場の状況把握を哨戒部隊が行なっている以上、他の者に出来ることはもう無い。
　春雨は一呼吸ついた後、何事もなく哨戒部隊が施設に戻ってくるのを待つことを選択した。直感的に、今は何も起きないと判断した。それが正しいかはさておき、動きようが無いのだからこれが正解だろう。
「そのドロップ艦が何者かは知らないけど、今この場でドロップしたのか、この辺りまで彷徨ってきたのか、そこがわからないと何とも言えないわね」

飛行場姫が呟く。それを聞き、春雨も無言で頷いた。
前者だった場合はまだマシだが、後者だった場合は既に泥に侵蝕されている可能性がある。艦娘だからという理由もあるが、施設に近付けるのはやはり控えた方がいいだろう。

その現場。目のいい戦艦棲姫がそのドロップ艦がギリギリ見える位置に待機し、その行動を確認していた。
「白露、貴女ドロップ艦のことってどれくらい知ってる？」
「あたしがドロップ艦だから多少詳しいよ。最初はあんな感じに海に放り出される感じかな」
白露はドロップ出身。海上で生まれて鎮守府に保護され、そしてそのまま所属することになった。
その時はドロップして少しそこに漂った後、鎮守府の部隊に発見されてついていくことになったようだ。待つ時間はまちまちではあるが、早いとドロップしたその場に艦娘達がいる。遅いとそこで数時間待ちぼうけということもあるようだ。
そして酷い時は、ドロップして保護される前に深海棲艦に襲われるということもある。一通りの武装が揃っているドロップ艦でも、相手によっては苦戦どころか沈められる可能性だってあった。そのため、基本的にはドロップ艦はドロップした時点で近場の鎮守府、もしくは近場を巡航中の部隊に発見してもらえるように、陸の方に向かって移動する。
「あたしは生まれたところから少し動いてから見つけてもらったかな。海のど真ん中でその場に留まるって危ないし」
「まぁそうね。独り身で生まれたなら、仲間がいる方に無意識に向かってもおかしくないわ。帰巣本能っていうのかしら」
「どうだろう。でも、何となくだけど陸の方ってわかるんだよね。あたし達ってそうやって出来てるのかな」
「かも知れないわ。私達と違って、海より陸に魂が惹かれてるのはわからなくはないもの」

正しい判断が出来る状態ならば、艦娘は陸の方向が何となくわかるように出来ていた。とはいえ、ドロップした場所によっては陸までがかなり遠いこともあるだろう。それもあるから鎮守府は定期的な近海哨戒をしているというのもある。

そこまで対策を取っていても、かなり確率が低いもののドロップした直後に強力な深海棲艦の部隊に襲われるなんてことだってあり得た。

白露はそちらも思い当たる節がある。ミシェルの件である。

「ミシェル……多分卯月だよね。あの子は……ドロップ艦で陸に向かってるところをあたしと古鷹さんがたまたま見つけて……近付いて後ろから撃っちゃった。ああなっちゃったのもあたし達のせい……だもんね」

ドロップ艦の最初の孤独を知っているからこそ、そこを利用して殺したことを静かに悔いていた。

「今は気にしないことよ」

「そう言われてもなぁ。あ、でも、今話したことは妹達には内緒ね。あんまり落ち込んでるところ見せられないから。昨日の夜は思い切り愚痴っちゃったけど」

「いいじゃない。それで気が晴れるなら、吐き出せるだけ吐き出した方がいいのよ」

妙に理解力が高い戦艦棲姫に救われた。白露は施設の一員となってから、仲間達に救われ続けている。

「古鷹さんも、あたしみたいに救われてほしいなぁ」

ボソッと呟いたが、そこにはあえて戦艦棲姫は何も言わなかった。

「おーい！　姉姫に話してきたわ！」

そこでジェーナスが現場に戻ってくる。鎮守府に連絡したということで、そこの部隊が到着するまでは今のまま遠目に見ておくというところに落ち着いた。何事も無ければ良し。何かあったら、うまく手を出す。

結局あの鎮守府に保護されるとなれば、深海棲艦のいる施設と関わり合いを持つことは確定する。なので、万が一の時に救うのもどちら

かといえば問題ないだろう。
　むしろ、ここで何か起きた時に放置している方がよろしくない。それこそ、目の前で泥に侵蝕されるなんてことがあったらさらに問題になる。いくら相手が艦娘でも、脅威が迫っているのなら救うのが施設の方針だ。そこで仲間意識を持ってもらえれば喜ばしいもの。
「あの子は大丈夫？」
「ええ、まだ何もなってないわ。陸にゆっくり向かってるところね」
「なら良かったわ！　そのまま私達のことを知ってる鎮守府に保護されてくれるのが嬉しいわね！」

　しかし、そう簡単には行かない。そのドロップ艦に危機が迫っていることを、戦艦棲姫達はまだ知らない。

見守るだけでなく

戦艦棲姫達が哨戒中に発見したドロップ艦。今はまだ生まれたばかりなのかはわからないが、彷徨うように海のど真ん中をゆっくりと航行中。

それを見えるギリギリの位置から見守り、鎮守府からの部隊がその艦娘を保護するのを待つのが施設の哨戒部隊。放っておくことも出来ず、だからといって近付くことも出来ず、ヤキモキした時間を過ごしている。

「こうしている間に、もしかしたら何か起きてるかも……。大丈夫かな……」

それは施設側も同じであり、無事に保護されたという連絡が無ければ落ち着かない。今のところ春雨の直感は反応しておらず、何かしらの危機が訪れるようなことは無いように思われているものの、一番不安なのは春雨自身。自分の力を一切過信していない。

今までに何度かあった虫の報せだが、それに頼りすぎると、いざそれを受けなかった時に何かあった場合にショックが大きくなる。今回に限り悪寒も何もないという可能性だってあるのだ。

自分がどうにかなるのは何も問題ないのだが、自分のそれによって仲間達が痛い目を見るのだけは避けたい。

「春雨姉さんが何も感じないのなら」

「ううん、信用しすぎちゃダメだよ。絶対は無いんだから」

海風は春雨の力を１００％信用しているが、それが危ういことを何度も言い聞かせる。

「みんながここに戻ってきて、保護されたって教えてくれるまでは気が抜けないよ」

そういう思いもあるため、春雨は施設のある島の岸から動けない。何事も無く、朗報を届けてくれて初めてこの心配が無くなる。

春雨の言うことなら素直に聞く海風だが、春雨の『辿り着く力』で何度も危機を救うことが出来ているのだから、心酔してしまうのも仕方ないこと。

「そう……ですね。春雨姉さんがそう言うのなら」
「うん、だから、私はここでみんなの帰りを待つよ。妹姫様も哨戒機を飛ばしてるしね」
飛行場姫も、春雨達と共に岸から動かず、哨戒機を飛ばすことに集中している。この島に脅威が訪れないか、それに関係しそうな何かがないかを常に監視し、それを事前に察知する。
そのために、今回は高高度からの索敵も入れた。所謂『銀だこ』の投入である。知らずに鎮守府を襲撃した龍驤と同じことを始めた。
飛行場姫だって深海棲艦、しかも姫であり、その名の通り飛行場、つまりあらゆる艦載機を操ることが出来る。それこそ、鎮守府が扱う基地航空隊の真似事も出来るし、銀だこのような深海棲艦特有の艦載機までしっかり網羅しているのだ。
「少なくとも、この島の近くに何かあるってことは無いわ。そこは春雨の直感が働いてないのもあるわね。でも、遠くになるとどうかしらね」
そのまま銀だこは視野を拡げるために散らばりながら近海を調べ上げていく。大分遠目ではあるが、戦艦棲姫達の居場所がわかるほどには監視の目が及ぶようになっている。
「戦艦と白露、ジェーナスの姿は確認出来たわ。そのドロップ艦とやらに気付かれないように、気付かれないくらいの距離でつかず離れずって感じみたいよ」
「そうなりますよね。離れすぎたらその間に何が起きるかわからないし、近付き過ぎたら戦いになってしまうかもしれないし」
「ええ、いい判断だと思うわ。待ってれば鎮守府の部隊が来てくれるんだもの。イライラするかもしれないけど確実ね。叢雲だったらまず無理だったでしょうね」
ここにいないからと叢雲のことを話題に出してしまっていたが、春雨も海風も、それに対して何も言い返せないでいた。
現場に叢雲がいたら、痺れを切らしてドロップ艦に接近してしまうか、苛立ちを抑えるためにその場から離れるかのどちらかだろう。すぐに想像出来る光景である。

「もう少し行けば、そのドロップ艦の子も確認出来るかしら」
さらに視野を拡げるために、哨戒機を戦艦棲姫達の視線の先へゆっくりと向かわせる。基本的に銀だこは艦娘達には気付かれないような場所からの監視なのだが、万が一のことを考えて気付かれないように。
そもそも生まれたばかりなので練度なんてあって無いようなもの。高高度で無くても哨戒機の存在に気付かなそうな未熟なドロップ艦の姿が確認出来た。
その姿は飛行場姫でも判別は出来ないが、少なくとも知らない姿の駆逐艦。今まで見かけた艦娘の姉妹艦ということは無さそうであることは理解出来た。
「アンタ達、あの子のことわかるかしら。特徴を説明するわね」
哨戒機から得られるそのドロップ艦の特徴を語っていく。
飛行場姫が確認出来たのは、赤茶けた癖っ毛なセミロングの髪と、今までに見たことがない制服であること。その制服は、サスペンダーがついたものだという話である。
それを聞いた春雨と海風は、艦娘であった頃の記憶を搾り出して該当者を思い出す。閉鎖的な空間では無いのだが、鎮守府にいない艦娘というのは姉妹や何かしらの関係を持ったことのある者以外は
「朝潮型……ですかね。私も演習の時にチラリと見たくらいなので、あまり関わり合いを持ったことがないんですが」
「その髪型だと……荒潮ちゃん、かな。妹姫様、その子、スパッツを身につけていますか？」
「ええ、春雨の言う通りね」
これでドロップ艦は特定。朝潮型の荒潮。以前に何処かの鎮守府と演習をした時に見かけたのを思い出していた。その時はまだお互いに練度が低かったくらいにかなりの昔であり、海風はまだ鎮守府に所属していないくらいの時期である。
春雨と演習をした荒潮が今頃何処で何をしているかはさておき、そこにいる荒潮は、つい最近新たに生を受けた者。同じ顔の別人。
「なら、そのまま陸に行ってくれれば、荒潮ちゃんが鎮守府の一員にな

るってことですね。何事も無ければいいんですが」
「今のところは何も無いわ。今のところは」
特定が出来たため、周囲をさらに監視する。何も無いなら何も無いに越したことは無いのだが、この海域でただ1人、しかも生まれたての艦娘なんて、あまりにも危険。
そもそも今回のこの場所、以前春雨達が古鷹に襲撃されたところと然程離れていない場所なのである。つまり、あちら側はいくらでも襲撃可能な場所ということ。
それを知っているがために、飛行場姫も銀だこを持ち出して、自分が確認出来るギリギリのところまで哨戒しているのだ。今荒潮を確認出来たのも、飛行場姫が確認出来る限界。これ以上離れていたらもう姿を伝えるなんて出来なかった。
「んん？」
そして、銀だこを持ち出したことが功を奏した。その確認によって別の確認も出来てしまった。
「妹姫様、どうされました？」
「ちょっと……いや、見間違いじゃない。あれ、アタシと同じ艦載機よ」
飛行場姫と同じモノ。つまり、別の銀だこがそこにあるということだ。
この海域に別の艦載機があるなんて絶対にあり得ないことだ。施設には姉妹姫以外に艦載機が扱える者が存在しないし、今回のドロップ艦は駆逐艦。しかも銀だこが扱えるのは深海棲艦限定。
飛行場姫はすぐさま、その艦載機の使い手を探す。今でさえギリギリの範囲なのだが、少しだけ無理をして。
むしろその銀だこからもこちらの存在は確認されたようなものなので、ここからが危険。
「姉さん、悪寒とかは」
「無いよ。だから言ったでしょ。あんまり信用しきるのはダメだって……っ!?」
などと海風に話した瞬間、背筋を伝う悪寒。今までのモノより少し

軽めであり、突然崩れ落ちるようなことは無いのだが、強く震えて自分を抱き締める。
「今さら来た……!?」
「そうか、なるほどね。春雨、アンタの悪寒、仲間と認識した者の危機を察知するんじゃないかしら。そのドロップ艦が特定出来て、そのまま鎮守府に保護されて仲間になるってわかった途端に起きたわけだし」
むしろ軽めの危機――例えば、仲間に生死に関わることのない事件ならば悪寒は感じないのではと飛行場姫は分析した。見られているだけならばそれだけ。
毎度敵の動きが自分達に不利益を齎すから悪寒を感じるとなったら、途切れることなく悪寒を感じ続けることになるだろう。それこそ、謎の潜水艦を構成する何者かが殺害された時にだって感じ取ってもおかしくない。
ドロップ艦の荒潮に危機が迫っていることを感知出来たのは、もう鎮守府の一員として認識したからだ。仲間の危機、しかも生命の危機に繋がる事件の発生を虫の報せとして受け取った。
「荒潮さんが危険ということは、今近くにいる戦艦様達にも危険が……？」
「可能性はあるよ……あのヒト達なら自分達で解決出来るかもだけど、でも古鷹さんと白露姉さんに重傷を負わされたこともあったから……」
そうなると危険だ。あの時は1人で2人を相手しなくてはならなかったから相討ちのようになったが、今回はあちらがどれだけの戦力を引き連れてくるかわからない。それこそ、荒潮1人に連合艦隊を連れ回している可能性だってある。
むしろ、荒潮を沈めることなく泥で侵蝕し、鎮守府に送り込んでそのまま内部から破壊しつつ、2度目の鎮守府襲撃なんてこともやりかねない。それに、潜伏させ続けてこの施設を探し出すなんてことまで考えられる。可能性は尽きない。
「お姉にも伝えてくるわ。その荒潮っていうのはどうなるかはさてお

き、アンタがそういう反応を見せたってことはそれなりに危ないってことでしょ」
「は、はい。私達は、救援に向かいます」
「ええ、よろしく。アタシは島から出られないから、頼らせてもらうわ」
　すぐさま行動に移す。飛行場姫はこの現状を中間棲姫に報告し、施設の態勢を整える。春雨は海風と共に哨戒部隊の救援。救う必要があるかはわからないが、敵がどういう手段に出てくるかがわからない以上、少数で居続けるのはあまりよろしくない。
　そのため、合流して1部隊となることで、荒潮に迫る危機を秘密裏に対処する。表に出る可能性はあるのだが、そうなったらそうなった時。
「海風、行くよ！」
「はい、姉さん！」
　２人はいち早く施設を飛び出した。

　一方その頃、荒潮を見守る哨戒部隊。今のところは何事もなく、まだゆっくりとではあるが陸の方に向かっているのみ。
「このまま鎮守府のヒト達と合流出来ればいいのだけれど」
　ジェーナスがハラハラしながら呟く。先程連絡をしてもらったばかりのようなものだ。鎮守府の艦娘達が到着するまでにはまだまだ時間は必要。自分からある程度近付いていっているとしても、時間の短縮はそれほどでは無い。
「焦っちゃダメよ。付かず離れずを続けて、何事もなく終わってくれるのが一番なんだから」
「Ｙｅｓ．　わかってるつもりなんだけど、何だかドキドキしちゃうわ」
「気持ちはわかるけど、落ち着かないと。紅茶でもあればよかったわね」
　ジェーナスと戦艦棲姫が話している中、白露は周辺警戒を続けてい

る。こういう時こそ、あちら側の者は意気揚々と襲撃をしようと画策するはずだ。実体験のおかげで、多少なり考えていることがわかる。
白露があちら側だった時、こんな状況をどうするかを考える。古鷹としか行動を共にしていない上、黒幕の記憶が完全にすっぽ抜けているため、他に誰がいるかなどは思い出せない。だが、こんな海のど真ん中だ。やれることなんて高が知れている。
「……上、とか」
警戒の最中、不意に真上を確認した。目のいい戦艦棲姫がドロップ艦しか確認出来ていないということは、海上にはまだ見える範囲に何かあるわけではない。伊４７からも何も無いため、海中も今のところは心配は無いだろう。しかし、空ならば、何かしてくる可能性がある。
こちらに空母がいない以上、あちらに空母がいたら制空権は完全にあちらのものになるのだから、使わない理由は無いだろう。例えば、視認出来ないくらいの高高度から爆撃を仕掛けてきたり。
そして、空で何かが光ったように見えた。
「うっそ、ホントにいんの!? 急降下爆撃！」
叫び、即座に艤装展開。対空砲火のための高角砲を生成し、真っ逆さまに落ちてくる艦載機を的確に処理する。
白露だって艦娘時代は相当なやり手。そしてそのスペックはそのまま、むしろ数倍に膨れ上がった状態で、さらには妹３人分の力まで手に入れているのだから、かなり遠くの急降下爆撃ですら、いとも容易く撃ち墜とした。
「ごめん、もう見守るだけは無理っぽい！ 敵空母が何処かにいる！」
「ナイスよ白露。なら潜伏はもう無理ね。あのドロップ艦、私達が救うわよ」
「Ｏｋａｙ！ どうせあの鎮守府の仲間になってくれるんだもの、お付き合いはすることになるわよね！」

白露の対空砲火が引き金となり、戦艦棲姫達はドロップ艦の前に姿を現す決意をする。生まれたてには間違いなく収拾不可能な現状を

打破するため。
鎮守府の艦娘達が来てくれれば、さらに有利になる。せめてそれまでの時間を稼ぐ。倒せるのなら万々歳だ。

悪意

仲間の危機を虫の報せとして受けた春雨。飛行場姫も自分のモノではない銀だこを発見しているため、何者かがドロップ艦荒潮を狙って暗躍していることが確実である。

施設では既に鎮守府への連絡はなされているが、それだけでは間に合わない可能性を考え、岸で哨戒部隊の帰投を待っていた春雨と海風は、救援のためにその海域へと向かっていた。

「悪寒が取れない……嫌な予感が止まらない」

向かっている間でも、春雨は嫌な予感がし続けていた。腰砕けになってしまうほどの衝撃では無いものの、ジワジワと真綿で絞められるような悪寒。それが何を意味するのかはわからないものの、悪寒があるということは、この先にいる仲間達に危機が訪れるということにほかならない。

「姉さん、大丈夫ですか？」

「向かうのに支障はないから大丈夫。急ごう」

あまり不安がって間に合わなくなっても困る。駆けるのに問題がないのなら、一直線に現場に向かうのがいい。

広い海で何処で待機しているかは飛行場姫に聞いているため、迷うこともないだろう。今なら春雨が直感的に選んだコースが正解である可能性も高い。

「ドロップ艦の荒潮さんに危機が訪れているかもしれないということは……またあちら側の襲撃……ですよね」

海風が不安そうに話す。今の状況から考えられるのはそれしか無い。銀だこが発見されたということは空母がいることもほぼ確定だ。

以前鎮守府が襲撃された際に古鷹と共にいたという軽空母龍驤がいる可能性は極めて高い。そちらも高高度からの監視により周囲を確認して、近接戦闘の徒手空拳や中距離の駆逐主砲、さらには魚雷まで取り回す猛者だ。

さらには、まず確実に1人で来るようなことは無い。古鷹の代わりを連れてくることは間違いない。それがさらに空母なのか、それとも

別の艦種なのかは勿論わからない。しかし、苦戦する可能性は高いだろう。
「こっちが人数集まれば大丈夫、なはず。私達が何処まで相手出来るかはわからないけど、勝ち目が無いわけじゃないよ」
「はい……きっと叢雲さんや薄雲さんも来てくれますもんね」
「多分ね。あっちが連合艦隊引き連れてきても、何とかなる……っていうか、何とかするよ」
自信満々には言えないが、哨戒部隊は即戦力ばかりが揃っているのだから、一切の抵抗を封じられて敗北するということは無いだろう。特に戦艦棲姫は強力な戦力。本人が非好戦的でも、その実力はここにいるメンバーの中でもトップクラスである。
それに、白露の実力は嫌というほど理解しているし、ジェーナスだって駆逐艦とは思えない程の規格外の装甲を誇っている。伊４７も叢雲を海上で止められるくらいの力を持ち合わせているのだから、万が一海中に敵が現れても一方的にやられるようなことは無い。
「慢心は出来ないけどね。あちらは手段選んでこないみたいだから。一番は、落ち着くことだよ」
「……そうですね。姉さんの言う通りです」
不安は拭えずとも、とにかく落ち着いて。これが勝率を最も上げる方法だろう。悪寒は取り除かなくとも、いつものように向かい、いつものように立ち向かう。これだけでいい。
艦娘のときから続けてきたやり方だ。それを忠実に再現し続けるのみ。白露を相手にした時だって、最初は動揺したがまともに戦うことは出来ている。
「だから、急ごう」
「はい！」
仲間を手助けするため、２人は速力を上げた。

一方、現場。荒潮に向かった高高度からの急降下爆撃は、白露が対空砲火により撃ち墜とす。突然の爆発でそこにいた荒潮はビクッと

驚いたように身体を震わせた。
何が起きたのかとキョロキョロしているところに現れたのが戦艦棲姫率いる深海棲艦の部隊。全員姫級という知らない者が見れば地獄のような状況。熟練の艦娘ですら尻込みするような状況に対して、生まれたてのドロップ艦は目を丸くしていた。
「ああ、やっぱり驚いてる。あんまり脅かさないようにしないと」
「貴女達はいいけど、この子が少しね……」
白露とジェーナスはまだ艦娘として見えるが、戦艦棲姫は言い訳が出来ないレベルで深海棲艦なので、もう正直に本当のことを言っていくしかない。戦艦棲姫の艤装も申し訳なさそうにしていた。
「え、えぇっと、どちら様かしら～？」
自分を攻撃してこない相手と思ったが、少しだけ冷や汗をかきながら対応する。まだ爆音でドキドキしているようだが、比較的落ち着いているようだった。
荒潮という艦娘を知る者がここにはいなかったものの、これなら話が早いと早速本題に入る。こういうときは白露かジェーナスに任せた方が良さそうと、戦艦棲姫が一歩下がった位置に。
「あまり素性は語れないんだけど、アンタ今狙われてるみたいなの。あたし達が鎮守府に連絡とっておいたから、保護されるまで守る。いい？」
「ふ、ふ～ん……私が狙われる理由がちょっとよくわからないけど」
「適当に利用するために無差別で襲ってるんだよ。だから、アンタは運が無かったってだけ。でも、あたし達がちゃんと守るから」
少し早口で説明しつつ、爆撃機が来たであろう方向を見据える。最悪な場合、また高高度からの急降下爆撃が放たれるため、上も前も警戒を強めて。
さりげなく戦艦棲姫も海中の伊４７を呼び出す。荒潮には気付かれていないが、海面に少しだけ頭を出して、海中には何者もいないことを伝えてもう一度潜っていった。
「敵は海上艦だけ。視界には……入った。少なくとも空母は２人いる。他にもいるかもしれない」

一番目がいい戦艦棲姫が白露に伝える。その瞬間、見ている方向から膨大な数の艦載機が飛び立っていた。
ここで対空砲火が出来るのは、一応全員。戦艦棲姫も三式弾に近しい弾幕が張れるため、その艦載機を墜とすために全員一斉に艤装を展開する。
「全部は厳しいかも！　避けながら行くから、自分の身はなるべく自分で守って！」
「わ、わかったわ～。生まれたばかりだけど、頑張るわ～」
「避けやすいようにするからＮｏ（問題）ｐｒｏｂｌｅｍ（無い）！」
ジェーナスもあの巨大な装甲の艤装を展開し、荒潮の正面を遮るようにして壁となる。
適当な空襲くらいならば、ジェーナスは傷一つ付かないだろう。それくらいに強固。急降下爆撃で艦載機そのものがぶつかってくるなんてされると質量に負けかねないのだが、それでも簡単には潰されない。そのため、本当に危ない時は、この装甲の中に入れてしまえばいいとまで考えていた。あと１人くらいは入れるスペースはある。
「対空砲火しながら、こちらも牽制しておくわ」
戦艦棲姫の艤装の万能性がここで発揮される。その巨腕を海面にバンと叩きつけるように置いた瞬間、両肩と背中に大口径の三連装砲が展開。見えている空母２人に対し、強烈な砲撃を放つ。
空気が震える程の火力は真っ直ぐ水平線に向かって飛び、着水した瞬間に魚雷の爆発以上の水柱が立ち昇った。直撃していれば間違いなく致命傷の一撃だが、相手がなんであろうと容赦なく撃ち放った。
「んじゃあ、こっちも行くよ！　ジェーナス！」
「Ｏｋａｙ！」
白露とジェーナスは、その隙間を埋めるかのように対空砲火を開始。向かってくる艦載機を次から次へと撃ち墜としていく。しかし、量が多いため全てを撃ち墜とすのは到底無理。そのため、自分達に被害が出ないように必要最低限を墜とす。
あちらの艦載機も一直線ではなく蛇行や速度の増減を繰り返すことでフェイントを仕掛けてくるものの、２人はそれでも的確に対処し

ていく。特に白露は見事に狙い撃ち、百発百中。
「Ｗｏｗ！　シラツユ、凄いわ！　全部狙い通りなのね！」
「そりゃあまぁ４人分だからさ！」
　これにより荒潮は無傷で守られることになる。飛んでくる艦載機の破片と煙で咽せつつも、何事もなく耐えることが出来ているので、時間稼ぎは充分出来ていると言えるだろう。
「アレではまだ終わらないわね。まだいるわ」
　戦艦棲姫が苦い顔をする。先程の砲撃は牽制ではあったものの、そんなことで怯むこともなく突っ込んできていた。
「貴女は先にここから離れなさい。ジェーナス、貴女が側にいてあげた方がいいわ」
「Ｏｋａｙ．　いざという時は艤装で守れるものね！　それじゃあここで離れるわ！」
　空襲を攻略したため、一旦艤装を消して荒潮の手を引くジェーナス。戦艦棲姫と白露、そして海中の伊４７にこの場を任せ、荒潮を鎮守府からやってくる艦娘達に引き渡すことを優先。
　ジェーナスは鎮守府の場所はわからないが、荒潮の帰巣本能を頼り、どちらに行けばいいかを聞きながらここから離れればいい。

　それを荒潮が望めば。

「ごめんね～。私、今から仕事があるのよ～」
　少しだけ戦艦棲姫と白露から離れた瞬間だった。荒潮が不意にジェーナスを引き寄せた瞬間、いきなりキスをした。
「!?」
　あまりのことでジェーネスは気が動転してしまった。ただのキスではなく、口同士、つまりディープキス。しかも、舌で口をこじ開けるように濃厚に。
　そして、
「んううっ!?」
　荒潮の口から何かが注ぎ込まれた。明らかにおかしい行為。注が

れるものも、荒潮の唾液やそういうものでは無い。どう考えても艦娘の体内で生成されるようなものではない。
それは、泥だった。
「っ!?」
すぐさま引き剥がそうとするが、荒潮の力が妙に強かったことで、無理矢理注がれ、嫌でも喉の奥へと入っていく。どう考えても荒潮の体内から出てくるとは思えない量を体内に入れられ、そしてゴクンと呑み込んでしまった。
それを確認出来たからか、荒潮は自分の中にあるそれを全てジェーナスに注ぎ込み、そのまま白眼を剥いて倒れ伏した。
「えあっ、な、なっ……!?」
気付いた時にはもう遅かった。ドクンと心臓が高鳴り、心が黒く染まっていくような感覚。艦娘としての思考が次々と塗りつぶされ、オセロのように白が黒へと置き換わっていく。そしてそれが、まるで苦痛では無かった。
艦娘を侵蝕するよりも緩やかに、さらには本来の深海棲艦とするために泥はジェーナスの体内を暴れ回る。
「ひっ、や、ああっ!?」
自分の身体を抱きしめ、ブルブルと震える。しかし、その表情は笑顔だった。あまりに心地良く、深海棲艦としての自分を取り戻していくような清々しさまで感じる。
「ふぁあああっ!?」
古鷹には起きなかった現象。深海棲艦の身体を侵蝕したために起きた、抗いようのない快感に、ジェーナスは悲鳴のような嬌声を上げた。さすがにそんな声を聞いたら戦艦棲姫も白露も驚いてジェーナスの方を見る。
「えっ、じぇ、ジェーナス……!?」
その時には、ジェーナスは最後の変化をしていた。艦娘には出来ない、自らの衣装を艤装のように替えることが出来る深海棲艦特有の力で、今の心境を表に出すかのように姿を変えていく。
元々は艦娘時代の制服が少し改変されている程度だったのだが、今

のジェーナスはまるで違った。悪意の塊に侵蝕されたことを体現するかのように、邪悪なレオタードドレスを身に纏い、腕には二の腕までのロンググローブが、脚にも太腿まで覆うニーハイソックスが出来上がっていた。
「っあ、ふぁあ……っ」
何度か震えて侵蝕の快感を享受しつつ、息を整えた。未だにビクンと震えるが、落ち着いたところで身体を起こす。
快感で頬を赤く染めており、その瞳からは確実に悪意が漏れ出していた。紫色の炎が灯り、戦艦棲姫と白露のことを敵として認識した目で見ていた。
「う、うそ、ジェーナス……なんで……」
あまりの出来事に白露は動揺してしまっていた。その表情は、自分があちら側にいた時と同じだとすぐにわかった。
戦艦棲姫も無言で苦虫を噛み潰したような表情に。聞こえるレベルの舌打ちまで。
「っふぅ……とっても気持ちよかったわ。今でもウズウズしちゃう。泥に呑み込まれるのって、こんなに気持ちよかったのね」
ジェーナスからは聞いたことのない他者を見下すような声色と、格下を見るかのような瞳。そして、動揺する2人を見て心底悦ぶゲスな笑み。白露の震える声を聞いて気分が良くなったのか、また身体を震わせていた。裏切りの興奮が身体を駆け巡り、息を少し荒くする。
「お、そいつに入ったんか。計画通りとはいかんけど、そっちの方がええかもしれんな」
そうこうしているうちに、戦艦棲姫の牽制砲撃を抜けてきた空母の1人、龍驤がニヤニヤしながら立っていた。
ジェーナスはそれを確認し、ニコッと笑ってレオタードドレスのスカートを摘み、龍驤に恭しくお辞儀する。
「ええ、これからは私もそっち側に行くわ。だって、そっちの方が楽しそうなんだもの。みんなを殺したらもっと気持ち良くなれるのよね？」
「おう、せやで。見かけた艦娘ぶっ殺して、目的を達成すんねん」

「わぁ楽しそう！　早く気持ち良くなりたいわ！」

ここにはもう、施設の者達が知るジェーナスはいない。魂を侵蝕され、黒幕の支配下に置かれた敵。悪意の塊に呑み込まれた哀れな深海棲艦と成り果てていた。

侵蝕

ドロップ艦の荒潮を救うため、深海棲艦であるにもかかわらずその前に出た戦艦棲姫率いる哨戒部隊。しかし、荒潮を先んじて逃がそうとしたジェーナスは、突如その荒潮に襲われてしまった。

キスされ、舌を捻じ込まれ、そのまま体内に泥を吐き出されたことにより、その場で侵蝕。荒潮は気を失って代わりに、ジェーナスが悪意の塊に呑み込まれ、快感の中豹変した。

「んっ、ふぅ、まだ気分が昂って仕方ないわ。あふ、興奮がすっごいの。シラツユもこんな気持ちだったのね。仲間を殺すのってどれだけ気持ちいいのかな。考えるだけでも堪らないわ！」

悪意に侵蝕されたことを表すかのようなレオタードドレス姿となったジェーナスは、変貌した自分を見て絶望を感じている白露の顔を見て余計に興奮していた。ニタリと笑みを浮かべ、自分を抱きしめながら震える。

自己嫌悪が溢れて深海棲艦化した結果、仲間思いの優しい性格となっていたのがジェーナスだ。元々の性格もあるだろうが、それがより顕著になり、常に仲間を気にかけていた、それこそみんなの姉とすら言えるくらいの聖人だった。

それなのに、悪意に侵蝕されたことで、完全に真反対となっていた。サディスティックな快感に目覚め、仲間を格下と考え、虐げることに悦びを得る。絶望を感じた表情が愉しくて仕方ない。そしてそれを踏み躙りたくて仕方ない。

「Ｓｃｒｅａｍ（悲鳴）を聞かせて。Ａｎｇｕｉｓｈ（苦悶）ｅｘｐｒｅｓｓｉｏｎ（表情）を見せて。私をもっと楽しませて。それで最期は、苦しみながら死んでね！」

一度消した艤装が再度展開されていく。しかし、以前の身体を完全に包み込む艤装とは違い、どちらかと言えば艦娘ジェーナスのような背中に背負うタイプの艤装が現れる。所々は明らかに深海棲艦であるとわかる生体艤装。

さらには腕や脚にも装甲が纏わりつき、その度に小さく嬌声を上げ

た。余程気分がいいのか、昂揚した表情を見せながら、真っ先に白露へと向かって行った。
「ジェーナス……!?」
「なぁにシラツユ、命乞い？　だったら気持ち良くなれるくらい惨めったらしく言ってね。今でも充分に気持ちいいけど、もっともっと気持ちよくなりたいの！」
　ジェーナスは接近戦なんてするタイプではない。だが、豹変したことでその手で痛みを与えたいと考えたことで、拳を振るうようになった。腕に纏わりつく装甲はガントレットのように変化し、殴り飛ばしたモノの壊れる瞬間をその身で感じるために薄く、しかし簡単には破壊出来ないほど強固なモノとなる。
　対する白露は動揺を振り払い、即座に村雨の錨を展開。ジェーナスの拳をギリギリで受け止めた。ゴギンと鈍い金属の衝突音がし、その衝撃を完全に吸収。
「抵抗もいいわね！　その分、殺した時の快感が強くなりそうだもの！」
「この……っ、でもあたしもこうだったのかと思うと気分が悪い！」
「アハ、ヒャハハハ！　だったらもっと愉しみましょ！　すっごく愉しくて気持ちいいんだもの！」
　まず間違いなくジェーナスがやらない狂ったような笑い声と共に、手の次は足が出た。そちらの装甲も変形し、白露の脇腹を抉るような形状のグリーブとなる。
「させるかっての！　あたしだって、今までいろいろやってきてんだ！」
「いいわよいいわよ！　もっと抗って！」
　蹴りは錨に繋がれた鎖を使うことで軌道を逸らし、なんとか回避。だが、空いた手は再び変化。ガントレットから主砲に切り替わり、白露の肩を撃ち抜くために放たれる。
「っの！　あたしは！　こんなことで負けんのさ！　お姉ちゃんだからね！」
　それもギリギリで回避。肩をほんの少しだけ掠めたものの、擦り傷

程度に抑え込んだ。
咄嗟に錨を振り回し、薙ぎ倒そうとしたものの、それは当たり前のように阻まれる。ジェーナス本来の艤装、全身を包み込む球体の艤装が展開され、強固な守りが復活。弾かれることを確認したと同時にその艤装は再び失われ、変形した艦娘側の艤装となった。
攻撃する場合は、その苦悶の表情を眺めたいために軽装。防御する時は一切の攻撃を跳ね返す重装。それを使い回すことが出来る難敵と化したジェーナス。
「ヒャハハ！　いいわよ！　とってもＥｃｓｔａｓｙ（エクスタシー）を感じるわ！　もっともっと抵抗して！　そしてしっかり苦しんで死んでね！」
昂揚を隠さず、狂ったように笑い、時折小さく震えて恍惚としながら白露に猛攻を仕掛ける。白露は対応出来ているが、反撃は出来なかった。いくら侵蝕された敵だとしても、それはついさっきまで仲間だったジェーナスだ。どうにかして泥を吐き出させる必要がある。
しかし、泥を吐き出させる手段は、相手を瀕死にまで追い込むこと。しかも、施設の仲間達の中では春雨にしか出来ないようなモノだ。白露の手でそうすることはかなり難しい。
「どうすりゃいいのさ……！」
春雨達もこんなこと思いながら自分と戦っていたのかなどと考えつつ、打開策をどうにか考えていく。時間を稼ぐことは出来るかもしれないが、斃すことは出来ない。
そもそも堅牢な重装を打ち破ることが出来ない上に、魚雷まで持ち出すと中のジェーナスに致命傷を与えかねない。生死の狭間、ギリギリを狙う器用さは、４人分の力を持っているとしても、白露には難しい。

一方、戦艦棲姫は龍驤と対面していた。龍驤はこの状況を心底楽しそうにニヤニヤしているが、戦艦棲姫としては気に入らなくて仕方ない。
だが、それよりも先に泥を注ぐだけ注いで気を失った荒潮へと駆け

寄った。今は本当に何も無い、ただ利用されただけの艦娘。目を覚ましたらまだ侵蝕されたままかもしれないが、もしかしたらジェーナスに注ぐだけ注いで、自分の分は失っているかもしれない。
「この子は囮だったわけ？」
「まぁそんなところやな」
なるべく冷静に戦艦棲姫は龍驤に問うた。気分がいい龍驤は、その表情を崩すことなく話し始める。
「このままあの鎮守府に拾わせて、中からぶっ壊すつもりやった。誰でもええから、同胞（はらから）と繋がりがあるヤツを貰って、そのままソイツ使ってその同胞（はらから）まで潰す。お前らのことやな」
つまり、最初から鎮守府ではなく施設を狙っていたわけだ。施設の存在はわからずとも、艦娘と協力関係を持つ深海棲艦なんてどう考えても黒幕の害になることに決まっている。
そのため、荒潮を使って潜入させ、『良さそうな相手に泥を注げ』という指示を与えていた。高高度の偵察機で様子を見ていたのは、万が一荒潮が別の深海棲艦にやられてしまったら台無しになるからである。
そういうところは妙に慎重だが、嫌がらせのために尽力するのは性根が腐っている証拠とも言えた。
「へぇ……それで、なんでジェーナスに泥を入れたのかしら」
「艦娘守ろうとする同胞（はらから）なんて、そういうヤツらやろ。なら、そこからぶっ壊すわけや。結果的に艦娘なんて雑魚共引き込むよりイイモン手に入ったわ」
荒潮に与えられた指示はもう1つ。『自分を守る深海棲艦がいた場合、それにも泥を注げ』である。こちらは保険だったのだが、ジェーナスはそれに見事に該当し、荒潮は指示通りに注ぎ込んだ。
「なんとなくやけど、お前らアレやろ。アイツらと繋がってるんやろ」
「アイツらって？」
「姫の器と辿り着く力を持つヤツや」
ピクリと戦艦棲姫の眉が動く。勿論、龍驤はそれを見逃さない。
「古鷹から聞いとるで。辿り着く力を持っとるヤツ、艦娘とつるんど

るんやろ。だからアタリ付けててん。そしたらなんや、どんだけ確認しても見えへん場所ってのがあってな。そこにソイツと姫の器がおるとうちは睨んだ。で、その結果がコレや。上手いこと行きすぎて、笑いが止まらんなぁ」

ニヤニヤしながら暴れるジェーナスに目をやる。変わり果てて快楽のために仲間を攻撃するジェーナスの姿は、龍驤をも興奮させる材料となり、戦艦棲姫には苛立ちを呼ぶものにしかならない。

「まぁうち1人やったらキツいやろ。なんでもやれるとはいえ、お前さん、歴戦の戦艦棲姫みたいやからな」

「ええ」

「だから、念のため仲間連れてきてん。大正解だったみたいやな」

龍驤の後ろには、艦娘に見た目が近い深海棲艦が2人。そのうちの片方が龍驤の隣へ。戦艦棲姫が遠目に確認したもう片方の空母である。最後の1人はジロジロと戦艦棲姫を舐めるように見ていた。

「装甲空母、大鳳。申し訳ありませんが、貴女にはここで散ってもらいます。今後の壁になることは間違いありませんので」

「名乗らんでもええねんで大鳳。コイツは今から殺すんやから」

「そうかもしれませんが、私の性分なので」

今までの敵側の元艦娘の中ではかなりまともな精神構造をしている大鳳。礼儀正しく下卑た笑みも浮かべていない。不意打ちのようなものも仕掛けてこなそうな雰囲気。これは艦娘としての大鳳が割と強く出ているのか。

姿形も、まるで空母ヲ級を再現しているような白いインナーとスラックスで、身体のラインをハッキリと表に出しているが、本来のヲ級よりは少し小柄である。

などと話している隙に、もう片方の敵、小柄ではあるが確実に戦艦であろう何者かが、戦艦棲姫に向かって飛び込んでいた。

龍驤や大鳳とは少し違うその小柄な戦艦は、若干軍服のようなデザインの衣装ではあるもののショートパンツを穿いているためか活発で生意気そうなイメージを戦艦棲姫は持った。

「話が長いのよリュージョーは！　こんなヤツ、さっさとヤッちゃい

なさい！」
　手に持つ背骨のような形状の杖を振りかぶり、戦艦棲姫に襲い掛かる。苛立ちを抑えきれなそうな戦艦棲姫は、その攻撃に対して即座に艤装によりガード。巨大なそれは、杖如きの一撃ではビクともしない。
　その瞬間、杖をクルリと反転させた。その先端には主砲。接近したことにより命中率を格段に上げた状態による砲撃。戦艦の砲撃をまともに受けてしまっては、流石の艤装も無傷ではいられない。それに、そのまま撃たせたら荒潮にも被害が及びそうだった。そのため、砲撃の瞬間に強引に手を振り回すことで、杖による照準をズラした。
　敵の砲撃は見事にズレ、戦艦棲姫の遥か後方で爆散。その威力は、戦艦棲姫の砲撃と同じかそれ以上であった。直撃はやはり避けて正解。杖の先端だなんていうバランスの悪い場所から撃った割には、驚異的な威力である。
「はっ、その程度でいい気になるんじゃないわよ！」
「誰もいい気になってなんかないわ。ただ、貴女達の言動には心底腹が立っているだけ。でも、残念なことに貴女達も白露や古鷹のように利用されてるだけなのよね」
「負けて私達を裏切ったゴミ虫なんかと一緒にしないでくれる？」
　この言い草により苛つく戦艦棲姫。今では仲間であり、やらされたことに対する贖罪を真剣に考えている2人を侮辱する発言は、施設の居候をしている戦艦棲姫の逆鱗に触れかけている。
「まぁその分、あんないい感じのヤツが手に入ったわけだし、しかもアレ辿り着く力を持つヤツと姫の器の居場所知ってるでしょ。雑魚でもなく、必要な情報まで持ってる。こういう時なんて言うんだっけ？
　リュージョー」
「海老で鯛を釣る感じやな。そんな適当なドロップ艦1人で、上物ゲットは堪らんなぁ。ついでに他の連中まで始末出来れば万々歳や。あっちの裏切りモンの白露と、クソ邪魔なお前、あと海ん中に潜んどる潜水艦。しばき倒してアイツに居場所聞くで」
　荒潮のことも使い捨てくらいに言い、さらには侵蝕したジェーナス

も上物と巫山戯た物言い。戦艦棲姫も堪忍袋の緒が切れかけている。
温厚な深海棲艦である戦艦棲姫は、怒りを露わにすることなんてまず無い。以前に古鷹と白露から襲撃を受けた時も、ここまでは無かった。
しかし、そろそろ我慢出来そうに無かった。ジェーナスが奪われたこともあるが、それ以上に態度が気に入らない。大鳳はまだマシだが、龍驤ともう1人がダメだった。生かしてどうにか泥を吐き出させてやろうという気持ちも失せた。
「一応、聞いておくわ。そっちの、名前は」
「は？　なんでそんなこと教えなくちゃならないのよ。どうせここで死ぬようなヤツに」
「名前は？」
睨み付けるわけでもなく、冷酷な視線でただ見つめる。今までに無い圧だが、涼しげな顔。
「……まぁいいわ。なんだっけ、メイドのミヤゲだったかしら。教えてあげる。私はＣｏｌｏｒａｄｏ（コロラド）。覚えなくてもいいわよ。どうせ死ぬんだから」
名乗られたことで、戦艦棲姫はそうと一言。そして小さく海面を叩いて、伊４７も浮上させる。
「ヨナ、状況はわかってる？」
「うん……ジェーナスちゃんがやられたのも、知ってる。どうにも出来なかった……」
「この子、なるべく離れさせて。確実に巻き込まれるから。あとくれぐれも気をつけて。この子、まだ泥を持ってる可能性あるから」
小さく頷いた伊４７は、気を失っている荒潮を引きずってこの場から離れていく。
「……これでいいわね」
伊４７が離れていったことを確認した後、拳を強く握り、小さく溜息をついた。そして、鋭い眼光で３人を見据えた。

「生きて帰れると思わないことね。３人がかりでも、私は貴女達如きには負けないから」

白露も知るモノ

ジェーナスが侵蝕されてしまったことにより敵対。伊４７は気を失っている荒潮を戦場から引き離すことにより、施設側の人員は白露と戦艦棲姫の２人のみ。対する敵側は、ジェーナスを加えた上に、龍驤、大鳳、コロラドの４人。

ジェーナスは仲間を甚振りたいという気持ちが先行したか、何かを言うまでもなく白露に襲い掛かり、残りの３人は戦艦棲姫を集中攻撃しようと画策している。

だが、戦艦棲姫は３人を相手にしても一切臆さない。相手が強力な３人の深海棲艦だとしても、負けるだなんて１ｍｍも思っていない。

「生きて帰れると思わないことね。３人がかりでも、私は貴女達如きには負けないから」

かかってこいと言わんばかりに手をクイクイと動かす。多勢に無勢であるにもかかわらず、戦艦棲姫は余裕綽々。

だが、その表情は冷酷。怒りは最高潮に達し、本気以上の力を発揮することになるだろう。戦艦棲姫も金剛と同じく、怒りが限界を超えると静かになるタイプ。

「何それ。こんなヤツ私１人でもいいっての。リュージョー、タイホー、アンタ達は見てなさい。私だけでいいわ」

「やめとけやめとけ。調子乗っとると痛い目見るで。素直にうちらも手伝ったる。こういうんは、口だけや無いヤツや。慢心すんなコロ助」

「誰がコロ助よ！」

あちらが何をしていようが、戦艦棲姫はクスリともしない。来ないのなら、こちらからやってやると言わんばかりに、早速艤装が動き出す。

この艤装のおかげで１人ではなく２人として戦える。普通の戦艦棲姫ならば、艤装に全てやらせて本体は指示を出すのみだが、ここの戦艦棲姫は一味違う。

「漫才見ている余裕なんて無いのよ。でも、貴女はよくわかっている

ようじゃない」
艤装が巨腕を振りかぶり、真っ先に龍驤を狙った。この中で一番まずいのはコイツだと、戦艦棲姫も艤装も感じ取っていた。
当然だが、戦艦棲姫は目の前の3人を一切下に見ていない。むしろ、1人1人が自分と同程度、いや、上だとすら感じている。まず確実に、古鷹と白露を相手にした時以上の難敵。口ではああ言ったが、勝てる見込みはかなり低め。
だが、絶対に弱みは見せないし、見込みは無くても勝てると考えて戦う。今のような漫才をしていれば負けない。調子に乗って1人でやるとなれば、確実に負けない。
「図体ばっかのヤツに、うちがやられるかい」
艤装の拳は軽々と避けられる。当たれば致命傷という質量だが、元より大振りであるために、そもそも当たるなんて思っていない。
「でしょうね。でも、一応こちらも2人なのよ」
避けた瞬間を狙った本体の一撃。拳の風圧を使ってヒラリと舞い上がり、その手に主砲を展開して砲撃。
先程も述べた通り、戦艦棲姫の本体は艤装に全てを任せ切るのだが、こちらは本体も当たり前のように攻撃に転じる。
その主砲は戦艦のモノと比べると非力ではあるが、並の重巡以上の火力は誇る。
「おっと、なんやお前もわけわからんことやれるんか」
「生きていくための手段として仕方なくよ。私は戦うのが嫌いなの。貴女達みたいに野蛮じゃないのよ」
戦艦棲姫の砲撃を、龍驤はギリギリで回避。想定外の動きをされたことで少し驚いたようだが、見てから避けている辺り、スペックは相変わらず異常。
事実、鎮守府襲撃で返り討ちにあってから、さらなる強化を施されている。単純な全ての能力が倍近くに跳ね上がっていると考えれば、凄まじい強化である。
「この、無視するつもり!?」
そこへすかさず杖を振り回すコロラド。骨側の打撃武器としての

攻撃は、即座に対応した艤装がガード。砲撃でなければ、その強固な装甲で完璧に防御出来る。
だが砲撃は流石に厳しい。杖を逆側に向けた途端、艤装は海面に拳を叩き付けた。爆発のような水飛沫が弾け、それにコロラドを巻き込んだことで体勢を崩し、まともに砲撃させなくした。
コロラドは見た感じ、精神的に幼い。泥による侵蝕の結果が、こんなに我儘で目立ちたがりな子供のようになってしまったのかはわからない。だが、そこは付け入るところだ。
「きゃっ!?」
「無視なんてしないわ。でも考えてみなさい。1人に3人でかかってきておいて、貴女だけを見ているだなんて出来るわけないでしょうが。まぁ私は1人で2人分だけど」
言いながらも、次に視界に入ったのは大鳳。ほぼゼロ距離まで接近され、持っていたボウガンのような兵装を構えていた。
2人と違ってやたらと静か。冷静に物事を眺め、確実な一撃を叩き込もうとしてくる猛者。このボウガンも、撃ち方次第では艦載機の発艦にも砲撃にも使えるマルチ兵装。その時々で適切な使い方を即座に判断して使ってくる。
「貴女が一番怖いわ」
「それは褒められていると考えても?」
「ええ、それで構わないわ」
まずいのは龍驤だが、怖いのは大鳳。物静かに、何を考えているのかがわからない分、突然の攻撃がやたらと上手い。
今回放たれたのは砲撃。それを見越して戦艦棲姫は艤装と共にバックステップで回避。
やはり大鳳の砲撃もコロラドと同様に凶悪な火力。軽々撃ち放ったが、掠めただけでも大ダメージを受けそうな一撃。反動も相当なはずなのだが、ボウガンのような形状を片手で取り回しているにもかかわらず、お構いなしに連射する。
「空母が砲撃するんじゃないわよ。でもまぁ、何かが混ぜられてるってのは知ってるから、貴女達も戦艦の誰かが混じってるのよね」

「ご名答です。私には伊勢と日向が混ぜられています」
「あら、本当に礼儀正しいのね。好感が湧くわ。死んでもらうけれど」
そこまで律儀に教えてくるというのが逆に怖い。それだけ自分の力に自信を持っているということにも繋がる。
「ホンマ厄介なヤツや。ここで死んでもらわんと確実に面倒なことになるやろ。3人がかりで構へん。とっとと殺るぞ」
「了解」
「雑魚に手間取ってる暇なんかないのよ！」
もう少しバラバラなチームワークを続けてほしかったと、戦艦棲姫は心の中で愚痴を吐く。だが、こうなってしまったものは仕方ない。そういうところをまとめ上げる辺り、やはり一番まずいのは龍驤である。
「好きにかかってきなさい。鎮守府の子達のように、今度は私が返り討ちにしてあげるわ。泣いて帰ることも許さない」
今ここで危機に瀕していることは、きっと誰かが気付いている。春雨の直感が働いて勘付いたか、ジェーナスが伝えた時に飛行場姫辺りが哨戒機を出しているはずだ。その望みを力に、戦艦棲姫は3人を受け持つ。

その裏側、白露はしつこく攻めてくるジェーナスを必死にいなしていた。相手が相手であるために本気がどうしても出せないでいたが、こちらも増援が来るまでの時間稼ぎに走っている。
「ヒャハハハ！　シラツユ、一方的にやられてくれるのね！　ならもっと悲鳴をあげて！　お腹に響くくらいに気持ちのいい悲鳴を聞かせてよ！」
攻勢に出ているため、艤装は軽装。直接痛みを与えるというサディスティックな快楽のため、ガントレットで殴りつけている。白露は錨によってどうにか防御をし続けているが、艤装同士がぶつかり合う衝撃そのものが今のジェーナスには快感になるらしく、拳を振るう度に小さく声を上げた。

白露にはそんなことになっているジェーナスが見るに堪えなかった。かつての自分を見ているようで気分が悪く、救わなければならないと心が奮い立つ。
「ったく、この記憶が残るのが厄介だなぁホント！　救われても救われないのがタチが悪いね！」
錨を消し、艤装変化。背中の艤装が時雨のそれに切り替わった。
白露の艤装をベーシックとすると、時雨の艤装は砲撃特化。背部に2門の大型主砲を備え付け、それが可変して両腕に装備出来るようになる。今回はまさにそれを実行。背部艤装を変形させ、両腕に装備。
白露は瞬時にそちら側に戦い方を移行し、近接戦闘から中距離戦闘へとスタイルを変更。
「一回、離れるっぽい！」
錨が届くような距離で両腕の主砲をジェーナスに向けて構える。ほぼゼロ距離で狙い撃つのは、ガントレットが届いていない露出した両肩。もし直撃したら、ジェーナスは両腕をもぎ取られる場所である。
仲間に対してそんな攻撃をすること自体、普通なら躊躇われることだ。そこは白露にもどうしても抵抗がある。だからこそ、ここで思考の切り替え。こういう時に一切躊躇しない夕立の性格を反映させ、仲間であろうが敵対したのなら殺さずともダメージを与える方針へ。
「当たるわけないでしょ！　でも、そういう抵抗も最高に昂るわ！」
ジェーナスの艤装が軽装から重装へと切り替わり、白露の砲撃をいとも簡単に弾き飛ばした。
強固な球体艤装に完全に包まれたジェーナスは、大型とはいえ駆逐艦の主砲では傷一つつかない。
「それなら、こっちはどうかな！」
続けて、夕立の気質を利用して魚雷をその手に生成。魚雷発射管があるにもかかわらず、お構いなしに投げつける。強固な球体艤装をぶち抜くために、直撃させてその爆発を利用しようと考えた。
内部のジェーナスのことはまるで考えていない一撃。本当に突き破れたらその爆発でジェーナスも吹き飛んでしまいそうだが、知った

ことではないという容赦ない雷撃である。
「わぁ、危ないわね。でもそれは気持ち良くないからダメよ」
強固な重装甲の隙間から砲撃することで、その魚雷を爆破。そもそも届かせない。
砲撃では傷はつかないが、魚雷は回避ということは、魚雷ならば装甲を突き破れるということだろうか。つまり、魚雷なら通用する。
魚雷と同程度の火力ならば、あの強固な装甲を貫くことが出来ると考えるのなら、戦艦棲姫の主砲でも行けるだろう。だから真っ先に白露に向かってきたのかもしれない。
「もう、魚雷なんて全部木っ端微塵にしちゃうじゃない。相手が悶え苦しむところを見てじゃないと気持ち良くなれないわ。だから、もっともっと苦しむようにしなくっちゃ！」
あまりにもジェーナスからかけ離れた言葉。それと同時に、重装甲のまま突撃までしてきた。
装甲が大きくなっても鈍足になるわけではなく、ただ単に質量兵器としての体当たり。重装も攻撃に転換。
「ヒャハハハ！　これなら簡単には死ねないわよね！」
「んなもん避けるっての！」
いくら速度が同じで質量が上がっていても、やっているのは真正面からの突進だ。それは見てからでも回避出来る。しかし、紙一重で避けようなんて思ってはいけない。
故に、白露は即座に海面を蹴って大きくそこから離れる。それは間合いを取るためというのもあった。
時雨の艤装を展開中であるため、近接戦闘は厳しい。だからといって村雨の錨を扱うのも自殺行為だ。そうなると、元の自分の艤装に戻すのがベスト。
「闘牛かっての！」
回避しながら、元に戻した艤装によって重装に向けて砲撃。回避した瞬間に軽装に戻られることを防ぐためだ。
ジェーナスもそれを見越して、軽装に戻ることは無かった。白露の砲撃はやはり傷一つつけることは出来ない。だが、間合いを取ること

は出来た。
「もう、逃げ回るなら逃げ回るで別にいいのよ。でも、それならもっとDe(絶)spair(望)を表に出してくれなくちゃ！　私、もっともっと気持ち良くなりたいんだもの！」
　間合いを取ったところで軽装に戻ったジェーナスは、恍惚とした表情で自分の身体を抱きしめ、震えながらも白露を見つめる。その目からは、白露を甚振りたい、悲鳴を上げさせたいという気持ちが、嫌というほど滲み出ている。
　むしろ、最初の頃よりも悪意が強くなっているようにすら思えた。侵蝕されたばかりの時よりも馴染んでしまったということになるのだろう。
「それは流石にゴメンだね。今のアンタの思い通りにはなりたくないよ」
「でもさ、このままで私に勝てると思う？　今の私、とっても凄いのよ？　もう身体の中から力が湧き上がって湧き上がって仕方ないの。それもすっごく気持ちいいのよ！　シラツユならわかるんじゃない？」
　近しい経験を思い出し苛立つが、ジェーナスのためにもそれは表に出さない。
　白露が知っているそれは、古鷹と艦娘を襲撃して嬲り殺した時に得たモノだ。悲鳴と絶望に染まった顔で昂り、力が湧き上がってくるような感覚を得た経験は、ジェーナス以上に知っている。当時は今のジェーナスのように、その悦びに身体を震わせていた。
　だからこそ、今は嫌悪感しかない。そして、仲間がその場所まで堕ちてしまってことがそれを助長する。
「わかるけど、今のあたしには必要が無いよ。快感なんて以ての外。気持ち悪くて仕方ないよ」
「ざーんねん。勿体ないなぁ、こんなに気持ちいいのに。でも、もっともっと気持ちよくなれそう！」
　ジェーナスの視線が白露から外れた。釣られるように白露もそちらを見る。

「ジェーナスちゃん……何その格好……それになんで白露姉さんと……」
「まさか……泥に!?」
ここで春雨と海風が戦場に到着した。だが、変わり果てたジェーナスを見たことで、その顔は驚愕に染まることとなった。

特別な悪意

「ジェーナスちゃん……何その格好……それになんで白露姉さんと……」

「まさか……泥に!?」

ここで春雨と海風が戦場に到着した。だが、変わり果てたジェーナスを見たことで、その顔は驚愕に染まる。

２人の表情を確認して興奮したのか、ジェーナスはビクンビクンと震えてより恍惚とした表情となった。

「その顔が見たかったの！　絶望に染まっていくその顔が！　はぁあっ、堪らないわ！」

豹変したジェーナスに、春雨と海風は動揺を隠せない。もう泥の侵蝕を受けていることは確定しているのだが、ここまで変わり果てるなんて想像もしていなかった。

白露だって充分すぎるほど違ったし、元に戻った古鷹が戦っていた時から一変して大人しい性格になっていることを考えると、ジェーナスのこの変わりようは納得のいくものだった。

「そんな……なんで……」

「あのドロップ艦、罠だった。泥を持ってたみたいで、目を離した隙にジェーナスに呑み込ませたみたい」

ジェーナスが侵蝕される瞬間――キスをして口移しの要領で泥を流し込んだ場面を見たわけではないが、まず間違いなく荒潮が原因であるということはわかっている白露は、苦い顔で２人に説明する。それがまた２人にはショックだった。

春雨としては、仲間であると認識した荒潮にピンチが訪れるから悪寒を感じたのだと思っていたが、実際はそうではない。施設に来ていたため現場に後から到着したジェーナスのピンチを感じ取っていたのだ。それが悔しかった。

もっと早く気付くことが出来ていれば、もっと早く虫の報せを受け取っていれば、ジェーナスのあんな姿を見ることなんて無かったはずなのにと、泣きそうな顔で歯を食いしばる。

そしてそれは、ジェーナスを余計に興奮させる材料にしかならない。泥による侵蝕で、今の黒幕の目的は理解している。その内の１つが、『辿り着く力』を持つ者の排除だ。当人（春雨）がここに来てくれた上に、最も見たかった表情をしてくれたのが堪らなく嬉しく、より苦しめたいという歪んだ感情が湧き上がる。

「ハルサメ、貴女、姫にはとっても邪魔みたいなの。だから、私からは２つＣｈｏｉｃｅｓ（選択肢）を上げる」

頬を赤らめながら自分を抱きしめ、現れた春雨に問うジェーナス。そんな言葉に、一応耳を傾けた。

「Ｎｏ．１、ここで私に殺される。すっごく惨たらしく、悲鳴と絶望で私を悦ばせてくれたら最高！　今でも気持ちいいけど、私もっともっと気持ち良くなりたいから、ありったけの悲鳴をあげてね！」

ジェーナスの口からは絶対に出ないような、とんでもないことを口にしている。春雨は返答すら出来ないくらい驚いた。呆気に取られているというのもある。

そんな様子を見てニヤニヤしながら、次の選択肢を提示。

「Ｎｏ．２、自分からこっちに来て、Ｍａｌｉｃｅ（悪意）を取り込んで仲間になるの。そしたらまた友達に戻れるし、ハルサメも気持ちよくなれるわ！　私としてはこっちがＲｅｃｏｍｍｅｎｄａｔｉｏｎ（オススメ）よ！」

バチコンとウィンクまでしてくるが、最低最悪の選択肢である。１つ目はともかく、２つ目も死ぬようなものだ。自分から選ばせている辺り、さらにタチが悪い。

どちらも呑めるわけがない提案をしてくるのだから、ただただこちらを苦しめるためだけに問いかけてきただけだ。さらに動揺させるために。

だが、春雨にそんなことを言おうものなら、海風が黙っていない。ジェーナスに対して仲間であるという認識が、いとも簡単に消えていく。

「第３の選択肢を提示します」

「ん？」

「春雨姉さんを傷付けようとした時点で、ジェーナスさん、貴女はもう

私の敵です。死ねば姉さんが悲しみますから、死なないギリギリまで痛めつけます。今の発言を後悔してください。なので、こちらの選択は、貴女を斃すです」

それでもう会話は終わり。海風はもう止められなかった。春雨の前に躍り出ると、ジェーナスであろうがお構いなく砲撃と魚雷を放つ。殺さないと言いながらも、確実に始末するための行動。

海風にとっては、春雨に対しての敵対行動はその時点でアウト。相手が侵蝕によって敵対した仲間であろうが関係ない。命を脅かしたのだから、因果応報として命を差し出してもらうしかない。

「ウミカゼは乱暴なんだから。じゃあ、Ｃｈｏｉｃｅしたのは１つ目ってことでＯｋａｙね？」

だが、ジェーナスも冷静である。砲撃は重装となることで弾き返し、魚雷はあっという間に砲撃で爆破。

「ハルサメにはいっちばん嫌な気分になってもらって死んでもらうわ！　そしたら私、どれだけ気持ちよくなれるのかしら！　想像するだけでもＥｃｓｔａｓｙ（エクスタシー）を感じちゃう！」

そして軽装となって突撃。ガントレットとグリーブを作り上げて、海風に接近戦を仕掛けた。砲撃がしづらい位置まで間を詰めると、殺意の篭った拳を思い切り突き出す。

海風も対応し、右腕を盾に変形させてそれを防御。ガギンと艤装同士がぶつかり合う音が鳴り響いたが、その一撃で海風がふらついた。駆け抜けてきた分、勢いが違ったせいで、海風が少しだけ押し負けた。

「ヒャハハ、ウミカゼにも絶望をあげるわ！　んっ、んんうっ！」

そして、ここまで近付いたことをいいことに、突然ジェーナスがおかしな呻き声を上げ始める。

「せや、戦艦の。先にええこと教えておいたる」

「まだ話す余裕があるわけ？」

「当たり前やろ。それに、お前にも苦しんでもらいたいんでな。事実を知っといた方が気分悪くなるやろ」

３人を相手にしていても完全に互角に渡り合えている戦艦棲姫に、龍驤が語りかける。
　コロラドの杖を払い除け、大鳳のボウガンの射線からズレながら反撃するが、あちらも並ではないため、戦艦棲姫から繰り出される砲撃は当たり前のように回避。お互いダメージは一切無い。
「あのドロップ艦、荒潮に仕込んだ悪意の塊やけどな」
「ジェーナスに入れたヤツかしら」
「おう、アレな、特別製やねん」
　龍驤が放った魚雷は手に持つ主砲で破壊。その隙を見計らって艤装が拳を振るうが、龍驤は軽々回避。大振りの攻撃はどうしても当たりづらい。
「１人だけに注いでも、うまくいかんかもしれへんやろ」
　確かにその通りだ。荒潮は誰かに泥を注いだ時点で気を失っているくらいだし、隙を見て、例えば眠っている者の部屋に忍び込んで注ぐなりして仲間にするだろう。とはいえ、荒潮ともう１人となったところで、うまく行くとは限らない。
「せやからな、あの悪意の塊、増殖すんねん」
　古鷹は泥は増殖しないと言っていた。一度排除すれば、そこから増えるようなことはないと。だが、龍驤はそれを突然覆した。
「誰かの中に入ったらな、そいつと荒潮の中で次に注ぐ分に増えんねん。で、また注いで、そいつがまた増やして。うちが言いたいこと、わかるな？」
　荒潮の罠としての性能を、ここで改めて理解した。たった１人を鎮守府に入れれば最後、ネズミ算式に侵蝕をしていき、次から次へと艦娘を寝返らせる。最終的には全員が泥の支配下に置かれ、鎮守府は壊滅。記憶が据え置きであるため、施設の位置も丸わかり。
「気付いたな。んで、お前の仲間、荒潮を連れてった潜水艦もやけど、あっちはどうなると思う？」
　ニチャリと意地が悪い笑みを浮かべた。

「海風！　あのスーツを展開して！」
ここで春雨の直感が光る。海風の危機に、殆ど考えることもなくその言葉が口から出た。そして海風の春雨に対する信用も光る。言われた瞬間にほぼ食い気味に制服を替えた。
「ゲホッ！」
ジェーナスが突然咳き込んだと思いきや、その口からは何処から出てきたのだというレベルの量の泥が吐き出された。盾を張ってジェーナスの接近戦を受けていた海風は、それをモロに被ることになる。
「対策済みですよ……！」
ぶちまけられる前に海風は事前に戦艦棲姫や春雨が試していた泥対策のスーツに身を包んでいた。一切隙間のない全身を包み込むウェットスーツのような皮膜と、頭を全て隠すマスクが作り上げられ、泥を被っても何とか回避。侵蝕を免れる。
「流石は春雨姉さんです。ジェーナスさんがこう来ることを直感的に勘付いたんですね。私もあの現場にいて本当に良かった」
そして、盾を刀剣に切り替えてジェーナスを叩き斬る。
「っはぁあっ、これっ、堪らない気分になるわっ！　あの子が気を失ったのもわかるかも！」
しかし、瞬時に重装となったことで右腕の刀剣は弾かれてしまった。泥を頭から被ったことと、マスクを身につけたことで、若干視界が塞がれたのが最大限の力が発揮出来なかった理由。だが、全力で斬っていてもこの重装には歯が立たなかっただろう。並の武器では届かない。
「ああもう汚い。春雨姉さんのモノならまだしも、貴女の吐瀉物なんて鬱陶しい以外の何モノでもないですよ」
泥を振り払うが、完璧に拭き取ることは出来ないため、海風はこの姿のままでいるしかない。ここで服を元に戻そうものなら、確実に肌につく。
ひとまず海面に払い落とした泥は、主砲によって霧散させた。これで吐き出された泥は海風にこびりついたモノのみ。それもジェーナ

スを対処した後に適切に拭き取ることでどうにか出来る。
「海風、大丈夫⁉」
「大丈夫です。姉さんのおかげで侵蝕されずに済みました。しっかりガードしています。でも近付かないでください。まだ私には泥がついてますから、万が一があります。悔しいですが、今は離れておきましょう」
侵蝕を受けていないことは確認出来たため、ホッとした春雨。だが、安心してはいられない。ジェーナスはまだ健在であり、また同じようなことを狙ってくるかもしれない。新たな泥を吐き出すために装填時間が必要かもしれないが、一度しか出来ないとは言っていないのだ。
「洗い流す時間が欲しいんですけど。春雨姉さんと背中を合わせながら戦いたいので」
「させるわけ無いわよね！」
もう何度目かの軽装となり、次は海風に対して魚雷を放つ。
ジェーナスとしては海風もこちら側に引き込んで春雨を絶望させようとしたようだが、こうなってしまったらもう要らないと判断したようだ。元々仲間であろうが、邪魔をするなら死んでもらう。取り返しがつかない程に歪んでしまっていた。
「ちょっとちょっと、さっきまで遊んでくれていたでしょうが！」
だが、それを簡単にさせるわけが無かった。白露が海風に向かう魚雷を即座に破壊。大きな水飛沫が立ち昇ったことで、海風はそれを雨のように被り、まだ拭い切れていなかった泥も洗い流される。
だが、しばらくはスーツは脱がない方がいいだろう。また泥を吐かれる可能性があるのなら、最初から対策しておいた方がいい。
「シラツユはＰｒｉｏｒｉｔｙ（優先順位）が低いのよね。Ｎｏ．１は『辿り着く力』を持つハルサメ、Ｎｏ．２は死んだらハルサメが最高にいい顔を見せてくれそうなウミカゼ、Ｎｏ．３がシラツユなの。Ｏｋａｙ？」
「あたしはお姉ちゃんなんだけどねぇ。まぁそれならそれでいいよ」
白露も海風に倣って全身を覆うスーツ姿に。これで泥をぶちまけられても、その時は侵蝕されずに済む。

「でも、お姉ちゃんが妹達を守れずにどうするってんだ！　あたしは何のために４人分の力を持ってる！　春雨と海風を、守るためだい！」
　もう何の危機もない。だからこそ突っ込める。いろいろと脱ぎ捨てたことによって身軽になったため、白露は今までに出したことがないスピードが出せた。
「わぁ、シラツユもやる気満々って感じね！　でも、それがＤｅｓｐａｉｒ（絶望）に染まったら、私確実にＥｃｓｔａｓｙ（エクスタシー）感じちゃう！
　だから、２人ともハルサメの前で惨めに死んでよね！」
「死ぬわけ無いでしょう。私が愛する姉さんの絶望に繋がることなんて、絶対にあり得ない。姉さんに仇を成すのなら、例えジェーナスさんでも関係ありません」
「おうよ。その歪んだ根性叩き直してやる。春雨、アンタも来な！　姉妹３人で、この高慢ちきなお嬢様をぶっ倒すよ！」
　まだジェーナスが堕ちたことにショックを受けていた春雨だが、白露の激励に心を燃やす。
　侵蝕を受けているのだから、もう戦うことは免れない。どうにかして泥を吐き出させなければ、今ここで立ち上がらなければ、ジェーナスはこの姿で世界の敵として生き続けることになる。
　それは嫌だ。許せない。このままでは、絶対にいさせない。
「はい、救います。私はジェーナスちゃんを、必ず救います！」
　動揺は消え、迷いを振り払い、力強くジェーナスを見定める。変わり果てたその姿は見るに堪えないが、だが必ず救うと決意して、春雨も泥対策のスーツ姿に切り替わった。
　これならば２人の隣に並び立てる。泥が来ようが関係ない。全ての力を十全に使い切ることが出来る。
「ヒャハハハ！　３人がかりで立ち向かってくるのね！　でも、私の方が強いわ！　みんなみんな、私の前で無様に死んで、私を気持ち良くして！」
　自分の方が強いのだという絶対的な自信と、泥による悪意のブーストで、この状況でも快楽に染まった表情で３人と対峙するジェーナ

ス。

そんなジェーナスを元に戻すため、白露型の姉妹は力を合わせて立ち向かう。

泥対策のマスクを被ったのでわかりづらかったが、春雨の瞳にはいつもの青ではなく、白い光が灯ったことに、誰も気付くことは出来なかった。

兆

春雨と海風が合流し、白露も加わったことで、侵蝕されたジェーナス1人に対して3人で当たれるようになった。

「ヒャハハハ！　3人がかりで立ち向かってくるのね！　でも、私の方が強いわ！　みんなみんな、私の前で無様に死んで、私を気持ち良くして！」

心底愉しそうに狂気の笑みを浮かべるジェーナスだが、いきなり向かってくることはしない。自分を抱きしめてひとしきり快感を味わった後、ニヤニヤしながら何かを思いついたように3人から離れていく。

「でも、先にやらなくちゃいけないことがあるわ。Ｈｅｙ，Ａｉｒｃｒａｆｔ（空母）ｃａｒｒｉｅｒの方、話があるから一回合流しましょ」

1人でも自分の方が強いと言いながらも、あえてここで引くという判断が出来る辺り、狂っていても冷静である。それに、これが一番春雨達が嫌がる手段であるということも即座に理解出来ていた。

ジェーナスが龍驤にある話なんて、すぐに察することが出来た。姫の器、中間棲姫が住まう施設の場所を教えるためだ。万が一の時のことまで考えて、先んじて情報提供をしようと動き出す。

それはさせまいと動き出したのは白露だ。夕立の気質をさらに前面に押し出して、獰猛な獣としての戦い方へ。

「させないっぽい！」

その手には数本の魚雷。重装でもぶち抜くことが出来る火力をこれでもかというほど投げ付け、足を止めると同時にダメージを与える算段。

さらにはそこに春雨も動く。いつも姉の行動を見続けていた春雨だからこそ、直感も相まって今の白露が夕立の気質を利用していることに気付いていた。

前へ前へと仲間達すらも置いていく程に突き進む夕立のサポートは、同じ速度で後ろから追いながら砲撃により回避方向を妨げるこ

と。
「ヒャハハハ！　そんなので私は止まらないわ！　無駄な足掻きよ！」
　しかし、相変わらず砲撃は重装で跳ね返し、魚雷は隙間からの砲撃で爆破。止まらないどころか、速度が落ちることすらない。
「ならば、嫌でも捕まえます。これ以上、春雨姉さんの手を煩わせないでください」
　そこにすかさず海風が突撃。その右腕を鎖に変形させ、さらにはその先端に錨を生成。村雨の扱っていた錨を自分のモノとしてジェーナスに絡みつかせる。
「おっ、海風ナイスっぽい！　それなら次はっ」
　白露がスタイル変更。魚雷が消えて、同じ錨がその手に現れる。
「はいはーい！　あたしも手伝うよ！」
　最も錨を上手く使える気質の村雨に。海風と同様に錨を振り回した後、思い切り投擲してジェーナスに絡み付かせた。
「わぁ、面白いことするのね！」
　しかし、２人して引っ張ろうとした瞬間に、今度は絡みついていた重装が消えて軽装に。引っ張れていたはずの部分が失われて、海風と白露はその反動で後ろへ倒れ込むことに。
　だが、その時には春雨が前に出ていた。本来のスピードに追加し、突発的に脚を生やすことによるブースト。春雨が出せるＭＡＸ以上のスピードが出て、一気に手が届く範囲まで突撃。
「ハルサメ、まずは貴女が死んでくれるの？　惨たらしく、顔を歪めてくれると嬉しいな！」
「ごめんね、それには付き合えないよ」
　そして、脚を刀剣に。白露に対しても行なった、救うための刃を作り出し、ジェーナスに向けて蹴り上げるようにして斬り払う。
「ダァメ。私、その辺のやり方全部知ってるのよ？　その場で見てたわけじゃないけど、そういうことするってことは全部教えてもらってるんだから。ほかならぬ、貴女に」
　その斬撃は、重装の時と同じ強度を持つガントレットでしっかりと

受け止めていた。頑強な装甲に、春雨の刃では傷もつけることが出来なかった。
　それでも、春雨は止まらない。動揺することなく、次の一手に出る。まずは逃がさないことを念頭に、ここに食い止めるために。それには多少なりの痛みも必要だ。
「今は見逃してあげるって言ってるんだから、素直に言うこと聞いといた方が命が長くなると思うんだけど？　そんなに苦しみたいのかしら。私としては万々歳だけどね！」
　一撃を受け止めた直後に、グリーブに包まれた足で強烈な蹴り。ここまで直接攻撃を繰り出すタイプではないと驚きつつも、まるでそれが来ることがわかっていたかのように、紙一重で回避する。
　脚を一瞬だけ生やすことで小さくバックステップしつつ、着水と同時にもう一度脚を生やし、蹴り終わった後のジェーナスに突撃。
「猛烈なＡｔｔａｃｋは嬉しいけれど、そんな挫けないような顔は、私としてはＮｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕよ。もっともっと、苦しんでほしいわ！」
　寸前で重装に変化。勢いよく壁にぶつかるような衝撃になりそうだったが、失われた脚の表面で艤装を蹴り、ダメージ無しで着水。少しだけふらつきかけたが、小さく回転することで身体を安定させる。
「本当はこんなことしたくない。でも、やらないと救えない。ジェーナスちゃん、必ず救うから。絶対に、救うから！」
　春雨はジェーナスを睨みつけた。その姿は球体の艤装で見えずとも、狂気に染まったその目を見つめるように。
　その時、春雨の瞳がまた白い光を放つ。決意に呼応し、春雨の中にある何かが鼓動を始めている。それは、先程とは違い、ジェーナスには明確に確認出来た。
　それを見たジェーナスは、初めて危機感を覚えた。今の春雨は何かがまずい。確実に自分の方が強いはずなのに、本当に自分をどうにかしてしまうのではないかという、言いようのない不安。
　今のジェーナスには、春雨はここで排除しなくてはならない『辿り着く力』を持つ者としての認識しかない。仲間という意識は完全に消

え、痛めつけることも殺すことも何の抵抗は無い。だが、この春雨と戦い続けるのは良くないことが起きると感じた。
　それこそ、春雨の望む答えに辿り着くのではないかと。
「私はそんなこと望んでいないわ。だって、こんなに気持ちいいんだもの。みんなの顔が絶望に歪むのが、痛みで悲鳴を上げるのが、全部私のＥｃｓｔａｓｙ（エクスタシー）に繋がるのよ！　こんな快感、手放すわけないじゃない！」
　泥によって歪められた、ジェーナスからは考えられない言葉。そして、より一層龍驤との合流に本腰を入れる。
「それ自体が歪められてるんだ！　本当のジェーナスちゃんを取り戻すために、私は！」
　それが悲しくて仕方なかった。だが、それも救うための決意に変えて、春雨はより力強くジェーナスを見据える。
　そして、より強い決意が漲ったその瞬間、春雨には今まで見えていなかったモノが見えた。
「えっ」
　当人が一番驚いていたが、それが何かはすぐにわかった。そして、何をするべきかも。
　そうするためには、ジェーナスの動きを完全に止める必要がある。しかし、春雨だけではそれが出来そうにない。ただでさえ相当な力を持っていたジェーナスが、泥によるブーストにより手がつけられなくなっているのだ。
　だが、今の春雨には仲間がいる。信頼出来る味方が、すぐ側に。
「海風、白露姉さん！　ジェーナスちゃんの動きを止めて！」
　思い立てば即時行動。自分の目的を伝えずとも、姉妹は何の疑いもなく実行してくれる。お互いにお互いを信頼し合っているのだから。
　言いながらも春雨はその動きを止めるために砲撃を開始。重装であるため全く効く気配が無いのだが、多少なり動きを止めることは出来ている。
「任せてください。そんなジェーナスさんはこの世から消えてもらいます。でも、死んでしまったら春雨姉さんが悲しみますから、慈悲深

い春雨姉さんのためにも、生かして殺します」
「物騒なこと言うね。まぁいいか、まずは任せてよ。３人がかりならいくらでも行ける」
　改めて２人がジェーナスに突撃。砲撃は重装によって阻まれることが確実であるため、ある程度の威力が確定している火力、もしくは搦め手によって動きを止める手段を用意する。
　白露が出来そうなのは錨だけだが、海風はその右腕の変形によってかなり万能な動きが出来る。ここは、海風も春雨ではなく白露と組んだ方が春雨のためとなることが瞬時に理解出来た。結果的に春雨のためとなるのなら、一時的に春雨から離れる。それくらい、海風には苦でもない。
「まずは合流を止める。海風は春雨側からお願い」
「了解です、しぐ……間違えました。白露姉さん」
「今は時雨の気質で計算してるから、あながち間違ってないよ」
　最も冷静沈着に物事を捉えることが出来る時雨の気質を表に出して、ジェーナスを確実に追い込むための策を練った。海風には出来ることが広いおかげで、策は幾つでも思いつく。
　海風が一瞬間違えるほどに、今の白露の雰囲気は時雨を再現していたようだ。それだけこの戦いは白露の中での総力戦。
　自分と同じように堕とされた仲間は、絶対に救いたい。そんな気持ちが白露にも全力を出させている。
「海風、まずは重装にさせないことが大事……なんだけど、もうなっちゃってるね。アレが一番厄介だからね。軽装に戻したいかな。もう一度捕まえよう」
「脱がせるならそれがいいでしょう。逃さないようにするためにも」
　再度錨を展開し、２人同時にジェーナスへと投げつける。当然絡み付かせて動きを止めるため。先程は重装から軽装にされたことで絡みつきが外されたが、今回は逆にそれを狙った攻撃。
「それはさっき効かなかったの忘れちゃった？」
「覚えてるからやってもらったんだよ」
　その２つの錨の隙間を通るように、春雨が同じように突撃してい

た。重装で跳ね返した春雨の突撃と、軽装で回避した海風と白露の錨による拘束。それが同時に繰り出されたことで、選択肢を大きく狭める。

春雨の狙いは、あくまでもジェーナスの動きを止めることだ。重装ならば錨の鎖で確実に動けなく出来るが、軽装である方がやりたいことがやれる。

やっていることはさっきと全く同じ。しかし、その攻撃は何かが違った。特に春雨。目から漏れる白い光は、未だに消えない。

「ハルサメ、貴女が一番危ないわ。何か違う。さっきと違う。だから、さっきとは違うＡｐｐｒｏａｃｈ（対処法）にするわ」

相反する行動を同時に求められたことで、一瞬だがジェーナスが混乱した。しかし、最善を取るのなら撤退しながらの重装がいいという結論に達した。それを口にしてから実行に移す。

軽装だと、春雨の刀剣による一撃をまともに受けてしまいかねない。その一撃は、体内の悪意の塊を吐き出させる可能性が非常に高い、辿り着く一撃。重装ならばそれは一切効かないのだから、錨の鎖に絡み取られる方がまだマシと考えたようである。

「縛るのはいいけど、縛られるのは嫌よ。だから、すぐに離れてよね！」

さらには、錨の鎖を握る白露と海風に主砲を向ける。重装の状態でもその隙間から砲撃を放っていたが、今回は重装の上から主砲を出現させて狙いを定めた。

鎖を握っているために回避は簡単には出来ず、それを避けるためには鎖を離すなり錨を消すなりしなければ不可能である。

「ハルサメにはもっと酷いのを上げるわ。これが一番嫌でしょう！」

さらには真正面の春雨には雷撃。脚を消している春雨には魚雷が最も効くことも見越して、ありったけの魚雷を撃ち放った。

今のジェーナスの魚雷は並ではない。本来のサイズよりも一回りは大きく、火力も高い。それが何十本と一斉に襲い掛かる。

だが、春雨は嫌な顔すらしない。むしろ、それこそ待ってましたと言わんばかりに回避することなく雷撃の群れに突っ込んだ。

「ちょっ、自殺行為!?　そういうのは気持ちよくないわ！　もっと苦しんでくれないと！」
流石にそれは予想していなかった。白露も海風も既に錨と鎖を消して回避に移っていたのだが、本来やろうとしていた撤退が出来ないくらいに驚いてしまった。
白露も海風も、春雨がそんな行動を取ると思っていなかった。思わず救いにいこうとした海風だったが、マスク越しのその瞳には、絶対的な自信が感じ取れた。白く輝く瞳は、真っ直ぐジェーナスを見据えていた。

「ジェーナスちゃんを救うまでは死なないよ。傷もつかない。だって、そこに辿り着いたから」

凄まじい雷撃のど真ん中、1つ間違えれば終わりのその海上を、まるで舞うように突き進む。ここしかないというその1点を踏み、時には脚を生やし、時には跳び、時には回る。
神業とも言えるそのステップでジェーナスに触れられる位置まで来た春雨は、ある1点を見据えた。そこはパッと見、普通の装甲。周囲と同じ、強固な艤装。
「ここ」
そこを突くように脚を上げ、一瞬、ほんの一瞬だけ脚を生やす。
タァンと、撃ち抜くような音が響き渡った。それは魚雷はおろか、砲撃よりも弱い衝撃。
それなのに、ジェーナスの重装は、その1点を中心にヒビが入っていく。
「な、なんで……」
そして、ジェーナスの姿が見えるくらいにまで破壊された。

光の道

瞳に光が灯った瞬間、春雨には今まで見えていなかったモノが見えた。それは、海上に伸びる光の道。自分の足下から、ジェーナスの側にまで、ハッキリと見えた。時には道は繋がっていなかったが、少し離れたところにまた続きがあった。舞いながら進めば、必ずその光の道を進むことが出来、最後はゴールに到着する。直感的にそれを理解する。

それが、答えに辿り着くための道だった。この道をただ突き進めば、ジェーナスを救うことに繋がる。ゴール地点は、今の目的だ。

それを白露と海風が手伝ってくれた。錨を振り回して捕縛してくれたおかげで、動きが止まった。光の道はブレない。

春雨を一番の脅威と見たジェーナスが、これでもかと魚雷を放ってきた。それでも、光の道はブレない。

最初に見えたその道は、ずっとジェーナスまでの道を示し続けてくれた。

「ジェーナスちゃんを救うまでは死なないよ。傷もつかない。だって、そこに辿り着いたから」

そう宣言出来るくらいに自信があった。道の通りにその足を踏み出せば、きっと上手く行く。そう考えれば、もう一切の抵抗が無かった。それに、身体が軽い。

軽やかに一歩、また一歩と猛烈な雷撃の中を突き進む。海の上に輝く光の道を、ただ歩くだけ。ここでは脚を生やそう、ここでは一回転、ここは少し跳んで。見ているだけでどうすればいいのかは手に取るようにわかった。それが舞いのようになっていることなんて、春雨は自覚出来ていないが。

そして、驚愕するジェーナスをよそに、触れられるほどの位置に到着。全ての雷撃を躱し、光の道のゴールに辿り着いた時には、次の点が見えた。

ジェーナスの纏う重装甲の中にある小さな小さな光の点。そこを叩けば、ジェーナスを救うことが出来る。だが、そこだけを叩かなけ

れば目的は達成出来ない。
「ここ」
だが、春雨にはそこだけを撃ち抜く自信があった。砲撃ではダメでも、その脚でならば、いくらでも可能だ。それ故に、少しはしたないかななんて思いながらもジェーナスに脚を向け、ほんの一瞬だけ脚を生やした。
その脚は普通の脚では無い。先端が尖り、針のようになった、そこを貫くためだけに作られた形状。それを一気に生やして一気に消す。
タァンと、小気味いい音が鳴り響いた。そして、春雨は確信する。その針のような足の先端が、見据えた光の点を、一切のズレ無く撃ち抜いたことを。
その点は、春雨の辿り着いた答えだ。完璧な、ジェーナスを救うための一歩。
「な、なんで……」
その瞬間、艤装が破壊される。驚愕に染まったジェーナスの顔が表に出るほどに重装甲は砕け散り、目が合った。
そして、次の辿り着くべき答えが開示される。装甲を破壊するのはまだ前段階。真にジェーナスを救うためには、本人から泥を吐き出させなくてはならない。
今までは瀕死にすることによって泥を吐き出させたが、ジェーナスを死に追い込むのは春雨的にはもうやりたくないこと。白露の時は脚を刀剣に変えて死ぬほどの一撃を与えることでそこに辿り着いた。
今度は、そこまでしなくても泥を吐き出させる手段に辿り着く。
「絶対、救うから」
見えた光の点は、ジェーナスの左胸、心臓。
「望んでないわ！　私は、そんなこと！」
だがジェーナスは食い下がる。重装が失われても、まだ軽装が残っている。ガントレットとグリーブを作り出し、勢い止まらぬ春雨を迎え討つ。
春雨が砲撃も雷撃もしてこないことはわかっている。重装ですら、作り上げた艤装の脚によって何故か破壊された。だから、次の攻撃も

春雨は脚。ならば、軽装とはいえ突然やられることは無い。そう考えていた。
砲撃や雷撃で牽制するには近すぎる。だからこその咄嗟の近接戦闘。もう、他者の苦しむ顔が見たいだなんて言っていられなかった。全力の攻撃は躱され、鉄壁が破壊されたことで、立場的にも精神的にも追い込まれている。
だからだろう、ジェーナスは忘れている。ここにいるのは春雨だけではない。
「っしゃあ！　一本釣りぃ！」
中身が見えたことで白露が3度目の錨をジェーナスの胴に絡ませた。小柄なジェーナスの腕だけを絡め取るなんて出来やしないから、身体そのものを縛り上げる。
それは意図してかどうかはわからないが、鎖は腰に巻きついた。春雨が見ている光の点は、白露のこの行動によって妨げられることは無かった。
「私もいますよ。姉さんの側なんですから」
逆側から海風も錨をジェーナスに絡み付かせる。白露よりは精度が低くとも、そのおかげで縛り上げたのは脚だ。その場から動かさないために貢献する。
これで、ジェーナスはその場から動けない。自由に動かせるのは腹から上。両腕は動かせるが、これでは力を入れることも出来ない。
迎え討つ際に、砲撃ではなくガントレットを展開してしまったのも悪かった。間に合わないかもしれないが、ゼロ距離射撃をしていれば、まだ話は変わったかもしれない。
「姉さん、海風、ありがとう。これで、救える！」
より一層、春雨の瞳が輝いた。その光が、ジェーナスを救う光となり、今のジェーナスには恐怖となる。
怯える目で春雨のことを見つめても、春雨は止まるつもりは一切無かった。命乞いも、侮蔑の言葉も、嘲笑も、何も聞き入れない。ただ救うために、最後の一撃を繰り出す。
「いや、ハルサメ、やめ……」

「ごめんね、ジェーナスちゃん、ちょっと痛いけど、我慢しないで」
謝られても、それが本来のジェーナスの本心でないことはわかっている。ここで見逃したら、ジェーナスにとってもっと酷いことになる。だから、今だけは心を鬼にする。
脚を生やし、ジェーナスの左胸に触れる。幸いなのかはわからないが、ジェーナスの胸は大きくない。ここから衝撃を与えれば、何にも妨げられることなくその光の点を撃ち抜くことが出来る。
いや、今の春雨ならば相手がどんな体型をしていようが関係ないだろう。今のジェーナスのような薄い服であろうが、そこに艤装の鎧を着込んでいようが、もう関係無い。この一撃は、答えに辿り着いた一撃。
「戻ってきて」
ダンと、激しい衝撃が走った。空気すら震える春雨のその一撃は、蹴りを入れたわけでも踏みつけたわけでもない。ただただ、目にも留まらぬ速さで脚を伸ばして縮めた。ただそれだけ。
しかし、ジェーナスはその一撃のみで終わっていた。心臓に強烈すぎる一撃を受け、ほんの一瞬、完全に心臓が止まった。瞬き1回分の臨死体験。
「これで、大丈夫」
光の点が見えなくなっていた。それは、もうそこに辿り着いたという証拠。今の一撃で、ジェーナスが救えたということになる。
激しい衝撃を与えられたのにそれで終わったことで、ジェーナスは何も起きていないと内心思っていた。春雨から得体の知れない圧を感じ取ったが、重装を破壊出来ただけ。それ以上は何も起きないのだ。
そう考えた瞬間、ジェーナスの体内に異変が起きる。
「っえぁっ、っごほっ、おぼぉっ!?」
尋常では無い量の泥が、ジェーナスの口から吐き出される。何処にこんな量が入っていたのだと思える程なのだが、先程海風に対して吐き出した程なので、常時増え続けていると考えてもいいのだろう。
海風を侵蝕するために吐き出した時は、昂揚感と悪意による悦楽、

激しい衝動に突き動かされて快感の波すらあったが、今回はただただ苦しみしかない。身体の中が強引に洗浄されていくような感覚に陥る。

この時には、白露も海風も錨は消していた。春雨も一時的に少し離れて、ジェーナスが泥を全て吐き出す様を見届ける。吐き出し終えたら、この世から消し飛ばすためにも砲撃を放つことになるだろう。

「げほっ、おっ、おほっ……っあっ……」

どうにか全てを吐き出したのか、ジェーナスの姿が変化する。悪意に呑み込まれたことを体現していた姿から、春雨達の知る制服姿に戻ったことで、精神的な部分も救われたのだと理解出来た。

だが、まだ終わっていない。本番はここから。吐き出された泥は、まだその場に留まっている。そのままにしておけばまた誰かを侵蝕しかねないし、むしろ今すぐ誰かを狙ってくるだろう。対策をしているとはいえ、最悪の場合、この泥が施設に近付くなんてことすらあり得る。

「ジェーナスちゃん、ごめん。すぐにここから動くから」

返答すら待たず、春雨がジェーナスを抱えてその場から離れた。瞬間、見計らったかのように白露が浮いていた泥を霧散させるために砲撃を放った。しかも、時雨の艤装を展開して念入りに。

増殖するような悪意であるため、それこそこの場で最高の火力を出せる白露が何度も何度も撃ち放って消し飛ばしたことで、その全てがこの世から消え去った。

「オッケー。対処完了！　春雨、海風、アンタ達から見てどうよ！」

「そう……ですね、少なくとも私からは残っているようには見えません。春雨姉さんは」

「大丈夫かな。白露姉さんの砲撃で消え去ったのが見えたよ」

ならば良しと、白露がまず制服姿に戻り、それに倣って春雨も。それを見たことで海風も、海水で全身をしっかりと洗い流した後で元の姿に戻った。ここにはもう何も無いと、春雨も確信している。

とはいえ、何が起きるかわからないのが相手のやり方だ。霧散させたというのにまたここに泥が増殖する可能性もある。定期的に見

回った方がいいだろう。
「あたしは戦艦さんのところ行くから、ジェーナスのことよろしく！」
そしてすかさず、白露は未だ3人と戦う戦艦棲姫の救援のため、休む間もなく次の戦場へと向かう。
春雨も向かいたかったが、ジェーナスのことをこのまま放っておくわけにはいかない。何せ、ジェーナスの溢れた感情は『自己嫌悪』。今の状況に最もマッチしてしまった。ここで確実に悪いことが起きる。
「ジェーナスちゃん……大丈夫？」
脚が無いためジェーナスよりも小さくなっている春雨だが、うまく抱きかかえて濡らさないように支えた。
泥を全て吐き出したジェーナスは、その時は茫然としていた。先程までの自分の行動が信じられない。しかし、その言動を自分の意思でやっていた感覚はある。
だからだろう、そのまま大きすぎる発作が始まる。
「ごめんなさい……私のせいだ……私のせいで……みんなを……」
今までにない怯え方。ただの害ではなく、自分の手を汚し、自分の口で罵り、そしてそれによって快感を得ていた事実は無くならない。誰もがそれは敵のせいであると理解していても、ジェーナス本人が自分自身を許せないのだから、簡単には振り払えない。
「そんなことないよ。ジェーネスちゃんは悪くない。何も悪くないよ。だってほら、私達は誰も傷ついてない。何も無かったんだもん。それに、今ジェーナスちゃんをおかしくした元凶は、みんなの力で全部消した。ジェーナスちゃんは、何もおかしくない」
泣きじゃくるジェーナスを撫でながら、思いを伝えていく。あんなことにはなってしまったが、ジェーナスは何も悪くない。ジェーナスを利用して目的を成そうとした黒幕が全て悪いのだ。そう言い聞かせて慰めていく。
だが、自己嫌悪の塊となってしまったジェーナスには、春雨の言葉は届かない。ずっとごめんなさいごめんなさいと謝り続け、自らの死すら願うようになってしまっている。今は春雨が抱きかかえているから何も出来ないが、手を離したら命を絶つために行動をし始めてし

まうだろう。
「ジェーナスさん、春雨姉さんも、私も、白露姉さんだって、何も感じていません。誰もが、貴女のことを責めません。だから、強くなってください」
海風の言葉は少しだけ強い。立ち直れとかではなく、強くなれという激励。自己嫌悪を乗り越えて、今よりもっと強くなれと。
「無理……無理よ……私はもう無理……みんなを傷つけて、みんなを馬鹿にして、みんなを殺そうとして……私のせいで嫌な思いをさせちゃった。死んだ方がマシ……私が死ねば全部終わるの……」
「私は、ジェーナスちゃんがいなくなった方が嫌だよ」
自己嫌悪を口にするジェーナスに対し、春雨はそれをハッキリと否定する。
「ジェーナスちゃん、死んじゃったら残された者はもっと辛い目に遭うんだよ。それこそ、ジェーナスちゃんみたいに自己嫌悪が溢れちゃうかもしれない。そしたらジェーナスちゃんだって嫌だよね？ジェーナスちゃんのせいで、私達が一生苦しむことになるもん」
「そんなの、そんなのダメ……でも、でも……」
「ジェーナスちゃんがいてくれれば、私達は幸せ。でも、いなくなったらすごく辛い。ジェーナスちゃんは、どっちがいい？」
聞くまでもないことである。答えは前者だ。ジェーナスは自分が大嫌いでもその分仲間達を愛している。その仲間達が一生苦しむ道を自分が作ってしまうなんて、死んでも耐えられない。
だが、生きていても精神的なダメージを与え続けるのではないか。あれだけのことをしでかしたのだから、顔を見るのだって嫌なのでは。ジェーナスの頭の中はそういう考えしか出てこない。
「……ジェーナスちゃん。言葉だけでわかってもらえないなら、行動で私の思いを伝えなくちゃ。私は1人でも欠けられるのがもう嫌なんだよ。だから、死にたいだなんて言わないで。一緒に歩いて、一緒に生きて、一緒に克服していこう。その方が……その方が『寂しく』ないから」
抱えるだけではなく、強く抱きしめた。顔を胸に押しつけるよう

に、温もりを与えるように。
「うあ……うあああああんっ！」
ジェーナスは決壊し、声を上げて泣いた。春雨も海風も、それを見ていることしか出来なかった。

ジェーナスは取り戻せたが、その分、大きな後遺症を残すことになった。いつものジェーナスに戻れる日が来るのかはわからない。
それを作り出した黒幕の存在に、春雨は怒りしか湧かなかった。それは叢雲のように溢れてしまいそうなくらいに。

1人で2人の姫

春雨達がジェーナスを救っていた裏側。戦艦棲姫は龍驤達3人との戦いを続けていた。

たった1人でも艤装とのコンビネーションのおかげで対等に戦えている。実際、実力としては龍驤達1人1人の方が上なのだろう。だが、それでも、戦艦棲姫は全く後れを取ることなく対応出来ていた。

少なくとも、3人は連携らしい連携はしてこない。コロラドがやたらと前に出たがり、それを龍驤と大鳳がサポートするように隙を狙ってくる。ただそれだけ。

そのおかげで、手練れの戦艦棲姫にとってはかなり戦いやすかった。今まで連携などしなくても虐殺が出来たのだろう。だから、いざこうなった時にグダグダ。

「悪意の塊が増殖する言うてんのに、お前さん冷ややかな顔しとるなぁ。荒潮連れてった潜水艦のこと心配やあらへんのか？」

戦いながらもおちょくるように話す龍驤に、戦艦棲姫は意に介せず艤装を嗾ける。

伊47には、荒潮がこの戦場で巻き込まれないように離れるように指示をした。その時に、まだ荒潮が泥を持っているかもしれないとはしっかり伝えてある。それをちゃんと理解してここから離れているのだから、再び泥を吐き出されて侵蝕されるということは無い。

スーツの意味が無かったということも無いはずだ。戦艦棲姫は実際に見ていないが、ジェーナスが吐き出した泥を被った海風は、侵蝕を受けずに済んでいる。正しく対処すれば、その侵蝕は怖くないことが確定した。

「……私に心配させて、十全の力を出させないようにしていると言いたいわけ？」

「まぁな。だからうちは事実ばかり言うとんねん。お前らが気分悪うなるタイプの事実はしーっかり伝えたる。嘘とつかへん」

この龍驤は泥の影響によりとことん歪んでしまっている。先程のジェーナスとはまた一味違った加虐趣味の持ち主のようだ。

自分で相手を痛めつけ、苦しむ顔を見て快感を得ていたのが歪んだジェーナスだが、龍驤はあくまでも口撃が主体。ペラペラと喋り続けて相手をイラつかせ、その上で動揺などまでさせて精神的にダメージを与えつつ、圧倒的な力で踏み潰す。どんな相手でもそのスタンスを崩さない。

だが、戦艦棲姫のような相手と戦うのは初めてなのだろう。ここまで抵抗出来て、口撃すら素知らぬ顔。むしろ、戦艦棲姫より自分達の方が格上なのだと気付いているのに、まるで崩れる気配が無い。

「じゃあ教えてあげる。少なくとも私はヨナのことを信じてるし、もう貴女達の思い通りにもならない。煽りたければいくらでも煽ればいいわ」

「ほーん、随分と余裕やないか」

「そう見えるならそうなんでしょうね。私としては、これを維持するだけでも結構必死なんだけれど」

3人からの猛攻は一切止まらない。近接戦闘と戦艦の火力を両立するコロラド、同じだけの火力と至近距離からの艦載機発艦を扱う大鳳、そして砲撃の威力は並かもしれないが雷撃までをも組み込んでくる龍驤。3人だけでも1部隊の力を優に超えている。

対する戦艦棲姫は、艤装とのコンビネーションがあったとしても出来ることは戦艦の域。深海棲艦という枠組みでも上位に位置するとはいえ、自由度はそんなに高くない。

なのに、まだまだ余裕を見せつける。そんな戦艦棲姫の表情に苛立ちを見せるのは、やたらと前に出てくるコロラドである。

「アンタ、実力隠してるわけ!? この私がここまでやっているってのに、ほとんど無傷で抑え込まれるってどういうことよ!」

「なら、貴女が私以下ということでしょう。認めなさい、コロ助」

「リュージョーならまだしも、アンタに言われる筋合いは無いわよ!」

戦艦棲姫が煽り、コロラドが反応する。こうやって口撃が効くコロラドがいるおかげで、戦艦棲姫は自分のペースを維持出来る。

むしろ、戦艦棲姫だって心の中では怒りが煮え滾っているのだ。ドロップ艦を使って罠を仕掛け、ジェーナスを侵蝕し、さらにはまだま

だその手を拡げようとしている。それを嘲笑いながら実行出来る相手に対して、怒りは止まらない。
だが、その怒りに呑まれたら確実に自滅する。それを理解しているがために、戦艦棲姫は冷静も維持する。戦艦棲姫が冷静ならば、艤装だって完璧な動きを続けてくれる。
「全く、感情任せに武器を振り回すことなんて子供でも出来るわよ。だから私より上かもしれないけど、簡単にいなせるのよ。おわかり？」
力いっぱい振り回した杖を、艤装がついには掴み上げた。しかし、その瞬間に杖を消し、そして別の場所に再展開するという荒技まで見せつけてきた。
結局杖での打撃は艤装に弾かれるだけなのだが、そこは怒り任せでも理解しているようで、艤装を破壊するために反転させた状態で展開し、砲撃の乱射を始める。
流石に当たるわけには行かないため、本体も艤装もそれは華麗に回避し続けた。掠めることはあれど、直撃はない。そして、戦艦であるが故に耐久力も高く、掠った程度なら顔を顰めることもない。
「あら、意外と頭を使えるのね。この中では一番アレなのかと思ったのに」
「アレって何よ。まさか私のことをＩｄｉｏｔ（マヌケ）だとでも!?」
「ええ。でも、考え方を変えるわ。貴女、意外とやるじゃない」
言いながらも、戦艦棲姫は後ろから狙ってきていた龍驤に砲撃。本体はそちらを向いていなかったが、艤装側の視界によって背後の動きも頭に入れている。
反応されるとは思いつつも、ここまで綺麗に来るとは思っていなかった龍驤は、ヒューと口笛を吹き回避。駆逐艦が混じっているからか、回避能力は段違いである。
「３６０度の視界、厄介ですね。ならば、まずは艤装の視界を潰しましょう」
「せやな、頼むわ」
そこから大鳳が艦載機を発艦。深海製の高性能な爆撃機をこれで

もかと放ち、本体では無く艤装を包囲しつつ、その頭部を破壊するために艦載機そのものが突撃してくる。
それに対しては、戦艦棲姫が考えるまでもなく艤装が対応。飛んでくる艦載機を丁寧に撃ち墜とし、自分への被害を最小限に食い止める。どうしても大きめな破片が飛び散るため、その装甲に小さな傷はついていくが、本体には何の被害もない。
「艤装を先に破壊するんは、うちも賛成や。本体だけやったらコロ助でもボコれるやろ。おうコロ助、本体は構わんでもええ、艤装をぶっ壊したれ」
「最初からそのつもりよ！　無駄に硬いデカブツを壊してやるんだから！」
ここに来て、あちら側が連携出来るようになってきていた。最初はまるで息の合わない個人主義の一団だったが、戦闘を重ねるに連れ、息を合わせてきている。
司令塔は龍驤。大鳳は一切の文句を言わず、冷静沈着に行動を起こし、コロラドは暴れながらも龍驤の意図通りに動く。結果的に、３人が強引に連携しているような状況に。
「……こうなられると厄介なのよね」
内心舌打ちしながら聞こえない程度の声で呟く。最初の段階では戦艦棲姫１人でもいなせるくらいには連携練度が低かったのだが、共通の目的を持っているからこそ、理解してからは成長が早い。
これは白露にもあった、一度見た技は効かないみたいなもの。白露はあまりにも極端だったが、この３人は実力として根幹から成長している。このまま戦い続けたら、嫌でもジリ貧に持っていかれることになるだろう。
古鷹と白露に苦戦したのは、最初からこういうカタチの連携が上手かったからだ。古鷹がその辺りをキッチリこなすタイプだったのが大きい。この３人もそこに並びかけてきている。
そうなるともう、スタミナ切れを狙うしか無くなる。あちらは総じてスタミナ不足であるという欠点を抱えているはずなので、時間稼ぎをしてやれば勝手に脱落する。

「もしかして、うちのスタミナ不足知っとるから、時間稼ぎしよう思うとるんとちゃうんか」
魚雷を放ちながら龍驤が問いかけた。図星をつけたと確信していたのか、意地の悪い笑みを浮かべて。
「正直なところを言うとそうね。貴女達、総じてスタミナが足りないんでしょ。白露は例外みたいだけど」
「おう、そこまで知っとるなら言っておこか。うちはスタミナが足りへん。理由は知らんが、どうせあれやろ、艦種違いが混じっとるからやろな」
戦艦棲姫が魚雷を破壊した直後、視界が隠されると同時に艤装に向けて再度魚雷が放たれていた。いくら戦艦の強固な艤装だとしても、魚雷によるダメージは相当大きい。
艤装の視界からそれを知った戦艦棲姫は、すぐにそちらも破壊する。艤装を守るために本体が尽力するのは、この戦艦棲姫ならではの戦い方。敵を斃すことより、自分達を守ることを優先する。艤装が本体を守るように、本体も艤装を守る。だからこそ、コンビネーションが完璧だ。
しかし、数的不利というのはどうしても付き纏った。艤装をあわせても、戦艦棲姫は2人。対する敵は3人。連携が出来ていない当初では、戦艦棲姫でも余裕でいなせた。だが、龍驤を中心に連携を学んでしまったことにより、その脅威は途端に跳ね上がる。
「なるほどね、連携すれば隙も丸見えってことか。たまにはこういうこともいいじゃない。リュージョー、もっと早く言いなさいよ」
「最初から言うとるやろアホ」
その瞬間、コロラドの放った砲撃が艤装の片腕に直撃した。本体も艤装も魚雷に対応しなくてはいけなくなった瞬間を狙われたことにより、その一撃は回避が出来なかった。
大鳳の艦載機に気を取られ、龍驤の魚雷を立て続けに放たれたことで対応に追われ、フリーになってしまったコロラドが少し離れて渾身の一撃を放つ。敵側の3人の綺麗な連携に、戦艦棲姫もしてやられたという感覚を得る。

破壊されたのは艤装の片手。咄嗟に腕を守るために手を出したことで、手首から先がグチャグチャにされた。
だが、それだけで被害を最小限にしたのは、戦艦棲姫、延いては艤装の技術の賜物。まだまだやってやるぞという強い意志を、これでもかというほどぶつける。
「まだ大丈夫ね？」
その声に、艤装は振り向くことなく小さく頷く。それを見て、戦艦棲姫も口元が綻んだ。
「まさか、この程度で私を斃せたと喜んでるんじゃないでしょうね」
戦艦棲姫は余裕を崩さない。艤装の片手がやられただけでは、その勢いは止まらない。
「んなわけあるかい。お前が無様に野垂れ死ぬところを見んとな」
「防御力は幾分か落ちたでしょう。同じように畳み掛ければ、逃すことなく始末出来ます」
「せやな。おありがたいことに、アイツはうちらに組む戦いのやり方を教えてくれた。礼はキッチリせぇへんとなぁ！」
龍驤も、鎮守府での敗北を糧にしていた。格下と思っていた艦娘にまさかの敗北を喫したことで、心を入れ替えたわけではないが、一切の油断を廃している。
それもあってか、大鳳とコロラドを連れてきているわけだし、ジェーナスを引き込んだ後はまずいと思った方に人数を割いている。そうでなければ、ジェーナス側に誰かを使っているはずだ。
それだけ戦艦棲姫に重きを置いていたのは間違いない。龍驤は口調こそ軽く敵をおちょくっているし、余計なことも言い続けているが、敵の実力に関しては正しく見ている。
古鷹と白露の2人がかりで撤退に追い込まれたのだから、3人がかりでなければ斃せないと理解していた。
「おら、仕切り直して第二ラウンドや。次は艤装の腕だけじゃなく、お前の腕もぶち折ったる。覚悟せぇや」
「あら、腕だけでいいのね。なら、こちらは貴女達の首でも貰おうかしら」

「ぬかせ。どっちが上か、ハッキリさせたる。大鳳、コロ助、目に物見せてやりや」
今回は重傷では帰さないと3人が再度攻撃に出ようとしたその瞬間。
「っ、コロ助、避けぇ！」
「ちょっ」
先んじて気付いた龍驤が叫んだ。流石にその言葉には従わなければと直感的に気付いたか、コロラドは振り向くことなくその場から離れる。
今コロラドがいたその場所、直撃コースで砲撃が通過した。それは駆逐艦のそれではない一撃。
「誰よ、危ないわね！」
「んなもん、ここにいるんは決まっとるやろ。それにうちには全部見えとる。裏切りモンの白露や」
コロラドが振り向いた先は、時雨の艤装を展開した白露が、その背部の大型主砲をコロラドに向けて放っていた。
「そう、ジェーナスは救えたのね。そうじゃなきゃ、白露がこちらに来れるわけないもの」
心底安心した戦艦棲姫は、改めて3人を見据える。
「第二ラウンドって言ってたわよね。ラウンドが変わったのならこちらにも増援が来ても文句は無いわね。仕切り直し、だものね」

ここからは白露も参加して3人をどうにかする。春雨はジェーナスに付きっきりとなるが、まだまだ戦える。救うことが出来るかは定かでは無いが。

仲間

「戦艦さん、助けるよ！」
「一番いいタイミングよ。頼らせてもらうわ」
龍驤達が連携を学び始めてしまったことで、艤装もカウントして2人である戦艦棲姫はどうしても押され始めていたが、白露が乱入したことで佳境を迎える。
「Ｔｒａｉｔｏｒ（裏切り者）？　ああ、アレがフルタカの言ってた、Ａｒｒｉｖｅｒ（辿り着く者）にやられて吐き出しちゃったっていうゴミ虫ね。アレは見たことが無かったから知らなかったわ」
白露と面識のある者は古鷹しかいないくらいだ。そのため、龍驤達も話にしか聞いていない。龍驤はたまたま別個体の白露を知っているが、コロラドはそれすらも無かった。大鳳も軽く一瞥する程度。
冷たい視線を受けても、白露はその勢いを落とさず、出来る限りのスピードで戦艦棲姫の隣に立つ。艤装の手が破壊されているのを確認して驚いていた。
「うわぁ。あたしがやっちゃった時よりは軽いけど、大丈夫？」
「問題ないわ。ねぇ？」
艤装の方も小さく頷く。この程度のダメージなんてことないとでも言わんばかりだ。それには白露も笑顔を見せて親指を立てた。
「それより、ジェーナスは」
「春雨がどうにかしてくれた。全員無傷で、泥も完全に吐き出させてる。溢れたのはあたしが撃って吹っ飛ばしておいたから」
その言葉を聞き、龍驤が反応する。普通なら魂を侵蝕している悪意の塊が、どんな手段を使ったかはわからないが引き剥がされているというのが驚きだった。しかも、一度ならず二度までも。
ちなみに龍驤達は古鷹も解放されていることをまだ知らない。龍驤は謎の潜水艦に連れられて逃げ帰っているので、結末を見ていないからである。そのため、古鷹は死んだものと考えている。
「話にゃ聞いとったが、辿り着く力っちゅーのは、そんなことも出来るんか。そりゃあ姫さんが真っ先に潰せ言うわ。生きててもらっちゃ

困る。大鳳、コロ助、ここはお前らに任すで」
流石にもう看過出来ないと、ここまで来て龍驤だけは春雨を追撃するために動き出す。
チラリとそちらを見たら、落ち込んで泣きじゃくっているジェーナスをあやすように抱きしめている春雨の姿が目に入る。今なら無防備みたいなものだ。
「なんや、あんだけ無防備なら、ちょいと艦載機放るだけで終わりやな。さっさと始末を」
「させると思ってんの？　あたしが妹を見殺しにするとでも」
既に白露が動き出していた。龍驤の目論見を看破していたかのように、既に砲撃を放っている。当たるかどうかはさておき、その行動をやめさせる必要があった。
はぁ、と小さく溜息を吐いてそれを軽々回避するが、その瞬間に戦艦棲姫の艤装が殴り込みにきていた。大振りであろうがお構いなし。春雨を狙おうとした不埒者を成敗するために、自らに目を向かせるように迫撃する。
「そんなにアイツが大事かい。そりゃあそうだわな。辿り着く力はお前らにとっては切り札みたいなもんや。手放したくないやろな」
「アンタ達みたいに短絡的な損得勘定じゃないんだよ！」
そんな馬鹿になっていた自分が情けないと吐き捨て、艤装と連携するかのように白露も錨を振り回しながら突撃していた。
艤装の攻撃がさらりと避けられたとしても、その隙を狙って動く。
「春雨の力なんてどうでもいいんだよ。あたしの妹だから、みんなの仲間だから、それだけでいいでしょうが！　利用しようなんて思っちゃいないのさ！」
「くっさ。なんやその感情論。それで勝てるんならいくらでも言っとき」
しかし、白露の攻撃は龍驤を庇うように飛び出してきた大鳳が防いでいた。錨を直接掴み上げ、握り潰そうと力を込める。
実際、大鳳には２人の戦艦（伊勢と日向）が混じっているため、並の空母とは比べ物にならない程の膂力を与えられている。ボウガン型の艤装を使っ

た艦載機発艦と戦艦火力の砲撃とは別に、以前鎮守府襲撃の際に龍驤が見せつけた徒手空拳も可能である。
「春雨はなんかよくわからない力持っちゃったけど、ただの寂しがりやの女の子だ！　あたし達が近くにいてあげたいってだけなんだよ！」
すかさず白露は魚雷を掌に展開して大鳳に投げつけた。ここで爆発したら白露も大ダメージを受けかねないが、四の五の言っていられない。春雨を守るため、龍驤を止める。
「物騒な攻撃ですね。ですが、効率的かもしれません。勉強になります」
その魚雷も大鳳は自分に当たる前にキャッチ。信管に触れることなく全ての勢いを消し去った後、その有り余る膂力を使って放り投げた。事もあろうに、それもまた春雨の方向へ。龍驤だけではない、大鳳も春雨のことを狙っている。
「させっかい！」
自分で放った魚雷なのだから、自分で対処すると言わんばかりに、即座に自らの主砲で撃ち抜いた。
本来海中で爆発するものを大気中で爆発させたものだから、凄まじい音と衝撃が発生。だが、春雨を守るために戦う白露は、全く勢いを止めることはなかった。
「私を無視するだなんて、いい度胸してるじゃない、Ｔｒａｉｔｏｒ（裏切り者）。引導を渡してあげるわ！」
「何を言ってるの。貴女の相手は私でしょう」
その白露を止めるために、今度はコロラドが動き出そうとしていたが、それは戦艦棲姫が食い止める。
先程、龍驤は艤装が無ければコロラド１人でもどうにか出来ると言っていたが、戦艦棲姫は全く弱くはない。こんな状況でも希望は捨てていないし、むしろ負ける気なんてカケラも無い。その気持ちだけで本当に勝ちに行けるくらいの実力者。
「ほら、私１人ならボコれるんでしょう？　やってみなさいよコロ助」
「はっ、それが望みなら叶えてあげる。無様に死ぬがいいわ！」

挑発に乗りやすいコロラドの特性を利用して、戦艦棲姫は1対1の状況に持っていけた。小さくほくそ笑んだのを、コロラドは見えていなかった。
うまく戦いやすい状態に持っていけている。数だけで言えば同じ数になれたのだから、うまくこれで耐久出来れば、そのままスタミナ不足に持っていけるはずだ。
それに、時間を稼げばもう1つ期待出来るものがある。それの到着の時間は、今だ。

「あれあれあれー？　もしかして駆逐艦共にやられて泣いて帰った龍驤ちゃんじゃなーい？」

この戦場にはあまり似つかわしくない、とても軽い声色。龍驤には今最も気に入らない声。
「その声……忘れへんぞ。北上ぃ！」
艤装との競り合いを放棄するほどに、一気に怒りが頂点に達した龍驤は、混じっている駆逐艦の力を最大限に発揮して突撃を始める。
その姿に、白露を食い止めている大鳳も、戦艦棲姫とぶつかり合うコロラドも、目を見開いて驚いた。ここまで余裕のない龍驤を見たことが無かったのだろう。
「おうおう、切羽詰まっちゃってまぁ。この前の負けがほんっとうに堪えたみたいだねぇ」
「じゃかあしぃわダボが！　今日はそのクソ生意気なツラ歪ませたらぁ！」
「やれるもんならやってみなよ。でも、アンタの攻撃はあたしには届かない。アンタはもう、駆逐艦共にすら届かない」
戦場に現れたのは、北上だけではない。その北上の前には、山風を筆頭とした白露型の妹達が揃っている。五月雨は秘書艦業務があるために参戦は出来なかったが、北上としては3人でも充分だと言い

切ってきた。
　それほどまでに、この3人は北上、延いては演習艦隊の皆に鍛えられている。かつての白露達トップの駆逐隊に勝るとも劣らない実力を手に入れていた。
「吐かせ！　うちがそんな駆逐艦(ジャリ)共に」
「……うるさい」
　すかさず砲撃を放ったのは山風。突撃してくる龍驤に容赦なく撃ち込み、その行動を止める。狙いは脚。殺すわけではなく、ただそこに這いつくばらせるための一撃。
　しかも、この砲撃は1発しか撃ってないように見えて2発放たれていた。片脚だけではなく、両脚を狙われたことで、その突撃は未然に防がれる。
「おまっ、それ別のヤツのやろが！」
　その一撃を、龍驤は知っている。鎮守府襲撃の際、大井が放った1音で2発放たれる砲撃。凄まじいコントロールと瞬発力が無ければ再現出来ないような、技と言っても過言ではない砲撃。
　山風は大井からそれを学び、そしてそれを実践したにすぎない。しかし、元々の力があるからこそ再現出来たのだ。山風の力は、爆発的に上昇している。
「誰の技だろうが、勝てりゃいいンじゃね？」
　そこに容赦なく突撃していたのは江風である。相変わらず主砲を逆手に持ち、空砲による初速をサポートしながらの近接戦闘。
　さらに、その主砲はそのために開発された特別製。普通の主砲として使うことも出来るが、逆手に持てばナックルガードまで構築される遠近両用の江風専用兵装である。製作者は勿論、あの明石。
「小賢しいガキがぁ！」
「あっという間に余裕無くなっちまったねぇ。そんなに北上さんにやられたのが気に入らなかったのかい!?」
　そしてさらに、涼風も突撃していた。その手には当たり前のように魚雷を携え、海中ではなくダイレクトに投擲。爆発したら致命傷になるのは確実であり、直撃してもその重みでかなりのダメージになる。

北上から最も鍛えられたのは涼風だろう。持ち前の視野の広さを伸ばされ、さらにはこの魚雷による多種多様な攻撃手段を叩き込まれたことで、古参ということもあり山風や江風以上に動ける存在へと成長した。
「このっ、鬱陶しいわ！」
「こっちのセリフ。わざわざ罠まで仕掛けようとして、本当に……鬱陶しい」
忌々しそうに呟く山風。確実に殺すような気持ちで、涼風の投げつけた魚雷を撃ち抜く。間近で爆発したことで、龍驤はその爆炎に巻き込まれることになり、途端に劣勢となり始める。
「まぁ相性ってのがあるんだろうねぇ。あっちのヒト達とは相性が良かったみたいだけど、あたしらにはこれだけやられちゃう。精神的にもキてるんじゃない？　鎮守府襲ってきて返り討ちにされてるから、身体が負けること覚えちゃったんだよ多分」
そう言う北上も、以前のトラウマを呼び起こすように魚雷のスクリューを回しながら龍驤に近付いていた。これでまた背中を抉ってやるぞと言わんばかりである。
「はっ、何が相性や。そんなもん」
「あるんだよねぇ。アンタのちっちゃなおつむじゃわからないかもしれないけど。ジャンケンって知ってる？　子供でも知ってることだけど、アンタは知らないだろうから教えてあげようか？」
一度勝っているというのもあるが、北上は龍驤に対しての言葉の圧が非常に強い。口撃には口撃をぶつけるのだと言わんばかり。煽る割には煽り耐性が低い龍驤には、これがまたやたらと効く。
「見てみな。あたしらだけじゃないよ。他にも救援入ってるからね」
そう、援軍は北上達だけではない。
例えば白露。大鳳と相対するところに加わったのは島風。そして、
「ほう、戦艦が混じった装甲空母か。やり甲斐があるなぁ！」
武蔵である。攻撃力と防御力を兼ね備えた大鳳に対して、最も効果的な圧倒的な力。島風もその全ての攻撃を回避するために相性は悪くない。

「お姉さまはヨナちゃんと合流して保護しました。なので、戦艦さんにはこの比叡が、気合、入れて、助けます！」
　そして戦艦棲姫には比叡。艤装も含めて３人でコロラドと戦うこととなる。近接戦闘も可能な比叡が加わったことで、杖による打撃も余裕で対応できるようになった。
「このクソガキ共、ちぃと人数増えたからといい気になりおって」
「何言ってんだよ４人分。アンタ、龍驤も含めて４人だろ。あたしらも４人なんだからトントンじゃん。何も文句を言われる筋合いはないね」
　人数まで当てられたことに驚く龍驤。白露や古鷹も本人込みで４人分であるため、当てずっぽうのようにも考えられるが、北上は確信を持ってそれを言い放つ。
「気付いたのはあたしじゃないよ。山風だ。誰が誰かはわかってないみたいだから、あたしが手を差し伸べただけ。とりあえずアンタの中身は特定したから」
「……ほう？」
「答え合わせしてみる？　龍驤、五十鈴、不知火、あとは……島風」
　軽空母である龍驤を素体に、対潜性能が非常に高い軽巡洋艦五十鈴と、駆逐艦の中では最も徒手空拳が得意であろう不知火、そして回避性能がトップクラスである別個体の島風が入ったことで、今の龍驤は完成している。
　この中でも特にわからなかったのは不知火。駆逐艦の候補は多数いたのだが。ここで不知火と断定出来たのは、やはり龍驤が出来る以上の格闘が出来たことが大きい。というのも、ここは大将にも調査してもらったというのもあるが。
「……正解や。ようわかったな」
「こっちには仲間がいるんでね。アンタ達みたいな自意識過剰じゃないんだわ。わからないことは仲間を頼るし、自分の弱さも知ってんの。だから、強くもなる。アンタ以上にね」

ここからが第三ラウンド。人数も増えたことで、勝率は一気に上がる。

最高の援軍

戦場に鎮守府の面々がついに到着。押され気味だった戦艦棲姫達は、この援軍のお陰でより活力を得ることになる。元々負けるつもりはなかったし、敗色濃厚というわけでもなかったが、ここでの後押しは非常に心強い。

戦艦棲姫は自身の艤装との連携を再開することが出来た上に、比叡が参戦してくれたおかげで、相手をしているコロラドに対してかなりの有利を得ていた。

「ヒエー！　なんなんですかこのヒト！　杖の先っぽに主砲ですか!?」

「ええ、だから注意しなさいよ。当たったら終わりと思いなさい」

「りょ、了解ですっ。それごと斬りますから！」

早速比叡は艤装を変形させて2本の刀剣をその手に。コロラドが近接戦闘を仕掛けてくるようなので、対応して自分もとしたようだ。

しかし、コロラドのそれは杖であり主砲。振り回しながら、超至近距離で砲撃を放つとんでもない兵器だ。いくら戦艦だとしても、直撃は致命傷、掠るのも重傷となる可能性は非常に高い。

それ故に、戦艦棲姫もそこだけはすぐに忠告した。せっかくの連携なのだから、比叡にも怪我を負ってもらいたくはなかった。

「私を斬るですって？　はっ、冗談はやめてちょうだい。たかだか艦娘如きがやれるとでも？」

「当然です！　そのために私はここに来ているんですから！」

「あっそ。ならアンタから終わらせてあげるわ！　自分の発言を後悔なさいよ！」

話しながらもいきなり杖を比叡に向ける。それは勿論主砲側だ。距離としてはかなり近いため、ここで狙われると回避は至難の業。

だが、比叡はお構いなしに真正面から突き進み、直撃も厭わずに間合いを詰める。

そんな比叡に対して、コロラドはおろか、戦艦棲姫も目を丸くしてしまった。まず間違いなくそんな行動をする者はいない。艦娘の駆

逐主砲ならまだしも、深海棲艦化したことにより火力が跳ね上がっている戦艦主砲相手にこの勢いなんて、度胸があるとかそういう話ではない。
「でぇあああっ！」
そしてこの声。凄まじい圧をかけながらの突撃で、艦娘のことを格下だと思っているコロラドを微かにでも退がらせた。
「なんなのコイツ！　Ｉｄｉｏｔ（マヌケ）通り越してるわよ！」
だが、それでたじろぐだけで終わらないのがコロラドである。しっかりと主砲で比叡の胸に狙いを定めて撃ち放った。
避けなければ一撃で命を奪い、かつ、避けづらさを重視する身体の中心を狙う、咄嗟とはいえ完璧な照準。普通ならこれは回避不能。
だが、そうされても大丈夫であるという自信があるからこそ、比叡は突撃をしているのだ。
「斬り払ぁい！」
軽く身体を倒したかと思いきや、宣言通りその砲弾を真っ二つに斬り払い、さらにはかち上げることによって軌道すら変えた。
砲撃を斬り払うだけならば、その軌道上に刃を立てれば可能かもしれない。しかし、縦方向にもう一度斬るというのは神業に近かった。
「からのぉ！」
呆気に取られた瞬間、比叡は既にコロラドの懐に入っていた。戦艦ならではの巨大な艤装で突っ込んできているため、風圧すら感じるそれに、コロラドは我に返る。
このまま斬られたら間違いなく上半身と下半身がお別れすることになる。しかも比叡が持っている刀剣は２本だ。簡単には避けられない。
「どりゃあああっ！」
「させないわよ！　艦娘如きの攻撃でぇ！」
しかし、そこは魂の混成をされた深海棲艦コロラド。杖を消してから即座に展開し直すことで、比叡の斬撃を食い止められる位置へと移動させた。
比叡の刀剣も深海合金を組み込んだ強固な刃なのだが、コロラドの

杖は純正の深海棲艦の艤装な上に主砲の性能を兼ね備えているため、それに輪をかけて硬い。ギンと激しい音と火花が散ったものの、互いに無傷。刃こぼれする事も無かったが、杖に傷がつく事もなかった。
「もう少し自分を大事にしなさいよ」
その鍔迫り合いが発生した瞬間、戦艦棲姫は主砲を構えてコロラドのみに狙いを定めていた。
比叡の陰になるような場所、ギリギリ衝撃波すら比叡に与えないような絶妙な位置から、コロラドのみを削ぎ取るような砲撃を1発。
「させないわよ！」
だがやはりコロラドはまだまだやり手である。その一撃もしっかりと回避するため、鍔迫り合いを即座に放棄してバックステップ。
さらにはまた再展開を繰り返してベストなポジションに配置した杖から、比叡に向けて砲撃を放つ。
「効かなぁい！」
そして、比叡は鍔迫り合いによって拮抗していた力のバランスが崩れた事でつんのめりかけたが、即立て直してその砲撃を斬り払う。しかし今回は斬り払った砲弾が比叡の腕を掠めて小さな傷を作った。
まだこの斬り払いは、無傷まで持っていける技能ではないのである。正面から斬ったところで、そのままの勢いで二手に分かれて貫かれるだけ。あくまでも斬るのみ。
それを解消しているのが、2本の刀剣による連撃。1本目で砲弾を斬り、2本目で払う。これによって自分への被害を最小限に抑えているに過ぎない。
「寄ってたかって鬱陶しいわね！」
「さっきまで私に3人がかりで向かってきたのは何処の何奴よ。寝言は寝てから言いなさい」
理不尽なイチャモンをつけるコロラドに、次は艤装が追い討ちをかける。もう逃がすつもりはないと言わんばかりに跳び、掴みかかるかの如く残されたもう片方の拳を握りしめて振りかぶる。
「どうせ貴女も混じってるんですから、これでどっこいどっこいなんでしょう！　数に有利も不利もなぁい！」

さらには、艤装と連携するように比叡も飛び出していた。だが、刀剣は1本となり、もう片方の刀剣は艤装に仕舞い込まれたと同時に主砲へと変形。艤装の形状を半々とすることで遠近両用とした。
どちらかに偏った運用ばかりしていた比叡には、このやり方は少しだけバランスが悪く感じていたが、この短期間で扱い方を学んでいた。撃ちながら斬るというわかりやすく強化される状態を今まで避けてきたのは、単純に比叡が不器用だったから。それを武蔵が矯正したことで、手段として扱えるようになっている。
「ったく、このコロラドが！　野蛮な連中に！　負けるわけないでしょうがぁ！」
コロラドも数人分の力をコントロール出来る戦艦だ。武器は杖だけではない。
背中から何を思ったかロブスターのハサミが生え、戦艦棲姫の艤装の拳を挟み込むように受け止める。また、カニの甲羅のような盾が現れて比叡の斬撃を食い止めてしまった。
そして、その隙間から杖を突き出し砲撃。攻防一体の攻撃に、流石にまずいと感じたか比叡も艤装も一旦退く。艤装はハサミから強引に腕を抜いたため、削がれるような傷が付いてしまった。
「かったいですねぇ！　なんですかそのカニの甲羅は！」
「エビのハサミ……？　貴女に混じってるの、もしかして艦娘じゃないのかしら」
核心を突く戦艦棲姫の言葉に、コロラドはフンと鼻で笑いながら答える。
「ええ。私には何処かの姫が混じってるらしいわ。詳細は知らないけど、2体もね」
「なるほど、そういうこと。だからそんな華奢な身体でも杖の先にある主砲なんてものを無反動で撃てるわけね。厄介極まりないわ」
だが、妙に幼稚なその思考回路で使いこなせているかもわからない。ただ使えるものを使えるように振り回しているのみ。
ならば勝てる見込みはまだまだあるだろう。それに、隣に仲間がいるのだ。1人じゃない。

一方、大鳳と戦う白露。援軍として現れた島風と武蔵と連携し、たった1人の装甲空母を追い詰めようと必死に立ち向かう。
その大鳳は、どれだけ敵が増えようとも無表情で全てをいなしていく。今の段階でやれることは、ボウガンのような艤装から放たれる戦艦主砲並みの砲撃と異常なスペックを持つ艦載機。そして、掴まれたら終わりであるほどの膂力。
遠近共にシンプルに高スペックである上に、感情を見せずに淡々と攻撃をしてくるために付け入る隙もない。
「やたらと速い駆逐艦と、武器を好き勝手変える駆逐艦、それと……」
白露と島風の攻撃をいなしながら戦況を分析している大鳳。その目からして、駆逐艦はそこまで問題として考えてはおらず、最重要は武蔵であると睨んでいる。
実際、この攻防の中でも、武蔵の一撃だけは絶対に喰らってはいけない高火力。深海棲艦のそれとほとんど変わらない主砲を、これでもかというほどに連射してくる。そこに仲間がいるのにだ。
「余程、仲間を信用していると見えますね。それに、信頼されています。貴女が折れれば、貴女方は確実に瓦解する」
「ほう、いい読みだ。だが、それは間違っているな」
白露からの錨は当たり前のように掴み、それを振り回すことで白露ごと処理。しかも、それを島風にぶつけるように対処するため、1人の攻撃を2人に返すという頭脳派な戦いを繰り広げている。
それでも、武蔵はまるで動じない。勝ちを確信しているように微笑みながら、2人に当たらないように砲撃を繰り返した。
「私が倒れても、誰も動じんよ。いや、むしろ逆に力を増すだろうな。貴様などでは及びもつかない程に。だが安心しろ。そうなることはあり得ない」
「断言するんですね」
「ああ、私はこの程度では倒れない。貴様がどれほどの力を持とうが関係ないんだ。それに、そもそも私だけを見ていると足を掬われる

ぞ。なぁ！」
　その言葉に応じるように、吹っ飛ばされた白露は倒れることなく海面に足をつくと、島風と共にさらに前へ。
「あたし達も負けない！」
「おうっ！　こんなところで倒れたら、速くないもん！」
　初めての連携であるために最初は少し息が合わなかったが、そこはどちらも熟練者。今は白露自身と時雨のスタイルの混合であり、冷静な判断と統率力を兼ね合わせた連携に最も適したモノ。対する島風は仲間思いからの読解力で白露のことを理解していき、自分が前に出るとしても白露にも影響を与えすぎないくらいの攻め方を心掛けている。
　今や、昔からの仲間だったのではというくらいに息が合っていた。島風が狙われれば、白露が即座に対応し照準を引き剥がす。白露が狙われれば島風が即座に対応し雷撃で未然に防ぐ。
「そうですか。確かに3人が3人、厄介なようです。ですが、私も3人分ですから、後れは取りません。それに、そもそものスペックは幸いにもこちらの方が上です。対応させていただきます」
　それだけの攻撃を集中しても、大鳳はまるで崩れる様子はない。在り方は歪んでいても、真正面から正々堂々とその力を見せつけるように全てに対応するため、むしろ一番厄介なのではと武蔵も考える。
　今までの敵のタイプとはまた違った存在なのが大鳳だ。他者を罵るような物言いもせず、小狡いようなこともしない。冷静に、あくまでも冷静に物事を処理していくある意味機械的な行動。悪意の塊による歪みで感情そのものを失っているようにすら見えた。
「なるほど、あの3人の中では貴様が最も怖いと見える。穴が無い。だからこそ、ここには私と島風が助けに入るべきだったようだ。この配分は間違っていないな」
「へぇ、そうなんですか」
「ああ、それを身体に教えてやろう。我々がここを任される理由を、なぁ！」
　ここで武蔵も突撃。砲撃を捨て、その拳に力を込める。本来艤装側

に備え付けられる主砲が、今この時のみその腕に装着された。
その主砲は火力だけでは無い。質量すらも攻撃に転じることが可能。しかしそんなことをやろうとする艦娘はいない。この武蔵だからこそ、その選択をしてしまう。
「計算や直感では抗えないほどの、圧倒的な力を見せてやろう！」
そして、その拳を大鳳に叩きつけんが如く振り下ろした。並の拳では無い。これも直撃すれば致命傷といえる、殆ど鈍器による渾身の一撃だ。
流石にまずいと思ったか、大鳳は表情を変えずとも大きく下がった。そのついでにボウガンから武蔵に対して砲撃を放とうとするが、そこは白露がしっかりカバー。鎖のついた錨を振り回し、武蔵の隙を補う。
大鳳からの反撃の隙を与えない、3人がかりの突撃。防戦一方に追い込まれれば、必然的にジリ貧に出来る。
「っ……」
「もう考える暇など与えん。それに、私ももう考えん。こんなに頼もしい仲間がいるのだ。考える必要もない！　貴様を斃すまで、正面からぶつかり続けてやろう！」
その武蔵の言葉に鼓舞され、白露と島風も一層力が入った。ここまで信用されているのだから、期待に応えたい。そのためには、仲間を信じて突撃する。これだけでいいのだ。

戦いは続く。だが、劣勢では無い。心も後ろを向くことなく、彼女達は常に前を向き続けて挑んでいく。

完膚なきまでに

大鳳とコロラドの戦いが続く中、龍驤との戦いも進む。龍驤の中に他に3人がいることは確定しており、その力もおおよそわかっているため、それに対抗するための行動を取り続けることに専念する。

調査隊の隊長は山風だが、この場では北上が指揮を執る。駆逐艦のことをウザいウザいと言う割には、今回に関しては自分から山風達を従えるつもりでここに来ているのだから、やはり子供好きであることは否定出来ない事実。

「寄ってたかって、鬱陶しいっちゅーねん！」

「どの口が言うんだろうねぇ。鎮守府に深海棲艦の群れを連れてきておいて。まぁ今までもそういう狡(こす)い手しか使ってこなかったんでしょ。そうじゃなきゃ勝てないんだもんねぇ」

北上の煽りは一切止まらず、常に言葉を投げかけつつも、駆逐艦達と共に龍驤に圧をかけ続ける。特に江風は完全に近接戦闘一本に絞っており、山風の砲撃や北上と涼風の雷撃の隙間を狙って直接殴りかかっているのだから、余計に勢いが増す。

それがとにかく龍驤の癇に障っているようだった。北上に対しての苛立ちは募る一方なのに、それに輪をかけるような江風の行動は苛立ちを加速させる。龍驤の敗北の中には、江風に直接殴られるというものもあるため、北上には及ばないものの江風にも怒りの矛先は向いていた。

「そもそも、馬鹿みたいに他人を煽っておきながら、自分がやられたらムキになって暴れ回るとかガキかって話なんだよ。まだこの駆逐艦達の方が大人だ。ただのワガママなクソガキなんだよアンタは」

これでもかと言うほどに煽り続け、さらには魚雷を投擲。鎮守府での戦いと同じことをしているに過ぎないのだが、それすらも敗北に繋がる行為であるため、龍驤の精神はどんどん追い込まれる。

しかし、大鳳とコロラドを纏めていた司令塔の役割を与えられていただけあり、それだけで完全に崩れることはない。顔に怒りを表しながらも、その行動の精度はそこまで下がっていなかった。

江風の近接戦闘はヒラリと避けつつカウンターを狙い、山風の砲撃はそのタイミングをズラさんがために砲撃を合わせる。雷撃には自らも魚雷を放つことで、確実に自分へのダメージを軽減していた。
「言わせておけば調子に乗りおって。まぁ好きに言えばええ。結局は実力でひっくり返るんやからなぁ！」
「やってみなよ。アンタが成長してるってんなら、あたしらはそれ以上に成長してんだ。そうだよなぁ、駆逐艦共ぉ！」
北上の鬨の声が響いた瞬間、駆逐艦達の圧がさらに上がる。山風の砲撃はさらに精度が上がり、毎度毎度の砲撃が1発で2発放たれる連射に。涼風の雷撃は仲間達の隙間を縫うような軌道で龍驤へと向かい、江風の突撃はその全てを邪魔することなく龍驤の死角を突くような動きとなる。
だが、龍驤は未だに使っていないモノがある。鎮守府での戦いでも、千歳と千代田に食い止められ続けていた艦載機。今この時も常に高高度からの監視を続けているため、死角は無い。江風の挙動は全て筒抜けであり、どれだけ精度が上がろうがしっかりと回避。
「うちは空母やぞ。今まで加減してやっとったが、もう知ったこっちゃあらへん。ここで皆殺しや！」
宣言通り、主砲を巻物へと変化させ、一気に全機発艦。それを殆どゼロ距離で受けることになった江風は、まるで鳥の群れに襲われたかのように艦載機に突撃を繰り返され、さらには機銃による射撃まで放たれる。
「つべぇ！　一時撤退だ撤退！」
その射撃は掠る程度で回避したものの、これでは近接戦闘は無理だと判断したか、逆手に持っていた主砲を本来の向きに持ち替え、眼前に迫る艦載機を撃ち墜としながら下がる。
その艦載機は殆ど群れだった。艦娘の扱う艦載機とはまるで違う、殆ど生体兵器のようなモノであるソレは、龍驤の周囲を飛び交いながらも射撃を繰り返し、一部が上空へと舞い上がったかと思えば、即座に爆撃を開始。
「ハッハハ！　お前らなんぞにはもう近付かせん！　これがうちの本

気や。全部避けてみぃ！」
　さらにその隙間から魚雷が放たれるという、３６０度全てを網羅した一斉攻撃。回避出来る場所を無くし、必ず殺してやるという意志が表現された、凄まじい一斉射。
　これには北上も変な声が出ていたが、もう分析は終わっていた。
「そもそも、本気だとか言わない方がいいんじゃない？　それ、ミジンコみたいなスタミナを消費してやるような技でしょ。なーにが今まで加減してただ。疲れたくないから自分の意思でやらなかっただけなのに、今更本気出しますとかクソダサいっつーの」
　龍驤のコレは、当然ながらメリットだけではない。これだけの連射と密度を維持しようとすれば、自ずと体力を使っていくのは必然。いくら最初からスペックが艦娘を超えていようが、それは変わらない。
　ならば回避し続ければいいだけ。ただでさえスタミナ不足が露呈している龍驤がこうしてきたのだから、その消耗を待っていればいい。
　しかし、北上はこうしてくる理由も考える。怒りで後先考えなくなっているというのもあるかも知れないが、こんな自滅するようなことをするのには何か理由があるのでは無いか。
　とはいえ、まずは回避しなくてはどうにもならない。爆撃も魚雷も直撃は死と直結するわけだし、射撃だって当たりどころが悪ければアウト。むしろ、上から下から正面からと３方向から一斉に攻撃が来ていることが問題だ。
　金剛の盾のような防御策があれば何も問題は無いのだが、不幸にもそういうものは誰も持っていない上に、北上も加えて耐久力が低い者達ばかりが揃っている。全回避が絶対条件。
「北上さん……とりあえずあの艦載機墜としていくから」
　ボソリと呟いた後、山風が龍驤を的確に狙い、周囲を飛び交う艦載機を確実に墜としていく。当然回避しながらになるのだが、そこは練度の高い山風だ。全て紙一重で避けながら攻撃を繰り返す。
「江風達も続くぜぇ！」
「おうさ！　魚雷はあたいに任せろー！」

江風と涼風も負けてはいない。山風に倣って、全ての攻撃を避けながら艦載機を対処していった。合間に放たれる魚雷は、涼風が必要最低限を破壊して被害を最小限に食い止める。
嫌でもダメージは入っていくのだが、言うほどでは無い。チリも積もればとなるかも知れないが、まだそこまでのダメージにはならない。だが避け続けるのにも体力がいる。
「ただ耐えるだけもいいけど……ここでポッキリ折ってやりたい」
なかなか強い言葉が山風から飛び出した。あの龍驤には山風もイライラしているようだった。
常にこちらを見下すような視線。怒りを露わにしている理由も、格下にやられたことが気に入らないからと、あくまでも自分が上位であるという態度を変えない意思。その何もかもに、山風はいい加減嫌気が差していた。
「ちゃんと斃す……正面から、正々堂々と、完膚なきまでに」
「耐久でもいいかもしれないけど、それだとアイツ言い訳しそうだもんね。いいねぇ、それ。シビれるねぇ」
ただ勝つだけならスタミナ不足を狙って耐久を続ければ勝てるだろう。だが、それでは龍驤は難癖をつけて負けを認めないまである。調子付いた状態から何も変わらない。
もう二度と楯突かないと思えるくらいに完膚なきまでに敗北を味わわせなくては、龍驤はどうにもならない。後のことを考えれば、ここで心を折る必要がある。
そんな山風の過激な発言を、北上はケラケラ笑いながら称賛した。
「何わろてんねん！　死を前に諦めたんか!?」
「はいはい、アンタにはそう見えるんだろうねぇ。アンタの中ではそうなんだろ。アンタの中ではな」
全方位に放たれる爆撃、射撃、雷撃をうまく躱しながら、付け入る隙を探す。こういうのは山風や涼風が得意だろうが、北上もその辺りは得意な方。ここには目がいい者が3人もいるのだから、確実に打開策は見つかる。
「涼風、アンタは対空。やれるよな？」

「あたぼうさぁ！」
　指示と同時に雷撃をやめて対空砲火に切り替え。爆撃を未然に防ぐために射撃も雷撃も全て無視して上を見る。
「江風、涼風を守りつつ雷撃を防ぎな」
「了解！　涼風は江風が守るぜぇ！」
　その対空砲火を補助するように江風が動く。射撃に関してはまだ見えるかも知れないが、魚雷に関しては意識もすることが出来ないだろう。それを江風がサポート。
「山風、アンタはあたしと」
「うん……真正面から……壊す！」
　そして山風は北上と共に龍驤へと突撃を開始する。その鼻っ柱をへし折るために、山風としては少し無理をしているかもしれないが、いつも以上に前向きに敵を見据えていた。
　近付かせないための艦載機の群れのど真ん中を、お構いなしに突っ込むそれは、龍驤には気が狂ったかのように見えただろう。だが、勝算がない状態でそんなことはしない。
　魚雷に対しては山風が砲撃と雷撃を組み合わせて処理。いくら水柱が立とうが、そのど真ん中を突っ切って龍驤に接近するのを止めることはない。近付けば近付くほど射撃を回避することは難しくなるだろうが、それすらも計算の上。擦り傷程度なら考慮せず、ギリギリの隙間を掻い潜る。
　涼風と江風が見えないところからの攻撃を全て防いでくれているため、何の心配もなく突っ込むことが出来た。横から何か来ることもない。後ろからは尚更だ。前だけ向いていればいい。
「なんや、なんなんやお前らは！　なんでそんなに……」
「んなもん決まってんだろ」
　射撃の紙一重の回避は北上も同じ。山風と一緒に、身体を少しずつ傷付けながらも、最近扱い方が雑だなと苦笑しながら艦載機の群れの中に魚雷を放り込んだ。
　龍驤を守るように飛び交うそれにコツンとぶつかった瞬間、並ではない爆発が発生。自分で引き起こした爆発だからか、一切の躊躇なく

その爆発に飛び込んだ。
「これ以上、好き勝手させたくないんだよアンタに。こっちが害被るのも嫌だけど、残念ながらアンタも侵蝕されてるクチなんだから、さっさと救ってやらないといけないって思ってんだ。建前でも」
艦載機の群れに確実に穴が空き、そこを少し火傷した北上と山風が突っ込んで来ていた。群れによって守られていた龍驤も、その内側に入られたらもう自分を守ることが出来るのは自分しかいない。
ここまでされると思っていなかった龍驤は、咄嗟に主砲を構える。しかしその時にはもう遅い。主砲を持つ腕を山風が撃っていた。直撃は免れたが、肉を削ぐような砲撃に思わず主砲を落としてしまう。
「つが……!?」
「これだけやったんだから……もう終わって」
低く、怒りの篭った山風の呟きが、龍驤に届いた。ゾワリと冷たい汗が背筋を伝う。
「やらせるかい！」
だが、タダでやられるほど龍驤も甘くない。ここまで来られたのなら仕方ないと、最後の手段である徒手空拳に打って出た。
北上はともかく、山風はそういうタイプではないのは見ればわかる。殴りつければ撃退は出来るだろうと踏んで、その手を伸ばす。
「やらせないのはこっちのセリフなんだよ」
その手は山風に届かない。伸ばした手をさらに伸びた北上の手が掴み上げる。いくら膂力があろうが、一瞬掴まれればその動きは鈍くなる。それだけの隙があれば、今の山風には充分だ。
「山風！」
「……うん！」
山風は改めて主砲を構える。狙うのは龍驤の腹。これなら生死ギリギリのところで止められる可能性が高い。
「避けないで」
そして、砲撃。1発で2発分放たれた砲撃は、龍驤の両脇腹を見事

に穿った。

本当の目的

仲間達の力を借りて、山風の渾身の一撃は龍驤の両脇腹を穿った。ど真ん中を撃ち抜いてしまったら、いくらなんでも死んでしまう。だが、掠めただけならば重傷にすら至らない。この一撃は、どちらでもないちょうどいい場所。

龍驤も反応は出来ていた。混ぜられている島風の力で、本来の空母としての速度とは一線を画した回避性能を発揮したのだが、それは僅かに間に合わず、しっかりと砲撃はダメージを与えていた。

「つぎ……!?」

思わず息を呑む。先に腕を抉られているが、それ以上の痛みが龍驤を襲った。その全てが山風によって引き起こされたもの。今までは北上に対しての怒りばかりだったが、ここに来てダークホースとも言える存在が頭角を現した。

その山風は、冷ややかな目で龍驤を見ている。これで終われと言わんばかりに。むしろ、さんざんこちらのことを格下と見ていた龍驤を見下すかのように。

「まだや……まだ終わらへん。そんな目で見んなぁ!」

痛みを堪えながらも、脇腹の傷を塞ぐように、服が包帯のように変化し傷口をしっかり締め付け、さらには白露や古鷹にやらせたように体内に艤装を展開することで強引に止血。激痛に苦しむものの、敗北だけは絶対にしないと心はまるで折れていない。

そして巻物を展開。まだ艦載機を発艦させようと力を込めるが、その瞬間を見逃さずに北上がそれを蹴り飛ばす。

「やらせるわけないでしょ。もうアンタは終わりなんだよ」

「まだや……!」

飛ばされた巻物が消滅したかと思えば、落としたはずの主砲をコロラドの杖と同じ要領で再展開。間近にいる山風に向けてその照準を定めた。

しかし、最初からそうするのではないかと考えていた山風は、砲塔が自分に向く前に撃ち、その主砲を破壊する。深海の艤装であるため

に主砲とて簡単には破壊出来ない代物なのだが、今の山風は一味も二味も違った。相変わらずの1発で2発撃つ砲撃が、全く同じ場所に命中したことによって、どれほど強固であっても破壊してしまった。
「まだまだや、うちは終わらへん！　離れろやダボがぁ！」
まだ諦めることなく魚雷を放つ。流石にこの超至近距離で対処は難しく、だからといってジャンプでやり過ごすのは隙を見せることに繋がる。
北上と山風は、仕方なく龍驤から離れ、すぐさま魚雷を処理。それを隙と見たか、水柱に隠れて2人から一気に遠ざかる。間合いを取ればまだ立て直せると信じて。
だが、龍驤は自分に苦汁を飲ませた北上と山風しか視界に入っていなかった。ここにはまだ、仲間達がいる。
「何逃げようとしてンだよ」
涼風と共に身を守っていた江風が、既に龍驤の後ろに回り込んでいた。主砲は再び逆手に持つことで近接戦闘スタイルに。ここで追い討ちとして撃とうものなら、龍驤は確実に命を落とすため、あえて拳を使う方を選んだ。
江風としては、別に撃ってもいいとすら思っていた。前回の鎮守府での戦いでもそうだが、やたらと言い方などが気に入らない。生かしておく理由があるのかと考えた程である。
しかし、龍驤だって白露や古鷹のようにただ利用されているだけの存在。哀れな被害者の1人だ。悪意の塊のせいで性格を歪められているせいで、こんな物言いになっていると理解している。
そのため、苛立ちはあれど命は奪うまいと最初から決意してこの場に立っている。殺したくても、殺さない。
「さんざんやっておいて、不利になったら逃げるだなンて、無ぇよなぁ！」
逆方向に空砲を放ち、その勢いで拳を打ち込む。その狙いは、よりによって山風によって抉られた脇腹。追い討ちにも程がある。
「黙れやカスがぁ！」
しかし、まだまだ諦めるつもりはない龍驤。その一撃すらも綺麗に

打ち払い、お返しと言わんばかりに江風の顔面に拳を叩き込んだ。
江風のそれより勢いは無いものの、容赦ない反撃に江風は少しだけフラつく。だが倒れない。北上や山風がアレだけやったのだ。身体まで張って。ならば自分も同じように身体を張らずしてどうする。その思いが、江風をさらに先へと進ませる。
「テメェに言われたかねぇよ！」
さらに空砲を放ち、自分の身体に鞭を打ってその拳を突き出した。次は回避もさせずに龍驤の顔面に直撃。やられた分と合わせておあいことなる。
「江風、ちょいと退きなぁ！」
そこへさらに涼風が参戦。艦載機が全て無くなったことを確認出来たため、すかさず雷撃で龍驤を牽制した。
直撃は致命傷に繋がるものの、今の龍驤の心を折るためにはこれくらいしなければどうにもならない。
「つざけんなぁ！　うちはまだ負けん言うとるやろがぁ！」
何処にそんな力が残されているのか、またもや３６０度全てに艦載機を発艦させて自らを守る。涼風からの雷撃は艦載機からの射撃で処理し、再び先程の状況を作り上げる。
が、北上も山風も、それに対して無理な攻撃をしようとはしなかった。江風や涼風もだ。
何故なら、その射撃は元より、爆撃や雷撃も相当雑。素人でも避けられる程度の出力しか出ていない。
「お疲れさん。もうスタミナ切れでしょ。おしまいなんだよアンタは」
敵側の元艦娘のほぼ全てに共通する欠点、スタミナ不足。その限界がついに龍驤に訪れた。
ただでさえ無茶苦茶な攻撃をし続けていたのに加え、腕や両脇腹に怪我を負っているのだ。その上で逃げるために動き回り、さらに無傷の時と同じようなことをしようとしているのだから、すぐに体力なんて尽きてしまうだろう。
「いい加減に諦めろっての。あたしらはアンタを取って食おうってわ

けじゃ無い。解放してやろうとしてんの。とはいえ、死ぬほど痛い目を見てもらわなくちゃいけないんだけど、その傷で充分じゃないの？」

溜息を吐きながら見下した視線で龍驤に語りかける北上。そんな態度も全て気に入らない龍驤は、歯軋りしながら主砲を北上に向けた。

だが、もう主砲を持って腕を上げることすら難しいほどに限界に近い。消耗し続けて、艦載機の数も自然と減っていく。

だが、泥を吐き出すようなことはない。まだ致命傷には届いていない。もしくは、吐き出すのをどうにか耐えている。

「何がアンタにそうさせるのさ。逃げるなら最初っから逃げればいいでしょ。それでも追いかけてこうしてたけど、スタミナ不足を考慮しなすぎる。まるであたしらを引きつけてるような……」

そこまで話して、北上は思い出した。鎮守府での戦い、最後に戦況をひっくり返したのは、混ざり過ぎていて何者かもわからなかった謎の潜水艦の存在。それが、ここまでの状態になっても表に出てくる気配すらない。

今更ながら謎の潜水艦の存在も考慮しなくてはいかなかった。とはいえ、今この海域にいるとは思えない。別行動中なのか、それとも感知出来ない何かがあるのか。

しかし、この龍驤の行動は、明らかに北上達の動きを自分に引きつけておこうとするものが交じっていた。そこにようやく気付けた。

「あのさ、あの潜水艦は来てんの？　いるなら何処にいんのさ」

北上からのその言葉を聞いたことで、龍驤は疲労の中でもニタリと笑った。

「ようやっと……そっちに気付いたか。へっ、誰が教えたるかい」

「……今、目が向こう向いた」

その視線の動きに即座に勘付いたのは山風。その方向は、施設の方向。

「えっ……まさか……施設の場所を探してる……!?」

そして、全てが繋がる。

一方、その3組の戦いの外、泣きじゃくるジェーナスを慰めている春雨。海風もその傍から離れず、周辺警戒を欠かさない。海の上から海の中まで、隅から隅まで隈なく確認している。
深海棲艦化したことで、電探からソナーまであらゆる力を使えるようになっている。当然、春雨の直感や叢雲の感知には程遠いのだが、艦娘だった頃から考えれば格段に強化されているのは間違いない。
今の春雨は完全に無防備だ。ジェーナスのために全神経を使っているようなもの。それを守るのが自分の役目なのだと、海風は今は特に気合を入れてそこにいる。このドサクサに紛れて春雨を始末しようとするような輩がいれば、容赦なく牙を剥くだろう。
そんな海風が特に気にしているのは海中の敵。目に見えないところからの攻撃は、今されるとまずい。ジェーナスがそこにいる以上、目に見えている敵と比べれば咄嗟の判断はさらに難しくなる。
「……ん？」
そして、入念に確認していたからだろう。その違和感に気付いた。ソナーの反応がおかしい場所がある。
「……敵？　敵ですね？」
それに気付いた瞬間、その反応から明確にわかる反応が飛び出した。それは確実に魚雷。狙いは確実に春雨。
「雷撃来てます！」
気付いた時には声が出ており、身体も動いていた。春雨の命を守るため、その魚雷を排除するため。
海中に砲撃を放ったところで、真下から来るような角度の魚雷を破壊するのは難しい。ならばと、それに合わせるように海風も魚雷を放った。タイミングが合うかはわからないが、春雨を守るためなのだ。一発勝負でも必ず成功させてみせる。
その気合が成功に導く。春雨に届くよりも遥かに先に、魚雷同士が衝突した。しかし、魚雷2本分の爆発は半端ではなく、本来起きる以上の水柱が時間差で発生した。

その場所は、春雨のほぼ真下と言ってもいい。それに巻き込まれることになった春雨だが、抱きかかえていたジェーナスのことは絶対に離すことはなく、そこからすぐに退避した。
「連射、来ます！」
だが雷撃はこれだけでは終わらない。春雨が避けた方向に追尾するように、次々と次の魚雷が発射され続ける。1本ずつ、丁寧に、海中から春雨の動きをトレースするように、ダダ漏れの殺意を隠すことなく。
「ジェーナスちゃん、ちょっと我慢してて」
状況が変わっても立て直すことが出来ないジェーナスに優しく語りかけた後、春雨はまるで何処に魚雷が来るかを把握しているかのように海上を動き回った。
春雨の通った場所を表すかのように魚雷が飛び出しては、その場で爆発していく。その全てが直撃すれば跡形もなく木っ端微塵にされるほどの一撃なのだが、その爆風すらも受けないレベルで回避を続けていた。
今この時にも、春雨の直感は冴え渡っている。ジェーナスを救うときのように瞳が輝くようなことは無いのだが、一度目覚めた力の余波か、この上なく性能が高まっている。
「春雨姉さんを狙うとは、不届き千万。確実に沈めます」
春雨ばかりを狙うその魚雷に腹を立てた海風は、相手が何者であるかなど関係なく殺すつもりで爆雷を用意。これでもかというほど海中に投射し続ける。
だが、あちらもかなりの上手。爆雷をヒラリヒラリと回避し、その間も攻撃の手を緩めない。
春雨はジェーナスを抱きかかえているため、反撃は不可能。ただ逃げ回ることしか出来ないが、このままではジリ貧になる。
だが、このまま施設に戻るのは得策では無い。あちらに施設の場所を教えるようなものだ。それだけは絶対に避けなくてはならない。
そうなると、春雨が執る手段は1つしかなくなる。あちらが諦めるまで避け続けることだ。

「姉さんは避け続けてください。私が処理します」
「殺しちゃダメ。この魚雷撃ってきてるヒトも、多分泥にやられたヒトだよ」
泥という言葉を聞いてジェーナスがビクッと震える。やはり完全にトラウマとして刻まれてしまっている。言葉だけでもこうなってしまうのは、可哀想にも程があった。
だがここで、予期せぬ援軍がやってくる。施設の方から駆けてきたのは、叢雲と薄雲。
「まずいことが起きたわ！」
そして第一声がコレである。こちらでは現在進行形でまずいことが起き続けているのだが。
「春雨姉さんが狙われること以上にまずいことですか？」
「アンタの春雨至上主義は今はいいのよ！　本当にまずい！」
叢雲がここまで焦っている姿は見たことが無かった。そのため、余程切羽詰まっているということがわかる。
そして、次の言葉で驚愕することとなる。

「施設が、奴らに見つかったわ！」

忍び寄る者

時は少し遡る。
春雨達が援軍に出て行った頃の施設。バタバタと飛行場姫が施設の中に入ってきたことで少し騒めき立つ。勿論その後は叢雲の耳にも入り、何事かと薄雲を引き連れてダイニングへ。
鎮守府への通信は既に終わっていたものの、中間棲姫はまだダイニングにいたため、春雨の悪寒の件をそこですぐ話すと、それは大変だとすぐにまた鎮守府に連絡をする。
「妹姫、私達は先に出るわよ。春雨が悪寒感じたって言ったなら、命中率高いでしょ。白露と古鷹以外にも敵がいるのは知ったんだから、そいつをやりに行くから」
「姉さんはこう言ってますけど、単純に春雨ちゃん達を助けに行きたいという気持ちはあると思いますので」
「余計なこと言ってんじゃないわよ。アンタも来なさい薄雲!」
飛行場姫が止めようとしなかったため、叢雲は薄雲と共に出撃準備。ちょうどタイミング悪く昼食前であったため、適当に食べ物を摘んでいく辺りが何とも叢雲らしい。
「他の連中も出られるようにしておいてよ。どんな連中が来るかわからないし、万が一があるでしょ」
「そうね。なら叢雲、薄雲、アンタ達に春雨達は任せる。後から誰かが追えるようには準備しておくから」
「ええ、それで頼むわ」
飛行場姫からのお墨付き。そして、中間棲姫も鎮守府と再度通信しながら、ジェスチャーで行ってほしいと表現したため、これはもう後押しを貰ったと考えてすぐに駆け出した。
しかし、島の外に出ようとした時点で叢雲の感知に何かが引っかかった。
「な、に……なんかおかしなのが」
「どうしました姉さん」
「海の中……底に何かいる……!?」

叢雲の感知は海上だけではない。叢雲を中心に球体、当然下方向にも伸びている。施設にいる間は、そこが島であるために地中なんて当然感知出来ないのだが、少し外に出ればかなり深くの海底まで確認は出来た。それこそ、漁をしていたら追い込み漁をする伊４７とミシェルの存在が常に何処にいるか確認出来るほどに。

だが、今は伊４７は例のドロップ艦の方へと向かっており感知外。ミシェルは今目の前にいる。そうなると、海中にいるものは１００％見ず知らずの存在ということになる。

「じゃあ、誰かが流れ着いてきた……とか」

「わからない。でも、艦娘の潜水艦なのは確定よ。私の感知はヒト型かそうでないかくらいはわかるんだから。しかも、２つなのよ」

形状までしっかり確認出来るわけではないのだが、それが異物であることは確定。鎮守府から潜水艦が来たことはないのだから、そう考えるのは当たり前のこと。

それが薄雲の言う通り溢れた艦娘なりヒト型の深海棲艦なりが流れ着いたのだとしても、それがここにいるというだけでも問題だ。それが２つとなるともっとおかしい。

すると、ミシェルが任せろと言わんばかりに海中へと潜っていく。今この場にいる海中を確認出来る者はミシェルしかいない。薄雲が止めようとする前に、自分の意思で施設の役に立とうと動き出した。

「危ないのに、行っちゃいました……」

「まったく……でも、アイツもアイツなりに施設のこと考えてんのよ。意外と苛立ちは少ないわね」

叢雲としても、ミシェルがこうやって動いてくれたのは割とありがたい。感知出来てもそれが何かわからないものは、直接見てきてもらうに限る。その行動は、叢雲にだけは筒抜けなのだから。

そうなると、急いで行こうとしても少し動けない。その感知された謎の反応次第では、今からやるべきことが春雨達の元へと向かうことでは無くなる。

そのため、ひとまず陸からミシェルの行動を見守ることにした。見守れるのは叢雲だけなので、薄雲にもわかるように少しだけ実況する

ように。
「接近したみたいね。アイツ、思った以上に早く動けてるわ」
「やっぱり普通の駆逐イ級では無いんですよね。ホントすごいです」
ミシェルの反応が、謎の2つの反応に接近。あくまでも近付くだけで、危険を考えると付かず離れずの位置を保つ。そういうところもイ級としては相当に頭がいい。観察という手段がとれるのは、知能が高いということにほかならないのだ。
「……薄雲、私は艦娘になってからの時間がかなり短かったから、他の同胞(はらから)のことは知らないんだけど、例えば姉妹の潜水艦とかいるのかしら」
それが迷い込んだだけの戦うつもりのない深海棲艦だとしたら、該当する者がいるかを尋ねる。
薄雲もこの叢雲ほどではないが、物凄く長いわけではない。しかし、薄雲が艦娘であった頃に慕っていた秘書艦叢雲からは、過去に戦ったことのある深海棲艦のことを話してもらったことがある。その中に該当する深海棲艦はいるにはいた。
「いたらしいです。私が直接相手をしたわけではないんですが、私が艦娘だった頃に話を聞いたことがあります。潜水艦だけど潜水艦じゃないような武装の双子棲姫という同胞(はらから)がいたと」
深海双子棲姫と名付けられたその深海棲艦は、過去に敵として現れ、撃破された存在。それ以降はまるで姿を見せていないらしいが、いたという前例があるのなら、他のところにいてもおかしくない。それが中立の立場となっている可能性も普通にある話だ。昔ならそんなことを思わなかったが、施設で暮らしていれば自然とそういう考えにも至る。
「この反応、それじゃないわよね……一緒に行動はしてるけど、やってることは個別ね」
しかし、話を聞いていく内に、叢雲はこの反応がそれではないと確信する。
双子棲姫は2人で1つの艤装を扱っているが、叢雲が今感知している存在は、バラバラに動いている。変異種と言われてしまえばそれま

でなのだが、それは1％にも満たない確率だ。なら、その考えは取っ払ってもいい。
「ミシェルに近付いてきてるわ。何か気付いたからじゃないわね。たまたまこちらに来てる。でも、妙にゆっくり……ん、待って、やっぱりおかしい」
「姉さん……？」
「アイツら……！　ミシェルに魚雷撃ったわよ！」
　反応だけでしか見えていないとはいえ、明らかに攻撃の意思を持っていることは確定。たまたま漂ってきた艦娘が、深海棲艦を見たから攻撃したというのなら、仕方ないことかもしれない。だが、叢雲からはそうは見えなかった。
　そもそも行動が何かを探しているようにフラフラとし、ミシェルを見つけたかと思えば即座に攻撃。まるで見られたことを拒んだかのようだった。
「ミシェルが猛スピードで浮上してくるわ！」
　攻撃を受けたからか、ミシェルは潜水をやめて一気に浮上してくる。これ以上は危険だと判断出来たようだ。普通の駆逐イ級ならこうは行かない。
「私達も迎え討つわよ。どんな奴か知らないけど、売られた喧嘩は買ってやるわ！」
「対潜装備をしておけばいいですね。了解です」
　２人して爆雷を展開。薄雲はソナーも展開して、陸から海へと飛び出す。２人とも対潜が得意というわけではないのだが、駆逐艦故に苦手でもない。しっかりと対策さえ積んでいれば、並には出来る。それが深海化しているのだから、艦娘と比べれば並以上だ。
　薄雲もちゃんとソナーを装備したことで海中で繰り広げられているミシェルのデッドヒートがわかるようになった。
　ただの駆逐イ級ではないとあちらも勘付いたか、雷撃を繰り返し執拗に追い回す。どちらかといえば、どんな相手でも見られたからには容赦はしないということかもしれない。
「来た！　薄雲、行くわよ！」

「はい、爆雷投射します」
ミシェルが海面まで浮上し、イルカのように飛び出しながら宙を舞う。それと同時に、叢雲と薄雲が海中に爆雷を投げ込んだ。勿論、一緒に浮上してきた者に対して、直撃まで狙って。
しかし、それを見透かしていたか、その爆雷をさらりと回避してミシェルと同じように海面の上へ。だが流石に宙を舞うようなことはなく、その頭を海上にひっそりと出し、叢雲と薄雲の姿をその目に捉えた。
潜水艦は2人。どちらもシュノーケルのような艤装が顔の半分以上を埋めているため、表情はおろか顔の形も判断が難しい。ただ、髪型は多少違うが叢雲はそれを姉妹だと判断した。雰囲気がどちらも近い。本来のそれとは違うのかもしれないが、何処となく姉妹感がある。
「アンタ達、何なの。うちのミシェルを攻撃するってことは、敵でいいのよね」
喧嘩腰で2人に尋ねる叢雲。薄雲もあえてそれを咎めることはしない。ミシェルが狙われたのは間違いないのだから、八割方敵としていいだろう。それが、黒幕側なのか、ただの野良なのか。それが問題。
しかし、2人の潜水艦は叢雲と薄雲を見据えたかと思えば、即座に雷撃を再開。そして逃走。対象がミシェルから叢雲達に変わっただけ。
「コイツら……！」
「姉さん、今あの2人、ボソッと何か呟きましたよ！」
怒りに震える叢雲には届かなかったが、薄雲にはその言葉が聞こえていた。
――見つけた、と。
「……つまりアイツらは」
「黒幕の手のものと考えていいと思います」
「クソッ、ここは敵対するヤツから見つからないんじゃないの!?　追

うわよ！」
　向かってくる雷撃を砲撃で対処し、２人の潜水艦を追う。島からはグングンと遠ざかっていく足の速さは相当なものであり、簡単には追いつくことが出来ない。だが、叢雲の感知のおかげで何処にいるかは手に取るようにわかる。
　追うだけなら簡単だ。だが、撃破を考えると難しい。ひとまず、追えるところまで追うというのが得策だと考え、２人は突き進んだ。

　そして現場。春雨達と合流した叢雲達は、その事実を端的に伝える。
「はっ、はは、ようやってくれたで。これでうちらも帰れるわ」
　傷だらけでもうギリギリというところにいるのに、あくまでも負けていない、思惑通りに事が運んでいると龍驤はまだ勝ち誇ったように笑う。
「はぁ……そういう事。アンタ達自身も陽動だったわけだ。施設を……姉姫の居場所を突き止めるためにこんなに大袈裟なことを。負けを認めないのも時間稼ぎだったってことかい」
　龍驤は何も言わないが、フラフラと北上の目の前であっても撤退の姿勢を見せた。これで逃げられると思っているくらいに傲慢であり、ここまでされても勝ち誇れるその神経を疑う。
「逃がすわけ……ないでしょ」
　呆れて動けなかった北上に代わり、山風が龍驤を捕縛しようと動き出す。しかし、叢雲と薄雲は見ているが、ここには潜水艦が２人いるのだ。片方は春雨を攻撃していたが、もう片方は龍驤の下へとやってきており、急浮上することで山風の行動を阻害する。
「っ……」
「すまんな……またうちボロボロにされてん。ホンマ、北上が言う相性っちゅーのはあるのかもしれんな……」
　口ではこう言うが、負けたとは露ほども思っていない。潜水艦に守られたからここに立っていられるだけだというのに、口だけは達者

だった。
　そしてこの潜水艦、鎮守府に現れた個体とはまた違うモノ。あまりにも混じっていて特定が出来ないところや、着ている水着のデザインは、前に見たモノと同じなのだが、髪型や体型がほんの少しだけ違う。だからだろう、北上もこれを姉妹として断定した。
「撤退する」
「おう、頼むわ。うち結構ギリギリやねん」
　潜水艦はシュノーケル越しに溜息をついて、龍驤を引っ張って撤退。それを確認したからか、大鳳とコロラドも即座に撤退の姿勢に。
「戦艦のヤツと、比叡、だったかしら。次もこうなるとは思わないことね！」
「ええ、次はちゃんと終わらせてあげる。今は貴女達のことよりも優先しないといけない事があるもの」
　戦艦棲姫はその撤退を容認。今は無理して戦うより、各所のケアの方を優先したいと考えた。当然その対象は、ジェーナス。
「私は貴様を逃すつもりは無いが？」
「いえ、撤退させてもらいます」
　大鳳の周囲の艦載機が急降下爆撃を始める。当てる気がないそれは、そこにいる者達の視界を隠し、気付いた時にはそこには敵の姿も無くなっていた。春雨を襲っていた潜水艦も、それに呼応してすぐに遠退いている。

　これにより、戦いは終了。結果的に何も変わらず、施設の位置が敵に知られるという最悪な事態になってしまった。

次に向けて

龍驤達の襲撃は、施設の場所があちら側にバレてしまうという最悪の状況で幕を下ろす。それだけでも大変なことなのに、ジェーナスが精神的に追い詰められているためにガタガタ。怪我人がいないわけでもない。この戦いはあちら側の思惑通りに行ってしまったため、敗北と言っても過言ではないだろう。

そして、ようやく戦いが終わったことで詰まっていた息を大きく吐き出した比叡が、響き渡るくらいの大きな声で叫び出す。隣にいた戦艦棲姫は大いに驚いた。

「な、何よ突然。驚くわね……」

戦艦棲姫も戦いで疲弊しているため、あまり強く構っていられない。対する比叡は、コロラドと激戦を繰り広げた割には元気な方である。

「金剛お姉さまに荒潮を託しているんでした！　今頃どうなっているか心配です！」

伊４７が戦場から離れたところを、金剛に保護されたということは比叡が戦闘開始時に話していたことだ。

実際は、ここに来るまでに部隊を半分に分けて、片方を援軍として、もう片方はドロップ艦保護としていた。金剛はその後者である。他にはここにいない空母達や大井、そして念の為に来ていた宗谷。

気を失っているドロップ艦をクルーザーに乗り込ませるというのが普通の処置なのだが、伊４７からちゃんと事情は聞いているため、その辺りの対処は引き続き現場でやっているだろうというのが比叡の想定。

泥を内包し、まだ吐き出すかもしれない存在となれば、そう易々と鎮守府に連れて帰るわけにはいかない。だからといって放置するわけにもいかない。気を失っている間ならば何事もないかも知れないが、目覚めた途端に敵対から再び口移しによる侵蝕があり得る。

「そっちは任せたわ。ヨナがまだ戻ってきてないってことは、そちらに付き合ってるってことでしょ。通信なり何なりして、近況を知って

ちょうだい」
　戦艦棲姫としては、そちらも心配ではあるが、伊４７のことを信じているため、最優先は心を完全に折られてしまったジェーナスになる。
　そのジェーナスは、未だに春雨に抱きかかえられて泣きじゃくるのみ。まるで見た目以上に幼くなってしまったように、感情のままに泣き続ける。
　何故そうなってしまったのかを知らない叢雲と薄雲は、そんなジェーナスに違和感を覚えてしまったが、一部始終を知っている白露が合流して、端的に説明した。なるべくジェーナスの耳に届かないように。
「何よ……それ」
　叢雲の拳が握り締められる音が聞こえた。薄雲も口を手で押さえながら目を見開いていた。
　泥による侵蝕は話にしか聞いていなかったのだが、実際に起きてしまったのは少なからずショックだった。それも、施設の中では特に優しく、仲間のことを第一に考えていたジェーナスが、その泥のせいで真逆の性格になってしまったのだ。
　そうなってしまっていた時のジェーナスを知る者は少ない。施設の者だけで言えば、今慰めている春雨と海風、戦った白露と、戦艦棲姫。伊４７に関しては海中で見ていたのみであるため言動の全貌までは知らない。
「イライラ通り越して呆れたわ。陰険にも程がある」
　吐き捨てるように話す叢雲。それは誰もが同意する。姿形どころか、居場所すらもわからない黒幕。そのやり方は、自分では動かず、基本的には艦娘を侵蝕させて自分の配下にしている手口。あくまでも手を汚さず、白露を筆頭とした治療された面々にも、心に傷を残し続ける結果となる。百害あって一利なし。
「叢雲、今はジェーナスには……触れないであげて。多分、慰められるのは、ジェーナスを元に戻した春雨だけだから」
「そこは任せるわ。どうせ私が何かしても、ジェーナスが嫌な気分に

なるだけよ。私自身がわかってるつもりだから。イライラするけど」
　自分の性質を正しく理解しているために、叢雲はそういう状況に首を突っ込むことはしなかった。ジェーナスをこれ以上崩したら、確実に自分に対しての怒りで頭がおかしくなる。
　ただでさえ怒りが溢れているのだから、制御出来ている今の状態を維持しなくては、今以上に施設に迷惑がかかる。
「私達は先に施設に戻りましょ。今回のこと、姉姫と妹姫に伝えておかないとダメでしょ」
「だね。でもヨナがまだ帰ってきてないんだ。だから、叢雲達が伝えに戻ってもらっていいかな」
「ったく、仕方ないわね。アンタに聞いたこと、そのまま伝えるわよ」
　状況が状況だけに、叢雲も素直である。以前だったらここでも当たり散らしていそうだが、随分と制御出来ているものである。

　一方、鎮守府組。比叡が金剛達のことを思い出したことで、まずは島風がそのスピードを活かして金剛達の元へと駆け出した。向かう前に白露と戦艦棲姫から大まかな流れを聞いていたため、それを説明するために。
　島風も戦いの中で疲れていたのだが、こういう時だからこそと力を振り絞って伝令係を買って出る。消耗はしているが、持ち前のスピードはまだ失われていない。
　部隊の通信機器はその部隊の旗艦、今回で言えば金剛が持っているのみであり、今のように部隊を分割して行動してしまうと、途端に面倒なことになる。
　しかし、今回に関してはこれが最も適した方法であった。全員で龍驤達を対処していたら、逃げられることも無かったかもしれない。しかし、荒潮がどうにも出来ていなかった可能性もある。
「いた！　おーい！　金剛姉ちゃん！」
「島風、大丈夫でしたカ!?」
「だいじょーぶ！　近況報告ーっ！」

そのスピードのおかげで、島風はすぐに金剛達と合流出来た。
本来ならばドロップ艦を鎮守府に早々に運ぶことを優先するのだが、この荒潮は泥に侵蝕されていることがわかっている。そのため、あえてここでの待機を選択したのだ。これでどれだけ経っても誰も戻ってこなかったら、部隊は援軍に行ったことで全滅してしまったと判断出来る。
島風がこの場に現れてくれたおかげで、戦いは勝利したか、あちら側が撤退したかということになるだろう。だが、島風の表情は浮かない。
「荒潮、どうしている?」
「宗谷のクルーザーに乗せてありマース。まだ目を覚ましていませんガ、泥を吐き出す可能性があるんデスヨネ?」
まだそこにいる伊４７に尋ねると、うんうんと首を縦に振る。足下にいたため、島風は驚くことになったが、すぐに気を取り直して話を続ける。
詳細を聞けば聞くほど、金剛達の表情は曇っていく。荒潮はまだ解放されておらず、そのまま鎮守府に連れていったら大惨事になっていたこと。それもあるのだが、施設の場所があちら側にバレてしまったことと、ジェーナスが潰されたことの方が堪えた。
「まずは目の前の危機をどうにかしましょウ」
「鎮守府に連絡をしてみては？　さっきは通信妨害がありましたけど」
大井の言葉に金剛がなるほどと早速鎮守府に連絡を取ろうとする。先程は龍驤達と戦闘中だったということもあり、通信中にノイズが走り話せるような状態では無かったが、撤退したというのならもう大丈夫だろう。ある程度離れていても妨害をしてくるのは、槍持ち（叢雲）の時でもあったこと。そこまで驚くことではない。
『良かった、通じたということは、戦闘は終わったということだね』
「Ｙｅｓ．　さっきノイズが走った場所から動かなくて正解でしタ」
ノイズが走る中でも、提督は金剛にその場から動かないようにと指示を出していた。どういうカタチででも戦闘が終わるまでは待機。

もし分けた戦闘部隊が敗北を喫したとしても、それをいち早く知ることが出来るため。
すぐに荒潮を連れて戻るようにと伝えていたら、確実に荒潮を目覚めさせていた。その時点で泥の増殖は確実で、鎮守府の誰かが侵蝕を受けていただろう。そういう意味では、この選択は結果として正解だった。
「今、島風が先行して戻ってきまシタ。説明してもらいマス」
『ああ、頼む。多少は姉姫に聞いているが、詳細は知らないからね』
ここでまた提督が戦況を聞く。あくまでも出先からの通信であるため表情は見えないが、声色からして金剛達と同じように曇っていることは間違いなかった。
『そう……か。ならば、その荒潮を連れて鎮守府に戻ってきてくれ』
ここでの提督の選択は、まだ泥を増殖しているであろう荒潮を手元に置くというもの。
「いいんですカ？」
『ああ、言い方は悪いが、敵側の戦力を捕虜にすると思えば、これは必要なことだ。荒潮にその記憶があるかはわからないが、指示を受けていたというのなら、少なからず今もあちら側の思考にされていると考えればいい』
荒潮を捕虜として捕え、尋問なり何なりをするにしても、リスクはかなりのものだろう。もしこれで荒潮が際限無しに泥を増殖させ続けたら、鎮守府は壊滅が確定する。情報も何も無い可能性だってある。何も得られない可能性の方が高いくらいだ。
しかし、提督には考えがあった。それが、今の鎮守府で行われている研究のこと。一か八かの賭けにもなるかも知れないが、今はただ訓練するだけではひっくり返せないくらいのところまで来ている。何せ、敵は何処にいるかわからず、泥によって勝手に増え、さらにはまるで感染症のように増殖する特殊なモノまで現れてしまっているのだ。
『明石に荒潮を分析させる。そして、泥の対策を早急に作り上げてもらう。我々が完全勝利するためには、これしか無いと考えた』

もし泥を増殖させて吐き出したとしても、それがあればさらに分析が進むだろう。当然取り扱いに失敗した時点でアウト。むしろ、明石が侵蝕されたら鎮守府の勝ちの目が完全に無くなる。
それでも、ここで賭けに出なければ全員を救うことは出来やしない。当然、この荒潮だって救うつもりで捕虜にする。研究、実験の結果、もし体内にある泥を吐き出させることなく消滅させることが出来るようになれば、今回の戦いは一気に有利になる。
むしろ、荒潮をも救うためにはこの選択以外には無い。泥を増やす存在である荒潮を施設に置くわけにはいかないし、だからと言って放置するわけにもいかない。ここで放置しようものなら、他の海域で同じように泥を増やし続けるだろう。
ならば、手に届く範囲で管理し、元に戻す手段を探し求める方が現実的であり建設的。
『危険を伴うのは百も承知だ。しかし、ここは決断の時だろう。我々は平和を取り戻さなくてはならない』
確固たる意志を感じる提督の声。誰も犠牲者を出すつもりは無い。
「……わかりまシタ。今は起こさないように、起きたら気を失わせるようにして、鎮守府へと運びマス。それでいいデスネ」
『ああ。よろしく頼む。くれぐれも気をつけて』
これで通信は終わり。戦場に向かった残りの面々が合流したら、そのまま鎮守府へと帰投。荒潮は捕虜として扱い、この戦いは一時的に終わる。
「荒潮は連れて帰りマス。ヨナ、ここまでいてくれてＴｈａｎｋ　ｙｏｕデース」
「ううん、何かあったら危ないし、ヨナも最後まで見届けたかったヨナ。でも、これでもういいかな」
「Ｙｅｓ．　姉姫によろしくデース」
今の話を施設に持って帰るため、伊４７はここで別れることに。流石に鎮守府までついていくわけにもいかないし、あまり遅くなっても施設に迷惑をかけてしまう。
「さて、今から私達は、爆発物を運ぶことになりマース。宗谷、負担が

大きくなってＳｏｒｒｙね」
「いえ、むしろ私がここにいて良かったです。背負って帰る方が危険ですから」
「そうデスね。Ｃｒｕｉｓｅｒのおかげで、私達は安心して戻れマース」
運んでいる最中に目を覚ました時のことを考え、荒潮の隣には誰かをつけることに。おそらく戻ってきた武蔵が受け持つことになるだろう。
「では、合流を待った後、帰投しマース。皆さん、最後まで気を抜かずに行きまショウ」

戦いの後、それぞれが次に向けて歩き出す。だが、施設の場所がバレた以上、ここからは混迷を極めることが確定していると言えるだろう。
何事も無く終われるかは、まだわからない。

心の力

春雨達が施設に戻ったのは、叢雲達が先行して戻った後、少し経ってから。ジェーナスは泣き疲れて眠ってしまっており、そのまま春雨の手でベッドルームへと連れて行かれた。

その頃には叢雲からの又聞きとはいえジェーナスの全貌を聞いた姉妹姫は、春雨から改めて話を聞いた後、目を覚ますまでは傍にいてあげるという。目を覚ました時に周りに誰もいなかったら、また自己嫌悪に苛まれて発作を起こし、最悪の場合死を選択してしまう可能性がある。それだけは避けなくてはならない。

「アタシは先に行ってる。お姉は春雨から話を聞いておいて」

「ええ、よろしくお願いねぇ」

２人して話を聞く必要はないので、飛行場姫は先んじてジェーナスの元へと向かった。泣き疲れて眠っているとしても、今この時にもう目を覚ましている可能性が無いとは言えない。今のジェーナスは１分たりとも目を離すことが出来ないだろう。

残されたのはジェーナスとの戦いをすることになった春雨筆頭の白露型姉妹。ダイニングには今は誰もいなかったため、そこで。ようやく腰を落ち着けることが出来たため、大きく息を吐いて身体を落ち着けた。

「その前に、貴女達はまだご飯を食べていないから、先にお昼にしましょうかぁ。お腹が空いているのも良くないものねぇ」

「あ、はい、そうですね。言われてみれば、お腹ペコペコです」

タハハと苦笑しながら空腹を今更ながらに感じてお腹を押さえる。戦闘中もそうだが、施設に戻ってくるまでも、ずっとジェーナスのことを気にかけていたので、空腹すら忘れていた。

ここに来てようやく気が抜けたともいえ、そうするとドッと疲れを感じる。空腹と共に眠気までやってきたため、昼食を摂った後は確実にお昼寝になるだろう。

「春雨姉さんは特に頑張りましたからね。うんと栄養をつけた方がいいです。春雨姉さんがいなければ、ジェーナスさんは救われませんで

したから。ああ、なんて素晴らしいことなんでしょう。春雨姉さんの偉大さを、改めて実感しました。私もそのお手伝いが出来たことを光栄に思います」
　ここに来て海風もヒートアップ。今まではジェーナスのこともあったからか静かにしていたが、今は気を遣うところもない。それ故に、抑え込んでいた感情が一気に溢れ出してきている。
「春雨ちゃんがジェーナスちゃんを救うことが出来たのは……やっぱり、彼が言っていた」
「はい、『辿り着く力』だと思います。あの時、あの瞬間だけは、何処をどうすればジェーナスちゃんが救えるか、その、全部が視えたんです」
　会話を阻害しそうだった海風は白露が黙らせ、春雨のことについて中間棲姫が言及していく。やはり今回の論点の1つはそこだ。
　救いたいという強い願いが春雨の覚醒を呼んだのは確かだ。救うための光の道が春雨の目にのみ映し出され、舞うようにその道を歩み、そして辿り着いた。その全てが春雨の手中に収まっているかの如く。
「春雨ちゃん、今身体の調子は大丈夫かしらぁ。急に理解し難い力を持ってしまったのなら、異変があってもおかしくないわぁ。見た目は何も変わっていないようだけれど」
「そう、ですね。今のところは何も。でも、何と言えばいいのか、今は何も視えない感じです。理屈はわかりませんが」
　単純に辿り着く必要がある事柄が無いだけにも思えるのだが、そうで無い感覚もある。直感が異常に強くなった春雨には、それも直感的にそうなのではないかと感じるものがあった。
　強すぎる力故に反動があると言われれば、素直に納得出来る。ジェーナスを救うために振り絞ったため、少しの間は同じことは出来ない。もしくは、本当に仲間を救いたい時にのみ発揮される力であるがために、今は何も無い。どちらか。
「常に視え続けるだなんて、春雨ちゃんも困っちゃうでしょう。それに、今は何事も無くても、気を抜いたらおかしなことがあるかもしれ

ないわぁ。少しでもおかしなことがあったら、すぐに言ってちょうだいねぇ」
「はい、ありがとうございます」
　それこそ、昼食後、昼寝の後、むしろ明日の朝だって、何か起きるかもしれないのだ。何事も無いことを確認出来るまでは、安静にする必要すらありそうである。
「春雨姉さんにはこの海風がいますので、もし何かあれば私がお助けします。お任せください。あれ程の力を発揮したんですから、本当に何があってもおかしくないんです。爛々と白く輝く美しい瞳、蝶のように舞う御姿、そして、蜂のように刺すその一撃。本当に惚れ惚れとする」
「はーい海風、わかったから今は抑えようねー」
　止まらない海風。白露ではブレーキは踏めなそうである。
「それにしても……『辿り着く力』……ねぇ。曖昧すぎたけれど、今回の件でそれがどういうものか、よくわかったわぁ」
「はい……最高最善の答えに辿り着く力、ですね」
「私の中身が貴女を排除したがるわけよねぇ。完全に目覚めたら、そもそも隠れることすら出来なくなるんだもの。それに、ジェーナスちゃんを救えたように他の子を救うことだって出来るかもしれない。思惑通りにいかない最大の壁、よねぇ」
　今はまだ春雨は完全に覚醒したわけでは無いのかもしれないが、その兆しが見え、その力を使いこなした春雨は、中間棲姫と同等の危険度として認識されただろう。
　むしろ、春雨の方が狙われかねない。春雨を殺すことが出来れば、最大の障壁は無くなり、目的の達成がより早くなる。春雨を侵蝕することが出来れば、障壁を取り払いつつ戦力を増やし、その辿り着く力すらも手中に収めることが出来る。
　あちら側が狙ってくるなら、前者より後者だろう。むしろ最悪の姫の中身は、器を取り戻す前に春雨の身体を狙ってくるかもしれない。今の中身がどういう状態かはわからないが、他の泥のように他者の身体を奪うことは可能だろう。器に戻るように。

そうではないかと話す中間棲姫の言葉に、春雨は素直に納得する。自分の持ってしまった力が、敵にとっては邪魔な力であることは、自分だからこそ理解している。もし敵側がこんな力を持っていたら、こちらの負けは必至。勝ち目を狙っても答えに辿り着かれたら全て意味が無くなる。

「私自身……その、完全に使いこなせているとは思っていません。ジェーナスちゃんを救いたいって思った時だけ発揮したような感覚はあります」

「春雨ちゃんの力は、心の力なのかもしれないわねぇ。力強く、こう在りたいと思った時にだけ発揮される力、みたいな感じかしらぁ」

この辺りはまだまだ曖昧だ。持ち主である春雨自身があやふやなのだから、持っていない中間棲姫がどうのこうの言えることはない。

しかし、その力を使って現状を打破したというのは事実。それだけで狙われる理由が出来てしまっている。

「春雨ちゃん、その力を使いこなせるようにするかどうかはさておき、今はゆっくり休んでちょうだい。自分の身体を守るためには、心身共に健康でなくちゃいけないわぁ」

「そう……ですね、今はゆっくり休みます。この後に何か出てきてしまうかもしれませんし」

「ええ、何をするにも万全がいいわぁ。聞いたことはないけど、風邪なんて引いたら困っちゃうもの」

深海棲艦に風邪という概念があるかはわからないが、体調不良なら普通にあり得ることだろう。そうなってしまったら、後々厄介なことになりかねない。

だから今はゆっくりと休息を取る。もう次の戦いは確定したようなものなのだから、それに備えて今は落ち着くのが一番である。

空腹を満たすための遅めの昼食、戦闘で汚れた身体をお風呂で清潔にし、白露型姉妹は3人揃っていつも通りの私室へ。その頃には気が抜けたか一気に疲れと睡魔が押し寄せた。

特に春雨は、初めて『辿り着く力』を使ったことが負担になっていたか、身体が筋肉痛になったかのように痛んだ。脚から力が抜け、ベッドに倒れ込んでしまった春雨に、海風が即座に駆け寄る。
「姉さん、大丈夫ですか!?」
「あ、あはは……今になって力が抜けちゃった。なんだか脚に力が入らなくって」
義脚に力が入らないということは、まともに艤装が展開出来ていないということになる。それを自覚した瞬間に展開されている義脚は消えた。
出そうと思っても出せそうにない。それほどまでに消耗してしまっているのだろう。むしろ、今使える力をあの時に前借りしていたかのように錯覚する。
「やっぱり、あの時の戦い方が響いてるんだろうね。春雨、艦娘の時とも違う動きしてたもん。大分無茶してたでしょ」
ベッドに横たわる春雨の隣に白露が座り、頭を撫でる。姉として、頑張った春雨を労うように。
「今はゆっくり眠ればいいよ。というか寝れ。春雨はこれからもっとキツい戦いをする羽目になりそうだからね。艦娘の時よりも辛い目に遭うかも。だからさ、ゆっくり出来るときはゆっくりしときな。あたし達がちゃんと見といてあげっからさ」
そう言って海風に振ると、勿論だと言わんばかりに逆サイドに座り、春雨の背中を撫でる。
「春雨姉さんは私達が守ります。絶対に。敵の手になんて渡しはしません。殺されるなんて私が許しませんし、侵蝕なんて以ての外です。春雨姉さんがああなってしまったら、私はどうすればいいのか」
「素直に半殺しにしてくれていいよ。姉さんや古鷹さんみたいに、私も絶対に耐え切るから。私だってそんなことで死にたくないもん。それに、敵にいいように使われるなんて私だって嫌だ」
眠そうではあるが、力強く返す。自分から屈するなんて絶対にしない。そんなことするくらいなら死んだ方がマシだ。だが死んでしまったら敵の思うツボ。じゃあ死ぬわけにはいかない。これだけ自

分の死を悔やんでくれるヒトがいるのだから、尚更である。
「だから……私も頑張るから……私を助けてね……」
「勿論です。私は春雨姉さんのために生きていると言っても過言ではありませんから。私を救ってくれた春雨姉さんのために、私は春雨姉さんを救います。時には矛として、時には盾として、春雨姉さんの身体に危害を加えるような輩は八つ裂きにします。誰であっても、春雨姉さんの身体に害を与えるものは許しません」
　力強く宣言する海風に苦笑しながら、疲れに屈服してそのまま眠りに落ちた。その寝顔はとても安らかである。心配事は多いものの、姉妹の温もりのおかげでグッスリと眠れそうだった。
「……白露姉さん、今も言いましたが……春雨姉さんは必ず守ります。私の命に替えても、春雨姉さんを敵の思い通りにはしません」
「うん、それはあたしも賛成。でも1つ間違ってる」
　海風の発言に、白露は1つだけ訂正を求めた。
「命に替えてもはダメ。アンタも生きな。誰も死んじゃダメだよ。春雨が悲しむから」
「そう、ですね。どうであれ春雨姉さんが辛い思いをするのはダメです。だったら誰も死ぬことは許されません。白露姉さんもですよ」
「当たり前。あたしはもう二度と死にたくないからね。死ぬのって、めっちゃくちゃ怖いんだよ。あたしは知ってるんだから」
　説得力のある白露の言葉に、海風は何と返せばいいのかわからなくなった。

　今はただ休み、次のための戦いに備える。施設の場所を知られたからには、それこそ今からでも襲撃を受ける可能性があるのだ。
　ここからは敗北は許されない。一度の敗北が、全ての敗北に繋がる可能性が高い。ならば、常に万全を維持しなくてはならない。

決意の力

春雨が目を覚ましたのは、もう夕暮れ時。両サイドを陣取っていた海風と白露もグッスリ眠っていたが、春雨がモゾモゾと動いたことで2人とも同時に目を覚ますこととなる。白露は大きなアクビをしながら身体を起こし、海風はボンヤリとした表情で春雨が目を覚ましていることを確認したことでシャキッと起き上がる。

「おはようございます春雨姉さん……という時間帯ではないですが、よく眠れたようで何よりです。身体の方は大丈夫ですか？　あの力を使ったことで後遺症なんてあったりしませんか？」

脚が無いために身体を起こしづらい春雨のサポートをしながら体調を心配する海風。

実際、一眠りしたことで疲れは取れているのだが、やはりまだ反動は残っており、少しだけ目がボヤけた。春雨の力は目に出る力だ。そのせいで、身体以上に目が疲れている様子。むしろ軽く眠ったことで疲れが目に来ているとすら言える。

「うまく焦点が合わせられないけど、多分一過性のことだよ。夜にまた眠れば、明日には治ってると思う。それに見えなくなったわけじゃないから。極端に視力が下がった……ってわけじゃないけど、そこまで支障は無いよ」

「そんなことはありません。目が霞むということは、歩くだけでも大変なはずです。夕食も食べづらいでしょうから、しっかりサポートさせていただきます。この海風、春雨姉さんの手となり足となり目となり、獅子奮迅の活躍を」

「はいはい海風、春雨ちょっと困ってるから止まろうね」

軽く擦っても変わらなかったため、一過性のかすみ目と考えて残り少ない今日を過ごすことに。義脚を展開して立ち上がったものの、やはりボヤける視界は思った以上に厄介で、疲れは取れているはずなのにフラついてしまった。

それを海風が見過ごすわけもなく、即座に駆け寄り倒れる間すら与えずにその肩に手を回して支えた。

「姉さん、無理をしてはダメですよ。ちゃんと支えますから」
「ご、ごめんね。疲れは取れてると思ってたんだけど」
「今だけは私をしっかり頼ってください。頼るなと言われても、海風は春雨姉さんの隣から離れませんからね」
　支えがないと立っていられないというわけではないので一旦離れるものの、ボヤける視界では部屋から出てダイニングに向かうのも難しそうである。結果的に、海風の手助けがどうしても必要ということになった。
「じゃあ、春雨は海風に任せるよ。あたしはちょっと行きたいところがあるんだよね」
「行きたいところ……ですか？」
「うん、多分もう起きてる頃だと思うから」
　その言葉で察した。白露が行きたいという場所は、ジェーナスの部屋だ。

　一方、そのジェーナスの部屋。ベッドの真ん中でジェーナスが眠り、その側に姉妹姫が共に目覚めの時を待っていた。２人とも、心の底からジェーナスのことを心配し、目を覚ました直後からメンタルケアが出来るように。
「ん……うぅ……ぁ……」
　すると、ジェーナスが呻き出す。辛そうな表情に冷や汗、歯を食いしばり、ブルブルと震える。悪夢を見ているようで、酷く魘されていた。
　ジェーナスがこの施設の一員となった直後も、毎晩こんな感じだったことを姉妹姫は思い出す。過去ジェーナスは、自己嫌悪のきっかけとなった死の寸前の戦いを鮮明に思い返す羽目になっては、目を覚まして発作を起こしていたのだ。
　そんなだから、ここに来た直後の者達は２人の添い寝でまず一晩を明かすことになった。ジェーナスは一晩どころか、数週間は添い寝をしてもらっていたのだが、人数が増えていくたびに少しずつ変わって

今に至る。姉妹姫だけでなく、他の者でも賄えるようになったからである。
「ジェーナスちゃん……酷く魘されているわぁ」
「これは大丈夫じゃないわね。汗は拭いてあげましょ」
用意していたタオルで冷や汗を拭いてやる飛行場姫。だからといって悪夢は振り払えないため、もう無理にでも起こした方がいいのではという考えに。
当時も、あまりに酷い魘され方をしていたら起こしていた。その都度、ジェーナスは堰を切ったように涙が溢れ出し、姉妹姫のどちらかに抱き着いて大泣きする。
「ジェーナス、起きなさい。悪い夢から覚めなさい」
今回は汗を拭いてやっていた飛行場姫が身体を揺すって起こす。なるべく早く目を覚ますようにと、少しだけ強めに。
しかし、今回のジェーナスは施設に流れ着いた当時とは違い様子がおかしい。その時の悪夢ではなく、たった今の悪夢を見せられてしまっていた。
普通ではあり得ない言動をひたすらにしていた、まさに狂っていた頃の自分。その時の情景、思考、感覚、記憶、全てが鮮明に残ってしまっているせいで、苦しくて苦しくて仕方なかった。
「ジェーナスちゃん、目を覚ましてちょうだいねぇ」
逆側に回って中間棲姫もジェーナスを揺り起こす。2人がかりで揺すったおかげで、ジェーナスは悪夢の世界から脱出することが出来た。
「っあ……」
ゆっくりと目を開けると、溜まっていた涙が溢れ出た。思考がぐちゃぐちゃ、吐きそうなくらいに気持ち悪く、そして今までで一番自分のことが嫌いになっていた。
「わ、私……うぅ……」
布団に包まれていた腕を外に出して、溢れた涙を拭う。それでも、次から次へと涙が溢れる。さっき春雨の胸の中でさんざん泣いたのに、まだ止まる気配がない。

「ジェーナスちゃん……私達に、話してくれるかしらぁ。溜め込んでいるから辛いと思うの。ゆっくりでいいから、心の内に溜め込んじゃっているものを、全部吐き出してみましょう」
「う、うぅ、でも……」
「大丈夫。ジェーナスちゃんのことを誰も責めないし、むしろ今のままの方が心配になっちゃうもの。だから、どうかしらぁ」
内に秘めるモノを今ここで一度全て吐き出してしまうべきだと中間棲姫は話す。それはどれだけ悪態をついてくれても構わない。淑女でなくてはならないだなんて言わない。思いの丈を、好きなように、当たり散らすように、それこそ見た目の如く子供のように癇癪を起こしてもいい。
スッキリ出来るのなら、何をしてもいいのだ。モノに当たるのは少し抵抗があるが、それで涙が止まるのなら許容出来る。そもそも発作（コマンダン・テスト）で暴れてしまう者がいるのだから、それくらいではまるで苦にならない。
「……2人にも……知っておいてもらいたい。私の……私のCruelty（残虐性）……自分の中にこんな感情があるだなんて知らなかった……」
そこから涙を拭きながらゆっくりと話し始める。今見た悪夢のこと、その時の自分の感情。
ジェーナスは真面目で心優しく仲間思いであるがために、あの言動を普通以上に悔いていた。それが悪意の塊によって植え付けられた、いわば外付けの感情であるとしても、自分の中に隠れていたモノであるという考えが拭えない。自己嫌悪が溢れているのだから、自分はそういうヤツなんだと簡単に思えてしまい、そして思い込んでしまう。
白露のように割り切ることが出来ない。古鷹のように耐えられない。自己嫌悪のせいで前が向けない。ジェーナスにとって、あの一連の流れは、今まで積み重ねた全てを壊されたに等しい。
「愉しんでいたの……ヒトが傷付く様を見て、私、心底悦んでいたのよ……。ただでさえ私は私が大嫌いなのに……友達を傷付けて気持ち良くなるだなんて……私もっと自分のこと……」

今のジェーナスは自己嫌悪が再度壊れんばかりに溢れ出している状態だ。艦娘だったなら泥が溢れて繭となるほどに。
しかし、既に深海棲艦化しているせいで壊れることも出来ず、ただただ悔いることしか出来ず、復調の兆しすら与えられない。泥が溢れる代わりに涙が溢れる。
「ジェーナス……アンタの場合、開き直れって言っても難しいでしょう。でもね、そんなにウジウジしていたら、周りが余計に悲しむわ」
そこに飛行場姫はあえて強めに押す。自分が嫌いならば、自分以外のために行動しろという話。
これは実際、施設に訪れた当時にジェーナスに話したことだ。自分を嫌う分、仲間を好きになれと。その結果が今までのジェーナスだ。仲間思いのジェーナスは、飛行場姫のこの教えで完成していた。
だが、今はその思いごと破壊されてしまっている。仲間を思う気持ちが悪意の塊に利用され、虐げることで悦びを得るサディストとしての人格を形成させられた。
「私は……こんな私は……生きてる価値なんて無いわ……あの時にハルサメに殺してもらっていればよかった……」
「バカなこと言うんじゃないの。生きていたらやり直せるけど、死んだらそれで終わりなのよ。周りに怒りと悲しみを振り撒いて、アンタはそこから逃げて終わり。そっちの方が嫌でしょ。むしろ、アタシはそうされた方が嫌いになるわ」
グスグスと鼻を啜りながら話すジェーナスを、飛行場姫は叱咤する。死を望むのは最も良くない感情だ。『死んで償う』は逃避。本当に償いたいのなら、共に生きて誠意を見せる。それが飛行場姫の考え方。
叢雲が白露や古鷹に言った通り、誠実であることを証明し続けることが償いとなる。2人とも嫌々やっているわけではなく、本心から償うために今を生きている。それが全て悪意の塊のせいであっても、自分がやったことには変わりないのだからと。
ジェーナスもその中に含まれるようになるのかもしれない。だが、誰一人として手にかけていないのだから、何も問題は無いのだ。よう

は、気持ちの問題。それが難しいからこうなっているのだが。
「ジェーナスちゃん、私からも1つ。むしろ、謝らなくちゃいけないかもしれないわぁ」
「姉姫……悪いのは全部私なのに……」
「貴女に迷惑をかけたのは、私の半身と言ってもいい存在じゃない。そんな子が貴女をそんな風にしてしまったというのなら、それは私の罪でもあるわぁ」
　言いながらジェーナスの手を取る。
「ごめんなさい、ジェーナスちゃん。私の半身が、貴女にとんでもないことをしてしまった。悪いのはジェーナスちゃんじゃない。私より罪は無いわ。だから、ね？」
　悲しそうな笑みを浮かべる中間棲姫。そんな表情を見るのは初めてだった。いつも朗らかで、農作業が大好きで、仲間との団欒の時間を心底楽しんでいる中間棲姫からそんな表情を引き出してしまったのだと思うと、ジェーナスは余計に自己嫌悪が強くなる。
　それに気付いた飛行場姫は、ここで思い切った行動に出る。
「ジェーナス、アンタ、どちらなの。自分でやったことだから罪を償いたいとか、やらされたことだから開き直りたいのか」
「わ、私、は……」
　中間棲姫が目を丸くして飛行場姫を見るが、今は口出しするなと制する。
　ここまでズルズルと落ち込んでしまっているジェーナスの気持ちを引き揚げるのは、寄り添い続けるだけではもうダメだった。自己嫌悪を破壊することは出来ずとも、どうしたいのかを自分で選択させることで吹っ切れさせる。
　そのためには、自分が嫌われてもいいという覚悟が飛行場姫にはあった。中間棲姫はここを治める者なのだから、仲間達からは好意的に思われてもらいたい。ならば、犠牲になるのは自分だと。
「どちらなの。自分で決めなさい。ここで優柔不断はダメよ。答えられないは許さない。0か1しか無いわ」
　強めな言葉で言い寄る。その目は真剣そのもの。ジェーナスは圧

倒されてしまった。
「私は……私は……前のように戻りたい……戻りたいよ……」
「そうね、アタシもそう思ってるわ。なら、そのためにはどちらを選ぶの。償うか、開き直るか」
はぐらかすことは出来ない。ここで選ばなくては、先に進まない。
どちらを選んでも、必ず立ち直れる道を示してくれる。そう信じられるくらいの力を飛行場姫が持っているのは確かだ。だからこそ、どちらかを選び取らなくてはならない。
その決意の力で、ドン底まで落ちたジェーナスの心を引き揚げる。自分の意思を強く持たせることで、元に戻す。
「私、は……私の望みは……開き直りたい。だって、だってアレは、私だけど私じゃない……んだもの」
そして選び取ったのは、開き直る方。まだ震えてはいるが、ジェーナスはそちらを手に取ろうとした。
「ええ、その選択は正しい。ジェーナス、何も間違っていないわ。アンタは正しい。その時のアンタはアンタじゃ無かった。それが自覚出来ているのなら、それでいいの。その気持ち、絶対に忘れちゃダメよ」
ニカッと笑って、ジェーナスの頭を撫でる。対するジェーナスは、ぎこちないにしても小さく笑みを浮かべた。

ここで決意の力で上へと押し上げたのは、最善の答えとなる。開き直ると決意したジェーナスは、すぐには無理だろうがまた元に戻ることが出来るだろう。そのために、仲間達も協力してくれるはずだ。

痛みを知る者

ジェーナスが泣き止み、開き直りたいと決意したことで、施設の時間は動き出す。今はもう夕暮れ時。そろそろ夕食である。

ジェーナスが泣き疲れて眠っていたことは、施設の者達は全員が知っていたこと。しかし、食事の準備はジェーナスを待つことなく進められていた。ジェーナスは必ず食べるためにここに戻ってくると、飛行場姫がリシュリューに伝えていたというのもある。

「お腹空いたでしょう。ジェーナス、お昼も食べていないんだから」

「そう、ね……気が抜けたら、すごくお腹が空いてきたわ」

どうしてもいつものような元気は出ない。まるで風邪でも引いたかのような表情。太陽のような笑みは失われてしまい、しかし前向きになろうと少し無理をした笑みを浮かべる。

それに対して、姉妹姫は共に見守る方向に落ち着いている。本当に無理しているのなら止めるかもしれないが、前を向こうとしているのは間違いないのだ。このぎこちない笑みはその証。

「どうする？　ダイニングで食べるか、ここに持ってくるか」

ここで飛行場姫はまた選択を迫る。少しでも前向きになれるように、自分で選ぶということをさせることで、前に踏み出すための力を発揮させる。

ジェーナスは少しだけ考える素振りを見せたが、意を決したように、ベッドから降りた。

「Ｄｉｎｉｎｇに行くわ……ここで縮こまってたら、前を向けそうにないもの」

人の目を気にしていたら、開き直るなんて夢のまた夢。それに、白露達には改めて謝っておきたいというのもある。

開き直るのなら謝る必要は無いと思った飛行場姫だが、それはジェーナスの優しさ故の行動だ。否定する必要もない。

姉妹姫に支えられて私室から出ようとしたところ、ドンピシャのタイミングで部屋の前に白露が立っていた。

「うわっとと、まさか全く同じ時間だったとは」

突然扉が開いたので驚く白露だったが、姉妹姫の奥にいる浮かない顔のジェーナスを見て、やっぱりなという顔をした。
「ジェーナス、あたし達はなーんにも気にしてないからね。っていうか、あたしなんかもっと酷いことさせられてきたんだから」
そして第一声。ジェーナスを慰めるように、自虐も交ぜながら何も悪くないと語る。
これも白露なりに考えての言葉だった。ジェーナスがどれだけ辛い思いをしているのか一番理解しているのは、まず間違いなく白露ともう1人。
「あ……」
白露が熱弁を振るおうとしたその時、さらにジェーナスの部屋にやってきたのは古鷹である。コマンダン・テストの支えもあり、まだ痛みはあれど何とかここまで歩いてきた。
そんな身体でも、ジェーナスのことが心配になってここまで来た。コマンダン・テストは無理をするなと念を押したが、ジェーナスのためだと古鷹も少しだけ無理を言って。
「ジェーナスさ、ちゃん、ジェーナスちゃんは、何も悪くないで、からね」
何とか敬語を抜いていこうと努力している辿々しい話し方。古鷹も前を向くために、自分を変えていく決意をしているのだ。
「悪いのは全部……あの悪意の塊。誰も、誰も悪くないの。白露ちゃんも、ジェーナスちゃんも……誰にも罪は無いんだよ」
「古鷹さんもね。あたし達の手は血に染まっちゃってるかもしれないけど、でも、それは全部アイツのせいなんだから。むしろ、悲しんで俯いてたら、多分アイツは指差して笑うような性格だよ。まぁそこまで軽くは無いけど」
2人揃ってジェーナスを励ます。やはりどうしても自虐は入ってきてしまうものの、その瞳は光を見つめている。自分をこうした者に対する恨みも憎しみもあるが、それを感じさせないくらいに明るい。
この2人がこれだけ前向きに生きようとしているのに、それよりもまだマシな自分がいじけているわけにはいかないと、ジェーナスも決

意を固める。それと同時に、この2人でもこんなに明るく振る舞えるのに自分はと、自己嫌悪の気持ちも強まってくる。
「ジェーナス、大丈夫？」
その表情の変化に気付いた白露が顔を覗き込む。
「大丈夫、大丈夫よ……私だって……前に進まなくちゃいけないもの……」
やはりどうしても自己嫌悪が強すぎた。それがジェーナスの特性なのだから仕方ないことではあるのだが、前を向こうと思っても、その溢れた感情が足を引っ張る。
歯を食いしばって、その足を前に前にと進めようとするが、吹っ切れることが出来るのはまだまだ遠い。だが、一歩ずつ進もうと努力することが大切だ。やらないより、やった方が当然良い。
「ジェーナスちゃん、夜だけれど、しばらくは私達と寝ましょうねぇ。ある程度は落ち着ける方がいいと思うから」
ここで中間棲姫からの提案。施設の一員となった当時のように、姉妹姫に挟まれて眠ることで温もりを感じ、今の感情を和らげていこうと考えた。
「あの……1つ提案が」
それを聞いて、今度は古鷹が発言。自分から意見を言うのはここでは初めてなので、中間棲姫は興味津々にその話を聞く。
「ジェーナスちゃんとの添い寝……私と白露ちゃんじゃダメ……ですか？」
「あら、貴方達が？」
「はい。同じ痛みを知る者として……力になってあげたくて」
泥によって魂を穢され、生き方を歪められた存在となると、今は数が限られている。
古鷹の言う通り、ジェーナスの心の痛みを知る者は、その限られた者しかいない。ジェーナスを救うことが出来た春雨も、その時の思いを知ることは出来ないのだ。
だからこそ、白露は春雨達を置いてこの部屋の前に来た、古鷹も同じ考えでここにいる。ジェーナスを慰めることが出来るのは自分達

しかいないと。
「ジェーナスちゃん、貴女はどうかしらぁ？」
妹のやり方を姉も倣って、ここも選択を迫る。前向きになれるように、自分で選ばせる。ある意味、悪いことを考えさせないように別のことを考えさせる手段とも言えるかもしれない。
ジェーナスはほんの少しだけ考える。自分がこんなことになっていて白露と古鷹に迷惑をかけないだろうか、そんな自分を許せるだろうか。だが、ここで好意を突っ撥ねるのも間違っているのではないだろうか。
いろいろと考えた結果、見出だした答えは――。
「じゃあ……お願い」
その思いを汲み取り、２人に頼ることにする。今までもそうだが、１人で眠ることが出来ないのは確かなこと。誰かに頼ることになるのは間違いない。それが誰になっても問題はないだろう。
「コマちゃんもそれで良かったかしらぁ。夜はこの子達に古鷹ちゃんの様子を見てもらうってことになるわねぇ」
「Ｏｕｉ．　問題ありません。お昼は私が介護いたしますが、夜はお任せしますね」
古鷹に付きっきりとなっているコマンダン・テストも、今この段階で随分と回復してきたので、夜くらいは他の者に任せても大丈夫と判断した。それに、その相手というのがジェーナスと白露。知らない仲ではないし、怪我人を雑に扱うような者でもない。信用して託すことが出来る。
古鷹が言い出して、トントン拍子に決まっていくが、白露は一切口を出さずにいた。出来ることなら自分もそうしたいと思っていたのは確かであり、自分と同じ苦しみを持つ仲間を助けようと考えるのは当たり前。むしろ、古鷹が言い出さなかったら自分から言うつもりでいたくらいである。
「それじゃあジェーナス、アンタは仲間を頼って、甘えて、楽しく生きなさい。多分何度も聞いてるでしょうが、誰もアンタのことは責めてないの。後ろを向くより、前を向く方がいいわ。俯いていたり、後ろ

を向いていたりしたら、この子達のことも見えなくなっちゃうもの」
自分のことを思って行動してくれる仲間がいることに、ジェーナスはまた泣きそうになってしまった。壊れることも出来ずに自己嫌悪が涙として溢れたのとは違う、喜びでの涙。
今のジェーナスは情緒不安定になってしまっているが、こういうことならまだ許されるだろう。泣きたければ泣きたいだけ泣けばいいのだ。

ジェーナスがダイニングに到着すると、施設の全員がそこで夕食を囲んで待っていた。必ずここに来るだろうといつも通りに。
「あ、うう……その、ごめ」
「ジェーナスちゃん、謝るのは無し」
春雨が先手を取る。ここで直感が役に立つ。まだ視界がボヤけているので海風のサポートはあるものの、ジェーナスが何処にいるかくらいは直感なんて無くてもわかる。
「みんなから聞いてると思うけど、誰もジェーナスちゃんのこと責めてないんだから。だから、今まで通り一緒に生きていこう、ね？」
春雨の言葉に全員が同意。そもそも、ジェーナスから攻撃を受けているのは白露型姉妹の３人くらいなのだから、その３人が何も感じていないというのなら何も言うことは無いのである。どんな感じになってしまったのかを興味本位で聞くなんてこともない。
「う、うん……Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」
「さぁ、冷めないうちに食べなさいな。今日はいつも通り、腕によりをかけて作ったわ。さ、Ｌａ（お）ｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ（嬢様）」
リシュリューがジェーナスを席に着かせると、いつもとは違うレベルの料理が並べられる。ちょっとしたお祝い事気分である。
「落ち込んだ時はＮｏｕｒｒｉｔｕｒｅ（美味し）ｄ・ｌｉｃｉｅｕｓｅ（い料理）、これは常識的なことね。これで気分を上げなさい」
気を遣っているわけでなく、ジェーナスのことを真に思っての行為。また泣きそうになってしまうが、袖でグシグシと目元を拭い、そ

の料理を口に含む。
「……美味しい、いつも通り」
「でしょう。自信作だもの。いつも通り」
何も変わらない日常を取り戻すことが出来たと実感出来る味。それだけでも心が落ち着いていく。何も特別なことなんてない。ジェーナスは何も変わっていないのだ。
ならば、今まで通りの生活をしていけばいい。今まで通り、いつも通り、楽しく生きる権利がジェーナスにはある。少しだけ歪んでしまったかもしれないが、まだ取り返しがつくところにいるのだから。
「さ、みんなも食べなさい。いつも通りに、ね」
あくまでもいつも通り。そう、何も変わっていないということをジェーナスに知ってもらうため、今まで通りを実践する。意識せずともそれは可能だ。何せ、今までそのように生きてきたのだから。
「春雨姉さん、今は遠近感が掴めないでしょうから、私が食べさせてあげます。ささ、遠慮なさらずに」
「あー、まぁ、うん、大丈夫なんだけどなぁ」
「何から食べますか？　お野菜ですか？　お魚ですか？　この海風が全てをずずずいーとこなしてみせましょう」
相変わらず押しの強い海風に春雨はタジタジである。その原因を間接的に作り出したのはジェーナスになるのだが、そんなことを気にさせないくらいのテンション。
そんな様子をニヨニヨしながら見ている竹と、ニコニコしながら見ている松。小さく溜息をつきながらその隣に着いた白露。苛立ちながらも食事に専念する叢雲に、その隣で苦笑する薄雲。輪に入るわけではないのだが、この光景を楽しそうに見つめる伊４７。
何も変わらない食事風景。それだけでも救われた。よそよそしい態度などでもなく、無理して盛り上げているわけでもない。皆が皆、楽しく生きるために好きなようにここで生きているに過ぎない。
「……私、みんなとここでずっと楽しく生きていきたいな」
ボソッと呟く。前向きになろうとする思いの中で自然に溢れたその言葉、誰もが聞き流すことは無かった。

「そんなの、心配しなくても大丈夫よ。アンタが嫌って言っても、ここから逃がさないから。ここで楽しく生きてもらうわ」
「ふふ、そうねぇ。妹ちゃんの言う通り、ジェーナスちゃんには楽しく生きてもらうわぁ」
姉妹姫からの保証もあり、ジェーナスはさらに前を向くことが出来るようになる。

まだまだ心に引っかかるものはあっても、仲間達のサポートがあれば、すぐにでも元に戻れるはずだ。

狂気の科学者

ジェーナスの件が進められている裏側、鎮守府。
荒潮が目を覚ますと、そこは見慣れぬ部屋。どちらかと言えば薄暗く、まず確実に歓迎されているとは思えないような場所。窓もなく、扉もキッチリと閉められており、電気がついていなければ確実にこの部屋は真っ暗闇になるような仕様にされていた。
荒潮自身は一切の拘束がされておらず、部屋自体もそこまで生活に苦では無いようにベッドなどが置かれていた。
『目が覚めたようですね。おはようございます』
室内に声が響く。これと言って五月蝿いわけでは無いのだが、今の荒潮にとってはあまりいい気分ではない声。
何せ、この荒潮は未だに泥による侵蝕を受けたままであり、艦娘のまま敵対している状態。さらには、既に体内には1人分侵蝕出来るだけの泥が増殖している。
「最悪の目覚めね～。ここ何処ぉ～？」
『理解している通り、ここは貴女が目指していた鎮守府になります。ドロップ艦として保護し、現在貴女の身体を調査中ですね。正式な登録まで、もう少々お待ちください』
事務的な声ではあるが、その裏側には荒潮のことを完全に把握しているような意地の悪さを感じる。
『申し遅れました。私は工作艦明石。そちらの言動は全てこちらでモニターしている状態ですのでご了承を』
放送の向こう側の顔が見えるかのようだった。声色からして、確実に笑っている。今の荒潮の状況を見ながら、どうしてやろうかとほくそ笑んでいる。荒潮はそう感じた。全てを理解して。
「では明石さん、貴女は何処まで知っているのかしら～」
ここであえて切り込んでくる荒潮。この鎮守府が、悪意の塊、最悪の姫の中身と敵対している場所であることは、龍驤から全て聞いている。それを知っている上で、増殖する泥を体内には入れたままで1人ずつ侵蝕していき、この鎮守府を裏側から滅ぼして乗っ取るつもり

だった。
　しかし、今この部屋は誰がどう考えても懲罰房である。窓がないのは地下だから。ドロップ艦を保護というのは建前、敵対していることを知っているからこんな部屋に押し込んでいる。
　練度はドロップ艦故に低くとも、荒潮は賢い艦娘だった。だからこそ、ここで自分の使命、鎮守府の崩壊と侵蝕を優先するために、駆け引きに出た。
『そうですね、そこはちゃんと伝えておきましょう。私は全部知っています。貴女の中に悪意の塊があること。それが体内で増殖すること。貴女の頭の中は艦娘ではなく侵略者となっていること。目的がこの鎮守府を侵蝕すること。この辺りは把握していますよ』
　簡単に言ってのける。しかも、余裕綽々であることを隠さない。お前はここから出られないのだと教え込むかの如く。
「そうなのね～。じゃあ、今から私がやることに何も文句は無いわよね～」
　全てを理解しているのなら話が早いと、艤装を展開して懲罰房から脱出しようと試みる。こうなっているのなら、どういうカタチでも脱出して、沈められようが泥をばら撒き一矢報いる。
　しかし、どれだけ力を入れても艤装が展開されることはなかった。よくよく考えてみれば当たり前のことである。見た目は艦娘であっても、頭の中は侵略者。そんな相手に武器を持たせたままでいるわけがないのだ。
『あ、先に言っておきますね。気付いていると思いますけど、貴女の艤装はこちらで保管させてもらっています。私、工作艦なので、艦娘から艤装を奪うことくらいはワケ無いんですよ。海の上ならまだしも、ここは私のホームグラウンドなんですから』
　少しずつ本性が出始めている。抗う荒潮の姿を見ながら楽しんでいるような声色。荒潮にも表には出さないが若干の苛立ちが生まれる。
『貴女はそこでゆっくりしていてくれればいいです。時が来れば解放しますので』

そしてこれである。目を覚ましたことがわかれば、そこの部屋にいてくれれば好きにしろとまで言ってきた。ただし非武装であり、部屋から出る手段は無い。これでは完全に捕虜である。実際捕虜なのだが。

『あー、でもそこにいるだけだと暇でしょう。何か話し相手にでもなりましょうか。こちらは作業しながらでもそちらの様子は見ることが出来ますので』

「それじゃあ、今明石さんは何をしているのか教えてもらえるかしら～」

苛立ちは隠し、余裕を持って明石に何をしているかを聞き出す。そうすることで、うまく抜け出すことが出来た時に鎮守府の危険度を仲間に伝えることが出来るから。

また、暇なのは否定出来なかったので、話し相手になってくれるのならなってもらおうという魂胆でもある。暇潰しに情報収集しつつ、逆転の一手を狙っているわけだ。

当然、荒潮のその考えを明石が気づいていないわけがないのだが。

『そうですね、貴女も当事者みたいなものだし、知っておいてもいいでしょう。私は今、貴女達が悪意の塊と呼んでいる泥の対策を研究、開発しているところです』

そんなところだろうとは思っていたようだが、そんなに簡単に研究出来るものかと首を傾げる荒潮。

「対策、ねぇ？」

『ええ対策。実はですね、既にセンサーは完成しているんですよ。古鷹の体液はとっっっても役に立ちました』

古鷹の体液と聞いて、荒潮にはピンと来なかったが、おそらく龍驤の仲間なのだろうとは勘付いた。つまり、斃した元艦娘の体液から深海棲艦の研究をしているということになる。

そういうことが許される世界なのかは生まれたばかりに近い荒潮にはわからなかったが、明石が意気揚々と話しているところからして、あまり認められない研究であるのではと思う。

『でも、あくまでも艦娘と深海棲艦の区別だけが付くようになっただ

けです。次は泥――悪意の塊を優先的にチェック出来るセンサーを作る必要があります。そこで必要になったもの、それは貴女が運んできてくれました』

「私、がぁ？」

『ええ。まさか泥そのもののサンプルが手に入るなんて思ってもみませんでした！　研究が捗って捗って仕方ないですね！』

　声だけなのに、悪寒がゾワリと背筋を伝った。悪意の塊がどういうものか理解しているというのに、それをサンプルと称して当たり前のように調査しているなんて、狂気も混じっているとしか思えない。

『まぁいろいろと予想はついていたんですよ。それが確定出来たって感じです。増殖する泥、これは艦娘ないし深海棲艦の体内、単純に人肌の温度でのみ増殖するモノですね。なので、貴女の体内で勝手に増える。でも、増える量というのはおそらく限られている。1人分が限界なんでしょう。その増加速度はまだわかりませんが、ある程度増えたらそこでストップ。他者に流し込んだ後、増殖再開。で、また1人分になる。これで鼠算式に増えていく、という算段ですね』

　ここから明石の言葉が激しくなっていく。相手は誰でもいいから、研究成果を聞いてほしい。そんな気持ちが溢れ出している。

狂科学者（マッドサイエンティスト）な本質が、初対面である荒潮相手にも隠せていない。

『アンプルの中に入れてしまえば増殖しない。試しに体温と同じにしてみたら増殖した。しかも自分から蠢くなんて劇物。ああ楽しい、こういうことやってみたかったんですよねぇ！』

「あ、あの……」

『で、貴女の何処から採取したかというとですね、話は聞いていましたけど、貴女深海棲艦の1人に口移しで泥を流し込んだんですよね。その時に、口内にほんの少しだけ残っていました。それをちょっといただいたわけです。勿論、直接触れるようなことはしていませんよ。防護服も作ってありますから。放射能からも完璧に身を守ることが出来る全身を覆うスーツでしてね。それを着ている間は侵蝕されません。戦闘は出来なくなりますし、息苦しくてまともな作業は短時間しか出来ませんけど』

止まらない明石に、荒潮は少しずつ恐怖を覚え始めてきた。相手が誰であってもこの熱意が見せられるのは、どう考えても狂っていることだ。

『なので、今はその泥が私の手元にありまして、そこからガンガン研究させてもらってます。凄いですよコレ。何せ、少し人肌で温めれば無限にサンプルが増えるんですもん。あ、そうそう、増やし方とかはもうマスターしているので、そこから侵蝕されるなんてことは絶対にあり得ません。故にやりたい放題ですよ。でも、私は絶対に鎮守府には迷惑をかけません。私はこの鎮守府を愛しているからこそ、ここまでやる気が出るんですから』

明石を突き動かすのは、あくまでも鎮守府に対しての愛情だ。この鎮守府の平和を守るため、全ての仲間を笑顔にするため、時には汚れ仕事も嬉々として行い、時には自分を犠牲にしてでも仲間達の身を守る。

今回の研究は特に危険であることは理解しているのに、そういうところからも率先して身を投じた。勿論、明石自身の欲望、研究欲に準ずるところがないかと言われれば、それはない。元々の明石の性質上、狂科学者（マッドサイエンティスト）となる気質は充分にあった。そこに平和を守ろうとする過剰な気持ちが乗ったことにより、今の明石となっている。

その結果がコレ。欲望のままに動き回って、最善を掴み取ろうとする探求者。それが悪い結果になったことは今までに一度も無い。勿論、失敗は付き物ではあるが、それはしっかり提督と大淀が止めている。ブレーキが利く内はまだマシだ。

『っと、泥の解析が終わったようですね。なるほどなるほど、これは興味深い。増殖の性質も何となくわかりましたよ。特定下における細胞分裂みたいなもの。なるほど、この泥は泥ではなく、微生物の集合体ということですか。だから侵蝕なんていう単純な意思も持っているわけですね。増殖は特別製らしいですし、そのように操作されたモノなのでしょう。魂に作用するというのは大分オカルトですが、わかってしまえば大したことないですねぇ。つまり、侵蝕された艦娘と深海棲艦は、いわば寄生虫に寄生されていると言った方が早い。なら

対策も簡単ですよ』
荒潮が口を挟む前にペラペラと話を続ける。明石のマシンガントークを止められるのは、提督か大淀しかいない。
『これなら貴女も解放出来ますね。体内の洗浄なんてお手のものです。でも、ドックに入れるのは流石にまずい。ドックが侵蝕される可能性もありますから。ならばどうするか、まぁ手っ取り早いのは投薬ですね。体内の余計なモノを破壊するにはこれが一番です。まぁちょーっと苦しいかもしれませんし、激痛に苛まれるかもしれませんが、別に構いませんよね？　だって、貴女を野放しにしていたらみんなが同じ目に遭っていたんですから。貴女1人の犠牲によってみんなが救われる。しかも貴女は苦痛を受けるだけで救われる。最高ですね、完璧ですね！』
荒潮は明確に恐怖を感じた。艤装も奪われ、部屋からも出られず、この狂った科学者に自分はいいようにされるのだと、嫌でも実感してしまった。
自然と手が震える。歯がガチガチと音を立て始めた。嫌でも目が潤んでくる。
『まさか怖いとか言いませんよね？　さっきまではこちらを出し抜こうと考えを巡らせていたみたいですし。私から話を聞いていく内に抜け道を探そうと躍起になっていたでしょう。お見通しですからね。貴女をそこから出したら、間違いなくこちらが怖い思いをするんです。そんなの嫌ですし、そもそも仲間が傷つくところを見たくないんですよ。なら、貴女だけが怖い思いをしてください。侵蝕されているのは可哀想だとは思いますが、なに、少しだけの辛抱です。元に戻ったら仲間ですから』
見えなくとも、荒潮には明石がどんな表情をしているのか手に取るようにわかった。澱んだ瞳でニチャリと笑う、荒潮のことを艦娘でも深海棲艦でもない実験台（モルモット）としてしか見ていない顔。
『薬の完成までは時間がかかりますが、そこまで待たせませんので少々お待ちを。いやぁ、本当に貴女が来てくれて良かった。こんなに簡単に決着がつくなんて驚きですよ。あ、そうそう、もしかしたら自

殺なんてことを考えるかもしれませんが、それも許しません。死んだら救われませんからね』
明石がそう言った瞬間、荒潮の周囲から何かが飛び付いてくる。よく見れば、泥による侵蝕を受けないように防護服を着込んだ妖精さん。いわゆる装備妖精という存在。その妖精さんが荒潮に乗っかった瞬間、自殺防止の装備が展開される。
これは錯乱した艦娘が自傷行為をしないようにと明石が開発した拘束具だったのだが、過激すぎるために提督が廃案にしたもの。しかし、こんな時のためにと1人分は用意していたのである。
『艦娘用の鎮静剤も開発してありますので、壊れることも許しません。壊れたら感情が溢れてしまうかもしれませんから。それでは、薬が出来るまでおやすみなさい。次に目覚めた時には、その侵蝕は取り除かれていると思います』
手脚を縛られた挙句、舌を噛まないように猿轡までされ、そのままベッドに寝かされた荒潮は、抵抗することも出来ずに強烈な睡魔に襲われる。この猿轡に鎮静剤が仕込まれていたらしく、抗うことすら出来ずにそのままま眠ることになった。

「よし、これで研究に専念出来ますね。ここからは本当に失敗が許されないし、緊張するなぁ」
「明石……あんなに怖がらせる必要あったの？」
明石の後ろには、ストッパーとして大淀が立っていた。だが、あまりにノリノリで荒潮には話すので、止める機会が見つからなかった。
結果的にあってほしい流れに行ったので良しとするが、今回の明石のやり方はあまり誉められたモノではない。
「まぁあ、そこまでしなくてもよかったかも。でもまぁ、静かにしていてくれたから結果オーライだね。じゃあ、すぐに泥を中和する薬を作るから。大淀も手伝ってくれる？」
「はいはい。私に出来ることなら」
「出来る出来る！　数値を見ててもらうこととか、物を押さえてもら

うこととかだから。1人だとしんどいけど、2人だとやりやすいんだよね」
目をキラキラさせながら作業を進める明石を見ながら、大淀は小さく溜息をついた。
「まぁ、こういうところが明石のいいところでもあるんですが」
ボソリと呟き、研究の手伝いを始める。

これにより、悪意の塊対策は劇的に進化することになるだろう。荒潮が解放される時も近い。

一致団結

翌日。目を覚ました春雨は、身動きが取れなかった。昨晩から白露がジェーナスにつくことになったため、夜は海風のみが隣にいる状態になっていたのだが、寂しさの発作が起きないようにといつも以上に強く抱きしめながら眠ったため、今こうなっている。

耳元に海風の寝息が聞こえる辺り、しっかりと疲れが取れているようで何より。そう考えつつも、このままだと全く動くことが出来ないため、海風にも目を覚ましてもらうことに。時間も時間なので起きても何も問題はない。

「海風、朝だよ」

抱きしめられているが故に、耳元に囁くしか出来ない。そしてそれが海風の作戦でもあった。目覚めの合図を姉の囁きにするという。

「ん、ふぅ、おはようございます春雨姉さん」

耳に息が吹きかけられたようなモノなので、小さく震えつつもパッチリ目を覚ます海風。トロンとした目ではあるものの、春雨が眼前にいることと、朝までグッスリと眠れたことに安堵した。発作も起きていないため、自分の温もりだけでもちゃんと春雨を癒すことが出来たことに大いに喜ぶ。

「目の方は大丈夫ですか？　海風の顔、ハッキリと見えていますか？」

「うん、大丈夫。流石に一晩経てば治るみたい」

昨日半日近く続いていた春雨の疲れ目、霞み目も、昼寝だけではなく深夜の熟睡を加えたことで完治。距離感が掴めないということもない。

海風からの抱擁を解いてもらって、脚を生成してから立ち上がる。ゆっくり休んだおかげで疲れらしい疲れはなく、目以外の反動ももう見当たらない。気怠さのような体調不良は昨日の段階から無かったが、そういうことが今更ながら出てくるのも無いようである。

「なら、そういうサポートはもう大丈夫ですね」

「うん、ありがとう海風。昨日は助かったよ」

「姉さんにそう言っていただけるだけでも、海風は感無量です。素晴

らしき春雨姉さんの手となり足となり目となることが私の至上の喜びなんですから。喜んでいただければ、私も喜びます。姉さんの感情は私の感情でもあるんです」
相変わらずだなと苦笑しつつ、さらりと着替え。海風も春雨に倣って着替えて部屋を出た。
昨日にあれだけの戦いをする羽目になったのだから、今日は平和な1日を望む。しかし、施設の場所が敵にバレてしまったために、そんなことも言っていられなくなるだろう。束の間の平和を満喫するためにも、春雨は今は気を落ち着けて生活することにした。

朝食の場にはジェーナスもしっかり参加している。白露が言うには、やはり昨晩もあの時の悪夢を見てしまったようで、深夜に魘されて目を覚ましたそうだ。だからか、少しだけ眠そうな表情。
しかし、白露と古鷹が付き添ったことにより、昨日よりは幾分か顔色は良かった。同じ傷を持つ者というのは、やはり過ごしやすいのかもしれない。罪悪感は失われなくとも、共に歩いてくれる者がいるというだけで心強い。
「さて、と。今日はみんなに話しておかなくちゃいけないことがあるわぁ。食べながらでもいいから聞いてちょうだいねぇ」
ここで中間棲姫が切り出す。誰もが何を話すかを察することが出来ていた。
「私と春雨ちゃんを狙っているという子達が、ついにこの施設の場所を知ってしまったそうなの。つまり、今この時も、ここに誰かがやってきて、危険なことになるかもしれないわぁ」
「少なくとも昨日の夜は何事も無かったみたいだけれど、今後どんな時間に何が起きるかもわからないって状況にはなっちゃったわね」
飛行場姫も加わり、現状がどれだけ危険な状況であるかを共通認識としていく。
今までは、この施設が誰にも見つかっていないという大前提があったからこそ平和であった。しかし、明らかに敵対を意識している輩が

この場所を知ってしまったということは、もう平和なんて言っていられない状態。
「そこで、聞いておきたいことがあるわぁ。もう平和とは言えなくなってしまったこの施設から離れたいという子はいるかしらぁ」
あくまでも平和であるからこの施設に身を寄せていたというものがいるのなら、ここに居続けるのは意図から外れることにほかならない。ならば、まだ安全なうちに旅立つという選択肢もある。
中間棲姫は真っ先にそれをみんなに伝えた。危険から遠ざかることは何も悪いことでは無い。それは逃げではなく、危機回避である。誰も後ろ指を指すようなことはしないし、むしろ推奨すらするだろう。
「ここまで来たら一蓮托生だろ」
それに対する第一声は竹。男勝りで強気な彼女だからこその言葉。
「私も竹と同じです。平和だからここにいるわけではなく、ここの空気が好きなのでここにいるんです。なので、一緒に守らせてください」
松も同意見である意思を見せる。２人の意見が食い違うことはまず無いのだが、言葉にすることで改めて同じであることをお互いに感じ合う。
「ヨナも、ここにいるヨナ。ここが好きだもん」
幸せアレルギーの伊４７も、この空間が好きだからという理由で離れることは無い。団欒に交じることは出来ずとも、施設を守りたいという気持ちはみんなと同じだ。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕも残るわ。近々買い出しに行かなくちゃいけないけれど」
「Ｏｕｉ．　私もですね。Ａｌｉｍｅｎｔｓ（食糧）、大分使っていますから、また陸に行かなくちゃ、ですね」
リシュリューとコマンダン・テストは、遠征組という都合はあるものの、やはり施設の防衛には積極的に参加する方針のようである。
今施設を出て買い出しに行くのは得策ではないと考えた。相手がどれほどの軍勢を率いてくるかもわからないため、戦力を減らすのは

あまりいいことでは無い。死が絡む戦いを拒むコマンダン・テストも、それくらいは理解していた。
　他の者は言わずもがなである。そもそも狙われている春雨を筆頭に、ここにいるものはあちら側に襲われたものや利用されたものだ。強いて言えば薄雲が無関係ではあるものの、叢雲のストッパーとして快くこの場にいることを選んでいる。
　理由はそうではあるが、皆、施設のことを大切に思っているからその考えに至るのだ。平和に暮らすことは何より、姉妹姫の人柄に惹かれてここに残る。
「ありがとう、みんな。平和は無くなってしまったけれど、私と妹ちゃんが貴女達の安全は必ず守るから、気を張らないでねぇ」
「ええ、お姉とアタシがしっかりこの施設を守るわ。誰にも危険な目に遭わせない」
　この２人の実力を知る者は少ない。実際に攻撃を食い止められているのは、海風と叢雲だけだ。そして、その時に実力差をひしひしと感じている。心が折れるほどの強さを持つ姉妹姫ならば、この施設を守り切ることが出来ると信じられる。
「貴女達だけだとどうしても穴が出来るでしょ。寝ずに番なんて出来ないんだから」
　姉妹姫の言葉に、戦艦棲姫が少しだけ反発するような口調で話す。
「まぁ……それを言われてしまうと、そうねぇ」
「だから、貴女達も私達を頼りなさい。ここを守るためなら、命を賭すことはしなくても、普通に力を貸すわ」
　全員が首を縦に振る。叢雲までもが、怒りに苛まれることなく、その意思を示した。
　姉妹姫が思っている以上に、ここに所属する仲間達は施設のことを大切に思っている。この場所だから生きていけるという者もいるだろう。
　それ故に今、この施設内の思いは１つとなっている。勿論平和が無くなってしまったのは悔しい。だが、その平和を取り戻すために抵抗する。

「夜の襲撃があるかもしれないから、哨戒は1日3回にした方がいいわね。全員寝ている間に忍び込まれるなんて気分が悪いことされたくないわ」
戦艦棲姫の提案で、哨戒もなるべく多く、さらには夜にも行なわれることに決まっていく。いつどのタイミングで襲撃してくるかなんて、一切読めない。ならば、常に注意をし続けるというのが正しいだろう。
そうやって神経を張り巡らせていると精神的に疲れてしまいそうだが、だからといってやらないわけにもいかない。中間棲姫と春雨がやられてしまったらその時点でおしまい。死んでもダメ。侵蝕されたらもっとダメ。ならば、全員で力を合わせてそれを防ぐ。
「むしろ夜の方を強めにした方がいいでしょ。私はやるわよ。ああいうゴミみたいな輩は、そういうことをやたらやってくるでしょ」
明らかに敵意丸出しの叢雲も、朝食の付け合わせのプリンを頬張りながら言う。夜の哨戒は賛成のようである。
実際、古鷹と龍驤が鎮守府に夜襲を仕掛けているため、時間帯を問わないというのは正解。夜は艦娘が艦載機を飛ばせない時間にもなるため、自分達に有利になるように仕掛けてくるのは当然と言えば当然である。
「昼間はアタシが哨戒機を飛ばすわ。コマ、アンタにもお願いしたいんだけどいいかしら」
「Ｏｕｉ．　勿論です。Ａｖｉｏｎ（哨）　ｐａｔｒｏｕｉｌｌｅｕｒ（戒機）を扱える者は、みんなでやりましょう。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕも出来ますよね」
「ええ、問題なく。艦娘の時は出来なかったけど、今のＲｉｃｈｅｌｉｅｕは　Ｃｕｉｒａｓｓ（航空）・ｄ’ａｖｉｏｎｓ（戦艦）、Ａｖｉｏｎ（哨）ｐａｔｒｏｕｉｌｌｅｕｒ（戒機）も扱えるわ」
飛行場姫に加え、コマンダン・テストとリシュリュー、この3人が施設近海の哨戒を毎日行なう。飛行場姫に至っては高高度哨戒も可能であるため、視野はさらに広い。
「フルタカさん、それでも大丈夫でしょうか。見たところ、完治とは言

いませんが、大分回復していると思いますので……」
「は、はい、大丈夫です。まだ痛むところはありますけど、随分と生活に支障が出なくなってきていますから。今までありがとうございました」
　古鷹は体調の問題があるため、まだ哨戒には参加出来ないだろう。もう少しの間を安静にしている必要は出てくるだろうが、もう大分動けるようにはなっている。
　コマンダン・テストも、ここまで回復していれば古鷹に対しての心配事が大分少なくなっていた。今までは目を離せないとすら思っていたが、今や朝食の場にも自分の足で支え無しで来ているため、安心出来ている。
　そして夜は駆逐艦の時間である。叢雲はやる気満々。そして、海風もやる気満々。
「春雨姉さんを狙う不届き者は、勿論この海風が成敗いたします。春雨姉さんは大船に乗ったつもりで、私を頼っていただければ」
「あはは、勿論頼りにしてるよ。もう、自分の身は自分で守るって域を超えちゃってるもんね」
　夜更かしはあまり良くないと思いつつも、そうしておかないと身に危険が迫るとなれば、四の五の言っていられない。それに、艦娘時代に深夜の哨戒だって経験しているのだから、今更駆逐艦（こども）だからとやらせないことは無いだろう。
「真っ先に見つけたら八つ裂きにするわ。もう私の怒りの捌け口はアイツらくらいしかいないんだもの。生きていることを後悔するくらいにズタズタにしてやる」
「姉さん……あまり過激なことは」
「本心だから仕方ないわ。私の怒りはまだまだ溢れてるんだもの」
　などと言いながら、白露や古鷹に対してその怒りを向けなくなっているのは、その誠実さを認めている証拠。
「……ジェーナスちゃん、貴女はどうする？　無理しなくてもいいとは思うけれど」
　古鷹がジェーナスに問いかける。精神的にもかなり厳しく、哨戒を

するということはアレの元凶と顔を合わせることになる可能性もあるのだ。
「私は……」
少しだけ思い詰めたような表情を見せるが、すぐに振り払う。開き直るのだと決意したのだから、前を向かなくてはと奮い立たせる。
「私も参加する。この施設のみんなにはとっても感謝しているんだもの。力になりたい。それに……ずっと外にいるＭｉｃｈｅｌｌｅを守ってあげなくちゃいけないから」
この場には来れないが、今でもミシェルは施設の近海で守るように漂っているのだろう。今現在で最も危険な場所にいると言っても過言ではない。
当然ミシェルも施設の一員。失われてはいけない存在だ。ジェーナスはミシェルを守るためにもその力を振るおうと考えた。
結果的に、ミシェルという存在がジェーナスに前を向かせるきっかけになった。
「なら……うん、みんな、改めてよろしくお願いねぇ。みんなでこの施設を守っていきましょう」
中間棲姫も全員の意思を汲んで、一切の否定をせずに協力をお願いした。誰もそれを嫌がらない。自分達の意思で、力を合わせて施設を守る。

平和を守るためには、どうしても戦わなければならない時が来る。それが今だ。

克服

施設が一致団結して防衛戦に打って出ると決意し、早速その行動に出ている中、鎮守府でも大きな動きが始まる。
「それで、結局朝まで作業をしていたと」
「はい！　それはもう捗って捗って！」
呆れた顔で見つめる提督だが、対する明石は疲れ一つ見せずにニコニコ笑顔で対応。隣に立つ大淀は、徹夜により眠そうで疲れた表情を一切隠していない。
結局、大淀は明石に付き合って一晩研究と開発を手伝う羽目になった。大淀に出来ることは高が知れていると伝えたのだが、明石がいてくれるだけでも充分と手放さず、大淀もなんだかんだでズルズルとこの時間である。
「はぁ……いくら艦娘だからと言っても、無理をしたら体調くらい崩すだろう」
「一徹くらいで倒れるほど柔じゃありませんよ。工作艦は身体が資本なので。それに、今回の件はどうしても早く終わらせておきたかったんです」
「気持ちはわかるが……あまり無茶をするんじゃない」
大淀も大きな溜息を吐いた。工廠担当の非戦闘艦娘である明石が倒れた場合、鎮守府運営に大きく支障が出る。明石以外にスタッフがいないとは言わないが、それは基本的には妖精さんだ。そうじゃない場合は、時間が空いている艦娘。結局は明石がいないと回らないというのもある。
そんな明石が、テンションとノリで徹夜などしてしまうと、いろいろと計算が狂う。だが、明石はこのまま今日の業務まで乗り切ってしまうのが恐ろしい。いくら戦場に出ることがほとんど無い艦娘だからと言っても、本人が身体が資本と言うだけあって、並より頑丈かもしれない。
「まあまあ、とりあえず研究成果を聞いたらそんな気持ち吹っ飛びますから、聞いてくださいね」

こちらへと提督を椅子に座らせると、徹夜でやり切った調査資料がドンと机の上に置かれる。
その全ては、荒潮から採取された泥から解析されたその性質。明石が調べて、大淀が纏めるというパターンで、一晩で資料までしっかり作ってきていた。
「結論から言いましょう。荒潮の魂を侵蝕する泥は、今すぐに排除出来ます。とはいえ、あくまでも理論上です」
「もうそこまで調査出来たのか」
「勿論、無限に増えるサンプルのおかげであらゆる実験が出来ましたから。勿論、私も大淀も侵蝕されるようなヘマはしていませんよ。念のため防護服を着て作業していたので」
言いながらも、大淀が研究成果から開発された泥対策の品を持ってくる。
「これは荒潮にも突き付けたんですけど、あの泥、微生物の群衆みたいなものでした。意思を持って動くのも、単細胞生物のような行動だった感じです」
「悪意という微生物が艦娘を蝕む……ということになるのか」
「はい。それが艦娘、ないし深海棲艦の体内に入ることで寄生し、魂を侵蝕、その思考を全て黒幕の思いのままにするという感じですね。なので、泥とか流動体とかではなく、生物を処理する手段として考えました」
それをどうにかしようとすると、体内にある寄生虫をどうにかして体外に追いやらなくてはならない。それをどうするかということを念頭に置いて、開発を重ねた。とはいえ実験なんて出来ないため、最も成功率が高いものを完成させたとのこと。大淀の意見と計算でその辺りは算出している。
それはあまりにもわかりやすい形状の薬。カプセル錠であるそれの中身が、その対策である。
「案はいくつかあったんですが、その、明石の案は過激なものが多くて……」
大淀がまた溜息を吐きながらそれを伝える。

最初に出した案が、体内の泥に向けて外部から逆位相の電波を放って消し飛ばすというもの。失敗した場合は荒潮が消し飛ぶため却下。
次に出てきたのが、薬ではあるのだが霧散ではなく排出を目的とした効能を持たせたもの。失敗した場合どころか、成功した場合も荒潮が悲惨なことになるため却下。悪意だけでなく、その後も生きていけないほどの惨事になるだろう。
次から次へとアイディアは溢れてくるのだが、そのどれもがキツい、汚い、危険の三拍子が揃っているものばかり。荒潮をまともに起こすつもりは無いのかと呆れたという。
「で、最終的には大淀の提案でこれになりました。体内に取り入れることで細胞に作用し、そこに寄生している泥をその場で消滅させます。それが一気に身体中に回るという感じですね。ちなみにそれに関しては、人為的に増殖させたサンプルに対して効果的であることは確認済みです」
つまり要約すれば、薬を飲ませれば身体中を蝕んでいる悪意という名の寄生虫を消す。泥をしっかり解析することが出来たことによる、完璧な対策である。しかも泥に対して効果的であることを実証しているまで。
しかし、これが体内にある者に対してどのような効果が出るかはわからない。それは生身の者に使うしか確認が出来ないのだ。だからといって明石が泥に侵蝕されるわけにもいかない。
「なので、荒潮に対してはぶっつけ本番になっちゃうんですよね。勿論調整はしているので、艦娘の細胞が壊れるようなことはありません。それも確認してあります。つまり、荒潮が死ぬようなことは無いと思いますが、泥を消滅させるということは、何かしらの影響は確実にあります。激痛もあり得ますね」
根を張っている土から草を引き抜くのだとしたら、ブチブチと引きちぎるようなものなので、その分激痛が走ることになるだろう。そうなるとは限らないが、寄生虫を引き剥がすというのだから、そうなってもおかしくはない。
「なので、最後の判断は私にはしかねます。提督に決断していただこ

うかと」
「その言い方はズルいと思うのだが。だが、明石に研究と開発を指示したのはほかならぬ僕だ。それに、部下の行いの責任を取るのは上司の役目でもある。決断は僕がするべきなんだろう」
　大淀のみならず、提督も大きく溜息を吐いた。あくまでも引き金を引くのは提督だと訴えてくるような言い分。
　だが、その答えは決まっているようなものだ。今回に関しては、苦しみがあったとしても荒潮を解放するためには必要なこと。それに、大淀が何も言わずに、明石が目を爛々と輝かせて話してくることなのだから、最悪なことにならない確証がある。
「僕を共犯者に仕立て上げたいという気持ちはよくわかった」
「そんな、共犯者なんて。提督は私の出資者であり、よき理解者であり、制御役ですよ。提督がいなければ私はここまで伸び伸びと研究開発なんて出来ません。感謝しか無いですよ。でも、こういう他の艦娘に何かがあることの最終判断を私1人でやるのは違うじゃないですか。独断でやって酷いことになった時、私は一切の責任が取れませんから」
　すごい早口。しかし、全く表情を変えない辺り、本心から出ている言葉。ちなみにこの明石、やりたい放題やっているし、コッソリ発明品を残していたりするが、提督に対して嘘をついたことは一度も無かった。だからこその狂科学者（マッドサイエンティスト）なのだが。
「古鷹が解放された時のように生死の境を彷徨うようなことは無いんだな？」
「はい！　それは自信を持って言えます！　あの時の古鷹のような苦しみを味わうことはありません！」
「明石がそこまで強く言えるんだ。余程の自信があるだろうし、万が一があっても荒潮の命に影響が無いんだろう。荒潮には申し訳ないが、今回は少し心を鬼にして、その実験を許可しよう」
　と言った瞬間、明石は小躍りしながら実験の最終段階のために荒潮のいる懲罰房へと向かった。
「……大淀、苦労をかける」

「いえ、私でなくては明石をあれくらいで収めることが出来なかったと思いますので……。ですが、申し訳ございませんが、本日は午前中にお休みを……」
「午前中とは言わず、1日休んでくれ。丸一晩、明石に付き合ってくれてありがとう」
そんな明石の背中を見つめ、2人してもう一度溜息を吐いた。

懲罰房では、未だに荒潮は昏睡状態で寝かされている。万が一を考えて手脚の拘束は緩められておらず、妖精さんがどうにか運んでベッドの上にいるというだけ。
明石は最初に荒潮と話していた通り、モニタールームでそれを確認する。もしまだ泥が残っていて吐き出したりした場合に大変なことになってしまうからだ。
「それでは妖精さん、荒潮の昏睡状態を解きつつ、その薬を飲ませてください」
明石に言われて了解の敬礼をする防護服を着込んだ妖精さん。薬を持って荒潮に近付き、猿轡を外すと同時に薬を口内に放り込んだ。突然異物が口に入れられたためか、まだ眠っている荒潮は抗うことが出来ずにそれを呑み込む。
手脚の拘束はそのまま。もしこの薬の効力で激痛が走り暴れ回ることがあったとしても、これならばのたうち回る程度で済むだろう。
「さて、どうなるか」
明石はニヤつきが止まらなかった。他の艦娘にはまず確実に見せられないような表情である。
この薬には絶対的な自信があるものの、それは結果として求めていたところに辿り着けるのみ。そこまでの経緯に関しては殆ど無視していた。とはいえ、泥と同じような成分を独自に作り上げて、まるで抗体のように寄生虫を死滅させるため、痛みは伴うのだろうと最初から予想がついていた。
だが、正しく作用すれば外傷もなく身体の中も綺麗に終われる最高

の薬が出来上がる。さらには、それを先んじて体内に取り入れておけば、二度と泥に侵蝕されることも無くなるだろう。
それは鎮守府の完全なる平和だ。泥に怯えながら戦うことも無くなる。そうなる未来のために、明石は尽力し、その成果が今出ようとしている。ニヤつくのも当然と言えば当然だった。
『んっ』
即効性の薬が早速効き始めたか、荒潮が小さく反応を始める。ピクリと動き出したが、その表情は苦悶のそれではない。いや、むしろそれは。
「おっと、まさか……これは思っていたのと逆になっちゃった……？」
そもそも明石は1つ知らないことがあった。泥に侵蝕された時、その宿主に与えられる影響が何であるかを。むしろこれを明確に知るのは、瞬時に支配された古鷹よりも、長々と影響を受ける羽目になったジェーナスだろう。
そう、この抗体も泥と同じような性質を持っていた。体内に入れられ、泥を死滅させるために与えられる影響は、激痛ではなく快楽である。それがどんな艦種であろうとも、泥を消滅させるための反応で身体中にその衝撃が走り続けることになる。
『っあっ……あっ、あっ……っ』
眠っている状態だからいいものの、それでも荒潮の身体は跳ねた。手脚が拘束されていなければ、暴れ回っていたかもしれないし、全く違うことをしていたかもしれない。
「うーわ……これ駆逐艦でもギリギリかも。海防艦とか耐えられる子いないかもしれない……」
この結果は少し予想から外れていたため、明石も苦笑い。しかし、荒潮の反応はまだ続く。何度かベッドの上で跳ねた後は、その爆発的な衝撃に身悶え、息は自然と荒くなる。しかし、眠りながらもその表情は蕩けているように見えた。
「まぁ痛くないならいいか。逆に辛いかもしれないけど」
そして、荒潮は一際大きく跳ね、ブルブルと震えたかと思えば、そのままグッタリと身体を投げ出す。時折身体がピクピク動いている

ものの、抗体による反応は終わったと感じた。ここまで来れば気を失わせておく必要も無いだろう。
「よし、妖精さん、荒潮を起こしてあげてください。拘束も解いて大丈夫です」
そこまで確認出来たため、荒潮に起きてもらう。妖精さんがペタペタと荒潮の頬を叩くと、今までとは違う動きをしてからゆっくりと目を開く。
『あ、あらぁ……ここは……何処かしらぁ～』
ぼんやりした表情から、ここがわかっていないような言葉。演技でも何でもなく、本当に今までの記憶が無いような素振り。
「おはようございます。気分は如何ですか？」
懲罰房に話しかける明石だが、それに対する荒潮の反応は最初の敵対心バリバリだったそれとは違う、明らかな困惑。
『え、え～っと、私、どういう状況なのかしら～』
「なにも覚えていませんか？」
『う～ん、確か私は海の上に生まれたのよねぇ。その時に誰かと出会って……気付いたらここにいるって感じかしら～』
龍驤達に接触されたことは覚えているようだが、そこで何をされたかを覚えておらず、自分が誰に何をしたかも知らないようである。
『あ、でも、なんだか変な夢を見たのよ～』
「夢ですか」
『そう、夢。色白な女の子とキスをする夢だったわ～。私ってば、それっ気があるのかしら～。思い出したら何だか身体がムズムズするのよね～』
夢の内容は確実にジェーナスを侵蝕させた時のことである。そして身体がムズムズするのは薬の後遺症。まだ抜け切っていないために起きている、小さな快楽の波。
『うふ、うふふふふ、あの夢の子、とっても可愛かったのよね～』
キャッキャッと悦びながら、惚けた表情で身悶える荒潮。敵対していた時とは大違いの女の子らしい反応である。
何かよろしくない感情を目覚めさせてしまったかもしれないと思

いつつも、明石は知らないと放置を決め込んでしまった。

とにかく、荒潮は泥の支配から解放されたのは間違い無かった。当然、それについての調査は続けていくが、対策が完璧に効いている。これにより、鎮守府側は黒幕の軍勢へと打って出ることが可能になったのだ。

目醒めし者

舞台は再び施設側に。朝食後にみんなで決めたように、飛行場姫、リシュリュー、コマンダン・テストの3人が哨戒を開始する。その間、他の者はいつも通りの生活をする。

駆逐艦達は当番制で深夜の近海哨戒をすることとなるため、午前中は農作業や漁、午後は当番の者は一足早く就寝し、夜に活動するという流れになる。

現在、駆逐艦は2人1組を4組作れるようになっているため、午前、午後、深夜と3組が哨戒に参加し、1組は休息日。その組の哨戒に戦艦棲姫やリシュリュー、コマンダン・テストが加わることで、哨戒部隊として成立させる。

「えぇと、午前の部は松ちゃんと竹ちゃん、付き添いが戦艦様。午後の部が白露姉さんとジェーナスちゃんで、付き添いはコマさん。深夜が叢雲ちゃんと薄雲ちゃんで、付き添いがリシュリューさん……私達は明日の午前中、だね」

「了解です。春雨姉さんとの哨戒ですから、力の限り貢献しますね」

「ある程度力を抜いてくれてもいいからね」

日程を確認しつつ、ダイニングにわかりやすく出来るようにホワイトボードに記載していく春雨。飛行場姫は既に艦載機による哨戒を3人がかりでやっているため、ここには海風と中間棲姫、そして古鷹が集まっている。

農作業は本日休息日。漁の方は飛行場姫が哨戒のため参加していないものの、午後の部である白露とジェーナスが伊47やミシェルと共に独自で動いている。ジェーナスは元気を出すためにも漁には率先して参加しているようだ。ちなみに叢雲と薄雲は、深夜の哨戒のために身体をゆっくり休めている。

「明日、身体の調子が良さそうなら、私が付き添いに参加しようと思います。姉姫さん、良かったですか？」

ここで古鷹が自分の意思を伝えた。こうなってしまったからには、自分もこの施設の一員として、施設の防衛に参加したいと考えた。

黒幕への怒りは少なからず持っているし、こんな自分でも施設の一員、仲間として見てくれているここの者達には大きな感謝もしている。それ故に、少しでも力を貸したいのだ。
「大丈夫そうなら、お願いしようかしらぁ。私も妹ちゃんもここから出ることは出来ないから、海の上に何かされたらどうにも出来ないもの」
「はい。なので、今日一日を安静にして、明日に備えたいなと思います。さっきも言った通り、傷の痛みも大分引いています。明日には殆ど痛みを感じないくらいになるかもしれません」
言いながらインナーに浮かぶ傷口を撫でる。結局この傷は完治までは行かないようだった。金剛の腕が足りないとかではなく、比叡の刀剣の斬れ味が悪かったわけでもない。
これは、古鷹の意志が反映されてしまった結果のようなものである。古鷹が本心からこの傷を残したいと考えていたからこそ、そのようになってしまった。痛みも無くなり、完全に治ったとしても、傷痕だけはそのまま残り続ける。
「一応私も戦艦の力が扱える重巡洋艦です。お力添えが出来ますので。春雨ちゃん、海風ちゃん、それでもいいかな」
「はい、是非とも。お手伝いしてもらえるだけでも嬉しいです」
「ですね。古鷹さんが大きな力を持っていることは知っていますし、心強いです」
春雨と海風も、古鷹の力添えを喜ぶ。今いる施設の戦力は限られているため、力を貸してくれる者が増えれば増えるほど、みんなが助かるのだ。それを古鷹が率先して参加してくれるということがありがたい。
「なら、４組はもう固定でいいかもしれないわねぇ。今哨戒をしてくれている松ちゃんと竹ちゃんには戦艦ちゃんを固定って感じで」
仲が悪い組み合わせなんて１つも無いため、哨戒の部隊の３人は固定ということになりそうである。春雨と海風の相方は古鷹。ここにいる組み合わせがちょうど哨戒部隊となるわけだ。
「うん、こんなことになっちゃったのは残念だけれど、みんながこの施

設のことを好きになってくれているのはとっても嬉しいわぁ。私が哨戒に参加出来ないのは申し訳ないんだけれどねぇ」
「いえいえ、姉姫様はこの施設を維持しているんですよね？　なら、それだけで大役ですから」
「姉姫様がいなければ私と春雨姉さんの愛の巣が失われてしまいますからね。私達のために、ここで守られてください」
　海風の発言はさておき、中間棲姫が倒れてしまうと、この施設の維持が物理的に不可能になる。電源が艤装に接続されていることもあり、何もかもが機能不全に陥るのだ。この建物自体にだって影響が出てしまう。
　それ故に、中間棲姫はここにいるだけで貢献しているようなもの。表に出ないことが、施設のためになる最善の動き。
「ありがとうみんな。みんなに任せるわねぇ」
「はい、そうしてください。みんな姉姫様のことが大好きなんですから」
　春雨の本心からの言葉に、中間棲姫は思わず目頭が熱くなった。こんな状況になってしまっても、そんなことを言ってもらえるというのが、嬉しくて仕方ない。
　こういう施設を作って本当に良かったと確信出来る。自分がやってきたことは、間違いでは無い。中間棲姫は心の底からそう思った。

　と、ここでダイニングに設置されたタブレットから受信音が鳴り響く。鎮守府側からの連絡は少し久しぶりにも思えた。
　このタイミングで連絡が来るということは、ジェーナスに泥を流し込んだというドロップ艦の処遇が決まったのだろうと、中間棲姫は神妙な面持ちでタブレットを操作する。
「はぁい、今は時間大丈夫よぉ」
『それは良かった。一応時間的に朝食後少し経ってからを狙ったのでね。農作業中だったら申し訳ないと思ってはいたが』
「そうねぇ。今日はたまたまお休みの日だったから良かったわぁ」

相変わらず施設のことを思った提督の行動。しかし、提督の表情は朝だというのに少し疲れているようにも見えた。
「あら、何かあったのかしらぁ。随分と疲れているようだけれど。ちゃんと眠れている？」
『いや、まぁ、そのことについても話しておきたくてね。今回は連絡させてもらった』
苦笑しながら話を続ける。
『昨日、こちらで保護されたドロップ艦、荒潮のことだ。悪意の塊に侵蝕されていたが、工作艦明石の尽力により、侵蝕から解き放たれて艦娘としての心を取り戻した』
今までは瀕死に追いやる攻撃、もしくは春雨が見出した答えに辿り着く一撃により解放されることはわかっていたが、今回はそのどちらとも違う手段によって泥を体内から失わせることに成功したということ。
実際に吐き出させた春雨は、提督のその言葉に大いに喜んだ。白露のときは殺す気でやった結果が運良く解放に繋がっただけだし、ジェーナスのときはその場で覚醒出来たからどうにか出来ただけ。どちらにしろ戦闘を介さなければどうにも出来ないというのは、どうしても嫌だった。
それが覆り、荒潮は戦場では無い場所で、瀕死になることもなく元に戻れた。しかも提督の話によれば、吐き出させるわけでもなく体内から完全に消滅させることが出来たというのだから、言ってしまえば春雨が扱った手段よりも確実。
『しかし』
だが、提督の表情はあまり明るくない。疲れているというのもあるのだが、それ以外にも理由はありそうである。
『荒潮の……その、思考の方に影響を与えてしまっている。これは眠っている間に薬を投与したことに加えて、荒潮自身に練度が全く無かったというのも繋がっているのだと予測している。そもそも、荒潮はその時の記憶を全く持ち合わせていなかったんだ。支配され、ジェーナスに泥を注ぎ込んだことも覚えていない。ドロップして、何

者かに遭遇した後、気付けばこちらに来ていたと話している。ちなみに、まだ荒潮にはやらされたことは伝えていない』
記憶が無いのは白露や古鷹でもあることなので驚かない。最も重要な記憶だけは悪意の塊に奪われていると考えてもいい。
悪意の塊は微生物の集合体のような性質だと明石は解析したわけだが、その辺りの厄介な行動原理だけを持っている単細胞生物みたいなものである。黒幕に繋がる情報だけはしっかりと抜き取って消滅するのだ。立つ鳥跡を濁さずと言うが、そういうシステムをしっかり組み込んでいるのは抜け目ない。
「思考への影響とはどういうことなのかしらぁ？」
『それが……だね。いや、見てもらった方が早いのだろうか。君達の施設に対して嫌悪感を持っているわけでもなく、むしろ友好的な考え方を持っているだろう。生まれたばかりの艦娘なのに、深海棲艦のことを……その……愛しているのだと』
どうも歯切れが悪かったが、最後の言葉に一同首を傾げる。説明が難しいというか、あまり口にしたくないというか、提督にしてはフワフワしている。
そこで、荒潮の今の様子を見せるということになり、タブレットを持ち上げて執務室から出ていく。向かった先は工廠。今は明石による身体検査中なのだが、そこにはあの戦闘に参加した者達が野次馬のように屯っていた。金剛や北上は勿論のこと、こういうことにはあまり首を突っ込まない山風までもがそこにいるくらいだ。
『明石、荒潮の様子を施設の者達に見せられる状態かい』
『あ、はーい、大丈夫ですよ。でも、荒潮には刺激的な光景かも』
明石の言葉にもよくわからない部分が多い。
『あら、あらあら～、もしかして話に聞いていた深海棲艦さん達の施設のヒト達とお話し出来るのかしら～』
そして、この鎮守府からは初めて聞く声。中間棲姫は提督の吐いた小さな溜息を聞き逃さなかった。
「えぇと、すぐに私達の姿をその子に見せても大丈夫なのかしらぁ？」
『大丈夫……だろう。多分、おそらく』

タブレットのカメラがそちらを向く。そこには、検査中であるため制服ではなく検査着を着ている荒潮の姿があった。見た目は元気そうであり、つい昨日まで侵蝕されていたようには見えない。
提督のタブレットの存在に気付いた荒潮は、検査中なのにもかかわらず明石の制止を突っぱねて提督の側へ。
『あらあらあら、本当に、本当に深海棲艦のヒト達だわ～。うふ、うふふふふ、とっても綺麗で、可愛くて、私のタイプね～』
中間棲姫であっても、今の荒潮の言葉には驚いた。しかも、中間棲姫のみならず、その後ろにいる春雨や海風、古鷹の姿を目にしても、その視線には艶っぽい何かが含まれていた。それは、春雨のことを見つめる海風のモノにかなり似ている。
『でも、夢で見たあの子とは違うのよね～。もしかして、そちらにいたりしないかしら～。色白の子……は皆さん同じみたいだけれど、癖毛のショートボブの子だったんだけれど～』
間違いなくジェーナスのことを言っている。記憶としては支配されていた時のことを何も持っていないが、ジェーナスに対して口移しで泥を流し込んだという衝撃的な行動については、それこそ魂に刻みつけられてしまっているのか夢として見たらしい。
これに対して、その子がこの施設にいるということを伝える勇気が無かった。荒潮が何をするかはさておき、ジェーナスのトラウマを穿り返すことにも繋がる。むしろ、ジェーナスと荒潮を対面させるのには抵抗があった。
「え、ええと……貴女はその子と出逢ったら何がしたいのかしらぁ？」
不意にそんなことを聞いてしまったことで、荒潮の感情は一気に爆発する。
『勿論、お近付きになって、お友達になって、そのままくんずほぐれつしたいわ～。夢で見たみたいにチュッチュしたいし、むしろそのまま……うふふ、うふふふふふ』
頬を押さえながらキャッキャッと惚けたように頭を振る荒潮に、施設の者達は唖然とした。
薬の影響、いや、悪影響で、荒潮は良くないナニカに目覚めてしまっ

たと分析されていた。練度が低く、経験値もまるで無い状態で、あまりにも過酷なことが起きてしまった挙句、口移しという衝撃的な事件まで引き起こしてしまったため、荒潮は一種の現実逃避を起こしてしまっているのでは無いかというのが明石の談。

さらには、薬が効果を発揮した際に痛みではなく快楽が走ってしまったこと、それが眠っている間に起きたことで、引き起こしてしまった事件を殆ど淫夢のように見てしまったことがトドメとなっている。

結果、深海棲艦に対して深い愛情を持つに至った。ある意味、思考、性格、性癖が歪んでしまったとすら言える。

おそらく眠っていない状態で投与していればこんなことにはならなかったのだろう。しかし、起こしていたら暴れ出す可能性があったのと、自傷行為により命を捨てようとする可能性もあった。それを防ぐために最善を尽くした結果がコレだ。

『是非とも貴女達ともお近付きになりたいわ～。お友達に、ううん、もっと深～い仲になれることを願って、うふふふふふふ』

今までに無いタイプが出てきてしまい、言葉も無かった。

開き直るためには

荒潮はもう少し検査があるということで、タブレットの前から姿を消したのだが、深海棲艦を見る目が敵でも味方でもなく愛する者だったのは、少なからず衝撃を与えた。

中間棲姫ですらも呆気に取られるそのテンションは、春雨について語る海風と比べても勝るとも劣らない。むしろ、海風よりも広い範囲にその感情を向けているため、その思いは余計に強いようにすら見えた。

深海棲艦のことを悪く見ていないことは、施設にとっては非常にありがたい。このタイミングでのドロップ艦となると説明が非常に面倒臭いことになる上に、艦娘によっては否定的になる可能性だってあった。最初から友好的ならば話をする必要すらなく、むしろ是非とも施設に行かせてほしいとまで言っている始末である。

しかし、荒潮の存在は、どう考えてもジェーナスにとっては地雷である。本人は全てを忘れてしまっている挙句、その時の内容を思考を変質させるきっかけとなる夢として、いいモノとして認識してしまっているのだ。

対するジェーナスは、それを刺激されると確実に発作を起こす。嫌な思い出を穿り返されて、号泣から錯乱、最悪な場合はまた自死すらも視野に入れてしまう。

荒潮に対して怒りや憎しみが向くことが無い代わりに、自己嫌悪がとんでもない勢いで加速することになるだろう。それだけは避けたい。

「えぇと……提督くん、1ついいかしらぁ」

『いや、言わずともわかる。荒潮を施設に向かわせるのは、流石にすぐには出来ない』

中間棲姫が話す前に、提督がその回答を伝えた。荒潮とジェーナスは今のテンションのまま合わせるのは確実にダメだ。せめてジェーナスが許可を出すまでは無理。画面越しでもかなり厳しいと言える。

実際、荒潮はドロップ艦、一切の練度を持たない、いわば素人であ

る。鎮守府から施設に向かう航路は、素人が踏破出来るほど生易しくはない。いや、航路自体は一直線なのだが、戦闘に巻き込まれる可能性が非常に高い以上、そんなところに参加させるわけにはいかない。
『ドロップ艦は、しばらくは鎮守府内で訓練し、ある程度の練度となって初めて実戦に投入するようにしている。なので、荒潮が施設に向かえるのは、少なくとも今すぐではないよ』
「それなら安心だわぁ。ジェーナスちゃんには話をしておくわねぇ。今はあまり顔を合わせない方がいいと思うから」
『ああ、同感だ。荒潮はさておき、ジェーナスには最低限の心構えが必要だろう。流石に今の彼女の心境で元凶と顔を合わせるのはよろしくない。こちらでもどうにか制御をしておく』
提督もその辺りはちゃんとわかってくれているので安心である。問題は、荒潮の独断専行を食い止めることのみ。とはいえ、練度が無いようなものである荒潮を食い止めるのは実に簡単なことである。
「ちなみに……荒潮ちゃんに真実は伝えるのかしらぁ？」
失われた記憶を伝えるかどうか。これは結構な問題点である。荒潮自身が何故こうなっているかを自覚することで、施設に対する感情は一変するだろう。罪悪感は確実に出てくる。
だが、それでもこの愛を失わなかった場合、荒潮の中で感情がどうなってしまうのかは誰にもわからない。それこそ、壊れるほどの感情を得てしまう可能性だってある。
そうなったら最後、荒潮から泥が溢れ出すかもしれない。愛する者達を傷付けたというのは、それだけ心に強いショックを与えるだろう。
『正直なところ、今は保留にしてある。いつかは知る必要があるかもしれないが、それが今かと言われたら何とも言えないんだ』
「そうねぇ……。最後まで知らない方がいいかもしれないし、この施設に来れるようになったら真実を知ってもらうのもいいかもしれないわねぇ」
『ああ。だから、今は保留だ。僕だけでなく、大将にも話をするつもりでいる』

これば っかりは1人で決められることではない。そう判断した提督は、荒潮の件も含めて悪意の塊への対策について大将と話す場を設けるとのこと。

陸で行われることに口出しは出来ないため、中間棲姫は全てを任せる方針。だが、もし機会があれば3人での会談を開きたいとも思っていたりする。又聞きばかりではあちらも面倒くさいだろう。

『結論を纏めよう。泥――悪意の塊の対策は、ある程度出来た。既に侵蝕されている者に対しては投薬によって治療が可能だ。次はそもそも侵蝕されないようにする手段を開発している。艦娘と深海棲艦を判別するセンサーは既に完成しているため、次は深海棲艦と泥の判別が出来るようになるところだ。それも明石は午前中には出来ると話している』

それも驚くべき進歩だった。荒潮1人を鹵獲出来たことで、対策が次から次へと出来上がっていく。

しかし、その結果の1つが荒潮のコレと言われると、複雑な気分にはなった。運が悪いことが重なったが故の後遺症みたいなものであるため、使ったら必ずこうなるとは一概には言えない。可能性としては無いとは言えないが、荒潮の性質というのも考えられる。

『悪意の塊への対策が完成次第、こちらからまたそちらに部隊を派遣しよう。同じモノがそちらにあるべきだと思う』

「ええ、そうあってくれるとありがたいわねぇ。泥を感知するとか出来るかわからないもの。どうなるかわからないけれど」

中間棲姫は泥に関しては感知出来る可能性はある。何せ、その悪意の塊は本来自分の中に入っていたモノなのだ。今のところ悪意に侵蝕された艦娘――叢雲が発見した姉妹の潜水艦が施設近海に来ていたときは反応を感知出来なかったが、泥が裸で漂っていたら流石にわかるかもしれない。

『ではそういうことで、今はコレで終わろう。荒潮の検査がそろそろ終わるのでね』

ここでまた荒潮が通話の中に入ると、話が長くなるどころか、いろいろと大変なことになりかねないので、一旦終了。

通信が切れたところで、中間棲姫はふぅと息を吐いて苦笑する。あれだけ強すぎる好意を向けられたことが無かったので、大分焦ってしまったと。
中間棲姫のみならず、画面内に納まっていた全員に対してハートマークを飛ばし続けていたのは、今までになかった。春雨だけは近しいものを間近で見ているが。
「無傷で治療されたことはいいことですよ。でも、ジェーナスちゃんにはどう伝えましょう」
これが一番重要。実際は包み隠さず鎮守府の状況を全員が共有するべきなのだが、そもそも話せるかどうかというのもある。しかし、話さないと進まないというのもあるため、どうやって話すかというところに落ち着く。
「……今まで通り、嘘も何も無く、真実を知ってもらうことにするわぁ。ジェーナスちゃんだって、開き直ろうと頑張っているんだもの」
ここで中間棲姫は決断。ズルズルと先延ばしにしてもいいことはないため、漁から帰ってきたらすぐに話すということにした。
充分開き直っていたところでもう一度突き落とすようなことは言えないため、早ければ早い方がいいだろう。

漁が終わるのはお昼前。哨戒をしている3人はまだ戻ってきておらず、昼食の用意は春雨と海風がやっていたのだが、そのダイニングにジェーナス達が入ってきた。
「そこそこ釣れたよ。全員分は行けたかな」
「わ、いい具合ですね。じゃあ夕飯はこれを使いましょうか」
白露が釣果を見せている中、ジェーナスも小さく息を吐いていつもの席に座った。いつもの快活さはやはり薄れており、表情もあまり明るくは無い。
釣りの最中も、どこかぼんやりしているというか、心ここにあらずという感じだったらしい。どうしても思い詰めてしまうところがあ

るようだ。
「ジェーナスちゃん、少しいいかしらぁ」
そんなジェーナスを見て、少しだけ抵抗はあったものの、だからこそ先延ばしは出来ないと改めて思い、中間棲姫は話しかける。
その声を聞いて、一瞬耳から抜けそうになったようだが、ハッと気付いて中間棲姫の方を向いた。やはり浮かない表情。
「なぁに、姉姫。大丈夫よ、私は開き直るって決めたんだから」
「あの時のドロップ艦、荒潮ちゃんが目を覚ましたそうよぉ。しかも、あちらの尽力で侵蝕から解き放たれていたわぁ」
荒潮、というかドロップ艦という言葉が耳に入った瞬間、ビクンと震えた挙句、表情が固まった。手も震え始める。
「そ、そう……良かったわ。侵蝕が無くなったってことは、もう……もう、おかしなことにはならないってことよね。喜ぶべきことよね」
「ええ……ただ……ねぇ。荒潮ちゃん、あの時のことを全部忘れてしまっているみたいなのよぉ」
自分がやられたことを後悔なり反省なりしているわけでもなく、全てを記憶から消して生きている。それをジェーナスがどう思うか。ここが問題である。
中間棲姫はさらに続ける。ここからはもっと辛いことを言うことになるかもしれない。
「でも、当時のことを夢に見たらしくて……そこからいろいろな後遺症が重なって……その、とんでもない性格になってしまっていて」
「姉姫はアラシオの今を見たのね。どんな感じだったの……？」
「私達同胞（はらから）にとっても友好的だった……だけなら良かったのだけれど……あの目は、何と言えばいいのかしら、分け隔てない愛があるというか」
中間棲姫にしては歯切れの悪い言い方に、ジェーナスはいろいろ察した。
「そ、そう、なんだ。もしかして……夢で見た私に会いたい……とか言っているみたいな」
「まさにその通りよぉ。ただ会うだけじゃなくて、あえて本人がその

まま言っていた通りに伝えるのだけど、深い仲になりたい、くんずほぐれつしたい、だそうよぉ」
ジェーナス、再び硬直。自分のトラウマを作った相手が、自分に対して明確な恋愛感情を持っていることが嫌でもわかった。むしろそれだけで無く、身体の関係すらも求めているとなると、いろいろと話は変わってくる。
実際、荒潮は夢の中で出会った色白の女の子――つまりジェーナスに対して、強すぎるくらいの愛情を持っているのは間違いない。実は悪意をもって侵蝕したときの記憶なのだが、それ自体を忘れてしまっているため、その全てが美化されて今に至っている。明石の薬の効能により快楽に呑まれてしまったことも、思考回路がそうなってしまった一因であるのは言うまでもない。
その表現が異常で過剰でも、純粋な恋心からあの言動が出たに過ぎないのだ。何もかもを飛び越しているのは考えものだが。
「……私は……その……」
「今でこそ鎮守府からは出てくるようなことは無いとは思うのだけれど、もしかしたら顔を合わせる機会が来るかもしれないわぁ。それに、私達はコレで鎮守府と繋がっているんだもの。画面越しに対面、なんてこともあるかもしれないわぁ」
コレとは当然タブレット。先程もそれで荒潮の様子を確認したのだから、また同じことが起きるかもしれない。ただでさえ荒潮が施設の深海棲艦達に興味津々であるため、通信中に突然割り込んでくるという状況がある。
その時にジェーナスは通信の場にいなければいいだけの話なのだが、毎回確実にそういうことが出来るかはわからない。
「……ううん、何度も言うようだけど、私は開き直るって決めたんだもの。アラシオが何も覚えていないのは、正直……その、何でって思っちゃったけど、嫌な思い出は覚えていない方がマシなのは私だって理解しているわ」
まだ手は震えているが、ジェーナスは正しく現状を理解している。荒潮は何も悪くない。悪いのは荒潮を最初に侵蝕した悪意の塊だけ

だ。今の性格になってしまったのも、その侵蝕から解き放とうとした結果なのだから、否定するモノでは無い。
いわば、自分の我儘で現状を進ませないようにしてしまいかねないと思った。だから、ジェーナスは我慢する。
しかし、中間棲姫はその感情を即座に看破する。
「ジェーナスちゃん、本心を言ってもらえると嬉しいわぁ。ジェーナスちゃんはそういうことが言える権利があるんだもの」
見透かされたような発言に、ジェーナスはまたビクンと震える。中間棲姫の前では隠し事は出来ないと、すぐに悟った。
「……私としては、アラシオには会いたくない。顔も見たくない。アラシオが私にＬｏｖｅの気持ちを持っているとしても、私はそれに応えられない。嫌い、大嫌い」
ジェーナスにしては、かなり強い拒絶の言葉。好きか嫌いかで言えば、嫌いの方に行くのは仕方ないこと。
それを言葉にしたことで、ジェーナスは少し涙目になっていた。負の感情を持つこと自体が自己嫌悪に繋がるのだから、もうこれは殆ど発作に近い。とはいえ、当たり散らすなんて初めてのことなので、ジェーナスは変に感情が昂ってしまっている。
「でも、でもね。私が大嫌いなのは、その私を好きって言ってくれるアラシオじゃない、私を滅茶苦茶にしたアラシオなの。だから……だから、アラシオだからって毛嫌いするのは、違うって思うの」
震えを振り払って、涙もゴシゴシと拭いて、強い瞳で中間棲姫を見た。その表情は開き直ろうとする意志を持っていた。
「……そう、それなら、次の機会に荒潮ちゃんと話してみる？」
午後はジェーナスが哨戒に向かうため、やるのなら明日の午前中くらいになるだろう。その時に荒潮と画面越しの対面をするかどうか。
「……考えさせて。私も、覚悟を決めるときが来ると思うから」
「ええ、好きなだけ考えてちょうだい。嫌だと言っても、誰も何も言わないわぁ。それがジェーナスちゃんに与えられている権利なんだもの」

ジェーナスは荒潮と向かい合うつもりではいる。開き直るためには、これを乗り越えなければいけないとすら思う。

しかし、それが上手く行くかはわからない。嫌悪感を表に出してしまうかもしれないし、泣き出してしまうかもしれない。

今、ジェーナスも決断の時。

人生の先輩

午後、鎮守府。荒潮の検査が終了し、鎮守府所属の艦娘としての生活が始まるのだが、その前に提督は大将と連絡を取ることにした。それは勿論、荒潮のことの報告である。

荒潮がこの鎮守府に所属することとなったわけだが、その経緯はしっかりと伝えておく必要がある。そして、今一番の問題であろう泥――悪意の塊の対策が完成したことも話しておかなくてはいけない。

「正直憂鬱だよ……荒潮の変貌を伝えることは」

「あはは……その、私からは何も言えません」

秘書艦五月雨もこれには苦笑しか出来なかった。何かを言ったとしても、現状が全く変えられないのだから仕方ない。

本来の荒潮がどういう艦娘なのかは、提督も大将も知っていることだ。少しふわふわしており、天然でマイペースな掴みどころのない性格。悪い子ではないのだが、言葉の端々に狂気のようなものを感じることのある、何処となくミステリアスな少女。それが荒潮である。

そんな荒潮だが、ここにいる荒潮は侵蝕とそれから復帰するための投薬による後遺症、むしろその効能がいろいろと重なってしまった結果、何処となく感じられる狂気の部分が若干強くなってしまい、さらにはそこに追加された『深海棲艦への愛』という本来持ち得ない特性まで持ってしまったことで、余計におかしなことになっている。

「泥が抜けたのはいいことなんだが、あそこまで変わり果てているとな……。勿論、明石のせいじゃない、というか誰のせいでもない。あの泥の性質がアレだから、開発された薬もああいうことになってしまう。それに、あれは荒潮だからこそああなってしまったとすら言えるだろう」

「だとしたら、その薬を私達が飲むことにもなるんですか？」

「……ああ、だが安心してくれ。荒潮のようにならないように、明石がちゃんと確認している」

五月雨は苦笑状態で表情が固まった。荒潮がどのようになったのかは噂程度にしか聞いていないが、相当乱れたという話である。

眠っている時に投薬したからああなっただけであり、目を覚ましている状態で飲めばああはならないだろうという話もあるのだが、そこはまだ保証されていないので、明石が絶賛実験中。むしろ荒潮がああなった理由もまだ憶測のうちなので、そこも調査しているくらいである。

「だから、全員が接種するのはもう少し後だ。そもそも予防接種として成立するかもわからないからな。それは明石に任せるしかない……んだが、また徹夜しようとしているな。今日は休んでもらわなくては」

大淀は提督がしっかりと休ませているため、今日は自室で眠っているのだが、明石は荒潮の検査をしなくてはとまだ身体を休めることすらしていない。仕事中毒（ワーカホリック）というよりは、研究欲によって動き続けている。

欲望に忠実に、そしてそれでも鎮守府のために、一切止まるつもりがない。それが明石。

「私も後からそう伝えに行きますよ。でもその前に、大将に連絡ですよね」

「ああ、荒潮について全てを話す。そうだ、どうせだから明石を連れてきてくれないか。研究に関しては本人に話させた方が早いし、そのまま休ませることも出来る」

「了解です。すぐに呼んできますね」

一礼した後、パタパタと執務室から出て行く五月雨。あれは何処かで転ぶなと注意しようとした矢先に蹴躓いており、わかりやすくドジっ子気質を出していた。

明石が執務室にやってきた後に大将へと通信。今回の件を事細かく説明する。荒潮の状況から、明石の研究成果についても全てだ。

相手が大将であっても変わらず、明石は若干狂気が混じった熱弁を振るう。荒潮の検査後にも調査を続けていたので、提督の知らない情報まで入れてきた。

「つまり、妖精さんに泥の感知の能力は付与させられます。名付けて『悪意見張員』です。そのままですが、補強増設で装備可能としました。それと、ある程度遠距離からでも泥を消滅させられる兵器も開発しています。艦娘と深海棲艦、どちらにも影響を与えず、泥だけを消し飛ばすことができれば誰もが喜ぶことでしょう。体内の泥に対しては投薬で解決出来ます」

早口でイキイキと話し続ける明石だが、徹夜の後にまだ眠っていないためにどんどんハイになっているだけな気もする。表情から疲れは見えないものの、いくら艦娘とはいえ疲労は溜まるのだから、鎮守府のためとはいうもののしっかりと休んでほしいというのが提督の思い。

『なるほど、それならある程度はこちらから攻勢に出られるのね。事前に確認して未然に防ぎ、襲われても侵蝕される前に消滅させ、いざ侵蝕されても投薬によって予防も出来るし後から治療することも可能と』

「はい！　これで泥に怯える必要は無くなります！　とはいえ、もう少し改良は必要かもしれないので、短期間ではありますが研究に研究を重ねて、最善となったモノを量産したいと思います！」

明石が今まで以上に目を輝かせて話す。自分の研究が提督のみならず大将にまで認められたことで、その喜びは最高潮に達していた。狂科学者（マッドサイエンティスト）とはいえ、他者に評価されれば嬉しいに決まっていた。

事実、これまで明石がやってきたことは鎮守府に貢献し続けているのだが、今回の件は今までとは比べ物にならないほどの成果だ。得体の知れない敵の攻撃を未然に防ぐことが出来るなんて、簡単には出来やしない。評価されないわけが無いのである。

しかし、どうしても引っかかる部分はあった。それが、今回の件である意味犠牲となった荒潮のことである。

『ただ、荒潮のことについてなんだけれど』

投薬によって侵蝕から解き放たれたのはいいのだが、あからさまに性格が変貌しているのは大将も見逃せなかった。

「それについては、やはり練度の低さと眠っている間の投薬が悪影響

を与えたとしか言えません。投薬による反応、快楽を抵抗出来ない睡眠中に受けてしまい、練度が足りないために余計に抵抗出来ず、そのまま失われかけていた記憶を夢として見てしまったためと考えられます」

つまり、今の荒潮は悪いことが重なってしまった結果であると明石は確信している。

だからといってこのままにしておくのはよろしくないのだが、それこそ無抵抗なままに薬の効果を受け入れてしまったが故の事故のようなもの。

『そう……あまり褒められたことでは無いけれど、悪意の塊の対策が出来たことは評価します。荒潮については、本来ならば救えなかった者。それを救うことが出来たのは、明石で無ければ出来なかったことでしょう。あまりこういうことは言いたくないのだけれど、多少は目を瞑るわ』

提督に続き、大将も明石の研究に関しては若干呆れてしまっていた。荒潮が救えたことはいいことなのだが、やりすぎとも取れる結果。

とはいえ、この事例があるからこそ、さらに発展し、完璧な薬が作られることになる。荒潮は発展の代価である。そう割り切らなければ、これ以降に進むことが出来ない。

『わかりました。ではその研究の続行を許可します。経費の方は申請しておくように。私がどうにかしておきましょう』

「ありがとうございます！　それでは私は研究の続きを」

「する前に身体を休めるんだ。徹夜のまま作業し続けるのは、艦娘としてもよろしくない。評価に響かせたくないのなら、今から寝なさい」

チェッと口を尖らせるものの、提督が言うことも間違っていない。それに、いざという時は要求ではなく命令として、提督の立場から明石に指示を出すつもりだった。そこまでされたら逆らえない。

明石もそこには納得して、執務室から出て行った。念のためとして、五月雨がちゃんと部屋に戻るか監視までして。

そして残された提督は、改めて画面の向こうの大将と向かい合う。
『それで、真実を荒潮に伝えるか否か、だったわね』
「はい。僕としては現在保留中にしています。姉姫にもそう伝えておきました」
『そう。でも、いつかは伝えることになるんじゃないかしら？』
勿論それも視野には入れている。何も知らない状態でジェーナスと対面させるのは、荒潮ではなくジェーナスに酷である。
『これは大本営の大将とかそういうのは関係ない、人生の先輩としての言葉なのだけれど』
「はい」
『この後にでも、荒潮には真実を伝えるべきだと、私は思うわ』
ハッキリと大将は言った。先延ばしにしていたら、どちらも報われないと。
「すみませんが、その心は」
『おそらくだけれど、貴方は荒潮が溢れることを恐れているんじゃないかしら』
図星を突かれて提督は無言で首を縦に振る。
荒潮は今、既に愛が溢れていると言っても過言ではない状態にある。それこそ、その感情によって心が壊れて泥が溢れ出し、そのまま繭となって深海棲艦化してもおかしくない、スレスレの状態なのかもしれない。
そんな状況で、実はその夢は現実であり、愛も何もないただただジェーナスを利用しようとした結果だったと知ったら、荒潮は全く違う感情が溢れ出してしまうのではないかと、提督は考えていた。
『荒潮のことだけを考えたら、真実を伝えないというのも間違いではないかもしれないわ。でもね、ジェーナスとの関係を考えると、先延ばしは余計に事を悪くする可能性が高いと、私は思うの』
ジェーナスが荒潮に対して持っている感情は詳しくは知らない。しかし、荒潮に対して少なからず好ましい気持ちを持っていないことは誰にだってわかる。ただでさえジェーナスの溢れた感情は自己嫌悪なのだから、それを毎時毎分毎秒刺激し続けるその記憶を生み出し

た荒潮には、愛情とは正反対の憎悪を抱いていてもおかしくないのだ。
　そんなジェーナスと顔を合わせるために努力していたとしよう。練度を上げ、鎮守府から施設への航行が許されるくらいに強くなり、念願叶ってジェーナスと対面出来たとする。荒潮は何も知らないからジェーナスに対してその愛を振り撒くために行動を起こすだろう。それこそ、ジェーナスのことを何も考えずに。そんなことをし続けたら、如何に温和で仲間思いのジェーナスだって爆発する。
　そこでジェーナスが荒潮を拒絶し、最悪のタイミングで真実を知ったらどうなるか。それこそ、今までの努力が全て水の泡となり、持っていた感情がグチャグチャになる。下手をしたら、それを見てジェーナスすらもおかしくなる。
　いわば、荒潮が何もかもを破壊する爆弾みたいなものである。
『最低限、荒潮は真実を知った状態でジェーナスと向き合うべきね。拗らせたまま対面すれば、確実に悪い方向に向かうわ。鎮守府にとっても、施設にとっても』
　しかし、どうしてもそこでついて回るのが、その真実を知って荒潮が耐えられるかどうか。精神的なダメージが大きいのはわかる。知らないなら知らない方がいいレベルの出来事だ。
　中間棲姫もこの件についての保留は賛成してくれたが、時間をかければかけるほど荒潮はどんどん拗らせていき、取り返しがつかなくなるだろう。深みにハマって抜け出せなくなる。
『今の段階で真実を伝えることが、おそらく一番ダメージが小さいわ。ジェーナスのことを深く深く愛してしまった場合が一番取り返しがつかない。自分の感情が一方的だけならまだしも、自分の与り知らないところで恨まれて憎まれて拒絶されたとしたら、今の段階以上に感情が溢れ出す可能性が高いわ』
　知らないなら徹底的に知らない方がいいとは思うが、そうはいかないだろう。施設と付き合って行く上では避けて通れない。ならば、全てを早い段階で終わらせておくべきだ。真実を知り、その上でジェーナスとも対面し、その気持ちをお互いに伝え合う。

我慢なんてしなくていい。思ったことを言い合うことが、今後をより良いモノにしていくものだと、大将は提督に話した。
「わかりました。大将が言うこともごもっともです。この後、荒潮に全てを伝えようと思います」
『ええ。難しいなら、私も今のように通信で参加するわ。私が話してもいい。とにかく、先延ばしにすると確実に状況が悪くなるわ』
まるで実体験からの言葉である。人生の先輩からの言葉と前置きした上での話なので、大将も昔、似たような失敗をしたことがあるのかもしれない。上に立つ者としてではなく、それこそ私生活の中で。
しかし、それが何であるかを聞く度胸は、提督には無かった。大将の表情が、こう話しながらも詮索するなと訴えてきているように見えたため。

この後、荒潮は真実を知ることになる。自分の身に何が起きたのか、正しく知ることでどうなってしまうのか。最悪、感情が溢れて深海棲艦化してしまいかねないのは怖いところである。
だが、荒潮にとってそれは悪い方向には向かわないはずだ。むしろ、知っておいた方がジェーナスと向き合える。

真実を知り

提督と大将が相談をしている裏側。会議室では金剛と比叡によって、荒潮にこの鎮守府の在り方を教えていた。

既に荒潮も知っていることではあるのだが、この鎮守府は他の鎮守府とは明確に違うところがある。それが、ある程度は知られているものの秘密裏に穏健派の深海棲艦の施設と繋がりがあるということ。そして、その深海棲艦達と協力して、悪意の塊という艦娘深海棲艦問わずに侵蝕し配下に置く泥を撒き散らす黒幕を撃滅するのが今の目的であること。

普通なら深海棲艦と協力関係にあることに大いに驚き、本当に大丈夫か疑問に思うというのが想定されていた反応。しかし、荒潮は一味も二味も違った。

「金剛さん達は、そちらの方達と話をしたりしたの～？」

驚かないのは一度見ているからというのはわかる。中間棲姫がどのようなヒトなのかも対面しているので知っているようだ。

だが、あまりにも食いつき方が違った。施設にいる深海棲艦がどんなヒトなのかをもっと知りたい。そして愛でたい。そんな気持ちが嫌と言うほど伝わってくる。

「Ｙｅｓ．　私達は、彼女達と共闘もしていマース」

「あらあら、それはすごいわ～。私もそのヒト達と仲良くなれるかしら～」

「きっとなれマース。でも、あちらは少しＳｅｎｓｉｔｉｖｅ（センシティブ）な場所でもありマスので、気をつけてくださいネ」

そこのところもしっかりと伝えていく。最終的には知られることになるのだから、施設がどういうところかは早めに知っておくべきだ。

施設にいる深海棲艦の殆どが、元々は艦娘であったこと。感情が溢れ、心が壊れた結果、今の姿になってしまっていること。そして、一部を除いて発作を起こす可能性があること。この辺りは念頭に置いておかなくてはいけないことだ。

「あらあら……ならガラスに触れるようにしなくちゃいけないのね～。私、あちらのヒト達のことが本当に本当に大好きなんだもの。嫌なことはしたくないのよね～。でもいっぱい愛し合いたいわ～。あの夢のように、チューッてして、ペロペロして、うふ、うふふふふふ」

それを知ったことで、施設の者達の扱いがとても難しいことは察したはずなのだが、すぐに欲に溺れていく。夢の中の出来事があまりにも激しかったために、荒潮は愛欲の使徒となってしまっていると言っても過言では無い。

全ての深海棲艦（色白な女の子）に対して愛を振りまくことに悦びを感じている。それが全て妄想だとしても、荒潮は一切止まるつもりは無さそうである。

「荒潮、あんまり暴走しちゃダメだよ。あっちのヒト達は、ほんっとうにそういうことに敏感だから。欲望のままにペロペロしようものなら、本当に嫌われちゃうから」

「嫌われるのは嫌ね～。でも、くんずほぐれつしたいわ～。あんなに綺麗で可愛いヒト達なんだもの～」

比叡の言葉も聞いているのかいないのか。もう愛の妄想の中に身を投じてしまっているかの如く、キャッキャッと頭を振る。その目にはハートマークすら浮かんでいる程だ。

金剛も比叡も、この荒潮を施設に連れて行って大丈夫かと不安になる。施設の者全員に均等に異常な愛情を振り撒いたとしたら、間違いなく逆鱗に触れるだろう。それに、その距離感が危険な者だっている。

「ちゃんと理解するまでは、ココでお留守番になりマース。私達は、施設のヒト達とは一定の距離感が必要なんデス。それだけは守らないといけませン。Ｏｋａｙ？」

「うふふふふ、楽しみ、楽しみね～。あのヒト達と手を取り合える日が来るのが～」

妄想の世界に飛び立っているせいか、目の前の金剛の声すら聞こえていないようである。

この様子を見て、金剛と比叡は心底困ってしまった。溢れた艦娘達

の発作に繋がる部分に触れないようにする以上に扱いが難しい。何せ、何もしなくても勝手に自分の世界に入ってしまう。
「金剛、荒潮に説明は終わったかい」
と、そこへ提督が部屋へと入ってくる。大将との通信を終え、荒潮を探していたらしい。
「Ｈｅｙ，提督ーっ！　大体終わったヨー」
「でも、荒潮がすぐにトリップしてしまって」
比叡が指差す先の荒潮は、未だ妄想の世界に入って恍惚としている。深海棲艦と愛し合う姿を想像するたびにコレ。今ですらこれなのに、コレを放置しすぎると余計にまずいことになるだろう。そのうち、現実と妄想の境界が取り払われてしまうかもしれない。
深く愛せば愛するほど、真実を知った時の落差が激しくなる。もしこの愛が今以上に膨れ上がっている時に真実を伝えてたら、それこそ心が壊れる程の感情が溢れ出してしまうかもしれない。
「荒潮に話がある。執務室に来てもらいたいのだが……荒潮？」
提督が声をかけたことでハッと現実に戻ってきた。いけないいけないと言いながらも、振り撒かれた愛は止まることを知らない。
「あら～、提督、荒潮に何か御用かしら～」
「ああ、荒潮にはもう少し細かいことを知ってもらう必要があってね。君がどのようにここに来ることになったか、だ」
「そういえば、私少し記憶が飛んでいるのよね～。その間にあんな幸せな夢を見ちゃったわけなんだけど。うふふふふ」
「その夢の話に繋がることだ。それを僕達は知っている」
すぐにまた妄想が拡がってしまいそうになったが、提督がそれを止める。
「知っている……って、どういうことかしら～」
「それについて話すんだ。執務室で話すから来てくれ。金剛と比叡も一緒に来てくれて構わない」
万が一の時のストッパーとして、金剛と比叡には同席してもらう。錯乱して暴れてしまったとしても、２人がかりならば止められるだろう。荒潮はまだ練度が無いのだから。

執務室。少し改まった表情で荒潮の対面に座る提督。金剛と比叡は、少し離れたところでその様子を見るように立っている。
お互いに心が落ち着けられるようにとお茶を飲みつつ、すぐさま本題に入った。
「率直に言おう。荒潮、君が見た夢というものは、現実で起きたことだ。君が失った記憶を、夢として反芻したに過ぎない」
真正面から事実をぶつける。しかし、これだけではまだわからないことがありすぎる。
そもそも荒潮は、その夢を見たことで今の性格へと変貌を遂げ、既に現実と夢の境界線すらあやふやだ。夢で見たようにその時の少女とペロペロしたいと言っているくらいなので、現実にもあの少女がいると確信している。
「あらあら、やっぱりそうなのね～。それなら、あの子はこの世界の何処かにいるってことよね～。やっぱりあの施設にいるのかしら。それならお近付きになって、うふふ、くんずほぐれつ……うふ、うふふふふふ」
「荒潮、話は最後まで聞きなさい」
またもや妄想の世界に飛びかけているため、提督がすぐに引き戻す。むしろここからが重要だというのに。
「何故君が彼女、ジェーナスに対してそんなことをしたかだ」
「ジェーナスちゃんっていうのね～。うふふ、あんなに可愛らしい子、うふふふ、身体が疼いちゃう」
「こんなことを言うのは僕としては心苦しいのだが、今のままでは君と彼女を画面越しにでも会わせることは出来ない。そしてその原因は、全て君にある。実際は君も被害者なのだが、それでもだ」
自分のせいでジェーナスに会えない。それを聞いたら妄想の世界に飛ぶなんてことは出来なかった。
「何故私がジェーナスちゃんと会えないのかしら～。ただ愛し合うのがダメというわけではないのよね～？」

「ああ。本人に聞いているわけではないが、今頃ジェーナスは君のことを激しく恨んでいてもおかしくはない」
流石にこれは聞き捨てならないと、今までとは打って変わって提督に向き直って続きを聞く。
「君が夢に見た記憶の詳細を伝えよう。僕としては又聞きとなるのだが、その協力者である深海棲艦から直接聞いていることだ。間違いのない真実であると考え、心して聞いてほしい」
そしてここからは荒潮がジェーナスに何をしたか、その後のジェーナスのことまで細かく説明した。
夢の中で見たキスの光景は、恋愛が絡むようなロマンチックなものではない。悪意の塊に侵蝕され侵略者と化した荒潮が、ジェーナスを陥れるためにした行為なだけ。キスもキスではなく悪意の塊を流し込むだけの手段でしかなかった。
その後ジェーナスは豹変した姿で仲間に対して牙を剥き、新たな侵略者として暴れ回るが、春雨によって救われ、今はその時のことを悔いて本来の明るい性格すら鳴りを潜めてしまっている。
「君も利用されていたとはいえ、君がジェーナスを陥れてしまったんだ。無論、我々は君には一切の罪が無いとしている。だが、ジェーナスが君のことをどう思っているかはわからない」
途中から荒潮の表情は固まっていた。自分の愛する夢の中の少女が実在する深海棲艦であると知れたことは喜ばしいことだったのだが、自分が恨まれるようなことをしてしまっているというのは想像すらしていなかった。
ロマンチックな夢だから恋愛感情、愛欲にまで発展したが、それ自体が間違っていると突き付けられたようなもの。
「ジェーナスは強い子だ。今頃、この真実と向き合おうと頑張っていると思う。だが、君の姿は刺激が強いということは理解してもらいたい。僕だって君が施設の者達と仲良くしてくれるのは嬉しいのだが、現状がそれを許さないんだ。ましてや、今の君の態度で向かおうものなら、確実にジェーナスを傷付けることになる」
だから真実を伝えたと、失われた記憶の話は終わる。

荒潮の頭の中はグチャグチャだった。身体が疼くほどに愛していた夢の中の少女が、自分に対して恨みを持っている。自分の知らないことでも、ジェーナスには現実であり、今も苦しみ続ける理由。その元凶たる荒潮のことは、嫌いにこそなるが好きになることはない。

それでも愛欲が冷めないのが今の荒潮なのだが、愛するジェーナスを傷付けたくないという気持ちから、相反する思考がぶつかり合ってしまっている。会いたい。でも会えない。その苦しみは尋常ではなかった。

「あ、あはは、そうなのね～。私がその子を、私の存在がジェーナスちゃんを苦しめてしまっているのね～」

口調は変わらないが、声が震えているのはすぐにわかった。表情も変えないように努めているが、顔色は真っ青である。

これはもう出会う前から失恋したようなもの。真正面から突っ撥ねられたわけではないが、出会ったら拒絶されることが確定している。あちらも出来ることなら顔を合わせたくないと思っているはずだ。

「……あはは、私1人が舞い上がっちゃって、ジェーナスちゃんのこと何も考えてなかったわ～……」

徐々に俯いていく。笑顔は崩さないのだが、それが逆に辛そうに見えた。

「幸せな夢だと思っていたけれど……裏側はそんなことになっているだなんて……うふふふふ、私なんだかバカみたい」

俯いているから表情はわからない。だが、荒潮の手の甲に涙が落ちた。それこそ、ジェーナスと同じように自己嫌悪が溢れ出しそうになっている。

「……ジェーナスちゃんへの感情は何も変わらないわ～。顔を合わせたい。会いたい。くんずほぐれつしたい。ペロペロしたい。でも、拒絶されるのもわかってる。だったら……せめて謝りたいなって、思ったわ～」

俯きながらもハッキリと自分の意思を表に出す。記憶に無いのだが、真実であることは理解したため、せめてその件についてジェーナ

スに謝罪したいと考えた。
絶対に許されないことはわかっている。謝るのだって自己満足だ。それでジェーナスが仲良くしてくれるなんて思っていない。謝罪すら拒絶されるだろう。だが、自分の気持ちを知ってもらった上で拒絶された方が気持ち良く終われる。
「それで君の気が済むのなら、僕も姉姫に話をつけよう。一度だけでもいいから、対面の機会を与えてもらいたいと。ジェーナス次第ではそれも拒絶されるかもしれないが、こちらの意思を伝えるくらいはした方がいいだろう」
「ええ、よろしくお願いね～……」
最初ほど声色に元気は無かった。

真実を知った荒潮は、それでもジェーナスとの対面を望む。しかし、その気持ちは一転していた。

ジェーナスの苦悩

夕暮れ時の施設。午後の哨戒を終えた部隊が戻ってくる。予定通り白露とジェーナス、コマンダン・テストの3人に加え、外ではミシェルが付き添いとして一緒に回っていたとのこと。

ミシェルとしても浮かない顔をしていたジェーナスが心配だったようで、哨戒中はずっと傍に寄り添っていたという。そのおかげか、ジェーナスは少しだけ笑顔を取り戻していた。

しかし、どうしても今までの明るさは失われており、その笑顔はぎこちないものの、開き直ろうと必死に前に歩こうとしていることは誰にでもわかった。

「I'm back」

「お疲れ様、ジェーナスちゃん。姉さんとコマさんもお疲れ様でした」

出迎えたのは春雨と海風。相変わらず、そろそろ帰ってきそうと直感的に気付いて出て行った結果である。一番最初に気付くであろう叢雲は、深夜の哨戒のために就寝中。

「流石に何も無かったよ。昨日の今日で来ることは無いってことかな」

「今はそうかもですけど、それこそ油断していたら寝首をかかれそうですし」

「だよねぇ。狡賢さが半端ないからね」

呆れたように笑う白露。コマンダン・テストも、今のところは死の匂いが感じられないために安心しているものの、いつどのタイミングで襲撃をしてくるかわからない。

それくらい、あちらはやり方が妙に捻くれているのだ。それこそ、施設を発見したその時に泥を設置している可能性だってあった。

「少なくとも、あたし達には何も見えなかったんだよね。泥って電探とかソナーに引っかかってくれるのかな」

「鎮守府側で泥のセンサーを作ってるとかそういう話をしていました。今頃は明石さんが完成させているんじゃないかと」

泥の話題が出たことで、ジェーナスがピクリと反応する。やはり、

自分のトラウマに関わる話題が耳に入ると過敏に反応してしまうようである。発作はどうにか抑えようと自分の腕をギュッと握った。
「Ｊａｎｕｓ、大丈夫、ですか？」
「Ｉ，ｍ（大丈夫）ＯＫ（夫）．　心配いらないわ」
少し体調を悪くしているように見えたコマンダン・テストがジェーナスに駆け寄るが、ジェーナスは大丈夫の一点張りである。どう見ても大丈夫じゃなさそうなのに。
だが、強く踏み込むことは誰も出来なかった。無理をするなと言っても、今度はムキになりそうである。まだ精神的にも不安定なのに、強引に開き直ろうとするのはかなりキツい。
自分から前を向こうとしているところにケチをつけるような行為になりかねないため、ジェーナスが大丈夫だというのなら、大丈夫なのだと納得せざるを得ない。
そんなジェーナスは、そのままトボトボと風呂の方へと歩いて行ってしまった。もう声をかけようもなかった。心配したコマンダン・テストは、少しでも側にいようとそれを追いかける。
「白露姉さん……ジェーナスちゃん、哨戒中はどうでした？」
あえて追わなかった白露に聞く春雨。
「まぁ、お察しの通り、ずっと心ここに有らずって感じ。哨戒しながらも何処見てるかわからない感じっていうか」
「ずっと考え事をしていたみたいな……？」
「うん、そんな感じ。でも、何考えてんのなんて聞けないじゃん。トラウマ穿り返すことになるかもなんだから」
考え事をしているというのなら、その内容なんて聞かなくても大体わかる。まず間違いなくどうやって開き直るか。そして、荒潮との対面のことだ。
ただでさえ自己嫌悪がついて回るような状況であり、それが溢れたからこそ今のジェーナスが出来上がってしまっている。開き直るためには、その常に隣にいる自己嫌悪を一時的にでも振り払わなくてはならない。そして、それが出来れば苦労はしないのだ。
酷なことを言うようだが、どれだけ考えても答えには辿り着けない

だろう。それには必ず自己嫌悪が邪魔をする。こうしようと最善を思いつけたとしても、こんな自分にそんな手段を使う価値があるのかと自問自答してしまい、そして全てがオジャンになる。自ら答えを封じてしまっているのだ。

ならば、それをどう解決するか。そんなものは決まっている。仲間の力。これが一番手っ取り早く、そして確実だ。自分が大嫌いだから、ジェーナスは仲間思いになっていたのだから。

「私達が隣にいてあげなくちゃいけない気がする」

そして、その答えに春雨は当然辿り着く。今のジェーナスは、1人で考えるのではなく仲間と考えるのが一番。

ジェーナスがそれを拒絶したとしても、それでも隣にいることでいつでも相談に乗れるようになってあげたい。それが春雨の辿り着いた答え。

「春雨姉さんがそう言うのなら、それが適切なのでしょう。確かにジェーナスさんは今は特にナーバスな状態ですけど、独りでいたら自己嫌悪に押し潰されてしまうようなヒトなんですよね。なら目を離せません」

海風も同意。春雨の言うことなのだからノータイムで同意するのだが、今回の意見は海風も春雨が言う前から薄々感じていた。ジェーナスは独りにしておけない。

「あたしは哨戒で組むことになったし、夜も一緒だけどさ、それだけだと足りないと思うから、春雨と海風もジェーナスのこと気にかけてあげてよ。やっぱりこの施設のみんなで支えてあげないとキツそうだからさ」

白露と古鷹がジェーナスの気持ちを一番わかるのは自明の理である。同じ境遇にいた上に、ジェーナスとは違って実害すら出してしまっているのだから、尚のこと親身になれるだろう。

だが、今のジェーナスにはそれだけでは足りない。同類以外にも、被害者からも、むしろ無関係な者からも寄り添ってもらわなければ、心の傷が癒えることはないだろう。

いや、この傷は一生刻まれたまま。どうにか耐えられるくらいの痛

みにまでなってもらうために、仲間達が尽力するのだ。
「了解です。私、今すぐ行ってきます」
「なら私も」
「うんうん、行ってあげて。それで、アンタ達で癒してあげて。まぁ……もしかしたら余計に罪悪感を刺激することになるかもしれないけど」
そこは確かに心配な部分ではある。ジェーナスの罪悪感の源は、仲間に牙を剥いたことと、実際に攻撃に出たことだ。その時の戦闘では誰も傷はつかなかったとはいえ、白露を筆頭に本当に殺そうとしている。
それだけではない。春雨に対しては、辿り着く者であることを理解した上で、優先的に排除しようとも考えている。白露や海風以上に、春雨に対しての罪悪感は強い。
しかし、だからといって傷つけまいと寄り添わないのは違うと春雨は感じている。罪悪感は刺激するかもしれないが、遠ざけるのは余計に深みにハマってしまうのではないかと。
故に、今はジェーナスに寄り添うと決意した。それが自分の辿り着いた答えだと、抵抗もなく施設へと向かった。

ダイニング。深夜の哨戒メンバーではあるものの、先に起きて夕食の準備をしているリシュリューにコマンダン・テストが合流。そして、ジェーナスも何か思い詰めたような表情でそこにいた。食事の準備を手伝うわけでも無く、いつもの席でただ俯く。
そこに春雨と海風が合流。ジェーナスはその顔を見てぎこちない笑みを浮かべるが、ただそれだけ。やはり何かをずっと考えているだけ。
「ジェーナスちゃん、何かあったら、私達に相談してね」
ただそれだけ、自分達も力になるぞということを知ってもらい、いつもの席に座る。
「……ハルサメ、あのね」

そこにジェーナスがポツリと呟く。対する春雨はただ目を合わせるように頭を向ける。その表情は明るく、何も気にしていないというもの。
「午後のＰａｔｒｏｌの間、ずっと考えてた。私はアラシオと顔を合わせられるのかなって」
思い詰めていたのはそこ。午前中はまだ気にしていなかった荒潮のことである。
中間棲姫と話していたときは保留にしていた荒潮との対面のこと。タブレットで、画面越しで対話をすること。その全てを、今の自分が出来るかどうか。
「でも、そろそろＡｎｓｗｅｒが出そうなの。ここで、シラツユやフルタカが頑張ってるじゃない。私よりも辛いはずなのに、前を向こうって」
「そうだね」
心から寄り添うための相槌、ジェーナスの話をキチンと聞いている証拠。
「私も辛いけど、アラシオだって辛いはずなの。記憶が無くなって、事実を間違った捉え方してるかもしれないけど、だからといっても私が拒絶するのは、なんか違う気がする」
「なんで？」
「だって、アラシオは何も知らないのよ。私に……あんなことしたってこと、何も知らないの。なのに、私が一方的に嫌うって、何かおかしいわ」
嫌われる理由がわからないのに嫌われるというのは、間違いなく嫌な気分になるだろう。
ジェーナスは拒絶していたが、荒潮のことも慮って物事を考えていた。大嫌いとまで言い放っているものの、あくまでもそれは侵蝕された荒潮なだけであって、今の解放された荒潮は別。本来なら嫌う必要が無いのだ。
むしろ、それで荒潮のことを嫌うのなら、自分だって春雨達から罵られてもおかしくない。なのに、こうやって寄り添ってくれるのだか

ら、自分だって同じように荒潮と接するべきだと考えた。
「じゃあ例えば……荒潮ちゃんが真実を知っていたらどうする？」
まるで鎮守府で起きたことを理解しているかのような春雨の問いかけ。無論、これはいつもの直感的な発言である、
実際、今この時の荒潮は、提督から真実を聞いたことで夢が現実であり、ロマンチックなものではないことを理解している。それでも、ジェーナスに謝罪するために対面したいと提督に話している。
そのため、次に対面するであろう時には、荒潮は真実を知った状態となるのだ。そこでのジェーナスへの態度は正直読めない。愛欲に溺れてしまうのか、それともただ泣き崩れるか。他にも起こり得ることはいくらでも考えられる。
これに関しては、春雨でも辿り着けなかった。この先で何が起きるのか、道が見えない。
「……そうだとしたら、余計に話をしなくちゃダメ。気にしていないって言ったら嘘になっちゃうけど、ちゃんと顔を見て話さないと、どうすればいいのかわからないわ」
「そうだね」
「アラシオが真実を知っていても態度を改めないというのなら、私は本当にＲｅｊｅｃｔｉｏｎ（拒絶）するかもしれない。そんなことどうでもいいなんて言い出したら、多分口にも出すと思う。でも、シラツユやフルタカみたいにしてたら……私はアラシオを受け入れてあげなくちゃって、思う」
荒潮だって被害者だ。自分でやりたくてやったわけではない。今までの被害者、勿論ジェーナスとも同じだ。
自分と同じように辛い思いをするのなら、その辛さを知る者同士で慰め合うのが一番いい。白露と古鷹がジェーナスを気にかけているように、荒潮にも同じようにするのは間違っていない。
「Ｃｏｎｓｏｌｅ（傷の舐め）ｅａｃｈ（合い）ｏｔｈｅｒって言うのかしら……私はアラシオと、そういうことをするべき存在だと、自分でも思ってる」
春雨に話していくうちに、自分の中の考えが纏められていく。独りで考えるよりも、やはり仲間に打ち明ける方が、事は早く進展してい

く。
　そしてジェーナスは決意した。
「次の通信の時、私、荒潮と話してみるわ。それでどうやって付き合っていくか決める」
「うん、それがいいと思うよ。話してみないとわからないこともあると思うし」

　ジェーナスは自分で考えて自分で決定した。そして覚悟もした。あとは荒潮と話すだけ。裏側では荒潮も真実に苦悩しているが、ジェーナスとの対面を望んでいる。
　２人の意思は今、平行線から脱却し、交わろうとしている。

2人の覚悟

施設としては夕食後。もう外は暗くなっており、あとは風呂だけで就寝という時間帯。深夜の哨戒メンバーである薄雲、叢雲、リシュリューは、それをせずに外に出る準備をしている。

この時間から夜中いっぱいを起きて過ごすというのは滅多なことではしないため、若干の緊張感もあった。夜の海というのは、昼より当然危険だ。叢雲の全方位を巡る感知があるため幾分か安全ではあるが、むしろこういうタイミングだからこそ攻勢を仕掛けられる可能性もある。夜は最も注意しなくてはいけない時間帯だ。

「大体アンタ達が寝静まってから外に出るわ。ま、安心して寝てなさい。何かあったらどうにかして音を立てるわ」

叢雲は自信満々に、だが溢れる怒りを隠すことなく、ダイニングの仲間達に告げる。

やはり感知の力は優秀であるため、叢雲は大分頼られている。暗闇の中でも何処に何がいるかわかるというのは非常に頼りになるものだ。

「私が姉さんの手綱を握りますので」

「薄雲、アンタ私のこと犬か何かだと思ってるわけ？」

「そんなことは。でも、怒りに呑まれてしまったら何をするかわかりませんし、なるべく私が制御出来るならしたいなと」

妹の発言に噛みつく叢雲だが、その姿はまさに狂犬の一言に尽きる。奇しくも叢雲は自分で犬であると証明したようなもの。姿はウサギだが。

「このＲｉｃｈｅｌｉｅｕが2人纏めて面倒を見るから安心しておきなさい。でも、海の中は見えないから、叢雲に任せるわ」

「ええ、私がいの一番に探し出す。怒りの捌け口が来てくれるなら、後悔するくらいにとっちめてやるから」

そんな2人をリシュリューが取り纏めるという、纏まっているのか散らかっているのかわからないような編成に。だが、叢雲はこんなことを言いながらも施設のために力を尽くそうと躍起になっているし、

薄雲は姉の側で同じようにこの平和を守るために戦おうとやる気満々。
「でもその前に」
チラリとジェーナスを見る。ビクッと震えるが、真剣な面持ち。
「まだ時間があるわ。私はアンタの戦いを見届けてから、気分良く哨戒に行くつもりよ」
「戦い……うん、そうね、戦いよね。I made up my mind（覚悟を決めた）」
夕食の時に、ジェーナスは自分の決意をみんなに語った。鎮守府の荒潮とタブレットの画面越しにでも対面して、どういうカタチになるかはわからないが、付き合い方を決めると。
叢雲が白露や古鷹に誠実さを求めているように、ジェーナスも荒潮に対してそういうものを望むのかもしれない。その辺りは、荒潮の態度にもよるだろう。
むしろ、ジェーナスは決意したかもしれないが、荒潮が真実を知ったことで顔が合わせられないと考える可能性だってあった。
「姉姫、鎮守府に連絡してもらっていいかしら。早ければ早い方がいいわよね」
「そうねぇ、わかったわぁ」
一眠りしてしまうと今の決意が鈍ってしまうかもしれない。ならば、食後の最も活力が出るであろう今、荒潮との対面を望んだ。

一方、鎮守府。業務を終えたところにタブレットが鳴り響く。提督も今は食後であり、執務室にいるものの朝の業務の準備を少ししていたという段階。秘書艦五月雨も、今は姉妹達とお風呂に向かっているくらいである。
こんな時間にかかってくるのは少し珍しいため、緊急性があるのかと急いで受けた。
画面の向こう側の中間棲姫は、そこまで焦っているような表情でもなく、しかし今すぐ話をしたいという意気込みのようなものも感じ

る。ある意味緊急を要するような雰囲気に、提督も少し真剣な表情に。
「何かあったのかい？」
『ええ、荒潮ちゃんのことで少しねぇ』
よく見れば、中間棲姫のいるダイニングには、施設の深海棲艦が勢揃いというなかなか見られない光景。そしてその中には、渦中のジェーナスの姿まで。
むしろ、中間棲姫の隣に座っていることと、荒潮のことと言われて、提督はすぐに察することが出来た。ジェーナスが、荒潮と顔を合わせる決意をしたのだと。
「呼んでくる前に、先に話しておこうか。大将と話をした結果、荒潮には真実を全て伝えたんだ。なので、彼女はジェーナスに何をしたかを全て知っている。その上で、ジェーナスと話をしたいと言っていたよ」
何も知らないでジェーナスと対面するわけではなく、全てを知った状態で対面する。それがいいことなのか悪いことなのかは見当がつかないが、一方的な恋愛感情を叩きつけられるのみというわけではなさそうである。
ジェーナスとしては、ほんの少しだけ安心した。被害者であり強制的だったとはいえ、自分をこんな風にした艦娘がそのことを全て忘れて自分に愛を振り撒いてくるというのは、やはりどうしても気になってしまう。だが、記憶にないとしても理解してくれているのなら、心の持ち方が変わるだろう。
「一応聞いておくが……本当にいいんだね？」
ジェーナスに最後の判断を促す提督。今ならやっぱりやめたと言っても誰も否定はしない。
しかし、ジェーナスは無言で首を縦に振った。今ならば決意は固い。その間にこの件を進めたい。そんな意志を感じる。
「君の意思を汲もう。少し待っていてくれ」
タブレットはそのままに、提督は席を立った。今荒潮は金剛と比叡の下で過ごしているため、そこにいけば確実にいる。放送で呼び出し

てもいいのだが、それだと刺激してしまいそうであるため、なるべく優しく触れることに。
この時間帯だと、金剛と比叡は就寝前のナイトキャップティーを楽しんでいるタイミング。荒潮が酷く落ち込んでいることもあり、確実にそれを行なっているはず。

舞台はまた施設へ。タブレットの向こう側が執務室の背景だけになってから時間が経つが、その間もジェーナスは緊張で震えていた。
「ジェーナスちゃん、大丈夫よぉ」
隣に座っている中間棲姫が手を握った。それでも緊張は拭えないのだが、幾分か落ち着くことは出来る。
ジェーナスがここまで落ち着かないことは、施設に所属してからかなり久しぶりなこと。深海棲艦化した直後の、何をするにも自己嫌悪が溢れてしまい、まともに行動が出来なかった頃が今に近い。
「……Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ⊠ｓ　ｆｉｎｅ．　私が望んでこの場を作ったんだもの。みんなに迷惑かけたくないし、ここまで来て逃げたら、もっと自分が嫌いになるわ」
ただでさえ自己嫌悪で自分のことを好きになれないジェーナスだ。ここで決意したことから逃げ出したら、それこそ自己嫌悪はさらに悪化する。
それに、わざわざ夕食後という時間を選んだのは逃げられないタイミングを狙ったとも言える。ダイニングにはミシェルを除く所属する仲間達全員が勢揃いし、ジェーナスの覚悟を見守る。特に、逃げたら何を言い出すかわからない叢雲がここにいるのだ。お目付役としては完璧。
すると、タブレットの向こう側で音が鳴る。執務室に提督が帰ってきた音。それと足音が４人分。
荒潮だけでは心細いということで、真実を知る時と同じように金剛と比叡が付き添っていた。これで万が一暴れるようなことがあったとしても、戦艦２人ならばしっかり押さえつけることが出来るだろ

う。
『待たせてしまって申し訳ない。まだ大丈夫かい？』
「ええ、大丈夫よぉ」
提督と中間棲姫の話はそこそこに、すぐに本題に入る。ジェーナスと同じように、荒潮もここには覚悟を持って来ている。
「ジェーナスちゃん、いいわねぇ？」
「……Ｏｋａｙ」
ゴクリと唾を呑む音が誰にでも聞こえるほどに響く。そして、カメラをジェーナスの方へと向けた。
『荒潮、君が夢の中で出会ったという少女、ジェーナスが向こう側にいる。君はしたいことをしたいようにしなさい』
『……ええ』
今までで一番静かな荒潮。マイペースな部分は完全に鳴りを潜め、緊張に支配されている。
しかし、カメラの前に座った瞬間に空気が一変することになる。
「……っ」
ジェーナスはその姿を見た時点で身体が強張った。泥を流し込んできた張本人。悪意の塊に支配された原因。自分を陥れた元凶。
怒りと憎しみが湧き上がるような感覚だったが、その荒潮だって被害者であることは理解しているのだから、どうにかそれを抑え込もうと画面外で自分の手をギュッと握る。
『……っ』
対する荒潮はその姿を見た瞬間に愛欲が溢れ出しそうになった。夢に見たその少女が画面越しとはいえ目の前にいる。
しかし、そのジェーナスに自分がしでかしたことは提督から聞いている通りだ。一生恨まれるようなことをしてしまっているのだから、この想いは絶対に成就しないし、むしろそんな想いを持っていること自体が烏滸がましい。
「……Ｈｅｌｌｏ，アラシオ」
『……貴女がジェーナスちゃん……ね～』
お互いに言葉があまり出ない。緊張もあるのだが、会ったことに

よって頭の中が真っ白になりかけていた。その感情は互いに別物ではあるが、同じような反応になってしまっている。
そして、先に口を開いたのは荒潮だった。
『ジェーナスちゃん、ごめんなさい。私、貴女にいっぱい謝らなくちゃいけない』
溢れ出さんとする愛欲をどうにか抑え込んで、荒潮はポツリポツリと言葉を紡ぐ。
『あの時のことを……何も覚えてないの。本当に全部、全部消えてしまっているの。でも、夢で、気持ちいい夢で、貴女と出会ったことだけはこの目で見たのよ』
話しながらも俯きそうになっていた。しかし、勇気を振り絞って頭を下げないように努力する。謝罪をするつもりなのだから、相手の目をしっかり見て話したい。ジェーナスに目を背けられたとしても、その顔だけはちゃんと見て。
『覚えていない記憶を教えてもらって……真実を知って……本当に本当に大好きな貴女を、私が陥れたと聞いた時は、心が引き裂かれたのかって思うくらいショックだった。そもそも顔を合わせたことも無い相手を愛しているなんて、他のヒトにとっては気持ち悪いわよね～……』
話すうちに声が小さくなっていくが、思いを伝えるためには言葉を止めない。
『だからね、私は貴女に謝り続けるしかないの。許してくれなくてもいい。むしろ恨んでほしい。憎しみを向けてほしい。それだけの罪を犯した事は、自分でもわかってる。それを全て忘れてしまっているのは、もっと罪だと思う』
マイペースな間延びした話し方は失われ、真剣にジェーナスと向き合っていた。愛欲もこの時には表に出る事なく、本当に荒潮かと思えるほどに真剣で真っ直ぐな瞳。複雑な感情が混じり合って、今だけは謝罪以外の感情が失われているかのような表情。
この荒潮だけでなく、他の鎮守府にいるであろう別個体の荒潮ですら、こんな表情はしない。それだけ、この事態に親身になっている証

拠。
『だから、ごめんなさい。貴女にそんな思いをさせているのは、全部私のせいだもの。謝る以外に私に出来ることが無いわ。本当に、本当にごめんなさい』
ジェーナスは荒潮の謝罪の言葉に返すことが出来なかった。それは違うと言いたかったのに、すぐにその言葉が出てこない。どうしても恨みと憎しみがそれを包み隠してしまう。
だが、荒潮が覚悟を決めて、振り絞って謝罪の言葉を紡いでくれているのだ。それに何かを返さなければ無礼というもの。一方的に謝らせるのは違う。
「アラシオ……大丈夫、大丈夫よ」
ジェーナスも振り絞って言葉を紡ぐ。
「貴女だって、ただ巻き込まれただけなんだもの。貴女は悪くないわ。そう、何も悪くないの。悪いのは、あの泥を最初にアラシオに呑ませたあっち側のヒト達よ」
これだって本心だ。確かに荒潮のせいでジェーナスは侵略者と成り果てたわけだが、本を正せば荒潮にそれをやらせようとしたあちら側が悪い。ジェーナスはおろか、荒潮だって完全な被害者だ。
だから、荒潮に対して憎しみを持つのはお門違いなのだと、ジェーナスは必死に思い込もうとする。それは間違いじゃ無い。むしろ、そう思わなければ、白露や古鷹にも関わってくるし、何よりジェーナス自身にも大きな罪が残る。
「だから……うん、だから、私とアラシオのこういう関係は、これでおしまい！　そう、おしまいなんだから！」
奮起させるように大きな声で宣言する。わだかまりをどうにか振り払うように。
荒潮だってもう仲間なのだ。自己嫌悪から仲間思いになっているジェーナスだからこそ、この言葉が無意識に出た。これが正解、これがあるべき姿、これが荒潮とのベストな関係性。
そんな言葉を聞いた荒潮は、愛欲も込みにしてジェーナスに対しての感情が溢れ出してしまった。堪えることも出来ない涙が、音を立て

たかと思うほど大量に流れ落ちる。
『ありがとう……ありがとうジェーナスちゃん……私は許されないことをしたけれど』
「許すも許さないも無いのよ！　だって、アラシオは道具として使われただけなんだもの！　使った張本人の方が悪いに決まってるわ！」
いつもの調子を取り戻して来たジェーナスはヒートアップしていく。落ち込んでいた表情は嘘のように明るくなり、荒潮を引っ張り上げるために力を尽くす。

覚悟を決めたことと、荒潮の謝罪によって、ジェーナスは自力で今までの場所へと這い上がってくることができたのだ。
それにはやはり、仲間の支えもあったからこそ。春雨に話を聞いてもらったのもあるが、叢雲の最後の一押しも効いていた。

2人の安堵

鎮守府との通信は終了。ジェーナスは言いたいことも言えたようなものなので、随分とスッキリした顔をしていた。

対面したことで、あの荒潮がジェーナスを陥れた荒潮とは別人であることはすぐにわかった。身体も記憶も全てが同じかもしれないが、感情が溢れて流した涙は本物だ。あれをこちらを騙すために出す事は出来やしない。

それもあって、ジェーナスは荒潮のことを受け入れることが出来た。大嫌いな荒潮は、もうこの世にはいない。泥を消滅させたことで、一緒に世界から消え去ったのだ。そう理解出来たことで、ジェーナスは荒潮を改めて仲間であると認識することが出来た。

「……ふぅ」

力いっぱい深呼吸。心の底から安堵したような表情。荒潮とは悪い仲にならない。直接対面するのは流石にまだ厳しいが、画面越しならば少しは話せる。そう確信していた。

自己嫌悪に繋がるような感情は無く、後悔するような言動もしていない。だから、ジェーナスにとっては最善だった。

「……Ｏｋａｙ！　私、ちゃんと開き直れるわ！」

昨日今日とずっと浮かない表情だったのが一転、荒潮との対話がいい刺激となったか、いつもの表情に近いものを取り戻した。どうしてもぎこちなさはあるし、少しだけ無理も見られるが、それでも明るい自分に向かっていこうとする気持ちは見てわかる。

ならば、それを仲間達が支えていく。誰もが明るいジェーナスを見たいので、それを否定するものは一人もいない。

「アンタの戦い、見届けたわ。じゃあ次は私達よ」

そして時間となったため、叢雲を筆頭に深夜の哨戒部隊が外へ。ジェーナスと荒潮の対話を見届けることが出来たので、最初の宣言通り気分良く哨戒に向かうことが出来るようである。

薄雲も叢雲の隣に付き従い、リシュリューは事前に用意しておいた夜食を手にしてそれをゆったりと追った。夜の哨戒は午前や午後よ

り長時間だ。半分やったら休息として夜食を食べ、その後もう一踏ん張りという流れ。
「夜の哨戒、気をつけてね」
「アンタに言われると不安になるわね」
春雨の声援に小さく笑いながら手を振った。薄雲も遠目ではあるが小さく礼をしている。
「直感的に春雨に何か言われると当たるんじゃないかってビビっちゃうんだろうねぇ」
叢雲の言葉に白露が反応。春雨が気にかけたということは、今からの哨戒で何か起きてしまうのではないかと若干不安になるのはわからなくもなかった。
だが、春雨としては社交辞令みたいなもの。いってらっしゃいと同義である。
白露はそれがわかっている。何せ、艦娘だった頃には鎮守府でさんざん同じことを言われ続けていたし、一緒に出撃する時ですら同じようなことを言うのだ。
それに、本当に危険だったらこんな軽く言うことはない。悪寒だって感じるだろうし、春雨だったらそもそも哨戒を止める。とはいえ、今すぐに危ないことが起きることは無い。
「気をつけるのは当たり前のことですよ。ただでさえ夜なんですから」
春雨の心配を無下にするような発言をしたからか、海風は少しだけ不機嫌。だが、相手が叢雲なので、いつものことと流せるくらいの余裕はある。口が悪いのは叢雲の特性なのだから。
「それじゃあ、アタシもあと1回だけ哨戒機飛ばしておくわ。夜に仕掛けてくることだって考えられるものね」
哨戒部隊が出た後、少ししてから飛行場姫も外へ。夜中ではあるものの、最後に島をグルッと一周回って哨戒するとのこと。
何の準備も無く夜でも艦載機が飛ばせる深海棲艦の特性を活かしたやり方。それはあちら側も同じであるため、同等の力で牽制するのも目的である。むしろ、艦載機だけで言うなら飛行場姫の方が上。

「それじゃあ、残ったみんなはもう眠る準備をしましょうねぇ。明日も同じようにやっていくし、農作業や漁もいつものようにしていくわぁ」
　中間棲姫が号令をかけ、残された者達はあとは風呂と就寝のみ。今哨戒に向かった者達に全てを任せて、安心して眠ることになる。
　勿論不安が無いわけではないため、中間棲姫はいつもよりも夜更かしをする予定らしく、代わりに飛行場姫が朝早く目覚めるとのこと。
　姉妹姫の両方が眠っている時間をある程度減らして、隙を少なくするのが目的だ。深夜の哨戒をしているとしても、それは1つの部隊が島の周りをグルグル回っているだけに過ぎない。北を見ている時は南はガラ空きになるのは当たり前。
　そのどうしても出来てしまう隙を突かれる可能性を考えると、姉妹姫も平和のために動かざるを得ない。2人の睡眠時間を削るわけにもいかないため、就寝と起床のタイミングをずらす事でどうにかするとのこと。
「シラツユ、フルタカ、まだしばらくはダメだと思うから、一緒に寝てもらってもいい？」
　開き直ることは出来そうだが、悪夢などは振り払えないため、夜は誰かに側にいてもらいたいという気持ちは大きい。そもそもが自己嫌悪が溢れないように誰かの温もりが欲しいという状態だったが、今はそれが特に強い。
「オッケー。そもそも夜はそういうことにしてあるもんね。昨日と同じように、あたしと古鷹さんがいくらでも温めてあげよう」
「私でもそういうカタチで役に立てるなら喜んで。ジェーナスちゃんがそれで喜んでくれるなら、私も嬉しい」
　昨晩は悪夢を見ることになったが、それでも充分に眠ることが出来たのは、ほかならぬ2人のおかげ。春雨が眠る時のように、ジェーナスの両サイドを白露と古鷹が陣取ることで、全員が温もりを得ながら気持ちよく眠れるフォーメーションになる。
　今のジェーナスにはそれが必要不可欠だった。仲間が側にいるということがわかる状態が一番落ち着くのだ。

「もし何かあったら、お姉ちゃんに相談していいんだよ。これでもあたし、春雨や海風のお姉ちゃんだからね！」
「そういうことなら、私もお姉さん、かな。一応、全ての重巡の姉なんて異名を貰っていたりするから」
「Ｔｈａｎｋｓ　ａ　ｌｏｔ．　２人とも、頼らせてね」
ジェーナスはいい相談役を得ることが出来た。同じ境遇、いや、ジェーナス以上に酷い目に遭った２人が、前向きに寄り添ってくれる現状は、開き直るための道を作ってくれる者としては最適だった。

一方、鎮守府。通信が終わった直後、荒潮はドッと疲れたように椅子の背もたれにもたれかかった。
「本当に、本当に良かったわ～……。ジェーナスちゃんが許してくれて～」
先程流した涙をようやく腕で拭い、少し腫れぼったい目を見せながらも小さく微笑んだ。いつもの調子はまだ取り戻していないが、ジェーナスとの関係が悪い方向に拗れなかったことを心の底から安堵したことで、力が抜けてしまっている。
「ジェーナスも言っていたが、君は許すも許さないも無いんだ。君だって被害者だからね」
「Ｙｅｓ，　提督の言う通りデース。荒潮は巻き込まれただけデスからネー」
鎮守府の誰もがそれを理解している。白露や古鷹のような前例があるのだから、荒潮だって自然に受け入れられるのだ。
「荒潮、君はこれで正式に鎮守府所属の艦娘として扱われることになる。それは構わないかな？」
「ええ、問題ないわ～。こういうのも罪滅ぼしっていうのかしらね～。出来る限り頑張らせてもらうわ～」
ここで努力して早く成長出来れば、施設に向かうことも出来るかもしれない。ならば、ジェーナスと直接会うためにも、訓練に精を出していち早く練度を上げることを望む。

口には出していないが、荒潮の考えている事は筒抜けだった。しかし、それを誰も否定しない。動機はそれでも、やる気が充分すぎるほどあるというのなら、何も問題はない。
「なら明日から艦娘としての訓練を進めよう」
「ええ、誠心誠意頑張らせてもらうわ～。ジェーナスちゃんのために、そう、ジェーナスちゃんのためよ～。うふ、うふふふふふふ」
ここでついに、ジェーナスの前で抑え込んでいた愛欲が溢れ出した。自重出来ているだけであって消えてはいないそれは、本人の前では絶対に見せられないような姿に荒潮を変える。
今は見えないジェーナスのことを思うことで、またもや瞳にハートマークが浮かび上がり、微笑みも惚けたような表情へ。そして、自分を抱きしめながら震え出す。
「本当に、本当に可愛かったわ～。夢で見た姿よりも現実の方が数倍、数十倍は良かったのよね～。うふふふ、夢では知らなかったけれど、声もとっても可愛いのね～。ああ、あの声をもっと聞いていたい、あの顔をもっと見つめていたい、あの肌に触れたい。会いたい、とっても会いたいわ～。でも、でもまだダメ、ダメよ。今の私だとジェーナスちゃんの足手纏いになっちゃう。それにこんなところ見せたら幻滅させちゃう。ちゃんと自分を抑え込まなくちゃ、でも、でもニヤけちゃう、あの可愛さは罪よね～、うふふふふふふ」
ジェーナスと対面出来た喜びが、今の荒潮には刺激的すぎたようである。ここからは定期的に顔を合わせてもらおうかと思っていた提督だったが、今の荒潮の姿を見てしまったら少し抵抗が出てしまった。
「金剛、比叡、荒潮のお目付役となってもらっていいだろうか。最終的には調査隊に入れたいとは思っていたんだが」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅデース。この荒潮を施設に連れて行くことは出来ませーン。せめてもっと自分を抑え込むことが出来るようになるまで、Ｄｉｓｃｉｐｌｉｎｅ（鍛錬）してもらいマース」
「鍛える事でしたら、この比叡、気合、入れて、行きます！」
比叡はお目付役という大役を任命されたことで気合が入り、明日か

ら荒潮をビシバシ鍛えていこうと躍起に。ジェーナスと直接会いたいという気持ちも汲んでおり、それが早く叶うために尽力しようと気合も入っている。
「比叡、気合を入れるのはいいんだが、荒潮のことも考えてあげるように。練度がまだ無いドロップ艦なんだ。いきなり君達レベルでやるようなことはやめるんだぞ」
「勿論です！　でも、今までに無いくらいに早く改二にしてあげるくらいに鍛えてあげますよ！　司令も改装設計図を用意して待っていてくださいね！」
　こういう時の比叡は、少しやりすぎな傾向にあるのだが、今の荒潮にはこれくらいがちょうどいいかもしれないと提督は注意をそこそこに済ませていた。それに、比叡のことは金剛に任せていれば問題ない。やりすぎだと感じたら金剛がちゃんと止めてくれる。
　荒潮の早急な練度上げは、鎮守府のためにもなる。この事件により、白露型が6人突然抜けることになったのだ。駆逐艦に空いた穴を埋めるためにも、荒潮という戦力増強はかなりありがたい。
「荒潮も、無理をしたら意味がない。ジェーナスに早く会いたいのはわかるが、それで倒れたらそれこそジェーナスが悲しむ。彼女の自己嫌悪を刺激することになるからね」
「うふふふ、勿論わかってるわ～。私はジェーナスちゃんを絶対に泣かせない」
　愛欲に塗れながらも、荒潮はジェーナスのことを第一に考えている。触れ合いたい、くんずほぐれつしたいという気持ちよりも、ジェーナスを悲しませないというのが軸にある。
　無理をしたら確実にジェーナスが傷付くのだから、決して無理はしない。なるべく早く、しかし何事もなく。それが荒潮の今の方針だ。
「泣いてる顔より、笑ってる顔の方が可愛いんだもの。うふふふ、そう、そうよ。ジェーナスちゃんにはずっと笑っていてもらいたいの。可愛い女の子の可愛い笑顔で、私の力は何倍にでもなるわ～」
　それがいいことか悪いことかはまだわからないが、少なからずやる気は充分だ。鎮守府のために働いてくれるだろう。その根っこには

ジェーナスのためにというものがついてまわりそうだが。

ジェーナスも荒潮も、次に向かって歩けるようになった。戦いはこれから、まだまだ過酷になっていく。そんな中でも、２人は明るく前を向けるだろう。

平和のためには

翌朝、深夜の哨戒組を出迎える飛行場姫。まだ日が昇るか昇らないかくらいの時間であり、薄暗がりの中探照灯を煌々と照らしての航行である。

この夜は何事も無かったようで、ただグルグル回っただけ。夜だから泥が見えづらいというのもあるのだが、3人がかりの探照灯照射と、徹底したソナーによる調査、そして広範囲に張り巡らされた叢雲の感知のおかげで、海の上にも中にも何も無いと判断するに至っている。

何より、眠っていたとはいえ春雨が虫の報せが無かったというのも大きい。まだ兆しとはいえ、辿り着く力に目覚めている春雨の虫の報せは信頼度も高い。春雨がぐっすり眠れているということは、それだけでも叢雲達が無事であったと感じられるものであった。当然過信はしていないが。

「夜は昼より気を張るから、疲れも段違いね。休憩したとしても普通にしんどいわ」

「まあまあ。何も無かったんだからいいじゃないですか」

小さく溜息をついて愚痴る叢雲を宥める薄雲。何かあったらあったで怒りを露わにするが、何も無かったら無かったで苛立ちを見せるのは若干理不尽ではある。

だが、叢雲の中ではそもそも深夜に哨戒をしなくてはいけないという現状が苛立ちに繋がるモノ。全ては黒幕が施設を見つけ出したことが問題であり、そんなことが無ければそもそもこんなことをする必要すらない。それが苛立ちの原因。

「アタシも軽く哨戒機を飛ばしてるけど、今のところは何も無いわね。昨日の今日ではやってこないのかしら。それとも、入念に準備をしているのかしらね」

飛行場姫もこんなに早い時間から哨戒機を飛ばすなんてことが無かったため、若干苛立ちを感じさせるような口調。別に低血圧だから朝が弱いとかそういうことは無いのだが、本来なら寝ている時間に起

きなくてはならないという事実が気に入らないようである。
　叢雲も飛行場姫も、全く同じ理由で苛立ちを感じている。まだ初日なのにこれでは、しばらく続きそうなコレで精神的にもダメージを受けそうである。
「妹姫、Ｐｅｔｉｔ―ｄ（朝）・ｊｅｕｎｅｒ（御飯）はどうすればいいかしら。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが作ればいいのかしら」
「流石に哨戒から帰ってきたところに作れなんて言わないわよ。アタシがやるし、誰かしら起きてくるわ」
　疲れているわりには、リシュリューはまだ有り余っている様子。流石は戦艦と薄雲は感心していた。燃費だけで言えば駆逐艦の方がいいはずだが、そもそもの体力の差があるようだ。
「それじゃあ、お風呂に入ってきなさいな。アタシが起きた時に追い焚きしておいたから、ちょうどいいくらいになってるわよ」
「そうね。もう髪が潮風にやられて鬱陶しいったらありゃしない。さっさとお風呂に行きたいわ」
「姉さん、髪長いですしね。洗髪手伝いますよ」
　姉妹は仲良く施設の中へ。リシュリューは後から行くと今はこの場に残った。
「ムラクモもウスグモも、夜の方が動きがいいくらいね。駆逐艦の本領発揮って感じよ」
「そうなのね。ならやっぱり、駆逐艦の子達に哨戒をお願いするのは間違ってないってことね」
「ええ。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは海の中は見えないもの。そういう意味ではあの子達を頼りっぱなしよ。纏め上げるなんて言いながら、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが足を引っ張っちゃいそうね」
　大人の世間話。夜の哨戒についての意見交換。
　夜に航行すること自体は、リシュリューだって何度もやったことはある。ただでさえ施設の遠征組として、この島と陸を定期的に往復しているのだ。基本的には夜に動くくらいである。
　そうであっても、駆逐艦に頼らなくてはいけない。それが海中の潜水艦の存在だ。敵に潜水艦が２人もいることがわかっている以上、駆

逐艦の手助けは絶対に必要。むしろ、リシュリューが守られることすらあるかもしれない。
「ま、このＳａｖｏｉｒ（ノウ）―ｆａｉｒｅ（ハウ）はみんなに共有していきましょ。今日の夜はまた別の子がやるんでしょ？」
「当番が回ってくるのは、白露とジェーナスになるわね。付き添いはコマよ」
「そう、じゃあＡｕ（食）ｃｏｕｒｓ（事）ｄ’ｕｎ（中）ｒｅｐａｓにでも話しましょうか」
ここでの経験は、施設の平和を守っていくにあたり、確実に役に立つ。この戦いが終われば必要なくなるノウハウかもしれないが、知っておいて損はない情報も沢山あるだろう。

その後、朝食。作ったのは飛行場姫とコマンダン・テスト。全員勢揃いしている場で、深夜の哨戒の話を共有していく。
この施設に夜の海の状況は今までほぼ無縁だったのだが、ここでどうしても知らなくてはならなくなった。
「夜は思ったより穏やかでした。天気がずっといいような島ですし、そのおかげかむしろ昼より風も波もなく、航行しやすかったです。凪というわけではないんですが」
その説明は、叢雲でもリシュリューでもなく薄雲がする。叢雲はここで天性の不器用さを発揮する上に、説明に愚痴が交ざるために聞き取りにくい。リシュリューは母国語の関係上、速やかな理解から少し遠い位置にいる。結果、薄雲が適任となっていた。
それを自覚していたからか、哨戒の最中もどちらかといえば海の状況を注視していた。今後のことを考えて、仲間達のために情報収集は欠かさない。
「空気も澄んでて、夜でも月明かりが綺麗だったので、遠くに誰かがいても目で見ることが出来ます。戦艦さんやコマさんなら尚更」
「そうね。私、夜の間にここに来ることも多いけど、かなり遠くからこの場所は確認出来るわ」

「ということは、逆も然りですよね。水平線に近い場所でも確認は出来ると思いますよ。それが昼でも夜でも」
そういう意味では、この施設は守りやすいと言える。開けっ広げな空間にちょこんとある島だからこそ、３６０度全てが艦載機が無くとも確認可能。いざという時は、全方位に仲間を配置することでどうにか出来る。
だがそれは、３６０度全てを囲まれるという危険性にも繋がっている。島の悪いところだ。あちらが持てる限りの部隊を全て放出して、島を隙間なく包囲したとなったら、そのまま数の暴力で押し潰される可能性だってあった。
いくら施設に所属する者全てが、類い稀なる力を持つ姫級の面々だとしても、それはあちらも同じこと。ただでさえ魂の混成で作り出された深海棲艦だ。単体のスペックだけで言うならば、あちらの方が上。
「結局のところは、ガチでぶつかり合った時に勝てるかどうかなのよ。私は負ける気なんてさらさら無いけど」
朝食をガッツリ食べながら叢雲が愚痴るように吐き捨てる。結局は戦うことになるのなら、真正面からのぶつかり合いで勝てるか否かになる。スペックだけで言えば負けていても、それはあくまでも数値上。あらゆる手段を用いれば、その辺りは簡単に覆せる。
しかし、それは当然あちらも同じ。むしろ、あちらはスペック差があるにもかかわらず、さらに小狡い手段を多々用いて自分達の優位に持っていこうとする。
例えば、艦娘の空母の動けなくなる夜を狙って襲撃したりだとか、侵蝕で敵を減らしつつ味方を増やす最も忌むべき戦術を多用したりだとか。
強い上に狡く、更には数も多い。普通なら、そんな輩が一斉に襲い掛かってきたらひとたまりもないだろう。
だが、施設の面々は誰も負けるつもりは無い。不安はあるかもしれないが、敗北をみている者は誰一人としていない。叢雲を筆頭に、真正面から叩き潰す気満々である。

「第一は島に近付かせないことだとは思うけど、万が一近付かれても、アタシもお姉も簡単にはやられないわ。どうせあちらはアレでしょ。ビクビクしながら遠距離で火力で押し勝とうとするだろうけど、そんな攻撃は効きやしないから」
　飛行場姫が鼻で笑いながら言う。自分の力に絶対的自信を持っている……というわけでは無いのだが、少なくともそんな輩に対しては負けるなんて考えられないと口に出すほど。
「何事も無いのが一番ありがたいんだけれど、もし何かあっても私達には自分の身を守るくらいは出来るわぁ。お互い、痛い目に遭いたくないのは同じだと思うのだけれど……本当にいざとなった時は、私だって抵抗するわぁ」
　中間棲姫も穏やかに話す。勿論戦いたくはないのだが、この施設の平和を守るためとなれば話は別。自分だけならまだしも、仲間達にまで被害が出るのはよろしくない。
　この中間棲姫の実力を一番知っているのは海風だ。初見で撃ってしまった時に、その全てを簡単に止められてしまい心を折られている経験がある。それ故に、中間棲姫の抵抗というのは充分過ぎるくらいの安心感であった。
「姉姫様も妹姫様も、私達が守ります。私達も、この施設での平和な生活が楽しいと思っていますから。もう手放したくないくらいに」
　春雨の言葉に、全員が頷く。平和でのんべんだらりとした生活を失うのは誰もが嫌なことだ。
　戦いから離れ、トラウマも刺激されず、やりたいことをやりたいようにやれるこの島は、もう楽園と言っても過言ではないものだ。一部の者はそこに、好きなヒトと一緒にいられる場所というのも含まれる。
「決着がつくまでは今のやり方を続けて、裏では鎮守府と連携しましょ。あの提督は話がわかるヤツなんだから、頼れるだけ頼らなくちゃ」
「そうねぇ。提督くんには頼りっぱなしねぇ。いつも働いているイメージがあるのだけれど、彼はちゃんと休めているのかしらぁ」

話題は鎮守府のことへ。言われてみれば確かにと、姉妹姫だけでなく春雨なども考える。あの提督、タブレットで連絡したらほぼ確実に数コール以内に出るし、いつ連絡を取ってもせかせか働いているイメージしかない。
「ね、ねぇ春雨、提督って休んでた？　あたし達は定期的に休暇貰えてたけど」
「……全然思い出せません。秘書艦をやってる五月雨も休暇があったのに、そのときは大淀さんが秘書艦やってましたよね」
「確かに……。姉さん達の捜索中も、ずっと働き詰めでした。そんな中私も離脱してしまいましたし……」
鎮守府にいたことがある白露型姉妹も、休んでいるところを見たことがない気がした。１年３６５日年中無休で海の平和のために働き続けている。
「今更かもしれないけれど、彼には一度休んでもらった方がいいんじゃないかしらぁ。だって、ここ最近心労が溜まり続けているでしょう？」
「そうね。そもそも白露達が行方不明になったところから始まってるこの事件だけど、ストレス溜まりまくってるわよねアレ」
白露達が行方不明になり、春雨が発見出来たと思ったら強大な敵が現れ、そんな中で海風も深海棲艦化したことで失い、今でも泥に対しての調査や研究の真っ最中。
艦隊の指揮をしながら方針を決め、そしてその責任を取る。そんな提督が疲れていないわけがない。気を病みながらもそれを表に出すことなく戦い続けている。
「アレじゃあいつか倒れるわよ。１日だけでもいいからガツッと休んだ方がいいんじゃないの？　ほら、あの大将に少し任せるとかして」
「出来るのならそうしてもらいたいです。鎮守府のトップだからといって、身体を壊したら意味がありませんから」
これに関しては満場一致。叢雲ですら、上の人間が倒れるとか腹が立つと怒りつつも心配するような若干ツンデレな匂いがする回答である。

「まぁ言うだけ言ったところで、最終的な決定権は彼にあるんでしょ。それでも働き続けるっていうなら、アタシ達からは何も言えないわ。悪い言い方だけど、この施設は鎮守府の運営に対しては完全に無関係なんだもの」
「残念だけどそうよねぇ。でも、彼には長生きしてもらいたいという気持ちは私達にもあるわぁ。だから、次に話す時にそれとなく伝えてみるわぁ」
　それとなくと言いつつも、中間棲姫は真正面から休めと言いそうだなと誰もが考えた。

　平和な生活のために全員が尽力する。それはどういうカタチであれ、誰も失われてはいけない。心労で倒れるなんて以ての外だ。

古鷹の前進

午前中、哨戒の当番は春雨、海風、そして古鷹の３人である。深夜に哨戒をしていた３人は今から就寝、他の者は自分の当番まで思い思い過ごすことになる。松竹姉妹は中間棲姫と農作業。白露とジェーナスは飛行場姫と漁。リシュリューとコマンダン・テストは哨戒機を飛ばす。

わかりやすく分配されており、やることがハッキリしているため、指示が無くても次々と自分のいるべき場所へと散らばることに。

姉妹姫は作業の前にやるべきこと――提督の体調管理の件を進めるために少しだけ作業に遅れるとのこと。

哨戒を任せられた３人は、他の者達よりも早めに島の岸へ。近海の確認をするため、伊４７とミシェルも今は同じ場所にいる。２人とも最終的には漁の手伝いに加わる予定。

「古鷹さん、身体の方は大丈夫ですか？」

「ゆっくり休ませてもらったので、すこぶる調子がいいですよ。痛みもようやく消えました。無理して動くと多少は痛みますけどね」

今はそこにミシェルがいるので、鈴谷の変装をしている古鷹。ロングヘアーのウィッグと眼帯までしっかりと装備して、ぱっと見では古鷹とわからないほどになっている。

制服も鈴谷のそれなのだが、傷痕を見せるためにかなりラフに着こなしていた。ブレザーであることを利用して、ブラウスの前を開いていつもの黒いインナーを見せつけるようにしている。薄くはないが肌に完全に張り付いているそこには、クッキリと痛々しい斬り傷が残ったまま。それでも痛みが無いと言うのだから、やはりこれは古鷹が意図して傷を残していると考えられる。

目に見える罪の証をそこに置き、さらには服をラフに着ることで他者にも自分が咎人であることを知ってもらう、古鷹の譲れない部分であった。

やらされたことであっても、命を奪ったことには変わりない。それ故に、背負うつもりで傷を残しているのだ。

「これは私が私であるために必要な傷ですから、気にしないでください」
「そうかもしれませんが……いや、納得するためなら仕方ないですね。私もとやかく言うのはやめておきます」
「うん、ありがとうございます」
　納得してもらえて何よりと、軽く傷をインナー越しに撫でた。触れても痛くないようで、締め付けて止血するという意図もあったインナーはもう不要なのではと考えたものの、やはり艦娘時代から愛用していたというのもあるので、古鷹は今後もこのスタイルで生活していくそうだ。
　ミシェルの前では鈴谷のブレザー姿になるものの、今のようにはだけてインナーと斬り傷を曝け出すスタイルは変えるつもりはないらしい。
「じゃあまずは、艤装を展開してみますね」
　この哨戒は、泥が失われて正気を取り戻した古鷹の初陣。春雨と海風がその付き添い。哨戒の前にまずはまともに深海棲艦の力が扱えるかのチェックから始める。
　ただでさえ古鷹はスタミナ不足というデメリットを抱えているのだが、そもそも泥が無い状態で艤装がうまく展開出来るかもわからない。白露は出来ているが、古鷹は艦種違いである戦艦が混ぜられているのだ。事前の準備はしっかりとしておいた方がいいだろう。
「んっ、と」
　少し力むと、尻の辺りからズルリと尻尾のような艤装が生える。本来の古鷹の艤装とは完全にかけ離れた、重巡ネ級と見せかけた戦艦レ級の艤装は、生えてしまえば軽く扱えるらしく、海面とは垂直に持ち上げることも出来れば、器用に左右に振ることも出来た。
「うん、問題ないですね」
「泥が無ければ制御が出来ないなんてことは無いんですね」
「ありがたいことに。あちら側にいたときと同じ戦術が使えるってことだから、いろいろと出来そうです。ちょっと哨戒機を飛ばしてみますね」

尻尾の先端から艦載機が飛び立つ。その勘も鈍っておらず、さも当然のようにコントロールしつつ、そこからの視界も頭の中に入れることが出来ていた。
「妹姫さんのような高高度の艦載機は扱えないですけど、空母と同じくらいの艦載機は扱えるようです。爆撃や航空戦は大丈夫ですよ」
艦載機が戻ってくると、尻尾がそれを呑み込むように収納。その様子は本当に戦艦レ級と同じである。
「それじゃあ、主砲や魚雷もあの時と同じように使えるんですか？」
「多分大丈夫ですよ。流石にここで撃とうとは思いませんけど」
威力が駆逐艦の比では無いため、試し撃ちというのもなかなか難しいものではあるものの、艦載機のことを考えれば、他の兵装もまともに動くと考えていいだろう。
どうせやるならもっと島から離れた、誰にも被害が出なそうな場所で力いっぱい砲撃を放つくらいがいいだろう。それも、以前に春雨が自分の身体を知るために使った模擬弾でやれば、何処かに被害が出るとかそういうことは無くなる。
「バランスの取り方も、あの時のようにすれば……うん、何も問題はありませんね」
長く大きな尻尾を器用に立てながら、スイスイと海上を滑っていく古鷹。あまり無茶をすると足りないスタミナを余計に消耗してしまうため、軽く流す程度ではあるものの、それでも充分に速かった。春雨と海風もそれを追うように続く。
つい最近まで敵対していた古鷹と一緒に、施設の平和のために施設近海を巡廻するというのは、少しだけおかしな気分になる。
とはいえ、それはあの最悪の姫と同じ外見である中間棲姫や、基地航空隊に対して苛烈な攻撃を仕掛ける飛行場姫、そしてあらゆる海域にて艦娘の行く手を阻む戦艦棲姫と、今まで敵としか思っていなかった深海棲艦と共に生きているのだから、そのなんとも言えない気分はすぐに払拭された。
「古鷹さん」
「はい？」

「敬語、取れてませんよ」
「あっ」
故に、もっとお近付きになろうとこういうカタチでちょっかいをかけた。性格上、古鷹はこういう時に丁寧になってしまうのだが、もっと気分を楽にしてもらいたいと。
「む、難しいんだよ……ちゃんと気を張っておかないとどうしても」
「頑張ってください。叢雲ちゃんからも絶対注意されますよ。もっと自然にです」
少しだけ気安く、生きやすいように。古鷹もこの戦いが終わったら施設で平和に暮らしていくのだから。
「……海風、どうしたの？　ずっと静かだけど」
ここであまり口を開かなかった海風に問いかける春雨。こういう場で静かなのは今の海風ではあまり無いことである。まさか古鷹にはまだ敵対心があるのかと、春雨は心配になった。
しかし、次に海風から出てきた言葉は、何も心配のいらないことだった。
「姉さん、後からでもいいので、今の古鷹さんの恰好を再現してもらっていいですか。姉さんにも似合うと思うんです。あの泥対策のスーツもそうでしたけど、スタイルをこれでもかと表に出すモノは姉さんにも似合うと思うんです。上着を羽織るくらいにして。あ、でも脚の件がありますよね。そこはいつも通りで、でも上はピッチリとしたインナーを」
「はいストップストップ」
真面目な顔をして何を考えているのかと思ったら、と春雨は苦笑するしか無かった。

哨戒中に立ち寄ったのは、以前戦艦棲姫が潜伏していた無人島。爆発によって燃えていた木々は流石に鎮火しているが、まだその戦いの跡がしっかりと刻まれ、砲撃で抉れた砂浜などもそのまま。無人島なのだから整備する者もいない。

ここに誰もいないことは何度も見ているのだが、それでもここで何者かが何かを企てている可能性を考えて、見に来ないわけにはいかない。
「……ここで戦艦さんと戦ったんですよね……白露ちゃんと」
まだ侵蝕されていた頃の自分を思い出し、少しだけ俯く古鷹。やりたい放題していたあの頃は、戦艦棲姫も邪魔になる者と見做して排除しようとしたが、結果的に2人がかりでも上手く行かずに白露が重傷を負い、スタミナ不足が露呈した部分もあり、それがバレないように早々に撤退したという経緯がある。
どうであれ、この場所も古鷹としては少しトラウマを刺激するような場所。小さく息を吐き、その時の感情を思い起こしていた。
「大丈夫ですか？」
「う、うん、大丈夫で、だよ。これを振り払わないと、私は先に進めないから。ジェーナスちゃんが開き直るために、私も開き直らないと」
辛い記憶を振り払って笑顔を見せる古鷹。悲しい笑顔ではあるが、力強く前に進み出そうとしている気持ちが見て取れるため、春雨もそれ以上言うのはやめた。
「古鷹さん、ここで試し撃ちしてみたらどうですか？　撃つのは模擬弾ですし、ここに誰もいないことはわかってますし」
ここで海風が提案。誰にも被害が出ないことが確定しているこの場所なら、言ってしまえば何をしたって問題ない。あまり自然を破壊するようなことをしてはいけないが、海に向かって撃てばそういう心配も無い。
また、ここでなら周囲に何者もいないのだから、ここにいると気付かれることもなく、誰かが気付いたとしてもそれは艦娘ではなく同胞（はらから）である可能性が高い。黒幕陣営のそれだった場合は困るが、それも可能性としては高くないだろう。
「そう、だね。ちょっと撃ってみるよ」
確かにと古鷹も納得し、早速尻尾を前方に持ってきて構える。そして、勢いよく砲弾を撃ち放った。模擬弾とはいえその火力は絶大であり、海面に着弾した瞬間に魚雷が爆発した時のような水柱が出来上が

る。まず確実に艦娘の戦艦主砲と同じ、いや、それ以上の火力が確認出来た。
直撃を喰らったらひとたまりもないそれは、敵対しているのなら脅威以外の何モノでもないのだが、味方になると頼りになる。
「うん、問題無し。身体に何の反動も無いし、傷が痛むことも無い。戦えって言われれば、すぐに戦えると思う」
使い心地がわかったことで、古鷹も安心。平和を守るための戦いに自分も参加出来るとわかったため、施設の仲間としての自覚がより深く刻まれる。
この強烈な火力を存分に扱い、今までの償いとこれからの自分のために戦うことを決意することが出来た。
春雨と海風も、古鷹のこの砲撃を目の当たりにして、このヒトが味方になってくれて本当に良かったと改めて思った。
施設の平和のためには、姉妹姫には申し訳ないが即戦力も重要だ。あちらは小狡いことをいくつも重ねてくるような厄介な連中。少しでも戦えるものが増えれば、それを淘汰することも容易になる。そしてそれが強大な力を持っているというのなら尚更だ。
「この力、みんなのために使わせてもらいま、もらうね。私が今までやってきたことを償うためにもだし、平和を取り戻すためにも！」
戦えると自覚出来たことで、古鷹は少しだけ自信を取り戻したようだった。取り返しのつかないことをやらされてきたとしても、それを振り払うことをせず、むしろ胸にしまって前に進む。いろいろなものを背負って。
だからだろう。こんな明るい時間、眠りもしていないのに、古鷹には声が聞こえたように感じた。
その声は3人分。その言葉は、たった一言。
後は任せた。
聞き覚えのあるその声に振り向くが、当然誰もいない。しかし、古鷹はその声の主を知っている。
「……うん、みんなの分まで、頑張ってくる。だから、ここで見てて」
またインナーに浮かぶ傷痕を撫でた。

古鷹はこの時を以て俯くのを止める。施設の仲間として、平和を守るために尽力するようになる。その表情は、今までよりも清々しさを感じた。

束の間の休息

その頃の鎮守府。いつものように業務を続ける提督だったが、そこで施設に繋がるタブレットがコール音を響かせた。
昨晩にかかってきたばかりなのに、また何か用があるのかと首を傾げつつも、待たせては悪いと即座に取る。
「どうしたんだい？　荒潮の件は昨日一応の決着を見たと思うが」
『そうねぇ。あの後ジェーナスちゃんは元気になったわぁ。開き直ることが出来たのは、荒潮ちゃんと話が出来たのが良かったみたい。でも、今回はそれとは違う話なの』
中間棲姫は少しだけ真剣な表情。隣の飛行場姫も若干神妙。
『貴方、ちゃんと休めてる？　春雨ちゃんからも聞いたのだけれど、ずっと働きっぱなしらしいじゃないの』
中間棲姫に突きつけられ、提督の表情が固まる。
艦娘達にはちゃんと休息を取るように言っており、春雨達が行方不明になった時には五月雨からもちゃんと休めと言われていたものの、艦娘達のように丸一日を休息に使うようなことは今までに無かった。強いて言うなら業務時間内に作業を終わらせるか、早上がりをするくらいであり、基本的には執務室にずっといる。
ここ最近は特に働き詰めだ。白露型の部隊が行方不明となってから、特殊な敵の情報を掻き集め、解析し、対策して、どんどん時間が溶けていく。その中でも鎮守府そのものが襲撃され、泥に支配された荒潮の鹵獲から治療までやってのけている。
実際動いているのは艦娘かもしれないが、最終的な決定権と、その全責任を負うのが提督だ。身体も疲れているだろうが、精神的な疲労も相当に溜まっていることだろう。
「た、確かに君の言う通りだ。僕はここ最近休めていない。だが、今僕が業務を止めてしまうと、確実に運営に支障が出る。五月雨や大淀のみでやれる仕事というのはとても少ないんだ」
艦娘に艦隊運営をさせるという鎮守府も無いわけでは無い。緊急時に独自の判断で行動出来るようにするため、秘書艦やその技術を持

つ艦娘達には、旗艦を任せると共に艦隊運営が出来るように学ばせている。
この鎮守府で言えば、秘書艦五月雨や事務員大淀の他に、艦娘達からの信頼度が非常に高い金剛もその知識を得ているのだが、実際は提督が働き続けているため、その技術を使うタイミングが起きない。
また、その技術があったとしても、最終的には提督の判断が必要になってくる部分が多い。艦娘だけで作戦を進め続けるのはどうしても限界がある。そしてそれは、今の戦況からして関係ないわけが無かった。
『それで貴方が倒れてしまったら意味が無いわよねぇ。一時的に指揮を執れないことと、ギリギリまで粘った挙句に長く指揮を執れなくなること、どちらがいいかくらい、貴方ならすぐにわかることでしょう？』
「しかしだな……今は鎮守府としても正念場だ。休んでいる暇は無いよ。ただでさえ艦娘達に無理をさせているんだ。僕だって身体を張らなければ」
いつになく中間棲姫は攻め込んでくる。それだけ提督のことを心配しているからなのだが、提督はそう言われてもとのらりくらりと躱そうとする。
提督の言いたいこともわかるのだが、それで倒れてしまっては意味がない。
そのため、姉妹姫は先んじて手を打っていた。提督が必ず休息を取れるようにと考えた結果、利用出来るコネがある。
『提督くんがそういうことを言うのは、私達は予想していたわぁ。だから、ちゃんと休めるように考えがあります』
「何を……？」
『私、大将さんとのホットラインを持ってるのよぉ？　貴方の上司からのお願い、いえ、命令なら、嫌でも休まなくちゃいけなくなるわよねぇ？』
せっかく手に入った大将との直接の連絡先なのだ。今使わずにいつ使う。本来なら褒められたことではないだろうが、まだ未遂。しか

し、それをやろうとするだけの力を持っているのだから、ある意味抵抗が出来ない。
『この後に連絡してみるわぁ。そうしたら大将さんから直に連絡が行くはずよぉ。せめて半日くらいはしっかり身体を休めてちょうだいねぇ』
「はぁ……君達、意外と滅茶苦茶するんだな」
大きく溜息をつく提督だったが、別に嫌悪感などの感情が芽生えているわけではなかった。心配されて気分が悪いものでは無い。
実際、提督には少しずつガタが来ていたのは確かであり、艦娘達にはそういう姿を見せないようにしていただけ。眠っても疲れが取れにくくなっており、業務中にも眠気がやってくる。コーヒーやお茶で誤魔化しつつも、作業効率は僅かにだが落ちていた。
これが続いていた場合、本当に最終決戦くらいでガタがピークを迎え、倒れていたかもしれない。提督自身はこの戦いが終わるまではと踏ん張っていたが、意識していないところにも蓄積しているのは明らかである。
「提督！　今日1日は私達に任せてください！　私だって提督が疲れていることくらい気付いてましたよ！」
「明石の制御は私がしておきますので、今日はゆっくりとお休みください。姉姫の言うことは間違っていませんから、一度しっかり身体を休ませるべきだと私も思います」
五月雨と大淀も、中間棲姫の言葉に同調。提督のことを心配しているからこそ、休息を勧める。むしろ、ここでちゃんと言葉にしてもらえたのがありがたかった。
艦娘という立場上、提督に強く言ってもその効果は少ない。心配はしているものの、最終的には提督の判断が全てであるために、それで休まなくてもクドクド言うことしか出来ないのだ。実際それで鎮守府が回っているというのも厄介なところ。
だが、第三者であり、ある意味提督と同等の立ち位置のようなものの中間棲姫からの言葉は、流石に蔑ろに出来ない。しかも、大将の名前まで出してきて無理にでも休ませようとしてきているのだから、提

督としても不利であった。
「わかった。今日1日は休息とさせてもらうよ。流石に連休とは行かない。まだまだやらなくてはいけないことは沢山あるのでね」
『1日だけと言わず、頻繁に休んだ方がいいわねぇ。疲れは自覚の無いところから来るわよぉ。艦娘ちゃん達を心配させるのはよろしくないわねぇ』
「面目無い」
　休むことを咎められることは無いだろう。艦娘達も口を揃えてそうしろと言ってくるだろうし、中間棲姫が言うように大将の耳に入ったら、まず確実に休息を命じられるだろう。
『憶測でしか無いけれど、今日くらいは襲撃も何も無いと思うわよぉ。あちらの狙いは私と春雨ちゃんだもの。鎮守府は多少放置されるんじゃないかしらねぇ』
　そうかもしれないが、そうなったら鎮守府側から施設に救援を出したいところ。その指揮を執らねばと考えるものの、何のために艦隊運営を艦娘に学ばせているのだと大淀からお叱りを受ける。万が一提督が休息中に鎮守府が襲撃されるようなことがあっても、大淀がしっかりと指揮させてもらうから安心してもらいたいと念を押す。
『というわけで、こちらからの用はおしまい。ちゃんと休むのよぉ。何かあったら、大将さんに言いつけちゃうからねぇ』
「その脅しはどうなんだろうか……だが、疲れを取るのは大切なことだ。艦娘に言っておいて僕自身が出来ていないのは確かによろしくない」
『うんうん、それがいいわぁ。五月雨ちゃん、大淀ちゃん、ちゃんと見張ってちょうだいねぇ。休みもせずに勝手に仕事しそうだからその人』
「はい、勿論！　提督のお休みを守ります！」
　この意気込みがどうなのかはさておき、これで提督は嫌でも休まなくてはいけなくなった。
　軽く脅しが入りつつも、提督を強引に休息をとらせることに成功。鎮守府は少しだけゆっくりとした時間を過ごすことになる。

「ということで、本日は提督がお休みとなります。提督代理は私、大淀が務めさせていただきますが、基本的には大きなことはしません。今までの作業を引き続きお願いします」
全員の前で話す大淀に、艦娘達は納得する。五月雨や大淀だけでなく、他の者達も提督に疲労が溜まっていることは理解出来ていた。
特に提督のことをよく見ている金剛は、口には出さずとも心配していたようだ。大淀のこの連絡で一番喜んだのは、ほかでもない金剛だろう。
「休息をとりたい方がいれば、それでも構わないと提督は仰っていましたので、今日は自由に生活してください。演習許可は私が受け付けます」
来るべき戦いのために鍛えたいと考える者達もいるだろう。そういう者は演習をしても構わない。しかし、怪我を負うような激しい戦いはやめてもらいたいとは提督の言葉。
自分を鍛え上げることに躍起になっているのは、やはり荒潮である。早急に練度を上げ、ジェーナスのいる施設に向かうのだと常にやる気満々。お目付役である金剛と比叡は勿論、今だけ使える最高の演習艦隊から武蔵やサラトガの力まで借りて、荒潮は短期間での練度上げを行うつもりであった。
金剛と比叡に関しては、荒潮のこの無茶なやり方は少し引き気味なのだが、武蔵が荒潮のことをやたらと買っているようで、その意気や良しと笑顔で鍛えようとしてしまっているために大変なことになっていた。
「うふふふ、武蔵さん、よろしくお願いしていいかしら～」
「ああ、演習が可能だというのなら、この武蔵が貴様を鍛え上げてやろう。集中的に鍛錬を行ない、早急に改二改装が出来るように尽力するさ」
「ありがとうございます～。うふふ、これでジェーナスちゃんのところに……うふ、うふふふふふ」

このやりとりに若干不安を覚えたか、金剛と比叡もその演習に加わることを決める。武蔵のやり方では荒潮が潰されかねない。
「山風の姉貴、何するよ」
「……施設の海風姉とお話し出来ればしたい。大淀さん……タブレットって使っていいの……？」
「構いませんよ。でも、山風さんの目的のためなら、午前中より午後からの方がいいです。今施設は当番制で近海哨戒をしているらしく、春雨さんと海風さんが午前中の当番だそうです」
提督が休息に入るということで五月雨と共に執務室から出て行った後、大淀は姉妹姫から施設の近況も聞いていた。山風のように施設との連絡を求める者もいるだろうと予測して。
それを聞いた山風は、少しだけ顔を綻ばせて、午後を楽しみにしながら午前中は甘味でも食べながら休むと食堂に向かった。江風と涼風もそれに付き添うカタチで後を追う。
「明石、貴女は私の管轄下です。今が力の入れどころなのは理解していますから、程々にやること」
「わかってるってば。そろそろ泥を霧散させる装置も完成するから、明日には施設に持って行けるようにはしたいね」
「そのために徹夜とかするのはダメですよ。次は明石が強制的に休息になりますから」
明石は明石で、相変わらずの研究開発の続行。これに関しては提督からも許しが出ているのだが、誰かしらが監視を行なうようにと口が酸っぱくなるくらいに言われていた。そのため、大淀が基本的には監視することになる。
実際、この研究は今までにないスピードで進んでおり、荒潮に服用させた薬も改良型が完成。そろそろ予防接種が出来るくらいにまでになりそうだった。それと併せて海中に潜伏する泥の感知が可能なソナーや、既に支配されている者を判別する探知機まで手をつけている。完成は今日中の見込みだ。
やはり、荒潮を鹵獲し、泥そのものが手に入ったのが非常に大きかった。明石の研究欲はしっかりと満たされ、鎮守府のための活動に

愉しさすら覚えながら、戦いに勝つための開発を次々とこなしている。
「私がダメになったら鎮守府がダメになるからね。それはもう気をつけてやってるよ。でも多少は寝ようかな、せっかくのお休みなんだし」
「そうしてください。なんなら眠っている明石の監視もしてあげますから」
「はいはい、好きにしてよね」

鎮守府は束の間の休息へ。ここで英気を養い、来るべき戦いにより力が出せるように、提督も艦娘も万全の態勢へと向かう。

共有される秘密

哨戒任務、午前の部が終了し、春雨率いる哨戒部隊は施設に帰投。近海をグルリと回りながら気になるところを確認してきたが、今回も何事も無し。目で見えるモノ、耳に聞こえるモノだけでなく、春雨の直感や悪寒なども反応無しであるため、海中に既に仕込まれているだとか、今まさに向かってきているとかそういうところも心配はいらないと言える。

春雨自身、自分の力を過信しているわけではないのだが、1つの指標として使うことは可能。勿論念入りに哨戒はしているため、そこに何もないということは確認出来ているが、海中の泥をソナーで感知出来るかもわからないので、そこはどうしてもフワッとしてしまう。

「戻りました。一応異常無しです」

一応、と付けてしまうのは仕方ないこと。これまで哨戒に出ていた3つの部隊も同じように報告をしていたし、叢雲の感知能力でも泥を感知することが出来るかわからないためにそれだけは曖昧となる。

「ご苦労様ぁ。お風呂に入ってお昼ご飯を待っていてちょうだいねぇ」

「はい、ありがとうございます」

小さく礼をして海風と共に風呂へ。古鷹はその背を見届けつつ、中間棲姫にもう一つの報告。

「哨戒中に少しだけ艤装の試験稼働をしました。十全に動くことが確認出来たので、施設の防衛にも参加出来ます」

「それは良かったわぁ。でも、本当に大丈夫？　無理をしなくてもいいのよぉ？」

古鷹はまだ病み上がりとも言えるような体調。そもそもがスタミナ不足という大きなデメリットを背負っているため、少しでも無理をしたらそのまま消耗して動けなくなってしまう可能性が高い。

だが、古鷹は大丈夫ですと笑顔で応える。憑き物が落ちたかのような清々しい表情に、中間棲姫は逆に驚いた。午前中だけで何が起きたのかとそのまま聞いてしまうほどに。

「声を、聞いたんです」
「声？」
「はい。私に混じっている3人の声でした」
曝け出している胸の傷痕に触れて目を瞑る。こうしたからと言って3人の何かがわかるわけではないのだが、自然と落ち着く。
「たった一言なんですけど……後は任せたと」
「そう……背中を押してもらったのねぇ。白露ちゃんも同じことがあったらしいわぁ。あの子は夢の中で聞いたらしいけれど」
「そうなんですね。私は私の中の3人を私の手で葬ってしまっていますが……それでも後押しをしてくれたことがとても嬉しくて。前を向かなくちゃって、思えました」
傷痕に触れた手を離し、力強く握りしめる。こんな身体にした黒幕、仲間達を自分の手にかけさせた最悪の姫の中身、それに対する怒りが力に変わる。
しかし、古鷹の中にはそれ以上に、そんな輩にもう他人が傷付けられるところを見たくないという気持ちが大きかった。怒りを上回る平和を願う心が、混じっている魂を揺さぶったのだろう。
「だから、その後押しに応えるためにも、私はこの施設を守ります。誰も傷付かないために。与えられた力であっても、存分に振るわせてもらいますね」
「よろしくお願いねぇ。立ち直ってくれて、私も嬉しいわぁ」
子供をあやすように、古鷹の頭を撫でる中間棲姫。そんなことをされたことが無かったので、一気に顔が真っ赤に染まった。
「わ、わ、こんなことされたこと初めてで……驚いてしまいました」
「あら、そうなのねぇ。こういうことってしないものなのかしらぁ」
「どうでしょう……少なくとも私は初めてですので」
そう言いながら、古鷹は自分のいた鎮守府、大塚鎮守府のことを思い出していた。
その頃、堀内提督が代表となる鎮守府とは別の鎮守府。そこに大将

が吹雪と共に足を踏み入れる。
近海に泥が設置されている可能性があるため、ここに来るために使ったのは陸路である。そのため随分と時間がかかってしまったのだが、大将は疲れを顔に出していなかった。
そこは、古鷹が元々いた鎮守府。大将は今まで通信で話をしていたが、泥の対策が堀内鎮守府で発展したことを機に、一旦直接話をしようと行動に出たのである。
堀内提督も状況が整えば便乗すると話していたものの、それはまた後日とした。今回は本番ではなく前哨戦。事前の認識合わせみたいなもの。本番の時には、堀内提督にも出張ってもらう予定だ。
「ようこそ、佐々木大将」
「お疲れ様なのです」
そのまま真っ直ぐ案内されて辿り着いた執務室にいるのは、堀内提督とは少し違った雰囲気の男性、大塚提督。理知的なイメージの眼鏡を光らせ、大将に深くお辞儀をする。
その隣で同じように頭を下げているのが、大塚提督の秘書艦を務める艦娘、電（いなづま）。五月雨や吹雪より少し幼い印象ではあるものの、こちらも2人と同様に歴戦の艦娘である。見た目では侮れない実力者。
「急にごめんなさいね。少し通信では話しづらい内容だったの。直に来させてもらったわ」
「いえ、構いません。それだけの何かがあるということでしょうから」
大将が訪れても表情を変えないくらいに冷静。隣の電も微笑んでいるもののそこまで変わらない。
艦娘を兵器として見ているところからか、公私をしっかり分けさせている。今は業務中であるために、余計な感情を表に出させないようにしているようだ。
「泥の対策に関して進展があったの。実際に侵蝕された艦娘を鹵獲し、そこから得た材料を使って薬を精製、投与することで正気に戻すことに成功したわ」
少しだけ眉がピクリと動いたが、それだけ。電はおそらく大きく驚こうとしたが、提督の傍にいる手前、大袈裟に驚くことはしなかった。

「ただし、若干の後遺症が残ってしまった。現在はそれの改良と同時に、泥そのものを霧散させる装置と、感知する電探とソナーも開発中ということよ。近日中にはノウハウが全鎮守府に公開されるわ」
「そうですか。喜ばしいことですね。ならば、大将がここに来たのは」
「最優先がこの鎮守府ということ。通信でも話した通り、以前にここで起きた部隊が行方不明になった事件は、その泥が大きく関わっているの」
　それに関しては今までに多少は話をしている。古鷹が深海棲艦化していることは伏せているが。
「そこで、貴方には1つ、絶対に秘密にしておいてもらいたいことがあるのだけれど、話していいかしら」
「それが通信で話しづらい内容というものですか。どういった内容で？」
「現在中心となっている鎮守府……堀内提督の管轄下以外には漏らしてはいけない最重要機密。これを知る者はほとんどいないことなのだけれど、貴方は知る権利があるの」
　ここで嫌だと言えば何も話さない。だが、知りたいと言えば全てを話す。大将はそのつもりだった。とはいえ、ここまで話しているのだから余程の者でなければ薄々勘付くだろう。むしろ、勘付かせるように大将は話している。
「行方不明だった部隊が生きていたということでしょうか。深海棲艦と化して」
　行方不明になった部隊と関係があるというだけでも、そこにいた6人の誰かが件の泥によって何かが起きていると考えるのが妥当。
　当時はその辺りの情報がカケラも無かったため、ただ捜索を続けて結果的に戦死と扱ったが、ここまでお膳立てをされればおおよそのことが見当がつく。
「誰が生きていたんですか。あの部隊の中では榛名が一番妥当だと思いますが」
　顔色ひとつ変えずに大将を問いただす大塚提督だったが、答えを早く求めようとしている時点で、あの時の事件には思うところがあった

のだろう。大将は順を追って説明すると一度手を前に出して遮る。
「まず最初に、今から話す件は、大本営発表があるまで口外しないこと。それはいいわね？」
「ええ、問題ありません。むしろ、頼りようがないでしょう。ならば、墓場まで持っていきます」
「よろしい。では心して聞くように」
　そこからは今まであったことを淡々と話すターンになる。全鎮守府に公開されている情報の端々に大将と堀内提督のみが知っている情報も付け加えて。
「生きていたのは古鷹。事件の起きた戦闘後に泥により侵蝕を受けた結果、同じ部隊の艦娘5名を殺害し、その遺体と共にその場から消えた。その後、何処かで何らかの処置を受けて古鷹は深海棲艦と化した」
　古鷹だったことは大塚提督としても予想外だったらしい。小さく目を見開いたことからそれがわかる。電もそろそろ驚きを隠しようが無くなってきていた。
「本人から聞いた情報だから、間違いは無いのだけれど、今の古鷹には魂が混ぜ込まれているそうよ。榛名、最上、鈴谷、3人の魂が混ぜられ、その特性を操れる深海棲艦……しかも、古鷹であるにもかかわらず戦艦の力を扱える」
「魂を……混ぜ込まれる？」
「ええ、本人がそう言っているし、もう1人同じような子が救われているの。その子は姉妹4人が混ざり合った存在だそうよ」
　ここだけはやはり簡単には理解出来なかったようである。言っていることが完全にオカルトなのだが、艦娘という未知の存在ならばそういうこともあり得るのかと素直に納得することにした。
　とはいえ、どういう理屈で魂の混成をしているのかは謎。そこは今は深く考える必要はないだろう。古鷹はもうそういうものであると考えるしかない。
「話を戻すわ。というか、貴方ならもう察しがついているでしょう」
「……古鷹を侵蝕した泥とやらが、まだ近海に漂っている可能性があ

るということですか」
「ご名答」
　むしろ、まず古鷹を侵蝕させられるということは、敵の拠点そのものがこの鎮守府の近場にあるかも知れないということ。
　現在、調査と対策に関する開発は堀内鎮守府で行なわれているが、黒幕の撃破に関してはこの鎮守府が中心となる可能性がある。まだ確定ではないが。
「数年前に現れた最悪の姫。覚えているかしら」
「覚えているも何も、今までの海軍史の中でも3本の指に入るほどの大海戦でしょう。自らを囮にして陸にまで侵略の手を伸ばした、おそらく最も賢い姫です。大将の艦隊が撃破したと聞いていますが」
「ええ。だけれど、その時に最悪の姫は死んでいなかった。器を捨てて、中身だけで漂っていたそうよ。それが今、力を増して、力を振るっているの」
　冷静に物事を判断する大塚提督も、そろそろ言葉が出せなくなっていた。電に至ってはもう固まってしまっている。既に理解の範疇を超えていた。
　今まで戦ってきた深海棲艦とはまるで違う生態。むしろ知らなかっただけで深海棲艦というのはそういうものなのかもしれない。
　しかし次は別のことで疑問が生まれる。
「何故それを知ることが出来たのですか？　器を捨てたというのは何を以てそう判断出来たのですか」
「器と私達が交流しているから。分離した器は別の意志を持って、今は艦娘とも協力関係を持つ穏健派として活動しているの。深海棲艦かもしれないけれど、あのヒトはもう仲間、平和を求める同志よ」
　裏側で今までとはまるで違う戦いが行なわれていたと知ったことで、大塚提督は言葉を失った。深海棲艦は侵略者であり敵であるという固定観念は全て崩される。
「悪い提督と艦娘がいるように、良い深海棲艦もいるということよ。何も疑問は無いでしょう」
「……確かに。世の中には艦娘を蔑ろにする愚かな提督がいると聞き

ますから。それと真逆の深海棲艦がいてもおかしくは無いのでしょう。すぐに納得出来るかはさておき」
　頭痛でも感じたかのように頭を押さえて俯く。考えが簡単にはまとまらない。そのため、口に出して要点だけを纏める。
「今の大将の話を纏めます。あの事件で戦死したであろう古鷹は、黒幕である最悪の姫の中身によって侵蝕され、何らかの処置を受けたことによって殺した他の仲間と融合し、深海棲艦として生きている。それは古鷹本人と、その最悪の姫の器から聞いた事実である。これでいいですか？」
「ええ、それでいいわ。それと、この鎮守府の近海に黒幕の拠点がある可能性があるというところね」
　あまりにも突拍子もない話である。しかし、大将がわざわざ鎮守府まで足を運んで冗談を言うわけがない。それに、大将の隣に立つ吹雪も、その事実を知っているように冷静な表情で資料を用意している。
「明日か明後日くらいには、黒幕のばら撒く泥のセンサーなどが完成すると報告を受けてるの。だから、それをまずこの鎮守府で使いたい。いいかしら」
「……了解しました。それまでにいろいろと考えを纏めておきます。とはいえ、否定する理由がありませんので、その時はまた」
「ええ、それと、今はまだ絶対に口外しないこと。電、この鎮守府の艦娘達にも話しちゃダメよ」
「は、はい、なのです」
　電も緊張した面持ちで頷いた。

　これにより、秘密の共有がされる鎮守府が1つ増えることになる。

兵器としても

大将と大塚提督の対談はその後少し続き、現在堀内鎮守府で行なわれていることまでほぼ全てが伝えられた。伝えられていないのは、姉妹姫が住まう施設の場所と、そこに所属している元艦娘達の詳細。

古鷹がその元艦娘のうちの1人であるというのは複雑な気分だったようだが、それ以外のことはおおよそ納得したようだった。

「ではまた後日、開発された泥対策を持ってきます。その時には、中心となって動いている堀内提督も連れてくるけれど、良かったかしら」

「はい、お待ちしています。堀内提督とも一度話をしてみたいです」

「あちらもそう言っていたわ。方針は違うけれど、貴方達はまず間違いなく協力出来る関係になれるわ。是非話してみてちょうだい」

堀内提督は艦娘を人間として見ているタイプの提督。兵器として見ているタイプの大塚提督とは方針が違う。しかし、大将はそれでも確実に気が合うだろうと言い切った。

大塚提督も、他者のやり方に口出しをするような人間ではない。こちらにはこちらの、あちらにはあちらのやり方があるとして、完全な不干渉を貫いているだけだ。お互いのメリットもデメリットも理解し、それで考えた結果、今のやり方の方がメリットが大きいと判断したまで。

このやり方で艦娘達が嫌がることもなく、むしろ完璧なメンテナンスのおかげで十全の力を発揮出来ていると言える。表でも裏でも不満の声が上がったことは一切無い。

だからこそ、自分とやり方が違う提督であり、同じような境遇を背負った堀内提督には興味が湧いていた。

「時間を取らせてしまってごめんなさいね。それじゃあ。吹雪、手を貸してちょうだい」

「はい、司令官」

吹雪も一礼した後、大将の歩行を手伝うように寄り添い、執務室から出て行った。

大将との対談が終わり、小さく息を吐く。やはり、大本営の大将を目の前にすると緊張はしてしまうようだ。冷静に振る舞うことに徹していても、それはどうしても難しい。
「お疲れ様なのです、司令官さん」
「ああ、電もご苦労様」
電も少し疲れた様子。大将の前にいたからというわけではなく、今回話された内容に驚きっぱなしだったからである。
普通に艦娘として鎮守府で活動している時にはまず知り得ないような、今までに無かったことが次から次へと出てきて、最終的には感情を出さないようにすることが不可能になっていた。
「電達の知らない間に、あんなことがあったなんて」
「……正直俺も驚いている。穏健派の深海棲艦、艦娘の侵蝕、魂の混成……訳がわからないことばかりだ。だが、あの大将が直に来てまで内密に話してくれたことなら、信憑性は高い……いや、真実なんだろう。その深海棲艦とは繋がっていると話していたくらいなのだから」
この鎮守府では、古鷹達が失われた事件以外では、これといって特殊なことは起きていない。強力な姫が現れた時も、ある意味いつもと変わらず全力で対処するだけだ。搦め手を使ってくるような敵は現れたことがなく、最悪の姫以外にはそもそも記録にも残っていない。
しかし、今回の姫は姿を一切現さず、それがこの鎮守府の近くに潜伏している可能性まで出てきてしまった。絶対とは言わないが、古鷹が侵蝕されたのだから、その戦場に泥を設置出来る何かがあったというのは間違いない。
「でも」
「どうした？」
「電としては、戦わずに済む深海棲艦がいるとわかったのは、嬉しいのです」
艦娘の中でも屈指の心優しい性格の持ち主である電は、手が届く範囲ならば深海棲艦だって救いたいと考えている。しかし、それが夢物語であることも理解しているため、心を鬼にして戦いを続けていた。

だが、話がわかる深海棲艦も存在しているということがわかったのは、電としては僥倖だった。余計な戦いをしなくてもいい可能性だってある。傷つけるばかりが戦いでは無いのだ。
「確かに余計な消耗をしなくて済むのはありがたい。最悪の姫、中間棲姫が分裂して、どちらとも戦わなければならないとなったら、どうしても犠牲が出るだろう。お前達を失うわけにはいかないからな」
こんなときめきそうな言葉も、電は真意を理解している。失いたくないという言葉に、感情的な意図は含まれていない。
大塚提督からしてみれば、あくまでも艦娘はヒトのカタチをした兵器。道具は道具だが、新たに練度を高めるのには相当に時間がかかる。それに、感情を持っているため、兵器が1つ潰れた場合、周囲の兵器のスペックが格段に落ちる。だからこそ失いたくない。そういう意図だ。
だが、この考え方は兵器としての考え方ではあるものの、艦娘を普通の兵器とは違うという考え方をしているとも言える。人とは別モノ。だが、扱い方には細心の注意が必要。そこにはやはり、大塚提督なりの優しさが見え隠れしている。
「そんな深海棲艦は、どれだけいるのでしょう」
「さてな。だが、そういう輩が多ければ多いほど戦いは早く終わる。多ければ多い方がありがたい」
相変わらずの感情があるのか無いのかわからないような受け答えではあるが、電は常に隣にいるため、そんな言葉を出してくれるだけでも嬉しいものだった。
「だが……古鷹が生きていた、か……」
やはりそこは予想していなかったところだったようだ。その時行方不明になった部隊の捜索はそれなりに長期間実施されていた。それこそ、堀内鎮守府の調査隊と同じかそれ以上の期間だ。しかしどうしても見つからなかった。1週間以上の行方不明は、さすがに戦死と見なす。そこで捜索を諦め、今に至る。
現れた戦艦棲姫の撃破は出来たはずなのだが、そのまま通信途絶というのはあまりにも不可解だった。当時も何が起きたのか全くの謎

だったが、そのままズルズルと引き摺っていたら、艦隊運営もままならなくなる。そこで遺憾だが調査を打ち切った。
「見つかるはずもなかったんだ。侵蝕され、自分の意思で戻ってこないでいたんだからな。我々の鎮守府を避けることだって出来ただろう。あの時の調査打ち切りは、あながち間違ってはいなかった」
「そう……ですね。多分、間違っていなかったのです」
感情を持ち出してしまえば、その選択の間違いはいくらでも言える。だが、長々と戦力をそこに投じていたら、出来ることも出来なくなっていただろう。今の鎮守府があるのは、そこで決断したから。
「だが、その結果、幾人もの艦娘が犠牲になったのかもしれない。大将は古鷹がやらされていたことも話してくれていたな」
「はい……黒幕の手足となって、いろんな場所で艦娘を……沈めて」
「ああ。古鷹の意思があったかどうかは知らないが、その時の古鷹は人類の敵だったのは間違いない」
だが、古鷹のことを責めようだなんて思っていない。あくまでも利用されていたに過ぎないのだから。
「兵器は使う者によって人々を守るものにも人々を滅ぼすものにも変わるということだ。我々は正しく使い、海の平和を守る。だが、奴らは兵器を誤って使い、海に破滅を齎そうとしている」
艦娘がヒトのカタチをした兵器であるという思想のおかげで、使い手によって善にでも悪にでもなるという事実を受け入れやすくなる。古鷹はその犠牲者だ。使い手が黒幕に変わったことで、その兵器は破滅を齎す尖兵に仕立て上げられただけ。
「ならば、古鷹がどうされていたのかは気にしない。今我々に味方してくれるのならば、そのように使うまでだ」
大塚提督としては、古鷹のことは裏切り者だなんて何一つ思っていない。やらされていたことが重たくても、そのことを気にも留めていないのだ。もし鎮守府に戻りたいと言うならば、構わないと返すだろう。姿形が深海棲艦となっていても、その信念が艦娘であるのなら何も変わらない。言ってしまえば、無くしていた兵器が形を変えて手元に戻ってきただけ。あくまでも使い手の違いにより正しく使われる

だけだ。
「電、お前としてはどうだ。艦娘としての意見を聞いておきたい」
　こういうところは大塚提督も艦娘のことを信用している。感情を持つ兵器の考え方というのは、人間とはまた違った見解に繋がるからだ。実際に戦場に出ることが出来る者の意見は、戦場に出られない自分では思いもつかない何かを孕んでいるかもしれない。
「古鷹さんが生きていてくれたのは、本当に、本当に嬉しいことなのです。他のみんなが沈んでしまったのは悔しいですし……古鷹さんがやらされていたことは酷いと思うのですが……でも、でも、今の古鷹さんは電達の知ってる古鷹さんなのですよね。だったら、また一緒に戦いたいのです」
　電もこの鎮守府の一員。優しくもあるが、自分のことを平和のために戦う兵器であると自覚している。共に平和を望むのなら、手を取り一緒に進んでいきたいと、それこそ人間よりも人間らしい感情で答える。
　その答えに対して、大塚提督はとやかく言うことは無い。兵器は感情を持つなとは言っていないのだから。むしろ、『感情を持つ兵器である』という認識をしているために、正しく納得して意見を取り入れる。兵器の分際でなどという考え方は何一つしていない。
　兵器であり、部下であり、仲間である。人間としては見ていなくとも、それがそういう生命（いのち）であることは理解しているのだ。そうでなければ、行方不明になった時に堪えるなんてことは無い。
「そうだな。俺もそれを望む。古鷹がそれを望めば、だがな。古鷹は古鷹で自分の道を定めているだろう。その施設とやらがどんなところかは知らないが、そこを守るための力となるのなら、俺は古鷹のやり方を認めてやることしか出来ない」
「電もそう思うのです。その、古鷹さんにも負い目を感じているところがあると思うので、強要は出来ません。でも、同じところを向いているのなら、一緒に戦ってるって、言えますよね」
「ああ、その考え方でいい」
　いつも冷静で表情を変えない大塚提督の口角が少しだけ上がった。

古鷹だけでも生きていたことに安堵しているような、電が同じ考えでいてくれることが嬉しいような、そんな表情。
電は極稀に見える大塚提督の感情表現が好きだった。それをずっと隣で見続けたいために、生きることに全力を尽くしている。
そんな感情を持つことを大塚提督は許してくれるかはわからないし、兵器である自分がそんな感情を持っていいかは疑問ではあったが、今の在り方が心地良いので想いを押し隠し、戦いが早く終わることを望み、一緒に歩いていくと決めていた。
それは別に綱渡りではない。これが最善であると確信している。歩き方を変えるなんてことも考えていない。
「古鷹さんとお話し出来ますかね」
「さぁな。だが、出来るのなら話くらいはしたいだろう。俺もそう思っている」
表情は戻ってしまったが、そんな大塚提督の隣に立つことが、電にとっては至上の喜びだった。
「昼食までまだ時間はある。書類を片付けてから昼食だ」
「はい、なのです」
淡々と仕事を再開する大塚提督に、笑みを浮かべながら手伝う電。見た目はそこまで相性がいいように見えないのだが、これで長い戦いを乗り切っているのだから、この鎮守府ではこれがベストなのだ。

この先、大塚鎮守府も施設との関わり合いを持つことになるのだが、それはもう少し後の話。

珍しい雨

午後の哨戒部隊である松竹姉妹と戦艦棲姫も帰投し、夕食の時間。深夜の部として今まで眠っていた白露、ジェーナス、コマンダン・テストの3人も目を覚まし、哨戒の準備として少し多めに夕食を食べていた。

昨日もそうだったが、普通ならこの時間は施設の者達が全員集まる和やかな時間なのだが、今は平和とは程遠い状況だ。哨戒で何も無かったことの確認や、深夜組への注意、明日の日程の確認などと、まるで鎮守府にいる時のような流れ。

落ち着いたスローライフが施設の平和の象徴だったのだが、それが失われていることが嫌というほどわかる。

「そういえば、ちょっと気になることがあったんだ」

食事中、竹が突然話し出す。松も同調するように頷いた。

「気になること？」

「ああ、西の方の空がちょっと暗かったんだよ。あれ、雨雲じゃね？」

哨戒中に気になったというのは、天候。この平和な島は、基本的には常にいい天気。少なくとも春雨がこの島に辿り着いてから今まで、いい天気で無かったことが無かった。暑くもなく寒くもない、常に朗らかな気候。それ故に、平和がより実感できた。

そんなこの島でも、年に2度3度ほどは雨が降る時が来るらしい。とは言っても、台風が直撃するなんてこともなく、シトシトと島全体を濡らしていくような雨が半日ほど降る程度。

「ああ、アタシもそれっぽいものは哨戒機飛ばしてる時にチラッと見たわ。まだ大分遠かったと思うけれど」

「夜中のうちに降って通り過ぎるくらいかもかなって思います。そうなると、哨戒部隊ってその雨が直撃するんじゃないかなって」

今までなら、夜に降る分には別に何も問題は無かった。眠っている間に通り過ぎるだけであり、畑が雨で水浸しになるのが気になる程度である。それも翌日に少し作業をするだけで済むので、気になることはない。

だが、今は夜に外に出る者達がいるのだ。流石に海上を航行する間に傘を差すわけにはいかず、雨合羽を着込んでの哨戒になるだろう。それに、昨晩の哨戒では夜の海は穏やかだったと報告を受けていたが、月光が遮られて暗く、さらには波も立つ可能性が高い。哨戒そのものが若干危険。

「大雨じゃなくても、哨戒には向いていないかもしれないわねぇ」

「島から離れている時にどしゃ降りに当たっても困るわ。同胞(はらから)とはいえ風邪を引くかもしれないもの」

深海棲艦が風邪を引くなんてことは今のところ確認されていない。この施設でも平和であるためにその辺りも気を遣っていたため、疲労や怪我などで消耗することはあっても、体調不良というのは無かった。

だが、それは今までそうなる条件を避けてきたからであって、実際に雨に打たれながら一晩を過ごすなんてやったら何かしらの体調不良が起きてしまいそうである。

「1つ聞きたいのだけれど、艦娘の時に風邪を引いたなんてことはあったかしらぁ？」

ふとした疑問を中間棲姫がみんなに問う。艦娘が風邪を引くなら、深海棲艦も風邪を引くだろうと考えたからである。

「ヨナはそういうこと無かったヨナ。潜水艦だからかな」

「毎日海の中にいるなら、そういう心配はないかもしれないわねぇ」

伊４７は風邪なんて引いたことがないと自信満々に答えるが、そもそも雨に打たれるどころか常に海中なのだから、そういった体調不良とは無縁。潜水艦という艦種そのものが考えるまでもなく風邪なんて引かない。

ならば海上艦はとなると、

「雨の日に出撃というのもありましたけど、風邪を引いたことはありませんね。戦闘の後にはすぐにお風呂を用意してもらえましたから」

「ですね。その時は寒いと思ったりもしましたが、事後処理が完璧でしたし、私達も風邪とは無縁でした」

春雨と海風がそう話す。これに関しては、おおよそ全員が同じ見解

である。
実際、艦娘は風邪を引かない。そこが人間と明確に違う部分である。もし近しい症状が出たとしても、それは人間で言う風邪ではなく、メンテ不良などの外的要因。極端な話、いくら雨に打たれようが風に吹かれようが、暑い寒いは感じても風邪には繋がらない。そもそもウィルス性のそれに感染するようなことはないのである。
だが、今はウィルスと言っても過言ではない脅威、泥の存在がある。特別製の増殖する泥に関しては、もう感染症と言ってしまってもいいくらいだ。
「でも、入渠とかその辺りのおかげかもしれないし、雨の中の哨戒は止めた方がいいでしょ。アタシ達は艦娘と違って修復材とか使えないわけだし、余計なことして面倒なことになるくらいなら、堅実に行くべきよ」
艦娘はそうであっても、深海棲艦は違うかもしれない。こればっかりはわからないので、堅実に行くのなら雨の中外に出るのはやめた方がいいだろう。
結果、本日深夜の哨戒は急遽中止となる。代わりに、一晩を施設内で過ごし、確認出来る範囲で外を監視する方向となった。
雨でも出来ることと言えば、コマンダン・テストの哨戒機を飛ばすこと。それでもまともに何かがわかるとは言い難い。
「せっかく準備をしたんだもの、一晩起きているわ」
「だねぇ。途中で雨が止んだらちょっと外に出てみるとかしてみればいいかな」
「Ｏｕｉ．　堅実に、この中でＳｕｒｖｅｉｌｌａｎｃｅするのが、一番です」
ジェーナスと白露もそれで納得。コマンダン・テストに至っては、雨とわかった時点で外に出るつもりは無かったようである。
「任せるわぁ。夜の間に何か作るとかしてくれても構わないからねぇ」
「何かあったらすぐに起こしてちょうだい。アタシやお姉なら些細なことでも起こしてくれて構わないから」

「Ｏｋａｙ．　途中でお腹も空いてきちゃうかもしれないし、適当に夜食を作るわ」
夕食時の認識合わせと予定の確認はこれにて終了。哨戒部隊は施設から外に出ることなく、待機しながらも出来るときだけ見て回るというところに落ち着いた。

そんな深夜、不意に目が覚めた春雨。いつもの夜と違い、パツパツと雨が窓を叩く音が聞こえる。
竹が言っていた雨雲は見事に上陸し、小雨ではあるがしっかりと痕跡を残すように島を濡らしている。春雨がこうなってからは初、この場所に施設が出来上がった後でもかなり少なめな天候が、真夜中にやってきた。
「雨……本当に降ってる」
久しぶりの雨音に耳を傾けつつ、海風の温もりを感じて寂しさを紛らわせる。その海風は春雨の胸に顔を埋めてしっかりと抱きつき、幸せそうに寝息を立てていた。その表情から、溢れた感情が絶望だとはまず思わない。
海風の頭を撫でながら微睡んでいると、雨音の向こう側くらいに哨戒部隊の３人の話し声が聞こえた。おそらく今はちょうど施設内で巡回中なのだろう。
流石に突然施設内に敵が現れるなんてことは無いだろうが、雨の中外に出ずに施設を守ろうとするとこうなる。勿論、見えるところがあれば窓から外を見ているし、コマンダン・テストが常に外に哨戒機を飛ばしているようなので、本来の哨戒よりは甘めになってしまうもののその目は光らせている状態ではある。
「んん……みんな頑張ってるなぁ……そのうち私達も夜に哨戒だし、見習わないとなぁ……」
微睡はより深くなり、そろそろまた眠りに落ちそうになったその時、
「っうぇっ!?」

強烈な悪寒を感じた。ビクンと震えてしまったことで、春雨に密着している海風にもその振動が伝わり、その瞬間にバチッと目が開く。
「姉さん、どうかしましたか。怖い夢を見ましたか。それともまだ身体が痛いとかありましたか。海風がしっかり抱きしめていましたから温もりはあったかと思いますが、もしかしてそのせいで痛かったりとかしましたか。そうだとしたら本当にごめんなさい。私の姉さんに対する愛情が強すぎるせいで痛みを与えてしまうなんて。でもそれは姉さんが可愛すぎるから」
「海風、ストップ、ストップ、悪寒、悪寒だから、前と同じの！」
ヒートアップしかけた海風を宥めつつも、悪寒を感じたことを海風に伝えると、スンと静まってすぐにベッドから降りる。その時にはもう眠気も何も無くなっていた。
「姉さんも起きる準備をしてください。私が一足先に外を見ます」
「うん」
春雨も脚を生成した後、すぐにベッドから降りる。海風が先んじて部屋の扉の前に行き、何事もないかを確認するべくゆっくりと扉を開いた。
その向こうに何か立っているわけでもなく、むしろ廊下の向こう側くらいに巡回中の白露とジェーナスがいた程度。それには何も疑問はない。
「あれ、海風、もしかして起こしちゃった？」
「春雨姉さんが悪寒を感じたということで、警戒しているところです。何か見ていませんか」
軽い声で白露が引き返したところに、海風が返す。哨戒中なのだから、何か見かけているかもしれないと考えるのは妥当。
「あたしは少なくともまだ確認出来てないかな。ジェーナスは？」
「私もおかしいなって思ったところは無いかも」
２人の目からは何かの異常性は感じなかったと語る。
時間は今は丑三つ時。深夜も深夜、睡眠時間の折り返しと言える時間である。それまで何度も施設内を見て回り、雨が止んでいた時には外にも出ていたらしいが、ずっと何かしらのおかしなところは見てい

ない。
だが、昨晩の深夜の哨戒とは雨以外にも違うところはある。周囲がやたらと暗いことだ。雨雲のせいで周囲を明るくする要素がなく、施設がいつになく闇に包まれていた。
「コマさん、今でも哨戒機飛ばしてるよね。今何か見える？」
「そう、ですね。今は何も見えません。Ｐｌｕｉｅ（雨）で少しＶｉｓｉｂｉｌｉｔ（視）・（界）ｒ（不）・ｄｕｉｔｅ（良）なんですが」
哨戒機からわかる視界も、この雨の中では若干落ちる。夜に艦載機を当たり前のように飛ばせる深海棲艦とはいえ、悪天候の中では十全の力を発揮することが出来ない。
「むしろ、そういうタイミングを狙ってきているのかも。雨なんて運次第なところだけど、今しかないってタイミングだし……」
春雨もすぐに合流したが、まだ悪寒を感じているようで少し震えていた。それを見た海風が即座に身体を支える。
「確かにね……。こんな時だからこそ何か仕込んできてもおかしくないか。むしろ今だからこそ外に出なくちゃいけないかも」
白露は雨の中でも哨戒のために外に出るべきだと提案。時既に遅しの可能性はあるが、それでもやらないよりマシ。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅのことも心配だから、私も外に出たいわ。もしこんな雨の中に誰か来てるっていうなら、一番危ないのはＭｉｃｈｅｌｌｅよね」
ジェーナスが言うことも確かだ。何者かが島に何かをしようとしてるとしたら、今１人で島の近海を漂っているミシェルが真っ先に犠牲になりかねない。
ミシェル自身、一度潜水艦相手に戦闘を仕掛けているので、それこそ即座に排除の対象にされてもおかしくないだろう。
「私もそれがいいと思う。なんか外に嫌な予感がする」
「春雨姉さんがそう言うのなら、本当に危ないのでしょう。すぐにでもみんなで行くべきですね」
「海風の熱意はさておき、あたしも賛成。コマさん、姉姫さんと妹姫さんを起こしてきてもらってもいいかな」

「Ｏｕｉ．　後からすぐに追いますので、よろしくお願いします」
ここからはコマンダン・テストだけが別行動。駆逐艦４人で外へと向かう。大雨とは言わないが、外に出れば確実に濡れるであろう雨の降る中、雨合羽を生成した後、施設を飛び出した。

４人が目指した先は、ミシェルのいる岸。今ならば、いつも漁をする時の岸にいるはずなので、迷うことなくそこに向かった。
外はいつも以上に薄暗く、雨のせいで視界が悪いが、４人が４人探照灯も使ってすぐに辿り着いた。
だが、もう遅かった。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……!?」

そこには、強固な装甲に包まれているはずのミシェルが傷だらけで浮かんでいた。

高高度からの罠

珍しく島に雨の降る深夜。春雨が悪寒を感じたことで外に出た駆逐艦達は、傷だらけのミシェルが浮かんでいるのを発見した。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ!?」

真っ先に近付いたのはやはりジェーナス。岸にもたれかかるように浮かんでいるミシェルに駆け寄り、傷を撫でるように触れる。

装甲にヒビが入り、一部は完全に破損している程の重傷。それでもまだ息があるようで、微かに口が動き、ジェーナスが来てくれたことを喜んでいるようだった。

「敵は……潜水艦ですよねコレ」

春雨が呟き、海風と白露が頷く。コマンダン・テストが雨の中でも哨戒機を飛ばしていたのだが、それで何も確認出来なかったということは、海上にいないということに、潜水艦以外にあり得ない。

そもそもこの施設を発見した敵は潜水艦。それがそのままここまでやってきて、まだ外にいたミシェルを攻撃したと考えるのが妥当。つまり、今海に出たら確実に海中から狙われるということになる。

むしろそれだけでは済まない可能性だってある。潜水艦がここまで来ているということは、他の連中も引き連れているかもしれないのだ。

ミシェルがやられたのは第一陣。ここから第二陣として、施設を潰すために全力を尽くしてくるだろう。いや、潰すだけでは済まない。中間棲姫の身体を奪うことが一番の目的であるため、島に上がり込んでくることも考えられるだろう。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅを引き上げるの手伝って！　このままだとまた狙われるわ！」

「だね。敵はまず潜水艦だろうから、魚雷とか飛んでくるかもしれない。すぐに陸に」

４人がかりでミシェルを岸から陸に引き上げる。そうしたことで、ミシェルがどれほどの重傷を負っているのかがよりわかることになった。

表面に見えている外殻も傷だらけだったが、腹側も相当だった。柔らかい部分からは血も流れており、ジェーナスに結ばれているリボン代わりのシーツも血塗れ。自然治癒にもかなりの時間がかかることだろう。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、大丈夫よ、私達が絶対守るから！」

岸から少し離れたところまで持ってきたものの、全く安心は出来ない。ここから追撃があることは確定なのだ。

「こんなに暗い状態で潜水艦……ソナーでギリギリだろうけど、まず間違いなく爆雷で狙えないよ。雨のせいで海面も上手く見えないし」

白露も敵がいるであろう方を向きながら忌々しげに呟く。そもそも夜の潜水艦は昼とは比べ物にならない程に強力であり凶悪。まず海上艦からの対潜攻撃は当たることがなく、その位置を認識するのも難しい。そもそもが視認出来ないのだから、相手をするのはそれだけで厳しい。

だが、こちらが陸に上がっていればあちらから狙われるようなこともない。潜水艦の武器は魚雷のみと相場が決まっているもの。

しかし、あちらは魂を混ぜられたわけのわからない潜水艦だ。ありとあらゆる潜水艦が混じっていると考えられているが、本当に潜水艦だけなのかという疑問もある。それこそ、空母や戦艦が混じっていたら、砲撃も雷撃も航空戦も何もかもやってくる不思議な潜水艦である可能性はいくらでもあるのだ。しかもその火力は戦艦並みというインチキ。

「だったら、ヨナが見てくるヨナ」

そこへ駆けつけた伊４７がそのまま海へと飛び込んでいった。念のためだろうが、着ている水着はいつものものではなく、泥対策の異国のウェットスーツで。

潜水艦に潜水艦をぶつけるのは、本来ならあまり得策ではない。魚雷同士の戦闘はまず当たらないのだ。だから、ただ睨み合うだけで終わる。

しかし、伊４７は一味も二味も違う。自分の身体よりも大きな艤装

を駆り、魚雷だけでなく豪腕を使った一種の格闘戦まで繰り出すことが出来る。これが非常に強力であり、どんな相手にでも一定以上の成果が出せるはずの武器となっている。
「ヨナちゃんが先に行ってしまったみたいね」
　それを追うようにやってきたのが中間棲姫と飛行場姫、そしてコマンダン・テスト。コマンダン・テストから話を聞いて急いでここまで来たのだが、たまたまその時に目を覚ましていた伊４７が真っ先に飛び出したと語る。今は他の者も施設を守るためにこちらに向かっているとのこと。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……なんて、なんて酷い……」
　大怪我を負ったミシェルを見て、コマンダン・テストはわなわなと震える。死に繋がるモノを見た時点で暴走しかねないのだが、今はまだ抑え込まれていた。ここ最近の度重なる発作で、少しだけ耐性が出来ていたというのはある。
「ごめんなさい。少し考えればわかることだった。こんな天気の夜なんて、絶好の襲撃のタイミングよね。でも、みんなに無理してほしくなくてあんな選択をしてしまったの。本当にごめんなさい」
　中間棲姫が悲しそうに謝るも、誰もそれを罪となんて考えていない。そもそもこの中間棲姫は、こういったことが完全に初めてなのだ。慣れないことをやっているのだから、間違いの一つや二つはあって当然。艤装の扱い方は知っていても、基本平和だった施設の守り方は、完璧では無かった。
「何を言っても言い訳になってしまうわ。だから、私もここで抵抗します。ここにいれば、あちらも目の前に来てくれるんじゃないかしら」
　本来なら中間棲姫を表に出すなんて言語道断だ。あちらがどういう手段を使って施設を陥れようとしてくるかなんてわからない。こうやって誘き出したところに何らかの手段を使って連れ去ろうとするのがすぐにわかる。
　むしろ、何処からか泥が飛んできて表に出てきた誰かを支配しようなんて考える可能性すらある。暗くて、雨によって視界が不明瞭な今

は、何処から何をされるか全くわからない。
「ミシェルちゃん……今はじっとしていてちょうだいね。必ず手当をするわ」
申し訳なさいっぱいの表情で、中間棲姫もジェーナスと同じようにミシェルを撫でる。施設の平和を脅かすのが、自分の半身の仕業だと考えると、どうしても嫌な気分にはなるらしい。
「念のため、アタシは高高度の確認をしてくる。雨雲の上に行けると思うわ」
そう言いながら、飛行場姫は艦載機をいくつか真上に飛ばした。それは普通の艦載機よりも高速で上昇していき、雨雲を突き抜けた。流石にここに何かあるとは思っていなかったが、敵も高高度からの哨戒をしていたくらいなのだから、今回もそれがあるかもしれない。
すると、その考えはドンピシャだった。雨雲の上、まさに施設の真上と言えるところに、飛行場姫のモノとは違う艦載機が1機陣取っていた。形状も特殊なようで、飛行場姫のそれを見てもその場から動こうとしなかった。むしろ、既に仕事を終えたということになるのかもしれない。
「なんかいたわよ。でも、アタシの艦載機見てもビクともしないんだけど」
中間棲姫が真上を見る。その目は飛行場姫の艦載機を見据えているが、それとは違う何かも見定めていた。
「私から離れなさい」
そう話した瞬間、遠目ではあったが施設の電気が一斉に消え、中間棲姫の背後に艤装が現れた。今まで施設の維持に使われていた艤装を一時的に撤去し、この場に展開し直したのである。
大口を開けたバケモノの頭部のような艤装に腰掛けたかと思いきや、海風の砲撃をいとも簡単に防いだ3本の滑走路が、一直線上に並び、見据えている真上へと向く。
「ギリギリね。ちょっと荒っぽくなるけど、驚かないでちょうだい」
そして、両手をグッと合わせて握りしめたことにより、滑走路に想像した以上の数の艦載機が発生。そして、待機することもなく一斉に

真上へと飛んでいく。
飛行場姫の艦載機とはさらに別格のそれは、真上に上がって被害が無いと思われる場所に辿り着いたところで一斉に爆発。誘爆に誘爆を重ね、あたり一面がその爆炎によって明るくなってしまう程だった。
そしてさらに凄まじいのは音。いくつもの艦載機が爆発したことで、島全体を揺らす程の爆音が鳴り響く。これで驚くなという方が難しい。
「えっ、ちょ、ええっ!?」
誰もが混乱する中、この爆発は止まらない。次から次へと発艦し、その範囲をどんどん拡げていく。最終的には島の上空を全て覆うほどとなり、島だけは昼間なのではないかというくらいに明るくなった。
施設から出ようとしていた後発の叢雲達も、この光景には目を丸くしていた。突然施設の電源が完全に消えたと思いきや、外でこんなことが起きているのだ。
誰がこんなことをしているかもわからないレベルだった。少なくとも中間棲姫がやっているとは思い至らない。温厚で、平和を心から愛する者の火力とは流石に思えない。
「雨が……止んだ……？」
「これ、雨粒も全部吹っ飛んでるんだよ。火力が高すぎて、あたし達のところまで届いてない」
衝撃と音に慣れてきたところで、それがわかった。あまりの威力によって、島一帯だけは雨が止んだかのようになっていた。この勢いをそのまま上に持っていけば、雨雲すら吹き飛ばしてしまいかねない。
天候すら変えかねない中間棲姫の力に、春雨達は唖然とするしか無かった。逆に、黒幕も近しい力を持っているのかもしれないと考えると、途端に怖くもなってくる。
「これくらい念入りでないと危ないわねぇ。妹ちゃんが見つけたの、物凄く高いところから泥を降らせようとしていたみたいだもの。いいえ、多分もう降らせた後ね」

春雨の直感が働く前に中間棲姫が勘付いたのはそれだった。高高度、雨雲の上にいた敵艦載機の目論見は、そこから泥を雨と共に散布すること。

どういう仕組みかはわからないが、あちらは雨雲の上からも施設の状況が把握出来ているようで、姉妹姫が外に出て春雨達と合流した瞬間を狙って泥を上からばら撒いたようだった。

「泥にも限りがあるんじゃないかしらぁ。私達に纏めてぶち撒けられるタイミングを狙ってくれていたみたい。おかげで今のが大体間に合ったわぁ」

念入りに爆発させたのは、カケラも地表に落とさないようにするためだ。最悪な場合、既に降り注いでいる可能性もあるのだが、そこは今は考えていない。春雨の直感が働いていないのだから。

だが慢心してはいけない。僅かにでも付着した時点で、何らかの悪影響がある可能性は極めて高い。そしてそれが今の爆発で全てが吹き飛んだとは限らないのだ。それこそその泥が、ジェーナスや荒潮を侵蝕した特別製、増殖する泥だった場合は、目も当てられないのだから。

「でも、すぐに身体を洗い流した方がいいわねぇ。雨に打たれるのはよろしくないと思うから、海水を使いましょう。その前に近場の海水をちゃんと綺麗にしておくわぁ」

艦載機の1機が岸の方へと飛び、1発だけ爆撃を放つ。爆雷や砲撃で霧散させることが出来るのはわかっているので、既に海に落ちているということがあったら本末転倒。伊47もいないことはわかっているため、即断した。

その爆撃は、1発だけでも相当な威力であり、春雨達は見ていないが武蔵の砲撃に匹敵する程の爆発が発生。海面が抉れるように吹き飛ばされ、そこに泥があったとしてもひとたまりもない火力。

「ジェーナスちゃん、ミシェルちゃんの身体も拭いてあげてちょうだい。もしかしたら、泥がついてしまっているかもしれない。勿論、貴女もよぉ」

「お、Ｏｋａｙ」

陸に引き上げたことで泥がついてしまったシーツを一度解いてあげると、中間棲姫のおかげで綺麗になった海水で汚れを取り、ミシェルの傷だらけの身体を拭いた。強くやりすぎるわけにもいかず、時間をかけるわけにもいかない。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、必ず救うから、頑張って。絶対に生きるの。一緒に戦いを終わらせましょう」
雨に濡れていたのもあり、涙目なジェーナス。そんなジェーナスの声を聞き、ミシェルは力無く反応する。大丈夫だ、必ず耐える、そんな感情が何処となく感じる瞳。
勿論その時はジェーナスも身体を洗い流し、春雨達も海に一時的に飛び込むことで付着したかもしれない泥を取り払った。ここまでやれば一応の安心は出来るだろう。
「敵は潜水艦だけじゃないわよね。今もアタシの艦載機と睨み合ってるんだもの。これを飛ばした奴が何処かにいるわ」
それが何処にいるかはわからないため、飛行場姫は３６０度全方位に艦載機を飛ばし、泥をぶち撒けようと考える愚かな犯人の場所を突き止めようと行動する。
「私も……ふぅ……お手伝いします。許せません、こんなことをする敵を、許すことが、出来ません」
発作を抑え込もうとしているコマンダン・テストだが、もう限界が近いらしく、意図せずに艤装が展開されていた。
コマンダン・テストの艤装はリシュリューや古鷹のような尻尾の艤装。細く長く、骨のような身体を持つ海蛇のようなそれは、持ち主の暴走しかけている感情を表すようにのたうち回る。
「見つけた。かなり遠くにいるけど、数は２つ。少し小さいけど、多分空母と戦艦」
そして、飛行場姫はこの犯人を見つけ出した。空母と戦艦。小さめということで、その犯人が何者かは容易に想像がつく。
「妹姫さん、その空母、どんな格好してるかわかる？　陰陽師みたいな子供？」
白露が聞くと、飛行場姫はしっかりと確認して伝える。

「それじゃないわ。小柄だけど、子供じゃない」
「なら、その敵は大鳳とコロラド。龍驤は来てないんだ」
毎度出張ってくる龍驤がいないことは気になるが、敵はこれで確定した。

今回の敵は４人。海上には大鳳とコロラド、そして海中に謎の潜水艦姉妹。他にもまだまだ出てくるかもしれない。
深夜、しかも雨の中の戦いだ。苦戦は必至だろう。雨に紛れて泥を降らせようとする輩に、施設の者達はどこまで出来るのか。

因縁の相手へ

深夜の雨の中、敵はとんでもない作戦に打って出ていた。その雨に紛れて、侵蝕の力を持つ泥を高高度から施設に向けて散布していたのである。

だが、それにいち早く気付いた姉妹姫は、飛行場姫が高高度へと艦載機を飛ばしてそれを確認し、中間棲姫が空に向かってとてつもない数の艦載機を放ったことで、雨が陸に落ちてこない程の火力を見せつけて全てを吹き飛ばした。

「まだやってきそうね。上のヤツはアタシがどうにかする。泥は絶対に陸に降らせない」

雨雲の上で艦載機同士の睨み合いが続いているが、飛行場姫の目の前だというのに何も気にしておらず、また何か行動を起こそうと震え出した。どう考えてもまた泥を散布しようとする動きだ。

やはりと言ってはなんだが、その艦載機に格納されているであろう散布用の泥も、増殖するタイプの特別製。時間が経てば再び散布するための量が溜まり、また上空から施設に向けてぶち撒ける。これを定期的に行うことで、施設を完全に機能不全にしようという策なのだろう。

それは絶対にさせないと、飛行場姫はその敵艦載機をどうにかしようと撃ち墜とすために動き出す。もし吐き出されても中間棲姫がどうにか出来るが、そもそも出させないのが一番の対策だ。

だが、その1機がやたらと性能が高く、動き回って飛行場姫の攻撃をヒラリヒラリと回避する。泥を散布するためにのみ調整されたモノなのだろうそれは、たった1機なのにその本懐を果たすための行動を止めることは無い。

「なんなのアレ……ごめんなさい、かなり手を焼きそう。ちょっと本気出すわよ」

飛行場姫の瞳が真っ赤に輝いたかと思いきや、腕を大きく開いた。その瞬間、中間棲姫程では無いが尋常では無い数の艦載機がその場に発生。

それが一斉に上空へと飛んでいき、中間棲姫が未だに巻き起こしている爆発を突き抜けて、次から次へと雨雲の上へと抜けていく。
「たった1機でここまで手こずらせるなんてね。アイツらもなかなかやるじゃないの。堪ったものじゃないけれど！」
「吐き出したモノは、私が全部吹き飛ばすわぁ。貴女達は、私達が上を抑え込んでいる間に下をお願い」
姉妹姫は共に、今施設を狙っている敵を排除すべきモノと認識している。ならば、施設の仲間達もその意思に従うのみ。
「お姉、もう一回お願い」
「ええ、大丈夫よぉ。まだまだ余力はいっぱいあるから」
簡単に言ってのけ、一度は止んだ雨に向かってもう一度艦載機を発艦。そして、一気に爆発。再び轟音と共に雨粒もろとも散布された泥が吹き飛んでいき、深夜だというのにあたり一面が真っ昼間かと思うくらいにまた明るくなる。
「合流したわ。これで施設の中には誰もいない状態よ」
叢雲を先頭に、施設に中にいた仲間達は全員が集まった。
「今見えている限り、敵は西側にだけよ。一応全方向確認しているけど、いるのはさっき言った2人だけ。回り込んで来ている可能性も捨てきれないから、出来ることなら裏側にも誰か回したいわね」
敵と言える存在は、海上に2人。ここからは見えないが、海中にも2人いることが確定している。そちらは伊４７が必死に追いかけ回しているのだが、施設側からは全く見えないのが惜しい。
「今ヨナちゃんが潜水艦を追ってます。そちらにも誰か割いた方がいいと思うんですけど……」
「そっちは私が行く。Ｍｉｃｈｅｌｌｅをこんな姿にしたＡｕｔｈｏｒ（張本人）でしょ？　だったら……責任を取ってもらわなくちゃいけないもの」
ミシェルと最も仲が良かったであろうジェーナスも怒りに震えていた。ただ施設で楽しく生きていただけなのに、何の罪もないのに、こんな瀕死の重傷を負わされるなんて、絶対に許さないと。
「私、対潜は結構得意な方なの。だからお願い。潜水艦は、ヨナと一緒

に私がどうにかする。私だけじゃ頼り無いなら、他にも付けてくれて構わないから」
「大丈夫よぉ。誰かが行かなくちゃいけないんだもの。それじゃあジェーナスちゃん、ヨナちゃんが追っている潜水艦の子達をどうにかしてちょうだい。ミシェルちゃんは、私達が見ておくわぁ」
「Ｏｋａｙ」
　ジェーナスはミシェルを優しく抱きしめると、Ｉ，ｍ（行って）ｇｏｉｎｇ（きます）と呟いて海へと駆け出した。それをサポートするように、中間棲姫の放った艦載機の一部はジェーナスを追うようについていく。また泥の雨が降り注ぎそうになったらそれから身を守ってあげるために。
「叢雲、貴女は私についてきなさい。あのコロ助、今回は確実に斃すわ」
「相手が戦艦？　まぁどんなヤツだって知ったこっちゃないわ。こんな時間にこんなことするなんて気分が悪い。後悔するくらいズタズタに刻んでやる」
「なら私もそこに。姉さんの制御は必要だと思うので」
　コロラドには因縁のある戦艦棲姫が向かう。だが、艤装と共に戦ってもかなりの強者であることは理解しているため、叢雲と薄雲をサポートにつける。
「片方は大鳳って言ってたよね。じゃあ、あたしが行かなくちゃダメだ。前に相手する羽目になってるからね。春雨、海風、いいかな」
「了解です。私達でサポートします」
「この雨の中に泥を混ぜているのもそのヒトなんですよね。ならば斃します。姉さんの安眠を妨げた罪は重いので」
　そして大鳳には白露が率先して向かうことになり、自然と白露型姉妹が集まることに。相手は戦艦と空母が混じっている強敵。駆逐艦である３人でどうにか出来るかはわからないが、ここで乗り越える必要がある。
「残りの子は、施設の逆側の巡回をお願い。何も来ないかもしれないけれど、何か来た時に無防備なのはよろしくないわぁ」
　残りは松竹姉妹と古鷹、リシュリュー、そしてコマンダン・テスト

なのだが、発作を我慢し続けていたコマンダン・テストがかなりまずいことになっていた。
瀕死のミシェルを目にしていることで、その元凶を排除するという方向に思考が向かってしまっている。
「Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、抑えられるなら抑えなさい！」
リシュリューがコマンダン・テストを止めようと動くのだが、それは僅かに間に合わなかった。のたうち回る尻尾を振り回し、そのまま海に駆け出してしまった。
今までの発作は、怒りの発散をその場でするように部屋の中で暴れ回ってしまっていたが、今回は海中とはいえ元凶がいる。発散する先が明確に存在するのだ。それ故に、その感情に任せた暴走は誰にも止められない。
「Ｐａｒｄｏｎ（ごめんなさいね）．　ＲｉｃｈｅｌｉｅｕはＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅを止めに行くわ！」
ああなったコマンダン・テストを止めているのはいつもリシュリューだ。今この戦場でも、傍にいてあげることが自分の義務だと考え、一言謝ってリシュリューも海に駆け出してしまった。
「姉姫さん、大丈夫っスよ。俺達だけで島の裏側見てくるんで」
「コマさんの側にはリシュリューさんは必要不可欠ですから。それに、今は古鷹さんもいますし」
松竹姉妹に頼られて古鷹は少しだけ複雑な表情をしたが、この施設を守るために尽力することは変わらないので、力強く頷く。
「じゃあ、みんなお願いねぇ。私達が空から泥を振り撒いてくるのをどうにかしておくわぁ」
「アタシ達は海に出られないから手助け出来るのにも限界はあるけれど、アンタ達を邪魔するモノはどうにかしておくから、大船に乗ったつもりで行ってちょうだい」
圧倒的な力で空からの脅威を排除し続ける姉妹姫の後押しはとても頼もしい。負ける気がしない。
だが、相手は雨に紛れて泥を散布しようとするような輩だ。次に何をしてくるかわからない。慢心は禁物。

ここからは全員が一時的に別行動になる。見えている脅威には、複数人で対応することになり、ほとんど均等に分かれることが出来た。
最も不安なのは、発作により飛び出してしまったコマンダン・テスト。先にジェーナスが向かった対潜水艦の戦場で、正気を失った状態で何処まで出来るかはわからない。リシュリューがサポートに入るとはいえ、そのリシュリューが潜水艦相手では能力が十全に使えないのが痛い。

いの一番にどうにかしなくてはいけないのは、泥を散布する艦載機を操る空母、大鳳。今はコロラドと共に行動し、確実に施設を潰そうと画策している、いわば主犯。
そこに向かうのは、白露、春雨、海風の大鳳対応部隊と、戦艦棲姫、叢雲、薄雲のコロラド対応部隊。駆逐艦ばかりだが、その力は深海棲艦の姫であるために、戦艦にも引けを取らない。
「感知の中にはずっと入ってるわ。空母と戦艦の２人って言ってたわよね」
「ええ。どちらも侮れないから、気を引き締めていきましょ」
「わかってるわ。今までの憂さを晴らしてやるんだから」
槍を強く握りしめ、より一層気合を入れる叢雲。薄雲もその後ろで艤装の鎖を握り締めている。
「大鳳もかなり厄介だよ。あたし、島風と武蔵さんが組んでくれたからどうにかなったけど、滅茶苦茶強い」
「大丈夫です。春雨姉さんがいるんですから」
「過信しないで。今までみたいに上手く戦えるかもわからないんだから」
春雨は少し不安があった。ジェーナスのときはその辿り着く力により無傷で救出出来たのだが、同じことが今回も出来るかどうかはわからない。
何せ、今回は元々仲間である侵蝕を受けてしまった者ではない。ただただ施設を破壊しようとしている襲撃者であり侵略者。その経緯

がわからないために、白露やジェーナスの時のような感情移入は一切出来ないのである。
　言ってしまえば、救いたいという気持ちが今までよりも薄いのだ。そのせいで、侵蝕から救うための光の道が見えるかもわからない。救えるかもわからない。
「春雨姉さん、救いたくなければ救わなくてもいいのでは」
　そこに海風はとんでもないことを言い出す。
「慈悲深い春雨姉さんの尊い考えは、私も感服して五体投地したい気分ですが、春雨姉さんにだって手が届く範囲があります。全てのヒトを救いたいと思うのは、流石春雨姉さんだと涙すら出てしまいそうですが、それで春雨姉さんが苦しむのは間違っていると、海風は思うんです」
「でも……」
「救えるものを救えないというのは辛いことだと思います。特に今回はただ春雨姉さんに害を為そうとするゴミ虫……いえ、少々口が悪くなってしまいました。害を為すことに特化した存在です。救えずとも、今は対処しなくてはいけません。春雨姉さんが出来ないのなら、この海風が春雨姉さんの分までやります。私には何の抵抗もありませんから。春雨姉さんをどうにかしようとする者は、誰であってもどういう理由があっても確実に排除しますので」
　既に海風は苛立ちを隠さない程になっている。春雨のことを思うあまり、本来口に出さないような暴言までチラホラと出始めている始末。
　そんな海風に苦笑しつつ、春雨はしっかりと自分の思いに向き合う。
「ううん、私はやっぱり救うよ。今から戦う2人だって、白露姉さんや古鷹さんみたいにやらされてるだけなんだもん。今回はたまたまそのターゲットが私ってだけ。本当はそんなことやるようなヒトじゃないことだってわかってるんだから」
　やはり救いたい。全員を救いたいと、改めて思い直す。春雨には自覚は無いが、ゆらりとその瞳に白い光が灯り始めている。

「そうですか。ならば、私はその思いに全力で応えるのみです。春雨姉さんが救うというのなら、私も全力で救います。それがいくら春雨姉さんを悲しませようとも、その慈悲を向けるのでしたら」
「うん、ありがと。そのためには少し傷をつけなくちゃいけなくなるかもしれないけど、それはもう仕方ないと思う。でも、命は奪わない。絶対に救うよ」
　決意も新たに、ついにその場所へ。

「急に明るくなるわ、あっちだけ雨が吹っ飛ぶわ、何なのよアレ。インチキも大概にしてほしいわ」
「一筋縄でいかないことくらい予想がついていたことですよ。ですが、あの場所から動けないのはわかっているんですから、我々を迎撃に来た方達を確実に始末してから島に行きましょう」
「そうね。アイツが来てくれると思っていたもの。ここで決着つけてやるわ。そうでしょう、戦艦の！」
　コロラドは杖を戦艦棲姫に向けて突き出し、かかってこいと言わんばかりに待ち構えていた。
　大鳳は白露と相対していた時とはまた違い、艦載機を操りながらもその腰には刀が一振り差されていた。

　数としては優位に立っているが、単純に勝てるような相手ではない。ここからが正念場である。

優位はあれど

深夜の迎撃戦、島からかなり離れたそこにいたのは、装甲空母大鳳と、戦艦コロラド。その2人に因縁のある白露と戦艦棲姫が先導し、その場所での戦いが始まる。

「前までならバラバラで戦っていただろうし、なんなら本気も出さずに戦ってたわ。でも戦艦の、アンタが私達に組んで戦うってことを教えてくれたんだから、ちゃんと使わせてもらうわよ」

「好きにしなさい。貴女達はグダグダ喋らないと戦えないわけ？　アンタといい、あのチビといい」

小さく溜息を吐きながら艤装と並び立つ戦艦棲姫。

数的優位は自分達のものではあるが、あちらは魂の混成により1人に見えて複数人の力を持っているのはわかっている。少なくとも、コロラドには他の姫級の力が2人分、大鳳には伊勢と日向の戦艦2人分が含まれているのだから侮れない。

あちらが1人で3人分なのだから、こちらも1人につき3人を用意したに過ぎない。それでもまだ隠し球を持っていそうなのだから、まだ人数が欲しいとさえ思える。

「アンタ達をここで始末して、さっさと姫の器を戴くわ。タイホーの悪意の塊が効いてないのは残念だけど、もう実力行使でどうにかしてあげる。どうせ逃げられないんだから、精々耐えなさいよ」

コロラドは最初から本気を出すように、前回の戦いでも展開したロブスターのハサミとカニの甲羅がその場に現れる。その手に持つ主砲内蔵の杖も健在。遠近共に隙がない装備。

大鳳は大鳳で、未だ施設上空に艦載機を配置しながら眼前の敵対する者に対して主砲を構えた。腰に差した一振りの刀はまだ使わないらしい。

「特にアンタ、Ａｒｒｉｖｅｒ（辿り着く者）よね」

杖を春雨に向ける。春雨はコロラドの言葉がすぐにはわからなかったが、自分のことを言われているのは直感的に気付いたため、一言そうだと答える。

「だったら、この場で選択肢をあげるわ。こっちに来るか、この場で死ぬか。うちのＰｒｉｎｃｅｓｓ（姫）は、器だけじゃなくアンタもＤｅｓｉｒｅｄ（御所望）なのよ。その力、こっちで使いなさい」
　至って真剣に春雨を勧誘するコロラドだが、春雨の答えは決まっている。
「お断りします」
「まぁそうよね。じゃあさっさと死になさい」
　春雨に向けた主砲が当たり前のように火を噴いた。至近距離というわけでは無いが、その砲撃はかなり回避のしづらいタイミング。
　しかし、既に直感が働いていた春雨は、放つ直前には回避行動をとっていた。紙一重でもダメージは入るであろうため、かなり大きく行動するように。
「始末の方向で決まったのならば、容赦はしません。徹底的に追い詰めさせてもらいましょう」
　その回避した方向に向けて、大鳳も砲撃。火力はコロラドと近しいため、こちらも大きく回避しなくてはならない。
　ならばと、春雨は回避直後に脚を生やして、海面を蹴るようにさらに加速。その砲撃を爆風を受けることなく回避に成功するのだが、春雨だけが孤立することになる。
「他の連中よりＰｒｉｏｒｉｔｙ（優先順位）が高いわ。Ａｒｒｉｖｅｒ（辿り着く者）だけはここで確実に殺す。タイホー、いいわね」
「はい、元よりそのつもりです。こちらに来ないのならば、彼女はもうこの世にいてもらっては困りますので」
　コロラドと大鳳はあくまでも春雨を集中狙いすると宣言した。そんなことを聞いては黙っていられないのは勿論海風。春雨が狙われたことで簡単に怒りが湧き上がり、理性がプツンと切れる。
　こんな相手でも春雨は救うと話していたし、春雨がそれを望むのならばそれを手伝うと宣言したが、直接の殺意を見せつけられてしまってはそんなことは言っていられなくなる。
「今、春雨姉さんを殺すと言いましたか。ならば、やはり救われることは許しません」

海風が真っ先に狙ったのは、当初の通り大鳳。回避先を狙ったことが許せなかったようで、義腕を刃に変形させつつ、もう片方の腕には主砲を展開させ、さらには魚雷もばら撒きながら突撃。
「春雨のことになると海風が突出しちゃうの厄介だなぁ！　戦艦さん、最初の通りにお願い！」
それに白露が反応し、海風が先行しないようにその突撃をサポートする。砲撃を重ね合わせるように放ちつつ、魚雷も邪魔にならないように発射。
白露も、この2人は今のところ救おうとは思っていない。海風のように春雨を狙ったからとかではなく、救おうとして手を抜くことが出来ない相手だからだ。殺すつもりで戦わなければ、勝てるものも勝てない。
「その程度ならば、さしたる問題はありません。雷撃は出来ずとも、届かせなければいい話」
大鳳はそれに対して、回避ではなく艦載機による処理を選択した。主砲が一時的にボウガンへと変化すると、数機の艦載機が発艦し、射撃で魚雷を次々と破壊していく。砲撃に関しては、魚雷を気にしなくなった分で簡単に避けられる。
「元よりそのつもりだったからいいわ。こっちのこと、無視しないでもらえるかしら、コロ助」
続いて戦艦棲姫の艤装が猛攻を仕掛ける。コロラドは春雨の方に目を向けているため、そのままだったら何の苦労もせずに薙ぎ倒すことが出来るだろう。そんなわけがないのはわかっているのだが。
「はっ、どうせ来るとは思っていたわよ！　アンタのＰｒｉｏｒｉｔｙ（優先順位）はＡｒｒｉｖｅｒ（迎り着く者）の次なのよ！」
春雨のことは大鳳に任せ、即座に戦艦棲姫に対応。艤装からの砲撃は軽々と避け、返り討ちにしようと杖を向ける。その時には艤装もさらなる砲撃を重ねるように腕を振り上げ、さらには戦艦棲姫自身もコロラドを狙うために主砲を展開していた。
「カバーしましょうか」
しかし、艤装から放たれた砲撃は、真後ろにいた大鳳がコロラドと

位置が入れ替わり、腰に差していた刀を抜いたことで真っ二つに斬られてしまった。まるで重さを感じていないように。
「Ｔｈａｎｋｓ，タイホー。Ｔｅａｍｗｏｒｋいいじゃない」
そして入れ替わったコロラドは、その杖を春雨ではなく海風に向けていた。
「やらせるかっての！」
そこに被せるのは白露。錨を投擲し、その杖に直撃させ、砲撃の瞬間に狙いを僅かにズラす。
「ナイスです白露姉さん。この春雨姉さんを付け狙う外道は、私の手で始末します」
ズレた砲撃を躱しつつ、コロラドに肉薄する海風。砲撃を仕掛けてもカニの甲羅の盾で弾かれてしまったため、義腕の刃を使ってダイレクトにその首を奪いにいこうとする。
しかし、コロラドは近距離も出来る万能型だ。接近した海風に向かってロブスターのハサミを突き立てようと身体を捻った。
その握力は、全てを握り潰すであろう大鳳のそれよりも強く、挟まれた瞬間に粉砕は確実。頭をやられれば成す術なく潰されるだろうし、艤装だって木っ端微塵にされるだろう。それが戦艦棲姫の艤装のような強靭な四肢であろうが関係ない。
「何してんのよコロ助ぇ！」
その海風を救ったのは、春雨でも白露でもなく、同じように肉薄していた叢雲だった。凶悪で醜悪なハサミを砕くために槍を突き出し、そのハサミの付け根、ハサミをハサミとする接続部分を狙って貫こうとした。それが貫けなかったとしても、海風に向かうその勢いは殺せる。
「そんなチャチなＳｐｅａｒ（槍）で、私のＳｃｉｓｓｏｒｓ（ハサミ）を止められると思って」
「止められるようにするんですよ。強引にでも」
さらにそこに加わったのは薄雲。鎖付きの主砲を先程の白露のように投擲し、槍の柄の尻に直撃させる。叢雲の腕力だけでなく、薄雲の腕力も加わったことで、ハサミは海風に届くことなく弾き飛ばされ

た。
　しかし、その勢いは相当なモノで、叢雲も腕が痺れる程の衝撃を受けて若干弾かれることに。
「まだです」
　さらに薄雲は鎖を引っ張り、その遠心力でもう一度投擲。叢雲もそれを理解し、腕の痺れを我慢しつつも槍を海面に刺し、それを軸に跳んだ。
　薄雲の振り回した主砲の鎖は、叢雲の槍の柄を軸に角度を急激に変え、その砲塔がコロラドに向いた。
「そんなもの、当たるわけ」
「当てるために振り回してるわけじゃないですよ」
　薄雲は中空でトリガーを引く真似をする。瞬間、鎖の先にある主砲から砲撃が放たれた。
　薄雲の艤装の特徴は、この主砲の遠隔操作。手から離れていても、鎖を握っていれば砲撃が可能。途中で主砲の場所が固定されるわけでは無いので、やっていることは不意打ちも不意打ちなのだが、何かと応用が利く力。
「何よそれ！」
　しかし、コロラドには盾もある。照準を定めたわけでもない砲撃であるためか、その勢いは軽く、カニの甲羅の盾で簡単に弾かれてしまった。
　それでも、一瞬だけでもコロラドの動きをその場に縫い付けたのは間違いない。砲撃を放った瞬間に、一時的に主砲も鎖もそこから消える。つまり、叢雲の行動を妨げるモノがそこから失われたということ。
「何かにつけて堅いのが気に入らないわ！　絶対にぶち抜いてやるわよ！」
　ガードしたカニの甲羅の中心を狙うように、姿勢を整えた叢雲がその槍を突き出す。甲羅ごとコロラドの胸を貫き、一撃で死を与えるかの如く。
「私のＳｈｉｅｌｄは、そんなものじゃあ崩れないのよ！　もっと腕

を上げてから来なさい！」
「崩れなければ、退かすまでです」
そこにまたもや薄雲の一撃。再生成した鎖と主砲を、今度は真上から振り下ろすように振り回し、コロラド本体に狙いを定める。
それを防がなければ、主砲そのものが脳天に直撃して致命傷になるだろう。だが、盾で防いだら叢雲の槍が直撃して致命傷になるだろう。そうなると、この一撃を防ぐために使うのは、杖、もしくはロブスターのハサミとなる。
「ええい、鬱陶しい！」
コロラドはハサミで食い止めるという判断をした。杖で止めたところで先端の主砲から砲撃を放たれる可能性が高いため、ハサミで圧し潰す方が堅実だとした。
「ここ！」
そこへ飛び込んできたのは、回避させられ続けていた春雨だ。もう一度脚を生やす勢いで超加速を見せ、一気にコロラドの至近距離にまで詰めていた。
「Ａｒｒｉｖｅｒ（辿り着く者）！」
「まだ救う道は見えていないけど、ここで止まってもらわないとみんなが酷い目に遭うんだから」
春雨の目には、まだ光の道は見えていない。瞳には白い光が灯っているが、まだ最善の道は存在していなかった。
救いたくとも足りないのはわかっている。だが動かないとどうにもならない。せめて少しでも消耗させなくてはどうにもならないということなのだろう。春雨はそう結論付けて、この隙を狙って行動を起こす。
「申し訳ないですが、コロラドをやられるわけにはいきません」
しかし、その突撃の前に大鳳が立ち塞がる。戦艦棲姫の攻撃を振り払い、コロラドを守るために再び鞘に納めていた刀に手をかけていた。
直感的に近付くのはまずいと考えた春雨は、再度脚を生やす勢いを使って真横へと跳躍。同時に砲撃を放ち、大鳳に牽制。

「間合いを取りますか。堅実ですね」
その砲撃は軽々と斬り払う。その時には、コロラドへの攻撃も全て食い止められた後。
「だったら、２人まとめて」
そこに戦艦棲姫が艤装と共に砲撃を放った。今なら仲間達はそこにおらず、２人同時の砲撃で誰にも被害は無い。
「コロラド、避けてください」
「わかってるわよ」
流石にこれは回避以外に選択肢が無いと、２人同時にそこから跳ぶように退避。本体と艤装同時の砲撃は、海面を抉るようなとんでもない火力を誇っていたが、残念ながら掠ることも無かった。

６人がかりで２人を相手にしても、ここまで手こずる。未だに触れることも出来ていないようなものだ。
苦戦は必至。しかし、ここで勝たなければ、施設に先は無くなる。

迷い

大鳳とコロラドに苦戦を強いられる春雨達。数的優位はあれど2人とも手練れ。やはり1人に3人分入っているというのが非常に大きく、本来出来ないような技まで確実に仕掛けてくる。薄雲、叢雲、春雨のほぼ同時攻撃もいなされ、戦艦棲姫の砲撃も回避されて、まるで傷もつかない。

この時誰もが、大鳳がこの戦闘の中心にいると理解した。コロラドはどちらかといえば考え方が幼いというか若干前のめり過ぎるきらいがあるが、大鳳は感情が無いのではと思えるほど冷静。

こうしながらも施設に泥を撒き散らそうと艦載機も置いているのだからタチが悪い。しかし、感情が無いと考えれば、それも納得が行く。あちら側にいた時の白露や古鷹、そして今ここにはいないがやたらと口が回る龍驤とは正反対な存在。それ故に、その力と共に恐怖すら感じる。

「あまり時間をかけていられません。貴女方もご存知の通り、我々は体力がありませんから」

またもや抜いていた刀を鞘に納め、今度はしっかりと握り締める。今までの攻撃回避のための抜刀とは違った、明確な居合抜きの構え。

戦艦棲姫の砲撃すら斬り飛ばした膂力と斬れ味は、一撃を喰らえば確実に致命傷。艤装で止めることも出来ない可能性が高い。むしろ、それ以外にも何かあるようにすら思える。

「コロラド、一旦離れます。チームプレイもいいですが、辿り着く者の始末は最優先ですから、前衛をさせてもらいますよ」

「構わないわ。偶には花を持たせてあげる。私も上手いことサポートしてあげるわ」

「感謝します。それでは」

ギシッと、柄を強く握り締める音が聞こえた瞬間、大きな水柱が立つほどの踏み込みと同時に突撃していた。

その狙いは、やはり春雨。いの一番に始末する必要があるとして、他の者達を全て置いておいて真っ先に狙いを定めた。

春雨もタダではやられない。踏み込んだ時には直感的に避けなければならない方向はなんとなくわかっていた。
この居合抜きは、自分の胴を真っ二つにするような一撃だ。しかも、何故だかわからないが、掠るのも絶対にダメ。大きく避けなければまずいことになると、ただ避けるだけでなく砲撃や雷撃まで絡ませての退避。
「その危機回避能力は、辿り着く力の断片でしょうか。でも、逃がしません」
春雨の回避方向を見てから、もう一度強く踏み込む。そこに魚雷があろうがお構いなし。自分に触れる前にそこから足を離し、既に春雨に向きを変えた後。
「来ないで！」
ここで咄嗟に春雨が繰り出したのは、脚部を脚ではなく主砲に変形させることによる砲撃。
手に持つ主砲がそのまま脚になったかのように生成され、その仕組みもあたまにはいっていることから、まるで蹴るように砲撃しつつ、その勢いを乗せたバックステップでより遠くへと退避。
「器用ですね。ですが、それは効きません」
駆逐艦の砲撃如きと言わんばかりに、片手で刀を振り回すだけで砲撃は全て弾き飛ばしてしまう。
そもそも、春雨は本気で砲撃が出来ていない。大鳳だって侵蝕を受けた艦娘の1人。今でこそ深海棲艦化させられているが、白露や古鷹と同じような犠牲者なのだ。
それがどうしても春雨の頭の中で引っ掛かっていた。救うためには傷付けなくてはいけないと理解していても、心の奥では無傷で助けたいと考えてしまっていた。それが砲撃の威力に影響を与えている。
ジェーナスが無傷で助けられた経験が、春雨をそうさせていた。救えるのならば、余計な傷は与えたくない。ジェーナスに出来たのだから、他の者にも。
これが大き過ぎる迷いに繋がっている。攻撃をしたら傷を付けてしまうかもしれない。だが、攻撃しなければ自分がやられる。どうし

たらいいのかわからない。
　そのせいで、本来もう見えていてもおかしくない光の道が、全く見えない。最善に繋がる道が、何処にも見当たらない。それどころか、直感的な回避すらままならなくなる。
「辿り着く力はあっても、本人が脆弱ならば、今のうちに始末がいいでしょう。抵抗しなければ、痛み無く首を飛ばします。戦うつもりが無いのなら、逃げ回らずに止まりなさい」
　大鳳にも言われてしまい、自分の迷いが明確にされる。大鳳を救いたいという気持ちが先行しすぎて、攻撃するという気持ちが薄れている。
　加速して至近距離に近付けたとしても、それはあくまでも救うために前回やった一撃がもう一度やりたいと考えたからだ。しかし、光の道も見えなければ、光の点も見えていないため、今やったところで救うどころか致命傷を与えかねない。
　迷いは、より深く。今の春雨は、何処にも辿り着けない。一度の大きな成功体験が、完全に足を引っ張っている。
「春雨姉さんを追いかけ回すなんて、万死に値します。白露姉さん、春雨姉さんを守りますよ」
「動機はさておき、あたしだってそれは考えてた。妹をあんな風にされて、黙って見ていられるかっつーの！」
　そんな春雨を救うため、海風が白露を連れて大鳳を止めようと動く。しかし、その行く手を阻むのはコロラドだ。大鳳のサポートをするため、海風と白露の前に立ち塞がる。
「させるわけが無いでしょうが！」
「こっちのセリフなのよ！」
　春雨の救援に向かおうとする海風に杖を向けた瞬間、叢雲が接近。撃つ前に心臓を貫いてやらんと槍を突き出す。
　さっきと殆ど同じ光景。そのままなら、またロブスターのハサミに食い止められるところだが、同じ轍を踏む叢雲では無い。槍をガードされることを最初から見越して盾では防ぐことが出来ない足下に魚雷も放っていた。槍を防げば魚雷が直撃、魚雷から逃げれば槍が直

撃。そういうコースを選択。
「Ｈｏｗ（鬱）ｆｒｕｓｔｒａｔｉｎｇ（陶）（し）（い）！」
しかし、コロラドも一筋縄ではいかない。攻撃は最大の防御と言わんばかりに、杖を振り回しながら主砲を連射。狙いを定めない代わりに、周囲全てに一斉射をしたようなものなので、叢雲が近付けなくなるのみならず、海風と白露の行動も抑制する。
前に進めない、春雨を救えないと感じ、海風は叢雲のように苛立ちが強くなる。それを表情から読み取った白露は、海風だけでも送り出すために尽力する。
「海風、アンタだけでも春雨のところに行きな！　１人でもいれば変わるっしょ！」
背中を強く押しつつ、錨に鎖を繋いで振り回し、その乱射を食い止める。少しだけでも進めるタイミングを作ったことで、海風だけならばコロラドから行く手を阻まれない状況を作り出した。
代わりに白露が擦り傷程度の傷を負う羽目になったが、妹のためだと表情すら変えずに耐える。
「ありがとうございます白露姉さん。海風、春雨姉さんを必ずお守りします！」
「頼んだ！　アンタも気をつけなよ！」
そして、海風はその場から春雨のもとへと向かった。
１人だけ逃がしたことにコロラドはご立腹のようだが、高が１人くらいと考え直す。
「まぁいいわ。残り４人くらいなら私だけでも充分よ。かかってきなさい」
「アンタ、もしかして自分が主人公か何かと勘違いしてないかしら」
戦艦棲姫の艤装がコロラドの乱射をものともせずに肉薄し、その豪腕で押し潰そうと拳を振り上げる。この一撃は盾で止められてもそのまま振り下ろせるため、コロラドといえどもひとたまりもない。
「アンタはただの愚かな侵略者。平和を望む者からそれを奪っている時点で、ただのクズなのよ」
「あっそ。アンタにはそうなんでしょうよ！」

しかし、そこはロブスターのハサミにより食い止める。手首の部分を挟み、その動きを完全に止めた。力比べはおおよそトントン。ちょん切ろうとハサミに力を加えるが、そうすると拘束が解かれて逆にやられかねないため、あえて破壊はせずに杖を艤装の腹に向けた。
「侵略者には容赦しません。私達はただ、ゆっくりと平和に過ごしたいだけなんですから」
そこへ薄雲が主砲を投擲。戦艦棲姫の艤装の腰を使って角度を急変更し、回り込むようにコロラドの胴に向かう。
「Ａｃｒｏｂａｔ（曲芸師）が！」
「アンタにはここであたし達と遊んでもらうよ。春雨と海風が合流するまではね！」
薄雲の主砲は盾で弾き飛ばすが、そこに合わせて白露が同じように錨を振るっていた。
「人様の庭に土足で踏み込んでおいて、タダで済むとは思っていないでしょうね、このクソ戦艦が！」
それに合わせるように叢雲も動き出した。
各々のチームワークは、同じ思いを持っているために徐々に研ぎ澄まされていく。
元々薄雲はそういうところが得意であり、白露も４人分の力を扱うために周りがよく見えていた。叢雲は猪突猛進なところはあるものの、サポートしやすい動きを心がけた前衛を務め、そして戦艦棲姫は艤装とのコンビネーションを仲間達と繰り出す。
４人がかりならば、コロラドを追い詰めることも出来る。そう考えて、攻撃の手を止めることはなかった。

一方、その場から抜け出すことが出来た海風は、１人大鳳に狙われ続ける春雨を救うため、大鳳に砲撃を始める。
「春雨姉さんに何をするんですか」
静かに、しかし怒りで塗れている海風の砲撃は、逆に研ぎ澄まされていた。今の大鳳が一番狙われたくないであろう場所、刀を握る腕を

集中砲火。
　対する大鳳は海風の存在に気付いたが、そちらを見ることなくボウガンを展開して艦載機を飛ばす。砲撃に関しても、艦載機を盾に使うことで完全に無視。
「海風っ」
「春雨姉さんはこの海風が命に替えてもお守りします。春雨姉さんに痛みを負ってほしくないですから」
　砲撃は食い止められても進むのは止まらず、艦載機からの射撃も回避しながら春雨の側に辿り着いた。大鳳からの攻撃も止まることを知らないが、春雨のみに振るわれていた暴力を分散するためにも、２人がかりで抵抗する。
　だが、春雨としては今の言葉、命に替えてもの部分は嬉しくなかった。守られることは嬉しいことでも、海風を失うことは望んでいない。自分のために海風が散ろうものなら、春雨は一生立ち直れない傷を負う。
「１人増えても同じことです。貴女は辿り着く者の拠り所でしょうか」
「そうあると信じています。妹ですから」
「ならば、貴女もここで始末してしまいましょう。立ち塞がったのならば、そうなる覚悟があるということでしょうから」
　春雨を集中的に狙っていた大鳳は、海風にも狙いを定めた。刀を鞘に納め、砲撃主体に移行。複数を相手にするのならこちらの方が早いと判断したようである。
　２対１となっても、大鳳の底知れぬ力の前には防戦一方になってしまう。それ程までに大鳳は強い。手練れなだけでなく、あまりにも容赦が無かった。やはり感情が無いのだろう。２人のことを上に見ることも下に見ることも無く、淡々と排除のために攻撃を続けてくる。
「春雨姉さんを心から愛しているからこそ、私は心を鬼にして姉さんに言わなくちゃいけないことがあります」
　大鳳からの攻撃を回避しながら、目を合わせることは出来ずとも心から言葉を紡ぐ。こんな状況でも、海風は今の思いを伝えなくては

と。
「その迷いは間違っています」
断言した。その言葉に、春雨の心は少なからず揺れ動いた。
「春雨姉さんは慈悲深いお方、手の届く誰もを救いたいという気持ちはわかります。でも、それで一方的に嬲られることがおかしいことくらい、聡明な春雨姉さんなら理解しているでしょう。やり返してはいけないなんて、誰も言っていません。誰も望んでいません」
大鳳の強烈な砲撃が春雨に向かい、それを海風が腕を盾に変形させて向きを逸らす。直撃では無いにしろ、その衝撃はかなりのもので、海風は艤装の腕でも痺れているように錯覚した。
「アレは敵です。救えるのならば救えばいいと思いますが、出来ないのならば排除しないといけない。気持ちはわかります。私だって救いたい。あのヒトは被害者であり、悪いのはあのヒトじゃない。でも、無理なものは無理なんですよ！　今、現実を見て、手を抜いて戦える相手だと思いますか！」
無傷で救いたいなんて到底無理なこと。この大鳳は今まで戦ってきた誰よりも強い。全力で戦っても勝てるかわからないのに、そんな甘いことを考えていては負けが確実になる。
海風は春雨に負けてもらいたくない。負けと死がイコールで結ばれているのだから尚更だ。
「キツいことを言います。思い入れの無い相手にまで、手を伸ばさないでください。相手はそれを利用して春雨姉さんに噛み付くような輩です。だから！」
盾だった腕を刃に変えて、砲撃を繰り出しながら突撃する。迷いが振り払えない春雨に、自分の覚悟を見せるために。
「私は！　もう、このヒトを救おうとは思わない！　そうしないと、本当に良くないことが起きるから！」
散ろうだなんて思っていない。だが、無謀でもあった。大鳳を斃すためには、砲撃だけではどうにもならないことはわかる。しかし、あえてあちらの間合いに入るのは自殺行為だ。
春雨が同時に動いていれば、また何かが変わったかも知れない。だ

が、迷いがより深くなっていた春雨は、動くのが一手遅れた。
直感的に、海風がやられると感じてしまった。
「海風、ダメっ！」
「素晴らしい姉妹愛です。私を救わないと決意することにも覚悟が必要だったでしょう。そして、貴女は正しい」
大鳳が刀に手をかける。また居合抜きの構え。しかも全力だ。あんなのを受けたら、海風はひとたまりもない。直撃ならまだしも、掠ってもダメ、おそらく風圧だけでも重傷。
「しかし、その力が私に及んでいなければ、どの選択もただの無駄に過ぎません」
海風だけは守らなくてはならない。自分のことをここまで考えて、覚悟をして、心の底から思いの丈を語ってくれた妹を、ここで失うわけにはいかない。
その妹を排除しようとする大鳳に対し、初めて、本当に初めて、春雨は黒い感情が生まれた。
救う救うと言いながらも迷い続けた春雨は、海風が絶体絶命となったその時に、ようやく迷いが晴れた。
「私が救うのは、海風だけだ」
大鳳の居合抜きが炸裂する瞬間、春雨はまるで風にでもなったかのように軽やかに駆け出した。一手遅くとも、一手速かった。
その斬撃は海風を確実に殺す一撃だったはず。しかし、春雨の目にはもう、そうならない光の道が見えていた。
こうすれば海風が、海風だけは救える。その最善の道、答えに辿り着いていた。

「ごめん、海風。ありがとう」
気付けば、海風は救われていた。春雨に抱きかかえられ、大鳳の間合いから離れた場所にいた。

一欠片の容赦も無く

「ごめん、海風。ありがとう」

気付けば、海風は救われていた。春雨に抱きかかえられ、大鳳の間合いから離れた場所にいた。

「……今のを潜り抜けた？　どうやって、いや、そうであるという足取りだった。確信して私の斬撃に突っ込んできた？　当たらない場所を、妹を抱きかかえるまでして……？」

大鳳は今の春雨の行動に対して疑問しか浮かばなかった。今の一撃は、海風の命を奪うための会心の一撃だった。なのに今、春雨が通った道は、誰も傷付かない道。

「なるほど、そういうことですか。貴女のそれは、最善の答えに辿り着く力」

「みたいですね。やたらとそう言われます」

海風を抱きかかえたまま、大鳳に向かって語る春雨。だが、大鳳よりも海風に怪我がないかを確認する。

何処にも傷は無い。擦り傷1つ無い。今見えた道は、海風を確実に救う道。

「姉さん……」

「海風のお陰で目が覚めた。私、多分自分の力に慢心してた。でも、もう大丈夫。手が届く範囲、ちゃんと見極めてるから」

海風に微笑む春雨。抱きかかえているために、もう顔と顔がぶつかり合う程に近い。海風には刺激が強すぎるものの、迷いを振り切って凛々しい表情の春雨に、改めて惚れ直していた。

「今の私に救えるのは、海風だけだよ。大鳳さんは……救えない。救いたいけど、無理と言いたくないけど、でも、殺す気でやらないと勝つことも出来ないから」

「はい、その通りです。でも、姉さんは1つ忘れてます」

もう少しこのままでいたいと思いつつも、このままでは戦えないため、惜しみながらも春雨に下ろしてもらう。

「姉さんに救えるのは、私ともう1人。自分自身ですよ。姉さんは少

し自己犠牲が過ぎます」
ハッとしたような顔をした後、そうだねと苦笑した。
どうしても春雨は自分のことを勘定に入れられない。心が壊れた時に、自分のことをどうでもいいものと考えてしまっているのがそこに引っかかってくるようだった。
だが、海風にそれを言われてしまったら、言うことを聞かざるを得ない。自分にとってはどうでもいいと言える自分でも、海風にとっては自分の命よりも大切なモノ。海風の命のためには、自分も勘定に入れなくてはならない。
「目が変わりましたね。これは本格的にここで始末しなくてはいけませんか」
「知りませんよ。でも、私はこんなところでやられるわけにはいきません。海風のためにも、施設のみんなのためにも」
改めて刀を鞘に納め、春雨と睨み合う大鳳。逃げ回りながらも救えるタイミングを見定めようとしていた今までとは違い、春雨の瞳からは覚悟を感じた。それと同時に、その瞳は爛々と白く輝き、誰にも見えていないナニカを見ているようにも見えた。
その実、春雨にはあらゆる道が見えていた。覚悟を決めたこと、そして、生まれた黒い感情を受け入れたことで、今まで選択肢に入っていなかった道まで現れていた。
「海風、手伝ってくれる？　私1人だとこの道は辿れないんだ」
「勿論です。私は身も心も春雨姉さんのために存在するんですから、好きなように使ってください」
「だったら、私の隣で一緒に戦おう」
「はいっ！」
もう完全に吹っ切れていた。迷いなんて何処にも無い。だからこそ、海風もその指示に従った。
「ここで終わらせます。救えたら救いますから」
もう救うことは二の次。ここで戦いを終わらせることを優先し、自分も海風も傷付かずに勝利することを優先する。
海風を、妹を傷付けようとした大鳳に、春雨は少なからず怒りを、憎

しみを、恨みを持った。そんな相手を救おうとして、逆に傷付くなんて愚かしい。全力で立ち向かい、出来ればやるとして戦う。
「行こう」
「はい！」
導かれるように、光の道を進む。それは以前と同様に舞うような道のり。不規則で、曲がりくねったその道でも、それが答えに辿り着く道だと信じて、ただその通りに進むのみ。
海風はその後ろを追うように進む。海風にその道が見えているわけがないのだが、今までずっと春雨を見続けてきたおかげで、そのほんの少しの挙動で次の動きが理解出来る。
春雨を愛し、依存している海風だからこそ、答えに辿り着く道を進む春雨を初見で追うことが出来た。春雨が自分に何を望んでいるかを理解し、最高の相棒として傍に寄り添う。
そういう意味では、春雨の隣にいられるのは、海風のみなのかもしれない。
「油断はしません。貴女達を両断しましょう。お覚悟を」
大鳳も黙ってはいない。その強大な力を十全に扱うため、大きく強く息を吐く。２人を相手にするために全神経を集中し、先程以上に力強く刀を握る。居合抜きの構えはより洗練され、普通ならば一切の隙が見当たらない攻防一体のカタチとなる。
春雨も海風も、実力だけで言えば大鳳には及んでいない。火力も、膂力も、技術も、何もかもが大鳳の方が一回り上。それでも、大鳳は絶対に慢心などしない。獅子は兎を狩るにも全力を尽くすと言うように、力の差で手を抜くことなんて愚かだと考える。
故に、今の春雨と海風に対して、自分の持てる限りの全てを出そうとした。先程までも全力は全力だが、やはり何処か力が抜けているところはあっただろう。格下である春雨が全力を出していなかったことが、そうさせていたのかもしれない。
「そちらから近付いてくるのならば」
ドンと音がなりそうなくらいに強烈な踏み込み。またもや大きな水柱が立ち、あり得ない速度での突撃になる。

「好都合です」
そして、刀を抜く。驚異的な速度からの抜刀により、すれ違い様に胴を両断する算段。その狙いは、勿論真正面から突っ込んでくる春雨。
今までならばそれで1人は確実に殺害出来た。駆逐艦だろうが戦艦だろうが関係なく、艦娘だろうが深海棲艦だろうが関係なく、その刃に断てぬモノは無かった。それこそ、戦艦から放たれた砲撃であろうが、堅牢な艤装であろうがお構い無し。ましてや、大鳳の膂力は並ではなく、それによって強引にでも持っていく。
防御は不可能。避けてもその風圧すらも駆逐艦の砲撃程の衝撃があるとんでもない一撃。自分で作った水柱を自ら斬り裂く渾身の一撃。
「そっか、この道はそういう意味だったんだ」
だが、春雨は全く怯まない。その圧だけでも死の恐怖を駆り立て身体を硬直させるモノなのに、春雨はそこに一歩踏み込む。
失敗したら確実な死。そうでなくても重傷は免れず、そもそもまともに動けないはずだった。大鳳も、この春雨の気でも狂ったのかという行動に驚きつつ、しかし慢心せず、いつも通り全力で刀を振り抜く。
それは、春雨の掌の上。
「道は、こう続いてる」
確かに大鳳は刀をしっかりと振り抜いた。振り抜いたはずなのだ。しかし、春雨はピンピンしている。その風圧すら受けず、大鳳の上に跳んでいた。
何が起きたかわからなかった。だが、何かを斬った感触は無い。それでも何かに触れたような感触はあった。
そして、大鳳の刀が粉々になった。
「……は？」
素っ頓狂な声を上げてしまう大鳳。今までに起きたことのない現実に、失われている感情が蘇ってくるような感覚。驚きを超え、僅かに戻ってきたのは、恐怖。
大鳳も知らぬうちに慢心しているところはあったのかもしれない。

今までに一度も失敗したことのない渾身の居合抜きが、避けられた挙句に刀そのものを破壊されるなんて考えてもいなかった。
その時、春雨は抜刀された大鳳の刀を完璧なタイミングで踏み付け、脚を展開しつつ上へと跳んでいた。その踏んだ場所が、光の道で開示された辿り着く場所。
刀の最も弱い点を突き、破壊しつつも回避して、その抜刀を刀ごと無かったことにしていた。
「流石は姉さんです」
そうなることを信じて進んでいた海風がすれ違い様に魚雷を放っていた。それが春雨の望む行動だと感じ、容赦なく大鳳を吹き飛ばすつもりで放っている。春雨もそれに対して表情1つ変えないため、その行動は間違っていない。
「っ、させない」
視界の端にそれが見えたことで、大鳳も即座に対応。刀が破壊されたことに茫然としている暇なんてないと、柄だけになった刀を投げ捨て主砲を展開し、その魚雷を撃ち抜く。
「次、ここ」
跳んでいた春雨がそのまま落ちてくる。狙いは大鳳の頭。その失われた脚を向け、ジェーナスの装甲を破壊した時と同じように、針のように尖った足先で貫くかの如く、一気に伸ばした。
その一撃が決まれば、大鳳は脳天を貫かれて確実に絶命する。今の春雨にその一撃を躊躇することはない。
「その程度、当たりません」
しかし、大鳳はそれをしっかりと見据え、紙一重で避けた。頬に切り傷が出来るが、致命傷はしっかり防ぐ。
だがそれも、辿り着く力によって見えている光の道の通りである。そこからの行動も見えていた。
「でしょうね」
避けられたことをいいことに、強引に脚を振ることによって大鳳の首を刈り取るように蹴り飛ばす。普通ならば鞭打ちでは済まない程の衝撃が大鳳の頭を駆け抜けた。

「っ」
一瞬視界がぐらつく。だがすぐに立て直し、蹴ったことによって間合いを取ろうとした春雨に対して主砲を構えた。まだ着水出来ていないのだから、回避は出来るはずがない。もしあの脚を盾へと変形させたとしても、強化された戦艦の主砲による一撃だ。まともに止められることはない。
大鳳の視界には春雨しか入っていなかった。それ故に、海風の行動が見えていなかった。
「春雨姉さんに何をするつもりですか」
怒りを表に出した海風が、その腕を錨と鎖に変え、主砲で狙いを定める腕を絡め取っていた。いくら膂力があったとしても、殆ど不意打ち気味にそれをされれば狙いはズレる。
咄嗟にその鎖を引っ張ったが、その時には仕事を終えたと海風は鎖そのものを消していた。
たったそれだけでも、大きな隙を生む。
「ありがとう海風、流石だよ」
綺麗に着水した春雨は、その瞬間にまた脚を展開したことで爆発的な速度で突撃。海風の一瞬の拘束によってグラついた大鳳を、自らの間合いに入れた。
その時、光の道は点へと変わる。撃ち抜くのは、その左胸、心臓。ジェーナスを元に戻した時と同じ点。
黒い感情があっても、春雨の根幹は変わっていない。殺したいほどに怒りを覚えても、大鳳のことを救いたいという気持ちは消えていない。
今がまさに、最初に言っていた救えるなら救うタイミングである。
「見えた。ここが、答え」
そして、脚を振り上げた瞬間にその点に向かって脚を伸ばし、即座に縮める。心臓を撃ち抜き、あわよくば救う。だが今回はあまりに容赦のない一撃。心臓を止めてしまっても構わないと思いながらの、痛みしか与えない蹴りのようなものだ。
その証拠に、ジェーナスの時には無かった傷が大鳳の胸に出来上

がっていた。胸を覆う服を突き破り、その衝撃が背中にも伝わり、ただ一瞬心臓を止めるのではなく、骨を砕くほどの衝撃だった。
「かはっ……っ」
初めて大鳳が大きくグラついた。しかし、まだ光の道は消えていない。終わっていない。
「海風、顎！」
心臓を撃ち抜いたために体勢が崩れ、今の春雨には狙えない場所に光の点が見えた。そこをすぐに攻撃しないとまずいと判断し、それを海風に指示する。
「了解です。春雨姉さんを狙った報いを、私の手で」
春雨からの指示への反応速度が驚異的な海風だからこそ、全ての言葉を紡ぐ前にその腕を鞭のようにしならせ、大鳳の顎を狙い、砕く程の勢いで振り抜いた。
まだ気を失うことすらしていなかった大鳳は、それがトドメの一撃となった。グルンと白眼を剥き、膝をついた。
しかし、まだ道が消えない。あまりにも往生際が悪い。
「か、ひっ……」
殆ど気を失いながらも、大鳳はその手を伸ばして春雨の喉を掴んだ。そのまま握り潰してしまう力を持っているのは知っているが、それ以上にまずいのは、身体の死を感知した泥が大鳳の中から吐き出されること。今の場所は、それをモロに被る場所である。逃げようにも逃げられない程の握力は残っており、春雨を完全に拘束しているようなもの。
最後の最後でも、春雨を陥れようとするその執念が、春雨の行動を一瞬遅らせた。道が見えていても、この咄嗟の拘束にはまだ対応出来なかった。
「姉さん！」
その危機をどうにかしようと、伸ばした腕をさらに変形させて大鳳の頭を強引に春雨とは別の方向へと向かせる。やり方を間違えたら首を捻じ切りかねないのだが、そんなこと躊躇している余裕なんて無い。

「ごめんなさい大鳳さん。私、死ねないので」
そして春雨も一切の容赦が無かった。掴まれている喉に手を添えた瞬間、脚が刃へと変わり、その腕を斬り飛ばしてしまった。そして、咄嗟に服の下に全身を覆うインナーまで作り上げる、
これにより強引に拘束を抜け出した春雨は、大鳳からの返り血を多少浴びつつも、そこまで汚れることなく離れることが出来た。

覚悟を決め、容赦なく大鳳を追い詰めた春雨は、相手の身体のことは考えずに戦いを終わらせる。だが、ここまでしなければ逆にやられていた可能性は高いのだ。

怒りを乗せて

春雨と海風が大鳳と戦うその近くでは、残りの４人がコロラドを相手取っている。本当は春雨達の側に行きたかった白露も、コロラドに度重なる妨害をされたことで、合流を諦めて斃すことを優先した。

そのコロラドは、４人がかりであっても殆ど互角。先程まではそこに大鳳がいたために余計に手が付けられなかったが、１人でも充分すぎる程に難敵。むしろ、コロラドも不利になればなるほど強くなるタイプにすら見えた。

あちら側にいた時の白露がまさにそれだったのだが、今は体内から泥が消えたことでその特性は失われている。だが、コロラドは同じ特性を持っている可能性は高い。泥の力だとすれば、全ての敵が持っていてもおかしくないのだから。

「Ｉｔ（いちいち） ｇｅｔｓ（うざった） ｏｎ ｍｙ（いわね） ｎｅｒｖｅ（ね）！」

暴れれば暴れるほど精度が高くなるコロラドの砲撃。その一撃は、戦艦棲姫ならば艤装により強引に弾くことが出来るが、他の３人の駆逐艦には掠るだけでも致命傷になりかねない危険な攻撃。

叢雲は自慢のスピードで回避は可能。白露も元々の実力が４人分になっているおかげで対応が出来るのだが、薄雲はかなり厳しい。鎖付きの主砲を器用に扱い、不意打ちや搦め手で敵を追い詰めることは可能なのだが、一度見られた搦め手が通用しなくなるのは大きく不利になる。毎度毎度新しいことをやらなければならない。

「面倒臭いわね貴女。こっちは４人がかりよ？」

戦艦棲姫の艤装が今度は接近戦を仕掛ける。その豪腕を振り上げながら、巨体とは思えないほどのスピードで突進。その体当たりは、甲羅の盾如きでは止められない程の衝撃となる。

「それだけアンタ達が貧弱ってことでしょ。そもそも私は負ける気なんてさらさら無いんだから！」

その突撃をヒラリと避けつつ、お返しと言わんばかりにロブスターのハサミをその腹に打ち込む。本来ならコレだけでも艤装が粉々になる程のダメージなのだが、戦艦棲姫の艤装はギリギリでその衝撃を

受け流しており、致命傷は受けていない。
「ったく、コレだけは使いたくなかったんだけど、アンタ達があまりにも鬱陶しいから、仕方なく使ってあげるわ。光栄に思いなさい！」
ここでコロラドが杖を両手で持ち、砲撃するでも無く上に掲げた。何をするのかと思いつつも、それはやらせてはならないものと認識し、全員一斉にコロラドに主砲を構える。もう救うなんてカケラも考えておらず、ここまで苦戦させられたのもあり、始末を優先していた。
「来なさい、私の本当の艤装！」
コロラドは掲げた杖をそのまま海面に突き立てた。その時には全員が全員砲撃を放った直後。何もしなければそれが直撃してコロラドは間違いなく死ぬ。それなのに、何の躊躇もなくそこから退こうともしない。
言い放った本当の艤装というのが、その集中砲火を覆すことが出来る程の力を持っているということに外ならない。
「何をしようと……」
４人の砲撃がコロラドに直撃する瞬間、突然とてつもない水柱が立ち昇り、砲撃を全て無に帰した。コロラド本人はその水柱の上に立ち、４人を見下すようにニヤリと笑みを浮かべる。
ただ水柱に勢いを殺されただけではない。その中に何かある。４人分の砲撃を簡単に跳ね返す程のモノが。
「何よアレ……いきなり出てきたわよ！」
海中も感知出来る叢雲がそう言うのだから、本当にたった今そこに出現したのだ。何も無いところから、コロラドの数倍はあるであろう何かが展開されたということは、やはり本人が言う通り艤装なのだろう。
だがそれは、まず艤装とは思えないモノだった。意思を持つ生体兵器である戦艦棲姫の艤装ですらここまでのサイズは無いし、艤装であると言われればそう見える意匠をしている。しかし、水柱の中から現れたそれは、生体兵器ではなく生体にしか見えなかった。
それは、白鯨だった。
あまりにも非常識な艤装が現れ、目を丸くしてしまったのは戦艦棲

姫だった。今まで旅を続けている間に出会った同胞(はらから)達の中にも、ここまでのモノを持つ者は見たことが無かった。戦艦棲姫自身のそれと同じか少し大きいと感じる程度。

施設のメンバーである伊４７の持つ艤装もかなりの大きさだが、コロラドの艤装は、それをさらに上回っていた。戦艦棲姫であっても、白鯨にはペロリと丸呑みされてしまいそうなサイズ。

「つはぁ、これやたらと疲れんのよ。だから、さっさと終わらせてやるわ！」

スタミナ不足が露呈しているコロラドが、そのスタミナを大幅に削ってまで展開した巨大な白鯨艤装。吠えることも無ければ、潮を噴くことも無い。そういうところは艤装なのだろう。

何故だかついている赤ん坊のような腕で這いずり回りながら、真っ先に狙ったのはやはりと言っていいかはわからないが戦艦棲姫である。

「こんなのと真正面からやり合おうだなんて思わないわよ……！」

これは流石にまずいと、戦艦棲姫も回避に専念する。この質量を押さえ込めるほどの膂力は流石に無い。立ち向かったら最後、艤装も本体も粉砕されてしまう。

「アッハハハ！　さっきまでの威勢はどうしたのよ！」

さらに艤装の上から杖による砲撃も追加。高台から一方的に砲撃を乱射して蹂躙し、そこにいる４人を嬲り殺そうとスタミナ度外視で暴れ回る。

白鯨に触れたらほぼ終わり。そこに砲撃まで加わったことで、回避する場所自体を制限される。コロラドはそこも狙って暴れ回っていた。

「何なのさアレ！　砲撃も全然効かない！」

「縛り付けようと思っても大きすぎて無理です！　避けるしか」

「砲撃が鬱陶しいわね！　このクソ鯨！」

三者三様の反応ではあるが、総じて必死に回避するしかなくなっている。

これをどうにかするには、選択肢は２つしか無い。１つはコロラド

のスタミナ切れまで粘ること。そしてもう1つは。
「こんなの、本体をヤれば終わりでしょうが！」
叢雲が取った選択。白鯨を無視して、その上に立って見下すコロラド本体を斃してしまえば、この猛攻は終わる。白鯨はあくまでも艤装。本体がいなければその存在を維持出来ない。
しかし、その本体までの道が遠い。巨大な白鯨の上に陣取るということは、この暴れ回る巨体を登らなくてはならない。それだけでも至難の業なのに、さらにはコロラド自体が上から攻撃を加えてくるのだから、近付く隙は無いと言っても過言では無いだろう。
ここに空襲が出来る者がいたらまた話は変わっただろうが、残念ながら戦艦棲姫以外は艦載機とは無縁の全員駆逐艦。さらに戦艦棲姫は戦艦であるため攻撃機は扱えない。出来ても偵察機程度だ。
「本体狙えるのは……あたしと薄雲だね。薄雲、鎖目いっぱい伸ばしたらアレに届く!?」
本体を狙うために白鯨を登らずに済ませるためには、砲撃で撃ち落とすか、白露や薄雲が扱う鎖付きの武器でダイレクトに狙うかになる。砲撃は一直線にしか飛ばないため、コロラドを狙おうにも簡単に避けられる上に状況次第で白鯨に弾かれる。実際に白露はコロラドを狙って砲撃を放っているのだが、暴れ回る白鯨にそれを何度も弾かれている。
そうなると、使えるのはある程度の自由が利く鎖付きの武器。白露は錨、薄雲は主砲だ。特に薄雲の主砲は曲がった後にさらに別の場所に放てる曲芸のような攻撃まで可能だ。今はそれが最もコロラドに通用する。
「届き……ます、届かせます！」
「あたしも頑張るからさ、とりあえず吠え面をかかせてやろう！」
この白鯨をどうにかするキーパーソンとして選抜されたことに若干の緊張感を持ちつつも、この危機を乗り越えるために立ち向かう。
「だったら、私達がサポートするわ。叢雲、いいわね？」
「あのクソ戦艦が叩き落とせるなら何でもやるわよ。薄雲が鍵だって言うなら、私がその背中を押してやるわ。一応私も姉なんだから」

「いいわ。なら私は白露を援護する。行くわよ」
白鯨の猛攻を回避しながら、戦艦棲姫は白露と、叢雲は薄雲と合流し、その攻撃を援護しつつ身を守ってやる。2人が斃れたらそのまま持っていかれるだろう。身を挺してでも守らなくてはならない。
「2組に分かれたところで、今の私には関係ないわ！」
しかし、コロラドの猛攻は一層勢いを増す。白鯨の尾鰭が錨のような形状へと変化し、グルングルンとのたうち回るように周囲を薙ぎ払う。ただ突進されるだけでも回避に専念しなくてはならないのに、ここまでされるとさらに回避が厳しくなる。むしろ、近付くことが出来ないのが問題。
「白露、大丈夫かしら」
「問題無し！　ちょいちょいしんどいけど、まだやれる！」
暴れ回る尾鰭の風圧に体勢を崩されつつも、その場からは一歩も退こうとしない白露を守るべく、戦艦棲姫が艤装と共に盾となる。
白露の方へと飛んでくる砲撃をどうにか弾き飛ばしているため、白露は大きく傷つくことはない。その間にも、鎖付きの錨を振り回しながら上に投げるタイミングを見計らっている。
「薄雲、アンタが要よ。私が守ってやるんだから、しっかり決めなさいよ！」
「は、はい、やります！　やってみせます！」
同じように叢雲も薄雲の前を陣取り、その砲撃を斬り払いながら薄雲を守り続けた。
戦艦棲姫と違うところは、叢雲自身も白鯨やコロラド本体に向かって攻撃を繰り出し続けていること。何かしら自分でも有効打が無いかと模索していた。
「あの艤装、魚雷も効かないのはインチキね……硬すぎるわ」
しかし、その全ての攻撃が跳ね返されているのを確認している。戦艦棲姫の砲撃すらも弾いているので、駆逐艦の砲撃はまるで効かない。そして魚雷すらも効かないとなると、艤装だけは無敵であると感じる。だからこそ、本体を狙った方がいいと言い切ったのだ。
だが、自分の攻撃がまともに効かないことに苛立ちがどんどん募っ

ていく。そもそも溢れている怒りがより強くなっていた。
「イライラする、なんであんな奴がこんな強い力を持たなくちゃいけないのよ」
その苛立ちを口から出すほどにイライラしながらも、薄雲のために道を切り開こうと白鯨に立ち向かう。
砲撃が効かないならば、自慢の槍もまるで歯が立たない。自分の攻撃が全て無意味にされている。ここまで何も出来ないことがあまりにも腹が立ちすぎて、叢雲は手が震える程に力んできた。
「この怒りを、苛立ちを、憎しみを、恨みを、全部アイツに吐き出してやる。一回殺すだけじゃもう抑えられない。何度も、何度も、何度も何度も何度も串刺しにしてやる！」
その怒りは全て槍に込められていく。それに気付いた薄雲が、白鯨の猛攻の中隙を探しつつも、叢雲の異変にも目が行った。
「姉さん、それ、思い切り解き放てば効くかもしれません……！」
その槍が、少しだけ大きくなっていた。まるで叢雲の膨れ上がる怒りに呼応するように、艤装そのものが変化しようとしている。
ならば、この全力の怒りを槍に乗せて解き放った時、槍はとんでもない変化をするのではないか。薄雲はそう考えた。
「怒りを解き放つ……いいわよ。私の怒りを、思い知らせてやるわ！」
「はい！　姉さんの怒りを、ぶつけてください！」
もう殆ど八つ当たりみたいなところもある。だが、ずっとずっと耐え続けていた怒りが溜まりに溜まってストレスとなっているのは確か。そのストレスを槍に乗せて、今も溢れ続ける怒りを更に乗せて、白鯨に向けて突き出した。
瞬間、叢雲の槍が猛烈に伸びた。
「ちょっ、アンタ何を!?」
「ぶち抜いてやるわよ、そんなゴミみたいな鯨！」
燃え上がり続ける怒りを糧にしてグングンと伸び、さらには太くなり、硬くなる。もう槍とすら言えない、破城槌の如き存在へと昇華した。
「鯨ってんなら、もっと可食部くらい増やしてこいっての！　そんな

筋張った身体、クソ不味そうだわ！　だから、ぶっ壊れろ！」
最後は理不尽な怒りまで上乗せされ、その怒りと対象となっている白鯨の口内を貫く。
本来ならば全く通用しない一撃だっただろう。だが、今の叢雲の怒りは、本当に今まで発散出来なかった全ての怒りの集合体だ。怒れば怒る程力を増し、そして、全てを貫く刃となる。
そして、
「ぶち抜けぇ！」
その巨大で強大な白鯨は、叢雲渾身の一撃で串刺しとなった。
「ふ、ふざけるな、何なのよそれ！　私の艤装を、そんなことで」
「せっかく姉さんが作ってくれた隙です。有効に使わせてもらいますよ」
「おうさ、叢雲最高にカッコよかったよ！」

この隙を薄雲も白露も見逃すわけが無かった。白鯨の上を陣取るコロラドへ向けて、薄雲は主砲を、白露は錨を投擲。しかも、叩きつけるような角度で振り下ろした。

叢雲の覚醒

交戦中、コロラドが本当の艤装という生体艤装、白鯨を展開したが、怒りを発散することによる新たな力に目覚めた叢雲の渾身の一撃により白鯨そのものを貫いた。これにより大きな隙が出来上がる。

「せっかく姉さんが作ってくれた隙です。有効に使わせてもらいますよ」

「おうさ、叢雲最高にカッコよかったよ！」

この隙を薄雲も白露も見逃すわけが無かった。白鯨の上を陣取るコロラドに向けて、薄雲は主砲を、白露は錨を投擲。しかも、叩きつけるような角度で振り下ろした。

「こんな、ところで、負けるかぁ！」

しかし、コロラドもタダでは転ばない。２人の攻撃を、持っている２つの艤装で食い止める。白露の錨はロブスターのハサミで挟み、薄雲の主砲はカニの甲羅の盾で受け止めた。ガギンと酷い音が鳴ったが、疲労を見せるもののコロラドは無傷だ。

わざわざしっかりと主砲を盾で受け止めている辺り、スタミナを消費した上に予想外に白鯨がやられてしまっても頭は回っているようである。ここでさらに砲撃と行きたかったが、盾であるためにコロラドに攻撃は届かない。

「しぶといなぁホントに！　前のあたしもあんなだったっけ?」

「うざさは似たようなモンよ」

白鯨を貫いた槍を本来のサイズに戻した叢雲だが、これだけでは怒りはまだ発散されない。これだけのことをやったというのに、まだ斃れないことに苛立ちが止まらない。そしてその分だけ、また力が扱える。

槍に再び力を込めると、まだまだ変化させることを実感出来る。一撃で破壊出来ないのなら二撃、それでダメなら三撃と、ダメージを積み重ねれば最終的には斃せるはず。そして一撃積み重ねるごとに叢雲の苛立ちは膨れ上がるため、殆ど無限ループに入る。

「同じことを、何度も喰らう私じゃないわ！　Ｉ，ｌｌ　ｋｉｌｌ

ｙｏｕ！」
　ロブスターのハサミで挟んだ錨を振り回そうとしたことで、白露は咄嗟に艤装を消す。そのまま持っていたら腕が持っていかれていただろうし、白露自身が振り回されて海面や白鯨の胴体に激突させられていただろう。海面ならまだしも白鯨の胴体だと、普通以上にダメージを受ける。
　さらには薄雲の主砲を杖で払い除けつつも絡め取り、そのまま突き付けることで薄雲自身に狙いを定める。鎖を消す以外の選択肢を与えないが、そんなことをする前に動きを固定化したことで、回避をさせないようにしていた。
　１人ずつ確実に始末すると、ここに来て妙に冷静なコロラドは、まず真っ先に狙ったのが薄雲である。手近だったからというのが一番の理由だが、本能的に最も始末しやすい者であると判断したというのもある。
「薄雲！　ボーッとしてんじゃないわよ！」
　しかし、それを防ぐのはやはり叢雲である。戦艦棲姫と白露が組んで行動しているため、薄雲の場所には手が届かない。叢雲は元々組んでいたのだから、当然守ることが出来る。
　コロラドが放った砲撃を、叢雲はいとも簡単に斬り払った。速さと力を兼ね備えた存在へと成長した叢雲は、薄雲を守ることも容易い。
「ぼ、ボーッとしてませんよ。鎖を引っ張られて、消す瞬間を狙われたんですから」
「ったく、アンタなら躱せてたかもしれないけど、私がいなかったら多少傷付いてたかもしれないでしょうが。白露とかが傷付くのは何の痛みもないけど、アンタは一応私の妹なんだから、もっと強く在り続けなさいよ」
　口は悪いが、薄雲にはそれが激励であることがわかっている。伊達にこの叢雲の妹をやっているわけではない。
　叢雲も怒りに塗れながらも妹のことを思っている部分が出ている。少し歪かもしれないが、姉妹がちゃんとやれている。
「戦艦が一番うざったいと思っていたけど、考えを変えるわ。アンタ

が一番よ、Ｓｐｅａｒ　ｓｏｌｄｉｅｒ！」
　叢雲の急激な成長、最早覚醒と言ってもいいほどの力の発揮に、コロラドの中の無意識な格付けが変動していた。所詮近接攻撃くらいしかしてこないと叢雲のことを甘く見ていたが、自慢の白鯨を貫くまでされたら、戦艦棲姫よりも優先順位が高くなるのは必然。
「それはこっちのセリフよコロ助が！　私の怒りはアンタら全員に行ってんのよ！　ここで始末してやる！」
　最初から救うつもりなんて毛ほども無い叢雲にとって、コロラドが何を言おうが斃す以外の選択肢は無い。むしろ、口悪く罵られれば罵られるほど怒りが募り、叢雲はより強い力を得ていく。
「アンタだけはここで終わらせてやる。Ｂｒｉｎｇ（かってきなさい）ｉｔ　ｏｎ！」
「終わるのはアンタよ！　その筋張った鯨ごと、海の藻屑にしてやるわ！」
　これだけ時間をかけても、未だ白鯨は半壊状態を維持し続け、コロラドはその上から見下しているのみ。とはいえ、白鯨はのたうち回ることは出来なくなっていた。それでも、あくまでも自分が上なのだと知らしめるように、絶対に白鯨から下りようとしない。
　それがまた叢雲の苛立ちを加速させる。今度は白鯨ではなく本体を貫いてやろうかと槍を握る手に力を込めた。
「あら、私達のこと、忘れてるのかしら。貴女の敵は叢雲だけじゃないわよ」
　そこに乱入するように、戦艦棲姫が白鯨の上まで跳んできていた。自らの艤装を使い、コロラドの近くにまで投げ飛ばさせたのだ。
　コロラドの意識が叢雲と薄雲の方へと向いている隙に回り込み、この行動に出た。勿論白露も、消した錨を再度展開し直している。
「このっ、寄ってたかってぇ！」
「だから、貴女達にそういうことは言われたくないのよ。平和な島にわざわざ襲撃してくるような連中、何されたって文句言えないでしょうに」
　戦艦棲姫の砲撃は、またもや甲羅の盾で弾き飛ばした。しかし、スタミナが大きく減少している今、コロラドはそれだけでもふらつく。

叢雲に白鯨を貫かれたのは、本体にも大きな影響を与えていた。戦艦棲姫もそうだが、本体と艤装は痛みなどは共有しないが繋がっている部分もある。いくらでも展開出来るからと言っても、破壊された部分を即座に修復することは難しい。何故なら、本体にも影響が及んでいるからだ。

艤装が破壊されれば、その分スタミナが削られる。それは誰だって同じ。春雨の義脚や海風の義腕もその影響下に置かれている。疲れればもう一度構築するなどは出来なくなる。

それでもコロラドは半壊状態の白鯨を維持し続けているのだから、消耗は全て本体に乗ることになるだろう。結果がコレだ。今まで出来ていたことが出来なくなる。

「っしゃあ、もういっかぁい！」

そのふらつきを見逃すわけもなく、今度は白露が先程と同じように錨を振り下ろす。鎖による遠心力を充分に使った一撃は、二度目だからか先程よりも速く、そして威力も高い。

「そんな野蛮な攻撃に、私がやられるかぁ！」

同じ攻撃をしたということは、同じように防がれるということ。猛烈に突っ込んでいく錨はロブスターのハサミにより挟まれ、すんでのところで食い止められてしまう。

しかし、二度目のそれは一度目のそれとは違う部分があった。白露は同じことをしたが、コロラドの消耗が激しい。それ故に、

「なっ」

ハサミにヒビが入った。そもそも一度目の攻撃を受けた時に酷い音が鳴っていたのだが、その時に既にハサミは脆くなっていたのである。

艤装の破損は本体へと影響する。痛みは無くとも、疲労感が一気に駆け巡る。コロラドのふらつきはさらに強く。

「そこから、下りてください！」

さらには薄雲からも同じように主砲が投擲される。こちらも白露に倣ってより強めに遠心力をかけて。

「同じことを何度も何度も！　私がそんな攻撃でっ」

これも先程と同じ攻撃であるため、同じように対処しようと盾で防いだ。だが、コロラドの消耗はさらに加速する。盾にもピシリとヒビが入った。
「上から見てんじゃないわよ！」
そして力を溜め込んだ叢雲が、もう一度槍を突き出す。それはまたもや叢雲の怒りを反映するかのように巨大化し、今度は口から通しての串刺しではなく、真横から装甲を破壊した。
のたうち回り、暴れていたその時とはまるで違い、装甲そのものも脆くなっていた。叢雲による一撃が相当に効いていたか、まるでガラスを叩き割るかのように突き破っていた。
もう殆ど攻城兵器である。巨大な艤装を使えば使うほど叢雲は怒りを覚え、その分力が増していく。今まさにその真価が発揮されているのだ。
「きゃっ!?」
白鯨がそこまでやられたら、コロラドもまともに立ってはいられなくなるだろう。ふらつきはさらに酷くなり、その場に崩れ落ちた。杖で身体を支えることで膝をつくことはなかったが、代わりに白鯨は音を立てて壊れていく。
「私はアイツ（春雨）ほど甘くない。救うなんて甘っちょろい考えなんて持ってないわよ。アンタにはここで確実に死んでもらう。この島に攻め込んできたことをあの世で後悔しろ」
槍のサイズを元に戻した後、その切っ先をコロラド自身に突き付ける。狙いは当たり前のように左胸、心臓。一撃で終わらせてやると容赦なく振りかぶる。
だが、コロラドはここまでされてもまだ諦めていない。
「まだよ」
崩れていた白鯨のカケラが叢雲の槍の軌道を逸らした。崩壊した白鯨を内側から再構築しようとしたことで、コロラドを包み込むようにその形を作ろうとしている。
この意地に、叢雲は一瞬恐怖を感じてしまった。ここまでされても諦めず、尚抗おうとするコロラドは、敵とはいえ感心すらしてしまう。

しかし、コロラドが再構築しようとする白鯨は、もうそのカタチになることは無かった。最後にコロラドを守るだけ守って、カケラも霧散。コロラドもそれと同時に気を失った。
完全にスタミナ切れ。傷は殆どついていなくとも、白鯨を使い続けたことによる体力の枯渇。もう起き上がるどころか目を覚ますだけの力も残されていなかった。
「……アンタ、めちゃくちゃすぎるわよ。こんなにギリギリまで粘るだけ粘って、勝算があるにしてもやりすぎ。他の連中なら撤退だって考えるでしょ」
こんな相手をわざわざ殺そうだなんて思わず、叢雲も槍を消した。瞬間、猛烈な疲労に襲われて膝から崩れ落ちる。
「姉さん!?」
「腹が立つほど疲れたわ……」
二度も繰り出した槍の巨大化は、怒りを込めた渾身の一撃だったのだが、後々に響いてくる諸刃の剣。膨れ上がった怒りだけでは、あんなことは出来ない。叢雲の体力も根刮ぎ奪い取り、全てが終わった後にその代償を払うことになった。
だが、叢雲は久しぶりに気分が晴れやかになっている気がした。溜まりに溜まった怒りをああいうカタチで発散することが出来たからか、今だけは怒りが溢れ出そうとしない。今だけは、怒りの無い真っ白な状態だと思えた。だから気を失ったコロラドに追撃をしようとも思わなかったようだ。
「甘いもの食べたいわ……こんな時間だけど」
「戻ったら何か食べましょう。誰も咎めませんよ」
「咎められても困るわよ……自分で歩くのもキツいわ。曳航してちょうだい」
「はい。じゃあ鎖を握ってもらって」
叢雲と薄雲が帰り支度をしている中、白露と戦艦棲姫は気を失ったコロラドの対処。それに、まだ戦いは終わったわけではない。
「春雨、春雨はどうなった!?」
落ち着いたところでハッと気付いて、春雨達の戦場を見る。そこ

は、思った以上に凄惨な光景だった。
「え、ええ……あれ春雨がやったの……？」
戦っていたはずの大鳳は血塗れで横たわり、片腕が鋭利な刃物で切り取られている。そして春雨は返り血を浴びているような状況。今はその血を雨と海水で洗い流しているところだった。
大鳳をあそこまで痛めつけたのだとわかると、一体何が起きたのだと勘繰ってしまう。
「い、一旦あたしは春雨と合流する。戦艦さんはコロ助のことお願いしていい？」
「ええ。コイツが泥を吐き出すかもしれないから、慎重に運ぶわ」
「うん、そうして。ちょっと春雨が心配になってきた」
妹達の心境が心配になった白露は、コロラドのことを任せて春雨の元へと駆け出した。

大鳳とコロラドはこれで撃破となる。まだ泥を吐き出しているわけでは無いのだが、勝利したことには変わりない。
残すところは潜水艦姉妹なのだが、こちらはこちらで波乱に満ち溢れていた。

哀れな人形

時は少し遡る。
ミシェルを攻撃し、未だ近海の深海にいるであろう潜水艦姉妹を追う伊４７と、海上からそれを援護するジェーナスは、施設から少し離れたところまで来ていた。ジェーナスのソナーは2人の存在を感知出来ているのだが、その動きはやたらと速く、また伊４７もそれを追随するスピードで追いかけているため、爆雷による攻撃はかなり難しい状況にあった。
そもそもが夜であり、雨すらも降るこの海上では、ソナーの反応だけが頼り。それが微妙にブレるほどの速さは、海上艦には厳しいものだった。
「ああもう！　夜の潜水艦は本当にキツいわ！」
独りごちるジェーナスだが、ミシェルにあんなことをした潜水艦姉妹は絶対に許せないと、爆雷を握りしめる手に力が入る。
「見つけた……！　流石ヨナね、真っ直ぐ見つけに行ってる。私だけだったらこんなに簡単に見つけられなかったかも」
伊４７の反応についていくことで、潜水艦姉妹の反応まで捉えることが出来た。海上でソナーを頼りに動き回るジェーナスと比べると、海中の目である伊４７の方が潜水艦を追うのに適している。むしろ、海中に潜った時点で既に見えていたのかもしれない。
その速度も、最大戦速で駆けているジェーナスよりも速いまであった。伊４７が先行していたため、ここまで追いつくのも必死だったのは言うまでも無い。
「ヨナに当たらないようにしなくちゃ……！」
ここからは爆雷を投下し、伊４７の行動を阻害しないように潜水艦姉妹の進路を邪魔していく。
自分で対潜は得意な方と言っているだけあり、その精度はかなりのもの。これが普通の潜水艦相手ならば、ここまで苦戦することは無かっただろう。しかし、上から来る爆雷がわかっているかのようにヒラリヒラリと避けていくため、有効打が一向に入らない。

とはいえ、潜水艦に対して爆雷が直撃すれば、おおよそそれだけで決着がつく。あちら側はそれも見越して、回避性能に特化しているようにも思えた。
だからこその、伊４７。追い込み漁を手伝っているだけあって、潜水艦姉妹の行動を逐一判断して、的確な位置を陣取ろうと泳ぎ続けた。
その巨大な艤装を最大限に利用し、普通の潜水艦では出せない速度で動き回るため、潜水艦姉妹もこれには面倒臭そうな視線を送った。
「ヨナ、怒ってます」
前を駆ける潜水艦姉妹に聞こえているかはわからないが、忌々しげに吐き出す伊４７。
いつもは幸せアレルギー故に仲間達との交流に制限があるものの、みんなに理解されているおかげで楽しく生きているため、基本的には笑顔を絶やさない。
しかし、今は心底気分が悪そうに顔を歪め、その姉妹に対して全力の嫌悪感を隠してもいない、
「ヨナ達は、ただ静かに暮らしたいだけ。ミシェルちゃんも、貴女達が来なければ静かに楽しく生きていけた。なのに、あんな怪我をすることになったのは、なんで？」
問い掛けるものの、振り向くこともなく避け続ける。合間合間に後方に向かって魚雷を放ってくるが、伊４７はそれを易々と回避する。スピードが乗っていようが、細かく動きつつも距離を詰める姿は、さながら伊４７自身が意思を持つ魚雷のようだった。
伊４７の艤装はより速く泳げるように腕を前に伸ばし、口から魚雷を吐きながらもその手で捕まえようと猛追する。潜水艦より明らかに巨大であるのだが、そのスピードは明らかに他より速い。
「何か邪魔をした？　それは必要なこと？　貴女達に危害を加えないモノを攻撃する理由は何？　納得出来るなら、追いかけ回すのやめてあげるヨナ」
静かに言い放つも、伊４７は自分で宣言した通り怒りを露わにしている。何を言われても納得はしないだろうし、ミシェルをあした報

いを受けてもらわないと気が済まない。
「わかった。話す」
「うん。話す」
今までさんざん逃げ回っていた潜水艦姉妹が突然動きを止めた。急に素直になったことに驚きを隠せない。
そして、こんなことをしている理由を、２人で声を揃えて話す。
「依頼されたから」
あまりにも単純。そして、施設にとってはあまりにもくだらない理由だった。誰かに頼まれたから、施設に害を為そうとしている。この２人にとってはただそれだけだった。
鎮守府襲撃の時もそうだ。頼まれたから重傷を負った龍驤の撤退を手伝った。多少悪態をついたのは、依頼されたことと少し違うこと、龍驤がコテンパンにのされていたから。泥を設置したのも、そうしてくれと頼まれたからに過ぎない。
前回の戦いでも、頼まれたから施設を探した。そうすることでどうなるかは知らない。それを妨害されたから、やり返しただけ。本人達からすれば、ただの正当防衛なのである。
結果、この２人には善意も無ければ悪意も無い。言われたことをただやるだけ。そこにどんな意思が乗っていても関係ない。この２人の意思ではないのだから。
だからこそ、この２人は施設に辿り着いてしまった。雇い主がどういう意図で施設を探し求めているかを考えていない。
「……それだけ？」
「それだけ」
「頼まれたことをしてるだけ」
あまりにも感情が乗っていない。ただの操り人形とすら思えるほど。こうやって話しながらも、ジェーナスの爆雷はヒラリヒラリと回避しているため、戦闘能力はかなりのものとも見える。
この潜水艦は、以前に北上が言っていた通り、多くの潜水艦が混ぜ込まれた個体。そのため、自分で自分が判別出来ないという状態にある。片方だけでなく、両方である。ある意味、疑問が溢れ出して何も

わからなくなったミシェルと近しい。
感情が無いのも、混ざり合い過ぎてわけがわからなくなった結果。喜怒哀楽がグチャグチャになって、相殺されて全てが失われたようなもの。
「じゃあ、ヨナ達からもお願い。そっとしておいて」
僅かな希望に賭けて、2人にお願いしてみる。
「ダメ。貴女達のお願いは聞かないように言われてる」
「依頼に含まれてる」
しかし、事前に対策されていたようで、依頼主からの依頼しか聞かないようにされているようだった。
それで素直に言うことを聞いている辺り、この2人は妙に素直。悪意が無いために非常に戦いづらい。
「じゃあ、今回の依頼は？」
聞けるのならと試しに聞いてみるが、2人は無言。秘匿義務があるようだ。そういうところは律儀。
「邪魔をするなら、反撃する。それだけ」
「依頼の邪魔はダメ」
そういうところから、ミシェルを攻撃したという。施設に近付いたことをミシェルが勘付き接近したことは、『邪魔をした』に含まれるらしい。
「……それはダメだよ。間違ってる」
怒りだけでなく、悲しみまで含まれた複雑な表情で2人の潜水艦を見つめる。今にも泣きそうな、哀れみすら感じているような、そんな表情で。
ただ生きていただけなのに殺され、それを利用されて作り出されただけなのに、感情を奪われ、ただ依頼を受けるだけの悲しい人形。
今まで見てきた中でも、最も壊れてしまった存在とも言えるだろう。自分がわからなくなっていても楽しく生きているミシェルは、壊れていても哀れでは無いが、この2人はそこからさらに存在意義すらも奪われてしまっているようなモノ。
「話はそれだけ。依頼の邪魔をするなら」

「排除する。依頼をちゃんと終わらせなくちゃいけないから」
今まで逃げ回っていたが、伊４７からは逃げられないと悟ったのか、急に反撃に打って出た。２人揃って魚雷をこれでもかと放ち、伊４７を始末しようと一転攻勢。
「……そっか」
これだけの魚雷を放てるなら、ミシェルがああなってしまったことに納得しつつ、あのミシェルにここまでの攻撃を仕掛けたことにさらに怒りが込み上げてくる。
「じゃあ、やり返されても文句ないヨナ」
対する伊４７は、たった１人で同じくらいの魚雷を展開。自分がやられないようにするためもあるが、ここで互角になることで、海上からのジェーナスの爆雷も命中しやすくなるだろうという算段。
潜水艦は基本的には魚雷しか扱えない。巨大な艤装を手に入れた伊４７も、そこは例外ではない。むしろ、海中で主砲が撃てたところで威力は半減どころか激減している。まともに使えるかもわからない。
結果、潜水艦同士の戦いは不毛に終わる。お互いに何も出来ないと言っても過言ではない。目の前で放たれて、目の前に飛んでくる魚雷なんて、見て躱せるというのが潜水艦の共通認識なのだから。
しかし、逃げられないほどの数を放てば話は変わる。それが伊４７であり、潜水艦姉妹のやり方。範囲を広く、そして多く。たった１人の潜水艦相手ならばそれでいい。ミシェルもそれでやられたようなもの。
「すごい。同じくらい出された」
「うん、すごい。こんなの初めて見た」
感心しているような言葉だが、全く感情が乗っていない。
だが、ここで緊急事態が発生する。今まで海上から降ってきていた爆雷が、ここで突然途絶えてしまった。
「ジェーナスちゃん、どうしたの……？」
流石にそれは伊４７としても不安に思い、戦闘中であっても海上に目を向ける。そこでは、想定外のことが起きていた。

海上。ソナーで感知していた潜水艦姉妹の反応の動きが緩やかになったことに気付いたジェーナスは、今が爆雷を投げるチャンスだとその真上に立つ。

しかし、その行動に出る前に、この戦場に向かってくる影が目に入った。まさか、他の敵がこの戦場に乱入してきたのかと、すぐさまそちらを確認した。

「Ｗｈａｔ？」

その影は、ジェーナスも知る者だった。

「て、Ｔｅｓｔｅ!?」

乱入してきたのは、コマンダン・テスト。しかし、その表情は施設の中では見たこともないような形相。叢雲が怒りに震えている時ですら、ここまで顔は歪んでいない。

血走った眼で周囲を見ながら、ミシェルに重傷を負わせた犯人を探していた。展開されていた尻尾の艤装は、その感情を表すようにのたうち回り、溢れる感情が隠せていない。

生に執着し、他者の死を極端に嫌うコマンダン・テストからは考えられない程の殺意が溢れ出していた。

「Ｏ▪　ｓｏｎｔ　ｌｅｓ　ｅｎｎｅｍｉｓ」

ジェーナスのことは認識出来たようで、一言ボソリと呟く。その声も聞いたことが無いほどにドスが利いており、ジェーナスは一瞬震え上がってしまう。

「な、え、え？」

「Ｏ▪　ｓｏｎｔ　ｌｅｓ　ｅｎｎｅｍｉｓ」
（敵は何処にいるんですか）

まともに話すことも出来ないくらいに正気を失っているのがわかった。あまりのことにあたふたしてしまうジェーナスを余所に、コマンダン・テストの眼がグリンと海中に向く。潜水艦の存在に気付いたらしい。

ミシェルは潜水艦にやられたという断片的な情報から、海中にいる者は全て敵であるという認識にすり替わってしまった。そこに伊４

7がいるにもかかわらずである。
「Ｅｎｎｅｍｉ（敵）……Ｔｏｕｔ（全部）ｃａｓｓｅｒ（壊します）」
何を思ったのか、尻尾の先端を海中に突っ込んだ。
「Ｔｏｕｔ（全部）ｃａｓｓｅｒ（壊します）」
そして、海中に向けて猛烈に魚雷を発射した。一切の躊躇なく、それが当たるかもわからないのに、海底を全て破壊するかの如く。
静かに、しかし狂気に染まっているコマンダン・テストに、ジェーナスは戦慄した。発作を起こして暴れ回っているのではなく、発作により生まれた怒りの矛先を破壊することで自分を落ち着けようとしている。
こうなったコマンダン・テストは、そう簡単には止められない。潜水艦姉妹がこれで倒れたとしても、伊４７の反応がある限り止まらない。潜水艦を全て始末するまでは、コマンダン・テストの怒りは発散しない。
「Ｔｅｓｔｅやめて！　海の中にはヨナもいるの！」
ジェーナスの悲痛な叫びも、今のコマンダン・テストには届かず。素知らぬ顔で海中を攻撃し続ける。
「やめて！」
それを止めようと縋るジェーナスだったが、邪魔をするものとみなして手を振るい、魚雷を一時的に止めたかと思うと尻尾まで振り回した。
こんなものに当たったらジェーナスとてひとたまりもない。さすがにまずいと重装の艤装を展開したが、その勢いにやられて大きく飛ばされた。文字通り、ボールがバットで打たれるように。
「Ｎｅ（邪魔）ｐａｓ（をしない）ｄ（でください）▪ｒａｎｇｅｒ」
ジェーナスが吹っ飛んだことを確認した後、またもや同じように尻尾を突き入れて魚雷を放ち続ける。もう敵も味方も無かった。
怒りのままに暴走を続けるコマンダン・テストを、ジェーナスは自分では止められないと悔やむ。だが、ここでさらなる乱入者。

「Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、いい加減になさい」
それを追ってきたリシュリューが戦場に現れる。暴走したコマンダン・テストを止められるのは自分しかいないと、目の前に立った。

同郷の友

施設を襲撃した潜水艦姉妹を迎撃する戦いの中、暴走したコマンダン・テストが敵味方の区別をせずに海中に魚雷を乱射し始めてしまった。海中には敵の潜水艦姉妹だけでなく、それを追って交戦している伊４７もいるというのに、怒りの矛先が潜水艦と広い範囲になってしまっているのが大問題。

ミシェルが重傷を負ったことで起きた発作が今までにないところにまで来ていたため、コマンダン・テストは完全に理性を失っていた。怒りを発散出来る先が近くにいるというだけでここまでになってしまうなんて、誰も思っていなかった。

「Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、いい加減になさい」

そんなコマンダン・テストを止めるため、それを追ってきたリシュリューが戦場に現れる。

施設の中では最も親しく、共に遠征に向かって長く一緒に暮らしている仲。コマンダン・テストの暴走を食い止められるのは自分しかいないという自負を持ってここに立っていた。

「Ｎｅ　ｄ・ｒａｎｇｅ（邪魔をしないでください）　ｐａｓ」

「するわよ。今の貴女は見ていられない。そこにヨナがいることがわかっていないくらいになってるのは見過ごせないわ」

ギョロリと理性のない眼で睨み付けるコマンダン・テストだったが、リシュリューはその程度では怯みすらしない。

「Ｊａｎｕｓ、Ｅｓｔ（大）―ｃｅ　ｑｕｅ（丈）ｃ，ｅｓｔ（夫）　ｂｏｎ？」

コマンダン・テストの艤装によって吹っ飛ばされたジェーナスを気遣うリシュリューだったが、ジェーナスはしっかりと艤装を展開していたので無傷。重装のそれはそう簡単に壊れることはなく、球体状の艤装の中で転がる羽目になって酷い目に遭った程度で済んでいる。

「Ｉｔ，ｓ　ｏｋａｙ．　怪我は無いわ。私、ヨナの方を手伝いたいの。Ｔｅｓｔｅの方、お願いしていい？」

「Ｂｉｅｎ（勿）　ｓ・ｒ（論）．　このＴｒｏｍｐｅｒ（おバカ）を正気に戻すわ。貴女は貴女の仕事をしてちょうだい。この子をどうにかした後にＲｉｃｈ

ｅｌｉｅｕも手伝うから」
　ジェーナスにはヨナの援護をしてもらわなくてはならない。コマンダン・テストがそれを邪魔するようなら、しっかりと躾をしなければとリシュリューは小さく溜息をついた。
「まさかここまでになるとは思っていなかったわ。犯人が近くにいるっていう状況がダメだったのかしらね」
　ジェーナスが伊４７の援護を再開出来たことを見届けた後、リシュリューもコマンダン・テストを冷たい瞳で見つめる。表情は冷え切っていても、嫌悪感は見えていない辺り、やはりコマンダン・テストのことを正しく友として認識しているまま。
「Ｓｉ（邪）ｔｕ（魔）ｔｅ（を）ｍｅｔｓ（す）ｅｎ（る）ｔｒａｖｅｒｓ（ら），ｊｅ（容）ｎｅ（赦）ｔｅ（は）ｐ
　もう理性の一片も残っていないコマンダン・テストは、リシュリューすらも敵として認識してしまっていた。
　コマンダン・テストの壊れた理性では、ミシェルに重傷を負わせた潜水艦は全て殲滅、それを邪魔する者もその仲間だという認識である。海中より海上の方が戦いやすいのもあり、リシュリューの優先順位を上げた。
　既に、コマンダン・テストから見たリシュリューは、あれほど頼り合っていた仲間でも友人でも何も無くなってしまっていた。
　リシュリューとしては、それが一番悲しかったのだが、表には絶対に出さない。ここまで狂ってしまった友を見ていると、悔しさで歯軋りをしてしまいそうになっていたが。
「好きになさい。でも、貴女はＲｉｃｈｅｌｉｅｕをどうにも出来ない。ちゃんと無傷で正気に戻してあげるから、安心なさい」
　リシュリューが言い終わる前に、コマンダン・テストはリシュリューに突撃していた。長く伸びた尻尾を振り上げ、のたうち回らせながら、リシュリューを始末するために全力を振るってきた。
　これの相手が艦娘だったりしたら、尻尾に薙ぎ払われてそのまま重傷、悪いと即死までである。だが、リシュリューと同胞（はらから）。しかも、同じように尻尾の艤装を扱う戦艦である。
「本当にＲａｉｓｏｎ（理性）が無くなってしまっているのね。Ｒｉｃｈｅｌ

ｉｅｕが貴女を止め続けてきたことも忘れてしまっているのかしら！」
リシュリューが艤装を展開した瞬間、もう殆ど終わっているようなものだった。
その尻尾は尋常では無い長さと大きさ。コマンダン・テストの尻尾も本体の倍近い長さを誇っているのだが、リシュリューの尻尾はそれを優に超えていた。
本体のおおよそ5倍。そもそもリシュリューがコマンダン・テストよりも大きいため、その尻尾は比較するのも烏滸がましい程の差があった。
「っ」
「部屋の中で暴れるだけならここまでしないのだけれど、こんなに開けた空間なんだもの。使わないわけがないわ」
襲い掛かってくるコマンダン・テストの尻尾を絡め取り、そのまま締め上げる。
しかし、本能的にまずいと思ったか、即座にその尻尾を消して再展開。拘束を回避してもう一度身体を捻り、今度は直接ではなく主砲を向けた。
「あら、本当にＲｉｃｈｅｌｉｅｕを殺すつもりなのね。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ……そこまで溜め込んでいたのかしら」
コマンダン・テストの形相を見ているだけで、リシュリューはいたたまれない気持ちになる。絶対に元に戻してやろうという気持ちが一層強くなる。
「今までさんざん止めてきたんだもの。こういう時もあったわね」
砲撃は重ね合わせた尻尾により完全にガード。いくら深海棲艦化して強大な力を持ったとしても、同じように深海棲艦化してより強大な力を得た戦艦には、火力も装甲も届かない。
そしてこのリシュリュー、こと装甲に関してはジェーナスと同等かそれ以上のモノを備えていた。見た目で硬さがわかるジェーナスの重装甲とは違う、単純な厚さ。そして硬いだけでなく柔らかさも兼ね備えたことにより、並の砲撃では傷一つつかない強靭さ。

「大分前に陸に近いところで発作を起こしたのよね。その時以来かしら。ここまでのＧｒａｎｄｅ（大）（喧）ｑｕｅｒｅｌｌｅ（嘩）をしたのは」
遠征の時、ここまででは無かったが理性を失って暴れそうになったらしい。それを止めたのは勿論リシュリュー。むしろ、リシュリュー以外に出来る者がいなかったのだが。
その時はどうにか人間にも艦娘にも深海棲艦にもバレないように対処が出来たのだが、まだその時には慣れていなかったリシュリューは、コマンダン・テストと互角、むしろ一時圧倒されてしまい、発作を止めることは出来たものの、重傷までは行かずとも傷を負うことになってしまった。
「なんだか懐かしいわ。でもね、もうあの時のＲｉｃｈｅｌｉｅｕじゃないの。別にＦｏｒｍａｔｉｏｎ（トレーニング）したわけじゃないけれど、心の持ち方が違うわ」
さらにコマンダン・テストは魚雷まで繰り出してきたが、それは尻尾を海面に叩きつけることで全て破壊。その爆発に巻き込まれても、リシュリューの艤装は傷一つついていなかった。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは、貴女を、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅを常に守ってあげる。そう決めたのよ。あの時にね。もう何処にも傷を負わせない。Ｃｏｒｐｓ（身体）にも、心にも」
これだけのことをされても、２人とも傷がない。無傷のまま、コマンダン・テストに怒りを発散させつつ、徐々に追い詰める。
今のリシュリューには、コマンダン・テストの全てをぶつけても何も効かない。冷静に理性的に考えることが出来れば話は変わるが、発作によって理性を失っているコマンダン・テストに、今のリシュリューを乗り越えることは不可能。
「Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、少しこちらに来なさい」
そしてついに、尻尾がコマンダン・テストの本体を捕らえる。
「っ!?」
何かをする余裕を与えずに引き寄せ、強く抱き締めた。その時の衝撃は相当なもので、コマンダン・テストは強く胸を打ったことで咳き込むことになる。

そんな状態になっても気にすることなく、コマンダン・テストを傷つけることもなく、戦艦の膂力で動きを完全に封じる。理性を失い、全力でもがき苦しむコマンダン・テストでも、リシュリューの全力には敵わない。
「いい、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ。落ち着きなさい。こんな雨の中なんだもの、頭を冷やしなさい」
頭を撫でながらさらに尻尾で包み込み、強く強く自分の熱を伝えた。雨の降る深夜だからこそ、より近くにいることを実感させる。
「貴女の気持ちはわからなくはないわ。仲間が傷付けられて辛い、悔しい、腹が立つ、全部わかる。特に貴女は、死が絡むとその気持ちが膨れ上がることは理解しているつもり。でもね、周りが見えなくなるのはよろしくないわ」
耳元で囁くように叱りつける。だが、怒りなどの負の感情は一切無い。ゆっくりと、やんわりと、その思いを伝える。
「大丈夫、Ｍｉｃｈｅｌｌｅは死なない。あの子はそんなヤワじゃないわ」
恐れている仲間の死は起きない。それを頭に刻み込むように、じっくりと、だが止めることなく。
「落ち着きなさい、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ。大丈夫よ。Ｔｅｒｒｉｂｌｅ（最悪）なことにはならないわ」
リシュリューに囁かれ続けることで、コマンダン・テストの息遣いに変化が見られた。怒りに呑まれたことで興奮気味だったそれは、ようやく正常に落ち着こうとしてきている。
暴れるから止まらない。故に、縛り付けてでも止めることで、心身共に鎮めることが出来た。
しかし、落ち着けば落ち着くほど今度は自己嫌悪の気持ちも膨れ上がり、逆に冷静さを失い、そしてまた暴れる。
これも以前の発作による暴走であったこと。リシュリューはそこまで理解し、尻尾を巻き付けて落ち着かせている。これ以上暴れ回ることは、コマンダン・テストにとって悪いことにしかならない。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕの声がちゃんと聞こえているかしら。もう元の

Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅに戻ったかしら」
拘束を解いてやる。すると、自分の脚で立つことが出来ず、膝から崩れ落ちた。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ……私は……また……」
「ええ。でも、貴女のそれは仲間を思ってのことだもの。誰も咎めない。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕも、みんなもね。ヨナも気にしないはずよ」
立ち上がれるように手を貸すリシュリュー。しかし、コマンダン・テストはすぐに手を取れない。
「全く。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、シャンとなさい。落ち込むくらいなら、今からＲ▪ｃｕｐ（挽）▪ｒａｔｉｏｎ（回）しなさいな。むしろ、貴女も手伝いなさい。今はＪａｎｕｓだけでヨナの援護をしているの。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは潜水艦には少しＮｅ（不）ｐａｓ▪ｔｒｅ（得）ｂｏｎ（手）▪なんだもの。貴女の方が得意よね？」
自分のためにも立ち直れと、無理矢理手を引いて立ち上がらせる。自己嫌悪で立ち上がれないのならば、リシュリューがそれを手助けする。
同郷だからこその縁もあるが、ここまで長く付き合ってきたことも大きい。お互いにもうただの仲間という域を超えている。
「さぁ、行くわよＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ。貴女がやることは決まっているでしょう」
小さく微笑み、コマンダン・テストの肩をポンと叩く。
「……Ｏｕｉ」
コマンダン・テストも力強く頷く。

発作はひとまず落ち着いた。問題点はまだまだあるが、今優先すべきことは１つ。

無感情の２人

海上でいざこざが起きている間、伊４７は潜水艦姉妹と激戦を繰り広げていた。
上からの援護が突然止まってしまった理由は、コマンダン・テストの乱入であることはその目で確認している。
「コマさん……？」
と、コマンダン・テストが来たことがわかった瞬間、海中に無差別に魚雷が放たれた。明らかな暴走、敵味方の区別なく撃ち込まれるそれに、伊４７も驚きながら対処する。
「ヨナのことが、わかってない……？」
明らかに鏖殺の雰囲気があるこの雷撃に、伊４７は違和感を覚えたものの、コマンダン・テストの特性を正しく理解している伊４７は、これに関しては仕方ないと納得した。
ミシェルを見たことで発作を起こしてしまったことは、今まで聞いてきた話から察することは出来る。それで正気を失っているのも理解出来る。
「回避優先」
「うん、回避」
潜水艦姉妹も、伊４７だけでなく海上からの魚雷は流石にまずいと考えたか、一旦攻撃をやめて回避に専念する。
味方諸共自分達を始末しようとする気概は、姉妹も納得出来た。自分達があちらにとって邪魔であることは、考えるまでもなく明らか。感情が無くとも、むしろそうであるが故に、その行動に対して驚きも怒りも無い。当然であると思う。それほどまでに容赦無い乱射。
伊４７が少し驚いた顔をしているのをチラリと確認したため、そちら側でも想定外の戦術なのだろう。しかし、理に適っているのだから文句は無い。
姉妹の考え方は、あまりにも機械的で合理的。これが最善なのだと勝手に理解して勝手に納得する。そして、学ばない。
「コマさん……落ち着いて……っ」

伊４７には願うことしか出来ない。ここで姉妹から目を離すことは出来ず、だからといってこのままが続いてもジリ貧。最悪、コマンダン・テストの魚雷に直撃して終わってしまう。
それだけは絶対避けなければいけない。自分が死ぬことより、コマンダン・テストがそれで再起不能になることがよろしくないと。
伊４７は溢れた感情が『諦め』であるため、自分の生に対しては全く興味が無かった。だが、それで周りが傷付くのは見たくない。気質としては、春雨と近しいモノ。
「あっ」
そしてこの辺りでリシュリューの乱入。コマンダン・テストの魚雷の乱射はストップ。海上での大喧嘩が始まる。
攻撃が止んだことで、伊４７も姉妹も一瞬気が抜けてしまった。キョトンとした表情で海上を眺めてしまうが、すぐに気を取り直して攻撃を再開。コマンダン・テスト乱入前の状況に戻る。
ここで仲間同士がいざこざを起こしてしまっていることがバレたのは、あまりよろしくない。伊４７はそれだけを恐れた。
「上で何か起きてる」
「何か起きてる。でも、依頼とは関係ない。報告だけする」
幸いにも、潜水艦姉妹の依頼の中には、施設側の戦力をそういうカタチで減らすことは含まれていなかったようだ。伊４７と戦闘中とはいえ、やろうと思えばあの仲間割れに便乗して、泥をばら撒くなり何なり出来たはずだが、それをしなかったために融通は利かないと見える。
しかし、リシュリューとコマンダン・テストが争っていることは依頼主、つまりは黒幕に報告するということは、次からはそこを弱点として突いてくる可能性が非常に高い。そうなると、尚のことこの姉妹を逃がすわけにはいかなくなる。
「絶対に逃がさないヨナ」
「無事に帰るまでが依頼だから」
「邪魔をするなら排除」
伊４７に対しては結果的に依頼を邪魔する者としての認識で固定

された。ここで排除しておかなければ、今後の依頼も邪魔をされる。感情は無くても、それくらいの考えは出来るようである。
しかし、怒りを露わにするとか、嫌そうな顔をするとか、逆に楽しそうにするなんてことは一切無い。完全に無表情に徹している。感情が無いのだから、表情も作らないのだろう。そもそもがシュノーケルで顔の下半分が隠れているのだから、尚更無表情に見えるものである。
「……厄介ヨナ」
魚雷同士のぶつかり合いは、お互いに無傷のままの不毛な戦いが続くため、伊４７は忌々しそうに溢した。
伊４７は１人で２人と互角な雷撃を繰り出し続けられるものの、逆に姉妹側は２人でやっている分消耗が少ない。それならば、他の連中と同じようにスタミナ切れを待つというのもあるのだが、困ったことにこの姉妹は他の敵と違い、スタミナ不足という弱点が無かった。
これはやはり、混ぜられたモノが同じ艦種であったことが理由である。
古鷹や大鳳には戦艦が、龍驤には駆逐艦や軽巡洋艦が、そしてコロラドには同じ艦種ではあるが種族が違う存在が混ざっているために、デメリットが発生している。逆に白露は混ざっているのが同じ艦種、しかも姉妹ということで完全に馴染み、デメリットは生じていない。
この潜水艦姉妹は、白露と同じで同種の艦娘が混ぜられたモノであるため、デメリットを回避。代わりに感情が失われて心が壊れているのだが、黒幕にとってはデメリットとも感じない不具合。
「このままじゃ……多分どうにもならない。でも、どうにかしなくちゃ……」
伊４７は考える。魚雷の撃ち合いだけではどうにもならないならば、自分に出来ることは何か。
そして、ちょうどこの時にジェーナスからの援護が再開された。雷撃による競り合いのおかげで姉妹の動きが緩慢になっているため、爆雷による海上からの攻撃も当たりやすくはなっているはずだ。
しかし、姉妹は器用に爆雷を避けながらも伊４７に向けて雷撃を続

けていた。やはり目が2人分あるというのは大きく、魚雷の量は2人で伊47とトントンくらいではあるが、視界の数はそれを覆す。
「このまま撤退する」
「うん、撤退する」
　姉妹はもう撤退を目論んでいる。ある程度やることはやったため、もう依頼は達成しているということにもなるようだ。
　だが、チラリと別方向を確認したことで動きが変わる。
「大鳳さんがやられた」
「コロラドさんも危ない」
　この戦場から見れば、大鳳とコロラドの戦いは伊47でも目視は出来ない場所。海上からですら夜の暗さと雨のせいで見えない。それを海中から完全に見通していた。
　これがあるから、鎮守府での戦いや荒潮の時の遭遇でも龍驤を引きずって撤退することが出来た。施設を発見するのも、この視野の広さが決め手である。
「あれはもうダメ」
「助からない」
　その言葉は、魚雷同士がぶつかりあう爆発の中でも、僅かに伊47に聞こえていた。
　この戦場に来ていた2人の敵は、仲間達がどうにかしてくれた。それがわかっただけでも力が増すような感覚に。
「なら、尚更撤退する」
「うん、撤退しないとダメ」
　救っておかなくてはならない者がやられたことを見たため、本格的に撤退を考え始めていた。
　2人への依頼の最も重要なところは、艦娘達の如く『生きて帰る』ことにほかならない。今でこそ排除排除と戦っているが、やらなくていい戦いは全力で回避する。何故なら、最優先がそれだからだ。
　感情が無くとも、依頼が生きることならば、それこそ生に執着して徹底的に生きる道を掴み取る。それがまた施設側にとっては厄介極まりない。

故に、伊４７は覚悟を決めた。ここで逃げられたら施設はさらに酷い目に遭う。それだけは嫌だと、歯を食いしばった。
幸せアレルギーで、仲間達とも仲良く出来ない不憫な身体なのに、それでも仲間だ友達だと言ってくれるみんなが大好きだからこそ、ここでその仲間達のために身体を張らなくてはならない。そう考えて。
「絶対に、逃がさないヨナ！」
ここで突然、魚雷を一切撃たなくなった。さらには、姉妹２人分の魚雷を前にして完全な無防備。
「なにを」
「なにを」
２人同時に伊４７の行動に疑問を持つ。だが、その瞬間が命取り。
伊４７の艤装が大きく口を開いたかと思えば、今までとは比べ物にならないサイズの魚雷を発射する。
数本分を１本にまとめ上げたかのようなそれは、爆発した瞬間に周囲の魚雷を全て巻き込んでとんでもない爆発を巻き起こした。
「撤退するなら今」
「うん、今しかない」
この爆発に乗じて本格的に撤退をしようと踵を返した瞬間、その爆発の向こう側から大質量の突撃を確認した。伊４７が魚雷では無く自らを武器に突っ込んだのだ。
そのスピードは下手をしたら魚雷よりも速く、海中の爆発を霧散させるほどの勢いで姉妹の眼前に現れたかと思うと、艤装の豪腕により掬い上げるように捕らえようとした。
「逃がさないって言ったヨナ」
しかし、その手は姉妹に触れることも出来なかった。不意打ちに近い攻撃だったため、急浮上するように回避せざるを得なかったようだが、それと同時に真下に向けて雷撃まで放ってくる。
このままでは伊４７に直撃するルートだったのだが、そこは熟練者、スピードを一切落とすことなく駆け抜けたことで、雷撃を回避。そして急旋回することでもう一度掴み上げようと豪腕を振るう。
「逃げるから」

「ここにはもう用がないから」
そのもう一撃も空振る。さらに浮上され、そして同じように魚雷を放つ。
同じことの繰り返しではあるのだが、戦闘している場所は徐々に海面に近付いていく。そのおかげで、フリーとなったジェーナスがかなり狙いやすい位置にまで来ていた。
「Ｎｉｃｅよヨナ！　もっともっとＡｓｃｅｎｄさせてちょうだい！」
海上のジェーナスが勢いよく爆雷を投下。もう逃げられないくらいの面積を埋めるように、ここから逃がさないように。
上から下からの攻撃により、姉妹も撤退が困難になってきていた。だからといって排除も厳しい。しかし、逃げなくては依頼が達成出来ない。
今の姉妹の最優先は、生きて依頼主の居場所に戻ること。どういう状況であっても、施設側が勝利を収めたとしても、今持っている情報を持ち帰ることが何よりも大切なことだ。どんな手段を用いたとしても。
「アレ使おうか」
「うん、使おう」
そう言った瞬間、姉妹を中心に突然強すぎる光が放たれる。海中のみならず、海上にすら溢れ出したその光は、少なからずそこにいたものの目を眩ました。
隠密行動をする潜水艦がこんなことをしたら、自分の居場所をバラす以外に無い。しかも今は深夜であり、日中以上に目立つことになる。
だが、確実な撤退のために至近距離にある者達の目を潰し、一瞬だけでも隙を作ることで撤退の時間を強引に掴んだ。
攻撃することすらやめて、逃げることに特化したことで速度も上げる。そうなると、伊４７の全力と同じくらいのスピードが出てしまう。
「あっ、に、逃げないで！」

眩んだ目でもその方向をどうにか捉えた伊４７は、逃がすものかと魚雷を放つ。しかし、伊４７の全力と同じくらいのスピードということは、魚雷よりも速い。渾身の一撃も、全く追いつくことが出来なかった。

だが、海面にまでその光が届いたということは、全員が潜水艦の居場所に気付いたということ。勿論それは、コマンダン・テストもである。

正気に戻ったコマンダン・テストを潜水艦の真上、いや、進行方向に向かわせるため、リシュリューは自らの尻尾にコマンダン・テストを乗せる。

「いいわね、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ」

「Ｏｕｉ．　Ｒ・ｃｕｐ・ｒａｔｉｏｎさせてください」

コマンダン・テストの意気込みを察したリシュリューは、尻尾を振り回して思い切り投擲。魚雷よりも速く泳ぐ潜水艦達を追い抜く速度で進行方向に着水した後、即座に海中に尻尾を突き入れて魚雷を放ち続けた。

「また来た」

「うん、さっきのヒト」

まるで海中に魚雷のカーテンが出来たかのように進行方向を塞がれ、急ブレーキをせざるを得なくなる。そうなると、今度は伊４７が追い付いてくるため、進行方向を９０度曲がることに。さらにそこにはジェーナスが陣取っていた。先程と同じように爆雷をばら撒き、魚雷までとはいかないものの爆発の壁を作り上げた。

撤退するための方向は、もう１方向しかなくなる。それは、施設に近付く道となった。それはもう撤退ではない。

もう殆ど捕らえたようなもの。しかし、この２人には諦めるという言葉は無かった。そんな感情すらも、持ち合わせていないのだから。

その危機を救うのは

大鳳を撃破した春雨と海風は、その返り血に泥が混じっている可能性を考えて、すぐに身体を海水で念入りに洗い流していた。
咄嗟に服の下にインナーを作っていたので肌に直接触れることは無かったのだが、それでも影響が無いとは限らない。海風はモロにそれを受けていても問題は無かったが、今この大鳳の体内に含まれている泥が以前よりも強力なものになっていないとは限らないのだ。
「は、春雨、これアンタがやったの……？」
コロラドを撃破したことで一旦妹達と合流した白露が、目を白黒させながら春雨に尋ねる。
何せ、今の大鳳は片腕が切り落とされ、胸にも蹴りましたと証明するような傷があり、顎にも酷い殴打の痕があった。対する春雨は海風と共に無傷。それに、爛々と瞳が輝いている割には、その表情はスンと冷静。
切り落とした腕はその時に海中に沈んでいってしまったが。
「はい、私が。海風に手伝ってもらって」
「……そっか。いや、ビックリした。ここまで痛めつけてるとは思わなかったから」
「こうしないと、私が殺されていました。本当に手を抜くことが出来ない相手でした」
冷たく言ってのけるが、春雨の手は今更ながら震えていた。戦闘中は答えに辿り着き、冷静に冷酷に事を成したが、全てが終わった後に身体が自分のやったことに恐怖しているかのように落ち着かなくなる。
そして、瞳の輝きが収まると同時に悪寒とは違う感覚で身体が冷え切ったようにすら感じた。
「その、自分で自分が怖くなりました、はい」
チラリと大鳳を見る。今はピクリとも動いてないが、時折痙攣のようなものがあるので、まだ死んではいない。
だがここで気になるのは、未だに泥を吐いていないこと。ここまで

やったら死に瀕しているとして泥を吐き出してもおかしくないのだが、まだ粘ろうとしているのか。気を失いかけている状態でも、春雨を始末しようと喉に手を伸ばしてきた程なのだから、執念は尋常では無いのかもしれない。
「春雨姉さんの手を汚させるわけにはいきません。本当に始末をするのなら海風がやりましょう」
「大丈夫、しなくていいよ。それに、私の手なんてもう取り返しがつかないくらいに汚れてるから」
主砲を構えて大鳳に向ける海風。春雨を全力で殺そうとした時点で海風にとっては死んでもいい存在。春雨以上に容赦なく引き金を引くだろう。
しかし、春雨は首を横に振った。この大鳳はきっとここから泥を吐き出す。それならば、助かる可能性が高い。これほどまでに痛めつけてしまったものの、大鳳だって被害者なのだ。死んでいないのなら助かってもらいたい。
「流石は春雨姉さんです。あれ程までに危険な目に遭いながらも、命を狙ったそれに慈悲を与えるだなんて。もう女神と言っても過言では無いのでは」
「過言だよ。白露姉さんだって元に戻れたんだから、大鳳さんも元に戻るはずだからさ。そうなったら、また仲間が増えるはずなんだ。私は、出来ることなら仲良くなりたい」
だが、大鳳には大きすぎるトラウマを刻んでしまっている可能性は高い。目覚めた『辿り着く力』を存分に使い、圧倒的と言っていい程の力で捩じ伏せた上に、腕を失い傷も酷い。今はまともに話せるかもわからない。
「……っうっ!?」
すると、大鳳が突然嘔吐(えず)き始める。気を失いながらもビクンと震え、体内からほぼ寄生しているのと同じ泥が溢れ出した。
「おっ、おぼぉっ!?」
顎をやられているため、吐き出すだけでも激痛が走っているだろう。そのせいで失っていた気を取り戻し、目を見開きながら泥を吐き

出し続ける。
その度に痛みで身体を震わせ、腕の切断面から血を撒き散らした。その血の中にも泥が混じっているように見えたため、春雨の洗浄は正解だったと言える。
「かひっ、ひっ、えほっ……っあ、う」
おそらく吐き出し切ったというところで春雨が大鳳をその場から引っ張り、泥から離した。同時に白露がその泥溜まりに向けて砲撃を放ち、即座に霧散させる。
これによって大鳳は支配から抜け出すことが出来た。しかし、ここからが本当の戦い。泥が抜け出したということは、大鳳は耐えなければ間もなく息絶えるということにほかならない。
「あ、うぅぅ……っ」
今にも命の灯火が消えてしまいそうな状況なのに、今までやらされてきたことを走馬灯のように思い出させられ、大鳳は気が狂いそうなくらいの感情の奔流に苛まれる。
元々が生真面目な性格だからこそ、この苦しみは深い。むしろ、死んでしまいたいとすら感じてしまうかもしれない。
そして、その視線が春雨を捉えた瞬間、さらに目を見開いた。自分と最後に戦っていた張本人。今までは自分が力でねじ伏せる側だったが、逆にねじ伏せられたことで、それは予想以上に恐怖を駆り立て、そして真逆の感謝の気持ちをも湧き上がらせた。
ここでこうされていなければ、自分はまだまだ罪を犯し続ける。それを止めてくれたのは感謝しか無かった。しかし、どうしてもあの冷酷な攻撃には恐怖を感じてしまう。
「大鳳さん、私がこういうことを言うのは違うかもしれませんが……」
泥の処理のために引っ張っていた大鳳と向き合う春雨。その表情を見て少し悲しそうにするものの、自業自得だとその気持ちを振り払う。そういった部分の割り切り方も、戦闘の時と同じように出来るようになっていた。
「生きてください」
たった一言。今まで自分と殺し合いをしていた者からの言葉に、違

う意味で目を丸くする。だが、春雨の人間性は戦いの中でわかっていた。
最初は大鳳を傷付けずに救いたいと迷い続けて、まるで全力を発揮出来ていなかった。被害者である大鳳を傷付けたくないという、春雨の根幹にある優しさ。
そして、海風の命懸けの叱咤により吹っ切れた後は、それこそ容赦無く辿り着く力を振るった。それは傷付けてでも大鳳を救いたいという、春雨に生まれた覚悟。
「……っ」
全身、特に切り落とされた腕の痛みが酷かったが、大鳳は心を強く持った。そんな春雨に対して恐怖を感じるだなんて失礼に当たる。そうでなければ自分がこの春雨を殺してしまっていたのだから、同じようにされても何もおかしいことではない。
優しいのにそこまでの覚悟を持って事に当たった春雨には、敬意も込めて、大鳳は痛みを堪えながら首を縦に振った。
「ありがとうございます。それと、後から謝らせてください。腕のこととか……いろいろと。でも、今は……私、行かなくちゃいけないところがあります」
再び春雨の瞳に輝きが灯る。その輝きは、大鳳にとっても希望の光のように見えた。
「白露姉さん、大鳳さんのこと、よろしくお願いしていいですか」
「いいけど、どうしたの」
「多分ですが……施設が危険です」
今の春雨には、急いで施設に戻らなくてはいけないという道がチラついて見えていた。悪寒という体感ではなく、明確にやるべきこととして。
その目は、今までになく強い意志を持っていた。春雨がこんな表情をすることに白露は少し驚きつつ、それを尊重する。ここまで容赦無い攻撃をしかけた春雨は何かが変わってしまったのでは無いかと勘繰ったが、根幹の部分は何も変わっていない。愛すべき妹だと、白露も納得する。

「そっか、わかった。大鳳さんは戦艦さんにお願いしてコロ助と一緒に施設に運んでもらう。だから、急ぎな。アンタがそう言うんだから、施設がまた狙われてるのかもしれないんだ」
「それじゃあ、お願いします。海風、行くよ！」
「はい、姉さん！」
死にかけだが生きる意志を見せた大鳳は、今までの白露や古鷹のように大丈夫なはずだ。だから、次の危機を救うために春雨は行動に移す。大急ぎで施設へと戻り、この直感で得た感覚の答えを探り出す。

一方、諦めることなく逃げ回る潜水艦姉妹は、自然と施設へとまた近付いていた。死なずに依頼主の下へと戻ることを最優先に動いていることで、結果的に追い込み漁の如く追い詰められている。
「いい加減に、止まって」
追いかけ回すのは勿論伊４７。そして海上からも攻撃を止めない。どうせなら同じ方向に逃げさせようと、施設から離れるような方向には絶対に行かせないように爆雷と魚雷を駆使して、ジェーナスとコマンダン・テストが進路妨害をし続ける。リシュリューも水上機を発艦させて海面に近い位置を牽制。
敵をまた施設に近付けることが正しいことかはわからない。むしろ、厄災を運び込むような行為になってしまうかもしれない。しかし、この潜水艦姉妹を撤退させるのはそれ以上に問題あることだと、この場にいる全員が同じ認識をしていた。
「依頼は生きて帰ることだから」
「止まったら依頼が達成出来ない」
「だから止まらない」
「止まらない」
回り道をしてでも撤退に尽力する姿は、敵では無かったら感心していただろうが、その立場的に厄介極まりない。そもそもが回避性能に特化しているのか、どれだけ攻撃しても掠りもしないのがさらに悪質。

本当はこうやって攻撃せずに、無傷で捕らえられるなら捕らえたかった。しかし、感情が無いが故に恐怖も感じなければ諦めることもない姉妹は、ある意味最もやりづらい。
「またここに来た」
「だったら、やれることを全部やる」
「それがいい。その上で撤退する」
「うん、撤退する」
そして、海上からは暗い中でも施設が目視で確認出来るくらいの場所にまで来たところで、姉妹は怪しいことを話し出す。やれることというのは、先程の目眩し以外にも多種多様にあるのかもしれない。
おそらく、依頼内容に含まれていないからやっていないというだけ。緊急性が無い限り、それは先程の目眩しと同じように諸刃の剣となる可能性はある。
「何をするつもり？」
伊４７もそこを警戒する。相手は同じ潜水艦に見えて、何かが違う。潜水艦以外は混ざっていないのに、深海棲艦化しているおかげでやれることの幅が広がってしまっている。それは伊４７も同じなのだが。
「秘密兵器」
「うん、秘密兵器」
持ち出したのは、今まで放たれていた魚雷とは雰囲気が違うモノ。秘密兵器というだけあって、それを使うこと自体が姉妹としてはあまりやりたくないことの様子。
おそらく、依頼主からもそう言われているのだ。本当にまずいという時にのみ使うことが許されたその武器を、逃げながらも伊４７に……ではなく、海面に向けた。その方向にいたのは、ジェーナス。
「また貰う」
あまりにも不穏な言葉に、伊４７は姉妹を追うことよりジェーナスを守ることを優先した。
しかし、その時にはその魚雷は放たれた後。それは真っ直ぐジェーナスに向かう。

「ジェーナスちゃん、避けて！」
海中で叫んでもジェーナスには聞こえない。だがその前に、コマンダン・テストとリシュリューがその魚雷に気付いて迎撃する。
コマンダン・テストの魚雷は惜しくも外れてしまったが、リシュリューの攻撃機が海面にスレスレのところでその魚雷を撃ち抜いた。その時にはジェーナスもそこからは紙一重で避けていた。
しかし、それは処理されることを前提とした魚雷だった。
リシュリューの艦載機が撃ち抜いた瞬間、魚雷は大きな爆発を――しなかった。むしろ爆発自体は小さい。
しかし、そこから現れたのは、あの泥、悪意の塊。爆発のように溢れ出したそれは、一番近くにいたジェーナスを包み込もうと、まるで巨大なスライムのように飛びかかる。これだけ大量だと、持っている本能的な意志もかなり強いらしい。
「えっ……」
泥を見たことで、ジェーナスはあの時のトラウマを一気に呼び起こされてしまった。吹っ切れたはずなのに、足が動かなくなってしまった。
これに取り込まれたら、またあの時のように仲間達に牙を剥いてしまう。甚振ることを喜ぶような、ゲスなサディストになってしまう。それなのに、怖くて怖くて身体が動かない。
「いや、いやぁっ」
悲鳴を上げることしか出来なかったが、そこに誰も予想していなかった黒い影が、猛烈なスピードで突っ込んできていた。
そしてそれは、そのスピードを維持したまま、しかしジェーナスのことを思って優しく突き飛ばし、泥の中へと突入した。
「う、うそ、なんで、なんで……」
あまりのことに、ジェーナスは茫然としていた。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……!?」
その黒い影は、ミシェル。ジェーナスを救うために、力を振り絞っ

てここまで来ていた、駆逐イ級だったのだ。

それは疑問ではなく

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……!?」

潜水艦姉妹から放たれた秘密兵器が爆発したことで発生した悪意の塊。それがまたジェーナスを侵蝕しようと襲い掛かった瞬間、ここにいないはずのミシェルが現れて、ジェーナスを突き飛ばした。

ミシェルのお陰でジェーナスは泥から回避することが出来たが、代わりに自ら泥に呑み込まれることとなってしまう。自ら突入したことで、ジェーナスに視線を向けることも出来ず、そのまま泥に包み込まれた。

「うそ、なんで、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、Ｗｈｙ（なんで）ｄｏ（そ）ｙｏｕ（んな）ｄｏ（こと）ｔｈａｔ（を）!」

話せるのなら何か話してくれたかもしれない。しかし、Ｍｉｃｈｅｌｌｅは何も話せない。そして、もうその身体は全て泥に包み込まれてしまったのだから、感情豊かな瞳も、その行動すらも見えなくなっていた。

自分を助けるために侵蝕されてしまうミシェルを助け出そうと手を伸ばすが、そんなことをしたらジェーナスも一緒に侵蝕されてしまう。しかし、ジェーナス自身が正気を失いかけていた。ほとんど躊躇なく泥の塊となったミシェルに駆け寄ろうとする。

「Ａｒｒ（やめ）ｔｅ（なさい）!　Ｍｉｃｈｅｌｌｅが何のために貴女を助けたと思っているの!」

それを寸前で食い止めるのはリシュリュー。ジェーナスを思い切り突き飛ばし、ミシェルから離れさせた。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅが!　Ｍｉｃｈｅｌｌｅがぁ!」

「落ち着きなさい!　侵蝕されても死ぬわけじゃないわ!　そこから救ってあげなさい!」

自分でも無茶苦茶言っているとしか思えなかったが、リシュリューはそれでもミシェルは生きているのだからまだ可能性があるとジェーナスを説き伏せる。

本人は謙遜するだろうが、春雨という侵蝕から解き放つ力を持つ者

だっているのだ。まだ終わりではない。
「ジェーナス、いいから今は落ち着くの。自己嫌悪が溢れている貴女には辛いかもしれないけれど、本当にＭｉｃｈｅｌｌｅのことを思っているのなら、この後のことを考えなさい」
落ち着かせるように抱き寄せる。それだけで済まないのならば、どうにかして気を失わせるしかない。
「あの泥の塊は……」
「ハルサメ……Ｍｉｃｈｅｌｌｅが、Ｍｉｃｈｅｌｌｅがぁ……」
そこに春雨も海風を連れて到着。そこに鎮座する泥の塊――ミシェルを見て、施設が危険だという直感がここに繋がったのだろうと悔しさを見せた。海風も大きくショックを受けたようで、歯軋りをしつつ視線を逸らす。
「……必ず救います。ミシェルちゃんは、必ず」
決意の力で、春雨の瞳はより強く白く輝く。
だが、ここで思い返してほしい。ジェーナスが侵蝕されたときは、春雨は激しい悪寒に見舞われた。だが今はどうだ。辿り着く力に目覚めたとはいえ、何も感じていないのだ。

泥に塗れながら、ミシェルはジェーナスが救われたことを心の底から喜んでいた。この泥の脅威についてはわからなかったが、怪我を押してここまで来た甲斐があったと。
施設を守るために必死に戦う姉妹姫には悪いことをしたかもしれない。そう考えつつも、ジェーナスを救えたことはミシェルにとって一番の喜びだった。無事に戻って、いっぱい叱られて、いっぱい謝ろう。そのためには死ねない。
――来て良かった。
だが、自分に対して泥が染み込んでくるのも感じる。傷を介して体内に侵入し、過剰な快楽を与えながらもその身体と心に影響を与える。痛みならば耐えようと考えるが、快楽ならば痛みよりも受け入れやすい。戦場で痛みに慣れている艦娘や深海棲艦だからこそ、この感

覚は回避不可能である。
これは、ミシェルも例外ではない。侵蝕が進むたびに、その身体をビクンと震わせる。意識を黒く塗り潰していき、黒幕の思うがままの悪意に塗れた存在へと生まれ変わらせられる。
――なにこれ？
しかし、ミシェルはここで今まで侵蝕されてきた者達とは違った思考を持っていた。この侵蝕に対し、溢れていた疑問がさらに溢れ出した。
何故自分はこんな状態になっている。これが何を意味するかがまるでわからない。そもそもこの感覚は何なのか。それすらもわからない。だからこそ、疑問が表に出てきた。
今のミシェルがわかっていることは、少しだけ。あの施設は自分の居場所。海を彷徨っていた自分がいてもいいと言ってもらえた大切な場所。そこの管理人である姉妹姫には、とても感謝している。
施設の者達は自分の仲間。身体を洗ってくれたり、一緒に魚を獲ったりと、楽しく生きていくために必要な友達。その中でもジェーナスは、何も知らない自分に生き方と名前をくれた、身を挺してでも守らなくてはいけないくらいに大切なヒト。
鎮守府の者達も、施設の仲間達と同じで楽しく生きるために必要な友達。会える機会は少ないが、会った時には可愛がってくれるから、鎮守府のみんなも好きなヒト達。
ならばそれ以外はどうか。ミシェルにはただただ疑問しか浮かばない存在。そして、理解が出来ない存在となる。
――なにこれ？
同じことしか考えられない。この感覚がわからない。何をされているのかわからない。そして、ここでミシェルの特性が発揮されることになる。
理解出来ないものは、その身に影響を及ぼさない。
ダイレクトに攻撃をされているところをその目で見ているのならば、攻撃されたと理解して身体にも影響がある。ダメージだって受けるし、痛みだって感じる。死にかけることだってする。

しかし、この泥の侵蝕は、実際に受けた者ですら理解が出来ない謎の現象。そもそもミシェルはこれを攻撃だとは思っていたが、どういうものかは全く知らない。ジェーナスからも聞いていないし、白露や古鷹からは以ての外。それ故に、この泥が何かすら知らない。

疑問が溢れたが故に生まれた、ミシェルにのみ与えられた能力。自分すら認識出来なくなった者が得た、最強の防御性能である。

――なにこれ？

どれだけ何かをされたとしても、ミシェルには本当に理解が出来なかった。身体がビクビクと震える。しかし、その理由がわからない。頭の中が黒く染まっていく。しかし、その理由がわからない。

泥に飛び込んだからこうなっているのだろうと予想出来ても、じゃあ何故泥がそんなことが出来るのだろうと考えると、やはり理解が出来ない。そして、特性により効果を及ぼさなくなる。

それが鎮守府の明石が解析した通り寄生虫だったとしても、ミシェルには通用しなかった。何故なら、それがわからないから。身体のカタチも不定形な存在に、寄生出来る道理は無かった。

――でも、ジェーナスちゃんが苦しんでる。

今理解出来るのは、これのせいでジェーナスが苦しんだこと。自分が突撃する寸前、ジェーナスの顔は恐怖に歪んでいた。ミシェルとて、恐怖という感情は理解している。わからなくはない。

大切なヒトがそんな顔をするのが、ミシェルとしてはとてつもなく気分が悪いものだった。

仲間達が苦しむことは嫌い。友達が嫌がることは嫌い。いくら疑問が溢れているからと言っても、それくらいはわかった。そうでなくては身を挺して守るだなんて選択は出来ない。

――これのせいで、ジェーナスちゃんが苦しんでる。

ミシェルは理解した。この泥は良くないものだ。普通なら理解は出来なかっただろうが、ジェーナスが拒んだということで、連鎖的に理解が出来た。

――助けたい。

今までずっと、自分のために動いてくれていたジェーナスに、恩を

返したいと思った。これは理解出来た。わからないなんてない。
しかし、泥はそんな思いすらも黒く塗り潰そうとしてくる。思うがままに操るために、侵蝕し、支配する。その魔の手は止まるところを知らない。
受け入れてしまったら、ジェーナスへの思いが消えてしまうだろう。むしろ、助けたいと思っているジェーナスにすら牙を剥くことになるだろう。そんなこと、ミシェルは望んでいない。
だが、ミシェルにはそんなことは起きない。侵蝕がここで動かなくなった。ミシェルの特性が、その侵蝕を完全に阻んでいた。理解が出来ない。わからない。それ故に、その効果を受けない。
この泥への理解を深めなければ、ミシェルは侵蝕に対して無敵だったのだ。何も知らないうちは、ミシェルには何も効かない。
――助けたい。
そこに、ジェーナスを助けたいという意志が生まれた。何もわからない、全てに対して疑問が生まれるミシェルが初めて手に入れた、こうしなければならないという思い。疑問も何もない。わからないはずがない。
ミシェルがこの姿になっているのは、自分自身のカタチがわからなくなったからだ。そして、黒い繭に包まれたままそうなったことで、駆逐イ級という姿を取っていた。
だが、今の姿のままではジェーナスを救うことは出来ないと、本能的に理解した。ここには疑問も浮かばなかった。救いたいという気持ちに、何一つ疑問は無かった。
――救うんだ。
心の力が膨れ上がる。ジェーナスを救うために、自分自身を変える。未だに自分が何者かはわからないけれど、そんなことは関係ない。自分が何者であろうとも、思いは1つだ。
――救うんだ！
その力は、ミシェルの内側から激しく溢れ出す。疑問を乗り越えて、確固たる意志を持って、ミシェルは今この時、孵化をする。

海上では、魚雷を放った潜水艦姉妹をどうにかするため、春雨と海風も参戦して戦いを続けている。しかし、海中の敵というのはどうしても撃破するのが難しく、春雨と言えども終わらせるための光る道が見えない。覚醒したとしても、不得手なことに対しては見えてこないのだ。

「深夜の潜水艦は……キツい……！」

ジェーナスが戦えなくなった今、コマンダン・テストと共に撤退だけはさせないように尽力する。

斃すための道は見えずとも、逃がさないための道は薄ぼんやりと見えていた。ここに爆雷を投げれば効果的であるという答えには辿り着けている。

だが、ここで海上にも異変が起きる。ミシェルが包まれているであろう泥の塊に、急激に変化が見られた。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……!?」

それに真っ先に気付いたのはジェーナス。その泥の塊は、さながら繭のように固まり、そして、ピシリと亀裂が入る。

「あれは……まさか、孵化!?」

春雨も直感的にそれが孵化であることに気付いた。海風のそれを見た時と全く同じ反応。周囲を埋め尽くしているのが、自分から出た泥ではなく、敵から受けた泥であること以外は、全て同じ。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ！　Ｍｉｃｈｅｌｌｅ！」

孵化を応援するかのように、ジェーナスは叫ぶ。あの泥さえ無くなれば、ミシェルは危機から脱することが出来るのだ。自分で出来ずとも、ミシェル自身がそれを望めば、きっといい方向に向かう。そう信じて。

その声は、しっかりとミシェルに届いていた。ジェーナスの声が聞こえる。自分を呼ぶ声が聞こえる。悲しませたくない。笑っていてほしい。そんな気持ちがさらに湧き上がり、内側から全てを吹き飛ばす力となる。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ――！」

最後の叫びに呼応するかのように、泥の塊は砕け散った。その中から出てきたのはミシェル……とは似ても似つかない、1人の少女だった。
見た目は深海棲艦と見ても間違いないだろう。腰まで伸びた白い癖のある髪に、仲間達と同様に白い肌。生まれたばかりであるために全裸ではあるが、それは誰もが通る道。ジェーナスだって自分がそうだったことはしっかり覚えている。
本来ならば自分が生まれた後の繭のカケラを取り込む必要があるのだが、泥の塊は即座に霧散してしまったためにそれは出来ない。しかし、確固たる意志を持って孵化したことで、その必要すら無かった。
「……ジェーナスちゃん」
その少女がジェーナスの方を見た。真紅の瞳が煌々と輝き、その姿を捉えた瞬間、ほにゃっと柔らかい笑みを浮かべた。
「ミシェル、ジェーナスちゃんと同じカタチになれたよ。これがミシェルの、本当のカタチなんだ。ジェーナスちゃん、ミシェルはこれでもいいかな」
初めての言葉による意思疎通。その少女がミシェルであることは、どう考えても明らかである。それをジェーナスが否定するわけがない。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ……本当にＭｉｃｈｅｌｌｅなのね！」
「うん、ミシェルだよ。んん、なんか違う、多分、こんな感じ、んっ、んんっ」
何か違和感があるのか、少しだけ頭を振って喉に触れる。わからない、理解出来ないなりにも、自分が艦娘であった時のことを本能的に模倣しようとした。
そして、
「ジェーナスちゃんを守るため！　ミシェルは、ヒトのカタチになることが出来たっぴょん！」
にかっと笑って、ジェーナスに飛び付いた。

ヒトのカタチ

泥に呑み込まれたミシェルは、溢れた疑問による特性により侵蝕を受け付けず、そして仲間を救いたいという心の力により覚醒。駆逐イ級という繭を突き破り、ヒトのカタチへと昇華した。

「ジェーナスちゃんを守るため！　ミシェルは、ヒトのカタチになることが出来たっぴょん！」

にかっと笑って、ジェーナスに飛び付いた。今までの大変さを微塵も感じさせないほどに明るく、ジェーナスとこう話せるようになったことを心から喜んでいた。

しかし今は戦場。こうしている間も、海中――足下では伊４７が潜水艦姉妹と向かい合い、春雨達が海上から牽制をし続けている。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、私もすっごく嬉しいけど、今は戦いの最中なの！　海の中にいる潜水艦の子達をどうにかしなくちゃいけないのよ！」

ジェーナスも喜びは大きいのだが、今はこの戦いをどういうカタチでもいいので決着をつけなくてはならない。喜び合うのはその後だ。

ミシェルも、自分を痛めつけた相手が海中にいるのは理解している。それは疑問にもならない。自分の目で見ているのだし、そもそもダメージを体感しているのだから、疑問になるわけがない。ミシェルにとっても、その潜水艦姉妹は敵という認識で問題ない。

「そうっぴょん。ジェーナスちゃんもそいつらに嫌なことをされたんだもんね。だったら、ミシェルが痛い目を見せてやるっぴょん！」

表情も無ければ四肢も無い状態でアレだけ感情表現が豊かだったミシェルが、表情どころか言葉まで得てしまったため、とてもハイテンションに全身を使って自分の感情を表した。駆逐イ級だった時の癖も残っているようだ。

ジェーナスとしても、ミシェルがここまで変わるとは思っていなかった。おそらくこの姿と性格が、話に聞いていた艦娘卯月なのだろう。妙な語尾がついてしまっているのも、その艦娘の特徴。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、その前に服を着ましょ。ほら、雨でビショビショになっちゃってるし、せっかくヒトの姿になったんだもの」

「服？　服って何ぴょん？」
あまりにも論外な言葉だった。
ミシェルの常識、理解していることは、とてつもなく狭い。駆逐イ級として見てきた施設で知ったこと以外は、ミシェルの世界には存在しないのだ。今までは服すら着ていなかったわけで、仲間達は服を着ていてもそれはそういうものとしてしか理解出来ていない。着たり脱いだりするものとは思っていない。そもそも着るという行為がわからない。
それほどまでに、ミシェルの知識は極端なのである。艦娘と深海棲艦としての本能として戦うという行為は理解している。施設の仲間達を守るという決意も出来る。感情だってしっかり喜怒哀楽が兼ね備えられている。しかし、それ以外はもう滅茶苦茶。生きていくための行為として、食べるということは理解していても、ミシェルはヒトの身体となっても生魚をゴリゴリと食べるだろう。
「えーっと、その、ほら、私が着てるコレ、コレ」
「あーっ！　みんなが身体にくっつけたヤツぴょんね！　それホントに必要なモノっぴょん？　今やらなくちゃいけないのって、海の中のヤツらをぶっ倒すことっぴょん！　ミシェル、いっきまーす！」
服のことはもう置いておいて、ミシェルは何を思ったのか海の中へと飛び込んでいった。
「ちょっ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ!?」
慌てて手を伸ばすが、ミシェルはもう海中だった。普通の駆逐艦ならば、そもそも潜ることなんて出来ない。むしろ、今のミシェルは孵化したばかりで艤装すら装備していなかった。
「大丈夫っぴょん。ミシェルが今までやってこれたことなんだから、カタチが変わった今でもやれるっぴょん！」
なんと、ミシェルはヒトのカタチとなっても海中で活動が出来た。それは駆逐イ級として活動していたのだから、ミシェルにとっては当たり前のこと。
そして、駆逐イ級から孵化した存在ということになるため、その特性は据え置き。当然海中に潜ることは出来た。

「Can（信）'t（じ） Believe（られ） It（な）！（い） Michelle、とんでもないわ!?」
流石のジェーナスもこれには驚きが隠せなかった。本当にミシェルがヒトのカタチをしているだけ。駆逐イ級が出来ることは、今のミシェルでも全て出来るということになる。
過去（艦娘）の自分のことを全て忘れているおかげで、戦い方の常識も駆逐イ級が基になっている。海上でも海中でも戦えるとなると、もう施設の中でもトップクラスの力を持っていると言っても過言では無い。
「ジェーナスちゃんを泣かせようとしたのは、何処の何奴ぴょん！
って、あの潜水艦の2人組だよね。何処にいるぴょん！ このミシェルがギッタンギッタンのグッチャグチャにしてやるっぴょん！」
海中まで一気に潜ってきたミシェルは、早速潜水艦姉妹の眼前に迫っていた。
伊47も流石にこれには驚いたし、潜水艦姉妹も感情が失われているにもかかわらず、全裸の少女が現れたことに唖然とした。どう見ても潜水艦では無い存在が目の前にいたら、こうもなろう。
「あ、ヨナちゃん、ミシェルも手伝うぴょん！」
「えっ、み、ミシェルちゃん!?」
潜水艦姉妹との激戦で、海上で起きていることが見えていなかった伊47は、当たり前のように海中に現れた少女があのミシェルであるということに、より一層驚くことになった。
キョロキョロと大袈裟に周囲を確認した後、唖然としている姉妹の姿を視界に入れた瞬間、ビシッと音が鳴りそうなくらいに力強く指を差した。
「オマエ達がみんなを泣かせようとしてる奴っぴょんね！ さっきはやられたけど、次はさっきみたいにいかないぴょん！ このミシェルが、オマエ達をメッタメタにしてやるぴょーん！」
そして、啖呵を切る。若干語彙が足りないのは、単純にミシェルにそこまでの知識が無いから。
「なにあれ」
「なにあれ」

潜水艦姉妹も、これくらいしか言うことが無い。秘密兵器として放った悪意をばら撒く魚雷によって、施設側の誰かを仲間に引き込んで脅威を排除しようとしたら、瀕死だった駆逐イ級が飛び込んできた挙句、新たな戦力として立ち塞がってきたのだ。
あまりにも理解が出来ない内容だった。本来の効果とは真逆の結果が出てしまった。聞いていた話と違う。ならば、あの駆逐イ級はなんだったのだ。疑問は尽きない。
「ヨナちゃん、あのお魚を捕まえる時のあれ、やるっぴょん。アレもお魚みたいなものだし、ミシェルとヨナちゃんでなら、いろいろやれるっぴょん！」
「えっ、あ、追い込み漁のこと……かな。うん、そうだね、ヨナ１人だとあの２人を追い込むのは難しかったけど、２人ならやれるヨナ」
「ぴょん！　あんなおっきいお魚なら、みんな喜んでくれるぴょん！」
ミシェルは伊４７との漁の経験がある。相手は潜水艦ではあるが、やることは追い込み漁と同じ。２人がかりで逃げ場所を固定して、海上の仲間達の手が届く場所まで移動させる。
潜水艦姉妹ですら、魚扱いである。別に相手を下に見ているわけではない。ミシェルはそういう知識しかないのだから仕方ないのである。
「それじゃあ、行くぴょーん！」
海中だというのに、殆ど潜水艦のように行動が出来るミシェルは、あまりにも例外が過ぎた。潜水艦姉妹にとっては、ミシェルの艦種すら理解が出来ない。
ミシェルはそんなことを気にせず潜水艦姉妹の右側へ。それに合わせて伊４７は左側へと向かう。眼前から一気に挟み撃ちの様相。
「なんかまずい」
「うん、関わってちゃダメ」
このミシェルの行動から嫌な予感がした潜水艦姉妹は、これまで以上に撤退の意思を固める。
秘密兵器を使った結果、新たな敵が生まれてしまったとなれば、これは突然仲間割れがあったこと以上に依頼主に報告しなければなら

ないこと。生きて帰る以外の選択肢が無くなったため、２人がかりの追い込み漁は無視してすぐにでも戻りたいと感じた。
「逃がさないぴょん！」
「向こうには行かせないヨナ」
　左右に散ったところで急旋回し、２人同時に姉妹に突撃。だがそれは体当たりをするとかそういうことではなく、施設から離れる方向の進路を完全に封じるため。
「邪魔」
「うん、邪魔」
　姉妹も黙って妨害されているわけがない。突撃してくるのなら、それに向けて魚雷を放てば簡単に迎撃出来る。躱されたとしても、進路妨害をさらに妨害して、逃げ道を作ることが出来る。
「ぴょっ!?　反撃してくるお魚とか普通いないぴょん！　でも、ミシェル負けない！　ヨナちゃんと一緒だから、上手く行くっぴょん！」
　その魚雷を華麗に避けて、あくまでも逃げ道だけは封じるように泳ぎ回る。攻撃してこないにしても、そもそも進路のど真ん中を陣取られたら、行けるものも行けない。
　放つところが見えている魚雷なんて、素人でも避けられる。ましてや、ミシェルは今まで海中でも活動出来ていたのだ。避けられないわけがない。さらりと躱した後は、施設とは逆方向へ。
「逃がさないヨナ」
　そして伊４７は逆方向へ。施設側にも行かせないと立ち塞がる。
「生きて帰ることが依頼だから」
「だから、邪魔しないで」
　ならば、前でも後ろでもない場所へと向かおうとするが、潜水艦姉妹はこの２人の動きに気を取られていたことで、海上のことが頭から抜けていた。
　右へ行こうとした瞬間、猛烈な量の魚雷が降ってくる。先程も同じようにされたため、その犯人がコマンダン・テストであることはすぐにわかった。まるでカーテンのように進路を塞がれ、こちらはダメだ

と早々に諦め逆方向へと向かおうとする。
だが、そちらもすぐにダメだと悟る。進路を埋め尽くすのではないかという爆雷の群れ。勿論それを投射したのは、真上にいる春雨と海風である。
「右も、左も、いけない」
「前も、後ろも、いけない」
そうなると、上か下しかない。しかし、上――海上に出ようものなら、海上艦達に狙い撃ちにされる。そうなると、向かう先はたった１つ。下――海底しかない。
勿論、それを見越した追い込み漁だ。相手側の行動範囲を極端に狭めて、思い通りに動かし、最終的に目的を達成する。海中に１人ならば逃げ道が出来ていただろうが、２人となった途端に密度が上がり過ぎていた。
「なら」
「下っぴょん？」
さらに急速潜航しようとした時には、ミシェルが既にその場所に移動していた。そして、ニカッと笑ったと思った瞬間、ミシェルは急速浮上を開始。
今なら逃げ道が開いている。ここから移動すれば、施設からも離れることが出来て、生きて帰ることが出来る。それなのに、身体が動かなかった。
追い込み漁の真骨頂。あらゆる逃げ道を考えさせることで、一瞬頭の中がパニックを起こす。嫌でも身体がピタリと止まる。頭が良ければ良いほど、パニックは顕著に。ミシェルが驚かせることも加味して一気に移動したため、余計に動きを止める結果になった。
「オマエ達が行くのは、上っぴょん！」
「うん、打ち上がってもらうヨナ！」
伊４７も真下に来ていた。普通なら追い込み漁で体当たりなんてしないのだが、相手がこれなら話は別。かなり強引な方法でも、仲間達のところに追い込む。
「ちょあーっ！」

ミシェルの掛け声と同時に、２人纏めて海上へと打ち上げた。主に伊４７の巨大な艤装の力なのだが、ミシェルの尽力もあってか、その衝撃から姉妹は逃げることが出来なかった。
「えっ」
「まずい」
そう思った時にはもう遅い。激しすぎる伊４７の艤装の尾鰭に打ち付けられた姉妹は、強烈な圧がかかって急浮上させられる。もがこうにもこの一撃は非常に重く、嫌でも海上まで打ち上げられた。
「こうなってくれれば、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕでもどうにか出来るわね。良い仕事よ、２人とも」
そして、リシュリューが尻尾の艤装によって打ち上げられた潜水艦姉妹を捕らえた。恐ろしく長いそれならば、姉妹を纏めて拘束することが出来た。

これにより、潜水艦姉妹も捕獲成功。殆ど無傷で攻略出来たのは僥倖と言えよう。

残された跡

雨降る深夜、施設に対する襲撃は、全員捕獲というカタチで幕を閉じる。しかし、既に泥を吐き出して正気に戻っているのは大鳳1人だけ。コロラドは艤装大破と過労から気を失い、潜水艦姉妹はリシュリューの艤装により拘束中。完全に終わったとは到底言えない状態である。

「そっちも終わったようね」

大鳳とコロラドを掴み上げた戦艦棲姫が合流。勿論、白露や叢雲、薄雲も一緒。叢雲は疲労から薄雲に曳航してもらっている程である。

大鳳を支えている方の手のひらはどうしても血塗れになっていたが、白露直伝の止血方法で、大鳳の流血はある程度止まっていた。特に一番危険であろう腕の切断面は、艤装の展開により蓋をするようにされており、春雨の一撃で折られた骨なども同じように固定して痛みを極力抑えられている状態。

それでも眠ったら終わりの可能性もあるので、深海棲艦特有の自然治癒能力で死を確実に乗り越えられるところまで来るまでは激痛により意識を保っている。

「う……やっぱりＢｌｅｓｓｕｒｅ（重）　ｇｒａｖｅ（傷）のヒトが……」

「コマさん、ごめんなさい。大鳳さんをこうしたのは、私なんです。自分達の身を守るためにここまで容赦なくやってしまって……」

春雨の攻撃によってここまで傷付いている大鳳を見てまた発作を起こしかけるコマンダン・テストだったが、先程に大きな発作を起こしたおかげか、まだ少し緩め。その怪我を負わせた張本人が目の前にいても、それが確実に正当防衛であることがわかっているのだから、怒りの発散と称した仲間割れがまた引き起こされることはない。

それに、今ここにいるということは、瀕死の状態であってもそのまま死に向かうことは無い。それが安心出来るところだった。大鳳の気力次第ではあるのだが、生きようとする意志が見えるため、コマンダン・テストは落ち着くことが出来た。

「この子達、まだ泥を吐いてないのだけれど、どうするのがいいかし

ら」
尻尾を掲げて悩むリシュリュー。少し強めに巻き付けることで、確実に脱出出来ないようにしつつ、さらに締め上げて体力を奪っている。反撃をすることは許さず、今はもう2人ともグッタリとしていた。
魚雷による自爆の恐れもあったものの、それをしなかったのはやはり、依頼が『生きて帰る』だからだろう。そういうところで融通が利かないのがこの姉妹のよろしくないところである。
「施設で縛り付けておくのがいいと思いますが、ひとまずは持ち帰って姉姫様に聞くのがベストじゃないかと」
そこに春雨が口を出した。それが正しいかどうかはさておき、ここでやれることなんて施設に連れ帰って泥を吐かないことを祈りながら鎮守府に連絡することくらいである。
こんな雨の中で外に放置しているのも酷だし、そもそも大鳳は今以上の治療が必要だ。春雨自身がやってしまったことであるため、すぐにでも施設に戻って看病したいと望む。
「それしか無いわよね。大鳳、それでいいわね？」
戦艦棲姫の問いかけに、まともに話せない大鳳は痛みを堪えながら首を縦に振る。唯一正気に戻っている大鳳がそう答えたので、それでも安全であろうと判断した。
増殖する特別な悪意の塊は、ここにいる大鳳を除く3人には入っていないらしい。強いて言うなら高高度を陣取っていた泥を散布する艦載機の内部に仕込まれていたのだが、それを扱っていた大鳳が斃れた今、それも今頃は消滅しているはずだ。
「で、ソイツは何者なのよ」
薄雲に曳航されて合流した叢雲が指を差しながら問う。触れてはいけないことかもしれないとなかなか話題に出さなかった戦艦棲姫と白露としては、叢雲のこの発言は大助かりだった。
明らかに見たことのない同胞（はらから）の少女が加わっているだけでも違和感が途轍もないのに、それが全裸であり、しかもジェーナスに懐いて抱きついているのだ。ジェーナスも迷惑そうにはしていないし、むし

ろ今まではあの件を開き直ろうと頑張っていた表情だったのが、そんなことを気にする余裕すらないくらいになっている。
「あれ、ミシェルちゃん」
「……は？」
「だから、ミシェルちゃん」
　春雨の言葉に叢雲は素っ頓狂な声を上げる。薄雲もキョトンとしており、戦艦棲姫と白露は春雨の言葉でも信じられなかった。
「いくら春雨でも、そんな馬鹿馬鹿しい冗談は面白くないわよ」
「冗談なんて言ってないよ。私達は本当に見たんだもん」
　春雨はその時に見たままを叢雲に説明。敵の攻撃を受けかけたジェーナスを庇って飛び込んだミシェルが、その泥を被ったことで駆逐イ級の姿から孵化し、今に至っているのだと。
　まともに聞いても信じられないことなのだが、こんな戦いの直後にそんな冗談が言えるほど、春雨の心は図太くない。ただでさえ目の前には自分が容赦なく傷付けた大鳳の姿もあるのだ。御伽噺で場を和ませようとかそういう考えには行けない。
「私も見ましたし、春雨姉さんが嘘を言うわけありませんからね。今のは全て真実です。姉さんを疑う前に、本人に聞いてみればいいのでは？」
「アンタねぇ……まぁお互い様か」
　春雨を疑ったことに反応した海風に突っ掛かられるが、叢雲は海風の性質も理解しているため、はいはいと受け流す。
　いつもの叢雲ならここから怒りが溢れてもおかしくないのだが、コロラドとの戦闘で怒りを発散しているおかげで、こういうところではいつも以上に冷静。喧嘩腰の言葉も無く、若干柔らかい態度。むしろそんな態度の叢雲に、海風が疑問を持つ始末。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、みんなにＧｒｅｅｔｉｎｇしましょ。ほら、みんなわかってないみたいだから。でもその前に服着ましょうね」
「服って身体にくっつけてるヤツぴょんね。じゃあ、ジェーナスちゃんみたいなのを～、ぴょーん！」
　掛け声と共に服を作ろうとしたミシェルだったが、やはり概念的に

理解していないからすぐには作れず、今は駆逐イ級時代に身体に纏っていたシーツが身体に巻きつく程度で終わってしまった。服の体裁すらなっていない。
　これにはジェーナスも苦笑し、この世界でヒトのカタチとして生きていく常識を正しく教えていかなくてはと決意する。
「ああ、うん、ミシェルだってことはよくわかったわ。何も知らないヤツが服作ろうとしてシーツ身体に巻き付けるとか考えないもの」
　叢雲も納得したようで、本当にミシェルが生まれ変わったのだと認識した。
　そうなると、ここからどうしていこうかとなるのは白露である。今は戦闘後なのでちゃんと白露の姿でここにいるが、白露の姿自体がミシェルに発作を起こさせるトリガーになりかねない。
　しかし、タイミング悪くミシェルの視線が合流した者達へと向いた。当然ながら白露も視界に入る。見た目を変える前だったため、白露は大慌て。
「ヒトのカタチになれたミシェルっぴょん！　改めて、よろしくお願いしまっす！」
　元気よくお辞儀。白露を見ても何の反応もしなかった。
　以前に見つけた三日月の形をした髪飾りを見た時は、疑問が溢れ過ぎて涙を流すことになったが、卯月からミシェルへと変わるきっかけを作った者の記憶は、より深いところに封じられているようだった。
　自分が何者かという記憶より、自分が死んだ理由の方が心を壊す。それ故に、無意識に絶対思い出さないようにと封印しているのだろう。
　むしろ、白露の雰囲気がその当時とまるで違うから、理解出来ないというのもあるかもしれない。
「もしかして、白露ちゃんぴょん？　ミシェルと話してた時とは、大分違うっぴょんね～」
「あー、そうそう、ほら、さっきまであたしも戦ってたからさ。いろいろ乱れちゃって」
「なるほどぴょん。そっちも似合ってるぴょーん」

普通の姿で話せることに安堵しつつも、いつ思い出してしまうかわからないためにヒヤヒヤしている白露。忘れているのなら忘れたままでいてもらいたいものである。
「……白露姉さんはこの程度で済んでるけど、古鷹さんは大丈夫かな……」
「ですね……白露姉さんはあまり変わってませんけど、古鷹さんは総入れ替えしてるようなものですし……」
そこは不安要素。白露でこれならば古鷹も大丈夫かと言いたいところだが、村雨の変装をしている白露と違って、鈴谷の変装をしている古鷹は見た目が大きく異なる。
そもそも古鷹と顔を合わせた回数が少ないため、ギリギリ違和感を覚えないかもしれないが、こればっかりは会ってみなければわからない。
「それで思い出したんだけど、施設の逆側、大丈夫なのかな。今古鷹さん達が確認しに行ってるんだよね」
現在、春雨達は当事者である者達の対処に出ていたが、その裏側で何かが起きていないかを松竹姉妹と古鷹が確認をしに向かっている。
実はここで捕獲出来た４人が全て陽動で、裏側から本命が来ているという可能性も無くはないのだ。
「確かに。でも姉さんは悪寒とか無いんですよね？　なら、そこまで大惨事にはなっていないと思いますけど」
「過信するなって言ってるでしょ。ちゃんとその目で見たものを信じないとね」
春雨は、施設に戻らなければならないという意思からここまで来て、潜水艦姉妹捕獲に尽力した。これがその意思を導き出したものなのかはわからないが、少なくとも今は施設が危険であるという直感は反応していない。
「私達は施設にすぐに向かいます。あとはよろしくお願いします」
それだけ言い残して、春雨は海風を連れてさらに進む。施設の安否を確認して、初めてこの戦いは終わりとなる。
「なんだか、春雨ってばものすごく頼もしくなっちゃったなぁ」

その後ろ姿を眺めて、白露がボソリと呟いた。言葉とは裏腹に、白露はとても嬉しそうではあった。

そして、施設。雨の中で泥を散布する艦載機は、大鳳が正気に戻ったことで消滅。代わりに溜め込んでいた泥が最後に大量に降ってきたのを、中間棲姫がしっかりと対処し、泥の脅威はこれによって全て失われた。

「ふぅ、これでおしまいかしらねぇ」

久しぶりに全力で艦載機を飛ばし続けたからか、中間棲姫は少し疲れ気味に息を吐いた。

「お疲れ、お姉。雨雲の上にあった艦載機は消えたみたいよ。結局最後まで逃げ回ってたわ……」

「妹ちゃんもお疲れ様ぁ。ひとまずここが守れたのは良かったわぁ」

姉妹姫が尽力したおかげで、施設に泥の一部が付着するようなことも無く終わらせることが出来た。

とはいえ、対処する前から降っていたとしたら、何処かに影響を与えている可能性はある。それに、爆発により全てを霧散させるくらいにはしたが、それで本当に対処出来たかはちゃんと確認しなければわからない。それこそ見えないところに実はコッソリと残っていて、それが増殖を繰り返している可能性だってあるのだ。

いくら島の上が全て認識可能であっても、目に見えない程ならば見落としも発生しかねない。しかも今は深夜で、ただ見て回るのも難しい。

「姉姫さん、妹姫さん、裏側見てきたっス」

ここで松竹姉妹と古鷹も戻ってくる。

「お疲れ様ぁ。そっちはどうだったかしらぁ」

「古鷹さんの哨戒機も使って確認しましたけど、近くに誰かいるような感じはありませんでした。私と竹でソナーも使って海中も確認しましたけど、潜水艦もいませんでしたね」

「すげぇ遠くにいるって言われたら何とも言えねぇけど、ある程度は

古鷹さんが見てくれたんで、誰もいなかったってのは信用出来るっス」
挟撃ということは今回は無かったようだ。しかし、雨に紛れて何かをしようとしていた可能性は否定出来ない。
「ただ……」
「何かあったの？」
「畑がちょっとやられてしまっているように見えます。雨に紛れた泥が、育てていた野菜に降り掛かってしまった可能性が……」
中間棲姫がどうにか対処していた降り注ぐ泥は、やはり少しだけ影響を与えていた。一応探照灯で照らして確認し、一部に黒い何かが付着しているように見えたとのこと。
それがこの一晩で増殖する可能性は否めない。そうなると、この野菜達は全て廃棄しなくてはならなくなるだろう。
畑はこの施設の生命線だ。ただでさえ今回で４人捕獲し、食糧の消費が一気に増えるというところで、安定供給が出来ていた畑すら失うとなると、今後がかなり厳しくなる。
「そう……残念だけれど、今まで育ててきたお野菜は、廃棄するしか無いのかもしれないわねぇ……」
こればっかりはしっかり確認してからになるが、そうせざるを得なくなる可能性は非常に高い。中間棲姫としてもそれは大分悲しいようで、あまり見せない落ち込んだ表情を浮かべた。

戦いとしては大勝利なのだが、少なからず傷跡を残した深夜の襲撃。まだ畑がダメになったかどうかはわからない。朝まで待つかどうかは、姉妹姫が判断する。

戦いは終わっても

深夜の戦いが終わり、春雨と海風が先行して戻ってきた時には、中間棲姫は自分の艤装を施設に戻し、電力を復旧させた後だった。松竹姉妹と古鷹も、姉妹姫と共に春雨達を出迎える。

「こちらは全て終わりました。私達は先行して戻ってきましたが、４人の敵を全員捕獲、うち1人は泥も吐き出した後です。代わりに重傷を負わせてしまっているので、すぐにでも応急処置をします」

「わかったわぁ。部屋はまだ空いているから、そこに入れてちょうだい。残りの3人はまだ泥を？」

「はい、そのままなので、リシュリューさんが締め上げて身動き出来ない状態にしています」

簡単な状況説明から、戦いは勝利でおわり、戦場に出ていった仲間達は無事にここに戻ってくることが確約された。それに関しては一安心と言わんばかりに大きく息を吐いた。

誰一人として欠けることなく、さらには黒幕の侵蝕によって加害者にされている被害者達も救うことが出来るならば、それは喜ばしいこと。施設の仲間が増えることも、姉妹姫としては嫌なことでは無い。

「こちらは何事も無かったですか」

「ええ、誰も怪我は無いわぁ。裏側から挟み撃ちなんてことも無かったもの。でも……畑が少しまずいことになっちゃったみたいなのよぉ」

悲しそうな笑みを浮かべる。この施設の生命線とも言える畑が、あの泥の雨のせいで一部に泥が付着してしまったと聞き、春雨もショックを受けた。

育てている野菜の中には、春雨が初めて種を蒔くところから始めた物も含まれている。成長が早く、時期的にももう少しで収穫出来るかもしれないというところまで来たのに、敵のせいでそれがダメになってしまったとなれば、悲しみも大きい。

「松ちゃんと竹ちゃんが言うには、降り掛かっちゃってるように見えたってことなのよねぇ。朝になったらちゃんと確認するつもりだけ

れど、探照灯を使って確認してるから、多分本当にそうなっちゃってると思うわぁ」
　その泥がここから増殖するかはわからないが、そうなったらまずい。そうでなくとも、育てている野菜に染み渡ってしまった可能性もあり、結局のところ野菜は全てダメになっていると考えなくてはならないかもしれない。
「そう……ですか。じゃあ……」
「ええ。私や妹ちゃんがもしそれを確認したら、私の手で畑を壊そうと思ってるの。その後は、また畑の作り直しねぇ。その泥が無くなったことは確認しなくちゃいけないし、もしかしたら土壌汚染の可能性もあるから、すぐには農作業は出来ないかもしれないわぁ」
　今まで積み立ててきたものが、この夜に全て台無しになってしまう可能性が出てきてしまった。
　だが、なるべくならば泥が被っていない野菜はそのままにしておきたいとも思っている。それが正しく確認出来るのは、雨が止んだ後、明るい時間がいい。
「それはまた考えるわぁ。春雨ちゃんも海風ちゃんも陸に上がってちょうだい。そろそろ他の子達も戻ってくるのよね？」
「あ、は、はい。そうだ、もう1つご報告が……。ミシェルちゃんのことで」
「そうだ、ミシェル！　あの子あれだけ重傷だってのに、アタシ達が目を離した隙にアンタ達のところに行ってたのね!?」
　飛行場姫が声を荒げる。なんでも、高高度の艦載機に集中しなくてはならないタイミングが出来てしまったらしく、その時にミシェルから2人とも目を離してしまったらしい。アレだけの重傷を負っていたのだから、流石に動くことはないだろうと高を括ってしまっていたようだ。
「あの子、大丈夫なの？　酷い傷だったじゃないの」
　これに対して、春雨も海風も言葉を濁す。まさかヒトのカタチになって戻ってくるなんて、いくら姉妹姫でもまず予想出来ないこと。
　何て答えようか迷っているうちに、白露を先頭に残った仲間達が

戻ってくる。
リシュリューの尻尾に絡め取られた潜水艦姉妹も、この時には流石にぐったりではなく気を失っていた。そして、戦艦棲姫の艤装が運ぶコロラドもしっかり気を失ったまま。
しかし、その中に1人、見慣れない少女を見つける。そして、重傷でも出て行ったミシェルの姿が見えない。そうなれば、中間棲姫ならすぐに察することが出来る。
「……春雨ちゃん。まさか……」
「はい……あの子がミシェルちゃんです」
姉妹姫もだが、ここで待機していた松竹姉妹や古鷹も、今のミシェルの姿を見て声を上げて驚いた。
「やっぱりそうなのね……」
「はい……話せば長くなるんですが、端的に言えば、ミシェルちゃんはイ級となっていた繭を破って、完全に孵化しました」
詳細はまた後から聞くとしても、あまりにも違いすぎてこれ以上言葉も出なかった。

ひとまず全員が揃ったため、ここからの施設の方針を決める。リシュリューのこともあるので、今は施設内には入っていないのだが、緊急性のあるものはすぐに対処された。
大怪我を負っている大鳳は、すぐにまだ残っている空き部屋に入れられ、今までの白露や古鷹と同様にまずは持ち直すまで安静にさせられることになる。その看病はいつものようにコマンダン・テストがメインであり、今回は春雨と海風もその手伝いをするという。
痛みに耐えながらも、大鳳は生きる決意をしている。時間経過で自然治癒していくのは今までの経験からわかっているため、安定するまで側にいればその後は安泰。
泥が抜けていないコロラドと潜水艦姉妹は、目を覚ましたらそのまま敵対することが確定しているため、抜け出せないように縛り付けて戦艦棲姫が見張っている。潜水艦姉妹はリシュリューが締め上げる

ことで同時に気を失ったため、コロラドと一緒に同じ場所で監視することに。いざとなったらまた締め上げられるように、基本的にはリシュリューも一緒に見張る。
　ただし、締め上げるためにリシュリューが艤装を展開しなくてはいけないため、部屋ではなく外となる。まだ雨が止んでいないため、屋根の下になるべく陣取るつもりのようだが、残った時間を外で過ごすのはなかなかに酷。それでも買って出たリシュリューと戦艦棲姫に全員が感謝した。
　姉妹姫は念のため、畑を見守り続けるとのこと。松竹姉妹の確認により、泥が一部付着しているわけだが、それがその場で増殖してしまわないか見ておく必要はある。
　何も起きなければ起きないでいいのだが、何か起きたらその場で畑を焼き尽くす覚悟も必要。それは流石に他の者にやらせるわけにはいかない。中間棲姫が責任を持って対処する。
「春雨姉さん、あの力を発揮したということは、また目や脚に影響があるかもしれません。海風が側にいますので安心してください」
「確かにそうかもしれないね」
　施設に到着した時点で気が抜けかけており、このままだとまた前回のように脚が消えてしまいそうなので、先に海風に支えてもらえるように近くにいてもらった。何も言わずとも近くにいるが。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅは大丈夫？　眠たくない？」
「大丈夫っぴょん！　ジェーナスちゃんともっともっとお話ししたいっぴょーん」
　ミシェルはミシェルでこれでもかというほどジェーナスに懐き、抱き付いては頬擦りしているほど。駆逐イ級だった頃は、この時間は独りで海に漂っているのだが、今は大好きな仲間達と一緒に居られるのが嬉しすぎるようで、絶賛興奮中。まるで大型犬である。
　ジェーナスとしても、この夜を利用してミシェルに一般常識を教え込もうと決意している。今回フリーとなっている者とそれを手伝う方針だ。施設で生きていけるようになったのだから、それなりに体裁は整えておきたい。鎮守府の艦娘達や、タブレット越しに提督と話す

可能性だってあるのだから。
まずは服から。そしてそこからヒトのカタチを持つ者に相応しい常識を手に入れてもらう。
「それじゃあ、みんな疲れていると思うけれど、よろしくお願いねぇ」
中間棲姫も流石に少し疲れた顔をしていた。肉体的にはまだまだ余裕はあるだろうが、施設が襲撃されたことと、丹精に育てた野菜達がやられたことで、精神的に参ってしまっている。
しかも、最悪畑そのものを焼き尽くさなければならないのだ。長年作ってきたものを自らの手で破壊するなんて、誰がやっても辛い。

全員持ち場についたところで、姉妹姫も外に出て畑を見に行く。今はまだ暗いが、飛行場姫が探照灯で照らしたことで、畑の全容が確認出来た。
松竹姉妹の言っていた通り、野菜の一部には黒い泥のような物が付着している。それ自体がこの場で蠢くようなことは無いのだが、そこに留まっているのは確かだ。それに、よく見てみると畑の土そのものにも少し付着しているのが見える。畑全体とは言えないが、半分近くはやられているだろう。
「……本当にやられてしまったのねぇ」
大きな溜息を吐く中間棲姫。今までこの施設を作り上げることを隣で手伝い続けた飛行場姫も、この有様にはショックが大きい。
これがただの泥だったら、洗い流せば済むことである。しかし、泥そのものに害があり、この野菜を食べたらそのまま侵蝕される可能性まであるのだから、廃棄以外には無いだろう。
むしろ、土に泥が付着していることも問題だ。染み込んでいくなんてことがあるかはわからないが、そうなった場合は深刻な土壌汚染となる。野菜そのものが育てた時点でアウトとなる可能性もあるため、畑そのものをどうにかしなくてはならない。
そして、その泥を手で掬い取ることはおろか、近付くのも怖い。今は畑からある程度離れているため大丈夫だが、畑に足を踏み入れた

ら、中間棲姫ですら侵蝕しようと襲いかかってくるかもしれないのだ。野菜に付着している程度の極々少量でも、侵蝕の意思を持っている可能性は充分にある。
「土がダメになっちゃっているなら、ココ一帯は爆撃で掘り返すべきよねぇ……その後に畑を作り直して、また植え直して……出荷する分が全部無くなっちゃうのよねぇ」
「そうね……そろそろ食糧も危険水域に近付いてるから、このタイミングでこれは少し厳しいわ」
普段ならもう少しは保つのだが、ここ最近で施設の仲間が一気に増えたため、食糧の消費量が格段に増えているのは間違いない。
春雨が仲間に加わった時はまだまだ余裕、叢雲や海風でもまだ良かった。白露が加わり、古鷹が助かりと徐々に消費量が増えていき、今回一気に４人増える。こうなると本格的に遠征も考えなければならない。
「今この状態で遠征に行ってもらうのは……それはそれで難しいわよねぇ」
「そうね。いつ何処に泥がばら撒かれてるかわからないような状態で、リシュリューとコマをこの施設から離れさせるのは少し怖いわね。あの子達まで侵蝕されたら、お姉は確実に倒れるわよ。心労で」
「否定出来ないわねぇ」
となると、今の一番の問題は食糧となる。春雨が来る前から考えると、ほぼ倍ほどに膨れ上がった仲間達を養っていくには、もう今の手持ちでは心許ない。
「朝になったら、提督くんに連絡してみるわぁ。申し訳ないけど、少し手助けしてもらえませんかって」
「そうね……こればっかりは手助けしてもらわないとまずいか。自分達のことは自分達でやってこれてたつもりだけど、今回に関しては外的要因だもの。頼れるモノは頼りたいわね」
本来なら外的要因の影響を受けることだってあり得なかったのだ。今回は本当に緊急事態。自分達だけならそこまで考えなくてもいいかもしれないが、養っていく仲間がいるのだからなりふり構っていら

れない。
「そもそも通信出来るのかしら。ほら、叢雲が艤装出しただけで通信妨害起きたじゃない」
　泥に関連するモノがそこにあると通信が出来なくなるというのなら、今この畑に付着した泥や、捕縛しているコロラドと潜水艦姉妹が通信を阻害する可能性は充分にある。
「そこは試してみなくちゃわからないわねぇ。いざとなったら、誰かに島から少し離れてもらって通信してもらうわぁ。連絡が出来ればいいんだもの」
「まぁそうね。やってみなきゃわからないか。それも全部朝になってもらわないと無理ね」
　飛行場姫も小さく溜息を吐いた。この数時間で心労が凄まじい。だが、すぐに気合を入れ直した。
「溜息吐いてたって何も変わらないわ。今は状況を良くするために頑張りましょ。お姉も疲れたならアタシに頼ってちょうだい」
「ふふ、ずっと頼りっぱなしよぉ。いつも助けてくれてありがとうねぇ」
　少し疲れた笑みだったが、気を取り直そうとしているのは見て取れた。

　ここで、雨は止む。
　後は、夜が明けるのを待つのみ。

危機に立ち上がる

早朝、ようやく空が白んできたくらいの時間。前日を丸一日休みとされたおかげで、身体は充分に休息出来たものの、鎮守府のことが若干心配だったためか、まだいつもの起床の時間よりも早く目を覚ましてしまった提督。根っからの仕事人間であるかを表しているかのようである。

いわゆる前残業のようになってしまいそうだが、やることもないので執務室に向かう。当然ながら、まだ総員起こしの時間にもなっていないため、五月雨がそこにいることはない。

「仕事中毒（ワーカホリック）なのかな僕は。ここの方が落ち着くまである」

苦笑しながら独りごちる。提督という役職についてから仕事尽くしであり、海の平和を守るために奔走していたからか、むしろ休むことに違和感を覚えるようになってしまっているのは、あまりよろしくない。だから部下である艦娘に心配されるのだ。

「まぁ時間までは仕事をせずにゆっくりさせてもらおう」

コーヒーを淹れながら執務室でゆったりとした時間を過ごしているところに、突然タブレットが受信の音を鳴り響かせた。

こんな時間に通信をしてくるなんてとても珍しいことだ。中間棲姫は特にこちらの良いタイミングを見計らって連絡をしてくるため、深夜から早朝にかけてや、食事時には絶対にかけてこない。

「おや、珍しい。僕がたまたま起きていたからいいけれど、こんな時だと出られないな」

余程緊急性があるのだろうか、コールが途中で止まることも無かったため、それを取る。

「もしもし、こんな朝早くにどうしたんだい」

『あ、し、司令官。良かった、こんな早くにごめんなさい、春雨です』

タブレットの向こう側は、姉妹姫ではなく春雨。その後ろには海風や白露の顔も見える。しかも、春雨はかなり疲労しているのか海風と白露に支えてもらっている。

「いや、本当にどうした。そこまでされているのなら、白露と海風に任

せれば」
『すみません、これは私達から伝えた方がいいと思ったので、無理を言って私が通信をさせてもらいました。そちらと話がしやすいのはやっぱり私達がベストだと思うので』
「しかしだな……君達が今いるのは施設じゃないだろう。わざわざ外に出てこちらに連絡するだなんて、正直わけがわからない」
その背景は施設内ではなく海の上だった。
施設に置かれているタブレットは、充電さえされていれば鎮守府で使っているものと同じように、ある程度離れていても使えるし、しばらくは電池も保つ。
だからといって、施設側がこういう使い方をすることなんて相当限られてくることだ。施設が安全なのだから、通信をわざわざ外でやること自体必要の無いこと。
「何かあったのか。こんな時間にそんな場所で通信なんて普通なら考えられない。施設に何かあったと考えるのが妥当だ」
『はい、至急伝えなくてはいけないことが。先に聞いておきたいんですが、そちらは夜に雨が降ったりしたでしょうか』
突然世間話のような話題だが、春雨の表情があまりにも真剣だったため、すぐに調べる。
「ふむ……こちらでは降っていないようだ。外も乾いているから、少なくともここ最近では降っていない」
『そうでしたか、安心しました』
『こうやって通信出来てるんだから大丈夫なわけだ。降ってたとしても何も無かったんじゃないかな』
画面の向こう側で白露も安堵した表情を浮かべていた。
「雨が何かあったのか？」
『はい。実は――』
ここで、昨晩に起きた施設襲撃の件をざっくりと話す。施設は深夜に雨が降っており、そのドサクサに乗じて敵が襲撃して来たのだが、全員で撃破することに成功して今に至ると。春雨が肩を借りているのも、辿り着く力を全力で使った反動で、また目がボヤけているから。

その時に、泥を持ったまま捕獲しているものがいるせいで、施設内では通信が不可能になってしまったため、海に出てきて通信をすることにしたようだ。そのため、施設からはかなり離れた位置になっている。

艤装を出した時にだけ通信妨害をしてしまう叢雲とは違い、完全に泥が入っている者に関しては、存在そのものが通信妨害を引き起こすということが今回証明された。

そして、話をしていく内に雨の中に泥を散布するというとんでもないことをされ、さらにはそれを対処しきれずに畑がやられてしまったということまで伝えられた。

また、深夜の間に姉妹姫が島中を全て見て回り、泥が付着しているのが畑だけでは無いことを確認した。生活空間に影響はなく、見て回った姉妹姫や、それまでに裏側を見ていた松竹姉妹と古鷹にうっかり付着しているなんてことが無いのも確認済みではあるのだが、そこかしこに僅かにでも痕跡が残ってしまっているため、施設そのものがかなり危険であるという。

通信妨害の理由がこちらの可能性もある。少量でも施設の至る所にあるというのなら、それが結果的に展開された艤装と同じくらいの効果を発揮してしまっているかもしれない。

「なんだそれは……雨に乗じて散布だなんて、あまりにも……」

『はい。それで、ですね。実は……畑が全滅しました。泥が付着した野菜もあるんですが、土にも付着していまして』

「……土壌汚染の可能性かい」

『はい……』

その泥がただの泥ではなく、明石の解析によって微生物の集合体であることは知っている。ある特定の状況で増殖することもわかっているため、土の中で増殖をしているということもあり得た。

結果的に、施設の土壌は汚染され、育てられていた野菜全てがダメになっている可能性は高い。ダメになっていないにしても、それが目に見えているだけの問題ではないため、あらゆる脅威を取り除くのなら、畑どころか、島そのものを浄化する必要まで出てくる。

『実は……その、連絡する前に、姉姫様が畑を全て爆撃で破壊しました。育てていた野菜も全て廃棄して、燃やすことに』
「そうか……そうなってしまっても仕方ないだろうね。万が一のことを考えれば、それがベストだと思う。辛い決断だ……」
結局、泥に汚染されている可能性がある畑は、苦渋の決断ではあるが土ごと全て爆撃によって破壊。野菜も痕跡が残らないレベルで破壊され、土も全て掘り返されるという大惨事。
中間棲姫自身は、またここからやり直しましょうと話しているものの、今まで丹精込めて育ててきたものを自らの手で全て破壊するのはとても辛そうだった。しかし、施設のためには仕方ないと覚悟を決めていたため、誰も文句は言わなかったし止めなかった。特に畑仕事をメインにやっていた松竹姉妹も、こればっかりは仕方ないと苦い顔で見届けている。
「そうなると、食糧はどうなるんだい？」
『はい、そのことで連絡をさせていただきました』
本題に入る。今回の件で、施設は食糧難に陥ってしまいそうだという話だ。今まで育ててきた野菜は、シンプルに施設内の食生活に貢献し続けていただけでなく、これを使ってお金を稼ぎ、それで施設の生活用品を買い集めるためにも必要。
それが失われてしまったということは、食べるだけでなく、施設を維持するための材料を失ってしまったようなものだ。勿論ある程度は保管してあるものの、それだってずっと置いておけるわけではない。
それに、今回捕獲した4人のうち3人はまだ泥が入ったままとはいえ、それを元に戻したら当然、そちらにも食糧が必要だ。今まではやってこれたが、流石に人数が増えすぎて厳しくなってきている。
「なるほど、それならば支援させてもらおう。深海棲艦からの襲撃に巻き込まれたというのなら、こちらからも問題なく手を貸せる。戦災復興の一環とすればいいからね。大将にも伝えれば喜んで手助けしてくれるはずだ」
『ありがとうございます。姉姫様も喜びます』

こういうカタチで助け合えるのは、提督としても喜ばしいことだった。人間、艦娘、そして深海棲艦までもが手を取り合える世界が、ここだけでは実現出来ていることが実感出来るからだ。
「だがその前に、そのばら撒かれた泥が気掛かりなんだが」
『はい……実際、増殖自体は確認されていません。妹姫様が言うには、基本的にはそこに留まっているだけだったと。ですが、見えていないところでゆっくりと侵蝕している可能性はあります』
見た目では増殖していないが、見えていないところで何が起きているかはわからない。それこそ、畑だけは処理したが、それ以上に深刻なことになっている可能性もあるのだ。だとしたら、泥の対処は早急に必要。食糧よりも優先順位は高い。
ならばと、提督はすぐに提案する。その泥もどうにか出来るかもしれない手段が、今の鎮守府には存在する。
「その問題、解決出来るかもしれない」
『えっ』
「君達ならわかるだろう。うちの明石の力を」
あー、と3人が3人、全く同じ反応を見せた。
昨日の提督の休息中も、バリバリ分析と開発を続けていた明石だ。既に体内の悪意の塊を消滅させる薬を作り上げるところまで来ており、それを改善、さらには別の技術に転用して、センサーなどなども次々と作り上げているほどである。
既に設置された泥を感知するセンサーと、それを外部から消滅させる装置は、実際に使ってみなくてはわからない部分もあるため、機会があれば現場で実験したいと、明石は常々話していた。それが今回可能になる。
「古鷹の体液と、荒潮から手に入れた悪意の塊から、こちらは対策が次々と開発されている。それを使えば、施設に散布されてしまった悪意の塊の場所も確認出来るだろうし、それを消滅させることも出来るはずだ」
『流石ですね明石さん……その分、身体を壊してるんじゃないかと心配になりますが』

「そこは大淀がしっかり制御したから大丈夫だよ。ただ、当然だがその装備が正しく作用するかはまだわからない。実験に実験は重ねているらしいが、現場で実際に使うのは今回が初めてになる」
とはいえ、悪意の塊からの侵蝕を排除する手段は確立されているのだ。コロラドと潜水艦姉妹が解放されることは確定したようなもの。しかも無傷で。大鳳は気の毒だが、一番手が付けられない存在だった上に、既に終わったこと。諦めざるを得ない。
『やらないよりはマシだと思います。是非とも、明石さんを派遣していただければ』
「了解した。食糧に関しては多少時間を貰いたいが、明石に関してはすぐにでもそちらに送ろう。食糧よりも危ないだろうからね」
優先順位は当然、泥の排除の方が高い。そしてこちらはすぐに用意出来るようなもの。
「午前中にはそちらに送る。今はこちらからそちらに連絡することは出来ないと見ていいんだね？」
『はい。通信妨害が続いているので、おそらく何も出来ないと思います。でも、午前中に来るとわかっていれば何も問題はない……無いと思いますので』
何か思うところがあるような顔をしたものの、施設としても問題無いということで、午前中に鎮守府から遣いの者が行くという話で落ち着いた。
勿論それを狙われる可能性だってあるのだが、やらなければどうにもならないのが今回の件だ。対処しない限り、施設との通信も復旧しない可能性もあるのだから。
「それじゃあ、こちらも急いで準備をしよう。少し待っていてくれ」
『はい、重ね重ねありがとうございます』

施設のために、今度は鎮守府が動き出す。そこには何も下心は無い。純粋に、仲間を救うためだ。

狂科学者来島

鎮守府から調査隊が出発したのは、施設になるべく早く到着出来るようにと朝食後すぐ。

隊長は相変わらず山風であり、残された白露型である江風と涼風も勿論同部隊。五月雨は基本的に秘書艦であるため、事が済んだ後に通信で結果を聞くことが出来れば良しとしている。山風には、海風と会いたいという若干下心が見え隠れしている目的もあるため、今回の遠征は是非ともという表情で歩み出たほどである。

他のメンバーも基本的にはいつも通り。空母枠としてちとちよ姉妹とサラトガ。戦力として金剛比叡に武蔵。そして、島風と宗谷。北上と大井はあえて鎮守府に残る方針となっている。理由は簡単、鍛えるという名目で練度がまだ足りない荒潮を鎮守府から移動させないようにするため。北上は相変わらず面倒臭そうな顔をしたものの、むしろ荒潮が早く強くなりたいという気持ちを汲んでいるのは間違いない。

そして今回はさらに追加で2人。1人は明石。施設のある島に泥が散布されたと聞いたことで、そもそも依頼するつもりであったにもかかわらず、明石から行かせてくれと言ってきた始末。それはもう目がキラキラと輝いていた。

もう1人はその明石の制御役である大淀。何かあった時に止められるのが大淀くらいであるため、今回の遠征には初めての便乗である。

「総勢13人の調査部隊……こンな大人数は初めてじゃね？」

江風が周りを見ながらボヤく。戦闘は念のため即座に最高戦力が戦えるように戦艦3人。一番後ろには常に哨戒機を飛ばしている空母3人。中間には宗谷のクルーザーとほぼ戦うことが出来ない明石を配置し、残りの者がそれを囲うようにして周辺警戒。

遠征にこんな人数を使うことはまず無い。普通の出撃でも限られた状況でしか無いだろう。しかもその中に非戦闘員が2人も含まれているのだ。こんな部隊で航行していること自体がレア中のレア。

「私が遠征に出ること自体初めてですので」
「だよねー。私だってそうだし」
大淀と明石はそもそもこういうカタチで任務に入ること自体が無い。大淀は軽巡洋艦なのでまだ普通に出撃することもあるが、明石は出撃ということをほぼしないような艦娘だ。遠征なんて以ての外。
極稀に泊地修理という出撃中にでも艦隊の艦娘のガタを治すために出たりするのだが、提督の方針上、出番が殆ど無いのだ。
「淀さンはまだしも、明石さんが出撃だもンなぁ。アレだろ、その大発の中にはいろンな発明品とかが載ってンだろ？」
「勿論。今回必要そうなものと、万が一の時に修理が出来るように工具やら材料やらをたんまりとね。いざって時は施設で泊まってもいいくらいに持ってきてるのさ」
ちなみにその大発動艇を動かしているのは宗谷である。クルーザーを操縦しつつも、艤装を展開して大発動艇まで扱っているという、相当器用なことをしている。
大発動艇が明石のモノで殆ど埋まっているため、施設への物資は宗谷のクルーザー側に。以前もそういうカタチで持ち運んでいるので慣れたモノだが、運べる容量には限度がある。今回は人数からも考えて、ひとまず3日分の米や携帯食料などなど。
「ところで大淀、そのメガネにもう泥を感知出来るシステム組み込んでるわけだけど、何か反応はある？」
早速発明した装備の使用感を聞く明石。センサーということで電探やソナーのようにしようかと考えたものの、こんなことで艤装側の負荷を増やしたくないと考えた結果、一種の増設装備に組み込めるようにメガネの形状にしたという。艦娘も深海棲艦も必要な時に艤装が展開出来るわけだが、外付けの増設であるため、最初から装備した状態で出撃。
で、大淀はいつも使っているメガネではなく、明石謹製のメガネで出撃していることになる。大淀のために作られているため、しっかりと度が入っている特別製。
「今のところは無いですね。確か、このレンズに情報と泥そのものが

映し出されるんでしたっけ」
「そうそう。電探みたいなものだから、侵蝕されてる艦娘や深海棲艦見てもちゃんと判別出来るようにしてあるから。まぁ今回が深海棲艦と見比べるのは初めてだけどね」
その割には自信満々に発明品の出来を語る。それはもうイキイキと。聞いてもいないのに理論までペラペラ話しそうになるため、大淀は話半分になっていた。そもそも半分は明石のお目付役をしつつ開発を手伝っているのだから知っている。
「聞いても全っ然意味わかンねぇや。涼風は？」
「江風にわかんねぇモノをあたいがわかるわけないだろがい」
「だよなー」
大淀と明石以外はちんぷんかんぷんな話であった。

そこからしばらく行き、誰にでも施設が目視出来るくらいの場所までやってきた。念のため鎮守府に連絡を取ろうとしたものの、案の定通信妨害を受けてしまい、まともに連絡を取ることも出来なかった。
「だから春雨達はわざわざ海の上から通信してきたってことだよネー」
「本当に何も出来なくなるのだな。これは確かに厄介だ」
通信妨害の件を実際に見るのは初めてなので、武蔵は厄介と言いつつも逆に感心していた。よくもまぁここまで鎮守府に対して嫌なことばかりを突き詰められるのかと。
「ん……？　何処か……おかしい」
山風が突然言い出す。この違和感には、島風も勘付いていた。
「あれ、ミシェルは？　いつもだったら私達のこと出迎えてくれるよね」
ここで春雨は1つだけ重大なミスを犯していた。深夜に襲撃を受けたことや施設に泥があること、最も辛い畑を失ったことを伝えるだけで終わっており、施設の中でもう1つ大きく変化したことを伝えていなかったのである。

それだけ春雨が疲れていたというのもあるし、あの時間帯は今回視察の者達は一晩徹夜で過ごした後であるため、寝不足だったというのもある。
つまり、ミシェルがヒトのカタチを得ていることが伝わっていないのである。
「もしかして、襲撃を受けたときにミシェルが……」
「施設の近くというか、哨戒機から見える限りの陸の上にも海の上にもイ級らしいものは無いらしいわ。何人かは外に出ているみたいだけど、その中にミシェルはいないみたい」
哨戒機からの情報をそのまま口にする千歳。千代田も同じようなものを見たらしい。
つまり、今見えるところにミシェルはいないということになる。施設の中に運び込まれているか、最悪の場合は――と考えている内に、今度は大淀がメガネに触れる。
「泥の反応あり。施設が目視出来るようになったからか、そちらの方に大量の泥が確認出来ました。おそらく、昨晩の襲撃で捕獲したという敵側の深海棲艦が原因でしょう。通信妨害が働いているのですから、これで確認出来ないわけがありませんでしたね」
大淀のメガネには、まだ水平線付近にしか見えない施設の島が真っ赤に染まっているように見えている。無論、この赤は明石が泥の位置をわかりやすくするために設定した反応の色。
明石の発明品は、僅かな泥でも確実に拾う程の感度になっている。それは、艦娘や深海棲艦の体内にあるそれすらも検知出来てしまうほどに。既に侵蝕されて潜伏しているモノも炙り出せるように、かつ、深海棲艦であろうとも侵蝕されているかどうかを判断出来るように。
その結果がこれだ。既に侵蝕されている者が3人もいる施設は、その反応はとんでもなく大きい。遠くだから島全体が反応しているように見えるが、近付けばもっと具体的にわかるようになるだろう。
「施設に行く。大淀さん……海の中に反応は……？」
「今のところ無いみたいです。反応は全て施設のある島に集約されているようですね」

「じゃあ……急いで行く。ミシェルのこと……心配だから」
山風が合図をして、少しだけ速度を上げた。海に脅威は無いため、まずは島に近付くことが大事。
そして、施設に到着して度肝を抜かれることになる。

島に到着した調査隊は、早速泥の場所を確認する。岸から施設に向かうまでの道程には一片も付着していないことはわかった。そのため、警戒することなく島に上陸することが出来た。
それは中間棲姫がこの場所を基点に艦載機を発艦していたから。施設全体を守るための爆発ではあったが、やはり中心から離れれば離れる程ムラが出てしまうのは仕方ないことである。
「来てくれてありがとうねぇ。本当に助かるわぁ」
調査隊を出迎えてくれたのは勿論姉妹姫。近海に来た時点で叢雲が感知し、それに合わせて施設の外に出てきた。しかし、以前とは違って随分と疲れた表情をしている。
姉妹姫も他の者と同じように徹夜しており、しかもついさっきでは無いにしろ自分で丹精込めて育てていた畑を破壊したばかりなのだ。肉体的な疲労よりも、精神的な疲労の方が深刻であり、特に中間棲姫は見てわかるくらいに消耗している。
「初めまして、姉姫。私、工作艦明石です。早速ですが、泥――悪意の塊についての調査をしたいんですが、よろしいですか？」
初対面にもかかわらず、グイグイと行く明石に大淀は大きな溜息を吐く。
「貴女が春雨ちゃん達が話していた明石ちゃんねぇ。貴女なら、私達が困っていることをどうにかしてくれるって話だけれど」
「はい、お任せください！　まずは島全体の調査で、泥の排除ですね。ヒトに試す前に、島の方に装備を使わせてもらいます。人間や艦娘は勿論、深海棲艦の身体にも影響を与えない特殊な波長を使って、泥のみを分解消滅させるものになります。ただし、若干出力が低めに設定してあるので、大淀に装備してもらっている泥を感知するセンサーと

の併用で現場に向かい、直接波長をぶつけることで確実に消滅させるようにしています。そうじゃないと艦娘も深海棲艦も波長のせいで吹っ飛んじゃうかもしれませんからね！」
　相変わらず物騒な研究結果。出力を小さくすることで身体に影響を与えずに泥のみを消滅させることが出来る。
　その分ピンポイントで使わなくてはいけなくなっているらしく、本来なら島全体を波長で覆い尽くそうとしていたのだが、そんなことをしたらそこに住む全員が悪影響を受け、最悪の場合崩壊まであり得るという酷い仕様。
「ちゃんと正しく作用することは実験済みですので。コレの言動が信用出来なくとも、資料として問題ないことを証明していますので安心していただければ幸いです」
　大淀がすぐさま補足を入れる。明石はそのまま喋らせると、信用出来そうなものも信用出来なくなってしまいそうなので、大淀のサポートはいろんな意味で必要不可欠。
「あ、そうそう、あと侵蝕されて捕まってるというヒト達も救えるように改良型の薬を作ってきましたのでご安心を！　荒潮を解放した薬とはまた違うタイプをいくつか作ってきましたので、試させてください。勿論、それを服用したら死ぬなんてことはありませんからね！」
　いちいち言葉の端々に狂気のような何かが感じられるのは怖いところではあるが、確実に救えるアイテムを持ってきているというのと、あの提督が信用して送り出してきた存在であるため、まず施設に被害が出るようなことはしないと判断した。
「あの……ミシェルちゃんは……」
　ここで山風がおずおずと尋ねる。施設に来る前からずっと気になっていたことであり、まさか被害に遭ったのではと不安にもなる要素。
　その名前を出されたことで、姉妹姫は共に複雑な表情に。しかし、悪い意味ではなくただ見ればわかるというような態度。
「あー、山風ちゃんっぴょん！」
　と、噂をすればとミシェルが施設から駆け出してきた。勿論その隣

にはジェーナスがおり、さらには白露型姉妹も疲れた顔でついてきていた。
　見たことのない少女から名前を呼ばれてビクッとした山風。他の者も誰だ誰だと騒めく。
「えーっと、信じられないとは思うのだけれど……この子がミシェルちゃんよぉ」
「ミシェルでっす！　ヒトのカタチになれたんだぴょん！　改めてよろしくお願いしまっすぅ！」
　元気よくお辞儀するミシェルに、全員島中に響き渡る程の驚きの声を上げた。

　調査隊が島に到着したことで、ここから事態を好転させていく。

山風の成長

ヒトのカタチへと生まれ変わったミシェルと対面して、大いに驚いた調査隊一行。大淀と明石はミシェルの存在を話にしか聞いていなかったが、それでも元々駆逐イ級だったはずなので、同じように声を上げる。

真っ先にミシェルに近付いたのは島風。誰よりも早く陸に上がってミシェルに駆け寄ったかと思ったら、ベタベタベタベタと身体中を触る。

「うわ、うわー、私達と同じ身体だ。ミシェル、なんでこんなことになったの？」

驚きは簡単には引かないが、ひとまず何故こんなことになったかを尋ねる。

「んー、よくわかんないっぴょん。でも、ジェーナスちゃんを守るんだーって思ったら、ヒトのカタチになれたぴょん。だから、ミシェルはもうみんなと同じっぴょん！」

島風のことも友人として認識しているため、お返しするように島風にベタベタ触る。

同じことが出来たということを実感し、２人揃ってニカッと笑った。

「でも、何か服着ないの？」

島風が言うのは、ミシェルの格好である。今のミシェルは、艦娘や深海棲艦が着る制服ではなく、明らかに布１枚を全身に纏っているようにしか見えなかったのだ。

この一晩で、ジェーナスを筆頭に施設の仲間達がミシェルに一般常識を教え込むために尽力したのだが、服だけはどうしてもうまく作れないようだった。

ジェーナスが最初に服について教えたとき、疲れからか、それが自分である証明と教えたのがよろしくなかった。何故なら、ミシェルがミシェルとして成立するものが、使わないシーツをリボン代わりに身体に巻いているだけだったからである。ミシェルにとっては服と

シーツが完全にイコールで繋がってしまっているのだ。
　そのため、今は苦肉の策として、シーツ1枚で服を作るという荒技で乗り越えている。ジェーナス達はそれを知らなかったのだが、古代ギリシャで着られていたというキトンのようになっていた。
「まだ時間が無くって、今はＰｏｓｔｐｏｎｅ（後回し）にしたの。それ以外にもいっぱい教えなくちゃいけないことがあったから」
「そうなんだ。じゃあ、時間があるなら私も手伝うよ！　人数いる必要があるかはわかんないけど」
「Ｔｈａｔ（助）　ｈｅｌｐｓ（る）　ａ　ｌｏｔ（わ）」
　その教育も、戦闘後の疲れているところにさらに徹夜をしているという状況下で行われているため、時間が無い以上に正しく教えられているかもわからない。
　もう少しシャキッとした状況でなら、効率よく教育出来ていたかもしれない。兎にも角にも、今は施設の者達は全員が疲れ切っていた。
「明石、ダメよ」
「私の心読めるの大淀!?」
「長い付き合いなんだから、何考えてるかくらいわかるわ。ミシェルさんには近付かないこと」
　大淀に先んじて行動を封じられた明石だったが、そう言っておかないとミシェルにもいつものマシンガントークから研究素材として手伝ってくれと言いそうだった。
　それに、絶対にやってはいけないボロを出しそうなのも明石である。このミシェルに対して、絶対に言ってはいけない言葉があるのだ。それが、
「いや、だってこの子、完全にうづ」
「だから言うなって言ってるでしょ」
　完全に口に出す前に腹に一撃入れた。不意打ちされたことで明石の言葉はそこで止まり、禁句（タブー）は免れた。
　当然だが、ミシェルに対して『卯月』という言葉は事前に禁じられている。髪飾りを見せただけでも発作を起こしたのだから、本来の自分を思い起こすような言葉は確実によろしくない。

そのため、いくら姿形や言動が１００％卯月だとしても、そのことには触れずにミシェルとして扱うのである。
「じゃあ……えっと、３組に分かれるってことで……」
このままだと時間がいくらあっても足りなそうなので、隊長である山風が一旦話を区切った。ここからは調査隊に任された仕事をこなしていく時間。
１つ目の班は、明石と共に施設の敷地内に付着してしまっている泥を探し出し、持ってきた装備でそれを消していく。
２つ目の班は、宗谷のクルーザーに積み込まれている若干の食糧を施設に運び込む。数日分とはいえ、願いを叶えてくれたことに姉妹姫は大いに喜んだ。
そして３つ目の班は、この施設に捕らえられている泥に侵蝕された元艦娘達の治療と尋問。そこに大鳳は含まれていない。とはいえ、一足先に泥を吐き出している大鳳の様子を見るのもここに含まれる。
「よーし、じゃあ私と大淀は予定通り泥掃除ですね。一通り見て回りながら装置を使っていくので、案内してもらえると助かります。ああ、あとサイズはフリーサイズで作ってますが、姉姫達にも身につけられる泥探知の眼鏡をいくつか持ってきましたので、どうぞ！」
ささっと眼鏡をいくつか取り出して、まずは中間棲姫に渡す。それ以外にも２つあったため、１つは飛行場姫が、１つは春雨が受け取った。
前者は単純に施設の管理人であるため、中間棲姫と共に身につけておいてもらいたいから。そして後者は、姉妹姫と違って海にも出られる者として、鎮守府と一番付き合いの長い者を優先した。そういう意味では白露でも良かったのだが、海風からの謎の推しがあったのは言うまでも無い。
早速眼鏡をかけてみて、施設の周囲を見てみると、その時点で反応がいくつも見える。それは、昨晩の内に確認した泥の場所とドンピシャ。
「すごいわぁ、遠くからでもしっかり場所がわかるのねぇ」
「はい、海中を見るためにも感度はかなり高めに設定してありますか

ら！　深海棲艦の皆さんでも扱えるように外付けにして正解ですね！」
　誰が使っても泥が確認出来るという優れ物。艦娘だけでなく、深海棲艦でも装備可能としたのは、明石の腕があってこそである。やろうと思えば人間でも問題なく使えるところまで配慮しているのが、明石の凄まじいところである。
「こうやって見ると、その、かなり散らばってしまっているんですね……」
「お姉でも取り零しが出ちゃうくらいなんだもの。アイツらのやり方がそれだけ汚いってことよね」
　同じく眼鏡を使って泥を確認している春雨と飛行場姫。物凄く汚れているというわけではないのだが、どうしても気になるレベルで反応が見えてしまう。まるで雑に掃除した時の埃のよう。それだけあちらの雨に紛れた散布という手段が効率的であったことを表している。
　この中間棲姫だからここまでで済んでいるわけで、そうで無かったら地面にも建物にも薄く全体的に張り巡らされ、隙を見て1人ずつ抵抗することも出来ずに侵蝕されていただろう。これで済んだのは運が良かったとすら思えてしまう。
「あそこだけは完全に取り除かれていますけど、やっぱり……」
「ええ、お姉が爆撃した畑ね。木っ端微塵にすれば泥は無くなるってことがよくわかったわ」
　飛行場姫が歯軋りするように嫌そうな顔を見せる。
「次に使う泥を消滅させる波長は、人体に影響なく海中のそれも排除することが出来るのは実証済みなんですが、地中となると話は変わります。波長が届くかもわかりませんし、それこそ掘り返さないとダメな可能性はあります。本当に必要なモノが出来ないのは、不甲斐ないばかりです」
　明石も研究の最中に土壌汚染の可能性までは考えていなかったため、それを除けば最善のモノを作れたと自負している。しかし、本当に求められているモノはそれ以上のモノだったというのが科学者と

しては不服だったようで、次はこうは行かないと明石も燃え上がっていた。
「少なくとも、この眼鏡（センサー）で確認出来るモノは、今すぐ直ちに排除しましょう。土壌汚染に関しては、また対策を考えます。それこそ、侵蝕された艦娘や深海棲艦を治療するための薬を使えば、それを抑えられるかもしれませんが、確定では無いですからね。今からやる波長でも土の中にまで浸透してくれる可能性はありますし。むしろまずは土壌汚染されているかの確認が必要でしょう」
話しながらも次の研究分析のことを考えている明石。今回直にここに来たのはそれもあるから。
「海風、どうかした？」
念のためと眼鏡でここにいる者達全員に、実は侵蝕されていないかの確認をしていると、春雨が海風の様子がおかしいことに気付いた。とはいえ、海風のこういう言動は割と見られるため、不安は一切無いが。
「姉さん、眼鏡も似合いますね。いや、これはなかなか見られないレアな姉さんですから、もう少し堪能したいですね。新鮮でとてもイイです。あえて服装も替えてみるのはどうでしょう。あのバレンタインの時のメイド服とかいいと思うんです。メイド長みたいで聡明な姉さんにはとても合うと思うんですよね。でも、知的なところをもっと押し出すように教師のようなスーツを着てみるのも」
「はいストップ、一回止まろうね」
相変わらずの海風に苦笑するしかなかった。
「……とりあえず、作業」
ここで山風がもう一度作業分担。しっかりと調査隊の隊長として指揮が出来るようになっている姿を海風に見せようとしているのは、後ろからずっと見続けていた江風と涼風にもすぐにわかった。
鎮守府から海風が失われてから、山風も精神的にいろいろあったが、成長しているのも確か。北上と大井という師にも出会い、心身共に強くなっている。引っ込み思案な山風が、こういう状況でも割って入れるくらいになったのは大きい。

「戦艦のヒト達は……宗谷さんと荷物を運び込む感じで……。力仕事いっぱいだから」
「Ｏｋａｙ．　比叡、武蔵、私達は宗谷を手伝うネ」
「了解です！　力仕事ならお任せください！」
　武蔵もいいだろうと力強く頷く。この中でも膂力が一番あるのは武蔵であるため、こういう作業もお手の物だろう。
「空母のヒト達は……捕まってる敵だったヒト達の様子を」
「ええ、私達が見てくるわ。治療薬は明石さんから貰っておけばいいわよね」
「まずは正気に戻ってる大鳳の様子からがいいんじゃないかな。話せる状態ならいいけど」
　実際大鳳はこの一晩で顎のダメージがある程度回復し、話せるくらいにはなっている。そこで話を聞ければ幸い。
「残りは……泥の駆除……」
「山風の姉貴、意見具申いいかい」
　ここで江風が提案。
「江風と涼風、あと島風くらいは、ミシェルのこと知っておいた方がいいと思うンだよね。ほら、予想外にヒト型になってたわけだしさ」
「……確かに。江風にしてはいいこと言う」
「一言多いぜ姉貴。だから、４つ目の班として、ミシェル調査ってことでいいかい？」
　当初は３つの班に分ける予定だったが、ミシェルという知らない要素があったため、そちらの調査も必要になった。江風がそれを率先して言い出したが、これは根っこの部分に力仕事や精神的に疲れそうな仕事を回避しようという魂胆もあったりする。
「わかった……じゃあ、お願い」
　そうなると、残った山風は明石と大淀と共に泥の駆除に。ここには春雨がついていくことになるため、海風も確実にいる。江風としては、海風のことをずっと考え続けている山風にそういう機会を与えようという気持ちもある。
　山風も江風にそういう気持ちがあることには気付いていたので、心

の中で感謝しつつも班行動を始める。
「それでは、こちらもすぐに準備しますね。機材がちょっとあるので、それだけ持ってきますので。あと、その場でいろいろと調べることもあるかもしれませんから、時間はかかると思います。改めて、よろしくお願いしますね！」
「ええ、よろしくお願いねぇ。私達の平和を、取り戻してちょうだいねぇ」
「任せてください！　私も平和のために研究を続けてるんですから！」
　大淀を筆頭に明石に対して『本当か？』という思いが強かったものの、実際明石は物騒な発明が多いだけで基本的には世界の平和のために尽力しているのは確かだ。思いと行動が若干食い違うことがあるだけ。それに、その技術力で大損害があったりはしていないため、全員がちゃんと信じることが出来る。

　なんやかんやあったが、ようやくここから作業開始。まずは最優先である泥の駆除から。

それは正しいこと

調査隊の作業で最も重要なのは、施設に散らばって付着した泥を排除すること。そのための装備を明石が作ってきているため、まずはそれを装備する。

今後のことを考えると、その装置の扱い方はここにいる者全てが知っておく必要があるため、泥駆除班に便乗する姉妹姫と白露型姉妹はそのやり方をしっかりと学ぶ。

今は疲労も取れておらず眠気もそろそろ来そうではあるが、施設の維持のためには重要なことであるため、これを今日最後の仕事として気合を入れ直した一同。

しかし、明石が持ち出した装備を見て眠気が一気に飛んだ。

「えぇと、明石ちゃん。それが泥を消滅させるっていう装備かしらぁ？」

「はい、そうですよ。冗談みたいな見た目ですけど、これが一番わかりやすく効果的に泥をピンポイントで吹っ飛ばすことが出来ますので」

明石が持ってきたのはどう見ても草刈機だった。長い柄の先端に回転する刃……ではなく、ただの円盤が接続されており、ここから明石が話していた波長が放出されるらしい。金属探知機のように回転させないタイプもあったらしいのだが、ここが回転するのがミソらしい。

「特殊な波長を扱いますので、こう、捻じ切るように泥を排除します。ただ飛ばすだけだと相当な力が必要なんですけど、それ以上の力を軽い負担で作り出すために、遠心力などなどを使ってみました。本来そういう波に回転なんて意味がないかもしれないんですけど、そこは私の発明ですので、しっかり効果的にしてあります。あ、ちなみに作動中は絶っっっ対に円盤に近付かないでくださいね。ヒトに向けるのも以ての外です。これはそこにある泥を消し去るために作ったモノでして、海中のそれにも対応出来るくらいの高出力ですからね」

相変わらずのマシンガンのようなセールストークに、姉妹姫はタジタジである。明石のこの性質を知っている白露型姉妹は、久しぶりに

これを見たので変に安心してしまった。離れてそれなりに経つ鎮守府は、何も変わっていないと実感出来る。
「ちなみに、万が一それに触れてしまった場合、どうなってしまうのかしらぁ？」
「回転する円盤に触れたらまぁ間違いなく触れたところが吹っ飛びますね。あと、泥を捻じ切る波長を身体に受けたら……どうなるかわかりますよね？」
「なるほど……大分危険なモノであることはよくわかったわぁ。でも、それくらい使わないと対処が出来ないということでもあるのよねぇ」
「そういうことです。身体に影響のあるモノを排除するためには、身体に影響のあるモノを使わなければ難しいんですよ。そもそもそれなりに強い火力でないと消し飛んでくれないような存在ですから、ある程度は出力を高めないとどうにもなりません。でも強くしすぎると、何処までも被害が大きくなりますから、今回はこの程度で抑えたんです」
毒を以て毒を制するわけではないのだが、強いモノに対しては強いモノを使わなければどうにもならないということである。
そして、それだけ危険なモノであっても、使う者さえ正気であれば危険ではない。明石だって、こういうモノを作っている科学者であっても、根幹は平和を願う艦娘だ。
そもそも、艦娘の艤装だって言ってしまえば危険物なのだから、この装備だけを危険視するのは間違っている。本当に見なくてはいけないのは、使い手だ。
「実際に効果をお見せしましょう。大淀、その眼鏡で泥を確認しながら、これを使って消し飛ばしてやって。威力は最小でいいからね」
「ええ」
装備を渡された大淀がそれを下段に構え、泥があるであろう場所に向かう。今ここにいる者の中で泥の場所が正確にわかるのは、眼鏡を預けられている姉妹姫と春雨。その３人は、大淀が真っ直ぐ一番近くに向かっているのがよくわかる。

施設を少し大きく回って辿り着いたのは、これといって何かあるわけでも無い庭の一部。しかし、そこには泥が僅かに付着しており、近付けば目視でもわかるのだが、近付き過ぎたら危ない。
「では、これを第一号として処理を始めたいと思います」
「よろしくお願いねぇ」
大淀が中間棲姫に伝えると、早速装備を掲げて円盤を泥に翳すように構えた。そして、手元に配置されたトリガーを引く。
その瞬間、装備の先端に備え付けられた円盤が唸りを上げて回転を始めた。そこまで大きな音ではなく、しかも風が出ているわけでもない。ただ回り続けるだけなのだが、そこにある泥には明らかな異変が起きる。
「わ、わ、すごい。本当に反応が消えてく！」
「消滅というより、霧散と言った方がいいのかしら。飛び散るわけでもなく、その場で綺麗さっぱり消えているわ」
春雨と飛行場姫がその様子を見て感心した。明石が言っていた通り、本当に泥がその場から綺麗さっぱり消えていくため、中間棲姫も全ての場所を爆撃するようなことにならなくて良かったと安心する。
「特殊な波長によって構造を分解しているイメージですね。この泥は群生している微生物みたいなものなので、その群を解き、そこから無へと昇華する。これがこの装備の仕組みです。小さい泥なら最小威力でも問題ありませんが、もし大きな泥があった場合は、威力をより大きくすることが出来るのでご安心ください。とはいえＭＡＸはダメですよ。ふとした弾みで誰かに波長を照射するようなことになったら、タダじゃ済みませんから」
明石がその効果を話してくれている中でも、中間棲姫はいろいろと考えてしまっていた。
「もしかしたら……貴女が来てくれるのを待っていたら、畑を壊さなくても良かったのかしらぁ」
悲しそうな声色で中間棲姫が呟く。この装備の効果を見ている限り、見つけた泥はその場で消滅し、そしてそれは泥だけを排除している優れ物だ。付着している庭の一部を破壊することもなく、そこには

元々何も無かったと言わんばかりに綺麗になっている。
　もしこれが最初からこの施設にあったのなら、畑を破壊することなく泥のみを排除出来ていたかもしれない。辛い思いをして、今まで可愛がってきた野菜達に爆撃を浴びせるようなことをしなくても良かったのかもしれない。
　それに対して、明石は少しだけ考える素振りをした後、小さく納得したような表情で中間棲姫に向き合う。
「いえ、貴女のやったことは正しいです。施設のことを考えるのなら、真っ先にやってもおかしくはないです。畑を優先したのも大正解ですよ」
　何を根拠にという視線を向けるが、明石は続ける。
「この装置はあくまでも表面上の泥を排除するモノです。見た目は綺麗さっぱりとなっていますが、泥は泥、流動体なので、染み込むという性質が確実にあるでしょう。ただでさえ増殖して侵蝕するという性質まで持ち合わせているんですから、そこにあるだけでもゆっくりと確実に蝕んでいくでしょう。それが野菜に付着ですよ。土や石と違って、口に含む可能性が高いモノです。私達には見えないところに染み込んで、この波長の届かないところに潜伏していた場合、何も出来ずにアウトです。そのまま食べたらおしまい」
　明石が微生物と称するだけあって、その泥は視認出来ない程に小さな悪意の群生。それ故に、肌に触れてもアウトの可能性を示唆しており、あらゆるカタチでの接触を禁じている。明石が作った防護服も、完全に密閉された侵蝕の隙も与えないスーツになっているくらいである。
　そんな相手に対して、それこそ入り込む隙間だらけの野菜なんて、どれだけ波長を当てても排除しきれない。そして、そこからまた増える。食べられないのなら全て廃棄するのは変わらない。畑ごと破壊する必要もあっただろう。
「むしろ、ここで畑を破壊していなかったら私が破壊してましたよ。こういう庭と違って、耕している土なんて泥に染み込んでくださいと言っているようなものですもん。一度全部掘り返す必要があったん

ですから、真っ先に破壊したのは最善手だと私は思います。言い方は悪いですが、畑も野菜も作り直せますからね」
今回はこのマシンガントークもありがたかった。中間棲姫に反論の余地も与えずに、苦しみながら実行した破壊を肯定し続ける。間違っていないと言われることが一番の癒しだった。
「ただ、１つ気になることが」
「気になること？」
「はい。私……というか全員がそうだと思うんですけど、陸上施設型の深海棲艦とお付き合い出来るなんて初めてのことじゃないですか。で、この施設というか島ってどういう扱いなのかなと思って。これって貴女の艤装になるということでいいんですか？」
艦娘側には絶対にわからないこと。陸上施設型の深海棲艦の持つ陣地、この島の扱いである。
実際は殆ど艤装と同じ扱い。中間棲姫と飛行場姫が死ねば、この施設も島もその場で消失する。元々ある島を改造して艤装扱いの島にしているわけではないため、島そのものが姉妹姫そのものであるところもあるのだ。
艦娘にも深海棲艦にもあることだが、身体と艤装はある程度リンクしている。どちらかといえば身体から艤装への一方通行ではあるのだが、身体が休まれば艤装も修復されるくらいには繋がっている。
そうなると、この島と姉妹姫は繋がっており、そんなところに泥が付着して、しかも染み込んでこようとしてくるのだから、気掛かりになるのは当然のこと。
「この島すらも艤装だというのなら、泥が付着していることで貴女方に何らかの影響を与えてしまいかねないんですよ。本体に付着しているわけではないので、大きく変化はないかもしれませんけど、何かしらの体調不良なり何なりが出てもおかしくありません」
姉妹姫としては、今のところ何も感じるところはない。島全体の大きさを１００として、泥の規模が１にも満たないため、正直蚊に刺された程度である。しかし、その蚊に毒があるから問題。
「泥が付着していた土などは持ち帰って分析させてもらいますが、何

か違和感とか不調があれば、必ず言ってくださいね。どうにかして治療しますから。薬とか薬とかいーっぱいありますので、その身体も隅から隅まで調べて調べて調べてまくりますからね！」
　最後の最後で欲望が出てしまったが、明石の優しさはよく理解出来た。言葉選びとテンションが悪いだけで、本当に平和を望んでいる者の顔をしている。
「ふふ、ありがとう明石ちゃん。私達に何かあったらお願いするわねぇ。そうだ、分析のために私の何かを持っていく？　髪とかなら渡せるけれど」
「いいんですか⁉　是非ともお願いします！　姉姫は今の黒幕の器ということなので、確実に何かしらの関係性があると思うんですよ！なので、姉姫の何かを調べられたら、黒幕の居場所や、弱点まで分析出来る可能性があるんです！」
　急に押しが強くなったことで、中間棲姫が一歩下がった。
「一番いいのは身体の一部なんですが、流石にそんな猟奇的なことは言えません。入渠で全てが修復される艦娘と違って、深海棲艦はそういうカタチで治せないと聞いていますから、傷つけたくはないんです。なので、欲しいのは髪か爪、体液が妥当ですね。体液と言ってもなんでもいいんですが、血をくださいというのは怪我をしろというのと同義ですから、なんでしょう、唾液か、涙が一番いいかなと思います。流石に下の」
「明石、ステイ」
　かなり危ないことを言いそうになったからか、円盤をちゃんと止めてから大淀がまた明石に一撃入れた。抉りこむように腹を殴ったことで、明石の言葉はそこで止まる。
　白露型姉妹は相変わらずだなぁとほのぼのしていたが、飛行場姫としては気が気でない。姉の貞操の危機まで感じてしまった。
「すみません、コレにはよく言って聞かせておきますので」
「別に構わないわぁ。後から髪を数本あげるから、それで研究を続けてちょうだいねぇ」
　若干引き攣った笑みではあるが、明石は信用を得た。

ここから泥駆除はどんどん進展していき、時間はかかったものの眼鏡で見える限りの全ての泥は消失。あとは染み込んだ泥がどれだけあるかの調査になる。

解放の薬

施設の外で泥駆除が進められている間、調査隊の空母組、千歳、千代田、そしてサラトガは、施設の中へと入れさせてもらっていた。今は治療中という大鳳の様子を見るためである。

まだ泥を吐き出していないコロラドと潜水艦姉妹は、リシュリューに絞め上げられているため外にいる。そちらは後にして、まずは正気に戻った大鳳の話を聞くことを優先した。同じ空母ということで話もしやすいだろう。

「▪a（お）fait（久し）longtemps（ぶりです）. 千歳さんに、千代田さん。そちらは、Saratogaですね。話に聞いています」

「ええ、サラも話に聞いていました。サラが以前にここに来た時は、ここでフルタカの看病をしていて顔を合わせられませんでしたからね。改めまして、Nice to meet you Commandant Teste」

空母組がやってきた大鳳が寝かされている部屋には、当然コマンダン・テストが常駐。大鳳も大分安定してきているようで、痛みはまだまだ強いものの、話せるくらいにまでは回復していた。

古鷹の時のように内臓がズタズタなんてこともなく、骨は折れていてもそれだけで済んでいるため、少量ではあるものの朝食も摂っていた。代わりに利き腕である右腕を刎ねられているため、今はコマンダン・テストに食べさせてもらっている程。

流石にまだ艤装の展開と同様に腕を作るまではやっていない。斬られた痕の痛みがあるため、まともに動かせそうにないからだ。今の傷口は艤装の蓋がしっかり嵌め込まれ、血も流れていない状態。

「貴女が大鳳ね……正気に戻っていると聞いているけれど」

話を聞くのは千歳。コマンダン・テストに促され、ベッドの横に腰掛ける。

大鳳もその声に視線を向け、小さく頭を縦に振る。話せるくらいになっていても、まともに話せるわけではない。まだ顎には痛みがあり、かつ胸の強打によって息苦しさも残っているため、動きはなるべ

く小さくしていた。
「話せないのなら、ＹｅｓかＮｏだけでもいいから答えてもらえると嬉しい。勿論、無理はさせないわ」
「……出来れば……自分の口で……話したいですが……」
ゆっくりと言葉を口にする。しかし、話すたびに顔を顰めるため、まだまだまともに話を聞くことが出来るのは先になりそうである。
大鳳としては、今までにやらされてきたことを反省するという意味でも、この施設に、延いては世界の平和のために身を尽くしたいと思っていた。それが自分の意思では無かったとしても、血に塗れた手は紛れもない事実。
失われた腕もその証であると、痛みも今ではありがたいものと感じる程だった。この痛み、この苦しみは、自らの罪を如実に表してくれるモノ。痛くなくなったとしても、死ぬまで残り続ける傷を見ることで、犯した罪を一瞬たりとも忘れずに済む。
「……私は……拭いきれない罪を……犯しました……。償うためにも……私は……知る限りのことを話したい……今すぐに……」
ゼエゼエ言いながらも、少しずつ少しずつ話す。
境遇は今までに古鷹から聞いたものと殆ど同じ。突然泥に襲われ、口に飛び込み、そして仲間だった伊勢と日向を殺害して遺体と共にその場から消えた。そして気付けばこの身体である。
またもや本当に重要なところは泥と共に吐き出してしまっていた。黒幕の居場所も、自分がされたこと、他の者にしていること、その何もかもがすっぽ抜けてしまっている。白露や古鷹と全く同じだ。
だが、ここからは大鳳のみが知っていることが展開される。
「私達は……この施設に悪意の塊をばら撒くために……夜に来ました……。雨が降ってきたのは……本当に偶然……狙ってやったわけでなく……準備が出来たら雨だっただけ……」
天気がどうであっても、昨晩に決行していたらしい。その日がたまたま雨だっただけ。潜水艦姉妹が施設の場所を発見する前から龍驤がこの作戦を考えていたらしく、いざ発見したら真っ先に準備をして行動に移す予定だったらしい。

結果的に雨という好条件まで手に入れたことで最高の状況での実行となったが、ミシェルが潜水艦姉妹に気付いたことと、春雨が深夜でも直感的に目を覚ましたこと、そして中間棲姫の超火力によって、その作戦は８割失敗に終わった。残り２割は現在明石の発明品によって駆除中。
「立案者の龍驤が来ていなかったのは何故？　あの子の性格なら、自分の立てた計画が上手く行くところを見たがりそうなものだけれど」
「龍驤は……今、療養中です……。私は少なくともそう聞いています……」
前回の戦いで、山風と北上にやられた傷がかなり深かったらしく、黒幕の本拠地で治療をしていると、大鳳は話した。だが、その本拠地のことがすっぽり抜けてしまっているせいで、どのように治療しているかなどはまるで思い出せないとのこと。ただ、治療しているという事実だけを覚えているのみ。
それを悔しそうに話す大鳳に、千歳は大丈夫と落ち着かせる。無理をするなと言うかのように、その額に手のひらを置いた。
「無理させてごめんなさいね。大鳳、今は眠った方がいいわ。コマさん、よろしくお願いします」
「Ｏｕｉ．　ゆっくり休んで、回復に専念してもらいます」
これ以上話させるのも酷に思えてきたため、大鳳との対話はここで一旦終了。
やはり、泥を失った時点で真相まで失っているのは誰だって変わらない。ならば、泥を持ったままの者に尋問をするのがいいだろう。

空母組はそのまま施設の外へ。畑とは別方向の庭には、戦艦棲姫とリシュリュー、そしてその艤装に絞め上げられている３人の敵。
さらには、コロラド辺りが余計なことをしないようにと、叢雲もそこに槍を持った状態で陣取っていた。勿論薄雲も隣に。
「……こちらはこちらでとんでもないことになってるわね……」
自分の数倍の長さを持つ艤装で３人を拘束し、身動き１つ取らせな

いようにしているその光景は、やはり艦娘とはかけ離れたモノ。
その３人は、抵抗もせず拘束されている状態。コロラドに至っては、今までに目を覚ます素振りも見せなかったらしい。今までにないスタミナ切れによる気絶が敗因だったからか、その回復にも相当時間がかかっている。
代わりに、潜水艦姉妹の方は既に目を覚ましている。スタミナに関しては他と違って相性のいい同種艦が混ざっていることでデメリットとして機能していないが、そもそも陸上では何も出来ないため無駄な抵抗をやめている。艤装すら消しているため、顔の半分を隠すシュノーケルも消え、その顔は曝け出されていた。
「この子達を治療しにきてくれたの？」
３人の到着にいち早く反応したのは戦艦棲姫。実際は叢雲が感知していたが、それだけを伝えてまたコロラドが目を覚まさないように見張っている。
「はい、薬も明石さんから貰っているので、正気に戻すことは出来ますよ。ただ……出来れば治療前に尋問をしておきたいんですが」
「この潜水艦の子は、何も話してくれないわよ。守秘義務だそうで」
依頼に入っていないことはやらないということを徹底しているようで、陸で目を覚ました後は無言に徹している。何処を見ているかわからない視線でぼんやりとしており、隣に姉妹がいても我関せずと、抵抗もしない代わりに何も言わない。
善意も悪意もないが故に、この行為も意思なんて無い。悪意をもって無言に徹しているならまだしも、ただ話す必要が無いから話さない。だからこそ、何をしても話さない。おそらく、拷問をしようが、それこそ死にかけても話さないだろう。
「コロ助は置いておいて、Ｓｏｕｓ―ｍａｒｉｎは治療してもらえるかしら。３人同時に拘束するのも疲れるの」
リシュリューからも少しだけ弱音が出る。何せ、戦艦棲姫とリシュリューは一晩この状態を維持しているのだ。施設の中に入ることも出来ず、最初は雨すら降っていたので、疲労もかなり溜まっている。
「わかりました。では、その２人は先に治療しましょう」

言いながら千歳が懐から取り出したのは薬瓶。そこには妖精さんも一緒におり、荒潮の時と同じように薬を強引に飲ませる係である。
千歳がその妖精さんにお願いすると、サムズアップをした後に薬を2錠手に取り、器用にリシュリューの艤装を駆けていく。
目の前に妖精さんに立たれても、潜水艦姉妹はどこ吹く風。薬を持っているからか、しっかりと口も噤んでいた。飲まされたら依頼を達成出来ないと判断したのだろう。
「薬を飲むだけで泥が消えるなんて、便利なものね。そういうのがあるなら早く出してもらいたかったわ」
叢雲の悪態も軽いもの。戦闘で怒りを発散出来たことが良かったか、まだ常に怒りを振りまくところにまでは行っていない様子。なので、薄雲も叢雲の発言を諌めるようなことはしない。
一切口を開こうとしない潜水艦の前に立った妖精さんは、何を思ったか潜水艦の鼻の辺りに触れ始めた。フェザータッチでやんわりと触れつつ、その手は徐々に鼻の穴へ。
潜水艦は何かに耐えるような表情になってきていた。妖精さんは、どういう手段を使っても口を開かせようとしているのがわかる。
「っ……へっくしゅ！　んぅっ!?」
それでも限界が訪れ、くしゃみをしてしまった。その時にどうしても口が開くため、妖精さんはその隙を突いて口の中に薬を放り込む。突然のことだったため、嫌でも呑み込む羽目に。
ちゃんと入ったことを確認したので、また次の潜水艦の方へ。今やられていたことを見ていたため、くしゃみを誘発させることには耐えるように意気込む。
しかし、妖精さんの技はそれだけでは無い。口を開かせるために手段を選ばないため、鼻ではなく顎の下へと手を伸ばし、くすぐり始めた。
「やってることエグいわね。いいぞもっとやれ」
「姉さん……でも、手段を選んでいられませんよね……」
叢雲は少し楽しそうに妖精さんのやることを眺めており、薄雲はその姉の姿を見て呆れつつも、この手段を取らざるを得ないのは納得し

ていた。
　戦艦棲姫もリシュリューも、この容赦の無さには複雑な表情。最初に自分の小ささを利用して手をこより代わりにくしゃみを誘発させたところから、かなりダーティーなことをするのはわかっていたが、今度はくすぐり。それでもダメなら、次は強引に痛みを与えるなりする可能性が高い。
「っ、ぶふっ、んうっ!?」
　くすぐられていた潜水艦も限界が来たことで噴き出し、その瞬間に薬を放り込んだ。その腕もなかなかのモノで、綺麗に喉の奥まで投げ込まれたので、嫌でも呑み込む羽目になる。
「っ!?」
　そして2人同時に身悶え始めた。薬の効果が始まったことがよくわかる。泥の消滅は侵蝕されている者に大きな快楽を与えるのだが、明石はあえてその要素を少ししか落としていない。意識がある状態で薬を呑み込んだ場合、耐えようとして効果がうまく発揮しない可能性があるからだ。耐え難い感覚を与えることで、嫌でも受け入れさせるという明石の作戦でもある。
　潜水艦姉妹はそれにどうにか耐えようとするのだが、明石の策略は綺麗にハマり、どう頑張っても耐えられない。
「〜〜〜〜!?」
　声なき声を上げて、潜水艦姉妹はビクンと大きく震えた後、グッタリと力を抜いた。その後も度々身体を震わせるものの、力は入っていないらしく、もう拘束の必要もないと判断し、リシュリューは2人を解放した。
　それでも立つことが出来ずその場に倒れ込み、ハァハァと荒い息を吐きながら震えている。
「……絶対に侵蝕なんてされたくないわね。こんなのやらされるわけでしょ」
「ですね……。死ぬほど痛いか、コレか……ですか」
　あの叢雲ですら引いているため、これがどれだけ壮絶なのかがよくわかった。

これで潜水艦姉妹は解放された。残りはコロラド、ただ1人。

尋問

明石の作った薬によって、潜水艦姉妹は治療完了。これで残るのはコロラドのみとなった。その姉妹は未だに薬の効果でビクンビクン震えているため、千歳と千代田が介抱。

「すぐに立ち直るのは難しいだろうから、私達はこの子達を見ています。サラトガさん、本当にいいんですね？」

「はい、彼女には、Ｃｏｌｏｒａｄｏには、サラが話をします」

千歳がサラトガに問うのは、コロラドに対する尋問は自分がやると言い出したからだ。姉妹をこうする前から話していたことであり、むしろコロラドが敵対していることを知ってからずっと考えていたことでもあるらしい。

サラトガはコロラドと同郷。リシュリューとコマンダン・テストの関係性と近い。それ故に、出来ることなら自分でコロラドを止めたかったとのこと。残念ながら最後まで戦うことは無かったのだが、この最後の大役を自分で出来ることに感謝していた。

「今からサラがするのはＣｒｏｓｓ―ｅｘａｍｉｎａｔｉｏｎ（尋問）ですね。Ｃｏｌｏｒａｄｏから聞けることがあるのなら、聞き出せるように努力しましょう。もう無理だと感じたら……妖精さん、Ｍｅｄｉｃｉｎｅ（薬）をお願いしますね」

潜水艦姉妹に強引に薬を飲ませたあの妖精さんが、サラトガに向かってサムズアップ。いくらでもやらせてくれと言わんばかりに、薬を抱えてニヤリと笑う。

「それではＲｉｃｈｅｌｉｅｕ、ＣｏｌｏｒａｄｏのＲｅｓｔｒａｉｎｔ（拘束）を解いてください」

「Ｏｕｉ．　叢雲、もし何かあったら、痛めつけていいわ」

「任せなさい。殺さない程度にぶちのめしてやるから」

まだ眠っているコロラドに対する拘束が解かれ、その場に置かれる。同時に全員が警戒を強めた。

一番危ないのは、ここでコロラドが白鯨を展開することである。長い時間気を失っていたかもしれないが、だからといって体力が回復し

ているかどうかはわからない。それに、陸であそこまでの艤装が展開出来るかもわからない。
　しかし、展開出来てしまった場合、ここら一帯が酷いことになることは確定している。施設にも影響が出るだろう。そのため、出来る限り施設から離れ、それでも海には近付きすぎない場所まで持っていく。
「ふぅ……少し緊張しますが、やります」
　小さく息を吐いた後、よしと気合を入れた後、キッとコロラドを睨み付けるように見据えた。そして、
「Ｇｅｔ　ｕｐ　ａｌｒｅａｄｙ（いいかげんにおきなさい）、Ｃｏｌｏｒａｄｏ」
　サラトガから出たとは思えないドスの利いた声でコロラドに声をかける。その声色を耳にして、ここにいた者達はゾクリと背筋に冷たいものが走った。そこに乗せられた感情は、怒りなのか、呆れなのか、それとも。
「……ん、ここは……」
　その声でコロラドも目を覚ます。両サイドにはリシュリューと戦艦棲姫が陣取っており、海へ向かうルートは槍を突き付けている叢雲と鎖を握りしめる薄雲。そして、真正面には腕を組んで仁王立ちのサラトガ。
「……Ｓａｒａ、アンタもここにいるとはね」
　明確に敵対の意思を瞳に宿し、睨み返す。そんな顔をされてもサラトガはどこ吹く風。
「貴女がどういう経緯でそのようになったかは知りません。ですが、Ｅｎｅｍｙとしてそちら側に立つのでしたら、サラも容赦は出来ませんので」
　しっかりと目を見つめる。コロラドも負けじと睨み付けつつ、その冷たい瞳に内心驚いていた。コロラドがこうなる前に、別の個体のサラトガのことは知っていた。故に、こんな表情が出来る性格とは思っていなかった。
　いつも穏やかで、笑顔を絶やさず、しかし戦場では凛々しく仲間達を後ろから助ける素晴らしい空母。それがサラトガに対する印象。

しかし、今のサラトガからは穏やかさなんて微塵も感じない。敵対しているという気持ちをコレでもかというほどぶつけ、目でコロラドを殺してしまいかねない程になっている。
「わかっていると思いますが、貴女はもう逃げられません。なので、知っていることを全て話してください。悪いようにはしませんよ」
「はっ、何を勝ったつもりでいるのよ。戦場で私にトドメも刺せない甘ちゃん達は、そのせいで後悔することになるわ」
やはり往生際悪く艤装を展開しようとするコロラド。睡眠である程度の体力が回復しているため、戦場で見せた白鯨以外の艤装の展開は可能だった。流石に白鯨は体力を使いすぎるのか、ここで展開しようとは考えなかったらしい。
だが、それは誰もが見越していたことだ。そして、そうすることだって誰もが予想していたことだ。まともに攻撃させるつもりなんて最初から無く、むしろ展開だけはさせてからさらに上から叩き潰すつもりですらあった。
その筆頭が、何を隠そうサラトガである。煽ればムキになって攻撃を仕掛けようとしてくるのはわかっていた。さらに言えば、コロラドはほんの少しの煽りでもムキになる。サラトガのような穏やかな者の煽りならば、即座に反応してこうなることくらい考えるまでもなかった。
「Ｆｒｅｅｚｅ（動く な）」
それ故に、サラトガはコロラドよりも早く動いていた。コロラドの艤装展開前には、サラトガも艤装展開が完了しており、コロラドの艤装が展開完了する時には既に手に持つトミーガン型の飛行甲板から艦載機が発艦、いや、発射されていた。
あれ程強固だったカニの甲羅の盾も接続されている根元を吹き飛ばされ、ロブスターのハサミも同じように接続されている根元を抉られる。防御に動く暇すら与えられない。
艦載機そのものが弾丸と化し、しかしコロラド本体を狙わずに抵抗する手段のみを奪い取る。これはコロラドが完全に回復していないことを如実に表していた。

万全ならば、この程度で艤装が破壊されることはない。しかし、スタミナ切れで倒れた挙句、一晩絞め上げられ続けた状態で、本調子なんて出るわけがない。ムキになって戦おうとしているのだから尚更だ。

「Ｃｏｌｏｒａｄｏ、サラの質問にただ答えるだけでいいんですよ。余計なことはしなくて結構です。Ｏｋａｙ？」

一切表情を変えず言ってのける。そのあまりにも冷酷な瞳に、コロラドは動けなくなった。

プレッシャーが普通では無かった。確実にいつものサラトガではない、コロラドを見下したような視線。並の艦娘がその視線を受けたら、恐怖でへたり込んでしまうほどの圧。

「貴女もＭａｌｉｃｉｏｕｓ（悪意）に囚われているだけの正しい艦娘だったのでしょうが、理由はどうであれ今はＥｎｅｍｙです。だから、黙ってサラの質問に答えてください。質問にはＹｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ．Ｏｋａｙ？」

コロラドは小さく舌打ちをした。たかが空母１人と考えていただろうが、目の前の空母はこの距離でも隙が無いのである。

大将の艦隊に属している者なら、サラトガの隠し続けている真の実力を知っている。何せ、このサラトガは暴走した武蔵を止められる唯一の艦娘なのだ。最強の艦娘と言われている武蔵が、あまりにも戦いが楽しくて命令を無視しかけた時、それをただ１人で制圧することが出来るだけの力を持っているのである。

そんなサラトガが、全力で敵意をぶつけて尋問をしようとしているのだから、こうなっても仕方なかった。敵ですら震え上がらせるその目は、コロラドとて例外では無い。

「貴女は、黒幕の居場所を知っていますか」

質問に対して、コロラドは無反応、黙秘権を使った。しかし、それはサラトガの求める解答では無い。

「Ｃｏｌｏｒａｄｏ、貴女は本来聡明なＢＩＧ　ＳＥＶＥＮの１人。強く賢く尊敬に値する者だとサラは理解しています。いくらＭａｌｉｃｉｏｕｓ（悪意）に囚われていようと、その高潔な魂は変わりない

と思います。もう一度言います。サラの質問にはＹｅｓ　ｏｒ　Ｎｏですよ。答えてください。貴女は、黒幕の居場所を知っていますか」

念を押してもコロラドは無反応。睨まれている視線に対して目を逸らさないでいるものの、あえて質問には答えないというスタンスを貫こうとしている。

１回目はまだ良かったのだが、２回目はよろしくなかった。サラトガは表情を変えずに艦載機を発艦し、コロラドの腹に食い込ませる。

「つぐっ!?」

「３度目はありません。Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ．　Ｏｋａｙ?」

あまりにも強引なやり方に、周りは少しだけ引いていた。叢雲ですら、怒りが鎮静化するほどだった。

コロラドも、ここでまた同じように無反応でいたら本当に殺されると感じた。余計な情報を吐くよりはここで死んだ方がマシだろうと考えたものの、それを察したサラトガが先んじて手を打つ。

「ああ、サラは貴女の命を奪うつもりはありませんよ。素直になるまで痛い目に遭ってもらうだけです。生かさず殺さず、心を擦り減らしてもらいます。Ｍａｌｉｃｉｏｕｓ（悪意）が擦り切れるまでやりましょう。そうすれば、自然と泥も吐き出すかもしれませんね」

本当にそれをやるぞという目。このサラトガは、言ったことを本当にやってしまうくらいの信念を持っている。コロラドはそこまで察した。

だが屈するわけにはいかないと、今度は違うカタチで乗り越えようと画策する。反撃の機会を掴み取るため、今は従っているフリをすれば良いと。

「……Ｎｏ」

「あら、知らないんですね。でもＣｏｌｏｒａｄｏ、サラは嘘を吐いているかどうかくらい、顔を見ればわかるんです。仕方ないから全てＮｏで答えてやろうとでも思っているのでしょう。Ｅｍｏｔｉｏｎｌｅｓｓ（無感情）に乗り越えるつもりですね」

艦載機がもう一発コロラドの腹に食い込んだ。撃ち込まれてはそ

の場で消滅し、またサラトガのサブマシンガンに装填されていく。こうしている間は無限に撃てるようである。
「こふっ!?」
「貴女は黒幕の居場所を知っている。それはそうでしょう。そうでなければ４人で纏まってこのＦａｃｉｌｉｔｙ（施設）に来るなんて出来やしない。黒幕本人から指示を受けてここに来ていますよね。答えてください」
　このサラトガには何も嘘がつけない。感情の機微を読み取っているとかそういうのでは無く、本当にその場の空気でそれが嘘が本当かを読み取れてしまっている。
　ここでコロラドは観念した。だが、姫の不利益になるようなことにはならないようにと言葉を選んで話そうと尽力する。
「……Ｙｅｓ．　私は姫から直接指示を受けているわ。この施設にいる器を奪取しろってね」
「なら次の質問です。その姫の居場所は、この施設の近くにありますか」
「Ｎｏ．　私達は器のためにわざわざここまで来ている」
　当たり障りなく、しかし嘘はついていない。どれだけ聞いても、黒幕の居場所に関しては曖昧な答えで躱していく。サラトガも、これは真意までは聞き取れないだろうと感じた。ここまでしても、黒幕の居場所は曖昧で終わらせるつもりなのは変わらない。
　おそらく、あちら側も詳細を知る者を極小数に抑えて、いざという時に情報が漏洩しないように努めているのだろう。一度の敗北から、黒幕はその辺りを大きく学んでしまっている。
　これは擦り切れる程に痛めつけても変わらないだろう。その信念にはサラトガも感心しつつ、別の質問に入る。
「次、今回のＳｔｒａｔｅｇｙ（作戦）……Ｍａｌｉｃｉｏｕｓ（悪意）を高高度から散布するという手段を、ここ以外でもやりましたか」
　そこは重要なところ。実は他のところで実験している、もしくはした後だったとなると、他の鎮守府にも影響が出てくる。
「それは本当に知らない。私は戦力として動いているだけだから、上

から悪意の塊をばら撒くだなんて初めて聞いたわ。確かにそれは効率がいいわね」
　あくまでもコロラドは強力かつ凶悪な戦艦戦力としてのカウントのようで、詳しい作戦の内容は伝えられていないらしい。今回の件は大鳳にしか伝えられていない作戦のようだ。
　圧倒的な力で侵略を進めるための駒。それがコロラドだ。頭を使うことなく、やりたいように暴れろというのが優先される指示のようである。
「そうですか。では次、貴女はどのように作られたか理解していますか」
　次は魂の混成についての詳細を聞き出そうとしている。
「Ｎｏ．　私も気付いたらこの身体だったもの。ああ、でもその前に一度死んでいるわ。姫の手で、苦しまずに息の根を止められたの。眠るように、気持ちよくね。貴女達も味わったらいいわ」
「余計なことを言わなくていいですよ」
　またもや艦載機が腹に食い込む。調子に乗りかけていたので黙らせた。
　しかし、ここでわかったのは、魂の混成のために生きていたコロラドを一度殺しているということ。他の証言や白露の存在から、魂の混成は亡骸の融合と考えるのが良さそうである。
「そうですか。結局、黒幕の居場所に関しては何も教えてくれませんか」
「アンタの質問には答えたわよ。それが私の出来ることだけれど？」
「なるほど、そういうところはＣｏｌｏｒａｄｏなんですね。芯が強く、簡単には折れない。仲間ならば心強いですが、敵となると厄介極まりない」
　ここで妖精さんに合図。これ以上は尋問しても意味がないと判断したか、コロラドにも治療を施すことに。
　コロラドは潜水艦姉妹がどうされたかを見ていないため、不意打ちが完全に決まった。妖精さんの持つ薬が綺麗に口内へと飛び込んでいき、そしてすぐにあられも無い姿を見せることとなった。

コロラドの治療もこれで終わり。敵対していた者全てが正気に戻ることとなる。

黒幕側の情報は多少は引き出せたが、あちらもやたらと慎重なのか、根幹に関わることはまだ触れることが出来ていなかった。

示された道

コロラドの治療もされたことで、施設に捕獲された元艦娘の４人は全て正気に戻ったこととなった。

それが全て終わって少しした後、島内をグルッと一周して眼鏡に反応した泥を全て駆除して戻ってきた姉妹姫一行が、施設外で待機している戦艦棲姫達と合流。元艦娘達が明石の薬によって治療されたことを知り、大いに喜んだ。

「それじゃあ、みんなが元に戻れたのねぇ。よかったわぁ」

「ま、まぁ、そうね」

ほんのりと顔が赤い戦艦棲姫の表情に疑問を覚えつつも、未だに薬の効果で息も絶え絶えなコロラドがフラつきながら起き上がるのを見たことで、中間棲姫はより一層喜ぶ。

「なんなのよこの薬……」

汗やら涙やらで顔がビショビショなコロラドは、どうにかその効果を振り払った。潜水艦姉妹より身体は大人だからか、そういうところからの復帰は早いようである。

その潜水艦姉妹は未だに厳しいようで、千歳と千代田に介抱されたまま動けないでいる。しかし、意識は失っているわけではないようで、よくわからない感覚にビクビクと震えるのみ。

「何かあったのかしらぁ」

「そこにいる薬の製作者に聞きなさい。正直コロ助が可哀想になったわよ」

既に戦艦棲姫はコロラドに対して憐れみの視線になっていた。一部始終を見ることになったここにいた者は全員同じような視線。叢雲に憐れまれるとなると相当である。

それだけ、薬での反応が激しかったと言える。あまりにも酷いことになりそうだったため、反応が溢れるまでリシュリューが再度拘束し直したレベル。そうでもしないと、本当に見ていられない状態になりそうだった。

姉妹姫と一緒に戻ってきた明石がテヘッと舌を出していたが、その

様子を見て大淀が溜息を吐いたのは言うまでもない。
「元に戻りましたね、Ｃｏｌｏｒａｄｏ」
「Ｓａｒａ、アンタ知ってて飲ませたわけ!?」
「この手段しか無かったんですから、仕方ありませんよね？」
　コロラドは口を噤むしか無かった。
「Ｃｏｌｏｒａｄｏ、まだ何か覚えていますか。正気に戻ったのなら、サラ達に貴女の知る全てを教えてもらいたいのですけど」
「……あれ？　さっきまであんなに姫のことを考えていたのに、顔すら思い出せないわ……。Ｗｈｙ!?」
　ここはやはり他の救われた者達と同じである。泥が失われた時に、同時に最も必要な記憶も失われる。コロラドもそれには納得がいかないらしい。
　今の今までさんざん利用されていたのが気に入らない。今までやらされてきたことも含めて、何故それで自分がこんな気持ちにならなくてはならないのだと、その場で暴れてしまいそうな程に苛立っている。
「何も、何も思い出せない。やらされてきたことは思い出せるのに、あの姫のことになるとそれだけＭｉｓｔがかかるのよ！　なんで、なんでよ!?」
　先程とは違う理由で震え出す。拳を強く握り、歯軋りしそうなくらいに奥歯を噛み締めた。感情が抑えられそうに無かった。
「そもそもなんでこんな身体にされてるのよ！　なんで艦娘を殺し回らなくちゃいけないのよ！　なんでそれで悦んでいたのよ！　この私が、ＢＩＧ　ＳＥＶＥＮたるコロラドが！　私にそんなことやらせたヤツの顔すら思い出せないとか、どうなってんのよ！　ああもう、Ｄｏｎ☒ｔ　ｂｅ　ｓｉｌｌｙ！」
　苛立ちが抑えきれず、地面を拳で殴りつける。薬によって体力を奪われているため、そんなことをしても地面に何か起きるわけでも無いのだが、次から次へと湧き立つ怒りのせいで、何かに八つ当たりしないと気が済まないようだ。
「ええと、コロ助ちゃん、ちょっと落ち着いてちょうだい」

「誰がコロ助だ！」
　戦艦棲姫から聞いていた名前で触れようとしたため、凄まじい剣幕で中間棲姫を睨み付ける。しかし、中間棲姫は怯むことはない。
「Ｓｉｓｔｅｒｓ、彼女はＣｏｌｏｒａｄｏと言います」
「あら、あらあら、ごめんなさいねぇ。そんなこととは露知らず。コロラドちゃん、一度落ち着きましょう。深呼吸、深呼吸よぉ」
　サラトガに指摘されて、すぐに謝りながら改めて手を差し伸べる。そんなことをされても気が治まらないコロラドは、差し伸べられた手を打ち払った。
　もう殆どここに来て正気を取り戻したばかりの叢雲である。言いようのない怒りに呑み込まれ、自分が加害者にされている上に自分を陥れた者の顔も思い出すことも出来ないため、誰に怒りをぶつけていいかもわからず、ただ八つ当たりをすることしか出来なかった。
「っ……大丈夫よぉ、落ち着いて。私達は、貴女を救うためにここにいるの。まずはその怒りを収めて」
　そんなことをされても、中間棲姫の物腰柔らかな態度は一切変わらない。コロラドに寄り添い、とにかく落ち着かせることに尽力する。狂犬を手懐けようとするかのようにも見えなくもない。
「コロラドちゃん、大丈夫。ここにいる子達はみんな貴女の味方。貴女の怒りの理解者。貴女と同じ境遇の子もいるの。だから、今は落ち着いてちょうだい」
　暴れそうになっているコロラドを押さえつけるように抱きしめ、耳元で囁くように思いを伝える。
「いい、コロラドちゃん。貴女が怒るのもわかるわ。やりたくないことを悦んでやるように頭の中を弄られていたんだもの。腹を立てても仕方ないわよねぇ。でもね、ここで暴れ回っても何も変わらない。むしろ、貴女のことだから絶対後悔する。今は落ち着きましょう。ね？」
　不思議と心に響くような声色に、最初は逃がれようとジタバタしていたコロラドも一旦動きを止める。怒りのせいで息は荒く、この拘束を解いたらまた暴れ出してしまいそうだが、中間棲姫の温もりと声に

は癒しの効果があるのか、今はそうすることなく話を素直に聞いていた。
　事実、中間棲姫の声色には落ち着く性質もあるようだった。力の強い姫だからこそ、
「なんで私なのよ……なんでこんな目に遭わなくちゃいけないのよ。とんだ辱めだわ……」
　怒り狂ったかと思えば、次は溢れる涙を腕で拭いながら心の内を曝け出す。情緒が不安定になっているのも、薬の副作用。敵対していた時の心を、治療時の快楽でグチャグチャにしているのだから、こうなっても仕方がないことである。
　起きている時に飲ませたことで荒潮のように性格そのものに影響を与えることは無かったが、それでも治療直後であるためにガタガタ。時間経過で元に戻っていくとはいえ、今は難しい。ただでさえコロラドはプライドが高いため、今までやらされてきたことを醜態、痴態と考えて余計に怒りが募る。
　対する中間棲姫は、そのコロラドの怒りと悲しみを自分のことのように受け入れ、落ち着かせるように頭を撫でる。
「私の中身がごめんなさい。本当にごめんなさい。私が仲間に代わって貴女に謝罪するわぁ」
　中間棲姫からの突然の謝罪に、コロラドも少し驚く。自分が狙われているというのに、それでもそれが自分のせいであるかのように振る舞い、利用されたコロラドに対して本気の謝罪をしているのだ。
「……アンタが謝る必要は無いわよ」
　その行為が、コロラドを冷静にさせた。プライドが高いが故に、無実の者に謝罪をさせるという現状が許せなかった。
「悪いのはあの姫、全部アイツのせいよ。私をこんな身体にしたのも、私に艦娘を殺させたのも、アイツのせいなのよ。アンタは何も悪くない。私も悪くない。アイツ以外、誰も悪くない」
　そう思わないと心が潰れてしまう。ただでさえ深海棲艦化の影響で不安定だというのに、ここからまたおかしくなったらまずい。
「だから、私はアイツに恨みを晴らしてやる。この手で、絶対に潰して

やる」
　しかし、コロラドに混ぜ込まれているのが艦娘ではなく別の姫であるというのがまた厄介なところであり、艦娘コロラドとしてのプライドと同時に、深海棲艦としての破壊衝動も持ち合わせてしまっている。
　結果、仲間のために力を振るうという根本的な部分は艦娘なのだが、自分のために全てを壊すという深海棲艦的な要素もかなり強め。
　叢雲の怒りとは別方向で制御が難しい存在となるかもしれない。だが、コロラド自身のプライドが、それをどうにかするだろう。破壊に頼るのは醜態と考える可能性は非常に高い。
　コロラドは開き直っているようなもの。全ては黒幕が悪く、自分は悪くないのだと考えられるために、やらされてきたことへの後悔が後を引かなかった。

　一方、潜水艦姉妹はというと、ようやく薬の効果による震えが取れてきたところ。２人揃って千歳と千代田に介抱されているのだが、やはりその表情は無い。
「そろそろ大丈夫かしら？」
　千歳が姉妹の片方を座らせてやる。先程までの感覚のせいか、顔はほんのり赤い。しかし、感情そのものが壊れているため、羞恥心だとか怒りや悲しみがまるで無かった。
「……」
　言葉すら失ってしまったかのようにぼんやりとしていた。記憶も無く、感情もなく、支配が終わったために行動する理由も無い。もう何をするべきかも自分で考えることが出来ず、ただそこでボーッとしているだけになる。
　千代田に介抱されていた姉妹のもう片方も同じ。千歳と同じように座らせてやるのだが、何をするでもなくボーッとしているだけ。
「こっちは完全に心が壊れているのね。ヨナから聞いたけど、指示が無いと動けないんだっけ？」

こちらには飛行場姫がつく。心が壊れているために善意も悪意も無く、ただ上に立つ者の指示を受けてその通りに動くだけの機械と成り果てた潜水艦姉妹に、少なからず憐れみを持っていた。
「この子、何者かはわかる？」
「いろんな要素が混ざり合ってしまっていて、誰を元にしているかが本当にわからないんですよ。潜水艦も何人もいますが、その全てが混ざり合っているようにすら思えるくらいで……」
千歳もこれには困っていた。混ざり合いすぎて、特徴と言える特徴もわからない。名乗ることも出来ず、名乗るための名前も覚えていない。違う方向のミシェルのようなもの。
疑問が溢れた結果、何もかもがわからなくなってしまったミシェルは、おそらく根底にはその記憶が存在するのだが、それが見えなくなってしまっている。
この潜水艦姉妹は、あまりにも多くの記憶が混在してしまっているせいで自分の記憶が探れなくなり、その結果心そのものも砕け散ってしまっている。
「一応聞いてみましょうか。貴女、名前は？」
聞かれた潜水艦姉妹の片方は、視線を飛行場姫に向けたものの、質問の意味がわかっているようには見えない。
「何か覚えていることはある？」
その質問に対しては反応を見せるものの、首をただ横に振るのみ。黒幕からの依頼でのみ行動していた潜水艦姉妹から泥が失われたため、その記憶自体が泥に持っていかれてしまっている。
逆に言えば、今までの記憶が何もなく、感情もないおかげで、後悔から自暴自棄になったり暴れたり塞ぎ込んだりすることもない。ただぼんやりしているだけである。
「ふぅん……じゃあ、アタシから『依頼』をしたらいいのかしら」
依頼という言葉にピクンと反応する。そこは今までやらされていたことだからか、深く刻まれているようだった。姉妹共々飛行場姫の方を向き、次の言葉を待っているようにも見えた。
上に立つ者からの依頼を受けるように調整されているのだとした

ら、姉妹姫はまさにその立ち位置になる。中間棲姫は黒幕の半身なのだから余計に依頼をしやすいだろうし、その妹たる飛行場姫も同じくらいの影響力を持っていてもおかしくない。
「アンタ達はもう解放されたの。だからアタシからの依頼は、『自由に楽しく生きてくれ』よ。感情も壊れているかもしれないけど、だったらまた覚えていきなさい。ここにいれば、楽しいや嬉しいくらいならすぐに覚えられるわ」
思い出せ、ではなく、覚えろ。新しい自分となったと考え、過去のことを引きずるわけでもなく、ここからが第一歩なのだと。
「承った。楽しく生きる」
「楽しく生きる。了解」
あくまでも機械的に、しかし飛行場姫からの依頼として、その言葉を刻み込んだ。ここから変われるかはわからないが、無いよりマシ。

今までとはまた違うカタチでの復帰となりそうではあるが、コロラドと潜水艦姉妹は、大鳳と共に施設の一員となる。
すぐに馴染めるかどうかはわからない。とはいえ、道は示された。

取り戻した休息

施設でやるべきことが終わったため、調査隊は一度全員が合流することに。宗谷のクルーザーに積み込まれていた荷物の運び込みも完了しているため、ここから数日は余裕があるくらいにはなった。

「食糧もありがとうねぇ。畑がダメになっちゃったから、本当に助かるわぁ」

「いえいえ、こういう時は助け合いですので」

荷物を待ってきた宗谷がペコペコと頭を下げながら中間棲姫と話している中、ミシェルといろいろやっていた島風、江風、涼風の３人も何処か楽しんでいる様子で山風のところにやってきた。

「いやぁ、ミシェルの教育っつーの？　結構大変だったけど、何とかなったよ」

「服の重要性ってのを教え込むのは大変だったぜぇ」

流石にシーツを身体に巻いているだけみたいな格好はまずいということで、ジェーナスと共にそれなりにまともな姿になれるようにどうにかしたようである。

「あ……そうだ。明石さん……泥って全部駆除した……んだよね」

「勿論。眼鏡で見てくれればわかりますが、この島にある全ての反応は消し飛ばしました。侵蝕されていた３人も、薬のおかげで正気を取り戻していますからね。違う問題が出てきているみたいですが」

その問題までは解決出来そうにないと、施設側に投げっぱなしにした明石ではあるが、やるべきことである泥の駆除が全て完了していることは自信を持って伝えた。

実際、大淀のみならず姉妹姫と春雨が施設内を全て確認し、一切の反応を感知しないところまで持っていけていることは確認済み。この施設に泥の要素がカケラも無いことは確定している。

島の地中に染み込んでしまっている可能性もあるため、それに関しては対策を作りつつ、島の持ち主である中間棲姫に影響が出ないことを逐一確認していく方針。中間棲姫と飛行場姫が崩れたらこの施設は終わりなのだから、ほんの少しでもおかしなことがあったらすぐに

でも連絡するようにと念を押してある。
「じゃあ……鎮守府に通信は出来る……？」
「あ、そうですね。もう出来ると思いますよ」
すっとタブレットを取り出し、すぐさま鎮守府に連絡する山風。そこから数コールもしない内に、待ってましたと言わんばかりの速さで提督が出た。
『通信が出来るようになったみたいだね。山風、首尾の方はどうだい』
「今……全部終わった。詳細は戻ってから話すけど……予定通り、このまま少しここに残る」
『ああ、そうしてくれ。施設の者達は寝ていないだろうから、全員に休んでもらっている間、施設の警備を頼む』
ここは中間棲姫に話せていないことではあるのだが、この時間まで結局寝ずに施設のことをやってきたのだから、全員が消耗しているのはわかっていることだ。早朝に連絡してきた春雨も、画面越しに疲労している姿を見せているのだから察している。
連絡から調査隊到着までに休む時間があったとしても、春雨の視界が多少元に戻る程度。時間にして数時間であり、普通の睡眠時間には全く及ばない。眼鏡による反応の確認や、自分の力で歩くことが出来るようにはなっていたが、疲労が溜まっているのは間違いない。
そこで提督は、今回の調査隊を一時的に護衛として配置し、施設の者全員にゆっくりと休んでもらおうと考えていた。山風達もそういうことなら問題ないと承諾。
戻るのは夜か、もしかしたら1泊ということになってしまいそうではあるが、施設のためなのだからと尽力する。山風は当然、海風に休んでもらいたいというのもある。
『山風、それは僕が直接姉姫に伝えよう。いいかい』
「うん……ちょっと待ってて……」
提督に言われ、山風が中間棲姫にタブレットを見せに行く。通信が可能になったことを喜び、施設の護衛を買って出てくれたことに更に顔を綻ばせた。
正直なところ、中間棲姫も割と限界に近く、すぐにでも眠ることが

出来たら眠りたかった。深夜からずっと起きており、雨の中施設の泥の確認をしていたり、他の仲間達の心配をしつつも施設の運営を変わらず行なったりしていたため、肉体的にも精神的にも疲労していた。泥を吹き飛ばす程の爆撃を行なったのも今に効いてきている。
「それじゃあ……お願いしてもいいかしらぁ」
『ああ、是非とも休んでほしい。安全圏にいる僕が言えたことでは無いのだが、その子達も君達のことを心配しているんだ。酷い目に遭ったのなら、助け合わなくてはね』
こういう時こそ助け合いだと話す提督に、本当にこの人間と知り合えて良かったと中間棲姫は思った。
もしここで調査隊を派遣してもらえなかったら、泥の駆除も出来ず、休息すら出来ず、そのまま消耗していって最終的には考えられないような最悪な目に遭っていた可能性は高い。姉妹姫共々倒れ、仲間は消耗しきり、コロラドや潜水艦姉妹も治療出来なかったかもしれないのだ。
そういう意味でも、鎮守府と関係が持てたのは非常に大きかった。こうなることを予測していたわけでは当然無いのだが、結果的にはこの判断が功を奏したと言える。
『山風、状況をなるべく教えてほしい。1泊することになりそうなら、事前に用意した野営の準備を』
「うん……わかった。そうするなら……またその時に」
『ああ、頼んだよ』
これにて通信は終了。施設側の者達は、ようやく心身ともに休める時間を手に入れることとなった。
「本当は……もう少しお話しとかしたかったけど、海風姉も、みんなも、すごく疲れてると思うから、あたしが提督に話をしておいたの。あたし達が護衛にいれば、みんな休めるかなって」
この案を出したのは山風だったらしい。そして、それを提督に伝えたところ、快くその案を良しとし、仲間達も賛成した。
「そっか。山風、私達のことを考えてくれたんだね。ありがとう」
自分の名前が聞こえたからか、海風が山風に感謝の言葉を述べる。

海風としても、まだまるで本調子ではない春雨には早く休んでもらいたいけど、一斉に休んだら施設が無防備になってしまうのが困ると考えてはいた。自分は春雨のことを全力で守りたいし、でも春雨と一緒に寝たいという気持ちもある。他の仲間達に春雨と眠る時間を寄越せというのも少し気が引けた。

そんな中、山風がこの案を出してくれたのだ。全ての問題点を解決してくれたのは、春雨のみならず、仲間達のためにもありがたい。

そして、それを山風が提案してくれたというのが嬉しかった。自分の後をしっかりと継いで、それ以上に活躍してくれていることを実感する。

「……うん、海風姉は、ゆっくり休んで。その間の施設の平和は……あたし達が守るから」

褒められたことで少し恥ずかしがりながらも小さく微笑む山風。海風に認められたことは、山風にとっても非常に大きなこと。これによりまた成長していく。

施設の外は調査隊に任せて、一度全員が施設の中に入り、元々施設内に留まっていた者達と合流。外に守ってくれるものがいるというのは非常に心強く、これによってようやく緊張の糸が切れた。

「……はぁ……ちょっと……疲れちゃったわぁ」

「お姉!?」

ここで力が抜けたか、中間棲姫が倒れるようにその場で座り込んでしまった。そんな姿を見せたことなんて無かったため、飛行場姫がすぐに駆け寄った。

この施設を開設してから今まで、ここまで酷いことになったことは無く、自分が戦闘に参加するというのも無かった。強いて言えば今は亡き天龍の暴走の時に力を使ったが、そういう時は基本的に飛行場姫がメイン。中間棲姫がここまで動くことはない。

いくら農作業をしていることで体力がついていようと、精神的な疲労も重なればこうなってしまうのは無理もない。

「こんなに長い時間起きていたことも無かったし、いっぱい戦っちゃったものねぇ……なんだかいつに無く疲れているわぁ」
「すぐに休みましょ。せっかく艦娘の子達が守ってくれるって言ってくれているんだもの。厚意に甘えるのがいいわ」
「そうねぇ……みんな、ごめんなさいねぇ。私はすぐに眠らせてもらうわぁ」
　これに関しては誰も否定しない。むしろ、早く寝てほしいという気持ちの方が大きかった。
「えーっと、潜水艦の子、アンタ達も今日はアタシ達のところに来なさい。まだ不便だと思うけど、まずはアタシ達がいろいろ教えるから」
「それも依頼と受け取る」
「了解。楽しく生きるため、貴女達の側にいる」
　潜水艦姉妹も今は姉妹姫の近くにいることで施設での生活に慣れていくことになる。
　名前が無いことが非常に厄介であるが、本人が思い出せないためにどうにもならない。だからと言って、ミシェルの時のように名前を決めるのもなかなか難しく、ひとまずはどちらが姉でどちらが妹かというので決めておこうとしたものの、生まれた時のことも忘れてしまっているためその順序も答えられない。
　見た目も近しいために双子と言っても過言では無く、髪型と体型がほんの少し違うくらいなので、便宜上で片方を姉、もう片方を妹としておいた。
「……姉」
「……妹」
　よくわかっていないようだが、お互いにお互いをそういうものだと認識出来るようにして、ひとまずは乗り切る。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅは私と同じ部屋で寝ましょうね」
「オッケーぴょん！　ジェーナスちゃんと一緒に寝られるなんて夢みたいぴょん！」
　ミシェルはミシェルでジェーナスの管轄下に。先程江風と涼風が話していた通り、シーツを巻いているだけのような姿からは一変し、

今はジェーナスとお揃いの制服姿になっている。どうやら、ジェーナスとお揃いになることが嬉しいと教えた様子。
　無論、このミシェルの姿と態度から、松竹姉妹が大きく反応していたのは言うまでもない。
「コロラドさんは私達とで良かったですか？」
　そしてコロラド。施設の中に入れられたものの、その苛立ちはあまり変化はなく、この施設に所属したばかりの叢雲のようになっているのだが、しかし、そこはやはり高いプライドのおかげで醜態を晒したくないという気持ちが大きく、ストレスは溜まりそうなものの社交的ではあった。
　声をかけたのは古鷹。やはりそこは同じ境遇の者で集まるべきと考えたようで、今まではジェーナスを慰めるために同じ部屋で眠っていたが、ミシェルが施設内に来ることが出来るようになったため、今度はコロラドに同じ立ち位置になってもらおうと考えた。
　ちなみに、ミシェルの前ではあるため、古鷹の姿は鈴谷に変装中。白露ほど言い訳が出来ないために、今は苦肉の策を続行中。
　だが、そのうち正しい姿で対面出来るようにしたいとは願っている。白露が大丈夫なら古鷹も大丈夫かもとは考えていた。
「Ａｈ．そうね。頼んだわ。アンタも私と同じだものね、フルタカ」
「はい。お互いに、その、慰め合いましょう。愚痴だっていっぱい聞きますよ。ね、白露ちゃん」
「おうともさ。傷の舐め合い最高！」
　そのうちここに大鳳も含まれることになるだろう。今回救われた４人の中では、大鳳が最も後を引きそうであるため、コマンダン・テストの介護が必要無くなった後は、そういうカタチでメンタルケアが必要になるはず。
「それじゃあ解散。お姉、肩貸すわ」
「ごめんなさいねぇ妹ちゃん、助かるわぁ」
　飛行場姫も大分疲れているはずなのだが、それを見せないように中間棲姫を連れて奥の私室へと向かった。潜水艦姉妹もそれについていき、ある程度は手を貸す様子。

これによってようやく施設は休息へと向かえた。次に目を覚ました時は、グチャグチャになってしまった施設の外を修復するところからになるだろう。畑の作り直しからとなると骨が折れる作業ではあるが、力を合わせればすぐに終わることだろう。

心の休息

施設全体の休息が終わったのは、殆ど日が暮れているような時間。調査隊の野営が確定したため、既に準備を終えていた。

護衛ということで施設周辺を哨戒したり警戒したりとしていたが、流石に昨晩から今は時間も殆ど経っていないため、何も起きなかったようである。あちらも異変に気付くのはもう少し先になるはず。

大将の艦隊である武蔵とサラトガも、この野営には思った以上に乗り気。大将の鎮守府で野営というのはなかなか出来ないらしく、するとしても宗谷率いる調査隊による長期遠征くらいである。それ故に基本調査隊の宗谷や、一時的に調査隊メインに活動していた島風はそれなりに経験があるが、調査隊の手伝い自体が今回初めてくらいの武蔵とサラトガは、こういう和やかな野営の経験自体が初めてみたいなもの。

「ふむ、こうやって仲間と共に野営というのも、なかなかどうして面白いものだ」

「はい、サラも楽しいです」

一番の戦力がこれを楽しんでいるからか、この野営も非常に和やか。誰も俯いているような者はおらず、心を落ち着けて夕食の準備をしているくらい。

ちなみに料理担当は金剛と比叡。比叡は生粋のアレンジャーであるために料理に関しては危惧されていたが、金剛が余計なことをやらせないようにすることで上手いこと回す。

昨晩に夜襲を受けているため、実際この野営も危険と隣り合わせではあるが、なるべく施設の近くでやらせてもらっているというのと、テントで屋根をしっかり作ることで対策をした。

岸に近いとモロに襲撃を受ける可能性があるためそこから離れ、屋根があればまた上空から泥を散布するという手段を取られたとしてもいきなり侵蝕ということは防ぐことが出来る。

「んー、雨に紛れて散布っていうくらいだし、あの波長を空にぶつけられるようにするのもアリかな。そうしたら、万が一の時に完全に防げ

るし、いざって時は対空砲火みたいに出来るんじゃないかな。最大出力を真上にぶっぱ、多分艦載機もバッタバッタ薙ぎ倒すレベルになる気がするんだよなぁ」
「……それ、本当に大丈夫なの？」
「やってみないとわからないけど、そもそも最高出力はちょっとねぇ。あ、でも雨のことはさておき、薬の改良案があって、戻ったらすぐに作るつもりなんだけど、ほら、飲ませなくても効く薬。液状にして模擬弾に入れてぶっかけるっていう」
　こうしている時も、明石は今の研究の次の段階を考えていた。宗谷のコントロールする大発動艇に研究道具も積み込んできているため、むしろ今も野営の端で作業をしていたりする。
　今回を前例とし、より使いやすく効果的なモノにするべく、改良に改良を重ねる。例えば、泥を吹き飛ばす草刈機の予備パーツを使って、このテントの屋根側に微弱に波長を流すことで降り積もった泥を即座に消滅させる装置をその場で作り上げてしまった。これで万が一また同じことをされたとしても対策が出来ていることになる。
　一度上手く行ったなら、そのノウハウを即座に活かしてくる。それがこの明石。
「あれ、そういや山風の姉貴は？」
「さっき施設ん中入って行ったぜ。海風姉が起きたんじゃないの？」
　野営の準備中ではあったが、山風がいないことに気付いた江風がキョロキョロと周りを見回すが、痕跡が何処にも見当たらず。涼風は山風の行動をしっかりと把握しており、コソッと行ったわけではないので放置していた。
　山風は休息を終えた施設の者達の様子を確認して、それを鎮守府に伝えるために動いている。
　中に入ったのは、先程まで少し薄暗かった施設内に電気が点き始めたから。少なくとも誰かが目を覚ましたということに繋がるため、話を聞きに行こうとしていた。
「あ……」
　施設内で出会ったのは飛行場姫。その両サイドにはしっかりと潜

水艦姉妹が付いている。
結局、潜水艦姉妹は今は飛行場姫の秘書艦のように付き従うように行動していた。『楽しく生きる』という依頼の内容がまだよくわかっていないのだろう。今は飛行場姫の側で施設のことを知りつつ、少しずつでも慣れていくことに専念している状態。
「ああ、山風。護衛ありがとう。おかげでグッスリ眠れたわ」
「よかった……姉姫さんは」
「まだ寝てる。熟睡してるわよ」
飛行場姫はいち早く目を覚ましたものの、中間棲姫は本当に疲れ果てていたようで、今もグッスリ眠っているとのこと。しかし、体調が悪そうとかそういうことはなく、夜に眠るように熟睡しているだけ。しかも、本当に気持ちよさそうに眠っているため、飛行場姫は起こすのを躊躇い、結果そのまま眠ってもらうことを選択した程である。
時間が経てば自然と目を覚まして、いつものように戻ってくるだろう。今は１００％まで回復出来るように、周りがサポートする時間。
「そっか……じゃあ、ひとまずは気を張らなくてよくなった……」
「ええ、そうね。ここから続々と目を覚ましてくるでしょ。アタシが一番だったかどうかは、部屋の中まで見てるわけじゃないからわからないけど」
もしかしたら二度寝に興じている者もいるかもしれないし、既に目を覚ましているが部屋から出ていないだけかもしれない。
休息は普段通りにすることに意義がある。切羽詰まった状況は、一時的に振り払うことが出来たのだから、それこそ自由に楽しく生きるためにのんべんだらりと生活することが大切。
「ああ、ちなみに春雨と海風の部屋は前から替わってないわよ」
その名前を出されたことで、山風はドキリとした。飛行場姫の顔を見ると、少し意地が悪い笑みを浮かべていた。
あわあわしたような山風だが、一礼だけしてそちらの方向へと駆け出した。やはり、山風が今一番求めているのは海風の存在。勿論、春雨もだし白露もだが、一番は海風。
「質問、今の発言の意図がわからない」

そんな山風の背中を目で追いながら、潜水艦姉妹の姉が飛行場姫に尋ねる。妹の方も頷く。依頼を受けてその通りに行動することしか出来ないこの2人には、言葉の意味を察するということが出来ない。ただでさえ感情というものが消えてしまっているのだから尚更。

対する飛行場姫はたった一言。

「そのうちわかるわよ。わかった時には、アンタ達は正しく元に戻っていると言えるでしょうね」

その言葉の意味もわからず、2人揃って首を傾げることしか出来なかった。

その山風が向かった部屋、春雨と海風が休息を取る部屋では、ちょうど春雨が目を覚ましたところ。事前に多少休んでいたおかげで、これだけの時間でも随分と回復していた。残されていた疲れはほぼ完璧に取れている。

小さく呻きながら身体を動かそうとするが、相変わらず海風にガッチリホールドされていて動かすことは出来ない。海風も相当疲れていたのだから、熟睡していてもおかしくないのだ。首だけ向けると、春雨の身体に顔を埋めるようにして寝息を立てる海風の姿がすぐにわかった。多少薄暗い程度なら、深海棲艦の眼ならそこまで支障が無いくらいに見える。

「……お疲れ様、海風。ありがとうね、いつも近くにいてくれて」

寂しさなんて感じることも無い。今この部屋に意識ある者は1人かもしれないが、独りではない。

「二度寝してもいいかな……でも時間がわからないし……」

外が薄暗くなっているのだから、もう時間的には夕食時くらいと察する。しかし、いつも聞こえるであろう誰かしらの声も無ければ、食事を想起させるような匂いも無い。まだ施設は静まり返っていると言ってもいいだろう。

遠くの方でパタパタと聞こえた気がしたが、それはおそらく外で野営の準備をしている調査隊の音。耳を澄ませば何を言っているかは

わからずとも誰かが何を話しているようにも聞こえる。
「ん……」
などと考察しているところに、海風も身を震わせて目を覚ます。
「おはよう海風。もう夜だけどね」
春雨の声が聞こえたことで目をパチッと開いた海風は、寝起きだからか一瞬だらしない表情を見せかけた後、シャキッとして消していた右腕を展開。
「おはようございます春雨姉さん。疲れは取れましたか？」
「うん、バッチリ。気持ちよく眠れたよ」
「それは良かったです。私も１００％回復したと言えます。これでまた姉さんを守ることが出来ます」
言いながらも春雨への頬擦りは欠かさない。
「こんなに休めたのも、山風のおかげだね。私達を守ってくれるって提案してくれたから」
「そうですね……本当に、山風は成長してくれました」
いつも春雨の方向しか見ていない海風も、今は山風のことを思っていた。
「私が鎮守府を離れることになってしまって、少なからず不安だったんです。その、五月雨姉さんもいますけど、妹達は……未熟とは言いませんけど、山風は引っ込み思案で、あまり前に出られるような子じゃなかったので」
しみじみと語る海風。その時の表情は、春雨のことを追いかけているような若干壊れたモノではなく、妹を思う姉のモノであった。
実際、海風がまともに鎮守府で生活している時の山風は、いつも海風の後ろについてくるような、前向きにはすぐになれないような艦娘だった。今でこそ調査隊の隊長をやっているものの、海風がいたら確実に海風に任せるようなタイプだし、今だって自分から前に出ずに戦場でもサポートを主にやるタイプだ。
そんな山風が率先して自分から意見を出し、アレだけの人数を従えて班分けまでやってのけた。そして全員が山風に従って間違いのない作業をこなしている。誰が何と言おうと、あの山風は隊長、上に立

つ器を持つまでに成長していた。
「なんだかそれが、すごく嬉しくて。私のせいで苦労をかけてるなって思うんですが、でも強く成長してくれましたから」
「そうだね。山風、なんだかすごく凛々しく見えたよ。私達のために率先して動いてくれて。話には聞いてたけど、戦力としてもすごく強くなってるんだよね」
「はい。敵の撃退に貢献しているんですよね。周りの皆さんの鍛え方もいいんだと思いますが、それに耐えて自分の力にしているのは紛れもなく山風ですから、山風自身にそれだけのことが出来る力が備わったということですよね」
　そんなことを話している部屋の外、その山風が扉の前にいた。飛行場姫から場所を伝えられたので、一応起きていないか確認しに来たらそんな話し声が聞こえたので、扉の前で硬直してしまっていたのだ。
　そして、それに春雨が気付かないわけが無かった。こういう時にも直感は働くモノである。
「じゃあさ、もっと労ってあげてもいいと思うよ」
「勿論、私は山風に感謝していますから、いくらでも労いますよ」
「だってさ、山風」
　扉の向こうに声をかける春雨。えっと海風が言葉が漏れた時、その扉が開いて山風の姿が。
「海風姉……」
「山風、さっきも言ったけど、本当にありがとう。私の後を継いでくれて、私達のことを第一に考えてくれて」
　ちょいちょいと手招き。山風もおずおずと近付くと、その手を軽く引っ張った後、優しく抱きしめた。
　自分が春雨にしてもらえたら嬉しいと思うことを山風にやってあげれば絶対に喜ぶと思い、即座に実行した。抱きしめて、その顔を胸に埋めて、頭を撫でて労う。海風が春雨にそれをしてもらえれば、少なくともトぶ。むしろもっとやってほしいと身体を押し付けるレベル。
「今の私にはこれくらいしかお返し出来ないけれど、感謝の気持ちを

こうやって示させてね、山風」
山風は言葉も無かった。それこそ、海風が春雨にしてもらっているかのようにトリップ寸前だった。今までずっと抑え込んでいた感情が溢れ出しそうになる。それは負の感情でも何でもなく、いろいろな愛の感情。
だが、山風はわかっている。海風は深海棲艦化したことで壊れてしまっている。自分に向けてこうしてくれるが、向いている方向は基本的には春雨。自分の仄かな気持ちは絶対に成就されないことを。
でも、海風のことを大切に思う気持ちは捨てるつもりはない。たまにこうしてもらえるだけでも嬉しいし、春雨と接している時のイキイキとした表情を見るのも嬉しい。気持ちが明るくなるような気分だった。海風が幸せならば、山風も幸せ。
「もう少し……こうさせて」
「いいよ山風。春雨姉さん、いいですよね」
「勿論。気が済むまでやればいいよ。それで心が落ち着くんだから」

そこから山風が海風から離れたのは、それなりに時間が経ってから。思う存分堪能しても心残りはあるものではあるが、またこの施設を守るための活力は充分すぎるほど貰えた。
定期的にやってほしいなんていう下心も生まれているが、それを口に出すのは憚られた。欲だらけになっても、迷惑をかけてしまうから。

笑顔を守る者

施設が休息に入った頃、鎮守府。山風からの定期的な連絡もあり、徹夜で施設のことに当たっていた姉妹姫が休息に入ったと聞いてようやく安心出来た提督。大きく息を吐いて、背もたれに身体を預けた。

「彼女らも一度大きく休んだ方がいいな。これはいい機会かもしれない」

「提督がそれ言います？」

五月雨の容赦ないツッコミに、提督は苦笑しか返せない。

今の鎮守府は半分休暇状態。いつもの調査隊の遠征だけならまだしも、そこに大淀と明石がついていっているため、工廠の稼働率が著しく下がっているからである。

ここで艤装を壊そうものなら、すぐに復帰が不可能。工廠にいるのが明石だけというわけではないのだが、メインがいないとどうしてもすぐに修復は出来ない。そのため、出来ることなら面倒事は増やさない方面。

「どうせなんですから、提督も休んでください。昨日の今日かもしれないですけど、半日休むくらいなら誰も咎めませんし」

「いやいや、昨日しっかり休ませてもらったんだ。今日は業務をさせてもらうよ。とはいえ、今はいつもよりは軽めにしているから許してくれ」

「もう……じゃあ、休憩を多めにしましょう。私、お茶淹れてきますから」

小さく溜息を吐きつつ、気を取り直してお茶を淹れに行く五月雨。実際、提督の言う通り今日の業務は比較的軽めになっているため、お茶を飲む余裕はある。

それくらいは問題ないかと書類を眺めながら、五月雨が戻ってくるのを待つ提督だった。

鎮守府が半分休暇状態となっているが、それはあくまでも半分である。こんな状況でも訓練に勤しんでいる者だっていた。
それが荒潮。今日は北上と大井に鍛えられ、その練度をメキメキと上げていた。全てはジェーナスと直接顔を合わせるため。施設への遠征が許されるようになるために、日夜努力を続ける。
荒潮を知る者ならば、ここまで一生懸命に、それこそ死に物狂いで練度を上げる姿は、あまりにも珍しい。
いつも飄々とし、努力をヒトに見せないような何処か掴みどころがない性格というのが艦娘荒潮なのだが、ここの荒潮はひっそり隠れて努力するなんてことはせず、堂々と仲間の力も借りて効率よくいち早く目的を達成しようとしていた。そのためには見栄えなんて気にしない。手段を選んでいられない。
それは悪いことではない。根幹に下心があるにしても、その姿勢は褒められてもいいくらいだ。それで身体を壊しているわけでも無いのだから、むしろ新人としては最上級とすら思える。
「おし、ちょい休憩しな」
「は～い。結構疲れちゃったぁ」
大井に教わっている荒潮に、近くで見ている北上が一旦止める。荒潮も疲れているようで、止まったらすぐにストレッチしていた。
荒潮の成長を見ているとだんだん楽しくなってきているようだが、そんな態度は微塵も外に出さず、いつも通りの態度で接していた。
駆逐艦ウザいと言いながらも、この荒潮の特訓は自分から言い出しているのだから、本心がどんなものかはよくわかる。
「アンタは雷撃よか砲撃の方が得意そうだねぇ」
「北上さんもそう思いますか。実は私もそんな気はしていました」
荒潮自身にはそういうことはピンと来ないため、教えてくれている仲間の言葉を信じるしかない。
実際、荒潮はどちらかといえば砲撃の方が呑み込みが早かった。だからといって雷撃が下手というわけでもない。非常に器用であり、かつ器用貧乏でもない。天才肌とすら言えるだろう。
「そうなると、あたしらよりは他の連中に鍛えてもらったほうがいい

かもしれないねぇ」
「とはいえ、雷撃も駆逐艦には重要な技能だから、ちゃんと覚えてもらいます。私と北上さんが直々に教えるんだもの。スペシャリストとまでは言わずとも、並以上に使いこなせるようになってもらいますから」
荒潮も2人の話を聞きつつ、自分の今後の鍛え方を考えていた。
出来ることならば全てやれるようにしておきたい。そうなれば練度もすぐに上がり、改二改装にまで辿り着けるはず。もしジェーナスと共闘するような事態に陥っても、絶対に足を引っ張りたくないから、誰とでもタッグを組んで戦えるくらいに出来ることを全て完璧にやれるようにしたい。
「大井っち、張り切ってんねぇ。荒潮には何か思うところある？」
「はい。なんというか、荒潮には頑張ってほしくて」
早く強くなりたいという願望の根幹、施設に行けるようになりたいというところを、大井は応援していた。
ジェーナスとの関係性は非常に複雑であり、ジェーナスからしたら開き直ると宣言したものの苦手意識は全く払拭されていない可能性がある。
相手がそういう心境であることを、荒潮はちゃんと理解している。その上で、溢れんばかりの愛情を心のうちに秘めて、ジェーナスを泣かせない、悲しませないように、でも会いたいという気持ちだけは抑えない。
そんな荒潮を、大井は健気であると感じ取っている。その第一印象は最悪であろうが、それでもその思いに殉じようとしている荒潮に対して、少しだけ自分と重ねているところもあった。
「勿論、頑張るわ～。私の命はジェーナスちゃんに捧げるつもりなんだもの～」
「向こうが迷惑に思わない程度にやんなよ。重い思いはただウザいだけの時もあるから」
「肝に銘じておくわ～。でも、うふふふふ、せめてジェーナスちゃんと顔を合わせて同じ空気を感じながらお話がしたいわね～」

北上の忠告も聞いてはいるのだが、やはりどうしても愛情が先立ってしまうようである。荒潮の生き甲斐なのだから、ジェーナス自身にその姿を見せなければ何も問題は無いだろう。いつまで耐えられるかはわからないが。

むしろ耐えておかなくては嫌われる可能性も考えると、荒潮は最後までその本性を隠し続けるだろう。ジェーナスを悲しませないため。辛い思いをさせないために。

「ジェーナスちゃんは笑っていなくちゃいけないの。あの可愛い笑顔を失わせるなんて絶対にあっちゃいけないの。それが私であってもダメなの。そんな顔を見るくらいなら、私は全部の想いを捨てちゃっても構わない」

全てはジェーナスのために。荒潮の根幹はそれで出来ている。ジェーナスを悲しませる者は許さない。それが自分であってもだ。そのためなら、自分の想いなんて不要だとまで考えている。

荒潮の気質は、どちらかと言えば海風に近い。心が壊れているわけではないので自分で制御が出来るジェーナス至上主義。その笑顔を守るため、一歩下がって見守る者。

あわよくば話したい、触れ合いたい、イチャイチャしたいが、そんなことをしたらジェーナスが悲しむ、嫌がる。それは避けたいから、一定の距離を保つ。

「うふ、うふふふ、そうよ、私はジェーナスちゃんの笑顔を守るために戦うの。笑顔を消そうとする輩は許さない。私が、私が全部消してあげるわ～……うふふふふふ」

そして妄想の世界へ。この辺りは訓練を繰り返しても簡単には治らないところであった。それが荒潮が努力出来る理由でもあるから、否定しづらいところでもある。

「はいはい、アンタの気持ちはよくわかったから、その思いを力にするんだよ。アンタがよくデキた奴なのはあたし達が理解してっから」

「無茶をしたらその分、ジェーナスが遠退くと思いなさいね。貴女は順調に、かつ誰よりも早く、その階段を上ってるんだから」

この心持ちに若干の心配はあるものの、荒潮は正しい道をちゃんと

選択出来ている。ジェーナスを悲しませないためにも、正しい道を選択し続ける。それだけは確信出来た。
もしこれで道を踏み外しそうならば、痛みで以て後悔してもらうしかない。

そのまま訓練終了。今日も格段に練度を上げた荒潮は、いつも通りお風呂でさっぱりした後、いつも通り執務室へ。もしかしたらジェーナスの新しい情報が入っているかもしれないと、定期的に提督に聞いているのだ。
「お邪魔しま～す」
「あ、いらっしゃい荒潮ちゃん。今は山風から定期連絡来てるからちょっと待っててね」
いつものことなので、五月雨も驚くことなく出迎える。毎日同じようにしていれば、誰だって慣れるもの。
その提督は今、調査隊と通信中。時間的に1泊が決まったため、その後の動きはこの場で決めている様子。
「今頃、ジェーナスちゃんもお休み中なのかしら～」
「うん、そうみたいだね。施設のヒト達は今全員が休んでる状態だからね。徹夜で戦って、そのあと施設のことをいろいろやってたみたいで」
山風からの定期連絡で施設の状況は逐一鎮守府側でもわかるようにしているが、今もまだ施設は稼働していない状況。
この時は夕暮れ時ではあるのだが、最初に行動を始めた飛行場姫もまだ目を覚ましていない時間帯。山風もこの時間まで誰も動いていないために宿泊を決定した。
「ああ、荒潮、すまないね。今日もいつものことかい」
ここで通信終了。1泊から明日の朝イチに帰投する方向で決定したところで、次の定期連絡は明日の朝で構わないということに決定。鎮守府もこのまま業務終了となる。
施設に派遣した調査隊も、このまま業務終了で自由に過ごしてもら

う方針。そこが息抜きになるかどうかはわからないが、少なくとも山風には求めていた姉との交流という癒しがあるため、あちらにも休息というカタチになってくれるだろう。
「ジェーナスちゃんのこと、何か変わったりしたかしら～」
「ああ、まぁ、少しね」
ここで提督が少しだけ歯切れが悪い態度を見せる。荒潮もそれに気付いて首を傾げる。
「君は、ジェーナスに懐いていた駆逐イ級の存在を知っていたかな」
「ん～……ちょっと知らないわね～。私が施設のことで知っていることって、とっても少ないもの～」
ミシェルのことは、五月雨もあまり詳しくは知らなかったりする。五月雨が施設に行ったのは最序盤くらい。ミシェルという存在がいるというのは山風達から報告を貰って知ってはいたが、実物を見たことは実は無かったりする。
「その駆逐イ級……ミシェルと名付けられているのだが」
「あら～、可愛いお名前。ジェーナスちゃんが付けたのかしら」
「ああ、そうなるんだが、そのミシェルがだね……ヒト型になったらしい」
あまりにも突拍子もない言葉に、荒潮のみならず五月雨もポカーンとしてしまった。
「え、え～っと、どういうことかしら」
「単純に言えば、駆逐イ級が殻を破って中からヒト型個体……実際のミシェルの元になったという艦娘卯月が外に出てきているとのことだ。この辺りは江風と涼風がジェーナス本人から聞いたそうだよ」
言われてもなかなか理解出来ない。とにかく、駆逐イ級が艦娘に変化したとして納得するしかない。
「そのミシェルは、今ジェーナスの管理下でヒト型の生活について学んでいるらしい。なんでも、ようやく服が着られるようになったとか……」
「あ、あらあら、それはまた大変ね～」
ここで荒潮は察する。ミシェルの存在は、ジェーナスにとって最も

身近で心安らぐ存在となっているのだろうと。第一印象が最悪な自分とは違い、ミシェルなら常にジェーナスを笑顔に出来ているのだろうと。

しかし、荒潮はこの短期間でも凄まじい成長を見せていた。それは身体だけではない。心もである。

「でも、それでジェーナスちゃんが幸せなら、私も幸せよ～。だって、今のジェーナスちゃんは落ち込んでいないのよね？　笑っているのよね？」

「実際に見たわけではないが……おそらくそうだろうね」

「私がその表情を引き出せないのは正直悔しいけれど、ジェーナスちゃんの笑顔が失われていないなら、私はもう大満足よ～。むしろ、ミシェルちゃんが気になるわ～」

ジェーナスに笑顔を齎すミシェルがどのような存在なのかはとても気になる。それが納得の出来るような存在なら、荒潮も笑顔で見守るだろうが、そうで無かった場合……。

「だから、もっともっと頑張って、早く施設に向かえるくらいの練度になるわね～」

「ああ、僕からは頑張ってくれとしか言えないが、なるべくそう出来るように力を貸そう。それに、仲間達が君を手伝ってくれているんだ。その期待に応えてあげないといけないね」

「ええ、勿論。ジェーナスちゃんのために戦うのが私なんだもの。早く強くなって、ジェーナスちゃんと直接会って、そして……うふ、うふふ、うふふふふ」

わかりやすく妄想の世界に飛ぶが、これももういつものことなので提督も慣れたものである。

荒潮は日夜努力を続ける。施設に直接向かうことが出来る日も、そう遠くない。

プライド

翌朝、施設の休息は本格的に終了。最も疲れていたであろう中間棲姫も、なんだかんだで半日まるっと睡眠に使ったことで完全回復。フラついていた昨日の昼とは打って変わって、全く疲れを感じさせない明るい表情。

「ありがとうみんな。お陰様でスッキリしたわぁ」

帰投の準備を終えた調査隊を見送りに来て、面々に御礼を言う中間棲姫。野営しながらも交互に深夜哨戒もこなしてくれており、全員の休息が終わるまでの安全を完璧に守ってくれていた。

少し眠そうにしている者もいたが、あとはもう鎮守府に戻るのみなので、戻ったらまた休めばいいともう一踏ん張りする方向。ちなみに大欠伸をしたのは江風である。

「ううん……こっちもココに来れて良かったから」

久しぶりに施設に来れたことで、山風を筆頭に鎮守府の面々も心休まる時間を過ごすことが出来ている。ここ最近は施設も鎮守府もストレスが溜まるようなことばかりだったが、ここでお互いに気を休めることが出来たのは大きい。

まだまだ黒幕の居場所がわかっていない以上、緊張感は高いまま。こういう時にでも気持ちよく休める時間というのは大切にしていきたいところである。

「あ、そうそう、昨日使った眼鏡と泥を刈り飛ばす装置は、施設側で保管しておいてもらえれば。複製品はすぐに作れますし、泥の脅威に一番晒されているのはココですしね」

「助かるわぁ。使い方も昨日教えてもらっているし、貴女達がいない時にでも使えるのはありがたいわねぇ」

泥を駆除する装備は、ひとまず施設に寄贈というカタチとなった。また同じようなことが起きぬとも限らないし、眼鏡に反応が見えないくらいにまで駆除はしたものの、まだ増殖をしている可能性も僅かながら存在している。

もしそれを見つけたのなら、この装備で全て消してしまえばいい。

無かったらまた爆撃とかをしなくてはいけなくなる。
「海風姉、春雨姉、白露姉……また来る」
「うん、待ってる。これからも頑張ってね。もう私の後を継いでもらったとか言えないくらいに強くなってくれて、すごく嬉しい。また山風の成長した姿を見せてね」
「わかった……次はもっと、もっと強くなってくる」
海風の声援を受けたことで、小さく微笑んだ山風。これがヒト前じゃ無かったらガッツポーズをしていたかもしれない。
春雨と白露も、山風の成長を大いに喜んでいた。今こうしている時も、その立ち振る舞いは少し自信を感じるほど。自分達が鎮守府にいた時よりも格段に精神的な成長が感じられた。
「それじゃあ……帰投する」
「ええ、また来てちょうだいねぇ」
小さく一礼して仲間達に合図し、ゆっくり島から離れていった。
「本当に助かったわぁ。あの子達がいなかったら、私は本格的に倒れていたかも」
「充分酷いことになっていましたよ。半日眠り続けるなんて初めてってジェーナスちゃんも言ってました」
調査隊の背を見送りながら小さく手を振っていた中間棲姫が呟くと、春雨が容赦なくツッコむ。
毎日を施設のため、仲間のために行動している中間棲姫とはいえ、ここまでグッスリ眠ることは今までに無かったと最古参のジェーナスが言う程なのだから、今回のことは余程のことだった。
「そうねぇ。しかも、一度も目を覚ますことが無かったのよぉ。こんなにグッスリ眠ったのは初めてだわぁ」
「もう大丈夫なんですか？」
「ええ、完璧よぉ。これだけ眠らせてもらったんだもの。今日からの作業も元気いっぱいに出来るわぁ」
今日は施設もやらなければならない仕事が多い。特に、泥のことを考えて破壊した畑の修復には時間をかけることになるだろう。それに、新たに加わった者達にもこの施設のことを知ってもらわなくては

ならない。
　コロラドは昨晩のうちに仲間達とある程度は話す機会を与えられていたため、まだ多少ぎこちなさはあるものの打ち解けそうなところにまでは来ている。同じ外国人である艦種も同じであるリシュリューとは、特に仲良くなれそうな雰囲気だった。
　潜水艦姉妹は基本的に飛行場姫の側から離れない。今回は依頼主という立ち位置になっており、依頼そのものが『楽しく生きろ』という若干曖昧なものであるため、それを理解するために依頼主の側からあまり離れない。
「まずは畑を作り直すわねぇ。種や苗に関しては、山風ちゃんや提督くんにお願いさせてもらったの。だから、次来るまでに片付けて畑らしいモノにしておかなくちゃねぇ」
「ですね。私も手伝いますよ。私もまた種から育てていきたいですし」
　こうして、また施設の束の間の平和は戻ってきた。真の平和のために、まずはあの戦いよりも前の状態に戻す必要はあるものの、ゆっくりと休んだことですぐにでも作業に取り掛かれそうなくらいの活力が溢れていた。

　今日の大きな作業は、やはり畑の復旧。春雨と海風もその作業班に属することになる。
「……どういうことなの」
　そして、同じようにその班に属しているのがコロラド。０からでは無いにしろ、広い面積の畑を作り直すとなれば、戦艦の膂力も欲しいかもということで、コロラドにはココに入ってもらった。
　艦娘としても深海棲艦としても確実にやらないような作業をすることとなり、若干混乱しているのが見て取れた。コロラド以外は既に農作業スタイル――ジャージに軍手と、おおよそ深海棲艦がしないような格好をしているのも、その混乱に拍車をかけている。
　ちなみにコロラドは、今までの深海棲艦スタイルが気に入らないと

いうことで、服の作り方を白露や古鷹に教えてもらって艦娘の時の制服にしている。パッと見なら、このコロラドを深海棲艦とは思わないだろう。
「どういうことって、見ての通り畑を作るのよぉ、この施設は自給自足がモットーだもの」
その筆頭、中間棲姫は、特に印象が違って見える。コロラドからしてみれば、この中間棲姫は黒幕が欲している最強の器。それが何処からどう見ても農民の見た目というのは、納得の行かないところもある。
何処をどうすればこんな性格になるのかがさっぱりわからない。しかし、現実として今目の前にいる中間棲姫はコレである。
「理解が出来ないわ……確かにＭ食ｅａｌ事は大切だけれど、わざわざこんなことをしなくちゃいけないなんて」
自給自足と言われても、コロラドにはすぐに理解が出来なかった。鎮守府で生活しているなら、何も言わずとも食事は提供されていたし、秘書艦業務の時には自分で作って提督に提供するなんてこともあるが、そもそもの原材料から自分の手で作るなんて聞いていない。
「四の五の言わずに、さっさと着替えて手を貸しなさいよ。今回はヒト手がいるの。アンタもこの施設の一員だっていうなら、自分の食い扶持くらい自分でどうにかしなさい」
そこに突っかかるのは、やはり叢雲。戦闘から一晩経ったからか、溢れる怒りがまた充填されてしまったようで、相変わらずプリプリしている。コロラドと決着をつけたのは叢雲のようなものなので。
そんな叢雲も今は農作業要員としてしっかりジャージ姿。いつものスタイルで作業なんて出来やしないし、思った以上に危ないことがわかっているため叢雲はこの辺りは割り切っている。何より、美味しいご飯のためならば多少の苦労は許容範囲内という考え方。食い意地がいい方向に作用している稀な例。
「ああ？　アンタ喧嘩売ってるわけ？」
「ええ、喧嘩売ってるの。ヒト様の庭をさんざ荒らしておいて、元に戻ったら無関係なんて思ってんじゃないでしょうね。まさか、この畑

を壊したのは姉姫の独断だとか考えてるわけ？　その原因を作ったのはアンタ達でしょうが」
　ジャージ姿で詰め寄られても迫力が若干落ちるが、叢雲の言うことはあながち間違ってはいないため、コロラドは文句を言い淀む。
「私だってアンタが被害者だってことくらい理解してるわよ。私を殺した張本人である白露や古鷹と同じだったことも。なら、アイツらと同じようにアンタもここで働くのが筋なんじゃないの？　白露は今漁に出てるし、古鷹もここにいるわよ」
　叢雲の言う通り、古鷹も今回は農作業に参加。ミシェルはジェーナスがいる漁の方に向かっているものの、何があるかわからないということで鈴谷の変装はそのまま。しかし着込んでいるものは他の者と同様にジャージである。
　この作業が施設のためになるというのならと喜んで力を貸すと、古鷹は何も文句を言うことなくここに立っている。むしろ率先してやらせてほしいと言ったくらいだ。
「それとも何？　アンタもしかしてこういうことやるのはプライドが許さないとか言うつもり？」
　やたらと突っかかる叢雲に、周囲は少しハラハラしてきた。あからさまに喧嘩腰なのは叢雲の特性上仕方ないことではあるのだが、ここまで他人に口出しするのは久しぶり。
　やはりコロラドが敵側だったというところが引っかかっているのだろう。白露や古鷹は償うためにも誠実に生きると叢雲に宣言しているが、コロラドの開き直り方は叢雲のお気に召さなかったか。
「……艦娘も深海棲艦も戦うばっかりじゃないって学んだわ。腹が立つけど、ここにいる連中の言ってることは思った以上に間違っちゃいなかったもの。怒りが溢れた私がここまで落ち着けるようになったのは、紛れもなくここの生活のおかげだから。そこにプライドもクソも無いわ」
　叢雲がコロラドに突っかかるのは、どちらかといえば同族嫌悪の類だ。
　プライドが高いが故に、今まで操られていたことや罪を全て押し付

けるように記憶を残されていることに対して怒りを覚えているコロラドは、叢雲に若干近いところがある。活動の理由も復讐に近い。それ故に、叢雲は自分のダメだった部分を浮き彫りにされているような感覚に陥っている。

「それに、私も言われた。働かざる者食うべからずよ。何もせずに美味しいものが食べられるとかあるわけないの。私だって農作業だったり周辺警戒だったりしてるわ。施設のために働いてるからこそ、生活の基盤を提供してもらえるの。ここは鎮守府じゃないんだもの」

言いながら、コロラドに鍬を押し付ける叢雲。さっさとやれと言わんばかりに。

「言いたい放題言ってくれたけれど」

ようやくここでコロラドが口を開く。

「私はやらないなんて一言も言ってないわよ」

しかし、突きつけられた鍬を拒む。そんなものを使わなくても作業が出来ると、突然ロブスターのハサミの艤装を展開した。

それを使えば、鍬で耕すよりも大きな範囲をガリガリと耕すことが出来るだろう。多少繊細な操作は必要になるだろうが。

「理解が出来ないとは言った。正直なところ、なんでこんなことしなくちゃいけないんだって気持ちもある。それがＰｒｉｄｅなんだと言うなら、アンタの言う通りよ。でもね、私はＢＩＧ　ＳＥＶＥＮの１人、コロラドなの。そんなちっぽけなＰｒｉｄｅで自分のＤｉｇｎｉｔｙ（品位）を下げようだなんて思っていないわ」

指をパチンと鳴らすと、コロラドの姿が作業着に変化した。ジャージは若干抵抗があったようだが、これならばいいかという妥協のようである。

どんな格好でも、怪我をしなければ構わない。中間棲姫も制服姿よりはマシだと少し安心する。

「Ｈｅ（働）ｄｏｅｓ（か）ｎｏｔ（ざ）ｗｏｒｋ（る）（者）（食）ｓｈａｌｌ（う）（べ）ｎｏｔ（か）（ら）ｅａｔ（ず）．

私も理解しているつもりよ。でも、畑がこうなったのは私のせいだとは思わない。全部私を使っていたあの姫のせい。だからコレは、罪滅ぼしじゃない。住まわせてもらうための

Ｃｏｎｓｉｄｅｒａｔｉｏｎよ」

中間棲姫に向き直り、これでも大丈夫かと尋ねる。使い方次第では鍬や鋤以上に農作業が捗ることは見てわかるため、問題ないとＧＯサインを出した。

「コレで良かったかしら？」

当てつけるように叢雲に言うコロラド。対する叢雲は、舌打ちしつつも口角が少し上がっていた。

なんだかんだ言っても、この２人は相性が良さそうではあった。同族嫌悪も乗り越えてしまえば仲良くなれるきっかけになる。思想が同じなのだから、話が確実に合う。それに、叢雲とコロラドは性格も近しい。今でこそ喧嘩腰だが、確実に仲良くなれるタイプ。時間はかかりそうではあるが。

「はい、それじゃあ作業を始めるわよぉ。今日中に出来るかはわからないけれど、コロちゃんの艤装があれば早く終われるかもしれないからねぇ」

「コロちゃん言うな！」

「うっさいコロ助」

「そっちはもっと許さないわよ！」

この農作業のおかげで、コロラドは施設に馴染んでいくことになるだろう。叢雲との関係も、農作業によって改善されていく。

正反対の在り方

中間棲姫の指示の下、畑の修復作業が始まる。全員が鍬やら鋤やらを持ち、グチャグチャになってしまった畑を耕そうとする中、コロラドは自らの艤装、ロブスターのハサミを農耕具のように扱い、いきなり大規模にガリガリと引っ掻き回す。

それだけでも引きずった場所は割と耕されており、そこを綺麗に均すだけでもそれらしい形になるため、ここでのコロラドの力は非常に有用だった。

「戦う以外にも使えるってのは、自分でもちょっと意外だったわ」

「兵器も使いようなのよぉ。私のは壊すことしか出来ないけれど、コロちゃんのはこうやって何かを生み出すためにも使えるの。便利でとってもいいことよねぇ」

爆撃によって空いてしまった穴も、これならばすぐに埋めることも出来るだろう。今は耕すことに使っているが、土を固めたり、それこそ雑草を根こそぎ穿り返すことも出来るだろう。

ある意味、コロラドは施設の整備に関しては即戦力かつ必要な人材であった。

「ふぅん……まぁ頼られるのは嫌いじゃないわ。なんてったって、私は世界のＢＩＧ　ＳＥＶＥＮの１人なんだから。むしろこれくらいならいくらでもやってあげるわよ」

中間棲姫に頼られてご満悦のコロラド。最初はなんでこんなことをという態度だったが、叢雲に焚き付けられて渋々始めたらこれである。褒められたらノリノリで次から次へと土を掘り返していくため、作業がどんどん進んだ。

実際はコロラドが粗めに掘り、それを残りの者が改めて耕しながら均すという流れになっているのだが、最初から個人で耕すよりは充分に効率が良かった。何せ範囲が違う。

「煽(おだ)てられたらコレなのね。コロラドならぬチョロラドじゃない」

「ムラクモ、聞こえてるわよ。これだけやってやればアンタみたいなＣｌｕｍｓｙ(不器用)でも簡単に出来るでしょ。感謝しなさい」

「うっさいチョロ助」
「殆ど原形残ってないじゃないの！」
叢雲とコロラドの言い合いは今に始まったことではない。作業中も事あるごとに小競り合いのようなことは起きていた。しかし、流石に中間棲姫が見ている中で殴り合いの喧嘩みたいなことは起きず、むしろお互いにこれくらいの距離感が心地いいと感じるまである。
だからだろうか、周りの者達もこの小競り合いは穏やかな温かい視線で眺めていた。叢雲が本気で気に入らないなら確実に手が出ているだろうし、コロラドだってもっと強く出ているだろう。これで済んでいるならば、このままでいればいいとさえ思う。
「ふふふ、叢雲ちゃんもコロちゃんも仲が良くて嬉しいわぁ」
「節穴ぁ！」
中間棲姫の言葉に即座に反応したのはコロラド。叢雲も無言でふざけるなと訴えているような視線を送る。しかし、そんな態度も周りの空気を弛緩させるのには十分だった。

一方、漁のグループ。こちらはいつも通りのメンバー、飛行場姫、ジェーナス、薄雲、伊４７に加え、新人である潜水艦姉妹と、新人ではないが今の姿になって初めてのミシェルが参加。
大鳳の方にはリシュリューとコマンダン・テストがついているため、まずは今の人数分の食糧を確保することを優先している。
「ミシェルは経験者だから大丈夫っぴょん！」
いつもの岸に来たところで、自信満々に胸を張るミシェル。駆逐イ級だった頃に伊４７と一緒に追い込み漁をしていた記憶はしっかりと残っており、駆逐艦の身でありながら海中に潜れるという特殊な力を持つため、今までと同じように手伝いが出来る。
そんなミシェルは、ジェーナスに教え込まれたためにちゃんと水着姿になっていた。ヒトのカタチになった今は、全裸で泳ぐよりちゃんと着て泳いだ方がいいとどうにか丸め込んでいた。
結果的に、ミシェルは伊４７が身につけているようなスクール水着

に落ち着いた。ミシェル自身が艦娘卯月を素体とした身体であり、伊４７以上に幼い見た目をしているため、その姿もよく似合っているとジェーナスが誉めたことで、ミシェルもノリノリで着るようになった。

「アンタ達は今から魚を獲ってきてもらうわ。自分の食べる分は自分で手に入れる。それくらいは出来るようになってもらわないといけないから」

潜水艦姉妹は飛行場姫から今からやることを教えられていた。当然ながら、潜水艦姉妹は生活のために働くなんてことをしたことが無く、漁なんて考えたこともない。教えられても簡単には理解出来ない。

だが、それが依頼なのだから達成しなくてはいけないことである。そういう考えで真剣に話を聞いていた。既に艤装も展開してシュノーケルによって顔の半分が隠されていたため、その表情を窺うことは出来ないが、おそらくこの２人は今、自分のために何かやろうとは考えていない。言われるがままに、決められたことをただ実行するのみ。

「ヨナ、ミシェル、この子達にお手本を見せてやってちょうだい。アタシ達はいつものように上で釣り糸垂らしておくから」

「ん、了解ヨナ」

「行くっぴょん！　２人も一緒に、ぴょーん！」

ミシェルが姉妹の手を取ったかと思いきや、有無を言わさずそのまま海中にダイブ。それを追うように伊４７も海中へと潜っていった。

引っ張られたことで姉妹は少しだけ驚いたような表情を見せたものの、なすがままにしていた。飛行場姫の依頼が漁であるため、それを行おうとしているミシェルの行動は依頼達成に一番近い行動だと考えたからである。

「大丈夫かしらね……ミシェルの強引さがあれば、あの子達も何かしら変わるきっかけがあるかと思ったけど」

そんな様子を見ながら飛行場姫は若干心配そうに呟く。自分で考えたこととはいえ、それが上手く行く保証は何処にもない。

この漁は、潜水艦姉妹の自我の育成に役立つかもしれないと考えて始めたことだ。勿論、そのきっかけは依頼からではあるが、戦闘から離れた平和的な作業を通じて、秘められている感性に触れられる機会が与えられるのではないかという作戦。

現状、姉妹は依頼という名目があるからここにいるのであって、自分の意思は何処にもない。対するミシェルは、ジェーナスがいるからという理由で呼ばずとも自分の意思でここにいる。いわば正反対の在り方である。それがいい影響を与えないかということを考えた。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅならきっとあの子達のＦｒｉｅｎｄになってくれるわ！　だって、あんなにＰｏｓｉｔｉｖｅに２人と仲良くしようとしてるんだもの」

そんな飛行場姫に、ジェーナスが自信満々に言い放つ。

「昨日ね、みんながＭｉｃｈｅｌｌｅのためにいろいろ教えてくれたのよ。特にシマカゼがね、Ｆｒｉｅｎｄは絶対多い方がいいよって教えてあげてたの。だから、Ｍｉｃｈｅｌｌｅもちゃんとそれを理解したの」

理解していないことには無頓着であり、自身に一切の影響を及ぼさないが、一度理解出来てしまえばスポンジに水が染み込むように吸収していく。その特性をジェーナスは正しく理解しており、悪いことは教えず、良いことばかりを教えようと努力した。

昨日はそれに江風、涼風、島風も加わってくれていた。服の大切さもそうだが、それ以上に大切な人間関係についてもしっかりと。特に島風は、過去の愚かな自分の二の舞にならないように、友人の大切さを説いたのだ。その結果、島風と同様の超が付くほどの社交性を手に入れるに至る。

「ここにいるみんなは友達なんだって教えてあげたの。そしたら、全員とお友達なんだーって、すっごく楽しそうにしてね。多分相手がどんな存在でも、Ｍｉｃｈｅｌｌｅは何も気負わずに攻め込んでいくわ」

「叢雲姉さんにも突撃してたもんね。すごくアワアワしてた。島風ちゃんと初めて会ったときみたいだったよ」

「それが今のＭｉｃｈｅｌｌｅだもの。ここでじっとしてるしか無かった分、自由に動ける今は好き勝手に動き回っても良いと思うのよね」
　今までは誰かがここに来ない限り交流と言えることが出来なかったが、今は自分から会いに行くことが出来る。そのおかげか、ミシェルは寝ているとき以外は何処かしらに出向いて誰かしらと接していた。食事時もジェーナスと一緒にいつつもそこにいる仲間達との交流を心の底から楽しんでいる。
　そんなミシェルの様子は、仲間達にとっても癒しになる。ここ最近は殺伐とした空気がずっと流れていたようなものだったが、それを払拭するかのように明るい。見ているだけでも空気が明るくなるようだった。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅは良い子だから、あの２人にも絶対いい影響を与えるわ。駆逐艦だけど潜水艦みたいなこと出来るしね」
「そうね、あの子なら何か変えてくれるかもしれないわね」
　今はもう見えない海中を見つめつつ、今はミシェルとヨナに託そうと、ひとまずやらなくてはいけないことをやるため、そこに釣り糸を垂らした。

　海中。潜水艦の３人はさておき、本来駆逐艦であるミシェルも潜水艦と同様に自由気ままに泳ぐことが出来ていた。先日の戦闘でもそうだが、もう駆逐艦という枠は取り払っており、ミシェルという何か違う艦種とすら思えるほどである。
「追い込み漁のやり方、教えるヨナ」
　この中で一番先輩なのは伊４７。ミシェルもどちらかといえば教える側ではあるが、そもそもやってきた時間が違うため、念のためミシェルにもしっかり教えることに。
　とはいえ、やることと言ったら魚群を見つけたらそれをうまく誘導して、海上から釣り糸を垂らす仲間達のところへと運ぶだけ。ただそれだけ。

「上を見ながら、うまいこと連れて行くだけ。簡単だヨナ」
言うだけなら簡単なのだが、これが実は意外と難しかったりする。魚の特性をしっかり理解した上で、向かう方向などを予測しつつ行動しなくてはならない。
これは、しっかりと自分の意思を持っていないと上手く行かないタイプ。潜水艦姉妹には、若干荷が重い可能性がある。
「追い込み漁。了解」
「あちらに誘い込む。了解」
淡々と感情のない声色で反応する姉妹だが、ここから苦戦することになる。そもそも先日の戦闘のせいで魚群そのものがあまり見当たらず、それを探すところからになるのだが、いざ見つけたとしても潜水艦姉妹ではうまく追い込むことが出来ない。機械的な動きではするりと抜けられてしまう。
「……」
なかなか上手くいかないことに、姉妹はどうしても無言になる。受けている依頼が達成出来ない現状に対して首を傾げていた。言うのとやるのとではまるで違うことを嫌というほど実感させられる。
ここで苛立ちでもいいから感情的な行動が出れば良しと伊４７は考えていた。嬉しい楽しいだけが感情ではない。
「こうっぴょん、こう！」
そんな２人に見本を見せるかのようにフラッと泳いでは、器用に見つけた魚を海上の仲間達の方へと誘導していくミシェル。
やっていることは同じように見えるのに、魚の動きがまるで違うことに、姉妹は２人とも首を傾げるのみ。
「ミシェルちゃんは、こういうの本当に上手。見習えとは言えないけど、もうちょっと、お魚の気持ちとかを考えるといいかもしれないヨナ」
「魚の気持ち」
「魚の気持ち」
言われてもわかっていないような仕草。自分の意思すらなく、気持ちとかそういうものがわからない２人にとって、他のモノの気持ちは

さらにわからない。
「なんかこっち行きそうだなーって思ったら、そこを止めてやるだけでいいぴょん、通せんぼを何回もやってあげれば、あっち行くしかないーって、お魚も考えるぴょん！」
ミシェルの割とわかりやすい説明にも、疑問は尽きないようだった。苛立ちまでは起きずとも、その疑問で何かしらの感情が揺さぶられる可能性はあるので、伊４７は２人のためにも懇切丁寧に教えていく。
それに対して、幸せアレルギーが発症することは今のところ無かった。２人のために働くというところに幸せを感じそうではあるが、２人のために倒れていられないという気持ちもそこに影響を与えているのかもしれない。

結果的に、この漁はあまり大漁というところまでは行けず。潜水艦姉妹の作業は、そこまで上手く行くことは無かった。
しかし、何故上手く行かないかというのを考え、こうしたら上手く行くかもしれないと行動してみるようになったのは大きな進歩かもしれない。

救いの女神

施設の午前の作業は終了。農作業の方はコロラドのおかげで大分捗ったが、漁の方はいつもよりも若干少なめという釣果。
やはり先日の深夜の戦いで海中に向けて魚雷や爆雷を相当量ぶち撒けているのが問題で、その辺りの生態系を壊してしまいかけていた。潜水艦組が海底まで調べたところ、爆雷に巻き込まれた魚の死骸なども見つけてしまっているため、それが判明している。
そのため、しばらくはいつも使っている海域では漁をすることを禁じることとした。どれくらいの期間をやめておくかは不明ではあるが、今は少なくとも漁場を回復させるという意味でも触れない方がいいと判断した。
「明日以降は、逆側を漁場にするわ。まさかそういうところまでしっかり被害が出てるとは思わなかったわ」
他の者達に風呂などに行かせつつ、飛行場姫は中間棲姫に報告。これからの施設の運営に関わることであるため、すぐにでも情報共有は必要。
「それは仕方ないわねぇ。漁は妹ちゃんに一任するから、好きなようにしてくれればいいわぁ」
「ええ、そうさせてもらう。そっちは？」
「コロちゃんのおかげで作業が大分捗ったわぁ。もう考えていた分の半分以上は終わったんだもの」
農作業組は順調も順調。コロラドの艤装が農作業に非常に有効であり、コロラド1人で3人分くらいの仕事を一気に出来てしまうため、今ではもう爆撃した痕跡が大分消えてしまったくらいだ。
とはいえ畑にするにはそこからさらに畝を作ったり種を蒔いたりとやらねばならないことは沢山あるため、作業は明日も続く。予定よりは早く終わるかもしれないが、ここからが本番。
「なら、いつもの生活に戻るのはそんなに遠くないわね。でも、また攻め込んでくる可能性があるのか」
「そうねぇ……。哨戒は再開した方がいいかもしれないわねぇ」

あの深夜の襲撃も、雨のため外に出ることは控えたとはいえ、哨戒前提で徹夜をしていたおかげでまだ気付けたことが多い。ならば、やはり哨戒は続けるべきだろう。

今日から再開するかはまだ何とも言えないところだが、人員も増えたためにローテーションも変化するだろう。むしろ潜水艦が増えたのはとても大きい。伊４７に全て任せ切るのには無理がある。

「なら、明日くらいから始める？」

「お昼には誰かにやってもらってもいいかもしれないけれど、夜は……いや、むしろ夜の方が危険なのよねぇ。申し訳ないけれど、今日からの方がいいかもしれないわぁ」

「まぁね。仕方ないことかもしれないけど、一度夜に襲撃を受けたってことは、またやってくるかもしれないってことだものね。なら、後からまた当番を決めましょ」

施設の平和のためにも、そういうところはすぐに決める必要がある。ここを維持するためなのだから、仲間達も納得してくれることだろう。

午後、いつも通り午前中にガッツリ作業をしたために、午後は休息となる。昼食時に哨戒の再開を提案したために、一部の者はそちらに従事することに。

当番もリセットされ、誰からやるかというのをジャンケンで決めたりした結果、本日昼の当番はジェーナスと白露に古鷹。ミシェルも哨戒を覚えるために便乗。深夜は叢雲と薄雲にコロラドという流れとなる。

コロラドは早速施設の防衛に参加するということで胸を張っていたものの、共に向かう者が叢雲であるということで複雑な表情をしていた。それは叢雲も同じであり、何でコイツとみたいなあからさまな態度を見せていたくらいであるが、中間棲姫からしてみればそれは仲がいいと判断されてしまうため、組み合わせに関しては文句が出ず。

「それでは、よろしくお願いしますね」

「はい、任せてください」
残りの者は自由に過ごすことになるのだが、春雨と海風はコマンダン・テストに代わって大鳳の介護にあたることにした。元々手伝うことにはなっていたのだが、コマンダン・テストが席を外すことになったため、春雨がメインを担うことに。
哨戒が決まったため、艦載機が扱える者は一度全員で島の周辺に哨戒機を飛ばすことになっている。コマンダン・テストもその1人であるため、参加してほしいと依頼されたのである。
コマンダン・テストはまだまだ大鳳のことが心配であったが、哨戒機を飛ばせる者はどうしても数が限られてくるため、今回はこういうカタチで解決した。むしろ、春雨が自分達に任せてほしいと言ったくらいである。
「大鳳さん、調子はどうですか」
その時は容赦なく戦ったものの、仲間になってからはどうしても引け目がある。そうしなければ殺されていたかもしれないが、それでも春雨は大鳳にはキチンと謝罪したかった。
「話せるようにはなりました……痛みはまだどうしても残っているし、今以前のように動けと言われたら、無理ですね」
苦笑しながら、首だけを春雨の方に向ける。身体の方は動かすとどうしても痛みが走るため、早く治すためにもなるべく動かないようにしているらしい。
「コマさんが周辺警戒のために哨戒に向かいましたから、私と海風で身体を拭かせてもらいますね。手荒なことをするつもりはありませんから」
「はい、お願いします」
丸一日経過したことで、溢れ続けた血はもう止まっている。深海棲艦特有の自然治癒能力は大鳳にも遺憾無く発揮されており、最初は酷い激痛に苛まれていたものの、今ではその痛みも大分緩和されたようだ。
布団を退けた後、ゆっくりと身体を起こす。血が出なくなったということで、布団にはもう血が付着しているようなことはない。午前中

にコマンダン・テストがシーツを替えていたおかげで、綺麗なもの。しかし、身体中に巻かれた包帯には少しだけ滲んでいるようにも見えた。強く押さえると滲み出てくるくらいくらいになっているのが正しいようである。

最初からのようだが、大鳳は布団の中でも身体を拭きやすいようにと全裸。春雨が蹴り抜いた胸には痛々しい痣が出来てしまっているものの、これも昨日と比べれば小さくなっているそうだ。

「包帯、取りますね」

「はい、お願いします」

そして問題の腕。春雨の刃は普通ではない鋭さを誇っているため、その切り口はやたらと綺麗。今では治癒能力もあり皮膚が出来始めており、あと数日もすれば、今の海風の右腕のように最初からそうだったかのような見た目になるだろう。

その傷口を見て、春雨は少しだけ俯く。自分が引き起こしたこの傷痕は、白露に与えた傷とは違って永遠に消えないモノ。義腕が作り出せる深海棲艦であるが故に生活には全く支障が無くなるのだが、それでも痛々しさが見た目にあるのはどうしても気になってしまう。

「……ごめんなさい、大鳳さん。何度だって謝らせてください。私があの時ここまでしなければ……」

腕を拭きながら、少し涙声で呟く春雨。海風もそんな表情の姉を見ていたたまれない気持ちになる。

「大丈夫、大丈夫ですよ春雨」

対する大鳳は、そんな春雨に対して何も気にしていないと話す。救ったその時の夜も、春雨は海風と共に大鳳の介護をしていたのだが、その時の大鳳は話すことが出来ず、ただ謝罪を聞くことしか出来なかった。だが今は違う。ちゃんと話せる。思いが伝えられる。

「貴女のやったことは間違っていない。あの時の私は、本気で貴女を殺そうとしていた。私は今、死なずにここにいられること自体に感謝しています」

やんわりと失われた腕の付け根に触れた。本来あるものが無いというのはやはり違和感はある。だが、その違和感が、今の大鳳には必

要なものだった。
「この痛みは、私の罪の証。いくらそれが操られていたからと言っても、私がやったことには変わりありません。私が沈めた艦娘達は、さぞかし私に恨みを持っているでしょう。それを忘れることなくいられるのは、この失われた腕のおかげです」
　義腕を使ったところで、その作るという行為が罪を忘れないためのきっかけになる。春雨の義脚や海風の義腕とはわけが違う、後天性のモノなのだから、尚更に忘れない。
「この痛みすらありがたいくらいです。私は今、償っているのだと実感出来るので。だから、気にしないでください。貴女が何度でも謝ると言うのなら、私は何度でも言いましょう。貴女は間違っていなかった。あの時はこうするのが正解でした」
「大鳳さん……」
「だから、私が貴女に言いたい言葉は、『ありがとう』です」
　あの戦いで自分を止めてくれたことに感謝しか無かった。あのままもし春雨すらも殺してしまっていたとしたら、本当に取り返しのつかないことになっていただろう。黒幕が危険視する春雨が失われた時点で、もう止められない。
　それを自分の命を残したまま回避してくれたのは、感謝以外無かった。罪悪感が付き纏うのはもう仕方ない。自分の不運は痛いほどわかっている。それ故に、ここで春雨と出会えたのは数少ない幸運だったとハッキリ言えた。
「ありがとう、春雨。私を止めてくれて。貴女は私を救ってくれた。こんな痛みなんてその喜びと比べれば些細なモノ。これ以上悪虐非道な行いをせずに済むのは、貴女のおかげです」
　これがやっと伝えられたと大鳳もスッキリしたようで、そこからは春雨と海風に身を委ねて身体を拭いてもらっていた。
　春雨もここまで言ってもらったのだから、いつまでもウジウジするのは違うと考え、大鳳の前で俯くのはやめる。大鳳が開き直ろうとしているのを、自分が折ってしまうのは違う。
「大鳳さんは春雨姉さんの偉大さに気付いてしまったようですね。な

らば私の同志と言えるでしょう。春雨姉さんの慈悲深さにより救われ、その女神とも言える愛に包まれたのならば、そう考えてしまうのは必然。そう、春雨姉さんは間違っていませんでした。命を奪おうとする相手の命を奪うことなく救ってしまうその技量、海風は感服してしまいます。私なら確実に命を奪ってしまっていましたから」
「え、えーっと……」
「春雨姉さんは讃えられるに相応しいモノを持っていますね。その妹であることを誇りに思います。ですが、春雨姉さんは私だけのモノではなく、全ての者にその愛を向けるヒト。その在り方がまた素晴らしい。私は春雨姉さんのことを心の底から愛していますし、それを独り占めしたいという気持ちは嘘では無いですけど、春雨姉さんの素晴らしさ、偉大さはもっといろいろなヒトに知ってもらいたいですから。大鳳さんがその先駆けとなってくれるのは嬉しいですね」
怒濤の如く吐き出される海風の春雨愛に、大鳳が押され続けていたのを、春雨がやめようねとストップさせる。春雨に言われたら流石の海風もピタリと止まり、でも思いの丈がまた言葉に出来たとテンションは高め。それはそれでいつも通りではあるのだが。
「でも、海風の言いたいことはわかりますよ。春雨のおかげで私は今ここでこうやって生きていますから。それは春雨の優しさのおかげと言えるでしょう」
「大鳳さんまで……」
「このことに関してだけ言えば、春雨は私の救いの女神ですよ。それは否定しません。それくらい、感謝していると知ってもらえれば」
大鳳は痛みに耐えつつもニッコリと笑顔を見せた。

大鳳の復帰はまだ先のことになるだろうが、心持ちはもう心配はいらない。傷が治れば、施設の一員としてその力を存分に振るってくれるだろう。

鍛錬の日々

鎮守府。施設で一泊してきた調査隊が帰投。すぐにその成果から次の段階へと進んでいく。

「明石が開発した泥対策は現状全て効果的であると」

「はい、私もこの目で見てきましたので」

泥が全て取り除かれたことで通信が出来ているため、昨日の段階からそれについては聞いていたが、帰投した大淀から改めてそれを聞いて安心する提督。これならば、もしまた鎮守府近海に泥がばら撒かれるようなことがあっても即座に対応出来る。

念のため毎日鎮守府内を全て確認しているが、今は泥の反応は一切無い。この鎮守府は安全であることが確認されている。

「なら、大将に連絡していいな。明日にでも、大塚鎮守府に向かえるようにしたいところだ」

この発明が完成し、その効果も確認出来たということで、それを大将に連絡。問題ないと判断されれば、それをそのまま大塚鎮守府に持っていき、対談という流れになる。

善は急げと、早速大将へと連絡を取る提督。待ってましたと言わんばかりにすぐに大将は電話に応答し、提督から話を聞く。

「はい、施設側の泥の駆除と、侵蝕された艦娘……既に深海棲艦化していましたが、3人を治療することが出来ました。その3人と、以前の手段の通り瀕死になったことにより泥を吐き出したもう1人を含めた4人は、現在施設に滞在中ということです」

『そう、なら後から私からも姉姫に連絡させてもらいましょうか。食糧問題もまだ抱えているはずだものね』

今の施設の一番の問題がそこだ。遠征に行きたくても行けない状況下で、畑が失われてしまったのは大きすぎる痛手。ならば、それを救うのが協力者たる者の役目と、大将もやる気満々である。

施設の者達がいなければ、泥の存在も無ければ敵の手段などもわからずに終わっていた。しかも、より強い力まで得ていた可能性もある。それを食い止めてくれたのは、紛れもなく施設の者達の力だ。

その者達を労うことに抵抗は無い。それが深海棲艦だとしても、目指している場所が同じなのだから、協力しない理由がない。
『2日3日くらいで手続きを終えて、すぐにでも食糧が渡せるようにしておくわ』
「ありがとうございます。助かります」
『いいのよ。こういう時に私の力を使わなくちゃいけないわよね』
大将という立場を使い、一番の協力者にはそれなりの恩恵を与える。職権濫用と言われてしまったら何も言い返せないのだが、施設は今回の事件を解決するにあたって、敵の戦力を激減させているいわば功労者でもあるのだ。今労わずにいつ労うというのか。
『それについても直接話をしておくわ。貴方は貴方で準備をしておいてちょうだい。大塚鎮守府へは、明日の朝イチに出向します。数人護衛を連れていくこと。いいわね？』
「はい、選出しておきます。それと、今回開発された装備も」
『ええ。いくつかは彼の鎮守府に置いておけるようにお願いね』
大将との連絡はこれで終わり。明日の早朝に大将が一度鎮守府に来て、そこからさらに大塚鎮守府に向かうことになる。
その際、流石に提督1人で向かうわけにはいかない。誰かしらを護衛としてつける必要がある。
「五月雨、ついてきてもらえるか」
「了解です、提督。秘書艦ですから、大将の吹雪ちゃんと同じように、全力でサポートさせていただきますね！」
「ああ、頼りにしている。あと最低1人くらいは連れていくべきだが……誰にするか」
ただの対談ならば、五月雨1人がいれば充分だろう。大将も基本的には吹雪しか連れてこないのだから、それに倣えばいいはずだ。しかし、万が一のことを考えればもう1人か2人、戦える護衛が必要であるといえる。
古鷹の件から考えると、大塚鎮守府の付近に黒幕が潜んでいる可能性は否定出来ない。そして、そうであるならば、大塚鎮守府そのものが危険になる。もしかしたら、既に泥に侵蝕された艦娘が潜んでいる

かもしれないのだ。
「万が一を考えれば、小回りが利く方がいいな。なら駆逐艦の誰かになるんだが……妥当なのは山風、いや、江風か。最悪室内での戦闘も覚悟しなくてはいけない」
疑いすぎるのはよろしくないのだが、覚悟だけは必要だ。なんと言っても、可能性がある場所に、鎮守府のトップが赴くのだから。
江風ならば、今は鍛え上げたことによって格闘が出来るようになっている。狭い空間で砲撃をすることなく相手をノックアウト出来るのは、こういう場では非常に有用。
「そうですね。私も江風がいれば大丈夫だと思います。もう1人つけるなら涼風ですね。あの子、北上さんに鍛えられて、すごく視野が広くなったんですよ」
「空間把握能力の拡張だったか。確かに、今回の状況にはもってこいかもしれないな。じゃあそれで決定だ」
これで何もありませんでしたとなったところで、何も問題はない。むしろ無い方が望ましい。
「五月雨、2人に伝えて来てもらえるかな。僕は明石の方に話をつけてくる」
「了解です。2人は今ちょうど休んでるくらいですよね。部屋にいるかな？」
「ああ、帰投後の入渠はもう終わってるはずだ。頼んだよ」
小さく敬礼して執務室を出て行く五月雨。途中何も無いところで躓きかけたが、何とか転倒だけはしないでそそくさと向かった。
これでこそ五月雨と感心しつつも、提督は提督で明日のための準備に入る。ただ行くだけではなく、装備をいくつか持参しての出向だ。何事もないとしても、海域調査のためにその装備を置いてくるくらいしなくてはならないため、その件を明石と話す必要がある。
「大淀、明石のことなら君にもついてきてもらうべきだな」
「ですね。行かせてもらいます。昨日の晩も徹夜まがいのことをしていまして……今もおそらく休むことなく働いていると思うので」
「注意しておかなくてはな……」

話が終わったらすぐにでも休ませる必要があるなどと思いつつ、提督は大淀と共に工廠へと向かった。

先に出た五月雨は江風の部屋に来たものの、そこにはおらず。お風呂に行っても既に出た後。時間的にはまだ昼食までは早く、念のため食堂に行ってもいなかったため、首を傾げながら居場所を探していた。

「あと行きそうなところ……海に出てるわけじゃ無さそうだし……」

江風だけでなく、涼風どころか山風も部屋にいなかったため、3人で行動しているのはわかっている。しかし、その3人で行きそうな場所は大概見たつもりだったが、何処にもいない。念のため工廠も見たが、そこにもいなかった。

「うーん……ん、例えば……」

ここで少し思い当たるものがあった。最近の山風達は、北上と大井に鍛えられているのは知っており、そのおかげで違う方向性の戦い方を手に入れている。江風は格闘戦、涼風は空間把握、そして山風は超速の砲撃。基本的にはそれを海上で鍛えられているが、もしかしたら陸で何かしているのかもしれない。

この鎮守府で何か出来る場所はと考えてみれば、工廠とは違う場所にある堤防の辺り。誰かが何かに使うというわけでは無いのだが、散歩コースにしている艦娘はちょくちょくいるという場所。一応敷地内であるため、定期的に整備され、雑草などが茂っているわけでもない、運動などに使おうと思えば都合のいい場所でもある。

「そこにいたりして」

まぁ一応と五月雨はその場所に足を運んでみる。すると、普通なら聞こえない声が聞こえてきた。一番わかるのは、江風のギャーギャー言う声。その次が同じように騒ぎ立てる涼風の声。

「本当にここにいた」

ここは普通に考えると頭から外れる場所だ。そんな場所で何をやっているのかとコソッと覗いてみる。

「はいもっちょー」
「ぐぬぬぬぬぬ、ど根性ぉぉぉ！」
「いいねぇ、痺れるねぇ」
　早速見えたのは、背中に北上を乗せた状態で腕立て伏せをする江風。
「うぉぉぉ！　山風姉なら北上さんより軽いはずだぁぁ！」
「……艤装出す？」
「それは勘弁してくれい！」
　その横には、同じように背中に山風を乗せた状態で腕立て伏せをする涼風。
　このあまりヒトが来ない場所で何をやっているのかと思えば、かなりハードな筋トレである。そのためか、江風と涼風の２人はいつもの制服ではなく運動着姿である。
　江風は近接戦闘で腕を壊したという経験があるため、それをなるべく抑えるためにも腕をメインに筋力を上げたいと、涼風は空間把握能力だけ持っていても身体が動かなければ意味がないため、全身を今以上に鍛えたいと考えた。結果がコレである。
「あら、五月雨。ここまで来るなんて珍しいわね」
　そんな筋トレ風景を眺めている五月雨に大井が気付いたようで、ちょいちょいと手招き。小さくお辞儀しながら、パタパタと大井に近寄る五月雨。
「こんなところでやってたんですね」
「ええ、相手が陸上施設型なのはわかってることだし、一応島の上で戦えるようにってことで、北上さんがね。私達は格闘技のことは完全に門外漢だけど、こういうトレーニングくらいならわかるもの」
　本来筋トレは武蔵の専門分野のようだが、その武蔵は荒潮を鍛えるのに忙しいということで、大井がメニューを聞いて江風と涼風に仕込んでいるらしい。
　小さい身体でも最高の出力を出せるようにと考えられたメニューは、実に簡単なトレーニング。しかし、今のように大きな負荷を与えることでより短期間で効果を得ようとしている。普通ならダメそう

な訓練でも、艦娘ならば効果的ということだ。
「ほい、じゃあ休憩ー。ちょっと休めたら次腹筋な」
「うーっす……」
北上が退いたことでその場にへたる江風。涼風は軽くストレッチしながら立ち上がるものの、やはり少しふらついていた。
「あれ、五月雨じゃん」
トレーニング中は必死だったから気付いていなかったようだが、心に余裕が出来ればすぐに涼風が気付く。
「江風と涼風を探してたの。明日、提督と一緒に別の鎮守府に出向するから、護衛としてついてきてほしくて」
端的に任務の内容を説明。明日向かう大塚鎮守府が、あの古鷹が元々いた鎮守府であり、もしかしたら黒幕が近くにいるかもしれないと話すと、なるほどと納得した。
「ンじゃあ、いざって時はその場で戦えるヤツってことで江風が選ばれたってことだ」
「あたいは周りがよく見えるからって感じかい。いいねぇ、やりがいがあるってもんだぜ」
すぐに理解してくれて何よりと五月雨は妹達の出来の良さに感心する。
「……あたしはお留守番、だね」
山風はついていけないことを悲観するかと思いきや、逆に行くことにならなくてよかったという表情を見せる。
元来、山風は人見知り。ここ最近は身も心も強くなっているおかげで大分改善されているかもしれないが、施設の深海棲艦達は顔見知りもいるおかげかやたらと取っ付きやすいというのがある。
しかし、明日向かうのはここと違う鎮守府であり、しかも方針が正反対というどう接すればいいのかわからないタイプの場所である。言ってしまえば別にいつも通りでいいのだが、山風にはそれが難しいため、そういうカタチで関係を拡げることはあまり好まない。
「んじゃあ、午後からの訓練はやめておこうかね。明日のために万全で行きなよ。アンタ達、提督の命を預かることになんだからさ」

「うす。肝に銘じとくぜ」
「何も無けりゃあいいんだけどねぇ」
心配自体が無駄になるかもしれないが、心配しないわけにはいかない。常に最悪を考えて、鎮守府全体が敵であると想定するくらいで。流石にやりすぎかもしれないが、敵はそういうことを当たり前のようにしてくる輩であるため、警戒するに越したことはないのだ。

ある意味、明日は決戦になるかもしれない。取り越し苦労なら御の字である。

いざ出向

翌朝、早々に大将が堀内鎮守府に到着。予定通り、五月雨、江風、涼風の３人を護衛として、大塚鎮守府へと向かう準備を整えていた。

「出発の前に、少しだけ。今日は私の方からコレを持ってきたの」

そう言って大将が吹雪に取り出させたのは、いつも施設と話をする時に使うタブレット。全く同じものを大将も持っており、施設との対話に使っている。ここ最近は要所要所でしか話はしていなかったが、今回の件はおそらく施設側にも関係してくることのため、大将が先に持参した。

「今から向かう大塚鎮守府は、貴方も知っての通り、施設に住まう古鷹が元々所属していた鎮守府よ。なら、彼に古鷹と話をしてもらうのもいいと思ったの。それで、事前に姉姫にも伝えていてね」

タブレットを操作して、その場で施設に連絡。こうするということも昨日のうちに伝えていたようで、発信したらすぐに施設側がそれを受ける。

『はぁい、聞いていた通りの時間で少し驚いているわぁ』

画面の向こうには姉妹姫。それと今回重要な立ち位置になりそうな古鷹。いつもならここに春雨達もいるのだが、今回は古鷹をメインとするため、部屋にもいない。

『今日は私が元々いた鎮守府に行くということで……』

「ああ、今から向かう。古鷹としては、彼と話をするとなった場合、大丈夫かい？」

その話を振られると、どうしても古鷹は考えてしまう。昨日からずっと考えてきて、仲間達とも相談して、そんな中でも自分の意思でこの場に座っているのだが、いざその時が近付いてくると抵抗も出てくる。

しかし、話が出来るのなら話をしておきたい。いくら提督が艦娘（自分）のことを人間ではなく兵器として扱っているとしても、せめて今生の別れの言葉くらいは言っておきたかった。

感情を出さないようにするのが鎮守府の方針なのは古鷹だって

知っているし覚えている。だが、古鷹はもうその鎮守府から原籍が消されている、言ってしまえばもう無関係な存在となってしまっているのだ。施設の方針に準ずる理由はもう無く、それこそ好き勝手生きてもいいようにはなっている。

だが、古鷹としては、そう生きていくにしても、ケジメをつけたかった。大塚提督が古鷹のことを今どう思っているかは聞いてみなくてはわからない。

『大丈夫です。話すと決めましたので』

ここまで来たらもう引き下がれない。古鷹は決意する。

『提督と話をして、お別れをしたいと思います』

「……そうか、わかった。ならば、現場に到着して頃合いを見てまた連絡をしよう。こんな聞き方はズルいかもしれないが、もしも彼が君との対話を拒んだ場合は……連絡をしないということにしたい。構わないかな」

『はい、それで問題ありません。事が済んだ後に、そのように判断されたと教えていただければ』

古鷹は表情を変えずに言い放った。大塚提督ならば、感情を押し殺してその選択をする可能性があると思っている。兵器であっても大切に扱ってくれる提督ではあるが、その兵器を失ったところを見たことがないのだから、どのような反応をするかも知らないのだ。古鷹達が第一号となってしまっているのだから、知っているわけがない。

「私はそんなことは無いと思うから、安心して待っていてちょうだい。彼は必ず、古鷹と話したいと言うわ」

大将がそう断言した。何を思ってそう言ったかは、この場にいる者には誰1人として理解は出来なかった。

「再確認になるけれど、姉姫も新しい人間と話すことになるのは良かったかしら。少なくとも、貴女達のことを憎くは思っていないわ」

『昨日も話した通り、私と妹ちゃんの意思は、問題無しから変わっていないわぁ。私達のことを知って、共存してくれるという人間さんなら、私達は仲良くしたいんだもの』

姉妹姫も、大塚提督との対話は良しとしている。大将が認めている

のだから、堀内提督と近しい者であるはずだと確信していた。
　堀内提督が姉妹姫にとってあまりにも相性が良かったというのもあるのだが、そこからの経緯で紹介される人間に悪い者はいない。施設のことを知ったからと言って、優先的に滅ぼそうと考える輩を紹介してくることなんて無いのだ。
「ありがとう姉姫。では、現場に到着して、頃合いになったらまた連絡させてもらうわ。時間としては、昨日話した通りで、多少は前後するかもしれないけれど」
『ええ、大丈夫よぉ』
　これで施設側の準備も整ったようなもの。大塚鎮守府への出向は改めて可能となった。
「っと、明石、ちょうどいいタイミングだ。手筈通りに出来たか」
「問題ありませんよー。人数も事前に聞いていたので、昨日のうちに装備も人数分揃えておきました。なので、もう換装済みですよ」
　そう言いながらやってきた明石と、大将の護衛。今回は吹雪だけでなく、追加で2人連れて行く。
　そのうちの1人は、やはりいろいろな意味で手慣れている島風。鎮守府との仲が良いため、江風や涼風の緊張感を取り除くことも出来て、かつ大塚鎮守府が大丈夫だった時には、その社交性によって空気を弛緩してくれるだろう。
　そしてもう1人。やはり小回りが利く方がいいということで、新たな駆逐艦が連れてこられている。
「この子は初めての子だから、ちゃんと紹介しておくわね。今からすることを考慮して、この子が一番適切だと思ったから護衛をお願いしたの」
「買い被りすぎだよ婆ちゃん……まぁ頼られるのは嫌な気分じゃないけどさー」
　頭を掻きながら大欠伸するその艦娘は、明石が用意していた泥の見える眼鏡を着用済み。施設のときの大淀のように、なんの違和感もなく眼鏡が着けられる者がいることに意味があると考えたらしい。
「望月でーす。今回はよろしくお願いしまーす」

その艦娘、望月は、吹雪に次いで大将の鎮守府では古参という歴戦の勇士である。態度だけで言うのならそんな感じはまるでない怠け者なのだが、実力だけで言えば島風より上である。
「危険かもしれないけれど、大塚鎮守府までは海路を使うわ。私と貴方は宗谷のクルーザーで移動。残りの子達はいつも通り航行してもらうわね」
宗谷のクルーザーが最も安全なのはわかっているし、専用装備の輸送などのことを考えると、宗谷自身の存在も重要。
今の面々ならば、江風も大発動艇を扱うことは出来るのだが、なるべく余計なところに装備のスロットを割きたくないというのもある。そのためにも、出向の7人目の艦娘として、非戦闘員ではあるものの宗谷も同行することになっていた。
実際は、その豪運も頼りにしているところはあるのだが、それは口に出していない。
「貴女達、それでよかったかしら」
「う、うっす。案内さえしてもらえれば、江風達でも行けるンで」
「江風、ガッチガチじゃねぇかい」
「そう言う涼風もだろ。緊張すンだよ、こういう大役は」
昨日は何の気なしにやりがいがあるなんて言っていたものの、実際この場に立ったら凄まじい緊張感となってしまっていた。そもそもここにいるのは大本営の大将。立場がさらに上の者の護衛みたいなものだ。堀内提督だけでは無い。
こういう場に出向くことがあるのは、鎮守府所属の艦娘の中では五月雨と大淀くらいしかいない。山風はこの緊張感も嫌だったから、自分が選ばれなかったことを喜んでいたのかもしれない。
「まあまあ緊張しなさんなって。いつも通りやりゃあいいんだよ。最後の海域に行くのと同じなんだからさー」
そんな2人を見て、望月が面倒臭そうに笑いながら話す。
「もっちーは力入ってなさすぎだもんね」
「それくらいがちょうど良いんだって。力んでまともに動けないより、力抜いて8割くらいでやりゃあさー」

「それでもそつなくこなすんだもんなー。もっちーズルーい」
「はっはっは、それはあたしのやり方が上手いだけだー」
　島風との関係も非常に良好。
「江風、涼風、リラックスリラックス。私もやっぱりちょっとは緊張してるけど、ほら、すごく強い姫級の敵と戦う時よりはまだ気が楽だよ。何も無い可能性だってあるんだからね」
「五月雨の姉貴は肝が据わってンなぁ……」
「ふふ、これでも初期艦ですから」
　妹2人を落ち着かせる五月雨だが、内心はドキドキしている。何が起きるかわからない他鎮守府への出向なんて、生まれて初めてである。正直なところ、姫級との最終決戦よりも緊張感は高い。
　しかし、そんな気持ちは全く表に出していなかった。ここで自分もガタガタ震えていたら、妹達がさらに緊張してしまう。そんな状態で十全の力を発揮出来るわけがない。
「では、最後の確認を。私、吹雪と五月雨ちゃんは、あくまでも司令官の護衛ということで、装備はそのまま。残りの4人は念のため鎮守府征圧用の装備に換装済み。宗谷さんは輸送装備。これで問題ありませんね」
　吹雪を中心に最終確認。秘書艦2人は自分の提督を守るための防衛ラインとしての意味合いを持つため、泥排除の装備ではなく実弾装備。緊急時には破壊工作も辞さないという強い意志を持って事にあたる。
　逆に、残りの戦闘要員、江風、涼風、島風、望月は、泥に侵蝕された艦娘がいた場合はそれを治療するために、事前に明石が用意した多種多様な装備を身につけている。万が一鎮守府内で戦闘が起きた場合でも、問題なく動ける。
　そしてコレに関しては、大塚提督には一切伝えられていないというおまけ付き。宗谷の大発動艇によって、泥を対策する何かを持っていくとしか伝えていない。
　もしも侵蝕された艦娘が内通者として動いているなら、詳細を伝えるのはよろしくないためである。

「江風、準備は出来てるよ」
「涼風、問題無しだぜ」
「島風、いつでも出撃出来まーす」
「んぁー、望月オッケー」
　これで準備も万端。宗谷も工廠にクルーザーと大発動艇を横付けして、輸送物資の搭載も完了。
　いつ頃に到着するかは事前に伝えておいたらしく、もうこのまま出発でもいいとのこと。
「それじゃあ、行きましょうか」
「はい。大淀、後は頼んだ」
「了解です。ご武運を」
　鎮守府は大淀に任せて、提督は大将と共にクルーザーに乗り込む。
　ここからは今までにない対話の時間だ。提督も少なからず緊張はしていた。

　鎮守府を出発してからしばらくして、航路としては7割は進んだところ。周辺警戒をしながら、小休憩を挟む。その時に泥の感知も欠かさず行なっているが、航路上からはその反応を見ることは無かった。
　望月は常時装備状態ではあるが、五月雨達は休憩中に眼鏡を取り出して周囲を見回す程度。とはいえ、使ったところで風景が変わらない。
「今のところは順調。泥の反応も無し。この辺りに黒幕の本拠地があるわけではないみたいですね」
「了解だ。引き続き警戒を頼む」
「はい」
　五月雨がクルーザーの中の提督に報告。
　黒幕は中間棲姫の中身、つまりは陸上施設型である可能性は高い。泥という謎の物質を扱う以上、ただの深海棲艦では無くなっている可能性は非常に高いため、島にいるという固定観念は持たないようにしている。

それで反応が見えないということは、今のところ本当にこの近くにはいないということになる。安全が保証されているというだけでも気が休まるというもの。
「状況として、古鷹が一番最初に近いくらいのはずなのよ。今のところ全員分の被害報告について調べたつもりだけれど、古鷹の事件が一番古いわ」
「そうなると、そう考えるのが妥当ですね。とはいえ、他の敵元艦娘がドロップ艦だった場合はその限りでは無いでしょう」
「ええ、その可能性も勿論考慮しているわ。特に……貴方達が戦ったという龍驤は、ドロップ艦だった可能性はかなり高いわね」
なんでも、古鷹や白露のような艦娘失踪事件を洗いざらい調べたらしい。今のところわかっている大鳳やコロラドに関しても、一応は海軍史には小さくではあるものの残っているらしい。
しかし、龍驤に関しては何処にも無いという。そうなると、龍驤はドロップ艦でまだ鎮守府に所属していなかった時に泥に侵蝕されたと考えるのが妥当。
「ここまで来てもまだ謎が多すぎる……お手上げというわけでは無いにしても、なかなか厄介ですね」
「ええ。でも、少しずつ近付けているわ。それに、近付くための手段も着実に増えてきているんだもの。地道に行きましょう」
「ですね」

まだまだ黒幕の居場所もわからない状況にあるが、真実には確実に近付いている。このままの足取りで行けば、決着をつけられる時も必ず来るだろう。

その鎮守府には

大将率いる対話の部隊が大塚鎮守府へと到着。海路を使って向かっていることと、宗谷のクルーザーを使うことは事前に伝えてあるため、鎮守府近海に入った時点で既に電が海上で待機していた。
「お疲れ様なのです。そのままこちらでお願いするのです」
電に言われ、クルーザー共々工廠の中へと入っていく。江風と涼風は、他の鎮守府に入るということ自体が初めてであるため、田舎者のようにキョロキョロと周囲を見回してしまう。
工廠というのは何処の鎮守府も似たような造りになっており、ここはここの明石が働いているのが見えたりした。そういうところで若干緊張が紛れる。ちなみに、ここの明石はまともである。
「大将、お待ちしておりました」
工廠で待っていた大塚提督が小さく礼をしながら出迎える。
「少しだけ遅れてしまったかしら」
「いえ、ほぼ定刻通りです」
事前に連絡した通りの時間にしっかり着いている辺り、大将の時間管理は完璧である。
吹雪の助けを借りつつ、大将が工廠へと降り立つ。少しだけフラつくものの、吹雪の支えで転倒は免れた。大塚提督と電が手を出そうとしたものの、吹雪のあまりにも的確で完璧な動きを認め、小さく動くだけに。
「私は知っての通りだけれど、今回は伝えている通り、堀内提督も連れてきているわ」
大将が降り立ったところを確認したところで、堀内提督も工廠へ。流石に支えは必要無かったが、五月雨が護衛としてしっかりと隣に立つ。
「君が大塚提督かい」
「ああ。貴方が堀内提督か。是非とも話がしたかった」
「僕もだよ」
先んじてこの事件の解決のために奔走し続けている堀内提督に対

して強く興味を持っている大塚提督と、同じ境遇となってしまった大塚提督とならば共にやっていけると考えている堀内提督。
　初対面であり、かつ方針が真逆の２人ではあるが今回の件では同志として、ガッチリと握手をした。反りが合わないとか、生理的に受け付けないみたいなことは、今のところ無い。まだ会って間もないのにそんなことがあっても困るのだが。
「早速だけれど、持ってきたモノを出して良かったかしら。例の装置なんだけれど」
「はい、よろしくお願いします」
「そこまで大きなものは無いけれど、一応数を用意しておいたから、置きやすい場所に置いておいてくれればいいわ」
　大将が合図をすると、護衛ではない４人の艦娘が、泥を消滅させる草刈機、泥刈機と、泥を感知する眼鏡、そして作れるだけ作られた治療薬を大発動艇から運び出した。
　そしてそれは、使い方を今は全く教えず、何に使うかも見た目だけではわからないものとなっている。そういうところも考えて明石は形状を考えていたのかもしれないが、おそらく偶然。やりやすいように欲望のままに作ったに過ぎない。
「また……見ただけでは何かがわかりませんね」
「ちゃんと説明するから安心してちょうだい」
　工廠にいて運び込まれていく装置を眺めていた大塚提督の明石が、首を傾げながらその光景を眺めていた。同じ明石でも、ここまでのことをやる別個体がいるとは思っていなかったらしく、驚きや感心などいろいろな感情が入り混じった複雑な表情をしていた。
「明石、お前はここまでやらなくていい。今の仕事だけでも充分に頼りにしている」
「あっ、は、はい、そう言っていただけると工作艦冥利に尽きます」
　明石が感じている思いを察したかのように、大塚提督は明石をフォロー。無論、心配しているからとかそういうのではなく、鎮守府全体のことを考えての行動である。
　それもこれも、明石のパフォーマンスを今の状態から変えないよう

にするためである。
余計なことをしようとして、本来出来ていることが崩れられても困るということだ。必要以上の作業をさせて万が一のことが起きてしまったら取り返しがつかない。
「あのヒトはオッケー。ついでに、電もオッケー」
ボソリと望月が大将に伝える。内容は勿論、侵蝕されているか否かの判定。常時感知の眼鏡を使っている望月は、この鎮守府に入る前から全てを見通している。
秘書艦である電と、工作艦明石は、今のところは白。侵蝕されておらず、突然敵対するようなことは無いことは確定。
望月がこういうことを伝えるのだから察することが出来るのだが、やはりこの鎮守府の中から泥の反応が感知出来てしまっていた。遠目だったために鎮守府に泥があるというだけで今は終わっており、鎮守府に入ったことで詳細を調査している段階。
しかし、大っぴらに動きすぎると、既に入り込んでいる侵蝕された者、いわゆる『内通者』とでも言える存在にいろいろとバレてしまう。そのため、あくまでも自分達は護衛であるという体裁を崩すことなく隙を突く。
「それじゃあ、本題に入りましょうか」
「はい、こちらへ」
大塚提督に案内され、一行は纏まって鎮守府の奥へと向かっていった。その間も望月が周囲を確認しつつ、何かあったらまず一番近くにいる島風や江風、涼風に伝える。
「こっからじゃちょい小さめだけど、確実にいるよ。数えるのめんどくせーけど、多分6人……くらいかな」
「6人ねぇ……もしかして、哨戒部隊か何かか」
「じゃねーの？　どっかで拾ってきたってのが妥当かなー。人数的にいつ拾ったかは知らないけど、増殖するんだっけ？　あれがあるのかはわからないね」
望月と江風がボソボソと相談しているのに、大塚提督も気付いていた。その内容までは把握出来ていないが、その鎮守府に対して何らか

の不信感を持っているような態度が感じ取れている。
そして秘書艦である電は、艦娘であるためにその会話の内容もしっかりと聞き取っていた。６人、哨戒部隊、拾ってきた、増殖――この４つのキーワードから、歩きながらもいろいろと思いを巡らせている。
大将一行が鎮守府にやってくるだけならまだしも、それに加えて他の提督までやってくるというのは、何処の鎮守府でも珍しいこと。そのせいか、道すがらに出会う艦娘達は、何処か緊張した面持ちで頭を下げてくる。
堀内提督の艦娘ならば、ここで立ち止まったり話しかけてしまったりと自由に行動しそうだが、ここは大塚鎮守府。余計なことはせず、感情を見せず、社交辞令的に頭を下げたのみ。それがここの艦娘には当たり前の行動。それなのに、ストレスを一切感じない。
「すごいな……完璧な統率力だ。それでいて、全員がイキイキとしている。縛られているようでいない。適格な指示があってこそなのだろう」
自分とは違う方針であっても、ここまで綺麗に纏め上げていることに素直に感心している堀内提督。
「いや、俺としては貴方のやり方も感心している。艦娘達の感情のままにやらせても、誰も離叛を考えないということは、貴方がそれだけ信頼されている証拠だ。護衛の艦娘を見ればある程度はわかる」
対する大塚提督も、堀内提督の艦娘――五月雨、江風、涼風を見たことで、その方針にも間違いが無いことを理解している。
お互いにお互いのやり方を理解し、しかし自分のやり方は曲げない。それがこの２人の提督。自分はこのやり方が最も艦娘の力を引き出すことが出来るのだと確信しているからこそ、違う方針をその目にしても、自分を変えるつもりはない。むしろここで方針を変えたら艦娘が困惑するだろう。
そうこうしているうちに執務室の前に到着。ここで電がパタパタ

と早足になり、執務室の扉を開けようとするが。
「ストップ。その扉に触るなー」
それを望月が止めた。突然の言葉にビクンと震えるが、ドアノブを握ろうとした瞬間だったため、大急ぎで手を引っ込める。
「泥、ノブの裏側につけられてる。多分触ったらアウト。すぐにじゃないけど、ゆっくり侵蝕される」
望月に見えているのは、執務室に入るための唯一の扉のドアノブ。正面から見えないところに僅かに反応を見つけていた。これは確実に電を狙った罠である。
「婆ちゃん、あたし一応泥刈機の小型版みたいなの貰ってるからさ、それで殺菌しとくけどいいかな」
「ええ、お願い。今のところはそこだけ？」
「みたいだね。多分大っぴらに動いてはいないんだと思う」
ドアノブに近付いた望月が袖を捲ると、そこに腕時計のような装置が装備されていた。明石が開発した例の泥を消滅させる装置の小型版であり、草刈機のサイズのものより出力は低いものの、ドアノブに付着した泥くらいなら駆除が出来る。
少し弄ってから装置をドアノブに翳すと、目に見えない波長が照射され、そのまま泥は消滅。望月の眼鏡にも反応が失われた。
「……つまり、我々の艦隊に既に侵蝕された者がいるということか」
この一連の流れを見て、大塚提督が歯軋り。電もショックが大きいようで、口元を手で押さえ目を見開いていた。
「まずは中に入りましょう。望月、部屋の中からの反応は？」
「無いねー。ここ、一応鍵かかってんじゃん。だから、中に仕込むことは出来なかったけど、こういうところにコソッと仕込んだって感じじゃね？」
「そうね。隙間から中に入れるにしても限界があるわ」
ドアノブを軽くハンカチで拭き取ったところ、泥らしきものも何も付着しなかったことが確認出来たため、改めて電がその扉を開く。
「涼風、電探を起動」
「あいよー。近くで見てるヤツがいないか見とくね」

念のためと、堀内提督が涼風に指示を出す。空間把握能力を最大限に利用出来る電探を起動し、執務室を中心とした周辺にこの泥を仕込んだものがあるかどうかを確認。
時間的にはたった今仕込まれたと考えてもいいだろう。そうでなければ電は既に侵蝕済みとなってもおかしくない。
「ここって結構というか艦娘の行動も結構統率されてるんだよね。休憩時間の奴は自由っぽいけど」
「ああ、そのように管理している」
「2人くらい、やけに早足でこの部屋から離れてる奴がいるね。多分そいつらが泥を仕込んだ奴だと思う」
この時間に動ける者は限られているはずだ。それを考えれば、侵蝕されてしまっている艦娘が誰かはすぐにでも把握が出来るだろう。
「まずは説明するわ。ただ、今回の泥は増殖の性質を持っている可能性が高いわね。その辺もちゃんと知ってもらわなくちゃいけないわね」
「了解しました。すぐにでも対処出来るように、まずは理解するところからですか」
「その間に侵蝕が進められるかもしれない。今は数人かもしれないが、聞いている話ではアレは時間経過でその数を増やす。放っておいたら、鎮守府内の艦娘が全員支配下に置かれてしまうということもある」
「なら、江風達に自由に動く権利くンない？　話すンのは、とりあえず提督達がいりゃあいいンだろ？」
江風から、鎮守府内にいるであろう侵蝕された艦娘を処理する班を別行動とするという案が提示された。本来ならば、提督から離れて行動するのはあまりよろしくないことなのだが、今回は緊急事態に近い。
「ならば、俺の艦隊から1人つける。それならば、鎮守府内を自由に動いてくれて構わない」
「りょーかい。江風と涼風、あと島風と望月、ンでそちらの誰かさンの5人で、鎮守府の大掃除と行こうぜ」

そうするためにも、大塚提督は執務室からすぐに頼れる艦娘の1人を呼び出した。全体放送というわかりやすく危険な行為ではあるのだが、背に腹はかえられない。

その者は、今日は休息日の者。本来ならば提督側からは不干渉で、自由に1日を過ごすことで明日からの業務に支障が出ないようにするのだが、緊急事態であるが故にその休息を一時的に解除することとなる。

そして少ししてから執務室にやってきたのは、1人の艦娘。

「はーい、司令官。何かお願い事？　もっと頼ってくれてもいいのよ？」

駆逐艦、雷。秘書艦電の姉であり、この鎮守府では電と並んで古参の一角。今では前線に立つよりは、遠征に力を入れている頼れる駆逐艦である。感情を出さないようにと言ってはいるが、本人の頼られることが好きという特性から、例外が起きるとまず確実に使われたがる。それも加味して、大塚提督は雷を案内役として選択した。

しかし、雷が執務室に現れた瞬間、

「悪いな。緊急事態なんだわ」

艤装を展開した望月が、抵抗させる隙を与えずに雷を撃った。

内通者

「悪いな。緊急事態なんだわ」
雷が執務室に現れた瞬間、艤装を展開した望月が、抵抗する隙を与えずに雷を撃った。
「なっ!?」
「雷ちゃん!?」
事前に何も聞かされていなかったため、電のみならず大塚提督も目を見開いて慌てふためく。
「大丈夫、今回の対談は、どちらかといえばこれが目的なの。あまり騒がずにいてちょうだい。内通者に気付かれる」
大将が大塚提督と電に対して静かにするようにと念を押すのだが、大塚提督はともかく、実の姉が突然撃たれたことに動揺を隠せない電。
戦場でやられたのなら、鎮守府の方針通り、感情を抑えて事にあたることが出来る。いくら仲間が中破大破と怪我を負ってしまったとしても、その戦況に合わせた対応が出来るように刻み込まれている。心優しい艦娘である電でも、戦場では非情になれる。
しかし、鎮守府内で、仲間である艦娘に、姉が撃たれたとなったら話は別。押し止めようとした涙が勝手に溢れてきて、撃たれた雷に駆け寄ろうとするものの、それは大塚提督が手を取り食い止める。
艤装を展開されたら提督と言えどひとたまりも無いのだが、そこはしっかりと訓練されているのか、電はそれで動きが止まった。しかし、倒れ伏す雷を見ても納得が行かず、撃った望月を睨み付けた。
大塚提督は、大将の『内通者』という言葉が気になっていた。今の言い分では、この雷が内通者、つまりは侵蝕された者であるということになる。
この短時間で混乱しつつも状況を整理したことで、咄嗟に電を止めることが出来ていた。
「説明する前に来ちまったんだもん。婆ちゃん待ってる間にちゃんと説明するべきだったって」

「そうね。そこは私の落ち度だわ。驚かせてしまってごめんなさい。雷は死んでいるどころか傷一つ負ってないわ。望月が撃ったのは模擬弾、それも、堀内提督の鎮守府に所属する明石が作り上げた薬入りのね」

実際、撃たれたショックで倒れている雷だが、血はおろか目立つ傷すらない完全な無傷。模擬弾で撃ち抜かれたため、顔面から水浸しになっている程度である。撃たれたというショックで気を失っているだけ。

しかし本番はここからである。明石が改良したのは薬が飲まずとも効くようにしただけ。効き方は変わっていない。

「っあ!?」

気を失っていた雷の身体が跳ねる。それはしっかりと薬が効き始めた証拠であり、嫌でも床をのたうち回ることになる。そして、それは痛みではない。

「どうも、泥に侵蝕された者というのは快楽を伴うらしいのよ。そして、それを治療しようとすると同じことが発生するらしくてね。改良しようと研究はしているみたいだけれど、こればっかりは難しいようよ」

「正直、うちの明石のせいでこのような事になってしまうのは申し訳なく思う。しかし、今は最優先で治療効率を上げたということなんだ。つい先日までは飲み薬だったんだが、今は皮膚から吸収させて泥を駆除出来るようにしている」

大将と堀内提督が申し訳なさそうに説明するものの、雷の痴態が酷かったために気が気で無かった。この砲撃をした望月ですら、こうなるとは聞いておらず唖然としている程である。

そして、特に酷い顔をしていたのはやはり電。望月を睨みつけていたかと思えば、雷の激しい反応に目を白黒させ、ビクンビクンと震える姿にだんだんと顔が赤くなっていき、そして最後に悲鳴のような嬌声を上げてグッタリと脱力した雷を見たことで電は完全に目を背けた。

「こういうことは事前に教えていただきたい。誰がどうされているか

はここに来なくてはわからないことなのかもしれないが、執務室で突然戦闘を始められたら、流石に動揺する」
「言い訳にしかならないけれど、全部の可能性を潰したかったのよ。何せ、相手は内通者……何処で話を聞いているかわからないのよ。正直に言えば、私達は電だって疑ってかかっていたの。雷が侵蝕されていなかったら、こうする前に伝えていたわ」
今までの侵蝕された者と違って、鎮守府に潜伏しているというのが厄介なところである。
侵蝕された深海棲艦ならば通信妨害を引き起こすのだが、侵蝕された艦娘は通信妨害を引き起こさない。これは荒潮を鹵獲した時に堀内提督の部隊が普通に通信出来たことでわかっていたこと。つまり、艦娘を使って潜伏されると、侵蝕された者がいるかどうかは見てみなくてはわからないということになる。今まではそれがわからなかったため、八方塞がりだった。
そして、それを事前に伝えられる状況にある場合、内通者が何らかの手段で通信傍受をする可能性すらあった。それこそまだまだ謎の多い敵のやり方だ。深海棲艦では妨害になるが、艦娘なら傍受になるなんてことがあってもおかしくない。理屈はわからないが。
そこで泥対策だの何だのを語ってしまったら、確実に対策されてしまう。それに、鎮守府に入った直後からもあまり大っぴらに話すことは出来やしない。
なるべく秘密裏に。だから、反応を感知出来る眼鏡を違和感なく身につけられる者を採用したのだ。そうでなければ、確実に警戒される。それを回避するためだ。
「い、雷ちゃんは大丈夫なのですか？」
「ええ、もう大丈夫よ。違う意味で大丈夫では無いかもしれないけれど」
グッタリしつつも、定期的に痙攣している雷に不安が募る電だが、薬の力で侵蝕が失われたのは間違いなかった。一際大きく震えたかと思えば、そのタイミングで雷が目を覚ました。
「ふぇ、わ、私、何を……」

若干惚けた表情で周囲を見回す雷。しかし、今からやろうとしていたことを思い出して顔面蒼白となる。
「あ、ああ、私、とんでもないことを……」
当たり前のように今までの記憶とその時の感情が残ってしまうのがこの泥の厄介なところ。雷も例に漏れず、その非道な行いの記憶に苛まれることになる。
いくら心優しい艦娘であっても、泥に侵蝕されてしまえばその性質を利用して暗躍する間者へと早変わりである。その時の記憶を残されてしまうため、優しければ優しいほど深いトラウマに苛まれることになる。気が強くてもストレスが凄まじい。
「雷ちゃん……！」
そんな雷を心配した電は、大塚提督が手を離したことで駆け寄り、その身体を抱き起こす。
「い、電……私、私ぃ……」
「大丈夫なのです雷ちゃん、電達は何もされていないのです。雷ちゃんは何も悪くないのです」
何者かの手によって悪者に仕立て上げられていたという事実に、電は冷静になりつつも怒りが湧き上がってきていた。
鎮守府の艦娘に明確な実害が出てしまっているのだから、感情を出すなと言う方が無理な話である。
「雷ちゃんをこんな風にしたのは誰なのですか……」
とはいえすぐに事の収束を目指して情報を手に入れようと動き出す。怒りを抑え込むのは、この鎮守府で活動していればお手の物。最初は湧き上がる怒りに呑み込まれかけたが、すぐに冷静さを取り戻していた。これでこそ、この鎮守府の秘書艦である。
「……私は、私は昨日の夜に……鹿島さんに……その、口移しで何か入れられたの。そうしたら、その、この鎮守府を壊さなくちゃって気持ちになって……」
ここで名前が出てきたのは、練習巡洋艦鹿島。古参というわけでは無いのだが、新人教育や遠征などに力を入れる、どちらかと言えばバックアップをメインとしている艦娘。雷とは共に遠征に行くこと

もあり、古参の雷と教育係の鹿島という2人で、新たに所属することになった艦娘を最前線に送り込めるように鍛え上げるというのが筋となっている。
　その鹿島が既に侵蝕済みということがここでわかる。そして雷は昨晩に侵蝕。暗躍しているというのが嫌でもわかるというものである。その性質上、鹿島はどの艦娘からも非常に信頼されている存在だ。その感情に付け込む事も容易いだろう。
「ごめんなさい、ごめんなさい司令官、私、そんなことしたくないのに……」
「いや、いい。お前の意思では無いんだろう。それくらい俺にもわかる。間者としても実害が出ていない」
　素気ない言い方ではあるが、それが大塚提督であることは所属している艦娘はしっかり理解している。鎮守府運営に支障をきたすかきたさないか、ここが重要であり、実害が出ていないのだから何も問題はないとした。
　実際は雷の心境という被害があるのだが、そこはこの鎮守府に所属する者。気を取り直すというか、それこそ感情を抑え込んで十全の力を発揮する。
「問題は鹿島だ。鹿島は少し前に遠洋航海に出て行ってもらっていたが……基点となったのは鹿島なのか……？」
　雷は鹿島にやられたと言っているが、その鹿島は誰かから侵蝕を受けたのか、それともこの鎮守府にいる残りの侵蝕を受けている者全員が鹿島からされたのか。
　遠洋航海に行ったというところから、そこで泥を拾ってきてしまったというのは何となくわかることだ。しかし、本当にそれが正解かはわからない。鹿島にしかわからないこと。
「じゃあその練巡を取っ捕まえてくりゃいいってことね。場所は何となくわかるよ。泥の反応見えてるから」
「電探もフル稼働さー。望月の反応も照らし合わせれば、何処に誰がいるかもわかんじゃないかな」
　ここで望月と涼風が力を発揮する。泥を持つ者の居場所は、今この

時でも何処にいるか把握出来ている状態だ。
望月は何処に侵蝕された艦娘がいるか、涼風は何処にどれだけ艦娘がいるかが見えている。それをうまく重ね合わせれば、何処でどうすればいいのかが見えてくるだろう。
「直接戦闘するのは、私と江風でいいよ。もっちーと涼風は、感知に専念してくれれば」
「だな。江風達に任せてくれよな。そのためにここに来てンだから」
島風が江風と共に前衛を買って出た。鎮守府内での戦闘も加味して、狭い空間でも戦える2人が前に出ることで、的確に確実に敵となってしまった艦娘を制圧する。
特に江風は砲撃すらすることなく鎮圧が出来る格闘戦を覚えてきているのだ。いざという時は暴力に訴えて気絶させて、薬を撃ち込む方向になるだろう。
「……電も行くのです。司令官、いいですか？」
「ああ、この鎮守府のことだ。我々がケジメをつけなくてはいけない」
そこに電も参加。本来ならば大塚提督の側にいるべきなのだろうが、今回は鎮守府内での戦闘が予想される。ならば、最も勝手を知る電が出向くのは間違っていない。雷がやるべき仕事かもしれないが、薬の後遺症でまだまともに動くことは出来ないため、雷は吹雪と五月雨が介抱しつつ、この執務室でこの件の詳細を話すことに。
「泥でしたか。それの感知と電探の反応を教えてください。真っ直ぐそこに向かえるように、電が案内するのです」
「頼んだよー。そんじゃ婆ちゃん、行ってくるから」
「鎮守府を壊すようなことが無いように頑張るぞー！」
物騒なことを言う島風だが、室内での戦闘というのはそこを回避するのは難しい。江風と島風が前衛とはいうものの、その装備は今の望月と同じで薬入りの模擬弾であるが、あちら側はまず確実に実弾を容赦なく撃ってくるだろう。もしかしたらそれだけでは足りないかもしれない。
出来ることなら、そうされる前に鎮圧したいところである。そこで速さに自信がある島風と、接近戦で周囲に被害を出さないように戦う

江風が前衛となった。
「多少ならば壊してくれて構わない。鎮守府ならすぐに修復出来るが、艦娘はそう簡単な話ではないからな。むしろ、鎮圧を優先で頼む」
「よっしゃ、許可貰えたンなら好き勝手やってやるぜ」
「江風、限度があるよ」
「わぁーってるって！」
若干不安になるテンションではあったが、同じ艦娘を相手にすることが確実なこの戦いで、落ち込むことなく向かえるのはいいことだとした。

鎮守府内での戦いが、ここから始まる。残りの侵蝕された艦娘は、推定で5人。傷つけることなく、確実に治療するために、5人の部隊が立ち向かう。

手段選ばず

執務室に呼び出されたことで早速治療された雷からの情報で、練習巡洋艦鹿島から侵蝕を受けたことを知った部隊は、早速鎮守府内にいる鹿島を探し出し、治療するために動き出した。

前衛は江風と島風、後衛に涼風と望月、そしてその中心に電を配置したほぼ輪形陣で鎮守府内を突き進む。基本的には望月が泥の反応を確認し、涼風がそこに何人いるかなどを説明し、そこから電が最短ルートを導き出して案内。

反応だけで見るならば、誰が鹿島かはわからない。しかし、ここまで来たら望月もしっかりと分析をしており、残りの人数は5人、比較的バラバラに動いているが、執務室のドアノブに泥を付着させる罠を仕掛けたであろう2人は組んでいることが判明している。

「うちの鎮守府よりちょい大きいくらいか。人数も結構多いね」

「なのです。効率よく戦えるようにするため、司令官が戦力の拡張をしたのです。おかげでみんなが程よく休息も貰えていて、万全な態勢でいつも過ごせているのです」

電が軽く説明しながら進軍。いつも万全で過ごせるということは、今から戦わなくてはならない者達も万全の状態の艦娘であると言える。フルパワーで襲いかかってくる艦娘を、なるべく無傷で鎮守府を傷付けることも控えつつ倒さなくてはいけないというのはかなり難しい。

万全なのはこちらも同じだと言いたいところではあるが、堀内鎮守府からここまで航行しているというのがあるため、十全とは言えない。多少なり疲労はある。それに対してあちらはホームグラウンドで待ち構えていたようなもの。最初から若干不利ではある。

とはいえ、こちらが違うのは薬入りの模擬弾。鎮守府に傷がつくことはまず有り得ない。水浸しになる程度であり、あちらの泥が付着するだけでもよろしくないのと同様、薬の成分も肌に浸透して直接治療が出来る。もう当たったモノ勝ちなのはお互い様。

「反応近い。そこ曲がったらすぐ右」

話しながらでも望月は泥の反応を見続けており、涼風も電探の反応からそこに1人だけであることを確認済み。
「あの、穏便に……してもらえるのですか」
電がおずおずと尋ねる。侵蝕されているとはいえ、相手は元々仲間である。本人だって、最初から裏切ろうと思って潜伏しているわけではなく、事件に巻き込まれたせいでそうなってしまっているだけなのだ。そんな相手に傷なんて負わせたくない。
それに対して、江風が当たり前だと返す。誰も傷を負わせることなく、今回の件を終わらせてやると、とても良い笑顔を見せた。
そして、望月が話した曲がり角、右を向いた瞬間にいた艦娘に対し、そちらを見るまでもなく主砲を展開して放った。先程の雷に対する望月の砲撃と同じ。構える隙すら与えず、そこにいると認識した瞬間にはもう模擬弾が顔面に直撃していた。
「こっちは電探増し増しでやってるけど、そっちは江風達の居場所とか気付いてないもンな。ある意味隠密ってヤツになンのか？」
「いいんじゃね？　だからわざわざ主砲にサイレンサーとか意味あるのか無いのかわからないのまで付けてきたんだから」
撃った瞬間の砲撃の音すら隠し、自分達の居場所を悟られないようにしながら仕事をこなす。1人目の雷は都合よく誰もいない執務室に来てくれたから楽であり、今回のこの艦娘に対してもありがたいことに周囲に誰もいなかったため、一切躊躇なく砲撃を放つことが出来ている。
そして、それは他の侵蝕された艦娘達にはバレていないだろう。望月が感知で確認しても、今撃ったからと言って慌ただしくなるようなことはない。涼風の電探に入る情報も変わらずである。
「っと、流石に鹿島さんってヒトじゃあ無いか」
薬をぶち撒けられたことで、あられも無い姿を見せる羽目になっているのは鹿島ではなく、またもや駆逐艦。今回は夕雲型のネームシップ夕雲。
この鎮守府では堀内鎮守府でいう白露のような立ち位置にいる駆逐艦であり、戦場では八面六臂の活躍を見せるエースなのだが、廊下

の曲がり角、しかも鎮守府という到底戦闘が行なわれないような場所での不意打ちには成す術も無かった。
「雷ちゃんに、夕雲ちゃん……侵蝕されているヒトが、的確過ぎるのです」
薬の効果で喘ぐ夕雲から真っ赤な顔で目を逸らしつつ、電が呟く。
大塚提督が何かと頼ることのある雷に、この鎮守府の駆逐艦としてはトップクラスの力を持つ夕雲。この人選は、鎮守府を熟知している者でしか出来ない。
そしてそれは、鹿島ならば可能だ。真っ先に電を狙うところなのであろうが、秘書艦ということで狙うのが難しかったか、まずは足回りを強化していき、最終的に全員を侵蝕してやろうという考えが透けて見えるようだった。しかも、電以外の主要となる艦娘を優先的に狙っている辺りがタチが悪い。
「後狙われそうなヤツって誰かいるの？」
望月が尋ねると、電は少し考える。雷がされたように、夜に訪れて突然という流れとなると、どんな艦種でも対象に出来るだろう。鎮守府内の不意打ちなんて、回避しようと思って回避出来るものではない。
「何人か思い付くのです。ドアノブに泥を付着させたのは2人組……なんですよね？」
「ああ、多分な。あの後に執務室から逃げていくみたいな動きが見えた。それが誰なのかまではわかんないんだけど」
「狙われそうで、そういう小さな罠を仕掛けつつ、2人で動きそうなヒトとなると……水雷戦隊を纏めている川内さんと、夕雲ちゃんの妹でこういうことをしそうな長波ちゃんなのです」
前者はこの鎮守府でも特に力のある水雷戦隊を束ねる隊長。そのトップクラスという夕雲達を率いる隊のさらに上に立つ者であるため、相当な実力者。さらには、忍者と呼ばれる程に隠密活動に長けているため、こういう罠を仕掛けるような作業はお手の物。
そして長波は、夕雲の妹にして夕雲と並んで駆逐艦のエースとされている者。夕雲が技で、長波は力でトップにいると考えればいい。そ

の2人を有する駆逐隊であるため、鎮守府の駆逐艦はかなりの練度を誇っている。
「人数的にはあと1人だよね。残りは誰だと思う？」
今度は島風が尋ねると、電はさらに頭を悩ませる。ここまではヒントや答えがあったから導き出せたが、最後の1人は本当にわからない。少なくとも今まで望月が見ていない艦娘となると大分限られてくる。
「この鎮守府でのエース……何かと頼りにしているヒト……なのですよね。そうなると大分限られてくるのですが……」
と考えているうちに、望月がちょっと待てと表情を変える。
「ヤバい、さっさとやらないとまずいことになるよ。泥が増えてる」
望月の言葉に全員が目を見開いて驚く。こうしている間にも、何者かが暗躍して鎮守府の艦娘達を侵蝕していっているということだ。
今まではゆっくりと裏側で勢力を増やしていたが、雷、夕雲と立て続けにやられたところを確認出来たのか、今だと言わんばかりに突然動き出した。
「1人増えた。いや、2人、3人……こりゃまずいね。ネズミ算だ」
どのように増やしているかはわからない。それこそ雷の言っていた口移しなのか、ドアノブの罠のように付着させて感染させたか。
どちらにせよ、このままだとまずいのは確かだ。泥の増殖スピードが読めない分、短時間でも放っておいたら完全に孤立する。最悪、このメンバーの誰かすらも侵蝕される可能性があるのだ。
「四の五の言ってらンねぇな。体裁とかも気にしてらンねぇ。江風も眼鏡使うぜ」
「だねぇ。全員装備しといた方がいいと思う。あたしの指示なんて確実にタイムラグが出来るから、自分の目で見た方がいいよ」
こうなってしまっては、違和感なく眼鏡を使うだなんて言っていられない。全員が完全な装備で向かわなくては、それこそ何もかもが間に合わなくなる。
電にも予備の眼鏡を渡して、使い方を教える。鎮守府の風景を見た瞬間、驚きが隠せなかった。泥の赤い反応がいくつも見えてしまった

からだ。
「侵蝕されているヒトが見えているのです？」
「ああ、それにヒトだけじゃなくて、壁とか床にあるのも見えてるよ」
「……酷いのです……。みんな一緒に戦ってきた仲間なのに……」
泣きそうな声で呟いた後、拳を強く握る電。怒りと悲しみが溢れるようで、抑え付けていた感情も表に出てきてしまいそうだった。
それが鎮守府の方針から逸脱しているのはわかるし、ここで長年戦ってきたのだから、感情を抑えて冷静でいる方が戦果を挙げられたことも理解している。しかし、止められなかった。
「電も全力でお手伝いするのです。電には薬がありませんが、足止めとかは任せてほしいのです。模擬弾を使えばいいのですよね？」
「ああ、無傷で治療だけしたいからな」
電の眼光が鋭くなるのを見て、江風はヒューッと感心した。心優しい電からはなかなか見られない、徹底的にこの状況を打破するという意志を感じた。
「っ、ああ……」
そうこうしている内に、夕雲が薬の効果によりフラつきつつも立ち上がる。
「夕雲は……今まで何を……」
ビクビクと震えるものの、頭を押さえながら現状整理。
「夕雲ちゃん、夕雲ちゃんも鹿島さんにやられたのですか？」
「電さん……そ、そう、そうよ。鹿島さんが夜に部屋に来て……その時にいきなり……き、キスを」
雷の時と同じように口移しにより泥を流し込まれて侵蝕されたようだった。夜のうちに暗躍し、主要メンバーをゆっくりと引き込んでいく手腕。ここで電は鹿島が発端であると確信した。
鹿島が遠征に向かったのは今からおおよそ5日前。その遠征の管理をしていたのが電だから覚えている。その時は何も様子はおかしくなかったし、いつも通りの生活をしていた。違和感などなく、いつものように教鞭を執り、いつものように訓練を行い、いつものように生活をしていた。

しかし、それは全て演技だったわけだ。裏側でゆっくりと鎮守府を堕とすため、電を除いた主要となり得る艦娘を次々と自分のモノにしていった。
「今も雷さんの状況を見に行こうとしていたところなの。お呼び出しがされたんだもの」
「雷ちゃんは皆さんのおかげで先に治療されているのです。心配はいりません」
「よかった……夕雲だけ解放されているわけじゃないのね」
そこを先に安心する辺り、夕雲は雷より心が強かった。気を取り直すのが早く、現状打破のことを考えている。
ある意味、この鎮守府の在り方をしっかりと体現していた。余計な感情を取り払い、次に向けてすぐに歩き出す。そうしないと自分が崩れてしまいそうだからだろう。せめて今は心を強く持たなくては、他の者が解放されない。
「夕雲ちゃん、動けますか。今、みんなが次々とさっきまでの夕雲ちゃんみたいにされているのです。多分、鹿島さんが筆頭になって泥をばら撒いているのです」
「少しキツイけれど、大丈夫。夕雲も手伝います。すぐにでも鎮守府を元に戻さなくては」
まだ残っている薬の効果をどうにか振り払い、夕雲も仲間に加わる。これで部隊は6人となるのだが、あちら側はそれ以上に増えていっているため、容赦なく治療していかなくてはおそらく間に合わない。減らすより増える方が速いとなれば、最終的には数に押されてしまう。
「流石にもうジッとしてらんない。さっさと行こう。電、もう見えてるんだから、先陣切ってもらっていい？」
「了解なのです。すぐにみんなを元に戻すのです」

あちら側も手段を選ばなくなっている。ならば、こちら側も手段を選んでいられない。正々堂々なんて言っていたら、救えるものも救え

ない。

風となる者

雷に続き、夕雲の治療も完了したのだが、それと同時に鎮守府内の侵蝕された艦娘が次々と増え始めた。６人中２人を仲間に戻すことは出来ても、それ以上の速さで増殖を繰り返されたら意味がない。敵は減るどころか増える一方である。

「まずいね。これ際限ないパターンじゃない？　増殖にどれくらいの時間がかかるかわからないけど、このまま増え続けられたらあたし達じゃ対処出来なくなるよ」

「とりあえず、見つけた奴らは片っ端から薬ぶっかけてやれば！」

「江風、薬にも限界あんだよ。バカスカ撃ってたら弾切れ起こすぜい」

増殖の速度は、とんでもなく速いわけではない。実際に確認されている限り、ジェーナスが侵蝕された時に戦闘中に少ししたらという感覚。とはいえ、数時間必要というわけでもなく、少し時間を置いたらもうと感じるほどではある。

しかし、現在考えるだけでも当初の６人を超えてしまっている、それがまた１人に注いだら倍。そこから同じようにやればさらに倍と、鎮守府にいる艦娘が一気に敵に回る可能性が高い。人数が多ければ多いほど手が付けられなくなるのがこのタイプである。

そしてもう一つ問題なのは、人数が増えれば増えるほど、対処が出来なくなるほどにバラバラに行動されることだ。ただでさえ推定ではあるが侵蝕されているという艦娘の中に隠密活動が得意な川内が紛れているのだ。おそらく拡散力がトッププクラス。

そんな状況で手当たり次第治療するとなると、最終的には弾切れを起こして治療不能になる。すぐさま切れるわけではないが、もしそうなった場合、この鎮守府はおしまいだ。逃がせるだけ艦娘を逃がす以外に道が無くなる。

「これ、二手に分かれた方がいいよ。片方は工廠に行った方がいいと思う」

この提案は島風。島風も眼鏡によって泥の動きを見ているが、その内の１つ、いや１組が、明らかに工廠を目指していた。

狙いはほぼ確実に明石。最初に狙わなかったのは潜伏がなるべくバレないようにするためだろうが、あちらももう手段を選ばなくなっているため、バレようが関係なくなった。
「急ぐなら島風に行ってもらった方がいいな。で、江風もそこに便乗する」
「だね。私と江風がこの中では速いから、速攻で工廠に行こう！　電、いいかな！」
「なのです。工廠の方はよろしくお願いするのです」
ここで別行動へ。広範囲に散らばる侵蝕された艦娘を各個撃破するため、まずは島風と江風が工廠へ。
「あたい達はそのまま４人で行動でいいかい。夕雲はまだ足腰立たないんじゃないか？」
そして残りの４人は組んだままとする。一緒に向かうと宣言したものの、夕雲はついさっきまで侵蝕されており、薬によって痴態を晒す羽目にもなり、まだその効果によって身体が震えているような状態。１人で行動させるのは以ての外であり、誰かと２人組というのも厳しい。ある意味、夕雲を守るためにも残り３人と共に行動するべきであろう。ここには特に実力の高い望月がいるため、守られるのなら丁度いい。
「いえ、大丈夫です。震えはまだありますが、時間の問題ですので。こちらとしても、一応この鎮守府でエース駆逐艦と呼ばれているのですから、ここで意地を見せねば」
震える脚をパンと叩き、踏ん張ってしっかりと立ち上がる。羞恥心はさておき、今まで潜伏させられてきたことへの怒りや悲しみ、全ての感情を抑え込んで、戦う兵器としての自分を表に出した。
今回の敵は、今まで仲間だった者。そうだとしても、この鎮守府を危機に陥れる者には正しく制裁を与えるために動く。無論、実弾を使ったり鎮守府を破壊するようなことはせず、電と同じように模擬弾による牽制をするだろう。
「じゃあ、あたしらはさっさと行こう。電、よろしく頼むよ。前衛が揃って工廠行ったから」

「なのです。電が前に出るので、行きましょう」
ここからは電が先陣を切り、侵蝕された者を見つけ次第治療をしていく。そしてその間は涼風が電探で鎮守府内に意識を張り巡らせた状態で、鎮守府内の艦娘の動きを逐一報告する。
こうしている間にも別行動で侵蝕を続けているだろう。その状況は常に知っておくべきだ。弾切れを回避するなら、纏まっているのなら纏めて撃った方が手っ取り早いため、やりやすいところを優先的に狙う。
「では、電が先頭行かせてもらうのです！」
ここからはスピード勝負。増殖する前に全員を治療するため、電達も鎮守府を駆け回ることになった。

島風と江風は工廠に到着。幸いにも明石はまだ侵蝕されていないが、明らかに泥に侵蝕されている艦娘がそこにいた。
「あの2人、だね」
「ああ、真っ直ぐ明石さんの方に行こうとしてやがる。アレだけは食い止めねぇとな！」
「おうっ！　そういうことなら任せて！」
言いながらも島風が艤装を展開。その瞬間、たった1歩踏み込んだだけで、跳ぶように距離を詰めた。そのリボンが表すように、今の島風はウサギのような跳躍を見せたようにすら見えた。
「そこの2人、ストップ！」
そして、着地したのは2人の眼前。陸上なのに殆ど海上と同じように動いている島風に、少なからず驚いていた。
着地と同時にいつも従えている連装砲ちゃんの1体の頭が島風の腕に現れ、即座に砲撃。眼前の敵に対して薬入り模擬弾をぶちまける。
「っ！」
しかし、ほとんど不意打ちに近いその攻撃も、瞬発力のみで完全回避。その模擬弾は床にぶち撒けられるのみとなった。

砲撃が当たっても床が破壊されなかったことに疑問を持ちつつも、次の攻撃に備えて2人も艤装を展開。跡を追っていた江風からの砲撃も即座に対応して掠りもせず、その砲撃は壁に直撃して水浸しに。
お返しと言わんばかりに島風に主砲を向けるが、その時には島風はその場におらず、別の方向から砲撃を放っていた。
「すばしっこい……！」
直感的にその砲撃に当たってはダメだと感じ取ったか、大きく回避するためにバックステップ。そのまま間合いを取った。島風も深追いはやめて一旦間合いを取らせて息を吐く。
あまり近付きすぎると、泥を吐かれて自分が侵蝕されるというリスクがある。それは絶対にダメであると理解しているため、今はこの間合いを維持する。
「川内と、長波。電の言ってた通りだね。反応もすごく強い。真っ赤だよ」
眼鏡をクイッと上げて2人を確認する島風。間近で見るまでも無かったが、その2人は全身から泥の反応がしていた。
電の予想通り、侵蝕されていたのは川内と長波。もうその本性を隠していないくらいに表情は艦娘とは違う何かになっていた。川内はまさに隠密活動をしますと言わんばかりに眼光鋭く島風を見据え、その隣の長波も小さく舌打ちしながら後ろからやってくる江風に視線を送る。
「その眼鏡で私達の行動が見えていたの？」
「そうだよ。すごいよねコレ。アンタ達の行動と居場所、全部わかるの。2人してここに向かってきてるのは丸わかりだった」
こちら側にそこまでの技術力があることまでは予想出来ていなかったようで、再度驚きを見せた。そもそも既に2人が治療されていることも気がかりのようだったが、今の砲撃数発でおおよその仕掛けがわかったようで、川内も小さく溜息を吐く。
「長波、コイツらを先に始末するよ。どうせもう私達の動きは筒抜けだ」
「了解。もうコソコソするのはやめてんだし、大っぴらにやってもい

いんだね」
「だね。別にここで殺しちゃっても、他の連中を仲間にして提督全員始末すれば何も問題無いから」
　とんでもない発言だが、冷静、冷酷な表情は変えない。むしろ鎮守府の方針を忠実に再現しているかのように感情を押し殺しているとすら思える。
　泥に侵蝕されて目的は変わっていても根幹は変わっていないため、戦い方も考え方も侵蝕前から据え置き。そういう意味では、この鎮守府の方針はあちらのやり方とも噛み合ってしまっている。
　しかし、泥によるブーストがあるために、侵蝕されている方が格段に強くなっていた。これは殆どリミッターが外されているようなものであり、陸上での戦いでも海上と殆ど同じ動きが出来るほど。
「私達が殺されるって？　無い無い」
　しかし、そんな2人に対して島風は鼻で笑うような態度で返した。そんな表情をされたら、感情を抑えている川内と長波でも苛立ちを覚える。
「何のために私達がここにいると思ってんのさ。全員救うために戦ってんの。ただぶっ壊すためだけに利用されているお人形さんよりも、背負ってる物が違うんだよね」
「背負ってる物が重すぎて身動き取れなくなってるんじゃない？　そんな奴らに私達が負けるとでも？」
「負けるね。断言するよ。アンタ達はここで負ける。重い物背負ってもさ、それが後押しになってくれたら物凄く進めるんだ。私に取って背負ってるモノは、向かい風じゃなくて追い風なんだから」
　何を思ったか、島風はクラウチングスタートの構えに。海上ではなく陸上、ただ駆け抜けるにしても、そこまでの準備をしたということは、余程のことをやるということ。そして、島風の目は川内ではなく長波を捉えた。
　瞬間、川内は強烈な悪寒を感じた。これは絶対にまずいと感じる程に。
「長波、避けっ――」

指示を出そうとした瞬間、風が駆け抜けた。
本気の島風のスピードは、海上ならば飛沫を上げ、陸上ならば地を抉り、その姿を目に映すことなく駆け抜ける。
当然島風にもダメージは入るが、そこは大将の艦隊。足腰は武蔵にしっかりと鍛え上げられ、一度や二度では折れることはない程に強靭な下半身を手に入れている。
「はっ……!?」
気付いた時には、長波は宙を舞っていた。島風の突撃をモロに受けたことで、地に足がついていなかった。しかも、それだけやられているのにダメージらしいダメージも無い。ここまでして島風は手加減をしていたのだ。速さのみに特化し、それでも相手を思い、あくまでも治療を目的としたその攻撃は、長波を優しく包み込んだ挙句に身動きを取れなくしていた。
そしてその隙を見逃すはずもないのが江風だ。島風はこの一撃を繰り出すことに集中しているため、その後の長波に関してはノータッチ。むしろ、江風に後はよろしくとアイコンタクトまでしていたくらいである。
「身動き取れねぇなら、江風でも狙い撃てるンだよなぁ！」
長波がどうなるかわかっていた江風は、即座に宙を舞う長波に向けて砲撃を放った。1発では当たるかわからないため、2発3発と連射し、確実に長波を治療する。
「うぁっ!?」
その1発が長波に直撃し、薬の成分が服を貫いて一気に肌に染み込み、体内に蔓延る泥を駆逐していき、それが猛烈な快楽へと繋がる。宙に舞った長波が地面に落ちた後、その快楽の波に襲われて嬌声を上げながら悶絶することに。
そんな姿を見慣れてしまったか、島風も江風も羞恥心などなく、すぐに川内の方へと向き直る。
「……何をしたの」
「何って、治療だよ治療。泥注がれた時、気持ちよくなっちゃうんだよね？　じゃあ、治す時にもそうなるのは当然じゃない？」

一度風となった島風は、少しだけチャージの時間が必要。敵の前であるというのに、脚を慣らすようにストレッチをして第二波の準備をする。

川内にも覚えがあった。鹿島に夜戦に誘われたかと思ったら口移しで泥を注がれ、その結果一瞬で侵蝕されたときのこと、確かにその感覚は痛いとか苦しいとかではなく気持ちいいだった。

しかし、その時とは比べ物にならないような反応を見せつけられて、むしろ嫌悪感すら覚えた。島風の言葉は、次はお前がこうなるんだぞと言っているようなモノ。痴態を晒せと突きつけられている。

「次も何もさせない。さっさと治ってもらうよ。覚悟はいい？」

「……一度見たなら、簡単には当たらない。逆にアンタをこちらに引き込んでやるよ」

長波はまた不意打ち気味に終わらせることが出来たが、川内は一筋縄では行かないだろう。

その足の先に

工廠に現れた川内と長波を追い詰める島風と江風。島風が早速持ち前の速さを全力で発揮し、江風と連携することで長波を瞬殺。今の長波は薬の効果により床をのたうち回っている状態。

しかし、その際に島風のスピードを川内に見せてしまっているため、簡単には当たらないと構える。川内が握るのは、特殊仕様の魚雷。それを逆手に握り、まるでクナイを構える忍者の如く島風を見据えた。

「もしかして、同じタイプなのかな」

島風もストレッチを終えて再びクラウチングスタートの構え。先程はここから爆発的な速さを一気に発揮することで長波を吹っ飛ばし、そのまま宙を舞わせた。

だが、その前置きがあることで心構えが出来てしまうのが、この必殺技の難点である。今から突撃するぞと宣言しているのだから、その進路から立ち退こうとするのは至極当然。それに、川内は迎え撃とうとしている程だ。あの速さにも目を追い付かせることが出来る可能性が非常に高い。

「かもね。私もどちらかといえば、スピードで押し込むタイプだから」

そんな島風に対して、川内はグッと前傾姿勢となる。見た目は殆ど獣のような構えではあるが、その両手に魚雷を握り締め、島風の速さに対応しようと眼を光らせた。

「こりゃまずいな。長波、ちょっとズラすぜ」

薬の効果で治療され、ビクンビクン震えている長波を、江風はどうにか工廠の端に運ぶ。2対1という数的優位を維持したいところだが、長波を放置していたらこの戦闘に巻き込まれてしまうだろう。せっかく救われたのに、怪我を負う羽目になっても気分が悪いし、最悪の場合、川内がもう一度泥を流し込む可能性もあるのだ。なるべく離しておいた方がいいに決まっている。

こうしている間にも、長波の治療は完了。特に大きな嬌声が響いたところで脱力した。こうなると運ぶのも少し楽になり、艤装のパワー

アシストもあってサクッと安全そうな端、今は明石が隠れている工廠の裏側へ。明石はまだ侵蝕されていないことは確認済み。
「悪ぃな明石さン、コイツ見てやってくンねぇかな」
「は、はい、大丈夫です。介抱しておきますね」
「頼ンます！」
未だに震える長波を明石に押しつけて、江風は戦場へと戻った。ここの明石ならばまともに介抱してくれるだろう。

江風が戦場となる工廠に戻ると同時に、２人は動き出した。島風の強烈な踏み込みで地を抉り、目にも留まらぬ速さで突撃。川内はそれを迎え撃つために同じように地を蹴り、魚雷を構えて突撃。
先程の長波に対しては速さに任せた体当たりという原始的な攻撃手段をぶちかましたが、川内にはそれはしない。一度見せているため、直接身体をぶつけてくる攻撃に対しては確実に対策をしてくる。
例えば、その瞬間を狙って泥を吐くとか。
「ぺっ」
島風が向かってくるそのライン上に、まるで唾を吐くかのように泥を吐き出した。少量でも付着してしまえば人肌の温度で増殖し、取り払う暇もなく口の中に飛び込んで一気に侵蝕することになるだろう。
「わかってるよ、そういうことをすることくらい」
だから直接向かわなかった。泥に触れないように回避し、すり抜け様に砲撃。泥と同じように、薬入りの模擬弾は少量でも付着してしまえば泥に反応してそれを駆逐し、取り払う暇も与えずにその身体を治療することになるだろう。
クラウチングスタートからの突撃は、一直線に突き進むための驚異的な力。今のように回避行動を取れば、その爆発力は一気に失われる。突っ込んでくるように見せて即座に方向を変えたので、ＭＡＸの力は失われた。それでも充分に速く、風になることは出来ずとも普通ならば簡単には対応は出来ない。
「それに当たらなきゃいいんでしょ」

しかし、川内はそれにすら即座に反応してくる。掠めるのも良くないと感じ、軽いステップで小さな飛沫すら当たらないような大振りの回避。

一度見ているから対応出来るというのは、以前に白露が見せた技能。見れば見るほど、戦えば戦うほど瞬時に成長していく。同じ技は通用しないという厄介な力である。島風のやることなすことを次々と吸収していき、即対応してしまうために、時間をかける程に不利になっていく。

そこからさらに魚雷の投擲。それこそクナイの如く、島風の足を止めるために腹に目掛けて。少しでも動きが止まってしまえば、そこに泥を浴びせかけるだけで勝ち。それを避けられても始末するだけなのだから、勝利条件の優位性は川内にある。

「それ、私知ってるんだよね」

魚雷の投擲は、島風もよく知っていた。北上がよくやる戦術である。

駆逐艦ウザいとよく言っているが間違いなく子供好きである北上が演習などなどを付き合っており、その時に島風にもこの魚雷投擲を繰り出しているため、避け方は身体に染み付いていた。

川内が魚雷を投げた時にはもうその軌道の外に回避済み。そして砲撃をお返しとばかりに放ったものの、すぐに対応されて回避される。

互いに掠めるだけでも致命傷になる戦い。素早く、しかし慎重に、その一撃を決めるために全神経を集中している。それこそ、お互いに周りが見えないくらいに。

少しでも隙を見せてしまうと、そこから一気にたたみ込まれる。そうされたら終わりだ。目の前の敵だけに集中して、その一挙手一投足に細心の注意を払いながら次の一手を選択する。

「っ……ここまで追いついてこれるなんて」

素早く動き回りつつ、牽制と直撃を織り交ぜながら川内を攻撃し続けているものの、決定打がなかなか放つことが出来ない。放った砲撃は掠めることなく、工廠の壁や床を濡らしていくだけ。

川内からの攻撃も似たようなもの。魚雷による直接攻撃の合間に泥を吐き、始末と侵蝕どちらの手段も取ってくる。島風ならばそれを行動を見てから回避出来るので今はまだマシなのだが、川内のスピードは回数を重ねれば重ねるほどに速く鋭く成長していく。

「目が慣れてきたよ」

徐々に川内の方が優位に変わっていくが、島風は全く折れない。むしろ、小さく笑みすら浮かべた。

「何がおかしいのさ。もしかして諦めた？」

「そんなわけないでしょ。なんかさ、楽しくなってきちゃった」

最初の上から目線のような嘲りから一点、この戦いが楽しいとまで言い出した島風に、川内はより顔を顰める。

今のまま行けば、自分の勝利は揺るがない。圧倒的に有利だった島風の攻撃はもう完全に見切っており、何をされても当たる気はしなかった。砲撃だろうが体当たりだろうが、そうしてくる瞬間が手に取るようにわかるようだった。それでも自分からの攻撃は避けられるので、次はそちらを優先的に覚えていけば、最後には勝てると確信している。

だが、そんな状況すらも島風は楽しみ、そしてそのステップは軽やかになっていった。攻撃は据え置きでも、回避は戦えば戦うほど精度を増していく。それだけを見れば、川内の泥による成長と同じくらいの成長速度。

「武蔵姉ちゃんが言ってたのってコレなのかな。戦えば戦うほど、何だかハイになっていくって。強敵と戦うことが、すごく楽しいって」

島風には、自分の速さに追いついてくる者が誰一人としていなかった。だから調子に乗り、傲慢になり、最終的には大失敗をした。その経験があるからこそ、今の島風がある。速さだけが全てではないと気付き、結果的に社交性のバケモノへと成長した。

しかし、艦娘にも深海棲艦にも、島風のトップスピードを見切れる者がいない。この速度を出せば、先程の長波のようにほぼ確実に瞬殺が出来る。無論、敵が戦艦だったりしたら通用しない可能性はあるのだが、そこは弁えて、通用する相手にのみ使うようにしている。

だがそれ故に、ずっと島風は燻っていたのだ。確実に通用するであろう艦娘の軽巡洋艦相手に、全力を出しても無傷を維持され続けている。そんなピンチが、島風は楽しくなっていた。もっともっと速く疾く駆け抜けたい。そんな気持ちが膨れ上がってくる。

「楽しい。疾ることって、本当に楽しい！」

ニコッと笑みを浮かべた瞬間、クラウチングスタートをしたわけでもないのに地面が抉れ、川内の眼前に迫っていた。それは先程以上の速度であり、島風としても記録を叩き出す程のトップスピード。

「もしかして、私のこと下に見てるわけ？」

自分との戦いを楽しいと言われた川内は、自分を格下と見ていると感じる。それが今の川内には気に入らない。

その顔面を叩き潰してやろうと、魚雷を振りかぶって振り抜ける。

「そんなわけないでしょ！　だって楽しいんだもん！」

この魚雷に触れるのもまずいだろう。泥に塗れている可能性を加味し、その寸前で前に跳ぶのと同じ力で上に跳ぶ。その跳躍力は尋常ではなく、本来出せる高さの数倍は上へ。

その時の脚への負荷は相当なものだが、島風は痛みに顔を顰めることなく真下に向けて主砲を構える。高く跳んだことで、今まで見えていなかった周囲がよく見えた。

「上に行くなんて狙ってくださいって言ってるようなもんでしょ。バカだねぇ！」

対する川内も島風を目で追っていたため、すぐさま真上に主砲を構える。自分は撃って、島風からの砲撃は避ければいい、島風は姿勢を変えられるわけがないのだから撃てば当たる。先程の長波と同じだ。島風に浮かされて回避不能にされ、その隙に江風に撃たれる。同じことをすればいい。

だが、ここで川内は気付いた。

江風は何処にいる。

「やっと隙を見せてくれたなぁ！」
川内が真上を向いた瞬間を狙って、江風が砲撃を連射していた。それは川内を治療するためでもあり、島風を救うためでもある。
２人は互いに互いを注視して、周囲を一切見ていなかった。だが、江風は違う。その戦いを全て見通し、実は的確にサポートしていたのだ。
例えば、川内が吐き出した泥。吐き出したのだから地面にへばりついており、この戦闘中に島風がそれに触れかねないタイミングが何度もあった。それが起きなかったのは、江風がその泥を薬入り模擬弾で撃ち抜いていたからだ。島風の戦闘に川内を集中させ、あえて直接狙わなかったのもこの隙を引き出すための布石。
「なんで撃つ瞬間に叫んじゃうかな。そんなことされたら、私なら普通に避けられるよ」
島風の迎撃はやめ、江風からの砲撃の回避に専念した。島風からの攻撃もだが、江風からの攻撃も掠めたら終わりの一撃必殺。少しでも触れればそのまま泥を駆除する。
「そりゃあ、避けられたかったからだよ」
しかし、ここまでが江風の狙い。島風も、最終的にはここに集約するように動いていた。
接戦を繰り広げることで壁や床に模擬弾がばら撒かれる。川内が吐き出した泥を駆除するために、そこにも模擬弾をばら撒いている。つまり、この工廠の至るところに薬の水溜まりが出来ていた。
「えっ」
気付いた時にはもう遅かった。踏み込んだ場所には、あらかじめ設置されていた薬溜まり。そこに足を踏み入れたことでバシャッと薬が跳ね、川内の肌に付着。瞬間、一気にその効果が現れる。
「っひっ!?」
肌から吸収され、体内の泥を次々と駆逐。薬の量が少量であるせいで、すぐに治療が進むものがゆっくりになっていた。
数分もかからないものがじわじわとされる苦痛は、困ったことに快

楽となってしまっているのが厄介だった。
「あぁあああっ!?」
その感覚でその場に倒れ伏し、薬溜まりにその身を委ねてしまったせいでさらに激しい効果に。川内は長波以上の痴態を晒すこととなった。
「よっ、と。これで勝ち！」
「お疲れさン！」
うまく着地した島風は、江風の元へと駆け寄りハイタッチ。江風が事前に工廠内を確認し、泥の反応が無いことも確認していたため、ここでの戦いはコレで終わりとなる。
「っし、あとは川内さンが元に戻ったことを確認した後、明石さンに介抱頼んで、電達と合流だな」
「だね。でもその前に、他の泥の反応を確認しておかなくちゃ」
周囲が見えていなかった島風は、改めて反応を確認する。すると、1つ、いや2つ、またおかしな動きをしている反応が見えた。
「あのさ江風、あっちって……」
「ん？　反応は……って、ありゃあ……」
2人してその反応が何をしているのかすぐにわかった。

この戦闘中に2つの反応が、執務室に向かっていたのだ。

司令を護る者

江風と島風が川内を撃破する頃、電を先頭に鎮守府内を駆け回る一行は、増え続けている侵蝕を受けた艦娘達を見つけてはすぐに砲撃を浴びせ、何かをする前に治療していく。

反撃の暇なんて与えることもなく、こちらに気付いた瞬間には砲撃。涼風と望月はそれを確実に行なう。余計なことをすればするほど、その艦娘に軋轢が残ってしまうため、うもすも無く、悪意を強く持つ前に対処することが一番の救いになる。

「鎮守府内が阿鼻叫喚だわ……」

倒される仲間を見て、複雑な表情を浮かべるのは夕雲。駆け抜けながらもようやく本調子を取り戻したのだが、やられるたびに嬌声を上げて廊下に崩れ落ちていく様を見続けるのは、やはり気分のいいものでは無い。

それは電も同じだった。知らない間に仲間達が次々と侵蝕され、気付けば四方を敵に囲まれているようなもの。しかも、こちらに一切悟られずに、秘密裏にここまでやろうとしていたのだ。

今でこそこちらにバレバレな状態で急速に勢力を拡大しているが、こんなことにならなければ、未だに潜伏をし続けて、内部からこの鎮守府を滅ぼしていた。今でこそ一度もそんな経験をせずに済んでいる電も、最終段階では侵蝕を受けていただろう。そう考えると、恐ろしくて泣きそうになった。

「なんで、なんでこんなことが出来るのですか……」

素直な疑問が電の口から溢れ出た。今まで戦ってきた深海棲艦とは明らかに毛色が違う。頭脳戦ならばまだ良かったのに、陥れることに特化した手段ばかりを使う。それでいて黒幕は未だに居場所どころか姿形すらわからない。全て部下にやらせるのみであり、その部下すらこの酷い手段を用いて増やす。

「それだけあたいらを恨んでんじゃないかな。元々は艦娘に負けたっつー姫らしいし、あんまりにも悔しかったから、器から離れて生きてるってくらいなんだ。逆恨みもいいとこだけどな」

涼風も嫌そうに呟いた。ただ侵略のために戦いを挑んでくる深海棲艦ならまだいい。そういう本能のまま、真っ向勝負を仕掛けてくるだけなのだから。知恵があるものが戦いを拒み、ひっそりと暮らしているのなら別に触れないだけ。共存とは違うが、人知れず静かに過ごしているものを邪魔をすることはない。

だが、わざわざ持てる知恵を使って相手に精神的なダメージを与え続ける手段しか選択しないのは気に入らない。

「やられたからやり返すってんなら、こっちが先にやり返してるんだっての。よっぽど性格悪いんだろうねえその黒幕は」

望月も心底気分悪そうに吐き捨てる。静かに暮らしているところに侵略しておいて、それをどうにか食い止めて返り討ちにしたら逆恨みでここまでのことをやってのけた。性格が悪いでは終わらないレベルのクズと言える。

そもそもこんな力を持っているのすら謎だ。まともな深海棲艦はここまでの能力を持っていないだろう。この場にいる者では涼風しか知らないことではあるが、春雨の『辿り着く力』のような不思議な力があるのは納得出来ても、ここまで他者を巻き込み続ける陰険な能力は信じられないくらいである。

「とにかく、今は全員治してやんないと、ねっ！」

反応が近付いてきたことを確認した直後に砲撃を放ち、即座に治療。やはり嬌声は上げてしまい、そのまま壁にもたれかかるように倒れる。

ここまで来ると、もう気の毒という気持ちすら薄れてきている。見つけた反応を潰していくだけの作業。ある意味、感情が凍り付いていくような感覚。何かを考えながら撃っていたら、先にこちらの心が潰れてしまう。それこそ、大塚鎮守府の方針に沿った方がいいのではと感じる程に。

感情を抑え込んで戦うということは、嫌なことをする時の抵抗が少なくなるということに直結する。本来なら、強敵と相対するときの恐怖だとか、傷付いた時の怒りだとか、敗北に繋がりそうな負の感情を抑え込むことを指しているのだろうが、こういう抵抗のあることに対

してもすんなり出来るようにするのにも繋がった。
「結構無くしてったろ。あたいの残弾はまだ半分はあるけど」
「あたしも大丈夫だね。ただ、反応がおかしなところ行ってない？」
「えーっと、あ、これか。２人分。これ向かってるのって……執務室か!?」
ここで望月と涼風も執務室に向かう存在に気付いた。この一行を遠ざけるために動いているとしか思えないくらいに真っ直ぐに。
泥に侵蝕された者同士がお互いの位置や状況などを把握している可能性があるのだが、そうだとしたら、これはもう陽動作戦にすらなっている。適当に近場の者達を侵蝕し、反応を増やすことでこちらに対処させ、その隙に要を潰しに行こうという算段なのだろう。
「他の連中に泥増やさせてる隙に司令官やろうってのかよー。なんて狡(こす)い連中なんだ」
「でも、他を放っておいたらネズミ算が終わんないぜ」
「だから厄介なんだけど……まぁ大丈夫っしょ。あたしらはその２人は無視でいいよ」
断言する望月。鎮守府のトップに危機が迫っているのなら、身を挺してでもそれを守るべきだと考えるのは艦娘の思考なら当然。
「何故言い切れるのですか」
その言葉に少しだけ冷静さを取り戻した電が尋ねる。望月はすぐに答えた。
「んなもん決まってるでしょ。うちの鎮守府で、一番やべぇヤツが近くにいるんだから」

その頃、執務室。泥を感知する眼鏡を使って、戦況を確認し続ける五月雨と吹雪。この状況が好転するまでは話し合っている余裕なんて無い。ただでさえ治療されてまだ震えが止まらない雷を匿っているのだ。今は戦う力がない人間はじっとしているしかない。
「２人、こちらに来ています」
先にそれを感じ取ったのは吹雪。五月雨は工廠の方を見ており、吹

雪はその逆方向。やはり陽動のように動いていることに気付いた。
「吹雪、今回は許可します。殲滅しなさい」
大将の言葉に、吹雪は無言で頷いた。あまりにも物騒な指示ではあるのだが、殲滅するのは艦娘ではなく泥のこと。吹雪は眼鏡をかけ直し、泥を改めて確認する。
遠くにある泥の反応は、増えるよりも減る速度の方が上がっていた。外に出て行った部隊が、しっかりと仕事をしていることを表している。工廠に離れていた反応も消えていた。部隊が二手に分かれて対処したことがここからわかる。
その2つが陽動であり、本命はこの2人。執務室にいる提督を、ここで纏めて始末しようという算段。ならば、執務室内でも相当な火力を放てるような戦艦を引き連れてきていると考えられる。人間3人を人質に、秘書艦に身動きを取らせないようにするつもりなのだろう。
「室内には入れないように、扉の前を陣取ります。少し喧しくなるかもしれませんが、気にしないでいただけると幸いです」
艤装を展開して大きく息を吸う。そして、吸った分を吐いた途端に、吹雪の表情が変わった。大将を守る者から、敵を斃す者の顔へ。
「五月雨、君もサポートしてあげるんだ。何処まで援護が出来るかはわからないが……」
「は、はい、頑張ります！」
「助かります。私だけでどうこう出来る問題ではないかもしれないので」
戦場は執務室前。狭い空間であり、戦艦の中でも特に大きな艤装を持つ大和や武蔵、扶桑姉妹などが展開してギリギリくらいのスペース。駆逐艦なら2人並んでも余裕があるものの、左右に避けるスペースがあるかと言われれば何とも言えない。だからと言って前後に並んでいては、援護どころの騒ぎではない。後ろから仲間を撃ち抜いてしまう可能性すらある。
しかし、五月雨だって堀内鎮守府では最古参であり、数々の戦いを潜り抜けてきた手練れ。狭い空間での戦闘は初めてでも、連携ならば

お手の物。戦闘中にはドジらないため、後ろに置くなら最善の人材。
「そろそろ来ます。出来れば執務室の奥の方にいてもらえると助かります」
「大将は僕が支えておく。吹雪、頼んだ」
「よろしくお願いね吹雪。でも、殺しちゃダメよ」
　先程の殲滅発言といい、毎度恐ろしい言葉を選択しているが、吹雪は表情ひとつ変えずに執務室から出て行く。五月雨も一礼して吹雪を追った。

「さて、と。五月雨ちゃん、私が前衛をやるから、後衛お願いしていいかな」
「う、うん、それで大丈夫。というか多分、それがお互いにベストだと思う。私もどちらかといえば後衛向きだし」
「私、結構わちゃわちゃ動いちゃうかもしれないけど大丈夫？」
「そこは大丈夫。妹２人がやんちゃだから、その辺は慣れっこだよ。最近はあまり同じ部隊で出撃してないけど」
　扉の前で待ち構えている内に、ほんの少しだけ作戦会議。とはいえ立ち位置の確認程度で、あとは自由に戦うというのが今回のやり方。
「多分だけど、今から来る敵は片方は戦艦。もう片方は鹿島さんかな？　普通なら私達駆逐艦だと少し難しい相手かもしれないけど、その辺りは気にしないで」
　自信満々の吹雪。それでいて慢心しているような雰囲気も無い。
　如何に古参の五月雨であろうとも、吹雪と並んで戦うことなんてまず無い。別の鎮守府である時点で合同演習なりなんなりする以外で同じ戦場には立つことは無いし、そもそも吹雪が戦場に出ること自体が稀。ブラック鎮守府の鎮圧には乗り出しているようだが、それ以外ではあまり聞かない。
　今は前線から離れて、大将の補助と秘書艦としての責務に追われているためである。本当に必要な時以外は戦場に出ないようにしているのだ。

「よし、そろそろだね。向こうもこちらが待ち構えていることがわかってるのかな。そしたら、向かい合った瞬間に撃ってくるかも。それだけは覚悟しておこう」
「う、うん」
「大丈夫大丈夫。まず執務室を撃つなんてことはしないよ。向こうも司令官達を交渉材料にしようとしてくると思うんだよね。鹿島さんなら絶対そう考える。うちの鎮守府にもいるんだけど、軍師って感じが強くてさ。それが泥のせいで捻くれちゃったら、そういう意地が悪い作戦を仕掛けてくるよ」
話しながらも、泥の反応から目を離さない。いつ目の前に来てもいいように、主砲を握り締めて待ち構える。
相手の特性から、先手必勝が確実。何かをさせる前に鎮圧。時間をかければかけるほどまずいことになる。本来なら待ち構えるという戦術自体がよろしくないのかもしれない。
しかし、あえて吹雪はここで待っていた。戦いにくいのはあちらも一緒。閉所での戦闘は慣れていないはずだ。吹雪以外は。
「いらっしゃいませ。貴女が今回の件の黒幕ですか。鹿島さん」
廊下の先、ついにその2人が姿を現した。
片方は予想通りの鹿島。ここに来るまでに何度も泥を吐き出したようで、口元が少し黒ずんでいるようにも見えた。さんざん飛び散った泥を浴びたか、本来なら白い制服が黒く汚れてすらいる。
そしてその後ろ。同じように泥に侵蝕されているのは、この大塚鎮守府が誇る最高戦力、戦艦大和。あの武蔵の姉であり、今でこそ改二改装が施されたことにより妹に最強の座を明け渡しているが、その力はまだまだ健在。並の艦娘では簡単に勝つことは出来ない。それこそ、ここの夕雲と長波のように、大和は技で最強、武蔵は力で最強とするのが、艦娘達の中では常識となっている。
「雷さんを解放したことで、私のことを知ったんですね。はい、私が黒幕です」
「他の艦娘に口移しで泥を注ぐんでしたっけ。なら、その大和さんにも？」

「はい。美味しく頂いちゃいました」
ぺろりと舌舐めずりをしながら、吹雪のことを見下すような視線を向ける。
「まずは交渉と行きましょう。吹雪さん、こちらの要求は」
「答えはＮｏです」
鹿島が何かを言う前に吹雪は間髪容れずに砲撃。
しかし、大和が鹿島の前に立ち塞がると、手に持つ和傘を開いてその砲撃を食い止める。模擬弾であることを事前に知っていたようで、傘でもそれが防げることは織り込み済み。
「意外と荒っぽいんですね。艦娘吹雪としては珍しいタイプかな？でも、もう一度。こちらの要求は」
「答えはＮｏです」
次は魚雷を一本投擲。当たり前のように地上で投げ付けてきたことに素直に驚いたが、こんなところで爆発物を扱うとは到底思えないため、大和は適切に処理。その魚雷をキャッチしたかと思えば、そのまま投げ捨てた。
廊下の端に落ちても爆発することはなく、ただ転がるだけ。投げ付けた勢いがあれば、和傘も貫いてダメージを与えていたかもしれないが、大和には効かなかった。
「はぁ、話し合いの余地は無いと。こちらとしては、貴女方が私に従ってくれれば、荒っぽいことをしないで済むんですが」
「なら、こちらからの要求も聞いてもらえます？」
「何でしょう」
小さく溜息をついた吹雪が鹿島に言ってのけた。むしろ、吹雪が鹿島を見下すような視線になっていた。
「素直に治療されるか、そこに這いつくばって治療されるか、選んでください」

秘書艦である意味

大塚鎮守府を泥で侵蝕しようとしていた黒幕、鹿島が、他の侵蝕を受けた者達を陽動に使い、同じように侵蝕した大和を引き連れて執務室前までやってきた。

それに対するのは、堀内提督の秘書艦五月雨と、佐々木大将の秘書艦吹雪。その吹雪は、五月雨よりも前に立ち、2人を見据えて大見得を切った。

「素直に治療されるか、そこに這いつくばって治療されるか、選んでください」

吹雪のその言葉に、鹿島は目を丸くした。いくら相手が精鋭たる大将の部隊であろう艦娘だからと言って、自分はともかく泥でブーストがかかっている戦艦大和を前にしてそんな言葉が言えるなんて思ってもみなかった。

とはいえ、その目は本気で自分達を斃そうと考えている目である。そして、負ける気がないという自信すら窺えた。

「よくもまぁ、この状況を見てそんなことを言えますね」

「ええ、まぁ。これくらいの状況なら、そこまで苦ではありませんから。五月雨ちゃんもいますしね」

その五月雨は、大和が現れたことで若干厳しいかと考えていた。鹿島だけならば、吹雪と組めば問題なく対応出来ると思っていたが、大和の動きも見ているために、戦略をその場で練っている。

間髪容れずに放たれた砲撃は、模擬弾であることを理解された上で傘で防がれ、ダイレクトに投擲された魚雷は当たる前にキャッチされて無かったことにされた。駆逐艦が陸でやれそうなことなんてそれくらい。あとは江風のような近接戦闘であろうが、五月雨にもそんな心得は無いのだから、選択肢に入らない。

故に後衛として、自信のある吹雪のサポートに徹することを誓った。吹雪が酷い目に遭いそうならば、そうならないように動く。お互い無傷で、全てを終わらせることが出来れば御の字だ。

吹雪はそんなつもりが無いようだが。

「それで、こちらの要求に対する答えを聞かせてもらえます？　もしかしたら理解が出来ていなかったかもしれないので、改めて説明しますけど、素直に投降するか、痛い目を見るか、ということです」
表情を変えずにもう一度言ってのけた。状況を鑑みてもその態度を変えない。むしろ、その視線は鹿島と大和を射抜くように鋭く、眼光だけで殺そうとしているとさえ感じた。
そんな視線をされても、鹿島の考えは何も変わらない。目的を果たすためには、今目の前にいる2人の艦娘をどういうカタチであれ排除しなくてはならないのだ。ここまでの力を持つならば、始末するよりは引き込みたい。しかし、それを不意打ち以外でやるには骨が折れる。
ならば、もう始末の方が手っ取り早いだろう。大和に全力を出させて、鎮守府を破壊してでもここで討ち倒さなければ、今後の障害になることが確定する。
そもそも、鹿島から吹雪に要求する内容は、『こちらに従えばこれ以上の侵蝕をやめてやる』である。逆らった時点で命の保証も出来ないと天秤にかけさせ、最終的には傀儡に仕立て上げるまで考えていた。そのために大和を支配下に置いて脅しもしやすくしたのだ。
川内は提督も始末するつもりだったようだが、鹿島はあえて生かすことでさらに上の段階に向かおうとしていたようである。
「こちらの答えはもちろんＮｏですよ。わかっているでしょう」
「はい、わかってました。一応意思を確認しておこうかなと」
少しだけおちょくっているような態度を見せる吹雪。明らかに鹿島と大和のことを下に見ている視線である。
鹿島は苛立ちは多少あれど、それを表に出すことなく小さく溜息をついた。しかし、大和は無言を貫きつつも苛立ちを顔に出していた。
「でも、これは1つ聞いてほしいです。戦う場所、変えません？　ここではお互いキツいでしょう。すぐそこにもう少し広いところありますし。どうせやり合うんですから、お互いのびのびと戦いましょうよ」
「それもＮｏですね。そのままここでやります。執務室ごと破壊して

もいいと思ってますから」
　交渉次第では提督を生かしておきたかったが、この吹雪はそれでどうにかなる相手にも思えなくなってきていた。むしろ執務室の破壊を盾に、自分達に優位に動いた方が良さそうである。
「そうですか。じゃあ、あとから大塚提督に謝ることにしましょう。多少ならば壊して構わないと言ってくれましたし、私がその多少になることにしますかね」
　そう言った吹雪は、真正面から大和に向かっていった。別に特段速いというわけでもなく、むしろのっしのっしと歩いて近付いた。
　それはもう狙ってくださいと言っているようなもの。しかしながら、異様な威圧感もそこにあり、むしろこの敵前でそんなことが出来るのが意味不明だった。
「もしかして、相当なおバカさんなんでしょうか。大和さん、死にたいようですので、始末しちゃってください。何というか、引き込むのが勿体無いです」
　鹿島の言葉に小さく頷くと、容赦なく主砲を全て吹雪に向けた。
　しかし、撃つ暇すら与えられることは無かった。向けた時には、既に吹雪は大和に向けて砲撃を放っていたからだ。
　ここでそのまま撃った場合、まず相討ちとなる。いや、むしろ相討ちにならないかもしれないのに、自分は確実にやられる。主砲が邪魔で、この砲撃が回避不可能である。それに、ここで全力の回避をした場合、鹿島に影響がある可能性もある。
「っ……」
　それ故に、大和は防御を優先した。再び和傘を開いて模擬弾を防ぎ、すぐにそれを払った。
　その時には、吹雪は眼前にまで迫っていた。
「こんな通路で戦艦が艤装を展開して、まともに動けると思ってるんですか？　火力だけを見て大和さんを優先して支配下に置いたというのなら、軍師としても高が知れていますよ鹿島さん」
　そして、主砲を撃つでもなく思い切り振って大和の艤装にぶつけた瞬間、大和の身体が大きく揺さぶられ、廊下の壁に叩きつけられた。

「えっ……!?」
それに驚いたのは、ほかでもない大和である。それをやったのは自分よりも一回りは小さく、大人と子供の差がある上に、艦種としても全てにおいてスペックが下であろう駆逐艦の吹雪。
しかし現実として今、大和は吹雪の一撃でふらつき、結果的には吹き飛ばされた。気を抜いていたわけでは無いのに。
「手の内は晒しませんよ。覚えられても困るので」
そこからすぐに復帰しようと吹雪の方を向いた大和は、その視界に吹雪を捉えることが出来なかった。瞬時にしゃがみ込み、その大きな艤装を支えている脚に向かって綺麗に足払いを仕掛けていた。
見えないところからの駆逐艦とは思えないくらいの衝撃に、大和は顔を顰めながらも倒れるのまでは防ぐ。しかし、吹雪はそれだけでは終わらない。
「あ、そうそう、ちょっとだけ伝えておきますね。手の内は晒さないけど、私の人となりくらいは知っておいてもらってもいいので。私、司令官――大将の秘書艦なんですけど、どうして選ばれたかわかります？」
クルリと回ってもう一撃。寸分違わぬ場所にローキックが決められ、1回目は耐えられても2回目は耐えられなかった。大和といえど、同じ場所に2回重めの衝撃を立て続けに受けたら、その身体は大きくグラつく。
「こちらの鎮守府は経験ですかね。鎮守府を長く知る者が秘書艦を務めるというのが筋でしょう。中には愛着もありますよね。別に提督と艦娘が好き合うことは悪いことでは無いです。そういう気持ちが力になるのもわかりますから。でも、うちの鎮守府は違います」
グラついた大和の手を掴んだかと思いきや、その瞬間に主砲を展開。その衝撃で大和は激しい衝撃を受けて吹っ飛ばされ、壁に激突する。
吹雪自身の力も駆逐艦のそれでは無いのだが、そのタネは艤装展開の精密さである。
何も無い空間から瞬時に艤装を展開出来るのが艦娘や深海棲艦で

あり、それに関しては質量保存の法則などなどを完全に無視している力なのだが、そこに無いものが現れるということは、その分、空間が弾けるような衝撃が生まれているということになる。展開している艦娘も深海棲艦もそんなものは感じないのだが、周りにはそういう影響があるということだ。

吹雪はそれを使って攻撃していた。当然砲撃には使えないのだが、このような接近戦ならば無類の強さを誇る。何せ、見た目とはまるで合わない衝撃が毎度の如く喰らわされるのだから、教えてもらわなければ訳がわからない。

尚、最初に大和が吹っ飛ばされたのも、ミートする瞬間に主砲を出し入れしたからである。それがあまりにも速かったため、大和にすら何が起きたかわからなかった。

「うちの鎮守府の秘書艦は、完全実力制です。司令官の脚を介護するというのもありますが、自分の力ですぐに動けない人間を護るためには、それ相応の力を持っている必要があるんですよ。それで、私はそうなってからずっと秘書艦をやらせてもらっています」

壁に激突した大和に近付いて、その胸に手を当てると、再び主砲を瞬時に展開してすぐにしまう。この衝撃で、廊下の壁にヒビが入るほどの一撃が与えられ、大和は白眼を剥きかけた。

事実、吹雪は大将の鎮守府でまさに『最強』の座に君臨する者。最強の戦艦と言われている武蔵ですら、この吹雪に対しては敬意を表している程の実力者。

かつての戦闘の際に、武蔵は自分より上がいると理解していると話していた。しかし、武蔵は最強の戦艦として名を馳せている。ならば、武蔵の言う『上』というのは誰なのか。答えは吹雪である。

「サラトガさんが来るまで武蔵さんを止めるのは私の仕事だったんですよね。あ、そんなこと言ってもわからないか。まぁ簡単に言えば、私、戦艦の攻撃が止められるんですよ。こういう風に」

同じことをもう一度。大和の背後の壁にもう一度ヒビが走り、ついには大和が肺の中の空気を吐き出してしまう。

そしてもう一度。3回目となれば、大和はもう耐えられなかった。

それでいて内臓を傷付けないように加減をしているのだから、吹雪の実力は遥か上だった。
望月が言う『一番やべぇヤツ』はここである。仲間には非常に優しく、真面目で勤勉、秘書艦として常に大将を支え続ける完璧な存在であり、敵に対しては一切の容赦なく、言い訳すらも許さない程の圧倒的な力で捩じ伏せる。
その寒暖差があまりにも激しく、二重人格なのではと思える程であった。それを望月は『やべぇ』と称したに過ぎない。
「かはっ……!?」
「もう終わりましょっか」
ここまで痛めつけたため、もう充分だと大和に模擬弾をぶちまける。ここまでされたら避ける余力なんて残っておらず、何も出来ずにそれを顔面に受けることとなった。
ここまで、僅か数秒。大和が何も出来ずにやられていく様子を間近で見せられ続け、鹿島は何も出来なかった。ちなみに五月雨も唖然として動くことが出来なかった。
大将の秘書艦だからと言っても、所詮は駆逐艦。艦種として戦艦にはそう簡単には届かず、大和を犠牲にしてでも始末出来ればこちらのモノとすら考えていたのに、結果はこれだ。鳴り物入りでやってきた大和が、まるで赤子のように手も足も出ず敗北を喫した。
「大和さん、ちょっと邪魔なので退いててくださいね。そこにいたらまた鹿島さんが泥を吐き出して無限ループとかになりかねませんから。もう痛い思いと気持ちいい思いを繰り返したくないでしょう」
薬の効果が早速出そうになっている大和を蹴り飛ばす。ミートする瞬間に魚雷発射管を展開してすぐにしまったことで、大和は廊下の端にまで吹っ飛んでしまった。そんな遠くでも、薬の効果はしっかりと効いており、その快楽で悶絶を始める。
「えぇと、次は鹿島さんがあなりますが、ここでもう一度要求を言っておきましょうか。素直に治療されるか、そこに這いつくばって治療されるか、選んでください」
にこやかに鹿島に言い放つ吹雪。その言葉に、恐怖しか感じなかっ

た。
「私の答えは、Ｎｏですよ！」
しかし、自分を奮い立たせて吹雪に立ち向かう。こうしている間にも増殖を終えた泥を小さく吐き、教鞭ならぬ鞭を展開し、吹雪に振るう。近接戦闘のために選んだこの武器は、今の自分には合っていると確信して使っている自信のあるモノだ。
泥を忍ばせて振るうことで、飛沫を飛ばして相手を侵蝕する役目を持っており、口移しで侵蝕していないものは大概この鞭に打たれて泥を染み込まされ、支配下に置かれている。
「そうですか。わかりました」
その鞭の特性を瞬時に判断した吹雪は、強烈な踏み込みと同時にバックステップし、五月雨の隣に並び立った。これで鞭の飛沫の範囲外。
「あーあー、床が汚れていっちゃいますね。ちゃんと掃除しないと」
それでも吹雪はスタンスを一切崩さず、鹿島を見据える。

大和は散り、第二ラウンドへ。

あの姉妹の1人

鹿島に侵蝕された大和は、吹雪が瞬殺。うもすもなく滅多打ちにした挙句、しっかり治療した上で戦いの邪魔にならない場所に蹴り飛ばした。

これで残るは鹿島のみ。その鹿島は、泥がまとわりついた鞭を振り回しながら近付いてくる。当たればそのまま侵蝕。当たらずともへばりつく泥が振り回されることによって飛び散り、廊下に次々と付着していくため、ただ単に真正面から向かうのはほぼ不可能。

「これはなかなか難しい状況かな」

まず吹雪が鹿島に向かって砲撃を放つ。当然薬入り模擬弾であり、当たればそのまま治療。廊下という狭い空間で放つために簡単に回避出来ないようになっているのだが、鹿島はもうそれも気にしていない。

ハッと鼻で笑ったかと思いきや、その模擬弾を鞭で払い除けてしまった。強烈な速度で振り回される鞭の前では、殆ど水鉄砲と同じ薬の弾丸は物理的な壁にぶつかるのと同じ。当然、鞭に付着している泥はその薬が駆逐していくのだが、そうなった時点で鞭から離れ、そこに鹿島がさらに泥を注ぐため、完全に互角。

「うわ、ちょっと予想外。模擬弾だから弾き飛ばせるんだ。実弾よりはどうしても軽くなっちゃうもんなぁ。それにしても、まさか鞭でガード出来るなんて思ってませんでしたよ」

「それはどうも。でも、やっぱり相性というのはあるようですね。私は貴女相手だと相性がいいようです。近付かなければさっきの力は発揮出来ないんですから、こうしておけば私の有利は変わりません」

吹雪の強さも殆ど不意打ちのようなモノである。それを大和を治療することで見せてしまっているため、近付かせないという対策を絶対に取らせることになる。

これが相手がただ砲撃するだけならば、何も考えずに吹雪は突撃していただろう。この吹雪は眼前で撃たれたとしても回避することくらい朝飯前だ。しかし、鞭という艦娘で使う者はまずいない特殊な武

器で戦われているせいで、なかなかに近付けないでいた。
鞭は範囲攻撃の一種だ。砲撃のような直線的な攻撃ならば簡単に避けられても、自分の周囲を埋め尽くすような攻撃は吹雪の管轄外。いや、そんなことをされても鞭そのものを弾き飛ばすことは造作も無いのだが、今回の鞭は触れたら終わりであるために、やはり攻撃方法を考え直さなくてはならない。
「仕方ないなぁ……司令官には殺すなって言われてるけど、実弾を使うなとは言われていないもんね。両腕捲ぐくらいなら入渠でどうとでもなるし、無傷で倒そうって考えが甘すぎるかな」
吹雪はそこに一切の抵抗が無い。あんな鞭を振り回していても、実弾ならば確実に通せる。もしかしたら、あの鞭で実弾すら弾き飛ばすかも知れないが、それならそれでやり方はいくらでもあった。
大和はボコボコにしているが、傷は殆どついていない。衝撃だけでのしてしまった。だが、鹿島を無傷で終わらせる義理は無かった。
「ちょっと待って、吹雪ちゃん」
主砲に触れて模擬弾から実弾に切り替えたところで、五月雨が待ったをかける。
「私があの鞭をどうにかする。そうなれば近付けるよね」
「まぁ、そうだね。でもアレ、模擬弾とはいえ砲撃を払い除けるくらいのヤツだけど、大丈夫？」
「うん、大丈夫。だから、実弾はやめてあげてほしいな」
ここで一歩前に出たのは、吹雪のサポートをするためにこの戦場に立っている五月雨。
吹雪が大和と戦っている時は、あまりにも無茶苦茶な戦いだったために何も出来なかったが、その吹雪と相性が悪い攻撃方法を使ってくる鹿島が出てきたのなら次は五月雨の番。
「吹雪さんは相当なモノであることはよく理解させてもらいました。でも、近付けさせなければこの程度です。所詮は駆逐艦、しかも模擬弾ですからね。私の鞭ならば、一度見た攻撃なら弾き落とすことくらい簡単なんですよ」
鞭を振り回しながら徐々に近付いてくる鹿島。このまま泥の範囲

外に下がり続けると、最終的には執務室の扉にぶつかることになる。そうなったらもう終わりだ。否が応でも泥を浴びせかけられることになり、2人揃って鹿島の支配下に置かれる。それだけは避けなければならない。

万が一そうなってしまった場合、おそらくこのまま執務室に戻されて揃っている人間3人を始末するなり人質にして傀儡化するなりで目的達成。今までの敗北が全てチャラになるレベル。

「それなら、この辺はどうでしょう」

五月雨がその手に展開したのは、爆雷。本来潜水艦をどうにかするための武器であり、海中に投げ込むための謂わば爆弾だ。ここでそれを取り出したということは、この室内だというのにそれを投げ付けてくるということにほかならない。

だが、五月雨も吹雪と同じで模擬弾などのダメージを与えない兵装を扱っていると、鹿島は判断している。ならば、爆雷を投げつけられたところで、鞭で弾いてやればおしまい。

「それじゃあ、投げますね」

宣言までしているのは愚かすぎると内心ほくそ笑みながら、しかし慢心はせず鞭を振り回す速度をさらに上げて、爆雷如き弾き飛ばしてやろうと待ち構えた。自分の行動が何もかも効かないとなれば心が折れるだろう。そう考えて。

そして、それが間違いであることに気付くのは、すぐだった。

「せーのっ！」

思い切り振りかぶって、爆雷を投擲した瞬間、鞭如きでは弾き飛ばせない程の速度で鹿島に向かった。

あまりのことで鹿島も咄嗟に避けたのだが、その衝撃は凄まじく、避けた先にある廊下の壁に激突した瞬間、爆発しなかった爆雷が完全にめり込んでいた。そして、めり込んだ爆雷からは模擬弾と同じ薬がタパタパと流れ落ちている。

「……は？」

素っ頓狂な声をあげる鹿島。どう考えても、五月雨の見た目から放たれる投擲では無かった。

「じゃあ、次行きますね」
「ちょっ」
五月雨の第二投。同じように振りかぶって、全力で投げつける。第一投と変わらない勢いを誇る爆雷は、振り回される鞭をモノともせず、それを突き抜ける勢いで鹿島に向かう。
そうなってしまうと鞭なんて振り回している余裕が無い。当たればダメージを入れられつつ、薬が破裂して治療完了。むしろ、そのダメージも相当なモノになることが見てわかるほどである。
五月雨も堀内提督の秘書艦。それを務めていられるのは、勿論経験もあるのだが、駆逐艦としての強さもある。この爆雷の投擲能力は、別に隠していたわけでもなかった。
五月雨が若干地味になってしまうのは、姉妹が全員キャラが立ちすぎだからである。五月雨は基本、姉や妹を引き立てるような動きを優先するサポート役を買って出るのみ。だから、そもそも力をそこまで発揮しない。
だが、出してみたらコレである。実際これだけやれても、生前の白露達上４人の姉達と同じか少し劣る程度というのだから凄まじい。
「どんどん行きますよ。頑張って避けてくださいね」
しっかりと宣言して、次々と爆雷を投げていく。一投一投が毎回渾身の投擲なのだが、その隙を全て帳消しにするレベルの威力であるため、鹿島は完全に防戦一方となる。
この五月雨の力の正体は、艤装のパワーアシストを全て腕に集中させるという細やかなコントロールを無意識にやっているところにある。
本来、艤装のアシストを全身に満遍なく行き渡らせることによって海上で戦える。脚に回して高速航行を、腕に回して砲撃を放ってもブレずに、身体に回して体幹を強化し、その全てが噛み合うことで艦娘という存在が海上で成立する。
しかし、今は陸の上だ。脚と身体に回す分は無くてもどうとでもなる。それを無意識に理解した五月雨は、そこに回すアシストを全て腕に回した。その結果がこの豪速球。砲撃よりはダメージは無くとも、

鞭如きでは止めることが出来ない、この状況に最も合っている攻撃となった。
　五月雨も白露型。狂犬揃いの姉妹の中の1人。例に漏れず、五月雨も戦闘センスは抜群である。周りが凄まじいだけで目立たないだけ。
「あ、廊下が壊れちゃった……良かったのかな」
「大丈夫大丈夫。多少壊してもいいってここの持ち主が言ってたから、やっちゃえやっちゃえ」
「吹雪ちゃん……意外と軽いね。夕立姉さん見てるみたい」
「軽いってのは五月雨ちゃんに言われたくないかなぁ」
　2人は和やかな会話になっているが、喰らっている鹿島は必死そのもの。当たれば終わりなのは模擬弾と同じなのだが、そのサイズが違う。廊下の壁にめり込むレベルの勢いで飛んでくる爆雷なんて、見て覚えたとしても簡単には回避が出来ない。だからといって弾き飛ばすことも出来ない質量であるため、鞭なんて振り回す余裕が無くなる。
「この、なんてインチキな……!」
　鞭ではどうにもならないと判断したか、一度鞭を消して鹿島も主砲を展開。投擲の瞬間は隙だらけになるのは見ていてわかるため、投げる直前に合わせて撃てば、投げられる前に始末出来る。
　そう考えて正しいのは、五月雨と1対1で戦っているならばだ。ここにはもう1人、五月雨よりもとんでもない艦娘がいる。
「やっと鞭をしまってくれましたね」
　主砲を構えたその時、吹雪が鹿島の真正面に立っていた。五月雨の横の床には抉れた跡があり、隙が見えたと思った時には吹雪はもう動いていたようだった。
　まずいと思った時にはもう遅い。吹雪がその主砲を軽くノックした瞬間、見た目とは一切噛み合わない衝撃と共に主砲が吹っ飛ばされる。まともに握っていることが出来ず、手が痺れる程。
「くっ……!?」
「私1人だったら、鹿島さんには苦戦していたでしょう。五月雨ちゃん1人だったら、大和さんが厳しかったかもしれません。無傷で終わ

らせるっていうのはそれだけ難しいんですよね」
　流れで鹿島の脇腹を蹴る。ミートした瞬間にまた魚雷発射管を一瞬展開したことで、鹿島の華奢な身体が壁に吹っ飛ばされ激突。泥を吐き出す余裕すら与えられず、痛みやら何やらで思考がグチャグチャにされる。
「本当は両腕両脚を捥ぐくらいでも良かったんですけど、そこまでしたらトラウマとか残っちゃいますよね。あくまでも鹿島さんは敵の術中に陥って侵蝕されているだけですもん。治療したらまともな鹿島さんに戻ってくれることはわかっています」
　そして、間髪容れずに吹雪が主砲を放った。一度実弾に変更していたが、五月雨の爆雷投擲の間に模擬弾に戻していたため、しっかりと薬が鹿島に命中。念のためと3発くらい撃っておいた。服にも染み込んでいるようなので、その辺りもしっかり綺麗にしてやるために。
「これでおしまい、かな」
　悶絶する鹿島を放っておいて、泥感知の眼鏡で周囲を見回す。今まであった工廠の反応も失われ、他のところで増殖を繰り返していた反応も次々と減っていき、あと少しで全て駆逐出来るところまで来ている。そちらの方は任せれば何とかなるだろう。
「床に散らばった泥にも薬かけておいたから、ビショビショだけど安全になってると思うよ」
「だね。お疲れ様」
　鞭を振り回したことでばら撒かれた少量の泥も対処完了。当然吹雪からも五月雨からも泥の反応はないため、本格的に戦闘終了となっただろう。
「終わりました。侵蝕された艦娘、全員治療完了です」
　そのまま執務室に戻り、現状を報告する。結局鹿島は廊下に放置するということになってしまっているが、今の状態をわざわざ連れてくることもないだろう。あまりにも見せられない姿をしているのだから。
「お疲れ様、吹雪。殺さずに出来た？」
「勿論。少し危なかったですけど、五月雨ちゃんのおかげで全員無傷

で終わりました」
無傷とは思えない音が何度も聞こえたものだが、当人が無傷であると言うのだからそうなのだろうと納得する提督達。

あとは先に出て行った部隊が戻ってくれば、この戦いは終わりである。いや、その後に薬でどこもかしこもビショビショになっている鎮守府の大掃除が残っている。とはいえ、これで脅威が去ったのは間違いない。

この鎮守府のやり方

「知ってると思うけど、こっちは終わったよー」
「一通り鎮守府の中全部回ったから、安心してくれい」
　執務室に戻ってきたのは、望月と涼風。眼鏡によって泥の反応が失われたことがわかったため、電と夕雲と一旦別れて先に戻ってきたという。
　別れた2人は、戻りつつも治療されて悶絶している仲間達の介抱をしつつ、運良く侵蝕されなかった仲間達に事情を説明している。幸いにも実際に侵蝕されていた夕雲が説明出来たため、治療されている側も侵蝕されていない側もすぐに納得だけはして、テキパキと介抱を始めていた。
「工廠、終わったぜ。明石さンに任せてきちまったけど大丈夫だよな」
「ああ、明石が最初から正気であることが保証されているなら、任せるのが正解だ。ちなみに、誰だったか教えてほしい」
「川内長波ペア。私と江風でちゃんと治療したから安心してね」
　ほぼ同じタイミングで江風と島風も帰投。ここに来るまでに薬の効果でビクンビクン震えている大和と鹿島を見てきたため、執務室に向かった反応がその2人であると理解した上で、しっかり処理されていることがわかり、少し安心。
「そこでやったのは鹿島さんと大和さんです。大和さんは鹿島さんが侵蝕したと、本人の口から聞いています」
「あたしらが向こうで鹿島にやられたっつってたのは夕雲だね。これで最初に見た6人かな」
「そうか……わかった。我が鎮守府の艦娘を救ってくれて感謝する。君達がいなければ、俺の知らぬ内に全員が黒幕の手の内に堕ちていただろう」
　戻ってきた艦娘達に頭を下げる大塚提督。艦娘は兵器であるという考えではあるが、救われたのは事実だ。そこに感謝の意を見せることには抵抗は無い。
「それじゃあ貴女達はそのまま鎮守府の掃除を手伝ってあげてちょう

だい。あの薬入りの模擬弾でそこら中が水浸しになってしまっているでしょう？」
「え、めんど」
「望月」
　面倒臭いと言い切る前に、大将が笑顔で見つめる。睨まれるよりも恐怖を感じる表情に、見せつけるように大きな溜息を吐いた。
「へーい。やりますよやりますよ。婆ちゃんいつも言ってるもんなぁ、片付けまで終わらせて初めて作戦終了ってさ」
「よくわかっていて何よりよ。島風もいいかしら」
「おうっ！　工廠べチャべチャにしちゃったから、片付けてくるね。江風も一緒に！」
「うぇっ!?　あー、まぁ水溜まりに飛び込ませるなんて作戦やっちまったもンなぁ。あれは江風が片付けなくちゃいけないよなぁ」
　鎮守府内でも工廠は特に酷いことになっているのは、そこで戦闘をした２人がよくわかっていた。室内なのにもかかわらず、まるで通り雨が通ったかの如く床は濡れ、モップか何かで対処しないと誰かが足を滑らせる可能性がある。例えば、五月雨とか。
「あ、廊下も酷いことになってしまって……」
「アレだけの音がしていたからね。五月雨、全力で何かしたのかい？」
「はい……爆雷を投げたので、壁を破壊してしまいました……はい」
　廊下を一部破壊してしまったことでシュンとしてしまう五月雨だったが、大塚提督がやっていいと言ったのだから問題ないとフォロー。効率を考えたらそうせざるを得なかったのだろうし、鎮守府が倒壊するような激しい戦闘をしたわけでもないのだから何も問題ない。
　そもそもその程度の破壊ならば、妖精さんの力があればすぐに復旧出来る。その辺りは、執務室が破壊された堀内鎮守府でも見ているので、そうですねと一応立ち直った。
「そんじゃあ、あたいも掃除に行ってくっかね。結構いろんなところ濡らしちまったし」
「私も、私も行くわ。もう身体は大丈夫だから、それくらいお手伝いさ

せて」
　ここで手を挙げたのは、最初に治療されてから執務室で待機していた雷。治療された直後は酷く落ち込んでいたものの、今はようやく調子を取り戻し、薬の効果のフラつきもどうにか治まっていた。
　やらされていたこと、先程まで持たされていた思考が、外から植え付けられたものであるとしっかり理解したことで、立ち直ることは出来ていた。感情を抑えるのは難しい状況にあるのだが、それに近しいことは出来ているおかげで長く落ち込むことは無い。今やれることをやろうと気持ちを入れ替えることは、この鎮守府に所属している者ならば造作もないことだった。
「雷、ついでと言ってはなんだが、電に執務室に戻るように言ってきてもらえないか。秘書艦として、この場にいてもらいたい」
「わかったわ。見つけ次第、ここに来るように言っておく」
　ここからは提督同士の対談だ。そこには1人、秘書艦を隣に置いておく必要がある。艦娘代表として、責任を持って話を聞く役は常に秘書艦だ。
「んじゃあ、ひとまずみんなで散らばって鎮守府の中を掃除してくるよ」
「提督達は本題やっちゃってくれよな。姉姫さン達も待ちくたびれてると思うぜ」
　今まで外で鎮守府内の泥を処理していた面々がまた執務室から出て行く。ここからは鎮守府の掃除。戦闘後の片付けに奔走することとなった。
　執務室に残った者は、本題へと入る。とはいえ、当初考えていたことは、明石が開発した泥の対策を使用して、近くに泥の反応があるかの調査や設置されているかもしれない泥の排除が目的だった。それはもう、鹿島を筆頭とした侵蝕された艦娘を見事に治療出来たことで運用が何も問題ないことを知らしめることが出来た。
　そのため、今回の本題は施設との対談。事前に施設側に話していたことでもあり、秘密を共有している大塚鎮守府にも、施設の善良な穏健派深海棲艦のことを知ってもらうという機会とする。

「電が戻ってくるまで、少し待ってもらえますか」
「ええ、ならそれまでに、鹿島のことをどうにかしましょうか。吹雪、そろそろ薬の効果も終わっているでしょうし、ここに連れてきてもらえる？」
「はい、引きずってでも」
「多少は気を遣ってあげてもいいわ」
その鹿島はまだ執務室前の廊下に放置中。そろそろ薬の効果による激しい反応は終わっており、侵蝕も治療されている頃だろう。だが、身体はまだガタガタで、自分の力で歩くことも出来ないことの方が多い。雷のような見た目だけでいえば未熟な身体で、回復がついさっきまでかかっていたくらいだが、鹿島はその辺りは早めであろう。
鹿島を執務室の中に入れるため吹雪が外に出ると、そこには蹲る鹿島の姿が。予想通り治療は終わり、正気を取り戻してはいるものの、今までの行いを省みてしまったせいで強いショックを受けてしまっていた。
「鹿島さん、大丈夫ですか？」
吹雪が近付くと、酷く怯えた表情で吹雪をチラリと見る。侵蝕されていた時に圧倒的な力を見せつけられたことに対する怯えでは無く、今までのやらかしに対しての周囲の視線に怯えているような、そんな表情。
鹿島発端の５人は、鞭による侵蝕ではなく、泥をモロに口移しで注ぎ込まれている。いわば、５人の操を破ったようなものと考えてしまった。自分のせいで穢してしまったとさえ思っている。
「えーっと、鹿島さん？」
吹雪が改めて声をかけると、鹿島はヒッと小さく声を上げた。先程までの自信過剰な態度は嘘のように失われており、あれ自体が泥のせいで作られていた性格であったことを理解させられる。
本来の鹿島は、とても仲間思いで心優しい、それこそ生徒を見守る教師のような性格である。練習巡洋艦という特殊な艦種であるために、そうなりやすいという傾向があるようだが、鹿島もしっかりとそ

れに準じていた。だからこそ、新人教育や駆逐艦達のために教鞭を執るような先導者となっている。鹿島もそれを本職であると誇りを持って続けていた。
　それが、泥のせいとはいえ、他者を陥れ、操を奪い、自分が上へと君臨することに快感を覚えるような女王様気質にされていた。鹿島はそれが自分の本性なのでは無いかと思い込み、そんな自分を奇異の目で見られることが嫌で嫌で仕方なかった。
「鹿島さん、自分でもわかってると思いますけど、今までのはやらされてきたことですからね。全部作られたモノで、鹿島さんとは全く関係ないモノですからね」
「……でも、やったのは私です。皆さんの、皆さんの貞操を奪い、思うがままに操るだなんて……私は艦娘失格です……」
「いや、だからそれが全部作られた思考なんですって。そう思うように泥が作用してるんですよ。思ってもないことを勝手に考えるようにされて、それが正しいとも思い込んでしまう。だから、全部偽物の感情ですからね。鹿島さんがそんなこと考えるわけないでしょ」
　吹雪がどれだけ話しても、鹿島は自分の思い込みに囚われてしまっている。もうダメだ、おしまいだと頭を抱え、生きている価値すらないとまで呟き始める始末。
　このまま放置するわけにもいかなくなったと、艤装のパワーアシストも使って強引に抱き上げ、執務室へと運んだ。
「ちょっとまずい状態なので、強引に連れてきました。あとはお任せします」
　大塚提督の前に投げ出された鹿島は、より怯えた表情になる。そんな鹿島を見て、大塚提督は小さく溜息を吐いた。
「鹿島、お前は俺のことをどう思っているのか知らないが、この程度でお前を捨てるとかそういうことはないぞ」
　その考えを読むかのように言葉を紡ぐ。
「今までの行動がお前の意思でないことくらい、俺だって理解している」
「ですが……」

「敵に利用されたことが、俺の部下でなくなる理由にはならない。なら何か、お前は自分の意思で泥に呑み込まれに行ったのか。違うだろう。そうだったとしたら俺は容赦なく切り捨てるが、俺の部下はそんな選択をしない」
淡々と、説教するわけではなく意思の確認をするように問いかける大塚提督。思いやりがあるわけでもなく、だからと言って距離を取っているわけでもない。程よい距離感を保ちつつ、端的に合理的に物事を進めようと続ける。
「アレは誰にも回避出来ない、敵の未知の手段だ。避けられないものを避けられなかったお前に何か罪があるのか。あるわけないだろう。むしろ艦娘には罪というものが適用されない。罰を与えるのは、その所有者である俺だ。俺がお前に何もしないと言っているのだから、お前は何も気にする必要はない」
大塚提督は、艦娘はあくまでも意思を持つ兵器であるという考えを崩さない。だが、その考えが逆にいい方向に向かう時がある。それがちょうど今であろう。
艦娘は人間であるという考えであると、ここで慰めるなどをした場合、提督にそんなことをさせてしまった自分は……と余計に思い詰めてしまう可能性があった。鹿島のような性格の者ならば、そうなる確率は非常に高い。
しかし、そう思わせることもなく淡々と機械的に扱い、必要以上に罪悪感を刺激しないからこそ、思い詰めることなく次へと進むことが出来る。自分は兵器であり、使われ方次第では善にも悪にもなると自覚して、この提督に使われているから善に傾いているのだと理解しているのだから。
「お前が陥れてしまった者達も、同じように話しておく。その上で謝罪をしたいのならすればいい。だが、遺恨は残すな。今まで通りにしていれば、残しようがないと思うがな」
鹿島としても、こう言ってもらえたことが救いではあった。
「鹿島、今すぐでなくてもいい。お前がそうされた時の状況を教えてくれ。そこからその海域の調査をする必要がある。その調査は、お前

が旗艦となって進めればいい」
そしてこの指示である。見捨てておらず、頼っていると示すことによって、鹿島の心はより良い方向へと向かっていくだろう。

艦娘を兵器として扱う方針がうまく作用しているところを見て、堀内提督はそれはそれで感心していた。こういうやり方もあるのかと、学びが進む。
しかし、自分の鎮守府ではこの手段は使えないなとも思った。こんなことをいきなりしようものなら、感情が溢れて繭になってしまうかもしれない。

涙の再会

鹿島の件が一時的に終了したところで、雷が呼びに行った電も執務室に戻ってきた。鎮守府中の仲間達の様子を見て回ったようで、電は少し息を切らしていた。

「ご、ごめんなさい、遅くなったのです」

「問題無いわ。みんなの様子を見てきてくれたのよね。ありがとう電」

大将の労いに少し顔を赤らめながら一礼して、そそくさと大塚大将の隣に立つ。これで提督とその秘書艦という組み合わせが全て揃ったため、改めて本題に入る。

この場に鹿島がいることは誰も気にしていない。むしろ、ここで姉妹姫がどういう存在かを知ることが精神的にもいい方向に向かわせるかもしれないため、あえて出ていけとは言わなかった。

「それじゃあ、本題に入るわね。先日にも話した通り、私と、この堀内提督は、いわゆる穏健派、こちらに対して侵略の意志が一切ない深海棲艦と関係を持っています。それは良かったわね？」

大塚提督と電は事前に聞いているため問題なく頷く。鹿島は当然その話は初耳であるため、小さく驚いていた。

「その深海棲艦達のおかげで、今回の侵蝕による被害はここで食い止めることが出来ました。事前に情報を手に入れておけたことで、堀内提督の鎮守府が対策を開発し、今に至ります。これも良かったわね？」

対策の結果は見ての通りだ。鎮守府は散々なことになってしまっているものの、侵蝕を受けて内乱を起こそうとしていた艦娘達の思惑をほぼ未然に防ぐことが出来ている。

施設で使用して効果が出ていることはわかっていたが、鎮守府でも完璧な効果を発揮出来たことで、全ての状況に対応出来ることが実証された。この装置各種を全ての鎮守府に展開することで、余計な被害者が出ないようにしていけば、黒幕を追い詰めることも出来るだろう。

「ここがこうで無かったら、この開発された装備の使用法などを伝えることで終わっていたでしょう。他の鎮守府ならここで終わることになっています。でも、この鎮守府は、その穏健派の深海棲艦とも深い繋がりが出来ます」
「はい、古鷹のことですね」
「ええ、そう。実はここに来る前、穏健派の深海棲艦と話しています。貴方達との対話を快く引き受けてくれました。特に古鷹は、貴方とまた話をしたいとも」
　その言葉を聞いて、大塚提督は少なからず反応をした。
　古鷹は生きていたが、もうこの鎮守府に戻ってくることは出来ない。だが、古鷹自身が最後に別れの言葉を告げたいと、自分の意思で決めた。
「俺としても、ケジメとして古鷹と話をした方がいいでしょう。少なくとも、もう画面越しでなく直接会うことは出来なくなってしまったなら、尚のこと言葉を交わす必要があると思います」
　これが今生の別れになるかもしれないのだから、誠意を見せるべきだと大塚提督も古鷹との対話を望む。勿論、施設との対話によって、穏健派の深海棲艦がいるということを知るのも重要だが、この鎮守府にとって最も重要なのは古鷹のことだ。
「わかったわ。それじゃあ、あちら側との通信を始めるわ」
　吹雪に合図をして、タブレットを取り出させる。ここまで来たらもう後戻りは出来ない。
　もう何度も何度も話をしている堀内提督は、緊張のきの字も無い平然とした表情。相手が深海棲艦であるとしても、ここまで普通にしていられることに、若干恐ろしさも感じた。
「……堀内提督」
「何かな」
「貴方はその深海棲艦と初めて話をした時、どう感じた」
　大将が準備をしている間に、大塚提督が素朴な疑問を投げかける。堀内提督はむっと考える仕草をしたものの、とても穏やかな表情でその問いに答える。

「勿論、驚きはしたさ。最初は部下の話を聞いて声を荒らげてしまったくらいだよ。しかし、実際に見て、顔を合わせたら、別の意味で驚く。あまりにも我々の知っていた深海棲艦とはかけ離れた存在すぎてね」
艦娘だって、何処からどう見ても人間のようなものだ。ドックを使えば千切れた四肢が再生したりする以外は、人間と全く同じような行動を取る。考え方だって人間とほぼ同じだろう。
だが、あの姉妹姫はそれに輪をかけて人間らしさがあった。ただ平和に暮らしたいという思いだけで生きており、そのためには本来やらない農作業という労働すら楽しみながら行う。そして、悪意を全く感じない聖人君子。
「陸上施設型の深海棲艦を見たことはあるかい？」
「勿論。何度か戦闘経験もある。中部での離島棲姫だったか」
「なら話が早い。彼女達は、自分達が生きていくために、そこに畑を作って野菜を育てている。あとは釣りで魚を獲ってもいる。自給自足で生活しているんだ」
流石にこればっかりは驚きが隠せなかったようだ。いくら陸上施設型とて、自分の陣地で農作業をする深海棲艦なんて聞いたことが無い。
「だが、それだからこそ、大きな安心が得られたよ。彼女達も、僕らと何も変わらないのだとね。生きるために、しかし、他人に迷惑をかけないように、自分で出来る限りのことを自分達でやっていく。その選択を笑顔でしている彼女らを、信用出来ない理由がないのさ」
これは、艦娘を人間と同じとして見ている堀内提督だからこその考え方なのだろう。艦娘を人間として見るのなら、深海棲艦だって人間として見られる。そして、艦娘が深海棲艦になってしまうこともわかっているため、全てがイコールで繋がった。それ故に簡単に受け入れられる。
種族的には異常性かもしれないが、人類や艦娘と共存出来る特異性である。
「……なるほど、それに関しては、俺も考え方を変えなければならない

のかもしれない。その深海棲艦に対してだけは、兵器ではなくそういうモノとな」
「ああ、それでいいと思う。特殊であることは変わらない。だが、あまり異物を見るような目で見てあげないでほしい。彼女達は、ただ平和に、共存を願っているだけだからね」
　それこそ、姉妹姫の考え方は提督達と同じなのだ。それを深海棲艦だからというだけで違うものと見るのは間違っていると、堀内提督は熱弁した。
　大塚提督もそこは納得した。余計な敵を増やすことは合理的ではなく、仲間は多いに越したことはない。例えそれが深海棲艦であろうとも、牙を剥かない者に対して偏見から攻撃をするだなんて、あまりにも馬鹿馬鹿しい。
「姉姫、待たせてしまってごめんなさいね」
『少し遅かったから心配しちゃったわぁ』
　２人の提督が話している間に準備が出来たために通信を開始していた大将。タブレットの向こう側から聞こえた声は、とても深海棲艦とは思えない程におっとりとした声色。それでいて、予定の時間より遅くなっていたことを怒るわけでもなく、ただただ何かあったのかもと心配している。
　堀内提督にはもう聞き慣れた声なのだが、大塚提督には驚くべきものだった。声だけ聞いていたら、それはもう深海棲艦ではない。人間と同じと言っても過言では無かった。
「予期していた異常事態が起きていたの。対処は全て終わったわ」
『そう、それなら安心ねぇ。また私の中身が迷惑をかけてしまったみたいで……』
「前々から言っているけど、中身のやらかしを貴女が謝る必要は無いわ。貴女は貴女、アレはアレなの。むしろ貴女は腹を立ててもいいのよ」
　などと話しながら、タブレットを大塚提督側に向ける。今回の本題はこちら。大塚提督と深海棲艦の対談。
　画面を見て大塚提督は目を見開いた。本当に深海棲艦が画面の向

こう側にいる。そしてその表情は、侵略者の1人とは到底思えないもの。それが悪名轟く中間棲姫だから尚更である。
隣に立つ電も、その表情に驚きを隠せなかった。電だって深海棲艦とは戦ってきたが、ここまで穏やかな表情の深海棲艦は今まで見たことが無かった。
さらにはその深海棲艦の向こう側の風景も、あまりにも普通な一部屋、ダイニングであるため、本当に深海棲艦かと疑うまでしてしまった。何処かのスタジオか何かから、深海棲艦のコスプレをしている何者かと話しているという錯覚すらあった。
『貴方が大将さんが話していた提督くんねぇ。でも、2人目の提督くんだから、呼び方を変えなくちゃねぇ』
『こっちはわかりやすいわ。眼鏡の提督だもの』
中間棲姫の隣から顔を出してきたのは飛行場姫。こちらは少し気が強そうではあるが、やはり敵意を感じさせない。
『それじゃあ、眼鏡くんとでも呼ばせてもらおうかしらねぇ』
「なっ、そ、そうか。呼びやすい呼び名で構わない」
『私のことは姉姫と呼んでちょうだい。こちらは私の妹、妹姫とでも呼んであげてねぇ』
あまりにも軽い会話から始まり、拍子抜け。人間と深海棲艦の対談なんて、緊張感が高まるものであると考えていたが、その不安は一切不要であった。
『貴方も提督くんや大将さんと同じように平和を守る人間であり、私達とも共存を望んでくれると考えていいのよねぇ？　そうでなければ、大将さんが紹介してくれるわけがないもの』
「……ああ、そのつもりだ。海の平和を守るため、俺は艦娘と共に戦っている」
『なら、私達ともお友達になれるわぁ。実際に会うことは出来ないかもしれないけれど、こういうカタチでも仲良くしてくれると嬉しいわぁ』
口には出さないが、大塚提督としては余計な争いを回避するためにも、ここは仲良くしていきたいとは思っている。友情などは考えてい

ない。
　こういう感情は画面越しでも姉妹姫にはわかるもので、しかし顔を合わせたばかりでいきなり友達になれるとは思ってもいないため、時間をかけて関係を良くしていこうと考える。
『さて、じゃあ本当に貴方と話をしたがっている子に来てもらいましょうか。こうやってここにいるということは、そうするためと思っていいのよねぇ？』
　これは勿論古鷹のこと。大塚提督は無言で頷く。
『さ、古鷹ちゃん、どうぞ』
　タブレットの向こう側の景色がグルリと変わる。その向こう側には、確かに古鷹がいた。しかし、最後に見た古鷹とは全く違う、古鷹をそのまま深海棲艦にしたと思える姿。
　今はミシェルを部屋に近付けないようにジェーナスが配慮してくれているため、古鷹も変装する必要がないため、ありのままの姿を見せている。そのため、インナーに上着を羽織るのみという施設内でのいつものスタイル。胸元に走る大きな傷口もしっかりと見せ、自分がどういう存在であるかを表していた。
『……お、お久しぶりです、提督。古鷹、このような姿ですが、生きていました。いや、本当は死んでいたらしいんですが……黒幕の未知の力によって蘇生させられました』
「蘇生、だと……？」
『はい……その際に、随伴の榛名、最上、鈴谷を取り込むカタチで、私という個体が出来ています。全員分の力も、全員分の記憶も、全て私が持っている状態です』
　本当ならいろいろと話したいこともあるだろう。だが、鎮守府の方針が染み付いているのか、提督の前ではまず端的に現状の報告から入った。そうすることで、この古鷹が大塚鎮守府の古鷹であるということを如実に表していた。
『今の私は、戦艦の力を扱える重巡洋艦……とでも言えるモノになっています。艤装も、見た目は重巡ネ級に近いのですが、性能は戦艦レ級とほぼ同じモノとなってしまいました』

「そうか……」
その分、やはりショックは大きいようで、大塚提督もなかなか言葉が紡げないでいた。艦娘を兵器として考えていても、ここまで変貌しているとなると驚きを隠すことはもう出来ない。
とはいえ、生きていたことには少なからず喜びを感じていた。蘇生というカタチであったとしても、自分の知る部下がそこにいることがわかり、不思議と安堵している。
『古鷹ちゃん、報告もいいけれど、他にも話したいことがあるでしょう？　時間は有限なんだもの。言いたいことは言ってしまった方がスッキリするわぁ』
画面外から中間棲姫の声。それに頷き、古鷹はより決意したような表情に。
『……提督、古鷹はもう鎮守府には戻れません。戻りたくないとは考えていませんし、むしろ戻りたいとすら思っています。ですが、私の身体は見ての通りです。艦娘古鷹は沈んだことにもなっていると思います』
何日にも渡る捜索の末に戦死として処理されているため、古鷹の籍は大塚鎮守府からは失われている。そういう意味では、戻ることの出来る場所はもう無い。
『それでも、私はこの施設で、深海棲艦として、鎮守府の繁栄と勝利を願っています。場所は違えど、心の向く先は同じ場所です。海の平和を、別々の道で守っていければと思います』
少し泣きそうではあったが、それを堪えて、思いを告げた。
「ああ、わかった。古鷹、お前はどのようなカタチとなっても俺の部下であることは変わらない。今でこそ戦死として籍を消してしまったが、お前がまたここに戻ってこれるようにしておこう。いつか必ず、深海棲艦であろうが鎮守府で過ごせるように出来るはずだ」
確証が無いことを告げるのは、大塚提督としては本当に珍しいこと。だが、古鷹のために、その言葉を紡いだ。

今生の別れと思いながら話すも、大塚提督が配慮してくれると知り、古鷹はもう耐えられなかった。溢れ出る涙は堪えきれず、拭いながらも深く頭を下げた。

結束

大塚提督と古鷹の再会の対話の後は、今後の黒幕対策を話し合う。ここからは姉妹姫の言動を見て茫然としていた鹿島も加わることに。

今すぐでなくともと大塚提督は念を押したが、鹿島が今やらせてほしいとやる気を見せたので、ならばとそのまま対談に参加させた。

ちなみに古鷹は少し顔を洗ってくると退室。泣き腫らした目は痛々しかったが、歓喜の涙なのだから恥ずかしくもない。施設の仲間達も祝福してくれることだろう。

『貴女にも私の中身がとんでもない迷惑をかけてしまったみたいねぇ。ええと、鹿島ちゃん、だったかしらぁ』

「はい、練習巡洋艦、鹿島です。先程大将が話していた通り、貴女は何も悪くありませんので、謝罪の言葉は無しでお願いします。その、謝られると私も辛いので……」

鹿島は鎮守府の方針に則り、多種多様な負の感情を必死に抑えつけていた。言動に無理があるわけでも無く、自然と落ち着けるのは、この鎮守府ならでは。

あれだけやらかしてしまっても、大塚提督は自分を見捨てないでくれたことが後押しとなっている。未知の手段による支配だなんて回避不能なことであっても、鹿島はここから汚名を返上していきたいと考えていた。

本人に謝らないでくれと言われてしまうと、中間棲姫も黙るしかない。大将からも、自分のことのように思うのをやめろと念を押される。

「鹿島、お前が侵蝕されたのはどの辺りか覚えているか」

「……はい、その瞬間はハッキリ覚えています」

鹿島は今一番必要な情報を苦しみながらも引き出していく。悪意の塊に侵蝕され、鎮守府を陥れるために潜伏していた経験は、今後のために確実に役に立つ。その時の悪意そのものを思い出してしまうのは辛いが、それでもスカートの裾を握り締めることで表に出さないようにしていた。

確実にストレスは溜まる。だが、今はそれを無視する。発散する方法は、後から考えればいい。
「今から5日前です。長期の遠征の帰路で、私は侵蝕されました」
「海路のどの辺りかはわかるか」
「はい、私は周辺警戒をしながら航行していたので、遠征部隊の中では特に周りを見ていました。それに、部隊の最後尾にいたので、侵蝕された瞬間は誰にも見られていません」
鹿島が説明するには、その長期の遠征というのは、定期的に行われる遠洋練習航海。新人のみならず、ベテランでも勘を鈍らせないために実施され、戦闘以外の作戦もスムーズに行なうことが出来るようにしておく。いつ何が起きるかわからないのが今の海戦であるため、出来ることを多くしておくに越したことはない。
そういう場合は、鹿島が必ず旗艦に任命され、随伴艦の後ろからその様子を監査するというのが基本。
その時に、鹿島は泥の侵蝕を受けた。誰も見ていない一番後ろにいる時に、海中からズルリと浮上してきた泥が脚に絡みついたかと思うと、そこから声を上げることも抵抗することもする暇も与えられず口の中に飛び込み、一瞬にして侵蝕されてしまったと。
この状況は、奇しくも古鷹の時と全く同じ。違うところは、後ろからその部隊を殺害するようなことをしなかったこと。
「海図で言うと……この辺りです」
施設との通信をするタブレットとは別に、海図を表示するための端末を取り出し、簡単にだが説明する鹿島。
その場所は、この鎮守府からはそれなりに離れた場所であり、本来の管轄外の海の真ん中。見回しても島は無く、水平線の向こう側にも陸が見えないような場所である。
「領海外……だな」
「うちの鎮守府と姉姫達の施設の距離と比べれば、まだ近い方という感じか。だが、それでも充分に離れた場所だ」
「当然ですけど、陸は見えませんでした。陸上施設型がいるのなら、何処かに陣地があってもおかしくないと思いますが、それらしいものは

何処にも。本当に突然、私は侵蝕を受けたので」
　その場所に関しては後から考えるとして、その時の鹿島のことについて続ける。
「その時の私の使命は、この鎮守府を乗っ取ることでした。何故そうしなければならないかは……その、さっきまで覚えていたんですが、今はまるで思い出せなくて……」
「それは泥の性質だ。侵蝕を治療した時点で、あちら側に最も重要であろう情報を全て奪われる。今までも、黒幕の顔を見たことがある者でも、その居場所すら思い出せなくなっているんだ。それだけ、この鎮守府を得ることが重要だったということだろう」
　堀内提督からの説明に、大塚提督は苦い顔をする。自分の鎮守府を何に使いたいのかは知らないが、艦娘達を侵蝕し、全員支配下に置こうとしていたのは間違いない。育て上げた艦娘を全て奪われるなど、許せるわけがなかった。
『おそらくなのだけど、私の中身が考えてることは……人員補充じゃないかしらぁ』
　ここでタブレットの向こう側から中間棲姫が意見を出す。
「そう思う理由は？」
『だって、ここ最近であちら側の子達を6人も救っているんだものぉ。提督くんのところの荒潮ちゃんを含めれば7人……ジェーナスちゃんまで含めれば8人になるわぁ。そちらの鹿島ちゃんを侵蝕した時はまだ2人だけだったけれど、減った分を増やそうとするのは、誰だって考えることじゃないかしらぁ』
　その補充の仕方が卑怯この上ない。ドロップ艦をチマチマ掬っていくだけでは足りないと、既に艦娘としての経験を長く積んでいる上に、戦術まで確立している鎮守府の艦娘を根刮ぎ奪うという酷い手段を使ってきた。
　敵を減らして味方を増やすという最高効率の方法。鎮守府から見ればいい迷惑すぎる。
「白羽の矢が立ったのが、俺の鎮守府だったということか。なら何故ここかということになるが……」

「最も手近だったからが有力だろう。次点で、偶然にもそれを思った時に鹿島率いる遠征部隊が目の前を通ったからというのもあるが」
大塚提督の言葉に即座に返す堀内提督。ただ戦力だけを増やすために泥をばら撒くのなら、まず手近な海域から拡げていくだろう。
だが、あちらは自分の居場所がバレることを極端に恐れているようにすら思えるため、わざわざ遠方に来てまで撹乱しようとする可能性は否定出来ないが。
「どちらにしろ、この鎮守府から確認出来るであろう場所に潜伏している可能性が高いということになるだろうさ。せっかく配備された例の装備で、早速使って近海を調査するべきだ」
「ええ、今すぐやれとは言わないけれど、近日中にお願いするわね。ここの調査が、最終決戦に繋がると言ってもいいでしょう」
この鎮守府近海に敵の拠点があるということさえわかれば、後はそこに立ち向かうだけ。強大な敵であることは変わりないため、入念に準備する必要はあるが。
『その最終決戦、何か手伝えることがあったら言ってちょうだいねぇ』
「ええ、その時はよろしくお願いね、姉姫。貴女達の手は極力煩わせないように努めるけども」
『もう私達も他人事じゃ無くなっているもの。戦力を……というのは難しいかもしれないけれど、この施設の中にも、私の中身に対してひどく恨みを持っている子が多いから……』
悲しい笑みを浮かべながら、中間棲姫も出来ることなら全力で支援したいと話す。食糧まで用意してもらったのだから、恩を返したいと。
今の施設の一員には、黒幕のせいで運命を捻じ曲げられた者が多すぎるくらいだ。先程まで話していた古鷹もそうだし、春雨から始まったここ最近所属した者は全員が何か関係してくる。その全員が、悪い言い方ではあるが復讐を望んでいる。
当然、平和が一番であり、戦わないなら戦わないに越したことはない。姉妹姫はこういう状況下に置かれても、なるべくなら戦闘を避けたいと思っている。せっかく救われた者達をまた戦場に立たせたい

なんて思っていない。あちらから来た場合は平和を維持するために迎撃くらいはするが。
「戦いたくないものを戦いに参加させるのは、正直心苦しい。なるべく君達の力は借りずに終わらせたいと思っているよ」
『そう思ってくれるのはとっても嬉しいわぁ』
欲を言えば、艦娘よりも強大な力を持つ施設の者達と共に黒幕の居場所へ赴き、総力戦を仕掛けたいとだって思う。その方が勝てる確率は大幅に上がるだろうし、人数が増えればその分、やれることも拡がる。
だが、平和を求めて人類の邪魔にならないように隠棲しているような者達を、わざわざ表舞台に押し上げるのは何か間違っている。平和を求める者のために戦うのが、提督と艦娘達であり、その中には施設の者達も含まれるのだ。
「少なくとも、こちらでは貴女達の力が借りられるような土台を作っていこうと思っているわ。深海棲艦かもしれないけど、貴女達は良き協力者であり、同じ明日を望む者だもの。せめて画面越しではなく直接会えるようにしたいわね」
『ふふ、それは楽しみねぇ。私達は施設から出ることは出来ないけれど、他の子達が鎮守府に行けるようになることを願ってるわぁ』
ここからは、若干世間話を交えつつも、施設側との交流というカタチで対談が進む。
初めて施設の者達と対話する大塚提督も、この対談で穏健派の深海棲艦がどういうものかというのをしっかりと理解することが出来た。特に電は、こんな深海棲艦がいるということを実感出来たことで驚きながらも終始楽しんでいるような雰囲気だった。

小一時間ほどの対談を終えて、施設との通信は終了。あるかどうかはわからないが、大塚鎮守府から施設に連絡が出来るようにと連絡先の交換もしてある。
大塚鎮守府の調査によって大きく進展するようならば、直接連絡を

することもあるかもしれない。深海棲艦について最も詳しいのは、やはり深海棲艦なのだから。
「ということで、貴方はもうこの秘密の共有者となったわ」
「秘密と言っても、公開するように仕向けていくのでしょう？」
「ええ、そのつもり。協力者となり得る深海棲艦は、それこそ艦娘として受け入れるくらいでなければいけないもの。すんなり行くかはわからないけれど、うまくやっていくつもりよ」
やることはやったと、帰投の準備を始める。まだ鎮守府の清掃の途中ではあるが、それが終わるまで居続けたら、今日中の帰投が出来なくなるからだ。
堀内提督は五月雨に指示を出して、鎮守府に散っている他の者達に帰投するように伝えるように向かってもらった。これで全員が集まれば、本当に帰投となる。
「今日のところはこれで終わりとしましょうか。これからは忙しくなると思うけれど」
「問題ありません。これを早く終わらせなければ、脅威は増える一方です。早急に調査を進めたいと思います」
「よろしくお願いね。何も無ければ何も無いという結果でも大歓迎だもの」
何か見つかれば御の字。何も見つからないにしても、別の場所にいるということがわかるので問題無し。調査さえしてくれれば、事態は確実に進展する。
「堀内提督、次はまたゆっくりと話をしよう。お互い、得られるものは多かったと思う」
「ああ、そうしよう。直で無くとも話す機会は増えるはずだ。今回の件、協力して確実に終わらせていきたいからね」
堀内提督と大塚提督がガッシリと握手をした。方針は真逆であっても、目指している場所は同じ。互いに互いを尊重し合い、むしろ学んで次へと繋ぐ。
タイプが違っても良き友人となりそうな２人である。おそらく戦いが終わった後でも、何かしらの交流は続けていくことになるだろ

う。

人間と艦娘も、これを機にさらに結束していく。対策を考案し、それを共有し、黒幕の思惑を尽く打破していくのだ。

姉妹とは何ぞや

大塚鎮守府での通信による対談を終えた施設。タブレットを定位置に置いた後、ふうと中間棲姫は大きく息を吐いた。飛行場姫も精神的に疲れたようで、すぐにお茶を淹れる。

堀内提督や大将とは何度も話しているので気心がしれているが、大塚提督は今日初めて顔を合わせる存在。そこに所属している艦娘と会ってるわけでもないため、人間性を事前に知ることは出来なかった。強いて言うなら、事前に大将に聞いていたことくらい。

結果的に、堀内提督と同様であると判断出来る要素はいくつもあり、あちら程では無いにしろ、信用に値する人物であることは理解出来た。

「お疲れ様、お姉」

「妹ちゃんもお疲れ様ぁ。お茶、ありがたくいただくわぁ」

飛行場姫が紅茶を持って改めて隣に座る。中間棲姫もそれに口をつけて、ようやく落ち着けたという感じに。

「眼鏡くんも提督くんと同じように、平和のために頑張ってる子であることはよくわかったわぁ。方針は違っても、目指してるところは同じってねぇ」

「そうね。少しお堅い感じはしたけどね」

「そこが彼のいいところでもあるんじゃないかしらねぇ。艦娘ちゃん達ともあの態度で真摯に接しているから、提督くんとは違ったカタチで良い仲だと思うわぁ」

鎮守府の在り方はそこそれぞれ。大塚提督のやり方で何も問題が起きておらず、むしろ隣にいた電や鹿島が提督のことを嫌っているような素振りを見せていないのだから、そこのやり方はそれで正しいのだ。

もしそれで問題があったとしても、施設側から何か言えることなんて何もない。人間を咎めるのは人間の仕事。そこに大将もいたのだから、何か問題があればちゃんと言葉にしているはずだ。

「そういえば、アタシからもお姉に言っておかなくちゃいけないこと

があるわ」
「あら、何かしらぁ」
「大将が言ってたこと、アタシからもね。もう『私の中身が』って言うのやめてちょうだい。お姉と黒幕は別モノなんだから」
　飛行場姫からもここは念を押す。いろいろな場所で迷惑をかけ続けている事件の黒幕、最悪の姫の中身は、器たる中間棲姫とはもう関係ない全くの別モノなのだと、飛行場姫は訴えた。
「確かに元は1つの存在かもしれないけど、あっちは器を勝手に捨てて出て行ったんだもの。お姉はいわば捨てられたようなモノじゃない。そんなヤツのことに、罪悪感なんて持たなくていいのよ」
「そうねぇ……そうしたいのは山々だけれど、どうしてもねぇ」
「それがお姉の優しさなんだと思うけれど、あんまり続くようなら、アタシも本気で怒るわよ」
　姉のために、妹は真剣そのもの。今でこそ忠告で済んでいるが、限度を超えたらいくら姉であろうとも説教だと、しっかり突き付けた。そうされたことで、中間棲姫もタジタジである。
「わかったわぁ。なるべく考えないように」
「なるべくじゃない。未来永劫ずっと考えないように。むしろお姉は怒り狂っても許されるんだから」
「怒るだなんて、私にはとても……」
　これは性格上無理な話。内面で沸々と煮え滾るものはあるかもしれないが、それを表に出すことはまず無い。それに、中間棲姫自身が、その怒りに気付けない程におっとりしているのだから仕方ない。
「まぁお姉に怒れってのが間違ってるかもしれない。だったらアタシがその分腹を立ててあげるから」
「妹ちゃん……」
「でもね、自分のことのように思うのはダメよ。いい？」
　まるでこの時だけは姉妹が逆になってしまっているような問答。だが、こう言ってくれる相手は限られているので、中間棲姫は微笑みながら首を縦に振った。
「質問」

そんな問答をしている間にダイニングに入ってきていたのか、潜水艦姉妹が間近に立っていた。なんでも、事前に依頼を受けていた施設の庭掃除が終わったことを報告しに来たようである。質問をしているのは姉の方。

ちなみにここにジェーナスとミシェルを置いたことで、古鷹が素の姿で話している最中にミシェルが乱入しないようにしていた。今頃古鷹は、腫れぼったい目を洗い終わった後、また変装をしているところだろう。

「何かしらぁ？」

「姉妹というのは、そのように接するものなのか知りたい」

妹の方も無言で頷く。

あまりにも多種多様な魂が混じり合いすぎて、自己認識すらも出来なくなって壊れた潜水艦姉妹。姉妹というのも、同じ境遇で似たような存在にされているため、名義上そう呼んでいるだけ。実際は姉妹でも何でもないだろうし、そもそもこの２人は姉妹というものを理解出来ていない。

「そうねぇ……私としては、姉妹というのはお互いに助け合っていくモノだと思っているわぁ」

「仲間との違いは」

「難しいことを聞くわねぇ……確かに近しいかもしれないけれど、私は妹ちゃんのことがとっても大事よぉ。順位付けをするわけじゃないけど、この施設のみんなを思い浮かべる時、一番初めに出てくるのが妹ちゃんの顔だもの」

飛行場姫も自分も同じだと説明するものの、潜水艦姉妹は２人揃って首を傾げるだけに終わった。

依頼によって物事をこなし、自分の考えというものを基本的に持ち合わせていない２人にとって、生きていくために、依頼を達成するために必要ではない情報は、ほぼ全てシャットアウトされているようだった。違うベクトルのミシェルのようなもの。

「貴女達にとって、一番大切なモノは何かしら？」

「依頼を達成すること」

この考え方はあまりにも深く刻まれてしまっているため取れないようである。刻まれているというよりは、壊れた心に染み込んでしまっているために、それが生きていくための根幹となっていると言った方が正しいかもしれない。
「聞き方を変えましょうか、一番大切なヒトは誰かしら？」
ここで思考停止。だが、最初に思い浮かんだ顔は。
「そうなるわよね」
潜水艦姉妹がお互いの顔を見合わせたのを見て、何処か安心したような表情を浮かべる飛行場姫。
潜水艦姉妹として成立してから、おそらくお互いが最も身近な存在であり、いの一番に思い浮かぶであろう顔になっているはずである。この施設に所属するようになってからは、常に2人1組で活動しているくらいだ。食べるときも寝るときも常に一緒。
「じゃあ、そのヒトがもし自分の前で倒れたとしたら、どう思う？」
ほんの一瞬ではあるが、姉妹の表情が強張った。
「そういうことよぉ。仲間が辛い思いをするのは嫌だけれど、姉妹は特に嫌だと思わないかしらぁ」
「……まだ、よくわからない」
「わからない……」
こう言っているものの、その片鱗を掴み始めているのは確かだ。心を壊したことで失われた感情を、こういうカタチで取り戻すことが出来そうである。
「気になるのなら、他の子にも聞いてくればいいわぁ。幸い、この施設には姉妹も増えたしねぇ」
「そういえばそうね。最初は松と竹しかいなかったけど」
今の施設には、松竹姉妹の他にも、白露春雨海風の白露型姉妹と叢雲薄雲の吹雪型姉妹が所属している。鎮守府の方まで手を伸ばせば、金剛比叡姉妹や千歳千代田姉妹、あとは白露型姉妹がさらにいる。
最初のことを考えると、潜水艦姉妹が話を聞ける相手は格段に増えていた。感情を取り戻すためには、そういった交流も必要ではないかと姉妹姫も考えている。

「了解。他の姉妹にも話を聞いてみる」
「聞いてみる」
小さく礼をして、潜水艦姉妹はダイニングから出ていった。
「漁に参加して、この施設の中でもいろいろと仲間と交流して、少しくらいは感情は戻ってきたかしらね」
「どうかしらねぇ。時間をかければ新しい自分を見つけ出せそうだけど、それがいつになるかはわからないものねぇ。でも、今はいい傾向かもしれないわぁ」
そんな2人を穏やかな目で見送る姉妹姫。今まで命令通りにただ事を成していただけの存在、哀れな人形だった潜水艦姉妹が今、自分の意思で姉妹について何ぞやを問うてきたのは、失われたモノを取り戻すきっかけとなり得ると思えた。
ならば、いつも通り見守ろうと、2人はやりたいようにやらせるように持っていく。ただ疑問を持つだけでも大きな進歩だ。
最初の依頼である『楽しく生きる』は、まだ続行中。この疑問を解決するという行為も、楽しく生きようとする行動に含まれるだろう。

時間的に、今は随分とまったりしている施設。午後の部の哨戒担当が松竹姉妹とリシュリューであるため、今は姉妹が1組欠けている状態。叢雲と薄雲は昨晩の深夜担当だったため、今はちょうど目を覚ましたくらい。そして白露型姉妹は春雨と海風が今日の午前中だったためのんびりしており、白露が今日の深夜ということで備えて眠っている。ジェーナスとミシェルもその班であるため、庭掃除が終わったところで眠りについた。
「春雨と海風に聞いてみる」
「それがいい。聞いてみる」
そんな面々の中、潜水艦姉妹が選んだのは春雨と海風。その2人は今、療養中の大鳳のところにいるということなので、足早にその部屋へ。
「あれ、こんなところに来るのは珍しいね」

その部屋で姉妹を春雨が出迎えた。今はちょうど大鳳のリハビリ中であり、痛みはあれど傷口から血が流れるようなことが無くなったため、身体を動かしているところである。
ベッドで横になっているだけでは身体が鈍ると大鳳自身が言い出したことであり、痛みに耐えつつも筋トレに近い事を始めていた。元々が非常に真面目で、混じっている伊勢と日向もトレーニングを欠かさないような性格だったため、この選択をしたようだ。
「春雨と海風に質問がある」
「私達に？」
春雨のみならず海風も首を傾げる。潜水艦姉妹に何かを聞かれる覚えがないため、どんなことを質問されるのか若干期待していた。
大鳳も神妙な面持ちの潜水艦姉妹を見て一旦筋トレをやめ、姉妹の話に耳を傾けることに。面持ちはいつもあまり変わらないのだが。
「姉妹とは何か知りたい」
「知りたい」
大真面目に聞いてきたため、春雨は目をパチクリさせていた。
「私にとって春雨姉さんは神の如く讃える存在ですね。存在そのものが私にとって喜びを与えてくれますし、その一挙手一投足に心が震えると言っても過言では」
「海風、ちょっと静かにね」
相変わらずの海風を黙らせた後、春雨は少し考える。姉妹とは何ぞやと聞かれて答えられる言葉があまり見つからない。
「姉姫と妹姫は、互いに助け合う者同士だと言っていた」
「でも、それは仲間でも同じこと」
「大切なヒトと聞いて最初に思い浮かぶ者が姉妹だとも言った」
「それだと確かに、姉の顔が最初に浮かんだ」
「妹の顔が最初に浮かんだ」
淡々と説明してくるが、春雨からしてみればもう答えが出ているじゃないかと言いそうになる。互いに相方が大切なヒトと自覚出来ているのに理解出来ていない。
「でも、わからない。姉妹とは何か」

「教えてほしい。姉妹とは何か」
無感情とはいえ真剣な目を向けてくる2人を無下にするわけにはいかないと、春雨も少し考える。自分が姉妹に思っている気持ちは何なのか。
都合のいいことに、春雨は上にも下にもいる白露型のちょうど真ん中。姉の気持ちもわかるし、妹の気持ちもわかる。
「私にとって姉妹は、やっぱり大切なヒト……かなぁ。姉さん達は目標で、妹達は守りたいってイメージがあるけど」
とても簡単に、艦娘の時に思っていた事を話す。目標であっても、守りたいヒトであっても、結局は大切なヒトであるという言い方には変わりない。ずっといてもらいたいヒト、近くにいてほしいヒト、いろいろな言い方があるが、最終的には。
「近くにいると、心が安らぐヒト……かもしれない」
「心が安らぐ」
「そう。勿論、仲間だって同じかもだけど、特に落ち着けるヒトかも。海風だってそうだし、白露姉さんだってそうだからね。そこにいてくれるだけじゃなく、いるってわかっているだけでも、私は落ち着けるよ」
自分の名前がそこで出されたことで、海風は満面の笑みを浮かべて春雨の隣に寄り添う。
「2人はお互いにそう思ったりしないかな」
「……」
2人して何か考える仕草。そして、
「そう、かもしれない」
「これを落ち着けるというのなら、それ」
まだわかっていないようだが、ふんわりと互いが大切な存在であるということを自覚し始めている。それだけでも上出来だった。

潜水艦姉妹もゆっくりとではあるがいい方向に向かっている。感情を取り戻すまではまだまだ先かもしれないが、大きなきっかけがあ

れば、一気に感情が芽吹くことだろう。

自力で答えに

姉妹とは何かという疑問を持った潜水艦姉妹は、その答えにまだ辿り着けていなかった。

姉妹姫からは、互いに助け合うモノ、一番初めに顔が思い浮かぶモノと、春雨からは大切なヒト、近くにいることで心が安らぐヒトと聞いた。この姉妹も、泥の侵蝕が失われてからは常に一緒に行動しており、自然と互いを大切なモノとして認識するようにはなっているが、まだよくわかっていない。

そのため、他の姉妹にも話を聞きに行くことにした。今すぐに話が聞けそうなのは、叢雲薄雲姉妹。深夜の哨戒を終えて朝食の後にすぐ眠りについていたが、そろそろ目を覚ましてくる頃である。

「叢雲はダイニング」

「甘いものを食べてる可能性が高い」

どのような行動をするかは大概予想出来るようで、叢雲は昼食代わりの甘味を摂っているだろうと予測。薄雲は寂しさを溢れさせないためにほぼ確実に叢雲の側にいるため、ダイニングなら2人ともいるだろうと考えてそのまま向かった。

そこには予想通り、寝起きの叢雲と薄雲が昨日のうちに作っておいたというクッキーを摘みながら、薄雲と一緒にお茶を嗜んでいた。代わりに姉妹姫はいなくなっている。あちらはあちらで他にもやることがあるようである。

「いた」

「予想通り」

潜水艦姉妹の視線に気付いたか、叢雲が睨むように目を向ける。知らない者ならばその態度は喧嘩を売っているように感じるだろうが、この施設に所属するにあたって、初日に全員の特性は聞いている。

叢雲のコレは、あくまでも平常運転。常に怒りを持っているのだから仕方なく、こういう態度でも別に仲間に対して嫌だという気持ちは無い。

「2人に質問がある」

「は？　アンタ達が私達に何の用よ」
「姉妹とは何か知りたい」
　叢雲の文句は殆ど無視して質問。叢雲が若干ムッとした表情を見せるが、薄雲はまぁまぁと宥めて、一緒にその質問に対する回答を考える。
　漠然と姉妹とは何かと言われても、叢雲としてはそういうものだとしか言えない。この施設の仲間の中でも、特に親密な者。怒りに身を焦がし続けている自分に対して親身になってくれる存在。薄雲のお陰で、怒りは今までよりも随分と緩和しているようにも思える。
　薄雲からしてみれば、深海棲艦化する前から叢雲は憧れかつ目標。この叢雲がその叢雲とは別人ではあるのだが、それが叢雲というだけで薄雲にとっては同じ。
「アンタ達は、他の連中に何か聞いてきたわけ？」
「姉姫と妹姫、春雨と海風に話を聞いた」
「姉妹とは、お互いを助け合い、近くにいるだけで心が安らぐ者と聞いた」
　なら私達も似たようなものだと、叢雲は説明を放棄。単純に今の感覚をこれ以上言語化出来なかったというのもある。
　怒りを抑えてくれる薄雲は、思っている以上に叢雲にとっては重要な存在なのだが、それは既に潜水艦姉妹が聞いている、『助け合い心が安らぐ』の中に含まれている。安らいでいるつもりは無くとも、実質的に怒りが抑えられているのだから、それは安らいでいるとしていい。
「私も姉さんと同じ……かな。大切なヒトですし、いなくなられたら困りますし。それに、姉さんが傷付く姿を見たくないというのが大きいですね」
　大切だからこそ、傷付いてもらいたくない。これも中間棲姫に言われたこと。相方が倒れるところを想像したら、表情が強張ったことを思い出す。
　潜水艦姉妹はどちらも、その時に自分がそういう表情をした理由がピンと来なかった。何となく、本当に何となく、嫌だと感じたからそ

うなったに決まっているのに。
「傷付く姿を」
「見たくない」
「はい。姉さんはここに来るまでにとても傷付いていましたから。もうこれ以上辛い思いをしてもらいたくないので、ここでのんべんだらりと生活してもらいたいなって」
　後半部分はさておき、今までが酷かったからこれからを気楽に生きてもらいたいという考え方は、自然と納得が出来た。悪いことばかりだったのなら、良いことばかりにしてバランスを取らなければ割に合わない。そこは感情云々でなく、合理的に考えて。
「2人はどうですか？　姉妹が辛い思いをしている時、何をしたらいいと思いますか？　私なら寄り添います。それに、姉さんは甘い物が大好きなので、それを振る舞って辛い気持ちを無くしてもらいますね」
「私は……まぁ近くにいてくれって言うならいてやるくらいはするわよ」
「はい、私は姉さんにそうしてもらえるだけでも充分癒されるので。甘いものをモフモフ食べている姿とかも」
「アンタ、私をリスか何かと思ってない？」
　潜水艦姉妹はその質問について回答が出来なかった。しかし、考えるという行動をするようになる。
　流されるままに依頼をこなすことしか出来ていなかった2人は、そもそも考えるという力が足りていなかった。それが今ではどうだ。自分達の意思で仲間達に質問をし、その答えから自分達のことに置き換えて考えることが出来ている。これは充分すぎる成長である。
「妹が辛そうにしていたら、近くにいてあげる」
「姉が辛そうにしていたら、近くにいてあげる」
　最終的には同じ答えに辿り着いたのは、全く同じように混ぜ込まれているからだろう。
　答え自体は、今まで聞いてきたことから踏まえて、最善と判断したものに過ぎない。しかし、そこに辿り着くまでに何をしたらいいかを

ちゃんと考えて、こうすれば相手が落ち着けると思った行動を口にした。
「なら、やっぱりお互いに大切なヒトだって感じてるってことですね。辛くなくても一緒にいたら、きっともっと楽しく生きることが出来ますよ」
薄雲がにこやかに終わらせた。こうやって、自分の力で何かの答えに辿り着くことが出来たことが一番の進歩だった。

残す姉妹は松竹姉妹だが、哨戒から戻ってくるのはもう少し先。あと話を聞けそうなのは、ここで姉妹としては成立していないがコロラドと、今は療養中でさっきの話を聞いていた大鳳、あとは戦艦棲姫や古鷹、伊４７、コマンダン・テスト。
姉妹でなくても、どう思うかを聞けることはいいことかもしれないと、適当に誰が何処にいるかを探していると、コロラドの後ろ姿を発見した。向かっている先は、おそらく療養中の大鳳の部屋。
「行ってみる」
「了解」
その後ろ姿を追ってみたら、案の定大鳳の部屋へと入っていった。同じタイミングで治療されたからか、余裕があればコロラドも大鳳と話をしているらしい。
先程来て、すぐに出ていったのにまた蜻蛉返りしたことになるのだが、潜水艦姉妹は何も気にせず大鳳の部屋に入った。
「あら、また来たんですね。春雨と海風は今は出て行ってますよ」
大鳳に言われ、しかし臆さず、今度は大鳳とコロラドに用があると告げる。大鳳は先に話をしているところをみているため、何が聞きたいのかは知っているが、コロラドはちんぷんかんぷん。
「コロラドには、姉妹がいるんですよね？」
「ええ、艦娘としてはまだ見つかっていないんだけれど、ＭａｒｙやＷｅｅ　Ｖｅｅがね」
「この子達の質問は、姉妹とは何ぞやですって。コロラドとしてはど

う思います？」
　突拍子もない質問だと思いつつも、コロラドは即答する。
「そんなもの、背中を預けて戦う同志って感じよ。一番信用出来る存在ね。お互いのことをよくわかってるんだから」
「それは仲間でも同じなのでは？」
「安心感が違うわね。キゴコロが知れているって言うのかしら。１００％の信頼があるもの」
　コロラドの姉妹に対する考え方はそれ。戦いの中に身を置くことから、仲間の中でも特に組んでて信頼出来る存在というところに重きを置いている。ある意味姉妹艦の愛情というのは薄いのかもしれない。
　潜水艦姉妹には少々参考にならない意見と言えよう。施設では戦いというのはあまり考えない方向で行きたい。
「アンタの中にも確か姉妹が入ってるのよね」
「はい、私とは無関係でも、伊勢と日向は姉妹なので、互いをどう思っていたのかはわかりますよ。でも、あまり参考にはなりませんよ？」
　大鳳も例に漏れず、混ぜられた者の記憶を全て内包してしまっているため、伊勢と日向が姉妹としてどう考えていたかは知っていた。
「特段仲が悪かったというわけではないですが、互いを姉だ妹だと思っていなかったみたいです。友人感覚というか、日向に至っては悪友とまで感じていたようで」
「それはＳｉｓｔｅｒｓとは言いづらいわね。Ｃｌａｓｓｍａｔｅみたいなものかしら」
「かもしれないですね。思い返してみれば、日向は伊勢のことを姉と呼んだことは一度もありませんでした」
　ただ、こういう姉妹の関係もあるのだと知ることは悪いことではないと考える。この２人にとって、姉妹という関係は完全な後付け。呼び名が無いためにそうなっているだけで、何かしらの記憶があれば、同じ境遇の同志という感覚になっていたかもしれない。
「私の考え方も、コロラドの考え方も、貴女達にはあまり参考にならなかったかもしれませんが、これでよかったですか？」

「参考になった。それぞれいろいろと考え方があることがよくわかった」
「姉妹と一括りにしても、関係はいろいろある」
学びにはなったため、潜水艦姉妹はまた新たな知識を得たと言える。
「私からしてみれば」
ここで最後にコロラドが２人を見ながら言葉を紡ぐ。
「そこまでどうこう考えるまでもなく、アンタ達はＳｉｓｔｅｒｓとして成立してるわよ。見た目とかはさておき」
そんなことを言われて、顔を見合わせる姉妹。コロラドはそういうところだと即座に指摘。
「言われてもまず相方の表情を窺うなんて、姉妹以外の何者でも無いでしょ。そうじゃなかったとしても、相当Ｉｎｔｉｍａｔｅ（親密）な関係よね。それで良くない？」
「確かに。姉妹とは何ぞやと聞いて回るのもいいかも知れませんけど、貴女達は充分姉妹をしていますよ。というか、意識してやることじゃないです」
「Ｓｉｓｔｅｒｓなんて設定が重荷なら、仲のいいＦｒｉｅｎｄでいいじゃない。姉だの妹だのに拘って悩むなんて馬鹿馬鹿しいわ」
つまり、聞いて回っていたものの、そこまで拘らずにお互いを大切に思ってるならそれでいいだろと言っている。身も蓋もない言葉かもしれないが、この２人の姉妹に対する感情はそういうものなのである。
姉妹姫や春雨と海風とは違う、姉妹という関係に全く重きを置いていない。ある意味、潜水艦姉妹と同じように名目上の姉妹なのだ。だが、そういう括りにされているために互いのことを理解し、信頼出来る仲間としての認識に落ち着いているのみ。
「そういえば、コロラドの中に混じっている姫でしたか。同じような感じの２人だったと思いますけど、姉妹だったり」
「しないわよ。というか、この子達は同胞（はらから）でもＢａｄ（犬猿）の（の）ｔｅａｍ（仲）みたいだから、姉妹とかそういうのじゃないわ」

「仲が悪い者同士を入れられるとは……貴女もなかなかに不運ですね」
「別に私の中で反発しあってるわけじゃないから痛くも痒くもないわ。その力だけ使わせてもらってるから」
大鳳とコロラドが話している間も、潜水艦姉妹は2人で考え、小さな答えに辿り着く。
「姉妹とは何か、理解した」
「深く考えることが、意味がない」
「自由にお互いを大切に思えばいい」
「姉とか妹とか関係ない」
姉妹間の考え方はあまりにも人それぞれ。親密な者達もいれば、そこまででもない者もいる。だから、潜水艦姉妹は潜水艦姉妹で好きなような関係になればいい。無理に姉妹を取り繕うとかする必要なんて全くないのだ。それで姉妹として見られるくらいに親密ならば、それはそれでいい。
「ま、それでいいんじゃない？　変なことで悩むより、自由に生きればいいわよ。アンタ達も解放されたんだから」
「そうですね。せっかく得られた機会ですし、好き勝手に生きればいいと思いますよ。ここはそういう場所なのだと教えられましたから」
コロラドも大鳳も、潜水艦姉妹の辿り着いた答えを否定することは無かった。

潜水艦姉妹の悩みはこれで一段落。とはいえ、2人で一緒にこうやって仲間に聞いて回った経験は、互いの関係をより親密にしたと言える。

顔を合わせるため

午後の哨戒でも施設近海には何も無く、明石が置いていってくれた眼鏡を使って完全に泥が無いことも確認している。

大塚鎮守府で内乱を引き起こそうとしている間に、施設側にも何かしらの攻撃をしてくる可能性はあったのだが、そういったことは今のところ無いようだ。あちらも次の手段を考えているのかもしれない。

「ミシェルちゃんは初めての深夜哨戒になるけど、大丈夫かしらぁ？」

夕食の時、夜の哨戒のことをきちんと打ち合わせしておく。他の者はさておき、ミシェルはヒトの身になって初めての徹夜だ。何か不都合があったりするかもしれない。

「大丈夫っぴょん！　ジェーナスちゃんにいろいろ聞いたし、白露ちゃんにも前にやった時にどうすればいいのか教えてもらってるぴょん！」

「見て回るだけならミシェルにも出来るわ。夜だからちょっと大変かも知れないけど、前にやった時もすっごく頑張ってくれたんだもの」

「実際、ミシェルは優秀だったよ。いざって時に潜れるってのは便利だなーって思った。いろいろ出来るようになったあたしでも、潜ることは出来ないからなぁ」

一緒に哨戒をしている白露とジェーナスがミシェルでも大丈夫だと言うため、中間棲姫もそれなら大丈夫とした。特に白露が優秀だと称しているため、心配する必要もないと考えたようである。

実際、ミシェルは昼夜問わず哨戒活動で非常に優秀な能力を持っている。目がいいとかそういうことでは無いのだが、やはり潜れるというのはかなり強く、そのおかげか海中に対する反応もかなり強め。夜の暗闇の中でも当たり前のように活動していたのは、前回の潜水艦姉妹との戦いでもよくわかっているため、ミシェルは何も知らないだけで万能戦力と言える。

とはいえ、ジェーナス的にはミシェルが戦闘に出ることはあまり嬉しいことではない。だからか、主砲や魚雷の使い方も教えることはしてなかった。本能的に使ってしまう可能性はあり得るが。

「今日の夜は、私が参加します」
「オッケー。コマさんなら視野も広いし、もっと安心だよ」
今回の哨戒の保護者は前回は古鷹だったが今回はコマンダン・テスト。今までと違って保護者としてついていける者が増えているため、この辺りは固定ではなくなる。大鳳が増えれば尚更。
「タイホー、夜は私がついていられなくなりますが、大丈夫、でしたか」
「はい、大丈夫です。ご覧の通り、大分動けるようにはなってきましたから。まだ痛みはありますが、皆さんと一緒にご飯が食べられるようになったのは大きいですね」
大鳳は未だ療養中ではあるものの、筋トレを始めているくらいであるため、復帰は近日中であると言える。ずっと部屋に篭っていたのも、今では自分の足でダイニングまで歩いてくることが出来るようにまでなっていた。
痛みが全て無くなるまではまだ時間はかかりそうではあるが、やろうと思えば戦闘に参加することも可能。しかし、未だ失われた腕を生やすようなことはしていないため、そちらの練習から始まりそうではある。
古鷹よりも回復が早かったのは、そういう体質というのもあるだろう。白露のような超回復能力ではないが、最前線で戦うための能力として、傷が治りやすくなっているというのはある。
「寂しかったら私達の部屋に来てくれても構わないわよ」
「ありがとうございますコロラド。その時は是非」
やはり治療された者は身を寄せ合う方向に向かっている。最終的には各々の部屋に戻るかもしれないが、まだ治療されて間もない今はそういう心の支えも必要になるだろう。開き直れても、夜にどうなるかわからないのが不安定な心である。
「それじゃあ、今日はこれでおしま」
夕食も終わり、片付けたら今日は終了となったところで、非常に珍しいこのタイミングでタブレットが鳴った。むしろそれは、夕食時を狙ってのコールかも知れない。
「あら珍しい。また提督くん、残業してるのかしらぁ」

「時間的には業務時間外よね。相変わらずといえば相変わらずか」
　飛行場姫が小さく溜息を吐きつつ、タブレットを操作する。
「珍しい時間じゃない。こっちはギリギリ夕食が終わったところだけれど」
『すまない。そのタイミングを狙わせてもらった。そこに全員いるのはこの時間だろうと思ってね』
　そんな提督の表情は、非常に複雑な表情をしていた。
「緊急の連絡なのかしらぁ。何かまずいことでも？」
『いや、まずいことは何もない。ただ、伝えておきたいことがいくつかあってね』
　その１つは喜ばしいニュース。大塚鎮守府からの帰投は無事終了し、大将の帰投も先程完了したとのこと。帰り際に狙われるなんてことも考えられたが、その辺りは何事も無かった模様。
　この連絡が鎮守府のタブレットで出来ている時点で、大塚鎮守府への出向は全て無事完了したということになる。当然ながら、鎮守府内に泥を持ち込む羽目になるようなこともなく、現状を正しく維持出来ていると言えよう。
『それはいいんだが、明日、またそちらに遠征に向かわせる。定期的な状況把握が必要だからね。そちらに救われた４人のことも詳細に知っておきたい』
「そうなのねぇ。問題ないわぁ。みんなも別に構わないわよねぇ？」
　ダイニングに揃っている面々は、別に断る理由が無いため、事前に許可を取ろうとしたことが律儀だと思いつつも丸を出す。
『それで、だね。初顔合わせになる子もそちらに向かう』
「あら珍しい。どちら様かしらぁ。この前の大淀ちゃんと明石ちゃんでも無い子なのよねぇ」
『ああ……荒潮だ』
　その名前が聞こえた瞬間、ジェーナスが固まった。
「まだ新人なのに、ここに来れちゃうの？」
『実はだね、荒潮はもう改二改装まで達成した。文句無しに我が鎮守府では最速記録を叩き出したよ』

なんでも、提督が鎮守府に戻ったタイミングで練度がその域に達していたらしく、改装を断る理由が無かったためにそのまま改二へ。そして、ある意味生まれ変わった艤装の慣らし運転までも、今日中に終わらせたらしい。

その理由は実に簡単で、1つは武蔵を筆頭とした大将の艦娘達が荒潮を徹底的に鍛え上げたからである。荒潮がそれを望み、無茶をしない程度に毎日みっちり詰め込んだことによってここまで早く練度が上がった。

2つ目として、荒潮自身の才能がある。その訓練の内容を余すところなく吸収し、全て自分の力へと取り込んでいった。結果、この超短期間であるというのに、砲撃も雷撃も並以上に成長しているという。

『軽率だったかもしれないが、僕は彼女に、施設へ遠征に行くのならせめてある程度成長してからだと言い聞かせていたんだ。改二改装はそのある程度になる』

「なるほどねぇ。それは確かに、充分すぎる成長ねぇ」

努力が実ったと言っても過言では無い成長である。改二改装はいわば、前線に出てもいい程の練度の証明ともなり得るからだ。

荒潮がここまで努力したのも、ひとえにジェーナスに対する想いの力である。

すぐにでもジェーナスに会いたいという気持ちを逸らせることもなく、地道にかつ確実にここまで来た。大分駆け足ではあったが。

『明日いきなり行くと言ってもまずいと思って連絡させてもらったんだ。荒潮は、そちらのジェーナスといろいろあるだろう?』

ここまで言葉も無かったジェーナスも、流石に気を取り直していた。荒潮と顔を合わせる時がついに来てしまったと身体を強張らせたものの、それだけ荒潮が自分と会いたがっているというのがわかり、無下には出来ないと思い直す。

とはいえ、トラウマを作った張本人でもあるのだ。本人はそのことを忘れているものの、それでも説明を受けたことで、ジェーナスにとってどう思われているかも理解している。

それに、画面越しの対話で過去のことは水に流すとしたのに、いざ

面と向かって話すのは拒否するというのは良いことではない。
「大丈夫、大丈夫よ。私は開き直ったんだもの。アラシオとだって、顔を合わせて話すことくらい出来るわ。むしろ、そうしないとダメ。私よりも、アラシオが辛い思いをしちゃう」
荒潮だって被害者。これ以上辛い思いをするのは間違っている。そう考えて、明日の対面は一切拒否することなく進める。
「でもジェーナス、あたし達今から深夜の哨戒だよ。時間的に、あっちが来た時は寝てる時間じゃない？」
「あ、た、確かに……お昼までいてくれるなら話は出来るわ」
せっかく努力して施設への遠征が可能となったのに、来てみたらジェーナスは眠っているなんてことがあったら、荒潮はショックを受けるだろう。いや、表には出さないだろうが、内心では落ち込んでしまうか。
ジェーナスとしても、それは避けたい。努力を無下にするような行為はしたくない。
『明日1日を使わせてもらえればと思っていたが、どうだろうか。朝早くからそちらに向かわせるなんてことはしないし、勿論昼食はこちらで用意する。君達には一切負担はかけない』
それならば問題ないと、満場一致で日程が決まった。
「ジェーナスちゃんのお友達ぴょん？」
荒潮の名前を初めて聞くミシェルは、荒潮という存在にも興味津々。ジェーナスの表情からその複雑な感情を読み取るようなことはしなかったものの、かなり強めの反応をしていたため、あまり会えない友達か何かかと思っていた。
「なんというか、ね、ちょっといろいろあって、顔を合わせづらい子なの。でも大丈夫、どっちが悪いとか、そういうのじゃないのよ」
「ぴょん？　ミシェルにはよくわかんないぴょん。あっちのヒトってことは、ミシェル達の仲間ってことだよね。だったらお友達ぴょん！」
仲違いなどの意味がわかっていないため、鎮守府の艦娘達はみんな仲間であるとして、その裏側にある感情は全て度外視。むしろ理解し

ようとしていないため、疑問すら浮かんでいない。顔を合わせづらいと言われても、何故そうなっているのかという疑問が浮かび、そして理解しないために結局友達という位置に落ち着く。
　こういう時にミシェルの性格は非常にいい方向に向かう。荒潮は友達。それでいい。開き直ると決意したのだから、当然関係性は友達というカタチで間違っていないのだ。第一印象が酷すぎただけで、荒潮自身も強く後悔し、どうあってもジェーナスを悲しませないといい意味でも悪い意味でも自分を抑え続ける。
「そう、ね。アラシオはＦｒｉｅｎｄよ。とっても大切な」
「だったらミシェルともお友達ぴょん！　みんなが友達なんだから、いっぱい遊べるぴょーん！」
　短絡的ではあるものの、今はそれが助かる。この考え方は、決して悪くはないはずだ。
『それでは、明日また部隊が出発したら連絡させてもらうよ』
「ええ、よろしくお願いねぇ。待ってるわぁ」
　通信終了。明日の日程はこれで決まった。来島はそこまで時間は経っていないが、荒潮の来島という大きなイベントが決定した。

「聞いての通りだ、荒潮」
　この対談の向こう側。画面に映っていないところには、荒潮が待機していた。ちょくちょく聞こえたジェーナスの声に一喜一憂したものの、向かえることが決まったときには思わず小さくガッツポーズをしてしまったくらいである。
「ええ、明日の遠征、楽しみにしているわぁ」
　スキップしながら執務室を出て行く。その背中を追いながら、本当に大丈夫かと思いつつ、自制心があることもここ数日間で理解しているため、今はまずやらせてみるところからにする。
　きっと上手く行く。荒潮なら、ジェーナスを悲しませることはない。

荒潮来島

翌朝。深夜の哨戒も無事に終わり、施設近海に何者かが近付いているようなことは無いことが確認出来た、コマンダン・テストの目により本来より遠方、ミシェルの潜水により海中まで視野を拡げているため、信頼度は高め。勿論、例の眼鏡も使っている。

「また何かあったらどうしようかと思ったわよ」

「いやぁホントにね……あたしとしてもなんか哨戒にいい思い出が無くなりつつあるよ」

ジェーナス白露組が哨戒の当番の時に限っていろいろあった。1回目は荒潮との邂逅、2回目は深夜の襲撃。そのどちらもこの2人が絡んでいる。

二度あることは三度あるとも言うように、今回も何かあるのでは無いかとビクビクしていたようだが、幸いなことに本当に何も無かった。その経験からじっくりと周囲を確認しているというのもある。

「お疲れ様、みんな」

「深夜の哨戒お疲れ様です。春雨姉さんが飲み物を用意しています。その慈悲に海風も感動してしまいますね」

「あはは……まぁ、慈悲とかそういうのは関係なしに、疲れてるだろうからまず休んでほしいかな」

今日出迎えたのは春雨と海風。悪寒ではなく、たまたま目を覚ましたということで、どうせなら出迎えようと外に出てきていた。そこでお茶までしっかり用意しているところが春雨の優しさ。

「ミシェルちゃん、大分おねむだね」

「そうね。前回のＢａｔｔｌｅの時と違って、今回はのんびりだったから、どうしてもこうなっちゃうわ。私達だって眠いもの。初めてでよく保った方よね」

いつも元気なミシェルも、今回ばかりは静か。コマンダン・テストの尻尾にもたれかかるようにしながらうつらうつらとしていた。

駆逐イ級の時とは勝手が違うようであり、しかも前回の夜の戦いは初めて今の姿になったことで興奮状態だったというのもあった。何

事もない深夜をのんびりと行ったり来たりというのは、どうしても眠気を誘うものである。
ジェーナスや白露のように、２人揃っての哨戒で何かと事件が起きているという緊張感があれば、日が昇るまでは当たり前のように保つのだが、ミシェルはそういった危機感は若干薄い。それ故に、ただただ疲れて眠気に襲われ、そしてほぼ敗北を喫する。
「ね、寝てない、寝てないぴょん」
「大丈夫よＭｉｃｈｅｌｌｅ。もう施設に着いたから」
「うゆぅ……」
ばっと目を開くミシェルだったが、すぐにまたうつらうつらと船を漕ぎ始める。ジェーナスも苦笑しつつもミシェルはよく頑張ってると頭を撫でて、そのまま寝かせてもいいやとコマンダン・テストに任せる。
実際戦闘や危険な何かが見つかった時は、眠気なんて一気に吹き飛んで臨戦態勢に移れるのだろうが、今回はこれでも何も問題はない。それに、ミシェルは潜水という違うこともやっているのだから、疲れて当然。
「お風呂は起きてからの方がいいかしらね。飲み物を貰ったら、私もＭｉｃｈｅｌｌｅと一緒に寝ちゃうわ」
「そうしといて。あたしが午前の哨戒部隊に引き継ぎしておくからさ。次は叢雲と薄雲だったよね」
「はい。保護者枠は古鷹さんです」
「あいよー。じゃあ朝ご飯の時くらいに話しておこう。あたしはその後に寝ればいいかな。眠気より食い気だから」
引き継ぎと言っても、何処をどれだけ回って結果的に何も無かったというのを伝えるだけ。午前の哨戒では、その続きから見て回れるようにするくらいなので、別に全員揃っている必要すら無いのだ。
そういう時は白露が引き受ける。深海棲艦化する前の練度で言えば、白露は誰よりも高かったりするため、なんだかんだリーダーシップをしっかりと発揮していたりするのである。自分でもいっちばーんと言い続けるだけあった。

「それじゃあＴｅｓｔｅ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅを運ぶの手伝ってもらっていいかしら」
「Ｏｕｉ．　勿論です。Ｊａｎｕｓの部屋でよかったですよね？」
「Ｙｅｓ．　ハルサメ、飲み物は後から取りに行かせてもらうわ」
　その足で３人は施設の中へ。
「……ジェーナスさ、これからのこと、割と緊張してるっぽい」
　ボソッと白露が呟く。春雨もやっぱりと返す。
　哨戒中、この後起きることについて愚痴というか相談を白露にしていたらしい。ミシェルが潜水して海中を確認しに行っているタイミングを狙って話しかけてきたようなので、ミシェルに余計な心配をさせないようにしているのもわかる。
　やはり、開き直ったと主張しているものの、荒潮と画面越しでなく実際に顔を合わせるというのは、今からの段階でも緊張しているらしい。自己申告するほどだから相当である。
「荒潮のことを傷付けたくないって言ってた。ジェーナスだって被害者だけどさ、荒潮だって酷い目に遭ってるんだから、おあいこ……っていうか、お互いに気にしちゃいけないんだって。でも、笑って顔を合わせることが出来るかわからないってさ」
「そう……ですね。荒潮ちゃんの前では、難しいかもしれません」
　そして、もし荒潮が傷付くようなことがあれば、ジェーナスの自己嫌悪が刺激され、間違いなく発作を起こす。そうならないためにも、荒潮の前では平然を演じなくてはならない。傷付くのは自分だけで充分だと。
「でも、それをサポートするのが仲間である私達の役目ですから。それに、今はミシェルちゃんもいますし、悪い方向には行きませんよ」
　自信満々とはいかないが、春雨は少しだけ強く言った。これは直感が働いているのかどうかはわからないが、春雨が確信をもって言うなら信用度が高い。
　海風も隣でうんうんと強く頷く。春雨がこう言うのだから、荒潮が訪ねてきても大丈夫だと春雨以上に確信をもっている。盲信ではあるのだが、こういう時のポジティブは空気を良くするため、春雨もい

つもの買い被らないでほしい的なツッコミは入れなかった。
「まぁそうだね。流石に誰もいないところで1対1(サシ)でで話すようなことはしないだろうし、むしろあたし達がそんなことさせないね」
「はい。ジェーナスちゃんのことを知っているからこそ、私達が見守る場所で顔を合わせてみましょう。それに、ミシェルちゃんはジェーナスちゃんから離れないでしょうから」
誰の目も届かないということは無いだろう。ミシェルが2人の間に立つことまで考えられるのだから。
朝食後、白露も就寝。ジェーナスは宣言通り、眠る前に春雨の用意した飲み物だけので眠りについた様子。昼食時前後でお腹を空かせて目を覚ますことになるだろう。

午前中も折り返しというところで、鎮守府の面々が来島する。哨戒中の叢雲が先んじてその存在に気付いていたが、事前に話を聞いていたためスルー。勿論、哨戒部隊は泥を感知する眼鏡も使っているため、鎮守府からの部隊に危険性が無いことも確認済み。
お出迎えはいつものように姉妹姫と春雨海風ペア。いつもなら白露も加わるところだが、現在爆睡中であるため欠席。
「確かに荒潮が入っているわね。前に見た時とは随分と様変わりしているわ」
飛行場姫の哨戒機も鎮守府の面々を捉える。メンバーは今までと比べると若干少なめ。状況が状況だからか、鎮守府の防衛にも割いていることから、必要最低限のメンバーとされていた。
調査隊としての山風を筆頭とした白露型3人、航空戦力としての千歳と千代田、海上の戦力として特に強い武蔵、島風、北上、大井の大将の艦隊。ここに荒潮が加わったカタチ。金剛、比叡、サラトガは、鎮守府の防衛として残っている。宗谷も今回は輸送する物がない上に調査することもないため、鎮守府で待機。
そこに加わった荒潮は、以前に画面越しに顔を合わせた時とは大きく成長していた。見た目からして若干育っており、以前が高学年の小

学生程だとしたら、今は中学生といったところ。
改二改装で見た目から変わる者というのは少なからずおり、春雨のよく知る白露型の姉達は、時雨を除いてそのタイプである。荒潮もその類。制服まで変わっているため、何処ぞでは小学校を卒業して中学校に入学したなどと喩えられることも。
「山風、あの中でもちゃんと隊長出来てるね」
「はい、もう本当に一人前ですね」
そんな面々の先頭を駆ける山風の姿を見て、姉として大いに喜ぶ春雨と海風。いつも姉の後ろを歩いてきた山風が、今やあの大部隊の隊長。誇らしくすら感じた。
水平線の向こう側に姿が見えたところで手を振ると、江風と涼風は大袈裟に手を振り、山風もかなり遠くではあるが小さく手を振っているのがわかる。自信満々とは言い難いが、それでもかなり前向きになっていた。
そこから少しして、全員が島に到着。山風がちょいちょいと手招きをして、荒潮を一番前に置く。
「お疲れ様ぁ。画面越しではなく実際に会うのは初めてねぇ。改めて、私はこの施設を預かっている姉姫よぉ」
「知ってると思うけど、アタシが妹姫よ。よろしく」
「ご丁寧にどうも～。ご存じ荒潮です～」
２人してのんびりと間延びした話し方であるため、ここだけ時間の流れが遅くなっているかのようだった。
「あぁ、やっぱり深海棲艦の方々は綺麗ね～。画面越しでも良かったけれど、直接会うことが出来て本当に嬉しいわ～。握手してもらってもいいかしら～」
「どうぞぉ、それくらいなら喜んで」
「うふふふふ、直接触れられるなんて夢のようだわ～」
中間棲姫と握手しながら微笑む荒潮からは、警戒するほどではないが分け隔てない愛を感じる。ジェーナスのために抑え込んでいるとはいえ、やはり抑え切れないくらいの愛情を持っている様子。許容範囲内ではあるため、姉妹姫は共に笑って済ますことが出来るレベル。

ジェーナスは特別中の特別だが、深海棲艦そのものを愛しているのが荒潮だ。この施設は楽園と言っても過言ではなく、好みの女性しかいない場所という認識。その視線は当然、春雨や海風にも及ぶため、さりげなく海風が春雨の盾になるような位置に移動した。
「ジェーナスちゃんはまだ眠っているのよね～」
「部屋に行きたいなんて言わないでしょうね」
「まさか、そんなことしたらジェーナスちゃんが嫌な思いをするもの。私はジェーナスちゃんにそんな思いをさせたくないもの。夜這いしてもいいと言われたら行くわ～」
そこはしっかり弁えているようである。行きたいという気持ちは一切隠すつもりはないようだが。
「……それまでは、いつも通り鎮守府であったことの情報共有で」
あまりそのままにしておくと荒潮が止まらなくなりそうなので、山風が割り入って話を進めていく。
荒潮とジェーナスの直接の対話は、今回の遠征の一大イベントではあるのだが、本筋はあくまで情報共有。通信でも出来ることかもしれないが、救われた者達の動向は直に見ないとわからない部分もあるため、今回はそこがメイン。
治療の現場を見ているため、事後観察というのもある。大鳳は未だに療養中だが、コロラドと潜水艦姉妹は既に活動中だ。その様子なども見れるものなら見ておきたい。
「山風……本当に立派になって」
海風は何処か感動すらしてしまっている。心の中では一番は当然春雨なのだが、二番は山風と言ってもいいだろう。深海棲艦化の影響で鎮守府を空けてしまっていることがどうしても心残りであるため、山風の成長は自分のことのように嬉しい。
「山風の姉貴、マジで頑張ってっからさ、機会があったら褒めてやってくれよな」
「そうそう。訓練とかもめっちゃくちゃ頑張ってんだぜ。北上さんと大井さんがすげぇ手伝ってくれっから」
「おいそこの駆逐艦（ガキ）共、余計なことを言うんじゃないよ」

あくまでも駆逐艦ウザいキャラで行きたいような北上であるが、もう誰もが北上の子供好きには気付いているため、生温かい視線を向けるのみである。
「北上さん、大井さん、山風のことをありがとうございます。心身共に強くなってるのが見てとれて、姉として嬉しいです」
「あーもう、あたしゃそういうキャラじゃないってのに……」
「北上さん、もう諦めましょう」
「一部大井っちのせいでもあるからね？」

終始和やかな雰囲気で続く。しかし、荒潮にとってはその時が刻一刻と近付いてきているので、表には出さないものの緊張は尋常では無かった。
ここで顔を合わせて、面と向かって拒絶されたら。そう思うと、怖くて仕方なかった。

因縁の対面

鎮守府からやってきた調査隊との対談はある程度あっさり終わる。基本的にはお互いに知っていることばかりであり、あくまでも定期的な調査隊派遣であるため、そちらはあまり時間はかからない。今この場に出せる者として、コロラドと大鳳がしっかりと正気に戻っていることを証明した程度である。

大鳳は一晩眠ってさらに回復したようで、調査隊の前に自分の足で歩いて現れた。未だに切り落とされた腕の再構築――艤装の義腕の生成はしていないが、身体の痛みを表に出さないために、もう戦線復帰も秒読みという段階にすら見えるところに。

「ひとまずこれで本筋の部分は終わりだけれど、問題はここからよねぇ」

「……うん」

中間棲姫の言葉に、山風も小さく頷く。元よりこの施設の信頼度は非常に高く、救出された者に対しての不安は1つも無い。顔を合わせて、無事であることを証明し、近況を報告する程度で構わない。

コロラドも大鳳も別にこれといって緊張感もなくこの場に参加している。罪悪感は多少はあれど、ありのままの自分を出して信用を勝ち取った。特にコロラドは感情的になりやすいので、その行動に嘘が無く、かなりわかりやすい性格をしているため、

しかし、ここからが一番の問題。ジェーナスと荒潮のこと。

荒潮は今、施設の紹介のために春雨と海風、そしてある意味仲介役のように島風が側にいる。ジェーナスが眠る部屋に近付かせないためという身も蓋もない理由があったりするのだが、荒潮自身もちゃんと自重出来ているので、どちらかといえばジェーナスが目を覚ますまで施設のことを深く知ってもらおうという配慮でもある。

ここでどういうカタチになっても、荒潮は今後鎮守府の一員。また施設に来ることもあるだろう。仲間として、他の者達と同じようになってもらう必要はある。

「荒潮ちゃんは、そちらではどうなのかしらぁ」

素朴な疑問をぶつけるが、山風は少しだけ視線を逸らした。
「……ジェーナスちゃんのことを思って、すごく努力してた。でも、何というか……ちょっと怖いときもあった」
それは、あまりにも強すぎる愛のカタチ。その感情が本来の才能を押し上げ、練度を急上昇させる理由となるのだが、それを知る者が見ても荒潮の漲るやる気には若干の恐怖を感じる程だった。
「でも……でも、本当に自分を曲げてなくて……一度も音を上げたことも無くて。愚痴1つ無かったの……今日までずっと」
武蔵の特訓にも耐え、北上と大井の特訓にも耐え、いつ休息しているのだろうと思える程に努力を重ねた結果が今の荒潮。その間に1つも弱音を吐くことはなく、むしろ疲れ果てても笑顔を絶やさない程であったという。
その全てがジェーナスのため。直接会うためには、どんなことだってやるのだという意気込みが、荒潮をそこまでさせた。
「ジェーナスちゃんが荒潮ちゃんを突っぱねるようなことはしないと思うけれど、やっぱりあの時の記憶には苛まれているから……何事もなく終わるとは私も思えないわぁ」
「殴り合いの喧嘩になるようなことはないと思うけど、アタシ達としても不安はあるわね。対面の時には、誰かしら近くにいるべきよ」
「そうねぇ。でも、面と向かって話すために、邪魔立ては出来ないわぁ。そこは難しいところねぇ」
1対1での対面はジェーナスも荒潮も辛いだろうから、誰かしらが側にいることになるだろう。鎮守府側ならば、やはり社交性の塊と言える島風が適任か。今も荒潮の側にいることだし、ジェーナスとの対話のサポートも出来そうである。
「私としてはね、なるようになれではあるわ。でも、ジェーナスちゃんが泣いてしまうようなことがあると悲しいわねぇ」
「……荒潮ちゃんは、ジェーナスちゃんを泣かせるようなことはしないから」
山風は、そこは確信を持って言えた。荒潮の努力を見ているからこそ、ジェーナスに向けている想いの強さは理解しているつもりだ。

万が一のことを考えると、対話には念入りに準備が必要だし、提督だって引け目だって感じる。これで失敗したら、荒潮のみならずジェーナスまでもが再起不能となる可能性すらあるのだから。
当然みんな荒潮のことを信じている。ジェーナスのことだって信じている。だが、１００％ではない。

お昼時。鎮守府の面々は外で戦闘糧食を、施設の面々はいつものようにダイニングで昼食となる。
そしてこの時が、運命の時間となる。
「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ……もうお昼だけど」
空腹と緊張で目を覚ましたジェーナスが、ミシェルと共にダイニングに入ってきた。寝不足というわけではないのだが、やはり表情は重い。隣のミシェルも少し心配そうである。
「ジェーナスちゃん、大丈夫ぴょん？」
「大丈夫大丈夫、ちょっと嫌な夢を見ちゃっただけ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、心配してくれてありがとね」
魘される程では無かったようだが、あの時の悪夢を見てしまったらしい。ミシェルがいる手前、大きく反応せずに耐えているようだが、それがさらにストレスになっている。
ここで耐えられるようになっているのは大きな成長だ。発作すら耐え切っているのも、ひとえにミシェルに心配させないためである。しかし、それで体調を崩してしまっていては意味がないのだが。
これも、今からの荒潮との対話が終われば全てが変わる。緊張が無くなれば、落ち着くことが出来るはず。
「姉姫、早速アラシオに会いたいわ。ダメかしら」
「少しくらいはお腹に入れた方がいいわぁ。はい、これ」
ジェーナスがこういうことを言い出すのではと見越して、中間棲姫は簡単に食べられるサンドイッチを用意していた。ジェーナスは小さくお礼を言い、もふもふ食べ始める。ミシェルもそれに倣ってもう１つを頬張った。

焦っているわけではないが、早く終わらせたいという気持ちはどうしても止められない。どういうカタチであれ、決着を望む。
「どうせなら、明るい場に持っていきなさい。ほら、お茶も淹れておいたから」
飛行場姫からは、ティーパーティーが開けるようにと紅茶とちょっとしたお茶菓子が提供される。
そして、ジェーナスが眠っている間に、外にはそのための場所も作られていた。大袈裟なものではなくテーブルと椅子を用意しただけではあるものの、いつものジェーナスの調子が取り戻せるように、普段と何も変わらない設備。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　じゃあ……行ってくるわ」
決意を新たに、ジェーナスは用意されたティーセットを手に外へ。ミシェルも手伝うと、お茶菓子を手に並んで向かっていった。
「……コソッと見守りたいですね」
ジェーナスの背中を見送った後、春雨がポツリと呟く。心配なのは誰でも同じ。そして、ジェーナスの一世一代の大勝負の結末を見届けたい。
「そう言うと思って、いい感じの場所に設置しておいたわよ」
ティーパーティーの場所を作ったのは戦艦棲姫。ある意味庭のど真ん中。視界が開けていて、何処からでもその様子が見られるような場所にその場所を作ったとのこと。いつもと同じ場所といえば同じ場所なのだが、その付近に鎮守府の面々が屯しているため、そこから少し離れた場所にしてある。
「行くなら早くした方がいいわ。荒潮、もうそこにいるわよ。多分ご飯も食べてないわ」
感知で全員の位置を把握している叢雲が忠告。荒潮もジェーナスと同じように、緊張感から既にその場所に待機するくらいになっていた。
緊張するのは荒潮も同じ。ここで関係が壊れることが怖くて仕方ない。そもそも出来ていない繋がりみたいなものだが、繋ぐきっかけすら失われるのは荒潮の中で一番の恐怖。

「それじゃあ、ちょっと意地が悪いかもしれませんけど、見届けてきます」
「春雨姉さんが行くのなら私も」
「アンタ達、午後の哨戒なんだから長引きそうなら切り上げてきなさいよ」
午後の哨戒の保護者枠であるコロラドに忠告され、勿論と頭を下げてコソコソとダイニングを出て行った。

施設の外、設営されたテーブルについていたのは荒潮。その隣には島風も一緒にいた。緊張する荒潮を落ち着かせるため、ギリギリまで手を握ってあげている。
「荒潮、大丈夫だよ。ジェーナスは荒潮のこと、嫌ってないから」
「そうだといいんだけれどね～……」
基本笑顔を絶やさない荒潮だが、今だけは違う。昨日のウキウキは何処に行ってしまったのか、手も震えさせてその時を待っていた。
「……Ｈｅｌｌｏ，アラシオ」
そして、ティーセットを持ったジェーナスがこの場に現れる。その声を聞き、ビクンと大きく震えた。
「……直接会えて、本当に嬉しいわ～」
ぎこちない笑みではあるが、普段の自分を作ってジェーナスに顔を向ける。対するジェーナスもぎこちない笑み。
お互いに複雑な感情を孕んでいるのが嫌でもわかる表情。荒潮にそんな表情をさせていることで自己嫌悪が刺激されるジェーナスと、ジェーナスにそんな表情をさせていることで信念に傷がついていく荒潮。それがまた表情を歪め、一層嬉しくないところへと向かっていく。
「お茶、お茶を飲みましょうか。落ち着いて話をしたいから」
「そうね～。それじゃあ……うん、いただきます」
完全にいつもの調子が失われている。お茶を注ぐ手が震えているため、島風が代わるとささっとお茶を注いだ。それがまた自己嫌悪を

刺激するのだが、表には出さないようにしている。
「……」
いざ面と向かうと、互いに話すことが無くなってしまう。緊張で震え、目も合わせられない。
こんなジェーナスを見るのが初めてなミシェルは、首を傾げながらツンツンとつつく。
「ジェーナスちゃん、なんか調子悪いぴょん？　さっきもそうだったけど、何かちょっとおかしいぴょん」
若干空気を読まない発言。とはいえ、これがこの現状を打破する初撃となる。
「大丈夫、大丈夫よ」
「大丈夫じゃないっぴょん！　もしかして、この荒潮ちゃんと何かあったっぴょん⁉」
無邪気に、理解していることだけを包み隠さず発言してしまうミシェルの言葉に、ジェーナスは少なからず痛みを覚える。ミシェルすら心配させてしまう自分が、嫌で嫌で仕方ない。
荒潮のことを開き直ると宣言したのに、いざ目の前にしたらこんなことになってしまった。全く開き直れていない。それだけ、あの時のトラウマは深く深く刻み込まれてしまっている。
「えぇと、貴女はミシェルちゃん、だったかしら～？」
「そうだぴょん。ジェーナスちゃんのお友達で、いろいろ教えてもらってるぴょん」
「そう、なのね。ジェーナスちゃんから、私のことは何も聞いていないのね」
荒潮のことは何も知らないミシェル。ただ友達である程度にしか伝えられていないので、ジェーナスがこんな表情になる理由なんて全く理解していない。
「ミシェルちゃん、私はね、ジェーナスちゃんに本当に酷いことをしてしまったの。償っても償いきれないくらい、絶対に消えない傷を与えてしまったの。……そして、私はそのことを全く覚えていない。後から聞いてそういうことをしてしまったって知ったのよ」

とても悲しい目で、ミシェルに真実を伝えていく荒潮。本当にやってしまったことはジェーナスにも辛い思いをさせるため隠しているが、全て自分が悪いという方向で、核心には触れずに教える。
持っている大きすぎる愛情も、今は完全に鳴りを潜めている。ここで溢れさせたら、何もかもが台無しになる。
しかし、ミシェルにはいろいろと通用しない。
「ミシェル、わかんない。ミシェル、嫌なヒトだったらこうやって会いたいって思わないっぴょん。でも、ジェーナスちゃんは会いたいって思ってたんだよね？」
「……そうね」
「だったら、荒潮ちゃんのこと、嫌だって思ってないってことぴょん」
ただただ思ったことを話すだけ。それだけなのに、ジェーナスの心には深く深く突き刺さっていく。
「荒潮ちゃんがすっごく悪いことをしたって言ってるけど、ミシェルにはわかんないぴょん。だって、ジェーナスちゃんはそれでもここにいるもん。荒潮ちゃん、本当に悪いことしたぴょん？」
これが核心。確かに荒潮がやったこと。しかし、それは泥に侵蝕された結果、やらされたことに過ぎない。故に、それは荒潮がやったことではない。あくまでも、敵のせいであり荒潮のせいではない。
それはジェーナスだって理解している。理解しているのだが、同じ顔であるというだけでこんな感情を抱き続けてしまっている。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅの言う通りよ。実はね、このアラシオじゃないアラシオに、私、本当に酷いことされたの」
「この荒潮ちゃんじゃない荒潮ちゃん？　ミシェル、わかんない」
「この世界にはね、同じ顔のヒトが何人もいるの。その内の１人に、私は本当に酷いことをされたわ」
このジェーナスの言葉は荒潮にも突き刺さる。しかし、その荒潮は自分ではないと話してくれているのが救いだった。
「アラシオ、私は貴女じゃないアラシオが憎いせいで、貴女にまで嫌な思いを持っちゃってた。そんな自分が本当に嫌い。本当に」
「仕方ないわ～、私も、うん、私も私じゃない時に、そう思われてもお

かしくないことをしてしまったんだから」
　あの時の荒潮は、もうこの世にはいない。そう思えば、幾分か気が楽になる。
「アラシオ、ごめんなさい。私、開き直るなんて言っておきながら、ここまでずっと引きずってきちゃった。ごめんなさい」
「ううん、ジェーナスちゃんは謝らないで。私の方こそ、ごめんなさい。償いきれないほどの罪かもしれないけれど」
「アラシオも謝っちゃダメ。だって、あのアラシオは貴女じゃないんだもの」
　謝り合いが始まってしまい、最終的にはクスリとお互い笑みを浮かべた。
「何も悪くないのに謝るの、ミシェルわかんない。わかんないけど、ジェーナスちゃんなんかスッキリした感じになってるぴょん？」
「そうだよー。ミシェルの何気ない一言が、なんかいろいろ吹っ切れさせちゃったみたいだね」
　疑問に首を傾げるミシェルを、島風が撫で回した。お手柄だと言われても、ミシェルはさっぱりわからない。

　ここから、2人の関係は良くなっていく。最終的には、親友と言える程にまで発展することになるだろう。

まだ残る謎

ジェーナスと荒潮の対談は、そこからは和やかなものとなっていく。ミシェルと島風が便乗しているからというのもあるが、なんだかんだでその時のことには触れない状態を続けていた。

ミシェルの一言は2人にとってとても大きかった。あの時の荒潮は、この荒潮ではない。この荒潮は、何も悪いことはしていない。そう思えば、心が大分軽くなった。

「私、すごく頑張ったのよ～。なんでも鎮守府で最速記録が出たんですって～」

「1週間かからずにＭｋ・Ⅱ（改二）になったんだものね。確かに凄いわ」

「うふふふ、それもこれも、ジェーナスちゃんとこうやって顔を合わせるためだもの～。画面越しではわからないところもわかって、本当に嬉しいわ～」

ほんの少し、いや、半分に満たない程度ではあるが、溢れ出る愛情を表に出し始めている荒潮だが、ジェーナスに不快感を与えないギリギリのラインを攻めている。

鎮守府でジェーナスの目に入らないところでは、暴走寸前な愛情を見せることもあるが、今この場では絶対に暴走しない。それはジェーナスのみならず、ミシェルにも配慮してである。

「ジェーナスちゃん、1つだけお願い聞いてもらっていいかしら～」

「ん、なぁに？」

「握手……してもらっていいかなって」

直接触れ合いたい。でも、ハグとかそこまでするのは気が引ける。むしろそんなことしたら確実に暴走すると自分でも理解している。だからこそ、握手だけでいいからしたいと、思い切って頼んでみた。そんな裏側の感情に気付いているのは島風のみ。だが、島風はあえて何も言わない。こんな時だからこそ、荒潮にはしっかり関係を育んでもらいたいと見守る。

「Ｈａｎｄｓｈａｋｅ（握手）なんていくらでもしてあげるわよ。それとも、私がそれを拒むように見える？」

「ちょっと前までは、お願いするのも怖かったわ」
「……そう、そうね。ふふ、これで本当に吹っ切れられるもの。ちゃんとやっておきましょ」
ジェーナスとしても、触れ合えるくらいになればもう何も気にならなくなるだろうと思い、テーブル越しではあるが手を差し出す。
荒潮は内心小躍りするくらいに喜んでいるのだが、それは表に出すことなくその手をやんわりと握った。その感触でさらに危険な水域に向かおうとするものの、どうにか我慢する。島風はそれに気付いているため苦笑。
「ありがとう、ジェーナスちゃん」
「どういたしまして」
「ミシェルも握手するぴょん！」
その2人の様子を見て我慢出来なくなったか、ミシェルも荒潮に飛びつくように荒潮に抱き着いた。これでは握手ではない。
これには荒潮も自分を失いそうになった。何処まで行ってもジェーナスが一番であっても、同じように深海棲艦そのものを愛しているのだから、ミシェルのこの軽率な行動は理性をゴリゴリと削るには充分すぎた。
「ミシェル、それ握手じゃなくてハグだよ。はいはい離れようねー」
島風がなんとか引き剥がし、改めて握手させるが、荒潮は少し夢見心地になってしまっていた。
このお茶会は、ここから終始楽しく進んでいった。荒潮は至福の時を過ごすことが出来ただろう。

その様子をコソコソ見ていた春雨と海風は、この辺りで問題ないなと撤収。あの荒潮の様子を見ていれば、これ以上酷いことにはならないだろう。惚けておしまいなら、手を出すなんてこともしない。自重出来ている。いざとなったら島風もいるため、安心して離れられた。
「これで安心だね。ジェーナスちゃんも吹っ切れてくれてよかった」
「ですね。大きな問題が1つ無くなったと感じます」

ニコニコしながらその場から離れる春雨。その表情を眺めて同じくニコニコする海風。春雨が嬉しそうにしていると、海風も嬉しい。
「それじゃあ、スッキリしたところで哨戒に行こっか」
「ですね。午後の登板をきっちりこなしましょう。春雨姉さんでしたら、それはもう鮮やかに難なく終わらせてしまうのでしょうが、それでも危険はあるかもしれませんし、お側に侍らせていただきますね。最も近い位置で春雨姉さんの勇姿を見られることが、海風としては最高のご褒美ですので」
「わかったわかった。ありがとうね海風。いつも一緒にいてくれて」
こんな海風がずっと側にいてくれるから、発作を起こすことなく毎日が過ごせる。そう思っている春雨は、海風を労うために少しだけ頭を撫でてやった。
もうそれだけで感無量な海風は、それはもうテンションが高くなったことは言うまでもない。
所定の場所まで行くと、コロラドともう2人、潜水艦姉妹が待っていた。
今回の哨戒は、保護者枠だけではなく、海中枠も追加している。鎮守府の面々が来ているということもあり、帰路に何もないことをしっかりと確認するため。
「Ｊａｎｕｓはどうだった？」
「大丈夫でしたよ。ミシェルちゃんのおかげもあって、すっかり荒潮ちゃんと仲良くなっていました」
「ふぅん、いいじゃない」
コロラドも小さく笑みを浮かべた。施設の中では最も新人と言えるコロラドも、この施設の居心地の良さは短い時間でよく理解している。他の仲間のせいで、その居心地を崩されるのは気に入らない。
叢雲相手の小競り合いも居心地の良さに含まれているのだが、本人は否定する。ちなみに叢雲も否定する。
「それじゃあ、お待たせしました。哨戒に行きましょう」
準備していた泥感知の眼鏡をかけて、早速哨戒に出発。潜水艦姉妹もコクリと頷くと、2人揃って海中へと潜っていった。

その２人は、潜る直前まで手を繋いでいた。お互いを大切なモノと認識しているかのようだった。
「あの子達も、なんだか変わってきているわね」
それを見送ったコロラドが、ポツリと呟く。その表情は、まるで娘を見守る母のようなモノ。
施設所属同期である潜水艦姉妹のことはやはり気になるようで、大鳳とは違って存在そのものがグチャグチャに壊されているあの２人は、どうしてもこの先楽しく生きることが出来るかが不安のようだ。
プライドが高く自信家なコロラドも、そこはビッグセブンと呼ばれる戦艦の代表のような存在。カリスマ性を持ち合わせているためか、周囲もよく見えている。
「姉妹とは何ぞやと聞かれて驚いたわよ。質問の内容じゃなく、あの子達がそんな依頼とか関係ない質問をしてきたってことは、少しくらいは感情が出来てきたんじゃないかしらね」
「ですね。私達も聞かれました。いい方向に進んでいますよ」
まだ無表情かつ端的な会話しか出来ないとはいえ、依頼主の言ったことだけをするのではなく、自分達で考えて自分達のための行動が出来るようになっているのは、自我が芽生えているようなもの。もう操り人形ではない。
「ところで、ウミカゼは何をしているの？」
などと話している間も妙に静かな海風をチラリと見るコロラド。
「何をって、こういう時にしか見られない眼鏡の春雨姉さんをいろいろな角度で堪能しているだけですよ。普段無いものを身につけるだけでも魅力が数倍になるのが春雨姉さんですから。コロラドさんも見てください。元々端正な顔立ちである春雨姉さんの美貌が、このパーツ１つで新たな顔を見せるんです。普段は優しく温かい雰囲気ですが、今は理知的で内に秘める賢さを存分に表に出しているではないですか」
「Ｏｋａｙ，　Ｏｋａｙ．　わかったから止まりなさい。アンタがハルサメのことをどれだけ思っているのかはよくわかったから」
相変わらずの海風のマシンガントークに、春雨も苦笑するしかな

かった。
「ハルサメ……アンタのＳｉｓｔｅｒ、なかなかにＣｒａｚｙね」
「あはは……でも海風は楽しそうですから。私は否定しませんよ」
話している春雨を舐めるように見ながら楽しんでいる海風を、春雨は何も否定しない。文句もなければ、むしろ好きにしていいと推奨したりもしている。それで海風が喜んでいるのだから、拒否する理由も無かった。
自分のことはどうでもよく、仲間達が楽しんで、喜んでくれるのならそれでいい。だから春雨は、滅多なことでは怒りを見せない。仲間になんて以ての外。良く言えば寛容、悪く言えば放任。
「まぁアンタがいいならそれでいいけど」
コロラドは小さく溜息を吐き、海風がちゃんと哨戒をしてくれればそれでいいと放置することにした。
だが、こんな姉妹関係に潜水艦姉妹が感化されなければいいのだがと若干心配になっている。百歩譲っても健全とは言い難いものを真似るのは、あまり褒められたものではない。

鎮守府の面々はもう少ししたら帰投することになるだろう。その帰路が安全であることをしっかり確認するために、哨戒の経路をそちら優先にして動く。
眼鏡に何の反応もなく、遠目に見ても何も見えない。平和な海路。海中の方も何事もないようで、潜水艦姉妹が定期的に浮上してきては、何もないと伝えるのみである。
「静かな海ですね。ずっとこうならいいんですけど」
春雨の言葉に、海風も完全同意。周囲に何もない海の真ん中ではあるが、ここには今、争いは何も無い。本当に静かな空間である。
「嵐の前の静かさって言われても困るんですけどね」
「でも、そう考えてしまいますよね。まだ敵は残っていますから。春雨姉さんを狙う不届き者は、海風が成敗しますのでご安心を」
「気をつけてね。残ってるってことは、一筋縄ではいかないってこと

だろうから」
　現在残っていることがわかっているのは、たった1人。前回の施設夜襲の際に療養中だったという龍驤のみ。
「私も龍驤のことはよく知らないのよね。前に他の子には話したんだけど、戦力として使われていただけだから、細かい作戦指示については聞かされてなかったのよ」
　一緒に活動していても、コロラドは龍驤のことをハッキリと知っているわけではないという。ただでさえ、治療されたことによって最も重要なことが抜け落ちてしまっているせいで、さらに謎は深まる一方。
　実際、龍驤は何処かの鎮守府の艦娘を侵蝕して手に入れたわけではないというところはわかっており、そこに混ぜ込まれた艦娘が何者かも判明しているのだが、逆に言えばそれだけしかわからないというのが現状だ。
「リュージョー、やけに使われてる気はするのよね……。黒幕の姫のお気に入りなのかしら。というか気に入るとかあるのかしら」
「愛着がある……とか？」
「無くは無いわよね。ずっと使い続けてるから、なんだかんだ信用してるってことかもしれないわね」
　黒幕の使う元艦娘にも、古参や新参はあるだろう。潜水艦姉妹はおそらく新参。既に救ってはいるが、白露も新参者だった。
　なら最古参は誰なのか。それはおそらく龍驤だろう。黒幕が自分の力を増していくための最初の駒として選ばれたと考えるのが妥当だ。
「でも、その龍驤さんって北上さんが2回撃退してるんですよね。トドメを刺す前に2回とも撤退されてしまっていますが」
「そうね。だからこそ怖いわよ。1回だけじゃなく2回も負けたなんて、今までに無かったことだと思うし。Ｒｅｃｕｐｅｒａｔｉｏｎ（療養）だなんて言いながら、実はＲｅｍｏｄｅｌｉｎｇ（改造）も受けてるんじゃない？」
「あり得ることですよね……」

コロラドの言葉に不安になる春雨。今までは撃退までは持って行けていたが、言ってしまえばその2回でこちらの戦力の把握をされてしまっていると言っても過言では無い。
勿論その時以上の力を持たれていることを見越して、鎮守府側は訓練を欠かしていないのだが、あちらはそれすら簡単に超えてくる強化をしてくる可能性があるのだ。そもそも泥という不確定要素を使っているのだから、本当に何をしてくるかわからない。
「どうであれ、私は春雨姉さんを全力で守りますから」
「ありがとう海風。私だけじゃ無く、みんなを守ってね。当然、その中には海風自身も入ってるからね」
「その姉さんの慈悲が海風の活力になります。私は姉さんのために私自身を守りますからご安心ください。姉さんに辛い思いをさせるだなんて死んでも嫌なので」
胸を張って宣言する海風に、春雨も笑顔で返した。

未だに謎が多く残っている敵陣営。こうして施設近海を哨戒している間にも、実は裏側ではとんでもないことをやらかしているのかもしれないと思うと、不安は払拭することは出来ない。
心強い仲間達が沢山いるのだから、その不安もみんなで一緒に乗り越えたいと、誰もが思っていた。

再来

今回の哨戒は一度施設に戻るルートを選択。行って帰ってきたところで、鎮守府の面々が帰投準備をしているところとなるからである。

帰路が安全であることをある程度確認出来ていることで、少しは気分が楽になることだろう。ついでに哨戒を再開するためにギリギリまで見送るため、より安全に帰ることが出来る。

「それじゃあ……今日はこの辺りで」

春雨達が岸に到着したタイミングを見計らって、山風が中間棲姫にお辞儀。今回は施設側も少し忙しめだったため、海風と話をする時間があまり取れなかったのだが、この帰路を半分まで行かないまでも一緒に航行出来るため、少しだけ嬉しそうにしていた。無論、他の仲間達にはその感情はほぼ筒抜けである。

「ええ、ありがとうねぇ。またみんなで来てちょうだいねぇ」

「……うん、また来る。荒潮ちゃんも来たがってるし」

その荒潮は、ギリギリまでジェーナスと話が出来ていたために、終始惚けたような笑みを浮かべていた。

今までのギスギス感が何処かに行ってしまったように仲が良くなり、そこにミシェルも加わったことでより明るい関係となっている。荒潮の中では、もっと強く近い関係になりたいという下心が悶々と溜まっているのだが、この関係を崩さないためにキッチリ抑え込んでいた。

「次からの調査隊にも、必ず参加させてもらうわ～。またジェーナスちゃん達と話がしたいもの～」

それまではまた訓練に勤しむとのこと。ジェーナスの平和を守るため、今以上に強くなり、さらに安全にここまで来れるようにしておきたいと。

それを聞いて意気込むのは、荒潮ではなく武蔵だったりする。のみ込みが早い荒潮を鍛えるのは、武蔵からしても楽しいらしい。

「私達はみんなを送ってきますね。そのまま哨戒を続行するカタチ

で」
「ええ、よろしくお願いねぇ。今は安全かもしれないけれど、もう何が起きてもおかしくないんだもの。みんなで力を合わせていかなくちゃねぇ」
次々と帰路に就く鎮守府の面々と共に、春雨達もまた施設から離れた。
潜水艦姉妹も海中から追ってきているため、万が一海中から何者かの襲撃があったとしてもすぐにわかる。海上は言わずもがなだ。千歳と千代田が哨戒機を飛ばしながら周辺警戒をしているし、春雨達だけではなく山風も泥を感知する眼鏡を持参してここまで向かってきているのだから、万全な態勢である。
コロラドは最後尾から、武蔵や北上、大井と仲間達の安全を確認しながら、春雨と海風は最前列で山風筆頭の妹達と進路に何も無いことを確認しながらの航行となる。全員揃って進める場所はそこまで遠くではないのだが、そこそこの時間はある。山風にとって、その時間が一番の至福の時。
「海風姉……あたし、頑張れてるかな」
「ええ、勿論。本当に目を見張る程よ。山風、本当によく出来てる」
海風に褒められて、しかも頭まで撫でられたことでご満悦な山風。今までの努力が報われ、より一層頑張ろうと気合が入る。
そんな様子を見て、江風と涼風も嬉しそうである。山風の努力を一番近くで見届けていたのは、紛れもなくこの妹2人だ。
どちらも自分の訓練を優先にしつつも、なんだかんだ山風には目を向けている。山風も、海風と同様に何かしらがキッカケとなって感情が溢れ出してしまう可能性があったからだ。
それも今では大分落ち着き、むしろ海風がこうなってしまう前よりも強く芯のある性格に成長しているまである。荒潮ほど顕著ではないが、山風も海風のためにと努力するタイプになっていた。
「マジですげぇンだよ山風の姉貴。北上さンも大井さンも、江風達のことガッツリ鍛えてくれてンだけどさ」
「ゼエゼエ言いながらでもしっかりついてけてるんだよね。その代わ

り、夜グッスリなんだけどな」
「疲れ果てるくらいまで訓練してるんだ。私がまだ鎮守府にいた時はそこまでじゃなかった気がする」
春雨も驚く山風の成長。隊長としてはこれ以上ない程の存在となりつつある。そうなった理由が海風の深海棲艦化というのは複雑ではあるのだが、成長していることは素直に喜んだ。
「海風の姉貴にああやって褒められるためにさ、慣れないことも頑張ってやってンだよね」
「あたいら結構一緒にいること多いんだけど、終わった後とかすごい愚痴とかも言うんだぜ。でも、それだけでやめるって言わねぇの。すげぇよホント」
妹達のそんな言葉が聞こえてきたか、恥ずかしげに顔を赤らめて抗議の視線を向ける山風。だが、海風はそれすらも褒めるため、抗議は出来ずにそのままニヘラと笑みを浮かべた。

しばらく行って、哨戒範囲ギリギリの場所。ここまで来たら鎮守府の面々とはお別れ。何度も何度も確認して、泥の感知もせず、違和感を覚えるようなものも存在しないため、あとは任せたとここで同行を終了した。
見えなくなるまで手を振って、水平線の向こう側に消えたことで哨戒が再開される。
「それじゃあ、ここからいつも通りグルッと回りましょう。潜水艦の子達も大丈夫かな」
呼び出しの合図として、海面をトントンと2回叩く。春雨は今脚を消しての航行であるため、手でノックした。すると、すぐに姉妹が浮上してくる。
「定期連絡。こちらには何もない。何かの痕跡も無い。視界にも何も入らない」
「鎮守府の艦娘達が向かう先にも、見える範囲では何も無い。この海域は安全と保証する」

仲良く頭だけを海上に出した姉妹が、淡々と状況説明。何の感情も含まれていないのなら、それはそれで信用度は高い。この２人もその性質上、嘘をつくことが出来ないようなものであるため、思ったことをそのまま話している。
「ここからはいつもの哨戒に戻ります。ひとまず時計回りに一周かな？」
「了解。そちらの動きに合わせてこちらも動く」
それだけ言って、また仲良く潜っていった。
「あの子達、本当に変わったわね」
ただそれだけでも、コロラドとしては充分な成長を感じたようである。全く同じタイミングで治療を施され、その時からちょくちょくと様子を見ていたのだが、最初と比べると大きな変化を感じる程だった。
治療された当初は本当に機械的。依頼を受けなければ行動すらせず、依頼主となった飛行場姫についていくだけの存在だったが、今では２人で独自の行動をし、感情は無くとも大切なモノが何かを理解しているように手を繋いだり息を合わせたりしている。もう哀れな操り人形ではない。
「姉妹とは何かとか聞いて回っていた時は何事かと思ったけど、あの子達はあの子達でちゃんと答えを見つけてるようで何よりだわ」
「ですね。私達も聞かれましたし、それが参考になったかはわかりませんけど、ああいうカタチに落とし込まれたのなら何も悪いことはないですね。仲のいい２人って、私もわかりますから」
それこそ、松竹姉妹のように共依存となっている可能性もあるが、だとしても人形から脱却しているのなら、今までよりもマシと言えるだろう。このまま大切なモノと共に過ごすことで、感情も少しずつ芽生えていき、最後には笑顔を取り戻すかもしれない。
「コロラドさんって……意外と見ているんですね」
海風の若干辛辣な言葉に、コロラドは顔を顰めながらも小さく溜息を吐く。
「悪かったわね。これでも戦艦、ＢＩＧ　ＳＥＶＥＮの１人なんだも

の。艦隊旗艦が出来るくらいに周りは見えてるの」
「何というか、叢雲さんと小競り合いしているヒトというイメージが強くて」
「それはアイツが勝手に絡んでくるだけでしょ。私は適当にあしらってるのよ。なんだかんだアイツは駆逐艦（ガキ）なんだから、大人の余裕で付き合ってやってるだけ」
　その割にはムキになってると言いかけたが、春雨にアイコンタクトを受けたことで口を噤んだ。変に刺激して面倒臭いことになったら、哨戒が滞るかもしれない。
　それに、こんなことを言いながらも、コロラドは叢雲のことも気にかけているのだから、口が悪いだけで優しい性格をしているのは確かだ。叢雲のように怒りが溢れているわけではないので理性もしっかりある。理性的なまま子供のような言い合いをするところが少々幼い感じはするが。
「さっさと行きましょ。ただでさえ今回はいつもよりも遠回りしてるようなモノなんだから」
「ですね。行きましょう」
　世間話を切り上げ、予定通り時計回りに哨戒を再開しようと思った瞬間、春雨は何か予感のようなモノを感じ、ビクンと震えた。
「うぇっ!?」
　だが、今までの悪寒とは何処か違う、嫌な感じがしない予感。その場に蹲るようなことでもなく、まるで死角から脇腹を突かれたような驚き。
「春雨姉さん、どうしました!?　敵ですか？　春雨姉さんを狙う不届き者ですか？　この海風が八つ裂きにしますので安心してください。危害を一切加えさせません。コロラドさん、姉さんを守るのを手伝ってください。春雨姉さんは施設の第二、第三の要。やられたら私達に勝ち目は無くなります。それくらい偉大で崇高なお方ですから」
「最後の方は知らないけど、ハルサメが何か感じ取ったのは確かなのよね。Ｉｎｔｕｉｔｉｏｎ（直感）、Ｓｉｘｔｈ（第六）ｓｅｎｓｅ（感）、辿り着く者のそれは信用しないといけないわ」

海風がバッと春雨の前に躍り出て、右腕を盾に変形させる。コロラドも何が起きるかわからないと、カニの甲羅の盾を展開した。
すると、先程潜ったはずの潜水艦姉妹が合図無しに浮上してくる。
「質問。海底を歩く者に知り合いはいるか」
あまりにもおかしな質問に、3人が3人、おかしな声をあげかけた。
「我々は視野が広い方。この目で確かに見た」
「海底を歩く者がいた。こちらに向かってきている」
「人数は3人。うち、1人は男」
これでようやくピンと来た。春雨も海風も、その存在を知っている。たった一度だが、顔を合わせ、会話もしている。コロラドだけはちんぷんかんぷんだと首を傾げるのみ。
「そのヒト達は味方！　こっちに来てる!?」
「歩いているが、その速度はかなり速い」
「おそらく、すぐに会敵する」
「敵じゃない、敵じゃないから！」
このタイミングでここに現れるというのは何故かはわからない。しかし、来てくれたのならば、歓迎する必要がある。
まさか海底を歩いてここまで来ているとは思っていなかった。おそらくだが、先程までここに鎮守府の面々がいたからだ。ソナーや哨戒機にその存在を捕捉されないように、しかし施設の面々にはその存在を知らしめるように、真正面からここまでやってきている。
「どちら様なのよ。そんな悠々と歩いてくるようなヤツって」
春雨がこう言うものの、コロラドは何処か懐疑的。味方と言われてはいそうですかと言えるような環境に無いことは理解している。
「コロラドさんは聞いたことなかったですか。そのヒトは、姉姫様の育ての親のようなヒトなんです。中立の立場のヒトなんですけど、今は摂理を崩しているとか何とか……」
そうこうしている内に、潜水艦姉妹が海中をじっと見つめていた。
「浮上してくる。目の前」
言うが先か、大きな水柱を上げて派手に登場したのは、道化の2人である。シュタッと華麗に着水し、恭しく、だが何処か巫山戯たよう

な仕草でお辞儀。
　そして、その水柱が失われたところに、1人の男が立っていた。一度だけ見たその姿、忘れるわけが無かった。

「『観測者』様！」
「久しぶりだね、辿り着く者」
　現れたのは、『観測者』。滅多なことでは出てこない中立の存在が、このタイミングで再び表舞台に立ったのである。

黒幕の特性

再び春雨達の前に現れた『観測者』達。鎮守府の面々と別れた後を見計らって現れた辺り、やはり自分達の素性を人間側に知られるのを控えているようだった。

春雨と海風は一度会っているため驚きはしないが、コロラドは目の前に現れた男の同胞を見て大いに驚く。艦娘はその名の通り、深海棲艦もそれに準ずるように、女しかいないというのが定説だ。もう長く続く戦いの中で、どちらにも男という概念は現れなかったからだ。

「黒幕からは聞いていなかったんですか？」

「知らないわよこんなヤツがいるだなんて。艦娘のときも当然」

突然現れた『観測者』を、コロラドはジロジロ眺める。見れば見るほど、自分達と同じような存在には見えないようで、そろそろ睨みつけるくらいになりつつあった。

戦力としての意味合いが強いコロラドには、『観測者』という存在は伝えられていなかったようである。コロラドには見つけることが出来ないと高を括られていたか、それとも余計なことを考えさせないように情報を遮断したか。そもそも頭脳戦より高火力で全て吹き飛ばすタイプであるため、全力を出させるならば後者と考えるのが筋か。

一方潜水艦姉妹は、その存在に疑問しか無いため、ある意味思考停止していた。明らかに敵対しているわけでもない、完全な中立という存在の意味がわからず、質問すら思い浮かばないでいた。

「突然すまない。彼女達に急ぎ伝えておかなくてはいけないことが出来たのでね」

「そうなんですか。姉姫様も妹姫様も喜びますよ」

「世間話をしに来たわけでは無いのだが、彼女達はそれを望むだろう。正直なところ、今は観測を続けるだけでは現状を打破出来なくなりつつある」

事は深刻になってきているのだという『観測者』。春雨達からしてみれば、あちら側に残されているのは龍驤のみで、それさえ救ってしまえば後は黒幕のみとなるはず。まとめて４人も救えたため、戦いは

佳境に向かっていると考えていたが、むしろここからさらに危険になると話す。
　それに、この言い分では、中立を保つことをついにやめるのでは無いかと勘繰った。
「彼女は、あまりにも摂理に反しすぎた。中立という立場で観測を続けるのは、終わりにしなくてはならないだろう」
「じゃあ、もしかして一緒に戦ってくれるんですか？」
「以前にも話したかもしれないが、私は戦うことが出来ないんだ。代わりに、君達側に少し寄せることにした。それが世界の中立と判断したんだ」
　つまり、人数は減ったはずだが、『観測者』が片方に親身にならない限り、中立とは言えないくらいに力の差が出来てしまっているということだ。
　こうしている間も、黒幕は力を付けているということにほかならない。ただでさえどんな存在かもわかっていないような相手なのに、放っておけば手が付けられなくなるのはインチキにも程があった。
　そう話している内に、道化が２人揃って『観測者』の袖を引っ張る。こんなところで立ち話をしていないで、さっさと施設に行けと行動で示していた。『観測者』も一言すまないと呟き、改めて春雨に向き直る。
「また、君達の施設に行かせてもらってもいいだろうか」
「勿論です！　滞在だってしてくれても」
「いや、私はあくまでも中立だ。多少寄せるとはいえ、完全な味方と思ってしまわれると、期待外れと感じるかもしれない。故に、あくまでも助言をするのみで終わらせてもらう」
　本人が言う通り、『観測者』は中立を維持する。そのため、一所に留まるということは基本的にはしていない。
　それでも、施設に自分の意思で立ち寄ってくれるというのは非常に喜ばしいことだ。春雨は大喜びで『観測者』を案内した。哨戒は残念ながらここで終わりとなってしまうものの、それ以上の功績となった。

施設は勿論騒然とした。こんなタイミングで『観測者』が施設にやってくるなんて誰も考えていないし、そもそも初めて見る者にとっては、あまりにも謎過ぎるその存在に思考が追いついていかない。
「嬉しいわぁ。本当にまた来てくれて」
出迎えるのは勿論中間棲姫。哨戒の途中の時間で帰ってきた挙句、何故か人数が増えていることに真っ先に気付いた叢雲が、もしかしたらと姉妹姫に伝えていたようである。
大喜びの中間棲姫の隣では、まさかこんなに早くまた来るとは思っていなかった飛行場姫がやれば出来るじゃないと小さく笑みを浮かべた。姉が飛び上がりそうなくらい喜んでいる姿を見て、飛行場姫自身も嬉しくて仕方なかった。
「当然、アタシ達がここでかなり苦労しているところも観測していたのよね？」
「ああ、全て見させてもらった。自らの力で乗り越えられる脅威ならば、私が手を貸すこともないだろう。それに」
「アンタには手を貸す力もない、でしょ。わかってるわよ。中立を維持するために戦う力が無いんだものねアンタは」
客としてダイニングに通された『観測者』と道化達。以前と同じように、その対面には姉妹姫が座る。
今回は施設内に残っているほぼ全員がダイニングやらその外の廊下やらに集まっており、その話を全員で聞くことになっていた。欠席しているのは、深夜の哨戒当番であるため今は眠っている松竹姉妹と戦艦棲姫のみ。
姉妹姫と同じように卓についたのは、この戦いでも重要な位置となる春雨と、どうあっても春雨の側から離れない海風。そして、今回は黒幕側から治療されてこちらに来ることが出来た者の代表として古鷹。
「私もほんの少しだけその存在を聞いたことがありましたが、本当に目の前にいるとなるとビックリしますね……」

古鷹も『観測者』については小耳に挟んだような記憶があるらしい。白露も耳に引っかかるような感覚があると話していたが、古鷹は白露以上に覚えがあるようである。
だが、そんな感じがするというだけで、誰がどんな場面でどのように話していたかは全く覚えがない。あるはずなのにそこにない、すっぽ抜けてしまったかのような違和感。
「彼女は私を知る数少ない存在だ。君が悪意に蝕まれている時に、何かしらの言葉を耳にしたのだろう」
「だと思います。記憶の空白にそれがあるような感覚なので」
何をきっかけに黒幕が『観測者』のことを話したかはわからない。とはいえ、今この状況を見るに、黒幕は『観測者』のことを敵視していない。もし何か思惑があるのなら、あちらも徹底的に探し出していただろう。それでものらりくらりと躱し続けそうではあるが。
「で、来てくれたのはとっても嬉しいのだけれど、何か用があってのことよねぇ？」
「ああ、春雨にも話をしたのだが、中立を維持するため、少々こちらに寄せることとした。それ程までに彼女は摂理に反している」
「それなら、もう少し具体的に何がどう摂理に反しているのか教えてくれないかしらね」
飛行場姫は何処か喧嘩腰である。煮え切らない態度というか、黒幕のみならず施設側に対しても曖昧で抽象的な表現しかしない『観測者』の物言いには少し思うところがあるようだ。
日常生活でなら笑って済ませるところだが、今は施設の存亡の危機なのだ。それを救うか救わないのかわからない。こちらに寄せるというのなら、ある程度ハッキリ話してもらいたい。
「ならば話そう。中立という立場を覆すことは出来ないが、今の彼女が何をしているのかを」
「勿体ぶるなっつってんの」
道化達がケラケラ笑いながら『観測者』をつつく。
「まず君達に伝えたのは、彼女は概念のようなモノということ。これは覚えているかな」

「そうねぇ。そもそも器から抜け出してるわけだし、泥とかを使ってくるってことは、ちゃんとしたカタチを持ってないって思うのが妥当なのかしらぁ」
「でもアンタ、前に話した時、今は形を取っているって言ってなかった？」
「ああ、その形が問題となった」
『観測者』が言うには、今までは他人の身体を仮の器として行動していたらしい。例えば、ここにいるのとは違う、別個体の戦艦棲姫。例えば、空母の中でも頻繁に現れる姫、空母棲姫。例えば、ドロップしたばかりの艦娘。それが生きていようが死んでいようが、中に入ってしまえば自分のモノと言わんばかりに使い潰してきたそうだ。
　しかし、今はそのどれでもない形を取れるようになっているという。
「器が無くても動けるようになっている……？」
「いや、少し違う。器を乗り換える内に強大となった彼女は、艦娘でも同胞（はらから）でもないものを自らの器として扱えるようになってしまった。その器に際限が無くなってしまっている」
　それを中立という立場から見届けることしか出来ない自分の不甲斐なさを謝罪した。
『観測者』のこの観測する力、何処にいても世界の何処かを見通す力は、中立であることが条件となっている。摂理に反した者を罰するために多少寄せることは出来ても、『観測者』の中の独自のバランスが保たれていなければならない。
　これを自ら破った場合、『観測者』は全ての力を失った挙句、泡沫となってこの世から消えるだろう。中立という摂理に自ら反したときの代償は、命である。
「それで、今使っている器ってのは？」
「彼女は器から離れた中身、概念だ。しかし、概念であろうとも器とは性質が同じとなる。姉姫、君はこの地を授かり、仲間達を守る場所として使っている。ならば、同じ性質を持つ彼女にも何かしらの地が与えられてもおかしくはない」

ここまで聞いて、春雨が直感的に酷い想像をしてしまった。辿り着く者としての直感が働き、『観測者』の言いたいことが何と無くであっても読み取れた。
「まさか……土地を器とした……？」
春雨の言葉に、『観測者』は頷く。道化達も大正解と言わんばかりに大袈裟な拍手。
艦娘や深海棲艦などという命持つ器ではない。陸上施設型という中間棲姫の概念から、陸を器としてしまった。
「そんな大袈裟なことをして、誰にも見つからないなんて流石におかしいでしょ」
「あの、妹姫様……多分、私達では見つけられません……」
荒ぶりかける飛行場姫に、春雨はさらに言葉を続ける。
「概念とはいえ、姉姫様と同じ性質を持っているんですよね……しかも、管理する土地を手に入れて、それを器にまでしちゃって」
「それがどうしたのよ」
「……この島、敵対する者を拒むんですよね……」
ハッとした表情に。中間棲姫の管理する島は、敵対する者に発見されなくなるという特性がある。潜水艦姉妹のように、善意も悪意もない人形だからこそ発見されてしまったが、そうで無ければあちらはずっとこの島を見つけることが出来なかった。
それと同じ性質を持っているというのなら、黒幕に対してもそれが機能する。つまり、黒幕と敵対するもの、黒幕に悪意を持つ者は、その居場所を発見することが出来ない。
「そういうことになる。私が伝えに来たのはそれだ。今までは彼女も仮の器を使って行動していたため、発見することも出来ただろう。しかし、君達がその居場所を見つけられるだけの力を手に入れるこの時に、彼女も力を得てしまった。故に、今のままでは手が届かず、その配下の侵略を受けるしか無くなる」
土地を穢し、侵し、自らの器としたことが、『観測者』にとって最も摂理に反することであると話す。中立以前の問題だ。
「手が届かずとも、姉姫のように誰にも手を伸ばさず、来るもののみを

受け入れる姿勢ならば、それは中立だ。この言い方はよろしくないが、それはただそこにあるものと出来るからね。しかし、彼女は違う。その立ち位置を優位に使い、侵略の手を拡げようとしている。ただ自らの怒りと憎しみをばら撒くためだけにだ。これは中立ではない。摂理に反する」

未だにわからない黒幕の素性が、ついに判明したと思ったらこれである。自分達に有利な力を相手も持っているせいで、完全に八方塞がりとなってしまった。

「しかし」

ここで『観測者』は続ける。

「この施設にはそれを打開出来る者も存在する」

「潜水艦姉妹のことかしら」

「いや、彼女達は自己を形成するようになりつつあることで、その位相から少しズレかけている。今の状態で見つけ出すのは難しいだろう」

ならば誰なのだと問いかけようとした瞬間、満場一致で1人の顔が思い浮かんだ。

「その者は、全てに疑問を持つ者。彼女の悪性を正しく理解せぬ者。その者の特性は、理解出来ないものは、その身に影響を及ぼさないこと。それならば、彼女の特性を貫くことが出来るだろう」

そう、ミシェルである。

最初の器

黒幕はさらなる力を得て、施設と同様に敵対する者から発見されない特性まで手に入れてしまっていた。しかし、それを覆すことが出来る存在がいると『観測者』が話す。

それが、『理解出来ないものは、その身に影響を及ぼさない』能力を持つミシェルである。何をしているかもわからないのなら、特性など関係なしに黒幕の居場所を探し当てることが出来るだろう。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、貴女の力が必要なんだって！」

同じ卓ではないにしろ、ダイニングにいたジェーナスは、ミシェルの手を取って声を上げた。まさかこんなところで抜擢されるだなんて思っていなかったため、ミシェルもキョトンとしていた。

「よくわかんないけど、ミシェルが頑張ればみんなが喜ぶぴょん？」

「ええ、でも、ミシェルをとても危ないところに連れていかなくちゃいけなくなるの……。それは私にもすごく抵抗があるわ」

簡単にだが説明したが、ミシェルは簡単には理解出来なかった様子。疑問が溢れているせいか、理解出来ないものは徹底して理解出来ない。

ジェーナスもミシェルをそんな危険な場所に連れていくことには抵抗がある。ミシェルに戦う手段を教えていないのは、この施設で平和に楽しく生きていてもらいたいからだ。それなのに、打開策がそれというのはあまりにも酷。

「というか、そもそもアンタが道案内してくれれば良くない？」

飛行場姫が『観測者』に対して正論をぶつける。そもそもミシェルを使わずとも、黒幕の行動が観測出来ている『観測者』自身が、施設の面々を黒幕の居場所に連れていけばいい。たったそれだけで全て解決する。

しかし、『観測者』は申し訳なさそうに首を横に振るのみ。

「すまないが、そこまでの手助けが出来ないのが私だ」

「あくまでも中立だから？」

「理解が早くて助かる。言葉にすることは出来るが、手を引くことは

出来ない。答えは君達の手で掴んでもらわなければならないんだ」
あくまでもそのスタンスは変えない。『観測者』が手伝えるのは助言まで。自らの手で平和を勝ち取ってこそ、価値あるものだと話す。人間側は手っ取り早く楽をしてでも平和を求めると思うのだが、簡単に手に入れた平和はすぐに崩れてしまうだろうとまで。
どう言ってもこのスタンスは変えないのだから、諦めるしかないだろう。『観測者』は自分でも言っている通り、戦闘では役に立たないのだ。道化は相当な手練れのようだが、最初から最後まで戯れているような雰囲気であるため、頼りすぎると痛い目を見るようにすら感じる。ならば、自分達の力で脅威に打ち勝つしかない。
「元々期待はしていなかったけど、ホンット融通が利かないわね……」
「妹ちゃん、あまり言い過ぎないの。このヒトにもいろいろとあるのよきっと」
自分からその力の維持の方法を伝えようとしないのが『観測者』である。世界を見通せる代わりに、中立を保たなければ死ぬという、あまりにも簡単で残酷なメリットとデメリットのことを話せば納得してもらえるはずなのに、そこはあえて沈黙。そういうカタチで中立を保っているのだろう。親身になりすぎるのもよろしくない。なら何故中間棲姫を育てたのかという話になるのだが。
「ミシェルちゃんを戦場に出すのは、やっぱり気が引けます。せっかくヒトの身体になって、ジェーナスちゃんと楽しく暮らしてるのに」
「ですね……。すぐさまその言葉が出る姉さんの慈悲深さに感涙が流れてしまいそうです」
春雨もそうだが、ここにいる仲間達全員が、ミシェルを戦場に出すのは難しいのではと考えている。単純に可哀想という考えもあれば、叢雲やコロラドは守りながら戦うことが厳しいという戦力的な考えもある。どちらにしろ、ミシェルに戦場は相応しくない。
それでもミシェル自身は、今この中で話されていることをジェーナスに詳しく聞いていた。自分が頼られているということだけは理解したようだが、何故みんなが唸っているのかが理解出来ていない。
「つまり、ジェーナスちゃんをイジめるヤツらを懲らしめるってこと

ぴょん？」
「そうね、そういうことにもなるわね。でも、だからといって危ない場所に行くのは……」
「だったらやるぴょん！　イジメっこはミシェルが成敗してやるっぴょん！」
　ジェーナスに対して嫌なことをしたというのは間違いない。そしてそれが、ミシェルのやる気に火をつける。
　ただ発見するだけというとても単純なことが、ミシェルにしか出来ない。そして、それさえしてしまえば、こちらにようやく勝機が見え始める。居場所がわかればあとは攻め込み方を練るだけだ。しかし、それが一番危険と言っても過言では無い。
「でも本当に危ないのよ？　痛いだけじゃ済まないかもしれないの」
「大丈夫っぴょん！　よくわかんないけどミシェルに任せるっぴょん！」
　ミシェルが自信満々に胸を張る。その危険性を理解出来ていないというのが厄介であり、命を投げ出してしまうのではという危うさがある。
「よくわかんないじゃダメなの。私はねＭｉｃｈｅｌｌｅ、貴女を失う方が怖いのよ」
「うー、でも」
「行くなら当然私もＥｓｃｏｒｔ（護衛）につくわ。でも、本当に、本当に危険な場所なの。どんな場所かもわからなくて、足を踏み入れただけでも自分が自分で無くなる可能性だってあるのよ。ミシェルがそんなことになったら、私は耐えられない」
　理解出来ていないのだから、ミシェルはおそらく未だに侵蝕を受けない唯一の存在であるのは変わっていないだろう。しかし、黒幕の力が強くなっているというのなら、その力を上塗りしてくる可能性だってあるのだ。ジェーナスはそれが怖くて仕方なかった。
　それに、そんな場所に防衛が誰もいないわけがない。非戦闘員であるミシェルが突っ込むのは危険とかそういうレベルではないのだ。潜るという回避方法が取れるとはいえ、侵蝕以上に危険。

「ちょっと考えましょ、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ。これはＩｍｍｅｄｉａｔｅ（即）ｄｅｃｉｓｉｏｎ（断）しちゃダメ。ね？」
「ジェーナスちゃんがそう言うなら、ミシェルは言うこと聞くぴょん」
　そこは素直に落ち着いた。完全否定しているわけでなく、考える時間をくれと言っているのだ。実際はそこまで時間は無いとは思うが、1日2日くらいの猶予はあるだろう。
「ミシェルのことはこちらで考えておくわ。で、さっきアンタ、黒幕が何をしているかを話してくれるって言ってたわよね。他にも何かあるんでしょ」
「ああ」
「それを教えなさい。アンタが何も出来ない分、こっちが動くんだから、出せる情報は全部出しなさい」
　相変わらず喧嘩腰の飛行場姫だが、『観測者』はそうされても仕方ないと考えているため、何も文句を言うことなく話を続ける。
「君達は彼女に残された戦力がどれほどかは把握しているだろうか」
　それをよく知るのは、卓についている古鷹を筆頭とした最近まであちら側にいた者達。
「知る限り、龍驤さんだけです」
「他にもいたかもしれないけど、確実にまずいのはリュージョーだけよ」
「龍驤ですね。他にもいたとは思いますが、問題になりそうなのは龍驤です」
　古鷹、コロラド、大鳳と、満場一致で出てきたのが龍驤の名前。戦闘した鎮守府の面々も、この場にいたら龍驤の名前を出していただろう。
「ならば、その龍驤が今、最も危険な存在となりつつある」
　哨戒中にコロラドがポツリと呟いた、療養ではなく改造されているのではないかという意見が、まさにその通りだった。
「龍驤は彼女の最初の器だ。姉姫から離れ、概念となった後、最初に手に入れたのが龍驤の身体だ」
　自ら器を捨てた黒幕だったが、やはり器が無ければ次の行動が出来

なかったようである。むしろ、傷だらけの器を捨てて、次の器を手に入れるために行動したとも言える。
　それに真っ先に選ばれたのが、たまたま黒幕の目の前にドロップしてしまった龍驤である。黒幕はまず龍驤の身体を使って活動を再開。そこから、数々のドロップ艦を仲間にしては侵蝕、殺害などを繰り返し、勢力をゆっくり拡張していったようである。
「コロラドさんが言っていた黒幕のお気に入りというのは、あながち間違いじゃ無かったんですね」
「みたいね。それくらい使われてんだもの。そう考えるのが妥当よ」
　コロラドがドヤ顔。それを見て叢雲が小さく鼻で笑ったのは誰も見逃していなかったが、話が進まないので一旦無視。
「その龍驤ちゃんという子を、私の中身が何をしているのかしらぁ？
　危険な存在になるということは、前までとは違うということよねぇ。私は顔も見たこと無いのだけれど」
「主に鎮守府の襲撃などをしていましたから、この施設には一度も近付いていませんよ。近付ける機会が来たときには療養中でしたし」
　大鳳が補足。龍驤がこの施設や堀内鎮守府絡みで出張ってきたのは、今までに2回。そして2回とも北上が撃退している龍驤。2回目の後は療養中とされており、大鳳もそうであると思っていた。
「彼女は龍驤を、自分と同じに仕立て上げようとしている」
「……どういう、こと？」
「艦娘や深海棲艦という概念から外に出そうとしているんだ。つまり、君達の言葉で表すならば、泥だ」
　改造によって、龍驤を泥にする。ミシェルでなくても、これは理解の範疇を超えていた。
「器は龍驤のままだろう。魂を混成し、優秀な手駒としていくつもの戦い……侵略をこなしてきているのだから、それを捨てるのは勿体無いと考えるのが当然だ。だが、これまで数度の連敗を重ね、龍驤自身も2度敗北を喫している。彼女はそれを知り、君達を全力で叩き潰さねばならない対象として見ることにしたようだ」
「それが龍驤を泥にすることと何の関係が」

「ありますよ妹姫様……だって、黒幕は今までその身体で勝ち続けてきたんですよ。言うなら、それは必勝パターンです。黒幕と同じ存在が2人になれば、私達は本当に勝てなくなります」
春雨がそれを言ったことで、絶望感が一気に大きくなった。
おそらく、黒幕は自分の器――土地を守るために動かないが、龍驤を同じようにしたらそこから外に出して侵略を進める。いわば、黒幕が盾で、龍驤が矛だ。矛盾を孕んでいるかもしれないが、侵蝕により黒幕に絶対的な忠誠を誓う龍驤が、力を得たことで叛逆するようなことは確実に無い。
「……今までとは違いすぎます。白露姉さんを筆頭に、なんだかんだみんな救ってこれました。瀕死にすることで泥を吐き出させることが出来ましたし、今なら明石さんの薬で侵蝕そのものを消すことも出来ます。でも、龍驤さんはもう泥そのものなんですよね」
「ああ。それも話しておきたかったことだ。これまでとはあまりにも違う。救うという考えは捨てた方がいい」
キッパリと言い放つ『観測者』に、春雨は少しだけ落ち込んだ。大鳳との戦いで、容赦なく切り捨てるという判断が出来るようにはなっていた。傷付けてでも救えるのならば救いたい。それで死んでしまったら、もう仕方ないという冷酷ではあるが妥当な判断が出来るようにはなっていた。
しかし、最初から救われない者は今までいなかった。あくまでも微生物に感染して正気を失っていたようなもの。現に、ここには正気を取り戻した仲間達が沢山いるのだ。心の何処かで、龍驤もここに並ぶことになると思っていた。だがもうそれも叶わない。
「覚悟を決めてもらいたくて、私は君達に話すことにした。知っているのと知らないのとでは、感覚が変わる」
「……ええ、ありがとう。知っておけば心持ちが変わるわぁ。救うつもりで戦えば、それを逆手に取られて負けてしまうかもしれないものねぇ」
中間棲姫も悲しそうに話す。今までの施設での生活で、勝つだの負けるだの考えたことなんて無かった。だが、ここでの敗北は施設の平

和が失われることと同義。最悪、全滅か全員侵蝕されて、あそこまで交流を深めた鎮守府の敵にもなる。それは耐えられない。
「私から話せることは以上だ。こちらでも、彼女の動きは観測し続ける。道化にも動いてもらっているからね」
道化達はシャドーボクシングの構えで頼もしさを表現。実際、泥を吹き飛ばすような力を持っているのだから、対処は出来るのだろう。
「考える時間をちょうだい。それに、彼――提督くんにもこの話はしておくべきだと思うの」
「ああ、それでいい。我々の存在をボカしてくれれば、情報を共有した方がいいだろう」
もう問題が大きくなりすぎて、どうすればいいのかわからない程だった。

ミシェルを戦場に出す件。そして、泥と化し救うことが出来なくなった龍驤の件。この2つの難題を、これからクリアしなくてはならない。

彼との協力

現在の難題は2つ。1つは、黒幕の居場所は施設と同様に敵対する者からの発見を拒む結界のようなものが存在すること。今のままでは、鎮守府の面々がどれだけ頑張っても発見することが出来ず、時間ばかりを浪費することになる。その打開策が、その結界の性質が唯一通用しないであろうミシェルなのだが、そんな危険な海域に、非戦闘員であるミシェルを向かわせるのは気が引けるため、今は少し考えるという方向に。

そしてもう1つは、黒幕のお気に入りなのではと考えられていた龍驤が最初の器であり、今はより強化されて黒幕と同様の泥となってしまったこと。今まで敵対している元艦娘のように救うことがもう不可能であり、次に出会った時には殺すつもりで戦わなければならない。

「我々はまた観測に戻る。彼女に加えて、龍驤の動きも見なくてはならない。幸い、先程君達と別れた鎮守府の者達が襲われているようなことは無いようだ」

施設内からでもその視野は健在のようで、明らかに壁しかない方向に目をやっても、現在帰投中の鎮守府の面々の様子が確認出来ているようである。『観測者』としての特性である観測は、それを見るとしたものを確実に見ることが出来るのである。

道化も同じ力を持っているらしく、大袈裟なポーズで遠くを見ているようだが、その目にはあらゆる情報が見えているようだ。黒幕も龍驤もしっかり確認中。

「それがわかっただけでも少しは安心ねぇ。でも、じっとしてるわけではないのよねぇ？」

「ああ、龍驤は彼女の側から離れている。君達が知る者は近くにはいない。おそらくだが、与えられた力の試験をしているのだろう」

「試験？」

「ああ、そこに生まれたばかりの艦娘を侵蝕している」

感情を変えず、それを言ってのけた。つまり、黒幕が勢力を増やす

ように、龍驤が勢力を増やしているということになる。黒幕が器から離れた時と同じ。
　そんなことを聞いて、慌てない者などいない。このままにしておいたら、せっかく救って敵の数を減らしたのに、また増えてしまう。
「ちょっと、それを見過ごせと言うの!?」
「陸から動けない君が救いに行くというのかい？」
　飛行場姫が声を荒げるものの、本人だってわかっていた。今からそこに向かったところでまるで間に合わず、そもそも居場所もわからない状態なのだから彷徨うことしか出来ない。
　歯痒いが、それはもう見過ごすしかないのだ。それに、龍驤が泥そのものとなったと聞いた時点で、誰もがこの事態を予想している。自由に動けるというのなら、それこそ周囲の誰かを侵蝕していくだろう。
「……ごめんなさいねぇ。私が聞かなければ、知らなくてもいいことを知ることなんて無かったはずなのに」
　鎮守府の面々が襲われていないという情報だけならば、こんな思いをせずに済んだかもしれない。だが、その後。じっとしているわけがないと聞いたことで、『観測者』が現状を伝えた。それがそれのきっかけ。
　とはいえ、中間棲姫が聞いていなくても、誰かが聞いていただろう。例えば、苛立ちが湧き上がっている叢雲。それと同じようにイライラしているコロラド。この２人は確実に『観測者』から今の言葉を引き出すことを言っていた。
「いや、私もすまない。今の君達には失言だった」
　ここは『観測者』も素直に謝罪。道化達もごめんなさいと言わんばかりに両手を合わせて頭を下げる。
「手の届かない場所の者達を救うことなど出来ない。ならば、知らない方が良かっただろう。しかし、今の龍驤にはそういうことが出来るということを知っておく必要もある。遅かれ早かれ、君達は知ることになった」
「そうね。それに関しては、早めに知れて良かったと思うわ。面と向

かった時点で、そうなるということを意識した方がいいもの。これからの戦いのためにも」
悔しそうではあるが、それを勝利に繋ぐための情報として先んじて知っておくのは悪いことではない。今知っておかなければ、もし対面した時にそうされてしまった場合、回避が出来なくなる。
見ず知らずの何処かの誰かが犠牲になってしまったという事実は辛いが、それをもう次に活かすしかない。そこで犠牲になった者は、まだ治療の余地があるのだから。
しかし、こうしている間にも被害者が増え続けているという現実が辛かった。最悪、その増えている被害者がまた取り返しがつかないところまで改造されて治療不可になり……と、泥と化した者自体がネズミ算式に増えていく可能性すらある。
「これはもう、摂理などと言っているわけにはいかない。これ以上の増殖は、中立から完全に逸脱する。私達もより強めに動こう。今までも、海中に設置された泥は排除してきていたのだが、今はその比ではない。許されざる行為だ」
ここに来るまでの『観測者』一行は、手が届く範囲で泥の排除を続けている。しかし、たった3人で出来ることは少ない。それに、人間や艦娘の目に入らないように行動する必要すらある。そのため、最低限ドロップ艦が守られるようにと七つの海を股にかけるように動き回っている。
しかし、もうそれすらも言っていられない状況だ。龍驤の暗躍……むしろ堂々とした侵略は、摂理に反する者を罰する『観測者』の目に余る愚行だ。直接叩くことは出来ずとも、出来る限りの妨害を続けると話す。
道化達も任せろと言わんばかりに胸を張り、力瘤を作るようなポーズ。自分達ならば、泥くらい余裕で排除出来るのだと表現している。
「私達が龍驤と直接戦うことは出来ないだろう。困ったことに、それは中立から外れる。しかし、龍驤に侵蝕された者を救うことは出来そうだ」
「アンタの中立判定はよくわからないわ。でも、これ以上敵が増えな

いなら助かるわね」
「すまない。私に出来ることは元凶の撃破ではなく、元凶の枝を折ることのみだ」
つまり、龍驤によって侵蝕され、荒潮や鹿島のように侵蝕された艦娘をどうにかすることくらいは出来るということだ。
今までやらなかったのは、あくまでも中立を守るため。そのおかげで春雨と明石による治療方法が確立されているのだから、間違ってはいないことではある。『観測者』に頼っていたら、ここまで力を得ることは出来なかっただろう。
「これ以上の戦力の拡大は、我々が抑えよう。君達は、黒幕と龍驤のことに専念してくれればいい。しかし、見てわかる通り我々にも限度はある」
「その分はこちらでどうにかします。鎮守府のみんなも、多分ですが、『観測者』様に頼り切ることは考えないと思います」
春雨の直感……ではなく、鎮守府で生活してきたからこそ言える、提督のやり方。海風も白露もうんうんと頷く。あの提督なら確実にそう言うと理解している。
『観測者』も言ってしまえば部外者だ。施設の者達の手を煩わせずに今回の事件をどうにかすると以前から言い続けているくらいなのだから、『観測者』の手を借りるという選択も確実にしない。
「了解した。ならば、出来る限りの剪定は任せてほしい」
「そう言ってもらえるだけでも嬉しいわぁ。やっと一緒のことが出来るんだもの。いつもすぐに何処かに行ってしまうんだからぁ」
中間棲姫は苦笑しつつも『観測者』と共に同じ道を歩けることを喜んだ。育ての親のようなモノである彼に少なくない好意を抱いている中間棲姫としては、話せるだけでも喜ばしいのに、自分のピンチを解決してくれるとまで言ってくれているのだ。表にはあまり出さないようにしているようだが、昂揚しているのが誰にでも見てとれた。
「出来ることなら、状況を連絡しなさいよ。どういうカタチでもいいから」
「善処しよう」

相変わらずの反応。しかし、この善処はまだ信用出来る方。逐一施設に訪れることは無いだろうが、定期的に施設に戻って来てくれる可能性はこれで出来た。
「では、我々はもう行くとする。彼女と龍驤の力をこれ以上増させるわけにはいかない」
「お願いねぇ。私達はここから動くことが出来ないけれど、それ以外の出来ることはしっかりとやっていくわぁ」
「ああ、君は自分の身を守ることだろう。彼女は土地を器としても、未だに君の身体を狙っている。そうでなければ、完全な自分には戻れないと思っているようだからね」
正直、既に中間棲姫以上の力を持ってしまっていると言っても過言ではないはずだ。しかし、それでも本来の器を求めているのは帰巣本能か何かだろうか。
それが何であろうと、中間棲姫の身体を狙っているのは確実。そうなると、力を得続けた龍驤がこの施設に直接襲撃に来ることだって考えられる。今すぐでは無いかもしれないが、そう遠くない未来だろう。施設だけでなく、鎮守府を襲撃する可能性もある。
ならば、それまでに対策を立てなければならない。不可能では無いはずだ。今でも明石は中間棲姫から貰った髪の毛などから研究を続けているし、今までの経験からも予想外を潰すことはいくらでも出来る。それでも上を行かれる可能性が高いために、出来ることは全て網羅しなくてはならないが。
「辿り着く者、春雨」
最後に『観測者』は春雨の方へ。
「時には非情にならねばならない時がある。辿り着いた答えが、今の君には拒みたいものになるかもしれない。だが、それも躊躇わずに選択してほしい」
「……善処します。龍驤さんはもう救えないとわかりました。なら、なるべく安らかに眠れるようにしたいです」
「その選択が正しい答えだと思えるのなら、それが君の辿り着いた答えだ。ならば、信じて進めばいい。無理強いはしないさ。選ぶのは君

だからね」
救えないのなら、終わらせるしか無い。春雨に終わらせる力があるかはわからないが、出来る限りのことをする。それが春雨が辿り着いた答えだ。
見てもいない敵に対して答えも何もないのだが、1つ今の状態でわかることは、相対したらもう容赦無く攻撃をするしかないということだけ。救うという気持ちは、捨て去った。

その頃、とある海域。何処かの鎮守府から見えるわけでもなく、むしろ周囲に陸があるような場所でもない。そんな場所に出現したのは、姫である深海棲艦。
ドロップ艦と同じように生まれ、本能のままに侵蝕を始める。その姫も例に漏れず、人類を侵略せんと動きはじめようとしていた。
しかし、生まれたその場にいたのはその姫だけでは無かった。ポツンと立っている艦娘。どう見ても駆逐艦であり、取るに足らない深海棲艦の敵。
「姉ちゃん、ええ身体持っとるやん。それ、うちに使わせてくれや」
こいつは何を言っているのだと顔を顰めた瞬間、その駆逐艦が大きく口を開いた。そこからどうやったらその小さな身体に入っていたのだと思える量の泥が吐き出され、その姫の顔面に飛びかかる。
「っ!?」
驚く暇すら与えられず、顔に纏わりついた泥は口や鼻、耳から内部に侵入していき、やはり何処に入っているのかもわからないように収まっていく。
姫は何が起きているかわからなかった。だが、疑問に思うことすら出来ず、生まれたばかりの身体に過剰すぎる衝撃が走る。あまりにも強烈だったため、自らの身体を抱きしめながら蹲った。わけもわからなかったが、その表情は笑顔だった。
「っ、あ、あぉああっ!?」
初めて発した言葉は嬌声。そして、そのままその意識は塗り潰され

ていき、本来のモノは奥に押し込められてしまった。
何度も何度も震えた後、最後に大きく身震いしたかと思ったら、ゆっくりと立ち上がる。
「ふぃー、やっぱこの瞬間は堪らんなぁ。今までから結構成長出来たし、この身体はうちが使わせてもらうわ。ありがたいことに空母やし、うちの力をいっちゃん上手く使えるやろ。サンキューな、生まれたばかりのお姫さん」

まだ残っている快楽に身震いしながら、ニタリと笑う姫――龍驤。その身体は、奪い取った空母棲姫となっていた。

無理難題

施設から『観測者』達が去った後、話された2つの難題についてを共有するために、すぐさま堀内鎮守府に連絡をする姉妹姫。これに関しては一刻の猶予も許されておらず、最優先で伝えておかなくてはならないことである。大塚鎮守府の連絡先も交換しているおかげで、今すぐ4者面談が出来る状態だ。

まず優先的に話したのは、龍驤の変化。泥と化し、黒幕と同じような侵蝕と乗っ取りが可能になったことを伝える。

『なんだそれは……。龍驤はもう救えないということか』

まず頭を抱えたのは堀内提督。隣に控える五月雨も、この事実には少し悲しそうな表情を見せる。

『艦娘を深海棲艦にするだけでは飽き足らず、泥そのものに変えてしまうとは。つまり、龍驤は他者を侵蝕するということになるわけだ』

「それだけじゃないわぁ。他人を器にして乗っ取ることも出来てしまうの。もう侵蝕ではなく」

『寄生……憑依……どちらとも言えるわね。カタチを持たなくなった龍驤が、誰かに入り込んでしまうわけだもの』

大塚提督も気に入らなそうに吐き捨て、大将は淡々と状況を分析。秘書艦達は言葉もない。電は驚きを隠すことなく目を見開いており、吹雪は既に対策を考えるように俯いている。

「既に犠牲者も出てしまっているようなの。ドロップしたばかりの艦娘らしいのだけれど」

『……そうか、そうだね。そんな力を手に入れたのならば、試さない理由はない。大塚鎮守府を人員補充で乗っ取ろうとしたくらいだから、それを使いつつドロップ艦を掻き集めている可能性だってあるさ』

練度の高い艦娘が所属する鎮守府を乗っ取ることによって減った人員を補充しようとしたのではないかという疑惑がある。それが失敗に終わった今、強化されて仲間を増やしやすくなった龍驤が黒幕の側から離れて仲間を作り続けていると考えるのは妥当である。

今でこそわかっているのはドロップ艦ではあるが、乗っ取る対象は

艦娘だけとは限らない。深海棲艦だってその対象だ。ならば、動き回って乗っ取りながら勢力を増やすという、初期の黒幕のやり方をなぞっていけば手っ取り早い。練度は低くとも、侵蝕してしまえばいくらでも使い道はあるのだろう。それこそ、魂の混成という荒技があちらにはある。

そしてその黒幕のことについて。施設と同様に、敵対の意思がある時点で居場所が見つけられないという、鎮守府側からしてみれば八方塞がりな状況を突きつけられ、龍驤の対処以上に頭を抱えることになる。

『その特性を突破することは、私達にはどう考えても不可能ね。全員が黒幕をどうにかしようと躍起になっているんだもの』

『ですが、それでは龍驤をどうにか出来たとしても、最終的な解決にはなりません。時間を置いてより強化されていきます』

『勿論それは理解しているわ。だから、どうにかしてそれを貫かなくてはならないわよね。姉姫、その辺りに心当たりは』

「あるのだけれど……その手段は出来ることなら避けたいの。本人はやる気満々なんだけれど……」

ミシェルの話をしたら、確かに躊躇うと堀内提督と大将は納得。施設の中で最も力を持たないものであろうミシェルを使うのはあまりにも危険すぎる。それに、ようやくヒトの姿を得ることが出来たのに、最も過酷であろう任務に参加させるのは可哀想であるという感情が表に出てくる。

対する大塚提督は、口には出さなかったものの、使えるものは使うべきなのではとは考えていた。しかし、それが施設の中でも戦力外であると聞いた途端に考え方を変える。２人のように可哀想だからとかではなく、成功率から考えて難しいとして。

『やるのなら、強めに護衛をつけてになるわね。それでも危険であることは変わりないから、最悪、ミシェルには特訓なりなんなりをしてもらうしかないでしょう』

『もしくは、その特性を貫けるようなナニカを開発するか、ですね。性質的に、電探の反応も捻じ曲げるでしょうけど、そこをどうにか出来

れば……』
　今のままでは、あちらの思う壺だ。探し当てることが出来ない間に、龍驤が次々と侵蝕しながら勢力を拡げていく時間を与えてしまう。
　ならば、すぐにこの案件を持ち帰って、適切な者にやらせるのがベスト。そして、その適切な者は都合よく堀内鎮守府に所属している。
『それがわかった状態で、こちらは対策に力を入れようと思います。大将、それでよかったですか？』
『ええ、一番勝手を知っているのは、貴女の鎮守府の明石だもの。引き続きお願いするわね。ここまで来たら、多少の無茶は許容するわ』
『多少で済みそうに無いので、まずはやらせてから考えます。やらせすぎると大淀の胃に穴が開きかねません』
　明石による研究は未だに続いている。中間棲姫から貰った頭髪から成分解析をしながら、今使える装備をより使いやすく、そしてより強力になるように改良している。
　その内容に、『敵意を持つ者を弾く結界をどうにかするもの』という特に曖昧で抽象的な依頼が加わる。明石自身はやる気が上限値を超えそうではあるが、今回は解決を優先する方がいいだろう。
『それでもそのミシェルとやらに頼らざるを得なくなった場合は、我々が責任を持って護衛する。こちらの鎮守府の付近ではないかという話でしたよね』
『ええ。捜索は大塚鎮守府を基点にすることになるわ。そこに、姉姫達の誰かを派遣出来るようにどうにかする。穏健派の深海棲艦の存在は、今回の戦いの中でも一番と言っていいほど重要だもの。勝利のためには必要不可欠。それを種族だけ見て突っぱねるのは間違っているわ』
　対談だけでなく、戦力としての協力が出来るように、大将は確実に、しかし迅速に、大本営の中で基盤を作ろうとしている。
『だが、あくまでも出来ることなら我々だけの力で終わらせたい。姉姫達の平和を守りたいのは変わらないからね』
「そう言ってもらえるだけでも嬉しいわぁ。でも、お手伝い出来るこ

とはしたいと思っているから、そこも覚えておいてちょうだいねぇ」
『ああ、勿論。君達の意見は尊重するさ。それでこそ仲間だからね』
施設にもこの戦いに参加したがっている者は沢山いる。正義感だけではない、復讐心も含めて。むしろ、後者の方が多いくらいだ。半数は元々あちらに利用されていた、もしくはあちらとの戦いの結果で深海棲艦化してしまった者なのだから。

通信終了後、堀内提督はすぐに行動に移す。やらねばならないことはまず、明石に新たな開発の依頼をするため。
「明石、明石はいるかい」
「はーい、何ですかー？」
提督の声を聞くや否や、工廠の奥から大急ぎでやってくる明石。ここ最近はちゃんと眠っているようではあるが、研究が楽しいようで、若干身嗜みが甘め、髪が跳ねているところもあるし、作業着がところどころ汚れている。匂いには気を遣っているようなので、まだ限界は訪れていない。
「新たな研究課題が出てきた」
「おーっ！　いいですねいいですね！　先日の泥対策の強化も続いていますけど、それとはまた違ったタイプの課題なんですかね」
「ああ、これはかなり厳しいタイプだ。明石でも解き明かせるかどうかわからない」
その言葉に、明石は俄然やる気を出す。解き明かせない謎と言われたら、徹底的に調べ尽くしたいと考えるのがこの明石だ。
「姉姫の施設の特性のことは聞いているかい？」
「えぇと、確か悪意を持って接しようとする輩からその身を隠す、でしたっけ。だから今までは敵に見つかることなく平和に暮らしてきたけど、潜水艦の姉妹がその特性を文字通り潜り抜けてしまったせいで、敵に居場所がバレてしまったんですよね。だから泥の雨を降らされて、私が開発した泥感知の眼鏡と特殊な波長で泥を消し飛ばす装置が必要不可欠になりました」

「ああ、だが今回は泥の感知だけでは足らなくなった」
　明石の目が輝く。それは、完全に好奇心を孕んだモノ。
「敵の黒幕が、同じ特性を手に入れてしまったという情報を姉姫から伝えられた。今のままでは、我々は黒幕の居場所を発見することは絶対に出来なくなってしまったんだ」
「なるほど、なのでその特性を貫く装置を開発してほしいということですね。了解です！　でも、泥の解析や、姉姫の体組織の研究とはベクトルが大分変わりますね。深海棲艦特有の特性、物としてそれがあるわけでもない、概念的なモノというのは、私としてもかなり難しいところになります」
　物がそこにあるのなら、どうにかしてそれを手に入れてもらえればいくらでも解析出来る。しかし、特性に関しては全く目に見えないものだ。研究しようがない。
　強いて言えば、同じ特性を持っている中間棲姫の施設周辺の空気などを解析したら、何かしらのヒントが得られるかもしれない。だが、どの視点から空気を解析したらいいかは皆目見当がつかない。
「しかも、納期はなるはやですよね。時間を置いていたら、あちらはどんどん危ない方向に育っていきそうですし」
「まぁ、そうなってしまうね」
「今は時間が時間ですから、やるなら明日からか……いや、むしろこの時間を使って、あらゆる値を確認出来る装置を開発しておいて、明日の朝に施設の近くの空気を解析するのがベストですね。でも悪意を感知する結界なんてどんなシステムを……。っと、提督、ひとまず明日の朝まで時間をください。それまでに一旦、私がやれる限りのことを用意してみます」
　悩みに悩んでいるようだが、その表情は今まで以上にイキイキとしていた。無理難題を突破した時の快感を知っている明石は、ある意味それをいつでも求めているようなもの。そしてそれがやる気にそのまま繋がり、本来以上の力を発揮する。
　だから徹夜も簡単に選択肢に入れてしまうし、自分の体調などを度外視してしまう。大淀というストッパーがいなかったら、陸で轟沈す

るという笑えないところにまで行きそうになっていた。
「一応だが、施設にいるミシェルがその特性を突破出来るとのことだ」
「あの子の特性って何でしたっけ。詳しく聞いていないんですけど」
「『観測者』が言うには、理解出来ないことの影響を受けない、だそうだ」
「またふわっとした特性ですねぇ。科学者とはある意味真逆ですよ」
　全く参考にならないなと苦笑しつつ、明石は次の手を考え始める。こうなると明石は、徐々に周りが見えなくなってくる。
「特性というのは深海棲艦特有の特殊能力として考えるべきですよね。それは体組織から解析出来ることなんでしょうか。今は姉姫の髪があるし、そこから手に入った情報から黒幕の居場所が突き止められるかもしれないというくらいにまでセンサーの精度を上げることは出来ましたけど、そもそも私達の存在を拒んで近付けさせないというのはどういう原理なんでしょう。空気中に姉姫の細胞が散布されている？　魂の侵蝕とか出来るくらいだから、目に見えないそういうモノが周囲を漂っている？　それか艤装の性能なのかもしれませんね。深海棲艦には艦娘が持たないタイプの艤装もありますし、周囲に影響を与えるタイプがあってもおかしくないですし。そういえば海を赤くする者もいましたよね。それに近い何かがあるのかも。だとしたら、空間そのものが艤装……？　うーん、可能性だけで言えばいくつも考えられますねぇ。面白い、実に面白いですよー！」
　ヒートアップしてきた明石。これはもう止められないなと思い、提督はおそらく近くにいるであろう大淀を呼ぶ。
「大淀もいるかい」
「はい、ここに」
　明石が散らかした研究室の掃除などをしていた大淀が表に出てきた。艦隊運営の補助役として動くことの多い大淀は、ここ最近は明石の側にいることが多い。常に研究を続けることになっているため、目が離せないのである。
「明石がまた自分の世界に入ってしまったんですね。新しい課題が与えられましたか」

「ああ、それも無理難題だ」
「なるほど、こうなってしまうのも無理ないですね。奥に連れて行きますので、後は任せてください」
そう言うと、大淀は明石の頭を軽く叩き、周りが見えるようにしてから工廠の奥へと引っ張っていった。
明石にこういうことが出来るのは大淀くらいだと感心しつつ、その背中を見届けながら提督も執務室へと戻った。

何処もかしこも、黒幕の持つ特性を突破するために尽力する。しかし、時間はあまり残されていない。

優しすぎるが故

鎮守府にも連絡をしたことで、施設側も準備に入る。とはいえ、やれることと言えば自衛の手段を増やしていくのみ。

『観測者』が去った後の時間は、大分回復した大鳳が戦えるようになるために身体を慣らす時間に使うことにされた。哨戒も中断となっているため、春雨と海風はそれに付き合う。

春雨は大鳳に対してまだ引け目を感じており、せめて気にならなくなるくらいに回復するまでは側にいたいと考えていた。ここ最近は、空いている時間は大体大鳳と話をしているくらいである。海風も、大鳳が春雨に対して感謝の念を強く持っているため、同志と思っているようだ。

「身体の痛みも大分引きました。そろそろ、本格的に戦えるようにしておきたいですね」

失われた右腕を前に伸ばし、艤装を展開するように腕を構築していく。これは既に春雨や海風に習っていることであり、今まではどうしても傷口が痛んでしまっていたのだが、もうその痛みもほとんど無いため、実行に移した。

海風のようにインナーで隠すわけでもなく、どちらかといえば飛行場姫のように機械的な腕をそのまま見えるようにしていた。これは、大鳳の気持ちの問題。贖罪の気持ちを忘れないように、隠すことを拒んだ結果である。

今の大鳳の出で立ちは、伊瀬型2人が着ていた巫女服のような上半身と、大鳳自身の身に着けていたスカートとスパッツという下半身。白露もそうだが、混ざり合うと服装にも折衷案を採用する傾向にあるようである。古鷹はいろいろと事情があるが。

「確かに、感覚が少し違いますね。握ったときの感触も少し違う」

ギュッと手を握ると、金属音がする。艤装で出来た義腕なのだから当然なのだが、それなのに感触があるというのにはなかなかの違和感。

「慣れれば普段通りですよ。最初は慣れないかもしれませんけど、す

ぐに感覚を取り戻すことが出来ますから」
「なるほど、ならこの状態でいろいろと動いてみた方がいいということですね」
何度か手を握りながらも、どうせならと艤装も展開していく。
大鳳の艤装は腰に接続された甲板と主機という非常にシンプルな上に、伊勢と日向が混じったことで手に入れた一振りの刀を扱えるようにするため、その艤装すらもコンパクトになっていた。そして、本来なら混ざるであろう戦艦の艤装もなく、ボウガンに全て集約。
結果的に、大鳳は遠近両方をこなすことが出来る上に、身軽で小回りが利くという独自な存在へと昇華されていた。本人が小柄であるところもそれに拍車をかけている。
「うぅん、刀を握った感覚も少し違いますね。慣らしておかなければ」
その場でスラリと刀を抜いたかと思いきや、両手で握りしめて思い切り振り下ろす。ダンと強く足を踏み込んだことで、春雨は少しだけ地面が揺れたかのような錯覚を起こした。
「握りが手で違うなんて、おかしな感じですね。すっぽ抜けないように注意します」
そのまま横にも薙ぐ。利き手ではない左手で払っても、狙いも威力も１００％とは言えない。いざ戦いとなったら、それが僅かな差であったとしても致命的になる可能性もある。
しかし、利き手はまだ握りにも慣れていない艤装の腕。今全力を出そうものなら、確実に刀を放り投げてしまうだろう。タイミングと場所が悪ければ、それによって誰かが怪我をする。それもよろしくない。
「でも、これで私もこの施設を守るために戦えます。罪滅ぼしが出来ますから」
刀を納めて笑顔を見せる。もう完璧に吹っ切れており、罪滅ぼし、贖罪という言葉を使いつつも前向きである。
「身体は痛くないですか？」
「多少軋む程度ですから、もう一眠りしたら完治と言えるところまで行けると思います。腕の接合面も大丈夫ですね」

ブンブンと音がなりそうなくらい義腕を動かしても、顔を顰めるようなことがない。
「明日くらいから、哨戒に参加してもいいですね。私の艦載機も夜に飛ばせますし、夜目も利く方だと自負しています。どの時間帯でも問題なく参加出来ますね」
「心強いです。大鳳さんなら春雨姉さんを共に守れるでしょう」
「はは、そうですね。春雨を守ることは出来そうですよ」
妙に気があっている海風と大鳳。やはり、大鳳が春雨に対して最初に言ってのけた『救いの女神』という感想が、海風の考え方と完全に一致していることが大きいのだろう。
実際、大鳳は海風ほどでは無いにしても、春雨には大きな信頼を置いている。別にマゾヒストというわけでは無いのだが、痛みを以て悪に染まった自分を救い出してくれたという事実が非常に大きく、ただ救うのではなく容赦無く罰を与えてくれたことに感謝以外の感情が出てこなかった。
自分を救ってくれた春雨のことを守りたい。そう考えるのも無理はない。これは恩返しなのだから。
「私を守ってくれるのは嬉しいですけど、その時その時で優先順位を考えてくださいね。ここの仲間達が傷付くのが嫌なんですから」
「勿論。誰も傷付いてもらいたくないですからね。でも、春雨はその力から余計狙われやすいでしょう。必然的に順位は上がりますよ」
真面目に、ただ合理的に考えても、施設の中での優先順位は春雨は上位。だからといって他の者を守らないと言っているわけではない。臨機応変に対応するつもりは大鳳にもある。
だが、全く同じ状況下に置かれ、どちらも守るということが出来ないようなピンチに陥ってしまったとしたら、春雨を優先するだろう。当然他を見捨てるわけではない。
「私はこの施設の一員として、みんなを守ると誓いますよ。本当の最優先は姉姫と妹姫であることくらい理解していますから」
「それならいいんですが……」
「心配しないでください。それに、春雨には海風がついていますから、

そういう意味でも任せられますよ」
　艤装を消してさらに身軽に。今は作り上げた義腕に慣れるために、普段の生活をしていくようだ。
　だがその前に、春雨の肩をポンと叩いて、その目を見つめる。
「前にも言いましたけど、私のことで気負わないでください。貴女は間違ったことをしていない。生きているんだから、それでいいんです。死んで然るべきな私を救ってくれたんですから、そこを誇ってください。むしろ、ずっとそんな感じだったら逆に私が怒りますよ」
　ニッコリ笑っているが、目は笑っていない。自分のことで悩む春雨を見ているのは、大鳳としても嫌な気分になる。
「……そう、ですね。大鳳さんがそう言うなら」
「前からずっと言ってるんですけどね。気にするなと。それに、私は感謝していると。引け目なんて感じなくていいですから。正しいことをして、された側がそれを受け入れているのに、やった貴女がウジウジしてどうするんですか。私に失礼だと思いませんか？」
　海風のように全肯定するわけでなく、しっかりと春雨を否定するタイプの信頼。隣の海風にとっては若干思うところはあるかもしれないが、その物言いが春雨に必要なものだともわかるので、あえて何も言わない。自分では言えないことを言ってくれる大鳳は、そういう意味でも信用が出来る。
「わかりました。気にしないことにします」
「よろしい。戦闘の時にあれだけ割り切れたんですから、普段の生活から割り切ってくれてもいいんですからね」
　軽く頭を撫でて、ここからはトレーニングに行ってくると駆け出した。まずは施設外周のランニングから始めるとのこと。そもそも身体を動かすことが好きな大鳳は、ここ最近ずっと寝込んでいたことで若干ストレスが溜まっていたようである。
「姉さん、大鳳さんの言う通りです。姉さんは正しいことをしていますから、気にしたら相手に失礼になっちゃいます」
「うん……そうだね。ちょっと考えすぎてたかな」
「優しいのは春雨姉さんのいいところですけど、優しすぎるのも考え

ものなのかもしれません。いえ、春雨姉さんはそのままでいてもらいたいという気持ちもありますよ。その慈悲深さがあるから、今の春雨姉さんがあるんですから。でも、それで苦痛を感じているのを見ると、海風も悲しくなってしまいます。なので、春雨姉さんにはいつも笑っていてほしいです。楽しく生きてほしいんです」

妹を悲しませるわけにはいかないなと、春雨はより開き直ることにする。大鳳には申し訳ないと思ったものの、その大鳳自身が割り切れと言ってきたのだから、その意見は素直に聞き入れた。

「姉さん、龍驤さんが救えないことも気に病んでますよね」

「……うん、正直、ね」

「気にしちゃいけません。これはもう、割り切るしかないんです。自分でも言ってたじゃないですか。救えないのなら、せめて安らかに眠れるようにと。なら、全力で立ち向かうことがそれに繋がると思います。容赦なんて要りません。手を抜いたら、それこそお互いに苦しむだけです。私は姉さんが苦しむ姿を見たくありませんから」

流石海風、と春雨は内心思った。自分の思っていることを見透かしてくる。そして、的確に欲しかった言葉をくれる。

優しさだけではお互いに苦しむ。それはその通りだ。救えないのならば、全力でそれを終わらせることが、一番の救いになるはず。苦しむことなく終わらせる。それでいい。

「その優しさを全て私に向けてくれれば尚いいんですけど、みんなに分け隔てない愛を向ける姉さんだからこそ、女神のような美しさを維持出来ていると思うので、私のワガママでその絶妙なバランスを崩すわけにはいきませんよね。ああ、でもその愛を一身に受けてみたいという欲はどうしても出てきてしまいますね。私は春雨姉さんを愛していますから、周りが見えなくなるほどの相思相愛になってみたいという気持ちが無いわけではないんですけど、それだと姉さんが確実に困ってしまいますから、言葉にはしましたけど押し留めておくことにします。常に隣に置いてもらえているだけでも海風は歓喜に包まれることが出来るので」

少し出したら次から次へと愛が溢れてくる。今回は止めずに垂れ

流してストレス発散してもらうことにした。愛を語り続ける海風は、それはもうイキイキとしており、春雨はだんだんと恥ずかしくなってくるものの、今だけは好きに溢れさせて構わないと全て受け入れた。

しばらくして、トレーニングを終えた大鳳がいい汗をかいたととてもいい笑顔で戻ってくる。

「腕の調子もいいですし、合間に艦載機も飛ばして、哨戒が出来るかも確認しておきました。完璧と言ってもいいでしょう。姉姫に明日から哨戒に参加させてもらえるように話しておきますかね」

久しぶりに艦娘――深海棲艦らしい行動をしたことも、動けなかったことで溜まっていたストレスを大きく発散することが出来たようだ。

「深海棲艦の身体となっても、やれることは艦娘と変わりませんね」

「ですね。良くも悪くも何も変わりません」

「ストレスが溜まったら、春雨達も身体を動かすことをオススメしますよ。運動でしたら私も付き合いますし」

それもいいかなと春雨も考える。今回のように、変に思い悩んでストレスを抱えるのなら、身体を動かして発散した方が良さそうである。

ここ最近は哨戒や鎮守府との対談、そして襲撃に備えるなどと、やることは妙に多くなってしまっているが、合間を見てそういうことをしてもいいかもしれない。

それは春雨だけでなく、他の者にも言えることだろう。施設の中でも身体を動かすことくらいならいくらでも出来るのだから。

「そうですね。今はもう時間がありませんけど、時間が合えばお付き合いしてもいいかも」

「是非。ランニングでも違う景色が見えますからね」

そうやって気晴らしを定期的にやることで、本来の平和を実感する。戦いと関係のないことをすればするほど、心の安寧が戻ってくるだろう。

大鳳との関係も、よりよいものへと発展した。春雨の中のストレスはまだ全て解消されたわけではないが、それが晴らされる時は近いかもしれない。

その溢れた感情は

夜、夕食後。『観測者』との対談に参加出来ていなかった松竹姉妹と戦艦棲姫に、哨戒前に事情を説明。龍驤がいつ襲撃してくるかは誰にもわからないため、哨戒はより注意して実施してもらうことになる。常に例の眼鏡は装備し、泥刈機も持ち運んでやるまであった。戦艦棲姫の艤装ならば、それを持ち運ぶのも苦では無い。

「くれぐれも気をつけてちょうだいねぇ。何かあったら大きな音を立てて私達を起こしてくれて構わないからぁ」

「ええ、そうさせてもらうわ。丑三つ時でも容赦なくやらせてもらうから」

近場で遭遇するとは思えないので、まずは逃げの一手となるだろう。施設の者達が気付ける距離まで逃げた後、大きな音で全員起こす。ある程度近くまで来れば、中間棲姫か飛行場姫のどちらかが気付けるかもしれないが、２人だけが目を覚ましても意味がない。

ただでさえ、今一番の危険人物である龍驤は、艦載機を飛ばしつつ砲撃も雷撃も近接戦闘すら出来るような万能戦力だ。艦娘の中に入り込んでいたら、その能力は失われるのかどうかはわからないが、使えると考えるなら危険すぎる。

むしろ、黒幕と同じならば、乗っ取れば乗っ取るほど力を得ていく可能性すらあった。今この時も何処かの誰かの身体を使い力を得ているかもしれない。少なくとも１人犠牲になっていることは『観測者』の口から語られているのだから、以前よりも格段に面倒臭いことになっているだろう。

ならば、施設の仲間達で力を合わせて撃退するべきだろう。今ならば、泥であれば対処する手段を手に入れているのだから。

「安全第一が最優先ですね」

「ええ、勿論それが一番大事よぉ」

「当然だぜ。んな下らねぇことでここでの生活を終わりにしたくねぇしな」

松も竹も、万が一何かを発見したとしても、真っ先に戦闘をしよう

とは思っていない。誰も傷つかないように撤退を優先する。
　それもこれも、依存先の相方を失うのが怖いからだ。常に２人が揃っているからこそ、２人とも安定してここでの生活が続くのだが、今回の敵は侵蝕というカタチで仲間割れを引き起こすことが当たり前になっている。もし片方が侵蝕を受けた場合、１００％発作を起こす。それを考えるだけでも恐ろしく、ここ最近は夜にお互いを慰め合って眠りについている程である。
「今は何も無いことを祈るわ。自衛をするにも限界があるもの」
「ええ、もし何かあったら、どんな手を使ってでも逃げ果せてちょうだいねぇ」
「そうさせてもらうわ。この眼鏡でほんの少しでも何か見つけるようなら、すぐさま引き返すつもりよ」
　身の安全を守るならそれでいいだろう。誰も咎めないし、むしろ誰もが推奨する。
「じゃあ、夜の哨戒を始めるわ」
「ええ、よろしくねぇ」
　入念な準備を整え、細心の注意を払って、３人は夜の海へと駆けていった。いや、既に海に潜っている伊４７もいるため、哨戒メンバーは４人。
　こんな夜は海中こそ危険だ。泥であれば前以て眼鏡で確認出来るからいいものの、それすらも乗り越えてくる可能性が無いわけではないのだ。海上から何も見えていない夜の海であれば、その目で全てが確認出来る者、潜水艦を同行させるのも必要。
「ヨナちゃんにも眼鏡を持たせているけれど、海の中でも大丈夫……よねぇ」
「明石は耐水加工はしてあるって言ってたわ。ただ、泳ぎづらくはなるわね多分。スピード出すなら外すべきよ」
「ヨナちゃんのことだから、そこは臨機応変に出来るわよねぇ。こうなっちゃうと、もう信用することしか出来ないもの。あとはあの子達に任せて、私達は休ませてもらいましょう」
　何事もないことを祈りつつ、姉妹姫は今日という1日を終える。哨

戒に向かった者達がいるからこそ休むことが出来るのだと毎晩のように感謝して。この夜も例に漏れず。

そんな静かな深夜。別に悪寒などを感じたわけではないのだが、不意に春雨が目を覚ます。

隣では海風が可愛らしく寝息を立てており、その温もりを常時送り込むためという口実で、引き剥がせないほど強く春雨の腕に抱きついていた。おかげで寂しさも感じず、発作を起こすことはない。

「……本当にありがとね、海風。助かってるよ」

自由に動く方の手で軽く頭を撫でてやると、ニヘラと笑った。いい夢を見ているのかもしれない。

海風はこうなった原因を反芻してしまう方。悪夢を見やすくなってしまっていると言える。そう考えると、いい夢が見られているというのはとても良いことだ。

「んん……それじゃあもう一眠り……」

まだまだ夜中であるため、もう一度眠りの世界に戻ろうとしたところ、外から小さく音が聞こえた。

時間的には、大体深夜の哨戒の面々が一時的に施設に戻ってくる時間帯。バタバタとしているわけでなく、おそらく屋根のある施設の近くまで戻ってきて、休憩しながら用意していた夜食を食べているところ。

今回は伊４７だが、潜水艦が夜食を持って哨戒に行くことは出来ないため、基本的には施設に用意しておいて、休憩がてら全員でこちらに戻ってくるというのが時間配分にも含まれている。

「そんな時間……かぁ」

意識をし始めると、妙に頭の中が冴えてくるもの。眠りにつこうとしても、なかなか眠れない。だからといって、海風を起こしてまで外に出ようとも思えず、ただ目を瞑ってその場から動かないことにした。そうしていれば、勝手に眠くなってそのまま眠りに落ちることだろう。

海風の寝息を子守唄代わりにじっとしていれば、夜の暗さもあって自然と微睡んでくる。この時間は平和を実感出来て心地良い。
しかし、春雨がこの時間に目が覚めたということは、何かあるということにも繋がる。
「……んん？」
外から微かに聞こえていた音が、若干だが騒がしくなったように感じた。ただ夜食を食べているだけでは起こり得ないような、パタパタと歩き回るような音。
まるでそれは、哨戒部隊の誰かが何かを見つけたかのような動き。施設の中にいるわけではないので、外に何かがあったと考えるのが妥当ではある。あまり急いでいないようにも聞こえたのと、やはり悪寒が走らなかったのもあり、施設に対して悪いことが起きるようなことでは無さそうではある。
「何か……あったのかな」
ここまで来ると、冴えた頭が微睡むことも無くなり、外で何が起きているかが気になってくる。悪いことではないにしろ、少しバタバタしだしているということは、事件性があるということにも繋がる。
「んん……春雨姉さん、どうかしましたか……？」
その春雨の動きを夢の中でも察したか、海風も目を覚ます。おそらくいい夢のちょうどいい区切りの部分だったのだろう、満面の笑み。
「外で何か音が聞こえたような気がして」
「音、ですか……？　姉さん、いつもの悪寒は」
「今日は無いから、悪いことでは無いとは思うんだけど」
そうこうしているうちに、また少し大きめな音。眠っていれば気にならないだろうが、起きていると明確に耳に入るくらいの音である。
誰かが艤装を使っているとしても、戦艦棲姫が艤装を引き連れて行動をしているため、その足音かと思いきや、それとは確実に違う音も含まれている。
「行ってみますか？」
「そうだね……気になって眠れなくなってきてるし、ちょっと見に行ってみようか」

「はい」
都合よく海風も目を覚ましたので、何があったのか様子を見に行くことに。何事も無ければ別にいいのだが、何事かあった場合は人手が必要かもしれない。

「あ、悪ぃ、音デカかったか？」
施設の外、音を頼りに哨戒部隊がいるであろう場所に向かったところ、竹が春雨達に反応。松も２人の姿を見て小さく謝るように頭を下げる。
「ううん、たまたま目が覚めた時に音が聞こえただけだから」
「何かあったんですか？」
「ヨナが海の底で繭を見つけちまったんだ。オレ達は一旦施設に戻ってきたんだけど、その間に戦艦さんにここまで運んで来てもらっててな」
久しぶりの黒い繭。最後に見たのは海風の繭化なので、かなり昔のように思えてしまった。
しかし、繭がそこにあるということは、誰かが感情を溢れさせたということに繋がる。何かしらの事件に巻き込まれたのか、事故でこうなってしまったのかはわからない。
「すぐに孵化することは無いでしょうけど、ここに置いておくのはやめておいた方がいいわね」
伊４７が海底から掬い上げ、陸からは戦艦棲姫が運び、施設の近くまで持ってきた。
その繭は、春雨が海風の時に見たものとそっくりな、ヒト１人入っていることがわかるほどの大きさのそれ。戦艦棲姫の艤装だから軽々とここまで運んでいるのだが、そうで無ければリシュリューの艤装を使わなければ運ぶのも難しかっただろう。伊４７の艤装は陸では動きが緩慢かつ芝を抉ってしまうため、ここからは力を借りている。
「あらあらあら、繭を保護したのねぇ」

施設の島の中でバタバタし始めたことで、姉妹姫も目を覚ましてきていた。繭を見るなり、中間棲姫はすぐにその繭に触れて溢れた感情を読み取る。
「……溢れた感情は、『恐怖』……みたいねぇ。余程恐ろしいことが起きてしまったから、心が壊れてしまった……と考えるのが妥当かしらぁ」
恐怖が溢れて繭になったものは、この施設の中では初めて。恐慌状態となると、孵化したときももしかしたら暴れてしまうかもしれない。怒りとはまた違ったカタチで、深海棲艦化した後が怖い。
「このタイミングで繭があったとなると、どうしても黒幕側に何かされたからこうなったと考えちゃうわよね」
「泥が無いことは眼鏡を使って確認済みです。妹姫さんも見てみてください」
松に渡された眼鏡を使い、繭をよく観察する飛行場姫。言う通り、この繭からは泥の反応は1つもない。
とはいえ、あちらが別種の泥を使っていると言われてしまうとまた話が変わってくるのだが。眼鏡で感知出来ない泥を使われたら流石にお手上げ。
「いの一番に触れに行ったお姉も大丈夫よね」
「ええ、問題ないわぁ」
泥が無いと直感的に判断出来たため、中間棲姫は一切躊躇わずに繭に触れた。こういうところは、一番接点が近い者であるおかげで、感覚的にわかるようである。
「空いてる部屋ってあった？　この繭何処に置けばいい」
「そうねぇ……今はベッドルームにしておきましょうかぁ。最近はみんなが上手く自分の部屋に分配してくれているみたいだし、数日ならそれでも問題ないわぁ」
それを言われて、戦艦棲姫は繭を慎重に施設の中に運び込んでいった。
「恐怖……まさか、龍驤さんに襲われたことで、とかでしょうか」
春雨がボソリと呟く。誰もがそうではないかとは考えていたが、口

には出していなかった。
　昼のうちに何処かのドロップ艦を侵蝕していることは確認出来ているため、今頃も下手をしたら別の海域で大暴れしている可能性だってある。この繭に包まれている艦娘は、その時に巻き込まれた結果こうなってしまったのかもしれない。
　それはまるで、春雨と同じような境遇である。ドロップ艦か何処かの鎮守府に所属していた艦娘かどうかもわからないが、未知の敵に襲われたことで錯乱し、あり得ないほどの恐怖を感じたことで溢れ、繭となったとするのが妥当か。
「孵化したこの子から聞くのがいいとは思うけれど、恐怖が溢れているんだものねぇ……話がまともに出来るかもわからないというのが現状よねぇ。これ以上怖がらせたくないし、これ以上壊れてほしくないから、慎重に行きましょう」

　全ては繭から孵化してからの話になる。しかし、恐怖が溢れたということは、今まで以上に困難がありそうである。

繭の謎

深夜の哨戒で発見された黒い繭。それが何者なのかはわからないが、溢れた感情が『恐怖』であることは中間棲姫が解析済み。こうなってしまった時の状況が余程酷かったと想像出来る。

ここ最近から考えて、犠牲となった理由は龍驤にあると誰もが考えた。既にドロップしたばかりの艦娘が1人侵蝕を受けていることは『観測者』の口から語られており、そこから勢力を増やす際に、この繭に包まれている艦娘が恐怖で心が壊れる程になってしまったのだろう。

「怪我を負っているのなら、孵化まで遅くて3日ねぇ。早くても1日はかかるから、今から最低丸一日はこのままになるわぁ」

夜中ではあるものの、繭の前に集まった者達に簡単な説明をする中間棲姫。残りの者には朝に伝えるとのこと。

今は誰も使っていないベッドルームを使用して、中間棲姫が定期的に経過を確認するようだ。あとは海風のときのように、日が出ているときは伊４７が隣に待機すると話していた。じっと1人で見守り続けるのは慣れたものだと胸を張る。

「でも、恐怖が溢れたとなると、孵化した後も少し怖いわね。半狂乱で暴れ回るかもしれないわ」

「そうねぇ。私の予想だけれど、そうなるか、むしろ何も出来なくなってしまうかのどちらかになるんじゃないかと思うのよねぇ」

施設に今までいなかったタイプである、恐怖が溢れた者。全てに恐怖を感じるようになった場合、それを排除しようと暴れ回るか、それから逃げることも出来ずにガタガタ震えるかのどちらかではないかと、中間棲姫は分析する。

「もしくは、何もかも忘れている可能性、なんてのも考えられない？」

「かもしれないわねぇ。あまりにも怖すぎて、心の奥底に封印してしまうかもしれないわぁ。その場合は、心が壊れちゃっているから、恐怖そのものを失っている……なんてことも考えられるわねぇ」

第三の選択肢として、記憶の封印。恐怖が溢れたということは、そ

れを回避するために心が防衛策に出るかもしれない。そうなった場合、溢れたことで恐怖そのものを失うという選択をする可能性がある。

そうなったら、何があってもニコニコ笑っているような逆に怖い存在になるだろう。それに、死をも恐れなくなるような狂戦士（バーサーカー）にもなるか。何せ、何に対しても恐怖を感じないのだから。

「どう転んでも厳しいわね……最後の以外は生活も難しいじゃない。最後のは制御出来ないし」

「……あまりこういうことは言いたくないのだけれど、恐怖が溢れた時点で、大分歪んでしまっているでしょうねぇ」

生活に不備が出るレベルの溢れ方だと、保護をするにも難しい。勿論、だからといって見捨てるわけがないのだが。

「なら、誰かが繭に何かを語り続けるのはどうでしょう。絶望が溢れたはずの私が、春雨姉さんの慈悲のおかげで乗り越えることが出来ました。この繭のヒトも同じようにすれば、溢れた感情を乗り越えることが出来るのでは」

そこで思い付いたのは海風だ。実体験を基に、溢れた感情がどれだけ酷くても、それを『依存』に切り替える裏技的な手段を提示。

生活に難が出るくらいなら、明るく楽しく生きていける依存体質にした方がマシなのかもしれないが、姉妹姫は正直何とも言えなかった。それをやって恐怖が本当に払拭出来るか。そして、出来たとしても誰に依存させるか。

「やるならアタシがやるわ。お姉にこれ以上負担を増やすのもどうかと思うし、アタシに依存するなら恐怖が無くなるくらいに鍛え上げてあげるわよ」

「それじゃあ……お願い出来るかしらぁ。もしかしたら何もないかもしれないけれど、万が一を考えて動いた方がいいものねぇ」

ここで、飛行場姫が繭の側につくと宣言。声をかけ続けると言っても程良く、距離を取るわけでもなく、恐怖を払拭するように撫でながら話すことになるだろう。

海風に対する春雨のように、元々想いを寄せていたようなことは今

回はない。それならば、そこまで徹底的に依存することも無いはず。むしろそれに賭けているところもある。
「今日はもう休みましょうねぇ。この子のことは、朝にまた考えましょう」
「そうね。戦艦の、哨戒はまだやる？」
「ええ、勿論。まだ夜は長いわ。しっかり見て回っておくから、貴女達はグッスリ寝ておきなさい」
松竹姉妹と伊４７も哨戒を中断するつもりはないようで、戦艦棲姫と共に改めて外へと向かう。まだまだ夜は終わらないため、こういう時に隙を見せるわけにはいかない。またそんな時こそ狙われたりするのだから、気を抜かずにしっかりやれることをやっておく。
「春雨ちゃんと海風ちゃんはもう寝ましょう。私達も休ませてもらうから」
「はい、また朝に」
春雨と海風も撤退。作業に参加していたわけでは無いのだが、新たな繭の存在に若干気疲れしてしまったか、２人して寝床に入ったらすぐに睡魔に襲われることになった。

朝、朝食の時間に繭のことが話される。たまたま目を覚ましていた春雨達は気付いたが、基本的にはかなり静かに事を運んでいたため、他に気付いている者は誰一人としていなかった。そのため、ベッドルームに繭があると言われて誰もが驚く。
ミシェルは相変わらずそれに対して疑問を持つが、ジェーナスが上手く説明していた。ヒト型になる前のミシェルみたいなものだと言ったら素直に納得した辺り、やはり実体験があると疑問を解消しやすいようである。
「今日一日は孵化することは無いと思うわ。で、管理はアタシとヨナがしていくから、みんなは予定通りに動いてちょうだい。漁の方は今日は休みで大丈夫よ」
飛行場姫を中心として、その繭を見守っていくと決定。溢れた感情

が『恐怖』であることも伝わったため、ここは有識者に任せるという方針となった。
　ここの面々の中でも、後半仲間になった者達でなければ、海風という前例を知っている。余計なことをしたら繭に包まれている何処かの誰かに余計な影響を与えかねないため、繭に対しては極端に接するのは控える。
「それじゃあ、あたし達は哨戒だね。ミシェルもお昼ならおねむにならないでしょ」
「夜はどうしても眠くなったけど、お昼なら全然大丈夫っぴょん！海の中も任せてほしいぴょん！」
「ということで、Ｍｉｃｈｅｌｌｅもまた一緒に行ってくるわ」
　勿論、哨戒はいつも通り実施。午前の当番は白露、ジェーナス、ミシェル、そしてリシュリュー。午後は叢雲、薄雲、コマンダン・テスト。春雨と海風が深夜の担当であるため、今日はゆっくり休むことになる。
「この後、繭のことはまた提督くん達に話しておきましょうかぁ。もしかしたら、何処かの鎮守府の子かもしれないもの」
「そうね。大将に誰か被害にあってないか調べてもらうのがいいわね」
　中間棲姫がわかるのは溢れた感情だけ。中に入っている者の素性はわからない。ドロップ艦であれば、他の鎮守府とは関係が無くなるため、施設でしっかり保護をするだけで済むが、何処かの鎮守府の艦娘となると話が変わる。この事件に巻き込まれている鎮守府が増えるということは、施設と関わり合いになる鎮守府が増えるということにも繋がるからだ。
　とはいえ、仲間が不審に姿を晦ましたとなると、鎮守府だって騒然となる。それをすぐに解消出来るなら解消してあげたい。その鎮守府がどんなところであるかは、大将に判断してもらえばいい。関わり合えそうならば、大塚鎮守府のように後からでも対話は出来る。
「それじゃあ、今日もみんなよろしくお願いねぇ」
　施設の方針は、あくまでも繭の保護。中にいる艦娘がどうであれ、

こうなったからには施設の一員として楽しく生きてもらわなくてはいけない。恐怖を払拭して、明るく笑えるようになるまでは姉妹姫が親身になるだろう。

この後すぐに繭についての情報を共有。今は飛行場姫が繭の側にいるため、ダイニングでは中間棲姫と空いている春雨と海風が鎮守府に対応する。

『繭が見つかったのか……かなり久しぶりな気がするが』

「そうねぇ。最後にこの施設で繭を見たのは海風ちゃんの時だから、もうそれなりに経つわぁ。頻繁に見つかっても困っちゃうけれど」

話しながらも、大将は吹雪と共に裏側で行方不明になっている艦娘がいないかを調査している。

『その繭というのはどういうものなんだ。実際の物を見せてもらえると助かるんだが』

大塚提督もだが、繭そのものを見た者は人間側にはいない。艦娘でもそれそのものを見たことがある者は海風のそれを見た者達のみである。

「一度見てもらいましょうかぁ。貴方達には知っておいてもらってもいいでしょうから」

これは実際に見せた方がいいと思い、せっかくタブレットが持ち運び出来るのだからとそのままベッドルームにまで移動。そこには、ベッドのど真ん中を占拠する大きな繭が鎮座し、その隣に飛行場姫が控えていた。

繭は昨晩から何も変わらず、別に脈動しているのがわかるわけでもなく、本当にただそこにあるだけ。孵化する直前まで何も変わらないため、常に見ているべきではある。

「あら、みんなにこの子を見てもらう感じかしら」

「ええ、知っておいてもらった方がいいでしょう」

「そうね」

画面越しに繭を見て、誰もが言葉を失っていた。艦娘という存在

は、中身が違っても見た目は人間と殆ど同じ。それが繭になるだなんて普通は考えられない。しかし、それはどう見ても繭だった。
　人間と同じサイズの黒い繭は、それこそ昆虫が完全変態するためにその身を包むモノと同じ。中で艦娘から深海棲艦へと変異しているというのを、嫌と言うほど伝えてくる。
『……感情が溢れた時、艦娘の内部からそれが泥となって溢れ出て、その身を包む……と言っていたね』
「ええ。私はその瞬間を見たことが無いのだけれど、みんな同じように感情が溢れ出してこのカタチになるみたいねぇ」
「私も、それに海風も、同じように溢れました。手の甲から泥がわっと出てきて、身体をどんどん覆っていきました」
　海風もうんうんと頷く。心が壊れて茫然としている時でも、自分がそうなっていたという実感はあるようである。
『それも泥なのか。黒幕がばら撒いているものと何が違う』
　ここで大塚提督からの質問。毎度泥という言葉で表現されるので混同してしまいそうになるため、どうしても気になったようだ。
「1つわかっているのは、提督くんのところの明石ちゃんが作ってくれた眼鏡では、繭は反応が無いことよぉ」
『……艦娘と深海棲艦は近しい存在であるという噂はあったが、似て非なるものではあるわけだ。性質は同じでも、出来ることがまるで違う』
『一度裏返ったら、表に戻ることは出来ないようだがね』
『肝に銘じておこう。同じことを俺の鎮守府では起こさない』
　単純に戦力の減少を避けるためではあるのだが、その言葉は艦娘のことを思ってのことにも聞こえる。
「艦娘も同胞（はらから）も、そこは同じなんでしょうねぇ。もしかしたら、誰もが本体はこの泥なのかも。だったら、泥というのは失礼かもしれないわぁ」
『敵のモノは泥で充分だ。だが、艦娘のモノは……少々聞こえが悪い。同じモノでも呼称は変えるべきだろうな。何と言えばいいのかは俺には思いつかないが』

『それはまぁおいおいでいいだろう。今はその繭の中にいる艦娘が何者かを調べたいところだ』
　そうこうしているうちに、大将がある程度調査を終える。一言も発しなかったが、ここ最近での報告書に全て目を通していたらしい。吹雪も同じように確認して、首を横に振っていた。
『今のところ、他の鎮守府から被害報告は出ていないわ。昨晩というのならまだ報告されていないだけかもしれないけれど、ドロップ艦が襲われたと考えておきましょう。もし何かあれば、追って連絡するわ』
「ええ、ありがとう大将さん。どうであれ、この子は私達が保護するから、安心してちょうだいねぇ」

　これで繭のことも情報共有完了。孵化するまで見守る必要はあるものの、別の場所に心配をかけることは一応無くなる。
　しかし、これが誰に何をされてこうなったかを知るためには、孵化を待つしかない。

確実に着実に

黒い繭が施設に保護されたことは、堀内鎮守府に所属する艦娘全員に知れ渡った。今はその黒い繭に悪い影響を与えないようにと、調査隊の派遣も控えることにしている。

施設側ですら、艦娘から感情が溢れて泥に包まれる現象が何なのかがわかっていないのに、それ以上にわかっていない艦娘達が向かうのは、流石にやめた方がいいと提督が考えた結果。対話ならいつでも出来るし、幸いにも直に向かったのはつい最近。

「状況は逐一教えてもらうつもりだが、こちらから関わり合うのは控えた方がいいだろう。ただでさえ溢れた感情が『恐怖』だというのなら、僅かなズレで目も当てられないことになりかねない」

繭に包まれているのだから、外で何が起きているかなんて中の者には伝わらないはずなのだが、身近にずっといた春雨の声を、中の海風が聞いたという証言もあるため、何がどう作用するかわからない。

艦娘達が周囲にいるからこそ良い影響を与える可能性もあるのだが、当然悪い影響になる可能性だってある。どう転んでも良いというのなら調査隊を向かわせるのだが、そうで無いのなら触れない方が確実。

「『恐怖』ってことは、相当酷い目に遭ったってことですよね」

お茶を淹れながら五月雨が話す。溢さないようにとやたらと慎重なのだが、提督の言葉に反応したことで集中力が途切れかけていた。若干ハラハラする展開だったが、お茶は溢さなかったので一安心。持ってくる時にも気をつけるように注視。

「ああ。大将が調べてくれているが、その子はおそらくドロップ艦だ。右も左もわからないような状態で襲われたら、少し気弱な者ならば恐怖に呑まれてしまっても仕方ないことだろう」

「余程想定外が無いと、そこまでにはならないと思いますよ。例えば……」

「例えば？」

「……信じていたヒトに裏切られたとか」

言っていて気が滅入ったようで、今のは無しと手を振る。
裏切りが恐怖に繋がるかはさておき、何かあったのは確かだ。そして、龍驤がドロップ艦を侵蝕していたという情報も入っている。ならば、もしかしたらその艦娘というのが、犠牲者の顔見知りだったのかもしれない。それか、実は複数人がドロップしていて、自分以外がやられたか。
どうであれ、心が壊れる程の恐怖を感じたのだから、龍驤が今現在やっていることは相当なことであるとわかる。勿論、鎮守府の面々のみならず、施設の者達も、今の龍驤の姿は知らない。
「我々は孵化してから考えればいいだろう。話せるようなら理由を彼女達が聞いてくれるはずだ」
「ですね。でも、まともに話が出来ますかね……」
「どうだろうか。妹姫が側に居続けるつもりのようだが、それで海風のように溢れた感情を塗り潰してしまえば、まともに生活は出来るようになるかもしれない」
それが正しいかと言われれば何とも言えないのだが、生活出来ない可能性があるよりは、確実に生活出来るようになってもらっていた方が良さそうではある。それが心をより歪めることになったとしても、背に腹はかえられないと考えるか。
施設の者達ではなく、大塚提督なら真っ先に推奨しそうだと苦笑する。彼ならば、最もマイナス面が少ないところを優先する。恐怖に慄き動くことも出来ないような者より、歪んでいても話が出来る方がマシだと。
「難しいところだ。何もかも忘れていればいいが、そんなことは無いだろうからね」
「その時の記憶だけ無くなってるなんて都合のいいことは無いですよね……絶対悪い方向でおかしくなってますよ」
奇しくも、情報共有より前に姉妹姫が話していたことを提督と五月雨も話していた。泥が溢れたことで記憶を失い、そして一緒に恐怖そのものを失っていたらどうなってしまうのか。
「……確か、繭が孵化した時、その破片を取り込ませる……という話

だったな」
「はい、私もそう聞いていますよ。万が一こちらで繭を見つけちゃった時の対処法を聞いてますから」
「取り込んだことで、溢れた艦娘は艦娘としての心を取り戻す。取り込まなかった、取り込めなかった場合は、最初期の叢雲のように完全に壊れた状態となる。これもわかっていることだね」
ふむ、と考えるように腕を組む。
溢れた感情が泥となっているのなら、あの繭は『恐怖』という感情そのものなのでは無いかと、提督は考えた。適切な処置として孵化した際の破片を取り込ませているが、そうしたことで溢れた感情を取り戻し、むしろそれが過剰に入ることによって、心がより壊れている可能性すら。
「あえて泥を取り込まなければ、恐怖は失われるのかもしれない」
「でもそうすると、艦娘らしさも失われますよね」
「おそらくはな。あちら立てればこちらが立たぬとはよく言ったものだ。全部いいとこ取りはさせてもらえない」
妙案といえば妙案ではあるが、それこそどうなるかわからないような手段だ。なるべくなら避けるべき。
「本当に、あの泥っていうのは何なんでしょうね。春雨や海風からも溢れてるわけですけど」
「感情が溢れた結果が泥だとしたら……黒幕の泥も全く同じように生成されているのかもしれないな。深海棲艦が溢れたら、器と中身が分離する……なんてことがあったりして」
「艦娘と深海棲艦が似たような存在なら、深海棲艦だって溢れることはあるかもですよねぇ」
今は考えてもキリが無さそうである。それを知るのは黒幕だけ。ただでさえ、溢れた艦娘達ですらその辺りはよくわからないのだから、むしろ考えれば考えるほどドツボにハマっていく。
「今は彼女らに任せて、僕達は出来ることをやっていこう。敵意を拒む力を貫く手段の開発を優先だ」
今鎮守府が出来るのは、繭についてではない。何としてでも黒幕を

撃破することにある。
施設の者達を手を煩わせず、特に最も力を持たないミシェルの力を借りなければならない状況は避けたいため、その手段をどうにかして見つけなければならない。
「明石さん……大丈夫ですかね」
「大淀が監視しているから大丈夫だと思うが、一応見に行っておくか」
話している内に不安になったか、提督と五月雨は工廠へ。
今頃明石は現在進行形で研究と開発を続けていることだろう。しかし、無茶をするのもわかっているため大淀が制御役として常に隣にいるのだが、それでも不安になってしまうのは明石が明石たる所以。

工廠の奥、明石の研究部屋。大淀と共に今回の敵への対策を日夜研究しているのだが、今は珍しく行き詰まっていた。
「あー！　ホントにわかんない！　物が無い状態での研究がこんなに難しいなんて！」
「いや、物が無いから難しいんでしょう。治療薬だって、泥が確保出来たから完成したようなモノでしょうに」
「そうだけど！　そうだけどもさぁ！」
頭を抱える明石を見て、溜息を吐きながら紅茶を用意する大淀。明石の頭を回転させるため、砂糖を少し多めに。
「なんなのさ特性って。目に見えないけど敵対する相手を拒む空間？　見えてないんだから作用しないでしょ！」
「そうかもしれないけど、深海棲艦はそういうものだって考えるのが」
「いや、違う。今までの成分解析から、深海棲艦は艦娘と殆ど同じってことはわかってるの。だから、この特性だって絶対解析出来る。目に見えないっていう考え方が多分間違ってる」
大淀との対話形式で考えを纏めて、次へ次へと繋げていく。1人で研究するよりは確実に捗り、自分とは違う見解を混ぜ合わせることによって新たな道を探り、引き寄せる。
「じゃあ、見えないだけでそこにあるってこと？」

「それが一番妥当じゃない？　だって、泥だって調べてみれば目に見えないくらい小さい微生物の塊みたいなものだったわけだからさ……え、そういうこと？　泥を散布してるみたいな感じ!?」
辻褄は合うが、だとしてもそれが何をしたら敵対する者を拒むなんて作用になるのかがわからない。
考えられるのが、知らない間に散布されている泥が付着し、真っ直ぐ進んでいるように見えて実は逸れているという動きをさせられるということ。そして範囲から離れたら付着していた泥が剥がれてまた元の位置に戻る。
これもある意味洗脳だ。中間棲姫も無意識にその力を使い、自分に近付くなという指示を送り続けて、その指示を達成したら終わりで洗脳を解除する。そう考えると意外と噛み合う。
泥がそもそも魂を侵蝕して自分の思い通りに洗脳するということを考えれば、この特性も泥の延長線上にあると言われれば納得出来る。一定の空間に微生物が漂っていると言われると、それはそれで恐ろしいものがあるが。
「だったらあの眼鏡で見えるはず。それに、開発した波長を使えば掻き消せるかも」
「ある程度の塊になっているから消せるというのは考えられない？」
「うっ……確かに。泥は群衆になってるから波長が効くけど、目に見えない空気みたいな状態だと、感知すら通用しないか。でも敵対する者にだけは作用して、しっかり仕事だけはすると。無茶苦茶すぎるでしょ！」
答えには近づいているのだが、対策がまだ出来ないというのが現状。そしてそれが確実に通用するかと言うのもわからない。
むしろ、中間棲姫のように優しい洗脳ならば、敵対する者を拒むだけで済むが、黒幕はそんなことでは終わらない。見つからない挙句、その一切見ることの出来ない微生物のような泥が入った時点で、ゆっくりゆっくりと侵蝕されていく可能性だってある。
そうなると、その空間に入ること自体がアウトだ。おそらく完全に密封しているはずの防護服越しでもすり抜けてくる程に小さく、時間

をかけることで終わりに近付くという最悪な空間。
「なら、感知出来る範囲をもっと強くする？」
「限界はあるよ。それを超えられたら、何処までやっても空間が見えない。それで飛び込んじゃったらアウト」
　眼鏡で見えるのはあくまでも泥。微生物1体1体を見ているわけではなく、塊になっていること前提の感知である。確認したわけではないが、泥を顕微鏡で見てもそれが見えるかどうかわからないレベルなのだから、それを見えるようにするのは流石に無理。代わりに体内に含まれていても見えるようにしているのだ。
　というか、1体1体見えるようにしたら、情報量が多すぎて眼鏡が壊れる可能性すらある。
「だったら、遠くからその空間が見えるだけというのは」
「まずはそれかなぁ。空間ってことはある程度敷き詰められてるって考えるのが妥当だよね。なら、例えばセンサーがその空間の先が見えなくなってる場所を見えるようにしてみる……かなぁ」
　泥を見るように、空間を見ることが出来れば、ある程度の回避は可能。おおよその場所も見当がつくはずだ。
「まずはそれからにしよう。狂わされる空間が見えるようになれば、次に繋がるからね。うん、そうしよう。万里の道も一歩から、だよ」
「そうね。時間はあまり残されていないかもしれないけど、焦っていくつも飛ばすことは出来ないから」
「そうと決まれば、まずは眼鏡の改良からだね。範囲を拡げればある程度は変わるかな……試してみなくちゃわかんないか」
　方針は一応決まったようである。とはいえ、まだまだ難所は続く。
「調子はどうかな」
　ここに提督と五月雨が入ってくる。ちょうど方針が決まったところなので、明石がニコニコしながらいつものマシンガントークで説明を始めた。この調子なら、まだ先に進めそうである。

　対策はゆっくりとだが確実に開発されていく。こうしている間に

も、裏側では龍驤が勢力を拡げているのはわかっているが、だとしても、一歩一歩進んでいかねばならない。

最終的に勝つために。

依存

午後の哨戒も終了したが、黒い繭は一切の反応無し。飛行場姫がたびたび話しかけ、繭を撫でるなどしていたが、その時に何か変わったかどうかなんてわかるわけがない。とはいえ、やれることは全部やる。

海風が特別というのもある。それをしていたのが最愛の姉である春雨だったために依存体質へと変化したというのも考えられる。叢雲の時といい、やはり姉妹というのは大きな影響を与えるものである。

この繭の中で変化を遂げている艦娘の姉妹がこの施設にいればいいのだが、今の状態でそれは絶対にわからない。透けて見えるわけでもないし、中間棲姫が触れてもわかるのは溢れた感情のみ。

「あと一晩はかかるわね。孵化は明日の朝ってところじゃないかしら。触っているだけじゃ確証は無いけども」

「そうねぇ。じゃあ、妹ちゃんはこの部屋で寝る？」

「ええ、そうさせてもらうわ。もし何かあったとしても、近くに誰かいなくちゃいけないでしょ」

別室で眠っている間に孵化するなんてことがあったら、欠片を取り込むことも出来ず、恐怖が悪化して暴走することが目に見えていた。ならば、一日中隣に居続けた飛行場姫が一緒に眠るのがベスト。夜中に孵化を始めても、隣にいればすぐに対応出来る。一晩何事もなくても別に問題ない。

実際、この施設に運び込まれた春雨の繭も同じようにしていたのだ。練度が高い春雨が死にかけたところで繭化したので、丸二晩をベッドの上で眠ったのだが、状況自体はその時と殆ど変わっていない。

「万が一のことがあったら、この子を運べるのは私が戦艦くらいでしょ。リシュリューは壁を壊せば出来るかもしれないけど」

「確かにそうなるわねぇ。そういう意味でもお願いするわねぇ」

春雨の時は、運び出せそうなのは飛行場姫とリシュリューくらいし

かいなかったが、リシュリューの艤装は少々使い勝手が悪い。そういう意味でも、夜に傍にいるのは飛行場姫が適任である。
「今日の夜の哨戒は？」
「春雨ちゃんと海風ちゃん、そこに古鷹ちゃんの予定だったんだけれど、今晩から哨戒に参加してくれるってことで、大鳳ちゃんが入ることになったわぁ。あとは、潜水艦の姉妹ちゃんねぇ」
「大鳳か。初陣なら春雨達と一緒がいいかもしれないわね。あの子もいろいろあるだろうし」
深夜の哨戒から始めるというのは少々不安ではあるものの、潜水艦姉妹が便乗することと、そもそもあちら側での経験で夜の戦いには強いこともわかっている。コロラドもそうだったのだから、大鳳も即戦力だ。
あと、大鳳が今晩から哨戒に参加すると言い出したのは、春雨と海風が当番だったから。やはり、ある程度慣れ親しんだ者が最初の方がいい。療養中に最も話をしたのはこの2人なのだから。

「ということで、今日からよろしくお願いしますね」
夜、いつもの岸で今日の仲間達にお辞儀する大鳳。そこまでしなくてもいいのにと春雨が言おうとするものの、大鳳はそういうところで非常に生真面目であるため、するがままにしていた。別に挨拶は悪いことでは無い。むしろ、礼儀正しいことは褒められて然るべきである。否定することは無いと判断。
今回の大鳳は通常の装備に加えて、泥刈機も一緒に持ってきていた。もし何かあったときにすぐに対処出来るようにである。
「夜の海でも問題は無い、ですよね」
「はい、何も問題は無いですね。常に哨戒機を飛ばしながら行きましょうか。高高度も可能ですよ」
「頼り甲斐があります」
この施設で高高度からの哨戒が出来るのは、今まで飛行場姫しかいなかった。それでも島から動けないのだから限界はある。中間棲姫

も高高度に艦載機を飛ばすことは可能なのだが、艤装を施設から動かさないので、実質出来ないと同じ。
　そこに、移動出来る空母の大鳳が入ったのはかなり大きい。確認出来る範囲が拡がったということは、それだけ施設が守りやすくなるということだ。それでも空から見るだけでは足りないため、海上の目と海中の目、どちらも必要。深夜に見て回るのだから尚更である。
「それじゃあ、海の中もよろしくね」
「了解。いつも通りこなすから」
「海の中は任せて」
　潜水艦姉妹は2人揃って海中へ。前よりもどんどん絆は深まっているようで、見た目だけでなく、雰囲気も姉妹と言えるようになってきている。言葉の端々に、ほんの少しだが感情が乗っているように感じた。
　まだまだ無表情かもしれないが、正しく成長はしている。笑顔を取り戻す日も近い、かもしれない。
「私達も行きましょうか」
「では早速哨戒機を飛ばしておきます。コースは春雨に任せますよ」
「了解です。いつものコースで回るので、大鳳さんはついてきてくださいね」
　まず海に出る前に、大鳳は手に持つボウガンから艦載機を発艦。いくつもの哨戒機が上空に飛び立ち、瞬く間に雲を突き抜けていった。また、いくつかは雲のスレスレくらいで止まり、上空から真下を観察。
　それを確認して、春雨を先頭に3人で海に出た。潜水艦姉妹は若干先行している状態になるのだが、基本的には海中から春雨の足を見て距離を保つ。
「夜の哨戒……姉さん、大丈夫ですか？」
「大丈夫。心が騒つくところはあるけど、海風が、みんながいるからね」
　春雨が今の姿になるきっかけとなったのは、夜の海。前回の深夜の雨の戦いは、緊迫した戦闘にそれどころではなかったので大丈夫だったが、哨戒はどうしてもその時を思い出してしまう時間だ。昼ならま

だしも、夜だと状況がそれそのものになってしまう。
施設に所属した当時ならば発作を起こしていただろう。だが、ここまでの経験と成長により、春雨はそう簡単には発作を起こさない。常に海風が隣にいるのだから尚更である。
「春雨姉さんが私の光であるように、私も春雨姉さんの光になれるように精進を続けていましたが、一歩でもそこに踏み込めていると知ることが出来て歓喜の極みですね。あまりにも嬉しくて身体が震えてきました。1つの目標が達成出来たと言っても過言ではないでしょう。でも、これで終わりません。私は春雨姉さんの全てを守るのですから。安心してください。ここでもし何者かが春雨姉さんに襲い掛かってきたとしても、この海風、命を懸けてその身を守りますから」
「命は懸けないでね。海風がいなくなる方が私には辛いから」
「偉大なる春雨姉さんに認められていると実感出来て感無量ですね。勿論、海風は春雨姉さんの側から一時も離れませんのでご安心を。寂しさの発作なんて、二度と起こすことはありません。この私が保証します。春雨姉さんはもう悲しむ必要など無いのですから」
少しでも寂しさを晴らすように、海風はしっかりと春雨の手を握っていた。
「仲のいい姉妹ですね。ちょっと羨ましいですよ」
それを少し後ろから見ながら、大鳳が微笑む。春雨のことを恩人とは思っているが、海風ほどの熱を持っているわけでもないため、こんな風景でも穏やかな感情で見ていられる。むしろ、大鳳も心が温かくなるような感覚だった。

夜の海を航行する哨戒部隊。まだ始まったばかりであるためか、何も異常無し。
毎日朝昼晩と哨戒をしているし、定期的に島から哨戒機を飛ばしているため、あまり隙を見せていない。とはいえ、襲撃してくるときは隙のある無しは関係ないだろう。何せ、龍驤はこれまで二度も敗北を喫している。そんな状況で、今まで通りの襲撃はしてくるはずがな

い。流石に慎重になってくるはずだ。
「哨戒機から何も見えませんね。異常無しです」
「定期連絡。海中異常無し」
「痕跡も見当たらない」
　上空も、海中も、海底も、敵が侵入してきたという痕跡はない。まだあちらも準備中なのかもしれない。その準備がドロップ艦の侵蝕だとしたら厄介極まりないのだが。
　それに、まだ施設から見て1方向しか見ていないのだ。真逆の方向に何かしらの準備をしている可能性だってある。午後の部では見当たらなかったとしても、この夜に乗じて何かしらの準備をしてきてもおかしくない。
「次の場所に行きましょう。まだまだ夜は長いですから」
「了解。また潜る」
　潜水艦姉妹はそのまままた潜水。大鳳も頷いて哨戒機を飛ばす方向を次の針路へと向けた。
「でも……私達がこうやって平和に暮らしている今頃、裏側では何処かの誰かがやられている可能性もあるんですよね……」
　龍驤が泥化し、侵蝕をして回っているとなると、それこそ鹿島の時のように哨戒部隊を侵蝕した後にそのまま鎮守府の乗っ取りなんてことをしているかもしれない。大塚鎮守府で失敗したことを、龍驤が自ら乗り込んで再度実行していたら大変なことだ。
「春雨姉さん、考え始めたらキリがありません。その誰をも救いたいという気持ちはわかります。春雨姉さんが救世の女神であることは海風が充分に承知しています。ですが、『観測者』様の言う通り、手が届かないところを救うのは難しいです。自分の身を守ることを最優先にしないと、手を伸ばすことも出来なくなってしまいます」
　ギュッと手を握って訴える海風。自分のことがどうでもよく、周りのことを気にかけすぎる春雨は、どうしても知ってしまった龍驤の悪行が気になってしまう。だが、何処の誰かもわからないような者のために気に病むのはやめてもらいたい。
　今何処にいるかもわからないのに救出なんて出来ないし、今から

行ったところで間に合わず、目の前にしてまた気に病むのでは意味もない。ならば、無視をしろとは言わないまでも、いくつかは取捨選択をしてほしい。そう海風は話す。
「……うん、勿論、施設のみんなのことを最優先にするよ。私はさておき、みんなが傷つくところを見たくないから」
「何度も言うように、姉さんが傷付いたら私も傷付きますから。先に言っておきます。私、姉さんが死んだら跡を追いますからね。絶対に。姉さんのいない世界に意味はありませんから。姉さんが嫌だと言っても、私は姉さんの側に居続けますから。死んでもです」
「それは困るなぁ……山風に怒られちゃう」
苦笑しつつも、海風の存在には感謝していた。行き過ぎた依存性になっているものの、ここまで親身になってくれているからこそ寂しさが溢れ出すことはもう無く、どうでもいい自分を大切に出来る理由になってくれている。
春雨側からも、海風に対して僅かにだが依存の傾向があると言ってもいいかもしれない。海風ほどではないが、常にとなりにいる海風がいなくなった場合、錯乱してしまう可能性は充分に出来ていた。
「ありがとう海風。なるべく気にしないようにするよ。もしこの裏側で誰かが侵蝕されていたとしたら、私が必ず救う。もし誰かが沈められていたら、その分を黒幕にぶつける。でも今は、海風と施設のみんなのために動くよ。まずは手が届く範囲から、だよね」
「そうです。その通りです。そして今、姉さんの手は私に届いています」
「あはは、そうだね。じゃあ、海風のために動かないとね。自分のために」
少し気に病んでいた春雨だが、海風のおかげですぐに立ち直れた。やはり心の支えになっている。共依存とは言わなくとも、その兆しは見え始めていた。
「っと、お話はその辺りで止めましょうか」
大鳳が突然表情を変え、真剣な声色で少し遠くを指差す。そちらの方を見てみると、泥感知の眼鏡に反応が現れていた。そのサイズから

して、ヒト1人分まではいかないくらいの量がそこにあるように見えた。まるで、そこに罠を張っているかのように。
　この場所は、鎮守府から施設に向かうための航路の上に近い。ならば、調査隊の面々を狙った罠とも言える。しかし、あまりにもわかりやすく置いてあった。
「……これ、罠じゃないかも」
　ひとまず排除しなくてはとその反応に近付く。やはり誰かいるわけでもない。ここにいたのだという痕跡をわざと残しているような、そんな泥。大鳳がそれをすぐさま泥刈機で消し飛ばした。
「哨戒機から何か見えてるわけでも無いですね。この周辺に誰かいるわけでもなく、午後の哨戒と私達の合間にここに来ていたと考えるのが正しいかと」
「でもそのときに襲撃してこなかったということは……」
「まだ準備中……それか、下見に来たか。泥が設置されたんじゃなく、たまたまここに落ちちゃったって考えることも出来ます」
　考察しているうちに、潜水艦姉妹も浮上。
「海中、海底、共に異常無し」
「海上に泥があったのは確認している」
「敵に潜水艦がいないと考える」
　つまり、ここで見つけたのはこの泥だけ。しかし、近々来るということを痛感した。

　あてつけのように設置された泥。これのせいで、施設側は少しずつ緊迫していく。
　それを狙ってだったとしたら、龍驤はよりキレる存在となってしまっているだろう。

悲しい笑顔

春雨達が行なっている深夜の哨戒。その途中で、海上に設置されている泥を発見した。その時は大鳳が持っていた泥刈機ですぐに排除したが、まるでそれはここにいたのだという痕跡をわざと残しているかのようにも見えた。

その発見から哨戒部隊はより慎重に哨戒を続けるのだが、施設周辺をグルリと回ることで、他にもいくつか泥が設置されている場所を見つける。数としてはそこまで多いわけではなく、包囲されているというわけでもない。まばらに、しかし比較的固まっている場所。

「何と言うか……あまりこういうことは言いたくないんですけど」

３つ目の泥を消した辺りで、春雨が苦言を呈するように呟く。その気持ちを代弁するように、海風がすかさずフォロー。

「自意識過剰ですよね。自分の存在を誇示して、お前達を見ているぞって感じでこうやってちまちまちまま置いて。春雨姉さんの手を煩わせるだけでも万死に値するのに、何様なんでしょう」

仲間達以外、しかも春雨と敵対している者に対しては、非常に口が悪くなる。春雨もこれには苦笑しか出来ない。

「哨戒の合間を縫ってここにいた痕跡が残せるということは、こちらのことをよく見ているということにもなりますよ。確かに少し慢心が過ぎる気がしますけど、彼女はいつもそんな感じです。実力者であることには変わりありませんから」

龍驤のことをよく知る大鳳が言うには、侵蝕された龍驤はそういう性格になってしまっているとのこと。そして、本来の龍驤はそんなことは無いと。

大鳳が元々いた鎮守府には龍驤はいなかったようだが、他鎮守府との演習で顔を合わせたことがあるそうだ。見た目は幼いものの、軽空母として駆逐艦や軽巡洋艦にも好かれ、見た目とは裏腹に大人の女性というイメージすら持てたという。

しかし、黒幕の駒である龍驤は、そんな雰囲気など微塵もない。あちら側だった時の大鳳には何も感じるものは無かったが、今ならば確

実におかしいということがわかるほどに歪んでいる。
黒幕の最初の器だからか、お気に入りを徹底的に弄くり回しているからだろうかと、大鳳は首を傾げた。
「その優秀な力を使ってこちらの隙が見えているなら、その隙を突いて施設に襲撃を仕掛けてくればいいじゃないですか。でもそれをしなかったということは、もしかして施設がまた見つけられなくなったとかあるんじゃないですか？」
対する海風は、どうであれ春雨に敵対しているのなら関係ないとニッコリ笑った。目は笑っていなかったが。
「どうなんだろう……。大鳳さん、その、不躾なことを聞くんですけど」
「どうぞ。力になれるなら何でも聞いてください」
「以前……施設に泥の雨を降らせた時、艦載機を使っていたのは大鳳さんですよね。その時、施設の場所ってちゃんとわかってたんですか？」
春雨のちょっとした推理は、今はこちら側に来てくれた潜水艦姉妹がいなければ、黒幕側は未だに施設の場所を把握していないのでは無いかということ。
その場所を明確に知っている潜水艦姉妹が場所を伝えれば、敵対する者でも結界的な効果があるこの空間を貫くことは出来るが、実際にここまで来たことのない龍驤には不可能なのでは。春雨はそう考えた。
「あの姉妹に導いてもらったことで施設の場所は理解していました。でも、いないとやっぱり少しあやふやになりますね。自分で見たわけではないので」
「ですよね。だったらこの泥、もしかしたら施設の位置を明確にするための目印だったのかなって」
「なるほど、三角測量みたいな。だからまばらにいくつか落ちていたと」
あやふやな距離感を計測するために泥を使ったという可能性。やっている姿を想像したら妙に微笑ましさも感じてしまったものの、

泥をあえて残していく辺り、やはりこれは施設側に対するあてつけ、予告状の意味もあるだろう。
「ただの自意識過剰な慢心泥空母だと思っていましたが、そんな思惑があっただなんて、海風には皆目見当がつきませんでした。それを看破してしまうとは、流石は聡明な春雨姉さんです。答えに辿り着く力なんて関係なく、その明晰な頭脳で真実を掴み取ったのでしょうね。海風、感動しています」
「いやいや、それはちょっと言い過ぎかなぁ。ちょっと思っただけだから。あまりにも不自然だったからね」
どうであれ、泥があったことは確かだ。これは哨戒が終わったところで、姉妹姫に伝えることになるだろう。

丑三つ時に休憩を挟み、同じコースを逆回転でもう1周。これで哨戒は終わりとなる。全て終えたら空は白んできていた。この頃にはやはりかなり疲れており、眠気もどうしても出てくる。しかし、こういう時だからこそ気を引き締めて、ストレッチなどを挟みながら任務を完遂する。
それまでに泥は最初に見つけた3つのみ。逆側にあることも無かった。測量をしたとしてもあの位置に置いたのは、あわよくば調査隊の航行する針路にぶつけて面倒臭いことにしてやろうという魂胆が見える。
「ふぅ、お疲れ様。やっぱり深夜の哨戒は疲れるね」
改めて背筋を伸ばす春雨。海の上では常に脚を消しているためか、疲れが腰や股関節に溜まっているようにも思えたため、岸から島に上がったところで脚を生やした後にすぐにストレッチ。
「哨戒機も帰還しました。空は結局一晩何も無しでしたね」
大鳳が飛ばしていた艦載機が戻ってきたことを確認。泥は見つけたが、上空には高高度も含めて何も無し。本当にただ泥を置いてあっただけと言える。
「海中、海底、共に異常無し」

「何者かが侵入してきた痕跡も無し」
潜水艦姉妹も無事浮上。海面に設置されていた泥以外は、本当に何も無かったということになった。勿論、ここにいる全員が眼鏡によって誰も侵蝕されていないことは確認済み。
「深夜哨戒、お疲れ様でした。じゃあ、あの泥のことを報告したら終わりです」
と話している内に、施設から中間棲姫とコマンダン・テストがやってくる。いつもなら哨戒を飛行場姫がやるところなのだが、今日も朝から繭の近くから離れない方針であるため、ある意味代役。中間棲姫が来たなら、報告もすぐに出来て楽になる。
「姉姫様、ちょうどいいところに」
「あらぁ、何かあったのかしらぁ」
すぐに設置されていた泥のことを説明する。今でこそそれだけで済んでいるが、あてつけのように配置されていたことに、中間棲姫は少なからず嫌そうな反応を示した。
施設の平和を脅かす存在が、まるで近々お前達の生活をぶち壊すぞと脅しに来たようなもの。何もしていないのにこういうカタチで因縁をつけられるのは、いくら温厚な中間棲姫でも嫌な気分になる。
「そうなのねぇ……そのことは提督くん達にもまた話しておくわぁ。貴女達は一晩哨戒で疲れたでしょう。今はゆっくり休んでちょうだいねぇ。朝ご飯まではもう少しかかるから、先にお風呂に入ってねぇ」
ここ最近の黒幕陣営のやり方が、中間棲姫の心を少しずつ削っているようにも思えた。今でこそまだまだ調子を崩すなんてことは無いのだが、こんなことが続いたらそのうち倒れてしまうのではないかと不安になる。
みんなで楽しく生きていくために在るこの施設は、中間棲姫がいなくては成り立たない。誰にも迷惑をかけずにひっそりと暮らしているだけなのに、捨てた器がまた欲しくなったと執着する黒幕のせいでそれを壊されるのは、中間棲姫のみならず、春雨達も気に食わなかった。

「姉姫様、私達が絶対ここの生活を守りますから。絶対守りますから」
力強く宣言する春雨。島の外で戦える力を持っているのは自分達だけ。姉妹姫は自衛は出来ても攻めることは出来ないし、性格上そんなことは絶対にしない。故に、春雨を筆頭に施設の仲間達が攻勢に出る。
それもこれも、全ては施設のため。いくら元々艦娘だったとしても、これだけ長く暮らし、深く関わったことで、自分達の居場所はここしか無いのだと刻みつけられているのだ。そこを守るのは当然のこと。
「ありがとうねぇ。私はこの島を守ることで精一杯で、あちらが諦めるまで我慢するしか出来なかったわぁ。でも、みんなのおかげで、平和を取り戻せるかもしれない。本当は辛いけれど……本当に辛いけど……でも、もうそうも言っていられないことも理解しているわぁ」
「姉姫様……」
「私はみんなのために、戻ってこれる場所を守る。だから……本当に申し訳ないけれど、この島の平和のために、よろしくお願いねぇ」
その表情は、悲しい笑顔。中間棲姫のこんな表情は、なるべく引き出したくなかった。

お風呂、朝食と終え、深夜哨戒組は休息へ。春雨は相変わらず海風と私室に。身体を清めた後、空腹を満たしたことで、一晩動き続けた疲れがどっと現れる。それでもお昼には目が覚めるのは生活習慣なのか何なのか。
「……姉姫様、悲しそうだったね」
「はい……平和であるこの島をわけのわからない連中の自分勝手な理由で壊されそうだなんて、納得行かないですから」
これが深海棲艦を憎む人類からの攻撃だったりしたら、まだ理解は出来る。穏健派であろうが何だろうが、深海棲艦という種族に対して敵意を持っているというのなら、それは仕方ないと考えられる。何もしていないところを無理矢理攻められるのは気に入らないが。

しかし、今回の黒幕はそういうものでは無い。侵略を止められたことを恨み、器を捨てた挙句、他者を利用して自分は後ろから見ているだけという性格の悪いやり口のために、施設を侵略して器を取り戻すついでに仲間達をどうにかしようとしている。そんなもの、誰も納得出来やしない。
「あんな顔、見たくないよ。だから、この島の平和は絶対に守ろう。あちらのいいようにされるなんて嫌だもんね」
「勿論です。私はここで春雨姉さんと平和に暮らすんですから。その平和を壊そうとする輩は、誰であっても許すことは出来ません。生まれてきたことを後悔させます」
「乱暴しすぎるのは良くないと思うけど……」
「何を言うんですか。姉姫様が悲しむということは、姉さんも悲しむということ。その慈悲深さは姉さんの女神たる所以でしょうが、姉さんが悲しむことは何があっても許されることがあってはなりません。万死に値します。文字通り、一万回死んでも許されないでしょう。むしろ、そういう輩は何があっても反省しないでしょうから、ごめんなさいを言うまで殺し、言っても殺し続けます。どうせ口先だけですし。姉さんを悲しませるというのは、それだけ罪深いことですから」
眠る前だというのにヒートアップしていく海風を落ち着かせるために、いつも通り抱き枕代わりになるのではなく、逆に海風を抱き枕にするように顔を胸に押し当てるように抱きしめた。
それだけで海風は落ち着いていき、逆に力が抜けていく。小さく震えているようだが見て見ぬふり。
「海風、あんまり荒くならないでね。私のことを思ってくれているのは嬉しいけど、もう少し冷静になろ。熱くなりすぎると、出来ることも出来なくなっちゃう」
「……姉さんのことになるとどうしても自分が抑えられなくなるんです」
「うん、わかってる。今の海風のことはちゃんとわかってるからね」
頭を撫でながら、海風の眠気を引き出していく。海風だって一緒に哨戒をしていたのだから、とても疲れているのだって一緒。

撫でられているからというのもあるが、その表情は眠気でトロンとしてくる。春雨の胸に頬擦りしているのは無意識に欲求を表に出しているだけ。
「あ、ボタンが痛かったかな。じゃあ……今日は特別。私もこうされたらすごく落ち着けたし、前にもやってあげた時に落ち着けたもんね。これならすぐに眠れるよね」
パジャマを消し、新たに着込んだのは飛行場姫のボディスーツ。温もりをより強く得られることで海風は落ち着いていき、そのまま蕩けた表情で眠りに落ちた。
「おやすみ、海風。じゃあ私も」
そして春雨もそのまま眠る。午前中眠ればスッキリもするだろう。怒りに染まっていては身体の疲れも取れることはない。

島の平和は今も脅かされている。だが、仲間達は一致団結してこの居場所を守ろうとしている。
いつ来るかわからない襲撃であろうとも、必ず撥ね除けてやると決意して。

恐怖に呑まれた者

深夜哨戒から戻ってきてグッスリと眠っていた春雨と海風が目を覚ましたのは、ちょうど昼食時。時間にしたら夜に眠るより格段に時間が短いのだが、生活習慣がキチンと出来上がっているのか、明るい中で眠っていると睡眠時間が減ってしまう。

とはいえ、それだけの眠りでもスッキリしていた。特に海風は、春雨の温もりの中で眠ったことによって、それはもう蕩けきっている程に。

「海風、そろそろお昼だから起きようか」

「もう少しこのままで……姉さんの温もりがあまりにも心地よくて、手放したくない気分なんです。妹姫様のボディスーツを着てもらえて、もう本当に幸せで、これ以上無いくらいに至福の時間を過ごせています。最高に気持ちいい夢も見ることが出来て」

「あはは、それはよかった。でも時間は時間だから、そろそろ、ね」

「名残惜しいですが仕方ないですね」

最後に思い切り頬擦りをしてから、海風は残念そうに春雨から離れる。これを許してしまうと、おそらくもうしばらくここから動けなくなる。今日はもうやることはないのだが、それはそれで勿体ない。

離れたところを見計らって、春雨は服をいつもの制服姿に。海風もそれに倣って準備完了。あとはダイニングに向かうだけなのだが、ここで想定外なことが起きる。

「いやぁあああああっ!?」

突然の叫び声。施設中に響くほどの声は、春雨達には聞いたことのない声だった。

「えっ!?」

「初めて聞く声……もしかして、繭が孵化したんじゃない!?」

施設の中で知らない声が発せられる可能性があるのは、それしかない。一応、このタイミングで実は外部からお客様が来ていたなんてこともあり得るかもしれないが、少なくともこんな悲痛な叫びを上げることはないはず。
「ベッドルームだったよね。行こう！」
「は、はい！」
春雨達は急いで叫び声が聞こえた部屋へと向かった。

ベッドルーム。そこでは飛行場姫を中心に知らない少女にどうにかして処置を施していた。
孵化したからにはまず真っ先に繭の破片を自身に取り込まなくてはならない。そうして溢れた感情を自らに取り戻して、艦娘としての思考を残したまま深海棲艦化する。
しかし、その少女は恐怖が溢れた存在。今ここで見える全ての風景に恐怖を感じていた。そのせいで真っ先に出たのが先程の悲鳴。
飛行場姫が怖い。見知らぬ施設が怖い。周りに散らばる破片が怖い。何もかもが怖い。最初から理性も何もあったモノではない。
「いい、落ち着きなさい。大丈夫。今ここにアンタに害を与えるモノは何も無い。アタシも、他の子も、全員アンタの味方、仲間よ」
「ひっ、ひぃっ!?」
「大丈夫、信じなさい。時間が足りなくなる」
怖がっている少女に対して、飛行場姫は冷静に手を取る。触れられることも怖がり、悲鳴を上げながら手を引こうとしたが、飛行場姫の声が聞こえた瞬間、ほんの少しだけ震えが治まったように見えた。
繭の中でも聞こえていた声であることに気付いたのはここだった。この少女が心を壊すほどの恐怖を感じた瞬間を悪夢として反芻させられている合間に、何処か落ち着く声が聞こえていたのを思い出す。
その声は、とても凛々しく、それでいて静かに冷静に、自分のことを思い遣った言葉を投げかけてくれていた。恐怖を払拭することは出来ずとも、縋る先としての認識を持つには充分だった。

「ひっ……わ、私、私は、なんで、何を」
「大丈夫よ、大丈夫。でも、まずはやらなくちゃいけないことがあるの。素直に、アタシの言うことをやってちょうだい。大丈夫、怖くないわ」
飛行場姫の声だけは耳に入るのか、震えながらも小さく頷き、その説明を聞く。春雨の時と全く同じ説明をされ、少女は言われるがままに破片に手を伸ばした。
瞬間、今までの恐怖に対しての悲鳴ではなく、取り込まれる繭の破片からの衝撃によって声を上げることになる。
しかし、恐怖に慄いている間に、僅かではあるのだが破片の一部が霧散しているのがわかった。全てを取り込めたとしても、完璧に全てを回収出来たということにはならない。
つまり、若干欠けた状態となる。それが何かは、ここで正気を取り戻してからしかわからない。
「ひぁあああっ!?」
全てを取り込み終わったことで大きく衝撃を受け、ビクンビクンと震えた後に突っ伏す。それを止めるために飛行場姫は少女を抱き締めるように受け止めた。
「お疲れ様。ひとまずは処置は完了。多少はスッキリしたんじゃないかしら」
背中を摩りながら、より落ち着かせていく。繭を取り込んだことで、錯乱するほどの恐怖に苛まれることは無くなったようだが、それでも常に恐怖が燻るのは変わっておらず、飛行場姫に抱かれていても小さな震えは止まらない。だが、悲鳴は止まった。
「いい、もう一度聞いてちょうだい。ここにはアンタの敵はいないわ。みんなが仲間だから。怖くない」
言われても払拭出来ないのが溢れた感情である。叢雲がいつもプリプリしているように、この少女はいつもビクビクしていることになるだろう。仲間に対しても恐怖し、おそらく人見知りのように目も合わせられず、まともに話すことも出来るかわからない。
「落ち着くまでこうしているけど、どうする?」

「う、あぅ……ずっとこうしていて、ほしい、です」
やはり震えが止まらないようで、唯一気が許せそうな飛行場姫に触れ続けていれば、多少は会話くらいなら出来そう。
恐怖を払拭することは出来ず、しかし飛行場姫に若干の依存。繭に語りかけることによって恐怖を緩和するという作戦が上手く行っているようには見えないのだが、実際はこれでも十分に緩和されていた。
飛行場姫の声に反応出来ていなかったら、繭の破片を取り込むことすら出来なかっただろう。そうしたら最後、艦娘らしさも失われ、周囲をただ怖がり、本能のままにそれを排除しようとする存在へと成り果てていた。そうならなかったのは、少しだけでも処置が上手く行っている証拠。
そして、少女は飛行場姫が近くにいれば、ある程度は落ち着けた。逆に、飛行場姫の声が聞こえない場所だと恐怖に怯えることになる可能性が非常に高い。そうならないように、仲間達は怖いものではないと教え込む必要がある。
「まずは服を着ましょうか。流石にそのままは嫌でしょ」
「ふぇ……あ、ぴぁあっ!?」
若干落ち着いてきたところで飛行場姫に指摘され、今度は羞恥心で悲鳴を上げる。
今の少女は孵化したばかりなので当然全裸。身長からしてみればおそらく駆逐艦なのだが、おそらくと感じるのはその豊満な胸である。平均以上はあるが中間ほどの春雨、それ以上のモノを持つ海風といるが、この少女はさらにそれ以上のモノである。
だからか、飛行場姫に教えられてどうにか制服を作ったところ、駆逐艦ならよく着ているであろうセーラー服姿となった。出るところが出ているのでいろいろと大変なことになってはいるが。
「うぅ……着ました……」
「よろしい。じゃあ次。アンタの名前を教えてくれる？　アタシは見ての通り深海棲艦……艦娘からは飛行場姫って言われてるらしいけど、ここでは妹姫と呼ばれてるわ」

「……う、潮……です……特型駆逐艦……綾波型の……」
繭から孵化した少女は、駆逐艦潮。艦娘の時からも恐怖によって心が壊れるのも頷けるような控えめな性格であり、後ろ向きというわけではないにしろ、自分から前に立つような性格ではない。それがドロップ艦となると、戦闘の経験が一切無いことでさらに顕著になる。
「潮、ここの施設のことをしっかり教えてあげる。少なくともアンタが怖がることは何一つとして無いことを知ってもらうわ。ここでなら落ち着けるはずだから」
「そ、そんな……こと……。怖い、怖いんです……妹姫さんは、その、落ち着けるんですけど、それ以外は、全部……」
服は着たものの、飛行場姫から離れることはなく、ずっと抱き着いたまま動かない。その身体は常に小刻みに震えており、周囲の環境が全て恐怖の対象となってしまっていることがそれに繋がっている。
やはり、叢雲と同じようなモノ。この世の全て、自分にすら怒りが湧く叢雲のように、全てに対して恐怖を抱くのが潮である。唯一、飛行場姫だけは繭に語りかけていたことで落ち着ける声という認識となったものの、それ以外には慣れるのは難しいか。
「ああ、春雨と海風、おはよう、ちょうどよかったわ」
「はい、妹姫様の言いたいことはわかります。勿論、私達が潮ちゃんの友達になりますよ。その方が楽しく生きられますから」
「ですね。同じ境遇のようなものですし、春雨姉さんが率先して手を伸ばすなら、私も同じように手を伸ばします。仲が良ければ居心地はいいですしね」
春雨が手を伸ばすが、やはりまだ恐怖が先立つようで、飛行場姫から離れようとしない。目も合わせることも出来ず、ガタガタ震えるのみ。
こうなる前に余程怖い目に遭ったのだろう。敵意が全く無い温厚な春雨の表情を見ても、本質として湧き立つ恐怖には抗えない。
「大丈夫、私達は潮ちゃんの仲間だから。同じように繭になって、この身体になったんだよ。仲間というか、同志というか、ともかく友達になりたいな」

そんな言葉に対しても、潮はひっと声を上げて飛行場姫に抱き着く。本当に怖いモノから逃げる子供のように怯えて震えるのみ。
「潮、アンタ何があったの。ここにいる子達は、アンタが思ってるような怖いヤツらじゃないわ。私の仲間なんだもの」
「で、でも、でも、そう言って近付いてきて裏切るヒトもいますから……」
気になる発言。実際にそれを見た、いや、経験してきたような発言である。
「……潮、嫌なことを話させることになるかもしれないけれど、教えてちょうだい。アンタ、一体何があったの。何があってこんなことになったの」
抱き締めながら頭を撫でて、ゆっくりと落ち着かせるように話す。事情を知っておけばさらに親身になれるはずだ。
しかし、恐怖で心が壊れる程の経験を、本人の口から語らせるというのは酷なこと。ただでさえまともに話すことも難しい潮にそれをやらせるのは難しい。
しかし、飛行場姫からの頼みだからか、潮はポツリポツリと話し始める。
「……私、その、海の上に突然生まれたんです……その時、一緒に生まれた子……姉妹艦の子もいて……」
そういうことも稀にある。ドロップ艦は必ず1人でそこに現れるというわけではなく、偶然にも同じタイミングで2人現れたという事例もあった。
潮はそのタイプだったようで、しかも一緒に生まれたのが姉妹艦。その艦娘の名前は曙というそうだ。
「そこから、その、本能的に、鎮守府を探したんです……2人で……。そうしたら、また姉妹艦の子に会って……。物凄く偶然が重なるなって驚いて……。それで……その子は鎮守府所属だって聞いたので連れて行ってくれることになったんです……」
ここで誰もが理解した。その姉妹艦というのに裏切られたのだと。ならば、鎮守府所属と話したのも嘘だったのか。

その姉妹艦というのは、駆逐艦漣。他の鎮守府では初期艦として運用されることもある、なかなかの実力者。そう話されたので、その時は信用したらしい。
「そうしたら……その、漣ちゃんが突然曙ちゃんに……曙ちゃんに何かを吐き出したんです」
「それって……泥かしら」
「っ……はい、泥でした。黒い、黒い泥でした。それに呑み込まれた曙ちゃんが……ひっ、何だか、よくわからないモノになっていって……」
姉妹艦が泥に呑まれる瞬間を目の前で見せられた。これが恐怖で心を壊すきっかけだ。知っている、信頼出来ると思っていたものに裏切られ、目の前で仲間を狂わされ、よくわからないモノというものに変えられたとなったら、気の弱い潮なら壊れてしまってもおかしくないかもしれない。
「よくわからないモノ？」
「泥が、泥が身体に纏わりついて、顔も全部埋め尽くして……でも曙ちゃんってわかって……。次は私だって見つめられて、怖くて、怖くて、そこから逃げ出したんです……。そうしたら……もういいやって後ろから撃たれて……」
「……そう、もう大丈夫よ。嫌なことを話させてごめんなさいね」
ここまで話すのが精一杯。口移しで注がれたわけではなく、吐き出した泥をそのままぶちまけられたことで、内部からではなく外部から侵蝕されたということだろう。だから、見た目的にはよくわからないものになっていった。
今頃はそれを体内に取り込み、荒潮や鹿島のように見た目だけは艦娘として活動しているだろう。もしくは何処かで改造されて、艦娘すら辞めさせられている可能性も無くはない。
「潮ちゃん、それ、私達にも無関係じゃないの。必ず解決する。そのために動いているんだ。だから、私達のこと、信用してもらえないかな」
「ひっ……」
「大丈夫。私達は絶対に潮ちゃんを裏切らない。約束する。この約束を破ったら、むしろ逆に後ろから撃ってくれても構わない。それくら

い自信があるから」
　ニコッと笑って、改めて手を差し出す。飛行場姫以外は恐怖の対象となってしまっていても、この春雨の自信満々の笑顔は、不思議と信用出来そうに思えた。
「そうです。春雨姉さんが裏切るわけがありません。大丈夫です。春雨姉さんは救世の女神、潮さんのことも救うために」
「海風ー、ちょっと今はやめよっか」
　海風のこのノリも、嘘では無いと信じられるようなモノ。だからだろうか潮の中からは、少しだけ恐怖が取り除かれた。
「……よ、よろしく、お願い、します……」
「うん、よろしくね。大丈夫だよ。ここにいるヒト達はみんな信用出来るから」
　飛行場姫の陰からおずおずと手を伸ばしたところを、春雨がしっかりと握手。恐怖でビクンと震えるものの、ほんの少しだけ心を開いたようにも見えた。

　孵化した潮が施設の一員となる。まだ恐怖に呑まれて飛行場姫の近くから離れられないが、一歩ずつ一歩ずつ成長していくことになるだろう。

一員として

拾われた黒い繭から孵化して現れたのは、駆逐艦潮。ドロップ艦であったが、鎮守府に案内するという姉妹艦漣が侵蝕を受けており、同時にドロップした姉妹艦曙が泥により侵蝕される姿を見せられた挙句、逃げようとしたところを後ろから撃たれたことで恐怖に呑まれたことがわかった。

その潮は、常に恐怖に怯えている状態。繭に声をかけ続けた飛行場姫の近くにいれば少しだけ落ち着くことが出来るが、それ以外には常にビクビクと目を合わせようともせず、涙目になってしまっていた。春雨と海風とは一応友達になることは出来たものの、まだまだ先は長い。

「潮、早速みんなにアンタのことを紹介するわ。ちょうどいいことに今はお昼時なの。みんなダイニングにいるから」

「えっ、あ……」

大人数がいることがわかっている場所に向かうのはどうしても抵抗があるようで、飛行場姫の腕をギュッと掴んだ。

しかし、そんな潮をそのままにしているほど飛行場姫は甘くなく、そういうことならと勝手に抱き上げてしまう。

「ひぃっ!?」

「大丈夫だよ。みんな潮ちゃんのことをしっかり受け入れてくれるから。怖いことなんて何もないからね」

「叢雲さんがちょっと心配ですけどね。いつも苛立ってますし」

海風の言葉に反応して、潮はさらに泣きそうな顔になるものの、会ってみなくちゃわからないだろうと下ろすことなく飛行場姫は潮を運んだ。

かなり強引な方法ではあるのだが、ここで躊躇っていては、この施設に身を寄せるのは不可能。みんなで仲良く暮らして行くことが絶対条件だ。春雨と海風相手には、おずおずとではあるものの握手が出来たのだから、おそらくは大丈夫。

とはいえ、海風の言う通り叢雲は若干不安ではある。常に恐怖を感

じている潮と、常に怒りを持っている叢雲は、まず確実に相性が悪い。今の潮は強く出られるとそれだけで崩れる。常に発作を起こしているようなものだ。対する叢雲は、常に強く出る。
「叢雲に関しては、アタシがどうにか止めるわ。何かあった場合はね」
「ですね。よろしくお願いします妹姫様」
　そこは潮を守るために飛行場姫が前に出るだろう。叢雲は飛行場姫に若干の苦手意識を持っているため、潮を守るには打ってつけの人材。
「あとは……ミシェルちゃんはジェーナスちゃんがどうにかしてくれるはず」
「ああ、確かに。潮さんにあの積極性は少し酷かもしれません。でも、ジェーナスさんが制御してくれるでしょう。それなら叢雲さんが一番危険ですね。次点でコロラドさんではないかなと」
「あのヒトは言い方がちょっとキツイけど、大人の女性だから大丈夫だよ。うん、多分」
　などと話しながらダイニングへ。潮は今からのことを考えると恐怖が噴き出してきて、飛行場姫に抱き着き震えることしか出来なかった。

　そしてダイニング。昼食時ということで全員ここに揃っていた。
　実際はあの潮の叫び声でなんだなんだとベッドルームに向かおうとしていたのだが、春雨と海風が向かっていったのが見えたことで、中間棲姫が待ったをかけていた。そのおかげで、比較的何事もなく潮を宥めることは出来ている。
　とはいえ、あんな叫び声が聞こえたら誰もがハラハラしてしまうもの。そして、叢雲はイライラしていた。
「無事に目が覚めたのねぇ。よかったわぁ」
　早速出迎えた中間棲姫なのだが、やはり誰の視線を受けても恐怖を感じてしまうため、小さく悲鳴を上げた後に、飛行場姫の胸に顔を埋める。そんな姿を見てあらあらと苦笑した中間棲姫であったが、恐怖

が溢れていることを知っているため、最初はこうなっても仕方ないと諦めていた。
今はどういうカタチでもいいので、施設はこういう場所であり、誰も潮の脅威とならないことを知ってもらいたい。そのため、敵対的な行動は絶対にしないようにと釘を刺していた。そんなことしなくても、誰も潮のことを取って食おうだなんて思っていないが。
「えぇと、この子の名前は？」
「潮よ。名乗ってはくれたわ」
「そう、じゃあ潮ちゃん、そのままでいいから聞いてちょうだいねぇ」
中間棲姫の声にガタガタ震えているが、耳を向けていないわけでは無い。
「この施設は、みんなで仲良く楽しく暮らすための場所なのよぉ。だから、潮ちゃんもここで楽しく生きてくれると嬉しいわぁ。そのためなら、私も協力は惜しまないからねぇ」
触れるのは流石に早いと感じ、手を伸ばしかけたが撫でるのはやめておいた。こちらに顔を向けてくれれば、握手くらいは出来るかと思いつつ、怖がらせないように優しく優しく声をかけ続ける。
「私はこの施設を管理する者、みんなからは姉姫と呼ばれているわぁ。貴女が今抱き着いてる子のお姉ちゃんなの。よろしくお願いねぇ」
「お姉はアタシ以上にデキるヒトだから、安心なさい潮。ほら、顔を合わせなくちゃ大丈夫かどうかはわからないでしょう？」
依存相手の姉ということで、多少は安心が出来たか、飛行場姫の胸から顔を離すと少しだけ流れていた涙を拭いて、中間棲姫と顔を合わせる。
その穏やかな表情に、潮は不思議な安心感を覚えた。このヒトは敵ではないと、本能的に感じる雰囲気。
「よろしく……お願いします……」
「はぁい。私もそうだけれど、みんなとも仲良くしてちょうだいねぇ」
ダイニング全体から向けられる視線にビクッと震えるが、その視線には奇異なモノを見るような感情は一切含まれておらず、ほぼ全てが好意的なモノ。

繭から孵化した時点で、その性質がどうであれ仲間。心が悪に囚われていない限り、この施設でなら絶対に仲良く出来るという自信がある。そんな瞳。

潮はそれでも恐怖を感じ続けてしまう。それが潮の性質であり、１００％自分に危害を加えない相手であっても、恐怖を払拭することは出来ない。依存相手である飛行場姫に対しても、僅かにだが恐怖は存在している。安心感を得た中間棲姫に対してもだ。友達であると認識だけは出来そうな春雨と海風にはそれ以上のモノがどうしても拭えない。

「ミシェルのこと、怖いぴょん？」

そこに早速懸念されていた１つであるミシェルの突撃。施設の一員となるということと自分の友達になるということがイコールになるミシェルにとって、潮はもう既に友達。島風から社交性を学んだミシェルは、アグレッシブに距離を詰める。

ジェーナスが止める間もなく、ニコニコしながら潮に飛びつくように近付いた。流石に抱き着くのはよろしくないと飛行場姫が止めるが、顔はかなり近い。

「ひっ……」

「何が怖いぴょん？　ミシェルわかんない。ミシェルは仲良くしたいだけぴょん」

無邪気な瞳で潮を見つめるミシェル。そんな瞳ですら、潮には恐怖を感じさせるものになってしまうのは、そういう性質だからとしか言えないのだが、それもミシェルには理解が出来ないこと。

「そいつは、何でもかんでも怖いのよ。私が何でもかんでもにイライラするのと同じよ」

そこに助け舟を出したのが、第二の懸念点である叢雲。そんな潮の態度に苛立ちを感じつつも、一定の理解は示していた。

潮の溢れ出した感情は、叢雲と同じで発作が常に出ている苦しいモノ。そういう壊れ方をしているのだから仕方ないと思いつつも、叢雲はそんな自分にも苛立ちが抑えられず、常にイライラしている。

「仲良くする気が無いなら無いで別にいいわよ。迷惑だけはかけない

でくれれば。私達はアンタを守ってやれるほど余裕があるわけでもないの。怖い怖いで逃げ回ってくれればまだマシだけど、動けないで侵蝕されるだなんて鬱陶しいことにならないでもらいたいものね」
　出てくるのはやはり悪態。恐怖に呑まれてウジウジしている潮は、叢雲にとっては苛立ちを加速させる者に過ぎない。そして、それを我慢することの出来ない叢雲は、思ったことをそのままぶつけてしまう。
　そしてそれを受けた潮はより恐怖を感じて、表情を歪めながら飛行場姫に抱き着く。叢雲は恐怖の対象の中でも特に怖いモノであるという認識になりつつある。
　そこに黙っていなかったのは、叢雲となにかと小競り合いをする者、コロラド。
「アンタねぇ、そういう性質かもしれないけど、もう少し言い方ってものがあるでしょ」
「私は思ったことをそのまま言っただけよ。私は鬱憤を溜め続ける程キツイの」
「成長してるってんなら抑えなさいよ。ヒトのこととやかく言う前に」
　今回に関してはコロラドが正論。しかし、叢雲は性質からしてこうなってしまうのは仕方ない。そこに関しては、コロラドも理解している。合間合間にこういう絡みをしているからこそ、お互いのことは変に理解しつつあった。それ故に、お互いが若干似た者同士であることもわかってきている。
　そんないがみ合いも、潮にとっては恐怖の対象。ガタガタ震えるしか出来ない。
「姉さん、今はちょっと抑えてくださいね」
　すかさず叢雲の口に甘味を突きつける薄雲。昼食時ではあるものの、叢雲の気分を落ち着かせるためにクッキーを持ち歩いており、何かまずいことが起きそうと思ったらこうして対応するようにしていた。
　甘いものを食べている間は多少落ち着くことが出来る叢雲は、今の

状況を把握しているからこそ素直にクッキーを食べて、小さく息を吐く。
「コロラドさんも、今はあんまり刺激しないであげてください。潮ちゃんが余計に怖がっちゃいます」
「Ｓｏｒｒｙ，ウスグモ。そいつがアレだったから思わず口を出しちゃったわ。そのポンコツの制御、よろしく頼むわよ」
「誰がポンコツよチョロ助！」
「誰がチョロいってポンコツ！」
　施設の仲間達の中ではこのやり取りも漫才みたいなものに見えるのだが、入ったばかりの潮にはかなり厳しい。
「潮ちゃん、ミシェル、ジェーナスちゃんから聞いてるぴょん。アレも仲のいい証なんだって。だから、ここのみんなは仲がとってもいいぴょん！」
　そんな状況を目の当たりにしても、ミシェルはニコニコと笑顔を変えない。あの２人の言い合いがいつものことであることをハッキリと理解しているからこそ、疑問は何一つ無かった。
　ジェーナスからしたらミシェルの教育に良くないかと若干ハラハラしていたものの、清く正しい子へと成長はしてくれているようなので、今はまだ安心している。口の悪さだけは参考にしてもらいたくない。
「だから、潮ちゃんもミシェルと仲良くしてほしいぴょん。みんな友達だし、楽しくて面白い方が絶対にいいぴょん！」
　叢雲とコロラドへの恐怖から来る苦手意識はもうどうしようも無いが、ミシェルは純粋な気持ちで潮と友達になろうとしてくれている。それは一切の他意がなく、純粋な感情。
　潮はそんなミシェルにも春雨や海風に通ずる安心感を覚える。信用出来る者という認識が不思議と出来た。
「……わ、私は、こんなだけど……みんなに迷惑をかけちゃうかもしれないけど……ここにいていいですか……」
「なんでダメぴょん？　ミシェルわかんない。もう潮ちゃんは友達ぴょん。出て行くって言っても捕まえて離さないぴょーん！」

ニパーッと笑いながら手を伸ばす。春雨の時と同じように、握手を求めているのだとわかった。本当は抱き着きたいのだろうが、今はまだそれが難しいと自制はさせているので、ミシェルから出来る最大限の友情の証がコレ。

「潮、ここはこういうところなのよ。ミシェルは特に顕著だけど、みんなアンタのことを受け入れてくれてる。怖がる必要なんてないわ」

ここで飛行場姫の後押し。ここで一歩進めれば、施設の一員として前を向くことが出来る。

「……よろしく、お願いします」

ミシェルの差し出した手におずおずと手を伸ばす。その瞬間、ミシェルがガッとその手を握り、ブンブンと振るように握手をした。

いきなりのことでまた恐怖が湧き上がりかけたが、ミシェルには一切の悪意はない。そのため、笑顔を見せることは出来なかったものの、手を引っ込めることは無かった。

「まぁゆっくり行きましょ。恐怖を払拭することは難しいと思うけれど、アタシが少し鍛えてあげるわ。自分の身は自分で守れるようになった方がいいものね」

「き、鍛え……」

「怖いかもしれないけど、さっき叢雲が言ったことはあながち間違っていないの。せめて逃げ回れるようにしておかなくちゃ。アタシはアンタにも痛い目を見てもらいたくないから」

飛行場姫直々に鍛えるという発言に少し驚きつつ、依存相手からの提案であるため、潮は怯えながらひとまずは頷いた。

こうして潮は施設の者達に受け入れられる。叢雲もこんな言い方をしていたものの、自分と殆ど同類であるという認識から、表には出さないが気にかけるようになっていく。

各々のすべきこと

潮が施設に受け入れられ、飛行場姫が主体となって施設を案内している裏で、中間棲姫はまたもや鎮守府の面々に今回の件を報告していた。潮から聞き出した情報は、春雨と海風も知っているため、タブレットの前でその全容を話した。

今回重要なところは、潮は漣と出会い、一緒にドロップした曙が泥によって侵蝕されたことで逃げ出そうとして、捨てるように撃たれたということ。そして、その漣が鎮守府所属だと話したことである。

『漣を初期艦としている鎮守府はそれなりにあるわ。そういう意味でも、鎮守府に所属しているという言葉はどちらとも言えないわね』

『艦娘を連れて行こうとして虚偽を伝えることもすると思います。ましてや姉妹艦だ。信じないわけがない』

『そうね。私が黒幕だったとしても、その手段で油断させるように指示をするわ』

そもそも、漣は1人で潮達と出会っている。いくら鎮守府所属だとしても、海上を1人で彷徨っているのはおかしい。哨戒をしているのなら、最低でも1人、誰かしら随伴艦がいるのが当たり前だ。なのに、漣は1人だった。

その時点で、鎮守府所属という言葉は非常に怪しい。何処か別の場所から、ドロップ艦や野良の深海棲艦を狙って行動していたと考えるのが妥当だ。深海棲艦なら容赦なく、艦娘なら付け入って、次々と仲間を増やしているのだろう。

『嘘が真になっている可能性もあるわ。こちらでもすぐに調査を始める。幸いなことに、前回の調査に使った装置の類は、全てこちらにも貰っているの』

「それならよかったわぁ。こちらは潮ちゃんを正しく導く方針で行くわねぇ」

『ええ、よろしく姉姫。繭となって深海棲艦化した者は、貴女達にしかお願い出来ないから、頼らせてちょうだい』

大将からの言葉に、中間棲姫は勿論と笑顔で返した。

なってしまったのだから元に戻すことは出来ない。ならば、今の身体、今の状況を受け入れてもらい、ここで楽しく生きてもらいたい。幸か不幸か、今は畑の再建という大きな作業もある。戦いに恐怖を感じるのなら、戦う必要すら無いのだ。

どういうカタチでも、新たな命を楽しく生きてもらいたいと願う。

『もし、万が一、その漣が本当に鎮守府に所属している者であるとしたら、あちらは鎮守府を1つ占拠してしまったと考えなければなりませんね。なら、調査もある程度慎重にやらねば、こちらの技術があちらに漏洩してしまう可能性も』

『ええ、それも勿論頭にはあるわ。だから、素直に通信で話を聞くなんてことはするつもりは無い。私や、他の大本営の者で手分けをして調査に向かうつもり』

なんでも、既に大本営は堀内鎮守府の明石が開発したシステムの実用化に乗り出しているらしく、大将が貰ったという眼鏡と、望月が使っていた腕時計型の泥を消す装置からノウハウを学び、量産化の目処がついているとのこと。

明石の発明はそういうところが素晴らしいらしく、明石のみが理解出来るような代物ではなく、汎用化までされている。当然、それの量産が簡単なことでは無いのだが、それでも技術者ならば、なるほどと思えるような技術のみで組み上げられているそうだ。

そのおかげで、今は何処の鎮守府でも作ろうと思えば作れるというところまで来ている。その頃の明石はさらに数歩先を歩いているのだが。

「こんなことを聞くのは野暮かもしれないのだけれど……大将さんの、大本営……だったかしら、そこには、私の中身が泥を撒いていたりはしないのかしらぁ」

それも当然可能性としては存在する。大本営の中にスパイがいる可能性だ。

知らない間に侵蝕されているかもしれないというのは、大塚鎮守府でも実証済み。現に、眼鏡を使って初めて侵蝕されていることに気付けたくらいだ。極端な話、他のところでも既に同じようなことが起き

ていて、それが大本営でも起きていないかどうかが気になる。
『そこは大丈夫であると保証します。例の眼鏡を貰ったんだもの。私の部下達が徹底的に調べ上げたわ。ねぇ、吹雪？』
『はい。大塚鎮守府での対談の後、大本営に戻ってからつい最近まで、まず大本営に潜り込んでいないことを徹底的に調査しました。眼鏡は2つ貰っていたので、私と望月ちゃんを中心に。それで、誰一人として侵蝕された者がいないことを確認しています』
ここまで聞いてようやく安心出来る。少なくとも今は、大本営には何も被害が無い。勿論、こうしている間にも誰かしらが侵蝕されているかもしれないが、大本営内のチェックは定期的に実施する予定。むしろ、毎日必ず執り行うレベル。
そして今開発中の量産型も、吹雪と望月が確認して、泥の痕跡が何一つ無い鎮守府に渡すという方針だ。ただでさえ魂の混成なんてやらかしてしまう輩に、人類の叡智とすらいえる高い技術を奪われたら目も当てられなくなる。対策に対策を取られ、こちらのやることが何も効かなくなるなんてことになりかねない。
「そちらのことで手伝えることがあったら何でも言ってちょうだいねぇ。少し前に明石ちゃんに髪の毛をあげたけれど、他にも何かあれば、ね」
『ありがとう姉姫。またその時になったら遠慮なくお願いすることにするよ。まずは潮のことをよろしく頼む』
「ええ、任せてちょうだい」
口には出さないようにしているが、やはり自分の中身が好き勝手やっていることがここまで大事になっていることに、中間棲姫は気に病んでいる。被害者も増え、謎はまだまだ多い。多少は解決出来ているものの、戦いは長引く一方である。
しかし、飛行場姫を筆頭に誰もが貴女のせいでは無いと言い聞かせているため、気に病みつつも、振り切ろうという気持ちもちゃんとあった。そのため、人間側からの頼らせてほしいという言葉は非常に嬉しい。より前を向けるようになる。
『こちらでは念のためにはなりますが、海域の調査を開始します。俺

の鎮守府近海に潜んでいる可能性があるのでしょう』
『ええ、何か痕跡のようなものがわかればいいわ。本当に何でもいい、それこそ、空間の歪みのようなものでも』
『了解です。敵意を弾くというのなら、弾く何かがあるはずです。見えずとも、こちらの行動に何か違和感が出てくるはず。その観点から調査をしていきます』
　大塚鎮守府では、黒幕が潜んでいる可能性を考えて、海域調査が開始される。ハズレの可能性もあり得るのだが、古鷹と鹿島の件から考えれば近海にその敵意を弾く効果を持つ島が存在していてもおかしくはない。
「それじゃあ、今日のところはこれで終わるわぁ。話を聞いてくれてありがとう」
『ううん、すぐに教えてくれてこちらこそありがとう姉姫。堀内提督も言ったけれど、潮のこと、よろしくお願いね』
「ええ、今は妹ちゃんに付きっきりだけれど、時間が経てば少しは生きやすくなると思うわぁ」
　対談はこれで終わり、また各々の作業に戻る。施設では潮の保護。大将は全鎮守府の泥の調査。堀内鎮守府は新たなる対策の開発。そして大塚鎮守府は海域調査。
　早急にやらなければ被害は増える一方ではあるが、焦ってやってもいいことはない。冷静に、しかし迅速に出来ることをやっていく。

　対談終了後、大塚鎮守府ではすぐに調査隊の編成が行なわれた。そのメンバーは、今は療養中ということで全員鎮守府におり、呼び出せばすぐに集まることが出来る。
　その者達は、大塚提督の指示で鎮守府に集合。お互いに少々思うところがあるようだが、鎮守府の方針に則り、感情を表に出さないようにしている。
「以前から話している通り、我が鎮守府の近海に、この事件の黒幕である『中間棲姫の中身』が潜伏している可能性がある。その調査を行

なっていく。お前達は調査隊として、明日より近海の調査をしてもらう」
事件の話題が出ると、どうしても感情が表に出かけてしまう。だが、どうにか抑え込んだ。
「調査隊の旗艦は、鹿島、お前に任せる。大和、川内、雷、夕雲、長波は随伴艦として鹿島の指示に従ってくれ。航路はこちらからも指示を出すが、海上では鹿島が指揮を執ることになる」
調査隊のメンバーは、あの事件の時に泥に侵蝕されていた者6人。未然に防がれた雷と夕雲はまだしも、他の4人は実害まで出しており、鹿島に至っては首謀者に仕立て上げられているため、精神的なダメージは大きい。
それを払拭するため、延いては落ち込んだ効率を上げるために、あえてここで重要な任務を与える。戦闘ではなく調査である上に、事件の根幹に関わるところ。吹っ切れるには丁度いい。
「提督、質問よろしいですか」
「どうした大和」
「調査という名目なのはわかるのですが、そこにその、大和が参加するのは良かったのでしょうか」
おずおずと挙手しながら大和が質問。この鎮守府では最強の戦力と言える大和だが、その代償として1回の出撃で相応な資源を消費する。消耗が激しく、鎮守府にも影響を与えるレベルの存在。
効率も重んじる大塚鎮守府では、大和は敵を全力で叩き潰す時で無ければ出撃がなかなか出来ない箱入り娘である。代わりに、出撃した時は確実に殲滅するほどの実力は持っているが。
「構わない。今回の件、この部隊のまま戦闘をすることにもなり得るだろう。その時、お前がいれば心強い。あちらは見た目にそぐわぬ戦力を持っているだろう。ならば、こちらも惜しみなく戦力を出すべきだ」
効率を考えても、今回の資源的な問題は度外視出来ると判断した。もし何者か、例えば龍驤と会敵した場合、大和程の力があってもどうなるかわからない。むしろ、また侵蝕される可能性だって見えてし

まっているのだ。
だからこそ、最高戦力を惜しみなく出す。圧倒的な力をあちら側が持っていたとしても解決出来るように。
「わかりました。大和、全力でこの任務に当たりたいと思います」
「ああ、それでいい。他の者も、何も躊躇いは無いはずだ。だが、もし見つけたとしても、何もせずに戻ってくること。あちらから攻撃を受けた時に迎撃するのみとすることだ。余計な消耗は抑えたい。それに、調査のまま決戦は出来やしない」
本来ならそのまま攻め込んで全てを終わらせたいだろう。しかし、あちらのやり方はそう簡単にはいかないことくらいわかっている。
まずは場所を割り出し、そこからまた作戦を立て、そして勝率を極限まで上げてから事に当たりたい。
「以上だ。療養期間も今日で終わり、明日からまた戦いに出てもらう。よろしく頼むぞ」
全員が敬礼をし、執務室から出て行く。大塚提督もその背中を見届けた後、ふぅと小さく息を吐いた。
「お疲れ様なのです。電もそれとなくみんなの様子を見ておきますね」
「ああ、頼んだ」
大塚提督が執務室からあまり動かない分、電が艦娘達の様子を見に行くことが多い。今回のこの部隊も、ほんの少しの蟠りを抱えているものの、お互いがそれをしっかり受け入れており、鹿島に対しても怒りや恨みなど一切無く、同情が一番であることは調査済み。
結果的に、この6人の部隊でも問題なく動けると判断して実行に至る。戦力としても、大塚鎮守府の中では屈指となっているため、並の敵であればモノともしない。今回は並ではないので困るのだが。
「鹿島さん、大分参っていたみたいなのです。なので、今回の旗艦で調子を取り戻してくれればいいのですが」
「大丈夫だろう。鹿島は強い。これまでに幾人もの艦娘を後ろから支えてきた矜持がある。それに、調査という点では鹿島がトップクラスだろう。効率から考えても、今回の人選は間違っていない」

大塚提督も、今回の部隊はベストメンバーだと考えているようだ。感情論ではなく、効率として。
「何か見つかればいいがな。敵意を弾くだなんてオカルト、簡単にどうにか出来るとは思えないが、僅かにでも痕跡が見つかればいい。鹿島達ならそれも見つけられるだろう。期待している」
無表情でここまで述べるが、電としては大塚提督がここまで自信を持って言うのだから、悪い方向には行かないと信じられた。今までのやり方が間違っていたことがなかったのだから。

各場所で黒幕を追い詰めるために動き始める。決戦はいつになるかはまだわからないが。

理由のない恐怖

夕方、午後の哨戒部隊が戻ってきて、異常無しであることを伝える。出迎えたのは相変わらず春雨と海風。哨戒に出ていたのが白露とジェーナスの組み合わせだったからというのも理由。

「もうホントさ、ジンクス的なものが付き纏ってるんだよね」

「シラツユの言う通りよ。もうＪｉｎｘは破ったと思うんだけれど、何かあるんじゃないかってビクビクしちゃうのよね」

２人は何事も無かったことに安堵しながら一息ついた。哨戒に行くと何かあるのではと、まだまだ勘繰ってしまうようだ。ここ最近は連続で何事も無かったのだから、そのジンクス破りは終わっていると思えるのだが、この感覚は払拭しづらい。

「Ｍｉｃｈｅｌｌｅが一緒に行くようになったら、もう何も起きなくなったのよね」

「ぴょん？　ミシェルが一緒だと嬉しいぴょん？」

「そうだよー。あたし達だけだと何か事件が起きる気がしちゃうけど、ミシェルのおかげでそれが起きなくなったかもしれないね」

今までと変わったことといえばそれ。ミシェルが必ず同行するようになったことである。もしかしたら、２人にとっては幸運の女神なのかもしれない。

「ホント、この子達必要以上にキョロキョロしてるんだもの。よっぽど酷い目に遭ったのかしら」

「そのうちのどっちもがコロちゃん絡みなんだよなぁ」

「コロちゃん言うな」

今回の保護者枠であるコロラドが心配するほどに、白露とジェーナスは周辺警戒を念入りにしていたようだ。まさか今回も来ないよなとヒヤヒヤしながらの哨戒のおかげで、他の者達がやるよりも注意力は非常に高く、何も無かったという説得力は段違い。そこにコロラドとミシェルの目もあるので、今回の哨戒も無事終わったということに出来る。

「ああ、そういえば、ウシオはどうなったの？　私達が哨戒に行ってる

間に、施設について妹姫にＧｕｉｄａｎｃｅ（案内）とかしてもらったのよね？」
哨戒中にジェーナスはそちらも気になっていたらしい。新たな仲間として施設に所属することになったとはいえ、みんなが揃ったダイニングに現れた潮は、どうも気にかけておく必要があるくらいに弱々しい印象だった。
「確かに案内はしてもらってたよ。流石に抱きかかえられながらじゃなく、自分の足で歩きながらだけど」
実際、春雨と海風が見かけた潮は、飛行場姫に連れ回されて、施設の隅から隅まで見て回っていたイメージ。春雨がこの施設に初めて来た時と同じような展開。
春雨の時と違うことと言えば、哨戒に出ている者がいるため施設のメンバーが全員勢揃いしているわけではないということと、時間が少し違うために農作業を生で見ることが無かったこと。畑自体はかなり整ってきているため、それはそれで驚いていそうだが。
とはいえ、恐怖が常に溢れている潮は、前に進むのも一苦労。腰が引けており、その場に立つだけでも震えている始末。歩けるようになるまでまず時間がかかったくらいだ。
「今日の今日でどうにかなるもんじゃあ無いよねぇ。ましてや溢れてるのが寂しさとかじゃなく恐怖でしょ。叢雲みたいにアグレッシブでもないし」
「そうですね……周りの全部が怖いなら、その場から動くのも怖いはずですもんね。妹姫様がそこにいたとしても難しいかも」
手を引かれているから動けていただけで、そうされなかった場合はその場で蹲っていた可能性すらある。
それでも飛行場姫は怒るわけでもなく、ゆっくり時間かけて出来るようになるまで傍に寄り添い続ける。そのおかげで、手を引かれれば動けるようにくらいにはなった。
仲間達に対して安心感を持ったとしても、行動に移せるかどうかと言えば話は別だ。まずは前に歩けるようにするために、飛行場姫は寄り添い続ける。

「妹姫様が育てると言っていましたよね。どういう意味でなんでしょう」
そういえば、と海風が思い出したことを話す。ダイニングにいる時、確かに飛行場姫は潮のことを鍛えてやると言っていた。
「育てるって聞くと……やっぱり精神的なところだと思うけど」
「腕っ節を伝授するとか。妹姫さんってばめっちゃくちゃ強いんだよね」
おそらく鍛えるというのは春雨の言う通り精神的な部分だとは思うが、白露が突拍子も無いことを言い出した。
飛行場姫の腕っ節の強さは、なんだかんだで施設の住人には周知の事実。現場を見ていない者も多数いるが、やはり叢雲の槍を素手で曲げているという事実が知れ渡っている。後から来た者でもそれに関しては伝えられているらしい。名誉か不名誉かはわからないが。
そんな飛行場姫が鍛えると言うと、そっち方面も考えてしまう。だとしたら、あの潮が突然近接戦闘をこなすような徒手空拳キャラに生まれ変わるなんてことがあるかもしれない。あの性格、発作が確実に邪魔をするが。
「潮ちゃんはまず自分の溢れた感情と向き合うことが大切だよ。それが溢れて壊れちゃってるから難しいかもしれないけど、ほら、私達だって今は多少は乗り越えられてるわけだしさ」
「……ですね。叢雲さんだって、今では怒りを制御出来てるわけですし、潮さんも恐怖を制御出来ると思います。春雨姉さんが言うんですから間違いありません」
最後の方はいつもの調子だが、海風も納得した様子。
「あたし達も、潮が楽しく生きられるようにサポートしてあげなくちゃね。やれることなんて高が知れてるかもだけどさー」
「Ｆｒｉｅｎｄとして仲良くしていれば、自然に楽しくなるわよ！ね、Ｍｉｃｈｅｌｌｅ」
「ぴょん！　ミシェル、ここでみんなと一緒にいるの楽しいぴょん。潮ちゃんもきっと、ミシェルと同じになれるっぴょーん！」
何に対しても興味津々で、楽しく生きていられるミシェルは、いわ

ば潮と真逆な存在。しかし、境遇は殆ど同じだ。
ドロップ艦として生まれ、仲間だと思っていた者に裏切られ殺されかけ、その時に溢れた感情が違ったために今が正反対になった。
疑問が溢れた結果、自分のカタチすらあやふやになったミシェルと、恐怖が溢れた結果、身動きが取れなくなった潮。紙一重でまるで違う道に向かってしまっている。
だが、この施設ならば、そんな正反対な2人でも仲良くなれるだろうし、恐怖は自然と払拭されるはずだ。時間はかかっても、最終的に落ち着ければそれでいい。ここでの生活はそこまで苦しいものではないはずだ。
「今は見守るしか無いね」
「はい。余計な接触は怖がらせるだけですし、適切な距離感を持ってことに当たりたいと思います」
「でも、関わり合わないわけじゃないよ。顔を合わせたら話もするし、手伝えることがあったら率先して関わりに行くよ」
深く関わらず、しかし一切触れないでもない。うまく距離感を保ちつつ、潮が慣れるのを待つという方針で行くことになった。
いきなり距離を詰められても怖がるだけだろうし、距離が離れすぎていても慣れることが出来ない。そうしている間に、潮もゆっくりと成長していくはずだ。

その頃の潮。飛行場姫と手を繋いだままであることは一切変わらず、しかし自分の足で歩くことくらいは出来るようになっている。その歩くスピードは誰よりも遅いが、飛行場姫は苛立ちを持つこともなく、常に隣に立つようにしていた。
おかげで、飛行場姫に感じる恐怖はかなり抑えられており、元々植え付けられた依存のこともあって、見る者が見ればベッタリのようにも見える。
「ゆっくりだったけど、施設のことはそれでわかったかしら？」
潮に聞くと、目はどうしても背けてしまうものの小さく頷いた。

「他のみんなも会うたびに言っているけれど、アンタと仲良くしたいと思ってるの。だから、少しずつでも慣れてちょうだい。アタシが隣にいてあげるから」
そう言われても、性質というのは簡単には覆せない。
「そろそろ夕食だけど、そこではみんなが一緒に食べるようにしているの。アンタも一緒に来なさい。どうしても嫌なら、部屋まで持って行くけど」
仲間達と一緒に食べるにしても、今の潮には怖くて仕方なかった。何が怖いのかと言われても、それは理由のない恐怖である。
この短時間でも、ここの住人は潮のことを裏切ることが無いくらい誠実で楽しく生きているのだと理解は出来た。しかし、それでも怖いものは怖かった。本来なら怖くないはずなのに身が竦む。足は震え、目は焦点が合わなくなる。何が怖いのかわからないのが怖い。
一番安心出来る飛行場姫が傍にいても、それは全く変わらない。怖い以外の感情が失われてしまったかのような感覚。
「……た、食べ、ます。みんなのところで」
怖くて怖くて仕方なくても、それから逃げ続けることはしなかった。顔を合わせないことで恐怖から逃げられるのかと言えばそうではなく、1人でいるのも怖いし、その時にみんなが自分のことをどう言っているのかを考えるのも怖い。視線を受けても受けなくても怖い。
同じように恐怖を感じるのなら、仲間のことを考えて一緒にいることを選択した。握手だって出来たし、ほんの少しの会話は出来たのだから、一緒にご飯を食べるくらい出来るはず。潮は勇気まで失ったわけでは無かった。
「そう、それなら良かったわ。あとは、楽しく生きられるように出来ることならみんなとの関わり合いを増やしたいところだけど……まだ流石に難しいわよね。ああ、夜はアタシが添い寝したげる」
「ふぇっ、あ、ありがとう、ございます……」
依存相手との添い寝と聞いて、怖いながらも若干身体が昂揚したように思えた。そこは全て恐怖に支配されているわけでなく、繭の中に

いる時の影響がしっかり効いているようだった。
「そうだ、潮。ここまでで何か、自分に違和感を覚えたところとかは無かったかしら」
　違和感と言われて、パッと思いつくところは、今のところ無かった。言ってしまえば、全てに恐怖を感じることが一番の違和感である。
「今のところは……何も……」
「そう。でも何かあったら言いなさいよ。アンタ、繭のカケラを取り込む時に一部が欠けてしまっていたの。心の何処かに影響がある可能性が高いから」
「は、はぁ……」
　おそらく潮自身にその欠けたモノは理解出来ない。壊れた心で自分の壊れた部分の把握はかなり難しいのだ。
「アタシもアンタのことは気にかけておくけど、アンタはまず自分のことをしっかり知っておいた方がいいわ。それでまた怖くなったら言いなさい。アタシならアンタを慰めることくらいは出来るから」
「……よろしく……お願いします……」
　飛行場姫にそう言ってもらえて、恐怖が少しだけ晴れるような感覚を覚えた。
「それじゃあ、行きましょうか」
「は、はい……妹姫さん……ずっと隣にいてください……ずっと……」
「ええ、少なくとも今はアンタから離れないわ。ご飯の後はお風呂もだし、寝るときもね。あ、でもそのうち料理とか手伝ってちょうだい。アタシ、料理当番の時もあるから。ここでの仕事をしないわけにはいかないもの」
　料理に対しても恐怖は感じてしまうが、飛行場姫が隣にいれば出来るかもと、潮はひとまず首を縦に振る。
「そうだ、あともう1つ。アンタ、溜め込むタイプ？　だったらそういうのはここではやめてちょうだい。思ったことは全部口に出していいわ。そうしてくれた方が、みんなアンタのことがわかりやすいから。それも怖いっていうなら、アタシにだけ教えてちょうだい。それを他の子にバラすなんてことはしない」

ストレスでまた恐怖が増える可能性もあるため、楽しく生きるためにも鬱憤は溜め込まないようにしてもらいたいという、飛行場姫の気持ち。潮のことを思っての言葉に、またもや潮の中では恐怖が晴れるような感覚。

おそらくこれは、嬉しいという感情なのだろう。しかし、潮にはその感情がすぐに判断出来なかった。

これが、潮から欠けた部分。自分の感情が、すぐに判断出来ない。恐怖に支配されて心が壊れた結果、恐怖以外の感情がすぐにわからなくなっている。カケラが取り込めなかったことにより、それがより顕著になっていた。

恐怖が晴れることで何か別の感情が動いていると知り、それが何かを探し出して、ようやくその感情がわかる。喜びと知るまでが遠い。

「……はい、その、また後から……お願いします。寝る前とか……話をしたいです」

「ええ、それでいいわ。話せることがあれば沢山話しましょ」

この欠けた部分との付き合い方は難しいかもしれない。しかし、この施設で過ごしていれば、自然とその方法も身につくだろう。

潮の選択

夕食時、飛行場姫に連れられて、潮はダイニングに現れた。昼食時と同様に、施設の住人全員が集まっているため、どうしても視線が集まる。まだ恐怖を一切払拭出来ていない潮は、その視線だけで身が竦んでしまう。

しかし、今は隣に飛行場姫がいるため、おずおずと与えられた椅子に着席。誰とも目は合わせられないものの、不思議な一体感はあった。ここにいる者全員が潮のことをもう仲間として見ているので、悪い感情など何処にもない。

「今日は貴女のためにいろいろと用意したわ。Bon（召し上がれ）appｔｉｔ」

食事当番であるリシュリューが潮の前に料理を並べて行く。他の者よりも少しだけ豪華なそれに、潮は驚きながらも恐怖が晴れていくのを感じた。

ここで恐怖が晴れたということは、これは怖いものではなく別の感情であると繋がり、そしてこれが嬉しいという感情であることに気付ける。

心が壊れたことで毎度この段取りをしなくてはならないのが潮の特性となってしまっているのだが、だからといって感情が失われたわけではない。料理を見て微かにだが笑みを浮かべた。

「あら、やっぱりこういうのは効くのかしら」

飛行場姫はその表情を見逃さない。指摘されたことでビクンと震えた潮は、恐怖よりも先に恥ずかしさを感じた。春雨とは違って羞恥心は据え置きの様子。元々の潮もそういうところには敏感であるというのもあり、簡単には消えないようである。

「え、えっと……」

「責めてるわけじゃないから心配しないで。ここにはこういう美味しいモノで自分を取り戻した子がいるから、アンタにも効果的なのかと思ってね」

最近ここに加わった者で無ければ即座にピンと来た。そして、一斉

に叢雲へと視線が行く。
「私は別に食い意地だけで自分を取り戻したわけじゃないわよ！」
「半分くらいはあるでしょ」
「……否定はしないわよ」
　薄雲の献身と美味しい食事で人間性を取り戻したといっても過言ではない。殺伐とした戦場では手に入らない、和やかな空間だからこそ、全てを失った叢雲が叢雲として成立するまで回復したのだ。
　潮にも同じようなことが起きるはず。穏やかな空気で、戦場から離れていれば、精神的なところに変化があるはずだ。いわば、文化的な生活で心を育む。
「とりあえず食べましょ。流石に食べ方がわからないなんてことはないわよね」
「それは……大丈夫です」
　早速いただきますをしてから一口食べた。瞬間、目を見開く程の衝撃。この時だけは恐怖が晴れるなんてレベルではなく、その感情がすぐに喜びであることが理解出来る程だった。
「おいひい……」
　一口、また一口と口に含んでは、その味によって歓喜に震え、少しずつ表情を取り戻す。
　叢雲が食べている間は怒りが沈静化するのと同じで、潮も食べている間は恐怖が晴らされるようだった。なんだかんだ言っても、やはり美味しい食事はどんな存在でも心を穏やかにするようである。
「ムラクモといい、ウシオといい、本当に作り甲斐があるわね」
「Ｏｕｉ．　もっと材料があれば、歓迎会を開くことが出来たのですが」
「それは仕方ないわ。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達が動けないんだもの」
　今は食糧も節約中。ある程度は鎮守府から補給されているものの、施設の人数も大分増えてしまったため、消耗は激しい。減らせるものは減らしておきたいと考えるのは妥当なところ。
　それでもストレスを発散するために甘味を欠かさないようにしているのだから、そこは作り手の腕。薄雲も叢雲への甘味の腕は日に日

に増すばかりである。
「……その……ありがとう、ございます。美味しい食べ物……私、嬉しいみたいです……」
ほんのりと笑顔をみんなに向けた潮。早速回復の前兆が見え始め、ダイニングは活気に湧いた。

深夜の哨戒は叢雲薄雲ペアに、保護者枠が戦艦棲姫。そして潜水艦枠として伊４７。いつものように夕食後に少し休憩してから出発。
潮は飛行場姫と眠ることが確約されており、春雨が施設に所属した直後のように、ベッドルームを使うこととなる。現状、飛行場姫は潜水艦姉妹とも一緒に眠っているため、潮は初めての夜を４人で迎えることとなる。
「まぁ４人がギリギリよね」
人数が１人分多いため川の字とは言えないものの、飛行場姫が潮を抱き締めるカタチとなりつつ、姉妹は姉妹で抱き合うように眠れば、ベッドの上に綺麗に収まる。寝相が良くないと落ちてしまいそうだが、幸いにも飛行場姫も潜水艦姉妹も寝相は良い方なので、その心配はない。
潮は潜水艦姉妹も一緒に眠るということで若干緊張していた。恐怖は勿論払拭が出来ておらず、依存相手以外の者と一緒にいるというだけで挙動不審になりかける。
食事の際には、味覚の刺激によってその辺りは一時的に引っ込むのだが、それが終わったらすぐに舞い戻ってくるので、まだまだ先は長い。初日にどうにかしろという方が間違っているのかもしれないが。
「この子達ならまだ接しやすいと思うわ。潮、ゆっくり慣れていきましょ」
「……は、はい……」
ビクビクしているのはどうにもならない。そんな潮を見て、潜水艦姉妹は１つ疑問を持った。
「質問」

潮は話しかけられるだけでもビクビクするだろうからと、潮ではなく飛行場姫に対して問う。姉妹はその辺りも配慮出来るようになっていた。
「恐怖というものがよくわからない」
「怖いとは何か」
感情が無いが故に、恐怖というものが理解出来ていない姉妹。だが、今の姉妹なら簡単な説明でも理解出来るだろう。この施設の一員として加わった直後ならば、その辺りは何もわかっていないだろうが、今や2人とも自我が育まれている。
「アンタ達も知っておいてもいいわね。でも、今からアタシ、嫌なこと言うわよ」
「構わない。知ることが目的」
それならいいかと恐怖についての説明を始める。だが、今の姉妹なら1つ言えばわかることである。
「アンタ達、もし目の前で相方が死んだらどう思う」
たったこれだけで、姉妹は恐怖という感情を学んだ。大切な存在が隣にいるから自分達は成立しているのだという認識が育まれていたことで、それが失われるという想像だけでも2人揃ってビクンと震えた。死んでしまう光景すらも想像してしまったのか、互いに繋いでいた手に力が入った。
「怖い、恐ろしい、その感情を理解した」
「同時に、悲しみと怒りを理解した」
飛行場姫は単に死んだらという想像をさせたのだが、姉妹はそれを敵に殺されるという光景で想像したらしく、相方が死ぬ悲しみと、その要因を作った敵に対する怒りという感情をここで知ることになった。
大切な者という正の感情の裏側にある負の感情を理解したことで、潜水艦姉妹はより自我が育まれて、感情が豊かになっていく。無感情から無表情に進化する日も近い。
「潮は常にこの感情に支配されているということ」
「それは辛い。何かしてあげたいと思う」

一定の距離を保っていた姉妹だが、恐怖を理解したことで、潮に対してさまざまな感情が芽生えた様子。
その中でも、仲間の力になってあげたいという気持ちが出来上がったのは大きな成長だ。依頼を受けることなくその行動を選択出来たこと自体、それは完全な自我だ。
「え、えっ、その……あの……」
姉妹の割と強めの押しに、潮はまた違った恐怖を感じずにはいられなかった。しかし、自分を思ってこの行動に出ていることも理解しているため、無下にすることも出来ず、恐怖と同時に混乱もしている。
そこに飛行場姫は助け舟を出した。潮にも、姉妹にも。
「潮、これはこの子達なりのアンタへの思いやりよ。何か応えてあげられないかしら」
そう言われてもという表情をするが、姉妹は力になりたいとグイグイ来る。
「それじゃあ……その……手を……握ってください……」
「了解」
「お安い御用」
言われたらすぐに潮の手を握った。姉が右手、妹が左手を、温もりを与えるように両手でしっかりと包み込むように。
潜水艦であるが故か、体温は他の者よりも少しだけ低いように感じだが、それでも充分すぎるほど温かさを感じた。
潮も握られた瞬間はビクンと恐怖に慄くが、姉妹の思いは伝わってくるので、徐々に恐怖は晴れていく。そしてわかった感情は、やはり喜び。仲間の温もりは喜びに繋がる。
こういうことを何度も何度も繰り返し行なっていくことによって、潮の中の失われたモノをまた育んでいこうという試みは、やはり接触が有効であることがわかった。叢雲も常に薄雲が近くにいたから回復出来たようなもの。姉妹でなくとも、潮には誰の温もりでもよく効く。
「……温かい……です」
「この子達だけじゃなく、みんなが同じことをしてくれるわ。アンタ

はもう少し図々しくしてもいいのよ」
　姉妹だけではなく、飛行場姫も温もりを与えるために頭を撫でてやる。恐怖を払拭するための行為は、重なれば重なる程効果的。潮は食事時の時と同様に、少しだけ顔を綻ばせた。そこからは恐怖を感じないほどに。
「怖いと思ったら仲間を頼りなさい。それでもダメそうなら数を集めなさい。ここのみんなはそれくらい喜んで受け入れてくれるわ。代わりに、アンタも頼まれたら何かやってあげることね」
「……だ、大丈夫……でしょうか……私なんかで……」
「あー……アンタが一番怖がってるところはそこなのね。世界の全てが怖いかもしれないけど、一番怖いのは関係を失うこと」
　深海棲艦化のきっかけが、泥のせいであることは一目瞭然ではあるが、姉妹艦である漣に裏切られたこと。それにより、関係を持つ者との繋がりが切れることを極端に恐れている。
　そして、元々控えめな性格もあってか、自分の行動がそれに繋がる可能性も恐れ、結果的に周囲のモノに対して関係を持つこと自体を恐れ、何をされても怖いとなる。強く出られても、控えめに触れられても、最終的に失うかもしれないと思うと怖くて仕方ない。
「潮、やっぱりアンタはアタシが鍛えてあげる。アンタのその恐怖を、アタシが振り払えるように強くしてあげる」
「え、えっ」
「心身共に強くなれば、アンタが一番怖いモノはアンタ自身の手で繋ぎ止められるわ」
　失うことが怖いのならば、失うことが無くなるほどに強くなればいい。そしてそれは、飛行場姫の手によって可能になる。
　死に別れが怖いならば、仲間を守れる力を手に入れればいい。関係が切れるのが怖いならば、そうならない心を手に入れればいい。怖がって逃げ回っているだけでは、結果的に関係は切れてしまう。ならば、逃げ回らずに済むくらいの心と身体を手に入れればいい。
「ここの子達は、アンタがどうあっても関係を切ることなんて絶対に有り得ない。勿論、力に溺れて傲慢になったら切られるかもしれない

けど、このアタシがアンタをそんなカタチで育てるわけがないわ」
「え、そ、その……」
「潮、強制はしないけど、考えておいて。強くなれば、アンタはその常に抱いている恐怖を払拭出来る。さっきも言ったけど、関係が切れることが怖いなら、そうならないようにアンタ自身が守ればいいの」
最後の決断は潮に委ねる。これだけ言っても恐怖に呑まれて強くなることを拒むのなら、それならそれでいい。そういう性質なのだから仕方ない。代わりに施設内の雑務くらいはしてもらうつもりだが。
そして、潮は考える。強くなるべきか、このままでいるべきか。勿論、強くなることに対しての恐怖はある。これだけ言ってもらっておいて上手くいかなかったらと思うと、身が竦む程に怖い。だが、やらないことも怖かった。
ならば――
「……わ、私……私、やります……やってみます……。どちらにしろ怖いなら……やった方がいいと思うんです……」
それが潮の選択。やって怖いかやらずに怖いかならば、やった方がマシだと考えた。
潮も艦娘の心は失っていない。世界を守るという意志は、そのまま残っている。その範囲が恐怖によって極端に狭まっているものの、それでも自分と仲間を守ることは出来るはずだ。
「ふふ、わかったわ。なら、明日から早速いろいろとやっていきましょうか。まずは心を鍛えるために、朝ごはんを一緒に作りましょう。ここでの生活をちゃんと出来るようにしないとね」
「は、はぃ……頑張ります」
声は徐々に小さくなっていくが、やる気だけは萎んでいかなかった。
「応援する」
「潮は強くなれる」
姉妹からの声援も、潮にとっては力になるはずだ。

潮はここから恐怖を払拭するために心身共に鍛えていくことになる。時間はかかるかもしれないが、目指す道は見えた。

記憶より

その日の夜は難なく乗り越え、朝。夜に目を覚ますこともなく、春雨はグッスリと眠ることが出来た。直感的な悪寒もなく、朝まで行けたということは、深夜の哨戒で何事も無かったということになる。

春雨は買い被るなと海風に言い聞かせてはいるものの、何も無いことには安心していたりする。潮の繭が拾われてきた時も、悪寒が無かったとはいえ深夜に目を覚ますことはあったが、今回はそれも無かったため、より安心出来る。

「おはようございます、春雨姉さん。今日はグッスリ眠れましたね。寝顔も穏やかで、疲れもスッカリ取れているようで海風も安心しました。不安が無いようですし、夜に何も無かったということでしょうね」

目を覚ましたその真横では、満面の笑みの海風が既に目を覚ましていた。おそらく、春雨が目を覚ます少し前から起きていて、春雨を起こさないようにその表情を眺めていたのだろう。

春雨はその辺りも察するが、あえて何も言わない。別に何か害があるわけでもなく、むしろ海風がたったそれだけで安定するのだから何か言う理由がない。

「おはよう、海風。自信を持って言えるわけじゃないけど、多分何も無かったんだと思う。夜の哨戒もそうだし、潮ちゃんのことも」

深夜の哨戒は勿論だが、今は潮のこともある。

繭から孵化して初めての夜は、１００％の確率でその時の悪夢を反芻させられ、発作を起こすことになるだろう。潮の場合は、恐怖に苛まれて錯乱し、一緒に眠っている者達を傷付ける可能性もあった。

だが、春雨が夜のうちに反応しなかったということは、そこまでのことが起きていないと考えてもいいだろう。もし何か起きていたとしても、飛行場姫と潜水艦姉妹だけでどうにか出来たレベル。

「ちょっと気になるから行ってみようか。それに、哨戒から戻ってくるみんなも出迎えなくちゃね」

「はい。私も潮さんのことは少し気になります。妹姫様のことですか

ら、何かあっても力業で押さえ込むことが出来る気がしますが」
「あはは……確かに」
そんなに乱暴では無いのだが、緊急時にはその力を惜しみなく使い制圧するだろう。それが潮であっても、正気を失っていたらおそらく容赦しない。
おそらくそんなことは無いだろうが、若干気になるので、2人はサクッと準備をした後、すぐにベッドルームへと向かった。

そのベッドルーム。中からは何やら声が聞こえるので、まだ眠っているということは無さそうと、ゆっくりと扉を開ける。
「おはようございまーす」
少し小声で中を覗くと、潜水艦姉妹の視線に出迎えられる。そして当の潮はというと、飛行場姫に抱き着いて心を落ち着かせていた。
潜水艦姉妹からの説明によると、2人の予想通り潮は当時の悪夢を見たようで、起きた途端に泣きじゃくったそうだ。暴れるまではしなかったものの、錯乱はしていたことで、飛行場姫がその動きを一応止めたことで現状になっている様子。
「ほら、もう大丈夫よ。春雨と海風も来たわ。アンタは仲間と一緒にいるの。怖いことなんて何も無いわ」
言い聞かせるように囁き、頭を撫でて落ち着かせる。昨日の今日では簡単にはいかないかもしれないものの、強くなるという選択を自ら掴み取った今の潮ならば、落ち着けるきっかけをもらえたらそのまま落ち着けるはず。
結果的に、涙が止まるまでにそこまで時間はかからず、震えも最小限にまで落ち着いた。
「それじゃあ着替えましょ。昨日も言っていた通り、今日は朝ご飯を一緒に作るの。少しずつでいいから進んでいきましょ。難しいならまた今度でもいいけれど」
「……大丈夫……です……やります……やると決めたので……」
ぐしぐしと目元を拭った後、飛行場姫から少しだけ離れた。そし

て、昨日も着ていたセーラー服姿に変わる、
「怖いです……怖いですけど……頑張ります……」
「ええ、その調子よ。今日もアタシがついてるから」
ちゃんと出来たことを褒めつつ、ちゃんと側にいてあげると横に立つ飛行場姫。それと同時に、潜水艦姉妹も逆側に立った。
「依頼は無くても、サポートさせてもらう」
「数は多い方がいい。仕事まで時間がある」
「潮の力になる」
「恐怖を払拭する」
春雨と海風には、一晩で関係が大きく変わったようにすら見えた。飛行場姫のみならず、潜水艦姉妹までもが潮に付き従う。
確かに人数が多い方が恐怖は払拭されるだろう。温もりは多ければ多いほど安心する。直接触れずとも、近くにいるだけで温かい。
「潮は大丈夫よ。春雨、海風、アンタ達は哨戒の子達を出迎えてやってちょうだい」
「了解です。私達も少し心配だったんですが、もう大丈夫そうですね」
安心出来た春雨と海風は、そのままベッドルームを出て哨戒部隊の出迎えへと向かった。
「言った通りでしょ。みんな潮のことを見捨てるなんてこと無いのよ」
２人の背中を見送った後、潮に言う飛行場姫。目を覚まして錯乱する潮を落ち着かせるために、このことをずっと言い聞かせていたのだ。施設の仲間達は潮のことを切り捨てるなんて絶対にしない。このまま待っていれば、誰かしらが潮のことを見に来るだろうと。
そして、ここに春雨達が現れた。飛行場姫が話していた通りに。この後に他の者達も続々と潮の様子を見に来ることになり、それもあってか、潮はここの仲間達への信頼を強くしていった。

施設の外に出た春雨と海風は、いつもの哨戒の出発地点の岸に。今の深夜哨戒の当番は叢雲、薄雲、戦艦棲姫、伊４７。今頃眠気と疲れ

からプリプリしながら帰ってきているだろうと話しながらそこに到着したところ、案の定苛立ちを隠すこともない叢雲が真っ先に目に入った。
「ちょうど良かったわ。春雨、アンタ達、前に泥がばら撒かれてるの見たのよね」
　春雨の姿を目にした叢雲がイライラしながらズンズンと向かってくる。
「うん、見たよ。ここと鎮守府の航路の上かな。そこに3つくらい」
「……そう。じゃあ、今日私達が見た泥は真逆の方向ね」
　聞き捨てならない言葉。昨晩と同じように、泥が海上に設置されていたらしい。
「場所は叢雲の言う通り真逆ね。見つけたのも3つ……だったわよね。出て行ったばかりの時に見つけたし」
「はい。場所も正確に覚えています。叢雲姉さんが見つけたらすぐに撃って消し飛ばしちゃいましたけど」
「あんなもの長く置いておく方がダメでしょ。さっさと吹っ飛ばすに限るわ」
　処理は即座にしたようで、それ以上拡がるようなことは無かったとのこと。いつもの眼鏡を使って何も無いことも確認している。
　今回は大鳳のような高高度からの調査が出来る者もいなければ、リシュリューやコマンダン・テストのように哨戒機が飛ばせるわけでもない部隊であるため、その時の周囲に何かあったかどうかは不明。少なくとも目のいい戦艦棲姫からは何も見えていなかったとのこと。
「戦艦様、その泥が設置されたところの海の記憶を読んだりは」
「してきたわ。案の定、あちら側の奴らが施設を調べている記憶が読み取れたわよ」
　ここで戦艦棲姫の特性が役に立つ。泥があった現場でその記憶を読み取ったことで、詳細までは難しいかもしれないが何かしらの痕跡が確認出来る。
　そこで見えた記憶は、複数人の何者かが泥を設置して、施設の場所を確認している映像だったという。その複数人というのが鮮明に見

えたわけでは無いようだが、1つだけ言えることがあるようだ。
「私はあの龍驤とかいう空母の顔は知ってるけど、そこにいたのはそいつじゃ無かった。多分駆逐艦、おそらく3人ね」
「3人……しかも本人がいない、ですか。確か今はもう泥となっているから、黒幕と同じように他人の身体を器にすることが出来るんですよね」
「そうね。だから、その3人のうちのどれかに入っているなんてことはあり得るわ」
龍驤はもう今までの姿で活動はしていない。いや、その姿も取れるのだが、泥と化した今では、他人の身体を使って活動をしている。
それは、器が壊れたところで龍驤自身は何のダメージも受けないため、次の器に乗り換えるだけ。器が無ければ元の姿になるのみである。
「それでも、あえてこちらに攻撃してくることは無いんですね……」
そこであえて襲撃をしてこない辺り、慎重なのか慢心なのか。
施設の場所がわかっていないから探すのはわかる。測量なんて手段を使っているのは妙な感じはするが。やるなら以前にやったように哨戒部隊を襲うなりして強引に施設の場所を探し出せばいいのにと誰もがそのやり方に疑問を覚える。
「昨晩もそうでしたが、相変わらず自意識過剰なやり方ですよね。まさか春雨姉さんに圧力をかけるために自分の力を誇示しているのでしょうか。精神的にチクチク攻撃するとか、なんて陰険なんでしょう。そんな慢心泥空母はこの海風が八つ裂きにしますので、春雨姉さんは気に病まないでくださいね」
海風も苛立ちを抑えようとしない。そのやり方で春雨が嫌そうな顔をするのに耐えられないようである。
「珍しく気が合うわね海風。私も同感よ。自分の力に酔っているようにしか見えないやり方をするクソ空母は、私もズタズタに刻んでやるわ。どうせもう救えないんだもの。後悔する程に痛めつけてやる」
「痛めつけるだなんて勿体ないです。何度も何度も殺すべきですね。女神たる春雨姉さんに楯突いた報いを、その程度で済ますわけには行

きません。心が壊れても許すことは出来ませんね」
「はは、言えてるわ。謝っても許してやらない。私の怒りが晴れるまで殺し尽くしてやるわ。死んでも地獄から引き摺り出してもう一度殺してやらなくちゃ。謝ろうものなら笑いながらグチャグチャにしてやる」
　こういう過激なところで同調されるのは困ると、春雨と薄雲が２人を止める。
「海の中にも何にも無かったヨナ～」
「お疲れ様、ヨナ。私達に見えないところを見てきてくれるのは助かるわ」
「えへへ、任せてほしいヨナ」
　ここで海中から浮上してきた伊４７も合流。３人が見えない海の底までを念入りに調査し、本当に何も無いことを確認してきたようだ。
　ここでも念のためと眼鏡を使ってお互いが侵蝕されていないことを確認した。春雨や海風にもやらせている辺り、本当に念入り。１人でもやられてしまえばアウトなのだから、ここは慎重に行く必要がある。
　とはいえ、春雨に一切反応が無いのだから、ピンチはまだまだ訪れていないというのが春雨を除くみんなの見解である。
「とりあえずみんなは休んで休んで。今、妹姫様が朝ご飯作ってるから。潮ちゃんも手伝ってるんだって」
「へぇ、アイツが、怖い怖いってうじうじしてるだけだと思ったけど」
　哨戒で気が立っているせいで口が悪いが、潮のことは多少なり心配はしていた。そんな言い方に薄雲は苦笑する。
「どうせなら美味しいもの作ってくれるといいけど」
「もう、姉さんったら、本当に食べることには一生懸命なんですから」
「言い方！」

　ひとまず哨戒は終了。今はこの平和を満喫しつつ、施設側としても

準備を進めていく。

明石と大淀

一方その頃、堀内鎮守府。孵化した潮のことと、あちら側にされた漣と曙のことを知ったことで、その対策を開発している明石は余計にテンパりつつあった。しかし、それは行き詰まっているとかそういうことではない。やりたいことが多すぎて、考えが纏まらなくなっているのである。

それは徹夜をやめろという大淀の横でうんうん唸りながらも眠ることも出来ず、結局身体を動かそうとしても作業が進まない。やりたいことが多すぎる上に、それに辿り着くためのアイテムが荒潮から手に入れた泥だけであるため、特性やら泥化やらはまるで進まない。

「特性の空間を見るための物でしょ。泥の対策もより強化するでしょ。出来ることなら艦娘そのものに照射して泥だけ引っ剥がすことが出来れば完璧だよね。身体を吹っ飛ばさずに内部の泥だけ消し飛ばす方法も考えなきゃ。あとは泥になったっていう龍驤をどうにかする手段か。存在そのものが泥になってるっていうなら、それはもう流動体……だよなぁ。攻撃しても受け流しちゃう？　でも他人を器にしてするってところを聞く限り、それもあるんだよなぁ。だとしたら、まず捕まえる……のは難しいか。器を壊しても外に出てくるってことだし、最悪壊した相手を次の器にするんだよなぁ。そうしたらどんどん強くなるわけだし。あ、でも龍驤も黒幕の特性を持っちゃってるなら、空間を見る物も優先順位高くなるか。いやいや、でも器に照射して龍驤そのものを引っ剥がす装置も……」

あまりにも考えが纏まらないため、思っていることが全部口から漏れ出している。そしてそれを全て耳に入れてその考えを纏めているのが大淀である。明石がやりたいことを全てメモして、それを1つずつでもクリア出来るようにと、唸る明石の隣で大淀も悩んでいた。

実際に明石のような作業が出来るわけではないが、技術者ではなく管理者としてサポートするのが自分の役目であると大淀は自負していた。そのため、明石が徹夜をするのならしっかりそれに付き合い、眠るところを見届けてから自分も休むところまでしていた。かなり

の親密さなのだが、大淀はともかく明石は大親友というところで考えは止まっている。そんな空気感を大淀は楽しんでいるようではあるが。
「明石、ちょっとストップ。考え続けてるせいで、ちょっと熱っぽくなってるわよ」
「考えが纏まらないんだよぅ。あ、なんか空白んでない!?」
「そうもなるでしょ。寝ろって言ってるのに横になったらなったで唸り続けて、結局動き出しちゃったんだから」
　溜息を吐きながらも、あえて頭を冷やすようにと冷たい水を差し出す。すぐさま受け取った明石は大きく喉を鳴らして一気飲み。
「徹夜はダメだって、何度も言ってるんだけど」
「なるはや案件だからどうしても考えちゃって。大淀は付き合わなくてもいいのに」
「私が寝てる間に動いて、そこで何かやらかした時に誰が一番酷い目に遭うと思う？」
　ニコッと笑うが、眼鏡の奥の瞳は一切笑っていなかった。明石も引き攣った笑みを浮かべるのみ。
「徹夜してるから考えが纏まらないの。一度寝なさい。それでも寝ないなら、私にも考えがあります」
「考えって？」
「寝るというよりは、気を失うというのはどうでしょう。幸い、今この鎮守府には武蔵さんが長期滞在してくれています」
　つまり、気を失うレベルで腹辺りを殴られ、否応なく意識を飛ばされるということ。痛みは度外視。最悪、入渠というカタチでの休息となる。
　それは流石に勘弁してほしいと、明石もここで休憩することにした。だが、こう話しながらも頭の中では考えが纏まらずにぐるぐる回っているため、眠気に繋がらない。
「ただなぁ……困ったことに眠気も無いんだよね……。行き詰まるといっつもこんな感じで、正直私自身も困ってるくらいだよ」
「知ってる。どれだけ私が明石の近くにいると思ってるの」

もう一度溜息を吐くと、一旦そこに座れと椅子を指差す。明石はひとまず大淀に言われた通りにそこへと座った。
「まずはお腹を満たす。その後にお風呂に入る。そして、寝床で横になる。たったこれだけで眠れるから」
言いながら明石の前におにぎりを置いた。戦闘糧食の一部らしく、1つくらいなら問題ないと先んじて提督に聞いているため、申し訳なさも感じずに明石に提供。
そこに何処から出したのか、少し大きめな水筒。その中には温かい味噌汁が入っていた。明石が唸っているうちに、大淀がささっと作ってきたらしい。
「はぁ……あったまるぅ」
「それだけでも多少は落ち着けるでしょ」
「だねぇ。ちょっとテンパりすぎてたなぁ」
おにぎりをもふもふと食べながら味噌汁を啜り、大きく息を吐いた。大淀も呆れながらその通りだと突きつける。
「独り言がループし始めてたもの。あれはダメな合図みたいなもの。手も動かないし頭も動かない。あのままだったら何やってもダメ」
「真っ直ぐぶつけてくるなぁ相変わらず」
「助かってるでしょ」
「いやもうホント助かってます」
本当なら先程の水やこの味噌汁辺りに睡眠薬でも仕込んでやりたいと考えていた大淀だが、残念なことにこの鎮守府にはそういうものは無いし、そこまでするのはやりすぎと自重することも出来ている。そんなことやったら後から何を言われるかわからないし。
そのため、なるべく眠りを誘うような休ませ方をして、そのまま気を失わせる方向に持っていった。
「はぁ……久しぶりだよこんなに行き詰まるの」
「そうね。なんだかんだチャチャッと仕上げるのが明石だものね」
「いつもはさ、こう、点と点がドーンと結ばれる感じがするんだよ。でも今回は、こっちはいっぱいの点で、向こうが面って感じで、何処に結んでいいのかわからないっていうか」

おにぎりの残りを頬張った後、頬杖をついて大きく溜息を吐く。食べて落ち着けたとはいえ、考えが纏まるわけではないため、悩みは深くなる一方。
「寝て起きたらまた一緒に考えてあげるから、何度も言うようだけど今はまず休みなさい。これで寝なかったら、本当に武蔵さん呼ぶわよ。もしくは最近絶好調の江風さん辺りを」
「艤装で殴られるじゃん！　わかった、わかったから、もう寝るから」
「最初からそうしろと言ってるのに」
結局、いろいろと考えながらも明石は言われた通りに仮眠に入った。眠れない眠れないと言いつつも、大淀の献身により疲れがドッと表に出てきて、そのまま眠りに落ちた。仮眠と言いつつ、昼まで寝ていそうな勢いだったので、大淀はさりげなく提督に申請だけして自分も眠りにつく。
いくら艦娘とはいえ、事前準備なしで徹夜なんて出来やしない。コンディションは嫌でも落ちていき、出来ることも出来なくなっていくだろう。ここで無理にでも寝かしたのは大正解。それこそ、急がば回れである。

そこから大淀が目を覚ましたのはちょうど昼時。仮眠として眠っていたものの、それなりにグッスリ眠れたようで、大分頭は冴えていた。
「……明石はどうなっただろう」
眠る前に外していた眼鏡をかけ直し、まだ寝ているかなと思いながら明石の部屋に行ってみたもののもぬけの殻。先に目を覚ましていたようで、ならば工廠だろうとそちらへ向かった。
流石に寝ていないということは無い。本当に寝ずにやりそうだったため、寝るまで隣で見守っていたほどである。だから寝ていることは確認済み。本当に仮眠の時間が短かったという程度だ。
「あ、大淀さん、ちょうど良かったわ～」
そこに現れたのは荒潮。いつものんびりとしているか、ジェーナス

との妄想に耽っているイメージが強い荒潮が、ほんの少しだけ焦った雰囲気を醸し出しつつ大淀を探していたようである。
「あら、どうかしましたか？　荒潮さんが私を探しているというのは珍しいと思いますが」
「ん～、ちょ～っと明石さんが凄いことになっていて～」
　明石の名前が出たことで、これはまずいと工廠に急ぎ足で向かう。
「ジェーナスちゃんを守るために艤装の改造のこととかを相談しようと思ったんだけれど～、なんというか凄いことになっていて～」
「凄いこと、とは？」
「やる気に満ち溢れているというか、とにかく凄いことになってるのよ～」
　荒潮の言い方では何が起きているのかわからない。それほどまでに明石がえらいことになっているのでは無いだろうかと、妙な胸騒ぎがする。
　そして工廠。そこで見た明石の姿を見て、大淀は引き攣った笑みを浮かべた。
「繋がった！　繋がったぞーっ！　位相を変えた波長なら艦娘の身体に影響を与えずに泥だけ吹っ飛ばすことが出来る！　艦娘と深海棲艦の身体の構造が近しいものだから泥だけ消すためにあんなことになっちゃったけど、近いだけで別物なんだから極々僅かなズレくらいなら再現出来るじゃん！　寄生虫が穴に入らなくても侵蝕する可能性があるなら、外側から内側に入れるなら内側から外側に弾き出すことくらいこっちから操作出来るに決まってる！　むしろ微妙にでも意思があるならそこをズラしてやればいいんだ！　あっちが洗脳ならこっちも洗脳してやればいい！　泥の意思をこちら側にズラしてやればいいんだ！」
　眠って回復した明石が、今まで行き詰まっていた分を取り返すレベルで動き回っており、周囲の視線は勿論、声も音も聞こえないように自分の世界に入り込んでいた。
　とんでもない独り言が聞こえたようにも聞こえたが今はあまり気にしないことにして、周りが引くほどの行動をしている明石を止める

ために一歩二歩と前に出る。
「明石！　ちょっと止まりなさい！」
「うぉーっと、大淀ぉ！　聞いて聞いて！　一回寝たことで頭が冴えて冴えて仕方ないんだよね！　あの泥って前から言ってる通り寄生虫みたいなものでしょ？　で、１つの意思で寄生した艦娘や深海棲艦を侵蝕して、魂を侵すって感じなんだけど、その意思そのものをこっち側にしてやればいいんだよ！　いわば、こちら側の洗脳！　まずは艦娘に侵蝕してる泥から実験しなくちゃいけないけど、泥をこっちのものに出来れば、今回の件は全部どうにか出来る！　特性だって空気中に散布された寄生虫だっていうなら、それ自体の意思をこっちの意思に捻じ曲げてやればいいんだよ！」
　大淀が来ても止まらないくらいにテンションが高い。
「ああもう！　わかった、わかったから、今はちょっと止まって！　みんな引いちゃってるから！」
「あとは泥の意思に干渉する手段なんだけど、単細胞生物なんて単純なんだから、ちょっとズラすだけでこちら側に来るはず。それが黒幕側なら頑丈かもしれないけど、１ｍｍズラすだけでゴールは変わるでしょ。ほんの少しだけでもズラすくらい出来るはず！　これなら行ける行ける！　右にズラすか左にズラすかで向かう場所は変わるだろうから、その方法を考えるだけで全部解決だよ！」
　まるで止まる気配が無いため、もう最後の手段に出るしかないと考えた大淀は、武蔵の姿を探そうとするものの、その武蔵は今別の場所で他の者の特訓で出払ってしまっている。
「明石さんを止めればいいの～？」
　と、ここで荒潮がニコニコしながら前に出る。もう縋れるものもないため、荒潮にお願いした。
「それじゃあ、止めま～す」
　そこで一撃。本当に一撃。明石の腹に１発入れることで、明石の動きを完全に止めた。
　その一撃は駆逐艦とは思えないくらい重かったようで、武蔵からの特訓もしっかりと効いていることがこんなことでもわかってしまう。

「止めたわ～」
「は、はい、ありがとうございます。明石、落ち着きなさい」
「ご、強引すぎだよぉ……」

とはいえ、明石は何かに辿り着いたようである。ここから鎮守府の力は黒幕をどうにかする手段を次々と身につけていくことになる。

遠縁の妹

午後。施設の哨戒メンバーは、松竹姉妹にコマンダン・テスト。そこに潜水艦姉妹がついていく。

潜水艦姉妹は潮から離れて行動することに対して若干の躊躇いを見せたものの、哨戒は施設全体で行なわれている自衛行為であり、主人である姉妹姫からの依頼でもある。

中間棲姫も飛行場姫も、2人のその考え方は依頼よりも大切なモノであると話はしたのだが、哨戒は潮を守るためにもやらなくてはいけない仕事だと割り切り、自分達がいない間の潮のことは、飛行場姫ならば任せられると哨戒に向かった。

「あの子達も律儀なものね。でも、自分で選択したことと、ここで潮から離れることを惜しんだってのは、充分すぎるくらいの成長ね」

自分の側を離れようとしない潮の頭を撫でながらも、潜水艦姉妹の成長を心から喜ぶ。あの姿は、もう哀れな人形だなんて誰も思わない。

あとは表情が出て来ればより良いと思うのだが、そこはゆっくりと慣らしていけばいい。自我は心配ないくらいに育ったのだ。自然と笑えるようにもなるだろう。

「それじゃあ潮、まずは自分を守る手段を覚えていきましょうか」

「ひっ、え、あ、は、はぃ……やると決めたので……はぃ……やります」

午前中は精神的な訓練ということで、朝食と昼食の用意を手伝い、空いている時間はまだ施設に残っている者達と対話をすることで慣らしていた。何も出来なかったものの、漁にも参加し、何をしているかを眺めるだけはしていた。

恐怖の払拭は性質上ほぼ無理なのだが、絶対に自分のことを切り捨てないということが保障されることで安心感は得られる。特に距離の詰め方が強めなミシェルは、午前だけで潮の信用をしっかり勝ち取っている。

「あの子達が戻ってきた時に驚くくらいになってると良いかもしれないわね」

「そ、それは、その……私にはまだ難しいですよう……」
「わかってるわ。それくらいの意気込みだといいってだけ。ゆっくり行きましょ」
とはいえ、自分を守る手段となれば、どうしても戦闘に繋がること。特に恐怖に繋がるようなことだ。やると決めたところで、今まで以上の恐怖に襲われることは言うまでもない。
そのため、まずは海上を航行出来るようにするところから始める。しかし、飛行場姫は陸上施設型。海上航行をすることは出来ず、一歩も踏み出すことも出来ない。
そのため、海上航行のための講師として、今暇している仲間達に集合をかけた。深夜の哨戒に参加する白露、ジェーナス、ミシェル、大鳳は現在夜のために睡眠中。中間棲姫は海上航行が出来ないために来ても意味がなく、現在はまた鎮守府との対談が出来るように施設内に待機。リシュリューやコロラドもそこに便乗している。
その結果、ここに集まっているのはそれ以外。みんな潮のことを気にかけていた。
「妹姫、私の艤装で海に出る？　潮を近くで見れる方がいいでしょ」
「そうね。まず潮が一歩出られるようになったらお願い」
戦艦棲姫の艤装を使えば、飛行場姫も一応海上には出られる。海に落とされた時点でそのまま死に繋がるようなものなのだが、その安定感は折り紙付きである。
今ここに集まったメンバーの中でも、最初に信頼を勝ち取った春雨と海風は少しだけ前に。あとは優しさが先立つ古鷹が気にしながらも一歩前に出ていた。ちなみに古鷹はミシェルがいないため本来の姿である。
「それじゃあ、まずは艤装を出してみなさい。出来る？」
「は、はぃ……出来る……と思います」
少しだけ躊躇いつつも、艤装を展開。その艤装は艦娘の時から殆ど変わっておらず、叢雲の持つ槍のような近接戦闘用兵装や、薄雲の持つ鎖付きの主砲のような特殊兵装もない。良くも悪くも一般的な装備。どちらかといえば春雨や海風に近いと言える。

「うん、まぁそこは普通で良かったわ。恐怖が先立って出せないとか、何処か欠陥があるような艤装じゃなくて安心した。それじゃあ、海に入ってみてちょうだい」
「はぃ……」
おずおずと海へ。そこもやはり艦娘としての記憶はしっかり残っているのだから、当たり前のように立つことが出来た。バランスが崩れるわけでもなく、さも当然のように航行可能。海の上に立ったからといって発作を起こして動けなくなるということはない。
「よしよし。じゃあ、主砲を撃ってみましょ。せめて自分を守るために、敵に向かって撃つくらいはしないといけないわ。実弾が怖いなら水鉄砲でもいいから」
そう言われても、潮は主砲を構えることが出来なかった。戦闘に繋がる行為が恐怖を激しく呼び起こし、ガタガタ震え出してしまったのだ。
自分を守るためだとしても、潮がこうなったのは、この主砲によって撃たれたことがトドメだ。敵が持っている物のみならず、自分で持つのも怖い。結果的に、海上に立つことは出来ても、主砲はそのまま消してしまった。
そもそも主砲は自ら関係を断ち切る兵器だ。今の潮に使えるわけが無かった。水鉄砲で殺傷能力を0にしたとしても、その形状から連想させてしまうため、もうダメだった。
「そうね、そうなるわよね。ごめんなさい潮。それは流石に酷だったわ」
恐怖が溢れ出したというのはここまで致命的であると理解した。この施設は戦わなくてもいいような場所になっていたため、その時に拾われていればこれでも良かっただろう。しかし、今は自衛くらいは出来ないと危険である。それが出来ないとなると、守られるばかりになるだろう。
飛行場姫は、元々姉を守るために戦えるようにしている。そこに潮が加わるだけ。それならばまだ問題ないかと納得はしていた。
しかし、ここで口を出す者が現れる。

「主砲も持てないでどうやって自分を守るのよ」
苛立ちを隠そうともしない叢雲が、潮に対して一切我慢することなく言い放った。
叢雲のキツい言い方は、潮にとってはどうしてもダメージになる。そのため、その場でブルブルと震え始め、自分の身体を抱き締めていた。そうしたところで震えは止まらず、膝から崩れ落ちる。
「潮ちゃん、大丈夫、大丈夫だからね」
その姿を見てすぐに動き出したのは古鷹だった。それは全て優しさから。自分も元々はあちら側で活動させられていたということもあり、その被害者には同情以上に救いたいという気持ちが先立つ様子。
この施設に所属してから、一から十まで被害者であるという存在は、ミシェル以外に入ってきていなかったが、潮は言うまでもなく被害者中の被害者だ。故に、どうしても気になって仕方なかった様子。
「叢雲ちゃんも、潮ちゃんを責めているわけじゃないの。だから大丈夫」
「う……うぅ……怖い、怖いんです……こういうのが怖いんです……」
「うん、わかるよ。敵でも撃つのが怖いんだよね」
大丈夫大丈夫と言い聞かせながら、潮を抱き締めて頭を撫で続ける古鷹。ここの古鷹は随分と薄着であるため、抱き締めればその温もりが強く伝わる。おかげで、まず恐怖が晴れていき、その感情が安心であることを理解出来た。
「戦うことが怖くなっちゃうのは、みんなわかってくれてるよ。潮ちゃんはそういう感情が溢れちゃったんだもんね。大丈夫、戦えないのなら、無理して戦わなくてもいい。その分、私達が戦うだけでいいんだから」
ヒックヒックとしゃくり上げるような泣き声が聞こえ始め、古鷹に縋り付くように抱き着く。そんな姿を見ていると、叢雲は苛立ちが増すような感覚だった。
「叢雲、我慢しなさい。アンタがそういう性質なのと同じで、潮はああいう性質なの」

「自分でこうすると決めたのに、いざやったら出来ないってのが私には気に入らないのよ」
「アンタはやめろと言ってもやめないタイプなんだから似たようなものよ」
　飛行場姫が忠告しても、叢雲の苛立ちは治まらない様子。しかし、同じように根幹を司るような感情が溢れた者であるため、方向性は違えど似た者同士というのが飛行場姫の評価だ。怒りをぶちまけるか、耐えきれず泣きじゃくるか、そのどちらか。どちらも抑えきれない感情の行く末である。
「叢雲姉さんは、潮ちゃんのことが心配なんですよ」
　そこに薄雲がヒョコッと現れて叢雲の心境を補完する。潮を叱咤するつもりでも、叢雲はどうも言葉選びがよろしくない。感情のままに最も悪い言葉を選択してしまっているようにすら思える。そのため、その内心を把握している薄雲が足りない部分を補完しているのだ。
「私も叢雲姉さんも、潮ちゃんは遠縁の妹みたいなものですから、どうしても気になるんです。姉さん、昨日も結構潮ちゃんが今後この施設でやっていけるのか心配していて」
「薄雲、余計なこと言わなくていいの」
「言葉足らずの姉さんの本当の思いを知ってもらわないと、誤解されたままになっちゃいますから。だったらちゃんと自分の言葉で潮ちゃんに伝えてください」
　いつもは控えめな薄雲も、叢雲のことになると途端に強めになる。戦闘以外不器用な叢雲のサポーターとして、姉妹以上の感情を持ちながら的確に口を出していた。叢雲の立ち位置が悪くならないように。
　そして今回もだ。叢雲は潮を責めるような言い方をしたが、本心は全く違う。しかし、怒りが先立つせいで言葉が責めになってしまう。
「……別に戦えないなら戦えないでいいのよ。だったら、私達に守ってほしいと言ってくれれば、私は断らないわ。そういうものだって理解はしているもの。でもね、やると決めたなら逃げるな。どういうカタチでもいいから、せめて自分を守れる力を得る努力をしろ。それだ

けよ」
叢雲は叢雲なりに思いやりを持って接しようとしていたのだが、叢雲自身の性質からそれは難しい。それに、潮は自分で道を決めたのだ。一度決めたそれを、やっぱり怖いから無理というのはやめてもらいたいと考えた。しかしどうしても言葉が悪い。
あの後にもう一言付け足せば良かったのだ。『自分が守れないのなら、私達を頼りなさい』と。その言葉が出てこないのが、今の叢雲の性質である。そのため、そこを薄雲がサポートしたわけだ。
そんな叢雲の言葉が聞こえたのか、潮は溢れる涙をどうにか拭い、震える脚でどうにか自立する。古鷹はまだ心配そうだったが、潮が自分の力で立ちあがろうとしているのだから、少し支えてあげるだけで止める。
「怖い、怖いけど……でも、みんなに迷惑をかける方が……怖いですから……」
迷惑をかけたら切り捨てられる。そういう考えが何処かにあるため、潮はどうにか立ち上がった。ここの者達にそんなつもりは1つも無いのだが、そんなネガティブな感情でも、前を向く理由になるというのなら縋るしかない。
「でも、でも主砲は本当に怖くて……怖くて……」
「それなら別の武器……しかも相手を切り捨てない武器になるわ」
とは言ったものの、武器というモノが関係を断ち切るモノである。主砲でも魚雷でも使うことが難しい。だからといって叢雲の槍のような刃も、文字通り切り捨てることになるのだから怖くて握ることも出来ない。料理の手伝いで包丁を握るくらいは出来たが、それはそれをヒトに向けることが無いからだ。武器として使えと言われたら、やはり握ることが出来なくなるだろう。
「そうなると……やっぱり拳しか無いわよねぇ」
何処か嬉しそうな飛行場姫の声色。力加減次第では敵を殴り殺すことも出来そうではあるが、そこを考慮せずに考えれば、相手の動きを止めるためだけの技だけ教えればいい。打撃ではなく、関節。しかし近付きすぎると泥を吐かれて侵蝕される。なかなか難しいところ。

「まぁ、自衛のためならなんでもいいわ。言ってしまえば護身術よ。アタシは一応その辺りも出来るから、潮は今は身体を作ってもらいましょうかね。同胞(はらから)はそういうところは成長早いから、一気にいけるわよ」

艦娘以上にイメージが身体に影響を与えるのが深海棲艦だ。こう在りたいがカタチにしやすいと言える。考えただけで着ている服が替えられるのだから、自分の中のパワーバランスも自由に近い。

ここからの特訓で、近接戦闘寄りに育つのだと思い込みながら鍛えれば、すぐに身につくだろう。筋力だけはどうしても時間が必要だが。

「このオドオドしている潮が、敵をボコボコにする姿は見てみたいわ。しかも殺さないんでしょ。いいじゃない、一番適してるわよ」

救いたいと言うのなら殺してはダメだ。しかし、手加減をしていては終わらせることも出来ない。ならば、聞こえは悪いが半殺しで止める技術を得ることが出来れば戦える。

殴りかかることで縁が切れると考えるかもしれないが、その拳は救うための拳になるはず。ならば、切り捨て、切られることに恐怖を感じる潮にとっては、まだ得られる技術となるだろう。

「え、えと……」

「潮ちゃん、無理だけはしないでね。やめたいって言っても責めないからね。でも、覚えたいというなら、私もお手伝いするからね」

古鷹も潮を全力でサポートするため、その手を握る。最初はビクンと震えたが、その温もりに恐怖は晴れ、安心という感情に行き着く。

「……が、頑張り、ます。怖い、怖いですけど、でも、私の手でどうにか出来る手段が手に入るなら……うぅ、怖い……頑張ります、頑張れますから……」

まだ震えは止まらないようだが、少なくとも先程よりは瞳に光が宿っていた。

ここから潮は、施設の中でも少数である近接戦闘タイプへと成長し

ていくことになる。怖がりながらも、前を向こうと奮起するその姿は、とても健気だった。

隙間時間

午後の哨戒部隊が戻ってくるまで、潮の特訓は続いた。特訓と言っても、戦える身体を作るという意味で、ちょっとした筋トレとか運動によって仲間意識を強める特訓である。ここにトレーニング好きな大鳳がいたら大喜びだっただろうが、深夜哨戒のために今は睡眠中。後から聞いて残念がるのは間違いない。

「ま、今日のところはこんなところでしょ。アンタ、意外と才能がある気がするわ。正直、見た目よりも動けてるもの」

「ふえっ、あ、そ、そう、ですか……？」

「ええ。言っちゃ悪いけど、アンタってどちらかと言えば裏方寄りだと思ってたのよね。前衛に向いてないというか。でも、そういうこともやれるような軸があるわ。教え甲斐があるってものよ」

体力や運動能力は、正直艦娘としては普通という水準なのが潮。強いて言うなら、非常に運がいいというのが艦娘潮のちょっとした特徴ではあるのだが、それでも潮以上の者はいる。それでも改二改装が出来るくらいの逸材である。

この潮は練度０の状態で死にかけ、恐怖によって深海棲艦化した存在ではあるが、その潜在能力は据え置き。むしろ深海棲艦化により、そこが早熟となっていた。それ故に、このトレーニングに怖がりながらもしっかりついてこれた。

「まぁ、前衛なんてしなくていいんだけれど。アタシが教えるのは、自分の身を守る手段。今日で身体がデキ始めてるから、回避と防御、あとはちょっとした攻撃方法を教えてあげる」

「攻撃……ですか」

「心配しないで。アンタの戦いの中での手段として覚えておいてもらうだけ。基本的には避け続けて諦めさせてやりなさい。そうしたらアンタは自分の身は守れるんだから」

戦いが怖いのなら、それを避け続ければいい。敵と相対することがあっても、その攻撃を全て避け、逃げ回れば傷つくことはない。それも出来なくなった場合は、逃げ出すために攻撃が出来れば、尚戦うこ

とは無くなる。
そして、その間に仲間に助けを求めればいい。施設の仲間達は喜んで潮を助けるだろう。
「……みんなに迷惑をかけたくないです……それが一番怖いんです……でも、でも怖くて、怖くて……堪らなく怖くて……」
「わかってる。大丈夫だよ、潮ちゃん」
このトレーニング中も常に隣で同じようにトレーニングをし続けた古鷹が、恐怖を感じた途端にすぐに手を握る。
異なる艦種を混ぜられたことでスタミナが極端に少ない古鷹も、このトレーニングに参加することによって、そこをカバーしていきたいと考えていた。潮の隣にいることで安心させ、なおかつ自分のためにもなるのだ。一石二鳥である。
「戦いたくないです……でも、それでみんなが傷つくのが怖いんです……だから力を持とうと思ったんです……それすらも怖いです……」
「うん、うん、そうだよね。大丈夫、みんなわかってる。大丈夫だよ」
変に考え始めると恐怖が膨らんでくるようで、トレーニング終わりにガタガタ震え出してしまう。それを古鷹が抱き締めて止めようとするが、簡単には止まらない。
「潮、アンタの恐怖は悪いことじゃないわ。誰だって戦うのは怖いんだもの。アンタはそれがちょっと大きいだけ」
古鷹だけでは震えが止まらなそうなので、飛行場姫もすぐさま温もりを与えに行く。トレーニングの最中でも定期的に発作を起こすため、中断しては落ち着かせを繰り返していた。
勿論その度に叢雲が苛立ちを見せかけたが、薄雲が即フォローしていたのと、春雨と海風がそちらのカバーにあたっていたことで、最悪な状況には行かなかった。
今も何か口走りそうだったため、叢雲の口を薄雲が押さえ、モゴモゴと言っている内に春雨と海風が両手足を拘束。余計なことをさせないようにしている。
「少しずつその恐怖と付き合っていきなさい。ストレスは溜まるだろうけど、時間をかければ必ず大丈夫になるわ。今日の夜もいろいろ話

をしてあげる」
「ありがとう……ございます……」
「それに、強くなれば怖いものは少しずつ無くなっていくわ。アンタの本質の部分かもしれないけれど、少しでも自信を持てば全部が怖いなんてことは無くなるから。今はアタシ達を信じてちょうだい」
ふふんと自信満々に笑みを浮かべる飛行場姫に、潮はまた安心感を得ることが出来た。やはり依存相手の言葉はより強く染み込むようである。
「哨戒から戻った」
「潮の様子が気になる」
そこに、午後の部の哨戒メンバーである潜水艦姉妹が駆け込んできた。任務はしっかりこなしてきたが、どうしても潮が気になったようで、哨戒が終わった瞬間、大急ぎでここまで走ってきたようだ。
同じメンバーの松竹姉妹とコロラドは、2人を追うことなくその様子に感心しながら背中を見送ったくらい。
「あらアンタ達、哨戒は？」
「何事も無かったことを確認」
「松、竹、コマンダン・テスト、計3名から報告される」
「我々の優先順位は潮にある」
ここまで言ってのける程にまで成長した潜水艦姉妹。潮という放っておけない存在が身近に現れたことで、自我に劇的な影響を与えていた。
古鷹にあやされている潮の姿を見て、すぐに駆け寄った。発作を起こして震えているものの、古鷹のおかげで落ち着いてきているところを見て、少し安心したように息を吐いた。
「頑張ってるようで何より」
「しかし、調子がいいように見えない」
「発作を確認。我々も傍にいる」
「同意。潮の傍にいる」
こうなってしまえば、潮も充分落ち着ける環境になったと言えよう。このトレーニングを通して潮の恐怖が晴れる頻度は多くなり、安

心という感情に辿り着ける時間も増えた。
「むぐぐ、ぷはっ、アンタ達強引すぎよ！」
　ここでようやく叢雲の拘束が解かれる。余計なことを言わないようにここまでずっと3人がかりで何も出来ないようにしていたが、それが無くなったことで怒りの矛先はその3人へ。
　だが、薄雲筆頭にそんな態度も素知らぬ顔。こうしなければ潮が傷付く可能性があったのだから、今はじっとしていてほしかった。
「ああもう、私だって多少は理解しているつもりよ。トレーニング中も頻繁に発作起こしてたんだから、嫌でも理解するわ」
「それでも口に出すのが姉さんじゃないですか。今は特にダメですよ」
「わかってるわよ！」
　ここの姉妹の力関係も大分固定化されてきたようである。戦闘では叢雲が、それ以外では薄雲が有利。
「今言いたいのは潮のことじゃないわ。哨戒終わったのよね、潜水艦の奴らが帰ってきたんだもの」
「そうですね。姉さんなら他のメンバーの帰投もわかるのでは？」
「ええ、3人分感知してるわよ。で、昨日も一昨日も、深夜の哨戒の時に泥を見つけてる」
　ここで叢雲が言いたいことに、春雨は勘付いた。
「今このタイミングで泥を置きに来てる……？」
「そうよ。何処からどうやって見てるか知らないけど、あっちは私達の哨戒の穴を知ってるってことになるでしょ。腹立たしい」
　前回、前々回と、泥は深夜哨戒の1周目に発見し、午前も午後も見つけていない。つまり、今このタイミング、午後の哨戒から深夜の哨戒の隙間時間に敵の何者かが施設にまで接近し、泥を設置して帰っているということになる。
　設置している理由は施設の位置の測量だろうとしていたが、もしかしたら他の理由もあるかもしれない。ならば、今もまた別の場所に泥を設置している可能性はある。
「だから、今からタイミングずらして哨戒に行くべきだと思ったのよ。

ご飯が遅れるのは百歩譲るわ。それよりもさっさとヒト様の居場所に迷惑かける輩を後悔させてやりたいもの」
「確かに……2回来たのなら3回目もあり得る……よね。うん、叢雲ちゃんの意見に賛成」
いないならいないで別に構わない。だが、いた場合のことを考えるとここで潰しておきたい。確かにそれは必要だと、春雨も頷いた。
「春雨姉さんがやるというのなら、それが正しいのでしょう。すぐにでも向かう準備は出来ています」
春雨も同意したことで、海風も即同意。
「わかりました。なら、この4人で行きましょう。次の哨戒は明日ですし、出来るのは私達が適任でしょうから」
薄雲も叢雲が提案したことだからと便乗。駆逐艦4人いれば確認だけは出来るだろうが、少し心許ないかもしれない。そうなると、いつものように保護者枠が欲しくなる。
そうなると、とても都合のいいことに、ここには戦艦棲姫がいる。事情を話したら便乗を快諾してくれた。もし何も無かったとしても、また記憶を読み取るなりすれば、あちら側の痕跡が何かしらわかるはずだ。
そしてその件を飛行場姫に話したところ、必要かもしれないと許可。夕食が遅れてしまうものの、中間棲姫には話しておくとまで言ってくれた。
飛行場姫も現状を憂いており、早期の解決を望んでいる。それに繋がるのなら、出来ることなら縋りたい。
「私が当たりをつける。そちらに行って、叢雲ちゃんが感知出来たら対処。出来なかったとしても、泥があったら処理。何も無かったら帰る。これでいいかな」
「ええ。思いついた私が言うのもアレだけど、さっさと終わらせて夕飯食べたいの」
「姉さんはお腹が空き始める時間ですもんね。トレーニングにも参加していましたし」
「アンタねぇ……まぁ間違ってないから否定はしないわ」

食欲よりも施設のことを優先した叢雲は、ここに来た当初と比べれば格段に成長していた。

夕暮れの哨戒。いつもやらない時間での航行であるため、妙に新鮮な気分になる。ここから徐々に暗くなっていくわけだが、深夜の哨戒よりはまだまだ明るいため、当たりをつけた場所にサクッと行って、用事をサクッと終わらせたい。

「多分、こっち。前回と前々回の真ん中の辺りかなって。で、どちらかといえば鎮守府寄りかもってイメージ」

春雨の直感で海をぐんぐん進む。一切の迷いなく、春雨を先頭にして。海風は春雨に何も無いようにと護衛をするかの如く付き従い、その後ろを叢雲、薄雲、戦艦棲姫と続く。

今のところは叢雲が感知出来るようなものも無く、眼鏡によって見える泥の反応も無い。

「逆側だったかもしれないけど、まずはこっちでいいよね」

「構わないわ。私達が闇雲に探すより、アンタの勘に頼る方が堅実だもの」

「叢雲さんは春雨姉さんのことがよくわかってきたようで何よりです。崇め奉ってもいいですよ。仲間のために身体を張る姉さんの分け隔てない愛を感じることが出来ますから」

「喧しい」

いつもの調子で現場に向かっている内に、叢雲が顔を顰めた。

「ビンゴ。感知範囲に何か入ったわ。3人」

「私が昨日見た海の記憶と同じ数ね」

本当に何者かがいた。それがわかっただけでも緊張が走る。春雨の直感と叢雲の感知が合わさったことで、敵は確実に逃がさなくなった瞬間である。

「あ、泥の反応もする。もう確定だ」

「そこにあの龍驤が交じってる可能性は」

「まだわからないかな……なんとなくでも」

直感的にもそこはまだわからない様子。龍驤本人がここに来ているのか、それとも配下だけに来させているのか。それもこれも、当人に会えばわかるはず。

あちらがこちらを認識しているかどうかはわからないが、春雨の直感的には少なくとも高高度からの監視は感じていなかった。だが、近付けば近付くほど、あちらの動きは撤退をしようとしている雰囲気に。

「逃がすか！」

「ちょっと、叢雲ちゃん!?」

ここで叢雲が急に速度を上げた。怒りが表に出てきてしまったため、少しだけ理性が外れかけてしまったようだ。そんな叢雲を孤立させないようにと、春雨を筆頭に速度を上げる。

「見つけた。多分駆逐艦が3人、感知じゃなくて目に入ったわよ」

目のいい戦艦棲姫は姿まで視認した。もう夕暮れも終わりがけで暗がりになってきている海の真ん中ではあるのだが、だからこそその3人は妙に目立っていた。その妙な姿のせいで。

「……あれ、泥で出来てる」

春雨が呟いた。眼鏡越しだからこそわかる、その3人の着せられているもの。上には艦娘の証拠と言うべき普通のセーラー服なのだが、スカートはなく、代わりに泥で出来ているであろうレオタード状のスーツを着せられていた。それに加えて、腕や脚も覆うようにロンググローブとニーハイソックスまで。その全てが泥によって構成されている。

その姿を見て、侵蝕されたジェーナスを嫌でも思い出してしまう。悪意を前面に出しているような姿だ。艦娘とは一線を画すように、まるで子飼いの戦闘員だと言わんばかりに。

「ってことは、アイツらに触れてもまずいってことよね」

「だね。でも逆に、戦艦様が持ってきてくれた泥刈機が効くと思う。服を引っ剥がすような感じになっちゃうから申し訳ないけど」

「敵に申し訳なさなんて感じてんじゃないわよ」

しかし、気をつけなくてはならないのは確かだ。あんな姿、泥を

纏った艦娘という敵を解放するには、どうしても慎重に行かなくてはならない。触れること自体が侵蝕に繋がるということは、春雨のあの技、心臓に瞬間的に一撃を加えるアレですら、春雨に被害を出しかねないのだ。

海上に現れた3人の艦娘。明らかに敵であるそれを、春雨達はこの場で解放出来るのだろうか。

擬似深海棲艦化

午後の哨戒と深夜の哨戒の隙間時間に敵の部隊が泥を設置しているのではないかと考えた叢雲の意見を聞き、その場にいた駆逐艦４人と戦艦棲姫の５人で、春雨が直感的にこちらにいるかもしれないという海域へとやってきた。

そこには叢雲が言った通り、泥を持つ駆逐艦がいた。戦艦棲姫が海から読み取った記憶の通り３人。その３人は、普通の艦娘とは違って、泥で作られたコスチュームを身に纏っていた。

「……ジェーナスちゃんがここにいなくてよかったね」

「はい。絶対にショックを受けますので」

その３人の駆逐艦の姿は、侵蝕され、春雨達に牙を剥いたジェーナスと殆ど同じ格好。おそらくその辺りの当てつけもあるのだろう。

姿形をそれにするだけで、こちらの１人が潰せるというのなら、あちらは優先的に手段として使ってくるはずだ。

「あ～あ、ついにバレちゃいましたなぁ」

「アンタがモタモタしてるからでしょ」

「まあまあ２人とも、これはこれでいい機会なんだから」

三者三様の反応を見せるものの、逃げられなかったことに対して焦りなどはまるで見せておらず、見つかったのならばここで迎撃してやろうという姿勢を見せ始めた。

「でも助かったねぇ。そっちから来てくれたってことは、これで完全に位置が把握出来たよ。わざわざこんなところまで測量に来た甲斐があるってもんだねぇ」

「ったく、ホント面倒ったら無いわ。明確な場所がわからないからって、あたし達をパシリに使って器の座標を探ってこいだなんて」

「でも、やってきたことが間違いじゃなかったんだから安心でしょ。あとはアレをどうにかすれば、任務完了なんだから」

もう逃げようだなんて思っておらず、目の前にいる５人の深海棲艦をここで始末しようと考えているようだ。

「アンタ達、何処の手の者よ。黒幕の泥姫の方なのか、龍驤の方なの

か」
槍を突きつけながら叢雲が問うた。
「んー、じゃあとりあえず名乗っとく？」
「アホか。必要ないわよそんなこと」
敵のうちの1人、髪を横に結った気の強そうな駆逐艦が、叢雲に食ってかかるように前に出た。
その手には艦娘のものではなく深海棲艦の主砲が握られ、問答をすることなく叢雲に対して砲撃を放つ。
「わお、ぼのたん好戦的ぃ。でも、漣もそれでいいや。名乗ったところで、全員始末するつもりでしょ」
「ぼのたん言うな。でも、アンタの言う通りよ。あっちは器を守る連中なんでしょ。だったらさっさとおわらせてやんないと」
話しながら、自ら漣と言った駆逐艦も主砲を構える。そちらも艦娘のものではなく深海棲艦のもの。威力は当然、艦娘のものよりも高い。
漣という名前を聞いたことで、アレが潮を襲った艦娘であることがわかる。ならば、一緒にいる方が、潮と共にドロップしたという曙。ぼのたんなんて呼ばれたなら、そちらが曙だろう。
だが、潮がこちら側にいるというのはあえてこの場では話さなかった。顔にも出さないようにして、この戦いに臨む。
「叢雲ちゃん、アレ、弾いちゃダメ。多分泥が紛れてる」
そこに直感的にも勘付いた春雨が助言。叢雲ならば、敵の砲撃を槍で弾いて回避することもある。しかし、あの弾に対してそんなことをしたら、槍とぶつかった瞬間に泥が撒き散らされて、わずかにでも付着してしまうだろう。そうなったら最後、肌から染み込んでそのまま侵蝕だ。
叢雲だって侵蝕だけは絶対に回避したい。あんなザマを見せるくらいならば死んだ方がマシであると考える。そのため、春雨の助言は素直に聞き、そのスピードで大きく回避。
「結構速いじゃない。でも、朧！」
「ん、わかってる。数はあっちの方が多いけど、朧達は負けないくらい

の力を貰ってるんだから」
３人目、朧と呼ばれた駆逐艦が２人の前に飛び出してきたかと思いきや、強烈な踏み込みと同時に猛スピードで突撃をしてきた。そのスピードは最早叢雲にも匹敵しており、回避方向に追い付くほどの勢い。
奇しくも、この駆逐艦３人は全員が潮の姉妹艦。同じ第七駆逐隊を組んでいた、最も親密な者達である。
この場に潮がいたら、恐怖だけではない感情で崩れ落ちていただろう。戦うことなんてまず出来ない。今のままでは。
「叢雲ちゃん！」
その速さに追いつけるのは春雨。脚を生やす勢いを使った跳躍を利用し、叢雲の援護をするために駆けつける。
「アンタはダメだよぉ辿り着く者。一応ご主人様から話は聞いてんだよね！」
しかし、それを邪魔するのは漣。行動を阻害するための砲撃を的確に繰り出し、叢雲との合流を阻止する。砲撃が直撃したら大怪我では済まず、掠るだけで終わったとしても泥の侵蝕という不安があるため、どうしてもブレーキをかけざるを得ない。
「叢雲姉さんには私が行きます！　春雨ちゃん達はそっちの２人を！」
「お願い！」
進めなくなった春雨の代わりに、叢雲には薄雲がつく。姉妹であれば連携も的確であり、１人だけを相手にするのなら勝てる率も上げられるだろう。
とはいえ、相手は侵蝕された艦娘。殺すわけにはいかず、どうにかして捕らえたいところ。治療出来ればいいのだが、今ここにあの治療薬は存在しない。そのため、近付くことなく気を失わせる必要がある。
「１対２か。こっちが不利だけど、朧には問題無い」
一瞬、朧の瞳に紫色の炎が灯ったように見えた。それは艦娘には起こり得ない現象、深海棲艦だからこそ起こる発光現象。だが、どう見

ても朧は深海棲艦ではなく艦娘である。
「数の差を覆すのは、本気出すしか無いってことだよぼのたん」
「わかってるわよ。あたしだって力は貰ってんだから」
そして、漣と曙の瞳にも紫色の炎が灯る。当然こちらも艦娘のままだ。しかし、やろうとしていることは明らかに深海棲艦。持っている兵装もそれのため、今や艦娘のまま深海棲艦の力を得ていると言っても過言では無い。
砲撃の性能も、動きの速さも、何もかもが艦娘を凌駕している。しかも、話を聞いている限り曙はドロップした直後なのにだ。練度があってないようなモノである曙が、まるで高練度の熟練者のような動きをしていた。
「……まさか、あの服のせいで同胞(はらから)の力使ってる……!?」
そしてそれにも春雨は勘付いた。ドロップ艦でも即戦力にするために、あの服を着せられているのだと。
泥で出来た服は、触れられないために春雨による治療を防ぐためであると考えられたが、実際はそれだけでは無い。戦いの場に出ることが非常に難しい練度1の艦娘でも、侵蝕によるブーストと泥によって作られた衣装を身に纏うことで、完成した深海棲艦と同等の力を得てしまっているのだ。いわば、『擬似深海棲艦化』である。
ロンググローブとニーハイソックスによって腕と脚の力を増幅し、レオタード状のスーツで体幹までも強化する。結果的に、あの3人は施設の深海棲艦と渡り合える力を得てしまっていた。
「だったら、さっさと脱がしちゃうべきね。そのために私はここにいるってことになるわ」
ならばと、戦艦棲姫が泥刈機を構える。出力は今まで最弱だったものを中程度にまで上げて、春雨と海風に狙いを定める漣と曙に向けて泥を消滅させる波長を放った。
出力を上げたことによって、多少遠距離でも普通に届く。その見えない攻撃は砲撃よりも速く曙に届くが、直前で勘付いたか、見えない弾丸とも言える波長を紙一重で回避した。
それでも波長はしっかりと効いていたようで、その身体は傷付ける

ことなく、ロンググローブの片方とレオタードの横腹が消し飛ぶ。
「なっ、漣、アイツらあんなわけわかんないもの持ってるなんて聞いてないわよ!?」
「そんなこと言われても漣も知らんし！」
泥は消し飛ぶが肉体にダメージは無いため、元気に文句を喚く曙。その隙を見逃さないのが海風。春雨に向けて主砲を向けた時点で３人は死んで然るべき敵であるため、一切の容赦なく斬り捨てることが出来る。春雨が救うと言わない限り、確実に殺すまでする。
「では貴女はもう黙ってください。キーキー煩いので。春雨姉さんの麗しい声が聞こえないじゃないですか」
泥が消し飛んだ横腹に狙いを定めて、実弾ではなく水圧が異常にかかった水鉄砲を放った。直撃したらいろいろと揺さぶられて行動不能になるだろう。
しかし、消し飛ばしたと思っていた衣装は即座に修復し、再び深海棲艦の力を使ってその砲撃を回避。
「消されたところで作り直せんのよ！　あたし達の中で増殖し続けてんだから！」
熱くなってきたからか、自分からタネを明かしてくれる曙。ここでわかったのは、あの泥の源は黒幕ではなく龍驤であることである。調子に乗ってペラペラ喋るのが歪んだ龍驤の特徴。それに侵蝕されていることで、その特徴が僅かに感染してしまっている。
「何度も作り直せるのなら、何度も消すだけよ」
冷静ならば自重出来るが、そうで無ければ勝手に全部話してくれそうだと、戦艦棲姫はよりその気質を呼び出すように泥刈機を連射する。
「うへぇ、容赦無ぇ～。でもこちらにはいろいろ手段があるんだよねぇ」
そこで漣は、波長を回避しながらも、３６０度全ての方向に向けて魚雷を発射した。その速度は並ではなく、まるで砲撃の如く周囲に向かう。
回避する場所がない上に、眼前にいる春雨達のみならず、少し離れ

たところで朧を迎え撃っている叢雲と薄雲の方にも向かっていった。
「まずい……！　春雨姉さん、破壊しま」
「ダメ、それは壊さずに避けて！」
　いつもなら回避する隙間もない魚雷は破壊してどうにかするのだが、春雨の直感がそれはダメだと告げていた。伊４７から聞いていた、潜水艦姉妹が使った秘密兵器の魚雷のことを今この時思い出していたからだ。
　その魚雷は、破壊した瞬間に中から悪意の塊が飛びかかり、目の前の者を一気に侵蝕するために襲い掛かる。今漣が放った魚雷が全てそれだった場合、破壊した時点で逃げ場が無くなってしまう。
　いくら泥刈機があったとしても、溢れ出た泥を全て消し飛ばすためにはそれなりの出力が必要だ。しかも、それを襲われる前に的確に放たなければならない。これは流石に至難の業。
　だからだろう、春雨は悪寒が背筋を駆け抜けた。それは、今少し離れてしまっている叢雲と薄雲の方。
「叢雲ちゃん、薄雲ちゃん、避けてぇ！」
　春雨と海風、そして戦艦棲姫はその魚雷をすぐさまジャンプして回避しつつ、隙を作らないように波長による攻撃と水鉄砲による攻撃を交差させていたが、朧を迎え討つ２人はまだ魚雷の存在が見えていない。下手をしたら直撃。そうでなくても咄嗟に破壊して大変なことになる。
「つたく、面倒くさいことしてくれるじゃないの！　薄雲、跳びなさい！」
「は、はいっ！」
　同じように避けつつ、朧からの攻撃を防ぐために主砲を放つ。
　しかし、朧はここで２人とは別の動きをしてきた。
「漣、いきなりすぎるよ。朧じゃなかったら反応出来ないんだから」
　最初に見せた踏み込みで一気に前進すると、魚雷を追い抜き薄雲の真後ろへ。そして、自らその魚雷を破壊した。
　春雨の予想通り、その魚雷は泥が詰まった秘密兵器。爆発した瞬間、薄雲に向かって飛びかかることになる。量もそこそこあり、回避

はまず無理。
「薄雲！　スーツ！」
「っ!?」
咄嗟ではあったが、薄雲はその泥を吐きかけられた時に海風が回避出来た全身を覆うスーツを作り出した。一切の隙間がないヘルメット状のマスクまで作り上げ、どうしても避けられない泥をどうにか防いだ。
全身にぶちまけられたわけではないのだが、腕や身体にベチャリとへばりつく。スーツを着ていなかったら、口にも飛び込んでいただろう。本当にギリギリだった。
「わ、すごい瞬発力。でもね」
しかし、朧はこの段階でノーマークになってしまっていた。つまり、目の前にいる薄雲を、好き勝手出来るということになってしまう。
「こんなに近いんだもん。勿論、攻撃するよね」
艤装を展開するように朧の手に現れたのは、鋭利なコンバットナイフだった。それによって泥がへばりつく薄雲の胸元を斬り払う。
「えっ……」
痛みは無かった。しかし、確実にスーツのみを切り裂いた。つまり、付着している泥が、薄雲の肌に直接付着してしまったことになる。
そうなってからは恐ろしい速さだった。口に入り込んだわけでもないのに、肌からどんどん染み込んでいき、胸元から次々と侵蝕。薄雲に強烈な快感を送り込む。
「ひっ、い、いやぁあああっ!?」
薄雲の悲鳴が響き渡ったかと思いきや、侵蝕が進んだせいで自らの意思でスーツとマスクを消してしまう。その瞬間、周りの泥が一斉に薄雲に纏わり付き、身体へと吸収されて行った。
「ひぁっ、あ、んぁあああっ!?」
そして、悲鳴は嬌声へと変わり、泥が全て消える。薄雲の中に入り込んだということだろう。
「薄雲……っ」
「そのままでいてね。邪魔はさせない」

叢雲は何も出来なかった。近付いたら自分が侵蝕されかねない。それに、朧がそうさせないように薄雲の側を陣取っていたのだから、動くことも許されなかった。

「ふはあっ、はぁ……はぁ……」

大きく仰け反り、ビクンビクンと震えていた薄雲は、力が抜けたように膝から崩れ落ちる。時折痙攣しているようだが、俯いているためその表情は見えない。だが、嫌でもどうなっているかは理解した。薄雲の姿が変わっていったからだ。

大きく震えたことで制服は消え、隣にいる朧と同じようになっていく。セーラー服はいつもの黒のものではあるが、やはりスカートは失われ、その内側にレオタードが貼り付いていた。色まで同じ、泥のような混沌の色。

その締め付けでさらにビクンと震えた後、薄雲はゆらりと立ち上がる。その時にはやはりロンググローブとニーハイソックスも出来上がっていた。完全に朧達と同じ姿になったことで顔を上げると、その瞳には紫色の炎が灯っていた。

「んっ……ふぁあ……あは、こんなに気持ちいいなんて知りませんでした。んんっ、ジェーナスちゃんもこんな気分だったのかな」

未だ興奮冷めやらぬ表情で叢雲を見つめる。その瞳には、心の底からの悪意が宿っていた。

対策の対策

ドロップ艦でありながらも、泥のブーストとコスチュームによる補完で擬似深海棲艦化と言える程の力を発揮する漣達により、思っていた以上の苦戦を強いられる春雨達。

その攻防の中、漣が全方位に放った魚雷を朧が利用したことによって、内部に格納されていた悪意の塊が薄雲を襲い、そして侵蝕してしまった。

「薄雲……っ」

悪意の灯る瞳で叢雲を見つめる薄雲に、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる叢雲。その表情を見たことで、薄雲は心底気持ちよさそうに身震いする。

「あは、姉さん、これすごいんですよ。物凄くスッキリした感じというか、溜まっていたストレスが発散されるような感覚というか。とにかく、とても清々しい気分なんです。本当に、ふふふ、本当に堪らない」

隣に立つ朧と目が合うと、ニコッと微笑みかける。

「ありがとうございます、朧ちゃん。もう少し早く泥を貰っておけばよかったですね」

「でしょ。それに、すごく強くなれるよ。ドロップしたばかりの朧達がここまで出来るんだから、元々経験のある君が戦ったらどうなるんだろうね」

「そんなの決まってますよ」

チラリと叢雲に目をやると、薄雲とは思えないような他人を見下したような視線となる。

「邪魔なものは全て排除出来ますよ。まずは姉さんを、ね」

再構築した主砲を構え、叢雲に向ける。薄雲は冗談でもそんなことをしないため、もう全てが侵蝕されてあちら側になってしまったことを証明していた。

今までにない怒りが溢れ出す。常に怒りが滾っていた叢雲だが、今回は話が違った。施設の仲間達の中でも、最も親密である妹、互いに頼り頼られて生きている存在を穢され、本人の意思とは関係ない悪意

と敵意に塗れさせているのが、脳を沸騰させるほどの怒りを呼び起こしていた。
「でも姉さん、普段の生活はからっきしですけど、戦闘となるととんでもないセンスを発揮するので、２人がかりで行きましょう。あちらはあちらに任せていいんですよね？」
「うん、大丈夫。漣とぼのは優秀だから、まずは目の前の敵を片付けようか」
「はい、目の前の敵を」
あれだけ親身になっていた叢雲を敵と吐き捨て、不敵な笑みを浮かべる薄雲。そしてそれを楽しそうに見る朧。
「……それだけかしら」
絞り出して出てきた言葉は、もう理性を燃やし尽くしかけていた声色。怒りに震え、自ら正気を手放そうとしているような雰囲気。
「姉さんは怒りによって艤装を変化させる力を持っています。あの槍を巨大化させるなんてことも出来るので気をつけて」
「うわ、すごいねそれ。見てみたいところだけど、ちょっと余裕無いかな。だったら、速攻で終わらせるくらいで行かなくちゃ」
まだまだ余裕そうな朧の声に、まだ残っていた理性が燃やし尽くされる。だが、そのギリギリのところで泥から身を守るスーツとマスクだけは作り上げた。もし泥がぶちまけられても、先程の薄雲のようにそれを切り裂かれない限りは侵蝕されない。つまり、多少は無茶が出来る。
「殺すわ。艦娘だろうが知ったことじゃない。そもそも私は艦娘のことが大嫌いなんだもの。容赦する必要なんてない。殺す。ここで殺す。確実に、後悔するほどに、命乞いするほどに、さんざん痛めつけてやる」
「私がさせませんよ、姉さん。そうだ、姉さんもこちら側に来ましょう。スッキリしますよ。それに、怒りの矛先を別にしちゃえばいいんです。ね、簡単でしょ？」
薄雲のその言葉が、再開の合図だった。手に持つ槍が一気に巨大化し、２人諸共薙ぎ払う。

「うわっ、そういうこと!?」
「はい、そういうことです。怒れば怒るほど、ああなるので」
「これは大変だね。でも、2対1ならなんとかなるでしょ」
その槍の薙ぎ払いは強靭な脚にされていることで軽く跳ぶことで回避。薄雲も新たに身につけさせられているニーハイソックスの効果によって身体能力が異常に向上させられているため、朧以上に軽々と回避。
「滾る。滾るわ。怒りが、憎しみが、私の本質が！　覚悟しろよゲスがぁ！」
何もかもが焼き尽くされ、当初の槍持ちの如く目の前の敵を殲滅するだけの存在と化していく。もう薄雲にすら容赦なく向かうだろう。

叢雲が2人に立ち向かう一方、春雨達は薄雲の侵蝕を目の当たりにして絶望を感じていた。ジェーナスの時とは違う、変わり果てる一部始終を見せつけられているため、精神がガタガタにされかけている。
「いいねぇ、その顔。辿り着く者を始末するってのが第一目的だけど、戦力増強も目的ではあるんだよね。これはメシウマ案件ですわ」
「敵が減って味方が増えるなんて、ありがたい限りだわ。じゃあ、こっちも誰か貰うってのがいいわね」
「ですなー。出来れば辿り着く者本人が欲しいところだけど、簡単にはいきそうにないし、ま、手っ取り早く手近なヤツからってことで。殺すなら殺すで構わないしね。あ、そうそう、向こうに援軍なんてさせないからシクヨロ～」
意気揚々と語る漣と曙だが、春雨達は気が気で無かった。薄雲のあちら側にされたこともそうだが、それによって怒りが限界に達し、無差別攻撃をしかねない叢雲も心配。
だがそんなことを言っている場合ではない。油断すればこちらがやられかねないのだ。それこそ、今回も救うなんて言っていられない状況。そもそも薬が無いのだから、侵蝕から今すぐ解放するならば、瀕死の重傷を与えるしかない。もしくは簡単には目覚めない程に深

く気を失わせて鎮守府に運ぶか。
「……容赦しない」
　ここで春雨は、大鳳と戦った時のような冷酷さに傾いた。仲間が穢されたという事実が、なかなか表に出さない怒りに火をつけた。そして同時に、その瞳が白く輝き出す。
「戦艦様、もう少し出力上げていいです。あのスーツを消すだけでは埒が明きません」
「わかったわ。でも、貴女達も避けるようにして」
「大丈夫です。戦艦様の射線に入らないようにしますから」
　出力が上がるということは、その分波長による衝撃も上がっていくということだ。今は泥を消し飛ばす程度で済んでいたが、ここから上がれば上がる程、身体にも影響を与えてくる。明石曰く、ＭＡＸの出力で放つと肉体すらも消し飛ぶという非常に物騒な兵器へと早変わりする。
　中程度ならば、そこまでの酷いことにはならないにしろ、泥で出来たコスチュームを消し飛ばすと同時に、それを纏った部位を一時的に使用不可能にするくらいは出来るはずだ。春雨はそれを狙って戦艦棲姫に指示を出している。
「海風、道が何本も見えるの。それを減らしてほしい」
「了解です。姉さんにとっての最善は、この海風が担います」
　今までは１人相手に複数人でかかるという状況だったため、その目に映る答えは非常に単調だった。その通りに進むだけで最善の答えに導かれ、その結果が正しく現れる。
　だが、今は相手も２人、いや、朧と薄雲を入れれば４人。どれから先に処理するかなどの選択肢が増える分、答えに向かう道は複雑になる。現に、春雨の見ている光の道は、今までとは違う幾重にも拡がる交差点。そのうちのどれかを選び取らなくてはならない。
　ある程度戦況が動けば、この道は数を減らすだろう。そのため、あちら側の動きを見るためにも、出来る限り戦って選択肢を少しずつ減らしていく必要がある。
　今でも道の太さや光加減などで優先順位的なものはわかるのだが、

いかんせん、あちら側のやれることが全て見えているわけではないのが辛いところ。泥を格納した魚雷や、泥が紛れている砲撃以外にも、まだ何か隠している可能性はある。
「んじゃあ、ぼのたん前衛よろしくどうぞー。漣は魚雷を撃ちまくるからさ」
「はいはい。あたしに当てんじゃないわよ」
「ほいさっさー」
先程と同じように、漣は魚雷を乱射。今度は３６０度ではなく、春雨達を中心にした眼前の敵のみを狙って密集させた攻撃。さらには、周囲に放っていた分を遅れて発射させることにより、ジャンプで避けたとしても着地点にも魚雷があるような状況を作り出した。さらには前衛という曙がその回避のタイミングを狙っている。
だからといって、それを砲撃で破壊して処理するのは薄雲の二の舞になりかねない。あの時はスーツでしっかり防げたが、それを見計らって朧がスーツを斬り裂いたことにより最悪な状況へと持っていかれている。
ならば、爆発して放たれた泥自体も消滅する程の威力を放てばいい。海風はそう考えた。春雨を守るため、即座に行動に移す。
「また春雨姉さんを狙いましたね。万死に値します。私はそもそも貴女方を救うつもりなんて毛頭ありませんから、一切の容赦をしません。覚悟してください」
密集して向かってくる魚雷に向けて、海風も魚雷を放つ。これならば、魚雷の爆発と同時に現れた泥も、その爆発によって吹き飛ぶだろう。海風の放った魚雷は通常よりも火力を増していたため、その程度なら可能。
そして、春雨も同じような魚雷を放っていた。爆発を重ね合わせることでさらに泥を吹き飛ばそうという作戦。さらには戦艦棲姫も泥刈機を魚雷に向けている。それでも漏れた泥は、この波長によって消し飛ばされるだろう。むしろ、出力を上げたことによって爆炎すらも舞い散らせる。
「わお、魚雷に魚雷ぶつけるなんて無茶苦茶しますなぁ。うわ、しかも

漣のコス吹っ飛ばされてる！　いやーん、えっちぃ」
戯(おど)けながらもすぐに泥が溢れてコスチュームを作り直す。脱げている間は擬似深海棲艦化の力は失われているようだが、その回復がやたらと速く、隙らしい隙が見当たらない。
むしろ、あの波長の衝撃に一度でも耐えられる強度を持っていることもネック。アレを対処するには、照射し続けるしかないとさえ感じた。
そして、春雨にのみ見える光の道。その数は少しだけ減ったものの、まだ多くの選択肢を与えられている。だが、その中の1つ。この攻防の前後で無かった道が現れた。
その道は、海上でも海中でもない、上空にある光。無数に存在する、星のような点の集合体。そこに飛んでいくことは出来ないので、やるべきことは、ただ一つ。
「海風、対空砲火！」
その道を辿るため、即座に指示を出す。上から何かが降ってくると判断したため、それを処理するために春雨も共に真上へと対空砲火を始める。
「何よアイツ、見えてなかったでしょ今！」
爆炎が晴れた後、曙が憤慨したように毒づいた。春雨の指示は大正解で、上から無数の針が降ってきていた。その先端にはしっかりと泥が仕込んであり、刺さってしまったら最後、そのまま侵蝕されることになる。おそらく、この魚雷同士の爆発に隠れて曙が空へと撃ち放ち、どさくさに紛れて刺さるように仕組んでいたのだ。
薄雲や叢雲の対策スーツを見たからか、それすら突きつける針という手段を使ってきた。あのスーツは泥にのみ対策を取っているため、先程のようにナイフで斬り裂かれることもあるし、針は止めることなんて出来ない。実弾なんて以ての外だ。それも突き通さないようなスーツにしたら、今度は身動きが取れなくなってしまう。
「でもさぁぼのたん、今上向いてくれてっからさ」
「今撃とうとしたわね。させるわけないでしょ」
対空砲火する2人が無防備のようなもの。そのため、それをカバー

するために戦艦棲姫がすかさず泥刈機を2人に向ける。出力はまた僅かに上げたことで、コスチュームを消し去る以上に、身体へのダメージも入れるように。
流石にこれ以上喰らうのは嫌だと、春雨と海風への攻撃はやめて回避に徹していた。見えない弾丸のような波長による攻撃も、何度も受けていれば慣れてくるようである。ドロップ艦ではあるが侵蝕によるブーストがあるため、その辺りの能力は大きく上昇させられている。
「ああもう、2人で3人は面倒臭いわね！」
「でも、ボーロは1人で片方こっち側につけてっからねぇ。あ、そうだ、だったらこっちにもう1人貰っちゃえばいいよ」
「……確かに、数的優位があるに越したことはないものね」
不穏な呟きが聞こえた瞬間、春雨にまたもや悪寒。薄雲のみならず、まだ他の仲間を侵蝕しようと企てている。その対象は、
「海風、ちょっと退いて！」
確実に海風であると勘付いた。
今まで常にこちらの泥対策を対策する手段ばかり用いてきた。治療を防ぐための泥のコスチューム。侵蝕を防ぐスーツを貫く針と刃。それを可能にするだけの強引なブーストと、それに耐え得るために用意された装備。
侵蝕されたジェーナスとの戦いを高高度から観察し続けていた龍驤だからこそ、ここまでの対策を用意してきたのだ。それを見せびらかそうとする慢心が含まれている戦術も、あの龍驤ならではと言える。
そして、最大の対策は、治療が出来る辿り着く者、春雨をどうにかすることである。その手段として選択したのが、春雨自身ではなく、春雨を慕う海風を狙うこと。沈めても春雨は崩れるだろうが、それ以上に敵に回った方が崩れる。
春雨は攻撃の手段を直感的に勘付き、即座に対応してくるが、海風はあくまでも普通の深海棲艦だ。右腕の変形はあるものの、あくまでもそれは艤装の延長線上。特殊な力を持っているわけではない。

「アンタの妹、貰うわよ」
明確な狙いを突きつけて、曙が海風へと突撃を開始。春雨と戦艦棲姫のことを無視し、徹底的に追い詰めるように動き出した。漣もそれをサポートするべく、またもや魚雷を発射。曙の邪魔をさせないようにと立ち回る。
「私が貴女達の下に行くわけがないでしょう。春雨姉さんの側を離れるだなんて、あり得ません」
「アンタの意思なんて関係無いの。まぁ、頑張って耐えてみなさい」

春雨は自分の中で、さらに怒りが灯るのを感じた。

溢れる激情

その裏側では、叢雲が朧と薄雲を相手にしていた。侵蝕されたことによって通常以上の力を手に入れている薄雲は、叢雲の勝手を最も知る者。怒りが全く収まらなくなっている叢雲相手でも、まるで怯むことなくむしろ上から目線を続けながらでも問題なく戦っていた。

「もう、叢雲姉さんは単調なんですから。怒りに呑まれると見境無くなりますしね」

薄雲は叢雲を手玉に取ることに特化していると言っても過言ではない。槍を巨大化させて振り回そうが、身体能力が強化されている薄雲にとっては児戯に等しいとさえ思えた。

泥の侵蝕により慢心がたびたび見えるようになってしまっているが、それでも一切支障が無いレベル。理性を失った叢雲の力任せな攻撃を軽くいなしつつ、いつもの鎖に繋がれた主砲を振り回しながら合間合間に攻撃をする。

「鬱陶しいわね薄雲！」

「当然じゃないですか。戦いは、如何に相手の嫌なことをするか、ですよ。私の存在そのものが嫌なモノになっているとは思いますが」

「はっ、敵対した時点で全部嫌なモノよ！　アンタにも容赦しない！」

薄雲の砲撃も当然、いまや泥が含まれている侵蝕攻撃。直撃も掠りもダメであるため、叢雲は怒り続けながらもその攻撃をしっかりと回避し続ける。

だが、ここにいるのは薄雲だけではない。この壮絶な姉妹喧嘩を仕組んだ朧もいる。叢雲のあまりにも派手すぎる攻撃を回避しながら、叢雲のことについて分析をしていた。

「すごいね、怒れば怒るほど攻撃力が上がるんだ。深海棲艦ってそういう特別な力を持ってるのがちょいちょいいるのかな」

初めて組むはずの薄雲とも綺麗に連携をし、合間合間に叢雲に向けて小型の銃を向ける。

それは、曙が使用した針を射出する装置を小型化したニードルガン。泥が塗られた針が1本でも撃ち込まれれば相手は侵蝕されるた

め、シンプルに小さな一撃を入れられればいいとこのタイプを使い始めた。
「でも、大振りだから狙いやすいね」
叢雲が薄雲に槍を振るった瞬間を見計らって、ニードルガンを1発放つ。叢雲は朧の方を見ていない。これは確実に当てたと確信した。
しかし、怒りに呑まれた叢雲はその程度では負けない。突如現れた浮遊する艤装が、その小さな針を弾き飛ばした。
「えっ、そんなの今まで使ってなかったのに」
「あれは……艦娘の叢雲姉さんの艤装です。頭の上に浮いてる」
叢雲の身を守ったのは、艦娘の時の叢雲が扱う浮遊艤装。ウサギの耳にも見えるそれは叢雲専用の電探であり、ある程度の距離ならば自由に動かせるモノ。
艦娘としての自分を捨てると見た目から変えている叢雲は、制服もバニーガールと称えられそうなスーツにしているものの、その艤装を使うことは無かった。艦娘時代を思い出させる艤装を使うつもりは無いと、出せるとしても出そうとしなかったのだ。
だが、理性を失ったことで手段を選ばなくなり、使えるものは全て使って目の前の敵を殲滅するとなったことで、過去の自分の艤装を使用した。電探ではあるものの、それは深海棲艦化の影響で強固な装甲を手に入れ、針如きでは傷を付けることすら出来ない。
それもこれも、叢雲の感知の力すらも増幅されていることにある。全ての位置が手に取るようにわかるのが本来の効果だが、怒りに呑まれたことでその性質も若干変化し、敵対する者の行動がいち早く読めるというものになっていた。
無意識に針の挙動まで把握し、自分に向かってくるモノに対して完璧な感知をすることで、威力が殆ど無いような攻撃はこの程度で弾く。
「そんなちゃちぃ手段じゃ無く、本気でかかってきなさいよクズが！」
怒りはまだまだ増す一方。つまり、叢雲の力は増し続けるということになる。これは厄介だと朧はより考える。
薄雲を侵蝕したところまでは何も問題が無かったのだが、叢雲のこ

の怒りは想定外。むしろ、ここまで出来る敵が、施設にいるということ自体が情報に無かった。
　朧達の持つ情報は、龍驤が戦場に出ている時に高高度からの調査によって得たモノ。つまり、その時にいなかった者に関してはデータに入っていないということになる。
　叢雲は龍驤が出てきた戦場にはほぼ参加しておらず、来たとしても戦闘まではしていない。そして、叢雲が覚醒したのは龍驤がいなかったコロラドとの戦い。そのため、叢雲の実力はあちらにはバレていないのだ。
「最初に薄雲を奪っておいてよかったかな。知らないヒトのデータを持ってるのはありがたいよ」
「ですが、叢雲姉さんの力はどんどん増しています。本当に、戦闘に関してはセンスが凄まじいですよ」
　薄雲が絶対にしないような叢雲をゴミのように見る視線。それを確認したことでさらに怒りが増す。
　一度槍を巨大化させたら怒りがある程度発散され連続で扱うなんて出来ないのだが、今は余りあるほどの怒りを蓄え、さらにまだ増すばかり。発散なんてされることなく、より大きく、より強く、叢雲から解き放たれていく。
「でも、私がどうにか抑えます。怒り狂っていても、私はあのヒトの妹ですから」
「任せるよ。隙を見てアイツもこちら側に引き込んで」
「はい、勿論。あんな姉さんなら、こちら側にいてくれた方がいいと思いますからね。敵対より、共に並び立ちたいですから」
　泥の侵蝕により、薄雲も悪意を隠さなくなっている。姉を利用するのが愉しくて仕方ないとほくそ笑んだ。
　そんな薄雲を見れば見るほど、叢雲の怒りは際限なく溢れ出る。理性を捨て去っているだけではもう足らない。もっと、もっともっと力を得なくては、救えるものも救えない。
　今の段階で薄雲を救う手段はただ一つ。瀕死に追いやって身体が泥を吐き出させることのみだ。薬も無ければ、泥刈機も無い。後者は

あったところであの泥のコスチュームを脱がすことくらいしか出来ない。薄雲を殺さずに痛めつけるという苦渋の決断をさせられることにまた怒りが湧き上がる。
「何をくっちゃべってるのよクズ共がぁ！」
槍だけでは足りず、主砲や魚雷も展開。怒りによりその数は増え、火力も上がる。薄雲はともかく、朧は救うつもりなく殺すつもりで攻撃を繰り出し始めた。
もう殆ど無差別攻撃に近い。目の前の敵を殲滅するために、一切の躊躇なく全ての攻撃を放つ。
「ああもう、本当に雑なんですから。だから隙だらけなんですよ。私が姉さんをどれだけ見てきたと思うんですか」
叢雲の攻撃は基本大振り。怒りによりそれがさらに顕著になっている。それ故に、回避しながら鎖で主砲を操る薄雲には、その隙が手に取るようにわかる。現れた浮遊艤装が無意識のうちに薄雲の攻撃を弾き飛ばすものの、それはあくまでも自分を守るモノ。泥によるブーストがかかった今の薄雲には、何をされようともその全てが把握出来る。
元々の叢雲に対する想いを泥によって歪められた結果、それを叢雲の最も嫌がる方向に持っていくことが悦びとなっていた。故に、率先して叢雲の気に入らない手段を取り、言動全てが叢雲の癇に障るようになる。
「そんな大振りなら、潜ってくださいと言ってるようなものですよ。こんな風に」
巨大な槍を潜り抜け、戦艦並みとなった砲撃も華麗に回避し、雷撃ですらお構いなしに飛び越え、あっという間に叢雲の眼前へ。
朧ではここまで出来なかったが、叢雲のことを把握している薄雲であるため、ここまで軽々と接近している。それを見ると、朧は真っ先に薄雲を侵蝕して良かったと心の底から思った。
「このっ」
「だから、私には姉さんの行動はお見通しなんですよ」
相手が薄雲であろうがお構いなしに強烈な蹴りをお見舞いしよう

とするが、薄雲も見越していたかのようにサラリと回避。
「ほら」
そして、主砲を繋ぐ鎖を振り、叢雲を縛りつけた。その鎖にも泥が塗りたくられており、スーツを着ていなければこの時点で侵蝕が始まっていたが、叢雲は事前に対策をしているため、これだけでは侵蝕なんてされない。
しかし、縛られているということは身動きが取れず、力業でどうにか出来るようなことでもない。
「ナイスだよ薄雲。それじゃあ、こちら側に来てもらおうかな。薄雲、お願い」
それを見計らって朧がニードルガンを叢雲に放った。当然それは浮遊艤装が防ぐのだが、そちらに艤装が向かったために、薄雲がフリーに。これで、叢雲を守るものは無くなった。
叢雲を縛っている時点で薄雲は手が届くほどに近い。言ってしまえばやりたい放題だ。薄雲がやろうとすることを防ぐものは何もない。
「では叢雲姉さん、こちら側へ」
思い切り鎖を引っ張ることでスーツをズタズタにしながら泥を染み込ませた。肌は露わになり、鎖にへばりつく泥は叢雲の中へ。
「っく……っ」
「もうこうなったら終わりですよ。素直に快楽を享受して、気持ちよく私達と一緒になりましょう。姉さんはもう私達と同じような格好みたいなものですし、きっととても似合うでしょうね。さぁ、姉さん」
泥は次々と叢雲を侵蝕している。だが、叢雲はそれを歯を食いしばって耐えていた。いや、耐えるどころではなかった。一向に薄雲も体感したあの反応を見せようとしない。
「……え？」
そこに薄雲は疑問を持った。何故何も起きない。何故侵蝕されているように見えない。誰もが抵抗出来ないその侵蝕の、悪意の奔流を受け止めて、何の反応も見せない。
薄雲はその理由に見当がつく。つくはずなのだが、今の今まで忘れ

ていた。姉のことのはずなのに、泥に侵蝕されたことで、その事実に。泥により植え付けられる慢心が、ここで作用した。

「この私が、叢雲が！　こんなチャチな悪意にぃ！　呑み込まれるわけがないでしょうがぁ！」

ついには怒りの力を艤装ではなく自らに纏い、縛る鎖を内側から破壊してしまった。スーツはズタズタで肌も見えている。泥も吸収されている。だが、叢雲は正気を保ったまま。快楽を感じているようにも見えない。

それもそのはず、叢雲にはそもそも侵蝕が効かないのだ。

叢雲が深海棲艦となった理由は、魂の混成をされて間もない白露に殺されたこと。その時に僅かに泥が付着した状態で怒りが溢れ出し、そのまま繭となった。その影響で、艤装を展開している時のみ、泥に侵蝕された者と同様に通信妨害を引き起こす体質となってしまっている。

それはつまり、既に侵蝕されているようなもの。そこから、叢雲だけは泥に耐性を持っていることに繋がる。僅かにその成分を身体に取り入れた、いわばワクチンのようなものだ。

「私の燃え滾る怒りの炎が、そんな泥程度なら吹っ飛ばすみたいね！　だったら、アンタのそれにも触れていいってことよね！」

そして、最も近くにいる薄雲の胸ぐらを掴む。レオタードだけならば出来なかっただろうが、セーラー服まで着てくれているおかげで、しっかりと掴み、逃げられなくすることが出来た。

他の者がこれをやった場合、手から即座に侵蝕されてアウト。スーツを着ていればまだ何とかなるかもしれないが、それでも相当危険な行為。この場では叢雲にのみ許された行動である。

妹であろうと関係ない。瀕死にすれば救われるのだから、怒りに任せて瀕死にする。ただそれだけでいい。

「妹だろうがなんだろうが、容赦はしないわよ。もう知ったこっちゃないわ。救えたら救ってやるわよ！」

引き寄せて腹に膝を入れる。侵蝕が効かないとわかったことで薄雲は咄嗟に叢雲を殺す方向にシフトしようとしたが、それが間に合わ

ず、その一撃をモロに喰らうことになる。
「っあっ!?」
「そら、泥でも吐いたらどうなのよ。痛い目を見たくないのなら、さっさと正気に戻りなさい。それまで私はアンタを殴り続ける」
膝蹴りの勢いで一度身体が離れるが、もう一度引き寄せて腹に膝を入れた。こんなことをしても吐き出すわけが無いのだが、理性の失われた叢雲にはそんなことは関係ない。
「アンタもよ!」
薄雲に攻撃をしながら、空いている手では槍を朧に向ける。溢れ続けて発散出来ない怒りを撒き散らすように槍を伸ばし、薄雲諸共叢雲を始末しようとしていた朧に対して激しい攻撃を繰り出した。
薄雲を利用しようとしているのに、いざこうなったら切り捨てようとしている朧が気に入らず、さらに怒りが増していることで槍は怒りを体現するように変形を始め、刃のみならず主砲までもが先端に生成されていた。
さながら、その武器はコロラドの持つ主砲の杖と近しいもの。なんだかんだ、コロラドのことを意識していたと言わざるを得ない武器。
「む、無茶苦茶すぎる……もしかして一番厄介なの、叢雲だったの……!?」
2人がかりでかかっても、怒り狂った叢雲には及ばない。侵蝕出来れば話は変わったのだろうが、それすらも効かないとなると、朧には打つ手が無かった。叢雲に対しては確実に上手になるはずの薄雲ですら、むしろそのせいで叢雲の力を底上げしてしまっているのだから。
「まぁ、それは仕方ないね。こちらは苦戦してるけど、あちらは……」
チラリと漣達の方に目を向ける。そして、小さく口角を吊り上げた。

将を射んと欲すれば

侵蝕された擬似深海棲艦、漣と曙との戦闘中、数的優位を奪うためと海風を狙い始めた。そんなことを海風が望むわけがないのだが、泥に侵蝕されてしまえば意思なんて関係ない。曙はそう言いながらも突撃を開始する。

「海風をっ、やらせるもんか！」

勿論春雨も黙っちゃいない。海風を守るため、一時的な退避を指示しつつも自ら海風に接近して、曙の突撃を防ぐ。

だが、漣も後衛として泥魚雷を放っている。それを破壊してしまったら、爆発と共に泥が撒き散らされ、最悪薄雲の二の舞になってしまう。あちらの狙いは海風をそうすること。ならば、思い通りに行かせるわけにはいかない。

「数的優位を奪おうと言うのなら、当然私も黙っちゃいないわよ」

そして、春雨達を援護するように戦艦棲姫も前に出る。泥刈機による波長攻撃と共に、戦艦主砲による水鉄砲――強烈すぎる水圧を使って、思惑を阻止せんと攻撃を繰り返す。

魚雷はジャンプして飛び越えなければならないのだが、その着地を用意周到に狙ってくる曙を、戦艦棲姫が主砲により攻撃など出来ないように抑えつけ、魚雷の回避ルートは春雨が光の道を確実に選択することによって完璧に避け切る。海風も春雨がやったことをリピートするくらいならば余裕を持って実行し、密集する雷撃を爆発させることなく乗り越えた。

先程はそれを朧がわざと破壊するという荒業で強引に侵蝕を始めたが、それが出来るであろう漣と曙は、戦艦棲姫の２種類の攻撃によって阻止されていた、

「うへぇ、流石に一筋縄ではいかないねぇ」

「そう思うなら諦めて帰ればいいと思いますよ。それでも追って確実に息の根を止めますが。春雨姉さんを困らせようとした時点で極刑です。一度だけでなく何度も殺します。泣いて許しを乞いなさい。その上で始末しますが」

「ウザすぎんだけどコイツ。そんなヤツがこっち側に来たら何をしてくれるんだか」
　戦艦棲姫の主砲を回避しながらも、しっかり海風に向けて砲撃を欠かさない曙。直撃ならば死、擦れば侵蝕という最悪な弾を、海風は右腕を変形させた盾で払い除ける。
「今、春雨姉さんを狙いましたね。何度目かはもう忘れましたが、その分、貴女の命を奪います」
「あたし、アンタを狙ったんだけど」
「私が回避したら春雨姉さんに当たっていました。つまり、春雨姉さんを狙っていたということです。大罪ですよ。命を以て償いなさい」
　盾が鎖と錨に変化し、曙に対して向かっていく。同時に春雨が漣に邪魔をされないように砲撃と雷撃。近付くことも、撃つことも許さない。
「ああもう！　本当に鬱陶しい！」
「鬱陶しくて結構。それにそれはこちらのセリフです」
　海風の猛攻は止まらない。春雨を守るため、春雨の敵を殲滅する。今の海風にはそれしか無かった。
　しかし、あまりに猪突猛進すぎると足を掬われる。それを防ぐために、春雨と戦艦棲姫が的確なフォローを続ける。
　一番困るのが、漣が放つ泥の魚雷。一回の量が多く、回避が非常にしづらいため、そもそも撃たせないというのが的確な処置だ。戦艦棲姫がそれを優先し、曙は2人に任せて徹底的に叩く。主砲で牽制しながら、さらに出力を上げた波長で追い詰める。
「こりゃあヤバい、バイヤーですよ。そんじゃまあ、漣さんはこっちを狙ってみようか、なっ！」
　ここで漣が急に動きを変える。常に後衛を張っていたのに、突如強烈な踏み込みと共に前に出た。叢雲を迎撃に行った朧と同等の速度で突撃し、一気に戦艦棲姫との間合いを詰める。
「戦艦様！」
「大丈夫、貴女達はそちらをお願い」
　戦艦棲姫とてそれくらいのスピードには問題なく対処出来る。次

にどういう攻撃をしてくるかはお構いなしに、眼前の漣に向けて同じように砲撃と波長を重ね合わせた。大問題である魚雷は今は放ってこないが、念のためと戦艦棲姫も他の者達と同じスーツを着込む。
「いやぁ、その辺りは全部データとして持ってんだよねぇ。だから、最初からアンタ狙っときゃよかったかも」
砲撃も波長も恐ろしい程のスピードで回避したかと思いきや、魚雷を放つのではなく手に握っていた。
そしてそれを真上に放り投げた瞬間、主砲で撃ち抜いて泥をばら撒く。
「それくらいならお見通しよ」
波長を真上に、そして、潜り込んでくるであろう漣に向けて主砲を向ける。想定通り、漣は上に注意を逸らして下から攻撃を繰り出そうとしていた。どちらも当たれば侵蝕確定。スーツを着込んでいるために被っても問題ないが、それでも念には念をと確実に漣を処理するために砲撃。
だが、自信満々に突っ込んでくる漣がそれだけしかやらないわけがなかった。攻撃することなくさらに加速し、戦艦棲姫と触れることなく真後ろに回る。そちらには生体艤装が待ち構えており、さらに主砲を放つが、そこからも逃げるように駆け抜けた。
そしてその時、自分の真下に泥の反応があることに気付いた。駆け抜ける瞬間に、足下に魚雷を設置していたのだ。そこにはさらに爆雷まで仕込んで。
魚雷は泥が格納されているが、爆雷はおそらくそのまま。そこで爆発されたら脚が吹き飛ばされる。その上で魚雷も爆発し、泥が撒き散らされるだろう。それは厄介極まりない。
「させないわ」
爆発する前に艤装が爆雷を掴み、射程範囲外に投げつけた。それならば魚雷は爆発せず、爆雷だけを処理出来る。
はずだった。
「すり替えておいたのさ！」
直後、魚雷が爆発。泥を撒き散らさず、まともに爆炎を巻き上げる。

そんなものが足下で爆発したらひとたまりもない。
だが、戦艦棲姫も手練れ。魚雷の攻撃を咄嗟に回避するため、爆発すると感じた瞬間に艤装の手に掴まり、全力で放り投げてもらった。その手から離れたタイミングで艤装を消すことで、完全にノーダメージでそこを切り抜ける。
「ま、マジかぁ。データ以上の動きバンバカされるんですけどーっ！」
「どうせあの龍驤のデータでしょうけど、そう簡単にはいかないわ」
自信を持って回避中に艤装を展開し、着水。艤装に支えてもらうことで本体は着水時にバランスを崩すことなく、すぐさま反撃に転ずることが出来る。
しかし、大きく回避する羽目になったため、春雨と海風から離れることになった。多少大きな声を出さなければ、声かけは出来なくなってしまっただろう。しかし、3対2の状況から、春雨サイドが2対1になったことは大きい。目の前の敵に専念することが出来れば、春雨の見えている光の道はさらに鮮明になるだろう。
「戦艦棲姫って本体がバカスカ主砲撃ってきたっけ!?」
「私は特別なの。生きていくための知恵よ」
艤装に波長を任せつつ、本体は主砲を連射。こちらも2対1のようなものである。本体がやられたら、艤装もやられてしまうというのは春雨達と同じ。
「普通の戦艦棲姫じゃないのかーい！」
「貴女も普通の艦娘じゃないでしょうに。おあいこよ」
しかし、漣1人でもかなりの手練れ。戦艦棲姫といえども、そう簡単にはいかない。駆逐艦であるがためにやたらと小回りが利き、かつ泥によるブーストとコスチュームによる補完が加わっていることで、並の強さでは無くなっている先程の魚雷と爆雷の設置もそうだが、瞬時に判断するとしても、ドロップ艦が出来るような動きではなかった。
それに輪をかけて厄介なのが、触れられないことである。艤装で掴んでしまえば済むことなのだが、あの泥で出来たコスチュームは艤装越しでも触れるのも憚られる。艦娘以上に本体と艤装が繋がってい

る深海棲艦では、泥が艤装にかかっただけでも影響を受けてしまいそうだからだ。
海風は泥をぶちまけられた時にスーツと共に腕を盾に変えてガードをしていたものの、それはあくまでもその時だから耐えられただけの可能性はある。それこそ、ここまでデータがどうのこうの言っているのだから、スーツでは防げても艤装では防げないなんていう仕込みをしてきている可能性は考えておかねばならない。
故に、どうにかして触れることなく気を失わせなければならない。それが出来る手段といえば。
「さらに出力を上げるしかないわね。多少は怪我をしてもらうわよ。元に戻ったら鎮守府で治してもらいなさい」
泥刈機の出力をさらに上昇。中程度だったものが、今ではもう7割程になっている。この出力ならば、泥は一瞬で消滅する上、肉体にも影響を与える。消し飛ばすなんて物騒なことにはならないまでも、波長に揺さぶられて確実な重傷に繋がる程になっているだろう。
それくらいしなければ、この漣をどうにかすることは出来ない。そう判断せざるを得なかった。当然ながら、戦艦棲姫は慢心なんてしていない。目の前の敵に注力しなければ、現状を打開出来ないと考えた結果がコレだ。
「それ結構やべぇんですってば。だから使わんでくだせぇ！」
そこにすかさず漣は魚雷を上に何本か投げて破壊。さらには足下も狙うように発射。器用にも投げた方の魚雷は、破壊したことで戦艦棲姫を綺麗に包み込むように泥がぶちまけられた。普通なら回避するのもかなり難しいレベル。さらに魚雷に至っては、回避したらそのまま春雨達の方向に進んでいく用意周到さ。
回避するわけにはいかず、しかし、処理が非常に難しい。しかし、戦艦棲姫はそれをしっかりと見据えて行動に移す。
「本当に厄介ね貴女は」
まず海中を疾ってくる魚雷を主砲によって破壊。そうすれば中に格納された悪意がぶちまけられ、戦艦棲姫に襲い掛かるのだが、そちらに波長をぶつければ、空中からの泥を対処出来ない。

故に、破壊した瞬間にまたもや艤装の手に掴まり、全力の投擲。そして即座に波長を纏めてぶつけつつ、艤装を消すことで全てを処理。またもや無傷でその場を切り抜ける。
「いやマジでどうなってんスかアンタ！」
漣もこの動きには驚きを隠せなかった。
しかし、すぐに意地の悪い笑みを浮かべる。
「でも、それやるためには艤装消してくれるんだよねぇ。一瞬でもさぁ！」
「つっ……なに……!?」
直後、戦艦棲姫は腕に鋭い痛みを感じた。嫌な予感がし、おそるおそるその場所を確認すると、しっかりと針が刺さっていた。
その方を咄嗟に見ると、そこには、叢雲と戦闘中の朧。顔も身体も叢雲の方を向いているのに、手だけは、ニードルガンだけは、叢雲ではなく戦艦棲姫の方を向いていたのだ。
漣が戦艦棲姫の視界を完全に引きつけ、単独で戦おうとしている素振りを見せつけることにより、叢雲の戦いを視野の外へと持っていった。戦艦棲姫は艦載機など使えず、視界は艤装と共に３６０度を見通すが、今この瞬間だけは回避のために艤装を消していた。
結果、視野は戦艦棲姫本体の眼前のみ。朧は見えていない。その隙を外部から狙われてしまった。
「Ｇ（グッジョブ）Ｊ、ボーロ。流石だねぇ」
戦艦棲姫はそれどころではない。この針はスーツを貫いて泥を送り込んでくる最悪の毒。あらゆる存在を侵蝕する。手練れの戦艦棲姫も例外ではない。
「つくっ、あ、あぅうっ!?」
針は抜いたが時すでに遅く、刺さっていた方の腕を押さえながら蹲る。泥が即座に身体を回り、存在を侵していく。その快楽は尋常ではなく、深海棲艦の姫と言えど、耐えられるものではなかった。
いくら戦艦棲姫といえど、痛みには耐性はあれど、快楽には耐性がない。それ故に、泥は他者を侵蝕する際に快楽を与える。心を無理矢理こじ開けるために。

「あっ、んぅっ、あぁあああああっ!?」
そして強烈な快感と共に自分の身体を抱きしめ、大きく痙攣しながら仰け反った。息も出来ないくらいに嬌声を上げ、再び大きく震えたかと思えば、そのままガックリと膝をつく。
その時にはもう生体艤装は消えており、ビクンビクンと痙攣すると、いつものネグリジェのようなワンピースが消滅し、セーラー服とレオタードが出来上がった。
「わお、戦艦でもおんなじ姿になるんだ。漣ちょっと興奮しちゃう」
うひひと下卑た笑い声を上げて、漣も恍惚とした表情に。そうしている間にも、戦艦棲姫の魂は泥に呑み込まれ続けた。
まだ小さく嬌声を上げていたが、ゆらりと立ち上がるとやはり同じようにロンググローブとニーハイソックスが出来上がる。侵蝕が完成したことでさらに大きく震えると、戦艦棲姫の瞳からは紫色の炎が灯った。
「っはぁあ……こんな快感、初めてだわ……んっ。まだ残っちゃってる」
「ようこそ戦艦様〜。やってほしいこと、わかるよね?」
「ええ……んんっ、勿論よ」
未だ快楽に震える戦艦棲姫は、笑みを浮かべて漣に同調した。

いつもの戦艦棲姫とは思えない程に甘ったるい声。快楽に負け、悪意に支配された、人類の敵としての姫と化していた。

その道は消えて

戦艦棲姫がそんなことになっているとは気付くことが出来ず、春雨と海風は曙との戦闘を続けていた。
回避特化で自分に集中させ、他に視界をやらせないようにするのが今の曙の戦い方。春雨と海風の２人を相手取っても、回避をしながらの反撃で互角に渡り合っている。
「ああもう、鬱陶しい！　さっさとやられろ！」
「こちらのセリフです。報いを受けなさい」
「そればっかねアンタ！」
海風の猛攻は凄まじく、曙がまだ救われるタイプの侵蝕であるにもかかわらず、春雨を何度も攻撃したという理由により、もう殺意しか持っていない。救うという選択肢は１つも無かった。
春雨は海風のその戦い方に同調することは出来なかったものの、容赦無く行かねば押し込まれる程に曙が強いため、抵抗なく殺傷力のある攻撃は放っていた。
しかし、砲撃も雷撃もしっかりと回避していく。光の道の通りに行動しているため曙からの反撃を喰らうことはないが、まだ道は複数出ているために、最善の答えの判断が難しい。
ひとまず泥に掠ることも許されないため、春雨も海風もスーツを身に纏っていた。気休め程度かもしれないが、無いよりマシの装備である。
「海風、目の前の敵に集中する。道も限定的にする」
「了解です。まずは確実に１人ということですね」
ここで春雨は、この状況を打開するために、曙を救うための光の道に答えを見定めた。それは他に見えている光の道を一時的に切り捨てることになるのだが、その先にいるのは叢雲と戦艦棲姫だ。個人でも充分すぎるほどに戦える。
むしろ春雨は、海風と共に曙を早急に対処して他の仲間を救援すべきと判断した。この場で全ての戦場の答えに辿り着くことなんて出来やしない。

眼前の1人に2人がかりで向かっているにもかかわらず、早急な決着に辿り着けないのは、この光の道を迷っているところにある。一切の容赦が無くなっているとしても、誰からやるかという迷いが出てしまっているため、十全の力が発揮出来ない。

それで総崩れになるのはよろしくない。そのため、まずは最も近いものに照準を定めた。

「この道を……辿る……!」

そう決めたら早かった。曙をどうにかするための光の道は燦然と輝き、こうすればいいという答えが手に取るようにわかる。泥で出来たコスチュームには触れてはいけないが、それ以外ならば触れてもいいということまで。

そうなると、狙いは頭だ。ここにいる全ての泥に塗れた者達は、首から下は殆ど万全と言える状態になっているが、頭だけは無防備。こちらが頭を狙うとはまず思っていないのだろう。砲撃が当たれば即死だし、水鉄砲なら意味もない。むしろ、守ろうとすると視界を遮りかねない。

「行くよ、海風」

「はい、サポートします」

跳んだら狙い撃たれるため、海上を滑走しながら突撃。

「はっ、そんなもの、魚雷を撃ってくれって言ってるようなものでしょ、クソチビ!」

「姉さんを侮辱しましたね。万死に値します」

曙も漣と同じ魚雷を放つ。勿論これを破壊すれば泥が撒き散らされ、特に海面に近い位置にいる春雨がモロに被ることとなるが、この対処法は勿論、光の道に示されていた。

「大丈夫、避けるから」

一瞬脚を生やす跳躍で魚雷を飛び越えた瞬間、空中で魚雷を放つことで、曙の魚雷と数度誘爆させて撒き散らされる泥ごと吹き飛ばす。さらには、自らの軽さを利用してその爆風に乗り、通常よりも高く速く遠くへと跳んだ。

跳び越えたタイミングを狙っていた曙はこれで虚をつかれること

になり、そこを狙って海風が逆に魚雷を放った。もう救うつもりもない一撃ではあったが、避けるタイミングをズラされたことで、曙はその魚雷を破壊するしかなくなる。
「ウザったいのよ！」
　勿論、魚雷を破壊するところまでもが道筋。これで曙の真後ろに回り込める。そこから振り向き様に曙の頭に向け、脚を鞭のようにしならせて蹴り飛ばせば確実に当たる。
　だが、曙も当然ブーストがかかっているため、その状況からでも反応してくる。魚雷を破壊した瞬間、春雨に視線を合わせてすぐさまその手にニードルガンを展開した。春雨は未だ空中。それならば、針を避けられるわけもなく、刺さればその時点で終了。
「わかってる」
　まだ道は続いている。このタイミングで脚を盾に変形させて、放たれた針を軽々と弾いた。艤装の金属に針が刺さるわけもなく、そこに付着した泥も着水と同時に洗い流された。
「なるほど、頭狙いですか。では、その首を刎ねてあげます」
　海風はさらにヒートアップ。右腕を使い慣れてきた錨と鎖に変形させ、曙の頭を狙って投擲。直撃したら脳震盪では済まない一撃であるため、流石の曙も回避のみに専念する。
「あっぶなっ！　アンタあたしを殺す気!?」
「何度も言っているでしょう。私は貴女を救う気なんて毛程もありませんから。何度も何度も姉さんを侮辱したんですから。一度じゃすみませんよ。三度は死んでもらいます」
「このサイコパスが！」
　ここで春雨がさらに動く。曙が回避に専念するのも道筋。ここで動けなくするために、海風の錨の邪魔にならないように展開してさらにいつもよりも長さを増した脚によって曙を蹴り飛ばした。狙いは頭ではなく、唯一僅かに肌が出ている太腿の一部。レオタードとニーハイソックスの隙間を綺麗に狙って一撃を叩き込む。
「ったぁ!?」
「折るつもりで行ったんだけど、骨も強くなってるのかな。泥が身体

の中を駆け巡ってるから。刃にすると伸ばせそうに無かったから仕方ないか」
だが、曙はそれで倒れることは無かった。動きは止まったものの、強靭な下半身でその衝撃を耐え、怒りに満ち溢れた表情で春雨を睨み付ける。
そんな目で見られたところで、春雨は怯むことなんてない。むしろ、より一層容赦が無くなるのみ。
「やってくれたわね……でも、もう終わりよ。あたしの時間稼ぎは充分すぎるくらい出来た！」
突然勝ち誇ったような表情で言い放つ曙。時間稼ぎをしていたようには見えなかったが、確かに回避を優先していたような節はあった。
その言葉を聞いた直後、春雨はもう何度目かわからない悪寒を感じた。海風が狙われているのはわかっているが、今までに感じたことのないタイプの悪寒。そして、見えていた光の道が突如ぶれ始める。勝ち目に向かっていく答えが失われていく。
そして、新たな道が現れた。曙に集中していたはずなのに、別の答え。対処しなくてはならない答えが、曙ではない何かに向かって伸びていた。
「えっ!?」
その道を辿ろうとした瞬間、戦闘に突如乱入してきた巨体が、真後ろから海風を掴み上げた。
その手が目に入ったことで、春雨は動くことが出来なくなってしまった。今までに何度も見た戦艦棲姫の生体艤装のモノだったからだ。
おそるおそる道を辿ると、そこには曙達と同じ姿になった戦艦棲姫が立っていた。海風をほぼ不意打ちで捕らえたことで興奮したのか、恍惚とした表情を浮かべながら小さく震えている。
「せ、戦艦様……そんな……」
「ごめんなさいね春雨。私もすっかりこの通り。とっても気持ちよかったわ」

当てつけのように話す戦艦棲姫に恐怖しか感じなかった。そして、辿り着く者として覚醒していたはずの自分の無力さを痛感していた。
周囲全ての光の道を気にすることが出来ていたら、戦艦棲姫が敵の手に堕ちることなんて無かったかもしれない。海風に曙を任せて、漣と戦う戦艦棲姫の救援に行っていたら、こんな結末は迎えなかったかもしれない。
「っ……あぐっ……戦艦様までやられるだなんて……っ」
「いやぁ、めっちゃ強かったよ。でもさ、漣ちゃんのことしか見えないようにしているうちに、ボーロに撃ってもらったんだ。だってコレ、チーム戦ですもん」
ニヤニヤしながら戦場にやってきた漣は、仲が良いように戦艦棲姫にしなだれかかる。戦艦棲姫も満更ではないように、漣の頭を撫でていた。その姿に余計絶望を感じてしまう。
「ほら、離れなさいよ。アンタの妹が苦しむ姿をただただ眺めてなさい」
調子を取り戻した曙が、春雨に向けて砲撃。当たるわけにはいかないため回避したが、そのせいで海風から離れる羽目になる。
戦艦棲姫の艤装が少し力を込めると、海風への圧迫が強くなり、苦しそうな声を上げた。しかし、春雨は助け出すために向かおうとしても、曙がしっかりと妨害し、少しも前に向かえない。
この時は、光の道が完全に途絶えてしまった。海風を救う道が見えない。つまり、もう海風は救われないということになる。そんなの認められないと、意地でも道を探そうとするが、焦れば焦るほどダメになっていく。
「よーし、それじゃあ戦艦様、やっちゃってくだち！」
「ええ、海風もこちら側にしてあげる」
戦艦棲姫が少しだけ手を揺らした瞬間、生体艤装の手から泥がジュワッと溢れ出す。スーツを着込んでいても、その掌によってズタズタにされたことによって、泥は着実に海風に染み込んでいった。
明らかに感じたことのない快楽が身体を駆け巡り始めたが、海風は歯を食いしばってその侵蝕に耐える。

「っ……こんなものに、負けるわけにはいかない……！」
目の前には最愛の姉。春雨に迷惑をかけるわけにはいかない。ここで侵蝕されようものなら、確実に姉が嫌な思いをする。それだけは避けたい。たったそれだけの思いだけで、泥からの侵蝕に耐えていた。
しかし、戦艦棲姫が送り込む泥は増える一方。少しだけ肌に傷がついたことによって、吸収率が一気に上がった。
「っあ、ふぁああっ!?」
掴まれている海風が耐えられずに嬌声を上げ始める。こうなったらもうおしまいだと、戦艦棲姫はその場に優しく下ろしてやった。拘束が解かれたことで、海風は快感に耐えるように自分を抱き締める。攻撃に転じようという気持ちも働かなくなっていた。
「ダメ、ダメ……姉さん、姉さんの敵になんてなりたくない……!?」
耐える。意地でも耐える。だが、泥はそんな想いすら踏み躙るように魂を侵し、むしろその想いを反転させるかのように塗り潰していく。
そんな顔をしたくないのに、海風は恍惚とした表情になっていた。こんな顔を姉に見せたくないのに。だが、その気持ちすらも塗り潰されていく。
「海風ぇ！」
「来ないでください！　来たらっ、来たら姉さんも侵蝕されてしまいます！」
漣も曙も、あえてこの状況になってからまるで手を出そうとしない。これも慢心のせいなのだが、海風が春雨の目の前で変わり果てる様子を眺めて、愉悦に浸っている。
だが、海風にも限界が訪れる。姉のことを想い、必死に耐え続けていても、その想いが急激に失われていく。だからこそ、最後の力を振り絞って、海風は訴えた。
「姉さん……私をすぐに……殺し……んぁっ、っひっ、はぁああんっ!?」
そして、海風は最終段階に。大きく仰け反りながら叫ぶような嬌声

を上げた後、力が抜けたようにがっくりと項垂れる。その頃には姉への想いは泥で埋め尽くされ、肩で息をしながらもその快楽を享受し、自らの力としていた。もう春雨の方も見ていない。今見えているのは、自らを変貌させる悪意のみ。

「う、海風……そんな……」

ビクンビクンと震える海風を見て、急激に寂しさの発作が起き始める。目の前に海風がいるというのに、そうでは無いと身体が理解してしまったかのようにガタガタと震え出す。

「っ、はぁあ……んんっ……」

嬌声は続き、何度も震えるうちに、セーラー服とレオタードが出来上がってしまった。痙攣が小さくなっていきロンググローブが、そして震えが止まってゆらりと立ち上がるとニーハイソックスが出来上がる。もう海風も敵の戦闘員の1人なのだと嫌でもわからされる。

「んぁっ、はふぅ……」

最後にもう一度大きな痙攣をしたことで、その瞳に紫色の炎が灯った。全てが完成してしまった証拠である。

「んっ……はぁあ……海風、しっかり生まれ変わりましたぁ……最っ高に気持ちよかったです。今までに感じたことないくらいに、んぅっ、清々しい気分です」

ニチャアと笑みを浮かべた後、涙目で見つめる春雨に視線を向けた。その瞳には、明らかな敵意と悪意。今まで依存していたはずの相手なのに、今やゴミでも見るような目で眺めていた。

「海風……」

縋るように名前を呼んだが、海風は鼻で笑うと曙の側に向かう。春雨のことなんてどうでもいいといわんばかりに。

「ふふ、さっきまですみませんでした。馬鹿みたいなことばかり言ってしまって。こちらの方が気持ちよくて堪らないですね。むしろもっと早く侵蝕してくれればよかったのに」

「アンタが避け続けたんでしょうが」

「あはは、そうでした。でも、私も思い知らされました。今までどれほど愚かなことをしてきたのかを。はふ、まだ快楽が残っていますよ」

まだ小さく痙攣する海風は、落ち着きを取り戻すと改めて春雨の方を見た。
「春雨姉さん、ご覧の通り、私ももうこちら側に来ちゃいました。とっても気持ちよくて最高の気分でしたよ。私がいなければゴミ同然の姉さんでも、望めば私が泥を分け与えてあげますけどどうしますか？
寂しくて寂しくて辛いんですもんね。寂しいなら死んでくれてもいいですけど、姉さんには利用価値がありますし、自分から頭(こうべ)を垂れてくれるとこちらとしても助かるんですよ。辿り着く者が敵対しているのは気分が悪いので、ここで排除するべきなんですよね。なので、姉さんは選択してください。ここで無様に死ぬか、お願いしますと頭を下げて自分からこちら側に来るか」
いつものマシンガントークも敵対しているとなると春雨の心を砕く。仲間だった戦艦棲姫も、海風の言葉を聞いてニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていた。
動けない春雨にトドメを刺すことをあえてせず、苦しむ姿を見て喜んでいるそれは、どう見ても慢心。
しかし、その言葉すら耳に入らない程に憔悴していた。
春雨は考え続けていた。寂しさの発作に苛まれながらも、何故こうなってしまったのかと。自分が海風の危機を、戦艦棲姫の危機を掴み取れていたら、こんなことにはなっていなかった。それは自分が不甲斐ないから、未熟だからと、あらゆる負の感情が駆け巡る。
だが、それ以上に凄まじい激情が心の奥底からふつふつと湧き上がってきた。海風が絶対にしないような行為、言わないような言葉を、本人の意思を塗り潰してやらせていることが気に入らなかった。戦艦棲姫にそんな顔をさせていることが苛立った。こんな思いをさせられていることに腹が立った。
そして、あまりにも惨めな自分に、怒りを覚えた。
「返答してくれます？　無言は死を選んだってことにしておきますよ。まぁ話せないくらいに錯乱してるのは知ってますし、いいんですけどね。姉さんをこの手で縊り殺したら、さぞかし気持ちいいんでしょう。私、その快感を知りたいんですよね。だから、自分からこち

らに来るって言わないでくれると助かります。ふふふ、さぁどうします？」

海風のおちょくるような言い回しに、漣達もケラケラ笑い出す。春雨を嘲るように。

怒りは怒りを呼び、身体中に熱を回らせる。こんなことは初めてだった。艦娘の時だって、こんなに気が狂いそうな程に腹が立つことなんて無かった。もう周囲の音すら聞こえない。寂しさすら感じない。ただ怒りを、凄まじい怒りを感じていた。

そして、春雨の中で何かが切れた音がした。

真紅の狂犬

春雨はとても優しい艦娘だった。

鎮守府では一度たりとも怒りを露わにしたことは無かったし、やんちゃな姉が無謀な突撃をしようとした時も、やんわりと叱る程度。苛立つということ自体が珍しいくらいの、非常に温厚な性格。

それ故に、白露が率いる駆逐隊でも、高い実力を持ちながら前には出ず、サポートに徹することが出来た。冷静に戦況を把握することも出来るし、仲間の、姉の様子をしっかりとその目に焼き付けることも出来た。

深海棲艦化してもその性格は失われておらず、施設の仲間達のために尽力した。酷い目に遭った者にはその手を差し伸べる。敵に利用されていただけの者に対しても、後腐れなど少しも感じていない。もう仲間なのだから、とやかく言う必要なんて無いのだから。

しかしここ最近の戦いでは仲間を利用するという手段を使ってくる敵に対して、少なからず怒りと苛立ちを感じていた。ジェーナスの一件で、それは顕著に表れている。救うことが出来ても少しも嬉しくなく、ただただ怒りに震えることしか出来なかった。

それでも、怒りを溢れさせた叢雲のような存在が施設にあるからこそ、苛立ったとしても自重が出来ていた。叢雲のように怒りと共に歩くことが出来ない者にとって、怒りはただ身を焼くだけのモノにしかならない。春雨はそれを理解していた。

それが今、限界を超えようとしていた。春雨にとっては、溢れた寂しさを紛らわしてくれるくらいに大切な存在となった妹、海風。その海風が、敵の手にかかり、侵蝕され、取るはずのない行動を取らされたのだ。

海風という存在が泥によって穢され、黒く染め上げられ、壊された。それだけでも春雨にとっては大きなショックだった。寂しさの発作が出てしまい、その場で震えて動けなくなる程に。

その海風の姿はダメだった。本当にダメだった。ただ身内が利用されていただけではない。海風の想いを踏み躙ったことが、一番の理

由となる。
　自分のことよりも仲間のことを想う優しい春雨の怒りのトリガーは、仲間の尊厳を踏み躙られること。それでもギリギリ踏みとどまっていたのだが、海風がそれに巻き込まれたことは、そのトリガーを引くに値することだった。

　そして、春雨の中で何かが切れた音がした。

「ふふふ、無言ということは、ここで殺されるということでいいんですよね。考えただけでも気持ち良くなっちゃいそうですよ。侵蝕されるよりも気持ちいいのかも。そんな快感を私のような新人が貰っちゃっていいんですかね？」
「好きにしていいっスよ～。漣達の目的は、器の確保と辿り着く者の排除ですもん。侵蝕か殺すかすればいいから、好きにしちゃってくだせぇ」
「ですって。じゃあ、私が直々に殺してあげましょう。でも触ったら侵蝕しちゃうので、ゆっくりじっくり甚振って殺すことにしますね」
　右腕を刃に変形させる。これで身体をゆっくり刻み、悲鳴を聞きながら最後は命を奪おうと考えたようだ。その刃に泥が乗らないように注意しながらも、ニコニコしながら春雨に向けて構える。
　今までは春雨の辛そうな声なんて聞きたくないと言っていた海風が、想いを塗り潰された結果、一番聞きたくない声を聞きたがっていた。
「……？　姉さん、諦めて心が壊れちゃったんですか？　反応してくれないと困るんですけど」
　刃を突きつけられても俯いたままの春雨につまらなそうな声を上げる海風。苦しむ様子が近くで見たいと言わんばかりにしゃがみ込んでその表情を窺い見る。茫然とし、涙を流しながら虚ろな顔をしているのだろうと高を括っていた。自らの堕ちた姿をしっかり見せつ

けることで、さらに絶望を味わわせてやろうとニヤついた。
しかし、ここで海風は春雨の様子がおかしいことに気付く。寂しさの発作を起こしているのはわかっているのに、知っている反応ではない。仲間がいないことに泣き叫び、ガタガタ震えているものだと思っていたのに、今の春雨は本当にピクリともしない。
心が壊れたとしても、ここまで無反応なのは何かがおかしい。だからこそ、その表情を確認するために、刃を反して峰の方で顎を持ち上げようとした。
「……え？」
だが、明らかにおかしなことが起きる。その刃が、春雨に触れそうになった瞬間にドロリと溶け落ちた。まるで異常な熱に当てられて金属が溶けるように。腕から離れた時点でそれは霧散し、海風の右腕は何も無い状態となる。
艤装がそんな簡単に溶けるわけがない。海風の意思でならばそういうカタチにすることは出来るだろうが、当然ながら今の海風にそんなことをしようとする意思なんて無い。どういうわけか、勝手にこうなった。
「な、なに……」
「海風、春雨の様子がおかしいわ。一度離れなさい」
遠目に見ていた戦艦棲姫が海風を離れさせ、これならばと自身の生体艤装を嗾ける。海風の艤装が誤作動を起こしたのかもしれないが、生体艤装は戦艦棲姫の意思の通りに動く別の意思を持っている存在だ。勿論しっかり泥による侵蝕が行き届いているため、春雨に掴みかかることにも抵抗などなく突撃する。
しかし、春雨に手を伸ばした時点でピタリと動きが止まった。海風の右腕のように溶け落ちるようなことはなかったが、急激に錆び付いたかのようにギシギシと音を立て始め、最終的には戦艦棲姫の意思すら受け付けずに機能停止。
艤装自体の意思が失われてしまったかのように、うんともすんとも言わなくなったため、戦艦棲姫も理解が出来ず、一時的に艤装を消した後、自分の側に再展開。その時にはまた動くようになっていた。

つまり、春雨の近くに行った時点で艤装が機能を停止する。
「何よコレ……どうなってるの」
「それじゃあ撃ってみりゃあいいんスよ。海風氏ー、やっちゃってくだち！」
「そうですね。近付いてダメなら撃って殺してしまいましょう。悲鳴が聞けないのはとても残念ですけれど、姉さんが悪いんですからね。そんな訳のわからない抵抗なんてするから、無惨に死ぬことになるんです。斬られていた方がカタチが残っていたのに、バカですねぇ」
相変わらず言葉を並べながら、失われた腕を再生成した後に主砲も展開。漣の指示によって、海風は春雨の俯いている頭を狙って一切の躊躇なく砲撃を放った。
しかし、頭を狙ったはずの砲撃は、まるで見当違いの場所へと飛んでいった。狙いを定めたはずなのに、いざ撃ってみたら照準が勝手にブレてしまった。
海風が砲撃下手というわけではない。艦娘だった時も、深海棲艦となっても、狙った場所にはしっかり当てることが出来た。
恐ろしいことに、そこから何度放っても全て外れた。まるで当たる気配が無い。
「え、な、なんで……」
「私が撃つわ」
駆逐艦の主砲だからダメなのだろうと、戦艦棲姫が改めて主砲を構えた。威力も範囲も大きく変わるため、入念に狙いを定めれば絶対に被害が出せる。
だが、今度は引き金が引けなかった。まるで、身体から攻撃の意思が抜け落ちてしまったかのような感覚。
戦艦棲姫も混乱し始めていた。頭では殺意があっても、身体がその通りに動いてくれない。
「漣、魚雷使いなさいよ。あたしも同時にやる」
「接近戦と主砲がダメだからってこと？　だったら漣にいい考えがある」
漣と曙もあの春雨がどうなっているのかわからなかったが、ひとま

ず始末しなくてはいけないのは間違いないので、今度は魚雷を放つ。曙はまともな魚雷だが、漣は悪意の塊が格納された侵蝕の魚雷。
そして、漣はどうせならと、春雨に直撃する前にお互いの魚雷を接触させて、爆風と侵蝕のどちらもを浴びせかけようと考えた。曙もそれに同意。どちらかが通用すればいい。
「少し離れた場所からやるべし。もしかしたら近いのがダメかもしんないかんね」
「ええ……何が起きてるかわからないけど、流石にこれで終わってもらわないと困るわ」
戦艦棲姫よりも離れたところから、春雨を狙って魚雷を向ける。交差地点を春雨の少し手前にして、ギリギリ当たらないところで接触させて爆破させるつもりで。
戦艦棲姫の時とは違い、離れたからか魚雷を放つことは出来た。予定通り、まっすぐ春雨の近くまで向かっていくが、その時。
「っ!?」
２人してゾクリと嫌な悪寒を感じた。俯いていたはずの春雨が、顔を上げて２人をジロリと睨みつけていた。
その瞳には、いつもの青白い光でも、辿り着く者の力を扱う時の白い輝きでもない。憤怒に塗れた真紅の焔が宿っていた。
「睨んだところでもう遅いわよ！　もう魚雷はそっち行ってんだから！」
「いや、これもしかしてまずいんじゃ……っ!?」
曙はまだ理解していなかったが、漣が真っ先にまずいと思った瞬間だった。そこにいたはずの春雨が消えていた。
やったことといえば、また脚を生やすことによる勢いによる跳躍。しかし、今までとは速度も精度も違っていた。
「っおぶっ!?」
そして、春雨は漣の眼前におり、その拳は深々と漣の鳩尾に食い込んでいた。砲撃を放つわけでもなく、ただただ怒りを発散するために拳を叩き込んだ、言ってしまえば理性を持たないような攻撃。効率度外視で、その怒りを漣に知らしめるための、痛めつけるための一撃。

「漣!? で、でも、これであたしらのコスに触れたってことは……」
泥で作られたコスチュームに触れたということは、それで侵蝕となるはず。曙も漣が痛い目を見たかもしれないが、本来の目的が達成出来ていると内心ほくそ笑んでいた。
だが、この春雨は何もかもが違った。漣に深々と食い込ませた拳。その周囲のコスチュームだけは綺麗に吹き飛んでおり、春雨が泥を直に触ることはない。漣はただ殴られただけになっていた。
「な、なな、なんなんですか姉さん！ 何が起きてるんですか！」
敵対しているにもかかわらず、姉の変貌に驚きが隠せない海風。しかし、今の春雨にはその声が届いておらず、漣から少しだけ離れると、ジェーナスを救った時のように脚を向け、一瞬だけ脚を生やして蹴り飛ばした。
当てた場所は胸ではなくまたもや鳩尾。これは救うつもりのない一撃である。心臓を一瞬止めることで身体に死を感じさせ泥を吐き出させる攻撃を、あえて死なない場所に繰り出したことで、ただ痛みを与えるのみとした。
「ぐぇっ!?」
「ちょ、アンタ何をっ!?」
漣がやられたことで曙が主砲を構えた瞬間、戦艦棲姫が感じたものと同じ、殺意はあっても砲撃が出来ない状態に陥った。身体と心が剥離したかのような感覚に、疑問と同時に恐怖が湧き上がる。
「な、何よこれ、何よこれ!?」
「すぐに離れなさい！ この春雨、何かがおかしい！」
春雨の存在を少なくとも曙よりは知っている戦艦棲姫も、今の春雨の姿に冷や汗が流れ始めていた。
しかし、戦艦棲姫の言葉に反応する前に、春雨は曙の横腹を蹴り飛ばしていた。先程の漣の時と同じように、触れる直前にその位置のコスチュームだけは消滅し、直に触れられることでダメージを入れられている。
「っぐぅっ!?」
「止まりなさい春雨！ それ以上はやらせな……っ」

曙を吹っ飛ばした後は、次はお前だと言わんばかりに戦艦棲姫に目を向ける春雨。その瞳に宿る憤怒の焔はさらに燃え上がり、戦艦棲姫に恐怖を植え付ける。
冷や汗はさらに増えるが、心は悪意に侵蝕されているため、春雨相手にも臆することなく敵対の意思を見せ続ける。卑怯なことをすることにも抵抗など一切無いのだが、何をしたらいいのかを瞬時には判断出来ない。
「海風、来なさい！　コレはここで始末しないとまずい！」
「は、はい！　姉さんを一番知るのは私ですから、私が確実に始末します！　甚振るとか言ってられません！」
そんな言葉が耳に入ったことで、春雨の中の怒りはさらに燃え上がった。理性を失うほどの怒りは確実に春雨から溢れ出す。
そして、それはカタチとなった。
「え、ね、姉さん……!?」
海風の目に入ったのは、春雨の手の甲。ドロリと泥が溢れ出していた。感情が溢れ出した時に体外に溢れ出す泥。海風にだって経験があるそれが、春雨に発生していた。
しかし、その泥は感情が溢れて繭となったもののそれとは違う、真紅に煌めく泥。もうコレは泥とは言えない。怒りをカタチとしたマグマと表現するべきだった。
それは本来おかしい。艦娘の感情が溢れた時に泥が溢れ、それが繭となり深海棲艦と化す。ならば、既に深海棲艦である者が溢れた場合、一体どうなるというのか。
「何が、起きようとしているの……」
戦艦棲姫も春雨の威圧に対して身体が動かなくなっていた。そもそも、春雨に対して攻撃が通用しない。艤装を嗾けても無意味となり、海風の右腕も反応しなくなる。砲撃も勝手に照準が合わなくなるか、そもそも撃つことすら出来なくなる。
「何よアレ……わけがわかんないわよ！」
ダメージから僅かに回復した漣と曙が復帰し、戦艦棲姫の隣にふらふらと移動してきた。しかし、春雨の姿に驚愕していた。

「……狂犬……」
それを見た漣が呟いた言葉が、狂犬。白露型の代名詞となりつつあるその言葉を、それを知らずとも口にした。
「っ、あっ、あぁぁああああアアああああアァアアアアッ！」
吠えるように叫ぶ。力を解き放つように、怒りを晴らすように。そして、春雨にさらなる変化が発生した。手の甲から発生したマグマが春雨を包み込んでいく。繭になっていくわけでは無いのだが、全てを包み込んだ後、強く手を振るったことで、生まれ変わったかのように泥が消え去る。
中から現れた春雨は、先程とは違う雰囲気を持っていた。深海棲艦のままではあるし、脚が生えているわけではない。何もかもが違う。
展開された艤装は、今までと似ても似つかない程に軽装だった。代わりにやたらと目立つように生まれたのが、犬の耳のような電探の艤装と、尻尾のような基部。
そして、制服すらも変化し、マグマが纏わりついたことによって真紅に染まる。元々露出は高い方だったが、より動きやすくなるためか、セーラー服部分は肌に張り付き水着のように、スカートはショートパンツ状へと変化。
もう、見た目からして狂犬と言えるような存在となってしまった。
「あんなの、あんなの知らない、データとかそういう問題じゃない、なんなのアレ!?」
漣も錯乱。深海棲艦ではあるのだが、もう深海棲艦に見えないくらいの変貌を見せた春雨に、恐怖しか感じていないようだった。
春雨をこんなカタチに変えたのは、紛れもなく自分達だというのに。

怒りの理解者

怒りに呑まれ、理性を失い、泥ではなくマグマが手の甲から溢れ出した春雨は、漣達の目の前で真紅の狂犬へと変貌した。艤装も犬のようになり、近接戦闘を行いやすくするように軽装となった春雨は、その瞳に憤怒の焔を宿して敵を見据える。

最初の照準は、この中でも最も罪深い者としての認識が強い、漣。そもそもこの場にいなければ、こんなことにはならなかった、最も忌むべき存在。一撃入れただけでは止まらない。

「あぁアッ！」

もう言葉まで失ってしまったかのように、吠えながら突撃。脚を生やした勢いを使った突撃。春雨が近付くだけで、身に纏う悪意の塊は蒸発するように消え去り、攻撃も出来ないために回避するしかなくなる。

海風と戦艦棲姫は、泥製のコスチュームはもう無駄だと、通常の艤装を展開する感覚で同じ衣装を用意するが、漣と曙は堪ったものではない。艦娘は制服を作り出すことは出来ないのだから、消されては再生してと泥を纏うしか無いのである。

「近付かれたらブーストかかんない！　ぼの、ちょい離れよ！」

「わかってるわよ！　コレ無かったら、あたし達に勝ち目なんて無いようなもんじゃない！」

そもそもがドロップ艦であり、泥による強引なブーストとコスチュームによる強化でようやく上から叩けるという状態である2人には、今の春雨は天敵中の天敵。近付かれた時点でブーストが利かなくなるため、ただのドロップ艦に戻るようなものであるため、逆立ちしても勝てないようなものである。

逆に海風と戦艦棲姫は、どうあっても力が下がることはないのだが、春雨がこうなっているという事実によって戦いづらくなっていた。悪意の塊に支配され、春雨のことを敵として認識していても、この変貌は錯乱を招く。そして、恐怖すら植え付けられてしまっていた。

「これなら、止められるかしら！」
狙われた漣の目の前に移動した戦艦棲姫が、春雨の突撃を止めるためにギリギリのところで艤装を展開。近付こうとしたら機能停止するというのなら、進路上に置いておけば壁にはなるはずと。
泥に支配されたことによって、あれだけいい相棒として協力していた生体艤装も、今の戦艦棲姫にとってはただの手段であり道具。そんな使い方をしてきたことに、春雨はさらに怒りが増す。
戦艦棲姫をそうしたのは、泥を持ち込んだ者達のせい。実際に撃ち込んだのは朧かもしれないが、春雨には目の前にいる漣が原因としていた。故に、真っ先に殺すべき存在として狙い続ける。
「アあっ、あぁアァぁあっ！」
進路妨害をする生体艤装などモノともせず、春雨が触れることなく脚がドロリと溶け出した。巨体が支えきれなくなり、その場に倒れ伏してしまう。
「なんなのよそれ……！　どこまで艤装に干渉してくるの!?」
春雨がそんなことを突然出来るようになった理由なんて、少し考えればわかること。先程の紅い泥、マグマ。あれが全てを狂わせている。
しかし、それ以上考える余裕なんて全く与えられず、それこそ全てを呑み込むマグマのように直進し、漣の喉に手を伸ばす。
掴まれたら終わり。振り払うことも出来ず、存在そのものを艤装のように溶かされるか、そんなことすら出来ずに首を折られて絶命か。どう転んでも命は無い。
「ひっ……!?」
力も発揮出来ず、ただのドロップ艦になった漣には、この真紅の狂犬はただただ恐怖の対象にしかならない。殆ど素に戻って小さく悲鳴を上げた。
それが春雨にはまた気に入らなかった。仲間達を弄び、上から目線で嘲り、海風を壊したというのに、いざ自分がやられる立場になった途端にこの態度。自分が被害者のような態度。許せない。許せない。許せない。

そんな気持ちが次から次へと湧き上がり、怒りに怒りが積み重なり、春雨は余計に正気からは程遠い場所へと誘われる。
「やらせませんよ、姉さん！」
漣に手を伸ばしたタイミングを見計らって、海風が突撃。厳しいとは思いながらも、艤装が機能しなくなるならと、自らの身体をぶつけにいった。
春雨は艤装のフル装備だが、海風の艤装はまともに動かなくなるため、体当たりですら殆ど意味がない。しかし、漣が死ぬことは無くなるだろう。そうすれば、また何かしらの策を練られるはず。
「アァ!?」
しかし、春雨は怒りに呑まれ理性を失っていても、考えることが出来ないわけではない。海風の体当たりに即座に反応し、漣ではなく海風に目を向ける。
その瞳は、海風ですら怯んでしまう程に怒りに燃えており、真紅の焔に対しては、悪意に呑まれているにもかかわらず、美しいとすら感じてしまった。
そのせいで体当たりが途中で失速してしまう。しかし、漣を守ろうと手だけは伸ばしたため、春雨の腕を掴むことは出来た。それが間違いであると気付かずに。
「っあ、あぁっ!?」
突然、掌が焼けたのではと感じるほどの熱を感じた。だが実際は焼けているわけではない。海風の中に巣くう泥を、コスチュームのように蒸発させているのだ。水分が気化するということは、それ相応の熱が発生する。実際に熱くなくても、傷ひとつつかずとも、海風はその瞬間を『熱い』と感じることになった。
しかし、体内の泥は常に増殖を続けている。そしてそのたびに蒸発し、熱を発生する。全ての泥が即座に消えてしまえば、海風は解放されると同時に侵蝕も終わるのだろうが、なまじ増殖を続けるせいで海風は無限に苦しむことになる。
悪意からは脱却出来ず、愛する姉に牙を剥き続け、しかしそれから解放されることはない。そこからの解放は、死、もしくは死に至るダ

メージを受けることによる泥の自発的な排出のみ。
春雨の怒りの焔は止まらない。海風が苦しんでいても、止まらない。
「そ、そのまま押さえてなさい！　アンタ諸共……！」
ここで曙が最悪の手段に打って出る。艤装も砲撃も効かなかったが、魚雷だけは回避したことから、あの爆発だけはどうにも出来ないのだと判断した。
それ故に、艤装が不具合を起こす範囲より外から魚雷を放ち、海風ごと春雨を始末しようと画策した。どんな手段をとったとしても、春雨だけはここで始末しなくてはならないと、悪意に呑まれているために抵抗など一切なしにその手段を行使した。
「あぁアアっ！　アアアぁあぁぁアアッ！」
だが、今の春雨にそれが通用するわけがなかった。軽装になったところで、他の兵装が使えないわけではない。海風に掴まれている腕とは逆の腕に主砲を展開し、爆発の影響が自分に及ぶ前に爆砕し、無傷で魚雷すら乗り切る。
こうなると、ここにいる者達では手も足も出ないということになるだろう。ここまで人数差が出来ているのに。
ならばと、恐怖でビクビク震えながらも漣はここと別の戦場に目を向ける。
「ボーロ！　まずいことになった！」
未だに叢雲との戦いに手を焼いている朧に声をかけた。

あちらはあちらで、泥による侵蝕が全く効かないという特性を十全に使いながら、叢雲が怒りのままに暴れ回っていた。
薄雲の胸倉を掴んだままでは足りないと、強引に引き寄せて首根っこを掴み、もう片方の手では槍を振り回しながらその先端に備え付けられた主砲を乱射。朧もこれには近付くことが出来ず、手をこまねいていた。
そんな中、漣の声が聞こえたことでチラリとそちらに目をやる朧。

そこで起きていた惨状を見て、目を見開いた。
海風と戦艦棲姫を自陣に取り込めたことは良かったのだが、それ以上に暴走している春雨の姿が目に入る。誰の攻撃も通用せず、触れれば侵蝕出来るはずなのにそれすら効かない。攻撃は上手くいかなくなり、魚雷は事前に爆破。
数的優位をひっくり返した結果、天敵を目覚めさせてしまったようなものである。
「……叢雲、朧がこんなこと言うのはアレだけど、一時休戦しない？」
ここで朧がとんでもないことを言い出した。怒りによって理性を失っている叢雲にそんなことを言ったら、火に油を注ぐのみである。
「何巫山戯たこと言ってんのよ！　誰が休戦なんてするか！　薄雲、アンタもそんな甘っちょろいこと言わないわよね。負けそうだから戦いをやめようだなんて」
問いかけても、薄雲はぐったりしていて反応が弱い。膝蹴りに加えて首まで絞められているのだから、いくら泥でブーストがかかっていようとも滅多打ちにされてこうならない方がおかしかった。
それでも瀕死にはまだ遠いため、自主的に泥を吐き出すことはない。反撃の機会を窺いながらも、それをすることが出来ずに体力だけを持っていかれている。
だが、朧は続ける。
「そっちにも問題が起きてる。春雨、アレでいいの？」
「あぁん？　そう言って私の視線をアンタから外してる間に不意打ち仕掛けるつもりでしょうが！　小賢しいことしてないで黙って死ね！」
「じゃあ攻撃しない。誓う」
「信用出来るわけないでしょ！　今までの自分の行いを省みて後悔してから死ね！」
叢雲は今、確実に有利な状況である。その状態で休戦だなんて、叢雲が許すはずがなかった。そもそも逆の立場ならば、朧は休戦を受け入れるかという話だ。そんな都合のいい話、あるわけがない。
それ故に、叢雲が朧の言葉を聞き入れるわけがないのだ。何をどう

言われようと、動揺を誘ってその隙に殺そうとしてくると考えるのは当然のこと。
「じゃあいい。朧は叢雲と戦ってる暇が無くなったから。薄雲と遊んでおいて」
「逃がすかぁ！」
　この戦場から離れようとする朧を逃がすわけもなく、槍をさらに巨大化させて振り回し、この場から離れないように攻撃を放つ。大振りであるため、どうしても攻撃は当たりにくいものの、同時に砲撃を重ねたりしているため、朧を追い詰めることは可能。
「ああもう、話くらい聞いてもいいんじゃないの」
「煩い！　こちらの話を聞かない奴の話なんて誰が聞くか！」
「うん、ごもっとも。何も言い返せないや」
　そうしている間にも、首を掴まれている薄雲はぐったりしつつも朧が指し示す方を確認し、敵対しているにしても春雨の暴走が目に入った。
「ね、姉さん……」
「黙ってろ薄雲！　まだ蹴られ足りないか！」
「お、朧ちゃんの言うこと、本当です……春雨ちゃんが、とんでもないことに……」
「泥に呑まれてる時点で、アンタの言葉も信用出来ないわよ！」
　またもや薄雲の腹に膝を入れる。もう何発目かもわからない攻撃に、薄雲は反撃すら出来ずにゼエゼエと言い出した。消耗しているし、今の薄雲には叢雲は殺すべき相手ではあるのだが、春雨の状況を無理矢理にでも見せるべきであると判断し、力を振り絞って叢雲の手を振り払う。叢雲も長く薄雲を掴んでいたため、若干汗ばんでいたか、全力の抵抗で滑って手を離してしまった。
　朧をこの場所から漣達の下へと行かせようというのが本来の目的ではあるのだが、あれはもうどうこう言っている場合ではない。目にしたことで、朧が休戦を訴えた理由もわかる。
「いいから、あっちを見てください……！」
　なんとか視線を春雨にやらせようと、叢雲の攻撃を回避しながら位

置をうまく立ち回る。そうすれば、自然とあちらの大惨事が視界に入るはずであると信じて。
怒り狂って何も見えていない状態ということはない。それは叢雲のことを最も知っている薄雲は把握している。故に、ここは叢雲をコントロールするように上手く戦っていた。
結果、叢雲の視界に春雨が引き起こしている光景が入った。
海風と戦艦棲姫が侵蝕されていることにも苛立ちを感じていたが、それ以上に春雨の変貌に驚いた。朧の休戦の申し込みの理由は理性を失っていても理解出来た。あの春雨はもう、敵味方関係なしに暴れる第三軍。侵蝕されているとはいえ、最愛の妹であろう海風にすら躊躇なく容赦なく死を振りまく存在と化している。
「わかりましたか。私達はもう敵同士ですが、アレはそんなこと言っている場合じゃないでしょう」
「……そうね。ちょっと冷静になりかけてきたわ。でもね、薄雲」
槍を突きつける。
「その隙を見て、私に春雨を押しつけて全員丸ごと逃げ果せようとするんじゃないの!?」
「誰がそんなことをすると言いましたか！」
「今のアンタ達はそれだけ信用出来ないクズじゃない！　この私が、叢雲が、休戦に応じると思ってるのか！」
「こっちも殺されかねないのに、何言ってるんですか姉さんは！」
「こういう時に妹らしさを出してくるんじゃないわよ！　私以外が全員敵ってだけ！　アンタも含めて、数は泥共の方が多い時点で信用出来るか！」
薄雲も叢雲のこの言葉には口を噤まざるを得なかった。心の奥底を読み取られたような感覚。
叢雲に押しつけて撤退は、口にも顔にも出さないようにしていたが、泥に侵蝕されていた者全員が思いついていたこと。特に漣は、どんな手段を用いても自分だけは拠点に戻ろうと思っていたくらいだ。
泥のせいでそれほどまでにゲスにされている。薄雲や、海風、戦艦棲姫までもが。

「後退以外は見逃してやるから、ほら、春雨を止めに行きなさい。どうしたの、やっぱりアンタ、私をハメようとしてるわけ？　だったら容赦しない。ここで皆殺しにしてやる。それが嫌ならさっさと行け。アンタ達が全滅したことを見届けてから、私が春雨を止めに行く。ほら、行きなさいよ！」

薄雲も朧も、侵蝕が効かず怒りが無限の力を発揮する叢雲にはもう勝てないと理解していた。ブーストがかかっていても、叢雲のブーストには足元にも及ばない。

この場を切り抜けるためなら、この叢雲の指示を聞くしかない。逃げ道すら封じられている。逃げようとした時点で叢雲があらゆる手段を用いて殺しにかかってくるだろう。二手に分かれても、それでさらに怒りを増して。

朧もここで覚悟を決めた。

「薄雲、叢雲に見張ってもらった状態であちら側の戦場に向かう。正直なところ、もう叢雲には勝てない。でも、むざむざ死ぬわけにもいかない。撤退するなら、仲間も連れて帰りたいから。見逃してもらえるのなら、この機会を使って仲間を救う」

「絶対逃がさないから覚悟しなさい。あっちが終わったら殺してやるから。アンタ達は、私の恩恵で命が延ばされているだけよ」

薄雲に合図をして、朧は春雨を止めるために突撃を始めた。薄雲は苦い顔を見せつつ、叢雲を睨み付ける。

「何睨んでんのよ。逆の立場で、私がアンタ達に休戦を申し込んだらどうする。ここぞとばかりに私を殺しに来るでしょうが。アンタ達がやってよくて、私がやっちゃいけない理由を納得出来るように言ってみなさい。別にあの朧を後ろから刺し貫いてもいいのよ」

薄雲は何も言い返せない。今回ばかりは、怒りに呑み込まれていても、叢雲が全面的に正しい。泥による侵蝕で妹であることすら利用しようとしていたのだが、叢雲には何も通用しない。今だって薄雲の喉元に槍を突きつけているほどなのだ。

結局、薄雲は小さく舌打ちをして朧に続いた。今はもう叢雲がどうだと言っている余裕なんて無かった。

「……ったく。まぁ、春雨がああなるのもわからなくもないわ。海風がああなったらブチギレても仕方ないもの。私だって薄雲がああなってるのを見ていると、ムカムカして仕方ないんだから。でもアイツ……多分怒り慣れていないのよね」

怒りに最も理解のある叢雲には、春雨の怒りは手に取るようにわかる。そして、同情も出来た。暴れたいなら暴れ続けろと、むしろ応援する程に。

それ故に、叢雲はあの戦場からあわよくば逃げ出そうと考えている者がいないかを監視する。自分達で引き起こした惨劇から逃げるなと。

身を滅ぼす怒り

春雨は初めての激情に突き動かされ、その熱に浮かされながらも暴走を続ける。どれだけ暴れても、どれだけ壊しても、その怒りはまるで晴れることはない。その怒りの源となっているもの、漣と曙が目の前からいなくならなければ、この熱は冷めない。

それに、海風と戦艦棲姫が敵対していることも怒りに繋がる。これは自分への怒りだ。不甲斐なさに、未熟さに、惨めさに、春雨は耐えられなかった。

艦娘としての誇りなどとうに消え、自らこの道を選び、獣となる。そしてそんな手段しか取れない自分自身に怒り続ける。故に、この怒りは止まることを知らず、時が経てば経つ程に増す一方。

「アァァァァあああぁぁああアァァあぁあっ！」

吠える。吠えるほどに怒りはさらに表に出る。耐えられない程の熱量はマグマとなり溢れ、手の甲から撒き散らされる。

深海棲艦となってから、春雨は二度目の感情の溢れを経験することとなった。その結果がこれだ。激しい暴走を引き起こし、本来溢れていた寂しさが吹き飛ぶ。怒りに感情全てが支配され、それこそまさに深海棲艦と言わんばかりの変貌を遂げた。

ただでさえ、春雨からは程遠い軽装となっているのに、怒りが溢れるほどさらに変化、いや、進化していった。ついには今まで消していた脚も展開を始め、真紅の煌めきを持つ義脚が完成する。より理性を失い、もう誰が誰だかもわかっていないように、眼前のものから始末するぞという視線を向ける。

流石にこの時は恐怖もあってか、海風は春雨から離れていた。ずっと腕を掴み続けていても、体内で泥の蒸発の熱を与えられ続けるのみ。漣が無事に移動出来ている上、春雨自身が変貌のためにその場で動かなくなっているのだから、触れているだけでキツいとなれば、わざわざそのままでいる必要もない。

「ダメ、やっぱり砲撃出来ない……！」

離れ際に春雨を始末しようと主砲を構えるが、やはりトリガーは引

けなかった。春雨の近くにいると、攻撃という行為が一切出来なくなる。魚雷も放つことも出来なかったし、右腕を刃に変形させたら途端にまた溶け出した。
ただ溶けるだけなら、春雨の怒りの熱量としてもいいかもしれないが、攻撃行為全てを封じるというのが理解出来ない。しかも、その状況で春雨は一方的に攻撃をしてくるのだから余計にわけがわからない。
「なんて厄介な……辿り着く力の一種なんでしょうか」
いつもなら褒め称えてマシンガントークに発展しているのだが、今の海風には春雨のその力は疎ましいものでしかない。姉がこうなっていることも気に入らないというくらい、侵蝕される前と比べれば正反対にされてしまっている。
「アァァっ、あぁああアァぁああっ！」
その声が聞こえたからか、また吠えたかと思いきや、新たに生やした脚で海面を蹴って海風に襲いかかる。最愛の妹であろうが、今の春雨にとっては怒りを発散するために破壊するもの。これがまだ侵蝕されていないのならば話は変わるのだろうが、今の海風は春雨にとっては敵。怒りの中で割り切ってしまったことで、海風ですら攻撃対象になっている。
近付かれるということは、尚更攻撃無効が響く。漣や曙のようにブーストが利かなくなるわけではないにしろ、出来ることが回避しかなくなるのは、最終的にはジリ貧だ。
「その怒りの炎で勝手に燃え尽きてくださいよ！　迷惑なんですよ姉さんは！」
確実に言わないような言葉を投げかけるが、海風はわかっていない。そういう言葉を聞かせれば聞かせるほど、春雨の怒りはより深いモノになり、力を増していくのだから。
瞳の真紅の焔がさらに燃え上がり、その手を海風に伸ばす。当然海風は回避しようとするのだが、ここで海風自身に異変が起きた。
身体が動かない。
「なっ」

「アァああっ！」
その瞬間、春雨の手は海風の顔面を捉えていた。別に向かってくる春雨に恐怖を感じたから動けなかったわけではない。直前まで回避しようとしていたし、むしろ、普段よりも大きく避けるつもりでもあったため、海面を力強く踏み締めていたくらいだった。
なのに、春雨が手を伸ばしたことで海風の身体は途端に動かなくなった。力が抜けたわけではなく、どちらかといえば金縛り。意思とは裏腹に、身体がいうことを聞いてくれなかった。
「な、なんで……身体が、う、動かなく……っあぁあっ!?」
再び海風の体内の泥が蒸発していくような熱が発生。締め付け以上のダメージが入っていく。触れて侵蝕しようとするものに対する当てつけのような苦痛を与えていった。
「このっ、ふざけんな！」
そこに割って入ったのは曙である。海風を囮のようにして、その後ろから主砲を放っていた。先程も魚雷で海風諸共春雨を始末しようとしただけあり、仲間が捕らえられていてもお構いなしである。
そしてそれは当然、春雨の怒りを買う。撃とうとした瞬間、グルンと胴を回して曙を睨みつけた。紅く燃える瞳に見据えられた瞬間、曙は意識していなくとも身体が萎縮したような感覚を得る。その結果、砲撃はまともに出来ず、あらぬ方向へと飛んでいった。
「なっ、何よ、これ……！」
「なら漣の出番だい！　ちょりゃーっ！」
その隙を見逃さず、漣も魚雷を放つ。今回は悪意の塊を格納することはなく、避けられないくらいに密集させ、直撃せずとも大爆発を起こし、いくらあの春雨でも木っ端微塵になるだろうと画策して。海風も巻き込まれるが、漣の中では所詮この現場で手に入れたばかりの戦力。失われても大したことでは無いと内心思いつつ。
「朧も入るよ。確かにアレはまずいからね」
そして朧参戦。叢雲の監視下ではあるが、仲間を救うためという名目を守るために、漣の魚雷に合わせて砲撃を乱射した。こちらも相変わらず海風のことなんて何も考えていない砲撃である。

何はなくとも、春雨だけは始末しなくてはならない。そのためには手段は選んでいられないし、犠牲も問わない。だからこそ、まるで躊躇は無かった。これが捕らえられているのが漣や曙でも、朧は同じことをしていただろう。
「あああぁああアァぁアァアアア！」
対する春雨は、海風を盾にするようなこともせず、怒りに任せて行動を開始。脚を生やしている状態でも並ではない速度を発揮し、魚雷も砲撃も回避して３人に突っ込む。無論、海風の頭は掴んだままである。
その様に、漣や曙だけでなく、朧も否応なしに恐怖を感じた。いくら深海棲艦といえど、他人を片手で掴んだまま、まるで速度を落とさずに突っ込んでくるなんてありえない。
「私が動きを止めます！」
その突撃を食い止めるため、今度は薄雲が乱入。春雨のよくわからない力が及ばないであろう場所から鎖を振り、こちらも海風諸共縛り付けた。それにより、漣達３人への接近は未然に食い止められる。
「つぎっ、あぁあああっ!?」
海風はそうされたことで掴まれている頭以外にも春雨と密着することになり、全ての場所で劫火のような熱を感じることとなった。体内の泥が蒸発し、しかし内側では増殖し、無限地獄が始まる。
しかし、泥の蒸発する範囲が数倍に増えたことにより、苦痛と同時に違う感覚も生まれる。何かから解放されるような心地良さが混じっていた。
増殖は続けるものの、海風の体内の泥の容量が、少しずつ減ってきている。春雨のナニカによって消滅する泥の量が上回ってきているのだ。
「アァアアアッ！」
縛られている春雨は当然その持ち主を睨み付ける。漣達と同様、その真紅に燃える瞳に見据えられた瞬間、薄雲もゾクリと恐怖が生まれる。
そして、しっかり捕らえているはずの鎖がドロリと溶け出し、拘束

がそのまま解かれた。鎖も艤装であるのだから、こうなって当然。ここまで見ていたわけではないため、薄雲は驚きを隠せない。
「え、ええっ!?」
当然これにより春雨の標的は薄雲に変更。漣達は当たり前のように薄雲を囮にして、その場から離れていた。
春雨が最も近い者を狙い続けると勘付いたようで、誰か1人を生贄にしておけば、撤退する余裕が出来ると考えた。
しかし、そんなことが許されるわけがない。少なくとも、朧だけはここから逃げ出せない理由がある。今でも監視が続いているのだから。
「で、でも時間は稼げてる。今のうちに撤退を」
「させると思ってんの?」
もう完全に逃げ腰の漣の真後ろ。朧と薄雲を監視している叢雲が、逃げさせるどころか春雨の方に押し出した。槍の柄で突き飛ばしただけ有情。絶対に逃がさないという意志の下、春雨に匹敵するかもしれない怒りをぶつける。
「誰のせいでこうなったと思ってんの。責任を取るのはアンタ達の仕事よ。死んでも春雨の暴走を食い止めろ。むしろ死ね」
「アンタ、今そういうこと言ってる場合じゃ」
「アイツに殺されるか私に殺されるか選ばせてやるっつってんのよ!」
曙に突っ掛かられるが、容赦無く叢雲はその槍で曙を打ち付ける。その目は冷たく、見下した顔。
「ったぁ!? 何すんのよ!」
「アンタ達みたいなクズでも、少しは役に立ちなさいよ! ヒト様の平和を勝手に脅かしておいて、予想外のことで制御出来なくなったら他人任せで逃げ果せようなんて都合のいいことがあると思ってんの!? 世界の誰もがアンタ達を許したとしても、私が絶対に許さない。ほら、さっさと行って、無様に散ってこい! 今ここで私が殺さないだけありがたいと思え!」
曙の腹に槍の柄を押し当てたかと思いきや、それを怒りの力で巨大

化させ春雨に強引に突撃させる。
「ちょっ、アンタぁぁ！」
「次はアンタよ」
叫ぶ曙を無視して、叢雲は次はお前だと及び腰になっている漣を睨み付け、槍ではなく脚で蹴り押す。
「な、何すんのさ！」
「敵には何をしてもいいでしょ。さっきもあのバカに言ったけど、殺されないだけマシだと思いなさい。逆の立場ならアンタ達はニヤニヤしながらこういうことするわよね。だから私がやってやってんの。ほら、立って突っ込め。ゴミはゴミなりに根性見せて、責任を取れ！」
漣を蹴り上げた後、そのまま春雨に向けて突き飛ばす。流石に吹っ飛ばされるようなことはないにしろ、叢雲の剣幕に少なからず慄いていた。
春雨のみならず、叢雲も悪意の塊による侵蝕が効かないとなると、完全な実力差になる。朧も従うしかないと首を横に振ったため、漣はギリッと歯軋りをしながら春雨を見据える。
「ああもう、やってやる、やってやらぁ！　これでもご主人様の最初の器ぞ！　こ、これくらいの逆境なんぼのもんじゃい！」
と意気込んだところで、薄雲を蹴り飛ばして追い討ちを仕掛けようとしていた春雨の視線が曙と漣に向く。やはりそこでどうしても萎縮してしまうが、今回はそれだけではすまない。回避しようとする気持ちはあっても、身体が動かなくなった。
「うぇっ!?」
「な、なんで、身体が動かない……!?」
春雨に見つめられると不可解なことが起き続ける。最初は艤装の不調から始まった。砲撃が定まらなくなり、勝手に溶け落ち、今は艦娘本体にすら影響を齎す。
今春雨に最も近い位置にいる海風にはさらに強い影響が発揮される。縛られたことによって頭から手が外れたが、逃がさないと言わんばかりに代わりに首を絞めるように拘束している上に、春雨の意識の範囲に入っていることで身体も動かすことが出来ず、密着しているこ

とで体内の泥が次々と蒸発していくために苦痛が酷くなった結果、もう悲鳴を上げることも出来ずに白眼を剥きかけていた。
蒸発の速度が増殖の速度を上回ったことで海風の中の泥が失われていく。地獄の業火に焼かれながらも、泥が僅かになったことで苦痛は減り、ただ激しく消耗させられる。
「っあ、あぁああっ!?」
そして、一際大きな苦痛の悲鳴を上げた後、ついには正気を取り戻した。海風の内を侵し続けていた泥は、春雨の謎の力によって全てが消え去り、海風は侵蝕前の姉を愛する本来の存在へと戻ることが出来たのだ。
春雨の憤怒の焔がどんどん増していることが理由。泥の蒸発の速度も上がり、海風の中に巣くう寄生虫を全て燃やし尽くしたのである。
全て失われれば、春雨から与えられる苦痛は失われる。気を失う直前くらいまで持っていかれたことで、海風はもう息も絶え絶えである。
「う、あぁ……ね、姉……さん……」
生半可な苦痛では無かったが、泥の侵蝕を春雨のお陰で脱却することが出来たのは確かだ。怒りに狂いながらも、春雨の心の底からの望みは全員の救出。泥を失わせることが願いだ。それが達成されたこととなる。
今までの行い、姉を苦しめるために嬉々として煽っていた自分が嫌で嫌で仕方なく、自死を選びたいほどの絶望に苛まれつつある状況にあるが、力を振り絞って姉に声をかける。
しかし、もう理性も何もかもをかなぐり捨てている春雨には、海風の声も届かない。名前を呼ばれたことで反応はするが、海風がもう元に戻っていることには気付けない。
「ッア、アァァあああっ!」
何を思ったか、絞め続けていた海風を解放したのも束の間、再び顔面を掴み上げて放り投げた。首がどうにかなってしまいそうだったが、なんとか耐えて着水。ゴロゴロ転がりながらもどうにか膝をつ

き、立ちあがろうと踏ん張る。
「姉さん、姉さん！　私は……海風は！　姉さんのおかげで、元に戻れました！　だから……っ」
今の見た目ではわかってもらえないだろうと、すぐさま制服姿に戻る。いつもの海風であると示して、春雨に正気に戻ってもらおうと、発作に耐えながら力を振り絞る。
春雨への敵対の心なんて何処にもない。今までの自分に反吐が出る。そして、春雨と叢雲以外の者に対して敵意を振りまく。もう泥の影響なんて何処にもないと、言動全てで伝えた。
「だから、その怒りを治めて、ください！」
「アァァ、あぁっ、うみ、かゼェ……アァァァァぁあああアァァァっ！」
海風に目が行き、元に戻ったことを確認したことで暴走が止まりかけたのだが、一度溢れ出した怒りは簡単には止まることはなく、マグマがより一層溢れ出す。
自分すら焼き尽くしかねないほどに溢れたそれは、春雨の両腕を包み込んで装甲となる。見た目は義脚に近しいものだが、繭の中で生まれ変わるように海風の右腕のように本当の腕を溶かしているかのようだった。
あの艤装が完成してしまったら、春雨は両脚どころか両腕すらも失うことになるだろう。それだけは許されない。海風の絶望はさらに拡がる。
「ダメ、ダメです、姉さん、そんなことしちゃ、ダメですっ！」
その声は春雨には届かない。例え海風であっても、今の春雨には何も届かない。

しかし、その声は別の者には届いた。突如春雨が空中に舞い上がった。
「えっ……!?」
そこにいたのは、２人の少女。まるで戯けるように踊りながら、春雨を吹っ飛ばしたにもかかわらず、恭しくお辞儀する。海風はその

姿、その仕草を知っている。
「すまない、もっと早く来ることが出来れば良かったのだが、手間取ってしまった」
そして、その2人の少女、道化を操る、いわば座長がそこに立っていた。
「『観測者』……様……」
「春雨を取り戻しに馳せ参じた。力を貸そう」
戦場に現れたのは『観測者』。春雨の暴走を止めるために、中立を謳う者達が戦いに参戦した。

道を化かす者

「春雨を取り戻しに馳せ参じた。力を貸そう」
戦場に現れたのは『観測者』。春雨の暴走を止めるために、中立を謳う者達が戦いに参戦した。
今最優先なのは、敵を倒すことではなく暴走する春雨を止めること。正気であるのは泥が効かない叢雲と、春雨の謎の力によって正気を取り戻した海風のみ。しかし、叢雲は漣達がこの戦場から逃げ出さないように監視を続けており、無理矢理にでも春雨を食い止めるように後ろから脅しており、海風は正気を取り戻すまでに激しく消耗をしているために立ち上がることも難しい。
故に、春雨を止めるのは、『観測者』が連れてきた道化が引き受ける。怒りが溢れ続け、その身を滅ぼさんと自らの身体を変え続けている春雨を止めなくては、最悪その焔で自滅しかねない。ただでさえ、今は両腕を装甲で包み込み、そのまま義腕へと変えてしまいそうなのだから、時間がない。
「頼んだよ、道化達」
ビシッと敬礼をした後、吹っ飛ばされても当たり前のように着水した春雨に向かっていく。
その春雨は『観測者』や道化達の姿を目にしても正気に戻ることはなく、溢れて止まらない怒りに翻弄されながらも暴走を続ける。近付くものは全て敵。認識も出来ずに道化達を相手取るためにその姿を睨みつけた。
「アレをされると、身体が動かなく……」
「大丈夫、見ていたまえ」
春雨に睨まれてもケラケラ笑いながら突撃を続ける道化達。海風も体験しているそれは、あの時点で身体が一切動かなくなるというものだったが、道化達にその兆候は見られない。むしろ、まるで躊躇なく近付き、春雨に対して猛攻を仕掛ける。
道化は2人とも主砲や魚雷のような殺傷能力を持つ攻撃方法を行使しない。使うのはその身体のみ。拳と脚だけで、あの春雨をどうに

かするつもりのようだ。
「あぁあぁあぁアアアッ！」
向かってくる道化達を破壊しようと、装甲に包まれ義腕となりかけている腕を突き出し、両腕共に主砲を展開。駆逐艦のそれとはひと回りは大きくなっているそれを容赦なく放った。
二度も面識がある道化に対しても、全く躊躇が無かった時点で、春雨はもう目の前のことすら認識出来ていない。見た目と同様に、狂犬、ケモノとなってしまっていた。
だが、道化達はまるで怯むことなく突っ込む。乱射されてもそれを当たり前のようにすり抜け、軽くステップを踏みながら2人揃って春雨の腕を掴んだ。
「アァアッ!?」
そして、腕を破壊するでもなく同時に絞めあげ、バックドロップの要領で持ち上げながらも脳天から海面に叩きつける。突き刺さったかのように春雨の頭だけが海中へと潜ることになるが、春雨もそんな簡単に終わるわけもなく、それを軸に身体を回転させることで道化達を振り払った。
「ッアァァ、ぁあああアァアアあっ！」
すぐに立ち上がり、両腕の装甲を鉤爪のように変形させた。こうなってしまったら本当に本能のままに破壊を齎す獣。
怒りが溢れ続ける限り、春雨が正気に戻ることはない。力も増す一方なのだが、道化達はまるで影響を受けることなく、まるで演劇でもするかのように手を繋いでポーズを取る。その名の通りの道化。しかし、これは遊んでいるわけではない。道化達の戦闘のスタイルである。
道化達の特性は、その名の通り道を化かすこと。本来起こり得る事象からズレることが出来る。それ故に、侵蝕しようとする泥を弾き飛ばすことも出来るし、今の春雨に睨みつけられてもその行動を阻害されることなく真正面からぶつかっていける。代わりに、そもそもの在り方からズレる必要があるため、戯けるような行動を度々起こしているのである。

辿り着く道を見出す春雨にとっては、天敵とも言える特性。道化達とは特別な力も何もなく、ただ実力勝負以外が出来ない。
「アァァあぁっ！」
本能的に道化達に襲い掛かる春雨だが、片方の道化が何処から取り出したのか赤い布をヒラヒラと舞わせた。闘牛か何かと設定付けて遊んでいるようにも見えるが、その実、本人達は至って真剣である。こうしなければ春雨が止められないから、周囲には奇異の目で見られようと関係なしに、戦場のど真ん中でも遊び続ける。
そしてそれは、確実に春雨を追い詰めることになる。赤い布でハラリとすり抜けられたかと思いきや、もう片方の道化が春雨の腹に思い切り蹴りを入れた。春雨自身の勢いもあるので、衝撃は相当なモノ。海面を滑るように吹っ飛ばされ、またもや水浸しにされる。
頻繁に春雨を濡らしに行っているのは、道化達なりに春雨に『頭を冷やせ』と言っているようなものである。言葉を発しない分、行動でそれを示し続ける。
しかし、春雨の怒りは止まらない。もう、両腕は殆ど燃え尽きてしまっていた。

「あ、あれ何なのさ……また知らないのが出てきたんだけど」
そんな道化達の戦闘に乱入することも出来ず、ガタガタ震えている漣。あまりにも激しい戦いであるため、近付いたら巻き込まれて死ぬかもしれないと思うと、もう春雨の力の範囲外にいるにもかかわらず身体が動かなかった。
隣の曙も同じ。震えているわけではないにしろ、緊張感から身体が動かない。いや、動かそうとはしているのだが、春雨とは別の方、後ろで睨みを利かせる叢雲のせいで、次の行動を選べずにいた。
「どうすんのよ。どちらにもいけないわよ」
「逃げられないし、あんな戦いに加わることは朧達には出来ないね」
朧も動けない、いや、動かない。実際はこのタイミングで撤退がベストだろう。道化達が勝手に現れて春雨を引きつけてくれているの

だから、そちらに任せて被害が出ないようにするべき。
　しかし、叢雲がいるために撤退は不可能。責任を取れと常に槍を突きつけている状態であり、おそらくこの３人は全員がかりで戦っても叢雲に皆殺しにされるだろう。
「む、叢雲氏ー、質問いいっスか」
「あぁん？」
「あの男性はどちら様ですかね」
　どうせならと、叢雲相手に情報収集を始めた漣。怖いもの知らずすぎるだろと曙は驚いたが、今出来ることなんてそれくらいしかないので黙って見守っていた。
「アンタが知る必要は無いわよ。でも、動かないのは正解ね。私もアレには関わらない。邪魔になりそうだもの」
「そ、そっスかー」
「次、余計なことを口にしたらその腕を捩ぐ」
「ウス」
　叢雲にももう逆らえない。怒りに呑まれつつも、あの春雨の姿を見たことによって冷静さを取り戻したことにより、正しくこの戦況を把握することが出来ていた。あの場に割って入ることは出来ない。邪魔になってしまったら、救われるものも救われないだろう。
　薄雲は敵としての認識が出来ているが、春雨に対しては敵ではなく怒りに呑まれた同類、かつ、救われてもらいたい存在としての認識になっているため、満を持して出てきた『観測者』ならばどうにかしてくれると信じて、今はこの惨事を引き起こした３人のドロップ艦共をここに縛り付けることに専念した。
　こういう時に恐怖を使い圧力をかけ続けることに何の抵抗もない。狡猾な敵に対しては、何をしてもいいのだと、叢雲は怒りを増幅させながらも春雨の戦いを見守る。
「さっきは行けっつったのに、今は行くなとか、言うことコロコロ変えんじゃないわよ」
　曙が愚痴った瞬間、叢雲の槍が曙が腕を捩ぐために振り下ろされる。本当にやると思っていなかったのか、ギョッとした顔で曙は艤装

で何とか受け止めた。
「つの、マジでやるバカが何処にいるのよ！」
「バカはアンタよ。余計なことを口にするなと言ったばかりよね。アンタ、脳味噌足りてないんじゃないの？　ゴミでも多少は考える力養いなさい。だから負けんのよクズ」
「言わせておけば……っ」
　今は下手に出た方がいいと漣と朧は判断しており、曙を何とか宥める。ここで曙を犠牲にして撤退というのも考えたものの、この叢雲ならば容赦なく殺しに来るだろう。おそらく逃げられない。今止まっていてくれるだけでも有情。
　ならば、もっと逃げやすいタイミングを狙った方がいい。例えば、春雨が道化達に正気に戻されたところとか。叢雲の気が抜ける瞬間を狙おうと画策していた、

「では、道化達に春雨を任せているうちに、私も一仕事……いや、二仕事をさせてもらおうか」
　そして『観測者』は、ただ道化達の戦いを見守るのみでは無い。２人には出来ないことを今のうちにやっておこうと行動に移す。その視線の先には、未だ侵蝕され乱入の機会を窺っている戦艦棲姫。
　今の春雨に近付いた時点で艤装は溶け、機能を停止してしまう。しかし、遠くから砲撃を放つと道化に照準を合わせているところに自分が狙われ始める可能性もある。
　侵蝕により他の者達と同様に打算的な性格が植え付けられてしまっている戦艦棲姫としては、なるべくならば楽して春雨を始末したいと考える。そうなると、今の漣達と同様に、道化達との戦いが終わった直後を狙うというのがベスト。
　ここであえて叢雲に立ち向かって漣達を逃がすという考えに向かわない。戦艦棲姫自身は拠点の位置を知らないため、道案内のために漣達も無事に助からないといけないのだが、怒りに満ち溢れた叢雲相手では、戦艦棲姫もタダでは済まないと理解しているからだろう。４

人がかりでも勝てるかわからない。
「君は春雨の仲間だろう。そのままでは中立ではなく、摂理に反する」
迷いが出ている内に、『観測者』は戦艦棲姫の眼前に立っていた。今まで隣にいた海風ですら、『観測者』がいつの間にあちら側に向かったのかがわからなかった。
「なっ」
「君達には話していたが、私は侵蝕された者を解放することくらいは出来るつもりだ。剪定を任されているからね。失礼」
そして、手に持つ杖を戦艦棲姫に向けた瞬間、タンッと小気味良い音が鳴り響いた。
これは春雨がジェーナスに対して繰り出した、一瞬だけ心臓を止める技と同じ。『観測者』としては、女性に対してこのような手段しかないことを申し訳ないと思いつつも、こうしなくては元に戻すことは出来ないためな仕方なく実行した。
「な、っあ、うぶ……っ!?」
その一撃だけで、戦艦棲姫は口を押さえたかと思うと、体内にどれだけ入っていたのかと思えるほどの量の泥を吐き出した。
海風はジェーナスの時のそれを知っているため、戦艦棲姫のこの反応を見たことで、自分と同じように解放されたのだと理解。海面に吐き出された泥は、正気に戻った戦艦棲姫が即座に砲撃で霧散させる。それはまるで、八つ当たりするかのように全力で放っており、それ相応の水柱も立つことになる。
「……ああ、もう！　本当に気分が悪いわ！」
すぐさまいつもの服装に戻った後、今までの言動を鑑みて激しく苛立った。同時に展開した生体艤装も、何処かシュンと落ち込んでいるように見える。
「すまないが、彼女の側にいてあげてもらえないだろうか」
「ええ、感謝するわ。あのままだったら、私、妹姫に小っ恥ずかしい姿を見せることになってたもの」
『観測者』に礼を言い、すぐに海風の側に。消耗しきり、立ち上がることもままならないため、いざ春雨と道化達の戦いに巻き込まれてし

まった場合、何も出来ずに沈んでしまう可能性もある。
今ならば、艤装も本体も十全に動けるため、海風1人を守るくらいは余裕で出来た。精神的に申し訳なさが先立つが。
「その……本当にごめんなさいね。あんなことをしてしまって」
「い、いえ……大丈夫……です。戦艦様も操られていただけですから……でも、でも、春雨姉さんは私のせいで……私の声も届かないくらいに……」
「貴女も気にしないように……と言っても難しいわね。少なくとも、今はあの子が元に戻ることを祈りましょう」
「……はい」
戦艦棲姫が隣に来てくれたことで安心は出来たが、その分何でこんなことをやってしまったのかという絶望の発作が頭を擡げる。自分のせいで春雨がという自己嫌悪も加わるため、海風は消耗している分も含めてガタガタと震え始めてしまう。
「君もだ。叢雲のためにも、元に戻りたまえ」
気付かぬ内に今度は薄雲の側へと来ていた『観測者』。元々叢雲に消耗させられていたところに、さらに春雨にやられたことで立ち上がることも出来ない薄雲を寝かせると、戦艦棲姫と同じように胸を一突き。
その一撃が入ったことで心臓が一瞬止まり、体内から一気に泥が吐き出された。『観測者』には泥を霧散させることは出来ないため、全てを吐き出し終わった薄雲を抱きかかえると、小さく叢雲にアイコンタクトを送り、その泥に対して砲撃を放ち霧散させてもらった。
正気に戻った薄雲も、他に倣うようにいつもの制服姿に即座に戻った。負の象徴とも言える姿から一刻も早く脱却したかったからだ。しかし、心は元には戻らない。寂しさの発作は起きずとも、いずれそれに繋がるであろう自己嫌悪が次から次へと湧き出してくる。
「わ、私、なんてことを……」
「誰も君を責めることはないだろう。気持ちを強く持つ方が、今後のためになる」
端的な慰めの言葉を投げかけた後、薄雲も戦艦棲姫に守ってもらう

ために同じ場所へ。
「頼めるかい」
「ええ、罪滅ぼしのためにも、この子達は私が必ず守るわ。貴方は？」
「私が出来るのはここまでだ。春雨は、道化に任せてくれると助かる」
これで何のしがらみも無くなった。春雨が正気に戻っても、また気をヤッてしまうような要因は無くなったはずだ。
漣達は叢雲が抑え続け、仲間達は正気を取り戻したのだから。

残すは、春雨のみ。身を滅ぼす怒りで身体を焼き尽くすのが先か、それとも道化達がそれを食い止めるのが先か。
海風達は、その結果を見守るしか出来なかった。

その声は届くか

我を失い、本能に従い、目に入ったもの全てを破壊する。それでも全く晴れる気配のないほどに溢れ出る怒り。春雨はその熱に焼かれているような気分だった。

どれだけ吠えても、どれだけ暴れても、身体を這い回る熱は取れることはない。むしろその熱は増していく一方であり、力が増していく代わりに何かが失われていくような感覚もあった。

しかし、力の限り暴れ回ることにそんなことは関係ない。もう何も見えない。何も聞こえない。それでも、春雨はその熱を発散するために暴走を続けた。

「ぁあああっ、アァアアアああアァアアアアア！」

両腕は憤怒の焔により焼き尽くされ、もう失われてしまっていた。装甲は義腕として成立し、二の腕から先はもう存在していない。

だが、その焔は衰えることはなく、春雨の身体を蹂躙していく。より強い力を得る代わりに、命の灯火を燃やし尽くそうとしていた。

「アァアッ、アァあぁッ！　あぁああアアアア!?」

義腕と義脚がさらに拡がろうと面積を増やし、二の腕と太腿を侵蝕する。完了してしまえば春雨から四肢が完全に失われることになるだろう。

そして、顔にも装甲が貼り付き始めた。より理性が無くなるように、獰猛で暴力的な獣（ケダモノ）となるべく。それが全て終わってしまえば、春雨はもう元には戻れなくなるだろう。残されているはずの理性も感情も記憶も何もかもが焼滅し、春雨という存在そのものが滅却する。

それは春雨の死と同義だ。目につくモノに見境なく襲い掛かり、暴走した辿り着く力を振るう厄災の獣となるだろう。

それが許せる者なんて誰もいない。特に海風は、自滅しようとしている春雨を見ているだけで済ませるなんてことは、死んでも嫌だった。

「私は、私は姉さんを……姉さんを止めたい……！」

依存と絶望の発作の中、海風はなんとか立ちあがろうとするが、力

が入らない。薄雲や戦艦棲姫のように『観測者』に治療してもらったわけでなく、春雨の憤怒の焔に体内の泥が焼き尽くされたことで侵蝕を失っているため、消耗があまりにも激しすぎた。

しかし、海風は意地でも立ちあがろうとする。発作に震え、腕を動かすのもいっぱいいっぱいだというのに、ただ愛する姉を失いたくないという想いのみで、２本の脚で海面に立つ。

「無理しちゃダメよ。そんな状態で行っても、足手纏いになるだけ」

戦艦棲姫がそんな海風を支えるが、辛そうな表情をしているのは同じだった。薄雲も同じように自己嫌悪で立ち上がれない状態であり、もう春雨を止められるのは、道化達しかいない。

その道化も、春雨の暴走には少し手を焼いていた。時間が経てば経つほど自らを失いながら強くなっていく春雨は、『道を化かす力』を以てしても気を失わせるまで持っていくのが難しい。むしろ、道化達の遊ぶような戦い方にすら対応してきているようにも見えた。

しかし、ここでやらなければ中立が保たれない。春雨が摂理に反する者と化すのは、道化達にとっても可哀想と感じた。そうなってしまったら最後、消すつもりで戦わなくてはならない。

道化達も、やろうと思えばやれる程の力は持っている。ただし、それは中立と摂理を破壊する行為にほかならない。

ひとまずは気絶させる方向で持っていきたいのだが、そうするためには接近しなくてはならない。そうなると、現在の春雨の両腕は鉤爪に変形しているためにかなり危険なことになっている。手加減が難しい。

「アァァァァッ！」

だが、手を抜き続けられる程時間も余裕もなく、いい加減この状況を終わらせなくてはならない。

鉤爪による攻撃も力を増すごとに速くもなっていき、回避そのものが厳しくなってきていた。しかし、避けられないわけではない。

ここで道化達が取り出したのは、薄雲や白露が使うような鎖。ジャーンと音が出そうな派手な取り出し方をしたかと思いきや、２人がかりで強引に春雨を縛り上げた。鉤爪に触れられたら鎖すらも切

り裂かれてしまいそうであるため、器用にもそこはしっかりと避けて。
「アアアアアアッ！」
しかし春雨もただやられるだけではなかった。さらに憤怒の焔を巻き上がらせ、マグマを溢れさせて艤装と装甲の範囲を拡げていく。露出がどんどん無くなっていき、身体が薄い艤装の装甲に包まれる。顔も鼻から下は獣の口のような装甲が装着された。もう見えている肌色は目元くらい。
そうなってしまうということは、両腕両脚だけでなく、全身を焼き尽くさんとしていることになる。もうこの変化は、死に向かっているとしか言えない。春雨の生きていくための機能を燃やし尽くしているのだ。
「アアアッ！」
そして、全力で鎖による拘束を外そうと身体を振り、腕を広げた。道化達は全力で縛り上げているのに、お構いなしに力んできたことで、鎖にヒビが入る。
こうなることは想定していたのだろうが、ここまで早く攻略されるとは思っていなかったようで、大袈裟な驚き方をしながらも次の手を考え始めた。
今の春雨は見た目すらもただの獣になってしまっている。装甲で包まれた狂犬。もう厄災の獣に足を踏み入れているようなもの。それを止めるには何が必要か。
「アアアアアア！」
考えているうちに鎖は突破される。ただ力のみで、拘束の内側から完全に破壊してしまった。
通常の春雨ならば出来ない力が、暴走状態にあるせいで出てしまっている。そのためか、春雨の身体も悲鳴をあげていた。そこに憤怒の焔が染み込むため、崩壊と焼滅までのタイムリミットはより早まる。
だがここで、すかさず道化達は春雨に飛びかかる。鉤爪に注意しながらも腕を掴み、行動出来ないように脚に脚を絡ませて。組体操とは言えないものの、何処その雑技団のように身体を絡ませているため、

鎖以上に解けづらい拘束に。
そしてそのまま海面を蹴って強引に移動。いくら春雨でも、両腕両脚を道化本人が拘束しながら空中に投げ出されれば、本当に一時的にでも行動を阻害出来る。踏ん張ることも出来ないのだから、着水までの時間は稼げる。
「む、道化達はこちらに来ようとしているようだ。海風、君に用があるみたいだね」
ここで『観測者』が道化達の狙いに気付いた。
「わ、私、ですか……」
発作を耐えながら、道化達に拘束されている春雨を見据える。
その目は何も認識しておらず、その耳は何も聞き取らない。全てを、自分すらも破壊するために行動する獣。春雨の面影は、もうほとんど見えない。
それでも、海風には愛する姉だ。どんなカタチになったとしても、どんな心になったとしても、それは春雨だ。
「なるほど。海風、もう一度声をかけてやってほしいと、道化達は望んでいる」
暴れる春雨をなんとか拘束しながらも、もう一度跳躍。着水する度に跳び、春雨に何もさせないようにしながら、少しずつ少しずつ海風に近付いてきている。
おそらく、道化達でもその春雨を殺さずにどうにかすることは難しいのだ。始末するのならあっという間。しかし、春雨を失うのは摂理を守るためにも惜しい。
その結果、先程は届かなかった海風の声をもう一度聞かせることで、春雨の失われかけている自我を呼び戻そうと画策した。
怒りで聞く耳を持たないとしても、妹の声は絶対に心に響く。そう考えて。
「でも、さっきは私の声も届きませんでした……。いや、むしろあの時は、私が声をかけたことで余計に溢れ出したのかもしれません……」
一度声が届かなかったことを悔やんでいる海風だが、『観測者』はやらない理由は無いと海風に語りかける。

「我々では無理だ。だが、君ならば春雨の心に声が響く。先程はダメだったかもしれない。だが、君は一度だけで諦めるのかい？」
「……っ」
「足腰が立たずとも、姉のことを想い、気力を奮ってここに立っているんだ。声をかけるくらい造作もないだろう」
『観測者』の声は、自然と海風を奮い立たせる。中立であり摂理を守る者がやってみろと言うのだ。悪い結果にはならないと確証があるからこその言葉なのだろう。
　たかが一度の失敗で何を恐れている。もう一度声をかけても聞いてもらえないのなら、さらにもう一度声をかければいい。聞こえていないようならば、聞こえるくらいに大きな声で、理解が出来ないようならば、理解が出来るまで。何度でも、何度でも。
　そう、海風が繭の中にいるときに、春雨がしてくれたように。
　まだ震えは止まらない。それでも、春雨を、最愛の姉を救うために、どうにか力を込めて、自分の頬をパンと叩く。そして、徐々に近付いてくる春雨を改めて見据えた。
　春雨の憤怒の焔は、止まるところを知らない。それを止めることが出来るのは自分なのだと、身体以上に心を奮い立たせて、脚に力を入れる。依存と絶望の発作なんて、今の春雨の苦しみに比べれば毛ほどもないと、強引に振り払った。
「……大丈夫です。やります」
「道化達、君達の思惑通りにしたまえ」
　待ってましたと言わんばかりに、道化達は渾身の力で春雨を運び出した。ここで海風が拒むようなことがあれば、そのまま両腕と両脚を捩ぎ取りながらも絶命に持っていくために戦いを続けていた。
　だが、海風はまだ折れていない。それならば託す。春雨のためにもなる。これ以上いい決着はない。
「アアぁぁ！　アアアアアぁぁアアアアアッ！」
　吠え続ける春雨を前にしても、海風はもう折れない。むしろ自分から姉の元へと近付く。震えているため速度は出さないが、姉のためにと。

「姉さん……姉さん……！」
拳を握りしめ、少しだけ前に出たところで足を止めた。
道化達が捕らえた春雨が、海風の真正面に立たされた。
ここで手を離そうものなら、目の前の海風に襲い掛かるだろう。鉤爪でズタズタにし、艤装に包まれた全体を使って海風をこれでもかと言うほどに破壊する。故に、道化達は一層の力を込めた。
「姉さん……」
「アァアッ！　あぁあアァア！」
正面で、もう触れられるくらいの距離にいるのに、春雨は目の前の海風のことを認識出来ていない。この世の全てが怒りの対象。だが、まだ記憶の焼滅までは届いていないはず。
海風は考える。どうすれば自分の声が届くのか。ただ対面して話しかけても、先程と何も変わらない。もしかしたら自分の名前を呼んでくれるかもしれないけれど、それで終わってまた激しい怒りに呑み込まれてしまう。
結果、海風は思い切った手段に打って出た。
「姉さん……！」
意を決して、春雨に抱き着く。全身が装甲に包まれているため、温もりなんて与えることが出来ないだろうが、そんなことは関係ない。こういう行為をする事で、春雨の心に何かしらの刺激を与える。
危険を顧みるなんてことはしない。姉のため、自分はどうなってもいいという覚悟で。
しかし、
「っあ⁉　うぐぅううっ⁉」
春雨ではなく海風の悲鳴が響き渡る。その装甲は、春雨の憤怒そのもの。マグマがカタチを成したものだ。海風には激痛とも取れる熱を流し込んできた。
姉とはいえ、他者の感情の奔流をダイレクトに流し込まれれば、泥に侵蝕されていなくてもそれだけの衝撃が身体を駆け巡ってもおかしくは無かった。道化達は素知らぬ顔で掴んでいるが、この２人が特別なだけ。道を化かす力によって、その奔流からの干渉を無視してい

るに過ぎない。
「海風、厳しいならば離れるんだ。声をかけるだけならば、接触する必要はない。君が苦しむ必要は無いんだ」
『観測者』すらも海風が苦しむ様子を容認するわけがない。声をかけるように指示はしたが、海風がここまでしたのは想定外だった。
「いいえ！　こ、これは、こうしなくちゃ、いけないんです！　姉さんの怒りを知るために！　その原因が私でもあるんですから！」
　だが、海風は苦痛を感じながらも離れようとはしない。むしろ、春雨に手を回してより密着しに行った。身体の前半分は全て春雨を抱き締めるために接触していると言ってもいい。
「これが、これが姉さんの怒りだと言うのなら！　私が、私が少しだけでも受け持ちます！　私が半分焼かれれば、姉さんが焼き尽くされることはなくなる、はずですから！」
　無茶苦茶な理論である。こんなことをしていたら、春雨1人が憤怒の焔で灰になるのみならず、海風にすら燃え広がって全てを焼き尽くしてしまうだろう。灰が2人分になるだけ。
　それでも海風は一切の躊躇が無かった。春雨が死んだら跡を追うと言ったくらいだ。一度やると決めた途端、その覚悟はあまりにも強かった。同時に死ねたなら死ねたで構わないという恐ろしい思考がそれを可能にしている。
「私は、海風は、姉さんの全てを受け入れる覚悟がありますから！　姉さんが消えて無くなる方が余程怖くて辛いんですから、もっともっと私を頼ってくれてもいいんです！　姉さんが私の絶望を塗り潰してくれたように、私が姉さんの怒りを塗り潰します！　だから、だから、姉さんの怒りを海風にも分けてください！」
　いくら痛くても、いくら辛くても、海風は抱き着き叫ぶのを止めることは無かった。聞こえているかもわからない耳に向けて叫び、見えているかもわからない目に自らの姿を映す。
「姉さん、姉さん、目を覚ましてください！　姉さんの怒りは痛いほどわかります！　でも、怒りで身を滅ぼすのは間違ってます！　だから、だから！　目を覚ましてぇ！」

より強く、渾身の力で春雨を抱き締めた。より激痛を受けることになっても、海風には戸惑いも躊躇いも無かった。春雨を失うことが最も怖いこと。それを避けるためにも、海風は全身全霊の力を振り絞って春雨に訴えかけた。

感情が昂り、激痛もあるせいで涙が溢れ出す。叫んだことで涙は飛び散り、それが僅かに露出していた春雨の目元、肌に触れた。

それが、奇跡を呼ぶ。

「アァアッ、アッ、ウミ、か、ゼ……」

春雨の中で、何かが繋がった。

憤怒を塗り潰し

腕や脚では飽き足らず、身体も、顔も、全てを包み、憤怒を撒き散らす厄災の獣となりかけていた春雨。理性も認識も記憶も何もかもを燃やし尽くさんと、拘束されても暴れることをやめない。

故に、誰かに抱き着かれたとしても、それが何かはわからず、ただ自分を邪魔する者であるとして、それを破壊せんと吠え続ける。それが、自分を慕ってくれる最愛の妹であっても、そうであるという認識が出来ない。もう記憶からも妹という存在が燃やし尽くされかけていた。

怒りに呑まれた本能しか残されず、全てを破壊するという目的以外は、もう何も残されていないようにすら見えた。

だがしかし、海風の愛の力はそれを突き抜けようとしていた。縋りつき、想いを込めて、涙を流しながら訴えてかける。激痛を与えられてもそれを止めず、想いをただ伝える。

怒りで身を滅ぼすのは間違っていると。目を覚ましてくれと。愛する姉に戻ってくれと。ただひたすらに。

その涙が、唯一残っていた肌、春雨の目元に飛び、触れた。それがきっかけとなった。

「アァアッ、アッ、ウミ、か、ゼ……」

春雨の中で、何かが繋がった。目の前の邪魔をする者が何者かもわからないのに、その言葉が口から自然と出た。

海風の涙に触れたことで、燃え上がり続ける怒りがほんの少しだけ鎮まった。焔に水をかけたことによる、一時的な鎮火。そのおかげで、春雨に少しだけの理性が戻ってきた。

だから、拘束されている中での暴走が一瞬止まった。それをいち早く気付いたのは、密着して拘束し続けている道化達。これを狙っていたのだと言わんばかりに、２人同時に片手にナイフを展開した。

これで春雨を傷付けようだなんて考えていない。今必要なのは、海風と肌で接触出来る面積を増やすこと。そして、一番わかりやすく理性を取り戻すための行動が出来る場所。

「アァ、アァアアアッ」
ほんの少しだけ繋がった春雨が再びズレようとしている。焔の力が強すぎて、そんな一雫だけでは取れない。せっかくきっかけが与えられたのに、ここで動かなければ今起きた奇跡が全て台無しになってしまう。それは、面白くない。
故に、より春雨の顔が露出するように、後頭部側から接合部をナイフで強引にこじ開け、鼻から下を隠すマスクを引っ剥がした。1人だけならダメかもしれなかったが、2人がかりならば破壊することも出来た。勿論、春雨を傷付けることもしない。
マスクの下の春雨の顔は、何も変わっていなかった。時間を置いていたら、肌も焼け爛れて失われていたかもしれないが、処理が早かったおかげで回避出来ている。身体はどうなっているかわからないが、顔が綺麗ならまだマシだ。
しかし、常に吠えていたことと、歯を食いしばり過ぎていたのか、涎と血に塗れていた。いや、それだけでは無い。マスクを生成するためであろう、口からもマグマが溢れ出そうとしていた。
「姉さんの怒り、私と、分かち合いましょう！」
涙でほんの少しだけ噛み合ったのだ。もっと触れ合えれば、その分変わるはずだ。海風はもう何も躊躇わなかった。激痛の中でも、頭は冴えていた。
だから、周りなんてもう見えていない。道化達がこじ開けてくれた道を突き進むように、海風はかなり強引に春雨の頭を撫でるように掴む。
そして、
「ごめんなさい、こんなところで、こんなことをしてしまうなんて。正気に戻ったら叱ってください。でも、これしか思いつきません。私の愛のカタチで、姉さんのその怒りを、私の絶望のように、塗り潰します！」
無理矢理頭を引き寄せ、口付けをした。触れ合うだけの軽いものではなく、お互いを受け入れ合うディープなカタチで。
外側だけでなく、内側からも激痛が走る。燃え滾るような怒りが、

口を通じて流し込まれてくるかのようだった。泥の侵蝕のような陥れるための甘美さは何処にもなく、狂うほどの怒りを表している棘。
悲鳴を上げそうだった。だが、口を離してはいけないと本能的に感じた。こうしていれば、春雨は元に戻ると、確信めいた直感があった。
そして春雨も、こうされて突き飛ばそうともせず、目を見開いた状態で身体が硬直していた。理性を失っていても辿り着く者としての直感が働いたか、海風を受け入れているかのようだった。
春雨の心の焔は燃え盛る一方だったのだが、この海風の機転が全てを変える。自らの行動で奇跡を呼び込む。
「ッッッッ」
春雨の叫びが完全に止まった。海風を振り払うことなく、力が抜ける。道化達を振り払おうと動き続けた鉤爪を展開した両腕も、ダラリと垂れ下がった。
こうなったらもう大丈夫だと、道化達も春雨の拘束を解いて、その身を海風に委ねさせた。激痛に耐えながらも、海風は春雨の身体をしっかりと支えた。
気が狂いそうな春雨の怒りの奔流を呑み込むように、海風は深く深く春雨との繋がりを求める。より強く繋がることにより、春雨の内側から溢れ出る怒りを自分にも取り入れ、壊れることのないくらいに分け合う。
それ以上に、海風は自分の想いを注いだ。春雨が絶望の昏闇の中に差す光になってくれたように、今度は海風が怒りの焔に注がれる水となるために。

春雨の中では、不思議な感覚が拡がっていた。怒りに呑み込まれ、焔に包み隠されていた理性に、一雫がポタリと落ちたような、そんな感覚。内側から溢れる怒りはますます燃え上がる一方なのに、それを外側から抑え込もうとしてくれる何かの存在に気付くことが出来た。
燃え尽きかけていた理性が、感情が、記憶が、その一雫で癒えていく。雫は一滴だけでは終わらない。次から次へと舞い落ちて、雫は雨

に、雨は洪水へとたちまちの内に増えていった。
燃え上がる怒りの焔と拮抗し、少しずつ押し返す。失われかけていた内側に、癒しの水が降り注ぐ。
――誰？
目の前にいる者すらも理解出来ない程に怒りが全てを焼き尽くしていたが、その焔が鎮火されつつある。そのおかげで、春雨はようやく何者かが自分を癒してくれていることに気付くことが出来た。
――海風？
そして、その何者かの名前がふと思い浮かぶ。外側の春雨は譫言のようにその名前を呟いた。しかし、
――海風って……誰？
それが誰なのかまではわからなかった。そして、その記憶の繋がりを焼き尽くさんと、押し返されていた憤怒の焔が勢いをさらに増した。
一度溢れ出した怒りは、簡単には収まらない。癒しの水すらも全て蒸発させようと、奥底からさらに燃え上がる。癒されかけた理性を再び焼き尽くさんと燃え盛る。
この焔は、春雨自身が巻き起こした怒りだ。仲間の尊厳を破壊されたことに対する、本心から生まれた初めての憤怒。理性を失うほどの怒りの具現化。つまり、春雨の望んで生み出したモノなのだ。そうであるが故、焔は強くなる一方だった。自ら望んでいる自らの焔なのだから。
それで自分の身が滅ぶのは別にどうでもよかった。怒り任せに全てを終わらせてもいいとすら思えた。自暴自棄と言われても何の文句も言えないくらいに。真っ先にそれを考えたせいで、あっという間に理性がトんだ。結果が、何もかもがわからなくなる程になった。
――あれ、私……何でこんなに怒ってるんだっけ。
全てを焼き尽くさんと燃え上がる憤怒の焔は、春雨からその理由すら忘れさせていた。理性を焼き尽くし、感情を怒り以外は燃やし尽くし、記憶すらも灰にしようと燃え盛った結果、春雨はそこに疑問を覚えるに至った。

海風から生じた一雫が、塵芥となりかけていた感情を繋ぎ合わせて、まずは疑問という感情を呼び起こした。灰燼に帰そうとしていた理性を貼り合わせて、考える思考能力を引き戻した。

だが、忘れかけていた理由も思い出すことになる。泥に侵蝕され、尊厳を破壊され、意志を捻じ曲げられた何者かの幻影がチラついた。それが海風であることにはまだ辿り着けない。

――誰、誰がそんなに……酷い目に遭わされたの？

怒りの理由なのだから、その幻影にもまた怒りが湧き上がる。憤怒の焔はさらに勢いを増す。海風が流し込む洪水を押し返さんと、拮抗を破らんと、轟々と焔を巻き上げた。

しかし、一度持った疑問は、そう簡単には燃え尽きない。ほんの少しでも癒されたその感情は、海風の想いがしっかりと保護し、二度と燃え尽きないように掴んで離さなかった。

――海風？

もう一度、その名を呼ぶ。記憶の隅から現れたその名を。

――海風、なの？

その幻影が海風であることに気付けた。同時に、憤怒の焔がまた押し返される。洪水のように溢れ出る海風の想いが、燃え尽きた理性と感情を拾い集め、繋ぎ合わせていく。今度はもう燃え尽きないように、怒りから守るために。

――なんで、こんな大事なことを忘れちゃってたの？

そこからは凄まじい勢いだった。海風を基点に、失われたモノを拾い集め、掬い取っていく。一度は塵となった感情も、灰となった理性も、燃え尽きかけた記憶も、歪（いびつ）ではなく綺麗なカタチで元に戻っていく。海風を認識出来たことが、春雨をまた春雨に戻していく。

――海風、海風、ゴメンね。私、海風のことを忘れちゃうなんて。

自分のせいで海風が傷付くなんておかしい。こんなにも苦しみながら自分を救おうとしているのに、自分が諦めて燃え尽きてもいいから全てを破壊しようだなんて考えるのは、絶対にダメだ。

何故それに気付けなかった。そんなもの、怒りに身を任せてしまったからに決まっている。どんなことがあっても、ここまでの怒りを

持ったことが無かったのに。
その時、海風が寄り添ってくれたような、そんな気がした。焔の熱とは違う、純粋に自分を思ってくれる温もり。水に揺蕩うような心地よさ。その感覚に身を任せれば、もう心配は無くなる。春雨は春雨として成立し、厄災の獣としての春雨は消えてなくなる。
はずだった。
――私は……。
一度は自ら望んだ焔だが、これはもう誰も望んでいない。仲間が悲しむのなら、この焔は必要ない。
だが、一度望んだモノをもう要らないというのは違う。あまりにも自分勝手が過ぎる。
――私は、海風のためにも、元に戻らなくちゃ。でも、この感情とも付き合っていくよ。
故に、春雨は怒りの焔に手を伸ばした。その性質も受け入れる。だから、ただ元に戻るわけではない。焔を全て消すことはなく、しかし理性を焼くことはない。共に歩くことで、獣としての自分も受け入れることで、春雨はさらに次のステージへと足を踏み入れた。

大きくビクンと震えて、春雨の身体を包み込んでいた装甲が灰となって消えていく。海風の想いが届いたように、厄災の獣となりかけていた春雨は、元の深海棲艦春雨へと戻っていく。
だが、それでも失われたモノはある。装甲も艤装も消えていったが、同時に両腕も消え去った。断面は春雨の両脚や海風の右腕のような綺麗なモノではあるのだが、怒りに呑み込まれた代償を表していることは、誰の目にもそう映った。
「姉さん……」
元に戻ったと思い、口を離す海風。海風もダメージが大きいが、身体の何処かを失うなんてことは無かった。春雨からマグマを流し込まれたことで内側に熱が残っているものの、今は何事もなく終わっている。

今更ながらなんてことをしてしまったんだろうと顔を真っ赤に染めるものの、しかし、本心を激しく伝えただけなのだからと何も気にしないで春雨を抱きかかえた。
「……ゴメンね、海風。迷惑、かけちゃったね」
その瞳には憤怒の焔は宿っていない。しかし、今までの青白い光とは違う、真紅の瞳となっていた。
怒りが溢れた結果による変質。あまりにもわかりやすい腕の消失と、顔を合わせればわかる瞳の変化。そして、この中では『観測者』のみが気付いていた、特性の進化。今は空気を読んで何も言わないものの、春雨は今までの春雨とは大きく違っていた。
「迷惑なんて思っていません。姉さんはやらねばやらないことをやり続けただけです。誰もが納得する怒りなんですから、姉さんは謝らないでください。むしろ、謝るのは私です。侵蝕されていたとはいえ、私は姉さんにあまりにも酷い言葉を投げかけてしまいました。姉さんが怒るのも無理はありません。それに今も、咄嗟に思いついてしまったとはいえ、姉さんの、じゅ、純潔を奪うようなことをしてしまって……。私のせいで、姉さんはいろいろなモノを失ってしまいました……。だから、私のことを叱ってください。殴る蹴るも受けます。それほどまでに、私がしてしまったことは本当に問題しかないことですから」
このマシンガントークにも安心出来る。春雨の心には燻る怒りが芽生えているが、それは海風に対してではない。無論、他の仲間達に対してでもない。
「叱るなんて……するわけないよ。海風のおかげで……私は……戻ってこれたんだから。海風がいなかったら……私は燃え尽きてたよ。全部無くしてた。これだけで済んだなら……充分だよ。全部海風のおかげ」
二の腕を上げてこれだけと言われてしまうと、口を噤むしかない。
「私がもっと頑張れてたら……海風も戦艦様も薄雲ちゃんだって、嫌な思いをしなくて済んだのに……ごめんなさい、本当に……私が未熟だったばっかりに……」

誰よりも酷い目に遭っているのに、春雨は自分のことより仲間のことを考えて謝罪する。それがまた罪悪感を刺激するのだが、春雨はそれがわかっていなかった。
だからこそ、戦艦棲姫はすかさずフォローを入れる。少しキツめに。
「春雨、謝らないで。私達よりも辛い思いをした子に謝られると、私達は立つ瀬が無いわ。私も海風と同じ気持ちよ。侵蝕されていたとはいえ、あんな小っ恥ずかしい姿で貴女から海風を奪ってしまったんだもの。むしろ叱ってほしいくらいだわ」
「……戦艦様を叱るなんて出来ませんよ」
「なら、謝るのもやめてちょうだい。それと、怒りを向ける方向はちゃんと残されてるわ」
戦艦棲姫が顎で視線を促す。

その先には、この大惨事の全ての発端となった者達が、叢雲の監視の下、この戦場に留まっていた。

春雨の怒り

海風の愛の力により、暴走していた春雨は正気を取り戻した。憤怒の焔に呑み込まれたせいで両腕を失うという代償はあったが、春雨本人はそれを『この程度』で済ませてしまうため、誰も何も言えなかった。

さらには、春雨は仲間達が侵蝕されてしまったことを自分のせいだと謝罪までし始めてしまったものだから立つ瀬が無い。それ故に、戦艦棲姫が一度その話を止めさせる。今はもう一つ、解決しなくてはいけないことがあるのだから。

「怒りを向ける方向はちゃんと残されてるわ」

戦艦棲姫が顎で視線を促す。

その先には、この大惨事の全ての発端となった者達が、叢雲の監視の下、この戦場に留まっていた。

「……海風、ちょっと下ろしてくれる？　ちゃんと自分の脚で立てるから」

「はい、姉さん」

今は暴走が止まったことで両腕両脚共に消えてしまっている状態。内から溢れ出たマグマが制服を呑み込んで装甲を作っていったため、服すらもまともに着れていない。そのため、まずは身嗜みから整えた。

いつものような艤装と制服を作り出したのだが、やはりそこは怒りと共に歩くという決意のためか、厄災の獣となりかけた時のモノに準じていた。

少し赤みを帯びた義腕と義脚が展開され、若干の刺々しかったものは今の落ち着いた気分を反映して生身のような丸く。制服もその時のような近接戦闘スタイルを模したショートパンツのタイプになった。

「ひとまずはコレでいいや。ん、腕と脚の感覚とかは大丈夫、かな。むしろ、前よりも軽いかも」

「そうなんですか？」

「うん、海風のおかげだよ。私、自分の中でいろいろと折り合いを付けてきたから」
ニコッと笑うが、その瞳の奥の真紅は、少し怒りの焔を携えていた。先程の暴走を思い出してビクッと震えてしまうものの、春雨が自分で大丈夫だと言うのなら大丈夫なのだと思い込み、戦艦棲姫が指し示した方、漣達の方へと向かう春雨の隣に付き従った。
海風とて、漣達には堪えようの無い怒りがある。この3人のせいで仲間達は次々と侵蝕され、自分すらも最愛の姉に対してやってはいけない言動を起こしてしまった。そして、それらがきっかけになり春雨は暴走し、ついには両腕を失うことにすらなった。
海風は、この3人を許そうだなんてカケラも考えていない。春雨が殺さないと言うのなら殺さないが、もし始末していいと言えば、一切の容赦なく全員の首を刎ね飛ばすつもりだった。
「じっとしてなさい。アンタ達はそれだけのことをしてきたの」
向かってくる春雨から逃げようとする3人を後ろから抑え込む叢雲。まだまだ怒りは止まることを知らず、伸ばした槍によって撤退のための進路を確実に封じていた。
特に曙はやたらと暴れ回ろうとしたが、叢雲がそれを許すわけがない。一度ならず二度も三度も身体を打ち、その場から動けなくして、自分達が何をやらかしたのかを見せ続けた。
どうせ心の中では反省も何もしていないとわかっていたので、ほんの少しでも妙な動きをした瞬間に滅多打ちにしたのは言うまでも無い。結果的に、3人は身体中が傷だらけになり、逃げようとする気すら失わされていた。
「叢雲ちゃん、その、ゴメンね。迷惑をかけちゃった、かな」
「別にいいわよ。つーか、アンタは一度それくらいブチギレておいた方がいいわ。怒りってのは、抑え続けると確実にぶっ壊れるから。アンタは身を以て知ることになったみたいだけど」
「あはは……本当にね。ずっと溜め込んでた分が溢れ出しちゃった代償……なのかな。でも大丈夫、この気持ちと一緒に歩いていけそうだから。叢雲ちゃんみたいに」

「アンタなんてまだまだよ。優しすぎるもの。後から怒りとの付き合い方を先輩として伝授してあげる」
３人を無視しながら話をしつつ、槍の柄で春雨の前に突き出した。まずは漣。
潮から聞いている限り、この漣が確実な元凶。潮から曙を奪い、さらには殺そうとし、今は曙と共にここにいる。そして、ここで施設への侵略を画策していたことで海風や戦艦棲姫、薄雲がトラウマを抱えることになった。
心についた傷は、もう一生治ることは無いだろう。事あるごとに思い出し、軽ければ嫌な思いをし、重ければ発作で活動が出来なくなる。そんな傷を笑いながら付けてきた存在。
「私はちゃんと理解しています。貴女達も、泥に侵蝕されてしまったせいで悪いヒトになってしまっていることを。本当は平和を望む艦娘だったのに、自分から望んだわけでもないのに泥を入れられてしまったんですよね。元の貴女はきっとこの出来事がトラウマになってしまう。何人も見てきていますから、私もそれくらいはわかっているつもりです。そうならば、私は貴女を見捨てることはないでしょう」
優しく語りかける春雨。漣は叢雲に押し出されたために少し俯いており、春雨の顔を見ることは出来なかったものの、叢雲のように少しだけの言動で鈍器を振り回すような怒り狂った存在では無いのだと、表には出さないようにしつつ安心していた。
そして、これならば付け入る隙もあると内心でほくそ笑む。叢雲が言った通り、春雨は優しすぎるのだと。こうして俯いていれば、こうやって優しく語りかけてくるだけ。もしかしたら治療しようとしてくるかもしれないが、これ以上痛い目を見ることは無いのではと考えた。叢雲なんかより全然怖くない。
しかし、しっかりと後ろから春雨の顔が見えている曙と朧は、漣に声をかけることすら出来なかった。叢雲が何も言わせないように後ろから刃を突きつけているというのもあるのだが、そんなことしなくても動くことは出来なかっただろう。

「でも」
小さく顎を持ち上げるように、俯いている漣の顔を上げさせる。嘘泣きでもしていれば反省しているようにでも見えるかなとか画策しているが、その思いは一瞬で破壊されることになる。
「今の貴女は、ただ私の仲間を苦しめて、それをケラケラ笑いながら楽しんでいたんですよね。仲間割れはさぞかし楽しかったでしょう。貴女達のおかげで、海風も、薄雲ちゃんも、一生消えることのない心の傷を負ってしまいました。戦艦様だって表には出していませんが、きっと辛い思いをしています。どう、責任を取ってくれるんでしょうか」
目が笑っていないどころか、顔すらも一切笑っていなかった。声色だけは優しそうに聞こえたが、その瞳の奥には、消えることのない憤怒の焔が見えていた。だが、もう暴走はしない。怒りと共に歩く。それは、前のように戻るというわけではない。怒りを制御出来るようになっているだけだ。
誰が見てもこの春雨が怒り狂っているというのがわかるから、曙も朧も何も言えなかった。言ったら何かあるとかではない。単純に、春雨が怖くて萎縮しているに過ぎない。
「わかってます。貴女達にはどうやっても責任が取れないことくらい。それに、今もどうせ私を出し抜いてどうにか撤退出来ないかなんて考えているんですよね。侵蝕された海風や戦艦様に取り囲まれた時、ただ震えて動くことが出来なかった私を見ていますから、いくら辿り着く力を持っているかもしれないけど、心が弱くて扱いやすい愚か者くらいに見えていましたか。今もそう見えますか。どちらでもいいですけど」
漣はピクリとも動けなかった。はいそうですとも、そんなことはありませんとも、反応することが出来なかった。その焔に照らされたことで、心の底から恐怖を感じてしまったから。
泥に侵蝕され、全ての力がブーストされて、泥のコスチュームのおかげで慢心しても施設の者達と対等どころか上から殴り付けることが出来るくらいの実力を手に入れたというのに、今この春雨には絶対

に勝ち目がないと感じるほどの圧を感じる。
「今の貴女は私にとって、生きていてもらいたくないくらいの存在です。元に戻せる余地はありますけど、元に戻さずにその命を奪うという選択肢も、今の私にはあります。先に言っておきますけど、今の私はもう侵蝕なんてされません。その小汚い服に触れても、私がどうこうなることは無いです。なので、こういうことをしても何も問題はありません」
顎に触れていた手が急に動き出し、胸倉を力強く掴んで引き寄せる。そもそも今の春雨の手は艤装。肌に直接触れるわけでもなく、締め付ける力は通常よりもあるレベル。たったこれだけで首が絞まり、苦痛を与えられる。
「今はもう何も話さなくていいです。どうせその言葉は上っ面だけのモノでしょうし。その場凌ぎで有る事無い事話すだけですよね。薄っぺらい言葉であることはお見通しなので、私が許可するまで一言も話さないでくださいね。癇に障りますから」
こんな発言をしたことに、叢雲は少なからず驚いた。その上で、なんだか楽しくもなってきた。ああ、本当に怒らせてはいけない存在なのだと感心しつつ、自分と同じレベルの怒りを溢れさせているのでは無いかと言うことで同族意識も芽生える。そしてそれに、嫌悪感は一切無い。
「でも、痛めつけるのも違うと思うんですよ。痛みは一過性のものですから。それが終わったらまた歯向かおうと考えるじゃないですか、貴女みたいなヒトは。正直なところ、顔が原型を留めなくなるくらいに殴りたいですよ。それでもスッキリしないことがわかっているので、無駄なことはやりたくないだけです。いくら貴女のおかげで艤装の腕を手に入れてしまったとはいえ、この手を貴女の泥塗れの体液で汚したくないですし」
掴んでいた手を離して突き飛ばす。恐怖で立てない漣は、苦痛から解き放たれて涙目になりながらへたり込んだ。逃げられそうに思えるが、身体が震えて動かない。
「貴女は最後にします。ずっと怖がっていてください。でも、心は壊

しません。そんな状態でこちら側に来られても困るので。しっかり泥を吐き出して、艦娘としての貴女を取り戻した後、私達の鎮守府で更生して、改めて友達になりましょう。その前に、今までやってきたことを後悔するくらいに心を痛めつけますが」
それだけ言って、曙にこちらに来いと手招き。一番反発するであろう曙を真っ先に指名したのには意味がある。
恐怖で動けなかった曙も、春雨に手招きされたことで自分を取り戻し、持っている反骨心を表に出す。
「なんでアンタの言うことを」
「いいから来なさい」
あの目で睨まれた瞬間、身体中に怖気が走った。逆らったら殺される。背中にナイフを突きつけられるどころか、もう何回も刺されているのではという錯覚すら覚えた。
冷や汗を流しつつ、舌打ちをしながら春雨の言う通りに近付いた。
瞬間、春雨は曙を蹴り飛ばした。
「海風」
「はい、もう大丈夫ということですよね」
「うん」
あまりのことに目を丸くした漣を無視して、海風に曙のこれからのことを頼む。今の蹴りは、曙の心臓を瞬間的に確実に止める一撃。しかし、恨みも込めて痛みすら与える一撃だった。ジェーナスの時のような優しい蹴りではない。手加減をして骨などを折ろうとはしなかったが、今の春雨に見えている紅く光る道に準じた動きをしたことで、ただただ激痛を味わわせた上で治療した。
「っはっ、かはっ、ごほっ」
「よかったですね。春雨姉さんのお陰で、侵蝕から治療されましたよ。偉大なる春雨姉さんの慈悲に感謝し、崇め奉りなさい」
曙はそのまま泥を吐き出すことになる。同時に泥のコスチュームは剥がれ落ち、最悪なことにこの海の上で全裸にされることとなる。
吐き出された泥は、海風がしっかりと処理。あえて曙の側で砲撃を放つことで、余計に驚かせようという意地が悪いやり方をしたが、曙

は何の文句も言えなかった。
「……最悪、なんでこんな目に遭わなくちゃいけないのよ……」
「その話はまた後からにしましょうか。今は姉さんのやるべきことを見守らなくてはならないので。あとこれは内密にしてほしいのですが……こちらで潮さんを保護しています」
「えっ!? わ、わかった……その件は後からでいい」
この曙はやはり施設の潮と共にドロップした曙。潮の名前が出た途端に、普通以上のリアクションを見せたことでそれがわかる。
「では次」
朧に手招き。ここで曙が激痛を伴う治療をされたのを見たことで、朧は激しい危機感を持つに至る。今の朧の目的は、施設を侵略するための礎を作ること。あわよくばこのまま全てを終わらせることができるだけの力を与えられたが、しかしそれが通用しなかったために、その事実を主に知らせる必要があると考えていた。だが、もうそれすら叶いそうにない。
故に、朧は半狂乱になりつつも、春雨を始末しようと主砲を構えた。曙のように言うことを聞いてしまったらアウト。ならば、刺し違えてでも辿り着く者を始末するべきだと、最後の最後で吹っ切れた。
そんなこと、今の春雨が許すはずがないことも、当然理解はしていた。何をしても通用しないと、本能的に気付いていた。
「反抗的なのはもう仕方ないと思います。泥のせいでそうなっているのは、私達はさんざん、本当にさんざん見せつけられていますから。でも、だからといってその行動を許すとは一言も言いません」
勿論それは未然に防がれる。春雨は何もしていない。そうしなくてもいいという道が示されていたから。
叢雲が、しっかりと朧の脇腹に槍の柄を突き立てており、砲撃にブレーキをかけた後、槍を振るってその身体を無理矢理春雨の方に飛ばした。
そして、その勢いで飛んできた朧も、春雨は曙と同様に蹴り飛ばした。恨みを込めて、しかし治療するために。また見事に朧の身体は曙と同じ方へと飛んでいき、同じところに泥を吐き出す。海風がそれを

しっかりと処理して治療完了となった。
「え、あ、あう……」
「落ち込むのは後からにしてくださいね。慈悲深い姉さんがそれだけで済ましてくれているのですから。そのありがたみを存分に噛み締めて、今後は春雨姉さんのために行動してください」
相変わらずの海風だが、朧はそれどころではない。この戦闘でも薄雲と戦艦棲姫、2人を陥れて仲間に引き込んでいるのだ。ただ戦っていた曙より重い罪悪感に苛まれることになる。
「残るは貴女だけですよ、漣さん。でも、簡単には治しません。ご覧の通り、私はそういうことが出来るし、貴女もそれはご存じだと思います。治療された方が楽になれるとは思いますが、私の怒りがそれで治まるわけがないことくらい、貴女でもわかりますよね？　なので、貴女には知っていることを洗いざらい吐いてもらいます。泥を吐き出したら重要な記憶も吐き出してしまうということは知っていますから、侵蝕されたまま従ってもらいたいんですよ。貴女がその第一号になってもらいます。構いませんよね。だって、こちらをさんざん苦しめたんですから。メリットがあればデメリットもある。自分達だけがいい理由なんてどこにもありません。痛めつけてでも知っていることを話してもらいますから覚悟してください。辛い思いをしたくないなら、そんな植え付けられた忠誠心なんて拭い捨てて、苦しむことなく今のご主人様を私達に売ってください」

漣はもう、怖くて気を失ってしまいそうだった。しかし、何故かその逃避が出来なかった。

心折る尋問

怒りと共に歩くことが出来るようになった春雨は、その力を存分に使い、恐れさせながらも曙と朧を治療し、正気に戻した。

これで残りは漣のみとなったが、その侵蝕を簡単には治療しないと本人に宣言。治療して泥を吐き出させると、それと同時に重要な情報すらも吐き出してしまい、また黒幕や龍驤の居場所がわからなくなるため、そのままの状態を維持しつつも情報を聞き出す方向に持っていくつもりだった。

攻撃の意思は恐怖によって奪い取ってはいるものの、素直に話すとは到底思えない。どうであれ、漣は他の者達と違ってこの場で唯一侵蝕されたまま。やろうと思えば今からでも泥を増殖させて、治療された者を再度侵蝕することだって可能なのだ。そんなことをしたら、眼前で睨みを利かせる春雨と、真後ろで刃を突き付ける叢雲に何をされるかわからないが。

「口を開くことを許可します。では、情報を提供してください。素直に話してくれたら、これ以上は何もしません。優しく、痛み無く治療しましょう。当然それは、貴女にとってはご主人様を裏切る行為になりますが、貴女は元々正しく艦娘ですから、何も問題ありません。治療されたら同じことですから、苦しまない方がいいと思います。貴女が選んでください」

笑顔で漣に選択肢を与える。目は全く笑っていないが。

漣としては、今の主である龍驤の情報を提供することは、春雨の言う通り裏切り行為である。何処にいるかもだし、今どれだけの戦力を持っているかや、どんな力を持っているかなどなんて話したら、まず間違いなく殲滅される。今すぐで無くても、対策はされるだろう。それは埋め込まれた忠誠心から許されない。

しかし、ここで何も話さないとなると、春雨から何をされるかわからない。今までの発言から考えて、痛みを与えることにも何の抵抗もなく、しかし殺すこともない。情報を提供するまで生き地獄を与えるぞと脅しているわけだ。

「うーん、まぁすぐには口を割ることは無いですよね。海風、そっちのヒト達は大丈夫？」
「はい、姉さんの手腕でしっかりと治療されています。朧さんは少し落ち込んでしまっていますが、曙さんはすぐにでも話が出来ますよ」
漣が簡単に口を利きそうにはないため、まずはその仲間であった2人から話を聞き出すことに。漣の目の前で当てつけのようにやる辺り、今の春雨はなかなかに意地が悪い。
「……一応、礼を言っておくわ。まだ胸が痛むんだけど」
「ごめんね。治療するためには一度心臓を止めないといけないの」
「じゃあ、あたしは一瞬死んでたってことか。無茶苦茶ね」
春雨に蹴られた胸を押さえながら曙が春雨の側に。治療されたばかりではあるものの、悲観するより先に苛立ちが前に出てきていた。施設の中ではコロラドと同じタイプ。叢雲と同族嫌悪でいがみ合いがありそうだが、今はそんなことをしている余裕はない。
そんな曙は解放されたことで全裸にされていることにも苛立っているようだが、そこはさりげなく現れた道化が展開した大きな布をかけてあげていた。花吹雪みたいな小道具を作り出すこともあるので、おそらくこの布も手品か何かに使うアイテムなのだろう。道化が近くにいる限りは布は健在。
「朧はちょっと口が利けそうにないから、あたしが答えられることは答えるわ」
朧はどんよりと落ち込んだ状態であり、航行もままならない。もう片方の道化が布をかけてやりつつ、曙に付き従うように移動させているくらいだ。顔色も悪いため、無理に話をさせるのは憚られる。
「なら、覚えていることを全部教えてもらえるかな。時間的にはあまり活動はしていないとは思うんだけど。出来ることなら、主人の顔とか居場所とか」
「……腹が立つことにその辺りは全然思い出せないわ。あたしが覚えてることは、アンタ達の居場所を探し出すことを命令されていたこと、出来れば陥れて仲間を増やすなり殺すなりして戦力を減らせってことくらい」

やはり、龍驤の泥で侵蝕されていたとしても、吐き出した時点で最も重要な情報は抜け落ちるらしい。一番知りたいことは、いつもこれで闇に消える。
それが困るから、漣はそのままの状態で情報を吐かせたいのだが、今のところだんまり。
「少なくとも、あたしはそこのバカのせいで狂わされていたわ。潮と一緒にドロップしたあたしに近付いてきて、鎮守府に行くって騙してから、ね。その後は……正直あやふや。何処かに連れてかれて、ほら、あの泥の服あるでしょ、あれが作れるようにされて、今に至るって感じよ」
「ありがとう。１つ聞きたいんだけど、なんで潮ちゃんは……？」
「さぁね。多分アレでしょ、潮ってやる時はやるけど優しすぎるから、あのクソきったない泥に侵蝕？　されても、多分性格とかそういうのまで変えられないんじゃないかしら」
なるほどと春雨は納得した。曙は見ての通り結構キツい性格をしているし、漣はおそらく最初からお調子者であるため、こういうことは向いている。朧は体育会系の生真面目さが垣間見えることから、そこの方向性を曲げてやれば淡々と作業をこなす兵隊になった。しかし、あの潮が侵蝕されていたとしたら、いくら方向性を曲げられていたとしても、攻撃を躊躇ったりなどをして、ちゃんと仕事が出来ない可能性があった。故に、余計なことをする前に殺そうとしたと。
結果的にその潮は、恐怖が溢れた結果感情が溢れ出し、深海棲艦化という末路となっているのだが、そうなっているなんて漣はおろか、龍驤も知る由もない。
「漣さん、曙ちゃんはこう言っていますけど、正否は？」
問いただすが、涙目で震えているだけでＹｅｓもＮｏもない。そんな様子を見て、春雨はこれ見よがしに溜息を吐いてから、徐に漣の腹を蹴った。
「つぶ!?」
「私が答えろと言ったら答えてくださいね。口を利いていいと許可を出したんですから。そのお口は何のためについているんです？　勝

ち目のある敵に対して上から目線の皮肉を言うためだけに存在しているんですか？　それとも泥を吐き出すための器官ですか？　違いますよね？」

なんてことをするのだと漣は内心毒づいた。しかし、そんなことを考えたことすらも読み取られているようで、もう1発横腹を蹴られる。春雨の脚は艤装で出来た義脚であるため、普通に蹴られる以上にダメージが大きい。

「もう一度聞きますね。正否は？」

「けほっ……かはっ……ぼ、ぼのの、言う通り……。うちらの中に入ってるのは、性格までガッツリ変えることが出来ない、から……。潮は役に立たなそうだから、始末を優先した……だけ」

素直に話さないと、死なない程度に甚振られる。そう考えたら、主人（龍驤）に繋がらない情報なら洗いざらい吐いてしまってもいいとして、おそるおそる口にする。

「なるほど。ということは、貴女の主人は黒幕よりも大分程度が落ちるということになりますね。黒幕の泥は真面目で優しい古鷹さんでも非道に捻じ曲げることが出来たわけですし、本来の性格がある程度残るとか、所詮は模造品と。覚えておきます」

わざと漣の主人のことを貶すような言い方をすることで苛立たせて口を割らせようとしている。ただでさえ慢心からペラペラ喋る龍驤の支配下に置かれているような輩だ。精神的に追い込めば勝手に喋りそうである。

実際、漣はわかりやすく顔を顰めていた。忠誠心だけはしっかり残っているようなので、主人を売ろうとしない分、主人が乏しめられるのは気に入らないようである。

「で、仲間を増やすのはいいんですけど、その目的は？」

「……そんなこと、自分達がよく知ってんじゃないですかねぇ。器のゲットには兵隊が必要なんスよ」

「侵蝕で配下を増やして自分の手を汚さずに事を成そうとする辺り、小狡いというか程度が知れているというか」

春雨らしからぬ毒が次々と。憤怒の焔は制御出来るようになった

ものの、だからといって鎮静化したわけではない。まだまだ怒りは燻り続けている。そのため、どうしても口が悪くなってしまう様子。
海風はそんな春雨に対しても良さを感じているようであるが。
「それで、貴女の主人は何処に？　曙ちゃんも朧ちゃんも、泥の巫山戯た性質のせいで忘れさせられているんですよ。でも、貴女ならわかっていますよね。正確な位置を言ってください」
最も聞かなくてはならない情報はそれだ。黒幕の居場所はわからないにしても、龍驤が今何処で何をしているかを聞き出すことが出来れば、そこからまた黒幕の居場所に繋げることは出来るはずだ。
ここまでしておいて未だにその居場所も何もわからないとなると、こちらも若干焦ってしまう。ただでさえ被害を拡げるような輩だ。出来ることなら早急に解決したい。
しかし、ここでまた漣は口を噤む。主人（龍驤）の居場所なんて、伝えられるわけがない。
「『観測者』様……は、流石に教えてはくれませんよね」
「すまない。それは中立に反する。君も知っての通り、私は手を引いて導くことは出来ない」
「いえ、大丈夫です。それが『観測者』様の在り方ですし、それを違えてしまったらもっとまずいことになるのだろうと思いますから。例えば、死に繋がるとか」
「流石は辿り着く者。申し訳ないが、私も私の存在を維持するために、在り方を違えるわけにはいかない。世界の摂理のためにもね。察してくれて助かるよ」
中立のために『観測者』が口を出すことはしない。それ故に、春雨が漣に何をしようとも何も文句は言わない。
「では、少し強引に聞かせてもらいましょうか。貴女の主人の居場所を」
冷ややかな目で漣を見下す春雨。憤怒の焔はより強くなり、瞳から漏れ出す程に。先程までならこのまま暴走だったのだが、今はもう制御が出来ているため、ただあの時の力を理性あるままに発揮することが出来る。

心の底から漣に対して怒りを持っているため、進化した辿り着く力までもが思いのまま。
「あ、そうでした。1つ教えておきましょう。どうせ貴女はもう主人の居場所に戻ることは出来ませんから」
「何をですかね」
「私の視界の中にいる限り、貴女は気を失うことも出来ませんし、壊れることも出来ませんよ。なんだかそういうことが出来るようになったみたいでして」
漣には1つ覚えがある。暴走状態だった春雨に睨まれた時、身体が動かなくなった。それの延長線上にある何かの力を、理性が戻ってきた今でも扱えるようになったということ。身体が動かないだけではない。心にすらも影響を与えてくる。
辿り着く力がそれを引き起こしていると言われても、漣には理解が出来なかった。
「ただ、言葉だけは貴女の意思で紡いでもらわなくちゃいけないんです。そこはコントロール出来ないみたいで。なので、ここからは根比べになります。私が貴女から情報を引き出すのを諦めるのが先か、貴女が私達に情報を吐くのが先か。貴女はただ喋らないだけで勝ちですけど、どうですか？」
勝敗がつく条件があまりにも春雨有利。しかし、抗議をすることも出来なかった。これは春雨からの当てつけだ。同じ立場の漣がやりそうなことをピンポイントでやり続けているに過ぎない。
漣の額に、冷や汗が流れ始める。自分は諦めるまで痛めつけられるが、春雨は諦めることはない。つまり、今から永遠に痛めつけられるということに繋がる。それなのに、気を失うことも心が壊れることも無いとまで断言された。正気のまま甚振られる。辛い思いをし続ける。
「わ、わかった、反省、反省した。反省したから」
「薄っぺらい言葉ですね。口先だけなのがわかりやすすぎます」
すかさず脇腹に蹴りが入った。あまりにも容赦が無さすぎて、漣は痛みよりも先に驚きが出た。そして気付いた。これは根比べという

体裁の拷問であると。
　春雨の怒りはまだまるで治まっていない。何せ、仲間達に消えない傷を負わされたのだ。生きている間その傷の痛みに苛まれるというのに、今だけの痛みで済むだなんて、許されるはずがなかった。
「素直に全部話してくれればいいんですけどね。あ、そうそう、私は流石に疲れてしまうかもしれません。でも諦めることは絶対にありません。そうなった場合、貴女を痛めつけるのは他の仲間に任せます。わかります？　今の貴女に恨みを持っているヒト、ここにいっぱいいるんですよ」
　蹴られた痛みに耐えながら、周囲を見回す。『観測者』と道化達は流石に苦笑していただけだが、他の者達は漣をただ睨みつけている。侵蝕されて心をグチャグチャにされた戦艦棲姫は、その艤装で握りつぶしてやろうかと拳をニギニギと見せつける。叢雲は言うまでもなく、槍を突きつけたまま。海風も右腕を鎖と錨に変形させ、ヒュンヒュンと音を立てながら振り回していた。薄雲ですら落ち込みながらも漣を睨みつけているくらいである。
　春雨の蹴りはまだ手加減されていることがここでわかった。見えている3人は、手加減しようのない武器を見せつけてくる。あんなものが直撃したら、怪我どころでは済まない。しかし、死なない程度に痛めつけてくることが嫌でもわかる。
「私達にはもう叶わないことなんですけど、貴女は艦娘ですから、入渠すれば元通りです。なので、手足の一本や二本くらいなら取っちゃってもいいんじゃないですかね。大丈夫、それでも死なないように出来ますから。貴女は絶対に死なせませんよ。ね、情報提供者さん」
　ニコッと笑みを向けた。そして、その瞳に灯る憤怒の焔は、より一層強く燃えた。

　壊れることは出来ずとも、漣の心が折れた瞬間であった。

笑顔の拷問官

その頃の施設。隙間時間を狙ってくるという叢雲の進言から出撃していった部隊の帰りがやけに遅いと、中間棲姫も少し不安になってきていた。本来ならば高高度からの監視をつけるべきだったかもしれないが、それが出来る飛行場姫は、潜水艦姉妹と共に潮に付きっきりとなっていたため、そこの部分を甘めにしていたことを後悔する。

遅いということは、本当にそこに敵がいたということであり、そこからさらに遅くなっているのは苦戦している可能性がある。そう考えると、次々と嫌な予感が湧き上がってくる。

「姉姫さん、あたしが見てこよっか？」

春雨達のことになるからか、深夜の哨戒の当番である白露が率先して行動に移そうとした。何事も無ければ既に帰ってきてもおかしくない時間帯だ。戦力的には相当であるが、それこそあちら側は何をしてくるかわからないような者達。罠に嵌められて悲惨なことになっている可能性だってある。

「そうねぇ……夕食も終わってるし、行ってもらってもいいかしらぁ」

「りょーかい。流石にあたし1人で行くのはどうかと思うから」

「私も行きます。どうせ哨戒ですし、空母の力は必要でしょう」

大鳳も白露に追従するカタチで自ら手を挙げる。

「私もいいわ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、一緒に来る？」

「ぴょん！　しょーかいに行くのがちょっと早くなるだけっぴょん？」

「そうね。やることは同じだから、みんなで行きましょ」

ジェーナスとミシェルもそれならばと春雨達の様子を見に行くことに賛成する。何かあったとしたら、追加の戦力が増えることはいいことだと思う。ミシェルには危険な戦場かもしれないものの、ここでどういう反応をするかはジェーナス的には確認しておきたかった。

黒幕の居場所を探すためには、ミシェルの力を借りねばならない。そこは当然激戦区だ。敵が止め処無く出てくる可能性もあるし、むしろミシェル自身が攻撃を受ける可能性だってある。そんな場所に出

向いて、混乱することなく事を成せるかどうかは、戦場でなくてはわからない。
　これでもし春雨達が激戦を繰り広げているのなら、ミシェルはそれをどういう気持ちで見るのか。怖がったらもう黒幕探しには行かせられない。そうで無ければまだ向かえるかというところ。そこを見極めるには、ある意味絶好の機会かとも思えた。当然抵抗はあるが。
「それじゃあ、少し早いけれど深夜の哨戒を始めてもらえるかしらぁ。戦艦ちゃんも一緒に向かってるからある程度は大丈夫だとは思うけれど、もしものことがあるものねぇ」
「オッケー。じゃあ、サクッと行ってくるよ。……で、どっち方面かわかる？」
「シラツユ……結構Ｈａｐｈａｚａｒｄよね（行き当たりばったり）」
　苦笑したジェーナスのツッコミで空気を和み、そのまま深夜の哨戒部隊は何も無いことを祈りながらも春雨達のいる場所へと向かうのだった。
　今そこで何が行われているかも知らずに。

　その現場。漣は春雨から与えられた痛みと恐怖により心が折られた。全ての手段が奪われた上に、心が壊れることも気を失うことも封じられるという春雨の謎の力によって、完全な八方塞がり。
　発言をしなくても嘘をついても痛みを与えられる。しかし、正直なことを話せば、主人（龍驤）への裏切り行為となり、植え付けられた忠誠心のせいでそれが出来ない。
　抵抗の意思もバキバキに折られ、むしろ何をしようとも勝ち目がないことは曙と朧の治療工程で理解させられてしまっている。曙は呆気なく、朧は抵抗虚しくだ。
　春雨だけしかここにいないならば、まだ撤退の目があったかもしれない。しかし、後ろには叢雲が控えているし、今まで陥れた者達が全員目を光らせて漣の動向を監視している。しかも、春雨が一番手加減しているまであるという絶望的な状況だ。

自爆装置か何かがあれば、漣は忠誠心から自死を選びつつ、ここにいる者達を全て巻き込んでいただろう。だが、それすらもないとなるとどうにもならない。

そして、折れた心で選択したのは――

「……全部話しやす……なので……痛いことしないでくだせぇ……」

主人を売ること。黒幕のそれと比べれば程度が落ちると春雨が称した龍驤の泥は、漣の性格そのものを豹変させる程の力は持っていない。そのため、漣本人の思考能力が残っており、命を優先させた。

「ありがとうございます。私もこれ以上痛め付けるのは心苦しいので、その決断をしてくれたことに敬意を表しますよ。正しい情報を教えてもらえるのなら、痛みなく優しく治療してあげますからね」

春雨の笑顔は既に恐怖の象徴となりつつある。笑いながら蹴られているようなものなので、どんな言葉を投げかけられても、春雨という存在そのものが漣のトラウマとなってしまっただろう。しかし、春雨がこうなるきっかけを作ったのは紛れもなく自分であるというのも理解している。故に、何も言えない。

もっと自分に有利な状況ならば、自分は悪くないと弁解しながら再戦のために策を巡らせていただろう。だが、もうそんなことが出来ないくらいに心がバキバキに折られてしまっているため、春雨の言う通りに素直に従う。

「では、貴女の主人の居場所を教えてください」

「あい……でも地図が無いので大まかな場所になるんスけど」

「ああ確かに。それでもいいですよ。ある程度場所がわかれば大丈夫です」

そこからは早かった。心が折れた漣は、主人（龍驤）の居場所をオドオドとしながらも説明する。主人への裏切り行為というだけでもさらに心を締め付けられるような思いなのだが、眼前にいる笑顔の拷問官の視線を受けているだけで、話さなくてはまた痛い目に遭わされるという恐怖でいっぱいになる。

本当ならば、ここまでのことをされていたら恐怖の感情が溢れ出していてもおかしくないし、脳がパンクして気を失っているだろう。そ

れが起きないため、心が折れるどころか常に擦り減り続けているようなものだ。正常な判断能力を完全に奪ってしまっていると言っても過言では無い。
「なるほど、そこそこ遠いですね。しかも、拠点を作っているわけではないと」
「足がつかないようにはしてるんスよ……戦力を増やして、うちらが場所を確定させて、一斉に襲い掛かるっていうカタチで考えてたんで……」
ドロップ艦でもブーストさせられることはわかっているので、見つけた艦娘や深海棲艦を侵蝕し、支配下に置いた後、数の暴力と触れれば侵蝕出来るコスチュームで圧倒し、器を奪い取ろうという作戦だったようだ。
実際、そんなことをされていたら耐えられなかっただろう。春雨も今の状態になる前に侵蝕され、元々通用しない叢雲とミシェルは数的不利で始末されるまで予想出来る。未然に防ぐことが出来たのは非常に大きい。
「では、仲間はもうかなり多いと考えてもいいんですか？」
「うす……見つけたドロップ艦は片っ端から侵蝕してますし、姫級も2人くらい確保してるんで……そちらに何人いるかはわからないスけど、それより多いとは思います」
「厄介ですね。出来ることなら殺さずに解放してあげたいですが、数で攻められると全部どうにかするのは厳しいです」
しかし、ここで漣まで確保出来たとなれば、施設への襲撃のタイミングはさらに遅らせることが出来るだろう。その間に準備が出来れば、もしくは襲撃前に奇襲を仕掛けることが出来れば、それもひっくり返すことが出来るはず。
それに関しては、今頃明石が何かしらの発明をしてくれているだろう。それこそ、今回の一件により新たな情報も手に入るので、対策は次から次へと開発される。襲撃までに間に合えばベスト。
「そういえば、今の貴女のご主人様は、どんな姿をしていますか」
ふと思い付いたように問う。今の龍驤は泥と化しており、他人の身

体を器として乗っ取ることが出来ることは春雨達も知っていることだ。漣が最後にどういう姿の龍驤を見ているかは知っておきたいところ。
「……空母のお姉さんスね……でっかい艤装に座ってる、おっぱいのおっきいお姉さんス」
「君達が空母棲姫と呼んでいる個体だ」
『観測者』のおかげで今の龍驤が使っている器のこともハッキリとわかる。本来のカタチから明らかに違う身体を使っていることに違和感を覚えつつ、ひとまずは知っておけて良かったと次の質問へ。
「居場所はわかった。どんな器を使ってるかもわかった。戦力もある程度はわかった。貴女のご主人様は私達の平和を壊す以外に目的は持っていましたか？」
施設の襲撃はわかる。それ以外に並行して取り組んでいる作戦があるかを聞き出そうとする。
その質問に対して、漣は怯えながらも少し考える仕草。
「……鎮守府を狙ってる感じですかね……。なんか、うちのご主人様……1人の艦娘だけはどうしても始末したいと言っていたので……」
「ああ、なるほど。でも襲撃までは行ってない感じですか」
「こちらが優先だったので……戦力を増やすだけ増やしてから鎮守府を潰すつもりみたいです。器を取りに行ければ、その、すごく強い戦力も手に入ると見込んでいたので……」
龍驤がどうしても始末したい艦娘と言えば、満場一致で誰だかわかった。大将の部下であり、現在は鎮守府に出向中である北上だ。一度ならず二度までもコケにされているのだから、どれだけ強い力を持ったとしても、因縁を潰すためにも自分の手で北上を始末すると考えているのだろう。
まず施設を潰し、戦力を増強し、鎮守府を潰す。その順序で行けば、北上としても信用している施設の深海棲艦達が敵に回ったという絶望的な状況を作り上げて、心身共に潰そうとしているのではと考えた。
「先に鎮守府じゃない辺り、黒幕側の指示を優先しているんですかね。

私怨が先立つなら、真っ先に鎮守府に行きそうですけど」
「そう、なんスかね……漣にはわかんないス」
　これは漣の本心。嘘をついているようには見えなかった。
「はい、ありがとうございました。貴女の後ろにいるヒトのこと、よくわかりました。しっかり対策して、確実に終わらせますので楽しみにしていてくださいね。漣さんから情報を手に入れたとよろしく伝えさせてもらいますので」
　ニコニコの春雨だが、やはりその瞳は一切笑っておらず、憤怒の焔もそのまま。まるで治まる気配がない。漣を弄ぶような尋問をしても、その怒りは全く薄れないようである。
　それ故に、かなり意地が悪い言葉を投げ掛ける。漣は萎縮しっぱなし。
「では、治療しましょうか」
　もう充分だと言わんばかりに漣の胸を一瞬蹴る。怒り狂っていてもそこは春雨、約束は守り、痛みなく瞬時に心臓を狙った。
　曙や朧とは違い、吹っ飛ばされるようなこともなく、その場で行動停止。そして、今までと同じように泥が口から溢れ出るように吐き出された。同時に泥のコスチュームも溶け落ちるように消えていく。
「……もう、これで戦いは終わり……だよね」
　正気を取り戻していく漣を見届けながら、海風に向かってボソリと呟く。
「はい、お疲れ様でした。今の尋問の内容は、この海風もしっかり覚えていますのでご安心を。流石は姉さんです。敵であろうが従わせてしまうなんて、海風感服いたしました。今まで受けてきた仕打ちから考えれば、ここまで優しく尋問しなくても、指の1本や2本なら躊躇なく切り落としても良かったと思うのですが、それをしなかったのは自制が利いているということなのでしょう。私ではまず間違いなく自分が抑えられなくなるでしょうし、姉さんで無ければここまで出来ませんね。つくづく姉さんの素晴らしさを実感します」
　相変わらずの海風に安心した瞬間、春雨から急激に力が抜けた。艤装を展開しておくのも難しくなったか、義腕と義脚がその場で消えて

しまう。
「姉さん!?」
　そのままだと水没しかねないため、海風がすぐに支えた。基部ごと消えていたためか春雨自身はとても軽く、艤装展開中の海風は水面に着水する前にしっかりと抱えることが出来た。
　その時には、春雨の瞳からは憤怒の焔は消えていた。漣相手に鬱憤を晴らすことが出来たからか、溢れ出し続けていた怒りは、ここで一時的に引っ込んだ様子。
「あ、あはは……ちょっと無理しすぎたかな……」
「姉さん……本当にお疲れ様でした。その無理の要因に私自身が含まれているのが悔しくて堪りませんが、もう大丈夫だと思います。安心してください。私が責任を持って施設にまで運ばせてもらいます」
「うん……お願い……ね……」
　疲れ果てたか、春雨は気を失うように眠りについた。海風は春雨にはもう聞こえていないとわかった上で、小さく謝罪の言葉を呟いていた。
「あーっ、いたいた！　おーい、何かあったー!?」
　ここで白露達が合流。そして、脚どころか腕も失った春雨を目の当たりにして、顔面蒼白になる。ジェーナスや大鳳も、春雨の大惨事には驚きを隠せない。むしろ、この場にいるもの達は何かしら辛そうな表情をしているため、ここで起きたことの凄惨さを知る。
「な、何があったの、春雨、どうかしちゃったの!?」
「白露姉さん、少し静かに。春雨姉さんが起きてしまいます。後から全部説明しますから、今は施設に戻りましょう。春雨姉さんは私が運びますので、白露姉さんはソレを」
「それって……え、どちら様!?」
　正気に戻ったことと、春雨の視線が失われたことで、溢れないにしろ今にも壊れそうな漣を白露に任せる。海風は気を失った春雨を強く抱きしめながら、まずはちゃんと休めるようにと施設を目指した。

漣達は一旦施設で保護されるというカタチになるのだが、そこには潮がいる。漣と曙は、潮の恐怖のきっかけとなった存在だ。そこからまた波乱が生まれる。

二度目の溢れ

その後の施設は壮絶な状態だった。そもそも敵対していた漣達を治療して保護してきただけでも充分に大変なことなのに、春雨が両腕を失い、しかも『観測者』までもが同行してきたとなったら、もうてんやわんやである。

まずは真っ先に暴走によって消耗している春雨を休ませるために海風が施設内を駆け回り、最高の休息環境を作り上げる。功労者である春雨は誰が何と言おうと身体を休めなくてはならないのだという海風の圧が凄まじく、海風自身もかなり消耗しているにもかかわらず、疲れを感じさせない動き。

その後、救われた3人の艦娘は一応用意されていた適当な服を着せられて別室へ。まだ刺激が強すぎるということで、潮とは絶対に顔を合わせないようにしていた。そもそも潮は、この騒ぎに恐怖を感じているため、飛行場姫から離れることが出来ていない。潜水艦姉妹もそこについているため、潮の心の安全は今のところ保たれている。

そして、侵蝕により心を病んでいる薄雲は、姉である叢雲がひとまず連れて行った。空腹だからテンションが下がるのだという持論を展開しつつ、まずは腹拵えとダイニングに引っ張った模様。そこではリシュリューとコマンダン・テストが準備しているために、すぐに何かを食べることは出来るだろう。

「貴方が手助けをしてくれたのかしらぁ」

「ああ、緊急事態だったものでね。大きな摂理の乱れを確認したため、今回は力を貸したよ」

「ありがとう、助かったわぁ。私達はここから動けないんだもの。助けたくても助けられないから、貴方が来てくれたのは嬉しいわぁ」

中間棲姫は戦場に現れてくれた『観測者』に感謝の意を述べる。道化達も事を終えたので『観測者』に並び立って恭しくお辞儀。

「それで……何があったのかしらぁ。貴方が出張るくらいなんだもの。相当なことが起きたのよねぇ」

「ああ、君には知っておいてもらおう。それと、そこの彼女もね」

そう言われて振り向くと、そこには白露の姿があった。ここに戻ってくるまでの間にある程度は聞いていたようだが、未だに半信半疑なところもある。『観測者』の説明ならば、納得せざるを得ないため、中間棲姫と共にそれを聞きたいと、春雨は海風に任せきってここに来た。

「うちの妹に何があったのか、詳しく知りたい。ブチギレて暴走したとは聞いたけど、それで何で腕が無くなってるの」

「詳しく話そうか。今回の件は、誰にでも知る権利はある」

ダイニングには叢雲達がいるものの、話しやすい場所はそこくらいである。そのため、一旦そこに移動した。夜も更けてくる時間帯ではあるものの、こういうことは早く済ませておくべき。

海風も知っておくべきだとは思うが、春雨の傍から離れることを拒むだろうから、白露が後から伝えておこうと考えた。

ダイニング。空腹を満たすためにいた叢雲と、連れてこられた薄雲。食事の提供者であるリシュリューとコマンダン・テスト、そして春雨関連の話がされるのだという事を聞きつけて大鳳もこの場に参加。

「さて、すぐに本題に入ろうか。春雨の身に何が起きたのか。白露が聞いたのは……いや、あの戦場にいた者達が理解しているのは、仲間達が侵蝕を受けたことで春雨が激昂し、見境なく襲い掛かったということだろう。そして、それをこの道化達が食い止め、さらに海風が正気に戻した。これはいいね」

叢雲と薄雲は現場におり、白露と大鳳は帰路で聞いていたが、残りの者達はそこまでのことが起きていたのは初耳。あの春雨が暴走したのみならず、侵蝕されていたとはいえ元々仲間だった者達を殺すつもりで襲い掛かったということに驚きが隠せない。

「その時何が起きていたか、だが……実際は単純な話だ。春雨は、二度目の溢れを経験することとなった。深海棲艦として、感情がまた溢れてしまったんだ」

艦娘が心を壊して感情を溢れさせた結果、黒い泥が溢れ出て深海棲艦化する。ならば、深海棲艦が心を壊した時、どうなるか。その答えを『観測者』が春雨を例として語っていく。
「春雨の溢れた感情は、知っての通り『怒り』だ。彼女は、普段からも怒り慣れていないのではないかい？」
「……うん、艦娘の時から、怒るってことはしない子だった」
「それが、度重なる仲間達への侵蝕を見せつけられ、トドメは海風への侵蝕だ。それは彼女にとって、心を壊すほどの怒りに繋がった」
つまり、今の春雨は今まで以上に壊れてしまっているということになる。寂しさで壊れ、怒りで壊れたとなれば、今の春雨は情緒不安定と言っても過言では無いのではなかろうか。
実際に怒りのままに漣に拷問じみた尋問をしたわけだが、普段の春雨ならばそんな選択は絶対にしない。それが当たり前のように出来ている事自体が、心が壊れているというところに繋がる。
疲れ果てて眠っている春雨が目を覚ましたら、普段通りに戻っているかもしれないが、何かがきっかけでまたあの春雨が表に出てくるかもしれない。敵を甚振る事を良しとするほどに怒り狂うトリガーが引かれてしまうようなことが。
「これは、君達が黒幕と呼んでいる彼女と同じ現象だ。深海棲艦の身で感情が溢れた結果、それが起きてしまった。彼女は器を捨てるというカタチだが、春雨はその身を削るというカタチで力が発現してしまったことになる」
ここで聞き捨てならない事を『観測者』が口走った。春雨と黒幕が、同じ現象を引き起こしていると。
艦娘が溢れさせるのとは違い、深海棲艦の身で感情を溢れさせ心が壊れると、さらに泥が溢れ出て様々な現象が起きる。それが、春雨の場合は暴走からの両腕消失、そしてその力の拡張らしい。あそこで止まらなかったら、溢れた感情によって肉体が全て消滅していたようなので、海風は最大級の仕事をしたと言える。
黒幕も同じように、艦娘に敗北したことで感情を溢れさせ心を壊し、泥が溢れ出ると同時に器を捨てて泥そのものとなってしまったと

のこと。春雨のように器を壊すことなく抜け出たのは、春雨とはまた何か違う理由があるのだろうが、そこは今はたまたまそうなったということになる。

春雨も一歩間違っていたら黒幕のように泥と化していたかもしれない。肉体が全て消滅した後、残された泥が春雨であり、黒幕と同じように他者を侵蝕する……というカタチになっていたら笑えない。

「えっと、つまり……どゆこと？」

「春雨ちゃんは、怒りの感情を溢れさせちゃったという事よぉ。同胞（はらから）が溢れた場合は、艦娘ちゃん達と違っていろいろと起きちゃうって感じねぇ」

白露にとっては、今の話はちんぷんかんぷんだったらしい。しかし、二度溢れたということは理解した様子。

「彼女との違いは、春雨は二度目であるというところではある。そのおかげで、今のカタチに落ち着けたのかもしれない。いや、海風のおかげと言えるだろうか。彼女がいなければ、春雨は命を奪う以外で止まらなかった。これも、愛が成せる技とした方がいい」

『観測者』ですら生かしたまま止められない存在となってしまっていた春雨。それを止めることが出来たのは、海風の愛故と『観測者』は語る。

海風には何かしらの特性は無かった。だが、愛の力、依存により生まれた春雨に対する異常とも言える愛情が奇跡を起こしたのだと。それは少なからず喜ぶべきことであり、逆に追求することでも無い。そういうものであると認識するのがいい。

しかし、ここで『観測者』が少しだけ表情を変える。

「1つ問題なのは、春雨の力の進化だ。こんなことを言いたくは無いのだが、今の春雨は我々にとっても監視対象となってしまった。辿り着く力が、予期せぬカタチに進化してしまっている」

これがなかなかに深刻な話らしい。実際に戦場にいた者、叢雲が感じた事を語る。

「あの子、容赦が無くなっただけじゃ無かったわよね。なんか、敵を睨み付けたら動けなくなってたみたい。それに、漣に向けて視線を合わ

せてたら、気を失えなくするとか壊れなくなるとか言ってたわ」
「それだ。春雨の力は、そういうことが出来るようになってしまっている。辿り着く力が、溢れた怒りによって変質してしまったんだ」
元々の『辿り着く力』は、ある意味春雨の溢れた寂しさから生まれた力。周囲に誰もいないことが寂しいとなれば、誰かがいる場所に辿り着くことでその寂しさを払拭する。そもそも、姉の背を追いかけ続けていたことも起因となって生まれた力であるため、その力は『最善の答えに辿り着く力』だった。
それが、怒りが溢れたことで変質し、まるで違うというわけでは無いが、大きく変化した部分があるらしい。そしてそれが、『観測者』に言わせてみれば、監視をしなくてはならないほどの強い力。
「変質っていうのは……？」
「その答えを強引に掴み取る。それはもう最善の答えでは無い。春雨の望む答えになる。そして、そこに必ず辿り着く」
白露にはやはりさっぱりわからなかったが、中間棲姫が冷や汗をかき始めていた。
「それは……貴方が言う『摂理に反する』に引っかかるんじゃないかしらぁ？」
「その通りだ。故に、監視をする。すまないが、そうしなくてはならない」
「姉姫さん、掻い摘んで教えてほしいんだけど……」
中間棲姫だけは今の春雨の危険性を理解したようだが、他の者はまだ理解していない。そのため、簡単な説明を求めた。
「……今の春雨ちゃんは、『望み通りの答えに辿り着く力』を持っちゃったの」
「望む答え……？」
「春雨ちゃんが逃げるなと思えば、絶対に逃げられない。春雨ちゃんが壊れるなと思えば、絶対に壊れない。逆に……壊れろと思えば絶対に壊れる。春雨ちゃんがそう望んでるから、周りがそのように動いちゃうの」
ゾクリと悪寒が走った。つまり、今の春雨は視界に入る者全てを、

自分の思い通りにコントロールする力を手に入れてしまったということになる。辿り着く力の怒りによる進化、自分が望んだ答えが最善となり、そこに必ず辿り着くのだから、春雨の思い通りに周りが操られるのである。

だから攻撃しようとしたら突然身体が動かなくなるし、砲撃をしようとしても無意識のうちにあらぬ方向に照準がズレる。トリガーが引けなくなるのも、そういうカタチで干渉されていたから。泥に侵蝕されないのすら、春雨がそう望んだからそうなっている。

触れていた海風の体内の泥が蒸発していったのも、その力の延長線上になるだろう。泥を消滅させるという春雨の望みが叶っていたのだ。それに痛みが伴ったのは、強引だったからか。

「実際春雨のその力は、自分の視界の中でしか起きない。これは姉姫、君の持つ力に近しいものでもある」

「私の力っていうと、繭から感情を読み取る」

「そちらではなく、敵対する者が施設に辿り着けなくなる方だ。春雨はそれとほぼ同じことをしている」

堀内鎮守府の明石が辿り着いた、敵対する者を寄せ付けない結界についての見解、泥を薄く拡げて目に見えない程にし、島に近付いたものをこっそり洗脳して航路をさり気なくズラすというシステム。春雨もそれを無意識に使っていると『観測者』は言う。

春雨は暴走している時にマグマを溢れさせていた。それを薄く拡げて目に見えない程にして視界の中にばら撒いている。そして、それを知らぬ間に吸い込んだものは、春雨の思い通りに動くわけだ。範囲が視界の中と狭いように見えて、実際見られた時点で春雨の思い通りとなるのなら相当危険な力。

「しかし、その力を扱える条件は限られているようにも思える。今目を覚ましたところで、その力が使えるかと言われれば、わからないとしか私には言えない。トリガーがあるのかさえ、ね」

「そうなのねぇ……だから監視がしたいと」

「ああ、春雨には申し訳ないが。彼女がその力を悪意を持って使うことは無いことくらい理解している。だが、我々は万が一を考えておか

ねばならない」

それ故に、一時的に春雨も監視対象に加えると話す。そんな力のことを聞いてしまったら、満場一致で仕方ないとなる。

善意のままにその力を使うのだとしても、それはあまりにルール違反と言えるだろう。摂理に反する。中立からは程遠い。

二度目の溢れによって、とんでもない力を得てしまった春雨。それは今後の戦いを大きく変える力となり得るのだろうか。

怒りの向き

春雨が目を覚ましたのは、日が変わろうとしている深夜。夕食を食べずに出て行っていたので、少し覚醒した段階で猛烈な空腹感を覚える。

隣にはやはりと言うか海風。しかし、眠っているもののあまりいい顔をしていない。春雨を抱き枕にするようにしていても、ついさっきの出来事が悪夢のように蘇ってしまっているようだった。

「……海風、大丈夫だからね」

手を伸ばそうとするが、今の春雨には二の腕までしか無い。撫でてあげることが出来なかった。

そしてそのことに対して、小さいものの苛立ちが湧き上がった。今までの自分では考えられないような怒りの感情。海風を撫でられない自分が気に入らない。

ここで自分に何があったのか察しがついた。寂しさが溢れ出して急激に苦しくなった時と同じように、意図せず怒りが湧き上がってくる。寂しさ以上に自分とは無縁の感情だったため、春雨自身驚いてしまったくらいだった。

「私……そういうことなんだ」

叢雲のように常に苛立ちを表に出すようなことはない。そこは寂しさが溢れている分緩和されていた。前代未聞の複数個の溢れによって、一部が相殺しあって落ち着けているところはあるようだった。元来の優しい感情が塗り潰されてしまっているわけではないため、それによってなんとか抑えつけているというのもある。

しかし、溢れていることは間違いない。怒りと寂しさに支配されやすくなってしまっているのは確実。心はさらに壊れているため、春雨自身も自分にどんな変化が起きているかはわからない。

兎にも角にも、今の春雨は海風が撫でられないことがどうしても気に入らなかった。だからといって、艤装で義腕を作り上げて撫でるのも何かが違う。春雨はいいかもしれないが、海風には硬く冷たい感触を与えることになるだろう。そんな自分がさらに嫌になり、怒りが込

み上げてくる。
「ん……姉……さん……」
涙目で目を覚ました海風は、自分よりも先に目を覚ましていた春雨を見て目を見開く。
「姉さん、大丈夫ですか。一眠りしたことで何かしらの不調はありませんか。あの時疲れ果てて眠ってしまったわけですから、何処かに痛みがあったり、体調が悪かったりするかもしれません。些細なことでもいいので、何かあったらすぐに私に教えてください」
寂しさを感じないようにすぐに抱きしめて温もりを与えつつ、春雨のことを第一に考えて行動を始める。部屋が暗いのはよろしくないとすぐに電気をつけ、春雨の身体に問題がないことを確認。
瞳の色が紅く染まり、両腕が失われてしまったこと以外は、今までずっと見てきた春雨のままであることを再確認して一度安心するものの、精神的な部分に変化があることはすぐにわかり、弁えつつも問診を始める。
「大丈夫だよ海風。自分にイライラしてるけど、それだけだから」
ほんの少しだけ、春雨の声色に怒りが含まれていることに気付いた。自制は出来ていても、常に春雨の動向を気にかけている海風にしてみれば、たったそれだけでも充分すぎる変化である。
ただでさえ自分のことがどうでもよく、他人のことを優先する春雨が自分のことを嫌いになってしまっては、さらに戦闘中に顧みなくなるだろう。それこそまた暴走して、自らの肉体を代償にしながら暴走しかねない。
そんな春雨を見て、海風は悲しくなる。自分があの場で侵蝕されていなければ、春雨がこんなことになっていなかった。そしてそんな春雨を侵蝕されていたとはいえ煽り、精神を揺さぶったことに対して、罪悪感が凄まじかった。
「……私のせいで、私のせいでこんなことになってしまって……本当にすみませんでした……。私が侵蝕なんてされなければ、姉さんはここまで揺さぶられることなんてありませんでした。私が弱いばっかりに……私が姉さんを……」

耐えきれずに涙を流す海風。海風も今は精神的にダメージが大きい。罪悪感から悲観的になってしまうのは必然である。春雨に危機が訪れていたから、施設に戻るまでは耐えられたが、一休み出来たことで本来のガタガタが戻ってきてしまっていた。
「海風は何も悪くないよ。私が……私がもっと強かったら、みんなを守れたかもしれないのに……。海風だけじゃない、戦艦様も、薄雲ちゃんも、あんな思いをしなくて済んだんだ……」
そして、それを見て春雨は自己嫌悪から自分への苛立ちがさらに湧き上がる。未熟さ故に誰も守れなかったという後悔から、どうしても溢れ出した怒りに繋がってしまう。
このままでは堂々巡りである。春雨が自分に苛立つ程に、海風は罪悪感を覚え、その様を見ることで、春雨はさらに怒りが募る。何も良くならない。
そんな2人に割り入ってくる者がいた。
「起きてる？　起きてるよね、声が聞こえたし」
深夜だというのに、容赦無く部屋に入ってきたのは白露だ。扉の隙間から光が漏れていたのと、その向こう側から2人の声が聞こえたことで、ノックもせずに突入。
本来ならば深夜の哨戒だったはずなのだが、今回は漣達の保護などもあったため、一時的に中止。白露達の哨戒は翌朝に持ち越しとなった。
そして白露は、春雨と海風がおおよそこの時間に起きるのではと見越して、部屋の前でジッと待っていたのだ。妹達は確実に精神的な消耗が激しいとわかっていて。
「し、白露姉さん……ノックくらいしてくださいよ」
「ごめんごめん、ちょっと聞き捨てならないこと聞こえたから、カッとなって入ってきちゃった」
ベッドの前で仁王立ちする白露。それでも春雨の中に渦巻く苛立ちは湧き上がり続け、海風の中に根付く罪悪感は止まるところを知らない。
そんな中でも、白露はマイペースに話を続ける。

「とりあえずアンタ達、お腹空いてるでしょ。何か食べな。お腹空いてると本調子出ないから」
「……そう、ですね。お腹が空いてるのは確かです。海風、遅くなったけど夕飯を食べさせてもらお」
「……はい」
まずは腹拵えから。その後はお風呂で身を清めてもう一眠りすれば、ある程度は考えも纏まるだろうと言われ、春雨も海風もひとまずは納得した。
それでも、感情のうねりは何も変わらない。春雨は確実にイライラしているし、海風は俯いたままである。

ダイニングには、温め直すだけで食べられるような夜食が用意されていた。春雨が義腕になってしまったことも考慮して、スープとサンドイッチである。まだ消耗している2人は卓につかせ、白露がスープを軽く温め直してから2人の前に出した。
食欲だけはしっかりあったのが唯一の救い。これで食事が喉を通らないまであったら、今の感情に思考が支配され続けて、消耗が回復することが無かっただろう。白露はその時のための手段も考えていたようだが。
「食べながらでもいいから、あたしの意見を聞いてもらおうかな。とはいえ、あたしはアンタ達に起きたことを『観測者』さんから又聞きしただけだから、現場でどういうことが起きていたかの詳細は知らない。間違ってるなら間違ってるって言って」
いつになく真剣な表情の白露に驚きつつも、春雨も海風も一応用意されたものを口に含みながら聞く。
「海風が敵の手にかかって侵蝕されて、それを見た春雨がブチギレて暴走、結果的に春雨は怒りが溢れたことで両腕を失ったってことでいいね」
「はい、それで正しいです」
「それで、春雨は自分が弱いから、未熟だから、誰も守れなかったって、

自分に対してイライラしてると」
サンドイッチを持つ手が少し震えた後、無言で首を縦に振る。
「春雨」
「……はい」
「アンタさ、巫山戯てんの？」
場を凍り付かせるような言葉を白露が発した。ただでさえイライラが募る春雨と、春雨への侮辱に怒りを感じる海風が揃っているところで、あえてこんな言葉を使った。
春雨はともかく、海風も聞き捨てならないと白露を睨み付けるが、春雨を見つめる白露の表情に言葉を無くした。
怒っているわけでもなく、冗談を言っているわけでもない。ただ冷ややかに、春雨を見つめていた。この顔は何処かで見たことがある。白露ではない姉の誰か。
「何、自分には辿り着く力なんていう特別な力があるから、本当ならみんなを守れたって思ってる？　それでも敵の方が一枚上手で、それにやり込められたことを全部自分のせいだと思ってる？　自惚れんな」
淡々と続ける。春雨は白露の顔が見れなかった。
「それってさ、なんだかんだ仲間のことが見れてないよね。それか、仲間のことを自分より下に見てるか。特別な力を持った自分が誰よりも上とでも考えちゃった？　そんなわけないでしょうが。あたしらは、アンタがどんな力を持ってようと守り守られる仲間だって思ってんだ。なのに、アンタがそれでどうすんの。何が自分のせいでみんなが傷ついただ。どうでもいい時にばっかり自分のことを蔑ろにするのに、こういう時ばっかり自分のこと見てんじゃないよ」
この説教は、姉４人からぶつけられているような感覚に陥る。白露だけではない。時雨からも、村雨からも、夕立からも、今の春雨はよろしくないと叱られているように思えた。
今の白露は誰かの気質を選んで表に出しているわけではない。全員の気質を均等に表に出している。４人が４人、春雨のことを大切に思っているからこそ、ここで自己嫌悪から苛立っている春雨に対して説教をすることを選んだ。

「白露姉さん、それは言い過ぎ」
「アンタもだよ海風。春雨が暴走したのは自分のせいとか、大概にした方がいい。春雨は積もり積もって溢れたんだ。確かにアンタがトドメだったかもしれないけど、アンタだけが悪いわけでもない。むしろ、ここにいる誰かが悪いわけがないでしょうが。侵蝕されたヤツが侵蝕してきたヤツのことを差し置いて罪悪感に浸るんじゃない」
４人分の威圧は、春雨至上主義の海風すら黙らせる。
「扉の向こう側からアンタ達が話す声が聞こえてきた時、あたしはそれはもう気分が悪かったよ。春雨は元凶じゃなく自分に怒りを向けてるし、海風は元凶のことを無視して自分が悪いとか言い出すし。ちゃんと冷静になって考えな。今回の件、誰が悪い」
そんなこと、本来は考えるまでもないことだ。海風が侵蝕するきっかけとなったのは、戦艦棲姫。その戦艦棲姫を侵蝕したのは、朧。しかし朧も巻き込まれただけのドロップ艦だ。それに巻き込んだのは漣であり、それを支配して使っているのは龍驤。延いては最悪の姫の中身、黒幕である。
ならば、怒りを向ける先は決まっているようなものだろう。この戦いのきっかけを作ったものである黒幕か、この作戦を実行に移させた龍驤、この２人のうちのどちらかだ。自分に対して怒るのはお門違い。罪悪感も同じ。
「……黒幕、それに、龍驤」
「そうでしょ。ほら、アンタ達は、何も悪くない」
一種の思考誘導なのだが、今の２人には効果的だった。今回の件は２人のせいである部分は何処にも無いのだ。責任転嫁ではなく、本当に責任が敵にあるのみ。そんなことでいちいち落ち込んでいたら、敵の思うツボだろう。
当然、自己嫌悪の気持ちや罪悪感についてもわからなくはない。白露も当事者として動いていたことがあるし、その被害者であるミシェルがこの施設に滞在しているのだから、春雨と海風の気持ちは痛いほどわかる。だが、ここで落ち込んでいたり苛立っていたら、先に進むことが出来ない。故に、吹っ切れるためにも考え方を変えさせる。

「正直なところ、暴走したことで春雨の両腕が無くなったのは、あたしだってショックだよ。あの現場にあたし達もいることが出来れば、もっと早く気付いていれば、こんな大惨事にならなかったかもしれないって思うことだってあるさ。でもね、だからといって、あたしは自己嫌悪にはならないよ。原因は全部、黒幕にあるんだから。あたしは何も悪くない。むしろ、誰かが被害を受けるたびに黒幕への怒りが募っていくね。あたしも利用されたクチだから」

自虐ネタを入れつつも、この説教の根幹を伝える。

「春雨。怒りが溢れたことはもう仕方ない。なら、怒りの矛先を見誤るんじゃないよ。未熟だったとかそんなわけ無いんだから」

「……はい」

「海風。その罪悪感はわかるけど、アンタは悪くないんだから、割り切りな。春雨だって、アンタが悪いなんて思ってないよ」

「……わかり、ました」

２人の本質を捻じ曲げようとするわけではなく、その向きを変えることで、最悪な状況を回避する。特に春雨は今までと違い、怒りも溢れているのだから、まずはそれを正しく導いてやるべきだろう。

結果として、春雨と海風は自己嫌悪を回避することに成功した。互いに負のスパイラルを形成していたが、その怒りの向きを黒幕に絞ったことで、精神的に多少は余裕が出来ただろう。

あとは、今の感情とうまく付き合っていくだけ。春雨は折り合いを付けていると自分で言ったのだから、もう少し制御出来るようになれれば万々歳だ。

天秤

白露の説教はそれだけで終わり、少し沈んだ心持ちで夜食を平らげた春雨と海風は、そのまま風呂を済ませてまた自室へと戻る。

先程までは消耗しすぎて眠りに落ちていたのだが、空腹を満たして身体を清めたらまた眠気はやってくる。時間が時間であるため、今眠りについたら朝まで起きることは無いだろう。

「……姉さん」

ベッドに入った途端、海風が話しかける。この時の春雨は、腕も脚も消した状態。意図してこの姿になるのは初めてであり、またそれに苛立ちが湧き上がっていた。海風はその春雨の感情を読み取ったようだった。

「なに？」

「……その、さっきの白露姉さんの話です」

ああ、と春雨も苦笑する。少なくともあの説教は2人の心には強く刺さっており、あの時の言葉は全面的に正しいと納得もしている。

春雨は自分自身に怒りを覚えるのはお門違い。今の身体になったのは未熟だからではない。ああいう手段に打って出た敵に対して怒るべきだ。怒りが溢れたのは事実だし、どんなことにでも苛立ちが湧き出てしまうのはその特性から仕方ないことかもしれないが、本当に怒りを向ける方向をちゃんと見定めるように心掛けたいと春雨は考えた。

海風も同じだ。春雨がこんなことになったのは海風の責任ではない。春雨だって海風のことを責めているわけではないのだから、責任を感じる理由が一切無いのだ。それをずっと悩み続けるのは、海風が愛する春雨のためにもならない。春雨のためにも割り切るべきだと海風は考えた。

しかし、どうしてもダメな部分が海風にはあった。

「私は、白露姉さんの言う通り、割り切ろうと思います。辛いです。すごく、辛いです。侵蝕されていたとはいえ、敵対し、春雨姉さんにあんなことを口走ってしまった自分が嫌で嫌で仕方ないです。でも、ど

うにか振り切ります」
「うん……そうだね。私がこの身体になったのは、海風のせいじゃないよ。大丈夫」
頭を撫でようと思ったが、やはり腕が無いことに苛立つ。展開しても硬い質感の義腕になるだけ。どうしようかと悩んだものの、答えは簡単だった。うまく身体を動かしてにじり寄り、より温もりが与えられるように全身を使って海風を抱き締めた。
急にそういうことをされたので、海風は驚きが隠せなかった。だが、まずは今思っていることを口にしたかった。
「海風はギリギリまで頑張ってくれたもんね。侵蝕を耐えることが出来たなんて、本当にすごいよ」
「……でも、屈してしまいました。強烈な快楽に、他ならぬ姉さんの目の前で……それが本当に悔しくて仕方ないんです。さっきも……その時の夢を見てしまいました。そんな自分が許せません」
春雨がこうなるきっかけになってしまったという罪悪感は割り切ろうとしているのだが、今度は侵蝕に敗北したことを気にしていた。
あれは余程のことが無い限り耐えられない代物だ。施設の仲間達では、耐性のある叢雲や、理解していないために効果を無効に出来るミシェル、そして今の力に目覚めた春雨以外は、どう足掻いても抗うことが出来ない必殺の毒。
だから気にすることなんて無いのだと春雨は言うのだが、海風にとってはどうしても許せないこと。
「私にとっては春雨姉さんが与えてくれるものが全てを上回るのに、あの時だけは屈してしまったんです。これは姉さんへの裏切り行為としか考えられません」
「海風、それは違う。あれは本当に仕方ないことだから。今でこそ大丈夫だけど、あの時の私だったら多分海風と同じように屈してたと思う。だから、気にしないで」
「……でも」
「でもじゃない。私はね、海風のことを本当にすごいと思ってるんだよ。尊敬だってしてる。だから、私が尊敬しているヒトのことを、悪

く言うのはやめて」
少しだけ怒りが垣間見えたものの、すぐにニコッと笑って額同士を重ねる。溢れる怒りの中でも、本来の優しさは失っていない。勿論怒りも溢れているが、春雨のその根幹は、何も変わっていないのだ。
故に、正しい怒りとの付き合い方さえ覚えてしまえば、怒りを表に出すことなく、いつもの春雨として施設でも振る舞っていけるだろう。昨日の今日で簡単に行くとは思えないが、この春雨ならばいつかは確実に出来るはず。
「ね？」
「……はい。姉さんのお眼鏡にかない続けられるように、日々精進させていただきます。もう二度とあんなことが無いように。海風は、もう春雨姉さんを裏切るようなことをしないと誓います」
「仰々しいなぁ。でも、ありがとうね、海風。ちょっと硬いけど、我慢してね」
義腕を展開して、より温もりを与えるように引き寄せた。海風はそれだけでも至福の時間を得ることが出来た。確かにその手は硬いし、今までの温もりは失われてしまっていたが、その分、身体の方はより温かく感じた。
春雨も不思議と怒りは薄れている。寂しさを払拭出来る行動は、怒りの払拭にも繋がるようだった。

翌朝。この温もりのお陰でぐっすり眠れた海風。春雨も寂しさを紛らわし、怒りを緩和してくれる海風と共にいたことでしっかりと疲れが取れ、いつもの時間に目を覚ますことが出来た。
「おはようございます春雨姉さん。昨晩はいろいろとすみませんでした。でも、お互いに深く眠れたようで何よりです。春雨姉さんの温もりのおかげで、悪い夢を見ずに済みました。やはり自分から抱き着きに行くより、姉さんから抱き寄せてくれる方が、私にとっては大きな幸せとなるようです。流石は私の女神。慈愛と母性が振り切れているだけありますね。春雨姉さんも気持ちよさそうに眠っていたよう

で安心しました。ささ、私が手を貸しますので、普段通りに過ごしましょう。何か不便なことがあったら私に言ってくださいね。あ、腕のことについては私も教えられることはあると思いますのでお任せください」

朝イチから放たれるマシンガントークに春雨は苦笑しつつ、腕を展開して身体を起こし、脚を展開してベッドから降りる。海風には不思議と怒りが溢れないので助かった。

昨晩の夜食の時は細かい動きをしなかったからどうにかなったが、やはり指先の感覚は生身の時とは違うようで、グーパーと手を動かしながら慣らしていった。

「うん、やっぱりまだ慣れないね。お箸とか持つのは難しいかも」

「いざとなったら私が食べさせてあげます。スプーンとかを使えばまだ楽なので、それも難しそうならば私に教えてください。春雨姉さんのことですから、少し練習すればすぐに慣れますよ。今まで通りの動きもすぐに出来ます」

「頑張るよ。こういうのにあんまりイライラしないようにしないとなぁ」

パジャマを消して制服姿に。やはりこれは怒りに呑まれた影響か、下はショートパンツ状。無意識にそれを選択してしまう。

寂しさが溢れて繭となり、孵化した直後はうまく制服が作れなかったりしたが、今もその現象が起きてしまっているようだった。怒りが溢れていることで、若干攻撃的な見た目になる。春雨としては今の姿が怒りのスタイルというイメージなのかもしれない。そのうちまた前と同じ白露型の制服が作れるようになるはず。

「脚と腕も一応隠しておこうかな」

「そう……ですね。多分、私や薄雲さんが……その、思い出してしまうので」

言われて春雨も気付いた。春雨の義腕と義脚の位置は、よくよく見返してみればロンググローブとニーハイソックスに見えないこともない。つまり、侵蝕されていた時と同じような姿に近いということになる。これで春雨が何かしらの理由でレオタードなんて着ようもの

なら、少なからず海風は当時のことを強く思い出してしまうだろう。
勿論、春雨だってそんな格好は死んでもしたくないモノだ。考えただけでも抑え込んでいた怒りがより溢れるようだった。黒幕と龍驤への怒りが抑えられない程に溢れ、明らかに表情に出ていた。
「す、すみません、そんなつもりで言ったわけじゃ無いんです」
そんな春雨の表情を見たことで、海風は慌てて訂正する。春雨もハッとしてすぐに顔を揉み上げるようにして怒りの表情を崩した。怒りが顔に出るようになったのは自分でも困ると、小さく溜息まで吐いた。
「ううん、むしろ教えてくれてありがと。あんな格好に見えるってだけでもイライラするし、隠すにしてもちゃんと隠すよ。下はいつも通りで、腕は海風を真似させてもらおうかな」
下半身はいつも通りの黒いタイツ。上半身も腕を覆い尽くすタイツのようなインナーを着用することに。知らない者が見れば、今の春雨は少し変わった制服の下に全身タイツを着込んでいるようにも見える。ヘソは見えているが。
これだけでも今までと比べれば随分とイメージが変わっていた。優しさよりも活発さが表に出ているように見えて、海風は目に見えて喜んでいる。
「今までの可憐さや優雅さとは違う強さを感じますね。斬新で、とても似合っています。新たな春雨姉さんを垣間見ることが出来て、海風感激です」
「あはは……ありがと。私もなんだか気持ちも新たにって感じだよ。スカートじゃ無いのってなかなか無かったしね。運動着の時くらいだし。じゃ、行こっか」
「はい、お供します姉さん」
海風を引き連れて部屋の外に出ると、そこには2人が出てくるのを待ち構えていたかのように道化達が立っていた。
「……えっと」
困惑する2人を尻目に恭しくお辞儀をしつつ、こちらへと案内するように先陣を切る。疑問に思いつつもついて行った方が良さそうだ

と直感的に判断して、春雨は道化達の向かう方、施設の外にへと向かった。

そこに立っていたのは『観測者』。２人の姿を見て、すまないと一言謝罪をした。
「私達に用があるということですよね」
「ああ、私が君達の部屋に出向くのはマナー違反と思ってね。道化達に呼んできてもらった次第だ。少々、話しておかなくてはならないことがあったものでね」
「……私のことですか」
コクリと頷く『観測者』。こういうところも直感的に気付けるのが辿り着く力の断片。進化してもこの辺りは据え置きのようである。
「昨日の今日で申し訳ない。春雨、君を我々の監視対象とさせてもらう」
「えっ!?」
強く反応したのは春雨ではなく海風の方。『観測者』から監視されるということは、中間棲姫や黒幕と同等の扱いになるということ。むしろ監視という言葉の音から、春雨が悪いことをしないように見張ると言っているようにしか聞こえなかった。
「な、なんでですか。春雨姉さんは今の戦いに貢献し続けている功労者でしょう。それなのに突然監視とかどういう意味なんですか!?」
声を荒げる海風を、まあまあと宥める道化達。それでも怒りが治まらないのか、『観測者』に掴みかからんとする勢いで飛びかかろうとした。しかし、道化達にはそれもお見通しだったらしく、『観測者』に近付くことが出来ずに取り押さえられた。その表情は申し訳なさそうだった。
「説明させてほしい。今の春雨の進化した力のことを」
ここからは昨晩に話をしたことと全く同じことを春雨に伝えた。今の春雨は、望み通りの答えに辿り着くことが出来てしまうこと。その力が、世界の摂理に反してしまっていること。それ故に、春雨の性

格をわかりきった上で、悪事に使わないように監視がしたいということ。全て包み隠さず伝えている。
「摂理に反するって……どういう基準なんですか！　それに、姉さんが悪に染まるとでも!?」
「無論、我々もそうならないと信じているさ。ある程度その生き方を見させてもらっているが、それを見た上で、春雨はその使い道を間違えることはないと言い切れる。しかし、怒りが溢れているという点が加わったことで、何かの弾みで悪い方向に向かう可能性がある。その可能性が僅かでもあるのなら、我々は監視しなくてはならない」
「なんでですか！」
「その何かの弾みが、全てを破壊しかねない力であることも理解してほしい。何がきっかけで発動するかもわからないような力なんだ。監視という言い方は悪かった。我々がしたいのは、春雨の調査さ」
　だとしても、海風には納得が行かなかった。最愛の姉が、起きるかもわからない暴走を危惧されて常に監視下に置かれるだなんて、納得出来るわけがない。
　一方春雨は、それを言われて不思議と納得出来た。自分の新たに得た力、望む答えに辿り着く力は、聞いている限りでは相当恐ろしい力だ。暴走するつもりは毛頭無いのだが、万が一のことを考えるのならそうして当然。もし自分が『観測者』と同じ立場ならば、同じような選択をするかもしれない。
「海風、大丈夫。別に私は監視されても構わないから」
　春雨は海風を諌める。簡単には止まりそうに無いくらい興奮していたが、春雨の言葉には素直に従って力を抜く。道化達は大袈裟に安心したような表情を浮かべる。
「でも姉さん、今このヒトは、春雨姉さんのことを危険人物と言っているようなものですよ。これは完全に侮辱です。春雨姉さんの苦悩も知らずに言いたい放題言っているだけです！」
「『観測者』様が私に面と向かって言ってきてるんだから、全部わかってる上で私に教えてくれたんだよ。だから、海風は怒らなくていいよ。私だってそこでは怒らないよ。溢れた苛立ちがあるだけ」

海風に落ち着いてもらうと、春雨は『観測者』に向き直る。
「『観測者』様、監視するのは構いません。私が持つ羽目になった力が危険であることは、私自身もわかりますので」
「納得してもらえて助かるよ」
「でも」
ここで、春雨はあえてとんでもない提案をする。
「基本的にこの施設にいてください。遠くから見られているだけというのは不公平じゃないですか。そういうの、今の私には苛立ちになります」
自分を監視するのは構わないが、ならばそれを許す代わりに春雨の視界が届く場所で行動しろと言っているわけだ。
まさか春雨が自分を人質にするような交渉をしてくるとは思っていなかったようで、『観測者』も少なからず驚いた。道化達に至っては感心するような仕草。
「すまないが、約束は出来ない。私も今は、彼女達が撒く悪意の対処に動いているからね。ここに滞在している間に、世界の摂理は乱され続ける。本来対処出来るものも出来なくなるのはよろしくない」
「なら監視はやめてください。さっきも言った通り、私の与り知らぬ場所からジロジロ見られるのは気に入りません。貴方の裁量で私の進退を決めるわけですから、多少なり私の望みも聞いて然るべきでは」
平行線である。春雨がここまで退かないこともなかなか無い。海風も春雨のこの言動には驚く程である。
春雨は直感で遠くから見られていることにも勘付くだろう。それ故に、今ここで監視をしないと言って施設を離れてから、宣言通りに監視を始めても、春雨は気付く。そして、怒りを溢れさせて余計に悪い方向に向かいかねない。
「ふむ……私の行動が君の怒りに繋がるというわけか。そして、怒りが溢れれば暴走の危険性が増す」
「私にはどうなるかも分かりませんけどね」
「なかなか、天秤にかけるには難しいことを言う。少しだけ考えさせ

てもらえるかな」
「はい、でもここから離れて考えるのはやめてくださいね」

『観測者』すらも手玉に取ろうとする春雨。怒りが溢れた結果、こういうところが強かになっていた。
しかし、その根幹の優しさが失われているわけではない。春雨は、何も変わっていない。

残った傷

『観測者』は春雨からの申し出――監視するのは構わないが、施設に留まり目につく場所で監視しろという脅迫めいた提案――の答えを保留にし、一時的に施設に滞在することとなった。少し考えさせてくれと伝えたようだが、春雨は直感的にどう答えるかはわかっているようである。

「姉さん……『観測者』様はどうすると思いますか？」

海風が問う。それに対して、春雨はニコッと笑って答える。

「あのヒトは多分、ここを一時的に拠点にしてくれるよ。今回の件が終わるまでは」

確信を持った言葉に、海風は驚く。そうなるように仕向けたと言わんばかり。

「だってここには、姉姫様がいるからね」

「姉姫様……ですか」

「今の状態で中立を保つなら、あちらがどう出てくるにしても狙われるのは姉姫様。昨日の夜だって、駆けつけてくれたのは私達が危なかったっていうのもあったと思うけど、最終的に一番危ないのは姉姫様だよね」

昨日の夜の戦いで参戦してくれたのは、複数個の理由がある。

１つ目は、摂理に反する行動を取る漣達を排除すること。元凶の排除は鎮守府の者達や施設の者達に任せるとしても、剪定をすると宣言した以上、ある程度手を回してくれる。

２つ目は、新たに摂理に反する存在となりそうだった春雨を止めること。暴走する春雨はその『望み通りの答えに辿り着く力』を存分に使い、その身が消滅するまで暴れ続けただろう。いや、身体を失ってもそれこそマグマというカタチとなって怒りを振り撒く存在に成り果てていたかもしれない。

そして３つ目は、そのどちらも放置していては、施設の者達――中間棲姫に危害を加えるため、それを防ぐこと。漣達黒幕の軍勢も、暴走した春雨も、最後は手近な場所を破壊し尽くすために行動する。前

者は最悪だし、後者でも酷いことになるのは間違いない。
結局、『観測者』は中立と言いつつも最初から若干中間棲姫に寄り添っているのだ。黒幕のいいようになった場合に中立が崩れ、摂理が壊れるからというのもあるが、親心もあるだろう。
「立場的にそういうことは言えないだろうし、本腰を入れて姉姫様に寄り添ったら、『観測者』様は多分泡になって消えちゃうんだと思う。だから、私がちょっとだけきっかけを作ったの。苛立ってるのは本当だよ。私だって欲しくて持ってるわけでもない力を摂理に反するって言われるのは嫌だから、少しばかりの望みくらいは聞いてほしい」
話しながらも少しずつ苛立ちを顔に出していく春雨。溢れた怒りを抑える術を正しく知っているわけではないので、どうしても溢れたモノが表面に出てきてしまうようだ。
海風はそんな春雨の表情に複雑な思いを馳せながらも、ただ優しいだけでない、強く気高い姉の姿を垣間見て、より尊敬し、より依存を深めることとなる。そして、隣に侍ることで溢れる怒りを抑え、寂しさを失わせる存在となるべく、気を入れ直した。

施設の中に戻ってきた春雨と海風。その時にはおおよそ殆どの仲間達が目を覚ましており、朝食の準備などの朝の作業に勤しんでいた。
しかし、ダイニングに入った春雨の姿を見て驚くものは多い。話に聞いていただけで、どうなっているか知らない者もいたため、腕が義腕になっているのを見るのはどうしても反応してしまう。そしてそれ以上に衣装チェンジしたことにも驚かれた。
「アンタはあの時の癖みたいなのがついたのかしら。随分とイメチェンしたわね」
「かもしれない。もう少し慣れたら白露型の制服にするつもりだよ」
「別にいいんじゃない？　アンタもどちらかといえば接近戦のタイプになりそうでしょ。スカートって動きにくいんじゃないかしらね」
「どうだろ。お構いなしだし。ちょっと慣らしてから考えてみるよ。

叢雲ちゃんもイメチェン？」
「私は薄雲のため」
そう話すのは叢雲なのだが、実は叢雲も制服を変えていた。今までのバニーガールのようなスーツを一新し、艦娘時代のモノに大分近いワンピースタイプに。動き回ってもいいように、その下にはいつものようなスーツを身につけているようだが、ぱっと見ではそうは感じ取れないような見た目。
その理由は全て薄雲にある。海風と同様、あの時の姿を思い出させるような服装に反応してしまったようだ。いわゆる、レオタード恐怖症。ジェーナスはそこまで反応を見せなかったし、海風も少しだけ苦言を呈したもののそれだけで済んだが、薄雲は心の傷が大きかったようである。
「薄雲ちゃんの様子は？」
「大分落ち込んでるわよ。昨日の夜も酷いもんだったわ」
そこは泥に侵蝕された者の宿命なのか、夢で反芻させられ、悪夢のせいで寝不足気味になり、テンションも駄々下がり。海風は春雨に対しての恩義と、依存からの決意もあるため、いつも通りと言ってもいいほどに回復しているが、薄雲は目の下にクマが見える程だった。相当参っている様子。
「私は出来る限りのことはしたわ。あとは薄雲次第。ここには幸か不幸か同じ境遇の連中が沢山いるもの。私よりも話をわかってくれるわよ」
「だね。私も叢雲ちゃんも、その時の薄雲ちゃんの気持ちを理解してあげるのは難しいかもしれない。海風、薄雲ちゃんのこと」
「はい、勿論。私もまた、薄雲さんの気持ちがわかる1人ですから。本当に、本当に辛いのはわかります」
植え付けられた気持ちでも、その時だけは自分の本心となってしまうのがタチが悪い。本当はそんなことをカケラも考えていないのに、侵蝕されてしまえばどう足掻いても敵となる。あの戦艦棲姫ですら、普段は見せないような甘ったるい声を出したくらいだ。
その戦艦棲姫はもう気にしていないような素振りでここにいる。

だからといって触れてもいいことではないし、表に出さないだけで内心では黒幕達に対する煮え滾る怒りが渦巻いているため、むしろ禁句（タブー）。面白半分で触れたら生体艤装に殴られても文句は言えない。
「ウスグモ、大丈夫よ。みんな私達のことを嫌わないんだもの。必ず立ち直れるわ」
「……うん、気にしないでおきたいって思ってるよ。でもね……夢に見ちゃったからまだ立ち直るには時間がかかるかな……」
「わかる、わかるわ。私もそうだったんだもの。だから、辛かったら私達を頼ってね。力になるからね」
今の薄雲にはジェーナスが親身になっていた。同じ辛さを知る者として、慰めるポイントも把握している。
一緒にいるミシェルは薄雲が何に悩んでいるのかはわかっていないものの、触れてはいけないところに触れないように楽しもうとしているのはわかった。
正直なところ、昨日の戦い１回だけで、施設内の一部がガタガタになっているのは間違いなかった。
「一応叢雲に聞いていたから、アタシ達も刺激しない見た目にしておいたわよ。これで良かったかしら」
「ええ、助かるわ」
「Ｗｏｗ．　みんなとっても似合ってるわ！　こういうのが見られるなら、私の時もお願いした方がよかったかも」
飛行場姫達もダイニングへ。精神的ダメージが大きい薄雲のために、今はいつものボディスーツ姿を控える方針となっている。それでも今までの姿が趣味と実益を兼ねていると話していたため、あくまでもスーツ状なのは変わらない。
飛行場姫はワンピースタイプではなくセパレートタイプにすることで大きく変化。潜水艦姉妹も水着が刺激する可能性があるとのことなので、国外の潜水艦がよく使うウェットスーツ状の水着に。そして伊４７は見た目がかなり近かったこともあって、少しオシャレなビキニタイプの水着。
薄雲が立ち直れるようになるまでは、全員が気にかけることにして

いた。ジェーナスはこういう意見を主張出来ないタイプだったが、薄雲は本人ではなく叢雲が手を回すタイプだったため、施設全体に影響が出ることに。
「す、すみません……私の我儘を……」
「別にいいわよこの程度。何も苦じゃないわ。たまにはこういう気分転換もいいと思うしね。みんなも着替えるのは好きにすればいいんだから」
こういうこともあり、施設内で着せ替えが流行りかけるのはまた別の話。
「あ、あの……昨日の夜に……敵を鹵獲したと聞きました……」
潮が恐る恐るそれに触れる。鹵獲ではなく保護なのだが、今の潮にはどちらにせよ、敵対していた者が同じ施設内にいるというだけでも恐怖が湧き上がる。
そして飛行場姫は、それが潮の姉妹艦であることを伝えていないようである。特に漣は潮の中で最大級のトラウマ。恐怖を溢れさせた原因と言っても過言ではない。いくら漣が正気に戻っているとしても、顔を合わせたら発狂が間違いないレベル。
そのため、潮とは顔を合わせることなく鎮守府に引き取ってもらう予定だった。朝食の後に鎮守府に連絡し、昨晩の戦いの詳細を聞いてもらいつつ、今後のことを話し合うことになるだろう。
「大丈夫よ。潮には危害を加えないし、その子達はもう敵では無くなってるの。春雨がちゃんと治療したわ」
「うん、そこは大丈夫。元の艦娘に戻ってるから安心して」
飛行場姫と春雨が潮を宥めるように説明するが、それだけでは潮の恐怖は払拭されない模様。目に見えない恐怖なのでそんなものである。
だからといって春雨の怒りがさらに溢れることはない。潮のことを正しく理解しているために、その態度で苛立つことはなかった。
「まぁアンタは気にしなくていいわ。顔を合わせるのも怖いでしょうから、内密に処理しておく。鎮守府から引き取りに来るでしょうけど、その時もアタシ達が傍にいてあげるから」

「は……はい、ありがとう、ございます……」
鎮守府からの来訪者にも恐怖を感じてしまうだろうが、飛行場姫と一緒にいれば大丈夫だろう。
「で、でも……私、頑張って……みます。怖くて怖くて仕方ないですけど……妹姫さん達が私のためにいろいろしてくれますから……」
それでも勇気を振り絞って前を向こうと努力する。昨晩の戦いのことを伝えられていないにしても、この施設を守る者として、そして自分を守るために、潮は少しずつ勇気を手に入れていく。
「潮ならやれる」
「潮は強い」
「我々も手伝う」
「なんでも言って」
潜水艦姉妹もそんな潮の頑張りを評価し、後押しするように両手を握る。昨晩もずっと一緒にいたようで、潮が飛行場姫の次に安心出来る存在となっていた。
潜水艦姉妹も何処となく柔らかい雰囲気を出すようになっており、まるで潮とも姉妹のように接する。
だからだろう、潮は潜水艦姉妹に対して、僅かにだが恐怖とは違う、笑顔を見せるようになっていた。壊れているので恐怖からしか自分の感情がわからないのだが、この感情は喜びであるとすぐに判断出来ているようだ。
本当の姉妹であり親友である者達がすぐ近くにいることは、最後まで隠し通すつもりのようだが。
「はぁい、それじゃあ朝ごはんを食べましょうねぇ。今日もちょっと忙しいわぁ」
ここで最後に中間棲姫がダイニングへ。若干疲れているようだが、今の今まで漣達の部屋に行っていたからである。
曙はまだマシなのだが、漣と朧は今までやらされてきたことを反芻してしまって錯乱しかけたため、コロラドと大鳳が手伝って押さえつけていた。今は落ち着いているものの、ガックリと項垂れて本来の明るさなどが完全に失われているようだ。

「鎮守府には朝に連絡を取るわぁ。春雨ちゃんと海風ちゃんは、また同席してもらってよかったかしらぁ」
「はい、問題ありません。提督に今の私を知ってもらう必要があるので」
「卒倒しなければいいんだけれどねぇ」
　つい先日からあまりにも変化している春雨を見て、堀内提督がどういう反応を示すかはわからない。
「その後は、保護した艦娘ちゃん達を引き取ってもらうために、いつもの調査隊の子達がここに来ると思うわぁ。潮ちゃん、ご挨拶しておく？」
「……その……状況次第で」
「そうねぇ。無理はしないようにしましょうねぇ。妹ちゃん、潮ちゃんのことはお願いねぇ」
「ええ、任せて」
　調査隊として来る者達も、春雨の変貌に驚くことは間違いない。特に山風達白露型の妹達は、豹変とも言えるくらいの違いにどんな反応を見せるか。
「哨戒は白露ちゃん、ジェーナスちゃん、ミシェルちゃん、大鳳ちゃんねぇ。昨日の今日で何かあるかわからないけど、気をつけて行ってきてちょうだいねぇ。それじゃあ、1日よろしくお願いね」

　どうであれ、昨晩の大混乱から一転して平和な1日が始まる。しかし、平和なのは今だけとなるだろう。

豹変した春雨

朝食後、各々自分のやるべきことを始めていく。午前の哨戒や農作業、漁といつもの施設の行動に加え、中間棲姫が鎮守府への連絡を始める。春雨と海風は中間棲姫に頼まれているので、ダイニングに残った。

ここ最近の報告は、堀内提督のみならず、大将と大塚提督も加わることになる。春雨達はそういう場の対談に参加するのは初めてではないが、怒りも溢れた状態で参加するのは当然初めて。そのことについても提督達に報告するつもりでここにいる。

それに、漣から聞き出した情報をはっきり知っているのはこの2人。他にも戦場にいたものはいるが、この場に相応しいのは尋問を執り行った春雨である。

「ごめんなさいねぇ。また話さなくてはならないことが出来たの。急ぎの用だからそちらのことも考えずに連絡させてもらったわぁ」

中間棲姫の第一声。画面内の人間達は、急いできたわけでもないようで、いつも通りの冷静な表情。その隣に立つ秘書艦達も、いつもの調子である。

ただ、堀内提督の秘書艦である五月雨だけは、異変にすぐさま口を出した。

『あの、春雨……どうかしたんですか？』

そもそも以前に見た時と制服が違うため、対談の前に聞いておきたかったようである。堀内提督も春雨の変化には気付いており、聞いていいものかどうか決めあぐねていたらしい。

「そのことも説明させてもらいます。姉姫様、これは私から説明した方がいいですかね」

「そうねぇ。私は現場にいたわけではないし、春雨ちゃんが全部聞いているのだから、春雨ちゃんが説明した方が伝わるかもしれないわぁ」

「それでは、ここからは私が。海風、私に何かがあったら遠慮なく止めてね」

「はい、お任せください」
話している間に怒りが溢れていく可能性があるので、事前に海風に念を押しておいた。そうしておけば海風も躊躇わない。
「端的に話しますね。昨晩、泥に侵蝕された者達と交戦しました。その人数は3人。漣、曙、朧になります」
先日に潮を保護したと聞いているため、ここに姉妹艦が揃ったことに驚きを隠せなかったのは大将である。漣と曙については聞いていたが、朧まで取り揃えているとなると、偶然ではないと考えるのが普通。おそらく相性の良さで組ませただけだろうが、出来過ぎにも思えた。
「そこでその、詳細は後から話しますが、私が漣ちゃんの侵蝕が治療されていない状態で尋問をし、敵部隊を指揮していた者、龍驤の居場所を聞き出しました。正確な場所はわかりませんが、大まかな場所はわかりましたので、皆さんに展開しておきたいと思います」
そう言うと、漣から聞き出した方向や距離から大体の場所を3人の人間に計算してもらい、ほぼ居場所は確定というところまで持っていくことが出来た。
そのままの流れで、敵の戦力や今の龍驤の姿、そして敵の使える力の説明をしていく。
龍驤が本当に泥に変えられてしまっており、他者の身体を器として扱えるという状態に複雑な気分になりつつも、現在は空母棲姫の身体を使っていることがわかった分、対策は考えられるだろう。
それに、ドロップ艦ですら熟練の者と同様の戦力として扱えるように出来るコスチュームは正直厄介極まりないモノ。見つけた艦娘も深海棲艦も、侵蝕してしまえば即戦力。それがドロップ艦でない熟練者だった場合は、手がつけられないモノになりかねない。
『明石に対策を強化するように話をしておこう。そのコスチュームが泥で出来ているのなら、今使っている機材でも対策が出来るんだね？』
「はい。それは実際に可能であることは確認済みです。泥刈機の波長を当てたところ、コスチュームが消し飛ぶことを確認しています。そ

のため、対処のためには必須かと」
　あのコスチュームは消し飛ばしたところで次から次へと再生するため、波長を当て続けることが必要になるだろう。その辺りは、その仕組みさえ明石に教えておけば対策をしっかり作ってくれる。それだけ信頼出来る存在である。
『質問なのだが、そのコスチュームとやらは、泥で出来ていると言っていたな。ならば、艦娘でも深海棲艦でも、触れてしまったらアウトということか』
「はい、本人からも聞いていますが、素肌に触れられたら侵蝕が始まります。そしてそれだけでなく、泥をばら撒く魚雷など使ってきますので、こちらを始末することよりも、仲間を増やすことに特化しているようにも思えました」
　大塚提督からの質問には即座に答える。効率重視で考える大塚提督にとっては、それを使う者がどうなるかも知っておく必要がある内容ではあるが、それ以上にどのようにして被害を最小限にしつつ勝利するかが重要。
　泥持ちに触れられた時点で、仲間が1人減り、敵が1人増える。そしてそれは、鼠算式でどんどん増えていくのだ。苦心して育て上げた部下が相手の戦力になるなんて言語道断。
『触れず、触れられずに、どのようにして対処した』
「あの泥は叢雲ちゃんと今の私には通用しません。叢雲ちゃんには先に泥を含んでいたという特例的な耐性がありました。私は……少し後で話しますので」
『耐性持ちなんているのか。それについては覚えておこう』
　後付けで耐性を持たせる手段を研究することは、大塚鎮守府では難しい。それもまた堀内鎮守府の明石による研究が進むことで、何かしらの対策が出来そうではある。
　それだけ聞いて、大塚提督はこれ見よがしに大きく溜息を吐いた。
『俺の鎮守府でも侵蝕騒ぎがあったが、敵は随分と狡い手段を使ってくるものだ。自らの手で部下を育てようとしないとは、程度が知れる』

「全くです。強化出来るとはいえ、育成の手を抜いているとしか思えません。横着者ですよ」
春雨のこの物言いに違和感を覚えたのは、やはり堀内提督と五月雨である。大将や吹雪も、春雨という艦娘はこういうことを人前でやるような娘ではないことは知っていた。見た目だけでなく、中身も何処か変わってしまっていることが、これで明確になる。
『それで、春雨に変化があるのは、その戦いのせいなんだね』
「はい。私はその戦いで、感情を溢れさせました。艦娘から深海棲艦へと変化した1回目は『寂しさ』でしたが、2回目に溢れた感情は『怒り』です。叢雲ちゃんと同じ、ですね」
やはりと堀内提督は納得した。確かに春雨は艦娘だった頃どころか、つい最近まではこんな冷たい表情をする少女では無かった。怒りが溢れているからこそこうなってしまった。先程の物言いといい、春雨は以前の春雨とは違うとわかる。
「五月雨が思ったのはこれだと思うんですけど、その、溢れた代償で両腕を失ってしまいました」
画面越しに両腕を消した。一部欠損がある者がいることは知っていても、現実に目の前でこういうことをされるのは初めてである大塚提督は、驚きで目を見開いていた。隣の電も口に手を当てて言葉もない。
それを知っていても、春雨がこうなっているということが、堀内提督と五月雨にはショックだった。脚を失っていると聞いた時もショックだったが、さらに腕なんて聞いたら言葉を失う。だが、話を先に進めるために、堀内提督は続ける。
『春雨がそれほどの怒りを感じたことが、その戦闘で起きたということか。君は僕が知る限り、あまり怒りを表に見せないようなタイプだった。それでも、感情が溢れてしまうほどのこととなると……まさか、海風が』
「……はい。私の目の前で、侵蝕されました。海風だけではありません。薄雲ちゃんと、戦艦様も同じように。仲間の、妹の尊厳を穢されたのが、どうしても許せなかった。そして、それがどうにも出来な

かった私自身に怒り狂った。だから……だから、私は、こうなりました」
　当時のことを思い出し、表情に明確な怒りが灯った。それを抑えるため、海風がすぐその手を握り、落ち着いてもらえるように力を込める。もう温もりは感じなくとも、握られているという感覚だけは残っているため、それだけでも心が多少は落ち着く。
「怒りの溢れた私は、その場で暴走しました。目に見えるものを全て破壊し、自らの身を滅ぼしながら、両腕だけでなく、理性も、感情も、記憶も、全て燃やし尽くしながら暴れて、暴れて、暴れ尽くしました。そのまま続けていたら、私は身体全てを失っていたと思います」
　しかし、春雨がここにいるということは、それを食い止めることが出来た何かがあったということ。そしてそれは、画面越しで見てもわかりやすいこと。海風が何らかの手段で侵蝕を打ち払い正気に戻って、暴走する春雨を止めた。そこまでは辿り着けた。
「詳細は省きますが、私は海風のおかげで暴走がこの程度で収まりました。腕の1本や2本で済んだなら、全てを失うよりはマシですね。それでその時に、今は保護されている3人に対して、私が尋問をしました。あとは先程の情報を聴き出して、3人を治療し、保護しました。戦いについては以上です」
　昨晩の少しだけの間で起きた出来事が、春雨の命運を変え、何人にもトラウマを刻み込み、そして勝利への道を作り上げた。勝利は勝利でも、辛勝としか言えないだろうが。
「提督くんには、その3人を引き取ってもらいたいのだけれど、良かったかしらぁ」
　中間棲姫の問いに、すぐに反応出来なかった。変わり果てた春雨に強いショックを受けており、机の下、画面に見えない場所で、血が滲みそうなくらい強く拳を握りしめていた。
　自分の与り知らぬ場所でとんでもない事件が起きており、元々部下だった者がより心を壊す結果になったことを悔やむ。知ったところでどうにも出来なかった可能性は高いものの、一切手が出せなかったのは悔しくて仕方ない。

それは五月雨も同じだった。五月雨も春雨の妹なのだから、鎮守府の中でも特に仲がいい相手。その春雨が、今までに見せたことのない暗く冷たい表情をしていることに、悔しさ以上に悲しさが湧き上がってくる。何故春雨ばかりこんなことにと、その境遇の悲惨さに逆に泣きそうになってしまった。
「提督くん？」
『……あ、いや、すまない。保護された3人の艦娘の引き取りだったね。勿論引き受けよう。この対談が終わり次第、いつもの調査隊を向かわせるよ』
「ありがとう。助かるわぁ」
２人の心境は中間棲姫にも伝わってきた。それ故に、深追いすることはしない。
『春雨、私からも質問いいかしら』
「はい、何でもどうぞ」
ここまでは聞き専となっていた大将がここで口を開く。
『貴女は二度目の感情の溢れが起きたと言ったわよね。それによって、貴女は何か変わったことは？　あまりこういうことは言いたくないけれど、暴走して暴れ回っただけでは済まないんじゃないかしら』
核心を突こうとする大将の言葉に、春雨はほんの少しだけ眉を顰める。まるで、春雨の中で進化した辿り着く力のことを見透かしているような言い方。
「私の中の辿り着く力が変化、進化しました」
『進化？』
「はい。今までの私の特性は、『最善の答えに辿り着く力』だったんですが、今の私の特性は、『望み通りの答えに辿り着く力』だそうです。この力のおかげで、私には泥の侵蝕が通用しなくなっています。私が望んでいないので」
淡々と説明するが、言っていることはとんでもないこと。全てが春雨の思い通りになると言っているようなものである。実際に触れた瞬間に誰をも侵蝕する泥が効かないという時点で相当なモノ。
『……それは、常に発揮し続けているのかしら』

「いえ、今は出ていないみたいです。その条件はまだわからず。ただ、戦闘中は使えていました。効果の範囲は私の視界内ということらしいです。自分でもはっきり理解しているわけではないんですけど」
『そう……』
大将は考える。この春雨の力は、あまりにも強力で、あまりにも危険であると。春雨自身が制御出来ているようにも見えず、しかも怒りが溢れていることまで考えると、何かの弾みでまた暴走しかねないのではないかと。
「私は既に『観測者』様の監視下に置かれることになっています。私の力が摂理に反するということですので。なので、これ以上監視とかそういうのを受けるのは、ちょっと気に入りませんね」
そして、春雨からも大将の考えを見透かすような発言。
「私を危険視するのは私自身でもわかりますよ。今でこそ常に発動しているわけではないですけど、全てが私の思い通りなんて言われたら、敵だけでなく味方だって私のことを要注意人物として考えるのは当然です。でも、1つ約束出来ることがあります」
『それは？』
「『観測者』様にも伝えていないんですが、どうせ聞いていると思うので、ここで話しちゃいますね」
一呼吸置いて、決意を固めたような視線でカメラを見据える。
「この戦いが終わったら、私は私自身のこの力を捨てようと思っています」

不要な力

「この戦いが終わったら、私は私自身のこの力を捨てようと思っています」

人間との対談の最中、春雨はそう言った。得てしまった『望み通りの答えに辿り着く力』は要らないと、春雨自身が考えていた。

『捨てることなんて出来るのかしら。手に入れたのも自分の意思では無かったのでしょう？』

『俺ならば、そもそも捨てようとは思わない。それを恒久的な平和に使おうと考えてしまう。野心と言われてもおかしくはないが、今の世界を正すにはあまりにも効率的なのでな』

『大塚提督の言いたいこともわかるわ。ただ、そもそも捨てられるか、春雨にその意思があるのか、そこに尽きるわね。こういう言い方は申し訳ないのだけれど、いくら貴女が今まで正しいことをしてきたとしても、今は怒りが溢れているのでしょう。その言葉が口先だけでないとは限らないわ』

当然の疑問が大将から飛び出す。大塚提督も、そんな力があれば捨てることなんて選択しないと言う。

深海棲艦の特性というのは、こういう力が欲しいと思って手に入るモノではない。ただでさえ、何かしらの力が欲しいと思っていても手に入らない者もいれば、手に入った力が無用の長物である者もいる。あまりにも限定的で使い方がわからない者すらもいる。

そんな中、春雨が手に入れた力は、いわば何もかもを自分の思い通りにする力だ。普通の人間、艦娘、深海棲艦ですら、その力は不要とは感じることは無いだろう。むしろ、そんな力を持って慢心しないわけがないし、野心が芽生えてもおかしくないのだ。それこそ、春雨が黒幕に代わって世界を我が物にしようと考えてもおかしくない力。

それが無いように『観測者』は春雨を監視するとしているし、大将も僅かにでもその不安があるのなら対策を取るべきと考えはしていた。

「わかりますよ。自分で言うのも何ですが、こんな便利な力……まぁ

私自身使いこなせているとは言えませんけど、望み通りになるだなんて、普通は失いたくないと思いますもん。それに、手元に置いておきたいと思うヒトは沢山いるでしょうね」
　そんな相手にも春雨は臆さない。むしろ、冷ややかな表情はそのままに、全てを見透かすような瞳で画面を眺める。
「私の言葉を信じてくれとは言えません。今の私に信憑性は無いと言われても、私は何も言い返せません。でも、一応私の言葉を聞いてもらえれば」
　ここまで否定する理由は無いので、大将も春雨の言葉を聞く。それが上っ面の言葉かどうかは聞いてみなくてはわからない。
「今の私が望んでいることは、この施設で平和に楽しく暮らすこと。この身体になってしまった以上、鎮守府に戻ることは出来ません」
　この選択をさせなくてはいけないのは悲しいこと。表には出さないように、堀内提督と五月雨はより強く拳を握りしめる。
「私達が戦う必要が無い世界になれば、こんな力は要りません。そもそもこの施設は戦うことなんて望んでいないんですから。その一員として、私も同じ気持ちです。戦わないならば戦わない方がいい。そして、戦わないならば、こんな自分の思い通りに出来る力なんて全く必要無いんですよ。仲間達と楽しく生きていくためには、むしろ邪魔な力ですから」
　元々部下だったことを抜いても、この春雨の言葉には嘘が交じっているようには思えなかった。本心から施設の平和を望み、戦わずに済む状況を望んでいる。
　艦娘の時とは違う平和ではあるものの、春雨は何も変わっていない。怒りと寂しさが溢れ、心が二度も壊れてしまっていても、根幹の部分は何も変わっていないのだ。
「今この施設の脅威である2つ、黒幕と龍驤をどうにか出来れば、こんな力は必要無いです。それとも何ですか。もしかして、今の脅威が失われれば、次の脅威として私やこの施設を見定めて、平和を望む私達に攻撃を仕掛けますか。そんなこと、しませんよね」
　強い力を持つ者はいつだって脅威になる。今は共通の敵として黒

幕がいるために協力出来ているが、それが終われば次は艦娘達よりも強力な力を持つ施設の者達が脅威となる。そう考える者は確実にいるだろう。

春雨としては、今こうやって話している人間達には、そんなことを考える者はいないと信じている。しかし、ここにいない者、春雨も知らないような者達がどう考えるかなんて、今この場で知ることは絶対に出来ない。

あちらが保険をかけるなら、こちらも保険をかける。ただそれだけ。施設の平和のために。心の平和のために。

『勿論、そのつもりは無いわ。今の戦いが終われば、貴女達の平和を約束する。良き協力者として。生活の基盤が元に戻るまでは、出来る限りの援助もしたいと思っているもの』

「はい、そうしていただけると、こちらとしてもありがたいです」

少なくとも、今の春雨からはその力を自分のために振るうようには見えなかった。自分のことはどうでもよく、仲間達のために物事を考えていく性質はそのまま。

そして、本心を押し隠しているようにも見えない。春雨は壊れていても、隠し事も嘘を吐くようなこともしなかった。それは艦娘の時から何も変わっていない。

「ただ、自分でこう言っておいて何ですが、本当にこの力が捨てられるかはわかりません。望む通りに出来るのなら捨てられると思いますけど、何かしらの理由で不可能だった場合は、私は脅威として判断されてもおかしくないので、お好きなようにしてください。『観測者』様からの監視も仕方ないことですし、拘束されても始末されても文句は言えません」

自分で言いながらも、やはり上手く行かなかった時のことは想定しているようで、保険もかけている。

むしろ、まず大将からある程度の言葉を引き出しておいてから保険の話をし出した辺りは、強かになっている。堀内提督は複雑な気持ちでそう感じた。

『その時はその時に考えましょう。貴女は考えを曲げることは無いで

しょう？』
「勿論。その分、私はこの力を敵を倒すことにしか使わないことを誓いますし、もし私の力で仲間達が害を被るようなことがあったら、即拘束でも始末でもいいと約束出来ます」
『それならば、貴女は自由にしてくれて結構。仲間であってくれるなら、これまでと同じだもの。勿論信じるわ』
　大将も春雨に対しては少しだけ強気に出る。艦娘時代の上下関係は関係なく、対等として見ているからこそ、あちらの強かさにはこちらも同じように接するとしたからである。
　当然ながら、大将だって嘘を吐かない。春雨を信じるという言葉には、隠れた本心など存在しない。言葉通りの意味合いで口にした。
「ありがとうございます。そう言っていただけて、心の底から安心出来ました。今までの傾向から、絶対に信じてくれるとは思っていたんですが、今の私の心では信頼が置ける貴女方でもどうしても疑いが出てしまうんです。怒りが溢れたせいだと思います。気に障ったのならすみませんでした」
　ここで謝罪の言葉が出るのも、春雨が完全に壊れたわけではない証拠。どうしても苛立ちが表に出そうになり、そこから繋がる負の感情が次から次へと引っ張り上げられるのは厄介なのだが、その奥底には本来の優しさは残っている。
『いいえ、貴女には貴女の考え方があるし、怒りが溢れてしまったことも理解しているわ。気に障るなんてとんでもない。驚きはしたけれど』
「ありがとうございます。もう少し、溢れる怒りに慣れたいと思います。ここには先達もいますので」
　先達とは無論、叢雲である。昨晩の戦闘後に怒りとの付き合い方を伝授すると話していたくらいなので、叢雲としても自分と同じ感情を溢れさせた春雨を気にかけているようである。
「……提督、私はこんなことになってしまいました」
　最後に、堀内提督に声をかける春雨。顔色が悪く見えたものの、春雨の声にしっかり反応して視線をちゃんと合わせる。

『どうであれ、君は僕達の知っている春雨だ。何も変わらない。確かに怒りが溢れているのは理解出来たが、だからといって全てが塗り潰されているわけでもない。今の君は僕達にも怒りが湧くのかい？』
画面の中に、堀内提督のみならず、五月雨もしっかり映り込む。春雨の豹変に驚きつつも、ここまでの話を静かに聞いていたことで、今の春雨を受け入れた表情。
春雨としても、この堀内提督の力強い目と五月雨の優しい視線は、一切忘れていない。自分のことを、艦娘春雨として見てくれている。
「そんなわけないじゃないですか。提督はいつまでも私にとっては尊敬する上司ですし、五月雨は頼れる妹です。それは変わりません」
『よかったぁ……これで『五月雨のことは別に』とか言われたらどうしようかと』
「言ってほしかった？」
『そんなわけないでしょ！　私にとっても、春雨は誇らしい姉なんだから』
２人して笑顔を見せる。五月雨はともかく、春雨もその笑顔からは怒りが溢れたとは感じられない、心の底からの笑顔だった。
やはり、仲間達、そして姉妹と接すると怒りが薄れるようだ。海風はその辺りもしっかり覚えておく。春雨の心の平和のために、自分の全てを懸けて尽くしていくために。

おおよその情報共有が完了したため、対談はここで終了。タブレットの画面が消えたことを確認してから、堀内提督は全身の力が抜けたかのように椅子にドップリと深く座る。そして、大きく息を吐いた。五月雨も疲れ切ったかのように息を吐き、その場にへたり込む。
春雨が変わり果てていたことに大きなショックを受け、画面の前では平静を取り繕っていたものの、内心では倒れそうなくらいに辛かった。今はもう取り繕う必要が無くなったため、ここまでダラけてしまっていた。
「……正直、悔しくて仕方ないよ」

ポツリと提督が呟く。
「私もです……。春雨があんなことになってただなんて」
五月雨もそれに応える。
「我々にはまだ力が足りないということなのか。確実に一歩ずつ進めていると思っていたが……」
施設と協力して黒幕をどうにかする手段を次々と作り上げ、施設の力を借りずとも鎮守府の戦力だけで全てが終わらせられるように進んでいたはずなのに、与り知らぬところでまた守るべき施設の者達が被害を受けていた。
しかも、最もよく知るであろう春雨がああなってしまっていたのだ。無力感が凄まじい。
「だが、折れるわけにはいかないさ。我々はやれることを全力でやり続けなければ」
「ですね。出来ることはまだまだありますし」
しかし、こんなことでは挫けない。ここで進むのを止めてしまったら、終われるものも終わらない。
あの施設が守れなければ、他の全ての守りたい場所を守ることなんて出来やしない。
「まずは調査隊だ。３人の艦娘を保護するために準備しておこう。今の話を聞く限り、おそらくだが制服も用意した方がいいな。手配にどれだけかかる」
「妖精さんのことなので、頼めばすぐに出してくれますよ」
「なら、すぐに準備だ。……一応、明石にも行ってもらうか」
「そう……ですね。徹夜していないようなら、一度春雨のことを見てもらってもいいかもしれません。というか話題を出したらダメと言っても行きそうな気がしないでもないです」
「確かにな。今後の解決のためにも、明石に知見を広げてもらうか。大淀にも一緒に行ってもらえば制御も出来るし、一度研究から離れて休憩してもらうのも必要だ」
こう話しながらも、五月雨は提督の体調を気遣っていた。確かに明石にも休息は必要だが、それ以上に休まなくてはいけないのは提督

だ。
　だからと強硬手段に出る。
「提督、今回の調査隊、久しぶりに私も行きたいなって思ったんですけど、いいですか？」
「そう、だな。春雨のこともあるし、話をよく聞いてきてくれ」
「はい。じゃあその間は、提督は休んでいてくださいね。秘書艦不在ということで、小休止しましょう」
　かなり強引な手段だし、秘書艦がいないからといっても業務を滞らせる理由にはならない。故に、その言い分を無視することも出来る。
　だが、今の五月雨には提督を休ませるという強い意志を感じた。春雨の件で精神的に参っているのは確実であるため、ここで心身ともに休んでおかなくては今後の鎮守府運営に支障が出てしまう。
「……すまない。正直なところ、僕も一度休みを取りたかった。調査隊が出ていったら仮眠させてもらう」
「はい、それで。なるべく何事もないようにします。もし緊急で連絡しなくちゃいけなくなったら」
「気にせず連絡してくれ。仮眠もこの部屋でとるつもりだからね」
　今回の提督はやたらと素直だった。それだけ精神的な疲労が溜まっているということだろう。五月雨も今回の調査隊から帰ってきたら、一日休みを貰うということで落ち着いた。

　施設での一件は、鎮守府にまで影響を与えている。それでも前に進み続けなくてはいけないのだから、一休みは必要だろう。

それぞれの立ち直り方

対談終了後、鎮守府がすぐにでも調査隊を送ってくれるということで、施設側も3人の艦娘の受け渡しの準備を始める。準備と言っても、遣いが来たらそのまま引き渡すというだけなのだが、今回の3人は一度も鎮守府に所属したことのないドロップ艦。鎮守府の中で言えば、荒潮とほぼ同じような存在である。

現在は潮の目につかない別室に3人を待機させている状態。精神状態のこともあるため、あまり刺激をしない者として、コマンダン・テストとリシュリューがあてがわれていた。幸いなことに、食事も喉を通らないなんてことは無かったようで、2人の手料理をしっかりと平らげたとのこと。

そこに春雨と海風がやってくる。3人にはある意味トラウマを植え付けた張本人であるのだが、今から引き取られる鎮守府について最も詳しいものであるため、事前の説明役としてここに来た。

今は侵蝕されていないため、怒りが溢れている春雨としてももう敵対の意思は無い。艦娘としての自分を取り戻し、鎮守府で更生したら友達になろうとまで話していたくらいなのだ。故に、あそこまでやったとはいえここからは仲間だと考えていた。

勿論、春雨は自分が漣にやった所業は全て覚えている。怒りを制御しながらも、その怒りのままに尋問(拷問)をして情報を吐かせたことも。そしてそれは、その時はそうしなければ仕方なかったことと割り切るしかない。

「あら、ハルサメにウミカゼ。この子達の次が決まったのかしら」

扉の前にいたのはリシュリュー。門番というわけでは無いのだが、ひょんなことで潮がこの近くに来てしまった場合、やんわりと追い返すために見張っていた。

「はい、先程。私達が元いた鎮守府に引き取られることになりました」

「そう、それなら安心ね。貴女のところのＡｍｉｒａｌ(提督)は信用出来る人だもの」

「ですね。私の知る限りでは一番信用出来る人間ですから」

どんな者にも分け隔てなく信頼を置くのが堀内提督である。そうで無ければ、ここの姉妹姫が心を許すようなことは無いだろうし、今日まで長く付き合いが続くことも無かった。そういう意味でも、堀内提督は引き取り手として最高の選択肢である。

「様子はどうですか」

「アケボノは開き直ってるわ。あの子、どちらかと言えばムラクモやＣｏｌｏｒａｄｏと同じタイプだから。Ｉｒｒｉｔａｔｉｏｎ（苛立ち）が力に出来るタイプよ」

３人のうち、曙は最初から落ち込んでいるようには見えなかった。すぐにその時の心境を苛立ちながらも話してくれたくらいである。それが今も続いており、一番元気と言ってもいいくらいだという。

「オボロも、一晩で考えを纏めたみたい。あまり俯かなくなったわね」

「あの時は話せないくらいでしたけど、生真面目そうでしたし、うまく自分の中で割り切れたんですかね」

「かもしれないわ。とはいえ、明るいわけじゃないけど」

曙の次に解放された朧も、この一晩を使ってどうにか割り切った様子。そもそもの敵対していた時間自体がそこまで長いわけでは無かったのが大きい。しかし、あの戦場で薄雲と戦艦棲姫の２人を直接侵蝕させている経験がどうしてもこびりついてしまっているらしく、完全に吹っ切れるにはまだまだ時間がかかりそう。

「サザナミが一番の問題ね。俯いたまま。あまり表情も見えないわ」

「そう……ですか」

そして漣。龍驤の最初の器として活動していた記憶もある上に、あの戦場では策略を担当していたため、ドロップして今まで、誰かを陥れることしか考えていなかった。

そこにさらに春雨から受けた尋問（拷問）である。自分がやらされてきた行動の罪を心身共に刻み込まれてしまったことで、それが全て泥のせいだとわかっていても、全て自分の罪だと思い込んでしまう。

「……やりすぎたかな」

ボソリと呟く春雨。あの時は怒り任せ、さらには仲間達の怒りすらも背に受けて、その心が赴くままに漣を脅し、痛めつけ、心を陵辱し

た。
侵蝕されているにもかかわらず、主人を売ることを良しとするくらいにまで憔悴させたのは、ほかならぬ春雨である。絶対に敵わない相手であると教え込んだ結果が今に至るわけだ。
割り切っていても、実際にそういう状況を突き付けられると、根幹に優しさが残っている春雨には少しだけブレが発生する。
「姉さんは、あの場で最善の行動をとりました。このことを気にする必要はありません」
間髪容れずに海風が口を出す。これは大鳳の時と同じで、ああしなければ最善の答えに辿り着けなかったと。
少なくとも侵蝕されていた漣は、隙さえあれば仲間達を置いてでも撤退するつもりだったし、春雨のことだってギリギリまで出し抜こうとしていたくらいだ。あの状況でもまだ勝ち目を探しており、少しでも甘く見ていたら漣だけは撤退していた可能性すらあった。仲間を犠牲にしてまで。
それを防ぐためには、それこそ脚を折るか心を折るかのどちらかだった。前者は叢雲なら一切の容赦なく、心を痛めることすらなく繰り出していただろう。そして春雨は後者を選び、完膚なきまでに叩き折ったに過ぎない。
「ん……ありがと、海風。でも、漣ちゃんには一言二言は話しておいた方がいいと思う。あの時は本当に、頭に血が上ってたから。今ならもっと冷静に話せるよ」
「姉さんがそれを望むのなら、私は付き従うのみです」
海風はそれ以上は何も言わない。少なくとも、春雨に対してはいつも通りの態度。心の中もいつも通り、姉の偉大さを讃えているモノである。
海風は自他共に認める春雨至上主義だが、もしこれで春雨が間違ったことをしようとしているのなら、全力で止めに入ると決断している。身を滅ぼす暴走が春雨の意思だったとしても、それは間違っているから、命懸けで止めに入ったのだ。
今のこの春雨のしようとしていることは、間違いでは無い。春雨の

根幹にある優しさから出たモノ。ならば、止める必要はない。
「今ならまだ落ち着いている方だから、説明は出来ると思うわ」
「わかりました。部屋に入らせてもらいます」
リシュリューに許可を貰い、3人が待機する部屋へと入った。コマンダン・テストも、少しだけ部屋の端に寄る。
まず最初にあったのは、驚きの視線。そしてその後、三者三様の感情。
曙は開き直っているというだけあって、春雨の姿を見ても何も思っていない。春雨はやるべきことをやったと理解し、あの激痛の中の治療も感謝こそすれ憎む理由などないと考えた。自分だって同じようにするから。
朧も考えを纏めた結果、どちらかといえば感謝寄り。あのまま侵蝕されたままなら、あの時以上に非道な行いを続けていたと思えば、まだ罪を重ねすぎていないあの段階で止めてもらえたのはありがたいものである。
そして漣はというと、リシュリューの言っていた通り、終始俯いていた。それを春雨は見逃さなかった。春雨の顔を見た瞬間、ヒッと息を呑んだのを。そして、シーツを深く身体に纏わせて部屋の隅でジッとしていた。
「アンタが直々に来るってことは、あたし達の処遇が決まったのね。やっぱり解体かしら。人類の敵になったようなものだし」
「そんなことないよ。あの時は人類の敵だったけど、今は違うでしょ？」
「当然。アイツらの思い通りになってたのが気に入らなくて仕方ないわ。出来ることなら、あたしの手でぶち殺してやりたいわよ。練度が足りないのが腹が立つわね」
勝ち気な曙を見ていると、確かに叢雲タイプだと納得。罪悪感を怒りに変え、そしてそれを力に変える。その力のおかげで後ろを向くことなく、次に活かそうと躍起になっていた。これならば、燃料は違うにしろ荒潮のように即戦力になれるように訓練を始めるかもしれない。

「解体じゃないってことは、拘束か何かされるのかな」
「ううん、ただドロップ艦として鎮守府に引き取られるだけ。着任しておしまい」
「えっ……だって朧達はあんな酷いことを」
生真面目な朧は、やはり侵蝕されていたとはいえ自分の罪として認識し、罪を償う方向で考えていた。
しかし、そんなわけがない。事件に巻き込まれた者達は例外なく保護され、どういうカタチであれ更生の道を辿ることになるだろう。罪の意識を無理矢理持たされたようなものなのだから、それと上手に付き合い、艦娘としての生き方にして行ってもらいたいと。
「私達が元々いた鎮守府が受け入れてくれることになってる。覚えてると思うけど、龍驤が狙ってるっていう鎮守府のことだよ」
「……この施設を手中に収めたら、ここで手に入れた戦力も使って鎮守府を潰すって言ってた……多分。誰が何処でどうやって言ってたかが全然思い出せないのが悔しいけど」
「うん、みんな同じことを言ってる。使うだけ使っておいて、必要無くなったら足がつかないように自分に関する記憶が泥と一緒に吐き出されるんだよ」
それを聞いたら朧も怒りが湧き上がるように拳を握り締める。生真面目であるが故に、そのような卑怯なことが許せない様子。曙とは違うベクトルの怒り。
「この後すぐってわけじゃないけど、鎮守府から調査隊がここに来るの。みんなはその部隊に引き取られることになってるから。大丈夫……だよね？」
「朧は大丈夫。ぼのは？」
「構わないわ。アンタ達の話を聞いてる限り、そこの提督はクソ提督じゃ無さそうだし」
何やら提督という存在に対して思うところがあるようだが、そこは絶対に大丈夫だと春雨が保証した。むしろ逆に、今は心労が溜まっているから、変なプライドで突っかからないでくれと念押しまで。
曙としても、生まれて今までいろいろありすぎて、プライドも何も

あったものではない。だからといって提督にホイホイ従うようなこともしたくないようだが、そこには罪悪感が絶妙に絡み合って複雑な感情のようである。
「漣ちゃんにも勿論鎮守府に行ってもらうけど、問題ないよね？」
俯いている漣に声をかける春雨だったが、その声を聞いてビクッと震えた後、反応を返すことも出来ずにシーツを頭まで被る。
「アンタにやられたこと、相当キテるみたい。それに、漣が一番いろいろやらされてたみたいだから、あたしらよりも罪悪感が凄いみたいよ」
「……そっか」
曙から説明され小さく溜息を吐いた春雨だが、お構いなしに漣の前にしゃがみ込む。
「ごめんね漣ちゃん。私もあの時は頭に血が上ってた。言い訳にしかならないかもしれないけど、私が怒り憎むのは泥に侵蝕されていた漣ちゃんであって、解放された今の漣ちゃんじゃないの。もうこちらを出し抜こうとか、陥れようとか考えてないんだよね。だったら、顔を上げてほしいな」
優しい口調なのだが、節々に溢れた怒りが見え隠れしているためか、漣は春雨がこう話しても反応は無く、ブルブルと震えていた。
理由は勿論いくつかあるが、1つはやはり、今までやらされていたことに対しての深い罪悪感。最後の最後に仲間を見捨ててまで逃げようとした非道さもそれに拍車をかけている。今はまるで思い出せない主人のために何もかもを利用し、自分のいいように操ることに快感を覚えていた自分が許せない。
そしてもう1つが、春雨への恐怖である。今までいいようにやってこれたことで調子に乗っていたところに、その全て破壊する春雨が現れたことで勝ち目のない存在というものを知ってしまった。そのせいで、圧倒的な恐怖を感じてしまっている。
「漣さん、聞いてください」
そこに海風が近寄る。春雨は何をするのかと思いつつも、あえて何も言わなかった。

「侵蝕されていた貴女を救ったのは、紛れもなく春雨姉さんです。考えてもみてください。貴女は泥の影響とはいえ、悪虐非道の限りを尽くそうとしました。仲間を犠牲にすることにも罪悪感すら覚えず、敵を陥れることに無類の快楽を得ていた。でも、今ならばそれが悪であることを理解していますね。姉さんはその悪から貴女を掬い上げてくれた救世主、恩人なんです。理解出来ますよね」

ゆっくりと染み込ませるように語りかける海風。漣を開き直らせようとする説得ではあるのだが、節々に偉大なる姉への信仰心が見え隠れする。

「痛みや恐怖は仕方ないこと。それが貴女の罪を拭い落とすために必要なことだったからです。その痛みだけで罪が許されたと思えば、軽いものだと思いませんか。姉さんは貴女のために、貴女を救うために、自らへの痛みも顧みずにあそこまでのことをしたんです。全ては貴女に艦娘としての正しい道を歩いてもらうためです。それとも、それを全て無下にして、また悪意に呑まれますか。違いますよね。貴女は救われたんです。もう痛みも恐怖も無い、正しい道に戻ることが出来た。それは誰のおかげですか。そう、姉さんのおかげです」

漣の震えは次第に治まっていく。恐怖に支配されかかっており、正しい考えが出来なかったところに、海風のこの言葉。傷付いた心に染み渡っていくように、罪悪感が解きほぐされる。

救われた、恐怖はもう要らない、今が正しい道、次々と今の漣を肯定する言葉が投げかけられ、そして最後はそれが誰のおかげかを説く。

春雨がこれはまずいかもしれないと思った時には遅かった。

「姉さんに対して持つ感情は、恐怖でも怒りでもないんですよ。姉さんは貴女を救ってくれた偉大なるお方。非道な行いから引き揚げてくれた女神に対して持つ感情なんて、1つしかありません。もう、わかりますよね」

震えていた漣がゆっくりと被っていたシーツをはだけて顔を見せる。そして、春雨の顔を見た瞬間、恐怖とは違う感情が溢れ出していた。壊れるほどでは無いにしろ、それはもう意識の方向を曲げたよう

なもの。
「……漣を戻してくれて、感謝しかないッス……そんなお方を怖がるなんて……失礼、だよね、うん」
何やら引っかかる言葉を使ったものの、俯いていた漣は前を向こうと顔を上げた。
「漣も、頑張って開き直ってみる。辛いけど、怖いけど、でも今持つべき感情は、それじゃない……んだよね」
そして、自分の頬をパンと叩き、勢いよく立ち上がった。その表情は、本来の艦娘漣の持ち味である、お調子者の明るいもの。悪意なんて何処にも無い、屈託のない笑顔である。
「割り切る！　漣ちゃんはここから正しい艦娘として頑張る！」
「うん、それでいいと思う。あとやっぱり謝っておくね。あの時は」
「いやいやいや、春雨氏。あれは愛の鞭みたいなもの。あの時の漣はああでもしなけりゃ反省も何もしなかったでせう。むしろ、元主人を売らせるまでしてくれて感謝感激雨霰ですぜ。だから、謝らんでくだせえ」

打って変わって太陽のような輝きを見せ始めた漣は、春雨の怒りすら払拭しかけていた。

それぞれの進み方

いろいろあったが壊れかける程に落ち込んでいた漣が立ち直り、鎮守府への受け入れはスムーズに行くようになる。ずっと塞ぎ込んでいるような者を運ぶのは難しいし、自分から歩いてくれれば全ての楽になるだろう。

ただ、開き直らせ方に若干の難があり、前を向いたのは良かったのだが、漣も春雨に対してわかりやすく好意を見せるようになっていた。海風ほど露骨では無いとはいえ、春雨のおかげで元に戻れたという気持ちを隠そうともしない。どちらかと言えば、大鳳に近いイメージである。

「まぁ、開き直ってくれたのはいいんだけれど……」

春雨もここまでされると困ってしまう。困惑は溢れた怒りも引き寄せてしまいかねないので、そういう意味でもなるべく適切な距離を見計らってもらいたかった。そういう意味では、春雨とベタベタ出来るのは海風の特権。

「漣は春雨氏が平和に暮らせるように誠心誠意頑張るって決めたんですわ。んで、黒幕をぶっ倒したら定期的にここに聖地巡礼として」

「ここに来るんだったら調査隊に入れるように頑張ってね……今からここに来るけど、私の妹達がメインの部隊だから」

「ほほう、ならばまずは妹さん達と仲良くしなくちゃですなぁ」

先程までの下り切ったテンションから打って変わって喧しいくらいになっている漣。

これが本来の漣の性格。侵蝕の素体となっていた時は、この人懐っこさを感じる態度に悪意が交じるせいで嫌味にしかならなかったが、今は純粋に明るいお調子者というイメージに。調子には乗っても、嫌味を感じないという稀有な存在である。

「気を取り直したのはいいけど、クソ喧しいわ。漣、あんまり声上げんな」

「何さぁぼのたん、いいじゃないのさぁ」

「あまり喧しくすると、潮に気付かれるかもしれないでしょうが」

潮の名前が出ると、どうしても漣も黙ってしまう。漣が曙を手に入れたタイミングの話であり、真っ先に始末しようとした相手。しかも、そのせいで恐怖が溢れて深海棲艦化しているのだから、引け目は相当なものである。

曙としては、姉妹艦というだけではなく、一緒にドロップしたというなかなか無い縁もある。そのため、どうしても気にかかるようである。しかし、自分の存在そのものがトラウマであることも理解しているため、会いたいと思っても会わないことが潮のためになるのなら、それが辛い決断だとしても優先する。

「あのさ、朧その辺のことよく知らないんだけど、やっぱり会ってから鎮守府に行くのはやめた方がいいのかな」

ある意味部外者となっている朧が2人に問う。ここから鎮守府に引き取られた場合、次にここに来ることが出来るのは当分先と考えてもいい。運良く早い段階で調査隊に加わることが出来たとしても、練度の問題から戦いが終わった後くらいにはなりそうである。

だとしたら、今生の別れになるわけでは無いにしろ、挨拶くらいしてから出て行った方がいいのではと朧は話す。こういう繋がりを絶った状態は後悔するのではと。

「少なくとも、あたしと漣はやめた方がいいわよ。だって、潮がこうなった原因なのよあたし達。そんなの、面見(ツラ)せただけで暴れ回るでしょ。それは、潮のためにもならないわ」

「漣もぼのたんと同じ意見かな……ボーロは後々仲間にしたクチだから関係ないけど、ほら、一緒にドロップしたぼのたんを奪った上に、殺そうとしたわけだしねぇ。最悪、姿どころか声や名前だけでも発狂するんじゃね？」

「あり得るわ。恐怖が溢れたっつってんだもの。原因に関わること全部が怖いでしょ。実際潮がどんな感じか知らないけど」

朧はともかく、漣と曙は潮のためにも会わないでいきたいと考えている。そのため、鎮守府からの調査隊が到着しても、どうにか顔を合わせないように施設を出て行くつもり。

潮側も、飛行場姫と潜水艦姉妹がうまく隠してくれる算段である。

うっかり顔を合わせないように、コマンダン・テストとリシュリューがこの部屋での動向をしっかり伝えて、上手くいくように手を回す。今も春雨と海風に3人を任せて、コマンダン・テストは飛行場姫に現状を伝えに行っている程だ。漁に参加していても、艦載機でちょっと呼び出すくらいは出来る。

あとはここに来た調査隊の面々が息を合わせてくれれば良し。これで潮の発狂は抑えられるはずである。

「そっか。それが2人なりのケジメなんだ」

「そんな大層なものじゃないわよ。そもそも、あたし達だってこうなりたくてなったわけじゃないんだもの。漣はどうか知らないけど」

「望んでるわけないでしょうが！　漣はぼのたんやボーロ以上に抵抗出来なかったんだから！」

漣のこの言葉を聞いて、春雨がそういえばと何かを思い出したような表情を見せる。

「そうだ、あの時は消えるだろう記憶の部分を優先したけど、そこも聞いておきたかったんだ」

「うす、春雨氏の質問なら何でも答えさせていただきますぜ」

「漣ちゃんはどうやって侵蝕されたのかな。曙ちゃんのことは潮ちゃんにある程度聞いてるけど、漣ちゃんのことは全く知らないから」

曙は漣に泥を吐き出されて、それが全身に纏わりつくカタチで侵蝕していく様をマジマジと見せつけられたことを潮から聞いている。漣の体内に入れられていた泥は増殖型であり、おそらく昨晩の戦闘で使われていたものと同じ。

朧もおそらく同じだろう。海上で漣と出会い、泥を吐かれて侵蝕された。ドロップ艦であるが故に。

しかし、漣は最初の器と戦場で口走っている。初めて龍驤に侵蝕されたもの、そして、初めて龍驤を体内に収めた者という他にはない経験がある。そこは知っておいて損はないだろう。龍驤との直接対決の際に、仲間達の身体を奪おうと考える可能性もあるのだから。

「えーっとですねぇ、正直なところ結構あやふやにされちゃってんスけど、その瞬間だけはやたら覚えてんスよ……。漣もご存知ドロップ

艦だったわけですが、鎮守府に向かって動いてる時に、コールタールって言うんですかね、それっぽいものを見つけまして」
　漣はコールタールと表現したが、要するに泥だ。それが龍驤本体だったからこそ、泥というイメージには結びつかないくらいのモノに見えたのかもしれない。
「近付かんどこって思って迂回したんスよ。なのに、それそのものが近付いてきて、一気にやられちまいました。パッと思い出せるのはこんなもん。そこからの記憶が綺麗に飛んじゃってる。使われてる間の記憶……になんのかなぁ。漣達を使ってた元主人の面(ツラ)も思い出せないし」
「なるほど、その侵蝕のされ方って、やっぱり口？」
「いや、覚えてる限り、顔面に飛び掛かってきた後、穴という穴からガバガバと。うわ、なんか思い出したら気持ち悪くなってきた……」
　コールタールが顔面に纏わりつくとか、体験したことが無くても嫌な気分になるだろう。曙も漣にそれをされたようなものなので、侵蝕された時のことを思い出して嫌そうな顔をする。
「つまり、龍驤は既に自分のカタチを持っていない……？」
「その辺りが全く思い出せなくて。ぼのとボーロも？」
「全然。会ったことがあるはずなのに、どんな姿かもまるで思い出せないわ」
　朧も同じようで、無言で首を縦に振る。相変わらず、自分に繋がる情報だけは泥と一緒に抜け落ちて行く性質は変わらない。どんな侵蝕をされたかは覚えているのに、その元凶となる者には辿り着けないというのは、黒幕もそこから派生するカタチとなった龍驤も変わらない。
　この性質に対しても今の春雨には苛立ちに繋がり、明確に怒りを露わにする。艦娘や深海棲艦を心身共に弄んでおきながら、足がつかないように対策まで取っている狡猾さに嫌気が差してくる。
「姉さん、気持ちはわかりますが今は抑えましょう。私も姉さんの苛立ちはわかります。実際私も狂わされた者ですから」
「……そうだね。もっと制御出来るようにならなくちゃ。先駆者の叢

雲ちゃんにいろいろ教えてもらおう」
叢雲という名前を聞いてもピクリと反応する。特に曙は、侵蝕されていた間とはいえ、叢雲に散々な目に遭わされているため、嫌でも思い出してしまうようである。
「と、ともかく、話が逸れに逸れたけど、あたしは潮と顔を合わせるのは反対。あたし達のためでもあるし、潮のためでもあるわ」
叢雲の話題に向かわないようにするためか、無理矢理話を潮の件に戻す曙。そもそもはその話から始まっているのだから、これはこれで正しい。
潮に会わない理由が理解出来たため、朧も2人の考えには納得して賛成した。実際は朧くらいは顔を合わせられるかもしれなかったが、そこからどうしても漣と曙のことに繋がってしまうだろうから、3人揃って会わないという方針で行くことに決めた。
「向こうから会いたいって言ってきても、断った方がいいのかしら」
「そこは何とも言えない。望みは叶えてほしいとは思うけど、そうすると苦しむのが確定しているからやめてもらいたいし。私は潮ちゃんの意思を尊重したいんだけどね。そこは妹姫様とかがどうにかしてくれると思うから」
「ふぅん……まぁ成り行き任せにしておく。あたし達にそういうこと言う資格は無いと思うし」
物分かりがいい風に見えて、曙も現状には大分苛立っているようだった。

その頃、潮の側にはいつものように飛行場姫と潜水艦姉妹がついていた。恐怖に打ち勝つためという名目で、今までやってこなかった漁にも参加し、飛行場姫の教えの下、釣り糸を垂らしている。
艤装も出すことは出来るものの、飛行場姫から離れることが怖いため、一緒に大発動艇に乗っての釣り。潜水艦姉妹も率先して追い込み漁に力を入れ、潮に成功体験をさせようと躍起になっている。
「……妹姫さん」

「なに？」
　そんな中、潮が飛行場姫に話しかける。目を合わせることは出来ず、垂らした釣り針の方を見つめているだけなのだが、飛行場姫は穏やかな口調で応える。
「……もう少ししたら……春雨ちゃんの鎮守府のヒト達が来るんですよね」
「そうね。その予定。多分昼頃になると思うから漁を終わらせた後になると思うし、そもそもその航路はここと違う場所だから、顔を合わせることはないわ」
　戦闘の影響で漁獲量が減ってしまっている今までの漁場とは島を挟んで反対側で漁をしているので、もし今すぐに来たとしても調査隊とかち合うことは無い。ただし、漁を終えて施設に戻っているところで顔を合わせてしまう可能性はあるので、その辺りは慎重に進めるつもりである。
「……会ってみても……いいでしょうか」
　ここで潮は勇気を振り絞った。怖くて怖くて仕方ないが、頑張ってみると宣言したのだから、有言実行したい。そう思い、無理を承知で思いを口にした。
　飛行場姫としては、正直まだ早いのではと思っていた。恐怖のコントロールが出来ていない状態で、施設の者以外の者達と顔を合わせるのは、恐怖を駆り立てる何かに繋がるかもしれない。それに、何かの間違いで漣達と顔を合わせてしまった場合、発狂は免れない。
　逆に、漣達と顔を合わせなければ、まだ耐えられる。最終的には鎮守府の艦娘達とも顔を合わせることになるのだから、早い段階で耐性をつけ始めた方がいい。トラウマの元凶よりは恐怖も軽いはずである。
「アタシとしては、潮の意思を尊重してあげたい。でも、本当に大丈夫？　ある程度はカバー出来るけど」
「……遅かれ早かれ、関係を持つことになると思うんです……なので……どうせ怖いなら早い方がいいかなって。待っている時間も怖いので……早く終わらせたいというのもあって……」

気持ちはわからなくも無かった。どうせ怖い思いをするというのがわかっているのなら、さっさとそれを終わらせたい。
「わかった。アンタの勇気を買うわ。お姉にも話しておく。もし何かあったら、すぐにアタシがその場から引っ込めるから、それでいいわよね？」
「……は、はい、それで、お願いします」
潮も前に進もうと力を入れた。その瞬間、垂らしている釣り糸に反応。潜水艦姉妹の追い込み漁のおかげで、潮の竿に当たりが出た。
「わ、わ……こ、これ……っ」
「落ち着いて釣り上げましょ。初めてのヒットなんだから、絶対に成功させなくちゃね」
この成功体験も、潮を前向きにさせる。本来の潮に戻ることは出来なくとも、違うカタチの潮をここで作り上げるために。

それぞれの思いが交錯する中、鎮守府からの調査隊到着の時間は、刻一刻と近付いてきていた。

準備を重ねて

しばらくして、おおよそ昼前。そろそろ哨戒部隊が戻ってくるかという辺りで、叢雲の感知範囲に鎮守府の者達が入る。時間としては大体予想した通りであり、それも見越して、飛行場姫は漁を早めに切り上げている。

「哨戒してる奴らが合流したみたいよ。纏めてこっち来てるわ」

「白露ちゃんが機転を利かせてくれたのかしらねぇ。それじゃあ、私はお出迎えに行ってくるわぁ。春雨ちゃんと海風ちゃんも来る？」

「はい、ちゃんと顔を合わせておきたいので」

中間棲姫と春雨、そして海風がお出迎え。これはなんだかんだいつも通りの流れ。

「潮、本当にいいのね？」

今回はそこに潮も加わる。勿論、飛行場姫や潜水艦姉妹も側にいるため、独りで初めての相手と顔を合わせろと言うわけでは無いのだが、やはり初対面となるとどうしても通常以上の恐怖が湧き上がってくる。

しかも、誰が来るかまでは聞いていないので、潮と相性が悪い者が交じっている可能性もあるのだ。例えば、社交性の塊である島風の友人になりたいオーラは、今の潮には少々キツイかもしれない。そして、ジェーナスにお熱ではあるものの、深海棲艦全体に対して好意的な感情を持つ荒潮もなかなかのもの。さらには、施設側は知らないが、今回は明石が来ることになっているのがさらに大きい。

「……はい、行きます。行ってみます。自分で決めたこと、ですから」

それでも、潮の決意は固い。そんな前に進もうとする潮を止めるのはよろしくない。

ここから明るくなるかと言われれば、おそらく難しいだろう。これがきっかけで、鎮守府に対して強い恐怖を感じることになるかもしれない。だが、会ってみなくてはわからないというのもある。

「話をするのは私達がするから、潮ちゃんは近くで見ているだけでいいからねぇ。わざわざ自分から話をしなくてもいいし、姿を見たらす

ぐに施設に戻ってくれてもいいのよぉ」
「は、はい……大丈夫、です……身の程は弁えているつもりですから……」
「でもね、今から来る子達はみんなとってもいい子だから、潮ちゃんも仲良くなれるはずよぉ」
笑顔で潮の頭を撫でる中間棲姫。手が伸びてきたところでビクッと震えるが、撫でられるうちに恐怖とは違う感情、おそらく喜びらしい感情が湧き上がってきた。
「保護した子達の引き渡しの準備もお願いねぇ」
「Ｏｕｉ．　手筈通りに進めるわ」
漣達の件は、基本的にリシュリューが執り行う。外の者達とうまく連携を取りながら、潮と漣達が顔を合わせないように専念する。
準備と言っても、そこまで時間のかかるようなことではない。おそらく持ってきてくれるであろう3人の制服に着替えてもらい、裏口から調査隊の面々と合流し、そのまま鎮守府へ向かうという流れとなる。
「それじゃあ、行きましょうかぁ」
そういう意味では、今回の調査隊派遣はいろいろと忙しいことになるだろう。

中間棲姫達が岸まで来ると、調査隊はもう直に見えるくらいにまで近付いている。いつものように、江風と涼風が目に入った者達に対して大きく手を振ってきていた。
それに対する潮は、やはり腰が引けていた。施設の者達ならば自分と同じ境遇の者などもいるために心を開きやすいのだが、艦娘となると話が変わる。いくら理解者であったとしても、恐怖の方が勝る。
「大丈夫だよ潮ちゃん。あれ、私と海風の妹なんだ」
「明るくて元気な子なので、仲良くしてあげてください」
春雨と海風がそう言うものの、潮はどうしても震えが止められなかった。

今回の調査隊のメンバーは、少し軽量編成。山風、江風、涼風のメインとなる調査隊の３人と、レギュラーとなる荒潮。春雨の調査をするためにやってきた明石と、そのストッパーである大淀。保護された艦娘を連れて帰るためのクルーザーを駆る宗谷に、その護衛として配備された北上、大井、島風、サラトガ。そして、五月雨。計１２名。
サラトガしか空母がいない上に、戦艦が１人もいないのは、それくらいの方が潮が親しみやすいだろうと考えた采配。とはいえ戦力としては充分すぎるくらいになっている。今は施設側の哨戒部隊も加わっているため、過剰戦力。
「ほい、哨戒もおしまい。今回もありがたいことに何も無かったよ」
「Ｊｉｎｘは振り切れたみたいよ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅのおかげだと思うわ」
「ジェーナスちゃんが喜んでるなら、ミシェルも嬉しいぴょん！」
哨戒も無事に終了。午前中に何かあったことは今までそんなに無いのだが、漣達を捕らえたことで尚更何も起きない。今の施設は平和であると言えるだろう。嵐の前の静けさであることには間違いないのだが。
「で、合流した時にちょっとだけ説明しといた。五月雨は対談に便乗してたから大体知ってたみたいだけど、まぁご覧の通りだよ」
調査隊の視線が一斉に春雨へと集まる。艦娘の春雨とも、つい最近まで見ていた深海棲艦姿の春雨とも違う、新たな春雨の姿に、驚きつつも受け入れられていた。
大きく反応していたのはやはり姉妹達。江風と涼風に至っては、その腕を触らせてほしいなんて言い始めた。五月雨と山風はやめておけと言いたそうだったが、やけに目をキラキラさせた２人の圧に負けてしまう。
「海風と同じだよ？」
「そうかもしンねぇけどさ、一応ね」
インナー越しにベタベタベタ触るため、春雨は溜息を吐きつつ優しく払い除けた。そういうこともなかなかしないのが春雨であるため、江風はそちらでも驚く。

寂しさに続いて、怒りが溢れてしまっているというのは、既に周知の事実。こういうところで今までの春雨とは違うことを思い知らされる。
「春雨、提督から私も言われてきたんだけど、後からちょーっと調査させてもらっていいかな？　かな？」
そんな春雨にも一切臆することなく、今度は明石がグイグイと前に出てくる。江風以上に押しが強くなりそうだったため、大淀が首根っこを掴んで止めているが、その目には好奇心が溢れんばかりに煌めいていた。
「いいですよ。私も私が知りたいですし。明石さんはそういうことの解析に強いことは知ってますから、よろしくお願いします」
「よっしゃ、言質ゲットぉ！　いやぁ正直古鷹の体液や荒潮から採取した泥だけじゃそろそろ限界が近かったんだよね。ここで深海棲艦の状態で溢れたっていう春雨の細胞が一部貰えれば、もっともっと研究が進むと思うんだ。聞いた感じ、黒幕と同じような体質みたいなモノだし、そこから泥の対策がさらに進みそうだからさぁ」
ヒートアップしそうだったので、大淀がしっかりと止める。春雨もこれには怒りよりも先に苦笑が出た。明石のことを知っているからこそであろう。
「おうっ、新人さんだ！」
今度は島風。オドオドしつつもこの場にいる潮に気付いて、予想通りにお友達になりに近付く。ニコニコしながらやってくる島風に、潮は少なからず恐怖を感じるが、あえて一歩も下がらなかった。この恐怖と付き合っていかなくては、先に進むどころかこの場に留まることも出来ない。
施設の者達とは付き合っていけるのに、外から来たというだけで怖がっていては、今後確実に身を滅ぼす。この施設が平和になったとしても、外の者と付き合いがないとは限らないのだ。
「私、島風！　よろしくね！」
「よ、よろしく……お願いします……」
握手するために手を差し出す島風に、潮はおずおずと手を重ねる。

島風は自分から無理矢理手を掴むようなことはしないが、差し出してくれたなら受け入れてくれたと考え、そのまましっかり握った。
小さく悲鳴は上げたものの、その温もりに癒される。恐怖が溢れているからこそ、怖い相手というものを見極められるようになってきたのかもしれない。
「アラシオ、貴女は今はちょっと控えてね。押しが強いから」
「ジェーナスちゃん、私のこととっても理解してくれてるのね～。勿論、怖がらせることなんてしないわ～」
潮と島風が仲良くしようとしているところを見て、荒潮もウズウズしているようだが、ジェーナスが事前に止める。
島風の友達になろうと思う心は磨き上げられた珠のように純粋だが、荒潮のそれは少々押しが強いため、今の潮には少々荷が重い。それを知っていて、ジェーナスはしっかり抑え込んだ。
「潮ちゃん、とってもいい子ぴょん。ミシェルともお友達になってくれたっぴょん」
「うふふふ、だったら私も友達になれるわね～」
「みんな友達ぴょん！　荒潮ちゃんもきっと仲良くなれるっぴょーん」
今はまだ難しくとも、時間をかければ慣れてくるはずだ。そうなれば、荒潮も潮と仲良くなれるだろう。今でないだけで、無理とは一言も言っていない。
「……姉姫さん……艦娘の引き取りのこと……」
ここで山風が本題を切り出す。調査隊がここに来たのはそれが目的。本来ならそれだけやってさっさと帰るというのでもいいくらいなのだが、昨晩の戦闘のこともあるためにどうしても世間話が多くなる。
切り出した山風も、出来る限り海風と話がしたかった。積もる話もあり、むしろ出来ることならまた一晩ここで過ごしたいくらいと思っているほど。しかし、こういう時は業務最優先。
「そうねぇ、でもその前に、あの子達の制服って持ってきてくれてたりするかしらぁ？」

「はい、提督に言われて、3人分持ってきました」
今度は五月雨。宗谷のクルーザーに積み込んでいた3人分の制服を取り出し、中間棲姫に預ける。勿論、その制服が何者の制服なのかはわからないように不透明な袋に詰め込んでいた。
この場に潮がいるかどうかはわからなかったが、もしものために見えないようにしていたのは大正解。この制服が、艦娘時代の自分が着ていたものと同じであると気付いたら、保護されている艦娘が漣達であるということを察してしまう可能性がある。そして、そうなったら最後、潮は間違いなく発作を起こす。
「それじゃあ、これに着替えてもらってからにしましょうねぇ。それまでは自由にしていてちょうだい」
「……うん、わかった……そんなに時間はかからないだろうけど……休憩させてもらう」
休憩しつつも宗谷にクルーザーを裏口側に移動してもらい、着替えが終わった3人を積み込むということになる。その間がほんの少しだけの休憩時間。
「それじゃあ、その間に春雨のこと調べさせてもらいましょうかねぇ！　あ、髪の毛とか貰っていっていい？　細胞レベルで調べておきたいし。あと艤装とかも見せてもらいたいかな。艦娘から深海棲艦に変わるのもビックリだけど、やっぱり溢れるっていうのが全然わからない現象だし、2回目なんてもっと稀なんだよね。だったらむしろ細かく見ていきたいなぁ。出来ることなら鎮守府に来てもらいたいけどそれは難しそうだし、やれること全部やってかなくちゃ！」
フリータイムとなった途端に、明石が春雨にさらに詰め寄る。大淀も呆れた顔で頭を叩くが、今の明石はその程度では止まる気配が無い。
「わかりましたから、少し落ち着いてください。私は逃げも隠れもしませんし、勝利に貢献出来るのなら喜んで手伝いますから。明石さんがそういうことすると、潮ちゃんが怖がるので」
そんな明石に対して苦笑しながら少々冷たい口調で戒める。明石はそんな言葉を聞いてもテヘッと舌を出すくらいで終わるのだが、姉

妹達は春雨の豹変っぷりを目の当たりにして、やはり驚きを隠せずにいた。
事前に見ていた五月雨でも、画面越しでなく直に見るとその変わり方がよくわかった。いつも苛立ちを腹に抱えているような、表情とは違う感情を隠し持っているのが丸わかりの態度。
「……春雨姉、ちょっと怖い」
感情の機微に敏感な山風も、これには即座に反応する。知っている姉とは別人とまではいかなくても、ここまで変わっていると怖くも感じる。
「あー、わかった。今の春雨の姉貴、ガチギレした時の時雨の姉貴に近いンだ」
「そうかもしんないねぇ。あれだろ、静かに燃えてる感じ」
「そうそう、それがまた怖ぇンだ。敵に回したくないっつーか」
江風の言葉に納得したのは、自分の中にその時雨が入っている白露である。確かにそんな感じかもと思いつつ、そこまでかと疑問も抱いたりしていた。
「まあ、春雨は春雨だから。根っこの部分は何も変わってないから安心しな。ちょいとお姉ちゃんが説教することもあったけど、大丈夫だよ」
白露がちゃんとフォロー。姉妹達はひとまずそれで納得した。

調査隊の到着により、保護されている艦娘は引き取られることになる。準備に準備を重ねているため、おかしなことが起きることは無いはずだ。

会えない理由

鎮守府から調査隊が到着し、保護された艦娘を引き取りにやってきた。その準備は施設の裏で行われる。

五月雨に渡された3人分の制服は中間棲姫が受け取り、施設の中で待つ漣達に持っていく。その間に、明石に春雨の調査をしてもらったり、潮の交流を進めるつもりだ。

「はい、これ持ってきてもらったわぁ」

「助かるっス！」

制服を渡され、早速着替える3人。今までのことを考えると、これでようやく元の艦娘に戻れたと思えた。

ドロップしたばかりの時に侵蝕され、漣とは違ってすぐに作戦行動をさせられていた曙と朧は、制服を着ることも久しぶりに思えてしまう。

「やっぱりこれがしっくり来るわ。つーか今までなんつーカッコさせられてんのよ」

「動きやすい格好だとは思ったけど、今考えると結構恥ずかしいよね」

「ホントよ。黒幕の趣味だって言うなら、ただのクソねクソ」

胸元のリボンを結んでホッと一息吐く曙。朧も身嗜みを整えて、正しく艦娘に戻れたことを素直に喜ぶ。

「ん、漣もオッケー。じゃあ、潮に気付かれないように施設から出なくちゃなんだよね」

「裏口から出てちょうだいねぇ。そこに、宗谷ちゃんがクルーザーをつけてくれてるから、岸にいる子達に気付かれることなく行けると思うわぁ。コソコソさせてごめんなさいねぇ」

「いえいえいえ、大丈夫っス。本はと言えば、漣が悪いんで。ぼのも巻き込んじゃったからとばっちりですなぁ……ホントごめんね」

あまり軽い口調ではない漣の謝罪に、ほんの少し気持ち悪そうにしつつも、はいはいと軽くあしらう。漣が沈んでいると、どうも調子が狂うようだ。漣は常に明るく、若干調子に乗ってるくらいが丁度いいと、鼻で笑いながら話していた。

「……本当に会わないで行くの？」
ここで朧が最後の確認。ここに姉妹艦がいるとわかっているのに、顔も合わせずに鎮守府に向かうのは、朧にはどうしても抵抗があった。
生真面目であるが故に、そこが変に割り切れない。潮以外とは顔を合わせているのに、これでは潮を無視しているみたいでスッキリしない。
「ボーロも巻き込んじゃったから申し訳ないんだけど、潮のためなんだよ」
「あたしらの顔を見たら、まず間違いなく暴走するだろうし、良くても発作を起こして酷いことになるわ。あたしはそんな面倒くさいことになってもらいたくはないわね」
漣も曙も、潮の恐怖が溢れたきっかけ。今の潮を作ってしまった張本人である。当然それを自ら望んでやったわけでは無いのだが、２人にしてみれば昨晩の戦い以上に罪悪感のある出来事であるのは間違いない。抵抗すらさせず、自分達が返り討ちに遭うなんてこともなく、ただただ一方的に殺そうとした。嬉々として。
漣に至っては、腹が立つことにその時の感情すら覚えている。それを指示した者の顔も声も思い出すことが出来ないのに、罪の瞬間だけは忘れたくても忘れられない。ハッキリと鮮明にその時のことが思い出せるほどだ。巻き込まれて侵蝕された曙とは段違いである。
そして、潮の方は２人の罪悪感を足しても越えられない程の恐怖を味わっているのだ。泥という得体の知れない恐怖。目の前で曙が侵蝕されていく恐怖。漣に裏切られた恐怖。そして、死の恐怖。深海棲艦化してしまう程の恐怖なんて、想像もつかなかった。
「罪悪感があるならさ、一言謝った方がいいんじゃないの？　漣もこの状態がストレスにならない？」
「ストレスになるかならないかで言えば、なるかもしれない。でもさ、謝って漣がスッキリすると、そのせいで潮が物凄く苦しむんだよ。漣が謝りたくても謝れない状況でストレス感じても、潮がここで立ち直っていくんだから、それでいい。むしろ漣達のことは忘れてくれた

方がいいの」
　漣も落ち込んでいる時にずっと考えていたことを朧に語る。
「漣は当事者だから絶対ダメ。ぼのも……現場にいたわけだから、多分ダメ。ボーロはもしかしたらセーフかもしれないけど……」
「なら、朧だけでも潮と顔を合わせたい。せっかくここにいるのに、挨拶もせずここから出てくのは、ちょっと我慢出来ない」
　それだけ言い残し、朧は潮と顔を合わせるために部屋から出て行こうとする。
　しかしここには艦娘だけしかいないわけではない。制服を持ってきた中間棲姫もいるし、部屋の前にはリシュリューも陣取っている。3人がかりで突破しようというのならまだしも、朧1人で向かおうとするのはほぼ無理。
「待ってちょうだい。それはこの施設の長として、簡単には認められないわぁ」
　当然、中間棲姫が立ち塞がる。朧の気持ちはわかるので、困った表情ではあるが穏やかな笑みを浮かべ、やんわりと朧を止めた。
「貴女のそういう気持ちはわかっているつもりよぉ。でもねぇ、今の潮ちゃんは、ようやく前を向けるようになってきたの。妹ちゃんと潜水艦ちゃん達のおかげで。昨日は自分を守るためにトレーニングとかしたし、さっきもこの施設のために漁だって参加してくれた」
「それが……」
「貴女と顔を合わせることで、前向きになった潮ちゃんの心をまた折ってしまうかもしれない。恐怖が溢れているということは、そういうことに敏感ということになるのよぉ。今の潮ちゃんは、貴女の知っている潮ちゃんじゃないと思ってもいいわぁ」
　極端な話、深海棲艦化した時点で、本来の艦娘としての性格や思考では無いと考えた方がいい。ドロップしたばかりの朧にはわからないだろうが、今の施設にはわかりやすい例がいる。
　朧にとっては見知った仲であっても、今の潮にとっては朧の思う潮では無い可能性だってある。何で喜んで、何で悲しむのかなんて、今この場でわかるはずがない。

だが、何が地雷かはわかる。それが漣と曙だ。そして、朧はそれに繋がる導火線みたいなもの。ダイレクトに起爆するか、連動して起爆するかの違い。そうならない可能性もあるが、まず恐怖で物事を計る潮には、かなり難しいと考えられる。
「……そ、それでも」
「それ、潮ちゃんのことは考えてる？」
鋭い指摘を突きつけられ、朧はうぐっと息を呑む。今の朧の行動原理は、自分が潮と会いたいという、全て自分のことのみを考えたモノ。
潮と顔を合わせ、挨拶をし、また会おうねと別れるところまで考えたのだろうが、それは全て自己満足と指摘されても何も言い返せない。
「ここにいる子達がどういう子なのか、貴女は知らないと思うから、少し教えておくわねぇ。端的に言えば、ほぼ全員心が壊れているの。そう見えない子もいるかもしれないけれど、トリガーを引かれたらそのまま発作を起こして、いろんな症状を見せる。泣きじゃくる子もいれば、暴れる子もいる。自分の命を絶とうとする子すらいるわ。潮ちゃんもその1人になっているのよ」
朧はまだ、この施設がどういう施設であるかを正しく理解していない。ただ深海棲艦化した者達が、姉妹姫の下に集って身を寄せ合っているというだけではない。心が壊れた者達が、そのトリガーを引かないように協力し合い、平和に暮らすことを目的とした場所なのだ。
今でこそ発作を起こさない者もいるが、常時発作を起こし続けているような者だっている。春雨と海風などがそれに含まれるのだが、潮もそれ。恐怖という感情に常に呑まれて生きていくのだから、なるべく外的要因の恐怖は取り除いてやりたいというのが中間棲姫の気持ち。
「ボーロ、漣達も行きたいんだけどさ、何で行かないのかわかる？　自分達が元凶ってのもあるけど、もう1個理由があんの」
ここでずっと見守っていた漣が口を出す。朧は無言で振り向くが、それに対して答えない。
「もし顔を合わせてさ、潮がわーって発作起こしても、漣達何も出来な

いじゃん。で、そうなっても後始末せずに鎮守府に引き取られることになるわけっしょ。ぜーんぶここのヒト達に任せて、やることやって出てくって、流石にどうかと思わん？」

発作を起こさないならば別に何でもいい。しかし、起こした場合、実害が出るのは朧ではなく施設側。そこにいるだけで発作を続けさせるのなら、早急にここから出ていくことになる。

そうなると、発作を起こさせた張本人は何もせず、巻き込まれた施設がその尻拭いをするとなるだろう。中間棲姫を筆頭に、この施設にいるものは発作を起こした者に対しての処置が適切であり、嫌な顔をせずに懸命に対処するものの、それをさせて良い気分になるわけがない。

「あたしも似たようなもんよ。そもそも、潮がギャーギャー言うのが見たくないんだけど、あたしがきっかけでそれを起こして、あたしが何もしないってのは癪なの。だったら何も起きない方がいいじゃない。……何か起こしたら、叢雲辺りにまた槍突きつけられそうだし」

「春雨氏も来るよねそれ」

「でしょうね。叢雲に槍突きつけられるか、春雨に蹴られるかの二択よ」

曙に関しては、おそらく後者の印象の方が強いのだろう。侵蝕されている時の経験が心に刻まれているようで、何かしたら叢雲の逆鱗に触れて面倒臭いことになると思うと、やはり控えた方がいいという判断。

以前までなら叢雲だけだったかもしれないが、今ならもれなく春雨もついてくる挙句、春雨がやるなら海風もやる。叢雲だけでも厄介なのに、春雨まで加わったら、自分に害が出る。

「ここまでのことを踏まえて、それでも潮ちゃんに会いたいと言うのなら、私はもう止められないわぁ。もし潮ちゃんが発作を起こしたとしても、私達がどうにか出来るのは保証しておくわねぇ。昨日までの立ち直りは全て水の泡になるかもしれないけれど」

中間棲姫にしては少し強めの言葉である。勿論朧の気持ちだって汲んであげたいのはあるのだが、それ以上に潮のことを考えているの

だ。
　言ってしまえば、朧は部外者だが潮は施設の一員。身も蓋もない言い方をしてしまえば、管轄外と管轄内の違い。当然分け隔てない愛を振りまくのだが、優先順位がどうしても出てしまう。朧だって被害者なのだからケアをしておきたいという気持ちはある。
「だから、潮ちゃんがもう少し成長したら会ってあげてくれないかしらぁ。どれだけ時間がかかるかはわからないけれど、物凄く時間がかかるわけでもないと思うの。だから、ね？」
　優しく思いを伝えながら朧の頭を撫でる。
「……わかった。今は我慢しておく。でも、必ず会いに来るから」
「ええ、そうしてちょうだい。今はまだ無理というだけだから」
　不服そうではあるものの、朧も一応は納得するに至った。漣と曙は顔に出すほどホッとしていた。

　その頃、春雨は直感的にそれを察知していた。潮は今、社交的な島風や、ジェーナスとミシェルに制御されている荒潮と交流し、笑顔を取り戻そうとしている。そこにあの3人のうちの1人でも来ようものなら、これが台無しになっていただろう。
「姉さん、どうかしましたか？」
「ん？　ううん、何でもない。多分、潮ちゃんの危機が去ったんだろうなって思って」
「潮さんの危機……ですか。ああ、なるほど」
　海風も春雨の言葉からいろいろ察することが出来た。

それぞれの道で

「……あ、宗谷さんのクルーザー見えた」
休憩ということで海風とたわいない話をすることが出来た山風が、施設裏手からクルーザーが動き出したことに気付く。想定より時間はかかっていたが、無事に乗り込んでくれたようだった。これにより調査隊の任務は終了となる。
「海風姉……また来るから」
「うん、待ってる。本当に頼もしくなったね」
「……うん、頑張ってる」
最後に頭を撫でられて、あまり見せないホニャッとした笑顔を見せる山風。海風に褒められることが一番の喜びであり、そのためにこの調査隊の隊長が頑張れるのだ。
それに、調査隊をしていれば、海風がこうなってしまった根本的な原因である黒幕を斃すことだって出来るはず。そう考えれば、いつもは内向的でヒトの前に出ることがどちらかといえば苦手な山風も、これだけ大勢の部隊の旗艦、隊長としてやっていけた。
「ニヒヒ、よかったなぁ山風の姉貴。このために頑張ってンだもンな」
「……江風煩い」
少し意地の悪い笑みを浮かべる江風に山風が苦言を呈するが、海風はそんな2人のやり取りも楽しく見守る。
頭の中は当然春雨第一なのだが、山風達のことだって大切。春雨も、山風のことを労ってあげることは大事だと常々伝えているため、こういう時は必ず話をする時間を作っているくらいだ。
「姉姫さんは……いないね、妹姫さん……」
「ああ、はいはい。そろそろ撤収なのね」
中間棲姫は最後まで3人に付き合い、裏手から出ていくのを見守っているのでここにはいない。代わりに飛行場姫が潮のためにここにいたため、山風が撤収の挨拶。
潮もなんとか調査隊の面々には慣れることが出来たため、恐怖が薄れるところまで来た。次にまた調査隊が来ても、こうやって顔を合わ

せることが出来るだろう。
特に島風は、友人と言えるくらいに仲良くなっている。潜水艦姉妹も、島風相手だと安心して潮が任せられるようで、常に傍にいるにしても、島風の行為を妨害するようなことはない。
「それじゃあ、そちらも気をつけて。こちらはこちらで自衛するから」
「うん……鎮守府も狙われてるってことだから……こっちはこっちで頑張る……」
ペコリとお辞儀して、そのまま全員を引き連れて帰投になる。最後まで明石が粘ろうとしたものの、春雨から貰えるものは貰ったので、大淀が襟首を掴んでそのまま引っ張って帰った。
「春雨、久しぶりに妹達と会えたわけだけど、どうだった」
飛行場姫の問いに、春雨は少しだけ笑みを浮かべた。
「やっぱり、いいものですね。怒りが薄れる感じがします。仲間達と楽しく話をするのが、今の私には一番落ち着けるのかもしれません」
それでも、全盛期のような満面の笑みではない。叢雲よりは控えめかもしれないが、常に沸々と沸き立っている怒りがそれを邪魔してしまっているようだった。
「山風はすごく頑張ってるみたいですし、江風や涼風も山風をしっかりサポートしてるみたいで。五月雨はもう言わずもがなですよね。ふふ、本当に頼もしくなってます。五月雨には追いつけたことありませんでしたけど。さすが初期艦って感じです」
姉妹達のことを話す春雨は、やはり怒りが溢れる前に近いくらいに明るい。海風もそんな春雨に引っ張られるのか、春雨への依存が発症する前のように妹達のことを気にしながらも楽しくしている。
叢雲には食べ物を渡すように、春雨には定期的な仲間との交流が怒りを抑えるのに必要なことのようである。仲間の尊厳を踏み躙られたことで溢れた怒りだからかもしれない。
そんな様子を見て、一番ホッとしていたのは、哨戒から帰ってきて調査隊にも付き合っていた白露である。海風はさておき、春雨の根本的な部分が変わっていないことがよくわかる。叱ったのもいい方向に向かったようだ。

「潮も楽しそうだった」
「恐怖が薄れていた」
「定期的に実施するべき」
「今後も積極的に参加するべき」
潜水艦姉妹も、鎮守府の仲間達との交流は潮にとっていい影響を与えると絶賛。次の調査隊の時も今日と同じようにお願いしたいと飛行場姫に訴える。対する飛行場姫は潮の意思次第だと伝えた。
「……私は……その……また会っても、いいかな、って」
おずおずと、しかしはっきりと、自分の意思でまた調査隊と話をしてもいいと思えた。それくらい、島風は良い影響を与えたということになる。
嫌味のない社交性は、恐怖に呑み込まれていても通用するようだった。そういう意味では、今後も似たような者が現れた場合、まず島風と対面させるのが最もいい方向に向かえるのではないだろうか。
「そうね、調査隊の子達は定期的に来てくれるから、毎回アタシ達で出迎えましょうか。お姉も潮がそうしたいって聞いたら、喜んでそうしてくれるわ」
「そ、そう、ですか……。それじゃあ……お、お願いします」
次の機会がいつになるかはわからないが、そこまで遠い未来では無いだろう。調査隊が来るまでは飛行場姫達が心身共に鍛え、来たら心に安らぎを与えるために交流。潮にはこれがベスト。
「それじゃあ、少し遅くなっちゃったけど、アタシ達もお昼にしましょ。きっともう用意されてるわ」
調査隊も水平線の向こう側に消えたため、施設側はここでようやく昼食となる。だが、漣達が無事に引き取られたため、安心して休息することが出来た。

調査隊も、水平線の向こう側にある施設が目視出来ない場所まで来れたことを確認してから、一旦止まる。
「もう……いいかな……」

ここで一度、クルーザーの中を確認する山風。そこには、潮に知られていないかドキドキしながら奥の方に待機していた3人の艦娘。
クルーザー内の生活スペースはそこそこの空間が確保されているため、3人で座っていてもまだまだ余裕はあるのだが、念のためということで漣と曙が朧を拘束した状態だった。いざ中間棲姫の視界から外れた後に、やっぱり潮と顔を合わせたいとクルーザーから飛び出されたらもう取り返しがつかない。
罪悪感から割り切っている2人と違って、朧は理解も納得もしているが割り切ることは出来ていない。何かの間違いで気が変わる可能性も考慮していた。
「……約束破って出ていこうだなんて考えてないよ」
そんな状況に文句を言う朧だが、漣も曙もギリギリまで両腕をガッチリ掴んでいる。
「今なら外に出られるけど……」
もう施設の目にも入らないところであるため、3人は自由になれる。いくらドロップ艦であっても、艤装が出せないわけではないため、ここからは海上移動も可能。自分の足で鎮守府に向かうか、クルーザーに乗ったまま向かうかを選択させる。
漣はこのままでもいいか程度に考えていたようだが、曙と朧は自分の足で行くと言い出したため、しぶしぶクルーザーから降りた。
「……今日から世話になるわ」
まずは曙。脚部艤装の調子が悪いわけでもなく、当たり前のように海上に立ち山風に軽めの挨拶。
生まれてすぐに侵蝕を受けたようなものである曙は、海そのものに恐怖を覚えるということも考えられたが、幸いにもそういうことは無い。負けん気の強さが、恐怖を感じることすらも許さないようである。
「あまり気負うなよー。ガタガタだと余計に文句言われるぜ」
「わかってるわよ。あの叢雲にとやかく言われるのは気に入らないわ」
いや、むしろ恐怖や苛立ちはあるのだろうが、それ以上に叢雲の存

在が引っかかっているというのが正しい。それだけ、侵蝕されていた時の仕打ちがわだかまりとして残っているのだろう。こんなところで立ち止まっていたら、また叢雲にどやされ槍を突きつけられるのではないか。そう思うと、見返してやると逆にやる気が出てきていた。

そんな曙の姿に、ちょっかいをかけた江風もニカッと笑って肩を組んだ。鬱陶しそうにしていたが、小さく溜息を吐く程度で終わらせている。

「まぁ、そのー、よろしく頼んますー」

海風のおかげで調子を取り戻した漣も、やはり罪悪感からは逃れられない。特にこの中では最も活動期間が長く、多くの艦娘を侵蝕させられた挙句、その罪をなすり付けられているようなもの。笑顔にも覇気はない。

「漣ちゃん、何か困ったことがあったら話を聞くわ～。たぶん、私が一番理解してあげられると思うから～」

「あ、そうなんスか、じゃあちょいちょいお願いしますわ」

そんな漣のことを気にかけるのは荒潮。ドロップしたばかりで侵蝕され、施設の者を陥れるために行動させられていたという境遇だけで言えば、漣と荒潮はかなり近いものがある。話も合うだろうし、気も合うだろう。

そして、特定の施設の者――荒潮はジェーナス、漣は春雨――にお熱なのも近しい。同じ対象ではないために仲違いなんてせず、しかしお互いの推しについて語り出したら止まらなそうな雰囲気まで似た者同士。

「……」

そして最後に朧。まだ思うところがあるか、水平線の向こう側にある施設の方をじっと見つめる。その視線の先には、潮がいる。見えなくても、そこにいるというのがわかる。

「朧、強くなりたい。すぐにでも強くなって、潮のいるあの施設を守れるようになりたい」

拳を施設に向けて決意する。今は力もないただのドロップ艦でも、心身共に強くなればこの調査隊の一員となって施設に向かえる。そ

の時には潮も成長しているはずだ。
いや、むしろもう顔を合わせられなくてもいい。その代わりに、潮の平和を守るために尽力したい。朧はそんな気持ちでいっぱいだった。
「ほーん、だったらあたしが鍛えてあげよう。黒幕をぶっ斃すまでは鎮守府にいるから、その間に山風達と同じようにね」
「もう、北上さんったらすぐにそういうことしたがるんですから」
そんな朧の決意を目の当たりにした北上が、またもや特訓してやろうとニヤニヤし始めた。これには大井もニッコリ。
北上の特訓は、山風達の成果からして折り紙付き。すぐに強くなれるかは本人次第であるとはいえ、すぐに強くなりたいというならば、この申し出は受け入れるべき。
「お願いします。朧、すぐに強くなりたいです」
「そりゃああんた次第だ。あたしゃ普通に鍛えてやるだけだからね」
「北上さんの訓練やべぇから覚悟しとけよー」
涼風の言葉に恐怖心を駆り立てられるが、それ以上にやる気が漲っているのが朧だ。怖がるより、強くなることが先決。
「それにさ、あたしとしてもあんた達を使ってたヤツに因縁がある……っつーか、多分アイツもあたしのこと狙ってくると思うからさ。返り討ちにしてやらんとね」
朧達を使っていたのは龍驤。その龍驤が自分の手で潰したいと言っていた1人の艦娘というのは、間違いなく北上。龍驤本人からその話を聞いていた漣は、その言葉を耳にしていろいろと勘付いた。
「あたしさ、あんた達の元ご主人を、2回撃退してんのよ。実際やったのは山風達だけども、まぁ面白いくらいに煽れてさ。そのせいで確実にあたしに恨みを持ってるはずなんだよね。だから」
「その北上さんに鍛えられた漣達が返り討ちにしたら、めちゃ楽しいってことですな！」
「その通り。自分が使ってた奴らが、因縁の相手に鍛えられて、それに返り討ちに遭うとかギャグじゃん。まぁ流石に時間が足りなそうではあるけどね。荒潮だって1日2日で改二になったわけじゃあ無い

からさ」
　とはいえ、新人からレベルアップするのは簡単なことだ。それに、この３人は泥によるブーストコスチュームのおかげで熟練者とも渡り合える身のこなしを強制的に叩き込まれている。
　今でこそそれは無くなっているとはいえ、それをやっていた経験は身体に残ったままだ。練度を上げればそれを再現することも可能になるだろうし、そもそもそこまで辿り着く時間も通常より短いとも考えられる。
「まぁあたしが勝手に決められることじゃあないけども。鎮守府行って、ちゃんとした手続きしてからね。オッケー出たら鍛えてやんよ。あとこういうこと話してたら、多分武蔵さん辺りがニコニコしながらやってくるから」
「あまり酷いことしそうになったらサラが止めますからお任せくださいね」
　武蔵ならば強くなりたいという朧の言葉に感銘を受けて、荒潮の時と同じように激しい訓練を買って出るだろう。その時のことを思い出したか、荒潮も流石に苦笑していた。
「……じゃあ……帰投する。戻ったらいろいろやらなくちゃいけないから」
「うす、よろしくオナシャス」
「軽いなぁコイツ」

　ここからはまた、施設と鎮守府は各々のやり方で先に進む。まずは龍驤という前哨戦に勝利し、黒幕を追い詰めていく。

可能性の塊

本日は午後の哨戒部隊は叢雲、薄雲、古鷹。そして深夜の哨戒部隊は春雨、海風、コロラド、伊４７。漣達の件が片付いたとはいえ、また新たな刺客が現れる可能性は考えているため、今回の戦いが完全に終結するまでは哨戒を続けるつもりである。明るいときより暗いときの方が危険として、潜水艦の投入は基本的に深夜組にしている。

春雨達は深夜のために一時就寝。哨戒部隊も出て行っており、残された者達は自由に行動することになる。農作業や漁は午前中に終わらせているため、施設は比較的平和な時間を過ごす。

「さて、午後はトレーニングね」

「は、はい」

潮は飛行場姫と潜水艦姉妹と共に、外で自衛の手段を学ぶことになっている。体力をつけるというのもあるし、身体を鍛えるというのもある。そして、身体を鍛えれば、心にも余裕が出来始め、心身共に鍛えられることとなる。

潮が楽しく生きて行くためには、このトレーニングは必要不可欠になるだろう。これからなるべく毎日鍛えていく予定だ。

「怖いのは仕方ないこと。それと上手く付き合っていくことが大事。潮、今はどう？　やっぱり怖い？」

「……はい、それは変わらないです……」

恐怖が溢れている潮に、怖いか怖くないかを問うたら、当然怖いと返ってくる。

「でも……」

だが、ここから変わってくる。

「さっき……鎮守府の皆さんと話をして……少しだけ、少しだけ変わった気がしました。怖さが薄れたというか……あのヒト達のためにも頑張りたいって……思えたんです」

仲間達との交流が、潮の心を落ち着けていた。昨日からずっと親身になってくれている飛行場姫と潜水艦姉妹、トレーニングに付き合ってくれていた古鷹や、文句を言いながらもなんだかんだ見守っていた

叢雲、それを宥める薄雲、目が覚めた時にすぐに来てくれた春雨と海風。他の者達も、何かと潮を気にかけている。
そして、外からやってきた艦娘達も同じように潮のことを仲間として認めて、恐怖を和らげるように楽しく会話をしてくれた。深海棲艦化していても、まるで艦娘として扱うように。
それが潮の恐怖をさらに和らげていた。切り捨てられることが恐怖の象徴だったが、ここで出会った者達は潮のことを絶対に切り捨てない。そう感じる程に温かな存在だった。
それ故に、潮はさらに前に進めた。恐怖は勿論隣に居座っているが、怖がりながらもゆっくりと共に歩くことが出来始めている。
「いい傾向」
「素晴らしい」
「その調子」
「応援してる」
潜水艦姉妹も小さく拍手するように潮を褒め称える。やはり恐怖を和らげるのは負の感情ではなく正の感情。
潜水艦姉妹は甘やかしていると言われても文句が言えないくらいに潮のことを肯定し続けているため、潮の恐怖は着実に取り除かれている。飛行場姫と潜水艦姉妹相手では、もう恐怖を経由しなくとも安心という感情が理解出来る程だ。
「あと今日は、トレーニングと聞いて是非とも参加させてほしいと率先してやってきた大鳳も一緒よ」
「よろしくお願いします潮。私も奴のせいで体力不足にされていまして。トレーニングに参加し、心身共に鍛えたいと思いまして便乗させてもらいます。潮のトレーニングも手伝いますよ」
「うぇっ、あ、は、はい、ありがとう……ございます」
そして今回のトレーニングには、午前中哨戒に出ていた大鳳が参加。春雨達が深夜のために眠りについているため、どうせならと自身を鍛え上げるために参加を申し出た。
潮としては、こうやって付き合うのは初めての相手。食事時に顔を合わせて、一言二言言葉を交わした程度である。そのため、いくら仲

間と言っても多少なり恐怖は感じてしまう。
　むしろ、飛行場姫と潜水艦姉妹以外には同じように感じるのだから仕方ないことだ。怒りが溢れている春雨と叢雲相手でも感じる恐怖は他と同じであるのだから、そこは若干肝が据わっているようにも思えるが。
「大鳳は基本的にスタミナ面だったわよね」
「はい。なので、暇があるときはこの島をランニングさせてもらっています。どうしても艦娘だった頃よりもすぐにバテてしまって困りますが。それと、技を鈍らせないように、これを振るうことも日課にしていますね」
　話しながら大鳳が展開したのは、戦場で振るう刀。しかしそのままで使うと危険であるため、同じ重さであっても完全な鈍（なまくら）である模擬刀である。
　そういう武器は潮にとっては切り捨ての象徴であるため、少し見せたらすぐに消していた。あくまでも潮に知ってもらいたいのは、自身を守る力。相手を切り捨てる力ではない。自分が扱う主砲にも恐怖を感じてしまう程なのだから、それはもう仕方ないことである。
「ですが、武道の方も多少は心得があります。あるのは私では無く、私の中にいる日向ですけどね」
　大鳳自身は武道なんてからっきし。空母故に近接戦闘なんて考えるまでもなく避けるべき戦法。しかし、大鳳の中にいる伊勢と日向は、航空戦艦であるが故に敵に肉迫する戦術も扱っていた。
　その中でも日向は、剣術のみならず、あらゆる武道を知識として学び、それを実践するようなストイックな性格だったらしい。それと水上機への愛は有名だったそうだ。その前者の部分は大鳳にしっかり受け継がれている。
　そして、潮に教えてあげたいものがあると提案したものが、飛行場姫も考えていたことと同じだった。
「拳を扱う武術、空手や拳法などは、潮のその性格としては向いていないかもしれません。ですが、合気道ならば、自分から攻撃せず、相手の攻撃をいなすことが出来ます。どうでしょう」

あくまでも自分から殴りかかるのは怖い。関係を断ち切る行為となり得るため、攻撃という行為そのものに恐怖を抱いてしまう。
だが、合気道ならばどうか。そもそもの理念――技の稽古を通して心身を練成し、自然との調和、平和への貢献を行うというもの――からして、今の潮には合っている武術と言える。
艦娘や深海棲艦が武術とはと思うものもいるとは思うが、本人は至って真面目。施設を守るため、潮にとって最善を探し出した結果だ。相性の良い戦い方を見繕って覚えてもらえば、より上の領域に辿り着けるはず。
あとは潮の意志次第。
「えっと、そ、その……」
潮は混乱している。恐怖と共に歩くために心身共に鍛えるというのがこのトレーニングの根幹なのだが、自分の身を守るために武道がどうのこうのと言われるとは考えていなかった。戦える手段とさんざん聞いてきたとしても、それはなかなか考えづらいもの。
「深く考える必要は無いわ。名前が仰々しくなっただけで、やることは変わらないもの。要するに、相手を傷付けずに自分の身を守る手段みたいなもの。まぁそれを攻撃にすることは出来るけど、ともかく鍛えるってだけ」
「は、はぁ……」
あまり理解はしていなかったようだが、飛行場姫の話すことなので、それが悪いことでは無いだろうと納得は出来た。
「……まだよくわかりませんが……が、頑張ります。自分の身も守れないのに……他のモノを守るなんて出来ませんから……」
こんな関係を失うのが怖い。その恐怖を取り除くにはどうすればいいか。その全てを守れるくらいに力をつければいい。そうやって考えが纏まっていく。当然力をつけることだって怖いのだが、前に潮が自身で話した通り、何かをしても何もしないでも怖いのなら、何かをしたい。
「あとは、潮はもう少し自分に自信を持った方がいいわね。アンタはデキる子なんだから」

「そ、そんな……私は……」
「そこはおいおいやっていきましょ。心の自信は強さに比例するはずだもの。アタシがそうなんだから間違いない」
飛行場姫はそもそも自分に自信が無いなんてことは無かったのだが、姉を守るために強力な力を得たことがより強い自信となっているおかげで、今のような性格になっていると言ってもいい。自信過剰というわけでもなく、それでいていつも自信に満ち溢れているようなもの。
潮にこうなれとは言わないが、ほんの少しは見習ってもらいたいとくらいは思っている。口に出すことは無くとも。
「じゃあ、始めましょ。制服だと動きにくいでしょ。はい、着替えて」
指をパチンと鳴らすと、飛行場姫はいつものボディスーツスタイルに。薄雲がいないため、姿形に遠慮はなく、最も動ける姿となった。
それに合わせて大鳳もスパッツタイプのスポーツウェア姿に。潜水艦姉妹も海中で身体を動かすわけでは無いので、水着では無くいわゆる体操着へと姿を替える。
「よ、よろしく、お願いします……」
そして潮は控えめなジャージ姿に。身体を動かしていくうちに暑くなっていくだろうから、その時その時に薄着になっていけばいい。
「潮は筋がいいから、すぐに強くなれるわ。どんどん自信を持っていきましょ。過剰にならない程度に、ね」
飛行場姫もなかなかにノリノリである。潮を鍛えていくのは楽しいようで、自分の弟子が育っていく姿を見るのが喜びに繋がっていくようだった。

そして夕方。哨戒部隊が帰投するくらいの時間。潮のトレーニングの結果が気になっていた叢雲が哨戒を早く切り上げようとしていた。事実、今回の哨戒部隊は何かと潮を気にしている者ばかりであるため、哨戒任務をしっかりとこなしつつも、終わりとなったらソワソワしていたのは誰の目から見ても明らか。

「姉さん……潮ちゃんは大丈夫ですから……」
「わかってるわよ」
　罪悪感のせいで少し不安定な薄雲も、この叢雲の様子は少し面白く感じていた。怒りばかりだった叢雲も、遠縁とはいえ自分以外の妹が現れ、それを気にする姿は、叢雲の中の妙に真面目で優しい部分を垣間見ることが出来ているからだ。
「叢雲ちゃんの気持ち、私もわかるよ。潮ちゃん、前を向くのに少し時間がかかりそうな子に見えたから、頑張れてるか心配になるよね」
　古鷹も叢雲と同じように、潮のことを気にかけている者。トレーニングで潰されることはないにしろ、潮自身が恐怖に潰される可能性はどうしても拭いきれない。そもそも、昨日のトレーニングで何度も発作を起こしているのだから。
「見てみないとわからないわよ。だから早く戻りたいのよね」
「哨戒を疎かにしちゃいけないけど」
「んなことはわかってるっつーの」
　叢雲と古鷹の関係も比較的良好。古鷹が誠実な姿を見せ続けていることもあり、こうやって同じ部隊となっても、諍いは起きない。
「あ……見えてきましたね。まだトレーニング中みたい……です」
　外にいることは叢雲の感知で気付いていたが、実際に何をしているかはわからなかった。それを実際に目にしたときに、3人は驚くことになる。
　そこでピンピンしていたのは潮だけ。他の者はトレーニングで疲れ果てていた。
　そもそもスタミナ不足である大鳳はもう立ち上がることも出来ず、潜水艦姉妹は揃って横になっており、最もスタミナがあるであろう飛行場姫すらも肩で息をしている程なのに、潮は息一つ乱していない。
「えっと、これ、なに」
　流石に叢雲も声が震えていた。
「わ、私にも、何が何だか……」
「潮はやっぱり才能があるわ。トレーニングが身につきすぎてる」
　飛行場姫は心底楽しそうに語る。鍛えれば鍛えるほどそれを呑み

込んでいくため、調子に乗っていろいろと教えて行ったらこのザマであると。

とにかくスタミナがあり、さらには物覚えがやたらといい。さらには深海棲艦特有の、イメージが身体に影響を与えるという特性を十全以上に使えているとすら感じるようである。

「精神的な不安があるにしても、これは相当なものよ。むしろこれが潮の特性ね。恐怖が溢れた分、怖いものから身を守るために強くなりやすくなっているのかもしれない。しかも切り捨てることに恐怖を覚えるから、一度やったことを忘れないまである。潮は可能性の塊よ、これは割と本気で」

とはいえ、恐怖からは離れられないので、妙なバランスが取れてしまっているという。これで恐怖を払拭したら、まず間違いなく最強となり得る器だった。潮の性格上、それは難しいというか不可能に近いが。

潮の驚異的な成長スピードは、今後の施設の防衛に一役買うことになるだろう。しかし、自分に自信を持てず、戦うことを嫌う潮は、それをどう使っていくのか。

互いの譲歩

夕食を終え、施設はそのまま1日が終わっていく。春雨は深夜の哨戒のためにここからが本番。海風、コロラド、伊４７と共に、夜の海へと出て行くことになる。

だが、春雨としてはその前にやらねばならないことがあった。

夜の岸、毎日変わらない暗い海の前に全員が揃うが、春雨がキョロキョロと周りを見た後、一点を凝視する。それは、少し海中の方。

「ハルサメ、何かあったの？」

朝の出来事を知っているのは海風のみ。故に、コロラドが怪訝な顔で春雨に問う。伊４７も首を傾げていた。

叢雲とはいつも小競り合いのような喧嘩をしているが、同じように怒りが溢れてしまった春雨とそういうことになることはない。

春雨の溢れたモノも怒りではあるが、いつも熱くなっている叢雲とは対照的に、静かに苛立つタイプの春雨はコロラドとの衝突はなかったりする。

「今朝、ここで『観測者』様と話をしたんです。そのときに、解答を後回しにされていることがありまして」

スンと冷ややかな瞳を海に向けて、小さく息を吐き、少しだけ大きな声で『観測者』を呼びつける。

「見てますよね。出てきてもらえますか」

すると、ザパッと波を作りながらも道化達が現れた後、２人で大きな布をバサッと振ったかと思いきや、そこに『観測者』が立っていた。相変わらずおかしな登場方法。突然現れるのはいつものことではあるが、毎度毎度その方法を変えてくる辺り、何を考えているかがよくわからない。

流石にこんな登場をされると、春雨以外の３人はビックリしているようだが、春雨だけは殆ど睨み付けるような目で見据えていた。

「私が言いたいこと、わかってますよね」

「勿論だとも、辿り着く者。君には理解してもらえていると思うが、私はここにずっといた。幸いにも、今日は彼女の活動が活発では無かっ

たものでね」
　そして、その間は春雨の監視――調査もしていなかったことは気付いている。『観測者』からの調査がある場合は、春雨は直感的に見られていると勘付くことが出来るはずだが、今日丸一日を終えてもその感覚は無かった。にもかかわらず、『観測者』がこの島から出ていっている感覚も無い。
　朝から今まで、ずっと島の海底にいたのだろう。昼前後のタイミングで漣達を引き取りに鎮守府の者達が来島していたため、姿を隠す必要はあった。その延長線上として、島の近くにいつつも視界から消えていた。
　離れて考えていないという屁理屈にも思えるが、春雨としてはこれでもここにいたわけなので、文句を言うつもりは無かった。出来れば視界に入ってもらいたかったし、施設の中にいてもらいたかったというのもあるのだが、そこまでワガママを言おうとは思っていなかった。若干苛ついても。
「今朝の君の提案に対して、大方君の考えている通りだが、話した方がいいかい？」
「はい、お願いします。言質としますので。私だけでは信用は薄いでしょうし、海風ならば私と口裏を合わせていると思われるかもしれませんが、コロラドさんとヨナちゃんまでいるんですから、その発言の信用度はかなり高くなります」
「なるほど、そのためにこの時間まで待っていたのか」
「自分から施設の中に来てくれれば手っ取り早かったんですがね。まぁ答えを聞きたい私達はその時この時間のために眠っていたので、そういう意味ではごめんなさい」
　春雨が当たり前のように『観測者』と対等に話す姿に、コロラドは言葉も無かった。
　前回の再来の時も、最初に『観測者』と遭遇したのは春雨、海風、コロラドの３人。海中担当は伊４７ではなく潜水艦姉妹ではあったが、海上担当は全く同じ。そのときの春雨の『観測者』への態度は、明らかに上の者を見る目で敬意を示しているようなモノだった。

しかし、今はまるで違う。怒りが溢れていることがわかるように、あまりにも冷たい。
「端的に話そう。私はこの施設を拠点として、君の調査をさせてもらう」
今朝の春雨の予想通りの解答である。監視する代わりに施設に留まるか、ここから出て行く代わりに監視を諦めるか、その2択は前者、春雨の監視を優先する方針とした。
「しかし、1つだけ約束が出来ないことがある」
「というと？」
「常にここにいることは出来ない。我々にも使命がある。それ故に、定期的にここに戻るということで手打ちとしてもらいたい」
この施設を拠点にするというのはそういうことだ。基本的には施設に滞在する方針とし、しかしやらねばならない『観測者』としての役目のために出て行くこともあるということを認めてもらわなければ困ると『観測者』は春雨に話した。
特定の時間となったら施設を出ていき、さらに特定の時間となったら施設に戻る。12時間外で活動をしたら、12時間施設で春雨の監視をするということだ。そして、『観測者』自身がこの施設から離れている間は、監視そのものをしないと約束する。見られているかどうかを直感的に気付くことが出来るのだから、この約束が反故にされたかは瞬時にわかるだろう。そして、この施設に戻ってきた時に堂々と咎めることも出来る。
「そうですね、そこは仕方ないでしょう。『観測者』様を縛りすぎて、ここではない別の海が泥塗れにされる可能性もあります。お前が拘束したせいだと罵られようものなら、普通に腹立たしいですから」
「ああ、理解してもらえると、我々としても助かる」
「1日1回はここに帰ってきてもらえるのなら何も問題は無いでしょう。私もワガママを言いすぎるつもりはありませんから」
実際はこれくらいが関の山だなと春雨も思っていた。何せ相手は『観測者』。度が過ぎると今みたいな対話が出来なくなる可能性がある。最悪、道化達による実力行使も無くはない。

故に、節度をもって交渉する。怒りに呑まれていてもその辺りを弁えることが出来るのが、春雨の溢れ方。２回溢れたことによる冷静さもある。
「では、その期間は」
「君が力を捨てるその時まで、というのはどうかな？」
鎮守府の面々に話したことは、海底からでもしっかり聞いていたようである。『観測者』の観測は、見るだけではなく聞くことも可能なようだ。
そもそも春雨がこの力を持っているから監視対象になっているだけ。失ってしまえば監視する必要は無い。そして春雨自身、この力を不要としているのだから、捨てることを一切躊躇わない。
そんな春雨の性格を把握しているからこそ、『観測者』はこの場でこの期間の設定が出来た。最後になって力を手放すことを躊躇うような者では無いと、今までの在り方から理解出来る。
「はい、それで構いません。それに、貴方がそう言ってくれるのなら１つ安心出来ました」
「それならよかった」
むしろ、春雨はこの言葉を引き出すためにこれまでの交渉を続けているようだった。春雨も『観測者』も意味ありげな含み笑い。
「では、姉姫が眠っている間は私の仕事をさせてもらおう。朝には戻る」
「了解しました。明日は姉姫様と顔を合わせてくださいよ」
「善処……いや、それは約束しよう。君とのことについて、彼女にも伝えておかねばならないだろうからね。君の口からでは無く、私の口から」
小さく手を振ると、道化達がまた大きな布を振るった。それが消えると同時に、３人の姿はその場から消え失せていた。
こうしている間に春雨は『観測者』からの視線は感じない。約束を守ってくれているようで、本当に施設の島にいる時にのみ監視をするようにしてくれるようである。
これはこれで『観測者』からの信頼が感じられるため、春雨として

もありがたいところだった。信用してもらえているというのは、どういう状況でも悪くない。
「……はぁ……あのヒトと話すのはちょっと疲れます」
いなくなったところを見計らって、心底疲れたと言わんばかりに大きな溜息を吐く。海風も少し心配そうに寄り添った。
「アンタ、本当に肝が据わってるわね。アレ相手にあそこまで啖呵切るなんて」
「あれくらい強気で行かないと、あのヒトのやり方に呑まれてしまいそうですから。こちらのことを全て知っている相手なんて、基本的にはやり込められておしまいですから」
コロラドは春雨のこのやり方にずっと驚き続けていた。まだ施設の一員として時間が短いが、今までの春雨がこういう舌戦や搦め手をするようなタイプでは無いことは理解していたつもりである。しかし、今の春雨は静かな怒りを常に孕んでいるために、こういうことも当たり前のようにやってのける。
だが、今の春雨はコロラド的には割と好感触のようだった。あの『観測者』の胡散臭さに対して、ここまで強気に出られるのは、見ていて楽しいと感じていたからである。
「姉さん、さっき少し気になる発言があったんですけど……」
海風が春雨に問う。心配そうにしつつも、やはり最後の意味ありげな顔については気になっていた。
「ああ、うん。『観測者』様のおかげで、私のやりたいことがやれるってことが保証されたんだ」
「やりたいこと……ですか？」
「うん。私が私の力を捨てられるかどうか」
春雨は軽く話していたものの、実際はそれが出来るかどうかの確信はそこまで無かった。直感的にそういうことも出来そうだとはわかっていたものの、いざ捨てようとした時に実は出来ませんでしたという可能性だってあり得た。
だが、『観測者』が直々に、春雨が力を捨てるまでと宣言したということが非常に大きい。嘘をつくこともなく、ただ必要なことでも話さ

ないような者が、それについては断言したのだ。春雨はやろうと思えばいつでも力が捨てられると保証してくれたようなもの。
「これで余計に決意が固まったよ。私、全部終わったらこの力を捨てる」
「……そうですね。ここでみんなと一緒に仲良く楽しく生きて行くのには、邪魔でしか無いですしね」
春雨の決意に、海風も同意する。海風としても、春雨が持つあまりにも大き過ぎる力は不安の1つであった。
望み通りの答えに辿り着くだなんて、身を滅ぼすことに繋がりかねない。海風としては、春雨がいなくなることが一番避けたいことだ。だったら、そんな力を持っていて欲しくない。明確に口には出さないが、海風の中では唯一の我儘でもある。
「まぁ、いいんじゃない？　私としても、そんな力を持たされたら自分の欲望のために使っちゃいかねないし。そうなったら平和も何も無くなるでしょ。黒幕の後はお前だーって、この施設巻き込みかねないものね」
「わかってもらえて嬉しいです」
コロラドも春雨のその決意には賛成。終始無言を貫いていたが、伊47も一切否定をしなかった。
「あ、じゃあ、本題に入りましょう。深夜の哨戒、しっかりやらないとですね」
少しだけ時間を使ってしまったが、今からはこの島を守るための哨戒任務である。春雨を筆頭に、海に入るための艤装を展開。
「時間をつかわせてもらって、ありがとうございました。私としても有意義なものになりましたので、今からは誠心誠意、施設のために働こうと思います」
「まぁ気負わない方がいいわ。イライラするかもしれないけど、もう少し力を抜きなさいよね。ウミカゼ、アンタがハルサメの癒しになってやりなさいよ」
「勿論です。私が姉さんに支えてもらっているんですから、逆に私が姉さんを支えなければ今がありません。互いに互いを支え合い、そし

て先に進めることを切に願っています。そしてゆくゆくは互いに愛し合え……いえ、これは私の我儘ですのでやめておきましょう。まずは姉さんの溢れる怒りを抑えられるように、この海風、全力で姉さんのサポートをさせてもらいたいと思います。苛立った時には私を頼ってください。姉さんのためになら、私は一肌でも二肌でも脱げますので」

止まらない海風に苦笑しつつも、苛立ちは一切無かった。

春雨の進退はこれである程度は保証された。『観測者』からの監視は逃れられないかもしれないが、春雨自身も望むカタチに持っていけているので、その辺りは問題ない。

もう残りの問題は、この施設の平和を脅かす者のみである。

3人の道

翌日、鎮守府。昨日のうちに3人の艦娘の引き取りは無事終わり、本日から鎮守府の一員として活動をすることになる。

荒潮も通った道だが、最初は鎮守府内で訓練を行い、ある程度の力をつけたところで近海哨戒や遠征などを経験し、最終的には戦場に出るという流れが堀内鎮守府のやり方。

荒潮はかなり例外的なところがあり、訓練を短期間で乗り越え、あっという間に改二改装まで上り詰めてしまったものの、本来はそれなりに時間がかかるもの。漣達3人は、荒潮を追いかけるつもりで自分を鍛えていくつもりのようではある。

「昨日のうちに話は聞いている。君達も、黒幕との戦いに参加したいと言うんだね」

執務室にて、漣達3人が提督の前に並んでいた。対する提督は、3人の気持ちは汲むと穏やかな表情。秘書艦五月雨も、3人のやる気満々な態度に笑顔を見せる。

「ウス。漣達はドロップしたてのど新人かもですが、出来ることなら自分の手でケリつけてーんです」

侵蝕されていた時もそうだったが、なんだかんだ漣がリーダーのように率先して会話をしていく。話し方はさておき、そもそもが会話が得意な方であるため、こういう時に悪い空気にせずにスムーズに回すことが出来た。

「荒潮にも伝えたことなんだが、うちの鎮守府ではある程度の経験を積んでもらわなくては実戦には参加させられない。そのため、まずは鍛えてもらうことになるわけだが、それは北上がやるということでよかったかな」

「そっスね。北上さんが直々に鍛えてくれると言ってくれたんで、よろしくお願いしようかなと」

「しっかり申請もされたよ。君達のやる気を買い、それは受理した。とはいえ、時間が足らずに参加出来ないという可能性も視野に入れるように」

荒潮は本当に特別。北上に加え、武蔵やサラトガからのしごきにも耐えられるほどの才能を持っていた上に、ジェーナスと対面するのだというありすぎる程のやる気も相まって、超高速の成長を見せつけた。改二改装というわかりやすい成長の結果も見られたことで、今や当たり前のように調査隊に加わっている。

漣達が望んでいることは、第二の荒潮。やる気は充分すぎるが、才能はやってみなくてはわからない。しかし、北上が自分から鍛えてやると言うほどなので、何かしらの光るモノはあるのだろう。才能の有無なんて関係なしに、技術を叩き込むはず。

「あたしはあのクソ泥女を見返してやらなくちゃいけないんだから」

「すぐに強くなって、潮にまた会うために、朧は頑張る」

「漣ちゃんもいろいろ思うところがありますんで、努力はさせていただきやす」

三者三様ではありながらも、目指す先は同じ場所。施設を守り、龍驤を斃す。これが目的だ。そのためなら、多少辛い訓練だろうが関係無しにこなすつもりだ。むしろ、荒潮を超えるくらいの意気込みがあるので、気持ちが才能を塗り潰す可能性すらある。

「ふむ、なら君達はそのようにやればいい。ある程度経ったら、練度を計測させてもらい、頃合いと見たら調査隊に加わってもらうよ」

「了解っス！　それでは、早速特訓させてもらいますぜ。ぼのたん、ボーロ、さっさと行くべ！」

「ああもう、漣はいちいち喧しいのよ！　引っ張らなくても行くから！」

居ても立っても居られない漣が、言うことを言うだけ言って、すぐに北上に鍛えてもらうのだと曙と朧の腕を掴んで執務室から出て行く。曙はそんな漣に怒りをぶつけながら、朧は提督に小さく敬礼しつつ、姿が消えていった。

「……何というか、明るい子だ」

「ですね」

その後ろ姿を見届けて、提督が苦笑しながら呟く。五月雨も釣られて苦笑。

つい最近まで侵蝕されて敵対しており、治療されたにしてもその時の記憶や感情を全て刻まれたままにされていても、そんなことを感じさせずにいるのがこの3人だ。3人が3人、心の支えを手に入れているから、ありのままでいられるのだろう。

「話を聞く限り、彼女らのような艦娘がまだまだ増えそうだ。うちで引き取るかどうかはわからないが、みんながあんな感じだといいんだがね」

「それは……」

「いや、これは無いものねだりだな。落ち込んでしまうのは仕方ない。我々でサポートをしてあげなくてはな」

「ですね。ここに所属するヒトが増えたら、みんなで助け合いましょう。それこそ、春雨達がいる施設みたいに」

五月雨の言葉に賛成しつつ、提督は業務に戻った。今日もやることは多い。

執務室から出た漣達は、事前に伝えられていた場所へと向かう。流石にこの時はいい加減に離せと曙も漣の手を振り払っており、朧もやんわりと離れていた。

「……アンタねぇ、気が逸るのはわかるけど、もう少し落ち着きなさいよ」

曙が漣を落ち着かせようとするが、漣はやる気スイッチが変に押し込まれてしまっているのか、早く鍛えたくて仕方ない様子。それは、曙が言う通り、焦りも見えていた。

自分達を操り、手駒として使っていた龍驤との因縁を、自らの手で終わらせたいという気持ちが前へ前へと出てきてしまっており、本来の明るい性格の裏側にドス黒いモノが渦巻いてもいる。

それをどうにか抑え込んでいるのが、海風に教えられた(植え付けられた)春雨への想い(信仰心)である。直接的に被害を受けた漣の方が恨み辛みは大きいかもしれないが、春雨はその悪意に間接的に呑み込まれ、あのような姿となってしまった。その償いのために、自分のためではなく春雨のため

に戦う。その気持ちが、漣をギリギリのところで踏み留まらせていると言える。
「落ち着きたいのは山々なんだけどねぇぼのたん。早く強くなんないと、あのクソ泥女との戦いに参加することすら出来ないんだよ。まぁ、春雨氏が戦いに出たらあんなもんゴミクズみたいに捨てられるとは思うけどさ、何も貢献出来ないのは悔しいじゃん」
「アンタの言いたいことはわかるわよ。あたしだって、自分の手でトドメを刺したいわ。生まれてきたことを後悔するくらいにケチョンケチョンにしてやりたいと思ってる。でもね、今のあたし達が出て行ったところで、それこそゴミクズなのよ」
曙も漣と同じくらいに燃え滾っている。元々勝ち気な性格の曙には、あの時の扱いが悔しくて苛立ち、それこそ一歩間違えれば怒りやら何やらが溢れていてもおかしくは無かった。
それを押し留めてくれているのが、やはり潮の存在と言えよう。仲間に引き込んでも役に立たないだろうという憶測からの巫山戯た理由で殺されかけ、恐怖に呑まれて深海棲艦化してしまい、そのせいで顔を合わせることすら出来ない状態にされているのだ。そんな潮のためにも、自分までそうなるわけにはいかないと踏ん張っている。
「漣、ぼのの言う通り、今は落ち着かないといけない時だと思う。朧達はせっかく鎮守府に来れたんだから、ここで出来る限り早く強くなっていこう。あの北上さんなら、朧達をすごく強くしてくれる。……多分」
朧も静かに燃えていた。だが、２人とは少し違い、龍驤を始末することではなく、強くなって潮と顔を合わせることに念頭を置いている。そのため、２人ほど感情が溢れそうにはなっていなかった。
しかし、早く会いたいという気持ちは２人以上ではあるため、そこに繋がる特訓を求める気持ちは同じである。
「もどかしいねぇホントに。飲んだら強くなれる薬とかありゃいいのにさぁ」
「それは都合が良すぎよ。あったとしても、副作用とかで酷い目に遭うに決まってる。それに、それって極論あの泥になるんじゃないの」

「うえ、努力した方がマシだわ。漣ちゃんは努力の子。しばらくドロっとしたモノは見たくは無えですな……」
舌を出して嫌そうにする漣に、２人も同意した。

呼び出された場所は、鎮守府から外に出て少し歩いたところにある堤防の辺り。３人は知らないが、山風達のトレーニングはここでやっており、今回も同じように北上と大井主導の下、駆逐艦達が身体を鍛えていた。
「お、来たねぇ新人ども」
その中で、相変わらず江風の上に乗っている北上が小さく手を上げる。その下で腕立て伏せ中の江風は、そろそろ限界のようで腕がプルプル震えていた。
その隣で山風を背に乗せて同じように腕立て伏せをしている涼風は、既に限界を迎えてその場に倒れ伏している。
「えーっと、それはなんスかねぇ」
「んー？　そりゃあ勿論筋トレだよ」
艦娘として戦うとしても、このトレーニングが正しいものかは正直わかっていない。だが、誰も文句を言わずにやっているくらいだし、調査隊の隊長達が率先してやっているくらいなのだから、これが強くなるのに効果的なのがわかる。
「漣、アンタはあたしの下で鍛えるから」
「う、ウス」
「曙と朧はあっち。大井っちがガッツリミッチリやってくれるよ」
北上が指差す方では、大井が荒潮を鍛え上げていた。
陸だというのに大井は艤装を展開し、最小出力とはいえ水鉄砲で荒潮を攻撃。対する荒潮は、それをただひたすらに回避しているのだが、なんと艤装を使わずである。単に身体の運びだけで艤装の出力と同じ程の動きを身につけようとしていた。
多少は直撃を受けたようだが、最小出力であるため、傷がつくわけでもなくただ身体が濡れるだけ。しかし、艤装を身につけていないの

だから一撃を貰えばそれ相応の衝撃を受けるわけで、骨が折れるなんてことは無いにしろ、痛みはしっかりある。
「……何やってんのアレ」
「急ピッチで成長するために荒潮が言い出したことなんだけどさぁ、アレはアレで結構効率いいんだよね。艤装無しでアレだけ動けるってことは、艤装有りだと相当なもんになるだろうねぇ」
「そうかもしれないけど、ここ陸の上よ。やる意味あるわけ？」
曙が問う理由も、北上には理解出来た。だが、そう言われることも予想通り。
「海の上も陸の上も似たようなもん……っていうか、海の上の方がキツいことくらい、アンタ達でもわかるでしょ。じゃあ、陸の上でも動けないと海の上なんて以ての外。で、その代わりに艤装無しってことでやってんの。ぶっちゃけ、艦娘と深海棲艦の力の差ってあんなもんだよ。こっち艤装無しであっち艤装有りってくらい」
ただの深海棲艦ならそこまで考えなくてもいいかもしれないが、今戦っている深海棲艦は、泥によるブーストがかかることで確実に艦娘よりも強い力を振るってくる。
それは北上が龍驤と相対した時に実感したことでもある。あちらは1人で、こちらは北上以外にも駆逐艦達を盛りに盛って、一方的に撃退出来たくらいだ。1対1（タイマン）ならば、北上とはいえ少々厳しいと感じるくらいに。煽りに煽っても、頭の中ではそこまで考えていた。
北上に慢心など無い。その場その場であらゆる手段を使って最善を掴み取るために努力する。しかし、その様子を他者に見せることは無い。それを知るのは、大井のみ。
「強くなるだけじゃあ無く、勝ってこそだから。まぁ荒潮は大分特殊だけどね。武蔵さんからも鍛えられてるから、アイツやばいよ。砲撃や雷撃だけならともかく、接近戦まで網羅しやがった。しかも、まだ全然時間経ってないのに。あれが天才って言うんかねぇ」
事実、陸の上で実力差を作っているというのに、荒潮の動きは徐々に大井の砲撃に慣れていき、直撃ではなく掠める程度になり、そして当たらなくなっていく。まだ大井は比較的手を抜いているようだが、

それすらも少しずつ凌駕していくだろう。
「あそこまでになれとは言わないけど、アンタ達にはせめて、3人で1人分にはなってもらわないとね。だから、最初からそれを根っこに置いて鍛えるよ。個人プレーは二の次。3人が3人、自分のやるべきことの一点特化に仕立てる。1人やられたら3人やられたって思ってやんな」
　1人1人を完璧に仕上げるのは時間がかかる。だから、1人で出来ることを3等分して、それに特化した特訓を施していく。その特化したことに関して一人前になるための時間は短くて済むだろう。
「龍驤に吠え面をかかせるには、これがベストだと思うんだよね。ああ、あとあたしと大井っちに分けたのは、漣はどちらかと言えば感覚的で、曙と朧は理論的でしょ。だから振り分けた。文句は無いよね？」
　ニヤッと笑う北上に若干の恐怖を覚えつつも、自分達がやれることを考えてこのようにしてくれたことに感謝する。故に、文句なんて1つも無い。
「やるわ、やってやるわよ。短期間で、あたしがやれること、全部取り込んでやるわ」
「それで強くなれるのなら、朧はいくらでもやる」
「こりゃあ漣も踏ん張る時っぺぇなぁ！」
　3人とも気合は充分。自分のためにも、仲間のためにも、これが最善として進むことを決意した。

「……北上さん、やっぱり駆逐艦（こども）のこと好き……だよね」
「おいおい、山風もそれ言うのかい。大井っちにも言ってるけど、あたしゃ駆逐艦（ガキ）はウザいって思ってんだから」
「……そっか」

黒幕の居場所

施設は一時的な平和な時間を過ごし、堀内鎮守府では保護された3人の艦娘の育成を開始することで、黒幕への対策を進めている。
そんな中、近海に黒幕が潜伏しているということで調査を続けている大塚鎮守府は、そろそろ手詰まりとなりそうだった。
鹿島を旗艦とした調査隊が、今のところ毎日のように出撃しては、毎回別方向へと向かって何かおかしなところがないかと見て回っているのだが、それらしい痕跡は何も無かった。
「今日も何も無し……ですか」
近海を行けるところまで行って周囲を見ながら、鹿島がボソリと呟く。まだ調査を始めてたった数日ではあるのだが、まるで成果がないとなると残念な気分に。
泥を見ることが出来る眼鏡を使うのは鹿島と夕雲、そして雷。3人の目を使って余すところなく確認しているので、本当に泥を感知しないことは全員がわかっている。
「これで北と南は行ったのよね。だったら、あとは東？」
雷が眼鏡を拭きながら鹿島に問う。何回見ても何も変わらないのだが、なるべく綺麗な状態で見なくては判断が出来ないため、定期的にレンズは綺麗にしていた。
「そう……ですね。東側には行けていないところはあります。まだ時間があるので、このままそちらの方へと向かいましょう」
「そっちってさ、確か遠洋航海の帰り道じゃなかった？」
周辺警戒をしながらも川内が思い出したかのように話す。鹿島が旗艦をやっているからか、無意識に遠洋航海のルートを外してしまっていたかのようにすら思える。
事実、鎮守府から真正面を進むルートは後回しにして、陸に近いところからグルリと回るように見て回っている。
黒幕は曲がりなりにも陸上施設型であるため、なるべく小島が多い場所を確認し、陸に住む人間達の平和を守ることを優先していた。ただ、その奥底には、またあの航路に向かったら、あの時のように侵蝕

されてしまうのでは無いかという恐怖も孕んでいた。
「あの場所は、最後に向かうつもりでした。今は人々の平和を優先したかったので」
「それは確かに。こっちの方は地図もちゃんとあるわけだし、ここで辿り着けない島とかあったら困るもんねぇ」
当然ながら、こうやって調査をしているときは、近海の地図や海図は確認しながら行動している。陸に近ければ近いほどその地図は正確になるわけで、見当たらない島なんてものが存在していないことも確認済み。
そうなると、黒幕がいるなら地図にも海図にも載っていない島ということになる。実際、施設のある島はそれに該当する島となるため、黒幕が同じような島を使っている可能性は非常に高い。
とはいえ、万が一陸に近い島、むしろ陸そのものを侵蝕して自分のモノにしようとしていたら目も当てられない。それ故に、優先的に陸を調査するのは、あながち間違いでは無い。
「でもコレで、人間側が危ないってことは無いんだよな」
「それは保証出来ます。持っている地図の通りに陸があることは確認出来ていますからね」
「んなら、あとは残ったとこを全部見ていくしか無いってことだ。まだ時間があるなら早く行きたいね」
そう言うのは長波。警戒をしていても敵が出てくるわけでもなく、少し暇そうにしているのが見て取れた。
「このまま行きましょう。でも、充分に気をつけて」
一度あった場所なのだから、もう一度同じことが起きてもおかしくない。またあんなことになったら、間違いなく心が折れる。それが怖くて仕方なかった。
だが、そんな感情で躊躇っていては事件の解決には全く貢献出来ない。それはよろしくない。
だからこそ、鎮守府のやり方をしっかり思い出す。自分は兵器であり、感情を強く持たず、やるべきことを正しくやり通す。
小さく深呼吸をし、その在り方へと自分をシフトしていく。私怨な

どなく、平和のために戦う兵器となる。そうすれば、恐怖なんて何処にも無くなるのだ。死ぬことさえ無ければいい。

そこからさらに進み、人間の住まう陸は水平線の遥か向こう側に消えたところ。

「一応念のため」

ここから大和が泥刈機を装備。緊急事態に備えて、その頭の部分を前側に構える。万が一泥が確認出来たとしたら、即座に対応出来るようにしておく方がいいだろう。

「見た感じは何も無いけど、どうなの？」

眼鏡を使っていない3人は、この空間に来たところで何かわかるわけでも無い。もし泥があったとしても、それは無味無臭。しかもそれを靄のように散布しているとしたら、目に見えない。何も知らない間にゆっくりと侵蝕し、黒幕のいる方へ向かわないように無意識のうちにルートを変えてしまう。

6人がやらされた侵蝕とは別物の、ただ近付かせないという。だけど薄いモノであるとはいえ、洗脳は洗脳である。長時間その場に居続けたら、それこそまたあちら側にされかねない。

「反応らしい反応は無い……んですが、何かおかしな感じがします」

眼鏡をつけたり外したりしながら話すのは夕雲。裸眼で見る風景と眼鏡越しに見る風景に差異がないかの確認をしているようだ。

当然ながら、そうしても見えるモノは変わらない。この眼鏡はまだ初期型。ここにいる者は知らないことだが、泥が泥として成立していないと反応が見えないため、空間に引き伸ばされた泥はわからない。

しかし、夕雲はその空間のことをおかしな感じとして認識していた。

「夕雲姉、おかしな感じって？」

「そうですね……激しい戦いの後に爆煙とかで肌が煤塗れになる時があるじゃないですか。そんな感じというか……」

「埃が纏わりついているような感覚、ですか」

夕雲のその言葉に、鹿島は少し考えた後、上着を脱いで袖を捲り上げる。夕雲の表現を基に、それに面する肌の面積を拡げてみようと考えたのだ。元々それなりの露出がある大和と川内も、それを聞いて意識を集中してみる。

すると、本当に僅かだが、肌に何かが乗ったような感覚を得た。

「あ、ホントだ。何かある」

「ですね……今の今まで気付きませんでした」

川内に続いて鹿島も肌にそれを感じた。大和も少し時間がかかったが気付いてしまえばそうかもしれないというくらいには感じる。

「ここは私が遠洋航海に使う航路から少し外れたところですね。それに、ここはもう近海とは言えないような場所です。当たり前ですけど、目視で何かあるわけではないですし……」

３６０度全てが海に囲まれたその場所では、正直何も無いようにしか見えなかった。しかし、肌は何かあると感じる。

この現象、ここにいる6人で無ければわからないモノだった。理由は簡単、一度侵蝕されているからである。身体が侵蝕を覚えているために、それに類するモノに対して敏感になっているのだ。

それでも意識しなくては僅かにすら感じることが出来ないくらいに微量ではあるのだが。一度も侵蝕されていないほぼ全艦娘は、この空気に気付くことは出来ない。

結果的に、大塚提督の采配、精神的なダメージから吹っ切れさせるために、一度侵蝕された者達を使ったのは大正解だった。

「鹿島さん、一度鎮守府と連絡を取ってみたらどうかしら。確か、侵蝕されたりしてると通信が出来なくなるって言ってなかった？　それを確かめるためにも」

「それは深海棲艦が侵蝕されている時に発生するみたいです。現に、私達が侵蝕されているときには普通に外と連絡が取れましたから」

「あー、そっか、確かに。じゃあやっぱり、今の私達の感覚だけが証拠になるんだ」

雷もようやくこの妙な感覚を肌で感じることが出来たようだが、残念ながら通信でこの空間がおかしいかどうかは判別出来ない。これ

が黒幕にかなり接近しているというのなら、あちら側の存在で通信妨害が発生するかもしれないが、おそらくそれもないだろう。
「でも、報告するのはいいことですね。そこからの指示を仰ぎましょう」
　実際、ここにいる6人が全員同じ感覚を得ることが出来たのだから、それについての報告はしておくべきだ。
　このままここに居続けるのは問題がありそうなので、この感覚が失われる場所まで移動してからとした。それこそこの僅かな感覚でも、積もり積もればまた侵蝕されるという可能性が無いとは言えない。
「調査隊旗艦、鹿島です。応答願います」
　誰もが肌に何も感じなくなったところで鎮守府に通信。その間も周辺警戒は欠かさない。案の定、通信はまともに出来たため、あの空間の近くでも通信妨害は受けないようである。
『俺だ。何かあったか』
「はい。ここにいる6人全員が、肌に何か感じる海域を発見しました。おそらくこれが……」
『敵対する者を弾くという空間か』
　マイク越しの大塚提督の声が、僅かにだが昂揚したように聞こえる。おそらくだが、今回のこの調査は難航すると考えていたのだろう。何せ、目に見えない敵にのみ有利に働く空間と言われてもピンと来ないのだ。
　それが発見出来たことは、喜ばしくもあるが緊張感を高めることにもなる。本当に近海に黒幕の拠点があったということなのだから、いつどうなるかわからない。
『ならば、出来る限りその空間がどれだけの範囲なのかを確認してくれ』
「了解しました。もう少し調査を続けます」
『ああ、頼んだ』
　短く端的な報告ではあるが、これで大きく進展することになる。調査隊は、地図や海図と睨めっこしながら、この空間の場所を確実なものとしていく。

鹿島からの報告を受けた大塚提督は、表情には出さなかったが、内心ガッツポーズでもしそうなくらいだった。今までこの件に関しては何の成果も無かったが、ここでようやく一歩前進出来たのだから。
「お疲れ様なのです、司令官さん。鹿島さんからの報告はどうだったのですか？」
「黒幕がいる可能性のある海域を発見したそうだ」
電もわっと喜んだが、業務中であるためにハッとすぐに表情を戻す。
「まずは敵対する者を弾く空間とやらの範囲を調査してもらう。やろうと思えば、その中心が敵の本拠地と考えることも出来るだろうからな。しかし、わかっていても辿り着けるかはわからない」
「ですね。そうなると、堀内司令官さんの鎮守府で開発されているという装備がどうしても必要になるのですか」
「かもしれないな。俺達でも出来ることはやっていくつもりだが、手詰まりになる可能性はある。そうなったら、協力してもらうのが無難だろう。無理をして足を突っ込み続けても、良いことは無いだろうからな」
ここからは慎重に行くことも必要だ。これ以上の被害を出すわけにはいかない。
「これについては、大将と堀内提督にも連絡をしておかねばならないな。あとはあの施設の深海棲艦……姉姫にも伝える必要はあるだろう」
「すぐにでも連絡するのですか？」
「早ければ早い方がいい。時間をかければかけるほど、あちらの思うツボだろう。ただでさえ、黒幕と同じ力を持つ者が1人増えているんだからな」
黒幕の居場所がわかったところで、まだいろいろと難題は残っている。しかし、前進するための情報は確実に仕入れることが出来ているのだ。こうなったらもう、後ろを向いている暇なんて無い。そんな時

間すら惜しい。
「我々も協力出来ることはしていかねばならない。こういうカタチで貢献出来たのはいいことだ。この調子で、先に進むぞ」
「はい！」

そして、早速大塚提督からの発信で情報を共有していくことになる。敵の本拠地をようやく見つけられたことは、この戦況を大きく動かすことになるだろう。

泥の意思

大塚鎮守府の調査隊が黒幕の拠点と思われる海域を発見したという情報は、仲間達にすぐに伝えられた。

予想通り大塚鎮守府の近海に存在していたことに小さな安心と大きな不安。ようやく尻尾を掴めたという喜びと同時に、手が届く場所にいるということはいつ襲われてもおかしくないということに繋がる。そう考えると、攻め込む以上に身を守るアイテムの開発が急がれる。

「なるほど、まずは鎮守府を守ることを優先するわけですね」

その情報は鎮守府中に広まり、勿論明石の耳にも届く。むしろ、コレに関しては提督直々に明石に伝えたレベルである。

明石は今も大淀と共に泥対策の研究開発を続けている。つい先日に泥の対策に一筋の光が見えたとなった後に、二度溢れた春雨の髪の毛やら何やらも手に入れたので、今は捗って仕方ないようだ。

そこに新たに黒幕の拠点らしき海域が判明したと聞いたら、より一層やる気が出ているようだった。それこそ、やる気が溢れて眠気も疲れも吹き飛んだレベル。

「ああ、難しいなら方針転換をする必要は無いんだ。そのために現状を聞きに来たんだからね」

「そういうことでしたか。よくぞ聞いてくれました！」

満面の笑みの明石。そして、ここから始まる明石のマシンガントーク。

「以前研究している時に思いついた泥の対策の１つとして、寄生虫みたいな単細胞生物の意思をちょっとだけズラすことによって害の無いモノにしてやろうというのを考えたんです。それで、今はまだ上手いこと増殖させながら実験に使っている荒潮から採取した泥を使っていろいろやってるんですが、なかなかその手段を見つけられなくて。でも泥を消し飛ばす波長は今も使っているわけで、それを少し弄ることで解決しようとしているんです。少なくとも今は、円盤を回転させて波長を捻りながら泥そのものを捻じ切るカタチで排除してい

るんですけど、その波長自体が泥のようになっている寄生虫の群衆を分離させる効果を持たせています。1体1体になってしまえば、円盤の風圧で死滅するくらいでしたからね。なので今までは力業だったわけですが、その波長を寄生虫そのものに影響を与えるように改良することを念頭に置いて、改良を加えています。望月に持たせた腕時計型はそれに近くて、回転力を必要最小限にして波長の力を強めた感じです。それでも結局は僅かな風圧でも死滅してくれるので、小型化大成功でした。そこから」

「明石、一旦止まりなさい。ズレてるから」

大淀がここで一時的にブレーキをかける。明石の言葉はいろんなところに飛んでいこうとするので、こういうタイミングで一度深呼吸させて、もう少し端的に話させようという狙い。

事実、明石のこのマシンガントークは止まり、一度呼吸を整えた。今話したのはこれまでの成果。聞きたいのは、それ以降の研究の進み具合。寄生虫の意思をズラすというどうしたらそれが出来るかもわからないような手段を研究しているようだが、そこに辿り着けたかどうかを知りたかった。

「そうだ、結論から言った方がいいですね。コレに関しては上手く行きました。泥が自ら霧散するように仕向けることも、そもそも侵蝕をしないようにするようにも出来ます」

とんでもないことを言い出した。この短期間で、明石は泥の構造を理解し、その在り方にメスを入れることに成功していたのだ。

「実際完成というか一歩進めたのは昨日の夕方くらいなんですけどね。キーになったのは、貰ってきた春雨の細胞でした。つまり、溢れた深海棲艦の細胞です」

「確かに、黒幕も溢れたことで器から離れて今に至っていると聞いたが」

「姉姫の細胞と泥は似て非なるものだったんです。それこそ私達艦娘のような、そっくりな別個体というか。あれです、焼きそばとカップ焼きそばみたいな」

表現が非常に悪いが、提督にはひとまずピンときた。見た目は全く

同じ細胞だが、性質がまるで違うということなのだろう。
　姉姫は二度溢れた黒幕が捨てた器。言ってしまえば、まだ溢れていない深海棲艦と同じと見てもいい。器と中身が別モノとなっているのは当たり前ではあるのだが、その形状は近しいモノなのだとか。
「でも、春雨の細胞は違った。どちらかと言えば、姉姫よりも泥寄りの構成でした。つまり」
「……深海棲艦が溢れたら、それはそれで細胞が変質する？」
「その通り！　まぁまだ憶測でしか無いんですけどね」
　パチンと指を鳴らして提督のその言葉を肯定する。艦娘が溢れると深海棲艦に変質するが、深海棲艦が溢れてもまた別のモノに変質するということが研究から判明したのだ。
　生物学的には深海棲艦と一括りに纏めてしまってよさそうだが、今までの深海棲艦とは何かが違うらしい。
「春雨から手に入った細胞は、さっきとは逆。見た目は全然違うのに同じようなモノです。例えるなら、タコ焼きとお好み焼きみたいな」
「明石、お腹空いてるの？　何か持ってくる？」
「後から食べに行こう、うん」
　当たり前だが、春雨と黒幕はまるで似ていない。それも憶測ではあるのだが、ヒト型となっているのなら、それは春雨に似たカタチになることはまずあり得ず、中間棲姫と似たような姿、もしくは完全に独自のカタチをしているかのどちらかだろう。
　ここに、細胞から調査したところ、今の春雨は存在の定義からしたら黒幕と同じようなモノとなるらしい。本人にそれを伝えたら怒りが溢れそうだが、それが事実。
「別に春雨の細胞が寄生虫というわけでは無いですが、とにかく、二度溢れた者の細胞……じゃなく、深海棲艦が溢れた場合は、他者を侵蝕するように変質する、というのが私の仮説です。最初は自分、次は周りってことですかね。黒幕は言わずもがなですが、春雨も似たようなことをしたんですよね？」
「侵蝕ではないが、無意識に敵の行動を抑制したと。視界に入った者を望み通りに動かしたそうだ」

「同じ原理ですよ。春雨は見えている範囲にのみ散布出来て、その行動を侵蝕したわけです。つまり、春雨の細胞を研究素材にすれば、黒幕の対処法もわかります。その結果、今の状況に都合のいい装置が開発出来ました」

言いながら用意したのが、小瓶に分けられた泥と、何やら見たことのない装置。見た目だけで言えば電探のように見えなくも無いが、どちらかといえば泥刈機の先端部分、腕時計型の泥刈機に内蔵されているそれに近い。

「この装置は、泥を消し飛ばすのではなく、泥に意思を逆方向にズラす波長を発生させます。侵蝕を前進だとすれば、これは後退させるモノです。すると、こうなります」

小瓶を握ると、その体温に反応して泥が増殖を始める。しかし、装置の波長に当てられたことによってその性質を逆転させられたことにより、増えるのではなく減る方向に向かっていくようになっていった。分裂は結合となり、成長は衰退となる。その結果、瓶の中の泥は、逆方向にされた自身の性質によって数を減らし、最終的には消滅した。

明石の手があり、かつ小瓶の中に入っているにもかかわらず、波長はしっかりと泥に効いている。これが小瓶だからとなるとまた話は変わってくるのだが、それでも肉体も瓶も貫通して泥だけをピンポイントで消滅させるように調整されているのだから、今回求めている物に近い挙動を再現出来るだろう。

「これを鎮守府に配備すれば、少なくとも人間や艦娘に害を与えずに、泥だけを消滅させることが出来るでしょう。ただこれ、出力を上げるためにはそれ相応のサイズにしなくてはいけないので、持ち運びがかなり難しいかなと思います。艦娘の装備には出来ないけど、鎮守府の施設として配備することは出来るかなと」

「なるほど、そういうカタチで防衛設備にするわけだ。確かに今最も欲しい物じゃないか」

「未完成といえば未完成ですけどね。これ、深海棲艦への影響は見れていないんですよ。今の段階でもまず確実に春雨に効いちゃいます。

なので、施設に配備することは出来ません。そこがまだまだ改良ポイントですね」
　とはいえ、今は確実に鎮守府を守ることが出来るのだから、段階を踏むにしてもいい具合。
「あとは散布されている泥に効くかどうかですね。というか多分効くんですけど、さっきも言った通り、持ち運ぶには出力が足りないし、出力を上げると持ち運べないし、小型のまま出力上げると多分使ったヒトが吹っ飛ぶか、装備している部位がミンチになるので、そこはまだまだ改良の余地ありです」
　相変わらず物騒な言葉が出てくるが、まだまだ伸び代があるということ。そこさえ解決出来てしまえば、敵対する者を弾く結界をも消し飛ばす装置が完成するだろう。
　だが、それまでにはまだ時間がかかる。そのため、まずはこの装置を大塚鎮守府でも製造出来るようにして、配備してもらう方向に持っていくのが先決だ。
「なので、黒幕の拠点に辿り着けるようにするにはもう少し時間がかかりますね。この装置の大出力小型化の研究をしていきますので」
「ああ、よろしく頼むよ」
「まっかせてください！　今の私はやる気に満ち溢れてますからね！
　もしかしたらやる気が溢れすぎて繭になっちゃうかも！」
「勘弁して」
　満面の笑みで心を燃やす明石は、今はとても頼りになる存在。大淀も苦笑しながらもしっかり支えて先へと進む。
「はいはいそれじゃあ頭を休ませるために、何か甘いものでも食べに行きましょうか。ちゃんと休憩しないと出来るものも出来ないわ」
「オッケーオッケー。一度リフレッシュした方が思いつくってことはわかってるからね。大淀に従いまーす」
「いつも従ってほしいんだけど」
「善処しまーす」
　ニコニコしながら大淀に連れられて一度工廠から出て行った。しっかりと管理が行き届いているようで、提督も一安心である。

「大塚提督に伝えておかねばな。これでさらに前に進める」
独りごちて、提督も執務室へと戻っていった。
あと考えねばならないのは、その辺りの対策が出来ても黒幕自体の力が完全に未知数であることだ。
これだけ長い間戦っているのに、その片鱗すら見せてこない相手に対して、どのように戦えばいいのか。それを考えるのは提督の仕事。勿論、他の鎮守府との協力も考慮して、出来る限りの最善を導き出す。

「ふぃー、リフレッシュ完了！　ここからバリバリ研究開発続けていくよー」
「するのはいいけど、ちゃんと寝てよ？　倒れたら意味が無いんだから」
「いやぁ、大淀のおかげで生活リズムは完璧だと思うよ。グッスリ寝てるし、ご飯も食べてるし、お風呂もちゃんと入ってるし」
「それが普通なの」
間食で英気を養った明石と大淀は、再び工廠へ。
「とりあえずコレで泥対策はかなり強化出来てるんだけど、黒幕の本体に効くかどうかはわからないんだよなぁ。それを試すことが出来ればいいんだけど、基本的には一発勝負くらいの気概で行かなくちゃだし」
「そうね……確かに実験が出来ればいいけど」
と考えている内に、明石は1つの答えに辿り着く。
「あ……いいこと思い付いた」
「なんか嫌な予感がするんだけど」
「いやいや、これは今後の戦いにも必要なことだよ」
コソッと大淀の耳元でその思い付いた案を話した。それを聞いた途端、大淀は目を見開いて驚き、しかしそれしか無いかと納得もする。提督が許可を出すかどうかはさておき、やれそうなことはそれくらいなのかもしれないと。
「私は明石が偶に怖くなるわ」

「いやぁそれほどでも」
「褒めてない褒めてない」

ここから戦いは一気に好転する。

滾る怒りの抑え方

深夜の哨戒を終えた後に眠っていた春雨が目を覚ました時には、施設側にも黒幕の拠点がある海域が見つかったことが伝わっていた。時間としては昼食時だったため、仲間達が集まるダイニングでそれを聞きながら少しだけ遅めの昼食を摂る。

「なんだかすごく安心したわ。Ｍｉｃｈｅｌｌｅに無理なんてさせられないんだもの」

「ミシェルはやってもよかったけど、ジェーナスちゃんがやめとけって言うならやめとくぴょん」

正確な場所は現在調査中ということではあるのだが、人間と艦娘の力でその辺りは出来そうということで、非戦闘員であるミシェルを使わなくては見つけられないということは無くなりそうである。そこはジェーネスも特に喜んでいたとのこと。ミシェルは少し残念そうにしていたが、ジェーナスがこの方がいいと言うのならそれに従うといった感じ。

「なら、明石さんがその辺りの対策を作っちゃってそうですね」

堀内鎮守府のことを最もよく知る春雨ならではの見解。海風も隣で首を縦に振る。

実際、明石がかなりいいところまで行っているので、春雨の予想通り。ただ、まだ完成しているわけでは無いので公表はされていない。

「私達はその戦いに参加出来るんでしょうか」

「うぅん、それは何とも言えないわねぇ。その場所はあの眼鏡くんの鎮守府の近くみたいだから、ここからはかなり遠いのよぉ」

「大将はアタシ達も仲間として認識してくれてるから、いざとなったら戦線に出られるように工面してくれるらしいけど、元々はアタシ達には頼らずに終わらせたいとも言ってたから、何とも言えないわね」

今のところ、施設の者達がその戦いに参加することは難しいといえる。まず鎮守府近海であるため、仲間かもしれないが嫌でも敵として認識されてしまう点。絶海の孤島か何処かにある鎮守府ならまだしも、普通に陸続きの場所では、一般人の目にも入ってしまうかもしれ

ない。そこがかなり難しい。
一応、姉妹姫や戦艦棲姫以外は、元々が艦娘であるため偽装は可能と言えば可能。しかし、艤装がどうしても誤魔化せない。特に難しいのがリシュリューやコマンダン・テストのような尻尾型。一応航行するだけならば脚部艤装だけでどうにかなるのだが、戦闘となると話が変わる。
それと、人間側が施設の者達の平和を守るために、なるべく力を借りないように進めて行きたいという考えがあるため、本当にギリギリにならなければ戦闘への参加を依頼してくることは無いと思っている。
そもそも戦いたくないという理由でここにいるのが姉妹姫だ。そして、仲間達もそれに同調している。それ故に、施設はあくまでも自衛に徹してもらい、本拠地を叩くのは人間と艦娘に任せてもらいたいと話していた。
「施設的にはそれでいいのでしょうし、それがいいのでしょう。でも、私の怒りはそれで治まりそうに無さそうで困ります。勿論、姉姫様にも妹姫様にも迷惑をかけるつもりはありません」
「気持ちはわかるけれど、抑えてちょうだいねぇ」
明らかに苛立ちを表に出している春雨に中間棲姫は苦笑しつつ、落ち着けるように近付いて頭を撫でる。春雨の怒りは寂しさとも連動しているため、仲間の温もりがあればある程度は抑えられる。それでもこの感情は厄介であると春雨自身も感じており、またそれが苛立ちに繋がっていく。
「春雨、あんまり怒りが晴れないようなら、思い切り身体を動かした方がいいわよ。まだそれと付き合い始めて時間が短いんだし」
ここで同じように怒りが溢れている叢雲からのアドバイス。怒りとの付き合い方を伝授するということを話していたため、こういう時に率先して口を出していた。
叢雲は叢雲で、あまりにも怒りが溢れて落ち着かない時は、薄雲と共に散歩をしたりして身体を動かすことでストレスを発散することもあるらしい。基本的に甘い物で多少は治まる叢雲ではあるのだが、

それでも無理な時こそいっそ暴れ回るという。当然、誰にも迷惑のかからないところで。
「あとはお風呂ね。水風呂はオススメ。煮え滾る頭が多少は冷えるわ」
「……そうだね。後から少し身体を動かして、お風呂に入ってさっぱりするよ」
　この溢れる怒りには、どうしても慣れることは出来ない。海風もずっと傍に居続けることである程度の怒りを抑え込もうとしているのだが、そう簡単にはいかないもの。
「……夢見が悪かったというのもあって、どうしても苛立ちが……ね」
「わかるわ。その時のこととか思い出して、気分悪く目覚める感じでしょ」
「うん……それもあるんだけど、なんか寝てる間に私のことを誰か噂してたんじゃないかな。聞き捨てならないような言葉が聞こえたような気がして」
　おそらく、鎮守府で明石が語った、春雨は黒幕と同じようなモノという言葉を、眠っていながらも直感的に感じ取ったのだろう。それも相まってか、目を覚ました時点で若干不機嫌だったため、海風に抱きしめてもらいながら落ち着くまでに時間をかけたほど。
　虫の居所が悪いと言うのが正しいのかもしれない。些細なことでも苛立ちが出てしまうような状況と言っても過言ではない。
「アンタの場合、マジで何か言われてるかもしれないわね。もしかしたら、龍驤辺りが愚痴ってんじゃない？」
「それはそれで腹立たしいね……うん、お昼は身体を動かすことにする。ありがとう叢雲ちゃん」
「礼には及ばないわよ」
　同類が出来たというのが、叢雲を若干落ち着かせる要因となっている。代わりに春雨がイライラしているのだから、叢雲の怒りを少し引き取ったかのようにすら見えた。

昼食後。午後の哨戒担当の白露、ジェーナス、ミシェル、リシュリューはすぐに出発。深夜担当の叢雲、薄雲、コマンダン・テスト、そして潜水艦姉妹はその時ために就寝。残った者はフリーとなったため、好き勝手平和に暮らす。

潜水艦姉妹が深夜哨戒のために潮から離れ、代わりに松竹姉妹がトレーニングのサポートに入っていた。また、古鷹もそちらの手伝いをし、潮の成長に一役買う。

そんな中、春雨も海風と共に岸に来ていた。昼食の時に宣言していた通り、身体を動かすため。潮達にも見える場所でやろうとしているのは、手伝えることがあれば手伝うためである。

とはいえ、今の春雨がやりたいようにやった場合、潮を怖がらせる可能性はかなり高い。だが、施設を守るために共に戦うこともあるかもしれないため、事前に慣れておくという意味でも一緒にいろいろやった方がいいというのもある。

「今自分がやれることも知っておきたいし、一度思い切り艤装を展開してみる」

「はい、私が見守りますので」

「任せたよ」

どう変質しているかは自分でもしっかり知っておく必要はあるだろう。直感的にその辺りに勘付くことが出来るとはいえ、頭の中で思っていることと、実際に動かしてみる感覚はまるで違う。

哨戒中は基本的に艤装の展開はしないので、いつもの脚を消したスタイルでの航行だったので、戦うための義腕と義脚にするのは暴走して以来。

「まずは思いのままに展開してみるよ」

何か弄るとか、無理にでも白露型に合わせるとか考えず、ただ本能のままに艤装を展開する。今の自分の心境や、根っこの部分を再現するために。

結果として、暴走していた時とは少し違うものの、狂犬を表に出したスタイルとなる。両腕には鉤爪が現れ、両脚も刺々しいデザイン。そしてなにより、犬の耳のような電探と尻尾のような基部が特徴的な

姿に。
　今はまだここで止まっているため、身体を覆い隠すような装甲や顔を隠すマスクなどは現れない。そこまで来てしまったら、春雨は完全に理性がない獣（ケダモノ）となっている時である。意図的に作り出すことは出来るだろうが、あえてそこまではいかない。
「……うん、やっぱり、意識せずにするとこんな感じなんだね、今の私は」
　鉤爪の手を動かすと、ガチャガチャと軽い音が聞こえる。しかし、これでも殺傷能力は相当なモノで、この手で握り締められたモノはズタズタに引き裂かれることになる。
「腕とか脚とかはわかるけど、これはどういうことなんだろ」
　そして、春雨自身も不思議に思っているような尻尾の基部。意識すると少し動かすことが出来るようで、それこそ完璧に犬になったような感覚。
「尻尾……ですよね」
「リシュリューさんやコマさんみたいなのでも無いし、もうこれだと本当に犬だよね。狂犬だっけ」
「それは夕立姉さんの専売特許ですよ。でもその妹ですし、姉さんにもそういう要素があってもおかしくないとは思います」
　周囲に害がないことを確かめるために、海風が許可を貰って尻尾に触れさせてもらう。その感触は見た目通りの艤装のような硬さであるが、触れないほどでは無いが熱くなっている辺りが基部であることを表している。
　暴走しているときは、艤装に触れるだけで身を焼かれるような熱と痛みを与えてきたが、今は春雨が怒りをある程度制御出来ているため、そのような熱が発生することはない。むしろそんな熱が発生していたら、また春雨の身体を蝕み、身体を燃やしているだろう。流石にそこまで諸刃では無いようである。
「なんだかこうしてるだけでも少しは発散されてるみたい。なんだろ、艤装を展開することで排熱してるのかな」
「かもしれませんね。定期的に艤装を展開して、ストレスを発散する

べきです。ただでさえストレスを溜め込みやすいですし、一日一回は本能を曝け出すというのがいいと思いますよ。姉さんがまたあんなことになったら……私は……」
　あの時のことを思い出して、海風が俯く。春雨のこの姿は、自分が堕ちてしまったことに怒りを持った結果だ。根本的な原因は黒幕と龍驤にあることは白露に理解させられているとしても、やはり自分がきっかけになってしまったという考え方は払拭されていない。
「大丈夫、もうあんな暴走はしない。そうしたら私はまた私に苛立つことになるもん。だから、私はこの怒りを全部黒幕と龍驤にぶつけることにした」
「……姉さん」
「それも全部終わったら……その時に考えるよ。いなくなればストレスも無くなるから、まず確実にあそこまで腹が立つことは無いからさ」
　ほんのりと笑みを浮かべるが、その笑顔がこうなる前のモノとは違うことは海風にはすぐにわかった。春雨はもう、心の底から笑うことが出来なくなっているのだ。
　それが本当に悔しくて悲しいのだが、自分のために笑みを浮かべてくれたのが堪らなく嬉しく、複雑な気持ちで春雨を見つめる。海風も、こんな春雨を見ていると少し辛い気持ちになるのだが、それが春雨のためにはならないとどうにか振り払う。
「姉さんの敵は、この海風が討ち倒します。生きていることを後悔する程に痛めつけ、何度も何度も殺してやりましょう。謝っても許すことはないですし、ゴミクズのように捨ててやります。黒幕だろうが龍驤だろうが関係ありません。春雨姉さんを悲しませた者は全て敵ですから、そうなっても仕方ありません。心身共に削り取ってやります。姉さんに屈服し、平伏しても許すことは無いでしょう」
　いつもの調子を取り戻して話し出す海風に安心しつつ、それでも今までとはもう違うのだなと実感した。そしてそれがまた怒りを呼び起こす。
「姉さん、尻尾から排熱が……」

「苛立つとこうなっちゃうみたい」
苦笑する春雨。
「でも、気にしないで。海風が私のためにそれだけしてくれるのなら、私も海風のためにこの力を振るうよ。海風を悲しませたアイツらを、私は絶対に許すことは出来ないからね」
これだけ聞いていると相思相愛のようにも聞こえるが、お互いに複雑な感情が絡み合っているので、知っている者からしてみればあまり微笑ましくない光景となった。

春雨は自分に滾る怒りの抑え方を少しずつ学び、それを力にしていく。しかし、ストレスは溜まり続けるのだから、簡単に制御出来るモノではない。
やはり、春雨が心の底からの笑顔を取り戻せる日は、黒幕を撃破して事件を解決した時だけだろう。

植え付けられた罪

夕方、哨戒部隊の帰投。白露とジェーナスという組み合わせではあったが、今回も何事も無かったため、もう出て行くと何かあるというジンクスは完全に振り払ったものとして扱うようになる。

その時間まで春雨の鬱憤晴らしと潮のトレーニングは続いており、そこにいた者達が哨戒部隊を出迎えることとなった。

「潮ちゃん、今日も頑張ったぴょん？」

「う、うん、大丈夫……今日もいろいろ……教えてもらいました」

岸に到着するなり、ミシェルが潮の成果を聞く。島風と同じくらいの社交性を獲得しているミシェルは、潮相手でも全く臆すことなく、むしろ率先して友達になるために近付いていた。そのおかげで、潮も恐怖が大分薄れており、この施設の中では比較的上位の仲の良さとなっている。

むしろミシェルのことを毛嫌いするような者など存在しない。この施設のマスコットキャラとして、広く愛されている。それこそ、叢雲ですら怒りを溢れさせることなく普通に接しているくらいだ。ミシェルがそういう接し方をするから、同じように返しているだけというのもあるが。

「アタシの教えることもどんどん覚えていくから、教えるのが楽しくなってきちゃったわよ。アタシがここから動けない分、潮に出撃を任せたいくらいね」

「しゅ、出撃なんて……私は……」

「緊急時は頼んだわ。基本的にはここにいればいいから」

その特性により力をメキメキと付けてきても、潮は戦いに出向こうと自分から考えることはないだろう。余程のことがない限り、自衛手段を身につけるだけで終わる予定だ。

「いやぁ、マジですげぇよ。もうオレ達とトントンくらいに動けるしな」

「うん、潮さん凄いわ。自分を守ることなら完璧に出来ると思うもの」

松竹姉妹も大絶賛。その２人は潮のスタミナについていけずに肩

で息をしているわけだが。同じように一緒に潮のトレーニングを手伝っていた古鷹に至っては、スタミナ不足をどうにか出来ていないために起き上がれないくらいに疲れ切っていたりするのだが。
「春雨は……うん、まぁ、発散してんのかね」
「そう……ですね。定期的にこうやって抜こうかなと」
白露は艤装展開状態の春雨を見て苦笑する。艤装、特に尻尾の基部を展開していると怒りが排熱により抑制されることがわかったため、余裕がある時は攻撃性の高い艤装を全て展開する方針となった。
いくら発散しても次々と溢れてくるのが感情の溢れではあるのだが、溜まり溜まってストレスになるよりはこうしている方が精神的に楽になる。実際、今の春雨は見た目こそ暴れそうに見えるが、心は落ち着いていた。
「それで落ち着けるなら何も問題が無いよ。いつもプリプリしてるよりは精神衛生的にいいだろうからさ」
「はい、この時間だけでも、多少はスッキリしました。暴れ回るとか物に当たってるようで嫌なんですけど」
「ヒト様に迷惑かけてないなら、別に何やってもいいでしょ。むしろジャンジャンやんな。あたしとしては、いつもムカムカしてる春雨ってのは出来ることなら見たか無いねぇ」
ニッと笑う白露に、春雨も不思議な安心感を得ることが出来た。やはり仲間との交流、とりわけ姉妹との交流は心を安定させる特効薬となるようで、一番は当然海風なのだが、白露も春雨の安定に一役買っている。
海風はというと、そんな春雨の様子に安心していた。勿論自分だけで春雨を安定させられれば最高なのだが、自分の力がそこまで及ばないことも理解している。仲間達全員の力を合わせて、初めて春雨は安定するのだ。だから、海風は現状を喜び、春雨が崩れないことを望む。自分のことより春雨のことを優先する。
「はい、それじゃあみんな今日はおしまいよ。戻ってお風呂に入ってさっぱりしてきなさい。古鷹はアタシが運ぶから」
疲労で立ち上がれない古鷹を抱きかかえようと近付く飛行場姫

だったが、それをチラッと見て春雨の直感が反応する。今までの身体が震えるような悪寒とは違う、何かがこの場で起きるという予感。
だが、春雨はあえて何も止めなかった。さらに直感が働き、これはこのままの方がいいと無意識に選択した。
「古鷹、大丈夫？」
「あ、あはは……自分のスタミナ不足を忘れてしまっていました……このデメリットはどうにかしたいんですけどね……あっ」
あまりにも疲れすぎて、いろいろと維持するのも厳しくなっていた。そのせいだろう、ミシェルのために変装していた姿が、不意に解けてしまったのだ。
そろそろ戻ってくるだろうとギリギリのところで鈴谷の姿を取っていたのだが、疲労はピークだったため、ウィッグがその場で消えた。その時点で、古鷹の姿は大きく変わるようなものである。
「んん？　古鷹さん、いっつもカツラだったぴょん？　オシャレ？」
そして、一番見られてはいけない者にその姿を見られることになる。どうにか眼帯が消えるのは阻止したものの、髪型が変わればもうそれは古鷹そのものである。
「え、あ、み、ミシェル……ちゃん……」
白露は大丈夫だったミシェルも、古鷹の姿には耐えられないかもしれない。だからこそ、古鷹は今まで頑なにミシェルの前では変装を続けてきた。
「んー？　んー、古鷹さん、何処かで見たことある顔っぴょん。でも、わかんない。わかんないってことは、あんまり必要ないってことっぴょん？」
その考え方があっているのか間違っているのかは何とも言えない。ただ、古鷹の姿そのものがミシェルのトラウマを刺激する可能性が非常に高かったことを考えると、その顔を見ただけで錯乱しないだけでも良しなのかもしれない。
「あ、あはは、私とミシェルちゃんは、流石にここで初めて会ったよ？
その時は、ほら、ミシェルちゃんはイ級の姿だったけど」
「そうぴょんね、そうぴょんね。それより前のこと、ミシェルわかんな

いし、気のせいっぴょん」
結果的に、ミシェルは変装無しの古鷹の姿を見ても、発作を起こすことはなかった。
三日月型の髪飾りよりも、卯月（ミシェル）の死の記憶に近い場所にいるのが古鷹だ。直接の死の原因であるが故に、ミシェルがそのことを思い出したら最後、この場で間違いなく壊れていた。
しかし、今のミシェルはイ級の身体だった頃とは違った。ジェーナスと共に、ヒトとして生活が出来るようになり、施設で楽しく生きることで、辛いことよりも楽しいことが記憶を埋め尽くしていた。
そのおかげで、過去の記憶はわからないものとして認識外に押しやられていたのだ。楽しい記憶に辛い記憶が塗り潰されたため、ミシェルはもう発作を起こさない。とはいえ、卯月という名前を聞くのはそれすらも掘り起こしてしまいそうだから禁句（タブー）となったままだが。
「それで、カツラはオシャレっぴょん？」
「そ、そう、なの。……死んだ仲間達のことを忘れないようにするため……かな」
少しだけ悲しそうな表情を見せるが、ミシェルに心配させないように、すぐに笑顔に戻る。
実際、ミシェルに古鷹の顔がわからないようにするのならいくらでも変装の手段はあっただろう。それでも、最初から選択肢が自分の中にいる3人の仲間の姿を取るというものしか出てこなかった。その姿の方がやりやすいというのもあるだろうが、それでも古鷹の中では追悼の気持ちがあった。
白露や大鳳が好んで着る折衷案の服装も、同じ気持ちの表れ。自分の中に入っている仲間を思っての選択。対して、古鷹があえて今まで誰にも属さないインナーのみで生活していたのは、申し訳なさの表れ。2人と違い、古鷹は自分の手で仲間を殺しているという苦い経験があるため、それと同じことが出来なかった。
自分がこうして生き残って、他の3人が犠牲になったことを、古鷹は深く悲しんでいる。だからこそ、せめて誰かの姿を模さなくてはならないときは、自分の中の3人の誰かになろうと無意識的に思った。

普段は出来ずとも、こういう時だけはと。
「ミシェルよくわかんないけど、古鷹さんが優しいヒトってことはわかるぴょん。お友達のことが大切なのは、ミシェルもすっごくわかるよ。だからジェーネスちゃんと同じ服着てるぴょん。古鷹さんも同じっぴょん！」
「うん、そう、そうだね」
　ミシェルほど純粋な気持ちではないために若干俯きそうになるものの、ミシェルに疑問を持たせないために全てを肯定した。あながち間違いでもないために否定することも無い。
「じゃあ、片方のおめめもお友達の真似っこぴょん？」
　流れで眼帯の方にも触れてくるミシェル。これに関しては、本当にミシェルの記憶を掘り起こしてしまいそうなので、変装が無くなったとしても外すつもりはない。
　髪型は他にも似たような者が沢山いるが、片目が輝いているだなんて古鷹にしか無い特徴だ。これだけは見せることは出来ない。
「これは……ちょっと違う理由かな」
「そうぴょん？」
「うん、でも大丈夫。心配するようなことじゃないからね」
「ふぅん、わかんないけど、古鷹さんがそう言うならそうぴょん」
　物分かりの良さに安心しつつ、隠し事をする後ろめたさも湧き上がる。だが、表情ひとつ変えずにミシェルに対応する古鷹。
「さ、アンタ達は早くお風呂行ってきなさい。古鷹はもう少し休ませてから行かせた方が良さそうだから」
「そうね。Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、先にお風呂行きましょ」
「はーい。ジェーナスちゃんとお風呂っぴょん！」
　ここで飛行場姫とジェーナスが機転を利かせ、ミシェルを古鷹から離れさせる。楽しそうにジェーナスと施設に戻っていく後ろ姿を見ながら、古鷹は心底ホッとしていた。
「……あの……お二人は何かあったんですか……？」
　そんな様子を見ていたことで、関係に疑問を持った潮がおそるおそる尋ねる。誰もがどう説明すればいいかと悩んでいたが、知っておい

てもらった方がいいかと飛行場姫が掻い摘んで説明した。古鷹は過去に敵に操られていたこと、そのせいで他の艦娘を殺すことになっていたこと、そして、ミシェルはその犠牲者の成れの果てなのだと。
話を聞くたびに、潮は驚きながら、時には恐怖による小さな悲鳴をあげながら、この施設の深い事情を知ることになる。
そして、自分がその事件に巻き込まれたのだと理解するのも時間の問題だった。あの時の漣の豹変と同じ理由で、古鷹は苦しめられているのだと知った。誰も漣や曙のことには触れなかったものの、潮の中ではいろいろと察することが出来た。
「ここには植え付けられた罪を背負ってる子が何人もいるわ。古鷹もそうだし、白露もそう。広い範囲で言えば、もっといる。でもね潮、楽しく生きるためには、触れないことも大事なの。気にしてることを掘り返されても辛いだけでしょう？」
「……そう……ですね。私も……私のせいで誰かが辛い思いをするのは怖いですから……」
「だから、アンタは今まで通り過ごしてればいいわ。ミシェルを見てみなさい。忘れちゃってるとはいえ、それだけのことがあってもこの施設で一番楽しく生きてるわ。アンタも見習って楽しく生きなさい」
そう言われても、という表情を見せるが、後ろを向くことなく、前を向いたままでいる。
「……頑張り、ます」
「今はそれでいいわ。ゆっくり慣れていきなさいね。じゃあ、本当に休みなさい。古鷹はアタシが運ぶから」
飛行場姫が古鷹を改めて抱きかかえ、ゆっくりと運ぶ。そんな姿を見ながら、白露はピンと来たように春雨に問いかけた。
「アンタ、実はこうなることわかってたでしょ」
「……直感的に。止める必要はないかなと」
「正解だったね。これでミシェルが発作を起こすようなことがあったら確実に止めてただろうから」
まるで見透かすような白露の物言いに、春雨もクスリと笑う。
「やっぱり、みんな仲が良い方が楽しいですから。今の私ですらそう

思います」
「だね。叢雲とコロちゃんの喧嘩漫才くらいでいいよホント」
「ですね」

こうして、古鷹とミシェルの問題もひっそり解決していく。施設の者の中では後ろめたさを背負って生きている者もいるが、少しずつでも前向きになっていく。

その対策は

翌朝。今のところは平和な施設。哨戒を繰り返しても以前までのような泥の設置は無く、それ以外の特別なこともない。潮のトレーニングをしている時に、飛行場姫がそこそこの頻度で高高度の観察もしているが、やはりあちら側に関する何かは見つかることは無かった。

幸いなことに、漣達が施設の正確な位置を割り出す前に治療を完了することが出来たので、黒幕も龍驤も曖昧な位置でしかわかっていないのだから、ひとまずは施設が戦火に巻き込まれることは無い。

「大鳳さん、高高度もお願いしますね」

「はい、常に1機は上空に上げておきますよ」

午前中の哨戒当番は春雨、海風、大鳳。潜水艦は無しとなっている。今の施設の仲間達の中では、飛行場姫と並んで高高度へ艦載機が飛ばせる大鳳が参加しているため、この哨戒中は必ず上空を監視し続けていた。

「姉さんも、この時間を使って発散してください。艤装での排熱が効果的なのは昨日でわかりましたからね」

「だね。そうさせてもらうよ」

哨戒中の時間もしっかり使い、春雨は艤装を展開して溢れてくる怒りを尻尾の艤装によって排熱。ただでさえ集中しなくてはならない哨戒で苛立つのはよろしくないため、落ち着くためにも優先的にその行動をしていく。

「……居場所もわかってるから、そろそろ鎮守府は攻め込んだりするのかな」

ボソリと春雨が呟く。怒りを排熱しながらも、やはり苛立ちは出てきてしまうようで、その言葉の端々にその感情が読み取れた。

漣達を治療し、その時のことを鎮守府側に話して丸2日。そろそろ対策や作戦が作られていてもおかしくない。その時は施設の力を借りることなく戦うということになっているのだが、春雨としては自分も参加したいという気持ちでいっぱいだった。

怒りを溢れさせられたきっかけとなった戦いの裏には、漣達を侵蝕

した原点、龍驤がいる。そしてその龍驤は、間接的に海風達を侵蝕したということになる。今持つ怒りを発散するために、最も近い場所にいる者だ。
「かもしれませんね。あの泥のコスチュームの対策を立てれば、誰でも戦えるようになりますから。龍驤本人も同じことやってきていると思いますし」
「だね。明石さんのことだから、そろそろ完成したって騒いでるんじゃない？」
「あり得ますね……姉さんの麗しい髪や、神々しい体液の一部を持っていったんですから、成果を出してもらわなくちゃ困ります」
春雨の一部を持っていったというのが、海風を若干複雑な気分にさせているようだった。
海風にとっては、何よりも大切な、むしろ大切すぎて神格化されているほどの存在である春雨。髪の毛一本でも大切なモノであり、実験目的で使われるというのが嫌でも気になってしまう。いくら春雨が許可したとしても、大概に使われてほしくない。
「もし対策が出来ていたなら、こちらに何かしら連絡をくれるんです？」
「おそらくは。あちらで勝手に決めて勝手に終わらせる、ということは無いと思います」
その話に大鳳も加わる。その作戦次第では、施設も何らかのカタチで協力することになるだろう。例えば、部隊の経由地点として休息をしてもらうとか。
だが、春雨としては戦力としての協力をしたいと切実に思っている。海風、仲間達を陥れた怒りと憎しみをその身に受けてもらわなくては気が済まない。
そんなことを考えたことで、尻尾からの排熱の量が一気に増え、その周辺だけ熱量が上がったかのように感じた。おそらく触れたら少し熱く感じるくらいになっているだろう。
「ふぅぅ……排熱排熱。変なこと考えるとイライラしていっぱい熱が出ちゃう」

「難儀な身体になってしまいましたね。そうだ、その尻尾を海中に沈めてみたら、より早く冷えたりしませんか？」
「た、大鳳さんすごいこと言いますね……でもやってみます」
試しにしゃがんで尻尾の基部を海面に浸してみる。すると、まずジュワッと表面が蒸発するような音がした後、何となくだが落ち着くような感じがした。基部を冷やすことが、苛立ちを抑えることに繋がるだなんて思ってもいなかった。
実際はプラシーボみたいなモノなのだが、熱を冷ますという行為をわかりやすく実行したことで、春雨の苛立ちが僅かにだが冷えていくことになった。
「叢雲ちゃんが言ってた水風呂は効くっていうのこういうことなのかな」
「さ、さぁ……怒りってそんな物理的なことで抑え込めるんですかね」
「頭に血が上ってる時に冷やすのはいいことだと思う、かな」
実際、春雨自身がそう感じているのだからそうなのだろうと、海風は疑問を失って春雨に従う。それならば、これから春雨の怒りが酷いことになった場合は、どうにか尻尾の基部を展開してもらって冷やすという方向でやろうと決意した。

春雨達が話している裏側、鎮守府。明石のことだから対策が完成したと騒いでいるのではと話していたことは、まさに正解だった。
朝イチであろうが関係なく、明石がやったやったと喜んで騒いでいた。大淀は疲れた顔をしているものの、その完成は一緒に喜んでいた。
「これなら行けるっしょ。装備としても使いやすいはずだし。まぁある程度限られた子しか装備出来ないとはいえ」
「そうだけど、まさかここまで大胆な作戦に出ると思わなかったわ。理に適っているとはいえ、結構危険だと思うんだけれど」
「まぁねぇ。でもさ、面と向かって対峙してるってだけで危ないんだから、プラマイゼロじゃない？」

「そう……とは正直思えない」
などと2人が話している間に、五月雨を引き連れた提督が到着。明石の満面の笑みを見たことで、何かまた成し遂げたのだろうと察しつつ、何かまたやらかしたのかと不安にもなる。
提督がここに来たのは、2人に呼び出されたから。明石では話にならなかったため、大淀がまず単純に、一言だけ告げていた。
黒幕対策に必要なモノが完成した、と。
「話を聞いてきたが、何が出来たんだい。五月雨も連れてきてほしいというのは」
「何が出来たかはおいおい聞いてもらうとして、五月雨に来てもらったのは、今この場で装備してもらうためです。出撃する面々がちゃんと装備出来るかどうかのテストとして」
そう言いながらも明石と大淀は開発したアイテムをいくつか持ってくる。そのうちの1つは明らかにサイズがおかしなものだったが、そこは後に置いておく。
「まず1つ目。最優先は艦娘を守るためのアイテムだと思ったので作りました」
五月雨に渡されたのは6つ1組のリングのようなもの。それを明石がテキパキと装備させていく。2つは腕に、2つは脚に、残り2つは腰と首。
重さを感じさせないものの、何やら装置が入っているようで、全てを装着したところでペアリングが完了し、小さな光を発し始める。
「五月雨さん、一応ですが身体に何か影響はないですか。私も実験に使われているので大丈夫であることは確認済みですが」
「はい、大丈夫ですね。でもこれ、何か変わってるんですか？　力が強くなるとかでも、身体が動かしやすくなるとかでもないですよね」
少し身体を動かしても、普段と何ら変わらないと話す五月雨。それについて、明石が説明。
「昨日だったかな、提督には見せてますけど、小瓶の中に入った泥でもその意思を逆方向に向けて、増殖ではなく消滅に持っていくことが出来るようになりました。でも、その時は波長を照射することで一直線

上の泥にしか効きませんでした。大型化することで艦娘が装備出来なくなる代わりに鎮守府防衛に使おうとという話だったんですが、どうにかして艦娘も守りたい。そこで思いついたのがこれです。これは波長を照射、線上に放出するのではなく、ペアリングした6つの装置間を行き来させることによって面にすることに成功したアイテムになります。どれか1つでも欠けるとその効果は失われてしまうんですが、全てが揃っている状態であればその身体の周囲に独自のフィールドを形成するんです。いやぁ、あの出力が低い状態でも何かに使えればと思ったんですが、むしろ出力が低いからこそ真っ直ぐではなく拡げて曲げることが出来るだなんて、よく思い付いた私！」

説明されてもちんぷんかんぷんな五月雨のために、大淀は実験用に増殖させて小瓶に移した泥を持ってくる。

「五月雨さん、これを持とうとしてみてください」

「えっ、あ、はい」

大淀に差し出された小瓶に手を伸ばす五月雨。その手が小瓶に触れる直前、まだ触れる前に中の泥が消滅した。

「えっ!?」

「こういうことです。泥が艦娘の身体にへばりつく前に、自分の意思で消滅するように仕向けています。つまり、泥がどのようなカタチで侵蝕しようとしてきても、その前に侵蝕性は失われ、無害なモノと変化した挙句に自滅するんです。さっきも言った通り6つの装置全てが揃っている必要はあるんですが、その状態が維持出来ている間は侵蝕の心配はありません。言ってしまえば泥に対するバリアですよコレ。出力そのものは小さいので身体に害はなく、6つ装着しても重くありません。今は他に使いようが無いですけど、むしろ今はコレがベストじゃないでしょうか」

明石が止まらないのはもうそのままにしておいた。だが、この装置は今の艦娘達には最も必要なモノ。その身を侵蝕されないようにすることが出来れば、ある程度無茶が出来る。だからといって無茶をさせるつもりは毛頭無いのだが。

「ただ、ですねぇ。これ開発に結構なコストがかかるんです」

「……どれくらい、なのかな」
「６つセットで、５１ｃｍ連装砲が作れるくらいですね」
　それを聞いて提督が咽せた。確かに資源度外視とは言ったものの、明らかなオーバースペック品であるから、それくらいしても仕方ないとは思う。しかし、それを鎮守府の人数分揃えようとすると、鎮守府の運営が傾くレベルだ。１部隊６人、いや、連合艦隊１２人分で抑えたとしても、かなりのコストになる。
　だが、ここで躊躇うわけにはいかない。確実に勝つためには、そもそも負けないことが重要。この装置は、敵の即死攻撃を回避することが出来る強力なお守りみたいなもの。戦場に出るには必須となるのなら、躊躇う理由もない。
「多少のコストは度外視だ。だが全員分は無理だろう。１２人分……だな。量産を進めてくれ」
「了解しましたー！　作り方はもう妖精さんも知っているので、速攻で作っちゃいます！」
「それで、だ。残りのモノも説明してもらうんだが、アレがどうも気になる」
　最初に持ってこられたモノの中でも、特に大きいモノを指差す。
　それはどう見てもドラム缶なのだが、燃料を運ぶような通常のドラム缶とは違う、明らかにいろいろな装置が仕込まれているようにしか見えないそれについて言われると、明石はよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに満面の笑みを浮かべる。
「提督、これは明石の結構とんでもない作戦のための装備です。いや、本当にとんでもない作戦なんですけど」
　大淀も少し疲れた顔。
「実際、黒幕対策というのが効くかどうかはわかりません。常にバージョンアップ、マイナーチェンジを繰り返して、最高最善を掴み取る必要があるでしょう。でも、そろそろそれも難しくなってきました。そもそも実験に使えるものが、荒潮から採取出来た泥だけ。泥には効いても本体には効かないなんてことがあり得るわけで、もう少し踏み込んだ研究をしないと、勝てないかもしれない。なので、実験材料を

手に入れるためのアイテムを作りました」
「……まさか」
提督もここで明石の狙いに気付いた。
「これで、龍驤を捕獲します」

今やりたいこと

「これで、龍驤を捕獲します」

明石が開発した、いろいろな装置が仕込まれたドラム缶。それによって、泥と化した龍驤を捕獲し、今後の黒幕対策の実験材料にしようというとんでもない作戦に出ようとしていた。

今持っている泥は、荒潮から採取した泥の特性を利用して増殖させながら研究を続けているわけだが、最終的にそれが黒幕に通用するかはわからない。そして、出来ることなら黒幕との戦いは一発勝負で終わらせたいと考えていた。

そうなると、どうしても黒幕により近い存在の細胞を手に入れたい。作戦成功率を上げるためには、今の敵の中で最も黒幕に近い存在となっている龍驤そのものを手に入れることが最善。

「捕獲したいのはわかった。だが、それはそう簡単な話ではないよ。明石の考えていることは、単純にこのドラム缶に詰め込むということだろう？　より強大な力を持ってしまった彼女を、終わらせることなく」

提督でもこれは可能かどうか疑問を持つ。そもそも、今の状態で斃すこと自体がかなりの難易度であることは間違いない。強大な力を持ち、他人の身体を奪って使っている龍驤は、手加減など出来るような相手ではない。

それなのに、今後のためにより難易度の高い選択をしなくてはならないとなると、提督としてはそれに対して許可に持っていくかは何とも言えない。時間がないとはいえ、考える必要がある。

「この捕獲装置……まぁドラム缶でいいか、ドラム缶はですね、泥が外に出られないようにしてあります。なので、今龍驤が使っている身体ごと詰め込めというわけではなく、泥となった龍驤だけをこの中に収めたいんです。なので、私的にやってほしいのは、今使っている身体から龍驤だけ吐き出させて、それをここに回収することです」

単に、今の器はどうなっていてもいいという苦渋の選択ではあるのだが、実際、泥と化した龍驤は肉体を破壊されても泥となって外に出

てきた挙句、次の身体を探して逃走するだろう。
そうなった龍驤は、鎮守府や施設でも使っている泥刈機の最大出力……むしろ、今作られている改良版を使って消し飛ばすというのが最も簡単で呆気ない最期を迎えさせられることになる。それすらも簡単ではないだろう。ああいう輩は、逃走能力が非常に高い。
だが、そうではなくドラム缶での捕獲を求められる。余程簡単でなければ、消し飛ばす方を選択することになるだろう。
「簡単には許可出来ない。撃破にすら手こずるであろう相手の捕獲は、危険度があまりにも上がりすぎる」
「いや、あたしとしてはそれ、大賛成かなー」
突然の声に振り向く提督と五月雨。そこには、午前中の訓練のために艤装の整備にやってきた北上。勿論隣には大井もいた。
「この鎮守府のモンじゃないあたしが言うのもなんだけどさぁ、龍驤を捕まえるっての、アリだと思うよ。ラスボスにも効く装備とか作れそうなら、そのために材料がいるだろうし、それを取ってくるってのは大賛成。後の戦いを有利にするための前哨戦ってなるなら、結構みんな賛成しそうだねぇ」
笑顔な上に、かなり軽い声色で話しているものの、北上の目は全く笑っていない。
自分を狙っていると名指しで言われているようなものなのは重々承知なので、北上自身も龍驤は自分の手で終わらせてやりたいという気持ちはあった。なので、内心では捕獲なんてせずにその場で消し飛ばしてやりたいと考えている。
しかし、今回の敵は龍驤というよりは、その向こう側にいる未だ姿すら見せていない黒幕だ。龍驤を斃すこと以上に、黒幕を確実に斃すことを視野に入れ続けなければならない。
当然、どちらの戦いも失敗は許されない戦いだ。敗北と侵蝕がイコールで繋がっているようなものなので、辛勝すらも厳しいかもしれない。ならば、より最終的な勝利が確実な道を選ぶ。難易度が高かろうが、一番の目標を達成するために必要なのは、どちらかといえば龍驤の捕獲だ。

「まぁ最終判断は提督なんだけどさ。あたしが何言ってもそちらの指示には従う。ただ、一応意見として言っておこうかなって。艦娘の言葉だから、聞き流してくれても構わないよ」
　そして最後に投げた。意見だけ言って、でも選択は提督に任せる。実際、艦娘がどれだけ言ったところで、最終的な決断は全て提督にある。戦場での戦略は艦娘自身に委ねられるところもあるが、その根幹を担うのは提督の決断。それに反する行動は取らない。
「明石、ちなみにだが……そのドラム缶は、確実に龍驤を捕獲することが出来るのか？」
「確実……と言われると、申し訳ないんですけど、肯定は出来ません。何事にも例外はありますから。少なくとも、今自分が持っている知識の上では確実と言えるくらいです。龍驤が泥と化し、その成分が何処まで今までの泥と一致しているかにもかかっています。当然、ありとあらゆる可能性は潰していますが、私の想定外なところに行かれると、捕獲にならないかもしれません」
　その場合は無理せず消し飛ばしてやってくれと明石は語る。出来れば欲しいと言うだけで、無理だけはしてもらいたくないというのは提督達と同じなのだ。
　明石だって、この鎮守府を愛している艦娘の1人。仲間達の犠牲なんて全く望んでいない。実験材料が欲しいというのは、あくまで明石の希望。無いならば無いなりにやっていくとも。
「……まだ少しくらいは時間はある。やるかどうかは考えさせてくれ」
「はい、それで問題ありません。これはこれで出来ていて、量産の必要もありませんから。使うか使わないかはお任せします」
　ただし、使い方は先に伝えておくと言う。その使い方で、作戦に組み込むかどうかを考えてくれればいいと。
「残りの装備のことも一通り説明させてもらいますね。あとは基本的には戦闘を有利に持っていくためのモノなので」
「ああ、わかった。頼むよ」
「あたしらも聞いていい？」

いつもは面倒臭いと他の者に任せることが多い北上が、ここぞとばかりに首を突っ込んでくる。大井もそれを止めようとしない。
これからの駆逐艦達の訓練を、この特殊装備に合わせたものに変えていこうという算段である。
やはりドロップ艦を数日もかけず最前線に立たせるのは無茶であることはわかっているので、完全特化の育成に入るのは当然のこと。通常の育成は二の次で、今出来ることではなく、今やりたいことを伸ばすことを優先する。

その頃、その3人。通称『北上組』と呼ばれるようになった漣達は、北上と大井が艤装の整備をしている間は自主練をすることにされている。
その相手として相対しているのが、山風達調査隊の白露型3人。そこに荒潮も加わり、練度の低い3人を徹底的に鍛え上げていた。
「あ、アンタねぇ、多少は手加減しなさいよ!」
「ンなことしたら育たねぇだろがい。お前は前衛なンだから、これくらい避けてもらわないと困るぜ」
曙を扱いているのは江風。理論的に物事を考える前衛ということで、大井に鍛えられながらも江風の近接戦闘に慣れる方針。見てから避けられるくらいに目を鍛えろというのが大井からの指示。
曙の性格からして、砲撃雷撃よりも直接殴りかかる方が合っていると判断されたようで、むしろ江風と並んで殴りかかれるように筋トレも欠かしていない。
「そこまで速く撃つのは難しいかな。連射力?」
「……それもあるけど……狙いは先読み」
朧に砲撃を教えているのは山風。こちらは理論的に物事を考える中距離として、徹底的な砲撃精度を仕込まれている。
山風が覚えた一度の砲撃で二度放つ程の精度と速射力を得ようとはしていないが、確実に敵に砲撃を当てる手段を徹底的に叩き込まれ、どうあっても砲撃を放てるという状況を作り出す。

「いやいや、漣ちゃんはそこまで視野広くねーですよ」
「広くなくてもやんだよ。お前さんはチームの一番重要な位置にいんだから、あたいと同じくらいに空間把握出来るようになんなくちゃあいけねぇ」
「んな無茶苦茶な」
そして漣は、涼風から空間把握について学ぶ。電探の力を借りることなく、夜でも周囲がしっかりと見えている涼風の力を、漣も手に入れようと必死。
涼風の言う通り、漣が担当するのは最も重要な役割。最後衛にて曙と朧の動きを完全に把握しながら雷撃による援護をするのが漣の学んでいること。3人で1人分を成立させるための骨となるのは、この漣である。
理由はとても簡単なこと。あちら側の時に、リーダーのように振る舞っていたからである。経験も3人の中では少し多い。
それに、実のところ漣はそういうことが出来る才があると北上が見抜いていたからこうなっている。北上自身が漣を鍛えてやると言ったのはそこ。
「ん～、ちょっと意見言わせてもらってもいい～？」
そんな3人の訓練を少し遠目に見ていた荒潮が、ニコニコしながら口を出す。あらゆる訓練を嗜み、それを全て吸収していった荒潮は、その目も期待されている。
「3人とも、変な癖が付いてるみたいに見えるわ～。多分だけど、あっち側だった時の癖よね～」
それは、泥によるブーストに頼った動き。ドロップ艦であるにもかかわらず、身のこなしが熟練者と同じにされていたことの弊害。今の身体はそんなことが出来ないのに、今まで出来ていたせいで身体が最初からそうしようと動いてしまう。それによって、いろいろとついてきていない。最初はその動きも活かしていけるだろうと高を括っていたのだが、やはり練度が低いうちはブーストと同じ動きなんて出来やしなかった。
ただし、成長率に関しては普通のドロップ艦よりはかなり高い。癖

がついているとはいえ、教えられたことが身につく早さに関しては他の追随を許さない。３人とも荒潮以上の早さで育っているのは確かだ。
「もっと癖を強く出してもいいと思うのよね～。身体は覚えちゃってるんだから、それを伸ばしつつやりたいことやれるようにしてみたらどうかしら～」
「アンタ簡単に言うわね……。あたし的にはあんまり思い出したくないことなのに」
荒潮のアドバイスに曙は顔を顰める。だが、早く成長するためには、手段を選んでいられないというのはあったりする。
あの時の記憶は忌むべきものではあるが、使えるものは使うとするならば、敵の動きも取り入れてやるべきかと考えはする。
「でも、考えてみて～。あちら側の動きであちら側を出し抜くって、気持ちいいと思わない～？」
そう言われて、曙は考え方を変える。当てつけのようにぶつけることは、龍驤に嫌がらせをするようなもの。自分の部下に離反され敗北すれば、そのプライドはズタズタになるはずだ。
その方針は、曙にとっては特にやりがいのあるものになる。３人の中でも、特に龍驤を出し抜いてやるという気持ちが強いため、荒潮の提案は即座に賛成出来るようなもの。
「まぁそのためにはそう出来るくらい身体を鍛えなくちゃなンねぇけどな」
成長率が高かろうが、身体がまだ追いつかないのだから意味がない。そこは地道な努力が必要になるだろう。他よりもその努力の期間が短いだけマシ。
「やるわよ。やってやるわよ。あのクソ泥女に、目にもの見せてやるんだから！」
「強くなるためには、手段なんか選んでられない。早く強くなって、潮に会うんだから」
「だぁね。漣も、春雨氏の手を煩わせないくらいに鍛えなくちゃあいけねぇ」

三者三様の目的ではあるものの、ここからさらに成長率を上げていく。ここに新たな装備も入ってくるため、３人が戦場に出られる日も近いかもしれない。

この後、北上と大井も合流し、よりハードな訓練になり、３人は今までになく成長と消耗させられるのはまた別の話。

あちら側の策略

午後、施設。哨戒当番は松竹姉妹と古鷹。残りの者は、自由な時間を過ごす。少ない平和な時間ではあるものの、貴重な時間をしっかり満喫することが大切。緊張感はあるものの、心は安らぐものである。

今の段階で施設の中の課題はいくつかあるものの、今一番力を入れているのは潮のトレーニング。暇な者はそれに付き合って身体を動かすことが日課のようになっており、スタミナを付けたいという理由で元あちら側だった古鷹や大鳳、コロラドが付き合ったり、単純に潮ともっと仲良くなりたいからとミシェルが付き合ったりと、自由気ままに鍛えられている。

そのおかげか、潮はこの施設にやってきて数日で、相当な力を手に入れていた。その特性により教えられたことはスポンジのように吸収し、さらには誰よりもあるスタミナのおかげで休みなく動き続けていた、

今、潮のトレーニングに便乗しているのは、いつもの飛行場姫と潜水艦姉妹の他に、大鳳と戦艦棲姫。それを少し離れて見守っているのが、潮の遠縁の姉妹となる叢雲と薄雲、そしてストレス発散中の春雨と海風。

春雨と叢雲は、こういうタイミングで心を落ち着かせることで怒りを抑え込むことにも努めている。

「潮ちゃん、また表情が柔らかくなったんじゃないかな」

春雨が話す。こうやって身体を動かし、施設の者達と身体の付き合いを続けていることで、恐怖心はかなり薄れていた。特に飛行場姫と潜水艦姉妹は、毎日近くにいるために心を開けているといえ、ほんのりとではあるが笑顔すら見せる程に。

そしてこの交流が潜水艦姉妹にもいい影響を与え続け、未だ無表情は変わらないものの、もう自我を取り戻したと言ってもいいほどに、自分の意思で動いている。今も率先して潮のサポートをし、自分達も鍛えつつも楽しく交流を深めていた。

「ですね。溢れた恐怖はどうしても払拭出来ないでしょうけど、それ

を感じさせないくらいに明るくなったように見えます」
「だね。楽しく生きていけてるみたいだし、いいことだよ」
春雨も小さく微笑む。やはり心からの笑みではないものの、仲間が楽しく生きていけているところを見ていると嬉しいという気持ちは変わっていない。怒りと寂しさが溢れていても、根幹の優しさが失われているわけではないのだ。
「そろそろ自衛くらいは出来そうね。武器が持てないなんて言ってた時はどうなることかと思ったけど」
「あれ、自衛どころか気持ちさえあれば普通に戦闘にも出られるくらいになってませんか。みんながいろいろ仕込んでますし」
「それは……うん、出来そうな感じね。回避能力も仕込まれてるし」
叢雲と薄雲による潮の分析。1週間足らずで、もう戦場に出られるほどに強くなっているという認識は、あながち間違いではない。言ってしまえば、飛行場姫の後継者と言えるくらいにまで仕込まれている。
握力腕力が備わっているわけではないので、かなり前に飛行場姫が見せた槍をひん曲げるようなことは出来ないだろうが、力にモノを言わせること以外は全て出来るようなもの。
「……漣ちゃん達が救われてることを知ったら、自分から行きたがるかもね」
絶対に潮に聞こえないくらいの小さな声で、春雨が呟いた。
当たり前だが、潮は自分がこうなった理由である漣達が、今はもう侵蝕されておらず、鎮守府で必死に鍛えていることなど知らない。だが、古鷹の話を聞いたことで、漣達はこの事件の裏側にいる者に操られていたということは理解している。
今でこそ恐怖が先立つだろうが、もしここで鎮守府にいる漣と話をすることが出来たら、漣をああした張本人――龍驤に対して、どんな感情を持つのか。漣達を陥れたことに対して、激しい恐怖に向かうか、それとも激しい怒りに向かうか。
「でも、まだ伝えない方がいいよ。せっかくここまで来たんだから、もう少し強くなってから」

「それがいいわね。心の方が鍛えられてるかはわからないし」
笑顔が戻りつつあっても、だからと言って漣達と顔を合わせるだなんて出来るかどうかはわからない。話題を出すのも憚られる。
ならば、時が来るまでは事実を隠蔽し続けるべきだと判断した。その辺りは、飛行場姫や潜水艦姉妹も同じことを考えているだろう。
「あちらはあちらで鍛えてるんですよね、おそらく」
「だね。3人が3人、すごく頑張ってるんじゃないかな」
鎮守府の状況なんて知る由もないのだが、春雨はしっかり直感で察していた。誰と何をしているかまではわからなくとも、まるで心を通わせているかのように同じことをしているのだと。
今はこれでも、いつか顔を合わせる時が来る。この調子なら、その時は近いだろう。
「……ん？」
と話している時、春雨が何かを感じ取ったように海の向こうを見つめる。それに釣られて海風もそちらを見る。ただ水平線が広がっているだけで、何かあるわけでもない。
「ん？　哨戒部隊が戻ってくるわよ。さっき出て行ったばかりよね」

叢雲の感知範囲に3人の反応。午後イチに出て行った哨戒部隊がこちら側に戻ってきていることに気付く。
普通なら、哨戒に出て行った部隊は夕方になるまでは戻ってこない。緊急事態が起きない限りは、出て行ったら出て行きっぱなしである。海上に泥が設置されていた時も、深夜哨戒だからという理由もあるが施設に戻ってくることも無かった。
春雨達の声が聞こえたか、飛行場姫も潮のトレーニングを一時中断。緊急事態に備えて艤装を展開し、高高度へ艦載機を発艦した。
「悪ぃ悪ぃ、ちょっとまずいと思って戻ってきたぜ」
少しして、哨戒部隊が施設に帰投。竹が若干先行して状況を報告。
「鎮守府の奴らじゃない艦娘がチラッといてさ、何か間違えないうちに撤退してきたんだ」
「同胞（はらから）だったら保護でも良かったかもしれないけど、艦娘だから鎮守

府のヒト達に任せた方がいいと思って。すぐに連絡を取ってもらおうかなって」
松も合流してすぐに中間棲姫に連絡を取ってもらうように話す。最後に来る古鷹は、まだ水平線の向こう側に目を向けながら艤装もしまわない。艦載機を発艦した後のようで、それが戻ってくるまではここに待機するつもりのようである。
「こちらに向かってくるようなことはありませんでしたが、一応艦載機を1機使って監視だけはしています。妹姫さんもお願いしていいですか」
「そうね。間違ってこちらに来ちゃうこともあるかもしれないし、そうなった時のことを考えてこちらでいろいろ考えておきましょ」
何も知らないものがうっかりこの施設の海域に入ってしまった場合、深海棲艦の巣窟のようなこの場所を見たら何を思うかなんて考えずともわかる。少なくともいい方向にはいかない。
とはいえ、追い払うことも難しい。姿を見せることなく施設に来ないように仕向けるというのはまず出来ないことだ。最悪、艦載機から手加減して模擬弾を撃つくらいしか手段がない。
なので、その前に鎮守府の面々に保護してもらうことを望む。それは確かに緊急事態。
「泥の反応は？」
ここで春雨が素直な疑問をぶつける。答えはわかっているようなものだが。
「無かったな。あったらお前にいろいろ頼んでた。無いから逆に困っちまった」
「ほら、何も無いってことは、この施設に敵意が無いってことよね。うっかり迷い込んじゃう可能性が」
善意も悪意もない、依頼によるただの調査である場合は、この施設に辿り着けてしまうという前例が、潜水艦姉妹によって作られていた。そのため、敵でも味方でも無いものは特に注意しなくてはならない。
もし万が一施設に辿り着いてしまった場合は、どんな理由があって

も堀内鎮守府に連れて行ってもらわなくてはならない。何処かの鎮守府所属ならそこから話を通すことになるし、ドロップ艦ならそのまま所属という方向に持っていくことになる。
「潮、一度施設に戻りましょ。万が一のことを考えたら、ここにいるのは危ないわ」
「は、はい、わかりました……」
「姉姫に伝えてくる」
「鎮守府に伝えるように」
施設の外にいると、もしかしたらその何者かわからない艦娘の目に入ってしまうかもしれない。それは潮にとってもいいことが何一つ無いため、トレーニングは一時中断し、潜水艦姉妹に連れられて施設へと戻っていく。
艦載機に関しては飛行場姫に任せたため、古鷹も一時的に艤装をしまい、なるべく艦娘に近い姿になるために重巡古鷹としての制服姿へと変わった。飛行場姫は言い訳が出来ないが、ここにいる他の者達はまだ艦娘と言っても言い訳出来るくらいの姿だ。もし見られたとしても、敵対はされないはずと判断。
「まぁ、警戒するに越したことは無いからね」
「腹が立つけど、今だけは艦娘の変装くらいしてやるわ……」
「姉さん……少しだけ我慢をお願いしますね」
古鷹に続いて、他の者達も艦娘時代の制服姿へと変化していった。叢雲だけは抵抗があるようだったが、仕方ないと舌打ちしながら偽装は完了。
「……でも、なんで突然艦娘が。この辺りでドロップ艦って見つかったことはあるんですか？」
飛行場姫に尋ねる春雨。ここに来て、ドロップ艦といえば荒潮と潮くらいしか思いつかないのだが、この近海で生まれたわけではないことはわかっている。そのどちらもが別の海域で生まれており、荒潮は龍驤に泥を仕込まれた挙句にここまでやってきて被害を出し、潮も繭となってこの近海まで流れ着いたのみ。
松竹姉妹が見たという艦娘がこの近海で生まれたドロップ艦であ

るかはわからないものの、珍しいものであるのは確かである。そもそもドロップ艦ではなく他の鎮守府所属の艦娘の可能性だってあるわけだし。
「オレ達がここに所属するようになってからは一度も無いな。というか、ドロップ艦そのものが無いんじゃないか？」
「私も聞いてないから、多分ドロップしないんだと思ってた。だから、基本的には何処か別のところでドロップして、ふらふらここまで来ちゃってるんじゃないかなって」
　松竹姉妹と古鷹曰く、その艦娘は練度が高いようにも見えなかったという。あっちへふらふらこっちへふらふらと、あてもなく航行しているようにしか見えなかったようだ。
　艦娘は本能的に鎮守府を探す習性があるのだが、その過程でこの海域に紛れ込んでしまったと考えるのが妥当。
　それでも警戒しているのは、今までの経験から。荒潮による大惨事はまだ記憶に新しい。それもあってか、ドロップ艦を保護するという方向には行かなくなっている。
「……これ、もしかして」
　ここで春雨がまた直感を光らせる。
「何か思い付いた？」
「多分ですけど、その艦娘も龍驤の手の者かもしれません」
　春雨の苛立ちが見えてきたため、海風がその手を握る。艤装の義腕であったとしても、何かしらの感覚が得られるはずなので、それで落ち着いてもらう。
「何も伝えないでこの施設の場所を探させてるんじゃないですか？
漣ちゃん達が戻ってこないから、次の手段に打って出てきたと」
「何も知らずに敵意もない者ならここに辿り着けるからってこと？」
「はい。泥の反応がないからなんとも言えませんけど、無くはないかなと」
　それでも、施設の者達が哨戒をしていることを向こうも理解しているはずだ。むしろそれを狙って何も知らない艦娘を嗾けてきたのかもしれない。その艦娘に施設の深海棲艦を見せることで敵がそこに

いるという認識をさせ、鎮守府全体に不和を呼び込もうと画策しているような。
「後のことを考えてやっているのかはわかりませんけど、嫌がらせであることは間違いありません。本当に、こちらをイラつかせることに関しては上手ですよね」
「本当よ。天性の才能かしら。逆に感心するわよ」
怒りが溢れた2人には、龍驤の存在そのものが苛立ちを助長させるモノとなっている。何をしても気に入らない。海風と薄雲が落ち着かせるために手を握るものの、ヒートアップは不可避。
「まぁ、まずは施設の安全を第一にしていこうぜ。オレ達ゃある程度変装は出来っから、万が一のことがあったらうまいこと言い繕ってここから帰ってもらえばいいだろ」
「そうね。竹の言う通り。でも鎮守府のヒト達が先に来てくれたら、全部任せちゃえばいいと思うわ。妹姫さんもどうにか変装を」
「難しいこと言うわね……アタシは艦娘じゃないんだからどうすればいいってのよ……」

そんなこんなで施設は少しバタバタしたものの、そのふらふらしている艦娘は最終的に鎮守府の艦娘達に保護されることになる。
一応施設は発見されることなく終わったのだが、これが龍驤の作戦だったのかどうかは、また少ししてからわかるだろう。

嫌がらせ

午後の哨戒中に発見された艦娘は、いち早く施設側から報告があったことで、堀内鎮守府の艦娘達に保護されることとなる。
流石に深海棲艦の施設から連絡があったなんてこの場では言えないため、哨戒中にたまたま出会ったという体裁で確保。それもあるからか、メンバーとしては金剛と比叡をメインに、千歳と千代田、そして山風と荒潮という少し変わったメンバー。
一応、この海域はあまり安全では無いということを教えるためというのもある。施設が危険というわけでは無いのだが、実際ここで戦闘が行われているのだから、いつ何が起こるかはわからない。ただでさえ黒幕どころか龍驤が暗躍しているのだから。
「Ｗｏｗ．　Ｄｒｏｐ艦デスか？」
早速声をかけたのが金剛。とっつきやすさ重視かつ戦力的にも充分であるために、今回に限り哨戒部隊の旗艦を務めている。
「あ、はぁい。鎮守府を探してたんだけどぉ～」
少々舌ったらずな喋り方なその艦娘は、同じ艦娘に出会えたことでパァッと笑顔を見せる。どれだけ探しても見つからなかったことが不安だったのか、金剛に声をかけられたため、ようやく鎮守府に行けると大喜び。
「そんなに時間がかかったんデスか？」
「うぅんとねぇ、もう半日くらい動き回っちゃったかも～？」
よく見れば、この艦娘はそれなりに消耗しているようだった。艦娘は人間よりは長い間活動は出来るものの、当然補給が無ければ最終的には力尽きる。休息無しで半日動き回っていたというのなら、体力の半分以上は持っていかれていてもおかしくは無い。
「半日……ということは、昨晩くらいにドロップしたんですか？」
比叡が尋ねると、そうだと答えた。深夜にドロップして、暗い中で彷徨い続けていたようである。そして朝になっても鎮守府が見つからず、それでもふらふらと動き回ってようやくここに辿り着いたようだ。

艦娘の本能に任せても、なかなか鎮守府に辿り着けないというのはある。ドロップした場所が悪かったりすると、どうしてもどの鎮守府からも遠かったりする。その間に深海棲艦に襲われたりすることだってあるだろう。

そういう意味では、この艦娘は比較的運が良かったと言える。施設の者とはいえ、鎮守府を探している姿を発見され、報告を受けて迎えに来てもらえたことで、これ以上彷徨う必要が無くなった。

「あ、あたし、文月っていうの。よろしくぅ～」

消耗している割にはマイペースに自己紹介。その艦娘――文月は、笑顔を絶やさぬままに金剛と握手。

「ご丁寧にどうもデース。私は金剛、残りの子達は鎮守府に行きがてら話しましょうネー」

「はぁい」

金剛が相手をしている間に、千歳と千代田が周辺警戒し、そこで飛行場姫の艦載機が高高度から降りてくるのを発見。会話は出来ないものの、妖精さんがそれに対して小さく挨拶をして、引き取ったことを伝える。すると、その艦載機は小さく踊るように機体を動かした後、高高度へと戻っていった。

また、山風と荒潮は眼鏡によって泥が無いことを隈なくチェック。遠目に見ていても何も反応が無いのだから大丈夫だとは思うが、それでも念のため念入りに。文月からは泥の類の反応は一切見受けられないので、本当にただのドロップ艦なのだとわかる。

「でも、思ってた方とは違うところからみんな来たねぇ～」

「そうなんデスか？」

金剛達がここまで来るにあたり、回り道をすることなく真っ直ぐ向かってきている。そのため、その方向に鎮守府があることになる。

それに対して、文月が向かっていた方向は鎮守府の方とは言い難い向き。ドロップ艦の本能で鎮守府に惹かれて向かっているとしたら、これは何処かおかしい。

そして、次に文月から発せられた言葉は、金剛達に緊張感を走らせる。

「聞いてたことと違うなぁ～」
　文月は、ここに来るまでに誰かと出会っている。しかも、何の違和感を持つことなく。
「アー、文月、それはどういう？」
「まだ明るくなるちょっと前かなぁ、あたし、艦娘さんに会ったの」
　文月はその時のことを語る。
　生まれたばかりの文月は、本能に従い、最も近場であろう鎮守府に向けて航行を始めた。しかし、方向音痴というわけでは無くとも、それはかなり遠くの鎮守府だったようで、何処まで行っても水平線ばかり。稀にある岩礁で少し休憩しつつ、何処かの鎮守府所属の艦娘に会えるまで頑張ろうと動き回っていた。その時に、何者かに出会ったようである。
　その艦娘を見つけた文月は、誰かいたと喜び近付いたのだが、何でも緊急性のある任務中であり、鎮守府に送り届けることが出来ないと言ったそうだ。その代わり、ここからあちらに真っ直ぐ行けば自分の鎮守府があると説明されて、そこで別れたとのこと。
「優しいよねぇ～。すごく急いでるのに、あたしに構ってくれてぇ」
　文月はわかっていないが、金剛達はすぐに察した。文月に鎮守府の場所を教えたというのが、まず間違いなく龍驤、もしくは龍驤に属する者であることに。
　どれだけ任務で急いでいたとしても、ドロップ艦を見つけたならその場で鎮守府に報告くらいはする。そこで鎮守府側からの指示を仰ぐ。何もせずに、あちらに鎮守府があるから自分で行けだなんてまず言わない。
　艦娘とはいえ、ドロップ艦は戦闘の経験も無いいわば素人だ。深海棲艦の中でも最も弱いとされる個体相手でも、戦闘経験皆無ならば苦戦しかねない。1対1でもそうなるのに、群れに当たろうものなら最悪な結末になる可能性もあるだろう。
　それ故に、ドロップ艦は必ず確保するというのが常識、むしろ大本営に定められた軍規になっている。艦娘を人間と見ようが兵器と見ようが、その存在自体を尊重する方針である。

「でも、教えてもらった方とちょっと違う方に行っちゃってたのかなぁ～」
「Ａｈ……そうデスね。海の上では方向感覚が狂いマース。慣れてないと、真っ直ぐ行ってるつもりでも、物凄く曲がってる時もあるからネー」
おそらくこの『教えてもらった方』というのも、鎮守府の方向では無い。施設の方向だ。
善意も悪意も無い、何も知らない者なら辿り着ける施設への道のりを、文月に導かせるために仕組まれているとしか思えない。
「山風、荒潮、海の中は調べてマスか？」
「潜水艦の反応は無い……かな」
「そうねぇ。ソナーに引っかからないような深～いところにいるならわからないけれど、少なくとも今は何もないわね～」
この文月を監視している存在があるはずだ。そこで考えられるのが、海中か上空。それこそまた潜水艦姉妹のような存在がいるかもしれないし、艦娘達が確認出来ない高高度から監視しているかもしれない。
今のところはそれらしいものがわからないとは言うものの、何かあるのは間違いない。疑心暗鬼と言われてしまえばそれまでだが、周辺警戒を怠ったら、何か拙いことが起きる気がしてならない。
「文月、道を教えてくれたヒトって、どんなヒトでしタカ？」
ここで何かしらの手がかりを得るために、鎮守府に戻りながらも文月から情報収集。他者を器として活動する龍驤が直接動いている可能性があるので、その姿を聞いたところで参考になるかどうかはわからないものの、最低限の残りの敵の数はわかるだろう。
「3人だったよぉ。ちょっと大きなお姉さんと、少し小さなお姉さんに、あと駆逐艦の子」
今の文月にとって、それが深海棲艦であっても偽装をしていればわからない。龍驤本人ならば多少は違和感があるだろうし、深海棲艦の身体を使っているのならよりわかりやすくなるはずではあるのだが、それでもヒト型となればかなりわかりづらくなる。事実、卯月（ミシェル）が深海

棲艦化した古鷹と白露を艦娘と認識してしまっているため、文月も同じようなものだろう。
「金剛さんのところのヒトじゃないの？」
「Ｙｅｓ．　その３人というのは、私達が探しているモノかもしれませーン」
　文月に掻い摘んで説明する。生まれたばかりだと訳がわからないだろうが、今この海域には艦娘の姿をした敵がいるのだと。泥とかそういった部分は後から鎮守府で説明を受けることになるだろうが、今は文月が利用されかけていたということを知っておいてもらえばいい。
「え、えぇ～!?　あたし、何かに使われそうになってたの～!?」
「そうなんデース。でも、私達が来たからにはもう安心デース」
「酷いよぉ～……そういうの、良くないと思うなぁ」
　文月も憤慨。敵の目論み通りに行っていた場合、文月は施設への道案内役となり、そのまま施設に混乱を巻き起こしていただろう。
　たまたま、施設まで真っ直ぐ行けなかったというイレギュラーがあったことで回避が出来たものの、施設の哨戒部隊が発見しなかったら、なんだかんだで辿り着いてしまっていたかもしれない。そうでなくても、金剛達が迎えに来ることも出来ず、そのまま消耗し切って終わっていた可能性すらある。
「しかし、３人デスか……予想はしてマシタけど、増えてますネ」
　少なくとも残り３人。あとは黒幕と龍驤という段階まで来たのに、そこからさらに増えていくのは厄介極まりない。しかも、今も現在進行形で増えている可能性がある。
　そこに追加で、文月のような何も知らない者を投入してくるまで出てきた。泥に侵蝕されているならまだしも、そういうのもなく、ただその存在を利用されるだけというのは殊更に酷い。
「艦載機では何の反応もありません」
「千歳お姉と同じく。もっと高いところから見られてるのかな……」
　千歳と千代田の艦載機でも、その痕跡らしきものは無い。今でも監視をされているかもしれないのだが、それがわからないのだから何と

も言えなかった。
　高高度からの監視ならば、飛行場姫が何かわかるはずだ。今はそちらに任せるしかないだろう。それでもわからないのなら、また考えなくてはいけないが。
「まずは鎮守府に行きましょうネー」
「はぁい」
　ひとまずは文月に何もさせずに終わったことに安心しつつ、そのまま鎮守府へと連れ帰る。何も知らないにしても、こういうことをしてきたという事実が大切である。

「鎮守府の子達がドロップ艦を保護したみたいね」
　飛行場姫が艦載機経由でそれを知って、安心して変装を解いた。それに続いて他の者達も元の姿に戻る。
「周辺に何かありましたか？」
「アタシが見ている感じは無いわね。ただ、見えていないところに何かあるかもしれない」
「例えば……もっと高い場所、とか」
　春雨の言葉に、飛行場姫は気に入らなそうな表情を見せる。これでも充分すぎるほどの高高度に艦載機を配置し、海上を監視していたのだが、それよりも上から見下ろされているかもしれないと言われたら気に入らないのもわかる。
「気に入りませんね。狡い手ばかりを使ってくるのに、こちらを見下しているというその態度が」
「同感。自分の力でどうにか出来ないクセに偉そうにしてる奴は気分悪いわ」
　怒りが溢れた春雨と叢雲はこういうところでも同調。その妹達がまあまあと宥める。海風は同調しかけていたが。
　事実、海風と薄雲も、龍驤に対しては小さくない怒りを抱いているのは確かだ。漣経由とはいえ侵蝕されているため、その元凶とも言える龍驤は恨みの対象。本来の発作を超える怒りが心の内に存在する。

「ちょっと考えなくちゃいけないわね。もっと上を見られるようにしておく。今でも出来るけど、多分今から向かわせたところであちらも撤退してるでしょ。だから、次からは高高度だけでなく、超高高度を監視するわ」

海上への視界が悪くなる代わりに、上空の監視が細やかになるため、次はそちらを優先するとした。大鳳もそれが出来るのならしていく方針。

まだ真相は定かでは無いが、文月を手始めに、ここから何も知らないものを頻繁に嗾けてくる可能性が上がってきている。これは完全に嫌がらせだ。

決断の時

夕方、夕食前。施設では食事の準備中だったが、突然タブレットが音を鳴らす。おそらく、哨戒部隊が発見したドロップ艦を保護した後、鎮守府にまで無事に連れ帰ることが出来たことを報告してくれるのだろう。

それまで『観測者』は春雨の監視のために施設内に滞在していたのだが、コールされた時点でその場から消えた。万一にでも、人間側にその存在を見られるわけにはいかない。代わりに春雨の監視は失われる。春雨にはその感覚が直感的にわかるので、こういう時は仕方ないかと妥協。

「はぁい、まだ大丈夫な時間よぉ」

ダイニングには中間棲姫。それと夕食を作るためにいた飛行場姫と潮に潜水艦姉妹。そして、直感的にここにいるべきではないかと来ていた春雨と海風。

画面にはいつも通り、堀内提督と秘書艦五月雨。大将と大塚提督も参加。何かしらの事件が起きた時は、中間棲姫も含めた４人の代表が揃うようになっていた。勿論、施設がドロップ艦を発見し、その保護を堀内鎮守府に依頼したことも全員が知っている。

『さっきは報告ありがとう。ドロップ艦は無事に鎮守府で保護することが出来た』

「それは良かったわぁ。何事も無かったかしらぁ」

『ああ、本人には何も無かった。泥による侵蝕などは見当たらず、一応明石による身体チェックも行なわれたが、何かおかしなことがあるわけでは無かったようだ』

少しだけ気になる言い方。本人には何も無かったということは、別件で何かあったと言っているようなもの。

「そのヒトの周囲に何かあったんですか？」

その疑問をすぐに春雨が口に出す。元より龍驤の手の者ではないかと話していたため、ドロップ艦の存在そのものに疑念を抱いている。最悪な場合、自分の意思で龍驤に従っている純粋な艦娘という可

能性だってあった。それに関してはただ話を聞くだけではわからないかもしれない。
　そのため、今鎮守府が手に入れた情報から分析するしかない。それもあるため、堀内鎮守府では文月に対してそこそこの状況説明をしてもらっている。
『ドロップ後、襲われるようなことは無かったが、何者かに出会って道案内をしてもらったと話している。その人数は3人。彼女――文月の言葉をそのまま使うなら、大きなお姉さん、小さなお姉さん、そして駆逐艦だそうだ』
　駆逐艦はそのまま駆逐艦の艦娘であろう。しかし、お姉さんという抽象的な表現をされた2人は、艦種すらわからない。
　とはいえ、その中に龍驤がいたとしてもおかしくはない。そのままの姿ならば小さい方に入るだろうし、他人の身体を使っていたなら大きい方に入るだろう。
『それよりも重要なことは、まだ3人いるということになる。未だ海上を動き回っており、ドロップ艦を見つけては侵蝕を繰り返すことで兵力を増しているのだろう。それがまた別の艦娘や深海棲艦を侵蝕してを繰り返していると考えれば、敵戦力は減るどころか増える一方だ』
『俺の鎮守府でやったことを、あらゆる海域でやっているわけだな。厄介極まりない。鎮守府1つでもある程度の人数が必要になったんだ。全域となると一筋縄ではいかない』
　鼠算式に侵蝕されているものが増えていくという状況は、大塚鎮守府でも発生している。その時の処置ですら、専用の道具と類稀なる技術を持った吹雪と五月雨が元凶（鹿島）を治療し、増え続ける侵蝕された者達を片っ端から治療出来るだけの力を持ち合わせた部隊が派遣されたからどうにかなった。
　しかし、今度は規模が違う。建物内という閉じられた空間ではなく、いくらでも広がっている海上だ。それこそ、分散されたら探すことすら時間がかかる。
『この被害の拡大を防ぐためには、まず間違いなく元凶を叩く必要が

ある。今回の場合は、龍驤だ。どうにかしたところで、既に侵蝕されている者は元には戻らないだろうが、原点が消えてれば多少行動は変わるだろう。そのために、僕からの提案は、早期決着だ」

少なくとも、龍驤がいなくなれば統率力が失われる。そうすれば、広い海上での侵蝕された者の確保と治療も少しはマシになるはず。

「私もそれは賛成です。このままだと、今日保護された文月ちゃんでしたか、彼女みたいな何も知らないで利用されるドロップ艦を次々と嗾けてくることになると思うんです。今回は何とかなりましたが、時間を与えたら施設に辿り着いてしまいます」

堀内提督の提案に、春雨は即座に乗った。怒りによって好戦的になっているというのもあるが、施設の場所を何も知らないドロップ艦を何度も送り込んでくる可能性を考えたら、施設を守るためには早く処理をする必要が出てくる。

文月はたまたま施設から逸れたが、何人も送り込まれれば1人くらいは施設までの道を見つけてしまう可能性はあるだろう。そうなったら最後、どういうカタチでそのドロップ艦を確認しているかはさておき、施設の場所を完全に把握され、ありったけの戦力を注いで殲滅にくるはずだ。

施設の平和のためにも、今は守りより攻めに寄せた方がいいと、春雨は確信している。

むしろ、向こうはこちらから攻勢に出ることはないと見越して、上から叩き潰そうとしているのではなかろうか。いくら覚醒した辿り着く者がおり、さらには最悪の姫の器や、沢山の仲間達がいたとしても、泥の侵蝕と数の暴力さえあれば踏み潰せると信じて。

『堀内提督、今のところ龍驤……いえ、泥対策は何処まで出来ているのかしら』

ここまで聞き専だった大将が口を開く。

『予算度外視で進めていますが、連合艦隊1つ分の対策は出来ています。侵蝕の件もクリアし、話に聞いている触れるだけで侵蝕されるであろう泥のコスチュームというのも回避可能となりました』

『あの開発コストを聞かされて私も流石に驚いたけれど、今回ばかり

は仕方ないわ。そこまでしなくちゃ勝てない敵であることは私も認めているから』
流石に1人分、6つのパーツ1セットを開発するのに、艦娘の装備の中ではトップクラスのコストである51cm連装砲と同等と言われたら、いくら大本営の大将といえども尻込みをしたようである。
しかし、今回はそれくらいしなければ戦いにすらならない可能性があった。何せ、触れた時点でアウトとなると、救えるものも救えない。ただでさえ、鎮守府側の治療方法は投薬だ。ただ砲撃や雷撃だけではどうにも出来ない。それ故の苦渋の決断でもある。
『準備が出来ているのなら、もう躊躇している暇はないわね。こちらから打って出ましょう。拠点としている場所はおおよそ見当が付いているのよね？』
『はい。移動している可能性は多少ありますが、今回保護した文月が話していたことからも、ほとんどその場所から動いていないことはわかっています』
漣達から聞き出した情報で、居場所はある程度しぼれている。それに加えて、文月に道を教えてくれたという艦娘の位置も計算してみたところ、近しい場所だったようだ。
文月は、たまたま龍驤の拠点の近くにドロップしてしまったのだ。そのため、こういうカタチで利用されることになった。泥による侵蝕を経験しなかったのは幸運としか言えない。もしくは、他の駆逐艦と比べると若干非力であることを知っていたから、あえてこういうカタチで利用しただけかもしれないが。
『では明日、黒幕との戦いの前哨戦と行きましょう。龍驤に攻勢を仕掛けます。いいわね？』
『了解です』
龍驤に勝てなくては、最後に待ち受けている黒幕には到底敵わない。今持っている手段が通用するかを確認する前哨戦と言っても過言ではない。これでダメならば、嫌でも撤退を余儀無くされるのだが、それでも誰も犠牲を出すことなく戦う手段を見出ださなくてはならない。それを知るためにも、早急な対処が必要。

「提督、一ついいですか」
ここで春雨がさらに口を出す。その瞳には、溢れた怒りと沸き立つ苛立ちが見えていた。素人目に見ても、今の春雨が何かに対して怒りを持っていると判別出来る程に。
『なんだい春雨』
「その戦い、私にも参加させてください」
あくまでも、施設は被害者だ。そんな被害者に、さらに辛い思いをさせたくない。だからこそ、人間の手で決着をつけなくてはならず、平和を望む者を戦場に駆り出すわけにはいかないと戦術を作り上げてきた。
当然これには難色を示す。それなのに、春雨はそれでもと話す。
「直接出てきていないとはいえ、龍驤のせいで何人も傷付きました。極端なことを言えば、ジェーナスちゃんから始まっていることです。もう、このまま指を咥えて待っているだけでは収まりがつかないんです」
間接的に龍驤にトラウマを植え付けられた者は、施設にも相当な人数になっている。龍驤が荒潮を侵蝕し、そのままやられたジェーナスから始まり、今でこそ夕食の準備をしながら静かに聞いているが、漣経由で殺されかけた潮や、その後の戦いで侵蝕された海風、薄雲、戦艦棲姫も被害者。そして今の姿になってしまった春雨だって、被害者と言えば被害者だ。
言ってしまえば、龍驤は黒幕よりも施設の平和を脅かしている。全ての元凶は黒幕かもしれないが、その姿を見せている分、龍驤の方が怒りの矛先が向きやすい。現に、明確な被害者は龍驤側の方が多いくらいである。
「私は悟りました。平和は、歩いてきてくれません。自分から歩み寄らなくちゃいけません」
待っていて平和になるのならそれはそれでいいだろう。しかし、防戦一方で常にストレスを与えられ続けている現状ならば、そんなことを言ってはいられない。
他力本願というわけではないし、鎮守府を信用していないわけでも

ない。鎮守府だけでもどうにか出来ると信じている。だが、それをただ見ているだけでは、真の平和には届かない。
「ベクトルは違うかもしれませんが、やろうとしていることは鎮守府にいた時と変わりません。世界を守るために戦うか、施設を守るために戦うか、それだけです。範囲は狭いですし、私怨もありますが……私は私から平和を掴み取りに行きたい」
熱弁する春雨に対して、中間棲姫は複雑な表情を浮かべる。今の施設に所属する者の半分以上が、もうこの戦いの被害者だ。春雨の言いたいことだって理解出来ている。この島から動けないからこそ、仲間を頼って平和を待つという選択をしていたが、出来ることならば自分の手で平和を維持したい。
しかし、戦いたくないという気持ちも強くある。それに、仲間達を危険な目に遭わせたくない。痛いことも、苦しむことも、当然死ぬことも、見たくないし感じたくない。待っているだけで平和が訪れるのなら、それに縋りたい。
「最後の決定は姉姫様に任せます。私だってこの施設の一員ですから、独断で何かしようだなんて思っていません。それが施設の迷惑になるというのなら、私は我慢します。でも、私の意志は伝えました。この施設の平和のために戦いたい。平和を脅かす者と、この手で決着をつけたい。多分ですけど、同じように思ってる子は他にもいると思います」
力強い、しかし、あまりそれを肯定するのは難しい表情を見せる春雨。それを見て、中間棲姫もここが決断の時なのだろうと感じた。
今までは、外部からの接触もない、本当に平和な島だった。毎日が変わらない日々を送り、のんべんだらりと生活するのみ。生きていることが楽しいと感じられるくらいの何も無い毎日だった。稀にやってくる外部の者も、結界のおかげで敵意はなく、世間話をする程度。
だが、ここ最近はあまりにも平和とは程遠い日々を過ごしていた。畑も自ら破壊せざるを得なくなり、それももう直ったとはいえ、以前の平和は何処かに行ってしまっている。もう遥か過去に思えるほどに。

それの平和は恋しい。ここにいる者達と、面白おかしく楽しく生きたい。またあの日々に戻りたい。脅威に怯えることのないあの日々に。

「……私としては、こうまでされても戦いたくはないの。荒っぽいことは嫌いだし、そもそも私はこの島から動けないもの。打って出ると決めても、貴女達にやってもらうしかない。それがね、辛いのよ」

仲間を危険に晒す行為になるのだ。自分の決断が、仲間の命に繋がると思うと、容易に決められるようなことではない。

「でもね、春雨ちゃんの言うこともわかる。平和は歩いてこない、待っていたら全てが終わっているとは限らない。最後には勝てたとしても、動かないでいたらその分大きな被害が拡がるかもしれない。それも嫌なの。……ワガママよね私。何もしたくないのに平和を望んでいるだなんて」

中間棲姫からそんな言葉を引き摺り出してしまったことで、春雨は自分に対する怒りも沸き立たせる。こんな決断をしなくてはいけない、させなくてはいけないことに怒り、悔しさが滲んだ。

『姉姫、1つ提案があるのだけど』

ここで大将が割り込むように口を開く。

『私達としては、勿論貴女達の手を煩わせることなく終わらせたい。平和を求める施設から戦力を募るなんて間違っていると思うわ。それでも、貴女達の中に戦いを求める者が出てきてしまっているのも事実。アレだけのことをされたんだもの。平和を求めていても、恨み辛みが溜まってきてもおかしくはないわ』

中間棲姫は悲しい笑顔で一言、そうねと応える。

『だから、違う方向での平和を目指してみない？』

「違う方向？」

『ええ。私は前々から計画だけはしていたんだけれど、貴女達の意思を尊重するとなかなか言い出せなかったことなの』

大将は小さく息を吐き、真剣な瞳でカメラ越しの中間棲姫を見つめる。

『貴女達を大本営の管理下に置き、明確に穏健派の深海棲艦として認めさせる。そのために、協力して戦線を組んで、世界の平和を目指している者達であることを知ってもらうというのはどうかしら』

姉姫の苦悩

『貴女達を大本営の管理下に置き、明確に穏健派の深海棲艦として認めさせる。そのために、協力して戦線を組んで、世界の平和を目指している者達であることを知ってもらうというのはどうかしら』

大将からの提案に、中間棲姫は目を丸くした。つまり、自分達と一緒に戦う姿を見せることで人類に協力的な深海棲艦であることを知ってもらい、大本営の管理下で平和を取り戻そうということである。

それは当然、今までの施設の平和とは違うものだ。だが、大将はそこからさらに続ける。

『管理というのは少し言い方が悪いわね。貴女達は基本的にはいつも通りにしていてくれればいい。この戦いが終われば、今までの生活に戻れるように保証する。その代わりに、その存在を周知させてほしいということ』

そうすることで、今の春雨のように戦いを望む者も鎮守府と協力して戦うことが出来るし、今までよりも補給物資の支援がしやすくなる。戦いが終われば全て不要なモノになるのだが、少なくとも今までのこの関係を正当化させることが出来る。

ただし、本当に協力者であるかどうかの確認などは逐一する必要はあるだろう。今までこうやって付き合ってきた3人の人間だけではなく、大本営の他の人間にもその姿を見せなくてはならなくなるだろうし、あちらからは本当に裏切らないのかという疑問を持った目で見られ続ける可能性もある。

一度このカタチで手を結んだら、それこそ管理されることになるだろう。大将はいつも通りに過ごしてくれればいいとは言うものの、その行動は定期的に監視され、息苦しいモノになりかねない。

『共闘することで、貴女達の平和を取り戻す戦いをサポートさせてほしい。それ以上でも、それ以下でも無いわ。どうかしら』

あくまでも大将は、施設の在り方を捻じ曲げようとは思っていないと言う。同じ道を歩こうとしている仲間の望む平和を乱そうだなん

てカケラも思っていない。大本営の向かう先は、戦いの無い世界だ。戦いを望まない者の意思を尊重しないわけがない。
「……1つ、いいかしらぁ」
大将の提案に対し、中間棲姫は出来る限り思考を巡らせ、質問をする。
『ええ、なんでも聞いてちょうだい』
「大本営……だったかしらぁ。貴女達の一番上のヒト達は、私達の存在を認めてくれそうなのかしら。こんな言い方をするのはどうかと思うけれど、勝ち目のある案なのかなって」
当然そこは心配になるだろう。今まで中間棲姫が見てきた人間は、その誰もが思想を同じとして中間棲姫のことを仲間として見てくれている。堀内提督や大将はその人柄から信用出来ると判断しているし、大塚提督は牙を剥かない深海棲艦をわざわざ始末するなんて合理的では無いとして仲間と割り切れている。むしろ、このように対話することで、より一層人間味を感じていくことが出来ている。
だが、人間というのはこの画面越しの3人だけではない。同じ思想の者も勿論いるだろうが、深海棲艦という種族に深い恨みを持つ者だっているだろう。そういう者に、協力者ですと中間棲姫の姿を見せて、果たして納得させられるか。
『ええ』
大将は断言した。大本営、延いてはこの世界にある鎮守府全てを納得させると。
『覚えているかしら。大塚提督が初めて貴女と対面した時のこと。私はその時に貴女に言ったわよね。『こちらでは貴女達の力が借りられるような土台を作っていこうと思っている』って。私はね、本当にゆっくりと準備を進めてきていたの。だから、私に任せてちょうだい。同じ平和を望む者を、たかが種族の話で爪弾きにするだなんて、おかしいと思うもの。悪いようには絶対しないから』
自信満々に言い放つ大将に、不思議と安心が出来た。勿論不安だってあるが、この人間ならば、本当に種族の隔たりなんて考えさせずに、施設も含めた真の平和に辿り着けるのではないかと感じさせるほど

に。
だからだろう、中間棲姫はあまりどころかまず口に出さないような愚痴を溢し出す。
「……正直なところ、私達だけではもうこの島の平和は守れないかもしれない。こんな弱気はダメなんだけれど、ここ最近はどうしてもそんなことを考えてしまうようになっちゃったの」
キュッと拳を握り、少し俯きながらもボソリと呟く。隣にいる春雨や海風のみならず、台所にいる飛行場姫達もそんな表情を見て悔しそうにした。
最も長く一緒に居続けた飛行場姫ですら、こんな辛そうな表情の姉を見たことは無かった。この現状で気に病んでいるのが、特に辛い。
「でもね、私の中身がずっと迷惑をかけ続けているのも、私としてはとても辛い。私はこの島から動けないから、それを私の手でどうにかする手段は無いけれど、叶うのなら私の手でどうにかしたい」
ほんの少しだけ見せた苦悶の表情はすぐに消え、いつもの調子に戻る。この短時間で、どの選択をするのが仲間達の、自分の最も平和な未来に繋がるのかを考えていた。
「私の選択でこの島を危険に晒すかもしれないけれど、よくよく考えたらもう充分に危険なのよねぇ。そんな状態で何もせずにいたら、もっと良くない方向に向かっちゃう。それはよろしくないわぁ。だったら、多少茨の道でもみんなのためになる道を選ぶわぁ」
ニッコリ笑って画面に向き直る。
「大将さん、共闘の方針、私は呑ませてもらうわぁ。貴女がそこまで力強く言うんだもの。悪いようにはならないわよねぇ」
『ええ、何があっても貴女達に悪いようにはしない。約束する』
ここまで一緒に歩いてきた仲間を裏切るような真似は絶対にしないと、大将も笑顔で応える。
今までもほとんど共闘のようなモノだった。同じ戦場に立ち、共通の敵と戦うこともあった。しかし、これからは非公式ではなく公式に認められた共闘となる。人々のためにその力を振るう深海棲艦として、大本営に認識させる。

「なら、明日の前哨戦から参加していいんですか」
ここで春雨が口を出す。大将からの許可が出たならば、躊躇う必要も無い。真っ直ぐ正しい怒りを向ける。
『私としては、それでも問題ないと思うわ。むしろ、その方が貴女のためにもなるわよね』
「はい。正式に許可をいただけるのなら、私は施設の平和をここまで破壊した龍驤を、この手で始末したいです」
あまりにも攻撃的。春雨とは思えない言い分。だが、堀内提督は表情を変えずに鎮守府側の作戦を伝える。
『いや、始末まではしない。黒幕との戦いに備えるために、龍驤は捕獲する』
「……捕獲？」
明らかに嫌そうな顔。これまでに何人もの仲間達が嫌な思いをしているのに、そんなことを平気な顔をして繰り返す龍驤を生かしておくという選択肢に嫌悪感を見せていた。
前までの春雨なら、この提督の提案も喜んで呑んでいただろう。倒さずに救う手段を探せるかもしれないと、是非その方針でと言っていただろう。しかし、今の春雨は違う。龍驤は生かしておけないと、最初から徹頭徹尾始末する方針だった。
「何故慈悲を向けるようなことを？」
そして、その嫌悪感を隠さない。命を奪うことに躊躇が無いくらいに、龍驤への怒りは滾っている。
そんな春雨の表情に臆することは無いのだが、そんな表情をするほどに壊れてしまった春雨のことを悲しく思いながら、堀内提督は続ける。
『僕としてはあまり良いことではないと思っているのだが、これは明石の提案だ。黒幕に通用する装備を開発するにあたり、その実験材料を手に入れる必要があると話していた。今開発に使っている泥にも限界はあるのでね』
「なるほど、被験体（モルモット）の獲得ですか。なら納得行きました。流石は明石さんですね」

ニコリともせずに龍驤のことを実験材料にすることを受け入れた。もう救えない龍驤は、せめて安らかに眠れるようにと慈悲深さを出していた春雨が、その龍驤に対してそんな気持ちを一片たりとも見せない。

仲間達に対しては慈悲の心はあるが、龍驤に対しては怒りと憎しみ以外の感情が欠如する。何も考慮などなく、こちらが与えられた苦しみを全て与えてからその灯火が消えてしまえばいいとすら考えている。

「それなら、捕獲のお手伝いをします。今使っている身体に関しては、救えたら救います」

『ああ、その場で乗り換えるなんてこともするかもしれないが……こんなことを言うのも辛いのだが、龍驤以外は全員被害者だからね。救えるものなら救ってほしい』

「了解です。私が聞いている限り、空母棲姫の身体を使っているということなので、その命は取らないように努めます。その空母棲姫が侵略者で、救われても人間を襲うと考えているようなら、その場で始末します」

提督は肯定も否定も出来なかった。

『大将、一ついいですか』

冷たい空気が流れる中、今度は大塚提督が質問。

『何かしら』

『その前哨戦、俺の鎮守府から1人か2人、参加させられませんか』

ここで戦力増強の申し出。大塚提督としては、黒幕との決戦に向けて、龍驤がどういう存在なのかを知っておくいい機会だと考えていた。当然苦戦は必至だし、最悪な場合、そこで重傷を負う可能性もある。何せ、黒幕も同じだが未知の手段を多々使ってくる難敵だ。だからこそ、事前に知ることが大事。情報を得ることが最も勝利に近づく鍵。

今のところ、大塚鎮守府が敵について知っていることは、艦娘を侵蝕して手駒に置き、自分の手を汚すことなく戦わせるということだけ。あとは侵蝕された者はブーストがかかり、本来以上の力が出せる

ようになるということくらいである。それ以外の力、純粋な戦力がどれほどのものかは知っておかなくてはいけないことだ。
『堀内提督、可能かしら』
『そう……ですね。部隊編成のことを相談したいので、出撃を少し遅らせることが出来るのなら、問題ありません。僕の鎮守府と大塚提督の鎮守府はそれなりに離れていますし、移動にも時間が必要ですから』
『そうね。それなら、明日ではなく明後日としましょう。早期決着は必要だけれど、お互いに準備が必要よね』
　時間を置けば置くほど、あちらは力をつけていくだろう。それ故に、明後日が限界。明日1日を準備期間とし、明後日に前哨戦、龍驤との決戦に持っていく。たった1日ではあるものの、猶予が出来たことでさらに鍛え上げることが出来るだろう、
『姉姫、今のところ、龍驤の居場所は貴女の島が近いみたい。一度そちらを経由させてもらってもよろしいかしら』
「ええ、構わないわぁ。真っ直ぐ行くより、少し休憩をする方がいいでしょうしねぇ。それに、そこから合流して、こちらからの子達を一緒に行かせるということで良いかしらぁ」
『それが一番妥当ね。大塚提督の艦娘もその場所を知ることになるのだけれど、それも大丈夫かしら』
「貴女が認めている子なんだもの。私達を見ても何かするわけでも無いでしょう？　それなら大丈夫、みんな受け入れるわぁ」
　逆に大塚提督も誰を参加させるかは考える必要はあるだろう。この施設の者達とも交流出来て、お互いに敵意なく協力し合える仲になれる社交性を持つものを選別しなくてはならない。
『それじゃあ、戦いは明後日。それまでにしっかりと準備をして、確実に勝ちましょう』
　通信はこれで終了。前哨戦までの日程が決まる。残された時間、各所でそのための準備が進むことになるだろう。

「春雨ちゃん」
　通信終了後、大きく息を吐いた後、中間棲姫は春雨をちょいちょいと呼ぶ。
「なんですか？」
「平和は歩いてこない。本当にその通りね。だから私も、自分から歩み寄ろうと思うわぁ」
「……ですね。このまま手をこまねいていても、何も変わらないと思います。私怨もありますが、私はこの島の平和を強く望んでいますから。そのためにも、自分から動きたいと思います」
　辛い決断だっただろう。だが、中間棲姫はこの決断に迷いは無い。いや、その迷いを振り払った。
　全てはこの施設の平和のためだ。今は辛くとも、必ずこの闇を抜けて元の平和に戻る。そう信じて、今はこの選択をしたのだ。

　きっと上手く行く。そのために、まずは目の前の敵をどうにかする。

怒りの発露

夕食後の施設。鎮守府との対談によって、黒幕と龍驤の件を終わらせるために、施設からも戦力を投入して事にあたる方針となったことが伝えられる。

中間棲姫がその決断をしたことに驚きの声が上がったものの、今のままではただ一方的にやられるばかりで、施設の平和が遠退くばかりであることは誰もが感じていたこと。苦い決断ではあるが、それを否定する者はいなかった。

「前哨戦は明後日らしいわぁ。一旦この島に来てから、改めて向かうらしいのぉ。その時に、この島から向かう戦力を同行させるわぁ」

こうやって伝えるのも、仕方ないこととはいえ辛そうである。平和を掴み取るために選んだこととはいえ、不本意と言えば不本意。

しかし、こうでもしなければ、あちらの脅威はずっとあり続ける。そのために決断したのだ。打って出ることにより、早急に平和を掴み取るのだと。

「ただ、1つだけ肝に銘じておいてほしいのだけれど、その戦場に出るということは、侵蝕される可能性があるということにほかならないわぁ。それがあるから、私としては誰にも出ていってほしくないのよねぇ」

そこが一番の問題。自らの手で平和を掴み取るために戦うとしても、あちら側は侵蝕という心に大きな傷を負わせる攻撃をしてくるのだ。最悪な場合、ここに戻ってこれなくなる可能性すらある。それが一番辛い。

中間棲姫の忠告を聞いて、数人がビクッと震える。侵蝕の快楽と、その後の自分の有様を覚えている者。

特に大きく反応したのが、自己嫌悪が溢れているジェーナス。変貌も酷かったこともあり、ギュッと拳を握る音がわかるほどだった。そのことを知らないミシェルも、少しだけ心配そうに手を握る。わからずとも、ジェーナスが辛い思いをしたというのはわかるものである。

「私と春雨は問題ないわね」

「うん、侵蝕されないからね。勿論、油断は禁物だけど」
「当然よ。大丈夫とわかってても自分から触ろうだなんて思わないわ」
その条件下では、施設の者達で気兼ねなく出られるのは春雨と叢雲。泥に直接触れても侵蝕されなかった実績があるため、基本的には安心。しかし、勿論それを過信することはない。あの時は侵蝕されなかっただけで、次はダメという可能性だって無くはない。あとはミシェルもなのだが、流石にあの戦場に出そうだなんて思えない。
それに、龍驤本人が来た場合はさらにどうなるかわからない。そんなことをさせるつもりは毛頭無いのだが、それでも戦場では何が起こるかわからないのだ。警戒を厳に事にあたる。
「春雨姉さんが行くのなら、当然私も」
春雨は侵蝕を受けることが無いことが確実であるため、この戦場に出ることに何の不都合も無いが、海風は若干不安がある。春雨のような耐性、対策があるわけでもなく、最悪、戦場で侵蝕を受けてしまう可能性があるのが恐ろしい。
それでも臆することなく向かうと言い放った。春雨がその場に行くのなら、その傍らに立つのだと意志を固めている。それは自分のためでもあり、春雨のためでもある。
依存の特性を持つ海風が春雨に付き従うのは当然のことではあるが、春雨の溢れる怒りを最も抑えられるのが海風であることも重要。万が一、また春雨が暴走するようなことがあった場合、あの時のようにまた止めることになるだろう。
今の海風には、泥による侵蝕をまた受ける恐怖より、春雨がまた暴走する恐怖の方が勝っている。それ故に、この選択に一切の躊躇が無い。
「相手が空母であることがわかっているのなら、こちらからも空母を出す必要があるでしょう。なので、私も参加させてもらいます」
大鳳も挙手。この施設の中では貴重な空母であり、制空権争いに確実に貢献出来るため、自ら戦場に立つ。近接戦闘も可能であるため、いざという時に致命傷を与えることも可能だろう。ただし、泥のこと

を考えると近接戦闘は不安要素にもなってしまうが。
　しかし、大鳳以外の者はそこからなかなか参加すると言い出せずにいた。元々あちら側だった者は、どうしても挙手しづらい。傍若無人に振る舞い、人類の敵として活動していた時のことをどうしても思い出してしまい、そしてそれを未だに回避出来ないとなると尻込みはしてしまうものである。
　鎮守府の者達は、泥を回避する手段をしっかり開発しているため問題はないが、施設の者達は実力でどうにかするしかない。それならば、最初から襲撃しない方が安全だ。当然ながら、この島自体を守る必要だってあるのだから、全員が出払うなんてこともしてはならないし。
「あらコロ助、アンタは来ないわけ？」
　早速叢雲がコロラドに対して弄るように言い放つ。似た者同士であり、犬猿の仲ではあるものの互いのことを変に理解しているため、コロラドはこの戦いに率先して参加表明をするかと思っていたようだ。
「私はアンタみたいに短絡的じゃないの。まだ1日あるんだから、ゆっくり考えさせてもらうわ」
　しかし、コロラドはここで慎重さを出す。叢雲にとやかく言われても、まだ時間に猶予があるのなら行くかどうかは考える。
「へぇ、アンタにしては殊勝な考えじゃない。てっきり怖がってんのかと思ったわ」
「誰が怖がってるって？　私があんなヤツを怖がるかってのよ！」
　言われてムキになるところはコロラドらしいが、しかしだからといって出撃するかどうかは保留にしている辺り、乗せられることは今のところ無いようである。
　実際、コロラドは恐怖心を持っているから躊躇っているわけでは無い。二度と同じ目に遭わないように対策だってしっかり積むし、戦いが有利になるように立ち回れるようにいろいろ考えてはいる。
　必要なのは、この施設を守る戦力。怒りに任せて全員出ていったら、この島を守る者がいなくなってしまう。コロラドが扱える白鯨

は、施設防衛の切り札になるだろうから、温存するべきではないかと考えていた。
「私だって腹立たしいわよ。でも、どちらかといえばリュージョージゃなくて、私を利用していた黒幕に対してなの。だから、別に意地でもぶちのめしてやろうだなんて思ってない。アンタ達に譲ってあげるわ」
「あっそ。ならありがたく頂戴するわ。後から寄越せとか言われても知らないわよ」
「言わないわよ。アンタは直接的なＨａｔｒｅｄ（憎し み）があるかもしれないから、譲ってやるって言ってんの。むしろアンタは感謝しなさい」
ここの言い合いが若干和むくらいになっていた。激しい言い合いになるわけでも無い喧嘩漫才とまで言われる始末だからか、潮ですらこれに恐怖を感じなくなりつつある。
「……あ、あの」
潮がおそるおそる手を挙げる。まさか戦いに参加したいと言い出すのかと驚くが、まずはそうでは無さそう。
「その……そのヒトは……まさか、漣ちゃんを……おかしくしたヒト……ですか」
以前から少し察していたこと。あの時の漣は自分の意思でああいうことをやったのでは無く、誰かにやらされていたということ。その元凶なのではないかと、潮は尋ねる。
「……そうよぉ。今、敵とされている子は、他の子をおかしくして自分の手駒にするような子なの。漣ちゃんは、その子にやられておかしくなっちゃってたのよぉ」
真実を伝える中間棲姫。既にその漣達が救われており、鎮守府で必死に訓練をしていることに関しては今は黙っているようだ。
潮の知りたいこと、聞いてきた事には、嘘偽りなく返答する。だが、余計なことは言わないようにする。
「……じゃあ……その戦場には……漣ちゃんもいるかもしれないって……ことですか……」
自分で話していて、恐怖がどんどん湧き上がってきてしまったよう

で、その手は自分を抱き締めるようになっていく。震えも始まったため、潜水艦姉妹がすかさずサポートに入った。
黙っていようと思った矢先に漣のことを聞かれて、中間棲姫は少し困ってしまう。ちゃんと全てを教えるべきなのか、端的にその質問の答えのみを教えるべきなのか。
そこで、飛行場姫が助け舟を出す。自分が何か言われることを覚悟して、潮には正しい現実を知ってもらうために。
「潮、その戦場に漣はいないわ。もう救われてるの」
恐怖の中でも、目を見開いて驚く潮。その表情の中には、安堵も少しだけ含まれている。
「前の戦いでね、漣は侵蝕から解放されて、正気を取り戻しているわ。今はアンタを襲ったときのようなことは考えてもいない。艦娘として、鎮守府に引き取られているの」
救われたことは喜べるかもしれないが、やはり恐怖が先立つ潮には、自分から聞いていてもその恐怖がどんどん増幅してくる。震えは目に見える程になり、発作と言えるくらいに息も荒い。潜水艦姉妹も手を握ったり背中を摩ったりと、その発作を緩和出来るように尽力する。
「そ、そう、ですか……それじゃあ……あ、曙ちゃん……は……」
「曙も同じタイミングで交戦して、同じように救われてる。漣と一緒に鎮守府にいるわね」
震えどころか、涙まで流し始めた。発作はさらに酷いモノになる。しかし、知ることをやめようとはしない。知らない方が怖かったから。
「ひっ……そ、その……漣、ちゃんと、曙ちゃん、は……ふぅっ、私のことを……知って……覚えて、いるんですか」
「……ええ、ハッキリと。侵蝕されてアンタを撃ったことを、自分の罪のように思って苦しんでいるわ。本来否応なく敵にやらされたことなのに、記憶も感覚も全部覚えているから、それが一番辛いみたい」
その時、潮の顔には確実に恐怖とは違う感情が浮かんでいた。漣達が無事に救われていることに対する喜びもだが、それ以上にわかりや

すい感情。
怒り。
その時は本人の意思としてやりたくもないことをやらされ、不要になったら罪の意識だけを押し付ける。今でこそ、漣も曙も前向きに戦いに挑もうとしているものの、そのときの記憶が消えるわけではない。常に侵略者にされていた記憶はついて回る。
潮は、漣と曙にそんな辛い記憶を押し付けた元凶に対して、ハッキリとした怒りを覚えた。恐怖よりも先に怒りが込み上がってきた。
ネガティブな感情は、別のネガティブな感情を引っ張り出してしまうことがあるだろう。恐怖と怒りは密接な関係にある感情と言っても過言では無いのだから。
「……許せない……」
「潮？」
「わ、私、そのヒトが、ゆる、許せません……漣ちゃんも……曙ちゃんも……やりたくないことをやらされたなんて……」
自分の思いを言葉にする。自分がやられ、こんなことになっていても、姉妹艦の親友が敵の手駒にされていたことに対しての思いが先立った。
しかし、怒りの発露と同時に恐怖の発作がさらに激しくなってきたため、ここにいるのはもう無理だと潜水艦姉妹が部屋へと連れていった。これ以上話していたら、潮が余計に苦しむことになる。

潮が出て行ったダイニングは、少しだけシンと静まり返っていた。恐怖に呑まれた潮の、明確な怒りの感情は、空気を冷ますには充分すぎる。
だが、その怒りは他の者の感情にも火をつける。少なくとも、春雨と叢雲は、その怒りを受け取った。
「潮ちゃんの分まで、私達が戦います。それだけのことをやったのだと、後悔させるために」
「ええ、私も同じ意見よ。例え龍驤が他の連中と同じで最初はただ侵

蝕されていただけだとしても、治療出来ない完璧な敵なら確実に終わらせる」

この言葉には、誰も何も言えなかった。近しい感情が、誰の心にもあったのだから。

猶予はあと1日。その間に、施設側も準備を終わらせる。前哨戦を何事もなく終わらせるために。

子供好きの北上

翌日、前哨戦までの最後の準備期間。この1日の間にも、龍驤は手駒を増やしている可能性は高く、明日の戦いでは多くの侵蝕されたドロップ艦を相手取る可能性がある。

鎮守府から用意するのは、１２人で編成された連合艦隊。泥を弾くバリアを生成する６つで１セットのアイテムは、コスト的に１２人分しか用意出来なかったためである。そこまで出来ているだけでも充分なのだが、ひっきりなしに手駒を増やし続ける龍驤には、その人数で足りるかはわからない。

そこにさらに情報を得るためということで、大塚鎮守府から艦娘が派遣されるという話も出ている。この1日は、その打ち合わせも兼ねている。

工廠には朝早くから大塚鎮守府から派遣されてきた艦娘が到着していた。まだ朝食を終えたくらいの時間であるため、あちらで出向が決まった時にはもう出発の準備を終わらせており、日が昇る前から動き出していたと見える。

「今日と明日、よろしくお願いします」

「よろしくね！　絶対大丈夫だから、心配しないで！　もっと私に頼っていいのよ！」

「ああ、よろしく頼む。彼が君達を派遣したということは、明日の戦いに有用だということにほかならないのだろう」

その派遣されてきた艦娘というのが、鹿島と雷である。２人とも侵蝕されている経験があるが、大塚提督からすればそんなことはどうでもいい。この戦いに勝つための采配である。

突発的に明日の戦いに入れてくれと言っても、当然だが顔合わせすらしていない者と一緒に戦うなんて普通よりもリスクが高いに決まっている。そのため、そういう状況でも十全な力が発揮出来る者が選択されているのだ。

鹿島は練習巡洋艦という特殊な艦種であり、通常の巡洋艦よりも若干力は劣るものの、大塚鎮守府の鹿島は一味違った。他者に艦隊行動

のノウハウが教えられるということは、その知識と力を内包していることになる。そして、それを再現するために連携も非常に上手い。初めて顔を見た者とも綺麗に合わせることが出来る程だ。
　雷も鹿島と似たようなもの。大塚鎮守府の古参であるために、仲間との行動は鎮守府の中では最もデキると判断されている。その社交性も島風並みに高く、古参なだけあって実力も非常に高い。鹿島との相性も抜群であるため、同じように連携が出来る逸材。
「こちらに来て早々で申し訳ありませんが、今回の出撃メンバーを教えていただけると嬉しいです。艦娘の基本的なスペックは全て頭に入っていますが、申し上げにくいのですが、若干そこから逸脱していますよね。なので、今日1日で全てを知った上で、お力添え出来るようにしておこうと思います」
「鹿島さんは堅いわ。要は、一緒に戦うヒト達と事前に仲良くなっておきたいってことよね。私も同じ気持ちよ。ちゃんと知っておかないと、連携なんて出来ないものね」
　鹿島はどちらかといえば大塚鎮守府の在り方をしっかりと守り、感情を出さないように心掛けているように見える。そのおかげで、あの時の辛い感情も抑え込んで通常の活動が出来ていた。
　雷は大塚鎮守府の中ではかなり感情的に動いているように見えるが、実際は不必要な感情だけ抑え込んでいるというとんでもなく器用なことをしているため、鹿島よりも上級者。
「ああ、昨日のうちに誰に向かわせるかは決めてある。君達を含めて12人。戦力としても申し分ないものとして考えた」
　顔合わせとしても、早急がいいだろう。そのため、鹿島と雷に紹介するためにも、この場で部隊の発表をすることとした。呼び出された者が明日の前哨戦のメンバーである。
　堀内提督が呼び出す度に、ゾロゾロと工廠にやってくる艦娘達。一部はやる気満々で、一部はやる気無さそうに。
「施設との関わり合いも多い者が基本になっている。まずは調査隊の隊長を務めている山風、その駆逐隊の一員である江風と涼風、そこに荒潮を加える」

この３人も、龍驤には因縁がある相手だ。２回目の戦闘で龍驤に致命傷に近い損傷を与えて撤退させた実績が大きい。それに、今ではこの鎮守府の最も強い駆逐隊といえばこの３人になる。使わない理由はない。
荒潮はこの鎮守府の中でも最も早く伸びた逸材だ。全てはジェーナスのためと鍛え続け、既にこの３人と同等に近い力を身につけてしまった天才。
「龍驤が名指しで因縁をつけている北上と、その相棒である大井」
「ちょいちょい、あたしってばそんな理由？」
「言わずとも君ならば出撃を望むだろう。そのために武装の使い方まで聞いてきたんだから」
北上と大井は、必須と言える人員だろう。龍驤との因縁は相当深いものであり、煽りに煽って二度の戦闘を撤退まで追い込んでいるのだ。敵を手玉に取る戦術は、北上がトップクラス。大将の艦娘の中でも、堀内鎮守府の艦娘を加えても、その追随を許さない。
「敵が空母であることを考えると、制空権の確保は確実に必要だ。そのために、空母は硬めにしておいた。千歳と千代田」
こちらも龍驤とは一度交戦している２人。違う器を使っていようが、それは空母であることには変わりない。ならば、制空権をしっかり確保していないとまともな戦闘すら出来やしないだろう。そのためにも、千歳と千代田は必要となる。
２人がかりでも拮抗までギリギリというところではあるが、それでも無いよりはマシ。むしろ、２人がかりだからこそ柔軟に対応出来る。
「そしてやはり撃破のためには火力が必要になる。金剛と比叡。これで１０人だ」
相手が他者を器として使っているのはわかるが、それがどんな器であれ、ある程度の火力が無ければ話にならない。侵蝕された艦娘を治療、解放するにしても、力業に頼らねばならない時も来るだろう。そのために、連携が最も得意な戦艦を２人投入。
武蔵を入れなかったのは、あまりにも火力が高すぎるのと、ハイに

なってしまった時に侵蝕された者達を沈めかねないからである。龍驤が器に使っている者が深海棲艦であっても、出来ることなら治療して解放したい。その成功率を上げるため、窮余の策かもしれないがこの手段を用いた。

ここに鹿島と雷を含めることによって１２人。連合艦隊の完成である。他にも向かわせたい者はいたが、アイテムの数的にこれが限界。

だがここで北上が意見（クレーム）。

「漣達はどうすんのさ。結構頑張ってるよアイツら」

ここまで必死に努力を続けてきた北上組の３人、漣、曙、朧。１人は龍驤を見返すために、１人は春雨に尽くすために、１人は潮と顔を合わせるために、今も絶えず訓練を続けている。そのおかげで、北上的には３人あわせて１人分の力を発揮出来ると確信していた。

しかし、その龍驤を斃すための部隊には含まれていない。アイテムが足りないのはわかるが、まだ練度も確認していないというのに最初から外すのはどうなのだと訴える。

そんな様子を見ながら、大井は相変わらずだと苦笑する。駆逐艦嫌いなどと言いながらここまで親身になっているのだから。

「ふむ……だが、３人分を追加となると、例の泥回避のアイテムは作れない。だからと言って、ここから３人削ることも難しい」

「あ、その件なのですが、我々の提督さんから言伝をいただいています」

そこにおずおずと鹿島が手を挙げた。

『鹿島と雷の分の装備のコストは、うちの鎮守府が出す』とのことです。開発する環境が無いので用意までは出来ませんでしたが、追加で２つ作ることは可能でしょうか」

資源は後払いになってしまうがとも話していたらしい。問題ないようなら、午後にその分を持ってくるとも。実に大塚提督らしい言い分である。他の鎮守府の力ばかりを借りるのではなく、その技術は借りるがあくまでも自分達の装備として扱えるように手を回そうとしているわけだ。

実際、このアイテムに関しては資源さえあればすぐに作れるようなものなので、コストさえ用意してもらえれば増産は可能。２人分となれば、それこそすぐである。
「不可能では無いが……それでも1人分足りない」
「ああ、だったらあたしの分はあいつらに渡してやって。これで3人参加出来るっしょ」
とんでもないことを言い出す北上。つまり、駆逐艦（こども）達を守るために、あえて自分だけは無防備になると言っている。堀内提督がそんなことを許すわけもない。
「流石にそれは容認出来ない。それで君が侵蝕されてしまった場合、取り返しがつかないだろう。万全な態勢で向かっても勝てるかわからないのが今回の戦いだ。1人失うということは、敵が1人増えるということにもなるんだ。君だってそれを理解しているだろう」
「理解している上で言ってんの。それに、あたしだけ無防備にしておけば、ちょっとやりたいことが出来るんだよね。だからさ、お願い」
いつも飄々としている北上の、やけに真剣な表情。勝算があるからこそ、この選択をしているのだと言わんばかりの目。
そもそも北上はこの鎮守府の艦娘ではないため、それが大将の艦娘であろうと堀内提督にはその意志を受け止める必要は一切ない。大塚提督ならば、北上が何と言おうと選択肢にすら入れていなかっただろう。合理的ではないため、意見があろうがより勝算が高い道を自分で割り出してから決定している。
だが、堀内提督は艦娘の言葉を親身になって聞くタイプであるため、そこまで言うならばと北上がそこに至った経緯を聞き出す。やりたいこととは何か、それが本当に妥当なのか。それを知らない限り、この意見は取り入れることは出来ない。
「まぁでもその前に、アイツらがどれだけ出来るか見てよ。そもそも実力不足で参加させられないってなら、あたしの分を渡すなんて出来やしないしさ。アイツらがお眼鏡にかなっているかどうかを判断するのは、提督のお仕事だからね」
「……そうだね、そうさせてもらおう。君がそこまで推すのだから、こ

の短期間で相当なものになっているとは思うが、今回の戦いは普通ではない。３人で一人前となっているとしても、それが戦場に出せるレベルに達しているかは、見てみなくてはわからないからね」
　そもそもお眼鏡にかなったとしても、それが北上のアイテムを譲渡してまで採用出来るかどうかはわからない。戦えるとしても、通用するかどうかは別。
「今頃は武蔵さんとサラトガさんが鍛えてくれてっから、それを見てよ。そうそう、鹿島もいるわけだし、練習巡洋艦の目から見てもどんなもんか意見が欲しいな」
「わ、私ですか!?」
「アンタ以外に練習巡洋艦はいないよ。こんな場所に合理的な考え方をする提督が送り込んでくるんだ。実力も見る目もあるんでしょ。それに、連携するにしても何が出来るかしっかり理解しておかにゃね」
　新人を鍛えることに定評のある練習巡洋艦。その目から見ても、北上組が実戦に耐え得るかどうかを確認してもらい、これならば行けると確信出来るものならば今回の部隊に採用してもらう。
「見てビックリしてよね。あたしと大井っちが鍛えに鍛え上げたから」
「だが、どうしてそこまで入れ込んでいるんだい。君は体裁としては駆逐艦嫌いで通しているだろう」
「アイツらの思いを遂げさせてやりたいじゃん。三者三様だけど、やる気があるならしっかり完全燃焼させてやんなくちゃ。そうしないとずっとウジウジしててウザそうだし。あたしはどちらかといえば後者。イジけてるとこ見せられたくないの。面倒臭そうだし」
　駆逐艦がそうしている様子を見たくないという本心が薄々ではなく堂々と見えている気がするが、あえてそこには触れなかった。否定していても、北上はどうやっても駆逐艦好きからは逃れられない。本人以外は全員理解しているほどである。
「むしろあたしとしては、調子に乗ってる龍驤に吠え面をかかせるのはコレが一番だと思ってるからね。意気揚々と送り込んできたアイ

ツらが、因縁の相手に育てられて自分を打倒してくるなんてさ。龍驤はどんな顔をしてくれるのやら」

ニヤニヤする北上。根っこの部分は若干性格が悪いようだが、それも駆逐艦達のことを思ってのことである。

漣達は今もその戦場に出るために努力している。その努力が報われるかどうかは、まだわからない。

3人の努力

前哨戦への部隊編成中の堀内鎮守府。堀内提督が提示した部隊に、漣達が含まれていないことに北上が難癖をつけた。泥バリアのアイテム数などの問題もあり、限られた人数しか出撃させられないのは仕方ないこと。しかし、それでも猶予があるのなら採用してもらいたいという北上の言葉に、まずはどれだけ戦えるようになったかを見るところからということになった。

さらに、戦える練習巡洋艦である鹿島の目で見てもらい、戦いに参加させられるところまで来ているかの確認もしてもらう。3人で一人前という特殊な戦い方になるのだが、それでも充分に戦力としてカウント出来るかどうか。

その3人は、今も武蔵やサラトガに鍛えてもらっているということで、堀内提督と鹿島がその様子を見に向かう。勿論北上と大井も便乗。いわば自分の弟子達が、この短期間でどのような評価を受けるかが気になっていた。

「先に聞いておきたいんだが、君達は彼女らをどう育てたんだい。申請は来ていたが、あれでもう出撃出来る程に育っているとは正直思えないんだが」

提督の当然な疑問。まだあの3人はこの鎮守府所属になってから数日。荒潮が改二になるまでにかかった時間よりも短い時間である。いくら敵対していた際の動き方などを覚えているにしても、泥のブーストも失われている状態で同じ動きが出来るわけもなく、身体がついていかない。

しかし、北上は自信満々に3人は戦えると言う。何度も言うようだが、3人は3人で一人前となるべく鍛えに鍛えたのだ。単体では今回選ばれた者どころか、鎮守府にいる艦娘達の中でも下から数えた方が早いだろうが、3人揃えばそれこそこの鎮守府でも最も優れているであろう駆逐艦である山風にも匹敵する程になっているはずだ。

「曙は近距離、朧は中距離、漣は遠距離って役割を与えて、それが確実に出来るように筋トレから何から何まで徹底的に刻み込んでやった

んだよ。荒潮の意見も取り入れてね」
　やったことといえば、陸上で出来る筋トレ、そして艤装無しで艤装ありの北上大井の攻撃を避ける体術、艤装ありならば電探の扱い方から艤装展開の精密性まで。そのポジションならば必要なことを叩き込まれている。
　そこに荒潮からのアドバイスも入れ、敵側だった時の動きもなるべく早く再現して、癖を直すのではなく受け入れることでさらに成長した。今の能力で出来ることを完璧に出来るようにし、さらに出来ることを拡げていくことで伸ばす。
「武蔵さんもノリノリなんだよね。鍛えてやってほしいって言ったら、すっごいイイ笑顔見せてきてさ。今頃酷いことになってるかも」
「その割には北上さん、楽しそうですね」
「そりゃあね。アレを見たら部隊に採用しようって思うはずだから」
「そこは見てから決めさせてもらうさ」
　そして、訓練をしているという海上が眺められる場所へ。いつも陸上訓練をしている場所からはっきり見える位置で訓練中であるため、そこで見てくれと促した。
　その海上、武蔵とサラトガ相手に立ち向かうのは、北上組の３人。話していた通り、ポジションを徹底して守っており、自分が出来ることを完璧に押さえている戦い方。しかし、それだけでは足りないと自分達でも感じ取っていたのだろう。この訓練によって、さらに殻を破ろうと躍起になっていた。
　その中でも特に自分を磨いていたのが、意外にも漣である。後ろから曙と朧を見ながら、自分が出来ることを探し、それを形にしていく力は、２人よりも大きかった。
「戦闘技術は及第点だ。被弾率はかなり低いようだね」
「あっちの攻撃、当たったら終わりの攻撃が多すぎんだよね。だから、まず回避を優先させてる。で、そのついでに攻撃出来るようにするスタイルがメイン。でも、そういうのって武蔵さんにはなかなか通用しなかったりするから、ここで臨機応変を覚えてもらいたいんだよね」
　武蔵は少なくとも手加減をしているのが、遠目でもわかった。サラ

トガも合間合間に空襲を入れて、回避性能の訓練に貢献しているものの、全力では無い。
　しかし、見ていれば見ているほど、２人は徐々にその力を強く出していく。どちらかといえば、自分達の攻撃に目を慣らさせているような雰囲気だった。
　さらに武蔵は、砲撃と格闘を入り交ぜて繰り出してくるため、先陣を切っている曙は悪戦苦闘。それを助けるために朧と漣が頭を使っているという感じか。
「付け焼き刃にしてはよく出来てると思うんだけど」
「……確かに、アレがドロップしてまだ数日しか経っていないと言われれば驚くものだ。侵蝕されていた時の動きを、追いつくことが出来ないにしろ覚えてはいるから、あれだけやれるんだろうか」
「多分ね。連携もある程度はそれで出来るっぽいから」
　提督が見ている内に、武蔵から一本を取ることは出来そうにない。だが、目に見えて成長していく様子は確認出来た。今は午前中ではあるが、同じことを午後まで続けていれば、３人がかりといえど一線級にまで成長出来そうである。
「鹿島の目から見てどうよ」
　北上に振られた鹿島だったが、その声も聞こえていないくらい真剣に３人の動きを目で追っていた。
　連携に重きを置いていることを前提に、今の動きが最善かをあらゆる観点から分析し、本当に辿り着くべき場所を脳内構築、展開することで、教え子を最高に仕上げていくのが、練習巡洋艦鹿島のやり方。
　今ここでも３人に対してそれを実行し、今が最善であることは瞬時に看破。練習巡洋艦ではない者の教えがここまで的確であることに驚きつつも、今の観点からさらに伸ばす方法を割り出しながら、今日中に戦力になり得るかどうかを考えていた。
　そして、出た答えは北上の望むモノだった。
「……可能ですね。１人で一人前にするのには時間が必要ですが、三位一体の戦術で土台があそこまで出来ているなら、今日中に仕上げることは出来ます。私も口を出していいですか」

視線は北上の方には向かないが、あの3人を戦場に出しても問題ないくらいには出来ると、練習巡洋艦の視点から見て保証した。
むしろ、ここから自分の教育で強く出来るかもしれないと思うと、ほんの少し昂揚しているようにも見えた。生粋の教育者タイプ。
「鹿島もこう言うことだしさ、アイツらも部隊に入れてもらえないかな。さっきも言った通り、足りない分はあたしのモン持っていってくれていいからさ。頼むよ」
龍驤への嫌がらせもあるのだが、あの3人の思いを遂げさせるためになるべくその方向に持っていきたいという意志を感じる北上の瞳。いつもおちゃらけているようではあるが、今回は至って真剣。
「……もう1つ聞いておきたい。先程言っていた、君のやりたいことは一体何か。これが最後の決め手になる」
ああ、と北上が納得。わざわざ自分を無防備にしてまで何をしたいか。
侵蝕されたら終わりのこの戦いで、侵蝕されないようにするアイテムが開発出来たから、攻勢に出られるようになったのが今だ。それなのに、自分の弟子を戦場に出したいというだけで自分の守りを全て捨て去るのは、あまりにも効率が悪いというか、慢心に近い危うさを感じる。
「ああ、確かにそれはちゃんと教えておかないとね。ほら、龍驤ってば、あたしに執着してくれてんじゃん。それを利用してさぁ……」
自分を無防備にしてまでやろうと考えていた作戦を話す北上。最初の方はふむふむと聞いていた提督だったが、話が進むにつれて、本当に大丈夫かという気持ちが強くなる。
自己犠牲というわけでもなく、そうすれば丸く収まるかもしれない一番の手段。龍驤の特性まで考慮にいれた作戦。直接ぶつかり合っているからこそ思い付いた手段。
失敗したら終わり。しかし、それくらいしなければ最善のゴールには辿り着けない。泥と化した龍驤を捕獲しつつ、その場にいる全員を解放することが出来るとなると、多少のリスクを取らなくてはどうにもならない時が来る。その中でも、最もリスクが少ない手段。

「……なるほど。だが、君は本当にそれでいいのか」
「構わないね。あの龍驤（バカ）を出し抜くためなら、手段は選んでらんないから」
　考えに考える提督。今回の部隊編成も、必要最小限のリスクだけは考慮したものだ。そのリスクも、部下の艦娘達が傷付くリスクではなく、あちら側にされている者達を救えない方のリスク。だが、今選んだ者に加え、鹿島と雷、そして施設から選出された深海棲艦の仲間も加われば、そのリスクもかなり抑えられるところだろう。
　そして今回の北上が提示した策は、それをさらに盤石にするものな上に、龍驤の捕獲率を格段に上げることが出来そうなもの。しかしながら、分散していたリスクを北上に集約するようなものなので、たった1人の危険度は格段に上がる。
「容認は出来ない。最善とは言えないからね。だが、手段としては成功率を上げるモノなのだろう」
「でしょ。だからさ、頼むよ」
「……上手く行ったときの最高の戦果は、そちらだろう。責任を問われるのは僕なんだが」
「あたしも婆ちゃんに謝るからさ、ね、お願い」
　冗談のように媚びてくるような北上の仕草に苦笑。そして、
「わかった。北上、君の案に乗ろう。だが、ギリギリまで最善の手段を考える。それでいいかな」
「問題無し！」
　ニパッと笑顔を見せる北上に、提督は小さく溜息を吐きながらも、その作戦のリスクを最小限に抑える手段を考え始めた。
「ありがとう提督。ただの艦娘の意見を取り入れてくれて」
「今更それを言うのかい。でも、君の言い分もわかるんだ。艦娘とて、感情を持つ人間と同じ。利用された彼女達の思いを遂げさせるため、一矢報いるために、戦場に出してやりたいという気持ちは僕にも理解出来る。だが、それが無駄死にになる可能性があるのなら、何と言われようと僕はやらせるつもりなんてなかった」
　だが、あの3人の成長と、北上の作戦、そしてそれに懸ける思いを

知ったことで、問題ないとは言い切れずとも、限りなく敗北の可能性を排除出来るところにまでは至った。あとは本人の思い次第だろう。
ならば、それをやらせる。無理無茶無謀と言われようが、前を向いているものを躓かせるよりはマシである。
「ちなみに、君は大将にもそういうことを？」
「結構打診してる。８割は却下されるけどね」
「なら今回はその残り２割だったわけだ」
よかったよかったと北上も安心していた。あれだけ努力している３人のそれが報われないなんてあってはならない。間に合わせることが出来て本当に良かったと、内心ホッとしていた。それに気付くのは、この場では大井くらい。
「今日中に仕上げるのなら、私も力を貸します。午後からでもいいので、私に教えさせてください」
「ああ、よろしく頼むよ。練習巡洋艦の教育、期待している」
「お任せください。あの子達を一人前からさらにステップアップさせましょう」
ニコッと笑う鹿島だったが、北上組の３人は後に語る。鹿島の教育が、今までで一番ハードだったと。

兎にも角にも、堀内鎮守府から出る部隊は決定した。翌日の戦いに備えて、ギリギリまで準備を怠らず、確実な勝利に向けて最善を尽くすのみ。

捻じ伏せる決意

鎮守府側の部隊が決定したため、そのメンバーが施設側に知らされた。翌朝に施設経由で戦場に向かうことになっているため、誰が来るかを最初から把握しておく必要があるからだ。

堀内鎮守府の面々だけならまだしも、今回は鹿島と雷という初めて施設を見る者、そして漣達という潮のトラウマを刺激する者が訪れることが確定している。そういうことは、事前に知っておく必要はあるだろう。

このメンバーからして、施設の中で重要な立ち位置になってくるのは、漣達と会うか会わないかに繋がる潮。そして、

「鹿島さんと雷ちゃんが来るんですか!?」

大きく反応した古鷹である。中間棲姫から呼び出されてこのことについて聞かされた古鷹は、確実に喜びの感情を表に出して驚く。自分の故郷となる大塚鎮守府からの参戦は、古鷹としては予想外だと思いつつも嬉しくも感じた。

大塚提督と直接顔を合わせることは出来ずとも画面越しでは話が出来たが、昔の仲間と直接会えるのはあまり考えていなかった。そのため、少し緊張すらしてしまっていた。

「ええ、眼鏡くんのところの子達も、本番に向けて情報を直接欲しいということみたいでねぇ。そこで、彼が選んだのが鹿島ちゃんと雷ちゃんって子みたいよぉ。私は直接顔を合わせたわけじゃ無いんだけれど、提督くんからその名前を聞いてるわぁ」

むしろ、堀内提督から古鷹によろしくと言われたくらいなので、あちらとしても若干意識はしていたようである。大塚提督としても、画面越しの再会をした時に、古鷹の部屋を残して戻ってこられるようにしておくと話していたくらいだ。艦娘を兵器として考えていても、元部下には愛着はあるのだろう。

「……姉姫さん、お願いがあります」

ここで、決意したように拳を握りしめて、真剣な瞳で中間棲姫に向き直る古鷹。その目を見れば、古鷹が何を言いたいかはわかる。

「私にダメという権利は無いわぁ。古鷹ちゃんがやりたいと思ったことをやればいいのよぉ」
「あっ……は、はい。でもまずは宣言を」
もう許可は貰えているが、ちゃんと言葉にして、意志を伝える。
「次の戦い、私も参加させてもらいます。本来の居場所の仲間達が来るというのなら、私も立ち上がりたいと思いました」
「ええ、わかったわぁ。でも、明日行く場所はとっても危険な場所。また侵蝕されてしまう可能性があるのよ。それでも、いいのねぇ？」
「はい、覚悟の上です。相手が相手ですから、私の力も必要だと思います」
重巡洋艦でありながら、戦艦の力、むしろ戦艦レ級の力を使えるようになってしまった古鷹は、スタミナこそ他の仲間よりもかなり少ないが、主砲も魚雷も艦載機も使える超万能な戦力となっている。
特に艦載機は今回非常に有用。敵が空母であることが確定しているため、制空権争いは絶対的に必要。現状向かうとわかっているのが、鎮守府から千歳と千代田、そして施設から大鳳の計3人であるため、さらに向かうとなれば、より戦いやすくなるだろう。
「近づかない、必ず回避する、無理をしない。これを守ります。あの侵蝕の辛さは……多分、この施設にいる仲間達の中でも一番理解していると思いますので」
実際、あちら側にいた期間が最も長いのは、施設にいる者の中では古鷹。そして、罪のない艦娘を手にかけた数が最も多いのも古鷹である。
故に、艦娘としての思考を狂わされ、人類の敵となる辛さは嫌というほど理解している。本来の自分と全く違う言動をさせられ、怒らせてはならない者まで怒らせて、そしてそこまでやらせておいて罪を全て被せられるなんて、二度とゴメンだと口汚く吐き捨てることが出来そうなほどに。古鷹だからこそそんなことは言わないが、今の古鷹の中にいる最上や鈴谷だったら普通に口に出していそうだった。
「そうね……それなら、古鷹ちゃんもよろしくお願いねぇ。明日のために、今日はゆっくり休んでちょうだい」

これがあるため、午後と深夜の哨戒に関しては必要最低限で済ませる予定である。誰が出撃するかもわからないため、それならば全員休もうというのが中間棲姫のやり方。
それでも身体を動かしたい者がいれば好きにすればいいとも言ってある。例えば、春雨は怒りの発散のために午後は外でいろいろとやっているし、潮のトレーニングは毎日欠かしていない。それ以外は何も考えず好きにする方針。
「私も少し身体を動かしておきます。明日になって鈍っているとかだと目も当てられませんから」
「そう、それじゃあ、軽く流す程度にしておきなさいねぇ。疲れが明日まで残るようなことは無いと思うけれど、万全にしておくに越したことはないから」
「はい、ありがとうございます。それと……潮ちゃんには話しておいた方がいいですか」
勿論これは、漣達が明日、施設に訪れることである。あちらはあちらで、潮と顔を合わせたがっているのだが、肝心の潮がそれに耐えられるかどうかはわからない。
一応ではあるが、潮は漣達が既に救われており、鎮守府所属の艦娘として活動していることは聞かされている。そして、潮に対してやったことを、やらされたことなのに自分の罪とされているために苦しんでいることも知った。
それならば、顔を合わせることも可能ではないかと考えた。それでも恐怖に呑まれる可能性は高いが、潮が望むのならば会ってみるべきだとも思う。
「そうねぇ……それは知っておいた方がいいかもしれないわぁ。知らない状態で顔を合わせちゃうかもしれないよりも、知っておいて覚悟をしておいた方がいいものねぇ」
「ですね。なら、このまま私が伝えてきます。妹姫さんもそこにいると思いますし、もし何かあってもカバーしてもらえるかなと」
「ええ、それじゃあお願いねぇ」
古鷹が一礼して出て行く。潮が前向きになってきているところに

これは大丈夫だろうかと不安になりつつも、いつかは知らなくてはならないことなのだから今知るべきだろうとも考える。
「難しいところよねぇ……過去と向き合うようなものだもの。そうよねぇ」
小さく息を吐き、扉の向こうに話しかける。すると、古鷹と入れ替わるように『観測者』が入ってきた。
春雨との約束を守り、明るいうちは施設内にいるため、呼べば来るような存在となっていた。基本的には施設を拠点に外海を監視し続けて、向かわなくてはいけない事態が発生した時は誰が何と言おうと島から離れる。そして、また戻ってくる。
春雨には出て行ったタイミングも戻ってきたタイミングもバレているため、それで良しとされていた。『観測者』としても、逆に管理される立場になるとは思っていなかったが、これはこれで活動をそこまで阻害されることでは無かったため良しと出来ている。
「彼女もまた進むために必要な試練を受けねばならない。止まるよりは善い道を歩くことが出来る。なに、耐えられないなんてこともないだろうさ」
「そうよねぇ。潮ちゃんも強くなったもの。身体も、心も」
何もおかしなことは起きないと信じて、中間棲姫は『観測者』をお茶会に誘った。『観測者』は少し迷ったものの、道化達が背中を押したため、仕方ないとその誘いに乗る。
『観測者』が滞在するようになったことで、ここ最近の事件で少し落ち込んでいた中間棲姫は、以前よりも心が落ち着いていた。それも春雨が想定した道なのかはわからない。

施設の外では、相変わらず潮が飛行場姫にトレーニングを課せられている。今日の参加者は明日の出撃のために身体を慣らしておくという4人。大鳳はギリギリまで失われた体力を取り戻すため、春雨と叢雲はいつもの鬱憤晴らし、そして海風は春雨のサポート。叢雲がいるため、薄雲も参加まではしていないもののここにいる。

潮はというと、本当に言われたことを全て吸収していくため、次々とやれることが増えていた。飛行場姫に仕込まれた格闘術は、なんだかんだでほぼ全てを網羅しており、それを覚えるにつれて力も増している。
「うん、もう潮は自分の身くらいは守れるわね。筋が良すぎて逆に怖いわ」
「は、はぁ……そう、ですか……」
そして、これだけ鍛えても息一つ乱さないスタミナ。これも潮の特性、恐怖から発展しているもの。
切り捨てられることに大きな恐怖を持っている潮は、自ら切り捨てる行為である兵器を握ることは出来なくなっているが、切り捨てられないようにするために追いつける体力を得ていた。
「潮はすごい」
「自信を持つといい」
潜水艦姉妹も、全力で潮を肯定する。実際、２人の言うことに嘘はない。本心から凄いと思っているから、今の言葉が口から出てくる。
そもそも２人は嘘をつけるような存在ではないので、その発言の信用度はとても高い。直接言えないことには黙りを決め込むだけ。そうで無ければただただ思っていることを口に出すのみ。
「それじゃあ、あとは基礎の部分を――って、あれ、古鷹？」
トレーニングを続けようとしたところで、施設からやってくる古鷹の姿が目に入る。ただ散歩しているのではなく、明確に潮に向かってきているのがわかったため、一旦中断。
この時には、便乗している春雨は何を話しに来たのか勘付いていた。そして、何も口に出さない。そのままでいる方がいい方向に向かうとわかっていたから。
「明日の戦い、鎮守府から来るメンバーが決まりました。その報告を」
「別に後からでもいいじゃない。今ここでする必要は……ああ、そういうこと。早く知ってもらいたいってことね」
「はい。他は後からでもいいかもしれませんが、今すぐ話しておく必要がある子達がいますので」

その目は潮の方へ。そして潮はそれにビクッと震える。
「メンバーはかなり多くて15人です。そのうちの3人が、漣、曙、朧」
名前を聞いただけで目を見開き、震え出す。朧はその時にはいなかった存在だが、漣や曙と同じように敵に利用されていたのだと知った途端、また違った怒りも感じ始める。
そんな潮を支えるために潜水艦姉妹が駆け寄る。足腰が立たないほどの震えにはならないが、やはり強い恐怖を受けたことで息が荒くなっていた。しかし、涙目になりながらも自分の足でしっかりと立ち、その現実を受け入れる。
「潮、顔を合わせる機会よ。どうする」
飛行場姫の言葉に、震えは一層強くなった。やはり、その時のトラウマを刺激され、悪夢ではなく現実でその恐怖を反芻してしまっている。
今でこれなら、顔を合わせたらどうなってしまうのか。泡を吹いて倒れてしまうのではないか。心配事は尽きないが、まずは潮自身に前に進む気持ちがあるかどうかを尋ねる。
「直接会うのが怖いなら、まずはタブレット越しに顔を合わせてみるのもいい。それも怖いならまずはやめておいても構わないわ。誰もアンタの選択を否定しない」
あくまでもこれは、潮の選択。潮がやりたいかやりたくないかである。
漣と曙が利用されていたことを知ったことで、恐怖を上回る怒りが発露した潮。朧すらも同じように扱われていたために、その怒りはさらに強くなっていた。
だが、やはり強すぎる恐怖は付き纏う。発作を起こすほどに潮を襲う恐怖の中では、まともに考えることも出来ないかと思われた。
だが、潮は決意した。
「会います……私……みんなに、会います……」
「本当にいいのね？」
「ご迷惑……かけるかもですが……会わせてください。それと……もう1つ……」

まだ落ち着かない息をどうにか鎮めようと深呼吸。しかし、震えが止まらない以上、まともに落ち着くことは出来ない。しかし、それでも潮は初めて強い決意をし、意志を見せる。
「わた、私も、私も……その戦いに、参加……します。させてください……」
ここまで言ってくるのは想定外だった。恐怖に呑まれ、戦い自体を恐れるようになっていたのに。
「私……曙ちゃん達を利用したヒトが……許せません。どうしても、許せないんです……だから……私も、私も戦いたい……っ」
震えは止まらずとも、少しずつ息は整っていく。この強い決意が、恐怖も怒りも捻じ伏せる。
「……簡単にいいとは言えないわね。明日、アンタのその友達と顔を合わせて、どんな反応をするかで決めましょう。なんなら今から鎮守府と通信して、話をさせてもらってもいいわよ」
「は、はい……その……ワガママかも、しれませんが……話を、話をさせてください……直接会う前に……声だけでも、いい、ので……」

潮の瞳には、強い意志が宿っていた。

根幹との再会

施設からの出撃メンバーが決まりつつある頃、鎮守府側のメンバーを報告されたことで、潮がその戦いに参加すると言い出した。漣達を陥れた元凶(龍驤)が許すことが出来ず、自分でも戦いたいと意志を見せる。

恐怖に震えながらもそれだけのことを言ってのけたものの、飛行場姫としては簡単に許可は出来ない。ただでさえ名前を聞いただけ発作を起こしかけたというのに、直接顔を合わせるだなんて簡単に出来るのか。明日に施設にやってきた時に錯乱したら、出撃に支障が出るかもしれない。

そのため、まず今から鎮守府と通信をし、3人と対面する。声だけでもいいから聞きたいと潮は言うが、それでダメなら出撃は無し。施設でジッとしていることを条件とした。

潮には強い意志があるが、発作に勝てるかどうかはまた違った問題。本質の部分に作用するため、どういう心構えをしても無理なものは無理である。今でこそ見られなくなっているが、春雨だってほんの少しの別れから寂しさに繋がって錯乱したほどなのだから、今の身体になって僅か数日の潮にはかなり厳しいものと思われる。

「本当に大丈夫かしらね」

そんな様子を心配してか、トレーニングに付き合っていた全員がゾロゾロとついていく。その中の叢雲が未だ腰が引けている潮を見てポツリと呟いた。

ダイニングに行くにあたって、潜水艦姉妹がしっかりとサポートしながら向かっているものの、自分で選んだ道にもかかわらず、身体がそれを拒んでいるかのような動き。

身体も心も強くなっているはずなのだが、やはり奥底に根付く恐怖が表に出てきてしまう。しかし、足を止めないのは成長した証。

「大丈夫なんじゃないかな。大惨事にはならないよ」

「春雨姉さんがそう言うなら大丈夫ですね。潮さんも大分成長していますし、自分で選んでいるんですから。そして何より、姉さんが後押ししているヒトが失敗するわけがありません。その答えに辿り着い

ているんですから」
　春雨の軽めな保証と、海風のいつもの捲し立て。これで空気は幾分か弛緩する。
「潮、大丈夫」
「側にいるから」
「何かあったら頼ってほしい」
「絶対に離れないから安心して」
　潜水艦姉妹も潮を癒すために側に付きっきり。その手を離すことなく、常に潮に温もりを与え続ける。
　ここ数日、毎日暇があればこうやって落ち着かせるようにしているため、こんな状況でも幾分か落ち着くことはできていた。そのおかげで前に進めているというのもある。
「が……が、がんばり、ます」
　やる気が空回りしているわけでもなく、無理しているわけでもない。勇気を振り絞って前に進もうとしているだけ。それならば、否定するよりも応援してあげたいと、怒りが溢れた春雨と叢雲ですら内心思っていた。

　ダイニング、中間棲姫にわけを話した後、飛行場姫を中心に、潮をテーブルにつかせる。タブレットは潮を映すことはないように配置し、最初は飛行場姫から始めて、覚悟が出来たらカメラを潮側に移動させる方針。
　残りの者は、カメラから外れた場所でそれを見守る。まるでテレビ番組の観覧席のようになってしまっていた。叢雲は相変わらず甘めの紅茶を飲みながら、他の者も休憩がてら水分補給をしながら、潮の健闘を見守る。
「鎮守府との通信を始めたら、もう後戻りは出来ないわ。潮、本当にいいのね？」
　ここで最後の忠告。その言葉に、潮は震えながらも静かに頷く。瞳に宿った意志はまだ消えておらず、せめて話くらいはしたいと手を

ギュッと握る。その手に潜水艦姉妹が手を添えた。
もし万が一この場で暴れてしまうようなことがあったら、2人が全力で押さえ込む。そうでなくても、触れているだけで落ち着けるのなら今一番必要なサポートであろう。2人はそれを率先してやっている。
飛行場姫が器用にタブレットを操作し、堀内鎮守府へと連絡。今回は個人的なことなので、大将や大塚提督は無し。
先程メンバーを報告して間もなくかけ直してくるなんて何かのっぴきならない事情があるのだろうと、堀内提督はすぐに反応した。
『おや、どうかしたかい。姉姫でなく妹姫だけとは』
「ええ、メンバーを聞いて、事前にやっておきたいことがあるの。……漣、曙、朧の3人を連れてきてもらえるかしら」
名前が耳に入ったことで、やはりビクンと震える潮。そもそも提督の声だけでも反応しかけたくらいである。覚悟は決めていても、どうしても身体は反応してしまうようだった。
簡単に理由を話された堀内提督も本当にいいのかと尋ねるが、構わないと答えると躊躇なく3人を執務室に呼び出す。今はギリギリまで訓練をしているということで、到着まで少し時間がかかるとして、少しだけ待つことに。その間は飛行場姫と堀内提督が世間話で場を繋ぐ。
それまでの時間、潮にとっては無限とも思えるほどの時間だった。今までとは違う恐怖に苛まれ、さらには緊張まで押し寄せてくる。もう喉がカラカラに渇いてしまっていた。
「はい、潮ちゃん。喉、渇いてるよね」
そこに春雨がさりげなくお茶を差し出した。喉が渇いていては、せっかく話せる機会だというのにまともに話せない。万全の態勢で事に当たらなくては、間違いなく失敗する。
「あ、ありがとう、ございます……」
「頑張って。きっとうまく行くから」
春雨の励ましでほんの少しだけ落ち着き、出されたお茶をグッと飲み込む。渇いた喉が潤され、詰まりかけていた息が大きく吐けた。

それで震えが止まったわけではないが、今の自分を正しく見据える余裕が少しだけ生まれる。自分で選んだことなのだから、こんなことではダメだと思えるくらいに。それでも恐怖は払拭出来ないが、幾分かマシにはなった。

そうこうしているうちに、タブレットから扉をノックする音。呼び出した3人が訪れた音。

運命の時が来たと思った瞬間、緊張がピークに達し、潮の身体は震えから硬直へ。それがわかったことで、潜水艦姉妹もより落ち着かせるために手を握るだけでなく、腕に抱きつくようにして大きく温もりを与えた。ウェットスーツ状の水着姿である2人からの抱擁は、他の者達以上に温かく、より落ち着くことが出来る。

『潮がっ、会いたいって!』

第一声は朧。3人の中でも潮とのいざこざに唯一参加しておらず、ただ姉妹艦に会いたいというだけの気持ちでここまで来た。

やはり名前だけで恐怖を感じるのに、声を聞いたら余計に恐怖が湧き上がってくる。だが、ここでこれではいけないと歯を食い縛り、どうにか硬直を解く。バクバクと鼓動する心臓の音が聞こえる程に、潮は発作を感じていた。

「すぐに顔を合わせるのはやめてもらっていいかしら。今でも潮は恐怖の発作に苦しんでるの。慣れるまで時間を頂戴」

『そ、そうなんだ……でも、この声は聞こえてますか』

「ええ、今はそちらに映っていないけれど、アタシの横にいるわ」

画面の真ん中には朧が緊張した面持ちで座っており、今は無言ではあるが漣と曙もその後ろに立っていた。3人とも、画面の向こう側にいるのが飛行場姫だとわかると、この異様な光景に一瞬驚くものの、すぐに受け入れた。

朧はともかく、後ろの2人は潮に対して引け目を感じているため、まだ流石に口を開くことは出来ない。自分の不意な一言が潮をさらに傷付けるかもしれないと、この場は一番無関係な朧に任せた。

『……潮、聞こえてる?』

なるべく恐怖を感じさせないように、優しく語りかける朧。潮はそ

れに対して反応は出来ないが、トラウマの根幹を担う漣と曙ではない声であるため、激しい発作には繋がらない。そこにいることもまだわかっていないが、それでもまだ画面を見ることは出来ない。
『潮のこと、みんなに聞いた。すごく辛い思いをしたって。だから、顔を合わせられないのもわかる。それでも、こうやって機会をくれたのは嬉しい』
　朧にも恐怖で硬直している潮の姿は見えていないが、そこにいる姿を想像しながらも、艦娘である時と同じように接する。
『漣と曙もここにいる。２人とも、潮と話したいって。それはやらされたことで、自分の意志じゃなかったとしても、自分がやったことだからって。だからさ、声だけでも聞いてもらえるかな』
　その言葉の後に飛行場姫の視線を受け、恐怖に打ち震えながらも、その声を聞くために小さく頷く。
「いいらしいわ。でも、気をつけてちょうだい」
『はい。どっちからでもいいよ』
　朧が引っ込むことはしなかったが、後ろの２人に促した。意を決して先に出てきたのは、曙。
『潮、そのままでいいから聞いて』
　あの時の曙の声。ドロップしたばかりに出会い、仲良くなった姉妹艦。同じ顔の別人ではなく、その時の本人。目の前で泥に呑み込まれ、そのままあちら側に行ってしまった者。
　それを意識してしまったがために、その時の恐怖、溢れ出す原因となった感情が心を掻き乱す。硬直からまた震えになり、歯がガチガチと音を鳴らす。
　だが、潮だって今までとは違う。自分の意志でここにいる。それに、周りには自分のことを見守ってくれている仲間もいる。
『あたしは悔しいの。あの時にあんなことをされて、こんなことをしでかした奴が、憎くて憎くて仕方ない。だから、あたしはあたしの手でそいつをぶっ斃すわ。アンタの分もあたしがやってあげる』
　曙の原動力は、元凶への憎しみ。巻き込まれて死にかけた潮の分まで憎しみを持って、必ず後悔させるところまでやってきた。その意志

を潮に伝え、潮が戦えないのならその分まで戦うと宣言。
『あと……その、本当にごめん。あたしも巻き込まれた方だけど、それでもアンタをあの場で裏切ったようなものよ。許されないことをしたって、あたしでもわかってる。だから、ごめん。許してくれなくてもいい。それでも、謝らせて』
裏切ったのは曙の意志ではない。侵蝕されたせいであちら側の思考にさせられたからだ。だから本来は謝る必要すら無い。だが、自分の罪としての認識にされているため、ツンツンしていることが特徴の曙でも素直に謝罪の言葉が出た。
この件での一番の被害者は、紛れもなく潮だ。勝手に巻き込んで、それなのに性格上不要と見做されて殺されかけ、結果的に恐怖が溢れて深海棲艦化するという大惨事。曙だって被害者なのに、自分を潮に対しての加害者であると考えてしまう。だから、柄にもなく素直に謝罪。
そんな曙の言葉に、潮は勇気を振り絞る。硬直と震えをどうにか耐えて、恐怖に押し潰されそうな心を奮い立たせる。だが、その分息が荒くなっていく。
『漣、アンタもよね』
『……そっすね。漣はもっと謝らなくちゃいけねーです』
自分を取り繕うような口調ではあるものの、いつもの元気さは微塵も感じられないくらいに声が小さい。
潮が漣に対して深いトラウマを負っているのと同じように、漣も潮に対して深い罪悪感を持っている。海風によって開き直れるような心構えに持って行かれているとはいえ、いざ潮と向き直るとなったら話は変わる。
『潮、本当にごめんね。泥のせいとかそういうの関係なく、漣がやったことは本当に許されないことだから。殺そうとしたのは紛れもないし、今の状況に持っていったのは漣だもんね。漣のせいで苦しんでいるのも理解してる。漣は潮と顔を合わせない方がいいとも思ってる。だから、これで終わりでもいい』
本当に辛そうな声色。だが、漣も勇気を振り絞っている。

「……ううん、謝らないで」
震えながらもこの言葉は紡げた。そして、一度言葉にしてしまえば次から次へと溢れる。
「漣、ちゃんも、曙ちゃん、も……自分からやったわけじゃ、ない、んだもんね……。悪くない、悪くない、んだよ、ね……」
ゼエゼエと荒い息を吐きながらも、顔をあげる。涙目どころか、ボロボロ涙を流しながらも溢れ続ける恐怖を決意で捩じ伏せ、3人に向けて、言葉を続けた。
「朧ちゃん、なんて、本当に何も悪くない、んだから……ね。私、わた、私は、漣ちゃん、も、曙、ちゃんも、恨んで無いよ」
震える手でタブレットを自分の側に向けて、今の自分を見てもらった。飛行場姫はそれを止めようとはしなかった。
深海棲艦と化した潮を見たことで、3人が目を開いて驚く。潮をこの姿にしてしまったことが自分の罪なのだと、漣と曙は心に留めた。朧も、一歩間違えればここに足を踏み込んでいたのだと思うとショックが大きかった。
「私、私も、戦う。こんなのおかしいから、謝らなくてもいいヒトが、謝るのは、絶対に、おかしいから……。だから、私も、頑張る、頑張るから、また、一緒に……一緒に」
泣きじゃくりながらも、自分の意志を伝えた。
『当然よ。あたしはアンタの受けた屈辱を晴らすために戦う』
『朧は、潮の心の安寧のために戦う』
『漣も同じ気持ちだい。平和も恨みも全部じゃい！』
画面の向こうの3人も貰い泣きしそうになりながらも意志を伝えた。
そして最後は、4人で小さく笑い合う。潮も、発作を起こしながらも笑顔を見せるようになっていた。

これを機に、潮は飛躍的に恐怖を抑える手段が上手くなる。恐怖の根幹に向かい合うことが出来たことで、大きく成長することが出来た

のだ。

戦力は揃い

漣達が和解出来たことで、潮は恐怖の発作が幾分か緩和されることとなった。姉妹艦の3人には笑顔も見せ、震えは止まっていないものの心が楽になっている様子。それには周りで潮を見ていたギャラリー達も一安心。これで前哨戦に向かうにあたっての憂いは無くなった。

せっかくだからと、もっと慣れられるように話を続ける潮なのだが、漣達も今は追い込みの時。3人も潮ともう少し話したかったようだが、残念ながら執務室の扉の向こうでは北上と大井が待機しているらしい。明日のための追い込みは、一分一秒が勝負どころ。こうしている間にもその時間は失われてしまう。

『それじゃあ潮、また明日。漣達は、絶対に元凶をぶっ飛ばしてやっから！』

『ホントよ。何のためにこんなに頑張ってるんだって話よ』

漣と曙は恨みも強い。決意の裏には少し後ろ暗いモノもあるが、施設側から派遣される部隊の筆頭が怒りと憎しみに駆られているのだから、その程度なら否定すら無いだろう。

『……潮、潮も明日の戦いに出てくるって、言ってたよね』

ここで最後に朧からの質問。ついさっき、潮も戦場に出ると言い出していた。しかし、朧としてはそれは本当に大丈夫かと疑問に思う。

『今回の敵、触ったらアウトな敵だけど、そちらって対策あるのかな。こっちは泥を弾くバリアみたいなものが開発されてるんだけど』

『そうそう。だから、やろうと思えばぶん殴れるかもしれないんだって。漣ちゃんはそんなことやりませんがね』

「……あ」

潮はここで初めて自分が戦場に出ることが出来ないのではと思い始める。勇気を振り絞って、漣達と一緒に戦うんだと決意したのも束の間、泥の特性によって思い切り出鼻を挫かれることになってしまった。

普通ならば、近付けないのなら砲撃や雷撃に特化すればいい。しか

し、今の潮は主砲も魚雷も切り捨てるモノであるために、展開しようとしても出来ないため、護身術ではあるが超近接戦闘を学んでいる。つまり、素手である。
　そんな状態で戦場に出たら、まず間違いなく泥に触れる事になるだろう。近付くこと自体が危険なのだから。
「な、なにも、考えてなかった……」
『潮がどういうスタイルかは知らないけど、アレでいいんじゃないの、ほら、春雨達が着てたスーツみたいなヤツ』
　あの泥避けは、それに傷が付かなければ侵蝕されないという実績がある。ナイフで切られたり、針で刺されたりと、全ての攻撃に対して確実に回避出来るわけでは無いにしろ、一応は信頼度が高い装備だ。
　深海棲艦である潮には、スーツとなれば事前準備が不要。強いて言うなら、どういうものを着ればいいのかを聞いておけばいい。時間があるなら試着もしておけば尚いいだろう。
『そこで聞いてそうなんでちょっと聞いてみるけど、春雨氏いますー？』
「はいはい、なに？」
　画面に映っていないところにいる春雨を呼ぶ漣。こういう場ならいてくれるだろうと信じたところ、当然いるために画面内に入ってくる。
　潮が立ち直る現場を見れたことで随分と心が落ち着いており、溢れた怒りは鎮静化されている。そのおかげで、漣達からしてみれば見たことがないくらいの穏やかな表情だった。これが本来の春雨なのだが。
『潮に、あの時のスーツのこと教えてもらってもいいっスか。泥除けとしてめっちゃ優秀っスよね』
「うん、いいよ。今の潮ちゃんには必要なことだろうからね。こっちでちゃんと教えておくから心配しないで」
『さっすが春雨氏、話がわかるぅ』
　春雨は勿論快諾。潮が戦いの場に立つためには必要不可欠であり、こんなことで折れてもらいたくは無い。

『ちなみに、潮ってどんな感じの戦い方なのかな。朧達は3人で一人前ってコンセプトの下で、短期間で出撃出来るくらいまで鍛えてもらったんだけど』

ここで朧からも質問。ここで潮がどのポジションに入るかによって、3人の戦い方も変わってくるだろう。とはいえ、3人は潮の性格は大体わかっているようで、ポジションとしては漣と同じバックアップだろうと思っていた。

「……その、わ、私……自分を守る手段を教えてもらっていて……でも、主砲も魚雷も、出せなくて……」

『んん？　それじゃあ戦えなくない？』

攻撃の手段を持っていないだろうと訝しんだ後、次の潮の言葉で3人が3人、全く同じ反応を見せる。

「か、格闘……素手で……自分を守るの……」

『す、素手ぇ!?』

4人の中で最も控えめな性格の潮が、4人の中で最も前衛に立つ事になる。だからといって嘲笑などするわけでもなく、単純に潮のことが心配で驚きを隠すことなく反応した。

本当にそんな戦い方で大丈夫なのか。あまりにも危険では無いのか。何故そういう選択になったのか。質問は次から次へと出てくる。

「はいはい、落ち着きなさいアンタ達。潮はアタシがしっかり仕込んであるから、充分戦えるわよ。それに、戦うっていう意志があるんだもの。安心しなさい」

飛行場姫がその混乱を収めるために口を出した。潮はこの数日でトレーニングを積み、自分を守る力を得ている。それは教えられたことを全て吸収する特性によって、飛行場姫が出来ることを全て呑み込んでいるようなもの。それ故に、飛行場姫も自信満々に大丈夫だと言い切れた。

3人は半信半疑である。少なくとも鎮守府の者達は飛行場姫の実力を知らないのだから。陸上施設型深海棲艦であるため、強力な艦載機を使ってくるという程度の知識しか無い。しかし、その力を目の当たりにしているどころか、自分がその力で心を折られた経験のある叢

雲には、この言葉の真意が読み取れる。
「大丈夫よ。妹姫に鍛えられてるのなら、潮は多分アンタ達より強いわ。３人がかりでも勝てないかもしれないわね」
　叢雲の声が聞こえたことでビクッと反応したのは曙。やはり侵蝕されていた時の経験が身体に染み付いてしまっているようである。
「まぁアタシ達の同胞（はらから）はそういうものだもの。だから心配しなくていいわ。対策はこっちでもしておくから、アンタ達は明日のために頑張りなさい。北上が少しずつフェードインしてきてるわよ」
　部屋の外で待っていた北上が、そろそろ時間だとニコニコしながら後ろに立っている。潮のことに集中していたため、中に入ってきていることにすら気付かなかったようである。
『潮、改めて、また明日。一緒に勝とう』
「う、うん、が、頑張ろう、ね」
　満面の笑みを浮かべた漣。クスリと笑って親指を立てる曙。そして拳を突きつけるようにしてニコッ笑う朧。その姿に潮は癒され、オドオドとしつつも笑顔を返した。

　通信終了。どっと疲れたように椅子に深く腰掛ける潮に、春雨がもう一杯お茶を差し出す。
　緊張感のある姉妹艦との対面で、今までのトレーニングでも疲れた表情なんて見せたことが無かった潮でも、精神的な疲労は大きいようで、貰ったお茶をぐっと飲み干し、深く息を吐いた。
「お疲れ様、潮。よく頑張ったわね」
　飛行場姫に撫でられると、少し頬を赤らめながら小さく頷いた。
「潮、えらい」
「頑張った。すごい」
　潜水艦姉妹も潮を褒め称える。ここまでされれば恐怖なんて何処にも無くなるだろう。
「……私、怖い、怖いですけど、みんなと顔を、合わせることが出来たから、頑張れます。もっと、もっと頑張れます……だから、明日、明

日は私も、行きます」
「ええ、でも本当にダメだと思ったらすぐに戻りなさい」
潮の意志は絶対に否定しない。それが正しい行いならば、否定する理由がないのだから。
「アンタ達もついていって見守ってあげて」
「当然」
「勿論」
潜水艦姉妹も参戦決定。基本的には潮のサポート。海中から状況を見定めて、潮が戦えなそうなら即座に引っ張ってでも撤退させる。そうで無ければ、気持ちよく戦えるように援護をすることになる。
潮はおそらく戦場でも姉妹艦と行動することになるだろう。そうなったら、潮の心を守るために、潮に向かうあらゆる脅威を排除するだろう。
もう、指示がなければ動けない姉妹では無い。自分で考え、自分の意思で動き、自分が嬉しいように生きる。自分のことはわからずとも、そういう自分として自我が芽生えた新たな存在として確立された。
「なんだかんだ、こっちから出すのも人数増えたわね。全部で８人か」
「ですね。私と海風、叢雲ちゃんと大鳳さん、それと、古鷹さんに潮さんに、この２人。あちらのヒト達も含めて２０人超えちゃいました。こんなに人数用意する戦いなんてそうそう無いですよ」
総勢２３人と連合艦隊２つ分のメンバーで前哨戦に向かうこととなる。相手が何人かわからない以上、これでもギリギリかもしれないのだが、それでもかなりの人数。多すぎて戦いに支障が出るかもしれない程である。
おそらくは、仕事をしっかりと割り振って戦うことになるだろう。その中でも潮は、立ち向かえるなら一番前、先陣も先陣になる。春雨や江風が超接近戦を繰り出すことを考えると、そこに並ぶことになるか。
「私達は私達で連携をしながら戦います。仲間に迷惑はかけません」
「ええ、そうしてちょうだい。あとは、潮の泥対策ね。まぁ教えればす

ぐにわかるでしょ。アレを着込んだ状態で今までのことが出来るかどうかを確認すれば、明日の準備は万端といえるわ」
戦力としてはもう充分とみなし、あと出来ることは対策などの別事の準備のみ。他の者達はもうそれも終わっているようなものなので、潮を完璧に仕上げることに残りの時間を使うことにする。
「ですね。潮ちゃん、今から時間貰えるかな」
「は、はい……大丈夫、です。みんなと、一緒に、戦うためには……必要なこと、なんですよね」
姉妹艦と会えたことで、前向きになっているのはいい兆候だ。これで明日の前哨戦、龍驤との戦いに勝つことができれば、さらに進めるだろう。

一方鎮守府。潮と顔を合わせることが出来たのがご満悦な北上組。特に朧は、最初の目的が達成出来たため、気合の入り方が違った。
「さぁ、仕上げをしましょう。朧、今なら何にも負ける気がしません」
「おー、やる気満々だねぇ。なら残った時間で総仕上げだ。鹿島も待ってるよ」
気持ちが前を向いていれば、どんな試練にも立ち向かえるだろう。朧はその傾向が特に強い。
「潮があんな姿になったのは、あたし達のせいでもあるのよね……」
「まぁねぇ。でもさ、ここは考え方を変えるべぼのたん。潮をああしたのは漣達かもしれないけど、それを差し向けたのは」
「クソ泥女ね。わかってるわ。あたし達のせいじゃない。全部あのクソ泥女が悪い」
曙は深海棲艦化した潮の姿に少なからずショックを受けていたが、その原因となった龍驤に対して深い恨みを持つことで力に変えた。溢れるほどでは無いが、曙は怒りによって強くなっている。
漣も同じように潮の姿に驚いたものの、曙に言った通り、怒りの矛先は正しく見据えている。そのおかげで心は落ち着いており、少しだけでも春雨と話が出来たことでさらにやる気が出ていた。

「明日のためにそこまで疲れないようにしたいけど、アンタ達は追い込み時だ。本当にまずいことになったら入渠まで考えておこうか」
「いや訓練でドックて。それはさすがに」
「あの鹿島、見てみ？」
北上に言われて指をさす方を見る３人。そこには最後の詰めを叩き込もうと、満面の笑みを浮かべて鞭を握る鹿島の姿があった。
「……生きて明日に向かうわよ」
「当然。画面越しじゃなく、直に潮に会わなくちゃいけないんだから」
「おうさ。あんな訓練で倒れるわきゃいかねーぜ！」

残り半日。これだけで３人の力はさらに上がることになる。ちなみに、ドックを使うことは無かった。

前哨戦前夜

前哨戦に向かう前の最後の夜。施設側は準備も万端であり、出撃するメンバーも決まったため、深夜の哨戒も再開された。この夜の当番は本来は春雨と海風が含まれていたのだが、明日の出撃のために繰り越され、松竹姉妹とコマンダン・テスト、そして伊４７が受け持つ。

また、夜になるまで飛行場姫が超高高度の監視もしていた。以前の文月のように、また何も知らないドロップ艦を使って施設の場所を探し出そうとしている可能性を考え、おおよその龍驤の居場所方面に飛ばす。大鳳も前哨戦参加者ではあるが、高高度からの監視が可能であるため、同じように艦載機を使って海上の監視をしていた。

「もし真夜中にドロップ艦を見つけてしまったとしても、容赦なく連絡を寄越してほしいと提督くんに言われているわぁ。だから、何かあったらすぐに教えてちょうだいねぇ」

前哨戦前夜ということで、もしかしたらここぞとばかりに何かをしてくるかもしれないと中間棲姫が哨戒部隊を見送り。受け持つ４人は、いつものように緊張感無く出発準備を終わらせた。

コマンダン・テストは常に艦載機を出しておき、伊４７も海中を念入りに確認。施設に近付く者がいるのなら、誰にも気付かれない内にそれを察知する方針。

「ウス。艦娘の変装もしておくんで、いざって時はすぐに呼べるように、タブレットも持ち運ばせてもらうっス」

「そうねぇ、それがいいわぁ。もし泥に侵蝕されているような子を見つけちゃったら、保護しつつ鎮守府に連絡してちょうだいねぇ」

深夜の哨戒でもしドロップ艦を見つけた場合でも、文月の時と同じように鎮守府に助けを求めるという方針は変わりない。同胞（はらから）のことならまだしも、艦娘に手を出すとまずいことが起こりかねないのだ。

そもそも保護するのもやめた方がいいかもしれない。そのドロップ艦に監視がついている可能性は非常に高く、そこに近寄った時点で監視対象が哨戒部隊へと変わり、そのまま施設の場所がバレるという流れまで見えている。

文月の時にその姿を確認したのも松竹姉妹だったりするのだが、その時から尾けられていた可能性も無くはない。だが、今この時に何もないということは、超高高度からの監視は視野が悪くなるという飛行場姫の言葉通り、文月をギリギリ見ているくらいだったのだろう。
「んじゃあ、行くか」
「ええ。哨戒部隊、行ってきます」
「くれぐれも気をつけてねぇ」
哨戒部隊を見送った後、すっと現れた『観測者』の方に目を向ける。こちらも夜のうちは別件で施設を離れる。
「行ってらっしゃい。また朝には帰ってきてくれるのかしらぁ？」
「ああ、春雨との約束なのでね」
道化達がニコニコしながら手を振ると、マントを翻した瞬間にその場から消える。小さく水飛沫がみえたので、海中、海底から向かったのだろう。
中間棲姫は相変わらずだなと感じつつ、毎日『観測者』と話が出来ることに感謝しながら施設に戻った。

施設内は、もうこの一日を終わらせるために静かになっている。出撃組は早々にお風呂で身を清め、早々に眠ることで疲れも取る。
春雨と海風も例外ではなく、既にベッドの中。特に春雨は、明日は施設側の部隊の中心人物として戦うことになるだろう。
「……んんぅ……」
しかし、緊張しているのかあまり眠気が来なかった。これはまだ前哨戦。本番でも無いのにこんなではよろしくないと自らを戒める。目を瞑っても、睡魔も何も感じない。変に頭が冴えている。
別に悪寒を感じているわけではないので、哨戒部隊が危険に晒されているというわけでもない。潮の繭が拾われてきた時とも違う。本当に、ただ単に眠れないだけ。
「姉さん、どうかしましたか？」
そんな様子を感じ取ったか、海風が目を開いて心配そうに声をかけ

る。怒りが溢れた後であろうが、寂しさが溢れたことには変わりないため、しっかり抱きしめて温もりを与え続けている。そのおかげもあり、春雨に何かあればすぐに気付いた。
「なんだか眠れなくてね。黒幕本人と戦うわけじゃないのに」
「前哨戦ではありますが、その力は黒幕のコピーみたいなものですし、だからなのでは？」
「……そうかもね」
意識し始めるとどんどん意識が冴えていく。疲れていないわけではない。午後はギリギリまで怒りを晴らすために身体を動かしていたし、潮の通信の後はその追い込みだって付き合っていた。
この緊張感は今までと違う。この施設に所属することになってから、明確な殺意を持って出撃をするというのは初めてのこと。誰かを救うために自分から向かうことはあったが、最初から戦うために出て行くということがこの施設には今まで無かった。
鎮守府ならば当たり前だったことが、この施設ならば当たり前ではない。それだけ平和を脅かされているということにほかならない。
「本番でコレじゃ無くてよかったよ。戦いの前に眠れないとかあったら困るもん」
「ですね……。姉さんには十全な力を発揮していただきたいですから。勿論、私は姉さんに頼り切っているわけではありません。如何に神の如き力を持つ姉さんとはいえ、万が一、億が一のことがあります。それをなくさせるのが私、海風のお仕事です。もう春雨姉さんにあんな思いをさせません。一度の失態は二度と起こしませんから」
海風だって大きな被害者。侵蝕され、愛する春雨に叛旗を翻す羽目になり、心を揺らがされた。あの時の感情を覚えているせいで、今でも悪夢を見るほどである。
姉にそんな姿を見せるわけにはいかないと気丈に振る舞い、表面上はいつもの調子を取り戻している。いつものマシンガントークも毎日のように飛び出すし、悪夢から救ってもらったためにその愛はより深いモノになっているのだが、春雨からしてみれば、多少無理しているようにも見えた。

「海風」
「はい、何でしょうか」
「あまり無理はしないでね。私、戦場ではまた暴走しちゃうかもしれない。それを止められるのは、多分海風だけだから」
怒り狂い、身を滅ぼしながら深紅の狂犬と化した春雨を止められたのは、誰がどう見ても海風のおかげだ。それもあって、春雨は海風に絶対的な信頼を置いている。海風がそうであるように、春雨もまた、海風がいなくては安心して戦えないのだ。
逆に言えば、海風がいれば春雨は心置きなく全力で戦える。勿論もう暴走しようだなんて考えていないし、そこまでしなくても終わらせられるならそうしたい。だが、むしろ狂犬の姿を取らなければ勝てない可能性だってある。その時は、海風に頼り切ることになるかもしれない。
「そう言っていただけるだけでも、身に余る光栄です。私は春雨姉さんのためにこの命を使っていると言っても過言ではありませんから。ですが、勿論死ぬなんてことはしません。姉さんの心を守るために、私自身を守らなければなりませんから」
「私にも話してくれたよね。海風のために、私は私自身を守らなくちゃいけないって」
「はい。こんな関係になれて夢のようですが、春雨姉さんと私はもう一蓮托生なのかなと。烏滸がましいかもしれませんが、もう切っても切れない関係となれたのかなと思いました。お互いのために、お互いを守る間柄なんて、とても素敵ですね」
緊張感は拭えないが、海風とこう話している間は、心が安らぐようにも思える。一時的にその心が自分から離れたことで、本当に必要なものであると実感出来たからだろう。
そんな海風を抱き締めようと腕を展開しようとしたが、もう少しで眠るという時に硬い艤装の義腕で抱き締められて嬉しいものなのかと躊躇ってしまった。
それに気付いた海風は、その切断面とも言える腕に触れて、逆に抱き着いてくる。そのことで怒りを溢れさせてしまうかもしれないた

め、それを抑えるために。
「姉さん、私にも気を遣わなくて結構ですよ。姉さんがどんな姿になったとしても、姉さんは姉さん、私の愛すべき姉です。その手が硬くても、冷たくても、姉さんが姉さんの意思で私に触れてくれるというだけで感無量なんです。私も愛されているように感じて、今にも愛が溢れてしまいそう」
　その身体に顔を押し付けるようにして語る海風を撫でるため、思いを込めて義腕を展開し、海風の後頭部に触れる。決して柔らかくない金属の腕ではあるのだが、それでも人肌のような温もりを感じられるものになった。
　それを感じた海風は、より春雨の愛を感じることが出来て、人前では見せられないくらいに甘える。本当に愛が過剰に溢れ出して、海風が愛の泥を分泌してしまわないかと要らぬ心配をしてしまいかけたが、流石にそこまではならないだろうと優しく撫で続けた。
　その時だけは、春雨から怒りも寂しさも払拭されていた。海風の前だけでは、本来の春雨が出ていた。

　翌朝。グッスリと眠ることが出来たため、春雨と海風は気力も体力も全快状態。特に海風は、最後まで春雨の温もりを感じていたため、１２０％の力を出せそうな勢いである。
「おはようございます姉さん。今日もいい天気、絶好の出撃日和です。今日決着をつけねばいつやるのだというくらいに清々しい空気ですね。姉さんは体調は大丈夫ですか？　顔色は良いようですし、肌艶もいつになく絶好調という感じでしょうか。でも勿論油断は出来ません。最初から最後まで万全な状態でいかなければ。なので、ギリギリまでお世話させていただきますね。さあさあ、今日は大忙しですから、張り切っていきましょう」
「だね。今日で龍驤は終わらせる。黒幕の前哨戦は快勝で終わらせたいね」
　義腕と義脚を展開してベッドから立ち上がり、すぐにそれを隠すよ

うに着替える。絶好調であることを表すかのように、隠すまでの義腕と義脚はマグマのように紅く輝いていた。
ダイニングに向かうと、疲れた顔の松竹姉妹とコマンダン・テストが休息中。それはそれは眠そうにぐったりとしていた。
「あれ……もしかして夜に何かあった？」
春雨が話しかけると、竹が聞いてくれよと押し強く声を荒げる。
「ドロップ艦、またこっちに来てたんだぜ。しかも３人もだぞ！」
「そ、そんなに……？」
「たまたまかもしれないけど、夜の内に送り込もうとしてくるのが狡いよなぁマジで。こっちが寝てる隙を見計らってんだよ」
眠気もあるからか、苛立ちを隠さない竹。松もそれを止める気力もないようだ。
「夜の内に鎮守府に連絡してね、全員引き取ってもらったわ。コマさんがいなかったら近付いちゃってたかも」
「Ｃ▪ｔａｉｔ（よかったです）ｂｏｎ。お力になれたようで」
幸いにもそのドロップ艦に島まで接近されるようなことは無かったらしいが、だからといって島が危険に晒されていないというわけでもない。３人も島に接近されたとなると、そろそろ本当に島の場所がバレてしまっている可能性が否定出来なくなる。
「鎮守府もてんやわんやかも……夜の内にドロップ艦３人だなんて……」
「３人目ともなると、保護しに来てくれた艦隊も疲れた顔してたっぽいな。後から通信で聞いたぜ」
「だよね……」
施設どころか鎮守府にまで迷惑をかけ続けているやり方に、自然と怒りが溢れてくる。海風が即座にカバーしたものの、苛立ちはどうしても止まらない。
「まぁ、今回の戦いの最中もこっちでは哨戒とか続けておくから、気にせずぶっ斃してきてくれよな。オレ達の分まで頼むぜ」
「施設の平和のためにも、鎮守府の平和のためにも、ね」
「勿論。こんなことをしたことを後悔させてくるよ」

少し暗い笑みだったが、やる気は充分すぎるくらいに漲った。

前哨戦、戦いの幕が切って落とされる。

準備を終えて

朝食を終えた施設組。出撃するメンバーは、緊張感に包まれながらもいつもの岸へと集合。ほぼ半数と言える８人はやる気も十分にスタンバイ。

それを見送るために、姉妹姫と共に白露もやってきていた。大きな戦いの前なのだから、元々自分のいた鎮守府の者達を出迎え、その健闘を祈りたいと。

「私からのお願いは、みんな無事に戻ってくること。命を散らすなんて以ての外。傷だってついてほしくないわぁ。だから、本当に危ないと思ったら逃げることも考えてちょうだいねぇ」

中間棲姫が念を押す。仲間達が死ぬなんて考えたくも無いのだが、今から向かうのは危険な戦場だ。最悪、誰も帰ってこなかったなんてことだってあり得る。それがどんな理由であれ、誰一人欠けてもらいたくない。そもそも戦うことが嫌なのだから、極端な話、自分の知っている者が戦うのだって嫌なのだ。

しかし、そうしないと逆にこの施設が危険というのが困ったもの。迎撃だけではなく、打って出るという決意をしたのだから、もう止まってはいられない。

「ギリギリまでは艦載機で見送るわ。その目が届かなくなったら、アンタ達に任せるしかなくなる。お姉が言ってる通り、必ず帰ってきなさい。畑もまだ途中だし、漁のための人員は減ってもらいたくないわ」

飛行場姫もしっかりと応援。中間棲姫よりは攻撃的ではあるが、島の平和を念頭に置いており、そのためには今から出撃する８人の存在は必要不可欠。全員何事もなく戻ってきて初めて、この戦いは勝利となる。１人でもやられたら敗北と見てもいい。

そしてその条件は、命が奪われることだけでなく、侵蝕も含まれている。誰かがまた侵蝕され、仲間ではなく敵になってしまった場合、それはその時点で勝利では無い。侵蝕をどうにか治療出来たとしても、心に嫌でも蟠りが出来てしまう。

「私と叢雲ちゃんはこのままでもいいかもしれないけど、みんなは対泥のスーツを着てね」
「勿論です。あちら側のいいようにはさせません。今回は改良版ですからね」
早速海風がスーツを着込む。今までの皮膜のようなスーツとは打って変わって、防刃防針の素材となっていた。艤装の金属を練り込んだようなそれは、若干行動を阻害するかもしれないが充分すぎる程に動けるように伸びるおかげで、本来の動きが出来ない程にはならない。
これだけでは潮が物凄く恥ずかしがったため、さらにその上から制服を作り上げるが、それはそれでまた防刃防針。動きやすさを重視するため、春雨のそれを真似るようにショートパンツ仕様となっている。スカートだと、飛び散った泥が内側に入り込んで隠れるかもしれないという理由もあるため、しっかり肌に張り付くタイプ。
結果的に、今は首から下を特殊素材で作られた厚めのインナーで包み込み、その上から特殊な制服を着ているという状態になった。これならば、そう簡単には侵蝕されない。最終的には顔もヘルメット状のマスクで覆うため、完璧に外部への露出を遮断する。
勿論、これで完璧だなんて思っちゃいない。あちらが何をしてくるかわからない以上、保険がかなり強固になったという程度で今は終わっている。
爆発を身近で受けたら破損するだろうが、そもそもそんな場所で攻撃を喰らったら侵蝕どころかダメージが大きすぎる。なので、本当に陥れようとしてくるのなら、砲撃はしてこないだろう。してきたら回避するのみ。
「あとは顔を隠しておしまいですが、今はいいですよね」
「うん、大丈夫。でも現場に着いたら絶対に展開してね」
もうあんな思いしたくないからと言いかけて、ギリギリで引っ込んだ。その言葉は、自分も海風も傷付く。
「意外と動けますね。刀もしっかり振るえます」
「はい、何もおかしなところはないですね」

大鳳も同じスーツを着込み、腰に差した刀を抜く。違和感なく戦えるようで、泥のことを気にせず十全に戦えることを喜ぶ。
古鷹も尻尾の艤装と右腕を包み込む艤装を展開し、使えないところが無いことを確認。古鷹にとっては久しぶりの戦闘ではあるが、潮とのトレーニングで身体と同時に艤装も慣らしていたため、今からの戦いにも充分に参加出来る。ちなみに眼帯はオフ。
「潮、大丈夫」
「潮ならやれる」
「う、うん……大丈夫、やれる、やれる、やれる」
潜水艦姉妹はウェットスーツ状のスーツとなる。こちらは水着仕様であるため、機動性に優れた仕様に。流石に防刃防針に関しては適材適所としている。
潮も仲間達と同じ姿になるが、少し違うのが手。飛行場姫からの教えを忠実に守るため、義手のような見た目のグローブが出来上がっていた。自分の身を守ることを優先するにしても、このグローブがあれば大概のことが出来るように仕込まれていた。
「春雨、どうせなら私達も着ておきましょ。耐性があるにしても、万が一があるわ」
「だね。それに、出撃する部隊はお揃いの方が気持ちが昂るし」
「それはどうか知らないけど、どうせなら私達は動きやすい方がいいわ」
そして春雨と叢雲も同じようにスーツを着たことで万全となった。叢雲の言う通り、戦いに絶対は無い。叢雲には泥に対しての耐性が、春雨はその力によって自分の思い通りにことを運ぶ力があるとはいえ、それを上回る可能性が僅かにでもあるのなら、正しい対策は必要である。
春雨が同じ姿になったことで、海風が特大の反応を見せていたのだが、ここはあえてスルーした。
「お、見えてきたよ」
部隊が準備している内に、水平線の向こう側に鎮守府の部隊が見え始める。それを見つけた白露は、向こうにわかるように大きく手を

振った。
向こう側もそれに気付いたか、やんちゃ組である江風と涼風が手を振り返してくる。そして今回はそこに、明らかに初見の艦娘も含まれていた。
「んん？　あれが例の大塚鎮守府からの増援かな？」
白露のその言葉に古鷹が真っ先に反応。事前に知っていたとはいえ、自分の古巣である鎮守府の仲間達と直接顔を合わせられるとなると、いつも落ち着いている古鷹とはいえ若干テンションが上がる。
「雷ちゃん……それに鹿島さん……」
また会えたことに感激したことで、左眼の輝きが一層強くなった。それは向こう側にもわかったらしく、その一群の中から1人が飛び出して島に向かってくる。春雨達も知らない顔であるため、それが大塚鎮守府の増援であることは一目瞭然。
「古鷹さん！　会いたかったわ！」
猛スピードで突っ込んできたその艦娘、雷は、それこそ飛びつくように古鷹に抱き着いた。流石に艤装を身につけたままだと質量的に危険とわかっていたようで、即座に艤装を消す。抱き着かれた古鷹も、いつものことと言わんばかりに綺麗に受け止める。
「色が白くなってるけど、古鷹さんは古鷹さんね！　私の知ってる古鷹さんのままだわ！」
「……うん、そうだね。私は何も変わってないよ」
元々の仲間にこう言われると、自分は艦娘のままなのだと実感出来る。つい先日まで今から戦いに行く敵と同じ存在だったのだが、そこから脱却出来たのだと改めて感じることが出来た。
その後から続々と今回の部隊が合流。いつも通り、旗艦は山風……というわけではなく、今回は金剛が旗艦。
今回は調査隊ではなく強襲部隊。物事を調べるために向かうのではなく、あくまでも眼前の敵をどうにかするための部隊であるため、この中では戦力としての実力が上であり、統率力も随一な金剛が旗艦を務めている。
「姉姫、妹姫、今日はよろしくお願いしますネー」

「ええ、よろしくねぇ。私達は参加するわけではないけれど、ここで貴女達の無事を願っているわぁ」
「それだけで百人力ネ。必ず全員無事で帰ってきマース」
　ニッと笑って握手を求める。中間棲姫もそれに応じてしっかりと握った。
「貴女が眼鏡くんのところの艦娘さんねぇ。貴女はちょっと前に画面越しに顔は合わせてるわよねぇ」
「はい、大塚提督の指示により、今回参戦させていただきました。練習巡洋艦、鹿島です。他の方々よりは力が劣るかもしれませんが、尽力させていただきます」
「あらあら、ご丁寧にどうもぉ。今から戦うというのにこんなことを言うのはなんだけれど、ここではあまり気を張らないようにしてちょうだいねぇ。余裕があったら、お茶でも飲みましょうかぁ」
　画面越しでもそうだったが、この中間棲姫の軽さには驚きが隠せない。最悪の姫と謳われていた存在は、今の黒幕であるその中身に集約されているのだと理解出来た。
　あの大塚提督がこの中間棲姫に対しては信頼とまではいかないまでも懐疑心を持っていないため、やはり信用出来る存在である。
「うおー、今日の姉貴達はなンかすげぇな」
「やる気満々って感じだ。深海の戦闘服はそんな感じなのかい」
「そういうわけじゃないけど、出来れば動きやすい方がいいからね。今は私も近接戦闘タイプだし」
　江風と涼風が春雨達の姿を感心しながら眺めていた。艦娘時代にはまずしないような攻撃的な姿であり、春雨に至ってはここから鉤爪や狂犬の耳と尻尾まで現れるのだから、このような反応をしてもおかしくはない。
　山風も静かではあるが、海風の戦闘服姿に見惚れているような雰囲気は出ている。身体のラインをしっかり出すような見た目なので、目のやり場に困っているように見えた。
　そして、同じように絡もうとしたがいろいろとまだ抵抗があるのがこちら。潮と北上組。

「……ちゃんと、会えた、ね」
事前に顔を合わせていたおかげで、直接面と向かっても、発作を起こすようなことは無かった潮。漣達はぎこちなくなりそうだったが、そんな素振りを見せないように努力する。
罪悪感を見せれば潮が悲しむし、そこからまた恐怖を溢れさせる可能性がある。潮のことを考えれば、開き直るしかなかったのだ。
「うん。これで朧の目標は1つ達成」
「そう、なの？」
「朧は、潮に会うためにここまで頑張ってきたから。でも、それだけじゃあもう足りないね。潮を悲しませたヤツを、ちゃんと斃すよ」
唯一罪悪感を持たない朧が率先して前に出る。普通ならこういう時は漣がおちゃらけるのだが、そんなことが出来ないくらいの神妙な空気になりつつあった。
とはいえ、この関係を引きずることの方がナンセンス。戦場にそういう私情を持ち出すのは、勝てるものも勝てなくする。だから、漣も曙もそれを振り払った。
「いや、潮っぽくないっていうか。本当に素手で戦うわけ？　大丈夫？」
「……うん、大丈夫。すごく、すごく怖いけど、それだけじゃダメって、わかってるから」
今この場に立っても、潮が格闘戦に打って出るというのが信じられない。
姉妹艦との再会で前を向けるようにはなったが、本質としてやはり切り捨てるモノ、主砲と魚雷は使えないままであるため、戦場に出るには拳しか無い。
しかし、ここにいる者達は、今の潮の実力を知らないからこういう反応をするのだ。仕込んだのは飛行場姫、ここから動けない代わりに、その技術を全て叩き込んでいる。そして潮は、その全てを忘れない。
「それじゃあ、時間も押してマスし、そろそろ行きますヨー！　打倒龍驤、ここで勝って、Ｌａｓｔ（最終）ｂａｔｔｌｅ（決戦）の礎にしてやりマース！」

時間もそこまで多くあるわけではない。時間をかければかけるほど、あちらの戦力は増えるようなものだ。暗くなる前に終わらせたいというのもある。
そのため、島での挨拶はこの辺にして、ついに出発のとき。
「春雨、最後に」
出ていこうとする春雨を呼び止める白露。なんだろうと振り向く春雨だが、白露は目の前に拳を突き出していた。
「怒りの矛先は、もう理解してるね」
「勿論です。自分に怒りを持つだなんて建設的ではありません」
「よし。それじゃあ、必ず帰ってくるんだよ。あたし達を泣かせんじゃないよ」
「……ふふ、わかってます。必ず戻りますよ。全員で、勝利の凱旋をします」
その拳に、春雨も拳を突き合わせた。

ここから前哨戦が始まる。ここから出てくる敵はまだ未知数。それでも、負けるつもりは毛頭無かった。

小さな空母

施設から敵地へと向かう襲撃部隊。
総勢２３人ともなると、その進撃も規模の大きなものとなる。戦艦である金剛と比叡が先陣を切り、そのすぐ後ろには接近戦を担当する春雨、叢雲、江風、そして潮が並んで航行。
逆に最後尾は常に艦載機を飛ばし続ける空母隊として、千代田と千歳、そして大鳳が務める。古鷹も艦載機が発艦出来るため、今はそちらを手伝いながら周辺警戒を続けていた。
残りの者達はその間にバラつきながらやはり周辺警戒。そして、仲間達との距離を保つように心掛けた航行。特に顕著なのは海風と漣達であり、海風は春雨の、漣達は潮の真後ろから援護をするような配置を心がけている。
「Ｈｅｙ，叢雲。まだまだ敵は感知しないデスか」
「まだね。この周辺では誰かいる感じがしない」
「Ｏｋａｙ．他の敵はまだいないということデスね」
頻繁に叢雲に確認しながら、真っ直ぐと龍驤が陣取っているであろう場所へと突き進んでいく。この方向でいいかどうかは、春雨が直感的に選択しているため、信頼度はそこそこ高め。実際、侵蝕されたままの漣から聞き出した方向もこちらなので、まだ拠点の場所を変えていないと見える。
「春雨、脚を生やした状態でＣｒｕｉｓｅ（航行）出来るようになったんデスか」
「そうですね、気付いたら。二度目の溢れのおかげで、いろいろと本質が変わってしまったようです。あの時の私は脚がない状態が当たり前となっていましたけど、今は脚を生やした状態が当たり前となったんだと思います」
その辺りはまだわかりにくいが、少なくとも今の春雨は艦娘の時と同じように脚を展開した状態での航行がうまく出来るようになっていた。怒りが溢れる前は、脚を展開している時はまともにバランスが取れなくなっていたが、今はそれこそ艦娘の時と同じように動けてい

る。
　実際、どちらも不便であるとは思わなかった。今なら今なりに戦えるだろうし、むしろ、艦娘の時の動きも再現出来るようになったため、今まで以上に強くなったかもしれない。
「それにしても……春雨は大分様変わりしてますねぇ」
「ですね。でも、比叡さんの攻撃とかを邪魔するようなことはしないので安心してください」
「それだと嬉しい、かな？　私、いつも勢い任せで突っ込んじゃうし」
「その辺りを知っているからこそ、隙を見て攻撃するので」
　比叡は春雨の両腕に展開された鉤爪に注目していた。むしろ見た目がもう今までから逸脱していると言っても過言では無い。
　怒りが溢れる前までは、まだ艦娘の時の艤装が深海側に歪んだと言えるような変化だったが、今は完全に別物。二段階目の溢れによる進化は、春雨を狂犬へと変えた。鉤爪や刺々しい脚甲に加え、耳のような電探に尻尾の形状の基部まで出来てしまっている。見る者が見ればカワイイと形容するかもしれないが、春雨から溢れ出す怒りを具体的に形状化したモノであるため、触れれば誰だって怪我をする。
「江風も自由にやってくれていいから」
「わぁーってるよ。つーか、江風は前のめりに戦うことしか出来ねぇンだ。そりゃあなるべく周りは見るけどさ」
「その気持ちがあるならいいよ。みんなが全力を出せる状況で私も戦うから」
　江風は、春雨から話しかけられた時に小さく震えたようにも見えた。どうしても生前の時雨のような静かな怒りがずっと見えているようである。その矛先が自分では無いことはわかっていても、春雨に対して少し怖いと思ってしまうほどだった。
　同じように感じていたのは、江風だけでは無い。春雨をよく知る者ならば、同じような雰囲気を肌で感じ取ってしまう。それだけ春雨が変貌してしまっているということ。
　しかし、そんな雰囲気を醸し出していても、春雨は春雨。その心には優しさも兼ね備えており、だからこそ怒りが溢れてしまったのだ。

それを全員が理解しているため、何も変わらず接する。
「金剛さーん、場所的にはそろそろ叢雲の感知が届くくらいじゃなーい？」
　そんなことを話していると、部隊の中でも真ん中から少し前方に来ていた北上が金剛に尋ねる。
　聞いていた話から割り出した龍驤の拠点と思わしき場所には、そろそろ近付くくらいにまで来ている。叢雲の感知の範囲はかなり広いため、もし何かあればそろそろだろうと意見を打診した。
「そうデスね。それなりにＳｐｅｅｄｙにここまで来ましたガ、さっきは叢雲は何も感じないと」
「……入ったわ。本当に端っこ、感知が届くギリギリのところに、何かがいる反応」
　先程までは何も感じないと話していた叢雲が、このタイミングで感知範囲に反応を確認。今はまだ１つだけのようだが、近付けば近付くほど、その反応は増えていくはず。
　そして、叢雲が感知したということは、ここからは見えない高高度にも何かが見えてくるはず。それを確認するため、大鳳がより注意深く上空に飛ばした艦載機からの視線を調べ上げる。
「こちらでも確認。高高度の艦載機です」
　大鳳がいなければ気付くことが出来なかったであろう敵の監視。しかし、逆に大鳳がいれば気付くことが出来る場所に監視を置いている時点で、何も知らない艦娘を施設に嗾けてきた時につけていたであろう超高高度の監視とは別に艦載機を用意しているようである。
「大鳳、それは龍驤の艦載機デスか？　覚えていたらでいいんデスけど」
「……私の知っている限りでは、これは龍驤のモノではありません。おそらく、別に空母がいますね」
　艦載機は見た目が近しいモノが多いが、龍驤が好んで使うタイプとは別物が来たと大鳳は言う。つまり、空母が複数人いるということ。文月が話していた３人のうちのどれかがその空母に該当する可能性は高い。

そういう意味では、空母を多めに配備させたのは正解だった。これでも少ない可能性もあるのだが、拮抗まで持っていければ御の字。
「この辺りは岩礁帯になっているみたいです」
「島ってほどじゃないけど、拠点にするってなったら出来るかも」
偵察機からの情報を千歳と千代田が伝える。陸に近いような場所では無いが、この辺りは岩礁が至るところにある若干戦いにくい場所のようだ。
空母ならばその場から動かずに圧倒的な物量で押し込むということも出来るかもしれないが、近接戦闘を主体とするのなら、この障害物だらけの場所は少々面倒くさい。
雷撃に至っては岩礁に邪魔をされてまともに届かない可能性もある。一撃一撃で破壊し続ければ、最終的には更地に出来るかもしれないが、そこまでやるには時間もかかる。
この場所を陣取っているのは、どう考えても北上対策。魚雷主体の北上の攻撃手段を近接戦闘に制限させつつも、それすらも十全に使えないようにしていた。
「余程あたしの魚雷が怖いと見えるねぇ。あれか、スクリューで背中抉ってやったのを根に持ってるんかな。かぁーっ、ちっちぇえなぁ」
そんな戦場でも、北上は余裕を崩さない。それならそれでやりようがあると、ニヤニヤしながら計算を進めている。
「油断はしない方がいいですね。私も斬撃が難しいかも」
「比叡、私達は戦艦としての戦い方をすればいいデース。まぁ、それも対策されているかもデスけどネ」
「ひぇー……で、でも、気合、入れて、ぶち抜きます！」
より一層気合が入ったところで、春雨にいつもの虫の報せがやってくる。今までは悪寒を感じたら蹲る程の震えになっていたが、怒りが溢れた春雨には強めの苛立ちとして変換されていた。
「……来ますね。おそらく、空襲です」
そう言ったのも束の間、水平線の向こうから目に見える範囲で艦載機が飛んでくる。その数は、１０や２０では利かない。さながら暗雲が高速で流れてくるかのように、一直線に部隊を呑み込もうと襲って

きた。
「泥を降らせてくる可能性もありますので注意を」
「Ｏｋａｙ．　対空砲火、お願いしマース！」
ここで歩み出たのは、山風、涼風、荒潮、そして雷。４人の駆逐艦が一斉に真上に向けて高角砲を構えた。
「うふふふ～、本当にやることがわかりやすいのね～」
「空母なんだから、こういうことしてくるわよね！　大丈夫、対空砲火は私も得意だから、頼ってくれていいのよ！」
荒潮と雷の砲撃を皮切りに、泥まみれの暗雲を全て消滅させるための対空砲火が始まる。その密度は相当なもので、空襲をまともにさせる前に次から次へと墜としていった。
それでもそれを回避する艦載機はいくつも現れ、さらには墜とせど墜とせど艦載機は飛んでくるため、どうしても空襲は収まらない。
当然、こちら側の空母達も艦載機で拮抗に持っていこうとはしているものの、物量の差は簡単には覆せない。泥によるブーストを実感させられる酷い空襲である。
「……北上さんは下がって」
「あいよ。ああいうのは任せるしかないからね」
対泥のバリアを唯一装備していない北上にとって、この空襲はかなり厳しい。避けられる程度にまで空襲の量を減らしているために何とかなっているが、ほんの一滴でもかかったらおしまい。ただのダメージを与える爆撃以上に慎重にならなければならない。
「それなら、この漣ちゃんが例のヤツをぶっ放しますぜぇ！」
ここで漣が新たな武装を展開。施設にもある泥刈機、改良前の旧式ではあるが、最高出力で上空に波長を放てば、少なくとも泥が着水する前に全て消滅する。
ヒトに向けて放ったらミンチになることは変わっていない。しかも高出力であるため、漣の華奢な身体では真上に向けて放つのも大変なモノ。だが、北上組として身体を鍛えさせられていた甲斐もあり、非常に安定した姿勢で暗雲に向けて波長を放つ。
これにより、墜とし漏らした艦載機から放たれる泥の爆撃の心配も

無くなる。純粋な爆撃も、ヒトをミンチにするとまで言われている波長ならば空中で爆散するため、ここでコレを使うのは大正解。
「反応、かなり増えてきたわ。文月が言ってたっていう3人だけじゃない。多分これ、野生の同胞(はらから)も交じってる」
「Ｏｈ……でも、それも想定通りデース。泥まみれのイロハ級は、もう仕方ありませーン」
侵蝕された艦娘以外にも、イロハ級が多数配備されていると叢雲の感知が言っていた。龍驤からしたら、それも自分を守る盾みたいなモノなのかもしれない。
泥に塗れた海域で生まれた深海棲艦であるため、おそらく治療不可能。侵略者気質がさらに際立ち、どうあっても人類の敵にしかならないだろう。
そして、大分近付いたからだろう、春雨にはあちらからの攻撃が直感的にわかった。狙われているのは、先頭にいる金剛。
「金剛さん、盾を展開してください！」
その言葉を全て聞く前に、金剛は艤装の盾を前面に展開する。その瞬間、ガツンと強めの衝撃を受ける。
「Ｗｏｗ，春雨Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕデース」
「いえ、でもそれは……矢ですか」
「デスね。Ａｒｒｏｗを使う空母がいるということデース」
金剛がガードしたことによって側に落ちていたのは、黒い矢。拾おうとした瞬間に消滅したため、おそらく泥製。刺さっていれば即死、擦っていれば侵蝕。針よりも太く、威力もあるため、防針ではどうにもならない可能性が高い。とはいえ、掠める程度なら傷はつかないので、刺さらないように気をつければまだ大丈夫。
「あちゃー、やっぱり当たらないかぁ。でも、それくらい歯応えがないとね」
そんな言葉と同時に現れたのは、弓を握る小柄な艦娘。しかし、その服装を見て数人が顔を顰める。
ドロップ艦を泥でブーストさせ、さらには熟練者と同じくらいの動きを可能にさせる、例の泥のコスチューム。触れただけでもアウトの

それを身に纏ったその空母は、ニコニコ笑いながら弓をさらに構える。
「ああそう、なるほど。文月が言ってたちっちゃいお姉さんって、アンタのことかい。瑞鳳」
「あ、やっぱり私のこと知ってるんだ。さすが大将の艦娘。龍ちゃんが目の敵にしてるだけあるねぇ」
小柄な空母、瑞鳳は、さらに矢を放つ。今度の狙いは北上。だが、その矢は北上に届く前に春雨が鉤爪で握りしめた。侵蝕を受けることなく握り折り、矢を消滅させる。
「で、駆逐艦というのは何処の誰ですか。貴女だけでは無いでしょう」
「そうだねぇ。でも、今は私と遊んでよ」
その姿勢は変えず、弓に矢をつがえた。

1人目は瑞鳳。だが、まだまだ敵は多い。これが始まりとなる。

大混戦

前哨戦のために龍驤の潜伏するであろう海域に到着した襲撃部隊。岩礁帯を陣取る敵、その1人目は軽空母瑞鳳。相変わらず泥で出来たコスチュームを身に纏い、ドロップ艦であるにもかかわらず、熟練者と同等の動きを見せつけてくる。

艦載機による攻撃は一切終わらず、その中でも瑞鳳が目の前に現れたということは、まだこの空襲を仕掛けてくるだけの戦力が整っているということになる。ならば、瑞鳳に手間をかけている余裕はない。なるべく早急にあちら側の攻撃の手を緩めさせる必要がある。

「うわぁ、すごい人数。そんなに龍ちゃんのこと危ないって思ってるのかな」

矢を連続で放ちながら、岩礁帯をちょこまかと動き回る瑞鳳。その合間にイロハ級の自分を顧みない野生丸出しの攻撃も入ってくるため、人数を揃えていても全員が瑞鳳に取り掛かれるわけではない。

それに、こうしている間にもさらにあちら側から人員が出される可能性があるのだから、警戒は徹底。

「思っていますよ。これ以上、貴女のような存在を増やされたら困りますから」

瑞鳳から放たれる矢は、基本的に金剛が盾で防御するか、春雨が鉤爪で打ち払う、あとは海風や山風が即座に撃ち落とすことで仲間達に届かせることもなく終わらせる。

これでも瑞鳳は救出対象。ここにいる漣達と同様、侵蝕されているだけのただの艦娘なのだから、治療する余地はある。その手段をいくつも兼ね備えてここに立っているのだから、当然実行するつもりだ。

特に春雨による解放は、鎮守府勢の持つ薬のようなその場で悶絶させるようなこともなく、蹴りによって容赦なく吐き出させるため、変に無防備を晒させる時間も少なめ。泥のコスチュームもその場で霧散させることも出来るだろう。

だが、今の春雨には一切の容赦が無い。解放するにも、激痛を味わわせてのものになる。優しく一瞬だけ心臓を止めるなんてことはし

ない。
　それに、先の言葉も瑞鳳が心配だからとか、龍驤が恐ろしいからとか、そんな感情は何処にもなかった。ただただこれ以上敵が増えたら面倒であるという気持ちが強い。苛立ちがより強く溢れてくるだけである。
「岩礁帯のことを考えると、近接戦闘がメインの方がいいと思います、お姉さま！」
「Ｏｋａｙ．　比叡、任せるヨ！　私達は周りに邪魔させないようにするからネ！」
　地の利を活かして海上というよりは岩場をメインに戦う瑞鳳を相手取るためには、同じように岩礁帯に突っ込むことが出来る近接戦闘組を突撃させるのが手っ取り早いだろう。
　近接戦闘ではない面々は、そこを援護するように戦うことになる。特にそれが上手いのが、春雨のために行動をする海風と、連携を徹底的に叩き込まれた漣達北上組。近接戦闘組が岩礁帯に突っ込んだところで、その隙間を縫って砲撃を放つことだって可能である。
　だが、それは相手が瑞鳳のみである場合。周囲のイロハ級を処理するのはまだマシではあるのだが、救出しなくてはならない相手が増え始めると、さらに面倒なことになる。
「アンタをさっさと片付けて次に行きたいのよ！」
　まるで猪のように突撃するのは叢雲。救うつもりがあるのか無いのか、槍は穂先を正面にして瑞鳳を追い詰めようとする。慣れない足場ではあるものの、接近戦専門だからこそ、悪い足場でも当たり前のようにその速度を落とすことなく突撃。
「うわぁ、すごいね。自分の危険とか顧みない子なのかな？」
　対する瑞鳳はそんな叢雲を集中的に狙い、次から次へと矢を放つ。頭から脚まで、狙いを１本に絞らせないことで、ガードに専念させる策。当たるわけにはいかないため、叢雲はその槍を大きく回転させ、矢を全て弾き飛ばしていた。
　その間に大きく離れ、斜め上に力強く放つ。その矢は大きく弧を描いた直後、空中で幾重にも分裂して降りかかる。泥で出来た矢である

ため、その挙動もある程度自由自在のようだ。ただ射るだけなら連射も出来て、細かいことをするのなら少しだけ溜めがいる。
瑞鳳はそれを、艦載機をコントロールしながら実行していた。今、上空を飛びながら襲撃部隊の空母隊を引き付けている艦載機の一部は、瑞鳳の操る艦載機。当然ながらスペックの高い深海仕様であり、泥ブーストとコスチュームのバックアップによって搭載数すらも通常より増加している始末。
「ああもう、鬱陶しいわね！」
こうされると面倒でも対処しなくてはならない。いくらスーツを着込んでいるとしても、それが泥製であっても、難なく貫いてくるだろう。
範囲が絶妙に狭いため、前に出れば回避出来そうだが、瑞鳳はそれすらも見越して既に叢雲の足場となっている岩場に矢を射掛けていた。それが泥となれば、踏んだ時点で侵蝕するし、それが出来なかったとしてもその岩場は滑る。
「叢雲ちゃん、一旦退いて」
熱くなりそうだった叢雲に、静かに指示を出したのは春雨。燃え上がるような怒りに呑まれている叢雲に対して、凍えるような怒りに呑まれているのが春雨。こういう時には冷静に物事を判断していた。
今は『望んだ答えに辿り着く力』のトリガーは引かれておらず、『最善の答えに辿り着く力』が発動中。光り輝く道は瑞鳳に伸びているものの、優先順位は叢雲に安全な道を踏んでもらうことである。そのため、無理して突っ込むよりは態勢を立て直すべきとした。
叢雲も、春雨の直感的な指示にはある程度の信頼を置いているため、舌打ちしながらもバックステップで瑞鳳との間合いを取る。
「滑って転んだら痛いもんね。私の間合いには近付かないでほしいからさ」
ニコニコ笑いながらも、矢の連射は止まるところを知らない。
やはり拠点防衛とも言える岩礁帯での戦闘は、あちら側の方が一枚も二枚も上手。だからこそこの場所を選んだのかもしれない。

瑞鳳への攻撃を近接戦闘組が受け持つ中、他の者達は周囲に群がるイロハ級の深海棲艦を処理していた。
侵略者気質を持ち、さらに泥に侵蝕されたことで、駆逐イ級ですら並の力では無くなってしまっているこの戦場なのだが、そこを受け持つ襲撃部隊の艦娘達は、臆することなく対処していく。
「荒潮と漣は防空に専念してればいいよ。周りのはあたし達がどうにかするから。曙と朧は潮のサポート。潮は近接戦闘だけど、岩礁帯で戦うのはしんどいだろうから、むしろ一緒に行動しな。山風と涼風はこっちだ。江風は春雨と海風に任せときゃいい」
「私も頼っていいのよ！」
「当然。雷、アンタは臨機応変に全員助けてやんな。そういうこと出来るからここにいるんだよね？」
「もっちろん！　頼って頼って、頼りまくって！」
指示を出すのは専ら北上である。駆逐艦に対しての信頼度と、ここにいる駆逐艦からの信頼度は、おそらく北上がダントツで高い。特に北上組は、師匠と弟子のような関係になっているため、言われたことに反発することなく、自分の出来ることを全力で実行する。
雷だけはこの部隊での初見になるのだが、当然昨日のうちに顔を合わせて、その実力を知っている。こうやって動かした方が実力を発揮出来るからこそ北上はそれを忠実に守って指示を続ける。
「北上さん、瑞鳳への援軍は」
「今は無くていいよ。最後は行くことになるかもしれないけど、今は周りの奴らをあっちに近付かせないようにして」
「了解です。ただでさえ岩礁帯で魚雷が使いづらいですから」
「いやまぁあたし達にゃ関係無いっしょ」
大井と話しながらも、魚雷を相変わらず投擲することでイロハ級を撃滅する。強化されていようが、魚雷そのものが砲撃のように飛んでいけばその装甲を簡単に撃ち抜く。
北上に指示をされている涼風も同じ戦術。岩礁帯を想定していたわけでは無いが、もし雷撃がしづらい状況だとしても何も問題ないよ

うに仕込むのが策士としてのやり方。
　イロハ級が待ち受けていることは、北上のみならず、ここにいる誰もが予期していたことだ。ただ龍驤とその配下にされているのが残り２人だけなわけがないと。結果的に大正解。そのために広範囲の殲滅兵器だって用意している。
「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂデース北上ぃ！　そっちは任せましたヨー！」
「あいよー。金剛さんも手筈通りによろしくー」
「Ｏｋａｙデース！」
　金剛が放った弾は、本来ならば対陸上施設型のためにも使われる対空兵装、三式弾。普通ではこんな使い方はしないのだが、今回は別。群れて数で圧倒してこようとするモノ達を一掃するため、砲撃の雨を降らせる。
　そしてそれはまた明石の開発した兵器でもあった。その三式弾は特別製。触れれば侵蝕を治療する薬剤入りの水弾でもある。これでイロハ級の中に侵略者気質では無いモノが少しでも含まれていれば、そこから混乱を引き起こすことが出来るだろう。
　侵略者ならば殲滅しなければ人類の脅威となり得るが、そうで無いのならば救う理由になる。もう、種族なんて関係ない。今関係しているのは、泥に侵蝕されているかされていないか。
「空襲の勢いが止まらない……かなり厄介ね」
「とりあえず、全機発艦、全力で！」
　その戦場を支えているのが空母隊だ。これだけの混戦の中で上を気にせず戦えるのは、全力で艦載機を処理している空母達のおかげである。
　その中でも、千歳と千代田は艦載機のコントロールに全神経を集中していた。同じように艦載機を操る大鳳と古鷹には他の攻撃方法があるが、千歳と千代田は混じり気のない正真正銘の空母。空を制する以外の手段を知らない。
　しかし、そうしていると２人は無防備になってしまう。そこを補うのが、他の手段がある大鳳と古鷹だ。
「やはりこちらを狙ってきますね。千歳と千代田は私が守りましょ

う。均衡を崩されたら一転不利ですから」
「ですね。幸いにも、私達には他の子達の力がありますから、全力で使わせてもらいましょう」
千歳と千代田を狙う敵の凶弾は、大鳳がその刀で斬り払い、古鷹が尻尾と右腕の艤装で薙ぎ払う。艦載機を操りながらのそれであるため、スタミナ不足の2人にはかなりキツイものではあるのだが、この戦場に立つまでにトレーニングを積んできているのだ。まだまともな体力とは言えないものの、慢心させられていた侵蝕の時期とは打って変わって長持ちするようにはなっている。
「っ、危ない！」
だが、その2人に忍び寄る存在に気付いた鹿島が、群れの中に砲撃を放った。
これだけの群れになると、その間をすり抜けてくる存在を知覚するのにはどうしても時間がかかる。それが命取りになる可能性もあるので、この戦場の全域に意識を張り巡らせる者が必要となるだろう。
そのうちの1人は、北上により空間把握能力を伸ばされた涼風。そしてもう1人は、仲間達の実力を測るための慧眼を持つ鹿島。涼風と同じくらいに戦場に視野を広げ、瞬時に動けるように常に鞭と主砲を展開して警戒している。
その広い視野があったからこそ、この不意打ちが認識出来た。そうで無かったら、大鳳か古鷹が痛い目を見ていたかもしれない。
「っと、すごいやん、よう見えとるねぇ」
当たりはしなかったものの、空母隊への攻撃を中断させることに成功。群れの中から1人の駆逐艦が現れた。
やはり泥のコスチュームを着せられたその駆逐艦は、瑞鳳と同じようにニコニコしながら主砲を構える。
「貴女は……黒潮さんですね」
「せやで、黒潮や。姉やんの邪魔はさせへんよ」
その駆逐艦、黒潮も、ドロップ艦でありながらも泥のブーストによる強化がなされている。一筋縄ではいかない存在だろう。

これで2人目。文月が話していた3人のうちの2人かはまだ定かではないが、明確に敵対している艦娘だ。まだ増える可能性を考えながらも、見えている敵は全て斃し、解放しなくてはならない。

練巡の力

イロハ級の群れの中から現れた新たな侵蝕者、黒潮。おそらく文月を施設側に向かわせたという3人の艦娘の内の1人。瑞鳳と同じく、泥によるブーストと泥のコスチュームによるバックアップにより、ドロップ艦であるにもかかわらず、対等に戦いを挑んでくる。

真っ先に狙いを定めたのは、大鳳と古鷹を守った鹿島。一番身近にいたというのと、自分の行動を妨害したから。1人削れば戦力は瓦解していくだろうということで、その狼煙を上げるために鹿島に突撃。

「ごめんなぁ。一番近くにおるんやもん。自分の不幸を呪ってぇや」

「そうですね、まさか私がまず戦うことになるとは思いませんでした」

だが、鹿島は一切臆さない。駆逐艦の突撃くらいならば、対処する方法なんていくらでもある。そう言わんばかりに、主砲と鞭を構える。

大塚鎮守府の駆逐艦達は、基本的には鹿島によって鍛え上げられている。それ故に、鹿島は北上とは違う意味で駆逐艦の扱いに長けていた。それが敵対していようが関係ない。

そもそも、やってくることなんて限られてくる。砲撃、雷撃、防空、爆雷。百歩譲って近接戦闘。その5種類。充分多いだろうが、これまで何人もの駆逐艦を見てきて、かつ鍛えてきた鹿島ならば、今この場で分析することは可能である。

「古鷹、貴女が行ってください。千歳と千代田は私が守ります」

「わかりました。任せます」

そこにさらに、古鷹が参戦。艦載機をコントロールしながらにはなるが、古鷹は本来の姿とはまるで違う、真の万能戦力となっているのだから、駆逐艦1人に対しては過剰戦力とすら感じるだろう。だが、それだけ慎重に行っているということにもなる。侵蝕されていた時の慢心を振り払うように。

それに、群れの中から飛び出してきたくらいだ。これだけの人数相手にも勝算があるから戦いを挑んできたに決まっている。いくら泥の効果で慢心しやすくなっているにしても、二度も敗北を喫している

龍驤の部下なのだ。流石に三度目の慢心は無いと見た方がいい。
「鹿島さん、手伝います」
「ええ、一緒にやりましょう。……久しぶりですね、こうやって並んで戦うのは」
黒潮の砲撃を捌きながらも、鹿島はほんの少しだけ嬉しそうに呟いた。
古鷹は大塚鎮守府の一員だった者。まだ艦娘だった頃は、鹿島とも付き合いはあったし、共に並んで戦うこともあった。当然ながら連携だって出来る。長く顔すら合わせることが出来ていなかったが、そこは大塚鎮守府の艦娘。その時のやり方がしっかり身についていた。
「あの時から、私は随分様変わりしてしまいましたけど、ねっ！」
尻尾を前方に構え、容赦なく砲撃を放つ。威力は当然戦艦並み。しかし、黒潮も侵蝕を受けた被害者。泥を吐き出させれば元通りになれることは確約されているため、放ったのは模擬弾である。
しかし、ただでさえ威力の高い深海の主砲で、さらには戦艦のモノ、ついでにそれがほぼ戦艦レ級と同等なのだから、それが水鉄砲であっても水圧がとんでもないことになっている。直撃したらまともでは済まない。
「うわっ、なんやアレ、当たったらあかんのやろなぁ」
しかし、黒潮は軽々と回避。ドロップ艦とは思えない瞬発力でステップを踏み、掠りもしない程に飛び退いた直後に主砲を鹿島に向けていた。
黒潮の砲撃は泥を含んでいない殺すための攻撃。泥製の矢とは違う、最初から最後まで殺意がたっぷり詰まった凶弾であり、ブーストのおかげで駆逐艦であっても巡洋艦並みの火力を出している。
「なるほど、駆逐艦といえど、火力は巡洋艦ですか。動きは駆逐艦のように素早い。なら、雷撃は雷巡と同じくらいですか？」
離れていれば、どれだけ火力があっても関係なく回避は可能。連射されればまた話は変わるだろうが、単発の砲撃ならばまず当たらない。
周囲のイロハ級は、泥でブーストされてはいるものの、結局は野生

のままであるため、統率があまりとれていない。本能的な部分に作用して、敵を追い込む、始末するという感情のみで行動しているようにも見える。
　そのため、黒潮と連携を取るようなことは無かった。おかげで鹿島も悠々と回避しながら、その性能をその目で見ることで解析が出来ている。
「随分と余裕あるみたいやん。ほな、こういうんはどうやろか」
　雷撃をリクエストされたからか、黒潮は鹿島に向けて魚雷を放った。その数は一般的な駆逐艦と同じではあるが、魚雷自体に仕込みがある。
　それについては既に知っていること。漣達も使わされた、泥が詰まった侵蝕魚雷。破壊しても泥が飛び散り、そうじゃなければ爆発によってダメージ、さらには泥の追加攻撃。百害あって一利なしの攻撃。
　さらには、そこに黒潮自身が砲撃まで合わせてきた。避けられても、避けられた瞬間に魚雷を爆破することで、鹿島に泥を浴びせかけてやろうという策。
「よく見る策ですね。自身の雷撃を自身で破壊することで爆破のタイミングをズラし、水飛沫による目眩しの後に急速に接近する。今回は魚雷に泥そのものを仕込んでいるのでしたか。ならば、どちらも抑え込んでしまえばいい」
　しかし、無数の策が頭の中にある鹿島には、その程度の策は瞬時に見破られる。そして、見てからそれを覆す。
　鹿島の放った砲撃は、黒潮の砲撃が魚雷に当たる前に魚雷に直撃し、想定していたよりも早く爆散。当然泥もその場でばら撒かれることになるのだが、鹿島はそこに砲撃を2発重ねていたため、その飛び散る泥ですら衝撃で自分の方へと向かないようにしていた。
　黒潮の放った砲撃は、本来当たるはずの魚雷が失われたことで、ただ何事もなく着水するのみ。戦況を何も変えることのない砲撃となる。当たるものと思って突撃の姿勢に入っていた黒潮は、その場にいる方がまずいとすぐに考えを切り替えてバックステップ。

「すぐに下がるのは及第点。敵の殺気をすぐに判断出来たことは褒めてあげましょう。ですがそれは、敵が私だけの時です。自分で目眩しをしているのですから、想定外が起きた場合は後ろじゃない、横に跳ぶべきです」
　下がることを見越していたのは鹿島だけではない。古鷹もそこに合わせて砲撃を放っていた。直撃したところで模擬弾であるため死にはしないだろうが、呼吸が出来なくなる程の衝撃を受けることは間違いない。
「っぶな⁉　めちゃくちゃやなぁ！」
　しかし、泥ブーストの力は絶大であり、その隙を突かれても瞬時に対応。着水と同時に横に跳び、衝撃は受けるものの直撃は免れていた。瞬発力に関しては並以上である。
「なるほど、漣さんから聞いていた通りですね」
　そう、鹿島は事前準備を一切怠っていない。漣達から侵蝕された者の身体能力や戦い方は聞いており、それを踏まえた戦術を既に構築済み。
　そしてそれを、鎮守府の仲間達全員に展開している。昨日の北上組へのハードなトレーニングも、それを身体に刻み込むため。
　聞いたところからすぐに戦術をアウトプットして他者に教えることが出来るのは、練習巡洋艦である鹿島の特性と言える。さらにはそれを自分にインプット出来ているのは、大塚鎮守府の鹿島ならでは。
　自分が出来るから仲間に教えられるというのは当たり前のこと。知識だけではその教育が真なるものにならないと大塚提督が鹿島を鍛え上げた結果である。
「古鷹さん、出来る限り多様な攻撃でお願いします。万能戦力は1人だけでもいると頼もしいですね」
「わかりました。あちらの対応力をオーバーフローさせるわけですね」
「そういうことです。それに、あちらの手段を全部見たいので」
　この期に及んでまだ裏がある可能性は高い。黒潮1人ならこれで終わりかもしれないが、ここにさらなる増援が入ってくるかもしれな

いと思うと、慢心なんて絶対に出来ず、周囲の警戒は常に厳としておく必要はある。
それを楽にするために、黒潮の全てを確認しておく。もしここで増援が来たとしたら、出来ることはこの黒潮とほぼ同じと見ていいだろう。
殺意のみの砲撃、侵蝕の可能性がある魚雷、並ではない瞬発力、今見えているのはこれだけ。そこに漣達から聞いている情報を加えると、爆雷を交えた攻撃と、コンバットナイフのような近接戦闘も視野に入る。
そして最も警戒しなくてはいけないのが、連携。
「あかんなぁ、ウチ1人でどうこう出来るモンやあらへん。ちゅーか、そっちは2人でウチは1人や。あかんあかん、数の差は必要やわ」
「よくもまぁこれだけ周りに侍らせて言えますね。貴女には協力してくれていないようですけど」
「そらぁなぁ、コイツらは本能のままにしか動けへん獣(ケダモノ)やさかい、協力っちゅーのはしてくれへんのや。だから、ちゃんと知恵のある仲間を使わせてもらうわ」
黒潮がそう言った瞬間、視界の端に何かが見えた古鷹が、咄嗟に鹿島の壁になるように跳び、その右腕の艤装によってガードした。チンと軽い音がしたかと思うと、それは強固な艤装に刺さることなく海上に落ちる。
ニードルガンの針。先日の戦場で朧が使っていた、刺さればそのまま侵蝕まっしぐらの、ある意味必殺武器。対針のスーツを着ることになった理由である。
これもバリアによって侵蝕を防ぐことは出来るかもしれないが、まだバリアの存在を明確にするわけにはいかない。そのため、古鷹は即座にガードという道を選択した。
「針、ですか。それも聞いています。無防備な相手にチクリと刺すだけで、あっという間に侵蝕し手駒にするお手軽兵装でしたか」
「知られとるんやねぇ。そりゃそうか、七駆と戦っとるんやもんな。ぬいー、それ、あんま効かへんみたいやわ」

「そうですか。残念です」
　イロハ級の群れの中から現れた2人目の駆逐艦。黒潮と同じように泥コスチュームに身を包んだその艦娘、不知火が、効かないと知るやすぐにニードルガンを消す。
「……2人目ですか。情報には無い人材でしょうし、文月さんが言っていた3人から溢れているところですね」
「ですね。大きなお姉さん、でしたっけ。それはまだこの戦場にはいないんでしょう。少なくとも、私達の敵はこの2人となりますか」
「見えている範囲では。人数差は五分五分となりましたが、それだけでは終わらないでしょう。まだこちらにいるというだけですから」
　そもそも、連携となると2人分とは行かないだろう。3倍にも4倍にもなる可能性は充分にある。漣達が3人で組んで戦っていた時に、いいように瓦解されたことを考えると、ここからが正念場となる。
　だが、鹿島も古鷹も、何処か気分が昂揚していた。久しぶりに仲間と並んで強敵に立ち向かうことに、戦意が漲るような感覚。共に大塚鎮守府の一員として感情を抑え込んではいるのだが、それだけでは収まらない程に漲る力。
「黒潮、貴女だけではやはり無理でしたか。落ち度ですね」
「すまんなぁ、別に慢心しとったわけやあらへんよ。ほら、力を測るためや」
「口ではどうとでも言えます。ですが、ここからは不知火も協力しましょう。あの2人を相手取るのなら、不知火としても楽しめそうです」
「それが慢心なんちゃうかぁ？　油断しとったら漣達みたくやられるで」
「彼女らと同じ轍は踏みません」
　ニードルガンを消した後はナイフを展開する不知火。黒潮が遠距離で不知火が近距離という配置のようである。ここからは連携によって圧倒しようという策のようだ。

当然、こうなることは鹿島の中で戦術構築済み。古鷹が隣にいるのだから、より勝率を上げる策に行ける。

岩礁帯の罠

鹿島と古鷹の前に黒潮と不知火が立ちはだかっている時、瑞鳳を相手取る近接戦闘組は、慣れない岩礁帯での戦いを挑まれていた。

ホームグラウンドである瑞鳳は、岩場でステップを踏むように動き回り、合間合間で射撃を繰り出してくる。その精度は動き回っているとは思えないモノ。春雨と叢雲は自身の鉤爪や槍で軽々と払い除けているものの、江風と潮はかなり苦戦していた。

「なンつー面倒くさいところで戦ってくれンだよ！」

今までに無い戦場に、江風は苛立ちを隠せない。海水で濡れた岩場は、踏み方を失敗するとつるりと滑るため、その上を蹴りながら高速で移動するなんてことが出来ず、岩礁に囲まれた海面を突き進む。そのせいか、接近戦を仕掛けたくても瑞鳳に追いつくことが出来ずに苦戦。

潮もほとんど同じだった。ただでさえ、飛行場姫達とのトレーニングが陸の上、もしくは平坦な海面だけだったこともあり、進むのに時間がかかってしまう。

また、この岩礁帯は海中から潮を援護するために戦場にいる潜水艦姉妹にも厄介なモノだった。海上に出ている岩礁は、海中ではより入り組んでおり、潮の真下を陣取ることが出来ない。緊急時に救うことは、この場では難しかった。

「勝手に私達の居場所に攻め込んできておいて、何を言うのかな？アウェーなんだから文句言っちゃダメだよ」

話しながらも笑顔を絶やさず矢を激しく放ち続ける。めちゃくちゃな姿勢になっているのに、精度は一切変わらないのが恐ろしいところ。

春雨や叢雲のようにわかりやすくガードする手段がない江風としては、攻撃に転ずることが難しく、回避に専念しなくてはならなかった。そうこうしている間に瑞鳳は離れていき、近接戦闘は難しくなる。

「江風、こっちは大丈夫だから、周りを黙らせてきて」

「わ、悪ぃ、任せるぜ春雨の姉貴！」
ここで春雨が江風を下がらせる。無理して突っ込ませるよりは、別の場所に当たってもらった方がいい。江風と最も連携出来るであろう山風と涼風がそちら側に徹しているのだから、江風もそちらに属した方がここよりも力を発揮出来るはず。
それに、この指示が春雨の指示であることも大きい。最善の道が見えている春雨が言うのだから、瑞鳳に向かうよりも周りのイロハ級を黙らせる方が、この戦況を良くする。そう考えれば、反発なんてせずに素直に従うのが妥当だとすぐに気付ける。
適材適所。ただ人数で圧倒するよりも、適した場所で戦った方が戦果が良くなるだろう。
「潮、アンタも、漣達と一緒に戦いなさい！　こういう足場だと厳しいなら、アンタがやりやすい場所でやればいいから！」
「うぁっ、は、はぃいっ」
潮に指示を飛ばすのは叢雲。江風と同様に潮も厳しそうであるため、別の戦場に移動させる。漣は泥刈機で対空砲火をしているが、曙と朧は潮を援護するために奮闘している。しかし、まともに近接戦闘が出来ないなら、別の場所で戦った方がいい。
ただでさえ、こんな混戦状態では、次から次へと恐怖が押し寄せてくるだろう。それを少しでも軽減するために、今この戦場で一番厳しい場所からは離れさせるべき。
「あれあれ、私にはあんまり人数を割かないのかな。さっきまでいっぱいいたのに」
「無駄に多いより、精鋭をぶつけた方が手っ取り早いんですよ」
瑞鳳の嫌味に、春雨も口悪く返す。
瑞鳳の言う通り、今岩礁帯で瑞鳳と相対しているのは４人。施設組の春雨、叢雲、春雨を援護するために決して離れない海風、そして、鎮守府組から比叡。
「もう少し、動きやすくしますか！」
ここで比叡が突拍子もないことを言い出した。岩礁帯を飛び回る器用さも持ち合わせているものの、その分強く踏み込むことが出来な

いため、全力を出すことが出来ないでいた。それをどうにかしようと刀を一時的に艤装にしまう。
「やめた方がいいと思います。多分これ、この場所自体が罠です。そうさせるための」
何をしようというのかと叢雲が尋ねる前に、春雨が忠告。それをする前に今のままで戦う方向に持っていく。
比叡がやろうとしていたのは、主砲を乱射して岩礁帯を全て噴き飛ばしてしまおうという手段。戦艦の主砲ならば、岩場自体を更地にすることも出来るだろう。多少ゴツゴツしていても、今の足を滑らせそうなモノよりは平坦に近付く。
何より、より不安定になるように足場自体に泥を付着しているため、それを消し飛ばすという理由でも、岩場を噴き飛ばすというのは悪くはない手段だと考えた。
しかし、春雨はそれ自体があちら側の狙いなのではと、直感的に勘付いた。行動が面倒くさい場所で戦うことで、痺れを切らしてこの場所そのものを消してしまおうという考えに誘導させる。
地形を変えるだなんて普通は出来ないだろうが、戦艦の主砲であれば、岩礁帯の岩なら木っ端微塵に出来る。だが、それ自体が仕組まれていたとしたら。
「岩場の隙間、機雷が仕込まれています。破壊したら誘爆するように」
言われて驚き足下を凝視したが、それらしいモノは視認出来ない。岩礁は他の海域にもある普通なモノ。飛石のように密集している場所もあれば、ヒト1人分以上の広さの足場もあるにはある。そういうところにはしっかり泥を配置して、まともに踏み込ませないようにしているあたり、タチが悪い。
「何も見えないけど」
「そのようにしてあるんですよ。潜水艦が海中から見えないところでもあるでしょうね。でも、岩場に強い衝撃を与えたら爆発するように仕掛けてありますよ。その機雷自体が命を持っているなら、移動もしますね」
「……深海忌雷!?」

深海棲艦製の機雷である深海忌雷。ここ最近は見なくなったが、海中から忍び寄り、艦娘の脚に絡み付いて動きを封じる。実際は爆発するわけではない生体兵器であり、機雷というよりは捕獲用の罠のような作用をする。

春雨は、この岩礁帯に爆発性を持つ深海忌雷がいくつも設置されていると見抜いた。本来の性質を泥によって捻じ曲げられ、捕獲ではなく殺意の塊となったそれは、岩礁を破壊しようとするなど強い衝撃を与えることで爆発する。

しかも、春雨はさらに見抜いていることがあった。深海忌雷が爆発した後のこと。

「多分ですけど、爆発してもそこまでの被害はないです。地形に対しては」

「ならどういう」

「泥をばら撒くんじゃないですか？　あの瑞鳳の動き、確実に誘い込んでますよね、忌雷地帯に」

遠距離からの攻撃がメインである瑞鳳が、間合いを取るために離れようとするのは当然のことではある。だが、その方向がより岩場の奥に行こうとしているような動きだった。

誘い込まれたところに瑞鳳自ら忌雷に着火する可能性もある。ここで春雨の予想通りに泥をばら撒くタイプだったとしたら、回避もまともに出来ずに泥を被り、そのまま侵蝕されるというオチ。

やはりあちらは泥の効果を相当強めに見ているようである。それは当然のことだ。ただ敵を処理するだけでは終わらず、仲間を増やしつつ、敵のメンタルを破壊することが出来る。一石二鳥では止まらない、最大の力である。頼るのも無理はない。

「なので、岩場に対しての砲撃はやめましょう。海風もそうして」

「了解です。足場の泥を剥ごうと思いましたが、姉さんがそう言うのなら危険ですね。薬剤をぶちまけることが出来れば話は変わるかもしれませんが、私には出来ません。慎重に動くしか」

「あ、それなら出来るよ。お姉さまと同じ三式弾持たされてるからね！」

ここで比叡が主砲を真上に向け、思い切り砲撃。普通の砲撃ではなく、三式弾による対空砲火である。
金剛と同じ三式弾であれば、そこから放たれるのは泥を消滅させる薬剤入り。侵蝕された者に触れれば治療され、泥に直に触れればその場で中和されて消滅する。あちらが泥の雨を降らせるのなら、こちらは薬剤の雨を降らせてやろうとした明石手製の必殺弾。
今まで出し渋っていたのは、その弾数がそこまで多くないからだ。基本は金剛が持っていき、比叡には3発程しか渡されていない。近接戦闘をメインとするのなら、砲撃を放つタイミングも少ないとして、薬剤三式弾は金剛に重きを置かれている。その1発目をここで放った。
「え、なになに!?」
真上に何かを放たれたため、瑞鳳が警戒。だがそこで視線が上に向いたため、叢雲がここぞとばかりに突撃する。
「目ぇ逸らしてんじゃないわよ!」
「いやいや、あんなことされたら流石に見ちゃうでしょ。でも、それはそっちもかもしれないね」
高速で距離を詰める叢雲の手前、岩礁の隙間から、突如蛸のような異形が飛び出してきた。これが春雨の言っていた深海忌雷。瑞鳳が小さく合図を送っていたようで、叢雲が通過しようとした瞬間を狙って、脚に絡みつこうとしてきた。
だが、叢雲にはそんなものお見通しである。自らの意思で動こうとした瞬間、叢雲の感知の範囲にその反応が現れていたのだ。ジッとしている間は物として扱われて感知の範囲内に入らなかったようだが、合図を受けたことで生物判定となったようだ。
「姑息なのよアンタ達は!」
絡みつく前に槍でその口から串刺しにし、爆発する前に振り回して逆に瑞鳳に投げ飛ばす。そんな衝撃を受けたことで忌雷は爆発。春雨の予想通り、その大きさからは想像が出来ない量の泥がその場にばら撒かれた。
叢雲が素早く対処したことで、その飛沫すらも叢雲に付着すること

は無かったが、念のため肌を全て覆うように顔にもマスクを展開していた。これで叢雲は自身の耐性をバラすことなく泥を回避成功。実際に付着していても叢雲を侵蝕することは出来ないのだが、そこはギリギリまで知られないようにする。
　あれを耐性無し対策無しで被っていたら、即座に侵蝕を受けていただろう。あの量からして、瑞鳳達が身につけている泥のコスチュームを生成することにもなっていたかもしれない。
「うわっぷ!?」
　逆にその爆発による泥をモロに被ったのは瑞鳳である。既に侵蝕されている者であるからこれ以上の効果は無いのだが、目潰しになってしまったのは間違いなかった。
　ならばここが隙だと、叢雲はさらに接近。槍の間合いへと入る。ここで即座に矢を番えたとしても、叢雲のスピードには間に合わない。
　ここに瑞鳳しかいなければ。
「っ!?」
　叢雲の感知内にはその存在は入っていた。だが、それがイロハ級か艦娘なのかの判断は出来ない。そのため、今眼前に迫る矢が何処から放たれたのかがわからなかった。
　ギリギリのところで避けることは出来ているが、泥除けのマスクを掠める。直前までその存在を知られることなく、しかし精度がかなり高い一撃を放ってきた。
「危ないわね、瑞鳳。私が来てなかったらやられてたんじゃないの？」
「ごめんごめん。ほら、偵察のまま交戦ってよくあることじゃない。来てくれるって信じてたー」
「都合のいいことを……。でも、ここからは私も参加するから」
　次に現れたのは、瑞鳳と同じく空母なのだろうが、見た目としては軽空母ではなく正規空母。
「まだ龍驤では無いですね。貴女は？」
　尋ねながらも春雨も叢雲のように突撃。狂犬スタイルとなり、獣の口のようなマスクまで展開して。
　だが、鉤爪を振りかざす前にその空母が展開したのは錫杖。春雨に

突きつけるようにして、その突撃を直前でやめさせる。
「名乗らなくちゃいけないわけ？　まぁでも最終的にはバレるかもしれないか。じゃあ名乗っておく。私は葛城。正規空母の葛城よ」
その突き付けた錫杖の先端から、黒く染まった人形の紙が生み出されたかと思いきや、そのまま艦載機へと変化して春雨に襲い掛かる。
「姉さん！」
それを海風が許すわけもなく、艦載機を砲撃で撃ち墜とした。瞬間的にその判断が出来たことに葛城は驚いていたが、まだまだ余裕があるような表情で一歩下がって弓を展開し、瑞鳳から離すように矢を放つ。
「貴女はいろいろとやれる空母ですか」
その矢は当たり前のように鉤爪で握り潰す。矢を放ってくることは辿り着く力によって既に把握しており、導かれるように握りしめただけ。
至近距離の射撃をそんなカタチで止められることを想定していなかったため、葛城も出てきたばかりなのに驚きを隠せない。
「厄介ですね。面倒ですね。腹が立ちますね。それに、まだここに龍驤が出てこないことが一番気に入りませんね」
「あっはは、本当に今の春雨は気が合うわ。龍驤がまだ余裕なツラをしていると思うと、クソ気に入らないわよ」
「だから、貴女達は早急に終わってもらいます。いいですよね、前座」
あえて下に見るような発言。龍驤の泥に侵蝕されている者ならば、下に見られることに苛立ちを覚えるだろうという精神的な攻撃。

次から次へと出てくる侵蝕者だが、春雨には臆するという選択肢は無い。より沸き立つ怒りで心を熱くしながら、この奥にいる龍驤を始末するために前へと進む。
瑞鳳も葛城も、既に前座扱いだった。

解放の刃

前衛には瑞鳳と葛城、後衛には黒潮と不知火と、タッグを組んだ敵部隊が現れている中、その戦いを邪魔するイロハ級達は他の者達が対処していた。空母隊が何とか遠方から飛んでくる敵艦載機を処理しているため、悠々とは言えないものの危険度はかなり減った状態での戦いとなっている。

特に、前衛から江風と潮がそちらに移ったことで、より邪魔立ては無くなった。目の前の敵に専念出来る状況であるため、もう後ろすら振り向かずに挑むことが出来る。

「貴女達は早急に終わってもらいます。いいですよね、前座」

鉤爪を突き出すように向けて、挑発するような発言。以前の春雨ならば絶対に言わないような、本当に見下した言葉。

まだ侵蝕されていた頃の白露に対して、心を揺さぶるために本心でもない挑発をしたことがあったが、その時は村雨に倣った搦め手を実行したに過ぎない。そのときは相当無理していた上に、相手が白露だったことですぐにそれが搦め手だとバレてしまった。

だが今は違う。苛立ちから自然にこの言葉が出てきた。ヒト様をやたらと見下した態度で、自分達が圧倒的有利な状況を作り上げてから、さんざん見下してくるような相手であるため、お返しと言わんばかりに毒を吐く。

瑞鳳も葛城も、春雨が見てきた侵蝕された者達よりは比較的謙虚ではあるのだが、龍驤の部下というだけで春雨にとってはもう悪態の対象。

「前座、今前座って言った？」

その言葉に突っかかるのは、やってきたばかりの葛城。瑞鳳よりもツンツンしており、どちらかといえば龍驤の泥の影響を色濃く受けているのか、馬鹿にされることが心底気に入らないようだった。

「まあまあ葛城、抑えて抑えて」

「馬鹿にされて黙っていられるかって話よ」

「それでもニッコリ笑って受け流すのが格上ってものだよ」

憤る葛城に対し、瑞鳳は逆に落ち着いていた。内心では前座と吐き捨てられたことは気に入らなかったようだが、そこは大人の女性であることを示すように表情には出さない。
見た目は瑞鳳の方が小さいが、中身は葛城の方が幼かったりする。こう並ぶと、瑞鳳が葛城を嗜めることも多いようである。
「それに、そんなこと言う子の鼻っ柱を圧し折るのって、とっても楽しそうじゃない？」
「……確かに。調子に乗ってるヤツが負けて這いつくばってるところを見るのは楽しいかも」
「でしょ？　だから、私達のことを前座なんて言っちゃう子は、叩き潰しちゃおうね」
ここで息が合ったように矢を放つ。狙いは2人とも春雨。口が悪い方を先に潰してやろうという魂胆が見え見えであった。
そして、春雨にはその2人をどうにかする光の道が既に見えている。だが、すぐに救ってやろうという気持ちはカケラも無かった。ここで正気に戻したところで、即戦力になるわけでもなし。
それに、この2人を使えば龍驤を誘き寄せることが出来るのではという考えもあった。あちらから来なくとも、2人を痛めつけて居場所まで案内させる、もしくは呼び出す。
「私達を叩き潰す、ですか。いいでしょう、やってみてください。ただし、何があっても文句と言い訳は聞きません」
放たれた矢は、軽く身体を傾けるだけで簡単に回避。そしてその瞬間、地を蹴って接近を開始。隣にいた叢雲も、その後ろから援護していた海風も、春雨を追従するように動き出した。
岩礁帯に散らばる泥は、比叡が上空に向けて放った薬剤三式弾のおかげである程度は消滅している。ただし、深海忌雷の方は海中に逃げるなどしてまだまだ存在しているため、それだけは気をつけなくてはならない。
そして比叡も、一度納めた刀剣を再度握りしめて、突撃姿勢。その一撃はあちらを殺してしまいかねないのだが、当然、瑞鳳も葛城も救うつもりで動いている。斬るときは峰打ち。これを徹底したいと

思っていた。
「地の利はこっちにあるんだから、粋がっていられるのも今のうちよ」
前に出るのは葛城。弓と錫杖の使い分けをしているようだが、後者は近接戦闘にも対応しているらしく、槍とまではいかないようだが、柄物を振るように扱う。
それならばと、叢雲が春雨より前に出た。同じ長柄物を使う者同士として、勝負を仕掛ける。そんな大それたものではない、何でもありの殺し合いだが。
「叢雲！　私がそっち手伝うよ！」
「好きにして。こんな前座に構っている余裕なんてないもの」
比叡はここで叢雲の援護に入る。春雨には既に海風がいるのだから、そこにさらに偏る必要もない。それに、武器持ちには武器持ちをぶつけるのが妥当だろうという判断。
「春雨、そっちは任せたわよ」
「うん、大丈夫。何も問題は無いから」
「春雨姉さんには私もいるので問題ありません。そもそも姉さん1人でもこんな輩に負けるわけがありませんから」
海風すらも、眼前の敵を下に見るような発言。完全に意趣返しである。
だが、瑞鳳はそれでもまだ余裕ありげな表情。どうもまだ何かあるようである。
数的優位は春雨側にあり、力もドロップ艦を無理矢理ブーストしている瑞鳳達に比べれば戦闘経験が段違いに多いために、戦術面でも技術面でも春雨達の方が上。おそらくこの中で最も経験が少ないであろう叢雲ですら、この2人では遠く及ばない。
「そう言ってられるのも今のうちよ。そもそも数の差なんて、こっちは簡単に埋められるんだから」
そう言いながら葛城が錫杖を振るった瞬間、岩場の陰から深海忌雷が蠢き出す。あくまでもこの戦場はあちらのモノ。地の利を活かした有利と、深海忌雷による数の暴力、そして泥の侵蝕という不可避の攻撃を活かした、まともに戦うつもりが最初からないような戦術を扱

う。
龍驤もドロップ艦をブーストさせただけの部下達の力では春雨達を確実に止められるとは思っていないのかもしれない。それ故に、襲撃を受けることを想定して念入りに準備していた可能性はあった。
「バカの一つ覚えね！　でもさっきは私に効かなかったこと、忘れたのかしら！」
足下で蠢く忌雷を再び串刺しにしつつ、槍を振り回して爆散を葛城に叩き込む。自分には付着しないようにし、さらには瑞鳳の時と同じように目潰しまで兼ねて。
目潰しはこれといって効果はないかも知れないが、ほんの一瞬でも動きを止められれば、叢雲のスピードならば一気に間合いを詰めることが出来る。葛城も槍の間合いと同じではあるのだが、その動きに躊躇いが出たら終わり。
しかし、葛城もそこは理解している上で、あえてその泥を浴びた。顔ではなく、一歩下がって身体で。
「二度も三度も同じことを受けるわけないでしょう!?　アンタこそバカなんじゃないの!?」
突撃からの刺突を繰り出す叢雲の殺意のこもった一撃を錫杖で打ち払いつつ、至近距離で弓を展開。ほぼ回避不能なほどの距離とタイミングで矢を放つ。引き絞ることもせず、ただ矢が射ち出されたため、威力は殆ど無いようなモノだったが、刺されればそのまま侵蝕の泥矢である。
「ちょええい！」
だがそれを許さないのが比叡。叢雲を犠牲にすれば葛城を斬れたかもしれないが、そういうことをしないのが鎮守府の艦娘だ。叢雲を守るためにその距離で刀剣を振り上げ、泥の矢をその場で叩き折る。
その瞬間、矢が本来の形状、泥へと変化し、刀剣の勢いでその場で飛び散ってしまった。
「数の差は覆せるって言ったでしょ。アンタはそうやって身体中を覆ってるみたいだけど、そっちの戦艦は素肌晒してるようなバカなんだもの。侵蝕してくれって言ってるようなモノじゃない」

だが葛城は比叡の実力を正しく理解していない。高速戦艦という艦種は伊達ではなく、この泥が飛び散った瞬間からでもそれが付着しないように動くことが出来る。
自分の攻撃の勢いを殺すことなく、足場の悪い岩礁の上でも回避に専念した結果、十全の力では無くとも即座にその場からいなくなっていた。泥は勿論付着することはない。付着したところでバリアに守られているのだが、まだその時ではない。
バリアは緊急時、そして最も効果的なタイミングでバレるべき。回避出来るのなら、自力で回避する方がいい。バリアを過信して突っ込むのは違う。
「アンタ如きの策なんて当たらないから素肌晒せるんじゃないかしらね。ドロップ艦に毛が生えたような連中に、私達が負けるわけ無いでしょうが！」
「誰が毛が生えた程度ですって!?」
そこで叢雲が今度は槍を薙ぎ払うが、錫杖を両手で握ることでそれを強引にガード。叢雲もそれなりに腕力はある方だが、泥ブーストのせいでそれを食い止められるくらいには強化されている。おそらくは泥コスチュームのロンググローブの効果。
鍔迫り合いのようになりかけるが、葛城もそこまで愚かでは無い。比叡が泥を回避出来ていることがわかっているのだから、ここで動きを止められるわけにはいかない。
「こちとら、修羅場何度も潜ってんのよ！　アンタみたいな貰った力で粋がってるような連中に、負けるかっつーの！　もっと経験積んでから出直してこい！」
力強く薙ぎ払ったかと思いきや、叢雲の槍の先端に主砲が出現。以前にもやった、コロラドの杖と同じ仕様の砲撃。反動は凄まじいが、1発、さらには撃った瞬間に槍そのものを消すという荒技を使えば、その反動は無いようなもの。
そして、この至近距離ならば簡単には避けられない。ギリギリ回避出来たとしても、腕は持っていかれる。
「この、言わせておけばぁ！」

葛城もブーストにより瞬発力は大幅に上昇しているため、何処を犠牲にすればいいのかを瞬時に判断。利き手ではない腕ならば、撃たれてもまだどうにかなると考え、むしろそちらの腕を盾に錫杖を叢雲に突き付ける。
死なば諸共ではないが、お互いにダメージを受ければその後の展開が有利に働くはずだと踏んで。
また、同時に深海忌雷が複数体、一斉に叢雲に飛び掛かった。爆発した時に泥を撒き散らすが、その時に小さいながらも衝撃が発生する。水風船ではないのだから、ゼロ距離で爆発されれば、如何に叢雲であろうともただでは済まない。
「邪魔くさいわね！　苛立つわ、腹が立つわ、気に入らないわ！」
怒りが溢れたことにより、叢雲もブースト。砲撃の威力の上昇と共に、槍の柄が巨大化。真後ろから飛びかかろうとする忌雷を吹き飛ばしつつも、ほぼ戦艦と同じ程の威力の砲撃が至近距離で放たれた。
叢雲の最後の理性でその砲撃は模擬弾になっているが、衝撃は相当なモノであり、消し炭になることはないにしても、折れる寸前までは持って行った。
「つの、お返し！」
葛城もただでは転ばず、錫杖の先端に何枚もの人形の紙が現れ、一斉に艦載機へと変化。叢雲を始末するために爆撃や射撃、さらには特攻まで仕掛けてきた。
流石の叢雲も、艦載機そのものの直撃は簡単には耐えられない。特に爆撃と同時の特攻は、致命傷になりかねない。嫌でも回避せざるを得なくなるだろう。
「叢雲っ、飛び退いてぇ！」
ここで比叡の咆哮。叢雲はそれに対して咄嗟にバックステップ。後ろから忍び寄る忌雷の中に突っ込むことになるが、艦載機の威力よりは遥かに小さいため、そちらを選択。
「つく……この程度のダメージなら問題ないわよ！　行けぇ！」
「勿論！」
忌雷の爆発に巻き込まれたが、そこまで大きなダメージでは無かっ

たために叢雲が叫ぶ。それと同時に比叡が刀剣をやめ、戦艦の本気の砲撃を葛城に向けて撃ち放った。当然それは模擬弾だが、薬剤を含めた治療弾である。掠めればそれだけで葛城は解放されることになるだろう。

「やられてっ、たまるかぁ！」

そうとは知らずとも、直撃も掠めるのもまずいと判断した葛城は、さらに錫杖を振るって人形の紙を展開。深海の艦載機へと変化させ、強引に盾に仕立て上げた。

これが殺意のこもった砲弾ならば破壊されていたかもしれないが、模擬弾であるために完全にガード出来る。衝撃はそれ相応なモノではあるが、葛城は比叡の砲撃に対しては無傷。

「っはは、その程度で私をどうにかしようと思っていたわけ!? 戦艦も大したことは無いわ、ね！」

そして、その隙間を縫って黒い人形の紙が比叡に向けて猛スピードで飛び、その額に貼り付く。

泥製で出来ている紙であるため、触れた時点で侵蝕開始。そのまま1人を手駒に変えてやろうという策。

だったのだが。

「効かなぁい！」

その紙は、比叡に触れる直前で消滅した。バリアがしっかり効いており、泥製の物質は抵抗することも出来ずにその性質を逆転させられ、自分の性質により消え去る。

「えっ、な、なんで!?」

「からのぉ！」

岩場の足場も慣れてきたか、比叡はそこで葛城に飛び込む。その時には既に刀剣を握り締めていた。

侵蝕が効かなかったことに驚き、ほんの一瞬動きが止まったのが運の尽き。比叡のスピードに追いつけなくなり、気付いた時にはもう眼前。

「どぉりゃあああっ！」

そして、渾身の一撃。峰打ちではあるが、刀剣が葛城を袈裟斬りに

する。血すら出ることのない打撃のようなモノだが、この比叡の刀剣も今回は特別製。一度納刀し、再び抜刀した時に少しの間だけ表面に薬剤が塗布される仕組みになっていた。つまり、葛城には薬を染み込むこととなる。

「ったく、私を囮に使うようなマネしてくれちゃって」

「ごめんね。あまりに都合が良かったから、使わせてもらっちゃった」

薬が効き始めて悶絶を始める葛城を尻目に、叢雲と比叡が拳を合わせた。怒りは溢れ続けているものの、まず目の前の敵を1人解放出来たことに小さく胸を撫で下ろした。

だが、まだ戦いは終わっていない。ここは瞬殺と言ってもいいくらいだが、瑞鳳は残っているし、肝心の龍驤は未だに現れていないのだから。

恐怖を与える者

叢雲と比叡が組んで葛城と戦う横では、春雨と海風が瑞鳳に挑んでいた。

葛城のように近接戦闘を仕掛けてこない分、徹底して間合いを取り、弓による射撃で2人を牽制し続け、岩礁帯を動き回る。小柄な体型であることを体現するかのように素早く、それだけ速く動き回っても弓の精度が落ちないというのがなかなか厄介。

「すばしっこい……」

当然、これには春雨の苛立ちは増す一方。声を荒らげてそれを表に出すことは無いのだが、静かにその怒りは燃え続けた。

岩礁帯という慣れない足場での戦闘はストレスが溜まるもの。瑞鳳からの攻撃が当たることは無いのだが、ただただ面倒であるというのが春雨の素直な感想である。

「足場はまだ撃たない方がいいですか」

「うん、忌雷があるから、面倒だけどやめた方がいいと思う」

一部は叢雲達の戦場に向かったようだが、まだまだ忌雷は潜んでいる。変に刺激したらその場で爆発し、それが誘爆して戦場が大惨事になる可能性がある。比叡が葛城側に行ったため、そこまで意識しなくてもいいかもしれないが、泥がばら撒かれることが問題。

春雨は元から、海風もスーツをしっかり着込んでいれば、忌雷の爆発によってばら撒かれる泥は怖くもなんとも無いのだが、いちいち足場が泥まみれになるのは素早く動くことに難が出そうなので、忌雷の爆破は控えておく。

「でも、あまり動いてもらいたくないから、さっさと終わらせようと思う。海風、ついてこれるよね？」

「勿論です。私は姉さんの隣に立つ者。お役に立てるように、どのような戦場でも必ずついていきましょう」

「頼もしいね。それじゃあ、ちょっとだけ脚を変えるから」

そう言うと、腿から下が脚甲に包まれた義脚が少しだけ変形。足裏がスパイク状となり、泥や薬に塗れていても滑ることが無いようにし

て、素早く動き回る瑞鳳への接近をしやすくする。
　海風もそれに倣って、スーツの下半身部分を変形。やはり足裏をスパイク状にして、春雨の隣を死守出来るように対応した。
「すぐに治療するつもりですか？」
「まさか。しっかり尋問させてもらうよ」
　言いながら岩場を強く蹴ると、今までより倍に近いほどスピードが上がった。
「わっ、急に速くなったね」
　瑞鳳も負けじと矢を放つが、先程からずっと春雨には当たる気配が無かった。真正面から射っても、上から降らせるように射っても、それを鉤爪で掴んでは折り、掴んでは折り。春雨の両手は泥まみれになりそうだったが、致命傷どころか掠りもしていなかった。侵蝕のチャンスはまるで無い。
　スピードが増したことで、より精密な状況判断が必要になるはずなのだが、春雨には『辿り着く力』がある。矢が来ようが、ここで突然瑞鳳が主砲や魚雷を使い出そうが、春雨は光り輝く道の通りに動くだけ。怒りが溢れる前よりも輝きは増しており、眼前の1人にターゲットを絞っているため、迷いなく突撃が可能。
　それならば海風を狙ってやろうと照準を変えるのだが、海風も一筋縄ではいかないタイプである。右腕が盾へと変化し、単純な矢ならば傷をつけることも出来ずに弾かれる。
　海風の盾は、そんじょそこらの攻撃では破壊出来ない。艤装を突き破る程の矢を放てるのなら、既にやっているはずだ。
「貴女ももしかして私達を格下と見ているクチですか？」
　そんな状況下で、春雨が瑞鳳に尋ねる。何度矢を放ってもその動きを止めることすら出来ず、むしろスピードも徐々に増している春雨に、瑞鳳は次の手を考えながらも答える。
「そんなことないよ。むしろそっちが私達のことを格下って見てない？」
「はい、見てますよ。侵蝕されているとはいえ、ヒト様の平和に土足で踏み込んでくるような輩は全員程度が知れてますから」

春雨の強気な悪態は、一度出たら止まらない。溢れた怒りを抑え込むため、口でストレスを発散する。それは戦場でも同じ。
「貴女達は直接来たわけではないですし巻き込まれたタイプなので申し訳ないですけど、龍驤の仲間というだけで格下も格下。人権なんて無いようなモノです。解放したら艦娘として受け入れてあげますから、頭(こうべ)を垂れてごめんなさいしてください」
矢を全て弾き飛ばし、ついには鉤爪が届くところまで接近。ただ弓矢を扱うだけなら、瑞鳳はここで八方塞がりになるだろう。
口ではああ言ったが、瑞鳳も侵蝕されているのだから、あの気質は植え付けられている。格下に見ていると宣言されたことに苛立ちを覚え、冷ややかな目で見てくる春雨に怒りが燃える。
しかし、春雨がそう言うのも無理はないくらいな実力を持っていることは、たった今、身を以て体験している。毎回が渾身の一矢なのに、全く歯が立たない。春雨のみでなく、海風にすらだ。
当たり前だが、負けたくないという気持ちは強い。駆逐艦如きにやられてたまるかという気持ちは、どんどん強くなっていく。
「謝る理由が無い相手に謝るほど、私は落ちぶれてないんだよね」
近接戦闘は仕掛けないものの、近付かれたら何も出来ないというわけでもない。葛城の錫杖ほどわかりやすい武器が無いだけ。
現にこの状況で繰り出したのは、弓矢も使わずの艦載機の発艦である。手を軽く振っただけで展開された深海の艦載機は、自らの意思を持つかのように瑞鳳の周囲を飛び回る、いわば浮遊要塞。深海棲艦特有の生体兵器のようなものである。
それ自身も砲台や艦載機を扱えるため、瑞鳳本人よりは数段劣るかも知れないが、瑞鳳の体力気力が続く限り無限に溢れ出る兵隊のようなものである。
「なるほど、1人でも複数人になれるということですか。こちらよりも数が多いから圧倒出来ると」
「簡単にはやられない自信作だよ」
「……浅はか」
展開したところから浮遊要塞が爆散した。眼前の春雨は何もして

いない。ならばと後ろからついてきていた海風の方を見ると、案の定、右腕に主砲を展開して正確に撃ち抜いていた。火力自体も並の駆逐艦を超えるものではあるが、それでも一撃で1つずつ破壊されているのには驚きを隠せなかった。

「貴女は知らないとは思いますが、人類はそれに浮遊要塞とコードネームを付けています。かなり前から陸上施設型の一部が使うモノで、私も艦娘だった時に相手をしたことがありますよ。その時から思っていたんですが、それ、ブーストがかかっていたとしても柔らかいんですよ」

手近な要塞を鉤爪で握りしめたかと思うと、瑞鳳の目の前で容易く握り潰した。砲台を完備しており、大きさとしては春雨の半分くらいであるにもかかわらず、まるでむしり取るように。

その瞬間に要塞そのものが泥へと変化し、水風船が破裂するかのように春雨の身体を濡らす。しかし、その怒りの焔が表に出てきているためか、付着した端から蒸発するように消滅した。

気が付けば、春雨の瞳には小さいながらも紅い焔が灯っていた。

「これ自体が泥で出来ているんですか。なるほど射撃も掠れば侵蝕の可能性があり、こう破壊しても泥に戻って侵蝕と。これ自体が特攻を仕掛けてくることで、瞬く間に勢力を伸ばす……という感じですか。相手が私達で無ければそれも通用したかも知れませんね」

近場にいる浮遊要塞を、手当たり次第に破壊していく。砲撃も出来るのに、わざわざ恐怖を与えるように力業で。破裂する度に泥をぶち撒けるが、やはり春雨に付着した瞬間に消滅。侵蝕は僅かにも出来なかった。

瑞鳳も負けじと次々と展開しながら春雨から離れようとしているのだが、展開しても春雨と海風の猛攻は止められない。一時的に攻撃の先をそちらに移せるため、ある程度の間合いを取ることは出来るのだが、それも簡単に処理されて、弓の間合いよりは近付かれていた。

「その要塞が侵蝕性のものならば、この世に存在してもらうわけにはいきません。むしろ、そんな穢らわしいもので春雨姉さんの覇道を阻もうだなんて笑止千万。それが貴女の戦い方だとしても、私には許せ

るものではありません。春雨姉さんに楯突いたことを後悔し、自らの行いを反省し、頭(こうべ)を垂れて謝罪をすれば、許してあげないこともないでしょう。貴女のチンケなプライドがそれを許さないとは思いますが、春雨姉さんという女神を穢そうとした報いは、それほどのことをしなければ許されることはありませんから」

春雨の攻撃に加え、海風も圧倒的な力で要塞を破壊していくため、瑞鳳の力だけでは展開が追いつかなくなっていく。

そもそも2対1、葛城を叢雲と比叡に持って行かれ、個人戦にされている時点で勝ち目は無かったのだ。コンビプレーをしていればまだ多少は歯向かえたかもしれないが、そうさせないように立ち回っているのも春雨達の戦術。練度の違いが大きく出ている。

そんな戦いの視界の端。瑞鳳には葛城が繰り出した泥製の紙が比叡に貼り付く瞬間が見えた。自分は圧倒されているが、ここで比叡を手駒に出来れば、今の戦いを覆せるとほくそ笑む。

春雨達は仲間思いであることが弱点だと教えられていた。故に、悪意による侵蝕で手駒に変えてやれば、精神的なダメージになって一石二鳥では終わらないくらいの戦果となるだろう。

「っは、そっちの戦艦のヒト、貰うよ」

意気揚々と宣言する瑞鳳。普通ならこれで驚きを見せ、自分が攻撃の対象から外れ、戦況を一気に変えることが出来る。そう考えるのは普通だろう。

だが、春雨は燃え滾る瞳で冷ややかに見つめ、比叡の方に視線すら向けずに攻撃を続けていた。

調子付いたことで間合いを取るのが一瞬遅れたために、春雨との距離は一気に縮まる。

「えっ、ちょ、仲間のこと」

「心配ないですよ。貴女達の考えることは全てお見通しですから。こちらが対策を取っていないとなぜ思うんです。そこが浅はかだと言うんですよ」

鉤爪を一時的に消し、その手で瑞鳳の首を掴む。そして、身動きを取れないようにした後、葛城の行く末を見せつけるように頭をそちら

の方に向けた。
　春雨の言う通り、比叡は侵蝕などされず、それに動揺した葛城がその場で叩き斬られた。峰打ちではあるが、その一撃が葛城の侵蝕を吹き飛ばし、逆に手駒が減ったことを思い知らされた。
「わざわざこちらから襲撃に来ているんですよ。侵蝕性の泥を持っている相手に嫌な思いをさせられ続けているんですから、ちゃんとそうならないようにしているに決まっているでしょう。侵蝕されると愚かになるとは思っていましたけど、貴女は特に顕著ですね。いくらドロップ艦でもそれくらいは考えられるのではないですか？」
　少し力を込めるだけで、瑞鳳が苦しそうに悶えた。ここまで近付いているのなら春雨は瑞鳳を解放することも出来るのだが、簡単にそんなことはしない。情報を手に入れるための尋問（拷問）を行い、龍驤の居場所を聞き出す、もしくはここに呼び出す。
「痛い目を見たくないのなら、素直に私の質問に答えてください。貴女に選択肢などありませんけど」
「そ、それでも艦娘につく存在なの!?」
　こともあろうにそんなことを口走った瑞鳳。それに対して怒りはさらに燃え上がる。
「誰のせいで私がこうなったのかを知らないようなので、貴女にはしっかりと教えておきましょうか。私は、貴女の主人である龍驤に、仲間達を侵蝕されて、その怒りでこうなったんです。誰のせいですか。貴女達のせいですよね。まさか、弱かった私達のせいだとでも言うつもりですか。言いませんよね。ならば、こうなるのは貴女達の報いなんですよ。わかりますよね？　いくら愚かな貴女でも、こんな簡単なことくらい理解出来ますよね？」
　首を掴む手の力が強くなる。だが、殺すつもりは一切無い。ただただ苦しめるためだけにこうしている。
　瑞鳳は言葉も無かった。出せないというのもあるが、春雨が壊れているのは嫌でもわかるし、自分のせいとは1つも思わないにしろ、言い返すはどの度胸は無かった。
「貴女達だってやられたらやり返すでしょう。だから私もやり返して

いるだけ。そこに文句を言われる筋合いなんて無いんですよ。平和に暮らしたいだけの私達に対して、悪意を持って攻めようとしてくる輩には、何かを言う資格なんて無いので」

ここで瑞鳳の目を見つめる。その瞳の奥の怒りを目の当たりにして、瑞鳳は心の底から恐怖を感じた。

仲間同士

前衛から離れた後衛の戦い。鹿島と古鷹のペアの前に現れたのは、黒潮と不知火。前衛の瑞鳳と葛城のように、ペアで戦うつもりのようである。

前衛側は結果的に1人ずつにされて個別撃破されているが、黒潮と不知火は離れる気が無いようで、しっかりコンビプレーに徹する。

これは2人が駆逐艦だからというのもあるだろう。空母よりは非力であることを自覚しているため、正しく連携をするように徹底する。漣達と同じだ。

「ナイフによる近接戦闘ですか。深海棲艦の硬い外装を剥がすには向いていませんが、私達のような生身には効率がいいかもしれませんね」

「それはどうも」

不知火が肉薄し、近接戦闘により始末するという手段を取るようで、黒潮がそれを援護する。泥によるブーストで、それはかなり精鋭化されており、まるで熟練者のような完璧な連携を見せてきた。

相手取る鹿島は、鎮守府では連携を教える側。それに、既に戦術構築は脳内で完了している。2人組、近接戦闘、援護、その全てを当てはめて、最善の動きが出来る。

そして、その計算を大きく上回っているのが古鷹の力だ。深海棲艦化による強化だけならまだしも、戦艦の力まで使えるようになり、あらゆる攻撃方法が戦術に取り入れられるため、やりたいと思ったことが全て可能になる。

「古鷹さん、隣へ」

「わかりました」

まずは二人並んでの迎撃に。こうすることで、黒潮の援護があろうとも、不知火と2対1の様相を作り上げることが出来る。

近接戦闘の手練れというわけでもなく、ブーストによって熟練者と同じ動きをしているだけのドロップ艦という認識であるため、崩す手段はいくらでも考えられた。流石に1人で2人を相手取る力は鹿島

には無いが、古鷹ならばそれも余裕にある。何せ、持っている力が戦艦レ級なのだから。
「使ってくるのがナイフであれば」
言いながら前に出た古鷹は、その右腕の艤装を巧みに操り、不知火のナイフ捌きを軽くいなすように払っていく。腕の全てが包まれているそれならば、ナイフで傷付けることは出来ない。
しかし、不知火の動きを止めることまでは出来ず、一進一退の攻防となる。せめてナイフを掴み上げることが出来たなら話は変わるのだろうが、そこはまずいと感じているのだろう、不知火はそれだけはされないように立ち回っていた。
ちなみに、古鷹の右腕を包み込む艤装は、手だけはちゃんと外に出ている。そのままならばナイフを掴むことなんて出来ないのだが、今は防刃防針のスーツを着込んでいるため、手もしっかりコーティング。掴もうと思えばガッチリと掴むことが出来る。
「ぬい、そのまま抑え込んどいてや」
古鷹が不知火にかかりっきりになることを見越し、不知火に当たらない位置から砲撃で支援することで、古鷹を追い込もうとしていた。
直撃すれば当然良し。そうでなくても掠れば相変わらず侵蝕の可能性がある。防刃のスーツであっても、砲撃の直撃、しかもしっかり殺意を込めている実弾ならば、貫くことも出来るし、掠れば傷だってつくだろう。黒潮はそこまで考えていなそうだが。
「何をしようと言うんです？」
しかし、それを止めるためにここにいるのが鹿島だ。わざわざ古鷹を隣に呼んでいるのだから、お互いを守るために動くのが当然のこと。それが連携である。黒潮と不知火は攻めの連携、対する鹿島の古鷹は守りの連携と言えるか。
黒潮の砲撃に合わせて鹿島が繰り出したのは、バルジである。いわゆる盾。自分を守るため、仲間を守るため、それを盾として展開し、黒潮の砲撃を綺麗に逸らした。
「直撃さえ受けなければ、バルジ1つで砲撃をいなすことが出来ます。勢いを殺すわけではないので、衝撃は最小限。まぁ、その威力がいな

せないくらいのものもよくありますがね」
壁に減り込む程の強烈なスピードと威力で投げられた爆雷や、ノックしただけで壁に吹き飛ばす程の衝撃に関してはいなせないと、鹿島は心の中で呟いた。
侵蝕されていた時の経験すら、戦術構築に活かしていこうとしている。最悪な経験から得られる情報は、鹿島の戦術を一段階引き上げている。
「侵蝕され、威力が上がった砲撃であろうとも、その程度ならこれでどうにか出来ますよ」
片手に鞭、片手にバルジの盾と、見るものが見れば何か別の戦いを挑んでいるようにしか見えない姿ではあるが、今の黒潮にこの鹿島を砲撃による支援によって正面から打ち負かす手段があるかと言われると、若干難しいかもというのが正直な感想だった。
「背中を見せるのは余裕の表れですか？」
そこにすかさず不知火が襲い掛かる。古鷹と一進一退の攻防をしながらも、持ち前の体術を使って振り払い、完全に隙だらけの鹿島に向けてニードルガンを放つ。刺さればそのまま侵蝕の必殺武器。
「前までの私だったら、こんなことは無理でしたね」
しかし、振り払われても古鷹がそれを許すはずがない。尻尾の艤装がすかさずその針を防ぎ、不知火に対しては無防備である鹿島を守る。
これがあるから鹿島は堂々と背中を向けることが出来る。古鷹も黒潮からの攻撃に対して反応する必要がない。背中合わせで立っているわけではないのだが、お互いを完全に信頼した状態でのタッグである。元大塚鎮守府所属は伊達では無かった。
「余所見をしている余裕なんて与えませんよ」
そこから、古鷹は尻尾の先端の口をガバッと開く。内部にはわかりやすく砲門が鎮座していた。不知火を今から撃つと宣言しているようなもの。
「させるわけがないでしょう。そんな大振りな攻撃を喰らう程、不知火は愚かではありません」

「勿論。理解した上で、今から撃ちます」
撃つぞと言われて回避しないわけがない。これを潜る、ないし飛び越えることをすれば、眼前には鹿島の背中。そこに一撃入れてやれば、敵は必ず1人は減る。
さらには、鹿島は古鷹と違って防刃防針のスーツを着ているわけではないのだ。不知火には無防備にしか見えていない。だからこそ、ここで古鷹の一撃を乗り越えて攻撃し、鹿島を始末、もしくは手駒にする。それがベストだと考えた。
無論、古鷹だってそう考える。自分があちら側だった時ならば、今の不知火と同様の行動を取るだろうと。
侵蝕されていた苦い経験を戦いに活かし、敵側の行動を読む。深海棲艦化させられ、長く侵略者として活動させられた経験を、汚点としつつも利用出来るモノとしても考えた。
「避けられるものなら、避けてみなさい」
ここで古鷹は、全力で、一切の制御をせずに砲撃を放った。重巡洋艦のままならまだしも、それは深海棲艦化により強化された戦艦の主砲。撃つだけでも強烈な衝撃波が発生し、潜ろうと飛び越えようとそれに身体が晒されることになる。
実戦経験がある程度あれば、この主砲を見た時点で下がるという選択が出来ていただろうが、やはり不知火も泥によるブーストをされただけのドロップ艦。その考えに至らない。
爆音と共に発生した衝撃波は、見事に不知火を貫く。撃った古鷹本人ですらビリッと身体に痺れを感じるほどの強烈な圧を、泥コスチュームによる補強が入っているとはいえ、小柄な駆逐艦がまともに喰らってただで済むわけがない。
「カフッ……!?」
「見えない攻撃は回避出来ないでしょう。まともに経験を積ませてもらえなかったのが運の尽きです。かつての私のように、侵略をさせられていたら……また違っていたでしょうね」
少し悲しそうな表情を浮かべる古鷹だが、容赦など無かった。
しかし、不知火もブーストがかかっているために、これだけでは気

を失うこともない。ギリギリで踏み止まって、さらに前に出る。その目は古鷹ではなく鹿島を見ていた。
黒潮と相対する鹿島は、不知火の方には目も向けていない。むしろ背中を向けている。不知火が繰り出そうとする行動は、まるで見ていない。
それ故に、自身を犠牲にしてでも鹿島を侵蝕さえしてしまえば、精神的な揺さぶりにもなり、戦力増強にもなる。この一瞬でそこまで考えた。
「鹿島さ――」
古鷹が声をあげようとした時には、鹿島の行動は終わっていた。古鷹の方は未だに向いていない。だが、その手に持っているのは主砲ではなく鞭。わざわざ構える必要もなく、手首のスナップだけで何処にでも攻撃が出来るモノ。
故に、振り向くこともなく鞭を後ろに振り、その先端が不知火の顎を捉えていた。ニードルガンを鹿島に向けるよりも前に、意識を刈り取られ、その場に倒れ伏す。
「黒潮さん、今まで及第点が取れていたのに、ここでダメな部分が出ましたね。いくら視線の先で自分の仲間がいい動きをしたからといって、それを表情に出すのはいただけません。貴女は私の装備を知っているわけではないでしょう。私が電探を装備し、後ろにも目が行くようになっていたらどうなると思いますか。こうなるんです」
黒潮の砲撃をバルジでいなしながらも、その視線や次の行動をしっかりと確認し、予測まで立てながら戦えるのが今の鹿島。やはりこちらも、自分が侵蝕されていた経験を活かし、慢心などせず、確実に敵を征する行動を計算する手段を鍛え上げている。
五月雨と吹雪にやられた経験は活きている。鹿島の弱点、想定外に弱いところを払拭し、正しく成長することが出来た。未だにあの２人をどうにかする方法は思い浮かんでいないようだが。
「授業を続けましょうか。実戦経験が足りない貴女には、教えることが沢山ありますからね。身を以て知ることもいい勉強になります。もう結構堪えているようですけど、まだまだありますよ。ついてこれ

ますか？」
「言うやん練巡のくせに。でも、アンタの動きも覚えてきたで」
　こう言う鹿島も今のところは防戦一方、黒潮が近付いてこないためにバルジでのいなしをメインにしており、逆に近付こうとしても砲撃や雷撃が激しく、なかなか近付けない。
　むしろ、古鷹と共に戦うためにあまり動かないでいた。流れ弾が古鷹の方に行っては困るというのもある。
「そうですか。なら筋がいいですね。そろそろ私のバルジを撃ち抜けますか？　そうすれば次の段階に」
「行ってもらおうやないか。そのうち足すくわれるで」
「かもしれませんね。ですが、まだまだ経験不足の貴女にすくわれる足は持ち合わせていないんですよ。だって」
　ニコッと笑う鹿島。イラッとする黒潮。そして、その時には黒潮は背後に近付く存在、古鷹がさりげなく発艦していた艦載機の存在に気付いていなかった。
「周りが見えていないんですから」
　その艦載機は爆撃も射撃もするわけでなく、黒潮の後頭部に特攻、そして直撃。ゴリッと嫌な音がしたかと思うと、黒潮は白目を剥いて倒れた。
　不知火に砲撃を放った時、古鷹は1機だけ艦載機も放っていた。猛スピードで真っ直ぐ進んだそれは、艦娘の艦載機では絶対に出来ないような挙動で反転し、真上に、そして真後ろにと移動していき、速度をそのままに黒潮の背後を取っていたのだ。
　殺すつもりなら何かを言うまでもなく射撃で心臓を撃ち抜いていただろうが、黒潮だって巻き込まれただけの被害者。鹿島とも古鷹とも同じ存在。ならば救ってやらなければならない。その結果が、この強引な特攻と意識を刈り取る一撃である。
「ありがとうございます古鷹さん。やってくれると信じていました」
「こちらこそ。衝撃波だけではダメだったので、助かりましたよ」
　お互いの勝利を讃えあう2人。長く離れていたとしても、2人は同じ鎮守府に所属していた仲間同士なのである。

だがまだ戦いが終わったわけではない。ひとまずは鹿島が薬剤の砲撃で２人を治療し、周囲にまだ群れるイロハ級を処理するために戦いを続ける。

悪意の雨

龍驤の姿を見る前に現れた前座、瑞鳳、葛城、黒潮、不知火の４人は、各々撃破され、瑞鳳以外は薬により治療されているところ。周囲にはまだイロハ級の群れがおり、仲間達がその対処に奔走している。

そんな中、ただ一人治療をされることなく捕獲された瑞鳳。その首には春雨の手がしっかりと食い込み、しかし殺そうとしているわけではなく、まるで真綿で締め付けているかのように苦しめる。

「質問に答えてください。今から私達は龍驤を始末しに行きます。ですが、ここまで来てまだ姿を見せようとしないようです。何処にいるんですか」

苦しそうにしているが、答えるつもりは無いような瑞鳳。泥の侵蝕はそのままであるため、当然ながら春雨には敵対の意思しかない。それは、かつての漣を見ているようだった。勿論それに苛立ちを覚えないわけがない。

その紅く燃える眼には、恐怖しか感じなかった。これでもまだ『望み通りの答えに辿り着く力』は発動していないのだが、見られている瑞鳳としては、逃げ出したい程の恐怖に苛まれることになる。

だから目を逸らした。その目を見ていられなかった。情報を吐くのも嫌だが、この眼に反発して睨み付けることも拒否。目を合わせることを生理的に受け付けなかった。

「素直に話せば、これ以上苦しめることは無いでしょう。痛みも与えません。貴女も侵蝕された者ですから、しっかりと治療して、他の皆さんと同じように鎮守府に保護してもらうことになります。でも、そうなると一番重要な記憶が失われてしまうんです。なので、貴女を侵蝕されたままで話を聞いているんですよ。ここまでは大丈夫ですか？」

瑞鳳は無言を貫く。そんな態度に、春雨はこれ見よがしに大きく溜息を吐いた。わかっていたこととはいえ、面倒なほどに瑞鳳は頑固である。

自分が同じ立場ならば、瑞鳳のように話さないだろうなと心の中で

呟く。自分よりも強大な敵に捕まり、首を締め上げられながら施設の場所を教えろとか言われても、決してヒントすら与えない。
自分と同じことをやっているのだから、瑞鳳の今の気持ちに多少は共感した。こうしても仕方ない。話さないのも理解出来る。
だが、話してもらわないと困る。
「つぎっ!?」
そのため、漣の時と同じように蹴りを入れる。爪先を鳩尾にねじ込むように。普通の服を着ていても相当苦しいのに、今の瑞鳳はドロップ艦の力を熟練者に追い付かせるための泥コスチューム、完全に薄着でスタイルが全て見えてしまうレオタード姿である。
ただでさえ春雨の脚は義脚、艤装と同じ強度を持つそれであり、しかも今は岩場で滑らないように変形させた、スパイク仕様である。漣の時よりもダメージが大きい。
「つほ、げほっ、い、いきなり何を」
「貴女達はこういうことをやるタイプのヒトですよね。自分達の思い通りにするために。逆の立場なら、貴女は笑いながら私に危害を加えていたと思いますよ。強情だ、意固地だ、さっさと話せと」
表情も目も一切笑っておらず、完全に見下した表情の春雨に、先程以上の恐怖を感じた。春雨は何かを話すまで、これをやり続ける。殺さない程度に抑え、しかし死にたくなるほどの痛みを定期的に与えてくる。尋問という名の拷問。
「貴女達は私達の住む施設の場所が知りたいはずですもんね。姫の器の場所を探してるんですから。それで、侵蝕を駆使して私達の仲間を味方に引き込み、その知識と技術を奪いつつ、邪魔者を排除すると。でもあえて侵蝕せずにこうやって捕獲して、面白半分で尋問をするんじゃないですか？　貴女達が手を汚さず、侵蝕した仲間達を使うとか」
話しながらも、春雨は漣達との戦いを思い出していた。当てつけのように周囲の仲間達を侵蝕していき、最後は海風に春雨を煽らせたあのやり方が、今の春雨を作り上げているようなものだ。怒りの原因、海風をあそこまで壊したことを、今でもずっと根に持っているからこ

そ、同じように煽り、拷問じみた尋問を繰り返す。
自分がやられたことをそっくりそのままお返ししてやるという思い。身体への痛みは無かったものの、心には壊れるほどの痛みが与えられているのだ。その分を身体で払ってもらうと言わんばかりに、この蹴りが生まれた。
「とにかく、貴女達が嬉々としてやりそうなことを、私もやっているだけです。そして、貴女達に咎められる筋合いは一切無い。貴女達は、私の質問に、答えるだけでいい。それを理解してください。いや、理解しなさい」
瑞鳳は口八丁で切り抜けてもいいかとも考えていたのだが、この春雨にはそういう搦め手は通用しない。嘘だって見破られるだろうし、真実味が無いことを話した瞬間にまたこの蹴りが飛んでくる。
真実を話す以外の選択肢を与えられていないのだ。自らの意思で主人を裏切れと。漣は痛みと恐怖で心が折れ、全てを話した。ならば瑞鳳はどうか。
「理解してもらえたと思うので、質問に答えなさい。龍驤は今、何処にいますか」
答えなければまた同じ痛みを与えるぞと、質問をしながらの脅し。殆ど恫喝である。
しかし、瑞鳳はやはり無言を貫く。ここまでされても何も話さない。痛みを与えられても、龍驤を売るという選択肢は無いようだった。
それはただ意固地なだけではない。忠誠心があるわけでもない。この期に及んで、まだ勝ち目があるとしての行動だ。
「何か隠していますね。今から何かしようとしていますか」
尋ねても無言。まるで、何かが来るのを待っているような仕草にも見えた。あと少し耐えればこの状況を覆せると信じているようにすら見える。
その様子を見たことで、春雨はそれが何かにいち早く気付いた。悪寒がこのタイミングで背筋を駆け抜けた。前のように腰砕けになるようなことは無いが、その分苛立ちが一気に湧き上がった。

直感がその理由を瞬時に分析した結果、春雨は空を見上げた。何も無い青空ではなく、空母隊が空襲をどうにか抑えているような状況。大鳳が飛ばしている高高度の艦載機が辛うじて見えるかどうかというくらい。

だが、春雨が見ているのは、そこからさらに上。

「全員マスク展開！　泥が来ます！」

春雨が叫んだことで、施設の者達は一斉に頭を覆い尽くすヘルメット状のマスクを展開。少し慌てたが、潮も侵蝕の恐怖を知っているために大急ぎで被る。

その瞬間、ポツリと腕に黒い液体が付着した。そこからさらにポツリポツリと、まるで雨が降るように黒い液体が降り注ぎ始める。とんでもないことに、この戦場のみの局所的な雨が降り始めた。その雨こそが、泥である。

空襲を抑えながらも、大鳳は自分の苦い経験を思い出していた。珍しく雨が降る深夜、施設に向けて高高度から泥を散布し、島を一気に侵蝕しようとしたあの時のことを。その戦いで救われているのだが、自分のやらかしたことは嫌でも忘れることは出来ない。

「超高高度からの散布……！　私の艦載機でも届かない！」

艦載機同士の攻防戦を気にすることもなく、海上に向けて悪意の雨を降らせるだけのために、高高度からさらに上の位置に陣取った艦載機がこのタイミングで動き出した。おそらくその高さから海上も見ていたのだろう。春雨達が前座と言われた４人を斃すのを見計らって、この行動に出たと考えられる。

別に気を抜いているわけではない。周囲にはイロハ級がまだいるのだから、侵蝕された艦娘がいなくなったとしても、緊張感は落ちてはいない。だが、海上の敵と、上空の対処可能な艦載機に意識を向けさせ、超高高度からは監視くらいしかしていないだろうと思わせておいての全方位侵蝕兵器の散布である。

「北上さん！」

ここで大井がそれに気付いた。ここにいる者達は全員、何かしらの対策をしている。艦娘は明石謹製のバリアを、施設の者達は侵蝕を防

ぐスーツを着込んでこの戦場に立っている。だが、北上だけは、漣達を戦場に立たせるために、バリアの装備を拒否している、唯一の無防備。こんな雨にやられたら、どうすることも出来ずに侵蝕されてしまう。

大井自身、バリアのお陰で悪意の雨粒が身体に触れる前に消滅していることは確認出来ている。他の者もそうだ。自分が濡れているような感覚もない。だが、それはこの装備があるからだ。

「あー、大丈夫大丈夫。こういうことしてくるだろうなって思って、事前に考えてるから」

そう言う北上は、この戦場に立っているにもかかわらず、仰々しい傘を差していた。柄の部分がやたら太く見えるのは、泥刈機を軸にした傘だからだ。

自分に降りかかる泥を確実に消し飛ばし、しかしそれが漏れてしまったとしても傘の部分で自分に付着するのを防ぐ。旧式の泥刈機を転用した、低コストでの泥雨対策である。

これを先んじて提案していたから、自分へのバリアを渡すという考えに至った。今の北上は片手が塞がっている状態になるのだが、雷撃主体で主砲すら装備していない北上には、片手が使えなくなったとしても戦いに支障が出ない。だからこそこの手段を選択したとも言える。

とはいえ、このまま悪意の雨が降り注ぎ続けるというのなら、北上は激しく動くことは出来ないだろう。

「近くに行きます！」

「お願ーい。足下に泥が溜まってきてるんだよね。これだとあんまり動けないから、道を作ってくれると嬉しい」

「任せてください！」

ここから少しの間は、大井が北上に付きっきりになるだろう。それでもイロハ級の対処は出来るため、そこまで問題ではない。

本当の問題は、ここで治療した3人と、未だ治療されていない瑞鳳である。せっかく治療されたのに、この雨に曝されたことで再度侵蝕。むしろ、その侵蝕の具合が普通と違った。

「っあ、あぉあああああっ！」
特に、侵蝕から解放されていない瑞鳳は、過剰な反応を見せた。侵蝕されている状態でさらに泥を浴びることくらいはあるかもしれないが、この反応は異常。
これはまずいと感じた春雨は、すぐに瑞鳳を解放しようと行動を起こそうとするのだが、それを封じるかのように岩場に潜んでいた深海忌雷が活性化し、瑞鳳を引き剥がすように行動を始めた。泥の雨を受けたことでこちらすら力が上がっており、瑞鳳を掴む手すらも解く。
「なっ」
そして、そのまま忌雷が瑞鳳に纏わりついていく。ここだけでなく、葛城にも同様に。いつの間にか岩場から移動していた忌雷が黒潮と不知火にまで取り憑こうとしていた。
これは流石に春雨にも見えていなかった。あまりにも想定外すぎて、直感にすら反応しない。
そうこうしている内に、眼前の瑞鳳が変貌を遂げていく。忌雷も泥そのもののようなモノなので、それに包まれてしまったら侵蝕は免れない。
むしろ、泥の過剰摂取みたいなもの。艦娘の身体を強烈に蝕んでいく。それこそ、艦娘をやめさせるほどに。
「っあああっ！」
大きく手を振るった瑞鳳の姿は、明らかに今までと違っていた。ブーストがかかっていた泥コスチュームだけでなく、忌雷が絡みつきより深海棲艦化したように見えた。
瑞鳳だけではない。葛城も、黒潮も、不知火も、同じように変貌を遂げた。艦娘だというのに、瞳には薄暗い炎が灯っていた。

一度解放した者達が、再度侵蝕される姿を見てしまった春雨は、こころの奥底にさらに怒りを激らせることになった。

炎に油

戦場に降り注ぐ悪意の雨により、治療され解放されたはずの３人とまだ治療されていない瑞鳳がさらに侵蝕されることとなってしまった。そこに岩場に潜んでいた深海忌雷まで取り憑き、今までとは違う変貌を遂げる。

「つは、はぁあぁっ、っぐぅっ」

取り憑いた深海忌雷は、胸元に鎮座すると同時に触手を背後に回すと、背中を貫くように食い込んだ。そしてそのまま埋め込まれるように溶け出し、４人と完全に一体化。その瞳には薄暗い炎が灯り、艦娘というよりは深海棲艦と言える程の姿となってしまう。

ほぼ心臓と同じくらいの位置に深海忌雷が陣取り、触手は背中に突き刺さっている。泥のコスチュームはそのままに、まるで泥を血管に直接注入しているかのように、肌に黒いラインが現れる程。あの深海忌雷が常に泥を送り込むようにしており、侵蝕している艦娘を過剰に侵蝕していた。

それはもう、異形とすら言える。生体兵器との融合になっていた。

「……私の直感をすり抜けてきた。ごめんなさい、これは私の落ち度です。知識のないところからの攻撃でも無いのに、そう来るとは思いもしなかった」

苛立ちを表に出す春雨。泥を雨として降らせるというのは、以前に施設でも受けている攻撃だ。だが、それは自然現象である雨と混じり合わせて実行することを前提としていると思い込んでしまっていた。ダイレクトに戦場全域に降らせるというところには思い至らなかった。

それが悔しく、そして怒りに繋がる。それに、一度治療出来た者達がまた侵蝕されたことが気に入らない。むしろ、それを綺麗に決めてきた龍驤の手口に苛立ちを隠せなかった。

「姉さんのせいじゃありません。そうでなければ、また私はこの泥に侵蝕されて、取り返しのつかないことになっていました。ギリギリかもしれませんが、直感的にそれに気付けたのは紛れもなく姉さんのお

かげです。だから、今はアレをどうにかすることに専念しましょう」
海風の支えが無ければ、また春雨は自分に対して怒りを募らせてしまっていたかもしれない。白露に説教されたことを思い出し、マスク越しではあるが自分の頬を叩く。痛みは無いが、衝撃だけは伝わり、頭を冴えさせた。
「ちょっと落ち着く。ごめん海風」
「大丈夫です。姉さんのサポートが私の至福の喜びですから。頼ってください。私は姉さんの存在そのものを頼りにしていますので。常に恩返しがしたいくらいです」
話しながらも、2人は改めて視線を瑞鳳に戻した。侵蝕とはもう言えない、同化とすら感じる程の変貌を遂げた瑞鳳は、薄暗く燃える瞳を春雨に向ける。
ゾクリと、先程までとは比べ物にならない力を感じた。ただ相対しているだけでは起きない、厄介極まりない戦いとなることが嫌でもわかった。
「行くよ、海風」
「はい、姉さん」
グッと脚に力を入れ、鉤爪を展開して突撃。最善の答えを導き出すためには、まだ情報が足りない。このまま怒り任せに戦っていたら、救えるものも救えなくなるだろう。
少なくとも、今までの侵蝕されている者達とは明らかに様子が違う。理性があるかもわからないような表情を見せる瑞鳳に、まずはどうにかして攻略の糸口を見出ださなければならない。

再侵蝕されているのは瑞鳳だけではない。葛城、黒潮、不知火も同じように歪められている。そのため、他でも同じように再解放に乗り出す。
今までは簡単にどうにでもなるという程度、春雨の言っていた前座という言葉が最も適しているとすら感じていたのだが、もう今は違う。元々侮ってはいなかったが、余計にそんなことが出来ない存在へ

と変わり果てている。
「さて、どうしましょうか……」
ここで鹿島の唯一の弱点、『想定外に弱い』が、ここで発動してしまう。今までの情報に一切ない敵に対しては、戦術が簡単には立てられない。
幸いにも、今も降る悪意の雨はバリアのおかげで触れる前に消滅してくれているため、目の前の敵の情報収集に専念は出来るのだが、収集中にやられてしまったら終わり。どうにもならない。
鹿島の前に立つ黒潮と不知火は、治療する前と同じように構える。黒潮は遠距離、不知火は近距離であることは変わらないようだが、雰囲気があまりにも違った。
それをすぐに思い知ることになる。
「っ」
不知火がその手にナイフを展開したかと思いきや、先程とは比べ物にならないスピードで突撃してきていた。艦娘はおろか、深海棲艦でもそこまでのスピードは出せない。島風以上のスピードである。
「鹿島さん！」
それに対応出来たのは古鷹。島風のスピードを知っているため、それを超える速度であっても対応することが出来た。左眼を輝かせながら海面を蹴り、狙われている鹿島の前に躍り出ると、その刃を右腕の艤装で強引に受け止める。
しかし、先程とはその威力すら雲泥の差だった。流石に艤装が破壊されるようなことは無かったが、腕力が異常に上がっており、深海棲艦化と同時に艦種すら変化している古鷹ですら、強引に押し込まれてしまう程。
「重い……っ」
弾かれるわけではないのだが、このまま食い止めておくことも難しい。何処からそんな力が発揮出来るのかが、攻撃を受けても見当がつかない。
「やっぱり狙ってきますか！」
そんな古鷹を始末するため、黒潮も動き出していた。こちらも先程

とは比べ物にならないようなスピードで移動し、不知火には当たらず古鷹にのみ当たる場所を狙って砲撃。
それにいち早く気付いた鹿島が、これまた先程と同じようなバルジを構えて砲撃を逸らす。だが、衝撃すらも桁違いになっていた。今の砲撃で2発、いや3発放っていたため、1発目は今まで通りで済んだのだが、2発目と3発目が強引にバルジを抉ることとなった。
「なっ、突然練度が上がった……!?」
「それだけじゃない、ですよ、コレ！」
尻尾の艤装を振り回し、無理矢理不知火を振り解く。流石に体幹まで強化されているわけではないようで、尻尾という質量の一撃を受け止めようとは考えていない。いや、考えているわけではなく、本能的に回避した。
古鷹が尻尾による攻撃をするのはこれが初めてだ。直撃したらタダでは済まない一撃であり、そのスピードも簡単には避けられないモノ。ナイフで迫り合いをしに来ているのなら尚更反応が遅れるような一撃なのに、それを当たり前のように回避してしまった。
足りなかった経験が、深海棲艦の本能で補完され、さらには追加のブーストまでかかっているため、ドロップ艦とは思えない動きを見せる。
「知らない攻撃にも対応してきます！」
「見てから避けられるくらいに反応が早いということですか！」
回避方向に鞭を振るうが、さも当然のように回避。むしろ、さも当然のように鞭の先端を握りしめて思い切り引っ張る。鞭には薬の成分が含まれていないため、それで何か起きるわけではなく、単純に鹿島の姿勢が崩される。
そして、その隙を見逃さないのが今の黒潮。足下が怪しくなったところを見計らって砲撃、さらに雷撃まで重ねてきた。元々ブーストによって精度は高かったが、完璧なタイミングを本能的に感じ取って放ってきている。
「させま、せん！」
バルジで砲撃を受け流しながらも、鹿島も咄嗟に雷撃を放つ。魚雷

同士がぶつかり合い、大きな水飛沫を上げることとなるが、その攻撃は回避した。
　どちらも直撃したらそのまま死に向かう。そこに泥が含まれていても侵蝕はバリアによって回避は出来るものの、命が奪われては元も子もない。
「鹿島さん、下がります！」
「えっ、うわぁっ!?」
　直後、古鷹が尻尾を鹿島に巻きつけ、即座にバックステップ。少し急だったが、鹿島になるべくダメージを与えないように優しく締め付ける。流石に急だったため鹿島は驚きの声をあげてしまったが、水飛沫を突き破るように黒潮が突撃してきており、不知火と同じようにナイフを振るっていた。
　その場にいたら危なかったかもしれない。バルジでその攻撃を食い止めることは出来ただろうが、古鷹が右腕の艤装で押し込まれかけたような力で刃を振るわれていたら、そのまま防戦一方にされていた可能性は高い。
「仕切り直しましょう。正直なところ、急に強くなりすぎです。泥の力はお互い身を以て知っていると思いますが、アレは異常ですよ」
「ですね……特にあの胸の忌雷……」
　古鷹が鹿島を連れて飛び退いたため、黒潮と不知火も仕切り直すように姿勢を正す。黒潮が遠距離、不知火が近距離と役割分担をしていた先程までとは違い、黒潮まで自由に動きつつも、連携は今まで以上となりそうである。
　その胸に寄生するように同化した深海忌雷が、２人とも同じようにドクンドクンと蠢いており、常に泥を送り込んでいる。そしてその度に、２人の瞳に灯った炎が勢いを増した。灯っている炎に、忌雷がポンプで油を注いでいるような、そんなイメージ。
「弱点はアレでしょう。ですが、なかなか近付くことが出来ませんね……」
「殺すことは簡単だと思いますが、救おうと思うと手こずりますね」
　古鷹にしては物騒な物言いだが、感情を殺し、最も簡単に合理的に

終わらせようとするのなら、全力で砲撃や雷撃を放ち、命のことを考えずに2人とも始末する方が手っ取り早い。そしてそれなら古鷹1人でもやれないことはない。戦艦レ級の力を手に入れているのだから、砲撃も雷撃も空襲も全てを使えば、肉片すら残さないレベルで殲滅が出来るだろう。

だが、龍驤を除く侵蝕された者全てを救うためにこの戦いはある。命を取らずに侵蝕から解放する。多少のダメージは仕方ないものとしても、命を奪うことは最も禁じられた戦術。

「せめてもう1人いれば、隙を突きやすいとは思いますね。あの2人、個別に戦うなら私達と対等ですよもう」

「ですね……って、あれは」

間合いを取りながら小声で作戦会議をして睨み合いが続く中、鹿島が2人の様子がおかしいことに気付く。

こうしている時にでも攻撃してきてもおかしくないのだが、まるで休憩するようにその場で止まっている。急激に激しい動きをしたことに、身体がついていっていないような、そんな雰囲気。

やはりドロップ艦はドロップ艦。経験が無いのは戦術や反応だけではない。その身体もだ。本来出来ない程の行動をやり続ければ、その分負荷が大きいのは当たり前。先程の重い一撃も、驚異的な反応速度も、身を削って繰り出しているのだろう。

戦えば戦うほど消耗していくが、あの忌雷が手を抜くことを許さず、死ぬまで極限以上の力を発揮させ続ける。命を糧に、今だけを乗り越えるために消費されるのだ。

「……いくら合理的でも、私達の提督さんはあんな選択はしません。許されざる行為です。早く解放してあげなくちゃ、私達が何もしなくても勝手に自滅してしまいます」

感情を抑えているとしても、この非道なやり方が許せないと、鞭を握りしめる鹿島。古鷹も同意。

「皆さん！　聞いてください！」

ここでわかったことを戦場にいる者達に伝えるため、鹿島は慣れない大声を張り上げる。

「忌雷に取り憑かれた艦娘は、限界以上の力を勝手に引き出されています！　そのままでいても自滅するでしょう！　だから、救うには時間がありません！」

瑞鳳と戦う春雨と海風、葛城と戦う叢雲と比叡も、薄々そんな感じなのだろうと勘付いていた。だが、それを言語化されると苛立ちがさらに激しくなる。龍驤は前座かもしれないこの４人を捨て駒程度にしか思っていない。春雨達を斃してくれれば、あとは部下がどうなっても構わないと言っているようなものだ。

それには漣達元々は龍驤の部下だった者達も戦慄させる。一歩間違えれば、自分達もこうなっていたのかと思うと、複雑な感情が芽生える。

前座との戦いは、悪意の雨から様相が一転する。救うためには早急な勝利が求められる。

挑戦状

再侵蝕を受けた４人の艦娘は、深海忌雷に取り憑かれてしまったせいで、過剰にブーストがかかって強敵になった分、限界を超えているせいで自滅に向かってしまっていた。救うのなら早急にどうにかしなければならない。そんなタイムリミットまで設けられてしまう。

だが、焦りは禁物。ここで無理に攻略しようとした場合は、裏目に出てしまう可能性が一気に上がる。それがまだどんなモノかも正しくわかっていないのだ。引き剥がしていいのか、そもそも触れていいのか、それすらもわからない。

「手段としては４つ。強引に破壊する。強引に引き剥がす。薬で消滅させる。波長で消し飛ばす」

瑞鳳が乱射する矢を回避しながらも考えに考え、思いついた対処方は春雨が呟いたこの４つ。

前半２つは、誰にでも出来る代わりに、強引な手段であるため、母体――同化されている艦娘に確実な被害が出る。言ってしまえば、生皮を剥がすようなものだ。ここに高速修復材があるわけでもないし、ドックなんて以ての外。

後半２つは、限られた者しか出来ない代わりにかなり堅実。しかし、やはりこれも母体にどのような影響を与えるかわからない。綺麗に消滅してくれるならいいが、あの忌雷が心臓の代わりになってしまっていたら、何をやっても意味がない。

そして、ここで攻めあぐねていたらタイムリミット。４人の母体は限界を超えてしまい、そのまま命を散らせることになる。

ただ勝つためならば、待っていれば確実に終わる。技量が無理矢理上げられており、対処するにはそれなりに苦労するかもしれないが、ただそれだけ。ここにいる仲間達は、全員が熟練者。ドロップ艦如きに後れを取ることはないだろう。だが、それは命を軽視した場合に限る。

４人の母体は、ドロップ艦としてこの世に生を受けてすぐに巻き込まれて、本来の役割、生き方を全て否定されてこの場に立っている。

敗北したのに、悪意の雨と忌雷との同化によって、無理矢理戦わされている。そんな悲惨な人生を送っている４人をこんなカタチで終わらせなくないと、心の底から思う。
　故に、救う。死なんて結末は許せない。その気持ちが、春雨の怒りをさらに燃え上がらせる。
「とりあえずどうにかするわよ！　ボーッとしててもどうにもならないわ！」
　葛城を相手取る叢雲が、強烈な錫杖による攻撃を槍で受け止めながら、春雨にも聞こえるくらいの声で叫ぶ。手加減なんてしている余裕は無く、少なくとも攻撃の意思を止める、つまりは殺さないまでも気を失わせる方向で挑んでいた。
「叢雲のっ、言う通り！　一度落ち着いてもらうために、少しだけ痛い目を見てもらうよ！」
　比叡もこの叢雲のやり方には同調しており、あまり余裕のない状況であるため、せめて静かになってもらいたいと、超至近距離で発艦する艦載機を叩き斬ったりと大忙しである。
　今の状態で薬が効くかどうかはわからない。だが、やっていないのだから、やってから考える。もしかしたらそれによって命が失われる可能性もあるのだが、だからといって何もせずに指を咥えて待っているなんてことはありえない。
「姉さん、私もそれがベストだと思います。暴れられたら治療も何も出来ません。一時的にでも気を失ってもらうべきかと」
「……だね。それに、戦いの中で何かわかるかもしれない。実は剥がすのが最善かもしれないし」
　言いながら瑞鳳を確認するが、光の道は微妙なところに出ていた。やはりと言うべきか、胸に同化する深海忌雷。そこへと道は伸び、その中央に光の点。侵蝕された者を解放するために、一時的に心臓を止める蹴りの場所だ。
　むしろ、その点が見えたことで１つ確信出来たことがある。やはりあの忌雷は、母体の心臓と同化している。直感もそうだが、今までの経験――光の点から、それに辿り着く。

つまり、忌雷を潰したら、母体は諸共命を散らせることになる。
悪意の雨との合わせ技のような、艦娘と忌雷の融合。
ここでまた1つ、ピンと来る。ここにいる大鳳や古鷹、施設に残った白露やコロラドのような『魂の混成』を、別なカタチで再現したのがコレであると。
白露達は、一度死んだ後に亡骸を融合させられた挙句に蘇生されたとされているが、ここの母体達は生きたまま泥を媒介に忌雷と融合させられたと言ってもいいのだろう。
まさに、黒幕の力。龍驤が黒幕と同じような存在となっていることを、嫌と言うほどに理解させられた。
「……ごめん、自分で言っておいてなんだけど、剥がしちゃダメだ。壊してもダメ。だからといって消したら……多分ダメ。あの忌雷の機能を停止させると、多分あのヒト達は死ぬ」
「えっ……!?」
「だからと言って、諦めはしないよ。その方が気に入らないから」
力強く放たれた矢を当たり前のように握り締めて、春雨は怒りを抑えずに宣言する。救うことを諦めないと。
白露から始まった侵蝕者の奪還は、その全てをどういうカタチであれ成功させてきている。最初は重傷を負わせることになっても泥を吐き出させ、時には薬を使って体内から消滅させた。春雨が覚醒してからは、痛みなく一瞬心臓を止めるという凄まじい手段も取っている。
今回のような最悪なケースにだって、何かしらの抜け道、救う手立てはあるはずだ。春雨に見えている光の道、光の点では、いつも通り心臓を一時的に止めることになっているが、それでは本当に救えるとは思えない。最善が息の根を止めるではダメだ。
「そのためにも、まずは動きを止める……!」
そのための道を探すと、しっかりと線が引かれていた。海風がいるからこそ、その道を辿れる。
胸に同化する深海忌雷に刺激を与えず、しかし立ち上がれない程に消耗させる手段。多少の傷はもう諦めるしかない。痛み無しの解放

は不可能である。
「海風、また鎖で行ける？」
「問題ありません」
　海風は右腕を錨と鎖に変化させ、強引な捕獲の方針で行く。縛り上げるのは脚が最も適しているか。
「姉さんは」
「私は艤装を破壊する。多少身体に傷をつけることになるかもしれないけど、死ぬよりはマシだろうから」
　鉤爪のスタイルは変えず、瑞鳳の艤装の基部を破壊することに専念する。その際に発生する身体への影響は、今は度外視。いざという時は、腕の一本や二本は犠牲になってもらうしかないとすら考えていた。
　無傷で救えるだなんて、もう考えていない。ここまで来たら、死なないだけマシだと思ってもらわなくては困る。正気に戻った後に死にたいと言われても、それは本人の選択だ。救い損だなんて思うつもりはない。選択出来る状況に持っていくのが最善であると、春雨は信じている。
「では、姉さんがやりやすくなるように縛り上げましょう。動けなくすることが最善だというのなら、私は姉さんのその道を確実に拓きます。お任せください」
　未だ瑞鳳の猛攻は止まらない。忌雷によるブーストにより、普通ではない動きを軽々と繰り出し、数本の矢を纏めて射ったり、素早く逃げ回りながらも半端ではない精度で確実に狙いを定めてくる。だが、その矢が春雨に刺さることは無い。回避出来るものは回避しているし、危ないと思っても鉤爪でキャッチした後にそのまま握り折る。
　海風への攻撃も、時には右腕を盾に変えて防ぎ、そうで無ければ錨で打ち払う。それが泥で出来ているものであっても、今の状態なら触れただけで侵蝕されるということは無いため、慎重ではあるが確実に被害を食い止める。
　しかし、瑞鳳の動きの速さが厄介だった。ただでさえ岩礁帯という厳しい戦場で、最も慣れたものがさらに強化されているのだ。さらに

は、未だ悪意の雨は降り続けている始末。足場は泥で濡れており、一歩間違えたら滑ってしまう。足裏をスパイク状に変えているため問題はないものの、それでも危険ではある。
　先程は簡単に捕獲することが出来たが、今度は春雨でも苦戦する。光の道は絶えず変化をし続け、最善の道を提示し続けているが、動き回る瑞鳳に対応するためには、それを確実に選択していかなくてはならない。
「そこっ！」
　それでも、海風は春雨に貢献するために行動する。岩礁帯を飛び回る瑞鳳の足下を狙って錨を投げ、着地と同時に捕まえるタイミングを狙う。
　だが、瑞鳳はそれすらも見越したような動き、そしてどう考えても普通ではない動きを見せる。真下に矢を放つことで錨と海風を結ぶ鎖を岩場に固定し、自分の脚を取られないようにしたのだ。
　いくらなんでも経験が少なすぎるドロップ艦にそんなことをやってのける実力があるわけがない。溢れ出す力を振り回すだけだったものが、精度までが並では無くなっていた。
　だが、その分瑞鳳への負担が大きいのがわかる。これを繰り出したことで胸の忌雷が脈動し、さらに身体に泥を流し込んだ。使えば使うほど泥を消費し、それによって身体もボロボロになっていく。
「っ……すぐに立て直します！」
　固定された鎖をすぐに消して再展開し、もう一度錨を振るう。一度の失敗でめげることなんてしない。同じことでも何度だって繰り返せば最終的には押し通すことが出来る。
　脚を縛り上げようとするのがダメなのだと悟った海風は、次はさらに上、胴を縛ろうとした。錨が直撃する可能性もあるが、動きを止めるためにはある程度のリスクは考慮するしかない。
「そこに、合わせる！」
　さらに春雨が艤装を変換。鉤爪を消し、両腕に主砲を展開し、その鎖に対応する暇を与えず、模擬弾を頭、腕、脚へと放つ。忌雷には当たらないように配慮はしているが、その攻撃によって身体がどうにか

なる可能性は配慮しない。死にはしないだろうが、腕や脚があらぬ方向に曲がろうが知ったことではなかった。
ほぼドンピシャの同時攻撃。どちらかに気を取られれば、もう片方を喰らうという渾身の連携。
「えっ」
だが、その全てが回避されることになってしまった。春雨でもこれには驚きを隠せなかった。瑞鳳の胸に同化する忌雷が、さらに追加で触手を伸ばしてガード。衝撃を逃がすことは出来ずとも、直撃は免れたことで体勢を崩すことも無かった。
海風の錨には瑞鳳自身が矢を放って回避。結果的に、渾身の連携も、瑞鳳と忌雷の連携に対応されてしまったということになる。
しかし、連携といっても忌雷が一方的に瑞鳳を使っているにすぎない。強い力を発揮したのは、母体をギリギリまで使い込もうとしているが故。敵にやられることなく、それでも0になるまで搾り尽くそうとしている、悪意に満ちた選択。
そのせいか、瑞鳳は明らかに大きく消耗していた。本人は至って普通な表情をしているが、無理矢理泥を注入されているために顔面蒼白。深海棲艦とは違った青白い顔をしていた。命を削っているのが嫌というほどわかる見た目になっている。
「やりすぎると、余計に命を吸い取るってこと、かな」
「ですね……すぐに攻撃に移ってこないところを見ると、随分と消耗しているようですが」
「このままだと死ぬよ」
合理的に考えるなら、それを待つ方がいいのだろう。勝手に自滅するのならそれで終わりだ。だが、それを許さないのがこちら側のやり方。
「……最悪だね。龍驤の考えがわかった」
「何が、ですか」
「これは龍驤の挑戦状だよ。救えるものなら救ってみろっていうね」
全てを救うために活動しているこちら側の信念を利用した、ゲスにも劣る行為。他人の命を使った作戦。しかし、やり方としてはこれ以

上効率の良い方法は無いだろう。
救うために全身全霊をかけて行動すれば、奥の手などまで晒すこととなり、この後に戦うであろう龍驤との戦いに不利となる。その上、救った母体の４人を戦場に置いておくわけにもいかないため、障害物の追加にもなる。
だからといって救わずに命を散らした場合、龍驤はここぞとばかりに罵ってくるだろう。ケラケラ笑いながら、見下しに見下し。自分が仕向けたことを突破出来なかったことで調子に乗ることは火を見るより明らかである。
「……気に入らない。本当に、気に入らない。自分で出てくるわけでなく、ヒトの命を使ってくるだなんて。思い通りになんて絶対にさせない。全部掴むんだ。全員救う。どうあっても！」
下卑た笑みを浮かべているであろう龍驤を想像したことで、春雨の怒りは限界に達した。

その瞬間、春雨の瞳に真紅の焔が灯った。

望む存在へ

深海忌雷に取り憑かれたことにより、急速に命を消耗している母体の４人。その忌雷は心臓と同化してしまっているため、消滅させても身体から引き剥がしても死に直結しており、そのまま活動させていても死に至る。これをどうにかする手段は簡単には思い付かなかった。

だが、１つだけわかっていることがある。これは龍驤からの挑戦状であると。この４人を救えるものなら救ってみろというあてつけだ。無理難題を吹っかけて、成功しても手札を晒すことになり、失敗したら龍驤の思うツボ。どちらに転んでも厄介なことは変わらず、そして、どう足掻いても母体への影響は計り知れない。

「……気に入らない。本当に、気に入らない。自分で出てくるわけでもなく、ヒトの命を使ってくるだなんて。思い通りになんて絶対にさせない。全部掴むんだ。全員救う。どうあっても！」

下卑た笑みを浮かべているであろう龍驤を想像したことで、春雨の怒りは限界に達した。

その瞬間、春雨の瞳に真紅の焔が灯った。

「その怒りはわかります。私も許せません。ヒトを何だと思っているのか。ただの手駒、捨て駒としか思っていないのなら、上に立つ資格なんてありません。姉さんの怒りが溢れてしまうのも無理はありません。敵であろうと手を差し伸べる慈悲深い姉さんですから。でも、これだけやればもう許されるわけがありません。龍驤を確実に始末しましょう。でもその前に」

「目の前で苦しむヒトを救うよ。それが私の望む答えだ」

真紅に燃え上がる眼で、瑞鳳を見据えた。この時から、春雨の覚醒した能力が発動する。視界の中に入ったモノを、望み通りにする。

あまりにも異常で、殆ど無敵のようなとんでもない力は、視界内に散布される春雨から発生した泥――もとい、マグマによる効果である。中間棲姫や黒幕と同様、目に見えない程小さな粒子が視界の中で飛び交い、それに触れたものを思い通りにコントロールしてしまう。

目に見えないのだから回避不能。ただし、思考のコントロールは出

来ず、行動を無意識下で抑制する。
今回の春雨の望みは救うこと。動きを止めるだけでは救われない。忌雷による泥の注入を止めること、そして、体力の消耗をこれ以上進めないこと。
「ッア」
初めて瑞鳳が反応らしい反応を見せた。春雨の視界、その影響下に入ったことで、素早く動き続けることが途端に出来なくなる。まずはその行動を阻害し、身体がまともに動かなくなるところから。これによって、瑞鳳に対しての処理が一気にしやすくなる。
しかし、ここからどうするべきかが見当がついていないため、ただ動きを止めただけで終わってしまう。救いたいという気持ちが先行していても、今からどうするかを決めていないのなら、それ以上進まない。望んでいる答えが曖昧だからだ。
少なくとも動くなという思いが影響下に伝播しているため、ああなっていてもこの力が効くことが証明された。
「逃げないでもらえますか。じっとしていてくれれば思いつく限りの手段を全て用いて貴女を救います。自分でどうなれば救われるのか話してくれるとありがたいですけど」
近付きながらも瑞鳳に向けて声をかけ続ける。忌雷に侵蝕されたままでも、何かのタイミングで理性を取り戻すかもしれない。
そうなったとしても侵蝕されているのだから反発しそうではあるが、こんな状況下、しかも刻一刻と自らの命が削られているのだから、漣の時と同じように心が折れてくれている可能性も無いとは言えない。
だが、やはり忌雷の同化は、ただ泥に侵蝕されているのとは違うようで、動きを拘束する程度では瑞鳳は何も変わらない。表情も無ければ、先程の小さな悲鳴のような声以上に言葉も発しない。こんな状況であっても無理矢理動いて春雨に攻撃をしようとする始末である。
むしろ、動けない状態で無理をしようとしているせいで余計に体力を消耗し、命を削っていた。命を救うために動きを止めたのに、それが命を削る方に作用してしまったら本末転倒である。

「海風」
「はい」
　このまま動こうとし続けられても消耗し続けられるため、海風が瑞鳳を拘束。先程までは抵抗されたが、動けないのなら抵抗なんて出来るわけがない。縛られていても無理をして動こうとするのは止めようとしないかもしれないが、強く拘束しておけば多少は変わるはずだ。
　しかし、そんな状態でも浮遊要塞の展開は出来る。動けないのは身体だけ。艤装の展開には制限が無く、むしろ春雨のこの力は艤装には影響が無い。無機物相手には為す術が無いのだ。
　海風が振り回した錨と鎖は浮遊要塞によって阻まれ、瑞鳳が無理をしてでも動こうとするのを止めることが出来なかった。それ以上に、浮遊要塞の展開自体が体力の消耗を呼び込み、瑞鳳はより弱っていく。
「すみません姉さん、すぐに排除します」
「うん、お願い」
　海風が浮遊要塞を処理していく中、春雨は自分が今出来ることを考える。怒りで簡単には纏まらないのだが、この現状を覆すために、思い付く限りのことを実行しなくてはならない。
　瑞鳳の顔色はより悪くなっており、冷や汗のようなモノまでかき始めている。しかし、抵抗はより一層激しくなり、負荷とそれに伴う消耗がさらに上がっていた。タイムリミットはもう間近だろう。
「……そもそも瑞鳳が悪いわけじゃない。その忌雷が悪いんだ。それを、止める！」
　そこで春雨は見るべき道を変える。瑞鳳を止めるのではなく、忌雷を止める方向に。
　無機物には効かないだろうが、忌雷は生体艤装のようなもの、有機物と無機物の中間みたいなものだ。自ら母体を生かすために行動しているのだから、それはもう意思を持つ生物と見てもいいだろう。
　それならば、この視界の中を望み通りにする力の影響下に入るはずだ。今の望む答えは『瑞鳳を止める』だったが、ここからは『忌雷を

止める』に切り替えた。
「海風！」
「これで、どうですか！」
　春雨自身も邪魔なモノは排除しつつ、海風によって浮遊要塞がある程度破壊されたことで、春雨の進む道が拓かれた。瑞鳳までの一直線の道。妨害なんてされない、紅く光り輝く道。
　こうなってしまえば、春雨は次に取るべき行動が手に取るようにわかる。舞うように向かう必要もない、真っ直ぐ突き進み、瑞鳳の真正面に。
「殺すための兵器で無く、生かすための兵器になれ！」
　鉤爪を消した春雨の右腕、義腕から、ぬるりと泥――マグマが溢れ出す。溢れ続ける怒りがカタチとなったそれを、理性ある今の春雨も自らコントロール出来るようになっていた。
　そのマグマを直接押し付けるため、瑞鳳と同化している忌雷に拳を叩き込む。先程の抵抗と同じように触手が動き出そうとしたが、今春雨が見ているのは瑞鳳では無く忌雷。視界全域に影響を与える力を、忌雷に一点集中した。そのおかげで、触手すらも動かせなくなっていた。
　有機物と無機物の中間という存在かもしれないが、意思を持つ生命の時点で春雨の力からは逃げられない。
「Ａａａａｈｈｈｈｈｈ！」
　この中の誰でもない叫び声が響く。春雨のマグマを直接叩き込まれたことで、その存在そのものが春雨の望み通りに変化していくのは、忌雷にとっても何か感じるモノがあるようだった。それが苦痛なのか快楽なのかはわからない。
　本来の命を奪って強力な力を発揮する生体艤装という在り方を、命を維持するための在り方に変化させる。それが今の春雨の望み。消すことも剥がすことも止めることも出来ないのなら、そのままでもいいような存在に書き換えるというのが導き出された答え。
　しかし、これはただ見ているだけでは出来ない。動きに干渉することは出来ても、存在そのものを変化させるためには、春雨自身から溢

れ出したマグマを注ぐ以外に選択肢が無かった。
　これは黒幕がやっている泥による侵蝕――洗脳とほぼ同じ方法。そんな手段しか取れなかった自分にさらに怒りを覚えつつも、瑞鳳を生かして止めるためにはこれしかないという確信があるため、ほぼ躊躇なくそれを実行した。
「ね、姉さん、忌雷が……」
　海風が驚きながらも言葉を紡ぐ。春雨から溢れ出たマグマを注ぎ込まれ、その存在定義を春雨の望むモノに書き換えられていることを示すかのように、泥の色をしていた忌雷が紅く染まっていく。
　存在を反転され、瑞鳳の生命維持装置のような役割へと書き換えられた忌雷は、瑞鳳への泥の注入をその時点でストップ。逆に泥を吸い上げて瑞鳳を正気に戻していく。不必要となった泥はその口から排出し、無害なモノへと変換した。着せられている泥のコスチュームも、忌雷の力で侵蝕性の無いモノへと置き換えられる。
　侵蝕し、命を奪う忌雷は、解放し、命を繋ぐ忌雷へと書き換えられた。これにより、瑞鳳の命は繋ぎ止められ、二度と侵蝕されない存在へと昇華された。
　その見た目はどうにもならないが、死んでいないのならまだやり直せる。本人が望めば、だが。
「……これで、いい、かな」
　瑞鳳の顔色が格段に良くなっていくのを確認して、春雨は一安心。しかし、こんな戦場のど真ん中に消耗した瑞鳳を放置するわけにはいかない。せめて自分で動けるのならいいのだが、まだ戦いは終わっていないのだ。
「っあ……あ、あれ……私……」
　正気に戻った瑞鳳の目に光が戻る。侵蝕も失われたことで、侵略者としての思考は失われていた。しかし、その姿はそのまま。胸に同化した忌雷も当然そのまま。
「え、ええっ!?　な、何これ!?　どうなってるの!?」
　自分の姿に羞恥を覚えたか、バッと自分の身体を隠すように腕を組む。だがその時に、自分の胸に同化した忌雷の存在に触れることとな

り、小さく悲鳴を上げた。
「わ、私、何がどうなってるの!?　いや、覚えてるけど、覚えてるけどさ！　なんかわけがわからない泥みたいなの呑まされたの！」
身体は消耗しすぎてまともに動かないようだが、頭は冴えているようだった。胸に同化した忌雷は、何処か元気そうに歯をカチカチ鳴らした。
「わかってますから落ち着いてください。貴女はもうあちら側ではないので。私達がちゃんと救いました。死ぬこともないでしょう。だから、少し黙っていてもらえますか」
正気を取り戻してこれだけ元気なら大丈夫だろうと、春雨は次のターゲットへと目を向ける。それは、ここからは一番手近である葛城。

葛城も瑞鳳と同じように顔面蒼白な状態で限界以上の力を発揮させられ、叢雲と比叡を相手に一進一退の攻防を繰り広げていた。叢雲も比叡も、傷付けずに気を失わせるという面倒臭い方法を取らざるを得ず、素人相手でも苦戦。それでも2人とも無傷で戦いを続けているのは熟練者のそれである。
「この、厄介ね！　イライラする！」
叢雲も苛立ちを隠すことなく、葛城からの攻撃をいなすことしか出来なかった。本当なら容赦なく殺しているのだろうが、どうにか理性を保ち、そこまではやらないようにしていることが、さらにストレスに繋がっている。
「薬を打ち込むのは!?」
「忌雷ごと壊れたら死ぬかもしれないけど、やってみたら!?」
「ヒエー!?　それはダメ！　殺さずに救う！」
比叡も薬剤が塗られた刀剣で斬り払うことで治療をしていくことも難しい。そのくせ、葛城自身は自分の身体を顧みずに攻撃をしてくるため、徐々に押し込まれそうになる。
しかし、それも終わりの時が来てしまう。葛城の限界を超えた力

は、あくまでも忌雷によって強引に引き出された葛城自身の力だ。ドロップ艦が引き出せる力は、熟練者には遠く及ばない。
そのため、戦闘中に突然動きが遅くなったかと思いきや、真顔のままその場に倒れてしまった。
「……は？」
「ちょ、まさか……」
葛城はまだ戦う意志を引き出されているため、手を伸ばして艦載機を発艦しようとしていたが、もう何も出ない。
プルプルと震える腕が叢雲の方へと伸ばされたが、最後は力尽きたように投げ出された。
「……嘘でしょ」
比叡が苦しそうに言葉を絞り出す。しかし、葛城は反応が無い。
叢雲が無言で近付いても、何もされない。槍の柄でひっくり返したとき、その惨状がよくわかった。
葛城の胸に同化した忌雷が、舌を出して息絶えていた。限界を出し続けた結果、葛城の全てを使い切ってしまっていた。

瑞鳳を救うことは出来た。しかし、葛城は間に合わなかったのだ。

影響の内外

春雨の『望み通りの答えに辿り着く力』により、心臓と同化した深海忌雷の性質を書き換えたことで、瑞鳳は救われた。忌雷が剥がれることは無かったが、その忌雷が侵蝕という性質を失って共存している状態となったことで、瑞鳳は泥による侵蝕すら受けない存在へとなっていた。

しかし、次は葛城だと春雨が視線をそちらに向けた時には、もう遅かった。叢雲と比叡が懸命に立ち向かったが、そうこうしている内に葛城自身が限界を迎えてしまったのだ。

忌雷に泥を注入され続け、強引に力を引き出されたことで、あまりにも大きすぎる負荷がかかり、そして、葛城の全てが使い切られた。

その結果、その場でピクリとも動かなくなった。同化した忌雷も、舌を出して息絶えていた。

「そんな……っ」

視界に入った時にはこうなっていたため、春雨は大急ぎで葛城の元へと向かう。瑞鳳は激しく消耗をしており動くことは出来ないため、海風に任せて。海風も春雨の側にいるために、何とかして瑞鳳を引きずってでもついてくるだろう。

「叢雲ちゃん！　比叡さん！」

「……春雨。こっちは……もう」

刀剣を強く握り締めながら悔しそうに呟く比叡。叢雲は救えなかったというよりは、龍驤の思惑通りに事が進んだことが気に入らないといった感じだった。

葛城は敵だ。だが、敵にされただけのドロップ艦だ。当然救いたい。救うためにここまで来ているのだ。だから、春雨は諦めなかった。

「すぐに、治療を！」

瑞鳳の時と同じように、腕からマグマを溢れさせ、忌雷に叩き込んだ。それが染み込めば、春雨の影響下に置かれる。そうすれば望み通りに、忌雷の性能を逆転させ、侵蝕を解放へと変えることができる。

もうそれが頼みの綱だ。叢雲はともかく、比叡は春雨に任せるしか無かった。止めるつもりもなかった。
しかし、マグマが忌雷の口の中に入り込んでも、瑞鳳の時のような反応――その身体が紅く染まるようなことは無かった。
いや、マグマがそこから葛城の体内に蔓延る泥を消滅させているのは確かであり、それに応じて葛城の身体が跳ねてもいた。瑞鳳の場合は忌雷そのものが泥を消していったが、葛城の場合はマグマが忌雷の意思を介さずに体内へと向かっていることを表していた。
つまり、忌雷には何の反応も無い。マグマの力は通じていない。
「まだ、まだ何かあるはず……！」
葛城の身体も、忌雷自体も、その視界に収めながらあらゆる望みを想像する。侵蝕を失ってほしい。元の身体に戻ってほしい。敵対しないでほしい。死なないでほしい。ありとあらゆる事態を好転させる望みを想像しては、その目に乗せて葛城にぶつける。だがその望みはあまりにも抽象的すぎて、それが本来効くような相手でも効かないような望み。
さらにはもう一度マグマに塗れた腕で深海忌雷を叩く。より染み込むように、より流れるように。叩いたことで葛城の身体は跳ねるが、それで終わり。ぐったりと手足を投げ出した状態になって、ピクリとも動かなかった。
葛城は目を覚さない。本当に命が尽きてしまっている。誰がどう見てもそうなってしまっていることは理解出来た。
だが、春雨は諦めなかった。何か出来ることがあるはずだと。それこそ、蘇らせることだって出来るはずだと。
「春雨、あっちを救いに行きなさい。もうコイツはダメよ」
しかし、叢雲がここで春雨を止めた。そんな言葉を聞いて春雨が叢雲を睨み付けるが、叢雲も苦しそうな表情で睨み返す。
「アンタが救う力を持っているのなら、まだ可能性のある奴を救いなさい。アンタも理解してんでしょ。コイツがもう無理だってことくらい」
「無理じゃない！　まだ、まだ私には」

「無理よ。だってソイツ、もう生き物じゃないのよ」
残酷な現実を突きつけられ、春雨は改めて自分の力を再認識した。命の灯火が潰えた者には、自分の力が効かないと。
春雨の力、『望む通りの答えに辿り着く力』は、有機物、自らの意思を持つモノにしか通用しない。
自分や仲間、敵は勿論のこと、有機物と無機物を半々にしたような深海忌雷も意思を持つために効果範囲内。泥ですら単細胞生物のようなものであると明石の調査によって判明しているので効果範囲内に含まれる。
しかし、艤装のような無機物や、植物のような意思を持たないモノには何の効果も無い。そう、亡骸にも。
瑞鳳はギリギリだったから効いた。まだ命の灯火が潰えていなかったから。
しかし、葛城は違う。既に潰えた灯火を再点火することは出来ない。
「だったら、まだ救える可能性があるあっちの2人を救いに行きなさい。アンタがここでウダウダしているせいで、あっちも死ぬかもしれないわよ。時間がかかればかかるほど危なくなるのはわかってんだから。別に私は全員死ねばいいと思ってるから別に構わないけど。それとも何、アンタは目の前しか見えてないわけ？」
「叢雲さん、春雨姉さんは」
「何も出来ないアンタは黙ってなさい海風。私は、春雨と話をしているの」
瑞鳳に肩を貸しつつもようやく追いついた海風だったが、叢雲の真剣な瞳に文句も言えなくなる。
「海風、瑞鳳は私が見ておくから、春雨の側に行ってあげて。こんな辛い決断、1人でさせちゃダメ」
比叡が瑞鳳を抱きかかえようとするが、手を伸ばそうとして一旦引っ込めた。比叡は当然バリアが存在しているため、その在り方が変えられた瑞鳳の紅い忌雷ですら消し飛ばしてしまう可能性を考慮した。

そのため、少し痛いかもしれないが岩礁帯に座らせることで、海風を自由にした。比叡も今は口出しが出来ない。
「春雨、アンタが悩んでいる間にも、終わりが近付いてるわよ。どうするの。終わりが近い奴と、もう終わった奴、どっちが大切かくらい、アンタなら理解出来てるでしょ」
こんなこと、叢雲だから言えた。怒りが溢れ続け、常にイライラしている叢雲だからこそ、歯に衣着せぬ物言いが出来た。思ったことを他人のことを考えずに口にする。だからこそ、叢雲の発言には裏がない。
そんな叢雲が何度も何度も葛城はもう死んでいると言い聞かせてくるのだ。嫌でも理解出来る。それに、春雨は最初からわかっている。
「……海風、あっちに行くよ」
「姉さん……」
「確実に救える命を救う。そんな選択しか出来ない自分が、本当に気に入らないけど」
心底悔しそうに顔を歪ませて、春雨はその場から離れた。立ち止まっていたら、救える命も救えない。
その眼に映る最善の道は、葛城の方を指し示していなかった。まだ灯火の消えていない黒潮と不知火の方を向いていた。ならば、そちらを優先する。悔しくて悔しくて堪らないが。
救われた瑞鳳と葛城の亡骸は叢雲と比叡に任せて、春雨と海風はもう一つの戦場へと駆ける。怒りと同時に悔しさも溢れさせながら。
春雨の腕からは、マグマが際限なく溢れ出していた。

もう一つの戦場、黒潮と不知火を相手取る鹿島の古鷹。相変わらず不知火が前衛、黒潮が後衛と、理性が無くとも役割分担はしっかりと出来ており、限界を超えた力を無理矢理引き出されているため鹿島も古鷹も苦戦させられている。
黒潮の砲撃を受け続けたことで鹿島のバルジはもうボロボロ。古

鷹も不知火の猛攻を防ぐのに精一杯である。やり返すことは容易なのだが、そのせいでさらに負担をかけたら、灯火が潰えるまでの時間がさらに短くなってしまうと、攻撃は控えめにしていた。
「どうすれば、どうすればいいの……っ」
この状況の対処法が全く思い浮かばない。鹿島は違う方向で焦りを見せ始めていた。特に不知火は黒潮以上に動き回っており、消耗が異常に激しい。戦いが続けば続くほど、その動きは鋭くなる代わりに、顔色は悪くなっていく。
この忌雷に関しては、普通の艦娘でも、明石の発明した装備でも、どうにも出来なかった。いや、どうにかすることは出来るのだが、同化してしまっている相手の身体のことを考えなければというのが前提になる。
消し飛ばすことは出来ても、共存させることは、今の段階では不可能。
「えっ」
そして、その時は訪れてしまう。古鷹に対して猛攻を繰り広げていた不知火が、糸の切れた人形のように力が抜けてその場に倒れた。
やはり、より激しく動いていた不知火の方が終わりに近い。そして、終わってしまう。
「う、うそ、そんな……」
「古鷹さん！　こちらを！」
その場で終わりに向かう不知火を見て愕然とする古鷹だが、鹿島はそんな感情も抑え込んで黒潮に集中するように促す。当然辛いが、救える者を救うためには、なりふり構ってはいられない。
だからこそ、ここに救世主が現れる。
「まだ救えますか！」
自分の戦場から離れ、敵を救うために駆け抜けてきた春雨が到着。倒れ伏した不知火を横目に見て、苦しそうな表情を見せるが、涙を堪えて残された黒潮を見据える。
「行けます！」
「それなら、すぐに救いますから！」

溢れ出すマグマを拳に纏わせ、黒潮に一気に接近。怒りと悔しさで力を増しており、その速さも泥のブーストを凌駕していた。
「その存在を！　反転させる！」
一度瑞鳳に救えているのだから、イメージは完璧に出来ている。そしてそれが望みとなるため、視界に入り、マグマを直に注がれたら、確実に春雨の望む結末へと持っていかれる。
黒潮と同化した忌雷に叩き込まれた拳からマグマが注入され、そのまま影響下に置かれた。その侵蝕速度は、春雨の思いの力が凄まじいが故に恐ろしい速度となり、黒潮に蔓延る泥を一気に消滅させた。
さらには、忌雷そのものを春雨の支配下に置いたかのように、その色を紅く染める。これにより、侵蝕を受けることはなくなった。
「……え、うぇっ!?　ウチ、どないしてたん!?」
瑞鳳と殆ど同じ反応を見せる黒潮。正気に戻ったことを意味するのだが、春雨としてはもうそちらに視線を向けることはなく、倒れ伏した不知火へと駆け寄る。
まだ灯火が消えてから間もない。どうにか蘇生するのだと仰向けにさせるが、やはり葛城のそれと同じように、忌雷は舌を出して息絶えていた。
「……諦めない」
マグマが纏わりつく腕を、忌雷に叩き付ける。同時に命を取り戻すように望む。
不知火の身体はその衝撃で跳ねるが、それだけで終わった。体内の泥は消滅しているかもしれない。しかし、命の灯火の再点火は出来なかった。
「春雨ちゃん……不知火ちゃんは……」
恐る恐る聞く古鷹だが、春雨は無言のまま立ち上がる。それが、不知火がどうなったかを如実に表していた。
黒潮は救うことが出来たものの、不知火は間に合わず。それはもう、春雨の影響力から外の存在となってしまっていた。
「う、ウチ、助かったんか……いやでも、ぬいは、ぬいは」
「……不知火さんは……間に合いませんでした」

鹿島もこの時ばかりは感情を抑え込むことはしなかった。あまりにも悔しい結末。侵蝕された全員を救うことが出来なかったことに、明確に怒りを露わにした。
「そんな……こんな胸糞悪いことあるんか……ウチらはただ、ここで生まれただけやのに……」
黒潮の言葉が重くのしかかる。
「なんかようわからん泥みたいなん呑まされてから、頭ん中真っ黒にされて……そんなん、おかしいやろ……」
瑞鳳と同じように消耗のしすぎで動けないが、頭だけはやけに冴えているようだった。だからこそ、この辛い結末を真正面から見せられることになる。
特に黒潮にとっては、不知火は姉妹艦、大切な存在だ。それが、利用されるだけされた挙句、使い捨てられ、自分とは違って救われることすらなかった。そんなこと、許せるはずもなかった。

「おうおう、なんや面白いことになったやんけ」

そんな戦場に響き渡る声。誰も知らない声であっても、その持ち主が何者かは誰もがすぐにわかった。
悪意の雨が降り続く中そこに現れたのは、下卑た笑みを浮かべた空母棲姫――龍驤であった。

前哨戦

深海忌雷に侵蝕された母体達は、瑞鳳と黒潮は救うことが出来たのだが、葛城と不知火は救うことが出来なかった。『望み通りの答えに辿り着く力』を以てしても、死を超越することは出来ない。それが摂理である。

春雨も自分の無力さを痛感していた。もう動かないことが分かっていても、葛城を甦らせることが出来るはずだと処置をし続けたことが、不知火の明暗を分けてしまったかもしれないと。あの時に、すぐに選択をしてさえいればと。

「おうおう、なんや面白いことになったやんけ」

そんな戦場に響き渡る声。誰も知らない声であっても、その持ち主が何者かは誰もがすぐにわかった。

悪意の雨が降り続く中そこに現れたのは、下卑た笑みを浮かべた空母棲姫――龍驤であった。

「出てきたね、本命」

その喋り方からついに出てきたかと反応したのは、龍驤が最も根に持っている相手、北上。ここまでは明らかに力を温存しており、戦場の中心で未だに降り続ける悪意の雨から傘で身を守りながらも、誰にも当たらないように雷撃を放つ浮き砲台のような活躍を見せていた。

そんな北上が現れた龍驤の方に視線を向けたのだが、今まで見てきた姿とは似ても似つかない姿であるため、思わず噴き出しそうになっていた。

今の龍驤は、生まれたばかりの空母棲姫を器として使っている。軽空母龍驤としての姿は、正直空母の中では特に小柄で、駆逐艦と見紛う程であった。だが、空母棲姫は大人の女性。スタイルもやたらといい美形だ。

しかもよりによって、本来の空母棲姫が身に纏っているセーラー服姿ではなく、自分の身体を見せつけるようなやたらと露出度の高い水着を着ていたのが余計に北上のツボに入りかけた。

ドロップ艦である文月が出会った『大きなお姉さん』とは、この龍

驤である。ドロップしたばかりならば、ヒト型の深海棲艦を艦娘と間違えても仕方ない。これは卯月（ミシエル）で実証されている。
ちなみに、『小さなお姉さん』が瑞鳳で、『駆逐艦』は黒潮。奇しくも、生き残った者が施設へと煽動した張本人だった。
「ウチのおもてなしは楽しんでくれたようやなぁ」
ニヤニヤしながら戦場を眺める。手駒として使っていた４人のうち、２人は救われているが、２人が息絶えていることを確認し、声を上げて笑った。
「なんや、全員救えとらんやん。そういうことするんが辿り着く者ちゃうんかぁ？　全員救うって息巻いとるのに、結局救えん奴がおるっちゅーわけや。しかも中途半端に救いおって。さぞかし恨みたっぷりで死んだんやろなぁ。なんで自分は救われへんのやーってなぁ！」
当てつけのように春雨に言い放つ龍驤。その物言いに海風が主砲を向けるが、突然現れた飛行甲板がその砲撃を阻む。
同時に周囲を囲む仲間達が一斉に砲撃を放つものの、その全てが甲板に防がれてしまった。それはまるで中間棲姫の持つ宙を浮く甲板であり、金剛による戦艦の砲撃ですら防いでしまうほど頑丈。
「ハッハハ、んなもん効かへんわ。うちがどれだけの力を手に入れたと思うとんねん」
甲板をしまったかと思えば、次はその巨大な艤装から全方位に主砲が向く。元々の空母棲姫の艤装にも砲台は備え付けられているが、龍驤としての力、魂の混成により手に入れた力もそのまま据え置きらしく、駆逐艦や軽巡洋艦の主砲も織り交ぜられていた。
「お返しや。お前らが先に撃ったんやから、喰らって当然やろ」
そして、同時に放つ。大小さまざまな砲撃が放たれ、一気に全員が動き出した。
この中でも特に危険なのが、先程まで戦っていたことで消耗している瑞鳳と黒潮、そして、当たり前だが動くわけがない葛城と不知火の亡骸。艦娘達のバリアでは、その泥製のモノを消しとばしてしまう可能性があるため、必然的に施設の者達が救うしかない。もしくは近く

に寄らないでどうにかするか。
「こちらは私が！」
黒潮は古鷹が受け持つ。その尻尾も含めて抱き上げ抱え込み、すぐにその場から退避。黒潮は驚いていたものの、身体が動かないのだから素直に受け入れる。
「お姉さま！」
「Ｏｋａｙ！　任せてくだサーイ！」
瑞鳳と葛城の亡骸は、金剛が盾を展開して前に立った。いつでもサポートに入れるように意識していたようで、それが功を奏したようだった。
「春雨姉さん。お任せください」
そして不知火とその側にいた春雨は、海風がしっかりとガードした。右腕を盾に変形させたことで、直撃は免れているが、その威力は相当なモノであり、上手く受け流すことでどうにか被害が無いようにした。
いくら亡骸とはいえ、これ以上傷付くことは春雨が許せなかった。その意思は海風にも伝わっており、即座に反応している。
「おうおう、死人も守るとは何とも聖人君子なこって。ほんまにそいつらがそれを望んどるかは知らんけどなぁ。死ぬ前に守ってくれやとか思っとるかもしれんなぁ。ええ？」
いちいち春雨の神経を逆撫でするような煽り方をする龍驤。春雨も不知火の亡骸を前に、そろそろ限界が来ようとしていた。
ただでさえ救えなかったことに責任を感じてしまっているのに、それをこうなってしまった元凶に突きつけられるのは我慢ならない。怒りの矛先が言っていい言葉ではないだろうと、怒りが限界を超えかけていたその時。
「春雨、今はもうちょい我慢しときな。あたしが多少はスッキリさせてやっから」
知らない間に、春雨の側に北上と大井が立っていた。北上の表情は今まで見たことがないようなおかしな顔。まるで、笑いを堪えているような。

「……く、くく、ぷはっ、もう我慢できない、 あっはははは！」
ここで決壊したか、突然爆笑しだす北上。亡骸の前で不謹慎ではと思ってしまったが、その目は龍驤のみを見据えており、その奥には笑みなど何処にも無かった。
「いやぁ、マジさぁ、あのクソチビ姿はコンプレックスだったのかな龍驤ちゃーん」
北上の声が聞こえたからか、龍驤の表情が明らかに変化した。艤装の上から見下すように北上を睨み付けるが、北上はその笑いを止めない。
「いくらなんでも露骨すぎっしょ。高いところに行かないと他人を見下すことも出来ないチビが、スタイルのイイおねーちゃんの身体に入って成長しました感出しちゃってさ。しかもそれを見せつけるみたいな格好までしてるのが、ホント、く、くくくく、はははは！滑稽で面白すぎんだよなぁ」
ゲラゲラ笑う北上に対して、まるで余裕を手に入れたと言わんばかりに鼻で笑う龍驤。
「言うとけ言うとけ。こんな戦場で傘差しとるような阿呆に何言われようと知ったこっちゃないわ。なんやお前、死にに来たんか。戦う気さらさら無いみたいにしか見えへんで」
「アッハハ、節穴の目が余計に節穴になったんかね。アンタにはこの程度で充分だってことだよ。それに、相手があたしだけなわけないでしょ。アンタに恨みと憎しみを持っているヤツら、何人いると思ってんの」
話しているときにでも砲撃を放ったのは、北上組である漣。空気なんて読むわけもなく、容赦なく龍驤を殺すために撃った。
後衛としての力を底上げされた漣の特化した戦術は、精度と空間把握。ドロップ艦とはもう言えないくらいの成長を遂げ、その恨みを晴らすべくここに立っている。
「はっ、漣かい。ウチが最初に使ってやった器やっちゅーのに、恩を仇で返すんか。死んでもいいようなお前を、ウチの慈悲で使ってやっとったっちゅーのに」

その砲撃は当たり前のように甲板で止めるが、そこを見計らって朧が魚雷も放っていた。そして同時に、曙も突撃姿勢に。
朧は中距離として、砲撃と雷撃どちらもを強化。そして曙は近距離として、回避性能と砲撃、そして近接戦闘のための体術を仕込まれている。
しかし、甲板によるガードはかなり硬く、魚雷に対しては小粒の砲撃で軽々対処。砲撃も雷撃も、龍驤を傷つけることは一切出来ない。曙も砲撃に牽制されて、ある程度までしか近付くことが出来なかった。
「なーにが恩ですかい。自分の思い通りに動く駒が欲しかっただけでしょうが。自分で動くことも出来ない逃げ腰お姫様は、他人様を使うことがお慈悲だと思われているようで」
「お、いいこと言うねぇ。自分のことしか見えないような視野の狭いヤツに、恩だの慈悲だの言う資格はないわな。全部自分のためなんだから」
「本当の慈悲深さってのは、春雨氏みたいな、他人のことを思って怒れることなんすわ。だから、アンタにゃ誰も慈悲なんて向けねぇですよ。うちのお姫様だってね」
瞬間、龍驤が壁として使っていた甲板の1つが爆散した。
「んん？」
明らかに砲撃などではない一撃が加わったことによる破壊。それはまるで、殴り壊されたような。
「……貴女が、漣ちゃん達を利用したヒト……なんですか」
曙よりも前。近距離型よりもさらに近距離。接近戦に特化された者として立つのが、深海棲艦化した潮。
恐怖に震えてこの場でも及び腰な雰囲気を醸し出しているが、それでもここにいるということは、自ら戦うと決意したことにほかならない。曙もこの潮をサポートするために主砲を構えた。
「それがどないしてん。ちゅーか、今お前何したん。ウチの甲板は並のバルジより硬いはずやけど、なぁー」
同じように再び甲板を展開し、今度はガードではなく潮を押し潰す

ために上から叩き潰そうとした。
だが、この潮には通用しない。飛行場姫から仕込まれた護身術、あらゆる近接戦闘の技を今この場で全て発揮する。どんな姿勢でも関係なし。
真上から振り下ろされた甲板に恐る恐る、しかし鋭く確実な拳を叩き込んだ。その瞬間に甲板が爆散し、木っ端微塵となる。
「は、おま」
「許しません……みんなが辛い思いをしてるのに……それを笑うことが出来るなんて……許しません」
恐怖に苛まれながらも、キッと龍驤を睨み付ける。涙目になりながら、震えは止まらずとも、決意の力でこの場に立ち続ける。
「震えながら言うても、何の説得力もあらへんぞ。でも、お前のそれはええなぁ。ウチが使うたるわ」
潮の戦闘術に目をつけたか、今度は泥を沸き立たせてぶつけようとする。潮は全身防備ではあるが、なるべくならばそれを受けるわけにはいかない。
だが、そんなことを簡単にやらせるほど甘い者は、ここには誰もいない。泥を飛ばそうとした腕に、北上が放った魚雷が突き刺さるように直撃していた。そのおかげで、龍驤が撒き散らした泥はあらぬところへ。
「こらこら、そんな汚らしいモノを振り撒くんじゃないよ。ていうかさ、ホントさ、アンタ他人の力を借りないと戦えないわけ？　相変わらず小さいねぇ。図体だけデカくなっても、おつむがミジンコ並みじゃあその程度しか考えられないか。いや、確か今って泥になってるんだっけ。微生物の群衆ってことは、名実ともにミジンコになったってことか。アッハハ、それは失礼しましたわ。そんだけ小さいならそういう風にしか考えられないわな」
北上の煽りは止まらない。
「そもそも全部貰い物の力のくせに粋がってるのがマジでダサいね。身体は他人様で、砲撃や雷撃も混ぜられたヤツの力で、唯一残ってた軽空母の力もその身体の力で上塗りされちゃってぜーんぶ他人の力。

それを自分の力とか、はっ、ちゃんちゃらおかしいっつーの。アンタの力はもう、他人に乗っかることだけなのさ。自分の力で敵を倒すことも出来ない、惨めで哀れなゴミムシの集合体が、あたしらに勝てるとお思いで？」

仲間達がスカッとするほどに罵りに罵る北上の言葉に、自然と士気が上がっていく。

怒りに震えて限界を超えかけていた春雨も、龍驤がコケにされているところを見続けたことで、幾分か怒りが晴れてきた。スッキリとは言わないものの、自分が言いたいことを全て北上が代弁してくれており、それを聞いている龍驤があからさまに嫌そうな表情を浮かべたことに、自分の思っていたことはあながち間違いでは無かったのだと確信する。

「言わせておけば偉そうに。結局お前らは群れにゃどうにも出来ん格下の雑魚共ってことやろ」

「その器の中に群れてる寄生虫が何言ってんだか。人数集めても自分の力でここにいるあたし達と一緒にすんなよ。悔しかったら自分の身体で戦えゴミムシ。あ、無理か。自分の身体はもう無いんだもんなー。だったらもう偉そうなこと言えないねぇ。既にアンタは負けてるんだよ。恨むならアンタをその身体にしたヤツを恨むんだね」

あからさまに嘲笑する北上に、先に怒りが溢れたのは龍驤。そもそも北上との相性が悪かったのだろうが、嫌でも感情的にされた。

「これはウチの力や。ウチだけの、支配者の力やぞ。それを思い知らせて」

「ちょっと、黙っていてもらえますか」

龍驤の言葉を遮るように静かに言い放った春雨。真紅に輝く瞳の焔は、暴走した時と同じ程に燃え盛り、しかしその心は冷静。怒りをある程度制御していた。

その瞳で睨みつけたことにより、その力の影響下に置かれ、龍驤の声が出なくなる。『黙れ』という具体的な望みが叶えられた。

「もういいです。その薄汚い言葉はもう聞きたくありません」

不知火の亡骸は黒潮を退避させた古鷹に任せて、大きく息を吐きな

がら立ち上がる。怒りが溢れ続けるが、表情にも出さない。だが、明らかにそれが表に出てきているように、艤装が痛々しく変化していた。

「ここで確実に終わらせます。今までやってきたことを後悔してください。元に戻れるのなら戻してあげますよ」

前哨戦、最後の戦い。龍驤との戦いが、ここから始まる。人数差はこちらにあれど、龍驤は余程の自信があるため、気を抜くわけにはいかない。

無差別の悪意

龍驤との戦いがついに始まった。その開戦の狼煙となったのが、春雨の『望み通りの答えに辿り着く力』。まずはその言葉を封じ、黙らせたことによって、行動で語り合うことになる。

言葉が口から出なくなった龍驤は、咄嗟に甲板を2枚3枚と重ねて春雨の前に。その視界から自分の姿を消したことで、その影響下から逃れる。

春雨の力は視界の範囲内に及ぼす力。壁があると対象が認識出来なくなるため、一時的な効果であればそれでおしまい。瑞鳳や黒潮に同化した忌雷に施した処置とは違うため、龍驤の声帯は元に戻ることになる。

本当に喉を潰すのなら、春雨の腕から滴り落ちるマグマを直接呑ませる必要がある。望みを永続的に叶える力を持つのは、春雨から分泌されたマグマのみ。

「お前、ウチに何しおった。喋れんくなるとか聞いとらんぞ」

「教えてませんから。足りない頭で考えてください。あと、その無駄口を慎んでもらえますか。耳障りなので」

両腕に鉤爪を展開し、足の伸び縮みを利用した爆発的なスタートダッシュで突撃する。甲板が何枚あろうが知ったことではなく、それを突き破るために両腕を振るう。

ガギッと嫌な音を立てるが、表面に引っ掻き傷がついた程度で、貫くことは出来なかった。本人が言うように、これは相当な硬さである。戦艦の砲撃ですら食い止める程の強度なのだから、

しかし、その硬さであろうとも、この中で唯一、モノともしない者がいる。

「そういうのは……良くないと思います」

震えながら、怖がりながら、しかし後ろを向くことなく、潮が拳を突き出す。それが直撃した甲板は容赦なく爆散し、春雨の視界を遮る壁は次々と失われていく。

「お前、ホンマなんやねん！」

それだけは完全に想定外だったようで、一時的に潮に集中攻撃を仕掛ける。春雨の視界はしっかり遮りながら、砲撃と甲板による押し潰しを組み合わせて追い詰めようと複数の攻撃を繰り出した。
未だに格下と見ているのか、空母棲姫の艤装から降りようとしていないのだが、それが間違いであることにはまだ気付いていない。
「……怖くて、怖くて、堪らなく怖いけど、このヒトだけは許したらダメだってわかりました……こんなヒトに漣ちゃんも曙ちゃんも朧ちゃんも使われていたと思うと……不憫ですから」
砲撃は軽々と避け、押し潰そうと振り下ろされる甲板は軽く撫でるように払うだけで、致命傷どころか軽傷すら防いだ。
潮に仕込まれた技術は、そもそもが自分を守る力だ。敵を攻撃するよりも、その攻撃をいなす方が得意である。それがどれほど強力であっても、飛行場姫の教えを一切忘れることがない潮にとっては、それは全てこの程度という認識になる。
技術全てを継いでいる潮は、島から出られない飛行場姫の現し身のようなもの。その思いも引き継いで、自分の身を守るため、仲間の心を守るため、教えられたことを忠実に再現し続けた。
「コイツ、ふざけとんなぁ。でもええわ、お前なんぞに構ってられへん。どうせやれるのはそれだけやろが。近付かせなければどうということやあらへんわ」
「そういう時のために、あたし達がいるのよ！　このクソ泥女！」
潮から離れればいいと艤装を動かそうとした瞬間、潮の後ろから曙がすかさず雷撃。近距離戦闘のために覚えた、北上直伝の魚雷投擲。
爆発した瞬間に身体に治療薬を撒き散らす。砲撃よりは強力な火力ではあるが、本来の使い方ではないため、甲板を貫くかどうかは何とも言えない。それがまともな爆発をするのなら破壊は出来る可能性は高いものの、質量兵器をぶつけるのみであるため、貫くことはおそらく出来ない。
「んなチャチな攻撃が効くかいダボがぁ！」
「効かせるようにするのが、朧達だから」
さらにその後ろ、朧が砲撃を繰り出す。その砲撃には殺意も乗って

いるが、明石謹製の薬剤弾でもある。侵蝕の泥弾と同じで、直撃なら死をもたらし、掠るならば治療する。
「そして最後に漣ちゃんじゃい！」
さらにさらにその後ろから、曙の魚雷を押し込むように砲撃。こちらは薬剤すらも入っていない、殺意のみの一撃。
３人合わせての連携攻撃により、投擲された魚雷が海中と同じくらいの威力となって、甲板を撃ち抜いて爆発することとなった。潮の一撃と同じように甲板を粉々に砕き、同時に朧の放った薬剤弾が周囲に飛び散る。
「じゃかぁしい！　お前ら如きが、ウチに傷付けられると思っとるんか雑魚が！」
だが、念入りに止めるようにしているのか、甲板が1枚貫かれたところで、さらに2枚3枚と重ねられるため、龍驤に届くことはなかった。
龍驤の体力が続く限り、この甲板は無限に現れる。本来ならスタミナ不足である龍驤だが、他人を器として使うことにより、それも乗り越えていた。体力すらも他人任せ。
「壁が邪魔だね。どうにか出来ないかな」
「すみません姉さん。海風には少々力不足のようです」
鉤爪で戦う春雨の隣では、右腕を馬上槍のように変形させて貫こうと試みたが、1枚貫けても2枚目以降がかなり厳しいようであった。
せめて春雨の視界に龍驤本体を入れることが出来れば、この戦況は一気に優勢になる。最初の望みが『黙れ』でなく『動くな』だったら良かったと、春雨は内心舌打ちしていた。
「ほい春雨、ちょっと危ない、よ！」
そんな春雨の後ろから、北上が甲板に向けて魚雷を投擲する。その技術の元祖と言ってもいい存在であるためか、それは的確に1枚ずつ破壊していく。しかし、甲板の増殖速度が異常であり、破壊してもすぐに次の甲板が現れた。そのサイズや硬さが変わることは無かったが、とにかく数が多い。
幸いにも、今は龍驤が防戦一方になっているため、これと同時に繰

り出される攻撃が簡単に回避可能であった。まだ考える時間が与えられる。空母であるのにもかかわらず、使ってくるのが甲板による防御と砲撃のみだからだ。
その空母の要素もずっと出し続けているのだが、仲間達の空母隊がそれに拮抗しているのが大きい。そのおかげで、空襲にまで巻き込まれることは無かった。この中で上まで気にしていたら、まともに戦いが出来なくなる。
「……このダボ共が……後悔させたらぁ！」
しかし、ここで龍驤が突如空襲をストップ。空母隊をフリーにする代わりに、近場から確実に始末する方向へと切り替えてきた。
以前にも北上達の前で披露した、自らの周囲に艦載機の群れを飛ばし攻防一体の弾幕を放ちつつ、一部を上空へと舞い上げて爆撃まで放つ、本人曰く本気の技。その時はスタミナという大きな欠点を背負っていたが、今はそれもなくほぼ無限に発生させられる。
さらにその内側には甲板まで用意され、しっかりと春雨の視界も対策されていた。龍驤自身は春雨の力の詳細を知らずとも、あの紅く燃える瞳に見られてはいけないという部分は直感的に気付いたのかもしれない。
「またこれかい。でも、今は理に適ってるのかもしんないねぇ。近付けないや」
「北上さん、あまり余裕はありませんよ」
「わかってるよ大井っち。ちょっと下がろう」
近場にいる者達は、否が応でも間合いを取らざるを得なくなる。これによって、潮は攻撃手段を失ってしまった。むしろ、この射撃と爆撃の雨で恐怖が再発し、身体に刻みつけられた回避能力で致命傷は避けているが、泣きそうな顔で下がっていく。
この状態で砲撃を放っても艦載機に妨げられ、それを乗り越えたとしても甲板に防がれる。先程とは打って変わって苦戦を強いられることになってしまった。
その射撃は近くにいる者だけでなく、周囲でイロハ級を処理している仲間達にも影響が出ていた。今までは正面の敵だけを見ていれば

良かったものを、後ろからも横からも攻撃が飛んでくるようになったため、まともな戦いが出来なくなりつつある。
それにいち早く気付いたのは、最も空間把握能力を鍛えていた涼風。背後で起きた異変を即座に察知し、イロハ級よりも先にそちらをどうにかしなくてはならないと判断。
「江風、山風姉！　なんかやべぇことになってる！」
「うぇ!?　やべぇやべぇ、回避回避！」
全方位への攻撃ということは、つまりそういうことになる。しかも甲板で視界を覆っているため、完全な無差別攻撃だ。
気付けたおかげで涼風達は回避することが出来たが、本来龍驤の部下であるはずのイロハ級達は、何が起きているかも理解していないようにそれを喰らい、手をかけるわけでもなくその命を散らしていく。
「……何あれ」
山風が明らかに不機嫌そうな顔を見せた。敵も味方も区別することなく攻撃の手をさらに激しくしていく龍驤には、いい気分になる者はいない。明確に嫌悪感を露わにし、それでもまだ倒れないイロハ級をどうにかするために、周囲を警戒しながら対処していく。
「山風ちゃん、私は先にあっちに行ってくるわ～」
「……うん、後から追いつく、と思う」
荒潮は3人に任せて、龍驤への戦いに参戦する。この中では最も万能な戦いが出来るのは荒潮だ。イロハ級を処理するより、龍驤の対処に向かう方がいいかもしれない。
「周りの敵は私が抑えるから！　みんな、頑張って！　もっと私を頼っていいのよー！」
その代わり、今の今までずっと対空砲火に専念し続けていた雷も、イロハ級の処理に参戦。主砲だけではなく、手に持つ錨に装備を追加し、撃ちながらも打撃まで加えて、山風達と即座に連携を可能にした。
「Ｉｎｄｉｓｃｒｉｍｉｎａｔｅ（無差別）ａｔｔａｃｋ（攻撃）デスか……堕ちたものデース」
金剛も瑞鳳と葛城を守るために盾を展開してその攻撃を防いでいた。２人を守るならば、金剛１人でもまだやれる。ただし、攻めに転

じることはかなり難しい。
「比叡、叢雲、ここは私に任せて、あれを止めてくだサーイ。嫌でもＧｒａｄｕａｌ（ジ）ｄｅｃｌｉｎｅ（貧）になりマース」
「お姉さま、よろしくお願いします！」
「……助かるわ。私の怒り、あのクズにぶつけてやる！」
龍驤が勝手に周囲のイロハ級を押しとどめてくれているため、そちらに割く手が不要になる。そのおかげで、龍驤をどうにかするための人材が次々と投入されるようになった。
「鹿島さん、そちらは任せていいですか」
「問題ありません。近付くことは憚られますが、あの攻撃からこの子達を守ることくらいなら造作もありません」
黒潮と不知火を守るのを鹿島に一任して、古鷹も戦線へ。この２人は戦場からかなり離れることが出来ているため、あの砲撃の威力も大分落ちている。そのおかげで、鹿島のバルジだけでも十分に２人を守ることが出来た。
しかし、威力が落ちているということは、周囲のイロハ級にもダメージが無いということ。それを１人で捌くことはかなり難しいだろう。それでも、鹿島はやれると言ったのだ。
「勿論、私達も手伝いますよ、鹿島さん」
「空襲が無くなったからね。周りをどうにかするのが、空母の仕事ってヤツでしょ！」
そこに飛んでくる千歳と千代田の艦載機。次から次へとイロハ級を襲撃しては、翻弄しながら処理をする。鹿島への攻撃が向かないように、あえて空母でありながら敵の矢面に立ち、それでもその攻撃を回避しながら艦載機を操った。
「では、私もあちらに行けますね。あの硬い壁を、私が斬りましょう」
空母隊がフリーとなるのなら、大鳳も戦線に立てる。艦載機は不要とボウガンを消し、腰に差した刀を抜いた。大鳳の渾身の一撃ならば、潮の一撃よりも威力が出る。硬い甲板でも一刀で斬り伏せることが出来るだろう。
しかし、周囲を飛び交う艦載機は簡単にはどうにも出来ない。そこ

に関しては、与えられた戦艦の主砲が役に立つ。対空とはいかずとも、眼前まで降りてきているのならお構いなしに砲撃で撃ち墜とせるはずだ。

その様子を見ている内に、春雨の怒りはさらに増す。攻撃出来ない怒り。近付けない怒り。敵味方に関係なく龍驤がいい気になっていることへの怒り。次々と湧き上がる怒りに、その瞳の焔はより燃え上がる。

「気に入らない。許せない。自分が連れてきた仲間まで巻き込んで、自分のことしか考えないなんて、本当に、本当に、許せない！」

北上の手品

自分の身を守るためか、龍驤は以前に見せた自身の周囲に艦載機を群れさせる手段に打って出てきた。３６０度全方位に対して攻撃を行い、味方すら巻き込んで春雨達を全滅させようとしている。

あまりの猛攻に近接戦闘を主に行う者達はどうしても一時的に退かざるを得なくなる。遠距離からの攻撃も、その周囲を群れる艦載機と強固な甲板によって龍驤本人には届かない。

甲板を破壊出来た攻撃は、北上や漣達による魚雷投擲と、飛行場姫に鍛えられた潮の拳。今のところはそれだけ。だが、この周囲を容赦なく飛び交い射撃を続ける艦載機のせいで、魚雷は届く前に破壊され、潮はそもそも近付くことが出来なかった。

「砲撃……弾かれる。魚雷……届かない。空襲……防がれる。爆雷……魚雷と同じか。近接……近付けない」

常に視線は龍驤に向けながら、春雨が考え続ける。その力を発揮しようとしても、甲板で視線を受けないようにしているため、今の春雨の望み『動くな』が叶えられることは無い。

ならばと、艦載機側を視認した。意思を持っているのなら、力の影響下に入る可能性があると考えた。しかし、それだけでは止まらなかった。龍驤のコントロールする艦載機には意思が無い。ただの物。それをこの数動かし続けているのみ。

「それなら、全部ぶち抜いてやるわよ！」

ここでこの戦いに乱入したのが、今まではイロハ級から瑞鳳と葛城を守るために岩礁帯に残っていた叢雲。金剛に全てを任せて、龍驤を止めるために槍を握りしめる。叢雲の怒りは、限界にまで膨れ上がっていた。

叢雲ならば、近付くことなく近接戦闘を繰り出すことが出来る。少々特異な攻撃ではあるが、今この場で最も適している攻撃だ。

「ぶち込んでやるわ！　せぇーのっ！」

怒りの力を艤装に流し、槍に全てを注ぎ込む。怒りを発散せんがため、突き出した瞬間に巨大化、そして急激に伸びる。

これならば、魚雷よりも鋭く、威力もある一撃となるだろう。質量兵器の側面もあるため、そう簡単には止められない。
「そんな棒っきれが、ウチを貫けると思うなぁ！」
だが、甲板を何枚も重ね合わせることでそれを防いでしまう。２枚３枚と破壊は出来たが、４枚目には先端が刺さる程度で終わり、５枚目はもう傷すらついていない。
しかも、その隙を突くように主砲が叢雲に狙いを定めていた。やられたらやり返すを実践するように、凶悪な砲撃が叢雲に襲いかかる。
当然だが、その威力は戦艦並み。直撃は死を意味し、掠るだけでも相当なダメージになる。その上、その砲弾は泥製。掠った時、傷を負いながらも侵蝕すら受けることになってしまう。いくら叢雲が耐性を持っていたとしても、火力によるダメージはどうにもならない。
「チッ……」
即座に槍を消し、通常の長さにして再展開。そのまま砲撃を回避。衝撃で軽くフラつくことにはなるが、それ以上のダメージを受けることはなかった。着ているスーツも無傷。
ここで砲撃を放ったことで、その真正面だけは甲板の盾も艦載機の群れも失われる。叢雲にだけは、龍驤の姿が見えるような状況。
そこを見逃さなかった春雨は、脚の伸縮を活かした超スピードでそのラインへと移動し、龍驤をその視界の中に入れる。ガードがないその隙間を狙った砲撃のために、鉤爪を主砲へと切り替えながら。
「アカン、それは許さへん」
しかし、春雨の視界に入ることを是としない龍驤は、すぐに甲板を展開。目が合うどころか、その身体の一部すら視界に入らなかった。そして、砲撃を放ったところで艦載機を墜とす程度。
砲撃よりも視認することに重きを置いたのだが、砲撃を食い止めるために盾を増やされるとなると、春雨の力は届かない。
「わかったやろ。お前らはウチの前では無力なんや。這いつくばって全員死にさらせ。自分から頭（こうべ）を垂れて支配下に置かれるっちゅーなら生かしてやるわ」
「冗談は見た目だけにしなよー。借り物の力で支配者気取りはクソダ

サいぞミジンコー」
龍驤の言葉にすかさず煽りを被せる北上。この射撃と爆撃の嵐を、傘を差しながらヒョイヒョイと逃げ回る姿に、仲間達は感心し、龍驤は苛立ちを覚える。
唯一バリアを持っていない北上は、不意に傘の範囲から外れるだけでアウトだ。足下にも泥は溜まっているため、ステップを踏むにもかなりの神経を使う。無論、その辺りは大井がしっかりサポートしており、北上の進路を作るために薬剤を散布しながら共に回避を続けていた。
ちなみに、北上が回避する先に大井が先回りしてしまえば、足下にもバリアが作用するため、海上に浮かぶ泥は全て消滅する。大井はそこも考慮しながら行動を続けた。
「はっ、お前も口ばっかりやんけ。そんだけ言うならお前がウチを止めてみろや」
「そうだねぇ。それじゃあ、ちょいとやってみようか」
そういうと、指を鳴らすような仕草をする。龍驤本人には見えていないだろうが、艦載機からの視線で北上が何をしようとしているのかはわかっている。
「何のつもりや」
「あたしが指を鳴らした時、アンタは痛い目を見る」
どう考えてもはったりである。戦況は何も変わっていない。指を鳴らす程度では何も起きない。龍驤自身も体力はまだまだたっぷり残っている。泥となる前のスタミナ不足状態とはわけが違う。
「やってみぃや。ハッタリぬかしとんのちゃうぞ」
「それじゃあ遠慮なく」
パチンと指を鳴らした。その間も攻撃の手は止めていない。そして、指を鳴らしたくらいでは、やはり何も起きない。
龍驤もそのハッタリにほんの少しだけ警戒はしていた。今までに二度も自分に苦汁を飲ませてきた北上がやることだ。本当に何か起きるのではとどうしても考えてしまう。しかし、艦載機から見える全ての視点から何も起きないことは確認済み。

「……やっぱりハッタリやんけ。何が痛い目を見るや。クソザコが」
何も起きなかったことを鼻で笑おうとした龍驤。だが、北上の目は自信に満ち溢れていた。
そして、その瞬間、龍驤が腰掛けている空母棲姫の艤装が強烈な爆発に見舞われた。
「なっ……!?」
「ほらね。あたしの予言通りだ。痛い目を見たろ」
一瞬何が起きたかわからなかった。しかし、今のは確実にダメージだ。艤装が動かなくなったわけではないが、その衝撃は龍驤本人にも届き、北上の宣言した通りに痛みを感じる羽目になった。
３６０度の視野で見ているにもかかわらず、その視覚から出来ることなど無いと確信していた。北上は傘を差しているため、真上からの確認は出来ないが、周囲を飛び交う艦載機がその行動の一部始終を見ている。それでも回避に徹していたし、放った魚雷はその悉くを艦載機の射撃によって破壊していた。他の者は尚更だ。あの春雨ですら、今は龍驤への攻撃に苦戦している程。それなのに、何が起きたというのか。
「それじゃあ、次に行こうか」
もう一度、指を鳴らす仕草。一度起きたことは、二度起きる可能性が出てくる。
「この、何しおった北上ぃ！」
龍驤の言葉など無視して、もう一度指を鳴らす。流石に二度目は喰らうわけにはいかないと、龍驤は艦載機を群れさせながらその場から移動を開始。北上に突撃するように突っ込む。回避しながらも北上をどうにかしようという、一石二鳥の手段。
だが、またもや艤装が爆発に見舞われる。動いていたからか、先程の場所よりも少し後側。しかし、1発だけでなく2発3発と喰らったような衝撃。流石にこうも喰らうと艤装にもガタが出てきたようで、北上への突撃が中断される。
「アンタにゃわからんでしょ。ほーんと、自分のことしか見えてない自意識過剰ちゃんになっちゃってまぁ。正直、軽空母の時の方が苦戦

したまであるね。アンタ、今の方が確実に弱いよ。こっちも人数揃えたってのはあるけど、変に力持ったせいで慢心が余計にでっかくなってるし。あれ、もしかして自分の理想的な身体を手に入れたからかな？　なんでも出来る気になった？　アッハハ、流石だねぇ」

完全におちょくっている北上だが、やはり目は笑っていない。

「力を借りすぎて本来の自分を見失うとか、わかりやすくクソザコちゃんだよね。なーにが支配者の力だ。知ってる？　そういうこと言う奴って、まず間違いなくイイ死に方出来ないんだよ。まぁあたしが読んでる漫画とかではだけどね」

動揺というわかりやすい隙を見せたところに、元祖である北上による魚雷投擲。教えられてその手段を使っている涼風や曙とは段違いの鋭さで龍驤に向かっていく。

「何度も見とれば、その程度喰らわへんわぁ！」

龍驤も負けじと艦載機からの射撃で迎撃し、その魚雷をしっかりと防ぐ。念のためか、甲板を２枚３枚と重ねたことで、爆風すらもシャットアウト。

しかし、その時にはまた北上は指を鳴らしていた。その瞬間に当たり前のように龍驤の艤装が爆発に巻き込まれ、ついにここで艤装が明確に破損を見せた。同じ場所とはならないが、何度も艤装の底に爆発を受けていたら、いくら深海の強固な装甲といえど、中破大破となる。

「あたしのは喰らわないかもしれないけど、こっちは喰らうんだよなぁ。いやぁ、節穴でありがたいわぁ」

未だに龍驤は何が起きているかわからない。この北上の手品には、とてもわかりやすいタネがあるのだが、ヒトを見下すことしか出来なくなった龍驤には、それが見えていない。

「……なるほど、そんな簡単なことなのに、見えてないんですね。本当に節穴」

春雨がボソリと呟く。海風がえっという顔を見せるが、春雨が口元で下を見てみてと伝えられたため、海の中を見る。当然目視ではわからないが、ソナーを使うと一目瞭然だった。そこには、潮を守るためについてきている潜水艦姉妹がいた。龍驤が気付いていない海中か

ら、ただただ魚雷を放っていただけである。
　そもそも北上は何もしていない。潜水艦姉妹が、潮のピンチに合わせて雷撃しているに過ぎない。都合よく龍驤はその場に止まっていてくれるため、海中からはさぞ狙いやすかっただろう。それには北上も気付いていた。そのため、あえて自分の手品だというように見せかけて、タイミングよく指を鳴らした。
　結果として、それが見えていない龍驤には潜水艦姉妹の存在が認識出来ない。対潜を出来る力も混じっているというのにもかかわらず、それをしていないのは慢心か、それとも北上の誘導のおかげか。
「この……ダボがぁ！　ウチはこんなふざけたことで、負けるわけが無いんやぁ！」
　大きく手を振るうことで、さらに艦載機を発艦させ、群れをより濃くする。だが、艤装が中破したことで、周囲に飛び交う艦載機の動きが悪くなった。龍驤自身が操作しているのは甲板の方であり、艦載機は空母棲姫の力を引き出すことで行っているらしく、艤装とリンクしているようだ。破損状況が反映された。
　つまり、その数が増えたとしても、艦載機からの視界は逆に減ったようなもの。完全な全方位に視界が行くようにはならなくなる。
「射撃が甘くなったよ。そんじゃあ、よろしくどうぞー」
　北上がニヤリと笑った瞬間、近接戦闘で甲板が破壊できるであろう3人が飛び出した。
　1人目、比叡。甘くなった射撃ならば、比叡の実力で全て斬り払える。高速戦艦という名を体現するような動きで近付いていき、ついに甲板に触れられる場所まで。
「だらぁあああいっ！」
　2本の刀剣を力強く振り下ろしたことで、数枚重ねられた甲板すらも叩き斬った。その勢いは凄まじく、海が割れるかと言わんばかり。
　2人目、大鳳。程度が落ちた射撃を掻い潜り、持ち前の運動性能で艦載機の群れの内側まで移動。そこで強く踏み込む。
「甲板はこうやって使うものじゃありませんよ。私の中の伊勢と日向も、苦言を呈しそうですね」

その踏み込みの力を存分に発揮して、甲板を纏めて横薙ぎにした。比叡と同様、こちらは空気を裂くかのような勢いである。
そして3人目、潮。飛行場姫に鍛えられたことにより、最も育っているのは回避性能。自分の身を守るため、敵の攻撃が当たることは一切なく、甘くなった攻撃くらいなら恐怖に苛まれながらでも余裕で回避が出来る。それくらい身体が覚えていた。
「怖い、怖いけど、やっぱり許せません……そんなの、味方も犠牲にするような戦い方をするヒトを、許しておくわけには、行きません！」
そして強く、とても強く腕を突き出した。音すらも置いてけぼりにするような渾身の拳は、直撃した甲板どころか、周囲の艦載機すら爆散する衝撃を生み出した。
3方向から一気に甲板が破壊されたことで、ようやく龍驤は考え方を改める。格上だ格下だ言っている余裕なんて何処にも無い。そんな単純なことを、今更気付いた。

それがもう遅いということに気付くには至らなかった。
「動くな」
春雨が甲板の内側まで来ていたのだ。その視界に入ったことで、『望み通りの答えに辿り着く力』の影響下に入った。龍驤の身体が途端に動かなくなる。
「お、おま……」
「貴女には罪しか無いですが、その身体には罪がありませんから。まずはその器から出ていきなさい」
怒りを込めた蹴りが、その胸に突き刺さる。そして、ダンと、脚の伸縮を利用した渾身の一撃。
それが、龍驤の、空母棲姫の心臓を一瞬だけ止めた。

掌の上

「貴女には罪しか無いですが、その身体には罪はありませんから。まずはその器から出ていきなさい」

怒りを込めた蹴りが、その胸に突き刺さる。そして、ダンと、脚の伸縮を利用した渾身の一撃。それが、龍驤の、空母棲姫の心臓を一瞬だけ止めた。

「お前、ウチに何を……」

身体が一瞬死んだことにより、泥はその身体から外に出ようとする。だが、龍驤は泥と違って単純思考ではない。ただの侵蝕とは違い、龍驤という意思が器に取り憑き、その身体を使っているに過ぎないのだ。

だが、その蹴りを繰り出したのが、『望み通りの答えに辿り着く者』である春雨。こうすれば器が救われるという道が見えてのこの一撃だ。当然ながら、いつもながらの反応が器側に現れる。

「っぶ!?」

突然の吐き気。そして、自分が自分で無くなるような感覚。いや、他の器を手に入れる時の感覚を強制的に引き起こされているような感覚に襲われた。一瞬だけでも心臓が止まったことは、龍驤にも無意識的にこの身体は死んだと認識させたようで、別の身体に移らなくてはならないという本能を刺激されていた。

実際、今の龍驤には死という概念はもう無い。強いて言うなら、泥を消滅させる波長をぶつければ始末は出来るが、器を殺したところで次の器を探すのみ。逆に言えば、消滅させない限りは永劫生き続ける存在となっている。

それもあるため、器の死にはヒト一倍敏感になっている。亡骸の中には入ることが出来ず、亡骸となったら動かすことも出来ない、他の泥と同じ性質を持ってしまっているのだ。これは黒幕の危機管理能力の賜物でもあるため、龍驤は何も文句は言えない。おそらく文句を言うための思考も削除されているだろうが。

「っお、おぼろろろっ!?」

龍驤が――いや、空母棲姫が、一気に口から泥を吐き出す。その勢いは今までの比ではなく、侵蝕されているのではなく、ヒト一人が入っているくらいの量がその場に撒き散らされた。
しかし、それはバラバラになるわけではなく1つの塊としてそこに流れ出していた。今までと違うのは、やはりその泥が一個体として成立しているからだろう。これそのものが龍驤だから、千切れることもなければ飛び散ることもない。むしろ、ここから離れたら本来の侵蝕性の泥になるか。
空母棲姫の器から泥が吐き出されたことによって、悪意の雨も止んだ。艦載機をコントロールするための器が失われたため、超高高度の艦載機も消えたようである。
『っの、ふざけんなや……ウチはまだ、まだ負けとらんぞ……』
何処からか聞こえる龍驤の声。と言っても、その声を発しているのは、空母棲姫から吐き出された泥の塊であることなど一目瞭然である。どのような原理で泥が喋っているかは謎だが、間違いなくこの場にいる全員がその声を聞いた。
「往生際が悪いねぇ。そんな姿になって何が出来るってのさ。ヒトのカタチにでもなれるのかな」
相変わらず煽る北上。しかし、その泥は消し飛ばす暇も与えずにヒト型へと変化していった。最終的には、大概の者が知っている龍驤のカタチと成った。
とはいえ、泥から強引にヒトのカタチを取ろうとしているため、二足歩行になることは出来ず、まるで腰から上が泥溜まりから生えているような見た目。そして色も泥と同じ黒一色である。
『まだや。まだ器があればウチは戦える』
「誰かが差し出すと思っているんですか？　浅はかですね」
勿論、春雨はその龍驤の姿を取るようになった泥を凝視していた。望む答えは『動くな』のままである。
しかし、龍驤はその影響下の中でも泥から今の姿へと変化した。影響を受けているのなら泥の状態から変化することも出来なかったはずなのに、それが出来たということは、今の龍驤には春雨の力が通用

しない。
　その理由は直感的に気付ける。今の龍驤は龍驤として認識は出来るものの、北上が言った通り、寄生虫の群衆のような存在。数百数千では利かないレベルの数がそこで群れることで、龍驤という存在となってしまっている。ただでさえ認識出来ないほどのサイズと量。そもそも視認出来ているとも言えないし、数が多過ぎてその全てに影響を与えることが出来なかったのだ。
　事前にそれが知れたのは良かった。今の春雨の力は、黒幕にも通用しないということになる。覚醒したばかりだからか、制約が非常に多い。今の春雨が泥を消滅させるのならば、直に触れるかマグマを流し込むかしないと無理ということになる。見ただけでは泥に干渉出来ないのだから仕方ない。
「ゲホッ……カハッ……え、わ、私は……」
　ここで龍驤が外に出たことで空母棲姫が正気を取り戻した。しかし、器として使われている期間の記憶がかなり曖昧のようで、自分が何故ここにいるかもまともにわかっていない。
　だが、艦娘と同胞（はらから）に囲まれているという状況に驚き、さらには目の前にいるヒトのカタチをする泥を見た途端に錯乱。快楽の中で自分が自分で無くなっていく感覚を思い出したようで、ある意味恐怖に呑まれているような表情で後退りをした。
『もう一度コイツの身体を使ったらええだけやわ』
「させるわけないわよねぇ」
　そこに乱入してきたのは、なんと荒潮。泥の塊と空母棲姫の間に割り込んだと思いきや、即座に主砲を龍驤に向ける。泥に向けて撃ったところで意味がないことは理解しているし、龍驤自身ももうこの程度の攻撃ならばダメージすらないことを理解していた。
　とはいえ、格上だ格下だと考えることをやめたことで、この荒潮も泥である龍驤を始末出来るという自信があるからこそ割り込んできたのだと察する。故に、自身の身体が泥であろうが、その砲撃は喰らうわけにはいかないと、まるで海上を滑るように動き回る。
『ほんならお前の身体使うたるわ。ちゅーかお前、アレか、あん時のド

ロップ艦かい！』
「あらぁ、覚えていてくれて嬉しいわぁ。貴女にはと～～っても恨みがあるの。ヒト様を使って、ただで済むと思わないでちょうだいね」
　どれだけ素早く動き回っても、荒潮の照準から逃れることが出来ない。しっかりとその動きを見据え、さらには次の動きまで予測して、進路も退路も確実に塞ぐために砲撃を繰り返す。
　荒潮の砲撃も当然ながら薬剤入り。今の龍驤は実弾や斬撃などは効かないかもしれないが、唯一確実にダメージを与えることが出来る攻撃になる。龍驤は知ってか知らずか、それも当たってはいけないものと判断して避け続けた。
『このっ、抵抗すんな！』
「こっちのセリフなのよねぇ。むしろ何故抵抗しないと思っているのかしらぁ。よっぽど頭の中がスカスカなのかしらぁ。ううん、ぎっしり詰まっているわよねぇ。寄生虫が」
　時折、荒潮の顔面に飛び掛かろうとするのだが、それも予測されており、さらりと避けられた挙句に砲撃を浴びせられる。
　むしろ、荒潮に極限まで近付けた時ですら、それ以上近付いたらまずい何かを感じ取っていた。ここでようやく、バリアの存在を理解する。
『お前ら、そうか、あの雨の中でもまともにおれたんは、そういうことかい』
「あらぁ、や～っと気付いたの～？　ほんっとうに、そのお目めは節穴なのねぇ」
　北上に続いて荒潮からも煽られ、龍驤の苛立ちは頂点へ。あまりにも自分の思い通りにならなすぎて、逆ギレ状態である。
「貴女はこちらへ。事情は説明しますが、ここにいることが危険ですから」
「お、お前、は」
「貴女がどうであれ、被害者は救いますから。出来れば従ってくれると嬉しいです」
　錯乱する空母棲姫の側に駆け寄ったのは古鷹。艤装が破壊されて

茫然と膝をついていたが、その場にいると本当に龍驤に再度乗っ取られかねないので、この場から離れてもらうことに尽力する。
空母棲姫はわけがわかっていなかったが、あの泥が自分をおかしくしていたというのは即座に理解出来たため、それから救ってくれそうな古鷹には素直に従った。見た目はどうであれ、同胞(はらから)であったために多少は安心出来たというのもある。
『この、邪魔や、退けぇ！』
「なんでぇ？　私達の言うことを聞いてくれないヒトの言うことを聞かなくちゃいけないのかしらぁ。もしかして、この期に及んでまだ格上だの格下だの考えてるのかしらぁ？」
「そうだぞー元ご主人様。往生際が悪いと嫌われちゃうぞ。あ、もう嫌われてるから気にしないか」
荒潮と龍驤の戦いに、漣も参戦。最初の器にされたことに恨みも大きく、さらに砲撃を重ね合わせることで、より進路と退路を塞ぐ。
遠距離に特化した上に、実力としてはまだ3分の1というところの漣が前に出てきているのは危険ではあるのだが、龍驤を煽るには充分なスペックを持っているため、あえてこの策に出ている。
これも北上考案。
「そもそも私達には貴女は触れられないわぁ。もうわかっているんだから、諦めなさいなぁ」
「そうそう。充分好き勝手やったんしょ？　だったらもう満足っしょ？」
2人に煽られながらも、龍驤は逆転の一手を常に考え続けていた。悪意の雨の中でも、荒潮や漣はそのままで侵蝕を受けることは無かった。むしろ、ここにいるものはほぼ同じ状態。深海棲艦達は雨の中でも大丈夫なように、全身を覆うスーツを着ていたくらいである。
しかし、ただ1人違う者がいた。雨に打たれても侵蝕されないという何かを身につけているはずなのに、悪意の雨を受けないはずなのに傘を差している者がいた。その者だけは、この悪意の雨を弾くことが出来ないということにほかならない。
『まだや、まだウチは負けとらん。ウチは死なないんやからなぁ！

それに、まだ器になる身体がそこにおるやんけ！』
一瞬の隙を突いて、荒潮と漣の砲撃を掻い潜り、傘を差す者、北上に突撃。バリアを唯一張っていない者であることを看破し、その身体を奪うことでこの状況を打開しようと画策した。
器を失い、敵に囲まれ、最後に残された龍驤の希望は、最も気に入らず、天敵と思っていた北上の身体だ。龍驤としてはもう苦肉の策ではあるのだが、ここから逃げられない以上、器を手に入れることの方が先決と考えた。
それも北上が誘導していたことにも気付けず。
「きゃー、あたし狙われちゃうー。助けてー」
明らかに棒読みであるため、そこまでもが北上の掌の上であることにこのタイミングで気付いた。
「ホントにバカだねぇ。単細胞の集合体みたいなものになったからかな。なんであたし達がアンタがそういうことするように仕向けてるとわからないかな」
飛びついてくるのは顔面。これは漣からの証言で知っている。おそらく、龍驤は頭からしか入れない。そうするときというのは、海面からも飛び出している状態になるため、いきなり姿勢を変えることも出来ないだろう。
普通なら反応出来ないくらいの速度であるのもわかる。水飛沫を全て避けろと言われても簡単には出来ない。だとしても、それが来ると最初からわかっていれば、ある程度の反応は出来た。
北上はそのタイミングを待っていたのだ。望まれているのは、龍驤の始末ではなく捕獲。黒幕との戦いに向けて、最後の研究をするための材料を手に入れるための一手を放つ。
「アンタは目敏いと思っててさ、あたしだけが侵蝕が効く状態であることをさりげなく……というか、めちゃくちゃわかりやすく見せてたんだよ。釣れるかなって思って。そうしたら見事に釣れたよね」
ここで北上が繰り出したのは、何かよくわからない粉。龍驤が襲い掛かる寸前でぶち撒けることで、それを泥と化した龍驤に混ぜ合わせた。

『なっ!?』
「これが狙いだったんだよ。明石謹製、『泥凝固薬』がアンタに効くかを確かめるためにね。まぁ１００％効くのはわかってたんだけどさ」
砲撃に混ぜ合わせたら、どうやっても回避されるだろう。だからといって、近付いてぶち撒けても警戒されるだろう。
それ故に、自分を囮に使って薬を確実に龍驤に付着させることを最優先にした。北上がやりたいことと言っていたのはコレ。自分を使った囮戦術。周りの仲間には確実に被害がなく、だからといって自分も最低限のリスクで終われる手段を明石ならば作っていると確信して。
『ぐぉ……な、なんや、これ……』
北上に飛び掛かろうとしたポーズで動かなくなった龍驤。その表面が凝固し、コンクリートのように固まっていた。しかしその内部は泥のまま。本当に周りだけが石化したようなものである。
「ヒトのカタチならこんなことは起きなかった。泥だからこれが出来た。ぜーんぶ、あたしの掌の上だったってことだよ、龍驤ちゃーん」
荒潮に合図をすると、ニッコリ笑ってその固まった龍驤に向けて展開したドラム缶を被せる。それは勿論、明石謹製の捕獲用ドラム缶。固まった状態でも詰め込めるようにして、その全てを中に格納した。
その内部では凝固が終わり、泥の姿には戻れたのだが、内側から外側に出ることは不可能なように設計されていた。
『おま、北上、北上コラァ!』
「やったね龍驤ちゃん、新しい身体だよ。寸胴なアンタにゃお似合いな身体だ。それがお前の最後の身体だ。喜べ」
ドラム缶をガンと殴り、龍驤を黙らせた。

被害者は出たものの、これでようやく龍驤との戦いは終わる。

死を受け止め

龍驤が捕獲用のドラム缶に封じられることによって、前哨戦は終わりとなった。泥と化した龍驤にはドラム缶を内側から破ることは出来ず、外側から開けてやらない限りはずっとこのまま。強いて言うならこのドラム缶そのものが破壊されれば脱出は可能だろうが、そうなることはまず無いだろう。このまま鎮守府に運ばれて、明石の研究材料となるのだから。

しかし、外側の音は聞こえているし、内側から話すことも出来るため、黙らせるのは至難の業。そこは北上がうまく黙らせたようである。

「それじゃあ荒潮、これはよろしく」

「はぁい。これは私の装備だもの、ちゃんと鎮守府まで運ぶわぁ」

担ぎ上げるわけでもなく、縄で結んで引きずるようにドラム缶を運ぶこととする。中に衝撃が走るかもしれないが、今の龍驤には何も感じないだろうから問題ないと、手早く持ち帰る準備をした。

部隊が撤収の準備をする中、春雨は自分が斃し、治療した瑞鳳の元へと向かう。ここに放置するわけにもいかず、状態が状態なので、施設に運ぶこととなる。

そしてそこには、忌雷に全てを使われて息絶えた葛城の亡骸もある。少しだけ回復した瑞鳳は、1つ間違えていれば自分もこうなっていたということに恐怖し、また、間に合わなかったことを悲しんでいた。

「春雨、私は瑞鳳に触れるのはやめた方がいいと思ったので、貴女に任せマース」

「……はい。私が運びます」

ずっとここで守っていた金剛が、悔しそうな表情で岩礁帯から離れる。バリアが効いている以上、その存在をマグマによって書き換えられたとしても、泥製である忌雷がバリアによって消滅してしまいかねないため、瑞鳳にも葛城にも近付くことが出来なかった。

「……瑞鳳さん、戦いが終わりました。貴女の状況から、鎮守府ではな

く私達の施設に来てもらうことになりました。よろしいですか」
そう言われ、瑞鳳は顔を上げる。泣き腫らしたような目ではあったが、救われたという自覚はある。春雨に視線を向けると、力強く頷いた。
当然、瑞鳳は春雨に対して大きな感謝を持っている。今の自分があるのは、全て春雨のおかげと言っても過言ではない。命の恩人であり、悪虐非道な侵略者から解放してくれた救世主。胸に何かよくわからないものがついてしまっているとはいえ、生きているのだからまだ前を向く事は出来た。
「葛城は……どうするのかな」
やはりそこは気になるようで、どうか蔑ろにしないでもらいたいと目で訴えていた。
ここに存在する葛城は、もう二度と目を覚ますことのない亡骸だ。そのままにしていても何か起きるわけではない。
しかし、春雨達にとっては、救うことが出来なかった象徴だ。丁重に弔いたい。放置なんて以ての外。
「勿論、弔います。ですが……」
ここで言葉を濁すのは理由がある。施設には、死という概念を意識することで暴走してしまうコマンダン・テストがいるのだ。この戦いでの結果を話として聞いてもどうなるかわからないのに、亡骸そのものを目にしたら、それこそ何が起きるかわからない。
そのことを考えると、この亡骸は施設に運ぶことなく鎮守府に運んでもらいたい。不安要素を取り除くためにはそうなっても仕方ない。
「そっか……。でも、弔ってくれるのなら安心した」
説明を受けたことで納得した瑞鳳。弔う場面に居合わせることが出来ないのはとても残念のようだ。
瑞鳳自身、自分が置かれている状況を正しく把握は出来ている。まともな艦娘では無いし、戻ることも出来ない。ドロップ艦だとしても、鎮守府に所属することはもう不可能。まともに生きていけるかすらわからない。
「自分で動けますか」

「うん、ある程度は休ませてもらっちゃったから。でも、まだフラつくかもしれない。肩とか貸してもらえると嬉しいかも」
「問題ありません。海風、お願い出来る？」
「了解です。姉さんは葛城さんを？」
無言で頷き、もう動かない葛城を抱きかかえる。身体のサイズ的に少し持ちづらかったものの、艤装や義腕を変形させてうまく支えた。海風も瑞鳳に肩を貸して、岩礁帯から抜け出す。
忌雷と同化してしまっていても艤装は普通に扱えるらしく、海上移動にも支障はない。むしろ忌雷の方からそれをサポートするように触手を伸ばし、出力が上がる始末。春雨のマグマが注入されて変質されたからか、見た目からは考えられないくらいに紳士となっていた。まるで戦艦棲姫の艤装である。
２人を連れて部隊と合流。そこには、今回の被害者である黒潮と空母棲姫、そして亡骸となった不知火も運ばれていた。やはりバリアがあることから近付くことも難しいため、基本的には大鳳と古鷹が支えている。
空母棲姫は未だにわけがわかっていないようで、常に頭の上にハテナマークが浮かんでいるような状態。そちらは今まで器になっていたとはいえ、消耗はそこまで激しくないようだったため、自分の足で海上に立っていた。艤装は破壊されてしまっているが、ただ航行するくらいなら出来るようである。
「……ぬいは……やっぱもうあかんの？」
手を震わせながら、黒潮が不知火を抱える大鳳に尋ねる。春雨の抱える葛城と同じように、不知火も大鳳の腕の中でぐったりとしていた。まるで眠っているかのように力尽きている分、現実味がどうしても湧かないようだった。
しかし、触れている春雨と大鳳には嫌というほどわかる。その肌は海上にいるという理由だけではない冷たさであり、鼓動も何も感じない。もう動かないと伝わってくる。
「……うん。力を尽くしたけど……間に合わなかった」
悔しそうに呟く春雨。本当だったら救えたかもしれない命が、ここ

で散ってしまったこと。それがどうしても心に刺さる。戦いの最中に龍驤が煽るために口にした言葉、何故自分は救われなかったのかと恨んでいると言われても、それは否定出来ない。片方は救われて、片方は救われなかったのだ。差が出てしまっている以上、双方から文句を言われても反論なんて出来やしなかった。

「……力を尽くしてくれたんやろ。なら、ぬいはアンタのこと恨んでなんか無いよ。ギリギリまで救おうとしてくれたヤツを恨むほど、ウチもぬいも根性捻じ曲がっとらんからね」

拳を握り締めながらも、黒潮はこの現実を納得しようと心掛けていた。当然、自分が救われているのに不知火が救われなかったのは何でだという気持ちはある。救うのなら不知火も救ってほしかったという気持ちは、嫌でも膨れ上がってくる。

だが、春雨の表情を見たら、そんな気持ちは引っ込んでいった。この大惨事を生んだ龍驤を完璧なカタチで討ち倒したのに、その勝利を喜ぶわけでもなく、失われた命に悲しんでいるのだから。

「ウチはぬいの分まで生きるわ。こんなの付いてしもうてるけど、なんや、よう見たら結構可愛いやん」

胸に同化した忌雷を軽く撫でると、それに呼応するように忌雷も触手を伸ばして黒潮の頭を撫でた。こちらも瑞鳳の忌雷と同じように、宿主のことを思い遣る紳士となっている模様。

可愛いという発言に対して同意する者はあまりいなかったものの、ヒトそれぞれのセンスなので何も言わない。

「あとは貴女だけですが……一度私達の施設に来てもらっていいですか」

「あ、ああ」

残りは空母棲姫。勿論被害者であるため、事情は話しておきたいというのはあるのだが、この場で全て説明するのは難がある。施設で腰を落ち着けてから話すべきだろう。

春雨も同胞(はらから)。それがそう言うのだから、今は素直に従う。侵略者気質は錯乱と恐怖で完璧に鳴りを潜めていた。むしろもう表に出てくることは無いのかもしれない。

「……ところで、なんだが」
「はい、答えられることは答えますよ」
「そいつ、そいつは私をおかしくした張本人、なんだが」
空母棲姫が指差す先にいるのは、漣である。生まれた直後に漣と出会い、不意をつかれるように泥を吐き出され、抵抗する暇も与えられずに器にされたことはハッキリと覚えていた。
漣が龍驤の器となっている時にやったことであるため、漣本人としては記憶が曖昧。しかし、自分が空母棲姫を陥れたこと自体は知っているので、ばつが悪そうな顔をする。曙や朧は、あえて逃がさないように退路を塞いでいた。
「漣ちゃんも、貴女のように利用されていたんです。なので、その頃のことは覚えていないと思います。貴女がそうであるように」
「……そう、なのか。なら、私をおかしくしたのはやはり」
「はい、今はあのドラム缶の中に入っている汚らしい泥です。貴女の前には二度と現れないので安心してください」
簡単には納得出来ないかもしれないが、漣も自分と同じであると言われたら、そうなのかと思うしかなかった。相手が本来敵対する艦娘であるのに、そういうことがあるからか、空母棲姫的には漣に不思議な仲間意識を持つことになる。
逆に、ドラム缶の中にいるという泥に対しては、敵対意識どころか、殺意や恨みすらも浮かんでくる。自分を滅茶苦茶にした張本人をこの手で始末したいという、侵略者気質の深海棲艦が持つ強い負の感情も表に。
「安心してください。これからあの龍驤には、死より辛いことが起きると思いますので」
「そ、そう、なのか」
「はい。それに、一応ですけどあのヒトも被害者なんです。元々はただの艦娘だったんですけど、この事件の黒幕に操られて、あんな取り返しのつかないカタチにされています。恨みも憎しみもありますが、元に戻るようなことがあったら……それも無かったことにするつもりではありますよ」

その可能性は０ではあるのだが。泥となった龍驤が元の艦娘に戻ることなど、まず間違いなく無理。あの明石ですらお手上げ。ただ、何かしらのカタチで艦娘としての意思を取り戻したとしたら、今のような憎しみばかりではなくする。

むしろ、正気を取り戻したら取り戻したで、今までやってきたことと今の自分の状態を悲観して、さらに壊れてしまいかねないが。

ここで、部隊から少し離れていた金剛が、比叡と共に合流。その手には、旗艦が持つ鎮守府との連絡に使うタブレットが。

「今、鎮守府の方に連絡しましタ。少し時間はかかりますガ、宗谷が来てくれるノデ、葛城と不知火は直接鎮守府に運んでくれマース」

龍驤がドラム缶に封印され、他の者達は侵蝕されていても艦娘であるため、通信障害は起きなかったようである。そのおかげで、この戦場からでも鎮守府に連絡することが出来たようだ。

向こう側では、戦いに勝利出来たことを喜ぶ一方、被害者のうちの２人が命を落としてしまったことは悔やんでいたとのこと。やはり誰も死なない戦いを望んでいるため、それがどういうカタチであれ、完全勝利とはいかない。

「施設に戻ったら、またこちらから鎮守府にも連絡しますね。こんなカタチにはなってしまいましたが、瑞鳳さんと黒潮ちゃんは艦娘でもありますから」

「Ｏｋａｙ．　それがいいと思いマース」

「処遇はそちらで考えていただけるとありがたいですね。こちらの施設も大分大所帯になってきましたから」

そろそろ本格的に施設がパンクしかねない状態。ただでさえ畑を失い、遠征にもまだ行けていない状況だ。これ以上人数が増えた場合、もう養えないというところにまでなってしまうかもしれない。

艦娘は鎮守府にいるのが普通だ。しかし、瑞鳳と黒潮は普通とは違う。ここの処遇はかなり難しいところである。

「では、宗谷が来るまでは事後処理をしながら待機デース。その後は、私達と施設のヒト達は別れて、各々で帰投というカタチでお願いしマース」

これで本当に戦いは終わり。空気はどうしても重くなるが、まずは休息の時間を得ることとなる。

前哨戦を終えて

前哨戦を終え、鎮守府に連絡したことで訪れた宗谷と合流した部隊は、鎮守府組と施設組で分かれて帰投することになる。事後処理として海域に散らばる泥がもう失われていることは確認済みであり、元からそこには何も無かった状態となっているため、安心してその場から離れることが出来た。

念のため潜水艦姉妹が時間の許す限り海中も探索しており、やはり何もないことを確認している。龍驤の隠し球のようなものが海中や海底に仕込まれているなんてこともなかった。

「お疲れ様ぁ」

高高度から見られていたため、島に到着した時には中間棲姫が出迎えてくれた。それだけでなく、妹達の安否が気になっていた白露や、潮が戦えていたか心配していた飛行場姫、叢雲のために甘い物を用意していた薄雲もここにいる。

最初に出て行った時よりも人数が増えていることに気付き、今回の戦いで救われた者をここに連れてきたのだろうと察する。しかし、そのうちの2人が、今までに無い姿であったため、流石の中間棲姫もどういうことなのかさっぱりわからず。

こんな施設があることなど知らない初めての3人は、驚きで目を丸くしていた。いくらドロップ艦や生まれたての姫だとしても、この施設が普通では無いことくらいは見ればわかる。

「ただいま戻りました。龍驤は生かしたまま捕獲され、鎮守府に運ばれています。理由があって、別々に帰投することになりました」

少し重い雰囲気になっているようだが、無事に帰投出来たことを伝える春雨。ここまで来ればもう大丈夫と、スーツも消していつもの服装へと戻る。それをきっかけに、他の者達も普段の服装に。

「そうなのねぇ。みんな、お疲れ様ぁ。誰一人欠けていないみたいで本当によかったわぁ。怪我をしている子はいないかしらぁ」

「ありがたいことに怪我人はいませんが、疲労がピークに来ているヒトはいます。すぐに休ませてあげてください」

古鷹と大鳳が該当する。戦いが終わり、帰るべき場所が目に入ったことで、元々足りないスタミナの分がどっと来てしまったようで、今になって疲労困憊となっていた。それでもギリギリまでは耐えて、ここまで辿り着くに至る。

２人とも本当にギリギリだったか、陸に上がったところで膝をつき、これ以上は動けないと訴えているようにへたりこんでしまった。

「スタミナ不足が、本当に足を引っ張りますね……」

「自力で部屋まで戻りたいですけど、ちょっとこれは無理そう……」

大鳳と古鷹は揃って苦笑。これはヘルプが必要だと、白露がそそくさと戦艦棲姫を呼びに行った。彼女の艤装ならば、２人を運ぶことくらい余裕だろう。それまではここで休んでもらうことに。

「えぇと、まず貴女達は……それはどうしちゃったのかしらぁ？」

続いて、胸に忌雷が同化してしまっている２人、瑞鳳と黒潮について。これに関しても、春雨が説明した方が早いため、事情を掻い摘んで説明した。

春雨のマグマによってその性質が変化しており、２人を生かすために動き続ける生体艤装のようなモノということで納得することになるのだが、そうなった流れも話すことに。

「なるほど……とんでもないことをされてしまったのねぇ……。春雨ちゃんで無ければ治療出来ずに、絶対に命を落とす手段、ということよねぇ」

「はい。それでも、全員を救い切れませんでした。この２人は間に合ったんですが……残りの２人は」

そのせいで、どうしても浮かない顔になってしまう。勝利の凱旋と行かなかった。これで喜んでいたら、命を失った２人に失礼だと思ってしまうから。元々あまり笑えなくなっていた春雨は、より暗い顔になってしまっていた。救えなかった怒りは、どうしても湧いてきてしまう。

「そう……その子達の冥福は、離れた場所であるけど、ここで祈らせてもらうわ」

悲しそうな表情を見せるが、ここで悔やんでいるだけでは前に進む

ことが出来ないので、辛いながらも割り切るしかない。
「貴女達の処遇はまだわからないけれど、きっといい方向に進むと思うわぁ。今はここで身体と心を休めてちょうだいねぇ。この施設は、好きなように使ってくれて構わないから」
「あっ、は、はい、よろしくお願いします。っと、私、瑞鳳といいます」
「ウチ、黒潮いいます。よろしゅう頼みます」
深々とお辞儀する2人。一時的か永続的かはわからないが、この施設の一員となることが確定したため、中間棲姫も快く受け入れる。
「あ、でも1つだけお願いがあるのだけどいいかしらぁ」
「は、はい、大丈夫です。ここに置いてもらえるだけでもありがたいので、何かあれば従います」
「本当に申し訳ないのだけれど、その見た目だけ変えてもらえると嬉しいわぁ。実は、それにトラウマを持っている子がいてねぇ」
今の瑞鳳と黒潮は、敵側の泥コスチュームを無害なものに変化させたもの。つまり、レオタード姿である。ロンググローブやニーハイソックスもそのまま。
それを見て騒ぐことはないが、今ここにいる薄雲は、その姿に対して強めのトラウマを持っており、飛行場姫や潜水艦姉妹、叢雲ですら、着ている物をそれらしくない物に変えたくらいである。
「え、えーっと、これどうやれば変えられるんだろ……」
「コレにお願いしたら変えてくれるんちゃうかな。なあなあ、普通の制服とかにしてくれへん？」
胸元の忌雷にお願いするように撫でると、了解と言わんばかりに触手がのたうち、生成されていたコスチュームがドロリと変化した。
最終的には普通の制服――シャツとスカートが出来上がり、スカートの下にはスパッツまで。黒潮としては、ドロップしたばかりの自分の姿と殆ど同じであるため大喜び。逆に瑞鳳からしたらまるで違う姿になったため、新鮮な気持ちになれたようである。
しかし、胸の忌雷はどうしてもそのまま。心臓を守る胸当てのように見えなくもないが、やはり異形感はなかなか拭えない。
「便利やねぇ。ウチらはもう一蓮托生やから、これからもよろしゅう

な」
褒めるように撫でると、喜ぶように歯をカチカチ鳴らした。共存関係としては良好。春雨のマグマで、忌雷も優しい存在へと変化しているおかげ。
「それと、貴女も被害者なのよねぇ」
次はその後ろでだんまりを決め込んでいた空母棲姫へと目が行く。目の前で起きていることが現実味が無いようで、救われた時とはまた違った混乱をしているようだった。
「同胞(はらから)、というのは、こういうもの、なのか」
素直な疑問が口から出た。生まれたばかりの時に器にされているため、この世界のことがよくわからなくなっている。侵略者気質を持って生まれたはずなのだが、疑問が疑問を呼び続け、侵略という気持ちはどんどん薄れていた。むしろ、最初に出会った存在があんなだったせいで、対人恐怖症にすらなりそう。
こうやって話しながらでも、空母棲姫は周りをキョロキョロも見回し、周囲を警戒していた。先程もそうだが、大人数に囲まれていることに不安を持っているようである。
「私達はかなり特殊だと思うわぁ。でも、楽しく生きたいと思う子達が多いことは、知っておいてもらいたいわねぇ」
「そ、そう、か……」
やんわりと説明され、素直に納得。目の前の同胞(はらから)は怖くない存在として認識は出来る。
楽しく生きるというのがどういうことかはまだわかっていないようだが、空母棲姫は精神的に大分追い込まれているようなので、他の者達と同じようにこの施設で心身共に休息をとった方がいいだろう。一度落ち着いて、改めていろいろと考えてみるべきである。
そもそも、休息をとらなければ艤装の破損も修復されない。ここから出て行くにしろ、共に生活するにしろ、万全の体調にするのが一番である。
「来たわ。古鷹と大鳳が動けないのよね」
ここで、呼びに行った白露と共に戦艦棲姫がやってくる。岸で動け

なくなっている2人を見ると、これは大変だと艤装を展開し、やんわりと持ち上げた。
「このままお風呂は流石に危ないわね。回復するまではダイニングか部屋で休みなさい。自分で動けるようになったらお風呂に行くこと。いいわね」
「ですね……このままお風呂なんて入ったら多分溺れます」
「陸で溺死とか笑えませんね……」
ひとまずはダイニングでいいかと動こうとしたところ、空母棲姫と目が合う戦艦棲姫。ビクッと震える空母棲姫だが、何やら品定めをするように眺めた後、うんと1人で納得するように頷く。
「あら、貴女も被害者かしら」
「そ、そうなる、みたいだ」
「その辿々しさ……生まれたばかりなのね。だったら、私がこの世の中のことを教えてあげるから、貴女も一緒に来なさい。お風呂にでも入りましょ」
空母棲姫はただ混乱するものの、言われるがまま。否定する理由も無いため、素直に従った。
「……戦艦様、もしかして旅の仲間にしようとしてるんじゃない？」
「あり得ますね。あのヒト、まだ世間知らずな感じですし」
「侵略者にならないなら、どういうカタチでもいいよね。仲良く付き合っていけるなら、その方がいいよ」
龍驤の器だったかもしれないが、あくまでもただの器。空母棲姫には一切の罪がない、ただ巻き込まれただけの存在だ。怒りを持つ必要は無いし、むしろここから楽しく生きてもらいたい。今の春雨だってそう考える。
これでもし侵略者気質を取り戻して、陸に向かって破壊活動をしようものなら、残念ながら制裁を加えることになるだろう。そうならないように、戦艦棲姫が事前に仕込みを入れるようだ。見た感じ素直な空母棲姫ならば、戦艦棲姫の話をしっかりと聞いて、旅人の一員になりそうである。
「それじゃあ、改めてお疲れ様ぁ。みんな、今は休んでちょうだい

ねぇ。お昼ご飯も用意しておくから、好きな時に食べてちょうだい」
ここで解散となる。戦場に立った者達は、ようやく気を抜くことが出来た。春雨もこの頃にはようやく溢れ続けていた怒りが収まり、それと同時に怠さが溢れ出す。フラつくまでは行かなくとも、大きく息を吐くくらいには疲れを見せた。
「叢雲姉さん、いると思って用意しておきました」
「あら、ありがと。ちょうど欲しかったわ」
薄雲が用意していたクッキーを頬張り癒される叢雲。戦場で動き回ったことで空腹感もあったからか、甘味が身体に染みるようだった。
「潮、すごく頑張った」
「今は休むべき」
「う、うん、そうする……ね」
潮も潜水艦姉妹に連れられて、施設へ。飛行場姫も何事も無かったことを確認出来てホッとしており、3人と共に施設へと戻っていった。
「春雨、海風、お疲れさん。辛いことあったみたいだね」
そして、白露が妹達を労う。しかし、勝利しても浮かない顔をしていることに気付いた。そのことを中間棲姫に報告しているとき、白露はちょうど席を外していたため、その理由は知らない。
だが、そのことをまた話せというのは酷であるため、察するだけ察してそれ以上のことは聞かないでおいた。余計に精神的な疲労を溜め込むのはよろしくない。
「今はひとまず休むべきだね。落ち着いてから、それでもまだ悩みがあるなら、お姉ちゃんが聞いてあげよう。気が晴れるかはわからないけど」
「……ありがとうございます、白露姉さん。正直助かります。愚痴になっちゃうかもですけど」
「お、いいぞいいぞ、かかってこい。いくらでも聞いちゃうぞ。海風も言いたいことがあれば言いなよ。受け止めてあげる」
「よろしくお願いします。鬱憤が凄いので」

「うわ怖。でも妹の愚痴くらい聞かずに何がお姉ちゃんだって話よ。どれだけでも話したまえ」

こういう時に姉の存在は助かると、春雨と海風は少しだけ笑顔になった。

今は休息の時。心身共に回復し、この後に始まる最終決戦に向けて、準備を始める。

水葬

施設の者達が休息に入る頃、鎮守府の者達も帰投完了。宗谷のクルーザーに積み込まれた葛城と不知火の亡骸と龍驤が詰まったドラム缶は、慎重に降ろされた。

亡骸とはいえ、胸に同化した忌雷や着せられているコスチュームは泥製。素手で触るわけにはいかないため、宗谷と、同行した島風、そして力仕事があるからと武蔵は、明石謹製の防護服をしっかりと着込んで対処した。

「お疲れ様。よく頑張ってくれた」

堀内提督が工廠で迎える。隣には五月雨や大淀も一緒。明石も運ばれてくる龍驤（モルモット）を運び込むために出迎えに参加していた。

施設側から連絡があるかもしれないと、大淀はタブレットを持ってきていた。この後やることにも参加してもらう可能性があるとも考えて。

「艦隊、帰投デース。戦果ｒｅｓｕｌｔは、連絡した通りネ」

「ああ、龍驤撃破、並びに、侵蝕者の救出、よく尽力してくれた。……亡骸は、クルーザーの中にかな？」

「Ｙｅｓ．　Ｃａｄａｖｅｒ（遺体）　ｐｏｕｃｈ（袋）を用意してくれていたのは助かりましタ。どうしても私達では触れませんカラ」

念のため出来るかどうかを確認するため、バリアを張ったまま手を触れようとしてみたのだが、案の定ロンググローブが消滅しかけたので、忌雷ごと消し飛ばしてしまう可能性を考えたら触れられない。

それを考慮して、泥が漏れないような遺体袋が用意されていた。ドラム缶を作るまでの試作品みたいなものであり、念のため３つほど残しておいたらしい。それこそ、泥塗れの亡骸を見つけた時に運ぶようなことがあるかもしれないと。

「……ここに辿り着いた時点で、泥を消滅させる波長に晒されてしまっている。遺体袋の中とはいえ貫通する波長だ。今は……見られたものではないかもしれない」

明石が開発した大型の波長発生装置は、鎮守府に泥を持つ者が侵入

出来ないように現在稼働中。そのため、工廠に入った時点で波長に晒されて、全てが消滅しているだろう。亡骸にも影響を与えてしまっている可能性は高い。
ちなみに、龍驤が入れられているドラム缶は、特殊な加工がされているため、波長を内部に通さないようになっている。そんなことで貴重なサンプルが消えてしまっては困ると明石がしっかり対策していた。
見られたものではないかもと言いつつも、提督はケジメとして遺体袋を運んでもらい、その中を確認する。誰がどのように沈むことになったのかは、提督という立場として見ておかなくてはならない。
ジッパーで閉じられた袋をゆっくりと開けて、中を確認する。先に運ばれてきたのが少し大きめだったことから、中に入っているのは葛城の亡骸であることがわかった。
「……こうなってしまうのだね」
苦しそうな顔で、すぐに袋を閉める。おそらく、中の状態を確認したのは提督のみ。
葛城の亡骸は、泥を消滅させる波長に晒されたことによって、コスチュームを剥かれた全裸状態。そして、予想通り同化していた忌雷にも影響を与えていた。触手は消し飛ばされ、本体も外装を残して消滅。その口内からは、泥ではなく葛城の血液を垂れ流すことになった。心臓と直結であり、中身が失われたのだからそうなるのは当然だった。
まるで、凶弾により心臓を抉り取られたかのような亡骸。誰がどう見ても死んでいるというのがわかるそれがあまりにも痛々しく、他の者には見せられなかった。
「こんな終わり方をする羽目になったんだ。弔ってあげよう。だが、大々的に弔うようなことは出来ない。この鎮守府の近海で眠らせてあげようと思う。それでよかったかな」
「私もそれがいいと思いマス。Ｇｒｕｄｇｅ（恨み）も何も無いように、送ってあげまショウ」
艦娘の亡骸は、基本的には鎮守府に戻ってくるようなことは無い。

戦場で散り、その場で沈み、そしてそのままとなる。そこから沈んだことへの恨みや憎しみで深海棲艦へと変貌してしまうかもしれないという都市伝説もあったりするのだが、それは未だ解明されていない。

しかし、その都市伝説のことを考えて、もし亡骸が鎮守府に戻ってくるようなことがあれば、例えば大怪我を負って帰投し、入渠が間に合わなかったなどという事例が起きたときは、鎮守府近海に水葬するというのが暗黙の了解となっていた。

堀内鎮守府では当然、こんなことは初めてのこと。白露達も戦場で散ったものであるため、悔やみはしたが弔うという行為はしていなかった。

「まさか、この鎮守府でこれをすることになるとはね……」

小さく息を吐いた後、すぐに弔う準備を始める。とは言っても、やることは非常に簡単。流石に工廠でするのはナンセンスであるため、もっと眺めのいい場所の沖に亡骸を葬ることになる。そこに行くためには、大発動艇を使うのが手っ取り早い。

「あたしが大発使うから……」

「ああ、ありがとう。よろしく頼む」

その水葬には、山風が手伝うと名乗りをあげた。本人と戦ったのは別の者ではあるが、その戦場にいた者として、ケジメに参加する。それに、海風ならば自分からやると言うだろう。山風もそれに倣った。

「明石、この2人の止血は出来るか」

「はい、勿論。なるべく綺麗な姿で送ってあげたいですからね。すぐに終わらせます。必要はないと思っていましたけど、棺もありますので、移し替えておきますね。遺体袋のままの水葬は流石に」

「ああ」

龍驤の入ったドラム缶を運びつつも、亡骸も裏に運び、水葬の準備を手早く済ませていく。連絡を受けた時点でこういうこともあろうかとと用意だけはしておいたらしい。そのおかげで、そこまで時間をかけることなく綺麗になった亡骸が棺に入れられてまた運び込まれてくることになる。

「……救えなかったことは辛いが、これを胸に前に進まねばならない。これ以上、犠牲を生むことなく戦おう」
それが難しいことであることは理解しているが、口にすることで決意をより大きなモノとした。艦娘達も、勿論だと頷いた。

山風が装備した大発動艇によって、提督と亡骸が入れられた2つの棺が沖まで運ばれてきた。水葬に参加するのは、山風の他には五月雨と、大将の艦隊から代表として武蔵。大人数でやるのは違うと、他の者達は参加せず。
さらに、大淀が持っていたタブレットから施設に連絡をして、中間棲姫達にも参加してもらうこととした。今は五月雨がそれを持たされている。
施設側からも冥福を祈りたいという思いがあったので、このタイミングでそれが出来たのは都合が良かった。
『私は人間さん達の弔い方というのはよく知らないのだけれど、これが間違っていないことはわかるわぁ。海から生まれた者が海に還るのは、自然の摂理だと思うもの』
「ああ、僕もそう思うよ」
葛城と不知火の最後ということで、瑞鳳と黒潮もタブレット越しに参加させてもらっている。侵蝕されていたとはいえ、仲間意識はやはりあった。黒潮に至っては、姉妹艦である不知火との今生の別れ。棺の中であるため姿は見えずとも、その終わりを見届ける理由はある。
「簡易的ではあるが、水葬を執り行わせてもらう。艦娘の死に対しての最低限の儀礼は尽くさせてもらうが、本来のやり方とは違うかもしれない。そこは申し訳ない」
安らかに眠ってもらいたいという祈りを込めて、黙祷を捧げる。この場にいる者は目を瞑り、施設側でも願うように手を合わせて。少し長めの静かな時間が流れる。響くのは波の音のみ。
それを切り上げたのは、提督の言葉。
「これで最後だ。もう、よかったかな」

ここにいるもの、そして施設側にも聞くように、少し掠れた声で呟いた。こんなことをするのも苦しいのはわかる。それでも、絞り出すような声でその場を進める。
誰もが声を出せずにいたが、もう大丈夫だと頷く。特に思い入れがあるであろう黒潮も、これ以上この場に亡骸として居続けさせるのも良くないだろうと、終わらせるために先に進むことを望んだ。
「それでは、海に還ってもらうよ。五月雨、山風、すまないが」
「いや、これは私がやろう。まだこういうことは知らない方がいい。提督よ、貴様もだ」
武蔵が棺を沈めるために前に出た。本当なら、五月雨と山風に棺を大発動艇から滑り落としてもらうつもりだったのだが、武蔵がその代役を買って出た。
棺とはいえ、それをするということは、2人を本当に終わらせるという行為をすることになる。その時の感触――仲間を終わらせる感覚は、出来ることなら知るべきではない。故に、武蔵がそれを代わりにやる。そのために参加したと言っても過言ではなかった。
「それに、滑り落とすよりは優しく沈めてやりたいだろう。ならば、私がやるべきだ。ゆっくりと、優しく還ってもらおうではないか」
まずは葛城の入る棺を持ち上げる。優しく、中に振動が無いように。
「……すまないね」
「構わんよ。大将がいたら、私にこれを命じるだろうさ。それに、私もこれをやりたいと思ってやっている。気にしないでくれ」
水飛沫も上げることなく、海面に置くように手を離すと、棺は海中へとゆっくりと沈んでいった。
そのまま続けて不知火の棺も持ち上げ、同じように海面へ、そこで、タブレットからボソリと声が聞こえた。
『ぬい、ウチがアンタの分まで生き抜くからな。安らかに眠るんやで』
少し泣きそうな声色だったが、確実に心に響いた。武蔵も少しだけ躊躇ったが、ここで止めていては意味がない。無念が邪念に変わりかねない。そのため、止まらずに手を離す。不知火の棺もゆっくりと沈

んでいった。
「僭越ながら、私が弔砲を撃たせてもらおう。見送りは盛大にした方がいい」
そして、武蔵が艤装を展開すると、真上に向かって全力で空砲を放った。それは海に響き渡り、鎮守府にも大きく聞こえた。真上に撃ったからか、空砲であるかもかかわらず、雲が晴れたようにすら感じた。
心は晴れずとも、前に進むための力にはなる。

タブレットは繋いだまま工廠に戻り、これからのことを話す。空母棲姫は深海棲艦であるため、その処遇は全て施設に任せることになるのだが、瑞鳳と黒潮は艦娘ではある。施設が引き取るか、鎮守府に所属するかといえば、基本は後者が選択されるだろう。
しかし、どうしても問題になってくるのが、その胸に同化した忌雷。この存在が、２人を艦娘か深海棲艦かわからない状態にしている。
「こちらとしては、艦娘として僕の鎮守府に所属してもらおうとは思っている。詳しくは大将と相談しようと思っているがね」
『わかったわぁ。その辺りはそちらにお任せするわねぇ』
「それまではそちらに滞在してもらうというカタチでよろしく頼むよ。明日にでも、また食糧を運ばせてもらう」
『助かるわぁ』
ここはどうしても提督１人でどうにか出来るようなものではない。上と相談して、最善の答えに辿り着く。
『司令はん、ちょいといいかな』
そこで、黒潮が少しだけ口を出す。
「ん、何かな」
『ウチは出来れば、そちらの鎮守府に行きたいと思っとります。ぬいの近くで戦いたいんで』
「なるほど、わかった。その思いも伝えておこう。いい方向に向かえるように進めていかせてもらうよ」

思いは伝わった。どうにかしてでも、忌雷と同化した2人を艦娘として認めてもらえるように進めていきたい。

犠牲者を弔うことは出来た。心にどうしても残ることではあるが、その思いを胸に、最終決戦へと臨む。

どちらが外道か

２人の水葬が厳かに行われているその裏側。工廠の奥にある地下牢のさらに向こう側。そこは、明石が専用の研究をするために新設した部屋があった。地下であるというのにそれなりの広さが用意されており、それでも完全に密閉された空間であった。扉を閉めてしまえば外から光が入ることもなく、内部から何かが漏れ出すことが無いほど。

その部屋の真ん中に、１つのドラム缶が置かれていた。それは普通のドラム缶ではなく、いろいろな装置が接続された、たった１つしか無い一品。

その中に、泥と化した龍驤が捕獲されていた。当然ながら内部から外に出ようとしても不可能であり、どうにか破壊しようとしても、泥の身体では無理。その流動性を活かして隙間を探したが、そんなものがあるわけが無かった。

『はい、どうもどうも。ご機嫌はいかがですか？』

そんな部屋の中に声が響いた。ドラム缶の開発者、明石である。事務的な会話をしようとしているのだろうが、その奥底にある感情が表に出たそうにしているのがすぐにわかった。

ドラム缶の中で龍驤はその声を聞いていたが、あえて反応はしなかった。無視を決め込み、何処かで隙を見せるのではないかと、その時を待つ。

『おや、無視ですか。貴女はやたらとお喋りと聞いていたんですけど、拍子抜けですね。ちなみに、貴女には隙を見せるつもりは全くありませんからご容赦ください。ここから出すことは絶対にあり得ないので。あ、でも好きなだけ抵抗してくれて構いませんよ。しっかりとモニタリングをしていますので』

明石の手元には、ドラム缶の内部が見えるような画面がある。サーモグラフィやＣＴスキャン、暗視カメラまで、ありとあらゆる手段を用いて龍驤が中で何をしているのかを２４時間監視していた。

今はドラム缶の中に溜まる泥として、ヒトのカタチすら取っていな

い。その状態で話す場合、どのような声を発するのかを知りたかったようだが、今の龍驤はだんまりを決め込んでいる。
　あの戦場から鎮守府に戻ってくるまでは、それはもう喧しいくらいに悪態をついていた。その度に荒潮がドラム缶を振り回し、海面に叩きつけたりガワを殴ったりと、龍驤に対してゴミクズを扱うような行為をした。
　にもかかわらず、今ここでは悪態も何もない。心を入れ替えたとかそういうわけではなく、単純にその時を虎視眈々と狙っているだけである。明石の身体を真っ先に奪い取ってやると苛立ちすら隠していない。
『温度が上昇していますね。へぇ、泥でもイライラすると熱量が上がるんですか。微生物は熱に弱いと思っていましたが、集合体かつ特殊な存在だからこそ、ヒトのようなことが発生するんですね』
　苛立ちが透けて見えているようで、龍驤はそれに対してもイライラする。
『今の貴女の状態は、私には全て筒抜けですので悪しからず。ああ、それと、貴女の身体の構造は現在絶賛解析中です。貴女の一部をちぎり取りまして、それを今までの通りに解析しているんですよ。泥が増えたのはありがたいですね。しかも、今までのモノとは違って、黒幕に近い存在とまで来ました。解析しがいがあるというものですよ』
　明石の声は、確実にテンションの高いモノなのがわかる。今までの研究材料とはまた違ったそれは、明石の果てない研究心に確実に火をつけていた。
『解析が済むまで、お喋りでもしませんか？　貴女も退屈でしょう。その抜け出すこともできない圧迫された空間に閉じ込められているんですし。世間話くらいならいくらでも付き合いますよ』
　完全におちょくっているような言葉に、龍驤の苛立ちは限界に。
「喧しいわ。お前と話すことなんぞあらへん。研究するなら黙ってやれやダボが」
『おや手厳しい意見。でも、私ってこうやって話しながら内容を組み立てていくんですよ。なので、それは出来ませんね。独り言も多くて

困っちゃいますよね』
会話を求めているようで、まるで会話が成立しない。龍驤がただ声を発することを望んでいるだけだからだ。
その時の反応を見ながら、なるほどなるほどと一人で楽しそうにしているのが声色からもわかり、龍驤は苛立ちから怒りへと向かっていく。
『あ、でもせっかく話をしてくれるみたいですし、こちらからいくつか質問させてください。出来れば答えてくれると嬉しいですね』
「なんでお前の言う通りにせなあかんのや。調子こくなや」
『あはは、調子に乗っているように見えますか？　まぁ調子は頗る良いんですけどね。ちなみにですけど、貴女に拒否権はありません。捕虜みたいなモノなんですから』
見えていないのに、明石の満面の笑みが想像出来た。龍驤は工作艦明石を知らないのだが、それでも何者かが自分を見下して笑っているのだということは理解していた。
実際、明石は龍驤のことを見下してなんていない。そのレベルにまで辿り着いていないのだから。
『泥本体から話が聞けるなんてツイてますよ。元々は物言わぬただの寄生虫ですから、質問なんて出来ませんからね。でも貴女は、そんな流動体な身体であっても賢く物事を考えることが出来て、器の意思を塗り潰して自分を反映させることが出来た。一応仮説があるんですけど、正解かどうか教えてください』
「誰が言うたるかい」
『拒否権は無いと言いましたよね？』
バチンと静電気が発生するような音が室内に鳴り響く。たったそれだけなのに、龍驤の様子がおかしくなる。
「いっぎいっ!?」
固定されているので音だけではあるが、ドラム缶の中から流動体がのたうち回るような音が始まった。それは、痛みに悶えるような動き。ドラム缶の中まで見えている明石は、龍驤には見えておらずとも満足そうに微笑む。

『やっぱり、ここに痛覚があるんですね』
「つ、痛覚、やと。ウチにはそういうんは」
『あるから悶えたんですよね？　まぁ泥になっているわけだし、ちぎり取ったことも気付かないくらいですから、痛みなんて感じないと自分でも思っていたんでしょうね。いや、知っていても感じないように出来たのかな？』
　明石の声が明らかにテンションが上がるように聞こえた。
『私の仮説なんですが、貴女には核（コア）がありますよね』
　その言葉を聞いた途端、龍驤が押し黙った。あまりにもわかりやすい、図星をつかれたときの反応。
『今までの泥――悪意の塊は、研究の結果、微生物の群衆であることは確認済みです。単細胞生物かつ寄生虫であり、寄生した者を侵蝕し、その悪意によって意のままに操ることに特化していました。悪意は黒幕の意志と考えていますけど、それは今は関係ないので後にしましょう。それでも、貴女みたいな存在はおかしいと思ったんですよ。単細胞生物の集合体にしては賢すぎる。ただの単細胞の集合体が他者を器にしたところで、うまく動かせるわけがないですから』
　泥はあくまでも、侵蝕した者の頭を使って行動しているというのが明石の考え方だ。思考能力がある者を侵蝕するから、悪意を体現させられるわけだ。
　しかし、龍驤は悪意を体現させているのではなく、侵蝕した者を自分としている。それは思考能力などは関係無い。流石に亡骸に取り憑いて動かすということは出来ないようだが、機能を弄っているわけではなく、機能を間借りしている。
　そこまでのことが出来るとしたら、単細胞では収まらないだろう。ヒトと同じくらいに思考をするのなら、そんな単純な構成で成立はしない。
　故に、龍驤には思考するための核（コア）が存在する。それが明石の１つ目の仮説。
『侵蝕、乗っ取った者の脳を休眠させ、そこに自分の核（コア）を寄生させることによって、その器を自分とする。その器が死にそうな時、もしくは

次の器に乗り換えようと思った時は、脳から核(コア)を切り離して次の器へと移動する。だから、器にされていた者は、器にされていた時の記憶が殆ど無いんですよね。漣から聞いていますから、この仮説はかなり信憑性があると思うんですよ。どうですか？』

だんまりを決め込むということは、それが正しいということにほかならない。しかし、明石はそれでは満足出来ない。

再び静電気のような音が鳴り響き、同時に龍驤の悲鳴がドラム缶の中から発せられる。

『まぁ核(コア)の存在がわかっているからこういうことが出来るんですけどね。貴女の全機能がそこに集中しており、他の泥は核(コア)からの命令に忠実に従う端末というところでしょう。器にした時にそれを全身に巡らせて、脳に寄生した核(コア)の思い通りに動かすわけです。元々が艦娘なんですから、器の動かし方は知っているようなもの。無意識にでもヒトと同じ振る舞いは出来るでしょう』

意気揚々と語り続ける明石の声に、龍驤は苛立ちを越えて徐々に恐れを抱くようになってきた。

『元々艦娘だった者をそのカタチにする際に、機能を取っ払うということは出来なかったわけです。なら、核(コア)に不必要なモノも全部押し込むのが妥当ですよね。本来核(コア)は触れられるモノではない。だからこそ最も安全な場所でしょうから。私だってやるならそうやって考えます。消せないのなら、触れない場所に隠そうとしますよ。でもですね、今の私には筒抜けなんです。貴女、何かを考える時に一瞬核(コア)に電気信号が走っているのわかります？　わかるわけないと思いますけど』

明石はその核(コア)の部分に直接電気信号を流し、龍驤に痛いと感じさせているのだ。泥自体には何の影響もなく、増えたり減ったりもしない。しかし、ただただ龍驤が激痛を味わう。たったそれだけ。

『あ、ちぎり取った泥の成分解析も出来ましたね。今までの泥の成分も内包しつつ、端末としての余白を残している感じですか。単細胞ではなく、２つの細胞が組み合わさっているんですね。で、どちらにも増殖の性質はあるのかな。はぁ、なるほどなるほど。じゃあ、次はこ

ちらから指示を出せるような電気信号を流してみましょうか。今は痛みですけど、素直になれる信号とかどうですか。黙れなくなるように仕込むことは出来るかもしれませんし、いろいろ実験してみましょう！　いやぁ、楽しくなってきましたね！』

それは、明石の狂気。探求者としての知識欲。本来なら理性が押しとどめるはずのその感情が、今はなにをやってもいい相手を得てしまったことで爆発してしまっていた。

『大丈夫、今度は痛くないので。どうせなら気持ちよくしてみますか？　脳味噌を直接弄るみたいなものですけど、貴女はもうそういう存在でも無いですから、倫理的に大丈夫ですよね。しかも、どれだけ弄っても核（コア）さえそのままなら死ぬこともありません。周囲の泥は増殖の性質も持っているわけですし、実は核（コア）も増殖したりしません？　あ、その辺も実験してみましょうか。でも貴女自身が消えてしまいますかね。いや、そうならないように慎重に行きましょう。こんな都合のいいサンプルが手に入ることなんてそうそう無いですし、なんとブレーキかけられないんですよ。好き放題やっていいというお墨付きです。なんてったって黒幕との最終決戦に向けての研究ですからね。貴女という存在が、私達を勝利に導くんです。素晴らしいですね！』

顔を合わせてもいないのに、もうその狂気は龍驤に恐れ以上の感情しか湧いてこなかった。慢心などもう無い。今すぐここから逃げ出したいと感じるほどの恐怖しか出てこなかった。

だが、プライドがそれを許さず、怒りが表に現れる。

「お、お前、ホンマに艦娘か。ただの外道やんけ！」

咄嗟に出た言葉がコレである。それを聞いた明石は思わず噴き出した。

『アッハハハ、確かにそうかもしれません。でもですね、そんなこと貴女に言われたくないんですよ。というか、言う資格は無いんじゃないですか？　自分は表に出ず、適当に捕まえたドロップ艦を侵蝕して手駒にして、その命すら散らしたんでしょう。それでも貴女はどうせ笑いながら、精神攻撃の一部に使ったんじゃないですか？　私、それよりも外道ですかね。これは嫌がらせではなく、勝利のための研究で

す。他人の命を弄んでいるわけでも無い。だって貴女は死なないんですから。無限に増える泥を研究することの何がいけないのでしょう。貴女の主観ではなく、道理として私にご教授くださいな。すみません、私、その辺は素人でして』

話をしているのに、話が通じない。龍驤はもう、蛇に睨まれた蛙も同然だった。

『私はね、人類のために研究をしているんです。そのためになら、この手を血に染めても構いません。でも、仲間達には絶対に迷惑をかけません。仲間を手駒としか思っていないヒトには、こういう気持ちはわからないと思いますけどね。あ、じゃあわかるように躾けてみますか？　電気信号をそのように流したら、もしかしたら貴女の性質を書き換えることが出来るかもしれません。艦娘には戻れなくとも、心を艦娘に戻すことは出来るかも。これも後から試してみましょう。貴女はもう、私の仲間なんですから』

明石の研究は続く。そして、龍驤の運命は、完全に明石の掌の上だった。

これからのこと

施設の夜。戦場に出ていた者達は心身共に休むことが出来たようで、続々とダイニングへとやってくる。部屋そのものはそれなりに広く造られているのだが、当初の倍以上の人数になってしまっているため、そろそろ全員が入り切らない可能性が出てきていた。全員着席するのにもそろそろ限界が来そうな状況。

「大分増えたわねぇ。こんなに賑やかになるだなんて、思ってなかったわぁ」

中間棲姫としては嬉しそうな声であるが、問題となってくるのが食糧である。消費量が一気に増えてしまったため、備蓄はわかりやすく減っている。そして復旧はしたものの畑の野菜が一度全滅したことと、危険であるために遠征にも行けないのが響いていた。

鎮守府から提供があるとはいえ、それも限界というものがあるだろう。自給自足が基本方針なのに、それがいくら協力関係でも頼りすぎるのはよくない。

「どうしても、Ｒｅｐａｓ（食事）の準備に時間がかかってしまうんね。作りがいはあるからいいけど」

ざっと２０人以上のための料理をさらりと作ってテーブルに並べていくリシュリューだが、さすがに1人で作るのは難しくなってしまったようで、コマンダン・テストのみでなく、ジェーナスとミシェルもお手伝い。そのおかげで、いつも通りの時間に全員分を提供出来ている。

食べ慣れている者達はさておき、こうやって出されて驚くのはやはり今日から所属することになった3人。鎮守府ではどのような生活をしているのかは知らないし、深海棲艦の生活は尚更わからないが、少なくともこんなにアットホームなものであるとは思ってはいなかった。

瑞鳳は目をパチクリさせて、黒潮は目を丸くして、そして空母棲姫は唖然として。三者三様の反応だが、ここに初めて来た者は大概似たような反応をするため、みんなが苦笑する程度で終わった。

「お昼の間にいろいろ説明させてもらったけれど、ここには慣れることは出来そうかしらぁ？」
３人に尋ねる中間棲姫。その３人は、戦場に出るという感じではなく、普段着で滞在しているというようにしか見えない状態だった。
瑞鳳と黒潮は、相変わらず心臓と同化した忌雷頼り。深海棲艦と同様に服装はそちらが自由自在に変えてくれるため、今も好きなように着替えている。それにも慣れたようである。
一転したのは空母棲姫だ。龍驤の器にされていた時に着せられたやけに露出していた水着はトラウマを呼び起こすからかやめており、逆に妙に露出度が減った服装に。本来はセーラー服と艤装のガントレットなどだが、この空母棲姫は黒のワイシャツとパンツスタイルというなかなかにクールなイメージに。
「それに関しては心配あらへんかなぁと思いますわ。なんかここ、めっちゃ居心地いいし。なんでやろなぁ、やっぱ、こういうモンついてても浮かへんからかなぁ」
胸の忌雷を撫でながら笑顔を見せる黒潮。忌雷もそれに合わせて歯を鳴らし、仲の良さを表現していた。
黒潮は順応性が非常に高い。割り切っているのか諦めているのかはわからないが、現状を真正面から見据え、後ろを向かずに受け入れる。
それは、失われた不知火の分まで生きると誓ったからだろう。普通以上に前向き。そして、心が壊れているわけでもない。黒潮の本質を十二分に引き出しているだけ。
「瑞鳳はんは？」
「私は……私は正直、まだ戸惑ってる。突然こんなことになって……」
胸元の忌雷に手を添える瑞鳳。撫でるというよりは、ただ自分の心臓に手を当てているという感じ。
瑞鳳には、それは自分の身体に触れているという感覚はない。しかし、自分の鼓動と同じ感覚で脈動しているのはわかる。本当にこれが自分を生かしているのだと実感する。
瑞鳳自身、忌雷との共存に対しては受け入れようと努力はしてい

る。自分が異形であるという自覚をし、これに生かしてもらっているということを理解して。
だが、だからといってすぐに割り切れる話でも無いのだ。黒潮があまりにもすんなり受け入れただけである。順応が早い者がそこにいるからこそ、瑞鳳はまだ戸惑いが無くならない。
「だから、自分の身体に慣れながら、この環境にも慣れていきたいなって思います」
まだ本心からの笑顔ではないものの、中間棲姫に笑顔を見せることは出来た。無理をしているわけではない。瑞鳳も、正しく前向きである。
「……私も、まだ、よくわからない」
空母棲姫も、まだ少し慣れていないような口調で自分の思いを話す。たった半日でこの辿々しさは直らなかったが、自分の意思をはっきりと伝えることは出来るようになったようである。
「でも、知ることは、楽しいと感じる」
空母棲姫は、ついさっきまで戦艦棲姫にこの世界の在り方を教え込まれていた。侵略者気質は、龍驤の器とされていたことで恐怖に塗り潰されたが、それ以外の部分はそのままであることに戦艦棲姫が気付いていたのだ。それ故に、自分の知識でそこを伸ばすことにした。
その結果、世界を知りたいという欲望を持たせることに成功した。侵略するよりはマシであり、むしろこの施設に対して好感も持つことが出来るだろう。
「まずは、ここを知る。その後は、外を知りたいと、思う。戦艦が、連れていってくれる、らしいから」
「一人旅もいいけど、仲間がいるのなら尚更楽しいもの。この子にはそういう楽しさを知ってもらいたいのよね」
やはり同じ姫であるからか、戦艦棲姫とは相性がいいようである。懐いたと言ってもいいかもしれない。ちなみに空母棲姫のファッションセンスも戦艦棲姫仕込みである。
むしろこの空母棲姫の言葉に一番喜んでいたのは、戦艦棲姫である。旅人の仲間、同じ感覚の同胞(はらから)が増えたことは素直に嬉しいと、空

母棲姫の前で口に出す程だ。
空母棲姫としても、器とされていた時の記憶がほとんど無いおかげで、ここにいる者達への後ろめたさは無いと言ってもいい。戦場にいなかった戦艦棲姫に対しては尚更だ。さらには、この施設が同胞(はらから)ばかりの居場所となるから、心も落ち着く。
そのため、ここに慣れるのも簡単であろう。知ることを喜びとしているのなら、ここでやることにも率先して参加しそうである。
「よかったわぁ。それじゃあ、まずはみんなお腹を満たしてちょうだいねぇ。これからの方針は、また明日から決めればいいわぁ」
終始ニコニコの中間棲姫。仲間が増えていくことは喜ばしいことであり、楽しく生きるための活力になる。こうした大人数での団欒の時間が、一時期は落ち込んでいた心の具合をいい方向へと持っていった。

さらに時は進み、あとは眠るだけとなる。瑞鳳と黒潮は相部屋を与えられ、空母棲姫は戦艦棲姫と共に行動。これで部屋もギリギリとなっていた。次にもし誰かを救ったとしたら、本当にパンクすることになる。
とはいえ、今考えられている中で、残りの敵は黒幕のみ。誰かを救うとかではなく、やることは殲滅である。これ以上施設の住人が増えるようなことはおそらく無い。
「黒潮ちゃんと瑞鳳さんは、鎮守府行きを希望している。空母さんは戦艦様と一緒に旅に出るって話で、リシュリューさんとコマさんはいつもの遠征だよね」
「古鷹さんも戻れるなら本来の場所に戻るかもしれません。確か、部屋は残してくれていると言っていましたし」
「そういう意味では、私達も戻れるかもしれないね」
私室で今後のことをふんわりと語らう春雨と海風。この施設がパンクしてしまうというのなら、自分達もここから離れることを考えてもいいかもしれないと思っていた。

もし、鎮守府が穏健派の深海棲艦を受け入れることが出来るようになったなら、古鷹は優先的に大塚鎮守府に戻ることを選択すると思われる。春雨と海風は、それに乗っかるカタチで、堀内鎮守府に戻ることも考えていた。
「白露姉さんはどうするんだろう。もし戻れるって言われたら」
「どうでしょう……4人分の考え方をしますから、満場一致で戻るとなったら戻るかもしれませんね。私はそれでもいいと思いますけど」
「だね。戻れるなら、姉妹全員で戻った方がいいかなって思う」
まだそれが出来るかもわからないのに、話が盛り上がっていく。当然高望みはしていない。これだけやっても、世間体というものがどうしても足を引っ張ってくる。大将が頑張って穏健派の権利を獲得してくれようとしてくれているみたいだが、すぐにどうにかなるとは思えないし、どうにか出来たとしても手続きやら何やらで面倒なことに巻き込まれる可能性は高い。
さらには、決まりで許可されているのに、後ろ指を指してくるような輩も必ず出てくる。そういうのが現れたら、春雨は確実な怒りを溢れさせるだろう。だが、そんなことをしたらせっかく得た権利を棒に振ってしまうかもしれない。
「まぁ、今は戻れたら戻るの方向で考えておこう。それでもここには何度か戻ってきたいけどね」
「ですね。もうここは第二の故郷みたいなものですし。山風の調査隊に入れてもらって、頻繁に来させてもらいましょう」
「あはは、それはいいね。是非ともそうさせてもらおう」
安らいでいるのがわかる、春雨の笑み。一番の怒りの矛先であった龍驤を斃したことで、曇りが晴れているのが海風にはわかった。心の底からの笑みでは無いかもしれないが、この笑顔は怒りの含まれていないモノである。
海風にはそれが嬉しかった。それと同時に、またこの笑顔が見れるのがいつになるかと悲しみもした。
そんな話をしていると、扉がノックされる。
「瑞鳳さんと黒潮ちゃんですね。どうぞ、入ってください」

相変わらず外を見ることなく誰が来たかを直感的に気付いた春雨に招かれて、呼ばれた2人が中に入る。
ちゃんと忌雷のおかげで寝間着に着替えることは出来ていた。何の害も無い泥のコスチュームも、使いこなせれば相当便利なようである。身体に張り付くパーツはどうしても必要になるようだが。
「どうかしました？」
「大したことじゃないんだけど、その、ほら、私達は春雨に助けてもらったわけだからさ。改めてお礼をって思って」
戦場ではドタバタしていたので、礼を言うことも出来なかった。この施設に到着してからも、何かとバタバタしていたため、こうやって腰を落ち着けて話すことも出来ていない。
そのため、誰もがフリーなこの時間を使って、春雨と話がしたかったと瑞鳳は言う。黒潮も同じ気持ちだそうだ。
「本当にありがとう。私も黒潮も、春雨のおかげで今ここに生きていられる。この子には……私はまだちょっと慣れてないけど」
胸の忌雷を撫でると、その手を舐めるように舌を出してきた。多少驚いたようだが、瑞鳳の忌雷はそういう性格のようで、人懐っこく触手を蠢かせる。
「ホンマにありがとうな。死んどったらこういうことも出来へん。春雨はウチらにチャンスをくれたようなもんや」
黒潮の言葉に同調するように、忌雷も歯をカチカチ鳴らす。瑞鳳の忌雷が人懐っこいなら、黒潮の忌雷はお調子者というイメージ。
見た目が同じ忌雷でも、思った以上に個性があるようである。春雨のマグマに侵蝕されたことで、正の感情が芽生えたのかもしれない。
「私は出来ることをやったまでです。それでも、2人は命を落としてしまいましたから……」
「気にしないで。春雨は本当に全力を尽くしてくれてる。間に合わなかったかもしれないけど、それは春雨のせいじゃない。その分、私達が生き続ける」
「瑞鳳はんが葛城はんの分を背負う言うてはる。ウチもぬいの分を背負う。それだけやから。春雨はなんも気にせんでほしいわ」

仕方ないでは済まないが、その仲間達が春雨を責めないのだから、自分を責めるのは止めてくれと訴えた。これは、白露から言われた、怒りの矛先を見間違えるなというのと同じだ。
「……わかりました。では気にしません。心には刻みますが、それで後ろを向くことはしません」
「うん、それでお願いね。葛城と不知火は、春雨を後押ししてくれてるって思ってくれれば」
「せやね。ぬいのことだから、物凄い力業で前に押し出すかもしれへん」
仲間の死は、水葬と共に割り切った。事実を心に留め、それを前に進むための力とする。これからのために。
「お2人は、これからどうするつもりなんですか？」
「黒潮と話してたの。これからのこと、ちょっと考えてたんだけど……出来れば」
「出来れば、ウチらも戦いに参加したい思うたんよ」
なんでも、忌雷が寄生したままであるおかげか、ドロップ艦であるにもかかわらず、熟練者の動きをそのまま使えるらしい。当然、本当の熟練者と比べれば手も届かない場所にいるかもしれないが、それでも例えば周りの雑多を処理することくらいなら造作もないだろう。
それを活かしたいと、2人で決めたそうだ。勿論、多少の訓練は必要かもしれないが、施設を守ることくらいならば出来るはずだと確信していた。
「本陣に突っ込むことは出来へんと思うけど、もしここが襲われるようなことがあったら、ウチらも力を貸せるなって」
「うん。それなら私達も前向きに生きられるなって思ったんだ。罪滅ぼし……なんて言うとなんか違う気がするけど」
だから、春雨達には施設のことを気にせず黒幕を斃しに行ってほしいと話した。
当然そのつもりだったのだが、2人の心境からして、頼られることでより前に進めると春雨は勘付いた。
故に、次の言葉はすぐに決まる。

「よろしくお願いします。任せてください」
拳を突き出す。それは義腕であっても、熱のこもった強い意志。
「うん、お願いね」
「任せたで」
その拳に、２人も拳を突き合わせた。
施設はさらに前に進む。死を乗り越えて、これからのことを考えながら。

決戦に向けて

翌日、施設も鎮守府も最終決戦への準備が始まる。特に施設は、今後の方針を決めていくことが最優先である。

勿論、手伝えることは手伝いたい。一度龍驤との戦いに参加しているのだから、黒幕との戦いに参加することにも抵抗は無かった。中間棲姫としては、施設の仲間達が傷付くところは見たくないのだが、この戦いを終わらせなければ施設に平和が訪れないことを嫌なほど理解してしまっているため、戦いたくないと口にすることは無かった。

「今のところ、私の中身――黒幕の居場所は、眼鏡くんの鎮守府の近くっていうところしかわかっていないのよねぇ。まずはそれを探すことから始まるのかしらぁ」

「そうなるんじゃないかしらね。その辺りには、アタシ達は手を出せないわよ。そもそもあの眼鏡の鎮守府の場所を知ってるのは古鷹だけなのに」

「知ってますけど、ここからどうやっていけばいいのかはわかりません。この海がどの海かが正しく把握出来ているわけではないので……」

第一の問題はこれ。そもそも未だに黒幕の居場所がわかっていないことである。決戦をするにしても、まず黒幕をその目で見ているわけではないため、戦うことすら出来ない。これは鎮守府側も同じなのだが、施設側からしたら、そもそも探しに行くことすら出来ないのだ。

そして、古鷹が言う通り、この施設と堀内鎮守府、さらにはそこから大塚鎮守府までがどれくらい離れているかもわかっていなかったりする。これが第二の問題。ここにいる仲間達の中で、施設と堀内鎮守府の行き来が出来る航路を知っているのは、実は海風だけなのである。海風以外は、方向はわかっていても正しい航路はわからない。

古鷹も鎮守府からこの施設に運ばれてはいるが、ここまでは宗谷のクルーザーの中で痛みに苦しみながらである。外の風景を見ているわけがなく、正しい航路は知らない。また、古鷹と白露は侵蝕されているときに鎮守府を襲撃することを考えていたが、その時は敵対者、

つまり結界によって施設の場所がわかっていない時。方向などがギリギリわかるかという程度。その時の記憶と組み合わせてもなかなか難しい。
「そうなると、私が皆さんを堀内鎮守府に連れていって、そこから大塚鎮守府までの航路を教えてもらうというのが妥当でしょう」
「それだと、鎮守府に行かなくちゃいけないってことじゃない。艦娘ならまだしも、深海の姿では行けないわよね」
施設から大塚鎮守府までどう行くかが誰もわからない。大塚鎮守府出身の古鷹ですらだ。それを解決するためには、どうやっても堀内鎮守府経由になる。もしくは海図を貰って何処に何があるかをしっかり知っておくか。
だが勿論、それは今は最も許されない手段。
春雨は堀内鎮守府経由の流れに辿り着いていたが、それをどうにかする道は、辿り着く者を以てしても見えていなかった。こういう時に限って、深海棲艦という存在が足を引っ張ってしまう。
変装でどうにか出来ればいいのだが、それでも少し詳しい者ならば、見ただけで艦娘ではないことを看破してしまうだろう。向かう場所が顔見知りであり協力関係を持つ鎮守府だとしても、何も知らない人間から見たら鎮守府を襲撃しようとしている深海棲艦の一群にしか見えない。
「いくら艦娘に変装したとしても、私達が鎮守府に立ち寄ること自体がかなり厳しいですよね」
「大将さんが私達のことを上手く使えるようにしてくれればいいのだけれどねぇ」
穏健派の深海棲艦の存在は認識されていても、それが鎮守府に向かっていいかと言われたらまだまだ出来ない状況である。異種族、しかもそれが今戦っているモノ達と同じ種族なのだから、余計に拗れる。
「じゃあここから一直線に黒幕のところに行けばいいじゃない」
ならば直接黒幕の居場所に向かえばいいだろうと考える者が出てくるだろう。鎮守府経由など考えずに。今の春雨なら、直感的に黒幕

の居場所もわかるだろうし、その力によって結界も突き抜けることが出来るはずだ。
　そしてそれを口に出したのが、怒りをまた溜め始めている叢雲。境遇からどうしても艦娘という者を好きになれないため、鎮守府という場所も出来ることなら目にしたくないモノだったりする。故に、その言葉にブレーキがかかることは無い。
　しかし、それに対して春雨がすぐに説明する。
「叢雲ちゃん、多分一直線は無理」
「なんでよ。鎮守府なんて頼らず、アンタの道案内があれば見つけられるでしょ」
「それは自信を持ってＹｅｓと言えるけど、距離がありすぎるよ。鎮守府経由にしたい理由なんて、全部そこ。近場で休んで、体調を万全にしてから行きたいから」
　細かい場所はわからずとも、それだけは理解出来た。今までの経験上、施設から堀内鎮守府までですらそれなりに時間がかかるのに、そこからさらに大塚鎮守府に行こうとすると、単純に計算しても倍くらいはかかる。
　朝に出て夕方に到着するとかになると、それだけでも疲れ切ってしまうだろう。そうでなくても、そこからすぐに戦闘に入るのは自殺行為と思われる。
　しかも、あちらは絶対に自分の拠点から動かない。何故なら、拠点そのものなのだから。
「……納得したわ。疲れた状態で戦える相手じゃないものね」
「それくらい言われる前に気付きなさいよ」
「喧しいわよチョロ助」
　コロラドにツッコまれて舌打ちしながら返す叢雲。対するコロラドは指摘が出来てドヤ顔。
「その辺は私達ではどうにも出来ないわぁ。提督くん達の手腕に任せましょう」
「提督と大将なら、アタシ達のこともいい感じに考えてくれるでしょ。眼鏡は知らないけど」

「あの子も根は提督くん達と同じだから大丈夫だと思うわぁ。合理的に考えても、私達のことを悪く扱う理由がないもの」
２人の口喧嘩に苦笑しながら、今は何も出来ないということで、鎮守府側の采配を待つしかないのだ。
これでやはり深海棲艦だから鎮守府には入れられないという方針になってしまったら、施設の者達は黒幕との戦いには参加出来なくなる。龍驤をどうにかするための戦いでは、その力の有用性を知ってもらうために共闘したというのに。
「また私と妹ちゃんは提督くん達と話をしておくわぁ。食糧の話もあるからねぇ」
「毎度恵んでもらってばかりで申し訳ないけれど」
「本当にねぇ」
食糧問題は本当に切実。自給自足が出来ない以上、鎮守府側からの支援物資に頼らざるを得ない。姉妹姫としては、そこがどうしても申し訳なく感じる。最初はいい距離感で話をするくらいの仲を求めていたのだが、今はおんぶに抱っことなりかねないところまで来てしまっている。
情報提供や戦力としての協力はいくらでもやるとは思っていたとしても、それに対しての報酬が大きすぎやしないかとヒヤヒヤしてしまう。無論、あちらの優しさが大きいのもわかっているのだが。
「この戦いが終わったら、恩を返しましょうねぇ。どういうカタチになるかはわからないけれど、あちらが望むことは叶えてあげたいわぁ」
「そうね。こちらに出来ることを望まれたら拒否はしないわね。人体実験したいとか言ってくるようなヒトじゃないし」
春雨と海風、白露は、そこで満面の笑みを浮かべる明石の顔が思い浮かんだが、流石にそこまではしないだろうとその顔を振り払った。
「ともかく、私達は今のところは待機よぉ。いつも通りのお仕事をしつつ、近海警戒もしておきましょうねぇ」
「龍驤っていうわかりやすい敵はいなくなったけど、まだこの島を直接狙ってくるようなことが無いとは限らないから。哨戒も再開する

かは考えておくわ」
施設は少しだけ日常に戻ることになる。緊張感の続く時間は続くものの、心身共に休息出来る時を得ることが出来た。

鎮守府からの救援物資は、午前中に届いた。部隊はいつもの如く調査隊であり、その物資の量は実に大発動艇３つ分。
何処にこんな量の食糧があったのだと思えたが、実際これは大将や大塚提督からのサポートもあってである。３つの鎮守府から持ち寄ったことにより、ここまでの量になったようだ。
「本当に助かるわぁ。これなら今の人数でもしばらくは繋がると思うわぁ」
「……よかった。でも、決着は早くつけなくちゃって、思う」
隊長の山風が中間棲姫とやりとりをしている中、他の者達が物資を施設に運び入れる。江風と涼風、荒潮はいつも通りとして、今回は漣達も参加。駆逐艦ばかりになってしまっている。
春雨達白露型と顔が合わせたい山風、江風、涼風。ジェーナスと触れ合いたい荒潮。そして、潮と話がしたい漣、曙、朧。その全員がなんだかんだで施設に用があるものである。
「Ｈｉ．　アラシオ。昨日の戦いでは頑張ったのよね！」
「すごいぴょん！　カッコいいぴょん！」
「そこまで言われていいかはわからないけれど、北上さんから最後の捕獲を任せられていただけよ～。でも、傷付かずに終われたのは良かったわ～」
荒潮は荷物を運びながらも念願のジェーナスとミシェルとの触れ合いに興じている。荒潮にとってはコレが一番の癒し。終始ニコニコしながらの作業。食糧の管理はジェーナスが基本。ミシェルもそこを手伝うようにしているため、荒潮は率先してそこに加わりたいと以前からさんざん言っていた。断る理由も無いため、結果的にこうなっている。
ジェーナスも荒潮に対しての考えはもう友人という感覚だ。荒潮

の努力は知っているし、先日の戦いでもその努力の成果を出しているのを理解している。そんな相手を仲間と見ない理由はない。
「荒潮ちゃんは、最後の戦いに参加するぴょん？」
ミシェルの素朴な疑問に対し、荒潮は少しだけ考える素振りを見せた後、力強く頷いた。
「最後に決めるのは提督だけど、私は参加したいと思ってるわ。私怨はどうしてもあるけど、でもやっぱり、みんなに迷惑をかける存在は良くないもの。ジェーナスちゃんにもミシェルちゃんにも迷惑をかけたヤツだから、私はそれが気に入らないだけなんだけどね」
「あはは、アラシオらしいわ」
笑顔を見せたジェーナスに、荒潮は心底癒された。
「潮、元気そうで何よりね」
「うん……元気、だよ。怖いけど、ね」
日用品の整理をするのは漣達。潮と潜水艦姉妹もそれを手伝うことにして、姉妹艦との交流に勤しむ。
以前よりは格段に恐怖心が抑えられるようにはなっていた。相変わらず全ての感情を恐怖から読み取るしかないのは変わらないが、やはり姉妹艦とこうやって話をしている時は随分と落ち着けるようである。
「ぼのがさぁ、ずっと会いたい会いたい言っててさぁ」
「漣、黙りなさい」
「朧は会いたかった。潮が元気そうでよかった」
三者三様ではあるが、潮の心を癒すには充分すぎる存在。そんな潮を見て、潜水艦姉妹も満足げである。
「こっちでは明石さンの研究が続いてるぜ」
「昨日早速一徹して大淀さんに叱られてたけどな」
江風と涼風から現状を聞いているのは春雨達。鎮守府のことをよく知っているからこそ、その話も容易に想像が出来た。
「何かわかりそう？」
「どうなンだろな。でも、あの龍驤が何も文句言わなくなったらしいってのは聞いたよ」

「ちょろっと聞いた感じ、電気信号？　とか何とかで、従順に躾けるとかなんとか……？」
やってることがあまりにも酷いが、春雨は何も言わない。ザマァ見ろとも思わないものの、同情はしなかった。
「あ、でもなンかすげぇこと言ってた。龍驤をシステム化するとかだっけか」
「ああ、そんなこと言ってたね、あたいらにはよくわからないけど」
それは誰にもわからないことである。明石がそれを完成させた時に、初めて理解出来る……のだろうか。

とにかく、決戦への準備はまだまだ続く。施設は食糧問題を一時的に解決したものの、長続きしないことはわかっているため、すぐにでも次の結果を出していきたい。

悪性を善性に

調査隊が施設に救援物資を運んでいる時、鎮守府でも最終決戦の準備が進められている。

鎮守府に今必要なのは、黒幕の居場所の確定と黒幕への対抗策。前者は大塚鎮守府が調査中であるが、後者は堀内鎮守府で開発中である。

その開発の筆頭である明石が早速徹夜をしたので、大淀が溜息を吐きながら無理矢理寝かせた。疲れた頭で考え始めたら、次は何を言い出すかわからない。むしろ、既に危険な発言はいくつか聞いているため、目を覚ましたらすぐにでも問い質してやると意気込む。

「龍驤をシステム化すると言ったと」

「はい。よりによって工廠でケラケラ笑いながら。徹夜明けでハイになっているので、それが現実か夢かがわからないんですよね……」

明石の様子を提督に報告する大淀。明石の発言がかなり不穏なものであるため一応伝えたものの、提督とそこにいた五月雨は2人揃って首を傾げた。

今の龍驤は泥であり、地下室でドラム缶に詰められて実験材料とされている。当然だが龍驤本人は侵蝕状態。こちら側の指示に従ってくれるわけがなく、協力はおろか、常に抵抗を続けて今でも鎮守府を破滅させようと画策していることだろう。

そんなものをシステムにすると言われてもよくわからない。むしろ、システムとはどういうことなのか。

「眠気の中で妄想を口にしただけならいいのですが、実現させようとするなら、一体何をするというのでしょうか……」

「起きたらすぐに聞き出してみればいいか。大淀は明石の監視をするんだろう?」

「そうですね。ちゃんと寝ているかを見ておかないと、今こうしている間も何か動いているのではないかと心配になります」

実際にそういうことをしているから、その件に関して明石は信用が無かったりする。休めと言っても休まない常習犯は、大淀の管理の下

でしっかり寝てもらわなくては今後のためにならない。
「それに、徹夜のテンションで相当ヤってますよ明石は。龍驤が文句を言わなくなったとか、従順に躾けるとか話していましたからね……」
頭を抱えるように呟く大淀。明石の言っていることは、正直なところ、人道的にはかなり厳しいところに来ている。
とはいえ、ブレーキを外したのは提督であり、龍驤について徹底的に調べることを許可したのも提督である。その結果がこれであるというのなら、責任は明石だけにあるわけではない。提督にも連帯責任がついて回るだろう。
「……目を覚ましたら問いただそう。流石にそんなことを話していたとなると、何をしているのか僕も気になる」
「ですね……。あまりに物騒なことをしているようなら、一度止めなくちゃいけないでしょうし。あ、ついでですが、念のため明石に対して泥のチェックはしておきましたが、何もなってはいません。ちゃんと素面で言っていました」
「余計に問題がありそうだがね……」
その全容がわかるのは、明石が休息を終えた後になる。そこまで長々と待つことにはならないだろう。わざわざ起こしてまで聞かなくてはいけないようなこともないはずだ。
しかし、早急な対処も望まれているため、余程目を覚さないようなら、大淀が目覚ましをするということになった。
朝イチに多少作業した後で眠りについたということで、大淀の予想では昼イチから少し時間が経ってからの起床となるだろう。それまでは一時待つこととなった。

そして、昼。施設への物資援助と搬入をしていることは隊長である山風からも伝えられており、帰投は今日中、暗くなる前には帰投出来るということに。
交流の場を設けてもらえたのだろうと予想がつく。向かった7人

の駆逐艦達は、施設に話がしたい者がいるのだから。
ならば、戻ってくる前に明石に話を聞いておかねばならないと、提督は五月雨と共に工廠にやってくる。
そこには眠ったことでスッキリした表情な明石と、呆れた表情で付き添う大淀の姿があった。ちゃんと休んでいたことに安心しつつも、寝起きであるにもかかわらずテンションが上がりっぱなしになっていることに呆れているのだろうと容易に想像がついた。
「あ、提督！　ちょうどいいところに！」
工廠に訪れた提督の姿が目に入った途端、まるで子供のようにはしゃいでいた明石が駆け寄ってくる。大淀がその後ろで平謝りしているのを見逃さなかった。
「龍驤の解析の途中経過、聞いてもらっていいですかね！」
「そのためにここに来たんだ。大淀から不穏な報告を聞いているからね」
提督から出た不穏という言葉に、明石はあちゃーという顔を見せつつも、その昂まりすぎているテンションを抑えることは出来ていなかった。
「早速なんだが、龍驤をシステム化するという意味を教えてもらおうか」
「あ、なら早速根幹の部分から説明させてもらいますね」
ここではアレだからと、地下室に連れていかれる。ほぼ使わない地下牢を越えた先の、新設された部屋。この奥に龍驤が閉じ込められているのだが、さらにその隣に設置された扉を開けると、部屋の管理を司る空間となっていた。
「まず大前提として、龍驤は完全に泥となっているので、艦娘は勿論、深海棲艦に戻すことも不可能です。そして、泥の身体のままでは攻撃も防御も出来ず、そこにいるものとなっています。代わりに手に入れているのが、他者を器として扱う力ですね」
明石の調査からわかっていることは、龍驤自身はもう器が無ければ他者に物理的な危害を加えることが出来ないということ。代わりに、器にしてしまえば、今まで手に入れた力を全て使うことが出来るとの

こと。
なんでも、核（コア）の分析の際に、明らかにおかしい情報量を持つ塊があったらしい。それが龍驤を龍驤と成立させているパーツであり、核（コア）の中でも最も重要なモノ。中心の中の中心。中枢と言ってもいい部分。
明石が電気信号を流していたのは、その周囲である。中枢は本当に弄ってはいけない部分だが、他の部分はまだ手が加えられるということになるらしい。
「龍驤はもう治療出来ない。侵蝕されていない艦娘龍驤、もしくは深海棲艦龍驤に戻すことは出来ない。身体は元より、頭の中ももう０の状態が侵略者、黒幕から分かたれた存在となってしまっている。もう侵蝕ではなく融合ですね。引き剥がしたら確実に死ぬというくらいの絡みつき方です。いつもの薬を使ったら、龍驤諸共消えてしまいます」
「ふむ……だが、龍驤も今はこうとはいえ、被害者の１人だ。出来る限り救いたい」
「勿論です。なので、私は考えました。元に戻らないのならば、元に戻った体裁を整えればいいと」
そこで明石はとんでもないことをしでかした。電気信号によって痛覚を刺激することが出来るということは、他の感覚も操作出来るということ。そのため、龍驤の思考を外部から操作し、侵略者としての思考を塗り潰す方向で考えたのだ。
やっていることは黒幕と全く同じ。洗脳されたものを再度洗脳することで、マイナスをプラスに持っていくようなもの。
「それはまた……」
「提督がそういう反応するのも承知の上でした。しかし、今回に関しては、そのまま置いておいても救えない。だからといって容赦無く消すのも忍びない。なので、龍驤には私の助手となってもらいます」
つまり、悪性しか持っていなかった龍驤に善性を植え付け、鎮守府の協力者とする。そのための躾けを行い、今は文句を言わなくなるところまで来ていると、明石は少し悲しそうな笑みを浮かべながら話し

た。
　これが良いことなのか悪いことなのかがさっぱりわからなかった。そもそもの龍驤は、人類のために戦う艦娘。それを黒幕に歪められ、取り返しのつかないところまで持っていかれてしまった。それを元に戻すためには、こちらも取り返しのつかないことをしなくてはいけない。それはわからなくもなかった。
　だが、人道的かどうかと言われれば、口を噤む。非道だと罵られたら、返す言葉もない。相手が今までどれほど非道なことを繰り返してきた存在だとしても。
「もう救われないところまで堕とされてしまった龍驤を救うためには、これしかないと思います。正直、私も悔しいですよ。泥化が不可逆なのを覆してやろうとは思っていましたから。でも、調べれば調べるほど、龍驤に身体を与えるのは不可能でした。器ありきの存在なんです。……黒幕もそうなんでしょうね」
　明石ですら匙を投げたということだ。最もノウハウを持ち、今まで多種多様な開発と対策をこなしてきた明石がどうにもならないと言うのなら、おそらく本当にどうにもならない。
「君の助手とするにしてもだ、泥のままでかい」
「意思の方はそちらに持っていこうと思っていますが、泥の方は調整をして、侵蝕性を逆転させた新たなシステムを開発中です。龍驤自身が仲間を守るために行動出来るシステム……名目上、侵蝕による仲違いや裏切りを防ぐシステムということで、Ｒｉｏｔ（暴）（動）Ｊａｍｍｅｒ（妨）（害）――ＲＪシステムと名付けました」
　黒幕と同じ力を持ちながらも、善性に傾けたことによってＡＩが自動的に仲間達を守るような力を発揮するような新システムにしようと考えているようである。
　これがうまくいけば、黒幕との戦いもかなり楽になると思われた。土地を侵蝕し、泥を散布して敵対勢力を近づけさせないようにしている黒幕に対して、鎮守府側から提供出来る最大の対策となるはずだ。
　無論、春雨や叢雲のような泥に対して耐性を持つものや、ミシェルのようなそもそも効かない存在というのはあるのだが、黒幕との戦い

には参加出来ない可能性も考慮しておく必要がある。
　それに、耐性があるからと言っても春雨達に負担をかけるのは本当に良くないこと。本来は施設側には平和を提供しなくてはならないのだから。春雨達はもう怒りを晴らすためにも参加したいと言い出すとは思うが。
「あと……これこそ人道的に厳しいかもしれませんが、善性を持たせた龍驤には器を用意したいと思っています」
「それは……つまり、艦娘を1人犠牲にするということになるんじゃないのか」
「いえ、ちょっとした裏技みたいなものなんですが、妖精さんにサポートしてもらうことで、意思のない妖精さんを生み出すことが出来るらしいんです。龍驤にはそこに入ってもらおうかと思います」
　これもまたとんでもないことである。妖精さんの増殖の機構は未だに解明されていないのだが、生まれたばかりの妖精さんというのはまだ何を担当するかが決まっていない空っぽの状態になっているらしい。そこに他の妖精さんが担当を割り振ることによって、同種とするそうだ。
　その担当割り振りの時に、正しく生まれ変わった龍驤の核（コア）を入れることによって器とする。言ってしまえば、ＲＪシステム専属の妖精さんとなってもらうということだ。装備妖精やドック妖精とほぼ同じ。
「大丈夫なのかい……？」
「私よりも詳しい妖精さん本人の進言ですので。妖精さんとしても、今の龍驤の状態は何というか可哀想と考えているみたいなんです。だったら、自分達の仲間として楽しく暮らせばいいと思ったと」
「……失敗の確率は」
「今のところは０です。妖精さんのサポートも入るので。躾けもおおよそ終わっていますので、今日中にはＲＪシステム妖精として、生まれ変わってもらうことは可能かと」
　自信を持って発言する明石。かなり思い切った方法ではあるが、龍驤を救う唯一の方法となった。最終的な決断は提督に委ねられる。
「……わかった。被害者である龍驤を救うためにはそれしかないとい

うのなら、それでいこう。それが本当に救われているのかは、僕には正直わからないが……」
「泥のままで生き続けるよりはマシかなというくらいですね。あのままだと本当に死ねないようなので。それに、そのまま放置していたら最終的にとんでもないことをしでかす可能性を考えると、今のうちにこうしておいた方がいいと思います。後のことを考えた、今の決断です」
「なるほど……。確かに、あの泥のままで放置していたら、本当に何かあった場合にこの鎮守府は滅ぶだろう。それを未然に防ぐためには仕方ないか」

これが英断となるのか、愚行となるのかは、神のみぞ知る。

新たな生

施設側では、調査隊が持ってきた物資の搬入が全て終了。その後は昼食を軽く摂り、調査隊本来の仕事として、施設の者達の状況整理。調査隊のみでどうにも出来ないような事態が起きていたら、任務用のタブレットを使って鎮守府に連絡をする。

とはいえ基本的には施設側は何も変わらない。強いて言うなら、今回は新人である瑞鳳、黒潮、空母棲姫の様子を見ておくというのがメインになる。

「はぁ……心が落ち着く」

久しぶりの調査隊の来島と、妹達と昼食を外で食べることにより、怒りがかなり発散されている春雨。もうなかなか出来ないであろう姉妹の団欒は、一時の平和を満喫させるには充分なイベントである。

春雨だけでなく、海風も春雨がまったりしているところを見ているだけで安らいだ。今後もまた昨日の戦いのようなことが起きるのだから、今こそ心身共に休んでいてもらいたい。

「春雨姉から見て……施設は大丈夫？」

山風が尋ねる。調査隊として、当人達の目から見てこの場所がどうなっているのかを聞いておく。

山風の目から見れば、やはり何も変わっていないのんびりした島。鎮守府とは比べ物にならないくらいに静かで、敵がココを狙っているとは思えないくらいに平和。

「そうだね、平和そのものだよ。施設そのものが戦いに巻き込まれることはまず無いし、みんなが仲良いしね」

「瑞鳳さんと黒潮さんも、あっという間に馴染みましたしね」

「だね。黒潮ちゃんは最初から開き直ってたけど、瑞鳳さんも昨日の夜には開き直れてたからね」

仲間という観点で言えば、今のところ心配事は何一つとして無い。仲違いからは無縁。叢雲とコロラドの言い合いは仲違いとは違う漫才なので、ある意味これも平和の象徴ではある。余裕がなければたわいない言い合いすらも生まれない。

「空母さんも、今は戦艦様にいろいろ教えてもらって楽しんでるみたい。そう考えると、今のこの場所は平和そのものと言ってもいいくらいだよ」
空母棲姫は、今頃戦艦棲姫からいろいろと教えてもらいながら、世界の広さについて学んでいる。
この戦いが終わったら、戦艦棲姫と空母棲姫2人で一緒に旅に出る予定だった。戦艦棲姫の思惑通りに進んだと言っても過言ではない。戦艦棲姫が思いつく限りの自分の技術を優しく、しかし徹底的に叩き込んでいる。
この戦いが終わる頃には、その知識欲は最大に達し、戦艦棲姫と共に旅に出たがることだろう。
「それじゃあ……春雨姉はどうなの……？」
ここも大きなところ。怒りが溢れて豹変してしまった春雨が落ち着けているかは、調査の対象とされていた。
施設にいる者の中でも、最も特殊な例となってしまった春雨については、他の者達よりは入念な調査が必要であると、提督から指示されていた。何事もないことを保障するためにも。
「私？　私は大丈夫。昨日も気持ちよく寝られたし。ね、海風」
「はい。春雨姉さんはいつも通りグッスリと眠っていました。魘されているようなことも無かったですし、具合が悪そうなこともありません。寝返りの回数も、息遣いも、普段通りでした。寝言は……昨日はありませんでしたね。お疲れだったのでしょうし、夢を見ることなくグッスリ眠っていたのでしょう。穏やかな寝顔でしたから」
海風がマシンガントークに発展しかけたが、妹達の前だからか自重した。ここで理性を働かせることが出来たのは、海風にとっては成長の1つ。
「それじゃあ……いつものような平和だったって、報告書に書いておくね」
「そうしてくれると嬉しい。他のヒトにも聞いて回るんでしょう？」
「……うん、そのつもり」
こんな簡単なやり取りでも、施設の平和さが溢れているので、充分

な報告書となるのである。

昼食を終え、少し休憩していると、突然山風の持つ任務用のタブレットが着信音を鳴らす。

鎮守府から何か連絡が来る予定では無かったため、山風がビクッと震えてからそれを受ける。

「は、はい……調査隊隊長の……山風だけど……」

『ああ、急に連絡を入れてすまない。物資の搬入は終わったかい』

「うん……全部午前中に終わった……。姉姫さん達、喜んでた……」

今は調査隊としての本業の方に勤しんでいると伝えると、向こう側にいる提督も順調で何よりと喜んでいた。物資を施設側に喜んでもらえたのも嬉しいようだ。

『そこに春雨達もいるようだね。それなら都合がいい』

カメラに見切れているように春雨達の姿が映っていたため、ちょうど良かったとすぐに本題に入る。

『捕獲した龍驤の処遇が決まった。これは施設の全員にも知っておいてもらった方がいいだろう。今回の件は、姉姫に伝えるよりは山風経由の方がいいと思ってね。こちらに連絡したんだ』

龍驤の名前が聞こえた途端、春雨の周囲に熱気が溢れたような感覚を覚えた。明らかに怒りを溢れさせている。それにあまり詳しくないものですら、今の春雨は苛立っていると一目でわかるくらい。

しかし、真っ先に知ることが出来たのはありがたかった。ギリギリまで知らされていないとかになると、春雨の怒りはさらに膨れ上がっていただろう。

「アレはどうなるんですか」

その口調には明らかに怒気を孕んでいた。提督もその気持ちを理解しているため、表情も変えずに結論だけを淡々と伝える。

『明石の手によって再洗脳を施し、こちらの味方につける。さらには、新たな器――妖精さんの身体を得て、泥対策の要となるシステムの根幹となる予定だ』

「再洗脳……ですか。まぁ、そうなりますよね。根っこまで侵蝕されて治療もできない上に、身体すら失ったんですから、救われるにはそれしか無いと思います」
　不服というわけでは無いが、あれだけのことをした龍驤に対して相当な譲歩であるとは思う。もっと痛い目を見てもいいとすら感じていた春雨としては、それに対して若干不満があった。
　だが、再洗脳というなんだかんだ尊厳を踏み躙るような行為をされていることと、妖精さんの身体になるというこれもまた違った生き方を強いられることには仕方ないとも思える。元々救えるのなら救うという気持ちはあったため、仲間になるのは喜びこそすれ、悲しむことでは無い。
「記憶などはどうなるんですか？」
『明石曰く、全てそのままだそうだ。恐ろしいことに、その罪悪感で壊れることが無いように躾けているそうだが……』
「なるほど。全てにおいて有用な存在となってくれるわけですね。黒幕を斃すためには、アレの記憶も必要でしょうし、最善の手段だと思います」
　納得はした春雨。溢れる怒りは多少抑え込まれているものの、やはり思うところはある。しかし、本当の目的を忘れてはいけない。この戦いを終わらせるためには、黒幕を斃すことが絶対条件。そこに最も辿り着ける道は、『辿り着く者』としての観点からも、明石が取ったこの手段がベストなのだと感じた。
「提督……それ、いつやるの……？」
『明石が今準備中だ。今日中には可能と話していたが、早ければすぐに……』
『提督！　準備出来ましたよーっ！』
　山風が質問をした瞬間に扉が開く音。同時に聞こえたのは明石の声。
『……だそうだ』
　提督も諦めたような表情で苦笑した。
「提督、それ、私達も見させてもらってもいいですか。前哨戦ではあり

ましたが、私達にとっては1人目の宿敵です。その最後を見ておきたい」
　春雨の言葉に、海風や白露も首を縦に振る。海風にとっては、春雨を裏切るカタチにさせられた元凶でもあり、憎らしい相手。白露にとっては、妹達を壊した原因となった元仲間。その終焉を、その目に焼き付けておきたかった。
　これは終わりでは無く、新たな龍驤の始まりなのだが、悪性を持つ龍驤が死ぬことには変わりない。
『ならば、このままここで映しながら処置を執り行うことにする。そちらでも君達のように最後を見届けたいと思う者を集めてくれ。……別にショーというわけでは無いんだがね』
「了解です。まだすぐに始まるわけでは無いですよね。ちょうどお昼時でしたから、すぐに集まると思います」
　こうして、龍驤の終わりと始まりは、施設の者の前でも行われることとなった。

　結果的に、それは施設の者と調査隊全員が見るということになる。タブレットの画面では小さく、施設にプロジェクターがあるわけではないので、うまく施設のタブレット側にも映せるようにした。画面が2枚あれば、一応全員の目に入るようになった。
『はい、それでは処置を始めますね。ご覧の通り、今、龍驤が入れられているドラム缶の前には、空っぽの妖精さんが安置されています。これからの処理で、あの中に龍驤を入れることになります。妖精さん監修であり、絶対的な安全の下で執り行われるので御心配なく』
　画面に映されたのは、まだ役割を持っておらず、意思も何もない妖精さん。ヒトでも着ることがある検査着に身を包み、眠るように横になっているものの、この妖精さんは絶対に目を覚ますことがない。あくまでも器であり、妖精さんの中でも、この存在は仲間ではなく仲間になるための素材というイメージなのだという。
　そして、ドラム缶からチューブが伸びており、その妖精さんを包み

込むようにセットされていた。ここから龍驤の核(コア)が流れ出し、妖精さんを埋め尽くすことで、それが龍驤となるという。
役割を持った時点で、妖精さんはその妖精さんへと姿を変える。工廠妖精なら作業着になるし、艦載機妖精ならパイロットスーツになる。そして、ここ最近は艦娘の姿を取るような妖精さんも多数見かけるようになった。龍驤はそれになると考えられる。
『では行きます。龍驤、そちらも覚悟はいいね？』
『……ああ、いつでもええ』
龍驤の声が聞こえたことで、数人がビクンと反応する。ある者は怒り、ある者は恐怖、ある者は悔しさ、あらゆる感情がそこに渦巻いたが、龍驤の声色からは、一切の悪意が感じ取れなかった。
明石の調整(躾け)によって、悪性は善性へとひっくり返り、しかし記憶は残っているために常に罪悪感を持ち続ける。しかしそれで壊れることは出来ず、深い悲しみに呑み込まれた状態で、常に正気を保持させられ続けるという地獄。
『スイッチ、オン！』
明石が何かのスイッチを押した瞬間、ゴウンゴウンと周りの機械が音を立て始め、ドラム缶の中から黒い泥がチューブを通って妖精さんの器に流し込まれる。それは次々とその身体を埋め尽くしていき、そしてその身体の中へと染み込んでいった。
泥塗れになってもびくともしなかった妖精さんだが、チューブから明らかに違うもの、核(コア)が入り込んだことでその小さな身体を大きく震えさせた。
『入りましたね』
ビクンビクンと震えた妖精さんの器がさらに泥に塗れていき、それすらも身体の中に収まった時には、先程とは似ても似つかぬ姿へと変貌していた。役割を持ったということになる。
その妖精さんは、どう見ても小さくなった深海棲艦のような色味。髪も真っ白で、肌も真っ白。まるで、施設にいる元艦娘のような見た目。髪型はかつての龍驤のようなツインテールで、この中に龍驤が入ったのだと如実に表していた。

しかし、服装が微妙におかしかった。やはりあちら側の気質が抜けておらず、侵蝕したという事実があるからか、その張本人であるにもかかわらず、侵蝕された者のトラウマに近いセーラー服とレオタード姿。システムの妖精さんであるからか白衣のようなものを着ているものの、その姿は明らかに、侵蝕された者であると表現しているようなもの。ご丁寧にもロンググローブとニーハイソックスまで完成。

『妖精さんが深海化したみたいになりましたね。初めての反応ですよ』

周囲の妖精さんは処置の成功に拍手をしているのだが、画面越しにそれを見ていた施設の者達の一部、特に泥によって侵蝕されたことを経験している者達の表情は複雑だった。

処置が終わったため、チューブが外され、妖精さんが解き放たれる。ゆっくりと目を開け、その場に立ち上がると、何処か驚いたような表情で自分の手足や服を見ていた。

龍驤の記憶があるとしても、こんなに小さな存在となるなんて思ってもいなかったのだろう。

『龍驤、話せる?』

『……ああ、妖精さんでもちゃんと話せるみたいやね』

普通の妖精さんは、まともに話すことは出来ないが、龍驤は深海化も伴っているのでかなり特殊であるようだ。それこそ、小型化した深海棲艦みたいなもの。だが分類的には妖精さんであることには間違いない。

龍驤は新たな生を与えられることとなる。それはもう艦娘でも深海棲艦でも無いのだが、死というカタチで終わらず、少し方向性は違うかもしれないが救われたと言えた。

生まれ変わった龍驤

泥と化し、もう治療の余地が無かった龍驤は、明石の力により妖精さんへと生まれ変わった。その際に、核(コア)へ電気信号を送り込むことによって調整が行われて、悪性が善性へとひっくり返っている。そのため、この状態となってももう敵対の意思はなく、逆に罪悪感に苛まれている龍驤となっていた。

それを画面越しに見ていた施設側は、誰もが言葉を失っていた。今までも相当なことをやってきた明石の発明の中でも、特にとんでもないものが作り上げられた。

「ほ、本当に、それは元に戻っているんですか？」

第一声は春雨。これに関しては、怒りも吹き飛んでしまっていた。苛立ちもなく、ただただ驚きが全ての感情を上回っている。

『元に戻っているというよりは、元の龍驤を再現しているというのが正しいですかね。元の性格を泥によって上書きされてしまっていて、しかもそれをどうにも出来ないくらいにされてしまっていました。侵蝕ではなく同化。分離させたら死ぬとかでなく、細胞がそれそのものになってしまっていると考えた方が早い状態です。なので、思考回路に直接電気信号を流し込むことにより、思考と性格そのものを本来の龍驤になるようにしたんですよ』

龍驤を元に戻しているのは、明石に施された再洗脳の結果である。泥による侵蝕はどうにもならず、あくまでもそれを明石の手によって強引に反転させられているに過ぎない。

電気信号によって行われたのは、痛覚による矯正もあったが、そもそもの思考のベクトルの調整がメイン。波長によって、泥を構成する微生物の思考のベクトルの方向性を変えることが出来るのだから、既に泥と化している龍驤のそれにも干渉することは出来た。波長では動かせないから、電気信号を使った。

それを使って悪性に働く向きを真逆に向けた。そうすれば、全てが善性になる。泥の効果で本来の性格が悪性に向いていたため、真逆にしたらそのまま本来の性格に戻ったというわけである。

それでも明石は、あくまでも再現と表現する。正しく元に戻せたわけではない。治療が完了したわけではないのだから。故に、躾けるとか調整とか再洗脳とか、表現を違う方向にしていた。
『そしてそれは、龍驤も自覚していることです。泥に侵蝕された者達も自分が侵蝕されていると自覚していたんですから、処置を施されたということは知っていて当然。その時の痛みや辛さも全て覚えているでしょう。どうかな龍驤』
『……嫌って言うほど覚えとるよ。さんざん痛い目を見る羽目になったんやからな。でも、正直感謝しとる。ウチは、ホンマに取り返しの付かんことをやっとった。あの痛みも苦しみも、全部その罪を償うためには必要なモンやった。それでも償い切れるはずがあらへん』
その言動は、龍驤を知る者ならば確実に龍驤であると言えるほどである。事実、その根幹は龍驤なのだから当たり前なのだが。
『でも、これだけは言わせてほしい。言っても無駄かもしれへんけど、ケジメのために、言わせてほしい。ホンマに……本当にすまんかった。いや、ごめんなさい、すみません』
小さいながらもしっかりと頭を下げる。むしろそれだけでは足らないと、土下座までし始めた。
こんな龍驤を目の当たりにしたことで、怒りや恐れと言った感情は、何処かに行ってしまった。他の今まで侵蝕されていた者達と同じであり、今までやらされてきたことを激しく後悔している被害者である。
今までのことを考えると、どうしても恨みも憎しみもあるだろう。しかし、あの龍驤を見ていると、そんな気も霧散していく。
『謝っても許してもらえるなんて思っとらん。でも、言わにゃ気が済まん。ウチは一生を懸けて償う。償いになるかもわからへんけど……』
明石に調整されたとはいえ、ここまでしおらしい姿を見ることになるとは思っていなかった。躾けるという言葉から、無理矢理言うことを聞かせるために心を折りに行ったものだと思っていたら、実はそれ以上の物理的な人身掌握をしていたのだから。

「1つ、こちら側のお願いを聞いてほしいんですけど」
ここで口を出したのは海風だった。
『なんでも言ってや。叶えられる願いなら何でも叶える。死ねと言われれば死ぬ』
「そこまで野蛮なことは言いません。死んでほしいくらいに憎らしいと思ったことはありますが、今の無力な貴女をそこまでするほど落ちぶれていませんから」
海風らしからぬキツイ物言いだが、それもこれも春雨が気分を害していたからだ。春雨の敵は自分の敵。春雨が許さないのなら海風も許さない。
だが、春雨自身は今の龍驤に対してその段階で止まっている。殺してやるとは思っていないため、海風も龍驤を殺そうだなんて思っていない。
「ただ、今の貴女の姿に気分を害している仲間がいます。ついでに私もその1人です。なので、まずはその姿をやめてください。龍驤をやめろと言っているのではなく、服装を変えてもらいたいんです」
戦闘員スタイルな龍驤は、一部の仲間達の心を抉り続けている。それは海風であり、薄雲であり、ジェーナス。顔には出さないようにしているが、戦艦棲姫も屈辱と感じているし、漣達や瑞鳳黒潮コンビもあの時のことを思い出して目を背けていた。
唯一、器とされていたために記憶がほとんど無い空母棲姫だけは、龍驤の今の姿を見ても何とも思っていない。むしろ、妖精さんが龍驤になる過程の方がトラウマを刺激している。ある意味『泥恐怖症』に近いため、見ていただけでも吐きそうになっていた。
『そうか、そうやな。ウチが侵蝕したら、この姿になるように設定したったもんな。気が利かんですまん。すぐに着替える』
深海棲艦と同じ仕様になっているようで、龍驤はその場で服装を切り替える。龍驤という存在にも何か嫌なものを感じる可能性を考慮して、普通な黒いセーラー服姿となった。白衣が消えないのは、システム妖精である仕様だろう。
こうなったことで、一部はようやく落ち着ける。薄雲もジェーナス

も、トラウマへの刺激が失われたことで、大きく息を吐いた。
「救うことが出来ないと言われていた子が救われているのは嬉しいことだわぁ。でも、本当に大丈夫なのかしらぁ。その妖精さんに触れたらダメとかはあるの？」
泥に侵蝕されるようなカタチで生まれた妖精であり、しかも同じようにコスチュームまで作り上げているのだから、心は変わっても性質は変わっていないのではと考えた中間棲姫。
その質問を待っていましたと言わんばかりに、明石がそれに答える。
『勿論、そこは対策済みです。むしろ、今の龍驤が触れたら侵蝕を治療する性質になっているくらいです。全ての性質を反転させていますから』
悪性を善性に変えるにあたって、龍驤が持つ全ての力は逆転している。壊す力は直す力に、侵蝕する力は解放する力に、殺す力は生かす力に。その存在そのものが、今まで使われていた薬剤と同等と言える。
実際は、泥の成分を中和相殺する泥を溢れさせるという存在となっているのだ。いわば、侵蝕の泥ではなく解放の泥。春雨のマグマとはまた違った、泥の侵蝕に対する解答。
『私が用意出来る泥対策の最高傑作と言えるでしょう。本来の仲間を発明品と言うのは少し気が引けますが、この龍驤がいれば、泥の侵蝕はもう怖がらなくていいでしょう。それがＲＪシステムですので』
鎮守府で用意出来る対策としては、もうこれ以上のモノは無いだろう。龍驤という人柱を得たことによる、意思を持つ対策機能。生体艤装と近しい存在とすら言える。
例えば、と、未だ残している荒潮から取得した泥の入った試験管を持ってくる。龍驤の力が本物ならば、これが消滅するはずである。
『これが泥のサンプルなんですが、反転の力を持つ龍驤の近くに持っていくだけで』
試験管を近付けた瞬間、まるで蒸発するように泥が消滅した。これは今まで使っていた波長と同じようなもの。龍驤そのものが泥を霧

散させる波長を発しているようなものである。
『こうなります。なので、龍驤がまた侵蝕されることもないです。極端な話、龍驤を泥の海に飛び込ませたら、その場からある程度の範囲の泥が全て消し飛びます。侵蝕されている者がいたとしても、その場で治療が完了します』
「あらあら、これは凄いわねぇ。なら、その子を使えばみんなが嫌な思いをしないで済むのねぇ」
『そういうことになります。少なくとも、今ここにある機材と接続状態にすれば、鎮守府全域が守られることになりますし、妖精さんであるが故に艦娘の装備としても使えます。見張員と同じですね』
とはいえ龍驤はここにいる1人だけ。装備出来るのは1人だけとなるが、その周囲が全員守られるように出来るため、黒幕との決戦では必要不可欠な存在となるだろう。
『バリア発生装備との併用で、確実に侵蝕からその身を守ることが出来るでしょう。これで五分五分になれると考えています。ですが、龍驤自身が不死の存在だったことを考えると、黒幕も同じ存在になってしまっていると思います』
つまり、どうやっても斃せない敵。波長によって消滅させられるかは、残った龍驤の端末の泥から解析をしていくことになるのだが、それでも今までの手段でどうにか出来るとは限らない。
それに、侵蝕性も今までとは比べ物にならない可能性だってあるのだ。黒幕とその配下達が同じ性質と考えない方がいい。
「どれくらい時間がかかりそうなんですか？」
『うーん……なるべく早く終わらせようとは思ってるけど、ひとまず解析にここから丸一日貰いたいですかね。アシスタントの龍驤の力も借りて、元凶の力を予測解析していこうと思います』
つまり、今日も含めて最低2日は何も出来ない。その間にさらに力を蓄え、本番に向けて準備を進めていくことになる。
「提督、この時間で進めてほしいことがあるんですが」
『わかっている。君達が黒幕との戦いに参加出来るようにする手段だろう。どう足掻いても、施設から直接大塚鎮守府まで向かうことは出

来ないし、そもそも君達は敵対生物と誤認されてしまうだろう。それを解消するために、裏で僕と大将がいろいろと手段を講じているさ』
春雨の思いを先に汲み取っていた。それに関しては、龍驤との戦いに参加してもらった施設の深海棲艦達の信用度と有用性が高いことを証明出来たはずなので、特例で穏健派の深海棲艦を仲間として受け入れられるように持っていく方針。
とはいえ、真っ昼間に堂々と鎮守府に入港するのは難しいはずなので、そこはまたいろいろと考えて。少なくとも、誰もが望む結果に持っていけるようにしたいと、大将も大本営側として力を振るってくれている。
『だが、悪い方向にはいかないよ。そうでなければ、今回の物資援助も簡単には許可が下りなかっただろうからね』
「なるほど……なら、あまり心配せずに待つことにします」
『ああ、そうしてくれ』
黒幕との戦いに向けて、施設側も何か準備をしておく必要があるだろう。その1つが、覚悟。

『ほな、ここからはウチが話せることを話す。良いか悪いか、記憶は全部そのままやから、望む情報を全部話したいと思うんやけど、どうやろか』
『ああ、そうだね。黒幕については、こちらはあまりにも情報が少なすぎる。出来ることなら、君の知る限りを提供してもらいたい』
『了解や。質問があったら何でも聞いてや』
そしてここからは黒幕への道を作る時間。龍驤への尋問となる。

最も知る者

龍驤が妖精さんへと生まれ変わり、ここから黒幕に関する話をさせる。龍驤としては、今までの罪を償うために、話せることは全て話すと姿勢を正した。

ここまで長かったが、ようやく黒幕がどういう存在かがわかることになるだろう。

『質問があったら何でも聞いてや』

聞きたいことがありすぎて、逆に質問がすぐに出てこない。それほどまでに、今まで黒幕の真相は秘匿され続けていた。

こんな機会はもう二度と無いだろう。龍驤ほど黒幕のことを知っている者はいないはずだし、これ以降に侵蝕された敵をその記憶を残したまま治療して味方に引き込めるタイミングは来ないはずだ。

「それじゃあ、私から」

ここで手を挙げたのは、やはり春雨である。

『辿り着く者……春雨やね。何でも聞いてくれや』

「黒幕は今、何処にいますか。大まかな位置はわかっていますが、正確な位置はわかりません」

大塚鎮守府の近海にいることはわかっている。しかし、未だにその存在をその目にすることは出来ていない。

敵対する者を弾く結界があるため、正確な位置がわかってもそこに辿り着くことは出来ないかもしれない。そのため、聞いたところで何も変わらない可能性は高い。しかし、どんなところに拠点を置いているかは、知っておいて損はない。

春雨は黒幕に対して殺意しかない。そのため、もう別に黒幕の人となりなんてどうでもいい。そのため確実に殲滅するための材料を真っ先に尋ねる。

土地を侵蝕しているというのなら、その場所がどうなっているかをまず知った方がいいだろう。攻め込むためには、立地条件などが重要となる、

『無人島を本拠地にしとる。そちらの姫さんが使っているようなモン

とは違う、木とかも生えとるような島やな』
「木……ですか。戦艦様が以前に野宿したところみたいなところですかね」
　その島は、戦艦棲姫以外にも古鷹と白露がよくわかっている。何せ、襲撃した2人だから。
　それに近しいような場所だったとしたら、無人島全域か一部に森があるということ。奥に行けば行くほどその姿を眩ますことが出来る。隠れるのなら持ってこいの場所でもあるだろう。
「最初から最後までずっとですか」
『せやね。ウチが器で無くなった後からずっとや。そこで、ウチらみたいな尖兵が、島から離れていろんなことをやっとった。あんまりこういうこと言うんは申し訳ないんやけど、そこにおる……古鷹とかを作るための動きが最初のメインや』
　かつて黒幕サイドだった者達が顔を顰める。
『古鷹が生きとったのは、内心結構驚いたわ。あの時、鎮守府を襲った時に、もうあかんから見捨てて帰ったんやけどな。治療されてそっち側におるやなんて思うとらんかったからな。でも、表に出したら調子付かせる思うて、平常心のフリしとった』
　仲間をも見捨てるような行動を取っていたことを後悔するような仕草をする龍驤。そういうところを見ると、やはりもう敵対していた龍驤はいないのだと実感する。違和感すら覚えるほどだ。
『話戻すな。あの島を選んだんは、黒幕の姫さんが力を蓄えるためや。見つからへんように、コソコソとな。雌伏の時や言うて、森の奥に身を潜めとる。あれや、今でこそ見えんようにする結界みたいなモンを使えるが、そん時には姫さんにもそういう力があらへんかったからな』
　泥の状態で活動していたわけではないだろうが、やはり隠れるのならそういう簡単には人目につかない場所を選択するだろう。適当な器を手に入れたとしても、だからといって堂々と表を歩くことはしない。
　復讐心が溢れたことにより器を手放すという状態になったわけだ

が、その心はむしろ冷静。復讐を確実に、むしろより効果的に痛手を負わせるために全力を尽くす。
　その結果がこれだ。尊厳を破壊し、艦娘に嫌な思いをさせることに特化した戦術を駆使して、その勢力を伸ばしていった。
『そうなると、1つ疑問がある。今もまだ潜伏しているのだろうが、規模が増えてきたら潜伏も難しくなるのではないだろうか。1人や2人だけではないだろう』
　ここで提督からの意見。いくら無人島で、森の中に潜んでいるにしても、人数が増えてくれば嫌でも人目につきやすくなる。ただでさえ、その無人島は大塚鎮守府の領海に近い場所。空母による哨戒があれば、違和感くらい覚える何かがあってもおかしくない。
　しかし、今の今までその存在を完全に秘匿出来ており、意識しながら捜索して違和感を覚える程度。しかも、一度侵蝕されているから肌がそれを微かに感じ取れたくらいである。
『それは、姫さんが隠れることに特化したからやろな。あのヒト、器が無ければ殆ど液体、流動体やん。だから、それを活かして、自分の身体をその島に染み込ませていったんや』
　これが『観測者』の言っていた土地を侵蝕するということなのだろう。だが、それだけでは隠れることには繋がらない。
『そうしたら、その島に地下の施設が出来てしもうた』
『地下……？』
『せや。ほら、そっちの姫さんが島に施設を建てたんやろ？　それを、地面の中に造ってしもうたんや。だから、表向きは無人島やけど、その中は拠点になっとったって寸法や』
　仲間達の施設とは逆の、地下施設。それを造り上げてしまっていたという。黒幕も中間棲姫。つまりは陸上施設型である。島を自分のモノにするのはお手のものというわけだ。
「なるほど、地下からより島を侵蝕していったことで、その土地そのものを自分のモノにしてしまった、と。地下施設そのもの、島そのものが、その黒幕の器ということになるわけですね」
『そういうことやね。ウチらには住む場所が貰えたって感覚しか無

かったんやけど、姫さんは裏でそうやって力を蓄えとった。その結果が今ってことや』

長い時間、その島に泥を染み込ませ続けていたのだ。その四肢を伸ばし続けて、島の全てを手中に収めようとしていた結果、本当に収まってしまったわけである。

その度に力も増しているし、やれることも増えてくる。最初は他人を器にして自分の身体とするだけだったが、そこから泥を分離させて侵蝕するようになり、その泥が増殖する性質を持ち、さらには龍驤のように完全に泥にすることすら出来るようになった。時間をかけて成長をしていったのだ。

ここ最近での成長速度が速くなったのは、復讐心に火をつけ、恨みと憎しみがさらに膨れ上がったからと言える。黒幕は、そういうカタチで壊れている。

そこで今度は気になることが出てくる。それについて口に出したのは、その処置が施されている白露。

「質問。あたし達、他の艦娘と混ぜられちゃってるよね。それもその地下施設でされたことなのかな。張本人であるあたし達は何をされたかも全く覚えてないんだけど」

魂の混成。侵蝕と同様に黒幕が実行した魂の冒涜。死んだと思っていた白露が今ここに妹達の記憶と共に生きているのは、紛れもなくその処置をされたからだ。

『ああ、それはな、姫さんの泥の効果や。あのヒトは、死体を混ぜ合わせられる。ウチも混ぜられる時に、一度死んどるんよ』

やはりというか、予想通りというか。殺害した仲間達を連れて行ったという古鷹や、そこに一片の証拠も残さずに持って行かれた白露達は、そのために使われたということ。

該当者は、白露、古鷹、大鳳、コロラド、そして潜水艦姉妹。勿論、龍驤も含まれている。あらゆる場所から材料を集め、配下を作り上げる。今でこそ亡骸を混ぜることなく侵蝕と増殖を繰り返すことで配下を鼠算式に増やすことが出来るが、それまではこういうカタチで配下を増やすしかなかったのだろう。代わりにその配下は深海棲艦化

し、艦娘よりも強い力を得ることになったのだが。
『ウチはそれを見とったから覚えとる。古鷹を混ぜるところをな』
古鷹の表情が歪む。自分に施され、今尚心の中にいる3人の仲間達のことを思い出すことで、苦しい思いに苛まれた。
『新鮮な死体を、姫さん自身が包み込むんや。そうすることで、死体がグズグズに溶け合って混じり合う。再構成されたら艦娘も辞めて同胞(はらから)へと変化する。そこに姫さんの端末を入れておしまいや。メインになるヤツは、そん時の姫さんの気まぐれやけど、基本的にはいっちゃん強いヤツか、侵蝕してここに連れてきたヤツやな』
やっていることは実に簡単。しかし、何故そうなるかと言われたら、原理は不明に近い。おそらく、艦娘が感情を溢れさせて繭になり、深海棲艦化することを、黒幕自身が繭となることで引き起こしていると考えるのが妥当。
繭の中で亡骸が一度液状化すると言われても、それは昆虫などと同じなので違和感はない。実際、繭に包まれて孵化したら脚や腕が無くなったりしているのだから、完全変態のような再構築であってもおかしくはない。液状化したのなら、混ざり合うことも可能だろう。
溢れさせるのではなく、包み込む。そのせいで、泥も体内に入り、完全な支配下に置かれる。それは他者を侵蝕する泥と同じように、宿主が死ぬことでその場に吐き出され、次の宿主を探そうとするのだが、そうなるまではしっかりと侵蝕して使い込むわけだ。
『ウチが今のカタチにされたんも、その地下施設でや。ほら、北上にボコボコにされたやん。その後、治療言いながら姫さんから処置を受けとったんよ。生きたまま包み込まれたからこうなったって感じやな。いや、姫さんの力が増したから、こういうことが出来ただけかもしれへんけど』
つまり、やろうと思えば黒幕は、この龍驤と同じような存在をいくらでも生み出せるということだ。時間はかかるかもしれないし、今までの経験なども必要になってくるかもしれないが、例えドロップ艦であろうとも、取り込んでしまえば二度と治療出来ない配下の出来上がり。

これも、艦娘への復讐に燃え、嫌がらせに特化した力だからこその進化。治療されることを知ったためか、より艦娘の尊厳を踏み躙ることを求めたことによる力であろう。
復讐心に囚われるとこうなるという大きな例である。同じく復讐心が溢れているリシュリューは、表に出さないように心の中でこうはなるまいと決意した。
『今の黒幕の姫はどういうカタチを取っているんだい。島そのものになっているということは、姿も持っていないのかな』
今度は提督からの質問。撃破するためにはどうすればいいかがここでわかる。ヒトとしてのカタチを持っているとしても、それがまともに倒せるかはわからない。
『拠点の中ではヒトのカタチはしとるよ。自分用の器は確保しとるみたいやから。でも、ウチでいう核(コア)は、ウチにも何処にあるかはわからへん。施設の奥にしまっとんのか、自分でしっかり抱えとんのか……』
これぱっかりは一番の部下にも伝えていないようである。自分の急所を自分以外が知ることは許さないということだろう。龍驤もそれに対しては違和感も不信感も無かった。
『つまり、島を破壊してしまえば万事解決ですかね!?』
『そんな簡単な問題じゃ無いだろう』
やはりというか何というか、明石が物騒なことを言い出す。間違ってはいないのだが、それで本当に終わるかと言われればそうではない。故に、提督が即座にツッコミを入れた。
例えば、島を消し飛ばすくらいの威力の爆弾を上空から投下して、全てを木っ端微塵にしたとしても、あの黒幕のことだから、その程度では核(コア)が破壊されないように対策はしているだろう。
やるのなら、その核(コア)を探し出し、確実に破壊する。もしくは、今の龍驤のように封印する。死なないのならば、殺さずに無力化する手段を考えるのも必要になるかもしれない。
それは龍驤の解析によって明らかになる可能性がある。龍驤が黒幕と同様の存在に変化させられているのなら、対策は考えられそう

だ。

黒幕の存在が明らかとなり、これからの戦い方も考えられるようになる。しかし、姿を見せていない黒幕に何が通用するのかは未だわからず。

ここに来てようやくスタート地点に立てたようなものだった。長い長い戦いに決着をつけるには、まだまだ情報が足りなかった。

和解

ここで通信は終了。情報を整理した後、大将と大塚提督にもここで齎された情報を提供して、これから行われる最終決戦に挑むことになる。

鎮守府では、堀内提督が大きく息を吐いた。龍驤が妖精さんと化した瞬間を目の当たりにしたわけだが、ここで成功して本当に良かったと、心の底から安堵した。

万が一失敗したら、この鎮守府は侵蝕されて全てが終わる。その可能性が0と言われていても、やはり侵蝕の怖さを知っている分、不安が払拭されることはない。

「正直、一安心だ。龍驤が無事……とは言えないが、まともに話が出来る相手となってくれたのは僥倖だ」

ドラム缶の横に置かれた台座の上で、同じように安堵した息を吐いていた龍驤。小さくなったことで体力不足がさらに如実になるかと思いきや、妖精さんという存在は普通とは違うようで、体力は有り余っているようである。

龍驤を襲っているのはとにかく気疲れである。今までとんでもないレベルの敵として君臨していたことを考えると、何処もかしこもアウェー。こうして立っているだけでも、足が震えてしまいそうなくらいに怖い。

「迷惑かけ続けてるんやから、この程度はダメージにも何にもならんよ。本来なら死んで命で償うべき所業やで。それが、生きて償う時間をくれたんはホンマにありがたいわ。ウチがやれることは何でもやらせてもらうで」

悪性を反転させたことで今の龍驤が生まれているわけだが、艦娘龍驤と殆ど同じ。小さな見た目からは考えられないくらいに仲間思いのお姉さんというイメージがあるのが龍驤だ。

「助かる。当面は明石の指示の下、黒幕対策の開発をしてもらいたいんだが良かったか」

「良いも何も、それがウチの生きてる意味みたいなもんや。いくらで

もやらせてもらうわ」
　任せろと言わんばかりに胸を叩く龍驤。だが、少しだけ無理をしているようにも見えた。
　明石の処置によって今の龍驤となっているものの、その記憶は残したまま。情報提供が出来るほどにはっきり覚えている分、罪悪感も凄まじい。
　ドロップしてから今まで、そのほぼ全てを侵略者として過ごしてきたのだ。白露や古鷹ですら、仲間である艦娘を沈めた経験があるのに、龍驤にそういう経験がないわけがない。直近では、龍驤の策略で施設の者達へのあてつけのように命を落とした葛城と不知火がいる。それが龍驤の思考を常に苛んでいく。
「龍驤。君はすぐに仕事に入らなくていい。一度身体……いや、心を休めるべきだろう」
　言われて、龍驤も少し考えたが、提督の言うことを突っぱねる理由がない。むしろ、何を言われても肯定するくらいである。休めと言われれば休む。
「明石、龍驤との解析はすぐにやるべきかい？」
「早いに越したことはないですけど、私も休憩時間が必要ですし、龍驤にも休んでもらって大丈夫ですよ。それに、今日からはこの鎮守府の一員ですからね。仲間達との顔合わせも必要でしょう」
　少しだけ悪い笑みを浮かべた明石。仲間との顔合わせと聞いて、逆に龍驤の表情は強張る。
「あー、あのなぁ、ウチとしてはその、顔を合わせづらいっちゅーか」
「でしょうね。でも、最終決戦のときには誰かが龍驤を装備して出撃するんだから、絶対にヒト前に出ることになるよ。遅かれ早かれ顔を合わせるんだから、今の方がいいでしょ」
　そう言いながら龍驤を摘み上げた明石は、うもすも言わさず五月雨の頭の上に乗せた。提督と共に来ていたが、ここまでのことに驚きっぱなしで一言も発していなかった五月雨も、これには声を上げるくらいに驚く。
「はい、装備完了。今の龍驤は五月雨の装備として認識されました」

「え、これだけでですか？」
「そう、これだけで。あんまり振り回すと落ちちゃうかもしれないですけど、戦闘の時にはそうならないように出来るから、五月雨でも大丈夫」
　何も無いところでひっくり返るようなドジをする五月雨でも大丈夫であることを実証するための試験みたいなもの。
　明石の助手であり、泥の研究をサポートすることも仕事だが、ＲＪシステムの根幹として戦場でその力を発揮するのが一番の役目。それが正常に作動するかは、しっかり試しておく必要がある。それが今だ。
「五月雨、そのまま龍驤に鎮守府を案内してあげてくれ」
「あ、はーい、了解です。それじゃあ行きましょう」
「ちょ、ま、なんやこれちょっと怖い！」
　龍驤を頭に乗せたまま、五月雨は地下室を出て行った。あまり安定しない頭の上のせいでバランスがうまく取れなかったが、そこは装備としての本能がうまく作用しているのか、そこから落ちるようなことはなかった。五月雨の髪が長いお陰で掴むところに事欠かない。
「ひとまずこれで装備状態の運用試験と行きましょう。あとからＲＪシステムとしての運用も確かめてみませんとね」
「それはいいんだが、なかなか強引だったんじゃないかい」
「いやいや、これくらいしないと、ずっとヒト前に出ようとしませんよ。それに、さっきも言った通り、いざ決戦という時に精神的な理由で本調子が出せなかったら困るじゃないですか。ただでさえ、本来の妖精さんとは大分違うんですから」
　五月雨の背を見送りながら、２人は龍驤のこれからについて考える。システム妖精となったことで、艦娘とも深海棲艦とも違う生き方を強いられることになるのだ。精神的にも調整されているとはいえ、何か悩みを持ったり、それこそ精神的に辛い思いをするのではないかと。
　しかし、それは今まで侵蝕されていたものも同じく。龍驤はそれが度を越しているだけ。それならば、周りの助けがあれば救われる。

龍驤を頭に乗せた五月雨は、手当たり次第に鎮守府の中を案内する。とはいえ、艦娘のための設備を妖精さんが使うことはほとんど無い。妖精さんには妖精さんの生き方がある。食べ物だって違うだろうし、同じであっても量が違う。風呂なども必要かわからない。そのため、案内されたところで無意味である可能性もあった。

だが、本質はそこではない。五月雨だって察している。龍驤すらも気付いている。こうやって鎮守府を歩き回ることで、龍驤が今の身体に慣れてもらうことが目的だ。身長が変わったことによる景色の違いが主であり、精神的な部分もある。

「さ、五月雨、もうちょいゆっくりでええか。まだ慣れとらんねん」

「あ、ごめんなさい。髪の毛掴んじゃっていいですよ」

「掴んどるんやけど、思ったより滑んねんて。そういう意味では五月雨、めっちゃ髪綺麗やな」

これではダメだと、龍驤はグリップのある手袋を展開して五月雨の髪をしっかり握る。これならどれだけ揺さぶられても落ちることはないはず。

妖精さんの重さはほとんど無いようなもの。そこにあるというのはわかるが、首が痛くなるほどの重さでもなく、だからといって乗っていることがわからないほどでも無い、ちょうどいい重さ。

そのおかげで、髪の毛を引っ張られても痛みも何も無い。そこに何かあるという感覚があるのみ。強引に悪意を持って引っ張れば痛いかもしれないが、今の龍驤にはそういうことをする気持ちはカケラもない。そうするくらいなら落ちることを選ぶだろう。

「あ、いたいた。龍驤さんに会ってもらわなくちゃいけないヒトがいたんですよ」

「……大概予想はついとったわ」

来たのは鎮守府の外。いつもなら山風達や五月雨達、荒潮なども加わって、陸上のトレーニングを積んでいる場所。今はその面々が全員調査隊として施設に出向いているため、そんなトレーニングは行われ

ていない。
　静かなその場所だからこそ、そこにはまったりしている北上と大井がいた。のんびりと、海で行われている演習を眺めているのみ。大井が用意したのだろうビニールシートとお茶で、精神的な休息をとっているように見えた。
「北上さーん」
「ん？　ああ、五月雨かぁ。なんか来るんじゃないかなって思ってたよ。龍驤の実験やるっつってたもんね」
　北上の姿が見えた途端、龍驤は五月雨の長い髪を活かして、後頭部側に隠れる。北上は特に顔を合わせづらい相手。利用していた荒潮や漣達よりも話すことが難しい。利用していたから謝るとかでもなく、戦ったから健闘し合うとかでもなく、いがみ合い、煽りあった仲だからこそ、顔を合わせるのも辛い。
「龍驤ちゃーん、そこにいるのはわかってんだぞー。妖精さんになってんでしょ。顔を合わせるのが嫌なのはわかるけど、顔を見せないと誠意が伝わらないぞー」
　ニヤニヤしながら五月雨の髪の向こう側に声をかける。髪が変に震えたが、五月雨の肩から龍驤がおそるおそる顔を出してきた。敵対していた時とは正反対の、何かに怯えるような表情を見せる。
「あたしゃ別に今のアンタについてムカついてるわけじゃあ無いから安心しなよ。改心したんでしょ。強制的にだけど」
　龍驤を摘むように持ち上げて、五月雨の頭に乗せ直す。隠れることも出来ないため、自然と目を逸らした。
「ウチが今までやってきたことは許されることやあらへん……北上、お前にも散々なことをやってきたと思う。せやから」
「ん？　あたしは別に何とも思ってないけど？」
　あっけらかんと言い放つ北上。
「あれはそういう戦いなんだから割り切ってんの。んなこと言ったら、誰も救われないでしょうが。荒潮とか漣とかさ。だから、スパッと割り切っておしまいにすりゃあいいんだよ」
「北上さんは能天気すぎるとは思いますけどね」

「大井っち、こういう時は結構キツめに言うよね」
「北上さんのためですから」
　北上は本心からそう言っている。つい最近、むしろ昨日までは完全に敵対しており、互いに出し抜く事しか考えていないような関係だったのにもかかわらず、もうその時のことは水に流したような言動。
　龍驤は最後の最後に北上を器にしてやろうとも考えていたので、その時の罪悪感もある。あそこまで行ってまだ利用しようとした性根の悪さを、調整されたことで深く後悔していた。
「だから、別に謝らなくていいよ。真に悪いのはアンタじゃ無いでしょうに。ぜーんぶ黒幕のせいなのは、誰もがわかってんのさ。そりゃあ、アンタに苦手意識持ってるヤツはいるだろうけど、少なくともあたしはそういうの無いね。というかアレか、龍驤ちゃんは罵ってほしいのかな？　望むのならあの時みたいに煽り散らしてあげるけど」
　戯けて話す北上に、龍驤は少しだけ精神的に楽になった。あの時に持っていた怒りと憎しみが、全て罪悪感に変わったようなものであるため、そこが張本人に緩和されたのは大きい。心への負荷が大分減る。
「本当ならあたしがアンタを装備して黒幕との最終決戦が良かったんだと思うけど、アレっしょ、どうせ陸上施設型なんでしょ。だったらあたしは出番がないからね」
「……せやな。お前くらい器用なら、ウチも使いこなすんやろな」
「だから、今はこれくらいで終わりにしとこうよ」
　五月雨の頭の上に拳を突き出す。
「……ホンマにええんか」
「いいんだよ。気が変わらないうちに終わりにしてよ。それとももしかしてお仕置きとか受けたいドMちゃんだったりする？　いやぁヒトの性癖についてとやかく言う筋合いはないけど、それはやる側もそういう性癖でないとダメだと思うんだよなぁ。残念だけどあたしはそういうのは」
「ちゃうわ！　ウチかてもう痛い思いはしたくあらへんわ。身体はま

だしも、心はな。そら反省は必要やけ、罰としてある程度は受けるけれども」
北上の煽りによって、龍驤は少しだけでも元気が出たような気がする。
龍驤を北上と会わせるのが、この鎮守府案内の一番の目的だ。精神的にかなり参っている、罪悪感だらけの龍驤の心を休ませることが出来るのは、あの時に宿敵だった北上しかいない。
「……ほな、ウチはこんなになってもうたけど、よろしゅうな」
突き出された北上の拳に、龍驤も拳を突き合わせようとするが、短すぎて手が届かず、五月雨に屈んでもらってなんとか格好がつくくらいになった。それが妙におかしくて、この姿になって初めて、龍驤は笑顔を見せた。

受けるべき罰はあるかもしれないが、誰もがそれを望んでいないのならば、受ける必要はない。龍驤は罪悪感は残され続けるが、新たな鎮守府の一員として活躍することになるだろう。

それに納得して

一方、施設。龍驤が妖精さんに生まれ変わる一部始終を見て、空気は少し複雑だった。とはいえ、救出不可能と言われていた龍驤が救われたのは決して悪いことではない。むしろ喜ぶべきことである。

「……救われたことはいいことですよね。そもそも、救えるのなら救うつもりで戦ったんですから」

「そうよぉ。龍驤ちゃんだって被害者なんだもの。救われて然るべきよぉ」

春雨のこの言葉に、中間棲姫が賛同。そして、それをきっかけに仲間達が次々と納得していく。

特に、一度敵対している者達は龍驤に対しては同情の気持ちも大きい。やらされていたに過ぎないのに、龍驤だけは救われない程にまで変えられて、取り返しのつかない程にまで血に塗れた。もしかしたら自分もああなっていたかもしれないと思うと、むしろ怖くて仕方ない。

「私は気に入らないけどね。殺せないのなら死ぬより辛い目に遭えばいいのよ」

怒りに任せた叢雲の呟きは、誰も否定しない。そう考えるのは間違いでは無いし、口には出さないが心では思っている者は沢山いるだろう。叢雲はそういうのを心の中で抑え込むことが出来ないだけ。そういう性質であることはみんなが把握している。

「アレはアレで大変だよ。ここからは艦娘でも深海棲艦でも無い存在として生きていくんだから」

薄雲が叢雲を宥めようとしたところで、春雨が口を出す。妖精さんの姿になるということは、それだけ艦娘や深海棲艦とは違う生活を余儀なくされる。しかも、システム妖精であるため、今後酷使されることは確定。

さらには、明石の実験材料となることも決定している。そして、その明石のアシスタントになることも。おそらく、普通に生きていくのとは比べ物にならないくらいに過酷だろう。

物理的な痛みはもう丸一日受けているだろう。叢雲はそれだけじゃ足りないと言うかもしれないが、既に尊厳を潰されているのだから、ある程度は妥協してもらいたい。春雨も妥協した。
「……まぁ、あれなら握り潰すだけで始末出来るんだから、良しとしてあげる。薄雲、なんか甘いもの貰えるかしら。イラつくと甘い物が欲しくなるわ」
「はい、ちゃんと用意してありますから、機嫌を直しましょうね」
今は叢雲もこの程度で終わらせた。あの姿で面と向かったら、それはそれで一悶着ありそうではあるが、溢れる怒りを抑え込めているのなら良しとする。
春雨も少し苛立ちが溢れそうだったが、海風筆頭に妹達が周囲を囲うことで落ち着かせた。叢雲には甘い物だが、春雨には妹達の温もり。白露も傍に寄ってやり、より落ち着かせる。
「私も割り切るよ。怒りはどうしても湧いてくるけどさ、ああなった龍驤に怒りを向けても、なんて言うか、無駄じゃないかなって」
既に今の龍驤は再洗脳済み。悪性が善性に反転した、ただの妖精さんだ。アレほどのことをやらされたことを深く深く反省し、鎮守府の、人類のためになるように身を粉にして働くことだろう。
そんな相手に恨みを持ち続けていても、無駄な労力なのではと考えた。それよりもやらねばならないことが、黒幕を始末することがあるのだから、龍驤にはもう構っていられない。
だからこそ、落ち着こうと努めた。姉妹の力を借りて、ここで無駄なことをしないように。
「それじゃあ……あたし達はそろそろ」
ここまで見ることが出来たため、調査隊は帰投することとなる。一番のメインである物資搬入も終わり、和やかに昼食を共にし、心身共に癒えたと思えた。
荒潮は今もジェーナスとミシェルに囲まれニッコニコ。漣達も潮と交流を深めることが出来たようで、来る前よりもイキイキしているように見えた。
山風は少し名残惜しそうにしていたものの、今まで通りに過ごして

いれば、また海風に会える。そう思えば、一時的な別れも耐えられた。
「物資の件、本当にありがとうねぇ。今は申し訳ないけれど、当てにさせてもらうわぁ」
「……うん、大丈夫。提督も、また何かあったら相談してほしいって……」
「彼にも御礼を言っておいてちょうだいねぇ。こちらも力になれることがあればお手伝いさせてもらうって」
「今頃……穏健派の深海棲艦が鎮守府に行けるようにするために、大将が頑張ってるんだって……」
まだ期待してはいけないのだが、穏健派の深海棲艦を鎮守府に受け入れられるようにしていく方向に向かっているのだから、そうなればここにいる姉妹が鎮守府に戻ってくる可能性が出てくる。離れ離れの生活ではなく、また共に戦えるようになるだろう。
海風は今まで以上に春雨に依存しているが、それでも本質から完全に狂ってしまっているわけではない。山風達を相手にするときは、深海棲艦化する前と同じお姉さんをしているのだから、戻ってきたらまたあの時と同じ日々になるはず。
「そうなのねぇ。なら、私はここから大将さんを応援しておくわぁ。みんなが望む方向に進むことが出来ればいいわねぇ」
争いを望むことはしないが、鎮守府に赴くことが出来るようになれば、今まで以上に楽しく生きられるようになると想像出来る。ならば、それがうまく行ってもらいたいと願うのは、悪いことではない。

調査隊が帰投したことで、施設は少しだけ静かになる。龍驤転生の際の複雑な感情もひとまずは落ち着き、あれはもう別物なのだという納得は出来ていた。
むしろ、ここで納得しておかなくては今まで救われた者達をも否定することになるので、誰もがそこに落ち着く。それこそ当該の者は何も言わなかった。
「あたしもあのヒトには何も言えないからねぇ。なんだかんだで何人

か手にかけてるわけだしさ」
　お茶を飲みながら白露が神妙な表情で話す。黒幕の支配下に置かれたことにより、嬉々として艦娘を沈めていた過去がある白露には、龍驤に対してそこまで激しい怒りは無い。
　漣達経由ではあるが、海風を侵蝕された恨みもあるし、春雨が怒りを溢れさせるきっかけを作ったのも、元は龍驤に帰結する。しかし、それも本来の龍驤本人の意志でやったわけではなく、黒幕の悪意が全て。ならば、悪いのは龍驤ではなく黒幕。
「毛色が違うにしても、今はあの明石さんが調整して元に戻したんでしょ。だったら、怒りも憎しみもちゃんと向ける方を考えるよ。春雨に矛先をちゃんと見定めろって言ったのは、他ならぬあたしだしね」
「ですね。私もそれは胸に刻んでいます」
「そう言ってくれるとお姉ちゃん嬉しい」
　初めて怒りを溢れさせた時に言われた白露の言葉は、今でも春雨にはしっかりと刻まれている。おかげで、葛城と不知火を救うことが出来なかった時も、激しい自己嫌悪に囚われることは無かった。
　怒りの矛先を正しく見定める。許せるものは許す。許せないものは徹底的に潰す。その矛先は、今はもう黒幕にのみ向いている。ならば、龍驤に怒りを向けるのは違う。そう考えられるようになったのは、紛れもなく白露のおかげ。
「そのうち直接会うことにもなるでしょ。その時に、怒りを溢れさせない自信、ある？」
「……正直なところ、自信は無いですよ。アレだけのことをやった龍驤相手ですから。画面越しだから我慢出来ましたけど、手で掴めるところにいたらと思うと……わかりませんね」
「素直でよろしい。でもそこはぐっと我慢してよね。海風だって、そんな春雨を見るのは嬉しくないでしょ」
　突然話を振られて海風がビクッと震える。こうやって姉妹でお茶会のようなことをして春雨の怒りを鎮めているときは、常に春雨に気を遣い、常に春雨を見ている。近くに白露がいても、話を聞いていても、気持ちは常に春雨に向いていた。

「そう、ですね。春雨姉さんの怒りは勿論理解出来ます。春雨姉さんの怒りは私の怒り。私もあの龍驤に対しては許せないものがありました。姉さんを悲しませた不届き者ですから、勿論万死に値すると思いますし、死よりも深い絶望を味わうべきとも思いますよ。でも、それで春雨姉さんの手が汚れるのは嫌です。それならば、私がこの手で握り潰します。春雨姉さんのその手は、壊すためではなく救うためにあるものですから。それによって私も救われていますしね」

捲し立てた後、海風は春雨の手を取った。義腕ではあるが、そこからは温もりを感じた。

「だから姉さん、我慢出来なくなったらまず私の手を握ってください。私の右腕なら、いくらでもどうしてくれても構いませんから。壊れても作り直せるのが義腕ですからね」

「……あはは、そんなこと言われたら、ちゃんと我慢しなくちゃって思えるよ。どうであれ、海風を傷付けるわけにはいかないからさ」

少しは気が晴れたのか、海風の手を握り返した。お互い義腕で、インナーを隔てていてもカチャリと音を立てたが、本来感じない温もりを感じることが出来た。心境によって、失われた温もりがそこにあるかのように感じ取れる。

「大丈夫。許すとか許さないとかはもう考えない。どうしても態度に出ちゃうかもしれないけど、何かおかしなことをしそうになったら海風が止めてくれればいいよ。白露姉さんもお願いしていいですか」

「勿論。妹におかしなことをさせるわけにはいかないからね。これは4人の総意だからさ」

「心強いですね。じゃあ、次の戦いは白露姉さんも来てくれますか」

「行けそうなら行くよ。人数制限とか条件とかあったらその限りじゃないから断言は出来ないけどさ」

出来ることなら誰もが決戦へと向かいたいはずだ。だが、施設を空にするわけにはいかないし、そんな大人数で詰めかけても逆に戦いにくくなる。

むしろ、今はまだ出撃出来るかもわからない。大将が裏側で穏健派の深海棲艦の有用性と信頼性を説いてくれているらしいが、それでも

堂々と鎮守府に入港することは難しいだろう。
「あたし達は全員巻き込まれた類だからさ、出来れば自分達の手で決着つけたいと思うよ」
「ですね。巻き込まれたヒト達は、みんなそう考えていると思います」
「だから、そうなるように祈るしか無いよね。あたし達には何か口を出すことも出来ないわけだしさ」
　お茶をぐっと呷って立ち上がる。
「まぁ、いつでも出撃出来るように、多少は鍛えておこうかな。今まで以上の戦いになるのなんてわかってるし」
「……ですね。そろそろ私も身体を動かしたかったので。姉さん付き合ってもらってもいいですか」
「おうよ。海風も来な。お姉ちゃんが胸を貸してやろう」
「わかりました。では2対1で、白露姉さんがごめんなさいと言うまで攻撃すればいいんですね」
「ごめんそれは勘弁して」
　ここからは3人でストレス発散や特訓をして、決戦に備えていく。その時はもう、目の前に来ているのだから。

　今は後ろを向くことは許されないだろう。常に前を向き、決戦までの時間を過ごす。それは平穏な日々とは言えないかもしれないが、今だけは落ち着いて。

まだある悩み

翌日。施設では黒幕との決戦に備えるため、逆に施設側の防衛についての話を進めていた。

決着をつけるために行動はしていくのだが、それによってこの施設がガラ空きになるのは控えなくてはならない。そもそも、最悪の姫は自分を囮にして本土に攻め込んできたくらいなのだから、本拠地を襲撃している裏側でこの施設が狙われてもおかしくない。

まだこの施設の場所は知られていないはずなのだが、何かの間違いで既にもう場所を知っているなんてことだって無いとは言えない。黒幕自身も中間棲姫と同じ力を持っているのだから、今こそ突破方法を見出だしているかもしれないのだ。

そうなったら、いくら強力な力を持っている中間棲姫と言えど、その力に屈してしまう可能性がある。泥の侵蝕に耐性があるかどうかなんて、その泥に触れてみなければわからない。しかし、そんな危険なことはするべきではない。

「ということで、もしここからも人間さん達の戦力として向かうことが出来るのなら、誰が向かうかを決めておきましょうかぁ。もしかしたらダメかもしれないけれど、いいとなってから決めるのはよろしくないものねぇ」

中間棲姫がメインとなって、これからのことを決めていく。勿論だが、姉妹姫は陸上施設型であるため、この施設から出ることは出来ない。そのため、残りのメンバー２２名からの選出となる。

この中でも、最初から出撃することが無い者は決まっている。戦えるかもしれないがあまり戦力としてはカウント出来ないミシェルと、忌雷と同化してしまった瑞鳳と黒潮、そして、純粋な深海棲艦である戦艦棲姫と飛行場姫。この５人は最初から施設に留まることとなった。

「ミシェルはみんなが帰ってくる場所を守るために頑張るぴょん。まだよくわかんないけど」

「うん、その方がいいわ。ＭｉｃｈｅｌｌｅはＨｏｍｅを守ってね。

みんなのために」
「ぴょーん！　頑張るぴょん！」
　ミシェルは疑問が溢れているお陰で侵蝕も何も効かない上に、おそらく黒幕の結界も完全に無視出来る力がある。しかし、戦う力も忘れているのと、教えれば教えるほど弱点が増えるという稀有な特徴を持っているため、この戦いが終わるまではなるべく知らないままでいてもらいたいというのがジェーナスの願い。
　ミシェル自身は、『観測者』から結界を越えられる者として名指しを受けたために非常にやる気が出ていたが、ジェーナスの説得により今はこの施設を守ることを優先するという思考に落ち着いている。
「ウチらは防衛に専念することくらいしか出来んわ。言うてドロップ艦に毛が生えたくらいやし」
「悔しいけど、でもこの子のおかげで多少は強い動きは出来ると思うから」
　この子とは、勿論胸に同化している忌雷。出力を上げる役割を持っているため、熟練者の動きとまでは行かずとも、ドロップ艦からは逸脱した動きが出来るはず。
　瑞鳳はこの施設に数多くいる制空権争いに参加することになり、黒潮は島周辺の警戒に参加することになる。
「私達もここに残らざるを得ないでしょうね。貴方達と違って、元々艦娘じゃあ無いしね」
「戦艦が、言うなら、私もここにいよう。まだあまり、慣れていない、が」
　空母棲姫はあくまでも戦艦棲姫からの教えを純粋に守っているだけ。旅人としてのノウハウを教えている間に、人間には迷惑をかけないという信念が生まれているようだ。
　そのため、今回の最終決戦もそこを念頭に置き、余計なことはしない。代わりに、この施設を守ることでこの帰ってこれる場所を残し、いざ旅に出ても恋しくなれるくらいに愛着を湧かせることに重点を置いた。これも戦艦棲姫の作戦。
　旅の仲間が増えることは、当然嬉しいことだ。戦艦棲姫は一人旅ば

かりを続けていたが、ちょくちょく会った同好の士との二人旅はまた違った景色を見ることが出来て楽しかった。だから、ここぞとばかりに仲間を増やすために動いていた。
「それじゃあ残りだけれど……流石に全員で向かうのはよろしくないと思うわぁ。だから、まずは立候補から教えてほしいんだけれど……」
「私は行かせてもらいます。責任を取らせなくてはいけませんので」
率先して立候補するのが春雨。多少は落ち着いているが、やはり黒幕に対しての怒りは隠しきれない様子。龍驤に向ける怒りが黒幕に向かうようになったため、その分どうしても怒りが強くなっていたのだが、海風が片手を常に握り、温もりを与え続けた。
「春雨姉さんが行くなら、当然私も行きます。私という存在は春雨姉さんのためのもの。何処にいても私は側でサポートをさせていただきますので」
「私も参加。怒りをぶつけたくてぶつけたくて仕方ないんだから。誰が何と言おうと、私は黒幕を始末するために動くわよ」
海風と叢雲も参加表明。そして、
「一昨日の戦いには参加しなかったけど、次はあたしも行きたい。というか、あたしみたいに混ぜられちゃったヒト達はみんな行きたがってると思う」
白露が挙手。その時に発した言葉で、同じ境遇である古鷹、大鳳、コロラドが反応。
今のようなカタチにされたのは、紛れもなく黒幕のせい。その恨みは、混じっている人数分はあると言っても過言ではない。
「……白露ちゃんの言う通り、私も出来れば参加したいと思います。私だけじゃない、私の中の榛名さんも、鈴谷さんも、最上さんも、みんな参加表明をしています」
「私もですね。伊勢と日向が、私の意見と一致しました。声が聞こえるわけではないですが、そんな感覚がします」
古鷹と大鳳は、白露の言葉に賛同して、自分の中にいる仲間達とも感覚を同じとした。表に出ている人格ならまだしも、材料にされた者

達の怒りは計り知れない。それならば、その怒りに任せて決戦にも参加したいと思うのは妥当である。
　実際に話が出来るわけではないし、白露のように気質を表に出すようなこともあまりしないのだが、なんとなくどう考えるかはわかるようだ。記憶も持っているために、感情の推移も自分のことのように理解出来る。それを鑑みても、同意、同調してくれるとわかった。
　だが、コロラドは少し違った。
「……チョロ助、アンタは行かないわけ？　日和ってんの？」
「そんなわけないでしょ。私も行くわよ。私の身体をこんな風にしたヤツは、ＢＩＧ　ＳＥＶＥＮの１人として、制裁を加えてやるわ」
　叢雲の声が聞こえるまでは、何やら神妙な表情をしていたコロラドだったが、すぐに反応して参加することを宣言した。
　だが、少し様子がおかしいことにすぐに気付く。いつもの蔑称で呼ばれているにもかかわらず、何の反論もしなかった。完全に別事を考えていたようで気もそぞろに見えた。
「コロラドさんの中のヒトは、艦娘じゃなくて深海棲艦ですよね。だから、この戦いにも抵抗を示しているのでは？」
　春雨が直感的に気付いた。コロラドの表情には、混ざり込んだ姫達の感情が出てきているのではないかと。
　コロラドに混じっているのは、戦艦新棲姫と呼ばれる姫と、南方戦艦新棲姫と呼ばれる姫である。艦娘は一切混じっておらず、他の者達とは異質な存在。そしてよりによって混じっている２人の姫は、穏健派では無いのである。
　混ぜられた者達の記憶や感情が理解出来るとなっても、それは人類の守護者たる艦娘ではなく、侵略者たる深海棲艦の感情。
「……そうよ。私の中の２人の記憶と感情は、正直見るに堪えないモノだもの。黒幕に利用されて私と混じっているけど、Ｉｎｖａｄｅｒ（侵略者）の気質は残ってるの。私が理性で抑え込んでるけど、黒幕のやりたいことに対して、否定の気持ちは無いのよ。ふざけたことに」
　ただ、利用するために殺された恨みというのはあるらしく、黒幕が気に入らないという気持ちはちゃんと持っているとのこと。そこだ

けはコロラドと同調しているのだが、元々の侵略者気質のせいで、黒幕の行動に反感が無いらしい。
　黒幕の目的は既に侵略ではなく艦娘への復讐、延いては全てに対する復讐となっているため、２人の姫とは目的は違えている。だとしても、別にそれを邪魔してやるという気持ちも湧かない。
　正気を取り戻した時にはその怒りから黒幕への反感が最高潮に達していたが、時間が経つにつれて少しずつ落ち着いたことで、２人の姫も変に冷静になってきていた。それがコロラドを悩ませる理由である。
　この感情を納得させるのは、コロラドにしか出来ない。まだ時間はあるため、それまでに折り合いをつけたいとコロラドは今は終わらせた。出撃に関しては、参加する方向で。
「はぁ、面倒臭いわねアンタ。そんな姫くらいビッグセブンだかビックリセブンだかの実力で捩じ伏せなさいよ」
「自分のことでも手一杯なヤツには、私の苦労なんてわからないわよ。口出すなポンコツ」
「はいはい今は黙ってなさいアンタ達。潮が怖がるから、あんまりアレなら摘み出して制裁するわよ」
　叢雲とコロラドの言い合いが漫才レベルでは無くなりそうだったため、飛行場姫がいち早く止めた。あまり激しい言い合いになると、潮が確実に発作を起こす。今でもハラハラしており、震えが出始めているくらいなのだ。潜水艦姉妹がその手を握っているためまだ落ち着けているが、そうで無かったら泣き叫んでいたかもしれない。
　その潜水艦姉妹も魂の混成によって生まれた存在なのだが、黒幕に対する恨みや憎しみは無い。むしろ、感情が混じりすぎて理解出来ておらず、それに姉妹愛や潮への感情が上書きされているため、復讐に向かおうという気持ち以上に、潮の側にいたいという気持ちが強い。
　そのため、潮が出撃しないのなら、潜水艦姉妹も出撃はしない。むしろ、陸上施設型に対して、潜水艦は不利過ぎるために出撃を見送るのは妥当。
「コロラドちゃんは、後からお話ししましょうかぁ。そんな悩みがあ

るなんて気付けずにごめんなさいねぇ」
「姉姫が謝ることじゃないわ。これは私の問題だもの。でも、Ｔｈａｎｋｓ．　少し頼らせてちょうだい」
「ええ、任せて」
　姫のことは姫に話すのが一番。それでこの悩みが解消出来るかはわからないが、話さないよりはマシだろう。
「大人数で詰め掛けるのは良くはないと思うけど、他にどうしても行きたいという子はいるかしらぁ。みんなの気持ちは汲むつもりよぉ」
　中間棲姫が他の者にも意見を仰ぐが、今のところは声が挙がらない。
　この事件よりも前から施設に所属していた者は、黒幕の撃破よりも施設の防衛の方が大事であるため、出撃は任せようとする気持ちがそれなりに大きい。代わりに、施設を破壊させることは絶対に防ぐ。姫としての全力を用いて、居場所を守るのが役目だと確信している。
「まだ考える時間はあるわぁ。何も変わらないかもしれないけれど、少しだけ考えておいてねぇ」
　一旦ここで話を纏めて、最終的な方針を決めるのは、鎮守府側の決定を待ってから。それまでは考える時間とする。それまでに何があるかもわからないのだから。

　施設の方針は決めていくが、少々前途多難なところもある。まずはコロラドの件を片付けなくてはならない。

特殊な亡霊

新たに判明したコロラドの問題点。混じっているのが艦娘ではなく深海棲艦であり、それがよりによって侵略者気質であるために、黒幕との決戦に参加するのに抵抗を示しているというのだ。

正確には、黒幕がやろうとしていることに対して否定の気持ちが無いため、決着をつけるという気持ちが無い。コロラドにとっては本来の身体を捨てさせられた憎しみ以外の感情がない相手なのだが、その身体を構成している残りの2人がそこまで考えていないという。むしろ、最初は憎しみを持っていたのに、時間経過で変に冷静になってきたことで、その辺りを考える余裕が出てきてしまっていた。

「それじゃあ、少しお話をしましょうかぁ」

方針決めの場を解散した後、姉妹姫とコロラドはダイニングに残った。残りの者はいつも通り、施設のための仕事をしたり、決戦に向けてのトレーニングをしたりとそれなりに自由な時間に。

それでも念のためと、春雨と海風、そして同じ境遇である白露、古鷹、大鳳は、コロラドが今どういう状況にあるかを理解するために待機する。特に春雨は、直感的に何かを感じ取るかもしれない。

「1つ教えてほしいのだけれど、その、混じっている子達は、自分じゃない子のことをわかっているのかしらぁ。例えば、頭の中で話せるとか」

その辺りはハッキリとさせておきたいだろう。白露から始まっている魂の混成の件は、まず間違いなく自分に降りかからない災難であるため、その真っ只中にいる者達から聞いておきたかった。

これはコロラドだけでなく、待機していた白露達にも聞いていた。コロラドだけが特殊な状況に置かれている可能性はそれなりに高いのだから。

「あたしは記憶を全部共有していることと、性格とかが表に出せる感じ。冷静に考えたい時は時雨の気質を使うとか、暴れたい時は夕立の気質を使うとか」

「私は記憶は白露と同じですが、気質ではなくその技能を使わせても

らう感じですね。伊勢と日向の技術で戦艦の主砲と刀の取り回し方はそこから学びました」
「私は……どちらかといえば感情でしょうか。榛名さんが混じっているので、金剛さんを姉と感じますし。最上さんと鈴谷さんはまだわかりませんが、もしかしたら姉妹艦と顔を合わせたら何かあるかも」
　三者三様である。記憶の共有化は共通として、扱えるものがバラバラ。混じっているのが白露は姉妹艦であるため、性格、気質が自分のモノとして扱える。大鳳は艦種は違えど大型艦であることには変わりなく、相性が良かったか技が使えた。古鷹は艦種違いは大鳳と同じだが自身の艦種すら呑み込まれるような混じり方をしたことで、感情を自分のモノのように感じる。
　ならばコロラドはどうか。混じっているのはコロラドと同様の戦艦。しかし、種族が違う。混ざり合う要素がある意味皆無と言ってもいいほどだ。そうなると、魂が混じったとしても何かしらの反発があってもおかしくない。
「コロラドちゃんはどうかしらぁ？」
「私は記憶の共有はみんなと同じとして、どちらかといえばタイホーに近いわ。この子達の艤装を扱える」
　ロブスターのハサミとカニの甲羅が混じっている要素の艤装。前者が南方戦艦新棲姫、後者が戦艦新棲姫のモノである。
　そこにコロラド自身の艤装として、主砲が先端に備え付けられた杖と、白鯨。それは艦娘コロラドの艤装からは大きく逸脱しているので、その辺りは古鷹と近しい。
「それと……声が聞こえるわけじゃ無いのだけれど、私の中にいる子達がそのままいるような感覚がするの。完全に混じり合ってるんじゃなくて……そうね、例えるなら、アレよ、潰し切らないＰｏｔａｔｏ　ｓａｌａｄ」
　コロラドの例えも酷いモノだったが、言いたいことはある程度分かった。
　つまり、混じり合っているはずなのだが、一部が個として残っているような感覚がするということ。やはりそこは、艦娘と深海棲艦の混

成であるための違いであろう。
　その個の部分が、コロラドの意思に介入するようになっている。混じっている者が今ならこう考えるであろうことがわかるというのとは違う、現在進行形で別の個がああでもないこうでもないと無意識的に触れてきているようなもの。
「それに話しかけることは出来ないわけ？」
　今度は飛行場姫の質問。しかし、コロラドは首を横に振る。
「ダメね。黒幕のことを別に否定しないと言ってきてるように感じるってだけだもの。その感覚が私にわかるから、さっきはあんな風に言ったの。身体の主導権まで奪うことは出来ないから出撃はするけど、意識的に何かが引っかかってくるのよ」
　あくまでも、コロラドが感じているのは、別の意思が介入してきているという感覚のみ。そしてその意思が、自分とは別の意見を持っているのだと感覚的に理解出来ているだけ。
「コロラドちゃん、出来るかはわからないけれど、ちょっと触らせてちょうだいねぇ」
　そう言いながら、中間棲姫はコロラドの額に触れる。それは、深海棲艦化する艦娘の繭に触れるような雰囲気だった。
　中間棲姫は繭に触れることによって溢れた感情が何かを読み取ることが出来る。それはあくまでも繭にのみ作用する力ではあるのだが、もしかしたら何かわかるかもしれない。
「ん……やっぱり私には溢れた感情しかわからないみたい。でも、確かにコロラドちゃんの中には何かがあるという感覚はあるわぁ。無理矢理混ぜ合わされたからかしらぁ」
　繭ではないのだが、その境遇からか、ほんの少しだけその２人の何かに触れることが出来たようだ。
　黒幕の手によって無理矢理泥に包み込まれて深海棲艦化したことが、中間棲姫の力に触れる結果となっていた。試しに白露に触れてみたら、同じように白露の中に３人分の何かを感じ取ることが出来たため、黒幕によって魂の混成をされた者にはその力が及ぶということがここでわかる。

「でも、わかるだけなのよねぇ。白露ちゃんが運び込まれてきた時みたいに直接泥に触れて調べたわけではないから、何もわからないわぁ」
「え、姉姫様、泥に触ってるんですか？」
「あの時はカピカピに乾燥していたから侵蝕性も無かったもの。繭と同じだったわぁ」
　ともかく、中間棲姫の力は、繭からしか読み取れない。今のコロラドの中にいる者達の感情はわからなかった。そこに何かがあるとわかるだけでも充分といえば充分かもしれないが。
「白露達と違って、アンタは敵対するもの同士で混じっちゃったもんだから、そういうことになってんのね。その反発されるような感覚って今回だけ？」
「……ちょくちょくあったわ。最初は私とＳｙｎｃｈｒｏしてるように感じたんだけど、アレね、姉姫と一緒にＡｇｒｉｃｕｌｔｕｒａｌ（農）ｗｏｒｋ（作業）をした時くらいから、ちょっと感じることはあったの。でも、私の行動を止めることなんて出来ないから、無視して働いてたの」
　そして前哨戦、龍驤との戦いの時も、施設を守ることに専念するとは言っていたものの、その時には反発を感じていたらしい。反発というよりは、龍驤のやり方を否定していないという感覚と言った方が正しいか。むしろ、コロラドに対して文句を言っているような、そんな感覚である。
　そこは飛行場姫の言う通り、敵対するもの同士で魂の混成が行われたことがコロラドにおかしな影響を与えているわけだ。艦娘同士なら、良くも悪くも向かう道は同じだが、深海棲艦、しかも侵略者気質というのだから、向いている道が全く違う。同調なんて簡単にはしない。
「それなら、コロラドさんの中にいる姫２人を、実力行使で屈服させればいいのでは？」
　ここで春雨による提案。少し力業ではあるが、言うことを聞かないのならば聞くようにしてやればいいという強引な手段。

春雨が感じたのは、コロラドと中にいる2人の姫は実力としては同等なのに、コロラドにリーダー面されているのが気に入らないのではないかということ。姫であるが故にプライドもあるだろうし、侵略者気質ならば元々艦娘だったコロラドに従うのは気に入らないと考えるのもわからなくは無かった。

深海棲艦に先輩後輩の概念はない、上から下まで実力主義。特に2人の姫はそういうことを考えるような性格なのかもしれない。

実際、南方戦艦新棲姫はかなり勝ち気な喧嘩っ早い性格であり、戦艦新棲姫は多少上品さはあっても南方戦艦新棲姫と似たような攻撃的な部分がある。そして何より、この2人が犬猿の仲であるというのが重要。それがコロラドの中に押し込められているのだから、常にイライラするような状態になってもおかしくはないのだ。

「春雨、言うのは簡単だけど、どうやってやればいいの？　相手はこの世にはいない精神的な存在よ。触ることも出来なければ、話すことも出来ない、いわば亡霊みたいなもの。それを屈服させるのは不可能じゃない？」

飛行場姫の疑問はごもっともである。ただでさえコロラドにしか認識出来ない存在であり、中間棲姫ですら触れてそこにいるように思えると感じる程度。コロラド以外には本当にそんな存在がいるのかも正直わからない。それをどうにかしろというのはなかなかに難しいこと。

「白露姉さんは、他の姉さん達に夢の中で思いを託されたと言っていましたよね」

「だね。あたしが全員分を背負うことになるから、後は任せたって」

「なら、そういう場で話が出来たりするのでは？」

とんでもないことを言い出したのだが、春雨が確信を持って話しているため、無下には出来なかった。

むしろ、そういうことでもやってみなければ、今の問題は解決しない。夢の中でも幻覚の中でもいい、自分の中の者達と向き合える場をどうにか作り出し、そしてそれと徹底的にぶつかり合い、屈服させる。いや、そこまで行かなくてもいい。コロラドをリーダーとして認めさ

せればいいのだ。結果的に屈服させることがそれに繋がる可能性が高いのは仕方ない。
「夢の中ねぇ……。少なくとも今までにそんな夢なんて見た覚えが無いわ。私、変に寝付きがいいの」
「そういうのって、強く思いながら眠ると上手く行ったりしますよ。それに、コロラドさんは特別……いえ、特殊ですし」
「そんなもんかしらねぇ……。でも、ちょっとやってみるわ。ワラニモスガルって言うのかしら。そうじゃなきゃ、Ｄｅｃｉｓｉｖｅ（決）ｂａｔｔｌｅ（戦）にも気持ちよく向かえないもの。Ｔｈａｎｋｓ，ハルサメ」
「いえいえ、頑張ってください。決戦で本気が出せないなんてことがあっても困っちゃいますからね」
　この戦いの結果を見届けることは出来ないが、応援することくらいは出来る。
「ならあたし達も願ったら夢の中で会えたりするのかな。今日の夜くらいに試してみようかな」
「うん……やってみてもいいかもしれない」
「それで顔を合わせることが出来たら、嬉しいですしね」
　白露達も、こんな手段で混じっている仲間達と話すことが出来たら嬉しいと、今晩あたりに試してみると言い出した。それでモチベーションが上がるのなら万々歳だ。
「流石春雨姉さんです。私ではそんなこと想像もつきませんでした。自分に無いことでもそこまでの想像が出来るだなんて、聡明な春雨姉さんならではの素晴らしい発想ですね。海風、また感激してしまいました。他者を思いやる力は春雨姉さんがトップクラスですね。あの龍驤に対してももう怒りを溢れさせないほどですから、もう慈悲の化身と見てもいいのでしょう。分け隔てなくその手を差し伸べる姿、私も見習わなければならないなと実感しています。流石は春雨姉さん、女神のような神々しさは増す一方ですね」
　海風も春雨の案を聞いて大興奮である。春雨を讃え、ニコニコしながらその手を握り、自分も隣に立つために精進せねばと意気込んだ。

「コロラドちゃんはやれることをやってみてちょうだいねぇ。話をすると言ってこれくらいしか出来なくてごめんなさいねぇ」
「いえ、姉姫も妹姫もＴｈａｎｋｓ．　話が出来ただけでもスッキリしたわ。これからも何かあったらよろしく頼んでいいかしら」
「ええ、好きにして。アタシもお姉も、そういうことは喜んで引き受けるわ。愚痴だろうが何だろうが、いくらでも話しなさいよ」
　コロラドも随分とスッキリした顔。これで夢の中で対話が出来るだなんてことがあれば、より気持ち良く決戦に挑めるようになるだろう。

　コロラドの悩みがこれでどうにか出来るかはわからない。しかし、光明は見えたと言えるだろう。

自分との戦い

「姉姫、いいかしら」
　その日の昼、昼食を終えたところでコロラドが何かを決意したように中間棲姫に話しかける。
「あら、何かしらぁ？」
「この後、ちょっとＮａｐ（昼寝）させてもらうわ」
　たかが昼寝をするというだけのことを意気込んで宣言するのはどう考えてもおかしい。しかし、コロラドの顔は至って真剣だった。
「わかったわぁ。誰か隣にいてもらいたかったりするかしらぁ」
「そうね……願掛けってわけじゃないけれど、ハルサメとウミカゼにいてもらえると嬉しいわ。私の望む答えに辿り着ければ嬉しいもの。２人とも、頼まれてくれる？」
「構いませんよ。なるべくサポートしますから」
「姉さんがいれば百人力でしょう。きっと最善の答えに辿り着けますよ」
　神妙な面持ちで昼寝に向かうコロラド。それを追従する春雨と海風。
　コロラドのこの行動の真意を知っているのは、午前中に話をした者達、魂の混成を施されている者達だけ。知っているのだから、春雨の力を味方に付けることができれば上手く行くことも期待出来た。
　今からコロラドがやるのは、強く思いながら眠ることで、自分に混じっている姫達と夢の中で顔を合わせること。出来るかどうかはわからないが、やらないよりはやった方がいいと思い、善は急げと実行に移した。
　その結果次第では、白露達も試してみようと考えていた。混じっているのは過去の仲間達。白露に至っては妹達だ。どんなカタチであれ、もう一度話がしたいと思うのは当然のこと。コロラドが特殊というのはあるが、ここで夢の中で会えるなんてことがわかったら、試さない理由が無い。
「……春雨と海風連れて昼寝とか、いいご身分ね」

叢雲がコロラドの後ろ姿に吐き捨てるように言い放つ。だが、コロラドは真剣そのものであるため、叢雲の声も聞こえていなかった。真面目に自分の中の存在と向き合い、強く思うことで、夢の中に顕現させる。それに対する緊張感もあった。
「なんなのアレ」
「叢雲、今回は応援したげて。コロちゃんは今から、自分との戦いなんだよ」
白露に言われたものの、どういうことかわからず首を傾げるだけだった。

どうせならとベッドルームにやってきたコロラド達。深く気持ちよく眠れるように、この施設の中でも最も豪華であろう寝室を使うこととした。コロラドの私室――魂の混成を施された者達の溜まり場――も考えたが、今回はこちらで。
別に春雨と海風が添い寝をするというわけではなく、隣に座って春雨が凝視し続けるということになる。今はトリガーが引かれていないため、視界に入った者を自分の思い通りに動かす力は発揮されないのだが、何かおかしなことが起きた時に揺り起こすことが出来るのは春雨がベストだろう。
「それじゃあハルサメ、ウミカゼ、よろしくお願いね」
「はい、任せてください」
「何かあったらすぐに起こしますね」
指をパチンと鳴らすと簡単な寝間着姿へと変化し、そのままベッドに横になって目を瞑る。午前中に作業をし、その後の昼食で程よく空腹も満たされており、さらには相変わらずのお日柄。幸せの絶頂とも言える環境に、すぐに眠気に襲われる。
だが、その間も強く強く願っていた。自分の中にいる者達と相見えることが出来るようにと。そして、自らの力を見せ、この身体の主導権を握る存在であることを知らしめることが出来るようにと。
「必ず、希望が叶うように」

春雨がコロラドの額に手を当てる。義腕を隠すインナーの腕の部分を一時的に消し、義腕そのもので触れた。
そこはインナーが今まであったこともあり、硬さは艤装と同じだが、温もりはヒトの温もりと同じだった。春雨にただ触れられているというだけなのだが、コロラドはそのまま自然と眠りに落ちることとなった。
駆逐艦である春雨に落ち着くようにされていることでプライドが傷つくとかそういうことは無かった。とにかく、今からやろうとしていることが成功するようにという願いが届いたことで、気を張りつつも心穏やかに意識を夢の中へと埋めていくのだった。
「流石ですね姉さん。コロラドさんのようなヒトにも温もりを与えることが出来るだなんて。仲間思いの素晴らしさがいつも以上に炸裂していますね。その慈愛の精神、私も見習わなくてはいけないとは思っているのですが、なかなか出来ないものです。女神たる姉さんだからこその手腕、お見事としか言いようがありません。自分の道のみでなく、仲間の道まで示すことが出来るとなれば、もう女神すらも超えた頂点なのではないでしょうか」
「……言い過ぎだよ。それに、私はコロラドさんの道を示したわけじゃないから」
海風のマシンガントークに苦笑しつつも、春雨は寝息が聞こえるまで、いや、寝息が聞こえてきても額に当てた手を退けることはなかった。
「私だって夢の中にまで手を出すことは出来ないからね。ここからはコロラドさんの戦い。自分との戦いに私達がこれ以上手を出しちゃダメ。私達が出来るのは、ここでコロラドさんの勝利を願うことだけだよ」
「姉さんに願われたら、どんな相手でも膝をつきますよ。この戦いはコロラドさんの勝利に終わり、中にいる2人の姫とやらも姉さんの光に導かれて屈するでしょう。そしてその偉大さを心に刻むことになるのです。姉さんがいなければこうはならなかったと感謝し、これからは姉さんのために全てを尽くそうと考えるでしょうね」

「そこまでは望んでないよ」
相変わらずの海風ではあるが、コロラドの勝利で終わるというのは春雨も願っていること。この願いが事態を好転させることを祈って、春雨は力を送り込むように手を添え続けた。

そして、コロラド。眠りに落ちた後、目を開けると真っ暗な海に立っていた。これが明晰夢だとすぐに自覚出来る辺り、今回の目的の1つは達成出来たのだと実感出来た。
周囲は暗いのに、そこに何があるかはわかる。現実の夜戦とは確実に違う、夢ならではのおかしな状況。自分の身体も淡く光っているのではと思える程にハッキリと見えた。
「Ｃｏｍｅ　ｏｕｔ（出てきなさい）」
誰もいない空間にコロラドの声が響く。闇の中にその声は溶けていくが、何かあるかもしれないと艤装を展開。夢の中でも艦娘の艤装が出てくるわけでもなく、今のコロラドとしては普段使いと言える主砲が備え付けられた杖が手元に現れた。
夢の中では、おそらく体力の心配も無い。やりたいことをやりたいようにやれる。それが夢、明晰夢というもの。
「Ｌｅｔ，ｓ　ｔａｌｋ（話をしよう）．　大体わかっているけど、アンタ達の意思をアンタ達の口から聞きたいの。だから、姿を現して」
無音の海に響くコロラドの声。だが、そんなコロラドを見ている者がいるのは嫌というほどわかった。それもちゃんと2人である。
「私は逃げも隠れもしない。むしろ、そうしないためにここに立ってる。それが私の願いだったんだもの。話が出来るならしましょう」
無防備で待ち構えるというわけにはいかなかったものの、攻撃の意思が無いことを示しながら、声かけを続ける。
その瞬間、何処からか砲撃が放たれた。夢の中だからか無音、しかし、夢の中だからか気付けた。
それを即座に避け、砲撃の放たれた方を見据える。そこには2人の姫が立っていた。仲が悪いのか、隣同士というわけではなく、かなり

の距離を空けて。
「アンタ達が私に混ぜ込まれた姫……悪いわね、姿もよくわかってなかったのよ。アンタ達の記憶も持ってるっていうのにね」
片方の姫――南方戦艦新棲姫は、巨大なロブスターのような艤装に腰掛けている、大人びた女性。口元を艤装のマスクで隠しているものの、その目力でコロラドを睨みつけていた。
もう片方の姫――戦艦新棲姫は、打って変わって幼女のような印象。巨大なカニに座り、明らかに威嚇するような表情でコロラドを見つめていた。
「アンタ達の感情、うっすらだけどわかっていたわ。何が気に入らないわけ？　アンタ達と私は、信念は違えど目的は同じでしょう。黒幕のことは気に入らないんじゃないの？」
そのやり方を否定していなくとも、黒幕に対しては殺されたという恨みがあるだろう。ならば、コロラドと同調して、復讐に乗り出してもいいはずだ。
「お前と同じってのが気に入らないんだよ艦娘」
南方戦艦新棲姫がマスク越しの少しくぐもった声で言い放った。
「主導権を艦娘に握られているのは気に入らないのよ」
戦艦新棲姫もほぼ同じことを言う。
侵略者気質を持っているということは、艦娘は完全な敵だ。自分の目的を阻む、決して相容れることが出来ない天敵。それと顔を合わせた時点で戦いは必至であり、どちらかが死ぬまでその手を抜くことなく殺し合いが始まる。
そんな相手と同じ身体に入れられた挙句、目的が同じとなり、しかもその主導権が全て艦娘にあるとなったら、苛立ちも大きくなる。何故従わなければならないという気持ちが膨れ上がった。
「それとな」
「それに……」
そして、２人同時に相方と言える姫に視線を向ける。その目は、コロラドに向けるもの以上に険しいもの。
「コイツと同じ空間にいることが腹が立つんだよ！」

「なんでコイツと一緒に艦娘の中にいなくちゃならないのよ！」
２人揃って同じ思いを発露した。犬猿の仲である相手と同じ空間に閉じ込められ、さらには嫌でも離れることが出来ないという苦行。これが最も苛立ちを大きくする原因だった。
そうでなかったら、例えば入れられているのが片方だけならば、渋々でもコロラドと協力していた可能性は高い。艦娘に主導権を握られているという事実は覆せないが、そうした原因である黒幕に怒りをぶつけることが容易になる。
しかし、今は黒幕に怒りをぶつける前に、それ以上に気に入らない相方がすぐ側にいることに対しても怒りの方が大きくなってしまっていた。それなのに、こういう夢という場を用意されないために喧嘩をすることも出来ない。意思をぶつけるだけで終わるせいで、苛立ちはさらに膨れ上がるのみ。
それをコロラドは感じ取っていた。理屈はわからないものの、この仲違いはおそらくどうやっても解消出来ないもの。本能的に２人は相性が悪く、その排除を何よりも優先するくらいの間柄だ。生理的に無理というもの。
「……はぁ、そういうこと。私に対して気に入らないだけならまだ可愛げがあったけど、ただ仲が悪いだけだったのね。黒幕のやることに対して否定的じゃ無いのも、多少はその本質がＩｎｖａｄｅｒ（侵略者）だからだと思ってたけど、その隣のヤツがいるせいでどうでもいいって思っていたわけか」
コロラドがわかるように大きく溜息を吐いた。心底失望したと言わんばかりに。その態度に、南方戦艦新棲姫も戦艦新棲姫もイラッとしたことを隠そうとしない。
「あまりにも幼稚ね。そっちの小さい方は見た目通りだし、大きい方は図体ばかりでガキかっての」
完全に見下すような視線と言葉。それには２人の姫が難色を示す程。
「私に言わせてみれば、どちらもガキよガキ。本質が見えてない。ヒトの中で何やってるかと思ったら、ただの喧嘩だなんて。私がアンタ

達を切り離したいくらいよ。姫と言われるくらいなんだから、余程強くて高潔な精神を持っているかと思ったら、なんなのそれ。アンタ達、叢雲以下ね」
殆ど説教みたいなものである。艦娘にそんなことを言われて黙っていられるはずもなく、特に南方戦艦新棲姫はコロラドを睨みつけながら近付く。
「姫なら姫らしく振る舞いなさい。私を通してあの姉妹姫や戦艦を見てきたでしょう。アレが正しく姫よ。あれを知ったらアンタ達に姫を名乗る資格なんてないわね。いくら気に入らない相手だろうと、こういう場では協力くらいしなさい。割り切れないなら黙ってなさい。意思を見せるな。じっとしてろ」
堂々と、面と向かって、その存在を否定した。コロラドとしては協力しながら戦っていきたかったが、本人達がこうならば、その力を使わせてもらうことすら必要ないと。
「ンだと……？」
「そっちの小さい方もよ。内輪揉めで止まっている暇なんて無いの。それが嫌なら従いなさい。それも嫌なら実力で捻じ伏せてあげる」
杖を向け、かかってこいと言わんばかりに構える。
「はっ、それが手っ取り早いな。ヒト様をガキと宣う艦娘をぶちのめして、アタシが主導権を奪ってやるよ！」
「艦娘に指図されるのは気に入らないわ。力尽くでいいならそれで後悔させてあげるわ。主導権は私がいただく」
「あぁ？　お前になんてくれてやらねぇよ！」
「アンタが持っていく方が気に入らないわ。私が使うの」

こうしている時も内輪揉めが終わらない。それを見ていると、コロラドは正直、負ける気がしなかった。大きく溜息を吐き、２人を見据える。
「かかってきなさいガキ共。屈服させてあげるわ」

屈服させる教育

「……多分、始まった」
　コロラドの額に手を置いていた春雨が、直感的に感じ取ったかコロラドの顔を心配そうに見つめた。
　ここからの戦いは、誰かが介入出来ない孤独な戦い。コロラドにしかどうにも出来ない、自分との戦いである。いくら春雨でも、手を出すどころかそれを見ることすらも出来ない。おそらくそれは『観測者』であっても不可能。
「私達には応援しか出来ないよ。その声も届かないけどね」
「ですね……」
　コロラドが眠りについても、春雨はそこから動かなかった。今はトリガーが引かれているわけではないので、『望み通りの答えに辿り着く力』を発揮することはない。そのため、２人はここでコロラドの無事を祈るしか出来ない。
　もし出来たとしても、春雨は手出しをするつもりはないだろう。これはあくまでもコロラドの戦いなのだから。
「もしも、もしもですけど、コロラドさんが負けてしまった場合……どうなるんでしょうか」
　コロラドが負けるとは思っていないものの、万が一のことがある。そうなった場合はどうなってしまうのか。
「……最悪はこのまま目が覚めないんじゃないかな。コロラドさんは今、心で戦ってるわけだから、それが夢の中で殺されてしまった場合は、目を覚ますための心が無くなっちゃうからね。それか、この中にいるっていう姫に身体を奪われるか」
　コロラドに混じっている姫２人の目的も性格も知るはずがない春雨だが、万が一コロラドが敗北を喫した時どうなるかは大方予想がついた。共倒れなら、この身体を扱う者がいなくなってしまい二度と目覚めなくなる。１人生き残ったらその者が主導権を得る。コロラドとしては数的には不利。
　だが、春雨にはまるで不安そうな表情が浮かばない。必ずコロラド

として目を覚ますことを確信した表情。それでも何が起きるかわからないので、こうやって側にいながら温もりを送り続ける。コロラドがそれを願ったから。
「私としては心配はしてないよ。コロラドさんが負けるとは思えないし」
「そうなんですか？」
「うん。なんとなくだけどね」
春雨のなんとなくは、かなり信用度が高い。それを聞いたのが海風なのだから、信用しかしていない。春雨がそう言うのだから、心配なんて何処にもない。
「でしたら、安眠を守りましょう。姉さんにそうされていれば私は穏やかな眠りが確約されるようなものですけど」
「安眠を守るのは賛成。少し静かにしようか。コロラドさんの戦いに水を差したくないしね」
「はい。せめて小声で」
その後は、コロラドが目を覚ますまでは静かに過ごす。勝利を祈りながら、その側で目を覚ますのを待ち続ける。

「かかってきなさいガキ共。屈服させてあげるわ」
杖を2人に向け、挑発するように言い放ったコロラド。発言の通り、まるで駄々を捏ねる子供に説教をするような、むしろ聞き分けのない部下に制裁を加えるような、優しくもあり厳しくもある視線で2人を見据えた。
「やってやるよ、お前から言い出したんだからなぁ！」
すぐにいきり立ったのは南方戦艦新棲姫である。戦艦新棲姫よりも近くにいたおかげか、コロラドの煽りと同時に猛スピードで突撃を開始した。
南方戦艦新棲姫が扱う艤装、ロブスターは、その鋏に巨大な戦艦主砲を備えた大型生体艤装だ。戦艦棲姫の扱う紳士な巨人とはまた違った、凶悪な性能を誇るトンデモ艤装。

突撃もその脚をガサガサと動かしながらの滑走。乱雑に砲撃を放ちながら近付き、全て回避されたとしても鋏で掴み上げて真っ二つにちょん切るつもりだった。甲殻類なだけあって艤装そのものの強度も高く、並の砲撃では傷一つつかないだろう。

「お前を先にぶち殺して、アイツと決着をつけてやる！」

「出来るものならやってみなさいよ。そんな単調な攻撃が私に当たると思っているわけ？」

先行してきた南方戦艦新棲姫の砲撃を軽々と回避し、杖の先端から砲撃を放ち続けるコロラド。低速戦艦ではあるものの、明らかに目の前の敵の動きを把握した状態で簡単にいなしていく。

その砲撃は回避されつつもロブスターには一部掠っていた。的が大きいのだから、当てるのは非常に簡単。猪突猛進に突っ込んでくるのだから、その当てやすさはさらに上がっている。

それでも傷が付かないのは流石と言わざるを得なかった。夢の中での戦いとはいえ、おそらくあの艤装の強度は現実から据え置きだろう。掠らせる程度では強固な装甲を撃ち抜くことはなかなか出来やしない。

「連携すれば勝ち目があるんじゃないかしらね」

コロラドは南方戦艦新棲姫の攻撃を見切っており、近距離となってもその鋏の一撃を受けることはない。回避すらせずに手に握る杖によって弾き飛ばしてしまう。

コロラドとて、今は深海棲艦と化した存在。そもそもが2人の姫と同等な存在へと昇華している。ただの力比べというのなら、1対1ならば対等。むしろ、艤装のスペックまで考えるのなら、コロラドの方が一枚上手であった。

何せ、今のコロラドはまだ本気を出していない。2人が組んで立ち向かってきたら出そうと思っている。だが、この状況に置かれても、まだ協力という考えには至らないようだ。

「何やってんのよ。意気揚々と突っ込んでおいて何も出来てないじゃない」

戦艦新棲姫は南方戦艦新棲姫がコロラド1人に手こずっていると

ころを見ながらほくそ笑む。力任せに突っ込む南方戦艦新棲姫でコロラドを消耗させ、2人とも疲労したところをまとめて始末するという漁夫の利作戦を取ろうとしていた。
戦艦新棲姫からしてみれば、コロラドは気に入らないが南方戦艦新棲姫よりはマシ。でもどちらもいなくなってもらいたいため、同士討ちしてくれるのがベスト。ならば、自分は消耗することなく、勝手にいざこざを起こしてもらい、最後に全てを掻っ攫えばいいと考えた。
それを見逃すコロラドではないが。
「こら、何人任せにしているのよ。私がアンタを狙わないと思っているの？」
南方戦艦新棲姫の鋏を打ち払ったと同時に、杖の先端に備え付けられた主砲から戦艦新棲姫に向けて砲撃。あれだけのことを宣っておいて、自分から動かずに終わらせようという根性を叩き直してやろうと、避ける位置も戦艦新棲姫寄りにしていく。
南方戦艦新棲姫からの流れ弾も飛んでくることになり、戦艦新棲姫は自分の思い通りにはいかないと悟ることになるのだが、それならばと自慢のカニを動かし、コロラドを始末しようと重い腰を上げた。
「アンタのせいでこっちまで動かなくちゃいけなくなったじゃないの」
「あぁん？　アタシに全部やらせようとしてたってことか!?　随分と狡いじゃねぇかクソガキ！」
「頭を使ってると言ってほしいわね。どうせアンタも始末するんだから、猪みたいに突っ込むアンタを利用しただけよ」
協力なんてするわけもなく、むしろ仲違いがよりわかりやすく発露し、コロラドそっちのけで喧嘩が始まる。互いに本来の目的はコロラドの始末だったはずなのに、南方戦艦新棲姫はコロラドを通り過ぎて戦艦新棲姫に殴りかかった。
コロラドは呆れてモノも言えなかった。自分を始末して主導権を得るという共通の目的があるにもかかわらず、目先の苛立ちを晴らすために目的が見えなくなっていた。優先順位の付け方が狂っているとも言える。

曲がりなりにも２人は姫。それなのに、自身の欲望にあまりにも忠実。そんな２人が自分に混ぜ込まれていることに一抹の不安を覚えるコロラド。自分にもこの気質が含まれていると思うと、いざという時に何かまずいことが起きてしまうのではないかと考えてしまう。
それならば、ここでこの２人を教育して、正しく姫に仕立て上げた方がいいと思い至る。喧嘩をするなとは言わないが、時と場合によることを覚えてもらわなくてはいけない。それすらもわかっていないのは、流石に看過出来ない。
「アンタ達、いい加減にしなさい！」
海面に杖を突き立てた瞬間、２人を呑み込むかのように白鯨が現れた。スタミナ不足のデメリットが無い夢の空間では、最初から全力を発揮出来る。タイミングなんて計る必要がない。今までは加減をしていたが、２人の愚かしさを見て、コロラドも堪忍袋の緒が切れた。
「なっ!?」
「ちょっ!?」
本人同士も艤装同士も取っ組み合いを始めていたが、この事態にようやく自分達が置かれている状況を完全に理解した。
「協力し合えとは言わないけれど、目の前の敵が見えていないヤツが姫だなんて本当に笑わせるわね！　いや、笑えないわよ！　こんなヤツらが私の中にいて、私の信念を邪魔してくるだなんて！」
２人の姫を噛み砕くためにのたうち回る白鯨。それに加えて、コロラド自身も杖を振り回しながら主砲を乱射。それこそ、コロラドも癇癪を起こしたかのように全力で攻撃を始めた。
一切止まらない攻撃だが、２人の姫とは規模が違う。とにかく白鯨の質量が尋常ではなく、ロブスターやカニの数倍の大きさを誇るために、近接戦闘では太刀打ちも出来ない。回避一辺倒に持っていかれる。
「な、なんだなんだ！　コイツ！」
「出来ることは知ってたけど、ここでは使えないと思ってたんだけど！」
「知ってたのなら先に言えよ！　こんなの無茶苦茶じゃねぇか！」

「アンタがバカなだけでしょうが！　表側でやってたの覚えてないわけ!?」
　ここまでしてもまだ口喧嘩を止めない2人に、コロラドはより一層怒りを表に出す。
「まだ自分達の立場がわかっていないようね！　私は！　協力して戦えって言ってんのよ！」
　白鯨が大きく身体を振ったことで、そのオビレが南方戦艦新棲姫に直撃。同時にコロラドが放った砲撃が戦艦新棲姫の艤装に直撃。2人揃って吹っ飛ばされる羽目になる。
「わざわざ私が不利になるように言ってやってんのに、それでもアンタ達はわからないわけ!?　わからないならここにいる価値も無いわ。私が消してあげるわよ！」
　追い討ちをかけるように白鯨は南方戦艦新棲姫を噛み砕くために襲いかかり、コロラド自身は杖を振りかぶって戦艦新棲姫に突撃する。
　そもそもが1対2にもなっていない。コロラドが1人で2人分の動きが出来るのだから、協力しない限り勝ち目が無いのだ。
「アイツと協力するくらいなら、死んだ方がマシよ！」
「同感だね。アタシもソイツなんかと協力なんてしたかないね！」
「あっそ。だったら死になさい。そんなアンタ達の力なんて、こちらから願い下げよ。私の信念を邪魔するようなヤツは、混ざり合ってほしくないわ」
　砲撃も鋏も避け、コロラドの杖による一撃が戦艦新棲姫の脇腹に直撃し、艤装から振り落とす。しかし、その時に艤装が主人を守るように脚を伸ばし、それがコロラドの脚を払った。
「この、ソイツを殺すのはアタシなんだよ！　お前になんてやらせねぇ！」
　白鯨に襲われる南方戦艦新棲姫は、その絶対的な質量の猛攻をどうにか避け、フラついたコロラドに向けて砲撃を放つ。だが、コロラドはすぐさま態勢を立て直し、南方戦艦新棲姫に主砲を向ける。
「嫌だけど同感ね。アイツを始末するのは私なのよ！　貴女になん

て、手を出させない！」
その砲撃は戦艦新棲姫の艤装であるカニの甲羅がしっかりとガード。コロラドも盾として使っていただけあり、その強度は並では無かった。
「そうよ、どういう理由であれ、協力し合えばもっと高みにのぼれるわ」
ニヤリと笑うコロラド。
「でもね」
そしてその表情はすぐに変わる。まるで教え子を叱咤する教師の如く、弟子を鍛える師匠の如く。
「気付くのが遅い！」
再び白鯨がのたうち回り、南方戦艦新棲姫を弾き飛ばす。その方向には戦艦新棲姫がおり、身体こと直撃。こんがらがるように艤装もぶつかり合った。
さらにそれをコロラドが追撃。砲撃ではなく、杖による殴打で２人まとめて吹き飛ばす。
「まだまだ教育は必要なようね。その身体に、心に、私の信念を刻みつけてあげる。どうせ夢の中だもの、何をやってもいいわよね。それに簡単には死なないでしょ。仮にも姫なんだから」
白鯨が消え、即座にコロラドの間近に現れた。その上に乗ったコロラドは、２人の姫を見下すように睨みつけ、杖を再び突きつける。
「まだまだ時間はあるわ。屈服するまではまだ時間がかかりそうだし、たっぷり刻みつけてやるから覚悟なさい」

夢の中での無限の体力を使うように、白鯨はイキイキとのたうち回り、コロラドも全力を出せる喜びを体現するかのように暴れ回る。
それを受ける２人の姫は、いがみ合っていても協力せざるを得なくなり、それでもコロラドに圧倒され続けることとなった。

主導権を持つ力

「まだまだ時間はあるわ。屈服するまではまだ時間がかかりそうだし、たっぷり刻みつけてやるから覚悟なさい」

白鯨の上から2人の姫を見据えたコロラドは、真下に向けて砲撃を放ち続ける。まるで手を抜かない本気の攻撃が続くことで、2人の姫は自然と協力せざるを得ない状況へと追い込まれていく。

犬猿の仲であるお互いを認識することすらも気に入らず、本来の目的であるコロラドを始末することすら放棄して喧嘩を始めていたわけだが、そんなことをしていたらここから先には進めないということを痛いほど理解させられた。それほどまでに、コロラドは圧倒的な力を持っていたからだ。

当然ながら、それも気に入らない。艦娘ごときに主導権を握られている現状が、気に入らなくて仕方ない。生理的に受け付けられない相方への思いの方が強かったが、ここまでされたらそちらを超える。

「……おい」

先に声をかけたのは南方戦艦新棲姫。

「……なによ」

流石に無視をするわけにもいかず、戦艦新棲姫もそれに反応する。

似たモノ同士であるために、今から言われるであろう言葉は手に取るようにわかった。だが、察したことを察せられるのが気に入らないため、相方からの言葉を待つ。

「マジで嫌だが、決着をつけんのはアイツを始末した後だ。マジで嫌だが、今は協力するしかないだろ」

「私も本当に嫌だけれど、アンタと組まないとアレはどうにもならないと思うわ。というか、何度も嫌だ嫌だ言わないでくれる。私も嫌だっていうのに」

「アタシの本心だから仕方ねぇだろうが。嫌なもんは嫌なんだよ」

「こっちから願い下げよ」

これで協力しながら戦うだろうと考えていたコロラドは、目の前で繰り広げられる口喧嘩に大きく溜息を吐く。まだ懲りないのかと主

砲による砲撃を再開。
「もしかして私、この期に及んで下に見られてる？　口喧嘩する暇がある程度の存在と思われてる？　随分と余裕があるのねアンタ達」
　一切の容赦なく、逃げ道を塞ぐように撃ち続け、さらには白鯨も再起動。暴れ回ってもコロラドは安定した乗りこなしを見せつけつつ、2人の姫を追い詰めていく。
　この質量兵器を食い止めるのはまず不可能。いくら強靭で強固な生体艤装を扱えるとしても、質量が数倍あったらどうにも出来ない。だからといって砲撃で破壊出来る代物でもないので、どうにか回避行動。
「クソッ、おいチビ！」
「何よバカ！」
「一回分かれてやんぞ！　纏めてやられるわけにゃいかねぇだろ！　お前囮やれよ！」
「はぁ!?　囮はアンタがやりなさいよ！　でも、離れて戦うのは賛成してあげるわよ！」
　まだまだ口喧嘩は絶えないが、ここで2人はコロラドを翻弄するために左右に散開。少なくとも目の前の共通の敵に対して意識を向けられるようにはなっていた。
　しかし冷静とは言えない。本来の力を発揮出来ているかはわからないが、ようやく戦いになるかというところには来た。
「高いところから見下すんじゃねぇ！」
　右に散った南方戦艦新棲姫は、白鯨の上に乗るコロラドに向けて全力の砲撃。簡単には破壊出来ない白鯨を狙うのではなく、その本体となるコロラドを始末することで、白鯨からの脅威も消そうとした。
　無防備ではないものの、コロラドは上にいる時点でかなり狙いやすいのは確か。乱射をするだけで、一部は当たってもおかしくない。コロラドだけでなく、南方戦艦新棲姫も体力無限なのだから、いくらでも乱射出来る。
「一回止まりなさいよ！」
　戦艦新棲姫は、逆に白鯨のオビレに対して砲撃を放つ。その付け根

の部分は、白鯨の中でも特に細い部分であるため、砲撃で叩き折ることが出来るのではないかと考えた。こちらもありったけの砲撃をぶち撒ける。
本来ならば強引にカニの鋏で挟み、力業でちょん切る方がいいのかもしれない。しかし、その威力を考えると近接で受ける方が危険。動きが多少収まるまでは撃ち続けるしかない。
「全く、ここまで来るのが長かったわね。ようやく手応えがあるってものよ」
しかし、コロラドは一切怯まない。集中砲火を受けても、それを全く気にならないように軽々回避。
南方戦艦新棲姫の砲撃は、白鯨自体の動きとコロラド自身の動きで掠るどころか衝撃すらも感じることなく避けた。戦艦新棲姫の砲撃は、むしろより激しくオビレを振り回すことで、砲撃自体を弾き飛ばすまでした。強度的なところから若干傷がついたものの、それでも当たり前のように健在。
さらにはお返しと言わんばかりに上から砲撃。オビレもより激しく振り回して直撃を狙う。当たればほぼおしまい一直線の攻撃であるため、２人の姫も必死に回避し続けた。
一応コロラドは低速艦であり、２人の姫は共に高速艦であるため、回避性能は姫達の方が上。勿論、コロラドはそれも考慮して攻撃を繰り出しているのだが。
「この、降りてこいよ！」
「何でアンタの指図を受けなくちゃいけないのよ。これが私の力。何か文句あるなら、アンタもそのＬｏｂｓｔｅｒ（ロブスター）から降りて、生身の勝負でかかってくれれば？」
南方戦艦新棲姫はロブスターの生体艤装が無ければ十全な力を発揮することが出来ない。施設の仲間である戦艦棲姫のように独自の進化を遂げているわけではないので、生身である本体側での攻撃はどうしても近接戦闘になる。
南方戦艦新棲姫はマスト状の槍を持っているものの、砲撃はロブスター頼みだ。コロラドの誘いに乗った場合、まず間違いなく杖からの

砲撃で為す術なくやられる。
戦艦新棲姫に至っては、腕を包み込むガントレットくらいしか近接武器を持っていないので、カニが失われたらほぼ無防備となるだろう。小柄な身体では、格闘戦を挑んでも無意味。
互いの生体艤装を排除しても、コロラドの方が得ている力は上。2人がかり、協力し合ってもかなり厳しい状況であるのは変わりない。
これが夢の中で無ければ、コロラドは即座にスタミナ不足を引き起こしていただろうが、この空間はコロラドの夢の世界。そんなことすら起きない。
最初から、2人の姫に勝ち目など無かったのである。
「私はね、別にアンタ達を這いつくばらせるために戦ってるわけじゃないの。跪けとも言ってないし、消してやろうとも考えてない。ただ協力しましょうと言いたいの。でも、私のことが気に入らないと言うから理由を聞きに来た。そうしたらこれだもの。実力行使に出るしかないでしょ」
一片の容赦も無く、的確に、確実に、致命傷を与えるための攻撃を繰り出し続けた。しかし、今の言葉通り、この場から追い出そうというつもりは無い。コロラドが求めているのは、あくまでも協力関係だ。
コロラドは当然として、南方戦艦新棲姫も戦艦新棲姫も、黒幕に殺されたことに対して恨みが無いわけではないはず。それなのに、命を奪った相手よりも主導権を握るコロラドが気に入らず、さらには隣にいるだけで何よりも気に入らない相手がいたらそれを最優先で周りが見えなくなる。それはよろしくない。
それが誰にも迷惑をかけていないのならまだしも、実害が出ようとしているのだから、それに巻き込まれたコロラドは実力行使でも止めようとする。
「これまでの行いを後悔するくらいにメッタメタにしてあげるから、考えを改めなさいよね」
ここからさらに猛攻が続く。上から横からの攻撃は激しさを増し、今までは手を抜かれていたのだと嫌でも理解することになる。一矢

報いるためにその隙を探そうとしても、隙を塗り潰すような強烈な動きを続けるため、最早どうにもならないレベルに達しようとしていた。
夢の世界であるため、２人の姫もスタミナは無限。好きなだけ暴れることが出来る。しかし、それを物理的にも精神的にも上から押し潰す力には勝てなかった。
「クソッ、がぁ！」
ここで南方戦艦新棲姫が無理を通しての突撃を繰り出す。白鯨さえどうにか出来れば勝ち目があると踏んだのだろう。サイズ差はかなりのものだが、同じ生体艤装なのだから互角に戦えるはずだと、強引な一撃に賭けた。
ロブスターに備え付けられた主砲、鋏、そして自分の手に持つ槍までを一点に集中させ、渾身の力で白鯨を貫こうと全力で攻撃。
「私はね、そうやって横から貫かれることがほんっとうに嫌いなのよ！」
コロラドはその辺りの対策はしっかりとしていた。何故なら、まだ侵蝕されており、かつ大分消耗している時とはいえ、巨大化した槍に真横からぶち抜かれた経験があるからである。
故に、攻撃を受ける瞬間にその場所にバルジが生成され、強固な装甲がより強固になった。結果、南方戦艦新棲姫の攻撃は傷を少しつける程度で止まってしまった。
「ま、マジ、かよ！」
「勝手に諦めてるんじゃないわよ！」
だが、そこにさらに押し込むように、戦艦新棲姫が回り込んでいた。あれだけ別行動を取っていたが、この時だけは一点集中に協力をしたのだ。
こちらもカニの鋏と砲撃を重ね合わせて、生成されたバルジを破壊するために集中攻撃。一度ついた傷を広げるために、同じ場所だけを何度も何度も攻撃する。
「お前……っ！」
「さっきアンタも言ったでしょ。アンタを始末するのは私なんだか

ら、こんなところで終わってもらっても困るって！」
「ああ、そうだなぁ！　コイツが終わったら決着つけねぇと、なぁ！」
　南方戦艦新棲姫も諦めず、同じ場所を再度攻撃。２人の姫の集中攻撃を受けてしまうと、流石の白鯨もダメージを受けてしまった。横っ腹からヒビが入り、そこから至るところに拡がっていった。
「っし、もう少しだ！　根性入れろよチビ！」
「アンタこそ気を抜くんじゃないわよバカ！」
　さらに力を込めることで、白鯨に拡がるヒビは全身に届き、最後は爆散。そのまま消滅していく。
「最初からそうやっておけばいいのよ。全く」
　しかし、その時にはコロラドは白鯨の上から降りていた。白鯨を処理するのに後ろを向くことすらしなかったため、背後に回っていたコロラドにまるで気付いていなかったのである。
「でも、一度終わりにしておきましょうか。これである程度はわかったでしょ」
　砲撃を放つわけでもなく、杖を振るって南方戦艦新棲姫の後頭部を殴打。返す刀で戦艦新棲姫の脇腹にも食い込ませた。
「ってぇ!?」
「っぎっ!?」
　２人揃って大きなダメージを受けたことにより、ショックで艤装が消滅。自然と蹲ることになり、結果的にはコロラドの前に跪くようなカタチになってしまった。
「協力すると無理も押し通せるの。いがみ合っている時より、アンタ達は強かったわよ。でも、まだまだね」
　殴打された後頭部を押さえながらプルプル震えている南方戦艦新棲姫と、脇腹を強打されたことで吐きそうになっている戦艦新棲姫を見据えるコロラド。
「まだやる？　やってもいいけど、何も変わらないわよ。今はやられたけど、白鯨は無限に出せるんだもの」
　そう言うと、たった今協力して破壊した白鯨が即座に再生された。現実世界ならばこれだけで気絶しかねないくらいにスタミナを消耗

するが、夢の中ではお構いなし。
２人で何とか破壊出来たのに、それが無限に現れるとなったら、いくら２人の姫でも心が折れた。主導権を握るだけあると、納得してしまった。
「……やめだやめ。腹が立つが、お前には勝てそうに無ぇよ」
「悔しいけど、このバカの言う通りね……。今ので全力を出したのに、すぐに無駄にされるのは勝ち目が無いわ」
ここでの戦いの決着は、殺すか心を折るかのどちらかしかない。２人の姫は前者を、コロラドは後者を目指して戦っていた。そして、それはコロラドの思惑通りに進み、ここに達成された。
「それじゃあ、私の言うことを聞いてもらいましょうか。黒幕を斃すために協力しなさい。私が主導権を握ることになるけど文句は言わないこと。あと一番重要なことだけど、２人で私の中でいがみ合うな」
勝者の言うことには従わなくてはならないと、２人の姫は渋々了承した。また何か文句があるのなら、今のように夢の中に呼び出せとすら。その度に今のような教育が発生するだろうから、そう簡単には文句も言ってこなそうではあるが。
「別に友情を育めとか、仲良くしろとか、そういうことを言ってるわけじゃないの。今の話の本質を捉えろと言ってるの。アンタ達だって、あの黒幕には思うところがあるでしょ」
「そりゃそうだ。いけすかないコイツと同じ空間に閉じ込めたのは、お前じゃなく黒幕だからな。恨みもひとしおってモンだぜ」
「そうね。同意なのが気に入らないけど、元凶は全部黒幕よね。始末しないと気が済まないわ」
ここでようやく全員の最優先事項が一致する。黒幕を斃すことが今一番やらなくてはならないことだ。
「悪いけど、主導権は私がもらっておく。でも、アンタ達の力は借りるわ。良かったかしら」
「ああ、負けちまったんだから逆らえねぇよ。今は好きに使ってくれ」
「そうね。私の力、今は譲るわ」

敗北を喫したからか、コロラドに対してはやけに素直となった。心が折れたというのもあるが、やはり勝者には傅くモノと本能的に感じているのだろうか。

「ところで、アタシの艤装の方がコイツのより使えただろ」
「何言ってるのよ。私の艤装の方が強いわよね」
しかし、この喧嘩は終わりそうにない。コロラドは大きく溜息を吐いた。しかし、その顔は今までとは違い、苦笑とはいえ笑顔であった。

次の段階へ

夢の中の戦いを終え、コロラドが目を覚ます。その時にはそれなりに時間が経っており、昼食後にすぐ寝たはずだが、もう太陽が水平線に近付いていた。夕方にはなっていないが、時間にしてざっと3時間ほど。コロラドにとっては1時間も経っていないのだが、現実ではそれだけ時が流れていた。

額に少し硬く、しかし温かい感触。眠っている間、ずっと春雨が額に手を置いていたようだ。望み通りの答えに辿り着くための願掛け。

実際この願掛けが効いたかどうかはわからないが、望んだ思った通りの答えに辿り着くことが出来たため、もしかしたら春雨のおかげかもしれないとコロラドは内心思った。

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ……朝じゃないけれど」

「おはようございます。グッスリとはいかなかったようですね」

春雨の穏やかな笑み。海風がお茶などを用意していたようで、コロラドが目を覚ますまでここでずっと待っていたらしい。

手を退かしてもらい、小さく呻きつつ身体を起こす。風邪を引いているとかそういうのは無いのだが、回復しているようには思えなかった。

「寝たのにあんまり疲れが取れてないわ。もしかして私、結構おかしなことしてた？」

「そう、ですね。おかしなことというのとは違うかもしれませんが、やっぱり少し寝苦しそうにはしていましたよ。激しい戦闘だったんですか？」

「まぁそれなりに。私が完膚なきまでに叩き潰してあげたんだけれどね」

得意げに話すコロラド。事実、コロラドは苦戦することもなく2人を屈服させているため、嘘は言っていない。しかし、その分の疲れが眠っていた身体の方に来てしまっていたらしい。

最後まで迷惑をかけてくれてとコロラドは呟きつつも、次に夢の中で話すことがあったらアンタ達のせいでと愚痴ってやろうと決意す

る。
「面倒な2人だったわ。でも、打ち負かして協力するように言っておいたから、ひとまずは安心かしらね」
「良かったです。これで躊躇いも無くなりましたか」
「ええ。私も黒幕との戦いに向かうわ。この子達も黒幕に殺されてる恨みがあるんだもの。ちゃんと同意してくれたわよ」
　ふっと小さく溜息を吐きつつも、自分の中にいる南方戦艦新棲姫と戦艦新棲姫のことを思い浮かべて苦笑する。おそらく今もなんだかんだ口喧嘩しているのだろうと思いつつ、それでも自分の信念に対して邪魔をしてきていないこともわかる。
　ようやく自分の中にいる全員が同じ方向を向いたと言えよう。これで一切の躊躇いなく黒幕との最終決戦に向かえるというものである。
　小さく伸びをしつつ、ベッドから降りて軽くストレッチをするコロラド。眠っていた割には疲れはあまり取れているわけでもなく、むしろ夢の中での戦闘のせいか、疲労が若干溜まっているようにも思えた。
「んん、ちょっと身体を動かそうかしらね」
「それがいいかもしれませんね。まだ時間がありますし、外に出てもいいかもしれませんよ」
　そもそもがスタミナ不足のコロラドだが、今回は今までとは違う疲労。どちらかといえば気疲れ。
　それならば、逆に少し身体を動かして発散した方が良さそうである。ストレスというわけでも無いのだが、やはり溜まっているモノはある。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　２人とも。それじゃあ、私は少し外に行くわ」
　それだけ言って、眠る前と同じように指を鳴らしていつもの制服になり、そのまま部屋から出ていった。
「何事もなくて良かったですね」
「だね。すごいよコロラドさんは」

その背を見送った後、残ったお茶を呑み終えて片付けを始める。海風も傍でコロラドの様子をずっと見続けたわけだが、寝苦しそうにしていたというのは本当で、たまに悪夢に魘されるように身体を動かしていたのを覚えている。
激しい戦いなのだろうと思いながらも、起こすようなこともせず、ただ見守った。そこで起こしていたら台無しになっていただろうし、コロラドもそれを望んでいない。魘されていようが何をしようが、孤独な戦いを止めることはなかった。
その結果がこれだというのなら、そうして正解だったと実感する。春雨も海風も、その魘され方に少し不安にはなったが、終わり良ければ全てよし。

その日の夕方。夕食を作っている間に、鎮守府から連絡が届く。全員が集まろうとしているタイミングだったため、そういう意味では都合が良かった。
「あら、こんな時間なのにみんな勢揃いなのねぇ」
今回は所謂定時直前の時間ではあるのだが、大将と大塚提督も参加していた。つまり、かなり重要なことが語られることになるのだろう。
『最終決戦までの準備を何処もしているとは思うのだが、大将がついにやってくれたよ』
「やってくれた……ということは」
『ええ、貴女達の鎮守府入りを許可する方向に持っていくことが出来ました』
穏健派の深海棲艦の存在を大本営に認めさせ、許可された者に限り、深海棲艦でも鎮守府に入港することを許可したのだと言ってのけた。大将はあまり表情を変えていなかったが、それが許される立場ならばドヤ顔をしていたかもしれない。
「あらあらあら、それはすごいわぁ。大将さんが頑張ってくれたのかしらぁ」

『ええ、多少手こずったけれど、ちゃんと認めさせたわ。実はね、龍驤との戦い、この説得材料にするために録画させてもらっていたの』
流石にそれは気付いていなかったようで、春雨を筆頭に現場で戦っていたモノは大いに驚いた。春雨すらも、そんなことをされていると
は直感的にも気付かなかった。その時の恨みの対象である龍驤が目の前にいたというのもあって、頭に血が上っていたと言われたらそうかもしれないと感じるくらい。
それは、録画などの戦場を記録するための妖精さんが管理する特殊な見張員。それを装備していたのは、周囲のイロハ級を近付かせないように行動し続けていた者――金剛である。
金剛が敵の攻撃を食い止めている中、その妖精さんが戦いに勘付き、金剛の肩から髪に塗れながらその戦いの様子を監視し続けた。録画を司っている妖精さんなだけあり、何の器具も必要なく、ズームまでやってしまう優れ者である。
『その戦う姿、そして、春雨の行動を見たことが決定打となったのよ』
「私が、ですか」
『ええ。貴女が救える者を救うというところ、その映像にもしっかり映っていたわ。艦娘を救おうとする深海棲艦なんて見ることはないでしょう。それがあってか、貴女達だけは信用に値する者として認識されたの』
あの戦場での春雨の行い――侵蝕された者達を救うために奔走し、実際に2人は救い、救うことが出来なかった2人にも懸命に処置を施そうとしたその姿が、大本営の者達の心を動かしたのだと大将は言う。
見た目は深海棲艦でも、艦娘と同じような心を持っていることの証明となったのだ。艦娘と協力して脅威に立ち向かい、そして撃破出来たのだから、仲間として認めても問題ないと判断出来たようだ。
あの時に刻まれたトラウマも、先に進むための道になる。
『とはいえ、映像だけではどうしても難しいところがあるわ。利害が一致しているからたまたま協力したと思われても仕方ないの。だからね、姉姫には悪いのだけれど、監査が入ることになるの』

「監査？　つまり、私達の在り方を見て、本当に信用に値するのかを見定めるということかしらぁ」
『そういうことになるわ。私はそんな必要無いと言ったのだけれど、こちらのルールとして、どうしても、ね』
　大本営の規則として、民間からの援助を求める場合は、それが本当に有用かどうかを調査する必要がある。大本営の一員の推薦であっても、万が一その者が裏切り者だったりしたら目も当てられないため、そこは慎重に判断しなくてはならない。
　そう言われてしまうと、誰もが納得する。自分達だってそうだろう。自分達は仲間ですと近付いてきても、裏で何を考えているのかわからないのだから、信用させるための演技と見られてもおかしくはない。今こうやって話が出来ているのは、最初から人となりを知っている堀内提督経由で知り合っているからである。そういうところも、春雨の存在は大きかった。
「なるほどねぇ。じゃあ、監査は貴女達がしてくれるわけでは無いのねぇ」
『残念ながら、ね。私は推薦者だから、もし私が利益のために深海棲艦と組んでいると言われたら、何も文句が言えないもの。証明するためには、第三者の目が必要だということね』
「それじゃあ仕方ないわねぇ。今までにあったことが無い人間さんと話をしなくちゃいけないということかしらぁ」
『そうなるわ。ただ、実際にその施設に行くのは、その提督直属の艦娘になると思うから安心してちょうだい。人間が踏み荒らすことはしないわ』
　施設との関係は、なるべく近付きすぎないようにというのが大将を込みにした大本営の方針。穏健派とはいえ、相手は深海棲艦であるため、余計な刺激は控えたいというのが大本営の考え。いわゆる、いい感じの距離感を保ちたいとのこと。
　人間が陸上施設型の深海棲艦の陣地に足を踏み入れることがいいことか悪いことかは見当がつかない。そのせいで姉妹姫に悪影響が起きても困る。ならば、最初からカメラ越しの対話だけで留めてお

く。どっちつかずかもしれないが、それがお互いのため。
「なるほどねぇ。私はそれで問題無いけれど、他の子達の話も聞いてみなくちゃいけないわぁ」
　都合のいいことに、今ここには全員が揃っている状態。純粋な深海棲艦から、元艦娘の深海棲艦、そして、忌雷が同化してしまったどちらとも言えない存在まで。その意見をひとまずは聞いておくべきと考える。
　基本的には施設の主である中間棲姫の意思が一番になるのだが、その中間棲姫が各々の意思も尊重しようとするため、この場で相談となる。
「アタシはお姉の意思に合わせるけど、みんなは？」
　飛行場姫は基本的に姉の意思に追従する。今までもこれからも、それが施設のためになると信じているから。
　艦娘が来るというのなら、元艦娘の意見の方がここでは重要だろう。とはいえ、堀内鎮守府から何度も艦娘がこの場に来ているのだから、そこまで不安になることはない。
「私も問題無いと思うわ。最初からこちらを攻撃しようっていう意思はないんでしょ？」
　ジェーナスが画面の向こうの大将に聞く。それに対しては勿論だと頷いた。監査という都合上、多少なり疑いの目を向けることになるとは思うが、戦場での活躍を見ているのだから、そこまで懐疑的に監査をすることはあまり無い。
　大本営も体裁としての監査と言っているくらいなのだから、これを機に施設を潰そうだなんて考えは毛頭無い。さらに言えば、堀内鎮守府の艦娘達もここへの道案内でついてくるため、不安は皆無と言えよう。大将の艦娘も勿論同席する。
「それならＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍよ。ここでやってほしくないこととかも全部知ってもらえるはずだし」
　やってほしくないことというのは、当然ミシェルに関すること。卯月と呼ぶのは完全なる禁句（タブー）。それ以外でも、記憶を呼び覚ましてしまいかねないことはやらないでほしい。

それは堀内鎮守府が理解しているのだから、ここに来るまでに全て伝えておいてくれるはず。
「叢雲姉さん、知らない艦娘だそうですが」
ここでネックになりそうなのが、怒り溢れ組。春雨はまだいいとしても、叢雲は艦娘という存在にも怒りを持っているため、いざこざを起こしかねない。
「……別にいいわよ。気に入らないことをしたら文句は言うけど」
「あら、殊勝な心掛けじゃない」
「うっさいチョロ助」
そこは叢雲も成長している。怒りは溢れているが、仲間であると認識出来れば多少は抑えられるようにはなっていた。
とはいえ、面と向かったことで溢れ出すようなことはあるかもしれない。それは事前にどんな者達がいるかは伝えてもらいたいものである。
叢雲が構わないと言えば、大概は問題無いと答えることになった。勿論、施設については事前に知ってもらい、禁則事項を犯さなければいい。
「私も大丈夫です。余程のことが無い限り、溢れることは無いですから」
春雨は叢雲ほどでは無いので、本人の言う通り余程なことが無い限りは大丈夫。これでほぼ心配は無いと言えるだろう。
「それじゃあ大将さん、こちらとしては監査の件、了解とさせてもらうわぁ」
『ありがとう姉姫。当然、こちらも貴女達のことを尊重するわね』
監査は翌日と設定された。最終決戦への準備は次の段階へと移る。

監査に向けて

施設との通信終了後、堀内鎮守府は翌日の監査についての相談を大将としていた。今回はここで話している者達とはまた別の外の者から派遣される艦娘であるため、事前にある程度は知っておく必要もあるだろう。

この通信のグループに入れるのは難しいものの、施設のことを知ってもらえれば、違ったカタチでの協力が望めるかもしれない。とはいえ、既に次が最終決戦。戦力を借りることなどはおそらく無い。そのため、あの施設の者達を認めてくれるだけで充分。決戦への道を綺麗に舗装してもらうために協力してもらう。

「その監査の艦娘というのは誰なのかは」

『それはまだわからないわね。でも、正しく現状を捉えられる子を用意してくれると思うわ。施設の子達は、誰もが信用に値する子であることは、私達がよく理解出来ているでしょう?』

「そう、ですね。何かを偽装する必要なく、裏が無いのなら必ず信用が出来るはずです」

そこは確信している。施設側には、一切の落ち度が無いのだから。その存在そのものと言い出したら意味が無いのだが、生き方だけで正しく見られるのなら、施設の者達はこれ以上無い善良な者達が取り揃えられている。

『それに、監査を担当する提督は、そういうところで差をつけないわ。安心してちょうだい』

「わかりました。こちらも自信を持って案内します。あの施設の者達を見てもらえれば、確実にわかってもらえるはずですからね」

堀内提督も大将も、施設には絶大な信頼を置いている。特に堀内提督は、本来は自分の部下であった春雨と海風が所属しているのだ。信頼を置かない理由がない。いろいろあったとはいえ、艦娘としての心を持ったままに深海棲艦となっているのだから、その本質は提督も知っている者だ。

ならば心配なんて必要が無いだろう。本質をそのまま見せれば、誰

だってあの施設が人類に対して敵意や悪意があるようなものではないことが理解出来る。
『それでは、そちらからの案内役を選出しておいてちょうだい。こちらからは、おそらく3人くらいがそちらに向かうことになると思うわ。監査役が2人と、吹雪にも顔を合わせてもらおうと思っているから』
　初耳だと言わんばかりに吹雪が驚いていたが、大将は続ける。
『私も明日はそちらに向かいます。これからのことで少し話したいこともあるもの。その間に、吹雪には施設を見てきてもらおうと思っているの。吹雪も監査に参加するようなものね』
「僕としては構いませんが、大丈夫ですか？　大将はその、脚が」
『ある程度は大丈夫よ。それに、吹雪も共闘する深海棲艦に関して実体験で知っておく必要があるでしょう。もしかしたら、決戦に出てもらうかもしれないのだから』
　こちらも初耳だったが、強敵を斃すために駆り出されるのならば、自分が出ることもあるだろうと感じた。ならば、画面越しではなく直に顔を合わせておいた方がいいかと納得。
　あくまでもかもしれないという程度なので、戦場に出ることはないかもしれない。それを最終的に決定するのは、決戦の部隊を決定したとき。選択肢として頭の片隅に置いておくということ。
『改めて、また明日よろしく。朝早くに向かうからそのつもりで』
「了解です。準備をしておきます」
　通信終了。もう時間はかなり少ないものの、今日の残された時間で施設までの案内役を準備する必要がある。
　実際はすぐに決まるようなものだ。施設に向かうということは、調査隊が出向くのがベスト。山風、江風、涼風、荒潮の調査隊の駆逐艦が最も適していると言えるだろう。
「先に話しておいた方がいいな」
「ですね。山風達ですよね？」
「ああ、調査隊を送り込んだ方が早いからね」
　そろそろ鎮守府も夕食時というところではあるが、急務であるため

すぐに執務室に呼び出し。そこまで時間がかかることなく４人が部屋に集まる。
「山風、頭に乗っているのは」
「……龍驤だけど……」
山風は頭に妖精さんと化した龍驤を乗せていた。なんでも、明石との研究の合間に、決戦に出撃しそうな艦娘達と慣れるためにこうやって装備させているらしい。
「すまんなぁ。明石がこうしてくれ言うもんで、今は山風の頭におらせてもらっとる。ＲＪシステムをみんなに装備してもらいつつ、ウチが話させてもらっとるんよ」
龍驤としては少し居心地が悪そうではあるのだが、明石の指示なのだから逆らえない。また、鎮守府の者達に認めてもらうためにも、こういうカタチで話をしていこうとしていた。
山風は今の龍驤に対しては割り切っていた。過去に三度も戦い、そのうちの二度は直接攻撃もしているのだが、今ここにいるのは手段はどうであれ救われた存在。仲間として認識する以外にない。
むしろ、今後の有用性から考えて、ここでちゃんと意思の疎通が出来ていないと、いざ決戦の時にまともな運用が出来ない可能性がある。それを考えるのならば、割り切らざるを得ない。あの時とは別人のように大人しいため、割り切るのも結構簡単だったようだが、人見知りの山風は他の者達よりは時間がかかった様子。
「……大丈夫だから、呼び出された理由、教えてほしい」
「ああ、そうだね。君達には明日、少し違う理由で施設に向かってもらいたい」
ここで簡単に明日の予定を伝える。朝イチに大本営からの監査役の艦娘が大将と共にやってきて、その者達を引き連れて施設に向かうという、ただそれだけ。簡単ではあるのだが、緊張感のある任務である。
説明はこれだけだが、その裏側には、監査役がもし施設に対して粗相をしないように見ていてほしいというのもある。それに関しては荒潮が敏感だろう。ジェーナスやミシェルに対して害がある者であ

れば、おそらく容赦せずに止めようとする。大本営だろうが監察官だろうが関係ない。
「……ん、わかった」
当然快く引き受ける。提督からの指示なのだから拒否することは出来ないのだが、この鎮守府はその辺りの自由度が高いため、一応聞くようにしている。山風達はなんだかんだ最も施設に慣れている者。適任であるため、提督もなんの不安もなく依頼が出来る。
それに、施設が絡むとなれば山風達は殆ど躊躇せずに引き受けるだろう。海風とまた顔を合わせることで、メンタルの回復にもなる。
「ンじゃあ、江風達が監査役の監視ってことになるのかい？」
「聞こえは悪いが、そういうことになるね。勿論、施設側に迷惑をかけるつもりはない。監査も形式上であって、信用は充分に得られている。だが、施設に対してはいくつも禁則事項があるだろう」
「あー、確かに。ミシェルのこととか、潮のこととかだよな」
その辺りもすぐに察する。施設のことをよく知っているからこそ、施設でやってはいけないこともよく理解出来ていた。すぐに思い浮かんだのはミシェル。その次が潮。
施設にはこういう者がいるのだと事前に伝えておかなくては、施設の者達どころか監査役にも嫌な思いをさせることになりかねない。そこは正しい距離感を保つことが重要。
「今はアレだろ、春雨姉も結構ヤバいんじゃないか？」
「だな。叢雲もいるし。気に入らないことがありゃ、ズケズケ言っちまうもンな」
怒りが溢れている2人に関しては、鎮守府側も若干危惧しているというのはあった。歯に衣着せぬ物言いをすることが確約されており、春雨はまだしも叢雲は艦娘に対していいイメージを持っていないため、何をしても口悪く罵る可能性がある。
とはいえ、叢雲だって成長している。余程気に入らないことをされない限り、我慢くらいはするだろう。その沸点は他の者よりも低いとは思うが。
「その辺りは、私達が向かう途中で教えればいいのよね～」

「そうしてもらうつもりだった。ちゃんと説明をして、お互いに柔らかい雰囲気で向かってもらいたい」
「は～い。施設のヒト達に嫌な思いをしてもらいたくないものね～。私達だけなら気にすることも無いけれど、初めてのヒトにはルールもわからないでしょうしね～」
荒潮は勿論、こう話している間もジェーナスのことを考えていた。ジェーナスにもトラウマが刻まれているため、監査役がそれに触れるような言動をした場合は、容赦なく止めるつもりで。
「それじゃあ、明日頼むよ」
「な、なぁ、ちょっとええかな」
そこで山風の頭の上の龍驤がおそるおそる手を上げる。小さいためにすぐにはわからなかったが、山風が龍驤を頭から下ろして、両手で提督の前に掲げた。
「ウチも……そこに行ってええかな」
龍驤の進言。なかなか難しい話ではあるが、そう思い立った理由について聞くと、龍驤はおずおずと話し出す。
「その、な、まずアレやん、今度の決戦、ウチもこういうカタチで行くことになるんやろ。だから、こうやってみんなと慣れられるように話をさせてもらっとると思うとる。でもな、施設のヤツらとは画面越しにしか話しとらんねん。だから、直に話したいんよ。決戦の時にギスギスするとあかんと思うし」
それは真っ当な意見である。鎮守府の者達との交流は、決戦当日に息が合わないなんてことを防ぐため。ちゃんと顔を合わせて、再洗脳より前の時のギスギスした関係をある程度払拭することが目的だ。
その決戦に施設の者達も参加するとなったら、当然だが顔を合わせることになる。もしかしたら、緊急時に装備の乗せ替えなんてこともするかもしれない。その場合、現場で突発的に行うと確実にいざこざが起きる。
それを防ぐためには、決戦よりも前に一度顔を合わせて、お互いのことを知っておくべきだと龍驤は訴えた。それで許されなかったら許されないでも構わない。それならそれで、その時のやり方を考えれ

ばいい話。当日に勝率を下げるようなことはしたくないというだけ。
「それに、な。画面越しやなく、直に会って謝りたいんや。ウチが元に戻れへんから、明石に元に戻っとる風にさせられとるのはウチも理解しとる。せやけど、これがウチの今の本心やから、どうであれ知ってもらいたいねん」
　これは誠意の話。今の龍驤には、それを考えるだけの思いがある。
「……ふむ、確かに、当日に龍驤を巡っていざこざが起きるのはよろしくない。あちらもＲＪシステムのことを知っているとはいえ、それを納得出来るかはわからないからね。龍驤自身がそれを望むのなら、僕はそれを許可しよう」
　提督は少し考える素振りをしたが、実際必要なことであろうともわかる。最善の戦いにするためには、事前準備で出来ることは全てやっておかなければならない。
「ありがとうな。今のウチは、殴られても蹴られてもある程度は大丈夫やから、いざって時はそれくらいやられる覚悟を持っていくつもりや。それくらい重い罪を犯しとるのはわかっとるでな」
「そこまでされることは無いだろうさ。彼女達も龍驤は被害者であると理解はしているんだ。画面越しでもその素振りは見せなかったろう？」
「直接会ったら思いが溢れる可能性はあるやん。そんだけのことをウチはしてもうてん。特に、春雨や叢雲辺りは怒りが溢れとるわけやし、ウチのことボコボコにしたい思うても何も否定出来へん。だから、そん時はそれを受け止めるわ。司令官も、ウチのためや思うて、そこは許したってくれへんかな」
　今の龍驤は調整の結果、罪悪感の塊。泥となっていることで感情を溢れさせて壊れることも無くなってしまっているため、ジェーナスのような自己嫌悪を溢れさせることも無い。ただただ、この思いを忘れることなく生きていくのが苦しいという無限地獄になっている。
　死ぬよりも辛い極刑を今でも受け続けているのに、そこに痛みまで与えられるのは過剰ではないかと考えたものの、龍驤がそれを望んでいるのならば、何も言えなかった。

「……僕は施設の者達に限ってそういうことは無いとは思っているがね」
「そういうことにしとくわ。でも、何かあっても誰にも罪はあらへんのや。全部ウチのせいやから」

ともかく、龍驤も参加することになった。果たして、大本営からの監査を難なく抜けることが出来るのか。

監査役

翌朝。鎮守府から監査がやってくる日。事前に来る時間はおおよそで聞いているものの、誰が来るかまでは聞いていないため、少々緊張した朝となった。

ただ、1つだけ先んじて聞いておかなくてはならないこととして、決戦前にちゃんと顔を合わせておきたいということで、龍驤が装備として来島することは伝わっている。無論、施設にいる者全員がそれを知っていた。

「……本当に顔を合わせる時が来ちゃったね。それもよりによって監査と同時に」

「どうせだから纏めてって考えたんでしょ。誰の差金か知らないけど、やってくれたわ」

怒りが溢れた2人、春雨と叢雲が、岸で監査の部隊を待ち構えていた。まずは春雨がそろそろ来るのではというタイミングを直感的に感じ取り、そこから叢雲が実際の感知で近くまで来ているかを確認する。今のところはまだ感知の範囲には入っていないものの、そろそろ来そうということでここにいる。

勿論その付き添いとして海風と薄雲もここにいるし、いつものように出迎えのために中間棲姫もいるものの、2人の小さな愚痴は止まらなかった。

龍驤に対しての怒りの感情はどうしてもまだ取れていない。そもそも怒りが溢れているのだから、何かにつけて怒りが出てきても仕方ない。叢雲は特にだ。

春雨は先に寂しさが溢れている分、冷ややかな怒りが主だが、叢雲は最初から最後まで狂いなく怒りに占められているため、熱い怒りが基本。愚痴は出るし態度にも出る。

「今日は少し多めに甘いモノを用意してきたんだ」

「そうなんですね。それなら大丈夫ですか」

「どうだろう……でもある程度は抑えられると思う、かな」

薄雲が少し大きめの袋にクッキーを詰め込んできたのを海風に見

せていた。龍驤の姿を見たら、まず間違いなく怒りが溢れるのがわかっているため、それを落ち着かせるためにもたっぷりと。昨日のうちから用意していたようだ。
　海風も、春雨の怒りを抑えるためにすぐ側に居続けることに決めている。それは基本的に毎日変わらないのだが、今日はより強めに。もし万が一龍驤に手を上げようとした場合は、それを止めるためにも。これは事前に春雨にもお願いされていたため、その使命を全うする。
「私達は普段通りにしていましょうねぇ」
「はい、わかっています。何とか我慢しますので」
「普段通りにしていたら、私は龍驤を握り潰すわよ」
　叢雲の物言いに応じて、薄雲がクッキーを差し出す。既にイラつき始めているので、早速甘味で落ち着いてもらっていた。中間棲姫は苦笑しか出来なかった。
「んぐんぐ……感知範囲内に入ったわよ」
　ここでついに、叢雲の感知の範囲に監査の部隊が入った。人数にして7人。
「4人は多分山風達ですね。山風、江風、涼風、あとは荒潮ちゃんでしょう。残り3人がこの施設に初めて来るヒト達です。でも、何となくですけど1人は知ってるヒトだと思います」
「艦載機を飛ばして見てみるわぁ」
　ここで中間棲姫が小さく手を動かすと、1機の哨戒機が現れた。これくらいなら艤装を施設内に置いたままでも出せるようである。代わりに攻撃性能などは一切無く、そこまで遠くにも飛ばせない模様。
「あらあら、1人は吹雪ちゃんだわぁ。よく大将さんとの通信の時に顔を見る子だけど、今回はここに来てくれたのねぇ」
「それだと、残り2人が監査役でしょうか」
「多分そうなるわねぇ。4人は春雨ちゃんが言う通り、山風ちゃん達だもの。2人は本当に見たことのない子だわぁ。なんだか真面目そうな子ねぇ」
　監査というだけあって、この場には施設の深海棲艦が仲間として認められるかを見定めに来たという態度がありありと現れているとの

こと。若干緊張感が増す。
「誰が来ようと関係ないわよ。あむ、気に入らなかったら文句を言うだけだもの」
「なるべく抑えてくださいね」
クッキーを食べながら、向かってくる方向を睨むように見据える叢雲。警戒がそのまま怒りに繋がるため、落ち着くために甘味を補充。
「目視で見えました。海風、泥の反応は」
「ありませんね。ちょっと意外なんですけど、泥の塊である龍驤の反応もしないみたいですね」
「妖精さんになったから反応も無くなっているのか、本体の泥はまた別の反応なのか……そこは明石さんに調べてもらいましょう」
ここで水平線の向こうに部隊が見えるところまで来た。先頭は案内役を兼ねている山風に、それをサポートする江風と涼風。いつものように、こちらに大きく手を振る姿が確認出来たため、春雨と海風も小さく手を振る。
「いますね、知らないヒトが」
そして、部隊の中央にいたのが、おそらく監査役の艦娘であろう。その後ろに荒潮と吹雪がいることが確認出来たため、消去法としてそうなる。
その2人は、近しい制服を着ているようにも見えたが、色合いが正反対であり、装備がまるで違った。片や大型の艤装を背負った戦艦、片やシンプルな艤装の空母。そして、どう見ても同じ国の艦娘には見えなかった。
施設にはジェーナスやリシュリュー、コマンダン・テストのような他国の艦娘だった者もいる。鎮守府には大将の艦娘としてサラトガも滞在中。雰囲気はその者達と近いが、国が違うのか、中間棲姫が言うように非常に真面目そうな雰囲気であった。
「……敵視はしていないようですけど、本当に味方なのかという疑問は持っていますね、あの目は。私達は戦場にいましたけど、姉姫様はここで初めて姿を見ることになるはずですし」
「それは仕方ないわよねぇ。誰だってそうなんだもの」

初めてこの島を発見した時のことを思い出して、海風は少し恥ずかしそうに目を逸らした。突発的に主砲を乱射し、中間棲姫の甲板に全て防がれたのは苦い思い出である。
中間棲姫としては、その2人の視線はその時の海風に近いものであると感じた。懐疑的な、まだ味方とは認めていないぞと訴えてきているような目。ここで見たものが全てなのだと割り切っている目。
しかし、その視線は映像に映っていないものに対するものであり、春雨や叢雲には比較的信用しているような感情を乗せていた。
「……姉姫さん、予定通り、到着」
「いらっしゃいませ。そちらの吹雪ちゃんは、顔は合わせているけど、こうやって直に会うのは初めてねぇ」
「はい、ご無沙汰しています。司令官――大将がよろしくと話していました」
まずは顔は知っていても初来島の吹雪から。話を聞かなくても、この島のことは知っているため、見た目は深海棲艦でも心優しい姫であることは理解済み。当たり前のように前に進み出て、握手を求めた。中間棲姫も一切躊躇なくその手を握る。
「貴女達が監査という子でいいのかしらぁ？」
そして、未だ前に出ようとはしない新規の2人。目の前に深海棲艦、しかも強力な力を持つ姫だけならまだしも、戦史を知る者ならば誰でも知っている最悪の姫、中間棲姫がいるのだ。怖気付いているわけでなくとも、警戒して一歩踏み出せないのは仕方のないこと。
さらにいえば、その中間棲姫がやたらとおっとりしており、ニコニコ笑顔で吹雪に対応しているのだから、知らない者が見れば逆に怖く感じてしまうのも無理はない。
勿論、ここに来る前に、山風達がさんざん教えている。ここはこういう場所なのだ、主人である中間棲姫はこういうヒトなのだ、と。聞かされていても驚いたようだが、現物を見たことでさらに驚いている。
「え、ええ、ごめんなさい、少々驚いてしまったわ。事前に聞いていても、中間棲姫が目の前にいると緊張してしまうものなんだもの。無礼

だったらごめんなさい」
　片方の戦艦が、帽子を脱いで一礼。
「私はBismarck（ビスマルク）。Aufsichtsrat（監査役）として、ここに馳せ参じたわ」
「同じく、Aufsichtsrat（監査役）のGraf Zeppelin（グラーフ・ツェッペリン）だ。よろしく頼む」
　ビスマルクの隣に立つ空母――グラーフ・ツェッペリンも帽子を脱いで一礼。
　２人とも監査役として非常に真面目で礼儀正しく、背筋もシャンと伸びているクールな印象。故郷が同じらしく顔立ちも似ているが、姉妹でも何でもないとのこと。艦種が違うのだからそういう繋がりは無い模様。
「話には聞いていたけれど、実際に顔を突き合わせるとなると、どうしても複雑な心境ね」
「我々は、というか全ての艦娘は、深海棲艦は敵性生物であるという認識しか無いのでな。申し訳ないが、警戒だけはしていた」
「でも、話す姿を見ればある程度はわかるわ。姉姫だったかしら。貴女は普通の人間よりもデキているヒトね」
　警戒心は解いていないものの、中間棲姫がどういう存在かは、こうやって直接会えばわかったようだ。
　この２人は監査としての仕事をそれなりにやっているようで、いわゆるブラック鎮守府もいくつか目にしているという。
　以前叢雲が生活していた鎮守府のような、艦娘を蔑ろにするような提督は、少数ではあるもののまだまだいなくはならないようで、吹雪もそうだが、手分けをして取り締まっている。この２人は、むしろこの２人が所属する鎮守府は、そういう仕事を受け持つこともそれなりにあるようである。
「私はヒトの目がいいと自負しているけれど、第一印象はとても良いわ。でもごめんなさいね、これも仕事だから、見るべき場所はキッチリ見させてもらうわ」
「ええ、問題ないわぁ。私達には疚しいところは何も無いからねぇ」

「勿論、ここでのＶｅｒｂｏｔはちゃんと守らせてもらう。こちらだって、貴女達と敵対したいわけじゃないもの」
ビスマルクが握手を求め、中間棲姫がそれに応じる。その手は温かく、その色素から冷たい印象が強い深海棲艦とは思えなかった。
一方、グラーフ・ツェッペリンは春雨に目を向けていた。見られたことで軽く警戒はするものの、そこに敵対の意思が無いことはすぐにわかる。直感を使わずとも、自分に対して悪い感情を持っていないことは火を見るより明らか。
「貴女がハルサメか」
「はい、私が春雨です。何でも、私達の戦いを映像として見ていただけたようですが」
「ああ、見させてもらった。苦しい戦いであることはすぐにわかった。それを戦い抜いた貴女達を、私は尊敬しよう」
少し腰を下ろし、春雨の前に膝をつく。突然そんなことをされたので、流石の春雨も小さく驚いた。
「特にハルサメ、貴女には高潔な魂を感じた。仲間を救うために奔走し、その類稀なる力を発揮し、救えなかった者にもその境遇を悲しんだ。それは深海棲艦という種族なんて関係ない。貴女が優しく、強い心を持っているからこその行動だろう。それに私は、敬意を表させてもらおう」
おもむろに春雨の手を取ると、軽く口をつけて敬意を表した。そんなことをされたことがない春雨はギョッとした顔をしつつも顔を赤らめる。そしてその横の海風が大きく目を見開いた。
グラーフ・ツェッペリンとしては、これが最大級の敬意。それを行動に示すことによって自分の気持ちを相手に伝える。あちらのお国柄ではそれが普通なのかもしれないが、春雨には驚き以外ない。
「な、ななな、何を突然やってるんです!?　偉大なる春雨姉さんに敬意を表するのはわかりますし、そういうことをしたくなるほどに神々しいのも理解していますが、姉さんの許可を取らずに突然、き、キスとか、それはどうなんですか!?　なんて羨まし、違う、とんでもないことをしてくれるんですか！　春雨姉さんの手は純粋にして潔白、おい

それと初見の方が触れていいものではなく、ましてやキスだなんて、ど、どういう神経を!?」
海風が捲し立てるものの、グラーフ・ツェッペリンは何を驚いているのかがわかっていない様子。
「我が国ではこれくらいが普通なのだが」
「普通ではないわよ。でも、やらないことは無いってくらいね。それくらい、グラーフはハルサメに対して敬意を表しているということを知ってもらいたいわ。あの戦いの映像、私もハルサメに対しては驚いたもの。艦娘の中でも、あそこまで出来る者はなかなかいないわ」
「ああ、命を救うために奔走する姿は、Ｗａｌｋ（戦）・ｒｅ（乙女）と評しても差し支えないだろう。そんな貴女達と共に戦えることを誇りに思う。我々が貴女達の決戦に参加出来るかは別として、同じＷｅｒｄｅｎ（志）を持つことは喜ばしい限りだ」
春雨をさんざん持ち上げられているので、海風としては悪い気分では無い。あの映像、その戦いが、大本営の心すらも動かしていることは、過去最高に興奮し、喜んだことである。その代表としてこの２人が春雨を褒め称えてくれているのだから、むしろ喜びで小躍りしてもいいくらいである。
だが、どうしても敬意の表し方がダメだったようで、敵意とは言わずとも警戒心だけは嫌でも強くなった。

監査の始まりは前途多難ではあるものの、施設に対しては好印象のようである。

割り切る方法

施設を監査する者として、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンが来島。最初は警戒していたものの、ビスマルクは中間棲姫と直に顔を合わせたことで、その本質を理解。グラーフ・ツェッペリンも戦いの映像で見ていた春雨に敬意を表した。

その表し方で一悶着あったものの、そのままでは話が進まないので、その原因となりかけている海風には少し抑えてもらって、本来やらねばならないことを始めていくこととなった。グラーフ・ツェッペリンに対して最大級の警戒をしているようだが。

「そういえば、龍驤ちゃんも来ているのよねぇ？」

監査の前に、ここに来ている者達の中でまだ顔を出していない者のことを振る中間棲姫。その名前に、ようやく気を取り戻した春雨と甘味で心を落ち着けている叢雲はピクリと反応する。

目の前にいるのはあくまでも艦娘のみ。そのうちの誰かに、ＲＪシステムが搭載されている。つまり、龍驤がこの場にいるわけだ。

「……あたしが装備してる。でも、顔を合わせるのが怖いからって、髪の毛の中に隠れてる……」

この中でも特に髪の長い山風が龍驤を装備しているようで、今は結んでいる髪の裏側に隠れているという。自分から会いに行くと決意したものの、この場に来てからは一言も発するどころか、表に出ることにも抵抗がある様子。

決意は出来たとしても、勇気が出ないようだった。その辺りは悪性が善性に反転したことが、そういうところにも影響を与えているようだった。敵対している時の慢心が嘘のように消え、逆に慎重に慎重を重ねるようになったことで、こういう場で本当に出ていいのかを窺っている。

「ウチが自分で来る言うたけど、その、な。尻込んでしもうて」

「……顔を合わせるって言ったのは、龍驤」

山風が自分の髪の中に手を突っ込むと、何かを探すようにゴソゴソと動かした後、妖精さんくらいのものを摘み上げてみんなの前に差し

出す。そこには画面越しでも見た、手の平サイズになった龍驤がいた。
　こうなっていることは知っているし、動いているところも見ている。話す言葉だって聞いている。それなのに、現物がここにいるとなると、感覚が大分変わる。山風達は先んじて慣らしているものの、施設にいる者達は通信で少し話しただけ。黒幕の情報を聞き出し、そして謝罪されたくらいで、世間話などが出来るような関係ではない。
　ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンも、ここに来るまでにある程度の知識は手に入れている。施設の者達や鎮守府に所属する者にトラウマを植え付けた宿敵の成れの果てであり、特に春雨や叢雲は怒りを溢れさせているために龍驤に対しては大きな感情を抱いていることも。
「や、山風、すまんのやけど、手の平に置いてもらってもええか」
「……ん」
　掲げるように龍驤をみんなの前に出す。ここまで来たら、もう後戻りは出来ない。
「……何度謝っても意味がないのはわかっとる。ウチの罪は何をしても軽くなるわけがあらへん。誠意がないと言われても仕方ないと思う。でも、言わんよりは言った方がええと思っとる。だから、何度でも言わせてほしい。今まで、ホンマに申し訳なかった」
　山風の手の平の上で土下座。画面越しに見たそれと同じように、謝罪の意を込めて。
　龍驤のこの謝罪は、本心からであることは見てわかる。春雨としては、直感的にもこれは裏がない言葉であることは理解出来た。それでも心が騒つくのは、怒りが溢れた根本的な理由を持っているから。
「許す許さないじゃないです。貴女はもう、あの龍驤ではないんですから。貴女は別人です」
　春雨は拳を強く握りながら、割り切るように口にした。全ての要素が反転したのだから、悪性の龍驤はこの世を去り、善性の龍驤が生まれた。ならば、もう怒りを向ける相手ではない。そう考えることで、どうにか理性を掴み取る。

そうで無ければ手を出してしまいかねない。本心からの謝罪をしている相手に対して、それだけでは気が済まないと半殺しにしていた可能性があった。それくらいに、春雨は限界に近かった。
それを抑え込むため、海風がその握り拳を包み込むように手を添えた。それだけでも多少は落ち着くことが出来る。春雨に必要なのは、姉妹の温もり。
「私は知らない相手に対して腹を立てるような理不尽な怒りは持ちたくありません。ですが、いくつかお願いを聞いてもらえると助かります」
「なんでも言うてや。あの時は海風に言われて服を替えたけど、他に何かあれば」
「髪型も変えてもらえますか。貴女から龍驤の要素を極力排除してください」
声を変えることなんて出来ないし、その特徴的な口調も簡単にはいかないだろうからそれは問わない。その分、見た目を確実に変えてもらいたいという願い。
画面越しの時はまだ耐えられたが、直に見たら耐えられなかった。服が違ったところで、あの龍驤であると意識させられるのはやはり見た目。
「ああ、わかった。これでええか」
いつもは髪を2つに結んでいる龍驤だが、春雨の願いを叶えるために、ただ髪を下ろすだけとした。それだけでも随分と印象が変わり、龍驤かどうかを判断出来る手段が、声を聞くことだけになった。
それだけでも春雨は幾分か怒りが引っ込むような感覚を覚えた。視覚的な苛立ちはやはりあったようで、それが失われれば耐えられる範囲に。
「次、貴女は気が済むかもしれませんが、どれだけ謝られても何も変わらないのなら、もう謝るのはやめてください。貴女だって、私達と顔を合わせる度に土下座するのは疲れるでしょう。身も心も」
龍驤としては、それに対して返答は出来なかった。Ｙｅｓと答えたら誠意が無いように思え、Ｎｏと答えたら春雨を否定することにな

る。どちらも龍驤としては選択出来ないものだったため、答えを有耶無耶にした。
春雨としても、少し意地悪なことを話したなと感じていた。そして、それに対してベストな対応をしたとも。龍驤は、本当にあの時の龍驤では無いのだと、改めて理解した。
「最後に、私達の仲間として活動してくれるのなら、後ろ向きな発言は控えてください。士気が下がりますので。まぁこれは謝るなと同じところに入ると思いますが」
「……せやな。士気を下げるんはええことや無い。無理してでも明るく振る舞わせてもらうわ」
「私はそれで問題ありませんので。他のヒトが同じことを言うかはわかりませんが」
小さく顎であちらを見ろと促す。そちらでは、溢れる怒りを甘味でどうにか抑えつけている叢雲の姿。龍驤に対して向ける目は止まることのない苛立ちに染まり、いつ握り潰してやろうかとタイミングを計っているようにすら思えた。
「……ウチはなんて言えばいいのかはわからへん。誰も彼もを傷付けてきとるからな。だから、誰も彼もから傷付けられる覚悟は出来とる。気が済むまで何をしてくれても構わんよ。気が済まんならいつまでもやってくれ。ウチからはそれしか言えん」
何かを悟ったような言葉に、叢雲は見せつけるように大きく溜息を吐いた。それで怒りが抜けるわけではないし、むしろそんなことをすればするほど怒りは増していくのが目に見えている。
だからこそ、叢雲は一つの選択をした。ここに来た当初ならば、まず間違いなく間髪容れずに龍驤を握り潰していただろうが、成長した叢雲には選択をするだけの理性がある。
「私はね、何に対しても腹が立つの。残念ながらそういうカタチになっちゃってるから。当然アンタにも腹が立つし、他のモノにも腹が立つ。だったら、アンタなんて他のモノと同じってことよ。いちいちそれに対して行動するだなんて無駄。余計な体力使いたくないわね」
本当は、龍驤を握り潰したくて仕方ないのだろうが、ここはギリギ

リのところで我慢した。甘味があるからまだマシというのもあるかもしれないが、叢雲も本当に怒りを向けるべき相手くらいは見定められている。そうでなければ、白露や古鷹に対してもっと攻撃的になっていてもおかしくない。

故に、叢雲はその2人に対して言ったことを龍驤にも言う。再洗脳と調整によって本来の心を模している龍驤ならば、叢雲の言葉を正しく受け取ることが出来るはず。

「だから、アンタは私に誠実であることを証明し続けなさい。言動に嘘はつくな。隠し事をするな。本心のままに行動しろ。それで少しでも疑問を持ったら、私がアンタを痛めつける」

白露の時と全く同じ言葉。叢雲の割り切り方はいつもコレになるが、それで割り切れるのならば、何度も同じ手段を使っても問題ないだろう。

怒りの矛先は、黒幕のみに絞られている。ならば、龍驤に構っているのは時間の無駄だし体力の無駄。

「弱者を痛めつける程、私は歪んでいないの。そうなったアンタを一方的に嬲るだなんて、私のプライドが許さない」

「……そうか、そうなんやな。ほんま、優しい奴らやで」

「優しくなんてないわよ。少しでも気に入らないことがあったら、私はアンタを潰す。いつでも命を狙われてると思いなさい。それがアンタに対して私が課すことが出来る罰よ」

舌打ちをしながら目を逸らすが、譲歩も譲歩。怒りをどうにか抑え込んで、大惨事にせずに済ませたのは、叢雲に正しく芽生えた優しさの一端。この施設での生活は、間違いなくいい方向に向かっている。

この一連の流れを見せられ、監査役のビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは、ここにいる者達がどういう存在なのかを理解することが出来た。

事前の情報として、一部の者は心が壊れていると聞いている。敬意を表した春雨だって、本来の性格が歪むほどの壊れ方をしている。叢雲もわかりやすく苛立ちを隠さないのだから、やはり壊れている一端が見えた。海風はさらに顕著。

「姉姫、貴女がこの子達を管理しているのかしら」
ビスマルクが何気なく中間棲姫に問う。それに対して、
「管理じゃなくて保護よぉ」
すぐにこう返す。管理だとここに住まう者達に自由が無くなるイメージがあるが、保護ならば一緒に暮らしているというイメージになる。
あくまでも、ここにいる溢れた艦娘達は、この施設を自分の居場所として考え、自由気ままに生活しているに過ぎない。自主的にここにいるのだから、管理しているわけではないのだ。
「なるほど。少し考えを改めさせてもらうわ。正直なことを言うと、私はこの施設を心が壊れて暴走の危険性のある元艦娘を管理するものだと思っていたわ。でも、本当は共存している保護施設ということなのね。貴女の性格ならば、それだけでも信用に値するわ」
「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいわねぇ。ここにいる子はみんな優しくて強い子ばかりだから、安心してちょうだいねぇ」
「ええ、今のやりとりだけでも充分に理解出来た。おそらくだけれど、この2人が一番尖っているんじゃないかしら」
怒りが溢れている2人が、最も尖っているのは間違いでは無いだろう。春雨はここ最近だが、叢雲は最初からコレなので、ある意味最も扱いが難しい存在ではある。
それがまともに生活出来ているのだから、この施設の存在は大成功であると言えるだろう。ここが無ければ、溢れた艦娘達は路頭に迷い、それこそ侵略者気質を発現させて、人類の敵になっていたかもしれない。それが抑え込めているだけでも、この施設は成功していると言える。
「私もちょっと安心しましたよ」
そこに割り込んでくるのは吹雪。画面越しでしか見ていなかった施設の全容の一端を目の当たりにして、大将が入れ込んでも問題ない場所であることを再認識した。
それに、吹雪にはもう一つ気になっていたことがあった。
「叢雲ちゃん、一応私の妹なので、話を聞いていると結構ハラハラした

んですよね。協調性が無いんじゃないかなって。でも、今のを見て大丈夫だって確信しました。薄雲ちゃんも手綱を握れているようですし」

妹達がここにいるということはずっと前から知っていたわけだが、ここで龍驤に対して怒りを露わにしなかったことで、安心して任せられると感じたようだ。

「聞こえてるわよ吹雪」

「お姉ちゃんって呼んでほしいなぁ」

「喧しいわよ。姉なら姉らしくしてみなさい」

こんな問答でも、吹雪はニコニコ。叢雲は溜息。それを見守る薄雲も、和やかな空気だと笑顔を見せた。

龍驤との関係も、今のところは安心出来るくらいにはなった。かなり無理矢理ギスギス感を取り払った感じにはなったものの、それで割り切れるのなら良しとする。

春雨と叢雲は、ひとまず龍驤に対しては怒り以外の感情で接することが出来るだろう。

施設の在り方

「それじゃ、ここからは本来の仕事を始めてもよかったかしら」
龍驤との関係がひとまず軟化したところで、ビスマルクが本題に入る。ここに来た理由は、龍驤の件もあるにはあるが、本来は施設の監査。この時点でおおよその信用は得ているのだが、規律としてちゃんと施設内を見て回らなければならない。
今見えているのは島の岸だけ。ここまで来て無いとは思うが、施設の中によろしくないモノがあったり、他に保護されている者達に敵対の意思があったりしたらいけない。ビスマルクがそう語る。
中間棲姫も当然納得している。自分達が潔白であることを示すには、監査役にありのままを見せるのが一番手っ取り早い。ここにいる者達は、隠し事など一切せずに、今までしてきた生活をただ送っているのみであるため、何処をどう見てくれても構わないと施設を開放する。
「案内は姉姫様がしますか？」
「ええ、その方がいいと思うわぁ。ただ、全員で回るのは流石に大人数すぎるわねぇ」
今回来島したのは、山風の頭の上にいる龍驤を除けば7人。そこに案内人である中間棲姫を含んだとしたら、いくらそれなりに広い施設であっても少し窮屈だろう。
山風達調査隊は、監査役が下手なことをしないように監視する役目も担っているのだが、外を見て回るだけならまだしも、室内となると流石に難しいだろう。そのため、代表として山風が便乗することとなった。龍驤に対しても案内が行き届くようにという配慮もある。
ここに春雨と海風がついてきてくれるのなら、山風も満足のいく仕事になったのだろうが、そこは隊長として割り切らざるを得ない。もっと海風と話せる時間が欲しいと内心思いつつも、まずは自分のやるべきことを正しく実行する。そうしていれば、海風に認めてもらえるのだから。
「それじゃあ、江風達はここの連中に別で挨拶してくるよ」

「荒潮はすぐにでも会いに行きたいんじゃないかい？」
「勿論よ～。今は漁に行ってるかしら～。それだったら、お手伝いしてもいいなって思うわね～」
一度別れる江風、涼風、荒潮は、施設の者達との交流に勤しむこととなる。特に荒潮は、ジェーナスと話すことが一番の目的。今この施設のために働いているというのなら、それを手伝ってもいいとさえ話す。
だが、艦娘や深海棲艦からは確実に聞かない言葉が聞こえてきたことで、ビスマルクは首を傾げる。
ここに来るまでに教わっているのは、ここにいる者達に対しての禁則事項。絶対にやってはいけないこと、言ってはいけないことを知っておけばいいということで、この施設で何が行われているかまでは聞いていなかったようだ。
むしろ、あえて話さなかったまである。この驚く顔を見るために。
「今、漁と言った？」
「ええ、漁をしているわぁ。ここは基本的には自給自足で生活しているんだもの」
「ほう、それは素晴らしいことだ。だが、それだけでは賄えないものもあるのでは？」
「そうねぇ。でも、そういうものは、買い出しに行ってもらってるのよぉ。調味料とか日用品はどうしてもねぇ。勿論、正当な商売でお金を稼いでだから安心してちょうだいねぇ」
吹雪はこのことを大将経由で聞いているため驚くことは無かったが、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは流石に驚いていた。艦娘であってもそんなことをする者は殆どいないと言ってもいい。
「ちなみに、何を何処で売って生計を？」
「見てもらった方が早いわねぇ。じゃあ、まずはそちらを見てもらいましょうかぁ」
この施設のキモと言っても過言ではない場所に連れて行かれる監査役一行。施設内に入るわけではないのならいいかと、ここにいる者達全員で向かった。

その場所は勿論、畑である。
「……穏健派の深海棲艦がいるというのはもう百歩譲るわ。でもね、深海棲艦がジャージ着て農作業している光景は、後にも先にもここでしか見られないわよ」
唖然としながら呟くビスマルク。グラーフ・ツェッペリンも言葉が出ないようである。監査役がそんな表情を見せたことで、江風と涼風は満足げだった。
そこでは当たり前のようにみんなが力を合わせて作物を育てている。今は筆頭として動いているのは松竹姉妹。そこに、艤装を使った重労働がお手のものであるコロラドに、地道な作業を黙々とこなす古鷹、そしてこの作業もトレーニングの一環になると楽しみながら身体を動かす大鳳。
奇しくも、松竹姉妹以外は龍驤の顔見知りの元艦娘達となっていた。見る者が見れば、かつて悪事を働かされていた者の更生施設のようにすら見えてしまう。
「みんな、自分の食べる分は自分で働いて作るのよぉ。私がお願いしているというのもあるけれど、一度始めてくれたら、みんな自主的にお手伝いしてくれるの」
「へぇ……そういう意味では、ここにいる子達は全員、物分かりがいいのね」
「そうねぇ。自分の境遇を悲観していない子ばかりで嬉しいわぁ」
一部どうしても溢れた感情次第で活動に至るまでに時間がかかる者はいるものの、最終的には全員施設のために何かしらの働きを見せているため、そういう意味では物分かりがいい。良い言い方をするのなら、みんな優しく真面目。艦娘としての心を失っていない証拠となる。
「身体は深海棲艦であっても、心は艦娘であるというわけだ。自分を見失っていないのだな」
「ええ、ここに流れ着いてくれれば、確実に処置が出来るのよぉ。逆に、処置が出来ないとどうなってしまうかわからないの。でもね、親身に優しく接していけば、必ず自分を取り戻すことが出来るわぁ。そ

れも実証出来ているしねえぇ」
　無論、叢雲のことである。処置が出来ずに心を失っていたところに、薄雲の献身を経て、今の自分を手に入れている。この施設ならば、正気を失った者も状況次第では艦娘の心を取り戻させることが出来るということだ。
　だが、そういうことが無いに越したことは無いとも訴えた。叢雲の場合はブラック鎮守府が原因で、全てに対して深い怒りを持つことになっているのだから。不慮の事故ならばまだしも、人間や艦娘のせいで死に至る羽目になるのは、流石に許し難い。
「なるほど、肝に銘じておくわ。私達は、そういう鎮守府を無くすための監査をやっているんだもの。それでも間に合わないことがあるのだから、本当に申し訳ないと思うわ」
「不条理で命を落とす仲間達をなるべく救うのが我々の仕事だ。だが、その目を掻い潜ろうと不要な努力をする者も存在する。不甲斐なく思うさ」
　ビスマルクもグラーフ・ツェッペリンも今の仕事に満足をしているのだが、それでも救われない者がいるのだから悔しいと話す。監査を出し抜こうとする小狡さにだけは長けている者もいるようで、そこの艦娘のことを思うと不憫で仕方ないとも。
　故に、そんなカタチでこの施設の一員を増やすような真似はしないように、しっかりと監査を続けていくとここで誓った。
「……みんな楽しそうやなぁ。良かったわ、居場所が見つかって」
　一方、龍驤は農作業の光景を眺めながらしみじみと呟く。少し前までは自分と一緒に侵蝕され悪事を働かされていた者達が、楽しそうに農作業を続ける様子は、龍驤には眩しく思えたようである。
「……ちゃんと挨拶するといい」
　その呟きを間近で聞いた山風は、またもや龍驤を摘み上げて手の平の上に。農作業中の者達の前に突き出すように掲げる。
　そのタイミングでちょうど見られていることに気付いたコロラドが、作業状況の報告のために中間棲姫の下へとやってきた。
「総出で雑草取りは終わったわ。Ｓｐｒｏｕｔ（新芽）もいくつか出ているみ

たいよ」
「あらあら、それは良かったわぁ。育つまでは時間がかかるけれど、着実に元に戻って行ってるのは嬉しいわねぇ」
　にこやかに話す中間棲姫とコロラドだったが、山風が龍驤を掲げていることに気付くと、その表情は別の方向に変化。
「Ｗｏｗ，もしかしてリュージョー？　本当にちっさくなってるのね。Ｈｅｙ，みんな、リュージョーがいるわよ！」
　畑にいる者達全てに聞こえるように大きな声で呼びかけた途端、今やっている作業を止めてまで龍驤を一目見ようと駆け寄ってきた。特に古鷹と大鳳は、あの戦場にも出ている上に、共に侵蝕されて戦っていた仲間だった時期もあるのだから、今の状況が気になるのは当然のこと。
「本当に妖精さんになってる……画面越しに見た時も不思議でしたけど、現実に見るともっと不思議ですね」
「本当に。龍驤、生活に不便は無いですか」
「えっ、あ、ま、まぁ、多少はあるけど、そこまで不便やないな。みんながなんやかんや気にかけてくれとるし」
　龍驤に対して怒りの目を向ける者は少なくないが、同じ境遇の者はむしろ同情が多い。一歩間違えれば自分もこうなっていたかもしれないと思うと、むしろ恐怖の方が先立つくらいである。あの時の龍驤を知っているために、しおらしくなった姿を見ていると、余程のことがあったのだと察する。
「春雨、大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ。割り切ることは出来ています」
「それならよかった。私としては、そちらの方が心配ですから」
　大鳳は春雨の方を気にかけていた。あの龍驤が、反転しているとはいえこんなに近くに、しかも仲間として存在しているのだから、怒りが溢れていてもおかしくないと考えていた。
　その春雨は、龍驤から龍驤としてわかる部分を排除したことで、大分落ち着いている。これで目の前にあの時のままの龍驤がいたら話が変わっていたかもしれないが、龍驤と呼ばれている別モノとして判

断出来るようになっているため、怒りは大分鎮静化している。海風だけでなく、妹達が側にいることも大きい。
「貴女達が監査のヒト達ですか？」
「どうよ、オレ達の畑。結構いい感じだろ」
松竹姉妹は監査役の２人へ。こちらも龍驤に対しては激しい怒りを持っているわけではなく、仲間を傷付けた嫌な奴という印象で止まっているため、元に戻っているのなら他の者と同じ程度で済んでいた。
むしろ、監査として自分達の作り上げた畑についての感想の方が気になっている。これがダメだと言われるなんて思っていなかったが、念のためその口から感想が聞きたいと。
「素晴らしい。自給自足の極致だ。だが、かなり大きな畑のようだが、ここまで食糧を貯め込むのか。人数が多いのは見てわかるが」
「いえ、これは一部は陸に売りに行くんですよ。それで日用品を買い集めて、生活に使っているんです」
「なるほど、先程姉姫が言っていたのはそういうことか。正当な商売をしているというのは」
納得するグラーフ・ツェッペリン。しかし、次に疑問に思うことは、これを何処で売るのか。
「ウチの野菜は結構人気あるんだってさ。持っていった分は全部売れちまうんだぜ」
「ふむ、それを何処で売っているのだ。ここにいるのは全員が深海棲艦だろう」
「そりゃあ陸だよ。人間に変装してな」
人間に変装という言葉で、少し表情が変わる。侵略行為では無いが、深海棲艦が当たり前のように上陸しているという事実は、普通に驚くべきこと。
「ビスマルク、これは大丈夫なんだろうか」
「難しいところね。でも、売買をしていても何も言われていないということは、出店の許可は正しく貰っているんでしょ。姉姫、その子達に会っていいかしら。そこはちゃんと聞いておきたいわ」

「ええ、大丈夫よぉ。先に言っておくけれど、ちゃんとそこのルールは守っているわぁ」
中に入るよりも呼んできた方が早いということで、コロラドがサクッと2人を呼んでくることに。全員の前で正しいことをしていると潔白を証明することがベスト。

そして少しして、コロラドが遠征組となる2人を畑まで連れてきた。
「何か御用かしら」
「Ａｕｄｉｔ（監査）の方々に呼ばれていると聞いたのですが」
やってきたリシュリューとコマンダン・テストの顔を見て、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは目を丸くする。
「え、あ、貴女、リシュリュー!?」
「コマンダン・テストではないか！」
「あら、Ｂｉｓｍａｒｃｋじゃない。そういえば貴女、監査役だったわね」
「Ｇｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎ、お久しぶりです。こんな姿で申し訳ありません」
なんと、顔見知りだったのである。

旧友との再会

「え、あ、貴女、リシュリュー!?」
「コマンダン・テストではないか！」
「あら、Ｂｉｓｍａｒｃｋじゃない。そういえば貴女、監査役だったわね」
「Ｇｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎ、お久しぶりです。こんな姿で申し訳ありません」
　監査役として来島したビスマルクとグラーフ・ツェッペリン、そして施設に住まう元艦娘リシュリューとコマンダン・テストは、実は顔見知りだったことがこの場で判明した。
　ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは、何故ここにいるというような表情で２人を見ていたため、死んだものと考えていた者に出会ったことで驚いていたようである。
　対するリシュリューとコマンダン・テストはいつもの雰囲気を崩さない。久しぶりに会った友人を前にして、喜んではいるようだが大きく感情を揺らすようなことは無かった。
「あらあら、知り合いだったのかしらぁ」
「知り合いも何も、私達はこの子達と合同作戦や合同演習に参加したくらいの仲よ。手合わせしたことすらあるわ」
「ええ、大体互角だったけれど、ほんの少しだけ貴女の方が強かったのよね。ちゃんと覚えてるわ」
　その言葉で、目の前のリシュリューがその時のリシュリューであることに確信を持てた。今でこそ姿は完全に深海棲艦。しかも、リシュリューの要素は色濃く持っているが、大本営や鎮守府では戦艦仏棲姫というコードネームで呼ばれている個体に近しい存在となっているのだが、中身は完璧に艦娘。
　過去に自分達の鎮守府と親身にしていた鎮守府に所属していたリシュリュー。演習では互いに戦艦であるということでぶつかり合うことも多く、友情もしっかり育んでいた。
「私もコマンダン・テストとは顔見知りだ。輸送作戦の護衛艦として

参加させてもらった時が最初だったか。それ以外にもよく顔を合わせたが」
「Ｏｕｉ．　Ｇｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎにはお世話になりました。あの頃の私は戦闘能力が低かったので、頼ってばかりでしたね」
　こちらも、コマンダン・テストが本人であることを確信。水母水姫というコードネームで呼ばれている個体とほぼ同じ存在となっていても、持っている記憶は当時のままであり、抜けも無ければ間違いもない。
　ビスマルクとは違い、主に共同作戦の方で共に戦場に立っていたのがコマンダン・テスト。水上機母艦として、輸送任務を主戦場としていたコマンダン・テストを、正規空母として護っていたのがグラーフ・ツェッペリンである。頻度も高かったので、やはりこちらも非常に仲良くなっていた。
　それがわかった分、ここにいることに対して複雑な感情を覚える。ここにいる元艦娘達は、何かしらの感情の溢れがあるからこそ深海棲艦と化し、艦娘では無くなってしまった。それは痛いほど理解出来る。
　何故なら、ビスマルクもグラーフ・ツェッペリンも、この２人は死んでいるものだと思っていたからだ。
「Ａｈ……Ｂｉｓｍａｒｃｋ、貴女の考えていることはわかるわ。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕはあの時に沈んでいるはず、生きているはずがない、でしょ」
「……ええ、正直なことを言えばそうよ。あの戦いで貴女と共に戦ってはいないけれど、話は聞いたもの。貴女が……そこで沈んだってね」
　ビスマルクが言うその戦いは、今からかなり前のことである。
　リシュリューの最期の戦いは、その時猛威を振るっていた深海棲艦の姫の討伐作戦。それまでに幾人も沈められており、強敵であると何処の鎮守府も感じ取っていたところに、出撃命令が言い渡された。
　慢心などせず、勿論負けるつもりもない。肉を切らせて骨を断つなんてことも考えず、命を大切にする作戦でその姫を追い詰めようとあ

と一歩のところまで来たのだが、卑怯とも言えるような不意打ちを受けたことで形勢逆転され、そのまま追い詰められてしまい、リシュリューは沈むこととなった。この卑怯な一撃があったことで、リシュリューは復讐心が溢れている。
「一応聞いておくけれど、あの憎らしい姫はどうなったの？」
「始末したわ。私が、この手で」
「そう、それならよかった」
　その仇を取ったのは、他ならぬビスマルクである。リシュリューが沈められたと聞き、自ら戦場に出ることを進言し、辛勝ではあったもののその強敵を還らぬ者とした。
　だからと言って、リシュリューから復讐心が失われることは無い。同じ顔の別人であろうと、その姫と同じタイプの存在が目の前に現れた時、簡単に理性が失われてしまうだろう。誰にも止められない鬼と化す。
「コマンダン・テスト、貴女も……」
「はい、ご存知でしょうが、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕと同じ戦場で。同時ではありませんが、同じ姫に沈められています。輸送任務中に、本来いないと考えられていた場所に現れたことで、ですね」
　コマンダン・テストも、その姫の部隊に襲撃されて沈んでいる。任務の途中で、想定外なタイミングで、志半ばで斃れてしまったため、生への執着が溢れ出してしまったと言っても過言ではない。
　それもあってか、遠征任務、施設の日用品を取り揃える仕事には、誇りを持って取り組んでいる。次こそは失敗しないと常に考えている程である。
「その時にＲｉｃｈｅｌｉｅｕとＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅは今の姿になったの。死の間際に心を壊しながら、ね」
「あの大将から少しだけ聞いているわ。感情を溢れさせたんだって」
「Ｏｕｉ．　Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕはアレに対する復讐心。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅは生への執着。わかりやすいでしょ？」
　そうかもしれないが、とビスマルクは複雑な表情を浮かべた。あっけらかんと言ってのける２人は、自らの境遇を憂いていないようで安

心は出来るものの、その奥底に復讐心や生への執着を持っていると聞いてしまうと不安になる。
　トリガーを引かれれば暴走してしまうという不安定なところは、どうしても危惧しなければならないところだ。一分の隙も無いなんて存在は、何処にもいない。
「それはそうと、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達が呼び出されたのは何故かしら。貴女達が話があったのよね」
「あ、そ、そうね、そうよ。貴女達、陸に上がって商売をしていると聞いたのだけれど」
「Ｏｕｉ．　ここで生活をしていくにしても、足りないものはどうしても出てくるもの」
　施設の遠征組が２人揃って陸で何をしているのかを事細かく伝える。聞いている限りでは、何もおかしなことはしていない。出店させてもらっている道の駅も２人を快く受け入れており、むしろ２人が来た時には率先して野菜を買ってくれるまであるほどである。
　一部下心があるようにも見えるが、２人ともさらりと躱すのがまた好評なのだとか。
「何もルール違反はしていないし、誰にも危害を加えていない。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達はこれでも艦娘の心を持ったままだもの。貴女達と一緒に歩いていた時と、中身は変わっていないわ」
「外見は随分と変わってしまいましたが、人間に対するＳｅｎｔｉｍｅｎｔ（気持ち）は、何も変わっていません」
　一部心が壊れていようが、そのトリガーさえ引かれなければ、ほぼ全て艦娘と同じだと話す。
　しかし、ここでビスマルクは監査としての言葉を返す。
「それでも、深海棲艦が上陸しているというのが問題なのよね……。まぁ艦娘でも一部身分を隠して人間に紛れて趣味を楽しんでいる子はいるけれども」
　その一部というのも、人間と同じような生活を体験してみたいという要望を通す場合が殆ど。例えば、ゲームや漫画などの娯楽や、食やファッションなどの趣味。そのお金だって、鎮守府で活動しているこ

とによる正当な報酬(給金)を使ってのもの。さらには極々一部がそれを使って物品の売買を行なっているようだが、それもルールを守ってである。

リシュリューとコマンダン・テストが行なっているのは、それの延長線上。自分達で育てた野菜を、自分達の手で、そこのルールに則って販売し利益を得ている。それもどちらかといえば生活をするための手段だ。

問題点は全て、種族的なモノである。今の軍規に深海棲艦を縛るものなど無いとはいえ、一応は敵対生物である種族の者が、悠々と上陸しているという事実が大問題。

この施設には、世界中の海を旅して、人間のファッションに興味を持った挙句、ウィンドウショッピングが趣味となっている戦艦棲姫すらいる。その辺りを知ったらどんな反応をするのだろうか。

「逆に言えば、軍規に縛られていない私達を止めることは出来ない、ということですか？」

コマンダン・テストがとんでもないことを言い出したが、ビスマルクとしてはそこで頷かざるを得なかった。

しかし、だからこそ、ここでしっかりと管理しておかなくては無法地帯になりかねない。人間側には内密にするにしても、鎮守府側は把握しておく必要は確実にある。

「正直困ってるわよ。昔の誼みで許可してあげたいのは山々だけれど、規律に無いからといってスルーするのはそれはそれで問題なんだもの」

「貴女は本当に昔から真面目よね。でも、それが貴女らしさでもあるわ」

クスクスと笑うリシュリュー。そんな笑顔も昔のままだとビスマルクは感じていた。深海棲艦と化しても、リシュリューの本質は何も変わっていない。

「でもね、Ｂｉｓｍａｒｃｋ。これを止められると、この施設はそのまま潰れて行ってしまうわ。それを貴女が許せるかしら」

「……貴女、昔からそうだけど、ちょっとズルいところあるわよね」

「ふふ、そういうものなのよ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは」
　こういうところを見ると、この２人はこうなる前から相当に仲が良かったのだろうとわかる。
「ビスマルク、私としては、今はそれについては後にしてもいいと思う。少なくとも、この施設は人間に対して敵対するようなことはなく、自給自足にて誰にも迷惑をかけることなく生活しようとしているのはわかった」
「そう、そうね。私達が独断で決めることは出来ないわ。他を見て回った後、改めて考えることにしましょう」
　考えるのをやめたわけではなく、今この場で唸っていても時間ばかりを浪費するだけであるため、後に回してまずは仕事を終わらせることに専念しようということ。
　考えるのは自分だけでは無い。こういうことがあったのだと自分の上司に伝えて一緒に考えてもらう方がいい。それこそ、偏った考えに辿り着いてしまったら監査の意味もない。
　昔馴染みと久しぶりに会えたという思いが、ここでの判断を鈍らせる。それをどうにかするのは、時間だ。
「気を取り直して。姉姫、この畑に関しては、素晴らしいものであると私も感じたわ。グラーフの言っていた通り、自給自足の極致。食い扶持を自ら作り上げ、外のモノに迷惑をかけないようにしているのは素晴らしいと思う。侵略者というイメージが強い深海棲艦からこれほどのモノが生まれているとなると、考えを改める必要があるわね」
　みんなで力を合わせて作っている畑を監査に認められたことで、一番喜んだのは松竹姉妹かもしれない。
「陸での売買に関しては少し置いておく。それを踏まえなければ、この施設の評価は今のところかなり高いわ。人間でもここまで徹底しているところは少ないしね」
「それは嬉しいわぁ」
　まだ見て回っている場所は１つ目とはいえ、高評価なのが嬉しくないわけがなかった。施設を認められるということは、自分が認められると言ってもいい程。

「それじゃあ、他のところも見せてもらうわ。リシュリュー、コマンダン・テスト、話はまた後からしましょう。次は監査とか関係ない、世間話でもね」
「いいわね、そうしましょ。お茶くらい淹れるわ」
「コマンダン・テスト、私も貴女とはまた話がしたい。構わないだろうか」
「Ｏｕｉ．　私も、それを望みます。お話、しましょうね」
監査の後にまた話す時間を得るように約束をし、本来の仕事に戻る。だが、その気持ちは少々複雑なモノであった。

旧友との再会が、この監査に影響を与えることは無いだろう。監査役の２人は、あくまでも平等にその場を見るためにここに来ている。譲歩などはするつもりはない。

施設の者達

畑から見始めた監査は続く。畑組と監査組の旧友であるリシュリューとコマンダン・テストとは別れ、漁をする者達のいる岸に到着。今は釣果を確認しているところのようで、沖ではなく島に戻ってきていた。

先導しているのは勿論飛行場姫であり、ジェーナスとミシェル、伊47、そして潮と潜水艦姉妹がそれを手伝っていた。潜水艦が多く参加していたおかげで、追い込み漁は大成功。人数が増えた分を賄えるほどの釣果である。

「ジェーナスちゃん、ミシェルちゃん、また来たわ～」

「アラシオ、いらっしゃい！　ちょうど今、今日のＯｕｔｃｏｍｅ（成果）を見てたところよ」

「ミシェルも頑張ったぴょん！　今日は上で釣ってたんだぴょーん」

「あらあら、偉いわぁミシェルちゃん。それじゃあ、いっぱい釣れたのね～」

飛びつくように抱き着いてきたミシェルを軽々と受け止めた荒潮は、くるりと回って綺麗に着地させた後、そのままジェーナスに引き渡す。ミシェルのノリを、最も理解しているのは荒潮かもしれない。

「アンタ達が監査ね」

「私がビスマルク、こっちがグラーフよ」

畑の後であるため、もうこの程度では驚かない。艦娘の中にも釣り好きがいるため、深海棲艦が同じようなことをしていても普通だと割り切る。

そう考えると、畑も園芸の延長線上と考えればまだ良かったのかもしれない。陸上施設型だからと言って、自分の陣地をここまで改造しているのは普通では無いが。

「よろしく頼む。ここでは畑では手に入らない食糧の調達か」

「ええ、野菜だけだと栄養が偏るでしょ。だから、魚も獲ってるの」

今回の釣果の中でも特に大物である魚を、監査役の２人に掲げて見せてやる飛行場姫。これだけあれば、ここにいる２０人以上の仲間達

の腹を膨らませることが出来るといい笑顔を見せる。
「畑もそうだが、他に迷惑をかけまいとする思いが伝わってくるようだ」
「他人に迷惑だなんて、そんなことするわけ無いじゃない。そもそもアタシとお姉はこの島から出られないし、この島に近付けるヤツは普通はいないんだもの。ここにいる仲間達だけで暮らしていくのが当然でしょ」
侵略行為なんてくだらないとまで言ってのける。自分達で用意出来るものは極力自分達で用意するし、手に入らないなら諦める。たまたま、本当にたまたま、侵略出来る範囲に人間の船などが通ったとしても、飛行場姫は逆にその船からこちらが見えないようにカムフラージュするまで考えているとまで言い出した。
今でこそ、食糧難を鎮守府側に協力を願い出て、しばらく分の食材を譲ってもらったものの、そうで無ければそれすらも無かったはずだ。遠征に行くことが出来ず、今や売るモノすらもリセットされてしまったために、藁に縋ったようなものではあるが。
「ちなみにだけれど、その魚は調理を？」
「勿論。アタシが捌くわよ」
「……並の艦娘よりも調理の技術があるんじゃないかしら」
当たり前だが、一般的な深海棲艦がここまでスキルを持っているわけがない。飛行場姫は殆ど独学でここまでやれるようになっているに過ぎないのだが、それでも人間の文化への理解度に関しては、異常と言っても過言では無いだろう。
ちなみに、魚の捌き方を教えたのは、他ならぬ『観測者』だったりする。
「こうして見ると、本当に私達や人間と同じね」
「当たり前じゃない。見た目……まぁ色合いは違うけど、手と足がある二足歩行って意味で同じってことは、生き方も同じになるわよ。お互いに似たような知恵もあるんだから」
「確かにそうね。納得しておくわ」
同じように感情を持ち、同じように生活をするのだから、種族の差

なんて何処にも無い。畑と漁を見て回っただけでも、それに気付かされる。
　人間と同じように生活し、艦娘と同じように共存する。それが出来るのが穏健派の深海棲艦である。
「まだ施設の中を見たわけでは無いけれど、私個人の意見としては、貴女達は充分すぎるほど評価が高いわ。貴女は、グラーフ？」
「そうだな。今のところは何も問題が無い場所と判断している。人間に害を為す深海棲艦とは分別して考える必要があるだろう」
　間違いなく、ここにいる者達は人間に危害を加えようだなんて思っていない。稀に、極稀に、壊れた心のトリガーが引かれて暴走することもあるかもしれないが、それすらも人間に対してのモノではない。それと正しく付き合っていけば、大惨事が引き起こされることは無いのだ。
　それもあってか、監査からの評価は非常に高い。ブラック鎮守府は例外としても、並の鎮守府より余程評価出来るとまで言ってのけた。ぶっちゃけてしまえば、余計な知恵を使って出し抜こうとか、変に競い合って破滅に向かっていくとか、そういうところがない。ほぼ善意で構成されている。
「あら、それは嬉しいこと言ってくれるじゃない」
「誰も彼もが、私達に対して敵意を持っていないんだもの。普通侵略者気質を持っているのなら、多かれ少なかれ私達の存在が邪魔だと思うじゃない。少なくとも今はそういったものも感じない。……なんだかグラーフだけは警戒されているみたいだけれど」
　そんな目を向けているのは海風だけである。むしろ、山風達妹は、前例がある分、海風が何かやらかさないかと若干ヒヤヒヤしていた。ただでさえ春雨絡みになると止まらなくなるのだから、それこそ今すぐにでもグラーフ・ツェッペリンに危害を加えるのではと考えてしまっていた。
　実際は、警戒はしているものの危害を加えようとは微塵も思っていない。春雨に危害を加えたわけでは無いのだから、排除する必要もない。しかし、またあんなことをされたら困る。ただその一心で警戒を

怠らない。
　対するグラーフ・ツェッペリンは、何故警戒されているのかはわかっていないようだったが、姉に向ける信頼の目は理解しているため、いい姉妹愛だと微笑ましく思っているようである。

　そのまま施設内へ。ここからは大人数だと邪魔になりかねないので、調査隊は山風のみが便乗。春雨と海風も協力してくれるはずなので、安心して送り出せた。叢雲と薄雲もここで別れ、農作業の手伝いに向かうようである。
「正直な感想いいかしら」
「はいどうぞぉ」
「思った以上に普通な場所で驚いてるわ」
　保護施設と銘打っているだけあって、生活に苦がないようにされているのがよくわかる。鎮守府にあるような戦うための設備は何処にもなく、生きていくための設備のみ。どちらかと言えば、人間の生活を模倣しているような雰囲気。ビスマルクもグラーフ・ツェッペリンも、人間が住まう施設というものは資料でしか知らないのだが、こういう場所なのだろうと納得出来る程である。
「私達は戦うつもりが無いんだもの。そういうものを取り入れなかったら、こうなると思うわぁ」
「ですね。誰も攻め込んでこないのなら、これ以上必要ありませんから。自由気ままに生きるだけなら充分過ぎるくらいですよ」
　中間棲姫に加え、春雨もこの施設の在り方には同調している。平和で在り続けるならば、余計なものは必要ない。強いて言うなら娯楽が無いかもしれないが、それでも住人は満足出来ているのだから、これ以上を求めない。
　人によっては、そんな生活に何の意味があるのかなんて訴えてきそうではあるが、ここの住人は揃って『余計なお世話』と返すだろう。これで平和に幸せに暮らしていけているのだから、それ以上を求めていない。

「貴女達が充分と感じているのなら、ここはこれが正解なんだろう。我々が口を出す理由にはならない。逆に、不便だと思ったことは無いだろうか」
「今のところ無いわねぇ」
　グラーフ・ツェッペリンの質問に対しても、間髪容れずに答える。ここ最近の事件に巻き込まれるまでは、本当に不便だと思うことが無かったのだから、考えるまでもなくこの答えが出る。
　今でこそ怪我をしてしまうことや怪我人が運び込まれることが増えてきてしまったので、もう少し怪我人を治療するための設備が整っていると嬉しいのだがと苦笑はするものの、そもそも戦いに巻き込まれてしまう前にはここまでの大怪我を負うものが施設にいることが無かったので、平和であれば無用の長物。むしろ、深海棲艦は自然治癒力が艦娘よりも異常に高いため、軽めの救急用具が有れば事足りる。
「私達から関わり合いを持たないのだから、これだけあれば充分なのよぉ。本当に欲しい物があったら、リシュリューちゃんとコマちゃんが仕入れてきてくれるんだけれどねぇ」
「なるほど。貴女達の生き方に何か言えるほど、私達は高尚な存在でも無いわ。私達は戦いにどっぷり浸かってしまっているから足りなくないかと思ってしまうけれど、真に平和を取り戻したらわかるんでしょう。ごめんなさいね」
「ううん、何も問題は無いわぁ。監査役としての仕事をちゃんと全うしようとしているのよねぇ。貴女達は貴女達の仕事をしてちょうだいねぇ」
　何事もないことを説明していく間に、ダイニングに到着。そこには大概誰かが休んでおり、今日は瑞鳳と黒潮、そして空母棲姫がお茶を呑んでいた。
　前回の戦いの被害者組ということで、山風の頭の上にいる龍驤は警戒して山風の髪の中に潜り込む。
「あー、監査のヒト達やね」
「貴女達が最近ここに所属することになった子達ね。……貴女も？」

「ああ。私も、今は、ここに」
まだ辿々しさが抜けない空母棲姫だが、戦艦棲姫からの教育により、人付き合いは並となっていた。今後、戦艦棲姫と旅に出るのなら、多少はコミュニケーションが取れるようにするべきだと教わったようである。
ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンの視線は、どうしても瑞鳳と黒潮の胸に同化した忌雷に行ってしまっていた。何をやっても外すことが出来ず、無理矢理剥がしたら死に至らしめるような融合。その一箇所だけで、2人は他の者よりも異形感が拭えなかった。
「あ、これ？　これは気にしないでほしいな。大丈夫、ヒトに危害は加えないから」
「せやでー。コレはウチらと一心同体やさかい。春雨のおかげでちゃーんと共同生活出来とるからね」
「うんうん。ただ、この子達も少しとはいえご飯を食べるから、私達だけちょっと食費が多くなっちゃうのは考えものかな？」
そんな境遇となっても明るく振る舞う瑞鳳と黒潮。そして、忌雷もそれに同調するように歯を鳴らしたり舌を出したりしていた。無表情に見えてその実、思った以上に考えていることがわかる存在である。
「あと、ちぃと聞きたいんやけど、そこにおるんと違う？　龍驤姉やん」
「監査と一緒に来るって言ってたもんね。少しでいいから話させてほしいな」
リクエストされてしまっては仕方ないと、山風がまた髪の中に手を突っ込み、隠れている龍驤を摘み出して2人の目の前に。都合のいいことにダイニングのテーブルもあるため、そこに乗せた。
目の前の3人は龍驤による被害者。特に空母棲姫は、その身体を器として使われていたのだから、思うところはいろいろとあるはず。
「そ、その、ホンマにすまんかった」
すぐさま土下座の姿勢に入るが、黒潮が待て待てと手を出す。
「姉やんだって使われとったんやろ。あれや、姉やんは下請け、ウチら

は下請けの下請けみたいなもん。あかんのは、使っとったいっちゃん上、黒幕や。そりゃあ姉やんにも多少何してくれてんねん思うところあるけど、そら仕方ないわ。妥協は出来る」
「そうだねぇ。龍ちゃんをどうにかしたところで何も変わらないし、黒潮が言う通り、龍ちゃんも巻き込まれただけだからなぁ。本を正せば私達と全く同じなんだよね。ドロップしてすぐに取り込まれてって。じゃあ、同じ境遇同士、いがみ合う必要は無いかなって割り切ったよ」
２人の優しさに泣きそうになっている龍驤。
「私、は、よくわかっていない。あの泥だけは、気に入らないが、今のお前は、それとは違う。なら、許す。戦艦にも、そうしておけと言われた。わからないことに怒りを持つのは不毛だ、と」
「……アンタには謝っても謝りきれんわ。さんざん使ってしもうて、ホンマすまんかった」
「覚えていない。だから、何も知らない。それで、チャラ、というのだろう」
空母棲姫も、龍驤に対してはそれで終わりとした。器として使われている時の記憶はあって無いようなもの。そのため、怒りより疑問の方が大きい。漣のように器として使われた後、泥に侵蝕され手駒になっていたわけでも無いので、割り切るのは簡単だったようである。

監査の間でも、この施設にいる者達がどういう者なのかを理解出来る。監査役の２人は、少なくともこの施設には人間より害を為す者がいないと確信出来た。

監査の結果

一通り施設内も回ったことで、監査は終了。今ここに所属している全員と顔を合わせており、その誰もがここでの生活に不自由していないことを話していた。『楽しく生きる』をモットーとしているのは一目瞭然で、それを体現するかのようにこの島は平和であることがわかった。

仕事が終わったことで、施設をグルッと回った後に来た時の岸へと戻ってきた。その時には調査隊の面々も戻ってきており、帰投の準備が出来たと言える。

見送りはずっと案内をし続けていた中間棲姫と春雨、海風の3人。

「貴女達のことはよくわかったわ。監査として、私達の答えは決まった」

「上から目線な言葉で申し訳ないが、この施設は合格だ。人類に害を与えることなどあり得ない」

「ええ、断言出来るわね。まぁ、余程のことがあったら心変わりするかもしれないけれど、貴女達がそうなるのは、おそらく人類のせいになるでしょう。そんなことが起きないようにするのは、貴女達でなく私達の仕事よ」

ここまでの平和を享受出来る空間に住まう者達に、人類の敵となり得る理由など存在しない。少なくとも、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンはそう思った。

規律を重んじる中立の立場から見ても、中間棲姫の誠実さは理解出来たし、誰もがここの主であると納得出来るくらいの在り方をしていた。本心から監査役の2人を歓迎しているし、後ろめたいことが全く無いと言わんばかりに常に笑顔。

そんな施設に危険を齎すのは、黒幕で無ければ一部の傲慢な人類くらいしかいないだろう。逆に、施設から人類の脅威になろうだなんて絶対にあり得ないのだ。

ならば、大本営としても受け入れて何も問題ないだろう。むしろ、何もしてこないだけの強力な力を持つ者達を、自分達の目に入る場所

に置いておくのは、これからの戦いのためにも必要。まだまだ深海棲艦との戦いが終わらない現状、この施設の存在にヒヤヒヤするのは間違っている。
「私達はそのように報告させてもらう。貴女達は信用出来る。手を取り合っても何ら問題ないとな」
「同時に、ここにいる子達が鎮守府に向かえるように手続き出来るように手配するわ。私達の独断では出来ないのが残念だけど、悪い方向にはいかないと約束する」
「それは嬉しいわぁ。重ね重ねありがとうねぇ」
監査役からしても好感触なのは、施設としてもありがたい話であった。平和を維持するために、こういう外部の者達の協力も必要になるだろう。
「吹雪ちゃんもどうだったかしらぁ。今日は来てくれたけれど、ずっと見る専だったわよねぇ」
「そうですね。私は監査というわけではなく、この施設を見て回ること自体が目的でしたから」
吹雪は大将に指示を受けたからというのが大きな根幹になっていたが、目的としてはもしかしたら共に戦うことになるかもしれない施設の者達がどういう生活をしてどんな性格をしているかを確認することがメイン。そのため、口を出すことなく観察することに注力していた。
叢雲のことに関しては妹なので少し関わり合いを持ったものの、それ以外は後ろからビスマルクとグラーフ・ツェッペリンの監査としての役割を眺めて、ここにいる者達の内情を観察することで目的を達成している。
「ここは本当にいいところですね。司令官が入れ込むのもわかる気がします。艦娘とか深海棲艦とか関係なく、中身が綺麗ですから。今まで私も結構黒い人間とかを見てきているので、こうやって観察すれば多少なり人間性はわかるつもりですが、ここの皆さんはみんなが真っ白ですよ。喧嘩っ早い叢雲ちゃんも例外なくです」
叢雲の怒りに悪意など全くなく、溢れたことによる純粋な感情であ

るために、そこに黒さは感じなかったという。つまり、裏がない。本心を隠していないため、黒さなんて微塵も無い。
　ここにいる者全員に対して同じように感じたと吹雪は話す。誰もが一切の裏がなく、思ったことを思ったように話し、行動しているため、より一層信用が出来るのだと。それは勿論、中間棲姫も同様。
「私は監査ではないですけど、司令官にはちゃんと伝えておきます。この施設のみんなは、絶対に私達に対して悪いことをしない。同じ道を歩けるだろうと」
「ええ、お願いねぇ。貴女も感じたままに私達のことを伝えてちょうだいねぇ」
「はい、勿論。むしろ、何も隠しようがないですよ。そちらが何も隠していませんからね」
　満面の笑みを浮かべる吹雪。ここで得られた情報は、これから向かっていくであろう最終決戦にも役に立つだろう。初見では無くなったなら、連携も取り易い。
　まだ吹雪が最終決戦に赴くかどうかは決まったわけではないのだが、勝利のためには念入りに準備は必要。今回はそれに繋がったはず。
「もう良さそうね。それじゃあ、姉姫。貴女達には朗報が届けられるように動いていくわ。期待していてちょうだい」
「ええ、ありがとう。よろしくお願いねぇ」
　これにて監査は終わり。ビスマルクが山風にもういいかと尋ねると、問題無いと返す。頭の上の龍驤も、今だけは隠れることなく表に出ており、中間棲姫の視線がそちらに行くと、小さく会釈。
　今までの非礼を詫びようと考えたが、春雨のお願いの1つとして『もう謝るな』があるため、既に謝罪を述べた相手には何も言わないことにした。ここに春雨もいるのだから尚更である。
「ハルサメ、最後に」
　帰投直前にグラーフ・ツェッペリンが帽子を脱ぎながら春雨の前に膝をつく。またアレかと海風が最大限の警戒をするが、春雨からちょっと待ってと言われたことで、前に出ることは無い。

「貴女はその高潔な魂を穢すことは無いだろう。だが、もしかしたら危ぶまれることもあるかもしれない。その時は、周りのことなど気にせず、助けを求めるといい。駆けつけられるのならば、我々も貴女の力になろう」
「……はい、肝に銘じておきます」
「ああ、その覚悟を持つことが大事だ。貴女は怒りと寂しさが溢れていると聞いている。怒りが先立つこともあるだろう。だが、それを我慢してでも、周りに頼ってほしい。そこにいる者、いない者、誰にでもいい。それは無様でも何でも無いのだから。貴女は独りでは無い。離れていても、我々は気にかけている」
　その手を取り、キスするわけでは無いのだが両手で包み込むように握る。この春雨には数多くの温もりが必要だと看破していたグラーフ・ツェッペリンは、こういうカタチで春雨をさらに先の段階へと引き上げる。
「ありがとうございます。なんというか、落ち着きました。怒りが晴れていくようです」
「それはよかった。それと、ウミカゼ」
　急に自分に話を振られてビクッと震える海風。
「ハルサメを最も支えられるのは貴女だ。我々が駆けつけられなくとも、貴女は必ずハルサメの隣に寄り添うのだろう」
「勿論です。春雨姉さんあっての私ですから」
「ならば、我々の分まで頼んだ。背負ってくれとは言わない。心の片隅にでも置いておいてくれ」
　春雨のためによろしく頼むと言われれば、海風も悪い気分にはならない。春雨の心を落ち着かせるためには海風の存在が必要不可欠であると理解してもらえているのだから。
「わかりました。貴女達の分まで、私は春雨姉さんの心を守ります」
「頼んだ。ハルサメ、そういうことだ。独りではない。誰もが貴女と共に在る。それだけを心がけてくれ。それならば寂しくないだろう。頼れるだろう。縋れるだろう」
　だから、孤独を感じる必要はないと、グラーフ・ツェッペリンは春

雨に刻みつけた。

帰路、調査隊は足取り軽やかに鎮守府に戻っていくのだが、周囲に施設の誰かがいないことを確認した後、ビスマルクが首に引っ掛けていた錨型のアクセサリを徐に外した。

「Ａｄｍｉｒａｌ（提督）、今まで聞こえていたかしら」

事前に一切聞かされていなかったようで、山風達は何事かと驚いた。

『ああ、聞こえていた。施設の内情はおおよそ把握出来ているよ』

そのアクセサリから男性の声が聞こえてきたことで、その驚きに拍車をかける。

この監査、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンのみが参加していたわけではない。艦娘のみが監査として赴いていることにより、少し甘く見る輩というのは少なからずいる。トップがいないのだからと気を抜くことで、僅かにでもボロを出すことがあるのだ。

そのため、３人目の監査役として、音声だけでもビスマルク達の提督が参加していたのである。又聞きのような報告よりは確実に相手のことを把握出来るため、監査の時にはこの手段を多用しているらしい。

『彼女達には裏表が無かったね。話せる深海棲艦というのはそういうものなのかもしれない』

「私もそう思っていたわ。隠し事をしていない、いや、出来ないんじゃないかしら。ありのままを常に曝け出し続けているような感覚を持ったわ」

『正直、あんなにスラスラと言葉が出てくるから驚いたがね』

声だけ聞いていても、施設の深海棲艦達の話し方はとても流暢で、話すことに何の躊躇いも持っていないようだったと提督は語る。声色から多少なりなら感情を察することが出来たが、その言葉は全て本心。裏表が無いどころの話では無い。

『ＯＫ。これなら俺も信用出来る相手だ。君達の言葉通り、余程のこ

とが無ければ心変わりなんてしないさ。そういう意味では、注意しなくてはいけないのは春雨と叢雲だが』
「彼女達も不安は無い。ありのままに生きているからこそ、怒りを隠そうとしないだけだ。本心のままに生きているのならば、何も言うことは無いだろう」
『グラーフは入れ込んでいるのかい？』
「敬意を表しているだけだ。彼女達の在り方を尊重している。怒りが溢れるだけのことが起きているのだから、今は自由に生きてもらいたいだろう。平等の目で見ても、彼女達は怒りを曝け出すだけで人類に害を与えようとはしないさ。それも、理不尽な怒りではない」
　裏表が無いが故に、争いの火種になってしまいかねないのが、怒りを溢れさせた2人だろうが、そこも制御は可能だし、口に出す怒りはその時に必要な怒りだろう。理に適っていない怒りを表に出すことはまず無い。特に春雨は。
『まぁ、これをきっかけにその施設とはいい関係で繋がっていきたいと思えたよ。君達もまた行けるのなら行きたいだろう？』
「そうね。あの平和は魅力的ね。あちらが迷惑で無ければ、慰安施設として使わせてもらいたいくらいよ」
「流石にそれはあちら側の許可を取らねばならないだろうがな。我々が平和を乱す可能性もあるのだから、そっとしておくのが一番だとは思うが」
「それもそうなのよね。私達が入り浸るのは良くないことだとも思うわよ」
　それくらい、あの施設には問題ないと感じたようだ。そういう意味でも、この監査は合格。
『では、これを踏まえて他の者達とも相談していく。全てが良い方向に向かえるように、俺も努力しよう』
「ええ、お願い。私達にも限界があるものね。貴方に任せるわ」
『任された。人間同士の政治には、人間である俺が力を使わなくてはいけないからね』
　提督との通信もここで終了。監査は全て終了ということになる。

「……ビスマルクさん……そういうの、先に教えておいてほしい」
ここで堂々と山風が苦言を呈する。他の者もうんうんと頷いていた。
「ごめんなさいね。これ、他の誰かが知っていると、相手からボロが出なくなるのよ。だから、完全に秘密裏にやらせてもらったわ。ちなみに大将も知ってること。フブキには教えられていないでしょうけど」
「初耳ですよぅ。全部利用されていた感じに思えちゃいます」
「ある意味利用してしまったようなものね。そこはごめんなさい。でも、そのおかげで施設の信用度は鰻上りよ。うちの鎮守府は全面的に味方出来るから」
ニッコリ笑うビスマルクだったが、周囲の者達はまだ少し納得がいっていなかったようである。そこには龍驤も含まれていた。

監査は合格。施設は大本営からも認められる、優良な深海棲艦であることが知れ渡ることになる。

監査を纏める者

監査役含む調査隊は無事鎮守府に帰投。工廠では提督と五月雨に車椅子を押されている大将が待っていた。遠目で見ても悪い結果にはならなかったことを察することが出来たようで、少し安心しているようだ。

「艦隊……戻った。結果は上々……だと思う」

「お疲れ様。報告は後からにするかい」

「……今からでも大丈夫。多分……ビスマルクさんがしたがってるから」

山風が言う通り、ビスマルクが施設の件を報告したがっているのは一目瞭然だった。誰にも気付かれなかった首元の通信機だけでは最早足りないと、見てわかるほどに笑みを浮かべている。

そのビスマルクを見ながら、山風達はギリギリまであちらの提督も話を聞いていたことに文句を言っていた。だが、ビスマルクは素知らぬ顔。まるで言われ慣れているかのようである。

「何をそんなに……と思ったけど、あの件ね。貴女達の上司が、こっそり聞き耳を立てていたこと」

「ええ、この子達にはちゃんと説明したのだけれど、納得してくれないのよね。監査というのはそういうものなんだと言っても」

「司令官も酷いですよ。知っていて私にも教えてくれないなんて」

吹雪も少々ご立腹な様子。しかし、大将はふふふと笑みを浮かべるだけであった。いつもこんな感じなので吹雪は若干諦め気味。

それでも大将に対しては信頼と尊敬の念が消えないのだから、長い時間を傍に立っていただけのことはある。

「うちのＡｄｍｉｒａｌ（提督）も、あの施設とは良い関係で繋がっていきたいと話していたわ。監査は合格、言うことなし」

「直接会えたのはとても良かった。彼女達の高潔さを知ることが出来た」

ビスマルクもグラーフ・ツェッペリンも、施設に対しての評価は非常に高い。そして、さらにその２人を管理する提督と、既に合格とし

ている。つまり、大本営公認となったと言っても過言では無いだろう。
　これにより、施設の者達はより悠々と生活することが出来るようになるだろう。それでも施設からは出ないし、陸にも余程のことが無い限り近付かないだろうが。
「私達が、必ず良い方向に持っていくから期待してくれて構わないわ。大本営の大御所達も、派遣した私達が絶賛すれば間違いなく頷くはずだもの」
「ビスマルク、音声データも残っているのだろう？」
「勿論よ。Ａｄｍｉｒａｌ（提督）はその辺りは手を抜かないわ。良い証拠にも悪い証拠にも使えるんだもの」
　施設を回った時の音声データは、しっかりと残してある。その時の施設の者達の声を聞けば、その穏和なところも理解出来るはずだ。相手が深海棲艦であるだなんて思えないくらいに優しく、仲間思いな声と言葉であることがすぐにわかる。
　これでも尚、深海棲艦だから信用出来ないなんて言い出す者がいたら、ならば何故監査を出したのだと文句を言ってやればいい。ビスマルクはそう話す。直に話した自分達が良いと言っているのだから素直に聞けとまで言い放つつもりのようである。
「まぁ、私は大丈夫だと思っているわ。大本営は聞き分けがいい子ばかりだもの。種族だの何だのを今更掘り返すようなことはしないわ。私がちゃんと鎮守府に来れるように根回ししたんだから」
　何のために戦闘風景を録画したのか。これで文句は言わせないと、大将までビスマルクに同調するように笑いながら話す。
　あの動画で深海棲艦でも協力してくれるものが存在することを知り、今回の監査でその普段の姿を音声だけとはいえ本質が読み取れるようになったのだから、まず間違いなく信用を得られる。
「そうでしょう？　今も聞いているのよね？」
　ビスマルク――いや、その首にかかる錨型のアクセサリーに声をかける。すると、少しだけノイズ音のような音が聞こえた後、そこからまた声が聞こえ始める。

『流石ですね、俺のことをよくご存知だ』
「一度監査で盗み聞きをするとした時、貴方は最初から最後までを聞き続けるでしょう。録音付きで」
『この情報が何に使えるかわからないというのだから、得られる情報は全て得ておくというのが俺のやり方ですからね。でもまぁ、こういう機会なのでちゃんと話しておかなくては』
　提督と五月雨がこれに驚かない辺り、調査隊が施設に向かっている間に大将から聞いていたようである。それでも、何処にその機能が入っているかは知らなかったので、ビスマルクが首元から外したアクセサリーから聞こえてきたのには内心驚いていたりする。
『山風、並びにビスマルクとグラーフと共に施設に向かってくれた者達、騙すような真似をして申し訳無かったね。だが、敵を騙すにはまず味方からという言葉もある。今回はどちらも味方だったわけだが』
　アクセサリー越しの声は、何処か軽さを感じる。しかし、それが得体の知れなさも感じさせ、山風達は口を噤んだ。むしろ、ここに帰ってくるまでの文句も全て聞いており、しかも全てが録音済みというのだから、まともに口は開けなくなるだろう。
　ここでなるほどと一部の者は思い至った。余計な発言を回避するために、不自然な程に言葉が出なくなる。だからこそ、この事実を知る者は極端に少ない方がいい。ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは、監査役としてこういう場に慣れているため、事前に聞いていても何も問題無いのだが、そもそも監査という行動に慣れ親しんでいない者達は、知ってしまえばコレである。
『ここからは録音をカットするよ。まぁ軽薄な俺ではそれも嘘っぽく感じてしまうだろうけど、今回は信じてほしい。ほら、ちゃんと切った』
　カチリとボタンを押すような音が聞こえた。これで録音はオフ。それでも言葉がなかなか出せないのは、この向こう側の提督を信じきれないからだろう。
「艦娘のみんなにも紹介しておくわね。彼はこういった監査に長けているいわばスペシャリストの、山寺提督よ」

『ご紹介に与りました、山寺です。階級は中将。そちらの佐々木大将とはそこそこ長い付き合いでしてね。でも、こういう場ではしっかり中立の立場を取らせていただくので安心していただきたい。良いものには良いと言うし、悪いものには悪いとハッキリ突きつけるのがモットーなので、よろしく』

あくまでも中立。少々軽いように聞こえるが、監査する者達を平等に審査する。

『今回のことを踏まえて、俺としてはあの施設、延いては穏健派の深海棲艦は１０：０で善性であるとジャッジした。なので、大将と協力して、彼女らを黒幕との最終決戦に導けるように力を尽くさせてもらう。それでよかったかな、堀内提督』

「はい、よろしくお願いします」

概ね望む結果となったため、堀内提督も苦言など無く素直に応えた。施設と最初に関係を持った者として、監査からそういう評価を受けるのは自分のことのように嬉しい。

声色からその辺りを察知出来る山寺提督も、声には出さないが素直でよろしいとニヤついていた。

『元より大将のおかげで最終決戦に参加してもらえる方針にはなっているんだが、今回の件で確証が持てた。彼女らは確実に協力してくれるだろう。いきなり後ろ弾なんてことは無い』

「ええ、それは僕も断言出来ます。彼女らが突然裏切るなんて有り得ない」

『とはいえ、だ』

少しだけ神妙な声色に。

『あちら側の手段として侵蝕、洗脳がある。艦娘にされても困ったことになるのに、艦娘以上の基礎スペックを持つ彼女らがそうなってしまった場合、文字通り手がつけられなくなるだろう。確か触れても侵蝕されるようになるんだったね』

「……そうですね。僕も又聞きですが、その辺りはその通りです。それに、絶対に侵蝕されないとは断言出来ません」

『そうされないためのシステムが開発済みなのも聞いている。それで

も、１００％とは言えない。過信は良くないしね』
　そうならないために作り上げたＲＪシステムも、絶対とは限らない。何せ、これから戦うのは全ての元凶、泥の根源。例外なんていくつあってもおかしくない。今までの侵蝕性の泥とは性質が違う可能性は充分にあるし、龍驤とも違う可能性があるのだ。
　その悪い方向の可能性を全て潰していこうとしているのが明石である。出来る限りの例外を省いて、最高最善の戦いに挑めるように、戦場に出ることのないサポート役としての使命を全うしようとしていた。
『そちらには、出来る限りの対策はしてもらう。勿論、それにはこちらも援助は惜しまないよ。今回の敵、黒幕は、大本営の力を結集してでも始末しなければならない存在だ。野放しにしていては確実に損害が増える。ならば、そうなる前に全力投資が望ましい』
「そうですね。今回は特にそう思います。時間をかければかけるほど敵が増えるのは確かですから」
　龍驤の件がまさにである。龍驤が泥化して、さらに被害者が増え、取り返しのつかないことにまで発展しているのだから、こうしている間にも勢力をさらに増やそうとしているかもしれないし、より力を溜め込もうとしているかもしれない。
　どうであれ、あまり時間をかけてはいられない。
「大塚提督は、今も敵拠点の特定を続けているのよね」
「ええ、ちょくちょく話を聞いていますが、やはり黒幕の結界が厳しいようで、ほぼ測量の過程に入ってしまっているようです」
「それ聞くと耳痛いわ……」
　山風の頭の上に出てきた龍驤がボソリと呟く。施設の場所の特定のために漣達を使って測量をしていたため、それを鎮守府側もやっていると思うと複雑な気分のようである。
「結界を看破し、回避するアイテムは、どうしても難しいようでして。原理はわかっても突破する手段に辿り着くのが厳しいと明石も話しています」
『なるほどね。なら、その原理とやら、こちらにも教えてもらえるか

な。何か助言が出来るかも知れない。こちらにも技術班はいるからね』
　そちらの明石程の特異性は無いがと付け加える。それくらい、堀内鎮守府の明石が特殊であることは認知されているようである。堀内提督はそれに対して何も言えない。
　ビスマルクのアクセサリーに備え付けられた今の通信機のことから考えても、山寺提督の鎮守府にいる技術班は、高度な能力を持っていそうである。堀内鎮守府の明石と技術面を共有出来れば、さらなる発展が臨めるかもしれない。
「貴方はこの技術を悪用しないと誓える？」
　そこに大将から痛烈な一言。だが、その表情は信用しているからこその笑み。山寺提督とは付き合いが長いと言っていたので、これくらいの少し軽口はあるようだ。
『勿論ですとも。これでも監査を任されるくらいに素行はいいつもりですから』
「表は良くても裏の顔はどうかしら」
『それこそご存知でしょうに。俺もこういう立場にいる存在ですよ。身の振り方は理解しているし、何のためにこの組織に属しているのかという話です。人類の平和を望んでいるのは俺も同じですよ』
　何処か軽さを感じるものの、その信念には間違いが無い。海の平和、人類の平和を望んで提督となり、今の立場にいる。それに、ビスマルクやグラーフ・ツェッペリンがこの提督に従っているくらいなのだから、間違ったことをしていない。
「ふふ、冗談よ。私も貴方のことは理解しているもの。だからこそ、協力者として最適だと思っているんだから。貴方が監査をしてくれると知って、正直声を上げて喜びそうになったわ」
『そこまで信用していただけるとは、光栄の極みですな。全身全霊をかけて最善を尽くしますよ』
　表情はわからないものの、山寺提督の自信に満ちた声色は、そこにいる者に期待を齎すには充分だった。

ここから決戦の準備は佳境を迎える。全てにおいていい方向に向かうのは確実化した。

決戦の時は、刻一刻と近付いてきている。

春雨の弱点

調査隊が帰投した後、施設では昼食の時間。そこでの話題は、当然ながら先程までの監査のこと。

全員が一通り話をしているため、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンがどういう存在かは把握出来ている。その上で、信用出来る出来ないだとか、単純に印象の話が繰り広げられた。

「監査として充分すぎるくらいの性格だから、信用してあげてちょうだい」

真っ先にフォローを入れたのはリシュリューである。旧友であることがどうしても前に出てくるが、そこから一旦目を逸らしたとしても、誠実にこの施設のことを評価してくれていると話す。

「私も大丈夫だと思います。あのヒトも嘘を吐けないようなヒトだと思うので」

「思ったことをすぐに口に出している感じでした」

最初から最後までを見続けた春雨と海風も、この監査に対しては一定の評価はしていた。中立の視点で施設のことを正しく判断してくれており、考えた上で施設の者達を仲間と認めてくれた素振りを見せていた。

そして、そこに裏表が無いことは春雨が気付いている。腹の探り合いのような雰囲気はあったものの、その結果として最後に合格という答えに辿り着いていたのだから、信用してもいいだろうと考えた。

「まぁ、嘘は吐かないけど隠し事くらいはしそうな雰囲気だったけど」

ボソリと呟く春雨。やはりと言うか何と言うか、春雨だけはビスマルクの首元に着けられたアクセサリーから会話を聞かれていることには勘付いていた。そのため、若干口数が少なくなっていた。

そこでそれについて指摘しなかったのは、まず勘付いた時に叢雲がそこにいたから。隠し事と裏切られることがイコールで結ばれている叢雲に、その事実を知らせる必要は無いと思ったからである。その場で喧嘩沙汰になるのはよろしくないため、叢雲のためにもその場では発言をしなかった。

また、ビスマルクの隠し事は、言ってしまえば施設のための行動。施設のありのままを曝け出させるための手段だ。ならば、それを指摘するのは野暮というものである。それこそ腹の探り合い。何を目的として盗聴紛いなことをしているかを知っておきたかった。あまり目に余るようなことなら容赦なく指摘するつもりだったようだが、それを加味しても誠実に施設を監査してくれたので、結果的に指摘もせずに終わっている。

「あの言い方なら、近々最終決戦になるでしょうねぇ。そうなると、私達も多少は準備しておくべきよねぇ」

「参加者は決まってるから、各々でって感じになるんじゃないかしら。他の子達は自衛の手段を増やしておくべきね」

姉妹姫の言葉に、参加を決めている者達は少しだけ緊張が走る。最終決戦に参加するのは、結局今回の事件に巻き込まれた者達。春雨を筆頭に、海風、叢雲、白露、古鷹、大鳳、コロラドとなる。

他の者は施設の防衛。敗北を知れば知るほどにその力を増していく黒幕は、こうしている間にもさらなる力を手に入れている可能性が高い。それこそ、今までずっとあった侵蝕だけでは利かなくなる可能性もある。結界に阻まれているはずのこの施設にも干渉してくるかもしれない。

「……私も、少し自分の問題点が見えてきました」

「春雨姉さんに問題点なんてありましたか。私にはその絶対的にして完璧な力が、この戦いを終わらせると思っていましたが」

「弱点だらけだよ私の力は。だって、そもそも自由に使えないんだから」

春雨の力、『辿り着く力』は、今の状態では常時勘が鋭い程度。戦闘に入ることで、『最善の答えに辿り着く力』として、戦場でこうすれば一番いい結果になるだろう道を示してくれるようになる。心臓を一瞬だけ止めるという治療法もそうだが、回避方向や攻撃する先を光の道として見えるようになるのが、その時の春雨。

そして、さらに敵の行いに怒りを覚えた時、マグマが溢れると同時に『望み通りの答えに辿り着く力』へと変貌する。春雨の望んだこと

が現実化し、その視界に入った者を操ることが出来るようになる。ただし、コントロール出来るのは身体だけ。そして、割と端的な命令しか出来ない。喋るな、動くな、逃げるな、そうやって行動を否定することに関しては屈指の力を発揮する。マグマを流し込んで思い通りにその存在を書き換えたのは、存在そのものを否定したからと考えることも出来る。

この力は、自分には常時発動しているようで、それ故にもう春雨には泥による侵蝕が通用しない。それが春雨の望みであるため、常に叶えられ続けているということになる。自分への望みは条件が関係なく、他者にそれを仕掛けるときだけは怒りがトリガーとなる。

「ちゃんと使えるようになるためには、春雨がガチで怒り狂わないとダメなのよね。近くで見てた感じ、そう見えたわよ」

ここで叢雲が春雨の力の特性について気付いたことを話す。怒りに精通している者は、他人の怒りにも敏感。春雨の怒りを見て、そこに気付くことが出来た。

そもそも怒り慣れていない春雨が怒り狂うことにより、『辿り着く力』がフルスロットルになる。溢れた怒りが力にまで影響して、その感情に合わせたカタチに変貌させる。泥を溢れさせるようにマグマを溢れさせ、瞳からも真紅の光を輝かせる。

春雨自身も、怒りが溢れたのだから力の変貌のトリガーも怒りなのだろうとは薄々気付いていた。しかし、それは春雨自身も気に入らないトリガー。

「私が本当に腹が立つ時って、絶対に誰かが取り返しのつかないくらいに傷付いてるとき……なんだよね」

春雨の怒りのトリガーは、自分のことではない。他人が傷付いた時だ。1回目は海風が侵蝕された時。2回目は瑞鳳に同化した忌雷が命を使い潰そうとした時。結果的にそれを治療することが出来ているとはいえ、海風には消えない心の傷が残り、瑞鳳には見た目からしてわかりやすい傷が残された。

つまり、トリガーには誰かが犠牲にならなければならない。それが春雨には気に入らない。さらに気に入らないことに、自分への怒りで

はトリガーが引かれないようである。自分の力なのに自分の思い通りにはいかないという理不尽さ。強力すぎる力の最大の弱点。
「それに、もし使えるようになったとしても、泥を止めることは出来なかった。あの時の龍驤の動きは止められなかったんだ」
「つまり、黒幕は止められない、ということですか」
「うん、そういうことになると思う。器に入っているのなら、その器を止めることは出来るかもしれないけど、泥の状態だったら対象が多すぎて止められない」
　そしてこれも1つ厄介なところ。視界の中に入れたもの全てに影響を与えられるわけではない。数に限りがある。
　泥が寄生虫の群衆であるが故に、力が全てに通らない。極々一部を止めたところで、大部分がまともに動くのだからどうにもならない。龍驤でダメなら黒幕でもダメ。
「春雨、あたしその力のこと聞いてからずーっと思ってたんだけどさ」
　ここで白露が春雨に疑問をぶつける。
「それ、敵にぶつけないとダメなの？」
　一瞬、この空間がシンと静まった。
「えっと、白露姉さん、それはどういう」
「言葉のままだよ。春雨のその力って、あたしは直に見たわけじゃないから何とも言えないんだけどさ、今度はまた一緒の戦場に立つからちょっと思ってたんだよね。その力、敵じゃなくてあたしに使ってくれないかなって」
　春雨のこの力、今まで怒りに任せて敵を止めるためにしか使っていなかった。先にも述べたように、否定することに対して屈指の力を発揮するのは、この怒りが理由。仲間を傷付けた相手に対しての怒りが、その者を否定するために大きな力を発揮する。
　だが、白露はそうではなく、力を味方に使ってはどうかと言っている。
「例えばさ、あたしに対して強くなれみたいに望んでくれれば強くなるんだよね」
「……出来るかはわかりませんけど、望む答えに辿り着けるのなら、仲

間を守るためにも使える……と思います。……あ、そうか」
「そうだよ。春雨ってばさ、本来はそういうことする艦娘じゃないでしょ。あたし達をサポートしてくれて、戦いやすくしてくれたじゃん。どちらかといえば前に出る方でも無かったし。それが本質だと思うんだけど」
　元来春雨は先頭に立つような者ではなく、姉を援護してその戦場を仲間達が動きやすくするために動く、生粋のサポーター。それ故に、周囲の行動を把握し、最も適した援護を即座に選択して実行する。
　しかし、ここ最近は自ら切り込み、怒りのままに攻撃をし、連携の方針も仲間を引き立てるというよりは確実に敵を始末することに特化していた。味方をどうこうするのではなく、敵をどうこうすることに専念していた。
　この事件に巻き込まれて深海棲艦化し、ここまで戦ってきたが、春雨は自分の本質を見失っていたのかもしれない。怒りが根幹になってしまったが故に。
「でも、出来るんでしょうか。敵だから容赦なく縛り付けることは出来ますけど、その、仲間に使うのはちょっと怖いというか」
「気持ちはわからなくもないけど、本来の自分を思い出しなってことだよ。腹が立つのはわかるけどさ、もう少し周りを見てみるのがいいと思うね。怒りに任せそうになったら、一回深呼吸してみなよ。それだけで世界が変わると思うから」
　冷静に怒り狂っていたと思われた春雨も、やはり根幹に怒りがあるせいで、何処か本来の冷静さを失っていたのだろう。その視界に敵しか入れないようにしていたのも、それがあるから。
　だから白露は、一旦落ち着けと言っている。簡単に出来ることではないかもしれないが、そこはこんなにも仲間がいるのだから、落ち着ける時間くらい作ってくれるだろう。特に、春雨の隣には海風がいるのだから。
「春雨姉さんの怒りが増す瞬間は、この海風が判断出来ます。ですので、安心してください。何かあれば、必ず声をかけます。白露姉さんの言う通り、深呼吸をした方がいいかもしれません」

春雨の力を十全に発揮させるためにその身を捧げる覚悟がある海風は、春雨の手を取って自身の強い意志を伝えた。
「真っ先に私に使ってください。どうあっても、私は春雨姉さんの望む通りに動きます。反発もしません。全てを受け入れます。心身共に、私は春雨姉さんあっての私ですから。いつでも好きなようにしていただければ、私は本望です。だって春雨姉さんは私を導く戦乙女、天使、女神なのですから。そうだ、そうですよ。春雨姉さんは導く者ですから、後ろでドンと構えてくれていてもいいくらいなんです。それでも並んで戦ってくれるのですから、素晴らしいですよね。勇敢で果敢な在り方に、海風は尊敬を通り越して平伏だけでは足りません。言葉に表すのも難しい素晴らしさです。流石は春雨姉さん、神々しくて眩しすぎる程です」
久しぶりのマシンガンに苦笑しながらも、少し勇気が出てきた。自分の本質を見つめ直し、やらねばならないことを改めて考える。
「少し、自分のことを考え直してみるよ。海風も手伝ってね」
「勿論です。春雨姉さんが望むことは、私が全て叶えます。先程も言った通り、好きに使ってください」
「ありがとう。それと白露姉さん、ありがとうございます。自分を見つめ直す時間を作ってみます」
「おうおう、頑張ってね。何かあったらお姉ちゃんも頼るんだぞ。あたしだけじゃなくて、アンタの仲間はこんなにもいるんだから」
戦場に出る者も、施設を守る者も、こんなにもいる。誰も頼られることを拒むことなんてない。ならば、好きなだけ頼ればいい。

最終決戦までの残された時間、春雨は自分を見つめ直すことで、自分の力についてよく知ろうと専念する。使いこなせない強大すぎる力でも、正しく使えるように。

艦娘としての春雨

施設の午後はいつもの自由な時間となる。各々が好きなことをすることになるのだが、昼食の時に話していた通り、春雨は自分を見つめ直す時間に使うことにした。

とは言っても、どうすればそんなことが出来るかは今のところ見当がついていない。コロラドのように眠って夢の中で自分と対話出来るとかそういうことは無いだろうし、ただ心を落ち着けて自分と向かい合うにしても何をやるべきかと悩んでしまう。

「自分を見つめ直すということは、過去を見つめ直すということ。それはトレーニングみたいなものですよ」

悩んでいる春雨に話し掛けたのは、トレーニング好きの大鳳である。これから足りなくなったスタミナをさらに増強するために島の周りをランニングするという。しっかりトレーニングウェアを着込んで、今から走り出そうとしているところである。

「春雨のトラウマを抉りたいわけでは無いですが、どうでしょう、艦娘の時にやっていたことをやってみるというのは」

「艦娘の時に……ですか」

「白露は春雨に本質を見つめ直せと言っていたと私は感じましたよ。だから、こうなる前、艦娘の時の自分を思い返してみるのは、結構有効だと思うんですよね」

春雨の本質は本来後衛、援護を得意とする艦娘である。しかし、この力を得てから自ら前線に立ち、連携はするものの前衛――しかもよりによって最前列として援護などしない戦術を主に使うことになっている。むしろ海風や白露に援護をしてもらう程だ。そもそも侵蝕された者を明石謹製の薬を使うことなく解放出来るのは春雨だけ。それも、心臓を一瞬で止める蹴りのみ。近接戦闘を余儀なくされてしまっていた。

そんなこと、艦娘の時は一度たりともしたことがない。導かれるように近接戦闘を繰り出しているが、実際は４人の姉を徹底的に援護し、より戦いやすくするのが仕事。それが春雨であり、４人の姉が春

雨に対して絶対的な信頼を寄せていたところ。
「春雨は艦娘の頃、どうやって自分を鍛えていましたか？　私はとにかくトレーニングでしたけど」
「私は……まず姉さん達の訓練を徹底的に見ていました」
　大鳳の問いかけに、自然と自分の過去、艦娘である時の艦娘春雨を思い返していた。
　春雨の姉４人は、鎮守府の中ではトップクラスの実力を持つ駆逐隊。そこに追いつくために、その訓練を常に見続けた。いや、見るだけでは終わらず、アドバイスも率先して聞きに行き、それを全て実行出来るように訓練もし続けた。
　努力を怠ることは一度たりともせず、しかし無理もしていない。休息すべきタイミングではちゃんと身体を休め、訓練だけではなく休息も共にしたことで、戦い方だけではなく普段の生活までも観察し、徹底的にサポートに徹した。
「そのおかげで、手に取るようにわかるようになったんです。姉さん達が次に何がしたいか。時間はかなりかかりましたが、それでも、慣れれば慣れるほど、何をしてほしいかが見えてくるようになったというか」
　戦場では、何処に撃ってほしいか、何処にいてほしいか、どうあってほしいかをいち早く察知して、そこにいるという動きを披露。故に後衛、１人を２人分にする動きを４人分やっていたのだ。
　春雨のそこまでの動きは姉４人に対して最高のパフォーマンスを見せる。そして、それが出来るようになったことで、姉以外の仲間にも並以上の援護を出来るようになっていた。
「なら、それをやってみればいいんじゃないですかね。過去の自分の模倣と言えばいいんでしょうか。トレーニングは今までの積み重ねですから、最初にやったことを何度も繰り返すことは大事です。初歩の初歩でも、クリアしたから終わりでは無いですからね。極まることなんて早々ありませんし」
　つまり、初心忘るべからずと大鳳は言っている。白露からの『本質を見つめ直す』という言葉は、艦娘として姉を追いかけていたその時

のことを思い出せという言葉と解釈したと。
春雨はそこには素直に納得する。自分の本質、援護担当であったあの時のことを思い出すのならば、あの時のように共に戦う者を徹底的に観察し、どうサポートすれば喜んでくれるか、危なくないか、平和的に解決出来るかを研究することが一番の近道ではないかと。
「そう、ですね。私の最初は、姉さん達との訓練でした。そこで自分を知り、姉さん達を知りました。それを今またやれば、本質が見えてくるかもしれません」
「私はそう思いますよ。トレーニングは身体の鍛錬だけでなく心の鍛錬にもなりますからね。いい汗をかけばスッキリもしますし」
「では、まずは大鳳さんのことを知るためにトレーニングに付き合いますよ」
「あら、それは嬉しいですね」
早速実行に移そうと、まずは助言をくれた大鳳のトレーニングに付き合うことに。勿論それには海風も便乗。仲間のことを知るために行動する春雨のことを知るために行動する海風、という構図となった。
決して大鳳と同じようなトレーニングウェアに身を包んだ春雨を間近で見たいからというわけではない。

大鳳のスタミナアップのトレーニングは、同じようにスタミナ不足に悩まされている古鷹とコロラドも便乗。その2人も決戦には参加の予定であるため、この大きすぎる弱点はギリギリまで改善したいと躍起になっている。
特にコロラドは、これについて強めに煽られたことで若干ムキになっているところもある。全力全開を発揮するとかなり早い段階でガス欠を起こすことは、あちら側にいた時から実証済み。むしろ、コロラドはそれでも無理に動こうとするため、戦場のど真ん中で気を失うなんてこともしてしまう。せめてそうなるまでの時間を延ばすために奮闘する。

「このＰｈｙｓｉｃａｌ（体力）が無いのだけは本当に忌々しいわ……。この島を１周回っただけで疲れを感じるだなんて……」
「ですね……。大鳳さんのペースがかなり速いというのもありますけど……」
　軽く息が切れているコロラドと古鷹。対する大鳳は常にトレーニングを怠っていないからかまだケロッとしており、春雨と海風もスタミナ不足のデメリットを持っていないためそれ以上にピンピンしている。
　古鷹の言う通り、大鳳のペースは普通では無い。一般人ならば全力疾走に近いくらいの速度でマラソンをしている。艦娘や何も無い深海棲艦ならばそれでも余裕があるが、魂の混成をされた者にはそれだけでも相当キツイようである。白露や潜水艦姉妹にはそれは無いが。
「妹姫のトレーニングはこれの比では無いですよ。私ですら立ち上がることが出来ませんでしたからね」
「……何をやらされたのよ」
「基礎から応用まで一通りですよ。潮の強化に繋がることですから。それを休みなく昼食後から夕方までやり通すだけですね」
　潮が覚えたことを忘れない上にスタミナが無尽蔵と言えたため、飛行場姫が面白がって自分の全てを教え込んだ時は、大鳳ですら立ち上がれなくなる程の疲労を感じていた。無論、今はその時よりもスタミナが増えてきているとはいえ、それでも疲労を感じることになるだろう。
「私もそれくらいやらないとダメなのかしら。Ｐｒｅｔｅｎｓｅ（付け焼き刃）が過ぎる気がするんだけど」
「鍛えることを否定はしませんよ。トレーニングは無駄にはなりませんから」
　ここまでやってきたことは絶対に無駄にならないと、疲れを取るためにストレッチをしながら大鳳は語る。スタミナ不足を補うために続けているトレーニングは、大鳳を確実に長続きさせている。
「決戦がいつになるかはまだわかりませんけど、それまでは私は鍛え続けますよ。ランニングの後は筋トレをしていきます。全身に程よ

く筋肉をつけることで、疲れにくくなりますから」
「Ｏｋａｙ．　こうなったらとことん付き合うわよ。叢雲にいちいち煽られるのは癪だもの」
「私もやります。出来る限り準備していきたいですしね」
３人は決戦に向けてやる気満々だ。やはり事件に巻き込まれて一度死に、今の姿に変えられたことは許せるものではない。黒幕に対しての怒りは、他の者達よりも上であろう。
そんな３人と共に鍛えていた春雨は、決戦でサポートするであろう仲間のことをよく観察していた。ランニングでも後ろから追走するカタチで全員を視界に入れ、走る時の癖から、何処で力を入れるか、力を抜くか、そういった細かいところまでを確実に頭の中に入れていく。
姉達と組んでいた時も、最初はそれだった。自由奔放な白露と夕立にも癖というのはあり、どのタイミングで援護を入れるのが最も有効かは、共に行動をすればするほどに把握出来た。
今、その感覚を思い出していた。姉のために強くなれるのが嬉しくて、さらにその先を知ることが楽しいと感じることが出来る。天性の援護気質。深海棲艦化で忘れかけていた、艦娘としての春雨を今、ここで思い出した。
「春雨、ついてこれていますか？」
そんな春雨に大鳳が声をかける。疲れらしきものを見せていない春雨ではあるが、精神的なところは見えてこない。
「はい、大丈夫です。それに、艦娘の頃を思い出していました。姉さんの後ろからこうやって見ながら、どうやったら力になれるかって考えていたんです」
ほんのりと笑みを浮かべ、過去を反芻するかのように思い返す。
最初は追い付くだけでも精一杯で、むしろ心配させてしまう程だった。訓練を中断させてしまって自己嫌悪に陥るときもあり、本当に自分が姉に追いつけるのかと疑問を持つことすらあった。それでも努力を惜しまず続けてきたことで、最終的には姉どころか鎮守府の艦娘全員が一目置くくらいに成長するに至る。

成長してからの春雨は一味違った。追い付くだけでなく、姉達の欠点や出来ないことを補うことまでし始めた。先読みではないが、何が出来ないかを判断して、それをフォローすることに特化する。それによって、姉達はより戦いやすくなったのだ。
「なんだか懐かしい気分です。最初の私は、こうやってみんなを後ろから眺めながら、自分も成長するために必死だったなって。この身体になって、この力を持って、その辺りを完全に忘れていた気がします。初心忘るべからず、ですね」
「そうです。やっぱりそこは大切なんです。迷ったらまず最初に戻るというのは、基本だと思いますよ。でも、それを忘れてしまうこともあります。それをフォローするのは、春雨の仲間達です。私然り、海風然り」
海風も、春雨を追いかけることはしていたが、春雨の最初に戻ってもらうという考えには至らなかった。海風の知る春雨は、既に努力が実った後。最初の艱難辛苦を知らないというのが少々仇となっている。
「春雨姉さん、私がそのサポートが出来ればよかったんですが、そこに気付かなくて申し訳ないです。それでも、これからは春雨姉さんのお役に立てるように全身全霊でお手伝いします。なので、春雨姉さんも海風を頼ってください。頼られるだけで、海風は歓喜に震えてしまいます。春雨姉さんの喜びは、海風の悦びになるのですから、好きに使ってください。春雨姉さんが心身共に最高最善となれるように尽力させていただきますので」
「そこまで気負わなくてもいいよ。でも、ありがとう。海風も気付いたことは躊躇なく教えてほしい。私のためにも、ね」
「はい、勿論です。春雨姉さんに頼られて、海風はもう感無量です」
満面の笑みを浮かべる海風に、春雨も気分が良くなった。持つべき者は、やはり仲間。そして、慕ってくれる妹だと実感した。

艦娘だった頃の自分を思い出し、春雨はより先に進む。本質を少し

ずつ思い出し、春雨は真の春雨へと昇華していくのだ。

見つめ直して

大鳳が中心となったトレーニングは日が大分沈んできたところで終わりを迎える。コロラドと古鷹の体力が艦娘であった時の全盛期まで戻ることは無いのだが、あちら側で活動させられていた時よりは随分と長持ちするようにはなってきたようだった。

この頃には大鳳も大分疲れており、便乗した春雨と海風も疲労を色濃く見せている。トレーニングウェアを着ているが、それは汗で湿り、今すぐにでもお風呂に入りたいという気持ちを強く押し出してくる。

「私と海風は後からでいいので、大鳳さん達は先にお風呂に入ってください。なんなら肩を貸した方が」

「だ、大丈夫、よ。この程度で、このビッグセブンたるＣｏｌｏｒａｄｏが、へばるわけにはいかないんだから」

コロラドは意地でも自分の足で施設に戻るようである。春雨や海風に肩を借りているところを叢雲に見られたら、何を言われるかわからないと。

古鷹も消耗が激しく、脚がプルプル震えている程だったため、そちらには大鳳がすかさずサポート。大鳳だってまだまだスタミナ不足は否めないのだが、この２人と比べればマシなくらいに鍛えている。

「そ、それじゃあ、私達は先にお風呂貰うね……。ちょっと時間がかかっちゃうかも……」

「どうぞどうぞ。お疲れですし、ゆっくり疲れを取ってください。でも、お風呂で寝ちゃうようなことはしちゃダメですよ」

「そこは私がちゃんと見ておくのでご心配なく。古鷹、私が支えますから」

そのまま古鷹は大鳳に連れられて施設へ。コロラドもフラフラではあるものの、ちゃんと２人の跡を追うことが出来たようである。いつもと比べると格段にゆっくりではあるが。

「姉さんもお疲れですよね。それでもあのヒト達に先を譲るとは、なんてお優しい。海風、さらに感激してしまいました。自分の身を後回

しにして仲間達を思いやるそのお気持ち、私には簡単には真似が出来ません。私は一刻も早く春雨姉さんの疲れを癒やしてもらいたいとしか考えられませんでしたから、視野の狭さを思い知らされました。流石は春雨姉さんです。仲間を全てその視野に収め、全員をサポートするのでしょう。その一歩目が今の行為と言っても過言ではないはずです。素晴らしい、素晴らしすぎます。これが出来るからこそ、春雨姉さんは援護のスペシャリストだったんですね。艦娘の頃から憧れだった春雨姉さんの一端をこんなタイミングで知ることが出来るだなんて堪りませんね」

海風も疲れているはずなのだが、春雨を讃えているとその疲れも飛んでしまうようである。

「お風呂はもう少し後になるけど、それまでは休んでようか。でも汗は冷やさないようにしなくちゃね。服は着替えた方がいいと思うけど、汗をかいたままいつもの制服に戻すと気持ち悪いだけかな。だったらこのままの方がいいか」

「タオルは持ってきていますので、そのままの方がいいかもしれませんね。暑いようでしたら上着を脱ぐくらいをしたらいいと思います。汗を拭くためにも、少しだけ肌を晒すのは仕方ないです。そうすると、春雨姉さんも私もインナーだけになってしまいますが……幸いなことに周囲には誰もいません。ちゃちゃっと拭くくらいなら大丈夫だと思います。姉さんの言う通り、身体を冷やすわけにはいきませんので、ささ、手早くやってしまいましょう」

海風も率先して上着を脱いで、トレーニングでかいた汗を拭き取っていく。疲れているようならば私が拭きましょうかとまで言い出したので、春雨はほんの少し悩んだ後、やんわりと断って自分の手で身体を拭いた。

その間も海風はニコニコしながらも視線を春雨から外すことは無かった。

大鳳達の風呂は少々長めになりそうであるため、入れるようになる

までは適当に時間を潰すことにした。汗を拭き取りはしたが、まだ暑いため、トレーニングウェアのままで島を見て回る。
大鳳達の体力作りもそうだが、他の決戦参加者――白露と叢雲も、同じように身体を鍛えていたのを、ランニングしている最中に確認したからだ。
「白露姉さんも一緒に戦ってくれるんだよね」
「ですね。心強いです」
艦娘の頃を思い返しながらのトレーニングをしてきたことで、当時の記憶をより一層思い出していた。
今、白露がやっている鍛錬は、叢雲を相手にした模擬戦。むしろ、叢雲が挑んできたため、それを喜んで受けたというカタチ。春雨はその叢雲を自分に重ね合わせていた。
「あ、やってるね、ほら」
畑や漁に支障が出ない近海でやることを前提として、少し離れたところ。そこで白露と叢雲が1対1の演習をやっている。岸から見れば少し遠めではあるが、何をやっているかは充分わかる距離であり、2人がなかなかに接戦を繰り広げている。
「一進一退……ですかね」
「だね。あの2人、今は互角なんだ」
本当に出会ったばかり、白露がまだあちら側だった時は、殺意も上乗せされていたからか叢雲よりも上位の存在だった。しかし、今では互いに手加減などしていないのに互角。叢雲の伸びが非常に大きい。
当たり前だが殺傷能力のある武器は使っておらず、砲撃は水鉄砲だし、雷撃は念の為禁止。叢雲の扱う槍や白露が扱う錨は、傷がつかないウレタン製。それでも当たれば痛いため、本番さながらの戦いとなっていた。
「あ、春雨ちゃん、海風ちゃん」
それを遠めで見守っているのは薄雲。叢雲の演習であるため、やはり近くにいることを選択している。演習中に怒りが溢れる可能性は非常に高いため、いつでも甘味を補充出来るように。
「どれくらいやってるの？」

「休憩を挟みながらだけど、お昼からずっと。お互いにどんどん強くなってるように見えるよ」
　これでも最初は白露の方が一枚も二枚も上手だったらしい。やはり４人分の戦術を扱えるというのは大きく、さらには艦娘としての経験が段違い。ほとんど槍一本で戦いを進めている叢雲相手ならば、そのトリッキーな戦い方で翻弄することが出来た。
　しかし、戦闘に関しては無類の才覚を発揮する叢雲は、それにも徐々に対応していく。力業には力業をぶつけ、トリッキーにはトリッキーに対応する順応さ。今では、白露が何を繰り出してもある程度の反応を見せていた。
　春雨が見ている限り、本気かもしれないが白露は叢雲に教えるような動きにも見えた。あらゆる状況に対応出来るように、叢雲の知らない戦い方を次々と見せつけているような。
　それは、自分が姉達からトレーニングを受けている時とそっくり。叢雲に援護を任せるためとかではなく、敵も同じようにやってきた場合は対応出来るように。
「なんだか懐かしいかも。私も白露姉さんにあんな感じで演習してもらったんだよ」
「そうなの？」
「うん。その時は私はまだ鎮守府の新人だったんだけどね。戦い方を教えてもらうって感じで」
　艦娘だった頃を懐かしむ。海風もまだ配属されていない時期の話なので、その時のことを興味深く聞いていた。
　艦娘の頃、訓練の中には実際に姉達と戦う実戦形式の演習もあった。４人のうちの１人と１対１で戦う、ただそれだけなのだが、春雨はこれで姉達の戦い方を真正面から受けることで覚えた。
　練度や経験の差があったため、いくら覚えても実力差を最後までひっくり返すことは出来なかったのだが、その分、サポートに徹すると動きが事細かく分析出来た。勝てずとも知ったことで最善となった。
「今の私は、姉さん達のおかげと言っても過言では無いよ。だから、叢

雲ちゃんもあの演習でまた一皮も二皮も剥けると思う。私がそうだったから」
「だね。なんだか動きのキレがどんどん良くなってるように見えるよ。甘味を欲しがるスピードも早くなってる気がするけどね」
　そう言っている内に、演習を一旦終えて岸の方へとやってきた。叢雲には疲れの色が見えるが、白露はまだまだやれると言わんばかり。互角に見えていたが、体力的には白露の方がまだ上のようである。
「薄雲、甘いもの！」
「大丈夫ですよ。まだまだありますから。でもその前に、お水を飲みましょう。水分の補給も必要ですから」
「そうね。クッキーは口の中の水分を根こそぎ持っていくものね」
　薄雲に言われた通りに、用意されていた冷水をガブ飲み。そしてすぐさま薄雲手製のクッキーを摘む。白露との演習は頭を使っているようで、甘いものがとにかく欲しくなるらしい。
「お、そっちはそっちでトレーニングかな」
「はい。大鳳さん主導で体力増強トレーニングをしていたので、付き合わせてもらいました。コロラドさんと古鷹さんのこともよく知ることが出来ました」
「うんうん、それでこそ春雨。みんなをよく見て、よく知ることが、春雨の根幹だよ。少なくともあたしはそう思うね」
　ふぅと息を吐きながら白露が笑みを浮かべる。春雨が少しずつ艦娘としての表情を取り戻しているように見えたようで、姉としては嬉しいとのこと。
　春雨は自分のことなので何も感じていない。海風に聞くと、白露の言う通りだと返す。変に意識させると先に進めなくなるかもしれないと考えてあえて何も言わなかった。
　海風としては、最初にそれに気付けたのが自分であるという絶対的な誇りがあるため、後々白露にそれを春雨に伝えられても落ち着いていられた。余計なことをとは思わない。
「今までの凛々しく力強い春雨姉さんも格好良くて素敵だと思います。今の艦娘としての自分を少しずつ取り戻してきた優しく柔らか

い春雨姉さんはもっと素敵ですね。春雨姉さんは本分を忘れたわけでは無いと思いますが、今までにあったことがあったことですから、少し力んでしまっても仕方ないでしょう。寂しさに加え怒りも溢れてしまっているのですから。過去を振り返り、本質を見直すことで、春雨姉さんがさらなる高みへと向かえるのなら、海風は全力でお手伝いしますね。今を否定するわけではありませんが、やっぱり姉さんには笑顔でいてもらいたいですから。姉さんの笑顔は海風の清涼剤、癒されますので」

ニコニコしながら海風のいつものマシンガントーク。今は今でいいが、どうしても本心からの笑顔を失ってしまっているのが心苦しかった。溢れた怒りがそうさせているのもわかっている。

それが今、本質を見つめ直すことで少しずつ戻ってきているように見えた。最奥にある怒りはどうしても払拭出来ないだろうが、それでも春雨の浮かべる笑みには温かさが戻ってきている。

壊れた心が完全に修復されることは無いが、多少歪(いびつ)でも、元の状態に戻ってきている。それをまた壊れなくするのは、本人の意思と仲間の存在。

春雨は特に仲間の、姉妹の存在を強く感じているため、今のこの状況が最も安らぐようである。鎮守府から妹達が来た時は、さらに安心感が増すほどである。

「それで春雨、どんな感じ？」

「どんな感じとは」

「自分を見つめ直すことは出来てるかな？」

白露に問われ、少しだけ考える素振りをしたが、力強く答える。

「出来ていると思います。艦娘として鎮守府に配属されてからのことを思い返しながら、自分はどうやって生きてきたかを見つめ直していますが、懐かしさもある中に何かが見えてきそうな感じもします」

過去を振り返り、本質を見つめ直すことで、自分に足りないものが見えてきているような感覚を覚えている。それが何かはまだわからないし、それが正しいものかもわからないけれど、不要なものでは無いと確信を持って言える。

「そうかそうか、ならいいんじゃないかな。決戦のその時まで、続けた方がいいと思うよあたしは。なんなら、あたしが今から演習をするなんてことも」
「ちょっと待ちなさい」
そこに叢雲が口を挟む。
「ん、どうしたのさ叢雲」
「その演習、私にやらせなさい。一度春雨とやっておきたい」
甘味を取り入れたことで疲れが取れたか、仁王立ちで春雨に演習を申し込んだ叢雲。時間としてはまだあるため、1戦だけ付き合えと拳を突き付ける。
春雨自身、ここまで大鳳のトレーニングに付き合っているので疲労は溜まっているが、叢雲も同じこと。白露との演習を繰り返してきたため、疲労は勿論溜まっている。コンディションは同じくらいと言えるだろう。
「いいよ。やろう」
「春雨姉さん、お疲れでは」
「それは叢雲ちゃんも同じだからさ。それに、叢雲ちゃんのサポートをするのなら、叢雲ちゃんの今をちゃんと知っておく必要がある。直接ぶつかり合った方がわかりやすいから」
ニコッと笑って、叢雲の突き出した拳に春雨も拳を突き合わせる。演習を合意したことになった。

仲間同士の喧嘩とかではなく、お互いを高めるための戦い。無論、春雨も叢雲も手を抜くことなんてするわけがなく、全力でぶつかり合う。
そこには怒りも憎しみもなく、仲間としての信頼の中で行なわれる。これをして、さらに絆を深めることになるのだ。

互いの成長のために

トレーニングの終わり掛け、叢雲が春雨に模擬戦、演習を挑む。お互いを高めるため、そして春雨は追加で仲間の戦い方を刻むため。

叢雲としても、春雨とは一度ちゃんと手合わせをしておきたいと思っていた。まだまともな心を持っていなかった時、槍持ちと扱われていた時に、春雨にはマウントを取られている。理性が完全に壊れていた時の出来事とはいえ、春雨に敗北を喫していることが気に掛かっていた。

「同類として、アンタとは一度手合わせしたかったの。アンタには勝ててないから。別に嫌ってわけじゃないけど、ちょっと頭の隅に引っかかってるのよね」

「私もしておいた方がいいとは思ってた。ちゃんとサポートが出来るようになるためには、力を知っておかないといけないから」

「理由は違えど、やることは同じってわけね」

叢雲が槍を展開。勿論殺傷能力を完全に失ったウレタン製の穂。それに斬られた場合は、引っ叩かれたくらいの痛みで終わる。しかし、突きに関しては少々ダメージが大きめになるので注意が必要。

春雨は前衛スタイルとして鉤爪装備。勿論その爪は槍に倣ってウレタン製。引っ掻いたところで痛くはないが、それこそ引っ叩いたくらいの痛みは与えられる。

ただ、春雨の方が若干不利だろう。間合いが格段に短く、さらには鉤爪で攻撃を受けるということがこれでは出来ない。その時のための主砲なので、容赦なく遠距離攻撃も繰り出していくだろうが。

海風は薄雲と共に岸で見守る。本当ならば隣に立ちたいのだが、これは演習。相手の実力を測り、サポートに必要な情報を取り揃えるための戦いであるため、1対1でなくてはならない。

代わりに、海風が春雨をしっかりとその目に焼き付けて、春雨自身の動きを観察する。春雨が仲間達の動きを把握するように、海風は春雨一本で動きを把握する。サポーターのサポーターとして共に戦場に立てるように。

「白露姉さんの主砲が開戦の合図だから」
「オッケー。どちらが勝っても恨みっこなしよ」
「負けたとしても、怒りに任せて駄々を捏ねないでね」
「保証はしないわ。それにアンタにも同じこと言えるわよ」
　互いに怒りが溢れているため、ここで敗北した場合、それに怒りを覚えるかもしれない。だからといって手加減されても気に入らない。
　共に全力でぶつかり合い、勝った方だけは気持ちよく終われそう。負けた方は遺恨が残りそうだが、岸で待機している妹に慰めてもらうことになる。
「ちなみに、白露姉さんには勝てた？」
「腹が立つことに、殆ど負けよ。結構互角まで行けてるんだけど」
「そっか。私も艦娘だった時には姉さんには勝てなかったよ。今はわからない」
「なら、アンタとも互角かもしれないわね」
　鉤爪と槍を軽く触れ合わせ、お互い所定の位置まで下がる。最初はそれなりに間合いを取ってから。
「よーし、ちゃんと離れたね。海風、薄雲、アンタのお姉ちゃん達が戦うよ。よく見てなよ」
「勿論です。春雨姉さんの勇姿を、私が見逃すわけには行きませんから」
「叢雲姉さんの成長を見て、何かアドバイスがしたいところ、かな」
　その戦いを見届ける者達の準備も万端。白露も２人の動きをよく見て、自分の参考に出来ることがあれば活用していこうと画策していた。
「それじゃあ、聞こえてないと思うけど、宣言しちゃおうかな。よーし、はじめー！」
　空砲を放ったことにより、春雨と叢雲の模擬戦が始まった。
　大きな破裂音と同時に、２人とも動き出し、春雨も叢雲も戦場と同じで突撃という手段を選択した。スピードは春雨の方が若干上。しかし、槍を突き出すように構えることで、春雨の間合いにならないように努める。

「いろいろと学んできたのよ。だから、アンタにも負けないわよ」
「私も負けるつもりはないから」
ヒュンと空を切る音と同時に、叢雲の槍がしなりながら春雨に襲い掛かる。ただ突き出すのではなく、小さく円を描くようにその先端を震わせながら。貫流槍術と呼ばれる槍の扱い方の真似事をこの場で編み出した。
不規則な動きを見せる先端だが、直感が並ではない春雨には、不規則は不規則ではない。むしろ、その内側に入ってしまえばいいとすぐに思い付く。ここであえて砲撃ではなく近接戦闘を貫くのは、叢雲に引っ張られているからというのもある。
「ここっ」
「させないわよ！」
穂の内側へと飛び込み、柄を鉤爪の付け根で強引に打ち払う。それだけでも結構な衝撃が叢雲の腕に響くのだが、叢雲は春雨の一撃がミートする直前に槍を消し、春雨の腕が通り過ぎた瞬間にもう一度展開。その穂で春雨の首元を狙おうと、穂先だけを動かすように巧みなテクニックで操る。
春雨はそこも読んでいる。いや、見えている。今はトリガーが引かれていないため、『最善の答えに辿り着く力』が発揮されていた。
叢雲からの攻撃の詳細はさておき、打ち払う行動が空振った時点で新たな道が提示されている。わかりやすく、下がるべきであると。それが最善。
「それなら」
その一撃を少し大きめに避けた瞬間に両腕の鉤爪を主砲に差し替え、中距離戦闘に移行。至近距離に近いのだが、猛烈な連射により叢雲を圧倒する方向にシフトする。
「喰らうかぁ！」
しかし、叢雲も手強い。それを槍を回すことで全て弾いていく。模擬弾であるため本来の戦い以上にこの手段が有効。
実際は実弾でも叢雲は同じことが出来るため、手段としてそれを使うのは何も問題はない。これよりは重い攻撃になるので多用はしな

いだろうが。
「相変わらずすごいねそれ。私や海風の盾とは全然違うのに」
「慣れたモンよ。とりあえず撃っとけみたいな奴は少なからずいるんだもの」
弾きながらも突撃をやめない叢雲。やはり最も力を発揮出来るのは近距離。砲雷撃戦の間合いを保つよりも自分の得意な距離を作り上げる方が、自分に有利になるのを理解している。
普通ならば砲撃の嵐を突っ込むことなんて出来ないのだが、叢雲は特殊。他にも施設には出来るものはいるものの、回避すらせずここまで強引に突っ込むのは叢雲くらいである。
「私の距離よ」
突き進んだことにより距離を詰め、槍の間合いに。鉤爪では届かず、砲撃だと放つ前にやられる、絶妙な間隔。春雨にとっては最も攻撃も回避もしづらい位置取り。
だがそれは、春雨が怒りを溢れさせる前だったらだ。今の春雨は、両腕も義腕。鉤爪と主砲以外にも変形は出来る。それこそ、先程自分で言葉にした盾にだって。
「つらぁ！」
「止めるよ」
強烈な突きに対して、右腕を盾に変形させることで対応。ただ受け止めるだけではなく、横に流すように払うことによって叢雲の体勢を崩しにかかる。そうすることで、さらに距離を詰めて自分の距離に持っていける。
だが、やはり一度やったことは手慣れているようで、払おうとした瞬間には槍が消え、払い終わったところで再び展開。再展開のタイミングが完璧であり、逆に春雨の方が体勢を崩しかけてしまう程である。
ここまでほぼ槍一本でやってきただけあって、この距離での戦闘は叢雲に分があった。槍の出し入れで翻弄し、自分のペースに引き込む。今は怒りを溜め込んだ槍の変形もしていないため、本番ではそれも使ってよりトリッキーに戦うことになるだろう。

こうやってぶつかり合うと、叢雲の特異性がよくわかった。砲撃と雷撃をメインにするのは、艦娘も深海棲艦も同じ。近接戦闘をメインにする者なんて早々いない。緊急時の手段として覚えておく程度だ。

施設の者達はむしろ、そういうところが特殊ではあるが、その中でも叢雲は特に特殊だと春雨は感じた。故に、こうやって直接ぶつかり合わないと、どのタイミングでサポートをすればいいのかわかりにくかっただろう。当日いきなりでも合わせられたかもしれないが、知っているのと知らないのとでは質が大きく変わる。

「離れなさいよ」

再展開した槍をそのまま振り回し、春雨に間合いを取るように促す。ここで離れたら叢雲の間合い。大きく離れて砲撃にシフトしようとしても、一度見ているのだから叢雲はそれをさせることはない。ちょうど良い距離を維持し続ける。

ならばと、春雨は機転を利かせる。槍の間合いは少し離れたところ。離れすぎても当たらないが、距離をうまく詰めることで問題が無くなる。ならば、逆に近付けばいいと。

「ううん、逆」

体勢を低くするために脚を消し、振り回された槍を潜る。そこでさらに脚を一瞬生やすことで爆発的な推進力を作り上げ、肩を叢雲の腹に入れるようにタックルを決めた。

この距離ならば、槍を使うことは出来ない。怖いのはゼロ距離の砲撃なのだが、それも封じるために両腕共に鎖へと変形させ両腕を拘束。

「このっ」

すると即座に足が出てくるのが叢雲である。咄嗟に格闘に持っていけるセンスは凄まじいが、春雨はそれもお見通し。

「いったぁ!?」

「ごめんね。これも戦術だから」

その足は、春雨自身も両脚を盾に変形させてガード。硬い鉄板を全力で蹴り飛ばしたようなものなので、鈍い音がした後に叢雲の表情が険しくなる。

槍での戦闘に慣れている叢雲の弱点は、それよりも近付かれた時である。今まで超近距離で戦うことになる相手がいなかったため、そこに対応せずに戦ってこれたが、決戦では何をされるかわからない。それこそ、施設の潮のようなゼロ距離まで近付かれたら終わりくらいの格闘を扱う者がいたら、大きく不利になる。

春雨は、それを身を以て証明した。抱きつけるほどに近づいたら、叢雲は何も出来なくなる。何か出来る方が少ないのだが。

「両腕も両脚も自由に変えられると、ここまで出来るね。自分でも今気付けたよ」

脚をさらに変形させて叢雲の脚を絡め取り、そのまま押し倒してマウントポジションへ。こうなってしまえば、槍を使うことも出来ず、砲撃も出来ず、身体も動かせない。完全な馬乗りではあるが、春雨も攻撃出来る手段が失われたことにより、ここから戦況が動かなくなった。

考え無しに突き進んだわけではなく、春雨に見えていた光の道はここまで。これ以降は不要ということだ。これで演習は終わり。

「自分の弱点がわかったわ。槍が使えないくらい近いヤツをどうにかする手段を考えなくちゃいけないわね」

「そうだね。出来るなら私もそうさせないようにサポートするけど、自分でも出来るようにしてくれると嬉しい」

「アンタの手を煩わせないようにするわよ。仲間は多くてもアンタは1人なんだもの」

演習の終わりが見えたので、春雨は拘束を外して叢雲を解放した。叢雲は完全に負けだと感じており、次に活かすためのことを考え始めている。そこには怒りがあまり入っておらず、自分の更なる成長のことを念頭に置いていた。

「だとしても、またマウント取られるなんて気分が悪いわ。今は無理でも、また演習に付き合いなさいよ。次はこうはいかないから」

「うん、いいよ。もっと叢雲ちゃんのことを知っておかなくちゃいけないし。戦術が変わるのなら、そのことも知っておきたいからね」

全員をサポートするのなら、全員の戦い方を知っておく必要があ

る。戦術がアップデートされたら、春雨自身もアップデートしなくてはならない。そのためには、決戦まではこうやって仲間達と共に成長する必要がある。

叢雲は特に躍起になっているため、春雨も親身になることが多くなりそうだった。成長速度も速いため、毎日アップデートをすることになるかもしれない。

演習自体は春雨が勝利したが、お互いに何かを掴むことが出来そうだった。決戦までの期間で、それを掴み取り、より成長をしていく。

決戦のために

模擬戦を終え、岸に戻ってきた春雨と叢雲を出迎えたのは、その戦いを見守っていた姉妹達。

「お疲れ様でした春雨姉さん。遠目で見ていてもその素晴らしい戦いは海風の目に焼き付きましたよ。叢雲さんの一撃を華麗にいなす姿は勇ましく、近接戦闘に特化した今の春雨姉さんの実力を際立たせていましたね。即座に間合いを取る瞬間など、まるで天使の翼が生えているかのように華麗でした。腕を盾にするのは、もしかして私を意識してくれていたのでしょうか。それは自意識過剰すぎますかね。でも、あの時にその選択をしてもらえたのは嬉しいです。盾の扱い方も私が参考にしたくなる程のものでした。そしてやはり最後、一気に間合いを詰めた後の両腕両脚を使った拘束、痛めつけるわけでなく身動きを取れなくするのは、例え敵であっても痛みを与えずに拘束するという慈悲の心を感じさせる最高の手段だと思いました。本当に始末しなくてはならない存在でも締め上げるだけで済ますのは、やはり持ち前の慈悲深さが出てしまっていますね。春雨姉さんの優しさに、海風は感嘆の息を漏らしてしまいました。全てにおいて素晴らしい。その行動全てに間違いなどありはしないのでしょうね。優雅で神々しく、勇猛果敢なその姿を、最終決戦でも見せていただけたらと思います。その時には私は姉さんの隣に立ちますので御容赦を。姉さんの怒りを抑えるお役目をいただいていますので、今のような勇姿を見せていただきつつも、完璧なサポートをしますので」

いつになく止まらない海風。命懸けではない春雨の戦いを目にした上に勝利を収めたため、感極まっているようである。岸から見ている間も目をキラキラさせていたらしく、薄雲と白露が苦笑する程だったのだとか。

「私としては春雨姉さんの戦術をより深く知りたいと思いましたね。姉さんが仲間達の戦い方を演習で学ぶように、私も一度手合わせをしてもらいたいと。その時には姉さんの全てを見せていただきたく。勿論、さっき叢雲さんにやった両腕両脚を使ったマウントポジション

も是非。もしかしたら回避する方法や拘束から抜け出す方法を編み出すかもしれません。そうなった場合、より強固に締め上げなくてはならないでしょう。それならば私の身体を使って、絶対に抜け出せないようなロックを仕掛けられるように特訓してもいいと思います。何も問題ありません。私は姉さんからされる全てのことが悦びなので、可愛がられようが痛めつけられようが、その全てを」
「海風、ちょっとブレーキ。なんか取り返しのつかない方向に行きそうだから」
　叢雲がマウントを取られたところを見て、よくわからない騒ぎ方をしかけたのは、薄雲と白露も確認済み。白露が妹の良くないところをいち早く止めたのは言うまでもない。
「叢雲姉さん、甘味です」
「ありがと。やっぱり負けると苛立つわ。相手がいくら仲間でも」
　薄雲から渡された水分をガブ飲みした後、すぐにクッキーで怒りを発散する叢雲。白露との演習と比べると、食べている量は少々多め。マウントを取られる程の敗北であったため、春雨のことを認めていても、怒りと苛立ちはどうしても溢れてくる様子。
　だが、それは敵対の怒りではないため、まだ自制は可能。むしろ、この経験を活かして次に進もうとさえ感じる、正の感情に近い。許せないとかそういう感情は無いのである。
「惜しかったですね。やっぱり、近付かれたのがまずかったですか」
「そう……ね。悔しいけど、槍よりも近くはどうしてもすぐに反応出来ないわ。そこは改善しなくちゃ」
「それなら、妹姫さんに習ってみるというのはどうです？」
　その名前を聞いた途端、叢雲は少しだけ表情が曇る。施設に所属したばかりの頃の苦い経験を思い出してしまった。
　叢雲は飛行場姫には心を折られている。その時はまだ未熟で、怒りの制御もままならず、来島した艦娘達を闇討ちしようとしたのを、赤子の手を捻るように止められたことが理由。それ以来、飛行場姫には苦手意識を持ってしまっていた。
　顔を合わせても逃げるとか楯突くとかそういうことはしないのだ

が、若干心の距離を置いているのは確かである。おそらく飛行場姫もそれには気付いていそう。
「……四の五の言っていられないか。決戦まで時間がないもの。出来ることはしたいわ」
「それなら、明日から潮ちゃんのトレーニングに参加してみるといいと思います。スパーリングとかもしているみたいですし」
「そうね。今日はもう時間が遅いからアレだけど、明日からそちらに行ってみようかな」
　そんな苦手意識を持っていることを良しとし続けるほど、叢雲は自分に甘くない。精神的なマイナスを出来る限り取り払うことで、より前に進もうと努力する。
「2人ともお疲れさん。流石にもうお風呂は空いてるだろうから入ってきなよ。あたしも入るけど、流石に5人まとめて入るのは難しいだろうし、疲れてる子から入るべきだね」
「それならアンタ達先に入っていいわ。私は先に妹姫に話をつけてくるから。疲れてはいるけど、すぐに風呂じゃなくても問題ないわ」
「それじゃあお言葉に甘えて」
　演習はこれにて終了。叢雲は次の道を見定めて、ギリギリまで成長し続ける。

　白露型姉妹3人で風呂を終えた後、ダイニングに向かうと未だ完全に疲れが取れていないコロラドと古鷹が休息中。大鳳がお茶などを用意していたが、スタミナ不足はそう簡単には払拭出来ないため、大鳳に任せっきりとなっていた。
　流石に歩けないというわけではないのだが、一度座ってしまうとなかなか立ち上がれないくらいには消耗しており、逆に夜はグッスリと眠れるとのこと。
「体力作りは継続して続けていくべきですね。前哨戦の時にも私と古鷹は本当にギリギリでしたから」
「ですね……。せめてこれくらいのトレーニングでへばらないように

したいです」
「ただでさえ、ここから遠いところで戦うんでしょう？Ｐｈｙｓｉｃａｌ（体力）が無いせいで戻れないとかになったら最悪よ。向こうの鎮守府が受け入れてくれるかは知らないけど」
「それは大丈夫です。私が一番わかっていますから」
　このスタミナ不足は致命的だ。あちら側で活動していた時でもネックになっていた部分だが、泥に侵蝕されていた時にはブーストがかかっていたことである程度緩和されていた。しかし、今はそんなものはない。頼れるものは、自分のみである。
　まだ全てが決まったわけではないが、最終決戦はここから堀内鎮守府に向かい、そこから大塚鎮守府へ。そして、その近海にあるという黒幕の拠点に殴り込みに行く。スタミナ不足で倒れた場合、運び込まれるのは大塚鎮守府となるだろう。
　そこに関しては古鷹が最も理解している。合理的に考える大塚提督が長を務めるそこならば、自分達の存在を正しく受け入れてくれるだろうと。黒幕の脅威は身を以て知っているし、穏健派の深海棲艦の力を借りての戦いも勝つためには必要と割り切っている。
　ならば、この施設の者が大塚鎮守府に行ったところで、後ろ指を指されるようなことはない。感情を抑えることに長けている分、受け入れる力も高い。
「ああ、ここにいたのね。ちょうどよかったわ」
　ここにさらに飛行場姫が入ってくる。夕食の準備というのもあるが、ここにいる大鳳達にも用があった様子。
　その後ろにはやはりというか、潮と潜水艦姉妹がついてきている。前哨戦を経て、潮は少しだけ恐怖を表に出さなくなっており、潜水艦姉妹は逆により感情を表に出せるようになっていた。
「大鳳、古鷹、コロラド。明日からアンタ達は、アタシがトレーニングしてあげる。スタミナ不足を解消したいのよね」
　突然の宣言に驚く３人。
「さっき叢雲からスパーリングしてくれって直談判されて、まぁそれはいいことだと思って許可したんだけれど、よくよく考えてみたらア

ンタ達もそれ必要よね。スパーリングじゃなくてトレーニングの監修をするわ」
　それは願ったり叶ったりのことである。特性があるとはいえ、短期間で潮を戦場に送り込めるくらいのトレーニングを課した者である飛行場姫が、潮を中心にするのではなく自分達を中心に据えたトレーニングメニューを組んでくれるというのだ。
　完全に解消されることは無いにしても、決戦までにある程度の成果が出るはず。今よりも行動が出来るようになれるのなら、喜んでそれを受け入れる。
　潮のトレーニングに付き合って倒れかけたこともあったが、そうならないようなメニューとなれば、１００％身につく。これは３人にとって本当に必要なもの。今は技術よりも基礎であり、戦いの資本となる身体作りが最優先であることは間違いない。
「とはいえ、わかっていると思うけど午前中はこの施設のことをやってもらうわ。農作業でも漁でもここの掃除でもなんでもいい。そこはいつも通りね。アタシが見るのは午後からよ」
「問題ありません。貴女のトレーニングとなれば、確実に効果的でしょう。今から楽しみですね」
　トレーニング好きな大鳳は、飛行場姫直々のメニューに興味津々。自分以上に効率の良い特訓が出来るのは嬉しくて仕方ないようである。
「せめて足を引っ張らないようにしたいので、明日からよろしくお願いします」
「ええ、アイツらに勝つために頼らせてもらうわ。Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｓｏ　ｍｕｃｈ」
　古鷹とコロラドも乗り気だ。今日の大鳳主導のトレーニングでも、ここまでスタミナ不足を痛感しているのだ。もう時間も無いのだから、出来ることは全てやっていきたい。
　それが苦行であっても、乗り越える覚悟はある。特に古鷹は、大塚鎮守府で活動していた時の経験として、感情を抑えて受け入れることが出来る。

「潮、アンタがスパーリングとかしてみる？」
突然話を振られてビクンと震える潮。そして、考えるまでもなく首を横に振った。
飛行場姫に鍛えられているが、それはあくまでも自分を守るための力を得るためだ。潮の拳は、ヒトを殴るためのものではない。スパーリングであっても、仲間に手をあげるなんて出来るわけが無かった。
「妹姫、それは意地悪」
「潮を悲しませるのはいけない」
潜水艦姉妹が苦言を呈する。飛行場姫としては、流石に無理かと潮の頭を撫でた。
潮が悲しむようなことを、潜水艦姉妹は許さない。いくらそれが飛行場姫であっても、はっきりと意思を伝える。それくらいに感情を表に出すようになり、自分で物事を考えられる程に自分を取り戻した。もう潜水艦姉妹は人形ではない。
「潮、アンタと一緒にこの子達も鍛えることにするわ。スパーリングをしろというのは流石に冗談だけど、先導することくらいはやってみない？　例えば、ランニングの先頭になって走ってもらうとか、腹筋や腕立て伏せの号令をかけるとか。この子達を、アンタのペースで鍛えてみるのはどうかしら」
それならば、攻撃的なことなど1つもない。それに、勿論潜水艦姉妹も隣にいてくれる。それなら、怖いことは何もないはずだ。強いて言うなら、潮の号令がハード過ぎて、3人に文句を言われることが怖い程度。しかし、この3人がそんなことを言うようには見えない。
そのため、少し考えた後、潮はおずおずと首を縦に振った。それくらいなら、やりますと。
「はい決まり。じゃあ明日を楽しみにしていてちょうだい。そうだ、春雨達も付き合ってもいいわよ。アンタ達もギリギリまで鍛えたいんでしょ」
「そうですね。一緒に戦うみんなのことを知るためにも、付き合わせてもらいます。いいよね、海風、白露姉さん」
「もっちろん。あたしだって決戦に備えたいからね。スタミナ不足は

無いのはありがたいけど、鍛えられるところは全部鍛えておきたいからね」
「勿論私も。春雨姉さんのためにも、今以上に精進させていただきます」
春雨達も自主的に参加。これによって、基礎体力を鍛え上げ、決戦に備える。

まだ日取りは決まっていなくとも、出来る限りの準備はしていかねばならない。

同型の邂逅

春雨達がトレーニングに勤しむ裏側。大本営では、帰投したビスマルクとグラーフ・ツェッペリン、そしてそこに便乗した大将と吹雪が、施設の深海棲艦達の有用性を納得出来るように説いていた。

基本的にはビスマルク達が施設側で手に入れた本人の音声。そして、それを使った山寺提督の話術により、大本営のお偉いさん達は次々と納得していく。

そもそも、前哨戦での行動、春雨の奮闘が心を動かしていただけあり、声まで聞けばもう満場一致となった。監査の結果も、そこにいる全員が良しとし、施設は晴れて１００％信用される存在となったのである。

「いやぁ、うまく行ってよかった」

全てが終わった後、山寺提督が安堵の息を吐きながら呟く。これだけ取り揃えて、監査の結果をＮＧとされたらどうしようかと思っていたと話す。

対する大将は、吹雪に車椅子を押されながらも小さく溜息を吐いた。

「貴方は勝ち目のある戦いしかしないじゃない。今回の件も、口八丁手八丁で丸め込む気満々だったでしょうに」

「これでも俺はいつも全力でいい方向に持っていこうと努力してますよ。その結果が今回のコレです」

勝ち取った勝利に満足しつつ、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンにも労いの言葉をかける。

「2人とも、よくやってくれたよ。あれだけ揃っていれば、誰だって心配は無くなる。特に姉姫の方は、かの有名な中間棲姫だからね。信用させるには骨が折れるかと思っていたが、あの声色で敵対しているだなんて誰も思わないよ」

「そうでしょうね。私達は直に会っているけど、正直さっきまでの連中より信用が出来るくらいよ」

あまり他の者には聞かせられないようなことをビスマルクは口走

るが、山寺提督は止めようともしない。むしろ聞かせてやりたいくらいに思っている。
　事実、腹の探り合いをふっかけてくるのは人間ばかり。それに比べて、施設の深海棲艦達は、余程のことがない限りは嘘を吐くこともなく本心のみでぶつかってくるため、話していて気持ちがいい。監査としても心配が要らないのはいいことである。
「Ａｄｍｉｒａｌ（提督）、我々はまた彼女達に会えるだろうか。我々もＥｎｄｋａｍｐｆ（最終決戦）に参加してもいいと思っているのだが」
「そこは要相談かな。あまり人数が増え過ぎてもよろしくない。それに、ここまで来ても黒幕は未知数なんだ。堀内提督の鎮守府で研究を続けているけど、それだけでは足りない」
　ここで既に話をつけていた、堀内鎮守府からの技術提供のことが話題として出てくる。
　あちらだけでは見当がつかないということで、山寺鎮守府の技術班も総出で、黒幕への対策――結界突破のためのアイディアを出すことになるだろう。
「まずは敵拠点への到達方法の開発、黒幕自体の能力解析、ここまでやって、ようやく五分五分だろうね。そこに、件（くだん）の泥に対しての見識があまりにも薄い俺達が参加するのは、割と自殺行為に近いと思っているくらいだ」
「何も言い返せないわね。私達は噂で聞いているのと、あの映像を見ているだけだもの」
「対処法も正確にはわからない。そうなると、我々が迷惑をかける可能性はあるか」
　納得するビスマルクと、残念そうに呟くグラーフ・ツェッペリン。最終決戦に素人が飛び込むようなものとなれば、自分達がやられるだけならまだしも、それが侵蝕に繋がり、多大な迷惑に繋がるとなれば、２人は渋々でも参加出来なくても仕方ないと割り切れた。
　ここで繋がりを持てたのだから、最後まで付き合いたいという気持ちがあってもおかしくない。しかし、優先順位としてトップなのは、共に戦うことではなく確実に勝利すること。少しでも確率を上げる

ためならば、一歩でも二歩でも下がる。
悔しくないかと言われれば、勿論悔しいだろう。しかし、実力があっても泥に対する経験が優先されるのならば、より経験をしている者の方が確実。引き際を弁えていた。
「最終的な判断には私も口を出すと思うけれど、声をかける可能性が無いわけではないから、その時はお願いしていいかしら？」
フォローするように大将が２人に話す。しかし期待はするなとだけ忠告はする。
「ええ、それで問題ないわ。最優先は勝利することだもの」
「あの施設が平和になるのならば、我々は高望みなどしない」
勿論、期待などしていない。それでも、協力出来ることはしようと宣言した。

そのままの足で向かったのは、近場である山寺提督の鎮守府。次に行われるのは、技術提供。堀内鎮守府によって開発された、もしくは研究中の対黒幕の技術を、この鎮守府の技術班に読み解いてもらうためである。
ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンはここで別れ、大将と吹雪だけを連れて工廠へ。技術者といえば、やはり工廠にいるものというのは何処の鎮守府でも同じ。
「明石、いるかい」
「はーい、少し奥にいますので少々お待ちをー」
少しバタバタと音がした後、奥からやってきたのは、何処の鎮守府にもいる明石である。工廠を担当する艦娘は基本的には明石であり、事務をメインとする大淀と共にほぼ全ての鎮守府で活動中。山寺鎮守府も例外ではない。
だが、当然ながら艦娘には個体差があり、堀内鎮守府の明石が狂科学者気質なのに対して、大塚鎮守府の明石は比較的真っ当な職人気質。そこそこで特徴が変わってくる。
そして山寺鎮守府の明石はというと、まず外見からして少し違って

いた。他の明石とは違ってメガネをかけており、白衣まで常備というどちらかといえば科学者気質。
「はいはい、何でしたか提督」
「さっき少し話したろう。その件だよ」
「別の私が作ったという技術の解析の件ですね」
　堀内鎮守府の明石ほど危ない雰囲気は無いが、科学者としての興味は完全にその未知の技術に向いており、いつそれを知ることが出来るのかとソワソワしているようだった。
「大将、堀内提督に連絡出来ますかね。どちらかといえばあちらの明石ですが」
「ええ、早いに越したことは無いものね」
　吹雪に持たせているタブレットを使い、堀内鎮守府へと連絡。あちらの明石とすぐに取り次いでもらい、明石同士が邂逅することとなる。
『ごめんねちょっとバタバタしてて』
　タブレットの画面には、自分と同じ顔の艦娘が見たこともない装置を操作しながら何やら解析していた。その頭の上にはこれまた見たことのない妖精さん――龍驤が乗っており、その操作を補佐しているようにも見えた。
『っと、そちらの技術者も明石なんですね。初めまして、えーと、メガネの私』
「初めまして、裸眼の私。他の明石にも会ったことあるけど、なんというか、雰囲気ありますね」
『そうかな？』
　話しながらも手は動きっぱなし。装置の中に入っている何かに対して分析をかけているようだが、山寺鎮守府の明石にはその内容がぱっと見ではよくわからなかった。
『あかん、明石、それはさっき見た結果や。もうちょい芯の辺……なんちゅーか、あれや、寄生虫の真ん中を見るべきや』
『もっと真ん中？　細胞分裂のど真ん中だから、染色体の何処かか。こんな小さいところのさらに小さいところってことだね。全体から

見るよりピンポイントで見た方がわかること多いか。そうなると……もうちょっと小さめの装置が必要かも。龍驤、その辺作れる？』
『もうやっとる。勝手に開発設備使わせてもらっとるで』
画面の向こう側は鉄火場と言わんばかりに動き回っている。よく見れば、画面の端でチラチラと大淀も手伝いをしているのが見えた。技術面では協力出来ないからと、書類を片っ端から片付け、整理し、新たな道を割り出しているくらい。
さらには、誰も触っていないのにガリガリと動いている設備もあった。それは龍驤が自らの断片を使って操作し、研究のための装置を作製する、いわば３Ｄプリンタのようなもの。より細かい作業をするために、龍驤は設備の端末として明石の助手をやっている。
「これはまた……凄まじいですね」
『なるべく早く黒幕対策をしたいからね。あ、そうそう、そちらのアドレス教えてもらえるかな。研究の結果からアシストしてくれるんでしょ？　データ送るから』
「あ、はいはい、すぐに」
同じ明石だからか、すぐに息が合う。データの転送をするために連携して、今までの成果と今やっている技術を貰っていた。
大将と山寺提督は、この光景を見て苦笑するしか無かった。特に山寺提督は、堀内鎮守府の明石のことは多少知っていたが、ここまでの者とは思っていなかった。
「……なるほど、ちゃんと読み解かないとちんぷんかんぷんですねコレ。本来の艦娘の技術から逸脱している部分が多すぎます」
クイッとメガネを上げて、送られてきたデータを熟読していく。その時にはもう周りの音が聞こえていない程に集中していた。アシストをするにしても、まずはその内容を正しく理解しなくては見当違いのことを言うことになりかねない。それは普通に迷惑である。
とはいえ、あまりにも普通ではないこのシステムは、製作者に聞かないとわからないことが多い。特に泥という艦娘にも深海棲艦にも無いようなシステムに関しては、熟読してもわからない可能性がある。それについては、堀内鎮守府の明石に説明を求めることになるだ

ろう。
「明石同士で直接連絡が取れるようにしておくべきかもしれないね。堀内提督、出来るかい」
『端末があれば直通の通信も大丈夫でしょう。それをそちらが許可してくれるのなら』
「問題ないよ。会話の内容は当然記録するし、２人の明石がこの技術を悪用することは無いだろう。うちの明石も平和のために戦っているからね」
　独自の通信となると、どうしても軍規やら何やらが関わってくるのだが、提督同士の合意と、明石に対する信用度、そしてここには２人に共通する上司となる大将もいる。
　これだけ揃っていれば、全員が納得するカタチで研究を先に進めることが出来るだろう。ここに誰かを出し抜こうなんて考える者はいない。全員が平和のために行動をしているのだから。
『よっしゃ、追加のヤツ作ったで。染色体やったか、それの内部を確認出来るヤツやと思うがどうや』
『えーっと、うん、これなら見れるかも。やってみようやってみよう』
『大淀、すまんのやけど前のヤツどうにかしといてもらえるか。近くにあったら明石が何かやらかす。あと確実に別事に気をやる』
『はいはい、明石はそういうところありますからね。一つのことに集中出来なくなりますから、視界から外さないと』
　画面の向こう側は、いつまで経っても燃え上がっているように見えた。これで平常運転だというのなら、逆にこの鎮守府に監査が必要なのでは無いかと感じるほどに。
「あ、そうそう、堀内提督。施設の監査の結果は、大本営も満場一致で合格となった。準備が整えば、すぐにでも彼女らを鎮守府に招待することが出来る」
『本当ですか！　ありがとうございます』
「いやいや、俺の仕事はこういうことだからね。後から大塚提督にも伝えておくよ」
　堀内提督の声色が明らかに喜び一色となった。施設のことを最も

知っているのだが、それでも大本営が認可を出さない可能性も少なからずあったからだ。その心配も払拭されたことで、また1つ気が楽になったようである。

これで、残すところは黒幕対策1本となった。あまり時間はかけていられないが、確実に勝利出来るように、先に進めていきたいところである。

逆恨みの進化

翌朝。まだ日が昇り切ってもいない時間に目を覚ます春雨。外は白んできているが若干薄暗く、誰もがもう一眠りするくらいの時間。

隣を見ると、気持ちよさそうに眠る海風の姿。春雨の身体を抱き枕にして、その温もりを存分に感じながら、幸せそうな寝息を立てていた。悪夢も見ているようなことはなく、今の生活を満喫していることがわかる。

ここ最近は春雨も悪夢らしい悪夢を見ていない。寂しさが溢れたことで深海棲艦化しているものの、怒りも溢れたことでいろいろと中和しているのだろうと感じる。こうなるまでに嫌なことは多かったものの、眠っている時まで反芻させられるようなことは無かった。

それもこれも、親身になってくれている海風のおかげだろう。常に温もりを与えてくれて、姉妹からの愛で怒りも薄れる。どちらに向けても発作を抑える作用があるのは、今この世界にはおそらく海風しかいない。白露や妹達でも、ここまでの温もりは与えてくれないだろう。

それだけベッタリだと言われてしまえばそれまでなのだが、海風の依存も相まって、春雨には最も安心出来る存在であることは間違いない。だからこそ、侵蝕された時に怒りが溢れたのだし。

「……ありがとうね、海風。いつもいつも、こんな不甲斐ないお姉ちゃんのために」

普通なら撫でているところだろうが、今の春雨は腕は消している。二の腕までしかない上に、そこも含めて海風にガッチリホールドされているため、モゾモゾと動いたところで動くことも出来ない。今ベッドから降りようと思っても、海風を起こさない限りは難しいだろう。

「……起きる必要も無いし、もう一眠り……」

考えている内に少しずつ微睡んでいく。春雨だってトレーニングに参加しているのだから、昨日はかなりの疲労を感じていた。この一晩で充分体力は回復しているが、眠気だけはまだまだある。適正な時間眠ることで精神的にも完全な回復に至る。

決戦も近いということで、こんなにゆっくり出来る時間もあと僅かだと考えると、この微睡んでいる時間はより至福の時であると実感出来る。そして、そのまま二度寝へと向かおうとしたその時だった。
「……ん？」
小さく虫の報せを受け取ったような感覚を得た。今までに感じた激しい悪寒などではないが、何かがあったのではないかと勘付くような、そんな感覚。
これは深夜の哨戒で施設に向かってくるドロップ艦を見つけた時のような感覚に近い。初めて発見された時、今は堀内鎮守府で艦娘としての道を歩んでいる文月を松竹姉妹が発見した時に感じたモノだ。
「外で何かあった……？」
今は深夜哨戒は中止している。龍驤が斃れた今、夜に何者かが来る可能性は非常に低く、決戦準備で体力を使うことも多くなってきたため、夜はみんなでグッスリ眠るという前までの習慣に戻っていた。
また、一応ではあるが夜は『観測者』が道化達と共に外海を監視している。施設側に若干寄せているため、何かあった場合は多少なり対処してくれる。黒幕は摂理に反する存在になってしまっているのだから、それを止める者として働いてくれると春雨は信じている。
「……海風、ちょっといい？」
眠っているところを起こすのは申し訳無いのだが、こういう感覚を得たということは、確実に何かあるということ。しかも、自分に不利益が発生する可能性が高い。ならば、気付いた時に対処出来るならしておきたい。そのため、海風を起こすことにした。
行きたくても今の状態では行けない。行けたとしてもお互いに発作を起こしかねない。動くのならば、お互いのために必ず一緒に。
「んん、どうかしましたか姉さん。外はまだ薄暗いようですが」
春雨に声をかけられれば、すぐさま目を覚ますのが海風。軽く眠そうではあるが、眼前に春雨の顔があることでその眠気もすぐに飛ぶ。
「なんか変な感じがしたんだ。もしかしたら、外で何かあったかもと思って」
「こんなタイミングでですか？　龍驤を斃し、施設を狙ってくるもの

が残すところ黒幕だけとなった今、何かあるのでしょうか。でも、春雨姉さんがそう感じたのなら間違いなく何かあったのでしょう。外に出てみますか」
　春雨が言うのだから間違いないと、すぐに布団をのけて外に出る準備をする。物分かりが良すぎるのも考えものだが、春雨にとっては非常にありがたい。

　すぐに着替えて施設の外へ。当然ながら誰も起きていないと思いきや、春雨がピンとする方へと向かったところ、ちょうど施設に戻ってくる『観測者』と道化達の姿があった。
　春雨との約束を守るため、明るい間は施設に滞在、もしくは近海から春雨を監視。夜は監視をしない代わりに施設から離れて海の摂理を守っている。いつ眠っているのかわからないが、むしろ眠る必要すらないくらいの特殊な存在と言われても納得は出来た。
　そんな『観測者』一行がこの時間に戻ってくるのは、ある意味いつも通り。春雨が目を覚まして虫の報せを受けるようなことはない平常運転なのだが、今回は何かが違った。
「流石は辿り着く者だ」
「外で何かあったんですか」
　この言い分から、何かあったのは確実。春雨はすぐさまそれを問いただす。
「彼女が更なる進化を遂げた。龍驤を失ったことで、さらに憎しみを増したからだろう」
　なんでも、こうやって夜の間にあらゆる海域に仕掛けられた泥を駆除するように動いているのだが、今回は少々違う動きをしてきたという。
「……何度進化すれば気が済むんですか」
　苛立ちが顕著に現れる。それを察してか、海風はすかさず春雨の手を握った。いくら義腕でありインナーに包まれていても、海風の温もりが伝わってくるようで多少は落ち着く。

「それで、どんな進化を？　島を自分の器とするだけじゃ収まらなくなったんですよね」
「ああ、これまでは憎しみを増し続けることにより、より艦娘を苦しめる方向に伸びていった。これは君達にもわかるだろう」
「はい。最早逆恨みの域ですが」
　あまりにもわかりやすく怒りを露わにしているため、道化達もどうどうと春雨を落ち着けるように動く。何処からか出した扇子で扇ぎ、熱くなった頭を冷やしてといわんばかり。
　最初は龍驤を器として、再起を図って行動を始めた黒幕。その時には他者を乗っ取ることしか出来なかった。深海棲艦としての溢れで手に入れた力は、艦娘への憎しみから尊厳を踏み躙ることに特化したモノ。その始まりは、自らを艦娘に取り憑かせることでコントロールするという単純なモノだった。
　そこから時間をかけて力を増していき、拠点となる無人島を侵蝕しながら勢力を伸ばしていった。流動体である身体を使い、龍驤のみならず他の艦娘を侵蝕し始める。憎しみは募り、力は増し続けた。
　順調に勢力を伸ばしていたので一旦は力の進化は止まったようだが、そこで春雨や鎮守府の艦娘達が白露や古鷹を撃破するという異例の事態が発生。そこから、自分の道を妨害する不届き者が存在することがわかり、より憎しみを増していく。そこでの進化が、増殖する泥だ。艦娘の尊厳をより多くより早く踏み躙るための進化。当時の龍驤は特別製と言っていたが、なるべくしてなっている。
　しかし、それでも春雨達は止まらない。次々と嗾けた部下を撃破し、本来の艦娘としての性質を取り戻させる。それを知ったことでさらに憎しみが増した。憎しみだけでは収まらず、島を侵蝕して自らの器とするほどに膨張し、さらには龍驤を泥へと変えることが出来るほどに悪意は膨れ上がっていた。端末だけでなく、本体そのものを増殖させているようなもの。憎しみを増し続けた結果、不可逆の侵蝕まで手に入れてしまった。
　そして、それすらも撃破された。龍驤が失われ、黒幕はそれを知るかはわからないが再洗脳により艦娘の思考すら取り戻している。不

可逆を強引に可逆にし、取り戻した。
　ある意味最高傑作であった必勝の存在すらも敗北を喫したことで、黒幕の憎しみはより溢れた。その結果、最後の進化を遂げたという。
「今の彼女は、本来の器の居場所がわかるようになってしまった」
　一瞬の静寂。そして、驚きで春雨も海風も大きく目を見開いた。
「今までずっとこの場所がわからなかったのにですか？」
「ああ。我々がこの夜にやっていたことは、以前にも言っていた通り散らばった悪意の駆除だ。ここ最近は多少減っていたが、昨晩はまた数を増やしていた。その悪意は、明確な目的を持ってこの施設に向かって移動していた」
　泥はその場に留まり、付近を航行やドロップした艦娘を乗っ取ることに特化していた。自ら移動する時は、器に出来そうな存在が近くに現れた時のみ。
　しかし、その泥は最初から常に動き続けていたという。その方角にはこの施設があり、陸には近付くことなく、それこそコソコソと。まるで鼠輸送である。
「姉姫様の結界を無視しているということですか」
「可能性は高い。この空間の内側に入る前に我々が駆除したため、そこまで出来るかは現状では不明と言っておこう。しかし、この空間に一部でも入ってしまった場合、姉姫にとって深刻な事態を引き起こすかもしれない」
「……ですね。そうか、私の感じたのはそれだったんだ」
　うっすら目を覚ました時に感じた虫の報せは、おそらくそれ。悪意の塊が施設に向かって突き進むのを察知した結果なのだろう。
「私にもまだ詳細は掴めていない。春雨、君にはすまないが、一度この島を離れたいと思う。無論約束は違えない。君の監視は一時的にやめよう」
「わかりました。でも、出て行く時は姉姫様にちゃんと伝えてくださいね。今回は姉姫様にも関係があることなんですから」
「そうするために今ここに戻ってきた。私の口から伝えておく必要はあるだろうからね」

この調査に関しては、もう『観測者』にしか出来ないことだ。黒幕の居場所を明確に知っているのは『観測者』のみ。中立を守らなければ存在そのものが失われてしまうために春雨達にその居場所を伝えることは出来ないが、摂理に反している者の監視は中立の内。
「春雨、辿り着く者の直感として、その悪意がこの島に近付いた時、どうなると思う」
『観測者』からの質問に、春雨は少しだけ考える。中間棲姫と黒幕は元は同じ存在。器と中身に分離した、1つの深海棲艦である。その中身の一部が器に近付いた場合、考えられることは1つ。
「姉姫様に悪い影響が出るかもしれません。今の自分を持っているとはいえ、中身が直接干渉したら、体調を崩すとかは考えられます」
中間棲姫の身体に影響を与えるのは、少し考えるだけでわかるだろう。入り込んでしまえば本当におしまいだが、そうでなくとも近くにあればそれに引っ張られて様々な症状を起こしてもおかしくない。
「私も同じだ。だが、それを実証するのは危険すぎる。あくまでも憶測の中でだが、彼女のためにも接近を防ぐ必要はある」
「はい。こちらでも警戒はします。もし姉姫様が倒れるようなことがあったら、私達でも島の周辺は確認します」
「すまないが、そうしてほしい。我々も勿論そうならないように尽力する。だが、1つ言えることは、もうあまり時間がないということだ」
当然、決戦はなるべく早くというのがみんなの思いだ。時間をかければかけるほど、あちらは戦力を増やしていくのだから。

黒幕の憎しみの力はとどまるところを知らない。しかし、春雨からしてみれば、それはただの逆恨みだ。あちらが憎しみを増す一方、こちらも怒りを増していく。

施設のために

夜のうちに活動をしていた『観測者』に齎された黒幕の情報は、施設を震撼させる。憎しみを増し続けた結果、施設の場所までわかるようになってしまったのだ。『観測者』曰く、黒幕は自分の拠点から動くことなく器の居場所を把握し、悪意の塊をそこに向けて放っているとのこと。

この施設の周囲に張り巡らされた、中間棲姫の能力による『敵対する者を弾く結界』にその悪意が接近し、中に入ってしまった場合、中間棲姫そのものに介入する可能性がある。体調が悪くなるだけならまだマシだろうが、それ以上になると施設の存続に繋がる。そのため、施設の警備はさらに強める必要がある。

「そうなのねぇ……ついにという感じだわぁ」

「正直なところ、いつか来るんじゃないかとは思ってたわよね。来てほしくなかったけど」

姉妹姫が揃って呟いた。このまま戦いを続けていたら、いつかこの施設に辿り着いてしまうのではないかと薄々感じていたという。嫌な予感というものは思った以上に当たりやすい。

「我々はこの施設に悪意が近付かないように事前に動く。それでも、漏れがあるかもしれない。言い訳がましくなるが、我々の人数では抑えられない可能性がある」

強大な力で中立を守り続ける『観測者』だが、道化達も合わせて3人しかいないのが現状。見つけた悪意の塊を片っ端から処理したとしても、手が回らないなんてことだってあり得るのだ。あまり過信しすぎるのも良くない。

それこそ、島の周囲を囲う程の量を出されたら、いくらなんでも3人ではどうにもならないだろう。そうなってしまった場合は、島の者達がどうにかしなくてはならない。すぐにそんなことになるとは限らないが。

「中立を守らなくちゃいけない割には、随分肩入れしてくれるのね。お姉のために動いてくれるのはアタシとしては嬉しいけれど」

「万が一のことがあった場合、確実に中立は崩れ、摂理も壊れるだろう。彼女がこれ以上力を持つことは、摂理に反し続けているんだ」
　飛行場姫からの皮肉も軽く受け流し、『観測者』は急がせてもらうと施設を出て行った。道化達も一礼をした後、遊びに行くかのようにスキップしながら主人の後ろについていった。
「中立とか摂理とかはよくわからないけど、アイツがお姉のことを第一に考えてくれてるのは、アタシとしても嬉しいわね」
「とはいえ、私の中身がどんどん力を付けちゃってるということよねぇ。私としては複雑な気分よぉ。だって、存在そのものがもうダメということになるんでしょう？」
「まぁそういうことになるわね。そんなヤツがお姉の半身みたいな感じに扱われてるのはアタシは気分が良くないんだけど」
　そもそも、自分から捨てた器をまた取り戻そうとしているのが気に入らないと、何度目かわからないような愚痴。中間棲姫も妹のこの愚痴を何度も聞いているので苦笑を浮かべる。
「ともかく、この島は自衛も強めなくちゃいけないのね。万が一、泥が見えるレベルまで近付いてきたら、アタシ達自身でどうにか駆除をしなくちゃ」
「そうねぇ。多少は泥刈機でどうにか出来るとは思うけれど、それだけじゃあ足りないわよねぇ」
「あと普通に復旧させた畑がまたおじゃんになったら流石にキレるわ」
　侵蝕のために泥が上陸してきた場合、せっかく元に戻した畑がまた廃棄となる可能性がある。それだけは避けたい。
「そもそも泥刈機で吹っ飛ばせるかもわからない……なんてこと無いわよね」
「艦娘憎しで進化を続けてるなら、今の対策を全部弾いてくる可能性も無いとは言えないわぁ」
「怖いこと言わないでよ。でも、全然普通にあり得るわよね。耐性持ってるはずの春雨や叢雲も侵蝕出来るようなことをしてくるかもしれないし」

「それはもっと怖い話ねぇ……」
ここまで来ると、今の対策が全て無効化されているというのも考えておくべき事態となっている。しかし、そうなると島に向かってきた時点でそのままアウト。処理出来ずに島を塗り潰されて、最悪の場合、この島にいる者全員が侵蝕されて破滅に向かう。
「あ、ちょっと待ちなさい！　中立かどうかはわからないけど、聞いておきたいことがあるわ！」
去っていった『観測者』を呼び戻す飛行場姫。今の自分達でも対処出来るかだけは教えてもらわないと困る。
出来ないと言われてしまったら、そこからどうするべきかを考えなくてはならない。出来るのならば、そのように施設内で対処方針を決めなくてはならない。
どちらにしろ、これからの施設のことをみんなで考えていく必要はある。

「ということで、春雨と海風は知ってると思うけど、あちらにこの島の居場所がバレたわ。これからはダイレクトに泥がこの島に攻め込んでくる可能性があるってことよ」
朝食時に飛行場姫からの発表。その頃には『観測者』一行はその泥の対策に出ているため、又聞きにはなるものの姉妹姫が説明をする。
そんなことを聞いたら食事の手も止まってしまう。唯一ある程度安全を維持し続けていたこの施設すらも、今はもう安全であるとは言えなくなってしまった。
『『観測者』から聞いたんだけれど、アイツらが対処した時に、その感覚が前と変わらなかったらしいから、ここに置いてもらっている泥刈機でも消し飛ばせそうという話よ。あのメガネで確認出来るかはまだわからないけど」
「でも、無理はしないようにねぇ。わかっているとは思うけれど、触ったらダメなのも変わらないんだもの。これは、春雨ちゃんや叢雲ちゃんでも例外では無いわぁ」

警戒はするに越したことはないので、耐性持ちであっても無理をすることなく他の仲間達と同じように振る舞ってもらう。前哨戦の時のように、全身を包み込むスーツは着てもらうし、自分から近付くようなこともしないように念を押す。

春雨は勿論、叢雲もそれには同意。万が一のことを考えると、侵蝕されるだなんて腹が立つことを受け入れられるわけがない。ほんの少しでも可能性があるのなら、それは確実に回避する。

そして、こういう話はミシェルには理解させないように努める。泥が危険であることくらいは知っておいてもらうが、それに侵蝕されたらどうなるかを事細かく教えてしまった場合、理解出来ないものがその身に影響を及ぼさない力も無効になってしまう。

それでもさらにそれを上塗りするように侵蝕する可能性すらあるのだ。とにかく、泥には触れるなということだけを知ってもらう方向。あとはスーツを着ることと教え込む程度。ジェーナスが自分と同じようにしてくれと言えばミシェルは素直に聞くため、その辺りはまだやりやすい。

「夜は特に危ないと思うわぁ。昨日まではやめておいたけれど、深夜の哨戒もまた再開した方がいいかもしれないわねぇ。当然、徹底的に防衛してね」

夜の闇に紛れて泥が島に上陸してしまったら目も当てられない。探照灯なども存分に使って、徹底的に防衛を固めたいと考えている。

出来ることなら、現在鎮守府に設置されているという、泥に対するバリアを貸し出してもらいたいものなのだが、規模が大きいため持ち運びがかなり厳しい様子。勿論、今回の件は鎮守府に連絡をするため、何かしらの対策を用意してもらえるのならば頼るつもりだ。

「もし、もしもなんですけど」

春雨が神妙な顔で手を挙げる。

「泥がどうにも出来なくなったとしたら、姉姫様と妹姫様は、この施設から……その、離れることは出来るんですか？」

本当に厳しい場合は、姉妹姫もこの施設を離れなくてはいけない時が来るかもしれない。それは今まで長年使ってきたこの陣地を手放

すということになる。
陸上施設型である2人は、自分の力で海に出ることは出来ないため、コマンダン・テストの大発動艇の力を借りて島から脱出することになるとは思うが、この島自体が半身みたいなものであるため、そんな簡単に離れることが出来るのかというのが春雨の疑問。
「うーん……正直なところ、それは私達にもわからないのよねぇ」
「アタシ達、本当にココから出たこと無いもの。アタシ達がいなくなったこの場所がどうなるかなんて、考えたこと無かったわ」
2人も実際、この島から離れたことがないため、それが出来ると断定は出来ない。ある程度離れたら艤装が消えるだとかはあるだろうが、島自体がどうなるかはまるでわかっていないのだ。今までそんなことをする必要が無かったから。
実験と称して一度離れてみるという手もあるのだが、それで施設が崩壊するようなことがあっても困る。この施設そのものが中間棲姫の艤装のようなものであるため、その可能性も無くはない。
「本当に、本当に緊急事態となった時には、この島を離れることも視野には入れておくわぁ。でも、ギリギリまでは私はここにいるつもりよぉ」
「ここがアタシ達の居場所だし、アンタ達の帰る場所なんだから、そう簡単に離れるつもりは無いわ。でも、もし命の危険まであったら、流石にここを放棄する選択だってする。命あっての物種だもの」
「妹ちゃんの言う通りよぉ。死んだら元も子もないんだもの」
施設も大切だが、それ以上に命の方が大切。施設がもし失われてしまっても、生きていれば再興出来る。壊すことになった畑が今は元に戻っているように、命が無事ならばいくらでもやり直せるのだ。
「そうならないようにしたいところだけれど。勿論アタシ達だって抵抗しないわけがないんだもの。鎮守府とも連携して、絶対に黒幕の思い通りにはさせないわ」
「その時は、みんな協力してくれるかしらぁ。みんなが無事でいられるように」
勿論だと満場一致で同意する。この場所はここにいる者達の愛す

べき居場所。本来の居場所がある者達にしてみても、ここは第二の故郷と言える大切な場所だ。戦いから離れた牧歌的な生活で、心を穏やかにしてくれるこの施設が、逆恨みから破壊されるだなんて堪え難い問題である。

みんなで協力してこの場所を守る。これがここにいる者達の共通する願い。そのためならば、誰もが全力を尽くす。

「妹姫、今日から鍛えてくれるのよね。だったら、早いうちから始めちゃダメかしら」

それだけのことを聞いたら、予定していたトレーニングも優先して実施した方がいいのではと叢雲が提案する。攻勢に出るのも、守勢に回るにも、今以上の力を持っておく必要があるだろう。

「ふむ……アンタ達が良ければ、ちょっと優先的にトレーニングを始めてもいいわ。その時が近いなら、アタシも力を貸してあげる。お姉、それでもいいかしら」

「ええ、この施設のためにみんなが動いてくれるのなら、私も協力は惜しまないわぁ」

中間棲姫も少し苦しそうな表情を見せつつも、この施設を存続させるためには仕方ないと割り切った。

争いごとが嫌いでも、今回は戦わなければ誰もが傷付く。そのためには、全力で立ち向かわなければならない。

「この施設がここにあることが、みんなのためでもあるし、何より私のためにもなるわぁ。だから、こんなことを言っていいのかはわからないけれど……みんな、その、お手伝いしてもらってもいいかしら」

そんな中間棲姫に対して、否定的な意見を出す者は誰もいない。自分達の居場所を守るため、出来ることは全てやる。それが過酷なトレーニングでも。

時間はあまり残されていない。しかし、施設がまともに動き出せるのは、鎮守府側の準備も整わなければならない。

一致団結

朝食を終え、当初は農作業や漁の予定だったが、施設の危機が訪れているということで、すぐにトレーニングを始めることとなった。
黒幕の拠点へ向かう者達以外でも、この施設を守るために力を付けたいと思う者は自主参加でいいと決めたところ、まさかの全員参加。この施設に所属するわけでは無く、旅人として居候させてもらっている戦艦棲姫や、その相方として学んでいる空母棲姫も、このトレーニングには参加すると言い出している。
「私もこの場所は大切な場所だもの。旅をしていて、戻ってこれる場所があるというのは、モチベーションに関わるから」
「戦艦が、そう言うのなら、私も、この場所は、守りたい。何より、あの泥が来るのなら、駆除をしたいと、思う」
戦艦棲姫は元より、空母棲姫もやる気満々だった。この施設の中では瑞鳳、黒潮と並んで新人ではあるが、その力は姫級なだけあって、最初から相当なモノであるはず。
自身のトラウマとなっている泥を目の前にしたら錯乱しかねないが、それを抑えるためにも精神的に鍛えておきたいという考えである。そして、身体を鍛えれば心も鍛えられるというのもあった。
「みんなで一緒に遊ぶぴょん？」
「遊ぶというか、力を付けるのよ。もしここが襲われたら、私もＭｉｃｈｅｌｌｅも困っちゃうでしょ？　そうならないように、撥ね除けるＰｏｗｅｒをつけるの」
「ミシェルもココは大好きぴょん。ジェーナスちゃんがいるし、みんなもいるぴょん。みんな一緒が楽しいから、ミシェルも頑張るぴょん！」
この施設の防衛に関しては、ミシェルも乗り気である。自分の居場所を自分の力で守れること、そしてジェーナスと並び立てることに喜びを感じていた。
最初はその力を使って黒幕の居場所を探し出すという話が出ていたが、あまりにも危険であることと、鎮守府側でもその対策を研究中

であるため、ミシェルが戦場に出ることは無くなった。やる気はあったが、ジェーナスがやめてほしいと頼んだことにより、ミシェルも残念に思いながらも素直に従っている。
　代わりに施設の防衛という大きな役目を任されることになったため、さらにやる気を出している。戦い方自体をまともに知っているわけでは無くとも、その力によって役に立つことも確実にあるだろう。
「やることは割と簡単よ。スタミナトレーニング、筋力トレーニング、それとスパーリング。最後のは受けたいヤツだけ受ければいいわ。近接戦闘なんて出来るヤツの方が限られているしね」
　施設の中でまともに格闘で戦うようなことをするのは、春雨、叢雲、潮の３人くらい。そのため、スパーリングは他の２つ以上に、必要だと思った者だけがやればいいと先に念を押す。
「順序としては、さっき言った順にするわよ。まずはスタミナ、次に筋トレ、最後にスパーリング。叢雲、それでも構わないかしら」
「ええ、問題ない。私にもスタミナだとか筋力だとかは必要だと思うから」
　スパーリングを目的としている叢雲も、基礎的な部分を鍛えておこうとちゃんと考えている。スタミナが無ければ近接戦闘を続けることが出来ないし、筋力が無ければダメージを与えることが出来ない。誰も強くなるには大切なことだとしっかり理解していた。鍛えられるところは満遍なく鍛え、最終決戦に臨みたい。
「潮、昨日言った通り、スタミナトレーニングはアンタがメインでやってみなさい」
「はっ、は、はい……や、やってみます」
　声が上ずっていたが、やると言ったのだからやろうと、恐怖を感じつつも頷く。勿論、潜水艦姉妹がサポートに入るし、飛行場姫も口を出す予定。
「妹姫、私も参加していいのよね」
「勿論よ。でも、アンタにそういうこと必要？」
「当たり前でしょ。私だって悔しい思いさせられてるんだもの」
　戦艦棲姫も、一度侵蝕されているためにトラウマが刻まれている。

その時は、自分で出来る限りをやっていたつもりだが、チームワークの前に倒れることになった。注意力が無いとかそういうことは無かったはずなのだが、それでも、視野が狭まっていたのかもしれない。
そういうところを鍛えるためにも参加表明。この施設を守りたいという気持ちだって、他の者と同じだ。
「それじゃあ、私は疲れたみんなを癒すために、いろいろと用意をしておこうかしらねぇ。疲れが取れそうなモノを作っておくわぁ。ありがたいことに、鎮守府のみんなから果物とかもいっぱい貰えてるから、何かしら出来るはずよぉ」
中間棲姫のサポートはそちら側。身を以て鍛え上げるのでは無く、終わった後の精神的な部分。まずは早速レモンの蜂蜜漬けでもとダイニングに向かった。
全員分となると相当な量になるだろうが、全く苦と思っていない。みんなのためにと、ニコニコしながら準備を始めた。
施設一丸となった実力の底上げ。それが今から始まる。

参加者全員がトレーニングウェアに着替えて施設の外に集合。その一番前に飛行場姫が立った。
「それじゃあ早速始めていくわよ。潮、まずスタミナを強化するなら何をするべきだと思う？」
「……走ることと……あと、泳ぐこと……だと、思います」
「そうね。まぁ後者は出来る子と出来ない子がいるから、前者が基本になるわね。ちなみにアタシは残念ながら陸上施設型っていう都合上、何をやっても泳げないから、やりたいと言われても教えることが出来ない。潜水艦の子に聞いてちょうだい」
つまり、昨日大鳳達がやっていたように、島をランニングして持久力を高めていこうということ。やることは非常に簡単なのだが、次の言葉により、非常に厳しいトレーニングになる。
「潮、追いつかれないように走りなさい」
「……えと……それは先導という……ことですか？」

「それもあるけど、ちょっと耳貸して」
潮にコソコソと自分の考えたことを伝える。潮は驚きを隠さず、飛行場姫は少し悪い顔。
そして、伝えられたことを潮に発表させる。
「そ、その、私が……先導しますが、私に追いつけたヒトから、トレーニング終了、だそう、です……」
単純に、潮だけが逃げる鬼ごっこということになるらしい。海上は禁止で陸上のみ。持久力と脚力のみで行われるトレーニング。スタミナに関しては潮が追随を許さないレベルなので、全員をそこに合わせるという方針。他の者ならまだしも、スタミナ不足が露呈している混成組には、超過酷なトレーニングである。
それに、当然ながら飛行場姫がそれを命じるくらいなのだから、まともにスタミナがある者でも、そう簡単にはいかない。それを確信して、この方法を取った。
「範囲は施設の中以外。全部外でやること。トレーニング終了条件は、潮にタッチすることよ。潮が走り出してから10秒後にスタートでいいわね。それじゃあ潮、全力で逃げなさい」
「は、はい……それでは……逃げます、ね」
そう言うや否や、潮は全力でそこから逃げ出した。その瞬間、誰もが目を丸くすることになる。あっという間にその場からいなくなったのだ。
潮は飛行場姫の後継者とも言える程に鍛え上げられている。腕力のみならず脚力もだ。自分を守るために鍛えているため、防御性能だけではなく、逃走力も並では無かった。それに加え、無尽蔵とも言えるスタミナを有するため、ただ逃げるだけならば、段違いのスペックを現す。
その潮を捕まえるのは至難の業。それを教えた飛行場姫ですら、全力で追いかけ回してようやくと言ったところ。
つまり、この施設内を全力で走り回ってスタミナを強化しろと言っている。ただ走るだけでは気が抜ける可能性もあるため、若干競技志向を持たせた結果がコレだ。

トレーニングと思えば苦しくなるかもしれないが、遊び感覚でやれば楽しく出来る。長続きさせるためのコツ。
「はい、１０秒経ったわ。全員潮を追いかけて。当たり前だけど、艤装は使っちゃダメよー」
ニッコリ笑って手を叩いた。あの潮を捕まえろということで、一斉に動き出す。速さでどうにもならないなら頭を使ってでもタッチ出来ればいいのだが、そもそも追いつかなければどうにもならないので、まずは全員全力疾走である。
「ぴょん！　潮ちゃんすごい速いぴょーん！」
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、そんなに速いの!?」
真っ先に突っ込んで行ったのはミシェルである。反応速度もさることながら、初動がかなり速く、一気にその距離を縮めていく。ミシェルがここまで出来るとは思っておらず、ジェーナスも驚きながらそれについていこうと奮闘。
そしてみんながそれを追うカタチで走り出した。立ち止まっているようなものは誰もいない。最後尾にいるのは他の者の動きを観察したい春雨と、付き従う海風、
「ミシェルちゃん、あんなに素早いんだね」
「ですね。それに、楽しんでる感じに見えます」
トレーニングではあるのだが、ほのぼのとした雰囲気に心が和むような感覚を得る。
切羽詰まっていると言われればそうなのだが、施設全体で１つのことをするというのは、春雨がここに所属することになってからは初めてではなかろうか。一緒にご飯を食べる以外に、同じ場所に全員がいるなんてことはなかなか無い。
「艤装使っちゃダメってことは、私は脚の力を使うなってことだよね。そうなると普通かそれ以下になっちゃうけど」
春雨のスピードの根源は、脚の再展開の衝撃を使った跳躍である。艤装を使うなと言われれば、おそらくこれも使ってはいけないことになる。
屁理屈を言ってしまうと、艤装を使わないとそもそも移動が出来な

いのが春雨である。この脚に関しても、艤装を使っているのでは無く、自分の身体能力の一種と言い張れるのだが、そこは真面目に、ただ走るだけでどうにかしようとする。
「それは仕方ないですよ。持久力を鍛えるためのことですから。でも、全力疾走しないと追いつくどころかどんどん離れていってしまいますよね」
「だね。でも、それが妹姫様の考えてるトレーニングだからね。走り回れば持久力も高まるよ」
話しながらも、集団からは離れない程度に速度を維持している。スピードだけならば現状ミシェルがトップで、その次が叢雲、そこに追いつきそうなのが常日頃からトレーニングをしている大鳳や、負けず嫌いなコロラド。
そこから少し離れて集団となり、後続として春雨達。少し遅めなのは、元々陸上どころか海上でもあまり活動することが無い潜水艦達。潜水艦姉妹は潮が酷い目に遭わないか少しハラハラしているようだが、伊４７はなんだかこんな状況を楽しんでいるようにも見える。
「ヨナちゃん、大丈夫？」
「うん、まだ大丈夫」
春雨の問いかけに、笑顔で答える伊４７。いつも水着な分、トレーニングウェア姿は新鮮だし、本人もこんな服を着るのは初めてだと言うほど。そしてそれ自体も楽しくて嬉しいのだと言う。
楽しそうということは、幸せアレルギーに障るのではないかと不安になるものの、伊４７はまだ大丈夫だと走り続ける。スタミナの問題はあるとは思うものの、止める気は毛頭無いようだ。
「みんなでこうやって、同じ服着て同じことするのって、楽しいんだね」
「うん、私もそう思う」
「すごく、仲間って感じがして、ヨナ楽しい」
あまり楽しみすぎるとアレルギーが発症してしまうのでそこは程々になるのだが、なかなか出来ない団体行動をすることは、精神的な成長と癒しに繋がる。

「無理はしないでね。妹姫様も、流石にそこまで強要することは無いと思うから」
「うん、引き際はわかってるつもりヨナ。でも、今はもうちょっと楽しみたいヨナ～」
少しだけ速度を上げる。みんなと一緒に同じように走ることで、この時間を満喫するようだ。
「……うん、私も結構楽しいんだ。潮ちゃんを捕まえられるかはさておき、こうやって施設のみんなが一丸となって同じことをするって、すごく楽しい」
「はい、私も春雨姉さんと同感です。こうやってみんなで一緒に鍛えるって、なんだか久しぶりな感じですもんね」
鎮守府にいた頃は、姉妹や他の仲間達と一緒に訓練をすることもあったが、この施設に来てからは全くそういうことはしなくなっている。だからか、春雨も自然と笑みが溢れていた、
「さ、じゃあ少しだけスピード上げてみよっか」
「はい、早く抜けられそうなら抜けちゃいましょう」

最終決戦までの短い時間ではあるが、こういうカタチででも一致団結出来ていることで、施設内の士気は青天井に上がっていく。

特化した回避

施設全体が参加するトレーニング。その始まりは、スタミナが施設内でトップを誇る潮を捕まえる鬼ごっこである。全力疾走でもしばらく走り続けられるくらいの潮を追いかけ回し、タッチしたものから勝ち抜けとなる。

回避性能に自らのスペックを偏らせている潮が相手であるため、誰もが手を抜くことが出来ない過酷なトレーニングになる。捕まえるまでは終わることが出来ず、時間が経てば経つほど消耗もしていくため、どんどん不利になるのもわかっているからだ。

後ろから追われている潮は、それはそれで気が気でない。施設のほぼ全員が自分を捕まえるために追いかけてくるという圧力は、その溢れた恐怖を駆り立てるには充分すぎた。

捕まりたくないという気持ちが恐怖に紐付けられ、理性を失っているわけではなくとも、その走りは時が経つほど速くなる。

「潮ちゃん、待つぴょーん！」

「ま、待てと、言われて、待ったらトレーニングに、ならないよぉっ」

追いかける団体の先頭は、変わらずミシェルである。この鬼ごっこをトレーニングではなく娯楽の延長として楽しんでいるからか、ニコニコ笑顔で駆け抜けた。

脚の速さだけで言えば、ミシェルは潮と同じくらい。全力疾走であるため、最終的にはスタミナ切れになるだろうが、互いにガス欠の気配はまだ見えない。始まったばかりだからこその風景とも言える。

「体力作りのトレーニングと言ってますけど、これはむしろ頭脳戦ですよ」

大鳳がボソリと呟く。ついていけているのがミシェルくらいであるため、他の者は走る速度では潮に追いつけていない。それは潮のことを気にかけ続けており、潮からの軽度の依存の対象にもなっている飛行場姫ならば、こういう展開になることくらい察していたはずだ。

それなのに、タッチするまでは終わらないと決めたのは、ただの持久力アップを目指すトレーニングではないからだ。勿論、常に全力疾

走でなければ、潮との距離は開く一方。頭を使っても届かない場所まで行ってしまうだろう。全力疾走をしつつ、さらに作戦を立てて、潮を追い込む。身体だけではなく、心も鍛える頭脳戦である。
「ただ真っ直ぐ走ってるだけじゃ追いつけないですよね。ただでさえ私達はスタミナがありませんから」
「一番速いミシェルで距離が詰まらないということは、そもそも走る距離を変えない限り一生追いつけません。それなら、ショートカットを……」
大鳳が古鷹にショートカットを促した瞬間、潮を追う集団からすぐに離れた2人がいた。いち早くこのトレーニングの意図に気付き、直感的に一団から抜け出し、ショートカットルートを選択。直角に曲がったわけではないのだが、かなり大きめに曲がって、明らかに島の中央に向かうように走り出す。
ただ潮が走るのを追いかけ続けたら追いつくことなんて出来ない。ならば、そもそも走る距離を短縮する。
島だってそこまで広いわけでは無いため、外縁をグルリと弧を描いて走っているのなら、それを結ぶような最短距離がある。春雨は即座にそちらのルートに入っていた。
「やっぱり、こういう時にもまず行きますね」
真っ先に一団から抜けた春雨と海風に感心している大鳳。おそらくそれも、光の道として見えているルートを選択したに過ぎないのだろう。春雨に敬意を持っている大鳳だからこそ納得し、そして追従を選択する。
この行動が取られたことにより、一部が走る距離を短縮するというところに気付き始め、春雨の跡を追うようになった。それを見ても我が道を行くことを変えない者もいるため、集団は見事に二分した。潮の走るコースを真っ当に追従する正規ルートの先頭はミシェル、潮が行く先を予測して最短距離を駆け抜ける近道ルートの先頭は春雨。
ここで集団が二手に分かれ始めたことで、潮もただただ全力疾走を続けるだけではダメになる。
そのまま走り続ければ、最終的には最初に一団から抜け出した春雨

が追い込むだろう。だからといって、そちらを警戒しすぎると速度が落ちてミシェルが追い付く。
「えっ、えっと、ど、どうすれば」
しかし、潮にはどうすればこの状況をうまく切り抜けられるかがすぐにはわからない。今出来ることは、この全力疾走を一切緩めることなく、スピードを落とさないこと。潮がこれをひたすら続けるだけで、他の者はスタミナ切れを起こし、誰も追いつけなくなる。そして鬼ごっこは永遠に終わらない。
問題は近道を選択した集団を正面に捉えた時だが、それはその時に考えることで落ち着いた。極端な話、これはタッチさえされなければいいのだから、もし間近に来られたとしても、その手を躱してしまえばいい。防御力、回避性能に全てのスペックを偏らせている潮には、それも余裕がある。眼前で砲撃を放たれても避けられるくらいには鍛えられている。
こうやって走っている間にも、スタミナが削がれていき、集団から少しずつ脱落していく者は出てくる。真っ先にその兆候が見えたのは、やはりデメリットとしてのスタミナ不足を持っている古鷹。
「こ、これ、かなり、キツいね」
「近道を使っても距離が縮まりそうに無いですからね。こちらが遅いからというのもありますけど」
近道ルートを選択したものの、そちらでも結果的に全力疾走を続けることにはなるので、次第に速度が落ちてくる。そんな古鷹を大鳳が気遣った。流石に後ろから背中を押すようなことはしないが、並走することで鼓舞する。
そして、正規ルートを選択しているコロラドも、最初は先頭集団の一員だったが、明らかに消耗が見えてくる。
「う、潮、速すぎないかしら!?」
「何、もうヘタレてんの？」
「うっさい！」
叢雲に触発されて、意地でもスピードを落とそうとしないコロラド。低速艦であるコロラドが、ミシェルは無理にしても叢雲に追いつ

けているのだから大したものである。
「あっ……」
そうこうしている内に、近道ルートを選択した集団が、少しずつ潮に近付きつつあった。先頭の春雨が最短を常に走り続けるおかげで、最終的な到達点で合流し、そのままタッチという流れが出来そうである。
そしてそれを潮が気付いていないわけがない。走っている視界の端にチラチラと春雨が見え始めている。このままだと進行方向が交差する。
むしろ、鬼ごっこはここからが本番。スタミナが続く限り、潮を追い詰めるために動き続ける。
「海風、大丈夫？」
「問題ありません。春雨姉さんについていくんですから、簡単には消耗しませんよ」
近道ルートの先頭である春雨と海風が、さらに潮に接近。ほとんど並走するくらいにまで来た。やろうと思えば義腕を伸ばすことによってタッチが出来るだろうが、艤装使用禁止であるためにそれは不可能。ならばもうギリギリまで近付くしかない。
「タッチ！」
そして、春雨が潮に手を伸ばす。そのまま走っていれば、その手は潮の腕に当たるくらいの距離。
だが、潮はそこで機転を利かせる。突出した回避性能から割り出された最善は、あえてそこで急ブレーキである。春雨自身は走り続けているため、タッチのタイミングがズレて空振り。
海風がその隙を埋めようと、潮の方へと身体を向けるが、潮は急ブレーキと同時に直角に曲がり、海風を擦り抜けるように回避。さらにそこから速度を再び上げる。足腰まで鍛えられているため、そんな身体に負荷がかかりそうな行動でも、表情一つ変えずに繰り出した。
常に怯えているような表情なので、周りには潮に負担があるかどうかは判断出来なかったのだが。
「うわっ、潮ちゃんすごいなぁ。最後見えてる光の道が消えたよ」

「春雨姉さんに見えている最善の道を逸れたということですか!?」
「うん、だからタッチ出来なかったんだね。私の最善は近付くところまでだったんだ」
あくまでも近付くまでの道は最善を選択していたが、タッチするところの最善はまだ見えていなかったということだ。むしろ、先頭にいたことでタッチまでは出来ないと示唆されていたのかもしれない。
「でも、これだと私達はまだ終われないからね。もう少し頑張らないと」
若干消耗はしているものの、まだ全力疾走は出来そうなくらいは体力が残っている。一抜けとは行かなかったものの、一度ここで見たことによって、最善はまた更新されるだろう。
一方、春雨のタッチを回避した潮は、急カーブしたことで近道ルートを選択した者達に一気に近付くことになる。避けているはずなのに自分から近付くことになったことで、実際は春雨の選んだ道がこれを狙ったものであることに気付かされた。
ここでタッチされないようにするには、もう全ての手を回避するしかない。触れられたらアウトなので、大きく小さく動き、自分に襲い掛かる魔の手から全力で逃げ回る。
「挟み撃ちでも避けちゃう!?」
「逃げ道を塞ぐしか無いですね」
一番のタッチを狙った白露も外し、その動きを見て挟み撃ちを狙った大鳳も外し、もう1対1では無理と判断して4人がかりで四方を取り囲むことで逃げ道を封じる策に出る。
そこまでしても潜り抜けるのではという恐れもあったが、そもそもまず取り囲むことが困難。素早く動き回り続けるため、常に正面が開けているポジションを維持し続ける。手が伸びてきたらその開けた方向に一気に蹴り出し、また次の開けた方向を向く。これの繰り返し。
実際、全力疾走するよりも体力を消耗するフェイズが始まっていた。体力だけでなく精神的にも圧をかけ続けられるため、追い詰める側の方が妙に消耗していくようだ。

「潮ちゃん、タッチぴょーん！」
そこに正規ルート組も合流。大人数で取り囲むことになり、潮の逃げ道はさらに塞がれる。
しかもミシェルは背後からの突撃。勢いを殺さずにほとんど体当たりのように飛び込むため、避けるのも気が引けるという荒技。
しかしルールとしてタッチされてはいけないので、潮は小さく謝りつつもミシェルの飛び込みを回避。そのままヘッドスライディングのようになるミシェルは、全面土に塗れながらも笑顔を絶やさない。
「すごいぴょん、避けられたぴょん！　潮ちゃんカッコいいぴょん！」
痛みはあるだろうがそれすらも感じさせず、すぐに立ち上がって潮を追いかけ回す。ミシェルだけはトレーニングではなく鬼ごっこの意識なので、これも完全に遊び。だから何をやっても楽しい。
実際、これだけの大人数に追いかけ回されてもまだ一度たりとも触れられていないというのは凄まじい。惜しいタイミングは何度かあれど、結局まだ触れられていないのだから意味がない。
「ホンット、触れられないわね！　槍があれば確実なのに！」
「それじゃあ意味ないでしょうが。バカなの？」
「うるさいコロ助！」
ここの諍いは相変わらずだが、この鬼ごっこを全力で楽しんでいるように見えた。叢雲も心の底からの苛立ちではない。
「ま、まだ捕まりたくありませんからーっ！」
開けた道をうまく潜り抜け、また大きく引き離そうとしたその時、眼前に現れたのは潜水艦姉妹。
最も潮の近くにいた者であるため、その行動の予測は他の者よりも出来ていた。どのタイミングで姿を現そうかと考えて考えて、今だと並んで正面に立った。
「潮、タッチ」
「鬼ごっこはおしまい」
走ってくる勢いを殺させないように寸前で出たことで、そのまま手を伸ばすだけでどうにかしようとした。
だが、潮はそれだけでは止まらない。

「ご、ごめんなさい！」
そんな姉妹のタッチを回避するように、その場で跳んだ。飛行場姫に鍛え上げられているだけあって、艤装は無くとも身体能力は非常に高く、駆け出した勢いもあったため、潜水艦姉妹の頭上をギリギリで跳び越えてしまったのだ。
そんなことが出来るならば、四方を囲んだとしても乗り越えられてしまう可能性は非常に高かった。
しかし、これは本当にギリギリな時にしか使わない裏技みたいなもの。何故なら、跳び越えた先が見えていないから。
「あ」
着地する先には、伊４７が立っていたのである。潜水艦姉妹と共にここまで追い付いてくるのにもかなり体力を使っており、一団の最後尾にいた伊４７は、やっと追い付いたと思ったら跳んできた潮の着地点にいた。
「よ、ヨナ～!?」
「危ない！」
そこで潮が咄嗟に取った行動は、うまく体勢を変えて伊４７に抱きつき、受身を取るようにそのまま地面を転がること。このおかげでお互いにダメージはなく、むしろ伊４７は潮の持つ柔らかさによって完全に守られていた。
「だ、大丈夫、ですか!?」
「大丈夫ヨナ～。潮ちゃんのおかげで、痛くも痒くもないヨナ」
無事に済んだことで一安心。そしてここで、何気についてきていた飛行場姫が一旦ストップする。
「一抜けはヨナね。偶然すぎるけど、潮にタッチ出来てるんだもの」
言われて伊４７は茫然。潮もこれは仕方ないかと納得した。

鬼ごっこによるトレーニング、一抜けは伊４７。予想外の展開に、誰もが変に笑えてきてしまっていた。

訓練は続く

スタミナトレーニングとしての鬼ごっこ。真っ先に抜けることになったのは、ちょっとした事故が重なった結果、偶然にもそこに居合わせた伊４７となった。潮から抱き締めることになるというアクシデントではあるが、タッチしたのと同じ。

「ヨナは一旦外れて、こっちに来ておきなさい。あと、本当に大丈夫ね？」

「うん、大丈夫。ヨナもちょっとは慣れてきてるヨナ～」

飛行場姫が心配しているのは、伊４７の幸せアレルギーだ。このトレーニングに参加しているだけでも、仲間達と共に行動するという幸せを感じ、伊４７には毒になりかねない。最後の潮からの抱擁なんて、状況が状況とはいえ、アレルギーの発症条件に抵触する可能性は充分にあった。

だが、今の伊４７は顔色も悪くなく、消耗もここまで全力疾走したことによる疲労くらい。しかし、このまま幸せを感じ続けるとそのまま発作を起こしかねないので、ここで一抜け出来たのは伊４７のためにもなった。

実際、伊４７はここ最近、幸せアレルギーの発症が少しではあるが緩和されている。理由はいろいろと考えられるが、そもそもの施設に所属する者が増えたことによる順応が大きなモノであった。

本来ならそんなことでアレルギーが緩和されることなんてないのだが、伊４７のそれは、体質と言うよりは精神的な部分が大きい。そのおかげか、完治はせずとも症状が軽くなることはある。

「それじゃあ、まだまだ時間はたっぷりあるから、続けていくわよ。潮は休憩ほしい？」

「い、いえ……大丈夫、です……。疲れはまだ感じていないので……」

「アタシはアンタが疲れてるところ見たことないんだけどね。じゃあ走って」

コクリと首を縦に振った後、すぐさま走り出した潮。あっという間にその場から離れていく様は、あれだけ走り回って一切の休憩をする

ことなく再開しているとは到底思えなかった。
「うー、いっちばーんはダメだったけど、次こそはあたしが……！」
「気負ってたら2番も難しいかもしれませんよ」
一抜けの座を手に入れることが出来なかった白露が悔しそうに呟くが、春雨があしらうように一言。
「むしろ、何番とか関係なく、チームワークを見せないと、潮ちゃんには追いつけませんし、タッチなんてさらに遠いです」
「だよねぇ。さっきみたいなワンマンプレイみたいなのは１００％通用しないねありゃ。せめて２人で組むか、それでも足りないくらいか」
「がむしゃらに走っても無理です。誰かと示し合わせなくても、その行動に連携すればいいと思いますよ。白露姉さんはそういうの得意だったでしょう」
少し話している内に１０秒経過。作戦を立てる余裕なんて与えられず、２回戦がスタート。
「ミシェル、いっきまーす！」
やはりと言っていいのか、まず駆け出したのはミシェルである。先程までと変わらず、潮と同じくらいの速度をしっかり出していき、正規ルートの先頭に立つ。ここは先程と変わらない。
ミシェルには追いつけないかもしれないが、その保護者としてジェーナスもそちらについていく。先程までの全力疾走で消耗が見え始めているが、まだまだ行けると言わんばかりに縋り付いた。
だが、他の面々は少し考えるようになった。２手に分かれて挟み撃ちにし、あれだけわちゃわちゃして追い詰めたとしても、潮自身もあらゆる手段を使って回避する。ただ避けるだけではなく、ジャンプまで含めた文字通り縦横無尽な動きをしてきた。
そのため、それを封じる、もしくはそうされてもいいような追い詰め方をする方向にシフトしていきたい。しかし、先程と同じ手段はもう通用しないだろう。何故なら、潮は一度やられたことは忘れないから。
「……よし、今度はちょっと作戦を変えてみよう」

春雨がその瞳を白く光らせた後、最善の道として選択したのは、またもやショートカットルート。正攻法、潮の走った道をそのまま走ってどうにか出来るものではないため、今回は最初から最短距離を割り出してその道を駆け抜ける。

今度ばかりは半々ではなく大多数が春雨の選択した道を使うことにした。潮が駆け抜ける道よりも短い距離で無ければ、そもそも追いつくことすら出来ないのだから。それでも全力疾走を続けなければならないので、消耗はやはり激しいものになる。

「姉さん、次の作戦はどうするんです？　これだとさっきと同じですが」

「ミシェルちゃんのおかげで潮ちゃんは正攻法のルートを使ってくれるから、さっきと同じように追い込むことは出来るけど、問題はそこからだね。四方八方を取り囲んでも避けちゃうから、どうにか隙を作るよ。そこで誰かに捕まえてもらうから」

この言い分では、自分が先に抜けようというつもりは無いようである。他の者達を先に抜けさせることに専念する生粋のサポーター気質。

スタミナはまだ充分保ちそうであるため、余裕があるのならまず仲間達の動きを観察する。春雨の目的はどちらかと言えばそちらだ。全員に対してサポートが出来るように、その行動の癖を見たい。そのためなら、別にすぐに抜ける必要なんて無いのだ。

先程のタッチする瞬間に光の道が消えたのも、春雨がそう思っているから起きたことなのかもしれない。潮の実力もあるだろうし、別の要因はいくらでも思いつく。だが、もう少しみんなと一緒にこの時間を楽しみたいという気持ちも少なからずあった。それが反映されたかのような道。

まるで、誰にとってもそれが最善だったと言わんばかりである。春雨にとっても、仲間達にとっても、その道は最も求めているモノ。

「流石は姉さんです。自分を後に回してでもサポートするだなんて、海風は浅慮だったかもしれません。常に仲間のことを思いながら行動出来ることは素晴らしいことだと思います。でも、それだと姉さん

はいつ抜けるのですか？」
「その辺りは多少見計らって、自分が厳しくなったらいくよ。今はまだ大丈夫だから」
　むしろ、スタミナトレーニングならば自分の限界まで走り回った方がいいと考えていた。ありがたいことに今はまだ限界が見えていないようなのでサポートに徹することが出来る。
　そうこうしている内に、再び絶好のチャンス到来。ショートカットをしたことによって潮に最接近する。ここからが本番。
　ここに来るまでにスタミナは持っていかれており、既に数人が脱落している状況。先程よりも取り押さえるのに使える人数は若干減っている。
「追いついたよ、潮ちゃん」
「ま、まだ、捕まるわけには、いかないから」
　ここからは先程と同じように全力疾走ではなく頭脳戦。牽制のしあいによる別方向のスタミナ消費が始まる。潮はそちら方面でも無尽蔵のスタミナを発揮する。
　正面から突っ込むだけでは意味がない。それならば、避けられる位置を固定する。これが常套手段だ。艤装が使えればいくらでもどうとでも出来るのだが、今はあくまでも身体能力一本でこの現状を打破する必要がある。
　先程は無理にタッチしに行って避けられ、そこから一斉にタイミングを見計らって突っ込むという手段を使うことになったが、今回はもう少し搦め手を使う必要があるだろう。それにも消耗したスタミナをより一層使うことになるのだが。
「こっち！」
　潮の利き手側から攻める春雨。そしてやはり、ここで光の道は途絶えた。まだ自分がタッチするタイミングではないということなのだろうと納得し、次の一手に託す。この行動をするからこそ、仲間達が抜けられるというのなら、春雨は喜んで自分を犠牲にするだろう。命のやりとりをしているわけではないのだから尚更だ。
「ま、まだ！」

その手を即座に避ける潮。先程よりも俊敏に、大きく間合いを取ることで、先程のような取り囲まれ方をしないように。速さは今ここにいる者達の中でもトップクラス。その行動を瞬時に判断出来れば、そこに追いつける者は限られてくる。
「と、通り越しちゃいそうだっぴょん!?」
その回避方向に、ミシェルが突撃していた。別に潮のことを見ていたわけではなく、楽しみながら走り込んでいたせいでブレーキが利かず、潮の背後から体当たりをするような状況になっていた。蹴躓いたことによって脚に対してのタックルになっている。
当たりどころが悪ければ、腰をやってしまいそうな姿勢。いくら潮でも、これを喰らったらダメージを受けてしまう可能性があった。
「わっ、ちょ、ごめんね!?」
潮はそれも咄嗟に回避する。ミシェルの声が事前に聞こえたために反応が出来た。軽く跳び越えるようなカタチでステップを踏み、ミシェルの身体を軽々と避けた。
「危ない危ない」
そのミシェルは春雨がしっかりとキャッチ。潮に対するタッチにはつかっていないからという屁理屈を用意しつつ、再びヘッドスライディングをするようなことが無いように、義腕を少し伸ばしてミシェルを支えた。
さっきはやろうと思ってやったことなので受身は完璧だったが、今回は勢い余ったような状態だったため、おそらく顔面から地面に突き刺さっていた。春雨が支えなければ、ミシェルは鼻血を出すくらいの怪我をする羽目になっていただろう。
「ありがとぴょん春雨ちゃん！」
「どういたしまして。気をつけてね」
「ぴょーん！　楽しくて周りが見えなくなっちゃうぴょん」
楽しいと言っているのなら、それはそれでいいだろう。終始笑顔を絶やさないミシェルは癒しである。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、あんまり無茶しちゃダメよー！」
後ろから追いかけていたジェーナスも少し心配そうに叫んでいた

が、大丈夫であることを大きく手を振って伝えたことで安心したようである。
　そうしている間にも、潮は申し訳なさそうにそこから逃走。トレーニングの最中ではあるため、やらねばならないことを全うする。
　だが、ここで若干迷いを出したことで少し動きが遅くなったため、今がチャンスだと追いついた者達が一斉に襲い掛かる。勿論それは潮の恐怖心を煽ることになり、せっかく落ちていたスピードが一気に上がる。
「さっさと捕まりなさいよ！」
「い、いや、嫌ですーっ！」
　怒りのままに突っ込む叢雲は、その圧を避けるために驚異のスピードで回避。槍が使えないことに苛立ちつつ、次の攻撃に転じる叢雲だが、やはりいつもの間合いと違うことと、触れることすら出来ない苛立ちで、動きは先鋭化してはいくものの、同じように潮も先鋭化されていくため、簡単にはいかない。
　しかし、叢雲がそうやって潮の意識を集中させているおかげで、春雨と海風が背後からの不意打ちを決める。
「ごめんね潮ちゃん」
「捕まってください」
　叢雲の同時に三方向からのタッチ。だがこれは先程も似たようなことが起きているため、潮は咄嗟に華麗に回避する。ジャンプで跳び越えると伊４７と同じようなことが起きかねないので、そこは手を潜り抜けるようにしゃがみ込んで、スルリと抜けた。
　しかし、その時に自分の正面を見ていない。そこに誰がいるかはわからない。
「え、ちょっ、ぐえーっ!?」
　そして、潮の頭が近くまで来ていた白露の鳩尾に食い込むに至った。
「えっ、あ、あっ、ご、ごめんなさいーっ！」
「だ、大丈夫、いっちばーん美味しい思い、出来たから、ね」
　震えながらもサムズアップ。タッチしたのと同義となり、白露は二

抜けとなる。

春雨の行動は、これも光の道の通りに動いた結果。

生粋のサポーター気質

２番手として白露が抜けた後、鬼ごっこは苛烈を極めた。やっていることは殆ど同じではあるのだが、潮自身の練度が上がりつつ、追いかけ回す側は消耗が積み重なっていき、時間が経てば経つほどタッチをすることが困難になっていく。

それでも、潮は手加減なんてしないし、追う者達もトレーニングの一環ということで全力で取り組む。ゼエゼエと言いながらも、やめようとはしない。スタミナを無理矢理にでも鍛えているような、そんな感覚を覚える。

「っしゃあ、タッチ！」

「私も同時に、タッチ！」

「ひゃああっ!?」

松竹姉妹が同時に潮にタッチすることで２人同時に抜ける。これで半数を超えるくらいが抜けることとなった。

潮の回避精度はグングン上がってはいるが、それでも確実にクリア出来るようになっているのは、残っている者達の連携力も一緒に上がっているおかげである。

「疲れてきたね流石に……」

「ですね……。姉さんはまだやれそうですか？」

「問題は無いよ。疲れだけだから」

春雨はスタミナに関しては普通。これだけ動き回れば、当然疲れだって見えてくる。額にはじっとりと汗が浮かび、軽く息が切れ始めているくらいだ。

付き従う海風も同じように疲れを見せてはいるが、春雨程ではなかった。スタミナだけで考えれば、春雨と海風は大体同じくらい。先日のトレーニングの時も、疲労を感じ始めるタイミングは同時とは言わないまでも誤差程度だった。

「少し疲れるのが早くないでしょうか。体調が悪いようでは無さそうですが、消耗が激しいのはあまりよろしくありません。今回のトレーニングでも常に前に立っていますが、それが原因でしょうか」

こと春雨に関しては即座に反応する。疲れるタイミングが早いとすぐさま気付き、その原因を探った。
それは、何気ない仲間の一言ですぐにわかる。
「サンキューな、春雨。助かったぜ」
「最後、すごく追い込みやすくなったよ。おかげで竹と一緒に抜けることが出来た。ありがとう春雨さん」
今抜けた松竹姉妹が春雨に礼を言った。２人とも、この鬼ごっこの中で自分達がクリア出来たのは、春雨のおかげだと話す。
「オレ達が回り込んだ時に、潮の死角になるように動かしてくれてたろ」
「潮さんにも苦手な方向みたいなのあるみたいだもんね。潮さんを誘導してたよね？」
「ちょっと大袈裟に動いて注意を引くようにしただけだよ。潮ちゃん、こっちのやることをすぐ覚えちゃうからね。新しいことをやればそれを覚えてこようとするから、その時だけ隙が出来るんだ。そろそろそれもダメになりそうだけど」
さらりと言ってのける春雨。その隙を突いたのは、松竹姉妹の実力であると言葉を添えて。
２０人強いた参加者がこれでついに残り一桁に突入したところだが、その全てにおいて、近道ルートで先陣を切るのは春雨。潮にどうにか近付いて全力疾走を食い止めてから、春雨が手を出すところから一進一退の攻防が始まり、そして少し後に加わった者が春雨が作り出した隙をついてタッチする。
潮は正規ルートですらあの手この手を使って変えてきており、その都度、春雨も新たな手段をその場で考えている。時には近道を使うことなく、むしろミシェルと共に正攻法で突撃することもあった。それが最善の道であると判断したため。
「よくもまぁ、しんどい状態で考えられるもんだ。オレには出来ねぇよ」
「私も全力疾走しながら何か考えるっていうのは出来ないなぁ。そもそも疲れで頭が回らなくなっちゃう」

「だよな。そういう意味では、春雨ってすげぇな。援護のプロだ」
ここまで褒められたら悪い気はしない。褒められている春雨だけではなく、海風も。尊敬し、敬愛し、心酔する姉が持ち上げられるところを見て聞いているだけで、よくわかってくれたという気持ちでいっぱいになるというもの。
それと同時に、春雨の疲労が、仲間達全員に気を遣い続けていることから生まれていることを理解する。その中に自分も含まれていることも。
自分が春雨を支えていこうと思っていても、実際はそれ以上に支えられていると実感した。
「姉さんの疲労を少しでも減らせるように、私が頑張ります」
「うん、ありがとう海風。私は自分のことが見えないから、私のことを見ていてくれるのは嬉しいよ」
春雨から労われるだけでも、海風は喜びで身を震わせるほど。その様子を見て、松竹姉妹はニコニコニヤニヤ。この姉妹愛には、２人とも敏感に反応してほっこりしていた。

鬼ごっこはさらに続き、ここでついにミシェルが抜ける。
「はぁ、はぁ、すっごく、楽しかったぴょーん！」
遊び感覚で楽しんでいたミシェルも、そろそろ疲れが出始めたところで春雨が機転を利かせて潮にタッチさせた。思いつく限りのあらゆる手段を使っているため、そろそろ手数が減ってきてはいるが、この中では最も戦闘に向いていないミシェルをクリアさせるところまでは行く。
抜けたミシェルは、先にクリアしていたジェーナスのところへと駆けていき、抱き着いたかと思った瞬間には寝息を立てていた。遊ぶだけ遊んで、疲れたから寝る。まるで子供であるが、それがミシェルらしさとも言えるだろう。
「ふぅ……あと５人……」
残ったのは５人。春雨と海風に加え、スタミナがかなり厳しい古鷹

と、ドロップ艦が強化されただけの瑞鳳と黒潮。ここまで来るともう正攻法では潮に追いつくことが出来なくなり、全力疾走されるとまず間違いなく撒かれる。
　ちなみに潮はまだ息一つ切らしておらず、鬼ごっこが始まった当初からほぼ何も変わっていないという恐ろしさ。
「妹姫様、提案があります」
「何かしら」
　ここまで全てを見守ってきた飛行場姫に春雨から1つ提案をする。
「多分ですけど、ここから潮ちゃんにタッチするのは、もう不可能です。私も含めて、残っている体力は潮ちゃんの半分にも満たないでしょうし、そもそも足の速さが違います。艤装も使えませんしね」
「そうね。見ている感じ、そろそろ限界かなとは思っていたわ」
「でも、タッチ出来ずに負けというのは悔しいじゃないですか。なので、最後は取り囲んだ状態から始めさせてもらえませんか」
　今まではミシェルがいたから追い詰めることが出来た。正規ルートを常に選び続け、潮の動きを固定化していたおかげでどうとでもなった。だが、もうそれも出来ない。
　そうなると、この鬼ごっこは一生終わらないだろう。潮のスタミナが尽きるのはまだまだ先で、その前に残った5人が間違いなく倒れる。その間も先に抜けた者達は終わるのを待ち続けることになるのだ。
　今先に抜けている者達は、ゆっくりと疲れを取りつつ、早く抜けた者はストレッチや早めに筋トレなどを始めているくらいである。
「確かに、この状態からは不毛になるわね。いいわよ、その提案は採用。潮、それでも良かったかしら」
「えっ、は、はい、大丈夫、です」
　潮としても、ここからは申し訳なさまで見えてきた。春雨と海風は率先して抜けようとしていないのが筒抜けであるためまだいいのだが、古鷹を見ているとだんだんと手心を加えた方がいいのではと思ってしまうのだ。
　それだけ古鷹の消耗は見てわかるレベル。汗だくで、息も切らして

おり、立っているのが精一杯と言わんばかりにフラフラ。今は気力だけでここにいるように見える。
　しかし、潮に出されている指示は、誰がどうであれ手を緩めることなく全力で逃げること。疲れを見せていようが容赦なくやれというのが飛行場姫のトレーニングである。潮はそれを忠実に守り続けていたに過ぎない。
　それが今解消されるということで、潮は内心ホッとしていた。このままやっていたら遺恨を残すかもしれないという恐怖があったので、それが失われたことは非常に大きい。
「じゃあ5人で囲んで。ある程度の距離は空けるのよ。間近で始めても意味がないから」
　少しだけ作戦会議をした後、飛行場姫に指示され、潮を取り囲むように5人を配置。ちょうど五角形を描くような形となり、その中央に潮。
　距離的には鬼ごっこの時よりはかなり近い。やろうと思えば一瞬で終わるような間隔。5人一斉に突っ込んだら、1人くらいはタッチ出来るのではと思えてしまう。しかし、相手は回避性能に全てを置いている潮だ。纏まったらそれを全て潜り抜けて包囲網から抜け出し、そこからはまた鬼ごっこ開始。そのまま終わらなくなるだろう。
「それじゃあ始めてちょうだい」
　開始の合図が出ても、そう簡単には動けない。動いたらそこが隙になりかねない。だから、動くなら同時に動く。これしかない。
　潮も３６０度全てを警戒している状態。後ろから近づかれたり、纏めて突っ込んでこられたりは、ここまでさんざんやられてきた。全力で逃げるのなら、いくらあちらが疲れ切っていようが関係ない。
「よし、行こう」
　最初に動き出したのは、やはり先導役としての動きを強めに発揮している春雨。この動きに合わせて他の者が動き、さらにそれに合わせて春雨が動きを変えるというのがもう定石となりつつある。
　そして、それはこれまで潮も何度も見ているために即座に順応する。突っ込んでくる春雨からとおのけば、後ろに控えている3人に捕

まる。だからと言って横に回避は春雨に反応されて詰められる。跳ぶのは伊４７の時のこともあって以ての外。
そうなると、潮が取る行動はたった１つ。春雨自身に突撃すること。回避しなくてはならない存在が１人だけになるため、まだ対応がしやすい。怖いのは海風の存在。
「今の私なら避けられるかもね」
「っ……」
小さくフェイントも入れながら、春雨の妨害を潜り抜けようと体勢を下げてステップを踏む。ちゃんと前を向き、突撃する場所に誰もいないことを確認しながら。
「私１人なら、だけど」
勿論、春雨１人で対応するわけがない。当たり前のように海風が隣に立ち、潮の進行方向を見極めて妨害に入る。
そこでさらにステップを踏み、海風の妨害すらも潜り抜けるために大きく横に跳ぶ。本来ならばこれで２人の壁をクリア出来るのだが、当然海風だってここまでずっと見続けているのだから、この回避にも順応している。
「止めますよ、流石に」
同じ方向にステップ。なるべく春雨に負担を与えないように、海風が動き回ることで、潮の行動をなるべく制限する。
避ける方向を固定することによって、むしろ自ら捕まりに来るくらいにさせるのが目的だ。それこそ、伊４７や白露の時のように避けた先にいて体当たりを喰らうくらいの覚悟で。
だが、やはり一筋縄ではいかないのが潮だ。妨害に対応して一瞬後ろに下がったかと思いきや、すぐさま突撃の姿勢に戻り、回避出来る隙間を探し出す。妨害そのものを空振りにさせることで体勢を崩し、逃げられるタイミングを広げようという算段。
「こっち」
春雨の光の道はそれも見逃していない。その突撃を止めるように、先に春雨が突撃。前のめりになりつつある状態で突っ込まれたら、どうしても姿勢はめちゃくちゃになる。

しかし、これも一度潮は見ていた。春雨自身が大袈裟な囮となって、背後から忍び寄る者の気配を極端に消す手段として使われたことを。ならばと、突撃姿勢のまま前ではなく横に向かう。
「だよね、うん。見えてる」
そしてそれは、春雨の手のひらの上。どちらに回避するかも光の道で見えていた。それを妨害するために、ほぼ同時のタイミングで春雨が飛びつく。
この時、まだ光の道はタッチするまでの道ではない。
「まだ……っ」
咄嗟に足を前に出し、突撃をキャンセル。春雨から離れるようにバックステップ。勿論真後ろに海風がいることは確認済み。そこに直撃しないようにちゃんと隙間を狙って。
「海風、少し横」
「了解です」
それに対して、春雨が海風に小さく指示を送る。潮が向きを変えた方向に目配せをすることで海風は瞬時にその意図を察し、ほんの少しだけ立ち位置をズラす。
それだけでも潮にとっては妨害が増えたと感じ、より一層大きめに跳ぶこととなる。
すると、そこには疲れ切っているが意地で向かってきていた古鷹がいるという算段だ。フラフラではいるものの、そのおかげで殺気立っておらず、ただそこにいるだけの存在となりつつあった。
「っっっ」
これでは伊４７の時の二の舞だとすぐにステップを強引に曲げる。限界が近い古鷹にこの勢いでぶつかったら、怪我をさせかねない。それがまた恐怖となり、その瞬発力を生み出した。
「うわ、ホンマに来よった。すごいなぁ春雨は」
「うん、私もちょっとビックリ」
そうなると今度はどちらに動いても誰かがいる状態を作り上げるため、瑞鳳と黒潮が両サイドに立っている。元は古鷹をサポートするため、しかし、こうなるであろうという春雨からの指示を守ったこと

で、中央に古鷹、その両サイドに2人というフォーメーションが見事に決まった。
「追い詰めたよ。これで終わるためには、5人同時にタッチしたかったんだ」
右に行っても左に行っても逃げ場が無くなり、下がろうにも春雨と海風が迫ってきている。先程はここから跳び越えたり潜り抜けたりしたが、それも間に合わない。
「これで、終わり」
逃げ道を完全に封じられ、行き場を失った潮は、流石に諦めたようにその場に止まった。
そして、5人が同時にタッチすることで、鬼ごっこは完全に終了となる。

最後は5人がかりとなったものの、作戦を打ち立てたのは紛れもなく春雨。生粋のサポーター気質は、今ここに違うカタチで開花していく。
最後は5人の光の道が潮に集約していた。タッチが出来ないわけがない。それが誰もの最善の道だったのだ。

頼り頼られて

鬼ごっこによるスタミナトレーニングが終了し、ここで一度休憩。全員抜けるまでやっていれば自然と時間も経ち、程よく昼食時となる。先に抜けた者達はある程度休息も出来ているため問題ないが、最後まで残っていた者達はまだまだ疲労が取れない。特に、スタミナ不足の古鷹はタッチした時点で疲労を訴えるように崩れ落ち、春雨達が手を貸して何とか施設に戻ることは出来た。

「ご、ごめんね……私、本当に体力無くて……」

「仕方ないですよ。そういう身体にされてしまってるんですから」

ダイニングの椅子に座らせられて、ようやく一息吐けた古鷹。ここまで運んでくれた春雨と海風にお礼を言いながらも、自分の体力の無さを呪った。

この施設の中でも、トップクラスに疲労しやすい身体にされている。全ては魂の混成が原因なのだが、どうしてもこれは払拭することが出来ない。トレーニングで少しずつ解消しようと努力しても、長期戦は出来ないようなもの。

龍驤戦ではギリギリ保ったが、今度の最終決戦はそれ以上に過酷になることが確約されているようなもの。そんな中で、体力が保つかどうかはわからない。むしろ、保たない可能性の方が高いだろう。

「せめて、もう少し保てばいいんだけどね……。これだけ疲れてると食欲すら湧かないんだ……」

不甲斐ないと苦笑する。別に古鷹だけがぐったりしているわけではない。同じようにスタミナ不足のコロラドだって、今は身体を動かしたくないと言わんばかりにじっとしている。

コロラドが鬼ごっこから抜けた時は、叢雲と同時に攻めた時。口には出していなかったが、互いにどちらが先に抜けるかを競い合っているように見えたため、春雨が上手く動かして同時に抜けるように仕向けていた。

だが、スタミナ不足かつ元が低速戦艦であるコロラドが、スピード自慢の駆逐艦と並んで動くのはかなり無理をするようで、終わった後

に一気に疲労が来た様子。早めに抜けて休憩をしていたものの、簡単には回復しないようである。
「そういう子もいると思って、疲れが取れそうなお昼ご飯を作っておいたわぁ。ちょっと匂いが強いけど、効果は抜群だから期待してちょうだいねぇ。食べ始めたらモリモリ入っていくわよぉ」
話しながら配膳する中間棲姫。監督役をしていた飛行場姫と、まだまるで疲れているように見えない潮がそれを手伝い、テーブルの上に並べていく。
その料理は、疲れ切った身体に染み込むようなスタミナ回復ご飯。ニンニクが利いた焼き物や、酸味で回復を図っている酢の物、そして休息中にも食べられるようにと最初に作られたレモンの蜂蜜漬けなど、仲間達に今一番必要なモノを出している。
幸いにも、この施設にいる者達は、食事での好き嫌いはない。一番そういうことを言いそうなミシェルも、元は生魚を食べていた駆逐イ級だったからか、なんでも美味しそうに食べる。そのため、好みまで考えずともみんなが喜んで食べていた。
「デザートも用意しておいたわぁ。これで頭の回転も良くなるでしょう」
そこに甘味を加えることで、身体だけではなく心の回復も考えている。いつもより少しだけ品数が多いことで喜びもあり、いつも以上にこの食事の時間が賑やかに思えた。

午後からのトレーニング、筋トレは少し休憩した後。食後すぐに動くのは身体のためにはならないということで、しっかり疲れを取った後からやることに。
これはいつものことではあるのだが、農作業や漁とは違う、戦うための準備による疲労であるため、すぐには回復しない。おそらく、気疲れというのもあるだろう。
だからか、一部の者は短時間でもと昼寝を始める者すらいた。グッスリ眠るわけではなくとも、それで多少は回復出来る。

「私も少し仮眠を取ろうかな……。結局最後まで動き回ってたし」
春雨も少し眠ることで消耗した体力を回復しようと考えた。鬼ごっこを最後まで抜けることなく参加し続け、その時その時で潮にタッチするありとあらゆる手段を立案し、全員の動きをコントロールするかのように状況を進めたことで、心身共に疲労を感じてしまっているからだ。
とはいえ、それが辛い疲れではない。やり切ったことによる充実感から得られる満たされたような疲れだ。忌々しいわけではなく、心地よさまである。
「姉さんは私達のことを思って最後まで残り続けてくれたのですから、仮眠くらいでバチは当たりませんよ。むしろ、次のためにも今だけはゆっくり眠ってください。姉さんが身体を壊したら意味がありませんから」
隣の海風も、春雨の休息には賛成。今はただのトレーニング。しかも自主参加制なのだから、眠り続けて筋トレを休んでしまっても誰も咎めないくらいだ。スタミナトレーニングは疲れ果てていてもやめるとは言わなかったから続いただけ。
そのため、海風としてはいくらでも休んでくれて構わないと心の底から言えた。眠いのならば眠ればいいと。
「うん……それじゃあ少しだけ。海風……ちょっと膝貸してね」
「え」
何かを言う間も無く、春雨はその場で眠るために海風にもたれかかるどころか、膝枕の状態になってすぐさま寝息を立て始めた。
見た目にはわかりづらかったが、余程消耗していたのだろう。徐々に人数が減っていったとはいえ、最初から最後まで自分以上に仲間のことを考えながら動き続けていたのだ。総合したら、古鷹くらいに疲れ切っていたのかもしれない。
しかし、海風はそれどころではなかった。夜眠る時に抱き枕にさせてもらっているくらいのことをしているにもかかわらず、膝枕というのは今までやったことがなく、ここはダイニングであるため人目もある。別に恥ずかしいとかそういう気持ちは微塵もなく、むしろ愛する

姉に頼られているも同然なので、もっとやりたいと思える程である。
　そのせいで、春雨の頭が自分の太腿に当たった時点で奇声を上げかけた。『え』で済んだのを褒めてほしいレベル。
「あ、春雨寝ちゃった？」
　春雨の獅子奮迅の活躍を早々に抜けたことで見守っていた白露が、少し心配になったのか様子を見に来た。
　同じダイニングにいたためチラチラ目で追っていたのだが、すっと視界から消えたため近付いたら膝枕をしていたという流れ。
「え、と、その、はい」
　春雨を起こさないように大きな声を出さず、しかし身振り手振りで今の心境を表現していた。頼られている喜びと、ゆっくり休ませるための緊張、そして大きな興奮。海風はその感覚で顔を赤らめ、しかし春雨の眠りを邪魔するわけにはいかないと慎重に慎重を重ねている。
「鬼ごっこの時、凄かったもんねぇ」
　白露もその辺りは配慮して小声で話す。隣に座ろうともせず、眠っている春雨の顔を見て穏やかな笑みを浮かべた。４人分の気質が全て、春雨の奮闘を称賛している。
「はい……無理をしているわけでもなく、それでも仲間のことを一番に考えて、ずっと動き続けていました。私達には見せなくても、姉さんは私達よりも何倍も頭も使っていて。こうなってしまうのも当たり前なんだと思います」
「だねぇ。本来の自分を見つめ直せって言ったのはあたしだけど、それで消耗しすぎるのは予想外だったなぁ」
　今までやれていたことを思い出してやってみろと話しただけのつもりが、思っていた以上に出来ており、しかも春雨が得た『辿り着く力』まで組み込んで、さらに成長している。まだそれに身体が追いついていないのだろう。
　これをぶっつけ本番でやっていたらどうなっていたのだと少し怖くなる。黒幕との最終決戦で猛烈に消耗し、戦闘中にまともに動けなくなろうものなら、そのまま死まで見えてきてしまうのだ。ここでこれを知ることが出来たのは運が良かった。

「姉さんだったら、これも順応してくれるでしょう。そしてきっと、黒幕との最終決戦ではその力を存分に発揮してくれます。私達を導いてくれる女神ですから」
今の春雨ならば、黒幕にも確実に通用する。そう確信したような声色で話す海風。白露もそうであってほしいと願う。
「アンタも少し寝たら？　春雨に追い付かなくちゃなんだから、疲れてるでしょ」
海風だって、鬼ごっこでは春雨をサポートするために最後まで残り続けている。春雨ほどの疲労はなくても、眠ってもいいくらいに疲れはあるはずだ。
「いえ、春雨姉さんをその時間に起こすためにも、私はこのまま起きておきます。休憩後まで眠っていたら、春雨姉さんが悲しむでしょうから、キチッと時間に起こさなくちゃですよ。それに、初めて春雨姉さんを膝枕したんです。この太腿に感じる頭の重さや、この寝息を堪能せねばいけませんし。トレーニングウェアは薄着なので、春雨姉さんの息が私に直接かかるんです。それはもう天にも昇る心地で、普段夜に眠っている時よりもレアな体験なおかげで、海風はもう、海風はもう」
「はいはい、やっぱりアンタも寝た方がいいよ。あたしが起こしてあげるから、ちゃんと休みなさい」
疲れで海風はいろいろとまずいことになっていそうなので、白露が強制的に眠らせることにした。本当なら思い切り引っ叩いて強引に意識を飛ばすまで考えたが、流石にそれは可哀想なので、白露が隣で見守ることで寝させることに。
実際、海風も大分疲れてはいたため、落ち着けるタイミングが来た時点でそのまま眠りに落ちた。春雨もそうだが、海風も相当に無理をしていた。春雨に追い付こうと躍起になっているのだから、必要以上に動いている。それを春雨に勘付かれないように隠して。
勿論、春雨は海風が無理をしているのは察している。それでも、自分のためにこうしてくれているのが嬉しくて、何も言わずにいた。海風の一緒に歩いていきたいという意思も察していたから。

「全く、あたしの妹達はどうしてこう、無理をしたがるかな」
２人とも眠りに落ちたところで、白露は独りごちた。

その小さな睡眠は、休憩時間ギリギリまで続いた。しっかり白露が起こし、次のトレーニングを始めるぞと促す。
「んん、んぅーっ、なんかすごくスッキリ出来た気がする。ありがとね、海風」
「いえいえ、私も少し眠ってしまいましたが、この幸せな時間を堪能出来ました。姉さんの温もりは女神の抱擁みたいなものです。私には特に落ち着けるものですから、これからもこんな感じで頼ってくれて何も問題はありませんよ。むしろどんどん頼ってください。私の安眠にも繋がりそうですしね」
心身共に疲れが取れているような表情の海風に、春雨も安心。自分が率先して休むことで、海風も休んでくれると思っていたが、見事にその思惑は当たった。
頼り頼られて生きていくことで、身体だけでなく心も癒やされるということを、改めて実感することが出来たようだ。
「それじゃあ、次は筋トレだね。スタミナと違って純粋に力だから、これはこれでまた違うところが疲れそうだね」
「ですね。春雨姉さんも私も、筋力というジャンルだと少々厳しいと思うので、頑張っていきましょう」
「だね。午後も頑張ろう」

こうして２人の絆は育まれ、姉妹愛はより強固なモノとなる。白露も、妹達の成長を嬉しく思いながら見ていた。
この絆は二度と切れることは無いだろう。一度目のような強引な手段であっても、もうあんな悲惨なことにはならない。

本来の風景

午後からは筋トレ。全身に効くような筋トレを隈なく進めていくのだが、全員参加で外でやっていくのは、どこか体育の授業感があった。

真ん中に飛行場姫、今回は戦艦棲姫も飛行場姫のアシスタントとして真ん中。その周囲に2人か3人で1組として固まりつつも、真ん中の姫達を囲むように配置され、飛行場姫の例に倣って全員で一斉に行動を開始。

「妥当なのは腕立て伏せと腹筋よね。あとプランクっていうのが良いって戦艦が言ってたから、それもやってみるわよ」

「陸で見たモノの受け売りだけど、こういうところで役に立ったのは良かったわ」

どういう理由で筋トレの情報を手に入れたのかは知らないが、多少は戦艦棲姫からの情報があるらしい。

よくよく考えれば、戦艦棲姫もなかなか引き締まった身体をしているので、旅をしている最中にちょくちょく鍛えているのかもしれない。

「こういうこと、鎮守府でもやったよね。基礎体力と体幹を鍛えるって」

「ですね。腕の筋力が上がれば、砲撃のブレが抑えられるという話も聞きました」

「腹筋もだよ。特に時雨は主砲が大きかったから、割と長く鍛えてたなぁ」

堀内鎮守府では、初期の段階での筋トレはそれなりに実施されているらしい。片手で砲撃を放つ者は、初心者の内は撃つ度に照準がブレる。魚雷はさらに衝撃が大きく、腰や脚に接続している者でも重心が傾くことは多い。それを抑えるために、最初のうちは基礎訓練ということで筋トレも含まれていたりした。

ここにいる白露型の3人には、もうかなり前の話。鎮守府のメインの戦力になってからは実戦経験と演習で鍛えていたため、筋トレから

は少し離れていたものの、自主練のようなことがある場合や、新人教育がある場合は、筋トレを行なうこともあった。
それもあってか、３人が３人、腕立て伏せや腹筋は難なくこなしていく。腕立て伏せやプランクの時には胸を邪魔そうにしていたが、深海棲艦化もあり、ノルマに対して苦しさを全く見せない。
この施設に元々いた者達は、農作業や漁によって地味に鍛えられていたことにより、これくらいは当たり前のようにこなしていく。見た目は華奢なジェーナスや伊４７ですら、この程度という感じだった。スタミナは少なくても、筋力は普通にあったりするのだ。
「Ｆｉｇｈｔ，Ｍｉｃｈｅｌｌｅ！」
「ふんぎぎぎ……が、頑張る、ぴょーん……！」
逆に、つい最近ヒトの身体を手に入れたミシェルは、スタミナトレーニングと違って大苦戦。走り回ることは出来ても、筋トレはキツイ様子。プルプル震えながら頑張っているものの、腕立て伏せでは腕を伸ばすことが出来ず、奇声を上げながらそのカタチを維持するだけとなっていた。
「が、頑張って……ね」
「正直なところ、我々にはキツイ」
「水中では不要な部分を使っている」
「艤装のありがたみが嫌というほどわかる」
潮に見守られながらの潜水艦姉妹も、これはかなり辛そう。潜水艦はそもそも陸で何かするわけでは無いため、こういうことは苦手であるようだ。淡々とした声色で話しているものの、腕立て伏せの最中にベチャッと潰れたり、腹筋で身体が起き上がらなかったりと散々。
ここは施設での作業をしている伊４７とは大きく違う。伊４７も農作業は殆どしないものの、深海棲艦化してからの年季が違うのと、艤装の形状もあるため、握力や腕力はそれなりにあったりする。
「楽々出来てるような子は、重りを使ってもう一度やりなさいね。鍛えなくちゃ意味がないから」
しかし、この施設には鍛えるための重りなんてあるわけがない。そこで、今鎮守府でも北上組がよくやっている、１人を背中に乗せての

腕立て伏せなどが始まる。
　最初に組んだ者達で、片方がもう片方の背中に乗る。例えば春雨ならば、海風を背負っての腕立て伏せ。各々が好きに組み合わさり、指示通りにトレーニングを進めた。
「こ、これ、き、キツイ……っ」
「ね、姉さん大丈夫ですか。重いですか」
「多分海風は普通に軽い方だと思うけど……っ、ヒト一人、背中に乗せると、すごく負荷がかかるよ……っ」
　なるべく春雨に筋トレとは違う痛みが無いように、北上が海の向こうでやっているように膝を立てて正座をするようなことはせず、跨るようにベッタリとくっつく。そのおかげで海風の体重のかかり方はある程度分散されてはいるのだが、それでもかなりキツイのは確か。
「１０回も、出来ないかも、しれないっ」
「が、頑張ってください。その後は私が姉さんを背負いますので」
「やるよ、勿論、やるよっ」
　ゆっくりとだが確実に腕立て伏せをこなしていく春雨。むしろゆっくりやった方が負荷が大きく、両腕に乳酸がどんどん溜まっていくことになるのだが、春雨の両腕は義腕。どちらかといえば、海風を支えて落とさないようにしながらの腕立て伏せになっている。
　疲れは胴に集約していき、春雨にとってはかなりキツイことになっていた。背筋が悲鳴を上げそうである。
　スタミナトレーニングの時からそうだが、飛行場姫の課すノルマは、普通よりもかなり厳しい。しかし、出来ないわけではないギリギリのラインを攻めてくるため、全員が厳しいながらもちゃんとクリアしている。
「たはぁっ、な、なんとか出来た……」
「お疲れ様です。少し休憩しますか？」
「ううん、大丈夫。次は海風だよね」
　春雨もかなりキツそうではあるが、海風を乗せた状態での腕立て伏せをクリア。今度は立場を逆転させて、海風の上に乗る。
　ここ最近は近接戦闘組であるおかげで腕力もついてきている春雨

でもかなりギリギリだったわけだが、援護が基本である海風にはさらに厳しい筋トレ。春雨が海風よりも少々小柄であっても、その重さでベチャリと潰れた。
「……も、持ち上がらない……」
手脚を消すと多少は軽くなるのだが、それでも海風にはキツイようである。突然戦い方を変えて順応した春雨とはやはり違った。
「大丈夫？　一度降りようか？」
「い、いえ、頑張ります。1回でも持ち上げられれば、それだけでも私の力になると思いますので。それに、せっかく姉さんが乗ってくれているんですから、ここは努力のしどころです。出来ればもう少し体重を分散させるために、ピッタリとくっついてもらってもいいですか。胴体を背中に貼り付けるように、あとバランスが取れるように脚を私のお腹とかに絡み付かせてくれると、私はとてもとても元気になれると思います」
膝枕以降、割と欲望に忠実になりつつある海風に苦笑しつつも、言われるがままに抱き着くようにしてやると、海風は自分でも言っている通りに力を発揮し、気合を入れた声と同時に腕を上げることが出来た。
やる気の出し方は人それぞれ。海風はそれがあまりにもわかりやすいだけである。
「愛する姉さんの温もりがあれば百人力ですね！」
「そう、だね。じゃあそのまま腕立て伏せやってみようか」
「……これが限界ですかね……。次に身体を下げたら、多分もう姉さんが抱き着いてくれていても持ち上げられない気がします……」
しかし、物事には限界というものがある。今の海風にはこれが精一杯であった。
ヒトを上に乗せた腕立て伏せは流石にみんな苦労をしており、そもそも1人でやるのにも苦労していたミシェルと潜水艦姉妹はさておき、飛行場姫の後継者である潮や、膂力が最初から強めな大鳳やコロラドのような大型艦でも大苦戦。軽々とこなしているのは、コマンダン・テストを背中に乗せていても問題ないレベルで動くリシュリュー

くらい。
「流石ねリシュリュー」
「Ｏｕｉ．　これでもＲｉｃｈｅｌｉｅｕは出先でもトレーニングは怠っていないの」
　戦艦であるというのもあるだろうが、それ以上にリシュリューが自分の身体のことを気遣っているというのもある。
　リシュリューは誰が見ても絶世の美女と言える程の美貌を携えているが、それは本人の努力の賜物だ。
「ただ、こういう時は本当に胸が邪魔なのよね……。艦娘の時はここまでじゃなかったのに」
「それ、聞くヤツが聞いたら血涙を流して襲いかかってくるからやめておきなさいね」
　そうこうしている内に、全員がノルマ達成。ストレッチをして身体をほぐしながら一時的な休憩に入る。
「休憩の後は、希望者にだけスパーリングしてあげるわ。そうじゃなかったら、また筋トレとかを進めておきなさい。戦艦が指示してくれるわよ」
「ええ、任せて。それに、そのまま休憩を続けてもいいわよ」
　戦艦棲姫の視線の先にいるのは、やはりというか古鷹である。重巡洋艦ではあるがほぼ戦艦であるため、筋トレは他の者よりもかなり出来る方だったのだが、身体を動かし続けることでどうしてもスタミナ不足がついて回ってきていた。
「ちょ、ちょっと、長めに、休憩を、貰います……」
　膂力も瞬発力もあるのに、持久力だけがからっきしであるため、総合的に見ればどうしても厳しい。それを補うレベルで気力があるのだが、今でも腕と脚が震えており、立ち上がれないでいた。腕立て伏せの姿勢から変えられず、座ることすら出来ていない。
「古鷹さん、大丈夫？　支えよっか？」
「う、うん……ありがとう白露ちゃん……」
　ここにサポートに入るのは白露。妹達の方はあまり心配がいらないので、こういう時は古鷹を気にかけていた。

２人揃ってあちら側だった時、２人で組んで行動していた時のことが大きく関係している。夜に眠る時も相部屋であるため、白露は古鷹のことを大分気にかけているようだった。また逆も然り。
「ホント、このデメリットは古鷹さんが一番重いよね。重巡に戦艦が入ってるからかな」
「だね……。大鳳さんみたいに大型艦だけとか、コロラドさんみたいに種族違いだけど同じ艦種とかじゃないから、負荷がとんでもなく大きいみたい。今更になって嫌ってほどわからされてる」
「あたしは全部姉妹だから上手いこと適合しちゃってるんだろうなぁ」
　デメリットが大きい理由は、まさに白露が言った通りである。艦種違いでも、中型艦に大型艦を入れてしまっているのは古鷹だけ。一応同じ例に龍驤もいるのだが、あちらはもうそういうところを超越してしまっているため、この重いデメリットを一番課せられているのは古鷹だけだ。
　実際はコロラドも古鷹に次いでスタミナが不足しているのだが、元が戦艦であるため基本の部分が大きいおかげで古鷹よりは長続きする。大鳳も同じ。
「前の戦いはよく保ってくれたよね……。大鳳さんでもフラフラだったのに、私なんてもっと酷かったよ」
「あれはやっぱり、昔の仲間がいたからじゃないかな。それに、海の真ん中で迷惑はかけられないって気を張っていたところはあると思うし」
「否定出来ないなぁ」
　震えがようやく止まってきたか、うつ伏せから座る体勢へ。それでも息はまだあがっており、回復まではもう少し時間がかかりそう。
「……今度は、私が元いた場所から始まる戦いでしょ？　だから、少しだけ、少しだけ気合が入ってたの。いいところを見せたいとか、そういうのじゃないけど……でも、私はまだやれるってところを、見てもらいたいって、思ったんだ」
　最終決戦は古鷹の故郷、大塚鎮守府へ出向してからになる。自分の

人生を狂わせた黒幕への復讐という気持ちもあるが、古鷹としてはその鎮守府に一度戻ることが出来る絶好の機会だからこそ、決戦に参加したいと考えていた。
そして、そこで元々の仲間達と共に戦う。それが古鷹の一番の望み。それを問題なくやれるように、ここで訓練に勤しむ。真面目な古鷹だからこそ、最善を尽くすために努力は惜しまない。
「あたしも応援するよ。妹達も心配だけど、古鷹さんもいろいろと縁があるしさ」
「ありがとう、白露ちゃん」
「一回マッサージでもしておく？　ストレッチじゃあ足りないかもしれないし、筋肉ほぐしておかなくちゃ」
ワキワキと手を動かす白露に苦笑し、出来ることは全てやっておきたいとお願いしていた。そしてあられも無い声をあげてしまうまでがワンセットである。

トレーニングはまだまだ続く。その先にある黒幕との決戦のことを考えなければ、施設の和やかな風景に見えた。

妹姫の力

筋トレ後の休息も終わり、希望者は飛行場姫とのスパーリングを、他の者達は筋トレの続きとして戦艦棲姫からいろいろと教えてもらう段階へと入った。

スパーリングに参加する者は、接近戦を戦闘の手段とする者。わかりやすいのは、槍を使う叢雲、鉤爪を使う春雨、そして刀を使う大鳳。潮も当然接近戦を主体とする者になるが、恐怖が溢れている者として、敵を攻撃出来ないという致命的なデメリットがあるため、このスパーリングには不参加である。結果、参加者は今挙げた3人と、その相方といえる海風と薄雲。

発端である叢雲は、槍の間合いよりも近付かれることに対応が出来ないため、そこをどうにかするために飛行場姫に鍛えてもらうという手段に出た。自分がより近距離に慣れること、むしろ自分でもそういうことが出来るようになること、そもそも識ることが重要である。

「じゃあ、まずやってほしいと言ってきた叢雲からにしましょうか」

飛行場姫は、徐に両手にグローブを展開。勿論これは、直撃しても痛くないようにする配慮である。また、近接戦闘を最もやりやすい姿として、トレーニングウェアではなくいつものボディスーツ姿へと変化した。これが飛行場姫の全力の姿であり、最も戦えるカタチ。一応薄雲に配慮して、デザインを少々変えている。

「叢雲、アンタはどういう風にしたい。いつも通り槍を使える状態でやるか、それともアンタも同じように拳でやるか」

スパーリング、イコール模擬戦なわけで、お互いに本番さながらの戦い方でやることが望まれるだろう。飛行場姫が実戦に参加することはあり得ないのだが、もしやるのならば、使うのは拳一本。潮がやっていたことを、さらに高い練度で繰り出すことになる。勿論、ここでは手加減だってするが。

「その時と同じようにやりたいから、槍は使わせてもらうわよ」

対する叢雲は、少し考えた結果、槍を展開した。当然だが、その槍の先端は殺傷力を一切無くしており、穂は春雨と模擬戦をした時と同

じようにウレタン製である。
いくら叢雲よりも強い飛行場姫とはいえ、怪我をする可能性は極力下げたい。何か間違って刺さってしまい、そのまま酷いことになってしまったら、ここにいる者以外にも被害が及ぶ。むしろ、模擬戦に殺意を持ち込むのはよろしくない。
「それじゃあやるけど、先に聞いておくわ。アタシは何処まで出していいわけ？」
黒幕との決戦を視野に入れるのならば、飛行場姫にも全力を出してもらい、それに追いつけるくらいでなければならないだろう。だが、まずそれを見て参考になるかはわからない。最終的には飛行場姫の全力を相手取り、勝てずとも拮抗出来るくらいには実力を伸ばしておきたいのは確か。
いきなり全力を見るか、まずは何％で始めてもらって徐々に慣れていくか。そこは考えだからだろう。
「一度、全力を見せてほしいわ。ちなみに私は一応アンタの力の端っこは見せられてるわけだけど、あれはどれくらいだったの」
叢雲の言う力の端っことは、まだ叢雲が今ほど怒りが抑えられなかった時期に、深夜に艦娘を襲いに行こうとしたのを軽く捻った時のあの力。当時の叢雲の全力の突撃による突きを、指２本で止めていた。
「あの時は……そうね、アンタも今より全然弱かった時だけれど、１割くらいかしらね」
「い、１割……」
「あの時はそれくらいでも充分だったけど、今はそれだと流石に無理よ。アンタだってこれまで修羅場潜り続けてきたんだから」
その力の差に愕然としそうになるが、今の叢雲はあの時から大幅に成長している。怒りを制御し、仲間のために戦うことも出来て、自らの力も把握出来ている。ならばせめて半分、５割くらいまでは引き出したい。
しかし、まず飛行場姫の全力がどれほどかも知っておきたかった。そこに辿り着くのが最終的な目標。自信をつけさせるために飛行場

姫が親身になって鍛え続けた潮ですら、まだこの飛行場姫には届いていない。
「一度だけでいいわ。アンタの全力が見てみたい。参考に出来るようならしたいし、全力に感覚を合わせておけば、それよりも下の力がすぐにわかるってもんでしょ」
「ふぅん、まぁいいわよ。でも、全力だとアンタが気を失う可能性があるのよね。それでもいいかしら」
　そんなことを言われて、叢雲が燃えないわけがない。
「いいわよ。見てみないとわからないし」
「見えればいいけど」
　不穏な言葉を残して拳を突き出すように構える。叢雲も同じように槍を飛行場姫に向け、どう来られるのかと緊張した面持ちで睨みつけた。
　瞬間、もう飛行場姫は叢雲の対応出来ない間合いに入っていた。
「は!?」
「これが一応アタシの全力」
　そして、軽く小突いたように見えても膨大な力が加わり、力強く握っていた槍が吹っ飛ばされる。あまりの衝撃で握ってなんていられなかった。槍を折られた時とはわけが違う。吹っ飛ばされた槍は、大惨事を起こさないようにそのまま消えた。そのままだと施設に直撃していたため危険。
　この威力を身体に受けたら、グローブを着けていようが関係ないだろう。腹に打ち込まれたら内臓に支障が出そうだし、腕や脚に打ち込まれたら骨を持っていかれるかもしれない。頭に打ち込まれたら脳震盪では済まなそう。
「いったたた……腕ごと持っていかれるかと思ったわよ！」
「持っていくつもりで殴ったわよ。それでも咄嗟に手放したのは正解ね。今のアンタならそういう選択をしそうだったからやったんだけどね」
　信用されているようではあるが、叢雲としては複雑である。
「姉さん……今の見えていましたか」

「全然見えなかった……」
　春雨と海風は客観的に見ていてもその動きがわからなかったようだ。同じように見ていた薄雲は、言葉すら失っている。それほどまでに飛行場姫の全力は桁違い。
「踏み込んだ時点で前に向かう力が普通ではありませんでした。そもそもの脚力が段違いなのでしょう。そこから急ブレーキをかけても体勢が崩れないということは、それだけ体幹も出来ている。そこでさらに振りかぶることなく腕力だけで槍を吹き飛ばすということは、膂力も相応。全身が戦うために作られているようなものですよ」
　あの一瞬が見えていたのは大鳳だけ。大鳳自身も、突撃の際に強烈な踏み込みをすることがあるため、飛行場姫を注視していればその辺りは把握出来た。
　自分と同じことをしているのだろうとは思っても、その技術のレベルがあまりにも離れているため、ここまで来ると参考にもならない。強烈、かつ繊細なその動きは、真似出来るようなものではない。
「そっか、この島にいるからあそこまでの力が出せるんだ」
　春雨がそこに気付く。飛行場姫の力の根幹は、陸上施設型としての力の特化。この島から出られないが故に得られた力であるというのなら納得である。
「しかも、そもそもが大きい力を一点特化してるから……」
「出力を過剰に出来る、というわけですね。ホースの先を潰して水の勢いを強くするようなものです」
　飛行場姫の強大すぎる力は、あくまでも居場所を守るためにしか使われないのだ。使いどころを制限することによって、本来では出し得ない力を発揮している。
　あれもやろうこれもやろうとすれば、当然その分力は分散するだろう。一点特化することで、その筋では追い付くことが出来ない程の力になるということ。潮が短期間で手に入れたあの強さも、敵を攻撃しないという大きなデメリットを抱えているからこそ得た力と考えれば、そちらも納得出来るところ。
「で、どうするの。全力でやればいいのかしら」

「……腹が立つほど悔しいけど、まずは半分からお願いするわ。見える範囲じゃないと、スパーリングにすらならないわよ」
「そうね。じゃあ半分くらいから始めましょ。そこから少しずつ上げたり下げたりするわ。アタシの独断で」
　叢雲が槍を再展開。そもそもが近付かれた時の想定のためのスパーリングであるため、そのスタンスは崩さない。最初は自分で考えて、その後はアドバイスも受けながら。
「……黒幕も同じだと考えた方がいいんですよね」
　ボソリと海風が呟く。春雨も勘付いていたようで、神妙な面持ちで首を縦に振る。
　黒幕も元は中間棲姫――陸上施設型だ。そのカタチはどうであれ、自分の陣地を持ち、その場所から動かないという時点で、今の飛行場姫のような強大な力を持っていると考えてもいいだろう。
　そして、島を守るという一点特化の飛行場姫と同様に、逆恨みという一点特化をしているとするのなら、黒幕は今の飛行場姫と同等かそれ以上の力を持っている可能性はある。
「1対1でやるわけではないけど、それでも1対1で互角くらいでないと、黒幕相手では太刀打ちすら出来ないかもしれない。せめて、せめてさっきの妹姫様の動きが目で追えるようにならなくちゃ、何も出来ずにやられておしまいだよ」
　表に出てこないためにその力の全貌は未だにわからず、しかしそれが一筋縄ではいかないとかそういうレベルではないとなると、相当厳しいのは火を見るより明らかである。
「最悪の場合、また侵蝕まであり得ますかね」
　大鳳もそこは危惧していた。春雨と叢雲以外は、その辛さを知っているため、侵蝕という言葉を聞いただけでも嫌そうな顔をした。言った大鳳自身ですらも。
　黒幕自身の侵蝕の性能は、龍驤を解析することである程度は対応出来るようになるだろう。しかし、あくまでも龍驤は黒幕にその力を与えられていたに過ぎない。本家本元の力は、それ以上であると考えるのが妥当。

「……春雨姉さんが侵蝕されたりなんてしたら、もう終わりです」
「ですね。『辿り着く力』によって守られているかもしれませんが、それを上塗りしてくる可能性も無くは無いです」
今でこそ、侵蝕性の泥に触れてもまるで効かないというのが春雨の特性ではあるのだが、それはあくまでも黒幕の末端の泥への耐性だ。ホンモノの泥に対してどうなっているかはわからない。触れないのが身のため。
海風は勿論のこと、大鳳もそれは心配している。春雨がやられたら終わりというのは共通認識だ。今回の戦いは『辿り着く力』が必要不可欠。それを失うのみならず、奪われてしまったらそれは確実に敗北へと一直線になる。
「あの速さで侵蝕まで備えられたら太刀打ち出来ないし」
半分の力で叢雲をスパーリングしている飛行場姫だが、それでも完全に圧倒していた。槍の間合いの内側に瞬時に入り、槍を持っている腕そのものを殴り付けたり、そもそも腹に1発入れたりと、ほとんど遊んでいるようにすら見えた。
叢雲は当然それが気に入らないのだが、いろいろ手を尽くしても簡単には覆らない。
「っの……っ」
「槍に頼り切らないことね。というかアンタ、槍を大きく出来るんでしょ。じゃあ、間合いが詰められたら、槍を短くしてみなさいよ」
殴りながらもしっかりとアドバイス。上に立つ者であるからこそ、その叢雲の短所をしっかりと見出だし、その場で改善するように言葉にする。
「短く、って」
「槍でなくちゃいけないわけじゃあ無いでしょうが。槍にこだわりがあるのなら知らないけど。それに、1本じゃないといけないわけでも無いわよ」
言われても簡単には対応出来ず、最終的には頭を押されるように殴られて、叢雲はその場に倒れることになった。結局、一度たりとも自分の間合いに持っていくことは出来なかった。しかも、それだけ殴ら

れても叢雲はノーダメージ。殴るのも完璧に手加減されている。それがまた気に入らない。
しかし、それは叢雲が望んだこと。気に入らないのは飛行場姫ではなく、自分の弱さにだ。これくらいも出来ないで、決戦に出るだなんて烏滸がましいと、怒りと同時に自分を奮い立たせた。
「誰か交代して。一度外から妹姫を見る」
「それなら私が」
次のスパーリングは大鳳。叢雲と交代し、近接戦闘の真髄を掴み取るために歩み出た。

スパーリングは続く。飛行場姫のおかげで、少しずつでも強くなっていることに、まだ本人達は気付くことはない。

協力者達

施設でトレーニングが行なわれている裏側。鎮守府側でも、最終決戦に向けての準備が続いている。龍驤の泥、体組織を研究して、黒幕対策を開発するのとは別に、誰が決戦に出撃するかというのも決めなくてはならない。

勿論、今回も出し惜しみなんてしていられない。少数精鋭なんて言っていられないだろう。しかし、あまりに大人数で向かった場合は、それはそれで鎮守府の防衛に穴が空いてしまうし、何より今回は戦力を3つに分散させる方向で考えていた。

1つ目は勿論、最終決戦に参加する者。大塚鎮守府へと出向し、そのままその本拠地を襲撃し、この戦いを終わらせるために行動する。ここが主戦力となるのは明らかであり、出来る限りの最高戦力を注ぎ込む。

2つ目は、施設周辺の哨戒。当然ながら決戦中であっても施設が襲撃される可能性がないとは言えない。ただでさえ、戦力が施設から離れることになるのだから、守るための人員は減る。充分すぎる力を持っているとしても、あちらは未だ何をしてくるかわからない。ならば、守りを固めるのは間違ったことではない。

3つ目は鎮守府の防衛。今でこそ泥を受け付けないバリア的なモノがあるとはいえ、あちらは艦娘に恨みを持つ者。大塚鎮守府も堀内鎮守府も自分に逆らう者達として、施設と同様に侵蝕を狙ってくる可能性がないとは言えない。そのため、守りも必要になる。

「こう考えた場合、決戦に向かってもらうのは当然、対地攻撃が可能な者になる。侵蝕された者に対しての戦闘に参加していて、かつ対地攻撃が可能な者となると……」

「駆逐艦、つまり私達ですね」

提督の言葉に自信を持って答える五月雨。龍驤を筆頭にした侵蝕された者と戦ったことがある者から選出するとなればかなり限られてくるのだが、特に得意であろう者とするならば駆逐艦、さらに限定するならば、山風と江風、そして荒潮。

小型艦ならばほぼ確実に装備が出来る、対地攻撃の代表格といえるロケットランチャー、WG42（ヴェーゲー）に加え、上陸用舟艇や内火艇が装備出来るのは、この3人のみ。江風は内火艇を装備することは出来ないのだが、山風と荒潮はどちらも可能。ある意味、最も火力が出せる者と言えるだろう。

金剛や比叡のような戦艦も、三式弾による対地攻撃が可能であるため、その火力も相まって有用。空母は対地攻撃よりは、陸上施設型から繰り出されるであろう空爆を抑え込むために必要。

結局のところ、今までのメンバーが全員採用レベルであるということに他ならない。

「山風と荒潮は確定だと思っている。カミ車（特二式内火艇）と八九式、それにWG42（ヴェーゲー）の併用が出来るからね」

「ですね。対地特化出来るのは山風と荒潮ちゃんだけです。次点が江風ですけど」

「ああ、だが対地ばかりではおそらくダメだ。満遍なく、全てに対応出来る方がいい」

五月雨と相談している中、タブレットが鳴り響く。通知先は、大塚鎮守府。決戦が近いということで、部隊のことについての相談は頻繁に行なっているが、今回もおそらくそれだとすぐに取る。

『すまない、また例の件だ』

「問題ないよ。こちらもまだ悩んでいるところだからね」

『こちらでは戦力増強の目処が立った。大和を改二とする方針で決まったことを伝えておく』

大塚鎮守府の最大戦力である大和。今までのままでも相当な実力であり、火力は改二改装を受けずとも並以上、トップクラス。大塚鎮守府では、ここぞという時に投入される存在。今回もここぞと言える場面であるため、大和が出撃するのは確定だった。

その大和が改二改装である。今でさえも鎮守府ではトップと言える力を持っているのに、さらにというのだから恐ろしい。無敵とは言えずとも、敵に同情してしまうほどの火力を手に入れることだろう。

「相当な資源がかかるんじゃないかい？」

『勿論。あの大和が改装するんだ。それ相応のコストはかかるが、ここで躊躇うのは合理的ではない。出来る限りを全てやらなければ、黒幕も討つことが出来ないだろう』
「全くもってその通りだ」
大和を改装したことによって得られるその力について聞いていくと、今回の戦いにあまりにも適応出来ていて驚いた。
大和の改装は二種類存在しており、その片方、改二重と呼ばれる重武装タイプは、言ってしまえばまさに器用万能。低速であることが据え置きなだけで、砲撃以外にも対潜、対地、対空と、逆に何が出来ないのだと言われるくらいの超万能航空戦艦へと生まれ変わる。
そのうちの対地、ここが今回の戦いに関わってくる。堀内提督が山風を部隊に入れることを確定としていた理由を、大和がやってのけてしまうのだ。この戦いに絶対に必要不可欠と断言出来る。
『こちらの部隊は、大和を主体としたモノになるだろう。まぁ、ほぼ確実に今の調査隊の面々になるだろうが、当然こちらの鎮守府の防衛も必要になる。近場にあるのが仇となりそうだ』
「ああ、それは僕も思っているよ。正直なところ、今何も起きていないことが逆に怖いくらいだ。こちらよりもより堅牢な防衛が必要になるだろうね」
『鎮守府を守るための何かが開発されたら、優先的にその情報を回してもらえると助かる』
「勿論だとも」
黒幕の拠点に近い位置にある鎮守府というだけで、いつどうなってもおかしくない状況にあるのは確かだ。当然ながら既に多種多様な泥対策は配備されており、泥を感知するメガネや、泥刈機のアップデートも既に対応済み。
大塚提督の方針もあり、情報さえ貰えれば、鎮守府で全て開発して実装する。今回の泥対策に関しても、作り方を聞いて大塚鎮守府の明石が開発したものだ。四苦八苦しながらも完成品を作り上げる手腕は持っているため、そういうことが可能だった。
０から１を生み出すのが堀内鎮守府の明石ならば、その１を確実に

１０に出来るのが大塚鎮守府の明石。ただし、本人はそれがそうなる理由はイマイチわかっていないという実情はあるが。
『例のバリアの方は、正しく稼働している。そのおかげで、泥の末端が鎮守府に忍び寄るようなことは無いだろう。しかし、それすら通用しないモノがある可能性は高いのだろう？』
「ああ、いわゆる『本体』は何とも言えない。今も龍驤の身体を使って研究中なんだが、やはりと言っていいのか、構造が今までの泥と若干違うようなんだ」
『だろうな。侵蝕と乗っ取りは別物だ』
　これまでの研究で判明したことは、やはり黒幕自身を構成する泥は、今までの侵蝕性の泥とは似て非なるモノであるということ。それがわかったのは、今でも行なわれている龍驤の核への調査である。
　恐ろしいことに、その核だけならば、泥を感知するメガネでは感知されない。あくまでも末端を感知することしか出来ないのである。末端が体内に巣食っているからその居場所がわかるというだけで、本人の構成は別モノであるということに他ならない。
『そこは申し訳ないがそちらに任せる』
「任せてほしい。なるべく迅速にそちらに提供出来るように努力しよう。研究をしているのは明石だが」
　一旦ここで通信終了。大塚提督から齎された情報は、大和を改二改装することにより、強力な戦力として投入すること。それを視野に入れた状態で、堀内鎮守府からも出撃させる艦娘を決定する。

　今まで以上に慎重に編成を考えられているが、艦娘達の方はいつ誰がどのように選ばれてもいいように、日々の鍛錬を怠ってはいない。
　特にやる気を出しているのは、今回の事件のせいで姉妹の半分以上を失った白露型。今まででも強大な敵だったのだが、その首魁である黒幕との最終決戦なのだから、鍛錬に気合が入るのもおかしいことではない。
「ふむ、いいじゃないか。艤装出力に制限をかけた状態で、この武蔵の

砲撃をここまで回避出来るようになるとは上出来だ」
海上では、武蔵による演習が繰り広げられていた。それを受けているのは、江風と荒潮。今武蔵が言った通り、わざと艤装の出力を半分程度に抑え込み、その状態で武蔵に立ち向かうことで、実際の黒幕との実力差を再現していた。
１００％の出力でも苦戦するのに、それを半分に落とすとなると、そうそう上手くいくモノでは無くなる。攻撃するにも回避するにも、先読みや要領の良さがどうしても必要になってくる。
しかし、それくらいしないと黒幕との戦いは互角にもならないだろうと考えてのことだ。そもそも艤装無しで大井からの砲撃を回避するというかなり無茶な訓練をし続けていただけあり、これはそれの延長線上とも言えた。
「はぁ、はぁ、これはこれでキツいぜ……」
額から流れ、顎から落ちる汗を拭いながら、江風は少しだけ休憩。疲れてはいるがまだまだやれると、その目に宿る闘志は一切失われていない。
「でも、強くなれてるって実感出来るわよね～」
対する荒潮は江風ほどではなく、いつもの笑顔を絶やさない。疲れていないわけでは無いのだが、短期間で改二改装まで成長した経験があるおかげで、急激な訓練でもそこまで表情に出さないでいた。
勿論２人とも、武蔵からの砲撃をモロに受けているため水浸し。直撃を受けることもあったため、痣まではいかないまでも、普通に打撲のような痛みもあった。
合間合間に休憩を挟んでいるものの、それでも武蔵を相手にするという圧で、精神的にも疲労を感じる。
「最初は無茶無謀な手段だと思っていたが、貴様らには有効な手段みたいだ。私もここまでやるとは思っていなかったぞ」
「こっちは結構絞り出してンだよなぁ。武蔵さン、一応聞きたいンだけど、加減とかしてくれてンのかい？」
「何を言っている。私が加減出来るように見えるか」
自信満々に言われ、考えるまでもなく手加減なんて微塵もしていな

いとすぐにわかる。徐々に慣らしていくなんてことが出来たなら、始めたばかりの頃に出力の下がり方を確認している時に手を抜いてくれるだろう。最初から全力全開で砲撃を放ち続けている時点で、手加減という言葉を知らないとすら言える。
荒潮は改二に上がるまでにそれを経験しているため、何も驚くことはなかったのだが、江風は随分と動揺したものである。実戦ではこうはいかないと容赦なく撃ってくる武蔵にギャーギャー言いながら回避を続けた。
「私も少し気合が入ってしまっていてな」
「そうなのかい？」
「ああ、協力する鎮守府には大和がいるということでは無いか。次の戦いには当然出てくるはずだ」
大和はご存知の通り武蔵の姉。しかも、今はまだ伝えられていないが、武蔵は姉に改二が実装されたことも知っている。その大和が改装されているかどうかはさておき、大塚鎮守府でも主力戦艦として戦っていると聞いたのだから、共に戦場を駆け抜けることもあるだろうとやる気を出していた。
無論、堀内提督が武蔵を絶対に編成するとは限らないのだが、編成しない可能性は極めて低い。資源を理由に出し惜しみするなんて選択肢は、とっくに失われているのだ。泥バリアの装置の段階で、その辺りの価値観は若干壊れている。
「今ならば、大和と一斉射くらいは出来るだろう。くくく、胸が熱くなるというものだ」
「一斉射？」
「簡単に言えば、私と大和が2人揃って目の前の敵に全力で砲撃を放つというだけだ。だが、破壊力は他の追随を許さん。今回は、それくらいやっても斃せるかわからないような相手だからな」
火力は艦娘最強。あらゆる敵を焼き尽くす、大和型姉妹の全力一斉射。今までは他の戦艦に後れを取っていたところもあるが、これにより名実ともに最強と言える存在となっただろう。
「実戦の前に一度大和と会ってみたいものだ。提督に頼んでみるか」

「いいかもしれないわ～。決戦に出るヒト達で集まって、みんなで打ち合わせとかしておいた方がいいものね～」
「だな。連携は意思の疎通が必要不可欠だ。ぶっつけ本番で上手くいくようなことなど、まず無いだろう。ただでさえ、まともに顔を合わせたことのないようなヤツとはな」
この武蔵の言葉がきっかけとなり、堀内鎮守府と大塚鎮守府の合同演習がすぐに設定されることになる。共闘するのなら、最初から顔を合わせておくべきであるというのは、誰だって考えること。

そしてそこには、施設からの参戦も考えられていた。初めての深海棲艦の来訪は、決戦の時ではなく、その合同演習となるだろう。
時間はないが、焦っていては上手くいかない。確実に勝てる見込みを作っていく。

事前に知るべきこと

その日の夜、スパーリングとトレーニングによって心地よい疲れに苛まれる春雨達。特に叢雲は躍起になって飛行場姫と手合わせをしており、槍の間合い以上に近付かれた時のことを考えた戦術を編み出すに至っているものの、その疲れは相当なモノであり、夕食の時間でもうつらうつらとしている程だった。

スパーリング組は特に疲れを見せているのは一目瞭然。春雨ですら、目に見えるくらいに疲れているのだから相当である。ゆっくりと眠れば明日に持ち越すことはまず無いだろうが、それでも普通では考えられないくらいに消耗しているようだった。

「今日はみんなご苦労様ぁ。ギリギリまでやるなら、明日も続けるのかしらぁ？」

「私達はそのつもりです。決戦に向けて、出来ることは全てやっておきたいですから」

春雨が代表するかのように話す。決戦に向かうことが決まっている者達は、みんな同じ気持ちだ。直前まで鍛え上げて、勝率を限界まで上げたい。

飛行場姫との手合わせは非常に効果的だった。この日の午後だけであっても、あらゆる戦術を叩き込まれるようなもの。潮のように一度使われたら全て覚えるなんてことは出来ずとも、身体に刻まれていくので確実に強くなれる。少なくとも叢雲は弱点と言える部分が失われた。

「それじゃあ、明日のためにもしっかり疲れを取ってちょうだいねぇ。お風呂で身体を清めて、グッスリ眠れば気持ち良く明日を迎えられるわぁ」

「ですね。でも、夜の間に哨戒とかもした方が……」

今や施設の位置が黒幕にバレている状態。今でこそ『観測者』が泥を先んじて駆除してくれているが、たった3人で全てが処理出来るかはわからない。すり抜けてくる可能性は考えておく必要がある。

明るい内ならば、トレーニングをしながらでもわかるし、姉妹姫が

常に哨戒機を飛ばして近海を監視しているため、すぐに対処出来るからまだいいのだが、夜となると話は変わる。そもそもが見づらくなり、眠っているために無防備な者も沢山いる。頭のいい黒幕ならば、そのタイミングを狙ってこないわけがない。
　それをどうにかするためには、再び哨戒を始めるほかない。しかし、人員をどう割こうかはまだ考えていなかった。深夜の哨戒にはある程度の準備も必要。
「今晩は私がやっておくから安心してちょうだい。ある程度夜目は利くし、何か見つけたらすぐにみんなを起こすわぁ」
　そこで中間棲姫が名乗り出る。自分はここから動くことが出来ないのだから、そういうことはやらせてほしいと。食事などのケアで今日1日を使っているのに、さらに深夜の哨戒まですると言うのだから、他の者達はいやいやとツッコミを入れる。
　今一番この施設のために動いているのは中間棲姫だろう。施設を守る力を得るためのトレーニングには一切参加せずとも、それ以外の施設の維持に関しては全てをやっているのだ。それなのにさらに寝ずの番をしろとは、口が裂けても言えない。
「だったらオレと松姉ぇがやるから寝ててくれよ姉姫さん」
「そうですよ。スパーリングに参加していない私達なら、まだ夜の間くらいは動けますから」
　松竹姉妹が早速自分がやると言い出す。筋トレの後、ストレッチをしながら休息を取っていたため、夜も活動出来るくらいには疲れが溜まっていない。
「そうよ。貴女はちゃんと身体を休めなさい。私達もいるんだから」
　戦艦棲姫もやめておけと中間棲姫を諭した。自分や空母棲姫も夜に動くことくらいは出来るぞと胸を張って話す。
「夜、動くのも、知っておきたい。戦艦から聞いている。陸に行くなら、夜に動くんだろう。なら、それを慣らすためにも」
「空母がこう言ってるから、ちょっと夜に動き回りたかったのよ。そのついでに哨戒するってだけだから、私達に任せてちゃんと身体を休めておきなさい。いいわね？」

戦艦棲姫と空母棲姫は、保護されている元艦娘などではなく、自由に動き回る姫。つまり、どうあっても立場は対等。空母棲姫は保護されている感じはあるものの、戦艦棲姫の管轄に置かれているため、戦艦棲姫の派閥に加えられる。
そんな姫からここまで強く忠告されてしまっては、中間棲姫も何も言えない。戦艦棲姫と空母棲姫は、自分の立場まで使って中間棲姫を休ませる方向に持っていこうとしている。
「それじゃあ……お願いしていいかしらぁ」
「任せなさい。貴女が倒れたら本当におしまいなんだから、それくらい喜んで協力するわよ」
「お互い、無理しない、程度に、だ」
中間棲姫が倒れたら、施設の運営はままならないことになるだろう。侵蝕は以ての外だが、心労も含めた過労で倒れるだなんてことがあってはならないのだ。
それに関しては中間棲姫としても自覚はあるようで、流石に一歩引いた。自分が休みたいというわけではなく、これだけ思ってもらえているのだから無下には出来ないという理由で。
「それじゃあ、夜については私と空母が取り仕切るわ。まだ体力残ってるって子は、哨戒を手伝ってちょうだい」
「オレらは参加すっから、他にも出てくれるヤツがいたらありがたいな。今回は総当たりに近いんだろ」
「人数は多いに越したことは無いわね」
夜のことは戦艦棲姫が主体となり進められることとなった。明るい間は姉妹姫が、暗い間は戦艦棲姫と空母棲姫がと役割分担を決め、この施設を絶対に守り切ると誓う。空母棲姫は新参も新参だが、立ち位置的には姫なので、こういう時には戦艦棲姫と共に前に立つようである。
それはここにいる４人の姫達だけではない。元艦娘の仲間達も、中間棲姫のために尽力する。誰も嫌だとは言わず、むしろ疲れ切っていない限りはみんなが参加したいという程だった。
「ああ、そうそう、決戦参加の子達はやめときなさい。明日突然来てく

れと言われたら対応出来なくなるでしょ」
「そうですね。夜の哨戒に関しては、お任せします」
「ええ。貴女達は私達の平和のために、私達は貴女達の帰る場所を守るために戦うんだもの。役割分担としては充分よ」
　最終決戦に参加する者達は、いつでも出られるように万全の態勢を維持する必要があるだろう。トレーニングで疲れている状態で哨戒までしていたら、それはもう過労に繋がる。
　黒幕を撃破するためには、全員が協力して完璧な状態を作り出さなければならない。心身共に最高の状態を維持し、十全、むしろそれ以上の力が発揮出来るようにしておきたい。
「みんなが協力してくれるのは、本当に嬉しいわねぇ……って、あら？」
　こう話している時、突然タブレットが鳴り響く。夕食時で全員が揃っているところに来たので、おそらく狙い澄ましてのことだろう。
「はいはい、この時間にかけてくるということは、みんなに聞いてほしいことなのかしらぁ」
『ああ、そういうことになるね。食事時だったかと思ったが、少し急であることだったのでね。すまないが、この時間に連絡させてもらったよ』
「大丈夫よぉ」
　タブレット越しに聞こえる堀内提督の声は、そこまで深刻な雰囲気はない。春雨も直感的に何かまずいことがあったようには感じなかったため、この連絡は悪い理由ではなく良い理由だということを察する。
『最終決戦の時が近いだろう。その戦いの前に、参加者は顔合わせをしておくべきではないかと大塚提督と話をしていてね。我々は明日、合同演習をすることとなったんだ』
「あら、確かにそれは必要かもしれないわねぇ。その時に初めて会ったというのは、連携とかも取りづらいかもしれないものねぇ」
　龍驤との戦いの時は鹿島と雷がぶっつけ本番ではあったが、２人とも連携が得意なタイプであったため、何も問題なく終わることが出来

た。
　しかし、次は最高火力を叩き出すための部隊。少しのミスも許されない最後の戦いだ。しかも、大和を改装してからの戦いとなるため、その力を慣らすためにも演習は必要不可欠。
『そこに、君達にも参加してもらえないかという話が上がっているんだ』
　流石にそれには驚きを隠せなかった。決戦には施設の者達が参加出来る手筈にはなっていたため、深海棲艦であっても鎮守府に向かうことにはなっている。種族の垣根を越えた部隊を編成するために。
　しかし、それはあくまでも決戦の時に限った話であるとも思っていた。事前に試しで鎮守府に向かうようなことは無いものと。それでも、堀内提督は事前の準備としてこれは必須であると考えていた。
『君が言った通り、決戦当日に初めて会うというのは、連携に支障が出るかもしれない。それに、我々は君達のことをよく知っているが、大塚鎮守府の艦娘達は鹿島と雷以外は基本的な部分を知らないからね。顔を合わせて仲良くなっておいてもらった方がいいだろう』
「まぁそうねぇ。悪いことでは無いわぁ」
『勿論、君達の都合が悪いのなら無理にとは言わない。理由も詮索しないさ』
　何処までも施設のことを考えて話してくれる堀内提督の好感度は青天井である。
「提督、ちなみにそれはいつのことになるんですか？」
　春雨が横から尋ねる。行けるか行けないかは日程的なものもあるだろう。大概の場合は向かうことくらいは出来るが。
『急で申し訳ないが、明日になっている。決戦の時も近いからね。なるべく早く事を済ませておきたいという大塚提督からの申し出だ』
　今日の明日と言われてほんの少し悩むところではあるが、それが本番ではなく演習だというのならまだマシ。
　時間をかけている間に黒幕は更に力を増す可能性があるのだから、時間はもう残されていないようなもの。そのため、出来ることは早く早くというのが現在の方針。

「私は大丈夫ですが……皆さんは」
「問題ないわよ。そっちの連中が役に立つがどうか見極めるくらいはしておかないといけないもの」
流石の叢雲もこの発言には目が覚めたらしく、いつもの歯に衣着せぬ物言いで自分の思いを伝える。
だが、口は悪くとも言いたいことはわかる。堀内鎮守府の艦娘ならまだしも、大塚鎮守府の艦娘はまだ殆どの者が敵のやり口に慣れていないようなもの。それで本当に戦えるのかと疑問を持つのは間違ってはいない。
「鎮守府への案内は私が出来ますので、時間さえ指定してくれれば向かうことは出来ます」
施設から鎮守府までの航路は、海風が完璧に覚えている。施設の者達の中では、唯一その2つの航路を何度も往復している経験があるのだから、深海棲艦化していても余裕あり。
他の参加者も、鎮守府に出向くことに肯定的。先んじて決戦のために人間関係を慣らしておくのは必要であると考えるのは普通であった。
若干抵抗があったのは、実際に鎮守府に襲撃している古鷹だったのだが、更にひどい事をしている龍驤が常駐していることを考えれば、鎮守府に顔を出すことくらいで抵抗を感じているようなことはしたくない。
「こんな感じよぉ。ちょっと急ではあるけど、こちらからも向かえるということでお願いするわぁ」
『ああ、了解した。演習はうちの鎮守府で行なうことになっているから、そのまま来てくれればいい。大将にも既に許可をもらっているからね』
「あら話が早い。でも、助かるわぁ」
だがそこで少しだけ疑問が生まれた。
「提督、1ついいですか」
『なんだい春雨』
「その大塚鎮守府は黒幕の拠点と近いんですよね。そこから決戦に参

加するような主力が離れて大丈夫なんですか？　演習自体を大塚鎮守府でやるべきでは？」
　そこは確かにと誰もが思う。いつ動き出すかわからない黒幕の近くにいる状態で、そこに対抗出来る可能性がある最高戦力を鎮守府から一時的にとはいえ出向させるのは大丈夫かという話である。
『大塚提督もそこは考えてのことのようだ。黒幕から何かしらの攻撃が来るとしても、それは本体ではなく末端。つまり、今までの泥への対策で対処可能と考えている。それに、こちらの対策も日々進化を続けていてね、泥を持つ者は今、大塚鎮守府には近付かないくらいの状態にはしてある』
　泥バリアや泥刈機は最新版。そして、大塚提督の性格上、主力の力の底上げを優先する代わりに、残った者達は全身全霊を傾けて鎮守府を守り切る。
　明石の開発した装置は、製造方法さえわかってしまえば量産も可能であり、資源に糸目をつけずに配備することで対策も万全。泥刈機の数も、当初に比べれば数を倍以上に増やし、泥感知の眼鏡も複数量産して、徹底的に監視し続けているとのこと。
『それに、君達を大塚鎮守府まで案内すると、それだけ時間がかかるだろう。大塚提督は、君達に疲労させないように、うちでやろうと決めたんだ。十全の君達を知りたいというのもあるようでね』
　それだけ、今回の演習は必要だと考えているからだ。黒幕の姿を確認したら、そのまま殲滅出来るくらいにまで持っていくために、ここで全てを知り、段取りを完璧なものにする。
「わかったわぁ。それじゃあ、明日はこの子達をよろしくお願いねぇ」
『ああ、絶対に悪いようにはしないさ』

　これにより、決戦参加組は堀内鎮守府への出向が決定した。日帰りにはなるだろうが、またより良い成果が得られるだろう。

念願の帰投

翌日。深夜の哨戒では何事も無かったようで、全員がホッと安心する。場所がわかったため、泥の1つや2つは来そうだと考えていたが、意外にも見かけなかったという。

おそらく『観測者』が徹底的に駆逐しているのだろう。今まで一切関与せずにいたものの、その力を貸してくれるとなったら、ここまで守ってくれるようだ。これが中立であるという判定になっているらしい。

「少なくとも、オレ達には何も見つけられなかったぜ。島の周りの確認もちゃんとしておいたが、マジで何も無かったからな」

「探照灯も全開で探し回ったけど、本当に何も無かったです。眼鏡も使ったし、念のため泥刈機も完備で一晩中見回りました」

「私の目でも、昨日の晩は泥は来なかったと断言出来るわ。当たり前だけど、私達にも何もない。確認してくれても構わないわよ」

参加者である松竹姉妹と戦艦棲姫が口を揃えて何も無かったと話した。念のためと感知の眼鏡を使って侵蝕されていないことも確認し、一応春雨が妙な直感が働くことも無かったため、昨晩は襲撃が無かったと言い切れるようになる。

「空も、何も、無かった。雲の上にも、何もない」

空母棲姫の艦載機により空の確認もされているが、そちらも何も無かったらしい。『観測者』も流石に空まではどうにも出来ないだろうから、空母棲姫の力を使ってそこが確認出来たのは大きかった。

「ならひとまずは安心ねぇ。ご苦労様ぁ」

昨晩は良くても、今晩は何かあるかもしれない。この哨戒は戦いが終わるまで続ける必要はあるだろう。この後にまた話し合う必要がありそうである。

朝食後、黒幕との最終決戦に参加する者達が堀内鎮守府へと向かうため、岸で準備をしていた。

前以て何か言われていることは無いのだが、陸に住む者達を驚かさないように、なるべく艦娘の時の姿を取ることとなった。
「はぁ……これが一番嫌なのよ」
「何ワガママ言ってんのよ。さっさと着替えなさい」
「うっさいわね……私には私の事情があんのよ」
コロラドに指摘され嫌な顔をするのは叢雲であるが、以前にも一度やっているので、これ見よがしに溜息を吐きながら、艦娘の時の服装へと姿を変える。相変わらず若干のアレンジは加えているものの、遠目で見ればちゃんと艦娘叢雲。
「ん……大丈夫だね。まだちゃんと艦娘を失ってない」
「ですね。私の脳裏に刻まれている、艦娘としての春雨姉さんが構成されています。少し久しぶりと感じてしまいますが、またその姿を見ることが出来て嬉しいですね」
両腕両脚を失っている春雨は、どうしても本来の艦娘春雨からは逸脱した姿にならざるを得なかった。だが、制服はしっかりと艦娘春雨。意識せずに生成すると溢れた怒りを体現するかのようにショートパンツを穿くことになっていたが、今はちゃんとスカート。白露型の制服だ。
それは海風も白露も同様。白露は４人分の折衷案だった部分を白露のモノのみに限定することで、誰が見ても白露と言える状態となった。意識しないとそれが出来ないというのは少々残念ではあるが、まだ失われていないことがわかっただけでも心持ちは変わるものである。
「それじゃあ、提督くんによろしくお願いねぇ」
「あっちの艦娘にもね」
「はい、勿論。今日中には戻るようにします」
姉妹姫に見送られて、春雨と海風が先頭に立って鎮守府への航路に舵を切った。
「海風、道案内よろしくね」
「お任せください」
施設から鎮守府までの航路を完璧に知っているのは海風のみ。そ

のため、全員が海風を追うように進むことになる。今回の旗艦は、春雨を差し置いて海風。そういうところで春雨に認められたのだと思い、やる気満々に先導する。
「感知の眼鏡、1つだけ借りてきたけど、とりあえず何も見えないね」
白露が周囲を確認しながら一本道を駆け抜けるが、泥はカケラも見当たらない。安全で穏やかな海をただひたすらに真っ直ぐ疾るだけ。
今からやることが決戦に対する準備ではあるのだが、ここまで静かだと本当に戦いの最中なのかと考えてしまうほどだった。そういうことをしながら、こちらの隙を見計らっていると言われてしまうと何とも言えないが。
「……春雨、少し緊張していますか」
大鳳に言われて、春雨は苦笑しながら肯定する。
「もう戻れないと思っていた場所ですから、どうしても……。悪いことにはならないのは確信出来ますが」
「みんな歓迎してくれますよ。何と言っても春雨姉さんですから」
「そうそう、気にする必要は無いよ。楽観的に行けとは言わないけどさ」
海風に加え、自分より緊張していそうな白露から励まされたのだから、緊張なんて感じていられない。
鎮守府から離れている理由だって自分に非があるわけでもないし、提督とも通信で何度も話をしているのだ。後ろ向きになる理由なんて何処にもなかった。ただ久しぶりというだけ。何も怖いことは無い。
「古鷹さんは大丈夫？」
「わ、私？　私は……うん、大丈夫、かな」
古鷹も思うところが沢山あるものの、比較的ポジティブではあった。鎮守府を襲撃したという事実はあるものの、その後はそこで治療されて今の自分を取り戻しているし、大塚鎮守府からの艦娘に関しては、先に鹿島と雷に会っているのだ。深海棲艦化しているとはいえ、仲間意識はそのままであることも確認済み。
それ故に、この鎮守府出向に関してはそれなりに楽しみにしていた

のだ。かつての仲間にまた会えることは喜ばしいことである。
「一番心配なのはアレでしょ。艦娘嫌いが鎮守府行くのよ。何かしでかさなければいいけど」
　コロラドが皮肉を言うように叢雲に視線を向ける。対する叢雲はどうしても苛立ちを隠せないものの、鼻で笑って返す。
「私だって成長してんの。艦娘如きに目くじらを立てる時代はもう終わってんのよ。私の怒りは黒幕一本なんだもの」
「どうだか。艦娘を見たら話が変わるかもしれないくせに」
「アンタと一緒にしないでくれる？　中に入ってる姫が駄々捏ねて鎮守府で暴れ出したりするんじゃないかしらね」
「アイツらはもう私が抑え込んでるから心配いらないわよ。アンタみたいに自分の問題じゃあ無いんだもの」
　相変わらずの口喧嘩だが、大鳳が嫌味なく元気でいいですねと宥めたことで一旦落ち着いた。この２人も、なんだかんだ鎮守府には順応出来るはず。

　そして、しばらく真っ直ぐ航行するうちに、遠目に陸が見えてくる。島とは比べ物にならないくらいに大きな陸ということは、もうそこは鎮守府ということになる。
「そろそろ到着です。誰かしら出迎えがあると思いますが……あ」
　海風が少し見回すと、案の定、海の上に数人立っているのが見えた。春雨達を歓迎するのは、やはり調査隊の面々。山風、江風、涼風の３人である。
　そしてその真ん中には五月雨も待っていた。姉妹の帰還ということで、鎮守府に残った白露型全員が、その来訪を今か今かと待っていた。
「みんな、お帰り！」
　笑顔の五月雨の第一声。知っている場所で知っている仲間――妹にお帰りと言われれば、本当にここに帰ってこれたのだと実感出来た。

感無量だった。もう絶対に戻れないと思っていた鎮守府に戻ってきたことを全身で理解し、そして気付けば涙目になっていた。
「うん、ただいま。私達は、帰ってこれたんだ」
「ですね……二度と戻れないと思っていたこの場所に」
海風も少しだけ目を拭う。最も短期間離れていた海風ですらこれだ。春雨が感極まらないわけがない。
そしてそれ以上にボロボロと泣いていたのは白露である。春雨とは違って本当に一度死んでいるため、戻ってこれる可能性がさらに絶望的だったのに、今ここに立っているのだ。
黒幕の手段だとはいえ死を乗り越えて、一時的にでも帰るべき場所に帰ってこれた。その感情が４人分、一気に溢れ出してきたのだから、感極まるどころか全部表に出してしまう。
「知ってる風景だ。知ってる建物だ。知ってる匂い、知ってる音、全部、全部覚えてる。死んだ時にもう諦めたはずなのに、戻ってこれたんだ……」
「……はい、戻ってこれました」
ここまで大袈裟な反応を白露がしてしまったことで、そもそも涙目だった春雨も決壊した。涙が溢れ出し、しかし笑顔は絶やさず。そして海風も貰い泣き。
怒りが溢れた時に失われていた本心からの笑顔が、今ここで取り戻された。艦娘としての自分を構成するものは、鎮守府にあったのだ。
「みんなが待ってるよ。提督もみんなが帰ってくるのを今か今かと待ってたんだから」
「うん、すぐに行くよ。私も、提督達と直接会いたいから」
画面越しには何度も顔を合わせていた提督と、同じ場所、同じ空気で会うことが出来る。涙は止まらず、しかし、その場に立ち止まっているのも惜しいと、白露型の姉妹はすぐに向かっていく。
残された叢雲達も、こうなっても仕方あるまいと苦笑し、あえてゆっくりと鎮守府へ向かっていった。再会に水を差すのはどうかと思うため、まずはその喜びを姉妹で分かち合ってもらおうと。
工廠の中も、覚えている通りだった。最後に見た時から何も変わっ

ていない。いつも哨戒や出撃に出て行って、帰ってきた時に見る風景がそのまま広がっている。
その中身、いつも春雨達が陸に上がる場所、そこに堀内提督は立っていた。それだけではない。この鎮守府に所属する全艦娘が、３人の帰還を工廠で待っていた。
「お帰り、春雨、海風……白露、時雨、村雨、夕立」
白露のみならず、その中にいる３人についても言及し、その全員の帰還を喜ぶ。
その姿は変わり果てていても、心は艦娘のままだ。感情も記憶も全て残して、この鎮守府で生活していた全てを持って、ここに帰ってきた。
震えが止まらないが、まず第一歩を踏み出したのは白露。４人分の思いを乗せて、提督に向かって力強く敬礼。
「ただいま、提督。長く鎮守府を空けちゃってごめんなさい」
「無事に……では無いかもしれないが、あえて言わせてもらおう。無事に帰ってきてくれて良かった」
決して無事では無いだろう。一度沈み、黒幕の力で蘇り、姉妹は融合してしまい、黒幕の思うがままに悪虐非道の限りを尽くしている。
だが、心に傷を負いながらも自分を取り戻し、ついにはここに戻ってこれたのだ。長かった哨戒任務は、今ここで終わりを告げた。
「ただいま……ただいま。ただいま。帰ってこれたよ。あたしは、僕は、私は、ここに、戻ってこれたよ。本当に、死を乗り越えて、ここに、帰ってこれたよ」
「ああ、ここが君達の故郷と言ってもいいだろう。戻ってこれた。みんなが喜んでいる」
もう白露は顔がグシャグシャである。４人分の笑顔と、４人分の涙、４人分の喜びが、全て顔に出てしまっていた。中にいる妹達の気質も、この時ばかりは融合することなく全員分表に出ている。全員でこの喜びを分かち合っていた。見た目は１人でも、そこにいるのは４人であった。
「春雨、海風、君達も、本当によく戻ってきてくれた」

「はい……白露姉さんと同じですが、長い時間を空けてしまって」
「構わないさ。今ここに立っていてくれるんだからね。ほら、白露達だけじゃない。君達の帰還も、みんなが待ち望んでいたことだ」
工廠がワッと盛り上がる。喜びに大きな声をあげる者、感極まって涙を流す者、すぐにでも近付いて、本当に戻ってきたのかを感じたい者、多種多様あるが、その全員が帰還を待ち、そして喜んでいた。

春雨達は無事、本来の居場所へと戻ることが出来た。一時的であろうとも、これは来訪ではなく帰投なのである。

本来在るべき場所

施設からの部隊は、大塚鎮守府からの演習相手が到着するまではフリーの時間とされた。叢雲、古鷹、大鳳、コロラドの４人は、少し用があると工廠に残ってもらうように明石に言われており、白露型の３人は戻ってこれた喜びを噛み締めてもらおうと久しぶりに艦娘の時のように生活してもらう。

未だ感極まっている白露は、涙で目を真っ赤に腫らしつつも、出迎えてくれたみんなに揉みくちゃにされていた。春雨と海風も同様であり、本当に帰ってこれたのだと実感しては、収まりつつあった感情がまた溢れてきて身体が歓喜に震える。

そんなことがしばらく続いた後、五月雨に連れられて鎮守府のとある場所へ。真っ先に来てもらいたいところがあるのだという。勿論、山風達もそれについていく。姉妹だけで組まれた遊撃部隊のように、ズンズンと目的の部屋へと到着。

「みんなの部屋は、そのまま残してあったんだ。海風が絶対に戻ってくるからってところから始まって、それからずっと」

五月雨に案内されたのは、元々使っていた私室。行方不明になってからも、定期的に掃除をしつつ、そのままの状態で残されていた。あの時、哨戒に出て行った直後の状態で時が止まった部屋。少し前までは毎日この部屋で眠っていたというのに、もう懐かしさすら覚える。

春雨が自分の部屋に入り、大きく息を吸う。何も変わらない、艦娘としての自分の最後の居場所。今でこそ変わってしまったが、ここに戻ることが生きている理由にもなっていた。

「全部残してくれてたんだね」

「勿論。許可もなく捨てるわけがないしね。場所も変えてないよ」

部屋としては簡素な部屋ではある。机と衣装ケースとベッド。布団は春雨のトレードマークとも言えるピンク色。何も変わらない部屋。

その机の上には、姉妹が揃った集合写真が立てられていた。知っている角度、全く同じ位置。それに、いろいろと小物などもそのままの

配置。
「なんだか、すごく懐かしく感じちゃうね」
集合写真を見ながら話す春雨。寂しさが溢れた当初なら、この写真を見るだけでも発狂していただろう。それが今は、死んだと思われていた姉達は少し違うカタチではあるが一緒に生活しており、寂しさに繋がる要素が大分減っている上に、そもそも怒りも溢れてしまっているせいで寂しさの発作を起こさなくなっていた。
それ故に、逆にこの写真には思い入れしかなかった。発作なんてもう起こさない。真に自分を取り戻したようなもの。
やはり、春雨に本当に必要なものは、全て鎮守府に揃っていたのだ。懐かしさ、思い出によって、失われていた本心からの笑顔が取り戻され、怒りが溢れる前の表情が、少しずつでも確実に戻ってきていた。
「私の部屋もそのままにしてくれてるんですね」
「それは山風がね。元々みんなの部屋を残してるんだから、海風の部屋を片付ける理由なんて無いよ」
海風の部屋もそのままである。あの時までは、海風を落ち着かせるために4人で眠り、強引に布団を持ってきていたのだが、流石に今はそんなことは無い。
「みんなで……ちゃんと掃除してるから」
「そうだぜー。海風の姉貴の部屋は、山風の姉貴が特に念入りにやってっから心配いらないよ」
「……江風余計なこと言わなくていい」
維持するために、白露型の姉妹達が手分けして定期的に掃除しているらしい。春雨と海風の部屋は見たが、勿論白露達の部屋まである。4人で6人分の部屋を掃除するのは少しだけ大変なところもあるのだが、部屋が散らかっているわけではないのならそこまで時間もかからない。
五月雨が掃除をしていると聞いて3人がビクッと反応するが、部屋の状況を見る限り、大変なことは起きていないためホッとする。五月雨が憤慨するものの、自分のドジには自覚があるのでそういう反応をされても笑顔で終われる。

「……ちゃんと、そのままにしてくれてるんだ」
白露も、自分達の部屋を見て、感慨深い気持ちでいっぱいだった。
シンプルな時雨の部屋、少し飾ってある村雨の部屋、机の上とかが散らかっている白露と夕立の部屋。全員が集約されている白露には、その全ての部屋の記憶が入っている。
「全部、全部ちゃんと覚えてる。あたしの、僕の、私の、全員分の記憶が入ってるから。なんか、すごい、うん、すごい。語彙が無くなっちゃった」
死によって失われたはずのこの部屋が、再び自分のモノとしてそこにあると思ったら、やはり感極まって涙が溢れてくる。失ったモノを取り戻していく感覚だった。
「なんか今日のあたしは泣き虫だなぁチクショー！　でも、ホント、すごく嬉しい。あたしだけじゃなくて、あたしの中にいるみんなが喜んでる！」
グシグシと目を拭いながら、満面の笑みを見せた。
「この戦いが終わったら、みんながこの鎮守府に戻ってこれるように、大将さんが取り計らってくれてるんだって」
深海棲艦であるがために、本来なら施設に押し込んでおくべきと考える者もいる中、あの大将は正しい共存の道を示していた。心が艦娘ならば、ただ協力してもらうだけではなく、本人の希望さえあれば鎮守府への再配属も許可するという方針である。勿論、鎮守府に籍を戻すかどうかは本人の意思次第。
春雨達は、今も行方不明というカタチで処理がされており、海風に至っては当然のように行方不明ですらなく出向のような扱い。籍が失われたわけではなく、あくまでも今はここにいないという状態でお茶を濁している。
深海棲艦化という確実に前例がない事件であるため、そのまま鎮守府に戻っていいのかと考えるものの、大将曰く、『愛娘が戻りたいと望むなら、拒否する必要は無いでしょう』と全員を納得させた。春雨達が鎮守府に仇なす放蕩娘というのならば抵抗はあるだろうが、艦娘としての心を失っていない、ただ姿だけが変わってしまった同一存在な

のだ。拒む理由など何処にも無かった。
「……あたしは、施設もいいけどここに戻りたい、かな。施設はさ、機会があればいつでも行けるんだし。毎日タブレットで連絡も出来るんだよね」
「ですね。あそこは第二の故郷として、頻繁に向かいたいですが、本来の居場所はここですから」
白露は鎮守府への再配属に乗り気。春雨も久しぶりに鎮守府に足を踏み入れたことで、この場所に帰りたいという気持ちが強くなっていた。まるでドロップ艦の帰巣本能。本来の居場所は鎮守府なのだと、本能的な部分で理解した。
「私は春雨姉さんが望むことを追わせていただきます。私にとっては場所なんて関係ありません。春雨姉さんが隣にいてくれれば、そこが何処であっても私の居場所です。ここでも、施設でも、名も無き無人島であっても、天国でも地獄でも、私は春雨姉さんと共にありますので」
「あはは、相変わらずだね、海風は」
「それが今の私ですから。でも……この鎮守府だと、山風達もいますからね。春雨姉さんが一番大切で、その存在が私の道を照らしてくれているのは当然ですけど、やっぱり妹達も大切な存在ですから。春雨姉さんがいて、妹達がいて、白露姉さんもいる。これが一番だと思います。そうなると、やっぱりこの場所がいいですね。勝手も知っていますし」
海風も勿論、鎮守府に戻ることを選択。春雨の居場所が自分の居場所なのだから、春雨が戻ると言うのならノータイムで戻る。
それに、口には出さないが、春雨が本来の春雨の表情を取り戻せるのはこの場所だと確信していた。
今の春雨は、心の底からの笑顔を作れている。怒りが溢れていて、根幹にある壊れた部分が消えていないにしても、この場所にいれば溢れた感情が忘れられるように見えた。それが海風には一番嬉しいことだ。本来の春雨が取り戻されるのならば、選択の余地なんで何処にも無い。

「……この戦いが終わった後のことを言うの、死亡フラグってヤツだと思うんだけど……」
山風がボソッと呟いたことで、空気が一瞬凍りつく。しかし、そんなものを吹き飛ばすくらいのテンションで白露が声を上げた。
「大丈夫！　そんなフラグ、バッキバキにへし折ってやればいいのさ！　そもそもあたしは一度死んでるから死亡フラグもへったくれも無いっぽいし、もう簡単にはやられないわ！」
ぐっと拳を突き上げて高らかに宣言。死を乗り越えた白露にとって、死亡フラグなんて関係ない。当たり前だがもう死ぬつもりはない。あんなに辛い思いは二度とごめんだと吐き捨てる。
白露の高度な自虐ネタは余計に空気を凍り付かせそうだったものの、白露の勢いのおかげで、これでもみんなに笑みが浮かんだ。
「この戦いは通過点だから、終わった後でもまだまだ先は長いよ。私達がここに戻ることが出来たら、そこからがまたスタートだからね」
「春雨姉さんの言う通りです。明るい明日が待っているんですから、その通過点なんて蹴散らしてしまいましょう」
深海棲艦化した3人がこれだけ明るく振る舞っているのだから、艦娘の姉妹達は暗くなる理由なんて無いのだ。3人の言葉に当たり前だと賛同し、この戦いを終わらせるための気合を改めて入れ直した。

それから、久しぶりの鎮守府をグルリと見て回って工廠に戻ってくると、明石からの依頼で残っていた4人も、大塚鎮守府からの艦娘達を待つために休息中だった。
「お疲れ様でした、春雨。久しぶりの鎮守府は堪能出来ましたか？」
早速大鳳に聞かれ、春雨は何かを考えることもなく笑顔で返す。
「はい、おかげさまで。なんだか気分が良くなりました。やっぱり私は、ここに戻ってきたかったんだなって実感しました」
「それは良かった。貴女はこの戦いの肝ですから、より良い心境でいてもらうことが一番ですよ」
その笑顔が一番の励みになると、大鳳も笑顔で応えた。

「結局、明石さんからは何の用だったんですか？」
「なんでも、私達の身体の構成が知りたいということでした。なので、髪や爪の一部、あとは体液なども少しだけ提供をすることになりまして」
　それは、明石……ではなく、龍驤からの提案だったそうだ。ただ泥に侵蝕されていただけではなく、亡骸を混ぜ合わされた結果蘇った大鳳や古鷹の身体の構成は、何かしらの違いがあるかも知れないということで、研究材料としてほしいとのこと。
　これで何かが違えば、ＲＪシステムにその要素が組み込まれ、さらに黒幕に対しての対策に繋がる可能性がある。それならばと、一切躊躇なく提供するに至った。
「叢雲も、唯一耐性を持つ身体なので調査したいと話していましたが……」
「アイツら……というか、明石の目が気に入らないから断ったわよ。ヒトの身体をジロジロ見てきて。髪を１本渡したんだからいいじゃない。それでも気分が悪いっていうのに」
「ワガママ言って時間使うんだもの。ホント面倒なヤツよムラクモは」
「うっさいチョロ助。ノせられてホイホイ血を渡してるようなヤツに言われたくないわよ」
　いつものようにプリプリしている叢雲だが、この鎮守府に居心地の良さは感じているようだ。明石に対して警戒心が強いだけ。そしてそれは、あながち間違いでは無い。
「あと、余裕があれば、古鷹のスタミナ不足を解消出来るようなアイテムが作れればと話していました。今はここの明石だけではなく、他の明石とも連携が取れるということなので」
「本当に助かります。外付けの装備で解消出来るなら、正直頼りたいですしね」
　古鷹のスタミナ不足も深刻だ。他の誰よりも消耗が早く激しい古鷹は、戦場でも強力な力を発揮する代わりに、長続きしないという大きなデメリットを抱えている。それを払拭することが出来れば、より

戦いやすくなるだろう。
「残り少ない時間でも、堅実に成果を重ねているみたいで、すごいですねあの明石は」
「私もそう思います。たまにとんでもないことをしでかしますけどね」
春雨からは笑顔が絶えない。そんな春雨に、大鳳も喜びを隠しきれなかった。

鎮守府に訪れたことで、春雨は確実にいい方向に向かっている。怒りと寂しさは、本来在るべき場所では溢れることは無かった。

交流の場

春雨達は久しぶりの故郷を満喫。短時間であっても、とても有意義な時間を過ごすことが出来ていた。怒りが溢れている春雨も、失われていた本心からの笑顔を取り戻し、心が癒される。

白露も海風も、ここに戻ってこれたことを喜び、戦いが終わったら再配属しようという話となった。

「あ、そろそろ来ますね」

春雨が直感的に、大塚鎮守府からの艦娘が堀内鎮守府へとやってくることに気付いた。そこから少しして叢雲が感知。そしてすぐに、水平線の向こう側に1つの部隊が現れたことが、目視でもわかるところまで来ていた。

そのうちの2人は、春雨達も知っている鹿島と雷。残りの4人がまだ顔を合わせたことのない艦娘達。江風や涼風は、大塚鎮守府の侵蝕事件の解決に向かっているため、そこで顔を合わせているものの、関係はそれっきり。その時には多少のケアに参加したものの、そこまで時間も使っていないため、顔見知り程度である。

「くくく、来たか！」

この到着に一番喜んでいたのは、武蔵である。改二改装が施されたことにより、最強の座に着いた姉の姿を、今か今かと待ち侘びていた。その力を確かめたくて仕方ないと、艤装まですでに装備して仁王立ち。

「はっはは、凄まじいな。ここから見てもわかる。なんだあのデカい艤装は。私のモノよりも派手じゃないか。あれは相当な力を持っているぞ」

遠目でもわかるレベルでその大きな艤装が目に入った。駆逐艦くらいならば両サイドに乗せることが出来てしまいそうな程に巨大な主砲は、本人が言うように武蔵のそれを一回り大きくしたくらいに見えた。それが、艦娘の中で名実ともに最強と名高い存在、大和である。

それに輪をかけて目立つのが、羽織っているコートのような上着。その大型化した主砲すら呑み込むように広がり、まるで一輪の花のよ

うに感じる。それも相まって、あまりにも巨大である。深海棲艦と比べると同じくらいのモノはそれなりにいたりするのだが、艦娘であのサイズは凄まじい。
「あー、川内さンと長波がいるな。あン時のメンバーがそのまま来てくれてンのか」
「夕雲もいるからね。あれかな、侵蝕された恨みを晴らすって感じかな」
江風と涼風が反応するのは、その大和の少し前を航行している者達。江風が島風と共に撃破した川内と長波、涼風が鎮守府内を治療して回っている時に真っ先に発見した夕雲。一緒にいる五月雨としても、大和も執務室前の攻防戦で相対した相手であるため、顔見知りを見たときのようなちょっと喜んでいるような表情。
全員が全員、一度侵蝕された経験があり、黒幕に対して因縁がある者達。ある意味、この最終決戦に招かれるべき者達である。
「大塚鎮守府より、旗艦大和、並びに随伴艦5名、到着いたしました。本日はよろしくお願いいたします」
工廠に到着するや否や、ビシッと敬礼をして堀内鎮守府に挨拶をする大和。その凛とした姿に、そこにいた者達はおおと感嘆の息を漏らす。
「よく来てくれた。歓迎するよ」
「我々も胸を借りるつもりで参りました。決戦として相手取る黒幕との戦い方は、こちらはまるっきり素人ですので、是非ともご教授いただければと」
今回の本題は演習。既に知る者と戦い、互いの力を把握すること。連携にも繋がるため、出来る限りの時間を、有意義に使いたいと考えていた。
「それと、もう一つ」
チラリと視線が春雨達の方へと向く。そして、ニコリと笑みを浮かべた。
「初めての深海棲艦との共闘です。無論、その心は艦娘であると理解していますが、戦い方は艦娘とは似て非なるモノと聞いていますの

で、そちらを見せていただきたいですね。決戦では共に肩を並べて同じ結末を求める者ですから」
　当然だが、大塚鎮守府に所属する者達は、堀内鎮守府の艦娘と同じで、穏健派の深海棲艦には肯定的。自分達が侵蝕されたという経験もあるためか、善なる者であることはすぐにわかる。
　その筆頭である春雨がそこに立っているため、大和は堀内提督に許可を貰い、春雨の方へ。そして、視線を合わせるためにその場で膝をつく。
　大和のその行為を見て、海風は警戒心を高めた。グラーフ・ツェッペリンのしでかした春雨への行為を、この大和もしないとは限らない。
「貴女が春雨ね。話は聞いています。今回はよろしくお願いします」
「はい、よろしくお願いします。どのように聞いているのかは知りませんが」
「侵蝕され、命を落としそうな艦娘を救うために奔走した映像を、私達も見せてもらいました。それに、そのときの詳細な様子を、現場にいた雷から聞いていますしね」
　大和の後ろで雷がサムズアップしていた。あの時にとにかくサポートを続けていた雷が、周囲をよく観察し、その時に起きたことを全て嘘偽りなく伝えたという。
　大本営に提供された映像もあったため、春雨の奮闘は関係者なら誰でも知っていることだった。大塚鎮守府は、この雷の説明も含まれるため、他より少し詳しい。
「種族なんて関係ない、同じ明日を見ている者同士、手を取り合いましょう」
「勿論です。貴女方は私達を敵として見ていないんですよね。ならば、手を取り合うのが一番いいですから」
「敵として見るなんてとんでもない」
　ニッコリ笑って手を差し出す。春雨もそれに応え、その手を取った。義腕の硬い感覚だろうとも、その温かさは春雨の優しさを直に伝えていると思い、大和はこの深海棲艦達が味方になってくれて本当に

良かったと実感する。
　これだけで済んだことに、海風も内心ホッとしていた。当たり前のように手の甲にキスをするような輩が何人もいたら困る。
「君達は少し休憩してくれればいい。演習はその後にやろうか。既にやりたくて仕方ないという顔をしている者がいるが」
　提督が全て話す前に、ズンズンと前に出てくるのは武蔵である。この時を待っていたと言わんばかりに大和の前に立つと、ニカッと笑って拳を突き出す。
「待っていたぞ大和。貴様とまた肩を並べて戦えるのを楽しみにしていた」
　実際、大塚鎮守府の大和と大将の武蔵は面識自体は無いのだが、姉妹ということで、お互いが何者かは理解している。
　そんな武蔵の態度に、大和は優しげな笑みを崩すことなく向き直った。
「私もよ、武蔵。話には聞いていたけれど、ここで会うのは初めてよね。一緒に、決戦に挑みましょう」
　突き出された拳に、大和も拳を突き合わせる。姉妹というより戦友。しかもこの2人に関しては初対面にもかかわらず、ここまでノリが良く意気投合出来るのは、やはり姉妹だからか。
「休んだ後でいい、その力を我々に見せてくれ。どれほどのものか、肌で感じてみたいものだ」
「ええ、試運転もしているから、今日の演習では力を十全に発揮することも出来るでしょう。でも、そこまで高望みはしないでね？」
「謙虚だな。だからこそ大和か」
　見方によっては一触即発なのだが、仲違いしているわけではなく、単に互いのことを理解しているが故にこういう話し方になるだけ。特に武蔵は好戦的であるため、姉に対してどころか、誰に対してもこういう態度である。
「みんな、久しぶり」
　一方、随伴艦5人には、古鷹が駆け寄っていた。鹿島と雷とは既に面識があるが、残りの3人とは今の状態では初顔合わせ。話には聞い

ているし、戦闘中の映像でもその姿を確認しているのだが、直に見るとやはり変わり果てた姿であるとわかる。
声もその要素も何も変わっていないのに、今の古鷹は深海棲艦。それを嫌と言うほど見せつけてくるのが、その色味。髪の色や肌の色が艦娘とは一線を画しているために、どうしても艦娘ではないと伝わる。
古鷹としては、過去から何も変わっていない体裁で挨拶をしたものの、心の中ではかなり緊張していた。施設で鹿島と雷と再会出来たことで多少は慣れていたものの、その2人とは考え方が違うかもしれない。
元々の仲間から忌避されるような目で見られたら心が折れかねないが、古鷹自身はそう見られてもおかしくないことをしているのだから仕方ないと、いろいろと腹を括っている。
「……いやぁ、映像で見ていて知ってたけど、直に見るとまた違うね」
早速口に出したのは川内。古鷹の姿を頭頂から爪先まで舐めるように眺め、しかし何処か納得したように頷く。
「見た目は変わっても、古鷹さんは古鷹さんだ」
「そ、そうかな」
「そりゃあね。大分離れてたけど、組んで戦うことも多かったんだからわかるってもんよ」
他の者達もうんうんと頷く。見た目が変わっても中身は変わっていないと確信している様子。
「鹿島は古鷹さんと共闘したんでしょ？　どうだったの？」
「凄まじいですよ。今の古鷹さんは戦艦ですし、出来ることが幅広くて。見た目はそのままスペックは戦艦レ級ですから」
「レ級かぁ……とにかくヤバいってことだ。これはまた一緒に戦えるのが楽しみになってきたよ」
能天気に、しかし力強く、川内は意思を示す。古鷹のことを悪くなんて思っていない。仲間なのだから。
「古鷹さんも演習に参加するんだろ？」
続いて長波。今の古鷹に大きな興味があるらしく、むしろ川内より

も前に出て古鷹の身体に触れる始末。触れた感覚は艦娘と何も変わらないため、おおと声を上げつつも、古鷹はやっぱり古鷹であると触覚からも理解していく。
　古鷹としては、なんの気兼ねなく触れてこられるのは悪いことではない。深海棲艦だからというだけで近付かれないなんてことがあった方が悲しい。雷が初見で抱き着いてきたくらいなので、触れたくないみたいなことは無いとは思っていたが。
「そのつもりだよ。ただ私、物凄くスタミナ不足で……」
「マジかぁ。でも、前哨戦ではしっかり戦えたんだよな？」
「そのあと施設で動けなくなっちゃって」
「そんなにか！　うへぇ、じゃあ結構大変だ」
　やはり距離感は何も変わっていない。むしろ、鎮守府にいた時よりも距離が近いまである。
　物珍しいモノであるから、それを知りたいという気持ちは強くなってもおかしくない。今の長波はその気があるようだった。
「こらこら長波さん、あまり古鷹さんを困らせちゃいけませんよ。そんなにベタベタと」
「あ、悪ぃ悪ぃ、つい。ごめんな古鷹さん、気に障っちゃったか」
「ううん、大丈夫。興味があるのもわかるから。こんなに肌が白くなっちゃってるし」
　長波の距離感を夕雲が諌めるものの、その変わりようは夕雲も少しは興味がある様子。
「……肌がきめ細かくなってる……それにすごく綺麗な髪質。常々、戦闘中でも思っていましたけど、深海棲艦の身体は綺麗すぎる気がします。ちょっと羨ましいです」
「夕雲姉、ヒトのこと言えんのか」
「おっと失礼。あまりにも古鷹さんが綺麗になっていたので」
　深海棲艦化をこのように言われたのは初めてだったため、古鷹は少しだけ頬を赤らめていた。左眼の輝きは少し強くなる程。
「スタミナ不足というのなら、節約出来る戦い方というのも考えた方がいいでしょう。こちらでも考えておきましょうか」

「あ、お願いします。自分でもトレーニングでスタミナを鍛えているつもりなんですが、短期間ではなかなか」
「なるほど。ならば、練習巡洋艦としていろいろ考えておきますね」
鹿島としては、古鷹のこの症状を改善するための案を出すという。一度背中を合わせて戦った分、古鷹には親身になるようだ。

一度共に戦っているだけあり、関係は良好。交流戦も、楽しくすることが出来そうである。

親善試合

大塚鎮守府から出向してきた6人が少し休憩した後、早速演習という運びになった。その間に、ここで初顔合わせである施設組との交流をしっかり進めていた。鹿島と雷は共闘する際に施設に来ているが、それ以外は当然映像でしか知らない存在。しっかり話して、しっかり心を通わせる。

叢雲は案の定プリプリしていたものの、そこは戦えばわかると会話はそこそこ。そこはコロラドに弄られていたが、それでもどうしても払拭出来ないのが叢雲の本質である。初顔合わせでも妥協された。

「1対1で実力を見るのもいいし、早速連携を確認するのでもいい。自由に決めてくれ」

堀内提督からそう言われた大和は、小さく悩む。どれも知りたいことではある。堀内鎮守府の艦娘達の実力、それに、大和との連携に最も適応していると言える武蔵の力。

だが、真っ先に知らなければならないことは、仲間として肩を並べることとなる深海棲艦の力。かつての仲間である古鷹も、知っているモノとはまるで違う力を持っているということだが、まず知るべきは、ここにいる深海棲艦の中でもリーダー格とも言える存在、春雨の力。

「1つ、その、力試しというわけではないのですが、知りたいことがありまして」

「なんだい」

「春雨の力を見せてもらいたいんです。深海棲艦の中でも、特に特殊な力を持っていると感じました。決戦は、こんな言い方はどうかと思いますが、まともな戦いにはならないと思うんです。なので、おそらくですがこの中でも特に特殊な春雨との演習を望みます」

映像では見ているが、見るだけと実際に手合わせを願うのでは話が変わるだろう。故に、大和が直にその力を体感してから、今後の連携について考えたいとのこと。

知ることはとても大事だ。相互理解……というか別種族の理解の

ためには、まず知りたい。大和の目は本気である。
「いいですよ。でも、今の私はそこまで特殊というわけではないです。大和さんが見た映像はあの前哨戦の映像だと思うんですが、その時の十全の力は出せません」
「そうなんですか？」
「はい。あちらの力は、私が心の底から怒りを感じた時にしか発揮されません。仲間相手に使う力でも無いですしね。なので、その片鱗、兆しの力でお相手します」
　春雨の持つ『望む答えに辿り着く力』は、今はトリガーが引かれていないので使用不可。代わりに『最善の答えに辿り着く力』はもう常時発動出来る状態。使おうと思えばいくらでも使えるくらいになっている。多用はしないが。
　そもそも、この鎮守府で穏やかな心を取り戻したことで、簡単には『望む答えに辿り着く力』は発揮されないだろう。むしろ、トリガーが変化しているかもしれない。ともかく、今は使えないと確信を持って言える。
「そうですか。でも、兆しの力は使えるとのこと。是非お願いします」
「ふむ、我々も春雨のその力とやらはよく知らん。見せてもらいたいものだ」
　武蔵も春雨が覚醒してからは同じ戦場に立つことは無かったため、その力に興味があるようである。余程の強さを持っていたならば、武蔵はおそらく春雨に演習を申し込んだろう。そうなる前に、サラトガがスッと武蔵の後ろに立っていた。流石は御目付役である。
「詳しく知る者は少ないだろうね。僕も話にしか聞いていない。見せてもらうことは出来るだろうか」
「構いませんよ。見せ物みたいになっちゃってますが」
　苦笑しながら、演習の準備を始める春雨。準備と言っても、近接戦闘のために少し身体を慣らす程度。海風には少し心配されていたものの、ひとまずは大丈夫と笑顔で返した。
　駆逐艦である春雨が、たった1人で大戦艦である大和と1対1（タイマン）というあまりにもおかしな状況ではあるが、誰も止めようとせず、むしろ

見せてくれとまで言い出しているのだから、知らない者が見たら正気の沙汰では無いと感じることだろう。

海上には春雨と大和のみ。その演習を見るため、一部の興味ある者達は、その戦いがよく見える岸まで移動してきた。演習の前哨戦、しかもその戦いが艦娘と深海棲艦の親善試合みたいなものということで、見たがる者はほぼ全員である。

艦娘達はまだ目がいいために普通に見ていられるが、提督は人間であるため、その戦いをしっかりと見るためにオペラグラスを持ち出す始末。

「いい勉強になるだろうから、アンタ達もしっかり見とけー。でも参考にはしすぎるなよー」

まるで先生のように促しているのは北上。そしてそれを聞いているのは文月を筆頭とした先日のドロップ艦達。

この鎮守府に配属となり、すぐさま伝えられたのが、穏健派の深海棲艦と同盟を組み、共通の敵である黒幕を斃すために協力し合っていることである。最初は驚いていたものの、鎮守府全体の雰囲気から今では納得している。

そして、元祖北上組よりはハードでは無いものの、二代目北上組として、漣達と一緒にやんわりと鍛えられているようだ。ここに北上と大井が居られる期間はそろそろ終わりになるだろうが、その間は面倒を見るようである。

ここまでやってまだ子供嫌いを明言している北上ではあるが、もう誰もその言葉は信用していない。

「はぁ～い、北上さん、質問いいですかぁ～」

「どうしたよ文月」

「参考にしすぎるなって、どういうことですかぁ～？」

ごもっともな質問に北上はそりゃそうだと笑い、とても簡単に説明。

「そりゃあアンタ、春雨（アイツ）の戦い方が艦娘とは一線を画しすぎてるから

だよ。知ったところで真似出来ないから。でも、知っておけば万が一の時に対応出来るかもしれないからね。だから見とけ、でも参考にし過ぎるな。以上」
「よくわかんないけど、わかったぁ～」
見ただけで春雨の真似が出来るものなんて誰もいない。天才である北上でもだ。

春雨と大和が向かい合って立つ。今はまだ離れておらず、演習前の最後の打ち合わせ。
「では、私はギリギリまでの本気を出しますね」
白露型の制服では戦いづらいということで、いつものショートパンツスタイルへと変化。艤装も展開し、真紅の狂犬へと姿を変える。勿論、鉤爪はウレタン製の絶対被害が出ないタイプ。
その姿を直接見ることで、大和は明らかに驚きを見せるものの、その瞳の奥には恐怖や敵対心はなく、この力が味方であってくれることの安堵と、どれほどの力を体験させられるのかという好奇心が見えた。
「艦娘には基本的にはいない近接戦闘型タイプ、ですね。映像で見せてもらってますけど、速さと火力を両立させた、器用万能と理解しています」
「はい。深海棲艦の特徴を、身に刻んでいただければ」
「物理的に刻むのはやめてくださいね」
軽めの冗談は言い合えるようである。
大和は見た通りの巨大な艤装。艦娘として出せる最大最強の火力を持ち、直撃は勿論のこと、掠るだけでも死に直結するような威力を誇る。いくら艦娘よりも高い能力を持つ深海棲艦といえど、その一撃で確実に屠ることが出来るだろう。
今の春雨には義腕を盾に変形させる力があるものの、大和の砲撃を真正面から受けるのは流石に不可能。受け流しですら危険である。模擬弾でもその衝撃は計り知れない。

「それでは、お互いに全力を尽くしましょう」
「はい、よろしくお願いします」
一礼してから、ある程度の間合いを取る。相手が大和であるため、普通よりは大きめに。
この演習に合図はない。今だというタイミングで攻撃を仕掛ける。そして互いに隙を一切見せていないため、その瞬間を見計らっている。
観戦する者達が息を呑む中、先に動き出したのはやはり大和だった。その強烈な砲撃が開戦の合図となる。今後戦う敵も、これくらいの火力を当たり前のように出してくる可能性は高い。それと相対する前に、模擬弾でもこれを見られたのは大きい。
「見た目通りのとんでもない威力だなぁ」
その砲撃と同時に、春雨の瞳が白く輝く。瞬間、自分と大和の間に光の道が引かれた。何本にも分かれるような道ではなく、確実に喉元に噛み付くための1本の道。ゴールも大和。
「掠るどころか、衝撃を受けるのもキツそうだね」
光の道は、かなり大きめな回避行動を促していた。ならばそれに従う。
義脚の伸縮を活かした急加速でその場から一気に離れて、衝撃も受けない位置まで移動。そこからさらに海面を蹴り、同じように義脚を伸縮させて海上を駆け回る。
五体満足の艦娘では確実に出せないスピード。今鎮守府にいる中では最速の島風をも置いてけぼりにするレベルで駆け回り、ステップを踏むように前へ前へと突き進む。それはやはり、海上を舞うかのような優雅さであった。
「速い……直に見るとより凄まじいですね」
それを追うように自慢の三連装砲を連射し続ける大和。ほぼ一斉射に近いくらいの密度で弾幕を張り、春雨の進路を妨害する、攻防一体の砲撃。
文字通りの幕となった砲撃は、簡単に回避出来るようなものではない。艦娘ならば、回避ではなくどれだけダメージを軽減出来るかを考

えるような代物。自分の砲撃を当てるなどして直撃を防ぐか、どうにか駆け抜けて衝撃だけをまともに喰らうか。しかし考えている内に砲撃は届いてしまう。
対する春雨には、その弾幕を潜り抜ける道は見つかっていた。義脚の伸縮はそのスピードに加え、大きな跳躍にも使える。
少し斜め方向へと跳び、弾幕の直撃を辛うじて回避するが、衝撃だけはどうにもならない。そこをどうにかするため、春雨は脚を盾へと変形させた。
「衝撃だけなら受け流せますからね」
まるで衝撃を踏むかのように空中で姿勢を変え、さらには鉤爪を主砲へと変化させ、真上に砲撃。自分の砲撃の勢いによって即座に着水、そこからさらに義脚の伸縮と、流れるような動きで完璧に潜り抜けた。
そうなると今度は大和がピンチになる。激しい砲撃を回避され、自分の最も得意な間合いである遠距離から近付かれると、簡単には対処が出来なくなる。
しかしそこは改二、さらには重装備の改二重へと改装されている大和だ。近付かれることを見越して、水上爆撃機を繰り出した。本来ならば制空権争いや弾着に使うべき装備であるが、今回は近付く春雨を追い返すための牽制と、あわよくば爆撃に巻き込んで終わらせるため。またもや攻防一体の技。
「艦載機まで使えるんですか……」
若干甘くなった砲撃と、その密度を補うような爆撃により、正面と上からの攻撃を避けることとなる。
強烈な弾幕を避けるより面倒なことになったが、春雨には辿り着く道が見えていた。ここまで来ると、爆撃を見ることなく回避していき、ついには春雨の間合いとなる。
「ここからですよ」
まずは鉤爪の隙間に主砲を展開し、両手で砲撃を始める。そのスピードの中にいながらも、照準は完璧。何故なら撃つ場所まで光の道で示されているのだから。

「当たりません。当たっても、喰らいません」
そこは大和も戦艦の意地がある。回避しながらもバルジを展開し、擦り傷すらも作らない。
「ですよね。ですが」
その行動自体が春雨が誘導したもの。回避行動を取るときには、より弾幕が薄くなる。その隙をついて、一気に距離を縮めた。もう手が届く距離という程にまで。
「やらせませんよ……！」
ここから近接戦闘が始まるのは知っている。鉤爪を展開しているのだから、それによる斬り裂きがあることくらい、誰が見ても明らか。
そして大和のバルジは、重い代わりに強固な装甲であり、生半可な攻撃では傷一つ付くことがない特別なモノ。そこに大和の強靭な膂力が加わっていることで、鉤爪程度では跳ね返されるのがオチ。
そう、生半可な攻撃ではである。
「ごめんなさい、バルジを破壊するわけにはいかないので、少し緩やかに」
春雨が繰り出したのは、鉤爪ではなく脚。映像で見ていない攻撃方法であるが、春雨を知る者ならばそれが必殺の一撃であることは一目瞭然。
その脚がバルジに触れたときには、あまり重みの無い蹴りだと、大和は少しだけ安心した。だが、大和は吹雪にやられているという貴重な経験があるため、ここで気を抜かない。むしろ押し返すように踏ん張り、身体を前に倒す。
「ゴール」
光の道の辿り着く場所。ここがゴール。蹴りが押し返されそうになった瞬間、春雨のあの蹴り、心臓を一瞬止めるための蹴りが繰り出された。本気でやればバルジすらも破壊されていただろうが、そこは加減をして。
その衝撃は並ではなく、大戦艦であっても耐えられるものではなかった。
「うそ……っ!?」

「残念ながら本当です」
体勢を崩した瞬間に春雨の脚が伸び、足払いを決めた。余計に体勢を崩した大和はその場に尻餅をつくことになり、最後に春雨が鉤爪を眼前に突き付ける。
「……参りました。まさかここまでとは。慢心していたわけでは無いのですが、知らないということはこういうことなんですね」
「ですね。この手段を知られていたら、大和さんには拮抗されていたと思います」
「負けていた、では無いんですね。ふふ、流石です」

親善試合は春雨が勝利を収める。これにより、深海棲艦がどれほどのものかを理解し、さらには仲間となってくれたことを心の底から喜ぶことになった。

真の帰投

春雨と大和の親善試合が終わり、２人が工廠に戻ってきたところ、岸で観戦していた者達も２人の健闘を称えるために工廠へと来ていた。

「流石は春雨姉さんです。あの大戦艦に屈することなく、むしろ真正面から圧倒してしまうとは、この海風、感動してしまいました。辿り着く力を十全に使いこなし、弾幕を掻い潜る姿は本当に勇ましかったです。私も見習わなければ」

案の定、春雨が勝利したことで海風が大興奮。春雨は苦笑しながらステイと海風を落ち着かせる。他の者も沢山いる工廠でいつものマシンガントークは控えてもらった。

「いやぁ、流石ですなぁ春雨氏。かの大和嬢にも臆さずぶつかり合ってあそこまでやれるとは。漣もビックリですわ。海風氏が盛り上がっちゃうのも無理は無えですよ。これはもう胴上げくらいした方がいいんじゃ痛ぁ!?」

「たかが演習でしょうが。んなことやったら迷惑よ」

漣も海風と同様に大興奮だったが、そこは曙が引っ叩くことでステイ。朧も苦笑しながら漣の口を塞ぐ。

実際、春雨は今回は勝てたものの、ある意味初見殺しをしたようなもの。大和が春雨のすることを最初から全て知っていたのなら、最後の一撃も受け流していた可能性が高い。

春雨は自分のことを知ってもらうために大和と戦っていたようなものだ。辿り着く力として、どれだけ弾幕を張っても潜り抜け、駆逐艦と侮っていたわけではなくとも戦艦の膂力を上回る近接戦闘を見せることが出来ることを。

「大和さんにも話したけど、多分次やったら拮抗だよ。それに、１対１だからどうにか出来ただけっていうのもあるし。戦いはチームプレイだからさ」

「なんて謙虚な。でも、春雨姉さんの言う通りですね、単独で戦えれば有利かもしれませんが、多対多の場合は話が変わりますかね。それ

に、春雨姉さんのやり方を知られた後では、対策もされてしまうでしょうし。……私としては辿り着く力への対策がどういうものかはわかりませんが」
「弱点を見つけてもらえると嬉しいかな」
辿り着く力への対策と言われると、それを持つ春雨でもすぐには思い付かない。それくらいインチキと言える力だ。しかし、弱点が多いこともわかっている。
対人戦だと屈指の力と言えるものの、あまりにも多すぎるものに対しては対応しきれない。また、味方に使っていても対象が多いと疲労が一気に溜まる。その時の最善を掴み取ることが出来るかもしれないが、それでも望んだ結末になっているかはわからないのである。
「そ、そろそろ、口離してくれないかねボーロ！」
「ああ、ごめんごめん。余計なことを言いそうだったからつい」
「ボノよか実力行使の出方が酷いよねボーロは!?」
ここでようやく口止めされていた漣が解放される。そんな話をしていても、春雨は終始笑顔だった。
一方、春雨との演習で敗北を喫した大和であるが、その敗北を既に次に繋ごうとしていた。
「あの最後の蹴りは……」
「春雨さんの脚は艤装です。その長さを蹴った瞬間に一瞬伸縮させることで衝撃を発生させている、と考えるのが妥当でしょう」
大和に説明するのは鹿島。練習巡洋艦として、親善試合の一部始終を凝視し、分析していた。
蹴られた瞬間に衝撃を受けるというのが、大和としては苦い記憶を呼び起こす。触れられた瞬間に吹っ飛ばされ、壁にヒビが入るほどの衝撃を何発も喰らった、あの時の記憶。
「次同じことをされると感じたら、耐えるのではなく、押し返す方向で力を入れた方がいいですね。私達ではそれでも弾き飛ばされると思いますが、大和さんの体幹と膂力ならば耐えられると思います」
「なるほど、肝に銘じておきましょう」
決戦に挑むにあたって、そういう今までに知らなかった戦術を知る

ことが一番の対策となる。
　如何に歴戦の鎮守府であっても、今回の戦いは今までとはまるで違う戦いだ。侵蝕だけでも相当なのに、それだけでは済まない可能性が非常に高い。鹿島と雷が参加した龍驤との戦いでも、浮遊した飛行甲板が何枚も重ねられて砲撃が一切通らなくなったり、そもそも深海忌雷が艦娘に寄生して、過剰な出力をさせた挙句、命を吸い尽くしてしまう事例まで出てしまっている。
　そうなると、これまでの常識なんて考えるまでもなく捨て去り、その戦いに何度も参加していた者達、先駆者の戦い方をまず知り、理解することが対策への近道。少なくともその戦術で今までの戦いを潜り抜けてきたのだから、少なくともそれが出来るようにならなければ、追いつくことすら出来ないだろう。

　ここからは出来る限りの演習が繰り広げられた。まずは1対1での力の見せ合いが続き、施設の者達がどういう存在なのかを確実に知ってもらうことに時間を使った。連携するにしても、単体の戦い方を知らなければ、組み立てることも出来ない。
　順当な戦い方をする者は、この場にはほとんどいない。海風は右腕を変形させて多種多様な戦闘方法を再現するし、叢雲は槍のみを使った近接戦闘で砲撃すら弾き飛ばす。コロラドに至ってはロブスターのハサミとカニの甲羅だ。
「深海棲艦って、ここまでやれたっけ!?」
　思い切り愚痴のような言葉を吐き出したのは川内。たった今、戦艦（コロラド）に立ち向かうという、艦娘同士でも厳しい演習をしたわけだが、手も足も出ないというわけではなくとも、攻撃のほぼ全てが通用しなかった。
　川内としてはそんな経験をしたことが殆どなく、負けるにしても一矢報いるくらいは出来た。しかし、コロラドには本当に傷一つつけられなかった。
「私が特別なの。でも、いい線行ってるわよ。Ｓｔａｍｉｎａをそれ

なりに使わせられたんだもの。あれ以上続けられてたら、私の方がＫｎｏｃｋｄｏｗｎさせられてたかもしれないわね」
「そ、そうなの？　じゃあ、攻撃しつつも持久戦に持ち込んだら」
「私はもう少し激しく攻撃してたわね。で、それまで耐えられたら気に食わないけどＧｉｖｅ　ｕｐしてたわ」
　まぁ負けるわけにはいかないけど、と後付けし、コロラドは川内の健闘を称えた。
　コロラドも相当特殊な方なので、それが見せられたのは大きい。それでも白鯨は出していないのだが。
　ここからは比較的順当な砲雷撃戦をする３人であり、まずは白露の番。とは言っても錨を振り回すようなこともするので、順当とは言い難い。しかし、錨を使う者というのは艦娘にも一部存在する。ここにいる雷も、緊急時の近接武器として使用することはある。そのため、スタイルとしては艦娘にかなり近い。
　槍を扱う叢雲も近接戦闘といえば普通かもしれないが、特化しているというのは特殊なので順当とは言い難い。そもそも槍の巨大化なんて艦娘には出来ない。
「先に特に特殊なタイプを立て続けに見てもらいましたが、ここからはどちらかと言えば艦娘に近い戦い方をするヒト達をメインにしています」
　春雨が提督に説明する。その白露の相手は、大塚鎮守府からやってきた中でも相当な実力を持つ駆逐艦、長波。川内の部下として戦闘能力がかなり高い。
　それでも白露は充分すぎるほどの力を発揮し、長波を追い詰めていく。
「こ、コイツ、なんだコレ！」
　相手をする長波が苦戦を強いられているのは簡単な話で、戦術に慣れたと思った瞬間には、別人のような動きをし始めるからである。砲撃を主体に戦闘を続けているかと思いきや、突然の突撃に転じ、それに慣れてきたかと思いきや、搦め手をやたらと使うスタイルへと変化。

夕立が突撃し、時雨が安定させ、村雨が搦め手で惑わし、それを白露が統率する。ここに春雨のサポートが加わって完璧となる駆逐隊の力のうち、春雨を除いた４人分を白露が全て使いこなしているのだから、翻弄されて当然だった。長波は今、４人を相手にしているのだから。

「悪いね。あたし、こういうやり方なんだ」

長波が咄嗟に放った魚雷は、着水する前に砲撃で撃ち抜いた。これは時雨の技術。

「うぇっ!? そんな精度、さっき見せてなかっただろ！」

「そりゃあそうでしょ。見せ続けたら慣れちゃうんだもんよ」

魚雷の爆発を回避しようとした長波の脚に、錨の鎖が絡み付く。これは村雨の技術。

「逃がさないよ！」

そして鎖を引っ張るようにしながら突撃し、ほぼゼロ距離での砲撃。これは夕立の技術。

瞬時に技術を変えられるのは、白露が持つ姉妹統率の力。混じっている気質をその場でコロコロと変えられるのは、白露の一種の特殊な能力と言える。

白露らしさが戦闘技術に発揮されないかもしれないが、そもそも複数の異なる力を当たり前のように使いこなしていること自体が、白露でなければ出来ない。

「マジかよ……っ」

その一撃は辛うじてバルジを展開することで防いだが、鎖を消しながら足払いをして体勢を崩す。

そこからさらに艤装を変形させ、大型の主砲を展開。これは時雨の艤装。

「４人分だからさ、簡単に覆してもらっては困るんだ」

そしてその主砲をゼロ距離で放つ。模擬弾とはいえ、その威力は相当であるため、長波はマズいと感じたか、力を全て足に込めるかのように全力のバックステップ。ゼロ距離の砲撃をギリギリのところで回避。力業は長波の得意技だが、演習でここまですることはなかなか

無い。
長波だって大塚鎮守府では相当なやり手だ。鎮守府では、技の夕雲、力の長波と称されるくらいの筆頭駆逐艦なのだが、今の白露のトリッキーな戦い方には悪戦苦闘である。
「夕雲姉を相手にするよかしんどいぞ……」
「それは光栄だね。そっちの夕雲がどんな戦い方をするかは知らないけど、さ！」
再び錨を振り回して、今度は大袈裟に身体を縛ろうと投擲。避けてくださいと言わんばかりの攻撃だが、今までの経験からして、そもそもこれが囮で別のことが本命だろうと察しはつく。
ならば、これをどう避けるか。ただ避けるだけでは思うツボになりそう。ならば錨を撃つ。これならば白露の体勢を崩すことが出来そうだ。そう考えた長波は、すぐさま行動に移す。
しかし、錨に一瞬でも意識を向けた時には、その錨自体がもう消えていた。代わりに逆サイドから白露が突撃している。
「げっ!?」
「隙あり！」
脇腹に一撃。常に翻弄し続けて、最後はしっかりと決めた。
「あークソ！　もっかい！　次は負けねぇ！」
「はっはっは、でも後からね。まだ順番とかあるから、出来たらでお願い。ちゃんと相手するから」
この一戦で白露と長波は仲良くなる。長波の一方的なライバル視みたいになりそうではあるが。

その演習を見届けた堀内提督は、なんだか感慨深い気分だった。こうなる前、部下達が演習を繰り広げるところを何度も何度も見ているからか、その白露の戦いからは４人分を感じ取ることが出来た。
「……本当に帰ってきたんだな」
堀内提督は白露達が本当に帰ってきたと実感出来ること。姿は１人かもしれないが、今そこには４人いた。

「ですね」
五月雨も堀内提督の隣でそれを笑顔で見ていた。姉の帰還を真に理解出来てご満悦なようだ。

心の成長

個人演習は続き、艦娘と近い戦い方をする面々ということで大鳳の力――戦艦と空母、そして刀による力押しスタイルを見てもらった後、古鷹の番。施設の者としては最後の個人演習となる。大塚鎮守府の面々も全員の力を知ることが出来ているため、古鷹の相手は既に見た者となる。

元々大塚鎮守府の者であるが、戦い方はもうその当時とはまるで違うものとなっているため、一度見て知ってもらわなければならない。とはいえ、そのスタイルは戦艦レ級であるため、そういう意味では戦い方は誰でも知っているもの。

だが、それを古鷹がやるということに意味がある。見た目は重巡洋艦なのに、艤装はレ級で出力はそれ以上とすら感じるだろう。だからこそ、その力を正しく使うと何処まで心強いかを知ってもらいたい。

「私と雷ちゃんは同じ戦場にいましたから、古鷹さんの戦い方はおおよそ理解しているつもりです。なので、別の方に……」

「あの、私からこんなことを言うのはなんですが、演習として相手をしてもらいたいヒトがいるんです」

鹿島が誰を出そうかと考えているところに、古鷹があえて自分からリクエストさせてもらいたいと話す。そしてそれは、大塚鎮守府の艦娘ではないことも。

古鷹の戦いを、大塚鎮守府の仲間達にまずは見てもらいたい。実際にやりあうのではなく、まずは見るだけ。それくらい、古鷹は今この場で相手をしてもらいたい者がいるのだという。

「早くやりたくて仕方ないという顔をしているんですよね……武蔵さん」

古鷹が武蔵の方をチラリと見やると、待ってましたと言わんばかりにニヤリと笑い、ズンズンと前に歩み出てきた。

「少しだけ、ほんの少しだけ、因縁があるんです。それは私にとって、いい意味で刻まれていまして」

「そうなんですか？　そういうことなら、私達は古鷹さんの戦いを見

守ります。ケジメか何かなんですか？」
「そんな感じです。武蔵さんも察してくれているように見えますね」
歩み出てきた武蔵は、腕を組んで仁王立ち。その風格たるや、大和以上にも思えた。
「私でいいのか？　貴様が本当に戦わねばならないのは、金剛か比叡ではないか？」
「いえ、武蔵さんでお願いします。その、金剛さんや比叡さんには申し訳なさが先立ちますし、私の気質が本気を出させてくれません。ですが、武蔵さんなら、私の全てを見せられると思うので」
「そうか、そういうことならば引き受けよう。やはり榛名が混じっていることがそうさせるのか」
「ですね。それに、あの時にそれを利用してしまったのが、どうしても引っ掛かっているので」
古鷹が治療されるに至ったのは、金剛と比叡のおかげである。比叡の刀剣を金剛が使ったことで、瀕死の重傷を負うことが出来たのが古鷹の元に戻る要因。あの金剛がそこまでしたのは、あの時の古鷹が死者を冒涜する行為をしたから。そこがどうしても引け目になっている。
当然ながら、金剛と比叡にはその件を謝罪しているのだが、これだけは開き直れない。自分は2人の妹であるという思考も出てきてしまっているため、いろいろと混じり合って2人とはまともに戦える気がしないと古鷹は感じていた。
それと比べると、武蔵はあの現場にもいた上に、自分に対して叱咤までしてくれている。当時は侵蝕を受けていたために苛立ちしか無かったが、今ではその言葉は古鷹にとっても大切なものとなっていた。
「武蔵さん、私は自分の弱さを知ることが出来ました。次は、心（ココ）をより強くしたい」
自身の胸に手を当てて、力強く宣言する。あの時の武蔵に言われた言葉。自分の弱さを知っているが故に慢心などしない。そして、心が絶対に折れないから負けない。この言葉が、今でも古鷹には心に刻ま

れている。
　その古鷹の言葉に、武蔵の笑みは不敵なモノから慈悲深いモノへと変わった。
「ああ、そうだな。ならば、私が相手をせねばな。強い心は、強い身体に宿る」
　さぁやろうと海上へ。この演習、勝っても負けても、古鷹は先に行ける。未だ振り払うことなんて出来ない罪悪感を、多少は呑み込むことが出来るだろう。

　岸ではこれまでと同じように２人の演習を仲間達が見守る。その中には、金剛と比叡の姿もあった。
「やっぱり、気になってしまうものデス」
「ですね……。あの古鷹は、私達の妹でもあるわけですし」
　堀内鎮守府に榛名はいないが、どういう存在かは知っている。金剛型の姉妹の中では特に優しく、しかし真っ直ぐとした信念を持つ自慢の妹。その性格が古鷹にも影響を与えているのは確実であり、古鷹も金剛と比叡は姉と感じている節はある。
「私達が相手をしたかったですね」
「そうネ。でも、榛名の気質が入っているなら、私達と相対するのはＶｅｒｙ　ｄｉｆｆｉｃｕｌｔだと思いマース」
　だが、それがあるために金剛と比叡にはどうしても本気が出せないというのも理解出来る。榛名の優しさは、そういう優しさだ。いくら演習であっても、いくら絶対に死なない戦いであっても、姉妹に手を上げることを拒むくらいに。
　姉のことを尊敬しているから、手が上げられない。ある意味、今の海風のような在り方を、艦娘として既にやっていたのが榛名である。
　そうなると、古鷹の全力、今知らねばならない情報を知るためには、相手を武蔵にせざるを得ないのだ。あちら側の時から因縁がある武蔵でなければ、古鷹は今の自分を出すことが出来ない。
「そういうところも、榛名なんだネー。古鷹には、榛名がすごく強めに

入っちゃってるのカナ」
「古鷹の他に3人混じってるはずなんですけど、古鷹の次に榛名が濃いんですよね。重巡洋艦の身体だったのが戦艦の力を手に入れたからですかね」
「かもしれないネ」
金剛も比叡も、古鷹を見る目は妹を見るそれだ。演習では、武蔵に勝ってもらいたいと心の中で応援していた。

海上で相対する古鷹と武蔵。以前にこうやって向かい合った時、古鷹は泥に侵蝕されていた。古鷹1人で戦艦3人と戦い、金剛の怒りを買うまでは互角だった。しかしそれは、泥によるブーストがあったからだ。
今はそれはなく、戦艦の力が使える代わりにスタミナがやたらと少ない深海棲艦である。当時は武蔵よりもおそらくは強かったのだろうが、今はそこまでの力は発揮出来ない。榛名の気質である優しさも、そこに絡んでくるだろう。だが、そこは鈴谷や最上の気質を使えば姉以外ならばどうにか出来る。
「よろしくお願いします。今の私を見ていただきたいです」
艤装を展開しつつ、戦いやすい姿にも変わる。艤装は戦艦レ級と同じもの。そして、制服もインナーに上着を羽織るだけ。胴に刻まれた斬り傷も、インナー越しにハッキリと見えるように。
「ああ、見せてもらおうか」
武蔵もその巨大な艤装を展開。大和のそれを見た後なので、少しだけ小さいように見えなくもないが、武蔵のこの艤装は大和よりも数倍は使い込まれているため、出力の安定度が違う。
故に武蔵は強い。爆発力ではなく安定に力を使い、しかもそれが通常の火力とは比べるまでもなく大きいとなれば、それはもう最強と称されてもおかしくないのだ。
「使える手段はいくらでも使ってくれて構わん。既に先の大鳳で見ているからな。空襲でも砲撃でも、貴様は雷撃も出来たか。その全てを

私に見せてくれ。むしろ、それが今回の演習だろうからな」
「はい。胸を貸してください」
微笑んだ後、間合いを取る。お互いに戦艦であるため、それなりに大きな間合いは必要。砲撃1つでも衝撃が大きく、駆逐艦の間合いでは一瞬で終わってしまうし、古鷹に合わせた巡洋艦の間合いでも訳がわからないまま終わる可能性が高い。
古鷹は近付くこと、武蔵は近付かせないことを念頭に置いた戦いとなるだろう。互いに自分の間合いに持っていくことが勝利の鍵。今は武蔵側に傾いている。
「では……行きましょう」
尻尾の口から膨大な数の魚雷が吐き出され、武蔵に一直線に突っ込んでいった。戦艦では極々稀な雷撃は、深海棲艦の中ではそれなりに多用される戦術。
こういうところだけは巡洋艦なのだと理解しているため、武蔵は即座に砲撃による対策を取る。強烈な火力の砲撃を海面に放ち、普通ではなかなかお目にかかれない水飛沫を巻き上げて全魚雷を破壊した。
勿論そうすることで武蔵の視界は水飛沫で全て封じられる。古鷹の姿が見えなくなるということは、今ここで突撃するのがベスト。
しかし、わざわざそうしてきたということは、突撃を誘い出しているとも考えられる。故に、古鷹は突撃ではなく空襲を選択。魚雷を吐き出した尻尾は、同じモーションで今度は艦載機を吐き出す。その量も相当なものであり、並の空母の搭載数を優に超えている。
「やはりか。突撃か空襲の二択だったからな。不用意に近付かない選択肢が取れるのは、ヤツだからさ」
そちらは高角砲群を使用しての対空砲火。自分に害を及ぼすであろう艦載機のみを撃墜し、古鷹の次の一手を見据える。
必要以上に撃墜しないため、武蔵の周囲は自分にダメージが入らない程度の空爆が繰り出され、魚雷を爆散させたモノとは別の水柱が立ち昇った。正面のみならず、周囲もそれで視界を封じられる。
「面白い、まずは視界封じか。確実に私を斃そうとする気概を感じるぞ」

やはり邪魔だと感じたか、武蔵はその強大な主砲を連射し、水飛沫を全て霧散させた。この隙を見て突撃してくる可能性も考え、自分を守るために３６０度全てに弾幕を張る。
これは先に行なわれた演習から取り入れた手段。大和の弾幕を春雨が乗り越えたことを考えると、全方向を壁にしなくては近付かれる可能性がある。古鷹の力が何処までのものかを見るためにも、武蔵は全力で迎え討つ。
「やっぱり。電探があっても視界の確保はすると思っていました。だから、ここで畳み掛けます」
そこにさらに雷撃。圧倒的なその魚雷の数で、処理が追いつかないようにしていく。それでも全てを対処していくのが武蔵なのだが。
しかし、対処しているということは、他を対処する手が足りなくなるはず。そこを見計らって、魚雷を吐き出した尻尾をさらに前方に構える。すると、その口内から戦艦の主砲が生えてきた。
「どうですか！」
そして、水飛沫に向かって武蔵と同じように連射。魚雷、空襲、魚雷ときて、ここでさらに砲撃。その全てが、艦娘の中ではトップクラスの威力。得た力を使い切ろうとする全力で、武蔵を圧倒する。
自分の砲撃によって姿は見えなくなるものの、そこで攻撃の手を緩めていたら、その隙をつかれて返り討ちに遭う可能性だってあった。それ故に、全力を出し続ける。武蔵がその場所から動いたようにも見えないため、全てが当たっているか何かしらで防がれているかのはず。
「私に攻撃の隙を与えないと考えるのはいいことだ。だがな、私はまだ倒れんぞ！」
しかし、それを真正面から拮抗してくるのが武蔵である。弾幕には弾幕を。その砲撃同士がぶつかり合い、威力もほぼ同じであるため、互いにその場から動けない。
ここからはスタミナ勝負となるのだが、そうなると古鷹が圧倒的に不利である。今の拮抗を維持するにも、その体力はゴリゴリと削られ続け、深海棲艦であるが故に、それがそのまま攻撃力に直結する。撃

ち続けていても、そのうち武蔵が押し勝つことは誰が見ても明らかだった。
「ならば……！」
だからこそ、古鷹は４つ目の手段がある。その右腕に本来の自分の艤装、艦娘の艤装を展開し、主砲を放ちながら接近。撃つタイミングをうまく合わせて、接近戦へと持ち込もうとした。
右腕の艤装は、いわば主砲群のようなもの。左腕で尻尾を支えながら、右腕の砲撃も加える。大きな砲撃に小さな砲撃を紛れ込ませることで、より強力な弾幕へと発展させた。
「くくく、はっはは、素晴らしいぞ古鷹！　貴様は確実に、あの頃より強くなっているではないか！　そうだ、やはり心（ココ）の強さが、全ての強さに繋がる！　貴様も理解しているようだ、なぁ！」
迎え討つため、武蔵も砲撃を放ちながら突撃。そして、
「ぐっ!?」
「ははぁっ！」
ガギッと鈍い音がして、砲撃の雨が止まった。古鷹の右腕の艤装が武蔵の主砲に阻まれ、武蔵の逆の主砲は古鷹の尻尾に阻まれる。
こうなると空いているのは武蔵の両腕と古鷹の左腕。咄嗟に左腕を突き出した古鷹だったが、武蔵の右腕に払われ、逆に武蔵の突き出した左腕は、古鷹が綺麗に回避する。そしてそのままダッキング。
「……引き分けでいいか？」
「はい、ありがとうございました。私は、心（ココ）も強くなれましたか」
「充分だ。しっかりと、正しく乗り越えているようで何より」
このままではもう埒が明かないので、演習は終了。古鷹は、武蔵に対してドローに持っていくことが出来たのだ。

精神的な成長を見ることも出来たため、古鷹としては大満足と言える演習だった。
大塚鎮守府の面々は、古鷹のその変わりように、驚きが勝っていたようだが。

特別ゲスト

個人演習が一通り終わったところで、一旦昼食の時間。朝から堀内鎮守府に向かったとしても、そこからそれなりに時間は経っているため、ちょうどいい時間となった。

その後は団体での演習。施設の者達の力は充分に理解出来たはずなので、混合の編成でぶつかり合い、鍛えながら異種族の連携を学んでいく。

深海棲艦は一癖も二癖もある者達ばかり。最も艦娘に近い動きをする白露ですら、その場で戦術を変えるため、連携には慣れが必要だ。

「ふぃー……ここのご飯は相変わらず美味しいなぁ。午後からの活力が湧いてくるってモンだよ」

「ですね。本当に久しぶりでしたけど、懐かしい味でした」

久しぶりの堀内鎮守府での昼食にご満悦な白露。春雨と海風も、かつて食べていた味に舌鼓を打ち、満足げに微笑む。

施設の味も勿論いいのだが、鎮守府の味も素晴らしい。かつて、海風が初めて施設で寝泊まりをした時に、この鎮守府の食堂を経営している間宮の味と比較した発言をしていた。春雨はそれを思い出しつつ、逆に施設の味がここに追いついていることが凄いと感じている。

「ここで落ち着いてご飯が食べられる時がまた来るだなんて、思ってもみなかったです。みんなと一緒に」

鎮守府の食堂で、みんなで集まって食べる。施設よりも当然広く、大人数であるため、騒がしさも施設の倍以上。

とある場所では、先程の演習の感想戦。鹿島が中心となり、施設の者達に通用しなかった部分を、腹を満たしながら分析。また別の場所では、北上組が参考に出来そうにない演習の光景を思い浮かべながら、次のトレーニングのプランを考えている。また、江風達が施設の者達の強力な能力にどうやったら勝てるかの作戦立案。

食堂を埋める話題は、全てが午前中に繰り広げられた演習の内容。自分達のことを話題にされるのは少々恥ずかしいとも思うが、それだけ受け入れられているとも感じられるため、悪い気分ではなかった。

「……ここのスイーツもなかなかね」
叢雲は早速デザートをパクついていた。施設では食べられないようなモノに、白露とは違う方向でご満悦のようである。
それに対してコロラドが弄るようなことは無かった。叢雲はかつて、ブラック鎮守府で酷い目に遭っているからこそ、怒りが溢れて今の身体になっている。そんな叢雲が、鎮守府で提供されたもので喜んでいるのなら、空気くらいは読む。ここでいざこざを起こしても、春雨達にも嫌な思いをさせるかもしれないため。
「あたしもたーべよ。春雨と海風もいるっしょ？」
「そう、ですね。ここに来たら食べておかないとです。海風もだよね」
「はい、お供します。ここの味を堪能しておかなければ」
演習の後もそうだが、もう今の春雨は、怒りが溢れているようには見えなかった。故郷に戻ってきたことにより穏やかになっている。ずっと持続している辺り、この空間がどれだけ春雨に良い影響を与え続けているかが窺えるものだ。
食堂にいる者はほぼ全てが食事を終えて、デザートを食べているかのんびりと休憩時間を堪能しているかしている。その食堂に、少し早歩きで堀内提督が入ってきた。
「みんな揃っているね」
稀に昼食時に緊急事態が起きた時は、最もヒトが集まっている食堂でその事態を解説する。知られてマズいコトは何処にもないため、全てを大っぴらに話してもいい。
「悪い報せじゃないから安心してくれ。今からだが、演習に特別ゲストがやってくる」
堀内提督の言葉に、みんなが誰だろうと首を傾げたりするのだが、春雨には何処となく察する要素があった。
これだけ食堂にヒトが集まっているのに、確実に演習をやりたがるような性格である島風がここにいない。それと併せて宗谷もいない。ここから考えられるのは、そのゲストというのは大将に関係した者。おそらく今、出迎えに行っているのだと推測出来た。
「彼女もまた、決戦に参加してくれる予定であるため、この機会に参加

する面々の実力を見ておきたいということでね。午後から急遽参加してくれることになったんだ」
話している内に、少しゆっくりと食堂に向かってやってくる影に気付いた。そのうちの2つは、今ここにいなかった島風と宗谷のモノ。そして、その後ろにいたのが、春雨の予想通り大将である。
大将がそこにいるのなら、隣に吹雪が立っているのも当たり前のこと。そして、この特別ゲストというのも、吹雪である。
「急に来てしまって申し訳ありません。仲間の実力をその目に出来る機会というのを逃がすのは惜しいと思いましたので、今からでも参加させてもらいますね」
吹雪の姿を見て、あの時のトラウマが一瞬蘇ったか、大和の表情が若干曇る。吹雪に完膚なきまでに敗北したことではなく、当時の自分の傲慢さを思い出してだ。
侵蝕されていたのだから、誰もが同様にそうなる。本来ならば心優しい古鷹ですら、侵蝕によって格に拘る傲岸不遜な性格に変えられていたのだ。大和であってもそれには抗えない。しかし、その時の記憶があるせいで、自分にもそういう一面があるのではと錯覚させられるのが厄介なところ。
改二という力を与えられた大和であるが、今でもそこはずっと引っかかっていた。顧みないようにしていても、どうしても考えてしまう。それは侵蝕を受けた誰もが同じであるのだが。
「大和さん」
その様子にいち早く気付いた春雨が歩み寄る。
「大丈夫です。誰も、貴女のことは責めていません」
そしてその手を取り、両手で握った。義腕であっても、それは春雨の温もりを強く感じることが出来る。
「侵蝕を受けたヒトはみんな同じ悩みを抱えることになります。でも、それは全て黒幕に植え付けられたモノ。貴女の根幹にそんなモノがあるわけがありません。怒りの矛先は、自分に向けてはいけません」
大和が持っている感情はその類と言ってもいい。正気に戻れたか

らこそ、正気ではなかったときの自分に怒りを持っている。
春雨は、かつて自分も言われた言葉を大和にも説いた。その思考を植え付けたのは泥、つまり黒幕だ。苛立つ要因を履き違えたら、その思いに呑み込まれて正しく力が発揮出来なくなる。
「……そう、ですね。このモヤモヤの原因は、私のモノではない……ですよね」
「はい、勿論。大和さんはそんなことをするわけが無いんですから」
微笑みながら、その握った手を撫でる。ただそれだけでも、大和は安心することが出来た。
吹雪を見たらどうしてもあの時のことを思い出してしまうが、それは自分への怒りではなく黒幕への怒り。トラウマを振り払い、精神的にさらに一歩進む。
「ありがとう、春雨。少し落ち着けました。貴女に言われると、なんだか気が楽になりますね」
「そうですか？　まぁ……私もここまで来るのにいくつも修羅場を潜っているので」
「少しですが話は聞いています。私では心許ないかもしれませんが、何かあったら協力しますね」
「ありがとうございます。私も結構ガタガタなので、頼らせてください」
手を取り合って笑い合う2人。それを少し遠目に見ながら、海風と漣はうんうんと頷きながらその光景を見ていた。これで大和も春雨に尊敬の眼差しを向けることになるだろうと思いながら。
「お昼からの団体演習をまず見せてもらえるとありがたいです。午前中の個人演習が見れていないので、その、施設の方々の力というのを知ることが出来ていません。私も同じように直に戦えばいいかもしれませんけど」
連携をするためには力を理解する。これは大塚鎮守府の艦娘と同じだ。いくら歴戦の猛者である吹雪といえど、その実力も知らない相手とぶっつけ本番で完璧な連携が出来るほどデキた艦娘ではない。というのが本人の談ではあるが、それでもある程度こなすのが吹雪で

あるというのは大将の艦娘達の内心である。
ただ、黒幕との決戦はほんの少しの不安要素も排除したい。ある程度ではなく、旧知の仲というくらいに力を合わせられなくては、その隙をつかれる可能性がある。完璧主義というわけではなく、マイナスの要素を可能な限り消したいだけ。
「その演習を私も見させてもらうわね。作戦の立案に役立てることが出来るでしょうから」
「お願いします。現状を現場で知っていただけるのはありがたいです」
大将もその演習を堀内提督と共に見て、これからのことに使いたいと話す。艦娘と深海棲艦が共存するにあたり、仲良く実力を伸ばし合うその光景は、今も続いている穏健派の深海棲艦との共存に一役買うはず。
そのため、午後からの演習風景は、前哨戦の時のように録画する方針。艦娘も深海棲艦も何も変わらないことの証明となる。

午後の演習まではまだ少しだけ時間がある。その貴重な時間を、吹雪は共に戦うであろう仲間達との交流の時間にあてた。
施設の者達とは監査の時に多少なり交流があるものの、世間話的なモノは出来ていない。なので、ここで改めて話をしようと考えたようだ。
「監査の時は一歩も二歩も下がったところから眺めていただけだから、こうやって面と向かってちゃんと話すのは初めてだよね」
「そう、だね。画面越しでもあまり話をすることが無いから」
その対象は、やはり春雨。吹雪からしても、今回の施設側からの出向メンバーの中で、リーダー格と見えたようである。
春雨にそういう気持ちは無いのだが、施設の面々の中で最も特殊な力を持っていることによって中心人物として見られているのは理解している。そして、春雨がいなければ黒幕との戦いが進められないのは誰もが理解していること。

「いろいろと話は聞いてる。吹雪ちゃん、大将の艦娘の中では一番強いんだよね」
「そうだねぇ。実力主義のうちの鎮守府の中で、ずっと秘書艦をやらせてもらっているくらいには、かな」
　自信満々、しかし慢心は無い。そんな吹雪の笑顔に、ほんの少しだけ驚きつつも、実力があるからこそこの振る舞いが出来るのだとわかる。
「でも、私だって万能じゃないんだよ。ここ最近は連携して敵を殲滅するとかそういう機会があまり無いから、まずちゃんと一緒に戦うヒト達のことを知ることから始めなくちゃいけないし、知ることが出来たからっていきなり連携出来るかって言われたら難しいと思うし」
「それは……誰でもそうなんじゃないかな」
「そうかな。少なくとも春雨ちゃんはぶっつけ本番でもある程度そつなくこなしそうだけどなぁ」
　笑顔を崩さない吹雪。本心から春雨達のことを信用しているため、内に秘めるモノも全て曝け出して話している。隠し事なんて一つもしていない。
「でも、正直なところね、肩を並べて戦うっていうのは、少し楽しみだった」
「そうなの？」
「そうだよ。だって、艦娘じゃなくて深海棲艦だよ？　本来は殲滅すべき敵だと思ってたのに、こうやって共存する道が出てきたんだもん。そりゃあ春雨ちゃん達は元々が艦娘だったっていうのはあるけど、それでも手を取り合えるっていうのは、とても素敵なことだと思う。未来のために他種族共同で事を成すなんて、もう奇跡みたいなモノじゃないかな」
　本当にそうだと春雨も同意する。深海棲艦となってしまったから、この鎮守府には戻ってこれないと思っていたのに、今ではかつての仲間、今の仲間が、そしてこれからの仲間が一堂に会し、和やかに昼食を摂りながら世間話なんてしているのだ。
　少し前までなら考えられない、奇跡のような風景。春雨も、吹雪も、

この空間をずっと続けられるようにしたいと、心の底から思った。
「だから、これからもよろしくね。まずは後から一戦交えてみる？」
「こちらからも。一戦交えるのは私が独断で決めることは出来ないけど、機会があったら、ね」
そんなことを言い合えるのは、もう仲がいいという証拠である。

吹雪の望んだ一戦交えることは、団体演習の後に叶うことになる。

縁の下

決戦への最後の参加者として、大将の秘書艦である吹雪が堀内鎮守府に到着。午後からではあるが、団体演習を見せてもらい、ここにいる者達の実力を知ってから、自分も連携が出来るようにと演習に参加させてもらうという。

その団体演習は、ある程度の役割を持たせた６人の部隊を２つ作り、それらを競わせるという方針。その中のルールとして、必ず３つの所属を混成させるように組ませた。ルール付けと部隊編成は、その場で堀内提督と大将が考えた。

ただし、どうしても相対させることが出来ない組み合わせというのがあるので、そこは考慮する。先程の古鷹と金剛比叡組、あとは春雨と海風はわかりやすい。他にも相性などがあるかもしれないため、そこは進めながら考えていく。

「部隊としての相性もあるだろうし、連携のしやすさというのもあるでしょう。それを知るために、ただひたすらに演習を続けてもらおうかしらね。決着がついたら次の部隊を編成していくわ。すぐに終わるから休む時間もあまり無いかもしれないけれど、そこはこちらでうまく配慮するわ」

大将が仕切りつつ、堀内提督が部隊を発表。そして１２人が海へと出て、即対戦。個人プレーはしないことを念頭に置かれた演習は、個人演習の時と同様に、戦場に出ていない者達が観戦することによって客観的にも確認。誰がどう強いかを知ることで、そこを補うための戦い方を脳内でシミュレートするイメージトレーニングに繋げる。

特に今回は、特殊な力を発揮する深海棲艦との組み合わせだ。連携の仕方もかなり変わる。何度か共に戦っている堀内鎮守府の艦娘達はさておき、大塚鎮守府の艦娘達は、共に並ぶのも一苦労である。

「やはり、大将の島風は万能ですね。すぐさま順応して連携も出来ている」

「ええ。あの子は最初は手を焼いたけれど、今は周りをよく見ることが出来る良い子だもの。初見でも合わせることは出来るわね」

今の戦場は、島風が部隊を回していた。チームメイトである叢雲とは一度組んだことがあるため、やりたいようにやらせつつも援護も邪魔をしないように進め、さらには初めての連携となる長波と夕雲相手でも、叢雲の援護に徹するように指示を出していた。

島風の指示は周りが見えている分、充分すぎるほど的確。知っているものが相手ということもあるとはいえ、自分以上に周りを見ていることで、瞬時の判断を可能にしていた。おかげで、組んでいる千歳と千代田も確実な空襲を放つことが出来ている。

「金剛の統率力は目を見張るものがあるわ。旗艦としての実力がとても高い。貴女の部下から出すのなら、金剛は確定かもしれないわね」

「ですね。金剛も島風と同じように周囲が見えている。普段の気遣いが戦場でも活かせているのでしょう。火力も申し分ないですし、今のところは候補ですね」

島風達が相手をしているのが、金剛が率いる部隊である。金剛と比叡という戦艦の二枚看板が前衛となり、それをサポートするように川内と白露が隙間から狙う。さらにその後ろから江風と涼風が雷撃で援護。6人が一体となった突撃を決めていた。

金剛は盾を展開し、比叡が刀剣を握って突っ込むため、後ろからの援護が見えにくいようだ。そのため、砲雷撃戦はいい具合に拮抗している。

そこで出てくるのが近接戦闘。叢雲と比叡の一騎討ちの様相になりつつあった。

お互いに相手が傷つかないダミーを使っているが、激しい猛攻で牽制し合い、時には刃をぶつけ合う。比叡の間合いになった場合、叢雲は圧倒的に不利になるため、必要以上に近付かせないように槍を振り回す。

逆に、近付けなければ自分の間合いにならないので、叢雲の槍を弾き飛ばして前に出ようと攻撃を繰り返していた。

「泥相手に近接戦闘はどうなのかしら」

「今ではバリアがあるおかげで不可能では無くなりましたが、泥を斬ることは出来ないので、あまりいい手段ではないかもしれません。で

すが、泥以外には強みがありますね」
「そうね。黒幕が自分だけで拠点にいるとは考えにくいし、周りに泥だらけの雑兵がいる可能性は高いわよね」
黒幕が拠点で待ち構えているのは当然として、今までのことを考えれば、幾重にも策を張り巡らせているのが当然。まず間違いなく1人でいるわけがない。侵蝕した艦娘や深海棲艦、もしくは泥そのものがヒトのカタチをして待ち構えているかもしれない。
ありとあらゆる攻撃手段がある方が、どのような状況にも対応出来るはずだ。近接戦闘も必要だろうし、長距離砲撃だって必要。解放する武器も必要だし、切り捨てる武器も必要。無くていいものなど存在しない。
もし自分が待ち構える立場ならという観点から、あちらが取るであろう対策を網羅する。今の敵の手段を全て考慮し、さらにそこから考えられる発展した能力まで考察し、それすらも上回る策を考案する。しかし、ここまで長く戦っていても未だ全貌が見えていない異例の敵。本当に取らなくてはいけない対策が見えていないと言われたら、否定は出来ない。
故に、普通に考えたらあり得ないようなミスすらも手繰り寄せる。相手は本来の戦いから逸脱した存在だ。その空間に入った時点で侵蝕かもしれない点を考慮してＲＪシステムを作っているわけだが、それ以上の攻撃を仕掛けてくる可能性もある。
「吹雪、貴女は演習を見てどう思う？」
「私ですか？　そうですね……」
演習を眺め、その戦い方をインプットしながら、考える素振り。数秒思案する。
「敵がああいうカタチでこちらを攻めてくるのなら、叢雲ちゃんと比叡さんは絶対に必要だと思いますね。自分の距離とか理解してますし、侵蝕を目的とした接近戦を仕掛けてくるにしても、引き際を弁えているように見えます。それに、叢雲ちゃんはまだ何か隠してる感じしますね。今よりも間合いを詰められた時に出すような何かを」
吹雪自身も近接戦闘が出来るため、飛行場姫とのスパーリングで編

み出した槍の間合いよりも詰められた時に繰り出す隠し技の存在にいち早く気付いたようである。今はまだ出すまでもないとしているようだが、比叡がさらに詰めてくるようならば出すことになるか。
「でも、敵が侵蝕を優先して攻撃すらさせないようにする可能性もありますよね。確か、以前に泥の雨を降らせたのだとか」
「ええ、龍驤との前哨戦でそういうことがあったみたいね」
「それを常用化されたら、むしろ近接戦闘は頼れないと思います。なので、頼れるように考えなくちゃいけないのは、それを止める手段、空母の力じゃないかなと」
吹雪が今注視しているのは、島風や金剛のような指揮能力でも、叢雲や比叡のような近接戦闘能力でもない。ましてや、その戦いをサポートする者達でもない。千歳と千代田による艦載機の取り回しを重点に置いていた。
今は相手に空母がいないため、艦載機は好きなように動かせる。その操作と練度、視野角、その他諸々が、今の戦場に的確かどうか。
「単体性能はすみませんがわかりません。ですけど、2人揃っている時はうちのサラトガさんを優に超えていますね。2人分だからと言われればそうなってしまいますけど、2人分以上に力が発揮されているように思えます。相乗効果でしょうか」
「あの2人は基本的には同じ部隊で活動させている。常に連携をしているからかもしれないね」
「なるほど。なら納得行きますね。あの2人は戦場を支配する力を持っていますよ」
千歳と千代田は龍驤との戦いには参加しており、泥の雨も経験している。しかし、その時には雨を止めることは出来ていない。大鳳や古鷹が加わっても、超高高度からの散布をどうにかすることは出来なかった。
それでも吹雪は、あの2人にはそれが出来る力があると見出だしている。もしあの2人が、超高高度を対処出来る艦載機を手に入れることが出来れば、雨を止めることは確実に出来る。それ以上に、制空権すらその手中に収めることが出来るだろうと。

むしろ、今まではバックアップを基本としていたため、前に出ることは無かった。敵艦載機を食い止めて、他の者達が戦いやすいようにすることを心掛けていた。故に、あまり目立たなかった。
それが実際は一番の功労者である。仲間にそれを感じさせないくらいの行動を、出撃した全ての戦場でこなしているのだ。縁の下の力持ちとは、まさにこのこと。２人がいなければ、まともに戦えなかった場面も存在する。
「ほら、やっぱり。あの拮抗を崩しに行きましたよ」
吹雪が言うと、戦場に変化が訪れる。島風からの指示もあったか、千歳と千代田が制空権による牽制から一転して攻勢に出る。比叡と拮抗している叢雲を避けるように艦載機が真後ろに回り込み、一斉に射撃を始めたのである。また、そこに紛れた爆撃機が爆弾を投下。比叡を守るために動こうとした金剛の足も止めさせる。
艦載機の射撃くらいなら、金剛がその盾でガードしてしまうだろうが、それさえ止めてしまえば途端に脅威となる。
そこからはトントン拍子だった。隙をついた艦載機からの攻撃で戦場を見出だし、逆にそれをサポートするように島風と夕雲が周囲に砲撃。てんやわんやになったところで長波の的確な雷撃が金剛に決まったことで、旗艦大破によるフィニッシュである。
「堀内提督、少しだけ時間をくれれば、彼女達に必要な艦載機を用意するわ。あの子達は、決戦の中心に立ってもらう」
「了解です。僕も彼女達は編成しようと考えていましたから、そうしていただけるのは助かります」
この団体演習によって、その実力がより浮き彫りになる。今までと同じようにしていたら勝てないかもしれないが、ここで本当に必要な力を取捨選択することで、より勝利に近付く。

そのように、団体演習が続けられていく。メンバーを何度も替えて、誰がどのような状態で最も力を発揮出来るか。これを全員の目で確認する。そうしていくうちに、決戦への参加メンバーがおおよそカ

タチになっていく。
　そこには大将の援助もいくつか加わることになった。艦娘の提供は今のままだが、そこに装備の提供まで含まれるようになったことで、より勝率の高い部隊が編成出来そうだった。
「吹雪、これで全員の動きを見ることが出来たと思うけれど、大丈夫かしら？」
「はい、頭に入りました。でも、どうしても春雨ちゃんだけは追いづらいですね。その時その時で動きが違いすぎる」
　この演習でも、辿り着く者としての春雨の動きは、毎回違うカタチを見せていた。前衛を援護するサポーターをすることもあれば、隣に並び立って攻撃することもある。その時その時で戦術がガラリと変わるので、見ていて頭が追いつかなくなる時があった。
「なので、さっきも春雨ちゃんと話したんですけど、一度個人演習をさせてもらいたいなと。良かったですか？」
「春雨がいいと言うのなら、構わないよ。今は演習終わりで消耗しているとは思うがね」
　なんて話しているうちに、その気配を察したか、春雨の方から吹雪の元へと駆けつけた。
「個人演習の件かな」
「うわ、流石だね。その話をしていたんだよ」
「いいよ。私も吹雪ちゃんの力を見ておきたいから。団体演習も見てるだけだったみたいだし、私と個人演習をしたら、次からは加わってもらえるよね」
　仲間達と共に切磋琢磨することで、より一層穏やかになった春雨。怒りと寂しさが溢れているようには到底思えない表情に、堀内提督は内心で喜びが隠しきれなかった。
　少し前にタブレット越しに見た怒りに塗れた冷たい表情は、今の春雨には存在しない。かつての艦娘の時の表情を完全に取り戻している。
「うん、そろそろ参加しないとね。でも、その前に春雨ちゃんと一戦させてもらおうかなって」

「そうだね。多分私の力だけが見ていてよくわからなかったんだよね。直に触れてみたいってことだよね」
「そういうこと」
「それなら、早速やろう」
　別に好戦的というわけではないのだが、吹雪との戦いは春雨としても昂揚するようなことのようである。
「それじゃあ、私にも見せてもらおうかしら。春雨の辿り着く力というものを」
「はい、見ていてください。そこで私に弱点があれば教えてください。自分の目ではわからなくて」
「そうね、任せてちょうだい。これでも私、ヒトを見る目はあるつもりだから」
　大将に戦いを見てもらうことで、春雨も自分のわからない自分を知るつもりだった。それ故に、個人演習でも団体演習でも率先して参加する。そしてそれが楽しかった。

　ついにマッチングされた春雨と吹雪の演習。武蔵すらも敬意を表す吹雪に、春雨は立ち向かうこととなった。

例外の者

団体演習をしばらく続けた後、満を持して吹雪が演習に参加する。今までの仲間達の動きを見て、大体どんな感じかは把握出来たようだが、春雨だけは読めなかったらしく、一度個人演習をしたいと持ちかけた。

春雨自身は団体演習に参加はしていたが、そこまで大きく消耗していなかったようで、その持ちかけを快く了承。自分の弱点探しにも繋がると考え、早速やろうと乗り気であった。

「休憩は大丈夫？」

「うん、大丈夫。疲れてないわけじゃないけど、そこまでだから」

戦闘に支障が出るほどの消耗では無いと春雨は言う。隣の海風も、この春雨が個人演習に参加することを拒まなかった。吹雪の実力は知らないが、少なくとも今の春雨が手も足も出ないということは無いと確信している。

「お互い、全力で」

「勿論。私が持ちかけたことだし、春雨ちゃんの全力を知りたいから、こうやって1対1を申し込んだんだからね」

「そうだね。じゃあ、お眼鏡に適うように頑張るよ」

拳を突き合わせた後、2人揃って海上へ。互いに何処か昂揚しているような表情。

片や、大将の秘書艦であり大戦艦である武蔵ですらも敬意を払う存在。圧倒的な力によってブラック鎮守府を鎮圧したり、大塚鎮守府の事件の時も大和を軽々と制した、駆逐艦とは言い難い実力を持つ最強の艦娘。

片や、辿り着く者として特にまともではない能力を持ってしまったことで、施設組の中心人物となっている存在。その力により戦闘では無類の強さを誇り、覚醒後の戦いでは確実な勝利に仲間を導いてきた戦乙女。

「大和さんは、春雨姉さんとも吹雪さんとも戦ったんですよね。どちらが

勝つと思いますか」
春雨から一時的に離れることとなった海風は、２人の実力を知る大和に、体感としてどちらが強いかを尋ねる。海風としては当然春雨だと言いたいところだが、吹雪を知らないために比較が出来ない。
「そうですね……私個人の感想で言えば互角です。ただ、相手をした状況が違いますから、単純に決めることは正直出来ません」
それはどうしても引っかかるところ。大和が２人と戦った状況はあまりにも違う。
春雨とはたった今、演習というお互いに何も無い、命のやり取りですらない手合わせ。対して、吹雪は侵蝕を受けていた時の制裁であり、殺意まであった状態で圧倒されている。
「どちらも手も足も出ないという感覚でした。ですが、春雨の方が得体の知れなさが強めですね。吹雪の方は真っ直ぐ腕力で殴りつけてくる感じなんですが、春雨の方は絡め取られるイメージというか」
「なるほど……ベクトルが違うと」
「そういうことですね。ただ、力業で圧倒されるのは恐怖を感じますが、搦め手で翻弄されるのは感心してしまいますね。好き嫌いだけでいえば、春雨の方が戦いやすいとは思います。あれも大分加減をしていたのだと思いますが」
吹雪は当然、侵蝕された者を解放するために戦っていたのだから、恐怖を与えてもいいくらいに上から殴りつける。
春雨だって、同じ状況ならば同じように戦っていただろう。搦め手を使うかもしれないが、最終的には実力行使。しかし、こういう場でそういう手段は見せないので、春雨の方が比較的戦っていて苦しくないとのこと。
「なるほど……。なら、あの結末は誰にもわからないということですね」
「はい。どちらが勝ってもおかしくはないと思います。ただ……」
「ただ？」
大和が少し考えた後、一つの確信を口にした。
「実戦経験の差は、おそらく吹雪の方が上、ですよね。だから、それが

やはり利いてくるかなと」

海上。互いに準備万端。春雨は最強の存在を相手にするということで、少しだけ慎重に最初は主砲装備。ただし両腕であるため、攻撃的なフォームであることは間違いない。

対する吹雪は主砲を装備はしているが、それだけ。魚雷発射管も展開していない。ただ近付いて撃つということに特化しているようにも見える。

「鎮守府の中でも戦闘出来たらしいし、軽装なのかな……。もう少し五月雨に話を聞いておけばよかったかな……」

事前に五月雨から聞いた情報は、吹雪に触れた大和が吹っ飛ばされたということ。艤装の展開と収納を駆使した攻撃であることは、五月雨には見えておらず、軽く叩いただけで強烈な衝撃が発生したとしか聞いていない。

それが蹴りでも発生しているため、腕力が強いとかそういうことではなく、何か細工があるということはわかるのだが、春雨にはまだ見当がついていない。

「まぁ、ぶつかるしかないか。それで無理矢理引き出すしかないね」

サポートをするにしても、その実力をその目にしなければわからない。わからないならば、直接ぶつかって知るしかない。春雨は前向きに、この演習を乗り越える決意をして突撃を始める。

むしろ、その手段は一度喰らって覚えるしかないだろう。それが一撃で致命傷ならばまずいのだが、一度くらいなら耐えられるはず。

「……道、見えたけど……」

少しだけ目を瞑り、そして開いた時には光の道が見えた。しかし、吹雪の近くに行けば行くほどその道は複雑極まる状態だった。ステップの間隔がやたらと短い。瞬時に判断しなければ何かをやられる。むしろ、その道ですら時間経過で次々とカタチを変える。

「今までに無いカタチ。でも、演習なんだから、当たって砕けなくちゃ」

砕けるつもりは毛頭無いが、春雨は胸を借りるつもりでまず主砲を構える。
「オッケー。じゃあ、こちらからも」
春雨が主砲を自分に向けるのと同時に、吹雪も主砲を構える。射線はどちらも相手の胸に向けて。ほぼ完全に一致しているためか、放った瞬間に中間地点でぶつかり合い、互いに失速して終わる。
砲撃同士をぶつけて回避することはあるが、お互いに攻撃しあった結果がぶつかり合うというのは意外と無く、故意にぶつけたわけではないので2人してわぁと驚く。そして、小さく微笑んだ直後に一気に加速した。
今の春雨は近距離から中距離まで駆逐艦の出来る距離は全て網羅している。砲撃が効かないわけではなくても、近接戦闘の方が効果的ならばそちらを選択するくらいに戦術の幅は広い。
「来たね。それなら私も、使っていくよ」
そんな春雨の突撃、しかも主砲を鉤爪に替えての一撃を弾くため、その手に対して軽く腕を盾のように構える。
普通ならばそんなことをしたらガードに使った腕が細切れになる。いくら演習用のウレタンの鉤爪とはいえ、実戦のことを考えたらそのようなガードをするのは愚の骨頂。
しかし、吹雪は自信を持ってこの手段に打って出た。つまり、腕を犠牲にするなんてことは無いということ。五月雨から聞いていた、軽く叩いた瞬間に強烈な衝撃が発生する技を防御にも使うということだと察した。
見えている光の道は、吹雪の直前でやたらとブレていた。つまり、今の春雨には直感的にも何が来るかわからないということになる。自分の考えの範疇に無い攻撃には、春雨は滅法無力であった。
しかし、何かまずいということだけはわかる。それだけがわかれば充分。
「つく！」
そこで春雨は、強引に身体を捻ってその攻撃を無理矢理キャンセル。振りかぶった腕では無い逆側の腕で掬い上げるようにして、吹雪

の逆サイドを狙う。
「わ、もしかして察した？　すごい直感だね。でも」
それに対し、吹雪は逆に近付き、身体ごと春雨に押し付ける。鉤爪はそれにより不発。光の道を乗り越えた動きをしてきたことにより春雨は驚いたが、それもすぐに終わらせられる。
春雨に触れているのはガードしようとした方とは逆側の腕。つまり、そちら側には主砲が展開出来るということ。
「私がわかる限りの春雨ちゃんの弱点。理解していないものは、理解するまで最善の道に含まれない」
まずいと判断した春雨は、攻撃出来る間合いなどを全て捨てて脚の伸縮を使いその場から跳び退く。吹雪には近付いてはいけない。それだけは確実であるため、触れられた時点でアウトである可能性が高い。
そしてそれは案の定だった。跳び退こうとした瞬間に、互いの密着していた場所に急激な質量の増加。その瞬時の艤装展開と収納は、春雨の目にも映らなかった。
「良くも悪くも、みんなは勝手を知ってるもんね。それに、例外的な動きが殆ど無かった。見る余裕もあっただろうから対応も出来る。でも、私は今日初めて直接顔を合わせてる上に、こんな手段を使える艦娘は、少なくとも私は知らないからね。今だけは私は例外だよ」
さらに吹雪は春雨とほぼ同じようなスピードで距離を詰めてきた。脚部の艤装の展開と収納を繰り出したことで、春雨の脚の伸縮と同等な加速力を生み出している。
強靭な義脚である春雨ならまだしも、艦娘とはいえ生身の吹雪がその衝撃に耐えられるのは、これまでの経験。見た目からはわからないほどに全身が鍛えられている。
「でも、知られたら確実に勝てなくなるから、勝てるうちに勝たせてもらうね」
突撃からゼロ距離での砲撃。艦娘ならばまず避けられない一撃だが、春雨は普通とは違う。義腕を盾に変形させ、その砲撃は食い止める。

しかし、これはガードさせるために撃ったようなもの。吹雪は即座に脚払いを繰り出した。砲撃から格闘への切り替わりがやたらと早く、戦い慣れているのが嫌というほどわかる。
「簡単に負けるわけにはいかないよ」
だが、ここで春雨の直感が冴える。光の道が、わずかに強くなった。吹雪の使ってくる手段に辿り着くことが出来そうであったため、あえてそこは喰らう。代わりに、かなり無理矢理だが義脚を軟質に、それこそ、自分がギリギリ支えられるくらいのゴム質に変化させた。
布地の服や防刃防針のスーツが作れるくらいの精度を持っているのだから、その精度を義脚にも発揮させることができる。金属以外も艤装として認識出来ているため、行き当たりばったりではあったがこれも出来てしまった。
流石に歴戦の吹雪といえど、触れる脚が突然ゴムになるだなんて初めての経験であるため、勢い止まらずミートした瞬間に魚雷発射管を展開収納して強烈な衝撃を発生させる。
その瞬間、春雨の目にはうっすらとそれが見えた。目がいいというわけではなく、この瞬間だけは瞬きせずにその目に収めろと直感的に察したのだ。
「いっ……っ」
ゴムであってもその衝撃は抑え切れるわけでは無いため、脚がグニャリと曲がり、春雨自身も体勢を崩すことになる。いつもの義脚のまま喰らっていたら、その衝撃でその場から吹き飛ばされていただろうが、ゴムだったおかげで衝撃を吸収することが出来た。
「うそ、そんな回避の仕方あるの!?」
これには吹雪も驚いていた。この戦いを観戦していた大将も目を丸くしていた。
「見えた。一瞬だけど、何をしてるか。これでもう、道に入れることが出来る」
すぐさま海面を跳ねて間合いを取ると、春雨の瞳が白く輝く。最善の答えに辿り着く道がリルートされ、今までよりも太くハッキリとした道へと変わっていく。どうしたら答えに辿り着けるのか、それが見

えてしまえば春雨が一気に有利になる。
しかし、
「えっ」
その光の道は、吹雪の直前で途絶えていた。いつもならば、そこで吹雪の身体に光の点が見えていてもおかしくないのに。
攻撃の手段を看破しても、今の自分にはその道を辿るだけで精一杯という表れ。もしくは、まずは道を辿ってから考えろという力からの試練。
「何か見えたかな？」
「うん、見えたよ。見えたけど、吹雪ちゃんって、凄いね」
「いきなり褒められるとビックリしちゃうなぁ」
話しながらも攻防は止まらず、春雨は今見えている道を歩いていく。吹雪の攻撃は途端に掠りもしなくなり、展開と収納を繰り出しても届かないような回避の仕方が始まる。
それはまるで演舞を踊るように、吹雪との戦いを楽しむかのように、その場でステップを踏む。道がそうしろと春雨に教えてくれているから。
しかし、その道のゴールに辿り着いても、吹雪への攻撃の手段はやはり見えない。ここまで来てもまだ、吹雪の方が上であり、勝ちが見えないということになるのだろうか。
「いや、ここからは私が道を作る」
吹雪は言った。春雨は理解していないことは道に含まれないと。ならばそれは、自分にも当てはまるのではないか。自分のことをまだ理解しきれていないから、これ以上の道が作られないのではないか。
故に、出来る限りのこと、今までやったことが無いようなことを、この場で繰り出していく。自分にはこんなことが出来るのだと理解して、初めて道の続きが出来上がる。
「どうやって、かな」
「突拍子もないことをしてみる、とか？」
ここで急接近。両腕をまた鉤爪に替え、大きく振り下ろす。大振りな上に間合いも微妙な状態でやられても、吹雪には隙だらけにしか見

えない。軽く避けて撃てば終わり。
だが、春雨は本当に突拍子もないことをしでかした。両腕と両脚が艤装であるからこそ出来ること。
腕と脚を入れ替える。
「うえっ!?」
流石の吹雪も、こんなことをされたことはない。腕が脚部艤装となり逆立ちとなり、脚が腕となり主砲を構えていた。あまりにも見たことのないカタチであったため、動揺が隠しきれなかった。
春雨は至って真剣そのもの。こんなことを後々やるとは思えないものの、こういうことが出来るということが頭に入ったことで、光の道はさらに伸びた。
そもそも、両腕両脚を鎖に替えて拘束なんてことが出来るのだから、この義腕と義脚は自由自在であることが証明されているのだ。それを咄嗟に繰り出しただけ。理解まで行っていなかったことを、理解するに至った。
「スカートだったらこんな格好出来ないよね、うん」
そして、脚の主砲を吹雪に放つ。これで決着である。

はずだった。
「流石にビックリするよ。もう曲芸だもんそれ」
吹雪の対応力は、生半可なものでは無かった。不意打ちも不意打ちなのだが、その砲撃と同時に、吹雪も春雨の顔に向けて砲撃を放っていたのだ。回避出来そうに無いと悟った瞬間、吹雪は春雨との相討ちを狙った。
お互いの砲撃は、お互いの顔面に直撃し、ダブルＫＯ。両者轟沈判定となって、演習は決着がついた。

経験の力

春雨と吹雪の演習が終了。突拍子も無い戦術を選択することによって隙を作り、途絶えてしまった光の道の先を自ら作り出すという荒業を決めることで、どうにか相討ちにまで持っていくことに成功はした。

しかし、これで春雨の手の内を見せたようなものなので、次は通用しないだろう。この1発目だからこそ、吹雪にも通用したと考えてもいい。そういう意味では、吹雪はやはり、ここにいる中でも最強と言い切れるだろう。

「いやぁ、流石にそんなことされるとは思わなかった。なんか久しぶりに顔面に模擬弾喰らったよ」

「私も結構咄嗟で。ただ思い付いたからやってみただけなんだけど……うん、ビジュアル的に大丈夫かな……」

「正直言うと、結構危ないと思う。腕と脚の入れ替えはねぇ」

今はもう元に戻しているが、咄嗟に出したその手段は異形と言っても差し支えない姿だった。両腕と両脚を自在に変形させられるとはいえ、もう少しやり方があっただろうと苦笑する吹雪。

だが、春雨的にはその異物感すらも戦術に取り入れていた。ギョッとした瞬間、大概の者がその動きを止める。驚きというのは、時に確実な隙を作るに至るだろう。吹雪ですら、それを見た時には動揺し、素っ頓狂な声をあげてしまったくらいだ。結果として相討ちに持っていけたのだから、そのやり方としては間違ってはいない。

「まぁ、戦術的には悪くないってことで。あんまりやらないようにはするつもりだけどね」

「それがいいよ。不意打ち以外では控えた方がいいね。ほら、やっぱり春雨ちゃんは見た目艦娘だからさ、腕が盾や鎖になるくらいならいいんだけど」

「だよね……考えてる暇がない時だけにしよう」

春雨も若干反省。勝つためには手段は選んでいられないかもしれないが、もう少しスマートに戦いたいとは思った。

演習を終えたことで工廠に戻ると、真っ先に海風が駆け寄ってくる。
「お疲れ様です春雨姉さん。あの吹雪さんと互角とは、海風おみそれいたしました。近接戦闘での美しい演舞もさることながら、脚をゴム質に切り替えての回避、あれは春雨姉さんにしか出来ない荒業でしたね。流石です。私だったら回避も出来ずにそのまま終わらされていました。それにあの最後の機転を利かせた一撃。あんな手段に打って出るだなんて、いつも傍で春雨姉さんのやり方を学んでいる私ですら思い浮かびませんでした。両腕両脚に限界が無い春雨姉さんだからこそ、その考えに辿り着けたのでしょう。グラーフさんが戦乙女と称していましたが、もう戦の神ですね」
春雨の手を両手で握って捲し立てる海風に、いつも通りだと苦笑。一瞬でも異形になったことで何か失望させてしまっていないかと危惧していたが、よくよく考えてみれば、両腕両脚を全て鎖にして拘束するなんてこともしているのだから、それなりに慣れていたか。
逆に、そういうことが出来ることを知らない者達は驚きを隠していない。積極的な者は、春雨に直に聞きに来る始末。いちいち答えるのも面倒なので、両腕を好きに変形させることで、今の特異性を見せつけることでひとまずは終わらせる。
「でも、弱点は教えてもらえた。理解出来ていないことには辿り着けないんだ。黒幕がやってきそうなことを、思いつく限り知っておかないと、私の力でもどうにも出来ないと思う」
戦闘中に吹雪に突き付けられた春雨のわかりやすい弱点。一度見たり喰らったりしたような攻撃ならば、その回避方法などの最善の道が想像出来る。
春雨にとってはもう無意識の類なのだが、その道は春雨の知識基準なのだ。それでも直感的に知識がないモノに対しても道が引かれることはあっても、最後に道が途絶えたりすることもあることを理解させられている。
「なるほど……辿り着くための材料ですね。わかりました。この海風、思い付く限りを提供します」

「うん、お願い。私も考えるから」
今の春雨には、とにかく知識が必要だ。黒幕がやってきそうなことを片っ端から手当たり次第考え、その全てを把握しておくことで、光の道の精度をより高めることが出来る。
勿論、仲間達の行動を全て把握することも必要だろう。本来の気質を忘れてはならない。今は直接対決をした吹雪だって、決戦では援護の対象だ。この戦いで多少は知ることが出来たが、まだまだ全てを知るには程遠いだろう。
「吹雪ちゃん、ありがとう。これで私はまた、ちょっと強くなれたよ」
「どういたしまして。それじゃあ、ここからまた団体演習を再開かな。私も参加するね」
「うん。連携しているところも見せてほしい。私に必要なのは知識だから」
一度手合わせしたことで、強い友情が生まれている春雨と吹雪。誰が見ても戦友と見えるほどに、互いに心を通わせていた。

そこからはまた団体演習。吹雪も加わったことで力の差が出るかと思っていたが、こういう時はあまり前に立たず、春雨にも見せた本気の攻撃は発揮しない。代わりに、指揮能力を見せつけた。
大将の秘書艦というだけあり、旗艦の経験も多くあり、周りをよく見て的確な指示を即座に出す姿は、ここにいる誰よりもリーダーとしての実績を感じさせるものだった。
「やっぱり吹雪ちゃんはすごいね。私とは実力も経験も違う」
その演習を観戦しながら、春雨はボソリと呟く。
金剛や島風の指揮もなかなかのものだが、吹雪の指揮はさらにその向こう側にいるように見えた。相手の攻撃を先読みして、的確な指示を与えるのが指揮の役目であるだろうが、そのスピードが違う。見てから指示するのではなく、経験則から次の次に来る攻撃すらも予測して、２つ先の動きをさせている。
そしてそれを、誰も疑いなく実行し、確実な戦果へと繋げていくの

だから凄まじい。これが大将の秘書艦の力なのだと嫌でも理解する。
「春雨姉さんも、サポーターとしてはあれくらいの力を発揮していたと思いますが」
「私はあそこまでじゃないよ。全部見ようと心掛けると、先読みが難しくなるもん。それに、それは白露姉さん達だからどうにかなるだけ。吹雪ちゃんは、今日初めて組んだ仲間に、今日初めて見た相手に対しての指示をしてるから。経験の違いがすごく出てると思うな」
　それを取り入れようと春雨は、その瞳を白く輝かせて演習を見続ける。まるで、戦場の全ての知識を取り入れようとしているかの如く、視線は常に演習の中心。
「うむ、吹雪の実戦経験は、我々よりも多いからな。ああなって当然だろう」
　春雨達の後ろに、武蔵が立っていた。春雨のいる場所は、たまたま演習が一番よく見える場所だったらしく、今の戦況を確認するために移動しているらしい。
　また、その武蔵の隣には大和が。武蔵と同じように今の演習を確認し、自分の力に取り入れるために移動しているようだ。
「想定外の力に対しても、すぐに順応する。過去の事例に突き合わせて、最も近しいモノと組み合わせて、その時の対処をそのまま実行する。そしてそのスピードがとてつもなく速い。私も吹雪のそこには感心しているぞ」
　武蔵が演習を見ながらニヤリと笑う。敬意を払い、こうやって褒め称えるようなことを話しながらも、あの吹雪にどうやったら勝てるかを常に計算しているような、そんな顔をしていた。
　隣の大和も、大塚鎮守府では見られないような演習から、自分に取り入れられそうな事柄を探し出して、戦わずして力を蓄えていた。
　大和型はどちらもそういうことが出来るようである。実戦を経験せずとも、見ているだけで強くなる。勿論実戦を続けた方が伸びるだろうが、そういう機会でなくとも、自らを高めることが出来る。
「経験則から過去の事例に突き合わせる……ですか。それに視野の広さも凄いです。戦場の全てを見て、その時の最善をすぐさま割り出す

……と」
「あれ、それって確か……」
海風の言葉に春雨も何かに気付いたようだった。そして、今は演習に出ておらず、観戦に力を入れている自分の妹に目を向ける。
「やっぱり。吹雪ちゃんのやり方に一番順応出来るのは、涼風だ」
そう、涼風。鎮守府の中では最古参であり、実戦経験は春雨以上。そして、北上に見出だされた空間把握能力。それは、今は吹雪に一歩劣るかもしれないが、確実に同型の力であろう。
それを涼風自身も自覚しているのか、吹雪の戦い方を真剣に眺めていた。時折、何かを組み立てるように手が動き、その全てを自分のモノにしようと、出来る限りのことをこの場でしている。
隣で一緒に眺めている山風や江風も、涼風の力になるべく、見えている状況を逐一言葉にしているようで、涼風のさらなる発展に力を貸していた。
「ああ、涼風は北上に才を見出だされていたな。そこに吹雪の実戦を見ることが出来ているのだ。これは今日だけで一気に伸びるぞ。くくく、これはまた楽しみではないか」
決戦までに、涼風はさらに強くなるだろう。それこそ、旗艦を担える程に。
吹雪は当然これが終われば大将と共に帰投するが、武蔵はここに残る。ならば、決戦までに涼風を鍛えて、吹雪と同等に指揮が出来るように仕立て上げる。そう画策していた。
そうすることで、武蔵自身も鍛えられるだろう。教えるということは、その分自分に知識が必要である。鍛えなくてはいけないのは、身体だけではない。頭もだ。
「しかし、貴様らの演習を見てウズウズして仕方ない。私も大和と1対1（タイマン）でやらねばな！」
「そう、ね。団体演習の後に、最後に時間を貰いましょう。私達の戦いは、どうしても派手になっちゃうから」
「ああ、それで構わん。まぁあのコロラドの戦い方を見ていると、我々も地味な方だとは思うがな」

言いながら顎で視線を演習の場に向けさせる。すると、全員が出来る手段を見せるという前提の場であるため、個人演習では見せなかった白鯨を展開していた。
鎮守府近海で展開したため岸には大きな波が押し寄せていたが、そんなことになっていても観戦している者達はその演習から目を離さない。黒幕もこういうことをしてくる可能性があるのなら、その戦い方を全て目にしておかなくてならない。
大和はそれを見て、確かに地味だと苦笑した。大概の艦娘――むしろ深海棲艦ですら、あれより派手な手段を持つ者など存在しない。それくらいに巨大で、存在感のある艤装を持つのはコロラドのみ。
「あれは特別ですよ。コロラドさんにしか出来ない大技です。あの後にスタミナが切れてしまうくらいの」
「なるほど。ちなみにアレは、どれくらい強いのだ」
「私は直接相対したわけではないですが、泥でブーストがかかっている状態だと手がつけられないくらいですね。叢雲ちゃんが怒りを溢れさせて巨大化させた槍で貫いたそうです」
ほう、と武蔵はさらに好戦的な目を向ける。あれと真正面から戦いたいとでも考えているのだろうか。それは流石に武蔵であっても無謀なのではないかと思うのだが、それでも挑戦したがるのが武蔵である。
「くく、貴様らとこうして演習が出来たのは、我々としてもいい経験となった。勝敗だけではない、皆が新たな戦術を手に入れることが出来そうだ。まぁ私は戦術など知ったことではなく真正面からぶつかるだけなのだがな」
「私達としても、ここに戻って来れて、こうやって艦娘のみんなと一緒に活動が出来るのは嬉しいですよ。何というか、自分で言うのはなんですが、心が落ち着きますから」
「よかったじゃないか。それこそが貴様なのだろう。それを忘れなければ、貴様はもう何にも負けん。心(ココ)の強さが、我々の強さだ」
胸をドンと叩き、ニヤッと笑う。春雨も、そうですねと微笑んだ。

この合同演習は、誰もにいい影響を与え続ける。そして、強くなる。

大戦艦の戦い

吹雪を含めた団体戦も進み、決戦に参加するであろう艦娘達は一通りその力を全員に示した。堀内提督と大将はその一部始終を全て見届け、その時の部隊を決める要素とする。

そして今、この合同演習のシメとして、大和と武蔵の個人演習が繰り広げられることとなる。大和も武蔵も、団体戦ではその火力を遺憾無く発揮し、全てを全力でこなし続けている。

それを単体で発揮するタイミングがついに訪れた。観戦する仲間達も、これまでの演習の終わりを告げる戦いとして、腰を据えて見るつもりのようである。

「大トリだ。これでは少し緊張してしまうか？」

「ううん、大丈夫。見られているくらいで力を落とすわけにはいかないもの」

海上で相対する２人。艤装自体は同型艦であるために似たようなもの。大和の方が少々大きいかというくらいで、その火力もその堅牢さも同じ。

それ故に、この２人は特に艦隊の花形と言える程に派手だ。存在そのものが旗艦のようなもの。象徴としての力が大きい。

「悔いのない戦いとしよう。まぁ、私としてはもう、こうして最強の姉と向かい合えるだけでも嬉しいのだがな」

「もう、本当に好戦的なんだから。でも、昂揚するのはわかるわ」

「だろう。残った力を、思う存分振り絞ってくれ。少なくとも、私はそうする。加減なんてしている余裕なんてないだろうからな」

ニヤリと笑って拳を突き出す。もう定番となった武蔵の挨拶。健闘を祈ると言わんばかりの、力強い行動。

「勿論。これで手を抜いて負けたとなったら、鎮守府を背負ってる自覚が無いのかと叱られてしまいそうだもの」

その拳に、大和も拳を突き合わせた。

武蔵にはこの時点で大和の実力がある程度理解出来る。自分よりは経験が少ないかもしれないが、努力の痕跡は自分以上では無いかと

感じる程だ。
現に、大和はあの侵蝕騒ぎの後からはトレーニングに精を出している。もうあんなことにはならないようにしたいという気持ち一心で、出来る限りの鍛錬を毎日のように繰り返していた。
大塚提督もそれは仕方ないことだと許容している。感情を抑えるためには、過去のトラウマを払拭する必要があるだろう。そのために鍛えるというのなら、容認はした。代わりにプランは大塚提督が決めていたが。
「では……やるか！」
「ええ、いい戦いにしましょう」
大戦艦の間合いまで離れる。駆逐艦を相手にしている時や、団体演習の時よりも、さらに距離を取るのは当然。ただでさえ主砲の威力がとんでもないのだから、これでも少ないのではと思えるほど。
「疼いて仕方ないな。あの大和がどれほどのものか。戦いたくて仕方なかった！」
間合いが取れたと感じた瞬間、先制攻撃は武蔵だった。その大型主砲を大和に向けて斉射。
「早速来たわね。でも、今の私なら！」
そして同時に大和も斉射。火力はほぼ同等。装備の性能的には若干大和の方が上だが、慣れによる精度は武蔵の方が上。その差を加味すると互角と言える。
「くくく、流石だな。これで真正面からの撃ち合いを選択するのは、大和くらいだろう。恐怖ではなくても念の為に避けるのが定石だからな」
砲撃同士が中間地点でぶつかり合い、模擬弾とはいえその場で大爆発を起こす。それだけでも海面が大きく揺れ、相乗効果もあるからか、コロラドが白鯨を展開した時に近しいほどの波を発生させる。
当然その波は仲間達が観戦している岸まで向かうのだが、その派手さに大盛り上がり。水浸しになろうが知ったことでは無かった。既に白鯨で何度かやられているのだから。
ちなみに、提督達はそれがあるために少し遠くで観察している。

「はっはは、ならば近付こうか！　精度はどうか確かめてやろう！」
叫びながら少しずつ間合いを縮めていく武蔵。その表情は、この戦いを全力で楽しんでいる笑顔。
「ぶつかり合いを望むなら、私も相手をしてあげるわ」
対する大和も、徐々に距離を詰めていく。砲撃の爆発の間隔は短くなっていき、海面が激しく波打ち始める。
２人の間だけは晴天なのに時化ているかのような激しさ。足場が不安定であろうがお構いなしに連射を続けた。
「ここまでは互角か。いいだろう、ならばこちらはどうだ！」
しかし、もう撃つだけでは終わらないと感じ取ったか、互いに砲撃をやめて拳での語り合いに移行。そのタイミングもピッタリだったのは姉妹だからか。
「くくく、いい膂力だ。私の拳を受け止められるとはな！」
「これ以上のを知ってしまったんだもの。これくらい！」
「それは私も知っているヤツだな。アレには劣るが、しかし充分すぎる力を見せてやろう！」
拳を払い、返しては受けられる。連射の次は連打。しかし、互いに致命傷に持っていくことは出来ない。
当然疲労は溜まっているが、それを感じさせない程の暴れっぷりを続けていた。
武蔵はこの演習の前に地味な方だと話していたが、そんなことは一切無かった。激しい砲撃と拳のぶつかり合い。効かないと思えば突撃も辞さず、姉妹艦同士の激しい殴り合い。演習といえど、互いに本気で戦い、その激しさに空気すらも揺れているかのような錯覚すらあった。
「はっはは、楽しいなぁ大和よ！」
「本気を出して戦うのは楽しいわね、武蔵！」
好戦的な武蔵ならわかるが、大和もその空気にあてられて昂揚している。妹がこれなのだから、姉もそうであってもおかしくはなかった。いつもは清楚であり、その名の通り大和撫子然とした立ち振る舞い。戦場でも凛とし、仲間達の柱となるようなエース。

しかし、今の大和は何というか、子供のように無邪気。同等な力を持つ者を前にして、抑え込んでいたわけではない全力をこれでもかと発揮している。
この時ばかりは、大塚鎮守府の教えのことを完全に忘れてしまっているかのようだった。感情を抑えることなんて出来そうになかった。
「私と対等に戦える者は限られている！　貴様ならばと思っていたが、やはりだったな。流石に我が姉、最強の艦娘よ！」
「改二改装されたからやっと並び立てただけだもの。でも、こうやってぶつかり合えるようになったのは、本当に嬉しいわ。正しいことに使えることもね！」
やはり、侵蝕されていた時のことがずっと引っかかっている。この得た力も、正しいことに使うと断言し、少し気負っているような雰囲気をだしつつも、武蔵との戦いに本当の楽しみを見出だしていた。
仲間を守るための力を手に入れたことを実感し、仲間のためにその力を振るう。それだけで、胸が空く思いだった。
「はっ、だが私は年季が違うぞ。この力を使ってしばらく経つからなぁ！」
「なら、胸を貸してよ、ねっ！」
つい最近改装された大和と違い、武蔵は改装されてから長い時間が経つ。ただそれだけでも、練度はあまりにも違った。大和だって力に振り回されるようなことは無いが、使いこなせている度合いで言えば、武蔵の方が数倍上。同じ力であれば、年季がモノを言う。
それに追いつくために、大和は必死だ。だが、ここまで個人演習と団体演習を繰り返したことで、大和だって成長している。恐ろしいことに、まだまだ伸び代があるのが大和だ。今この場ですら、武蔵に立ち向かえるように現在進行形で成長しているくらいだ。
「くはは、いいぞ、いいぞ！」
「こんな距離で！　でも、やりたいことはわかるわ！」
殴り合いの最中でも、互いに意思疎通したかのように砲撃準備。そして、躊躇なく放った。しかも1発やそこらではない。何発もである。

大戦艦によるゼロ距離の撃ち合いという凄まじい衝撃は、岸にまで届く程だった。その衝撃だけではなく、その爆音、その熱すらも、ヒシヒシと感じる。
これ程の火力を持つ者など艦娘にはいない。深海棲艦で言えばゴロゴロいるかもしれないが、コロラドすらもその戦いにビリビリと凄まじさを感じる程である。
故に、誰もが興奮してその戦いを観戦していた。どちらが勝つかではない。ただただその結末を見たいと、まるでそういうイベントを見ているかのような盛り上がり。
「はっはぁ！　そろそろ、ケリをつけるぞ！」
「ええ、終わらせましょう！」
今までの演習の疲れもあってか、もう次で決着をつけると言い出した武蔵。大和も疲労は溜まっているため、それに同意。今残された力を全てここで発揮して、目の前の相手を屈服させる。ただそれだけ。いわゆる全弾発射だ。一人で一斉射をしたとしても相当な密度の弾幕が張られることになるだろう。
それをかなりの近距離で、しかもお互いに放つのだから、その場はとんでもないことになる。誰かがそこに挟まれていようものなら、模擬弾だとしてもミンチになる程ではないかという圧がかかるだろう。大和も武蔵も頑丈だからこれが出来るというだけ。
「行くぞぉ！」
「撃てぇ！」
そして、今まで以上の爆音と共に、２人の戦場が爆発するように光り輝く。模擬弾同士の斉射なのに、この威力。耳を劈くような爆音で、周囲の海面が弾けるように水柱が立ち昇り、そこだけが局所的な雨のようになってしまった。
その雨が晴れた時、そこに立っていたのは武蔵だった。大和は膝をつき、息も絶え絶え。やはり、その力を使い続けた年季の違いを見せつけることになった。
と、思いきや、武蔵もそのまま仰向けに倒れる。互いの砲撃が互いに直撃しており、ダメージは限界を超えていたのである。大和もその

まま倒れた。
「もう無理だな、立ち上がれん！　楽しかったぞ、大和！」
「またやりましょ。私も、次までには勝てるように鍛えておくから」
「当たり前だ。こんなに楽しい演習はなかなか出来ないからな！」
　互いに健闘を讃えるものの、そこから動けなくなってしまったため、仲間達に工廠まで運んでいってもらうこととなってしまった。
　演習でここまでやる者はまずいない。ましてや、大塚鎮守府の者達はこういう時に確実に弁える。それなのに、何か超えてしまった。
「……武蔵、ちょっとやり過ぎではないかしら？」
　呆れたような表情の大将。だが武蔵は悪びれもせず、ニンマリと笑顔を見せる。
「何を言う。これが我々の全力であることを仲間に知ってもらういい機会ではないか。これが大戦艦、これが大和型だ」
「演習で自力でここまで帰ってこれなくなることが問題なの。そっちの大和も」
　チラリと大和の方に目を向けるが、この戦いは大満足だったと言わんばかりに、清々しいまでの笑顔。大塚鎮守府所属の者で、ここまで感情を表に出す者など早々いない。強いて言うならば、雷くらいだろう。
　それほどに、この最後の個人演習は身になったと言える。大和は武蔵にその力を限界まで引き上げられ、さらに向こう側まで行ったようなもの。
「あ、あはは……楽しんでしまいました。我を忘れてしまったという感じで、面目次第もございません」
「はぁ……まぁ、終わってしまったものは仕方ないけれど。ここでの経験は、貴女の役には立ったかしら？」
「はい、充分すぎるほどに。武蔵のおかげで、自分の力の引き出し方がわかったというか、心構えを新たに持つことが出来たというか、とにかく、これからもやっていけそうです」
　今の大和には、トラウマを感じさせるものは無かった。

これにて、合同演習は終わりを迎える。最後の最後に繰り広げられた大戦艦の戦いは、大きく士気を上げる事に貢献した。

笑顔の帰還

合同演習の段取りは全て終了。時間としても、そろそろ夕暮れというくらいの時間となった。堀内鎮守府へ出向した者はそろそろ戻らないと、今の自分の居場所に明るいうちに戻るのが難しいだろう。

そのため、ここで解散となる。大塚鎮守府の艦娘達は少しだけ休んでから帰投。そして、施設の者達はすぐに戻ることとなった。それこそ、今まさに泥に狙われているような状況で、少しでも暗い中で向かうのはよろしくない。いくら深海棲艦は夜目が利くとしても、余計な心配は無い方がいい。

「提督、大将、今日はありがとうございました」

全員が工廠の海に出たところで、代表として春雨が一礼。海風と白露も、少し名残惜しみながら小さく礼。

本来の居場所に戻ってこれたことで、春雨も白露もとても心穏やかになっている。特に春雨は顕著に表れており、溢れた怒りは完全に鳴りを潜めていた。

やはり故郷に戻り、残されている自分の居場所を目の当たりにしたのは大きい。

「いや、構わないさ。むしろ、常駐させられないのが残念だよ」

「それも時間の問題よ。貴女達は、この事件の功労者なんだもの。確実にいい方向に持っていくから、期待していてちょうだいね」

この戦いが終わる頃には、どうにかしてでも鎮守府と施設が自由に行き来出来るように持っていくと、大将は断言した。

春雨も白露も海風も、本来の居場所はこの鎮守府。本人が何を望むかというのはあるが、戻りたいというのなら、艦娘と同等の扱いで鎮守府に置けるようにすると。

「忘れ物はないかい？」

「元々何も持ってきてはいませんでしたが……あ、そうだ。ちょっと鎮守府から持ち出したいものがあるんですけど、良かったですか？」

「軍事機密に関係するものでなければ、いくらでも持っていくといい。そういう風に言うのだから、君達の私物か何かだろう？」

「はい。実は……」
春雨がそれのことについて話すと、提督は一切否定することなく持っていきなさいと後押ししてくれた。良かったと春雨は満面の笑みを浮かべて、急いで取りに向かい、それを懐にしまった。
「それでは、また。次は決戦の時……になりますよね」
「ああ、そうなるだろう。だが、いつでも連絡してくれて構わない。余程のことがない限り、話をすることは出来るからね」
「はい。姉姫様にもそう伝えておきます」
最後はビシッと敬礼をして、工廠から外へと向かった。3人がこの鎮守府を離れる意思を見せたため、他の仲間達もそれについていく。
「思ったより、スッキリしてるのね。未練は無いわけ？」
ボソッと叢雲が春雨に問う。故郷に戻ってきたのだから、もっと名残惜しんで、施設に戻ることすらも拒むかと思っていたようである。
鎮守府というものに否定的な感情ばかりの叢雲だが、3人にとっては施設よりも優先すべき場所であることは理解しているつもりだ。3人が望むのならば、今ここでお別れでも別に問題ないと考えていた。
しかし、春雨はそんな素振りを見せることなく、施設に戻るという選択をし、すぐ行動に移した。海風はともかく、白露も何も文句を言わない。それに少しだけ疑問を覚えたようである。
「未練が無いわけ無いよ。でも、まだ私達が鎮守府にいていいって決まってるわけじゃないし、それに……ケジメをつけてからスッキリと鎮守府に戻りたいと思って」
「ケジメ？」
「うん。全部終わらせて、施設が平和になったら戻りたいんだ。今は島も危ないでしょ？」
決戦が終わり、施設の平和が取り戻されたならば、この鎮守府に戻って艦娘として仲間達と過ごしていきたい。そう考えていると、春雨は叢雲に伝えた。勿論、その平和の中でも施設には度々行きたいとも。
あの場所は、もう第二の故郷なのだ。鎮守府は大事だが、施設だっ

て大事。どちらにもいたいが、残念なことに身体は1つしか無い。ならば、基本は鎮守府で、時間を作って施設に向かいたい。それが春雨の望み。
「そう、なら別にいいわ。アンタ、この1日で随分変わったみたいだから」
「変わったというか、戻ったというか。でも、私の中に溢れた怒りは無くなったわけじゃないよ。なんだろう、すごく抑えやすくなったんだ」
　そう話す春雨の表情は、怒りが失われた代わりに、思い出したかのように寂しさが表に出てきているようにも見える。怒りが溢れる前ならば、まず間違いなく寂しさの発作を起こしていただろう。そちらも抑えやすくなっているようで、春雨は二度溢れたものの、随分艦娘に近くなっていた。
「より完璧な存在へと昇華されているということですね。流石は春雨姉さんです」
「完璧……かどうかはさておき、こういうのって自分で言っていいことかはわからないけど、なんかすごく落ち着いてるのは確かかな。ふとした弾みで引き金引かれそうだけど」
「その時はこの海風にお任せを。誰にも引き金を引かせないように心を守ります」
　海風が胸を張って答える。叢雲はまた始まったとうんざりしたような表情だが、海風はこういう壊れ方をしているのだと理解しているため、わざわざ止めることなく溜息をついて放置。
「そもそも、春雨姉さんはもう怒りも寂しさも感じるべきでは無いんです。これまでに春雨姉さんはあまりにも酷な運命を背負いすぎですから。春雨姉さんに辛い思いをさせる引き金は、何人たりとも引かせません。それが仲間であろうとも、私が確実に排除しましょう。勿論、私が姉さんの引き金を引くようなことは絶対にしません。……二度と」
　最後の言葉には複雑な感情が入り混じっていたが、そこにはあえて触れない。海風の持つ最大級のトラウマ――春雨との敵対の記憶――

―に触れる理由なんて何処にも無い。
「ありがとう海風。頼もしいよ」
「そう言っていただけるだけで、海風は天にも昇る心地です。これからも傍に侍らせていただければ」
「一緒にいてくれると、私も嬉しい。海風のおかげで、私の寂しさの発作も抑えられてると思うからね。だから、侍るとかじゃなくて、妹としてこれからも一緒に同じ道を歩いてほしい、かな」
そんな言葉を聞いた事で、海風は人目を憚ることなく大興奮。基本いつもこんな感じではあるのだが、春雨から真正面の好意的な感情をぶつけられたことで、それは爆発している。
その光景は、施設での日常に戻ろうとしていることを意味していた。鎮守府への出向が、今は非日常となってしまっているが、この戦いが終わればどちらも日常に出来るはず。
次に鎮守府に行くときは、最終決戦の時。全ての準備が整い、黒幕を斃すために。

施設に到着した時はもう夕暮れ。あと少ししたら日も沈む。
ここまで来るところでも、泥が設置されているようなことはなかった。『観測者』が施設に寄り付く泥を全て排除してくれているようである。
しかし、まだわからない。島は当然、３６０度全てが海に囲まれているのだから、泥の侵入経路なんていくらでもある。たった3人しかいない『観測者』一行だけでは対処出来ない可能性だってあるのだ。
「あ、あれは……」
島がそろそろ見えるというところで、上空に見覚えのある艦載機を見つけた。島の周辺を哨戒している、飛行場姫のそれだ。
それに向かって手を振ると、気付いたように近くまで降りてきて、戻ってきたことを喜ぶように旋回した後、そのまま島まで戻っていく。
「島は何も無かったみたいだね」

それだけは安心出来た。もし何かあったら、こんなこともしていないだろう。
だが、今の島の状態を目にしないと、無事かどうかはわからない。少なくとも遠くに黒煙が上がっているようなことはないため、出ていっている間に施設が破壊されているなんてことはないようだが。
むしろ、あの中間棲姫の守る施設が破壊されるようなことはまず無いだろう。泥が降り注ぐのはあったとしても。
「人数が減ってるようなことは無いわ。全員いる。岸にいるのは、妹姫と潮達ね」
いち早く感知した叢雲がそれを確認したことで、より無事であることがわかる。白露が借り受けている泥感知の眼鏡でも何も見えないため、正しく何も無かったと言えるだろう。
そこから少し行ったところで、島自体も視認。叢雲が言っていた通り、飛行場姫と潮達がそこに立っていた。夕暮れ時の最後の哨戒の最中だったのだろう。
ただ、そこにいる者達は少々疲れたような顔をしていた。春雨達がいない間に施設を守るため、哨戒を繰り返していたからか。一番施設を守れる者がここから離れていたために、気疲れもあっただろう。
「お帰り。何事も無かったみたいね。鎮守府はどうだった？」
島に到着すると、飛行場姫が早速この出向についての話を聞きたがった。陸上施設型という都合上、この島以外の世界は言伝で無ければわからない。旅人である戦艦棲姫から話は聞いているものの、彼女が絶対に行くことが出来ない場所である鎮守府については、割と興味深いもののようだ。
むしろ、鎮守府にも興味はあるが、それ以上に深海棲艦が出向したことに対する周りの対応が気になる様子。本来所属していた春雨達が戻ってきたのだから、それ相応の歓迎を受けたのだろうと察してはいるものの、それ以上に何かなかったかは知っておきたい。
「良かったです。久しぶりに提督にも会えましたし。妹達が、私達の部屋をそのまま残してくれていて」
そこまで話して、あっと思い出したように懐から何かを取り出す。

それは、自分の部屋に飾ってあった姉妹の集合写真だった。
「これ、私の部屋に置いておこうと思って、鎮守府から持ってきたんです」
「へぇ、艦娘だった頃の思い出の品か。いいじゃない、もうこういうのに耐えられるようになったのね」
「ありがたいことに。二度溢れたことで、発作が中和されているみたいで。それに、姉さん達もここにいますから、この写真から感じる寂しさは殆どありません」
一度は別にいいと切り離していた姉妹の思い出。寂しさが溢れてしまうために無意識に避けていた艦娘の時の記憶と向き合えるようになったことで、むしろその写真も恋しくなっていた。艦娘だった頃を忘れないように、いずれ鎮守府に戻れることを望んで。そのため、許可を貰って施設に持ってきたのだ。
それを知って一番喜んだのは海風。そして、一度突っぱねられた経験のある山風だった。この写真が施設にあるということは、施設にいる姉妹達も鎮守府のことを忘れないということに繋がる。
「あとは決戦までに出来る限りをするだけですね。鎮守府であったこと、夕食の時に話しますよ」
「そうね。お姉も聞きたがってると思うわ。それに、アンタ達が出て行ってる間に、こっちでもいろいろあったのよ」
飛行場姫の少し疲れた笑み。
「あの、まさか泥が……」
「いや、それは大丈夫。『観測者』がどうにかしてくれているみたいで、哨戒は繰り返してるけど何事も無かったわ」
「それじゃあ、何が……」
「……お姉が手伝いたい手伝いたいって。ボスはどんと後ろで構えてほしいんだけどさ」
中間棲姫が倒れたら施設はおしまいなのだが、その中間棲姫が仲間のためには無理をしがちというなかなか厄介な性格をしているため、妹としてどうにか止めようとしていた。
程々の手伝いならまだしも、全部やろうとするからよろしくない。

仲間思いはいいのだが、身体を壊すほどまで動こうとする。
「まぁ、うん、大丈夫よ。お姉もわかってくれたから」
「なるほど……ひとまず、向こうであったことを聞いてもらいます」
「ええ、そうしてあげて。その間は止まってくれるだろうし」
少し遠い目の飛行場姫。潮と潜水艦姉妹も、飛行場姫の苦労を間近に見ていて溜息をついていた。

施設の光景に、春雨は笑顔を見せた。

その身体には

戦場に出る可能性がある者達が堀内提督達の目下で演習を続けている中、その裏側では確実に戦場に出ることがない者、明石が、施設の者達から得たモノから研究を加速させていた。

今までは龍驤から齎された泥で研究を続けてきたが、ここで手に入ったのは黒幕によって蘇生された者達の細胞。そして、元より耐性を持っている叢雲の細胞である。

今までにない研究材料であるため、今まで見えてこなかったモノが見えてくるかもしれないと、早速そちらの分析に取り掛かっていた。

「今までは龍驤の泥を見続けてきて成分解析も大分進んだけど、ここでまた新しい素材だよ。楽しいね！」

「ホンマお前、よう言えるなそんなこと。余計に作業増やして自分追い詰めるだけやろ」

妖精さんの身体となったことで疲れなどに対しての耐性が艦娘や深海棲艦だった頃とは比べ物にならないくらい上がった龍驤であっても、今の明石が確実に過労であることは理解出来た。合間合間に大淀が休憩を強制するためどうにかなっているものの、それが無ければ一切の休憩なく作業を続けるため、龍驤は呆れていた。

龍驤だって明石を止めるように説得はしているが、話を聞こうともしないため、ＲＪシステムを司る者として、研究そのものを強引に止めてやると脅してどうにか休憩させている。今では龍驤と大淀は大の仲良しとなっていた。

「でもこれ、調べがいはあるでしょ。なんてったって、蘇生された上に融合された身体だからね。これ、確実に黒幕に繋がるよ。龍驤の泥からは読み解けなかった何かが絶対にあるね」

「かもしれへんな。ウチはもうそういう肉体自体があらへんから、混じってるだとか蘇生されたとかも関係無くなっとる。調べるならアイツらの身体が一番ええやろな」

「龍驤の泥はそれはそれでかなり参考になったけどね。ホントありがたいよ」

今のところ確認出来たのは、龍驤の今の身体は侵蝕性のある泥とは性質が違うこと。他者の身体を自分の器とする能力も、侵蝕とは別の手段。脳を強制的に休眠させ、その間に自分の影響下に置いて、全てをコントロールする。龍驤が空母棲姫に対して行なっていたことは、もう解析は完了している。

そこからさらに、泥となっている寄生虫のさらに中心、染色体を解析することによって、泥を消滅させる波長の改良も終わらせていた。今までは増殖の位相を逆転させ減衰に導く波長だったが、その構造が解析出来た染色体のみを確実に破壊する波長の開発に成功し、さらには人体に影響を与えないように改良までして、ＲＪシステムに組み込むところまでは来ている。

これにより、今のところは泥による侵蝕は完全にシャットアウト出来るようになった。身体の各所に装備するバリアが無くとも、龍驤を中心としたある程度の範囲に対して完全な無効化フィールドが生成出来る。今はその効果範囲を拡げることにも注力していた。

「ウチの核の部分も結構弄り回しとったやろ。そこからは何かわからへんかったんかい。脳味噌触られとるようなもんやから、ウチにゃ何がお前に見えとったのかわからんのや」

「龍驤を壊さないように調べるのは結構大変でさ、その上で成分分析はちょっと難しいんだよね。脳味噌の一部を千切り取ったらどんなヒトでも死ぬか壊れるかするでしょ。そういうの超越してるだろう龍驤でも、ダイレクトに核触って無事でいられるかわからないじゃん」

「言うて電気信号で痛み与えてきたやろがい」

「それは脳信号とベクトルが同じだったら核に通用したってだけ。再洗脳も同じ。脳に直接作用することなら、龍驤の核にも作用するってこと。完全に同じ身体なら黒幕にも通用するってことに繋がるんだけど、ほら、龍驤ってある意味分体みたいなモノでしょ。そもそも泥だったヤツと、泥にされたヤツだとまるで別モノって考えた方がいいから、手段としては持っておくけど確実に効くとは思ってないよ」

それでも出来なかったと言わないあたりが明石である。龍驤に支

障をきたさないように核の分析は完了しており、その結果はちゃんと資料に纏めてあるため、龍驤にそれを渡した。
勿論その資料を纏めたのは大淀である。
当然ながら、核にその中枢が集約していることは確認済み。他者の脳に寄生出来るのだから、脳と同様の機能がそこにあるのは当然のこと。
そして、その周囲の構築する泥も、増殖性の無い別モノ。核を守ることに特化した性質を持っており、今回は特殊な装置を使って採取したが、そうでなければ余程のことが無い限り核にダメージを与えることは出来なくし、器への定着を強くする。侵蝕とは違うカタチで艦娘や深海棲艦の身体を奪うことに特化した性能。
その状態であっても、肉体が一瞬でも仮死状態になれば無理矢理吐き出されるという安全装置がついていることは確認済み。そのシステムが何処にあるかも分析は出来ていた。
「……ウチの身体、こうなっとんのか」
その資料を見てゲンナリとした顔を見せる龍驤。再洗脳で艦娘の心を取り戻しているため、その悪意のこもった性質が自分にもあるのかと思うと嫌な気分にしかならない。
「自分のことを知れたのはいいことだね。で、今は自制心も取り戻してるんだから問題なし。そんな力も使うヒト次第ってこと。今の龍驤は善人オブ善人だから、誰も何も気にしてないから安心しなよ」
再洗脳により、龍驤がその力を悪用しないことは明石が確信している。そうでなければ助手になんておかないし、黒幕との戦いの結果に直結しそうな研究に手出しなんてさせない。
「まぁ龍驤は気にせず一緒に研究進めようね。どうしても気になるのなら、そういう方面に頭の中弄る？」
「お前そういうことホンマに出来そうやから困るわ。でも、今のままでええ。自分のやってきたこと後悔出来へんくなりそうやから」
話しながらも自分の資料を読み終え、本題の方へと意識を向ける。
今、明石が見ているのは白露から貰った細胞。姉妹４人の融合体としてこの世に生を取り戻した存在は、何がどう違うのかを調べる。た

だの艦娘としての細胞は自分のを使えばいいので、そことの差を見ていくイメージ。
「……早速だけど、白露の細胞、おかしなところがあるねぇ」
「ああ、素人のウチでもわかるわ。今日貰っといてよかったやん」
「だね。これ知らなかったら、決戦で絶対支障が出てたよ」
資料と照らし合わせながら分析を続ける。一方龍驤は、白露のモノだけではなく、古鷹や大鳳、コロラドの細胞も確認。
「混じっとるヤツら全員が同じ特徴持っとる。こうなってなかったらウチも同じやったろうな」
「やっぱり。というか龍驤がちゃんと話してくれたんだから、これについてはすぐ思い当たるべきだったよ」
細胞は髪の毛から確認しているが、貰った血も確認。その結果を見て、明石は頭を抱える。
「……あー、これ、そっかぁ……。混ざり合うって、そういうことにもなるんだ」
「せやな……いや、これはホントにまずいんちゃうか？」
「まずいも何も、これ対策出来なかったら、白露達を出撃させることも出来ないよ。龍驤はもう別のカタチに昇華させてるから大丈夫だけど、白露達はそういうこと出来ないし」
大きく溜息を吐いて、椅子に深く腰掛ける。この結果を見て、どっと疲れが出たようである。
「まさか細胞にもここまで混じり合ってるとはね……」
以前、龍驤が魂の混成の際に話していたこと。亡骸を集めて、黒幕が包み込んで再構築することで深海棲艦化する。謂わば、黒幕が繭そのものとなって身体を作り替えているのと同義。
その際に、亡骸はグズグズに溶けて融合すると話していたが、その時に繭の成分が溶け込んでもおかしくは無かった。つまり、白露達の身体には、既に黒幕の泥が混じっているのだ。
核に近い泥であるため侵蝕性は無く、それを理解しているためか端末を入れて傀儡へと変える。春雨によって解放されたのは、その端末が失われただけ。そもそも細胞に混じってしまっている黒幕の細胞

は、何をどうやっても失わせることは出来ない。
　それが何を意味するのか。常に最悪を想定する明石には、容易に想像がついた。ただでさえ復讐心による進化が止まらない黒幕なのだから、何処までこちらに嫌がらせが出来るかに特化しているのなら、ここからやれることなんてわかりやすい。
「例えば、白露が黒幕の手が届く場所に辿り着いた場合、この細胞のせいで再洗脳なんてことがあり得るよね」
「あり得るやろな。なんてったって、髪の毛にすら混じり合っとるんやから、脳に混じっとらんわけがない。泥に触れんでも持っていかれる可能性はある。それこそ、拠点に辿り着けんように泥を散布されているようなもんなんやろ。だったら、その空間に入った時点でアウトや」
「だよね。再洗脳が無くても、身体を強引に動かされて仲間割れなんてことをさせられる可能性だってある。泥を自由に動かせるなら、身体を自由に動かせるはずだし」
　これが最悪の想定。何も知らずに決戦に挑んだ場合、そこに参戦していた者達が突然叛旗を翻し、敵が増えるだけでは収まらず、精神的な揺さぶりをかけてくる。
　心まで持っていかれたら最悪。そうでなくても身体のコントロール権を奪われて、意思とは関係なしに敵対行動を取らされる可能性もある。むしろ、その方が互いに苦しいだろう。
　ケジメを付ける戦いとして、その気持ちを鑑みて参戦させたはずなのに、それが全て裏目に出るという大惨事を引き起こされるのだ。これが黒幕にとっては最上級の嫌がらせになり、かつ悦楽に繋がるだろう。
「細胞に直接働きかけてくるとなると、かなり厳しいね。戦場に行ったらアウトってなると、出撃自体を取りやめてもらう以外に選択肢が無くなる」
「でも、遅かれ早かれ対策は考えとかんと、近しいことで何かされるかもしれへん」
「だね。でもどうしたもんかな……。こういう時に、私に聞いてみる

か」
「せやな。せっかく連絡先貰っとんのやから、使えるもんは使っとかな」
ここで、山寺鎮守府の明石に連絡を取ることにする。今頃は資料を熟読し、何かしらのアドバイスをくれるくらいに知識をつけているはずだと信じて。
早速連絡を取ってみる。すると、何度もコールするまでもなく受け取られた。あちらも連絡を待ち構えていたかのようだった。
『はいはい、何となくだけど、連絡来るかなとは思ってました。今日、施設のヒト達の細胞が手に入るんでしたよね』
「わあ、話が早い。ならちょっとアイディアを出してくれると助かるんだけど」
『私に出来ることならどうぞどうぞ』
同じ明石だからか、すんなりと話が通り、一緒に頭を捻ってくれる。
細胞に直接働きかけての遠隔操作をどうにかする方法。今は泥の侵蝕自体は波長によって弾き飛ばすことは出来るが、泥を介することなく触ってくるとなると話が変わる。そこに対して何か出来ないか。
『簡易的な暗室が発生させれればいいと思いますよ。私も任務用の通信機器に、ノイズを受けないようにするシステムを組み込んだことがありますから』
「暗室かぁ」
『悪い鎮守府だと変に頭が回るのか、外部との連絡手段を断ってくるところとかあるんですよ。なので、そのノイズを受けなくするシステムですね。通信機器を使えなくする機能を使えなくする、ノイズキャンセラーみたいな』
簡単に言っているものの、相手にバレないようにそのシステムを小型化して組み込むというのは、実際はかなり難しい技術。堀内鎮守府の明石も頑張っているものの、やることが大掛かりなものが多いため、どうしても小型化が難しいシステムばかり。
しかし、山寺鎮守府の明石はその小型案をさらりと打ち出してきた。当然小型化すれば出力が下がるが、必要最低限のシステムさえ組

み込んであれば問題ないと、不要部分を外した構築を展開。
「はえー……私のシステム、無駄がかなり多かったのかな」
『そんなことは無いですよ。無駄じゃなくて、多用途なんです。でも、1つのことだけがやりたいってなれば、これくらいで充分かなと思って。小型化に関しては任せてください。そういうの、こちらの仕事の都合上慣れてますから』
「どんな仕事なのかなー」
『企業秘密です』
　これにより、技術革新が起こる。今までの大型の装置は、次から次へと小型化され、艦娘達の持ち運びが可能になっていく。
　2人の明石による協力プレイは、黒幕との戦いに向けて一気に進むための礎になるだろう。決戦の時は、刻一刻と近づいてきていた。

　しかし、細胞レベルで混ざってしまっている黒幕の泥は、どうにかして万全な対策を取らなくてはいけない。そうでなければ、その場で最悪なことになってしまう。

影響は大きく

合同演習翌日。昨日までとはまた違った、清々しい気分で目を覚ます春雨。昨日の演習での疲れは完璧に取れており、溢れていた怒りも完全に沈静化しているために精神的にも癒されていた。

本来の居場所である鎮守府に行けたこと。自分達の帰りを祝福されたこと。まだ部屋が残されており、戻ることが可能であること。その複数の要因が全て、春雨を癒すことに繋がった。また、そのことを中間棲姫達に説明したことで喜びを反芻し、より穏やかになっている。

その時、話を聞いていた中間棲姫も、あの時以来の春雨の心からの笑顔に喜びつつ、この表情を引き出した鎮守府に感謝の気持ちを持った。

小さく欠伸をしつつ、少しだけ首を動かすと、そこには熟睡している海風。海風も昨日の演習ではその力を存分に発揮し、個人戦でも団体戦でもいい成績を残している。その分、疲れも溜まっているだろうから、この熟睡も理解出来た。とても気持ちよさそうに眠っているため、起こすのが憚られたものの、外は大分白んできている。いつもの起きる時間も間近。

春雨を抱き枕代わりにして眠っている海風を起こさなければ、春雨は活動が出来ない。とはいえ、海風は春雨に起こされることを喜んでおり、時間的にも問題ないため、躊躇なく耳元で囁くように海風を起こすことにした。

「おはよう、海風。今日もいい天気だよ」

第一声の時点でモゾモゾと動き出し、すぐに目を開ける海風。少々寝ぼけ眼ではあるものの、春雨の声で目を覚ますという最上級の幸福を堪能した後、すぐに身体を起こす。

「おはようございます春雨姉さん。本当に今日もいい天気ですね。まるで春雨姉さんの行く末を指し示すかのように晴れやかです。春雨姉さんもよく眠れたようで何よりですね。昨日の疲れがまるで見えませんし、随分とお顔がスッキリされている様子。もしかしていい夢

でも見られたのでしょうか。その中に私が登場しているなんてことがあったりしたら、私も喜ばしい限りです。私は勿論春雨姉さんの夢を見ることが出来ました。昨日の演習を復習しているかのように、姉さんの援護をしながら快勝する夢です。私の望む未来を夢に見ることが出来るだなんて、やっぱり春雨姉さんと一緒に眠ると満たされますね。この夢を現実とするためにも、日々精進しなくてはなりません。今日も一日頑張りましょう」

ひとしきり喋るのを聞いた後、春雨は勿論と満面の笑みを浮かべた。それを見た海風はさらにヒートアップ。

「春雨姉さん、鎮守府に行けたことで、以前の自分を取り戻したんですね。本当に良かった。やっぱり、姉さんは笑顔であってほしいので。寂しさの時から鎮守府のみんな、というか姉妹、勿論私も含まれているとは思うのですが、仲間との交流が春雨姉さんの心には最も有効であるんだと思います。私も落ち着けましたが、姉さんには効果が絶大なんですね。また何か辛いことがあったら、鎮守府のみんなに会いに行きましょう。姉さんの事情を知っているのなら許してもらえるでしょうし。流石にアポ無しで突撃するのは憚られるとは思いますけど、春雨姉さんの笑顔は何にも代えられませんから」

そんなに戻っていたのかと春雨自身も驚いていたが、誰からも落ち着いていると言われたくらいだから、そうなのだろうと結論づけた。海風が喜んでくれているのも嬉しい。

「海風、まずは起きよっか」

「そうですね。ではすぐに」

先に海風がベッドから降り、制服姿に変わったらすぐに春雨を支えるために動き出す。義腕と義脚を展開すればいつも通りに起きられるのだが、海風は献身すればするほど調子が良くなるので、今は何も言わずに任せている。

いつも通りに身体を起こし、義腕と義脚を展開後、体調も絶好調ということを示すようにさらりと立ち上がり、そのまま制服に切り替えた。

そこでまた海風が目を輝かせる。

「白露型の制服ですね。私の知っている、艦娘の姉さんの姿です」
言われて気付いた。昨日までは、無意識に制服を作ると怒りが溢れた姿になってしまっていた。スカートではなくショートパンツになるのがデフォルトで、近接戦闘を今すぐにでも出来ると言わんばかり。
しかし今は、怒りが溢れるよりも前、艦娘の時と同様の白露型の制服が出来上がっていた。
これも穏やかになった証拠。春雨が元に戻ったことを表す、一番大きな部分。笑顔もそうだが注視して心境が読めるくらい。しかし服装は誰が見てもわかることだ。
「あはは、そうだね。無意識だったよ」
「ということは、姉さんには怒りが無いようなモノですね。海風、本当に嬉しいです。勿論、怒りが溢れた凛々しくカッコいい姉さんも愛していましたが、今の慈悲深く優しい、美しい姉さんは一層好きです。それでこそ私の愛する女神。これからはその笑顔が維持出来るようにサポートさせてください。姉さんの怒りを、私が全て排除します。穏やかに、和やかに、楽しく生きましょう。私もそれを追いたいので」
「だね。なんだか身体も軽い気がするからさ。このままで生きていきたいね」
黒幕がいる限り、まだ心を本当に落ち着けることは出来ないが、と内心では思っていたものの、そんなことを口に出す意味もないので、心で留めた。余計なことを言って、海風を曇らせるのはよろしくない。

施設でも深夜の哨戒を再開しており、春雨達が朝食のためにダイニングに入ると、今回の深夜哨戒当番であるジェーナスとミシェル、そして黒潮が少々眠そうに待機していた。
「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ，ハルサメ、ウミカゼ」
「おはよう、ジェーナスちゃん」
３人の中では一番元気そうなジェーナス。流石に何度も深夜哨戒

をしているだけある。ミシェルはまだまだ慣れていないか既に微睡んでいるようにジェーナスにもたれかかり、黒潮もあくびを隠そうとしない。
「おはようさぁん。ふぁあ、やっぱ徹夜は眠いわぁ」
「クロシオは初めてだったんだもの。私だって最初はそんな感じだったわ」
「そうなん？　夜は気ぃ張るし、あの泥もちょろっと見る羽目になったし、気疲れや思ったけど、コレが普通なんやなぁ」
　聞き捨てならない言葉が聞こえたことで、春雨が身を乗り出す。
「黒潮ちゃん、泥を見たの⁉」
「んん？　ああ、昨日1回だけ出てきおってなぁ。あの泥刈機で消し飛ばしたから誰も何の被害も無かったわ」
「『観測者』様の手から潜り抜けるようになってるんだ……」
　それだけ数が多いのか、それとも泥を排出する何者かがいるのかは、今のところ定かではない。少なくとも、『観測者』一行だけでは対処しきれない量になっているということは確か。
　春雨の直感に引っかからない程度の脅威でしかないものの、これが増えてくれれば、今ある対策だけではどうにもならなくなる可能性がある。泥刈機だけでなく、主砲や空爆による衝撃で霧散させる必要も出てくるだろう。
「春雨姉さん、何か感じたりは」
「今はしないね。多分夜にだけこっちに送り込んできてるんだと思う。それに、本当に危なかったら寝てても気付けるんだけど、それも無かった。だから、今はまだ大丈夫」
　とはいえ、春雨の直感はそこまでにならないと反応してくれないことが多い。そんな自分に小さく怒りが湧き上がったが、『怒りの矛先を間違えるな』という言葉を思い出し、小さく深呼吸して落ち着く。
「ハルサメ、この島のことは私達に任せて、Ｆｉｎａｌ　ｂａｔｔｌｅに向けて力を蓄えて」
　ニッと笑ってジェーナスがサムズアップ。
「せやで。ウチらかてちゃんと抵抗するから心配せんでええ。あんな

泥でここを潰されて堪るかっちゅーねん。なぁ？」
　黒潮もジェーナスと同じようにサムズアップ。そして声をかけた胸元の忌雷も、任せろと言わんばかりに歯を鳴らし、触手を突き出してきた。黒潮の一心同体となっているおかげか、その気質はより黒潮に近付き、息の合った相棒といった感じになっている。
「そうぴょーん……ミシェル達が、この島を守るっぴょーん」
　眠気でふわふわしているが、ミシェルも気持ちはみんなと同じ。居場所を守るために尽力しようと、その力を遺憾なく発揮してくれている。その力のために詳しくは知らされていないだろうが、ジェーナスのために使えるモノは全て使うという気概のようである。
　ここの３人だけではない。島を守ろうという気持ちはみんな同じだ。何人たりとも、危害を加えさせるわけにはいかないとやる気は充分。
「うん、よろしく。私達が絶対に諸悪の根源を斃してくるから」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．　そっちは任せたわ。だから」
「島は任せるね。役割分担、大事だもんね」
　ニコッと笑って春雨もサムズアップ。その笑顔には、怒りも何も含まれていない。
　ここでジェーナスも春雨がすっかり穏やかになったことに気付いた。昨晩の段階から怒りを露わにすることは無かったが、今回のこの話を聞いてもこの程度で済んでいるということは、溢れた怒りの制御が完璧に出来ているということの表れ。
　やはり春雨はこうでなくてはならないと内心思っていた。怒りが溢れた春雨は、叢雲までは行かずとも、常にピリピリしていたような雰囲気だった。笑顔もぎこちなく感じたし、事あるごとに口調が少し荒くなるくらい。本来の春雨を知る者ならば、確実に違和感を覚える仕草だったが、今はそれが全て失われている。
「ハルサメ、やっぱり鎮守府行って良かったのね。いつものハルサメに戻ってるわ」
「そうかな。海風にも言われたんだけど」
「そうよ。私にもわかるくらいなんだもの。海風なんてすぐだったで

しょ」
「勿論。春雨姉さんの僅かな変化でも瞬時に把握理解するのがこの私ですので。おはようからおやすみまでを傍で守り続ける守護者であれば、この春雨姉さんの取り戻した穏やかさに気付かないわけがありませんね」
　相変わらずだと苦笑するジェーナスと、ケラケラ笑う黒潮。穏やかな雰囲気に眠気がピークに達したか、ミシェルはもう完璧にジェーナスの肩で寝息を立てていた。
「でも、泥がここまで来るようになったというのは危ういですね。対策をもっと強化したいと思ってしまいます。出来るかはわかりませんが」
　先程の深夜哨戒の話を思い返すと、1回だけでも泥が見えてしまったということは、今後はさらに量が増えると考えてもいいだろう。何処その害虫ではないが、1回見たら何回も見る羽目になる。『観測者』を潜り抜けるだけの量があるのだから、それこそ今頃島に忍び寄ってきていてもおかしくない。
「今のところは島の何処にも泥は無いよ」
　そんなことを考えている内に、今度は瑞鳳がダイニングへ。深夜哨戒の保護者枠として参加しており、忌雷の寄生により深海棲艦の力が扱えるようになったことで、夜間哨戒も可能となっていた。
　例の眼鏡と哨戒機の併用によって、島内の何処にも泥が来ていないことを確認してきたようだ。やはり深夜に見ているということは、今頃辿り着いてしまっていてもおかしくないと考えたようである。
「Ｇｏｏｄ（お疲れ様）ｗｏｒｋ，ズイホー。島の何処からも反応が無かったのね」
「うん、反応もないし、目視で見えるモノも何も無かった。とりあえずは安心かな？」
　黒潮と同様、瑞鳳もこの施設には随分と慣れた様子。施設の一員として尽力してくれているようだ。
「お疲れ様です、瑞鳳さん」
「あ、おはよう春雨。なんだか顔色がいいね」

「そんなに違います？」

怒りが溢れた状態しか知らない瑞鳳からしてみれば、今の穏やかな春雨は血色もいいと感じるようである。

本来の春雨に戻れたことは、これからを進んでいく上でもメリットにしかならないだろう。心優しいサポーターとして、楽しく生きていきたい。

知らざるを得ないこと

施設の全員による朝食を終え、深夜哨戒組は眠りに入る……その前に、昨晩に見かけた泥の件を全員に伝える。『観測者』の対処を潜り抜けて、ついに島の近海にまで現れたこと。

泥は一片たりとも施設に上陸させてはならない。そのためには、今以上の対策をしっかり立てる必要があるだろう。ここでより強く対策しなければ、最終的に呑み込まれかねない。

「決戦に出る子達は哨戒はしなくていいわ。基本的には万全な状態でいてもらいたいもの。いつそれが始まるかもわかってないからね。トレーニングは続けていきましょ。泥の発見は今のところは夜に1回だけだけど、真っ昼間に真正面から堂々と来る可能性もあるし、夜に量を何倍にもしてくる可能性もある。だから、昼夜問わずで哨戒は続けていくわよ」

それを取り仕切るのは飛行場姫。この島を守るため、出来る限りの戦略をその場で考え、指示を出す。本人は決戦参加者達にトレーニングを施しながら、哨戒機で島周辺を哨戒し続けるだろう。

この指示に、仲間達は素直に従う。この島を守りたいという気持ちは誰もが同じ。最古参のジェーナスから、新人の瑞鳳と黒潮までが、全員同じ気持ちである。

「哨戒機は私も空母が受け持つわ。空母、よかったわよね」

「ああ、問題、ない。私としても、この島は、旅から戻る場所として、残っていて、もらいたい」

その知識欲により、すっかり戦艦棲姫の旅仲間として定着してしまっていた空母棲姫も、哨戒というカタチで参加する。飛行場姫と同様に高高度の艦載機も使用可能であり、龍驤に器にされていた影響か、超高高度にも手が届く。

しかも、飛行場姫とは大きく違うところは、海上艦であること。島から離れた哨戒も可能という、もしかしたら今最もいてほしい存在なのではと思えるほどであった。

「ね、ねぇ、妹ちゃん、哨戒機を飛ばすくらいなら、私も手伝ってもい

いんじゃないかしらぁ？」
　ここで中間棲姫もオズオズと手を挙げる。手伝いたい手伝いたいと前に出ようとする施設の主は、自分の立場を弁えてくれと妹に抑えつけられていたのだが、やはりこういう時には自分の力を使わせてほしいと率先して意見を出す。
　飛行場姫はそんな姉に対して、まだ言うかと睨みつけようとしたものの、あまりにも抑えつけすぎると、何処かで爆発してしまうかもしれないという不安があった。そのため、少しだけ考える。
「お姉……まず自分の立場わかってるわよね？」
「勿論。私が万が一侵蝕されたらおしまい。この施設はその時点で壊れちゃう。だから、泥に触れられるような場所には行かないでほしい。みんなの意見だもの、ちゃんとわかってるつもりよぉ」
　ざんざん言われ続けたため、そこはしっかり学習している。だからこそ、飛行場姫が仕切るのにも何も文句はないし、口出しも一切しない。
　だが、主という立場にあるからこそ、全てを仲間に手伝ってもらうというのは我慢出来なかった。自分の居場所なのだから、自分の手で守りたいという気持ちは膨れ上がるばかり。
「……岸まで寄らない。施設の中……は流石にしんどいだろうから、少し外に出るくらいで抑える。危ないと思ったら前に出るんじゃなく後ろに下がる。これ、全部守れる？」
　余程姉を信用していないのか、入念に約束事を増やしていく。対する中間棲姫は、勿論と全てを受け入れていく。
　活動的で仲間思い、真面目で優しいが故に、誰よりも前に出たがるのはわかっている。仲間を危険な目に遭わせたくないから、自分を矢面に立たせる選択肢が最優先で出てきてしまう。別に仲間を信用していないとかそういうのではない。自分の手が届く場所で危ない目に遭うくらいならば、自分を犠牲にした方がいいという考えが先立つだけ。
　しかし、今回は犠牲になった時点で終了なのだ。極端なことを言えば、中間棲姫以外が侵蝕されたとしても、この施設はまだ立て直すこ

とが出来る。致命傷になるのは中間棲姫だけ。それをつい最近まで理解出来ていなかった。
　そのせいで、飛行場姫が割と本気目で説教している。仲間のためを思うのならば前に出るなと。自分の立場を理解しろと。黒幕の行いで罪悪感を持ってしまうくらいに責任を感じているのなら、施設のために動くんじゃないと。
　それでも、中間棲姫は何かしらの力になりたいと思い続けていた。誰の邪魔にもならない、それでも自分の施設を守れる手段を。
　そこから中間棲姫が思い付いたのが、前には出ないが、ある程度の手伝いになる、哨戒機の展開。高高度が確認出来るのが飛行場姫と空母棲姫の２人だけでは数が足りないだろうし、飛行場姫がトレーニングを受け持っている間とかに飛ばすなんてことをしてもいいと考えた。
「ちゃんとわかってるつもりよぉ。本当に本当。なんなら、私のすることに監視をつけてくれても構わないわぁ。あくまでも、哨戒機を飛ばすだけ。それならこの施設の電力にも影響は与えないから。ね？」
「……はぁ、わかった、わかったわよ。でも、自分で言った通り、誰かしらの監視は置くわよ。いや、監視じゃないわね、護衛よ。お姉は超重要人物なんだから、要人警護はつけるべき。誰がそれをするかはこっちで決めておくから」
　ようやく仲間のために動けるということで、パァッと明るい表情になる中間棲姫。そんな表情を見たら、誰も何も言えなかった。
　実際、中間棲姫の力は、この中で最も優れているのは当然のこと。艤装を施設に備え付け、電力の源として活動させていても、その哨戒機の数と性能は飛行場姫に匹敵するだろうし、空母棲姫では追いつけない位置にいる。
　そんな主の力は、借りられるものなら借りたいのだ。自分達だけでは守りきれないかもしれないが、本人のとんでもない強さが加われば、撃退どころか殲滅まで出来るかもしれないのだから。
　しかし、万が一がある。あちらもあらゆる手段を使ってくる輩なのだから、真正面からならば絶対に負けないと言いきれても、想像もつ

かない搦め手を使ってこられたら、あっという間に最悪の展開なんてことがあり得てしまう。
だから、中間棲姫は奥の手。なるべく頼らず、なるべく何もしてもらうことなく全てを終わらせる。
「そりゃそうよね。お姉は囚われのお姫様じゃないんだもの。自分で動けるなら動きたくなるわよ。自重してほしいくらい前に出ようとするけど」
中間棲姫は苦笑するのみ。自分の性格は自分が一番よくわかっているはず。
「お姉は午前中は畑仕事とかしてくれればいいわ。午後からお願い」
「はぁい、みんなのために頑張るわねぇ」
抑え込まれていた仲間を思う欲求が解放されるからか、それこそ周囲が輝く程にニコニコである。主なのに自分に役割を与えられなかったことが随分とストレスになっていたようだ。
「午前中はアタシかしらね。トレーニングは午後から見るわ。空母、深夜は大丈夫？」
「任せて、ほしい。夜に、動けるように、しておきたい、から」
「万が一何かあったら私もサポートするわ」
戦艦棲姫が空母棲姫の保護者のように振る舞う。いつも組んで動いているわけではないにしろ、この戦いが終われば、一緒に旅に出るのは確定しているため、どういう場面でも互いを気にかけていた。
空母棲姫はまだまだ未熟な部分があるだろう。いくら深海棲艦の姫であっても、ここにいる者達と比べるとどうしても経験の差が出てきてしまう。そこを相方が補うのだ。
「あとは哨戒の当番ね。それはまた順番に出来るように決めていく。すぐに決めるからちょっと待っててちょうだい」
「お願いねぇ。妹ちゃんなら安心して任せられるものねぇ」
「お姉に任せると自分への配分を増やしそうだもの」
飛行場姫が当番を書くためにホワイトボードを持ってきたタイミングで、今度は備え付けられたタブレットが受信音を響かせた。この時間に堀内鎮守府から連絡があることはそれなりにあるため、訝しむ

こともなくそれを取る。
　最終決戦の日程でも決まったのかと想像していたため、春雨を筆頭に、タブレットを注視する。
「はぁい、今日は何かしらぁ？」
　自分の出来ることが決まって上機嫌な中間棲姫が受けると、向こう側には堀内提督以外にも秘書艦の五月雨、そして龍驤を頭に乗せた明石の姿があった。
　明石がこの場にいるのは非常に珍しい。研究のために工廠に篭っていることの方が普通で、合同演習の時ですら姿を現さなかったくらいである。
『まずは君達に伝えておかねばならないと思ってね。また後から大将達にも伝えるつもりだが、優先度が高かったため、この時間に連絡させてもらった』
　堀内提督の表情は少し神妙。それを見て、春雨は決戦の期日が決まったわけではないと察する。むしろ、期日が先延ばしになるような事態が発生したのだと感じた。
『昨日、明石がそちらの者達から細胞を一部貰っていると思う。その解析結果が出た』
「あらぁ、そうなのねぇ。何か役立つことがわかったのかしらぁ」
『ああ、事前に知れて良かったことがね』
　小さく息を吐き、正面を見据えて現実を突きつけるように語り出す。
『今のままでは、魂の混成をされた者達に出撃を許可出来ない状態になってしまった』
「それはどうして？」
『細胞に黒幕の泥が混ざり込んでしまっていることが判明した。明石の見立てでは最悪の場合、黒幕の領域に入った時点で再洗脳される』
　空気が凍りつく。これだけ準備をしているのに、その体質で出鼻を挫かれることになるなんて誰も想像していなかった。
『黒幕の泥はかなり特殊でした。端末として増殖する侵蝕性を持つ泥とは似て非なるモノ。感知も出来ません。私と龍驤で詳細に確認し

た結果でどうにかわかるくらいに、完全に融合しています。黒幕手ずから亡骸を融合させたことによって起きた現象と考えられますね。何せ、黒幕が繭となったんですから、その中で身体を変質させたなら、細胞の一つや二つ混じってもおかしくはないです』

詳細を知る明石からの言葉に、誰も何も言えなかった。当事者である白露達は、小さく苛立ちを見せる。解放されたと思っていたのに、まだその呪縛がついて回っていることに、怒りすらも感じていた。

『叢雲、貴女も例外ではありません』

「は？」

『泥に耐性を持つと聞いていたので細胞に何かあると思っていましたが、案の定です。叢雲の身体にも泥が混ざり込んでいた。魂の混成をされた細胞とは少し違いますが、それでも黒幕の泥が混じっています』

白露に沈められた際に、まだ制御しきれていなかった泥が混ざって繭化したために、端末からの侵蝕を回避出来るようになっている叢雲。混ざり方が特殊であるため、艤装を出した時にのみ通信障害を発生させてしまう体質になっていたが、これが紛れもなく黒幕の泥を持つ存在としての証である。

逆説的に、白露達も端末への耐性を持っていることとなるのだがそれは一旦置いておいて、叢雲も黒幕の領域に入った時点で何かしらの不調が起きる可能性が高い。良くても艤装が動かなくなる、最悪は洗脳。効かないと思っていたのに叢雲がその場で敵対することも考えられた。

「ふざけんじゃないわよ……何よそれ。復讐すら出来ないとかどうなってんのよ！　私は完全に巻き込まれてるだけよね。なのに、なんなのよそれ！」

怒りが溢れて声を荒げる叢雲。テーブルをダンと叩き、訴えるように叫んだ。当然その姿を見たことで潮の恐怖が溢れ、ひっと声を上げた後に飛行場姫に縋り付く。

しかし、叢雲の怒りはごもっともすぎるため、誰も何も言えない。姉妹姫も止めることは出来なかった。

そして、その怒りは同じように溢れている者に伝播する。
「それはあまりにも酷いですね。ヒトをいいように使っておいて、自分には絶対に害を為さないように仕込んでいるとは。そもそも品性がクズだとは思っていましたが、ここまで徹底しますか」
穏やかだったのに、怒りのせいで口調にそれが滲み出てくるようになってしまった春雨。気付けば白露型の制服は再び怒りに塗れた戦闘服へと切り替わっていた。拳を強く握り、怒りに震わせ、冷酷な瞳でタブレットを見つめる。
せっかく自分を取り戻したのにこんなことになってしまったと、海風はその怒りを鎮めるためにすぐさま拳を包み込むように手を添えた。今の怒りはそれだけでは抑えられないかもしれないが、少しでも足しになってくれればと出来る限りのことをする。
「じゃあ、あたし達はここから動くなってこと？　昨日の演習とか、全部無駄になっちゃうってこと？」
辛そうに白露が言葉を紡ぐ。テーブルの下に震える手を隠しながら、しかし今ここで聞いておかなくてはいけないと。それだけははっきりさせておきたいと。

すると、明石がニヤッと笑みを浮かべ、よくぞ聞いてくれましたと手を叩く。
『無論、これで諦める私達ではございません！　作っていますとも、対策を！』

持つべきものは

決戦に備えている最中に通達された、魂の混成をされた者達への黒幕の影響。海域に近付いただけで最悪の場合は再洗脳される可能性が高いという調査結果が出てしまった。

また、叢雲にも同様の傾向が見られた。耐性を持つ者は細胞レベルで黒幕の泥が混じってしまっているせいで、黒幕の手が届く海域に入った時点で何かしらの影響があるかもしれない。

それを伝えられたことで、叢雲の怒りは爆発。それが伝播したように春雨も静かに怒りを溢れさせ、先日合同演習に行った者達はそれ自体が無駄になってしまうのかと嘆く。

しかし、すぐさま明石が切り返した。

『無論、これで諦める私達ではございません！　作っていますとも、対策を！』

力強く宣言。細胞レベルでの融合をどうにかするなんて、早々どうにか出来るものではないと考えていたものの、明石には既にその対処の仕方が視野に入っているようである。

『まず、細胞から泥を抜き出すというのは不可能です。それは確実に死を意味しますし、そもそも結合しているモノを分離させることなんて出来ません。言い方は悪いですが、白露を４分割して全員をそこに蘇生するようなものです』

「それは無理だね、うん。そりゃあ出来るならやってもらいたいけど、そんなことしたら私死ぬしかないもん。それだけガッチガチにくっついちゃってるってことだよね」

『そういうことですね。剥がしたらそれが壊れてしまうから出来ない。ならば、外部からの影響を受けないようにするのが妥当でしょう』

簡単に言っているが、どうすればそんなことが出来るのかは、ここにいる者には誰も理解出来ない。明石の頭の中では出来上がっているようだが。

「勿体ぶってないでさっさと言いなさいよ。イライラするわね」

『単純ですよ。物理的にあちらからの影響をシャットアウトする。これに尽きます』
つまり、黒幕の泥に対応したバリアにシステムを改良するということである。
今は泥を弾くためだけに作られた装備であり、とある波長で身体を包み込むことによって、目に見える端末のベクトルを逆方向に向け、侵蝕と増殖の性質が反転、自身の性質により消滅する。
その波長を黒幕が泥に対してぶつけてくるであろう影響力に向けることにより、その泥を内包する細胞への影響を失わせる。
当然、今のままでは黒幕の備わっているかもわからない力に対しては抵抗出来ないため、どういう方法でコントロールしてくるかを考える必要はあるものの、これまでのノウハウを使えば確実にゴールに辿り着けると確信を持っていた。
『私の予想では、まず黒幕の拠点の周囲に張り巡らされている結界。泥を目に見えないくらいに細かくして散布することによって、耐性を持たない者に対して一定の効果を与える極僅かな洗脳を行なう空間を作り出すアレですね。あの泥の、細胞に作用してしまう可能性を消します。同質の存在がそこにあるのだから、強制的に作用し、全てを狂わせる。私はそう予想しました』
黒幕の領域に入った時点でアウトと話したのは、その予想があったから。敵意を持つ者を弾く結界は、散布された黒幕の泥であり、細胞と反応したら最後、再洗脳に繋がるとした。
「だったら、私達が作っている身体を全て覆うスーツとマスクで潜り抜けることは出来ませんか」
まだ怒りから抜け出せていない春雨が、少しピリピリした語気で問う。海風がずっとその手を握っているものの、それだけでは怒りから抜け出すのは難しい。
解放されたはずの姉が未だに縛られており、決戦という場で抵抗することすら許されないことに、腹が立って仕方がない。自分のことより仲間の不遇に対しての怒りの方が強くなる春雨には、姉妹の努力を無駄にするような状況は特に許し難い。

『確証は持てませんね。何せ、相手は目に見えない粒子です。流体状で付着してくる泥とはわけが違います』
完全に密封出来るスーツを作り上げたとしても、突き抜けてくる可能性は高い。むしろ、その機能があるスーツを意識して作られたとしても、まず戦いにならないだろう。皮膚呼吸が出来なくなるのだから。
深海棲艦でも溺れるということは、姉妹姫で実証されているようなもの。陸上施設型だからとなればそうかもしれないが、呼吸がままならなければ普通に行動が出来なくなる。
これまでのスーツはまだ流動体が入らないようにするくらいに出来れば良かったため、ある程度の許容は出来た。しかし、気体をどうにかするのは不可能に近い。
『ここで、山寺鎮守府の明石の提案で、簡易的な暗室を作製する試みに着手しています。あちらはノイズキャンセラーと話していましたが、まぁ要するにちょっと違うバリアです。システムの簡略化、対象の解析から、逆位相の分析、それが白露達には影響を与えないように制御、そしてそれらをまとめ上げた上で小型化まで、やらなければならないことは諸々ありますが、確実に潰せます。今や手を貸してくれるのは1人だけじゃないですからね』
最初はサポーターが大淀だけだった研究室も、龍驤が加わり、さらに同じ道にいる別の自分という同業者までが手伝ってくれるのだ。作業のスピードはさらに上がり、確実に、着実に前に進める。
「時間はかかるのかな」
おそるおそる白露が聞く。これがあまりにもかかるようならば、魂を混成された者と、最初から混じってしまっていた叢雲は、どう足掻いても戦場には出られない。これまでのことが全て無駄になる。
それだけは避けたかった。精神的なところでもこんなところで折られるのは困る。
『ある程度は見越してもらいたいですが、何ヶ月もかかるようなことはありません。長くても数日です。それまでに問題点が見つかる可能性はありますし、他に何か気になることが出て来たら、その都度

バージョンアップはしていきますので。断言出来るのは、絶対にその思いを遂げさせます。だから、私達の力を信じてください』
あまりにも自信満々に、不安になるという感情が取り除かれるような感覚。今までの明石の成果から考えれば、この危機も宣言通りにさらりと解決してしまうのではと誰もが思う。
侵蝕を治療する薬から始まり、そもそも寄せ付けない波長、治療出来ないはずの龍驤も再洗脳というカタチで艦娘の心を取り戻し、白露達の身体に仕込まれた罠も決戦の最中では無いタイミングで看破した。
ならば、今回のこの細胞と融合した泥に対しても、確実な対策を講じ、それを実現するに至るだろう。しかも、そこまで時間をかけずに。
「本当に信じていいのよね。ギブアップなんてしたら、私がアンタを始末しに行くわよ。もう鎮守府の場所もわかってるんだから」
物騒な物言いの叢雲に、薄雲がさりげなくクッキーを握らせた。小さく舌打ちをしながらもクッキーを頬張り、怒りを鎮静化しようと試みる。
一度合同演習で鎮守府に辿り着いているため、行こうと思えば道案内が無くても行けてしまうのが今の施設の者達。叢雲は今でこそ緩和しているものの、場所がわかってしまえば、襲撃だってやりたい放題。そんなことをしないと信じてもらえているから場所が伝わっているのだが。
『信じてくださいとしか言えませんが、もう見当は付いてるんですよ。なので、時間の問題です。とはいえ、それが絶対に対策になるかどうかはわかりませんから、過信は禁物ですが』
「今までの成果から考えれば、信じない理由は無いですよ。私は明石さんに賭けます。むしろ、頼らざるを得ない。私達に黒幕の泥を突破する手段が作れないんですから」
春雨の言葉に、みんなが頷く。そもそも明石がいなければ最終決戦まで漕ぎ着けることすら出来ていなかった。
これまでの功績からして、ＭＶＰは間違いなく明石だ。戦場だけで言えば春雨がいなければ救えなかった者がいたり、撃破することが出

来ない者がいたりするのだが、スタートラインに立つことが出来なければ、その成果を出すことは出来ない。そして、それを可能にしたのが明石なのだ。それは叢雲だって認めている。
「わかったわよ。今はアンタに任せる」
『ありがとうございます。近日中に最高の結果を伝えられるように努力しますので、期待してお待ちください』
明石が近日中と言うのだから、本当に近日中なのだろう。
『私からは以上です。皆さんのためにも、すぐに対策を開発しなければ。全部説明出来ましたし、もう大丈夫ですね。それでは！』
言いたいことを存分に言い、用が終わったからすぐさま工廠へと戻る。存在自体が暴風のような明石に、思わず苦笑してしまった春雨。
最初こそ怒りに呑み込まれていたが、対策が考案されており、努力が無駄にならないことがわかったことで、精神的に落ち着きを取り戻してきていた。意識すれば制服が白露型のそれに戻り、怒りによる震えも止まっている。
海風もここでようやく安心出来た。一度火が点いたらもう元に戻らないかと思っていたため、また今の姿が見られたのは喜ばしいこと。
「ともかく、今はこちらでも出来ることをするしかないということねぇ」
『ああ、すまないが、もう少し時間を貰いたいと思う。その間、黒幕にも時間を与えることになるのが心苦しいのだが、こちらに勝ち目を作るためには時間が必要だ。今考えられる全ての問題を解決してから向かうことにしよう』
急がば回れと言うように、早急に目的を達成するためには、入念な準備が必要である。誰もがそれを理解し、確実に勝利を収めるために行動をしていく。

通信終了後、まず飛行場姫が午前の哨戒のために外に出て行き、他の者達も各々の仕事につく。農作業や漁は勿論進めていくし、施設内

の掃除などもしていくだろう。
決戦が近くとも、施設でやることは普段と変わらない。むしろ変えない。午後からはトレーニングなどが入ってくるが、午前中は施設のための活動を続ける。生きていくためには、このリズムは崩すわけにはいかない。
その農作業の中、中間棲姫は随分と上機嫌だった。仲間のために活動出来るのが余程嬉しいのか、ニコニコ笑顔で畑の雑草取りに勤しむ。
そんな光景を見て、今日の農作業参加者であった春雨と海風はほっこりすることが出来た。
「姉姫様、なんだかすごく嬉しそう」
「妹姫様にこっぴどく叱られたみたいで。でも、それを抜きにして午後から哨戒に参加出来ることが、本当に嬉しいんでしょうね」
「自分の施設なのに自分は動くなって言われてたんだもんね。わかりづらかったけど、ストレスが溜まっていたのかも」
決戦まで嫌でも時間が必要になったわけだが、その間は施設を守り続けなくてはならない。それを自分の手で出来ることが喜ばしいようで、今や鼻唄を歌いながらである。ここまで機嫌がいいのは初めて見るレベル。
「いやぁ、姉姫さん、真面目すぎんだよ」
「そこがいいところでもあるんだけどね」
松竹姉妹も、あそこまでの中間棲姫を見ることはあまり無いようで、苦笑しつつもほっこり。それに追従するように、農作業を進めていく。
「姉さんも穏やかになってよかったです」
「まぁ、そうだね。明石さんが信用出来るから、怒りは薄れたよ」
「それだけでも元に戻れたのは、やはり鎮守府あってのことですね。昨日の演習はそれだけ効果的だったということ。決戦までに時間があるというのなら、また鎮守府に向かいたいものです。春雨姉さんの心の安寧のためにも、むしろ頻繁に向かうべきですよ。こちらから行けない場合は、山風達にこちらに来てもらうとかでもいいです。春雨

姉さんが穏やかであればあるほど士気が上がるので、誰もが春雨姉さんのことを気にかけなくてはならないですよ。崇め奉るのは当然として」

はいはいと春雨がマシンガントークを止めるが、その中でも心は穏やか。

白露達の努力を無駄にされると感じた時の怒りは、明石のおかげで鎮静化した。やはり、持つべきものは鎮守府の仲間である。

侵蝕を受けた者には

黒幕の泥の件は真っ先に施設に伝えられることとなったが、それをどうにかするための研究を続けていることは今の協力者全てに伝える必要がある。ここからは施設を交えることはせず、人類側だけでの打ち合わせ。

堀内提督から発信し、大将と大塚提督、そしてこの場に初めて登場する山寺提督。大将経由でこの場に顔を出すように命じられ、最初は拒んだようだが、明石の件もあるために渋々参加することとなった。その代わり、山寺提督だけは顔すら出さない。

大塚提督は山寺提督と初顔合わせであるため、軽く挨拶をすることに。山寺提督がいわゆる諜報員のようなものであるため、大塚提督としては若干警戒の色が強め。

『大将、彼は本当に協力者として信用をして問題無いのですね』

『大丈夫よ。彼は疑われることが仕事のようなものだから』

『人聞きが悪い！　でも、やってることがやってることだから、何も言い返せないのであった』

山寺提督の艦娘、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンが施設に対して仕掛けた盗聴紛いの諜報については、堀内提督は知っているため、あえてここでは何も口出しをしなかった。

手段としては非常に有効であり、むしろその手段を用いて本音を吐き出させようとしているのだから、監査としてはおそらく最上級の存在と言える。誰に対しても中立でいられるメンタルの強さも、今の立ち位置を支えている重要なファクター。

『そんな俺でも、黒幕というヤツに対してはまだ情報がそこまで多くないんですよ。なので、この場で共有させてもらえるとありがたいですね。ある程度は堀内提督や大将に聞いているとはいえ、現場にいるわけじゃあない』

「わかってます。そのためにこの場に来てもらったのでしょう。今回の話は、かなり重めの話です。山寺提督は既にご存知のことだと思いますが」

ここからは、白露達の細胞に黒幕の泥が混じってしまっている件を展開する、山寺提督は明石経由でそれについては把握しており、現在それを回避する手段を明石2人によって開発中であることも聞いている。
むしろ、その件について知らないのは大将と大塚提督。今のままでは施設からの参戦者の半数以上がそれのせいで無力化されるどころか、敵対する者が増えるという大惨事は、事前に知らされて頭を抱えるものである。
『魂の混成により蘇生された者に仕込まれたセキュリティみたいなものね。当人は何も考えてなさそうではあるけど』
『離反される可能性なんて1mmも考えていないだろうから、たまたま混じってしまったと考えるのが妥当か。だが、それがあちら側に有効に働くのは気に入らないな』
黒幕がどういう存在かわからないので好き勝手言っているが、その過程、黒幕の心情はどうであれ、現状をどうにかする必要があるのは変わりない。
『施設からの援軍を代えることで対策が出来るんじゃないか？　合理的に考えれば、リスクは減らすべきだ』
「いや、今回の援軍は全員、黒幕に因縁のある者達なんだ。自分の今を生み出した者に対する……嫌な言い方をすれば復讐のための戦いだ。それをこんな理由でやめろというのは、正直心苦しい」
リスクのことを考えれば、間違いなくメンバーチェンジだろう。しかし、心情を見るのなら、そんな理由で出鼻を挫かれるだなんて可哀想。
艦娘を人間として見るか兵器として見るかで、ここの考え方は大きく変わる。堀内提督が前者で、大塚提督が後者なのは一目瞭然。しかし、意見の行き違いにはならず、相手の意思も理解している上で、自分の意見を話している。
『実際、これはその魂の混成とやらがされた深海棲艦だけの問題では無いんじゃないですかね』
そこに山寺提督が意見を口に出す。

『状況証拠だけでしか判断出来なくて申し訳ないんだけど、1つ気になったことがあるんだ。その深海棲艦達は、黒幕に直接製造されたような者達だから影響を受けるのは当然なんだが、他にも受けそうな者がいるんじゃないかな。例えば、既に一度侵蝕を受けた者なんて、何かしらあってもおかしくないんじゃないか？』

侵蝕自体は春雨の蹴り、もしくは明石開発の薬により、跡形もなく消し飛ばされている。前者ならばその場に全てを吐き出すことになり、後者ならば侵蝕と同様の快楽と共に体内から消滅。『観測者』による治療も、春雨と同様の衝撃を与えることによる一瞬の仮死を体験させる手段を用いる。

しかし、今までの話から想像してみれば、吐き出されているのは黒幕の意のままに操るための端末のみ。そして、明石が開発した感知のシステム自体が、その端末に対して反応すると考えることが出来る。

ならば、一度侵蝕を受けた者達は、端末以外にも仕込まれている可能性が十分にあり得る。それこそ、侵蝕性のない黒幕の泥そのものが体内にあってもおかしくない。

「大塚提督、そういえば、そちらの調査隊は、一度侵蝕を受けた者達だったね」

『ああ。そして決戦に参加することにもなっている』

「拠点の近海を探し当てたのも彼女達……だったね」

『ああ、近海に辿り着いた時、集中したら何かを感覚的に察したそうだが……まさか』

その感覚的に領域に入った瞬間を察することが出来たこと自体が、侵蝕の際に仕込まれた何かのおかげである可能性。

当時は一度侵蝕を受けたことに対して身体が敏感になっているのではと考えたものの、そうなっている理由が仕込まれた何かであれば納得が行く。

「こちらにも侵蝕を受けた者がいる。彼女達の身体を調査し、仕込まれているものが無いかを確認しよう」

堀内提督が言うその者達とは、漣、曙、朧、そして荒潮の4人である。龍驤経由であるとはいえ、侵蝕を受けているのは間違いなく、漣

に至っては器にされている経験すらあるのだ。
　大塚鎮守府の鹿島とは別のパターンかもしれないが、それでも黒幕の何かが仕込まれている可能性は十分にあった。
「その前に、それが調査出来るようなシステムの開発も明石に頼まなくてはいけない。出来上がり次第、こちらと大塚鎮守府、そして施設でも調査をする方向に持っていきたい」
『ええ、そうしてちょうだい。施設側は人数も多いでしょうから、鎮守府に呼ぶよりは、出向いた方がいいわね』
「はい、そうさせてもらいます。状況が進展したら、またこちらから連絡をして調査に入ります」
　侵蝕を受けた者が軒並みアウトとなると、施設にいる者の半数はアウトになるだろう。そして、そこから連鎖的に出撃出来ない者が増えてくる。
　春雨もその中に含まれるだろう。海風が侵蝕を受けているため、今のままでは出撃出来ない可能性が高く、海風が出られないとなれば春雨の安定性が一気に落ちる。海風自身も発作を起こすかもしれず、施設全体に影響があると言っても過言ではないだろう。
　艦娘達にも重要だが、施設の者達に対しても必要不可欠な調査となる。それも勿論、対策と同様に早急に対処しなくてはならない。

　報告終了後、すぐに工廠へ向かう堀内提督。先程の件は明石に知っておいてもらう必要があり、現在の研究よりも優先順位が高いとも考えている。
　その明石は施設との通信を終えた後からいつものように工廠の奥に引き篭もっている。今は大淀も手伝いをしており、急ピッチな研究開発を進めていた。
「明石、今いいかい」
「はーい、提督同士の報告会で何か進展がありました？」
「気になることが出てきてね。優先順位が比較的高そうだから、先に君達にも話をしに来た」

泥対策よりも優先順位が高い内容と聞いたら、作業を止めざるを得ないだろう。一旦休憩も込みにして、話を聞くために腰を据える。
そこで話されたのが、一度侵蝕された者達の中に何かが残されている可能性。今までの泥対策はあくまでも端末に対してであったが、さらに深い部分に存在する問題点が確認したいということ。
実際、それがまだあるかどうかはわからない。無いなら無いに越したことはない。しかし、調べずに決戦に向かうのは流石に警戒が無さすぎると感じた。
「なるほど、侵蝕した時点で黒幕の何かが身体に残されている可能性、ですか」
「貫った細胞みたく、完全に混じり合っとるわけでもなく、ただそこにあるっちゅーわけやな。ウチみたいにそれそのものにされたわけでもなく」
「今までの傾向からして、無くはない仮説ですね。大塚鎮守府の艦娘も、それが残されていたからこそ、領域に入ったことを自覚出来たと」
三者三様の反応ではあるが、向いている方向は同じ。その可能性は断定出来ないが否定も出来ない。ならば調査は必要。
「都合がいいことに、今は白露達の細胞から泥を抽出している最中なんです。それを使ってまずは一度侵蝕を受けた者の中に同じ反応があるかどうかを調べてみましょう」
泥の抽出と聞いて、提督はおやと首を傾げた。施設との通信の最中に、細胞から泥を抜き出すことは不可能と断言していたはずだ。しかし、今それをやっていると言う。
「ああ、それなんですが、言葉足らずでしたね。細胞を傷付けずに泥を抽出することは不可能です。それくらいガッチリ融合してしまっているので、分離させることは出来ません。また、泥だけを消し飛ばすことも無理です。細胞が確実に傷付いてしまいますので。でも、細胞のことを気にせずに泥だけ抽出することは出来ます。いや、これは抽出じゃないですね。不要な部分を削り取り、欲しいところだけ手に入れようとする荒業です。アレですよ、身ごと切って中身だけ得ようとしている感じ。初心者の皮剥きみたいなものです」

細胞に混じり合った者から泥だけを抽出して無害にすることは不可能。何故ならそれだけ融合してしまっているため、そんなことをしたら細胞そのものを破壊してしまう。
端末に対して施すように泥だけを消し飛ばそうとしても、細胞に食い込んでいる以上、消せても細胞に傷が付き、それが致命傷になってしまう。
なら逆に、細胞のことを気にせずに泥を手に入れようとすれば比較的簡単に可能だと気付いたようだ。不要とするのを侵蝕されている側として、泥に重きを置いて作業する。そうすることによって、僅かではあっても確実に抽出が出来るということのようだ。
「白露達にダイレクトにこんなことは出来ませんけど、貰った髪の毛とか体液に対してだったらいくらでも出来ます。これで多少なり泥単体にして、端末と同じように成分解析。同一、もしくは近似的な反応が体内にあるかどうかを確認出来る装置の開発。これなら多分、午前中には可能です。龍驤が張り切ってくれますし」
「おい、ウチは今それ初耳やぞ。やるけどな。やるけどな！」
「情報の精査は大淀にやってもらいます」
「初耳ですが、まぁそれくらいなら大丈夫です。むしろ明石に任せると余計なところに手を出しそうなので、私がしっかり纏めます」
「わーお、信用されてるー」
そして、これで抽出出来た泥を調査解析することにより、対策に繋げていく。外部からの干渉を防ぐ手段や、そのモノを活性化させないようにする手段の開発には、まずこの泥を手に入れることから始まるだろう。
「さあさあ、面白くなってきましたよ！　方向性も今は1本になりましたからね！」
心底楽しそうに研究を再開する明石に、大淀も龍驤も小さく溜息を吐いていた。
「コイツが盛り上がると、ウチらの作業が倍以上になんねん……間違ったことはしとらんから文句は言えんけどな。ヨド、胃とか大丈夫なん？」

「幸いにもまだ食欲とかは落ちてきていないので大丈夫ですかね……。龍驤さんは体調如何です？」
「ウチはありがたいことに妖精さんの身体やからな。艦娘や深海棲艦よか頑丈みたいやわ。ただ、とにかく甘いモン欲しくなるんは、この身体のせいなんやろか」
「妖精さんは甘いものが好きですからね……その嗜好が龍驤さんにも植え付けられているのでしょう。また金平糖を用意しておきます」
「ありがとな。ホンマ頼りになるわ」
こちらはこちらで強い友情で繋がっている様子。

この調査の結果次第で、決戦に向けた対応がさらに進むことになる。

体内の罠

鎮守府の昼、工廠。流石に昼食を抜いて研究を進めるのはよろしくないと大淀が取り仕切り、食堂で食べないにしろ、何かを腹に入れろと簡易的な食事を持ってくる。

明石にはサンドイッチが、龍驤には妖精さんの主食とも言える金平糖が渡され、大淀も明石と同じ物を頬張りながら作業していた。

「いやもうホンマに甘いモンが染みるわ。ちゅーか食い過ぎなんちゃうかコレ。自分の頭くらいのデカさの金平糖て。ウチの泥、舐めたら砂糖になっとらんか」

「ヒトに例えるとそれくらいの摂取はしていますからね。何処にそれだけの糖分が入るのやら」

「妖精さんは代謝が凄まじいんじゃないかな。何処から出してるのか知らないけど。むしろ消化したモノが全部活力に変わってるから、エネルギー効率ヤバすぎ」

そんな雑談をしながらも作業は続く。決戦に向けた重要な研究であり、失敗は許されないくらいに時間的な要求もあるのだが、明石達はそんな中でも緊張感が全く無い。研究に失敗は付きもの。むしろ一発でトントン拍子で行く方がおかしい。そう考えながら進めている。

とはいえ、今の明石には多種多様なノウハウが刻まれているおかげで、今回の研究も一発成功が見えていた。既に白露の細胞からは完全に融合してしまっている泥の成分だけを残して他を削り落とすことは成功。結果的に泥が抽出されることになる。それを手に入れた全員分の細胞で行ない、調査可能なくらいにかき集めた泥の塊が完成していた。

現在の装置で確認出来る泥――端末とは別モノと見做し、改めて成分解析をして既存の端末と比較。違う部分を入力し、それを同じように感知出来るように装置を修正。

「うん、今まで作ってきたモノが役に立ってるね。龍驤に追加で作ってもらったモノも応用で使えるし、最終的には黒幕そのものを消せる

装置が出来るかも」
「出来るかもしれへんけど、それ喰らったらウチは消し飛ぶんやろ。それに、白露達だってタダじゃ済まん」
「そうなんだよねぇ。そこが厄介なところなんだよ。ある意味、こちらの仲間を人質にされてるようなものなんだよね」
注意して装置を使えば、黒幕のみに影響を及ぼすことも可能だろうが、最終決戦にそんな余裕があるかはわからないし、逆にそれを黒幕に利用される可能性だってあるのだ。そのため、作ったとしても戦場に持っていくことは出来ない。
なので、ひとまずは黒幕の泥が感知出来る装置を作り上げる。今はそれが重要なのだから。

昼食時も終わり、午後イチ。食事中も作業していただけあり、望む装置が完成した。泥を消し飛ばすのはまだ置いておいて、少なくとも今ここにある泥と同じ反応のものが体内に存在しているかを確認するだけの装置。
端末を感知する眼鏡のような広範囲を見ることまでは出来ないが、目の前に来たら何処にどうあるかくらいには確認出来る。元々手に入れた成分が少なかったために、精度はその程度で打ち止め。無尽蔵に使えた端末が異常だっただけ。
そこで呼び出されたのが、調査隊である山風達。侵蝕を受けている荒潮が含まれており、その差を確認するために全員を見ようと考えている。
勿論、この場にはその装置の出来を確認するために、提督と五月雨も便乗。その結果がどうであれ、ここでの確認が決戦に向けての重要な情報を生み出すはず。
「一応持ち運びが出来るようにしておきました。その分簡易的ではありますが、何処に何があるかくらいは見ることが出来るようにしてあります。眼鏡ではなく単眼鏡にしてあるのは、システムをそれ一本に絞ったからですね」

取り出したのは、何処にでもありそうな単眼鏡。しかし、本来のそれと違って遠くが見えるわけではなく、そのレンズを通して見たものに対して分析をかけ、内部に仕込まれている黒幕の泥と同一存在があるかどうかを調査する装置となっている。
効果範囲は狭いが、一人一人を見ていくだけならこれでいい。山寺鎮守府の明石から学んだ小型化の技術を早速取り入れた結果である。
「ではまず、侵蝕を受けていない山風から見せてもらいますね」
「……ん」
一歩前に出て、単眼鏡で上から下までを舐めるように眺める。その視線に山風は少々引きつつ、その調査の結果を待つ。
その視線が頭頂部から爪先まで終わったところで、楽にしてくださいと離れる。調査自体はこれでおしまい。
「山風からは何も反応がありませんでした。内部に格納した、細胞から抽出した泥と同一の成分を持つ何かが、山風の中には存在しないということになります」
その装置が絶対であるとは限らないのだが、何事もないと保証されるのは安心出来る。山風もホッと小さく胸を撫で下ろした、
「続いて、荒潮の確認をします」
「本命よね～。ここで何か見つかる可能性が高いんだもの～」
続いて、一度侵蝕を受けている荒潮。明石の頭の上にいる龍驤は、それを行なった張本人であるため、少しバツが悪そう。しかし、荒潮は気にしなくていいの一点張り。おかげで龍驤は多少気が楽になっている。
「でも、何もない方が嬉しいわね～。一度侵蝕されたからって、まだ何かあるって言われても、気分が悪いだけだもの～」
「誰だってそうあってほしいと思っているさ。今回のこれも、念の為の確認だからね」
荒潮と提督が話している間も、明石は単眼鏡を使って荒潮の体内を隅々まで確認していく。至って真剣ではあるのだが、どうしてもこの舐めるような視線は気になるようで、飄々としている荒潮であっても嬉しくは無さそうだった。

しかも、一点を見つめたところで明石の動きが止まったのだ。山風の時には無かった明石の動きに、表情には出さずとも荒潮は内心ビクビクしていた。
「あの～、明石さん？　もしかして」
「予想はしていましたけど、本当にあるとは思いませんでしたよ。黒幕の泥と同一存在の何か」
言葉にされるとショックを受けてしまうが、事前に見つかったのはいいこと。まるで癌を初期段階で発見したかのような感覚。
明石が単眼鏡で凝視しているのは、荒潮の鳩尾の辺り。胴の中央にポツンと小さな反応を確認した。何か蠢いているわけでもなく、ただそこにあるだけの反応。
しかし、この形には少し見覚えがあった。
「……卵？」
小指の先に乗る程度、ウズラのそれよりも小さいが、反応の形状は確かに卵だった。それが、本人にわからないように鎮座している。
今まで何もわからなかったのが不思議なくらいに存在感があるが、今のこの装置、単眼鏡があるからわかるだけで、活動にも何も影響が無いように配置されているのが、意図的にこうなっているかのようにも見える。
「ちょ、ちょっと明石さン、江風にも見せちゃくれないかい」
明石の見間違いというのは無いだろうが、一応ということで他の者にも見てもらうことに。
まずは江風が単眼鏡を借りて荒潮の鳩尾を凝視する。すると、少々鈍い声と同時に、山風の同じ場所を見る。明石の言う通り、荒潮にはあるが山風には無い。
「マジで何かあるぞ。卵ってのもわかる。そういうカタチしてンだ」
「卵……ねぇ。こんなところに？」
荒潮も自分の鳩尾を撫でるが、当たり前だがそんなモノが入っているような感覚などあるわけが無かった。しかし、誰が見ても荒潮の中にはそういうモノが入っているのが見える。
提督も確認させてもらったが、やはりその存在は誰の目にも見える

モノ。
「例えば、これがそのままの状態で黒幕のところに行ったら、私はどうなっちゃうのかしら～」
「予想出来ることはいくつかあります。例えば、無意識に身体を操られて黒幕に攻撃が出来なくなったり、思考すらも操られて再洗脳される可能性もあります。ただ、これ卵のカタチをしているので……本当に最悪な場合、孵化しますよねコレ」
ただそこに泥があるわけではなく、卵という形状であるが故に、孵化というより悪い方向の想像が出来る。そうなった場合、人体への影響は計り知れないだろう。
それこそ、再洗脳どころの騒ぎでは無い。黒幕の泥が身体中に回ってしまった場合、魂を混ぜられるように強制的に深海棲艦化させられる可能性もあれば、龍驤のように泥化する可能性すらある。既に深海棲艦化している施設の者達ならば、さらに酷いことになり得る。
「これ、消すことって出来るのかしら～？」
当然、そんなものが身体の中にあってもらっては困る。出撃しないことで影響を回避出来るかもしれないが、それは今だけという可能性だってあるのだ。時間が経てば経つほど不安は大きくなるモノ。
対する明石は、勿論開発中だと胸を張る。しかし、自信満々には発言出来ない。
「艦娘の中にあるものは消すことは出来ると思います。今の波長をこの泥に対応させることさえ出来れば、今までと同じように身体を傷付けることなく消し飛ばせるでしょう」
「何か含みがある言い方ねぇ」
「それはまぁそうなってしまいますよ。だって、この泥と同じ要素が、白露達は全身に蔓延っているんです。卵だけ消すなんて器用なことは出来ません。周囲の細胞ごと滅ぼしてしまう。そうすればどうなるかなんて、子供でもわかるでしょう」
卵と同時に身体ごと崩壊する。それは火を見るより明らか。ただでさえ細胞から泥だけを抽出して分離することが出来ないから、泥以外の細胞を削り取る――本来の細胞を犠牲にすることによって、今の

調査用の泥を手に入れているのだ。
　如何に明石であっても、全く同じモノを分けて消すという処理は簡単には出来ない。卵だけをピンポイントで消す装置は、作れるかもしれないが今までよりも膨大な時間がかかるだろう。そうこうしている内に、黒幕がさらに力を付ける可能性があるのだから、今そんな時間は使っていられない。
「少なくとも艦娘に対しては容赦なく消す装置を使って消しておきますが、それだけではまず確実に足りない。本当に厄介なモノを作ってくれましたよ黒幕は」
　おそらく初めて、明石がここまで悔しがるところを見る。今のままでは、完全に解決するまでに手が届かない。そのままだと、本当にこの戦いを望む者達を戦場に送り込むことも出来ない。そもそも戦場に立ったことによる影響も読めないため、雑に全部消すではどうにもならない。
「……手術でお腹から抜き取るとか……出来ない？」
　山風が思い付いたことを言ってみる。傷付けずに解決することが無理ならば、傷付けてでも解決する方向を考えた。
　しかし、明石は首を横に振る。
「艦娘のように卵だけが埋め込まれているのならそれでいいんですが、白露達は全身が卵みたいなものです。取り除くことは不可能でしょう。何かしらの犠牲で取り除けたとしても、全身に蔓延っているのだから、取り除いたら命も削ぎ取ることになります。見た目はただの深海棲艦でも、その実、半分は別モノと考えてみましょう。しかも、命を維持するための器官すら半分ずつです。生きていたとしてもまともに活動出来るとは思えません」
　だから、領域内に入っても身体に影響を与えないように暗室を作ればいいと山寺鎮守府の明石が提案したのだ。取り除くことが出来ないのなら、共存出来るシステムを作ればいいと。簡単に出来ないから頭を抱えているのだが。
「それに、もし卵を手術で抜き出せたとしても、深海棲艦には修復材が使えないという前提があります。白露は確か超回復があるから大丈

夫でしょうけど、他の子達はそんなものはありません。成功したとしても、そこから数日は動くことすらままならない。古鷹ですら完治に1週間近くかかったらしいですし」

腕を組んでうんうんと悩み出す。なかなか難しい問題らしく、明石でも簡単には完璧な解決が思い浮かばないようだ。暗室はあくまでも応急処置。根本的な解決にはなっていない。

今はそれで妥協して、最終決戦に臨むしかないかもしれない。だが、明石としてはもっと安全な道を探し出したかった。

姉姫の夢

施設の午後。午前中はいつものように農作業や漁をしていたが、午後からは決戦参加組はトレーニング。その他の者も、施設を守るために活動する時間となる。

その中でも施設の主である中間棲姫は、今まで抑えられていた欲求が解き放たれているかのようにルンルン気分で外へと向かう。

今までは施設を守る活動といえば、トレーニングをする仲間達が休息中に食べるオヤツを作ることくらいで、哨戒なんて参加させてもらえなかった。それは仲間達が中間棲姫のことを思ってのことであり、万が一のことを考えたらあまり活動的になってもらいたくなかったのだ。

しかし、あまりにも抑え込み続けるとストレスになってしまう。みんなが頑張っているのに、自分だけ何もしないでいてくれと言われても、施設の主としてそれが我慢出来るわけがない。

結果、飛行場姫からいろいろと制約をつけられた上で、哨戒任務を受け持つことになった。その1つが、監視という名の護衛をつけること。1人で行動していて万が一のことが起きてしまった場合、取り返しがつかないし後悔だけでは終わらない。

「なんだか本当に楽しそうですね」

「勿論よぉ。みんなを守るのがこの施設の主である私のお仕事なんだものぉ。みんなの気持ちもすっごくわかるけど、やっぱり私が動かなくちゃダメだと思うのよねぇ」

トレーニングが始まるまでは、中間棲姫の護衛は春雨と海風。直感的に何かがあった場合にすぐに対応出来る方がいいため、飛行場姫から直々の任命である。

トレーニングが始まったら、今度は戦艦棲姫が共に行動するとのこと。この施設の居候という立場から、ここではかなり少ない中間棲姫と完全に対等な存在であるため、遠慮が無いという利点がある。

ちなみに、戦艦棲姫の相方となりつつある空母棲姫は、深夜の哨戒を受け持つこととなっているため、現在就寝中。

「それじゃあ早速、哨戒機を飛ばすわねぇ。全方位に満遍なくでいいかしらぁ」
「そうですね。島を守るためですし。でも、妹姫様も時間をかけてグルリと回していたみたいですけど」
「そーれっ」
春雨の言葉を全て聞く前に、哨戒機を飛ばすという意思の下、大きく手を上げる。すると、以前に泥の雨を全て霧散させるほどの火力を発生させた時に使用していた空飛ぶ甲板が1枚だけ出現した。
この場に電力供給をしている艤装本体が移動させられていたら、甲板も全力全開で出現させられていたようだが、今はそんなことが出来ないために甲板のみを使用。それも全力では無いために1枚だけ。本来の3枚は使えない。
そしてその甲板から、次から次へと哨戒機が上空へと飛び立っていく。ある哨戒機は北へ、別の哨戒機は南へ。中間棲姫を中心に全方位に向かって、1機だけではなく10機以上の編成の部隊が飛んでいった。
飛行場姫の哨戒は、岸を歩きながら哨戒機を何機も飛ばし、島の外周をグルリと散歩するように確認していくスタイル。1つの方向を念入りに調べ上げるという感じ。
しかし、中間棲姫は岸まで近付かない、施設からあまり外に行かないという制約があるため、島の中心に存在する施設から、一気に全方向へと飛ばす。当然、その哨戒機の情報は逐一中間棲姫に送られてきており、本当に360度全ての情報を一気に頭の中に取り入れていた。
「す、すごい……」
「これでも手を抜いているんですよね……甲板1枚ですし」
「多分ね……。私達が知ってる中でも、こんなに艦載機使えるヒトいないよね……」
手を抜いた状態でも、艦娘を凌駕する搭載数。一気に扱える数も段違い。だがそれ以上に、全ての方角を一括で確認してしまうことに驚いた。

飛行場姫達が1つの方向に向けて艦載機を飛ばすのは、そこから手に入る視覚情報などが混線しないようにするための配慮。しかし、中間棲姫はそんなことはお構い無しに全方向。見えている風景がぐちゃぐちゃになり、どれがどちらの方向の風景なのかもわかりづらいのだが、中間棲姫の頭の中ではどれが何処を見ているのかが全て把握出来ているという。

「こんなに飛ばすのは久しぶりねぇ。島の周りを見るってこと自体があまり無いんだけれどねぇ」

そして恐ろしいことに、それだけの情報量があっても、春雨達とは雑談出来るくらいに余裕がある。視線を春雨達に向けていても、風景の明度は何も変わらない。何処に何があるかを事細かく理解していた。

それくらい、中間棲姫の力は群を抜いている。誰も出来なそうなことですら簡単にやってのけるのが、この島の主である。

「うん、綺麗な海よぉ。何かおかしなモノがあるわけでもなく、泳ぎ甲斐があるくらいに澄んだ色ねぇ。私は泳げないんだけれどねぇ」

「陸上施設型の特性……なんですかね」

「多分ねぇ。私も妹ちゃんと、一度練習しようとしたのよぉ？　でも、まず浮かばないのよぉ。で、バタバタ手足を動かしても沈んでいくばかりで、何をやっても泳げないって悟ったのよねぇ」

かなり昔の話らしいが、それをしみじみと思い返している中間棲姫。

なんでも、今の漁の形式が決まる前に、海女のように素潜りを試してみようとした時があったらしい。魚だけではなく、海藻や貝類なども採れれば食生活が華やかになるだろうと考えて。

しかし、結果は今話した通り、そもそも泳ぐことが出来ないため断念。これに関しては、伊47が仲間に加わるまで凍結され、その後に調査したら食べられそうな貝類がいなかったことで完全に終わっている。

「春雨ちゃん達は泳げるのかしらぁ」

「はい、一応は。戦闘中に艤装が破損して推進力が無くなった時のよ

うな緊急事態の時のために、泳ぎの練習はさせられています」
「ですね。一通り泳げるようにならないと出撃も出来ません。なので、うちの鎮守府の艦娘は全員泳げます」
春雨と海風が口を揃えて話す。傷は浅いのに泳げずに沈むなんてことが起きないように、堀内提督がしっかり仕込んでいるとのこと。場所によっては、海上を駆けることが出来るし、もし脚部艤装がダメになっても部隊の仲間がいるのだからと、泳ぎを重んじていないところもあるようだが、堀内鎮守府は少々違った。
そのため、新人で出撃していた荒潮や漣達北上組も、泳ぎだけはしっかり覚えている。幸いにも、挙げた4人は全員が器用に泳ぎを覚えるタイプだったので、小一時間程度の練習でさらりと終わらせていたりする。
「羨ましいわぁ。妹ちゃんが小舟で漁に行ってくれてるじゃない？私もちょっとそれをやらせてもらったことはあるけれど、海の上に行くのなんてそれくらいなのよねぇ。自分の手足で泳げるようになってみたいわぁ」
哨戒を続けながらも、楽しそうに話す中間棲姫。特性として現状不可能であることではあるが、今までの戦いの中で、不可能は可能になってきたことも多い。それを考えると、陸上施設型が泳ぐようになれる可能性も0では無くなっている。
そんな夢を語る中間棲姫に、春雨と海風はより穏やかな気持ちになった。戦いの中にいて、今も島の周囲に何も無いことを確認しているのだが、今この時は平和を実感出来る。
「きっと泳げるようになりますよ。今は海に入るのは危ないですが、全部終わったら練習をしましょう」
戦いが終わったら、とフラグを立てるようなことを話しているが、以前も白露がフラグをへし折ると言っていたし、春雨自身もこの戦いは通過点だと考えているため、気にせずに先のことを語る。
「そうねぇ。ちょっと怖いけど、またやってみようと思うわぁ。そのためにも、まずは海の平和を取り戻さないとねぇ」
「ですね。私もやりたいことが沢山ありますから。まずはまた畑で一

から野菜を育てたいですし。あ、でも鎮守府にも戻ろうかなと思っているんです。頻繁にこの施設には来たいと思ってて」
中間棲姫に釣られて春雨も穏やかな笑顔で話す。今の春雨はより一層怒りから離れており、寂しさも感じさせない。姿は違えど、正しく艦娘春雨を体現している。壊れている部分はもう何処にも見えない。
隣の海風も、そんな春雨をまた見ることが出来たのが嬉しくて仕方ない。自分の愛する姉が取り戻されたのだから、喜ばない理由がない。しかし、今も水面下ではその穏やかな心を脅かすモノが蠢いていると思うと、複雑な気分である。
「ふふふ、そんな日が早く来てほしいわぁ」
「すぐですよ。私達が決着をつけてきますから、姉姫様はここで私達の帰る場所を守っていてくださいね」
「ええ、勿論。ここは私の場所なんだもの。誰も傷つけさせないし、居場所を失わせることなんてさせないわ。何人たりとも、この平和を壊すことは許されないものねぇ」
穏やかな笑みの奥に、力強い意志を感じた。施設を守るため奮闘する中間棲姫には、それ以上に仲間達の平和を願う気持ちが強く存在している。
だからこそ、コレほどまでに強い力が発揮出来た。思いの力では他の追随を許さず、元々持つ尋常ではない力も組み合わさり、まず崩れることのない強固な意志となっている。
「……あら？」
などと話していると、中間棲姫が小さく反応を見せる。全方位に飛ばしている艦載機の視覚情報から何かを見つけたような反応。
「どうしました？」
「今朝黒潮ちゃんが話していた泥かしらぁ……また潜り抜けてきているみたいねぇ。動き自体はとても遅いけれど、放っておいたら島まで辿り着いてしまうのかしらぁ」
昨晩に続き、この真昼間にも泥の存在を確認。『観測者』の対処を潜り抜けてくるくらいに泥の量が増えていることが嫌でもわかる。

「少し高いところも見ているけれど、ちょっと前にあった雨を降らせてくるようなモノは無いわぁ。本当に流れ着いてくるだけみたいねぇ」
「すぐに対処しましょう。泥自体はそこまで多くないですか？」
「そうねぇ。あの明石ちゃんから貰ってる泥刈機で簡単に消せるくらいよぉ」
今ここにある分だけで言えば、対処を免れるくらいの僅かな量。すぐに対処すれば大惨事にはならない。
逆に、すぐに対処しなければ施設に辿り着いてしまい大惨事になるため、すぐに動き出す。昼からの哨戒メンバーである松竹姉妹にすぐに伝えられ、中間棲姫がもう1機案内用の哨戒機を発艦させて泥へと向かってもらった。
「嫌ねぇ……昼夜問わずというのは」
先程まで夢を語っていたのに、泥を見たことで曇ってしまった中間棲姫の表情に、春雨はギリギリと怒りが溢れ出しそうになったものの、海風がすぐに手を握ることにより何とか抑え込むことで、姿が変わることも無かった。
「でも、みんなが手伝ってくれるなら、大丈夫よね。私も全力で島を守るから、よろしくね」
「はい、任せてください。必ずこの島の平和を取り戻します」
怒りは決意へと変わり、より強く平和を望む力となる。

中間棲姫の力により、泥の侵蝕は未然に防がれていくのだが、昼夜問わずに泥がやってくるという状況にまで悪化しているのはよろしくない。精神的に追い詰められていく。
だが、その分、施設の仲間達の結束力も強くなっていくのだ。より強い力になり、今まで以上に平和を望むだろう。それはもう、黒幕の泥程度では止まらない。

遺された卵

中間棲姫による哨戒は続けられ、春雨と海風は護衛を戦艦棲姫と交代してトレーニングの方へ。黒幕との決戦までに、出来る限り鍛えておかねばならないと、みんな躍起になっている。

飛行場姫も、このトレーニングには結構乗り気。古鷹筆頭のスタミナ増強や、叢雲が望む近接戦闘の強化など、やりたいことは沢山ある。ここでさらに強くなれば、施設を守ることにも繋がる。

以前の鬼ごっこの際には全員参加になっていたが、今回は哨戒の関係があるためそうはいかない。結果的に、今回は決戦参加メンバーのみが参加となっている。あとは、飛行場姫に若干の依存が入っている潮と、その潮をサポートすることで自分を手に入れている潜水艦姉妹。

「それじゃあ、今日もスタミナトレーニングから行きましょうか。その後にスパーリングね。春雨や叢雲だって継戦能力が増えた方がいいでしょ」

「そうね。ずっと動き回っていても息を切らさないくらいになれば、隙を見せることも無くなるわ。だから、スタミナトレーニングは個人的にも賛成」

「私も、ですね。疲れが遅くなれば、頭も回しやすくなりますし」

元々不足している者達はともかく、そうで無い者にも必要なトレーニング。誰もがやる気満々である。

そして相変わらず、そのトレーニングの先導者は潮。潜水艦姉妹も同じように便乗しており、図らずも魂の混成を受けている者達は全員がここに揃っているという状態に。

「え、えと……それじゃあ……体幹トレーニングで、スタミナをつけていこうと、思います……」

トレーニングを受ける者達からの視線が集まることで、どうしても恐怖を感じてしまうのが潮の特性。少し俯きつつも、しっかりと先導者としての務めを果たそうとしていた。

発作を起こすかもしれないと感じたら、すぐに潜水艦姉妹が潮を落

ち着かせる。だが、今は安定しているので、みんなと一緒にトレーニングを受けるという方向のようだ。
「妹姫さんに習ったこと……でいい、ですよね」
「ええ。筋トレにも繋がりつつ、スタミナも増えるわ」
「は、はい、それでは、その……まずはプランクから……」
潮を中心としたトレーニングが始まる。それは殺伐としたモノではなく、和気藹々としたモノ。実力の底上げも当然必要なのだが、やはりここで仲間意識をより一層高めていくことも大事。共通の活動をみんな揃って行なっていくことで、繋がりは強く深くなっていく。

トレーニングがしばらく続いたところで、哨戒をしているはずの中間棲姫がトレーニングの場に現れた。哨戒機自体は相変わらず全方位に飛んでいるため、その全ての視覚を確認しながらでも何かしらの用があるということ。勿論、護衛の戦艦棲姫も隣についている。
「あらお姉、どうかした？　ちょっと施設から離れすぎな気がするけど」
「ごめんなさいねぇ。さっき提督くんから連絡があったのよぉ」
「そう、それならお姉が直接来ても仕方ないか」
トレーニングは続けさせつつ、その連絡が何かを聞いていく。既にスタミナ不足で限界が近い古鷹がいたので、ちょうどいいと休憩をさせる方向で。
「ちょっと問題が出てきちゃったみたいで、今から緊急でここに調査隊が来るらしいわぁ。もう向かってるらしくて、急ぎで調べたいことがあると言ってたわねぇ」
「本当に急じゃない。やることやって帰っても、鎮守府に戻る頃には暗くなってるんじゃないの？」
「それくらい重要ってことよねぇ。ちょっと心配だわぁ」
こんなタイミングで施設に来るなんて今までに無かった。どうしても今すぐ知っておきたい問題が出来たということだろう。
そして、それを聞いたことで、春雨の直感が働く。完全に把握出来

ているわけではないが、あちらが何を望むかを察することが出来た。それが今出来る最善の道。決戦に向けての最速の道。
「姉姫様、薄雲ちゃんとジェーナスちゃんを連れてきておいた方がいいかもしれません」
「薄雲ちゃんとジェーナスちゃん？」
「はい。何となくですけど、今回の調査……一度侵蝕を受けたことがあるヒトが重要な、そんな感じがします。こんな時間に来ると言っているくらいですし、そのまま帰るにしても時間はあまりかけない方がいいと思うので」
　先程飛行場姫が言った通り、この時間に来るということは、やりたいことをやってすぐに帰ったとしても、暗がりを航行する可能性がある。ここに泊まっていく前提で来ているのなら別に構わないのだが、そうで無かった場合は、出来る限り事を早く終わらせる方向に持っていきたい。
「侵蝕を受けているってことは、私や空母もいた方がいいかしら」
「ですね。戦艦様はそのままズバリで、空母さんは侵蝕というより器ですけど。あ、あと今の状況が大分違いますが、瑞鳳さんと黒潮ちゃんもいた方が良さそうです」
　春雨が考えている通り、侵蝕を受けた者――泥をその身に一度でも宿した者という条件ならば、龍驤に器にされた空母棲姫や、現在進行形で忌雷に寄生されている瑞鳳と黒潮も該当することになるだろう。
「それじゃあ、すぐに準備をしましょう。全員岸に集まればいいかしらぁ」
「ですね。私達も移動しておいた方がいいと思います。別に施設の中に入らないといけないとかそういうことは無いと思いますし」
　春雨が中間棲姫と話をしている間、少し不安になっていたのは海風。侵蝕を受けた者に何かがあると聞いてしまうと、あの最も苦しい記憶が蘇ってしまう。
　愛すべき姉を追い詰めたあの苦い経験はその姉によって全て解決したはずなのに、未だについて回ってくるとなれば、それはもう呪いのようなモノ。腹立たしいし、とにかく辛い。これのせいで決戦に参

加出来ないとか、春雨の傍にいられないとかになったら、ほぼ見せなかった海風の発作が発生してしまいかねない。
「……海風、大丈夫だよ。そういうことが無いようにするための調査なんだと思うから」
「そう、ですね……。そうあってほしいですね」
少し弱気になっている海風の手を握る。いつも自分の怒りを抑えてくれる時のように、今回は逆に海風を落ち着かせる。
万が一のことがあってもいいように、こんなに急ぎで調査をしに来るのだ。ならば、心配なんていらない。今までどんな状況でもクリアしてきたのだから。

それから少しして、聞いていた通りに調査隊が到着。メンバーとしても必要最低限というイメージで、いつもの山風を隊長とする駆逐艦4人と、調査をすぐに出来るようにと明石、念の為機材を運んでくれている宗谷、そして、護衛のために金剛、比叡、島風、サラトガの4人。
ここに来るまで艦載機による哨戒も実施し、泥は確認していないとのこと。また、到着の前に中間棲姫の哨戒機に案内されているため、見落としもないことは確認済み。
「今回は……ちょっと急だけど、明石さんがすぐにでも調べたいって……」
隊長の山風が中間棲姫に説明する前に、明石がチャカチャカと準備をしていた。準備と言っても、黒幕の成分を確認する単眼鏡を取り出して軽く設定をしている程度だが。
「端的に説明しますね。一度侵蝕を受けた者の体内に、黒幕の成分と同じ質の物体が埋め込まれていることが判明しました。その形状から卵と称しています。こちらでは荒潮がそれを持っていることを確認済み。その後、漣、曙、朧にも同様の卵が存在していることを確認しています。龍驤は存在そのものが変化しているため、核が同質のモノになっていました」

つまり、施設にいる者でもこの卵が存在している可能性があるために早急な調査をしたいということ。
侵蝕は受けていないが、細胞が魂混成組と同質となってしまっている叢雲も、念の為確認は必要とされ、これで何かしらの反応を見つけた場合は、黒幕の領域が悪影響を及ぼすと考えられる。
「今回持ってきたのは、黒幕の泥と同質のモノが体内に存在するかを確認する装置です。今まで眼鏡というカタチで提供させてもらっているモノを改良したモノなんですが、これで近くから見なくては確認できないんです。なので、今すぐ全員見させてください」
「侵蝕を受けた子達は先に集めておいたわぁ」
「流石ですね。察しがいい」
「春雨ちゃんが指示してくれたからよぉ。すぐに確認してちょうだいねぇ」
すぐに調査に取り掛かる。まず、魂混成組から。都合よく決戦参加組に加え、潜水艦姉妹もここにいるため、全員しっかり確認。
「……なるほど、卵どころではないですね。細胞に混じり合ってるから、全身から反応が確認出来ました。これはある意味想定通りです」
明石だけでなく、山風や江風も同じように確認して、卵だけで終わっていないことを確認。
荒潮で確認した時は、身体の中心に小さな反応があるだけで終わったのに、白露を見ると全身の至る所から同じ反応が見える。単眼鏡越しだと、まるで全身が輝いてしまっているように見えた。その上で、中心により濃い場所があるという感じ。
「叢雲は卵が無いだけで白露達と同じ、全身から反応が見えます。これも想定通り」
「……腹立たしいわね。でもちゃんと対策考えてんでしょ？」
「勿論。いくつか案は検討しています。時間がどうしてもかかるので、状況だけとにかく知っておきたかったんです。全身から反応があるか無いかで、対処の仕方は変わるので」
必要最低限の対策で済むのか、より踏み込んだ対策が必要なのか。それで今後の研究開発が変わってくるため、急ぎで調査を進めたに過

ぎない。
　叢雲ならば、予想がついているならそれを込みにして開発しろと言い出しそうだったが、自分で対策が出来ないのだから、門外漢が文句だけを言うのはダサいと考えた。プライドが高いことが功を奏している。
「で、続いて施設組なんですが……まず、ジェーナス」
「うん、どうだったかしら」
「案の定、卵を発見しました。でもそれだけです。艦娘も深海棲艦もそこは変わらず、細胞が侵蝕されているとかそういうのはありませんね」
　安心していいのか悪いのか、卵以外の悪いところは何処にもなかった。しかし、その卵が致命傷ではあるのだが。何かの弾みで孵化してしまった場合、どういう影響が出るかなんて明石でも想像がつかない。
「同じように、薄雲、戦艦さんと空母さんにも同じ反応が見えました。空母さんは侵蝕ではなく器にされていたわけですが、それでも体内に残すみたいですね」
「よく、わからないが、厄介なことに、なっている、みたいだな」
「困ったものね。まだ終わっていないだなんて」
　漣達に残っているのだから、戦艦棲姫に残されているのはわかる。空母棲姫に残っているということは、龍驤本人に卵を残す性質が与えられていたということ。核自体が同質にされているくらいなので、龍驤は今は違えど本当に第二の黒幕にされていたようである。
「……おや？」
　そのまま調査を続けているが、ここで明石が今までと違う声を上げた。今前にいるのは瑞鳳。
「え、な、何かあった？　違う反応されるとちょっと怖いんだけど」
「い、いえ、瑞鳳も侵蝕を受けていたんですよね……？」
「それは、まぁ、ご覧の通りだよね。侵蝕どころか現在進行形で寄生されてるんだけど」
　存在を知らせるように、胸に寄生する忌雷が歯をカチカチ鳴らす。

侵蝕を受けているどころか、艦娘と深海棲艦の間に置かれていることを象徴するようなモノ。
この忌雷自体が泥から作られていてもおかしくないため、危惧していることが発生していても何も疑問では無い。
しかし、明石の表情は、それとは違うもの。
「瑞鳳、黒潮、ともに卵の存在が確認出来ません。どころか、黒幕と同質な細胞が1つもありませんね」
魂混成組よりも濃厚に反応がありそうな2人に何も無いと言われて、この場が妙な空気になる。
「それと……海風」
「は、はい！」
「海風からも反応が見えません。本当に侵蝕されていたのか疑うくらいに」
そして海風もである。厄介なことに巻き込まれていないために喜ばしいことなのだが、それ以上に、何故そうなっているかが気になる。
だが、それもすぐにピンと来る。戦場にいたもの、最も近くにいた者、海風本人がそれにすぐに気付いた。
「あ、私……泥を吐き出して治療されていません。春雨姉さんに、体内の泥を全て燃やし尽くされています」
「そういう意味だと、私と黒潮も春雨に治してもらってるね。泥は吐き出してるけど、ちょっと違うのかも」
「せやなぁ。ほら、この子が塗り潰された感じやったもんなぁ」
3人の共通点は、春雨のマグマによって自分を取り戻していること。つまり、それが卵ごと焼き尽くしているということになる。

これが、今の問題点の打開策に繋がる。

見据えるのはその先

黒幕の細胞が混じっている可能性を考慮して、緊急の調査のために施設にやってきた明石達調査隊。いわゆる被害者の面々を確認していくと、やはりその体内には卵が残されていた。

しかし、同じように侵蝕された経験がある海風や、現在進行形で忌雷に寄生されている瑞鳳と黒潮には、黒幕の細胞と同質の反応が確認されなかった。

その理由は、海風の発言ですぐに判明する。その侵蝕を治療された時、他の者達と違って、春雨から発生したマグマを使われたことが大きな違い。海風は直接触れて身を焼かれる思いをしながら体内の全てを焼却させられ、瑞鳳と黒潮は命の灯火が消える前に忌雷に直接叩き込まれていた。それがこの結果を生み出している。

「なるほど、それなら納得出来ます。春雨の、えーっと、『望み通りの答えに辿り着く力』、でしたっけ。それの原液みたいなものがダイレクトに注がれたんですもんね。治すという望みが浸透して、黒幕の細胞を一片残らず焼き尽くしたと」

「ですかね。海風の時は……正直なところ、頭が熱くなり過ぎていてコントロールもしていませんでしたが、瑞鳳さんと黒潮さんの時は生きてほしいという願いで注ぎました」

「それが春雨の願い、望む答えだったわけですね。そう望んだのなら、確実に焼き尽くすでしょう。流石は辿り着く者、黒幕の天敵なんでしょうね」

話しながらも確認は怠らず、今この場にいる侵蝕を受けていない者も確認していた。当然ながら、卵どころか何かしらの影響を受けたような部分もない。身体中に黒幕の細胞が混じっている潜水艦姉妹と一緒に眠っている飛行場姫や潮にも、その細胞から何かが起きている、なんてことは無かった。

意外でも何でもないかもしれないが、一度泥に包まれているが自身の能力で完全に無効化したミシェルにも反応は見られなかった。ミシェルのガワは繭がそのまま変化したものであるため、染み込むよう

なことは無かったようだ。そのミシェルはジェーナスのお腹に耳を当てたりして卵が本当にあるかを確かめようとしている。そんな姿にほっこりしていた。
やはり、黒幕の細胞は増殖して侵蝕を繰り返すような性質は無いようである。だが、卵が孵化した場合はどうなるかわからない。
「やはり春雨姉さんは救世主ですね」
明石の解釈を聞き、居ても立っても居られなくなったか、ずいと一歩踏み出した後、すぐさま春雨の手を握る。
「黒幕の天敵だなんて、最高の褒め言葉じゃないですか。偉大なる春雨姉さんがいなければ私達は未だ黒幕の束縛から解放されませんでしたからね。そんなことを聞いてしまったら、唯一絶対の存在たる春雨姉さんにのみ許された私達を導く力によって救われたことを、私は一生忘れることはないでしょう。そんなの、女神以外の何者でも無いですよ。これからもついていかせてもらいます。この海風、得体の知れない泥の卵が失われているのですから、いつも以上にサポートさせていただきますね。決戦でもお側に侍らせてください。必ずやお役に立ってみせましょう。一度ならず二度も救われたのですから、私が春雨姉さんに尽くさない理由など何処にもありません。豪華客船に乗ったつもりで頼ってください。私だけが一方的に幸せをいただいているのはあまりよろしくないと思います。春雨姉さんも癒され、喜び、幸せになってもらわなくてはいけないんですから」
そしていつものコレである。春雨が救世主、その言葉だけで、ここまで盛り上がっていた。
相変わらずの海風に春雨は苦笑。調査隊としてここに来た山風は少し複雑な表情を見せたが、これが今の海風であるとちゃんと理解はしているため、元気そうで何よりと納得はしていた。
「ひとまず、ここにいるヒト達の調査確認は終わりました。やはり、侵蝕被害者には例外なく卵が埋め込まれているという感じです。そして、それを治療出来るのは現状、春雨のみ……なんですが」
勿論、その治療というのは今すぐに出来るものではない。春雨のマグマは、望む答えに辿り着く力が発現している時限定、つまりは限界

以上に怒り狂っている時にしか分泌されない。それを誘発させようだなんて誰も思わない。
「幸いにも、こちらには春雨の細胞がいくつか存在しています。そこから何かしらの分析をしてみようと思います。ここで性質がわかっただけでも大きいですからね」
「なら、もう少し材料とか持っていきますか？　髪の毛とかくらいなら大丈夫ですよ」
「わ、それは助かる！」
　早速と言わんばかりに、春雨の髪の毛などを採取。すぐに渡せるものはそれくらいなのだが、明石にとっては貴重な研究材料。既に貰っている分も含めれば、大分大掛かりなことも出来るはず。
「出来ればみんなのもお願いしたいです。特に瑞鳳と黒潮の忌雷の体液があると、分析が捗ると思って」
「体液……この子の？」
「血を流せとは言っていないのでご安心を。それだけベロベロしているのなら、唾液が採取出来るんじゃないかなと」
　存在そのものを春雨のマグマによって書き換えられている忌雷の体液は、おそらくこの中では最もマグマに近いものになるだろう。これが分析出来れば、もしかしたら体内の卵を焼き消すことが出来るかもしれない。
　そうでなくても、全身に黒幕の細胞が蔓延っている魂混成組の身体を、黒幕の脅威から守る何かが作れる可能性もある。今までの端末と違って成分を増やすということは出来ないだろうが、そこは春雨や忌雷に協力してもらうとして。
「それくらいなら構わないよ。大丈夫だよね？」
　忌雷を撫でると、舌を出して早速協力しようと躍起になる。声もなければ表情もないのに、やたらと感情豊かに見えるのは、戦艦棲姫の生体艤装やまだイ級だった頃のミシェルに共通する部分。
「この子も、春雨のおかげでこんなにいい子になったんよ。明石はんに言われて、いくらでも協力すんでえってベロベロし始めとる」
　黒潮の忌雷は瑞鳳のそれ以上に積極的。こちらもどうかと言わん

ばかりに触手を伸ばすが、そこから何かが垂れるわけでもなく、粘液やら何やらがあるわけでもなし。勿論切断するわけにもいかないので、唾液だけで終わらせる。
「はい、ありがとうございます。これだけあれば何かしらの成果を出すことが出来るでしょう。もしこれで春雨のことについて調査出来れば、疑似的に辿り着く力が再現出来るかも」
黒幕の泥に対して否定の力を発揮させることが出来ればそれでいいため、そこさえ再現出来れば問題ない。故に疑似的。
最善の道に辿り着く力はまだしも、望む答えに辿り着く力は屈指のインチキな能力であり、言ってしまえば全てを自分の思い通りにする力だ。あまりにも強すぎる力であるため、明石であっても完全再現は出来ない。
本来の持ち主である春雨だからこそコントロール出来るのだが、怒り狂っているという条件下でしか使えず、その力の大部分は他者を否定するために使われるため、これでも十全に力が使えているとは思えないほどだ。
「目標は、黒幕からの干渉を完全に防ぐ装備の開発ですね。卵があるだけならまだしも、全身に蔓延っているのは消すわけにはいきません。身体がスポンジ状になって死ぬのが目に見えてますからね。なので、少し嫌かもしれませんが共存してもらう方向で考えています。命と天秤にかけたら、こうなってしまうのは仕方ないことでしょう」
身体がスポンジになると言われてゾクッとする混成組。共存しなければ死に至ると言われてしまうと、受け入れざるを得ない。
卵だけならば消す。そうでなければ悪いことにならないようにする。これが明石のやり方である。生きていくために仕方ないならば、本来悪い要素にしかならない部分も共に生きていけるようにしていく。
「身体中の黒幕の細胞を、春雨のモノに入れ替えれたらいいんだけどねぇ」
白露が呟くものの、それが不可能であることはわかっていた。２種の細胞を分離出来ないのに、片方を入れ替えるなんて以ての外。

「くっつけるならまだしも入れ替えるのは流石に……ん、ちょっと待って。そうか、それだ！」
　明石が目を見開いて叫んだ。その声に驚き、恐怖が溢れ出しそうになった潮には、すぐさま潜水艦姉妹がサポートする。
「それって？」
「くっつけちゃえばいいんですよ！　春雨の細胞を！」
　とんでもないことを言い出した明石。誰も意味がわからなくて、首を傾げるのみ。全員がミシェルになったように理解不能。
「本来の細胞に黒幕の細胞が混じり合っているから、敵の領海に足を踏み入れた時点で影響が与えられる可能性が高いわけです。だから引き剥がしたかったんですが、それは無理。死んでしまいますから。ならば、それをそのままに新たな要素を細胞に追加することで乗り切ってしまえばいいんです。その力が黒幕の力の否定をするんですよね。なら、それが体内で常駐していれば、常に相殺し続けてくれるでしょう。いわば、黒幕の力が細菌やウィルスで、春雨の力が白血球になるわけです。体内に侵入してきても、それを即座に食い殺してしまえば影響はありません。元々融合してしまっている細胞に関しては仕方ないにしろ、それ以降の外部からの干渉はそれで全て否定出来るようにしてしまいましょう」
　言っていることはわかっても、どうすればそれが出来るかは明石の頭の中にしか存在しない。
　少なくとも細胞に混ぜ合わせると言い出しているので、身体に直接何かするのは確定であるため、当然難色を示す者は現れる。
「じゃあ何、今度はアンタに身体を弄られるってわけ？」
　こういうことに敏感なのは叢雲だ。気に入らないことは気に入らないとはっきり口に出す。
「弄ると言ってしまえば否定は出来ません。身体そのものを変えなくては戦場に出ることすら出来ない可能性が高いですから。勿論、出来るのならスーツのようなものでどうにか出来るようにしたいと思っていますが、おそらくその程度なら突き抜けてきますよ。それに、私はもう１つ危惧していることがあるので、細胞そのものに作用する何

かを作る必要があると思います。貴方達を戦いの後も維持するために」
「……どういうことよ」
最後の言葉が聞き捨てならなかった。
「黒幕を斃すことが出来たとしましょう。というかします。そのために研究をしているわけですし、皆さんもそのために鍛えているんですから」
「当たり前じゃない」
「その時、黒幕に関するモノが同時に消えるとしたらどうなると思いますか」
決戦で黒幕を斃し、この世から消し去ったとする。今度の戦いはそれが目的であり、完全に消滅させることがこの戦いを終わらせる最終的な手段だ。
その時、この世界に散らばった泥が全て同時に消滅したらどうなるか。その泥で構成されてしまっているものが消えるため、今侵蝕されている者は正気を取り戻したりするだろう。それはいいことだ。
だが、そもそも黒幕の細胞で身体が構築されている者達は、黒幕の消滅と同時に死ぬことになるのではないか。明石が危惧しているのはそれだ。
「……私も例外ではないって言いたいわけ？」
「勿論、これは可能性論です。黒幕は嫌がらせに特化していますからね。万が一自分が死んだとしても、その細胞を持つ者に次の自分をやらせるように考えているかもしれない。むしろ、卵はそのために植え付けているのではとすら思います。予備をいくつも用意しているんですよ。その1つが龍驤だったと思えば、割と納得が行くのでは？」
叢雲も口を噤む。言われてみれば確かにと、誰も考えていなかったことが出てきた。
黒幕を斃した後にその要素を持つ者達にどんな影響があるかなんて、何も考えていなかった。共斃れさせられるか、卵が暴走して全員泥になるか。
「私は先を見据えます。ならば、貴女達が拒んでも、その命を救うため

ならば、少々身体を弄らせてもらいます。それによって意識が変わるようなことは無いでしょう。そのようにしたいですし」
真剣な明石の表情に気圧される。あくまでも、一番いい道を掴み取るために選択肢を出しているだけだ。春雨のように直感的に最善の道が手繰り寄せられるわけがないのだから、全ての検討案から最善を見つけ出すしか無い。
そのためには犠牲になるものもあるだろう。だが、その犠牲が最小限なのは、混成組と叢雲の身体を少々弄るというものなのは明らかだった。
「私としても、明石さんの案が一番問題が起きないと思う」
これだけ聞いて、春雨が口を開く。ここからは辿り着く者の直感も加わり、より信憑性が増す。
「どうなるかは私にもわからないけど……でも、せっかく斃せたのに、その後が無いかもしれないって言うなら、私はそれは嫌だ。そんな状況を作っている黒幕が一番気に入らないけど、なっちゃったものは打開しなくちゃいけないんだから」
服装は変わらずとも、怒りが溢れかけている春雨は、拳を強く握りしめて思いを語った。

今もそうだが、その後のことも出てきてしまった。

不安を振り払い

調査隊の活動はこれで終了。時間が時間であるため、長居はせずにすぐに帰投ということになった。今すぐに鎮守府に戻っても、時間的には夕暮れ時となってしまうだろう。

暗くなればなるほど、帰投が厳しくなるのは誰にだってわかっていること。ただでさえ、今は島の近海に黒幕の端末である泥が流れ着いてきてしまうのだ。暗くなったらそれを視認することも難しくなる。

泊まるという選択肢もあるのだが、明石の研究はやはり鎮守府でなければ上手くいかないことが多い。全てが揃っている施設でやらねば、最速の解決には至らないだろう。

「あ、そうだ。ついでで申し訳ないんですが、泥刈機の増産とスペックアップをしておきましたので、差し上げますよ」

「あらぁ、それはありがたいわねぇ。是非ともお願いするわぁ」

「了解です。宗谷さんのクルーザーに積み込んでおきましたから、サクッと渡しておきますね。前のモノもそのまま使ってください。邪魔でしたら持ち帰りますけど」

「念のため数を増やす方向でいくわぁ。何もかもが本当にありがとうねぇ」

今回は一から十まで明石のやりたいことをやっていたわけだが、誰も文句はない。調査隊として来た山風達は、交流の時間があまり無かったことを少しだけ残念がるものの、急な来島だったので仕方ない。愛する者の顔が直に見られただけでも良しとする。

それに、必要ならばまた明日来ればいいのだ。今は何事もなく鎮守府に戻ることが大事。

「それじゃあ……今日は早いけどこれで終わり……」

「はい、忙しそうだけれど、身体に気をつけてねぇ」

「……うん、あたし達も決戦に向けて、頑張ってるから」

ここにいる面々は、宗谷を除いて決戦参加候補。体調を崩さず、心身共に健康的な生活を送って、初めて決戦に向かうことが出来るはず。

「……海風姉、春雨姉、白露姉……また、来るから」
「うん、待ってる。次はまたそっちで顔を合わせることになるかもしれないけど」
「それならそれで……その時までに、強くなってるから」
小さく微笑む山風。その自信のある表情に、海風は安心することが出来た。

調査隊が帰投後、その前までやっていたトレーニングもそこで終了。疲れ果てていた古鷹も休息をしながらの調査だったため、自力で歩けないなんてことはなく、自分の足で施設へと戻っていけそうだった。
しかし、どうしても気が重くはなっている。明石は自信満々ではあるが、今身体の中には、黒幕の卵が植え付けられているというのだ。消せる見込みがあるとはいえ、気分の良いものではない。
それに、海風や忌雷を持つ瑞鳳と黒潮は例外だが、自分達が一度侵蝕され、この施設に対して叛旗を翻していた証拠が入っているのだと言われたようなもの。その時の記憶をどうしても呼び起こしてしまい、気が滅入ってしまっていた。
「ジェーナスちゃん、大丈夫ぴょん？　卵とかミシェルにはよくわかんないけど、痛くないならいいぴょん」
「大丈夫よＭｉｃｈｅｌｌｅ。痛いことなんてないし、そこにあるっていう感覚すらないから」
ミシェルを心配させまいと、気丈に振る舞うジェーナス。しかし、侵蝕されたあの時のことを思い出してしまったことで、少し不安定になりつつある。
それはジェーナスだけではない。侵蝕されていた時の感情を思い出してしまい、発作を起こしかけているのは薄雲も同じ。そちらには溜息を吐きながらも叢雲がついた。怒りが溢れながらも、そこには姉妹愛が存在している。
「明石さんなら、痛みも何もなく身体の中から卵を消してくれると思

う。泥刈機の波長みたいなのかもしれないし、投薬かもしれないけど、どうであれ辛い思いはすることはないよ」
春雨がそう伝えることで、多少は和らぐ。施設にいる者の中で明石のことを最も知る者である春雨がこれだけ言うのだから、今はそれを信用するしかない。むしろ、直感的に最善を取る春雨が言うのだから、それだけ信用度は高いと言える。
同じように元堀内鎮守府出身の海風と白露も明石だから大丈夫と太鼓判を押している。これまでの発明品で幾度となく施設が救われているのだから、次も大丈夫と信じることは出来る。
「あたしは卵だけじゃなくて全身に使われるわけだけどさ、あの明石さんなら絶対大丈夫だからさ。これまでもどうにかしてくれたわけだし」
「アンタは楽観的すぎるのよ」
ケラケラ笑いながら言う白露に対して、叢雲からの痛烈なツッコミ。
「春雨姉さんが信じると言うのですから、信用出来るに決まっていますね。むしろ不安になる要素が1つもありません」
「アンタの春雨信仰はよくわかってるから意見の内に入らないわ」
いつも通りの海風に対しても、叢雲は綺麗にツッコミを入れる。その様子を見ていた薄雲は、薄く微笑んで発作を乗り越えた。このやり取りに平和を見出だしたようである。
「とはいえ、本当に厄介なことをしてくれたわよね。黒幕を斃したら纏めて死ぬかもしれないとか、ふざけんなって感じよ」
「死ななくても、卵が孵化して黒幕の代わりになる可能性があるとも言ってるわけよね。そんなもの私の中にあると思うと気に入らないわよ」
飛行場姫と戦艦棲姫は、この現状に対して小さく怒りを露わにしていた。感情的にならないようにしているのは、ただでさえ発作を起こしかけている薄雲と潮に影響を与えないように。
戦艦棲姫は体内に卵が入っていることが確定しているので、現状崖っぷちと言える。明石が何とかする何かを完成させない限り、命が

黒幕に握られていると言っても過言ではないのだ。施設の防衛に徹するため、黒幕の領海に直接入ることは無いにしろ、そこで決着をつけた瞬間に施設内で何かが起きる可能性があるというのだから気が気でない。
「でも、あれだけ自信を持って啖呵を切ったんだから、あの子はすぐにでも私達を救ってくれる何かを作ってくれるんでしょう。春雨だって信用してるんだもの。なら、私も信用するわ」
「そうね、それがいいわね。変に気負うより、今は楽観的に考えておいた方が気持ち的に楽よ。だから、白露くらい軽い気持ちがいいわ」
だが、ここで精神的な疲労を感じ続けるのは建設的ではないと、今は明石の発明を期待して普段通りに生活する方向に持っていく。
誰も信用しておらず不安になっているのなら、その気持ちが伝播して施設内の空気が悪くなりそうだが、春雨を筆頭にまるで不安視していない者がいるお陰で、その空気は払拭されていた。ならばそれに乗るのが、施設を運営する立場にある者。
「今は何を考えても何も変わらないんだから、気長……はダメだけど、まずは待ちましょうねぇ。気分が良くない時は美味しいものを食べて気持ちよく眠れば多少は変わるわぁ」
最後は中間棲姫が締める。今深く考えても、自分達で出来ることなんて何もない。強いて言えば春雨次第なのだが、そこに頼るのは確実に良くないこと。救われるために春雨が救われない思いをするのはよろしくないし、そもそもトリガーが誰かの被害であるため、それを引かせるわけにはいかなかった。
なので、今は気晴らしではないが普段の平和を満喫することで気持ちを落ち着かせる方針とした。きっとではなく、絶対大丈夫だと言い聞かせるように。

一方、調査隊。帰路に僅かながら泥を発見するという事態が発生したものの、当然ながら即座に対処。明石がそこにいたものの、端末である泥には既に興味を失っていたため、採取などは考えるまでもなく

消し飛ばした。
　実際、明石は宗谷のクルーザーの中で出来ることを既にやり始めていた。瑞鳳と黒潮の忌雷から手に入れた体液の調査解析である。宗谷の操縦が上手いお陰で揺れも少なく、それに没頭出来ているようだ。
「真っ直ぐ向かって真っ直ぐ帰ってるはずなのに、行きに無かった泥が見えたってことは、今もまさに施設に向かっているということですか」
　泥刈機を使った比叡が少し不安そうに呟く。
「Ｙｅｓ．　私達の鎮守府は明石が作ったＢａｒｒｉｅｒに守られてるケド、施設は無防備だからネ。今施設に運べるようにＢａｒｒｉｅｒをＭｉｎｉａｔｕｒｉｚａｔｉｏｎしてるみたいダヨ」
「それも必須ですよねぇ。なんだかやることが多すぎるくらいです」
「それくらい、黒幕はやりたい放題してるってことネ。全部どうにかしないと、私達に勝ち目はありまセーン」
　少しでも妥協をした場合、そこを付け込まれて瓦解し、そのまま全滅まで持っていかれてしまう可能性が高いのだから困ったものである。
「最初は慢心が多いと思っていたんだけどネ……。これまでの戦いで、しっかりＬｅａｒｎｉｎｇしているんだネ」
「負けたことで復讐心が溢れたって話でしたよね。そのせいで負ければ負けるほど強くなるってことです？」
「かもしれないネ。しかも、最悪無意識に強くなるＰａｔｔｅｒｎダヨ。艦娘へのＨａｒａｓｓｍｅｎｔに特化しているからネ」
　分析をしているというわけでは無いが、今までの傾向からして金剛が考えたのがそれ。負けることでそれより上回る力を手に入れる能力。自分が直接敗北するだけではなく、自分がやろうとしたことを失敗させられてもそれに該当し、上回る成長を見せる。
　ただこれに関しては、成否はどちらでもいい。結局のところ、斃すか、斃されるか。
「だいじょーぶだよ。私達は絶対に負けない」

そのスピードで周辺を確認してきた島風が部隊に戻ってくる。泥感知の眼鏡をクイッと上げて、ニッコリ笑顔を見せる。
「そのためにみんなで鍛えてきたんだもん。そんな簡単に上回られたら困っちゃう。それに、向こうが上回ってくるなら、私達はそれをまた上回ればいいよ」
笑顔が深くなり、そしてそれはより好戦的なモノになった。この表情は、武蔵のそれと殆ど同じ。
「それに、上回る余裕なんてもう与えない。次で終わり。もう、はじめましてからのさようならでいいよ。ここまで好き放題やったんだもん。そういう独りよがりな戦い方をしてるヤツは、足を掬われればいいよ」
少しだけ自分に重ねるような言い方。島風は過去に近しいことをしているからこそ、その痛みを知っている。そのため、正しく更生し、この仲間思いの島風が生まれたのだ。
黒幕も力を持ったが故にやりたい放題している。ならば、自分と同じようにそれを後悔してもらう。悔やんだ時にはもう遅い。死を以て理解してもらう。学習なんてもうさせない。
「でも、学習するっていうなら、こうやって弾き続けてるとバリアも効かなくなるなんてことがあるかも？」
「あり得るから困るネ……」
端末が強化されるという可能性を考えると、今は大丈夫でも最終的には突破されかねない。泥刈機も通用しなくなり、対処不能となった侵蝕性の泥に施設も鎮守府も覆われて……なんてことを考えたら、嫌な寒気を感じてしまう。
そうなる前に決着をつけなくてはという焦りも見えてきそうだが、それは振り払うことが出来た。何故なら、
「っしゃああっ！　やっぱり見つけたぁ！」
クルーザーの中から明石の咆哮が聞こえたからだ。

液化した望み

それから少しして、外は薄暗くなりつつある時間帯の鎮守府。施設から戻ってきた調査隊が、工廠に到着した。全員が少々疲れた顔をしており、特に疲労が見えるのは、クルーザーを工廠まで乗り付けた宗谷だったりする。

戦闘に参加しないタイプの珍しい艦娘であるのに、ここまで疲れているのは気になるところではあるが、まずはいつも通り出迎える堀内提督と秘書艦五月雨。

「お疲れ様。さっき連絡を貰っているが、泥があったと言っていたね」

「……うん、ほんの一滴だけど……ちゃんと眼鏡にも反応した」

この件に関しては、施設側から聞いていないことである。バリアを使っている鎮守府側には近付こうとせず、直接施設を狙って蠢いている泥となると、ついに黒幕が施設の場所を割り出してしまったということにほかならない。

中間棲姫としては、鎮守府側の手を煩わせず、施設のことは施設でやるという意志の下、何も言わずに処理をしていた。

そんな姉姫の方針に少し困りつつも、仕方ないかと納得する。あちらの意思も理解しているつもりである。

「姉姫のことだから、自分の施設は自分達で守ると考えていたのだろうが……いや、これはあまり深く追求しないでおこう。あちらはあちらの考え方があるし、あまり首を突っ込みすぎるのもいいことじゃない」

「一番いい泥刈機は預けてきたから……」

「ああ、それで問題ない。自己防衛をするとあちらが決めているのなら、そのサポートに徹することにしよう。だが、決戦の時にはあちらも人数が減る。やはり一部の者は施設に派遣するべきだね」

元々、施設防衛のために人員を割く予定であったが、今回のこの泥の件でその意思はより強くなった。ヒトが減っているタイミングを見計らって、さらに泥が増えてこられたら施設も困るだろう。

一応、鎮守府で使っている泥のバリアを小型化して提供する計画も

進めているが、それでもそれをすり抜けてくるようなインチキがあり得る。ならば、やはり人員を割いておくべきだろう。バリアを抜けてくる敵なんてモノも視野に入れておかなくてはならない。
「次に通信した時にそれとなく聞いておこう。あちらは拒みそうではあるが、こちらとしては気が気でない」
「……うん……そうして。こちらでも多少気にかけておく……」
「頼んだよ。調査隊にやってもらう仕事では無い気がしないでもないが、施設に向かうときには気をつけてくれ」
少なくとも、泥に対して強い衝撃を与えれば霧散することはわかっている。万が一泥刈機が効かないなんて状況に陥ってしまったとしても、対処が出来ないわけではない。それすらも回避するようになったらもうどうしようもないかもしれないが。
「で、だ。ずっと気になっていたんだが……」
「……アレのせいで、みんなちょっと疲れ気味……宗谷さんが一番疲れてると思う……」
堀内提督が気になっているというアレ。それは、宗谷のクルーザーの中から、今か今かと説明のタイミングを見計らっている明石。
むしろ、ここまで来る際にも何を見つけたかをずっと説明してきたのだ。それだけ画期的な発見をしたようで、上がりきったテンションを抑えきれず、それはもう饒舌に早口で捲し立てていたようである。最初の叫び声といい、その後のマシンガントークといい、明石は何処かネジが外れている。
そして、それをモロに全て聞くことになったのが、クルーザーを操縦している宗谷。離れることも出来ず、明石を止める者もいない。そして、話されても理解が出来ないとまで来ているため、精神的な疲労がどっと出てしまっていた。
今の宗谷は島風に付き添われて休息中。本来ならば運が良すぎるくらいなのに、今回は最も運が悪かったとも言える。
「いいですか？　もういいですか？　提督に聞いてもらいたいことがあるんですけど！」
「奥の研究室で大淀と龍驤が待っている。そちらで腰を据えて聞いて

あげるから、もう少し我慢しなさい」
「了解です！　あの２人にも伝えたいですもん！　これは世界変わる！」
満面の笑みでクルーザーから飛び降り、施設で採取してきた研究材料とその装置の一部を持って、大急ぎで工廠の奥まで走り去っていった。
同時に、調査隊のほぼ全員が安堵したかのような大きな溜息を吐いた。あのテンションに気圧され、宗谷程ではないにしろ精神的な疲労は蓄積していた様子。
「あー……みんな、お疲れ様。時間も時間だから、すぐに休んでくれ。後のことは僕が引き受けよう」
「……よろしく……」
山風は勿論のこと、いつもは騒がしい江風と涼風ですら静かであり、荒潮も困ったような笑みを浮かべているのみ。
明石の一件でもピンピンしていたのはサラトガくらい。好戦的な理由で暴走しかけた武蔵を止めることが出来る者は、一味も二味も違った。

全員が休息に入ったところを見計らって、提督と五月雨は工廠の奥へ。そこでは全く手を止めずに施設の設備で調査をしている明石の姿があった。大淀と龍驤も明石に説明を受けており、驚きの表情を見せていた。
「明石、話を聞こうか」
「はーい！　すぐにでも！」
今か今かと待っていたようで、提督と五月雨に椅子を用意し、しっかりと聞いてもらうための場を作り上げる。
「ではですね、ここに帰ってくるまでに調べたこと、あとここでその確証を持って再調査をして確信した情報を展開しますね。まずは、これ。今日施設に行ったことで手に入れた、瑞鳳と黒潮に寄生している忌雷の体液です」

試験管の中に入った液体を机に置く。おそらく唾液であることはわかり、見た目はほんの少しだけ濁っている粘液。
「龍驤はあの忌雷のことは知ってますね」
「ああ、ウチが用意したヤツやからな。アレは泥製やった。過剰な泥を外部から摂取することで暴走して、既に泥の反応があるヤツに寄生する仕組みや。寄生されたヤツにガンガン泥を送り込んで、過剰にブーストさせる。命を燃やして限界をアホみたいに超えた力を発揮するわけやな。命を燃やして、や」
それを誘発させるために泥の雨を降らし、あわよくば誰かを侵蝕しようと考えていたらしい。
結果的に、明石の開発したバリアによって全員が弾かれていたために侵蝕はされず、忌雷の暴走のみを引き起こしたのみで終わっている。
自分で仕掛けたことなので詳細を話せるが、過去の過ちの告白であるために龍驤も少し辛そうに話す。それでも、再洗脳により艦娘の心を取り戻しているため、これからのことに活かそうと包み隠さない。
これも自分の犯した罪を償うためには必要なのだと、拒むこともしなかった。聞かれたことは全て曝け出すのが、今の龍驤である。
「ならば、その忌雷から手に入る成分は全て泥の要素、端末と同じ構成をしていないとおかしいはずなんですが、この体液に関しては全く違う成分でした」
侵蝕性は無し。他者を陥れようとする意図は何も見えない成分。少なくとも敵対の意思が感じられないそれは、今までに無い構成要素である。
「この成分、端末を消滅させ置き換える性質を持っています」
聞いてしまうとあまりにもとんでもない性質。しかし、それが春雨由来の成分であると理解すれば、そうなるのも当然なのではと察することが出来る。
瑞鳳と黒潮が救われた時、春雨は自らのマグマを忌雷に流し込み、その存在を反転させる望みを込めて侵蝕した。その結果が、泥で構成された忌雷の性質の完全な書き換え。泥の存在を否定し、侵蝕を殲滅

するシステムへと生まれ変わった。殲滅と同時に、自身と同様の性質に変化させることで、この体液を取り込んだ者は二度と侵蝕されない性質まで手に入れている。
　それと同時に、忌雷の性格も軟化し、寄生している主に対して友好的な存在となっている。共存するにあたって、一切問題無いくらいの相棒へと変貌した。
「意図的では無いとは思いますが、瑞鳳と黒潮はこの変化した忌雷の体液によって、端末に対して完全な耐性を手に入れています。本人達は気付いていないでしょうが、実際帰投している最中に確認したのは、これです」
　採取した体液を、増産した端末に一滴垂らした瞬間、その端末を取り込み、無害な液体へと変化させていく。そのスピードはそこまで速くはないのだが、それでも確実に侵蝕性の泥を無害化し、自身を増やすという性質を見せつけてきた。
　この書き換えられた忌雷の体液は、端末に対して絶対的な有利を提供する最高の素材となることが確定した。その量は今は少なくとも、端末を体温によって増やし、それをさらに変化させることで増産も可能である。
「おそらくこれが、春雨の持つ泥……マグマですね。わかりますか、これ。無色なように見えて、うっすら赤みがかってるんですよ。春雨の望みが液化しているんでしょうね。春雨自身は黒幕と同じような力であることに苛立ってそうですけど」
　この成分、一部は春雨から以前に貰った細胞と一致する部分もあるらしい。これも帰投中のクルーザーの中で解析済み。
　既に解析が済んだ成分のデータは、常に確認比較出来るように持ち歩いており、あの場ですぐに確認しているのだが、これらを知った途端に叫んだということになる。
「あとはこれを黒幕の細胞に対してどういう反応を示すか確認します。今の案では、この性質を持つ春雨の細胞と結合させることで、万が一のための対策に使おうと考えています」
「結合……かい？」

流石に細胞の結合と言われても堀内提督にはパッと想像がつかない。その表情を見た瞬間、明石は捲し立てるように自分の案を話し始める。

「はい。提督には話しましたが、今の状態では体内の卵のせいで黒幕の領海に入ることもままならず、卵が処理出来たとしても全身に細胞がある白露達には処置が出来ません。そして、もし何かしらの手段で外部からの干渉を取り除けて、黒幕を斃すことが出来たとしても、それがトリガーとなって白露達の身体に何かしらの影響が出る可能性があります。黒幕と一緒に細胞が消滅して死ぬか、細胞が暴走して第二第三の黒幕と化すか、その時に何も起きなくとも、後からその影響が出る可能性があります。それを抑えるために、黒幕の細胞に対して絶対的な有利を取りに行く春雨の細胞を結合させ、その効果を書き換える、もしくは否定し続けて影響を失わせるという手段に持っていきます。そうすることにより、まずは端末への完全耐性を獲得し、体内の黒幕の細胞に牽制を仕掛け、じっとしているように抑え付ける役目を担ってもらうんです。外部からの干渉は全てシャットアウトです。その全てを否定するので。あわよくば、春雨の細胞と少しずつ置き換わってもらい、全員が瑞鳳や黒潮のようになってもらいたいとは思っているんですけどね。そうすれば、黒幕を撃破した際に細胞全てが消滅となっても問題が無くなるので。しかし、この体液だけではそれが全て上手く行くかはわからない。そこで春雨の細胞です。体液と細胞を掛け合わせることで反応を確認します。そうすれば、より強く黒幕を否定する成分が作れるのではないかと私は睨んでるんですよ。なので、まずはそこからですね。今ある成分を使って、対策になり得るモノが作れないかを確認し、それを黒幕の細胞に掛け合わせてどうなるか、上手くいけば拒絶反応などの有無を調べる必要もあります」

イキイキと話す明石に圧倒されつつも、やりたいことは理解出来た。今手に入れた春雨の細胞、それと忌雷の体液により、黒幕の細胞の影響を内外併せて否定するという手段である。

「ひとまず研究は続行します。この忌雷の体液があれば、全てが変わりますよ。波長との併用も出来ますしね。さぁ忙しくなってきた

ぞー！」
「元より忙しいっちゅーねん。でも、道が拓けたのは確かやわ。まずは黒幕の細胞の追加の抽出やな。まだ実験に使う分には心許ないわ」
「だね。龍驤はそこお願い。大淀は」
「解析された成分表を打ち出しておくから、明石は調査に専念して」
「Ｆｏｏｏ!!!　流石に大淀、阿吽の呼吸ってやつだね。じゃあお願い！」
ここからまた研究開発班の作業が始まる。新たな素材を手に入れたことで、さらなる発展が見込めるようになり、明石のテンションはより一層高くなる。

提督も五月雨も、話を聞いている分では上手く行くのではと期待出来た。明石がこれくらい絶好調な時、失敗したことは今のところ無い。

水と油を乗り越え

そこから一晩。テンションが上がりきった明石は、一睡もすることなく作業を続けた。

黒幕のこと――その成長性と厄介さを考えたら、早急に決戦に向けての準備は終わらせておきたい。しかし、そういう気持ちが先立ったのかと言われたら、明石はおそらくＮＯと答える。何故なら、手に入れた素材を弄くり回すのがあまりにも楽しかったから。

初めて見る素材、泥を手に入れた時もかなりテンションが上がっていたが、今回はそれを超える興奮だった。敵の力を知るための研究ではなく、それを打破するための研究。同じ勝利に向かう研究でも、確実に勝つための研究というのは楽しい。明石はそういう性格をしていた。

「……っし、まず出来たかな」

深く息を吐きながら大きく伸びをする明石。流石に徹夜明けということで、若干落ち着いているところはあったが、未だに目をキラキラさせていた。

むしろ何度か叫びかけたが、深夜に騒ぐなと大淀の注意――時には実力行使――により、ある程度静かに作業するようになっている。

「試作品１２号ね。ただ細胞と体液を混ぜ合わせるだけじゃ無理だとは思っていたけど、配分とかは重要だったわね。春雨６．４の忌雷３．６くらい……かしらね」

「だねー。そりゃそうかって感じ。春雨が親で忌雷が子みたいなものだから、親が多くないとそうはならないってことでしょ」

眼鏡を外して目元を揉む大淀。明石の研究に一晩付き合い、その結果を全て書類に纏め上げ、成分表も事細かく記載。今後があるかはわからずとも、今後に繋がるようにそれを残す。

「結局貰ってきた白露達の細胞は８割方使ってしもうたな。春雨の細胞もほとんど全部使ってもうた。でも、そのおかげでここまでは漕ぎ着けたわけや。いくら妖精さんの身体やからて、疲れるもんは疲れるんやぞ」

「でも、龍驤のおかげで作業が捗ったよ。こんなに早く事が済んだのは、龍驤のおかげでもあるからね」
ぐったりとしながら金平糖に齧り付く龍驤。妖精さんの身体は艦娘よりも頑丈であり、謎が非常に多い存在ではあるのだが、それでも今回の作業は今までで一二を争うくらいの疲労度のようである。作業しながら甘味を摂るなんて今までしたことがなかった。
それもこれも、明石が全く止まろうとしなかったからである。今までの明石を知っている大淀ですら、今回は今までで一番だと言うほどの過労。
それだけ捗ったのは間違いない。明石の気質に引っ張られたわけではないが、大淀も龍驤も、この研究が決戦のキーになることは進めていくにつれ確信になっていった感覚がある。
明石は研究欲のみでここまで来たが、他の２人は決戦準備という気持ちがちゃんとあった。
「春雨の細胞と忌雷の体液の混合薬……端末を書き換えることは確定だよね」
龍驤に用意してもらっていた端末の泥に１滴垂らした瞬間、試験管の中の泥が一気に侵蝕され、瞬く間に無害な存在へと書き換わった。
これにより、混ぜ合わせても忌雷の体液の性能は変わらず、むしろさらに効果が強化されていることが理解出来た。明石が親子の関係と言っただけあり、混合の相性は抜群。
「問題はこっちや。黒幕の細胞……今までは垂らしても何も起きへんかったよね」
「ですね。纏めた資料を確認しましたが、何の結果も得られていませんでした。忌雷の体液で書き換えることも出来ず、春雨の細胞も水と油のような反発をしています。結合率を上げていく中でも、春雨６の忌雷４の時が一番いい反応をしました」
大淀が自分で纏めた資料をパラパラとめくりながら話す。今回の試作品が１２号……つまり、これよりも前に１１回の失敗作がある。
忌雷の体液は端末を書き換えることで大量に手に入るが、春雨の細胞には限りがあるため、まずは体液多めで実験スタート。そこから少

しずつ春雨の細胞の比率を上げていくという方針で進めた結果、その反応の仕方から微調整して今に至る。
　春雨６の忌雷４の際に、黒幕の細胞に対してほんの少しだけ違う反応が見えたため、ここで刻み始めた。そして見出されたのが、６．４：３．６という絶妙な比率である。もしかしたらさらにここから加工が必要かもしれないが、まずはこれで実験。
「これでダメだったら一度寝よう」
「あら、明石が自分から言い出すなんて珍しい。でもいいことです。一度頭をスッキリさせた方がいいですからね。成功でも一度寝なさい」
「ウス」
　話しながらも実験の準備が完了。黒幕の細胞が入る試験管の中に、混合液を投入する。すると、
「お、これは……来たんちゃうか!?」
　妖精さんの身体であるが故に、最も近くで見ることが出来る龍驤が目を見開く。今までは水と油のように反発しあっていた両者が、徐々に染み込み始めたのだ。
　明石が考えていた成功例は、黒幕の細胞との完全な同化。そして、そのまま性質を完全に書き換えること。春雨の細胞や忌雷の体液と同じ効果を持つ必要などなく、黒幕の細胞の性質を完全に消してしまえればそれでよかった。そうすれば、外部からも内部からも黒幕の影響を受けずに済む。
　今のこの反応は、それに近かった。黒幕の細胞を否定するため、混合液は内部に混ざり込もうとしている。自らのカタチも変えて、何もかもを別の答えに切り替えるために。混ざり合い、最善の道を作り出すために。望み通りの答えに辿り着くために。
「来てる。来てる！　黒幕のモノでも春雨のモノでもない、別の細胞に向かってる！」
　ほんの少しだけ赤みがかった液体と混沌を表す黒の液体が混ざり合い、お互いを喰らいあい、細胞そのものが別モノへと改造されていく。そして最後は、見たこともない白い液体へと姿を変えた。新たな

細胞として。
「成分解析するよ！　これが身体にあっても問題ないなら成功！」
　ここからはこの細胞が体内にあっていいモノかどうかの確認。全細胞がこれに置き換わるのだから、生命維持が出来るかなどは絶対的に必要な調査点。
　それに、ある程度の時間を置いても何事もないことを確認しなくてはならない。これで1日経ったら滅ぶとかだと、投与した時点での死が確定してしまう。それは絶対によろしくないことだ。死が救済だなんて言っていられない。
「過去の成分解析表、纏めておいてよかったですね。こういう時に絶対に必要になるんですから」
「ホンマやわ。ヨドおらんかったらそこもなぁなぁになってたんちゃうか」
「ならなかったかもしれませんけど、明石のことだから時間をかけていたでしょうね。次から次へと別の方向に思考が飛ぶので」
「うん、それはここでよう見させてもろうたわ。ヨドも大変やなぁ」
　今までの纏め資料と照らし合わせながら、新たに作り上げられた細胞を調査していく。完璧だと思っていても、それが体内に入った時点で突然毒になるかもしれないのだから、調査は念入りに。命に繋がる実験は、失敗が許されない。
「見てる感じ、深海の細胞に近いんちゃうか？　余計なモン入っとらん、純粋な同胞（はらから）っちゅーか」
「姉姫の細胞に近い……かな？　でも、ほんの少しだけ艦娘の細胞っぽさもある。生きていくための成分も、ちゃんと残ってる」
　値だけで見れば、これは今深海棲艦の細胞である。黒幕の侵蝕性も無ければ、春雨の否定する力も無い。全ての要素を取り除かれた、純粋な深海棲艦。元が艦娘であるため、ほんの少しの艦娘要素が混ざり込んでいるが、だからといって拒絶反応を示すわけでもなく、しっかりと共存している。
　そもそも、艦娘が溢れて深海棲艦と化すという現象があるのだから、艦娘の要素が混じっている深海棲艦の細胞があってもおかしくは

無い。全身を繭に書き換えられたとしても、僅かには残るモノ。
「あとは時間経過です。今のところ崩壊の兆しは見えませんが、ある程度の時間の後に突然綻びが見え始めるということもあり得るでしょう」
「だね。まずはこのまま半日くらい置いておこう。それでも何も起きなかったら、この方針で混合液を量産だね。……春雨達にまた協力してもらわなくちゃだけど」
「あー、殆ど使ってもうたもんなぁ。全員分賄うのは流石に無理やし。春雨の細胞がこっちで増産出来りゃええんやけど」
当然ながら、春雨の細胞は侵蝕性の泥と違って増えることはない。マグマを常に垂らす事が出来るというのなら話は別なのだが、そうで無いのだから、提供してもらえる分をどうにか拡張するしか無いのである。
明石の計算上では、1人分、例えば白露1人の全身の細胞を正常に書き換えるために必要な春雨の細胞は、それほど多くは無い。春雨の長い髪を数本貰うことで賄えるはず。しかし、緊急事態が起きたらと考えると、それなりに多めに貰っておく必要はあるだろう。
「本当なら、春雨にショートカットになってもらって髪の毛全部使いたいレベルだけど」
「お前、そんなこと言うたら海風に殺されるぞ。麗しい姉さんの髪を奪うだなんて～みたいなこと言われるんちゃうか」
「簡単に想像出来るから怖い。多分一番濃度として濃いところは血液だから、少し献血してもらえれば大丈夫だね。また来てもらおうかなぁここに」
それも調査結果として残されている。今回有用な春雨の細胞を手に入れるために必要な部位。髪の毛よりも体液の方が純度は高く、汗などよりは血液の方が濃い。春雨の身体は、血液と一緒にマグマが全身に流れているため、敵の攻撃を望み通りに通用しなくなっていると言える。
それを一部抽出させてもらうとなると、春雨に鎮守府に来てもらって献血をしてもらうのがベスト。ただし、今ここで作られた細胞の可

否によるというところはあるが。
「うん、まずは提督に報告して寝よう。それがいい。どうしてもこれは放置しないといけない試験だし」
「ですね。あ、このまま放置？」
「ううん、空気中に晒す。試験管じゃなくてシャーレに移して。空気に触れることで突然変異する可能性もあるから、それは見なくちゃね」
　密閉空間だから安定しているとかもあり得る。そのため、出来る試験は全て行なう。それこそ寝ている間に変異しているなんてこともあり得るのだから。
　当然だが、この処置が施される者は、この細胞を身体にして一生を過ごしてもらうことになるのだ。僅かな不手際も許されず、考えられる全ての状況を割り出さなくてはならない。それこそ、海水に浸けてみるだとか、艤装の金属に置いて見るだとか、やらねばならないことは沢山だ。
「これの試験をしながら、次は分析済みの黒幕の細胞にぶつける反対側の位相を作って、卵だけを消し飛ばす装置を作るよ。そっちなら簡単でしょ」
「簡単……なんかなぁ。まぁ今までのノウハウあるんやし、そこの対象成分を切り替えるだけでどうにかなるんか」
「そうなるね。あとは、眼鏡の私に教えてもらった簡略化と小型化も仕込んで単一の装置にしてもいいかなって思ってる。そうしたら、大塚鎮守府の明石にも作り方が伝えやすくなるしね」
　卵の被害は大塚鎮守府にも及んでいるため、この装置はあちらにも必要。わざわざ作ったものを送り届けるよりは、向こうで作ってもらった方が早い。
　そこで山寺鎮守府の明石からの技術提供が役に立つ。小型化、簡略化によって、何処でも作れる仕組みに改良してしまえばいい。
「よしよしよし、それじゃあ一旦寝てからガンガン進めていこう！」
　ここまで来ることが出来れば、否応なしに士気は上がるもの。大淀も龍驤も、徹夜のハイテンションで明石に賛同した。

出来上がりつつある黒幕対策。これが完成すれば、決戦へと向かえるようになるだろう。

持ちつ持たれつ

一方、施設。深夜の哨戒に出たリシュリュー、コマンダン・テスト、伊４７の３人が、姉妹姫にその時の報告をしていた。
「なるほどねぇ。昨日の夜は２回見かけたのねぇ」
「ええ。すぐに泥刈機で消したけれど、違った時間に２回ね」
深夜の哨戒中に泥を見かけることは昨晩でもあったが、２回確認したと言うリシュリュー。発見した瞬間に対処しているとはいえ、見る回数が増えるというのはそれだけでも気分の良いものではない。
一応今回の哨戒メンバーには、泥による侵蝕を受けた者はいない。だが、話を聞いているだけでも嫌悪感を持ってしまう内容であり、見つけた瞬間に容赦なく最大出力で泥刈機を使ったほど。
「空母、空の哨戒はどうだった」
「見る限り、何も、無かった。流れ着くだけ、だと思う」
飛行場姫の言葉に簡単に返す空母棲姫。深夜の哨戒機担当として、飛行場姫と同じように島の周囲を散歩しながら哨戒機をありったけ飛ばしていたようだが、高高度を確認していても空には何も無かったとのこと。
施設の場所がバレていても、艦載機がここまで飛んでくるということは今のところない。やらないのか、やれないのかは不明。
「１回は海の中だったんだヨナ」
「ええ、１回は海上を漂っていたけど、１回はヨナが海の中で発見したわ。それもすぐに消し飛ばしたけど」
海上のみならず、海中からも流れ着いてくるので侮れない。今回は潜水艦である伊４７が海中からも確認しているため、深夜の海中でも早期に発見出来ているが、ヒトによっては確認出来ずにスルーしてしまい、島への侵入を許してしまう可能性すらある。
「動きはそこまで速くないわね。ただ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達が近付くと素早くなるわね。▪ｒｏｓｉｏｎ（侵蝕）しようとするＩｎｔｅｎｔｉｏｎ（意思）があるんでしょう」
「幸いなことに、海の中にも泥刈機の

Ｌｏｎｇｕｅｕｒ（波）ｄ’ｏｎｄｅ（長）が届くようなので、何とかなりました。アカシさんのおかげ、ですね」
今はこれで何とかなっているものの、夜も安心出来ない状況であることは確定した。昨晩が２回見ることになったならば、今晩には３回見ることになるかもしれないのだから。
回数が増えれば増えるほど、対処は厳しくなるだろう。しかも、泥がずっと泥刈機でどうにか出来るかどうかもわからない。ただでさえ、時間経過と共に復讐心を増して成長している黒幕だ。端末の泥の性質すら変化させる可能性すらある。
対策が効かないとなったら、その時点でアウトだ。強い衝撃によって霧散させる以外の対処法が無くなり、それすらも効かないならばこの施設を放棄するしか無くなってしまうのだから。
「ひとまずはご苦労様ぁ。もう少し平和な夜を過ごしたいのだけれどねぇ」
「Ｏｕｉ．　Ｐｅｔｉｔ（朝）—ｄ・ｊｅｕｎｅｒ（食）は貴女達に任せるわ」
「ええ、任せなさい。アンタ達は徹夜してるんだもの、それでやれなんて言わないわよ」
小さく欠伸をする伊４７と、それに釣られて欠伸を噛み殺す空母棲姫。今までならば夜にこんなことをする必要も無かったのに、今は必須となってしまった現状を、中間棲姫は憂いていた。
「……こんなこと、早く終わりにしたいわねぇ」
中間棲姫の呟きに、飛行場姫はほんの少しだけ苛立ちを覚えた。姉にこんな泣き言を呟かせる黒幕のやり方に対して、心の底から怒りまで感じる。
だが、それを表に出すことはない。姉を心配させることにもなるし、施設の者達の士気にも関わる。ならば、今は感情的になる理由はない。
「そうね。でも、あと数日の辛抱よ。鎮守府が決戦に向けて研究を続けてるんだもの。心配はいらないわ」
「そう、よねぇ。私達はこの施設を守ることだけに専念しなくちゃあねぇ。その分、あちらには迷惑をかけないようにしなくちゃ」

少しだけ見せた顔をすぐに振り払い、いつもの穏やかな笑顔に戻る中間棲姫。飛行場姫はそれを見て安心しつつ、姉を守らねばと内心で改めて誓った。

朝食後、深夜哨戒組はすぐに就寝へ。残った者も今日の仕事の準備を始める。

農作業組は昨日に作業をしているため今日は休み。そういう時は施設内の掃除をしたりと、施設の存続に繋がる仕事を探して実施する。

漁組は今日も食糧の確保。なるべく鎮守府から貰った食糧を長続きさせるためにも、施設でも増やせる食糧はなるべく手に入れておきたい。勿論、生態系を壊すような漁撈はするつもりはないが。

「それじゃあ、今日も1日……」

いつもの朝の挨拶をしようとしたところに、タブレットが鳴り響いた。こんな時間にかかってくることはちょくちょくあったため、あまり疑問を持つことなくすぐに受信。

「はぁい、今日はどうかしたのかしらぁ」

『早急に連絡をしておきたくてね。明石が、対策のための薬を作り上げた』

昨日の今日だというのにもう作ってしまったのかと、ダイニングは騒然。喜ぶべき報告なのだが、むしろ明石が有能すぎて素直に喜んでいいのかわからないような、そんな空気に。

元堀内鎮守府出身の春雨達も、この早さで対策を作り上げたことには驚きを隠せない。昔からすごいすごいと思っていたが、ここまでとは思っていなかった。

『だが、今は少し経過観察をしている。命に関わるモノだからね。細胞そのものを書き換えるようなものだ。今は良くても、時間が経って結局ダメだったとなったら、目も当てられない。こればっかりは慎重に事を進めさせてもらうよ』

春雨細胞と黒幕細胞を結合させることによって別の細胞へと変化

させ、黒幕の影響を受けなくするという都合上、その細胞が命に直結するということ。これに失敗していたら、投与して細胞を切り替えたことにより、肉体が崩壊するなんていうグロテスクな結末に辿り着いてしまう可能性だってある。

それだけは絶対に避けなければならないため、この対策だけはどうしても時間をかけなければならない。僅か半日だけでそれを良しとするのはよろしくないかもしれないが、まずはすぐに崩壊することがないことがわかれば多少は安心出来る。

そして、ここで辿り着く者の直感が光る。

「大丈夫だと思いますよ。ただの直感ですので、確証は持てませんけどね」

この春雨の言葉は、周囲に自信を持たせる。明石が聞いていたら、それはもう飛び上がるほど喜んでいただろう。本人は自信なさげに話していても、辿り着く者からのお墨付きが貰えたようなものなのだから。

そもそもその薬のことは春雨は知らないこと。そこに対する直感は、他のことよりも若干甘め。ただし、知っている白露達への影響に関わることであるため、その身体に悪影響が無さそうというところには繋がる。

手段は理解出来ないことであっても、結果が知る者に関わるのなら、春雨の直感は冴え渡る。仲間の危機に反応するのだから、危機がないことに対しても反応出来る。

『もし今の対策が有用ならば、それを増産させなければならない。体内の卵を除去するためには必要では無いようなのだが、全身の細胞を変質させるためにはそれなりの量が必要だ。そのためには』

「私の細胞が必要ということですね。あと瑞鳳さんと黒潮ちゃんの忌雷から体液を」

『ああ、そういうことになる。どれだけ必要かは明石が計算しているが、少なくとも今はこの実験で春雨から貰った細胞は使い切ってしまったらしい』

その明石は、徹夜の研究をしたために現在休息中。その辺りが決ま

るのは午後になるだろう。むしろ、夕方近くになると考えてもいい。
　必要ならば明日以降にまた取りに行くという話になった。決まらない限りは動けないし、そもそも経過観察の真っ最中であるため、それも時間がかかる要因となる。
『それまでは自衛を頼んだ。昨日、帰投中に漂う泥を確認している。既に君達の居場所は黒幕にバレている可能性は高いのだろう』
　施設の者達は『観測者』からその件を聞いているために知っているが、鎮守府には伝えていなかった。余計な心配をかけたくないという気持ちが強く、自衛でどうにか出来るのならば、鎮守府側の力を借りることなくどうにかする。そのための力――泥刈機や感知の眼鏡――を借り受けているのだから、施設の者達の力だけでも充分に守ることが出来る。
　堀内提督もそこを理解して、自衛を促した。本当は鎮守府側からも増援を送りたいとは思っているが、施設側の思いも汲み取りたい。
「ありがとう、提督くん。こちらはこちらでちゃんと身を守るわぁ」
『ああ、一応だが、鎮守府で使っている泥を撥ね除けるバリアを小型化してそちらにも配備してもらう方針で考えている。せめて泥を島に上陸させないように出来れば、君達も安心出来ると思うのだがどうだろうか』
「そこまでしてもらってもいいのかしらぁ……」
『当然だろう。我々は仲間だ。それに、そちらからは細胞などを提供してもらっているのだから、その分の謝礼は必要だろう。持ちつ持たれつさ』
　それならと中間棲姫も提督の申し出を快く受けた。泥の進化のことを考えなければ、その装置さえあれば昼夜問わず泥の侵蝕を恐ることは無くなるだろう。それでも哨戒自体は続けるとは思うが、安全度は跳ね上がる。
『それでは、取り急ぎ報告させてもらった。結果はまた順次伝えていくよ』
「ええ、ありがとう。よろしくお願いねぇ」
『可能であれば、また鎮守府に来てもらうことになるかもしれない。

そのように考えておいてもらえると助かる』
「わかったわぁ。みんなもそれで良いかしらぁ」
決戦に向かうためには必要なことであると理解しているので、誰もが納得し、首を縦に振る。時間的なところは妥協せざるを得ないということで、叢雲も苛立ちを見せながらも良しとした。今回の対策は叢雲の身体にも関わること。これでもし失敗策を掴まされ、無くてもいい苦しみを齎されたら困るだろうし、余計に怒りが溢れるだろう。
これが容赦なく施設の者を使って実験するとか言い出したら、叢雲も憤慨するだろうし、そもそも姉妹姫が許しはしない。何処までも安全を考慮しているからこそ信用度は得られている。
『朗報を待っていてほしい。それが終われば、段取りを決めて最後の戦いとなる』
提督からの通信はこれで終了。決戦に向けての進捗は、思っていた以上に早く進んでいた。

各自午前の作業に取り掛かる中、春雨と海風は施設内の掃除を受け持つ。ここ最近トレーニングをするようになったことで、いつになく使うようになっている風呂掃除がメイン。水を流しながらの作業になるため、互いに水着姿での作業となっている。
海風がその姿にうっとりしつつも作業をしている時、先程の通信の時に出たことをふと春雨に尋ねた。
「姉さん、また細胞を提供するんですよね」
「そうなるね。みんなのためには必要だもん」
「やっぱり、多めに欲しいとなると髪の毛になるんでしょうか」
その辺りはまだ詳しく聞いていないが、前回の提供で使ったのは髪の毛、唾液、そして少量の血液である。
「かもしれないね。どれだけ必要になるかはわからないけど。もしかしたら、鎮守府に行って献血したりとかもあるかもね」
「……髪だとしたら、その、バッサリ切ったりするかもしれないんですかね」

前回は春雨の比較的長めな髪を数本というくらいで終わっているのだが、今回は大量に必要となったら束で渡すことになるかもしれない。今は掃除中なので邪魔にならないようにアップにしているが、普段はサイドテールにしている長髪を切って渡すなんてことも考えられた。

「ショートカットの姉さん……うん、似合うと思います。思いますが、私の中の姉さんはやっぱり今の姉さんですね。なるべく崩してもらいたくないという気持ちが強いです。その艶やかな髪を消耗品として使われるのは個人的には複雑な心境です。姉さんがそれを是とするのなら、私は同意をしますけどね。姉さんの意思が私の意思。姉さんの考えることは絶対。間違いがあるわけが無いんですから、私が文句を言う隙間なんて何処にもありませんので。でも、でもやっぱり、春雨姉さんの髪を洗ってあげるのは至福の時なので、そのままでいてほしい気持ちがとても強いです。その触り心地も、色味も、香りも、全てが神がかった美しさですから、失われてほしくないと思ってしまいます」

いつものマシンガントークに、春雨は笑顔で応える。

「髪は最終手段にしよっか。本当に足りなかったら少しずつ渡すってことで。それに、バッサリじゃなくて毛先から少しずつ渡せば良いと思うよ。今の長さじゃなくなるってだけで」

「確かに。多少短くなっても春雨姉さんの女神のような魅力は失われることはありませんからね」

まだどうなるかはわからないが、何かしらを提供するのは確定。どうであれ、春雨は何も拒否することなく提供するだろう。海風の気持ちも汲み取って。

施設は少しずつ危険に晒されているが、それの対策も出来つつある。決戦の日まで、あと少し。

熱を持った対策

おおよそ半日後、しっかり眠って英気を養った明石が、工廠奥の研究室に戻る。目を覚ましたのは3人の中では最後だったようで、既に大淀と龍驤が少しだけ作業を始めていた。

3人が休息を取っている間に誰にも触れられないように完全に密室としていて、誰も触れていないことは龍驤が確認済み。さらには、春雨細胞と黒幕細胞の結合によって相殺された白い液体から有害なガスのようなモノが出ていないことも確認している。

こういう時に妖精さんの頑丈な身体と、RJシステムが研究室内に設置されているおかげで、システム妖精としての力で室内を視ることが出来ていた。

「おはよー、昼だけど」

「おはようさん。早速やけど、アレの時間経過の結果や」

大淀が纏めた資料を渡すと、明石がざっと目を通す。

「……時間としてはどれくらい経ってるっけ？」

「6時間やな。朝イチにこれやって、今は昼飯時を抜けたくらいやから」

「これで一切変動無し。もう少し置いておいて、それでもこの結果なら、安定しているのは確定ってことでいいかな」

これだけ時間が経過していても、ほんの僅かにでも何も起きていないということは、これで状態が安定していると考えてもいい。実際はもっと置いておくつもりではあるが、これで夜にもう一度確認した時に何事も無かったら、これで安定と確定しようと考えた。

もし不安定ならば、細かい値が僅かに変動していてもおかしくない。拮抗しているとしても、値が上がったり下がったりとブレるはず。部屋を離れる時に値を全て算出して出力するようにしていったのだが、そこも全くおかしな部分が見えていなかった。

「これで多少は気が楽になったかな」

「経過観察は必要だけど、ある程度は安心しても良いとは思うわ。この6時間でブレが1つも無いんだもの」

「だよね。丸一日……明日の朝まで同じような状態だったら、もう行けると判断する」
　こう決定して、対策のための混合液に関しては研究を一時的に終了とした。まだまだ経過観察の余地はあるものの、逆に言えば、経過観察以外にやることが無くなったのだから、これ以上触れるよりは別件を進めた方がいい。
　とにかく今はやらねばならないことが多いのだ。１つずつ解決していくことで、確実に最終決戦までの道を作り上げる。
「次は最低限卵だけを消す波長を作ろう。白露達の身体だと細胞ごと吹っ飛ばしちゃうから絶対にダメだけど、荒潮達の身体の中から脅威を無くしたいからね」
「そうね。でも波長の解析ってすぐじゃない？　黒幕の細胞は少しだけど残ってるから」
「だね。今までのノウハウ使えば、小一時間くらいで出来ちゃうかな」
　泥刈機やバリア装備に使われている技術を使えば、これに関してはすぐにでも対応出来るだろう。既に体内のそれを確認する単眼鏡が完成しており、波長の解析はその延長線上なのだから、本人が言うように小一時間ほどあればすぐに完成し、今日中には堀内鎮守府の卵持ちが黒幕の呪縛から完全に解放されることになるだろう。
「よーし、それじゃあ、チャチャッと作っちゃおう。グッと寝たから頭の中すごくスッキリしてるんだよね」
「今後も同じくらいちゃんと寝るように」
「せやで。お前がおかしなったら、ウチらが迷惑やけ」
　辛辣なツッコミだったが、明石は目を逸らしながら口笛を吹くだけだった。

　そして宣言通りの小一時間後、山寺鎮守府の明石からの助言も借り、小型化、簡略化した懐中電灯のような卵駆除装置を作り上げた。
　以前、大塚鎮守府に向かう大将の望月に使わせた腕時計型のモノよりは大きめではあるが、内部構造がかなりわかりやすくなっており、

その設計図さえあれば、何処の工廠でも作れるという逸品。こういうところは、堀内鎮守府の明石には出来ないことだったため、協力者として手伝ってくれた山寺鎮守府の明石に深く感謝した。
「ありがとう眼鏡の私。こんなにスッキリと作ることが出来たよ」
『それは良かったです。単一の機能しかないですけど、それなら大塚鎮守府でも簡単に作れるでしょうね。小型化も完璧です』
「だねー」
使い方も簡単。卵があるであろう鳩尾に押し当て、ボタンを押すだけ。体内に波長が照射され、卵のみを完全に消滅させる。
残っていた黒幕の細胞を使って実験もしており、それを入れている試験管は勿論のこと、それを握り締めた艦娘の身体に影響を与えないことや、極端なところで言えば龍驤が発生させられる端末も消すことは無かった。本当に黒幕の細胞にしか作用しないことは確認済みということ。
「よし、それじゃあこれを使ってこちらの卵を全部除去するよ」
『はい、その結果次第で大塚鎮守府の方にも連絡を入れましょう』
「りょうかーい。それじゃあまた後で」
山寺鎮守府との通信を切り、次は提督の方へ。状況報告をしつつ、卵を除去したいと伝えると、すぐにその面々を集めてくれた。
工廠に集まったのは提督と五月雨は勿論のこと、卵を植え付けられている荒潮、漣、曙、朧の４人。ちょうどトレーニング中だったため、北上と大井も便乗していた。
「来ていただいたのは他でもありません。体内の卵を消すことが出来るようになったので、それをすぐに実践しようかなと。実験も出来ていますので身体に害なく消すことが出来ることは確定です。ただ、消えた時に身体に対してどういう反応を見せるかはわかりません。痛みがあるかもしれません」
実験ではあくまでも消せるかどうかしか見ていない。実際に体内に入れて確認するわけにも行かず、身体全部が同じような質になっている龍驤に対して使った場合はまず間違いなく核ごと消滅するため、試すことが出来なかった。

そういう意味では、臨床試験無しでの実践となる。後遺症が残るような悪影響ということは無いのだが、その時だけは何かしらの影響があるかもしれない。前以てそういうことは教えておく。
「ならば、この漣ちゃんがまず受けましょうかね」
そんなことを聞いても一切物怖じせず、漣が一歩前に出た。
「漣を実践に使ってくれていいよん。もしこれで卵が暴走しても別に構わないからね」
「いや、それはありません。それは絶対に大丈夫。ただ、激痛とかそういう類が」
「ならもっとＯＫっすわ。その程度の痛みくらい、全然耐えられるね。怖くもない」
漣はその程度の痛みは辛くない。本当の恐怖を知っているのだから。アレ――春雨からの拷問――以上の痛みと恐怖など、この世界には何処にもない。そう思っているから、必ず治る代わりに激痛があるかもしれないと言われても何も感じない。
むしろ、ここで自分が臨床試験に使われることで、後の被験者達に覚悟をさせることが出来るのなら万々歳だ。絶対に治ることが確定しているのだから、やらない理由もない。
「こんな感じだけど、いいかな。漣がまず犠牲になるよ」
「いや、アンタの反応次第ではめちゃくちゃ怖くなるんだけど」
「でぇじょうぶだ。漣だって艦娘。痛みくらい耐えてやらぁ」
曙の苦言も撥ね除けるようにケラケラ笑う。こうだって決めたらその意志が揺らがない。
「私はいいわよ～。正直、１番というのは気が引けてたし～」
「朧も、漣の意志を尊重する。先にやりたいならどうぞ」
「うっす。ありがとうアラシー、ボーロ。やらせてもらうぜ！」
荒潮と朧も良しとしたため、曙もそこはまぁいいかと漣に先にやらせることにした。
ただ、ここでギャーギャー騒がれたら後からやるのが怖くなるのは確か。漣はそれを避けたとも言える。
「それじゃあ、早速やりますよ。一気に消えるわけじゃないので、少し

押し当てたままにします。少し温かいと感じるかもしれませんが、それは波長が身体を揺らしているだけなので、火傷みたいなことはありません。ただ、痛みがあったとしても動かないでいてくれると助かります」
「りょーかい。あ、じゃあぼの、漣のこと羽交い締めにしておくれ」
「それアンタ貫通してあたしの卵も消し飛ばすんじゃないの？」
「なら朧も手伝う。両サイドから押さえつければいいんじゃないかな」
　暴れられても困るということで、漣の身体を曙と朧が左右からロックする。脚にも脚を引っ掛けて、漣はその場で大の字にされたようなもの。
「それベッドに寝かせた方がいいんじゃないかね」
「北上さん、今はそのままやらせておきましょ」
　そんな漣の姿に、北上と大井は苦笑。時間が惜しいからここでやるとしたのだろうが、普通に考えたら効率は悪い。明石のことだから、拘束出来る椅子とかベッドとかも用意出来ただろうにと内心思いつつも、これ以上口出しはしなかった。
「それじゃあ、行きますよー」
　装置を漣の鳩尾に押し当ててスイッチを入れる。波長を照射するときにはその中央が淡く光るため、見た目通り懐中電灯のようだった。
「あ、やんわり温かい」
「卵を消滅させるための波長は細かい振動です。だから、痛いというよりは熱いとなるかもしれませんね。ただ、火傷はしないのでご安心を。私の手を貫通して消し飛ばすことは確認出来ているので。その時私は温かいと感じるくらいはしました」
「なるほどねぇ」
　しかし、明石は1つだけ見落としているところがある。その消し飛ばす細胞の量である。
　実験に使っていたのは、白露達の細胞から抽出した黒幕の細胞。それはそれこそ、小指の先程度。だが、今漣の身体の中にある卵の大き

さはビー玉1つ程度のサイズなのである。そのため、振動で消滅させる際に発生する熱量は数倍に膨れ上がる。
「あ、これ熱い、熱い！　痛くないけど熱い！」
「暴れないで」
「いやこれすっごい熱い！　熱湯風呂が身体の中から湧いてきてるみたいな感じ！　あっ、あっ、あーッ!?」
　余程熱いのか、ジタバタと悶えるものの、それも僅か数秒のこと。身体の中から卵が消えたことで、その熱はあっという間に消え去り、何事も無かったかのようになる。
　すぐさま明石が単眼鏡を使って体内を視る。すると、漣の中に卵がないことが確認出来た。これにより、この装置が卵を完全に消滅させることが出来るモノとして完成した。
「はい、問題ありません。もう何処にも黒幕の細胞は確認出来ませんでした。これで真に解放されたことになりますね」
「ふひーっ、や、やっべぇっすわ。ジワジワ熱いんスよ。こういうのは初めてだったから、変にリアクションしちまったい。てへぺろ」
　舌を出して戯ける漣を、曙が引っ叩いた。
「とはいえ、これでうまく行くことはわかったので、残りの3人にも施術していきます。どうなるかがわかったわけですし、サクッとやっていきましょうか」
「あ、じゃああたし達が身体を押さえつけてあげよう。大井っち、逆サイドお願いねー」
「はい、大丈夫です。じゃあ次は曙、貴女が受けなさい」
　間髪容れずに北上と大井が曙を羽交い締めにする。曙が反応を見せる暇も与えず、すぐさま明石が装置を鳩尾に押し当てた。
「えっ、ま、マジ、ホントに熱い！　これ熱い！」
「うんうん、わかるよぼのたん。くっそ熱いよね」
　一度それを受けているために先輩ヅラの漣に苛立ちを覚えつつも、曙も処置完了。そして朧、荒潮と順に処置をしていき、堀内鎮守府の中に黒幕の要素は失われた。

対策は完璧となりつつある。

阿鼻叫喚の治療

体内の卵が除去出来るようになったのは、すぐに大塚鎮守府にも伝えられた。堀内鎮守府以上に危険な場所であるのだから。

あちらは侵蝕された鹿島の手によりネズミ算式に相当な人数が泥を受けており、大多数の艦娘達が体内に卵を宿していることになる。さらには、近海に敵の拠点があることも確定しているのだ。今でこそ何事もないとはいえ、どのタイミングで黒幕の力が強化されるかわからない。突如侵蝕を受けた者達が再洗脳を受ける可能性が無いとは言えない。

そのため、対策が確実に可能となった時点で連絡をして、どのような状況でもすぐさま対応する方針となっていた。そのためにも装置は簡略化する必要はあった。

『こちらでは全員が対策済みとなったよ。卵が体内に含まれている者はもういない』

「そうか、それは朗報だ。それを今伝えてきたということは」

『ああ、この手段をそちらに提供する。なるべく早くということだからね。時間的にこちらから運ぶとなると明日になってしまうが、幸いこの装置の設計はかなり簡略化してあるということだ。設計図をそちらに送るから、その通りに使ってもらえるかい』

「無論だ。すぐに送ってくれ」

話している時には、その設計書が大塚提督の作業用ＰＣに送信されてきた。宛名は堀内提督ではなく、明石がダイレクトに。

その手際の良さに感服した。効率重視で考えれば、大塚提督がＧＯサインを出した時点でもう送って良しとするだろう。あちらではそういう連携がしっかり出来ていた様子。

「早いな」

『この通信は明石にも聞かれているのでね。今か今かと待ち構えていたくらいだ』

「なるほど。だが……」

大塚提督や秘書艦の電がそれを見ても、その内容はさっぱりわから

ない。技術者でなければ理解が出来ないような内容であるのはすぐにわかるので、何の抵抗もなく明石の元へとそのデータを転送する。
「流石に俺が見てもわからないな。装置は２つか？」
『ああ、卵を確認するための単眼鏡と、卵を消すための装置の２つだ。本当にあるかどうかと、消えたことの確認が出来た方がいいだろう』
「その通りだな。時間はかかるかもしれないが確実性は必要だ」
急がば回れという言葉もある通り、時には時間をかけてでも確実に勝利に進めるのなら、何も文句は無いだろう。むしろ、これをしなければ余計な手間がかかる上に、戦力が減る可能性の方が高いくらいなのだから、ここに時間を使わない理由は無かった。
『そうだ、僕もそれによって処置をされているところを見ているんだが、その装置はどうしても処置される者に苦痛を与えてしまうんだ』
「苦痛、か。それはどのような」
『体内の卵が消える時、熱を発生するんだそうだ。こちらで処置を受けた者の感想が総じて『熱い』だった。特に最初に受けた漣が言うには、内側から熱湯が湧き出しているのではという熱らしい』
体内の泥を燃焼させているのだろうと察する。しかし、それで怪我を負うわけでもなく、むしろ最善の状態に持っていくためのデメリットであるとするのなら、まだまだ軽い方だろうと大塚提督は考えた。そういう苦しみを与えてしまうのなら、さらに早いところ終わらせるべき。
「わかった。それについてはこちらでも考慮して処置をしていく」
『また何かあれば連絡するよ。そちらの様子も教えてくれると助かる。明日施設に持って行く可能性が高いのでね』
「こちらこそ助かった。これで決戦にも向かえるだろう。それに、脅威に怯えることもない」
これで通信は終了。鎮守府同士の繋がりはより深く。方針は正反対でも、今ではもう気が合う友人と言わんばかりであった。

データは送っているため、すぐに工廠へと足を向ける大塚提督と

電。そこには、飛ばされてきた設計書を印刷して確認している明石の姿があった。
「明石、今送ったデータだが」
「はい、堀内鎮守府の私からのデータですよね。すごいですよコレ。物凄くわかりやすく書かれています」
やはり、見る人が見れば即座に理解出来るレベルの設計書だったようだ。山寺鎮守府の明石が手を加えたことによる簡略化は、この理解に大きく貢献している。
「これならすぐに作れます。時間的には……まだ大丈夫ですね。このまま処置まで行けるかも」
「その方向で頼む。今回の件はなるべく早い方がいいだろう」
「了解です。すぐに取り掛かるので少々お待ちを」
ここで大塚鎮守府の明石の特性が光る。
堀内鎮守府の明石は言わずもがな、無から有を生み出すことに長けている。研究によって解析を行ない、最終的には対策を次から次へと生み出していく。
山寺鎮守府の明石は、システムの簡略化が得意。余計なシステムを省くことで小型化し、諜報活動に役立つアイテムの生成をし続けてきたことにより得られた才能。
そして大塚鎮守府の明石は、設計書さえあれば確実に素早くそれを作り上げる能力が他の追随を許さなかった。一度知ってしまえば恐ろしい程に手が早く、他が丸一日かかるような仕事を半日もかけずに作り上げてしまうくらいだ。
今回に関しては、システムの簡略化がされているため、さらに早い。ものの十数分で単眼鏡を作り、さらに十数分後には卵を消滅させる装置まで作り上げた。
合理的に物事を進めようとする方針のおかげで覚醒した、大塚鎮守府の明石ならではの能力と言っても過言ではない。手際の良さは、効率に繋がるのだから。
時間にして小一時間。本当に対策を作り上げたため、本来の業務時

間としては少し遅めではあるのだが、工廠にほぼ全艦娘を集めた大塚提督。
緊急性のある集合だったため、何が起きたのかと若干騒ついたのだが、感情を抑えるという鎮守府の在り方に準ずるためにすぐに静かになる。
「集まってもらったのは他でもない。以前、この鎮守府で大規模な侵蝕事件が起きたのは記憶に新しいと思う」
運良く免れた者達を除いて、その時の屈辱を思い出して三者三様のリアクション。俯く者もいれば、怒りを抑え込む者もいる。
「その際、あの泥は侵蝕した者に黒幕の細胞……今は便宜上、卵と称するが、それを身体に埋め込んでいるそうだ。それは現在使用されている薬剤を投与するだけでは消滅することはなく、特殊な手段を用いなければ永遠に残り続けるらしい」
工廠がさらに騒つく。あの事件だけでも辱めを受けたというのに、それがまだ終わっていないということになるのだから。
だが、何の策もなくこの事実を艦娘全員に話すはずがないというのも理解していた。この大塚提督が、ただ不安を与えるだけの事実を話すようなことはしない。ここでそれを言うのだから、対策もしっかり用意しているのだろう。そう考えていた。
「だが、先駆者である堀内鎮守府の者達がその泥を解析し、体内から除去する装置を作り上げてくれた。構造もかなり簡略化してくれたようで、設計書まで用意してくれていてな。それが今、明石の手によって完成した。今からここにいる全員を調査し、卵を持つ者達はそれを除去する。通常の時間より少々押してしまっているが、緊急性を要するため、理解してほしい」
時間管理もしっかりしている鎮守府としては、それを覆すようなこと自体が稀。しかし、これはすぐにでもやらなくてはならないことであるため、誰もが納得した。
「ただし、この処置には少々苦痛を伴うとのことだ。体内の余計なものを除去するのだから無理もない。体内で熱が発生し、身を焦がす痛みを感じるのだそうだ」

前以てそれを教えておくが、痛みよりも屈辱の方が辛いと考えるのが大塚鎮守府の艦娘達である。感情を抑えているのも加えているため、その程度では動じることはなかった。
熱さによる苦痛は、戦場でも味わう羽目になるダメージだ。ならば耐えられないことは無い。
「では早速だが進めていく。決戦参加のメンバーから処置をさせてもらう。構わないな」
ということで、体内の卵の処置が始まる。一旦処置を順番待ちしてもらうことになるため、侵蝕されていない者達が列形成などを行い、効率よく処置が出来るように進めて行く。
「まずは鹿島、お前からだ。お前は特に最初の者だからな」
「はい、お願いします」
その列の先頭には、用意された椅子に腰掛けさせられた鹿島。その椅子も集合がかかる前に明石が作った、身体を固定するためのモノ。
波長照射装置の設計書に処置を受ける者が動かないようにする必要があると追記されていたため、拘束具として用意していたそれを若干改造してここに持ってきていた。
体内の卵の位置は、電が確認。ちなみに、電自身はこの集合をかける前に調査し、処置の必要が無いことは確認済み。
「ありました。鳩尾の部分ですね」
単眼鏡を覗き込む電が大塚提督に伝える。場所も概ね聞いていた通りであり、最初の泥に侵蝕された鹿島も同じように植え付けられていた。
これは龍驤の器にされた漣も同じだったため、侵蝕という行為を受けた時点で種類問わずに同じ場所に植え付けられるということに繋がるのだろう。
「処置をする。耐えろよ」
「はい」
淡々と進めるものの、鹿島は内心では緊張していた。今から痛いことをすると言われているのだから、ぐっと力が入ってしまう。身体が椅子に固定されているおかげで震えることは無かったが、それでも装

置が押し当てられるとビクッと身体を震わせてしまった。
感情を抑えるだけでは、この緊張感は拭えない。大塚提督もそれは理解しているつもり。
「照射」
トリガーを引くことで鹿島の体内にある卵を消滅させていく。サイズも変わらないため、消えるまでは数秒。
徐々に熱くなっていく体内。最初はお風呂くらいだと思っていたが、そこから自分で止めることが出来ない温度の上昇。
「つぐ……確かに熱いです……熱いですが、耐えられない、ことは無いですね……っ」
歯を食いしばってそれに耐える。確かに激痛とも言えるダメージかもしれないが、侵蝕されていたことによる心の痛みよりも辛くはないし、治療された時の過剰な快楽よりも気が楽であるため、大声を上げるようなこともない。
とはいえ、これは鹿島だから耐えられたに過ぎない。続く雷の処置では。
「えっ、あ、熱っ、あっつい！　鹿島さん何でこれ耐えられるの!?」
これである。ジタバタするため、最初に作っておいた拘束椅子がその効果を遺憾無く発揮していた。
熱量に個人差があるわけではなく、苦痛への耐性に個人差があるだけ。特に駆逐艦は、身体が小さいからか耐性が若干低く、戦艦は逆に耐性が高いと言えた。鹿島はその中でも群を抜いて苦痛に対しての耐性が高かっただけ。
「っううっ、いや、本当に、よくあの程度で、耐えられましたね……っ」
大和ですら少しだけ声を上げてしまうほど。叫ばない代わりに、拘束椅子をガシャガシャと鳴らすことになる。当然ながら、大和の膂力であっても壊れないように頑丈に作られているため、暴れても身体がそこから動く事はない。艤装も展開しないようにしている。
外部からの損傷は戦いの中でいくらでもあるため耐えられても、内部からのダメージは簡単には耐えられない。
そこからは、ある意味阿鼻叫喚だった。処置を受ける者の悲鳴にも

似た叫び声が響き、特に耐えることが出来た者ですら、どうしてもジタバタと動いてしまうため、それを見せられている後の順番の者達は嫌でも恐怖が募る。

感情を抑えるとか言っていられないのだが、こんなことで屈していては、確実に鎮守府の運営の妨げになるため、辛かろうがそれを受け入れる。当然、叫んだりジタバタしたりはするのだが。

これで大塚鎮守府も準備万端となった。残すところは、施設のみ。

治療は施設へ

堀内鎮守府、大塚鎮守府と卵の除去が実施され、残すところは施設のみとなった。しかし、その施設は卵以上の問題を抱えている。そもそも全身に細胞が回ってしまっている魂混成組の治療に関しては、未だ絶対に成功すると確証が持てていないことだ。

明石には伝わっていないのだが、辿り着く者である春雨からのお墨付きがあるため、この実験はおおよそ成功。少なくとも悪い方向に行かないことは大体確定している。

ただそれは、使ったら死ぬだとか、細胞が暴走するとか、そういうことが無いというだけであって、それ以外に何かしらのことが起きる可能性はある。

「おおよそ12時間、一切の変動無し。これはもう安定でいいね」

堀内鎮守府では、明石が何度も混合液の状態を確認し、その状態が全く変わらないことを確認したため、これで完成とした。

「簡易的な出張セットも作っておいたで。いざって時は、施設で細胞抽出と調合が出来るようにしとる。宗谷の力は借りにゃいかんけどな」

合間合間に時間を有効活用するため、龍驤が携帯出来る設備をいくつも作り上げていた。不要になる可能性もあったが、無いよりはマシだろうとして。実際、これにより明日そのまま施設に行くだけで全ての治療と対策が完了出来る。

時間は早いに越したことは無く、むしろ出来ることなら今からでも施設に向かいたいくらい。時間としてはもう夜であるため、安全性を考えれば嫌でも明日以降になるのだが。

「提督にはこのことを伝えておきました。明日、調査隊と共に、施設への出向を許可するとのことです。大塚鎮守府でも大成功だったみたいですよ」

先に執務室に向かっていた大淀が、朗報を携えて工廠の奥へ。この鎮守府は当然のこと、所属する艦娘の大多数が侵蝕されていた大塚鎮守府でも全員が解放されたということで、施設への治療技術の提供も

いち早くということになったようだ。
「よかったよかった。どうしても卵が消える時に熱くなるというのは直せそうにないけど、全員解放されたなら安心だよ」
「せやな。んでも、コレをどないするかや。ここまで安定してるなら、もう処方すんのか？」
「するしかないでしょ。というか、これなら行けるよ確実に」
ということで、翌日は明石達も施設へと向かうことになる。卵の除去は勿論、魂混成組に対しての治療も実施するために。

そして、翌日。鎮守府から連絡を受けていた施設の者達は、決戦前の一番の大仕事、体内から黒幕の要素を全て排除する治療を受けるため、調査隊の到着を待ち構えていた。
そのため、今日の午前中の作業は全て中止。施設に住まう全員でその治療に参加する予定である。一度確認しているのだから大丈夫だとは思うが、侵蝕を受けていない者にも時間経過により何かしらの影響が無いかを調査する必要もあるため。艦娘には無くとも深海棲艦にはあるという可能性も否定は出来ない。
「そのＴｒｅａｔｍｅｎｔ（治療法）、身体の中がとっても熱くなるのよね」
間違いなく治療を受けることになるジェーナスが、少し不安げに中間棲姫に聞く。
以前、春雨から明石は痛みもなく消してくれるはずだと聞いていたので、実際は苦痛を味わうと聞いてとても驚いた。それは春雨もである。
今回のこれは、黒幕の邪悪な意思が邪魔をしてきているのでは無いかと感じる程に、仲間達に対して過酷な現実を突きつけてくる。
「そうねぇ。提督くんが言うには、そうなっちゃうらしいわぁ。身体の中の悪い部分を焼き尽くす……みたいなものなんだそうよぉ」
「仕方がないとはいえ、ちょっと怖いわ。私だけじゃないと思うけど」
「私も少し怖いよ……」
ジェーナスに賛同するのは薄雲である。ただ戦闘に巻き込まれた

だけなのに、最後まで苦痛を味わう羽目になるのは、どうしても納得がいかない。
しかし、痛い目に遭うのが確定していても、ここでちゃんと除去しておかなければ、最終決戦後に勝敗問わず何か良くないことが起きるかもしれないのだ。それを考えると、怖がっている余裕なんて何処にも無かった。
「あの熱量を受けることになるんでしょうか……」
この施設の中では、ある意味その苦痛を知っている海風。暴走した春雨からの強引な治療は、溢れ出るマグマに全てが灼き尽くされるという、たった1人しか経験していないこと。その時も、とにかく熱いと感じた。
それと全く同じことが行なわれるのかもしれないと知ると、それに釣られて当時のことを一緒に思い出してしまった。春雨に対しての罵詈雑言は、一字一句覚えている。幸福の中でなら思い出すことも無いが、不意にこういうタイミングでフラッシュバックしてしまう。
それに気付いた春雨は、海風が崩れないうちにその手を握った。自分の怒りが溢れてしまいそうな時にしてもらうように、海風を落ち着かせるためにその温もりを与える。
そうすることで、海風はあっという間に落ち着きを取り戻すことが出来た。それだけ強く依存しているというのもあるのだが、2人にとってはこの壊れ方がもう普通なこと。
「アンタ達はまだマシよ。私達は全身の細胞をどうにかされるんだから」
叢雲が苛立ちを抑えることなく口に出す。卵の除去だけなら熱いだけで済む。一時の苦痛を耐えればいいだけの話。だが、混成組は卵だけでなく、全身の細胞を弄るという大きな治療が待っている。
春雨から大丈夫という保証はあっても、それはあくまでも最悪な結果にはならないというだけだ。結果には辿り着くまでの過程で何が起こるかは想像がつかない。
それこそ全身に激痛が走るかもしれない。安定するまでに時間がかかるかもしれない。後遺症のようなものだって無いとは限らない。

「ま、全身の細胞に関しては、あたしが人柱になるから心配しないでよ」
白露がニッコリ笑いながら言ってのけた。どうなるかはわからないかもしれないが、妹(春雨)が大丈夫だと言うのだから問題ないと、真っ先に自分が施術を受けると宣言。自分の反応に不安があるなら考えればいいとまで。
どちらにしろ施術を受けなければ戦うこともままならない可能性があるのだから、白露がどういう反応を見せても関係ない。胸を張って話す姿に呆れつつも、その気持ちだけで充分だと溜息を吐いた。
そうこうしている内に、鎮守府から調査隊到着。今回は治療がメインであるため、明石と大淀がセットでメンバーに含まれているのが特徴。宗谷のクルーザーには出張用装置が詰め込まれ、その場で薬の調合を、また、春雨からの献血も可能にしている。
調査隊のメンバーとしてはいつもと殆ど同じ。山風を隊長とした駆逐艦４人に島風、金剛、比叡、サラトガの護衛部隊となる。
「いらっしゃい。今日もよろしくお願いねぇ」
「……うん、すぐに準備してもらう、ね」
調査隊の隊長は山風ではあるのだが、今回も作業のメインは明石である。岸に着くや否や、宗谷のクルーザーから機材を運び出す。そこまで大掛かりではないため、室内に入る必要は無い。晴れているのだから尚更である。
「山風、卵の除去は先にやっておいてもらっていいかな。単眼鏡で場所を確認して、装置で波長を送り込むだけだから、誰にでも出来るよ。特別な装備でも無いしね」
「……ん、わかった。それじゃあ……えっと……」
「照射は私がやるわ～」
「なら私が場所の確認やるね」
波長の照射は荒潮が、単眼鏡による確認は島風がやることに。
「戦艦さん、艤装を出してもらってもいいかしら～」
「あら、どうして？」
「これ、結構熱くて～、どうしても身体が動いちゃうのよね～。時間が

かかればかかるほど苦しむことになるから、身体を固定してほしいのよ～。私達も羽交い締めされながら受けたわ～」
　実際に受けている荒潮の言葉であるため、戦艦棲姫も素直に従う。しかし、自分も受ける側なのだがと話すと、飛行場姫がニヤニヤしながら任せろと肩を叩いた。膂力で言えば施設でトップクラスなのだから、戦艦棲姫が相手でもびくともさせないだろう。
　だったら最初から全員飛行場姫にやらせればいいのではと訴えかけたが、精密性で言えば戦艦棲姫の艤装の方が上。絶対にびくともさせないとするのならば、艤装の方が適している。
「それじゃあ、始めていくわ～。あ、そうそう、身体中の細胞に混じっちゃってるヒトは、今からやるところの直線上に入らないでね～」
　流れ弾でも死ぬ可能性があるため、ここは絶対に要注意。念には念を入れて、波長の照射は海側に向けてすることにしたくらい。かすった瞬間にその細胞が死滅なんてこともあり得るのだから、ここに関しては要注意。
「そ、それじゃあ、私からやるわ！」
　怖いことはすぐに終わらせたいと、ジェーナスが真っ先に挙手。荒潮の表情が少し蕩けかけるが、今はそういうことをしている暇などない。むしろ、ジェーナスを救うために心を鬼にする。今からするのは激痛を与える行為だ。荒潮の愛するジェーナスであっても、これは躊躇っていられない。
　戦艦棲姫の艤装がジェーナスの両腕と両脚を優しく掴み、身動きが取れないようにする。喋ることは出来ないが、少し申し訳なさそうに触れているため、逆にジェーナスがもう少し強めでもいいと指示を出す。
「アラシオ、準備ＯＫよ」
「はい、それじゃあとっても熱いけど我慢してね。動いたら余計に時間がかかっちゃうから」
　島風が単眼鏡を覗いて卵の位置を確認。そしてその場所にピンポイントに荒潮が波長を照射。荒潮も自分がされた時と同じようにジェーナスを救う。

「じんわり熱くなってき……うぇっ、あ、熱、熱い!? ナニコレ!?」
「私もそうだったわ～。でも、一過性のモノだから、今だけ我慢すれば大丈夫よ」
歯を食いしばって耐えるジェーナスを、周囲は心配そうに見守る。ミシェルもすぐに駆け寄りたいくらいに焦っていたが、戦艦棲姫がそれをどうにか押さえ込んでいた。あれは治療であり、ジェーナスのためのことだから心配しなくていいと言い聞かせて。理解は出来ないが、納得はしてくれたようで、少し涙目ではあるが治療の邪魔はしない。
この治療を最初に見せつけられたことで、この後に治療を受けることになる薄雲の緊張はピークに。
自分もあのような苦痛を味わうのだと思うと、逃げ出したいくらいに思う。だが、そんなことをしたら確実に施設の迷惑になる。そちらの方が嫌だと、何とかその場に立ち続けた。
「はい、おしま～い。島風ちゃん、確認お願いね～」
「おうっ。ちゃんと無くなってるよ！」
終わった時には息も絶え絶えだったが、そのまま身体の熱は一気に失われて、元の調子に戻ってくる。大きく息を吐くと、治療前の時とほぼ変わらない状態に。疲れはあっても痛みはまるで無かった。
それがわかったからか、艤装からの拘束も解かれる。フラつくことも無い。
「痛いんじゃなくて熱いっていうのは、逆に辛いのね……」
「ジェーナスちゃん、大丈夫ぴょん!?」
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ、もう大丈夫よ」
戦艦棲姫からの拘束が外され、ジェーナスに飛びつくミシェル。治療さえ終わってしまえば何とも無いので、そんなミシェルを当たり前のように受け止めるジェーナス。疲れもすぐに取れるだろう。
「それじゃあ次に行くわよ～」
卵の除去は順調に進むようだ。これならば、不安は一気に取り除かれることだろう。

一方、明石の方は先に春雨に献血をしてもらいつつ、瑞鳳と黒潮から忌雷の体液を採取していた。この場で特効薬を調合するところを見せることで、信用度を上げるという作戦でもある。
実際、見せられている者達は何をしているのかはわからないが、春雨の細胞が血液から採取されているため、何処か血清のようにも見えた。
「はい、これが今回の治療薬です。黒幕の細胞と結合し、新たな細胞として変化します。変化には少しだけ時間がかかりますが、安定した細胞になることは確認済みです。昨日の朝から２４時間経過しても、細胞は安定していますから、これはもう崩れることはありません。振動もさせて崩壊もありませんから、安心してください」
ただし、その結合の最中に本体にかかる負担のことは未だわからず。ここだけが唯一の不安である。
「それじゃあ、あたしがまず受けるよ」
ここで白露が前に出る。宣言通り、人柱となるため。春雨の保証があるため。死ぬことは無い。それに、戦場に出られないということも無いだろう。そのため、自信を持って治療を受けることが出来た。
「ん、オッケー。それじゃあ、チクッとしますよー」
そこにほぼ躊躇いなく注射を打ち込んだ明石。血液の流れに乗せて混合液を身体中に流す。
「うん、今のところは何も無いけど……」
「反応は一気に行きます。覚悟だけはしてくださいね」
「怖いこと言うなぁ……あ」
ビクンと白露が震える。細胞が反応を始めた証拠。
「あ、これ、まずい」
「まずいって、な、何か失敗を」
「違う、これ、痛いんじゃない、この感覚絶対ヤバい、っああっ」
自分を抱きしめながら蹲る白露。この反応の仕方に覚えがある者は少なくない。そう、泥に侵蝕された時の反応である。
つまり、細胞の切り替えには快楽を伴う。泥の侵蝕がそれなのだか

ら、春雨の細胞のそれも同じ効果があってもおかしくない。むしろ、体内に混じった黒幕の細胞がその効果を発生させてしまっている可能性もある。
「っあっ、こ、こんな感覚なのっ、ヤバ、耐えられな、っっっっっっ!?」
羞恥心なども無く、その場で大きく仰け反りながら叫んだ。ヒトによっては大きなトラウマを刺激されるような姿であるが、これは治療。これでも問題ない反応。
ひとしきり震えた後、その場に膝をつく。細胞が切り替わったことで、白露の肌がより一層白くなったようにも見えた。
「っは、はぁあ……これダメだよ……あんまりヒト前でやらない方が、いいんじゃないかな……」
未だにビクンビクンと震えている白露。侵蝕と同じような反応をしたものの、正気のままでいられているため問題はない。

かのように思われた。
「えーっと、白露姉さん、それって無意識ですか」
「え?」
春雨に言われて自分の姿を見る白露。その姿は、まるで侵蝕されたかのようなレオタード姿。ロンググローブやニーハイソックスまで完備。
しかし、泥にやられた時とは色合いなども違う、真紅の姿となっていた。

紅く染める治療

施設の者達の治療中、体内に卵を埋め込まれた者達への処置は順調に進んでいるのだが、細胞に黒幕のそれが混じってしまっている者達への施術で、問題が発生した。

混合液自体は大成功であり、最初の被験者として立候補した白露の体内からは、黒幕の細胞は失われている。しかし、その反応は非常に過剰。まるで泥に侵蝕されているかのような反応を見せ、ヒト前であるにもかかわらず叫ぶような嬌声を上げてしまっていた。そしてさらには、その姿。

「いや、あの、あたし完全に無意識だから！」

それこそ侵蝕されたかのようなレオタード姿。しかしそれは、泥の侵蝕を受けた時のような混沌の色ではなく、春雨の怒りが混じった真紅。それこそ、春雨の細胞と黒幕の細胞が混じり合った結果であるということをわかりやすく表現しているようにも見えた。

今の白露の姿にトラウマを持つ者だっているため、大急ぎで別の服に着替える白露。一番慣れ親しんでいる、白露型４人の折衷案とも言える制服を作り上げたところ、無事に服装は変化。

しかし、そこにも影響は出ていた。制服自体に紅が交じり、村雨のインナーも真紅に。細胞の影響が完璧に出てしまっていた。

「え、ええ……これ副作用……？」

白露自身としても、こんなことになるとは思わなかった。意識すれば黒く染められるのだが、逆に言えば、意識しなければまたあの姿を作り出してしまう。服を展開するときは絶対に細かく考えてからでなければならなくなってしまった。

「……いや、考えられることではあったんですよね、それも。そもそも、黒幕の細胞がそういう性質を持っているはずなんですよ。むしろ、さっきのは黒幕の領域に入った瞬間になっていた姿ですよ。紅くはなく黒くなっていたと思いますが」

明石の推論。先程の姿は、この事実を知ることなく黒幕の領域に入ってしまった時の末路だと考える。

「ですね……。黒幕の力が一番大きくなる領海に入った瞬間に、卵や身体の細胞が活性化して、再洗脳していたんじゃないかと思います。あちらも無意識かもしれませんけど」
その言葉に、春雨も同意。領域は黒幕の力が最も影響を与える場所。つまり、自分と同じ細胞を急激に活性化させることだって可能であろう。黒幕自身が無自覚でも、嫌がらせを主体としているのならそうなってしまえと考えるだけで望みが叶う。既に自分の泥がばら撒いてある領域に、細胞を持っている者が足を踏み入れるのだから、そうなっても疑問はない。
それこそ、怒り狂った春雨に近い力だ。視線の中の者をほぼ自由にコントロールしてしまう『望む答えに辿り着く力』に近い。仕込みさえしてあれば自由自在に操ることが出来るようなもの。
春雨のように仕込み無しでコントロール出来るわけではないが、一度侵蝕してしまえば仕込みは完了。今でこそその侵蝕も防ぐことが出来るが、それが無い時期はガード不能の最強の力。
これを全て、復讐心が溢れた結果、心を壊して無意識無自覚に繰り出しているというのなら、何処までも邪悪な存在。
「とにかく、春雨の細胞の力で事前に誘発させたんですよコレは。でも、本来の力は抑え込まれた。それでも拮抗されたから侵蝕と同様の快楽と変化が発生したわけです。頭にまで回らなかったのは、流石は辿り着く者って感じですよ」
決戦で発生して全てを台無しにしていたであろう変化を強引に引き起こしたことで、それを未然に防いだということである。治療というよりは、受け入れた上で変質させたというイメージか。
複雑な気分ではあるものの、頭にまで黒幕の細胞が来なくてよかったと安心した。
「紅く染まるのも当たり前なんですよ。忌雷の色が紅くなってるんですから」
「言われてみりゃそうやなぁ。うちらの忌雷が黒から紅に変わっとんのやから、さっきのも紅くなったら当然や」
黒潮が忌雷を撫でながら納得する。瑞鳳も自分の身に起きたこと

を見せられたようなものなので納得。
　春雨のマグマを流し込まれたことで、本来泥色だった忌雷が真紅に生まれ変わっているのだ。それと同じことが起きてもおかしいことではない。
「身体の調子は悪くないよ。痛いとか熱いとか怠いとかは無いかな」
「なら効果としては成功として見て大丈夫ですね。未然に防ぐために事前に発揮させ、それを春雨の細胞の結合というカタチで抑え込んでいるわけです。そして、それは二度と再発しない。細胞そのものが変質していますから、黒幕の領域に足を踏み入れたとしても、反応するための細胞はもうありません」
「そっか、それならよかった」
　治療としては成功。決戦に向かった時の何かしらの不安は、これによって取り除かれた。気分としては複雑ではあるが、これ以上悪いことにはならない。
　言ってしまえば、見た目が少し紅くなるという程度。治療中にあられも無い姿を見せることになる一過性のモノと、治療後に一時的に侵蝕された姿になるくらいである。そのどちらもが、精神的なダメージに繋がるのだが。
「では、次は私が」
　治療されるのならば問題ないと、白露に続き大鳳が前に出る。春雨に対して尊敬の念を持っているため、その細胞を自身の治療に使えるというのは内心ありがたいと思っていたりする。
　一応ではあるが、白露とは別の反応をする可能性もあるということでモニタリングはしっかりしている。白露の時からもそうだが、持ってきた簡易的な機材と、明石の頭の上にずっと陣取っている龍驤の力によって、常にその状態は記録されていると言っても過言ではない。
「春雨が問題ないと言うのですから、何も問題はありませんよ」
「いや、でも大鳳さん、マジでしんどいから覚悟した方がいいからね」
「勿論、あれだけの痴態を白露が晒しましたから、私は同じ轍を踏まないよう、に……っ」
　話している間に注射を打ち込まれ、混合液が身体を回った瞬間、大

鳳の様子がやはりおかしくなる。プルプルと震え出し、先程の白露と同じように自分を抱き締めながら蹲る。
「な、なるほど、こういう……こと、ですか……っ」
「うん……歯を食いしばっても漏れちゃうみたいな」
「っくっ、うっ、くううっ……っ!?」
白露のように仰け反ることは無かったが、小さく丸くなったように我慢した大鳳。何度も何度も大きく震えた後、やはり白露と同様に真紅のレオタード姿に。
黒幕の侵蝕が表に出たが、春雨の力で害を失った。そう考えるのが自然な変化であることを、二度目にしてよく理解出来た。
「ふぅ、ふぅぅ……これは厳しいですね……。こういうところを見られながらというのは、思った以上に辛いですよ」
すぐさま服装を変える。やはり真紅の要素が加わっており、大鳳の場合は見えているインナー部分が紅く染まっていた。
その声を上げるたびに、どうしても変な空気になってしまうのがこの治療。岸でやっている上に、周囲には同じように治療待ちだったり、そもそも調査隊の面々や施設の者達もいるのだから、そんな空気になるのも無理はない。
「海風、大丈夫?」
この治療が続く中、春雨が心配しているのは海風だ。春雨の細胞を使った治療であるため、その成り行きを見届けようとここにいるのだが、そんな海風は春雨の手を強く握りしめていた。震えもないとは言えない。
今の海風にとって、屈指のトラウマとなっているのが侵蝕だ。自分自身がそれを経験し、最愛の姉と敵対した記憶は、この治療法によって刺激され続けている。
「……大丈夫、大丈夫です。あれは私が忌むべき他者を陥れる行為ではありません。春雨姉さんの慈悲の結果なんですから。姉さんが手を握ってくれているなら、尚更大丈夫です」
「無理しちゃダメだよ。私だって、少し苛立ちが出てきちゃってるんだから」

春雨の精神的なダメージにも繋がっているのは言うまでもない。怒りが溢れた原因は、仲間達が侵蝕されたことなのだ。その光景が今、目の前で繰り返されているようなもの。

それ故に、お互いのために手を握っている。お互いに心を落ち着けるために。それでも十全とは言えないのが現状。春雨も気を抜いたら怒りの姿に変わってしまいそうだった。

「海風姉……春雨姉……落ち着いて」

その2人に、今度は山風も加わる。2人が結ぶ手を上から包み込むように握り、さらに温もりを与えた。2人の仲に割って入ることはどうかと思いつつも、2人の温もりだけでは足りないと感じたか、意を決してそこへ。

春雨には姉妹の温もりが一番の特効薬だ。今施設にいる2人の姉妹だけで足りないのなら、外にいる妹の存在も必要。それが今ここで発揮され、春雨は一気に怒りが鎮まる。

山風の温もりは海風にも有効だった。姉至上主義となっていても、姉妹の絆が崩れ去ったわけではない。特に山風は一番近い妹だ。海風も艦娘の時は特に気にかけていた相手であるため、繋がりは深い。

「ありがとう山風。おかげで落ち着けた」

海風の言葉に、山風は頬を赤らめながらも小さく微笑んだ。

「っっ、あぁあああっ!?」

そんな和やかな光景の裏では、治療が続けられていた。混合液を投与され、その過剰な反応の中で細胞を変質させ、そして真紅に染まる。今回は古鷹の番。ビクンビクンと震えながらも姿を変え、そして落ち着いたところで元の姿に戻るが、曝け出しているインナーが真紅に変化していた。

あちら側で活動していた時には、重巡ネ級のボディスーツ――レオタードに近い姿でいたからか、最初の変化ではその時のことを思い出してしまい若干崩れかけるものの、白露や大鳳が支えることで何とか克服。トラウマをどうにか振り払う。

「っっっ!?」

「――っ!?」

続いて潜水艦姉妹。２人揃っての投与により、同時に強い反応を見せる。その反応を押さえつけるように２人で抱き合って、その快楽の奔流を耐えた。元々感情の起伏が小さい２人ではあるものの、この衝撃には表情を変えてしまう。

最終的には、本来の姿である競泳水着スタイルとなるのだが、例に漏れずそれは真紅に染まっていた。薄雲のためにとウェットスーツにしていたが、今はそんな余裕もないのか２人で抱き合いながらも息を整えている。

「自分の開発した対策でここまで阿鼻叫喚になるのも初めてなんですが、ここは心を鬼にして続けさせてもらいます。残すところあと２人、叢雲とコロラドですね。どちらからにしますか。両方同時でもいいですよ」

今までの仲間達の痴態を延々と見せつけられていたものの、コロラドは随分と開き直っていた。自分だけがこうなるわけではないし、むしろ決戦で恨みを晴らすためには必要不可欠。過剰な快楽は苦痛であることくらいは理解しているつもりだが、これまでの屈辱に比べればこの程度は微々たるものとしか思っていない。

しかし、叢雲は少々事情が違っていた。快楽により治療されることは別に問題はない。痴態をコロラドに見せることは気に入らないが、それによって怒りが大きく溢れるかと言われればそうでは無かった。だが、その後の変化が問題だった。

「……何で敵のクズ共と同じ姿にならなくちゃいけないのよ。それだけはゴメンだわ」

ここまで全員が避けられていない、あの侵蝕されたようなレオタード姿が気に入らないと言う。

こうなることは開発者である明石にも想像がついておらず、今この場になって初めてわかったこと。それも、実際は黒幕の影響を先んじて発生させ、それを春雨の細胞で抑え込むというカタチでの治療となっているのだから、結局は黒幕の力に一時的にも屈すると考えていた。

「あら、たかがそんなことで抵抗しちゃうのね」

ここで発破をかけるのはコロラドである。
「あん？」
「私だってあんな格好はゴメンよ。でも、一度我慢すれば後は二度と黒幕のいいようにされないって言うなら、喜んであの姿になるわね。そんなところにＰｒｉｄｅなんて関係ないわ」
フンと鼻で笑い、一歩前に出る。叢雲を残して自分が先に治療を受けようという姿勢。
「治療を受けたくないなら受けないでいいんじゃないかしらね。でもそのせいでアンタは黒幕との決戦にも出れないで、この施設でイライラしながら待つことになるのよ。それに、私達が黒幕に勝ったら、それと同時にアンタが余計にバカな方向に行っちゃうかもしれないわね。それでも一時のあの姿が嫌だって言うなら、別にいいんじゃない？　私はアンタのそのつまらないＰｒｉｄｅを尊重してあげる」
余計に叢雲を苛立たせるように吐き捨て、明石に腕を差し出した。注射しろと言わんばかりに。
やっちゃっていいのかなと少しだけ考えた後、まぁいいかとコロラドに注射器を押し当てる。しかし、
「待ちなさい」
叢雲がそこに待ったをかける。
「そこまで言われてはいそうですかと言うわけないでしょうが。私も受けてやるわよ。でも、あの姿にはならない。私は私の力で抑え込んでやる」
「うわチョロッ。人のこと言えないくらいアンタチョロいわねぇ。それでもやっすいＰｒｉｄｅに縋り付くのかと思ってたわ」
「アンタに言われたくないわよチョロ助。明石、気が変わらないうちにさっさとやって」
流石の明石もこれには困り顔。だが、治療はしなくてはいけないので、手早く2人の腕に混合液を注入。コロラドはともかく、叢雲からも合意が取れたと判断した。
「だったら、アンタよりも反応を薄くしてやるわ。キャンキャン泣き喚いていなさいよチョロ助」

「ハッ、それはこっちのセリフよ。耐えられずに痴態を晒せばいいわポンコツ」
　ギリギリまで罵り合い、憎まれ口を叩きながら睨み合うが、この薬はなかなかに即効性。すぐさま全身に回り、同時に強烈な反応が始まる。
　コロラドだって侵蝕されたときは艦娘だったとき。快楽などなく、抵抗する暇すら与えられずに頭の中を書き換えられた。しかし今は深海棲艦。泥の侵蝕は快楽と直結する身体。叢雲はともかく、コロラドだってこの衝撃を知らない。
「んいっ!?　こ、ここまで、激しい、の!?」
「んぁあっ!?　い、いきなり泣き言かしらね、私は、まだまだ耐えられるわよ」
「喧しいわよ、アンタだって、涙目じゃないの」
　罵り合いながらも過剰な反応に身悶えし、同じように自分の身体を抱きしめた。だが、目の前の相手に弱みを見せたくないのか、２人とも膝から崩れ落ちることもなく、ブルブルと震えながらも２本の足で立ったまま耐えた。
「っく、こ、これ、爆発するみたいにっ……っあはあぁあっ!?」
「ヤバ、白露が言ってたの、このこと、かっ……うぁあああっ!?」
　だが、すぐに限界が訪れる。誰にも耐えられない奔流に呑み込まれ、２人同時に大きく仰け反った。そして同時にレオタード姿に変化。
　今までの中でおそらく一番大きな反応。痴態としても誰にも敵わないレベル。ただ、最後まで罵り合っていたからか、見届けていた者達としては苦笑しか出てこなかった。２人にとってそれが幸いなこと。
「はぁ……はぁ……あれだけのこと、宣っておいて、しっかり変わってるじゃないポンコツ……」
「うっさい……その節穴の目でよく見てみなさいよ……私は……アンタとは違うのよ……」
　そう言う叢雲は、なんとか自分らしさを残そうと意地になったの

か、全員に出来上がったニーハイソックスをどうにか回避し、普段使いの黒タイツのままとなっていた。ただそれだけでも、屈しなかった部分があるということになる。

「いや、叢雲ちゃん正直今までとほとんど変わってないよ。色が変わっただけ」

春雨の無慈悲なツッコミが入り、苦笑していた面々に普通な笑顔が戻った。

結果はどうであれ、これによって全身の細胞にまで混じっていた者達への治療は完了となる。経過観察は多少必要かもしれないが、もうこれで決戦の準備が出来たと言っても過言ではない。

その効果は

全身に黒幕の細胞を持つ魂混成組と叢雲の治療はどうにか終了。一時的に侵蝕された姿になるというアクシデントが起きているものの、ちゃんと意識をすれば衣装は好きなように変えられるのが深海棲艦だ。今は色合いが紅く染まっているものの元の姿に戻っている。

また、体内の卵のみを除去する側も、荒潮と島風による連携で終了。戦艦棲姫の艤装に羽交い締めにされた状態で波長を照射されることで、相当な熱量を受けながらも体内から黒幕の細胞は失われた。

「はぁ……酷い目に遭ったわ」

最後に処置をされたのが戦艦棲姫だったようで、飛行場姫による羽交い締めを受けた後。下手をしたら自身の艤装よりも強力な膂力でガッチリとホールドされていたのと、体内の卵が焼滅する熱でジタバタと暴れたことによって、思った以上に消耗していた。

戦艦棲姫だけでなく、処置を受けた者は全員が精神的に疲労を感じていた。最初に受けたジェーナスは、肉体的な疲労はもう回復しているものの、この場で自分と同じように熱で苦しんだ者を見れば、どうしても心が疲れるというもの。

「戦艦、おつかれ」

「ありがと。貴女も大分苦しんだわね」

「痛みは、やはり、辛いから」

空母棲姫も例外なく処置を受け、その熱による身体が焼けるような感覚に身悶えした。ジェーナスや薄雲とは違い、大型艦で戦い慣れしていない空母棲姫がそれを受けたため、誰よりも暴れてしまった。

戦艦棲姫の艤装だからビクともさせなかったが、その分疲れも人一倍だったようで、回復するまでに少々時間がかかった様子。もうこんなことは懲り懲りだと吐き捨てるように話していた。

「まぁでも、私達は軽い方ってよくわかるわ。あっち、もっと阿鼻叫喚だったみたいだし」

当然ながら、あれだけの騒ぎになったのだから、卵を除去している場所にもその声は届く。特に、最後に施術を受けたコロラドと叢雲は

特に大きな声だったため、否応でもそちらに耳が向くものである。
最後に治療を受けたコロラドと叢雲も、気を取り直して服装を正した。どうしても細胞に混じった春雨の細胞の影響か、服装の何処かが紅く染まってしまう。コロラドは服そのものが、叢雲も普段使いのインナーがその影響を受けていた。
「明石さぁん、全員終わったわ～」
「ありがとうございます。確認も終わったってことかな」
「おうっ、ちゃんと卵が無いことも確認したよ！」
島風が預かっていた単眼鏡を明石に返し、それはそのまま大淀の手に。そして、今回の治療を受けた者達をそれによって確認していく。
鎮守府での実験では完全に違う細胞へと変質していたのだが、深海棲艦の身体を介しての治療は今回が初めて。まずは完璧に失われていることを確認し、さらにまた細胞を分析して、本当に何事もないことが確定したらようやく決戦に向かえるようになるだろう。
ここは本当に慎重にいかなければ、最悪なことが起こりかねないのだ。ただでさえ、春雨の細胞と結合されそうになった途端に侵蝕と同様の反応がこの場で発生したくらいなのだから、この治療法が確立されていなかったら、現場でこれが起きていたということになる。
「皆さん、黒幕の細胞の反応はありません。これで決戦の場に立っても、何かしらの影響は無いでしょう」
少なくとも、この単眼鏡によって黒幕の細胞が、そしていつもの眼鏡によって端末による侵蝕が、体内に存在しないことが確認出来た。無論、施設周辺にそれが漂っているなんてこともない。
「これって後遺症って言えないかな……」
紅く染まったインナーを見て困った表情を浮かべる白露。実際この副作用、春雨の怒りの色を受け継ぐというのは、精神的に大きな影響を受けるような深刻なものではない。全身の細胞に混ざり合い、別のものになったことを表に出すかのように、その内側から出てきたモノを紅く染める。それだけ。
白露が試しに艤装も展開してみたところ、まるで春雨の義腕や義脚のように、うっすらと紅みがかっているのがわかる。やはり、ここに

も春雨の細胞の影響が見えた。
それほどまでに、春雨の細胞が黒幕の細胞を嫌っていると考えられる。怒りの矛先であることを細胞単位で把握し、そこにあるその要素を自らの身を以て滅ぼし、全く別モノに書き換えてしまうくらいに。
「まぁ苦痛なんて全く思わないし、むしろ救ってくれてありがとうなんだけどね。頭の中も書き換えられてるわけじゃないし、身体も全く不調無し。時間経過は必要かもしれないけど」
艤装を消した後、軽く身体を動かしても何も変わっていない。それどころか、前より力強く動くような感覚さえあった。治療によって細胞が変質したことで、さらに強くなった可能性すらある。
「ひとまず、また皆さんから細胞を一部貰えますか。何かあった時の対処法を考えられるように。何も無いに越したことはないですけどね」
決戦は間近だが、それでも万が一のことを考えれば、ここでは後のことを考えておくべき。そこは慎重に行かなければ、その身を滅ぼすことになりかねない。戦いが終わった後でも。
代表者から渡すとかではなく、全員が髪の一部や体液を提供。叢雲も嫌気を隠すことはなかったものの仲間に合わせた。ここまでされたのに後は放置なんて言われたら余計に怒りが溢れると、むしろ自分の最終的な面倒を見ろ、何かあったら殺すと言わんばかりである。
「ではこれで完全に終了です。お疲れ様でした。特に春雨は血液の提供ありがとう。貧血とか大丈夫？」
「はい、今のところは大丈夫です。体調不良はありませんね」
「でも、今日は安静にしてね。動いたらフラつくなんてこともあり得るから」
今回の治療でそれなりの量の血を抜かれている春雨は、今日の残りの時間はゆっくりと休んでくれとのお達し。出来ることなら精のつく料理を食べてもらいたいと、宗谷から貧血に効きそうな食材を提供される。中間棲姫もそれは喜んで貰い受けた。
実際、艦娘から採れるギリギリの量を貰っているため、明石としても心配ではあった。自然治癒力が艦娘よりも高い深海棲艦ならばさ

らに許容量が増えそうではあるが、それでもこれが何かの不具合のきっかけになったら目も当てられない。それこそ、これがきっかけで決戦に出られなくなったなんて言われようものなら、その責任は取れるようなものでは無いだろう。
「春雨姉さんの身の回りのお世話は、この海風にお任せください。今日は体調不良と同じように扱わせていただきますので」
「うん、それくらい徹底した方がいいかもしれないね。姉姫様、妹姫様、今日はゆっくりさせていただきます」
「ええ、大丈夫よぉ。特別に何かしなくちゃいけないことは無いんだもの。いくらでも休んでちょうだいねぇ」
春雨に限らず、細胞が混じった者達も経過観察の段階ではあるため、行動には慎重性が求められた。午後からはトレーニングの予定だったが、どちらかといえば身体に馴染んでいるかのチェックに使うことになるだろう。
白露の先程の確認から、艤装の動きも見ておいた方がいい。それこそ、施設から少し離れた場所で模擬戦なんてこともした方がいいかもしれない。
「他の全員のチェックもしたよー。誰にも黒幕の細胞は無いのを確認！」
そう話している間に、島風がこの場に集まった施設の者全員をチェックして、何事もないことを確認した。その素早さを遺憾無く発揮しており、手早く全てを終わらせる。これによって今回の治療と調査は全て完了となった。
「それでは治療は以上です。ここからは通常の調査隊の業務でどうぞ。私はこの場で確認出来るところは確認しておきます。危ないことがあったら今すぐ知っておくべきですからね」
簡易的な装置であっても、重要なことは調べられるようにしてきたということで、今貰った結合した細胞の調査はこの場でやっていくとのこと。ここで問題が見つかった場合は、この場ですぐに対処したいため。
問題点を持ち帰ったとしたら、最悪この場でおかしなことになる可

能性だってあるのだ。勿論、今は大丈夫でも明日になったらおかしなことが起きているという可能性だってあり得る。馴染めば馴染むほどいい方向にも悪い方向にも向かっていくかもしれないのだから。
「……それじゃあ……近況報告、とかで」
山風もこういう展開になるとは思っていなかったのか、ひとまず普段の調査隊として、施設の状況把握に努めることにした。

この少し空いた時間、混成組はすぐに自分の身体にしっかり馴染んでいるのかの確認を始める。明石がまだここにいる時に、何かしらの不調が見つかった場合は、すぐに見てもらえるためだ。
わかりやすく自分の状況を知るには、まず艤装の展開。そこから自分の出来ることをある程度やっていく。海に出なければ出来ないことはそれもやる。岸に集まっているため、その行動に移るのも容易。
「それじゃあ出すわよ。波が立たないようにするつもりではいるけど、ある程度は自衛して」
まず真っ先に確認したかったのは、コロラドの白鯨。大きくスタミナを消費する代わりに、無敵に近いくらいの巨大な生体艤装を展開する荒業。
そして、合図と同時に展開。海上に見上げるほど大きな生体艤装が展開され、その質量の発生によって波も立つ。とはいえ、離れた場所からなるべく慎重に展開したことで、津波のようなことは起きなかった。
「……よく見ると、うっすら紅くないですか？」
「うん、前の合同演習で見たけど、その時は真っ白だったんだよね。でも今は影響を受けてるように見える」
白鯨と言われれば白鯨なのだが、その白い胴体に薄く赤みが差していた。むしろそのせいで血が流れているように見えるため、余計に生々しい表面となっていた。
だが、影響はそれだけでは無かった。白鯨をある程度コントロールしているコロラドが、自分に違和感を持つような表情に。

白鯨を消したコロラドが岸に戻ってきたところで、それにいち早く気付いた春雨が何かあったのかと問う。
「コロラドさん、何かありましたか？」
「いや、そのね、あまり疲れなかったのよ」
この白鯨は、スタミナを大幅に消耗するために多用厳禁の裏技みたいなものである。今のように試しに展開しても、多少は疲れが出てしまうのが普通。ただでさえスタミナが足りないコロラドには、1日に2回くらい使うだけでもスタミナ切れを起こす。
しかし、今回の白鯨展開では、あまり疲れを感じなかったと話す。ピンピンしているというわけではないのだが、いつもは今の数倍はスタミナを持っていかれるとのこと。
「もしかして……あの、古鷹さん、艤装を展開して一番疲れる動きをしてもらえますか？」
「えっ、あ、うん、わかった」
春雨に言われ、古鷹も艤装を展開。レ級艤装を両腕で持ち上げ、大量の艦載機を吐き出した。施設近海の哨戒も兼ねた行動であり、以前に飛行場姫がやった全方向への哨戒機の展開まで。
さらには砲撃と雷撃を同時に放てるようにスタンバイ。今は陸の上であるためそんなことをするわけがないのだが、いつでも放てるぞという状態にすることで完全な臨戦態勢へと移行する。
視野が大きく拡がり、それを脳内で処理しながら全ての行動を意識する。さらには、自分の視界から入る情報も同時に演算して、砲撃を放つか魚雷を放つかのタイミングを図る。今はそれを戦場で行なっているわけではないので緊張感という追加要素が無いのだが、古鷹の中ではこれが一番疲れる行動。
「……あれ？　確かに、あまり疲れない、かも」
この中では特にスタミナ不足だった古鷹がこう言うのだから、これで1つの確証を得ることが出来た。
「治療でスタミナ不足がある程度解消されてるんじゃないですか？」
「かもしれない。午後から模擬戦をやってみた方がいいかも」
古鷹を筆頭とした致命的なスタミナ不足は、トレーニングで多少は

改善されてはいたものの、それでもかなり厳しい問題ではあった。明石がスタミナ消耗を抑えるアイテムを作ることが出来ればなんて話していたが、それもまだ出来上がっていない。
しかし、この春雨の細胞が混じり合って新たな細胞へと変化したことで、異常なスタミナ不足が改善されたのではないかと感じた。
「調査隊のヒト達って、いつまでここにいてもらえるんでしょう。午後もいてもらえるなら、この場で演習をお願いしてもいいかもしれません」
「だね。ちょっとお願いしてみよう」

この古鷹のお願いを、調査隊は快く承諾。タブレットで鎮守府にも連絡し、午後イチに特別演習を組むこととなった。

頼るのならば姉を

春雨の細胞の混合液を使うことによって、黒幕の細胞の脅威から脱却することが出来た魂混成組。治療後にその身体を確認しても、一片も残っていないことが確定した。

その後、その変化――春雨の紅に染まっているところを確認している最中に、異変を感じる。コロラドが白鯨を展開した時、いつもなら確実にある疲労をあまり感じなかったと言うのだ。

同じように古鷹も艤装を展開し哨戒機などを飛ばしたのだが、やはり疲労感が少ないということで、一度調査隊の面々と演習をして、身体の具合を確かめる方向となる。

「慣らしが必要というわけデスネ。でも、Ｃｏｌｏｒａｄｏの相手は骨が折れそうデース」

「ですね。あの鯨は斬ること出来ませんし」

金剛と比叡はすぐに納得。細胞そのものが変質したというのなら、それを慣らすための時間も必要だ。自分達も、改装されたりした時は多少の慣らし期間を設けられるくらいだ。少なくとも半日は訓練や演習で慣らす。深海棲艦だからといって、それを怠るのはよろしくない。

そうなると、施設の者達は全力で戦いを挑んでくるだろう。そうなると、鎮守府側も全力で対抗する必要がある。しかし、今回治療を受けた者の半分は大型艦。コロラドと大鳳は言うまでもなく、古鷹も重巡の皮を被ったレ級なので大型艦扱い。白露と叢雲だって、駆逐艦と考えてはいけないレベルの力を持っているため、相手をするのもなかなか難しいところである。

ちなみに潜水艦姉妹は不参加。決戦に参加しないというのもあるが、戦い方がまるで違うため、演習よりは近海を泳ぎ回って身体を慣らしていく方針。午後からの哨戒に参加することでそれをこなす。

「Ｉｎｄｉｖｉｄｕａｌ（個人）ｍａｔｃｈ（戦）かＴｅａｍ（チーム）ｍａｔｃｈ（戦）かで、やり方は変わりますね。コンゴーとヒエーには頑張っていただかなくては」

「デスネ。でも、制空権が必要になったらサラには動いてもらいマース」
「はい、勿論。全力で」
　ニッコリ笑うサラトガだが、実際この中で一番の手練れである可能性がある。何故なら、あの武蔵を押さえ付けるほどの力を持っているのだから。
「あちらの出方次第で考えまショウ。例えば古鷹1人だったら、私と比叡で相手をしたりしマース」
「2人がかり、ですか？」
「Ｙｅｓ．　比叡はレ級相手に1対1で勝てるカナ？」
「あ、あー……そう言われると、厳しいですかね」
　今の自分ならば、負けないだろうが勝ち切るのは少し厳しい。というのが比叡の回答となる。実際、戦艦レ級というのはそれ程に危険な深海棲艦だ。
　古鷹は今や完全にその力を使いこなせる上に、艦娘としての考え方を持ち合わせているため、同じとして見るのは間違っている。さらに上として考えるのが妥当。ならば、2人がかりでちょうどいいくらいではないかと金剛は考えた。
　それに、それ以外にも理由がある。
「まぁそれだけじゃないケド」
　ふふんと笑みを浮かべる金剛。比叡は頭の上にはてなマークを浮かべるのみだった。

　昼食後、話していた通り、治療された者達の慣らし運転のために模擬戦を行なう。
　参加する者は施設に一切の被害が出ないくらいに離れた場所に集まった。鎮守府の者は宗谷を除く全員。施設の者は決戦参加組。そして、その模擬戦の戦場となる海の上空では、中間棲姫の哨戒機が飛んでいた。
　今の時間は午後の哨戒の時間でもある。模擬戦に参加せずとも、施

設の哨戒は続けられており、この戦場にも泥が迷い込んでくる可能性があることを考慮して進めてくれと、姉妹姫からのお達しである。
「これだけ離れれば大概のことが出来るわね」
「アンタの白鯨は邪魔くさいものね」
「アンタの馬鹿でかいＬａｎｃｅよりはマシなつもりよ」
　叢雲とコロラドの煽り合いは相変わらずではあるため、もうスルーである。
「今回は慣らしなのはわかってマース。なので、やり方はそちらに任せてますネー」
　ここで真っ先に行動を起こしたのは古鷹である。この模擬戦の言い出しっぺであり、一番のスタミナ不足を抱えている者。だが、治療の副産物でそれが失われているかもしれない。それを知るために、まずは自分がと率先して前に歩み出た。
「まずは私１人でお願いします。少しでも自分を追い込みたいので」
「Ｏｋａｙ．　では、相手は――」
「金剛さんと比叡さんでお願いします」
　鎮守府側が言う前に古鷹が願い出る。この慣らしは、この２人でなければならないと。奇しくも金剛が話していた通りとなる。
「一応聞いておきたいんですケド、何故私達をＣｈｏｉｃｅしたんデス？」
　問われると、古鷹はクスリと笑い、その理由を述べる。
「理由は３つあります。１つは、やっぱり自分の力が戦艦と同等になってしまっている上に、レ級となるとどうしても力の差が出てしまうので、同じ艦種のお二人がいいなと」
　ここは金剛も話していたこと。レ級の力を十全に使おうとすると、どうしても小型艦相手では押し潰してしまう可能性がある。そのため、拮抗している２人がいい。
「２つ目として、因縁……と言っては悪い言い方ですが、お二人とは、その、戦ってるじゃないですか。そこでいろいろとありましたから、今ここでもう一度、改めて相手をしてほしいんです。武蔵さんはいませんけど」

古鷹があちら側だった時の最後の相手はこの2人である。そして、金剛の手によって古鷹は瀕死の重傷を負い、体内から泥が排出されて正気に戻った。
その時の戦いは、古鷹としても嫌な記憶だ。混じっている2人の妹を盾にするような行為をしたこともだし、それによって温厚な金剛の真の怒りを買ってしまっていることも。だから、それを払拭するためにも、ここで正しい戦いをしたいと願った。
「3つ目は……本当に私情なんですけど、その、やっぱりこういう時はお姉様に頼りたいじゃないですか」
少し恥ずかしげに話す古鷹に、比叡はなるほどと納得。古鷹の中にいる榛名が、その思いを強くしているようだった。今の古鷹にとっては、金剛も比叡も姉のようなもの。
決戦に向かうための調整ならば、そこは最も信用出来る者を頼りたい。勿論、施設の者達だって信用出来る仲間なのだが、姉という存在はさらにそれを行く。
金剛の思っていた理由は、むしろ後者2つである。敵対していた時の最後の戦いは、金剛にとってもあまりいい記憶ではない。そのせいで、古鷹が自分達に負い目を感じているのではとも思っていた。
お互いにその思いを払拭出来るのではないかと、古鷹との演習は自分がやるつもりで考えていた。合同演習の時にも手合わせしているのだが、こういうカタチではなかったため、これもいい機会だと思い、使わせてもらおうと。
「Ｏｋａｙ．　それなら私達が相手しないわけにはいきませーン」
「ですね。気合、入れて、相手します！」
理由がわかったため、快く承諾した。

集まっていた者達から3人が離れ、改めて向かい合う。もう施設の島は水平線の向こう側。
演習に参加しない者達は、感知の眼鏡などを使って流れ着いてくる泥に警戒しながら、その戦いを見守る。

「それでは、よろしくお願いします」
古鷹が先に艤装を展開。今回は最初から全力を発揮するため、レ級の尻尾艤装と同時に、古鷹本来の右腕の艤装も扱う。その全てが紅みがかっているのは、春雨の細胞の影響。
「比叡、こちらも最初から全力デース」
「了解！」
金剛は盾を、比叡は刀剣を展開。金剛はともかく、比叡のそれは勿論模擬戦用の柔らかい素材。
古鷹にとっては、あの武器もトラウマの一部になりかけているが、逆に救ってくれた武器でもあるため、感情は相殺されている。
「では、行きます」
先制攻撃は古鷹。どれだけ離れていても、艦載機ならば容赦せずに攻撃が可能。
その万能さが古鷹のウリなのだが、今まではスタミナ不足によりこれが長続きしなかった。意地で終わりを先延ばしにすることも可能だが、後がキツい。しかし、今やこれだけやっても少しの疲労で済んでいた。
「数が多いネ……、比叡、私は三式弾で迎撃するカラ、Ａｔｔａｃｋよろしくネ」
「気合、入れて、行きます！」
金剛がバックアップ。繰り出された空襲を最低限撃墜しながら比叡の道を切り拓き、その出来上がった道を刀剣を振りかぶって比叡が突撃。
比叡は突撃しながらも砲撃を欠かさず、２人がかりであるが故に攻防一体の連携となっていた。戦艦の猛攻はそれだけでも大きな圧があり、砲撃の威力も並ではない。いくら演習用の模擬弾だとしても、直撃すればそれなりの衝撃と痛みに繋がる。
「近付かれると困りますね」
当然、古鷹もいいようにさせるつもりはない。突撃する比叡に対し、砲撃と雷撃を同時に放つ。雷撃は正面に、砲撃はその回避先に。さらには尻尾と右腕、どちらからも砲撃が放てるため、その弾幕は本

来の倍はある。
直進してくる相手には最も効果的なのだが、軽い砲撃ならば比叡は弾き飛ばしてしまう。幸いにも尻尾による砲撃は戦艦並みかそれ以上の火力があるため、弾き飛ばすことはかなり厳しい。腰を据えて斬撃に全力を使えば可能だが、突撃しながらでは無理と言ってもいいだろう。
「関係、なぁい！」
それでも比叡は突撃をやめない。どうせ砲撃は回避先にしか放たれていないのだから、真正面から来る雷撃だけを回避してしまえば前に進める。そして、雷撃は跳び越えてしまえばどうとでもなる。
だが、跳び越えるということは空中で無防備になるということにほかならない。そのため、比叡は即座に砲撃。向かってくる魚雷を全て噴き飛ばし、自分への脅威を全て取り払った。
「想定通りです。だからこそ！」
突撃は想定通り。魚雷が噴き飛ばされたことによって発生した水柱で比叡の姿が見えなくなるものの、回避先を砲撃で潰したのだから、そこを突き破って突っ込んでくることは想像に難しくない。
ならばそこを狙えばいいと、尻尾の砲撃をそこに向けて連射。それでも強引に斬り払われる可能性はゼロではないものの、確実に動きを止めることが出来る。突撃は回避可能。
しかし、砲撃によって水柱が失われたことで、そこで比叡と金剛が入れ替わっていたことに気付いた。
今まで艦載機を処理していた金剛が、ここぞとばかりに突撃し、比叡すらも追い抜いて、その盾を使って砲撃を防いでいたのだ。衝撃は大きいが、守ることに特化した金剛ならば、それを真正面から受けてもビクともしない。むしろ、自分から突っ込んで衝撃を強くしても関係なし。
「っりゃあああ！」
ならば比叡は何処に行ったのかと思いきや、金剛を跳び越えて古鷹に肉薄していた。そのまま受けたら、真っ直ぐ一刀両断となってしまう。いくら模擬戦用の刀剣とはいえ、脳天から喰らうことになりかね

ないので、これは回避せざるを得ない。
ここで古鷹は、小さくバックステップをしつつ身体を捻り、尻尾の艤装で刀剣に噛み付くことでそれを食い止める。ガギッと嫌な音はしたものの、勢いを完全に殺し、比叡の膂力でも振り下ろすことが出来なくなった。
だがこうなれば古鷹は無防備に近い。ここまで接近出来たのならば、砲撃だって相当な威力になる。比叡は機転を利かせて主砲を構えた。
「やらせません！」
しかしここも古鷹は対応。右腕の艤装を使って主砲に対して先に砲撃を放つ。撃つ前に撃つことで、まともに照準を合わせられなくした。
「ヒエ!?」
「これならば……っ」
「Ｎｏ．　私もいますヨ」
だが、一瞬でも全艤装を比叡に傾けたことで、今度は金剛の突撃に対応が出来なくなる。しかも、砲撃ではなく盾による打撃。ただ押すだけでも、高速戦艦の速力が乗れば強烈な体当たりとなる。
魚雷を放とうとしても、古鷹の魚雷は今や尻尾の艤装から吐き出すカタチでの発射だ。比叡の刀剣に噛み付いている今、それも不可能。自由に使えるのは脚しかない。
「比叡を放してくだサーイ」
そして、盾を使った体当たりは見事に直撃。古鷹の身体は宙を舞い、尻尾の力も抜けたことで刀剣が解放された。
しかし、古鷹は抜け目ない。吹っ飛ばされた瞬間に、尻尾から魚雷をばら撒いていた。それも相当量である。姿勢が完全に崩れている比叡はともかく、金剛もこの距離での雷撃は簡単には避けられず、見事に爆発に巻き込まれて水柱に包まれることとなった。
「ンー、比叡は直撃ダネ。でも、私はちゃんと防げたヨー」
「その盾、凄いですね……」
結果として、金剛１人が立っているという状態になって演習終了。

古鷹は敗北ということになったのだが、とても清々しい顔をしていた。
「まだ馴染んでないカナ？」
「そうですね、でも、まだまだいけますよ。やっぱり、みんなとトレーニングした甲斐もありますね」
ここまでやっても、古鷹は疲労の色を見せることはなかった。

春雨の細胞を取り入れたことで、スタミナ不足がある程度解消されたのは確かである。そして、それ以前に行なったトレーニングもしっかり効いていた。下地が出来ているからこそ、春雨の細胞はそれを引き上げている。

細胞の結果

模擬戦をしばらく続けることで、魂混成組は今の力を身体に馴染ませる。大鳳はサラトガと航空戦を、叢雲は島風との一騎打ち、白露は妹達との久しぶりの殴り合い、そしてコロラドは白鯨を用いた鎮守府側からの大討伐戦を繰り広げた。

ちなみに春雨はそれを見学するのみ。混合液を作るために血液を提供しているため、いくら深海棲艦だとしても安静にしておくというのが約束。それもあるため、海風も春雨の身を案じて傍から離れることはなかった。こうで無くても離れないが。

施設側を1人として戦うだけでなく、団体戦も数回は繰り返す。鎮守府での合同演習では出し渋っていた全力も存分に発揮し、自分のスタミナの限界を知るために、何度も何度も演習を繰り返した。

その結果、今までとは比べ物にならないくらいの時間を活動し続けることが出来ていた。これまでやってきたトレーニングでも、古鷹は真っ先にダウンしていたくらいなのに、今はまだ自力で施設に戻れるくらいの余力はある。疲れていないわけでは無いが、確実に戦える時間は延びていた。

「すごい、まだ動けるよ。かなり疲れてはいるけど」

「潮ちゃんとのトレーニングだと、今頃だともう立ち上がれていませんでしたもんね」

「うん、あれはまぁ全力疾走を延々とやらされるようなトレーニングだから極端だけどね」

あのトレーニングのおかげで基礎の部分は鍛えられていたが、それでも極端なトレーニングではあったため、古鷹では追いついていくのがやっと。少しずつ時間は延びていたものの、決戦までに間に合うとは到底思えなかった。明石にその辺りをどうにか出来そうな装備を打診するほどである。

だが、もうそれも不要と思えるほどになった。それでも十全とは言えないため、使える時間はトレーニングに使いたいと思っているようだ。

「相手すンのも大変だな……でも、こっちとしてもいい訓練になったンじゃね？」
「だな。あたいもまだやらにゃいけねぇことがわかってきたし。いい機会だったねぇ」
　特に相手をしていた江風と涼風は、身体中を模擬弾で汚しながらも充実した表情を見せている。この２人も決戦に参加する確率が高い者であるため、ここでもう一度深海棲艦との演習が出来たのは非常に大きい。
「またやりたい！　明日は鎮守府に来たり出来ないかな！」
「無茶言わないで。そっちはそっちでいろいろ手続きがいるでしょ」
「でも、今から戻って明日に呼ぶとか出来そうじゃない？」
　島風が結構な無茶を言うため、叢雲が呆れながら返す。とはいえ、今の鎮守府はそれくらいやってしまいそうだから恐ろしい。特に大将はその手の強めな権限を持っており、割と突発的にいろいろ決められる地位にいるようなので、島風がお願いしたら一言二言で許可を出してしまいそうである。
　とはいえ、施設側も今回の治療によって準備万端と言えるくらいにまで来た。ここまで来たら、演習では無く本番が近いだろう。
　ギリギリまで演習を繰り返したいのはわかるが、施設は施設で、この居場所を維持をするという最優先事項があるため、そうそう何度も呼べるものでもない。
「ともかく、演習も充分に出来たでショウ。次は演習か、もしくは本番か。それまでに、身体を崩さないようにしてくださいネー」
　金剛も大満足の結果だったようだ。中でも、古鷹に負い目が無くなったことが大きい。
　心身共に治療された施設組は、決戦では最も頼りになる仲間となるだろう。

　この後、軽めに事後処理を行ない、調査隊は帰投。明石の調査結果は追って連絡するとのこと。魂混成組の細胞を詳細に確認すること

は、今の環境では難しいようだ。ちゃんと鎮守府の工廠に戻ってから、いつもの3人で腰を据えて調査をする必要がある。
時間的には明るいうちに戻れるくらいになるだろう。そこから調査するとなると、早くとも連絡は明日になるか。
ひとまず全てが終わったため、全員で施設に戻る。その間に、演習中に島でやっていたことを全員に共有。
「明石ちゃんから、小型化したっていうバリアの装置を作ってるって聞いたわぁ。今までは治療薬に専念してたから開発に手が回せなかったらしいのだけれど、今回の結果が見れたから、すぐに作ってくれるらしいわぁ」
鎮守府でも使っている泥除けのバリア。あちらでは動かせないくらいに大きく、その代わりに鎮守府全域を守ることが出来ているという優れ物。それを施設側にも提供したいと思っていたのだが、先に述べた通り、持ってくることが出来ないサイズであるために断念していた。
だが、山寺鎮守府の明石との交流があったおかげで、必要最低限のシステムを組み込んだ持ち運び可能なシステムを開発中とのこと。もう決戦間近ではあるのだが、無いよりあった方がいいというのは確かであるため、たった数日のためになるかもしれないが作ってもらうことにした。
「哨戒中にまた泥が見つかったわねぇ。演習してる方には行かなかったから、こちらで処理しておいたわぁ」
その理由がコレである。こうしている間にも、また泥の脅威が迫ってきているからだ。
まだ処理出来る範囲内であるため、演習に参加していなかった者達が随時対処に向かっていた。これを鎮守府の面々がいる内に伝えなかったのは、やはり余計な心配をかけないようにである。まだこちらでどうにか出来るうちは、力をこれ以上借りることなく施設の者達だけで対処する方針。
「本当に頻度が上がってきてんだよなぁ。何処かで誰かが吐き出し続けてんじゃねぇのか？　何処ぞの観光名所みたいに」

「もう、竹ったら。でもそれくらいに思えるくらいに増えてきてるのよね……」
松竹姉妹が話す通り、泥を見る頻度が日に日に増えてきているのは間違いない。そこそこ長めに行なわれた演習中にも別の場所で発見されたレベル。演習中に泥が乱入してくることは無かっただけで、施設が狙われているのは変わらない。
今も帰投中の鎮守府の部隊が泥を発見している可能性がある。それくらいに向かってくる泥が増えている。『観測者』の対処も追いつかなくなる程の量。
「『観測者』がいなかったら、もっと流れ着いてるかもしれないのよね。そう思うと、アイツには感謝だわ」
「そうねぇ。あのヒトが私達を守ってくれているって実感出来るわぁ」
実際、ずっと顔を見せていない『観測者』のおかげでこの程度で済んでいる。ここ最近は春雨も監視されているように思えないため、泥の対処に専念してくれているのだろう。
それもこれも中立を保つため。黒幕を直接叩くことは出来ずとも、それに向かうための道はしっかりと使ってくれている。
逆に言えば、『観測者』がここまで手出しをしてくれなければ中立にならないというところまで来ているというのもある。それほどまでに黒幕の力は強大。しかし、その姿も形も誰もわからないという徹底ぶり。引き篭もりここに極まれり。
「でも、こんなこともそろそろ終わるのよね。それまでが踏ん張りどころよ」
「みんなには苦労をかけるけど、もう少しだけの辛抱だから、みんなで乗り越えていきましょうねぇ」
ここまで来ると、施設の団結力は非常に高い。絶対に屈することなく、この窮地を乗り越えてやるのだと声を合わせた。

この日の残された時間は少ないのだが、演習を行なった者達と治療

を受けた者達は休息をとる。春雨は休息を命じられたものであるため、素直にゆっくりとしていた。
ダイニングでお茶を飲みつつ、心を落ち着ける。心身共に休み、次の日のための英気を養うのだ。
「皆さんは、変に具合が悪くなったりしてませんか？」
春雨が気にしているのは、魂混成組の体調。自分の細胞が入っているのだから、気にならないわけがない。
演習ではその力を遺憾無く発揮し、従来以上の力を発揮しているようにも見えていたため、そのリバウンドが無いかどうかを確認していた。明石がいないので、これは施設内で知っておく必要がある。
「すこぶる順調だねぇ。演習で身体にも馴染んだ感じだし、むしろ今までより調子がいいレベルだよ」
まず白露が語る。他の者のようにスタミナ不足のデメリットを持っていなかったため、その分余計に元気だと力瘤を作って見せるほどだ。
「私も別に何とも無いわ。黒幕の細胞が殲滅されたってなら気分もいいし」
叢雲も同様。魂を混成されたわけでは無くとも、体内に黒幕の細胞を有していた者としては、それが失われただけでも充分だそうだ。気分がいいおかげで体調も良く、疲労感もあまり無いらしい。
「一番心配なのは古鷹さんだったんですが」
「うん、私も大丈夫。勿論疲れてはいるけど、時間が経ってもコレなら本当に調子がいいよ。あれだけ演習もやらせてもらったのにね」
古鷹もそうだが、演習で白鯨を展開したコロラドもピンピンしていた。あちら側だった時は1回展開しただけで息も絶え絶え、それを破壊されて2回目の展開が上手く行かなかったくらいだ。それが、今回は3回以上の展開をしても普通にスタミナ切れを起こさなかった。
「これも全て春雨姉さんの力のおかげですね。黒幕の戒めから解放し、その力によって皆を導くとは、流石としか言いようがありません。辿り着く力というのは、自分だけでなく仲間をも辿り着かせるということなのでしょう。その細胞を体内に取り入れたのですから、スタミ

ナ不足が失われた望むべき答えに辿り着いたのでしょうね。その細胞が身体の中にある限り、皆さんは常に春雨姉さんの御加護があるのです。これはもう皆さんも春雨姉さんを崇め、敬い、奉る必要があると海風は思います」
「海風やめてね。私はそんなことカケラも思ってないからね」
しかし、細胞のおかげで黒幕の軛(くびき)から解き放たれたというのは事実である。誰もが感謝しているし、足を向けて寝られないくらいには考えている。叢雲だって、そこまでは思っておらずとも、春雨のその力には感心しているくらいだ。
大鳳に関しては、元より春雨に敬意を払っているため、海風ほどでは無いにしてもかなり上位の方に見ている。女神と称しただけのことはあった。
「私としては、今日の夜がちょっと気になるのよね」
お茶を啜った後、頬杖をつきながらコロラドがボヤいた。
「私は助かったけど、私の中のアイツらが何か言い出すんじゃないかと思うのよ」
アイツらというのは勿論、コロラドに混ぜられている南方戦艦新棲姫と戦艦新棲姫の2人のこと。ほぼ亡霊のようにコロラドの中に滞在し、夢の中で対話が出来る特殊な存在。艦娘では無く深海棲艦が混じっていることによる、さらに特殊な状況。
その2人は外側(コロラド)に何かしらの影響を与えることが出来るのだから、逆も然り。混合液を取り込んだことで発生したその感覚は、あちらにも伝わっている可能性はある。
「それくらい屈服させなさいよ。アンタが主導権握ってるんでしょうが」
「当然じゃない。文句を言ってきたとしても飼い慣らしてやるわ。ただ、思ってることくらいは言わせてやるの。巫山戯たことを言ったら上から叩き潰して教育するけど」
叢雲の悪態にも即座に返す。心の余裕はコロラドの方が上。
「まずは一晩見てみるべきですね。眠って完全に落ち着いたところで、何か影響があったら困りますし。私としては何も無いことを祈り

ますよ」
春雨としても、自分が当事者みたいなものであるため、これで何かが起きたらと思うと気が気でない。一部は明石の責任ではあるのだが、やはりそこは春雨の心の問題。
「大丈夫です。何と言っても春雨姉さんの細胞なんですから、悪いことには絶対になりませんね。むしろ前よりも強化されているくらいですよ。戦闘中に確実に春雨姉さんに感謝するでしょう。そしてやはり、崇め、敬い」
「海風ステイステイ。春雨が困ってるから」
流れに任せると暴走してしまう海風を今度は白露が止めた。

ひとまず治療は完全に完了。一晩置くというのは必要かもしれないが、もう残すのは最終決戦のみだ。

中の問題

施設の夜。決戦に出ないメンバーによる哨戒は当然続く。空母棲姫が哨戒機を飛ばし、戦艦棲姫に加えてジェーナス、ミシェル、そして今日は薄雲という面々。ミシェルを除けば、本日治療を受けたメンバーではあるのだが、その後にしっかり休んだおかげで一晩の徹夜くらいは出来ると意気込んでいた。実際、鎮守府側との演習中は哨戒メンバーは昼寝をしており、その後もしっかり休息し、夕食後に仮眠までとった。これならば大丈夫だろうと、姉妹姫も良しとしている。

「ここ最近は泥が増えているから、気をつけてちょうだいねぇ」

「ええ、勿論。私達はその苦痛を知る者だから、それこそ親の仇のように消し飛ばしてやるわよ」

中間棲姫の言葉に、戦艦棲姫が忌々しげに語った。泥に対する怒りと恨みを特に知っているものであるからこそ、二度と侵蝕されてなるものかと躍起になって哨戒をするだろう。

ミシェルだけは侵蝕を受けたことは無いが、その事実を理解していないためにそもそも効かない。未だに侵蝕という敵の攻撃自体よくわかっていないまである。しかし、泥が良くないモノであることは理解しているため、ジェーナスと共に哨戒を続けていた。

「空母、近海全域は行けそう？」

「ああ、多分、行ける。姉姫にも、教えてもらった」

搭載数だけで言えば姉妹姫よりも少ない空母棲姫だが、そのコントロール技術はすくすくと成長し、2人に匹敵する程になっている。おかげで、島の中心から全域を見るということも可能。その状態で島の外に出られるのだから、空母としての戦力ならば下手をしたらトップクラスと言えるだろう。

「それじゃあ、行ってくるわ。貴女達は今はゆっくり寝ておきなさい。私達に任せて」

「ええ、そうさせてもらうわぁ。後少しの辛抱だから、よろしくお願いねぇ」

「そうね。その分、全力でここを守るわ。旅の途中でここに戻ってく

るのが私としては楽しみなんだもの」
黒幕の手はすぐそこまで迫ってきている。そんなことで戻ることの出来る場所を失いたくはない。そして、他の者にとっては戻るのではなく居場所そのものなのだ。それをしっかりと守っていきたい。

哨戒が始まる裏側では、この1日を終わらせる動き。夕食も風呂も終わり、眠るのみ。
夕食前の休息の時間で危惧していた、コロラドの中にいる2人の姫のこと。他の魂混成組とは違い、混じっている姫が亡霊のようにコロラドの中に住み着いているため、夢の中で会話出来るという特性を持ってしまっているわけだが、そこからコロラドに影響が与えられたように、その逆も発生している可能性があった。
つまり、治療の影響が2人の姫にもあったということ。それに対して、何かしらの文句が言われるのではないかと、コロラドは考えていたのだ。
「まぁ、文句を言われても仕方ないことにはなったから、好きに言わせてやるわ。そこまで抑え付けてやるとは考えていないから」
相部屋である白露や古鷹、大鳳にも相談しており、もし眠っている間に何かあったなら、すかさず起こしてくれとお願いしていた。前回は夢の中で戦った後に疲れがあまり取れなかったため、もしまた同じようなことが起きたら普通に困る。
今でこそスタミナ不足が対策されたため、そこまで疲れが取れないなんてことは無くなるだろうが、万が一のことは考えておいた方がいい。
「任せてよ。あたし達はもう一蓮托生みたいなものだしね」
「そうですね。同じ苦しみを分かち合うものだからこそ、こういう時こそ助け合いですよね」
「はい、私達に任せて、コロラドはグッスリと眠ってください」
3人が3人、コロラドのために動くと力強く宣言。そこまで大層なことにはならないだろうし、むしろそこまでになったら今の状態から

でも何かしらの影響はありそうではあるが、協力してくれるというのなら頼らせてもらう。
「Ｔｈａｎｋｓ．　それじゃあ、何かあったらよろしく」
「オッケー。じゃああたしが添い寝ね。変に魘され始めたら起こすからね」
「ええ、それでいいわ」
　そしてコロラドはいち早くベッドに横になる。以前と同じように、そうなることを強く願いながら目を瞑ると、そのまま深く深く眠っていった。
　やはり演習などで身体は疲れていたようで、お風呂に入ればそれがどっと出てくる。スタミナ不足がある程度解消されたとしても、疲れないわけではないのだから。
「今日は一段と早く寝息立ててるね」
　白露が少し驚いていた。元々寝付きがいい方とコロラド本人が話していたが、今日は格段に早いようである。
「いいこと、だよね。もしかしたらすぐにでも決着をつけてくるかも？」
「だといいんですけどね。簡単には終わらない気がします」
　大鳳の不穏な言葉は、的中することになる。

　さて、夢の中である。以前と同じように真っ暗な海の上、二度目のコロラドはひとまず周囲を見回す。前回夢の中で対話した時は、ここで無音の砲撃が飛んできて、聞こえていないにもかかわらずそれを察して回避することが出来た。
　今回は突然砲撃が飛んでくるようなことはない。それどころか、コロラドが夢の中に来たことを察知して向こうから会いに来たくらいである。
「悪いわね。また話をしに来た……ん、だけ、ど……」
　少し久しぶりに顔を合わせるわけだが、その姿を見てコロラドは言葉を失いかけた。

南方戦艦新棲姫も、戦艦新棲姫も、まるで当てつけのように真紅のレオタード姿で現れたからである。
「おう、これについて話をしに来たんだよな。大体わかってんだけど、ちゃんとお前からの説明をしてもらおうか。あぁ？」
「酷い目に遭ったわよ……。何より、コイツとペアルックにされたのが本当に気に入らないわ」
「それはこっちのセリフだ。それに、アタシらはコレ、なんでか脱げねぇんだぞ！」
流石にそれは予想していなかったため、コロラドは目を見開いて驚いた。
自分達はいち早くそれをやめたいと思ったため、いつもの服に戻ることは出来た。それが紅く染まっていたのは、むしろ治療を施された証として目に見えるモノであるため、まだ許容範囲内。
しかし、ここにいる姫2人はコロラドとは存在そのものが違う。肉体は失われ、殆ど細胞に居座る概念と化しているようなモノだ。細胞に混じり合った存在となれば、春雨細胞の影響もより強く受けることになるだろう。
その結果がこれである。コロラドと同様に姿を変えられたものの、外のモノと違ってその影響を強く受けすぎ、元の姿に戻れなくなってしまった。コロラドが夢の中で、しかもある程度意識しなければ見られない姿ではあるものの、本人達には大問題である。
「ぶっちゃけ、着心地は悪くねぇよ。でもな、コイツと揃いなのが気に入らねぇ」
「正直なところ、動きやすくて悪くないとは思ってるけど、コイツと同じ格好とか気分が悪くて仕方ないのよ！」
別にその姿に何か文句があるわけではないらしい。元々の姿がそれに近いわけではないのだが、深海棲艦の中では非常に多い、身体のラインがよく見える服装を好んでいた2人には、レオタードくらい別にどうということはないとのこと。むしろ、互いにこの姿は悪くないと思っているくらいだ。姿にこれといったトラウマを持っていないために、むしろこのままでも全然構わないとまで思える。

しかし、犬猿の仲である相方が自分と同じ姿をしているというのなら話は別である。変化中にも罵り合い、変化した後も罵り合い、姿をお互いに変えることが出来なかったことでも罵り合う。ただただ途方もなく喧嘩を続けるだけ。
「……なるほどね、うん、それは正直ごもっともな意見よ。私もそれについてはある程度重く考えるわ。私だけはちゃんと姿を変えられるのは、身体の主導権を持っているからよね」
仲が悪いのは知っているし、それを上から抑え付けていることでひとまずは止まっていたものを、今回の治療が再燃させてしまったことはコロラドも感じた。責任というわけではないが、こうなってしまったのは治療を受けたからだ。中の2人の意見を聞くことなく。
しかし、これをしなければ黒幕の思うツボ。決戦に参加した瞬間に今以上のことが起きるだろう。それこそ、結局ペアルックになっていた可能性は非常に高い。先に侵蝕を引き起こした後、春雨細胞によってそれを失わせているのだから、それが無ければあちら側のレオタードでペアルック確定である。
「でも、今は私がここにいるわ。主導権を持つ私がアンタ達に干渉すれば、服装くらい変えられるんじゃないかしら。アンタ達にも私の主導権は影響があると思うのよ」
細胞の主導権がコロラドにあるのなら、2人の姫に対しても何かしらの影響を与えられるのではないかと考えた。影響が与えられるのなら躾なんてことはしなくて済むはずなのだが。
やり方は気に入らなくとも、服装を変えることくらいは受け入れてくれるだろう。むしろ、コロラドの指示に従うより、相方とのペアルックを拒むはずだ。
「やれるならさっさとやってくれ。一分一秒でもコイツと同じ姿は気に入らねぇんだ」
「賛同するのは気に入らないけど、同意見なの。早く変えて」
これに関してはコロラドに従った。思い通りに行って苦笑。
「でも、うまく行かなくても文句言わないでよ。それで文句言ったら、前みたいな殴り合いになるから」

「それならそれで構わねぇ。次は勝つ。主導権も奪ってやるから覚悟しろよ」
「なんでアンタが勝つ流れなのよ。アンタが主導権持つくらいなら、この艦娘が主導権持ってた方がマシよ」
　相変わらずの喧嘩だが、2回目の対面なのにずっと見せられていると慣れてしまうもの。もうツッコミを入れることなく、コロラドは事を進めていく。
　しかし、言い出したもののどうやればいいのだろうと少しだけ悩んだ。見ているだけでは何も出来ないだろうから触れてみるか。それとも脱げないというのだから脱がしてみるか。いろいろと考えた結果、ひとまず戦艦新棲姫の頭を撫でるように掴む。
「ちょっ」
「手頃な高さにあったから」
　ケラケラ笑う南方戦艦新棲姫を睨み付けるが、コロラドは気にせず念じてみる。考えていることがそのままカタチに出来るのなら、夢の中でなら余計に好き勝手出来るのではないかと考えて。
　結果、戦艦新棲姫は元の姿に戻ることに成功。しかし、コロラドと同じように少々紅みがかっていた。
「……ふぅ、これで落ち着けたわ。こんなヤツと同じ格好だなんて死んでもゴメンよ」
「こっちのセリフだ。アタシは別にこのままでもいいぞ」
「私が気に入らないからとっとと戻りなさい」
　高さ的にか、南方戦艦新棲姫には顔面を掴むアイアンクロー形式で姿を元に戻した。その姿に戦艦新棲姫はニヤニヤしていたため、事が済んだ後にまた喧嘩が始まる。
「チビだから頭撫でられたんだろうが！」
「憎たらしいから顔面掴まれたんでしょうが！」
「仲良くしろとは言わないけど、ヒトの中で喧嘩するんじゃないわよ。鬱陶しい」
　それこそ殴り合いの喧嘩が始まりそうになったため、コロラドは溜息を吐きながらも白鯨を展開。実力行使で黙らせることとなった。

むしろ、今後はこちらの意向でペアルックにすることくらい出来るという事実が判明したので、お仕置きとしてそうする方向に持っていけそうである。

これでコロラドの中の問題も解決。問題と言えるようなことだったかもわからないが。

最後の戦いに向けて

翌日、鎮守府。施設の状況も確認出来たため、ついに最終決戦の日程を決定する。また、堀内鎮守府では出撃するメンバーの決定も控えているため、本日中に終わらせる予定である。

日程に関しての打ち合わせのため、朝イチから各鎮守府の代表者が会合を行なう。相変わらず山寺提督だけは顔を見せることはない。今回はご丁寧に、画面上に『ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ』と冗談みたいな言葉まで表示させてきた。

ここには中間棲姫も勿論参加。山寺提督とは公の場では初めての対面。あちらの顔は見えていないが、互いの声を聞きながら話し合えることを中間棲姫は喜んだ。

『初めまして、お顔が見えないのは残念だけれど、事情があるのよねぇ』

『申し訳ございません姫君、仕事の特性上、なるべく顔を知られるわけにはいかないのです。それについてはご了承ください』

『あらまぁ、これはご丁寧に』

顔は見えなくとも、中間棲姫に対してはとても丁寧な対話を試みる。しかし、山寺提督を知る者からしてみれば、この態度自体がフェイクなのではと思える程に怪しかった。

『姉姫、知っていると思うけれど、彼があの監査のトップよ。ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンの上司ね』

『あらあら、それじゃあ私達の在り方を認めてくれた張本人ということになるのね。その節はどうもありがとう。私達の平穏を認めてくれて』

『いえいえ、滅相も無い。貴女方の生き方は、我々と同じですので。平和を求める者の生活を脅かす理由は、我々にはあってはならないことですよ』

言い方と態度はさておき、この考え方は間違ってはいないし、本心からの言葉。元を知らないからこそ、これが本心であるのなら信用に値する者と判断出来ること。中間棲姫は山寺提督に対しての信頼を

持つに至る。
『それじゃあ、ええと……お顔が見えないし、貴方のことは音声くんと呼ばせてもらうわねぇ』
山寺提督を除く提督一同が一斉に噴き出した。大塚提督を眼鏡くんと呼ぶようになった時も大概だったが、この身も蓋もないネーミングセンスだけは中間棲姫のおかしなところでもあった。
『ははは、好きなようにお呼びください。俺も貴女のことは皆と同じように姉姫と呼ばせていただきます』
『ええ、それでいいわぁ。これからよろしくねぇ』
初対面の2人の挨拶が終わったところで、ここからは本題。このタイミングで会合が開かれたことから、話題は決戦についてであることは間違いない。
『ここまで準備が出来たのなら、明日から動き出していいでしょう』
まず大将が日程を提示。時間をかければかけるほど黒幕が力を増していくのだから、ここまで整ったならばもう向かう方がいいと考える。実際、これは焦って出撃するわけでは無い。思いつく限りの対策が出来ているために、決断したに過ぎない。
その言葉に対して、異論を唱える者はいなかった。こういうタイミングで口を出すことが多い山寺提督も沈黙。この選択に文句は無いということにほかならない。
『艦隊の強化は言い出したらキリが無い。その線から外に出ている対策が出来たと言うのなら、もうここで仕掛けた方がいいとは俺も思う。こちらでも出来ることは底上げだけになっているからな』
大塚鎮守府がやらなければならないのは、堀内鎮守府や施設からやってくる部隊の受け入れが主。つまり、以前の堀内鎮守府のように、深海棲艦を鎮守府の中に入れること。
それに関しては、大将の手腕で簡単に申請が通っており、時間的に翌日に向かうというカタチになったとしても、全員に部屋を提供出来るようにもしてある。そのため、本当にやることが底上げだけとなっていた。
無論、それが出来るところにはいるので、参加するメンバーの練度

は限りなく上がり続けている。機会があればまた演習がしたかったものだが、それは流石に無理そうである。
「こちらとしては、一部の艦娘には施設の防衛にも向かってもらおうと考えています。最低限、鎮守府を守るバリアを提供することはしますが、万が一を考えれば哨戒が出来る者達を増やすべきだと思いまして」
『ええ、それはいいことだと思うわ』
バリアの小型化は、明石達が現在絶賛構築中。山寺鎮守府の明石からの技術提供のおかげで、もう完成の目処がついている。明日どころか今日の午後には提供出来るだろう。こちらも早ければ早いに越したことはない。
『そこまでしてもらってもいいのかしらぁ。こちらはこちらで自衛をしていこうとは思っているんだけれど』
「構わないよ姉姫。それに、ここ最近は泥が流れ着いているだろう。バリアだけでは耐えられないなんてことがあったら、困るのは君達だけではないからね」
『それはそうねぇ。私達の誰かが、貴方達を困らせることになりかねないわぁ。それに、遺恨は残したくないものねぇ』
中間棲姫としては、そこまで尽くしてもらってもいいのだろうかと少し悩んだものの、万が一を考えると、何かと手を貸してもらった方がお互いのためになるだろう。
それにしても守ってもらいっぱなしに思えたものの、その分、多種多様な情報を提供しているのでお互い様だと堀内提督に言われたことで、この場では納得する。
『あ、じゃあせっかくですし、こちらからもビスマルクとグラーフを提供しときましょうか。必要ないかもしれないが、そういう防衛の部隊を組むのなら、戦艦と空母はいた方がいいと思うから』
「まるで、僕が組む出撃メンバーが予想出来ているように感じますね……」
『すまないが、予想は出来ているよ。ある程度はね』
実際、堀内提督は施設に足を踏み入れたことがある者達に施設防衛

に参加してもらうつもりで部隊を組むつもりだった。そして、それは決戦参加に入りきらなかった者で。
この鎮守府の主力と言える金剛と比叡、航空戦の要である空母の中で特に強いところにいる千歳と千代田は、決戦メンバーに加えようと既に考えていた。そこからさらに主力と言えるメンバーを注ぎ込もうとすると、施設への防衛に向かってもらうのは、北上、大井、漣、曙、朧、そして宗谷の6人。
これを見越した上で、ビスマルクとグラーフを施設に置くと言い出したのだ。
施設にいる戦力は、防衛部隊なんて必要が無いくらいに強力だ。1人1人が姫なのだから、何かあっても余裕を持って自衛が出来るだろうし、あの姉妹姫が島から移動出来ない以上、施設を存続させるために全力を出すのは当然のこと。その持っている力を十全に使い、何人たりとも近付くことが出来ないくらいに籠城戦をすることだって可能だろう。
それでも、想定外というものが存在する。例えば、艦娘にしか触れないモノだとか、その逆だとかを用意されたら、どうしても厳しくなるに決まっている。そういう抜け道を作らせないように、艦娘と深海棲艦の二面体制で迎え撃つ。何も来ないかもしれないが、それならそれで何も問題はない。準備しておいて損は無い。
『それでは、決戦は明日。姉姫、申し訳ないんだけれど、明日の朝に参加する者達を堀内鎮守府に向かわせてちょうだい』
『ええ、そのように話しておくわぁ』
『その後、堀内鎮守府から纏まって大塚鎮守府へ移動。そこからは時間次第だろうけれど、私の想定では一度そこで夜を明かしてから、翌々日の朝に最終決戦となると思うわ。これで良かったかしら』
時間のこと、体調のことを考えると、この流れがベストだろう。施設の者達は移動に次ぐ移動でどうしても疲れが出るだろうし、向かう先が今までに行ったことのない鎮守府でもあるのだから、精神的な疲労もあり得る。
万全の状態で戦うのなら、移動に使った疲労を回復した後に向かう

のがベスト。緊張感を一晩持ち越さなくてはいけないというデメリットはあるものの、その程度で精神的なダメージを負うようなことはもう無い。
『堀内提督、明日は私もそちらに向かいます。吹雪を参加させるので』
「了解です。お待ちしております」
『大塚提督、準備が出来次第そちらに連絡するカタチで良かったかしら』
『はい、問題ありません。こちらでも今日中に整えておきます』
決戦の準備は最終段階。あとは、向かって斃すだけ。

会合終了後、堀内提督は工廠へ。決戦部隊と施設防衛隊を通達するべく、該当者を呼び出す。
ゾロゾロとやってくる艦娘達だが、正直なところ、呼ばれるのではないかと考えていた者ばかり。
今回の事件に関係している者のみで部隊を組むのは最初からわかっていた。施設に実際に向かったことがあるもの、深海棲艦と共闘したことがあるもの、そこが今回のキモ。
「明日、最終決戦に向かうことになる。今呼び出された者達は、わかっていると思うがそこに参加してもらうよ。構わないね」
勿論だと言わんばかりに全員が頷く。むしろ、ついにこの時が来たかと武者震いするものまで。
「大将とも話し合って参加する者を決定した。部隊は3部隊に分ける。かなり大人数の戦いになるが、陸上施設型の拠点を落とす戦いだ。全員纏まって向かうことにはならないかもしれない。分散して戦うことにもなることを考えると、こうせざるを得なかった」
五月雨からタブレットを渡され、その部隊を読み上げていく。
「第一部隊、旗艦金剛。随伴艦は比叡、千歳、千代田、武蔵、サラトガ」
戦艦と空母のみの部隊。とんでもない重量編成ではあるのだが、その重さを使って圧倒的な火力で押し込む。ここに加えられた武蔵は、現場では大塚鎮守府の大和と行動出来るように既に話が通っている。

そのため、実際は５人の部隊。
とはいえ、この５人はおそらく固まって動くようなことはしない。個別に動き、その場を引っ掻き回すいわば遊撃部隊だ。その時その時で必要な行動を選択する。
「第二部隊、旗艦山風。随伴艦は江風、涼風、荒潮、島風、そして今はここにいないが大将の吹雪が参加する」
こちらは打って変わって駆逐艦のみで構成された超軽量編成。山風と荒潮は対地攻撃可能な装備を使い、残りの４人でそれをサポートしつつ、個々の戦闘力の高さを使っていく。
この中でも、島風の指揮能力と涼風の空間把握能力には重きを置かれており、第一部隊とは違って団体で動くことを意識していた。
「第三艦隊は決戦の場ではなく、施設の防衛に当たってもらう。旗艦北上。随伴艦は大井、漣、曙、朧、宗谷。また、島では山寺鎮守府からビスマルクとグラーフ・ツェッペリンと合流することになる」
陸上施設型には少し分が悪い雷巡である北上と大井を施設防衛に回し、その力を遺憾無く発揮してもらう。
北上組である漣、曙、朧もそちらへ。これは精神的な部分を考慮してであり、あの施設に潮がいるため。
宗谷に関しては、基本的には物資輸送の面で施設に向かい、そこから鎮守府に帰らないというカタチでの部隊配属となった。
「残りの者、五月雨を筆頭とした者達は、この鎮守府の防衛に努めてもらう。対策はしているが、もしものことを考えると、鎮守府からも全力を取り除くことは出来ない。むしろ、ここを守らなければ帰って来れる場所がないからね。それはよろしくない」
最終決戦に勝利出来たとしても、それで鎮守府が失われていたら目も当てられない。それを防ぐためにも、残された者達は全員が鎮守府を存続させるために行動する。
基本的には何も起きないはずだが、それこそ何が起きるかわからないのが今の黒幕だ。備えるに越したことはない。

「以上だ。何度も言うようだが、決戦は明日。それまでは自由に過ごしてほしい。ギリギリまで鍛えてもいい。身体を休めるのもいい。悔いの無いように、明日を迎えよう」

最後の1日

最終決戦の日程が決まり、そのことが施設内でも展開された。明日になれば、施設の代表となる者達が早朝から出向し、少しの時間を島の外で過ごすことになる。

ここから少し離れることになるというのは、施設に馴染んだ者であればあるほど心細くなるものだが、参加者は黒幕への復讐心が強めな面々。心細さよりも使命感の方が強いため、この程度で崩れるようなことはない。

以前の春雨ならば、島から離れるだけで泣きじゃくるくらいに壊れていただろうが、今までの波瀾万丈な紆余曲折のおかげで、これくらいならば充分に耐えられた。そうでなければ以前の鎮守府での合同演習なんて行っていられない。

「出発は明日の早朝になるわぁ。だから、今日はトレーニングをするにしても程々にして、明日に向けて早く休んでちょうだいねぇ」

日が昇り始める頃にはもう島を出るくらいになるだろう。前回の出向の時から考えれば、それであちらの朝食終了に到着出来るくらいになる。

「短く見積もっても、2泊3日くらいになるかもですよね」

「そうねぇ。明日に眼鏡くんの鎮守府に到着して1泊、次の日に決戦で斃したとして、そこから真っ直ぐ帰るのは難しいと思うから1泊って感じかしらぁ。もしかしたらそれ以上になるかもしれないものねぇ」

順調に行ってそれだ。もしかしたら、鎮守府に到着したところで何かしらの不具合が発生する可能性だって無くはない。

何と言っても、その場所は黒幕の拠点に限りなく近い場所。出来る限りの治療と対策をしたとしても、それすらも潜り抜けてくる可能性が無いとは限らないのだ。

そうなってしまった場合、その原因解明に時間を使う可能性はある。そうならないことを祈っているが。

「あちらの鎮守府は歓迎ムードらしいから、気負うことも無いわぁ。

部屋もしっかり用意してくれているみたいだから、もし何だったら枕を持っていくといいわよぉ。眠れないなんてことも無いはずだからねぇ」
　枕が変わったら眠れなくなるなんていうことは無いとは思うが、初めての場所と緊張感のダブルパンチで眠れないなんてことはあるかもしれない。そういう時のために、枕くらいなら持っていくことはありか。
　実際、この決戦の話題が出てから少しだけ空気がピリついたのは誰もがわかっていること。ついにこの時が来たのだと拳を震わせる叢雲や、ここまで得体の知れない敵を相手にすることに若干不安がある古鷹。心を落ち着かせようとグッと手を組むコロラドに、深呼吸をする大鳳と、どうしても戦いを意識してしまうことで緊張感を生み出してしまっている。
「いつも通りにやればいいよね。あたし達、ここまでめっちゃ努力してきたんだから。通用しない相手でもないでしょ」
　ここで場を和ませようと少々軽めに話し出す白露。努力が通じないわけがないと笑顔で言い放つ。
「付け焼き刃なところもあるかもしれないけどさ、一方的に負けるなんて有り得ないね。それに、抵抗出来ずに再洗脳みたいなことも明石さんのおかげで無くなってるんだし。二度も三度もやられて堪るかっつーの」
　強大な敵かもしれないが、ここまでやってきたのにそれでも届いていないなんてことはないと断言する白露。
　それに合わせるように、春雨も声を上げた。
「ですね。ちょっと前までだったらダメだったかもしれませんけど、今なら不安はありません」
「ねー。相手が泥の塊だろうが島そのものだろうが関係ないよね。やれることをやれば、勝ちはあたし達の手の中だよ」
「はい、白露姉さんの言う通りです。……どちらかといえば、今は夕立姉さんかな？」
　こういう好戦的で楽観的な物言いは、白露というよりは夕立に近

い。どんな強大な敵にも物怖じせず、戦いを楽しむかのように突撃する白露型屈指の狂犬。白露は今、自分に混じっているその妹の気質で話していた。
　おそらく、別の妹の気質であれば不安の方が大きくなっていただろう。真面目で慎重派な時雨の気質なら確実。のらりくらりと生きる村雨の気質でも難しい。白露本人の気質であっても、夕立よりはどうしても慎重にはなる。
　だからこそ、ここでは緊張感を取り払う。後先考えない発言であろうが、この場ではこれが最も適していると信じて。
「そうですね、白露の言う通りです。出来る限りの脅威は取り払った上に、ここまで努力もしている。実を結ばないわけがありません」
　そんな白露と春雨のやりとりを見て少し緊張感が薄れたのか、まずその言葉に賛同したのは大鳳。ここまでやってきたことが無駄になるわけがない。仲間達と共に駆け抜けてきた時間は、必ず勝利へと繋がる。
「当たり前よ。ここまで巫山戯たことをしておいて、タダで済むと思っていてもらっちゃ困るわ」
　叢雲もその意思を見せる。元々武者震いをしていたようなものだ。ほんの少しだけ後押しがあれば、そのやる気は一気に噴き上がった。
「うん、大丈夫。相手がどんな敵かわかっていなくても、ここまでやってきたことは嘘じゃないもんね」
「Ｙｅｓ．　私達はこの日のためにここまで来たんだから。Ｎｅｒｖｏｕｓｎｅｓｓ（緊張感）なんていらないわ」
　古鷹もコロラドも自分を奮い立たせる。ここまで来たのは勝つため。ただ自分を強くするために鍛えてきたわけではない。明確な目標を持ってトレーニングを続けてきたのだ。
「春雨姉さんが負けるわけがありません。大丈夫です」
　今までこういう時にはマシンガントークで周囲を呆れさせていた海風が、自信に満ちた表情でたった一言、力強く勝利を確信した言葉を発した。流れ続けていた春雨に対しての信頼を一言に凝縮しているだけあり、これだけでもあらゆる想いが伝わってくる。

「それじゃあ、決戦まで残り1日、自由に過ごしてちょうだいねぇ」

今日の作業は一切無しとした。農作業も漁も、1日くらいならやらなくてもいいくらいに資源はあるため、決戦前の最後の1日は仲間達と共に楽しく過ごしてもらいたいという姉妹姫からの計らいである。

言ってしまえばいつも通りではあるのだが、心持ちが違うため、こういう安らぎの時間はありがたいと春雨はゆっくりと過ごすことにした。

「何だかティータイムって久しぶりに思えちゃうね」

「でしょ？　こういう時だから、初心にかえろうかなって」

午前中はジェーナス発案のティータイム。心を落ち着かせるにはこれが一番だとジェーナスが言い出し、施設の外で日の光を浴びながらの穏やかな時間となる。

参加者はおおよそ半数。哨戒や施設の維持のための作業は欠かせないため、残念ながら相席することは叶わなかった。しかし、決戦参加者の心を落ち着かせるために開かれた席なのだから、外部からの邪魔を排除するために動けるのなら本望だと笑顔で近海を監視しに向かった。

「ジェーナスちゃんの淹れる紅茶は本当に美味しい。私がここに来たばかりの時にも飲ませてもらったっけ」

「ええ、ウスグモと一緒にね」

その薄雲もティータイムに参加。叢雲の心を落ち着かせるのは、甘味以上に薄雲の存在である。今も薄雲手製のクッキーを振る舞われながら、ジェーナスが淹れた紅茶で心を落ち着けている。

今だけは溢れ続ける怒りも完全に抑えられており、穏やかな心でこの時間を過ごすことが出来ていた。

「私がここに来てからどれだけ経ったかもう覚えてないくらいだけど、ジェーナスちゃんが言う通り、初心にかえるのはいいね」

「あんまりこんなことを言うのはどうかと思うんだけど、あの時が一番平和だったじゃない。一度その平和な時を思い出して、それを取り

戻せるように頑張ろうって思ったの」
　春雨が施設に辿り着いた時が、施設としては最も平和だったと言えるのは確かだ。そこから事件に巻き込まれていき、今やここも戦火の只中と言える。こうやってゆっくりお茶会というのもなかなか出来ない。
「あ、は、ハルサメ、勿論ハルサメのことを責めてるわけじゃないのよ。こうなるべくしてなっちゃったんだと思うもの。むしろ、ハルサメがいてくれるから、またこういうことが出来ると思ってるんだから」
　まるで春雨達が施設に住むようになったから戦火に巻き込まれたような言い方になってしまったため、慌てて訂正する。
　今考えると、春雨がいてもいなくても施設は黒幕の脅威に晒されていた可能性は非常に高い。探し当てることがなかなか出来なくても、対策に繋がる手段が間に合わずに鎮守府もやられていたかもしれない。
　むしろ、春雨がここにいたからこそ、鎮守府との繋がりが出来上がり、対策もハイスピードで出来て行った。それならば、春雨はこの施設の真の平和のためには必要不可欠だったのではなかろうか。
「ううん、今は忘れましょ。心を穏やかにして明日に臨むんだもんね。私が落ち込ませたら意味が無いわ。美味しいものを食べて、身体を休ませて。楽しんで楽しんで、英気を養ってね」
　満面の笑みを浮かべるジェーナス。以前までのジェーナスならば、自分で話しながら自己嫌悪が溢れ出して発作を起こしていてもおかしくは無い。だが、それも無くなっていたのは、大きな成長だ。
　それもこれも、ここまでの経験の賜物。侵蝕を受けたことでどん底まで落ち込んだ精神状態も、常に一緒にいるミシェルや、この施設の仲間達のおかげで、より強いものへと成長を果たした。だからこそ、それを十全に使って施設を守っていきたいと考える。
「ありがとう、ジェーナスちゃん。私、ジェーナスちゃんの分まで頑張ってくるよ。必ず勝って、みんなで帰って、また紅茶を飲ませてほしいな」
「Ｏｆ（勿）ｃｏｕｒｓｅ（論）．（よ）　むしろそれまでにまた腕を上げておくわ」

「これ以上になっちゃうの？　それは楽しみだなぁ」
にこやかに進むティータイム。春雨はもう、怒りも寂しさも溢れない。穏やかに、決戦の日を迎えることが出来る。

ティータイムが続く施設から少し離れた哨戒部隊。今回は松竹姉妹と戦艦棲姫。そして、島から飛行場姫による哨戒機。
「やっぱり増えてんなぁ」
「そうね。また泥が見えるなんて」
朝からまた泥を消すことになっていた。日に日に辿り着く泥の量は増えており、対処が必須な状態が続いている。『観測者』だけでは間に合わないレベルになっているということは、竹が以前に話していた通り、泥を吐き出すために作られた敵もいるのかもしれない。
何せ、今やもうあちらは施設の場所を感知出来るようになってしまっている。それこそ、島を八方から包囲した状態で延々と垂れ流している可能性だってある。
「施設としても、最後の攻防戦はいるかもしれないわね。守りながらも打って出るくらいに考えないと」
「そうっスね。あいつらが明日出て行った後、どうにか誘き出してやりてぇっスわ」
「あまり危険なことはしたくないけれど、万が一のことを考えると、ちゃんと対処しておきたいですよね。脅威は無いようにしたいです」
施設側もやり方を考えなくてはならないだろう。ただ防衛に徹するだけでは終われない。泥の源泉を全て排除することで、島に対しての脅威を全て排除する。そこまでしなければ、黒幕を斃したとしてもまだどうなるかわからないだろう。
それこそ、源泉にされている者も卵が植え付けられているはず。黒幕を斃すことで命まで奪われるのならまだしも、それが暴走して第二第三の黒幕に生まれ変わられたら厄介極まりない。そのためにも、周囲の状況は確実に調べておく必要がある。
「戻ったら提案しましょ」

「ウス」

施設の方針も固まりそうである。守り続けるだけでなく、泥の脅威を根本から消すのだ。

施設のために

午前中の哨戒でも泥を発見したことを姉姫に報告した松竹姉妹。飛行場姫はその瞬間を哨戒機から見ているため、この事実は知っており、決戦前の深刻な問題だと感じている。

「今からってのはしんどいかもしれねぇっスけど、決戦と並行で対処した方がいいっスよ」

「私も竹と同じ意見です。ここでどうにかしておかないと、もし決戦に勝てたとしても大変なことになるかもしれませんから」

松竹姉妹もその危険性は哨戒中に勘付いていた。もし泥を垂れ流し続ける何者かがいたとすると、もし黒幕を撃破することに成功したとしても、そちらに植え付けられた卵が何かしらの悲劇を引き起こすことを。

その場で命を奪われるかもしれないが、暴走して第二第三の黒幕へと変化を遂げてしまった時には最悪だ。せっかく斃したのに、この施設に泥を流し込むことが出来るくらいに近くにいる者が同等の力を持ってしまう可能性があるのだから。

「そうねぇ……何処かの誰かだとしても、その子も救っておきたいわよねぇ」

「ただ、アタシの哨戒機では見当たらなかったわ。それよりも離れた場所にいると考えてもいいでしょうね」

「私も見たことがないわぁ。空母ちゃんもよねぇ？」

たまたまそこにいて話を聞いていた空母棲姫も首を縦に振る。哨戒機を使って島の近海を見て回っている3人全てがその存在を確認出来ていないということは、かなり離れた位置からずっと泥を生成し続けているということ。無論、叢雲の感知にも引っかかっていない。

こうなると、何処にいるかを探すためには施設側も人海戦術を使うしかなくなるだろう。決戦に参加しないメンバーを総動員して、施設の平和を脅かす者の居場所をその日中に探し出すのだ。

「明日には提督くんのところから艦娘ちゃん達が来てくれるわぁ。それに、音声くんのところの監査の子達も来てくれるそうだから、頼る

ことになるわねぇ」
「本当に総動員で行くしか無いわね。せめて今日中には当たりをつけておいた方がいいかもしれないし」
　近海と言っても、当然ながら海は広い。適当に探してもまず間違いなく見つかるわけがなく、だからといって何処にいるかわからないのだから、ローラー作戦で片っ端から見ていくしか無いだろう。
　さらに言えば、敵だっておそらく移動する。陸上施設型だったらそうはならないが、泥の発見地点がまばらであるため、複数人いるか、常に移動をし続けているかのどちらか。どちらにしろ厳しい戦いであることには変わりない。
「1人だったらまだいいんだけれど、何人もいるとなったら怖いわねぇ」
「いるとしたら、1人……いや、1組だと思いますよ」
　哨戒の話をしているところに割り込んできたのは春雨である。時間的にそろそろ昼食時。ティータイムも一旦終わり、昼食のためにダイニングに来たところで話し声が聞こえたため、思ったことを口にしたとのこと。
「何人もいたら、もっと泥が早く多く流れ着いていると思います。流石の『観測者』様も、複数人からの泥の流出をこの程度に抑えるのは難しいんじゃないでしょうか」
「彼のやり方を私達は知らないから何とも言えないけれど、道化ちゃん達も入れると3人しかいないんだものねぇ。泥を撒き散らす子が何人もいたら、まず対処出来ないわよねぇ」
　春雨が直感的に思ったことをつらつら述べていく。実際は、少し考えてみれば確かにと思える現状である。
　例えば、島を四方八方から囲めるくらいの場所に泥を生成し続けるだけの敵が陣取っていたとする。それに対して、現状で動いているのは『観測者』一行の3人。その3人が常に処理をし続けているとしても、それだけ人数がいれば今頃もっと泥が流れ着いてもおかしくない。八方向の内の一方向しか抑えられないようなものだ。
　だが、今は頻度は増えてきているものの、いきなり極端な量が流れ

着くことが無いのだ。そこから考えるに、『観測者』一行に見つからないように移動しながら泥をばら撒いているか、それ以上のスピードで動き回ってばら撒いているかのどちらか。『観測者』の手が届かないなんてことは無いだろうから、このどちらかとしか考えられない。
「なので、1人じゃなくて2人以上が固まって動いているんだと予想します。その……言いにくいことですけど、あちら側のヒト達って、単独で動くことが無かったじゃないですか」
　言われてみればと納得した。最初に戦った白露と古鷹もそうだし、直近だと龍驤は1人のように見せかけて、瑞鳳や黒潮達ドロップ艦を侵蝕して待ち構えていたくらいだ。最終的には1人になるが、最初から1人ということはなかった。
　つまり、今この泥を垂れ流し続けているのは、1人ではなく1組。少なくとも2人はいるが、バラけての行動ではなく、常に連れ立っての行動。
「2人、もしくは3人かなと。それこそ、こちらの哨戒部隊のように」
「そいつらが泥吐きながら逃げ回ってるってことか。攻め込んでも勝ち目が無ぇから、泥で圧倒してガタつかせて。随分とお行儀のいいこって」
　嫌気を隠そうともせず、竹が忌々しそうに吐いた。
「それでも『観測者』まで振り切るとなると厄介ね。『観測者』をまけるほど速いのか、それとも『観測者』すらも手玉に取れるくらいのやり手なのか」
　腕を組んで考える素振りを見せる飛行場姫。提示したどちらだとしても、戦いにくい相手であることは間違いない。まだ前者の方がマシではあるが。
「『観測者』様は『観測者』様で別のモノに手間取っている可能性もあると思います。あのヒトはあくまでも中立を守らないと命に関わるようなヒトですから」
「そうよねぇ。手を出しても構わないなら、あのヒトが黒幕をどうにかしてくれているはずだものねぇ」
　むしろ、その中立性のせいでこうなってしまっているという可能性

もあって複雑な気分に。
逆に言えば、中立性を以てして抑え込んだ結果がこれだとすれば、こちらにはまだ対抗出来る策があるということだ。本当に無理ならば中立が保たれていないため、『観測者』がさらに力を上げることになるはず。
「ともかく、こちらでやれることを全力でやらなくちゃねぇ。それなら、私はこの施設を守るために力を尽くすわぁ。みんなの力を貸してちょうだい」
「ったりめぇだぜ。オレ達の居場所を潰そうとする奴にゃあ絶対に後悔させてやるからよ」
「せっかくここまでやってきたんだもの。こんなところで潰されても困るわよね。私も竹と一緒に全力を尽くします」
決戦を前に、基本は朗報を待つのみだった施設組も居場所を守るために戦うことになる。

午後イチ、哨戒を始める前に、決戦に参加しない面々が集まって、当日の打ち合わせを実施。その時には北上組と監査組が来島してくれるため、戦力としてはかなり上がる。とはいえ、行き当たりばったりで進んでも時間だけが過ぎるだろう。大まかにでもいいので、泥を垂れ流している何者かの場所を知りたいところではある。
「今まで泥を見つけたところとなると、どの辺りになるかしらぁ？」
中間棲姫が纏めながら、一旦現状の情報を整理する。もしかしたら泥の発見場所に関連性があるかもしれない。
一応ではあるが、この島の周辺を海図のようなものにしてホワイトボードに描き、哨戒を繰り返した者達がそこにチェックを入れていくこととした。
「オレ達が今日見つけたのはココだ。あと前の夜に見つけたのはココとココ」
「私達もこの辺で見つけたわ」
竹とジェーナスが海図に書き込んでいく。鎮守府に帰投していく

艦娘達も発見したと聞いているので、その航路上にもあると仮定してさらに記入。すると、自然と見えてくるものがあった。
「まんまるを描くぴょん？」
　ミシェルが言う通り、配置されている場所が大体ではあるものの施設を取り囲むように円形を作り出し始めた。正確には円ではなく半円。鎮守府方面に弧が薄い形状。
「これは……大体鎮守府とは逆方向って感じねぇ」
「まだ範囲は広いけど、少なくとも捜索範囲が半分には絞れたわね」
　全方位で調査することは無くなったとはいえ、まだまだ当たりをつけるには広大である。
　そもそもこれが正解がどうかもわからない。泥が配置されているからこちらにいると思わせる陽動の可能性すらある。しかし、こう見えているのなら、こちらを調査せざるを得ない。そうしている間に島に近付こうだなんて考えているかもしれないが。
「私達はこの島から出られないから、他のみんなで見てきてもらうしか無いわぁ。少なくとも、この範囲は哨戒機を飛ばして見ておきましょうかぁ」
「そうね。哨戒機の範囲から外にいるとは思うけど、やらないよりはマシね。アタシとお姉は島から飛ばす。空母、アンタはアタシ達の哨戒範囲から外に飛ばせるように、海に出てちょうだい」
「わかった。超高高度で、いいか」
「ええ、見えないところを見えるようにお願い。今回は島を守るだけじゃなくて、敵に打って出るんだから」
　姉妹姫は、あくまでも島から出ずに。しかし、空母棲姫はその機動性を活かしてさらに広範囲を確認する。
　それに加えて、海上と海中の調査を実施する。今回の泥は海中でも発見しているため、その敵の部隊に潜水艦が交じっている可能性は非常に高い。
「ヨナ、あと姉妹、海の中はアンタ達にかかってるわ。頼んだわよ」
「任せて」
「ここを守る」

「大丈夫、ヨナも頑張るヨナ」
潜水艦姉妹が力強く頷く。この施設を守らなければ、親身になっている潮が恐怖でまた壊れてしまう。それだけは許せない。それ故に、持てる力全てを尽くす。
伊４７も当然、施設を守るために戦う。今はどちらかと言えば辛い状況、どんなに仲間達と交流があっても、幸せアレルギーは発症しない。ならば、何処までも全力を出せる。数少ない潜水艦としても、伊４７は屈指の力を持っているのだから、姉妹姫も頼りにしていた。
「あとは、うまく均等に割り振って外に向かっていきましょう。細かいことは明日、鎮守府から艦娘ちゃん達が来たら決めましょうねぇ」
北上組と監査組は、それだけでも大きな戦力だ。特に、いろんなことをのらりくらりとやってのける北上は、ここでの作戦なども立案してくれるだろう。やる気がないように見せかけて、屈指の頭脳派である。本人は否定するが。
「それじゃあみんな、よろしくねぇ」
全員がおーと腕を上げる。施設を守るため、より一層全員のやる気は上がった。

「まさか、こんなことになるなんてねぇ」
全員がまた各々の持ち場――この日は休息と哨戒――に戻り、中間棲姫も施設近海全域に哨戒機を飛ばす仕事を進めながら、ポツリと呟く。
ずっと維持されていた平和が、ことごとく脅威に晒されているのはどうしても辛いし悲しい。しかし、それを守るための力が自分にあることも理解している。ならば、戦いたくなくとも戦わなければならないだろう。
「でも、みんなのためなら頑張れるわぁ。そのためにも、哨戒をしっかりやっていきましょ！」
意気込みも新たに、中間棲姫はその力を遺憾無く発揮した。今までに無い程に哨戒機が飛び回り、休息している者達は何が起きたのかと

驚いたという。

末妹の悩み

一方、堀内鎮守府。最終決戦までの残り1日は、最後の詰めに使っていた。決戦出撃メンバーに選ばれた者はギリギリまで自分を鍛え、最高の状態で明日に臨む。

特に力を入れていたのは、北上からその才を見出だされ、今は武蔵に鍛えられている涼風。恐ろしいことに、一切兵装を装備せず、ただひたすらに回避をし続けるというトレーニングである。回避性能を上げ、涼風が持つ力を１２０％引き出せるように身体に教え込んでいた。

「つべぇ……頭痛くなってきやがったぜい」

回避は出来ても、そうするために頭を使う。それを長い時間繰り返していれば、自然と頭が痛くなってくるもの。涼風はそこに、電探を使って周囲の状況を把握しつつ、今までの経験と照らし合わせた先読みまでしているため、余計に頭を使っていた。それに加え、武蔵のあまりにも容赦のない猛攻を必死に回避することになっているため、身体的な疲労も相当なもの。

しかし、涼風は一度も音を上げていない。むしろ、もっと激しくていいと言い続けた結果が、武蔵の全力である。模擬弾でも当たればかなり痛く、駆逐艦の身体では吹っ飛ばされることもある。それでも、自分を追い込むことでより強い力を得ようと努力している。

「涼風よ、貴様のその意気込みには感服する。だが、少し休もうか。頭が痛いんだろう」

「え、わかるのかい」

「わかるさ。この私を誰だと思っている。吹雪の頭痛の主だぞ。他人が頭を痛めているタイミングを理解することなど造作もない」

笑いながら言うことでは無いだろうと呆れながらも、気遣ってもらえたことは素直に喜び、ならばお言葉に甘えてと休憩に入った。

既に涼風は全身が模擬弾でビショビショ。強烈な砲撃を何度か直撃しているため、少し打身のようにすらなっていた。

「いてて、重いの貰っちまってるから、結構身体中痛ぇや」

「それでも頭はしっかり回っていたようで何よりだ。どうだ、視野は拡がったか」
「おうさ！　前よか大分見えるようになったよ。みんなのおかげさー」
　武蔵に鍛えてもらう前からも仲間達に協力を仰ぎ、経験と視野を拡げ続けていた。合同演習でもその場に立つことも外部から眺めることもさんざんやった。明石に作ってもらった最新の電探を使いこなし、北上に見初められた空間把握能力も鍛え続けている。
　それでも足りないと、出来ることは全てやる。今はあらゆる方向性の艦娘がここに集まっているのだ。武蔵の前には島風とも演習を繰り広げ、その速さに目を慣らしている。
「その空間把握は、私のところの吹雪に匹敵するほどだろう。誇っていいことだ。身体能力も随分と上がっていると思うぞ」
「そうかな、でも、あたいにゃまだまだ上があるはずなんだ」
　ほんの少しだけ俯いたように見えたが、小さく首を振ってから笑顔を作る。
「あたいは白露型の末っ子、どうしても姉ちゃん達にゃ力が劣る。白露姉や海風姉みたいな統率力も無けりゃあ、夕立姉や江風みたいなパワーも無ぇ。五月雨みたいに秘書艦やれるほど上手く立ち回れないし、山風姉みたく仲間の感情を読み取るみたいなことなんて以ての外だ。時雨姉みたく冷静でも、村雨姉みたく器用でも無ぇ。努力の数でも、春雨姉にゃ絶対勝てねぇ。多分、白露型の中じゃあ一番下っつっても過言では無いと思ってる」
　笑いながら自虐的な言葉をツラツラ並べる。そして最後に、それを振り払うために自分を鍛えると。
　実際数値化すると、涼風の力はどうしても9人の姉よりも若干劣る部分はあった。春雨と五月雨を除いた姉達は改二改装も施され、差は広がる一方。五月雨は秘書艦という立場と無意識ながらのパワーアシストのコントロールというとんでもない才能があるし、春雨に至っては言わずもがな。今やこの戦いのキーマンだ。艦娘の時からも努力の結果が姉達に追いついて第一線を駆け抜ける存在である。

そんな姉達の背中を追いかけ続けていた涼風。古参ならではの経験の数と、全ての姉を見続けてきた視野、そして学んできた戦闘術で格段に強くなってきた。
「たはは、あんま弱気なとこ見せたくないんだけどさ、どうしてもさ」
しかし、これだけやってもコンプレックスというのは簡単には治らない。自分に自信があるような物言いをしても、内心ではそんな自分ではまだ足りないと力を求める。これはもう渇望の類だ。
この渇望は、この事件が始まってから急激に涼風を蝕んでいる。最初はまだ良かったのだが、勝てるかもわからない、存在すらも曖昧な黒幕という不明瞭な敵との戦いで芽生え、決戦間近となったことでそれはもう溢れるのではないかという程になっていた。
そんな涼風を目の当たりにして、武蔵は涼風の頭を撫で回す。グワングワンと頭がシェイクされて目が回りそうになった。
「うおおお!?」
「貴様は何処まで謙虚なんだ。いいか、よく聞け」
ひとしきり撫で回した後、視線を合わせるようにしゃがみ、肩に手を置いて武蔵は涼風を見つめる。その真っ直ぐすぎる視線に涼風は目を逸らしそうになるが、よく聞けと言われたのだから見つめ返す。
「確かに貴様には改二改装は無い。それは事実だ。だが、それで上下関係が決まるわけがなかろう。現に、貴様は仲間達に頼られている。自覚するべきだ」
「あたいが頼られてるのかい?」
「当然だ。これはあまり口外するなと言われていたんだがな、貴様がそういう思いを持っているのなら知っておくべきだと、私は勝手に判断する」
それは、この大詰めの演習が始まる前のこと。涼風が武蔵に鍛えてくれと願い、武蔵もいいだろうと快く承諾した直後。涼風が準備をすると工廠に駆け出していった後、武蔵に駆け寄ってきたのは山風だった。そして、武蔵に涼風に対する思いを伝えたのだという。
「貴様のその視野の広さには、山風も信頼を寄せていると言っていたよ。山風はあくまでも顔色を窺うことに特化しているようなモノだ

と、自分で話していた。対人関係での感情の起伏は誰よりもいち早く反応出来るが、それだけなのだとな。だが貴様は違う。全てに対して反応出来ている。手合わせして、私も貴様の実力には驚かされた」
今まで何度も演習やトレーニングに付き合ってもらっていたが、今のように1対1（タイマン）での演習は初めてだった。そんな武蔵も、涼風の視野の広さ、空間把握能力に驚いていた。
本来の居場所である大将の鎮守府で度々吹雪と演習をしている武蔵だが、その時と似た感覚を得ていた。吹雪まで洗練されているものではないかもしれないが、それでも匹敵するのではないかと。
しかし、この姉に対する少し後ろめたい気持ちというものが、本当の力を発揮するのを邪魔しているようにも思えた。無意識にセーブしているというか、強くならなくてはと気が急いているせいで本領が発揮出来ていないというか。そして、そのせいで追いつけないと思いさらに悪循環を始める。
「この武蔵が認めてやろう。貴様のその実力は、姉妹にも認められる程に高まっている。だが、今まで一度も本気が出せていないだけだ。山風はそこまで看破していたぞ」
「うおお……流石っちゃ流石だなぁ」
「だから、貴様に自信をつけさせてほしいともな。おっと、これは言わない方が良かったか」
クククと笑いながら話す武蔵。だが、涼風はそこまで考えてもらえていることを知ることが出来たため、気持ちの入り方が違った。
むしろ、山風からは頃合いを見て自分がこういうことを言っていたと口外してくれとも頼まれていたのだ。口外するなという体裁で。武蔵はその策に乗ったに過ぎない。
涼風のエンジンは、これまでずっとかかりきっていなかった。それは山風から見ても明らかだった。北上に見出だされることによって戦い方を先鋭化させてきたが、それでもまだ足りない。気持ちが乗っていないのだから、本当の力は発揮出来ない。
だが、ここで最後の一押し。武蔵というわかりやすく最強の一端に認められること、そして、背中を見つめ続けている姉達から頼られて

いること、これを自覚出来た時、涼風の奥底に眠る真の力が表に出てくる。
「そっか、あたいはちゃんと出来てたんだ」
「当然だ。むしろ、ちゃんと出来ていない時なんぞ一度たりとて無かったろう。なんだ、死と隣り合わせの戦場で手を抜いていたのか貴様は」
「そ、そんなわけあるかい！　あたいはずっと本気も本気だったさー！　ぶっ斃さなくちゃいけねぇ奴にも、救わなくちゃいけねぇ奴にも、出せる限りの全力を出してたさ！」
「ならば、自覚しろ。貴様は頼られている。貴様は弱くなんてない。山風だけではないぞ。江風も、荒潮も、貴様のことを頼りにしている」
　姉妹で馬鹿をやっている江風はともかく、荒潮もかと涼風は驚いた。海風が抜けて3人となった駆逐隊に編入された天才すらも、涼風のその力には敵わないと武蔵にこぼしたそうだ。
　荒潮が天才的なのは成長性。ありとあらゆる技術を取り入れ、砲撃も雷撃も対空も対潜もあっという間に身につけた。しかし、空間把握能力に関しては年季の入った涼風にはまるで追いつけない。それは当然、実践経験の差が響いている。
　それ故に、荒潮はその自分に足りない部分を仲間に頼る。涼風にだって当然頼る。むしろ羨ましがっているかもしれない。持ってないものを持っていて。
「貴様に面と向かって話すことは無いだろうな。だが、私経由ならばいくらでも言うだろう。それだけ私は奴らのトレーニングに付き合っている。休憩中にその気持ちを吐露することくらいある。疲れ切っているから自分を隠す余裕すら無いようだ」
　ここまで暴露してしまっていいのだろうかと涼風は逆に引いているくらい。これからあの仲間達とどうやって顔を合わせればいいのか困るレベル。
「いいか、涼風。貴様は貴様が思っている以上に力を持っているんだ。先程も言ったが、この武蔵も認めている」
「……そっか、そうだね。うん、そんなに言ってもらえてるなら、あた

い、もっと自信を持ってみる」
　涼風はもう自分を弱いなんて思わなくなるだろう。ここまで思いを伝えられたのだから、それに応えなければならないと。だからといって力んでしまっては意味がないのだが。
　それを解すためか、武蔵はニヤリと笑って軽く押して突き放す。
「それを今、証明してみせろ」
　ここまで話していたのだから休息は取れたなと、武蔵は全開で艤装を展開。今すぐ演習再開だと言わんばかりに砲撃を放つ。
　だが、みんなの思いを受け取った涼風は、鍛えられたことによる身体能力と、これまでの実戦経験を一気に解き放ち、次の行動を即座に計算、全砲撃に対して最も適した回避方法を選択し、全てを紙一重で避けていた。
　もしこの武蔵の攻撃に泥が含まれていたらという考慮までして、その水滴が一雫も身体に付着しないギリギリの場所。体力まで温存した、その時のベストな動き。
「ほう……今だけは吹雪と同じだったぞ。ハッハハ！　面白い、面白いな涼風！」
「急にぶちかましておいて高笑いとか頭おかしいんじゃあないかい!?」
「褒め言葉だなぁ！」
　明日の決戦に向けて、大詰めの演習は続く。

　涼風はもう大丈夫だ。頼られていることを知り、それに応えたいと真の力を発揮出来るようになった涼風は、もう手がつけられなくなるだろう。

それぞれの決戦前夜

決戦前夜。本当の前夜は施設の者達と堀内鎮守府の面々が大塚鎮守府に到着してからになるのだが、施設からしてみれば明日早朝から始まる最初で最後の大きな戦いとなる。

決戦に向かう者だけでは無い。施設に残る者達も、島に迫る泥を対処するためにその源泉を叩きに行くつもりだ。

ある意味、施設側からしても二正面作戦。攻撃の部隊と防衛の部隊を切り分け、同時に作戦を実行する。

「明日のために英気を養いましょうねぇ。リシュリューちゃんとコマちゃんが、腕によりをかけて作ってくれたわぁ」

食卓に並べられたのは、歓迎会以上に豪勢な夕食。ここで気持ちを高め、風呂で身を清め、グッスリと眠ることで最高の状態で決戦に挑むため、まずは最高の食事から。

勿論、この料理を作ったリシュリューとコマンダン・テストも防衛戦に参加することが決まっているのだから、同じように英気を養う。

「Ｂｏｎ（めし） ａｐｐ（あが）・ｔｉｔ（れ）．　これで力を蓄えて、明日は必ず勝つわよ」

「Ｖｉａｎｄｅ（お肉）もしっかり使わせてもらいました。これでＶｉｔａｌｉｔ（活力）・も完璧、です」

フルコースを一度に全部並べられているかのような豪華さに、みんなが目を輝かせながら着席し、思い思いに舌鼓を打つ。これまでに無いくらいに美味しく感じ、またこの食事を食べなくてはと思うほどに力が湧いてくる。

それも目的だ。名残惜しいくらいに美味しい料理を食べることで、この世に大きすぎる未練を与える。まず無いとは思うが、命を懸けて戦うなんてことはしてもらいたくないという思いの表れでもあった。

「全部終わったら、またみんなでこうやって食べましょうねぇ。今度は祝勝会で」

「そうね。そのためには、誰も欠けちゃダメよ。怪我くらいならまだ治るからいいけど、命だけはどうにもならないもの」

姉妹姫の言葉に、仲間達は全員強く頷いた。この美味しい食事をまた食べるため、誰も欠けることなく決戦を終えると誓う。この施設では、それが一番の平和。それを取り戻した証となるのだ。

本日の深夜哨戒の当番は、薄雲、黒潮、瑞鳳に、島から空母棲姫。空母２人体制で近海の哨戒を強め、泥の接近をいち早く気付くために動く。明日に備えている深夜に泥に襲われるだなんて笑えないことにならないように、むしろ今まで以上に警戒を強めた。

一方、明日の決戦組はお風呂で身を清め、あとは眠るのみとなった。豪華な食事で満腹となっているため、自然と眠気も訪れる。

朝早くから動き出すことが確定しているので、眠れる者はいつもよりも早い時間から眠ればいいと中間棲姫が話していた。それに反する理由なんて何処にもない。

「……いよいよ、だね」

「はい、ついにです」

ベッドの中、海風と向かい合う。今まで長く続いてきた事件も、明日で終わらせるのだ。眠気はあっても、少し昂揚していた。

今はもう眠る直前であるため、海風は右腕を、春雨は四肢全てを消している。そのため、海風が春雨に温もりを与えるために腕枕のように手を回している状態。春雨は今はほとんど発作を起こさないが寂しさを払拭出来て、海風は依存を満たすことが出来る、いつも通りの眠る体勢。

それでも、今は目を瞑ることなく最後の夜を惜しむように話をする。いつもならこうやって話している間にどちらか――大概は春雨――が眠りに落ちて、そのまま朝へというのが定番。

「最初の頃から比べると、もうあの時の私は影も形もないような感じに思えちゃうけど……」

「そんなことはありません。春雨姉さんは春雨姉さんです。幾分か変化はありますが、根幹は何も変わっていません。私が保証します」

外見だけで言えば、最初の頃――施設に繭として流れ着いた頃――

からはかなり変わってしまった。わかりやすいのは両腕。それ以外にも、瞳の奥に宿る怒りの焔や、その怒りを表すかのように紅が交ざる服装。それに、今は鳴りを潜めているが、表情も当時よりは冷たいモノになってしまっている。

だが、その根幹の部分。真面目で心優しく、仲間思いな春雨は、これだけの波瀾万丈な生き方を強制されても失われることはなかった。溢れた寂しさの中には仲間を切実に求める思いが強く、溢れた怒りの中でも仲間に対しての思いは焼滅するようなことは無かった。

春雨は、春雨のままで、今を生きている。海風はそう断言した。

「この戦いが終われば、春雨姉さんはより穏やかになれます。逆に言えば、黒幕が存在している限り、春雨姉さんの心はどうしても曇ってしまうでしょう。私は、海風は、春雨姉さんにはいつも心が晴れていてほしい。勿論、春雨姉さんだけじゃない、この施設の仲間達にも、鎮守府の仲間達にもです。黒幕の脅威が無くなれば、みんな笑顔になれるでしょう。私はそのためにも、全力で戦いたいと思います」

海風も黒幕には深い憎しみがある。愛する姉に対して叛逆させられたという、絶対に許すことが出来ない恨みが。それがある限り、海風は見た目は開き直れていたとしても春雨に対して申し訳なさが出てしまう。それも黒幕が斃されれば多少は気が晴れるだろう。

「うん、私も頑張るよ。みんなのために」

春雨も黒幕に対しては許さない程の怒りを持っている。その怒りが晴れれば、さらに穏やかに日々を過ごすことが出来るはずだ。

「そのためにも、しっかり寝て、万全な状態で明日を迎えなくちゃね」

「はい。それではいつものように失礼して」

抱き枕のように春雨を抱き締める。その温もりに春雨は癒され、その存在に海風は癒される。いつもの通りではあるのだが、決戦前ということでそれはとてもよく染みた。

「……頑張ろうね」

「はい……姉さん、死なないでくださいね」

「当たり前だよ。死んだら美味しいご飯が食べられないもん」

冗談めいた春雨の言葉に、海風も笑顔。少し前まではこんなことす

ら言えないくらいに怒りに呑まれていたが、今ではそれも薄くなっている。
「全部終わらせて、鎮守府に戻って、たまにこの施設に帰ってきたりして、楽しく生きたいって思うよ。そのためにも、みんな無事で終わらせよう。そういう海風も」
「死ぬわけがありません。春雨姉さんを置いて逝くわけにはいきませんから。もう二度と姉さんを悲しませません。私は、海風は、これからもずっと姉さんの傍にいますので」
「……うん、お願いね。ずっと一緒にいてね」
少しだけ寂しさが表に出始めていたが、温もりですぐにそれも薄れる。
「それじゃあ、また明日。おやすみ、海風」
「おやすみなさい姉さん。いい夢を見られることを祈ります」
「海風もね」
そしてそのまま眠りにつくことになる。２人ともこの夜は穏やかに眠ることが出来た。

鎮守府の夜。作戦前であることから、こちらも決戦参加組は早めの休息。今日を最後の詰めとしていた者は多く、その疲れを取るために誰も夜更かしなんて考えていなかった。いつもはそれなりに夜の時間を楽しんでいる涼風も、ギリギリまで演習を続けていたためか、何をするでもなくすぐさま眠りに落ちてしまうほど。
そんな中でも、徹夜とは言わないものの遅くまで明日の準備を続けている者がいた。決戦に参加しない代わりに、全員のバックアップをしている明石である。
「よーし、これで大方終了かな」
軽く汗を拭って作業を終えた明石。ズラリと並ぶ装置は、施設のために作られたバリアの小型版。これがあれば、突然泥が島に押し寄せても、ある程度は守れるはず。八方に配置することでほぼ隙間なくガードが出来るようにはなった。

ちなみに予算は大将持ちである。全てが終わった後は解体して別の装置へと生まれ変わるのだとか。
「これで島は大丈夫、のはず。みんなの装備の調整は終わってるし、龍驤の改修も」
「終わっとるで。黒幕の泥のデータも入れといたわ」
「オッケー。これでＲＪシステムの効果範囲が増えたね」
明石がこの時間まで仕事をしているということは、龍驤もそれに付き合わされているということになる。妖精さんの身体であるため、休息の時間は艦娘よりも少なくて済むのだが、それでも決戦メンバーみたいなものなのに遅くまで起きているのはよろしくないので、ここまでやったら明石と共に休息に入る。
「これはウチが敵に近付きゃ全部吹っ飛ばせるんか？」
「基本的には仲間を守るためのシステムにはしてるんだけど、効果範囲内に入れれば侵蝕されてる相手を解放することは出来ると思う。ただ、あちらも流石にもうセーフティ仕込んでそうだよね。黒幕本体をシステムで消し飛ばすなんて簡単なことは出来ないと思ってるよ」
「せやろなぁ。それが出来りゃ苦労はせんわ。少なくともアレやな、敵対するモンを弾く結界は、ウチの力で消し飛ばせるやろ」
今までの侵蝕されてきた者のような存在ならば、ＲＪシステムを使えばその侵蝕を引き剥がすことは出来る可能性が高い。少なくとも、仲間達が侵蝕されることは無いように調整はしているため、そこは心配ないのだが、既に侵蝕されている者を対象にすることは考えていなかった。
とはいえ、今までのシステムの集大成ではあるから、何かしら効果が出ることは予想が出来る。それこそ、泥刈機のシステムも踏襲しているのだから、海上に浮かんでいるような泥でも消し飛ばすことが出来る。端末による侵蝕は無いと考えてもいい。
「あの黒幕の卵が領域内でどうなってるかって感じやな。あの細胞のデータは突っ込んどるけど、それこそウチがどうにか出来るかもしれへんし、どうにも出来んかもしれん。あの波長出す懐中電灯はある程度使っとるんやろ？」

「勿論。近接戦闘出来るヒトに持ってもらおうと思って、４つは作っておいた。ただ、孵化した卵がどうなってるか……だよねぇ。今持ってるデータとは違う者に変質していたら、それはもう救えない者になっちゃうから」
「そん時はそん時や。やれることはやる。やれへんことは……妥協するしかあらへん」
　今の明石がわかっていないことは、体内に仕込まれた卵が孵化した時に、媒介となっている艦娘や深海棲艦がどうなるか。それこそ、明石がこれに対処出来なかった時の、植え付けられた者の末路は、今持つ対策でどうにか出来るか。
　出来た場合はいいとして、出来なかった場合だ。もうそれは今回の事件の犠牲者として処理するしか無くなるかもしれない。それが辛いところである。
　明石は、何も殺すつもりで対策を作っているわけでは無い。救うために作っているのだ。そのためなら手段は選ばない。洗脳が解けないから再洗脳するという無茶苦茶なことをやってでも、それを良しとする。生きているのだから。
「はぁ……悔しいね。ここまで自分を隠し続けてる相手なんていなかったからさ、解析がここまで来ても完璧じゃないとかさ」
「それでも、ほとんどを救ってきたんや。ウチも救われとる方やろ。だったら誇れ。お前は手が届く範囲は全部救えとるんやからな」
　明石がいなければ救われていない者が沢山いるのだ。今は救われなかった僅かな者のことでマイナスの感情を持つくらいなら、救われた殆どの者のことでプラスの感情を持てと、若干非情な物言いではあるが龍驤が慰める。
　勿論、救われなかった者達のことを忘れろとは言っていない。むしろ、龍驤は自分の行いで命を散らせた者達のことだって忘れることはしない。
「そう、だね、うん。今出来る最高最善の対策は出来たはず。ここまでやったんだから、みんなは負けないよ」
「せやで。それに、お前の最高傑作であるウチが戦場に出るんや。お

前が戦場に出とるようなもんやぞ。胸を張れ、誇れ、いつも通りちゃらんぽらんに生きとけ」
「最後のは失礼じゃないかな!?」
ケラケラ笑いながら、黒幕対策の研究をこれで閉じる。明石がやれるのはここまで。あとは仲間達に託すのみ。

それぞれの決戦前夜はこうして終わる。そして明日は、ついに決戦となる。

最後の戦いへ

ついに、その時が来た。
まだ空が白み始めるくらいの時間に春雨は目を覚ます。決戦当日だから眠れなかったというわけではなく、体調を十全にするためにグッスリと眠ることが出来ている。これで幸福な夢を見ることが出来れば精神的にも癒されていただろうが、そこは体調を完璧にすることを身体が優先したか、一切夢を見ることなくこの時間まで眠ることになっていた。
隣の海風も春雨と同じタイミングで目を覚ましたようだ。２人で目を覚まし、向かい合い、微笑み合う。
「おはよう、海風。まだちょっと早いかな」
「おはようございます姉さん。少し暗いですが、朝は朝ですね」
「眠気は……正直無いよね」
「はい。もう本当にスッキリしています。万全と言っていいでしょう」
このまま眠ることは出来なそうなので、もうここで起きることにした。ベッドから降りて、いつものように義腕義脚を生やし、白露型の制服姿に。海風もそれに倣って制服に着替える。
「流石にまだ誰も起きてないかな。出発まではまだ時間あるよね」
「そうですね。いつもよりも早めに朝食を摂る予定ですけど、それでももう少し時間はあると思います」
「なら、散歩でもしようか」
「いいですね、お供します」
決戦前に疲れるわけにはいかないのだが、散歩くらいなら大丈夫だろうと、あまり音を立てないように外へと出た。
日の出の時間まではもう少し時間があるが、外の風景がハッキリと見えるくらいの明るさ。もう少ししたら、水平線の向こう側に日の出が見えるだろう。
暑くもなく寒くもない、穏やかな温度であるため、散歩をしていても気分がいい。

「あ、空母さん、哨戒の方はどうですか」
散歩の途中で空母棲姫と顔を合わせる。深夜の哨戒担当であるため、出せる限りの哨戒機を展開して、施設近海全方位を確認している。
「おはよう、春雨、海風。泥は、やっぱり、何度かあった、ようだ」
少し眠そうではあるが、真剣に哨戒機からの情報を取り入れて抜けが無いように確認中。
やはりこの夜にも流れ着いてくる泥は確認したようで、大惨事になる前に哨戒部隊が対処している。結果的には島の平和は守られている。
「2人は、早起き、だな」
「グッスリ眠ることが出来まして、2人揃ってスッキリ目を覚ましました。早く寝たからですかね」
「かも、しれない、な」
空母棲姫も穏やかな表情。何事もなく朝を迎えることが出来たことを喜んでいる。
「2人とも、そろそろだ」
「そろそろ？」
「ああ、東の空、見てみるといい」
言われてそちらを向くと、水平線の向こうが眩しく光り輝く。ちょうど日の出のタイミングだったようだ。この輝きは、施設の未来を示唆しているようにも見えた。
「私は、この時間の哨戒で、コレが一番、好きだ」
「わかります……これは何度も見たい風景です」
「ですね。とても綺麗……」
徐々に周囲も明るくなり、日の出の瞬間は終わりを告げる。ほんの少しだけの天体ショーに、今まで以上にやる気が満ち溢れるようだった。力が漲る。それでいて、心はより静かに穏やかに。これならば、心身共に万全と言えるだろう。
「帰ってくれば、また見れる。次は、哨戒なんてしていない、時にだ」
「はい、その通りです。またこの景色を見るために、必ず無事に戻ってきます。勿論、みんなで」

この朝日をまた見るためにも、決戦には勝たねばならない。また帰らなくてはいけない理由が出来た。

早めの朝食を摂り、休む間もなく出発準備。早めに堀内鎮守府に到着し、今度はそこから大塚鎮守府に移動しなくてはいけないのだから、やることはなるべく早い方がいい。

「準備はいいかしらぁ？」

「忘れ物……は考えなくてもいいわね」

お見送りは勿論姉妹姫を筆頭とした、施設の全員。深夜哨戒組も、今は寝る間も惜しんで見送りに来てくれている。

当然ながら準備は万端。誰一人として体調を崩すようなことも昨晩も眠れないなんてこともなく絶好調。決戦に向かうには今しかないと言うくらいに完璧な仕上がり。

叢雲やコロラドは少し気が立っているところはあるものの、それが絶好調とも言えるので何も問題ない。

「貴女達は私達の代表。島の平和のための遊撃隊。私達の思いを乗せて、最後の戦いをお願いねぇ」

「みんなは私達の帰る場所。島の平和のための防衛隊。私達が出て行っている間、施設の維持をお願いします」

少しだけ島から離れるが、向いている方向は全く同じ。島の平和を守るために元凶を叩く。その隙を叩かれないように施設を守る。やることは正反対でも、目的は何事もない明日を迎えるため。そのために、一致団結して戦いに挑む。

「また鎮守府に到着したら連絡をちょうだいねぇ。逐一無事を報告してもらうことは過保護かもしれないけれど、念のため、ねぇ」

「はい。そちらの様子も聞けたら聞きたいですしね」

念のため、堀内鎮守府に到着、そして大塚鎮守府に到着しても、施設に一度連絡を入れることにしている。おそらく翌日の決戦前にも連絡することになるだろう。施設の無事も知っておきたい。

だが、春雨達がここから向かってから、防衛戦に打って出るのだ。

連絡したら誰も出ないなんてことが無いとは言えない。それだけ敵が強大である可能性だって十分ある。それでも、連絡はすると決めていた。これで決戦前に帰る場所が無くなっていましたという大惨事があった場合、モチベーションはどうなってしまうのか。

とはいえ、春雨はそこの心配を一切していない。直感的に、連絡が取れないとは思っていなかった。ただそれだけでも、施設側としてはとても心強い。

「それじゃあ……うん、行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい。貴女達の帰りを、私達はここで待ってるわぁ」

徐に中間棲姫が手を上げる。出撃する者をどうやって送り出せばいいのかはわからなかったので、思いついたのがハイタッチ。これなら時間もかからず、全員と触れ合える。

握手というのも考えたが、それだと握って離さないという選択をしてしまいそうなので、あくまでもタッチで。

本当は向かってほしくない。しかし、行かなければ平和は取り戻せない。だからこそ表情には出さず、送り出すことに専念する。

「必ず戻りますから」

その意思を察した春雨が、中間棲姫とハイタッチ。それに続くように、今から決戦に向かう者達が次々とタッチしていく。

これだけでは足りないと、仲間達がそれに倣って中間棲姫の隣に並び、最終的には全員とタッチすることになった。ここにもうかなりの人数がいるため、そのハイタッチだけでもそこそこ時間が掛かるようになってしまったものの、これが戦いのための後押しになってくれるのはわかっているのだから、やらない理由がない。

タッチする時に各々が声援を投げかける。頑張れ、戻ってこい、必ず勝てと様々な言葉を貰い、より一層やる気が出た。

「それじゃあ改めて、行ってきます！」

そしてそのまま、海へと出て行った。次にこの島に戻ってくるときは、全てを終えた後。勝利の凱歌と共に。

鎮守府への道中。今回も海風の案内により真っ直ぐ最短の航路で向かう。なるべく早く到着し、大塚鎮守府への出向を早くしたいところ。
「……みんなのためにも、頑張らなくちゃね」
ハイタッチした手を見つめつつ、ギュッと握って力を入れる。ここまでしてもらったのだ。負けるわけがない。
「仕方ないとはいえ、艦娘の制服は苛立つわね……」
相変わらず叢雲が愚痴るものの、こればかりは仕方ない。深海棲艦ではあるものの艦娘でもあるということを示すため、制服は元の自分のモノで鎮守府に向かうのは暗黙のルールとなっている。基本折衷案の制服を着ている白露や大鳳も、今だけは主人格の制服に合わせていた。意識すればその辺りはどうにか出来る。
しかし、春雨細胞の効果でどうしてもうっすらと紅く染まってしまうのは直しようがないらしい。治療された証であるのだが、このデメリットは無意識の部分に刻み込まれているらしく、意識しても紅く染まるとのこと。
「少しの間だから我慢しなよ。現場で戦うときは好きな格好でいいんだからさ」
「わかってるわよ。ったく、鎮守府ってのは本当に面倒臭いわ」
そんな苛立つ叢雲を白露が宥めた。叢雲の悪態は止まらないが、これが平常運転なのだから誰も何も文句は言わない。こうだからこそ叢雲だとみんなわかっている。むしろ愚痴が出るならば絶好調。
「……ん？　正面から誰か来るわ」
そんな叢雲が感知範囲に何者かが入ったと話す。このタイミングで誰かが来るとしたら、大概誰だかわかるもの。
「ああ、クルーザーの反応もあるわ。鎮守府の増援か」
「だね。私達が抜けるところを埋めてくれるみたい」
そう話している内に、水平線の向こうに増援部隊の姿を確認。事前に誰が来るかは聞いていなかったが、メンバーを見てすぐに納得出来る。

陸上施設型には若干不利な雷巡である北上と大井、そしてその弟子でもある通称北上組、漣、曙、朧。そして、非戦闘員として物資の搬入を受け持つ宗谷。あのクルーザーの中には、小型化されたバリアのシステムが入っている。
「おー、やっぱ同じ航路使ってんだからかち合うわな」
「お疲れ様です。施設のこと、よろしくお願いします」
「あいよー。ちゃんと守っておくから、アンタ達は何も心配せずに戦いに専念しなー」
いつもながら、のらりくらりとしている北上と、それを支える大井。施設への増援だというのに、のんべんだらりとした態度は相変わらずである。それがまた安心出来るのだが。
「春雨氏、潮の様子はどうっスか」
「うん、調子はいい感じだよ。怖がるのは仕方ないけど、安定してると思う」
「そりゃよかったですわ。久しぶりにまた会いたかったから」
漣も増援と言いつつも潮とまた会えることを楽しみにしていた。北上と同様に緊張感が無いが、こちらは曙と朧にツッコまれる。施設を守れなかったらどうなるかわからないと脅しまでかけられていた。
「宗谷さん、そちらにいろいろと?」
「はい、施設を守るための装置を明石さんが作ってくれましたので。ある程度は手助け出来るかと思います」
非戦闘員ではあるものの、艦娘ではあるため、設置などの手伝いは出来るそうだ。宗谷はそれらのことで戦闘のサポートをする。
役割としてあくまでも調査隊の隊長であるため、どちらかといえば姉妹姫と同様に陸から動かない方針。
「ビスマルクさんとグラーフさんはそちらと合流してとかではないんですか?」
「そうみたいだね。あたしらも聞いてなかったから、多分島で現地集合なんじゃない? ちゃんと来てくれればどうだっていいよ」
「まぁそうですけども。あのヒト達が遅刻とかは無いとは思います。行ったら意外ともういたりするかもしれませんね。航路が違うから

わかりませんが」
　山寺提督の艦娘達、監査組の２人は、堀内鎮守府経由ではなくダイレクトに島へ向かうとのこと。前回は案内が必要だったが、２回目ともなると不要だそうだ。
　２人で泥があるかもしれない海域を突っ切ってくるというのは少々不安だが、そこは山寺提督の部下、既に堀内鎮守府の明石から聞き及んでいる装置の開発を終え、２人に持たせて出向をさせていることだろう。装置が増えるのもいいこと。
「そんじゃ、そっちも頑張ってねー」
「はい。よろしくお願いします」

　こうして二正面作戦は始まる。戦闘のタイミングはズレるかもしれないが、前哨戦以来の共同作戦。そして、施設始まって以来の総力戦だ。
　これに勝たねば、未来はない。

元凶の２人

施設からの決戦部隊が堀内鎮守府に到着。一度来ている場所であるため、春雨達だけでなく、叢雲達も落ち着いてここまで来ることが出来た。これで出向は半分。ここから今度は堀内鎮守府からの出向メンバーと共に大塚鎮守府へと向かうことになる。

大塚鎮守府までは施設と堀内鎮守府を結ぶ航路よりもさらに長く、単純に真っ直ぐ向かうことも出来ない。そこに艦娘と殆ど同じ見た目ではあるが深海棲艦が一緒に向かうのだ。少々遠回りの道を選択しているため、余計に時間がかかる。

「お疲れ様です、提督。二度目の帰投になりますね」

「ああ、待っていたよ。少し休憩してから、大塚鎮守府へと出向してもらうことになるだろう。それまでは自由にしていてくれ」

そう話す提督も少し忙しそうである。決戦に向かう部隊の最終調整で工廠は騒がしいことになっていた。昨日のうちに用意していたモノを、参加者全員に展開しつつ、正しい挙動をするかどうか、本当に大丈夫かをギリギリまで確認していた。

春雨達が工廠に到着したことに全員気付いてはいるのだが、最後の調整で忙しく、挨拶すら出来ないようである。

「あら、随分と忙しそうね」

続いて、大将も到着。決戦参加の吹雪と、その間の大将の世話役を任命された望月が工廠へ。今回は宗谷による迎えも無かったことから、陸路でここまで来たとのこと。

「大将、ご足労いただきありがとうございます。騒がしくて申し訳ございません」

「いいのよ、決戦直前だもの。こうなっても仕方ないわ」

この決戦、大将はこの鎮守府で結果を待つとしたらしい。指示が出し易いというのもあるし、吹雪も決戦の場に向かうのだから、ここまで来たら一蓮托生という思いを強く持ったからでもある。

代わりに、望月はいい迷惑だと大将の前だというのに臆面もなく言い放つ。出向して、かつ吹雪がいないとなると、望月に世話係の大役

が回ってくるのが面倒くさいのだと。
　こう言いつつも、なんだかんだ完璧な仕事をこなすのがここの望月。大将も言いたいように言わせているあたり、望月にも大きな信頼があるようだった。
「施設の子達も到着しているようね。今日はよろしくお願いね」
「はい、施設の平和のためにも、全身全霊で挑みたいと思います」
「黒幕への恨みを晴らすためでしょ」
　叢雲の言葉に、それも勿論あると肯定する春雨。鎮守府へと一度戻れたことでかなり穏やかに戻っている春雨でも、その根幹には怒りが燻っていることは間違いない。黒幕との戦いは、８割は施設の平和のためという気持ちがあるのだが、残りの２割は今までの報いを受けてもらわなければならないという気持ちがある。
　故に、その笑顔の向こう側、瞳の奥底には、しっかりと怒りの焔が灯っていた。見てわかるほどではないが、その眼光は燃え上がるような紅。
　大将もその眼を見て少々昂揚するような気分となる。この春雨ならば、確実に皆を導いてくれると確信出来るようの感覚。『辿り着く者』として、この決戦の勝利に辿り着いてくれるはずだ。
「部隊は伝えた通りです。吹雪にはこちらの駆逐隊に加わってもらいます」
「ええ、そのつもり。吹雪にも伝わっているわ」
「はい。島風ちゃんもいますし、ここの駆逐艦のヒト達とは、先日の合同演習で連携出来るようにしてありますので、お任せください」
　これで吹雪も参戦。これでメンバーは全員揃った。
「あ、そうだ。司令官、施設に連絡をしたいんですが」
「ああ、そうだったね。五月雨、持ってきているかい」
「言われた通りタブレットは持ってきていますよ。ちゃんと！　ここに！」
　ちゃんとしっかり持ってきていたタブレットを提督に渡して、自分だってこれくらいは出来ると胸を張る五月雨。致命的なドジは無いが、タブレットを持ってき忘れるくらいの軽めなドジはやるのではと

思っていた春雨は、クスリと笑みを浮かべた。そこから何を考えているかを察した五月雨はプリプリと怒っていた。
　そんな五月雨は置いておいて、タブレットによって施設へと連絡。呼び出すとすぐに受け取られ、いつもの中間棲姫の顔が画面に現れた。まだあちらは何も起きていないとわかる。
『はぁい、提督くん。こちらの子達がそちらに着いたようねぇ』
「ああ、全員無事に到着した。こちらの部隊は到着したかな」
『ええ、お陰様で。今はバリアが張れるっていう装置を島に設置してくれているわぁ』
　外は見えないが、宗谷のクルーザーに積み込んでいた物を降ろしている最中。
　小型化された装置であってもそれなりの重さはあるのだが、艤装のサポートを受けたリシュリューが軽々と運んでいるらしく、それを今でも成長が止まらない潮がサポートするカタチで次々と設置を終わらせているとのこと。
　それ以外に食糧なども運んでおり、防衛部隊は自分達の分の食糧は自分達で用意するということらしい。そこまでしなくてもいいのにと中間棲姫は言うのだが、鎮守府側からの友好の証として受け取ってほしいと言われてしまえば、否定することは出来ない。
「姉姫様、春雨です」
『春雨ちゃん、良かったわぁ。大事無いみたいねぇ』
「はい、ここまでの航路でも、何事もありませんでした」
　提督からの報告のみならず、春雨からの直の連絡があれば尚更い。顔と声が聞けただけでも、ひとまず堀内鎮守府への出向は上手く行ったということになる。
『そうそう、北上ちゃん達だけじゃなくて、ビスマルクちゃん達もさっき到着したわぁ』
「そうなんですね。２人だけでそちらに向かったと聞いていたので、少し心配ではありました」
『道中で泥を発見したらしいんだけれど、ちゃんと対策を持っていたみたいでねぇ。流石は音声くんだわぁ』

その呼び名には慣れていないようで、この声を聞いていた堀内提督と大将は噴き出しそうになるものの、ギリギリで耐えた。
『ちゃんと侵蝕されていないことも確認済みよぉ。ただ、通ってきた道のりが違うのか、泥が結構な量あったらしくて』
『装置が無ければ私達もあちら側だったわよまったく』
話している間に、画面の向こう側にビスマルクが現れた。隣にはグラーフ・ツェッペリンも。
『施設側ではポツポツ見つかるくらいで聞いていたんだけど、私達が向かってくる航路はそれなりに見えるレベルだったわよ。さっきも言った通り、泥刈機？　あれが無かったら私達は逃げきれなかったかもしれないわ』
『それとＤｒｅｃｋ（泥）を感知する眼鏡だな。あれがあったからこそ迂回して安全な航路を選択することが出来たのだ』
施設から確認した泥の量から格段に増えているらしい。それはまるで、春雨達が出向したことを感知しているかのようだと。
黒幕からしたら、現在最も厄介なのは、辿り着く者としての力によってそもそも侵蝕が効かない春雨。その春雨が今まで窮地を救い続けている。そこにいる状態で泥を大量に発生させるのは、あちら側からしても無謀だと考えていたのだろう。
そして今、春雨は決戦のために島を離れた。しかも、ある程度の主力となり得るメンバーを引き連れて。その瞬間をあちらとしてもずっと待っていたのだろう。ここで島を侵蝕しようと、泥の量を一気に増やしてきたのだ。
とはいえ、端末に対してはこちらも万全に対策を取っている。端末程度ならば、泥刈機の出力をＭＡＸにしてやれば、近付くことも出来ない。侵蝕の不安は限りなくゼロに近かった。それでも、泥刈機は一方向にしか放たないため、いきなり３６０度を囲まれたらかなり危険ではあるのだが。
「ここからは益々増えてくるかもしれません。施設はバリアが張られるようなので比較的安全になるかもしれませんが、元凶を叩かなければ、元も子もないと思います」

『ええ、それは理解したわ。そして、その元凶に埋め込まれているＥｉ(卵)を排除することも最優先なのよね。Ｇｕｔ(わかったわ)．　このビスマルクに任せなさい。多分元凶もわかっているし』

その言葉に、そこにいる誰もが驚いた。

「元凶がわかったのかい？」

『ええ、グラーフが哨戒機を飛ばしながらここまで来たんだけれど、そこで一瞬だけ姿を確認したの。そうよね？』

『ああ、だが、私とビスマルクのみでどうにか出来る相手ではないと判断したので、それだけで終わらせている。それに、あまり嬉しい存在では無かったんだ。我々にも因縁がある者の同型だったようでな』

ここで春雨の直感。その泥をばら撒いている者が何者なのかを瞬時に察する。そして、嫌な予感がどうしても溢れ出る。

「まさか、その元凶って……かつて相手取ったというリシュリューさん達の仇なんじゃ……」

『流石だハルサメ。あの姿は一瞬であっても忘れることは出来ない。Ｃｏｄｅ　Ｎａｍｅ『欧州棲姫』。我々が始末をしたが、この施設にいるリシュリューとコマンダン・テストを葬ったＳｃｈｉｃｋｓａｌｈａｆｔｅｒ(因縁の)　Ｆｅｉｎｄ(敵)だ』

その名の通り、かつて欧州で暴れていた強力な深海棲艦。その時の個体は、高貴な外見とは裏腹に、かなりラフな戦い方をしていた強敵。戦争に手段なんで選んでいられないという現実主義の侵略者だったという。今回の泥発生の元凶はそれと同型であったとグラーフ・ツェッペリンは語る。

全ての欧州棲姫が同じ戦い方をするとは限らないが、今のそれは泥に侵蝕された個体だ。より狡賢く堅実に勝利をもぎ取ろうとするだろう。だが、問題はそこではない。

『今は名を明かしていないが、リシュリューには内密にしている。彼女のＡｂｚｕｇ(引き金)はそれなのだろう』

「はい……私達にもわかりませんが、名前を聞いただけでも暴走しかねません。そうなった場合、何が起きるか……」

『わかっているわ。だから正直、対処に困っているの。勿論対処する

わ。確実に。でも、リシュリューには参加してもらいたくないのよね……』

リシュリューの復讐心のトリガーは確実にここ。同型の別人であっても、その顔を見た時点で暴走が確定。もし侵蝕を治療出来たとしても、リシュリューはお構いなくその殺意を隠さず、穏健派であろうが命を奪いに行く。

発作が起きづらい代わりに、起きた時には誰にも止められない。それがリシュリューである。

『それに関しては少し考えておくわぁ。うまく顔を合わせないようにしたいのだけれど、元凶ともなると話は変わってくるのよねぇ。うん、時間は少ないけれど、丸く収まるように考えておくわぁ』

難しい問題ではあるのだが、誰にも嫌な思いをしてもらいたくないという気持ちが強い。そのため、どうにか出来ないかと考えるつもりだそうだ。

「すまん、ちょっと聞きたいんやけど、さっきの欧州なんちゃらってヤツ、どんなヤツなんかな」

ここで準備が進んだのか、山風の頭の上に乗った龍驤がこの通信の中に割り込んできた。何か思うところがあるようで、その話がどうしても聞きたいようである。

『あら、何かあるの？』

「気になることがあんねん。その欧州なんちゃら、もしかして、なんかようわからん乗り物みたいなもんに乗っとるようなヤツか？」

『ええ、そうね。それがどうかした？』

「……それ、ウチが姫さんに提供したヤツや。確保しといた2人の姫はウチが使わず拠点に送ったんよ……」

かつて漣が春雨に提供した情報、『姫級も2人くらい確保してる』がここで影響してくる。

確保された姫は前哨戦では参加していなかったが、それは黒幕に提供されていたから。そこで先遣隊へと改良されていたようである。それが今、施設に牙を剥こうとしている。

「すまん……こんなことになるなんて思うてなかった」

「仕方ないですよ。今の問題点はそこじゃありません。確かその時、姫は2人と聞いているんですが、もう1人は」
「似たようなヤツや。なんや仮面みたいなヘルメット着けとってな、マントまで羽織っとった」
『欧州水姫ね。Ｇｕｔ（わかったわ）．　こちらで何とかしておく。頼もしい仲間もいるもの』

敵、泥を吐き出す元凶はわかった。施設はその2人の姫をどうにかするために動き出す。

仏艦の引き金

施設への連絡を終えた鎮守府側は、大塚鎮守府への出向の準備を整える。施設側に不安が出てきてしまったが、あちらはあちらで何とかしておくと言うのだから、それを信じてやらねばならないことをやっていく。

決戦に参加する者は、今この鎮守府にいる者だけで１２人。その準備を万全にし、一切の不備が無いことを確認していくとなると、どうしても時間がかかってしまうもの。

真っ先に整備されたＲＪシステムは山風に搭載され、同時に山風も準備が整っていたおかげで、施設との通信に割り込むことが出来ていた。

その結果が、かつての龍驤が黒幕に提供したという２人の姫、欧州棲姫と欧州水姫が施設へと泥をばら撒いている者であることが判明した。

「送り込まれたことはもうどうにも出来ない。今わかることはそれだけだ。それに関しては、施設側の人材で対処してもらおう。ビスマルクが何とかすると話していたんだからね」

「そうね。むしろ、得手不得手を知っているビスマルクとグラーフが援軍に来てくれていたのは僥倖と言えるでしょう。姉姫達と協力して、どうにかしてくれると思うわ」

堀内提督と大将は、その強力な敵に対して勝てない相手では無いと考えていた。

無論、その２人の姫も泥によるブーストがかかっており、以前に戦った時よりもより強力かつ凶悪に変貌している可能性は非常に高い。しかも、端末だけではなく黒幕自身の泥も含まれている可能性がある。そうなるともう未知数だ。

それでも、素体が変わっていないのならば、そこまで大幅な変化があるとは思えない。ならば、勝手を知る者達を中心にして戦えば、どうとでもなる。問題点は泥のみだが、そこを考慮した戦術もその場で考えられるだろう。

「不安なのはそこだけじゃないです。むしろ、戦闘は何も不安は無いと思います」
　そこに春雨が割り込むように口を出す。そこの戦闘に危険が迫っているという直感は今のところは無い。しかし、施設にいる者ならば別の不安がどうしてもついて回ることになる。
「リシュリューさんです。さっきもビスマルクさんが話していましたが、リシュリューさんには欧州棲姫がいることはなるべく知ってもらいたくはないです」
「復讐心が溢れるから、かしら？」
「はい。それに、私達は暴走したリシュリューさんを知らないんです。本人曰く、誰にも抑制出来ないくらいになるということですが……リシュリューさんのあの艤装を展開された状態で暴れられたら、妹姫様くらいでしか止められないんじゃないかと思いますね……」
　リシュリューの艤装は、本人の身体のおおよそ5倍の大きさを持つ。コロラドの白鯨よりは小さくとも、その次に大きいと言っても過言ではない。それが激しくのたうち回るようなものだ。余程のことが無ければ止めることは出来ないだろう。
　飛行場姫なら止められるかもしれないが、海に出られたらそれも不可能。飛行場姫の次に可能そうなのは、困ったことに潮である。仲間が暴れているのを止めるために手が出せるかはわからない。恐怖心が勝ってしまう可能性もある。
「それに、コマさんも発作を起こす可能性がありますよね」
　海風に言われて、春雨が小さく頷く。ここにいる面々は春雨も含めてコマンダン・テストの暴走を知る者はいないのだが、少なくとも死をきっかけとして暴れ回るということは知っている。特に白露や古鷹は、自分が死にかけた時に親身になってくれるくらいに、死に対して過剰に反応する。
　リシュリューとコマンダン・テストの両方が暴走してしまった場合、面倒臭いことになるのは目に見えていた。今の施設の中では上位に入る力を持つ2人だ。島の上ならば基本的に飛行場姫がどうとでも出来るが、海上だと手がつけられない。

「それ、もしかしてお互いがお互いに殴り合わない……？」
白露の言う通り、最悪を危惧するならばリシュリューとコマンダン・テストの同士討ちが出てくる。
コマンダン・テストがリシュリューを死を運ぶ者として認識してしまったら終わり。そうなると、リシュリューがコマンダン・テストを復讐を邪魔する者として認識する。互いに理性が飛ぶのだから、仲間という意識も無くなってしまうだろう。それが一番まずい。
「ならば、君達は施設に戻るかい？」
「難しいところですね……。こういう言い方は良くないとは思うんですが、私達が帰ったところで何も変わらないと思います。むしろ、信じて送り出してくれたのに、そういう理由があるからと戻ったら、その思いを無下にするような気もします」
これは施設から見ても攻撃と防御を同時に行なう二正面作戦。何が起きたと防御側の部隊は施設の者達だけで何とかしようとしているからこそ、春雨達はハイタッチで送り出されたのだ。
ここでもし戻ったとしたら、もう送り出してはもらえない気がする。この1回のみの覚悟と決断だ。
「なので……私達は戻らず、黒幕を撃破することに専念します。島のみんなを信頼していますから」
これも春雨達の覚悟。施設に未練がないとかではなく、施設に残っている者達、そして援軍達の力を借りれば、この危機も脱することが出来るだろうという直感。
春雨がこう言ったからというわけではなく、他の仲間達もそれでいいと頷く。施設に残った者は、施設を守るためにそこにいるのだ。そして、そこまで弱い者達ではない。
「そうか……わかった。ならば、こちらは予定通り準備を終わらせ、大塚鎮守府へと出向してもらう。もうそこまで時間はかからないだろう」
「はい、よろしくお願いします。大塚鎮守府に到着したらまた姉姫様に連絡をしますので、その時に状況を把握します」
「ああ。いざという時は、こちらからさらに増援も考えておく。君達

は予定通りに黒幕を斃すことに専念してくれ」
堀内鎮守府の準備もあと僅か。小一時間もしない内に全員が整い、またここから送り出されることになる。
施設のことに不安はあれど、信頼しているのだから振り返らない。自分達は、成すべきことを成す。

施設、鎮守府との通信を終えた後、小さく息を吐く中間棲姫。
「どうしようかしらねぇ。それを聞いてしまうと、リシュリューちゃんには参加してもらいたくはないわぁ」
施設防衛の際に相対する黒幕の刺客が、リシュリューの理性を失わせる復讐の相手だと知ってしまうと、そんな辛い思いをさせるわけにはいかないと思うのがこの施設の主の考え方。
そもそも今回の敵もそうだが、狡猾な相手に対して理性無しで立ち向かえるほど甘くはない。それこそ手玉に取られてしまうのが目に見えている。『観測者』ですら追いつけないくらいに動き回っているような相手なのだから尚更だ。
「姉姫、あの子が発作を起こした時、一体どうなるのかしら」
素朴な疑問をビスマルクがぶつけるのだが、中間棲姫は苦笑を浮かべるのみ。リシュリューの名誉のためには話しづらいようである。しかし、知っておいてもらわなくては止めることも出来ないだろうから、少し悩みつつも語ることにした。
「簡単に言えば、見境なく壊そうとするって感じねぇ。それこそ、目に付くモノ全てを。ただ、その時はそのきっかけになった子がいなかったからというのはあるかもしれないけれど」
おそらく、その復讐の相手が眼前にいれば、如何なる状態であってもその1人に対してその暴力性をぶつけるのだろうが、当時はそれをぶつける特定の相手がいなかったことで、目に付く全ての深海棲艦由来のモノを破壊しようとしたようである。
繭から孵り、深海棲艦と化したリシュリューか溢れさせた復讐心は、当初は深海棲艦全てに振りまくモノであったため尚更だった。施

設内だというのにあの巨大な艤装を展開してしまう程に錯乱しては、飛行場姫にかなり強引に止められるというのを何度か繰り返し、ようやく自分も深海棲艦であるというところで復讐心が相殺された。
「私はねぇ、今回敵になってしまっている子も、泥のせいだと思うの。だから、出来ることなら救いたいと思っているわぁ。端末の泥と、黒幕の卵を全部消してあげれば、本来のその子に戻れるはずよねぇ」
「そうね。理論上は」
「艦娘ちゃんでも、同胞(はらから)でも、黒幕に巻き込まれた子は全員助けたいと思うの。ワガママかしらぁ」
あまりにも澄んだ瞳でそれを語る中間棲姫に、ビスマルクは少し気圧されてしまった。救うことが当然であるという強い意志をぶつけられたようなもの。今まで戦ってきた深海棲艦とは全く違う者であることは一目瞭然であり、より信用出来る発言。
監査として動いているからこそ、そこの感情を読み取ることは容易だった。そこに一切の後ろめたい感情は無く、本心からの言葉であることを。
故に、ビスマルクの回答は決まったようなものだった。
「貴女の言うことは何も間違っていないわ。ワガママかもしれないけど、その意志は崇高なモノよ。私は否定しない」
「ああ、私も貴女のその意志を肯定する。救える者は救いたいと思うのは、我々と同じだ」
ビスマルクと共に、グラーフ・ツェッペリンもその意志を否定することは無かった。
中間棲姫の考え方は間違ってはいない。それは、人類の平和を取り戻すために行動する鎮守府側の信念と同じモノ。範囲は狭くとも、同じ未来を目指していることは理解出来た。
「ただ、リシュリューちゃんが今回どうにかしなくちゃいけない子を見ちゃった場合、その子が元に戻って私達と仲良くしようと思っていても、容赦なく攻撃してしまうと思うわぁ。そういう子なんだもの」
救いたくてもそこがネックだった。そのリシュリューの在り方を否定するわけでは無い。そうなってしまうのは仕方ないくらいの人

生を歩んできたのだし、一度壊れた心はどうあっても元には戻らない。特にリシュリューはトリガーがあまりにも限定的だったため、慣れるということ自体が出来ない。
　それでも、この施設にいればそんな思いを二度とすることなく生活出来ると思っていた。それが、こんなカタチで打ち砕かれるだなんて、誰が予想しただろうか。
「救いたいけれど、ここにいることは出来ない。そういうことね」
「ええ、そういうことねぇ」
「なら、うまく救うことが出来たら私達の鎮守府が引き取ってあげる」
　ビスマルクがとんでもないことを言い出した。深海棲艦を鎮守府が引き取るだなんて、普通は絶対に言わないことだ。
　しかし、その根拠を聞けばそれが出来る裏付けもしっかりしていた。
「どうせこの戦いが終わったら、ここにいる子の一部は元いた鎮守府に戻りたいと言うでしょう。つまり、鎮守府に深海棲艦が住むことになるわ。それを良しとするためには、先に同じことをしている鎮守府がある方がいいじゃない。だったら、私達の鎮守府が先駆者になるってだけよ」
「欧州棲姫は強大な力を持つ深海棲艦ではある。だが、それが協力者として我々と共存してくれるのならば、穏健派の深海棲艦の存在をより強く証明出来る。これは我々のＡｄｍｉｒａｌ（提督）の発案だ」
　山寺提督の考えとして、今回敵として存在している深海棲艦が懐柔出来るのなら、新たな監査役として仲間に加えたいらしい。無茶苦茶なことを言っているのは百も承知なのだが、穏健派の深海棲艦との共存をよりやりやすくするためならば、これも必要だと。
　とはいえ、その欧州棲姫が完全な侵略者気質であり、どうあっても共存が不可能であるならば、残念ながら討伐というカタチになってしまうだろう。それも中間棲姫に伝えると、悲しそうな表情をしたものの、仕方ないことと割り切ってくれた。
　言ってしまえば、今も何処かで艦娘と深海棲艦が命を懸けた戦いを繰り広げ、そのどちらかが命を落としているのだ。それを考えると、

ここで発見されたからと言って何があっても命を奪わないでくれというのは少々勝手が過ぎる。
　そもそも、野放しにしていたら人類を滅ぼそうとする輩を艦娘が放っておくわけがない。中間棲姫が何と言おうと、まず確実に始末する。共存する案を出した山寺提督だって、始末という選択をするだろう。
「方針はこれでいいわね。それじゃあ、動くなら早い方がいいと思うから、今すぐここの子達と作戦会議をするわ。リシュリューとコマンダン・テストにはうまく隠しながらでいいわね？」
「ええ、そうしましょう。そろそろ装置の準備とかも終わっていると思うもの」
　ここからは難しい戦いになる。一番の問題点が仲間内にあるというのが、辛い現実だった。

　黒幕との決戦に先立って、施設の防衛戦が始まる。迫り来る2人の姫を対処するため、またもや艦娘と深海棲艦の共同戦線が展開されることとなった。

防衛戦

施設では早速、防衛戦の作戦会議が執り行われる。全員参加の戦いであるため、最初から外に出ての話し合いとなった。すぐに作戦行動に出るためにも、外の方がいい。

この間にも島に近付くモノが無いとも限らないので、姉妹姫が哨戒機を飛ばしていた。発見したら作戦会議どころではなくなり、総力戦にすらなるだろう。

最初から島から出て行かない者達は決まっている。そもそも出られない姉妹姫と、恐怖が溢れる可能性が高い潮。この3人は施設の最終防衛ラインとなる。

「こういう時は、誰が仕切ればいいのかしらね。アタシやお姉は戦術とかわからないわよ」

「そうねぇ。そもそもまともに戦う方法がわからないものねぇ」

力任せで雨雲を晴らすレベルの艦載機の爆発を起こす中間棲姫が言うことでは無いと施設の者達は思っていたが、今はここで話を進めるためにスルー。

こういう時は、鎮守府で戦ってきている艦娘に任せるのが一番と、姉妹姫は作戦会議では一歩引いた。ここまで戦略的な会議はしたことがないため、素人同然の2人は基本的には口出ししない。

「ビス子さんや、こういう時は仕切ってちょうだいな」

「誰がビス子よ誰が」

「まーまー。リーダーシップはこの中ではトップでしょ。それに監査なんだからヒトを見る目もあるだろうし、一番いい感じに作戦考えられるんじゃない？」

北上の軽口にビスマルクが苛立ちを見せるものの、その直後に煽てられて口を噤んだ。ここで変に仲違いのようなことをすれば士気が下がりかねないため、あまり余計なことはしない。それに、褒められたら悪い気分ではない。

事実、今ここにいる者の中では最も作戦立案には向いているだろう。監査をしているというのもあるが、鎮守府でも旗艦を務めて仲間

達を先導する役目を持っているため、戦略を立てるのは苦手ではない。
「まぁいいわ。意見が無いなら私が進めるけれど、大丈夫かしら」
施設の者達が作戦立案出来ないというわけでは無いのだが、慣れている者に任せる方が確実。そのため、ビスマルクを中心とした打ち合わせで良しとされた。
そのビスマルクのことを知るリシュリューがそれでいいと言ったことがさらに後押ししていた。信用度が高いと考えてもいいと仲間達が信頼を置いたようである。
「それじゃあ、私が話を進めていくわね。今回の部隊は、3つに分ける。1つ目は、私とグラーフがここに来るまでに発見した敵対深海棲艦の居場所に向かう部隊。2つ目は、そこから移動していることを考慮して、別の場所に調査を仕掛ける部隊。そして3つ目は、万が一のために施設の守りを強化する部隊よ」
施設近海と言っても、海は当然広い。何処から来るかなんてわかったものではないのだ。故に、ここから2つの部隊を作って、こちらから立ち向かう。
しかし、だからといって全員が出払うのは危険だ。島から移動出来ない姉妹姫に何かがあった時、対応が出来るものが少な過ぎるのは危うい。そのためにも、強力な防御性能を持つ者は施設に残り、侵略を防ぐ必要がある。八方向にバリアが張られたとしても、何が起きるかわからないのが黒幕絡みの敵だ。
「貴女達の実力はある程度は理解しているつもりだから、そこから配分するわ。何か文句があったら言ってちょうだい。善処するから」
ビスマルクは理解していると話しているが、実際のところ、ここの元艦娘達は戦っているところを見たことがないため、元となっている艦娘から力を拡張しているとして、さらに深海棲艦特有の高出力な戦い方も考慮した。
だがそれ以上にここで大切になるのは、おそらく相性。充分過ぎるくらいに仲がいい者は引き剥がさないようにする。そうしなければ、全力が出せなくなってしまうかもしれない。

「まず、艦種はなるべく分けさせてもらいたい。都合がいいことに戦艦は私を含めて3人いるのだから、部隊に1人ずつとしましょう。空母も3人だから均等に分けたいところだけれど、ズイホー、貴女は確か殆どドロップ艦に近いということだったわよね」
「うん、申し訳ないけど、戦力として一人前としてカウントされるのは厳しいかも」
「Ｇｕｔ（わかったわ）．　戦場は厳しそうだから、貴女は施設の防衛に入りなさい。同じ境遇のクロシオもそれでいいわ」
「おおきに。精一杯やらせてもらいますわ」
　このような感じで、ビスマルクが3つの部隊に人員を振り分けていく。配分としては基本的には均等。偏らせた時にその隙をつかれるとそこから崩れる可能性がある。
「部隊の旗艦はそこの戦艦か空母がやる方向でいきましょう。第一部隊、実際に見かけた場所に行く部隊は私、ビスマルクが旗艦を務めるわ。そこから動いていないのなら真っ直ぐそこに向かえるから、そこは私が適任だと思ってる」
　これに関しては満場一致。問題は次。
「第二部隊、ある意味Ｇｕｅｒｉｌｌａ（遊撃）—Ａｒｍｅｅ（隊）になるわけだけど、リシュリューか戦艦棲姫のどちらかに旗艦を務めてもらう。そこで聞きたいんだけれど、どちらの方が防衛能力が強いかしら。戦闘の様子を見ているわけではないから、細かいところは理解しきれてはいないの」
　片方は施設の最終防衛ライン。万が一突破された場合、もしくは裏をかかれて忍び寄られた場合、中間棲姫を絶対に守らなくてはならないため、島の防衛力は出来る限り高めておく必要がある。
　勿論、鎮守府からの対策として、小型化されたバリア装置があるため、島に近付いただけで治療される可能性はある。それでも、そのバリアすら突き抜けてくる可能性を考慮すると、防御力を高めることは損ではない。
　ビスマルクとしては、リシュリューの方が守りに強いと判断してこの問いをしている。望むべくは、リシュリューに戦場ではなく施設防

衛に入ってもらうため。そうなれば、戦場で欧州棲姫の姿を見る確率がグンと減るはず。
　適当ではない完璧な理由をつけて、最悪から離れるための手段を提示した。本人には知られないように。
「それで言うならリシュリューの方が上ね。何と言っても、あの大きな艤装は簡単には突破出来ないもの」
　知ってか知らずか、戦艦棲姫が援護射撃。防衛能力はリシュリューの方が確実に高いと言い切った。
　実際、自分の数倍の大きさの尻尾型艤装を使えば、そんじょそこらの攻撃は軽くいなしてしまうだろう。それこそ、コロラドの扱う白鯨の次に強力な攻防一体の艤装だ。
「そうね、Ｌａｄ（防）・ｆｅｎｓｅ（衛）で言うのなら、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕの方が適任かもしれないわね」
「でしょう。だから、私がその第二部隊の方を受け持つわ。リシュリューが防衛部隊で」
「Ｏｕｉ．　適材適所、というものね。任されたわ」
　戦艦棲姫の言葉に納得し、リシュリューも自分が島を守るべきだと認識する。そもそも施設を守りたい気持ちは強めであるため、攻めるよりは守る方が向いていると自分でも考えているようである。
　ビスマルクは内心ホッとしていた。これでリシュリューが戦場に出たがった場合、どうやって施設に押し込めようかと考えていたのだが、全てが言い訳みたいになってしまって勘繰られる。そうなったら最後、暴走まで一直線だっただろう。
　それに、暴走するかどうかはさておき、それほどまでに強い艤装を持っているのなら、攻めより守りで活躍してもらいたい。仕事はないかもしれないが、後ろに協力な仲間がいるという事実が、戦闘を楽にするというものである。
「なら、戦艦棲姫と相方の空母棲姫には第二部隊、リシュリューとコマンダン・テストには防衛部隊をお願いするわ。コマンダン・テストは空母では無いけれど、ズイホーが一緒にいるし、むしろ姉姫と妹姫も哨戒機は出すでしょうから、充分ね」

施設を守ることは、黒幕の手の者を撃退するよりも重要だ。むしろ、敵を取り逃したとしても、施設が無事であれば問題ないというレベル。それは誰もが納得する。
「あとはうまく配分するわ。……っと、1つ聞きたいのだけれど、ミシェルは……その、戦闘員としてカウントしていいのかしら？」
配分で困ったところはそれもある。リシュリューの問題は防衛部隊というところでどうにか出来たが、ミシェルに関してはなかなか難しいところ。見た目は艦娘卯月。しかし、戦闘力は皆無と言ってもいい。
「ミシェルもここを守りたいぴょん！」
「その意気込みはいいことだと思う。でも、かなり危ないことになるわ。戦えない子がそこに行くというのは、それだけでもリスクが」
「Ｂｉｓｍａｒｃｋ、ちょっといい？」
ミシェルのやる気に少々困っていたビスマルクだが、そこにジェーナスが口を挟む。
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅもね、この施設のことが大切で大好きなの。だから、参加させてあげてほしい」
「そうは言ってもね、今回の戦いは普通の戦いじゃないのよ」
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅは潜水艦としても戦えるの。だから、海の上じゃなくて海の中だったらどうかしら」
ミシェルの特性として、理解出来ないものはその身に影響を及ぼさないというものが大きな部分を占めているが、忘れてはいけないのが、ヒトのカタチをしつつも駆逐イ級としての性質を併せ持つこと。
今でも漁の時に素潜り出来るくらいに、ほとんど潜水艦のような特性を持っている。そのため、今回の戦いは他の潜水艦達と共に海中で参加すればいいのではないかとジェーナスは提案した。
勿論、無理に突っ込むようなことはしないし、危険だと思ったらすぐに撤退する方針。それだけはちゃんと理解してもらっている。ミシェルとて、ジェーナスが悲しむことはしたくないと心に刻み込んでいるのだから、それを守らない理由はない。理解を超えた、本能レベル。

「確かに今回は潜水艦の部隊も必要だと思っていたわ。でも、本当に大丈夫なのね？　脅すようで悪いんだけど、命の保証は出来ないわよ」
今回の戦場はいつになく苛烈になる可能性がある。いくら敵が海上艦で、潜水艦は比較的安全だとしても、何が起きるかわからない。
しかし、ミシェルにはそこが理解出来ていない。死ぬのが怖いとかそういうことではなく、施設を守るために仲間達と共に戦場に出ることへの恐怖が理解出来ない。
怖いものなしという長所にも短所にもなる性質になってしまっているが、ミシェルは至って真剣だ。自分の、仲間の居場所を守ることに、何故恐怖を感じる必要があるのか。みんなのために動くことは悪いことじゃない。
「ミシェルはジェーナスちゃんのところに帰るぴょん。何があっても、どんなことをされても。それ以外わかんないもん」
ビスマルクは艦娘卯月を知っているが、こんな真っ直ぐな瞳をするような者では無かったと思っていた。だから今目の前にいる者は、卯月ではない、ミシェルという固有の存在。施設には無くてはならない、大切な仲間。施設で力を合わせるのなら、ミシェルだって前に出る。
「……仕方ないわね。それじゃあ、海中の安全を確保するため、潜水艦達は常に海中を巡回してちょうだい。ミシェル、ヨナ、あと潜水艦の姉妹ね。４人で行動すること」
「りょーかいぴょん！」
ビシッと敬礼するミシェル。それに倣って、伊４７は深く頷き、潜水艦姉妹も表情は無いが親指を立てる。
「よし、それじゃあ改めて部隊を編成していくわよ」

ここから防衛戦が始まる。最初の難関はクリア出来たが、まだ油断は出来ないのは確か。慎重に、しかし大胆に、今回の敵を確実に斃す。

天性の才能

作戦も決まり、防衛のために打って出る施設の仲間達。２つの攻撃部隊と１つの防衛部隊、そして潜水艦隊という４部隊による複合作戦である。

第一部隊は迎撃隊。一度見かけた場所に向かい、まだそこにいるのならそのまま戦闘となる。

旗艦はビスマルク。随伴艦はグラーフ・ツェッペリン、北上、大井、漣、曙、朧。この中でもビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは、今回の敵である欧州棲姫と交戦経験があるため、戦いはかなり有利に持っていけるだろう。

第二部隊は遊撃隊。見かけた場所から移動していることを考え、そこから離れた場所を調査しながらの戦いとなる。見かけた時点で戦闘になるため、臨機応変な対応が必要になるだろう。

旗艦は戦艦棲姫。随伴艦は空母棲姫、ジェーナス、薄雲、松、竹。深海棲艦のみの部隊となっているため、攻撃力は最も高いと思われる。対応力も充分すぎるほどあるので、もし敵と対面したとしても、そのまま戦闘で勝ち目があるくらいの力を持っている。

防衛部隊は施設から動かず、その２つの部隊を潜り抜けて施設にまで近付いてきてしまった場合、中間棲姫を守る必要が出てくる。そのために、最初から施設から動くことなく防衛線を敷いている。

旗艦に関しては考えられておらず、島に留まるのはリシュリュー、コマンダン・テスト、潮、瑞鳳、黒潮。そこに姉妹姫が加わる。哨戒機を扱える者が４人もいるため、近海を常に哨戒機で監視することも仕事。

宗谷もこの班に入るが、非戦闘員であるため、基本的には雑務を続ける。戦えずとも艦娘であるため、バリアの調整や移動などは可能。そういったことに尽力する。

潜水艦隊はそのままズバリ潜水艦のみで構成された部隊。海中に何事もないことを調査しつつ、黒幕の手の者の動向を表に出ることなく探ることが目的。

旗艦は伊４７。随伴艦はミシェル、潜水艦姉妹。ミシェルは海上艦としても活動出来るが、今回はあくまでも潜水艦として活動する。
「そうだ、先にこれを渡しておくわ」
部隊が決まったところで、ビスマルクが各部隊の代表者にインカムを渡す。山寺鎮守府で作られた小型通信機なのだが、どれだけ離れていても電波が乱れないという特性のモノだという。
泥が含まれた深海棲艦と相対する場合に電波障害が発生するというのは事前に聞いていたため、それをすり抜けるための強固な電波を使った特注品だ。何をどうやっても通信が妨害されないため、今回の戦いにはもってこいの道具。
「水陸両用だから、潜水艦隊にも渡しておく。何かあったらココのボタンを押しながら話せば、全員にその会話は繋がるわ」
「なら、遊撃隊は私が預かる」
「潜水艦隊はヨナが受け持つヨナ、旗艦が持った方がいいと思うから」
第二部隊は戦艦棲姫が、潜水艦隊は伊４７がそれを身につける。外に出て行く部隊の旗艦として代表者となる。
「施設の方では、私と妹ちゃんが持っておくわぁ。哨戒機からの情報を逐一伝えられる方がいいものねぇ」
施設組は姉妹姫が２人で持つ。瑞鳳やコマンダン・テストも哨戒機を飛ばすのだが、代表というのならこの２人を置いて他にはいない。
「あ、そうそう、あたし達も渡さなくちゃいけないのあったわ。大井っち、アレ何処にやったっけ」
「宗谷さんのクルーザーに積ませてもらってますよ。すぐに取りに行きましょうか？」
「いや、出撃直前でいいよ。渡して装備してもらうだけだから」
北上が言い出したのは、前哨戦でも使った泥を弾くバリアを身体の周囲にのみ展開出来る例の装備。前回使った分が全て堀内鎮守府にあったため、今回の戦いでも有用に扱えそうだと持ってきていた。
北上達堀内鎮守府からの出向者は最初から装備しているため問題なく、それで余った分は第二部隊に装備してもらおうということだ。持ってきている数は１０人分近くになるため、いくら対泥スーツが作

れる深海棲艦勢だとしても装備してもらおうということに。
「まぁココまで来たらバリアを突き抜けてくる可能性が無いとは言えないけどね。無いよりマシだし、このバリア装備自体も明石が多少調整加えたらしいからさ。少なくとも、ビス子＆グラ子には装備してもらった方がいいでしょ」
「その言い方では我々がコメディアンのようだが……」
「放っておきましょ。でも、その装備はありがたいわ。万が一のことを考えると、身を守れる手段が多い方がいいもの」
　呼び名はさておき、この装備に関してはありがたいもの。用意出来る対策には限界があるため、１人分に使う予算が普通では無いバリアの装置を借りられるのは願ったり叶ったりである。
「あとはいい？　何か言えるのは今のうちよ」
「うっす。心残り無いっす」
　ビスマルクの最後の確認に、漣が返す。それと同時に、全員が問題ないと返事をした。
　潮とは今話しておいてもいいが、無事に戦いを終わらせることが出来ればいくらでも話くらいできる。そういう思いを乗せたアイコンタクトを潮に投げかけ、それを受けた潮は恐怖を呑み込んで力強く頷く。
「それじゃあ、Ｂｅｔｒｉｅｂｓｂｅｇｉｎｎ（作戦開始）」
　これで本当に準備万端。防衛戦が始まることとなる。

　第一部隊は目的がはっきりしているため、まずは真っ直ぐ欧州棲姫を見たという海域へと向かう。グラーフ・ツェッペリンが哨戒機を飛ばし、さらにそこに飛行場姫の哨戒機がついてくるカタチで、周辺を全て見ていく。飛行場姫の哨戒機は飛ばせる場所に限界があるため、ギリギリまで便乗。
　当然ながら、泥を感知出来る眼鏡は併用。現在は漣がそれを装備し、周囲を確認しながらズンズン進んでいく。こうしている時にも泥が忍び寄ってくる可能性は考慮している。

「そろそろ島に設置したバリアの範囲外だよ。ここからが本番って感じかね」
　呑気な声色で北上が言う。ここまでは泥が無くても当然。あったとしても、バリアが届いていない海中くらいだが、それも見当たらない。
　今は完全に外部にいると考えていい。この方向かもわからないが、反応らしい反応が無いのだから、そう考えるのが妥当。
「近付いてきているなら、そろそろ見えてもいい頃だと思っていたけれど、流石にまだ見つけられないか」
　発見した場所はここよりはまだ遠い。しかし、施設に近付いてこようとしているのなら、もうその姿を見かけてもいいのではとは思っていた。
　それが無いのだから、発見した場所から動いていない、もしくは全く違う方向に動いているかのどちらか。第二艦隊が向かっている場所にいる可能性はそれなりに高い。
「キタカミ、貴女が第二艦隊の向かう場所を指図したわよね。何か根拠があって？」
　欧州棲姫を探す中、素朴な疑問を北上にぶつけるビスマルク。ビスマルクとしては、第二艦隊は自分達とは真逆の方向に向かわせるべきだと考えたのだが、バリア装置を宗谷のクルーザーから引っ張り出している時に、あちらに向かうといいよと助言したのだ。
「んー、今までの傾向？　初めてココに来た奴だけどね」
「Ｔｅｎｄｅｎｚ（傾向）？」
「泥ばら撒いてる奴がいきなり突撃してくることは無いでしょ。少なくとも、これまでに侵蝕されてる奴らを殺すことなく解放してるような輩に対して、真正面から突っ込んでくるのはまずしない。その元凶と言える春雨が島から出て行ったことを確認出来ていたとしても、慎重に事を運ぶはず。まぁあっちの連中ってめっちゃ慢心するから、慎重って言葉を知ってるかわからないけど」
　今までの状況から、敵の考えそうなことを組み立てていく北上。もし自分があちら側だったら、あの施設を攻略するならと、少々捻くれ

た考えも併せて戦略を練る。
「もし今までのことを反省して、なるべく近寄らないで誘き出そうと考えてるなら、今頃はここから少し行ったところ。多分ビス子達にも気付いてて、ここぞとばかりに引っ張り出そうと動き回ってるんじゃないかな。こちらが気付いていて、あちらが気付いていない状況なんて滅多に無いでしょ」
「確かに」
「今のところの泥のばら撒き方からして、かなり動いてるって思い込ませようとしてるから、バラバラに探しに来るくらい考えてさ」
　これまでに見つかった泥のばら撒き方からして、明らかに施設の戦力を分散させようと画策している跡を感じ取ったという。
　施設の同胞（はらから）を纏めて相手にするのは厳しいと考えるのは誰だって同じ。ならば、各個撃破を狙う。むしろ、少なめの状態から侵蝕を狙うのが妥当。
「で、移動するならビス子達を発見した場所から、島から回って４分の１行ったところじゃないかな。一気に真反対まで行けるだけの速力があったとしても、そうしてくると見せかけて真ん中突っ切る。そもそも、ビス子もこっちの部隊と真逆に行かせようとしたでしょ」
「そうね。均等に割り振って、成功率を上げようとしたわ」
「それも読まれてること考えたわけよあたしゃ。読んでるのか直感的に気付いたのかはわからないけどね」
　それもさらに裏を読んであえて動かないという選択も考えたが、あちら側にそこまで考える頭は無いと、割と失礼な考え方からその道はカットした。
「じゃあ、なんで私達も一緒に行くってことをしなかったのかしら」
「纏めて行ったらバレるかもしれないでしょ。まずは施設のみんなを嗾けて、連絡が来たらあたし達も向かう。この方があちらの警戒の仕方を変えるよ。それに、一気に向かったら強引に突き抜けようとするかもしれないよ。今回の敵、施設に近付けたくないんでしょ？」
　何かを見通すような言葉。
「もしかしてさ、今度の敵、リシュコマの天敵だったりする？」

「……ええ、よくわかったわね。勘繰られないように自然に割り振ったつもりだけど」
「だよねぇ。わかりやすかったのは視線かな。防衛部隊を選んでほしいって感じの目力が見えたからね」
北上のこの洞察力に、ビスマルクは息を呑む。絶対に敵に回してはいけない相手だと嫌でも理解する。同時に、確実に侵蝕されたらアウトな存在であることも。
自分でも監査役を仰せつかってからは、ヒトを見る目を養ってきたつもりだったが、北上には敵わないと一瞬で感じた。これはもう、天性の才能だ。
「とにかく、まずはこっちに本当にいないかを確認だね。泥の置き逃げをしてるかもしれないのはあるんだから」
「え、ええ、そうね。……本当に侮れないわね」
「褒め言葉だねぇそれは」
第一部隊はひとまずやるべきことをやる。こちらにいない確率の方が高いが、もしいた場合は困るので。

その裏側、第二部隊。戦艦棲姫を先頭に、北上にアドバイスされた海域を駆け抜けていると、哨戒機を飛ばしていた空母棲姫がピクリと反応を見せる。
「知らない、艦載機、見つけた」
「本当にこっち側にいたのね。北上の言った通りになるのかしら」
一気に臨戦態勢に入る。ジェーナスは流石に軽装で艤装を展開。重装は今は邪魔になるだろう。
連絡はその姿をその目に捉えてから。艦載機だけ発見しても、それを何処から飛ばしているのかはまだわからない。それに、あちらも同じように移動しながらこちらを見ているだろうから、確実に戦いが始まってから増援を募る。
「泥の反応、感知しました。まだかなり遠いですけど、このまま真っ直ぐです」

泥感知の眼鏡を使う薄雲がその姿――泥の存在を捉える。目視確認が出来ているわけではなくとも、手が届く範囲にまで接近することが出来た。
「真っ直ぐって……北上の予測精度、ここまでなの……？」
仲間達が感嘆の息を漏らす。あっちに向かってと言われた方向が、見えない敵にドンピシャというのは、流石に驚きを隠せない。

そして、本当にその姿をその目に捉えることになる。
水平線の向こうにいたのは、２人の姫。
片方は水上バイクのようなものに乗った姫君という風格。手に持つ大剣のような弩（いしゆみ）が特徴的。もう片方は目元まで隠れたヘルメットを被り、マントを翻す騎士のような出立ち。
コードネーム『欧州棲姫』と、コードネーム『欧州水姫』。まさに予想通りの存在がそこにいた。

加護

戦艦棲姫率いる第二部隊が、北上に指示された通りに海を駆け抜けたところ、本当に2人の姫がそこにいた。

片方は水上バイクのようなものに乗った姫君という風格。手に持つ大剣のような弩(いしゆみ)が特徴的。もう片方は目元まで隠れたヘルメットを被り、マントを翻す騎士のような出立ち。欧州棲姫と欧州水姫である。

戦艦棲姫は貰っているインカムのボタンを押し、全域に対して姫を発見したことを伝えた。これで少しすれば第一部隊が援軍としてこの海域に現れるだろう。

また、中間棲姫の哨戒機がギリギリ届く位置にはあるので、いざという時は島からの援軍も出来ないわけではない。リシュリューを呼ぶわけにはいかないのだが。

「本当にいたわね……流石に驚いたわ」

艤装に構えさせながらも、自身も主砲を準備する戦艦棲姫。薄雲は鎖付きの主砲を握りしめ、ジェーナスはいつでも重装に出来るように構えた。

空母棲姫、松竹姉妹は、艤装に腰掛けるタイプの艤装であるため、堂々と構えるということはしないが、睨み付けるように2人の姫を見つめた。

「貴女達が、私達の居場所を壊そうとしている輩かしら？」

「そんなこと見てわかることでしょう。そんなことをわざわざ聞いてくるだなんて、バカなの？　愚かなの？」

水上バイク上の艤装に乗った姫、欧州棲姫が、戦艦棲姫を煽るような物言い。この程度で精神的な安定が揺らぐことはなく、むしろ泥にやられていることが嫌というほどわかるため、哀れに見えてくる。

「貴様達の言う通り、我々は居場所とやらを破壊しに来た。これでいいか」

目深にヘルメットを被る姫、欧州水姫が補足するように話す。欧州棲姫ほどおちょくってくるような物言いはしないものの、雰囲気とし

ては自分達の方が優位に立っていると考えているように見える。
　表情が見えないのでどういう目で見ているかはわからないが、少なくともこの対面に恐怖などを感じているようには到底見えない。
「あらそう。で、少なくとも人数差はこちらにあるわね。多勢に無勢というヤツよ。それでも随分と余裕があるようだけれど」
「ヒトを見る目はあるのかしらね。私達に数なんて関係無いもの」
「ああ、貴様らが何匹群れようとも、我々には敵うまい」
　明らかな慢心であり、自信に満ち溢れた言葉。しかし、あまりにも揺るぎない言葉に、見た目以上の力を持っているのではないかと勘繰ることになる。
　事実、泥によるブーストは確実にある。本来以上の力を引き出され、想定以上に強くなっている可能性は否めない。
　さらに、ここまで来ているくらいなのだから、今までの端末だけでは終わらないだろう。泥による改造を受けているなんてことだって考えられる。そもそも黒幕の拠点にいたはずなのだから、何をされていても疑問はない。
「見た目は多分だけど何も変わっていないのよね。あの忌々しいコスチュームじゃないもの。だから、私達が受けたような侵蝕では無いと思う」
「ですね……わざわざ服を替えるのは、多分当てつけだと思いますけど、あの服からは泥を感知出来ません。身体の中に反応が見えるだけです」
　戦艦棲姫達は知らないことではあるのだが、欧州棲姫と欧州水姫は各鎮守府でも登録されている姿そのままで今ここに立っている。故に、自分達がされたような、端末による侵蝕だけではないのはわかった。薄雲が泥感知の眼鏡によって見えているのは、体内に含まれていることだけ。
「先制攻撃、仕掛ける」
　ここで一手目を繰り出したのは空母棲姫。今ここにいる者の中で、最も回避しづらい攻撃が繰り出せるのは、間違いなく空母棲姫。ありったけの艦載機を展開して、隙間なく空爆に費やす。

空母棲姫も扱える艦載機は相当な数がある。姉妹姫には手が届かないにしても、艦娘達が扱える搭載数は優に超えており、それが一斉に襲い掛かってくるのならば、普通ならひとたまりも無いはずだ。
だが、空母棲姫がここに辿り着くまでに口にした言葉、『知らない、艦載機、見つけた』が、ここで利いてくる。欧州棲姫が徐に弩を真上に持ち上げると、猛烈な勢いで艦載機が発艦され、次々と空母棲姫の艦載機を撃墜していく。
誰も知らない艦載機、それこそ欧州棲姫と相対したことがあるビスマルクでも知らない、超高スペックなモノが欧州棲姫には積まれていた。おそらくこれが、泥によるブースト。
「む……拮抗……」
「んならオレも手伝うぜ！」
航空戦、制空権争いは互角。ならばとすかさず竹が膨大な数の魚雷を放つ。
元来、竹は雷撃が得意な艦娘であり、深海棲艦化したことでそれはさらに顕著となっていた。駆逐艦では本来出来ない先制雷撃、しかも仲間が前方にいてもそれを縫うように放つ器用さまで身につけ、後方支援でありながらもその場所から動くことなく2人の姫に雷撃を繰り出す。
「ふっ、甘い、なっ」
しかし、敵は欧州棲姫だけではない。マントを翻した欧州水姫が立ちはだかると、軽く手を振るだけで魚雷が次々と破壊されていく。
右腕を包み込むような手甲には機銃のような小口径の主砲が装備されており、それを目にも止まらないスピードで連射したことで、超密度で襲い掛かる魚雷を破壊したようだ。一部誘爆もあるものの、魚雷は1本たりとも欧州水姫に届くことは無かった。
「まぁ一点集中させればぶっ壊されるのはわかっていたけどよぉ」
「それだけ水柱が上がれば、こちらの姿なんて見えないでしょう！」
竹の雷撃は最初から破壊されることを見越していた。むしろそれで立ち昇った水柱が目眩しになった瞬間を狙っていた。
竹と完璧な連携が出来る松が、最も層が厚いところに向かって砲撃

を放つ。欧州水姫のみならず、欧州棲姫にも照準を合わせて。
「なるほどな。だが、まだまだヌルい。ヌルすぎる！」
しかし、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに、水柱を突き抜けて突撃してくる欧州水姫。松の砲撃は真っ直ぐ完璧なコースで向かっていたのだが、恐ろしいことに左腕に装備された手甲のみで砲撃を弾き飛ばしてしまった。
いくらなんでもそこまで出来るのは考えていない。砲撃を弾く者は何人かいても、それは盾を使ってだったり、砲撃を重ねたりで凌いでいるにすぎなかった。それを、腕を振るだけで無効化である。松の砲撃も駆逐艦のレベルを優に超えているのだが、その程度なら埃を払う程度に弾いている。
このままだと松まで接近されてしまう。砲撃すら弾き飛ばす左腕で掴まれたらひとたまりも無いだろうし、魚雷を噴き飛ばす右腕で撃たれても危険。そもそも背中には戦艦の象徴である大口径の主砲も鎮座しているのだ。接近なんてされようものなら、あらゆる手段を使われて肉塊にされる。
「Ｓｔｏｐ　ｉｔ！」
それを食い止めるため、ジェーナスがその突撃を前に重装へと艤装を変化。身体を包み込む球体の装甲でそれを妨害する。
駆逐艦という艦種を完全に超えている強固な壁は、生半可な攻撃では傷一つ付かない。唯一、春雨によって最も脆い一点に衝撃を与えられるという神業を決められた時には粉々にされたが、力業で粉砕されることはまず無い。
「甘い、甘いぞ、その程度でこの私が止められると思っているのか！」
手甲の左腕でジェーナスの装甲を殴りつける。ガゴンと鈍い音が鳴り響き、その一撃だけでジェーナスはその場に立っていられない程の衝撃を受けた。さらに追撃と言わんばかりに右腕の主砲を放ち、その衝撃でさらに吹き飛ばす。
普通ならばその場に止まれるくらいには力が入るのだが、あまりの威力にジェーナスは足が浮いた。見た目通りのボールのように扱われ、その場から退かされるような感覚に。

「Ｗｈａｔ!?」
「ジェーナスちゃん！」
　欧州水姫がさらに追撃しようとする動きが見えたため、それを止めるために薄雲が鎖付きの主砲を振るう。胴に巻き付けて前進させないようにすれば、ジェーナスへの威力は減るはずだ。
　だが、そんなことでは止まらないのが欧州水姫である。薄雲の思惑通り、主砲は胴に巻き付いたのだが、それをそのままにして突撃を繰り出したことで、薄雲ごと持っていかれる、
「ええっ!?」
「いい加減にっ」
「止まれよ手前ぇ！」
　流石にまずいと感じたか、松と竹までもがそれを止めようと砲撃と雷撃を繰り出した。距離的にまだ吹き飛ばされたジェーナスからは離れているので、撃つなら今しかないと完全に同じタイミングで放っている。
「止まらぬよ！」
　上を止めれば下が、下を止めれば上が直撃するという状況下だが、欧州水姫はそれすらも気にしない。右腕が主砲、左腕が手甲と、わかりやすく攻防一体の艤装を持つため、身体を捻りながらどちらの攻撃もいなす。むしろ身体を捻ったことで薄雲も振り回される羽目になる。
　３人を同時に相手取っても一切怯まず止まらない。そして、未だに背中の戦艦主砲は使っていないとまで来ている。
　あまりにも強大な力に驚きを隠せなかった。泥によるブーストとは思えないくらいに強化されているとしか思えない。
「相手は彼女だけではないのよ」
　さらには、欧州棲姫自身も攻撃を開始した。空母棲姫との制空権の取り合いが拮抗しているということは、艦載機以外の手段を持たない空母棲姫がその場に張り付けられているようなモノになっているということ。そうなると、欧州棲姫の対処は戦艦棲姫の仕事となる。
「させるわけないでしょう。各個撃破出来るならしたいんだもの」

「その程度の実力で各個撃破とは笑わせるわ。纏めてかかってもこれだというのに」
本体と艤装による同時砲撃。本当は生かして決着をつけたいのだが、欧州水姫を見る限りそんなことは言ってられないことは確実。慢心などせず、余裕などなく、眼前の敵を殲滅するために初回から全力を使っていく。まずはこれに対してどういう反応をするかで、次の行動を考えていかなければならない。
「お前は私と一騎討ちが御所望？」
欧州水姫は砲撃を弾き飛ばしていたが、欧州棲姫は逆にそれを軽々と避ける。乗っている水上バイクのような艤装の機動性能が非常に高く、隙が比較的ある戦艦棲姫の砲撃では、一筋縄ではいかない。
そして、回避しながら艤装に備え付けられた主砲による砲撃も開始。欧州水姫のそれよりはほんの少し小振りではあるが、威力は見た目に反して超高火力である。戦艦棲姫の艤装といえど、当たればかなり厳しい。ガードではなく回避を選択。
「空母！　少しはこちらに回せる!?」
「難しい。今は、爆撃させないことで、手一杯」
空母棲姫が食い止めていなければ、この戦場には爆撃の雨が降っているだろう。そんなことまでやられていたら、完全に防戦一方になる上に、下手をしたらそれすらもままならなくなる可能性すらある。
艦載機の扱いに一点集中している空母棲姫がいるからこその、現在の戦況。数的優位はこちらにあるのに、それをことごとく乗り越えてくる。
「泥の効果か。本当に厄介極まりないわね！」
言っていても仕方ないと、今度は砲撃ではなく突撃に切り替える。欧州棲姫からの砲撃は勿論回避しながら、自身の身体を直接ぶつけるために。
欧州棲姫からは泥の反応も見えているため、ある程度近付くことが出来たらそれを消滅させるために泥刈機を使うつもりだ。半分以上の出力で使うことで、戦闘不能にしつつ体内の泥を失わせる。そうすればブーストが失われると同時に、良ければ侵蝕すらも無くなるは

ず。
「今度は何をするつもりかしら」
「こちらの技術の粋よ。喰らいなさい！」
砲撃を掻い潜り、ある程度の距離まで詰めたところで泥刈機を展開。欧州棲姫に向けて波長を放つ。これは一種の見えない攻撃だ。直感的にまずいと思っても、掠めたかどうかもわからない。
そのため、初見の欧州棲姫は避けようとはしたものの、何かを発射されたわけでもないので、戦艦棲姫の行動を嘲笑う。
「何をしたのかは知らないけど、本当に愚かなのね。不発弾かしら」
「貴女には見えてないだけよ」
その攻撃は、しっかりと欧州棲姫の腕を掠めていた。その瞬間、そこにある泥の侵蝕は失われていく。しかし、掠めた程度であるため、体内で増殖した泥がそれを補完し元通りに。
この時の感覚は欧州棲姫にも伝わったか、少々嫌そうな表情で戦艦棲姫を睨みつける。
「……見えない攻撃と考えればいいのね。直撃を喰らえば、加護が無くなると」
その言葉に眉を顰める。泥の侵蝕を加護と言ったが、戦艦棲姫達にとってみればそれは呪いだ。到底許されるものではない。
「貴女は真っ先に始末しましょうか。どうせならこちら側に来ない？」
「冗談はやめてちょうだい。一度喰らって最悪な気分になったの。むしろ貴女を解放してあげるわ。あっちの奴もね」

たった2人でも、遊撃隊がここまで押し込まれる難敵。泥のブーストまで入った姫2人は、これでもまだ実力を隠しているようにすら思えた。

侵蝕せずとも

戦艦棲姫と空母棲姫でどうにか食い止めている欧州棲姫と、駆逐艦4人では簡単には止まらない欧州水姫。この2人の姫に対して、6人がかりでも苦戦を強いられる施設の遊撃隊。

空母棲姫の奮闘で空爆が無効化出来ているため、この戦況を維持出来ているのだが、この拮抗が崩された場合、一気に劣勢になるのは目に見えていた。

「……強い。なんだ、あの力、は」

全ての艦載機を自らの力でコントロールしながら、欧州棲姫の隙を探している空母棲姫だが、数はあちらの方が少ないのにもかかわらず、あまりにも的確に迎撃をしてくる上に、さらに出し抜こうと攻撃すらしてくる。

空母棲姫がやられてしまえば、あとはもうこの勢いの空爆が戦場全域にばら撒かれ、そのまま劣勢どころでは無くなる。

その力を発揮している欧州棲姫は、空襲に専念しているわけではなく、戦艦棲姫と対等にやり合っている片手間に防いでいるから、さらにタチが悪い。専念すれば、空母棲姫は圧倒されて敗北を喫すると言われているようなもの。

「あれに、負けるわけには、いかない」

艦載機しか手段がなく、だからこそ全身全霊をかけている自分が、本業ではなく片手間に制空権を拮抗させるような輩に拮抗状態を維持されているのが気に入らない。空母には空母なりにプライドがある。

「戦艦。少し、荒っぽく、いく」

「いいわよ、ここに私だけしかいないなら、好きにやればいいわ！」

その戦艦棲姫は、泥刈機の出力を少しだけ上げて、さらに波長を照射し続けていた。見えない攻撃ならば掠めることは出来たのだから、今はこれを連打するに限る。

実際、これさえ使っていれば欧州棲姫は逃げ一辺倒になる。あの見えない攻撃に触れたが最後、体内に蔓延る泥が一部は消え去るのだ。

すぐに増殖して元通りになるとはいえ、直撃してしまえば全てがあっという間に消滅する。
　それだけは避けなければならないと直感的に察したのだろう。強力な力を持つ欧州棲姫といえど、回避以外の選択がない波長による攻撃にはどうにもならない。見えないため、距離をどうすればいいのかもわかっていない様子。
「この、状況を、覆す」
　今は抑え込むことで手一杯だった。それは、自分の行動が仲間達に害を与えないようにするために多少抑えていたからだ。荒っぽく、周囲のことを考えずに動けば、多少は変えられるはずと、空母棲姫は艦載機の動きを少し変化させる。
　丁寧に確実に破壊するのではない。もっと大規模に、荒々しく、仲間のことを考えず、ただ壊すことに専念する。それだけで攻撃力はグンと上がるのだが、代わりに防御力は下がるため、油断は出来ない。攻撃は最大の防御とは言うものの、破壊した敵艦載機の破片などまでは見ていられない。
「全て、壊す！」
　慎重さを無くし、ただ破壊するだけの行動となった瞬間、空母棲姫の艦載機の動きは今までとは違う速さを発揮する。深海棲艦特有の生物的な艦載機が、一切の容赦なく欧州棲姫の艦載機を駆逐していった。
　破壊した時の破片が空から降ってくるような状況になるが、余程大きいモノでない限りは対処しない。全てを機能停止に追い込むことに尽力する。
「そう、ならこちらも」
　対する欧州棲姫は、戦艦棲姫からの見えない攻撃、波長を回避しながらも、艦載機側に手を加え始めた。
　その瞳に紫色の炎が灯った瞬間、破壊された艦載機がどろりと溶け、混沌の色を持つ泥に変化、それがさらに凝固して艦載機へとさらに変化することで、破壊された艦載機が数を増やして再構成されてしまった。

丁寧に破壊していたから起きなかったこと。荒々しく破壊して欧州棲姫に届かせようとした結果、逆に敵の猛攻を強めることになってしまった。
「……っ」
「残念だったわね。貴女の攻撃は届かない。いや、届かせてもいいけれど、その時には貴女は死んでるでしょう」
自分のせいで拮抗が不利になりつつある。空母棲姫はギリッと歯軋りしながらも、もう一度丁寧に破壊する方針へと切り替えた。
破片を残すとそこから増殖する。ただ泥が増えるだけではなく、泥で構成されているモノが増える。それが一番厄介なところ。あまり乱雑に破壊すると、本当に手が付けられなくなる。
「貴女もそろそろ、それをやめてくれるかしら」
「そうは行かないことくらいわかっているでしょう」
こうしながらも、戦艦棲姫による波長の攻撃を避け続けている。その合間にも砲撃を放っているのだが、明らかに余裕を見せていた。遊んでいるわけではなくとも、こちらを値踏みしているような視線にも思える。
対する戦艦棲姫も焦りはなく、自分の調子は崩さずに攻撃の手を緩めることもしない。本体と艤装で砲撃と波長を重ね合わせているのだが、それでも全てを回避され続けている。
戦艦棲姫も、今はこの波長を空に向けて放ちたかった。艦載機が完全に泥によって作られていることがわかったのだから、手っ取り早いのは波長による全機撃墜。
しかし、そちらに気を向けるということは、真正面の欧州棲姫に無防備な状態を見せるということ。ただでさえ本体と艤装の同時攻撃すら回避し続けているのに、その片方――泥刈機持つのは艤装側――が欧州棲姫から照準を外してしまうと、おそらく現状維持が不可能になる。
回避しながら攻撃することであちら側の攻撃の頻度を減らせているとしたら、艤装側が抜けた時点でそのまま押し込まれるだろう。当然、本体の方が防御力は低いため、掠っても致命傷。さらには、あち

らの攻撃にはまず間違いなく泥が含まれているため、バリアがあるにしても直接傷口に注がれた場合は、何が起きるかわかったものではない。
「ジリ貧なのはわかっているでしょう。それでも立ち向かってくるなんて、本当に愚かなのね。それとも、まだ勝ちの目があるということかしら。例えば、援軍を待っているとか」
「そうよ。貴女もわかっているんでしょう。こちらには、貴女達とは比べ物にならないくらい仲間がいる。信頼出来る仲間達がね」
「そうね。ある程度は調べさせてもらっているわ。近付くことは出来なかったけれど、何人も島の周囲を警戒していたものね」
哨戒部隊を確認し、こちらの戦力を調査していたということに他ならない。
ということは、早朝から複数人の仲間達――春雨達が出ていくのも見ている。さらには、その後にやってきた増援のことも見ている。少なくとも、欧州棲姫の存在を確認しているビスマルクに関しては、確実に施設側の戦力としてカウントしているだろう。
「何度も何度もよくわからない同胞(はらから)に邪魔をされたけれど、彼らも来るのかしら。来たところで、今回は返り討ちにするけれど」
これはおそらく『観測者』への物言い。ここ数日はずっと泥を駆除し続けていたため、欧州棲姫からしてみればずっと邪魔され続けたということになる。
本当ならば、施設に向けて泥を流し込み、何かをするまでもなく島の者達を侵蝕するつもりだったようだ。中間棲姫さえ侵蝕してしまえば終わりだが、それだけでは足りず、減らされた戦力を補わせるためにも全員を手に入れるくらいの気持ちで垂れ流していた。
結果的にそれは『観測者』一行と哨戒部隊による駆除のおかげでうまく行かず、今に至る。
「まぁ、その仲間が来る前に貴女くらいは始末しておいてもいいわね。それとも、さっきも言ったけれど私達の仲間になるというのもいいんじゃないかしら。同胞(はらから)なんだから、仲良くしてもいいのよ」
「寝言は寝てから言ってもらえる？　その忌々しい泥に呑まれるなん

て真っ平ごめんよ」
「あらそう。……もしかして、一度加護を受けているのかしら。この甘美な感覚を拒むだなんて、本当に愚か者なのね貴女」
クスリと笑みを浮かべつつ、再び瞳に紫色の炎を灯らせる。その瞬間、砲撃の威力と連射速度が格段に上がり、回避が一気に難しくなった。攻撃しながらでは追いつかない。波長を飛ばすこともままならなくなりつつある。
今までの侵蝕されている者とは格段に力が違う。底上げの度合いが半端ではない。通常の欧州棲姫がどれほどのものかはわからないが、あまりにも強すぎた。
侵蝕がより奥深くまで辿り着いているように思えた。心を埋め尽くすだけでは足りず、細胞という細胞を駆け巡り、常に新たな泥を生成し続けて身体を循環しているような。
「貴女は知っているのよね。あの快楽を、あの昂揚を。そして一度はそれに屈して、受け入れて、その祝福をその身に宿したのよね」
戦艦棲姫には煽っているようにしか聞こえないが、当人は別に煽っているのではなく、自分も受けたその堪らない感覚を反芻するように事実を述べているだけ。話しているうちに欧州棲姫も当時のことを思い出したのか、少しだけ表情を変える。
「でも、私の得た祝福は、それだけじゃない。より深く、より濃く、より強い力なの。わかるでしょう」
相対したことで嫌というほどわかる。あまりにも強い。ただの姫とは一線を画している。艦載機を泥化した後に再構築して増殖させるだなんて、普通では無い。
それでいて、砲撃の方は下手をしたらまだ手を抜いている。こちらの実力を測り、必要ならばより強い力を発揮すればいいと。そして戦艦棲姫と空母棲姫の２人を相手取るなら、今の段階、この程度でいいと判断していた。
勿論これは慢心からでは無い。最初からＭＡＸの力を出すと、その分対策を追いつかせてくるのが厄介だからだ。故に、フルパワーは基本的にはすぐには出さない。それだけ、敵を警戒している証拠。

「決めたわ。知っているのなら、貴女はもう一度こちらに来なさい。あのお方をその目にすれば考えも変わるわ」
「……どういうことよ」
「私と貴女達の違いはそこ」
ふふふと不敵な笑みを浮かべて、とんでもないことを口走る。
「私は、こうされる前からあのお方に屈していたんだもの」
欧州棲姫も欧州水姫も、元は龍驤によって侵蝕されている。そして、あの戦場には必要ないと、黒幕の元へと送られていた。
そこで一度侵蝕を取り除かれているのだという。しかし、その強大な力に心から屈し、侵蝕されていない状態で膝をついた。その状態で泥を呑み、今の力を得るに至っている。
そのため、侵蝕の純度が違う。抵抗しながらも呑み込まれる、抵抗する間も無く呑み込まれるという段階を踏んでいるのだが、この欧州棲姫は自ら望んで泥を呑んでいるため、より深く、より濃く、侵蝕を受けるに至っていた。
その結果が、この劇的な強化。細胞全てに泥が染み込み、波長で消し飛ばしてもすぐに補完される。何故なら、欧州棲姫自身が心の底からそれを望んでいるから。
つまり、洗脳ではない。何も無くてもあちら側の存在ということ。侵略者気質など関係ない。今まで敵対させられていた者達とは雲泥の差だった。最初から受け入れることを選んでいた者には、それ相応の力を与えていたわけだ。
特に同胞（はらから）にとっては有用に働く。艦娘に対しての嫌がらせに特化しているのだから、深海棲艦にはより甘美になるのは当然のことだった。艦娘はあっという間でも、深海棲艦には快楽を与えるのは、そういうところから来ていた。
「……そういうこと。なら尚更気に入らないわね」
そこまで聞いても、戦艦棲姫は欧州棲姫に靡くことはない。
「私は旅人、何者にも屈しない。自分の道は自分で切り拓いてきたんだもの。何処かに腰を落ち着けるつもりなんてないの。それに私、信心深くないのよね。誰かの下につくのもゴメンだわ」

鼻で笑う戦艦棲姫に、欧州棲姫は心底残念そうな表情を見せた。
「そう、残念ね。貴女ならあのお方の素晴らしさを知ることが出来たでしょうに。それなら、ここで始末させてもらうわ」
「最初からそうしなさい。こちらも決めたから」
「決めた。何を？」
睨み付けるように欧州棲姫を見据える。そして、その思いをぶつけた。

「貴女は救えない。だから、ここで確実に始末する。姉姫には申し訳ないけど、ここで命を散らせてあげるわ」

依存の力

敵対する欧州棲姫は、自ら黒幕に屈し、力を与えられた存在だった。そのせいか、今までの侵蝕されていた者達とは比べ物にならない程の力を発揮してきた。

そしてそれは、欧州棲姫だけではない。駆逐艦４人がかりで戦う欧州水姫も例外では無かった。今までの相手であれば、深海棲艦化している４人の駆逐艦であれば戦艦相手でも互角かそれ以上に持っていけただろう。最悪でも多少劣勢になるが圧倒されることはない。

しかし今、４人は完全に圧倒されていた。雷撃が得意な竹、それをサポートするように砲撃を放つ松、強固な防御力を持つジェーナス、鎖によるトリッキーな攻撃を繰り出す薄雲と、四者四様の行動で翻弄するのだが、欧州水姫はそれを全くモノともせずに全て力業で解決してきた。

「め、滅茶苦茶だコイツ！　何やっても止まらねぇ！」

「全部弾き飛ばされちゃう……っ」

何と放っても、魚雷は右腕の主砲で、砲撃は左腕そのもので、全て弾かれていた。

「私の力じゃ、縛り付けることは出来ないよ……っ」

「Ｄｅｆｅｎｃｅもままならないわ!?　軽装にもなれない！」

薄雲が進撃を食い止めるために鎖で縛り付けようとしても、拘束自体が出来ずにそのまま動かれ、その猛進に立ちはだかったジェーナスも殴られるだけで酷い衝撃を受けると同時に、その場に立っていられないくらいの衝撃を受けた。

あまりにも攻撃力が高すぎる。ここまで出来るのは飛行場姫か潮くらいしか思い浮かばない。いや、下手をしたらそれ以上にすら感じる。

「『祝福』を受けたこの私が、貴様ら如きで止まるわけが無いのだ！　さぁさぁ、誰から死にたいのだ！　好きにかかってくるがいい！」

力強く叫ぶと、最も手近であるという理由だけで、鎖を巻き付けていた薄雲に背中の主砲を向ける。今まで使っていなかったが、見ただ

けで砲撃の威力も普通では無いのがわかる。至近距離で放たれた場合、直撃せずともその衝撃でダメージを受けるだろう。そして、放つ本人はノーダメージ。

触れられる程に近付いているわけではないため、バックステップすれば回避は出来るだろう。しかし、欧州水姫もただ撃つだけではない。止められないくらいの力を存分に発揮し、それこそ確殺と言わんばかりに薄雲に接近。

「っ!?」

「この私が動かないとでも思ったか？　かかってこいといったが、かかってこないならば私から動くに決まっているだろう。なぁ！」

そして、爆音と共に砲撃が放たれた。直撃だけは避けねばならないと、強引に射線から飛び退いたものの、やはり衝撃のせいで姿勢を崩され、吹き飛ばされた。

状況が悪かったら、その爆音で鼓膜がやられていたかもしれないが、薄雲は何とかその辺りは耐えた。

しかし、欧州水姫の手段は主砲だけではない。砲撃すら弾き飛ばす左腕を瞬時に伸ばしてきた。おそらく掴まれたらアウト。首ならば死が確定。そうでなくても、その場所が使い物にならなくなるのも確定。

薄雲は生きるために、どうすればその状況が覆せるかを瞬時に考える。自分に出来ることは正直少ない。無傷でどうにかすることはまず出来ない。ならば、何処を犠牲にするか。

「っ……！」

思い立ったのが、やはり一番使い慣れている鎖の活用法。姿勢が崩れていても、これならば左腕を首ではないところへと移動させられる。

春雨や海風、そして叢雲もよくやっている、攻撃をいなす方法。盾や柄がある武器防具ならばもっと簡単だったろうが、今すぐに展開出来るのがこれしかないのだから、これでやっていくしかない。

鎖を二重にして、突き出される拳の前に盾のように構えた。これならば腕力でどうにかしようとされても、少したわませることで衝撃を

吸収しつつ、強く伸ばすことで弾き飛ばす。さらには、攻撃を滑らせることで方向を変え、致命的な攻撃から身を守ることが出来る。
　これによって鎖を握る手がやられる可能性はかなり高いが、命が残るならマシ。
「む、その程度で止められると、思って」
「いないので、致命傷だけは避けますっ」
　欧州水姫もその鎖の持ち方を見たことで何をしたいのか察した。そして、突き出す腕をほんの少しだけ上へ。鎖に止められることなく、狙っていた首よりも少し上――頭に狙いを変えた。
　掴んでしまえばそのまま握り潰せる。駆逐艦の頭など、今の欧州水姫にとってはリンゴを握り潰すようなもの。容易いものである。
　薄雲は欧州水姫が頭を狙ってくることも読んではいた。そのため、強引に腕を上げ、鎖によってその手を払い除けつつも体勢をしゃがむように下へ。
　掴もうとしていたモノが眼前から消えたものの、欧州水姫はそこはまだ冷静だった。掴み殺さないならば、致命傷にならずともダメージは与えようと、右腕の主砲を即座に構える。
「やらせない！」
「薄雲から離れなぁ！」
　だが、ここまで来れば松竹姉妹も黙っちゃいない。再び、砲撃と雷撃を同時に放つことで、無理矢理ガードの姿勢に持って行かせる。
「小賢しいな。だが、甘いぞ！」
　何を思ったのか、欧州水姫は左手で鎖を掴むと、かなり強引に振り回した。咄嗟なことだったため、薄雲は鎖を消すことも出来ず、身体を持ち上げられてしまい、松竹姉妹の方へと投げ飛ばされてしまう。そしてそこには、既に放たれた松の砲撃。
　欧州水姫は薄雲を無理矢理盾にしたということになる。攻防一体となってしまった一撃。松の砲撃は深海棲艦化により駆逐艦の火力では無くなっている。薄雲も強化されているが、砲撃をまともに喰らっては、致命傷にならずとも大ダメージは必至。
「ウスグモ！　Ｃｌｅｎｃｈ（歯を食いしばって）　ｔｅｅｔｈ！」

そこで横から飛び出してきたのはジェーナスだ。いつもとは違う、猛烈なスピードで薄雲に突っ込んだかと思えば、松の砲撃が直撃する直前で抱き締め、その瞬間に重装を展開。かなり強引に薄雲を守りつつ、そのまま真っ直ぐ通過。

そのスピードのおかげで、砲撃の射線上からは辛うじて回避出来た。さらには当初の狙い通り放たれた砲撃は欧州水姫の方へと向かっていく。

「ふっ、避けたか。よくやったと褒めてやる、が！」

先程と同じように魚雷は右腕、砲撃は左腕で対処。一切ダメージを与えられることはなく、むしろ勢いは増す一方。

「ウスグモ、Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋａｙ？」

「だ、大丈夫、ありがとう。でも、どうやって……」

「ハルサメのやり方を真似たの。Ｏｆｆ（ぶっ）　ｔｈｅ（け）　ｃｕｆｆ（本番）だったけど、上手くいって良かった！」

春雨のやり方――瞬間的に脚を生やす、今は脚を伸ばすことで、驚異的なスピードを出す技。それの応用として、ジェーナスは重装を瞬間的に展開することでそれを再現した。春雨の脚とは違って、海面に接する面積が大きい分、そのスピードがさらに上。その代わり、逆に面積が広いせいで真っ直ぐ跳べるかと言われればバランスが非常に悪い。ジェーナス自身が全神経を集中して繰り出したことで、今回は何とか上手くいったというところ。

しかし、現状攻撃が通らないのは変わらない。あちらは今までの敵と違ってスタミナ切れを狙うことも難しい。戦えば戦えほど昂揚し、力を増しているのではないかとすら思える。

「んなら、コイツはどうだ！」

一切止まらない欧州水姫を止めるため、竹は魚雷を発射するのではなく自らの手の上に展開。並の大きさではなく、両手で抱えるほどのサイズ。

そこまでのサイズとなれば、殺傷力も通常の魚雷の数倍。たとえ主砲で撃ち抜かれたとしても、そこからの爆発が確実に欧州水姫を呑み込む。

「ちょっと竹、姉姫さんは救いたいって」
「んなこと言ってられねぇだろ！　あっちは殺す気で、それが余裕で出来るだけの力があんだよ！　そんなヤツを、殺す気無しでどうにか出来ると思うか!?」
「……それは、そうだけど」
「オレは、あんな奴の命なんて何とも思わねぇ。このままにしてたら、松姉ぇが殺されるからな。オレにはそっちの方が耐えられねぇ。松姉ぇはどうだよ」
　竹に言われたことで、目の前で竹を失ったらと考えてしまう。あれだけの攻撃を受けてもピンピンしており、全く止まることなく真正面から突撃してくる欧州水姫は、少しでも気を抜いたら確実に持っていかれるだけの力を持っている。想像が現実になる可能性は、極めて高い。
　その瞬間、松の瞳がドロリと濁った。竹を失うかもしれないという気持ちが小さく発作を起こし、それを引き起こす要因であろう欧州水姫に対しての殺意が一気に膨れ上がる。中間棲姫には生かして救いたいと言われているが、竹を殺すつもりならば容赦することは出来ない、
　これにより、簡単にリミッターが外れた。
「嫌よ、絶対に。なら、アレは始末しなくちゃ」
「だろ。だから姉姫さんにゃ悪いが、ここまでやらねぇとどうにもならねぇ」
「うん、いいよ、やる。竹が死ぬくらいなら、そんなお願いは知ったことじゃない」
　常にやる気満々な竹は、松を失うと考えた時には怒りが溢れる程度。しかし、いつもは冷静な松は、竹を失うと考えた時には簡単にキレる。互いに依存相手を失いたくないという思いから、眼前の要因は一片残らず消すという判断に向かう。自分の姉妹以外の命は、簡単に軽いモノへと変わる。
　幸いなことに、欧州水姫も欧州棲姫と同様、侵蝕が無くても黒幕に屈している存在だ。治療したところで敵対は変わらない。それ故に、

始末しなければ止まらない可能性はある。
「いいぞ、その目だ、この私を止めるのなら、それくらいになってもらわなば困る、なぁ！」
　松竹姉妹の殺意を感じ取ったか、すぐさま背部の戦艦主砲を向けて、間髪容れずに放った。爆音と共に放たれたそれは、真っ直ぐ姉妹に向けて飛んでいく。
「竹」
「わかってらぁ！」
　互いの艤装をぶつけ合うようにすることで、その衝撃で砲撃を左右に分かれて回避。風圧だけでも相当なモノではあるのだが、それだけで体勢が崩れることは無かった。自分の脚ではなく、艤装を使って航行しているためか、良すぎるくらいの精度のバランサーが、ふらつきすらも無くしている。
「貴女には死んでもらわなくちゃいけない。竹の脅威は排除しなくちゃ」
「松姉ぇの命を狙うってことは、死んで詫びなくちゃいけねぇよなぁ！」
　そこから急発進。突撃の構え。松は艤装をバイクのようにしてしっかりと跨り、先端に設置された主砲を欧州水姫に向ける。竹は逆に艤装にサーフィンのように立ち上がって乗り、構えた巨大な魚雷を近接武器のように扱いながら、通常の雷撃も併せて突っ込む。
「ほう、そうか、貴様らは姉妹か。ならば、片方がやられればもう片方もやられる、な！」
　共依存なことは見ていれば確実にわかること。相方がいなくなることで、もう片方も無力化出来ることは一目瞭然。
　そこで欧州水姫は、どちらの方が致命的になるかをその場で割り出した。力量はその戦闘経験から、性格などはその表情から。
　そして、
「貴様を先に始末してやろう」
　狙いを定めたのは、竹。巨大な魚雷は厄介であるということと、竹が松を鼓舞している節が見えたところから。おそらく、竹が目の前で

死んだ場合、松は確実に再起不能になる。逆ならば激情して相討ち狙いもあり得るため、より安全である方を選択。
「はっ、やれるものなら」
「やってやるのだ。この私が、なっ」
突如、背部の戦艦主砲が完全に後ろ側に回った。そして、全てを同時に放つ。すると、欧州水姫の身体が浮かび上がるようにすら見える程の衝撃が発生し、自らの脚で進む以上のスピードで竹に突撃した。
正気かと思った時には、竹はその巨大な魚雷を投げつけていた。相手の勢いも活かして直撃を狙う。当然、当たればそのまま爆発。自分もそれに巻き込まれる可能性はあるが、中心部にいるわけではないため致命傷にはならない。欧州水姫だけは粉微塵になるはず。
「甘い、甘すぎる！」
だが、欧州水姫は突撃しながらも身体を回転させ、羽織っているマントを凄まじい勢いで回転させる。それは投げられた魚雷を絡め取り、破壊することもなくいなしてしまった。
そんな無茶苦茶な動きに、竹は思わず驚きで一瞬動きを止めてしまった。そのほんの少しの隙が命取りになると理解していても、すぐに身体が動かせなかった。それは、死の恐怖が引き起こしたモノ。
「っあぁぁあああああっ！」
竹には死よりも怖いものがある。松を失うことだ。それだけは絶対に許せない。
故に、死の恐怖なんて簡単に蹴散らし、むしろ怒りを奮い立たせ、回避された魚雷を消して手元に再展開。魚雷としてではなく鈍器として殴りかかる。
「っはっ、いいぞ！」
振りかぶった魚雷は、左腕で軽々キャッチ。そして、右腕が竹に向けられる。
「貴様を認めよう。だが、届かない」
「竹――っ！」
撃たれたら竹は終わる。そんなことをさせるわけにはいかない。その瞬間、松は艤装を蹴り欧州水姫に飛び掛かっていた。

咄嗟の判断だったとはいえ、突飛な行動。そして、欧州水姫すらも反応するくらいの特大な殺意に、撃つ手がほんの少しだけ止まる。
「竹は、やらせない！」
「止められるものか！」
「オレがこんな簡単にやられるかよ！」

三者三様の叫びの後、爆音が響いた。

強すぎる姫

「竹は、やらせない！」
「止められるものか！」
「オレがこんな簡単にやられるかよ！」
　三者三様の叫びの後、爆音が響いた。欧州水姫の砲撃音、竹の振りかぶった魚雷の破砕音、咄嗟に飛び出した松の衝突音、全てが混じり合ったような爆発音。
「竹、だ、大丈夫……!?」
「おう……辛うじて、な」
　一番大きかったのは、やはり竹の持つ魚雷だった。その大きさとは裏腹に、爆発そのものは通常の魚雷よりも小さかった。流石に近接戦闘に使うために展開した武装であるから、自分への被害を鑑みて控えめにしていたのが功を奏した。間近で爆発しても、腕が噴き飛ぶとかそういうことは無かった。勿論それは竹が咄嗟に耐爆のための防火服を展開していたから。それでも、被害は当然出ている。
　魚雷と松と突撃によって致命傷になることは無かったものの、防火服すらいとも簡単に貫く欧州水姫の砲撃が左腕を掠めてしまったことで、二の腕に肉が抉れるようなダメージが入っていた。さらに自分の魚雷の爆発で、半身に火傷。服もボロボロになっている。咄嗟に作ったためか、自分の身をギリギリ守る程度で仕事を終えてしまったようだ。一瞬気を失いかけたが、敵の眼前で気絶するようなことは無い。
　松も咄嗟に飛び込んでしまったため、欧州水姫の砲撃の衝撃をまともに喰らってしまった。小型の主砲といえど、殆ど接触しているようなもの。竹への直撃を止めることが出来たとはいえ、それによって肋骨にヒビが入ったような痛み。それだけでは終わらず、内臓にダメージが入ったのか、口の中に鉄の味を感じた。
　そして、欧州水姫。２人がかりでここまでやったにもかかわらず、左腕に破損が見える程度。爆発する魚雷に触れていたのに、砕けることもなく、一部ヒビが入っていたり、鉄鋼の奥の素肌が見えていたり

するのみ。あとは、翻していたマントが焦げついていた程度。
あまりにも強すぎた。黒幕に屈し、侵蝕されていなくとも本心から泥を受け入れ、最大限の力を取り込んでいることによるスペックアップが異常。攻撃面も防御面も強いとなると、攻略法がどうにも掴めない。
「ふむ、その度胸は大したものだ。愛する者を守るために身を挺するその姿勢は、見事と言えるだろう。だが、それでこの私に届くと思ったら大間違いだ」
ダメージが大きい竹に向かって、軽く左手で突き放すように押す。ダメージがあるせいで、ただそれだけでも身体がフラつく。そもそもの力が強いというのもあるが、殴るわけではなくただ押すだけで済まされたことに憤りを感じる。
「手前ぇ……っ」
「動かない身体で、その目によく焼き付けるがいい。貴様の愛する者が死ぬところを」
そしてすぐさま右腕を松に向けた。次の瞬間には頭が無くなっているという状況下となり、痛みを堪えながら松はすぐさま動き出す。
蹴り出した艤装を消したかと思えば、自分の真下に再展開。砲撃が放たれそうになったと同時にもう一度蹴り出し、射線からかなり強引に外れた。
その時に動くことが難しい竹を救うように抱き締め、さらにそこから離れるために艤装を展開しようとした。2人分の艤装がその場に出来上がってしまうため、上手く動かせるかどうかわからないが、少なくともあの砲撃から身を守るためには必要。
「甘い」
しかし、艤装を展開した瞬間に脚に砲撃を掠めてしまう。小型の主砲と侮るわけでは無いのだが、掠めるだけでも肉を削ぐのは竹の時と同じ。よりによって脹脛の辺りをやられたため、自らの脚で立つことが困難になってしまった。
艤装に乗ることで航行するタイプであるため、まだ回避が出来ないわけでは無い。しかし、痛みによってそこから動くことが難しくなっ

てしまった。
「っあっ!?」
「松姉ぇ……っ」
「逃げるな子ウサギ」
２人の艤装の上で悶える松竹姉妹に、欧州水姫が纏めて始末してやると言わんばかりに戦艦主砲を向ける。
欧州水姫の中では既に狩猟のようになっていた。命懸けの戦いではなく、一方的な虐殺。しかも、殆ど遊びのように。
「いい加減に、してください！」
「おぐっ!?」
これには蚊帳の外になりかけた薄雲も明確に気に入らなそうな声色。止めるために鎖を投げ、その首に巻きつけ、思い切り引っ張る。普通ならばそれだけでも死に至るはず。おかしな悲鳴も出たため、鎖は気管支を押し潰しているはず。
今のまま撃たれたら間違いなく松も竹も死んでいた。竹はそれに気付いており、小型ではあるが魚雷を投擲していたくらいだ。傷を負った身で咄嗟に投げたからか、それは結局うまく当てられなかったが。
しかし、欧州水姫は見事に首が絞まっているにもかかわらず、まるで堪えていない様子。急に絞められたために変な声が出たようだが、それで終わり。その鎖を握り締めると、薄雲の方に視線を向ける。
「今だけは力が強かったようだが、まだまだ甘いようだな」
縛り付けられたことをいいことに、強引にそれを引っ張る。しかし、今回は薄雲もそうされることを見越して、すぐさま鎖を消した。ただ虚空を引っ張ることとなり、欧州水姫は少しだけ体勢を崩す。
その瞬間を見逃さない。次はジェーナスが猛スピードで突撃。一度やったことなのだから、次も成功させると、重装を瞬間的に展開して急激にトップスピードに持っていき、さらにもう一度展開することで自ら巨大な鉄球と化した。
「ふっ、甘い、甘すぎる。所詮は駆逐艦か」
質量のある体当たりを、その左腕で受け止めてしまった。その時に

また手甲にピシリとヒビが入るが、あれだけの勢いを片手で止めて尚ダメージらしいダメージを受けていない。
「なっ」
「軽いな。重ければ貴様も動けないのだろう。しかし、硬い。私の砲撃では傷を付けることも困難だ。ならば、中身だけを始末してやろう」
力強く掴んだと思ったら、中にジェーナスが入っているにもかかわらず、そのまま片手で持ち上げ始めた。
そんなことをされるのは初めてであるため、ジェーナスもパニックになりかける。重装の艤装を消すという選択が頭に出てこないくらいに。とはいえ、今ここで消したら生身が掴まれて破壊されているだろうから、選択としてはそこまで間違いではない。
「えっ、ちょ、何よそれ!?」
「軽いと言ったろう。この私には、貴様らなどこの程度だということだ！」
そして、一気に海面に叩きつける。当然、中に入っているジェーナスは重装の内側に叩きつけられることとなる。
「Ｏｕｃｈ!?」
「何度か振れば、中でミンチになるだろうな。耐えてみせろ」
持ち上げて、二度目の叩きつけ。自分の艤装なのに、その強固さがダメージの一因となっているのだが、艤装を消すわけにはいかない。故に、ジェーナスはこのダメージに耐えるしか無い。
深海棲艦化したおかげで艦娘よりは身体は頑丈だ。ある程度は保つ。しかし、何度も何度も繰り返されれば、欧州水姫が言うように、こねくり回されてミンチになってしまう。ただでさえ２回目で強めに打ち付けることになり、腕がミシリと悲鳴を上げる。
「今のうちに攻撃してぇ！」
ジェーナスの悲痛な叫び。今ここで十全に動けるのは薄雲だけだ。
「ジェーナスちゃんを！　離してぇ！」
再び鎖を投げる。だが、今回は先端の主砲に重きを置いた戦術へ。分銅のように振り回された主砲は、真っ直ぐ欧州水姫へと向かう。小

さくとも直撃すれば骨などを簡単に砕くくらいの質量兵器。遠心力も乗って、そもそも深海棲艦化により高まっている腕力を数倍に引き上げた。
「甘い、な。今の私には盾がある」
その攻撃に対し、さも当然のようにジェーナスを盾にして、薄雲からの攻撃を防ごうとする。
「させない！」
だが、それは薄雲は織り込み済み。ジェーナスに直撃するかと思いきや、鎖が一気に伸びてジェーナスを軸に迂回するように回り込む。そして、軽く手首をスナップさせた瞬間、先端の主砲が欧州水姫に狙いを定めていた。
鎖で繋がれている先まで薄雲のコントロール下に置かれているのが、この艤装の特徴。手から離れていても遠隔操作で砲撃が可能だ。欧州水姫の背後には戦艦主砲と基部があるものの、撃てばそれなりの効果がある。
「むっ、それはいけない、な！」
流石にまずいと感じたか、ジェーナスを離して振り向き、放たれた砲撃は左腕で弾き飛ばす。さらには同時にジェーナスを主砲で打ち払い、器用にも負傷した松竹姉妹の方へと飛ばしてしまった。
今のジェーナスが直撃したら、松も竹もただでは済まない。ならば生身でぶつかり合った方がダメージは小さいはずだ。
しかし、欧州水姫はそれすらも許さない。真後ろに向けて戦艦主砲による砲撃を放ったのだ。打ち払ったジェーナスに直撃するように。
重装のジェーナスならば、この砲撃の直撃を受けたとしても装甲が破壊されることは無いだろう。それほどまでに頑丈であり、ジェーナスの防御力を約束している絶対的な盾。
だが、その衝撃を受けることで押されるカタチとなり、重装のまま松竹姉妹を押し潰すことになる。ただでさえダメージが大きい松竹姉妹にそんなことが起きたら、それが致命傷になりかねない。そして、そうなってしまったらジェーナスは自己嫌悪の発作を確実に起こす。

ならばこそ、ジェーナスの選択は1つしか無かった。
「マツ、タケ、艤装を消して！」
咄嗟に思い付いた方法には、2人の艤装が邪魔だった。そんな状態で重装に包まれたジェーナスの直撃を受けたら、艤装を展開している時よりも致命傷になる可能性が高い。それでも、ジェーナスは全員が守られる道を掴もうとした。
松竹姉妹もジェーナスの必死さから、従った方がいいと直感的に判断して、互いに艤装を消す。
「Ｇｏｏｄ！　ちょっと我慢してぇ！」
欧州水姫の砲撃がジェーナスを直撃。それでも重装は凹む程度で終わるが、そのせいで弾き飛ばされる速度が急激に上昇。
だが、ジェーナスは防御出来たと認識した瞬間に艤装を解除。生身となって松竹姉妹へと突っ込むことになる。
「纏めて始末してやろう。それが望みのようだから、なっ」
勿論それを欧州水姫は見逃さない。さらに追撃の砲撃を放つ。薄雲にそれを守らせないように、右腕の主砲でしっかりと牽制までする強かさ。
これが直撃した場合、3人纏めて木っ端微塵。致命傷では済まない。
「させるわけ、ないでしょ！」
そこでジェーナスは、松竹姉妹にぶつかった瞬間に艤装を2人を中に格納するカタチで再展開。そのおかげでどうにか砲撃によるダメージを最小限に抑えることが出来た。
「Ｃａｐａｃｉｔｙ　ｏｖｅｒだけど、なんとか、なったかな」
「わ、悪りぃ、めちゃくちゃ揺れたが、何とかなったぜ……」
「骨が、軋む……っ」
元々怪我をしているため、この衝撃は身体に響いていたが、致命傷にはならない。まだ命は繋がっている。
「ほう、ならばその中で3人混ざり合ってしまえばいい」
ここぞとばかりに戦艦主砲を連射。ジェーナスの重装艤装を破壊出来るまで叩き込めばいいと力業で押し込もうとする。1発くらい

ならどうとでもなったが、2発3発と放たれればジェーナスとて限界が訪れてしまうかもしれない。
そして、この状況で艤装を解除することは絶対に出来ない。ジェーナスのみならず、松竹姉妹にも影響が出る。
「撃つのを、やめてぇっ！」
薄雲がすかさず魚雷を放ったが、当たり前のように右腕の主砲で全てを破壊。鎖もそこに繋がった主砲も、左腕で全てを弾き飛ばしてしまう。
攻撃も防御もあまりにも完璧。たった1人で3つの動作を隙なく繰り出すため、突破口がまるで見当たらなかった。4人がかりでも圧倒されたのに、薄雲1人でどうにかなるわけが無い。

故に、ここで現れた援軍は、心強かった。ミサイルのように飛んできたのは魚雷。すかさず撃墜するものの、その数が尋常ではなく、欧州水姫は戦艦主砲を放っている余裕が無くなる。
「む、援軍か。それまでに始末出来なかったのは、この私の落ち度かもしれん」
魚雷が飛んできた方に目を向けると、そこに立っていたのは5人の艦娘。
「欧州水姫ってこんなに強かったっけ？　流石にここまでする奴じゃ無かったっしょ」
魚雷を手のひらで回しながら欧州水姫を見つめるのは、北上。その隣には大井が立ち、付き従うように漣、曙、朧が魚雷を構えている。
「ま、なんだっていいか。とりあえずまぁ」
魚雷を握り締めて、欧州水姫に突きつける。
「駆逐艦（ガキ）虐めて粋がってる姫には、ここでくたばってもらうよ」
その瞳には、明確な怒りが灯っていた。

始末以外の結末

第二部隊の戦場に第一部隊が到着する少し前。元々見かけた場所の近辺を調査していたビスマルク達の元へ、戦艦棲姫からの通信が入る。おそらく全体通信。施設にいる姉妹姫や、海中を警戒している潜水艦隊にもこの音声は届いている。

『発見したわ。想定通り敵は２人。水上バイクの奴と仮面マントの奴。それ以外は今のところ見当たらない。これから交戦するわ』

「了解。第一部隊がすぐに向かうわ。施設は一層警戒して。潜水艦隊は変わらず海中を調査し続けてくれればいいわ」

『潜水艦、了解。少し近場には行くヨナ』

『こちらの哨戒機もうっすら見えているわぁ。何かあったらすぐに向かえるようにしておくからねぇ』

全員の反応が聞こえたことで、発信源の第二艦隊は通信を切り、戦いに専念する。

その場所に最も近いのは当然第一部隊。そのように配置しているのだから、この通信の後にすぐに動き出す。

ある意味作戦通りなのだが、緊迫した空気はどうしても流れる。ここまで来た敵となれば、今まで通りになるわけがない。苦戦することも考えて戦術を組み立てる。

「私達が知っている欧州棲姫と思わない方がいいのよね？」

「だろうねぇ。今までのこと考えると、普通じゃないって思っといた方がいいよ。ただでさえ泥があるからねぇ」

経験則から北上がビスマルクに簡単に説明。軽空母だというのに砲撃やら雷撃やらを当たり前のように放ってきた龍驤や、重巡洋艦に見せかけた戦艦レ級だった古鷹など、敵対していた時の情報を掻い摘んで話すと、ビスマルクもグラーフ・ツェッペリンも渋そうな顔をする。

「それに、ブーストがあるんスよ。ドロップしたてのうちらが、熟練者と渡り合えるくらいになったくらいだし、姫に同じことが起きてるなら、確実に数倍はパワーアップしてますわな。うん、メシマズっスわ」

漣も実体験からブーストの話を付け加えた。むしろそれが重要である。ブーストのせいで、全く同じ行動をしてきたとしても、出力が段違いになる。

そもそも深海棲艦というものは、艦娘よりも高い性能を持っている。それがさらに上がっていると言われてしまうと、一度斃したことがある輩でも手が届かない場所に行ってしまっている可能性はある。

「常識は捨てた方がいいね。あたしはまぁ基本龍驤とぶつかってばっかだったけどもさ、聞いてる感じでもかなり厳しいのは確かだから、覚悟して行った方がいいね」

「Ｇｕｔ．　勿論覚悟はしているわ。情報に無いことがあったとしても、冷静に対処する自信もある」

「ならいいんじゃない？　初見殺しだけはどうにかしてね。あたし達も知ってることしか知らないんだから、いきなりとんでもないことしでかすことも頭の片隅に置いておいて」

もう殆ど脅しにしか聞こえないが、これが全て正しいことなのだから笑えないのである。

そして、戦場に到着。そこでは２つの戦いが繰り広げられていた。

１つは欧州棲姫との戦い。戦艦棲姫と空母棲姫が相対しており、制空権を拮抗にしつつ、欧州棲姫からの砲撃は戦艦棲姫がギリギリで渡り合っている。

互いに傷はなく、撃っては避けての繰り返し、どちらもかなり強力な主砲を備えており、直撃ならば確実に死を提供し、掠めるだけでも肉から骨まで持っていってしまいそうな火力。それを連射しながら隙を探しているという段階である。

とはいえ、欧州棲姫はまだ加減をしているようにすら思えた。不敵な笑みを浮かべながらも、戦艦棲姫に『祝福』を与えようと画策している。一度侵蝕の甘美な感覚を知っているのだから、もう一度与えれば確実に心の底から堕ちると確信しているような表情。

そしてもう１つは欧州水姫との戦い。駆逐艦４人が必死に追い

縋っているのだが、その圧倒的な力により左腕の艤装を一部破損させるくらいで止まってしまっている。
それに引き換え、ジェーナスと松竹姉妹は、厳しい状況下で負傷してしまっていた。３人纏めてジェーナスの艤装内に籠城しているのだが、そこに向けて欧州水姫が戦艦主砲を放ち続けているような過酷な戦況である。唯一フリーにされている薄雲も、砲撃も雷撃もまるで効かないという最悪な状況。どう見ても勝ち目が無いとすら思える。
欧州水姫はこれまで戦ってきた敵の中では屈指の冷静さを見せつけていた。慢心など何処にもなく、ただ効果的な攻撃を繰り出している。そのせいで、欧州棲姫以上の難敵と言える。
「ビス子さんや、欧州棲姫頼むわ。ほら、因縁ある相手でしょ。戦い方も詳しいだろうから、ある程度は優位に立てるんじゃないかな」
ビスマルクの方に視線すら向けずに、軽めに指示をした。ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンは、北上の視線が今、滅多撃ちにされているジェーナスの艤装内の方を凝視していることには気付いていない。
「慣れた方が動くというのは当然のことよね。いいわ、キタカミ。私とグラーフで棲姫に行く。水姫は任せたわよ」
「りょーかい。大井っち、駆逐艦（ガキ）共、行くよ。あたしについてこい！」
両手に魚雷を展開し、接近しながらも勢いよく投擲。合わせろと言わんばかりに視線を送ると、北上組の３人が一斉に同じ行動に出た。大井はそういうことをしないが、漣達は北上に鍛えられた猛者だ。合図と同時に魚雷を投げる。
その光景に驚きつつも、ビスマルクはグラーフと共に欧州棲姫の方へ。因縁の相手の姿をその目にしても冷静さを失わず、現況で最も必要な手段をその場で判断する。
欧州棲姫の厄介なところは、空母並みの航空戦力と戦艦並みの砲撃を同時に扱う上に、その艤装の性能によって高速で動き回ること。その全てが高水準であるため、食い止めることも難しい。
しかし、今は同様にスペックが高い戦艦棲姫と空母棲姫が味方にいるのだ。そのおかげで拮抗にまで持っていけているのだから、この

チャンスを使わない理由がない。
「グラーフ！」
「了解だ。攻撃隊、発艦始め！　蹴散らすぞ！」
ビスマルクの号令を全て聞く前に、グラーフ・ツェッペリンは艦載機を発艦。慣れた動きであるからか、極限まで無駄のない高速の行動で即座に空母棲姫の援護へと向かう。
深海棲艦の艦載機を使っているわけではないので、その動きは有人の直線的な動きではあるのだが、洗練に洗練を重ねた熟練機であるため、まるで敵艦載機の行動を先読みしているかのように動き回り、１つずつを確実に破壊していく。
「航空戦が拮抗しているのなら、私の艦載機で後押しすれば崩れるだろう。あくまでもＵｎｔｅｒｓｔ▪ｔｚｕｎｇにしかならないのは悔しいがな」
「充分よ。私達はＫ▪ｎｎｅｎで攻めればいいわ。私も、拮抗を崩すために動くんだから！」
ビスマルクは戦艦棲姫をサポートするために砲撃を放つ。一方向からの砲撃ならば軽々避けられるだろうが、二方向からの砲撃であれば、回避に専念しなくてはならなくなるはずだ。
かつてビスマルク達が欧州棲姫と戦った時も、同じように行動を固定化させることで、辛うじての勝利をもぎ取った。人数を集めて集中砲火を仕掛けることで、どうにか逃げ道を無くし、
その時は配下の深海棲艦達もいたため、孤立させるのに苦戦したが、今ここにいるのは欧州棲姫ただ１人だ。ならば、ここからでも戦況を良い方向に持っていけるはず。
「あら、増援のようね」
しかし、欧州棲姫はまるで気にも留めずに軽々と回避。２人がかり、しかもどちらも強力な戦艦であるのだが、今の欧州棲姫にとっては多少攻撃が激しくなった程度としか思っていないようである。
「ビスマルク、助かったわ。今のままだとジリ貧だったかもしれない」
「ええ、今見ている限りでも、私が以前に戦った欧州棲姫よりも格段に強いものね。動きの速さがまるで違う。これが泥のブーストってヤ

ツかしら」
「おそらくね」
　ビスマルクは戦艦棲姫と並び立つ。別方向から砲撃を放っても全て避けられるならば、一度ちゃんと合流して、意思の疎通と情報の共有をした方がいい。この場でどうにかするにしても、先に戦っていた戦艦棲姫ならば、この欧州棲姫に詳しいのは当然戦艦棲姫になる。
　ビスマルクの戦闘経験は、あくまでもかつての欧州棲姫に対してだ。その時の定石が今回も効くとはもう思えない。ならば、この場で次の手を考える。いざという時は、過去の経験は完全に捨て去る覚悟。
「助かった。だが、艦載機は、カケラも残さないで、くれ」
「了解だ。何かあるということだな」
「ああ、泥になり、分裂する。数が増えたら、どうにもならない」
「分裂とは……奴らの艦載機はＡｍ（アメーバ）▪ｂｅか何かなのか」
　同じように、グラーフ・ツェッペリンは空母棲姫と合流。戦艦の２人以上に個別に動いている必要がなく、連携が重要。むしろ空母棲姫が顎で促し、グラーフ・ツェッペリンに自分の艤装に乗れと言ってくる程だ。
　グラーフ・ツェッペリンの速力が遅いというわけでは無いのだが、空母棲姫がより速いため、回避行動のことを考えればその状態の方が堅実に戦える。グラーフ・ツェッペリンはそれを察し、否定もせずに空母棲姫の艤装へと飛び乗る。
「戦艦棲姫、状況は」
　砲撃を放って欧州棲姫を牽制しつつ、ここまでの戦いの流れを聞いておく。戦艦棲姫は気分悪そうに欧州棲姫の素性を語った。
「奴はもう救えないわ。姉姫には悪いけど、ここで始末でいい」
「貴女がそう言うくらいなんだもの余程のことよね。まさか、侵蝕されていなくても黒幕に忠誠を誓っているとか？」
「……勘がいいわね。その通りよ」
　救いたいという中間棲姫の願いの、その仲間である戦艦棲姫が反故にしようとしているということは、そのままにしていても島に、施設

に害しか無いということ。
　となると、侵蝕があろうがなかろうが、治療のしようがない。そもそもリシュリューの問題があるのだが、これでは中間棲姫の前に差し出すわけにも行かない。ビスマルク達が引き取るというのも難しいだろう。黒幕に忠誠を誓っているということは、侵略者気質とかそういうのを超えて、完全に人類の敵なのだ。
「ちなみに聞くけど、救う手段は思い付く？　泥を取り除いてもこちらに攻撃をしてくるわよ」
　戦艦棲姫の言葉に、砲撃を放ちながらも考えるビスマルク。そして結論付ける。
「殺さずに捕らえて、忠誠を誓う先を始末すればいいかもしれないわね。そうしたら心が折れるでしょ」
「まぁ、それならいけるかしらね……。そもそもあのレベルを殺さずに捕まえることが厳しいけれど」
　ただでさえ、２人がかりでも無傷。制空権を確保すればまだ優位に立てるかもしれないが、現状ではそれも厳しいかもしれない。とにかく付け入る隙を探すところから始まる。
　もしくは、欧州水姫に向かった北上達がそれを終わらせてくれれば、戦力を増やせるはず。そうなれば圧倒出来る。
「まずはやれることをやるしかないわね。でも、負けるつもりは無いわ。私だって監査だけじゃないんだもの。最悪始末するだけよ」
「いいわね、その割り切りっぷり。私は好きよ」
「深海棲艦にそう言ってもらえるのは嬉しいわね。共存出来ている感覚がして」

　救う手立てが無いわけではないのだが、生かして動きを封じるのは始末するより難しい。しかし、最高の結末は誰も死なないことだ。

依存の在り方

ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンが欧州棲姫と相対する中、北上組は欧州水姫と相対していた。戦艦主砲を放ち続けて、ジェーナスの重装を激しく揺さぶり内部で強打させ続けていたところを、魚雷の投擲によって中断させている。

「駆逐艦虐(ガキ)めて粋がってる姫には、ここでくたばってもらうよ」

怒りに燃える瞳を隠すことなく、さも当然のように魚雷を投擲。それが開戦の合図。

「貴様の中では魚雷は投げるモノなのか。凄まじいな。魚雷が使えないこの私には、まるで理解が出来ない」

「理解してくれなくて結構。これがあたしの、あたし達の戦い方なんでね」

勿論、開戦したのだから動き出すのは北上だけでは無い。アイコンタクトも無しに漣も全く同じタイミングで魚雷を投擲していた。

言ってしまえば、漣は北上の一番弟子とも言えるところまで成長している。もう3人で一人前なんてことは言われない。1人で一人前だ。

「お手伝いします！　私も！」

そこに重なるように、薄雲も攻撃を再開。あくまでもサポートするように、最も使い慣れている鎖を展開して、その行動を封じるために振り回す。

腕力勝負になったら１００％負けるのだが、まずは今戦場に来たばかりの北上達に、欧州水姫の出来ることを全て見てもらわなくてはならない。そのため、効かないとわかっていてもあえて実行する。

「北上さん、少しだけ任せます」

「あいよー。すぐに行ってあげて」

同時に大井達も動き出す。まずは欧州水姫は任せ、危険な状況になっていたジェーナスの保護を優先した。

あれだけの砲撃を受けていても、その装甲は凹み焦げついている程度で、中は無事のように見える。しかし、怪我人が3人詰まった球体

の中で、主砲による振動を何度も受けていたら、流石に何かしらの支障が出ていてもおかしくはなかった。
　真っ先に向かった大井は、戦場を確認して、ジェーナスの他に松竹姉妹がいないことから、あの艤装の中に3人が入っていることは察していた。さらに、あの艤装の大きさから、中の容量としてはギリギリ。おそらく側面に密着している状態で、砲撃の衝撃をモロに受け続けていた。
「大丈夫!?　助けに来たわよ！」
　砲撃が止んだため、重装艤装の元へと駆けつけた大井はすぐに中に声をかける。
「た、助かった、か……。腕もだけどまだ頭がグワングワンするぜ……」
「身体中も痛い……っつ、抉られた脚が……」
「2人とも無事で良かったわ……」
　助かったことがわかったことでジェーナスが艤装を一度消すと、その中から崩れ落ちるように3人が出てきた。
　松は肋骨にヒビと脚の肉を一部削がれ、竹は二の腕を抉られている。そしてジェーナスは自身の艤装の中で振り回されたことで幾つもの打撲痕と裂傷。幸いにも顔にダメージが入っていなかったものの、打ちどころが悪かったかタンコブも出来ているくらい。松竹姉妹よりはダメージは少なめ。
　そして3人揃ってガタガタになってしまっているのは、重装の中で振り回されたことで、その衝撃と音による体力の消耗が原因。欧州水姫が言うように物理的に混ざり合うのではないかと思える程に揺さぶられ、心身共に疲れ果ててしまっていた。
「ジェーナスもそうだけど、松竹は特に少し離れていた方がいいわよ。竹はともかく、松は脚がやられてるじゃない」
　曙がその傷を見てすぐに指示を出す。その艤装に乗って戦う松竹姉妹からしてみれば、脚の怪我は比較的些細なモノではあるのだが、2人とも目に見えて戦いに支障が出る怪我の仕方をしているため、これ以上の戦闘の参加は厳しいと考えた。

しかし、2人の気持ちはそれとは違う方を向いていた。曙には視線すら向けない。
「悪ぃがそれは出来ねぇんだわ」
「うん、竹の言う通り、私達はここで退くなんて微塵も考えてないの」
艤装の中から解放されたため、2人とも改めて艤装を展開。その上に腰掛けることで当たり前のように動けるようになった。少しの振動でも身体に痛みが走る状態ではあるが、戦えないわけではない。十全では無いが。
「アイツはオレの松姉ぇをここまで痛めつけたんだ。オレ達の手でどうにかしなくちゃやってらんねぇんだ」
「あのヒトは私の竹に怪我をさせてるのよ。私達の手で決着をつけないと気が済まないわ」
2人の目は、依存による壊れた心を表に出していることがわかるくらいに澱んでいた。
互いに互いを想い、ほんの一時でも離れることを拒むほどに依存している2人は、一瞬でも相方が死ぬかもしれないと考えてしまったことによって、依存が暴走しかけている。今の状況を生み出した欧州水姫は、この世から消えてもらわなくてはいけない存在として認識された。
「気持ちはわかるけれど、今の貴女達がまともに戦えるようには見えないわよ。特に松、貴女、肋骨がイカれているわよね。今もそうしているのがやっとなんじゃないの？」
しかし、その2人の消耗はお見通しと言わんばかりに、大井が冷ややかな目で見据える。
まるで心臓を貫くかのような視線に、松は何も反応出来なかった。
「いい、よく聞きなさい。お互いにお互いが大切で、ずっと一緒にいたい、いや、いなくちゃいけないという気持ちは私にもわかるわ。貴女達程じゃないけど、私だってそう思える相手がいるもの」
チラリと北上に視線を向けたのがわかった。ヒトの恋路に敏感なのが松竹姉妹の真骨頂。同じ匂いは大井からも感じ取っていたし、むしろ艦娘の中ではトップクラスに強い匂いであるとも思っていた。

その大井からの言葉だからか、松は素直に聞いていた。竹も反発することなく耳を傾けている。
「死んだらおしまいってことくらい、いくら心が壊れていても貴女達ならわかるでしょう。互いに依存しているから死ぬ時も一緒なんて思っているのなら、そんな考えは捨てなさい。生きて生きて生き延びなさい。それで、2人で愛し合えばいいわ。私ならそうする。北上さんと一緒に死ぬくらいなら、北上さんの首根っこを掴んでここから逃げ出すことを選ぶわ。長い時間一緒にいたいもの」
死んだ時点で全てが終わるのだから、死なないように立ち回る。それが大井の考え方だ。生きていられる時間をずっと北上と共に歩いていきたいから。
もし北上が誰かに傷付けられ、その敵をその手で縊り殺したいと思っても、大井は戦場に出ることなく北上の傍を選択する。その方が長く一緒にいられる時間が手に入るから。
「相手が傷付けられたからといっても、貴女達の手でケリをつけなくちゃいけない理由にはならないの。貴女達に仲間がいないなら話は別だけど、こんなにも仲間がいるのよ。勿論、その中でも一番大切なのは相方でいいわ。でもね、こういう戦場にいる時こそ、仲間を頼りなさい。それは痴態でも屈辱でも無い、当たり前のことなの」
依存が溢れているせいで、今の松竹姉妹には周りが見えなくなりつつあった。さっきまでジェーナスに守ってもらっていたのに、解放された途端、相方の無事と憎しみの相手である欧州水姫しか見えなくなっていた。曙に声をかけられても、そちらに目を向けなかったのはこのためだ。
しかし、それがダメなのだと大井は断じた。いくら心が壊れていても、命を失うのは今の幸せを棒に振る愚行だと。そのために仲間を頼るのは至極当然のことであり、美徳と言われても痴態とは言われない。言わせない。
「だから、貴女達は少し離れていなさい。そして、私達の戦いを見ていなさい。貴女の相方を傷付けた報いは、私達が代わりに受けさせてあげるから」

凛とした瞳に、松も竹も心を動かされた。このヒトならばやってくれると信じられるくらいに。
「でも、私達も貴女達のことを構っていられないと思うわ。だから、動けるのなら攻撃じゃなくて、自分達の身を守るために使って。これだけ大層な艤装があるんだもの、避けるくらいは余裕よね？」
「……ああ、松姉ぇのためにも、オレは生き延びてやる」
「そうね。竹のために、必ず生き延びます。そのために、もうこれ以上喰らいません」
よろしいと大井は笑顔を見せて、拳を突きつける。松も竹も、その拳に自分の拳をぶつけるように突き出した。二の腕を抉られている竹は逆側の腕で。
「ジェーナス、貴女はまだ動けそうね」
「マツタケより軽いはずよ……痛みはあるけど、折れてるわけじゃないわ」
「なら、貴女はもう少し頑張ってちょうだい」
「Ｏｋａｙ．　任せて。マツタケの分まで頑張れるから！」
ここからは松竹姉妹は一時離脱。ここから離れるわけではないため、あくまでも周辺警戒をするだけに。
ジェーナスは大井の指示の下、改めて戦場へ。その重装艤装があれば、自らの身は守りやすい。先程までのように、それを利用されて中にいる本体がダメージを受けるということはあり得るが、それでも今は仲間がさらに増えているのだから大丈夫。
「北上さん！　こっちはもう大丈夫です！」
「グッジョブ大井っち。こっちは大変だねぇ」
この少しの間、北上は漣と共に魚雷を投げ続けていた。流石の欧州水姫もこればっかりは主砲で片っ端から破壊するしか回避する手段が無い様子。しかも魚雷が爆発することにより目眩しが発生するため、右腕の主砲ではなく衝撃が激しい戦艦主砲で火柱ごと噴き飛ばす方針でいるようだ。
今北上と漣が投げている魚雷は、少々手を加えた特別製。ダメージ以上に爆炎が大きく出ることで、目眩しの性能が上がっている。それ

によって、戦艦主砲以外の選択肢をなるべく失わせる方針。
「漣、奴さんはこちらの主砲が効かないかもしれないねぇ」
「あの左腕、そういうことっスね。ちょいちょい砲撃も入れてるんですけど、全部弾き飛ばされてるんスよ」
「だねぇ。殴って砲撃を弾くとか、どんだけインチキなんだっつーの」
　無数の魚雷を投げながらも、北上は漣と共に欧州水姫の力を測っていた。北上は欧州水姫の情報も頭の中に入っているが、あの個体は明らかに知っているモノとは違う。ならば、出来ることは全ての力を出させることだ。
　あちら側の全てを知った上で、出来る作戦を全て出す。その場で考え、隙を探し、最善の行動を選択する。それが北上のやるべきこと。
「ふむ、理解が出来た。貴様らは定石を覆す者達なのだろう。我々と同じだ。当たり前を当たり前と思わない。故に強い。納得したぞ」
　欧州水姫はそれだけの猛攻を受けながらも飄々としていた。北上が観察しているように欧州水姫も観察をし、増援の戦略分析までしている。恐ろしい程に冷静であることも、今までの敵とは一線を画していた。
「貴様らは今までの者達よりも力自体は小さいのだろう。しかし、技術でそれを補うのだな」
「そうだねぇ。あたしらはアンタ達よりも火力も無ければ耐久も無いよ。連射も出来ないだろうし、体力も少ないだろうね。でもさ」
　魚雷を投げつつも、少しずつ少しずつ距離を詰めている北上。それに合わせて漣は逆に距離を開いている。魚雷の間隔を変えながらも、薄雲の鎖による援護もうまく合わせられるように調整。
　その場で初めて連携を取るような仲間とも、まるで昔から慣れ親しんでいるように組める。それが北上の真骨頂。観察力が異常に高く、仲間の長所と短所を即座に理解する。
「技術だけなら、アンタ達に後れを取らないよ。むしろ、上だと自負してる。力業で敵を弄ぶようなこともしない。やれることは徹底的にやる」
　投げ続けて投げ続けて、それを延々と砲撃で撃ち落とされていると

ころでの、本来の魚雷の使用法。爆炎の中、海中を突っ切る魚雷は、真っ直ぐ欧州水姫に向かっている。
「はっ、賢いと言えばいいのか。それともズル賢いと言えばいいのか」
欧州水姫はそれにも気付いており、右腕の主砲でそれを破壊。爆炎もバックステップで回避。同時に戦艦主砲で迎撃。同時に3つのことを当たり前のように繰り出す。漣はこの隙を見て砲撃を放っていたが、それすらも左腕で弾いていた。

欧州水姫の底知れない力はまだ続く。だが、北上は勝ち目のない戦いは挑まない。ここから逃げ出さないということは、勝算があるということになる。

獅子搏兎

激戦続く防衛戦。欧州水姫に一方的に嬲られていたジェーナスと松竹姉妹は救われ、怪我の状態があまりよろしくない松竹姉妹はその場から離れる。撤退するわけでは無く、戦いに巻き込まれない位置で待機するという程度だが、一時的に戦線離脱。

残された仲間は北上達を含めて7人。深海棲艦化によるスペックアップをしているのはジェーナスと薄雲の2人のみであるが、北上と大井という熟練者と、その2人に鍛えられて一人前に仕上がった漣、曙、朧の北上組が参戦しているため、一概に不利というわけではない。

「さて、癖はおおよそ掴んだよ」

「流石っスね北上大先生」

「元々知ってる欧州水姫の定石は捨てたけど、うん、ひとまずはね。ただし、簡単に突破出来るとは一言も言ってないよ」

わかったからと言って、あっさりと攻略出来るわけではない。事前に大概の対策が出来ており、かつそれ以上のことをしてこなかった龍驤の時とは話が違う。そもそもの力が何もかも上。単騎で戦ったら、如何に北上といえど何も出来ずに殺されているだろう。これだけ仲間がおり、漣と共に魚雷を投げつつ、薄雲が鎖による牽制をしてくれているから均衡を保つことが出来ているだけだ。

ここまで見ている中でも、欧州水姫が異常なのはとにかく防御性能である。北上達が出来る手段――戦艦には程遠い砲撃と一流の雷撃、そして薄雲などの搦め手――を全て使ったとして、おそらく突破は無理。

ここに大井達が加わったところで、真正面からぶつかっても無意味な攻撃になる。出来ることは今挙げた要素の範疇に収まってしまうからだ。

「でも、付け入る隙はある。例えば、アイツの左腕」

「ヒビが入ってますな」

「あれ、松竹がやってくれたんじゃないかな、薄雲」

「そうです。ただ、そのせいで松ちゃんも竹ちゃんも」

「殆ど相討ちみたいなモンであんだけしかダメージらしいダメージ入んないのかよー。なんちゅー硬さだ」
　しかし、それだけ硬くてもヒビを入れることは出来ているという事実が大事である。条件さえ整えば、欧州水姫の鉄壁の防御にもダメージを与えることが出来るということに他ならない。
「アレを使わせるくらいに攻撃の密度を上げないとなぁ。でも、魚雷は主砲で全部撃ち落とされちゃうし、砲撃はより壊すまでに至らない。薄雲が縛っても、むしろ好都合って言わんばかりに振り回されるし」
　ここの部隊で指揮を出すのはもう北上くらいしかいない。それ故に、この戦場のど真ん中、強大すぎる深海棲艦を前に、それを斃す手段を探し続けていた。あらゆる行動に対して、どのような手段をとって防御回避するか。
　魚雷を投げているだけでは全てを理解することが出来ないため、漣や薄雲にある程度複数の行動をしてもらうようにしていた。そのおかげで癖はある程度把握出来ているつもりである。
　まだ隠し球がある可能性はかなり高いが、現状をどうにかしない限り先には進めない。一歩ずつでも前に進むためには、せめて今の欧州水姫をどうにかする必要はある。
「魚雷がダイレクトに直撃するぐらいでないとダメとなると、あの主砲が厄介だな……」
　まず気付いたのは、あくまでも左腕で防ぐのは砲撃だけということ。魚雷くらいの火力ならば、防ぐことも出来ないということなのかもしれない。
　実際、竹の魚雷による直接攻撃を受けたことであのヒビが入っているのだ。魚雷ならば、左腕の抑えられるダメージの数値以上の威力があるということ。ここにいるメンバーならば、全員が魚雷を扱える。欧州水姫に絶対に勝てないという理屈にはならない。
　しかし、それを補うように戦艦主砲と右腕の主砲を扱い、弱点となり得る攻撃は全て防いでいる。魚雷は間違いなく届かず、そもそも近付くことも容易では無い。竹はその中でも、その身を犠牲にして突っ

込んだのだが、それでもヒビを入れるくらいで終わってしまった。
　そして、欧州水姫は基本的に回避という行動をとっていない。何もかもを迎撃で済ませている。つまり、回避まで入れられたら手がつけられないということになる。
「お喋りは済んだか。全く、一方的に魚雷を投げ続けるだなんて聞いたことがない。しかし、戦術としてはこれがいいのだろう。現にこの私が攻勢に出れなんだ」
　欧州水姫の砲撃がより激しくなる。今までは魚雷の投擲という本来あり得ない攻撃方法を繰り出されたことで様子見をしていた部分もあったが、いい加減に慣れてきたようで、北上を止めるために集中砲火に切り替える。
　戦艦主砲の威力は生半可ではない。投げた魚雷は、その衝撃波を受けるだけでも軋み、そして爆発する。その爆炎爆風すらも欧州水姫に届いていないところに、その防御を攻撃に転じてきた。
「まぁ普通の奴ならアレだけすりゃあ結構怯んでくれるんだけどさ、アンタはずっと冷静で困るよ」
「無論だ。獅子は兎を狩るにも全力を尽くすと言うらしいではないか。この私は、相手がどうであれ出し惜しみはしない。貴様のような兎でも、獅子たる私は手を抜くわけにはいかない」
「わかってんじゃん。じゃあ、こんな言葉は知ってるかな。窮鼠猫を噛むってね」
　欧州水姫の集中砲火を紙一重で避けながらも、北上はまだ余裕を持ったまま話しかける。当然砲撃の衝撃波も掠めているせいで、一撃一撃で身体が軋むようなダメージを受けているのだが、それも効いていないようなフリ。
　そうすることで、欧州水姫の視線は北上に集中していく。漣の砲撃も薄雲の鎖も片手間に弾き飛ばしながらも、直感的に真っ先に北上を始末しなければまずいと思わせていく。
「自らを鼠と称するとは謙虚だな。しかし、所詮は鼠だろう」
「鼠は数集まってデカイのを始末出来るんだよね。これぞまさにジャイアントキリング、大番狂わせってヤツだ。アンタはただのデカブツ

になってくれるかな」
ここで北上は何を考えたか、欧州水姫ではなくその頭上、照準としてはすっぽ抜けているような場所に魚雷を投げた。まるで手を滑らせたかのように。
明確な視線誘導。冷静な欧州水姫は、当たらない魚雷に対しては視線すら向けない。自分に害を為さないならば、無視で充分。しかし、北上が自信満々に上に投げるというのなら、何かしらの意味があるのだろう。視線は向けず、意識だけは向ける。
そして、これが合図となる。
「つらぁあっ！」
欧州水姫の視線と意識を一瞬でも集中させたその瞬間を狙ったのは、北上組の切り込み隊長、近接戦闘担当の曙である。砲撃が跳ね返され、魚雷も爆破されるのならば、自らを飛び込ませて生身を狙う。同じ砲撃でも、ゼロ距離ならば反応出来まいと、出来る限りのスピードで突撃していた。
「む、こちらにも鼠が1匹」
「2匹だよ」
視線が曙に向いた時には、中距離担当の朧がさらに飛び込んできていた。曙がしゃがみ込んで脚を狙い、朧はその上を狙うように魚雷投擲の構え。
「何言ってんの、3匹だねぇ」
そして、長距離担当の漣が砲撃の構え。三点同時の攻撃。魚雷が直撃すれば、懐に潜り込んだ曙もかなり危険なのだが、そこは北上組の連携が冴え渡っており、爆発の瞬間に曙はそこから離れるくらいは出来る。
「させぬよ。その程度でこの私が、やられるわけが……！」
曙には蹴り、朧には右腕の砲撃、漣には左腕による防御、そして北上には戦艦主砲。三点同時には、四点同時をぶつけることで対処しようと繰り出した。
だが、ここで欧州水姫はふと意識を真上に投げられた魚雷に移した。あの時、北上は何故投げた。この攻撃の合図のためにか。それと

もそれ自体が攻撃に繋ぐためか。
北上が繰り出した行動に、意味がないことなんて無い。これまでの戦いと口振りから、北上は基本的には何かを企んでいる。全ての行動に、自身を追い込む何かを含んでいる何かを感じる。故に、ただ投げただけでも注意を向けざるを得ない。
「グッド。注意力散漫になってくれるだけで充分」
そこからの、大井による砲撃。北上の投げた魚雷を撃ち抜いて、欧州水姫の真上で爆発を起こす。光と音で意識を惑わせたところに、さらに北上が魚雷を放っていた。投げるのでは無く、海中へ。
前から漣、後ろから曙。横から朧、そして下から北上。さらには注意力への攻撃として上から大井。三点ではなく、五点の同時攻撃。ここまでしたら、最後に放たれた北上の魚雷が直撃するはず。
「っあっ、行けぇ！」
モロに蹴りを受けた曙だったが、その瞬間に脚を掴み、ダメージを受けながらもその場から避けられないように動きを固定する。
「素晴らしい。だが！　この私に、通用すると思うなぁ！」
欧州水姫の咆哮と同時に、腰から尻尾のように錨が伸びる。欧州水姫の隠し球、ある意味第三の腕が現れ、そちらを朧には差し向ける。魚雷が自分に届く前に尻尾の錨が襲い掛かり、代わりにフリーとなった右腕の主砲を北上から放たれた魚雷に向けた。
「鎖なら、私にも得手があります！」
そこに薄雲が重ねる。同じ鎖でも少々細いが、狙いを外させるくらいの力はあるのだから、強引な投擲でも意味がある。
鎖が絡み合い、本来の意図から外れた位置へと移動させたことにより、朧の投げた魚雷は止まらず欧州水姫へと向かう。
「甘い！　甘すぎる！　その程度では止まらん！」
北上に向けていた主砲を朧へ。既に魚雷を放った北上本体を狙う必要はないと瞬時に判断したようで、魚雷を処理するために戦艦主砲を放つことでそちらも避ける。
「いや、充分だよ。こっちの意図、読み取ってくれたね。流石大井っち」

北上がニヤリと笑った。その瞬間、欧州水姫の真上に突然、大きな影が出来た。それが何かが、欧州水姫にはすぐにわからなかった。
「Ｃｒｕｓｈ（押し潰）ｙｏｕ（れろ）――！」
真上から降ってきたのは、重装艤装を展開したジェーナス。春雨を参考にした艤装展開による超加速を使った跳躍で欧州水姫の上を取り、北上が投げて大井が撃ち抜いた魚雷の爆炎に紛れて最後の一撃。
「き、貴様ら……!?」
「上への視点は一番薄れるでしょ。だから、大井っちに合図しておいたのさ。どうにか上から攻撃出来ないかってさ」
魚雷を投げつつも、北上は大井にアイコンタクトを送っていたのだ。上から頼むと。魚雷を上に投げたのもその一環。
そこから大井が思い付いたのが、ジェーナスそのものを武器とする手段。アレだけの砲撃を受けてそのカタチを保っていられるくらいの強度ならば、上から落ちれば欧州水姫にもダメージが与えられると判断。
「ぬお……っ!?」
その目論見は上手く行き、欧州水姫の真上から押し潰すように叩きつけ、そのまま質量によって戦艦主砲をひしゃげさせた。曙もその時には拘束を解いてそこから離れていたため、ジェーナスに巻き込まれたのは欧州水姫のみ。
「そのままっ、潰すから！」
「こんなところで、この私がやられるわけがなかろう！」
しかし、戦艦主砲はやられたかもしれないが、欧州水姫から突如黒い靄が溢れ始めた。まずいと感じた北上は、すぐさまジェーナスに離れるように促し、それを聞いたジェーナスは艤装の展開を利用して欧州水姫から離れる。
それもダメージになるはずなのだが、まるでブレることなく靄に包まれていった。
「こっからが本気ってことかい。今まで随分と出し渋ってくれたねぇまったく」
北上の顔に冷や汗が流れていた。ここからまた勝ち目を探さなく

てはいけないと思うと、骨が折れそうだと嫌そうな顔。

「ここまで出させたのだ。光栄に思うがいい。私も貴様らに敬意を表し、全身全霊、全力で向かわせてもらおう」

靄が晴れた時には、欧州水姫の姿はより黒く染まっていた。

真骨頂

北上達の連携により、欧州水姫を追い込むことに成功したかと思いきや、何やら黒い靄が溢れるように身を包み、それが晴れた時には本気へと移行していた。

今までも欧州水姫は比較的黒い見た目だった。艤装も服装も黒く、違うところと言えば髪と肌とマントの内布くらい。しかし、黒幕の泥をさらに溢れさせたからなのか、髪も黒く染まっている。また、晴れた靄は微かにだが身体から立ち昇っており、どう見ても近付くのはまずいと感じさせるオーラを湧き立たせていた。

「ここまで出させたのだ。光栄に思うがいい。私も貴様らに敬意を表し、全身全霊、全力で向かわせてもらおう」

数人は見覚えのある紫色の炎が瞳に灯ったかと思えば、ヒビの入っていた左腕の艤装が修復されていく。さらには、たった今ジェーナスが決死の覚悟で飛び込んだことによりひしゃげさせた戦艦主砲すらも元に戻っていった。

「マジか……自己修復とかいつの時代のやべぇ奴だよ」

小さく舌打ちをする北上。過去に自己修復をする敵というのがいたことを思い出していた。決着をつけることが出来ずに戦いが翌日にもつれ込んでしまった時、破損させた艤装がある程度修復されるというとんでもない個体。思い出したくもない過去の遺物。

それとほぼ同じ能力を、目の前の欧州水姫は発揮してしまった。しかも、修復の瞬間を目の前で見せるという絶望感。おそらく本気となったことで破損がリセットされたものだとは思われるものの、ここからはまた同じように全員の力を合わせても無駄になる可能性があるかと思うと、弱気な者なら心が折れるような光景。

「壊しても直るってなら、もう一度壊してやるわよ！」

しかし、ここにいる者達はそんなことで心は折れない。それを証明するように叫んだのは曙。恐怖を振り払っているようにも見えるが、むしろこの状況で溢れてくるのは怒りだ。

生まれてすぐに侵蝕され、トラウマを植え付けられ、それでもそこ

から解放されてまともな艦娘としてようやく成長してきたところに、敵わないような敵が眼前にいるという事実が耐えられなかった。
　勝ち気で反抗心が強い曙にとって、それは怒りにしかならない。理不尽に対する怒り。もう少しこの溢れた感情が多かったら、叢雲のようになってしまっていただろう。いや、この場でもし欧州水姫に殺されかけるなら、間違いなく感情が溢れる。
「ぼのたんの言う通りじゃい！　こんなところで折れるわけにゃあいかんのじゃ！」
「当たり前。朧達は、これ以上の辛いことを知ってるんだ。こんなことで折れるわけが無い！」
　曙に呼応するように漣と朧も叫ぶ。自分に活を入れるように。
　曙も含めた北上組には、勝ち目が見えない敵くらいで簡単に折れるような心は持ち合わせていない。これよりも怖いこと、怒り狂った春雨と相対した経験があるのだから、そんじょそこらの敵には恐怖すら感じない。やる気に満ち溢れている。
　3人が3人、全く闘志を失っていない瞳。勝ちを掴み取るためならばなんだってやってやるという決意と、強大な敵に立ち向かうための勇気が滾っていた。
「いいね、流石はあたしの教え子。こんなことじゃあ挫けるわけないか。アンタ達はどうだい。薄雲、ジェーナス！」
　ニヤリと笑いながら、深海棲艦の仲間達に声を上げさせる。無論、その心は折れていない。
「そんなの決まってるわ！　ここで挫けたら、私達の居場所が危ないもの！　まだ負けてないんだから！」
「はい、ジェーナスちゃんの言う通りです。施設を守るためにも、崩れるわけにはいきません！」
　あれだけのことをやってようやく通った攻撃が、数秒で無駄にされた。これは辛いところではある。特にジェーナスは、あそこまでやったのに無かったことにされたことが、内心では泣きそうなくらいに気分が悪い。
　だが、曙の言う通り、修復されてしまったとしても、もう一度破壊

して仕舞えばいい。一度上手く行ったのだから、また上手く行くはずだ。なればこそ、ここで立ち止まっているわけにはいかない。
「大井っちは、聞くまでもないね」
「はい、私は北上さんと共に行きますから」
いつの間にか北上の隣まで移動してきていた大井は、ほぼ無条件で北上に賛同。むしろ、隣に北上がいて、当人がやる気満々なのだ。こんなところで折れる理由なんて無いし、それどころかやる気を見せる北上というだけでもそれなりにレアだったりするので、大井としてはそんな北上の隣に立つことで充足感を得られている。
「私が見ていないと危なっかしいですしね」
「苦労をかけるね。あたしの性分でさ」
「いえ、こちらも私の性分なので」
ニコッと笑って拳を突き合わせる。そして、未だ靄が湧き立つ欧州水姫を睨みつけた。
「皆、ここで死ぬ覚悟は良さそうではないか。ならば、望み通りにしてやろう」
「いいねぇ、痺れるねぇ。でも、あえてここは言わせてもらおうかね」
北上から笑顔が消えた。基本的に何処かヘラヘラしているイメージが強い北上が、ほとんど見せたことのない真剣な表情を見せたことで、欧州水姫のみならず北上組や施設の仲間達すら悪寒が走った。
それを知るのは大井のみ。この顔を見せた北上は、
「かかってこいよ真っ暗な姫」
誰にも負けたことは無い。
「よかろう、ならばその鼻っ柱を折ってやろうではないか。この私の直感が告げている。貴様を真っ先にやらねばならないとな！」
その悪寒を払拭するためか、靄が脚に回ったかと思った瞬間に爆発的な加速。今までその場に止まる防御的な戦い方から打って変わって、突撃を主体にした攻撃型の戦い方に。その速さは脚の伸縮を利用する春雨や、艤装の展開を利用するジェーナスの速度に近いモノ。それを戦艦の身体で行なってくるのだから、圧はそれ以上。
しかし、北上は一切動こうとしない。視線も逸らすことなく、その

動きを観察する。
今一番警戒しなくてはいけないのは、欧州水姫の身体から立ち昇る靄だ。それはまるで湯気のように身体の表面を揺らめき、黒く染まった髪と共に真っ白な肌を黒ずんで見せる。それが今まででも強力だった身体性能をより底上げし、自己修復までやってのけてしまった。
「常に漏れ出てる、か。なら、時間をかければガス欠を起こすだろうね」
その突撃を止めるために、真正面に魚雷を放り投げる。今までよりも鋭く、速く。欧州水姫が突撃する速度も合わせれば、今までの数倍の速度が出ているように錯覚する。
「甘い、甘いぞ！　この私が力を失うのを待とうというのならば片腹痛いな！　そうなる前に貴様らを殲滅することくらい、造作もないことだ！」
だが、靄を纏った欧州水姫は一味違った。魚雷すら左腕の艤装で殴り飛ばし、爆破させてしまった。そうしても身体どころか艤装も無傷。いや、無傷では無い。ヒビが入った瞬間にその位置に靄が強く立ち昇り修復してしまっている。
完全な自己再生。ほぼ無敵と言えるくらいの肉体を得てしまった。
「いや、出来ないね。その身体、相当無理してるタイプだろ。長く保たない」
真っ直ぐ見据えて突撃を回避する北上。余裕なんてないが、口だけはいつもと変わらず。また、避けながらも他の仲間達に小さく合図していた。指の動きと、ステップで。
それを解析出来るのは大井だけ。常に傍に立ち続けるからこそ、その一挙手一投足の意味を瞬時に判断出来る。北上が最も頼りにしているだけあった。
ある意味、海風の目指すカタチがそこにある。ここにいないのが惜しいくらい。
「その靄、力の前借りだろ。よくあるヤツだ。後からの負担を考えずに、今だけを乗り切ろうとする苦肉の策。ただ、最初の許容量が大き

いからブーストが激しい」
パッと見ただけでここまで分析していた。本気でここにいる者達を皆殺しにするために、後の事を考えずに出せる力を出してきていると感じたのは、靄の出方。最初の自己修復と、今の自己修復の時、左腕の艤装は欧州水姫の内側から漏れ出した靄を吸収してジワジワと元に戻っていった。あくまでも、今の破損を靄の力で補修しているに過ぎない。新品同様のカタチも、一部見せかけのようなものの可能性もある。
しかし、ブーストが激しくなっているのは事実だ。出力を倍近くにしているために、あらゆるスペックが跳ね上がっているのは否定出来ない。当たり前だが、どの攻撃が当たっても致命傷になり得るし、掠めるだけでも靄の分だけ威力や影響力が上がっている。
「その靄、黒幕の泥なんだろ。加護だか祝福だか知らないけど、身を滅ぼすものなんて加護とは言わないんだよ」
殴りつけつつも戦艦主砲を北上に向ける欧州水姫。北上の言葉を聞いても、眉一つ動かさず、黙々と殺すために行動。
近付いてからの戦艦主砲は回避が極めて困難であり、直撃を避けたとしても激しすぎる衝撃でダメージを与える策。
案の定、この至近距離での砲撃は北上の身体を蝕むように軋ませる。その激痛に顔を顰めるが、視線はあくまでも欧州水姫から外さない。視線だけで射抜くように。
だが、顔を顰めた瞬間を見ていたため、欧州水姫は追い込むならば今だと判断した。至近距離での戦艦主砲の連射は、一発一発が北上の身体を軋ませる。直撃は免れていても、ダメージは積み重なっていく。
さらにはそこに両腕による攻撃まで含まれるのだから、北上は回避に専念せざるを得なくなった。
「ったた、そんなにあたしばかりに集中していいのかな。まぁ目が離せないのはわかるけどさ。あたしから目を離した瞬間に、その首を掻き切るからね」
「ぬかせ。だが、貴様はこの中でも最も危険であることは私でも理解

出来る。最初に潰さねばならない存在だ。それだけ認めているのだよ」
「そりゃあ光栄だ。だけど、あたしはアンタを認めない。結局のところ他人の力に頼ってる。アンタの力だけならあたし1人にも勝てないってことだ。あのお方とやらの力で、その身を削って頑張らないと勝てない。しかも、身を削ってるってことは、祝福なんて言いながらアンタも使い捨ての駒ってことだ。そんなヤツに忠誠を誓ってるだなんて、敵のあたしから見ても惨めなんだよねぇ。誇りはあんのか誇りは」
ここで北上節が炸裂する。自分のことならまだしも、主のことをバカにされているような言い分に、欧州水姫は若干だが気分悪そうに怒りを見せる。
琴線を見つけたと北上はほくそ笑み、ここで畳み掛ける。北上の真骨頂、口撃の時間。
「あの黒幕は自分以外はどうでもいい、ただの我儘なお姫様だ。暴君っつってもいい。そんなヤツに仕えてるアンタ達が可哀想で仕方ないよ。しかも、泥の侵蝕が理由なんじゃなく、それが無くてもなんでしょ？　まるでインチキ宗教にハマってる哀れな信者って感じがしてさ。いやいや、それを頼らなくちゃいけないくらい切羽詰まってたのかな。いや、申し訳ない。心神喪失状態の相手をバカにするみたいなことをするのはあまりよろしくなかった。悪いのは全部インチキ宗教の教主様である黒幕だもんな。アンタは悪くない。他人様を利用して思い通りにしようとしている嫌がらせの達人である黒幕がぜーんぶ悪いんだ。ゴミカスみたいな偽神はあたし達が始末しておくから、目を覚ましなよ哀れな子羊」
話しながらもニヤついてきた北上に、欧州水姫は苛立ちが強くなる。それこそ北上の思うツボ。
「貴様は口だけはよく回るようだな」
「お陰様で。ずっとこういうカタチでやらせてもらってるんでね。そうすれば、アンタみたいなヤツでも、あたしに目が向くでしょ」
ニヤリと笑う。その瞬間、猛烈なスピードで突撃してきたジェーナ

スが背後から戦艦主砲に体当たりをぶちかましていた。
「っく……また貴様か」
「それだけじゃないよ。アンタは違うだろうけど、あたしには仲間がいるんだ。こんなにもね」

北上に視線が向いたと感じた瞬間に、大井が合図を出していた。ジェーナスの体当たりを皮切りに、全員が一斉に攻勢に出たのだ。

靄を掻き消して

「それだけじゃないよ。アンタは違うだろうけど、あたしには仲間がいるんだ。こんなにもね」
　北上に視線が向いたと感じた瞬間に、大井が合図を出していた。ジェーナスの体当たりを皮切りに、全員が一斉に攻勢に出たのだ。
「パワーが上がってるのはわかってんだ。でも、あたしらは今からそれを崩す。戦いは、パワーだけじゃあ無いのさ」
　ジェーナスの突撃の衝撃で気がそちらに向き、他の仲間達も一斉に向かってきたことで余計に気を散らせる。ただでさえ忠誠を誓う黒幕をこき下ろすような発言をされて苛立ったところに、雪崩れ込むように突っ込んでくる敵の群れ。これで集中力を乱されない者など早々いない。欧州水姫も例に漏れず、苛立ちが強くなる。
「この……っ」
「いいねぇ、ちゃんと煽りは効いてるじゃん。愛しのご主人様がバカにされたら、いくらアンタみたいな奴でもキレ散らかすんだ」
　ケラケラと笑いながら魚雷を投げる北上。意識が一瞬でも仲間の方に向いたならば、自分の攻撃はさらに命中しやすくなる。わざわざ近付いてきてくれているのだから、的も大きい。
「小癪だな、貴様は！」
「それで結構。アンタが強いから悪い。あたしゃ勝つためには手段を選ばないよ。使えるものは全部使う。状況も、アンタの在り方だってね」
「ならば、私も見習わせてもらおうか！」
　欧州水姫はその魚雷を爆破させることなく左手で掴んだ。ただ弾くだけではなく、繊細な動きでやんわりと止めることも出来るらしい。
　さらには、その魚雷を背後から突撃してくる者達へと投げつけてしまった。当然ながら、これに直撃しようものなら致命傷は免れない。
「ぶっ壊すから、潜ってくだせぇ！」
　それを即座に対処したのは漣だ。遠距離担当ということもあり、砲

撃の精度をかなり高めており、突如投げられた魚雷だってすぐに対応出来る。
　爆炎だけはどうにも出来ないが、むしろこの程度ならば日々の特訓で考慮されているため、少し髪が焦げる程度でもお構いなしに突っ込めるくらいの選択は出来る。
「こっちの手段がこっちに効くわけないでしょうが。そのお粗末な考え方も、アンタのご主人様のせい？　それともアンタがそもそもお粗末？」
　爆炎が巻き起こるということは、向かってくる者達の姿が見えなくなるということ。そして、そんな爆炎などお構いなしに突っ込んでくる者しかここにはいない。
「はっ、ならば全員蹴散らしてしまえばよかろう！」
　後ろから突撃してくる北上の仲間達をどうにかするため、靄を撒き散らしながらも身体を捻り、その間を戦艦主砲を連射する。殆ど範囲攻撃みたいなもので、乱雑ではあるものの最も効果的な手段となる。狙いを定めることなく、点ではなく面の攻撃。これならば爆炎など関係なしに、範囲内の全員を始末出来る。
　一転攻勢に出た仲間達は、ジェーナスを筆頭に殆どの者が欧州水姫の背後に回っている。北上に接近しているのだから、こうなるのは当たり前。そのため、面の攻撃は欧州水姫から見て後ろ半分にばら撒けば、ほぼ全員に影響を与えることになる。
「全員、私の後ろに！」
　そこで1人壁となったのはジェーナス。何発喰らっても、まだあの戦艦主砲は重装艤装を貫くところまでは行かない。そのため、未だに鉄壁は健在である。靄による追加ブーストがかかっても。まだまだ受けることは出来るだろう。
　そして、案の定ジェーナスにその砲撃が直撃する。ガギンと前よりも酷い音が鳴り響いたが、ジェーナスの艤装は少々凹んだだけで、後ろはともかく中にまでダメージを与えることは無かった。
　いや、ジェーナスだけはどうしても消耗してしまう。艤装が凹めば凹むほど、ジェーナスの体力は持っていかれる。松竹姉妹を守るため

にもう何発も喰らっているし、艤装の強度を活かした体当たりなんてことまでしているのだから、身体に怪我は無くとも、体力の消耗はかなりのものだ。
　それでもジェーナスは意地でも倒れない。仲間を守るため、その艤装で矢面に立つ。それが自分の出来ることと理解し、この艤装が壊れるまでは自分が誰よりも前に立ち、全てを受け止める。
　被害は自分だけでいい。それが一番いい。自己嫌悪が溢れているジェーナスにとって、自己犠牲で仲間を守ることが出来るのならば後腐れもなく気が楽。故に、十全の力で守りに徹することが出来た。
「駆逐艦（ガキ）の覚悟の方が、アンタを上回ってるみたいだ。そりゃそうだわな。アンタはゴミカスご主人様に言われるがまま、ただ指示に従ってるだけ。ジェーナスは自分で考えた結果、仲間を守るために勇気を持って前に出た。こりゃあ雲泥の差だ。アンタに勝てる要素なんて無いね」
　鼻で笑いながら煽る北上は、話しながらも魚雷の投擲を続ける。相変わらず主砲を持たないスタイルなので、先程と同じように利用されそうになるが、そこは同じ轍を踏まない。２本同時に投げ、かつそこに3本目を重ね合わせることで、掴んで別方向に投げ直すという回避方法を封じに来ていた。
「小賢しい！」
　その魚雷に対しては、右腕の主砲。怒りを露わにしながらも、それを瞬時に判断出来てはいる。それではまだ思い通りには動いてくれないと、北上はもう少し煽る方向へ。
「あの黒幕に何の思い入れがあるかは知らないけどさ、アンタには損しか無いと思うけどね。どうせ事が済んだら捨てられるよ。アレはそういう奴だ」
「貴様に何がわかる」
「わかるね。これまでどれだけ戦ってきてると思ってんの。こんだけ見てれば、性格くらい分析出来るんだよ」
　実際、北上は黒幕の性格分析をしているわけでは無い。ただ、ここまでのやり口を見る限りでわかることは多々ある。その1つが、自分

の駒(部下)に対しての考え方だ。
「部下に思い入れなんてあるわけがない。そもそも、最初の器で一番可愛がっていたであろう龍驤が負けて戻ってこなくなっても、自分から取り返すって考えに至らない時点で、全員使い捨ての駒くらいにしか考えてないね」
　そのおかげで鎮守府は研究が進んだのでラッキーではあるのだが、それは黒幕の在り方に繋がるモノでもあると考えている。
　本当に大事なら、間違いなく自分から取り返しに来るはずだ。なのに、龍驤がやられても拠点から出てこない。取り返すための部下を送り込んでくるわけでもない。やられたらやられっぱなし。そのくせ、やられたことに対して復讐心を燃やして力を上げているのだからタチが悪い。
「それがどうした」
　しかし、欧州水姫はそれだけ言われても折れることは無かった。むしろ、攻撃の精度は更に上がる。
　侵蝕されていなくても忠誠心を持つ欧州水姫は、現在侵蝕されているのだからより強い忠誠心を持たされているだろう。そのため、自分が駒であると言われたところで、それを受け入れてしまうくらいに洗脳されていた。
　主を馬鹿にされていることには怒りを見せるが、自分の扱いに対しては疑問すら持たない。そういう思考にされている。
「ホント哀れよね。駒であることに誇りを持ってんの？　クソすぎよ」
　そんな欧州水姫に対して、曙すらも憐れみの目を向けていた。自分も経験があるからこそ、同じ境遇、いや、それ以上に堕ちている者を見たら、こんな顔もしてしまうもの。
「使い捨てにされて喜べるなら、あたしが直々にゴミクズにしてやるわ！　救うだなんて意味がない！」
　ジェーナスの陰から飛び出した曙が、一気に間合いを詰めた。戦艦主砲では近すぎて照準を定められないような位置まで突撃し、殆どゼロ距離というところまで来たところで、徐に取り出したのは小型化さ

れた泥刈機である。近接戦闘を得意とする曙のために作り出された、至近距離で治療をするための波長照射装置。
掠めても泥が増殖して意味が無くなるかもしれないが、身体の中心に撃ち込んでやれば話は変わるはず。しかも、出力ＭＡＸならばそれだけでもダメージになる。
「甘く見られたものだ、なっ！」
しかし、至近距離であるということは、欧州水姫の左手も脚も届くということになる。
蹴りは先程モロに喰らっているものの、その時は靄を纏っていなかった。今は靄による追加のブーストがかかっているため、その蹴りは先程よりも速く、威力も高い。それが腹にまともに入ってしまい、曙は猛烈な吐き気に襲われる。さらには、骨が数本イカれた音まで聞こえた。
「学習、しないわね……。さっきのこと、もう忘れたのかしら……!?」
それだけされても、曙は再度脚を掴み拘束する。これならば、波長を直に叩き込む事が出来るだろう。
それに、欧州水姫の体表を漂う靄は、曙が掴んでいる脚からは失われていることがわかった。これは、ここにいる全員が身につけている、泥避けのバリアの装備が影響している。
身体中全六箇所に装備されたバリア発生器で靄が消えたということは、侵蝕性の泥と同様の性質を持つモノだということ。至近距離であればあるほど、欧州水姫のブーストは失われるということになるのだ。
「小癪な。華奢な貴様に、この私を、今の私を、止められると――」
「曙ちゃんだけなわけ、無いですよ！」
すかさず飛んできたのは薄雲の鎖だ。先程は膂力で外されたりしたものの、今回は一味違う。曙の決死の特攻により、装備しているバリアが通用することがわかったのだ。
それ故に、薄雲も博打に出た。自分も渡され、両腕に装備していたバリア発生器を、何と鎖の先端、主砲に括り付けていたのである。
今のままで泥を投げつけられたら、薄雲は侵蝕されてしまう可能性

が非常に高い。バリアが不十分であるため、肌に張り付いたらアウト。その心の傷は決して癒えることはない。
それでも、ここでやるのならこうするべきだと、トラウマを振り切った。
「ぬぅっ!?」
曙が脚を拘束してくれているおかげで、薄雲の鎖は欧州水姫の胴と左腕を縛り上げる。そして、バリア発生器が括り付けられた主砲は欧州水姫の背部の艤装に絡まった。
「貴様……この私は拘束出来なかったろうが――」
「出来るよ。今の貴女は、さっきよりも弱くなってる」
さらに躍り出たのは朧。左腕が封じられたことを確認したため、中距離からの砲撃に切り替えた。そこに装填されているのは、実弾ではなく模擬弾。大塚鎮守府でも使われた、被弾した瞬間に泥が失われる治療薬を内包する必殺の弾丸。
心の底から忠誠を誓っている欧州水姫には無意味かもしれないが、今ここで勝利するためには、治療してしまえばブーストは失われる、体内の泥を消すことが優先だ。
「ぬあああああ!」
吼える欧州水姫。バリアに包まれブーストが失われつつある状態でも、本来の膂力で強引に引っ張り、朧からの砲撃を辛うじて避ける。
その力は尋常では無かったが、薄雲は動かさないようにと必死に鎖を引っ張った。鎖を握る手のひらに血が滲むが、知ったことではない。
「力んだね。なら、今はそれに一生懸命ってことだ」
しかし、近くに北上がいるということを忘れてはいけない。魚雷を扱うだけではなく、近接戦闘までしてしまうのが北上だ。久しぶりに魚雷を逆手に持ち、スクリューを限界まで激しく回してゼロ距離へ。
「巫山戯るなぁ!」
欧州水姫も抵抗はやめない。北上が至近距離に来たことを見越して、今度は右腕。砲撃だけでは止まらないと察したか、そのまま殴りつける方向に持っていった。むしろ、北上が持つ魚雷を叩き落とすた

めにも、それを狙って主砲を突き出す。
　それが北上の狙いだ。
「っし、こうすりゃいいね！」
　北上は魚雷を使わなかった。殴り飛ばされる瞬間に魚雷を消し、突き出された拳を受け止め、そのダメージを受け流すように身体を移動させた後、そのままその腕を絡め取る。いわゆるアームロックの状態。
　欧州水姫の膂力から考えれば、いくら艤装のパワーアシストがあっても完璧なロックにはなっていない。それでも、右腕に密着しているということは、北上が装備しているバリア発生器の影響をモロに受けているということ。靄は一層薄れる。
「貴様らぁ！」
「悪いね。これはチーム戦なんだよ。勝ちゃいいのさ勝ちゃ」
　北上への苛立ちは最高潮に達したか、拘束されて当たらないにもかかわらず、右腕の主砲を連射。実際、これで衝撃を何発も受けることになるのだが、北上はびくともしない。砲撃の熱で身を焼かれていても、顔色一つ変えない。
「お前らぁ！　もう少しだぞぉ！」
　北上の咆哮に、より一層力が入る。逆に、欧州水姫にはついに焦りが見えてきた。現在3人に身体を拘束されて、発揮した靄がどんどん薄れていくのが嫌でも理解出来た。
「まだだ、まだ終わらん！」
　両腕と片脚を封じられたことで、欧州水姫が扱えるのは拘束されていないが自分を支えている片脚、戦艦主砲、そして第三の腕である錨の尻尾のみ。
　ならば、錨の尻尾で北上を刺し貫いてしまえばいい。これだけ近いのだから、外すことも無いだろう。
「これは使っちゃダメダメよぉ！」
　それを真っ先に察知した漣が強引に拘束した。のたうち回られたら厳しいが、一瞬でも隙が作れれば充分。
「このっ、小賢しい！　ならば――っ!?」

残された戦艦主砲を放ち、その強烈な衝撃をゼロ距離でぶち込もうとした瞬間、その主砲が突然爆発した。何が起きたのかとそちらに視線を向けると――

「私達の、こと……」

「忘れんなよな！」

一歩引いた位置にいた松竹姉妹が、戦艦主砲に向けて砲撃を放っていたのだ。深海棲艦化したことで強力になった砲撃が、見事に主砲を破壊する。

退避させて意識の外に置いたことで、完全な不意打ちとして機能した。完璧なタイミングでの復帰。

指示をしたのは当然大井。

「流石大井っち。あたしの意思をしっかりわかってくれるね。最高だよ、相棒」

「勿論です。これくらいしなくては、北上さんの隣には立てませんからね」

そしてその大井は、拘束されていない最後の片脚へと近付いて触れる。

この瞬間、欧州水姫を包み込むバリアが、体内の泥を全て掻き消した。これにより、靄は完全に消滅。欧州水姫の力を底上げする源は、完全に消え去ったのである。

厄介な姫

時は少し遡る。
欧州棲姫と相対する戦艦棲姫達は、増援と合流した段階で仕切り直しとなった。本体にはビスマルクが、空襲にはグラーフ・ツェッペリンが援護に入り、その攻撃をどうにか回避しながら攻撃の隙を探している。
「ふふ、2人がかり、いや、3人がかりで私を狙うのね」
戦艦棲姫とビスマルク、そして戦艦棲姫の艤装が、たった1人の欧州棲姫に向けて主砲を放ち続ける。一発一発が致命傷を与えられる程の威力を持っているのだが、欧州棲姫は艤装の水上バイクで軽々と回避。
そういう動きをされてしまっては、3人がかりで狙いを定めるのも仕方のないこと。そこまでしてでも掠りもしないのだから、斃すためには力を合わせて撃ち続けることが必要だ。
欧州水姫が単純なパワータイプであるとすれば、欧州棲姫は技術で勝ちに来るスピードタイプである。自分へのダメージは全て回避し、一切触れさせずに心を折りに来る。そのくせ、反撃は戦艦並みの火力があるため、掠めるだけでも相当に厳しい。
現に、欧州棲姫が撃ち返してくる砲撃が戦艦棲姫の艤装を掠めただけで、ピシリと火花が散った。致命傷ではないが、負傷として認識出来るような傷が装甲に深く刻まれてしまっている。
「厄介極まりないわね。ビスマルク、アレ、どうやって斃したの」
「あの時は随伴艦も厄介だったから、航空戦力での数の暴力よ。でも、過去の欧州棲姫はあそこまで速くないわ。それに、火力も上がってる。貴女の艤装も込みでここまで撃っているのに、全部避けるだなんてあり得ないわよ」
ビスマルクが知る欧州棲姫よりも格段に素早く、主砲を放った時には既にその射線から大分離れた位置にいるようにすら思えた。流石に攻撃のタイミングを予知しているようなことはないとは思えるが、見てからでも恐ろしい速さで回避し続けた。

過去、欧州棲姫を斃した時は、ビスマルクを筆頭にした部隊とはいえ、航空戦力を多用している。それは当然、欧州棲姫から発艦される艦載機の対処もあったが、随伴艦として侍らせていた深海棲艦があまりにも邪魔だったというのもあるという。

ビスマルクは口には出さなかったが、欧州棲姫の随伴艦は戦艦棲姫の別個体だったこともあり、航空戦力での圧倒は非常に効果的だった。そして、1人残った欧州棲姫の行動を回避一辺倒に固定化し、集中砲火を浴びせるように持っていけた。

「正直、あの時の定石はもう効かないわね。アレだけ速いなら、航空戦も効果的とは思えない。というか、空母棲姫とグラーフが2人揃っても拮抗してるって、完全に私の知ってるソレの上位互換よ」

「なら、今ここで戦術を編み出さなくちゃいけないってことね」

「そういうこと。ちなみに貴女はそういうの得意？」

「旅の経路を考えるのは得意だけれど、それが戦略に繋がるのなら」

「Ｖｅｒｚｅｉｈｕｎｇ（ごめんなさい）．　それは流石に打開策には繋がらないわ」

話しながらも撃ち続けているのだが、状況は変わらない。むしろ、少しずつ欧州棲姫が近付いてきてすらいる。

「お喋りしながらとは、随分と余裕ね。侮辱されているのかしら」

「あの黒幕に対して本心から忠誠を誓っているというところは侮辱に値すると思ってるわよ」

忌々しげに吐き捨てる戦艦棲姫。侵蝕の傷を持っているからこそ、黒幕に対しての憎しみは強い。

「勿体ない。祝福を受けておいて、その力を手放すだなんて、私には考えられないことよ」

「私には必要ないの。あんなのに従うくらいなら、力なんて必要ない。気ままに旅をするのが私の在り方だもの」

「貴女はまだ理解していないだけなの。あのお方の絶対的な力を。私達には到底辿り着けない領域にいるのよ。それを知れば、貴女だってその素晴らしさを理解出来るわ」

あくまでも黒幕に心酔している様子。戦艦棲姫の知る心酔――春雨に対する海風――とはまた違った在り方。依存ではなく、一方的に

跪いているような、憐れな部下なイメージ。
　しかし、そういう者ほど怖い。黒幕の求める未来のためにならば、その身を擲ってもいいと力を発揮することだろう。笑顔で命を捨てることだってしそうである。そしておそらく、黒幕のことだから、この欧州棲姫すらも捨て駒にするだろう。
　そこが海風とまるで違う。春雨のために力を尽くすが、春雨のために命を落とすことを是としないのが海風。対する欧州棲姫は、命を落とすことも是としてしまい、最終的に黒幕が喜べばそれでいいという、ある意味自己犠牲の塊みたいなモノ。
「あのお方の祝福を得た私に屈せば、それも理解出来るでしょう。そちらの艦娘も、自ら頭（こうべ）を垂れるに違いないわ。だから、まずは私が圧倒してあげましょう。それがいい」
　一層激しくなる欧州棲姫の砲撃。的確な回避と、完璧な砲撃、そして圧倒的な航空戦。航空戦艦としての全てを最大の力で兼ね備えていると言える。
「やってくれるわね……避けるのに精一杯になるじゃない」
「何か作戦を考えないと、本当に圧倒されるわ。せめてどうにか近付くことが出来れば、私の子が拘束出来るかもしれないけれど……」
　速く動き回るのならば止めてしまえばいい。それが出来そうなのは、やはり戦艦棲姫の艤装。並の深海棲艦では間違いなくどうにも出来ないレベルの膂力を持っているため、捕まえてしまえば脱出は不可能。殺すも殺さないもその掌の上に置くことが出来るだろう。
　しかし、それが簡単に出来れば苦労はしない。消して再展開をするにしても、あの速さでは間に合わないし、近付けば近付くほど欧州棲姫の砲撃の的になる。巨体であるが故に、破壊もされやすい。
　そのためには、あのブーストをどうにかしないと話にならない。ただでさえ強い欧州棲姫を手をつけられない存在に押し上げているのは、間違いなくその身体を侵蝕している泥が原因だ。
　幸いにも、その泥を消すための装備は戦艦棲姫とビスマルクが持っている。さらには、全員が全身に六箇所、自身への泥の影響を失わせるバリアも張っている。それを利用すれば、欧州棲姫が言う加護を

引っ剥がすことが出来るはず。
「何を考えているかは知らないけれど、私は負けないわよ。あのお方の望みを叶えるのが私の望み。私の意志。私の生きる意味なんだもの」
心酔を吐露すればするほど、欧州棲姫からの攻撃は激しくなる。その想いの力が、そのまま欧州棲姫の力となる。
途端に砲撃の精度がぐんと上がった。避けたと思った場所に着弾するようになってきている。ただ速いだけではなく、追い詰めるような動きを優先するようになっている。
「貴女達が強いのは見ればわかるわ。だからこそ、貴女達は自分の意志でこちら側に来てもらいたいの。わかってほしいのだけど」
「貴女こそわかりなさい。私達がそちら側に心底恨みを持っていることくらい、見ればわかるでしょう」
あくまでも欧州棲姫の目的は戦艦棲姫の勧誘のように見える。同じ深海棲艦の姫として、黒幕の姿を見れば必ず屈服し、その意志を理解出来ると確信した物言い。一目見て気に入ったのだと言わんばかりに、その圧倒的な力を見せつけつつも話をするような攻撃。
対する戦艦棲姫は、ここまで話が通じない相手とは思わず、内心では少々焦りのようなものが出てきている。説得出来るだなんて微塵も思っていないが、多少はこちらの話に耳を傾けるモノだと思っていた。それなのに、一方的な思いを吐き出すのみで、戦艦棲姫が何を言っても自分の解釈に重ねてしまう。
実際、こういうタイプが一番厄介である。

一方、そんな欧州棲姫とは相対することなく、艦載機の処理を引き受けているのが空母棲姫とグラーフ・ツェッペリンである。
中途半端な破壊をした場合、その破片が泥化した後、新たな艦載機へと変化するため、一向に数が減らないどころかむしろ増えているまであった。
そうならないように破壊しているつもりなのだが、艦載機自体が、

破壊されるのなら半端に壊してくれと言わんばかりに回避し、その思惑が綺麗に実行され半壊。むしろ真っ二つになった挙句、分裂するかのように数が増える。
　泥の増殖を艦載機に転用するというトンデモシステムではあるのだが、空母棲姫もグラーフ・ツェッペリンも冷静にそれを処理していった。
「なかなかに厳しいな。どれだけ撃墜しても数が減らん。そちらは」
「キツい。1つ、壊すのに、2つ使うことになる。その間に、奴らは、同士討ちで、数を増やす」
「むぅ、それが出来るのは厄介極まりないな」
　そう、これが欧州棲姫の艦載機の真骨頂である。数が減ってきたらわざと同士討ちをし、自身を分裂させるという異常な性能を有していたのだ。
　どれだけ撃墜しても自分達で増えていくのだからタチが悪い。自己修復以上に厄介な自己増殖。これをどうにかするためには、根本から断ち切るしかない。
「操っている欧州棲姫を止められればいいかもしれないが、我々が制空権争いを止めた途端にどうにもならなくなる」
「ああ。ここにあるのが、全部、あちらにも、行くことになる、だろうな」
　現状でも撃墜を免れ自己増殖した艦載機が空母棲姫とグラーフ・ツェッペリンに向かって爆撃を繰り出している状態。今この場を離れて欧州棲姫を狙いにいくと、この爆撃を全域にばら撒かれることになる。そうなった場合、欧州水姫と戦っている者達の方にも被害が出てしまう可能性が高い。それは防ぐ必要がある。
　そうなると、今ここにいる空母の2人がこの艦載機をどうにかしなければならない。
「空母棲姫、何かＳｐｅｚｉｅｌｌ（とっておき）のようなモノはあったりしないのか」
「お前が、何を言っているか、わからないが、私は、常に、全力だ」
　空母棲姫は最初からずっと出せる限りの力を出している。自分で

知る限りの自分を、徹頭徹尾惜しみなく。
「……いや、待て。もしや、戦い方を知らないのか」
しかし、その空母棲姫の全力にもグラーフ・ツェッペリンは疑問を持っていた。自分の知る空母棲姫はもう少し搦め手を使ってきたはずなのだが、この空母棲姫は良くも悪くも真っ直ぐすぎる。向かってきたものを破壊し、分裂したから粉微塵にする。そして爆撃は避ける。それしかやっていない。
空母棲姫は生まれて間もない姫だ。しかも、生まれた直後に龍驤に器にされ、救われた後はずっと施設で暮らし、哨戒機を飛ばすくらいしかやったことがない。つまり、これが初めての実戦経験となる。それ故に、基本に忠実な戦い方しか出来ないのだ。
本来ならば、生まれたら侵略者として敵を殲滅する手段を覚えていくのが姫。しかし、その在り方を最初の最初から躓かされているため、空母棲姫は並の空母棲姫とはまるで違う生き方をしてしまっている。それがここに影響していた。
グラーフ・ツェッペリンや欧州棲姫が繰り出す航空戦の搦め手をこの空母棲姫も出来るようになれば、事態は一変するだろう。学習は、それだけで大きな力を生み出す。
「この場でというのは厳しいかもしれないが、私が戦い方を教える。構わないか」
「よく、わからないが、これを、どうにか出来るのなら、私は、お前に、縋るぞ」
「よろしい。ならば、この土壇場で悪いが、空母たる者としての授業を始めさせてもらう。君ならば、この状況も乗り越えられるはずだ」

命が懸かっているこれ以上ない程に特殊な戦場かもしれないが、この空母棲姫が戦いを学ぶ場となる。
これにより、空母棲姫は本当の力を取り戻すこととなる。

Ａｕｓｂｉｌｄｕｎｇ（教育）

欧州棲姫との戦いが続く中、グラーフ・ツェッペリンは空母棲姫の戦闘経験が無いことによる技術の未熟さに気付いた。姫は姫かもしれないが、生まれた直後から器として使われ、まともな戦闘をする間もなく施設に所属したことが大きな原因となっており、やれることが単調すぎるために欧州棲姫の艦載機をどうにかするための技術が足りない。

それ故に、この切羽詰まった戦場の真ん中にもかかわらず、空母棲姫は戦い方を学ぶ場となる。最初で最後の戦いになる可能性はあるのだが、ここを乗り越えなければ、戦艦棲姫と旅に出ることも出来ない。

「よく、わからないが、これを、どうにか出来るのなら、私は、お前に、縋るぞ」

空母棲姫は、この場をどうにかする力を望んだ。楽しく生きるためには、ここでグラーフに縋らなければならない。

それがいいことなのか悪いことなのかは、空母棲姫にはわからない。それでも、今を乗り切るためには最善の道だ。自分だけでなく、仲間達を救うために。

「よろしい。ならば、この土壇場で悪いが、空母たる者としての授業を始めさせてもらう。君ならば、この状況も乗り越えられるはずだ」

空母棲姫の艤装に乗りながら艦載機を発艦させるグラーフ・ツェッペリンだが、ここからは教育者として、空母棲姫に出来そうなことを考え、敵の行動を思い出し、それを身につけさせる。

「いいか。今の君は、破壊に特化しすぎている。目の前のモノを処理するために、手当たり次第に破壊しているだろう」

「勿論、だ。そうしなければ、数は増える一方、だろ」

「そうだが、破壊の方法を少し変えてみればいい。君の艦載機は我々と違い、生物のように動かせることがウリだ。それを活かすことで、より効率よく戦うことが出来る。まずは私が言う通りにしてみればいい」

グラーフ・ツェッペリンが出来ないことを空母棲姫にやらせるような感覚。艦娘の艦載機には出来ない、それそのものがそういう個体であるのが深海棲艦の艦載機。そして、空母棲姫はそれが大量にあるにもかかわらず、ある程度個別にコントロール出来るというのが特性だ。

敵も同じなのだから、それを意識して動かせば、自然と破壊の仕方は変わってくる。例えば、今回は木っ端微塵にしないと増殖するのだから、そもそも射撃を使うべきではなく、爆撃で破壊するべき。

「いいか、タイミングを合わせて、うまく捻って上に向かうんだ」

「わ、わかっ、た。緊張、するな」

「それでいい。いきなり慣れられても、私が困る。だが、君はおそらくセンスが抜群だ。すぐに学び、自らのモノと出来る。この戦いの中で学んでいけばいい」

欧州棲姫の艦載機に向かって、射撃も爆撃もせずに突撃を始める空母棲姫の艦載機。似た性質の敵機へと猛スピードで飛んでいったかと思いきや、合間で掻き回すように動き回る。

攻撃はせずとも、海上に攻撃しないように邪魔をし、この艦載機をどうにかしないとまともに攻撃出来ないと思わせることに専念する。

「我々の艦載機ではどうしてもその動きが出来ない。だからこそ、君のそれにやってもらう。私が同時に、下への攻撃を防げば、その意識を君の艦載機に寄せることが出来るだろう」

「わ、わかった。だが、これはなかなか、神経を使う」

「そこは慣れてくれ。役に立つはずだ」

実際、この行動が出来るようになれば、旅の途中に侵略者気質の同胞(はらから)と相対することになった時に、力の差を見せつけて互いに無傷で別れることも出来るかもしれない。

あくまでも、今やっているのは攻撃ではなく場を掻き回すだけの行動。艦載機は一機たりとも破壊していない。

しかし、空母棲姫の艦載機が内側から引っ掻き回し、時には体当たりまで仕掛けることで、あちらを苛立たせる。

空母棲姫の艦載機は空母棲姫自身がある程度のコントロールをし

ているように、欧州棲姫の艦載機は欧州棲姫がある程度のコントロールをしているだろう。ならば、なるべく鬱陶しく行動する。
釣れれば御の字。そうでなくても、集中力は削がれるはず。そうなれば、戦艦棲姫やビスマルクも戦いやすくなるだろう。
「よし、釣れた」
グラーフ・ツェッペリンが言った途端、空母棲姫のコントロールする艦載機を止めようと、欧州棲姫の艦載機が群がってくるようになった。邪魔者は排除するべしと、射撃までしながら。
あちらの艦載機は射撃で破壊したら増殖するが、空母棲姫の艦載機はそんなこと出来るわけがない。それに、外して自分達に当たっても増殖に繋がるのだから、一切の躊躇が無い。
「一気に上昇だ」
「わかった」
指示通りに艦載機を纏めて上へ。すると、わかりやすくそれをどうにかするために他の艦載機達がついてきた。それでも一部ではあるのだが、先程よりは1機に対して多めに引っ張り出すことは出来ている。
「爆撃だ。行け！」
合図と同時に真下に向かってありったけの爆弾を落とす。すると、ついてきた欧州棲姫の艦載機をあっという間に木っ端微塵にして行った。破片も残さず、泥になったとしても衝撃で噴き飛ばす程の威力。
空母棲姫の艦載機のスペックは、欧州棲姫のそれを優に超えていた。しかし、泥の力で分裂増殖という規格外の能力により、数の暴力を受けていただけだ。それを一掃出来る力は元から持っていたのだが、空母棲姫がそれに自分から気付くことは出来なかった。
それを今、グラーフ・ツェッペリンの教えにより少しずつ引き出されていく。まずは効率的な爆撃から。
「そうか。一箇所に、纏めて、撃てばいいのか」
初歩の初歩なのだがと思いつつも、グラーフ・ツェッペリンはそうだとしか言わない。それを自分から気付いていける力が今は必要。

これが理解出来たということは、空母棲姫はここから飛躍的に成長していく。
「射撃では、ダメだ。だが、爆撃は、簡単には、当たらない。ならば、動く方向を、こちらから、コントロール、してやる。そういうことか」
「ああ。ああいう輩は、おそらく複雑な動きはあまりしないだろう。奴は航空戦艦であって空母ではないからな。艦載機の専門ではない。故に、専門家である君のそれよりＳｐｅｚ（スペック）もＫｏｎｔｒｏｌｌｅ（コントロール）も下だ」
　言われてみればと、空母棲姫も気付いていく。自分がコントロールする艦載機よりも、欧州棲姫がコントロールする艦載機の方が、明らかにスペックが低い。移動速度も、機敏性も、射撃精度も、何もかもが空母棲姫の艦載機より一段階くらい下。
　ただし、それは1対1が出来ればの話。そこに気付かれたのか、僅かに残った欧州棲姫の艦載機群は、空母棲姫の艦載機を無視するように同士討ちを始め、次々と数を増やしていく。あっという間に元の数、いや、それ以上の数になってしまった。
　ここでわかるのは、欧州棲姫の艦載機はそれだけでもう1つの敵。戦艦棲姫の艤装のように、個を持っている存在である。艦載機のカタチをしている泥と考えれば、何かあれば増殖するという性質も納得が行く。
「撃ち漏らしが無いはずなのに、数が減らないというのはどういうことなのだ。規格外の力を持つ艦載機なんて初めてだぞ」
　勿論、空母棲姫が爆撃をしている間もグラーフ・ツェッペリンの艦載機がなるべく漏れがないように艦載機を破壊していっているのだが、1つ減らしたと思えば2つの艦載機が同士討ちにより4つに増えているという鼠算を見せつけられる。
　こうすることで心を折りに来る作戦でもあるのだろう。本体に届かず、処理しても次々と増えていくという状況は絶望にしか感じない。
　当然、グラーフ・ツェッペリンも空母棲姫も、そんなことで心が折れるわけがない。無限の軍勢であろうが、立ち向かわない理由なんて

何処にもないのだから。
「幸いにも、我々に攻撃が飛んでくることはないが、どうにか現状維持をしているという状況には変わりないな……。打開策を考えなくては」
空母棲姫の教育という前代未聞の状況を、減らない敵を全滅させるというチュートリアルステージが用意されたことによって、あらゆる戦術を試す場として有効活用出来る。
しかし、最終的にはそれも終わらせる必要があるため、打開策は考えておかなくてはならない。
最も手っ取り早いのは泥刈機だ。波長をぶつければ泥を消し飛ばすことが出来る。そして、欧州棲姫の艦載機は泥そのものと考えられるため、泥刈機が最も有効な手段と言えるだろう。
「私は、泥刈機を、持っていない。お前は」
「すまないが私も持っていない。あれはビスマルクに持たせている。……確かに、アレならばあの艦載機群を一掃出来るかもしれないな」
しかし、空母組には泥刈機が与えられていない。高高度まで行かれた場合は波長が届くかもわからないため、本体を狙う戦艦組が優先して装備している。まさか装備する者が逆であるとは思わない。
「だが、その持ち主は本体に苦戦しているようだ」
艦載機を処理しながらも、チラリと仲間達の方に目を向けた。そこには、不敵な笑みを湛える欧州棲姫に苦戦する姿があった。

「アイツ、精神が無敵なのよね……。何を言っても黒幕が正しいに結びつけることが出来るんだもの」
ビスマルクが忌々しそうに呟く。北上ほどではないが多少は煽りをしてみるビスマルクなのだが、一切煽りが効かないという異常な精神力を持っているのが欧州棲姫である。否定しても黒幕のことを理解出来ていないと突っぱねられるだけ。心酔もここまで来れば異常。心が壊れていると言っても過言ではない。
だが、溢れているわけではないので、単純にただ壊れているだけ。

黒幕の威光に当てられて、勝手に精神が歪んでいる。
「なに？　ようやく屈する気になった？」
「Ｓｃｈｅｒｚｅｎ（冗談）はやめてちょうだい。屈するくらいなら死んだ方がマシ」
「本当に残念ね。あのお方の素晴らしさを理解出来ないだなんて、せっかく手に入れた人生を損しているわ」
　撃ちながらも一気に近付いてきた。これまでとは違う動きをしてきたため、ただ砲撃だけでは終わらないと察し、戦艦棲姫の艤装が先んじて前に出る。
　砲撃は避けられるが、ここで突っ込んできたということは何か違うことをしてくるということ。
「これだけ撃ち合えば、貴女達の戦い方は大体把握出来るわ。だから、これくらいは出来るわよ」
　３人がかりの砲撃を掻い潜るように駆け抜け、一番前に立っていた戦艦棲姫の艤装に肉薄する。
　戦艦棲姫は嫌な予感がした。砲撃の手を一瞬緩めてきたのだ。何もしないで突っ込んでくるなんて有り得ない。
「耐えなさい！」
「遅いわ」
　その瞬間、欧州棲姫が手に持つ弩を持ち上げる。すると、それは弩から大剣の形状へと変化していた。
「これがあのお方から賜った私の力。祝福を以て、その威光を貴女達に知らしめてあげましょう。そして、その偉大なる力を理解し、膝をつくといいわ」

　そして、一閃。
　戦艦棲姫の艤装は、その一撃により、誰よりも大きく太い腕が両断されていた。

監査の力

欧州棲姫の持つ弩は大剣へと変化し、その一閃は戦艦棲姫の艤装の腕を両断した。

戦艦棲姫とビスマルク、そして艤装の3人がかりの砲撃もあたり前のように回避して迫撃してきた上に、その勢いに任せたわけでも無く軽々と大剣を振り回す。さらには、深海棲艦の艤装をも簡単に斬り裂いてしまう鋭さ。艤装でコレならば、本体ならばより簡単にやられてしまうだろう。

この一撃を受けて、戦艦棲姫は再展開を試みる。しかし、一度消すということは、今のままでも厳しいのに、攻撃を分散させる人員が1人減るということに繋がる。即座にそれを選択するのは難しい。

加えて、戦艦棲姫は艤装の展開が自分の背後にしか出来ないという特性があった。再展開するということは、自分達の前を守ってくれていた艤装を一度後衛に持っていかねばならないということに繋がる。

「……っ、オッケー。貴方の意思は伝わってくるわ」

戦艦棲姫は艤装の意思を汲み取る。それは、再展開せずにこのまま戦わせてくれというモノ。後ろに回ってしまっては、主が守れないと。

「頼んだわよ。すぐに元に戻すから」

故に、片腕が落とされた状態での戦闘を選択した。余裕が出来るかはわからないが、タイミングとしては今では無い。欧州棲姫の未知の力を見てからでなければ、タイミングを測ることも出来やしない。

「近接攻撃まで出来るわけ!?」

ビスマルクも流石にこれは想定していなかった。以前に戦った欧州棲姫は、あくまでも弩で艦載機を発艦させるのみだった。剣のように見えるだけで、弩は弩。それを使って攻撃してくることなんて無かった。

それなのに、見た目通りに変化させて、何よりも攻撃力の高い必殺の武器になっている。近付かれたらまずいどころか、砲撃よりも致命傷になるだろう。

「ふふふ、この力に屈するだけで、貴女達の命は保証してあげるわ。でも、抵抗するなら残念だけれど、ここで死んでもらうしかないわね」
すかさず大剣を弩に切り替え、かなり至近距離だというのに追加の艦載機を発艦する。空母組が対処している艦載機はそのままに、さらに増やしてきた。
この艦載機も当たり前のように増殖の機能を有しているのだが、そんなことよりも砲撃でも避けられるかわからないような距離で発艦されたことが一番の問題。避けることがかなり難しく、直接ぶつかってこられるだけでも厳しいのに、当たり前だが射撃や爆撃まで繰り出してくるだろう。
「止めなさい！」
すかさず戦艦棲姫は艤装に指示。欧州棲姫に最も近い位置にいる艤装が、残された腕を振り回して、至近距離で発艦された艦載機を強引に止める。
それと同時に戦艦棲姫はバックステップし、泥刈機による波長の照射。今の戦艦棲姫には艦載機の構成要素はわかっていないが、至近距離にいるのだからうまく作用するはずと、自分の艤装の陰から泥を消し飛ばす。
すると、波長は自身の艤装に影響を与えることなく貫通し、発艦した艦載機が見事に消滅した。完全に泥で出来ていることを証明することとなる。
「あら、残念ね。でも、無理矢理止めたんだもの。それが代償となるわ」
その声が聞こえた時には、欧州棲姫の持っていた弩は再び大剣に切り替わっており、風圧を感じるほどの斬撃の後。戦艦棲姫は艤装を前に出していたのでその目に映ることは無かったのだが、ビスマルクはしっかりと目に焼き付けていた。
その刃が、戦艦棲姫の艤装を袈裟斬りにする瞬間を。
肩口から腰に向けてバッサリ。腕よりも分厚いはずなのに、いとも簡単に、何の力も加えているようにも見えず、当たり前のように一刀両断。

そして、まるで居合斬りで斬られた巻藁のように、ズルリと艤装の身体が傾く。艤装だからまだマシかもしれないが、今まで艦娘や深海棲艦と同様に活動していたような艤装がこうなったのだ。ビスマルクは目を見開いていた。

「捕らえろ！」

それでも、戦艦棲姫はギリギリまで艤装に指示を出す。再展開の余裕が無いのならば、最後の最後まで力を振り絞る。酷使しているわけではない。本体と艤装の盟約がそうなっているからだ。戦艦棲姫だって、艤装がやられたことに何も感じていないわけがない。

戦艦棲姫の艤装は意思を持っている。主である本体を守るため、紳士的に守護し続けることを、自ら望んでいるのだ。再展開すればある程度の損傷が失われる艤装とは違い、本体が死んだら元も子もない。故に、このような消滅寸前の状態でも、忠義を尽くし続けた。

「素晴らしい忠誠ね。それはあのお方に向けるべきだと思うのよ。勿体無いわ」

しかし、伸ばした手も返す刀で斬り飛ばされ、そのまま艤装が倒れ伏す。そして、そのままサーッとその存在が消えた。戦艦棲姫はそのまま残しておくわけにはいかないと生体艤装だけを一度消したのだ。両腕を失ってしまっては、もう何もすることは出来ない。

ここから再展開をしたいところだが、こうなってしまうとなかなか難しい。展開の際に確実な隙が生まれてしまう。それを狙われるのは、火を見るより明らか。

そもそも、ここからは艤装が失われて2人で戦わなければならない。今までも厳しかったモノが、余計に厳しくなるだろう。そこでそんな隙を見せるわけにはいかない。

「くっ……いや、まだよ。再展開は出来る」

「構わないけれど、そういうのはある程度余裕を持った状態の方がいいと思うわ」

すかさず砲撃も繰り出す欧州棲姫。いくらバックステップをして間合いを取っていたとしても、艤装を斬り払えるくらいには近付いているのだ。その砲撃の回避は至難の業。

艤装を背後に展開する一瞬の隙をつかれるのは明白。水上バイクに乗っているのに瞬時に詰め寄られる速さは既に知っている。
だが、戦艦棲姫の心は折れるどころか強く燃え上がっていた。再展開出来るとはいえ、自身の艤装があそこまでやられたのだ。怒りが湧かないわけがない。
「どれくらい時間を作ればいい」
そんな戦艦棲姫を見たビスマルクが、泥刈機から波長を照射しながら問う。ここまで近付かれている状態で、砲撃と斬撃、そして超至近距離からの艦載機発艦を回避しながらでも、ビスマルクは的確な回避方法を選択していた。むしろ、少しずつだが精度を上げているようにすら見える。
「ほんの少しでいい。1秒も要らない。再展開して、前に出すだけの時間をちょうだい」
「Ｇｕｔ．　このビスマルクに任せなさい。奴の動き、充分に監査したわ」
ニッと笑みを浮かべた瞬間、ビスマルクの手には魚雷が展開されていた。
ビスマルクは戦艦娘の中でもかなり珍しい、魚雷を扱える戦艦だ。とはいえ、専門家である重雷装巡洋艦（北上や大井）はおろか、魚雷による大火力を目的としている駆逐艦には及ばない、あくまでも牽制や補助火力として持っているに過ぎない。
だが、ビスマルクはこれを戦術に取り入れることにした。そう考えた理由は、ほんの少し前。欧州水姫に立ち向かう北上を見たことである。魚雷はあくまでも砲撃をサポートするモノという認識だったビスマルクに衝撃を与えた、投擲という突飛すぎる戦術。それはこの状況にも有効だと判断した。
「初めてでもそつなくこなすのが、このビスマルクよ。貴女が艤装を展開する余裕くらい、私がしっかり作ってあげる」
言いながらも魚雷を投擲。まるでダーツのように欧州棲姫へと向かっていくそれは、北上のコントロールには及ばなくとも、初心者とは思えない的確な場所へと見事に飛んでいく。

「あら、今度は貴女？　じっと見ているだけでも良かったのに」
「見ていたからこそわかることがあるのよ。私が監査役を受け持っている理由を、貴女の身体に直接刻んであげるわ」
　ビスマルクが投げた魚雷を軽々回避した欧州棲姫は、お返しと言わんばかりに砲撃を放つ。その砲撃は魚雷を巻き込んで爆発させたが、ビスマルクは当然、それを回避して突撃。
「近付くということは、今の艤装と同じ目に遭いたいということよね。それとも、ようやくあのお方の偉大さに気付いて跪きに来てくれるのかしら」
「冗談ばかり言うのね貴女は。私はビスマルク、敵に頭（こうべ）を垂れるほど、安いプライドは持っていないの」
　ビスマルクが接近してきたために、弩は大剣へと変化。触れただけでもズタズタに斬り裂かれてしまい、艤装で防ぐことすら出来ない程の鋭さを持つそれに対して、ビスマルクは臆すことなく真正面から向かう。
　その立ち位置は、欧州棲姫の視界から戦艦棲姫を隠していた。艤装を展開する余裕は十二分に与えられる。しかし、ただ展開するための時間を稼ぐために、その身を犠牲にするのは違う。
「ビス――」
「心配しなくていいわ。もう私には、欧州棲姫の動きはスケスケよ」
　欧州棲姫はビスマルクの突撃に対して、当たり前のように大剣を振るう。その上半身と下半身を分離させるかのように、砲撃をしながらもかち上げるような斬撃。
　モロに喰らえば、脇腹から真横に真っ二つである。艤装すら盾にならない。さらには回避ルートを砲撃で潰されており、それも直撃してしまったら木っ端微塵。
「だから、見えていると言っているでしょう」
　しかし、ビスマルクはその砲撃と斬撃の僅かな隙間を潜り抜け、艤装すら消して飛び込み、その胸に蹴りを叩き込んだ。
「っ……!?」
　さらに、蹴りが当たった瞬間に脚部艤装を展開。その衝撃により、

欧州棲姫を大きく蹴り飛ばすことに成功した。
この蹴りは、穏健派の深海棲艦の情報として展開された対龍驤戦の映像から、春雨が決めた心臓を一瞬止める蹴りを参考にして繰り出された。
ほんの一瞬だけ脚を伸ばすということは艦娘であり五体満足であるビスマルクには出来るわけがないのだが、脚部の艤装の展開ならば可能。
奇しくも、誰も知らないであろう吹雪の近接攻撃と同様の効果が発揮される、渾身の蹴りとなった。
「大剣は使い慣れていないわね。振るのは速いけれど、一度避けてしまえば二撃目はすぐに来ない。砲撃は艤装に備え付けていて手に持っているわけでもない。懐に入れば射線から外れる。弩のままなら艦載機で迎撃出来ただろうけど、艤装の切り替えをするつもりはなかった」
その眼力により、この欧州棲姫の行動の分析は、ビスマルクの中では出来ていた。勿論、自分の力を超える動きをされてしまったらどうにもならなかっただろう。それでも、分析の末に、斃せずとも一度は突き飛ばせると判断。今それを実行するに至る。
監査役を担っているビスマルクは、監査相手の一挙手一投足から、その行動を読み取る。万が一、監査中に攻撃の意思を見せた場合、それを瞬時に見抜いて返り討ちにするくらいの実力は持ち合わせていた。
それがビスマルクの力として昇華されている。相手の行動から、次の行動を予測する能力。直感的に動ける春雨や、今までの経験から次を先読み出来る吹雪や涼風とは違う、その場で監査して癖を見抜く能力。
「これでいいわね！」
「ええ、最高よ！」
ビスマルクの蹴りによって吹っ飛ばされた欧州棲姫を追撃したのは、艤装の再展開を完了させた戦艦棲姫。先程よりもやる気に満ち溢れた艤装が、吹っ飛ばされた欧州棲姫に対して全力で砲撃を撃ち込ん

でいた。
「ごめんなさいね。私のこれは、ある程度監査……観察しなくちゃいけないのよ」
「いえ、そのおかげで助かったわ。でも……」
あれだけ撃ち込んでも、まだ終わっていないと理解出来る。爆発はしているが、欧州棲姫の声はまるで聞こえない。むしろ、まったくの無傷である可能性もある。
そして、すぐにそれがわかることになる。

「本当に素晴らしい力だわ。やっぱり、貴女達はあのお方に従うべきよ。その力はあのお方のために使いなさいな。それが貴女達のためなのよ」
黒い靄に包まれた欧州棲姫が、爆炎の中から現れた。当たり前のように無傷で。

祝福の刃

「本当に素晴らしい力だわ。やっぱり、貴女達はあのお方に従うべきよ。その力はあのお方のために使いなさいな。それが貴女達のためなのよ」

黒い靄に包まれた欧州棲姫が、爆炎の中から現れた。当たり前のように無傷で。

「それが貴女の最高の状態ってことでいいかしら？」

ビスマルクが聞くと、欧州棲姫は不敵な笑みを浮かべた。

明らかにあの靄は近付くのは怖いのだが、まずは先制攻撃と言わんばかりに、戦艦棲姫が泥刈機から波長を照射。靄も泥の一種ならば、これで問題なく取り除ける。

実際、この靄はバリアでも消滅させられるくらいに泥と同様の成分である。泥刈機でも当然掻き消すことは可能であり、むしろ泥刈機が最も効果的と言える。

しかし、欧州棲姫はそれを見越したように行動を開始。靄が発生したことで泥ブーストはさらに強いものとなり、水上バイクの加速が今までとは比べ物にならないほどに強力となっていた。

その場から一気に離れると、泥刈機で追いかけることも出来ない程の速度で回り込みながらの接近を仕掛けてくる。今までとは雲泥の差。目は追いついても手が追いつかない。まさに、祝福を見せつけるような猛スピード。

「ビスマルク！」

「照射を優先するわ！　あのＤｕｎｓｔ靄は確実にまずい！」

止めなくてはまずいと見ただけでわかるレベル。強化のされ方が尋常ではない。いくら出力を上げても、スピードが倍近くに膨れ上がるのは異常である。

「今までごめんなさいね。全力を以てお相手しなくては失礼よね。圧倒して、確実にここで終わらせてあげる。跪くなら今のうちよ。死ぬよりも従った方が絶対貴女達のためになるんだもの。あのお方も、貴女達のことは受け入れてくれるわ」

こうなってもそのスタンスは一切変わらない。黒幕を讃え、その偉大さを見せつけるかのように、今の自分の力を振るう。
靄のブーストは力の前借りであっても、欧州棲姫は使うことに一切の躊躇がない。今この場で、2人の戦艦の心を折り、それでも屈しないならば始末するために、出来る全力を発揮する。
当たれば即死級の攻撃ばかりを繰り出すのに、こうなる前から速かった動きがさらに速くなるという大惨事。
ビスマルクは再び監査に入る。速かろうが視ることは可能。想定では、動きが速くなっただけでやることは変わらない。ならば、まずそのスピードに目を慣らすことが出来ればいい。
勿論、攻撃の手は緩めない。最も有効であろう泥刈機による波長の照射はそのままに、接近はさらにまずいため魚雷を常用する。流石に現状では泥刈機を手に持って運用しているため、魚雷は本来の使い方で。
「その程度で止まるわけないわ。むしろ、私があのお方から賜った本当の力を見せてあげる」
そう言うと、弩はまた大剣に変化し、思い切り振るった。まだ斬撃はおろか、砲撃すら届かない場所からだ。
すると、大剣からは高出力の泥の刃が放たれる。今回はビスマルクが放った魚雷を一掃するために使ったか、海面にそのまま直撃。その瞬間、魚雷諸共破壊する大きな水飛沫が舞い散った。斬撃のカタチに海面が抉れたかのような、大波を引き起こす一撃に、戦艦棲姫もビスマルクも一時的に視界が塞がれる。
舞い散った水飛沫には泥も含まれていたが、それは装備しているバリアと泥刈機によって、肌に付着することなく消滅。しかし、それが無ければこの一撃で全員が一気に侵蝕されていただろう。
欧州棲姫の心酔をカタチにしたかのような、泥を侵蝕ではなく攻撃に転用した技。直撃ならば刃に斬り裂かれるかのように両断され、掠めても侵蝕、当たらずともそれに巻き込まれた海水がそのまま侵蝕性の泥となるおまけ付き。
欧州棲姫はこれを、他者に祝福を与える黒幕の思いが込められた剣

だと思い込んでいる。祝福の刃であると。
「斬撃を飛ばすだなんて、インチキにも程があるでしょう！」
「Ｗａｓｓｅｒｓｃｈｎｅｉｄｅｒってそういうモノじゃないんだけれど……」
水飛沫をすぐに消すため、泥刈機の波長の照射と同時に砲撃も乱射する戦艦棲姫。過去の経験からしてみても、こんな突拍子もなく放たれる超水圧の刃なんて該当するモノなど存在しない。ビスマルクも困惑気味だ。
そもそも水飛沫で視界を塞がれたことにより、監査の目からも逃れられてしまっている。ビスマルクにとっては最もやりにくい相手になってしまった。監査が中断させられ、その動きを見るためにも、戦艦棲姫に倣って主砲を乱射。水飛沫を取っ払う。
「そんな粗雑な砲撃で、今の私は止められないわ。あのお方の加護に包まれているんだもの！」
歓喜に震えるような声色が、思っていた以上に近くにあった。案の定、この水飛沫を利用して一気に接近していた。
泥刈機の波長を喰らえば泥どころか靄も消されるが、泥も靄も即時増殖のため、然るべき場所に喰らわない限りは『祝福』が剥がれることはないと確信を持って突撃。水飛沫を突き破るかのように大剣が届く範囲へ。
「来ると思ってたわよ！」
そこへすかさず戦艦棲姫が波長を照射し、さらにはその隣から艤装による迎撃。
少なくとも、斬撃飛ばしは泥によるものであるため、波長が当たれば自分に襲い掛かる攻撃は無効化出来る。欧州棲姫本人は艤装によってその行動を強引に止め、本体へのダメージを極力抑える。
「本当に残念。ここまで出来るのに殺さなくちゃいけないなんて。でも安心して。あのお方は貴女の亡骸にも祝福をくれるわ」
しかし、欧州棲姫は躊躇なく大剣を振るった。自信満々に。
殺意は無いのに、明らかに殺しに来ている一撃。その剣閃は、戦艦棲姫の首を刎ね飛ばす一閃。

今までの黒幕のやり方からして、亡骸であろうとも泥によって魂の混成が出来るのだから、本当に強い者であるならば殺してでも手に入れるという手段に出ることも厭わない。
それが黒幕の望みなのだからと、欧州棲姫は喜んで剣を振るう。故に殺意は無い。怒りも悲しみもない。常に黒幕の祝福に喜びを覚えるだけの、壊れた姫。
「そう簡単に、やられるわけが無いでしょう！」
首を狙ってくるということは、しゃがめば避けられるということ。瞬時に判断した戦艦棲姫は、恥も外聞も投げ捨てて、ガバッと蜘蛛のようにしゃがむ。その際に長い髪が上に舞い上がってしまったことで、斬撃の犠牲に。髪が一部無くなるくらいで済むなら、首が飛ぶより全然マシだと、一切の躊躇なくこの回避方法を選択。
同時に、艤装はこの超至近距離で砲撃を放っていた。爆音と爆風で激しい衝撃が発生するが、欧州棲姫は軽々回避。さらには避けながらも振るった大剣を弩に変化させて艦載機すらも発艦させていた。その艦載機は艤装に直撃し、ほとんど自爆するような勢いで爆発。致命的なダメージにはならずとも、艤装は再び危険水域へと持っていかれる。
「この……っ」
近場にまで来てくれたことから、ビスマルクは再び魚雷を投擲。艤装から逃れるために回避した先を狙って、一撃必殺狙いで頭を噴っ飛ばすために。
「焦っているのかしら。でも大丈夫、そんな貴女もあのお方は祝福してくれるわ。力を与えられれば、焦りも無くなる。心の余裕にも繋がるのよ」
しかし、それも当たり前のように回避。主砲によってビスマルク諸共破壊しようと迎撃。
ビスマルクもそれは辛うじて回避したが、衝撃が腕を抉り、痛みで顔を顰めた。
「どうかしら。あのお方は私にここまでの力を与えてくれたの。これでもまだ偉大さが理解出来ないかしら」

「出来ないわね。忠誠を誓う者を駒としか使えない奴の何処が偉いのか、私には一生理解出来ないわ」
「本当に残念。あのお方は私を信頼して手駒として使ってくれているの。心身共に祝福を得た私は、あのお方に報いるためにここにいるんだもの。駒でも家来でも使い捨てでも何でも構わないわ。今はあのお方が信頼してくれているんだもの」
泥の効果が一部はあれど、ここまで心酔しているとなれば、最初に戦艦棲姫が言っていた通り、欧州棲姫はもう救われない存在なのだろう。心を折ることすら出来ない。
ならば一思いにと思っていても、この強さは異常だ。近距離でも遠距離でも、攻撃を避け続けてこちらへのダメージを積み重ねてくる。殲滅も簡単にはいかない。通ったと思ったら靄まで発生させてさらにブーストがかかる始末。
だが、このブーストは力の前借りだ。今を凌げば最終的にはガス欠になる。戦艦棲姫とビスマルクはその事実に気付いてはいないが、ビスマルクの特性からして、時間をかける戦いを望んでいる。結果的に、監査を完遂する時にはガス欠が起きているはず。
「だから、あのお方のためにも、ここで終わりにしましょう。だから私は全力を出しているんだもの。貴方達のことは正しく評価しているわ。ここにいられたら、あのお方の障害になることは間違いない。だからこそこちら側に来てほしかったんだけれど、それも望まないのならば、確実に終わらせることの出来るこの力だって躊躇なく使うわ」
再び大剣を振るい、泥の斬撃を飛ばす。靄を出さずとも3人がかりで互角だというのに、靄を出してきたらここまで圧倒することになる。
だが、誰も諦めることはしない。そこまでの強敵を相手にしても、心は絶対に折れない。
「私達が負けることを前提にした物言い、気に入らないわね」
戦艦棲姫が泥刈機で斬撃を消滅させるが、その後ろには砲撃が重ねられていた。それに対しては艤装が自身の身体に鞭を打って強引に食い止める。その威力によって、砲撃を止めた腕が再び逆方向に曲が

りかけるが、破壊されたわけではないので倒れることもない。
「本当にね。まだ全容じゃないかもしれないけれど、私には大分見えてきているわよ。いちいち目眩しまでしてきてるけど、簡単にはいかないわ」
　ビスマルクも監査の目は緩めない。水飛沫で姿を隠されることもあるが、それを込みにしても行動を見切っていく。疲労は当然溜まっていくが、欧州棲姫からの攻撃はむしろ当たらなくなっていく。
「その強い心は評価に値するの。だからこそ、私と共にあのお方に仕えましょう。死にたくはないでしょう？」
「さっきも言ったけど、あんな奴に仕えるくらいなら死んだ方がマシなの」
「勿体無いわ。そこまで意固地にならなくてもいいのに。特に貴女は同胞（はらから）なんだもの。ありのままに生きればいいじゃない。こちらには私達の真の幸福があるというのに」
　そんなことを言う欧州棲姫に対して、戦艦棲姫は当てつけのように溜息を吐く。
「私のありのままは、自由気ままに旅をすることなの。それを邪魔する貴女達は、私の生き方を、幸福を奪っているということになるんだけれど？」
「ならこちらの方が幸せなのね。それ以上の幸福を知ることもいいと思うわ」
　同じ言語を使っているのに、まるで会話にならない。思い込みもここまで来ると狂気だ。
「さぁ、真の幸福を知りましょう。受け入れるだけでいいのよ。たったそれだけで貴女達は幸せに包まれるの。悪いことじゃないわ」
「ふざけるなと言っているのよ」
「何もふざけていないわ。私は貴女達に幸せになってもらいたいだけだもの。何か問題でもある？」
　余裕すら見せる欧州棲姫にそろそろ苛立ちを覚えそうだったが、ここで冷静さを失ったら終わりだ。故に、どれだけ何を言われても心だけは落ち着かせる。

しかし、巻き返すことが出来ない。どうにかしてこの状況を打開しなくてはならない。

だが、ここで戦況を大きく変える一撃。

「こう、だな」

空母棲姫の声が聞こえた瞬間、欧州棲姫の艤装が爆発した。

Ｓｐｅｚｉｅｌｌ（とっておき）

欧州棲姫が身体から靄を発生した頃、制空権争いをしている空母組の２人は、より踏み込んだ教育に入っていた。

「私は何度も深海棲艦の艦載機と制空権争いをしてきたが、君はまだまだやれることが多いだろう。今この状態で拮抗まで持っていけているのだからな」

「そう、か。わかった。教えて、くれ」

まずグラーフが教えたのが、陽動。わざと視界をチラつくように動き回り、邪魔をしながら自分に注意を引いて、纏め上げてから全てを爆撃で破壊する。

そして次に教えたのは、自己増殖を封じる手段。あちらの艦載機は半端に破壊するとそこから増え、数が減ってくると同士討ちによって数を増やす。それを防ぐためには、そもそも撃たせないこと。

あちらの艦載機は、その増殖の性質を有効活用するためか、そもそも若干脆く、攻撃特化になっていることがわかったため、射撃で破壊される前に艦載機による体当たりによって破損させずに破壊する。

しかし、その力加減が絶妙だった。強く当たりすぎると破損してしまい、そこから増殖。弱く当たりすぎるとダメージはなく、その特化した攻撃力によって空母棲姫の艦載機が破壊されてしまう。

「こう、で、いいか」

「上手いものだ。流石は姫というところか。我々の艦載機では絶対に出来ないことなのでな。無茶を教えるようですまない」

「構わない。これで、勝てるのなら、お前に、従う」

だが、空母棲姫はいとも簡単にその力加減を理解した。グラーフ・ツェッペリンは自分が出来ず、敵対している敵空母にされたことを出来るかと聞いただけであったが、それすらも教育と見做して覚えて行った。

一部を迎撃に回し、一部は体当たりで増殖を防ぐ。そこにグラーフ・ツェッペリンの艦載機が飛び回り、爆撃を空中で霧散させたり、この空域から離れようとするモノを追い込んだりと縦横無尽にサポー

トをすることで、増殖する艦載機相手に拮抗どころか優勢が見えている。
空母棲姫の成長は、艦娘では考えられない程に早い。ここが深海棲艦の真骨頂とも言えるところ。イメージの力がそのまま実力に繋がるのだから、想像力が強ければ強いほど、艦載機のコントロール精度は高まりに高まる。
空母棲姫は、その力が他の者達よりもかなり高めだった。これまでのトレーニングで培ったものではなく、戦艦棲姫から旅の話を聞いていて、知ることを楽しんでいたことによるイメージ力の成長。それが、この戦場に影響を与えていたのだ。
そうでなければ、当人が見たことのないような服装をその場で作り上げて生活なんてしていないだろう。そこからが既にその前兆。
「射撃は急所と呼べる場所を狙う方がいい。あのタイプの艦載機ならば、視覚を司っているであろう目のような部分だ。破壊せず、そこだけ狙え」
「ん、わかった」
上空を見つめた時点で、そうするイメージが出来ている。グルリと回り込んで、欧州棲姫の艦載機の真正面に躍り出た空母棲姫の艦載機は、グラーフ・ツェッペリンに言われた通りに、その艦載機の眼のような部分を的確に撃ち抜いた。回避させる暇すら与えず、一発必中の射撃。
これにより、破壊されることもなく、分裂することもなく、そのまま落下してきた。そのまま落ちられても困るため、すかさずグラーフ・ツェッペリンの艦載機が爆撃で追撃して木っ端微塵に。
「上手いぞ。流石だ」
「大分、やれるように、なって、きた」
これを発艦している1機ずつに指示出来ているのが凄まじい。これはもう、空母棲姫が戦闘能力に覚醒したと言っても過言ではないだろう。
眠れる獅子を呼び起こしたグラーフ・ツェッペリンは、この空母棲姫が敵ではなくて本当に良かったと内心思っていた。この空母棲姫、

グラーフ・ツェッペリンが知る限り、最も強い個体であると確信している。艦娘で言えば改二、空母棲姫ＩＩとでも呼べる程に強力な力を有しているのは間違いない。これが敵ならば、間違いなく苦戦していた。艦娘に犠牲も出ていただろう。
「爆撃、射撃、直接攻撃と教えたが、最後に１つ、私のＳｐｅｚｉｅｌｌ（とっておき）を君に教えよう。今の君にならば、簡単にこなすことが可能だ」
「よく、わからないが、すごい技、みたいなもの、か。いい、のか」
「私なりの敬意の証だ」
３つの戦い方の最後、４つ目に教えるのは、艦載機ではなく、それを扱う本体を狙う方法。
通常なら射撃と爆撃があれば充分。直接攻撃で奇を衒うことで、より効果的に敵を殲滅することが出来る。これだけ覚えていれば、この空後棲姫であれば大概の戦場を乗り越えることが出来るだろう。
だが、今の敵である欧州棲姫はその大概から逸脱している存在。ならば、強大な敵に対する艦娘ならではの創意工夫を伝える。いわば『必殺技』だ。
「１機だけでいい。あの本体に向けて急降下させる。そして、スレスレのところで爆撃をしつつ、そのまま離脱する。これでいい。小さな的にも当てやすい」
「急降下、させて、爆撃」
言われるがまま、空母棲姫は制空権争いをしている艦載機の内の１機をそこから離れさせる。何かをすると察したか、欧州棲姫の艦載機がそれを阻止しようと２機３機と追ってくるが、それをさらに阻止するために他の艦載機が体当たりを決めた。
３つの戦術の学習によって、４つ目の技を確実に通すためのイメージ力が備わっていた。然るべき教育を順にこなしたからこそ、ここまでスムーズに事を起こすことが出来る。
「大まかでいい、狙いを定める。そしてそこに向かって急降下だ」
「わかった」
制空権争いから逃れた１機が欧州棲姫の姿を捉えた瞬間、一気に急降下。自然落下でもいいとグラーフ・ツェッペリンが言おうとした時

には、加速しながら猛スピードで落ちていく。そして、
「こう、だな」
欧州棲姫が避ける時間すら与えず、爆撃を数発叩き込み、そのままのスピードで急速離脱。その艤装を爆破した。
「Wunderbar（素晴らしい）. これが我が国のSpezieller（とっておき）、Bombenangriffe（急降下爆撃）だ」
「ぼんば……よく、わからないが、本体には、当たらなかった。難しい、な」
「いや、充分すぎる。むしろ我々がやるより威力が高い程だ。流石だと言っておこう」
いきなり爆撃を喰らった欧州棲姫は、艦載機からの攻撃は視界ではわかっていたが、この急降下爆撃には対応出来なかった。
艦載機とは思えない速度で一撃離脱をされたこと、それに加えてビスマルクの監査を意識させられたこと、さらには戦艦棲姫とその艤装が粘りに粘ることによって、意識せずとも神経をそちらに注いでしまっていたこと。全てが噛み合った結果がこの一撃に繋がった。
「なっ――」
流石の欧州棲姫も、これには表情を歪んだ。本体には殆どダメージが無かったとはいえ、艤装の一部が半壊するほどのダメージを受けたのだ。今まで余裕をもち、さらに盤石にするために靄まで発生させたのに、この体たらくである。
半壊した艤装は靄の効果により修復が始まるが、精神的なダメージは癒えることはない。不意打ちを喰らったという苛立ちは、嫌でも欧州棲姫に襲い掛かる。
「今ね」
「ええ、今よ。畳み込むなら！」
このタイミングを見逃さない。靄による艤装の修復には驚きはあるものの、これまでの敵がどれほどおかしなことをしてきたかは理解しているので、それほど大きな反応はせず、すぐさま突撃しながら泥刈機による波長の照射。
靄が消えれば自己修復も失われる。それが出来るのは、泥刈機だ

け。
「っふ、ふふふ、まさかそんな隠し球を持っているだなんて、ね！」
艤装の修復が終わるまでは何もさせないと、大剣を振るって斬撃を飛ばす。あくまでもこれは泥を鋭く飛ばしているに過ぎないため、泥刈機の前では無力。２人に到達する前に霧散。突撃の速度が落ちることはない。
しかし、消されることを前提とした攻撃であり、そうされた直後にその場から移動。自己修復中の艤装からさらに靄が立ち昇り、一気に修復が完了する。
「これがあのお方の加護なのよ。貴女みたいに一度消してからなんてことはしなくていいの」
「私から見ればただ気持ち悪いだけよ。泥まみれの艤装だなんて、死んでも使いたくないわ」
「ふふ、そんなこと言って、本当は羨ましいんでしょう？　言わずともわかるわ。それがあのお方の祝福だもの。同胞（はらから）はこの力に惹かれるものよ」
相変わらず会話にならない。靄により修復されることが快楽に繋がっているのか、それとも黒幕の力を実感出来るからか、恍惚とした表情で勧誘を続ける様は、戦艦棲姫にとっては生理的に受け付けないモノとなってきている。
「でも、本当に勿体ない。貴女なら確実にあのお方にも気に入られるというのに。今以上の力も得られて、ずっと最高の気分でいられるのに。何をそこまで拒むのかしら。一度知ったのなら、尚更わかるはずだけれど」
「何度も言わせないで。私は貴女とは違うの。誰かに仕えるだなんて真っ平御免なのよ。あの経験は、私にとって捨てたいほどにいらない記憶よ。腹立たしい」
戦艦棲姫の艤装が迫撃。自己修復が完了した瞬間に飛び込み、壊れかけた腕で全力の攻撃。こちらの腕はまた壊れてもいいと、火花を散らしながらも致命傷を与えるためのパンチを繰り出す。
「同じことを二度も三度も。ただ大きいだけで、私に敵うとでも？」

当たり前のように大剣を振り上げ、そのパンチを根元から斬り払う。
「わかってるわよ。でも、その子はそれを選んだ。敵うと思っているからよ」
その斬り払われた腕をもう片方の腕で掴んだ艤装は、それを武器にして再度叩き込む。その攻撃速度は上がる一方。自身の身体の特性――命の無い身体――を理解した上で、本体には出来ない身体を張った攻撃を何度も繰り出す。
救うなんて気持ちは最初からない。それ故に、一発一発が死に至る威力をもっている。当然、この自身の腕を武器とした攻撃も、直撃すればほぼ確実に致命傷。
「だから、もう同じことは」
「それが効かなくても、こちらにはまだ人数がいるのよ」
艤装のもう片方の腕も斬り払った瞬間、その陰から現れたのはビスマルクである。大剣を振るった直後はすぐに攻撃に転じることは無い。そう見切って、あえて超至近距離へと接近していた。
ここで先程は強烈な蹴りをお見舞いしていたが、今回は違う。ビスマルクが扱う少々小さめな魚雷を投げ込んでいた。
「まだまだ。祝福を受けている私には、その程度」
しかし、当たり前のように急加速でバックステップ。艤装の修復が完了しているのだから、その速度が出るのは当たり前なこと。そして、主砲も修復出来ているのだから、砲撃も可能。
これだけ近くに来ており、深海棲艦ではなく艦娘であるビスマルクには、ほんの少しの擦り傷も致命傷となる。
欧州棲姫はここまで話していても慢心はしていない。同じことを繰り返すということは、勝ちに繋がる何かを持っているからだと判断していた。警戒は怠らない。一度やられているのだから、二度もやられるわけにはいかない。
故に、確実に始末するために上も確認する。先程の急降下爆撃は、このタイミングで飛んできてもおかしくはない。
「もう、一度、だ」

しかし、知っていても、見ていても、避けられないものは避けられない。空母棲姫が繰り出す急降下爆撃は、意識を向けていてもとんでもないスピードだった。艦娘が繰り出すそれとは雲泥の差。砲撃と殆ど同じくらいの速度で落下し、しかも対空砲火をことごとく避け、爆弾を数発叩き込んだと思ったら、生物でも出来ないような動きで急上昇する。

その速度が乗った爆撃は、ただ落下させる空襲とはまるで違う速度。それこそ、真上から放たれた戦艦主砲の如く突っ込んでくる。

「今度は当たらないわよ。見ているんだもの」

辛うじて、本当に辛うじて、欧州棲姫はその爆撃を回避することに成功した。艤装を掠めることなく、それの直撃を免れる。

だが、そうしたということは、一時的にでも全神経を空爆の回避に注いだということ。半壊した戦艦棲姫の艤装を乗り越えて、戦艦棲姫本体が飛び込んできていることには気付かない。

「悪いわね。新興宗教はお断り。さっさと還りなさい。家じゃなくて、海にね」

僅かな隙を見て、波長を最大出力で照射。それは、靄を消し飛ばすだけでは終わらず、欧州棲姫の体内に巣食う泥すらも消しとばし、その衝撃で欧州棲姫本体にも大きなダメージを与えた。

孵化

ついに欧州棲姫に泥刈機の波長が直撃。体内の泥諸共全てを消しとばし、波長によるダメージも入る。

「っ、あぁあっ!?」

初めて悲鳴らしい悲鳴もあげる。しかしそれは、ダメージを受けたことではなく、自分の中から泥――祝福が失われたことに対する悲鳴。黒幕から与えられたその力が消されたことが、欧州棲姫にとっては最も許せないことである。

泥刈機がバージョンアップしていても、波長は泥を捻じ切るように回転しているため、欧州棲姫にもそのようなダメージが入っていた。深海棲艦であるがために頑丈だったというのもあるが、それでも泥が失われたことで本来の身体となり、その状態で出力ＭＡＸを喰らったのだからタダでは済まない。身体の前面、特に腹の辺りがズタズタになり、靄も失われているせいで回復もない。

「やって、くれたわね」

明確に怒りを露わにした表情。泥（祝福）によるブーストが失われても、その態度はやはり変わらない。実際は侵蝕が無くなっているため、正気に戻っていてもおかしくはない。だが、本心から忠誠を誓っているので敵意は失われていない。

侵略者気質だったとしても敵意はあるかもしれないが、それは黒幕に対してもあって然るべきであり、戦艦棲姫達にはそこまでの敵意を見せなくてもいいはず。一時的な共闘だって考えられる。

しかし、この欧州棲姫にはそういう気持ちがカケラも無い。眼前にいる者達は、忠誠を誓う黒幕の敵であるという認識は変えず、ここまでされてもまだ逆転の目を探している。

「絶対にここから逃がすことは無いけれど、これ以上はやめておきなさい。死ぬわよ」

「死ぬことなんて怖くないわ。あのお方のお役に立つためだもの。命を散らすことに躊躇いなんて何も感じない。あのお方のためならば、私はなんだってする」

血塗れでもその忠誠心は何も変わらない。泥が失われても、濁った瞳で黒幕への想いを説く。力は先程よりも格段に落ちているはずなのに、戦艦棲姫は少しだけ恐怖を感じた。
自分を利用している者に対して、ここまで親身になれることが理解出来なかった。いくら威光にあてられたからといっても、捨て駒にされることを喜べる者なんているとは思えない。ただ戦うのが好きだとか、死に場所を求めているだとか、そういう者ならば話は変わるのだろうが、欧州棲姫は違う。役に立つために命を散らすだなんて、間違っているとしか思えない。
「まぁ、その信念が正しい方向なら、私も評価していたわ」
小さく溜息を吐きながら、ビスマルクが欧州棲姫を睨み付ける。
「黒幕の信念は、かつて敗北した艦娘への復讐。自分を殺した者に報復するため。ここまでならまだ譲歩は出来るわよ。私達だって、深海棲艦に仲間をやられたら復讐したくなる気持ちはわかる」
かつての自分、そして今でも激しい復讐心を持ち、トリガーが引かれてしまったら暴走不可避なリシュリューのことを思い、復讐については理解はする。黒幕の復讐心は、正当とギリギリ言える範囲。
結果的に、ビスマルクはその復讐に成功している。リシュリュー達の仇を討つことが出来たから、今は平常心でいられる。
「でもね、やり方が狡いのよ。復讐は自分の手でやりなさい。やれないならまだしも、貴女の敬愛する黒幕は、やれるのにやらないでしょう。他人の尊厳を奪いながら手駒を増やして、命懸けの戦いを他から拾ってきたような連中にやらせて、それを失っても悔やむことすらしない。陸上型だから来れないというのもあるかもしれないけれど、それでもわざわざ艦娘を使ってくるあたり、性格が歪みに歪んでるわ。敬意なんて払えるわけがない」
そう言って、この欧州棲姫を徹底的に否定する。そもそもが自分の相手した仇討ちの相手の同一個体。気に入らないものの、その時の欧州棲姫はただの侵略者であるがために、納得は出来ていた。この戦いの中では、艦娘が沈むのも無いわけではない。それがたまたま身内になってしまっただけ。それで敵を否定することはしない。

しかし、この欧州棲姫は違う。生き方が歪んでいる。歪まされたと言った方がいいのかもしれないが、もう自ら進んで歪んだようなもの。黒幕のやり方に賛同し、侵略だけではなく艦娘達への嫌がらせ、尊厳の破壊も是としている時点で、もう救えない。
「だから、黒幕と同じように貴女も否定する。恐怖も感じずに死ぬことに躊躇が無いのなら、ここで海に還してあげるわ。野放しにしても、いずれ戦うことになるもの。脅威のままならば、ここで排除する」
これ以上言うことは無いと言わんばかりに、ビスマルクは主砲を構えた。

一方、北上達の奮闘によって体内の泥を全て消し飛ばされた欧州水姫も、一切の侵蝕とブーストが失われた。欧州棲姫のような重傷を負っているわけでは無いため、まだ戦う余裕はある。
欧州棲姫と同様に、侵蝕が無くとも黒幕に忠誠を誓っているタイプであるため、これまで以上の力は出ていないが抵抗はする。
「まだだ、まだ終わっていない！」
破壊された戦艦主砲は自己修復されず、薄雲からの拘束を強引に引きちぎる程の膂力も失われた。左腕の艤装で砲撃を弾くことも出来ない。今出来そうなことと言えば、右腕の主砲を放つことくらいである。しかし、それも北上が拘束しているため、まともな砲撃にはならない。
「終わってんだよ。泥のブーストも無くなった状態なら、ここから解放されることも出来ないでしょ」
砲撃の衝撃が北上に伝わるが、やはり表情すら変えず、まるで説得するように欧州水姫に話しかける。撃たれれば撃たれるほど体内にダメージが溜まっていくのだが、北上は素知らぬ顔である。
事実、欧州水姫の砲撃も、先程までとは雲泥の差。泥も靄も無くなったことにより、元々の効果である力の前借りのデメリットが訪れていた。先に使った分の代償が泥のない身体を襲っているのだから、今の欧州水姫の砲撃は駆逐艦のそれ程度にまで落ち込んでいる。

それくらいしか威力が無いのなら、蓄積されるダメージは微々たるもの。元々ある分のせいで痛みは上乗せされるものの、それを表に出すほど北上は弱くはない。
「何をそこまで黒幕に忠義を感じてるのかわからないね。捨て駒にされていることに気付いていても、それを良しとするのはなんでさ。あたしにゃそこまで偉い奴には思えないよ。狡いし」
その言葉に、欧州水姫は鼻で笑う。
「貴様らは、あのお方をその目で見ていないからそう言っていられるのだ」
「見れるわけないでしょ。引きこもりがツラ見せないんだから。探し出しても探せないようにまで仕組んでおいて、姿を見ていないから理解出来ないとかちゃんちゃらおかしい」
北上に煽られても、欧州水姫は堪えることなく続ける。
「その目に入れば嫌でもわかる。あのお方には敵わないとな。今ここにいない者達は、あのお方と直接顔を合わせるのだろう。そこで知ることになる。そして屈する」
欧州水姫が黒幕の何を見たのかはわからない。だが、欧州棲姫もそうだが、黒幕をその目にしたことで忠誠心を持ったのだから、余程の存在なのだろう。
島を拠点にし、むしろ自らを島にしているくらいなのだから、それこそいろいろと考えられる。純粋なパワーなのか、知能なのか、それとも見た目なのか。どうあってもおかしくはないだろう。
だが、北上は断言出来た。
「そりゃあ無いね。絶対にない」
逆に鼻で笑う北上に、欧州水姫は小さく苛立ちを見せる。
「威光だろうが何だろうが、ヒト様を顎で使っておいて、自分は島の奥で引き篭もってるような奴に屈するなんてあり得ない。それが初見ならまだしも、こちらはどれだけ痛い目見せられてると思ってんの。アンタ達とは経験が違うんだよ」
未だ乱射し続ける欧州水姫の右腕を折るレベルで絞めあげる。艤装に包まれているため、北上の腕力でどうにか出来るものではない

が、それでも砲撃が止まるくらいにはダメージを与えることは出来たようである。
「それに、あたしらは恨み持ってる奴に鞍替えするほど安い女じゃあ無いんだ。あたしはうちの婆さんより凄い奴を知らない。あ、ここ最近は増えたかな。施設の姉姫と、これだけのことになっても心が折れない春雨は、尊敬出来る奴だよ」
　言いながらも一発、欧州水姫の顎に拳を叩き込む。これ以上話していても無駄だと感じたか、それで脳を揺さぶり、一撃で落とそうとした。
　だが、歯を食いしばりそれを耐える。単純な耐久力があるため、消耗した北上には気を失わせるまで持っていけなかった。
「平行線だ、なっ」
　ここで欧州水姫は力を振り絞るように身悶え、何処からそんな力が出たのかわからない勢いで拘束している者達を振り回した。欧州水姫は戦艦、対する北上組は殆どが駆逐艦。元々の膂力の差があるせいで、艤装が半壊していても相当な力を発揮する。
「うわっ!?」
「ちょおっ!?」
　脚をロックしていた曙、錨の尻尾をロックしていた漣が振り回されたことで弾き飛ばされた。力の前借りによる消耗をしているはずなのに、まだまだここまで動けるのは想定外だった。
　いや、おそらくそれだけではない。何か仕掛けがあるはず。
「まさか、アンタ――」
「この私がここで敗北するわけにはいかんのだ！　あのお方の悲願を達成するまでは、なっ！」
　ゴウッと、力の奔流のようなものを感じた。欧州水姫が命を懸けてでも黒幕の願いを叶えるのだと決意したことで、体内に埋め込まれた卵がその場で孵化してしまった。
　バリアでは泥は消滅させることが出来ても、埋め込まれた卵は除去出来ない。専用の装置を使わなくてはならなかったが、先程までは拘束するのがやっと。装置を使う暇など無かった。力の前借りによる

消耗が見えた時点で、即座にやっておけばまだ間に合ったかもしれない。しかし、それでも何処に埋め込まれているかの判断が難しかったため、除去は出来ていなかった可能性がある。
「まずい、一回離れるよ！」
北上の号令と共に、拘束していた者達は欧州水姫から離れた。間一髪だったか、それと同時に欧州水姫の身体から泥が溢れ出す。それはまるで、感情が溢れ出すかのように欧州水姫の身体を包み込み、あっという間にヒト型の繭となった。
「ま、マジか。ここに来てまだあんのかい」
流石の北上もここまでは予想していなかった。そして、
「負けん。私は、負けん！　目的を、達するまで、なっ！」
すぐさま繭が崩壊する。その中から現れた欧州水姫は、理性すらも泥に食い破られ、黒幕の目的を達成するためだけに変質した存在と成り果てていた。
今までは自分の意思があったから、知っている欧州水姫の姿であったのだろう。しかし、今の欧州水姫は思考から何もかもを黒幕の思い通りに支配されているのか、数人のトラウマを抉る混沌のレオタード姿。その瞳からも紫色の炎が燃え盛るように溢れ、ついには泥の涙や唾液まで垂らす程に。
これはもう力の前借りどころではない。命を燃やし尽くしている姿。
「っふふ、ははは っ！　私も命を燃やす時が、来たようね！」
その姿が目に入ったのだろう。ビスマルクに主砲を突きつけられている欧州棲姫も、突然身体中から泥が溢れ出す。
「っ、ビスマルク！」
「躊躇なんてしないわ」
その様子にまずいと感じた戦艦棲姫が声を上げるのと同時に、ビスマルクが砲撃を放った。
しかし、あっという間に繭に包まれて、砲撃すらも弾き飛ばしてしまった。強固すぎるその繭に、ビスマルクは思わず舌打ち。
「あのお方のために、あのお方のために、私は、命くらい捨てるわ！」

そして繭が崩壊。欧州水姫と同様に、欧州棲姫もレオタード姿に変化。さらには、先程撃ち込んだ波長による傷も全て回復していた。

靄による力の前借りではなく、命を燃やした最後のブースト。これを耐えきれば、２人とも自壊する。おそらく長く保たない。

しかし、２人の目的はもう違うところを見ていた。

怨敵

この土壇場で、欧州棲姫と欧州水姫の体内に埋め込まれていた卵が孵化し、命を燃やす最後の形態へと移行。力の前借りなんて生半可なものではない。こうなったらもう、死に向かって一直線。その分、出力が比べ物にならないほどに上がっており、ここまで来るのに数人がかりで抑え込んだモノを、優に超えてきてしまった。

しかし、欧州棲姫と欧州水姫の目的は、もう違うところを見ていた。眼前の敵が視界に入っていないような雰囲気。泥の涙と唾液を流し、理性すらも燃やし、忠誠を誓う黒幕の目的のために動くだけの機械となる。

「目的を達成するためだ！　もう、なりふりなんて構っていられん！

この私の命を全て燃やし尽くし、あのお方のために突き進まん！

うぉおおおおっ！」

咆哮。そして、猛烈なスピードで駆け出す欧州水姫。今まで死闘を繰り広げていた北上達のことなど無視して、向かうのは完全に施設の方向。

「あのお方のために、私の命を燃やし尽くすわ！　目的さえ達成すれば、全てが変わるんだもの！」

それに続くように欧州棲姫も駆け出す。今までとは比べ物にならないスピードを出し、ビスマルクや戦艦棲姫が反応した時にはもう、欧州水姫に追従するように施設へと向かった。

この2人の本来の目的は、施設にいる中間棲姫、黒幕の器だ。考えられるのは、中間棲姫の侵蝕。それが実行出来た時点で黒幕の勝利だ。姉姫として確立した施設の主人が、余計なモノに満たされてしまったらおしまい。互いに陸上施設型ではあるが、どちらも同じになってしまえば黒幕の思うがまま。

侵蝕性のある端末の泥は、島に設置されたバリアによって弾かれる。しかし、そうではない泥、それこそ、今2人の姫が纏っている孵化した卵に関しては、これまでに無かった要素であるため、中間棲姫と反応したら何が起きるかわかったものではない。

「まずい！　その２人を止めて！」
「とりあえず脚をやるしかないねぇ！」
　すぐに行動に移したのは、ビスマルクと北上、そして空母棲姫。駆け出した方向に向けて、ビスマルクは砲撃を放ち、北上は足を止めるために魚雷を放つ。そしてさらに、覚えたばかりの急降下爆撃を決めるために、空母棲姫がありったけの艦載機を嗾けた。
　欧州棲姫が暴走状態に入ったことにより、意識が艦載機に回せなくなったのか、そちらも一斉に施設に向かって飛んでいくようになっていた。ならば、本体を狙う方が早いと、欧州棲姫に艦載機を注ぎ込もうと考えたようだ。
　しかし、後ろに目があるのかと思える程に軽々と回避していく。命を燃やすブーストによって、今まで以上に冴え渡っていた。そして、少し動きを止めるとその分一気に離されてしまう。
　このブーストは、この場にいる数人には覚えがあった。まだ龍驤が敵対していた時の前哨戦、今では施設の一員となっている瑞鳳と黒潮が未だにそれを身に宿している深海忌雷。それによる命を使ったブーストと似ていた。
　あの時は、ブーストを失わせて命を救うことが出来たのは春雨だけ。わかりやすく外見に弱点が見えていたから、春雨でも救うことが出来た。しかし、この２人はそういうところも見えず、春雨がいたとしても治療は絶望的。むしろ、今この場に押し留めることすら出来ない存在を治療するのは不可能である。
「くっそ、疲れが鬱陶しいなぁ！」
　その魚雷を投げたことで、北上は小さくフラついた。大井がすぐさま駆け寄るが、北上の消耗はかなり激しい。何か、激しい砲撃が放てる右腕を常にロックし続けていたのだ。ダメージはなくても、砲撃の衝撃で身体の内側が揺さぶられていたため、疲れはピークに達していた。
「行けるヤツは全員行って！　漣と曙はまだ行けるか！」
「行くわよ！　あんなインチキクソ姫なんて、ここで終わらせてやるわ！」

「漣ちゃんもまだまだ行けますぜ！　北上大先生はそこで休んでてくんなまし！」
２人の姫を追うのは、漣達北上組と薄雲。松竹姉妹はともかくとして、ジェーナスも消耗が酷く、ここまでよく保った方である。消耗が激しい者だけを置いておくわけにはいかないため、大井はこちらに残る。
「私達も行くわよ。空母、サポートお願い！」
「任せて、くれ。今も、追っている」
「戦艦棲姫、貴女も消耗が激しいでしょう。ちょっと休んでなさい」
ビスマルクは戦艦棲姫の消耗を見逃していない。二度も三度も艤装を再展開しているのだ。しかも、ただ一旦消すとかではなく、破壊されたモノを再構築しての再展開なのだから、本体に影響が無いわけが無い。
「それに、こちらにはまだ人員はいるわ」
ここでビスマルクは耳元を弄り、通信機を立ち上げる。全体通信になってしまうが仕方ない。今はそこを問題視することは出来るわけがないのだ。それだけ切羽詰まった状況。
「足止め、お願い！」
そして通信機に叫んだ。この通信機をつけている者はビスマルク、戦艦棲姫、姉妹姫。そして――

「任されたヨナ！」

潜水艦隊の伊４７である。
欧州棲姫と欧州水姫を相手に激戦を繰り広げている中、潜水艦隊はずっと海中に潜んでいた。海上の２人の他にも、潜水艦が施設に近付いてくる危険性があったからだ。
黒幕の戦術からして、囮を何重にもして本命を施設に近付けるという手段を使ってきそうではあった。勿論、第二部隊の面々はソナーに

よって潜水艦の反応を確認はしていたが、それだけでは足りないために潜水艦の目を使っていた。
結論としては、今ここまでずっと海中を確認し続けて見当たらなかったことから、潜水艦による伏兵はいないと判断。
場所としても、そこまで遠くないため、出来る限りの速力を出して、その戦場へと向かう。
「急浮上するヨナ。みんな、続いて」
「了解」
「足止めする」
「頑張るぴょん！」
全員が深海棲艦化しているおかげか、普通の潜水艦隊よりは速力があるため、欧州棲姫と欧州水姫の姿はすぐに見える場所へとやってくることが出来た。
若干施設には近い場所ではあるが、まだ島の全容が見えない場所。ここでならまだマシ。
「それじゃあ、行くヨナ！」
伊４７の号令と共に、潜水艦隊一同が一斉に急速浮上。伊４７の巨大な艤装が先陣を切り、潜水艦姉妹が魚雷を構える。ミシェルは攻撃の方法がよくわかっていないものの、足止めをするということだけは理解しているため、そうするためにも身体を張る。
その急浮上は、並の潜水艦では追いつくことも出来ないスピード。それこそ、自分達が魚雷になったかのような猛進で、先に来ていた欧州水姫の足下まで接近。
「行かせない！」
そして、まずは伊４７の艤装の角が海上へと姿を現す。もう刺し貫くくらいの勢いで狙いを定めたのだが、欧州水姫はそれを辛うじて回避。
「そこで止まって」
「それ以上はダメ」
それに合わせて、潜水艦姉妹による雷撃。足止めが脚を破壊すると同義になっているため、一切躊躇なく、殺すように魚雷を放つ。

「ぬあああああっ！」
しかし、それを見越していたかギリギリのところで回避。さらには潜水艦姉妹を狙って砲撃まで重ねる。伊４７とは違って海上に出てきているわけではないので、いくらブーストがかかった砲撃であっても、海中では威力は大きく減衰。
とはいえ、元の威力がとんでもないことになっているため、海中だとしても侮れない。潜水艦姉妹は咄嗟に回避する。
「ちょわあああああっ！」
そして、さらにスピードを上げたミシェルが欧州水姫に突撃。伊４７を回避し、潜水艦姉妹を狙って砲撃を放った直後であったため、自身をミサイルのように見立てたミシェルの一撃には反応がほんの少しだけ遅れた。
ミシェルは砲撃も雷撃もやり方が理解出来ていなかったために、出来ることと言ったら体当たりくらい。しかし、たった１つ理解出来ていることは、自分が今までヒトのカタチでは無かったこと。今よりも前、駆逐イ級のカタチを取る――ジェーナスのように全身に纏う装甲とする――ことで、自身の身を守りながらも強力な一撃とする。
「ぬあっ!?」
流石にそのまま突っ込んでくるとは思っていなかったか、どうにか左腕の艤装で弾くが、そうしたことにより欧州水姫の猛進はここでストップ。ミシェル自身はその程度ではダメージを受けることなく、ポーンと飛ばされた後に艤装を消して、海上に見事に着地。駆逐艦と潜水艦を両立出来るミシェルだからこそ。
「あっちに、行って！」
さらにそこに重ねるように、伊４７が艤装の尾鰭で激しく叩きつける。まともな艦娘や深海棲艦がそれを喰らったらひとたまりもないだろう。だが、欧州水姫はそれすらもガッチリと受け止めた。左腕の装甲は砲撃を弾くだけでは終わらない。
それでもダメージは通っている。ジェーナスの体当たりを食い止めた時のように、ビシリと艤装にヒビが入った。激しすぎるブーストにより、装甲はさらに脆くなっている。

「目的を、果たすまではぁ！」
戦艦主砲が伊４７に狙いをつける。その圧、そして泥を垂れ流しながらも睨み付ける形相に、伊４７は一瞬怯んでしまった。しかし、涙目になりながらも、施設を守るためには力を振り絞る。
「ヨナ達の居場所をっ、奪わないで！」
砲撃が放たれる直前に、あえて艤装を消して海中へと潜る。これによってギリギリのタイミングで回避成功。
この砲撃によって、欧州水姫の主砲にも小さくヒビが入る。やはりギリギリのブースト。命を燃やしながらの戦いは、限界を超え続けているせいで、身体中にガタが来ていた。
それを欧州水姫は気付いていない。いや、気付いていても無視している。もう死んでもいいという気持ちは、自分へのダメージを全て外に置いてしまっていた。
「引き付けありがとう。私が目的を果たすわ」
そして、欧州水姫が先に暴れ回っていたことにより、それ以上に素早い欧州棲姫がその戦場を通過して施設へと一気に近付く。
駆逐艦よりも速く動き回る欧州棲姫には、後から追っても追いつくことが出来ない。ビスマルクや漣達が砲撃を放っていても、さも当然のように見ないで避けているのが厄介極まりない。
実際は、艦載機の目で３６０度を把握しているだけなのだが、だからといってもやりすぎなくらいの回避性能。
「行けぇ！」
「任せなさい！」
全ては心酔する黒幕のために。命を削ってでも、失ってでも、その目的さえ達成出来ればいい。自分の身体のことを考えず、最後に笑うのが黒幕であればいい。その気持ちが先立ち、自分の限界なんて何も考えていない。そのせいで、やたらと速かった。
「まずい、追いつけない……！」
ビスマルクが悔しさで小さく舌打ちをする。このままでは危ない。このまま、最悪なことになってしまう。

そして、それは現実となる。空に、施設側からの艦載機が見えた。それは姉妹姫のモノではない。瑞鳳のモノでもない。一番そこにあってはならないモノ。

このせいで、欧州棲姫の姿が、彼女の目に入ってしまった。そこからは、もう早かった。

施設側からとんでもない勢いで突っ込んでくる、1人の戦艦。別個体であろうとも、それが欧州棲姫であるならば関係ない。その存在がトリガーとなり、簡単に理性を消し飛ばす。

「Je（見） l， ai（っ） trouv（け）▪.
Mon（私） ennemi（の） jur（怨）▪!（敵）」

巨大な尻尾を展開し、欧州棲姫に向かって突撃するのは、溢れた復讐心に呑み込まれ発作を起こしたリシュリュー。

その瞳には、目の前の怨敵を殺して殺して殺し尽くすまで止まらない、圧倒的な殺意が宿っていた。

理性燃やして

命を燃やして施設へと突撃していった欧州棲姫と欧州水姫。その片方、欧州水姫は潜水艦隊の奮闘によってどうにかその場に押し留めることが出来たのだが、その隙を見て欧州棲姫はさらに突出。ついには、施設からかなり近い位置にまで来てしまう。まだ島自体は見えていないのだが、島の者達の哨戒機の範囲には入っていた。

そして、それが災いした。欧州棲姫という存在が視界に入った時点で暴走が確定する者が施設にいる。よりによって、施設の中で真っ先に気付いてしまったのがその者――リシュリューだった。

艦載機から見えるその姿を認識した瞬間、あっという間に理性は蒸発。誰かが止める間も無く駆け出し、海に飛び出した。

「Je（見）l, ai（っ）trouv（け）▪.
Mon（私）ennemi（の）jur（怨）▪!（敵）」

その瞳には、目の前の怨敵を殺して殺して殺し尽くすまで止まらない、圧倒的な殺意が宿っていた。

滅多なことでは発作を起こすことがないリシュリューの溢れた感情、復讐心。欧州棲姫という限られた個体をその視界に入れることでのみ、リシュリューの理性を簡単に消し飛ばす。

その発作は、滅多に起きない代わりに、起きた時が深刻である。今のリシュリューは復讐心に完全に呑まれており、欧州棲姫を完全に叩きのめすために破壊をし尽くすだろう。それだけならまだいい。欧州棲姫を始末した後ですら、破壊行為をやめない可能性がある。溜まりに溜まった鬱憤を解消するためには、それ相応の発散が必要。

「まだ邪魔をするのがいるのね。でも、今は構っている時間なんて――」

「Di（消）spara（な）▪tre（さ）（い）」

欧州棲姫の言葉なんて聞く耳を持っていなかった。眼前に立ち塞がるリシュリューに対して、邪魔そうにスルーしようとした時、その視界が全て艤装に埋め尽くされた。自身の数倍は大きな尻尾による薙ぎ倒しを即座に繰り出していたのである。普通ならば避けられな

いだろう。その圧倒的な質量に轢き潰され、跡形も無く破壊される。
だが、欧州棲姫は現在、命を燃やして最大級の力を発揮出来る状態。もう長く保たないという最上級のデメリットを抱える代わりに、全スペックが上昇している。
「無茶苦茶ね。私を止めないでくれる？」
かなり強引な主砲の発射で、尻尾による一撃をギリギリで食い止めた。風圧だけでブレーキを踏まざるを得なくなったようだが、確実にノーダメージで済ませている。
この質量による一撃を止められるとは思っていなかったが、リシュリューは止まらない。反動を使って尻尾を逆回転させて、もう一度叩きつけようと振り回す。
ここまで強引な攻撃をしてくる相手を、欧州棲姫は見たことが無かった。流石に二度目は砲撃で弾き飛ばすという非効率的なことは避け、持ち前のスピードを使って大きくバックステップし、その範囲からすぐさま離れた。
「だから、貴女に構っている暇は――」
「Me(死)urt(に) s, il(な) te(さ) pla(い)▪t」
間髪容れずに今度は砲撃しながら叩きつける。振り回すよりも尻尾の効果範囲は狭いが、砲撃も加わったことによって逆に攻撃範囲は拡がっており、回避も難しくなっている。
欧州水姫ならば、左腕の艤装で弾き飛ばしているかもしれないが、欧州棲姫にはそういうことは出来ない。しかし、それを補うように手に入れているスピードは、回避性能を格段に上げている。
「全く、ここまで荒っぽいのは初めてよ。私は目的のために貴女を無視させてもらうわ」
砲撃も尻尾も掻い潜り、爆発的なスピードで一気に施設に向かう。だが、リシュリューはもうその間に欧州棲姫しか入っていない。溢れ出る殺意を隠そうともせず、そのスピードも気にすることなく、周囲のことすら気にせずに砲撃を乱射。
一発一発が超火力である上に、その攻撃範囲が非常に広いため、真っ直ぐ施設に向かおうとすれば間違いなく避けられない。避ける

のならば、進路を一度大きく変え、迂回するルートを選択しなければいけないだろう。
だが、欧州棲姫は現在進行形で命を燃料にし続けているのだ。それ以外の手段も選択出来る。
「時間が無いというのに、厄介極まりないわね」
命を燃やしているとしても、目的達成のためには、ここで死ぬわけにはいかない。どうせ死ぬのなら、施設に辿り着いてから。そう考えている欧州棲姫は、かなり強引にその弾幕を抜ける手段に出た。
自身も同じように砲撃を乱射し、自分に届かせないようにしながら、施設に向かう道を突き進むことにしたのだ。
「貴女には構っていられないのよ。ほら、見えてきたわ」
ここで欧州棲姫は察する。眼前のリシュリューは、行動を止めに来たわけではなく、単に自分を殺したいとだけ考えているのだと。施設の一員なのに、施設が見えていない。
そうで無ければ、砲撃の乱射なんてやっていられない。流れ弾が施設に飛ぶ可能性があるような射線になってきているのに、むしろ弾幕自体は厚くなってきている程だ。
理由はどうであれ、これは利用出来ること。理性も燃やし尽くされつつある欧州棲姫でも、目的達成のためならば使えるモノは全て使うくらいの思考能力はある。
「撃ったら島も壊してしまうかもしれないわね」
水平線の向こうに島が見えるところまで来たことをリシュリューに伝える。今のままだと流れ弾が施設に届くかもしれないぞと脅すように。
事実、リシュリューの放つ砲撃はかなりの威力であり、射程も長い。やろうと思えば、水平線の向こう側の施設にも被害を与えるような攻撃が可能である。
欧州棲姫も、眼前にリシュリューがいなければ、施設に向けて砲撃を放っていた。黒幕の器たる中間棲姫はその程度では死なないだろうし、どうせ今は器の周りに器を守るための者達もいるはず。守護者は体を張って器を守るだろうから、どれだけやっても器は壊れない。

そう踏んでいた。故に、島への攻撃には躊躇がない。
だが、欧州棲姫の言葉は、リシュリューに届いていなかった。復讐心に呑み込まれたリシュリューは、もう周りなんて気にしていない。施設が壊れようが、仲間が巻き込まれようが、知ったことではなくなっている。
欧州棲姫が殺せればそれでいい。その気持ちだけがリシュリューを突き動かしている。
「Ｔａｉｓ―ｔｏｉ（喧し）」
故に、一層砲撃が激しくなる。その攻撃は島の方にも届くほどに。欧州棲姫もこうしながらジリジリと島には近付いているため、より内側にまで被害が出るようになっていくことだろう。
ここまで周りが見えていないなら、逆に目的達成の障害としてこれ以上ないくらいの存在となるだろう。躊躇が無い者ほど邪魔なモノはない。
そんな欧州棲姫の思いなど知る由もなく、リシュリューは乱射しながら接近。目は常に欧州棲姫を捉え、絶対に逃がさないという気持ちが強く溢れ出ていた。
ただ殺すだけでは足らない。壊して、潰して、砕いて、裂いて、その肉片を一片も残さずにグチャグチャにするまで止まらない。
周りなんてどうでもいい。自分のこの復讐心を晴らすためには、何も必要ない。怒りに任せて、目に見えるモノ全てを破壊する。
「しつこいわ。いい加減に――」
欧州棲姫も黙ってはいない。命を燃やした全力の砲撃をリシュリューにぶつけ、邪魔をやめさせる。目的を達成するのに邪魔となる者は、早急に排除しなければならない。何せ、もう時間は残されていないのだから。
「しなさい！」
砲撃と同時に爆発的な加速を以て突撃。弩は既に大剣へと変化。飛ぶ斬撃も復活しており、砲撃の着弾と共に直撃するように放たれる。
「▪ｎｅｒｖａｎｔ（鬱陶しい）」

それを当たり前のように尻尾で防ぐ。だが、多少危機感を持ったのか、ただ防ぐだけではなく二重に折り畳むようにしてさらに強固な壁とした。
だが、その時だけはリシュリューからの砲撃が無くなる。欧州棲姫にとってはチャンス以外の何物でもない。
「私達の目的の邪魔をしないでちょうだい！」
飛ぶ斬撃はあくまでも泥をウォーターカッターの原理で飛ばして殺傷力を乗せているだけなので、強固な艤装に阻まれた場合は傷をつけることも難しい。現に、リシュリューの尻尾は砲撃を受けてもびくともせず、飛ぶ斬撃を受けても泥に戻るだけ。艤装にべったりついたところで本体に付着しているわけではないため侵蝕されることはなく、むしろもう少し近付けば、施設に設置されているバリアでそれ自体が無効になる。
故に、直接大剣で薙ぎ払った。いくら強固すぎる艤装といえど、鋭利な刃である大剣ならば行けると判断して。
しかし、欧州棲姫の目論見は外れる。
「なっ……っ」
リシュリューが尻尾を消していたのだ。近付いてきたことを利用して、綺麗に斬撃を躱した挙句、復讐心と怒りが乗った拳を、欧州棲姫の顔面に叩き込んでいた。
咄嗟に顔を背けるが、その拳は頬に直撃。自身の勢いも乗っていたため、強烈な一撃となり、首ごと持っていかれるかというほどの衝撃となった。
「か……はっ……」
脳が揺さぶられ、一瞬白目を剥きかける。だが、こんなことで気を失っていては、目的を達成することは出来ないと、意地でも意識を繋ぎ止めた。
同時に、渾身の一撃になると、大剣を弩に変化させ、ほぼゼロ距離での艦載機発艦。それはまともにリシュリューの腹に食い込み、さらには射撃まで放った。
「っ……」

当たりどころが良かったものの、リシュリューは脇腹を撃たれることになり、血がドクドクと流れることに。復讐心で全身が興奮状態になってしまっているせいで、血の流れ方も激しい。
しかし、その目から殺意は無くならない。反応はしたが、痛みなど感じていないかのように振る舞い、全く怯むことすら無かった。
そもそも、ビスマルク達が４人がかりで止めていた存在を１人で相手取っているのだ。無傷で終わるわけがない。
「つの……やって、くれるわね……！」
血が滲んだか、口からペッと吐き出し、リシュリューを見据える。
だが、その時にはリシュリューの尻尾が襲いかかっていた。まるで止まる気配がなく、より勢いと殺意を増して動き回る。動くたびに脇腹から血が滴り落ちるが、まるで気にしていない。復讐心によって、痛みも恐れも何もかもを失っている。

そして、さらにこの戦場に乱入者。
「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ……」
現れたのは、死の匂いを感じ取ってしまったコマンダン・テストが、この場に現れてしまった。
「アカン、アカンてコマはん！」
「施設を守らないと！」
黒潮と瑞鳳が焦りながら追従してくるが、この状況を見てしまったコマンダン・テストはもう止まらない。
発作を起こすのはリシュリューだけではない。必ず誰かが死ぬような戦場は、コマンダン・テストにとっては発作のトリガーしかない。

コマンダン・テストは欧州棲姫を睨みつけた。もう理性は飛ぶ。
「Ｉｍ許ｐａｒｄｏｎｎａｂｌｅ」
尻尾を生やしたコマンダン・テストは、躊躇なく突撃した。

親友といえど

徐々に施設に接近してきているリシュリューと欧州棲姫の戦いに、さらなる乱入者が現れた。施設側からその姿を確認し、死の匂いを感じ取ってしまったことで発作を起こしかけていたコマンダン・テストである。

そして、現場に到着して怪我を負いながらも復讐心から戦いを続けるリシュリューと、顔面を殴られた程度でまだ戦意を一切失っていない欧州棲姫をその目にしたことで、完全に発作を起こしてしまった。

コマンダン・テストは欧州棲姫を睨みつけた。もうその時点で理性なんて無かった。死を撒き散らす者という認識は、コマンダン・テストの生への執着を異常に掻き立てる。

「Ｉｍ（許）ｐａｒｄｏｎｎａｂｌｅ（さない）」

尻尾を生やしたコマンダン・テストは、躊躇なく突撃した。

そもそも、欧州棲姫という個体はコマンダン・テストの仇敵でもある。自身を死に追いやり、生への執着を植え付けた張本人。同じ顔の別人であることはわかっていても、リシュリューと同様に恨みを持っている。

いくら優しくておっとりとしているコマンダン・テストであっても、自分を殺した相手となれば話は別。死を振り撒く者に対しての怒りに加え、明確に死を与えた者として認識し、更なる怒りを呼び起こした。

こうなってしまうと、コマンダン・テストもリシュリューと同様に理性なんて何処かに投げ捨てていた。眼前の欧州棲姫を破壊するためにのみ行動することになる。

「似たようなのが増えたわね。でも、私は目的を達成するために動き続けるだけよ！」

同じように尻尾を振るうコマンダン・テストの攻撃はさらりと避ける。

すると、同じように欧州棲姫を狙って動いていたリシュリューとかち合うことになった。

同じ国出身のこの2人は、戦い方もよく似ていた。長い尻尾の艤装を使い、艦載機と砲撃、そして尻尾そのものを使った近接攻撃と、やれることも殆ど同じ。リシュリューの方が火力が高いが、代わりにコマンダン・テストは魚雷が扱える。そこが違うくらいで、基本的には大柄か小柄かの違いくらいしかない。

そんな2人が同時に理性を失い、たった1人の敵を集中攻撃しようとしたらどうなるか。その攻撃自体が、間違いなくお互いを邪魔する。

「っ……」

尻尾同士がぶつかり合ってしまい、欧州棲姫に当たることは無くなった。そのまま真っ直ぐ行っていたとしても、回避済みの欧州棲姫に当たることは無かったが、このぶつかり方は邪魔をされたと感じ取っても無理はない。目の前のモノを破壊し尽くす方向で暴走している2人にとって、それが仲間であっても、一緒に遠征に向かっている親友であっても、もう敵として見てしまってもおかしくない。

以前、コマンダン・テストが暴走した時に、リシュリュー相手でも容赦なく攻撃をした時があった。それが今、リシュリュー側にも起きてしまっているのだ。

だが、それ以上に始末しなくてはいけない存在がそこにいるのだから、その怒りは欧州棲姫に全て向けられる。理性はなくとも、本能的に狙わなくてはいけない存在を理解していた。

「付き合ってられないわ。私は、あのお方のために、命を懸けて目的を達成するのよ！」

そんな中でも、欧州棲姫の目的はあくまでも施設へ向かって器を奪うこと。そのためにも、ここで戦闘に巻き込まれている余裕など無かった。

そのため、さも当然のようにリシュリューとコマンダン・テストに向けて艦載機を発艦。リシュリューの時のように適当にでも喰らわせておけば、足止めになる。

「させるわけないよ！　お願い！」

そこに合わせるのは瑞鳳。合図を出したのは、忌雷に対してだ。忌

雷もそれに応えるように歯をカチリと鳴らした。
深海忌雷に寄生され、それを春雨のマグマに書き換えられ、短い間ではあったが共存をしてきた。黒潮はともかく、瑞鳳は最初こそ慣れることが出来なかったものの、春雨の力が注がれているおかげか、忌雷は非常に好意的で、瑞鳳のためにその力を存分に発揮しようと奮闘する。服装の構築もそれの一部。
この戦場では、施設を守るために2人がかりの力でそれをすることになる。本来の瑞鳳はドロップ艦であり、練度がまるで足りていないのだが、忌雷による無理のないブーストを身に受け、ある程度の技量を獲得していた。サポートのおかげともいう。
それによって繰り出された艦載機の発艦――瑞鳳の場合は弓であり、その全てに忌雷の力も宿っている――は、真正面に放たれた欧州棲姫の艦載機に向かって一直線に突き進み、足りない練度を根性で乗り越えるべく、かなり無理矢理ではあるものの、低空の制空権を拮抗に持っていった。
「ナイスやで瑞鳳はん！　ほんならウチらもや！」
忌雷によるサポートを受けられるのは勿論黒潮もだ。こちらも練度はまるで足りていないのだが、忌雷による無理のないブーストのおかげで、第一改装されているくらいには技量を獲得。弓を使う瑞鳳とは違い、胸に寄生した忌雷が触手を伸ばし、黒潮の腕に絡みついたことで、砲撃を確実にサポート。
半分深海棲艦化しているようなモノであるため、砲撃の威力も並の艦娘からは大幅に上がっている。その反動に耐えられる練度には達していないため、忌雷によって支えられることで砲撃を可能としていた。
この2人の尽力によって、欧州棲姫が発艦した艦載機は全てが駆逐され、リシュリューとコマンダン・テストに害を及ぼすようなことは無くなる。
「Ｔｅ（まず）ｍｅｔｔｒｅ（は）ｅｎ（お）　ｐｒｅｍｉｅｒ（前から）（だ）」
理性が焼き尽くされた2人には、眼前にいる親友も敵になってしまっているが、それ以上の共通の敵を始末するため、連携とすら言え

ない強引な砲撃と雷撃で、欧州棲姫を狙う。
「そんなの当たるわけが――」
砲撃も雷撃も、今いる場所に対して放たれただけ。欧州棲姫には軽々避けられるような攻撃。
だったのだが、撃つと同時にリシュリューがその長くて巨大な尻尾を進行方向から薙ぎ倒すように大きく振り回した。
それだけならば良かったのだが、この攻撃は当たり前のようにコマンダン・テストを、そして砲撃で参加した黒潮すらも巻き込むような一撃。
欧州棲姫を始末するために周りが見えておらず、そのまま行ったら2人とも尻尾に轢かれて大惨事となってしまう。
「ちょぉ!? ウチらおるやん!?」
そこで黒潮は忌雷との連携で身体能力を一時的にブースト。巨大とはいえどうにかギリギリで跳び越える。こんな隙だらけな姿を本来は見せてはいけないのだが、その尻尾の薙ぎ倒しで欧州棲姫も猛スピードで回避していたので、そこに追撃を当てられることは無さそう。
かなり突発的なブーストであるため、黒潮にも反動が来てしまうが、まだ大丈夫だと、着水しながら忌雷を撫でた。
だが、問題はコマンダン・テストである。跳び越えることなんてまず出来ず、だからといって食い止めることが出来るかと言われれば、答えはNOだ。戦艦と水上機母艦の力の差は歴然であり、強引に尻尾で弾き飛ばそうとしても、質量の差で確実に競り負ける。生身で腕力を使うのは以ての外。
故にコマンダン・テストは、本来ならばしない選択をする。
「Ne d▪range pas（邪魔をしないでください）」
尻尾によって自身の邪魔をするリシュリューに対して、躊躇なく、容赦なく砲撃を放った。止めなかったら相討ちで、2人とも死に至る。そもそも、コマンダン・テストとしては、リシュリューのこの攻撃方法も死を振り撒く忌むべきモノとして判断出来てしまうので、その破壊の対象にリシュリューが含まれるのは当然であった。

「Ne（邪）d（魔）・range（しない）pas（で）」
流石にその砲撃を喰らうわけにはいかないと、リシュリューは尻尾を一時的に消して再展開し、砲撃から身を守るための壁とした。これでコマンダン・テストは守られることになる。
このせいで、リシュリューはコマンダン・テストを、コマンダン・テストはリシュリューを敵として認識してしまい、理性が失われているせいで邪魔者しか目に映らなくなってしまった。
「なんなのアレ。私と戦いたいのか、仲間割れしたいのか、訳がわからないわ。まぁこちらとしては好都合だからいいけど」
欧州棲姫としても理解は出来ていないが、自分を狙う者2人が勝手に潰し合ってくれるならそれでいいと、回避した勢いをそのままに、さらに施設へと接近を始める。
「逃がさない！　行って！」
瑞鳳がもう一度艦載機を飛ばすが、欧州棲姫はもうそれすらも無視した。後ろから撃たれるわけでもなく、爆撃すら届かないのならば、相手をするより無視して突き抜けた方が目的達成に近付ける。
むしろ、見た目にはほとんど出ていなかったが、欧州棲姫の限界は近い。命を燃やすブーストは、最初から最後までフル回転させて、命が尽きたらそのままバタリだ。だから、そうなる前に全てを終わらせる。
「何やっとんねん！　アンタらの怨敵が逃げとるやんけ！　アホなことやっとらんと、早よ追わんかい！」
ここで、暴走による内輪揉めに巻き込まれかけた黒潮がキレた。理性を失ったことで周囲を全て破壊するだけの存在になっている2人に対し、新人ながらも思っていることを包み隠さずぶちまけた。
施設を守るという信念の下、みんなで力を合わせて戦っていこうというのが今回の最初で最後の共同総力戦だ。姉妹姫すらも出張り、全員が同じ方向を向いているからこそ成立する。
それなのに、力を合わせられないどころか、仲間にすら手をかけようとしている。そういう溢れ方をしているのは事前に聞いているにしても、この最悪な現状に導いているのは、間違いなくこの2人だ。

「付き合ってられんわ。アンタらのせいで施設ぶっ壊れたら、正気に戻った後でもぶっ殺したるからな！」
そんなことを言っても正気に戻るわけがないことはわかっていた。だが、言わないと気が済まなかった。
この穏やかな施設の仲間にそんなことを言わなくてはならないことに、黒潮は少し涙目になってしまっていたが、それだけ吐き捨ててすぐに欧州棲姫を追う。練度が低いことは自覚しており、追ったところで追いつけるかどうかはわからなかったが、それでもやれることはやる。
「瑞鳳はん、もうアカン。ウチらだけでも追うで」
「そ、そう、だね。うん、島に近付かせちゃダメだから！」
届かないかもしれないが、最後まで諦めない。瑞鳳はありったけの艦載機を発艦させ、黒潮は出来る限りのスピードで欧州棲姫の背中を追う。
欧州棲姫に恨みがあるから暴走しているのに、その欧州棲姫がその場からいなくなっても目の前の親友を邪魔者――敵と思い込んでしまっている。仕方ないとしても、今ここで起きてはいけないことが起きてしまっているとしか言いようがない。
「貴女達……危惧していたこととはいえ、何やってるのよ……」
その光景を見て頭を抱えたのは、ようやく追いついたビスマルクとグラーフ・ツェッペリン、そして空母棲姫である。欧州水姫は駆逐艦達と新たに加わった潜水艦隊に任せ、最も重要な存在を始末するために動いていた。
「空母棲姫、欧州棲姫に艦載機！」
「もう、やってる。それに、妹姫も、艦載機を出した」
欧州棲姫を止められるのは、もう施設に最も近い者達しかいない。それを察して飛行場姫が動き出しているということを知り、少しだけ安堵。
だが、目の前で起きているさらにまずい状況をどうにかしなければならない。このままでは戦力が落ちているだけでなく、仲間同士なのに殺し合いが進み、片方、最悪両方が失われてしまう。

ビスマルクとしても、グラーフ・ツェッペリンとしても、旧友２人がこんなことになっているのを、手をこまねいて見ているだなんてしたくない。ならば、身体を張って止めるしかない。
敵はここにはいない上に、仲間をどうにかする余裕なんて何処にも無いのに。
「貴女達……っ、いい加減に、しなさい！」
疲れを惜しみながらも、全力で突撃し、リシュリューに一発強烈なビンタをお見舞いするビスマルク。リシュリューもここでさらに横槍を入れられるとは思っていなかったため、防御することも出来ずに見事に一撃入れられた。
これで正気に戻るとは思えず、むしろ自分も敵として認識される可能性は高いが、ビスマルクはこれをやらねば気が済まなかった。
自分の知るリシュリューは、少しプライドが高く頑固なところはあるが、冷静で気高く仲間を守ることに全ての力を注ぐような、尊敬に値する艦娘だった。
だが、今はどうだ。そういう溢れ方をしているにしても、そのトリガーとなった者を差し置いて、最も近いモノを攻撃するだけのバケモノになってしまっている。
それがビスマルクには許せなかった。敬意を持っていた相手がここまでの暴走をしていることが。
「今はそんなことしている場合じゃないでしょう。あっちを見なさいあっちを！」
そして、強引に頭を捻り上げ、施設に向かう欧州棲姫を視界に入れる。
「正気じゃないなら正気じゃないでいいわ。でも、やることはやりなさい！　それでもわからないなら、勝手に滅ぼしあってなさい！」
それだけやって、ビスマルクは欧州棲姫を追う。グラーフ・ツェッペリンも空母棲姫も、施設の方を優先した。
この一発で、リシュリューの中で何かが変わった。

姉妹姫の苦悩

島の岸。姉妹姫と潮が水平線を眺めながら戦闘が何事もなく終わることを祈っていた。戦艦棲姫からの通信があった時から心配になり、潜水艦隊への指示が耳を劈いた後からはその気持ちがより強く。そして、艦載機で欧州棲姫を見てしまったリシュリューが島を飛び出して行ってしまった後からは心配から不安になる。

「……お姉、敵がかなり近付いてきてるわ。そろそろここからでも見えるくらいになる。アタシも艦載機を出すわよ」

「ええ、お願い。でも、救えるように、ね」

「善処するわ。でも、加減したせいでこの島に……お姉に何かあるようなら、アタシは容赦しないから」

潮に少しだけ離れさせ、飛行場姫はありったけを発艦。こちらに向かってくる欧州棲姫に向けて、一斉に嗾ける。

だが、飛行場姫にはもう1つの問題点が見えていた。欧州棲姫がこちらに近付いてきているだけでなく、リシュリューとコマンダン・テストが発作を起こして仲間割れをしていること。なるべく欧州棲姫と離そうとしていたのに。施設を飛び出していったのを止められなかったことが、暴走を引き起こしてしまった。そもそも、欧州棲姫のことを伝えておかなければならなかったか。いや、暴走を見越して抜け出せないように拘束するべきだったか。考えられることはいくらでもあった。

起きてしまったことを悔やんでいても始まらない。まずは現状を打破するためにも、耳元のインカムを操作して、知ることが出来る情報があるのなら仕入れておく。マイクが繋がった瞬間、戦闘音がどうしても耳に響いてくるが、これは我慢するしかない。水中の音が大きく聞こえるため、伊47がかなり激しい戦闘を繰り広げていることがわかる。

「緊急時に悪いんだけど、情報をちょうだい。端的でいい。この敵は、救えるの？」

中間棲姫がピクリと震える。これで救うことが出来ないと言われ

た場合、決断を余儀なくされる。
『正直厳しいわ。２人とも、泥が無くても黒幕に従っているような輩だもの。しかも今、命を使うことでとんでもない力を手に入れてる。耐えれば自滅するだろうけど』
　やっぱりと、飛行場姫は小さく苛立ちを見せる。その飛行場姫にピッタリと引っ付くように立っていた潮も、その苛立ちを感じ取ったからビクッと恐怖に引っ張られそうになった。
　島にここまで近付いているということは、すでに設置済みのバリアに身が晒されているということになる。だというのに、欧州棲姫は止まる気配がない。つまりそれは、心の底から侵蝕が無くとも黒幕に従っているということに他ならない。
『見えていると思うけれど、欧州棲姫を見てリシュリューが暴走したわ。それに釣られてコマンダン・テストも発作を起こしてる。最悪なことに、理性を失っているせいで仲間割れ状態よ』
「ええ、それはこちらからも確認出来たわ。悔しいけど」
　飛行場姫にはビスマルクの姿も見えているため、リシュリューとコマンダン・テストを引っ叩いた瞬間も知っている。それで止まれば苦労はしないのだが、リシュリューの動きがほんの少し変わったように見えたので、あとは天に任せるしかない。
「ヨナ、余裕が無ければ大丈夫よ」
『ほ、報告！　欧州水姫の、方は、ヨナ達と、駆逐艦のみんなで頑張って止めてるヨナ！　でも、でもこのままだとこのヒトもそっち行っちゃう!?』
「無理だと思ったらすぐに撤退しなさい。生きていることが一番大事よ。いざという時はこちらに来させてもいいから」
　そして欧州水姫をどうにか止めている伊４７率いる潜水艦隊。追ってきた北上組の３人と薄雲も加わり、かなりの人数でどうにかしようと奮闘しているようである。
　消耗している者も一部は追い付き、無理のない程度にそれを手伝っていた。北上や戦艦棲姫もこちらに加わっている。
　三者三様、しかし、出来ることなら聞きたくなかった言葉のオンパ

レードである。特に最初の戦艦棲姫からの言葉、救うことが厳しいというものは、飛行場姫にはともかく、中間棲姫には重い言葉。
救わないという選択肢は取りたくない。しかし、そのせいで仲間達が辛い思いをするのはダメだ。
手が届く範囲の命は全て救いたいし、そこに敵味方なんて関係ないというのが中間棲姫の考え方だ。本来なら敵対されてもおかしくない艦娘や、そこに繋がる人間ともうまく付き合えているのだ。同胞(はらから)ならば、もっと上手く行くはず。
だがおそらく、今敵対している2人は手が届かない者達なのだ。手を伸ばしても払われる。それは、届いているとは言わない。
「お姉、酷なこと言うけど、聞く限り無理よ。アタシだって辛いけど、さっきも言った通り。アタシの優先順位は敵じゃなくて仲間なの。だから……殺すつもりでやるわよ」
心を鬼にして、飛行場姫は艦載機をコントロールし続ける。欧州棲姫からの艦載機も現れ、邪魔をされつつも足止めだけはするために。
時間を稼げば自滅するのだから、最悪それでもいいと考えた。しかし、タイムリミットがいつかはわからない。あまり無茶は出来ない。
「止まらないわね……なんて力なのよ。とにかく速いわ」
欧州棲姫の姿は、もう水平線の向こうに見えていた。明確にこちらを見据えているのもわかる。飛行場姫だけでなく、空母棲姫やグラーフ・ツェッペリンの艦載機もその足を止めるために奮闘するのだが、その速さのせいでどうにも出来ず、嫌でも接近を許してしまう。
「……い、妹姫、さん」
震える潮の声。敵がここまで来てしまうという恐怖。仲間達が必死に抵抗していることを察したことによる恐怖。そして、今までに見たことのない切羽詰まった飛行場姫を見ての恐怖。あらゆる恐怖が溢れ出して、外に出てきていた。
そもそも恐怖が溢れている潮には、こういった防衛戦はあまり向いていない。自分から向かうより恐怖が大きいからだ。
「安心なさい。アンタのことはアタシが守るわ」
飛行場姫がそれを察し、優しい声色で潮を宥める。今にも泣きそう

な顔をしている潮の恐怖を少しだけでも和らげるため。
しかし、潮からの次の言葉は、飛行場姫も想像していない言葉だった。
「わ、私が、私が食い止めます」
震えながらも、涙目ながらも、潮は強い意志を以て施設のために動きたいと決意した。溢れた恐怖は止められない。そういう性質なのだから。それでも、この施設のために戦いたい。一度戦えたのだから、守るためならばもっと戦える。
「……出来るの？」
そんな潮の決意を、飛行場姫は否定はしない。しかし、震えながら言われても説得力がない。
「や、やります。私も、ここが無くなるのは嫌です。戦うことよりも、そっちの方が、怖いです。だったら、一番怖いものを、無くしたい」
ぐっと涙を拭いて、力強い目を見せる。当然恐怖は薄れていないが、その方向性が違った。戦うことへの恐怖は鳴りを潜め、施設が、居場所が無くなることへの恐怖しかない。
「アタシもお姉もついていけないわ。アンタは1人で立ち向かわなければならない。まぁ向こう側からみんなが追ってきているけど、それでもこちらからは1人。それでも」
「だったら私がついていきます。大丈夫ですよね？」
そう言ってきたのは、なんと宗谷である。この施設に残っている海上艦は、もう宗谷しかいない。しかし、宗谷は非戦闘艦。戦いには最も不向きというか、向く向かないの問題ではないはずだ。それなのに戦場に共に出ると言い出した。
「いや、アンタは」
「雑務は終えました。反対側はもう大丈夫です。なので、真正面の敵だけをどうにかしないといけません。それが可能になるならば、この宗谷、少々無理をさせてもらいます。大丈夫ですから」
妙に漲る自信。今までのクルーザーで荷物を運ぶ調査隊の仕事ではなく、正しく艦娘として出撃するという意志。
その瞳からは、何故だか失敗するという予感が無かった。宗谷なら

ば、潮を戦場に送り届け、共に戦ってくれると感じることが出来た。
「……お姉、いいかしら」
飛行場姫はこれで良しとした。ならば、中間棲姫は。
ここまであまり口を出すことが出来なかった中間棲姫だが、仲間の誰もがこの施設のために動いており、恐怖に震える潮や、非戦闘員の宗谷ですら参戦すると言い出したのだから、もう後には引けない。
むしろ、中間棲姫もこの施設のために何かしなくてはと思う。守ってもらってばかりで本当にいいのかと、ずっと考えていた。
勿論、今向かってくる敵だって、命を奪いたくない。救えるものなら救いたい。その信念は揺るがない。だがそれで仲間達が命を散らすのは、絶対に許せない。自分が許せなくなる。
「わかったわぁ。でも、2人だけじゃなく、護衛も一緒についていってもらうわねぇ」
パンと手を叩くと、中間棲姫の傍に3体の球体状の艤装が現れた。艦載機を数回り大きくしたような外見であり、口をカタカタと動かしつつも中間棲姫に懐いているように身体を擦り付ける。
「それは、護衛要塞、ですか？」
宗谷はその存在について知っていた。姫級、特に陸上施設型の深海棲艦が侍らせていることがあるという深海棲艦。かなり脆くはあるのだが、主を守ることに特化している、まさに護衛の存在。
そういう個体だと思っていたが、中間棲姫のそれは個体ではなく艤装の一部という扱いのようだ。今まで表舞台に出てこなかった理由は、中間棲姫が本気で艤装を使う必要があるから。つまり、
「貴女達はそう呼んでいるのねぇ。私がこの子達を使うためには、施設の電力をカットしなくちゃいけないの。だから、今頃冷蔵庫の中身がちょっと怖いわぁ」
施設の運営に影響が出るからである。今でこそ全員出払っているような状態ではあるが、長く使い続ければ、当然施設の各所に害が出るだろう。それこそ、冷蔵冷凍している食料がダメになる可能性だってある。
「大丈夫ですよ。もしものために、運んできた氷塊を入れておきまし

たので。宗谷印の南極産……というのは誇大広告ですが、姉姫さんに何かあっても食料に害がないようにしておきました」
「あらぁ、ありがとうねぇ。それなら心置きなく使えるわぁ」
護衛要塞を撫でて指示をすると、それは小さく頷くように傾いた後、潮と宗谷の周囲を飛び回るようになった。
「私も艦載機で応戦するわぁ。だから、潮ちゃん、行ってきなさい。でも怖かったらすぐに戻ってきていいからねぇ」
潮も撫でて、ニッコリ笑う。その時に潮は気付いた。中間棲姫も少し震えていた。施設の主人も、今は仲間達が戦火に巻き込まれることに恐怖を持っていたのだ。
それが、恐怖を最も知る者として決意を後押しする。元々の心優しい性格も相まって、恐怖には非常に敏感であり、仲間の恐怖は自分以上に辛い。自分はまだいいが、仲間が同じ感情を持つのは許せない。
「はい……では、行って、きます！」
「無理だけはしちゃダメよ。でも、アンタの決意、アタシは見届ける」
グッと拳を握り締め、潮は駆け出した。今行かなくては、恐怖に呑み込まれてしまいそうだったから。決意が揺らぐ前に、前に進む。
それを後押ししてくれるのが、宗谷と護衛要塞。潮の恐怖を和らげ、共に並んでくれる。それが非常に頼もしい。

「……妹ちゃん、これで良かったのかしら」
潮達の背を見送りながら、ボソリと呟く姉。それに対して妹は、少し悔しそうにしながらも、それを振り払う。
「大丈夫よ。お姉の決断は、間違ってない」
姉の涙目を見て、妹は強く拳を握りしめるだけだった。

これで本当に最後。施設防衛戦は、佳境へ。

仲間を守る拳

施設の島近海。欧州棲姫は目的のために、猛スピードで接近してきている。充分すぎるほど近付いているため、島を包み込むバリアの範囲内には入っているのだが、それでも敵意を失っていないため、心の底から忠誠を誓っていることは嫌というほどわかる。

また、命を燃やしたブーストはバリアでは剥がれないようで、今までの端末とは一線を画していた。死が終着点の強化であるため、最初から黒幕サイドの者に対しては、非常に相性がよかった。

「そろそろ、そろそろ到着するわ。そんな艦載機の攻撃なんて、効かないわよ！」

施設から飛んできた飛行場姫の艦載機を見て、鼻で笑った。自身からも艦載機を発艦し、妨害を防いでいく。

さらには背後からも艦載機が飛んでくるが、持ち前のスピードで全て回避。ジリジリとでも施設に近付いていた。

「ふふ、見えたわよ、あのお方の器！」

そして、欧州棲姫の目に中間棲姫の姿が映った。声が届くわけでは無く、見えたと言ってもほとんど米粒程度。それでも、それが忠誠を誓う黒幕が欲しているモノであることはすぐにわかった。

最後の仕上げは、体内に仕込んである特製の端末で侵蝕するだけ。ただそれだけで、ここまで来た全てが報われる。他の泥は島に近付けば近付くほど失われていることがわかったが、その最後の仕上げだけは、まだちゃんと体内に残っていることは確認出来た。

器を取り戻してしまえば、自分の命なんてどうなっても構わない。あの施設は全て黒幕のモノとなるのだから、それでいい。それを望んでいるのだから、それでいい。

だが、それを邪魔する者が現れる。護衛要塞を引き連れた、施設の最後の砦。

恐怖が溢れた者、潮。そして、奇跡の船、宗谷。

「潮さん、大丈夫ですよ。私達は負けません」

その声色は、不思議と潮の心を落ち着かせる。小さく、しかし深く

呼吸をし、震える身体を整える。
本来ならば戦場に出ることも無いような非戦闘艦。艦娘であるにもかかわらず、移動はクルーザー。物資の輸送や、調査隊としての任務を務め、そもそも兵装自体を持っていない。
なのに、この場に艦娘として付き合ってくれている。それが、今の潮には心強かった。
潮の周囲に浮かぶ護衛要塞も、まるで中間棲姫の意思を体現するかのように潮を守るために身体を揺らした。
「わ、私……ヒトを攻撃するのは、怖くて……」
「そうですよね。わかります。潮さんの拳は、モノを壊すためのものではないのでしょう。仲間を守るための拳ですから」
震える拳をギュッと握りしめている。戦う以前に、ヒトを攻撃すること自体が出来ない。それは切り捨てるという行為となり、潮には最も忌むべき行動となるのだから。
だが、それをしないと施設を切り捨てることになり得てしまう。どちらにしろ何かを切り捨てなくてはならないとしたら、どちらが大事か。そんなもの、聞くまでもなかった。
敵を救うために、仲間を切り捨てるだなんて、潮でなくても絶対にしない。ましてや、その敵が元凶に忠誠を誓っているのなら尚更だ。
「でも、潮さんは決意してここに来た。勇気を振り絞って、自分の出来る限界を超えて。それなら、その恐怖は乗り越えることが出来ていると思いますよ」
その勇気を後押しするように、宗谷は潮の背中を撫でる。温かく、力を分け与えられているような、不思議な感覚。
宗谷にそういった特別な力があるわけではない。ただ単に、優しく思いを乗せただけ。恐怖からしか他の感情がわからない潮が、そういう思いに敏感なのである。
この思いは怖くない。心が安らぐ。そして、勇気が湧き上がる。そんな感覚。
「別に躊躇なく攻撃をしろと言ってるわけじゃありません。潮さんは、その優しさを忘れないでください。いざとなれば、攻撃しなくて

も勝つ方法もありますからね」
　ニッコリ笑いながら語る宗谷を見ると、触れられる以上に心が落ち着く。
　そして最後に、震える拳を握られた。温もりを強く感じ取ることが出来て、その震えは自然と止まっていった。
「が、頑張り、ます」
「はい。頑張りましょう。ここが正念場ですから」
　最後に1つ深呼吸をして、潮は向かってくる欧州棲姫を見据えた。トラウマを抉るような姿――侵蝕された漣達と同じ姿――をその目にしたことで、やはり恐怖を感じてしまうが、ここで何も出来なかったら、自分を認めてくれたヒト達の居場所が無くなってしまう。居場所が無くなるだけならまだしも、命すら無くなってしまう。
　そんなのは、嫌だ。
「これ以上、行かないでください！」
　潮は主砲も魚雷も使えない。溢れた恐怖のせいで、切り捨てる道具は使えない。それは、勇気を振り絞っても無理だった。何せ、潮は出したいと思わないから。
　その分、飛行場姫に鍛えられた拳がある。龍驤の甲板を纏めて突き破る程に強靭となったそれは、今は潮の感情も乗り、宗谷の思いも乗り、最高潮に達していた。
「何も持たずに私の前に立つだなんて、死にたいのかしら。でも、いいのよ。素直に命を散らすことは、あのお方に貢献しているようなもの。屈したいと思うのは当然よ。一思いに、轢き潰してあげる！」
　そんな潮に対し、欧州棲姫は砲撃を放ちながら突撃。砲撃も普通以上の火力を持っているのに、突撃の勢いと圧を乗せてきた。
　今までの潮ならば、恐怖に震えてその場に蹲り、その全ての攻撃を無防備で受けていただろう。だが、今の潮は違う。その突撃を真正面から受け止めるつもりでここに立っている。
「大丈夫です。潮さんには、あの砲撃は当たりません」
　根拠が無いような宗谷の言葉を、潮は信じることが出来た。そしてそれは、すぐに現実のものとなる。まるでその砲撃が意思を持ってい

るかのように潮から逸れた。いや、撃った瞬間から潮に向かってくることはなかった。
理由は非常に簡単。欧州棲姫が狙いを定めている時に、運良く高めの波が発生し、放つ時には波にあおられていたのだ。
急ぎながら撃っていなかったら、多少高い波が来たところで照準は合わせられる。だが、欧州棲姫は目的が近くにあるということで、ほんの少し気が逸っていた。ここを越えれば、器がある。その気持ちが、この照準のズレを生み出している。
それはそれなのだが、ここで波が立つのは運である。無かったら気が逸っていたところで砲撃の照準がブレることはない。この広い海で、故意に波を起こすことは容易ではない。それなのに都合よく起きた。
これが、宗谷の豪運。潮のために起きた、宗谷にとって都合のいい空気の流れ。調査隊の時の小さな豪運とはわけが違う、命を拾う、最大級の豪運。意図的に起こしたわけがない。
「行ってください、潮さん」
「はい……！　潮、行きます！」
怖い。本当に怖い。向かってくる欧州棲姫が怖くて仕方ない。でも、今は手も足も震えていない。その全ての力が拳に宿っている。恐怖を振り払うため、その元凶たる者を、その拳で討ち払う。
「妹姫さんに教えられたこと、やってみます。私は、自分を守るために、みんなを守るために、鍛えられたんですから！」
涙目ではあるが、強く拳を握り締め、全力で突き出す。直に触れるのはまずいかもしれないと考え、思いつく限り最善のグローブを纏って。
「この私に、そんな攻撃を？　轢かれたいってことよね。そういうことよね。ならば、あのお方への生贄として、貴女がまず肉塊となりなさ――!?」
近付いて理解した、この潮の拳の危険性。喰らってはいけない。貰ってはいけない。触れてはいけない。瞬時に頭の中で警報が鳴った。直撃は死を意味すると、直感的に気付いた。

ならばとかなり強引に潮を避けようと曲がり、さらには弩を大剣に変えて、擦り抜け際にその身体を両断してやろうと画策。
しかし、それは叶わない。ここで都合よく突風が吹いた。波が水飛沫となり、都合よく欧州棲姫の目に入る。
「なっ」
「たぁあああっ！」
そのほんの少しの隙が命取り。潮の拳は、ついには音を置いていく程にまで極まっていた。学んだことを忘れない潮が、飛行場姫からの教えを全てその拳に乗せて、渾身の一撃。
「っ」
欧州棲姫は咄嗟に大剣を守りに使った。言っても拳は拳、砲撃とは違う。まだそれで耐えられると考えて。
その考えが甘い。
「なん……っ!?」
大剣を軽々突き破り、触れたところから粉々に砕いていく。艤装如きでは潮の拳は止まらない。これが生身に触れれば、一切の容赦なく、その全てを抉り取るだろう。
これには当たるわけにはいかないと、かなり強引に身を捻る。しかし、拳の圧は凄まじく、空気を巻き込むように繰り出されているためか、それでも脇腹を抉り取る一撃となった。
「っか……この……っ」
すぐさま砕け散った大剣を再展開し、潮を薙ぎ払おうと振るう。しかし、それを守るのは中間棲姫から託された護衛要塞だ。潮に向けられる前に体当たりをすることで強引に向きを変えた。その剣筋は潮から大きく外れ、一切の被害無し。
そしてその時には、潮が次の一撃のために強く海面を踏み込んでいた。次は拳を握るのではなく、指を伸ばして強く振り払う。そんなことをしたことで普通ならば何も起きないのだが、飛行場姫ならばそれだけでも鋭い一撃となり、生身にくらいならば傷をつけることが出来るだろう。
潮にそこまでの力はないかも知れないが、先程の拳のこともあり、

あらゆる攻撃が一撃必殺に見えてしまう。欧州棲姫はまずいと判断し、すぐさま潮から離れた。
「貴女に構っている暇なんてないの。私にはあのお方から託された目的があるのよ。だから――」
「その目的が、私達の居場所を奪うことなら、ここで、止めます！」
手刀が避けられたところで潮は止まらない。さらに強く踏み込み、今度は手を開いた状態で欧州棲姫に再接近。それを欧州棲姫に押し当てるように触れる。
「貴女の目的は、姉姫さんですよね。だったら、ダメです。絶対、ダメです！」
そして、さらに強く踏み込む。それはもう、発勁と同等。内臓を激しく揺らし、猛烈な吐き気を催すことに。
ここで吐き出してしまったら、最後の詰めである特別な端末を外に出してしまうこととなる。そのため、欧州棲姫は嫌でも吐き気を抑え込んだ。吐くならば、器に向けて。それだけで目的は達するのだから。
「貴女も同胞（はらから）なのよね。なら、人間につくより、あのお方についた方がいいわ。偉大なるあのお方ならば、貴女も正しく導いてくれる」
「……私の拠り所は、妹姫さんですから。それに、この施設のみんな、ですから！　貴女みたいな怖いヒト達には、ついていきません！」
互いに信念を譲らない。
「そうよ、潮！　ここでそいつは、止めなくちゃいけないわ！」
ここでビスマルク達が追いついた。潮と宗谷による足止めのおかげで、戦力は集結。
「ヒト様の、居場所を、荒らすな。いい加減に、帰れ」
空母棲姫もありったけの艦載機を発艦し、上空から欧州棲姫に向けて急降下させる。学んだ技は早速使っていく。
「貴女達はどこまで……どこまであのお方の邪魔をするのよ！」
その艦載機を自身の艦載機で迎撃しながら、欧州棲姫はその思いを叫ぶ。誰もが同じことを思っただろう。

それを代表して、1人が全員の言葉を集約して伝えた。
「貴女が言わないでちょうだい」
その言葉と同時突っ込んできたのは、巨大な尻尾。叩きつけるように欧州棲姫に襲い掛かる。
「っ……貴女は……っ」
それを辛うじて避けた欧州棲姫が睨み付けるその先には、リシュリューがコマンダン・テストを引き連れて立っていた。

引き金は旧友

潮と宗谷の善戦により、ついに欧州棲姫を追い詰める。施設にはかなり近付いてしまっているものの、これ以上行かせないように取り囲むところまで来た。

そこには、つい先程まで暴走していたリシュリューとコマンダン・テストの姿もあった。

理性を失い、親友である互いを敵として認識してしまっていた2人だったが、リシュリューに放たれたビスマルクのビンタによって、何かが変わっていた。

「貴女達、仲違いしていたんじゃないの？」

「残念ながらね。でも、もうＲｉｃｈｅｌｉｅｕはあんなＡｂｏｍｉｎａｔｉｏｎ（醜態）は見せないわ。Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ Ｔｅｓｔもね」

「Ｏｕｉ」

リシュリューが正気に戻ったのは、ビスマルク達があの現場を離れようとした時である。

暴走していたリシュリューへの一撃は、ビスマルクすらも敵として認識するに至るモノ。その後、強引に首を捻り上げられたことで欧州棲姫を視界に入れることになったが、それだけではリシュリューの理性は戻ってこなかった。

コマンダン・テストは引き続き邪魔をする敵にしか見えないし、むしろビスマルクという新たな敵まで増えている。目につくもの全てを破壊するまで止まらないが、優先順位は手近なところから。理性が無いのだから、順序を作ることも出来ない。

しかし、その後の声が、リシュリューに違う道を示した。

『正気じゃないなら正気じゃないでいいわ。でも、やることはやりなさい！　それでもわからないなら、勝手に滅ぼしあってなさい！』

少しキツめで、しかし仲間のことを思い、叱咤激励をする真面目そ

うな声。凛として、いつも前を向いている自信満々な声。リシュリューはそれを知っている。理性を失っていても、それは強く強く心に刻まれていた声。

発作を乗り越えるために有効なのは、今のようになる前の出来事であった。

ここまで激しい発作を起こしたことがあるもの自体が少ないのだが、近しいのは春雨。２度目の溢れ――怒りに呑まれている状態でも、鎮守府に戻ることが出来たことで、とても穏やかに戻った。故郷がキーだったと考えられる。それと同じだ。

リシュリューにとっては、欧州棲姫に沈められる前の記憶、旧友が、発作を抑えるキー。全てを破壊し尽くすまで暴れ続けるか、もしくは深海棲艦化する前に知り合った者の声と温もり。これがリシュリューを止めるための数少ない手段だったのだ。ビンタも、首を捻るのも、ビスマルクの手がリシュリューに触れる行動。それも実際は功を奏していた。

「……何をやっているのよＲｉｃｈｅｌｉｅｕ」

自分で自分を叱咤する。自分でも理解していた発作により、本当に久しぶりに会えた旧友を、よりによって敵として見てしまうなんて、なんて醜態を晒してしまったのだと苛立ちを覚えた。

復讐心は勿論ある。欧州棲姫の姿を見たのだから、殺意は異常に湧き上がっており、破壊衝動のようなものまで感じられる。だが、見境なく破壊するようなことはもうしない。そんなことをしたら、次はビスマルクに愛想を尽かされる。むしろ、討伐対象にすらされてしまうかもしれない。

「Ｍｅｒｃｉ，　Ｂｉｓｍａｒｃｋ．　自分を見つめ直すことが出来たわ」

既に行ってしまったビスマルクの背に礼を言いながら、自分の頬をバシンと叩く。今までに無かった刺激は、リシュリューを数段先に進ませることになった。

奇跡的な噛み合いによって、リシュリューは正気を取り戻した。ならば、次はコマンダン・テストである。

こちらの発作を抑える手段は、リシュリューが熟知している。命ある仲間の温もりを、直に伝えること。そしてそれは、リシュリューが最も適している。

「Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ……　Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕに引っ張られてしまったのね。Ｐａｒｄｏｎ（ごめんなさいね）」

近づこうとすれば攻撃を受けるが、そんなことを気にすることもなく突っ込む。その尻尾の耐久性を遺憾無く発揮し、コマンダン・テストからの攻撃は全て跳ね飛ばし、そして尻尾を使いつつ力強く抱擁。以前の夜の戦いでもやった、コマンダン・テストを宥める手段。

脇腹からは血が流れるものの、そこは機転を利かせて、服を替えて強めのコルセットを巻き付けることで止血。深海棲艦の特性を全て使い、コマンダン・テストを安心させる。

「大丈夫よ。もう大丈夫。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕは死なないわ。怪我をしていても、死には至らない。だからＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、正気に戻りなさい。正気に戻った貴女に謝らなくちゃいけないんだもの」

抱きしめながら頭を撫でる。これがいつもの落ち着かせ方。今回もその方法でコマンダン・テストに温もりを送り込む。

「貴女もＧｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎに顔向け出来なくなるわ。昔の知り合いは大切にしなさい。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕが言えた話では無いけれど」

グラーフ・ツェッペリンの名前が耳に入ったことで、コマンダン・テストも一気に落ち着きを取り戻した。過去の自分を思い出すことで、その時に身体を合わせようとするような、そんな落ち着き方である。

やはり、強すぎる発作というのは、過去と向き合うことで落ち着くことが証明された瞬間でもあった。難しい問題ではあるが、可能であればコレが最善の治療法と言える。

「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ……私……」

「いいのよ、Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ……もう大丈夫。お互い、難儀な性質ね。本当にごめんなさい」

「……本当に、そう、ですね。こちらこそ、申し訳、ございませんでした」
　互いに、大きく深呼吸。頭に上っていた血を下ろすように酸素を取り入れ、身体の熱を取り払う。復讐心による熱はまだ完全に失われたわけでは無いが、それでも充分に理性は取り戻せている。
　今ならば、欧州棲姫を目の前にしても、正気を失うことはない。次はその戦場にビスマルクもいる。旧友に醜態を見せるまいというプライドが、発作を抑え込むことが出来るはずだ。
「行きましょう。決着をつけるために」
「……Ｏｕｉ．　私達の居場所を、守るために」

　そして、今に至る。欧州棲姫の姿を見て、復讐心はグツグツと沸き上っているものの、正気を失うことはない。普段通りはいかなくとも、見境なく攻撃することもない。
　そこに旧友がいるのだ。また醜態を晒すなんて、プライドが許さない。もう発作なんて起こさない。
　それともう１人。正気を失っている時に全力の叱咤をした者に対して視線を向ける。それを感じ取った者――黒潮は、少し申し訳なさそうに目だけを向ける。
「クロシオ、これで殺されなくて済むかしら」
「ちゃんと聞こえとったんですか。正気に戻ったんなら、また頼らせてもらいますわ。さっきの無礼、すんません」
「いいわ、むしろ貴女が言いたいことはわかるもの。むしろこちらもごめんなさい。納得していても、あの醜態は許し難いものだもの。Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ自身でも、ね！」
　後腐れの無いように謝罪しあって、早速リシュリューが欧州棲姫に突撃する。復讐心を乗せながら、しかし正気は持ったまま。
　それは、リシュリューの行動全てに影響を与えた。力が全身を駆け巡り、スペックを数段階上げるに至る。命を燃やしているわけではない。単純に、特性を力に変えているに過ぎない。

「さっきより、速いじゃない……！」
「貴女相手だからよ。よく見えるわ……その憎たらしい、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕの仇の顔がね！」
リシュリューはここで理解する。本当に恨みのある相手に対して、正気を失ったまま攻撃するのは勿体無いということを。ちゃんと復讐の相手を見据えた状態で決着をつける方が、気が晴れるというもの。
それはどちらかと言えば負の感情ではあるが、今はそれでも構わない。そこで見境が無くなるあたり、発作が起きているようなもの。
「いい加減に、してもらえるかしら!?」
対する欧州棲姫は、その強大な尻尾には流石に敵わないと、すぐさま範囲外に退避。
だが、それを見越していない者がいないわけが無かった。今、欧州棲姫に最も近い位置にいるのは誰か。
「ダメです！　施設に、近付かないで！」
その退避方向は、潮のいる方向。完璧な攻撃のタイミングを運良く拾うことが出来たため、そのまま拳を突き出す。宗谷の豪運は未だ健在。
流石の欧州棲姫も、潮の恐ろしさは嫌というほど理解している。艤装はことごとくを破壊され、身体に触れられたら拳なら肉を抉り掌なら内臓をやられる。特に後者は欧州棲姫にとっては大きな痛手だ。特製の端末を吐き出す羽目になる可能性が高い。
「貴女こそダメよ！　いい加減に邪魔はやめてくれないかしらね！」
その拳をギリギリで避けつつ、大剣は弩となって潮に狙いを定める。ゼロ距離からの発艦は、先程リシュリューがやられた一撃。場所が悪ければ脇腹どころか致命的な一撃となる。
だがそれは当たることはない。その一撃は、護衛要塞がしっかり引き受けた。１つは発艦する直前にその身体をぶつけ、２つは潮を守るように寄り添う。これによって潮は完璧に守られた。
「ここで、終わって、もらう」
次は空母棲姫による急降下爆撃。回避した瞬間を見計らった、数機

による特攻。命中率はやればやるほど上がっていき、この爆撃もほぼ完璧な位置取り。
「終わらないわ！　私は、目的を達しなければならないんだもの！」
猛烈なスピードで急降下してくる爆撃機に対して、欧州棲姫は主砲を真上に向けて放った。三式弾というわけではないのにしっかりと対空砲火となり、空母棲姫の艦載機を的確に撃墜していく。
そうなると今度は本体がガラ空きになる。そこにすぐさま狙いを定められるのは、黒潮と瑞鳳だ。
「今やな。行くでぇ！」
「了解！　私も直接！」
黒潮は忌雷の力を借りた精密な砲撃で、瑞鳳は艦載機を発艦させる矢でダイレクトに、現状最も避けづらいであろう腹を狙う。一撃で始末しなくてもいい。だが、動きさえ止められればそれでいい。
「このっ、まだよ！」
しかし、それすらも大剣を振り回すことで弾かれてしまった。ここに来て、欧州棲姫の精度は上がりに上がっている。見えているもの、見えていないもの、本来ならば反応出来ないようなもの、その全てに対応出来ていた、
それは、最後の灯火とすら感じられる。
「あのお方のために、私はぁ！」
「いい加減にしてちょうだい。こちらはそれで迷惑しているのよ」
欧州棲姫の言葉を聞き終わる前に、ビスマルクが主砲を放った。回避されるのを覚悟してでも、攻撃の手を休めることは出来ない。
焦っているわけではない。しかし、早急に斃しておかなければならない。何故なら、
『ビスマルクさん、そっち、行っちゃったヨナ！』
潜水艦隊が、欧州水姫に抜かれてしまったからだ。あちらはあちらでギリギリの戦いをしており、相当踏ん張ってくれていたのだが、ここでついに力尽きてしまった。幸いにも誰も重傷を負うことは無かったようだが、それでも消耗は激しい。
突破力だけで言うのなら欧州棲姫よりも欧州水姫の方が上であっ

た。何よりあの左腕が相当だったようで、それに追加で命を燃やすブーストまでかかっているのだ。ある程度の足止めが出来ただけでも充分。

欧州水姫が合流する前に斃すことが出来れば、まだ勝ち目はある。しかし、合流してしまった場合、ここからでも厳しい戦いになるだろう。

消耗が重なり

欧州棲姫との戦いは佳境へ。ほぼ全員がその戦場に揃いつつある中、潜水艦隊が引き止め続けていた欧州水姫が、ついにその足止めを振り切ってしまったという。つまり、これ以上欧州棲姫に手間取っていたら合流されるということになる。

欧州棲姫だけでもここまで粘られているのだ。ここにさらに欧州水姫に参戦されたら、もう流石に抑え切れない。どちらか片方を施設に接近させることになる。それは施設側の敗北条件だ。

「ヨナ、貴女達は」

『止めるために追ってるヨナ！　でも、なんかすごく速い！』

「……Ｊａｗｏｈｌ（了解）．　無理せず追ってちょうだい。その速さならすぐにでもこちらに合流することになるわ」

この通信はビスマルクと伊４７だけではない。同じようにインカムを持つ施設の姉妹姫にも届いている。

欧州棲姫との戦いは既に施設側からも見えている位置だ。欧州棲姫にも苦戦している現状は、姉妹姫もしっかり理解している。

「ビスマルク、来たぞ。水姫だ」

「予想以上に速いわね……」

グラーフ・ツェッペリンの艦載機がその姿を捉えた。伊４７から報告があってすぐと言ってもいいくらいのタイミング。

欧州水姫を足止めしていた場所は、それなりに離れていたはずだ。少なくとも施設は水平線の向こうにも見えておらず、ここまで来るのにも全速力で時間はかかっている。

それなのに、欧州水姫は自分達の数倍の速さでここまで来るということになる。命を燃やしながらの行動は、低速艦が高速艦になるレベルで全てを覆すようである。

「Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｉｏｎ（迎撃）、ですか？」

そのビスマルクとグラーフ・ツェッペリンの会話に聞き耳を立てていたのはコマンダン・テストだ。場を引っ掻き回してしまったことを償うためにと、率先して前に出る。欧州棲姫に対してリシュリューが

動き続けるなら、コマンダン・テストは欧州水姫に対して動く。
「ええ、このスピードで施設に突っ込まれたら、流石に止めようがないわ。一応島の姉妹姫にも警戒は促すけど、止められるモノならこちらで止めたいの」
「ならば、私が迎え撃ちます。死を齎す者には、鉄槌を下さなくてはなりませんので」
　コマンダン・テストも、落ち着きを取り戻しているものの生への執着はより強まっている。リシュリューに慰められ、落ち着いたところに旧友であるグラーフ・ツェッペリンがここにいるため、激しい発作には至らない。
　ただし、元々の発作が死に繋がるモノを全て破壊するという若干矛盾した行動を取っていたため、それが落ち着いているとしてもやはり何処かズレていた。欧州水姫を止めるためには一切の容赦をしないという小さな矛盾。
「私も手伝おう。流石にコマンダン・テストだけでは荷が重すぎるだろう」
「Ｏｕｉ．　助かりますＧｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎ」
　２人でブレーキになるかはわからないが、出来る限りのことはしなくてはならない。必要最低限の妨害で足止めをしなくては、施設の明日は失われてしまう。
「私は！　あのお方のために事を成すのよ！」
　だが、欧州水姫にばかり構ってもいられない。欧州棲姫が現在進行形で施設を目指しているのだ。今でこそ仲間達がどうにか食い止めているが、少しでも気を抜けばそのまま抜かれてしまう。
　怪我まで治すようなブーストはかかっていないため、潮からの攻撃を喰らった場所はそのまま。特に発勁を喰らったことによる内臓の揺さぶりは確実に身を蝕み、内側からの崩壊を促しているほどである。
　それでも、意地でこの場に留まり続けていた。命を燃やし続けて、もう死んでいてもおかしくない状態なのに、忠誠心だけでより燃え上がる。

「ヒト様の幸せを壊すことで悦に浸るような奴の、何処に跪く理由があるというのよ！」
そんな欧州棲姫の意地が気に入らないのはリシュリューだ。ただでさえ存在そのものに復讐心が燃え上がるというのに、その信念までもが気に入らない。誰にも迷惑をかけずに静かに暮らしている者達の平和を破壊してまで、自分達の目的を達成しようとしているのが更に癇に障る。
その怒りの復讐心を乗せた砲撃を連射。絶対に進ませないという気持ちも含まれているその砲撃は、確実な進路妨害となる。当然直撃を狙っているのだが、それは意地でも回避される。
「私達は、ただ静かに暮らしたいだけなのに、なんでこんなことをされなくちゃいけないんですか！」
その回避先には、潮が回り込んでいた。リシュリューの容赦ない砲撃にあたることなく、当たり前のように掻い潜り、再び欧州棲姫に触れられる程の距離へ接近。
欧州棲姫も、それを二度も三度も喰らうわけにはいかないと大剣を振るった。それを喰らえば潮とてひとたまりもない。
しかし、潮はもう今までの潮ではなかった。飛行場姫からの教えを全て体現出来るところから、自分の中で別方向へと昇華。これまで見てきたこと、聞いてきたこと、したこと、されたこと、その全てが潮を成長させる要素となる。
振り回された大剣をしゃがむように回避し、同時にピンポイントで大剣の腹の部分をかち上げるように拳を叩き込む。その反動は凄まじく、欧州棲姫といえど大剣を持っていられないくらいの衝撃を受けて、大剣が破壊される前に思わず手を離してしまった。
これまでならばそうはならなかったが、限界を超えに超えているため、握力が僅かに減っていたのだ。それに気付かないくらいにまで追い込まれていたため、この一撃の重みに耐えられなかった。
「あのお方の願いは、叶えるべき願いなのよ！　正しい器を欲しているのなら、それを差し上げるのが私達の務め！　そもそも、あの器はあのお方の持ち物よ！　本来の持ち主に返すべきとは思わないかし

ら!?」
「思わないわね。一度捨てておいて、また欲しくなったからタダどころかヒト様に迷惑をかけて取り戻そうとする奴の気が知れないわ」
大剣を再展開する余裕も与えず、リシュリューが尻尾を叩きつける。これもギリギリ回避されるものの、風圧でフラついていたため、目に見えて消耗してきているのがわかる。
「まだだ！　まだ終わらせん！」
しかし、ここでついに欧州水姫がこの戦場に現れた。潜水艦隊やまだ動ける駆逐艦達の猛追を振り切って、猛スピードで突っ込んできたのだ。
勿論それは見越している。それを止めるのがコマンダン・テストの使命。
「Ｇｒａｆ　Ｚｅｐｐｅｌｉｎ、私が先行いたします。援護、よろしくお願いいたします」
「ああ、任せてくれ。こうやって君と組んで戦うなんて、思ってもみなかったぞ」
「私もです。では」
欧州水姫の突撃に合わせ、コマンダン・テストも突撃。その尻尾をのたうたせ、グラーフ・ツェッペリンの艦載機と併せて迎撃態勢に入る。
「退け！　私はここで成さねばならぬことがあるのだ！」
「退きません。私はここを守らねばなりませんので」
死を振りまく者に対して、怒りや悲しみが渦巻く中、コマンダン・テストは今まで以上に冷静だった。
それは当然、自分の後ろにグラーフ・ツェッペリンがいてくれるから。リシュリューと同様に、旧友が背中を守ってくれているという頼もしさが、理性を失うような激しい発作を抑え込んでくれている。
それ故に、敵の動きがよく見えていた。欧州水姫の猛烈な突撃も、その隅々まで見ることが出来た。
「私達の居場所を、壊させるわけには、行きませんから！」
まずは砲撃から。牽制のためとはいえ、とんでもない精度の一撃が

欧州水姫を襲う。
だが、コマンダン・テストは戦艦ではなく水上機母艦。その火力は幾分か落ちる。そのため、欧州水姫は左腕の艤装で軽々と弾き飛ばす。
「退かぬならば、ここで死ぬがいい！」
「死にません。私には、仲間達がいますから」
それでも勢いが止まらない欧州水姫だったが、コマンダン・テストを振り払うために動こうとした瞬間に、グラーフ・ツェッペリンの目が輝いた。今だと言わんばかりに艦載機に号令をかける。
「Ｂｏｍｂｅｎａｎｇｒｉｆｆｅ（急降下爆撃）、行けぇ！」
空母棲姫が繰り出すそれとは練度が違う、本家本元の急降下爆撃。それは、猛スピードで動く欧州水姫に襲い掛かる。渾身のとっておき。
速度も精度もまるで違う虎の子は、今までの拘束――欧州棲姫の艦載機との制空権争い――から解放されたことで、より勢いを増していた。欧州水姫の間近にまで急降下を繰り出した挙句、本当にギリギリのところで爆撃を決めて急上昇していくほど。
「ぬおっ!?」
「我がＳｔｕｋａの本気だ。だが貴様には牽制にしかならないだろうな」
その爆撃を受けても、欧州水姫は止まらない。左腕のみならず、右腕の主砲を犠牲にしてまでその爆撃をなんとか打ち払っていた。当然爆発はモロに喰らっているのだが、強固な艤装を犠牲にしただけで本体は殆ど傷を負っていない。
これでも今までの足止めで相当消耗させられており、それを振り切るために余計に振り絞っているため、欧州棲姫と同様に自覚出来ないくらいに追い込まれていた。
「故に、我々は力を合わせるのだ」
その爆撃の爆炎の向こう側から、コマンダン・テストの尻尾が襲い掛かる。その先端は、強靭な顎を持つ怪物の頭部。噛み付けばひとたまりもないだろうし、そうでなくても頭部甲板が直撃すれば軽傷では

すまない。
そして、今の欧州水姫には、身を守るための両腕の艤装は失われているのだ。これを止める術は、何処にもない。
今までの行動が全て積み重なって、欧州水姫はここまで追い込まれていた。命を燃やさざるを得ない状況にまで持っていかれ、そこからさらに追い込まれ、なんとか振り切って目的の場所を見つけたとしても、最後の壁としてコマンダン・テストが立ちはだかる。
生への執着による暴走が無くなれば、それはただ、強力な戦闘能力を持つ深海棲艦の姫である。それ以上の力を持っている欧州水姫であっても、限界ギリギリの状態で抑え込める道理はない。
「Ｊｅ（申し）ｓｕｉｓ（訳ざい）ｄ▪ｓｏｌ▪（ません）・　私達は、生きねばならないのです。貴女達の言う器……姉姫と共に。だから、貴女達には渡せません」
その頭部は、欧州水姫の胴体を完璧に捉えていた。
それを見た欧州棲姫の方は、もう欧州水姫には頼れないと歯痒そうに歯軋りをし、自分だけでもこの場を切り抜けようと画策する。
しかし、消耗だけで言えば欧州棲姫は欧州水姫以上だ。つい先程ですらフラついたくらいなのだから、もう耐えられないところまで来ている。
「貴女も、終わりなさい！」
リシュリューの尻尾が欧州棲姫を薙ぎ倒そうと襲い掛かる。そのサイズからして、出来そうなのは跳び越えることくらい。当たり前だが、潮は既に回避済み。
欧州棲姫も回避しようと力を入れたが、ここで本当の限界が見えた。水上バイク状の艤装に、ヒビが入った。今までの酷使の代償、そして、欧州棲姫自身の限界がカタチとなった瞬間である。
もう避けられない。ならば、受け止めるしかない。しかし、この質量兵器を止める術など、欧州棲姫には用意されていない。
「……諦めて、なるものですか……！」

その言葉と同時に、欧州棲姫はリシュリューの尻尾によって薙ぎ払われ、誰が見ても致命傷とわかるほどに吹き飛ばされた。

主の力

正気を取り戻したリシュリューとコマンダン・テストの参戦、そして、命を燃やし続けた代償による消耗。それが綺麗に重なったことにより、2人の欧州姫は、リシュリューとコマンダン・テストによって致命的な一撃を受けることとなった。

「……まだ侮らないわよ。ギリギリでも何をしてくるのかわからないのが貴女達だもの。完膚なきまでに勝ちに持っていかせてもらうわ」

致命傷を与えたとしても、リシュリューは冷静だった。欧州棲姫がギリギリのところで口走った言葉が耳に入ったからである。

『……諦めて、なるものですか……!』

この期に及んでまだ諦めていない。もう誰が見ても敗北を喫したと感じられるくらいに攻撃が入ったはずなのに、まだ終わっていないと感じさせるくらいの意地を見た。故に、追い討ちにも躊躇が無い。

故に、打ち払った欧州棲姫に向けてさらに主砲を向けた。当然ながら、その射線上に施設なんてない。むしろ吹き飛ばした先は、島から離れさせる方向だ。それによって余計に躊躇は無くなる。

「終わりよ!」

そして、容赦なく砲撃を放った。

また、グラーフ・ツェッペリンにより繰り出された急降下爆撃の爆炎に紛れたコマンダン・テストの一撃は、欧州水姫の胴体を確実に捉えていた。抉るように食い込んだそれは、欧州水姫に致命的なダメージを与える。

「ぬぁあっ!?」

それを無理矢理弾こうとしたが、もう両腕の艤装は破壊されている。それがあるかのように艤装を殴ったとしても、流石にびくともしなかった。故に、欧州水姫も欧州棲姫と同じように吹き飛ばされる。

「……これで終わってください」

生への執着の発作が激しくなるが、理性を失うことはない。しか

し、ここで自らの手で欧州水姫に死を与えたようなものであるため、顔色が悪くなっていた。
　コマンダン・テストにとっては、最もやってはいけないこと。理性を失っていたから躊躇なく破壊行為を行なっていたが、今は理性が戻っている状態。自分のやっていたことをハッキリと理解している。故に、別方面での発作となっていた。
「終わらん、ここではまだ、終わらん！」
　しかし、欧州水姫にも意地がある。自らが死にかけであっても、その目的を達成するために、最後の命を燃やす。これをやったら本当に死ぬとわかっていても、欧州水姫は一切止まることは無かった。
　同じ目的を持つ仲間に思いを託すため、欧州水姫は今出来る全身全霊を懸けて砲撃を放った。それの狙いはコマンダン・テストではない。少し遠目に見える、欧州棲姫を狙うリシュリューだった。
「なっ……!?」
　砲撃を放つ直前に欧州水姫からの渾身の一撃が飛んできたことで、即座に回避を選択。リシュリューから放たれた砲撃はあらぬ方向に飛んでしまい、欧州棲姫に直撃することは無かった。
　それと同時に欧州水姫の主砲も爆発。この一発が最後の一発だった。
「行けぇ！」
「貴女の思い、受け取ったわ……！」
　欧州水姫の声が聞こえ、欧州棲姫も最後の命を燃やす。あとほんの少しだけ進めればいい。それだけのために、もう殆ど燃え尽きている命を輝かせる。
　これが正しいことに使われているのなら、誰もが応援するだろう。しかし、やろうとしているのは器の侵蝕。誰にも迷惑をかけず、ただのんびりと暮らしている者達の平和を脅かすだけの、一から十まで悪意の塊。これが許されるわけがない。
「何いい感じの雰囲気出しとんねん侵略者！　ここで素直に終わっとけや！」
「あそこまでの瀕死なのに、何であんなに速いの!?」

すかさず黒潮と瑞鳳が追い討ちをかけるのだが、欧州棲姫のスピードは瀕死とは思えない程だった。砲撃は避けられ、艦載機でもすぐには追いつけない。
「ウシオ！」
「い、行きます！」
リシュリューに言われ、すぐに駆け出す。当然ながら、潮はここまでの戦いを続けていても一切疲れを見せていない。それもあってか、まともに対応出来そうなのは、潮と空母棲姫くらいだろう。宗谷は流石に追いつくこともままならない。
「往生際が、悪い！」
空母棲姫の艦載機が猛スピードで追うが、走り出しのタイミングの分、欧州棲姫の方が僅かに速く、そのせいで潮もその差が縮まらなかった。
何処からその力が出るのだと驚嘆してしまうものの、そんな暇はない。命が続く最後の最後まで黒幕に尽くし、器を手に入れるために死すらも恐れない欧州棲姫は、潮でなくても恐怖を感じてしまうほどである。
「くっ、仕方ない。もうこれしかないわね」
必死に追うが、火事場の馬鹿力を出されているせいで、ビスマルクですら追いつくことがギリギリ出来なそうであるため、本当の最後の手段に出る。
「姉姫！　自分の身は自分で守ってちょうだい！　欧州棲姫がそちらに向かってる！」
ここまで苦戦してしまったからこそ、一番控えたかった手段に出るしかなかった。それは、中間棲姫自身に戦力になってもらうことである。
戦いたくないからここにいる中間棲姫に戦わせるだなんて、誰もが心苦しいこと。しかし、この施設の中で最も力を持っていることも確かである。それこそ、中間棲姫を守るために力をつけた飛行場姫をも超える力を。
今回の敵は島に近付かせることすら許してはいけない。つまり、拳

で戦う飛行場姫では中間棲姫を守りきれない可能性が高い。海上に出られる潮だからこそ近接戦闘が成立したのであって、島に乗り上げられたらおしまいと考えるべき。
「そんなことさせない！　される前に私が、私が器を取り戻して、あのお方に……！」
　このまま猛スピードで突っ込み、一切のブレーキを踏まずに中間棲姫に直撃。そして、未だ体内に保持し続けた特製の端末を吐きかければ目的達成。それは急速に中間棲姫を侵蝕し、黒幕と同一の存在にしてしまう。
　しかし、欧州棲姫は見誤っていた。中間棲姫の力を。覚悟を決めた施設の主の力は、黒幕の下僕では打ち崩せないことを。
「ごめんなさい。本当にごめんなさい。こうしなければみんなが不幸になってしまうの。でも、決めたのは私だもの。これを最初で最後の罪として、一生背負って生きていくわ。でも、これだけは言い訳させてほしい」
　中間棲姫は艤装を自分の背後に展開し直し、宙を舞う3枚の甲板をまるで砲塔のように組み合わせて欧州棲姫に向けていた。
「これは、殺すための攻撃じゃない。弾なんて撃つことが出来ないもの。だから、空気を撃ち出すのよ。それで貴女の中の悪いものが全部抜け落ちてくれればいいのだけれど」
　そして、爆音と共に放たれた。
　中間棲姫が自分で言った通り、放たれたのは空気砲。弾というモノは存在せず、圧縮された空気が弾丸となって欧州棲姫に襲い掛かるのみ。
　だが実態は、弾が無いためにその攻撃が一切見えず、しかし圧縮が凄まじいために弾丸よりも威力があり、さらにはその空気は通常の砲撃の大きさとは違う、生半可なモノでは無い一撃となっていた。
「っ……」
　見えない攻撃は避けようが無い。だが、向かってきているのは確実。欧州棲姫は残された力を振り絞ってそれを回避するためにその場から横に跳んだ。これが避けられれば、もう勝ちは目前。目的は達

成され、黒幕の望む未来が得られる。
だが、それだけでは足りなかったことを、すぐに身を以て知ることとなる。避けたはずなのに、掠るのではなく直撃した感触。
消耗した欧州棲姫の残った力では、それを避けられるだけの移動が出来ていなかったのだ。さらに言えば、艦娘や深海棲艦でやれる砲撃とは比べ物にならないサイズの攻撃だったというのもある。
「そんな、こんな終わり……あのお方に……っ」
空気砲が身体に触れた瞬間、圧縮された空気が解き放たれる。それはもう、身体の中心で竜巻が起きたようなもの。爆発よりは優しく、しかしダメージはそれ以上に甚大。身体は傷付けず、衝撃で体内が激しく揺さぶられる。
「っあ、おぼっ!?」
潮に殴られたそれとは比較にならない程の衝撃に、ついに耐えられなくなった欧州棲姫は、体内に隠していた特製の端末を吐き出してしまった。そして、それもこの空気砲の破裂によって、その場で霧散していった。一片残らず、欧州棲姫の企ては全てが失われたのである。
それだけでは終わらない。解き放たれた空気砲は欧州棲姫を舞い上がらせ、艤装も何もかもを粉々に打ち砕いていく。しかし本体だけは無傷のまま。
中間棲姫の思いがこもったその攻撃は、武力だけを全て破壊する力が含まれているようなもの。この施設の周囲に散らばっている、敵対する者を退ける力を集約したようなモノ。欧州棲姫に直接作用し、施設に仇成す要素だけを内側から消し飛ばしているのだ。
「っあ、あぁあぁあっ!?」
艤装はおろか、命を燃やすブーストも失った欧州棲姫は、もう戦える力なんて残っていない。さらには、ブーストのせいで消耗され続けた命は取り戻すことも出来ない。
全てが失われた欧州棲姫は、そのまま海面に叩きつけられ、もうその灯火が消えるのを待つしか無かった。
「……残念……最後は……器自体にやられる……なんて……」
チラリと欧州水姫の方に目を向ける。あちらももう力尽きており、

動けなくなっていた。最後の砲撃で力を使い果たしてしまったのだろう。ブーストで燃やし尽くされた命は取り返せない。
あちらにも特製の端末は仕込まれていた。どちらかが施設に近付き、中間棲姫にそれを吐きかければおしまいだった。だが、欧州水姫はそれが不可能だと悟ったのだろう。欧州棲姫に全てを託して、終わってしまった。
「そう……あの子も……負けたのね……」
全ての侵蝕が失われても、欧州棲姫は黒幕に心の底から忠誠を誓ったまま。命の灯火が失われそうなこの瞬間でも、命乞いすらせず、目的を達成出来なかったことを悔やむ。
「……申し訳……ございません……。これで……おさらばでございます……」
黒幕の泥によって食い潰されたことにより、命が消えると同時に肉体そのものが塵となって消えていく。これが侵蝕されていなければ、何かしらの遺物が残っていただろう。しかし、黒幕は自身の痕跡を残すことを極端に嫌う性質があるため、亡骸すらも消し飛ばす。
亡骸も残らず、いなかったことにされる。それがあまりにも悲惨で、可哀想だった。
欧州水姫も同じように、指先から塵となっていた。こちらは中間棲姫の一撃を喰らっていないので侵蝕は残ったままだが、最期は跡を残さずに消滅していく。
「はっ、ははは……いい戦いだった……目的を達することが出来なかったことは悔やまれるが……楽しませてもらったぞ……」
黒幕に届くわけがないのだが、空に手を伸ばす。しかし、そこから塵となって消えていき、最後はその存在そのものが霧散した。
体内に残されていた特製の端末も、その時には一緒に消え去っていた。欧州水姫に強く根付いていたのか、結果的には周囲に何も被害を出すことも出来ず、一矢報いることにもならなかった。

施設の防衛はこれにて終了。全員がボロボロになりつつも、何とか

黒幕の思い通りになることだけは避けることが出来た。

心に刺さる棘

防衛戦は、施設側の勝利で幕を下ろした。ギリギリまで命を燃やし続けた欧州棲姫が施設に接近したが、中間棲姫による迎撃で一撃の下に敗北。中間棲姫は戦いを止めるために放った武力を吹き飛ばす最も優しい攻撃だったが、黒幕の祝福により命が食い潰されていたため、解放されることもなく、亡骸すら残らなかった。

「……私が……トドメを刺してしまったのね」

艤装を元の位置に戻して、施設を復旧させる中間棲姫。時間としてはそこまで長い時間では無かったため、食材がダメになるとかそういうことは無いだろう。しかし、その顔は浮かない。欧州棲姫の最期は、自分が引き起こしてしまったと思い込んでいるからである。

実際はそうではない。中間棲姫が何もしなくても、欧州棲姫はあそこで息絶えていた。それだけギリギリの状態だったのだ。しかし、それを待っていたら間違いなく島に上陸されており、中間棲姫は侵蝕されていた。それは施設側の敗北であり、全体的に考えても完全に勝ち目が無くなる。

この中間棲姫の決意と行動は、褒められこそすれ、悲しむことではない。施設の仲間達も、貶すことは絶対に無い。

「お姉、今のは仕方ないわ。むしろ、あれだけされても殺す気なんて微塵も無かったわよね。だったら、それはアイツが自滅したの。お姉のせいじゃない」

「そう……かもしれないけれど」

「かもしれないじゃない。そうなの」

飛行場姫が少々強い言葉で中間棲姫を慰めた。それくらい言わないと、姉は勝手に落ち込んでいく。

ただでさえ、黒幕が引き起こした事件を自分のせいだと思ってしまうくらいに優しい性格をしているのだ。今の自分の攻撃が欧州棲姫の死の直接的な原因で無かったとしても、黒幕に関わっている者の死というだけで自分が悪いと考えてしまう。

中間棲姫の悪い癖であり、どうしても治せない癖でもある。それが

全面的に悪いことではない。それだけ心優しい存在であることを証明しているのだ。しかし、それで常に落ち込んでしまうのはいいことではない。
「今は、島の外で戦ってくれたみんなを出迎えましょ。施設を守ることが出来たんだもの。そんな辛そうな顔をしていたら、みんながいい思いが出来ないわよ」
「……そう、そうよね。施設を守ることが出来たんだもの。喜ばなくちゃ……いけないのよね」
どうしても喜ぶという感情は湧かなそうなので、飛行場姫は小さく溜息を吐きつつも、姉の背中をパンと叩く。
「シャンとしてよね。アタシ達はね、お姉のおかげで救われてるんだから。今までも、今も、勿論これからもね」
スッキリしない勝利ではあるが、勝ちは勝ちだ。施設は救われ、現状の脅威は失われた。

海上では、出撃していた全員が集まっていた。最も遠くにおり、かつ怪我を負ったり消耗が激しかったりする松竹姉妹やジェーナス達もようやく施設近海にまで戻ってこれた。
「終わったみたいね……」
「ああ、一安心だぜ。これで松姉ぇがこれ以上傷付くこたぁないんだろ」
「竹もね。お互い、ボロボロね」
この中でも特に怪我が深刻なのは松竹姉妹だろう。松は脚が、竹は腕を抉られており、かたや骨にヒビが入り、かたや半身に火傷と大惨事。完治するにも時間がかかるくらいの大怪我。
それでも生きているし、これ以上戦うこともない。それを喜び、互いの艤装の上で抱き合って、生きていることを実感した。痛みがあるということは、死に近付いていないということに他ならない。生きていれば傷くらいそのうち治る。
楽天的と言われればそうかもしれないが、この姉妹にとって、最も

大切なのは姉妹の無事。痛みくらいそれで乗り越えられる。
「いやぁ、今回は大変だったねぇ」
「お疲れ様でした」
飄々としているように見える北上も、欧州水姫との戦いで随分と消耗しており、今は大井に航行を手伝ってもらっているレベル。
やはり、欧州水姫の右腕をロックしている時に主砲を乱射されたことが効いてきた。致命的なダメージは無くとも、積もり積もって体力をゴッソリ持っていかれている。大井もそれを察して戦いが終わったとなった瞬間に肩を貸したほど。
「え、潮ここまで来てる⁉　ちょっと大丈夫なの⁉」
これまた消耗が激しい曙だったが、施設で待っているであろう潮が戦場に立っている事に気付き、疲れを忘れてしまったかのように駆け出す。同時に漣と朧も潮を心配して駆け出した。
その潮は一切の消耗を見せていない。スタミナに関しては誰よりもあるため、逆に少しでも消耗らしい仕草を見せていたら心配してしまうほどである。実際は、消耗ではなく恐怖の兆候。
「う、うん……大丈夫……。でも、今更だけど、手が、震えてきちゃった……」
今までは施設を失う恐怖が優っていたため、欧州棲姫ともまともに戦えていたのだが、その恐怖が失われた今、最も恐怖を感じるのは戦っていた自分への恐怖。
自ら進んでやったことなので発狂する程の恐怖では無いにしても、恐怖自体は払拭出来るようなものではないため、その場でへたり込むくらいに震えてしまっていた。
そんな姿を見たため、曙が慌てて駆け寄るが、それよりも先に潮の側に潜水艦姉妹が浮上してきた。
「潮、大丈夫」
「もう怖くない」
いきなり現れた姉妹に曙は腰を抜かしそうになるものの、流石にそんな醜態は見せられないと踏ん張った。漣はそういう仕草を見逃していないが。

潜水艦隊も海中から追いついたようで、姉妹の次には巨大な伊４７の艤装がゆっくりと浮上してくる。ミシェルはそこに便乗しており、浮上したところでジェーナスを探し、見つけた瞬間に駆け寄った。
「ジェーナスちゃん、大丈夫ぴょん!?　痛いところ無いぴょん？」
「Ｍｉｃｈｅｌｌｅ，　大丈夫よ。すごく疲れちゃってるけど、私はまだマシな方だから」
「よかったぴょん！」
流石に抱き着くのは憚られたようだが、ジェーナスが手をバッと開いたため、飛び込むように抱き着いた。やはり個別に動いて戦場を駆け回るのは寂しかったようで、ミシェルに戦闘はあまりよろしくないと感じる。
だが、もうこんな戦いは起こり得ない。ミシェルにとっては、これが最後の戦闘となるだろう。ここからは施設で平和に暮らせる。
「怪我人はかなり多いですね。こういうこともあろうかと、クルーザーに応急処置のための道具は多めに積み込んであります。深海棲艦の方々は回復が早いとのことなので、確実な処置をしておけば大丈夫でしょう」
ここからは宗谷が取り仕切った。最も体力を失っておらず、この中では医療に関しても理解があるため、怪我人をまとめて処置していくようである。
少なくとも全員激しく消耗しているが、明確に怪我をしているのは半数にも満たない。松竹姉妹が特に酷く、次点が脇腹から血を流しているリシュリュー。この３人に関しては、すぐにでも処置をしておかなければならないだろう。
「大丈夫よＣｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｔｅｓｔｅ、Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕはこの程度では死なないわ」
心配そうに付き従うコマンダン・テストに、リシュリューが痛みを堪えながらも笑みを向けた。この怪我は死には至らない。安静にしていれば完治にまで時間はかからない。そう教えるように。
「姉姫も心配しているでしょう。早く戻って、安心させてあげましょ」
そして、ビスマルクの号令で全員がゾロゾロと島へと戻っていく。

誰もが疲労しているため、早く休みたいという気持ちが強かったようだ。
だが、1人だけ、空母棲姫だけはその場から少し動かなかった。その視線の先には何もない。いや、先程まではあった。
「……一つ、間違えれば、私も、ああなっていたのだろうか」
欧州棲姫や欧州水姫の死に様は、亡骸すら残らず、この世界から存在が消えるような終わり方。初めて同胞（はらから）が死ぬところを見る空母棲姫だが、これが普通とは違うことを直感的に理解していた。
全ては黒幕のせい。自分に繋がることは全て消し去る主義がここにも影響を与えていた。全ての武力を吹き飛ばされても、命の使い方がまずかったか、黒幕の思惑通りに痕跡すら残さなかった。最後まで忠誠を誓っていたとも考えられる。
空母棲姫の言う通り、一つボタンを掛け違えていたら、空母棲姫がこうなっていた。龍驤がどちらかの身体を器と決めて、空母棲姫を黒幕の下に送っていた場合、忠誠を誓うかはわからないが、こうなっていた可能性が無いとは言えない。
この死に方は誰から見ても悲惨だ。そこにいなかったものとして扱われるのは、今まで生きてきたことを否定されているようなもの。弔うことも出来ない。
「気にしちゃダメよ。貴女は解放されたんだもの」
それを宥めるように戦艦棲姫が寄り添う。これからの旅の仲間として、メンタルケアは自分の仕事だと考えて。
これから生きていくのに、このようなことが起きることはもう無い。ここからは楽しく生きていけるはずなのだが、最初にここまでのモノが心に刺さってしまうと、開き直ることは難しいだろう。人生経験が豊富な戦艦棲姫でも、この終わりは刺さるモノがある。
だからこそ、これを塗り潰すくらいに楽しく生きてもらいたい。そして、戦艦棲姫はその手段を知っている。戦いから離れ、好きに世界を見て回ることで、自然と心は癒されていく。
「今は仕方ないかもしれないけれど、すぐに楽しませてあげるわ。この戦いがちゃんと終わったら、私と一緒にいろいろ見て回りましょ

う」
「……そう、だな。戦艦の話は、面白い。私も、見てみたい」
「ええ、一度行った場所なら案内も出来るもの。貴女はもっとこの世界を知りましょ。それがいいわ」
しばらくは失われた命の痕跡を見つめ続けていたが、これも乗り越えなければならないモノとして、空母棲姫は呑み込んだ。留まるよりは、前に進んだ方がいい。ここで自分が終わるわけではないのだから。

施設はそこからも大忙しである。怪我人の応急処置から始まり、中間棲姫の艤装展開による施設への影響調査。あとは本当に被害が無いかどうかを確認して、戦いが本当に終わったかどうかを確認。
これだけ激戦を繰り広げた後に、実はもう一手と言われたら洒落にならないため、まだ比較的消耗が少ない空母棲姫とグラーフ・ツェッペリンが哨戒機を飛ばしている。飛行場姫も哨戒側に回ろうとしたものの、今は姉についてやれと周りからさんざん言われたため、施設内の仕事に専念する。
やはり中間棲姫の表情は暗い。いや、笑顔ではあるのだが、空元気のようにも見える。心配させないように明るく振る舞おうとして、それが周りにすべてばれているような表情だ。
「……お姉、気にしちゃダメよ」
話しかけるが、悲しい笑顔でそうねと応えるだけ。心に突き刺さった棘は、そう簡単には取れない。
あの後、欧州棲姫のことは、どうあっても救えない者であり、何かあれば確実に中間棲姫を出し抜くために動くような存在だとみんなから聞いている。だからといって死んでいいとは思っていないが、死ななければこの施設が危ない存在ではあった。
どうすれば姉がいつもの調子を取り戻してくれるかと思案する飛行場姫だが、ふと1つ思いついた。
「……そうだ。アタシの声も届かないなら、お姉にも届かせる声が

あったわ。今なら呼べば来てくれるかも」
「……？」
「あ、でも艦娘達もいるからすぐには無理か。全部終わったら来てもらいましょ。お姉、落ち込むのは今日いっぱいにするわよ」
そう言われても中間棲姫にはわからない。気持ちが前を向いていないせいで、周りがあまり見えていない。
「妹ちゃん……来てもらうって、誰に……？」
「そんなの決まってるでしょ」
ニヤッと笑って答える飛行場姫。

『観測者』よ」

親心

施設での事後処理はひとまず終了。怪我人は手当てが済み、松竹姉妹とリシュリューは自室で安静にするということで落ち着く。艦娘も消耗が激しいため、一休みしてから鎮守府に戻ることになったのだが、その前に鎮守府への連絡となる。

その場に立つのは姉妹姫の他には大井とビスマルク。本来なら北上が話をする予定だったのだが、欧州水姫との戦いで大きく消耗していたため、まだ比較的動ける大井が代打となった。その北上は帰投の前に一旦休息ということで、北上組と共にゆっくりとしている。ビスマルクも休息が必要なはずなのだが、そこは任された仕事をするのだとプライドの高さで乗り切る。

通信先は、いつもの面々。しっかり山寺提督も含まれており、大将は堀内提督の鎮守府に滞在しているので、そこに相席するカタチで座っていた。山寺提督の画面以外には、その隣に秘書艦の姿もある。大将の場合は吹雪が決戦部隊であるため、望月が代理としてそこにいた。

山寺提督は当たり前のように『ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ』の表示。この状況でも自分のスタンスは崩さない。その画面を見て、ビスマルクが小さく溜息をついたのは誰も見逃さなかった。

『先に伝えておく。まだ決戦部隊は俺の鎮守府には到着していない』

『こちらからは出発しているから、もう少し時間はかかるだろう。準備をして全員で向かったことは伝えているからね』

『ああ、想定通りだ。そちらとこちらはそれなりに距離がある。前回の出向から考えれば、あと小一時間ほどはかかるだろう』

施設の現状を伝えるにあたり、今出向している春雨達に伝えられないのは少々残念ではあったが、到着と同時に大塚提督からこの件を聞くことになるはずなので、伝わらないことはない。

「それじゃあ、話をさせてもらうわねぇ。ついさっきまで、防衛戦をすることになったわぁ。結果は見ての通り、施設を守ることが出来たんだけれど、その時の相手は、亡骸も残らず消えてしまったわぁ」

なるべくいつものペースをそのままに、中間棲姫がつらつらと述べる。飛行場姫には、空元気で無理をしているのはわかっているものの、この施設の主として、施設に起きたことは自分の口で語ると言って聞かなかった。

例え辛い思いをしたとしても、施設の責任は自分の責任と矢面に立つ。余程のことが無い限り、飛行場姫に任せ切るということはしない。

やはり発生した防衛戦。しかも、本来出てくるであろう北上が大井に代打を頼むほどなので、余程の戦闘が行なわれたのだろうと察した。よく見れば、中間棲姫も疲れた表情をしているため、勝利までの過程は相当なものだったのだろうと推測される。

「相手はこうなる前に伝えていた通り、欧州棲姫と欧州水姫よ。どちらもとんでもない強化を受けた個体だったわ」

ビスマルクが付け加えていく。実際に戦った者からの言葉であるため、リアルな感想が語られた。欧州棲姫に関しては、一度屠っている相手であるため、そのあまりのイレギュラーさは語らずにはいられなかったようである。

何より知ってもらいたかったのが、命を燃やした強烈なパワーアップのこと。侵蝕無しで忠誠を誓っている個体であるせいで、バリアや泥刈機による端末の消失があってもお構いなしに敵対し、死すらも厭わず敵対を続ける。今回の2人がそうだったのだから、拠点に何者かがいるのならば、同じような者である可能性は非常に高い。

『命を糧にした強化か。効率はいいだろうな。褒められる行為では無いが』

『本当に褒められないわね。命を何だと思っているのかしら』

『何とも思っていないんじゃないですか？　自分以外はどうでもいいと考えていそうですね黒幕とやらは』

黒幕のやり方から考えれば、これは最高効率だろう。これまでのこと――駒として使っていた者達が侵蝕を解除されて敵対する――を考えれば、黒幕もそこに策を講じてくるのは当然のこと。

部下のことをまだ使い捨てと思っているのなら、命を燃やして強く

なるだなんて、まさに最大級の効果を発揮出来る。侵蝕が消されても結果的に死ぬのなら何も問題ない。敵の戦力を増やすくらいならば、自分の役に立って死ねと言わんばかりの非情な力である。

合理的に考える大塚提督は、これに対して効率がいいとは言う。だが、倫理的に考えればそんな力は使えない。より合理的に考えるならば、そんな使い方をするよりは長持ちするように運用する方が遥かに強いからだ。

結局のところ、山寺提督が言う通り、自分以外はどうでもいいと考えているからこんな策が思いつく。本当に勝ちたいのならば、もっとやりようがあるとまで。

「救えなかったことは悔しいわぁ……。私の中身にそういう感情を持っているのだとしても、話し合えばわかってくれるかもしれないのに……」

「話し合いで解決したら良かったけど、そんな余裕すら与えられなかったものね……」

眼前とまではいかなかったが、かなり近付いてきた欧州棲姫は、そのままの勢いで話すらすることなく中間棲姫を侵蝕しようと画策していた。故に、中間棲姫も武力を全て取り払う渾身の一撃を放ったのだ。

あそこまで命を食い潰す前に同じように出来ていたならば、もしかしたら話し合える時間が作れたかもしれないが、それは無理というもの。それに、今更である。

『決戦部隊には、その能力については話しておく。命を削る超強化のことを事前に知っておけたのは良かった。いざ戦いでそれを知っても手遅れかもしれないからな』

『拠点を守る者ならば、同じような存在である可能性は高いか。むしろ、拠点の近くであるがために、より強力な可能性すらある』

『ああ。自分のことしか考えていないという前提があるのなら、俺はそう考える。自分の周りにこそ最も強い駒を配置するとな』

今までの傾向から考えれば、自分の身を守るために力を割いていると考えるのは間違いでは無いだろう。最悪攻め込まれたとしても、そ

の最大の力を持つ部下を使って始末してしまえばいい。
今まで鎮守府が戦ってきた深海棲艦達も、その傾向はあった。強力な側近を並べ立てて自分を守るという戦い方は、むしろ深海棲艦の常套手段。
「眼鏡くん、うちの子達にも、勿論艦娘ちゃん達にも、気をつけるように言っておいてちょうだいねぇ」
『勿論だ。死なずに確実に敵を始末することが最善であり最高効率であることは間違いない。命を懸けて斃すだなんて非効率だ。死ぬくらいなら戻ってこいというのが、俺のやり方なんでね』
艦娘を兵器として見ていても、それを失うのは合理的では無いと考えるのが大塚提督だ。誰一人欠けることなく勝利せよというのが基本。これは何処の鎮守府でも言えることである。方針は違えど、堀内提督も同じ気持ち。
『ところで姉姫、少し顔色が悪くないかしら』
ここで大将が話を遮るように口を出した。画面越しでも中間棲姫の不調を感じ取った様子。
「……そう、かしらぁ……」
「アタシじゃなくてもそう見えるんだもの。それだけバレバレなのよ。お姉、今日はもう休みなさい。事情は説明しておくから」
「でも……」
「でもじゃない。お姉が倒れたらこの施設は終わりなんだから、みんなに休めと言われたら休むの。むしろ一番休まなくちゃいけないのはお姉かもしれないんだから、とっとと休む。誰かお姉連行して」
このままウダウダとしていたら休めと言っても休まなそうだからと、中間棲姫の意思とは関係無しに自室に連行することとなった。みんな疲れているのはあるのだが、こういう時は力を貸すと、さりげなく部屋の外に待機していた戦艦棲姫と空母棲姫が打ち合わせに乱入。戦艦棲姫の艤装が中間棲姫を優しく掴み上げると、のっしのっしと自室に退場させた。
「え、ちょっと、私は」
「何度も言わせないでちょうだい。お姉は一番自分の身を案じなく

ちゃいけないの。これ、施設の全員が満場一致だから。はい、行った行った」
「悪いわね姉姫。私も貴女には休んでもらいたいの。話は聞いてるから、心の前に身体も休めてちょうだいね」
「え、えええ……」
　そのまま中間棲姫は打ち合わせの場から退場。いくら中間棲姫といえど、戦艦棲姫の艤装に掴まれている状態から脱出することは出来ない。さらには、ここの中間棲姫は戦艦棲姫に攻撃してまで抜け出そうとも考えないので、なすがままに連れ去られた。

　自室に寝かされた中間棲姫は、気が気でなかった。しかし、横になったら起き上がれないくらいに消耗していることに気付いてしまい、自分でも知らない内にここまでになっていたのかと溜息を吐いた。最後の一撃は心身共に大きな負担がかかっていたらしい。
　武力を全て吹き飛ばす空気砲という、ここの中間棲姫にしか出来ないであろう一撃必殺の攻撃に、何も負荷がかからないわけが無かった。そこからさらにこの施設の維持を優先しているのだから、本体にさらなる影響があってもおかしくない。
「……無理……していたのかしら……」
　本来することのない戦闘。それが中間棲姫の身体を蝕んでいる。そこにさらに、欧州棲姫にトドメを刺したという精神的なダメージがのしかかり、余計に体調を崩している。優しすぎるが故に、戦闘という行為そのものがダメージに直結していた。
　しかし、その性格上、全てを仲間達に任せることも出来ない。自分の施設なのだから、自分が矢面に立たなくてはならないと責任を感じてしまっている。一番やられてはならないのにもかかわらずだ。
　この呟きに対して、返事をするものが突然現れた。
「君の優しさは間違ってはいないよ」
　中間棲姫の自室の入り口。そこには、いつの間にか『観測者』が立っていた。道化すらも近くに置かず、本当に一対一。

あまりにもビックリしすぎて、中間棲姫はベッドから飛び起きる。ここまで驚く中間棲姫は今までに無いため、『観測者』は少々驚きつつも苦笑した。
「え、ど、どうやってここに」
「妹姫が私を呼んだのだろう。艦娘達の目を盗んでここに来たのだがね」
こっそり施設に入ってくる『観測者』を想像して、少し笑ってしまった。
「何度でも言おうか。君の優しさは何も間違っていない。こうなってしまったのは、君のせいでは無いよ」
「……でも、彼女は結果的に私が……」
「君が撃たずとも、彼女はああなっていた。非情かもしれないが、あの力の使い方は、命を粗末にするモノだ。遅かれ早かれ、その身体を崩壊させていた」
理解は出来るが、納得は出来ない。優しいが故に、敵であろうと欧州棲姫の死は、自分のせいだと感じてしまう。黒幕がやったことも自分のせいだと考えることは無くなってきたものの、死まで見てしまうとどうしてもその感情がぶり返す。
「いいかい、姉姫。全ての方向に優しさを向けること悪いことでは無い。故に君は間違っていない。だが、今回は少々勝手が違う。どちらかを選ばなければ、どちらかが命を落とす状況だ。君にとっては辛い決断だっただろうが、私はその決断を評価するよ」
中間棲姫がいるベッドに近づき、膝をつく。
「仲間を取るか、全ての命を取るか。これはあの戦場では誰でも不可能だった。辿り着く者の力でも無理だ。無論、この私でもね。ならば、私も、辿り着く者も、君と同じ選択をしていただろう」
救われない者を救うことは不可能だ。どうしても取捨選択をしなければならない。それが酷くストレスとなってしまっても、決断は必要だった。『観測者』はそれを正しい選択と言い切った。
「落ち着けるまでは、私が傍にいよう。中立ではないかもしれないが、決断した者が落ち着くまで見守るのは……親心というものではない

だろうか」
「親……そうなのかしら」
「君を育てたのは私だからね。ただ、親というよりは、君は私と同列の同胞(はらから)と考えているがね」
クスリと笑って頭を撫でる。こんなことをされたのは、まだ空っぽの時くらい。何処か懐かしさを感じて、中間棲姫も笑みを取り戻した。

まだ本調子になることは無いだろうが、少しはこれで気が晴れるだろう。まずは本調子になるところから。

艦隊集結

施設からの報告から小一時間程度、大塚提督が予想した通りの時間で、堀内鎮守府から向かってきた決戦艦隊が到着。施設から堀内鎮守府までの距離よりも長かったため、施設組は少々疲労を見せていた。

工廠には大塚提督と秘書艦の電、また今回の出撃メンバーとなる大和を筆頭にした6人の艦娘が出迎えに来ていた。電はさておき、他の面々は既に顔を合わせているため、対面にも抵抗が無い。

「決戦部隊第一艦隊、旗艦金剛、並びに随伴艦5名、到着デース！」

「第二艦隊……旗艦山風……随伴艦5名、到着……」

「ああ、よく来てくれた。艤装を一時的に明石に預けて、今は休息を頼む。明日のメンバーも同じようにしているからな」

大塚提督に敬礼しつつ、明日の決戦に向けての最終段階に入る。基本的には万全な態勢を維持するため、確実な休息と完璧な艤装整備を提供し、１００％の力を発揮出来るように準備する。ここの明石は、そういったところは完璧だ。大塚提督が頼りにしているだけのことはある。

「施設から参りました。一応、筆頭は私でいいのかな……？」

「いいわよ。アンタが一番適任でしょう辿り着く者」

「はい、私達を率いるのは春雨姉さんで無ければダメです」

海風はともかく、叢雲すらも春雨に任せているのは、なんやかんやこのメンバーの中では春雨が最も黒幕に届く存在であるため。プライドが高い叢雲やコロラドが認めているため、施設の者としては満場一致。

「一応変装はしてきてくれているみたいだな」

「余計ないざこざは無い方がいいと思いますから」

「ああ、ここで深海棲艦だからと揉め事を起こすのは合理的ではない。その選択はこちらとも一致している」

春雨達は、以前に堀内鎮守府に向かった時のように、本来の姿を模した制服姿である。どうしても春雨細胞の影響で赤みがかっているところはあるものの、色合いはさておき遠目で見れば艦娘としか言え

ない姿である。
　春雨と海風、大鳳は義腕や義脚を隠しているために、本来の艦娘の姿とは違う部分もあるが、そこまで気になるところではない。明確におかしな場所がなければ大丈夫。
「お前達も身体を休めてくれ。部屋は用意してある」
「ありがとうございます。私達は入渠が出来ませんので、明日までは充分な休息をとった方がいいと思います」
「難儀な体質だな。ならば、修復材が含まれていない風呂も用意しておく。身体を清めることくらいはした方がいいだろう」
「ありがとうございます。助かります」
　ここまで来るのに潮風に当たりながら長い時間を進んできたのだ。どうしても汚れというのは出てきてしまうため、風呂には入っておきたいと思うのは自然の摂理。施設でもしっかり風呂に入っているのだから、そういった生活習慣は変えたくないもの。
　通常の艦娘と同じ風呂では、僅かにでも修復材が含まれているせいで酷い目に遭う可能性がある。そのため、提督が入るような普通の風呂を用意してくれるとのこと。それには深海棲艦一同は大いに喜んだ。
「決戦メンバー間での交流は好きにしてくれればいい。むしろ推奨する。明日の決戦で息が合わないだなんて起きてほしくないのでな」
「わかりました。以前の合同演習の時に話はさせてもらいましたが、最後の時間はそういうカタチで使わせてもらいます。勿論、身体は休めますね」
「そうしてくれ。……あと、来てくれた全員に話がある」
　突然神妙な表情になる大塚提督に、春雨達だけでなく、金剛や山風もその話を聞くために耳を傾ける。
「施設から連絡があった。防衛戦が実施されたとのことだ」
　ピリッと空気がヒリつくような感覚。その源は、春雨から。わかっていたこととはいえ、施設が、今の居場所が襲撃を受けたということに怒りが溢れる。
　だが、そこはどうにか抑え込んだ。今の春雨の怒りのバロメーター

は服装変化というカタチで非常にわかりやすいのだが、今はとりあえずその兆候が少しだけ見えて止まる。春雨の瞳が紅く燃えるのが確認出来たのみ。
「結果は」
「無事に防衛を完了したようだ。しかし、話している間に姉姫が体調を崩したようでな。途中で退室した」
春雨はそれですぐに察する。戦いを好まない中間棲姫が少しだけでも戦闘に参加したことで、心身共に悪影響を受けたのだと。それくらいにまで追い詰められたとも理解する。
「……勝てたのは安心しました。でも、相当やられたようですね」
静かに、しかし怒りが確実に含まれている声色で、春雨は大塚提督に聞く。その時には怒りが溢れ、案の定服装変化まで発生していた。平和を望んでいる優しい中間棲姫が何故こんな目に遭わなくてはならないのか。それを思うだけで、春雨の内側から怒りが際限なく溢れ出る。
そんな春雨の手をすぐさま海風が握った。怒りを抑えるには姉妹の温もり。これが一番手っ取り早く落ち着ける。海風では足りないかもと、白露ももう片方の手を取った。
おかげで、少ししたらすぐに元の姿に戻る。怒りが溢れた存在であることは変えられないため、時々こういう発作を起こしてしまうのは仕方ないことである。
「詳しく聞いている。知りたければ話すが」
「お願いします。それに、無事にここに到着出来たことを伝えておきたいですし」
「わかった。ならば、休める者はまず休め。春雨、それと金剛と山風、お前達は執務室に来てもらう。堀内提督に到着したことを伝えなくてはいけないからな」
勿論、施設代表を春雨だけというわけにはいかないので、海風と白露も便乗。話を聞けば聞くほど、怒りが溢れて話が出来なくなる可能性がある。すぐにでも落ち着けるようにするべき。

大塚鎮守府執務室。小一時間前に終わった打ち合わせをもう一度するということで、連絡を受けた者達はすぐに決戦部隊の集結を察する。
施設側で画面に出たのは飛行場姫のみ。いつもなら中間棲姫が出るところなのだが、姿形を見せない。
『悪いわね。お姉はまだ休んでもらってるわ』
「構わない。不調な状態で参加されても困るだけだ」
少しキツめな言い方ではあるが、大塚提督の考えていることは意外とわかりやすい。中間棲姫にちゃんと休んでもらいたいという気持ちが節々から伝わってくるため、飛行場姫はそんな言葉に対しても何も言わなかった。
「妹姫様、無事到着しました」
『良かったわ。そちらは何事も無かったようね』
画面越しの飛行場姫は、やはり何処か疲れた顔。防衛戦を終えた後からバタバタしているのが見てわかる。
飛行場姫側からも、春雨が一度怒りを溢れさせているのを察した。服装は元に戻ったものの、瞳の奥の焔がまだ残ったままだったからだ。
「話は聞きました。防衛戦があったのだとか」
『ええ、ご覧の通り勝って終わったけれど、怪我人も出てる。でも、誰も命に別状は無いから心配しないでちょうだい。お姉も体調を崩してるけど、少し休めば戻ってくるわ』
なるべく春雨を安心させるように話しておきたいのだが、事実を隠すわけにもいかないため、一度ここに参加している面々に話したことをもう一度話す。大塚提督に伝えてもらうでも良かったのだが、直接話せる機会があるのならば、施設の者の口から聞いてもらいたい。
話が進むにつれ、春雨の中の怒りは沸々と煮え滾る。その都度、海風と白露がその怒りを抑えるように手を握る。予想出来ていたこととはいえ、それを知ってしまうとどうしてと怒りに繋がる。
「わかりました。とりあえずみんな無事ではあるんですね」

『ええ。重傷の松竹とリシュリューは、処置をしてゆっくり休んでる。安静にしていれば、そこまで時間もかからずに治るでしょ。でも、一応常に確認だけはしておくわ』
「はい、そうしてください。大丈夫だと思いますが、万が一がありますので」
　今でこそ安静にしていれば問題がないという状況ではあるものの、そのダメージを与えたのが欧州姫２人なのだ。それ自体に何か仕込みがあってもおかしくはない。
　春雨の直感は問題ないと言っているものの、毎回それが正しいとは限らないのだから、万が一を考えれば常に見ておいた方がいいだろう。あらゆる装置で経過観察をするべきとも思われる。
　幸いにも、今はまだ堀内鎮守府からの増援は施設に残ってくれている。応急処置をした宗谷も勿論その場にいるのだ。的確な処置はしてくれるはず。
『こちらはアンタ達の居場所を守りきったわ。後は任せたわよ』
「はい。朗報を持ち帰ります。絶対に」
　力強く返事をする春雨。自信に満ち溢れているということではないのだが、溢れた怒りから、黒幕のやり方だけは絶対に許さないと決意に満ち溢れていた。
「すまないが、ここからはこれからの進め方について話したい。構わないか」
「あ、はい。ありがとうございました。現状把握、よく出来ました」
　春雨達には知っておきたい情報が展開されたため、ここからは最終決戦に向けての打ち合わせ。施設が守られたということで、ひとまずは心配事の１つが失われたとし、本題の方に入った。
「最後の整備はしていくが、基本的には調整で終わるだろう。防衛戦の戦果を取り入れ、拠点周りの敵の手段を割り出し、作戦を修正する。少なくとも、命を削る強化という今までに無かった戦術を見せつけられているからな」
　今までのブーストとは雲泥の差。強烈な強化によって、たった１人に数人をつけても苦戦するレベル。今回はあちらの目的が施設に向

かって器(中間棲姫)を侵蝕することだったおかげで、この程度で済んでいる可能性がある。
　これが目的が皆殺しだった場合、命を引き換えに数人がやられていたかもしれない。そう考えるとゾッとする。
　そして、その皆殺しを目的とした命を燃やすブーストが、拠点周りでは行なわれることになるだろう。黒幕の考え方からして、自分が無事ならば駒は死んでも構わないとする。そこにある命が全て失われれば、自分は生き残れるのだから、それこそ仲間達を自爆させてでも春雨達を始末しようとしてくるだろう。
『それについては気をつけてとしか言えないのが現状ね。敵は黒幕のためになら命を捧げるような狂信者。死に物狂いのモノほど恐ろしいものはないわ』
『生きたいという枷が無くなりますからねぇ。そういう輩はうもすもなく始末が一番簡単だとは思いますけど、それが強制されてるのなら、救えるものなら救いたいですよね』
　山寺提督の軽い口調が少し場を和ませるものの、内容は相当危ない。命を捨ててくる者ならば、命を奪ってでも止めるしかないという非情な選択。しかし、侵蝕によりそれを無理矢理やらされているのなら止めてやりたいというのもある。
　これは多少合理的な考えにも関わってくる。侵蝕を失わせ、正気に戻ったところで味方に加えれば、敵は減って戦力は増強と至れり尽くせりだ。今まで敵がやってきたことを、そっくりそのままこちらがやるだけ。
『そのために作られたのが、ＲＪシステムだ。そうだね、龍驤』
「せやな。ウチがここにおるのは、そういう理由もある」
　山風の髪の中からひょっこり現れた龍驤が力強く宣言する。Ｒｉｏｔ(暴)　Ｊａｍｍｅｒ(動妨害)という名称の通り、全ての暴動を妨害するのが今の龍驤の在り方。侵蝕による本来とは違う行動をさせられている者を正気に戻すためのシステムなのだから、拠点周りに配置されている者達は、龍驤によってある程度どうにかする。
　だが、心の底から忠誠を誓っているような連中だけはどうにもなら

ない。そして、それが自爆してくるようなことがあったら目も当てられない。

その時は、苦渋の決断として始末しか無いだろう。中間棲姫のような、全ての武力を吹き飛ばす力は誰も持ち合わせていないのだから。

「方針として、この龍驤によって正気に戻った者は保護し、それでもダメだった者は討伐対象とする。これでいいだろうか」

『それしかないわね。容赦なくいかなければ斃せないような敵だもの。なるべく救いたいという姉姫の気持ちは汲み取るけれど』

『お姉には納得してもらうわ。でも、結果が出るまでは伝えないことにする。まぁ……お姉のことだから察するとは思うけど』

決戦の方針も決定。後は、その時が来るのを待つのみ。

感極まる再会

無事大塚鎮守府に到着した決戦艦隊。施設の防衛戦のことについて聞いて春雨の怒りが溢れたものの、何事もなくその打ち合わせは終了。少々気が立ってしまっているものの、ここからは明日の決戦に向けて休息と整備の時間となる。

春雨達は勿論のこと、金剛達堀内鎮守府の者達も、一部を除いて初めての来訪。ここを知るのは、元々属していた古鷹と、この鎮守府を救った江風、涼風、島風、吹雪。古鷹はともかく、後者の者達は交流らしい交流もしていない。

強いて言うなら合同演習で力同士をぶつけ合うことでわかりあったものの、まともな交流はまだである。

「打ち合わせは終わりましたか？」

執務室の前、少し苛立ちを隠しきれていない春雨の前に現れたのは鹿島である。ほんのりと甘い匂いを漂わせているため、今まで何をしていたのかがすぐにわかる。

「はい、たった今。ここからは私達も休息に入ります」

「それなら、よろしければこの後、交流会も兼ねてお茶会なんてどうでしょう。合同演習ではどうしてもピリピリしていましたが、今回は心を落ち着かせる時間ですし」

「なるほど、だから甘い匂いを。お茶菓子が手作りなんですかね？」

「その通りです。私もですが、夕雲ちゃんや雷ちゃんが手伝ってくれた自信作ですよ。ここに到着する少し前に作っておいて、今仕上げたんです」

休息としてよく使われる手段であるお茶会。施設でもジェーナスが主催となって、施設の外にテーブルを持ち出してまったりする時間を満喫する。堀内鎮守府では金剛が主催することが多い。

「Ｗａｏ！　それは是非とも参加しなくてはですネー。でも、私はお茶の味には一家言ありますヨー。私の舌を唸らせることは出来ますかネー？」

少し戯けるように、この空気を――特に春雨の怒りを抑え込むよう

に、明るく振る舞う金剛。
この雰囲気に、春雨は自然と気持ちは安らぐ。堀内鎮守府でも決戦前には金剛がお茶会を開くことがあったことを思い出し、過去の思い出と仲間達と共にいる状況がうまく折り重なって、落ち着かせる要因となっていた。
海風も春雨が落ち着いていくのを感じ取ってホッとしていた。自分や白露の温もりだけでは抑えきれないところは、仲間との思い出でカバー出来る。やはり鎮守府に戻ることが出来て、仲間達と強く交流が出来たことは、春雨にとっては非常に大きい。
「私も是非参加させてください。心を落ち着けたいというのもありますし、皆さんとは世間話とかもしたいところですし」
「はい、勿論。こちらとしても、貴女達の話をもっと聞いてみたくて」
にこやかに話す鹿島。穏健派であり、本来の艦娘の心を失っていない者達であるとはいえ、一応は深海棲艦である。１００％信用出来る存在として理解していても、それは今のところ戦闘でのこと。世間話が出来るようになって、初めて全面的な信頼が得られると、鹿島は考えていた。
勿論、それは春雨達から自分達への信頼もである。大塚鎮守府の艦娘は堀内鎮守府よりは交流が極端に少ない。それこそ、まともに一緒にいたのは合同演習と前哨戦だけ。故に、艦娘も信頼に値する存在であることを伝えたい。
それが最も簡単に出来るのが、全員で楽しめるお茶会ということになる。流石に決戦艦隊の全員――大塚鎮守府の艦隊も含めて総勢２５名でやることは出来ないため、ある程度は分けてやることにはなりそうだが。
「それに、このお茶会はちょっと古鷹さんのためでもありまして」
「古鷹さんの……？」
「はい。こちらに参加する前に、提督さんとの時間を差し上げたいなと」
今は状況からして大塚提督に余裕は無かったが、決戦部隊の到着とその報告が終わったことで、一時的に時間が出来る。そこで、ようや

くこの鎮守府に戻ってくることが出来た古鷹に、提督と話をする時間をあげたいと鹿島は話す。
　大塚提督のやり方として、いくら古鷹がここに戻ってくることが出来たとしても、最優先は業務とすることはわかっていたこと。故に、辿り着いた工廠でも、声を上げることなく淡々とやるべきことをやっていた。それこそ、施設からの使者という体裁を崩すことなく。
　感情を抑えることは、この鎮守府で学んでいる。こういう時こそ、普段通りを貫く。４人分の感情を持っている古鷹には相当過酷だったとは思うが、表情すら変えなかった。
「そういうことでしたら協力します。私も古鷹さんには帰ってこれた喜びを知ってもらいたいですから。私だけでなく、海風も白露姉さんも同じことを思っていると思いますよ」
「はい、勿論。居場所に戻れる喜びは、私もまだ覚えています」
「だねぇ。あたし、鎮守府に戻れた時にわんわん泣いちゃったくらいだし。古鷹さんも今耐えてると思うなぁ」
　白露も似たような境遇だ。戻れるとは思っていなかった本来の居場所に戻れた時の４人分の感情は計り知れない。
　海風だってそうだ。感情を溢れさせてしまった時点で鎮守府には戻れないと腹を括っていたところで戻ることが出来たのだから、その喜びは相当なもの。それも、愛する春雨と共になのだから余計にである。
「そもそも、みんな古鷹さんが戻ってきたことを力いっぱい喜びたかったんですよ。でも、そんなことをしたら普段通りの業務が出来ないからって私達だけで出迎えることになって」
「あはは……それだけしっかりしている人なんですね」
「ちゃんとその時間は与えると約束はしてくれているからいいんですけどね」
　そういうところはきっちりとしているのが大塚提督である。どういう状況下であっても鎮守府運営の根幹は揺るがない。
　艦娘という兵器を使うにあたって、最高のパフォーマンスを引き出すためには、メンタルケアも重要であるとは考えていない。結果的

に、兵器と思っているからこそ人間のように扱うという若干矛盾した状態にはなっているのだが。
「では、席は用意していますのでこちらへ。前半の部は駆逐艦をメインにしています。金剛さんも参加していただいて問題ありませんからね。あ、龍驤さんはお茶とか飲めるのでしょうか」
「んー、茶はちょっと厳しいかもしれへんけど、茶菓子はありがたいわ。妖精さんの身体、甘いモンが原動力になるもんでな」
「でしたら都合がいいですね。少し多めに作ってありますので、英気を養ってください」
怒りが溢れたままでは、疲れは取れないだろう。そこを割り切るためにも、まずは一度鎮守府の艦娘達との交流会に参加して、互いに仲良くなりつつ英気を養うことになる。
これによって春雨は溢れ出す怒りを一時的にでも抑え込むことが出来るだろう。

春雨達が離れて少しして、大塚提督と電が事務処理をしている中、執務室の扉をノックする音。誰が来たかは、大塚提督のみならず電でもすぐにわかった。
「提督、古鷹です。今よろしかったでしょうか」
「ああ、こちらからも呼ぼうと思っていた。入ってくれ」
「失礼します」
鎮守府にいた時、むしろ身体に刻まれた礼儀をそのまま再現するように、執務室へと入る古鷹。その姿は、何かが混じっているわけでもなく古鷹であることを表した本来の制服姿。この時ばかりはどうにか抑え込んだか、春雨細胞の紅すら表に出てきていなかった。
色素は全て深海棲艦に染まってしまっていても、そこにいるのは正しく古鷹である。大塚提督も電も画面越しにしか見ていないため、直にこうして顔を合わせるのは初めてのこと。
「……提督、長く鎮守府を空けてしまって、申し訳ありません」
深々と頭を下げる。古鷹にはまずそちらの気持ち――申し訳なさ

が大きかった。
任務をほっぽり出して行方不明になり、さらには４人纏めて命を落とした挙句、敵対勢力に属して好き勝手していたのだ。救われた後でもしばらくは連絡を入れることも出来ず、特殊な手続きをしなければ施設から出て鎮守府に赴くこともままならない。
鎮守府のために戦う艦娘という名の兵器が、提督の管轄外で好き勝手動き回るだなんて許されるはずもない。そう考えた結果がこの第一声であった。
「頭を上げろ古鷹。俺はそんなことでお前をどうこうするような奴じゃあ無い」
小さく溜息を吐き、席から立ち上がる。ビクッと震えつつも、古鷹は言われた通りに頭を上げた。
「お前が言う言葉は、謝罪じゃないだろう。家に帰って来た者が最初に言う言葉はなんだ」
腕を組んで眼前に立つ。しかし、圧をかけているわけでもなく、ただその言葉を聞くために。
「……ただいま戻りました。古鷹……並びに、榛名、最上、鈴谷、今ここに帰投しました」
「ああ、よく戻ってきた」
帰投を労われた瞬間、古鷹の目からは４人分の涙が溢れ出た。もう絶対に戻ってこれないと思っていた本来の居場所に立っていることを実感出来たことで、抑えておかなくてはいけない感情がどうしても抑え切れなくなる。
大塚提督はそんな姿を見ても咎めることはない。今の古鷹が鎮守府所属の艦娘では無いというわけではなく、こういう時に抑え込む方がストレスになってポテンシャルを落とすと考えて。
実際はそれだけで無く、こういう時に泣くなという方が無粋であるため、古鷹にはやりたいようにやらせておく。
「よかったのですぅ！　お帰りなさい古鷹さぁん！」
そして感極まって貰い泣きした電が古鷹に抱き着いた。最古参ではあるものの、こういう時に感情が抑えられるほどデキた者ではな

い。むしろ、戦いの最中で無いのなら、これくらい表に出したところで誰も文句は言わない。
「うん、ただいま、電ちゃん。ごめんね、心配かけて」
「大丈夫なのですぅ！　戻ってきてくれたのなら、電はそれで充分なのですぅ！」
ワンワン泣く電をあやすように撫でる古鷹。その撫でられ方に、電は古鷹では無く榛名の面影を感じ取った。
今の古鷹には、本人込みで４人分の魂が含まれている。白露ほど結合が強くは無いのだが、その思いなどは引き継いでいる部分もある。今まさに、それが表に出てきているようだ。
「古鷹。以前にも話した通り、今はお前の籍は消えてしまっている。だが、この戦いが無事に終わることが出来たならば、またここに戻ってきてくれて構わない。籍は後からでも付け加えることくらい可能だ」
無論、簡単なことでは無いだろう。深海棲艦の力を保有するというのは、それだけでもその鎮守府は危険視されかねない。いくらそれが穏健派であっても、手続き自体がかなり難しいだろう。
だが、そこは大将の手腕でどうにかしてくれる。この決戦の功労者に酷なことは絶対に強いない。
「はい、是非また、ここに戻らせてください。時間がかかっても構いません。そのためにも、明日は必ず生きて戻ります。二度と死にません」
涙を拭い、決意した表情で提督に頷いた。

大塚提督はそんな古鷹を見て小さく笑みを浮かべた後、電にやりたいようにさせつつ自分の席に戻った。すると、不意に後ろを向きポケットからハンカチを取り出す。
「……今日は妙に暑いな。こんなに汗ばむとは」
そんなことを言いながら、眼鏡を外して顔を拭いているようだが、何をしているのかは丸わかりだった。

一番感極まっていたのは、実は大塚提督だったのだ。

楽しい時間を経て

古鷹が執務室で涙の再会を果たしている中、春雨達は大塚鎮守府所属の艦娘達と交流を進めた。

お茶会という場を用意してもらい、和やかな空気の中で心が安らぎ、春雨は怒りが完全に薄れている。ゆっくりと腰を据えて話をしたことがなかった雷や夕雲、長波と、戦いとは一切無関係な話で盛り上がれるのは非常に大きい。

残された時間は、一時的にでも戦いのことは忘れて、楽しい時間を過ごすべき。ずっと緊張状態で半日以上過ごすのは、それだけで十全の力が出せなくなるくらいのストレスだろう。

決戦に確実に勝利するためには、心身共に休まっていなくてはならない。不安を消し去り、心配事は解消し、仲間意識をより高める。これが最善の道。辿り着く者として、春雨もこの方針には全く異議はない。

「うわ、マジだ。すげぇ」

「普通の妖精さんとは違うんですねぇ……」

そんな中、盛り上がっているのは山風の頭から降りて茶菓子をモフモフと食べている龍驤である。長波がテーブルに張り付くように動いている様子を見て感心していた。夕雲も長波ほどではないものの、舐めるようにその姿を眺めて驚いていた。

何処の鎮守府でも妖精さんというモノは相当数確認されている。工廠にも装備にもドックにも、あらゆる場所にその技術を遺憾無く発揮してくれている最高の仲間。それが、同じように見えて全く違う存在としてここに立っている。春雨達のメンタル維持もお茶会の重要な目的ではあるが、龍驤にもそれは該当した。

堀内鎮守府ではもう仲間意識を無理にでも植え付けられたようなものだが、大塚鎮守府の艦娘達とはこういう場で交流しておかなければ当日に息を合わせることが出来ないかもしれない。やることが範囲技みたいなものなので、合わせる息も無いかもしれないが、事務的よりは仲良くなった方が戦いやすいだろう。

龍驤の後ろ暗い経緯は、大塚提督と電くらいは知っているが、他の者には伝わっていなかったりする。洗脳が解けなかったから再洗脳を施しただなんて知ったところで支障しかない。感情を抑え込めるかもわからなくなる。

そのため、大塚鎮守府の面々からしたら、龍驤は救出困難となった龍驤をどうにかして救おうとした結果、妖精さんの身体に転生させたということにされていた。堀内鎮守府の明石がよりバケモノじみた存在に見られているのだが、あながち間違いでは無いので否定のしようもない。

「まぁ、ウチもいろいろあってなぁ。こういうカッコでもみんなの力になれるようになったんはありがたいこっちゃ」

「その小さな身体だと不便なのでは？」

「不便じゃないっつったら嘘になってまうけど、これでええねん。艦娘や深海棲艦の時とはいろいろ変わっとるからな、これはこれで楽しく生きていけとるんよ。まぁウチの明石が無茶する方やさかい、その面倒を見るんは結構しんどいんやけど」

話しながらも楽しそうな龍驤に、ほっこりしていく大塚鎮守府の面々。春雨達も和解済みであるため、龍驤がこうして生きていることは納得しているし、わざわざ掘り返すこともしない。

「それにしてもホンマに美味いやんコレ。雷が作ったんか？」

「そうよ！　お休みの日に練習してて、最近はみんなが喜んでくれるくらいになったの！」

「今まで食った中でも一二を争うレベルや。食通の叢雲はどう思う？」

ここであえて叢雲に話を振る。龍驤としては因縁を持たれていてもおかしくないと思いつつも、まともに話が出来るようにしておきたいために、こういう場でもまともに話したい。

実際、堀内鎮守府から大塚鎮守府に出向するまでに、龍驤はＲＪシステムのことについて話すと同時に、軽めではあるが話をしていた。その際に叢雲は、怒りが溢れているために、それがわかるように小さな苛立ちに苛まれているような雰囲気を出していたものの、毛嫌いす

るようなことなく、龍驤と普通に会話は出来ていた。
とはいえ、その話というのが黒幕を斃すための手段についてだ。戦闘関連だからこそ、自分の意思を乗せることなく話すことが出来ていたのかもしれない。
「そうね……美味しいと思うわよ。でも、うちの薄雲のクッキーの方が美味しい」
「それ、姉妹補正かかってるでしょ。叢雲、もっと公平に審査しなよー」
「うっさい。島風はどうせ何でもかんでも美味しい美味しい言いながら食べるタイプでしょうが」
「だって美味しいもん。雷、これすっごく美味しい！　お茶にも合って最高！」
「ありがとう島風。なら、次は叢雲も唸らせなくちゃいけないわね。気合入ったわ！」
ニカッと笑いあう雷と島風。その間に挟まれた叢雲も、せいぜい頑張れと口角を上げていた。
そんな光景を見ながら、春雨は心を落ち着けることが出来ていた。明日が最後の戦いであることは忘れることなんて出来やしないが、この和やかな空気は施設にも通ずるものがある。
「春雨姉さん、笑顔が戻ってきています」
春雨の表情を見て、海風も嬉しくなっていた。海風も春雨に満面の笑みを向ける。
施設の防衛戦のことを聞いて怒りが溢れたためか、また少しそちら側に傾いていたことが悲しかった。やはり姉には笑っていてもらいたいと思うのが海風である。
故に、鹿島が開いてくれたこのお茶会は、いいタイミングだと思った。春雨自身も乗り気だったのがさらにいい方向に進んでくれた。これならきっと、またいつもの笑顔を取り戻してくれると感じて。
そして、それは現実となる。本来の居場所に戻れた時に取り戻した心からの笑顔が、決戦前でも出ていた。仲間達との交流は、確実に春雨を癒している。

「そうかな。でも、この時間がすごく楽しいから、かな」
「ですね。みんなでゆっくりとした時間を過ごすことは施設でもありましたが、こういう時間はとても癒されます」
「うん。本当に……落ち着けるなぁ」
溢れていた怒りも悲しみも鳴りを潜め、それこそ今の春雨は艦娘春雨と言えるくらいにまで落ち着いている。例え見た目は違えども、春雨は春雨なのだという証明。
こんな時間が長く続いてほしいと思いながらも、そうするためには明日の戦いを確実に終わらせなくてはならないというところに繋がる。
気が張っていたら疲れてしまう。決意は固く、しかし今は心身共に休める。明日のために。

大塚鎮守府での1日は速やかに終了。身体は完全に休まり、心も安らぎ、食事も風呂も終わらせて、後は明日を迎えるのみとなる。
堀内鎮守府や施設から出向してきた者達は、2人で1部屋を与えられていた。春雨には勿論というか、満場一致で海風と同じ部屋になる。
ベッドは2つだが、その特性上、1つのベッドの上に座る春雨と海風。もうあとは眠るだけということで、互いに寝間着姿。海風は右腕を消した状態である。春雨はバランスが取れないので今は四肢を出したまま。
「……明日で終わるんだよね」
一言目は春雨からだった。昼はお茶会などで交流を深め、心を落ち着ける時間となったが、この夜は緊張感がどうしても湧き上がってくる。
ここで眠って、朝になったら出撃。今まで散々なことをしてきた黒幕と決着をつける戦いだ。
その黒幕は、未だに全容が掴めないという謎多き存在。知っていることに対しては全て対策を取れているものの、それでもまだ実力をい

くつも隠していることだろう。艦娘に対する嫌がらせに特化している陰湿な性格から考えて、こちらの神経を逆撫でするような戦術をまだ幾つも隠し持っている可能性は高い。
「終わらせます。春雨姉さんも重荷を下ろせるはずです」
ギュッと春雨の手を取る海風。不安を取り除くように、落ち着かせるように。
しかし、その海風の手も震えていた。春雨のみならず、海風だって明日の戦いは不安でいっぱいだった。
海風は一度、大きなトラウマを刻まれている。その時は春雨のおかげでどうにかなったものの、決戦でも似たような戦術をしてくることは明白だ。黒幕は自分の手を汚さず、そこにいるものを自分の駒として扱うことはやめないだろう。
そうならないように対策していても、またああなってしまう可能性もある。海風にはそれが怖くて怖くて仕方なかった。
その震えに気付いたことで、春雨は軽く海風を引き寄せた。自分が落ち着くだけではダメだ。海風にも落ち着いてもらわなくてはならない。
「一緒にこの戦いを終わらせようね。終われば、私はこの力を捨てられる。普通の春雨に戻るんだ。そうすれば、何のしがらみも無くなるからさ」
頭を抱え込むように抱きしめて、後頭部から頭を撫でる。強めに温もりを感じられることで春雨が癒され、春雨の温もりを与えられて海風も癒される。これぞＷＩＮ―ＷＩＮの関係。
本当ならここで、飛行場姫のボディスーツ姿になってより温もりを強めるなんてこともするのだが、今やそれすらも海風のトラウマを抉る行為になってしまうため、寝間着のままで。
「春雨姉さん……勿論です。私は春雨姉さんの隣に居続けます。何があっても、どうなっても、必ず春雨姉さんと共に生きます。二度とあんな醜態は見せません。春雨姉さんの心を乱すような行為を、私がすることはありません。春雨姉さんを悲しませるようなことをする者は、私が全て殲滅します。これ以上は春雨姉さんが悲しむことはあっ

てはいけないことですから」
「うん、ありがとうね、海風」
「私は春雨姉さんに常に笑顔でいてもらいたいですから。戦っている時の凛々しい表情も素敵ですが、やっぱり落ち着いた地母神のような微笑みを見せる春雨姉さんが一番素敵だと思いますね。周りをも笑顔にする優しい雰囲気は、春雨姉さんにしか出せません。私はそれを落ち着いて感じたいですね。黒幕という心のつっかえがあるから、姉さんはまだ本当の笑顔を取り戻せていないと思います。でも、それさえ終われば、春雨姉さんは怒りも寂しさも無くなるでしょう。私はそれを、笑顔を取り戻したい。だから、全力で戦います」
　いつもよりも強めの熱弁。海風とて、春雨にはより強く正しく戦えるようにあってほしい。
「本当にありがとう海風。私、海風がいなかったらここまで来れなかったよ。何処かで絶対に壊れてた。だから、これからもずっと、私の隣にいてほしい、かな」
　その笑顔は、海風の知る一番の笑顔だった。心のつっかえがあったとしても、その笑顔を引き出すことは出来た。
　だが、これだけでは足りない。もっと、もっと、心の底からの満面の笑みを、みんなの前で見せられるようになれば、それが一番だ。
「それじゃあ……寝よっか。明日のために」
「はい。最後の休息です。春雨姉さんもゆっくり休んでください」
「海風もね。いい夢を見たいかな」
　春雨は四肢を消してベッドに横に。それを抱き枕にするように海風が抱きしめて、布団を被せる。いつもとは違う布団と枕ではあるが、互いに心を落ち着けて温もりを感じていれば、目を瞑ったらすぐに睡魔に襲われることとなった。
　なんだかんだで身体は疲れている。明日のために、万全な状態を作るために、２人はそのまま眠りについた。

　夜も更けていく。朝が来れば、もう決戦の時。誰もが明日のために

決意を固め、最後の戦いに挑む。

最終決戦

そして、朝が来る。外は雲ひとつない晴天。絶好の決戦日和。
いつもとは違う部屋での目覚めは、それだけでも少し違うものだった。幸いにも、枕が変わったら眠れないなんていう者も、決戦に対しての緊張感で目が冴えてしまったという者もいない。普段通りの生活が大塚鎮守府でも出来ている。
そもそも大塚鎮守府の艦娘達は、徹底した規則正しい生活が身についているため、定刻になればしっかり眠れる。堀内鎮守府の艦娘達も、翌日が戦いであることがわかっていれば、休息は万全。最も心配されたのは施設の者達だったのだが、そこは元々艦娘であり、鎮守府で生活していた者ばかりだ。その辺りはしっかりとしていた。
唯一例外となる叢雲は、少々興奮状態ではあったようだが、そこはどうにか寝た様子。むしろ、そんなことで寝不足にでもなろうものなら戦闘から外される可能性もあったし、何よりコロラドに何を言われるかわからない。そのため、プライドを捨てて白露や古鷹と共に寝たレベル。元々は因縁しかなかった相手でも、今は仲間意識もしっかり確立した、共に恨みを晴らす戦友。叢雲の怒りの対象では無くなっている。
「体調は万全。不調も無し。海風は？」
「勿論問題ありません」
着替えてしっかりと準備を整えた春雨と海風。義腕も義脚も不調は一切なく、むしろ今までで一番調子がいいくらいである。
いつも通りの制服に着替えて、食堂で腹拵え。ここで手を抜いたら本番で力が入らない。寝起きだから食べられないとかは無く、今までよりも少し多めの量を平らげていく。栄養を取り入れたことでより活力が増す。戦いに向かうための力が漲る。
この力が今から向かうこれまでで最も苦戦を強いられるであろう戦いを乗り越えるためのモノになるだろう。満腹で普段よりも動きが鈍るなんてことも無い。
「出撃する者達は工廠に集まれ。整備済みの艤装の最終チェックをし

ておくんだ」
　大塚提督からの指示で、一斉に動き出す。ここからは流石に緊張感が漂い始めるが、だからといって誰もそれに押し潰されるようなことはない。もう全員が、この戦いを終わらせるために前を向いている。
「深海棲艦は艤装の整備は必要ないと考えてよかったのか」
「はい、私達は体調と艤装が密接に繋がっていますので、どれだけ破壊されても再展開である程度元に戻りますし、体調が良ければそれだけで艤装も修復されます」
「便利なものだ。その力には頼らせてもらうぞ。確実に斃すためならば、手段など選んでいられない」
　本来ならば、艦娘達だけで決着をつけるべきなのだろう。だが、ここに集まった者達は皆、黒幕に因縁のある者達ばかり。ならば、力を合わせてこの戦いを終わらせたい。
　最後の準備は十数分程度で終わり、整った者から出撃するために海上へと並んでいく。今回の部隊は総勢２５名の大連合艦隊。全員が精鋭であり、確実に勝つための布陣。
　ここまでそのメンバーを決めるためにも提督達が頭を捻り、敵の戦術を知る限り覚え、対策を立てて、勝率を限りなく上げている。それに、臨機応変に立ち回れるように、指揮力も持ち合わせた者を何人も採用している。
「準備は出来たようだな。では、少々見えづらいかもしれないが、これが最後の作戦会議だ」
　電が鎮守府間の打ち合わせに使っているタブレットを持ってきて、いつものように接続。画面は小さいものの、そのカメラには並び立つ決戦艦隊を捉え、画面の向こう側の仲間達にその勇姿を見せていた。
　この時には体調を崩していた中間棲姫も快復しており、飛行場姫と共にそれを見ている。それだけではない。施設側では、仲間達全員がなるべくそれを見ようとダイニングに集結していた。
『この決着は、貴女達に託されたわ。ここから応援することしか出来ないのは申し訳ないけれど、貴女達なら勝利出来ると確信している。だから、私達の分までお願いね』

大将からの激励に、より力が入る。この中では最も立場が上である大将にここまで言わしめているのだ。やる気が出ないわけがない。

『こちらでやれることは全てやった。負ける要素は全て排除してある。それに、ここまでの努力は誰もが理解しているはずだ。その全てを発揮してほしい。だが、当たり前だが一番守ってもらいたいことは、命を粗末にしないことだ』

堀内提督からの指示に、その鎮守府所属の者達以外も強く頷く。当然、この戦いで命を捨てようなんて思ってはいない。黒幕を斃したことで得られる平和を享受するためには、命を落とすなんて以ての外。怪我だって控えたいところだ。

「我々の思いは1つだ。ここで勝利し、海の平和を取り戻すこと。それに一歩でも近付く戦いになると、俺は考えている。ならば、勝たねばなるまい。お前達にはそれだけの力がある」

大塚提督からの発破に、艦隊の気持ちは1つになる。勝たねばならない。その決意が漲る。

そして、最後。

『貴女達の帰るべき場所、戻りたい場所は、ここにあるわぁ。だから、必ず戻ってきて、元気な姿を見せてちょうだい』

中間棲姫からの願いに、誰もが気合が入った。防衛戦で心身共に消耗した施設の主が、ここに戻ってきてくれと願ったのだ。その願いを聞き入れなくてどうする。

黒幕の呪縛に囚われているのは、中間棲姫も同じ。器として勝手に捨てられ、自我が芽生えた後に取り戻そうと仲間達を虐める。平和を打ち壊してしまった黒幕の存在に、中間棲姫はずっと心を痛めていた。

これが終われば、中間棲姫は多少は解放されるはずだ。ここまでのことをされても、救えるものなら救いたいと言い出すのが中間棲姫。黒幕はこれまでで最も救われない存在であっても、元は自分と1つだった存在。自分を捨てた者だとしても、思うところはある。しかし、救うということが出来ないくらいに罪を重ね、さらには確実にそれを後悔することが無いのだから、ここで決着をつけるしかない。中

間棲姫もそれは割り切っていた。
「勿論です、姉姫様。私達は必ず、誰一人として欠けることなく戻ります」
この春雨の言葉は、上がりきった士気をさらに上げることになる。
「よし、時間だ。これが最後の戦いになるだろう。我々はお前達に託す。頼んだぞ！」
鬨の声を上がる。もう、この勢いは止まらない。これをこのままに、黒幕との戦いを終わらせたいところである。

一斉に出撃した決戦部隊。その先頭は、拠点の場所をおおよそでも知っている大塚鎮守府の艦隊。
記憶を持ったままであるため龍驤も知ってはいるのだが、そこはあえて発言していない。ＲＪシステム装備中の山風が前に出てはいるのだが、龍驤は結界突破のためのシステムを自分の中で構築している最中。元々明石に仕込まれているのだが、現場で使うための最適化は現場に来なくてはわからない部分もある。
「この辺りですね。座標はここで間違いありません」
旗艦である大和が一旦振り返る。しかし、少しだけ妙な顔をした。
「大和よ、何か問題があったか？」
「前に感じた違和感のようなものが無くなっているみたいで。最初に気付いたのは夕雲でしたね。何か感じますか？」
「……何も感じません。肌に纏わりつくような感覚が、何も無いように思えます」
それを聞いて若干不安になる一同。これがもし本当なら、この期に及んで黒幕が拠点から移動した、もしくは結界を張らずにどうにかしようとしているということになる。
だが、それをひっくり返したのは、最適化を終えた龍驤の言葉。
「いや、ここであっとる。結界の中にも入っとるで」
龍驤が虚空に手を置くように話す。まるで龍驤にはそれが見えているかのようである。

「肌で感じられなくなったのは、身体ん中から卵が無くなったからやな。むしろ、誰か何か感じ取るのはあるやろか。その方が危ないで」

以前に敏感に気付き、言われたら確かにと違和感を覚えたのは、一度侵蝕を受けた者達。つまり、体内に卵を植えつけられていた者。その卵が拠点の空気を感じ取っていたのでは無いかと龍驤は話す。

実際、拠点に近付けば近付くほど、体内の卵は身体に悪影響を与える可能性があった。それこそ、強制孵化による再洗脳だってあり得た。それを事前に対策したことによって、結界の場所を肌で感じることが出来なくなってしまった、

とはいえ、結界を知るために卵を持ったままにするだなんて危険なことは出来るわけが無い。事前にそれを知っていたとしても、後のことを考えれば除去一択である。

「ウチはその可能性も考えられとった。結界の性質からして、黒幕の細胞……卵の成分が分析出来とるから、そこから結界を消すことは可能や。中和させるんやけど、な！」

龍驤が手をバッと広げる。その瞬間、ＲＪシステムが起動し、山風を中心とした広範囲の黒幕の成分が中和されていく。誰の目にも見えない処理ではあるのだが、これは確実に効果的であり、敵対する者を弾く効果は失われる。

あれ自体、目に見えない程の粒子となった泥が気付かないうちに範囲内に入った者の思考を操作し、真っ直ぐ進ませなくするという仕組みだ。それを中和して道を作ったことで、思考操作も失わせる。

この空間内ならば、卵と同質の黒幕の細胞のみならず、侵蝕して他者をコントロールする端末も完全にシャットアウト出来る。つまり、突然の侵蝕によって仲間が敵対することは無い。Ｒｉｏｔ（暴動）Ｊａｍｍｅｒ（妨害）の本領発揮である。

当然ながら油断してはいない。あちらも今までさんざん侵蝕をしてきているのに、こちらが強引に解除し続けているのだ。そう出来ないように調整してきている可能性は非常に高い。ＲＪシステムだけでは足りないかもしれない。

そうなった時のために、龍驤は今も再計算を続けている。常に周囲

の状況を確認し、新たに見えた要素があればすぐさま分析し、演算する。ここにいる誰もが、二度と嫌な思いをしないように。
「もう行けるで。何にも惑わされずに、黒幕のところに一直線や」
「了解。流石はＲＪシステムですね。では、行きましょう。私達の鎮守府で割り出した座標まで」
ここからは再度、大和を先頭についていくカタチで突き進む。ここまで来たらもう迷わされることもない。真っ直ぐ、黒幕を殴りに行くだけだ。

しかし、妨害が無いわけではないのはわかっている。あくまでも、黒幕は自分で戦おうとしない引きこもり。駒を使って自分の手を汚さない。
拠点であろう島が見える前に、そこには防衛のために繰り出された深海棲艦の群れが待ち構えていた。
「妨害はあるでしょうね。救えるようなモノですか？」
「いや、ありゃあ救えれへん。もうウチのシステムの効果範囲内やけど、敵対心はまるで消えとらんわ。言うてイロハ級やからな……黒幕の威光に照らされて、心の底から変わってしもうたんやろ」
中にはヒト型もいるが、あくまでもイロハ級。しかし何処か違うのは、中和されずに纏わりついている泥の存在。端末とも卵とも違う、ただただ黒幕を守るために強化されていると考えられる。
あれこそが、命を吸い尽くして力を数倍に膨れ上がらせる黒幕の泥。欧州姫は長く耐えられたが、イロハ級ではそこまで保たないだろう。故に、あくまでも捨て駒。
「やり方が汚いですね。文字通り」
怒りが溢れ出してきている春雨は、早速戦闘モードと言わんばかりに服装が変わる。泥まみれのイロハ級に触れるのは危険ではあるが、普段使いの鉤爪も展開された。
だが、イロハ級はそれだけでは終わらなかった。群れの中から数体のイ級が前に出てくると、その泥が増幅し、グチャグチャと纏め上げ

ていく。複数体いたはずなのに、組み合わさっていくごとに1体の質量になっていく。魂の混成と殆ど同じ現象が目の前で引き起こされている。
それを知る龍驤や、覚えておらずともそれをされた白露達はあからさまに嫌そうな顔をした。
「ありゃあ……アカン、イ級といえども混成されたら強化されるぞ」
「ならば終わる前に始末するさ！」
龍驤の言葉に合わせて、待ってましたと言わんばかりに武蔵が砲撃を放つ。しかし、それに立ちはだかるかのように、盾持ちの戦艦がそれを守った。このイロハ級の混成はそれだけ重要ということなのだろう。
イロハ級の戦艦だというのに、大戦艦武蔵の砲撃を受けて一撃で沈まなかっただけでも相当な強化をされているのがわかる。
「硬いな。それほどまでに強化されるか」
小さく舌打ちしつつも、楽しそうに舌なめずりまでする武蔵。
しかし、次の瞬間にその表情は一転させられる。
「……何、あれ」
泥同士で結合し、混ざり合ったイ級達がさらにカタチを変えていき、最終的にはヒト型にまで昇華した。そして、その泥が内側へと吸収されると、その姿が露わになる。
一番見たくないカタチとなって。
「……白露……姉さん……!?」
その泥の塊は、白露のカタチをしていた。

泥の傀儡

ＲＪシステムにより黒幕の拠点周りに展開されている敵対する者を弾く結界を突破することに成功したのだが、そこで待ち構えていたのは拠点を守るような配置されたイロハ級の群れ。その全てに泥が注入されているようで、強化は確実。現に、盾持ちの戦艦が武蔵の砲撃を受けても一撃で沈むようなことが無かった程だ。

それだけなら良かったのだが、問題はここから。群れの中のイ級が数体前に出てくると、泥が増幅し、グチャグチャと纏め上げていく。複数体いたはずなのに、組み合わさっていくごとに1体の質量になっていく。

そしてその泥が内側に吸収された時、そこに現れたのは白露のカタチであった。

「……白露……姉さん……!?」

「な、なんで!?　あたしここにいるが!?」

一番驚いたのは白露本人である。当たり前だが、仲間の白露はみんなと共にここにいる。思わず白露の方に視線を向ける者だっていた。だが、泥から生まれた白露は、その白露と瓜二つ。しかし違うところも勿論ある。

深海棲艦由来の真っ白い肌はさらに白く、その瞳には生気のようなものがまるで感じられない。まるで死人のような見た目である。それに、服装までは再現出来るわけではなく、首から下は全て泥で出来たラバースーツのようなモノで覆われていた。それこそ、まるで傀儡だと言わんばかりに無機質。

「……もしかして、白露姉さんの情報はあちら側にあるということなんじゃ……」

「元々向こう側だったからってこと!?　じゃあアレか、あたしのＤＮＡ情報だけは控えているとかそういうことか！」

「かもしれません。それに、だとしたら……」

春雨が言う前に、イロハ級の群れが次々と泥による融合をしていく。グチャグチャと音を立てながら複数体の深海棲艦が1つに纏

まっていく姿は異様、いや、悪夢としか思えなかった。
　このまま放置していたら、同じように泥の傀儡が増えていく。そして、見た目通りならば異常な力を発揮されかねない。生まれたばかりだからか動かない泥の白露がどれほどの実力を持っているかはわからないが、一筋縄ではいかないことくらい、誰にでもわかることである。
「これは止めねばならないな！　大和！」
「ええ、ここで出し惜しみなんてしていられないわ。やりましょう、武蔵！」
　ここで武蔵が動き出す。大和と共に、この異様な光景を止めるために、全身全霊の一斉射を繰り出す。
　２人が揃うことで行なわれる一斉射。この攻撃方法が使用出来る者は限られており、いわゆる選ばれし艦娘にのみ許された必殺技である。
　その中でも、大和と武蔵が組んだ一斉射――通称『タッチ』の破壊力は、全艦娘で見てもトップクラス。イロハ級であろうが姫であろうが、何もかもを薙ぎ倒し、草一本も残さない最大級の破壊力を誇る。
　ただし全砲門から連射するというその性質上、連発出来ない上に本人への影響、疲労感なども大きいため、使いどころが難しいというのもあった。戦場のど真ん中で疲労感で動けないなんて言われても困るだけだ。
「これが、艦娘トップの火力だ！」
「全主砲、全力斉射！」
「行けぇ！」
　一切の容赦なく、武蔵と大和は並んでありったけを撃ち始めた。その耳をつんざく爆音が、強大な火力を物語っていた。それでいて狙いもしっかりつけているため、無駄弾となり得る砲撃は基本的には存在しない。
　だが、これでもどこまで止められるかわからない。少なくとも敵の戦艦が、本来ならば一撃で沈むであろう火力を真正面から受けて沈むことが無かった程なのだ。連射をして貫けたとしても、そこにさらに

盾を被せられたら、本命にぶつかることは無くなってしまう。故に、武蔵も大和も撃ち続けるしかない。
　これによって周囲のイロハ級が減れば、それはそれで戦いやすくはなる。泥から生まれてくる者達が減ればさらにいい。
　しかし、それを野放しにするようなことはあり得ない。早速最初に産み落とされた泥の白露が動き出す。
　表情一つ変えず、武蔵に視線を向けると、軽く海面を蹴る。その瞬間、見たこともないような速さで突撃開始。艤装らしい艤装も装備していないように見えるからか、あまりにも身軽。それでいて、施設を襲った2人の欧州姫のように命を燃やしたブーストも健在だろう。
　一斉射の最中にまるで違う方向から突撃をされては、簡単には対応出来ない。無防備とまではいかないが、そちらに意識をやると一斉射が疎かになる。そうなれば、あのイロハ級の融合がさらに止められなくなる。
「邪魔はさせないわよ！」
　それと同時に動いていたのは叢雲だった。いつもの槍によって、泥の白露の進路を妨害。叢雲も素早さには自信があるため、その突撃を食い止めることに成功。
　むしろ、ここでの叢雲は仲間を守るという理由以外の行動原理があった。それは、姿が白露だったからこそ身体が動いたと言ってもいい。
「こっちの白露とは違う、殺してもいい白露が来てくれてありがたいわ！　私のこの怒りと、憎しみと、恨みを、ぶつけさせてもらうわよ！」
　そう、本来の叢雲は白露や古鷹に怒りを持っている存在。仲間となった今ではしっかり和解をして共存もしているのだが、その分、怒りを抑え込んでいたと言える。
　そこに敵として出ていた泥の白露。叢雲の中で抑え込まれていたその怒りを、激しく燃え上がらせる理由となる。仲間意識が芽生えているからこその激しい怒りな部分もあるが、本人は確実に否定。
「私を殺した恨み！　絶対に許さない！　細切れにしてやるわよ！」

黒幕への怒りも完全に爆発している。抑え込む必要もない。完全に殺すつもりで槍を振るった。
だが、泥の白露はその槍を片手で軽々と受け止めると、強引に自身に引き寄せた。その膂力は、見た目とは完全に一致しないくらいに強く、このまま引っ張られたら体勢を崩す上に泥の白露の身体に飛び込むことになるだろう。
槍を引っ張るだけでこの力ならば、その拳を攻撃に転じられたら、ダメージも相当に大きい。一撃で骨の数本は持っていかれてしまう。
「させないわよ！」
叢雲は咄嗟に槍を消した。その時には、泥の白露は逆側の手を握りしめ、腹に一発入れるつもりだったため、叢雲のこの判断は大正解だった。
「すまん！」
「私はコイツの顔が気に入らないだけよ！」
軽く叢雲に詫びを入れる武蔵だが、対する叢雲は助けたつもりはないと泥の白露から視線を外さなかった。
「一斉射だけでは足りんか！」
「壁が無くならない……！」
イロハ級の融合を食い止めるために放っている一斉射だが、あちらもそれを良しとするわけがなく、融合していないイロハ級が命を捨てるように壁になっていた。
おそらく、泥に侵蝕されたことで意思そのものが消されている。黒幕のいいように使われるための哀れな人形にされ、命を散らすことにも何の抵抗もない。そもそもが侵略者気質なイロハ級ならば、それも簡単に受け入れて自分を捨て去ってしまうのだろう。
「だったら、私達も一緒に！」
「砲撃で足りないなら、空爆も入れるよ！」
ここで動き出したのが千歳と千代田だ。砲撃だけでは壁が阻むというのなら、その壁を乗り越えた先から殲滅してしまえばいい。そうなると、必要になるのは空母の力だ。
２人同時に艦載機を発艦させ、融合途中の泥の塊に向けて爆撃を仕

掛けていく。砲撃を止める壁なんて上空から飛び越え、止めることもさせずに一撃を入れればそれでいい。
しかし、イロハ級には空母もいる。制空権争いは当然のように始まるだろう。あちらは守るだけでよく、艦載機を犠牲にすることも厭わないため、突き抜けるのは至難の業。
それでも千歳と千代田は屈するわけが無かった。艦載機すらも壁に使われようが関係ない。それをすり抜けて爆撃だけを確実にぶつける。そのために、2人同時に艦載機に指示を開始。
「ごめんなさい、少しだけ無理をして！」
「隙間を縫うように！」
千歳と千代田の力が注ぎ込まれるように艦載機の動きが加速する。その時、2人の持つカラクリ人形のような艦載機の模型が、淡く発光を始めた。
空母の力を存分に発揮するため、千歳と千代田はこのカラクリ人形を介して艦載機そのものに自身の力を送り込む仕様を取り入れていた。開発者は勿論明石である。
当然そうする分消耗が激しくなるのだが、ここで惜しむ理由はない。それに、すぐには消耗しないように鍛えていた。こういう時、砲撃が通用しないのならば、方向性を変えられる空母が全力を出す。
2人の力が注がれたことで、艦載機の動きも格段に良くなった。敵艦載機が邪魔立てしようと進路を塞いでも、その一瞬の隙をつくように隙間を突き抜け、一気に引き剥がしては爆撃を仕掛ける。
時には急降下爆撃まで繰り出し、確実な妨害を実現した。結果、グチャグチャと融合していく泥の塊は、融合途中で爆撃を受け、何も生まれずに爆発四散する。そうなってしまえば、待っているのは確実な死だ。
「それでも数が多すぎるけども……！」
「いくつかは妨害出来てるけど、全部は難しいよ！」
千歳と千代田の活躍で、一部の融合は食い止めることが出来た。しかし、まだまだ数が多すぎる。拠点周りに一番力を入れているのは、やはり黒幕のその引きこもり体質のせいなのかもしれない。自分の

やることを邪魔されたくないという思いの表れか。
　こうしている間も、別に武蔵と大和や千歳と千代田だけが戦っているわけではない。壁を取り払い、融合を阻止するために、全員が一丸となって抵抗している。壁を取り払って融合を阻止することが今の一番の目的。
「コイツ……鬱陶しいわね！」
　その中でも、既に生まれてしまった泥の白露と拮抗しているのが叢雲だった。槍を振るうものの、それがどういう攻撃であっても簡単に受け止められてしまい、手痛い反撃を喰らいそうになるため、槍を消して再展開というのを繰り返している。
　とにかく動きが洗練されている。いや、むしろ本能に身を任せて危険を察知し、そのあまりある力をリミッター無しに使い続けていることで、無理矢理叢雲を圧倒していた。
　生まれたばかりであっても、命を燃やすブーストで圧倒する。そして、やることをやればそのまま力尽きる。そうしている間に新たなイロハ級がまた泥の傀儡に纏め上げ、さらに圧倒する。
　最悪な泥の軍勢が、ここで無尽蔵に生まれようとしている。これは、ＲＪシステムでも止めようが無い。
「叢雲、手伝う！」
　そこに割り込んだのは、他でもない白露だ。自分と同じ姿をした泥人形なんて、すぐにでも排除したいと思うのは当然のこと。自分で自分を殺すというのは精神的にもキツいが、やらねば最終的には敗北に繋がるだろうから、ここは冷静に確実に始末する方向。
「アンタにいられると間違いそうになるのよ！」
「気持ちはわかるけど冷静になるためにも、さぁ！」
　泥の白露から繰り出される攻撃は、こうしている間にも精度を増し、練度すらも増していく。最初は徒手空拳だけだったものが、ラバースーツのような泥が主砲を作り出して砲撃まで放ってくるようになっていた。
　叢雲は槍を回転させることでそれを弾き飛ばし、白露は冷静にそれを回避。時間が経てば経つほど強化されていくため、それに対応しな

くてはならなくなる。

「……やっぱり」

そうしている間にも、どうしても融合を阻止出来ないものが現れてしまう。そして、そこから生まれたものを見て、春雨は苛立ちを抑えきれなかった。

生まれた泥の傀儡の姿は、龍驤と大鳳。空母の力が必要であると考えたか、そこに対応するカタチでそこに現れた。

トリガー

黒幕の拠点周りに現れた泥の傀儡。最初は白露の姿を取っているモノから始まり、制空権争いが必要と考えたが、龍驤と大鳳の姿の傀儡が生まれていた。

その２人は早速、泥で出来た艤装を操り、泥で出来た艦載機を飛ばす。その力は異常とまではいかないものの相当な力を持っており、千歳と千代田に軽々と拮抗する勢い。

「厄介なのが出てきたわね……！」

「でも、簡単に負けるような鍛え方してないんだから！」

２人揃ってカラクリ人形を操る。同時に、２人の艦載機にも力が宿り、より鋭い動きを可能にした。ご丁寧に真正面から突っ込んでくる敵艦載機には、回避しながらも射撃を直撃させ、上を取ろうとドッグファイトを仕掛けてくるような敵艦載機には、より高度なテクニックでさらに上を取り爆撃を決める。

この戦いの前に必死に熟練度を上げた甲斐があり、ここでの制空権争いはかなり優位に立てている。泥で作られた即席の空母隊であれば、命を燃やすブーストがかかっていようが関係ない。こればっかりは、経験がモノを言う。

「まだ増えそうね。千代田、もう少し出しましょ」

「了解！　攻撃機発艦！」

さらに艦載機を増やして、一気に力を送り込む。艦載機を増やせば増やすほど、千歳と千代田の消耗は激しくなるのだが、そこで加減するわけにはいかない。

それを繰り出してくるのが今の仲間と同じ外見をしているとしても、敵は敵だ。特に龍驤の外見を持っている泥人形は、今でこそ仲間であるが敵であった期間が長かった上に、やっていたことが極悪であるため、割と容赦なく攻撃が出来る。

ＲＪシステムで周囲を見守っている龍驤としては複雑な気分だったのだが、そうなっても仕方ないと割り切っているため、むしろもっとやれと応援するレベル。

「手伝うわ。あちらが私を使っているんだもの。私がこちらに来ないと話にならないでしょう」
　そこに大鳳が参戦。模造品が完全に大鳳と同じ能力を持っているというのならば、艦載機を発艦させつつ、近接攻撃まで繰り出してくる。空母である千歳と千代田では、流石にそこまではカバー出来ない。
　故に大鳳が刀を抜きつつ2人の前に立つ。そのタイミングが完璧であり、ちょうど2人に向かってくるところだった。泥で生成された刀を握りしめて。
「あっぶな！　お姉、ちょっとだけ離れよう」
「大鳳さん、少しだけお任せするわね」
「ええ、私がどうにかしなくちゃいけない相手だもの。でも」
　泥の大鳳が踏み込みながら振り下ろした刀を、大鳳が払い除ける。泥の白露と同様に、その膂力は並ではないが、大鳳は関係ないと言わんばかりに片腕で。
「貴女はまだ侵蝕されていた時の私のニセモノでしょう。だったら、私より確実に弱いわ」
　使っているのは右腕、つまりは義腕。生身の時よりも鍛え上げ、より強くなったその腕で、偽物を圧倒する。とはいえ、甘くは見ていない。曲がりなりにも過去の自分と同等な力を持つ者。気を抜けば出し抜かれることは一目瞭然。片手で捌こうとしても最後は無理が出てくる。
「1人で戦うのは良くないよ。私も手伝うから！」
　そこに乱入してくるように飛び込んできたのは比叡。同じ刀を使う者同士として親近感が湧いたか、共闘を申し出た。
「私のコピーなら私が」
「じゃあそっちは任せた。ほら、もう1人いるんだから！」
　大鳳同士の睨み合いに割り込んでくるのは比叡だけではない。敵空母隊には泥の龍驤もいる。過去の力を使ってくるというのなら、徒手空拳や砲撃、雷撃までもを駆使してくるだろう。その2体相手では、どうしても大鳳が不利になる。

案の定、大鳳に向かって泥の龍驤から雷撃が放たれていた。泥の大鳳と同時に向かってきている辺り、これは狙っての行動。考えてではなく、本能で連携を始めている。
「やらせ、なぁい！」
その魚雷は、比叡が刀剣を激しい勢いで振ることによって爆砕。砲撃よりも斬撃の方が性に合っているのか、撃って破壊すればいいモノを、風圧による破壊で押し通してしまった。
「あ、相変わらず凄まじいですね」
「褒め言葉だよね、それ！」
「勿論」
自然と口角が上がる。比叡と背中合わせに戦うのが楽しくなってきていた。
「それじゃあ、確実に終わらせるよ！」
「はい。行きましょう！」
２人揃って刀を構える。これならば、相手がどれほど強大な存在でも折れることはない。そうでないのなら尚更だ。

だが、そうしている間にも融合が完了していく。最初の白露はさておき、龍驤と大鳳を作り出したのは、この融合を邪魔させないように。他の者が食い止めようとしても、それをさらに邪魔するイロハ級達のせいで融合は止まらない。
瞬殺するくらいしか止める手段がなく、そんなことが簡単に出来るものなんて片手で数える程しかいない。
「私が出てきてる……！」
ここで現れたのが古鷹。その場で作られた複製品とはいえ、一部劣化していても重巡洋艦の皮を被った戦艦である。当たり前のように尻尾の艤装を生やし、手近だったからであろう自分自身へと襲いかかった。
「前までの私なら厳しかったかもしれないけど、今なら！」
模造品が尻尾を前に構える。これは確実に砲撃の構え。対する古

鷹も同じように主砲を構えた。砲撃に砲撃を重ね合わせる作戦である。
　そんなことをしたら神経を酷使するようなもの。スタミナ不足だった頃の古鷹であれば、1回実行するだけで相当体力を持っていかれる。多用なんて以ての外。
　だが、今の古鷹はそのスタミナ不足をある程度克服している。多少の無茶をしても、突然倒れるようなことはない。仲間のために動くのならば、躊躇うことなんてどこにも無い。
　砲撃は全く同じタイミング。同じ照準。放たれた瞬間にその中間地点で衝突し、爆発を引き起こす。
「古鷹、1人で無茶したらＮｏなんだからネ」
　さらにはそこに、金剛が手助けに入った。その爆風を吹き飛ばすように砲撃を放ち、泥の古鷹を確実に消し飛ばすために全力を発揮する。
「おね、金剛さん！」
　思わず古鷹の中の榛名が出てきかけたが、そこは弁えるように言い直す。そんな古鷹の様子を見て、金剛はニッコリと笑顔を向けた。
「んふー、今はお姉さまでも全然ＯＫネ。古鷹がやりやすいように、ネ」
「あ、あはは……何かすみません。それでは……」
　尻尾から艦載機を吐き出させて周囲に飛ばしながら、泥の自分を見据える。砲撃の相討ちと金剛の砲撃を回避し、未だにピンピンしているそれは、無感情の瞳で2人を眺めていた。
「行きましょう、金剛お姉さま！」
「Ｏｋａｙ．　力を合わせてネ！」
　2人並べば、どんな敵でも脅威と感じない。それがかつての自分であったとしても。

　仲間達の奮戦によって、融合は最低限に抑え込まれているのだが、それでも完全に止めることは出来ない。

今回の敵は救うとか生かすとかは考えていないため、容赦なく噴き飛ばしていく。春雨も今回ばかりは手加減など出来ない。
「数が多すぎる……武蔵さん達の一斉射でも止まらないなんて」
「斃しても斃しても湧いて出てきますからね。幸いそこまで強くないですが、どうしても……」
海風が言う通り、斃したとしても次から次へと現れるのがイロハ級。拠点の方から向かってくる者もいれば、海中から浮上してくる者もいる。そして、ある者は壁となって自ら命を散らせ、ある者は攻撃に転じて融合の邪魔をする者達を逆に邪魔をする。
泥で強化されていても、春雨達にとってはまだ戦いやすい相手だった。何故なら、今までのように命を救うために戦っていないから。
「鹿島さん、そちらはどうですか！」
「拮抗です！　押されているわけでもありません！」
大塚鎮守府の艦隊は、一部の者を除いて、この手の敵と戦うのは初めてのこと。だが、これまで手に入れてきた情報と、ここまで辿り着くまでにこなし続けてきた訓練のおかげで、堀内鎮守府の艦娘達に匹敵するような動きを見せていた。
特に大きな影響を与えているのが、実際に戦った経験のある鹿島と雷。鹿島の指揮能力と雷の視野の広さによって、1体ずつを手早く確実に始末していく方針で進めていた。大和が武蔵と一斉射を続けているため、5人で2体3体を相手取り、的確に沈める。
「普通のより硬いくらいで、斃せない相手では無いね。長波、さっと終わらせるよ」
「ウッス！　夕雲姉もついてこいよ！」
「長波さんに言われるまでもありませんよ。これでも、鎮守府では上の方に位置させてもらっていますからね」
「みんなが仲良くて嬉しいわ！　でも、あんまり乱暴なのはダメよ。電が泣いちゃうから」
四者四様のテンションではあるが、向いている方向は同じ。無限と錯覚するほどに湧いて出る敵をこれ以上増やさせないように、全力で処理に取り組むのみ。

しかし、またもやイロハ級の融合により、敵の強力な戦力が増える。しかも、その姿は春雨の怒りをさらに掻き立てる。
「……本当に、嫌がらせばかり……」
ボソリと呟くのも無理は無かった。現れたのは3体。白露ではなく、白露に混ぜ込まれた者。時雨、村雨、夕立。勿論、本人とは別物だし、同じ顔の別人ですら無い。泥で作られた模造品。艦娘とも深海棲艦とも言えない存在だ。
ここまでの3人は、魂を混成されたことにより人類に敵対させられた者達の模造品だった。その本人がここにいることを確認してそうしたのならば、余計にタチが悪い。
しかし、次に現れたのは、よりによって魂の混成で混ぜ込まれた側である。数を増やすためなのかもしれないが、あえて白露を複数体出すのではなく、その中に入っているモノを出してきたのは、黒幕が直感的に春雨の癇に障る手段を選び取ったとしか思えない。
「外側だけじゃなくて、内側も人形にすることが出来るんだね。本当に本当に……タチが悪い」
これには春雨も怒り心頭。ゴウとその瞳から紅い焔が舞い散ると、その能力にトリガーが引かれる。最善の答えに辿り着く力から、望み通りの答えに辿り着く力へスイッチ。
「海風、私が1体止める。確実に始末して」
「わかりました」
視界に入った姉の泥人形、その一番手近にいた泥の夕立を睨み付ける。以前は泥が微生物の群衆であるために止めることが出来なかったが、こちらはあくまでも融合したのが数体だったおかげで、その力が効いた。
周囲に黒幕の泥が目に見えないカタチで散布されているため邪魔をされるかと思っていたが、そこはＲＪシステムがしっかり効いており、この戦場の邪魔をしそうな泥は取り除かれている。
「止めた。行って」
「了解」
どれだけ力を持っていても、動けなくしてしまえば斃すのは簡単。

守りも何もあったものではないため、一撃で死を与えることができる。
淡々と、泥で作られた姉を始末する。精神的にはかなり辛い。一度死んだ姉を、自分の手でもう一度海に返すだなんて、泥人形であっても気分がいいものではない。
「イライラする。まるでこちらの嫌がることがわかってるみたいで」
「ですね……。なんで姉さんを手にかけなくちゃいけないんでしょう」
春雨のみならず、海風も苛立ちを隠さなくなってくる。これ自体がモニタリングされているのではという考えが生まれ始める。

泥人形との戦いは苛烈極まるものに。しかし、春雨は何か違和感を覚え始めていた。

その目は何処に

泥人形との戦いは続く。どうしても撃ち漏らしが出てくるところで融合が完了し、次々と泥人形が増えてきていた。当然ながら容赦なく、仲間の顔をしていようが躊躇なく、確実に始末をしている。

それはもう、艦娘でも深海棲艦でも無い、救うことすら出来ないただの泥。黒幕に生き方を滅茶苦茶にされ、意思すら奪われた、ただ生きているだけの使い勝手のいい駒。救えたとしても、泥の効果で命は失われる。

「ヒト様の姉の姿を用意するのは、流石に悪趣味としか思えない、ね！」

泥の夕立を海風に討たせた後は、視線を泥の村雨に向け、今度は自分の手で始末する。せめて苦しませないようにという思いからか、心臓を一撃。

動き回られるのなら苦戦するかもしれないが、今の春雨は姉の姿を使われたことによって怒り心頭状態。その力が望む通りの答えに辿り着く力へとスイッチしているため、敵に『動くな』という望みをぶつけることでその動きを止めている。

「あとは、時雨姉さん！」

「春雨姉さん、私がやります」

「任せるよ！」

すぐさま視線を泥の時雨の方へと向ける。これまで海風に対して猛攻を仕掛けていた泥の時雨も、その瞬間に動きがピタリと止まった。

そして、間髪容れずに海風が砲撃を放ち、一撃で終わらせる。心臓を撃ち抜いたことで機能停止に追い込むことが出来ることは、泥の夕立にも泥の村雨にも有効だったため、躊躇さえしなければ確実に終わらせることが出来た。

春雨も海風も、一応割り切ることが出来ていた。見た目は尊敬する姉の姿ではあるが、実際はそれとは違うもの。それを自らの手で始末することに抵抗はない。

いや、抵抗が無いわけでは無い。辛い、とても辛いが、こんなカタチでその姿を利用されている姉達があまりにも哀れで、死を冒涜されていることに怒りが溢れる一方。
故に、早急に終わらせてやるという気持ちで、姉のカタチをした人形を容赦なく叩き潰す。その散り方は記憶しないつもりで。それを覚え続けていたら、間違いなくトラウマになる。
「終わったね。じゃあ、次に行くよ」
「はい、姉さん」
泥人形は始末するとそのまま泥へと戻るように溶けた後、そのまま塵となって消えた。春雨達は知らないが、施設側で戦いを繰り広げた欧州姫達も、溶けることは無かったが塵となった。命を糧に強化された者は、その身体すら残らないようである。
そんな終わり際を、春雨も海風もあえて視界に入れなかった。姉の姿の敵が消える瞬間なんて知りたくもない。
「白露姉さん、叢雲ちゃん！」
怒りのままに、その視線を泥の白露に向ける。近くにホンモノの白露もいるのだが、流石に春雨がそれを間違えることはない。
春雨が参戦する前は、叢雲と白露の2人がかりでも、なかなかに厄介な存在だった泥の白露。ホンモノの白露とは少し攻撃の手段が違うものの、混成状態での攻撃は据え置きであったため、村雨の鎖すらも使ってきていた。
それには白露自身が対応出来たため、白露が徹底して叢雲をサポートしつつ、攻撃の隙を作っていくのだが、それでも一筋縄ではいかなかった。
「大丈夫よ。こっちは終わらせた」
「あたしとしてはすっごい複雑な気分だけどね！」
しかし、流石は2人と言ったところで、泥の白露は既に塵と化している途中。その胸にはしっかりと叢雲の槍が突き刺さっており、連携がうまく行ったことを物語っていた。
自分の顔の敵を斃すということに気分を悪そうにしていた白露ではあるのだが、叢雲が憂さ晴らしとして使っているのには、罪悪感も

あることで肯定的。故に、複雑ではあるものの抵抗なく援護も出来ていたようだ。
「根本から絶たないと厳しいだろうね。叢雲、何か感知出来ない？」
「湧いて出てくる泥ばかりよ。知ってか知らずが、私の感知が対策取られてるように感じるわね」
　チッと聞こえるくらいに舌打ちをする叢雲。泥人形は勿論のこと、そうなる前のイロハ級も当然感知の範囲内に入ってくる。どれがどれだかもわからず、例えばこの無限に湧いてくるイロハ級のコア的な部分もわかるはずがなかった。
　見渡す限りというわけでは無いにしろ、水平線から次から次へとイロハ級がやってきては、融合して泥人形と化していく。無論、半分は武蔵と大和による『タッチ』によって殲滅されており、そうでなくとも他の仲間達の奮闘で数は減らしている。しかし、どうしても数の暴力には勝ち切れない。
　そして、この戦いの最中に覚え始めた違和感。それを直感に任せて何かを探る春雨だが、それは割とすぐに思い当たる。
　明らかに、出てきている泥人形の力が計算されている。イロハ級の命を使った小手調べと言わんばかり。実際は、ある程度の実力が無いとこの攻撃はいなせないのだが。
「……多分、見られてる。私達が姉さん達の姿を見せられて苛立っているところも、それをどうやって対処してるのかも」
　つまり、今のこの戦いは常に黒幕の目に入っているということ。モニタリングされているのではと思ってしまったのも、あながち間違いでは無い。
「ハッ、どうせそんなところだろうと思ったわよ。腹が立つやり方ね」
「うん、それには同意。私もこのやり方は本当に気に入らない」
　怒りを溢れさせている2人は、当たり前のように同調しながら、その怒りを隠すことなく表情にも出している。
　だが、何処でどうやってこちらを見ているのか。すぐに考えられるのは、龍驤との戦いでもあった、超高高度からの感じだ。艦載機を届かないくらいにまで上空に待機させ、常にこの海域を眺めているとい

うもの。
　こういう乱戦でも巻き込まれることなく監視し続けることで、敵の一挙手一投足を見て覚える。手が届かないために止めようがないという厄介な手段。
「姉さん、『観測者』様の視線とかを直感的に勘付きますよね。そういうのは今は無いんですか？」
　春雨の特性の一端として、直感的に自分に向くモノ全てを把握出来るというものがある。むしろ、大概のことを直感的に理解出来る。ならば、今のこの状況も理由がわかるのではないかと海風は考えた。
　しかし、春雨からの返答は芳しくないもの。
「意識し始めたから、見られてる感じはするようになった。なったんだけど、その目が何処にあるかわからないんだよ」
　見ているのならば目があるはず。それこそ、超高高度の艦載機かもしれないし、極端なことを言えば拠点からこちらをジッと見ているかもしれない。とにかく、視線を生み出す根幹があるはずだ。
　しかし、今の春雨を以てしても、それがわからなかった。見られているという感覚はあっても、何処で誰がどう見ているかがわからないという気持ち悪さ。
　そうこうしているうちに、またもや泥人形が発生。次に現れたのは、不知火と島風の泥人形。龍驤に混ぜ込まれた2人である。
「アイツら……ウチのや。スマン山風、あっち行けるか」
「……大丈夫。あたし達で、どうにかする」
　そちらには堀内鎮守府第二艦隊があたる。こちらには島風もおり、数も上。しかし、泥人形の実力は命を糧にしているせいで通常よりも上。普通の艦娘だったなら、1人を相手にするだけでも相当厳しい戦いを強いられるだろう。
　だが、ここにいるのはここまで泥との戦いで生き延びてきたスペシャリスト。ただブーストがかかっているだけならば、戦術もあったものではないので、対応は可能。
「ただ速いだけの私なんて、強くもなんとも無いんだからね！」
　真っ先に向かったのは島風。自分と同じ顔の泥人形の存在が気に

食わない様子。それもそのはず、泥人形の島風は他の泥人形以上に素早く、突撃もとんでもない速さを見せてきたからだ。速さ勝負をしようというのならと、島風はクラウチングスタートの構え。
江風はこの時の島風の速さを知っている。故に、泥人形の速さがお遊びくらいに思えた。
「ＧＯ！」
海面を蹴った瞬間、島風は風となり、泥人形の島風を蹴り飛ばす。ただ速いだけでは対応出来るはずもなく、しかも今回は加減も何もしていないため、その蹴りは心臓に直撃。一撃で心臓を止めるほどの威力を打ち込んだ。
しかし、泥人形のブーストはそれだけでは止まらない。自分の命を何とも思っていないのだから、死ななければ何をやってもいいとすら考えている。いや、考えてもいない。そうなるように設定されている。
心臓を蹴られても、心臓が止まりかけても、体内を駆け巡る泥が命を使い潰すために強引に心臓を動かす。心臓そのものを完全に破壊しない限り、おそらくこの人形は動き続ける。
「心臓を潰しなぁ！」
それを即座に看破したのは、攻撃をした島風でも、それを見ていた江風でもない、この戦場全てを見ていた涼風である。
今まで現れていた泥人形の傾向を観察し、過去の記憶と照らし合わせ、想定外まで想定し、さらには黒幕の今までのやり方すら視野に入れて、次の一手を常に見据えていた。その思考速度は、吹雪に匹敵するほどである。
現に、涼風が叫ばなければ吹雪がそれを言っていた。泥人形の弱点は心臓。泥を全身に送り届けるための器官であると。
「蹴るだけじゃ潰れないかー！」
「だから、撃ち抜いちゃいましょうね～」
蹴り飛ばされた泥人形の島風を追撃したのは荒潮。飛ぶ方向まで加味して砲撃を放った結果、姿勢を変えることも出来なかったためにそのまま心臓を粉砕。そしてそのまま消滅。第二艦隊の天才２人の

連携により、あっという間に1体撃破。残るは1人、泥の不知火。
「コイツ、格闘戦が強ぇ！」
龍驤の徒手空拳の力は、この不知火から得られている。そのため、格闘戦が得意な江風とも当たり前のように拮抗。むしろ、ブーストのせいで膂力が駆逐艦を優に超えているため、的確に防御しなければ圧倒されかねなかった。
そもそも、肉体の強度も泥で強化されているため、ただ殴るだけでどうにか出来るようなものではない。強烈な衝撃であっても、内部の心臓は泥が再起動させるために意味が無くなる。結果的に、砲撃で破壊するか、斬撃などで潰すかくらいしか選択肢が無くなる。
刀を使っている大鳳と比叡ペア、高火力で押し潰そうとする古鷹と金剛ペアは、先程の涼風の叫びをちゃんと聞いていたため、2人がかりで圧倒し、殺すための攻撃をすぐに繰り出している。1対1ならば厳しくとも、2人であればそれも簡単。片方が陽動して、もう片方が隙をつく。それだけでいい。
故に、江風も自分が陽動に入り、他の誰かに撃ってもらう。一番適しているのは、
「はい、じゃあ心臓を潰すよ」
江風の近くにいた吹雪。江風が拮抗を維持しているおかげで、吹雪が軽々と真後ろに回り込み、心臓を撃ち抜く。
「これはツーマンセルでないとダメだね。でも……何かおかしいなぁ」
「おかしいって？」
「いや、すごく強いのはわかるよ。ブーストがかかってるからそんじょそこらの深海棲艦なんて比じゃないくらいに強い。でもさ、なんか手応えなくない？」
それは吹雪が強いからだろと言いかけたものの、本拠地に入ったというのに2人がかりならば斃せるような人形が無限に湧いてくるというのは確かに妙である。ただ消耗を狙っているのか、それとも別の思惑があるのか。

少なくともまだ誰も怪我もしていない。精神的なダメージを受けていても、戦いは続行出来る。

春雨は、その戦いを続けさせることに意図があるように思えていた。

舐めるような視線

春雨のみならず、吹雪もこの戦場のおかしな部分に気付いていた。2人がかりならば特に苦戦することなく撃破することが出来た泥人形だが、吹雪はそれに対して手応えがないとまで言い出している。

拠点を守るために配備されている駒ならば、もう少し苦戦してもおかしくないだろうと考えていた。島になんて絶対近付かせないくらいにガチガチに守りを固めてきてもおかしくないくらいの引き篭もり。

「……この戦場を見てる。これは絶対に確実」

春雨はそこまではわかっていた。しかし、それをどうやって見ているかがわからなかった。視線を感じるが、その源が見えない。奇妙な感覚ではある。

「また上から見ているとかは」

「上は……無い。超高高度からの監視なら、絶対にわかる。それに、見られてるのは上だけじゃない」

海風からの質問に対して、春雨は残念ながらと否定する。上からの監視ならば、確実に上に目を感じるからだ。

それはまるで、全身を舐めるように見られているということ。今の春雨からしてみれば、非常に気持ち悪い視線。『観測者』からの監視の視線を感じ取った時は、ここまでは無かった。何もしないであろうという思いもありつつ、仕方なく見ている、むしろ見守っているというイメージの方が強い。

全身に視線を感じるということは、全方位から見られていると考えてもいい。そうなると、結論は1つしかない。

「……この空間そのものが黒幕の目……なんだろうね」

春雨はここに辿り着く。

「結界であると同時に、目でもあると」

「うん。叢雲ちゃんの感知が領海全部に拡がってて、しかもそれがもっと細かく見える……みたいな」

そもそもこの海には黒幕の結界が展開されており、拠点に近付くこ

とが出来なくされていた。それをどうにかしたのがＲＪシステム。粒子化している泥を中和、消滅させることによって、敵対する者を弾く結界を無効化している。

だが、逆に言えば無効化出来ているのはそれだけだ。侵蝕をしてくる端末への対策は万全ではあるものの、それ以外の手段には現状対応が出来ていない。

そこで春雨が直感的に考えたのが、無効化出来ていない粒子がまだこの海域に蔓延しており、それがこの戦場全てを監視しているということ。舐めるような視線というのは、事実粒子が身体中に纏わりついているから感じ取ったもの。

それこそ、この海域に入った瞬間に、夕雲がおかしな感じがすると言ったことと同じだ。過敏に反応出来るが故に、そのおかしさを知ることが出来る。そしてそれを春雨は、視線であると感じ取ったようだ。

実際は見ているわけでは無い。ほとんど触れているようなもの。それは結果的に、ただ見ているよりも詳細なモニタリングをしていると言っても過言では無い。

「私の力と一緒にされるのも腹が立つわね……」

「下手をしたら上位互換だからね」

「余計に腹立つわ。で、それをどうにかする手段は思いつかないわけ？」

イライラしながらも、打開策を問う叢雲。目に見えないことによって、こちらのやり方を調べられるというのが非常に気に入らないようである。これが気に入らなくない者なんてこの戦場にいるのだろうか。いや、いない。

「奥の手を出すことなく出来る限り処理して、もう全部無視して島に向かう……っていうのが多分妥当。黒幕を斃しちゃえば終わりだから」

見えない粒子の処理は簡単には出来ない。今の春雨が散布出来るマグマは、その視界に入った者にのみ作用する効果に加え、数が多くなりすぎると対応が出来なくなる。ただでさえ見えていないモノな

のに、それがここには数兆という数が漂っているようなもの。
　それはおそらく、卵が処理出来ずにここに来ていたら、そこにも激しく反応していただろう。強制的に孵化させられ、あっという間に侵蝕から再洗脳へ。しかも治療方法が無いときた。事前に対応出来ているから良かったものの、その危険性がここにあるというだけでも恐ろしい。
　そして、その状況を打破する簡単な方法は、発生源の除去。つまり、黒幕の撃破だ。それを阻止されているのだから本末転倒。
「せめて無限湧きが無くなればいいんだけど、ね！」
　話しながらも発生しかけている泥人形を事前に処理していく白露。春雨には今、考える時間が必要だ。そのために、春雨には害が及ばないように身体を張る。姉として、これくらいは容易いと的確な動きを選択し続けた。
　勿論、海風もそれに続く。考えている姉に手出しはさせないと、激しい砲撃を繰り出していた。そのおかげか、春雨は怒りが溢れつつも冷静に現状打破の手段を直感的に拾おうとしていた。
「イロハ級の発生ポイントがわかれば、それを潰せるだろうけど、それが何処かは……それこそ叢雲ちゃんの感知か、空母のみんなに海域を徹底的に調べてもらうしか無いと思う」
　直感的にわかるのは、その発生ポイントは拠点に近い場所であるということ。真下から突然現れるようなことはなく、水平線の向こうから次から次へとやってくるのみ。つまり、生まれたのは拠点という可能性が高い。
「それなら、サラの艦載機をここから先に向かわせましょう。少なくとも、見てくるだけなら出来ますよね？」
　ここで動き出したのはサラトガ。千歳と千代田が２人でこの戦場の制空権を維持しているからこそ、少しだけでもサラトガはそちら側に注力出来る。
　今この戦場で最も必要なのは、黒幕に対する情報収集だ。自身の情報をとにかく秘匿し続けていたのだから、まだまだ勝ちに向けての情報が少ない。現在どんな姿かもわからないし、どんな手段で戦うつも

りなのかもわからない。
せめて何かしらの情報が手に入れば、ここからの方針が決められる。本当に欲しい情報が手に入るかはわからなくとも、先に進むことは出来るだろう。
「お願いします」
「Ｏｋａｙ．　それではサラの子達、お願いしますね」
発生源であると思われる方向に向かって、艦載機を発艦させる。その練度はやはり並ではなく、キーンと音を立てて真っ直ぐと突き進んだ。そのスピードもかなりのもので、周りに群がりそうな敵艦載機を軽々と回避し、それでも尚追随を許さない。
ただ見てくるだけならば、超高速で駆け抜け、島だけを見て帰ってくるだけでいい。無理して攻撃までする必要もない。それ故に、ただ速度だけを追求した偵察機を使用した。
「ですが、わかったところで何も変わらない可能性はありますよ。Ｂｒｅａｋｔｈｒｏｕｇｈ（打開策）だけは考えてもらえると」
「ですね。これの発生源がわかっても、それをどうにかする段階までいけないかもしれない。そもそもこの纏わりついてくるような視線をどうにかするには至らないですから」
手っ取り早く解決する方法は黒幕を斃すなのだが、それが簡単に出来れば苦労はしない。一応こうやって対策を考えながらも、無限に湧いてくるイロハ級と撃ち漏らしから発生する泥人形は処理しながら前には進んでいるのだが、そのスピードは微々たるもの。押し込まれているわけではなくとも、このペースだと確実に消耗させられ、うまく拠点にまで近付けたとしても十全の力で戦うことは出来やしない。
むしろ、それもあちら側の目的かもしれない。数で押しながらその力を発揮させ、それを観察しながら時間を稼ぎ、勝っても負けても自分の糧にして、アドバンテージを取っていく。こちらは消耗、あちらは強化。やはり時間をかければかけるほど勝ち目が薄くなる。
「せめてこの監視だけでもどうにか出来れば……」
手の内を晒さないように戦うのは至難の業だ。そんな余裕なんて無いし、こうしている間にも泥人形自体が強化される可能性すらあ

る。
　そして、あちらもこちらの手の内を知りたいのだろう。最も出てもらっては困る泥人形が現れてしまった。
「……Ｎｏ（冗談で しょ）ｋｉｄｄｉｎｇ」
　ギリッと歯軋りしながらその泥人形を見据えるコロラド。そこに現れたのは自分と瓜二つの傀儡。
　つまり、そこから繰り出されるのは決まっている。
「ここで出したくは無かったんだけど！」
　コロラドが咄嗟に白鯨を展開する。同時に泥のコロラドも白鯨……いや、泥で出来た白鯨、泥鯨を展開。突如として巨大な艤装のぶつかり合いとなる。
　春雨の細胞によりスタミナ不足はある程度改善されているものの、コロラドとしてはこの白鯨を展開すること自体がかなりの消耗に繋がる。こんなところで出していたら、黒幕との直接対決の時に使うことは難しくなる。
「ムラクモ、アンタこっち来なさい！　私のＷｈａｌｅ（鯨）を始末することくらい簡単でしょ！」
「手間かけさせんじゃないわよ！　こっちの手の内晒したくないのよ！　アンタみたいにバレバレじゃないんだから！」
「どういうことよ!?」
　領海の現状を把握しているのは、基本的には春雨のみ。その近くにいた海風、白露、叢雲がひとまずは理解し、制空権争いの中で偵察機を出したサラトガも一応は理解。そして、直感的に何かがおかしいと考えている吹雪も勘付いている節がある。
　ここでそれを言葉にすることがいいことかどうかはわからない。黒幕は見ているだけで聞いていない可能性はある。あくまでも粒子を纏わりつかせてその行動を監視しているのみであり、この粒子から音まで拾っているかどうかまではわからない。
　だが、春雨は言葉くらいなら問題ないと判断した。おそらくこの粒子は自分達の行動をリアルタイムで観測しているが、音まで理解出来るほど高度なものではない。口の動きから何を話しているか判断す

るなんて芸当もやってのけそうではあるのだが、それならそれで構わない。思惑を看破したことを知られたからと言って、こちらもあちらも方針を変えることはしないだろう。
「私達の行動が逐一モニタリングされています！　あまり新しい行動をしたくありません！」
「はぁ!?　Ｍｏｎｉｔｏｒｉｎｇ!?」
　ただ、これを知ってしまうと動きが悪くなる可能性が高い諸刃の剣。意識してしまうとどうしてもギクシャクしてしまうだろう。
「そうか、そういうことやったんか。なんか変な値が感知出来てると思うたわ！」
　この春雨の言葉に反応したのは、山風の頭の上にいる龍驤。今もずっとＲＪシステムをフル稼働させて結界の粒子を消しとばしているのだが、それでどうにも出来ないモニタリングの粒子に関しても僅かながら別の値を感じ取っていたらしい。
　ここが領海だからということで何かがわからず、こうしながらもずっと解析したいたのだが、春雨が看破したことで方向性を理解した。
　こうなったら龍驤の本領発揮である。
「……出来る？」
「おう、だいじょーぶや。ウチがここにいる理由を、敵さんに教えたらんとなぁ！」
　山風に言われて龍驤はバッと手を広げ、自分にすら纏わりつく粒子を解析していく。自分達をただ見るだけの粒子ということさえわかれば、アクセスする方法は龍驤の中にいくらでも組み込まれている。
　明石もこういうことを見越してＲＪシステムをバージョンアップし続けているのだ。体内に埋め込まれた卵のデータも勿論入っているし、春雨の細胞に関しても全て登録済み。そこからは応用を利かせて、この場で明石並みの分析を開始した。
　これを現場で行なうこと。これがＲＪシステムの真骨頂。明石を出張させることを目的とした調整をされたのが龍驤である。再洗脳により知識まで与えられ、今や龍驤は第二の明石である。

とはいえ、明石ほどの狂気は入れられていない。そこは大淀が自重させた。明石のコピーは2人もいらないと。それに、制御役を作れという指示を素直に聞き入れていた。

「ちょい時間かかるから、それまで粘ってくれや！」

明石であっても分析には時間がかかる。龍驤だってそれは当然だ。僅かにでも時間がかかるならば、それまでは持久戦になる。

この分析が終われば、この事態は好転するだろう。先に進めるか否かは、龍驤に託された。

泥鯨

黒幕の拠点周辺、領域と思われる場所には、結界とは別にＲＪシステムでは消せない粒子が撒き散らされていることが判明。コレによってここでの戦いがモニタリングされ、ここでてこずり手段を出し続けると、その分あちら側に戦い方を分析されてしまう。

ならばと動き出したのが、ＲＪシステムの妖精、龍驤。山風の頭の上に立ち、大きく腕を広げた。

「ホンマや、少しだけ、ほんの少しだけやけど、普通とは違う反応があるで。気ぃ入れんとウチでもわからんレベルや」

「……それは危なくない……？」

「侵蝕性はあらへん。端末とは完全に別モンや。どちらかといえば卵……いや、ウチのコアにちぃと近い。その辺のデータからいろいろ解析しとる」

山風が龍驤の安全を確保しなくてはならないので、周囲に一層気を遣う。

今回の山風は黒幕の拠点襲撃に特化しているため、対地装備。この場で戦うことはかなり難しく、それもあってＲＪシステムを積んでいる。同じ役割を持つ荒潮は、山風ほど特化していないため砲撃なども可能ではあるが、山風は自衛のための機銃程度しか持っていないレベルである。

むしろ、モニタリングされていると言われたら、余計に対地兵装を見せるわけにはいかなかった。それに対しての策を練られても困る。

「でも、わかってまえばこっちのモンや。確実に解析して、中和させたる。山風、スマンが」

「わかってる。全部避け続ける、から」

こうなると、山風と龍驤は一蓮托生。どちらが倒れてもおしまい。龍驤だけならまだ戦えるかもしれないが、勝ち目が薄くなるのは確実。

まず間違いなく、ここからでも黒幕へと辿り着くのが厳しくなる。この結界の効果を最初から無視出来るのは春雨だけだ。１人いれば

いいかもしれないが、それでも難しいことには変わりない。
「しっかり、掴まってて」
「命綱、巻かせてもらうわ」
そう言いながら、龍驤は山風の髪の毛を自分の腰に巻きつけた。これなら多少なり無茶な動きをしても頭の上から落ちることはない。
今回の解析をするためには、腕を広げておく必要がある。なるべく自分に粒子が当たる面積を大きくしておきたいからだ。だが、激しい回避行動をしていると、ほぼ間違いなく振り落とされる。そのため、そうならないようにガッチリと結んだ。
万が一、これで山風の髪が千切れてしまったとしても、髪は入渠すれば元に戻る。むしろ心配なのは龍驤の行方。この広い海に落ちたらそのまま死である。いくら妖精さんの身体を得たとしても、こればっかりは耐えられない。
「っし、ほな改めて行くで！」
「ん……じゃあ、避け続けるから」
龍驤の解析が終わるまで、自身への脅威は避け続ける。危険から離れ、しかしなるべく戦場の中心を陣取るように。

今特に危険なのは、泥人形のコロラドが展開した白鯨もとい泥鯨。対するコロラドも白鯨を展開したため、その場所だけは巨大な艤装のぶつかり合いになってしまっていた。
ただぶつかり合うだけならまだしも、尻尾を大きく振るったり、乗っている泥のコロラドが砲撃を乱射したりと、周囲に影響を与え続ける厄介さ。そして、コロラドも鯨同士の戦いとなってしまったら周囲を気にしていられない。
「なるべく手数を抑えろっつっても、私は大概知られちゃってんのよ！」
泥鯨をどうにかするために、白鯨も大きくのたうちながら尻尾を振り回す。狙っているのは当然撃破だが、最低限その場から動かさないようにしなくてはならない。

コロラドは元々あちら側だったこともあり、出来ることは全てバレているようなもの。そのため、この場でも出し惜しみ無し。多少改善されているスタミナのおかげで、1回目の展開も躊躇なく行ける。
互いに振り回した尻尾がぶつかり合った瞬間、その質量によって激しい衝撃と衝突音が戦場に響き渡った。近くにいたら鼓膜がどうにかなってしまいそうなくらいの激しいぶつかり合いに、誰もが否が応でも反応してしまう。
「上を引きずり下ろせばいい!?」
「出来るならやってちょうだい！」
「任せな！」
ここで真っ先に動き出したのは、大塚鎮守府の艦娘、川内。島風に匹敵するレベルのスピードスター。
「アンタ達も手伝いな！　まずアレをどうにかしないとダメだ！」
声をかけた先には、同じく大塚鎮守府の仲間達。今までは周りに湧いて出てくるイロハ級を処理していたが、泥鯨がいる限りそれすらもまともに出来なくなる可能性がある。早々に処理しなくては、まともな戦いも出来なくなるだろう。
いや、それ自体はコロラドが拮抗出来るかもしれない。しかし、コロラドばかりに頼り続けるのもよろしくない。何故なら、この泥鯨は一回とは限らない。
「合同演習で一度見ておいてマジで良かった！　色だけで殆ど変わんねぇ！」
長波が言う通り、ここにいる者達は全員、コロラドの白鯨と戦わせてもらっている。初見だったなら驚きでまともに戦えなかったかもしれないが、一度見ている上に、その戦い方をしっかりと身体に刻んでいるため、この場でも対応が出来る。
コロラドには弱点らしい弱点は無い。白鯨は悪く言えば大雑把な動きだが、強固な装甲と強大な質量で全て帳消しにしている。だからといって本体だけを狙おうとしても、ロブスターの鋏とカニの甲羅、そして杖型の主砲によって当たり前のように迎撃してくる。
強いて言うならスタミナ不足が一番の弱点だったわけだが、泥のコ

ロラドはスタミナ不足という弱点すら克服している。命を燃やしていることで、死ぬまで動かし続けるだろう。
「上に3人持っていければ勝てるから！　私と長波、あと雷、鯨を登るよ！」
「了解！」
「まっかせて！」
　夕雲と鹿島にサポートをしてもらいつつ、本体を狙う。泥鯨そのものはコロラドが止めてくれるため、本体は狙いやすい。しかし、そのサイズが問題。ただジャンプして上まで行くのは、そもそもの身体能力が高い者でなければ難しい。ここにいる者では、おそらく川内くらいしか出来ないだろう。
　そこで川内に指示をされた2人は、コロラドの白鯨を利用する。こちらならば、簡単に振り落とされることはないだろう。何より、コロラドがそこをサポートしてくれるのだから。
「ちょいと乗せてくれよっとな！」
「ごめんなさい、足場に使わせて！」
「構わないわ。アレを止めてくれるなら、好きに使いなさい！」
　白鯨の筋張った外殻を使って、コロラドと並び立った長波と雷は、泥鯨の上に陣取る泥のコロラドを見据える。
　逆に川内は、泥鯨の周囲を夕雲と鹿島を伴いながら回り込み、後ろから登れる算段をつける。
「鹿島、鞭って上まで届く？」
「あの高さだとギリギリ届きませんね。なので、夕雲さんと砲撃で支援します。あの盾を使わせれば、逆側が空くでしょう」
「でも、鋏がありますからそちらで止められるのでは？」
「止められるなら止められるで、こっちは何人もいるんだから大丈夫！」
　一発でも当たれば攻略可能なのだから、誰かが囮になってその隙を作ればいいだけの話。1対1でやるわけでも無いのだから、誰かの攻撃を当てることは出来るはず。
　これが初見ならばどうだったかはわからない。しかし、泥の傀儡は

基本的に新しいことをやらない。そのおかげで、経験さえあればある程度の行動が予測出来る。
「つし、それじゃあ、行くよ！」
川内の号令と同時に一斉に飛びかかる。泥のコロラドもそれは認識出来ているようだが、その一発目がコロラドの白鯨による突撃。尻尾を振り回すわけではなく、その巨体をそのままぶつけに行った。
あちらも同じ大きさなのだから、それだけでは致命傷どころかダメージにすらならないだろう。だが、その衝撃は姿勢を崩すには充分。
「行きなさい！」
「サンキュー！　雷、行くぞ！」
「いっくわよー！　みんなでやればすぐに終わらせられるわ！」
その反動を使って飛び込んだのは長波と雷。互いにその手に主砲を握りしめ、泥鯨の上へ。その感触もコロラドの白鯨と同じ。ただ泥で出来ているだけの模造品。
ここまで近付けば、泥のコロラドはロブスターの鋏を使ってくるようになる。至近距離というわけでは無いが、杖の砲撃は別の理由で出来なかった。
「こちらも撃ちますよ！」
「了解です。下からだと狙いにくいですが、まだマシな方ですね」
同時に鹿島と夕雲が上に向けて砲撃。２人揃って狙っているのは頭部、つまり急所狙いの一撃必殺。この攻撃によって強引にカニの甲羅の盾を使わせる。こちらに対応しなくてはならなくなったため、杖の砲撃が出来なくなった。
ならばここで第三の刃。川内が完璧なタイミングで泥鯨の真後ろに跳んだ。ロブスターの鋏もカニの甲羅も、どちらかといえばコロラドの方に向いているため、川内にとっては隙だらけになった。
これならば当てられる。そう考えても、堅実に確実に決めるため、握りしめた魚雷を投げる。コレならばどこに当たっても致命的なダメージを与えることが出来る。さらには自分で投げた魚雷を主砲で撃ち抜くことで、回避しても爆風に巻き込まれるように仕立てた。間

近で爆発すれば、致命傷になる率も上がるはずだ。
「なっ」
しかし、ここで泥のコロラドは第三の刃を辛うじて回避してしまった。泥鯨自体を移動させることで、自身の身体の位置を移動させたのだ。爆風からもギリギリ避けるカタチとなり、腕は焼けるがそれで終わる。
「問題ないわ。それくらいならわかる。自分と同じなんだもの」
そこにコロラドが第四の刃。自分はロブスターの鋏もカニの甲羅も使う必要が無かったため、杖を両手で握りしめてしっかりと狙って放った。
避ける方向も、どう避けるかも、コロラドには読めていた。自分のことなのだから、これくらいやると考えていた。模造品だとしても見縊らない。
その砲撃は泥のコロラドの半身をもぎ取るように入り、心臓が潰れたことで消滅。それと同時に泥鯨も消滅した。
「Ｏｋａｙ．　まずは斃せたわね」
「でも、あれがまた出てくる可能性あるんでしょ？」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．　警戒は怠っちゃダメよ」
コロラドも節約のために白鯨を消す。これでもスタミナ消費はほどほど。まだまだ戦える。

こうしている間も、龍驤の解析は続いている。やはり微量の粒子であるため、どうしても時間はかかってしまうものの、確実に一歩ずつ先に進めた。
「やっぱ特殊やな……ここにしかない成分なんやろ。でも、ウチならやれる」
目を瞑り、その粒子と向き合いながら、出来る限りの全てと照らし合わせる。それと該当しないならば、近しい成分を探し出して、その場で作り直す。
敵対する存在を弾く結界を消しながらの作業ではあるが、システム

妖精となった龍驤にとってマルチタスクはお手のもの。思考が分散することもない。
「すまん、もうちょい濃い方……拠点側に行けるか」
「やってみる」
場所に関しては山風にどうにかしてもらわなくてはならないため、移動だけは指示するカタチに。山風もその状況は理解しているので、なるべく龍驤のことを気遣いながら移動。
しかし、そうすることで他の仲間達との戦いから少しだけ離れることになってしまう。それを察したのは、他ならぬ妹、涼風。
「山風姉、ちょいと危ないと思う。あたいが守るよ」
「うん……お願い」
と話した瞬間に、涼風にはすぐに察知出来た。敵は目の前のものだけではない。それに、魂の混成をした者全てが泥人形として現れるのならば、間違いなく海中からも現れる。
「潜水艦……！」
察知した時にはもう爆雷を投下していた。それだけで足りるかはわからないが、回避行動に移るならばこれが一手目としては上等。
「山風姉、ソナー起動。これ、まずいかもしれない」
言われて山風もソナーで海中を確認した途端、明らかに嫌な顔をした。

そこには、かなりの数の潜水艦がこちらに向かってきていた。

敵潜水艦の群れ

泥のコロラドが繰り出した泥鯨を処理したのも束の間、今度はこの領海の解析を進める龍驤と、それを搭載している山風に危機が迫る。解析を食い止めるためか、敵の潜水艦隊が押し寄せてきていたのである。

いち早く涼風が気付いたため、山風もソナーを起動させてその影を見つけることが出来ているが、その山風は今回、拠点攻撃用に対地攻撃に特化しているため、潜水艦を攻撃する装備は簡易的なモノしか持っていない。また、涼風も今回は海上での戦いを視野に入れ、それ以外は電探などをメインにしているため、こちらも装備は同様。潜水艦は荷が重い。

「とりあえず避けなくちゃダメだい。山風姉、ソナー全開にして、全力で避けるよ」

「……う、うん……潜水艦相手なら……まだやれる」

「っと、ごめんよ！」

言っている内に察したか、すぐに山風の手を取って強く引っ張り、その場から猛スピードで離れる。

すると、今山風が立っていた場所が爆発。魚雷が1本ではなく何本も放たれていた。

「っっ」

「つぶねぇ！　潜水艦も泥ブーストかかってる上に、命燃やしてっから火力がやべぇ！」

魚雷の火力も普通ではないのに、それがまとめて襲いかかってくるとなると、そのうち掠めてしまいそうで恐ろしい。しかも、こちらからは攻撃が出来ないようなモノなのに、あちらからは狙いを定めることが出来る。

実際、駆逐艦は潜水艦に対しては有利なはずなのだが、それはちゃんと対策を立てているからである。ソナーも爆雷も簡易的なモノではなく専用のモノを装備することで、潜水艦はカモとなる。

しかし、今はそうではない。潜水艦がいること自体は予想はしてい

たが、その対策をしているのは山風でも涼風でもない。ならば誰か。
「潜水艦だ！　潜水艦が来てるぞぉ！」
戦場に響き渡るように叫ぶ涼風。ソナーなどが装備出来ず、海中からの攻撃には回避以外なす術がない戦艦や正規空母にその脅威を知ってもらうため。そして、この戦場で潜水艦対策が取れる者にそれを知ってもらうため。
「っし、ならばあたし達が処理するしかないね！」
ここで動き出したのは、泥の自分を叢雲と共に処理した白露である。深海棲艦ならば、その装備を自由に差し替えることが出来るため。ついさっきまでは海上艦狙いでも、次の瞬間から潜水艦狙いとすることが出来た。
そして白露はどちらかといえば対潜攻撃が得意な方。混じっている妹達と比べてもトップクラス。白露型全体でも、山風とほぼ同じでツートップと言える。
「私も対潜装備へと切り替えましょう。良かったですか？」
「うん、大丈夫。私が海上を意識するから、海風は海中を意識して」
「了解です。この戦いのキーマンである春雨姉さんを狙う不届き者は、この海風が確実に始末するのでご安心を」
海風も対潜は得意な方。潜水艦の脅威が近付いてきているというのなら、それから春雨を守るためにも率先して対潜行動へと移行する。ソナーは全開、爆雷もしっかり握り締め、春雨を狙うような者達は、文字通り海の藻屑にしてやると意気込んでいた。
こうしている間も、海上艦の群れは止まってくれない。気を緩めると数が増えるわ隙をつかれるわといいことが何もない。今でも武蔵が大和と共に殲滅を続けているのだが、合間合間の泥の傀儡のせいで、そろそろ止めたくても止められないような状況になりつつある。
「春雨、アンタも対潜でいい。海上は私が見る」
叢雲からの提案は、白露型姉妹全員の対潜への投入。感知により見えてきた潜水艦の数からして、白露と海風だけでは全て処理することは難しいと考えたようである。
今やられたら特にまずいのは、一斉射を使い続ける武蔵と大和と、

偵察機を出しているサラトガ、そしてこの領海を解析し続けている龍驤。このどれもが欠けてはならないもの。
叢雲自身も、自分が近接攻撃に特化していることで対潜が苦手になってしまっているのは理解している。故に、自分よりもデキる者は全員対潜に回した方がいいと判断した。海上艦を守ることは自分にも出来るのだから。
「わかった。じゃあ任せたよ」
「さっさと行きなさい。かなり数いるわよ」
叢雲がこういうだけあり、潜水艦の数は相当である。感知など使わずとも、ソナーにいくつもの反応が見えた。
このタイミングで確認しただけでも、ざっと２０体はいる。その全てが命を燃やすブーストがかかっており、全てのスペックが数段階上になっていた。
「春雨、今回は全部殲滅でいい？」
白露も、姿が見えていない潜水艦を本当に殺していいかを尋ねる。
全てが泥人形なら別に構わない。侵蝕されているわけでもなく、ただただ作られているだけの存在なのだから、壊しても何も罪悪感は起きない。
しかし、この中に侵蝕されている艦娘や穏健派の深海棲艦がいるとしたら、救われる者すら救えないということになる。
「……大丈夫です。見えないところにいるけど、感覚的に全部泥人形です。殲滅しても、嫌な気分にはならないと感じました」
アテにしていいのかはわからないがと春雨は保険をかけるが、今の春雨の直感は通常よりも冴え渡っている。望む答えに辿り着けるのだから、その選択は全て正しいと言っても過言ではない。
強制的に望む答えにするというインチキも出来るが、そもそも選択を間違えないというのも辿り着く者の真骨頂。怒りが溢れて殺意に塗れていても、それだけは絶対。
「オッケー。なら、手当たり次第でいいね」
「はい、問題ありません。殲滅します」
「スペックが上がっていようが関係ないね。全部やったらぁ！」

ここからは対潜行動。この戦場を駆け回り、一網打尽にしていくことになる。
潜水艦が出てきたということで動き出すのは春雨達だけではない。
「制空権、もう大丈夫!?」
叫ぶ千歳。泥人形の龍驤と大鳳と戦う比叡とこちら側の大鳳は、同じ数ということで大体が互角。経験の分こちら側に分があるものの、片方が隙を作りもう片方がそこで撃破するという定石が出来ないのが厄介だった。
ここだけは他とは違う難関。しかし、比叡も大鳳も弱音なんて吐かない。むしろ、この戦いを自らの成長に繋いでいた。
「大丈夫ではありませんが、粘ります。今はこちらよりやらねばならないことがありますよね」
大鳳も当然空母。今は近接戦闘に専念しているが、艦載機だって飛ばせる。今はそちらに気をやる余裕も無かったが、敵潜水艦の登場によって、躊躇する理由が無くなった。
「ちとちょ、対潜出来たよね!? じゃあ、そっちに入って!」
むしろ、ここで踏ん張るのは大鳳ではなく、共に戦っている比叡だ。より速く、より強く動き回ることで、泥の龍驤と大鳳を1人で引きつける。そうすれば、大鳳が艦載機を使う余裕も出るだろう。
「気合、入れてぇ! 粘ります!」
片手では刀剣を強く握り締め、片方では主砲を展開。砲撃と雷撃を交互に繰り出す泥の龍驤に対して砲撃を放ちつつ、刀を振るう泥の大鳳に対しては同じように斬撃を放つ。
1対2の様相となるものの、比叡はむしろ愉しそうにしていた。仲間達に頼られ、仲間達のために全力を出す。それがここまで昂揚する。
「今! やってぇ!」
「了解。艦載機、発艦! せめて拮抗に持っていくわ!」
このタイミングで大鳳が艦載機を繰り出す。あちら側の2人がかりの艦載機には数でこそ及ばないものの、その練度は並ではない。それこそ、艦載機が1対2でも勝ち目があるほどに俊敏かつ鋭敏に動き

回る。それはもう艦載機とはいえない。小型の浮遊要塞とでも言える程に完璧な精度。
しかし、その動きをするためには大鳳がそちらにも意識を注ぐ必要がある。龍驤のようなシステム妖精ならまだしも、ただの深海棲艦にマルチタスクはかなり厳しい。
だが、そこは大鳳――魂の混成をされた者。かなりギリギリではあるが、艦載機の操作と近接戦闘の両立を実現した。
「よし、すぐに片付けるわ。千代田！」
「すぐに出す！　艦攻隊、対潜行動！」
千歳と千代田がカラクリ人形を振るうことで、艦載機の動きが途端に変わる。制空権争いを完全に放棄したかと思いきや、一気に海面スレスレの低空にまで降下、そして、潜水艦を感知したところで爆雷を投下する。
正規空母では出来ないが、軽空母では出来る対潜攻撃。ここでその真価を発揮した。駆逐艦の対応だけでは足りなかったであろう手数が一気に増えることで、守らねばならない者を確実に守ることが出来るようになる。
「これなら手数は足りるね。海風、山風達の方へ行こう」
「了解です。今一番守らなくてはいけないのは、山風ですからね」
この状況を見た春雨と海風は、最も重要なことをしている龍驤、それを搭載している山風を守ることに専念する。
事実、潜水艦は戦場に満遍なく来ているが、山風に対しての攻撃は何処よりも激しかった。涼風が察知しているために回避出来ているのだが、他が1体なら山風には3体はいるというくらいに攻撃が激しい。
それほどまでに、龍驤による解析が気に入らないのだろう。自分のことを知られることを極端に嫌う性質だからだろうか、この解析という名の干渉は、黒幕にも確認出来ている。
「山風！」
数が増え続ける潜水艦を、春雨と海風が一網打尽にしていく。もう海中に投棄するかのように爆雷を投げ続け、泥人形はそのたびに爆散

した。
だが、命を燃やすブーストがかかっているのは大きく、それでも回避する者は当然ながら出てくる。隙をつかれることは無いにしろ、雷撃に常に意識を持っていかれるため、精神的な疲労は計り知れない。
「山風、涼風、大丈夫？」
「海風姉……うん、大丈夫。回避に専念してるから、当たらない」
「助かったさー。あたいだけだと限界が来そうなくらい狙われてどうしようかと」
そう言う涼風だが、まだ余裕が見えていたことを春雨は見逃していない。
今この戦場で、確実に成長、いや、覚醒しているのは、間違いなく涼風だ。周囲の見え方が違う。全てをいち早く察知しているのは、もうほとんど春雨の直感に近い。
無意識のうちに今までの経験に現状を結びつけ、初めての状況にも類似する状況を照らし合わせて最善の動きを選択しているように見える。
おそらく、このまま続けていても、涼風が健在ならば山風は守られ続けているだろう。だが、万が一があるため、２人は側にいることとした。その方が２人が安心するし、さらに強い力を発揮出来るだろう。
「っし、解析完了や！　耐え続けてくれてサンキューな！」
集中的に狙われている中でも、龍驤はずっと解析をし続けていた。周囲の音すらもシャットアウトして、このデータのみを見ていたことにより、出来る限りの最速を叩き出した。
龍驤は既にまともな存在では無い。見た目はこうして妖精さんとなっているが
システム妖精として、頭の中はほぼスーパーコンピュータみたいなもの。誰よりも考えが速く、誰よりも的確な事を起こすことが出来る。それを明石が制御していることで、仲間としての立ち位置を確立した。
「ほな、行くでぇ！」

ＲＪシステムがアップデート。結界を消し飛ばす領域に加え、監視の目も消し飛ばすように効果が追加された。

その瞬間、春雨が感じ取っていた舐めるような視線が一気に消えた。黒幕からの監視が、龍驤の周囲だけは完全に消え去ったのだ。

壊れた心の埋め方

仲間達が時間を稼いだことによって、無事ＲＪシステムのアップデートが完了。周囲に散布されていた黒幕の粒子が除去され、舐めるような視線のように感じた視線が失われた。

これでこちら側の手段をこれ以上解析されるようなことは無くなる……と言いたいところだが、まだまだ敵が周囲に湧いて出てくるような状況だ。潜水艦隊も全滅させたわけではないため、今でも海中からの脅威は取り除かれていない。

しかし、まだ１００％安心することは出来ない。端末を消す領域よりはかなり小さめの範囲であるため、山風達を守るために近付いてきた春雨達は範囲内に入れているが、この戦場全域にまでは到底届いていない。

「まだ見せていない手段は見せないでください。上や下から見られている可能性がありますので」

そこは春雨が念を押した。敵が減っていないということは、その敵の目を使って黒幕が情報収集を続けている可能性がある。

少なくとも、今の脅威は潜水艦。海中からの監視は確実にあり得る。粒子によるモニタリングがメインで、傀儡の目がサブと言ったところだろう。

「爆雷くらいなら大丈夫でしょ。艦娘としても潜水艦への当たり前な手段なんだからさ！」

そして、白露がすぐさま爆雷を投下。やはり龍驤を搭載している山風が狙われやすいようで、足下には潜水艦が集ってきそうだった。

「すまん、もうちょい範囲拡げる。これ上手くいったら泥人形を始末出来るかもしれへん！」

泥人形が周囲に漂う粒子と同じ成分を持っているのならば、ＲＪシステムの領域が拡がれば拡がるほど有利になる。基本的には龍驤を中心にした球形。その半径がどれだけ大きくなるかになる。今でこそ解析したばかりで波長を飛ばせる範囲にも限界があるが、システムをより最適化することによって、そちらに回せる容量が増やせるた

め、端末を消す領域と同じくらいに出来るだろう。
　そしてそれが上手くいけば、近付いた時点で泥人形は分解され、そのまま消滅することになる。戦わずして勝利する。これが最もいい勝ち方であり、黒幕の拠点に向かうための体力もしっかり残すことが出来る最善。
「やるにしても動きながらで。山風、サラトガさんの方へ」
「わ、わかった」
　次に狙われるであろう者は、偵察機を出しているサラトガだ。自分を知られたくないという性質から、偵察機なんて以ての外だ。あちらはあちらで防空の手段を持っているかもしれないが、それでも根幹から潰そうとしてくるのは目に見えている。潜水艦が山風を狙ったことからも明らか。
「向かってくる潜水艦は、あたしと海風で退かしておくからね！」
「はい、勿論。山風と涼風には傷一つ付けさせませんよ」
　それは妹だからというところも大きかった。誰がやられたってダメなのだが、実の妹なのだから、より情があるのは当然のこと。
　海中から相当な威力と精度を併せ持つ魚雷が向かってくるが、これは一斉に回避。そして、それと同時に白露が爆雷を放る。ソナーも相まって、投下した位置はドンピシャ。
　爆発したことで潜水艦諸共木っ端微塵……とまでは行かずとも、息の根を止める程の威力であることは間違いない。
「っし……死体も浮かんでくることは無さそうだね。だから泥人形ってことになるかな」
「ですね。ソナーの反応が無くなるだけです」
　白露と海風が少しだけ安堵の息を吐いた。この攻撃そのものが大惨事のトリガーにならなかったことが。
　潜水艦の全てが泥人形であると春雨は言ったものの、何かの手違いで侵蝕された艦娘や深海棲艦がいる可能性だって考えられた。今までの黒幕のやり方からしたら、むしろ速攻で投入してきてもおかしくはない。
　そもそも、海中とはいえ既に端末を消滅させるＲＪシステムの範囲

内だ。侵蝕されている艦娘や深海棲艦だったら正気に戻っているだろう。その上でまだ狙ってくるというのなら、昨日に施設を襲撃した2人の欧州姫と同じ、心の底から忠誠を誓っている者になる。
　そうなると、それが艦娘であろうが深海棲艦であろうが、もう手遅れだ。しかも、命を燃やしているということは、遅かれ早かれ息絶えることが確約済み。途中で止めるなんてことは、今の春雨以外には出来やしない。
　春雨が救いたいと思っていなければ、それでも殲滅は止めないだろうが。
「やべぇ、全部山風姉を狙い始めてっぞ！」
　涼風が察知した敵の動き。これまではそこにいる者達を満遍なく攻撃して足止めし、その戦術を監視していたが、それが龍驤を中心に見えなくなったからか、その元凶を潰しに来ている。
　それを春雨が感じ取っていないわけがなく、妹達が狙われているという事実でさらに怒りが溢れ出していた。白露と海風が殲滅するだけでは漏れが出てしまっていたため、そこをサポートするように対潜行動に出る。
　その時の春雨は完全に無表情。しかし、激情に駆られているのがわかるくらいに、怒り任せに爆雷を投げ込んでいた。それこそ豪速球を叩きつけるかのように。
「春雨、苛立つのはわかるけど、ちょっと抑えな。あたしも気に入らないけど、敵の戦術としては間違ってないから」
　そんな春雨を宥めるのは白露である。ここは冷静な時雨の気質を使って、この場を正しく見据えていた。
「わかってます。私だって同じ状況ならその根幹を潰しに行きますから。それでも、手駒の命を雑に使って自分の障害を潰そうとするその性根が気に入りません。それで妹が狙われているなら尚更です」
　黒幕が自分の手で龍驤を止めに来るのならまだしも、手駒を使い、しかも自爆特攻みたいなことを平気でやらせていることが気に入らないと春雨は話す。そうしながらも爆雷は的確に投げている分、冷静でいられなくても技術が劣化することは無い。しかし、あからさまに

激情を表に出しているため、山風は少しだけ怯えてしまっていた。
「今の春雨がそういう性質になっちゃってるのはわかるけど、こういう時こそ頭を冷やすんだよ。頭が熱くなってたら、いくら辿り着く者でも判断をミスるかもしれないよ」
「その時のためにあたいがいるんだけどね！　でも、春雨姉がこの戦いのど真ん中にいるなら、もうちょい冷えててほしいかな！」
怒りによって逆に頭は冴えていくものの、怒り任せに動いてしまうのは変えられない。それが毎度正解の動きかもしれないが、いつかそれも出し抜かれるのでは無いだろうか。毎度毎度最善の動きを取るというのは、裏を返してみれば春雨の動きは読みやすいということになる。
黒幕が微生物の群衆である場合は、望む答えに辿り着く力でもコントロールが出来ない。これは龍驤の時に実践済み。
そんな相手が春雨の動きすら監視してきているのだ。最善の動きをさせることで出し抜こうとする可能性はある。
「だからさ春雨、その怒りは否定しないけど、あたしとしては怒り方はうまく変えた方がいいと思うよ。まぁ今のアンタにはあたしのこんな言葉も苛立ちに繋がるかもしれないけどさ、お姉ちゃんの言葉は素直に聞いてみるのもいいと思う、よっと」
海中からの魚雷を軽々と避けつつ、山風にそれを回避させて潜水艦を迎撃。一撃でしっかり沈めた後、泥人形であるが故に消滅したことを確認する。
「あたいも白露姉とおんなじかな。春雨姉が怒るのもわかんだけどさ、もっと頭冷やしてみるのはどうだい。アレだ、正しい道ばっかり選んでたらつまらないって感じ」
ニカッと笑う涼風。この切羽詰まった戦場でも笑顔を忘れない。戦いに余裕がなくとも、気持ちには余裕を。思考の全てを戦いに置いていては、いざという時に即座に対応が出来ない。だからこそ、すこしだけでも余白を作る。白露や涼風はそれが出来ていた。
溢れて心が壊れ、その余白が感情で埋め尽くされてしまっているのがよろしくない。それでもこれまでは戦えてこれたし、仲間もいたの

だから負けることは無かったが、今ここはアウェー。黒幕の本拠地。未だに何をしてくるかわからないのだから、余白はかなり重要。
「……春雨姉、白露姉や涼風が言うの、あたしも間違ってないと思う……。だって……すごく辛そうだもん」
そして山風。怒りに任せた春雨は無表情だが、そこからも感情を読み取っていた。その怒りの向こう側に、微かにでもその感情、辛さが見えている。
本来の春雨からはかけ離れた感情。それが完全に消え去っているわけでは無い。現に、鎮守府に帰ってこれた時に本来の優しさと笑顔を取り戻せているのだ。ならば、この戦場でももっと艦娘の時のように振る舞えるのでは無いか。
「……大丈夫。あたしも、涼風も、こんなところで沈むような……やわな艦娘じゃないから」
簡易爆雷を海中に落としつつ、龍驤のことも多少は気遣いながら回避行動を続ける山風は、春雨が鎮守府で最後に見た時よりも格段に勇ましくなっていた。
山風だって辛いことはいくつもあっただろうに、ここでは気丈に振る舞っている。姉達が鎮守府から離れてしまい、調査隊の隊長に任命され、今はＲＪシステム搭載という堀内鎮守府のキーマンだ。今までならプレッシャーに押し潰されていてもおかしくない。
それでも、涙ぐむこともなく、山風は戦っている。海風の後ろに隠れて様子を窺うような、もう弱気だなんて言えない。
「春雨姉さんの怒り、海風にはわかります。強く正しい姉さんだからこそ、この黒幕のやり方には怒りを覚えて当然です」
最後は海風。話しながらも周囲に目を遣り、海中のみならず海上にも意識を向けながら、龍驤の邪魔をする者を処理。潜水艦にもやはり的確な対潜攻撃を繰り出し、被害無しに食い止めている。
「ですが、冷静になるべきというのはみんなの言う通りです。少しだけ、少しだけ深呼吸をしてみませんか。酸素を取り入れて、頭を回し、怒り以外の感情に目を向けてみませんか。出来なくても、するという行為が新しい道を開くかもしれません。大それたことを言っている

かもしれませんが、何卒」
春雨至上主義であっても、春雨が今以上の存在になるというのならば、今の状況を多少は否定する。春雨のためを思えばこそ。
「……ごめん、ちょっと深呼吸」
ここでさらに怒りが増すことはなく、姉妹からの言葉は素直に聞くのが春雨。言われた通り、一度呼吸を正す。頭に酸素を回し、熱くなった脳を冷やすように空気を取り入れた。
それだけで溢れた怒りが鎮静化することは無い。だが、熱くなり、怒り以外の感情を燃やしていたことで無表情になっていたものが、少しだけ表情を取り戻した。
怒るのも、ただ熱くなるだけではダメだ。要所は熱く、要所は冷たく、どちらも共存させて真の怒りとする。いくら溢れていても、そこは忘れてはいけない。
壊れた心を、仲間に、姉妹に埋めてもらう。それにより、この戦場でも静かな心を取り戻していく。それこそ、春雨がまだ艦娘だったときのように。

「Ｆｏｕｎｄ（見つけた）ｉｔ．　イロハ級が発生しているＰｏｉｎｔ、発見しました！」
ここでサラトガが声を上げる。偵察機が、イロハ級が無限に湧いているポイントを発見したようだ。しかし、
「っ……通信途絶……対空砲火を受けたようですね。守っている者がいるようです」
すぐにその偵察機が墜とされたと気付く。その一瞬、艦載機の妖精さんからの通信は、サラトガに嫌な顔をさせるのに充分だった。

「……防空巡棲姫……ですか」

道を開き

黒幕の拠点に偵察機を飛ばしたサラトガが苦い顔をした。無限にイロハ級が湧き続けるポイントを探し当てることが出来たのだが、その瞬間に偵察機が撃墜されてしまった上に、その実行犯が空母の天敵とも言える姫、防空巡棲姫であることがわかったからだ。

そのコードネームに『防空』と付けられた深海棲艦は、総じて空母に対して徹底した対空砲火を繰り出してくる難敵。その上で単体スペックも非常に高い。防空巡棲姫は軽巡洋艦ではあるのだが、その性能は戦艦を優に超えている。

「サラトガさん、どうしました」

ここで春雨達がサラトガと合流。海中から襲い掛かる潜水艦を的確に処理しながら、サラトガを守るために周辺警戒。

「イロハ級が湧いているＰｏｉｎｔは見つけました。見つけたんですが……そこを陣取っているのが防空巡棲姫なんです」

その名前を聞いた途端、龍驤以外はサラトガと同様に苦い顔をする。生まれた瞬間に黒幕の器として使われていた龍驤はその名前を聞いても脅威がわからないが、春雨達は艦娘の時に嫌というほど知っている。実際に戦ったわけではなくとも、全鎮守府にその恐ろしさは伝わっているため、この戦いが厄介な方向に向かったと気が滅入っていた。

「まずいですね……防空巡棲姫となるとサラでも厳しいです。艦載機は軒並み墜とされるようなもの……」

「拠点を空襲から守るために配備されているのでしょうね」

徹底して自分に害が無いように努めている黒幕のやり方に苛立ちが溢れかけそうになった春雨だが、先程の姉妹の教えを思い出して、すぐに深呼吸。腹は立てても、熱くならないように、せめてまだ今は冷静に。

「すまん、聞かせてほしいんやけど、その防空なんちゃらってのはどんな奴なん。ウチならそれがどんな奴かわかるかもしれへん」

ＲＪシステムをさらにアップデートしながらも、黒幕のことを最も

知っているであろう龍驤が、サラトガに問うた。
割と最近まで黒幕の下にいたのだ。しかも、黒幕が泥となってからかなりの期間を。敵に何者がいるかも知っていると言ってもいいだろう。
少なくとも、龍驤が泥化するまでには拠点に常駐するような深海棲艦はいなかった。故に、今でもこの場ではなく別の場所にいる部下はそれなりにいる。そのうちの誰かがわかれば良し。名前がわからない者も多々いるため、ここで特徴だけでも聞いておく。
「例えるのなら、Ｓｅａ（ウ）ｕｒｃｈｉｎ（ニ）です。トゲのような両用砲が特徴的な軽巡洋艦ですね」
「トゲトゲ……ああ、おった、そんな奴おったわ。チラッとやけど見たことあるで」
やはりここで情報は正義。言われて思い出すくらいにしか見たことが無いようだが、少なくとも龍驤にはその姿に見覚えがあるようである。龍驤が既に器では無くなっていた時期に、知らない間に加わっていた者として認識しているようだ。
当時は自身の勢力を増やし、人海戦術で本来の器――中間棲姫の居場所を探るつもりだったようで、さらには今でこそ端末という自己増殖までする便利な洗脳アイテムがあるものの、その頃は黒幕自身、もしくは黒幕から切り離された一部が中に入らなければ手駒に出来なかった時期。
手当たり次第に切り離した泥を設置していた結果、古鷹のように近場を通ってしまったことで、もしくは近場に生まれてしまったために、その運命が捻じ曲げられた。
「そいつ、最終的にどうなったかは知らんけど、混成候補やったはずや」
「混成候補……？」
「ウチや白露みたいにな、魂混ぜて強化する候補っちゅーことや。より強い手駒にするための代表ってことやな」
苛立ちが増したため、春雨の深呼吸は止まらない。冷静でいたいのだが、黒幕のやり方が気に入らない。

魂の混成がされているということは、強化されている上に犠牲者がさらに増えているということ。大体４人の融合体として考えるのが妥当であるため、その防空巡棲姫にも３人入っていると考えていいだろう。潜水艦姉妹は例外だが。
「ウチが出て行っている間に混ぜられとったのかもしれん。いろいろされたんは、多分ウチが泥になってからや。それまでも疎遠だったけど、何がどう混ざってるのかはスマンがわからへん。実際は誰も混ざってないかもしれへんし」
それくらいしか情報が出せなくて申し訳なさそうな龍驤に、大丈夫だと返すのは春雨……ではなく涼風だった。今の春雨は冷静になるのに忙しい。深呼吸をしながら、白露と海風の手を握っているくらいだ。
姉妹の力を借りてでも冷静になろうとしているのはいいことであるため、誰も否定しないし口も出さない。
「とにかく強い、と考えればいいですね。空母にはかなり重荷であることは間違いありません」
「せやな……いや、ウチはもう空母じゃあ無いんやけど、対空の怖さはわかるわ」
全てが高水準な上、対空性能は群を抜いているのだから、空母にとっては天敵どころの騒ぎではない。
「……ふぅ、すみません時間を貰いました。まずは現状を打破して、ほぼ全員で向かいたいところですね」
ようやく落ち着くことが出来た春雨が、ここからの流れを大まかに考えた。
空母が厳しいというのなら、他の者達でどうにかするのが普通。それほどまでに強力な姫ということならば、出来ることなら戦艦には来てもらいたい。
「システムの拡張はもうちょいや。それが出来たら泥人形もある程度は抑制出来ると思う。そこで一気に押し込む……っちゅーのはどうやろか」
話しながらもＲＪシステムの範囲は拡張され続けている。最初は

半径も数メートルというところだったが、秒単位で拡がっていき、あと数分もすれば端末を消滅させる範囲と同等までになるだろう。
　それまでの時間は、押し寄せてくるイロハ級と泥人形を殲滅し、前進する余裕を作る方がいい。そろそろ武蔵と大和の一斉射も厳しくなってくる頃合いであるため、力を温存するためにも、なるべく早く前進したいところ。
「それが一番でしょうね。行かねばならない場所もわかりましたし、ここにいるモノを全て殲滅した後、真っ直ぐ向かいましょう。ある程度は斃し切らなくても、進まないと話になりません」
「あたし達は潜水艦をどうにかして、あとはみんなに頑張ってもらおう。それまでにシステムの拡張は出来るはず」
「ですね。じゃあ、潜水艦は手分けして殲滅で。山風と涼風は、出来る限り回避に専念でいい？」
「がってんだ！　今はシステムの拡張が優先だもんな！」
　山風は対地のために温存。あくまでもＲＪシステムの搭載艦として、今は生存を優先。涼風は全体を見極めるために攻撃よりも回避を優先。これでこの戦場を自分達に有利な場へと変えていき、勢力を確実に前進させる。
　サラトガのおかげで向かわねばならない場所がわかったのだから、最短距離を進める。こうしている間も、サラトガは次の偵察機を発艦させ、他にも無限にイロハ級が湧いているポイントが無いかを確認する。１箇所だけと高を括っていたら、実は回り込まれていましたとなったら大惨事だ。複数箇所あるのなら、部隊を分けて対処するか、全員で纏まって行くかを考えなくてはならない。

　湧いて出てくるイロハ級を一網打尽にしている武蔵も、流石にここまで長々と一斉射をすることは無かったため、一時的にそれを止めた。大和も初めての一斉射であったこともあり、武蔵に倣って一斉射を中断。
　これによって、眼前の敵はことごとく粉砕されたことを２人は自覚

した。あまりに撃ち過ぎると、爆炎と爆音で目の前が見えなくなるようである。
「大和、そちらはまだ行けるか」
「勿論。まだまだ行けるわ。そちらこそバテてない？」
「論外だな。これでも今まで艦娘の頭を張り続けていたのだ。この程度で疲れを見せるわけがない」
ニヤリと笑みを浮かべながら一斉射ではなくピンポイントの砲撃で現れたイロハ級を一撃で粉砕する。その砲撃は融合をするイロハ級くらいならば纏めて焼き尽くしてしまうほどに強力。むしろ障害が無ければ融合を促して纏めて始末する方が効率がいいとすら思える。
しかし、そう簡単には行かないのがこの戦場。強化された戦艦が武蔵の砲撃を盾で防ぐくらいはするのだ。無防備な融合中を狙わせてくれるわけが無い。
「だが、そろそろ前進しないとまずいな。まだ黒幕の島も見えていないぞ」
「このまま消耗させられる……と考えるのが普通よね」
あまりここで足止めを喰らうと、ただただ消耗させられ、いざ黒幕との決戦となった時に体力が尽きて何も出来ないという可能性もある。
武蔵と大和は特に火力が高いため、最終決戦でもその力を遺憾なく発揮したい。逆に言えば、黒幕側から考えれば真っ先に消耗させておきたい存在でもある。
勿論一番に排除したいのは自分のことを探ってくる者のようだが、その次となると火力が高い順となるだろう。
「だが、敵の動きが変わってきたな。龍驤の力が発揮されてきたか」
もう一度砲撃を放ったところ、先程はその砲撃を受け止めた盾持ちの戦艦が受け止めきれずに吹き飛ぶ。粉砕とまでは行かなくとも、先程はその場で持ち堪えられていたことを考えると、泥による強化が微妙になっていると感じた。
命を燃やすブーストにもＲＪシステムが効き始めており、敵の猛攻

は少しずつだが抑え込まれている。それは、この戦況をひっくり返すには充分だった。
「大和、ど真ん中をぶち抜いてやれ！」
「ええ！　今まで止められてきたんだもの、一掃するわ！」
　武蔵の砲撃が簡単に通用するのなら、大和の砲撃は尚更だ。改二改装されたことで更なる力を得た大和は、今や武蔵のそれを超えている。
　その砲撃は群れを一網打尽にし、一直線に道を作るほどであった。火力が上がっているのではなく、敵が脆くなっている。それがすぐにわかるほどだ。
「行ける、行けるぞ。これならばこの群れを突き抜けることが出来る！」
「私達が道を作ります！　どちらに向けて撃てばいいですか！」
　最大の火力を以てして、無限に湧くポイントまでの道を作り上げる。多少撃ち漏らしがあっても、今の弱体化が入れば２人ほどの火力が無くても問題なく処理が出来るはずだ。
　現に、同数での戦いをすることになった比叡と大鳳のペアも、ＲＪシステムの拡張によって弱体化した泥人形の隙を見逃すことなく、一瞬で斬り捨てた。これはもう粘り勝ちと言えるくらいである。
「案内します。サラの艦載機に続いて！」
　偵察機を続けながらも、サラトガの艦載機の１機がチカチカと光で合図を送り、ポイントがあるであろう方向を指し示した。
「大和、もう一回だ。一斉射で土手っ腹に穴を空けてやるぞ！」
「それで行きましょう。それじゃあ、一斉射！」
　ポイントまでの一点に集中するように、武蔵と大和は砲撃を放つ。これまでの一斉射も激しかったが、周囲を一掃するのではなく、一点突破の猛烈な火力。戦艦の盾であろうが、他のイロハ級の身を張った妨害だろうが、一切お構いなく薙ぎ倒していき、最終的にはまるでモーセの十戒の如く道が開く。
　時間をかければまたその道が閉じてしまうだろうが、そこは２人が機転を利かせ、開いた道をさらに拡げるように一斉射を左右に拡げて

いく。これによって、道は徐々に大きくなっていった。

そしてその先、道の向こう側に、イロハ級とは違う姫の存在が確認出来た。群れによって見えていなかったというわけでは無いのだが、サラトガの艦載機を処理するうちに若干前に出てきていたのだろう。

刺々しい両用砲を身に纏った姫、防空巡棲姫。その姿を捉えた。

最後の姫

ＲＪシステムの拡張、サラトガの偵察機、そして武蔵と大和による一斉射により、イロハ級が無限に湧いて出るポイントまでの道が開く。

そしてその向こう側。まだ島も見えていないような場所ではあるのだが、少しだけ前進してきていた防空巡棲姫の姿を捉えることが出来た。

「Ｐｏｉｎｔから少し離れています。サラの艦載機を墜としに来たみたいですね」

サラトガとしては移動してくるとは思っていなかったものの、多少釣れればいいかなと思っていたところに移動してきてくれたので、これはラッキーと素直に喜んだ。

拠点を守っているのではなく、イロハ級の源泉を守っているというイメージ。しかし、そこを守ることが出来れば拠点も守れることに繋がる。サラトガの偵察隊でそこまではわかっていた。

今この戦場と源泉、そして黒幕の拠点は一直線上。この防空巡棲姫を撃破出来れば、そのまま黒幕の元へと向かえる。結果として、これが黒幕に向かうための最後の戦い。本当の前哨戦と言える戦い。

「奴を斃せば！　残りは黒幕だけだそうだ！」

武蔵が戦場に響き渡る声で叫ぶ。それは鬨の声となり、その場にいる全員の気合へと繋がる。ＲＪシステムのアップデートによって弱体化した泥人形をことごとく薙ぎ倒し、一斉に防空巡棲姫を見据えた。

「防空巡棲姫!?　私達じゃ分が悪いわね……」

「なら、今は徹底的に潜水艦を叩く。あとはイロハ級の群れを少しでも減らせるように！」

ちとちよ姉妹も当然ながら防空姫の脅威は理解している。自分達では分が悪い。勝てないとは言わないが、大きく消耗させられることが確定する。ただでさえまだ黒幕がいるのがわかっているのに、ここで消耗するのは得策ではない。

むしろ、あの姫をここに置くくらいに空襲を嫌っているというのなら、それだけ空母の力が黒幕との戦いで必要になるということにもなる。ならば尚更、防空巡棲姫に空母をぶつけるのはよろしくない。
「コロ助！　アンタが突っ込みなさい！」
ここで叢雲がすかさずコロラドに指示を出した。開いた道を閉ざさないように、その道に突っ込ませようという考え。他にも突撃は誰でも出来るだろうが、ここであえてコロラドに言ったのには、勿論わけがある。
「ったく、アンタに言われるまでもないわよ！　誰か付き合いなさい！　突撃するわよ！」
当たり前のように白鯨を展開。この戦場では二度目の展開となるのだが、まだまだ疲労は見えない。
この質量があれば基本的にはどんなイロハ級でも一切受け付けずに全てを轢き潰すことが出来るだろう。泥でブーストされていようがお構いなし。単純明快なサイズの暴力は、如何なる壁をも吹き飛ばす。
「便乗するよ。何かあったらすぐ降りる」
「おうっ、私も乗せてね！」
そこに川内と島風が便乗。敵の群れに一気に近付き、そこからはスピードで掻き回す。防空巡棲姫までの道のりを開き続けるために、あらゆる手段を使わねばならない。質量とスピードの同時攻撃だ。
だが、それが軽々と通用するのはイロハ級のみ。防空巡棲姫は冷ややかな瞳で白鯨に目を向ける。
「……これ以上、行かせないよ」
そして、恐ろしいことに白鯨の突撃を片手で止めてしまった。
「は……!?」
衝突の際の衝撃と同時に、急ブレーキをかけられたことによる反動で、川内と島風は咄嗟に飛び降りたものの、コロラドはその場に投げ出されることになる。
こんなことが出来るものなど、今までに見たことがない。おそらくだが、島にいる絶好調な状態の飛行場姫や潮でも、片手で白鯨の突撃

を止めるだなんてことは出来ないだろう。
白鯨から投げ出されたということは、今のコロラドは空中にいるということになる。そして、防空巡棲姫は対空に特化した姫。
そこから繋がるのは1つ。上にいるものを全て撃墜する。そして、コロラドは上にいる。
「叩き落とす」
まるで、戦艦主砲を真上に向けて放ったかのような対空砲火。そして密度もおかしい。艦載機を全て墜とすために放たれるそれは、それこそコロラドには壁が押し寄せてきたかのように感じた。
まともに喰らえば命はない。まともに喰らわなくても相当厳しい。だからといって空中では回避も何もない。だがコロラドにはまだ手はある。
「そんな呆気なく、このコロラドがやられるか！」
カニの甲羅では全てを守るのは不可能。ロブスターの鋏は論外。ならば、ここで展開するのはもう一度白鯨だ。
止められた白鯨を即座に消し、間髪容れずに再展開。超大型の艤装であるが故に、消すのも展開するのも簡単では無いが、そこは無理矢理出力を上げることによってギリギリで展開完了。
空中で巨大な艤装が展開されたことによる衝撃は相当なものだったが、防空巡棲姫はびくともしない。
放たれた対空砲火は白鯨の内部に包まれるようなカタチとなり、そのまま爆散。白鯨もその場で四散する羽目になる。
その反動は当然コロラドの方にも響くことになり、一気に体力を持っていかれてしまう。とはいえ、スタミナ不足を克服した今ならばまだ戦える。傷を負っているわけではないのだから、何も問題はない。どうにか着水し、すぐさま次の攻撃のために杖を構える。
「ダメだよ。やらせないから」
対空砲火の直後だというのに、両用砲をそのまま左右に下ろして放った。そちらには咄嗟に白鯨から降りていた川内と島風の姿が。
イロハ級を掻き分けつつも、防空巡棲姫に主砲と魚雷を放っていたが、両用砲の一撃によって全てが粉砕され、かつ、まるで止まる気配

もなく2人に襲い掛かる。
　こちらは既に着水出来ていたおかげで、持ち前のスピードを活かしてすぐさま回避。その火力は掠るどころか、近くを通り過ぎるだけでも衝撃で吹き飛ばされそうな程であったため、かなり大きめな回避を要求される。
　イロハ級の群れはそんなものを喰らったらひとたまりもない。相変わらず敵味方問わずの無差別攻撃なのだが、今回はイロハ級も泥のブーストがかかっているからか、防空巡棲姫の砲撃を避けつつ、川内と島風に追撃するという賢い手段を使ってきた。
　ある意味、敵の群れが一丸となった連携。もしこれで敵が誰かを捕らえたとしたら、そのまま命を使って砲撃から回避させないという最悪な手段に打って出るだろう。そのため、捕まることも許されない。
「動きを止め……っ」
　防空巡棲姫は視界の中に入っている。ならば、今の春雨ならば防空巡棲姫に対してその力が使える。今回の望む答えは、『動くな』。泥人形にも使った手段だ。
　しかし、今でこそＲＪシステムが拡張されているため見られてはいないが、ついさっきまではそれも見られていたのだ。春雨の視界に入ってはいけないという学びを得ているため、当たり前のようにイロハ級が視界を遮ってくる。
　未だその効果を貫通させることが出来ず、複数体を対象とすることも出来ない。視界に入っている最も近い者の動きは止まったものの、防空巡棲姫は止まることなく砲撃も止まらない。
「学習されてる……っ」
　小さく舌打ちをする春雨だが、冷静を心がけて呼吸を整えた。ここで怒り任せに行動していたら確実に敵の思うツボ。
　やはり怒り慣れている叢雲とは違い、ほんの少しの怒りで冷静さを失う春雨は、こういう時に厳しい。もう怒りと相乗りしているつもりでいたが、元来優しい性格の春雨には慣れること自体が出来ないのかもしれない。
「……あれ、ただの防空巡棲姫じゃ、ないよね……」

そんな中、冷静に状況を判断した山風がボソリと呟く。
「ああ、やっぱり混ぜられとる。それに、アイツ侵蝕も無い状態で敵対しとる」
山風の言葉に同意しながらも、領域内に入ったために防空巡棲姫を分析しながらわかったことを話していく龍驤。
少し前進してきている時点で、端末を消す領域には足を踏み入れている。つまり、何もされていなくても黒幕に従っているということに他ならない。施設を襲撃した欧州姫と同じか、また違った理由で従っているか。
さらには泥人形のように動きも悪くならないことから、単純なスペックが異常に底上げされている可能性が高い。それこそ魂の混成により他者のスペックを自分のモノにして、反発すら起こさず全てプラスにしているような。
「ごめん、やっと追いついた。で、アレに混ざってるのが何か、だよね」
ここで吹雪が合流。その観察力を使って、防空巡棲姫の正体を看破しようとする。それには動きを見なくてはいけないため、少し時間がかかる。
「江風が前に出る！　春雨の姉貴、目の前開きゃあいいンだよな！」
「お願い！」
江風も加わるが、止まらず直進してイロハ級の群れに向かっていった。春雨も動きを止めたイロハ級を確実に始末しているが、それだけでは足りないくらいの数が現れては視界を塞いでくる。
今最も勝率が上がる戦術は、春雨の視界を拡げて防空巡棲姫に対して力を発揮させること。ならば、自分が率先して敵を殲滅し、少しでも数を減らすことに尽力するべきと判断した。
「潜水艦も春雨姉さんを狙うようになってきています。やはりその力を危険視しているようです」
「ついさっきまで見られてたからね……私が『辿り着く者』ってこともわかってるだろうし、群れを使って止めてくるよ」
龍驤のシステム拡張を止めるために山風を強めに狙っていた潜水艦だが、ここまで来てしまったらもう無意味と考えたか、狙いを山風

から春雨に変更。今最も邪魔なのは『辿り着く者』であると理解し、早急にこの場から排除する方向に路線変更してきた。
　山風が狙われることも見過ごせないが、春雨が狙われることはさらに気に入らない。春雨が自己防衛出来るとしても、海風が動かない理由が無かった。山風を守るように、春雨を守る。
　視界を邪魔するのは春雨のみ。他の者には防空巡棲姫の動きが見える。そこから過去の知識を持ち出して、何が混ざっているかを分析する。龍驤に対して北上がやったように、吹雪と涼風がそれに専念する。
「砲撃は戦艦。あれだけ強いなら、大和さんか武蔵さんが入ってる」
「多分武蔵さんだ。あたいも結構喰らったからわかる。大和さんよりも力押しな感じがすんだよ」
「だね。対空は本人……だけじゃないね。アトランタさんが入ってる可能性が高い」
「秋月型の誰かってのはどうだい」
「それもあるけど、撃ち方に癖がある。多分アトランタさんで確定」
　ありったけの知識と問答形式で考えを纏めていく。防空巡棲姫に含まれているのは、今のところわかる限り少なくとも2人。力押しの凶悪な砲撃が可能となる戦艦武蔵。本来持つ対空性能をより上げるための防空巡洋艦アトランタ。
　だがそれだけでは利かないこともわかる。それに、1つ謎がある。
「でも、武蔵さん入れるんだ」
「どういうことだい」
「黒幕が一番恨み持ってそうでしょ。中間棲姫にトドメを刺したの、うちの武蔵さんだよ。艦娘の中でも一番気に入らないんじゃない？」
　言われてハッとする。ただでさえ艦娘への逆恨みで溢れて泥となっているのに、その元凶となるであろう武蔵をこうやって利用するのは少し驚きである。あらゆる艦娘を使っても、武蔵だけは徹底的に潰してもおかしくない。
　しかし、そこで嫌な考えにも辿り着く。
「気に入らないからこそ、素材に使ったとか」

「うわ、それすごいあり得る。尊厳を壊すために、最強の力を持つ武蔵さんをただの素材に使ったなんて、趣味が悪いね」
「……じゃあさ、あの防空巡棲姫……何人もの武蔵さんが入ってるなんてこと……」
涼風が辿り着いた答え。それは、あの防空巡棲姫には、ありったけの武蔵が使われているということ。その力を全て取り込んだことにより、コロラドの白鯨すら片手で止めてしまう膂力を手に入れているという考え。
ただその力を吸い尽くし自分のために使い、恨みを持つ艦娘を徹底的に凌辱する。これが黒幕の恨みの晴らし方だとしたら、相当にタチが悪い。
だが、これまでのことを考えるなら、黒幕はそういうことをやりそうだと思われる。嫌がらせに特化しているのだから。
「そうなると、結構厄介だね。あれ、冷静に力押ししてくるようなものだよ。何人もの武蔵さんが」
「単純な戦力として一番ヤバいってことかい。なら、出し惜しみもダメなんじゃないかい」
「黒幕が奥にいるってのにね」

防空巡棲姫をどうにかするためには、一筋縄ではいかないことがわかった。だからといって、ここで全てを出し尽くすわけにもいかない。

勝つためには

吹雪と涼風の分析により、現れた最後の姫である防空巡棲姫は魂を混成された存在、しかもアトランタの他には複数の武蔵が入れられているのではないかということが判明した。そうでなければあの膂力は説明出来ないし、対空砲火が一斉射のような火力を誇るだなんて聞いたことがない。

「他にも混ざっていそうなのは」

「いるとは思うけど、わからないくらいに混ざってる。多分だけど、ありったけを混ぜたんじゃないかな。何人もの武蔵さんとバランスを取るために」

それが何者かはわからない。混ざっているだろうアトランタは特徴的だったようだが、他の魂は見えないようである。しかし、それだけでは利かないくらいにあらゆる戦術を使ってきた。

防空巡棲姫と相対しているコロラド、川内、島風だけでは一切止まる気配がない。一斉射のような対空砲火、白鯨すら素手で止める膂力、さらにはこのタイミングで新たな戦術を見せる。

「鎖……!?」

身近であるコロラドは当然のこと、最も疎遠であろう川内すらも、合同演習の時に見た、錨が先端についた鎖を振り回す攻撃。打撃にもなりつつ、拘束にも繋がり、もしこれに捕らえられた場合は、両用砲から放たれる超絶火力をモロに喰らって即死。万が一避けられたとしても、白鯨すら止める膂力で引っ張られようものなら、縛られた場所が引きちぎられる。

この鎖の使い方は、どう考えても白露の扱い方。むしろ、白露の中の村雨の使い方である。

「んなもん当たって堪るか！」

流石に危機感を覚えたか、川内が鎖の先端の錨を狙って砲撃。それは見事に命中し、鎖による捕縛は逃れることが出来る。

しかし、その瞬間にとんでもない速さで川内に近付いており、気付いた時には蹴りを繰り出した脚が川内の横っ腹に食い込んでいた。

「つぎ……っ!?」
咄嗟に腹筋に力を入れるが、そのダメージはとんでもない。まるで車に衝突されたかのような一撃を受けたことで、そこから海面に叩きつけられるように飛ばされる。
致命傷にはならずに済んだものの、骨がミシリと音を立てたかのような感覚。この一撃で中破と言ってもいいほどに。
「あの速さ……私!?」
気付いたのは、その戦場に立つ島風。根本的な速さが自分と同じと感じた。脚の使い方は少々見えづらかったものの、突発的な加速力と、その勢いは、紛れもなく島風の速さ。
それと同じことがやれたのは、かつてまだカタチを持っている時の龍驤。混ぜ込まれた島風の力を使い、砲撃に追いつくのではという速さを発揮していた。
「川内さん!?」
「ったた……大丈夫、まだやれる。軋むけど、死に足は踏み入れてないよ」
吹っ飛んできたところに追いついた雷が駆け寄るが、川内はまだ自分の足で立つことは出来た。痛みを堪えているのは一目瞭然だが、本人がやれるというのだからやる。
大塚鎮守府の教えを守り、感情を表に出さない。それは、痛みなども同じことだ。いくら痛かろうが冷静に乗り越えねばならないのが命懸けの戦場。仲間がいても、それが出来れば勝率はグンと上がる。
これだけやれば、防空巡棲姫に混ぜられたものが何かは誰にでもわかる。
それを言葉にしたのは、この2人の分析が僅かに聞こえていた春雨。防空巡棲姫を止められる場所を探すために周囲を動きつつ、吹雪と涼風の分析に加えるように意見を伝える。
「多分さっきの泥人形が全部混ざってるって考えた方がいいと思う。向こうには全員分のデータが残ってるみたいだし」
つまり、今まで敵対した者、白露から龍驤までの全員分が、あの防空巡棲姫に混ぜられている。能力をコピーした泥人形が作れるのだ

から、手駒として使った者達の能力は泥というカタチでバックアップ済み。そこからコピーして作り出した泥人形を魂の混成に使うことも出来たのだろう。

この土壇場でそこまでのインチキを繰り出してきたのは、嫌がらせ以外の何モノでもない。敗北を喫した艦娘達相手に、どこまで尊厳を破壊出来るかの限界を求めているようにしか思えない。

自分を殺した武蔵を素材扱いとし、一度手に入れた手駒は最後の最後まで使い倒し、徹底的に自分の力ではなく大嫌いな艦娘の力を練り合わせたモノで艦娘達を始末する。この陰湿さ。嫌がらせの極致。

流石の春雨も、怒りを通り越して呆れてしまっていた。あくまでも自分の手を汚さない――混ぜるのには自分の手だから汚れてはいるのだが――そのやり方は、もう逆に感心せざるを得なかった。あまりにも徹底しているのだから。

「あれだけ混ぜられたら、感情なんかも消し飛ぶよ。私達はその実例を知ってるし」

大量に混ぜ込まれているとわかるもう一つの理由が、ちょくちょく聞こえる防空巡棲姫の言葉である。あまりにも感情が乗っていない。まるで施設に残っている潜水艦姉妹のようだった。今でこそあの姉妹は施設で生活したことで無表情ながら感情を取り戻しているが、この防空巡棲姫は施設に所属した直後の潜水艦姉妹に近い。

身体からして、基礎の部分は防空巡棲姫なのだろう。しかし、大量の魂を混ぜ込まれて、自分が認識出来なくなり、結果的に全てを失った。泥人形まで入れられているのだから、壊れてしまうのも当然である。そこから、黒幕の傀儡として確立したのだろう。

施設を襲撃した2人の欧州姫のように忠誠を誓ったのではない。何もわからないのだから黒幕に従わざるを得ないのだ。そもそもが侵略者気質の深海棲艦というのも相まって、もう善悪の区別もついておらず、黒幕の言うことが絶対というカタチに形成されてしまっている。

潜水艦姉妹とはまた違った育てられ方である。あちらは依頼というカタチで自分の思い通りにコントロールしていたが、防空巡棲姫は

より手駒として扱っているイメージ。そこはやはり、自分でやっているにもかかわらず、武蔵が含まれていることが気に入らないからか。理不尽にも程がある。

「ということは、もう救えないってことでいい？」

非情ではあるが事実を述べる吹雪に、春雨は首を縦には振らない。春雨自身も怒りが溢れて殲滅だけを考えたいところではあるのだが、深呼吸と姉妹の温もりによって冷静さを取り戻してきている分、まだ他に選択肢が無いかを考えるくらいの余裕はあった。

とはいえ、そう考えているうちに仲間がやられるようなことがあったら、容赦なく叩き潰す。先程川内がやられたのを見たことで、また下げた怒りのボルテージが上がってきている。

しかし、防空巡棲姫の今の在り方を見ていると怒りよりも先に憐憫の情を覚える。

今までにもいたが、いいように使われて、本人の意思すら塗り潰されて、命すら摩耗され、ここの戦いのために散らされる。今までの情報からして、あの防空巡棲姫はこの戦いが終わったら燃え尽きるだろう。

勝っても負けても死ぬ。ただただ艦娘に対して恨みを持つ黒幕の手駒――捨て駒にされるその在り方が、あまりにも憐れだった。

「救えるものなら救いたいよ。こんなにイライラしていても、あの防空巡棲姫は可哀想だって思えるから。でも、手を抜くなんて出来ない。だから……」

「救えれば救う。それでいいよ。救われないくらいに堕ちてるなら、死こそ救済になると思う。情を持ってたら勝てるものも勝てないからさ」

今まで数々の修羅場をくぐってきた吹雪からのその言葉には、春雨も頷かざるを得なかった。

意地でも救うという気持ちでやったら、傷付かなくてもいい者まで傷付く可能性があるのだ。一番守らねばならないのは仲間。言い方は悪いが、防空巡棲姫は仲間ではない。もしかしたら仲間になってくれるかもしれないというだけ。それでも確率は低いだろう。

ならば、今まで群れとして出てきて、今でも出てきては散っていくイロハ級と同じように殲滅の対象とした方がいい。意思があるから救うというのも不公平だろう。
「で、なんだけど、ちょっと作戦があるんだよね」
さらに吹雪は続ける。
「ここで全員が戦うのは得策じゃないと思う。防空巡棲姫……の裏側にいる黒幕の狙いは、こちらの手札を全部切らせることだと思う。あわよくば鏖殺ってところじゃないかな」
「あたいもそれは思ってた。それにあれ、まだ命燃やしてないと思うんだ。時間を使わせるっていうのもあるんじゃないかい」
「だね。それであそこまで強いってことは、命ブーストかかったら本当に手がつけられないよ」
あれでまだ全力では無い。それを聞いたらゾクリと悪寒が走る。それが本当ならば、魂の混成の最終系みたいなアレをどう止めればいいのだろうか。
それに、命まで燃やして戦い始めたらどうなってしまうのだ。それこそ、誰にも敵わないくらいの力を見せつけながら、屈指の戦闘力を持つ者達ですら瞬殺していくのを、ただ見ているだけにさせられるだけになりかねない。
「だから、ここで部隊を半分に分けるべきだと思う。ここで時間を食ってたら、もう黒幕は倒せないよ」
これは英断だ。全員で黒幕に行きたい気持ちはあるが、防空巡棲姫に全員で戦い、手の内を殆ど明かした上に消耗した状態で黒幕との連戦というのは、向こうの思うツボ。確実に勝てる状態で黒幕が現れるとしたら、もうそこから逃げられないと考えてもいい。
ならば、全力で戦える半数を黒幕に送り込み、全力で戦える残り半数で防空巡棲姫に立ち向かう方が勝算があると吹雪は考えた。
今でさえ、全力で立ち向かってもまるで太刀打ち出来ていない。まだ3人とはいえ、このままでは簡単に全滅させられてしまう。
「私はこっちの指揮をする。島風ちゃんもこちらに貰いたい。涼風ちゃんは黒幕方面に。あとは、黒幕と戦えそうなのを黒幕にぶつけ

る。多分私の定石が通用しないからさ、いろいろ出来るヒト達を使うべき。代わりに防空巡棲姫は定石でどうにか出来そうだから、艦娘でもどうにかなる」
　吹雪の目からは自信しか感じられない。救えるなら救うというのは、春雨でなければ出来ないことではない。
「わかった。多分艦種とかそういうのも関係ないと思うから、戦えそうなヒトを選出する」
「うん、お願い。それじゃあ……」
　首を軽く回して、指をポキポキと鳴らす。そして、防空巡棲姫を見据えた。
「行きますか」
　タンと海面を蹴った瞬間、島風と殆ど同じ、いや、それ以上の速さで防空巡棲姫に突撃した。
　この移動方法は、春雨のやり方と同じ。一瞬脚部艤装を出す時の衝撃を使った跳躍。元々吹雪はそういう戦い方が出来るのだから、この手段も簡単にやってのける。

「悪いけど、貴女達の思い通りにはさせないから」

思いを背に

防空巡棲姫の力を確認した後、吹雪の作戦により部隊を二分することとなる。戦いながら選出するのは難しいものではあるが、そこはもう春雨お得意の直感的な選出でそこをどうにかする。

その時間は吹雪が稼いでくれるようで、猛烈なスピードで防空巡棲姫に突撃。あっという間に間合いを詰めた。

「今はシステムの範囲内かな。でも、アレはあまり見せない方がいいよね。コレの視界も黒幕に行っちゃってるかもしれないし」

などと言いながらも、脇腹狙いの蹴りーー先程川内がやられたことの意趣返しーーを繰り出す。今回はただの蹴り。

「ヒトが多いね。でも、行かせない」

その蹴りは、さも当然のようにキャッチしてしまった。艤装で守るという手段もあっただろうが、その瞬間の吹雪の速度に艤装展開が追い付かなかったようである。それでも素手でガード出来る分、瞬発力はかなり高い。

先程の白鯨を片手で止めるだけの膂力で握り潰せば、その時点で吹雪の脚は使い物にならなくなるのだが、これをこのまま掴んでいたらまずいと思ったか、すぐに手放して間合いを取った。すると、今この時まで防空巡棲姫の頭があったであろう場所を、掴まれていないもう片方の脚が通過した。

そのままでいたら、蹴りが入った瞬間に脚部艤装を一瞬だけ展開して、渾身の一撃を入れていた。入っていたら、今この時に防空巡棲姫の首が飛んでいた。

「判断力も高いんだ。感情が無い分、そっちに全部振られてるのかな」

すかさず砲撃で追い討ち。回避直後を狙っていたのだが、こちらは艤装を瞬時に展開。駆逐艦の主砲では、艤装どころかそこからハリネズミのように生えている両用砲にすら傷を付けることが出来ない。

この火力の無さは吹雪の唯一の弱点となる。駆逐艦なのだから仕方ないのだが、敵装甲を軽々貫くような一撃はどうしても繰り出せない。代わりに得ているのが近接戦闘でのあの一撃。これまでもこれ

からも、その手段を見られてしまうのが厳しいため、あまり何度も使えないのも辛いところ。
故に、それをどうにかするのが仲間達だ。春雨が選出しなかった者達と協力して現状を打破する。

「誰を選ぶか……」
その選出をしていく春雨。黒幕との最終決戦に必要なのは、ただ強いだけではない。あらゆる状況に対応出来ることが重要。たった1人でどうにかしろとか言っていない。連携による相乗効果があれば充分。
絶対に向かわねばならないのが春雨、そして山風である。春雨は言わずもがなだが、山風はＲＪシステムの装備者であるため、現場で解析が必要である上にその場でも端末や他の粒子も無効にし続けなくてはならない。
それ以外では、春雨が向かうのだからダメだと言ってもついてくる海風と、吹雪の推薦もあってその場の指揮まで見込まれた涼風。この2人は絶対である。特に海風は、春雨の安定のためにも必要不可欠な存在であるため、必ず来てもらわなくては困る。最早共依存と言われても否定は出来ないが、2人ともそんなこと気にしない。
「……とりあえず、進もう。みんなに道を開けてもらって、私達は黒幕のところに行かなくちゃ」
「はい、お供します。山風、涼風、最大戦速で突き抜けるけど、大丈夫よね？」
「当たり前さー！　駆逐艦のすばしっこさ、ここで見せつけてやんなくちゃね！」
「……大丈夫。龍驤を振り落とさないようにするだけだから」
「ウチもしっかり掴まっとるから心配せんでいい。命綱も結んどるしな」
残りの決め方はかなり雑になる。恨みが深い順なんて言ったら、おそらく全員が同率。だからむしろ、ここまでの戦いを全て見てきた春

雨の直感に任せるしかない。如何に吹雪といえど、今までに姿形を見せないだけでなく、泥という謎の存在相手では作戦の立てようが無かった。
「山風、対地要員は誰？」
「あたしと……荒潮ちゃん」
「よし、じゃあ直感的に選ぶよ。白露姉さん！　江風！　荒潮ちゃん！　叢雲ちゃん！　古鷹さん！　大鳳さん！　サラトガさん！　金剛さん！　黒幕側に行きます！」
　この選択は本当に直感。このメンバーなら黒幕にも通用すると感じ取ったからこその選出。直感の中にもある程度は根拠がある。
　そもそもあちらは拠点を自分自身としていることを考えて、対地攻撃が確実に通用する。故に、山風は元々確定だったとして、荒潮も１００％採用。さらに極端なことを言えば、白露や海風も深海棲艦であるが故にその場で対地攻撃が可能であるため、こちら側に入る。これによって駆逐艦の対潜要員が全員引き抜かれてしまったことに繋がるのだが、千歳と千代田がそちらをカバー出来るため良しとした。
　制空権ーー艦載機が扱えるものとして選出されたのが大鳳とサラトガ、そして例外的に可能な古鷹。防空巡棲姫がいないならば、空襲が大きく通用すると考えた。千歳と千代田は先述の通り対潜要員としても考えているため、結果として選ばれた者に。
　そして、最大火力となる戦艦は金剛、そこに同じように艤装が扱える大鳳と古鷹。大鳳と古鷹は役割をいくつも持つことになるのだが、その分、防空巡棲姫との戦いに戦力を残せるという意味でも非常にありがたい存在。
「コロラドさん、そちらをお願いします！」
「Ｌｅａｖｅ（任せ）　ｉｔ（な）　ｔｏ（さ）　ｍｅ（い）！」
　施設の仲間の中で唯一、コロラドだけは防空巡棲姫との戦いに置いていかれることとなる。これは別に拠点での戦いには不要とかそういうことではない。コロラドは拠点よりも防空巡棲姫にぶつけなくてはならない理由があるのだ。
「私が残された理由なんてわかりやすいわよ。今までの全員分の力を

使ってくるっていうのならーー」
全て言う前に、防空巡棲姫は春雨達の突撃を防ごうとするために、足下に艤装を展開。それが一気に浮上してくる。
「だと思ったわよ！　Ｍｕｄ（泥）　ｗｈａｌｅ（鯨）！」
そう、先程泥人形のコロラドも繰り出した泥鯨。それまでをも扱い、進路を妨害。
そして、それに合わせてコロラドも白鯨を展開。直接体当たりをして、進路妨害を妨害する。
「今よ！　Ｈｕｒｒｙ（急ぎなさい）　ｕｐ！」
白鯨が湧いて出てきたイロハ級すらも蹴散らし、道を開く。それでもまだまだ群がってくるのだが、それはまた別の者達が道を拡げていく。
「私達なら背中を任せられるということで、ここに残ることを選んでくれたんですよね？」
「頼ってくれてるんだもの。相応の働きくらい見せるわよ！」
「だから振り向かずに進めよな！　絶対お前らの戦場にコイツらは行かせねぇ！」
敵が駆逐艦なら夕雲が中心となり長波と雷が即座に対応。いくら泥ブーストがかかっていようが、ここまで長々とその戦い方を見せられてきたのだから、どうすれば効率よく斃せるかなんてもう個人で分析済み。
防空巡棲姫との戦いにも、そこから抜け出すのにも邪魔なイロハ級をまず処理するのが自分達の仕事と言わんばかりに手早く確実に処理し続けた。そのおかげで、道はまだ開いたまま。
「余計な力を使わせないわ！」
「対潜も任せてよね！」
周囲の海中から忍び寄る潜水艦も、千歳と千代田が軒並み一掃していく。軽空母ならではの対潜攻撃が、この場でも活躍していた。駆逐艦なら１人が現場に向かわねばならないが、空母ならば自分は避けつつも、全方位の潜水艦に対応出来るのは非常に大きい。
正規空母には出来ない芸当だからこそ、今この場を任された。防空

巡棲姫が相手であろうとも、千歳と千代田は簡単には屈しない。
「くくく、聞くにあの姫は別個体の私が詰め込まれているそうだ。これは胸が躍る。この武蔵を使って、ただて済むと思ってもらっては困るなぁ！　大和、奴に向けて一斉射を仕掛けるぞ！」
「いやいやいや、やりたいのは山々だけど、吹雪がかなり近い位置に」
「奴なら軽々避ける！　だから構わん！　ぶちかませぇ！」
　若干引き気味の大和であったが、武蔵は一切の容赦なく防空巡棲姫に向けて一斉射を開始。激しい砲撃の嵐が防空巡棲姫を呑み込んでいく。大和も小さく溜息を吐きながらもそれに便乗。２人揃って放つからこそ絶大な破壊力になるのだから、始めてしまった一斉射は簡単には止められない。
「ああもうやっぱり。あんまり無茶苦茶しないでくださいよ頭痛の種！」
「ハッハハ、それでも運用している貴様らが悪いなぁ！」
　文句を言いつつも、これをやってくることは予想がついていたようで、吹雪は武蔵の言う通り軽々と回避。こんなやり取りの中にも、互いを信頼している感はある。信用しているから武蔵は撃つし、吹雪も見越して回避する。
　防空巡棲姫は一斉射に巻き込まれていくのだが、間合いを取りつつ艤装でガンガンと弾いていた。一斉射すらもその装甲を傷付けることは難しい様子。完全に叩き潰すのなら、もっと近付いて撃ち込むしか無さそうである。
「お姉様の道は！　比叡が斬り開ぁく！」
　その一斉射が止んだ瞬間、爆炎を突き破るように比叡が刀剣を振りかぶっていた。道から防空巡棲姫を遠ざけるため、近接戦闘で圧倒する。
　その艤装の硬さは相当なものであり、刀剣をまともに受けてもビクともしない。しかし、比叡の振るう刀剣も明石がメンテした最上級のモノ。斬れ味もそうだが、頑丈さも並ではない。ガギンと嫌な音がしても刃が欠けることもなく、むしろそのまま向きを変えて斬り払った。その瞬間、吹雪の主砲を受けても傷一つ付かなかったハリネズミ

のような両用砲の1本が綺麗に斬り飛ばされた。
「さぁ、今のうちに行ってくださいね！」
今しかないというタイミングで、吹雪が叫んだ。春雨達もそれに呼応してスピードを上げる。
「ムラクモ！」
この激戦の中、コロラドが突き進む叢雲に声をかけた。動きを止めさせず、最後の言葉をかけるように。
コロラドの声にイラッとしながら振り向くが、その真剣な表情を見て考えを改める。いくら犬猿の仲のようになってしまっている相手でも、共に施設で暮らす仲間。互いに互いを知っているからこそ、信頼が置ける戦友。
「私の分、アンタに乗せるわよ。その馬鹿みたいに大きな槍を、黒幕にぶち込んできなさい！」
コロラドは自分の最後の戦場がここだと認識している。黒幕の顔を拝むことは無くても、ここで奮闘することが最善の選択であることはわかっている。故に、叢雲に自分の思いを託した。
「はっ、アンタに言われなくてもわかってるわよ！　そのクソ防空姫をそこから動かさないように、せいぜい気張りなさい！」
「わかってるわよ！　これで失敗したらアンタのこと一生こき下ろし続けてやるんだから！」
これもまた友情の証。この2人だからこそ成立する思いの託し方。罵り合いのように見せて、その実、互いに最も欲しかった言葉。
「それじゃあ、突き抜けるよ！」
春雨の号令と共に、選出された者達が一気に群れを抜ける。イロハ級も防空巡棲姫もそれを妨害しようと動くものの、ここに残された者達の懸命な抵抗によってそれが阻まれ、選出部隊はイロハ級の群れから抜け出すことに成功した。
当然それを追おうとする輩もいるのだが、それを簡単に許すわけがない。突如爆発が何度も起こったかと思えば、ヒト型のイロハ級に至っては首に鞭が巻き付く。
鞭を使うのは当然鹿島。魚雷を放ちながら群れに突撃しており、手

近なヒト型を絡め取る。
「ここを任されたんですから、徹底的にやらせてもらいますよ。出せる力を全て出し尽くしてもいいんですから、ね！」
　そして、思い切り鞭を引き、その骨ごと砕いてしまった。勿論首に巻き付いているのだから即死。
「わぁ……そんなこと出来たんですか」
「あの後……貴女にこっぴどくやられた後に、私も鍛え直していますからね」
　侵蝕されていた時とはいえ、吹雪との戦闘に敗北したことは間違っていない。故に、より強くなるために鹿島も鍛えている。
　実際にやられたのは五月雨の豪速球なのだが、やる気に繋がったのならツッコむ必要もない。吹雪は頼もしい仲間に笑顔を向けた。
「それじゃあ皆さん、踏ん張りどころですよ！　救えるものなら救いたいですが、無理せず始末でも構いません！　この姫も、群れも、誰も彼もあちらの部隊に近付かせないように、ここで私達が防波堤になりましょう！」

　鬨の声が響き渡り、全員の気持ちが１つになる。

拠点を守る者

春雨が選出したメンバーは、吹雪達の力によってイロハ級の群れと防空巡棲姫が陣取る戦場を突き抜けることに成功。その後を追ってこようとした敵も、あちら側の仲間達が食い止めてくれた。

これにより、選ばれた１２人はそのまま黒幕のいる拠点へと一気に近付くことになる。

「みんなの思いを背負ったんだから、ここで必ず勝たなくちゃ」

少し気負ってしまいかけている春雨だったが、怒りを晴らすのとは違う理由で深呼吸。ここで緊張していては、せっかく十全の力を出せるように送り出してくれたのが意味が無くなってしまう。

「大丈夫です。ここまで来ることが出来たんですから、苦戦はしても敗北はしません。気持ちを強く持てば、春雨姉さんが負けることはありませんから。緊張するのは仕方ないことです。落ち着かないのでしたら、私を、仲間を頼ってください。みんな春雨姉さんを信頼してここにいてくれているんですから」

海風がより温もりを与えるように両手で手を握った。駆け抜けながらでは少々危なそうではあるものの、そこは海風、春雨に一切負担をかけないように確実に落ち着かせる手段を選択している。

そんな海風のおかげで、深呼吸の回数は自然と減っていった。緊張も取れ、いつもの春雨に戻る。今は怒りもそこまで表に出ていない。格好はもう替えるつもりは無いようだが。

「大丈夫デース。春雨、みんなが春雨を信頼しているように、春雨もみんなを信頼してくだサーイ。いや、言わなくても大丈夫ですヨネ？」

「勿論です。私もみんなを頼ります。みんなで、平和を取り戻しましょう」

そこに金剛も加わる。この選出された決戦部隊の中では唯一の純正の戦艦、かつ、堀内鎮守府で屈指の力を持つ者。心身共に支えとなる大きな存在。

そんな金剛に後押しされれば、安心感はより一層強くなる。姉妹の温もりと、仲間からの信頼。これだけあれば、春雨は極限まで安定す

ることが出来た。
「春雨、無意識のうちに自分を落ち着けるための選出もしてるね。白露型、全員揃ってるもんね」
そんな春雨を見て、春雨の耳に入らないように白露がボソリと呟く。それが耳に入った山風が小さく頷いた。妹のことをよく見ている長女と、感情の機微に敏感な八女は、春雨のその感情にすぐさま気付いた。
実際、ここにいる白露型は全員が黒幕に対して通用する力を持っているだろう。艦種なんてもう関係ない、通常の海戦とは全く別モノの戦いが繰り広げられることがわかっているのだから、火力などでは無く対応力、応用力を重点に選出している。砲撃や雷撃、航空戦や対空砲火、近接戦闘までをも網羅し、それをその場に合わせたカタチに切り替えることが出来る白露型姉妹は、今回の作戦にはもってこいな性質であろう。
だが、それ以上に春雨の怒りと寂しさを鎮静化させるためには白露型姉妹が必要である。勿論、他の仲間達だって近くにいてくれれば落ち着けるのだが、姉妹との繋がりはそれだけでは収まらない。安心のレベルが違う。
「なら、その分あたしらもしっかりやらなくちゃね。春雨の期待に応えなくちゃ」
「当たり前でしょうが。春雨のためでなくても全力で挑むに決まってるわよ」
そんな白露に対して、叢雲がツッコんだ。しかし、その声色からは怒りが若干薄れ、最後の戦いに向けての意気込みに溢れている。
向かう直前のコロラドの活が効いているようで、やってやるという気持ちが止まらないようだ。それは怒りではなく、心の底からのやる気。ただでさえ黒幕を絶対に始末してやるとここに立っているのだから。
「ここで確実にぶちのめす。今まで姿すら出さなかったことを後悔させてやるわよ。どんなカタチになっていようが知ったことじゃない。今日まで好き勝手やってきた報いを受けてもらうわ」

槍を握る手がより強くなり、ギュッと聞こえてくるほどである。白露は槍で泥を貫けるだろうかと思いつつも、そんな野暮なことは言わないでおいた。この気持ちをこんなところで折るのは無粋。
「偵察機、敵拠点を発見」
ここで敵の群れを突き抜けた時くらいから艦載機を発艦していた大鳳からの報告。このまま直進すれば、黒幕の本拠地に辿り着けるということ。
「見たところ、海路上に何かあるようには見えません。海の色も何も変わらない。海中に罠を仕掛けているのか、それともここまで来て真正面から迎え撃とうと思っているのか……」
てっきり島の周りは泥だらけかと考えていたが、そこは思ったよりも綺麗。むしろ、見た目だけで言えば黒幕が潜んでいるようには見えないようだった。
それもそのはず、自分の姿を見られることを極端に嫌っている黒幕が、いくら結界があったとしても自分の痕跡を残すような真似はしない。島自体も近海も綺麗なものである。むしろ、少し前までは結界すら無かったのだから、綺麗にしておくのは当然だった。
そのため、逆にこの綺麗さでも泥が忍び寄ってくる可能性は考えておいた方がいい。見えないところから襲い掛かるのは黒幕の十八番。むしろ、海水に見えて実は泥でしたというのも考えておいた方がいい。
「なるべく新しい要素は逐一解析しとる。ウチなら何処に何があるかくらいはわかるから、何かあったらすぐに言うで」
龍驤は自身のシステムをフル稼働中。端末は常に蔓延しているため消滅させており、監視の目もアップデートにより機能させていない。しかし、それ以外の要素も当然ながら感知の範囲内に入ってきているため、わかる範囲でその場で解析、カウンターを狙っていた。
少なくとも、今この場で侵蝕の泥が現れても、ＲＪシステムによって回避出来るようにはなっている。だが新たな泥で侵蝕出来るという状態になっていたら話は変わる。それこそ、黒幕そのものに対しては卵の解析しか出来ていないため、確実な回避が出来るかと言われる

と少々厳しい。
　出来ることなら黒幕そのものを消滅させるシステムにアップデートしたいところだが、如何に明石でも出来ることと出来ないことはある。龍驤と殆ど同じ構成のはずなのだが、実際はまるで違うモノである可能性は非常に高い。それに、泥の原点ともなれば解析出来るようなモノでも無い可能性がある。
「今までと同じなら、強めの砲撃で霧散はさせられる。量が増えてもそれ相応の火力を撃ち込めばどうにかなる。でも、コアを破壊しない限り、泥も永遠に出続けてくると思う」
　ここからの流れを考えていくと、やはり勝利の鍵は黒幕のコアの発見だ。まず間違いなく見える場所には置いていない。島の何処か、奥のさらに地下に拠点を構えているというのだから、そこにあると考えるのが正しいだろう。
　ならば、ここからやるべきことは島に上陸して、その入り口を探すこと。龍驤はその場所を知っているはずだが、もしかしたらその場所自体を変えているかもしれない。
「対地攻撃……やっぱり戦車隊と内火艇？」
「そうね～。あとＷＧ（ヴェー ゲー）４２は持たせてもらってるわぁ」
　荒潮が補足的に説明。今出来る対地攻撃は、いわゆる上陸支援舟艇と内火艇、そしてロケットランチャーと、どちらかといえば海上から陸上を攻め立てるために使用する装備。その島には木々が生えていることを考えると、上陸してから使用すると自分も巻き込まれかねないため少々怖い。
　だが、使い方次第では致命的なダメージを与えることも出来そうなのが対地装備だ。戦車隊や内火艇は島を蹂躙出来るだろうし、ロケットランチャーは邪魔な木々を噴き飛ばしつつ、地下への入り口を表に出すことが出来るだろう。
　そして、今回は空母の爆撃も有効だ。それこそロケットランチャーと同じように地下への入り口を探すためには邪魔なモノを噴き飛ばすためには使いやすい。むしろそれが嫌だから防空巡棲姫という対空が最強クラスの姫をここに置いていたとすら考えられる。

「島が見えたぜ……！」
　正面を見続けた江風が声を上げる。それに合わせて全員がそちらを見ると、言われていた通り木々が生い茂った島が水平線の先に見えた。
　後ろから追ってくるイロハ級もおらず、突き抜けてから順調に黒幕の拠点とされた島が見えてきた。ここに来るまでとんでもなく時間をかけてしまったが、ようやく辿り着くことが出来たのだ。
　ここまで近付いたのなら、黒幕も春雨達の進軍なんて確実に気付いている。故に、上陸を許すわけがなく迎撃が始まるだろう。
「絶対何かが来る……！　みんな、備えて！」
　言われるまでもなく、全員が突き進みながらも何が来てもいいように警戒。前からだけでなく、横からも上からも下からも何が来るかわからない。最悪な場合、その不意打ちが致命傷になる可能性もあるのだから、警戒しないわけがない。
　その時、島の上、鬱蒼とした森の奥から、人影が出てきたように見えた。防空巡棲姫だけではなく、もう1人拠点防衛のために残していたのかと考えたものの、その姿は誰がどう見ても深海棲艦でもなんでもなく艦娘。
　しかもそれは、意図してか偶然か、誰もが見たことがある姿だった。
「……知らん、あんなんおったなんて、ウチは知らんぞ。知っとったら真っ先に伝えとる」
「なら、つい最近何処かで捕まえたってことですか。『観測者』様からも伝えられていませんから、下手をしたら昨日今日に」
　その姿を見て苛立ちが抑えられないのは春雨。そしてそれ以上に動揺が隠せないのは、海風だった。
「なんで……こんなの、こんなのって……」
「海風、落ち着きな。アンタの大好きな春雨はこちらにいる春雨だ。だから……」
　白露も少しだけ動揺していたものの、小さく息を吐き、すぐに心を落ち着ける。
「あの春雨は別人だ」

そう、黒幕の拠点の奥からやってきた艦娘は、春雨。艦娘春雨である。
同じ顔の別人が多々いる艦娘なのだから、春雨が別にいてもおかしくない。ただし、それが黒幕の拠点にいるとなると話は別。
龍驤が知らなかったということは、本当につい最近捕らえられたと考えるのが妥当。春雨が言う通り、『観測者』にそれを伝えられていないところから見れば、これは下手をしたら春雨達の出撃の直前くらいに捕らえられた可能性すらある。
「侵蝕されているように見えないけど……いや、わかンないか。システム的にはどうよ」
「あれは艦娘や。純粋な。泥は入っとらん」
江風の質問に龍驤が答える。ＲＪシステムの中でも初期から実装されている端末の除去の範囲は、既に黒幕の拠点も含まれている。それもあるため、目の前の別の春雨は端末による侵蝕はされていない。それどころか、卵が植え付けられているような反応もない。
故に、何も変わっていない純粋な艦娘。心の底から忠誠を誓っているならわからないが、実際はそれも違うだろう。
何故なら、その春雨はフラフラとした足取りで森の中から脱出してきたようにも見えるからだ。
そして、疲労困憊のような表情で縋るように手を伸ばしてきていた。あちらの春雨からもこちらの春雨達の部隊が見えたのだろう。助けが来たと感じてもおかしくはない。
「た、助け――」
救いを求めた瞬間だった。誰の目にも入る状況になった時、森の奥から混沌の色をした泥が雪崩れ込んできた。
「えっ……」
疲労している身体でそれを回避することは出来ず、あちらの春雨が一気に呑み込まれる。そして、泥は次から次へと春雨に吸収されていき、纏わり付き、その存在そのものを侵蝕していく。
悲鳴すら上げることが出来ず、むしろそれは恐怖から快楽へ、上げたかった悲鳴は嬌声へと変わった。

「……最悪な当てつけですね。アレが私であったことは本当に偶然だったのでしょう。誰でも良かったのでしょう。でも、たまたま、本当にたまたま私だったせいで、ここまで当てつけになるなんて……」

春雨の怒りのボルテージは一気に上がる。それだけではない。その光景を見せられている仲間達も、黒幕に対する苛立ちや、目の前で救えなかった悔恨が押し寄せてきていた。

そして、泥がそのまま消えていく。中から現れたのは、完全に侵蝕された別個体の春雨。海風にとっては最も見たくなかった敵。

トラウマとして心に刻まれているセーラー服とレオタードを身に纏い、その快楽に身を震わせたことでロンググローブとニーハイソックスまで完成。艤装も侵蝕されたことで禍々しい形状へと変化していた。艦娘であるのに、瞳には紫色の炎が灯った。

もうそれは、艦娘とも言えない。中間のような歪な存在。しかし、姿形は完全に春雨。精神的な攻撃としては最上級の最後の砦として、春雨達の前に立ちはだかった。

別個体の春雨

防空巡棲姫の防衛戦から突き抜けた春雨達は、ついに黒幕が潜む島の近海にまで到着。島が目視出来るところにまで進むことが出来た。

しかし、そこで現れたのは別個体の春雨。島内で捕らえられていたのか、疲労困憊の状態で逃げ出していたのだ。

それだけならば保護をすれば良かっただけなのだが、別個体の春雨は目の前で泥に呑み込まれ、そのまま侵蝕されてしまった。今の別個体の春雨は、完全に敵対している艦娘とも深海棲艦とも言えない、中間のような歪な存在と化していた。

「いい、海風。落ち着いて。見たくないモノを見せられたのはわかってる。でも、心を鎮めて。私だって物凄く腹が立ってるけど、大丈夫だから」

自分の別個体が侵蝕されたことに怒りのボルテージが上がっている春雨だったが、それ以上に苦しんでいる海風を見たことで自分が怒り狂ってはいけないと心を静かに留めていた。

別個体の春雨は、海風が最も見たくなかった春雨の姿である。弱々しく、今にも倒れてしまいそうなくらいに消耗した姿でもかなり重くのしかかってきていたのに、ただでさえトラウマとして心に刻まれている侵蝕を表すレオタード姿、かつ、春雨が敵対しているという事実。これは、もしあの時の立場が逆転していたらを完全に再現されてしまっているようなもの。あらぬ心配と不安、そして心をガタガタにされていく感覚。侵蝕された時の精神ダメージがぶり返し、手が震え出してしまった。

これはもう依存の発作と言ってもいい。最愛の姉が隣にいるにもかかわらず、同じ姿の別人の侵蝕を目の当たりにした瞬間に、目の前が真っ暗になったような感覚を得た。

「春雨姉さん、春雨姉さん、なんで、なんであんなことに、なんで、私は、海風は、春雨姉さんを、春雨姉さんを守ると誓ったのに、あんなことに、ならないように」

動揺のせいで、頭も回らなくなってしまった。泣きじゃくったり、

自死を選んだり、暴走したりしない。ただ壊れ、狂い、その場で震え、何も見えなくなる。そして、見えなくなってしまったために春雨を認識出来なくなり、よりドツボにハマっていく。
「あ、あぁあああっ……春雨姉さん、春雨姉さん……」
足腰に力が入らなくなったかのように膝をつき、震えを隠そうともせずに荒い息を吐き続ける。まるで悪夢に魘されるかのように、そこから動けなくなってしまった。
春雨という個体の侵蝕を見てしまったのだから仕方ない。想像だけでも動揺するくらいだろう。それが、現実として目の前で起きてしまったのだから。
「ここにいるよ。私はここにいる。アレは違う。私だけど私じゃない。アレは海風の知らない私だから」
焦点が合わない海風を落ち着かせるために、春雨がすぐに手を握った。いつもは自分がこのカタチで落ち着かせてもらっているのだから、こういう時はお返しに落ち着いてもらいたい。これでは戦闘どころでは無いのだから。
「海風姉……落ち着こう、ね。あんなの見たくなかったってわかるけど、あたし達の知ってる春雨姉は、ココにいる……からね」
春雨に加えて山風も懸命に海風を慰めようと身体に触れる。春雨と同じように、姉妹の温もりがあれば多少は自分を取り戻せると信じて。
依存相手である春雨の温もりだけでは足りないくらいに取り乱しているのだから、さらに上乗せ出来る温もりが必要。そうなると、適任なのは山風。海風自身が気にしていた存在でもあるのだから、それが実感出来るようになれば、真っ暗になった視界が開けるはず。
「……あの私を救える余地は？」
春雨が龍驤に問う。その声には、多くの怒気が含まれていた。仲間達は春雨の声を聞いてゾクリと震えを感じてしまう。叢雲だけはその怒りに共感し、槍を強く握りしめるだけ。
「あの侵蝕は端末のそれとは違うな。今のウチでは治療出来へん。なんやおかしい感じもするから解析はしとる」

龍驤からの答えはやはり、そう簡単には侵蝕から解放することが出来ないということ。しかし、今までとは違った侵蝕とも感じ取れるということで、今この時も解析は続けていた。
そもそもシステムの範囲内だというのに侵蝕されたため、今まで手に入れ続けてきた黒幕の情報とは別であることは窺える。たった今ここで散布されている監視の目を排除し、泥人形の行動を抑制したシステム自体も効かないとなると、別個体の春雨を呑み込んだ泥はこれまでに見せたことのない完全な新規。
泥に呑み込まれた別個体の春雨は、侵蝕の快楽に身体を震わせた後、島に向かってくる部隊を睨み付ける。今までは救いを求める弱々しい瞳だったものが一転、黒幕の意志に呑み込まれ、艦娘でありながらも深海棲艦の思考へと塗り潰された結果、侵略者の瞳へと変わり果てていた。
おそらく生まれて間もない艦娘であっただろうが、侵蝕されていた漣達のことを考えれば、もうドロップしたばかりだから弱いと考えるのは間違い。身体強化がかかる泥コスチュームも身に付けているのだから、あれはもう熟練の戦士にされていると考えてもいいだろう。
「春雨、アンタは海風についててやんな。ここで無駄に力使う必要ないから」
ここで一歩前に出たのは白露。
「あたしだってね、怒り心頭なんだよ。妹が苦しんでる姿見せられ続けてたらさ」
海風が発作を起こし春雨の怒りが溢れる状況を作られただけでも充分すぎるくらいに腹が立つのに、その犠牲になったのが別個体の妹（春雨）となれば、姉として怒りが頂点に達するのは自明の理。
ただでさえ妹を思うお姉ちゃんな白露の中には、さらに3人の姉が含まれているのだ。本来の4倍の怒りを感じ、少し間違えばその感情が溢れ出してもおかしくないほど。そこは4人分を抱え込んでいることもあり、その感情が溢れて繭となることは無いのだが、それでも今までに無いくらいに怒りを感じているのは確かだ。
「待ってな。お姉ちゃんがどうにかしてやる」

その怒りが、白露に変化を齎した。白露の瞳に、真紅の焔が宿ったのである。
「……白露姉さん、それは……」
「ん？　お、おお？」
視界がほんのりと紅く染まったように思える。そして、今までよりも強く力が発揮出来るような感覚。
「あたしに入ってる春雨の細胞が、あたしに力を貸してくれてるんだろうね。あたしの怒りに反応して」
それほどまでに、今の白露の怒りは強いということ。何せ４人分である。白露だけじゃない、時雨も、村雨も、夕立も、白露の中で怒り狂っているのだ。静かに、それでいて激しく。理性を保ちながら、しかし本能を解き放つように。三者三様の怒りを、白露の怒りを以て束ねる。
その結果がマグマブースト。白露の中で春雨細胞はマグマとなり、身体中に駆け巡る。黒幕の泥ブーストと似ているが、その原点があまりにも違う。しかし、負の感情によるブーストであることは変わらない。
「身体が熱い、熱いけど、まだ気持ちいい方だよ。お風呂に入ってるみたいな、ね！」
そのブーストに身を任せ、白露は別個体の春雨へと突撃する。つまり、島に一気に接近するということに他ならない。
無闇矢鱈と突っ込んでいるわけではない。先陣を切って別個体の春雨がどういう存在かを知るために、一番槍を買って出た。
対する別個体の春雨は、植え付けられた悪意に身を任せて白露を迎え撃つ。あちらもまた、敵対する者の手段を測るために行動する。
拠点防衛というカタチになるため、その場から動くことなくただ砲撃を放つのみ。魚雷を受けないように、かつ白露の動きを見ての対処を狙った、ドロップしたばかりの艦娘としてはしっかりと考えられている作戦。
「甘い！　砲撃の精度は甘々の甘だね！」
しかし、その程度の砲撃で白露が屈するわけが無かった。軽々と避

け、何にも止められることなく島に接近していく。
「白露に続くわ。あちらの春雨もどうにかしないと話にならない。島に上陸する必要があるなら、退かさなくちゃいけないもの」
その白露の行動により、より火がついたのは叢雲。最初から怒りが溢れているだけあり、春雨細胞との適応率は非常に高く、こちらもその瞳に真紅の焔が宿る。
「春雨、白露も言ってたけど、アンタはここで海風が調子取り戻すまで見ててやんなさい。私と白露が、あっちの春雨をどうにかしてあげる。島までの道も、切り拓いてやるわよ！」
それだけ言い放ち、白露を追うように突撃を開始した。白露に一番槍を譲ってはいるものの、そのスピードはあっという間に白露に追いつき、横に並んでの戦いへ。
「クソ気に入らないわ。私だってね、仲間が狂わされるのは二度と見たくないのよ」
叢雲も、目の前で薄雲が侵蝕された経験がある。その時の怒りを今ここでも思い出していた。それを見たことで崩れ落ちた海風の姿も、叢雲の怒りに拍車をかける。
最初から怒りと相乗りしている叢雲に、新たな怒りの力が加わったところで、制御しきれないなんてことは無い。むしろ、春雨細胞のマグマブーストは叢雲にとっては熱すらも感じない。
「じゃあ、2人でやらない？　あたし、ちょっと自分でも制御し切れるかわからないんだよ」
「はっ、アンタが追い付けるかは知らないけどね」
「言ったな。あたしは叢雲に勝ててんだ。むしろアンタが追い付いてきなよ」
「演習と実戦は違うわよ」
「なら尚更あたしの方が分があるね。こうなる前から鎮守府ではいっちばーんだったし、そもそもあたしは……」
白露の瞳の焔が一層燃え上がる。
「4人分なんだよ！」
その瞬間、白露の巻いていた夕立のマフラーが焔のように燃え上が

る。これはもう、白露の中の夕立が怒りを露わにしているとすら感じるレベルに。
同時に、白露の表情が獣のように変化。これもまた、夕立の特徴。戦いを楽しみ、本能的に敵を殲滅する狂犬のような荒ぶり。
「春雨を貶めるなんて、あたしが許さないっぽい！」
よりスピードが上がり、あっという間に島へと上陸。スピード自慢の叢雲ですら追いつけないスピードを、この瞬間だけ出していた。
眼前には泥に呑み込まれた別個体の春雨。もう手が届く範囲。しかし、今までのことを考えると泥コスチュームは触れただけで相手を侵蝕する攻防一体の装備。その要素があるかはわからないが、直接殴るのには抵抗がある。
「その身体から、出ていけぇ！」
そこで白露は、まともに喰らえば死にはしないものの激しいダメージになるであろう空気砲を放った。艤装は時雨のモノへと変化して、背部から前に突き出した2つの大型主砲による渾身の一撃。
別個体の春雨は、それを見てから回避しようとするが、その時にはもう叢雲も追い付いていた。
「私はアンタがどういう存在だとしても容赦しないわよ。泣こうが叫ぼうが、敵対している時点で全力で叩き潰す！　救うだ救わないだなんて関係ない！」
その回避方向に先回りしており、怒りによって長さを増した槍を思い切り振り回す。刺さない辺りは少しだけ理性が残っているものの、直撃したら確実に肉も骨もタダでは済まない一撃。
「やめてよ」
別個体の春雨が初めて言葉を口にした。ただ一言、拒絶の言葉。
その瞬間、陣取っている陸地から泥が隆起し、まるで壁のようにその一撃を防いだ。白露の砲撃に対しても同じように泥が防ぐ。
「なっ」
「おっとぉ!?　こりゃ面倒くさいね」
その泥に触れるのもまずいと感じたか、すぐにバックステップして間合いを取る。

すると、別個体の春雨の足場が泥に塗れていき、地面だというのに波打っていた。

「来ないでよ。これ以上」

その中心で、別個体の春雨は意地が悪い笑みを浮かべる。春雨からは絶対に出ないような表情。

海風がそれを目にしていなくて本当に良かったと、白露は内心思っていた。

涼風の奮起

黒幕の拠点で泥に侵蝕された別個体の春雨は、白露と叢雲の突撃を島に溢れる泥を使ってカウンター。足下が波打ち、次々と泥が溢れてくる。その泥が壁のように隆起し、自身の周りを守る。

今までと違い、陸の上を陣取っているため、そんな手段を扱える。黒幕の拠点なのだから、泥は無限に供給されるようなものなのだから、いくら別個体の春雨がドロップしたばかりの練度0だとしても、次々と泥を注ぎ込んで、さらに陸地を唸る泥を操らせて、この拠点を守り切ろうという算段のようである。

「ここから先は、行かせないから」

薄く微笑みながら、波打つ泥をコントロールして迎え撃つ別個体の春雨。手をスッと上げるだけで、周囲の泥がまるで触手のように持ち上がる。

性質が違うため、ＲＪシステムでは掻き消すことは出来ず、しかし存在が同じであるため、春雨の力では止められない。それでいて、それに触れた場合に侵蝕される可能性すらあるとなると、迂闊に動けない。

「厄介やな……泥の中に土や草が混ざっとるせいで、簡単に消せん。成分がグッチャグチャや」

システムの範囲、龍驤の手が届く範囲に陸がギリギリ入ってはいるのだが、その成分解析が難航している。監視の目のような粒子と違って、拠点に蔓延る泥そのものとなると、その濃度の差からか解析がかなりしづらいようである。陸と混ざり合っているのもそれに拍車をかけており、何も仕掛けがない自然物が混入していることで、その成分がどうしても邪魔をしてくるらしい。

泥そのものが微生物の群衆のようなモノであるため、別の物質を巻き込んで性質を変えるようになっているようだった。そのせいで春雨の力が通らないというのもある。泥は生物の集合体であっても、内部に無機物が混入しているため、思い通りにいかない。

「春雨ちゃん、１つだけいいかしら～」

ここで荒潮が春雨に問う。いつもは戦闘中でもマイペースな表情を崩さない天才だが、今はあの敵を見せられたことでそれも薄れている。
「直感的に答えてくれていいわ。あちらの春雨ちゃんは救えると思う？」
勿論、目の前でこんなことが起きたとはいえ、別個体の春雨は艦娘であり、自分の意思とは関係なく黒幕に取り込まれて侵略者と変えられているのだ。今でこそその治療方法がわからないが、元に戻すことが出来るのなら当然それも選択肢に入れる。
救うのならば、撃破しても殺さない。侵蝕性が無ければ鹵獲して鎮守府に連れて帰ることが出来る。そうしたら、明石の力によってこの侵蝕も取り除けるだろう。それに、何かまた別の力が働いて、救えるようになるかもしれない。それこそ春雨の望み通りの答えに辿り着く力によって、解析すら難しい体内の泥を分解出来る可能性も捨ててはいない。
ここでの春雨の返答は、直感としてもかなり迷った結果。
「救えないとは言わないよ。多分何か出来るはず。それこそ、私が瑞鳳さんや黒潮ちゃんの時みたいにマグマを叩き込んだりしたら、何かしらの状況は変わると思う」
「なるほどねぇ。なら、救えるということね～？」
救えないとは言わない。つまりは救える。今回の答えは０か１を求めていたため、春雨が０ではないと言うのなら、この現状は１。
「それに、救わなくちゃいけないわよねぇ。ドロップ艦が巻き込まれてあんなことになってるんだもの。私だってあんなの見せられたら気に入らないわ～。まるで昔の自分を見ているみたいだし」
荒潮も現状に苛立っている１人。あの別個体の春雨を見ていると、ジェーナスを貶めたときの自分を思い出してしまい、気分が悪いようである。
この場で何も感じていないものなんて誰もいない。そして、その感情は全員が同じであった。
怒り。これに尽きる。

「ああなったらもう駆逐艦じゃなくて陸上施設型と見てもいいと思う。アレはもう、海の上に出てくるつもりなさそうだ。春雨姉、どうだい？」
　涼風の問いに、春雨は首を縦に振った。海上で戦うのなら魚雷も効果があるだろうが、その被害を減らすために別個体の春雨は陸から外に出るつもりは無さそう。そちらの方が泥をコントロールするという攻防一体の手段も使えるため、力が増すのもわかる。それ故に、別個体の春雨は陸上施設型と見做していいだろう。
　ならば、普通に攻撃するよりは対地攻撃で叩いた方が効果的ではないかというのが涼風の考え。戦車隊や内火艇を別個体の春雨に直撃させるのは流石に拙いかもしれないが、島に蔓延る泥を排除するという意味でも、そちらの方向での戦いをするのはあながち間違ってはいないのではなかろうか。
　兵器で自然を破壊するのは忍びないが、別個体の春雨が陣取る岸よりも向こう、黒幕が潜む森を焼き払う意味でも、この攻撃は必要となる。わざわざ森の中に入っていくのは自殺行為だし、地面がああなっているということは、木々にも泥が混ざり込んでいてもおかしくない。
「……うん、それでいいと思う。涼風は今を打開するのはそれが一番だと思ったんだよね？」
「ああ、救うにしても、まずはあの足下の泥をどうにかしなくちゃいけねぇって。アレがある限り、もし取り除けたとしてもまた注がれるんじゃないかい」
「そうだね。むしろ、アレだと足下から常に注がれてるって考えてもいいかもしれない」
　別個体の春雨が立っている場所は、特に泥が多い。陸上だというのに泥が波打つせいで脚部艤装で安定させているようにも見えた。
　ならば、救うためにまずやらなくてはならないのは泥の足場から動かすこと。それこそ海上にまで引き摺り出し、泥の供給を取り除くことが大事。
「あたいは吹雪からも任されてんだ。指揮ってわけじゃあ無いけど、

あたいが状況判断して、作戦を立てる。春雨姉、今はあたいの指示があってるか間違ってるかだけを直感的に判定頼んだ」
　そう言うと、涼風は自分の扱う電探をフル稼働させながら、戦況把握と演算を開始。自分の持つ知識と経験、そして思いつく限りの戦略をこの場で組み立てていく。
　別個体とはいえ春雨が堕とされ、それを見た海風が崩れ落ち、現状の打破を試みた白露が姉の力を結集して戦いに挑む。姉妹達のそんな姿を見せられた涼風は、自分も力になるのだと出来る限りの力を奮い立たせた。
　その涼風の奮起は、怒りに震える者達にまた違う感情を齎した。最も近くにいた春雨にもだ。
「大丈夫。涼風の判断は、全部正しい」
　怒りを振り払い、ニコリと笑って涼風に目を向けた。
　その瞬間、涼風に不思議な力が湧き上がった。頭の回転が急激に速くなり、今までの経験全てに一気にアクセス出来るような感覚。あまりにも冴え渡りすぎて、涼風自身が驚いた。
　だが、そんなことで動揺している暇もない。思いついたことを次々と口にしていく。なるべく消耗が少なく、手段を強くバラすような戦術は取らず。
「荒潮、内火艇突っ込ませていい！　あの奥の森を薙ぎ倒しちまえ！　金剛さん、三式弾装備してたよな！　荒潮に合わせて島自体を攻撃してくれ！」
「はぁい、任せて～」
「Ｏｋａｙ．　従うヨ！」
「大鳳さん、サラトガさん、三式弾に合わせて爆撃いけるかい!?」
「勿論。黒幕が島そのものというのなら、島そのものを狙うだけね」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．　タイホーと一緒に、サラの全てを放ちますね」
　まず真っ先に狙わせたのは、やはり別個体の春雨ではなくその奥に見えている黒幕の隠れ家をより隠す鬱蒼と茂る木の数々。それ自体が泥の供給源になりかねないため、真っ先に潰す。内火艇による突撃

と三式弾による範囲攻撃、そこに空母2人による空爆が加われば、間違いなく陸地を焼け野原に出来る。
　木々にも泥が混ざり込んでいた場合は、それだけでは燃え尽きることもないかもしれないが、やらないよりはマシ。むしろ、やるべきと判断したからこの指示を出している。
　それでも陸地は大きいため、供給自体は失われないだろう。むしろ、木々が無くなることで地面の泥が増えるかもしれない。
「江風、白露姉と一緒にあっちの春雨姉を狙っちまえ！　でも、接近戦はなるべく控えて、砲撃主体！」
「おうよ！」
　言われている最中からもう江風は動き出していた。涼風ならば、自分に白露や叢雲と並んで突撃してくれと指示を出すと確信していたからだ。案の定、予想通りの指示であったため、喜び勇んで海面を蹴る。
「古鷹さん、一番重い役目なんだけどいいかい」
「いいよ、大丈夫」
「その尻尾で、あっちの春雨姉を海の上に引き摺り出してほしい。白露姉なら鎖とかも使えるから、協力してでも。なるべく傷付けない方向でいけっかな」
「噛み付いて引っ張り出すのは少し難しいかもしれないけど、やるよ」
　古鷹の左目が紅く光り、その指示を聞き入れて江風の後を追うように向かう。
　白露ほどではなくとも、古鷹だってこの現状に怒りを覚え、春雨細胞が活性化していた。展開している尻尾の艤装は真紅に染まり、より長さを増している。
「……春雨姉、出来るかはわかんないんだけど、あっちの春雨姉に触れられる場所にまでくれば、その力で解放させることなんて出来っかな」
「正直なことを言うと、わからない。でも、涼風が立てた作戦は、そういうことなんだよね？」
　春雨には、涼風の作戦がおおよそ見当がついていた。今の動きから

この質問となれば、察することが出来る。
島からの供給源をなるべく断ちつつ、別個体の春雨がコントロール出来る泥を極力失わせる。足下に泥がある限りダメだろうから、そこから引き剥がすことを優先。多少は痛い目を見てもらわなくてはならないが、それでも命を奪うつもりはない。
そして、白露、叢雲、江風、古鷹の４人がかりで陸から海に引き摺り込んだら、春雨のその力により体内の泥を失わせる。涼風の中では、体内の泥をマグマになって押し出してしまえば、別個体の春雨は泥からは解放される。今は敵対する者を減らすことが最優先であるため、これで救われるはずである。
「ああ、あたいとしてはさ、システムの解析であの泥をどうにか出来ることは無いと思ってんだ。いや、龍驤さんを否定してるわけじゃあ無いよ。ただ、ここは向こうの領域なわけだから、解析に合わせて構築が切り替わってんじゃないかなって思うんだよ」
「確かにな。そこにあるもん適当に混ぜ込んで、こっちの解析邪魔してきとる感じには思える。やりすぎるといかん方向に進化するかもしれん」
「だから、解析よりも今あるものを徹底的に消しとばす方向でお願いしたいんだ。あっちの春雨姉が解放されたとしても、すぐに侵蝕されるようなことがあったら意味ないからね」
「せやな。なら、解析済みのデータを全開にして、全部吹っ飛ばしておく。それなら戦いやすくなるやろ」
ＲＪシステムは暴走を抑制するシステム。これ以上の侵蝕を防ぐために使われる。ここで龍驤が解析に専念し続けていたら、端末の排除などが疎かになる可能性もある。そちらも進化させてくる可能性があるため、解析はそちらに寄せる。
別個体の春雨の解放は龍驤の仕事ではない。弱体化も狙いたかったが、それよりも確実に仲間を守る方向にしていく。これ以上仲間が侵蝕されるようなことがあったら、海風だけではない仲間達が崩れる。
「山風姉……出来るなら対地攻撃に参加してほしい。いけっかな」

「……大丈夫。でも、あたしは……あっちの春雨姉を救うためにも動きたい」
海風を抱き締めながら、強い意志を見せる山風。別個体の春雨を救うことが、この海風を立ち直らせる近道であることもわかっている。
「海風姉、大丈夫だから。あっちの春雨姉も、必ず救うから。だから……見てて。あたし達の戦いを。辛いのは、すごく辛いのはわかるけど、じっとしてるだけじゃ何も変わらない」
一際強く抱きしめた後、山風は海風から離れて立ち上がる。
内向的な山風の、力いっぱいの奮起。海風が崩れたことで手も足も震えてはいるが、大きく深呼吸することでその震えを止める。
「見てて、海風姉。みんなで、みんなの力で、あっちの春雨姉を救うから」
そして、山風も戦場へ。

「海風……私は傍にいる。でも、みんなが戦っている姿は、見てあげて。あちらの私を救う姿を。私が断言する。絶対に救えるよ」
海風に温もりを与えながらも、春雨の視線は戦場へ。
その時、春雨の瞳に灯る怒りの焔は、違う色を見せた。

異様な強さ

涼風が奮起し、それに引っ張られるカタチで仲間達に気持ちが入った。そして、別個体の春雨を救うためにも涼風の指揮によって一気に攻勢に出る。

まず動き出したのは、対地攻撃を指示された５人。

「同時に行くわよ～」

「……うん」

荒潮と山風がここで虎の子の武装、対地攻撃のための戦車隊と内火艇を展開。どちらも大発動艇と殆ど同じ大きさ。山風が展開した戦車隊には、荷物の代わりに上陸する戦車が搭載されており、妖精さんが乗り込んでいた。荒潮が展開した内火艇は、それが直接上陸するさらに攻撃力の高い一品。

「あちらの春雨ちゃんの横をすり抜けるように、わざと見えるところから向かわせるわ。その方が、気もそぞろになるんじゃないかしら」

「多分……あっちは、島の上をどうにかされることを嫌がると思うから」

「だったら、さんざん嫌がらせしてくれた御礼をしてあげましょ。それくらいしても、私達にバチなんて当たらないもの」

これまでの黒幕の戦術は、艦娘に対して徹底的に嫌がらせをするもの。何度も何度も心にダメージを与え続けてきたのだから、その報復を受けても文句を言われる筋合いなんてない。

だからこそ、ここではそういう黒幕に対して最も癇に障る手段を取るのが一番である。やられたらやり返すだけ。

「よし、それじゃあ～」

「行く……っ！」

２人が同時に手を前に突き出した。その瞬間、爆発的な加速で戦車隊と内火艇が陸に向けて突撃を開始。搭載されている戦車も、内火艇自体も、備え付けられている主砲を激しく放ちながらだ。

勿論、それは別個体の春雨のことなんて全く狙っていない。その後ろ、拠点の木々、陸地を燃やし尽くすために動く。

「……来るなと言っているのに」
別個体の春雨がスッと手を上げると、上陸艇と内火艇の砲撃を食い止めるように、泥が壁のように迫り上がってくる。
これまでのことを考えれば、それは泥であっても相当強固な壁。並の艤装よりも硬く、おそらく内火艇であっても直接ぶつかったところで傷をつけることは出来ないだろう。砲撃も容易く受け止め、島の内側への攻撃は完全にシャットアウトしている。
「守られることは想定済みよ～」
「だからこそ、あたしがこれを持ってる……っ！」
その壁を綺麗に回避する上陸艇。その後ろから山風が放つのは、ロケットランチャーであるＷＧ４２（ヴェーゲー）。その壁を乗り越えて上からの攻撃として、ロケット弾が降り注ぐ。
「鬱陶しいよ、山風」
冷ややかな瞳で睨み付ける別個体の春雨が次に繰り出すのは、全く同じＷＧ４２（ヴェーゲー）。壁の後ろ側から生えるように生成されたそれは、ロケット弾にはロケット弾をぶつけるという荒技を軽々とこなす。
やはり、侵蝕された別個体の春雨は、もうただのドロップ艦の域を超えている。漣達の時以上に大きな力を持ち、涼風が言った通り陸上施設型みたいなものにされてしまっているため、実力はまるで違った。
「拠点ばっかり守ってていいのかな」
そこに視線が動いたことを、白露は見逃さなかった。ここにいるのは対地要員だけではない。先程から真正面で戦いを挑んでいた白露が、より怒りの焔を燃やしながら攻撃を加える。
今は強力な一撃を連発するため、時雨の艤装を再現。さらには夕立の気質を強めに出しており、本能的な攻撃を得意としている。そのため、強烈な空気弾を次から次へと放ち続けた。
実弾にしていないのは、やはり別個体の春雨も救うため。妹を殺すという行為自体が白露の中ではトラウマレベルに刻まれている蛮行。侵蝕されていた時とはいえ、二度とあんなことはしたくない。
立場が逆になったこの戦い。今度は別個体とはいえ春雨を救うた

めに白露が全力を発揮する。
「白露姉さん、今度はこちらに牙を剥くの？」
それすらも手を軽く払うことで泥の防壁が現れ、さも当然のように防いだ。陸だけでなく、空中にすら現れたように見えたが、実際は陸の延長線上。別個体の春雨が陸の少し奥側に立ったため、手前側から泥が飛び出して壁となっていた。
白露は小さく舌打ちをしたものの、すぐさま次の砲撃に向けて準備を始める。今の春雨の言葉に少しだけ引っかかるモノがあったが、止まっている余裕は無い。
「お返し」
さらに、手を前に。すると、白露の砲撃を防いだ泥の壁が途端に崩れ、泥の砲弾と化し白露に放たれる。もう主砲すらいらないのか、手を翳すだけで次々と放たれる砲撃は、咄嗟に避けなくてはいけないくらいに精度が高い。
それでいて泥のＷＧ（ヴェーゲー）４２は健在。山風のロケット弾は悉くを撃ち墜とされている。しかも、上陸艇と内火艇は未だに防がれたまま。泥の壁は幾重にも折り重なるため、ここは空母棲姫の身体を器にしていた龍驤を彷彿とする守り。
「当たらないっぽい、その程度」
白露の回避もマグマブーストによって冴え渡っていた。瞳から真紅の焔を舞い散らせ、掠りもしないくらいに跳ぶ。そして、両腕に主砲を展開し連射。
「当たらない。当たるわけがない」
背部の大型主砲でも軽々弾かれたものが、腕で放つ砲撃で貫けるわけがなく、こちらの砲撃も軽々防がれる。
「はっ、だったらこれはどうよ！」
別個体の春雨の視線が白露に向いたのをいい事に、逆側から叢雲が槍を振るう。流石に泥まみれの陸に乗るのは躊躇われたか、槍を伸ばして貫くつもりで。
他の者達は別個体の春雨を救うつもりで戦っているが、叢雲だけは少々違った。ここまでの力を与えられてしまっている者に対して、最

初から救うつもりで手加減なんてしていたら、救えるものも救えない。故に、最初から殺すつもりでその攻撃を繰り出した。そこまでしないと追い詰めることも出来ない。
傷付けずに救うなんて出来ない状態にある。ならば、傷をつけても死んでなければどうにでもなる。今までそういう者達を何人も見てきたのだから、死なない程度に痛めつけることに何の抵抗も持っていない。
「たかが槍だよ」
即座に手を振るうと、やはり泥の壁。まだ巨大化させていない槍では1枚たりともぶち抜くことは出来ず、傷一つ付けることは出来ない。
陸にいる間は壁の生成も自由自在なのか、何枚出しても息一つ切らさず、際限無しに壁を使い続けるのがかなり厄介。
たった今侵蝕された別個体の春雨がここまで使いこなしているのには違和感を覚えるものの、それは現在も供給され続けている泥によって知識すらも与えられていると考えれば、別に何もおかしいことではない。
ほとんどドロップ艦と同じ存在がここまで強くなっているというのなら、まともに成長した艦娘が取り込まれた場合どうなってしまうのか。
「くっそ、全部防がれちまう！」
接近戦をすると何が起きるかわからないため、砲撃主体で戦う江風であったが、それもまた泥の壁に阻まれる。大型から小型までその攻撃に適したサイズの壁を作り出しては、ただそれを完璧に防いだ後、その壁から砲撃のように泥を飛ばす。
直撃したら致命傷だが、それ以上に侵蝕の危険性があるため、絶対に当たるわけにはいかない。しかし、それだと今度は回避一辺倒にされて攻撃のチャンスが訪れない。あちらは陸からの供給があるせいで疲労すら見せることはない。
「ならば、これでどうデース？」
これだけ攻撃が集中しているところに、金剛の三式弾が放たれる。

山風のロケット弾のさらに奥を狙って。
「ダメ。それは許さない」
しかし、それすらも見えているかのように別個体の春雨は反応した。山風のＷＧ４２（ヴェーゲー）と同様に、同じロケット弾を三式弾に合わせて放ち、広範囲の攻撃を防いでしまう。
別個体の春雨の放つロケット弾の方が密度が高く、どれだけバラして放ってもそれを乗り越えることが出来ない。まさに、放たれる壁のようなもの。
むしろ脅威はそれだけでは無い。一部が三式弾による攻撃を防いだだけで、残りの攻撃はそのまま金剛に襲い掛かる。攻防一体の対対地攻撃。発生源まで潰してこようとする辺り、実力も兼ね備えていることに他ならない。
「これは酷いデス。こんなＣｏｕｎｔｅｒしてくる敵は今までいませんネ」
それでも金剛は回避しきる。対地攻撃を返されたところで、まともに当たるわけがない。しかし、やはり攻撃のタイミングを崩されるというのは厄介なことで、一斉攻撃を意図的に邪魔されているようにも思える。
金剛もこれにはどうしても違和感を拭えない。知識を与えられているにしても使いこなしすぎている。ただでさえ三式弾に対してのロケット弾など、普通では考えられない戦術。
「でも、その分隙は無いというわけではないですよ」
「Ｙｅｓ．　さらに奥は、サラ達Ａｉｒｃｒａｆｔ（空）　ｃａｒｒｉｅｒ（母）なら届きます」
故に、この三式弾に合わせて大鳳とサラトガが艦載機を飛ばしていた。爆撃機による島への直接攻撃。荒潮と山風が繰り出す戦車隊と内火艇、そこに山風と金剛が同時に放つ対地攻撃を全て同時に防ぎ、さらには白露達の攻撃にも対応しているため、艦載機にまでは別個体の意識は回せないはず。
しかし、ここで思わぬ手段を使っていた。
「ダメだって言ってるよね、大鳳さん」

別個体の春雨のさらに奥。森の中からと言ってもいい場所から、突如現れたのは深海の艦載機である。
陸上施設型が多用するタイプの、まるで基地航空隊のような艦載機の群れが大量に現れ、大鳳とサラトガの艦載機を纏めて薙ぎ倒そうと襲い掛かる。
「艦載機……駆逐艦が？」
「Ｎｏ．　あれはもうＤｅｓｔｒｏｙｅｒ（駆逐艦）ではありません」
「……涼風の言う通り、陸上施設型、ということですか」
ここまでやってきたということは、もう駆逐艦だなんて思えない。艦載機まで使ってきたら、それはもう全く違う艦種である。
最初に涼風が言った通り、今の別個体の春雨は駆逐艦ではなく陸上施設型。陸から降りない限り、それと同様の行動が出来ると言っても過言では無い。砲撃は駆逐艦並みかもしれないが、とにかくやれることが多かった。壁による防御の艦載機による制空権確保。ここまでやられたら、普通の戦力ではひとたまりもないだろう。
それに加えて、泥には侵蝕性が残っている可能性もあるため迂闊に近付くことが出来ない。叢雲は槍でガンガンと攻撃をしているが、それでも陸に乗ることだけはしていない。
「頑丈、だね」
叢雲の攻撃に合わせて、春雨細胞の活性によりその全長を伸ばした尻尾による薙ぎ払いを繰り出す古鷹だが、それも泥の壁に阻まれる。砲撃でダメなら質量兵器と考えたものの、槍以上の質量と威力でも軽々と受け止められてしまうくらいに頑丈。
「芸がないね、古鷹さん」
そしてお返しと言わんばかりに壁からの砲撃。これの威力は、別個体の春雨自身が放つ砲撃を超えている威力であるため、余計に回避をしなくてはならない。

「春雨姉、あたいわかったかもしれねぇ」
「うん、私もわかった」

この戦いを見ながら、春雨と涼風は別個体の春雨に起きていることを察した。今までの行動、それと合間にボソリと話した言葉。そこから考えられることは、ただ1つ。

「アレ自体が黒幕だ」

思いやりの焔

「アレ自体が黒幕だ」

春雨と涼風の声が揃った。別個体の春雨が黒幕であると、2人の中では結論付けられていた。陸地と繋がった泥、駆逐艦とは思えない攻撃方法、それに加えて、別個体が話す言葉の節々。そこから割り出した結論である。

「そうでなくちゃ、あの攻撃方法はない。いくら侵蝕されてるからって、基地航空隊みたいな艦載機の飛ばし方なんて出来ない」

「だよな。あたいもそれだった。別個体の春雨姉だとしても、あんなの駆逐艦の域を超えてんだ。混ぜられてもいないただの駆逐艦に出来ることじゃねぇ」

春雨はどちらかといえば直感的だが、涼風はその行動をただ遠目に見ているだけで、おおよその攻撃方法を理解している。

その最たるものが、艦載機が出た場所が明らかに別個体の春雨とは一切繋がっていない場所だったこと。それなのに、自分の意思のままに操り、最大の力を発揮させている。しかも、完全に慣れたやり方で。つまりは、この陸上と完全に繋がっており、艦載機を飛ばし慣れていることに他ならない。

黒幕ならば、まだ中間棲姫の時に艦載機を先に飛ばしていてもおかしくない。むしろ、施設の中間棲姫――姉姫と飛び方すらそっくりだった。そこに気付いたのは春雨。

「あとあの泥の壁の出し方、姉姫さんの甲板と同じタイミングだった」

「ああ……海風が姉姫様を撃ったっていう」

「そうそう。その時と全く同じなんだよ、あのガードの仕方。地面に引っ付いてるかいないかってだけ」

それは今から考えればかなり前。初めて施設に堀内鎮守府の面々が辿り着いた時。海風が錯乱して撃ったところ、瞬時に甲板を展開して全くの無傷で終わらせた。

涼風はそれを思い出していた。やはり涼風は今、極限まで冴え渡っている。

「黒幕も、本を正せば姉姫様の中にいたんだもんね。行動の癖が同じに見えてもおかしくないか」
海風を抱きながら、仲間達の戦いを見守る。自分もあの戦いに加わりたいという気持ちもあるが、今は海風を放っておけない。いくら涼風もいるからと言っても、依存相手である自分が離れたら、海風は確実に終わる。それこそ、今はギリギリだが二度目の溢れに達してしまうなんてこともあり得る。
春雨は自分に起きているからこそ、海風に二度目なんて感じてもらいたくない。今でこそしっかり制御出来ているが、海風が次に溢れたら、それこそ命を失う可能性だってあった。全てを燃やし尽くしてしまいかけた春雨と同じように。
「海風、大丈夫だよ。みんなが頑張ってくれてる。あちらの私も、きっと救われる」
慈悲に満ちた瞳で海風を見る。出来れば顔を合わせて、面と向かって話をしたいものの、発作で蹲っている海風は、春雨と顔を合わせることも出来ない。
顔を上げたら、侵蝕されている別個体の春雨を目にすることになってしまう。それを本能的に拒んでしまっていた。海風にとって、春雨は神聖なモノ。穢されている姿は、春雨以上にショックを受ける。それをほんの少しだけでも見たことで、ここまで心が揺さぶられているのに、注視なんて出来やしない。
そんな海風に対して、春雨が持った感情は今までとは違った。
今までは、海風をこんな風にしてしまった別個体の自分に対して激しい怒りが溢れ出している。瞳からは真紅の焔が燃え盛り、表情も失われていった。
だが、今は違う。涼風の奮起に引っ張られた仲間達と同様に、怒りとは違う感情を齎されており、別個体とはいえ自分を救おうと一生懸命に戦う仲間達の姿が春雨の心を激しく動かす。自分が助けられているような感覚まで得られる。
それ故に、今の春雨には怒りよりも先に、本来の感情――思いやりが溢れていた。勿論怒りが無いわけではない。だが、それを凌駕する

レベルで、仲間を思う心が強く外に表れようとしている。
「大丈夫、大丈夫。必ず上手く行く。私が保証する」
この思いやりから、春雨の瞳に灯った焔の色が、真紅ではなく純白に輝く。怒りの奥から溢れる正しい心が、色になって外に現れた。
「……春雨姉さん……」
蹲りながらも、海風はようやく反応を見せる。今までとは違う温もりを感じたか、ゆっくりとだが顔を上げた。
涙でボロボロ、精神的な疲弊があまりにも激しく、見たこともないくらいにグシャグシャになってしまっている海風に、春雨は怒りが溢れそうになった。しかし、そこで怒り以上に海風を思いやる心が溢れ、しっかりと目と目を合わせる。
「大丈夫。海風の辛いことは絶対に起きない。あの別の私も、絶対に救われる。だって、私達が救うんだもの。救われないわけがないよね」
見たくないものによって崩れた心は、ずっと見ていたい笑顔によって元に戻っていく。海風にとって、最大の治療薬は春雨の笑顔。
「……そうですよね。山風だって、この戦いに勝とうって、ここまで前を向いてくれているんです」
それに、山風だって海風を立て直すために必要不可欠な存在だ。さっきまで山風が一緒にいてくれて、海風のためにも別個体の春雨を救いに向かい、今も奮闘するその姿が、海風の崩れた心をより癒していく。
「内向的だった山風が、春雨姉さんを救うために、あそこまでしているんです。救われないわけがない。どの春雨姉さんも、救われなくちゃいけません」
「うん、そうだね。私も、別の私が苦しむ姿なんて見たくない。それは黒幕のことが気に入らないってだけじゃない。それが私だからってだけじゃない。苦しむ姿を見たくないんだ。だからさ、海風」
顔を合わせ、目を合わせ、その溢れ出た涙を指で拭き取ってあげて、ニッコリと微笑む。
「私を、救いに行こう。海風なら、絶対に出来るよ」

春雨の保障が入った瞬間だった。海風にも不思議な力が湧き上がってきた。侵蝕された春雨を見たことでグズグズだった心に光が差し、全身に活力が漲るような心地よい感覚。

繭の中で感じた春雨の温もりとはまた違った、その強い心を感じられる温もり。触れられていなくても、春雨の愛を感じるような熱。後ろ向きな気持ちを燃やされるような焔。

海風は自分の力で立ち上がり、零れ落ちる涙を袖で拭う。

「行きます。行きます。必ず救います。春雨姉さんが黒幕に利用されているだなんて、私には耐えられない。最愛の春雨姉さんでなくても、別個体だとしても、春雨姉さんは救われてほしい。戦いの中で沈むのも辛いのに、あんな利用されて捨て駒になるだなんて以ての外です。いいように使われる春雨姉さんなんて見たくないんです。だから、だから私は……！」

その思いが力を引き出し、海風の瞳にも焔が宿る。

白露達のように直接春雨の細胞を入れられることで、怒りによる活性化をしているが、海風だけは特殊である。春雨が暴走した時、口移しでそのマグマを直接身体の中に取り入れているのだ。

人工的に抽出して、薬として注入されているのとはわけが違う。経口摂取で体内に入れ、それを自身の血肉へと変えた海風の身体は、ある意味根底から春雨の色に染まっていると言える。海風がそれを受け入れている、むしろ望んでいるのだから尚更だ。

故に、決意さえ出来れば後は簡単だった。他ならぬ春雨が侵蝕されているのだ。崩れた心さえ元に戻れば、後は救いたいという気持ちだけが躍動する。

「必ず！　春雨姉さんを救います！」

前を向き、力を振り絞り、高らかに誓う。それがトリガーとなり、海風の中にあるマグマが沸き立ち、海風自身を染め上げた。義腕である右腕が真紅に染まり、強固な艤装として確立した。

「行こう、海風。涼風もついてこれる？」

「あたぼうでい！　あたいだって、あっちの春雨姉を救いたいって思ってんだからな！」

がってんと力瘤を作った涼風。こちらもやる気は充分だ。もう前しか向いていない。
「ありがとう。別個体のことでも自分のことのように嬉しいね。あちらの私も、初めてここで出会ったけど、もう仲間として認識されてるんだね」
「そりゃあ、白露型だからね。違ったらどうだったかわからないけど、やっぱ姉ちゃんが利用されてるってのは気に入らねぇよ」
「ふふ、それは私もだよ。他ならぬ私だもん。黒幕に利用されてるなんて嫌だ。だから、絶対に救うよ」
改めて別個体の春雨を見据えた。あまりにも強い力を与えられ、ここにいる3人を除いた仲間達が総攻撃を仕掛けても素知らぬ顔で全ての攻撃を捌き切っているそれは、今この時も足下から泥が注入され続けているような状態。
いや、注入ではなく接続だろう。この島と一体となっている黒幕が、自身の意志を示すために、別個体の春雨を自分の意志を示す端末として使っているようなもの。
ならば、やはり最初に涼風が考えた作戦――別個体の春雨を島から引き摺り出す――が現状打破に繋がるだろう。接続を断ち切るためにも。
「涼風、思いつく限りの作戦は？」
涼風に問う春雨。それに対して、間髪容れずに答える涼風。
「海風姉は腕の鎖とか使って、あっちの春雨姉を海の上に引き摺り出してくれ！」
「ええ、勿論。春雨姉さんを必ずあの呪縛から解き放つ……！」
鎖を使える者が1人でも増えれば、陸上から離れさせることが出来る可能性が増える。今は白露と古鷹だけだが、そこに海風が加わることでさらに前進出来るだろう。
「春雨姉は……いや、多分あたいが指示しなくても全部いいとこ行けるんじゃないの？」
「そうだね。対地攻撃は出来ないけど、それ以外なら大概出来るから、要所要所に入っていくよ。涼風は？」

「あたいも似たような感じになると思う。対地攻撃出来ないから、多分本体狙いになるんじゃないかな」
「了解。それじゃあ、行こうか！」
改めて発せられた春雨の号令により、３人は戦線に参加する。１２人の力を合わせれば、この状況も打破出来る。

その頃、春雨の細胞が体内に入れられている最後の１人、コロラドも、自分の中で力が脈動していることに気付いた。
春雨に呼応しているわけでは無いのだが、防空巡棲姫との戦いが難航すればするほど、コロラド自身の怒りがその細胞を活性化させている。
「てこずらせてくれるわね……本当に」
「でも足止めはちゃんと出来ているので。それはこちらの作戦通りですよ」
コロラドの隣に立つ吹雪が苦笑しながら話す。
今までの泥人形と同じ戦い方が出来る防空巡棲姫には、吹雪もかなりてこずらされている。艦載機を飛ばしてこないのはありがたいものの、こちらの艦載機は全て撃墜されるため、直接攻撃しか手段がないというのに、当たり前のように徒手空拳を繰り出す上に、合間合間に泥鯨まで展開される。
それに加えて、周囲にはまだイロハ級が山のようにいる。全員で一斉にかかることが出来ればまだ健闘出来るかもしれないが、たった１人でも人数差をひっくり返す程の力を持っているために、なかなかうまくいかない。
「手段を見せないように戦うってのは難しいな……。もうその辺りは考えない方がいいのかな」
このままで行くと、ただ消耗させられるだけである。逆に防空巡棲姫はまるで堪えていない。
「全力を出したら、あっちが苦労するかもしれないしなぁ……」
作戦はより進むが、本来の黒幕との戦いに影響が出るとなれば話は

別。故に難しい。
だが、そろそろそんなことを言っていられなくなってきているのも事実。

何処の戦いも混迷を極めている。何処かで決断をしなくては、勝てるものも勝てない。

防波堤の戦い

春雨達が拠点で別個体と戦っている中、そちらに敵を向かわせないように残った者達は懸命に戦っていた。

群れとして現れているイロハ級は、ただ数が多いだけなのですぐに斃せるようにはなっているのだが、数が多いために逆に厄介。

そして、それの中心に立つことになっていた防空巡棲姫はさらに厄介。その目は黒幕の目として考えれば、本気を出したらその情報が黒幕側に行ってしまい、今の戦いが余計に厳しいものになり得るため、今は抑えている状態。

それ故に、既に情報として行っているであろう者達は全力で、最も渡してはいけないであろうデータを持っている吹雪だけは、あの全力を出すことなく攻撃を続ける。

近接戦闘までこなす吹雪ではあるものの、防空巡棲姫の凄まじい力にかなり苦戦している。全力を出してもトントンくらいかむしろ自分が劣るのではと目測で判断していた。

「厄介極まりないなぁ……武蔵さんが何人も入っていると、あそこまでになっちゃうのか」

苦戦していても、まだ表情は崩さない吹雪。勝利のためにはまず観察。この場で初めて出てきた敵に対しては、まずその情報を確実に自分のモノにしていくのがこれまでの定石。未知の敵だから混乱するのなら、既知の敵と照らし合わせていくのが手っ取り早い。

これまでの情報と、大将の秘書艦としての圧倒的な知識を組み合わせて、防空巡棲姫に対しての勝ち目を考えていく。そのため、まずは全て出させなくてはならない。

そうなると、今のままでは勝ち目がないと思わせるくらいに圧倒する必要が出てくるだろう。それが出来るのは――、

「一斉射！」

「おうさ！　大和！」

「ええ、行くわ！」

やはり武蔵と大和。ここにいる者の中でも随一の火力を誇る２人

がかりの渾身の砲撃は、当たれば確実に死へと至らしめることが出来る。
しかし、艤装による防御でその一斉射すらも弾き飛ばしてしまう程に硬い。一応軽巡洋艦であるはずなのだが、混じっている複数体の武蔵の力を全て膂力と耐久力に割り振っているように思えた。
「ここまで無傷だとプライドが傷付けられるようだな！」
「そんなこと言いながら何で笑っていられるの……」
一斉射が効かない相手を見て、大和はギリッと歯軋りをするものの、武蔵は強大な敵を相手にしても笑顔を絶やさない。
この絶望的な戦いの中でも、それ自体を愉しんでいる。大和には少し恐ろしくも感じるが、ここまでの敵を相手にして気持ちが落ちていかない武蔵に、逆に感心していた。
「ハッハハ、それは決まっている。私よりも強い者が目の前にいるんだ。つまり、まだ私には上があるということに他ならない。伸び代が見つかったんだぞ。喜んで然るべきだろう！」
吹雪という頂点を知っているからこそ、その狂気すら感じる力を求める心は燃え続けたまま。そこに吹雪以外にも強い者がいるとわかったならば、その炎はより燃え上がるという。
根っからの戦闘狂である武蔵には、強者との戦いにより血が滾ることが一番の喜び。それにより一度は慢心したが、それも制御されたことにより、純粋に戦いを楽しむ者となっていた。
そして、最強と称えられても自らを鍛え上げるのを怠らない武蔵に、そんな相手を見せてしまったら、笑顔を見せてもおかしくない。
大和にもその気持ちはわかる。わかってしまう。演習の時に武蔵と全力でのぶつかり合いをしたことで、強者との戦いで昂揚した自分を思い出せる。
やはり姉妹。そういうところは似た者同士である。
「だから頭痛の種が無くならないんですがね……」
武蔵のそんな声が聞こえていたことで苦笑する吹雪。頭痛の種かもしれないが、慢心を無くした武蔵はあんな性格でも非常に頼りになる。

無茶苦茶なことを言うしするが、仲間のことを信頼しているからこそ実行しているに過ぎない。そして、本当に無茶なことをする相手は吹雪だけという徹底ぶりである。
「アンタも苦労してるのね。でも、楽しそうに見えるのは気のせいかしら？」
コロラドも吹雪と共に防空巡棲姫に対して砲撃を繰り出している。白鯨は防空巡棲姫が泥鯨を繰り出すまで温存する作戦。白鯨で押し潰そうとしても、逆にあのスペックを残したまま泥鯨で迎撃され、他の者達が手を出しづらくなってしまうのがよろしくない。
白鯨はこの戦場の中でも屈指の力ではあるのだが、多用するのは戦場をただ荒らすだけになる可能性もある。いくら合同演習の時にさんざん見せたとしても、実戦に組み込むのは少々難しい。
また、敵が白鯨で押し込むことが出来そうな相手ならば、容赦なく繰り出していただろう。ただでさえ春雨細胞の活性化によって力が漲る状態。今ならばスタミナの消費のことを考える必要も無いくらいである。
しかし、対等と言えるほどの泥鯨が出せるというのがわかっているのだから、他に合わせた方がいいだろう。
確実に勝つ戦いより、絶対に負けない戦いを狙う。命あっての物種。無理して突っ込んで返り討ちでは目も当てられない。
「そう見えますか。いや、まぁ、苦痛ではないですよ。アレがうちの武蔵さんですし。むしろこの戦いで焦った表情を見せたりしたら、その方が心配になります」
「へぇ、じゃあ結構認めているのね」
「勿論。仲間ですから」
薄く笑みを浮かべる吹雪に、コロラドは肩を竦めた。頭痛の種なんて言いながらも、そうあることを楽しんでいるような姿は、吹雪もまた武蔵と似た者同士なのだろうと思っていた。
それがコロラドと叢雲の関係性に似ているようにも考えたが、同じにしたくないと首を横に振ってその考えを掻き消した。

吹雪は防空巡棲姫との戦いをメインにした指示だが、同じようにこの盤面を見ながら的確な指示をしているのが島風である。
持ち前のスピードを遺憾なく発揮し、時には自ら矢面に躍り出て、時には仲間との協力で確実に数を減らす。防空巡棲姫との戦いにも手を出しつつ、周囲のイロハ級を減らすことにも尽力。
「雷、そっち頼んだよ！」
「りょーかい！　イロハ級なら何体相手でも行けるから！」
「あはは、頼もしいね。頼りにしてる！」
比較的小粒が多いところに駆逐艦を回しつつ、大型が多いところには自ら赴き、川内や鹿島と連携を取る。千歳と千代田は現状潜水艦相手を徹底しているため、空爆が微妙ではあるのだが、うまく出来そうなタイミングがあれば、それも見逃さずに空襲指示。
吹雪が大ボスとの戦いに集中出来るように、島風は敵の1体も春雨達の跡を追わせないように大局を見据える役目を担った。
狭いが圧倒的な力を持つ者と戦うか、広いがまだ対処しようがある敵の群れを処理するか、どちらが楽かなんてことは一概にして言えた話ではない。とはいえ、吹雪ほどの実力者が相手をしても厳しいのならば、そこに集中してもらった方がいい。
島風もまた、戦局を俯瞰することが出来る者。自分の役割をすぐに把握し、即実行する。速さに自信があるものとして、判断の速さも周りが認める程。
「潜水艦減ってる!?」
「多少は減ってるわ。半分そっちに回す！」
「防空巡棲姫の方には回さずにイロハ級の処理だけに使って！」
千歳と千代田に少しだけ余裕が出来たのも見逃さない。島風自身も簡易ソナーで海中を確認しながら動き回っているため、敵の接近にはいち早く反応出来る。全域の海中を把握しているわけではないにしろ、艦載機の微妙な動きの変化に反応して、即座に声をかけていた。
そのタイミングが絶妙であり、千歳と千代田にもそうだが、誰にも隙を与えない。思考を研ぎ澄まし、確実に現状を有利に持っていく方

向へ導く。
「っ、泥人形……っ」
　イロハ級だけでも数の多さで厄介極まりないのだが、合間合間に現れる泥人形にも手を焼いている。幸いなことにイロハ級の融合によってしか生まれないため、そうなる前に処理すれば大丈夫なのだが、戦場が広いためどうしても漏れが出てしまう。
　さらに、この場所から龍驤が決戦へと向かっていることもそれに拍車をかけていた。ＲＪシステムの効果範囲外となったことにより、泥の弱体化が薄れてしまっている。結果として、イロハ級すらも硬くなっているのだ。そんな状態だと、泥人形の生成は今までよりも妨害出来なくなってしまうのは当然のこと。
　しかし、艦娘は成長する。相手が強くなろうが、その場その場で対応の仕方が身につくおかげで、善戦は続いていた。硬いなら柔らかい部分を狙えばいい。速いなら動いた先を先読みすればいい。
　そしてそれに最も適応が早かったのは、やはり島風。そして、それと近しいか、むしろそれ以上の成長速度を見せていたのは、大塚鎮守府が誇る最強の練習巡洋艦である。
「大丈夫です島風さん、カバーします！」
「さっすが鹿島姉ちゃんだ！　慣れるのはっやーい！」
「いち早く理解し、それを伝えるのが、練習巡洋艦の務めですから！」
　鹿島の鞭が唸り、生成された直後の泥人形に巻きつく。如何に力を持とうが、その行動を起こす前に捕らえてしまえば、脅威は未然に防ぐことが出来る。
　故に、島風以上に鹿島はこの戦場で泥人形の生成を見張っていた。無論、イロハ級の処理はしているのだが、撃ち漏らしを把握することを優先していた。
「相手が泥人形なら、一切の容赦は必要ありませんしね」
　拘束している泥人形の頭に向けて、躊躇なく主砲を押しつけて放った。水風船のように破裂し、そのまま形が崩れていく。泥人形の急所は、ヒト型なだけあってわかりやすい。
　そもそも鞭を首に巻き付けて斬首するような戦術までこなすのだ

から、容赦も何もあったものじゃないのだが。
「うわぁ、本当に容赦ない」
「ここを乗り切るためには容赦なんて必要ありませんからね。艦娘でも深海棲艦でもない、ましてや味方になることが絶対にないよくわからない生物相手には尚更です」
「でも、任せられるよ。泥人形はお願い！」
「了解です。島風さんも頑張って！」
「おうっ！　踏ん張りどころーっ！」
島風がさらにスピードを上げていく。やらねばならないことはやれているのなら、それを維持し続けることが大事。そのためにも、今以上の力を発揮してより良い方向へと向かわせる。

「っりゃあああああっ！」
周囲のことを気にする必要が無くなったおかげで、何も考えず全力で戦いに挑めるというもの。
比叡も何も顧みずに刀剣を振り回し、防空巡棲姫に向かう。しかし、やはり艤装に傷をつけることすらできない。
「重くない」
冷静に弾き飛ばし、殆どゼロ距離で比叡に向けて砲撃。
「やられるかぁぁぁ！」
それをこの距離だというのに斬り払う比叡。それと同時に片方の刀剣を艤装にしまい、主砲へと変形させて放つ。武蔵達より威力は低くとも、この距離ならばある程度の効果が見られるかもしれない。
しかし、何も全てを真正面から受け止めるわけではない。島風の泥人形の力も取り入れている防空巡棲姫は、それを瞬時に回避に使い、比叡の真横へと移動。
「速くない」
そして、まともに蹴りを入れる。相変わらずの横っ腹だが、比叡はその衝撃で倒れることは無かった。
「させなぁい！」

「こちらのセリフ」
またも刀剣を薙ぎ払う比叡。対する防空巡棲姫も、何処からか取り出した刀を振るった。泥人形の力を全て使えるなら、伊勢と日向を混ぜられた大鳳の力――斬撃を仕掛けてきても何もおかしいことはない。
「つくぅぅ……っ！」
刀と刀が弾き合い、その衝撃で互いに間合いを取ることに。一筋縄ではいかないが、ここまで力を持っている上にあまりにも万能すぎるとなると、戦いも消耗させられるだけになってくる。

あまりにも強い防空巡棲姫に苦戦させられる。これを乗り越える手段を見つけ出すのは誰になるのか。

信頼からの本気

防空巡棲姫の強さは、単純な強化を積み重ねられた結果で得ているモノである。

魂の混成として入れられたアトランタと無数の武蔵により強靭な身体と自身の持つモノをさらに強化した防空能力を手に入れ、さらには泥人形としてコピー出来る今までの情報を全て叩き込まれたことによって技術を全て吸収させられ、そこに泥によるブーストまでかけられていることにより、全ての力を十全に扱えるようになってしまっている。

多すぎる混成による代償として自己を認識することが出来なくなるデメリットも、黒幕にとっては好都合だっただろう。潜水艦姉妹に対しては依頼というカタチで自分の思い通りの行動をさせることにより、善悪の感情を超越して施設への侵入を成功させたが、こちらは自分の思い通りに動く傀儡として調整したようで、何も文句を言わない最高の守護者として拠点防衛の長として君臨している。

故に、やってはいないが説得なんて確実に通用せず、力の加減もしない。感情のブレもない。ただただ黒幕のために出来る力を全て出し尽くす。

「比叡さん、まず砲身を斬ってしまってください！」

戦いの中で吹雪は出来ることを全て確かめるため、一旦攻撃方法を狭めてみる方針に出る。

一度比叡の斬撃が両用砲を1本斬り飛ばしたことは確認出来ている。砲撃の衝撃には強くとも、斬撃には弱いことはそこで証明されている。そのため、比叡には両用砲を機能不全に陥らせることに専念してもらおうという算段だ。

「了解っ、でぇす！」

基本的には近距離を維持しながら戦う比叡。コロラドの砲撃や武蔵と大和の一斉射を邪魔しないように、合間合間にバックステップを織り交ぜながら、一切止まることなく動き続けた。

しかし、防空巡棲姫が刀まで取り出し始めてきたため、比叡の一撃

もなかなか上手く行かない。使える手段を躊躇なく使ってくるのが防空巡棲姫である。学習しているというよりは、最初からそうするようにインプットされているような感覚。

良くも悪くも機械的。傀儡という言葉が最も似合う敵。黒幕が他人に出来ることをこれでもかと詰め込んだ最高傑作。武蔵が複数人混じっていることで、限界を超える力を発揮しても身体が追いつかないなんてことすらないのが厄介極まりない。

「近付かせない」

間合いをとった瞬間の比叡に対し、ハリネズミのような配置の両用砲のほぼ全てを比叡に向けた。一発一発が戦艦の砲撃並みの威力を誇るのにもかかわらず、かなりの数を一気に放つという攻撃。点ではなく面での攻撃が、比叡に向かって放たれるということになる。次の一手を完全に封じつつ、あわよくば始末まで持っていこうという一撃。

防空巡棲姫は人形みたいなものだが、次の一手をその場で考えるくらいの知能は持っている。学習はせずとも、的確な対処法をその場で割り出すくらいはする。その結果が、最も近い場所におり、かつ自分の武器を一部でも傷つけた比叡を優先して消すこと。

「流石に避けまぁす！」

間合いをとっている分、流石にそれは避けられる。比叡は高速戦艦。多少は回避行動が取れるし、当たりそうな砲撃は斬り払う。これで一応の回避は出来るのだが、砲撃の衝撃までは全て消すことは出来ない。踏ん張ればその分、衝撃が身体を駆け巡って消耗に繋がる。

かろうじて回避出来たが、最も近くを通過した砲撃の衝撃波が明らかに比叡の体力を抉る。

「っつ……酷いなこの威力……っ」

比叡も少しだけ顔を顰めた。隙を見せないようにすぐさま刀を構える比叡だが、内心じんじんとした痛みまで出てきてしまった。珍しく愚痴を呟いてしまっているのも、あまりにも硬すぎることに対しての苛立ち。繰り出せど繰り出せど、その攻撃はまるで通る気配がない。

確かに初手で両用砲の1本を斬ることが出来たが、それを喰らったからこそ、比叡を執拗に狙い、唯一効く攻撃をしてきたものに優先順位をつけた。防空巡棲姫からしてみれば、比叡さえ始末してしまえば後は何もせずとも勝てる相手。脅威は早々に排除するのみ。

「やるなら一撃で……だけど、そんな簡単にいかないもんなぁ！」

間合いをとったため、比叡も砲撃にスタイルチェンジ。今度は逆に近寄らせない方針へ。

どちらかといえば受けの戦い方をする防空巡棲姫の流れにしないように、あくまでも自分達が流れを作っていく。

「効かないのに」

その砲撃は当たり前のように艤装で弾かれる。もう何度も何度も戦艦の主砲を受けているのに、やはり傷一つついていない。

これは本当は両用砲が自己修復した原理と同じであり、傷自体はついているのだが瞬時に修復されているだけ。とはいえ、表面に傷をつけるくらいしか出来ていないのも事実。

それを自分の目で確認出来ているのは、この中では吹雪だけ。防空巡棲姫を注視して、その一挙手一投足まで見続けていたから今の特性を把握している。

「勝手に直るのは流石にインチキだな……」

どうにかすると考えるなら、比叡が叫んだ通り一撃で死に持っていくしかない。あのペースならば、重傷に持っていっても時間を与えるだけで完治しそうである。艤装があれなら本体すらも自己修復しかねない。

自分の身体のことを顧みないように調整されているのなら、腕を飛ばそうが脚を飛ばそうが泥がそれを補填しそうである。頭を無くす、もしくは心臓を潰す、それくらいしなければ死ぬこともないし止まることもない。

逆に言えば、殺すこと以外で止めることが出来ないというのもあるだろう。ここまで来たら治療も何もあったものではない。心を入れ替えさせるどころか、そもそも心が無いような相手をどうしたら救えるのか。

それこそ、死こそ救済という残酷な現実を突きつけるしかないのではないだろうか。潜水艦姉妹のように更生の余地があるわけでも無い。芯の芯まで敵の思想に染められた人形を、今からこの場で作り直すことが出来る者はいない。
「鹵獲出来ればどうにでも出来るだろうけど、それも無理だよなぁ。そんなことする前に命燃やされて死ぬだろうし」
そうなると、もう救うという甘い考えは捨てた方がいいのだろう。可哀想ではあるが、生きている限り敵対し続ける存在に成り果ててしまっているのなら、始末以外に選択肢は無い。
非情であっても、これは戦場。それは割り切らなくてはならない。防空巡棲姫も利用されている存在なのだろうが、取り返しがつかないところにまで改造されてしまっているのなら、もうその命を奪うしかないだろう。
その役目は自分が担う。そんな辛い思いを他の仲間にしてもらいたくない。
「ダメだ、打開策がない。出し渋っててもジリ貧になるだけだ。でも向こうの戦いに悪影響が……」
「独り言が喧しいわよフブキ」
考えを口に出して纏めている吹雪に対して、コロラドがツッコむ。そうやって現状を打破しようとしているのは理解出来るが、少々聞き捨てならない言葉が聞こえたため、口に出したようである。
「向こうに悪影響？　そんなこと考える必要は無いわよ」
「いやいや、あっちが本番なんですし、苦戦をするのはわかっているのに余計に覚えさせちゃいけないこと覚えさせたら」
「アイツらならその程度くらい楽々乗り越えるわよ。だから、出し惜しみなんてもうやめなさい」
杖の主砲を放ちながら、吹雪に説教。確かに吹雪のあの手段は、敵にはなるべく知られたくない技。それをあちらに多用されるようなことがあれば、黒幕との決戦がさらに苦しくなる。
だが、コロラドは断言した。吹雪が何をして、それをあちらが取り込んだとしても、仲間達はそれすらもその場で乗り越えるだろうと。

「ここでアレをどうにかしないと、私達だってどうなるかわからないわよ。ただでさえ消耗させられてるんだから。それに、さっさと終わらせれば私達だって向こうに行けるでしょう。アンタの手段が何かは知らないけど、あちらに厳しくなるならアンタ自身が向こうに行ってどうにかすればいいじゃない」

だから、全力を以て戦えと言い残し、コロラドは何か考えがあるのか移動を開始。向かったのは武蔵と大和の方である。戦艦がまとまって撃つ方が、あの強固すぎる装甲も撃ち抜けるかもしれないと考えたか。

だが、それを上手く通すためには、吹雪に本気を出してもらわないといけない。躊躇いなど捨てて、出来る手段を全て出してもらいたい。

「……そっか、そうですね。無意識に信頼出来てなかったのかな。春雨ちゃんだっているんだし、私が何やっても、看破して乗り越えてくれる、か。うん、よし！」

コロラドの言葉で吹雪も覚悟が決まった。自分が何をやっても、あちらなら乗り越えてくれる。それに、ここでずっと躊躇って本気を出せずにやられたら未練しか残らない。

第一、見せたところでそれを絶対コピーされるとは限らないのだ。覚えられたからと言っても出来るとも限らない。何故なら、あちらがどういう戦い方をしてくるのかわからないのだから。

「行きましょう！　出し惜しみして負けるとか笑えないですし、ね！」

途端に吹雪のスピードが変わる。脚部艤装の出し入れによる急加速は一度見せているため、防空巡棲姫もすぐさま反応して艤装で防御。撃つ暇も与えずに蹴りが入るものの、本体にダメージが入ることはない。

だが、ここからが違う。

「一度倒れてもらいますよ。そちらにも全力を出してもらわないと困るので」

蹴りが艤装に当たった直後、再び脚部艤装の出し入れによる衝撃を与える。これは殺傷能力は小さいかもしれないが、威力だけは戦艦主

砲以上のそれであり、防空巡棲姫であってもいきなりそれをされたら体勢を崩す。
「……なに？」
驚いたような表情も見せず、何をされたかわからないという言動。そこから猛攻を始める。
「気付かないうちにどんどん行きましょうか」
艤装で守られるとわかっていてもその拳を突き出す。防空巡棲姫も駆逐艦の拳はガードすればいいと艤装を盾にするが、それが少し当たった瞬間に強烈な衝撃を受けて吹き飛ばされた。
これだけでは終わらない。飛ばされた防空巡棲姫を軽く追いかけて、さらに触れる。防空巡棲姫もまずいと考えたか、両用砲を吹雪に向けて構えた。比叡の時のように全てを向け、弾幕で埋め尽くそうと画策した。
「砲撃って遅いんですよ。照準合わせてトリガー引くまでに2ステップありますからね。どれだけ強くなっても、それだけは変わりませんから」
再び艤装の出し入れ。砲撃を放つよりも前に衝撃を放ち、撃つ前にまた吹っ飛ばした。
その後に放たれた砲撃は、照準など定まらずにあらぬ方向に飛んでいった。
「まだまだ行きますよ。慣れさせる暇なんて与えません」

吹雪が本気を出し始めたことで、流れが来始める。

防空巡棲姫の力

「これもまた、慢心なのかな」

吹雪は防空巡棲姫への攻撃を繰り返しながら独りごちた。脚部艤装の出し入れによる衝撃で海面を蹴ることで防空巡棲姫に追いつき、浮かせたまま追撃を入れる。防空巡棲姫は咄嗟に艤装をそちら側に展開するが、砲撃を放つ余裕は一切与えられずに再び蹴りを入れられ、飛ばされる向きを強引に変えられる。

自分が本気を出して防空巡棲姫と互角に戦うことが出来たとしても、それを黒幕に学ばれたら、決戦に向かった仲間達では勝ち目が無くなってしまうと考えていた。

つまり、あちら側の仲間達は、自分には勝てないと無意識に思ってしまっていた。実際にはかなりの実力差があるだろうが、少し信用していなかった部分があるのかもしれない。

「傲慢だなぁ私」

大将の秘書艦を務めているのもあり、鎮守府でも最強として認識され、知る者からも一歩引いた、むしろ畏敬の念を抱く者までいた。あの武蔵を捻る姿なんて見てしまったら、そう思う艦娘が多くいてもおかしいことではない。

そして、基本的には大将の隣に立つ者として、仲間と協力して戦場に立つことも少なくなっていた。それにより、よく言えば孤高、悪く言えば孤独な存在となっていたのは間違いない。

それが結果的に、自分に敵う者がいないという状況を作り上げていた。そのせいで、自分の力を敵に知られたら、勝てなくなってしまうという考えに繋がる。ここを吹雪は自己分析によって傲慢だと感じた。

しかし、よくよく考えてみれば、既に吹雪に拮抗する存在は仲間にいる。合同演習で接戦を繰り広げた春雨。一度喰らったことで看破し、突拍子もない手段でそれを覆し、吹雪の顔に模擬弾をぶつけた者。

その春雨があちら側にいるのだから、自分の手段があちらに学ばれたとしても、また何かしらの回避方法を編み出してくれるだろう。春

雨は既に知っているのだし。だから、別に見せちゃってもいいやというところに持っていけた。
「何を、言ってるの」
「ああ、こちらの話ですよ。貴女は表情が歪みませんね」
着水前にさらに追いついた吹雪は、海面に押し込むように腕を振るう。勿論直撃する瞬間に艤装の出し入れをし、強烈な衝撃を叩き込みながら海面にめり込ませるかのように叩き付けた。
吹雪なら下手をしたら防空巡棲姫を浮かせたままに出来る可能性があったが、あまりやり続けると慣れさせる可能性があるため、バリエーションを持たせつつ確実にダメージを与えていく。
しかし、防空巡棲姫の頑丈さは異常だった。これだけ滅多打ちにされても、艤装には傷ひとつついていない。やはり自己修復が利いている。艤装でしっかり守っているため、肌の方にもダメージは無し。
そして体力面だが、そこも無表情なせいで疲れがあるのかもわからない。息遣いも全く変わっていないため、大したダメージは無いと見ていい。
だが、いずれ限界が来る。泥でも体力の補充までは出来やしない。消耗させ続けて自己修復も間に合わないくらいまでにしてやれば、最後は斃れるはず。
「止めませんよ、攻撃は」
叩き付けたところに魚雷を被せる。吹雪が出来るであろう最大級の火力であり、順当な戦い方を挟んで惑わす。拳を止めるのとは全く別な防御をしなくてはならない。
「それは喰らいたくない」
ここで防空巡棲姫が繰り出したのは、泥鯨。魚雷を巻き込むように現れたそれは、防空巡棲姫を持ち上げながらも質量を増し、吹雪にも間合いを取ることを強要する。
流石の吹雪も、泥鯨を破壊することは出来ない。戦艦棲姫の艤装くらいまでなら可能だが、ここまで巨大なモノとなると、砲撃も魚雷も通用しないだろう。
「こういう時に私がいるのよ！」

だが、鯨には鯨をぶつけるのが定石。即座に白鯨を展開したコロラドが猛烈なスピードで突撃し、泥鯨に体当たりをぶちかました。
泥人形を相手にしていた時と違い、泥鯨を操る本体が自分以上のスペックを持ってしまっているため、始末ではなく戦いやすくする方向に持っていく。
既に何度も白鯨の再展開を繰り返しているが、消耗は僅か。やはり春雨細胞が効いているおかげでスタミナ面は解決出来ており、今は怒りによる細胞の活性化があるおかげでより強く力を発揮出来るようになっていた。
使い続ければ消耗は激しくなるのだが、必要な時にのみ効果的に扱うことで、コロラド自身もここに来て自身の力の使い方を上の段階へ昇華していった。
「我々もいる！」
「ちょ、ちょっと足場が悪いけど、やれないことはないわ！」
そして、そのコロラドの隣には武蔵と大和も立っていた。コロラドと合流したことで、展開と同時にその上へ移動し、防空巡棲姫本体を見定めていたのだ。
泥鯨の上に行かれると、海上からは狙えない。故に、同じ視点に立つことで確実に狙う。一斉射すら弾かれていたのだが、撃たないよりは撃った方がいい。あの防空巡棲姫にも消耗が無いはずがないのだから。
艤装の上ということで足場は悪いものの、一斉射が出来ないわけではない。ならばここでやるしかあるまい。
「それなら、私も手伝ってあげる。ただ、申し訳ないんだけど私をＣｏｎｔｅｒにしてちょうだい。Ｗｈｉｔｅ　ｗｈａｌｅのＣｏｎｔｒｏｌをしながらだから、安定のためにね」
「了解した。貴様と肩を並べて戦うのは楽しそうだ！」
「勝手は変わらないし、大丈夫です。２人が３人になれば通用するかも！」
そこにコロラドも参加。２人がかりの一斉射ではなく、３人がかりの一斉射。バランスを取るためにコロラドを中心とした『タッチ』を

実施。
「それじゃあみんな、全力斉射！　一気に殲滅する！　Ｆｉｒｅ！」
号令と共に、３人同時に強烈な砲撃を開始。本来ならば、コロラドの砲撃は武蔵や大和と比べるとどうしても一段落ちてしまうのだが、深海棲艦化と魂の混成、そして春雨細胞の活性化により、勝るとも劣らない力を手に入れている。
そのため、コロラドを中心にした『タッチ』は、非常にバランスよく防空巡棲姫に襲い掛かる。泥鯨の上ということで逃げ場も少なく、そもそもの一斉射の密度が上がっているため、艤装によるガードも今まで以上にダメージが入るはず。自己修復があるとしても、それを超える速さと勢いで砲撃が放たれれば、追いつかずに撃破も可能なはず。
「……困る」
そこで防空巡棲姫が取った行動は非常にわかりやすく、その射線軸からズレるために泥鯨を消し、海面へと落下。一斉射の衝撃を利用して、いち早く着水。
「そんな感情持ってるんですか？　社交辞令ですかね？」
だがそれを吹雪が許すわけがない。着水と同時にその地点へと駆け込んでいた吹雪は、再び一斉射の射線軸にぶつけるために防空巡棲姫を蹴り上げる。ただの蹴りならそんなことは無いのだが、吹雪の本気の蹴りは武蔵ですら浮き上がらせる程の威力を持っているため、防空巡棲姫でもお構いなしにかち上げた。
それを耐えようとすかさず艤装で防御するものの、衝撃を逃すことは出来ず、どうしても空中に投げ出される。そして、一斉射の真っ只中に飛び込む羽目になった。
「もっとだ！　もっと！　貫けぇ！」
武蔵が吼え、より弾幕の密度が高まった。後先考えない全弾発射の前には、逃げ場なんて何処にも無く、艤装だけでは抑えきれなくなり、明らかに自己修復が追いつかなくなった。
砲撃をやり返されるような暇も与えず、直撃による爆炎と爆煙がその場で巻き起こり、防空巡棲姫の姿が見えなくなってしまうが、次の

砲撃でそれを全て吹き飛ばしてまだまだ追撃し続ける。それこそ死ぬまで。
ずっと空中に止めることは出来ないため、砲撃に押し込まれて海面に叩きつけられた。
「一旦止める！」
ここでコロラドが一斉射を止める。海面に辿り着いてしまった状態でさらに押し込もうとしても、海中に潜られることで砲撃の衝撃が吸収されて効かなくなるかもしれない。
泥人形の力を全て持っているということは、潜水艦の力を持っている可能性もあるということ。
事実、海面に叩きつけられた時に浮かんでこないところを見ると、この考え方は間違っていなそう。吹雪に叩きつけられた時は咄嗟に潜水艦の力を使うなんてことは出来なかったようだが、一斉射に巻き込まれている間に次の手段を考える余裕があったか、その力を遺憾無く発揮してきた。
「フブキ、私達はＳｕｂｍａｒｉｎｅ（潜水艦）相手だと無力よ！　そっちは……って、言うまでもなかったか」
コロラドが頼む前に、既に吹雪は動き出していた。いや、むしろ動いていたのは吹雪だけでは無い。潜水艦を徹底して狙っていた千歳と千代田が、この事態に瞬時に動き出していた。
防空艦が海中に潜っているのなら、対空砲火は飛んでこない。ならばここからは空母の時間である。
「動きを止めるわ！　そちらから狙って！」
千歳の言葉に吹雪が頷くと、簡易ではあるが爆雷を投げる。同時に千歳も千代田の艦載機も爆雷を投下し、潜水艦と化した防空巡棲姫を追い詰めていく。これ以上潜らせていては面倒なことになるのだが、潜っている方が不利であるように持っていけば自然と浮上してくるだろう。
むしろ、ここで千歳と千代田が動き出したのは、もう一つ理由がある。防空艦として動いているのなら、艦載機を見れば嫌でも浮上を優先するだろうと考えたからだ。空を制する者として存在しているの

に、艦載機に潰されるというのはプライドに傷をつける行為。いくら戦い方を変えているとはいえ、艦載機であることには変わりない。
自己認識が出来なくなるくらいいろいろと混じってしまっていても、防空艦としての矜持が失われているとは限らない。これで釣れれば御の字。
「千歳お姉、浮上してきてる！」
「狙い通りね。それなら、攻撃隊一時撤退！」
浮上されたら艦載機が一網打尽にされる可能性が非常に高いため、一度防空巡棲姫の周囲から撤収。
潜水艦の力を使っている間は、艦種が潜水艦に固定されるようなので、やはり対空砲火は一切飛んでこなかった。だが、艦載機が鬱陶しく対潜攻撃を続けていたおかげで、もう一度海上に引き摺り出すことは出来たようだ。
「比叡さん！」
「当然、見えてる！　だらぁあああっ！」
浮上してきた瞬間を狙い、比叡が踏み込んでいた。殆どモグラ叩きのような状態。姿を現したタイミングで、海面に叩きつけるように刀剣を振るい、脳天からかち割ろうと渾身の一撃。
しかし、その刃はまたもや酷い衝突音と共に防がれた。しかも、艤装では無く防空巡棲姫が握る刀によって。
「……邪魔」
さらにはそこから軽く振るわれただけで、比叡は弾き飛ばされてしまう。先程よりも力が強くなっているようにすら感じた。
浮上してきた防空巡棲姫は、やはり傷ひとつ負っていない。だが、これまでとは確実に違う部分があった。
「攻撃、通ってるね。あそこまでやってアレなのは悔しいけど」
防空巡棲姫の見た目が少し変化している。顔にラインが走っていたのだ。おそらくあれは、防空巡棲姫の内部に入れられている泥が溢れ出している証拠。そこまでしなくては、現状を打破出来ないと判断させた。

無傷とはいえ、防空巡棲姫の真の力を発揮させているのは確かである。ここを乗り越えることが出来れば、勝利は目前である。

空母の意地

吹雪達の猛攻を受け、防空巡棲姫の顔にはラインが走り、泥が溢れ出しているのがわかった。ここからが真の力を発揮する時。

既に潜水艦の力まで使い始め、海中を回避先に使うようになってしまっているため、戦場はたった1人のために三次元の戦いへと変化する。

「厄介だから、早く始末する」

ここにいる者は全て厄介極まりない存在であると判断したようで、無表情ながらも吹雪に狙いを定めた。特に厄介なのが吹雪であることも理解している。

思考自体が人形と化しているものの、その場で考えることは出来ていた。誰が一番黒幕に害を及ぼすかという基準であろうが、どの観点から見ても吹雪がこの中でもトップクラス。

故に、この力を以てして、吹雪を集中狙いすると決めた。

「もう消えて」

ダンと聞こえる程に海面を踏みつける。瞬間、突発的な加速を用いて吹雪に急接近した。

吹雪の速度には追いついていないが、単純に脚力だけでとんでもないスピードを再現している。武蔵のパワーと島風のスピードを兼ね備えているため、艤装の展開を使った加速などしなくても、同じくらいのスピードを出してしまった。

さらにそこでハリネズミの両用砲を展開。突撃と同時に砲撃まで放ち始め、回避経路を封じながらの接近。そもそもの砲撃自体が戦艦並みであるため、どれが当たっても死を免れない状況。

「それが十全ですか。荒っぽいけど、確実に殺そうとしてきてますね」

当然、吹雪はまともに受けるつもりはない。脚部艤装の再展開により、一気に射線軸から退避。

如何に吹雪といえど、耐久力に関しては駆逐艦のそれである。鍛えられるものと鍛えられないものがあるのだから、そこは別のもの、今回はスピードと瞬発力でカバー。

「逃がさない」
だが、防空巡棲姫も負けてはいない。突撃からさらに踏み込み、強引に身体の向きと進行方向を変更。慣れていない者がそんなことをやろうものなら、間違いなく脚を負傷、最悪折れてしまうくらいなのだが、そこはやはり混ぜ込まれた素材による力、そして泥ブーストと自己修復まで利かせて、さも当然のように繰り出してきた。
実際は痛みもあるのだろうが、防空巡棲姫は表情を変えない。痛くてもどういう顔をすればいいのかわからないのか、そもそも痛みを感じることすら出来ないくらいに感情が失われているのか、痛みというものを理解していないのか、そこはわからない。
「よくもまぁ、そんな動きを」
そこは吹雪の方が上手である。急加速や急転回に関しては、吹雪に一日の長がある。まるでステップを踏むように2回3回と急転回を繰り返し、その負荷も綺麗に受け流し、防空巡棲姫には出来ない動きで確実に回避していく。
結局のところ、防空巡棲姫の急加速は付け焼き刃。今ここで吹雪においついてやると、自分が出来ることを組み合わせて繰り出したに過ぎない。長年使い続けてきた吹雪に追いつけるわけが無かった。
しかし、そこに戦艦並みの砲撃が加わっているため、吹雪も回避に専念せざるを得ない状況に持っていかれている。余計なことをすると砲撃を掠める可能性があると考えると、吹雪も内心戦々恐々である。
吹雪から砲撃を仕掛けたところで、防空巡棲姫の砲撃に呑み込まれて返り討ちに遭うことが目に見えていた。それに、照準を合わせている暇があるのなら全力で回避に徹した方が先がある。
「私が厄介なのはわかりますが、ここには私以外もいるんですよ」
ここで吹雪は仲間を頼る。当然ながら、ここには沢山の仲間がいるのだ。これまでだって、ずっと共闘し続けている。
今の防空巡棲姫には吹雪しか見えていないのかもしれないが、無視され続けている他の仲間達としては、その隙を探し出すチャンスがきたようなもの。

「だったら、覚悟を決めるしかないわね」
「うん、妖精さんには申し訳ないけど、今はこれが一番だもんね」
真っ先に動き出したのが千歳と千代田である。潜水艦をあらかた殲滅出来たことで、ほんの少しだけ余裕が出来ている。そのため、艦載機の一部を防空巡棲姫にぶつけようと考えた。
勿論、あちらの対空砲火は並ではない。本来の防空巡棲姫もとんでもないのに、そこにアトランタまで加わってしまっているのだから、向かわせる艦載機達は全滅すると確約されているようなもの。だとしても、今は手数を増やすために空からの攻撃が必要。
「妖精さん、私達の力、ありったけ持っていっていいから！」
「攻撃隊の意地、見せつけてあげよう！」
千歳と千代田が操るカラクリ人形が、もう何度目かもわからないが発光を始めた。これまでで特に眩く、千歳が言うように力をありったけ込めたことで、艦載機達も力を増していく。
相手は艦載機に対して最大級の天敵。真正面からぶつかるだなんて以ての外。避けて通るのも難しい、知る限り最強の防空艦。そんな相手に空母が戦いを挑むなんて無謀かもしれない。
それでも、千歳と千代田は覚悟を決めた。共に歩んできた妖精さんに全てを乗せて、渾身の発艦。それでも、扱える艦載機の半分と少しである。残りはイロハ級の群れやまだ残っている潜水艦を始末するために使っているのだから仕方ない。
「いい千代田、あちらは戦艦みたいな威力の対空砲火を撃ってくるような輩よ。だから」
「大きく広がってから、同時に突っ込む！」
「ええ、それで行きましょう」
千歳が言う前から、千代田は立てられる策を理解している。３６０度全てから取り囲んで、中央に置いた防空巡棲姫に向かって突撃しながらの爆撃。
深海棲艦の艦載機のような小回りが利くような性能は持ち合わせていないが、一糸乱れぬ隊列による同時攻撃は、全てに自身の意思が介入する深海棲艦と違って搭乗者として妖精さんを使っていること

が利点となる。使用している空母とは別のタスクで動くことで、使用者への負荷を減らしながらも完璧な行動が可能となるからだ。
カラクリ人形を通して力を与え、既に限界に達している熟練度をさらに引き上げ、よりその行動の精度を上げることで、防空艦の対空砲火にも対応する。ここまでの者が出てくるとは思っていなかったが、防空艦相手にどうしても向かわなくてはいけなくなった時のことは考えていた。
「妖精さん、お願い！」
際限なしに力を注ぐが、一気に消耗する。膝をつく程の消耗ではないが、一瞬だけ目眩がした。疲労を超えて、明確に体力を失っていっている感覚を覚える。
千歳がこれなら千代田も同様。こちらは明らかにフラつきまで見せたが、その場に踏ん張り、妖精さんと艦載機に力を注ぎ込む。
その艦載機達は、千歳と千代田の力を受けたことで加速、さらには見た者を魅了しかねない程に美しい隊列で、吹雪と戦う防空巡棲姫に向かって飛んでいく。
作戦通り、３６０度全てから突撃出来るように周囲を旋回し、吹雪の邪魔にならないタイミングを見計らって一斉に突撃。
「……やらせない」
空の上からの攻撃が目に入ったら、本能的に撃ち墜とさなければと考えてしまうのが防空艦。潜水している際に艦載機に対潜攻撃をされたことで浮上してきたくらいなので、やはりその本能がしっかりと利いている。
しかし、防空巡棲姫の目の前には吹雪がいる。少しでも隙を見せればそのまま命を奪ってくるような相手。防空に全てを寄せることは出来ない。
それ故に、防空巡棲姫が取る行動は、最優先が吹雪への攻撃。しかし、両用砲は全て上に向けて対空砲火に専念した。広範囲にぶち撒けるタイプの対空砲火であるため、戦艦主砲並みの火力も含めると、３６０度全てを網羅する攻撃となった。
「視線が上に行きましたね。その一瞬が……っ」

両用砲は上を向いているが、防空巡棲姫自身はその強化された膂力と格闘能力を使って吹雪を圧倒しようとしている。ただ、それはまともな艦娘相手には通用するのであって、吹雪相手には全く別。

「命取りですよっ」

両用砲が自分に向かなくなったタイミングを見計らって、吹雪は一気に接近、防空巡棲姫には、その移動は殆ど瞬間移動か何かに見えてしまった。瞬きをした時には距離を詰められているようなもの。そして、結局そのタネはまだ気付くことが出来ていない。

「……っ」

咄嗟に手が出る防空巡棲姫だが、それでは間に合わない。吹雪がそれを止めるために手を翳した瞬間、防空巡棲姫の振るった腕は弾き飛ばされる。如何に異常な膂力を与えられていたとしても、吹雪のこの攻撃方法は、触れる前には弾かれる。

吹雪のその絶妙なタイミングのおかげで、敵から触れられることはない。握力がどれだけあろうが関係ない。うまくタイミングさえ合わせられれば、砲弾すら弾き飛ばしてしまうのだから、吹雪に触れることなんて出来るわけがなかった。

「千歳さん、千代田さん、ここです」

そして、その腹に吹雪の蹴りが減り込んだ。完璧な直撃。そこから脚部艤装の瞬間展開により、防空巡棲姫を真上へと蹴り上げる。

浮かせてしまえばこちらのもの。いくら両用砲があろうが、まともな姿勢が取れないのなら、十全の力は発揮出来ない。

「……ダメ。やらせない」

しかし、それもまともな深海棲艦ならばである。防空巡棲姫の全身から泥が溢れ出たかと思いきや、艤装そのものが球体に出現。まるでジェーナス（アンツィオ沖棲姫）のように身体を完全に包み込んでしまう。しかもその全面に両用砲が備え付けられているため、３６０度どころか上下左右前後全てを網羅していた。

別にジェーナスの情報を取り込んでいるというわけではない。侵蝕はしたが、それを黒幕の元へと持ち運ばれているわけではないため、全身を包み込む艤装のことは知らないはずである。しかし、それ

でもこの手段に出たのは、これまでの戦闘経験の蓄積から出た、咄嗟の判断。海面に足がつかなくなったことで、下にも撃っていいと判断したことによるとんでもない返しの手。
当然ながら、この状態をされてしまうと、砲撃は一切効かない。接近戦なんて以ての外であり、むしろ全方位への砲撃によって近付くことすら出来なかった。
「そんなこと出来ちゃうんだ……」
小さく舌打ちをする吹雪だったが、その弱点も同時に看破している。
自分を守るために全身を突っ込んでいるため、ジェーナスのように自分の視界を考えているわけではない。つまり、今の防空巡棲姫は何も見えていない。代わりに上から下まで全てに砲撃を放ってくるのだから、近付くことさえ出来なくなってしまっているのだが。
「爆撃も効かないくらいに硬いわね……」
「戦艦の砲撃も弾き返してるくらいだから、対空砲火とかそういうの関係ないんだ……」
対空砲火の隙間を縫って突撃した艦載機が爆撃を決めるのだが、全身を包む装甲を破壊することは出来ない。一斉射すら弾く装甲に対しては流石に無力である。
そうなると、比叡の刃も通らないだろう。あの状態は無敵の状態とすら言える。出来るのは、その両用砲を斬り刻むくらいだが、近づくことも出来やしない。
「本当にウニになってしまいましたね……どうする」
「だったら、これこそ私の出番でしょう！」
吹雪が頭を悩ませるが、ここで動き出したのはコロラド。当然白鯨を展開している。
「これなら、誰よりも強い力で装甲を破壊出来るわよ！　噛み潰してやるわ！」
そして、白鯨をそのまま突撃させ、その巨大な口で全身装甲となった防空巡棲姫を丸呑みしてしまった。
見えていないことをいいことに、不意打ちでもなんでもなく真正面

から白鯨による一撃である。

これで終われば一息つけるが、まだこれでもどうなるかわからないのが今の敵だ。まだ安心は出来ない。

芽生えた感情

吹雪達の渾身の攻撃により、全身を両用砲で包んだ完全防御の態勢をとった防空巡棲姫だが、身を守るためとはいえ、周囲が一切見えなくなるというのは落ち度だった。その瞬間にコロラドが白鯨を展開し、艤装で両用砲だらけになった防空巡棲姫を一口で丸呑みしてしまった。

「これで終わらせるわよ！」

そして、全力で噛み潰す。コロラドの白鯨は、そう呼ばれていても深海棲艦の艤装。本来の鯨とは構造がまるで違う。特に口の中は何重にも重なる歯が生えており、噛み潰すと同時に磨り潰すことも可能。咬合力も当然ながら膂力と比べるまでもなく強く、艤装如きならば一瞬でスクラップにするくらいの力を持つ。

そして、コロラドはここまで来てもまだ警戒を続けている。全力で噛んだところで、あのふざけた力を持つ防空巡棲姫だ。最悪、球体の艤装も破壊出来ない可能性があるのだ。そうなってしまったら為す術が無くなる。

「私の全力、ここで使って――っ!?」

しかし、白鯨の内部で質量が膨れ上がっていることがわかる。球体の艤装だけではない。防空巡棲姫も泥鯨を展開しようとしているのだ。

自身の艤装のせいで周囲が確認出来なくなったとしても、白鯨に呑み込まれる瞬間は流石にわかる。そこで咄嗟に繰り出したのが、やはり泥鯨。吹雪の魚雷の時もそうだったが、咄嗟に防御として使うのはやはり巨大な艤装のようである。

先程は艦載機による空爆も回避しなくてはならなかったために両用砲を増やす方向に持っていったが、白鯨の内部ならその心配もない。単純に質量さえあれば、この咬合力もどうにか出来ると考えたようだ。

「その程度で、どうにか出来ると思うんじゃないわよ！」

あちらが狙っているのは、白鯨の内部崩壊。内側から巨大な質量が

拡がれば、自ずと爆発する。泥鯨と白鯨と同じ大きさなのだから、完全に展開出来てしまえば、勝つのは確実に泥鯨。
当然、コロラドも負けない。そんなことさせるかと、それこそ何もかもを破壊するかのように全力で押し潰す。展開にもほんの少しだが時間はかかるし、何よりそれほど巨大な艤装を展開するためにはそれなりの空間が必要。それを最も把握しているのはコロラド本人だ。
その甲斐があり、泥鯨が構築される前に歯がそれを磨り潰し、防空巡棲姫の艤装に届く。展開中にそれを邪魔したことで、まともな展開を防ぐことが出来た。
防空巡棲姫の声は全く聞こえない。この展開を予測しているのかどうかはわからない。
「Ｃｒｕｓｈ（ぶっ潰）ｉｔ（れなさい）！」
そのまま球体の艤装まで破壊しようと、全ての力を白鯨の顎に込めて、力強く噛み締めた。最初は飴玉を頬張っているように口をモゴモゴさせていたが、それも何かを捉えた瞬間に止まり、そのままグッと両顎が閉じる。
ゴギンという鈍い音。確実にあの球体の艤装を破壊した音。それでもコロラドは止めない。本当に命を奪うまでは、力を緩めることはない。
「……っ」
やはりというか、これで死ぬような存在では無かった。白鯨の中で何度も何度も衝撃が走る。その度にドンと爆音が鳴り響き、爆撃が揺れ動いた。
内側で砲撃を放っているのは、見るまでもなく明らかだった。その一発一発がとんでもない火力であり、磨り潰そうとしている歯を1本ずつ破壊していた。持ち主であるコロラドには艤装のダメージがわかるため、ここまでやっても完全に噛み潰せていないことが痛いほどわかる。
「Ｆｕｃｋ！　これでもまだダメなの……!?」
コロラドは当然殺すつもりでこの攻撃を繰り出した。それなのに、それでも命を奪うに至らない。

白鯨内部から聞こえてくる爆音は、その間隔が早まっていき、ついには白鯨自身がその衝撃で強引に口を開けられてしまった。その隙をついて、防空巡棲姫が中から飛び出してくる。
同時に口内に激しい砲撃を撃ち込まれ、そのせいで内部から爆発。単純なダメージによって白鯨は自身の存在を維持出来なくなって、その場から消え去った。
「……酷い目に遭った」
そういう防空巡棲姫だが、流石に無傷というわけではなかった。全身は血まみれであり、身体中を修復せんと泥すらも溢れ出ている。やはり艤装のみならず、本体もある程度の修復が可能な様子。そうで無ければ、身体のことを無視した瞬間加速なんてするわけがない。
わかりやすくダメージがあったのは、その片脚。噛み潰されかけた際と、白鯨の口内から脱出するために無理をしたか、明らかに折れていた。さらには片腕は、先程の艤装を噛み潰した時に巻き込まれたか、もう動かないだろうと思えるくらいにプランと垂れ下がっている。
ここまで負傷すればすぐには治らない。だがこれも、時間をかければ元通りとなってしまう。押し込むのなら今しかない。
「Ｓｏｒｒｙ，　斃し切れなかったわ……」
コロラドはここで限界が訪れる。防空巡棲姫を噛み潰すために全力を出し尽くしてしまい、その状態で白鯨を対処されてしまったため、ここで立ち上がれなくなった。
白鯨を何度も展開し、今回は破壊によって消されているのだから、いくら春雨細胞の活性化があったとて、コロラド自身の消耗が激しくても仕方ない。むしろ、激しい消耗だけで済んでいるのだから、コロラドにとっても最善の幕引き。
「充分だ。本当によくやってくれた。あとは任せてくれ！」
ここまで押し込んでくれたのだから、あとは艦娘だけでもどうにか出来る。慢心ではなく確信。
コロラドで無ければ押し込めなかった強固な装甲をここまで粉砕してくれたのだ。ここで動かなければ、コロラドの覚悟が無駄にな

る。
　即座に動き出したのが武蔵。損傷した状態ならば、艦娘最強の火力も通せるはず。
「手柄を攫うようで悪いが、今しか無いのでな。大和！」
「ええ、私もそろそろ限界に近いわ。ここで決着を！」
「全弾撃ち尽くせ！　惜しみなく、出し切れぇ！」
　これがこの戦い最後の一斉射となるだろう。これまでも何度も何度も放ち続け、武蔵も大和も残弾は残り僅か。限界ギリギリ、ガス欠寸前。それでも、コロラドが倒れるまで戦い続けていたのだから、自分達も同じようにやらない理由がない。
　だが、防空巡棲姫にも意地があった。ここまでされても、自身の使命は失われていない。黒幕に歯向かう者を足止めし、ここで始末するという使命は、防空巡棲姫の中で消えずに残り続けている。命よりも大事な使命として。
　死んでもこの場に止め続ける。そのためなら命を捨てても構わない。いや、むしろ防空巡棲姫の中では自分の命が勘定に入らない。そういうカタチで作られてしまっているから。
　故に、ここまでの重傷を負っていても、本来と違わずに反撃に出る。破損した艤装を再展開し、両用砲も当然のように出現。一斉射にぶつけるカタチで、防空巡棲姫のありったけを放ち始めた。
「くぉ……っ!?」
「まだここまで出せるの……!?」
　防空巡棲姫の砲撃は、たった1人でも一斉射と対等。むしろ、威力だけで言えば防空巡棲姫の方に軍配が上がるほど。代わりに、負傷した身体で撃てば撃つほど、身体が耐えられなくなっていく。
　コロラドにやられた傷から血が溢れ、泥による修復が間に合わなくなる。その戦い方はあまりにも痛々しく、撃つのに躊躇いを覚えてしまうほどだ。
　だが、武蔵はそれでも容赦しなかった。自分がその砲撃の矢面に立ち、その威力により傷を負っても、真正面から防空巡棲姫とぶつかり合う。

「くくく、アッハハハ！　その意気や良し！　命を賭して我々とやり合おうとは、貴様にも信念があるのだろうよ！　それがいくら歪んでいようと、一途な思いには変わりあるまい！　ならば、全力でぶつけてこい！」

武蔵の身体も所々から血が流れ始める。流れ弾が当たっているわけではない。そんなものが当たったら、流血では済まない。これは互いの弾同士がぶつかり合い、粉砕し、その破片が身体を掠めているのだ。

そんな状態でも、武蔵は一歩も引かない。血塗れになろうとも、防空巡棲姫との戦いに愉しさを感じてしまったため、これを全力で満喫しなければならないと誰よりも前に立つ。

「武蔵、無茶は……！」

「構わん！　奴は奴なりの在り方があるのだろう。ならば、最期までその通りに生かしてやるだけだ！　奴が本望かは知らんが！」

ニィッと笑みを浮かべて、武蔵の砲撃はさらに激しくなった。本当に全てを出し尽くして。

本来ならば戻るための燃料は残すものであるのだが、武蔵はそれも完全に無視した。仲間を守るため、敵を斃すため、全てを出し尽くしたコロラドの戦い方に美しさまで感じ取ってしまった。だから、自分もそれに倣おうと、出せるものは全て出す。この後倒れても構わない。死ななければ安いもの。目の前の敵を、全力で斃す。ただそれだけ。

その気迫は、防空巡棲姫にも伝わった。伝わってしまった。

「……なんで」

混ざり合いすぎて自己認識すら出来なくなった防空巡棲姫が、明らかに表情を変えた。最初に発現した感情は、恐怖。

撃っても撃っても真正面から受け止めようとし、こんな状況で笑顔すら見せ、危機的状況を楽しむ武蔵のことが、心底恐ろしかった。血塗れの笑顔は、その恐怖に拍車をかける。

それを知ったことによって、先程のコロラドにも恐怖を感じる。今でこそ消耗しすぎて立ち上がれないほどになっているコロラドだが、

そうなるまで力を出し続けた信念が怖い。
「なんで」
その恐怖は、防空巡棲姫にも強く影響を与える。砲撃が乱れる。視界がブレる。武蔵に対して目を向けられない。
「今！」
「行けーっ！」
そのタイミングで仕掛けたのは千歳と千代田である。激しい砲撃が飛び交う中に向かえるのは、空の戦力。拮抗を崩すのは２つ目の戦力。
そしてそれはどうしても防空巡棲姫に反応をさせる。先程から何度もあった、防空艦の性（サガ）。空を舞う艦載機には、どうしても目が行ってしまう。
ただでさえ今、武蔵から目を逸らした瞬間だったため、その艦載機の存在は嫌というほど目に入った。
「はっ、すまんな。こちらも義理と人情を見せている余裕なんてない。卑怯と罵られても、私は受け入れよう。だが、これは命の奪い合いだ。貴様も周りにイロハ級を置いているのだからどっこいどっこいだろう」
その隙を見逃すほど武蔵は甘くない。一斉射をより集中させ、防空巡棲姫を圧倒する。そして、自身の傷も顧みずに放ち続けたことで、その砲撃は防空巡棲姫に届いた。
「……っ」
まずいと感じたようで、砲撃よりも防御を優先した防空巡棲姫は、艤装を重ねることで一斉射から耐える。衝撃で血が撒き散らされ、脚を負傷しているためにその場に身体を留めておくことが出来ず、宙に投げ出される。
「追撃！」
さらにここで注意を引きつけた艦載機達が爆撃の態勢。この状況ならば当てられるとした。
しかし、防空巡棲姫はまだ諦めていない。いや、諦めるという感情は未だになく、使命を全うするために艦載機に向けて当たり前の動き

――対空砲火を放つ。姿勢が定まらなくとも、そこは防空艦、とんでもない精度で艦載機に向けて両用砲を向けた。
「でしょうね。貴女は防空艦だもの。でも、空母の仕事は空襲だけじゃないの」
「こっちを見てくれただけで良し。あくまでも後方から援護するのが空母の役割だもんね、千歳お姉」
「ええ、防空艦相手でも出来る仕事はあるわね」
この瞬間、戦場の、防空巡棲姫の行動を支配しているのは千歳と千代田だ。完璧なタイミングで艦載機を操り、他の者が攻撃出来る隙を作る。
自分達がトドメを刺そうだなんて考えていない。周りに手柄を渡しても全く苦では無い。この戦いを勝利に導くことが出来ればいい。
「隙だらけになりましたね」
対空砲火をするということは、やはり下は見えなくなる。そこに飛び込んでいたのは吹雪。
背中から強烈な蹴りを入れ、対空砲火すらも邪魔をし、さらに追撃の砲撃。艤装を展開する暇すら与えず、負傷した脚を狙ったことで、着水もままならない状態にしつつ、トドメのために構える比叡の方へ。
「美味しいところを貰ってごめんなさい！　でも、今回は確実に、斬ります！」
1本の刀剣を両手で握って待ち構えていた比叡は、飛んでくる防空巡棲姫を見据えて目を見開く。
防空巡棲姫も簡単にやられて堪るかと言わんばかりに比叡に向けて艤装を展開し、両用砲から砲撃を放つ。だが、ここまでの負傷が効いているため、まともな照準が定まらなかった。
故に、掠りはしたものの、比叡はそこから避けることなく防空巡棲姫と対峙出来る。
そして、

「チェエエストオオオ！」
戦場に響き渡る咆哮と共に、一振り。その一太刀は、負傷によって脆くなった艤装ごと、防空巡棲姫を叩き斬った。

解放

「チェエエストォォォ！」

戦場に響き渡る咆哮と共に、比叡が刀剣を一振り。その一太刀は、負傷によって脆くなった艤装ごと、防空巡棲姫を叩き斬った。

その一撃は確実に防空巡棲姫に致命傷を与えている。その感覚も掌にしっかり残っている。艤装だけでなく、肉体を斬る感触は、嫌というほどにわかってしまう。

「手応えはあったけど……っ」

ただし、バッサリというわけにはいかなかった。寸前も寸前で身を捩ったのがわかった。それにより、比叡が斬ったのはもう動かなくなっている片腕。それを刎ね飛ばしたにすぎなかった。動かないならば捨ててしまっても構わないという咄嗟の判断をしたらしい。

失われた腕はその場で霧散。二度と治らないというのを如実に表していた。

「……」

無言で失われた腕を見る防空巡棲姫。そこからは当たり前だが血が流れ落ち、そのままにしていれば間違いなく死に至る。痛みを感じないとしても、命は刻一刻と削られている。

こうなってしまえば自己修復ももう間に合わないだろう。時間経過で修復が無ければ、それはもう死に向かって時間をかけて歩いていくだけ。結果的にそれは、黒幕からの使命を果たせないということになる。

「まだ」

武蔵の気迫によって芽生えた恐怖が呼び水となり、防空巡棲姫の中に感情が1つ、また1つと生まれていく。根幹には傀儡として生み出されたことによる、黒幕への忠誠心が強く根付いているため、現状に持って行かれた『悔しさ』、ここまでされたことに対しての『怒り』、そして、この敵に勝ちたいという『渇望』が、一気に目覚めた。

多くの魂が混じったことで自己認識が出来なくなり、感情が失われていたが、感情が完全に無くなったわけではない。それも認識出来な

くなっていただけだ。
それが芽生えていったのなら、もうそれは人形ではなく、1人の黒幕に忠誠を誓う部下。手に負えなくなることがすぐにわかる。
「まだ……！」
その声に、感情が乗った。失われた腕を震わせ、グッと力を入れると、身体中の傷から血を撒き散らせつつ、さらに泥が噴出した。
その泥が防空巡棲姫の身体を包んでいく。明らかに繭となりつつある動き。泥の溢れ方からして、これは確実にまずい行動。
施設を襲撃した欧州姫達が揃って実行した、命を燃やす最後の進化。命を燃やす覚悟をしたその時、体内に植え付けられた卵を孵化し、そのまま繭と化す。そこから孵った時には負っていた傷は全て完治し、タイムアウトのその時まで暴れ続けるだけになる。
死ぬことがわかっているのだから、命を燃やすのも躊躇がない。だが、既にここまで傷を負ってしまっているからか、あまり傷を負っていない状態で感情的に命すら燃やそうとした欧州姫とは少々違い、繭と化する速度は少々遅い。あちらは実行した瞬間に身体が包まれたが、防空巡棲姫はじわりじわりと身体を包んでいく。代わりに、その間も回避行動は止めるつもりはないようだ。
「させるかぁ！」
最も近い位置にいる比叡が容赦なく斬撃を放つ。砲撃よりも早く繰り出せることを比叡は自身で理解しているため、これがまずい状況とわかった途端に直感的に手が出た。
「っ……！」
比叡の一撃は、繭化しながらもまだ動ける防空巡棲姫が刀を展開して食い止めた。ここまでしてもまだ、比叡の斬撃を片手で止められるくらいに力が残っている。
その時の防空巡棲姫の表情は、今までの無表情から一転、明らかにやられて堪るかという感情が乗っている食いしばったもの。
命を捨てた者の底力が、そこに集約されていた。傀儡であるが故に、自分の命は勘定に入れていない。だが、死んでしまったら使命を全う出来ない。

故に、最後の命を使い捨てる。それで使命が全う出来るなら、それで別に構わない。むしろ、そんな考えすらないかもしれない。命が尽きかけたから発動したとも考えられる。そんな悲痛な覚悟が見て取れた。
「千代田、爆撃！」
「了解！」
そこへ千歳と千代田が空襲を重ねる。比叡が危険な状態になるかもしれないが、なりふり構っていられなかった。
比叡も察したようで、鍔迫り合いをしていたところをすぐに離れる。
「させ……ない！」
しかし、やはり繭化の途中でも防空艦は防空艦。艦載機には無類の強さを持ち、即座に両用砲を展開。真上に向かって乱射した。丁寧で精度が高い対空砲火なんてまるで考えていないものの、それで爆撃が抑えられるのなら良しとしていた。
本能的に気付いているのだろう。繭となってしまえば、もう敵の攻撃は効かない。そして、孵化をしてしまえば、命尽きるまでにここにいる者達を殲滅出来るだろうと。
故に、今の防空巡棲姫は、自分の身を守ることに徹底していた。自分を維持し続けることが、延いてはこの戦いを勝利に導くことだと確信して。
「島風ちゃん！」
ここで吹雪は機転を利かせた。泥が身体を包み込むのに時間がかかるということは、まだどうにかする時間があるということだ。ならば、素早く動ける者が早急に終わらせる。自分も動き、島風も動けば、最悪なところに行く前に終わらせることが出来るはずだ。
「おうっ！」
この周囲を走り回ってイロハ級を処理し続けていた島風だが、吹雪の声に即反応して防空巡棲姫の状況を確認。そして、瞬時に次にやらねばならないことを理解する。
島風が速いのは戦場での移動だけではない。状況理解から次にや

らねばならない行動の分析までもがとにかく速い。一種の天才である。
それ故に慢心し、仲間達を侮蔑していた時期もあったが、それも無くなった島風にはもう隙がない。これまでの戦闘経験もあるため、その場で最善を思いつく。
「一緒に突っ込んで！」
島風が割ととんでもないことを言ったが、それくらいしないと防空巡棲姫が止められないのは確か。吹雪も察して海面を蹴る。
今の防空巡棲姫は千歳と千代田の艦載機から身を守るために対空砲火に専念している。意識がまたもや上に行っているのだ。横からの攻撃に対して隙が出来ている。
防空巡棲姫も自身を守ることに必死なのだろう。そのせいで、防御が疎かになっているのは何という皮肉か。
砲撃でどうにかなるとは思えない。駆逐艦の火力では、今の防空巡棲姫は止められない。
ならば魚雷。戦艦主砲と同等の火力を出せるそれならば、繭となる前ならば破壊は出来る。しかし、魚雷の難点は砲撃よりも遅いこと。北上のように投擲するにしても、何ステップか踏まなくてはならないため、やはり遅い。
「島風ちゃん！」
吹雪が海面を蹴った瞬間、島風も海面を蹴る。
「私だって何度も吹雪の戦い方を見てきてるんだ！　何をしたいかなんて、すぐにわかるよ！」
吹雪が繰り出そうとしているのは、蹴りが入った瞬間に脚部艤装を再展開して強烈な衝撃をぶつける技。島風はその原理は理解していなくとも、やらねばならないことは感覚的に把握していた。
跳んだ瞬間、2人の狙いは完全に一致している。猛烈なスピードで防空巡棲姫を捉え、瞬きする間にゼロ距離に接近。挟み込むように蹴り、それと同時に脚部艤装を再展開である。島風はそれを知らないため、吹雪の衝撃を自らが受けるように、全く同じ位置を両足で蹴った。
「耐える！」

吹雪の蹴りの衝撃は、吹っ飛ぶことによってダメージが軽減されている。言ってしまえば、その蹴りだけで終わらせることは大体が出来ない。それによって壁にぶつけたり、追撃で砲撃を放ったりすることで致命傷にする。海戦では基本的には後者しかほぼ使えない。

だが、島風自身が壁となり、蹴りの衝撃を全て防空巡棲姫に押し止める。島風に対してもかなりの負荷がかかるが、その適度で島風が怯むわけがない。一切の躊躇なく、脚が壊れてしまっても構わないと容赦なくぶつかった。

「っかはっ……!?」

防空巡棲姫が初めて明確に表情を変えた。腕が失われても眉一つ動かさなかったのに、この一撃はしっかりと効いた。

まだ繭に包まれていない心の臓を蹴る吹雪と、その衝撃を体内に押し込むために自らの脚を犠牲にしてもいいと考えた島風。この2人の同時攻撃は、防空巡棲姫の体内に蔓延る泥までも、全て破壊するほどの威力を見せた。

「入った……!」

吹雪はその手応えに確信した。自身の足が、防空巡棲姫の心臓を潰した感覚。如何に混ざり合い、泥まみれになろうが、その急所は何も変わらない。燃やすための命を、この場で刈り取ったのだ。

「ったーいっ!?」

島風も流石に悲鳴を上げた。耐えようとはしたものの、やはりあの渾身の蹴りをその脚で受けてしまったのだから、防空巡棲姫を踏みつけると同時に反発する力を受けて逆に吹っ飛ばされてしまう。

脚はこのせいでボロボロ。脚部艤装にも支障が出始め、少し動かすだけでも鈍い痛みが走る。おそらくヒビが入ってしまっているのだろう。

「もう、流石に、終わってくださいよ……」

吹雪もそんな言葉を口にしてしまうほどだった。だが、身体から溢れ出す繭化の泥が、そのまま霧散していくところからして、防空巡棲姫はこれで終わりだとわかる。

もう心臓なんて機能を停止している。それでも、防空巡棲姫は残っ

た手を伸ばしてきた。
「……もう、ダメ……なの」
「はい、もうダメです。貴女はおしまいです」
「……そう」
最後の最後。命が尽きようとするその瞬間、防空巡棲姫の瞳に光が戻ったように見えた。

「ありがとう。Ｔｈａｎｋｓ」

その言葉を残して、防空巡棲姫はそのまま霧散した。
塵となる直前に、自己認識が出来るようになったのだろう。その言葉は、防空巡棲姫本人と、混じり合ったアトランタ、そして無数の武蔵からの感謝の言葉だったに違いない。
防空巡棲姫も、どちらかといえば侵略者気質ではなく、穏健派だったのではないだろうか。だが、黒幕はそんなものお構いなしに自分の手駒へと改造して、思い通りに操る。自分すら見失い、傀儡と成り果てた防空巡棲姫は、最後にその意識を取り戻した結果――
解放されたことに感謝して、この世から散った。
「……こんなに胸糞悪い戦いは無いですよ。もし黒幕が今以上に跋扈していたら、こんなヒトがもっと増えるということになるんですよね」
苦い顔をする吹雪だったが、その拳は血が滲みそうなくらい強く握られている。

ここで立ち止まっているわけにはいかない。まだ黒幕との決着はついていない。先行した春雨達の方へ、何人かは向かいたいところである。
「かなり消耗してしまいましたね……」

血塗れの武蔵、比叡も多く血を流し、コロラドは消耗しすぎて立ち上がれず、島風は最後の渾身の蹴りのせいで脚を負傷。千歳と千代田も防空艦相手の航空戦で力をかなり注いでいるため、体力をかなり失っている。

「……私は、こんなところで終わらないわよ……。黒幕にはオトシマエをつけてもらわなくちゃ困るんだから……」

もう立ち上がれないというのに、コロラドは黒幕との戦いに向かおうとロブスターのハサミを使ってどうにか身体を起こそうとしていた。消耗だけで怪我をしていない分、少し休めば動けるはずだと、どうにか向かいたいと。

「コロラドさん、流石に休んでください。気持ちはわかりますが、燃料空っぽみたいなものですよね。その状態で行ったら足手纏いですよ」

吹雪が駆け寄り、身体を休ませるように言うが、コロラドは悔しそうに拳を握り締める。その苛立ちはわかるが、動けないならば動いちゃいけない。

「それに、託したんですから、任せてあげましょう」

「……Ｓｏｒｒｙ．　気が立っていたわ」

聞こえるくらいの舌打ちが聞こえたが、コロラドはそれだけで終わらせた。ここを守るとして、春雨達に思いを託したのだから、今は信じてここで待つしかないだろう。動けないのだから。

防空巡棲姫との戦いはこれで終わった。何人もの仲間が傷を負うことになったが、誰も死んでいないのだからまだ良し。

代弁者

防空巡棲姫との戦いが進む頃、黒幕の拠点近海での別個体の春雨との戦いはさらに進んでいた。

別個体とはいえ、愛する春雨が眼前で侵蝕される様を見せつけられたことによって海風が崩れていたが、最もよく知る春雨からの言葉によって立ち直ることが出来た。それどころか、海風なら絶対に出来るという保証を受け取ったことで、今までにない力が湧き上がっている。

「最優先は、別個体の春雨姉をあの島から引き剥がすこと！　あの島の上に立っていることがダメなんだと思う！」

「うん、私もそう思う。島を器にしてるって『観測者』様に聞いてるからね。涼風の予想は間違っていないよ」

仲間達にも聞こえるように、これからやらねばならないことはただ1つ。陸に陣取り、駆逐艦であるにもかかわらず陸上施設型と同様の力を使っている別個体の春雨を、陸という名の呪縛から引き剥がすこと。

涼風の見立てでは、あの陸地そのものが黒幕。そこに立っている限り、黒幕が別個体の春雨の身体を使って攻撃してくる。おそらく別個体の春雨自身の意識は無いと見ていい。

そこは龍驤が空母棲姫の身体を器として使っていたのと同じこと。むしろ、少々応用している可能性も考えていた。龍驤の場合は空母棲姫の器でしっかり自分を出しているが、黒幕は春雨の器で春雨らしさを消していないからだ。

「引き剥がすっつっても、アレをどうすりゃいいンだ！」

砲撃を連射する江風だが、その全てが泥の壁に阻まれており、一切の傷がつかない。

だからといって接近するのはまずい。あの壁がそもそも泥だというのならば、触れること自体が問題になりそうである。強引に突っ込んだらそのまま取り込まれるなんてことまで考えてしまうと、迂闊に近寄れない。

「戦車隊も歯が立たない……！」
「内火艇もねぇ。困っちゃうわ～」
　山風と荒潮による対地攻撃も、そのことごとくを防がれてしまっている。本来ならば上陸して致命的なダメージを与えるのだが、そもそもそれが許されない。海上から備え付けられている砲塔で撃つことくらいしか出来ないでいた。
　それも全て、泥の壁。砲撃に対してもそうだが、あの万能の壁は何もかもを防いでしまう。戦車隊や内火艇の突撃も、泥の壁の前では進むことすらままならない。
「制空権は拮抗！　気を抜くと押されてしまいます！」
「タイホーにＢａｔｔｌｅ　ｓｈｉｐのＰｏｗｅｒを使ってほしいところなんですが、サラも全力でコレですから……」
　さらに奥の陸を狙う空母の２人、大鳳とサラトガも、別個体の春雨が繰り出す基地航空隊に大苦戦。爆撃は食い止められ、そもそも島の奥にも向かわせてもらえず、逆に敵艦載機群を抑え込むのに全力を出さなければ戦場を荒らされる。
　合間合間に金剛が三式弾で制空権争いを援護するのだが、それはあちらも出来ること。異常とも言える対応力で、徹底的に侵攻を妨害する。
「Ｓｈｉｔ．　簡単には行きませんネ」
「コンゴーはあちらをＢｒｅａｋ出来ませんか」
「厳しいデース。砲撃はどんなに火力があっても防がれてしまいマース」
　泥の壁が非常に強固であることは、金剛でなくとも見てわかる。砲撃ならば簡単な防いでしまい、陸地に破片すら向かわない。
　ここにいる者の中では上位の火力を持つ金剛だが、あの壁を破壊するのは砲撃では難しいと断言した。
　その理由が、別個体の春雨自身に猛攻を仕掛ける叢雲の戦い方。
「クソ鬱陶しいわね！　守ってばかりで動きもしない！」
　怒りを糧にして、槍の巨大化も躊躇なく繰り出し始めている。別個体の春雨が何であろうが、自分の手段を見せずに戦うなんてもう不可

能。対地攻撃をこれでもかと繰り出しているのだから、学ばれるとかそんなことを考えている余裕なんてどこにもない。
しかも、叢雲だけは別個体の春雨を救う気持ちなんてどこにも無い。殺す気で行かなければ成果すら得られないくらいに強大な力を与えられているのだ。加減していたら自分が死ぬ。
「動く必要が無いからだよ」
その巨大な槍による刺突を、やはり泥の壁で完全に止める。こうなると槍も質量兵器と言えるのだが、その攻撃に対してだけは泥の壁の厚さを変えて対応している。
龍驤の時も甲板を複数枚重ねられたことで勢いを殺され、結果として本体にまで辿り着くことは出来なかった。今回もそれと同じ。最初の厚みならば貫いていたかもしれないが、それを見越して数倍の厚さを持つ泥の壁を生成しているために、叢雲の攻撃は完全に止められる。
「そうでしょ。わかってくれるよね」
そして、その壁が小さく波打った途端、激しい砲撃が放たれる。槍を突き出した直後の叢雲は、無防備というわけでは無いにしろそれを回避するのがかなり難しい。
「叢雲ちゃん、槍を消して！」
咄嗟に動いたのは荒潮である。叢雲が回避しきれないと判断した瞬間、内火艇を移動させて叢雲の盾にしたのだ。槍がそのままだと完全に防ぎ切ることが出来なかったため、すぐに消せと指示を出した。
叢雲もそこは直感的に指示を聞くべきと判断し、槍を消してバックステップ。これでギリギリ内火艇が間に割り込むことが出来た。
「あかん、せめて泥だけは取り払いたいんやけど、完全に混じり合っとるせいで分析が難しい」
龍驤はこの状況でも常に島の分析を続けていた。泥と島が完全に混ざっているせいで、目の前の泥の性質自体がかなり異質なモノになっているらしい。
自分の持つ情報――端末や監視の目、さらには中間棲姫の細胞とも一致しない、完全に独自の進化を遂げた別物。泥だけならまだ多少時

間をかけても解析が出来そうなのだが、それが島そのものとの融合を果たしてしまっていることで、泥とは無関係な自然成分まで取り込んでしまい、それが解析の邪魔をしていた。
「ジロジロ見るのは感心しないね」
その龍驤の解析を身に感じるのか、別個体の春雨は攻撃の手を山風に強めに向ける。泥の壁が山風からの攻撃を防ぐと同時に集中砲火を始めたのだ。
龍驤を乗せているという理由で誰よりも狙われることになるのだが、山風は当然、その覚悟を持ってこの戦場に立っている。それ故に、どれだけの猛攻を受けたとしても、自分のためにも龍驤のためにも回避し続ける。
「見ぃひんとお前のことわからへんやろ。ウチがそっち側だった頃からまた変わりおって！　ウチが覚えとるお前は、まだ身体がちゃんとあったんちゃうか!?」
龍驤は他の者達と違って、再洗脳というカタチで艦娘の思考を取り戻している。おかげで、黒幕側にいた時の記憶は消えていない。その時の最後に見た黒幕の姿は、今のような状態では無かったという。
「あの身体はどうしたんやあの身体は！　それこそ泥人形みたいな奴あったやろうが！」
龍驤の知る黒幕の姿は、先程戦っていた泥人形のような存在。しかし、これまでに器として使ってきた艦娘や深海棲艦の要素を全て取り入れたような、誰とも言えない姿だったという。素体は本来の身体である中間棲姫に近かったようだが、そこに多種多様な成分を取り込んでいることで、潜水艦姉妹のように誰でもあって誰でも無いような固有のモノとなっていた。
龍驤が泥の状態で半身だけとはいえ自分の姿を形作れたのは、その意思が龍驤のモノだけで済んでいたから。黒幕はそれすらもグチャグチャになっているから、本来のカタチすら取れない。故に、泥となってから知った身体のカタチを模倣することで自らの姿を手に入れていた。
しかし、今はそんな姿も見せない。別個体の春雨を取り込んで、自

分の思考を代弁させているようにしか見えない。
「そんなの関係ないよね。知ったところで意味無いでしょ」
龍驤の言葉に少し苛立ったのか、泥の壁が次々と増えていき、そこからの砲撃がさらに激しいものとなる。
春雨の視線対策、さらには叢雲のような近接戦闘を寄せ付けないようにしつつ、白露や海風のように鎖によって別個体の春雨を島から引き剥がそうとしている者に対しても牽制。江風や古鷹のようにただ壁を破壊する手段を模索する者達にも好き勝手させないように砲撃を放つ。
こうなるともう、陸上施設型と呼ぶだけでは収まらない。海上要塞の如き鉄壁。侵攻どころか近海に蔓延ることすら許さない。徹底的に邪魔者を排除することに特化している。
「意味は無いけど、知っておいて損は無いよ、別個体の私……うぅん、黒幕」
それだけの猛攻を繰り出しても、春雨はその隙間を縫うように回避して、少しずつ前進していく。
「別個体の私の身体を使わないと、もう自分の意思すら私達に伝えられないんでしょ。いや、別にその身体じゃなくてもいい。代弁者が必要なんだ」
睨みつけたところで、泥の壁に遮られてその表情は窺い知れない。だが、直感的に別個体の春雨が嫌そうな顔をしたと勘付く。
「そりゃそうだよな。ここまで島に近付いておいて、まだ姿を現さないなんておかしいはずなんだ。そこまで引きこもりにしても、目と鼻の先にいりゃあ、自分の手であたいらを潰しに来てもおかしくはねぇ。だから、もう自分で考える力もないんじゃないかい」
冴え渡る涼風も、春雨の言葉で納得した。今の黒幕は、もう自分の言葉すら持っていない。
ここ最近の敗北から、怒りが溢れ続けている黒幕。そしてそれを糧に進化をし続けていく過程で、黒幕は理性を失い、自我を失い、思考を失い、そしてカタチすら失った。おそらく龍驤の敗北がそのきっかけ。

本能でのみでこの場に居座る黒幕は、自身の言葉を代弁する者がいなくては何も伝えることが出来ない。そこで、その場にいる何かを使う。この別個体の春雨も、何者かが島まで侵攻してきた時のためにすぐに取り殺すようなことをせずに代弁者として保存していたのだろう。逃げる様を見せた挙句に侵蝕したのは、本能的に嫌がらせをするためと言っても過言では無い。

「……だからどうしたっていうの？」

明らかに不機嫌な声を上げる別個体の春雨。それと同時に攻撃の密度がさらに上がる。攻防一体の泥壁砲撃は、島の側面を埋め尽くすように聳え立ち、それが一斉に砲撃を放つため、回避するのもかなり厳しい。進むなんて以ての外。

「代弁者を引き剥がせば、何も出来なくなるってことでしょう。だから、私は別個体の私を救い出す」

その瞳に白い焔が燃え上がる。

だが、別個体の春雨から鼻で笑うような声が聞こえた。

「辿り着く者といえど、そう簡単にはやらせないよ。もう私は負けない。何度も何度も何度も何度も敗北を喫したんだ。私はもう負けない。負けるはずがない。私を、私をここまで貶めた艦娘を、私は絶対に許さない」

「逆恨みも大概にしてくれませんかね。戦いに負けたことを貶めたと感じるような卑屈な者が力を持つと、ここまで捻くれるんですね。あまりにも愚かしい」

それでも春雨は苛立ちを抑え、小さく息を吐く。そして、壁の向こうの別個体の自分を睨みつけた。

「もう、ヒト様の身体を使って巫山戯たことは言わせない」

固定観念

「辿り着く者といえど、そう簡単にはやらせないよ。もう私は負けない。何度も何度も何度も何度も敗北を喫したんだ。私はもう負けない。負けるはずがない。私を、私をここまで貶めた艦娘を、私は絶対に許さない」

「逆恨みも大概にしてくれませんかね。戦いに負けたことを貶めたと感じるような卑屈な者が力を持つと、ここまで捻くれるんですね。あまりにも愚かしい」

それでも春雨は苛立ちを抑え、小さく息を吐く。そして、壁の向こうの別個体の自分を睨みつけた。

「もう、ヒト様の身体を使って巫山戯たことは言わせない」

ここからは春雨も戦いに参加する。常に壁に阻まれて力を使いきれない状態であっても、何かしらの突破口があるはずだ。

別個体の春雨は島から無尽蔵に力を手に入れているため、これはもう陸上施設型……というよりは、島そのものとの戦いと言っても過言ではない。無尽蔵と言っていても、最終的には限界を迎えるはず。

ただし、その限界が途方もなく先であるため、限界を迎えさせるという時間稼ぎのような戦いは出来ない。そんな時間は無いだろうし、その前にこちら側の限界が訪れる。勝つためには、負けないようにするのではなく、本当に勝ちに行かなくてはならない。

「口ばかりで、どうせ何も出来ないよ。越えられるものなら越えてみてよ。私の怒りを、苦しみを、その命で思い知ればいい」

別個体の春雨は、もうその本性を隠すことがなくなっていた。そもそも殆ど隠していないようなものなのだが、春雨や涼風にその正体――別個体の春雨がいなければ自分の意思すら伝えられないくらいに壊れていることを看破されたことで、より殺意が顕著になってきている。

無尽蔵に補給され続ける泥をただ壁にして撃ち続けるだけでも、ここにいる総勢１２名の部隊を圧倒するほどの力。壁を乗り越えて空襲を仕掛けても、それ以上の力の航空隊が発進してそれを迎撃してく

る始末。
　これによって山風を回避に専念させるようにし、龍驤の解析を妨害しつつ、より追い詰めていこうという算段のようである。
　これだけでも、相当な苦戦を強いられているのは確かだ。壁によって砲撃も接近戦も何もかもを封じられ、飛び越えようとも迎撃され、春雨の視線すらも封じられている。ある意味、理に適っている無敵の戦法。
「口だけと言われても言い返せないな……どうやって突破しようか」
「ありゃあ、かなりしんどいなぁ。あたいらの砲撃なんて、傷一つつけられないんじゃないかい」
「多分ね。叢雲ちゃんの槍でも貫けないってことは、あれを破ることが出来るのは……多分ここにいる中だと大鳳さんだと思うんだけど、島に上がらないといけないから」
「そりゃあダメだ。その時点で侵蝕されちまう可能性がある。んな危険なことさせらんねぇよ」
　何処かに隙間があることを考えながら壁の向こうを見続ける春雨だが、見ているだけでもこの壁はどうにも出来なそうだと悟ってしまう。当然その程度で諦めるわけがないのだが。
　涼風も何処か抜け道がないか探し続けていたが、泥壁に関しては本当にどうにもならなそうな仕様にしか見えないため、力業で突き抜けるくらいしか思いつかずに悩む。
「ったく、ただの我儘なクソ泥のくせに、やたらと強い力を持ってるせいで、こんなにも調子に乗るわけ!?」
　苛立ちを隠さない叢雲だが、そうしながらも回避に専念し続けて槍が通りそうな場所を探していた。
　泥壁は徹底した一枚壁。隙間すら作らず、その厚さはわかりやすく砲撃や槍への対策。砲撃は勿論のこと、今ここで確認した叢雲の巨大化する槍は、生半可な厚さでは貫いてしまうため、それを見越して食い止められるくらいの厚さを維持していた。
　そのせいで、どんな攻撃でも防いでしまう無敵の盾と化し、さらには攻撃の密度もかなり高めな最強の矛となりつつある。何とか回避

は出来ているものの、それはある程度離れているからにすぎない。基本的に攻撃の際に接近する必要がある叢雲には、攻撃のチャンスがかなり少ない状況。
「縛り上げるにも、あれだけ高い壁だと鎖が届かないよ」
「ですね。でも、別個体とはいえ春雨姉さんを救わなくてはいけないんです。あれを乗り越える方法を考えなくては」
「私の尻尾も流石に届かないよ。鎖ほど長いわけじゃないし」
　別個体の春雨を捕縛する方法を考える白露、海風、古鷹の３人だが、やはり壁が邪魔をしていてかなり厳しい。そもそもの弾幕で近付くことも出来ないのだが、鎖を振り回しているのを確認したせいか、そもそもの壁の高さを上げてきていた。
　これによって、山風の放つＷＧ４２（ヴェーゲー）すらも牽制していた。飛び越えさせようと射角を上げると、その内側にいる別個体の春雨には確実に当たらない。遠くにまで行ってしまう。同時に別個体の春雨もＷＧ４２（ヴェーゲー）を放ち、その攻撃を迎撃してしまうため、島にもダメージ０。
「島を……攻撃すりゃあいいってことかな……」
　江風が回避しながらもボソリと呟いた。対地攻撃として、島を攻撃することを優先としたい。しかし、ロケット弾もダメなら、空爆も通用しないときている。最も的確で、確実にダメージを与える手段は全て封じてきていた。
　この知識も、今まで器として使った者や、部下にした者から学んできたのだろう。敗北から学ぶと言われれば聞こえがいいが、それを全て逆恨みに使っているのが、春雨達には気に入らないところ。
　ここで江風が突拍子もない策を思いついた。
「なぁ、春雨の姉貴、ちょっと江風に案があンだけど」
「いいよ、教えて」
　こういう時に頼るのは、やはり春雨だった。直感的に近くにいたとかでなく、最も良い回答を持っていそうだと江風としても気付いたようである。
　そのままだと危険であるため、泥壁からの砲撃がなるべく回避しやすい位置まで退避してから、その思い付いた案を伝えた。

そして、それを聞いた春雨は、ほんの少しだけ驚いた表情を見せた。春雨と共に状況分析をしている涼風もその話を聞いていたが、流石に声を荒げそうになった。
だが、よくよく考えてみればと少しだけ悩んだ結果、
「それ、行けるよ。江風、よく気付いたね」
「すげぇよ江風！　あたいら、そこに辿り着けなかったよ！」
「考え方が凝り固まってたのかも。絶対に思いつかないもん」
その案を全面的に肯定した。江風がたまたま思い付いた作戦であったとしても、それをしっかりと考察し、直感的にも論理的にもいけそうだと判断した。
ここまで褒められると、江風も流石に少し恥ずかしさうに頭を掻く。
「気付いたっていうか、抜け道無いかなって思ってたンだけど、実は……って思ったンだよね。やってみていいかな」
「大丈夫、江風。それなら絶対に行ける」
春雨に見つめられ、笑顔を向けられた瞬間、江風の奥から力が湧き上がるような感覚。この案が絶対通用すると確信を持つことが出来、それをするために特化した力が思いつく。
それこそ、涼風のように頭が冴えていた。何処に何をどうすればいいのかが、手に取るようにわかる。
「ンじゃあ、やってくるぜ。江風の力だけでどうにもならなかったら、みんなに手伝ってもらう！」
「うん、まず今回は私と涼風も手伝うから大丈夫だよ。狙うところ、ちゃんと合わせるから」
「任せろい！　江風と組んで長いんだから、何処にやりたいかなんて目ぇ瞑っててもわかるってもんだい！」
江風を先頭に戦場へ帰還。泥壁の砲撃は密度を増すが、やりたいことをやるために意地でも回避した。
先程湧き上がった力のおかげで、江風はその動きも冴え渡っていた。いつもよりも身体が軽く、被弾してしまいそうな勢いの弾幕を次々と回避。追従する春雨と涼風も、その砲撃を華麗に避けながら準

備を進める。
　そして、やりたいことが出来そうな地点まで到着。そこは島に近付きすぎず、だがある程度は近い場所。演習や本来の戦闘ならば、ちょうど魚雷を放つくらいの距離。
「っし！　その先に別の春雨姉がいるぜぇ！」
「よっしゃあ！　ンなら行くぜぇ！　春雨の姉貴、涼風、せーので頼む！」
「うん、タイミングは任せたよ」
　そう言いながら3人が構えたのは、砲撃ではなく雷撃であった。
　陸上施設型には完全に無効となることが定石。本体が島の少し奥にいるのだから、魚雷を放ったところで島に当たっておしまい。端を削ることは出来るだろうが、本体にはノーダメージであり、無駄すぎる攻撃であるため、やる意味がない。魚雷が勿体無いとすら言われる。
　そのため、これは熟練者であればあるほど、案として思いつかない。定石が身に刻まれているのだから、陸上施設型に魚雷は無意味という固定観念に囚われるのは当然のこと。むしろ、やる理由すら思いつかない。
　江風だって長く戦いを経験している猛者だが、ふとした弾みで閃いた。やっていないことをやってみようという考えに辿り着くのは、それは一種の才能。
「せーのっ！」
「撃てぇ！」
　同時に魚雷を発射。この時、江風も涼風も気付いていた。魚雷の威力が今までと違うと。発射した時の身体にかかる衝撃が段違いに重かったのだ。なのに、バランスはしっかり取れていたおかげで普段と同じように雷撃が繰り出せたことになる。
　その放たれた魚雷は真っ直ぐ黒幕の拠点としている島に吸い込まれていき、砂浜に突き刺さるように着弾。そして、大爆発を引き起こした。
　江風の一発目だけならこんなことにはならなかっただろうが、春雨

と涼風の雷撃が全く同じところに向かったおかげで、物の見事に誘爆に誘爆が重なった。
「……何をしたの」
壁の向こうにいる別個体の春雨が、忌々しそうに吐く。その雷撃は、明確に泥壁にダメージを与えていたのだ。それも、泥壁自体には当たっていないのに。
「言うわけねぇだろ！　自分で考えろってンだ！」
挑発するように舌を出し、破れた泥壁の隙間に砲撃を放つ江風。しかし、泥壁の再生速度はかなりのもので、砲撃はすぐさま止められた。
「江風の思ったこと、大正解だね」
「ああ、やっぱりそういうことなンだな。島全部がアイツってことだ」
江風が思い付いた案。それは、島が黒幕本人だと言うのなら、魚雷で島を破壊しても泥壁などに影響を与えられるということ。
島を器にしているのなら、島へのダメージがそのまま黒幕へのダメージとなる。だからＷＧ（ヴェー）４２（ゲー）や三式弾、艦載機からの爆撃を徹底的に処理していた。しかし、魚雷による海中へのダメージは、如何に強大な力を持っていても、その特性――陸上施設型は海に出られないことによって回避が出来なかった。
泥として漂っているだけならばこんなことにはなっていなかったかもしれないが、器を手に入れたのだから、海中からの攻撃が弱点となり得たわけだ。
陸上施設型でありながら、本来効かない攻撃が最も効くモノとなっていた。ここに北上のような重雷装巡洋艦や、潜水艦の誰かがいたら、おそらく最もダメージを与えられただろう。
「魚雷が効く陸上施設型なんて、少なくとも私は見たことが無かった。だから、この攻撃は考えてもいなかった。私だけじゃ、辿り着けなかった。仲間がいるから、見えてない道も見えるようになったよ」
如何に『辿り着く者』といえど、固定観念に囚われてしまえば、その道は見えなくなる。それを実感することになった春雨は、改めて仲間の大切さを認識する。
「そうだよ。やっぱり、仲間がいなくちゃ私は成立しない。私一人だ

けが辿り着いても意味がない。辿り着くことすら出来ないんだから。みんなで辿り着かなくちゃいけないんだ」

春雨の中で燃え盛る焔は、その色を変えていく。寂しさはもう感じない。怒りはもう鎮まった。仲間達との戦いが、春雨の辿り着くべき道を指し示す。

「そうか、そうなんだ。私は辿り着く者で収まらない。私が望む、最善の答えは……みんなで戦って、みんなで辿り着くことだ」

本来の進化

黒幕の代弁者とされた別個体の春雨との戦いは苦戦を強いられていたが、江風の閃きによって打開策が見出だされた。黒幕が島そのものであるのならば、本来陸上施設型には通用しないはずの魚雷も効くのではないかという案が、本当に効いたのである。

島に雷撃を直撃させたことによって、一時的に泥壁自体が破壊されたことを確認出来たため、今後の狙いはこれで行ける。

「もっとバカスカ撃っていけばいいンじゃね!?」

「うん、多分それでいい。でも、壁の再生がすごく早いから、攻撃のタイミングはちゃんと考えないとダメだよ」

まず壁の取り除き方はわかった。しかし、即時再生をすることともう1つ問題点が出てくる。

江風と同時に雷撃を放ったことで、壁は一時的に崩れ、別個体の春雨の姿を視認することが少しだけでも出来ている。江風が面と向かえたのだから、当然その近くにいた春雨だってその姿を目にしている。

その時に、春雨はその力――望み通りの答えに辿り着く力を使っていた。見た者を思い通りにコントロールする力により、その時は定番の『動くな』ではなく『島にいるな』というそこに立っていることを否定する願いをぶつけている。しかし、それでも壁の再生は止められなかったため、そのままた視界を遮られてふりだしに戻された。

実際、別個体の春雨の動きを変えることも出来ていないのは、春雨の目からしたらすぐにわかった。おそらくだが、別個体の春雨に身につけさせている泥のコスチュームがその状況を作り出している。

代弁者とするために侵蝕と同時に身体に張り付いている黒幕そのものであると考えれば、そのコスチューム自体を使って操り人形のように動かすことは可能。言葉は代弁者を使うが、それを操っている本体はこの島全体であり、コア自体は見えないところにいるため、春雨の力が通用しない。そもそも微生物の群衆である時点で止めることは出来ない。

これが島と接続しているわけではなく、別個体の春雨が侵蝕されつつ、黒幕が中に入っているというのなら、その動きは止めることが出来ただろうし、上手くいけば泥壁の再構築も防ぐことが出来た可能性はある。
「やらなくちゃいけないのは、集中攻撃して壁を無くしてから……」
「その隙に、あちら側の春雨姉を釣り上げろってことだ」
涼風も春雨の事情は理解出来ずとも、今回は引き摺り出すことを優先すべきと考えている。元々救うつもりで戦うのなら、あちらがどういう戦術を取ってきたとしてもやることは同じ。引き摺り出すために壁を破壊する。それ以外にない。
ならば、この戦場にいる雷撃が出来るもの全員によって、一斉に攻撃を繰り出すことがベスト。
３人がかりでの同時攻撃で、別個体の春雨の正面にある泥壁が少し破壊され、一言言葉を交わした瞬間に泥壁が再生した。もっと大きく穴を空けるならば、より強い攻撃を一度にぶつけるしかないだろう。
そのためには、今ここにいる者達の力を結集し、完璧なタイミングで島に直撃させなくてはならない。まばらになると、破壊と再生が拮抗して、うまく壁を破壊することは出来ないだろうし、同時でも同じ場所でなければ、破壊出来る範囲が広がるだけで再生の速度は同じなので、鎖を放り込むような時間は与えられない。
「空母の２人以外は全員魚雷が使えるから、１０人同時に雷撃だね。一点集中で、誘爆に誘爆を重ねて」
大半を占める駆逐艦は勿論のこと、古鷹も本来の巡洋艦としての力を残しているために魚雷の運用は散々してきている。
戦艦である金剛は本来は出来なかったのだが、限られた者に与えられた第三改装により、施設を守っていたビスマルクと同様、魚雷が扱えるようになっていた。
そのため、ここにいる春雨を含めた総勢１２名のうち１０名が雷撃に参加可能。それだけの攻撃をまともに受ければ、泥壁も大きく抉れて再生に時間がかかるはずである。
「大丈夫、みんなでその答えに辿り着けばいい。私と一緒に、みんなで

辿り着こう」
　春雨の瞳が燦然と輝く。辿り着く力により正解までの道を示すための光を見るために。
　心持ちが変わった春雨には、その道も違って見えるようになる。今まで見えていた道は、自分だけのモノだった。それを辿っていけば、自分にとっての最善に辿り着けた。だが、今は違う。仲間達全ての道が見えた。
　一人で辿り着くことなんて出来ない。仲間がいるからこそ、辿り着く者としての力を発揮出来る。その信念が道にも表れていた。
　全員の最善の答え、救われる道。自分だけではない。仲間がどう動けば最善の道に向かえるか、その全てが見える。
　自分が動いたらその通りに動くのではなく、その道を辿ってもらうために、道が見えている春雨自身が指示をする必要があるのだが、春雨自身の道はその指示まで考慮されている。
「皆さん、私の指示に従ってもらっていいですか！」
　春雨は大声で全員に伝える。そうすれば、別個体の春雨にもやろうとしていることが把握されるのだが、それでも大丈夫と確信して。
　自分の意思を言葉にするだけでも、各々から伸びる道は形を変えていく。しかし、それが途絶えることは無かった。
「私だけが辿り着いても意味がありません！　だから！」
「当然です。春雨姉さんがここまで言うのですから、勝ち目があるのでしょう。どんな絶望的な状況でも、その光が必ず、今を変えてくれます。従わない理由は無いです！」
　その言葉に答える筆頭は、やはりと言っていいのか海風である。心酔していても間違いは正す海風が、無条件で従うというのだから、春雨には余程の自信があるということ。この切羽詰まった戦場でここまで言うのだから尚更だ。
「大丈夫デース。今の部隊の旗艦は春雨みたいなものデスから、余程の無茶じゃない限りみんな聞くヨー！」
　そこにこの中でもリーダー資質がトップクラスである金剛が指示に従うと言うのだ。他の者達も次々と口を揃えて指示を待つ。艦娘

も、深海棲艦も、ここでは関係ない。全員が春雨の言葉に耳を傾けた。
「アンタが見た道は、必ず勝てる道なのよね？」
自慢の槍が通用しないため、一時的に春雨の方まで下がってきた叢雲が問う。この状況を覆す何かを持っていると言うが、それは本当に自信を持って言えることなのかと。槍を振るいながら飛んでくる砲撃を弾き、春雨の答えを待つ。
その春雨と肩を並べて戦うことも多かった叢雲でも、この鉄壁とも言える黒幕の猛攻を春雨が超えられるのかはわからない。
「勝てるよ。それに、叢雲ちゃんはキーマンだよ」
対する春雨は、自信を持って答える。しかも、叢雲を立てるような発言。そう言われた叢雲は少しだけ驚いて春雨の方を見据える。
「叢雲ちゃん、今怒りが溜まりに溜まってるよね」
「ええ、あんなイライラする敵はそういないわ。自分のことを棚に上げて言いたいこと言って、自分の口が無いからヒト様を使って代弁させるとか、クズの中のクズよ。見てるだけで腹が立つわ」
「なら、槍は相当大きく行けるよね」
「自信を持って言えるわ。コロ助にぶち込んだ時よりも力が出る」
「それならやってもらいたいことがあるから、お願いね。叢雲ちゃんでないと出来ないことだから。任せた」
面と向かって任されたことで、叢雲の中に力が芽生えた。滾る怒りはそのままに、何か別の力が内側から燃え上がるような、そんな感覚を得た。
「……これも辿り着く者の力なのかしら」
「ううん、多分それだけじゃない」
春雨は微笑みながら、しかし、辿り着く者としての類稀なる直感で、今の自分の力を理解したことで、自信を携えた表情で言い放つ。
「私の力、本当の進化、わかった気がする。だから今、それが実践出来てる。白露姉さんに言われたこと、今の私なら出来る」
「何のことかは知らないけど、今はアンタの指示に従ってあげる。いや、従うんじゃないわね。利用してあげる。これだけ力が湧くんだもの」

「うん、それでいいよ。私をしっかり利用して。頼りにしてるんだから」
ふっと口角を上げながら、叢雲は改めて泥壁に目を向けた。猛攻は何も変わらない。隙も何もあったものではない。
しかし、江風主導のあの一撃を受けたからか、より自分の前には厚めの壁を張っているように見えた。砲撃も一度でも貫きかけた江風に対しては当たりが強いようにも見える。
「みんなの力が必要なの！　だから、お願い！　みんなら絶対出来るから！」
春雨のこの言葉、そして、少しだけ下がって全員を自身の視野の中に収めることで、今の春雨の力が最大限に発揮される。
仲間達は声援を受けることで力が湧き上がる感覚を得て、これまでの消耗なども払拭されたように感じた。
「春雨姉さんの思いの力です。身体が温かい。力が漲ります」
この力の湧き上がり方は、明らかに外部からの干渉による強化だ。しかし、泥の侵蝕による強引な干渉ではなく、対象となった仲間達を優しく包み込むような温かさ。海風のように春雨の力に敏感な者だけではない。他の者もこの優しい熱量を感じることが出来る。
「なんだ、春雨。やっぱり出来るんじゃん。でも、きっかけが必要だったんだろうね」
その熱を感じながら、白露がニッコリ笑う。春雨の力は、敵のみならず、仲間にも作用するのだと。
以前に白露が案を出した、『望む答えに辿り着く力を仲間に使ってみる』というものは、今ここに実現した。
いや、実際はその力を仲間に使っているわけではない。今までの春雨の力は、怒りを根源とした否定の力。『動くな』や『喋るな』といった、対象の行動を否定することに特化した力だった。
しかし、今は違う。否定など一切しておらず、信頼から来る仲間達へのブースト。泥などという穢らわしいモノも使わない、マグマの熱をただ身に纏わせる健全なブースト。
「……辿り着く者……」

別個体の春雨が泥壁の向こう側で苦い顔をした。その力がこの戦場にどう作用しているのかがわかっているかのように。
きっかけは、涼風の奮起。逆境に置かれても、正しい心で前を向いていたことにより、春雨の心は動かされた。
海風が崩れているところを何とかしたいという思いやりが、それを強く光らせた。滾る焔はカタチを変えて、真紅から純白へと昇華する、
江風の閃きで、疑問だった勝ち目に光が差した。それは勝利への自信へと繋がり、春雨の力はより高みへと昇った。
そして、少し下がって戦場の全域を捉えたことで、仲間達の奮闘をよく見ることが出来た。この仲間達と共に、最善の答えへと辿り着きたいと心の底から思った。
これにより、春雨の力は、本来の進化を見せた。怒りによる変化ではない。最善の答えに辿り着く力を、否定的ではなく肯定的に進化させた力へと。

今の春雨は辿り着く者ではない。
仲間と共に辿り着く者。辿り着くために、仲間の前に立つ者。仲間のために力を尽くす者。つまり、

導く者である。

導く者

辿り着く力はさらに進化し、今や仲間達すら辿り着かせる力、導く者として覚醒した春雨は、その目を戦場全てに向けていた。

黒幕のように自分の領域全てに自身の粒子をばら撒くようなことは出来ないが、自分の目が届くところは全てがその力の領域内となる。結果、今ここにいる仲間達は温かな熱と共に力が湧き上がっていた。

「仲間を使う力で、私を圧倒しようとしてるのかな」

やはり、別個体の春雨――黒幕は、春雨の今の力を理解している。この近海にばら撒く自身の粒子にも干渉してきていることを肌で感じているのだろう。黒幕が粒子ならば、春雨も粒子。同じことで拮抗しようとしているのならば、勘付いて当たり前。

春雨も今の状態になったことで、黒幕が周囲に撒いている粒子を感じることが出来るようになっていた。しかし、視界の中という限定的な領域であるために、密度は春雨の方が上。黒幕の粒子は春雨のそれに追い出されるように島まで追いやられている。

「なんやこれ……ウチにも干渉してくんのか」

「……あたしも力が漲ってる。龍驤も？」

「ああ、頭が冴えとるわ。分析の速度が倍以上になっとるで！」

そして、春雨でも黒幕でもない３人目の粒子を感知出来る者、龍驤も、この春雨の力をその身に感じていた。視界の中に入り、かつ、春雨の仲間であるという認識をされたことで、妖精さんの身体である龍驤にもしっかり作用していた。

この戦場で最も必要な力が膨れ上がるという、インチキと言われても言い返せないくらいの強化。自分に都合のいい強化と言っても過言ではない。それは、春雨の望む答えに仲間達を導くため。

覚醒したその力は、仲間を際限なく強化する力。粒子となって視界に撒かれた春雨のマグマは、最善の答えまでの道を辿らせるための力を与える。

「全員、回避しつつ接近！　一点に集中して！」

指示を出しながらも当然自分でも前進。しかし、全員を視界の中に入れておく必要はあるため、その前進は通常よりはかなり遅め。
代わりに、一点集中のために仲間達が動き出す。何処とも言われていなくても、何処を狙えばいいのかは無意識に――いや、直感的にわかった。
春雨のばら撒く粒子と化したマグマは、春雨の意思を言葉ではなく直感で理解させる。言葉を交わす必要もなく意思疎通が出来ているようなもの。それこそ、春雨の意思を仲間が体現していく。
やっていることは黒幕の泥による侵蝕に近しいモノ。自身の意思を送り届けて、思い通りにコントロールする。だが、根幹がまるで違った。意思を捻じ曲げて傀儡とする黒幕と違って、同じ思いを胸に共に最善の道を歩んでいくとするのが春雨。
強制力が無くとも、自分の意思で手伝ってくれる者だからこそ、春雨の意思を汲み取って、何をすればいいのかを言葉なしで把握出来る。
「先行しマース！　皆さーん、Ｆｏｌｌｏｗ（ついてき）ｍｅ（て）！」
まず飛び出したのは金剛。こういう時に先陣を切り、仲間の盾となりながらも、高速戦艦の名に恥じぬスピードで先頭に躍り出る。
誰よりも前に立つと、艤装を盾へと変形させて、仲間を守るために万全の状態を作り上げた。
「盾というより、的だよ」
そんな金剛を見て、別個体の春雨は吐き捨てるように呟いてから、金剛に向けて激しい砲撃を放ち始めた。
先行した金剛は、黒幕からして見れば恰好の的。狙ってくださいと言っているようなもの。泥壁は金剛に向くように変形し、今までにない集中砲火を浴びせる。
「それでみんなを守れるのなら、上等デース。もっともっと、この私を狙ってくるといいデース！」
「なら望み通りにしてあげる」
「かかってきなサーイ！」
ニィッと挑発するような笑みを浮かべ、その集中砲火を当たり前の

ように盾で弾き飛ばしていく。
泥壁からの砲撃は、普通の戦艦の一撃よりも重いもの。それが駆逐艦の連射並みの速さで飛んでくるのだから、本来ならば耐えることなど出来ようはずがなかった。
しかし、金剛はそれを意に介することもなく、次々と弾いていった。盾の動かし方から角度、力加減まで、完璧に計算しては、自分へのダメージを最小限どころか無効化にし、一切傷を負うことなく凌いでいった。
「身体が軽くてよく動きマース。これなら、いつまでも出来ますネー！」
弾き飛ばす方向もその場で理解出来た。直感がいつもよりも冴え渡る。何処に盾を置けば砲撃を確実にいなせるかが、手に取るようにわかる。体力の消費も極限まで抑えられ、衝撃で身体にガタが来ることもない。
「サラ達がしっかりサポートしなくては、ですね」
「ええ、こちらにも目を向けてもらいましょう。それが一番の援護です」
そこに空襲を合わせるのが空母隊、サラトガと大鳳。ここぞとばかりに自分が搭載している全艦載機を発艦。出し惜しみをすることなく、その全てを叩き込むために空襲を開始。
先程までは、黒幕の基地航空隊にことごとくを妨害され、爆撃も一つ残らず一掃されていた。しかし、今回は違う。敵攻撃機がどのように迎撃してくるかが海上からでも把握出来る。大鳳に至っては、艦載機を自身の力でコントロール出来るため、その把握が艦載機の動きに直結する。
「隙間が見える。こんなに冴え渡るのは初めてですよ」
「Ｙｅｓ．　これがハルサメの見ているＶｉｅｗ（景色）なのかもしれませんね」
「確かにそうですね。なら、この力を有意義に使わせてもらいましょう」
深海棲艦の艦載機を扱う大鳳は、それを本来ならあり得ない生物的

な動きをさせて敵航空機の隙間を縫っていく。サラトガの繰り出した艦載機は、それを操縦する妖精さんにもこの力が行き渡っているため、普段よりも高速で動き回り、敵航空機を翻弄していく。
「……鬱陶しいね。でも、ここはやらせない」
しかし、爆撃自体は島まで届かない。黒幕の基地航空隊は無限に発生するようなものであるため、爆撃そのものを受け止めて自爆することで島を守り続けている。追い詰めているようでその実、まだ攻撃が一切届いていない。
ただし、その攻撃のスピードと精密性は先程までとは段違いであり、黒幕もそこへの対処に少しだけ神経を向けなくてはならない状況へ。
「何処に行って何をすればいいのかわかる……この道を辿っていけばいいってこと……だよね」
「そうねぇ。内火艇の道まで見えるわぁ。これが春雨ちゃんの道ってことよねぇ」
山風と荒潮は戦車隊と内火艇を操りながらも一点集中に向けて動き出す。空襲による上空からの対地攻撃と合わせて、海上からの対地攻撃を続けた。本当の狙いのために、まずはあらゆる方向から黒幕を翻弄する。
分厚い泥壁があるから海上からの攻撃はシャットアウト出来ていると考えるのなら、それは間違いである。今の山風と荒潮には、その行動の適切な動きが見えている。
といっても、少し考えればわかることではあった。壁のないところまで移動させればいいということ。
「目の前だけが攻撃出来る場所じゃないものね～。さっきまでは操るにも視野が今より狭かったから出来なかったけど、今なら回り込みだっていくらでも出来るわぁ」
「自分の前だけ壁を張ってるんだから……もっと遠くから島を踏み潰す」
別個体の春雨を守るための壁であるため、陸と海の境界にビッシリと壁を生成しているのだが、それが島全域にまで拡がっているわけで

はないのだ。むしろこの行動によってそれを促す。正面にいる敵だけを注視していたら、足を掬われるぞと教え込むように。
「……あくまでも島を狙おうってことか。私の核狙いなのかな。でも、その程度でどうにか出来ると思ってるなら大間違いだよ」
さも当然のように泥壁はどんどん拡がっていき、最終的には島と海の境界を全てを囲うように壁が生成された。どれだけ回り込んでも島の中に戦車隊や内火艇が島に踏み込んでこれないように。
だがこれは黒幕にとっても出来ることならばやりたくはないことなのだろう。いくら島全体が自分の器となっているとしても、まるで違う方向から攻撃されるのは鬱陶しさで集中力が乱される。それは例えるのならば、自分の周りに数匹の蚊が飛び回っているようなもの。
「大丈夫、充分に行けてる。みんな、タイミングも合わせられるよね」
春雨が見えている道は、今やここにいる仲間達全員に見えている道。その光り輝く道の通りに動くだけで、最善の答えへと辿り着くことが出来る。
何処で何をすればいいのかを提示されているのだから、今やそれ通りに動くことが黒幕の思い通りにしない最高の動きになるのだ。
「これが春雨姉さんの見ている世界。辿り着く者の世界なんですね。今だけでも春雨姉さんと感覚が共有出来ていることを、海風は嬉しく思います。私の役目、よくわかります。この道を提示してくれている春雨姉さんの期待に応えるためにも、全身全霊をかけて辿り着きたいと思います。お任せください」
海風が特に動きが良くなっている。一部の春雨細胞による治療を受けた者と違う、経口摂取による細胞適合者として、辿り着く者に最も近い世界を見ているのが海風だ。動きも直感もほぼ春雨の模倣と言っても過言ではないくらいにまで高まっている。
これも海風の特性、春雨への依存が影響している。誰よりもこの力を受け入れることが出来たから、ここまでの力を引き出せる。今の海風は、２人目の辿り着く者であろう。
「よし、それじゃあ……撃って！」

この合図と同時に、魚雷が放てる者は一斉に放った。駆逐艦は全員、古鷹も尻尾からありったけを吐き出し、金剛すらも盾で守りながら繰り出す。
その威力は、先程の江風と同じように威力が上がっており、突き進むスピードなども大幅に強化されている。それがほぼ全ての仲間達から一気に放たれた。
「……っ」
やはり海中からの攻撃を陸上施設型は対応出来ない。海中に壁を作ることも出来ず、魚雷は全てが島に直撃していく。これほどの数の魚雷が島にぶつかれば、島そのものを抉りかねない程の火力を叩き込むことになる。
海中の爆発は海上にまで影響を与え、砂や土まで巻き上げた水柱が発生。中には黒幕の泥まで巻き込まれているかのようにも見えた。
「叢雲ちゃん！」
「わかってるわよ！　私にも、見えてんだから！」
そして、その水柱の根本、幾つもの魚雷が叩き込まれて抉れた島の一部に向けて、叢雲の巨大化した槍が突き立てられた。今までも特に大きく長いそれは、まるで掘削するかの如く島を強く抉り、別個体の春雨が立つ足場にヒビを入れる程にまで達する。
ほぼ地盤沈下とすら言える程の大惨事を引き起こしたその一撃により、別個体の春雨の前に生成されていた分厚い泥壁は連動して破壊され、水柱の向こう側に足下を崩されて姿勢まで崩れた姿を晒していた。
「ここ！　海風！　白露姉さん！　古鷹さん！」
「お任せください！」
「っし！　やってやるよーっ！」
「今なら、私も全力で行ける！」
海風は右腕を錨と鎖に変形させ、白露は村雨の武器であった鎖を展開。古鷹は尻尾の艤装を極限まで伸ばす。
「見えてなくても、何処にいるかわかる……！」
「流石春雨だね」

「勿論です。これが春雨姉さんの見えている世界なんですから。これが全て、正しい！」
そして、その全てを別個体の春雨へと絡み付かせる。少し距離が離れていても、今ならば限界以上に伸ばすことが出来ていたため、しっかりと捉えることが出来た。
古鷹の尻尾が両脚を、白露の鎖が右腕を、海風の鎖が左腕に巻きつき、トドメと言わんばかりに春雨の両手が胴体を掴む。
「っ……やらせな……」
「壁を作るのは別にいいけど、それは生やすものでしょ。やればいいと思うよ。でも、この手は絶対に放さないから」
やはりと言えばいいか、別個体の春雨は新たな泥壁を陸から生やそうとした。しかし、叢雲の槍が深々と食い込んでいるため、壁そのものがまともに生成されなかった。
これが叢雲がキーマンと言っていた理由。陸地に直接攻撃を仕掛けるだけでなく、それをそのまま維持することで目の前だけでも機能不全を起こすことが出来るのは、この中では叢雲しかいない。
「なっ……」
「力を合わせて！　せぇの！」
そして、４人がかりで別個体の春雨を一気に引っ張る。脚は陸の泥に接続されてしまっているが、そこに古鷹の尻尾を配置したことで、かなり強引な引き剥がしが可能となっていた。
さらに３人の力も加われば、陸との接続を無理やり引きちぎることも出来る。ただ引っ張るだけでなく、春雨の力まで加わっているのだから、その手段は最善の答えとなる。
「っしゃあああ！　行けぇえ！」
白露が吼えたことで全員に力が入り、脚の泥がブチリと切れる。その瞬間、引っ掛かりが取れたように別個体の春雨の身体が陸から離され、宙を舞った。
これにより、別個体の春雨は解放されることになる。泥の呪縛から

解き放たれ、身体中に纏わりついていた泥はコスチュームごと霧散した。

代弁者の救出

導く者として覚醒した春雨によって完璧な連携を見せた仲間達により、黒幕の代弁者として使われていた別個体の春雨が島から引き剥がされた。春雨、海風、白露、古鷹の４人がかりでタイミングよく引っ張ったことで泥の呪縛から解き放たれて宙を舞う。

「春雨、治療は!?」

「ＲＪシステムで行けると思います。山風！」

「すぐ行く」

島の上からは救い出された別個体の春雨だが、今の今まで黒幕の代弁者に仕立て上げられていたのだ。卵が植え付けられていてもおかしくないし、新種の泥が体内に巣くっていても疑問は無い。むしろ、陸から剥がされたくらいで侵蝕が失われるとは到底思えない。

ただ、陸から引き剥がすのが最優先であることは確かだった。無限に供給される泥のせいでその場での治療は不可能だったし、救うためには島の上にいてもらうわけにはいかなかった。

「龍驤、解析は」

「もう出来とるで。そいつ、やっぱ卵が植え付けられとる。端末はさっさと消し飛ばしとるが、卵はサクッとやることは出来へん。それに、別モンも入れられとる。これは直に触らんとどうにも出来へんやろな」

「……あたしが触ればいい？」

「おう、山風がウチを装備しとるんやからな。ウチが山風を通じて確実に治療したる」

春雨のマグマでも治療は可能だろうが、ここはもっと健全な方法で元に戻すべきだろう。

マグマを流し込む治療法も確実といえば確実なのだが、今後のことを考えれば、別個体の春雨の体内に蔓延る知らない泥であっても解析はしておいた方がいい。それでどうしても治療出来ないというなら、春雨のマグマを最終手段として使うべき。

一方、拘束された状態の別個体の春雨は、陸から離れたことで代弁

者ではなくなっており、その際に泥のコスチュームも全て霧散したため、残念ながら全裸で捕らえられている状態。
　島との接続は無くとも、別個体の春雨は侵蝕されているようなものなのだから、呪縛から解き放たれていても敵対の心はそのままである可能性が非常に高い。龍驤が別物の泥が入っていることを察知しているのだから尚更だ。
「逃げられるだなんて思わないでね、別個体の私。今はもう自分の意思を取り戻してると思うけど、まだ私達のことは敵に見えてるよね」
　春雨が自身と同じ顔の敵に向けて言い放つが、別個体の春雨は無言。その目にはまだ敵対心が見えており、侵蝕は全て失われたわけではない。
　おそらく、こうやって島から引き剥がされても、隙を見て誰かを攻撃しようと思っていたのだろう。最悪、侵蝕すら考えているはず。
　なのだが、４人がかりの拘束は侵蝕どころか艤装の展開すらさせない完璧なマウント。さらに言えば、春雨がその両腕で胴を掴んでいるため、余計なことをしないように力を使っている。導く者としての力は、別個体の春雨に対しても最善の道――治療されて呪縛から完全に解き放たれること――を歩かせるために発揮されていた。
「別個体の春雨姉さん、すぐに元に戻しますからじっとしていてください。抵抗は不要です。貴女にはこれが最善の道です。それは私達全員が見えています。だから受け入れてください」
　海風が諭すが、別個体の春雨は明らかに嫌そうな表情を見せる。代弁者にされたという事実は、別個体の春雨をより黒く染める侵蝕に繋がっている様子。
「アンタが心の底から黒幕に屈してないことくらいわかってんの。侵蝕がよっぽど深いんだね。でも安心しな。あたし達はそんなアンタも救ってやれるからさ」
　白露からの言葉にも、別個体の春雨は無視を貫く。ちゃんと治療をしない限り、この心を動かすことは出来ないだろう。
「っし、解析完了や。今のウチはホンマに冴えとる。処理速度が数倍に膨れ上がっとるわ」

ここで山風とその上の龍驤が到着。別個体の春雨を見るなり、その体内に蔓延る泥の解析が完了したと言い出した。
これまででも解析はしてきているが、ここまであっという間であることは、今までに無い。こんな状況、明石だったら今すぐ自分にもこの力を頼むと拝み倒していただろう。だから、この戦いの後に詳細を語るレポートを提出することになる。
「やっぱり島から直接に入れられた泥なだけある。ウチが持っとるデータと照合出来へんのも入っとるわ」
「治療は？」
「当然、出来るで。春雨のおかげで、ウチも辿り着く者の景色は見えとるんや。戦場で解析しとるんやから、最善の道を選び取れるわ」
春雨の力の効果範囲は、艦娘や深海棲艦だけではない。意志を持つのならば、妖精さんにも影響する。特に龍驤はより強い意志を持つのだから、影響を受けない理由がない。
その結果、辿り着く者と同じ道が見えるようになったことで、解析のスピードが数倍に。さらにそのシステムの適用範囲や効果までもが飛躍的に上昇している。
「今まで時間かかっとった泥の解析も終わった。ひとまずそっちの春雨の治療を始めよか。急がんと卵が孵化するかもしれへんしな」
当然ＲＪシステムによって卵は消滅させられる。しかし、端末と違って体内に埋め込まれているようなものに対しては、その身体に触れなければ対処が出来ない。
そしてその治療は、龍驤が直接触れるより装備している者が触れる方が手早く終わる。龍驤はあくまでもシステム妖精、解析などはシステムとしての機能として実行出来るが、治療は出力の問題で装備者の力が必要となってくる。
「山風、お願いね」
どうしてほしいかも全てわかっているため、別個体の春雨を拘束している４人、その中でも自由に動かせる春雨と古鷹が身体を持ち上げて、山風の前に立たせる。
別個体の春雨は睨み付けるように見つめるが、そんなことを意に介

さない山風は一切の容赦なく鳩尾に手を置いた。卵の位置、侵蝕の原点の場所も、当然光の道として提示されているため、何も考えることなくそこに手を置くことが最善の道であるとわかる。
「そんな目で見ても無駄……」
そして、ＲＪシステムの治療効果を発動。触れている場所から波長を送り込み、体内に埋め込まれている卵をピンポイントで消滅させていく。もう、龍驤さえいれば、明石の作った装置は不要となるほどになっていた。
当然この治療には、施設でも同じ治療を受けた者達と同じように熱が発生。内側から燃やし尽くす。熱という苦痛を与えられ、別個体の春雨は目を見開いてその強烈な熱量に悶える。
「卵がデカいな。本来よりちぃと時間はかかるが、耐えてくれや。必ず全部消し飛ばしたる」
４人がかりの拘束はこういう時にも役に立つ。この熱量を受けた者はほぼ全員がのたうち回るくらいに暴れるため、羽交い締めにするか拘束椅子を使うかして、身体を動かさないようにしてやる必要があるわけだが、それに通ずるものがあった。
実際、この熱を受け続けることで別個体の春雨は鎖が身体に食い込むくらいに暴れた。締め付けられた痕が身体に残るくらいに力を入れてしまっているが、拘束している４人はそれ以上ビクともさせないくらいに強く締め付ける。
「卵以外の泥も入っとる。最初の侵蝕でしっちゃかめっちゃかになっとったからやろ。ここの部分も直に触れて解析しといたる。消す方法もすぐに作っとくわ」
「今までのと違う感じ……？」
「せやな。あの陸地にある泥に近いっちゅーか、黒幕本体に近しい泥なんやろ。多分コレ、器にされたモンなら持っとるようなヤツかもしれへん」
龍驤に関しては、器だったものが泥化させられたため、龍驤特有のモノに変質してしまっていたが、それ以外に器にされた者がいるのなら同じ泥が体内に巣食っている可能性は高い。黒幕が唾をつけた証

という感じか。
　これがあることによって、かなり強めの侵蝕をされていると考えられる。端末による支配とは比べ物にならないくらいに体内に根を張っており、今までの治療よりもダメージは大きい。
「今のウチならこれも解析出来る。すぐに治したるから、今はとにかく耐えてくれ」
　卵の消滅を確認した後は、身体に蔓延る黒幕の泥の治療。別個体の春雨はまだ身体が艦娘のままでいるため、治療自体はすぐさま身体中に行き渡る。
「これで元通りのはずや。少なくとも、ウチには泥の気配っちゅーか、何かしら感知に引っかかるモンは無くなっとる。言い方が悪いかもしれへんけど、その春雨は新品同様になったと思うで」
　ドロップしたばかりで捕らえられたとするなら新品と言ってもいいかもしれないが、記憶まではどうなっているかはわからない。
　治療が終わり、息も絶え絶えと言った感じで荒い息を吐く別個体の春雨の拘束を解くと、自分の力では立っていられないようで、その場に崩れ落ちそうになる。
　しかし、今は脚部艤装も展開していないため、そのままにしていたら沈んでしまう状態。流石にまずいとすぐに古鷹が抱きかかえた。
「辛かったと思うけど、これでもう大丈夫だからね」
　古鷹に優しく声をかけられても、別個体の春雨は何も言えなかった。代弁者とされている時の記憶は無いにしても、それ以外の記憶は当然残ったまま。艦娘でありながら、艦娘に対して敵対していたという事実は心に刻まれてしまっている。白露型の中でも特に優しく真面目な春雨であることから、この気持ちは簡単には払拭出来ない。
「別個体の私、今はここで見ていてくれればいい。ちゃんとケジメをつけてくるから。貴女に代わって、この私が」
　別個体とはいえ、それは春雨のことである。自分のことのように辛い。だからこそ、ここで決着をつけなくてはならない。
「もう言葉も失っているのでしょうけど、そろそろ姿を現したらどうですか。代弁者がいなくても、その本性くらい私達に見せられるで

しょう。それとも、ここまでされてもまだ引きこもったままなんですか？」
島に向けて煽る春雨。代弁者たる別個体の春雨を引き剥がしたことで、もう本能しか残っていない状態の黒幕である。その言葉に反応して何かしらの動きを見せてくれれば良し。
実際は、島に乗り込んで核を探し出す必要があるとは考えているのだが、それをショートカット出来るならしておきたい。泥まみれの島に足を踏み入れることなんて出来ることならしたくない。
しかし、うんともすんとも言わない。島の泥は鎮静化しているほどである。しかし、泥壁も対空砲火も基地航空隊もそのまま。
代弁者がいなくても、島そのものが抵抗をすることは変わらないようである。つまり、島が意思を持っていると考えられる。島を器にしているというだけあって、本能的に自身へのダメージは回避しようと動いてくる。
「……徹底してますか」
「あそこに足を踏み入れたら、すぐに侵蝕されてしまいますよね……。春雨姉さんなら回避出来るかもしれませんが、あちらの方には道が続いていませんし」
全員に見えている辿り着く者の光の道。それは今、島の向こうには続いていない。つまり、上陸するなという意味である。
このまま何の策も無ければ、次の代弁者にされることが確実。ならば、向かうことは出来ない。それは春雨にも言えている。

八方塞がりとなりつつある決戦。しかし、ここを乗り越えなければ黒幕を終わらせることは出来ない。

黒幕の核

代弁者とされていた別個体の春雨の治療まで完了したのだが、黒幕への打開策は未だ見出だせていない。空母の2人が懸命に空襲を続けているのだが、制空権は一向に確保出来ず、爆撃は島にダメージを与えることが出来ず、無駄弾を消費していくのみ。

代弁者がいようがいまいが、島に対する攻撃は回避することに専念するようであり、特に空襲や艦娘が出来る限りの対地攻撃は全て迎撃をしてくるため、ほぼ通用しないと見ていい。

「効いたのは魚雷と、叢雲ちゃんの槍だけど……」

「だからと言ってもあの島への上陸は厳しいですよね……。春雨姉さんならば、侵蝕など物ともせずに突き進むことは出来るでしょうが、私達にはそんな力がありません。いくら春雨姉さんの力によって私達が擬似的に辿り着く者になっているとしても、私達は足を踏み入れた瞬間に侵蝕されてしまう可能性が非常に高いです。というか間違いなく次の代弁者を手に入れようとするでしょう。それに巻き込まれてしまったら、足手纏いになってしまいます。だからといってただ一人で黒幕と対面させるのは、流石に危険すぎるでしょう」

久しぶりの海風のマシンガントークだが、その内容はあまり明るいものではない。今やここにいる誰もが最善の答えが見えている状態ではあるのだが、島に伸びる道が1本もないという状態。さらに言えば、春雨にも今は島に繋がっている道が見えていないと来た。

あちらはこのまま引きこもり続け、こちらに逆恨み的な怒りと恨みを募らせることで力を増していき、最終的には手が付けられなくなる。放置していれば、最後は辿り着く者、導く者すらも超える力を手に入れてしまうかもしれない。そうなる前に終わらせなければ、今まで以上の大惨事が待っている。

「攻撃を繰り返しても、島が大きすぎるし防衛だけはしっかりしてるしで先に進まない……せめてコアの場所さえわかれば道が伸びるはずなんだけど……」

導く者となった春雨であっても、辿り着く者としての性質で消えて

いない部分がある。知らないモノに対して弱いという性質だ。
泥壁の突破方法に関しては、そのものが眼前にあったからこそ、攻略方法を直観的に勘付くことが出来た。そこに江風の閃きが乗ったのだから尚更だ。あの作戦に辿り着く要素はいくらでもある。
しかし、黒幕を撃破するための要素は、ここまで来ても未だにほとんどない状態である。島が目の前にあっても、そのどこに核があるかはわからない。
「……あ、そうだ。龍驤は核の場所を知っていますよね。そこに辿り着く道は見えていますか」
ここでこの中で唯一、黒幕のことをちゃんと記憶している龍驤に話を聞く。知っている姿とは違うようだが、この島のことは知っているので、核の場所もわかるはずだ。
しかし、龍驤は首を横に振る。知っていても今は道が見えていないようだ。
「ウチがここにおった時は、島のど真ん中の地下にあった。今でもそこにあると思うで。せやけど、確か核の位置は変えられるんよ。もしかしたら、ウチの知っとる場所から全然違う場所に移しとるかもしれへんな……」
龍驤がまだここにいた時となると、今から考えればもう1週間は前の話だ。用意周到とは言わずとも、やたらと警戒心が強い黒幕ならば、龍驤が敗北した時点でここから移動することを視野に入れていてもおかしくない。
だが、もう殆どこちらに力を貸してくれているようなものである『観測者』がその辺りを何も言っていなかったので、核自体はここにあると考えている。通信時間ではないタイミングで夜逃げのように移動し始めたら話は変わるが。
「あ、あの……」
ここで口を挟んだのは、未だ古鷹に支えられている別個体の春雨である。脚部艤装はまだ展開出来ておらず、自力で立つことが出来ていないため、最初に抱きかかえてくれた古鷹を頼らざるを得ない。
「その核っていうのは……黒いボールみたいなもののこと……です

か」
「それや！」
　その言葉に、龍驤は目を見開いて声を荒げた。妖精さんに叫ばれたことで、別個体の春雨はビクッと震えて古鷹にしがみつく。
「ウチもやけど、泥の核は黒い泥の塊でまん丸らしい。ウチも明石に聞いただけなんやけどな。ウチの場合はもうほんまに小さい米粒みたいなもんやったらしいんやけど、こんだけデカい器に入っとるなら核も大きなって当然やろ。せやから、黒いボールっちゅーのもあながち間違っとらん」
　龍驤が保証したことで、別個体の春雨が目にしたそれが、黒幕の核であることで間違いなくなった。そして、それを記憶しているということは、少なくとも別個体の春雨がまだ記憶があるうちにそれを見ているということになる。
　侵蝕から解放された時、その罪悪感だけが残されて黒幕に関する記憶が消えるのはこれまででもずっとあったこと。それでも覚えているのは都合が良かった。
　いや、本来なら消えていてもおかしくないのだろう。本当に僅かでもそれが残っていたのは、黒幕のそれがあまりにも心に刻まれていたから。別個体の春雨には、それは恐怖の象徴として心に残ってしまっていた。
　これは黒幕の落ち度。自分の存在がどういう影響を与えているのかを正しく把握出来ていない。侵蝕した状態で見せているならまだしも、別個体の春雨は侵蝕前にその姿を見せてしまったためにこんなことが起きている。それもこれも、言葉を失う程に自分という存在を復讐心などで認識出来なくなったからであろう。
「話、聞いてもいいかな。辛いなら大丈夫だけど」
　春雨が別個体の自分に優しく問う。自分の辛い過去を自分の口から話せというのは酷なことではあるのだが、ここで話を聞かないと先に進めない。
　深海棲艦化しているにしても、自分自身が相手であることもあって、別個体の春雨は少しだけ落ち着いて話をし始める。

「……わ、私は、その、今日生まれたばかりの艦娘です……それで……自分の向かう場所を探していた時に……この島に辿り着きました」
ドロップ艦は本能的に鎮守府を探し出す。本来ならば、この別個体の春雨は大塚鎮守府に辿り着くはずだったのだが、何の因果かこの島――黒幕の拠点へと辿り着いてしまった。
その時のこの島は、ここまで要塞じみていたわけではなく、見た目は普通の無人島だったようで、何の警戒心もなく一度上陸したらしい。一旦ここで休憩をしてから、改めて鎮守府を探そうと。あわよくば、ここで休憩している時に巡回している艦娘に見つけてもらえればラッキーと思いつつ。
しかし、それが運の尽き。そのまま何か――おそらく侵蝕性の無い泥に引き摺り込まれて、この島の地下施設へと連れていかれた。その時にはまだ侵蝕をされていなかったようである。
「怖くて……動けなくなってしまって……でも、その時に見たんです。黒いボールみたいな……その、話を聞いている限り……この島の核……ですか？　おそらくそれではないかというモノを……」
何の理由で侵蝕せずに置いておいたのかはわからない。しかし、予想はなんとなくつく。代弁者として適しているかを値踏みしたのだろう。その結果、別個体の春雨は黒幕のお眼鏡にかなったようである。
とはいえただのドロップ艦。使い捨てるにもちょうどいいと判断したか、引き剥がされたら卵を孵化させることなく捨てている。嫌がらせに特化しているわりにはそこは何もしてこなかったのは、おそらく観察。別個体の春雨に対して何をしているのかをその目でしっかり見るため。辿り着く者の手段をしっかり見ておくことで、より上の力を得ようとしている。
「怖くて……すごく怖くて……でも、すぐに出て行けるようになったんです。それで、死に物狂いでここから逃げようとしたら……貴女達を見つけて……」
ここからは春雨達が見た通り。疲労困憊状態で島の奥からフラフラと出てきて、見つけた春雨達に手を伸ばして助けを求めようとした

瞬間に泥に呑み込まれて、そのまま代弁者にされてしまった。
ここで卵も埋め込まれ、多種多様な泥に侵蝕されたのだろう。今でこそ治療は出来ているが、そのままならば別個体の春雨も侵蝕されていた時の漣達のように使われていたと考えられる。代弁者は今は欲しいが、ここを乗り越えてしまえばもう必要が無い。あとは尖兵として小間使いのように使うのみ。
「怖いところを聞くのは忍びないんだけど、その黒幕の核がある場所は覚えてる？　私達はそれを壊さなくちゃいけないんだ」
「……この島の……真ん中と言えばいいんでしょうか。どうにか脱出した時、周りは木ばかりで……。でも、この場所に来るまでは、一本道に思えました。ここに行けと言われているかのように……」
つまり、この島に生えている木々に至るまで泥が侵蝕していると考えてもいい。別個体の春雨を当てつけに使うために、わざと木々を分けてここへの道を作っていた。
今はまた木々で地下への入り口を閉じている。おそらく地面にも入れるような場所がない。核のある場所は完全に密室状態としているのだろう。ただ、そこに爆撃や対地攻撃をぶつけられれば、入り口が勝手に開いてしまう可能性がある。そのため、防空に関しては万全を期しているわけだ。
結局のところ、明石が最初に提案した、島そのものを爆破するのが一番手っ取り早い上に適切な手段だったと言える。今は島は黒幕以外無人なのだから、爆破しても何の影響も無い。今更言っても仕方ないのだが。
むしろ、そこまで考慮している可能性はある。島を守ることに特化しているようにも見えるため、とんでもない火力の爆弾を落とそうとしても、それを妨害するためにあちらは尽力するだろう。自分の命に繋がるのだから。
「さて、どうしようか……。今や島の周りも泥壁で入れないようにされてるし、そもそも踏み込んだら侵蝕される。核の場所は遠いし、空爆とかは全部カウンター。やれそうなのは……」
「魚雷と、叢雲の槍」

これしかないと白露が提案する。先程も効いたのだから、もう一度それを決めるしかない。
陸上施設型であっても、島そのものが器となってしまっている時点で、陸への攻撃がダイレクトに通用する。それがあったからこそ、別個体の春雨を救出することが出来た。
しかし、ここからはまたレベルが変わる。表面を傷つければいいという問題ではない。叢雲の槍でその地下施設のところまで穴を打ち抜かなければならないのだ。いくら怒りが青天井の状態であっても、こればっかりは難しい。
「いや、チャンスがあるならやってやるわよ。腹が立つのは今も同じ。まだまだ力は出せるわ」
苛立ちを隠そうとしない叢雲が、もう一度やってやると宣言する。
「そうだね。やらないで諦めるのは良くないよ。みんなで力を合わせて、もう一度一点集中をやってみるのが一番いいね」
こんなことで折れていては、勝てるものも勝てない。導く者が導くことを放棄してしまっては意味がない。

春雨もここでさらに奮起する。瞳の焔はさらに燃え上がり、この戦いを終わらせるのだとより強い力を発揮する。

共通の策

別個体の春雨を助け出せたのはいいが、島に引き篭もり防衛を続ける黒幕に手も足も出ない状況。実際あちらから攻撃をしてくるわけでもなく、防衛一本に絞られているために、その強固すぎる防衛能力に苦しめられることになっている。

今のところ通用しているのは、岸に向けての魚雷と、叢雲の繰り出す巨大化した槍。しかし、それで核があるであろう地下施設までダメージを与えることが出来るかと言われれば当然不可能。島の中央まで届くような武器は流石に無い。

対空砲火と基地航空隊を止めることが出来れば、そのまま対地攻撃によって島そのものを焼け野原に出来るだろうが、それすらもままならない。それ故に、まずは島をガタつかせるところから始める。

「魚雷を纏めて撃ち込んで、そこに叢雲ちゃんの槍を打ち込む。さっきやったことをもう一度やりたいんだけど……」

「同じ場所にやるのはやめた方がいいね。せめて、何か効果的な場所でやるべきだよ」

春雨の言葉に付け加えるように、涼風も案を出していく。少なくとも、同じ場所に同じタイミングで魚雷を撃ち込んだところで、ほとんど通用しないことがわかっている。

ならば、例えば泥壁が失われたらそこに何かしらの弱点があるような場所を知りたいところ。

「大鳳さん、上空から何か見えませんか」

未だ制空権争いを続ける大鳳に聞く春雨。サラトガと共に艦載機を飛ばし、島に爆撃を決めるタイミングを測っているのだが、やはり自身の島を守るために力を注いでいるのがわかるくらいに激しい抵抗を見せる。

そもそもの艦載機のスペックが異常に高く、サラトガと大鳳だけでは歯が立たないレベル。そこに古鷹が艦載機を追加しても、おそらく拮抗から先にはいけない。あちらは艦載機を自爆させてもいいくらいに無尽蔵に発艦出来るのだから、最終的にはジリ貧となり敗北を喫

することになるだろう。
　それを打開するために、上空から見た島の状況を聞いていた。もしかしたら、そこから何か攻略のヒントが得られるかもしれない。
「一応、高高度に艦載機を１機だけ送ったけれど、まだ少し見づらいですね。ただ」
「ただ？」
「あちらの基地航空隊は、ここより奥側から出ています。島で言えば、真逆」
　たまたまなのか、意図的なのかはわからないが、戦場となっている近海とは逆方向の場所から対地攻撃を迎撃しているのだと大鳳は話す。上から見れば島の全容はある程度はわかるようではあるが、今は制空権争いもしている上に、黒幕の艦載機はさらに上を取ってくるため、ハッキリと見えているわけではないものの、これだけは確信を持って言えるとのこと。
　その場所も変えられるかもしれないが、少なくとも今はここより遠い場所を基点にして猛攻を仕掛けてきているようである。
「他には何か見えますか？」
「見えている限りを話します。作戦に役立ててください」
　サラトガは妖精さん経由だが、大鳳は艦載機の視点をそのまま自分のモノに出来る。そのため、リアルタイムで高高度からの状況を伝えることが出来た。
　曰く、基地航空隊の発艦位置以外にも、木々は島の中央に向かうにつれ多くなることや、泥壁が周囲全てに展開されて内側に入る余地がないことはすぐにわかるようである。
　山風がＷＧ（ヴェー ゲー）４２による対地攻撃をしたときは、別個体の春雨付近から同じモノが展開されて迎撃していたらしく、いなくなった今はそれを放ってくるようなことはなさそうと言う。泥壁からの砲撃はしてきても、三式弾やＷＧ（ヴェー ゲー）４２のような少々制御が難しいモノに関しては、代弁者がいないとできないようである。
「ぶっ壊すにしても、何をするつもりなンだ？　叢雲がこじ開けてる間に鎖とかが通せたからこっちの春雨の姉貴を救い出すことは出来

てっけど、絶対次は対策してくンだろ」
江風の言う通り、一度喰らったような一撃には、即座に対応してくるのが黒幕。復讐心から、敗北を喫したらそれに対してさらに上の力を得る。まだあちら側だった時の白露が持たされていた特性だ。
最悪、魚雷も叢雲の槍も効かない可能性があるのだが、あと1回くらいは通るはず。その時に、何が何でも攻撃を通さなくてはならない。
「1つ思い付いた作戦があるんだ。江風が閃いたみたいに」
「何すンだ？」
「陸上施設型に効かないって思われてる攻撃を仕掛けるっていうのはどうかな」
春雨には考えがあるようである。そして、導く者の考えは、その力により擬似的に辿り着く者となっている仲間達に次々と伝播していき、なるほどと納得。本当に効くかはさておき、やらずに終わらせるよりは試す価値がある一撃。
「ただ、今のままだと人数が厳しいかな……。もしこれで突破出来たとしても、もう少し戦力が欲しいところだけど……」
と春雨が少し悩んだ時、何者かの気配を感じて全員が一斉に視線を向ける。
「あれ、今どういう状況？」
そこにいたのは、吹雪と鹿島。防空巡棲姫との戦いを終えた後、未だ減らないイロハ級を他の仲間達に任せて、増援としてここまでやってきたのだ。
防空巡棲姫を撃破した後、少しの間は周囲に群れるイロハ級を始末していたのだが、このままでは埒が明かないと、仲間達が2人をこちらの戦場に送り出した。
どれだけやっても減らないのなら、元凶を始末することで根本的な部分から解決する方針。防空巡棲姫に使っていた戦力をイロハ級の殲滅に使えるようになった時点で、ある程度は余裕が出来る。武蔵と島風、コロラドは消耗してしまっているものの、比叡と大和が参戦出来ているのは大きい。それに、武蔵に関しては消耗しているとはい

え、まだ満面の笑みで戦いに参加しているために心配はいらない。
「よかった、来てくれた」
追加の戦力が欲しいと望んだ瞬間に2人が来てくれたのは偶然か必然かはわからないが、とにかく戦況はこれでまた一歩前進する。
大将の艦娘の中でも屈指の実力者である吹雪と、大塚鎮守府でも上位に位置する鹿島がここに来たのなら、攻略作戦もより立てやすくなるだろう。
いきなり纏めて視線が自分の方に向いたので、思わずビクッと震えてしまった吹雪。今も戦闘の真っ最中だと思っていたのに、戦闘しているのは空母のみ、残りの者達は敵前で作戦会議をしているかのように集まっているような状況。流石にすぐには把握出来なかったものの、戦いが難航しているのはすぐにわかる。
それは鹿島も同じではあるのだが、作戦会議している仲間達よりも先に、島の状況に目を向けた。上陸を拒むように生成された泥の壁と、その奥から無尽蔵に飛び立ってくる航空隊。一筋縄では黒幕の撃破に向かえないということはすぐに見て取れた。
「見てわかる通り、島の上に上がれないんだ。壁があって奥に行けないし、多分足を踏み入れた瞬間に侵蝕される」
「ああ、なるほど。島全体が黒幕ってことかな」
「うん。核があって、それを壊せば終わりなんだけど、そこに行くことも出来ずに、空襲も迎撃されて届かないんだ」
確かにそれは困ったと、吹雪も一緒に悩んでくれる。だが、一応作戦はあると、魚雷と叢雲の槍のことは伝えた。一度喰らわせているため、次にまともに喰らってくれるかどうかはわからないが、通用したことは確かなのでもう一度やると。
その時に開く泥壁の隙間に何をするのかもここで伝えた。その作戦を迅速かつ確実にクリアするために、2人にも協力してもらいたいと。
「なるほどね……。じゃあ、私は魚雷を合わせるよ。鹿島さんは……」
「私はこちらの春雨さんの保護を優先します。古鷹さんが参加した方がいいと思いますので」

そう話しながら、鹿島は古鷹にしがみつく別個体の春雨の支えとなった。代弁者として使われていたところを解放されて、今は治療されたことで足腰立たない状態にされているため、どうしても誰かが傍についてやる必要がある。

戦力だけで言えば、鹿島と古鷹なら古鷹の方が上であることは否めない。鹿島も当然重要な戦力ではあるのだが、ここでは一歩引き、救われた者のメンタルケアに努める。

「ここから移動して、基地航空隊が近い方から作戦開始する。ただ、あちらも基地航空隊の場所を変えてくる可能性があるから、それは大鳳さんにずっと見てもらってる」

「なるほどね……難しいところだけど、まずやってみないとね。動かないことを祈るか、動く前にさっさとやるかってことか。でも、いくら泥で作られてるとしても、移動させるのには時間はかかると思うし、2人がずっと空襲止めてないなら動かす余裕はないんじゃないかな」

「そう……だね。ずっと攻撃し続けておけば、島の構造を変える余裕を与えないって出来るか。じゃあ、古鷹さんも」

「うん、空襲に参加する。数が多くなれば、余計に余裕が無くなるはずだもんね」

ここで古鷹も空襲に加わる。艦載機のスペックは大鳳やサラトガには劣るかもしれないが、数を増やすということに意味があった。

あちらの航空機が増えてきたとしても、拮抗を維持させればさせるほど、こちらがやりたいことはやれるはず。

「合間合間に対地攻撃を挟みつつ、攻撃する場所を移動する。山風はWG42（ヴェーゲー）での攻撃を続けて。金剛さんも三式弾お願いします。それで、良さそうな場所はみんな察することが出来る、よね？」

疑似的な辿り着く者となった仲間達の目には、次に向かうべき場所が見えていた。春雨にも、今まで見えていなかった道が見えるようになっていた。

吹雪と鹿島が参戦してくれたことで、厳しかった勝利への道は再び姿を現すようになったのだ。

今いるべき場所は、ここでは無い。最善の答えに辿り着くための道は、島を迂回して逆側に向かっている。そちらに行けば、この戦いで有利になれると道は示している。
ならば、その道を辿って、確実な勝利を目指す。こればっかりはやってみなければわからない。やった後に新たな道が開くはずだ。
「それにしても……やっぱり姉妹だなぁ」
春雨の立てた作戦、泥壁が開いた後にやろうとしていることについて、吹雪が少しだけ苦笑した。
「何が？」
「いや、ね。今からやること、私と鹿島さんは覚えがあるんだよ。少なくとも陸上施設型にやることじゃあ無いと思うけど」
「嫌なことを思い出してしまいますね……春雨さん、五月雨さんと同じことをやろうとしていますから」
そう、春雨の作戦は、泥壁が開いた後、陸に向かって爆雷を投げ込むということである。それも、普通に反応出来ない速度で。
吹雪は見る側、鹿島は受ける側でその一撃――あの壁に減り込む程の豪速球――を知っている。
五月雨は無意識に艤装のパワーアシストをコントロールすることで、それを全て腕力に使うという離れ業をやってのけた。春雨はそこを義腕のシステムで再現しようとしている。
勿論、大塚鎮守府で五月雨がそんなことをしていただなんて春雨は知らない。むしろ五月雨がそこまでのことをしていただなんて考えてもいなかった。故に、本能的に同じ策を選択したに過ぎない。そこが、吹雪にとっては姉妹だと感じたところ。
「あはは……白露型はそういう時に力業に走ろうとする性（サガ）があるのかも」
「勝てるなら何も問題はないし、少なくとも今見えてる道はそうすること前提なんだよね。だったらガンガンやっちゃって」
「うん、任されたよ」

黒幕の島攻略戦は最終段階へ。これがうまく行かなかったら、ジリ貧になる。緊張感が凄まじいが、春雨はむしろ、妙な昂揚感を得ていた。

皆の目に映る道

吹雪と鹿島が合流したことによって、黒幕に対する次の策に移る。黒幕の基地航空隊を破壊するため、まずは最も近い位置まで移動、そこから魚雷と叢雲の槍による一撃を入れて泥壁を退かし、そこに爆雷を豪速球にして投げ込む。この策が決まったことで、全員に光の道は指し示された。

「す、すみません……お手数かけます……」

「大丈夫ですよ。今、この海域は危ないですから、皆さんと一緒について行った方が安全だと思いますから。私から離れないでくださいね」

救われた別個体の春雨は鹿島が責任を持って曳航。その場にいるのも、そこから離れるのも、今のこの海域的には少々危険である上に、流石に全裸は可哀想だと、鹿島が上着を羽織らせるくらいはさせている。

治療の後遺症でまた足腰は立たないものの、鹿島が支えてやればようやく自分で脚部艤装を展開することくらいは出来るようになったため、ある程度の安定感は見せるようになっていた。

「大鳳さん、サラトガさん、古鷹さん、大丈夫ですか。移動してもらっていますが」

春雨が3人に問うた。大鳳とサラトガの空母2人と、それに準ずる力を持っている古鷹には、航空戦を続けたまま一緒に来てもらっているという、なかなか厳しい状態。この移動中でも、黒幕に余裕を与えないように、航空戦は続けたままでいたいが、離れると春雨の力の範囲から離れてしまうために、かなり危険になる。それだけは避けたかった。

普段から回避しながらの航空戦というのはやっているのだが、全速力で駆け抜けながらの航空戦は多少なり艦載機側に影響が出る。特に、妖精さんではなく使用者本人にコントロールが委ねられる深海棲艦の艦載機は、集中力の分散が危惧される。

「ええ、大丈夫です。貴女の力のおかげでキレは今まで以上です。疲れもまだまだ感じません」

「Ｙｅｓ．　タイホーの言う通り、移動しながらでも航空隊のＣｏｎｔｒｏｌは出来ます。頭も冴えてますしね」
「春雨ちゃんの力が、私達を底上げしてくれてるからね。何処をどうすればいいのかわかるから、拮抗は維持出来てるよ」
　しかし、今は春雨の力の影響下。その辺りも直感やベストな力の扱い方などを選択出来ているため、いつもよりも激しく動いているにもかかわらず、何事もないどころかいつもよりも細かく動かせているくらいだった。
　また、艦載機自体も強化され、3人がかりになったことも併せて、拮抗は確実に維持出来ている状態。優勢にまで持っていくことは出来ずとも、劣勢にはならない動きをしていた。これにより、基地航空隊の位置を移動させる余裕を無くす。
　おそらく、こちらが攻撃の手を緩めた時点で、あちらはより防衛に適した配置に変えてくるだろう。せっかく戦いやすい場所に移動しているのに、それをまた覆されたら、時間や体力がいくらあっても足りない。
　事実、大鳳が高高度から監視していると、島の中は艦載機を出してくるくらいで動きが見えなかった。木々が騒めき、守りを固めているようにも見えるが、今はそれくらい。
「一度三式弾撃っておきマース。山風、そちらもお願いしますネー」
「……了解。龍驤、振り落とされないで」
「っと、大丈夫やで。ウチのこと気にせずガンガン行ってくれ」
　ここで海上艦からの対地攻撃も入れて、さらに黒幕の余裕を無くしていく。こちらも航行しながらなので、本来なら狙いを定めるのが難しいのだが、そこは辿り着く者の力が利いていた。狙いたい場所に思い通りに飛んでいく。
　無論、これは黒幕によって迎撃されるものの、これでまた手段を減らすことが出来ているのだから良し。
　今は黒幕に余計な行動をさせないことに重点を置く。
「何処がベストかは見えてるからいいけど、タイミングとかは？」
「それも多分わかると思う。でも、あちらも妨害してこないわけがな

い、よね」
　魚雷を放つタイミングなどは、導く者となった春雨が全員を完全に合わせることが出来る上に、言葉を交わさなくても意思疎通が出来る程の連携が可能となる。そのため、いざ現場に到着すれば、何も言わずともいつ何処に攻撃をすればいいのかは直感的にわかるだろう。
　後から来た吹雪と鹿島も、今では春雨の視界に入ったことで効果範囲に含まれ、疑似的に辿り着く者の力を得た。光の道を見て最初は驚いていたが、春雨に説明されてなるほどと納得する。
　ただし、この光の道は今のところ妨害がないことから見えている道だ。想定外、知識にない手段を取られた場合、この道がまた途絶える可能性はある。対処不能なくらいなことをされてしまうと、導く者である春雨とて、いきなり対応することはなかなか出来ない。
「やってきそうなのは泥人形か。それなら蹴散らすだけだから大丈夫。私も鹿島さんも、有り余ってるとは言えないけど、まだ余裕はあるからね」
「あれだけの戦闘をして余裕がある方が恐ろしいんですが……」
　鹿島が若干引いているのも無理はない。防空巡棲姫との戦いは、基本的に吹雪が中心となって行なわれていたのだから、誰よりも消耗していて然るべきである。なのに、ここの吹雪はそれを一切感じさせないくらい。顔色もいい。
　実際は大技を連発したコロラドや、一斉射の撃ち合いから弾のぶつかり合いで破片を受けて血塗れになった武蔵、吹雪と共に蹴りを入れたことで脚を負傷した島風など、消耗している者はいる。しかし、吹雪はそれ以上に体力は残っていた。基礎からして違うようである。
「一度見せてしまっているので、妨害はしてくると思う。自我はなくても本能的に守りを固めてくるくらいだから」
「そうだね。でも、それごとやっちゃえばいいわけだよね。それに、今ならＲＪシステムもアップデートされたんじゃないかな」
　話を振ると、山風の頭の上で振り落とされないようにしている龍驤が、任せろと言わんばかりに親指を立てた。
「ウチにも春雨の力の影響は出とるでな。泥人形なら、システムで消

し飛ばすことも出来るかもしれん。出来なくても、蹴散らしやすくは出来るやろ。だから、ウチもあんたらの道をちゃんと開けたるからな」

今ならば、別個体の春雨から解析したデータもあるため、大概のデータは揃っている。黒幕自身のデータは変質を繰り返しているためになんとも言えないが、それ以外ならシステムで対応出来る。

そのため、厄介な妨害があったとしても、道を開くことは可能だろう。むしろ、自身を中心とした範囲全てが弱体化、ないし消滅まで持っていけるかもしれない。

島の周囲をぐるりと周り、今まで戦っていた場所から島を挟んで反対側へ。光の道は進路を示さなくなり、続いて攻撃する場所を指し示す。

空母隊と対地攻撃の奮闘により、基地航空隊の位置はここまで変わらず。そのおかげで、攻撃が通用することを光の道が教えてくれている。ここまでは順調。

しかし、こちらが黒幕の動きを見ることが出来ているのなら、あちらもこの動きを見ているに決まっている。本能的に自己防衛に走り、泥人形が島を守るために生成されていた。当然ながら、その姿は今まで見てきた艦娘の姿を模したモノ。

イロハ級が融合して生まれているわけではなく、泥壁からそのまま生成されて艦娘のカタチをしているだけ。しかし、触れられたら侵蝕は免れず、防衛を意図している生成であるために攻撃力より防御力に秀でているタイプの、いわゆる肉壁である。

「これで消耗させて、自分への攻撃を弱体化させようと考えているのでしょうが……もうこんなことくらいしか出来なくなっているんですね」

ここまで来ると、黒幕も哀れに見えてきていた。怒りと寂しさを超越し、導く者へと辿り着いた春雨であっても、この黒幕の在り方には怒りが湧いてきそうになる。

ここまでこれだけ好き勝手にやり、何人もの艦娘や穏健派の深海棲艦の心に傷を負わせ、自分以外の全てを使い捨ての駒くらいにしか見ていないのに、いざ自分がピンチになったら精神的にダメージを与えるような駒を用意して、十全の力を発揮させないように狡賢く動く。

それを自我も殆ど消えた状態で本能的に繰り出してくるのだから、元々性根が腐っていたとしか思えない。こんなモノが、あの中間棲姫の中に入っていたとは到底思えない。それが春雨の怒りを助長する。

「気持ちはわかります。私も気に入りません。ですが、落ち着きましょう春雨姉さん」

「アンタが腹立つ分は、あたしらが受け持ってあげるから。アンタはあたしらを導いてよね」

海風と白露がすぐに駆け寄り、春雨を落ち着かせた。導く者となっても不安定であることには変わりないようで、そこは姉妹がしっかり支える。

支えられるからこそ、春雨は仲間を導くことが出来る。仲間あっての自分と、正しく理解しているから。黒幕とは正反対である。

「……よし、では、行きましょう。山風、ＲＪシステムを全開にして」

「了解……龍驤、お願い」

「任せや。もう殆ど解析出来とんねん。泥人形なんて、壁にすらならんぞ！」

これだけの泥人形が生成されても、今の龍驤――ＲＪシステムがあれば、それは駒以下の存在に出来る。

解析を終え、泥に対しての対策が万全となりつつある龍驤が、徐に泥人形達へと手を翳す。すると、その動きは途端に緩慢なものに。

そもそもが壁になるために群がるだけの死霊の群れのようなものだったが、龍驤の力によってそれがさらに動けなくなる。防御力も急激に落ちていることだろう。主砲一発でも簡単に弾け飛ぶくらいに。

「今や！　やってくれぇ！」

「ありがとう。これならもう行けるね。みんな、タイミングは……言わなくてもわかるね」

ここに集合した時点でどうすればいいのかはわかる。そして、誰が

脆くなった泥人形を処理するかも。
「道を開きマース！　行ってくだサーイ！」
戦艦である金剛が、残っている力を出し切るくらいに砲撃を放つ。それは、武蔵達の行なう一斉射に近い密度。辿り着く者の力を得たことで、精度だけでなく火力まで上がっていた。
眼前の泥人形を一網打尽にしていく勢いで蹴散らしていくその間に、駆逐艦達が魚雷を装填。叢雲は溜めに溜めた怒りを槍に注ぎ、そして、春雨と海風だけはその手に爆雷を携える。
「私と海風は利き手が義腕だからね。一番これに適してると思う」
「同じタイミングで同じ場所に投げ込むのはお任せください。私が春雨姉さんに合わせられないわけがありませんから。一挙手一投足、その全てを春雨姉さんのために使わせていただきます」
爆雷を握りしめて、笑顔を見せる海風に、春雨も緊張なんて感じることなく先に進める。
「それじゃあ、みんな、行くよ！」

全員の準備が整った。もうあとは行くだけ。ここで押し勝って、勝利を掴む。
ここにいる者達には、その道が見えていた。

猛攻

「それじゃあ、みんな、行くよ！」

春雨の掛け声と同時に、春雨、海風、叢雲以外の駆逐艦が一斉に魚雷を放つ。

雷撃の威力は全員が殆ど同じ。しかし、練度によってその狙いの定め方やタイミングが変わるのは仕方ないことである。艦娘によって得意不得意があるため、北上や大井のような艦種として雷撃が得意な者もいれば、装備は出来るもののあまり多用はしない山風のようなタイプもいる。

だが、辿り着く者の力を得ているここにいる者達は、今だけは一糸乱れぬ完璧なタイミングで同時に魚雷を放った。こうすることにより、黒幕が追い詰められるのだと信じて。

誰も疑問に思わない。誰もこの力を否定しない。春雨の力を受け入れて、春雨の思うがまま……と言ってしまうと支配者のようになってしまうが、先導し、その戦い方を見つけ、勝利への道を指し示し、それに仲間達が自分の意思で従っているに過ぎない。

これがダメだと思えば、いくら春雨が提案した作戦でも、確実に否定するだろう。だが、誰も犠牲にならない、安全かつ確実性のある作戦を伝えてくれるのだから、それを否定する者はいないだろう。あの叢雲ですら素直に従うのだから。

「邪魔モノは退いてくださいネー！　雷撃の邪魔デース！」

まずその道を開くのが金剛。島を守るために群れる泥人形達を一網打尽にするため、全力の斉射によって視界を拡げていく。

精度も火力も上がっている上、ここで全部出し切ってしまうレベルに放っているため、ＲＪシステムによって弱体化されている泥人形は、掠るだけでもそこから微塵になっていく程。

そのおかげで、雷撃の道がみんなの目には見えていた。光の道は、金剛が開いた道をまっすぐ突き抜けて島へと辿り着いている。この道を自分が通るのではなく魚雷を通す必要があるのだが、そこは心配いらない。

「撃て撃て撃て！」
「タイミングは見てわかるんだ！　躊躇なく全部ぶっ放せぇ！」
　この中でも特にやんちゃな江風と涼風が先陣を切るように魚雷を放ち、光の道に沿うように島へと向かわせた。他の者もそれに合わせるように魚雷を追従させる。このタイミングが最もダメージを与えられると確信出来るから。
　しかし、全ての魚雷を纏めて放っても、本当に撃ち込みたい場所に辿り着く前に接触して誘爆しかねない。そのため、順序立てて撃ち込む必要があった。
「……2人とも煩い」
「いいじゃないの～。こういう時は、元気な方がいいわ～」
　一番槍が江風と涼風。そして、それに合わせたのが山風と荒潮。江風と涼風の放った魚雷が爆発しても誘爆しないように間隔を空けて。
　一発入った後に、同じ場所に二発、三発と入れていけば、嫌でもそのダメージは島の奥へ奥へと進んでいく。
「そこに合わせるのが、あたし！　いっちばーん完璧なタイミングで、みんなを取り纏めるよ！」
「そこに私も加わればいいね。いっちばーんの白露ちゃんに合わせるから、自由にやってね」
　第三陣として放たれるのが白露と吹雪の魚雷。深海棲艦化していることにより魚雷の威力自体が上がっているのもさることながら、ここにいる者の中でも屈指の力を持つため、組分けの最後に置かれた。さらにそこに艦娘の中でも最強と言える吹雪のサポート。強大な力がより強大となり、前の二組の力を大きく上回った衝撃が島の岸に直撃した。
　本来は堀内鎮守府でもエースとされていた駆逐隊を治めていた者。そこに従っていた妹3人まで加わっているのだから、この白露は統率能力もかなりの者である。それが今、導く者の力によってさらに底上げされているのだから、連携は完璧なモノとなる。
　荒潮も、姉妹ではないのに白露には強く信頼が置けると感じているくらいだ。そもそもが境遇によって穏健派の深海棲艦に対する感情

がいい意味で強め。ジェーナスがトップ中のトップだが、それ以外の深海棲艦にも好意的な感情を持っている。そのおかげで、白露との協力プレイにも一切の不満が無い。

吹雪ですら、この場では白露に任せた方がいいと感じ取った。導く者から与えられた辿り着く者の力など関係なく、姉妹の絆を根幹に置いた方がより確実にこの雷撃の連打を効果的に叩き込めると判断したからだ。大将の秘書艦の目は、ここでも最善の流れを掴み取る。

「つし、で、次はまた江風達だ！」

「魚雷の三段撃ちってな！　叩き込めぇ！」

白露と吹雪の放つ魚雷が島に直撃すれば、次はまた江風と涼風の魚雷。涼風の言う通り、三段撃ちの要領で順序立てて魚雷を撃ち込み続ける。一組目が放ったら次の組へ。その組が放ったらまた次の組へ。このおかげで絶え間なく魚雷を同じ場所に撃ち込み続けることが出来た。

雷撃の直撃を何回も受ければ、その都度上がる爆発の水柱は大きくなり、そして砂や土まで巻き込んだモノへと変わっていく。より大きく、より深いダメージになっていくのが見てわかる。

それをただ黙って見ている黒幕では無い。防衛のためにはより強い力を発揮するのが黒幕だ。魚雷をここまで撃ち込まれれば、それをどうにかしようと本能的に動いてくる。例えば、海底にまで泥壁を生成するとか。

「よし、このタイミングね。アンタ達、退きなさい！」

ここで自らの最善の答えを指し示す道が輝いたのが叢雲である。やりたい放題し続けているのに、追い込まれてもここまで抵抗し、自我も言葉も失った黒幕に対する苛立ち、怒りと憎悪は、これ以上ないくらいに高まっている。

怒りが強ければ強いほど叢雲の力が増すのは、自他共に理解している叢雲の特性。今の力は、コロラドの白鯨を貫いた時よりも強い。ここでやらねばという決意の力まで含まれ、さらに導く者からのバックアップまであるのだから。

海底に泥壁を生成する暇なんて与えない。やらねばと本能で察知

した時にはもう遅い。その時には叢雲は槍を構えている。
「いい加減に！　諦めろ！」
そして、叢雲の怒りの叫びと共に、魚雷の爆発がまだ止まぬ場所に槍が突き立てられる。これまでの中でも、それこそ先程繰り出したそれよりも巨大化した槍は、先に放たれていた魚雷と全く同じ点を貫いた。
ズンと、地響きのような音が周囲に鳴り響く。それはまるで、破城槌が突き立てられたかのような音。この一撃が、黒幕の土手っ腹に食い込んだ音。
「らぁあああっ！」
さらに、貫いたところで槍を捻り、より奥へ押し込むために力を入れる。まるで鍵を開けるように繰り出された二撃目は、より陸を深く抉る。地盤沈下を起こした程の渾身の一撃をさらに超えた会心の一撃は、黒幕の拠点に明確なダメージを与えた。
「開いたわよ！」
それに連動するように、泥壁の一部が粉砕された。島の外周、その全域に張り巡らされた泥壁が、叢雲により目の前の一部だけ解錠されたのだ。
「今！　海風、一緒に！」
「お任せください！　絶対に、確実に、同時に行けますから！」
この瞬間を見逃すわけがない。光の道――その到達点である光の点は、この解錠された泥壁の向こうに燦然と光り輝いている。春雨も海風も、同じ場所を見据えている。
爆雷を強く握り締め、完璧に同じタイミングで、直感的に選択したフォームすらほぼ同じというシンクロを見せて、全力で投げる。その投げる瞬間に、義腕の形状を変形。春雨からしてみれば、脚の伸縮を利用した急加速と同じ艤装の再展開を手のひらだけで起こして、爆雷を驚異的なスピードで射出した。
見る者が見ればそれは、吹雪が繰り出す、艤装の展開の時に発生する衝撃を利用したモノであることは一目瞭然。投げる腕力と共に衝撃まで使っているのだから、爆雷は砲撃よりも速く目的の場所まで到

達する。
さながらそれは、流星のようだった。
「抜けた……！」
泥壁を再生成する時間など、叢雲が与えていなかった。解錠され、破れた隙間を通り抜け、2人の投げた爆雷は猛烈なスピードで島を突き進み、最も近い場所の木に直撃。その瞬間、とんでもない威力の爆発を引き起こす。
海中でもまともにダメージが与えられるように設計されている爆雷の火力は、当然ながらかなりのモノ。それこそ、魚雷にも引けを取らないレベルの爆発を見せる。
小型ながらもそれだけの爆発力を備えた爆雷が、とてつもないスピードで突っ込んできて直撃、そこで爆発を起こしたのだから、島の中はそれだけでグチャグチャになる。
海中から槍が突き刺さった状態で、陸上でも爆発が起きたことで、島内の泥がその補修に向かい出す。このままではまずいと本能的にそこを守ろうとしたのだろう。
「もう一回！」
「すぐにでも！」
そこに追い討ちをかけるため、さらに春雨と海風は爆雷を再装填。投げたフォームからクルリと一回転し、踊るようにもう一発投げる。当然、その時には義腕の変形による射出も込み。一度爆発を起こした場所に、爆雷がさらに投げ込まれて爆発する。
爆発の上からさらに爆発を乗せることで、補修を間に合わせることなく激しい爆発を叩き込む。
こうなると島の上はもうしっちゃかめっちゃかだ。上から下から攻撃を入れられ、本能でも処理が追いつかなくなる。故に、行動そのものにエラーが出始めた。いくら自我がなく思考能力も希薄になり全てを本能でこなしているにしても、やらねばならないことが複数になるとバグってしまうもの。動きが一瞬止まった。
「見えた！　空母隊、今です！」
その瞬間を見逃す者はいない。そこへ高高度から見続けていた大

鳳がこのタイミングを見計らって強めの空襲を仕掛け始める。サラトガと古鷹も、ここに合わせて艦載機を追加した。
春雨と海風の二投目によってさらに被害を受けたことで、空襲を抑える艦載機の行動自体にも支障をきたしていた。その隙に、空爆は激しさを増し、基地航空隊の発艦場所そのものに爆撃を決めることに成功。そもそもが近い位置からの一撃だったため、爆雷の爆発が基地航空隊を掠めていたのも良かった。
「Air（制）superiority（権）、いただきました！」
「畳み込みます！　全機、さらに爆撃を！」
「了解！　私も空爆に専念します！」
空母隊の快進撃はさらに続く。一度確保した制空権を維持しつつ、爆撃の手は緩めない。基地航空隊だけでは止まらず、地下施設への入り口を探すように木という木を薙ぎ払うために絨毯爆撃を繰り出す。
点ではなく面での攻撃で、広範囲に焼き尽くしていった。泥が行き渡っているせいで簡単には燃えないかもしれないが、爆撃自体が黒幕にダメージを与える行為に繋がるなら、ありったけを落として次から次へと焼き払う。
だが、これが黒幕にとっての最後のトリガーとなった。
「えっ……」
突然、光の道が途絶えた。何が起きようとしているのかがわからなかった。
「地鳴り……違う、これ、まさか……」
島を中心に海が揺れる。波が激しく立ち出したと思えば、島を取り囲む泥壁が液化して消滅した。その全てが島の中央に集まった瞬間、まるで間歇泉のごとく泥が噴き出した。
しかもその泥は明らかに手のカタチをしていた。突如現れた泥の腕が飛び交う艦載機を、虫を追い払うかのように薙ぎ払った。
地鳴りと波は尚も止まらず、艦載機は次々と払われる。そして……
「何……あれ……」

島の真ん中から、泥で構成された巨人が現れた。

泥の巨人

好機を逃さずに黒幕の潜む島へと猛攻を仕掛ける春雨達。全員で力を合わせて泥壁をこじ開け、爆雷によって手に負えない状況にまで持っていき、空襲まで通せるようにしたのも束の間、黒幕にとっての最後のトリガーが引かれた。

泥壁が全て失われたかと思いきや、突如間歇泉のように噴き出した泥が手をカタチ作り、空襲を仕掛ける艦載機を虫のように払い除ける。そして、

「何……あれ……」

島の真ん中から、泥で構成された巨人が現れた。艦載機が払い除けられる程に長い腕からして、巨人は見上げるほどに大きい。コロラドの白鯨やリシュリューの巨大な尻尾が握り潰せるくらいのそれは、空襲などによってグチャグチャにされた島の表面をさらに更地にする様に現れ、形成されていく。

最初は上半身だけだったが、下半身も出来上がり、より巨大な全身で立ち上がった。その時には、島にある泥は何もかも失われていた。

「……島を器にしてたってことは、それだけの量があったってことだよね……」

島全体を器として活動していたのだから、黒幕を構成する泥は島と同じ大きさにまで膨れ上がっていてもおかしくない。ただでさえ島に生えている木々にすら干渉しているレベルであり、島そのものへのダメージを自分のモノとして受けていたくらいなのだから、その全てが巨人として顕現してしまえばこれくらいになるのは当然の帰結。

今までは島そのものが防衛に徹していたが、今は島そのものが攻撃に打って出るということだろう。島のままでは出来ることが限られている。だからこそ、ヒトのカタチをとってその四肢を使った攻撃まで視野に入る。

「春雨姉さん……アレ、何に見えますか」

「……わからない」

海風の質問に、春雨は答えられなかった。その泥の巨人は、ヒト型

はしているものの、ただそれだけ。明確な誰かというわけではなく、それこそ子供が粘土で作ったかのような歪な姿。顔もあるようで無く、胴や四肢の長さもめちゃくちゃ。そこがとにかく不気味で、その姿が生理的な嫌悪感を与えてくる。

春雨達はそれを嫌悪と捉えたが、例えばその意志に同調出来るものが見た場合、この姿を神々しく感じる者もいるかもしれない。不定形を不気味では無く超越と捉え、何にでもなれることを無敵と捉えれば、この姿も心の底から屈するに値するモノとなるか。さらにこのサイズがあれば余計に心を折る。

少なくともここにいる者達の中でそう思える者は誰一人としていなかったが、侵略者気質を持っている深海棲艦ならばそうなってしまう可能性はある。欧州姫達は、そちら側に精神が倒れたわけだ。おそらくその時はここまで巨大では無く、地下施設内で普通の深海棲艦と同等な大きさだったとは思うが、部屋の中が同質の泥で埋め尽くされているのを見れば、心を折ることは簡単に出来るだろう。

「デカすぎンだろ……ありゃあ……」

「空襲に手ぇ届いてるもんな……。でも、まだ出し抜く手はあると思う」

どうすればいいんだと困惑する江風だったが、涼風には思うところがあった。大きくなったことによって空襲を払い除けてはいるものの、その動きは緩慢。これほどまでに大きくなれば、二足歩行でバランスを取るのは難しい。その上、その全てを泥で構成しているのだから、自重で自壊してもおかしくない。現に、艦載機を払い除けるために振られる手の先からは、泥が僅かにだが飛び散っている程だ。

「空襲は一時止めます！　アレでは歯が立たない！」

大鳳が叫び、古鷹と共に一旦艦載機を全て消した。サラトガも流石にこれはまずいと全機撤収させて自分の手元に戻す。

こうしている時でも何度か爆撃は仕掛けているのだが、アレほどの巨体となると爆弾の1つや2つ程度なら一切効かない。削れたとしても、即座に周囲の泥がそこを補修して元通り。無傷と言ってもいい状態になる。

「全員ここから離れましょう！　今のままでは何も出来な……すぐに逃げてぇ！」
　指示なんてしている余裕すら失われた。泥巨人と化した黒幕は、のっぺらぼうの顔を春雨に向けた瞬間、ゆっくりとではあるがその手を握りしめて、春雨に向けて振り下ろそうと振りかぶった。艦載機を払う動きよりも遅く、しかしその質量からしてみれば充分過ぎる速さ。
　片手だけでも軽くヒト1人くらいならペシャンコにしてしまう程の大きさの拳だ。それが勢いをつけて落ちてくるとなったら、死が確定するようなもの。それに、海面を叩きつけることになるのだから、津波が起きることも予想出来る。
　流石にそこまでの攻撃を受けたら、どうなっても厳しい。今は全力で回避することを考えなくてはならないだろう。
　ここで全員の目に逃げ道が提示された。今のこの状況での最善の道は、逃げ延びること。この一撃を確実に回避して次へと繋ぐことである。今だけは、勝つことではなく負けないことを優先する道。
　そうするためならば、一度攻撃の手を休めても問題はない。ここで必ず勝たなくてはならないというわけではないのだから。
「少し頑張ってくださいね」
「えっ、は、はい……！」
　鹿島だけは別個体の春雨を連れている状態。だが、辿り着く者の力を得たことで、鹿島の持っていた練習巡洋艦ならではの力が発揮される。それは、教え子を正しく導くこと。春雨とは違う意味で、仲間をより良い方向へと向かわせることが出来る力を得た。
　故に、鹿島は別個体の春雨の手を強く握ると、これまででもなかなか出せないような超高速の動きでその場から離れた。別個体の春雨の速力は高が知れているのだが、鹿島に引っ張られることによって今のスペック以上のスペックが発揮されている。急速に経験値が貯まり、今の最善の足の運びを自然と覚えていった。
　別個体の春雨も、今は導く者の力の影響化。身体が自然と最善の動きをする。それを鹿島にサポートしてもらうことで、この戦場で生き

残ることを優先出来るようになる。
「落ちてくる……!?」
　振り下ろされる手がゆっくりと近付いてくる。それはもう、空が落ちてくるかのような恐ろしさ。これが避けられない程のスピードだったら終わりだったが、やはり自分の身体を維持するためにはこれ以上速く動くことが出来ない。
　それ故に、逆に様々な負の感情が駆り立てられる。避けなければ死ぬという緊張と、ただでは済まないという恐怖。生理的に受け付けない不気味さがそれを助長し、生半可な意志ではこれだけで足が動かなくなってしまうだろう。
　だが、そんなことで足を止めてしまう者など、ここには存在しない。これほどの強大な敵を前にしても、誰も心を折ることはない。今でこそ全力で回避することに専念しているが、そうしながらも勝ち筋を探しているのだから。
「衝撃に備えて！」
　急に手の方向を変えることは出来ない泥の巨人は、回避されたとしてもその殴りつける場所は変わらずに海面を強く叩いた。
　まるでミサイルが着弾したような轟音。同時に発生する激し過ぎる衝撃波。拳を中心として、周囲が一気に吹き飛ばされる程の一撃。
「っ、つっ～～!?」
　これには流石に誰も立っていられない。突風とかそういうレベルではない。戦艦である金剛ですら、足下がグラつくほどなのに、身体が軽い駆逐艦達ではまともに立っていられない。
　そしてさらに危ないのが、妖精の身体になってしまっている龍驤だ。身体が軽いとかそういうレベルではないため、山風の髪を命綱にしていたとしても、この衝撃を耐えるのはかなり厳しかった。
「龍驤……っ」
「すまん！　飛ばへんように支えるのが精一杯や！」
　山風が飛ばされないように龍驤の身体を握るように支えているが、山風自身も飛ばされかけているので、互いに振り落とされないようにするのに必死である。

そして、衝撃波の次は津波だ。拳が海面を叩いたのだから、その影響で海が揺れ、それが途轍もない波になることは当然の帰結、遠く離れた場所ならば、この波も安定しているかもしれないが、ここは震源地、いや、爆心地なのだ。高低差も尋常ではない波が衝撃の次に襲いかかってくる。

「無茶苦茶が過ぎるね……これどうしようか」

その波を華麗に乗りこなしながら呟く吹雪だが、誰もその言葉に対して反応が出来ない。天変地異のような衝撃と波を起こす一撃に、体勢を崩さないようにいるだけでも必死である。

いや、春雨だけはこの衝撃と波の中でも黒幕を見据えていた。次の一手、次の次の一手を読み解かなければ、この戦いに勝ちはない。

「まず弱点を探す！　これだけ大きくなったなら、核もあの中に絶対にある！」

隠していた核も、これほどの巨人となったのならそちら側に移しているはずだ。何故なら、島自体に泥が失われているのだから。

もう器として使っていた島も捨てるつもりで今の姿になっている。地下施設というのも全て引き払って、島を島に戻して、全ての泥を結集しているからこのサイズになっている。そうでなくては割に合わない。

つまり、あの巨人を斃せば、この戦いは終わりということだ。

「でも、それが何処にあるかはわからない……」

ただし、終わらせるための核が何処にあるかは、ぱっと見でわかるわけが無かった。自分の急所を曝け出す者なんて何処にもいない。自我すら消えた者であっても、本能的に隠す。

定石通りならば、頭か心臓。わかりやすく急所と言える場所にそれを置くことにするだろう。本能的ならば尚更考えるまでもない場所に置く。

そのどちらだとしても、今はまるで届かない場所にあるのだが。駆逐艦の主砲だと、下手をしたら射程範囲外。当たったとしても距離的に威力が激減している、

「とりあえず頭を攻撃しましょう。それが出来るのは、私達空母隊で

す」
「Ｙｅｓ．　さっきはＮｏ　ｄａｍａｇｅでしたが、もう一度やらない理由にはなりませんね」
「了解です。全部を纏めて叩き込めば、活路を切り開くことが出来るかもしれませんしね」
　急所を狙うのならば、まず真っ先に動かねばならないのは空母。先程はその巨大な手で薙ぎ払われたが、今ならばまともに狙えるはず。片腕は殴りつけるのに使っているし、もう片方はすぐには動いてこない。むしろやるなら今しか無い。
　故に、大鳳が真っ先に指揮を執る。サラトガと古鷹も頷き、すぐさま艦載機を発艦した。
　先程は爆撃を無力化――むしろ直撃してもすぐに修復されてしまったが、それは1つ2つがまばらに当たったからだ。同じ爆弾を一箇所に纏めてやれば、少しは変わるはず。
「せめて私達が、上から何かを見つけましょう。仲間達が見えない場所を見ることが出来るのが私達ですから」
　3人分の艦載機が一斉に泥の巨人の頭上へ飛んでいき、爆撃を仕掛ける。払わなければ何とかなる。そこに、あの頭を爆破するくらいの火力をぶつけてやれば、何かがわかる。
　しかし、それでも一筋縄ではいかない。
「削れた……けど、何もない……!?」
　その爆撃は、想定通りに頭を噴き飛ばすことに成功した。やはりまとめて叩き込むことで、そこにあるものを失わせることは出来る。
　だが、頭には核はなく、失われたはずの頭はすぐに修復される。顔が無いのだから、それはあくまでも頭状の何かということに他ならない。ヒトのカタチなだけで、それはヒトではない。
　そこからさらに追い討ち。振り下ろしていた手を持ち上げたかと思うと、その手がボコボコと沸騰するように泡立ち、何かを構築していく。
「まずい、すぐに散開！」
　気付いた時にはそれはもう完成していた。駆逐艦のような手持ち

の主砲である。
見た目はそれでも、サイズが尋常ではない。巨人が持っているのだから、戦艦主砲が豆鉄砲に見えるレベルの超巨大主砲がそこに展開されていた。
これを放たれたら、直撃でなくても酷いことになるのは考えるまでもない。掠っても致命傷。近くにいても衝撃波だけで並大抵のモノは破壊される。

「避けてぇぇぇっ！」
そして、その砲撃は間髪容れずに放たれた。

勝ち筋を探して

巨大かつ強大な力を持つ泥の巨人と化した黒幕が繰り出したのは、とんでもないサイズの主砲。戦艦の主砲が豆鉄砲に見える程のそれが、展開と同時に放たれた。

察知した春雨が叫び、全員一斉にそれを回避する。幸いにもこの砲撃は、誰かを狙って放たれたモノではなかったため、直撃は免れることは出来た。しかし、そもそものサイズが尋常ではないため、その衝撃波も凄まじい。先程の振り下ろされた拳もとんでもなかったが、この一撃はそれをさらに上回る。

キーンと耳鳴りがするが、春雨は何とか回避に成功していた。衝撃波を何とか受け流すことが出来たため、ほぼノーダメージと言える。

海風も春雨に倣って何とか回避が出来ているようだが、やはり耳鳴りが酷いらしく、砲撃の閃光をモロに見てしまったことで目がチカチカしているようだった。春雨の姿が見づらいのか、探し求めるように手を伸ばしてきたため、春雨はすぐに手を繋ぐ。

「ぜ、全員、大丈夫ですか!?」

海風が無事なのはよくわかるが、他の者は衝撃によって舞い散った海水の飛沫によってどうなっているのかわからない。そのため、すぐに反応が見えるようにその場で声をかけた。

霧がかかったかのような戦場に春雨の声が響き渡る。そのおかげか、すぐ反応が返ってきた。

「白露無事！　吹雪も一緒にいる！」

「涼風大丈夫！　江風も一緒！　あと山風姉と荒潮の姿も見えてるよ！」

「ふざけんじゃないわよ！　何なのよアレは！」

少なくとも駆逐艦の仲間達は無事な様子。叢雲に至っては、この一撃を見たことで余計に怒りが増しているようである。

だが、全員が無傷とは言えなかった。衝撃が身体を駆け抜けてしまったため、消耗が激しい。江風は吐きそうなくらいに気持ち悪そうにしているのと、山風が龍驤を守るために身を挺したか、身体が軋む

くらいになってしまっていた。
「空母隊、全員無事です！　衝撃で身体が軋みますが、まだ艦載機も行けます！」
「私も問題Ｎｏｔｈｉｎｇデース！　泥人形が一掃されてＬｕｃｋｙですねー！」
　大鳳、サラトガ、古鷹の空母隊、そして泥人形を相手にしていた金剛も無事。防御力の高い大型艦だったおかげで、よりダメージは小さい。特に金剛は回避しながらもシールドを展開していたおかげで完全な無傷。
　さらには、今の一撃によって邪魔をしてきた泥人形が吹き飛ばされたらしく、金剛がここからはフリーとなる。邪魔者がいなくなったのは幸運だった。
「だ、大丈夫です……誰も傷ついていません」
　少々弱々しい声ではあったが、最後に鹿島の声も聞こえてきた。別個体の春雨も無事とのこと。
　しかし、回避がぎりぎりなところだったようで、鹿島の消耗は明らかだった。自分だけで避けているならまだしも、別個体の春雨の安全を確保しながらの行動だ。
　流石にここまでの攻撃をしてくるだなんて想像もしていなかったため、これだったらここまでついてこなかった方がよかったかもしれない。しかし、あの場所にそのままいても泥人形が現れて囲まれたら厳しいだろうし、防波堤をしてくれている残りの仲間の方へ戻る。
　完全にたられば だが、ここの選択は間違えたと思っていた。あわよくば鹿島も戦力として参加したかったのだが、こうなってしまうとなかなか難しい。
「黒幕は……どうなって……っ」
　霞がかっているが、その巨大な影はしっかりと見える。主砲を放ったことでその姿は余計に歪なモノになっていた。
　手を振り回すだけで一部が飛び散るような不安定な存在だ。自身の砲撃の威力に耐えられるはずもない、主砲が展開された腕は見事に失われていた。しかし、その分の泥は身体側に移動していたようで、

逆側の腕が不気味に肥大化し、それが既にゆっくりと振り下ろされようとしていた。
「もう一度来ます！　避けて！」
　ここからさらに押し潰す攻撃が繰り出されるのだから堪ったモノではない。しかも、主砲の発射で失われた分の泥がそちらの腕に移動しているせいで、最初の一撃よりも肥大化した腕での一撃になる。避けるにしても、先程よりもさらに大きく避けなければならない。
　砲撃よりはまだマシかもしれないが、とにかく規模が大きすぎるために、攻撃に転じることが出来ない。ただでさえ超絶火力の砲撃によって周囲が見づらくなっている状況。海風のように視界がボヤけている者もいるだろう。
「江風、あたいが引っ張るから耐えてくれよ！」
「山風ちゃんは私が引っ張るわ～」
「叢雲はイライラしてないで避けなよ！」
「わかってるわよ！　いくら私でもアレを受け止めようだなんて思ってないわ！」
　そうなってもいいために、仲間達は協力して次の一撃に備えた。消耗が激しいからといって見捨てるなんて絶対にしない。各々の力が及ばないならば、それを仲間が補う。それが当然のことだ。
　互いに声を掛け合い、仲間達に現状を伝えながら、最善の道を掴み取る。各々に見えている道は、仲間を思うことでさらに太く確実な道へと変わっていった。
　そして、その狙いはやはり春雨である。先程の主砲は狙いを定めずだったが、自らの四肢を使う場合は狙いを定めるようである。とはいえ動きは緩慢。避けようと思えばいくらでも避けられる。
「拳じゃない、手のひらだ……！」
　初撃は握り拳だったが、次は張り手。先程よりも面積を拡げてきたあたり、より確実に殺してやるという本能を感じる。そもそもの手の大きさが違うのに、さらに拡げてこられたら、回避出来る場所はさらに限られるだろう。
「海風、一気に駆け抜けるよ！」

「了解です！」
念のため、その指の隙間に入るような位置をキープしながら、なるべく離れられるようにスピードを上げた。海風の目もこの頃には多少は良くなっているため、春雨を追従することは出来ている。
「前より少し早くなってる……!?」
「大丈夫です！　駆け抜けてください！」
黒幕もこの僅かな時間で熟れてきたのか、振り下ろす速度が１回目より確実に速くなっている。拳の時と同じようにただ避けるだけではまずい。
故に、今の位置取りはベストだった。手のひらが大きいということは、指の股部分の間隔もそれなりに大きい。また、黒幕は『手のひらを作る』という本能的な思考の元に行動しているため、指を揃えるようなこともしない。そのおかげで、攻撃範囲は広いように見えて抜け道がかなりある。
しかし、そこでは回避とは言い切れないかもしれない。直撃は免れることが出来ても、衝撃波はまともに喰らうことになる。しかも、指の股部分に入り込んだとしたら、周囲から衝撃の奔流をモロに喰らう羽目になるだろう。なるべくそれを回避するため、２人は全力で駆け抜けた。
「全員！　衝撃に備えて！」
もうこれ以上は無理だと感じたところで、奔流に巻き込まれても耐えられるように防御体勢に。海風と背中を合わせ、両腕を盾にする。海風も右腕を盾にして、２人揃ってほぼ球体の装甲を作り出した。
「来た……！」
そして、手のひらが着水。ドスンと耳をつんざくような轟音と共に、周囲に竜巻でも起きたのかというほどの衝撃が駆け抜ける。１人でいたら間違いなく吹き飛ばされいたが、そこは２人がかりで耐えたおかげでダメージも軽微。
しかし、ダメージが無いわけでは無かった。強烈すぎる衝撃を盾越しとはいえ喰らったのだから、互いに骨がミシリと軋む音を聞く羽目に。ヒビまでは行ってないにしろ、普通ならば痛みでどうにかなって

しまいそうなダメージである。
「海風っ、大丈夫!?」
「大丈夫です！　なんとか、耐えることが出来ています！」
だが、２人はそれでも少し顔を顰めるくらいで終わらせる。痛みは当然あるが、ここでそれを訴える意味がない。もう動けないのなら話は別だが、まだまだ戦える。
「みんなは大丈夫!?」
爆心地の中心にいたようなものの春雨だが、耐えられた時点で他の者達を心配する。海風はそんな春雨に惚れ直すが、今はそれどころではない。
「姉貴！　すぐにそこから離れろーっ！」
すぐに返ってきた反応は、江風の叫び。この一撃を少し離れたところから見ることが出来た江風には、春雨達が置かれた状況が霧の向こう側でもわかった。
振り下ろされた手は、少しずつ握り拳になろうとしている。その内側にいる春雨達は、このままでは間違いなく握り潰されることになるだろう。
ただでさえ泥で作られた手だ。握り潰されて死ぬだけならまだマシ。そのまま泥に呑み込まれて利用される可能性すらある。それこそ、代弁者に仕立て上げられる可能性もあれば、そのまま黒幕の器にされてしまう可能性まである。
「まずい……！　海風、掴まってて！」
「は、はい！」
咄嗟に見えた道を辿るため、展開していた盾を腕に戻すと、春雨はすぐさま海風を抱きしめる。腕をさらに変形させて海風を固定すると、脚部艤装の伸縮を利用して爆発的な加速を生み出し、その場から一気に離れた。
最初からこうしておけば良かったのかもしれないが、これは海風に対してダメージが入りかねない諸刃の剣。現に海風は、春雨の加速についていけずに軋んだ身体がさらに軋む感覚を得ていた。しかも、本来の春雨のスピードに辿り着くことも出来ない。

これで本当にギリギリだった。動く指の風圧を背中に受けて、最後には体勢を崩して滑り込むように脱出成功。
「ごめん海風、キツかったよね」
「だ、大丈夫、です。春雨姉さんの感触でプラマイゼロです」
「それだけ言えるならいいね。でも……」
眼前には自分よりも大きな握り拳。砲撃なんて効くわけもなく、効いたとしても即座に再生してしまうのだから、むしろ意味がない。
今は片腕だけになっている巨人だが、泥のバランスを整えて再び四肢を構築。頭も再構成しており、空母隊の爆撃は完全に無かったことになっている。砲撃による自分への反射ダメージも完全にチャラ。というかダメージとしての認識がない。飛び散った泥も自分から巨人の身体に戻ってくるレベル。
何をやってもダメージ無し。その一挙手一投足が春雨達にとっては大災害。頭が潰れてもお構い無しとなれば、もうこれは核をピンポイントで潰すしか斃す方法は無いだろう。
「まず核の位置を見つけないとダメだね」
「ですね……でも、何処にあるんでしょうか」
何度も海面を叩かれているので、足場は大波で不安定。しかも水飛沫で霞がかっているため、核どころか泥巨人の全貌が影でしか見えないくらいになってしまっている。
この状況で核を探し出すことが出来るのは、1人しかいない。
それに気付いたのは春雨だけではない。それを搭載している山風も、今やらなければならないことに気付いていた。
「龍驤……あの泥の巨人の核……調べて」
「おう、もうやっとる。ただ、アレ自体がぐっちゃぐちゃすぎて、どうなっとんのかようわからへんねや。だから、もう少し時間を稼いでくれ」
ＲＪシステムによる泥の解析をすれば、泥巨人についても何かわかるかもしれない。あらゆるモノが混ざり合ったような構成物である上に、そもそものサイズが大きすぎるために、解析にはどうしても時間がかかる。そのため、この状況をもう少し維持してもらわなければ

ならないと訴えた。
　ここまで大きいと、耐えるのもかなり厳しい。しかも、黒幕自体がこの身体に慣れてきているため、動きが少しずつ速くなっているのも問題。四肢の構成も強固になっているようで、飛び散る泥も減ってきていた。
「時間稼ぎかぁ……でも、こちらでも核を探してみるよ」
　ここで前に出たのは吹雪。ここまで涼しい顔で戦場に立っていたが、その間も黒幕の観察はしっかりやっていた。しかし、核の場所はまだ見つかっていない。
　目視でわかるようにされているとは思えないが、多少なり特殊な行動をする可能性はあるため、いろいろと手段を試して核の位置を探っていこうという算段。それに、ある程度刺激を与えれば、龍驤の解析に引っかかりやすくなる可能性もある。
「回避も重要だけど、攻撃も重要。弱点になりそうなところを探っていこうかな。あれだけ大きいなら、魚雷とかも通用するかもしれないし」
「あれに魚雷!?　マジで効く!?」
　吹雪の言葉に驚く白露。手のひらがあのサイズということは、足はさらに大きく太い。魚雷の爆発でもびくともしないと思われる。
「やってみなくちゃわからないよ。というか、回避に専念させられてるから、やれることがやれてないのが現状だからね。光の道が見えてないなら、私達で道を作らなくちゃ」
　やってもいないうちからやらないのは悪手だ。出せる手段を全部出して、それでも通用しないならば、また考えなくてはならない。

　ここで出せる手段を全て出す。そうすれば、春雨にも、仲間達にも、勝利への道が見えるようになるはずだ。

巨人の弱点

その巨体と、それに伴う強大な力。泥の巨人と化した黒幕に、春雨達は苦戦を強いられていた。

そのサイズから繰り出される攻撃に対して、必死に逃げ回ることしか出来ておらず、攻撃の隙をどうにか見つけた空母隊が空襲を仕掛けるが、急所であるはずの頭を爆破して失わせても核がそこに無いのなら当たり前のように再生してしまう。

攻撃の範囲が広すぎる上に、主砲の威力は並ではない。全ての攻撃が致命傷。掠ることすら許されず、近くにいるだけでも衝撃波で消耗させられる。

「ほな、もっと集中する。山風、痛いかもしれへんけど、我慢してや」

「……大丈夫。強く結んでおいて」

龍驤が山風の髪を自分の身体に幾重にも巻き付けて、絶対に振り落とされないように命綱を強く縛る。

この戦況、まずやらねばならないことは、泥の巨人の核が何処にあるかを探し出すことである。しかし、目視でそれを探そうとするのは至難の業。

ただでさえ大きく、頭頂部までは相当見上げる必要があるくらいなのに、攻撃を繰り出すごとに海水が舞い上げられ、霧のようにこの戦場を包み込んでいるため、とにかく視界が悪い。

それをも凌駕して黒幕の核を探すことが出来る者がいる。それが龍驤だ。

ＲＪシステムは暴動妨害、侵蝕する泥の性質を感知して無力化することが目的で設計された、拡張されすぎた電探みたいなモノ。明石謹製のそれは、龍驤という超高性能なシステム妖精を擁立したことによって、その場で明石並みの解析を行なうというトンデモ兵器へと昇華している。

その効果範囲も広く、泥の巨人の頭頂部まで範囲内であり、全身を隈なく調べることが出来るだろう。範囲内ならば全て龍驤の手が届く範囲。そのことごとくを詳らかにしていく。

「ホンマにグッチャグチャや。いろんなもん混ざり込んどるせいで、次から次へと変質しとる」
その龍驤を以てしても、その泥の性質は簡単には解析出来ない。龍驤の中にあるデータは、増殖はするが変質はしない端末と、そこから派生し、予測まで含めたありとあらゆる泥のモノ。この場で解析した監視の目や、泥人形を構築する魂の混成の泥も、既にデータ化していつでもアクセス出来るようにしてある。
ほんの少しでも類似点があれば、そこから数十数百の可能性から演算を行ない、その対策まで割り出す。明石が出来ることなのだから、そのコピーとも言える龍驤も当然それが出来る。むしろ、システム妖精である分、明石より計算は速いくらいだ。
しかし、黒幕本体の泥は今までとはあまりにも性質が違った。いや、端末や監視の目、魂の混成に使われている泥と共通点は多い。多いのだが、龍驤には常に変質し続ける性質として見えているため、演算に使える情報が全く定まらないでいた。
端末の感覚がしたかと思えば、監視の目を開けているかのような錯覚を与えられ、また次の瞬間にはまるで知らないデータまで見つかる。それが絶えず起き続けているのだ。
「……混沌（カオス）やな……見た目通り」
復讐心が溢れ、器を捨てるというカタチで進化を遂げていく黒幕の泥は、まさに混沌。この状態になるまでに、何人もの器を乗り継ぎ、その肉体の情報を取り入れていくうちに、この混ざるという行為そのものが特性として昇華されている。
故に、切り離された端末や、粒子化した監視の目、別個体として形成されている泥人形などは解析出来るが、その原点となる黒幕自身は、混ざり合っているが故に何モノでもなく、その性質自体が解析を妨害していた。
こんなところにまで嫌がらせが行き届いていると思うと、あまりにも徹底的すぎて逆に感心してしまうほどだった。そして、最初は自分もコレの器だったことと、あの性質の一端が自分なのだと思うと、龍驤はゾッともしてしまう。

「解析して消しとばすかとは出来へん。あんにゃろ、ウチの解析にまで耐性持とうっちゅーことやな。だとしても、急所くらいは探したる」
目を瞑り、システムによってわかる空間のデータに直接触れながら急所と言えそうな場所を手当たり次第確認する。
黒幕も龍驤が自分のことを調査しているのだと本能的に察知し、それを嫌がるように再生された方の腕の泥が沸き立つ。この反応は先程もあった主砲による砲撃だ。
「まずい……！　もう一発来るぞぉ！」
叫ぶのは涼風。黒幕が山風――むしろ、その頭の上で黒幕を舐めるように観察する龍驤――に狙いを定めたことで、先程の展開してからすぐに放つような強引さはなく、迷惑だと言わんばかりに山風に身体と腕が向いていたため、その近くにいた涼風が即座に察した。
「悪ぃ、山風の姉貴。強引だけど、避けるために引っ張らせてもらうぜ！」
涼風の叫びと同時に、江風が山風の手を掴んだ。ビクッと震えたようだったが、山風はこれを受け入れるしかなかった。消耗はあるものの江風に引かれて突き進むことによって、この二度目の砲撃を切り抜けることが出来る。
江風だって消耗しているのだが、この危機に吐き気ごときと呑み込んで、全員が無事に乗り越えるために気力を振り絞った。
しかし、避ける方向はどうするか。黒幕が構えている腕はゆっくりと山風を真正面から捉えようとしている。後ろに下がるのは流石にまずい。
「全員！　前へ！」
ここで春雨の声が響き渡る。仲間達には見えずとも、春雨には全員分の道が全て目に映る。そして、その光の道は、全員が前に進むことを示していた。
これだけ巨大だと、主砲を展開したとしても射角的に自分の近くは範囲に入らなくなる。こういう時だけは、懐に入ることが一番安全。
この春雨の指示が戦場に響いた瞬間、仲間達の目にはそのための道

が提示された。
導く者が道を作り、辿り着く者がその道を辿る。本人達は確実に否定するが、これは一種の主従関係に近しい。しかし、一切の強制力が無いため、互いの信頼関係が無ければ出来ない。
強制的に従わせる黒幕とは、根底から違うのだということを見せつけるように、全員一斉に動き出した。
「近付けば弱点は見えてくるかもしれないけど、足には気をつけなくちゃね。踏み潰されるだなんて考えたくも無いし」
ボヤきつつも、吹雪は泥の巨人から目を離していない。回避のためとはいえ前進出来たということは、これまでよりも近くでその全貌が見えるということ。
ドロドロの全身を遠目に確認するものの、それらしいところはなかなか見えないのが現状だ。近付くことでまた何か違ったモノが見えるかもしれない。
「山風の姉貴、大丈夫か!?」
「だ、大丈夫、だから、あんまり強く引っ張らないで」
「身体きっついンだろ。だから、少しは我慢してくれよな!」
狙われている山風は、江風の力も借りて真っ先に泥の巨人の足下へと辿り着く。こうなるともう黒幕の主砲からは逃れたようなもの。
しかし、砲撃自体は止めようとしておらず、全員が逃げ果せたというタイミングで再び発射された。今回はギリギリというわけでは無かったため、落ち着いて回避は出来ているものの、その衝撃はやはりとんでもないものであり、足下であっても風圧には襲われる。軽量の艦なら間違いなく吹き飛ばされるレベルの威力。
「っくぅ……でも、同じことを二度も三度もされない……!」
耳鳴りだけはどうしても回避は出来ないが、初回よりは慣れたもの。体勢を崩すことなく、しっかりと全員が足下へと逃げ込めた。ここにいる限り、砲撃が飛んでくることはおそらく無い。
しかし、ここはさらに危険であることは間違いない。何故なら、すぐそこに足があるのだ。このサイズで蹴りなんてされようものなら、真下に逃げ込んだ春雨達は一網打尽にされかねない。

それでも導く者によって提示された光の道はここを指し示していた。ならば、ここにいること自体に意味がある。導いた春雨にもその真相はすぐにはわからないが、次の黒幕の行動で察することが出来た。

「……脚を動かさない？」

主砲を放ったことでまたそちらの腕は弾け飛んでいたが、その分の泥はまたもやもう片方の腕へと移動させ、長さが狂った片腕で足下を掴みに来ていたのだ。

砲撃を放てば脚ごと持っていかれてしまうために砲撃では無いのはわかるが、ここまで下に纏まっているのだから、ゆっくりであっても脚を閉じる方が効率がいいし、とにかく攻撃範囲が手よりも広い。それなのに、あえて手を伸ばしてくるというのは不可解である。

そこから出された結論は、たった1つ。黒幕はこの場から動けない。

「……そうか、結局は器から離れられないんだ」

伸ばされてきた手から逃げながらも、春雨はその足を注視していた。これだけ近くにいても微動だにしない。それも、両足ともである。

霧がかっていて見づらいものの、その足はよく見れば、どちらも島に接続されていることがわかった。踵が陸に乗っている。つまり、あの場所から動かすことが出来ないのは確実。

なら何故そんなことになっているのか。1つは大きすぎて片足立ちなんて出来ないくらいにバランスが悪いからというのもあるだろうが、摺り足をすれば脚を閉じることくらいは出来る。だとしても動かさないのは、島から離せない理由があるから。

「見つけたで……！　核は巨人の中には無い！　足下の陸ん中や！」

これだけ大きなモノを生成していても、本体は島の中。最低限の地下施設はそのままにして、残りの泥を全て陸上に移動させて巨人を生成した。そのコントロールは常に足の先から行なっているということだ。

ヒト型であれば、その何処かに核があると考えてしまうのが、これ

までの経験から来ている固定観念。しかし、この黒幕がここまでやっても自身の最も弱い部分を見える場所に置くかという話である。
移動させることも出来るかもしれないが、それ自体が敗北に繋がる可能性があるのだから、自我が無くてもその選択はしない。大きなことをやっても、自分自身は隠れ潜む。それがこの黒幕の在り方だ。
龍驤は巨人を隈なく調べたが、何も感じることが出来なかった。故に、まさかと思いながらも島の全域を調査したのだ。足下まで近付いたことで、それがよりやりやすくなったことも大きい。
その結果、足だけ僅かに泥の濃度が高いことに気づいた。核を守るために、そこだけ厚めにするのはわからなくもない。
「見つからないわけだ。私も身体ばかり見てたもんなぁ。巨人そのものが囮ってことかな」
「でもさ吹雪、これ魚雷正解かもしれないよ。倒れるくらいに爆発起こせば、足をひっくり返すことが出来るってことだよね」
「だね。接続を剥がしちゃえば、あの巨人は無くなる。でも、あの量の泥がここにばら撒かれることになると思うけど」
「うえ……」
黒幕の核を破壊したら、死と同時に泥が全て消えてくれるならいいのだが、それでも悪あがき的に泥を残していかれたら厄介極まりない。
それを核が残った状態でやるとなると、あの巨人が確実にただの泥となってこの海域一帯に流れ出す。それに侵蝕性があろうがなかろうが大惨事は確実である。
「でも、やらなきゃどうにもならないんでしょうが！　だったら、私はあの脚をぶち折ってやるわよ！」
少しだけ悩んでしまった吹雪と白露だが、そんなことは無視して叢雲が槍を構える。極限まで巨大化させた槍ならば、あの脚の1本くらいなら貫いて折ることも出来るかもしれない。
「春雨！　アンタも決断しなさい！　脚を折れば核に近付けるのよ!?」
導く者に対して指示を仰ぐように見せかけて、ほとんど叱咤であ

る。だが、春雨的にはこう言われることで仲間意識がグッと強くなった。
導く者だからといって、常に自分が先頭にいなくてはいけないわけでは無い。仲間と共に歩くからこそ、みんなに最善の道を提供する。それが真に導く者だ。
「そんなの、決まってるよ。当然、ここで黒幕を斃さなくちゃいけないんだから」
叢雲の言葉に笑みを返す。

「全員、脚を集中攻撃！　核を曝け出させます！　あの巨人の弱点は脚です！　全攻撃を以て、膝をつかせてやりましょう！」

決死の攻防

龍驤の調査により、黒幕が作り上げた泥の巨人は囮であり、本体――黒いボール状の核は未だに島の中に存在していると判明した。しかし、泥の巨人がいる限り、黒幕の核に攻撃をすることは出来ない。そのため、ここからは泥の巨人を斃すために動くこととなる。

黒幕の核とダイレクトに繋がっているのは足。ここだけは島から動かすことが出来ないようで、これを潰せば核に一気に近付ける。それを防ぐために手を伸ばして来るわけだが、それ以上に再生能力を持つ太すぎる脚を破壊する必要があるのがかなり厳しい。

しかし、春雨達はこんなことで挫けることはない。弱点が見えたのならば、そこを徹底的に叩く。斃せる手段が見つかったのだから、その後のこと――巨人が消滅すると同時に構成していた泥が降り注ぐ――なんて考えている余裕なんてない。

「全員、脚を集中攻撃！　核を曝け出させます！　あの巨人の弱点は脚です！　全攻撃を以て、膝をつかせてやりましょう！」

この春雨の言葉が、辿り着く者達に光の道を指し示した。狙うのは脚。それ故に、魚雷による攻撃。

「核は左脚側や！　そっちを集中狙いで頼む！」

システムによって核の位置を確認した龍驤からの援護で、集中狙いする脚も決まった。核と繋がるためか、右脚よりは陸に多く乗っており、魚雷を撃ち込むにしてもバランスを崩すのは難しいかもしれない。

そうなると、魚雷だけでは足りないだろう。勿論、魚雷によって足を削り、バランスを崩しやすくする必要はあるかもしれないが、それで倒れなかった場合に厳しくなる。

そうなると、本当に狙わなくてはならないのは足というよりは足首。姿勢を崩すために、左脚の足首を半分以上削り取れれば、あとは自重で倒れるだろう。あれだけ大きければバランスを崩しやすいはず。

「まずは魚雷で先制攻撃と行くぜ！　涼風、もう一度やるかい！」

「おうさ！　でも、手で邪魔してきてっからちゃんと気をつけろよ！」
「ったりめーよ！」
一番槍は、やはり江風と涼風が受け持つ。特に涼風は、周囲を把握しながらの攻撃。
脚を狙っての攻撃が来ることなど、黒幕としても百も承知なのだろう。伸ばしてきた手は、２人どころか足下に群がる敵を蹴散らすために振り下ろされる。主砲を放ったことで逆側の腕が伸びており、さらには手のひらもより大きくなっていたため、妨害は激しい。
むしろ、攻撃は最大の防御と言わんばかりに容赦なく押し潰しに来る。喰らったらひとたまりもない質量の暴力に、いち早く気づいたのはやはり涼風。
「江風！　撃ったらすぐに下がるぜい」
「あいよぉ！　死なば諸共なンて、やってやるかっての！」
２人揃って魚雷を放った瞬間には踵を返しており、手のひらによる妨害を確実に避けつつも、足への一撃がどうなるかを確認。
海面を殴りつけるなどはなく、手のひらで海面を掬うような挙動をされたためか、衝撃よりも猛烈な風が発生してしまい、避けられたものの追い風によって体勢を崩される。
他の者も同様だ。ゴウと吹き荒んだ嵐によって、軽い山風辺りはその場から足がはなれてしまいそうにまでなってしまう。だがそこは一緒にいた荒潮がうまくカバー。頭の上の龍驤もどうにか飛ばないように山風の髪の毛をしっかりと掴んでいた。
放った魚雷はというと、巨人の左足の爪先に直撃。２人分が爆発したので先端は見事に削れたのだが、まだまだダメージが足りなく、すぐに泥がその場所を修復し、元通りになってしまった。
「こンだけじゃ、全然足りねぇ！」
「さっきの三段撃ちくらいやらねぇと通らねぇよ！　つーか、あたいの電探こうなると役に立たねぇなぁおい！」
あまりにも豪快に動かれると、電探で察知するとかそういうのは必要ないくらいに次の行動がわかる。その上に鈍重であるため、見てからでも回避行動が取れるほどだ。

しかし、あまりにも大きすぎると、それがわかっていたとしても、その圧がとんでもなく、回避がギリギリとなる。
今の掬い上げるような一撃は、当然全員が回避しているが、攻撃されればされるほどその場から離れなくてはならなくなるのが厳しい。攻撃のチャンスをことごとく邪魔され、ジリ貧状態に持っていかれる。
「私達は腕を止めましょう。あちらなら艦載機も使えるはずです」
「了解です。肩から行きますか」
「Ｏｋａｙ．　少しでも動きを止めてくれれば御Ｍｏｓｔ　ｓａｔｉｓｆａｃｔｏｒｙの字ですね」
あの激しい動きの腕を止めることが出来れば、攻撃のチャンスはより多く訪れるだろう。そのため、脚を狙うのは少々難しい空母隊が艦載機を使って肩に攻撃をしていくことに。
空母隊は本隊から多少離れていても攻撃のタイミングに支障をきたさないため、一時的な別行動となる。主砲を構えられたらすぐに避けられるように、腕の範囲からは外れる場所へ。
「一気に行きます！　出し惜しみは無しです！」
先程は両腕があったために払われたが、今は片腕に泥が寄っているため心配がない。また、頭を吹っ飛ばすことも出来ているので、全く効かないというわけでもない。
ならば、狙うのは片腕をどうにかするための肩。ここを削ってしまえば、まともに動かなくなるはず。あわよくば、腕そのものを失わせることも出来るかもしれない。
艦載機に意識を多少持っていくために、回避が疎かになりかねないが、そこは仲間達を信じている。こちらが危ないとなればすぐに伝えてくれるはず。それまでは、一転攻勢に出ようと残っている力を振り絞って艦載機を発艦した。
足下の敵を始末するために片腕を使っているため、艦載機に対しては無防備。その鈍重な動きから、いきなり腕を上げることも無いだろう。艦載機の動きはそれ以上に速いのだから、持ち上げてくるにしても間に合わせられない。

「っ！　大鳳さん！　砲撃来ます！」
だが、手早く動かせないのなら、艦載機をコントロールしている本体を狙うのは当然のこと。自我がなく本能で動いている黒幕とて、その定石は理解しているようで、艦載機が飛び立った時点で掬い上げた腕に主砲が展開された。
照準は大鳳へ。サラトガと古鷹も同じ場所にいるため、そこを狙われたら３人纏めて終わってしまう。だからといって、両腕の泥を片方に集約しているせいで、砲撃でそれを食い止めることも出来ない。故に、これは回避してもらうしか無い。
「撃つ前に脚を崩せば！」
砲撃が放たれるまでには流石に多少なり時間はある。そのため、体勢を崩せばより回避がしやすくなるだろう。
だが、黒幕の動きがさらに熟れてきたか、腕の持ち上げが思った以上に速い。照準をまともにつけなくとも、主砲のサイズがサイズだけに直撃に近い効果が得られる。ならば、精密に撃つよりは手早く撃つ方がこの戦場では的確。
勿論空母隊の３人も回避行動に移っているが、回避がギリギリ出来るか出来ないかレベル。掠めるのも致命傷になりかねない一撃は、それではまずい。
「止まりなさぁい！」
体勢を崩すために取った行動は、荒潮が繰り出した内火艇の突撃。陸に足が乗っているのだから、内火艇は十全の動きをすることが出来るだろう。
そこで咄嗟に繰り出したのが、その太い脚に内火艇をダイレクトにぶつけること。そこに乗っていた妖精さんは既に脱出済みであるため、何も心配せずに突っ込ませることが出来た。しかしそれだけではグラつきもしない。そのため、そこへさらに春雨と海風にアイコンタクト。
「ごめんなさい司令官、虎の子の内火艇、おしゃかにします……！」
それを受けた２人は、内火艇に向けて爆雷を投げ込んだ。爆雷の爆発が相当なモノなのは、先の陸上の爆破でわかっていること。そこに

内火艇の爆発まで引き起こすことで、数倍の火力を作り上げた。
主砲や魚雷などでは起こさない爆発が起きたことで、泥の巨人の足首が半分近く削がれることになり、自重を支えきれずに身体が傾く。しかし、既に再生が始まっているため、少し傾いた程度で終わってしまいそう。
しかも砲撃は止めるつもりはないらしく、傾いた体勢からでも大鳳を狙って砲撃を放ってしまった。その衝撃でさらに傾くものの、狙いがあらぬ方向に行くということは無かった。
「これは……まずいですね……っ」
とにかく砲撃の効果範囲が大きいのがまずい。来るとわかってから回避していても、そもそもが自分よりも大きな主砲を構えられているのだから、少しでも間に合わなければ掠めることになってしまう。
３人纏まって回避に徹しても、これぱっかりは回避しきれない。艦載機に意識が少しだけでも寄っていたために、タイミングがほんの少しだけ遅れていたのも運の尽き。
だが、それすらも超越するものが、ここにいないわけではない。その身を削ってでも、仲間を護るための盾となる者。
「諦めちゃいけませーン！」
空母隊の前に、金剛が立っていた。艤装を変形させて、盾を前面に展開しながら。
空母隊の前に来れるだけのスピードを発揮出来るのならば、自分が回避するために使えばよかったのに、金剛はそんなことが出来なかった。自分だけが無傷で生き残るより、傷を負ってでも仲間達を守りたい。その気持ちが、辿り着く者とされている今、これが最善であるという道として目の前に現れたのだ。
故に、金剛は迷わずその道を選ぶ。強大な砲撃の前に立ち、その盾を構える。これが最善であるとわかっているのだから。
「避けきれなかったところは、この私のＢｉｇ　ｓｈｉｅｌｄが抑え切りマース！　だから、全員無事に終わりまショウ！」
砲撃の直撃は回避によって免れている。しかし、ギリギリ掠める位置にはいた。それを、艦娘の装備する小さな盾でいなそうとしてい

た。
「金剛!?」
「この程度のＳｉｚｅで、この私のＳｈｉｅｌｄを破れるなんて思わないことネー！」
　言葉ではこうだが、重たすぎるその一撃をいなすだけでも全身全霊をかけていた。強固な盾もその一撃で一瞬でヒビが入り、金剛自身も踏ん張っていたことで腰や脚にダメージが入る。脚に関しては、もう折れてしまいかねないくらいの負荷がかかる。
　しかし、その程度で金剛が折れるわけがない。その名の通り、金剛石の如く固い意志を以て、その一撃を振り払う。
「Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｌｏｏｏｖｅ！」
　咆哮と同時に身を捻り、その強大な砲撃をついに弾き飛ばしてしまった。無傷とはいかず、金剛自身も吹き飛ばされることになってしまったが、空母隊は殆ど無傷。３人分のダメージを１人で引き受けたようなもの。
　だが金剛に悔いは無かった。自分はまだ死んではいない。傷を負っただけで全てが解決した。ならば良しと、金剛は笑顔を見せる。
「今デース！」
　砲撃の衝撃が巨人にも伝わるため、砲撃の連射は無いと言ってもいい。それに、この一撃を放ったことで、片腕だけだった巨人はさらにその腕を失い、再構築に時間が掛かっている。畳み掛けるなら今しかない。
「空母隊は腕の再構築を防ぎます！　そちらは脚を！」
　空母隊の空爆は失われている腕の付け根に向けて繰り出され、再構築をことごとく潰し続ける。これならば、足下の仲間達はもう邪魔されない。
　また、上半身への衝撃を受け続けることで、巨人の身体が少しだけフラつく、ここで足に畳み掛ければ、おそらく倒れる。
「了解です！　叢雲ちゃん！」
「任せなさい！　このクズに対しての怒りは、増しに増してるわよ！」
　叢雲は内火艇の爆発を修復している脚に狙いを定めた。泥が溢れ

て傷口を元に戻そうとしているのを見ていても、苛立ちがさらに増す。
「今まで以上に行けるわよ！　このっ、クズがぁ！」
そして、その槍に怒りを乗せて一気に巨大化。コロラドの白鯨に勝るとも劣らないサイズの太さとなり、その足首に食い込んだ。修復なんてさせないと、無理矢理捻じ込み貫く。
「白露ちゃん、魚雷を合わせて」
「あいよ！　叢雲の槍に？」
「ううん、足下でいい。体勢を崩すだけでいいから」
さらに吹雪と白露が魚雷を放つ。足首と足下が同時に抉られれば、それだけでもバランスは崩れるはず。
「全員合わせて！」
そして最後の衝撃。春雨、海風は爆雷を、山風、江風、涼風、荒潮は魚雷を、トドメと言わんばかりに投げ付けた。
槍が食い込むその傷口を拡張するかの如く爆発を起こし続ける。再生なんて間に合わせない。この片足が陸から外れれば、核からの供給は失われるのだから。

そして、
「折れたっ！」
足下の爆破で体勢を崩した結果、巨人は自重を耐えられなくなり足首の傷からバキリと折れる。核からの供給が一時的に失われた巨人の身体は、急激にグラつき始めた。

降り注ぐ泥

仲間達が力を合わせたことで、ついに泥の巨人の片足を折ることに成功した。陸にまだある地下施設からの供給が失われたことによって、その身体は急激にグラつき始める。

「完全に倒れるまで、絶対に抜いてやらないわよ！」

折れた足首には、未だに叢雲の槍が鎮座している。それを抜いたらこの状態からでも再生しかねないため、退かすに退かせない。しかし、足首が折れた巨人は自重もあってグラつきが激しくなってくる。腕を再生させないようにと空母隊が空襲を続けていたこともあり、今にも倒れるという段階。

このまま倒れられたら、戦場にいる者達は回避もままならない。泥まみれになるだけならまだしも、これだけの質量が真上から降ってくるとなると、それだけで質量がとんでもないことになっている。サイズ的にも、全員を巻き込むのは目に見えていた。

「春雨姉……行って……っ！」

ここで山風は、春雨の背中を押した。春雨には陸に向かってほしいと。

巨人との接続が切れたからと言っても、黒幕はまだ核に一切傷がついていない状態。攻撃の手段を何度も何度もいなし続けているに過ぎない。ここで巨人を斃したからと言っても、黒幕がそのままならば時間をかければまたここまでのことをやらかす。むしろ、これまで以上に強くなるだろう。

故に、ここで確実に終わらせる必要がある。それを成功させられる可能性が高いのは、間違いなく春雨だ。まだ侵蝕性の泥を持っていたとしても、春雨には通用しない。最も安全に、かつ確実に、この戦いを終わらせることが出来る。終わりに導く。

「今行かないと、もう行けないと、思うから」

「……うん、私にもそういう道が見えてる。私と一緒に向かえる仲間は……」

春雨の目には全員分の光の道が見えている。自分のための道は、山

風が背中を押したことで陸へと繋がっていた。
しかし、他の仲間達の最善の道は、陸には向かっていない。今から降り注ぐとんでもない質量の泥を避けるための行動を示唆されているのみ。
春雨と共に黒幕を斃しに向かえる仲間は、今はもういない。
「うん、わかってた。こうなるんじゃないかなって、思ってた」
「……春雨姉さん、隣にいたいですが……私にも陸に繋がる道がありません。春雨姉さんだけで行くのが最善なんでしょう」
海風も例外なく、春雨の隣に立つことは出来なかった。辿り着く者として、春雨の隣を最善の答えとしたかったのだが、それは許されなかった。この光の道を無視することは出来ない。新しい道を切り拓きたくとも、こればっかりは逆らえない。直感的にそう思った。
最善を掴み取らなければ黒幕には勝てない。余計なことをして、本当に勝てる道から逸れるのは得策ではない。
「だから、無事に戻ってくることを待ちます。ですから……ですから！」
山風と同じように、海風も春雨の背中を押す。嫌だとは言わない。離れないでだなんて言えない。ここで笑って送り出すのが侍る者の責務であると感じ、発作を起こすことなく春雨から離れる。
「この戦いを、終わらせてください！」
全てを終わらせるために、春雨に託す。絶望を乗り越えて依存をする海風には、この決断はかなりキツい。それでも、海風は春雨から一時的に離れることを選んだ。
春雨ならば全てを終わらせて戻ってくると確信している。導く者が、明るい未来へ導いてくれると信じている。
「春雨ぇ！　あたし達の分、全部持っていって！　お姉ちゃん、帰ってくるの待ってるからさぁ！」
「こちらはこちらでやらなくちゃいけないことがあるからね。あたいらに任せて、春雨姉は行ってきとくれよ！」
「私の怒りをアンタに託してやるから、ぶっ潰してきなさい！」
次から次へと思いを託される。その仲間からの思いが、春雨には一

番の力になる。導く者は、導かれる仲間から信頼されていなければ十全の力を発揮出来ないのだ。
　思いを託されるということは、絶大なる信頼を得ているのと同義。その期待に応えずに、何が辿り着く者か、何が導く者か。
「みんな無事でいてね。誰も欠けたらダメだからね。私、寂しさも溢れてるんだから」
　ニッと笑って、光の道を辿るために、身体も心も前を向く。陸へ、黒幕の核へと続く道は、これまでにない程に眩く輝いていた。この道を辿れば、必ず勝利へと辿り着くことが出来る。みんなを勝利に導くことが出来る。
「それじゃあ、後はよろしく！」
　それだけ言って、春雨は海面を蹴った。一気に陸へと向かい、倒れゆく巨人の足下の中でも触れられるくらいの位置へ。
「……春雨姉さん、必ず帰ってきてください。私達も、必ず生き残りますから」
　最後まで背中を見送りたかったが、そんなことをしている余裕など何処にもない。見上げれば、泥の巨人はもうかなり傾いていた。
　一度倒れると決まってしまえば、これまでの緩慢な動きは失われる。ただ落ちるだけなのだから、重力に逆らうことなくただただ膨大な質量で押し潰す。倒れる方向だけは定めたか、逃げられないように部隊全てを包み込むように落ちてきた。
　黒幕との最後の戦いは春雨に託したが、ここでの戦いはまだ終わっていない。
「こうなってくれれば、まだ対処は出来るよ。危ないことには変わりないけど」
　こんな状況でも、余裕を失っていないのが吹雪である。質量はあるものの、巨人という体裁をとっていた今までと違って、今はあくまでヒト型の泥である。カタチを整えておくような力は加わっておらず、破損したところで再生もしない。
　ならば、自分達だけが安全になれるように消滅させていけばいい。逃げ切れなくても、砲撃や魚雷などを駆使すれば泥を霧散させること

も出来る。これまでの経験から、強力な攻撃であれば泥そのものを霧散させられることは実証済み。
「金剛さん……は厳しいか。大鳳さん、古鷹さん、砲撃出来ますか！」
「問題ありません。空襲はもうする必要が無いでしょう」
「今なら大丈夫！　フルパワーで上に撃てってことだよね!?」
　戦艦主砲による砲撃ならば、ある程度の泥なら蹴散らすことが出来る。その上、大鳳と古鷹は深海棲艦化も相まって、その砲撃の威力は艦娘のそれ以上になっている。
　黒幕によって与えられた力を、黒幕にぶつける。これまでの生き方を否定されて、駒にされて、好き勝手使われた恨みもあるが、それ以上に仲間を守るためにその力を使えることに感謝した。
「多分、それだけじゃ足りない。だから……」
　徐に魚雷を手に持つ吹雪。自分のところの北上がやることなのだから、吹雪がやれない道理はない。
「全員、魚雷を上に投げて。泥を霧散させるよ」
　無茶苦茶な指示ではあるのだが、誰も否定はしない。光の道がそうなっているわけではないのだが、これまでの経験でそれが正しい選択であることは誰もが察することが出来た。
　戦艦主砲の砲撃と共に、それに匹敵するレベルのダメージを与えられるであろう魚雷を重ねれば、特大の爆発を発生させられる。逃げながらではあるが、それを襲いかかってくる真上に投げれば、それによって逃げ道はさらに増えるだろう。
「っしゃあ！　ぶン投げてやりゃあいいンだな!?」
「投げる場所はあたいが見つけてやっから、ガンガン投げてやれ！」
　真っ先に魚雷を展開して投げ出したのは江風と涼風。勿論涼風は、この状況でも周囲の警戒は忘れていない。泥の薄い場所を探してそこに投げれば、より効率よく泥を霧散させられるはずだ。それに、こんな時にでも泥人形辺りが現れてもおかしくないのだから、周辺警戒は絶対に必要。
「コンゴー、サラが曳航します。Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋａｙ？」
「Ｏｋａｙ．　ちょっと無理しすぎたヨー。でも、みんなが無事なら

Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍネ」
「もう、ムサシのような無茶をするんですから。では、少し我慢してくださいね」
　仲間の盾となった金剛は、サラトガが泥が降り注がない場所まで曳航。かなりの速度が必要になるため、金剛の身体をあまり気遣うことなく、トップスピードで撤退。
　金剛は砲撃どころか自走すら出来なくなってしまっていたが、それでも死に至るようなことはない。痛みがあるのなら、まだ生きていると実感出来る。
「……やはり出てきましたか。春雨さん、私から離れないでくださいね」
「は、はい」
「皆さん、こちらです！」
　しかし、案の定泥人形がその撤退を食い止めるために現れ始めた。泥人形は降り注ぐ泥に押し潰されても同化するだけで終わり。始末されてもダメージが無いのだから、出してこないわけがない。
　それをどうにかするため、そしてこの戦いの最大の被害者であろう別個体の春雨を守るため、鹿島も奮闘する。泥の巨人戦では別個体の春雨の側から離れずにその状況を見ているだけで終わっているが、こうなると全員に被害が発生する。
　逃げ道確保のために、鹿島は得意の鞭と主砲、さらには魚雷まで総動員して、自分や別個体の春雨どころか、全員分の撤退経路を切り開いていく。流石に全てを薙ぎ倒すことは出来ないが、必要最低限を的確に斃していくことで、真っ直ぐ安全な道が作り上げられた。
「いっけー！　ありったけ、ぶん投げるぞぉ！」
「白露の姉貴！　江風達に合わせてくれよぉ！」
「わかってらい！　お姉ちゃんはちゃんとみんなのこと見てっからね！」
　白露の魚雷投擲も始まり、戦場上空には激しい爆発が連続して発生するようになった。大鳳と古鷹の砲撃が鹿島の作った安全な道の上を綺麗にしていき、そこに投げ込まれた魚雷がさらに誘爆して降り注

ぐ泥を次々と霧散させていく。
「うへ、流石に白露姉だね。マジであたいらの魚雷にしっかり合わせてくるんでやんの」
「こっちも狙いは定めてっけど、姉貴すげぇなホントによぉ！」
流石は白露と言える程、その連携は完璧。江風と涼風の魚雷投擲にしっかりと合わせて、最高の効率になるように爆発させている。
統率力、計算高さ、豪快さ、搦め手、白露の中にある姉妹の要素を全て発揮していた。春雨細胞の活性化に加え、辿り着く者へと昇華した今の白露は、まさに４人分の力を全力で使えてしまう。
それでも、見えているのは上だけだ。退路を妨害してくる輩というのはどうしても現れるもの。鹿島が作り出した道を塞ぐため、泥人形はいくらでも現れる。
上に集中する者は、下は疎かになってしまう。だからこそ、仲間達がそれをカバーするのだ。
「ダメよぉ。道を塞いじゃあ」
荒潮は露払いに参加することで確実に安全な道にしていった。内火艇は失ってしまったものの、主砲は健在。確実に仕留める砲撃を何度も繰り返すことで、的確に泥人形を始末し、より安全にしていく。
だが、泥人形の数は激しさを増していく。黒幕の絶対に逃がさないという意地が透けて見えるようだった。ただ妨害するだけでなく砲撃や魚雷まで使い反撃してくる。
数の多さのせいで、荒潮にも直撃では無いにしろ砲撃が掠め始め、生傷が作られていった。荒潮だけでなく、他の者にも。
「激しいわねぇ。誰か手伝って～」
「……あたしも手伝う。道を開くなら、あたしも出来るから」
そこで山風が繰り出したのは戦車隊である。対地攻撃のための装備ではあるのだが、それには戦車、つまりは砲撃出来る武器が搭載されている。さらには大発動艇そのものだって質量兵器。泥人形くらいならば轢き潰すことだって出来る。
機敏性は艦娘に劣るものの、それ自体の防御力は艦娘よりも上。体当たりも立派な戦術だ。

そして、その戦車隊の搭載された大発動艇の上。そこには海風も乗っていたのだ。
「春雨姉さんの帰る道を邪魔させるわけないでしょう！　そこを、退きなさい！」
山風が操る大発動艇で敵陣に突っ込み、右腕を鎖と錨に変えて振り回し、泥人形をことごとく薙ぎ倒していく。
姉妹の連携はやはり完璧なもの。特に山風は、海風のしたいことを即座に察し、行きたい場所へと導いていった。
「あっははは、最高ね～！　私も内火艇が残ってたらああしたかったわ～！」
「……あんまり無茶はしないでほしい」
山風が言うのも無理は無かった。あのカタチで敵陣に突撃しているため、海風は敵の集中砲火に晒されることになる。盾を作り出すことが出来るにしても、どうしても生傷は出来てしまうのだ。
「来た……！　全部処理は出来なかったけど、大分減らせた！」
吹雪がほぼ全員の撤退を確認したものの、泥の落下を全て処理することは出来ない。だが、安全圏を作ることは出来た。傷は負うかもしれないが、これで命を落とすことはない。
「全員！　衝撃に備えて！」
巨人となっていた泥が全て海面にぶちまけられた。その時の衝撃は計り知れないものとなるが、奮闘によって最小限の被害に食い止められることになる。

「春雨姉さん……後は頼みました」
その泥の向こう側、陸にただ1人向かった春雨の無事を祈り、海風はここを切り抜けるために、さらに力を振り絞った。

負の感情の塊

仲間達の思いを背に、一人陸へと向かった春雨。降り注ぐ泥を潜り抜け、黒幕が潜む島へと上陸した。

「……一人で決着をつけることになるなんてね」

深海棲艦化したばかりの頃だったら、寂しさで発狂していただろう。二度目の溢れを経験した直後ならば、怒りでここまで心は落ち着いていなかっただろう。

これまでの経験から、春雨は単独行動を可能としていた。導く者となったことで、艦娘の頃のように安定している。壊れた心が自らの力で補完されて、何も変わらない春雨としてそこにいた。

「道は……こっちだね」

春雨に見えている光の道は、島の奥へと続いている。確実に地下施設までの道を見せてくれている。黒幕までの一本道。

今まではそれを木々で隠すようにしていたが、今やそれすらも出来ていなかった。島中に張り巡らされた泥を巨人として操り、それを供給源から破壊したことによって一時的にコントロール出来なくなっているのだ。

故に、地下施設までの道を邪魔するモノは何もない。泥人形すら出ず、しかし招き入れているわけでもない。春雨を遮ることが出来ないというだけ。

それほどまでに、黒幕はもう消耗している。ここまで追い詰めることが出来たと考えてもいい。

「まだ油断は出来ないけどね……」

独りごちて、奥へ奥へ。途中、木々に囲まれた場所を歩くことになるのだが、そこは背負う艤装を消して慎重に進む。確かにこれは隠れやすいなと思いつつも、獣道だけは出来ているあたり、ここにヒトがいたという形跡が僅かながら残っていることがわかる。

木々が動いたとしても、根本から動かすことは出来ないだろうし、その周辺の草花は踏み荒らされて道となる。例えばまだ侵蝕されていた時の龍驤などがこの道を通って島から出て、そこら中で暴れ回っ

ていたのだと考えれば、この先に何かがあると予想できる。
「……ここ、かな」
少し進んだところで、木々が少ない空間を見つける。春雨の直感がここだと告げていた。
しかし、入口と言えそうな場所は見えない。そこにあるのはただの地面。草花が生えているわけでもなく、ただそこには小さな空き地があるというイメージである。
「地下施設で、器を持っていたときでも潜伏出来た。泥を染み込ませることで、地下に施設を作ったって言ってたから……入口そのものが泥で出来てるんじゃないかな……」
空き地にしゃがみ込んで、見えている土に触れてみる。すると、明らかに土とは違う嫌な感覚がした。見せかけだけでこの下に何かがある。そう感じる程の何かが。
明確に嫌な顔をした春雨だったが、この下に黒幕がいるとわかったなら、潜入する以外の選択肢はない。待っていても黒幕が表に出てくることはなく、手をこまねいている間にも力を取り戻そうとするだろう。それこそ散らばった泥を回収するなりしそう。
「……それじゃあ、強引に入らせてもらうよ」
立ち上がると、徐に主砲を真下に構える。ここから放たれるのは、ただの砲撃では無い。春雨が力を込めた模擬弾。これまでにも状況を覆してきたマグマが込められた紅い弾丸である。
当たり前だが、この黒幕に対しての怒りも極限まで高まっているのだ。それを表に出していないだけ。導く者に覚醒したことで制御出来るようになっているに過ぎない。それ故に、『望む答えに辿り着く力』も健在である。使い放題というわけではないが、マグマが扱えるトリガーはとっくに引かれているのだ。
「こんな撃ち方するのは初めてだけど……っ」
そして、反動や衝撃などかんがえずに真下へと砲撃を放った。ドンと小気味良い音と共に足下を抉り、さらには弾丸からぶちまけられた春雨の力（マグマ）がその場の土を侵蝕していく。
瑞鳳や黒潮に寄生した忌雷を紅く染めていった時のように、足下が

徐々に紅く染まっていく。この一発で全てを染めることは出来ないかもしれないが、今やりたいのは染めることではなく、地下施設に潜入することだ。
「痺れを切らしてくれないかな」
反応がないため、もう一発。より深くにマグマが染み込むように、全く同じ位置に砲撃を放った。
その時の春雨の表情は、冷酷そのものだった。まるで怒りが溢れている時の無表情。黒幕に対して、余計な感情を持っていないことを表しているくらいに。
だからだろうか、二発目の砲撃が地面に食い込んだ瞬間に、春雨の足下が途端に歪み出す。泥によって作られたルート。侵蝕されているのなら一切苦ではない、むしろ快感すら感じるような出入り口なのだろうが、春雨には嫌悪感しか無かった。
別個体の春雨もこの通路を通る羽目になったのだろう。脱出する時もおそらくは地下から上がってこれる仕組み。1つの出入り口で泥の流れが変わるのだろうか。構造は穢らしいが、手段としてはそこそこ近代的。器にした者の記憶から読み取ったと考えるのが妥当。
「……気分が悪い通り道だね」
この泥には侵蝕性がなく、肌に付着していくような感覚もないのだが、とにかく嫌悪感が凄まじい。
それもそのはず、この泥は黒幕を構成する泥の中でも特に感情的な性質を含んでいる。春雨は望む答えに辿り着くためのマグマのお陰でどうにか出来ているが、他の者が同じように通過しようとしたら、まずこの感情の波に心を壊されかねない。
別個体の春雨もドロップ艦ながらギリギリ耐えられた、もしくは黒幕が意図的に耐えさせたのだろう。だから出てきた直後は疲労困憊だった。
――悪意――恐怖――憤怒――憎悪――絶望――
泥の通り道を進むと、頭に叩きつけられるように負の感情が流れ込む。春雨を引き摺り込んだ割には、ここで壊してやると言わんばかりに。

「頭が痛くなるくらいに干渉してくる……でも、この程度で私は壊れないよ。それに、押し潰そうとしてもそうはいかない」
そしてさらには圧力まで半端ではない。招き入れていない者が強引に入ったら、最悪押し潰されてゴールに辿り着くことが出来ずに肉塊となっていた。
感情の奔流で精神的に疲弊させて、泥による圧迫で物理的に潰す。ここも黒幕の加減次第。春雨に対しては全力の圧で挽き肉にするつもりでいるようである。
だが、春雨にはそれも通用しない。泥を否定するマグマを体表に溢れさせているため、圧は殆ど効いていないようなもの。
「これは……本当に私しか通れなかったね。光の道、間違ってなかった」
これが春雨にしか光の道が現れなかった理由と言っても過言ではない。黒幕の核が表に出てこようとしないのならば、決着をつけられるのは春雨しかいない。
おそらくこの通り道、『観測者』であっても通ることが出来ないのだろう。道を化かすことが出来る道化であっても、このような物理的な抵抗には無力。
それでも『観測者』ならば涼しい顔で通り抜けそうなのだが、『観測者』の特性が邪魔をする。泥の駆除は出来ても、黒幕に対する直接的な排除は中立に反してしまうようである。
そう、『観測者』は中立を保つため、命を奪うことが出来ないのだ。泥に侵蝕された者がいたとしても、その本人を始末するようなことは出来ない、故に道化を使っている。しかし、道化が通れない道の向こう側にいる者に対しては、基本的には話をすることしか出来ない。その相手が自我を失っているのだから、ここに来るのも無意味になる。
「そろそろ……かな」
泥の通り道を流されて少ししたところで、圧が弱まる。そろそろ大きめの部屋に出るのだろうと感じ、警戒をさらに強めた。
そして、スポンと抜けるような感覚と共に広い空間に出た。周囲は泥だらけであり、波打ち蠢く壁で敷き詰められている、見た目だけで

も嫌悪感が拭えないような空間。
だだっ広いというわけではないのだが、島の地下を空洞にしているだけあってそれなりに大きな場所。表すならば、鎮守府の工廠に近しいか。勿論出撃出来るような海に出られる場所などはない、ただ泥の床があるだけだが。
「よっ、と。これは……弊さないと出られないタイプかな」
春雨がこの空間に入り込んだ時点で、今まで通ってきた道は塞がれた。この中にいる侵蝕された者達は、黒幕の意思によって出たり入ったり出来るのだろう。黒幕が出したいと考えれば、再びあの道が開き、道自体が地上へと送り出す。
「……やっと見つけた。それが貴女の核……なんだ」
部屋の奥にこの空間の主であろう黒幕の核が鎮座していた。いや、中間棲姫の浮遊要塞のように、浮かんでいた。
話に聞いていた通り、それは春雨の頭くらいの大きさの、黒いボールのカタチをした何か。綺麗な真円を描いているものの、どこか歪にも見える。
――悪意――恐怖――憤怒――憎悪――絶望――
泥の通り道を進む際に叩きつけられた負の感情が、より鮮明に突きつけられる。空間全体が、黒幕の感情に包まれている。
自分で引き込んだのに、春雨という異物が入り込んだことに腹を立て、その怒りをより増していた。
自我を失っているが故に、自分本位が加速している。八つ当たり的な暴力と、棚に上げた怒り、そして、復讐心が暴走する。
「ここまで自分勝手に好き勝手やってきたのに、やり返されたら逆ギレして、それでまた……溢れてたんだ」
黒幕は春雨のように二度目の溢れを経験していた。むしろ、二度どころでは無かった。何度も何度も感情が溢れ、今のようになってしまっていた。
流れ込んでくる負の感情は、全て黒幕が溢れさせた感情だ。最初は復讐心だったが、そこからさらに溢れた。
艦娘を貶めてやろうとする『悪意』が、抵抗する艦娘への『恐怖』が、

うまくいかないことへの『憤怒』が、より力をつける者達への『憎悪』が、もうダメなのではないかという『絶望』が……その全てが黒幕から溢れた感情だ。

「二度目の溢れですら、私はめちゃくちゃになったのに、5回は溢れてる。大きかろうが小さかろうが、これだけ溢れたら心も壊れるよね。こうなってもおかしくないんだ。壊れて壊れて、壊れ尽くして、こんなことになったんだ」

その原因は全てが自分勝手。これがあの姉姫の中に入っていただなんて思えなかった。

一度目の溢れによって精神が歪んだのは間違いない。復讐心が溢れたことで、中間棲姫の心の致命的な部分が壊れただけ。深海棲艦でも屈指の頭脳派であった中間棲姫は、ここから堕落の道を歩んできた。

春雨の眼前の核が周囲の泥を取り込み、カタチを作っていく。そのカタチは、まさに泥人形となった中間棲姫の姿だった。しかし、春雨の知る姉姫とは姿形は同じかもしれないが、負の感情が溢れ出し、似ても似つかない存在。

自我を失い、本能でそのカタチを取っているとしたら、何とも皮肉である。捨てたのに、今は追い求めている。

それが、春雨の堪忍袋の緒を断ち切った。

「……貴女に言うべきことは、もう無い」

最後の領地

黒幕の核の前まで辿り着いた春雨だったが、その黒幕は最後の戦いを仕掛けるため、周囲の泥を取り込むことで、泥人形と化した。

そのカタチは、本来の黒幕のカタチである中間棲姫そのもの。春雨にとっては、あの姉姫と同じ姿となったのと同様である。

「……　貴女に言うべきことは、もう無い」

それが、春雨の堪忍袋の緒を断ち切った。自ら捨てた器を取り戻そうとしているのも気に入らなかったが、最後の最後に結局その姿になったことに、より一層怒りを感じた。

自我も無い状態でこの姿を取るということは、本能的に求めているということ。ならば何故捨てた。何度も何度も思った疑問は、ついに答えを得ることは出来なかった。

「……っ！」

先制攻撃は黒幕。核を封じ込めた泥人形の身体が完成した瞬間に、地面を蹴って春雨の眼前に迫る。そのスピードは島風を超えていた。春雨の脚部艤装再展開のスピードも当たり前のように超えている。

単純な脚力のみでこの速さを実現したということは、この黒幕の身体には島風のコピーが何体も含まれている。泥人形として持っているデータを複製し、それを何重にも重ね合わせて自分の身体にしているのだ。

これまでの記録を自身の力にしているという意味では、かなり正統派な戦い方ではある。小狡い手段を使うわけではなく、正々堂々と真正面から春雨にぶつかってきているのだから、今までの黒幕は何だったのかと思えてしまうほど。

そこからすぐさま繰り出してくるのは駆逐艦の主砲。射程が短い代わりに素早さを取ったこの一撃は、白露型の４人分を重ね合わせたかのような動き。

やはりこれまでに手に入れたデータを重ね合わせている。同じデータを何重にも出来れば、複数の個体のデータを一気に扱うことも出来る。

「喰らわない……っ」
白露型の動きは特に見慣れているのだから、春雨には回避は余裕あり。島風の速さまで重ねられているためにタイミングが本来よりも速くされているが、そこは直感と光の道を使って完全に回避した。
お返しと言わんばかりに黒幕の身体に砲撃を放つものの、それを黒幕は紙一重で避けた。核に当たっていないのだから、多少掠ったところでお構いなし。むしろ即座に泥が補充され、その度にデータが重ね合わせられている。
「っ!?」
次に黒幕が繰り出したのは刀。春雨の記憶には大鳳のイメージが強いが、黒幕のデータならば伊勢と日向の力のコピー。2人同時、いや、2人をさらに何重にも重ねた一撃は、片手で振るっていたとしてもとんでもなく重たい攻撃。
避けられないと感じた春雨は、受け止める方向で考えた。だが、そのままならば無理。故に、両腕を分厚い盾に変形させることで無理矢理食い止める。かなり重たい攻撃だったため、吹っ飛ばされる羽目になるのだが、体勢はなるべく崩さない。
「……っ!?」
そこに飛び込んできた光景に目を疑った。黒幕が次に繰り出したのは、知っている3枚の甲板が周囲に浮かび、それが縦に並んで春雨に狙いを定めていた。
施設に泥の雨が降り注ぎかけた時、姉姫が放った雨を晴らす一撃。艦載機による爆発を重ね、空間全体に激しい衝撃を放つ渾身の一撃。
それと全く同じ構え。真上ではなく真横に撃とうとしている。春雨に向けて。
「姉姫様の手段まで……っ」
こんな一撃をまともに喰らったらひとたまりもない。むしろ、こんな部屋で放とうだなんて気が狂っているとしか言いようがない。
放たれるのは泥で生成された艦載機だろう。それが大爆発を起こしたとしても、泥が撒き散らされるだけならば黒幕にはダメージにもならない。衝撃だって大したことはないのだろう。身体が吹き飛ん

だとしても、核が無傷ならすぐさま再生する。
しかし、春雨にはそうはいかない。衝撃を受けても厳しく、泥がばら撒かれてもそれそのものが強烈な弾丸となりかねない。
そして、黒幕は艦載機を装填して、即座に放ってきた。艦載機そのものが強力な弾丸のようになり、その直撃も質量兵器として春雨に襲い掛かる。
幸いにも盾を展開したままであるため、そのままガードは出来るのだが、先程の斬撃よりも重たい衝撃を受けたと思った瞬間、２つ目の艦載機が１つ目に衝突。そして、大爆発を起こした。
「っあああっ!?」
爆発自体も泥で出来ているため、爆炎が上がるわけではなかった。その代わりに強烈な衝撃波がそこを中心に発生して、春雨をさらに吹っ飛ばす。
このままいけば壁に激突してしまうだろう。それも避けた方がいいと、春雨はこの状況であっても直感的に判断。ある程度の衝撃は仕方ないと、まずはその脚をバネ状に変形させた。これならば壁に足をつけた時にショックをある程度吸収出来る。
だが、そう簡単にはいかないのがこの戦場。何故なら、空間そのものが黒幕なのだから。
「いや、これはダメだ！　だから、こう！」
直感的にこのままではまずいと感じた春雨。脚をバネ状にするだけでは足りない。そのため、足を盾に変形させた。
その瞬間、春雨が着地しようとした壁が一面刃へと姿を変えていた。
「っぶない！　そんなことだと思った！」
足を盾にしたことで、刃を踏んだところでダメージ無し。直感が無ければ、着地と同時に串刺しにされていた。
壁一面の泥の刃は、春雨の盾を貫くことは出来ない。厚さもそうだが、今の春雨の艤装は怒りによりマグマが浸透している。マグマは泥を否定する存在であるため、刃は通らない。
しかし、それは盾の形状にしているからだ。肌や服ならば、泥とい

う以前に刃であることで春雨に傷をつけることになる。過去に作り上げた防刃のスーツが今回も必要であると感じ、春雨はすぐさま対応。全身を覆い尽くすスーツを生成した。
「この……っ」
脚をバネ状にしているため、そのまま壁を蹴って黒幕に突撃をする春雨。その際に両腕を針状に変形させて、黒幕の核を直接狙いに行った。
砲撃よりも一点に集中させた攻撃を喰らわせることで、より核を破壊しやすいと考えた一撃。バネによって吹き飛ばされたスピードを殺すことなく反転しているため、その突撃も弾丸のようなスピード。
しかし、島風のスピードを複数重ね合わせているため、黒幕のスピードはそれをさらに超えていた。春雨の突撃を眼前に見抜いていたかのようにサラリと避ける。
部屋全体が黒幕自身なのだから、３６０度全方位から観察されているのは変わらない。さらには壁に触れたら黒幕に触れたようなもの。全てが黒幕の手のひらの上。
「不利なのはどうにもならないか……」
とんでもないスピードで突撃したが、着地は完璧。すぐに振り返って砲撃を試みるが、その時には黒幕はそこにおらず、代わりに、そこまで狭くはないが周囲が囲まれたこの空間で、艦載機が数機、春雨を取り囲んでいた。
大鳳や龍驤など空母を取り込んでいるし、そもそも陸上施設型なのだから、艦載機が使えないわけがない。しかし、黒幕自身が発艦したわけではなく、天井から産み落とされたのだからタチが悪い。
「っ」
回避を選択したが、突然脚を掴まれた感覚。今度は床から手が生え、春雨の脚を掴んでいた。
「させるわけが、ない！」
それには瞬時に反応。掴まれたものの、脚自体を消してしまえば問題なく、すぐさま再展開したことでその手を強引に踏みつけて天井まで跳ぶ。それと同時に艦載機が泥の爆撃を放ってきていたが、この選

択のおかげで全て回避出来ていた。
天井ですら触れるのは厳しいものの、そこは今までの経験を活かすのが春雨。腕を一時的に脚へと変えて逆立ち状態で着地。そのまま脚部再展開と同じ要領で天井から離れる。
やはりというべきか、天井に腕(脚)をつけた瞬間に刃が発生したが、防刃にプラスして瞬発力も加えたことで、被害なしで跳ぶことが出来た。着地も完璧にこなす。
「何処に行った……っ」
振り返った時に視線から消えていた黒幕の核を探すため、光の道を辿る。すると、まだ中間棲姫のカタチをした泥人形が、真逆の壁に立っており、そちらの壁からは古鷹が持つ尻尾――レ級の艤装が何本も生えていた。
ここからの一斉射で、室内を砲撃で埋め尽くそうとしているのは間違いない。自分はそこにいるから安全圏。むしろ、自分は自分の砲撃を喰らったところでダメージにすらならない。
「耐えてみせる!」
砲撃を直前で食い止めることは出来ない。黒幕からも離れてしまっているため、飛び込んだところで間に合わずに何本も生えた尻尾からの集中砲火に晒されるだけ。
ならば、その砲撃を全て耐える方がまだ道がある。春雨に見えている道も、それが確実であると出ていた。
両腕も両脚も盾に変形させ、それこそ再びジェーナスのように全身を覆う。また脚を掴まれるようなことが無いように、隙間なく埋め尽くした。これならば砲撃を喰らってもほぼ無傷で乗り越えることが出来るはずだ。
「っっっ!?」
ここから激しい砲撃が始まった。戦艦主砲による一斉射は、それこそ武蔵と大和が繰り出す一斉射に勝るとも劣らない威力で春雨に襲い掛かる。
生身で受けたらひとたまりもない攻撃だが、全身を覆い尽くす装甲を作り上げたことで、衝撃を受けるだけで済む。その衝撃が半端では

ないのだが。
「くぅぅっ！」
脚まで盾に変えているため、踏ん張ることは出来ない。そのまま吹き飛ばされて反対側の壁に打ち付けられ、それでも一斉射は全く止まることはなかった。
この空間は、黒幕の最後の領地。ここから出ない代わりに、ここでは無限の力を手に入れる。
「ま、まだ、まだやられない。やられない！」
撃ち込まれて打ち込まれて壁にめり込んでいくが、春雨はまだダメージ自体はない。
しかし、このままでは攻撃に出られない。黒幕の弾は尽きないため、このまま消耗するまで撃ち続けるだけで春雨は終わってしまう。
こんなことで諦めるわけがない。春雨に、諦めるという言葉はない。
仲間に背を押されてここにいるのだ。勝利に辿り着く者として、未来へ導く者として。
「負けない！　負けて、堪るかぁ！」
球体となった盾を再展開することで、壁から弾むように黒幕に飛び込む。砲撃を喰らいその勢いは落ちるものの、黒幕の至近距離まで近づくことは出来る。
しかし、攻撃の手段がない。ただ体当たりするだけでもいいかもしれないが、それでは致命傷は与えられない。そもそもスピードがありすぎてコレも簡単に避けられるだろう。
「まだ！」
尻尾の砲撃を掻い潜り、逆側の壁に。その時にはまた黒幕の姿は別の場所にあったが、春雨の狙いはそこではない。壁に生えた尻尾を一網打尽にするため、壁に着地した瞬間に球体の盾を解除。同時に脚を刃へと変え、生えている尻尾を軒並み斬り払った。
戦いは簡単には終わらない。黒幕の最後の領地を潰すため、春雨は

単身戦い続ける。
心は一切折れることはない。

天を穿つ

黒幕の領地内で猛攻を受けながらも、反撃のチャンスを探る春雨。しかし、部屋中が黒幕の武器となり、天井から艦載機が生み出されたり、壁に刃が生成されたりと、この空間そのものが襲いかかってくるため、そのチャンスを測るのが非常に難しい。

圧倒的な火力の前には両腕と両脚を盾にしなければ対応出来ない程ではあるのだが、その状態で動くことで何とか反撃は出来ている。逆に言えば、それ以外で反撃する手段が無くなってきているのも事実。

「この空間にいる限り、まともに核が狙えない……」

そもそも、黒幕の核を取り込んでいる泥人形の動きがとにかく速いのが問題である。島風の力を複数重ねて取り込んでいる上に、恐ろしい程の速さで動いて自ら壁に激突したとしても、それが自分自身なのだからダメージにすらならない。水に飛び込むようなものだ。

この空間の中にいる時点で、勝率は格段に減る。だからといって、この空間から抜け出すことも出来ない。自ら中に飛び込んだようなものではあるのだが、一度入ったら黒幕の意思が無ければ出られないような場所。故に、この状況からでも覆す手段を考えなくてはならない。

壁も床も天井も泥で出来ているため、傷をつけたところですぐに再生する。足場として成立しているのは、なんだかんだここが島の地下、地面をくり抜くように出来た空間だからなのはわかる。そこにうっすらと泥を敷いてあるために今のような状態になっているところまで。うっすらだからこそ、再生も速い。

「ここで出来そうなこと……」

黒幕の核を見据えながらも、状況を覆す手段を考える春雨。速さでは劣るために攻撃は当たらず、周囲全てを取り囲まれているために回避するのも厳しいという状況でも、焦らず冷静に思考を巡らせる。

黒幕の核は今のところ眼前。しかし攻撃が届かない。砲撃を放ったとしても、回避されるか甲板を展開してガードされるのみ。春雨の

砲撃も相当威力はあるのだが、元が駆逐艦であるがためにどうしても貫けない。それが泥に耐性があるマグマであっても、単純な硬さと厚さが乗り越えられない。

ならば接近戦となっても、未だに速さについていけない。近付けたと思った時には、もう別の場所に移動されている。それも、単に速いだけで。タネも仕掛けもないスピード勝負には、完全に敗北。

魚雷や爆雷で爆破をしたところで、泥ですぐさま修復される。四方八方に張り巡らされている泥には、爆発の衝撃を吸収する仕組みがあるらしい。つまり、空間を拡げることも出来ない。

「どうする……」

考える時間はある。黒幕がやってくるのは、春雨には比較的見慣れた行動ばかりだからだ。

結局のところ、黒幕が今出来る行動というのは、自分の力ではなく、これまでに取り込んだことがある者達のコピー。複数重ねることで本来の数倍の力を発揮しているものの、根幹は知っている行動である。

初見で無ければ対応が出来るのが春雨だ。壁いっぱいの尻尾なんて攻撃は流石に密度と圧で防御一辺倒にさせられているが、それ以外は確実に回避は出来ている。故に、黒幕も生半可な攻撃は繰り出してこない。

「っ」

黒幕自身は大鳳が扱う刀を握り、背後の壁からは古鷹の尻尾艤装、さらには床からはコロラドの扱うロブスターの鋏、横の壁からは白露が扱う錨と鎖、天井からは艦載機が産み落とされるという完全な同時攻撃。

自分自身に重ねるのではなく、空間全体を使って仲間達の攻撃を模倣してきた。まるで5人を同時に相手しているような、ある意味豪華な一斉攻撃。流石にここまでのことを演習でもやったことはない。

「全方位が敵っていうのは、本当に難しいなぁ！」

背後からの砲撃も、艦載機からの爆撃も、鋏と錨の攻撃も、全てが同じタイミングで春雨に直撃するような繰り出され方。回避しよう

としても、全てのルートを封じ込められている。こうされると再び全身を包み込む盾の展開以外に確実な防御が出来る手段が無くなる。
しかも、それを封じるために黒幕自身が刀を握って飛び込んできていた。そのスピードを活かして、瞬きする間にゼロ距離まで近付いてきている。四肢の変形はある程度速く変形できるものの、全身を覆う盾を展開しようとするなら、一瞬で展開することは不可能。盾は作れても、囲うことが出来ない。その隙を見計らって斬撃で始末しようと突っ込んでくる。
核が近付いてきているのだから返り討ちにしてやるという手段も取れるのだが、全攻撃が自分に向かってきているのだから、もしここで黒幕の核を破壊出来たとしても、残りの攻撃を全て喰らって自分も死ぬことになるだろう。しかも、核が絶対に破壊出来るかどうかもわからない。春雨の攻撃が当たる直前に避ける可能性すらある。
「させるかぁ！」
なるべく速く変形させられるモノでこの攻撃全てを回避しようとした。
真正面からの斬撃は、右腕を刀に変形させて強引に打ち払う。後ろからの砲撃は、左腕を盾にして無理矢理受け止めた。床からの伸びるロブスターの鋏と、横から向かってくる錨と鎖は、両脚を再展開することでかなり強引に蹴り飛ばすことに成功。
残す艦載機からの爆撃だけは、黒幕からの斬撃を打ち払った勢いをそのまま使って着弾点から移動して、紙一重で回避した。
タイミングはかなりシビア。吹雪ですら艤装の再展開で敵の砲撃やら何やらを弾こうだなんてそうそう思わない。しかし、春雨はこの窮地でやってのけた。道を切り開くための手段として、迷いなくそれを選択した。
特に右腕で刀同士をぶつけ合うだなんて、盾を使えばいいのに直感的に出たのがコレだった。盾ではなく刀だったために、その一撃の衝撃は点に凝縮され、黒幕の握る泥製の刀は軽い音と共に見事に折れていた。これが盾なら、単に斬撃の勢いをそのまま受けることになり、他の攻撃を弾くためのタイミングがズレていただろう。

「考えろ、考えろ、今の私に何が出来る、私なら何をするべきだ」
今は弾けたかもしれないが、次はないかもしれない。何せ、今この空間は黒幕の体内みたいなもの。今の動きですらモニタリングされて、乗り越えられる可能性は充分にある。
この状況を突破するには、やはりこの空間を破壊するしかない。しかし、春雨の持つ武器では、空間はおろか、壁に傷を付けることも出来やしない。ならば何が出来るか。
「……空間を、パンクさせる……？」
そこで思い当たったのは、空間そのものを破裂させること。この空間を何かで敷き詰めれば、まるで風船が割れるかのようにこの空間そのものが崩壊する。
「でも、どうすれば……私が膨れ上がるなんて出来ないし……」
当然だが、この空間を埋め尽くすなんてことは出来るわけがない。春雨は艦娘としても比較的小柄な方ではある。艤装をどれだけ展開したとしても限度があるだろう。
例えば、この空間にコロラドの白鯨や、リシュリューの巨大な尻尾のような艤装を展開出来たとして、それでもまだ足りない。全部重ね合わせても天井に届くかどうか。空間を満たすまでには確実に至らない。
「……そうか、天井、天井だけなら……！」
この空間は島の地中に作られている地下施設。下は考えるまでもなく、横も海中に繋がるためぶち抜くのは厳しい。海水が入り込んできたら、春雨も無事では済まない。
ならば天井だけでもぶち抜けないか。上ならば、崩落はするかもしれないが海水が流れ込んでくるようなことはない。その上で地上への道を開き、この密閉空間も解除出来る。一方的な戦いからは脱却出来る。
「どうやって……ううん、私は知ってる。こういう時、大きな壁を打ち貫くための武器を知ってる。長く、太く、強い、このための武器……！」
全部を壊すのは無理でも、一点突破するのなら適切な武器がある。

今までに何度も見てきた。ここに辿り着くまでにも、春雨を道を切り開くためにその怒りを乗せてくれた一撃を何度も見せてくれた。
「叢雲ちゃん、その力、貸して……！」
そう、あの怒りによってサイズを変える槍。あれならば、この空間の天井を突き破ることも出来るはず。床に槍の端を置きながら真上に向けて拡張していけば、つっかえ棒のように空間を押し広げようとして、そのまま天井を破壊する。
そのためには、春雨が出来る限りの全力で槍を展開し、そこに力を注ぎ込むことで巨大化をさせなくてはならない。槍を展開するだけならすぐに出来るだろうが、その後が出来るかはわからない。
「……っ」
まずは槍を展開。その間も黒幕からの攻撃は止まらない。それを回避しながら、都合がよさそうな場所を探す。
猛攻は無理矢理でも回避出来るが、天井を打ち貫くためにはそこに一度立ち止まらなくてはならない。その間は嫌でも集中放火を喰らうことになってしまう。
「真ん中が一番薄い……！」
この部屋の中でも、天井が最も地上に近い位置を確認出来た。空間のど真ん中。そこに光の点を確認出来た。そこを穿てと道は示している。
「無防備にはならない！」
空間の中央まで移動したことで黒幕からの猛攻も酷くなる。全ての壁に主砲が展開され、しかも、足下からも天井からも主砲が生えてきていた。
それだけの主砲から一斉に砲撃を放ってくる。前や後ろ、上も下もと撃たれてしまうと、どれかには確実に当たってしまう。
故に、やるべきことは簡単だった。全砲撃から自身を守るならば、全方位に盾を張るしかないだろう。ならば、
「私自身が槍となればいい！」
まずは自身を囲む盾を展開。ジェーナスのような球体の盾の中心に自身を置く。コレならばあらゆる砲撃からも自分を守ることが出

来るだろう。壁に叩きつけられながらも身を守ることが出来ているのは実証済み。
　しかしこのままでは場所を移動させられてしまう。そのため、即座に自身を中心として槍を展開。天井と床に先端を突き刺し、これで空間の中心に自分を固定する。
「みんな、みんな、力を、貸してぇ！」
　そして、春雨が全力を込めてつっかえ棒と化した槍を拡張、巨大化していく。ただ自分の力だけなら突っかかっておしまいだろう。だが、今の春雨は力を注ぎ込むことでミシリミシリと天井を押し上げていく。槍の先端は天井に突き刺さり、泥による修復が出来ないくらいに深く穿つ。
　当たり前だが天井は重たい。しかし、床を破壊するよりは軽い。全ての力を注ぎ込み、どうにかしてでも破壊する。
「もっと！　もっと！　もっと！」
　この間も撃たれ続けている。盾がガンガンと激しい音を立てる。槍にも当たり、衝撃が春雨に伝わる。だが、力を込めることをやめるわけにはいかなかった。
「もうこれで力なんていらない！　これさえ終われば、導く者じゃなくなっても構わない！　だから！　だから！」
　春雨の思いを込めた絶叫が、槍に伝わる。その瞬間、天井にピシリとヒビが入った。それを泥が修復しようと群がるが、春雨はこの機を逃さない。
「みんなのために！　全部出すから！　だから、壊れてぇぇ！」
　一度入ったヒビは、修復なんて出来ずに拡がる一方。そこに春雨の力が激しく加わるのだから、より崩壊を助長する。
　春雨の放つマグマが噴き出すように、春雨の思いを乗せた槍が天を穿ち、貫いた。

限界を超えて

春雨の思いを乗せた巨大な槍は、黒幕の領地である地下空間を突き破り、島のど真ん中に大穴を空ける。その勢いは火山が噴火するかのように激しく、爆発するかのような轟音が響き渡る。

それを外から見ていた仲間達は、春雨がとんでもないことをやったのだとすぐにわかった。泥の雨を避けるために島から少し離れていたため、島の中央で泥や土を巻き上げた爆発が発生したのもほんの少しだが見ることが出来た。空母隊に至っては、念のためと飛ばしていた艦載機がそれをしっかり目に収めている。

「紅い……槍……っ」

それに真っ先に気付いたのは大鳳。艦載機の目から見ていたそれは、まさに紅い槍。春雨細胞を治療に使ったことで軽く紅く染まっている叢雲のそれとは雲泥の差と言えるほどに真紅に染まったそれは、天を穿つ程の勢いで島の中央に聳え立つ。

「槍って……アイツ、私の技をパクりやがったのね」

大鳳の呟きをしっかり聞いていた叢雲だったが、その表情は別に怒りが溢れているわけではない。自分の専売特許を持っていかれたようにも思えたが、春雨の窮地を救ったのが自分の技術であるという事実は悪い気分では無かった。

ピンチの時に自分の槍を思い出したということは、それだけ印象に残っているということ。怒りの後輩がそれを繰り出したのならば、怒りの先輩としては気分が悪いわけではない。

「後から礼でも言ってもらおうかしらね」

フンと小さく笑みを浮かべながら、こうなったら自分達も戦いに参加出来るかもしれないと息を整える。

他の者も同様。泥を回避することや泥人形を処理することに体力を持っていかれてはいたものの、春雨の奮闘がわかったことで、ここで疲れてなんていられないと奮起する。

「今なら行けるかもしれない。春雨姉さんと共に戦えるかもしれない」

そう言いながら海風は光の道を探す。しかし、春雨から離れてそれなりに時間が経つため、辿り着く者としての力はもう薄れてしまっていた。あくまでも導く者の視界に入ることで一時的な変質をしたに過ぎない。春雨の近くならばしばらくは維持出来ていただろうが、泥の雨を回避したところで、その効果は尽きていた。
「空母の皆さん、春雨姉さんまでの道はありますか！」
「……なんとも言えないですね。道らしいモノは見えるけど、泥の被害があるかどうかは判別出来ない」
光の道が見えないのならば、空からの目で春雨を手助け出来る道がないかを探してもらう。実際、島の中央までは獣道のようなラインが何本か走っているのだが、そこに本当に足を踏み入れていいのかは、見ただけではわからない。
それこそど真ん中を穿ったとしても、島にはまだまだ泥が張り巡らされており、身体のどこかが触れた瞬間に染み込んだ泥に襲われるなんてことすらあり得なくはないのだ。この期に及んで侵蝕なんて喰らいたくもないため、慎重に動かなくてはならない。
「いや、大分小さなっとる。泥の感覚、めっちゃ少ないで」
ここで龍驤が一切緩めていなかった解析に1つの成果を出した。もう残っていないものの、春雨の力が残っている時にその力を有効活用しようと解析に全力を傾けていた。
そのおかげで、今の黒幕の泥の構成までもがある程度把握出来た状態にまで来ることが出来た。春雨に導かれるように、トントンと解析が上手く行ったのは、むしろ恐ろしさすら感じた程だ。
結果、今の島の状況も龍驤だけには手に取るようにわかるところまで来た。1人でも理解していれば、この先には行ける。RJシステムの本領発揮である。
「島の中心、春雨がぶち抜いたんやな。それで黒幕の地下施設が剥き出しになりおった。そこは泥の感覚が相当濃いけど、それ以外は大分薄いで。巨人に大半を持っていかれとるし、今も核(自分)に集めとるんやろ」
「かも……しれないね。春雨姉とぶつかるために……力をかなり使っ

てるのかも……？」
「……いや、これはもしかして……乾燥しとるんか」
地下空間では無尽蔵に使える泥も、天井が失われたら途端に弱体化していた。これが春雨が掴み取った勝利への道の1つ。
他の泥はまだしも、黒幕本体の泥――特に核は、太陽光に弱いのだ。
この島に拠点を構え、外に出ることなく心を壊し続けた結果、端末などの泥には殆ど影響はなくとも、黒幕自身には影響がある。長い間引きこもりに徹していたことがここに影響を与えていた。
海水を漂っているのならまだしも、陸の上を陣取っている状態で日の光を浴びれば、泥というのは乾くのだから。陸の泥も、海に面しているのだから泥としての体裁をとっていられたが、ただ陸上にポツンと立つ泥には、水分が供給されない。地下水を使って潤いを保っているだろうが、それは日に当たっていない時に限る。
「薄いんなら、もうウチがカウンター出来る！　畳み掛けるなら今や！　山風、悪いんやけど」
「大丈夫……行ける。あたしも、春雨姉の力になりたいから。海風姉も、行きたがってる。だから――」
キッと核があるであろう方向を睨み付ける山風。任せると言ったものの、並び立てるのならば共に戦いたい。黒幕に対する怒りは、ここにいる全員が持っているのだから。
「行こう……みんなで、春雨姉と一緒に……！」
道は拓かれた。やるならば、今しか無い。

自らを槍として空間を穿った春雨だが、それによってかなりの力を使ってしまっていた。全て出し尽くすという気持ちで際限なく注ぎ込んだようなもの。本来ならば艤装をここまで巨大化させることなんて出来ない。
春雨を奮い立たせていたのは、この戦いを終わらせるという強い思い。しかし、その分激しく消耗してしまっていた。それもそうだろう。本来ならば戦艦の主砲であっても破壊出来ないような地下空間

の天井、下手をしたら槍の第一人者である叢雲ですら貫けない分厚さの岩盤を、春雨ただ一人の力で破壊してしまったのだから。
「……まだ、終わってない……」
今のままでは自分で展開した盾のせいで状況が掴めない。槍と化したことで空間の床からかなり離れた場所にまで上ってきていることはわかるのだが、それがどうなっているのかわからない。
だが、今からどうすればいいのかは直感的に理解した。このまま艤装を四肢に戻したら、力尽きてそのまま落ちて、黒幕の真正面に力無く叩きつけられる。今の状態で黒幕の前に倒れようものなら、そのまま集中砲火を喰らう。最悪な場合、代弁者として取り込まれる可能性すらある。それくらい、春雨は自分を出し尽くしてしまっていた。
故に、まずは地上に着地する。あの空間に下りることはまずやってはいけない。
「……っ」
槍の柄を再展開することによって、天井が抜けた黒幕の領地から跳び上がり、それと同時に槍そのものを消す。すると、燦々と輝く日の光を浴びることになる。
あの泥で出来た空間から抜け出せたと実感し、しかし下を見ればまだあの泥が残っていることに苛立ちも覚えた。
その空間の中心に、中間棲姫の姿を模った泥人形が立っている。しかし、天井が失われたことで無理矢理外に出され、内部の泥が日に当たって急速に乾燥していっていた。
核を取り込んでいる泥人形は、日光に当たるわけにはいかないとまだ崩れきっていない天井の陰に隠れる。その状態で床一面に張り巡らされた泥からは主砲が展開され、春雨に向けて一斉射を始めた。
「そんなの受けない！」
脚を盾に変形させてそれをガード。重かったものの、衝撃のおかげで少し飛ばされて陸に下りることが出来た。しかし、体力がかなり厳しかったか、着地に失敗してゴロゴロと転がる羽目に。
「っは、はぁっ、はぁ……キツイけど、まだ、まだやれる……！」
脚の盾を元に戻すとともにその場に立ち上がり、自分が作り上げた

大穴の中を睨み付ける。しかし、その穴から一斉に膨大な数の艦載機が溢れ出てきた。大穴となった地下空間の天蓋としつつ、春雨を一気呵成に攻め立てようという算段だ。

日光に照らされていてもここまで出来るのは、黒幕が未だに膨大な力を持ったままという証拠。しかし、これほどの力を一気に使えば、黒幕もタダでは済まないだろう。故に、穴の中で陰に隠れているのだから。

消耗している状態でここまでの艦載機に襲われてしまうと、いくら春雨でもかなり厳しい。すぐさま対空砲を展開するものの、全てを撃ち墜とすことは出来ない。

「この量は、厳しい……っ」

1機2機なら気にすることはないのだが、文字通り桁が違うために圧倒されてしまう。消耗さえしていなければ春雨だけでもこの量は捌けるかもしれないが、今は体力が残されていない。

「まずい……っ」

何機か墜としたところで、突然ガクリと膝から力が抜けてしまった。四肢としている艤装にまともに力が回らなくなってきている。対空砲火の精度も落ちつつある。

如何に導く者といえど、春雨は1人の深海棲艦。体力だって無限ではなく、使える力にも限界がある。

仲間の思いを背にしていても、だからといってそれが無限の力になるのかと言われればそうではない。対する黒幕は、泥さえあれば無限。今でこそ乾燥という最後の弱点をつかれているものの、それでもまだ余力があるようにすら思える。

このままでは押し込まれる。しかし、春雨はこんな状況でも絶対に諦めない。振り絞り、振り絞り、最後の最後まで争う。仲間を勝利に、未来に導くため。

それが、更なる奇跡を呼び起こす。

「えっ……」

春雨の目の前にあった膨大な数の艦載機が、次から次へと撃墜されていく。その勢いは半端ではなく、自分1人では到底出来ない速さ。

しかも、1つの爆発を他の艦載機に誘爆させて、あっという間に撃滅した。
「実はさ、私は防空の方が得意なんだよね。だから、こういう場では任せてくれていいよ」
「マジかよ……逆に何が苦手なンだよアンタ」
「武蔵さんに反省させることかな？」
その対空砲火を繰り出したのは吹雪。その隣で同じように撃つ江風が唖然としているものの、不敵な笑みを浮かべながら殲滅を続ける。
「この穴の中や。黒幕の匂いがぷんぷんするで」
「……見えたよ。姉姫さんの泥人形……」
「タチが悪いぜまったく」
山風と涼風が穴を覗く。黒幕の姿をその目にして、苛立ちを隠さずに睨みつけた。
「春雨！」
「春雨姉さん！」
そして、白露と海風が春雨のそばへと駆け寄った。
「姉さん……海風……」
「よく頑張った！　春雨のおかげで、あたし達もここまで来れたよ！」
「春雨姉さんの力、見せていただきました。春雨姉さんでなければここまで出来なかったでしょう。ここからは……ここからは、私達も戦いますから！」

姉妹達が目に入ったことで、春雨の奥底からさらに力が湧いてくる。
やはり導く者は、導かれる者がいなければ真の力が発揮出来ない。

覚悟

単独で戦っていた春雨が地下空間を破壊したことにより、仲間達が島まで増援としてやってくることが出来た。春雨で無ければ戦えない戦場なんて存在しない。もうここからは1人では無い。

「うん、まだまだやれるね。防空巡棲姫にはどうしても負けちゃうけど」

「いやいやいや、比べる対象がおかしいだろ」

大穴から溢れるように発生した黒幕の艦載機群は、吹雪と江風が一網打尽にしていった。特に吹雪は涼しい顔で次々と誘爆を巻き起こし、体力も使わずにとんでもないスピードで殲滅していく。これには江風も唖然としていた。

穴の陰に隠れている黒幕も、この勢いで穴を塞ぐ天蓋が剥がされていくとは思っていなかっただろう。中間棲姫を模した泥人形がピクリとも動かなくなっていた。

「アレを狙えばいいんだね……」

「上からだなんて卑怯くせぇけど、今までさんざんぱやってきたんだ。恨みっこ無しだぜぇ！」

そんな泥人形を、山風と涼風が狙う。主砲だけでは足りないと言わんばかりに、穴に向かって魚雷を投げ込んだ。

陸上で魚雷という普通ならばあり得ない攻撃ではあるのだが、核を破壊するためなのだからそれくらいはする。穴の中にあるものを全て破壊するかの如く、一切の容赦も躊躇もなく叩き込んだ。

しかし、黒幕も黙ってそれを受けるわけがない。魚雷であろうが上から来るものは全て対空砲火で撃ち墜とす。

床一面に展開された両用砲が次々と放たれ、投げ込まれる魚雷を破壊しながら山風と涼風に反撃を仕掛ける。日光に照らされながらも、乾きつつある泥を巧みに操りながら手段を選択するのは、本能的にもこれ以上負けたくないという気持ちの表れ。

「退きなさい！　私がぶち込んでやる！」

対空砲火のせいで攻撃が届かなくなったところを見計らい、次は叢

雲が槍を穴へと向けた。
「これが本家本元よ！　喰らえぇ！」
　これまでの怒りと憎しみ、恨みを込めた槍は、急速に太く、長く、大きくなっていく。それこそ、地下空間をぶち破った春雨の槍に勝るとも劣らないサイズにまで拡張され、泥人形に向かって突き出された。穴を埋め尽くすとまでは行かずとも、簡単には避けられないサイズが猛烈な速度で地下空間を上から穿つ。
　しかし、今の黒幕は弱体化が続いているとはいえ、自身の持つあらゆるデータを自分に重ね合わせて全てのスペックを得ている。春雨が苦しめられた、複数の島風の力を用いて瞬時にその一撃を避ける。これで再びその姿を陰に隠していた。
「避けるとは思っていたわよ。でもね、アンタに効くのは直撃だけじゃないわよね？」
　槍の一撃は確かに当たらなかった。だが、叢雲の一撃は確実に地下空間を崩壊させる一撃となった。
　春雨の突き破った天井は空間の一部だったが、叢雲の追撃により残っていた天井の一部が瓦礫と化していく。つまり、地下空間に差し込む日光の量は確実に増えていった。
　無論、叢雲もこの一撃の前に春雨に聞いている。直感的にこの弱点には気付いていたから。
「流石叢雲ちゃんだ……私の二番煎じよりも確実に壊してくれるね」
　消耗が激しいとはいえ、まだ戦う気持ちは薄れていない春雨が、海風の肩を借りて穴の付近へ。
「ったり前よ。専売特許とは言わないけど、付け焼き刃の槍と私の槍は別モノなんだもの。それで、この穴を拡げればいいのよね？」
「うん、ガンガンお願い。白露姉さん、海風、２人も」
「海風は春雨に肩貸してやっておきなよ。ひとまずあたしがやっておくからさ」
　春雨からの指示を受け、白露も地下空間を日光で満たすために、穴の拡張に専念する。手っ取り早いのはやはり魚雷か爆雷だが、投擲するなら爆雷の方がお手軽であるため、容赦なく爆雷を投擲した。

爆雷が爆発するたびに瓦礫がバラバラと穴の奥へと落ちていき、黒幕が隠れる場所が次々と失われていく。核が瓦礫に潰されても致命傷になるかはわからないが、攻撃を止めるわけにはいかない。何故なら、黒幕はその瓦礫をしっかりと回避していたから。

そうしている間も、当然黒幕は反撃してきてはいるのだが、瓦礫が床の泥も押し潰していくため、攻撃の手段そのものが少なくなっていく。

しかし、瓦礫自体にも泥が染み渡るために、攻撃が出来ないわけではない。そこが液状である利点。核は安全圏に退避し、それ以外の泥が徹底的に攻撃する。黒幕の陰湿なやり方はこの状況でも変わらない。

「もっと更地にしましょうか」

「はい、全力で」

そこへ傾れ込むように飛んでくる味方の艦載機。黒幕の艦載機が吹雪達に一掃されたところを見計らって、大鳳と古鷹が艦載機を発艦し、その全てを穴の上空へと待機させていた。そこからやることなんて誰でも想像がつく。爆撃だ。

「少し離れて。一網打尽にします」

大鳳が合図をすると、古鷹も小さく頷き、艦載機群が一斉に爆撃を始める。天井がいくら分厚くても、爆雷と爆撃が纏めて直撃すれば一気に破壊されていった。効率もよく、地盤にヒビが入り、足下がどんどんと崩れていくため、島に集結した仲間達は少しだけ退避した。

隠れる場所が無くなるまで爆撃を続けることで、天井と呼べる部分は全て失われる。地下空洞は改めて、島に出来た大穴というカタチにされた。見た目としては、大きくボウル状に抉られた盆地。

さらには地下空洞の底に溜まった瓦礫も爆撃により粉砕され、黒幕の泥が隠れる場所はおろか、泥が染み渡るような場所も失わせる。こうなってしまえば、黒幕はまな板の上の鯉となる。

「もう隠れる場所はありませんよ」

これによって、黒幕の核が含まれた泥人形――中間棲姫の泥人形は、ここにいる全員の前に姿を現すことになる。もう姿を隠すことな

んて絶対に出来ない。
直射日光にあたり、泥人形の体表が少しずつ乾燥してきているのも確認出来た。そのせいか、黒幕の動き自体が鈍くなっている。
「もういいわよね」
苛立ちを隠す気もない叢雲が、黒幕を睨みつけながら呟く。これまで、深海棲艦化してから溜めに溜め込んだ怒りを、ついに爆発させる時がきたのだ。もう抑えられないと言わんばかりに、槍を持つ手が震えている。
これまで怒りを晴らす機会は幾度とあったが、それは毎度この黒幕に使われていただけの駒だったため、叢雲はここまでずっと我慢していた。自分を殺した相手――白露にも古鷹にも、悪態はつくが攻撃まではしていない。したくてもしていない。
それがようやく、ついに晴らすことが出来るのだ。怒りと共に歓喜もあった。震えはその複雑な感情から起きている。
「いいよ、うん、やっちゃって」
対する春雨がそれを許可する。別に春雨がここのリーダーというわけではないのだが、誰か1人が許可を出すことで、叢雲のリミッターは外れることになる。
「もう止まらないわよ。ここで確実に始末する！」
それが一方的な虐殺になるかどうかなんて関係ない。これまで溜めに溜めた怒りを全て解き放つため、倫理的なことも考慮せず、残酷に残虐に黒幕を始末する。
まるで足下の蟻を踏み潰すかのように、これまでにないサイズにまで巨大化した槍を黒幕に対して打ち込む。それはさながら、穴の中へ隕石が落ちるような勢い。
今までなら回避することは出来たかもしれないが、この怒りはそれどころではない。動きが鈍くなったところに、ほとんどこの穴を埋め尽くす程の太さに達した槍が落ちてきているために、どうにもならないレベルの攻撃となった。
そして、黒幕の泥人形もろとも、叢雲の槍は穴の中にあるもの全てを押し潰した。

「……終わった……？」
穴の中はまだ見えない。叢雲が念入りに殺すとして、グリグリと槍を捻りながら穴の底を磨り潰す。それでも怒りはまだ晴れておらず、残虐とも取れる行為を繰り返すのだが、これが終われば叢雲の大きな怒りは失われるため、誰もそれに対して苦言を呈さない。
「春雨姉さん、何か……感じますか……？」
肩を貸している海風が心配そうに春雨の顔を見る。その春雨は、叢雲の槍の下をじっと見つめていた。それは、本当に終わったかを疑問に思っているかのような表情。
海風も春雨のそれを見たことで、若干不安になる。アレだけの攻撃を受けているのに、黒幕がまだ生きているようには思えない。しかし、春雨がそれを信じていないのならば、まだ警戒するに越したことはない。
「嫌な予感がする……叢雲ちゃんの槍をあそこまで受けたんだから、間違いなく致命傷のはず。核だって傷ついてないわけがない。でも……なんか、なんか嫌な予感がするんだ」
「春雨姉さんがそう言うのでしたら、間違いないでしょう。でも、核が傷ついたら流石に生きてはいないと思うのですが……」
「わからないよ。だって、核が傷ついたところで即死じゃないかもしれないんだから」
そう春雨が言った瞬間だった。巨大化した叢雲の槍が突然弾き飛ばされた。
「なっ!?」
一番驚いたのはやはり叢雲。これだけ大きく、太く、重い一撃を喰らっておいて、まだ反撃が出来るだなんて信じられない。しかも、弾き飛ばすほどの余力がまだ残っているとも思えない。
そこにいたのは、最期の溢れを起こしていた黒幕。その核にはヒビが入っていたが、まだ死んでいない。この命の最後の灯火を、ここにいる者達を皆殺しにするために使おうとした最期の覚醒。

黒幕が最後に溢れさせたのは、皮肉にも『覚悟』だった。死んでもいいから自分の邪魔をする者を始末する。動機はあまりにも不純だが、この期に及んで自らの力で終わらせるという覚悟をした。
「最後の最後にやってくれる……っ」
ヒビの入った核を中心に、最後の泥が纏わり付き、新たな姿をとった。その姿は、もう泥人形とは言えない程に綺麗な姿の深海棲艦。それこそ姉姫がそこにいるかのような見た目。
しかし、やはりというか、姿形が中間棲姫であってもまるで違う。姉姫のような純白のドレスではなく、泥で出来た混沌のレオタード姿。しかもその上から姉姫も着ていたようなドレスまで着込んだ、過去の自分を再現しつつ、さらに死を覚悟した者の姿。
「もうアレは保たない。でも、覚悟したヒトってのは、一番怖い」
吹雪が舌打ちする。防空巡棲姫ですら命を燃やそうとした瞬間に危険な匂いがしたわけだが、この黒幕はそれ以上に危ない。
保たないと言っているのは、見た目でもわかる。腕や脚、顔にすら、小さくヒビが見えるほど。核のヒビが全身に見えているかのようだった。
「アレを斃せば終わり」
海風の手を小さく叩き、自分の力で立てると離れる。心配そうな表情をしたものの、春雨の目はここで戦わなければ終わらないと気持ちを燃え上がらせているモノだった。

「最後の戦いだ。だからみんな、もう一踏ん張りだよ！」
春雨の鬨の声と共に、力が湧き上がる。導く者により、仲間達は再び辿り着く者へ。
最後の激闘の火蓋が切られた。

最後の干渉

覚悟を決め、命を燃やして最後の力を振り絞る黒幕。春雨の鬨の声と共に力が湧き上がる仲間達。今から最後の戦いが始まる。

先制攻撃は黒幕だった。島のど真ん中に空いた大穴からフワリと浮かび上がると、自身の周囲に3枚の甲板を展開。中間棲姫と同様の甲板をグルグルと回しながら、自身を中心に艦載機を尋常ではない数発艦させた。

「ちょっ、な、なンで浮いてやがンだアイツ!?」

艦載機の数もそうだが、黒幕自身が浮かび上がったことに驚きを隠せない江風。江風のみならず、他の者もその挙動には少なからず驚きを見せていた。

過去、海上にいながらもその足を海面につけていない、浮いている深海棲艦というのは1体だけいた。しかし、その深海棲艦は艤装が海面についていたし、そもそも1度しか現れていないという激レア個体。江風は実際にその深海棲艦と戦ったことはないため、このような挙動には動揺してしまう。

だが、これのタネは涼風がすぐさま見抜いた。

「ありゃあ、浮遊要塞の力取り込んでやがるな。姉姫さん……っつーか、中間棲姫って使えたよね?」

「だね。中間棲姫の周りに浮かんでる邪魔なヤツだよ」

涼風の答えに吹雪も賛同。核が浮遊要塞のように浮かんでいたのだから、それを取り込んでいる黒幕が浮かぶのは、あながち間違ってない。

「むしろ、それよりもあの甲板だ。あれを打ち破るのはかなり厳しいよ」

艦載機は対空砲火でどうとでもなる。吹雪が繰り出すそれは、相変わらず最高の効率で次々と破壊していくのだが、そもそもの量が非常に多い上に、甲板の強固さは嫌というほど理解している。特に海風は、嫌な記憶を思い出していた。

至近距離で砲撃を放っても軽々と跳ね返すほどの耐久力を誇る姉

姫の甲板。黒幕の甲板は、それと同等、もしくはそれを超える強度を持っている可能性がある。ならば、砲撃は効かないと見てもいい。
「だったら私がぶち抜いて……っ」
艦載機を全て吹雪達に任せて、甲板を気にすることなく本体を攻撃するために、叢雲が再び槍を巨大化させて突き出す。先程の状態のトドメとなった槍だ。もう一度突き刺して、今度こそトドメにしてやると渾身の一発。
しかし、一度喰らってここまで追い詰められた一撃なのだ。黒幕がそれに対策をとっていないわけが無かった。
３枚の甲板を一箇所に纏めると、その槍による一撃をしっかりと食い止めた。本体が宙に浮き、甲板も宙に浮いているため、踏ん張りなんて皆無のはずなのに、叢雲の渾身の一撃はまるで動かなくなってしまう。
龍驤の甲板を思い出して叢雲は小さく舌打ちした。あの時は何枚も重ねられた結果、数枚は割れたが貫き切れなかったという状態。だが今回は傷ひとつつけられなかった。
「甲板が寄った！　ここを狙って……っ!?」
周囲を回転していた甲板が叢雲の一撃に全て偏ったことで、強固な盾が正面にしかない状態となる。ならば、逆側は完全な隙。
ここを狙わないわけにはいかないと、戦艦主砲も扱える大鳳と古鷹はすぐさま構えて砲撃を放った。本当ならここに金剛もいるはずなのだが、先程の重傷があるため、サラトガと鹿島、別個体の春雨と共に島には侵入せず。最大火力はこの２人に任されている。
しかし、覚醒している黒幕にはそれすらも通用しない。甲板は３枚までしか使えないようだが、艤装までしっかりと展開してきた。施設に住まう者なら見たことがある中間棲姫の艤装――巨大な球体の基部が背後に出現し、２人の砲撃を完璧に受け止める。
盾とは違うのに、ダメージらしいダメージは見受けられず、単純に硬い。戦艦の砲撃を受けてこれということは、駆逐艦の主砲など確実に効かないということに他ならない。
「硬すぎる……甲板も、艤装も……！」

「だったら、隙間を狙うわ～」
前には甲板、後ろには艤装となると、狙えそうなのはそのどちらも無い横。荒潮はすぐさまそこを狙って砲撃を放った。装甲の隙間を狙うように。
それを守ろうとするのは、未だに飛び交う艦載機。吹雪が一網打尽にしているとはいえ、それにも限界がある。こちらに攻撃してくる艦載機は処理出来ていても、黒幕を守るために飛び交う艦載機までは対処出来ない。
そのため、荒潮の隙間を狙った砲撃は艦載機が自身を犠牲にして食い止める。流石に砲撃を受ければ艦載機は破壊されるのだが、黒幕本体に全く通っていないので、あちらの目論見通りとなってしまっている。
「砲撃も軒並み無理となると、後は……」
ここで考えを巡らせる。あの強度の艤装を破壊するためには何が必要か。強力な装甲ですら一撃で破壊出来る力。叢雲の槍すらも超える威力を持つモノと考えるならば何か。
「……大鳳さんしかいません」
真っ先に気付いたのは春雨。あの強度をどうにか出来るのは、龍驤との戦いで数枚重ね合わせた甲板を一撃で破壊した大鳳の本気の斬撃だけ。強い踏み込みと共に繰り出す全力の斬撃は、おそらくあの艤装をも真っ二つに出来る。
だが、踏み込む地面が必要である時点で、宙に浮いている黒幕にはそれが出来ない。おそらくそれも見越して穴の中央に浮かんでいる。接近戦を防ぎながら、中距離遠距離の攻撃は艤装と甲板でシャットアウト。攻撃は艦載機で全てこなす。そのうち砲撃も放ってくるだろう。
「やば、砲撃も来るよ！　向きを変えてやらぁ！」
言ってるそばから艤装から主砲が生えてくるのが見えたため、すかさず白露が鎖を投げつけた。その砲塔に絡ませ、強引に砲撃をあらぬ方向へと向けようと力を込める。宙に浮いているため、回転くらいはさせられると考えて。押してダメなら引いてみろ。

「げっ、全然動かない！　壁引っ張ってるみたいなんだけど!?」
だが、ある意味予想通りではあったがビクともしない。前にも後ろにも動いてくれない。一切の隙がない。命を燃やしているというのは、ここまで強くなるのかと驚いてしまう。
「姉さん、避けてください！」
「わかってらぁい！」
鎖で巻き付けたままだと、砲撃をまともに喰らうことになってしまうため、白露は砲撃を放たれる寸前に鎖を消してその場から退避。
その威力は戦艦主砲のそれを優に超えており、陸で放たれたことも相まって、地面を激しく抉る。紙一重で避けることが出来た白露だったが、その衝撃で見事に吹き飛ばされてしまった。それだけで済んでいるため、自己再生能力が他の者と比べて段違いに強い白露には効いていないようなモノ。擦り傷程度ならば見る見る内に治っていく。
「せめてあの場から動かさないと……」
「でも、何をしても動かないとなると」
「そうなんだよ。光の道も、光の点も、黒幕には向いてないんだ」
しかし、ここまでしても手も足も出ない状況に持っていかれていることで、春雨はどうしたものかと悩んでしまう。まずはあの防御力を打ち崩さなくてはならないが、今出来る限りの最大火力を喰らわしても、傷ひとつつかないとなると困ってしまった。
それでも諦めるなんてことはしない。悩みはしても、解決の道を探し続ける。必ず突破口があるはずだから。時間をかければ黒幕は自壊するだろうが、そんな時間待っていられない。だからこそ、攻略の糸口を探す。見える限りの光の道を手繰り寄せる。
そして、その道は割と近くで輝いていた。それも、山風の頭の上で。
「いや、まだ手はある。ウチがアレに干渉すりゃあええ。アレやって所詮泥の塊やろ。んならウチの出番や」
妖精の身体といえど、艦娘の意志を取り戻しているためにしっかりと辿り着く者の力を得ている龍驤だからこそ、解析と演算の速度が数倍に膨れ上がっていた。特に今は、春雨の視界の中心。湧き上がる力はこれまで以上。

黒幕は今でこそ深海棲艦と同様の見た目になっているが、元は泥の集合体。それであれば、ＲＪシステムの効果範囲内である。本体を止めることは難しくとも、艤装に干渉することは可能だと判断した。
だが、黒幕は最早そちら側にも干渉を仕掛けてきた。目に見えないＲＪシステムでの解析相手に、空間に散布される泥の質や密度をコントロールすることで妨害しながらも殆どハッキングに近いことまでしてしまっている。
「マジかアイツ……っ!?」
今まで自分の監視の目を妨害してきたＲＪシステムに対しての怒りが、命を燃やす覚醒によって明確な攻撃手段として成立してしまった。逆恨みもいいところなのだが、本能でそれを可能にしている。
喰らった龍驤は堪ったモノではない。一気に処理負荷が上がり、解析がまともに出来なくなる。それはシステム妖精である龍驤にも影響を与え、頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を受けることになる。
この状態でまともな解析なんて出来ない。解析をしようとする限り、それが無効になる上にダメージを受ける羽目になる。
「まだや、まだや！　ウチはシステム妖精なんや！　工廠に戻りゃ明石が直してくれる！　せやからこんな痛み、知ったこっちゃあらへんわ！」
とんでもないことを言いながらも、龍驤は自身の演算速度を最大、いや、限界以上にまで高めて黒幕の解析と干渉を続ける。処理負荷なんて度外視。本来ならばあるリミッターも、装備者である山風の意思を無視して解除。
途端に、山風に装備されているＲＪシステムが過負荷によって熱を発し始める。辿り着く者と化した龍驤の制御に追いつくことが出来なくなっていた。
「くぉ……だがなぁ、こんなもんじゃあウチは終わらへん。終わらへんぞ！　山風、スマン、付き合うてくれ！」
「かまわない……あたしはちょっと熱い程度だから」
「よっしゃあ！　勝ち筋は、ウチが見つけたらぁ！」
この龍驤の意地に、仲間達はより奮起することになる。勿論、春雨

も。
龍驤が命懸けでこの戦況を打破しようとしてくれているのだ。ならば、それを応援しないわけにはいかない。導く者として、辿り着く者を最善の答えに辿り着かせる。
春雨はその目を龍驤に集中させる。自分の視界に入った者の力を底上げするため。望む答えに導くため、今は龍驤に全てを託す。
「サンキューな、春雨。ウチには思うところもあるやろうけど、仲間として見てくれて、ホンマに感謝しかあらへん。力、貸してくれやぁ！」
解析と演算に加えて、黒幕からの逆ハッキングまでかかり、龍驤は限界を超えていた。だが、春雨の後押しもあり、鼻血や血涙まで流しながらもそれを止めない。全ては黒幕を終わらせるため。
しかし、黒幕もただ逆ハッキングを仕掛けるだけでは止まらない。展開した主砲、そして発艦した艦載機も全てが、山風に向いていた。艦載機だけなら吹雪や江風が撃ち墜とせるのだが、砲撃だけは山風の力で無ければどうにも出来ない。
ここが海上なら脚部艤装の力で素早く動けるのだが、ここは陸上。完全に自分の脚力にかかっている。山風は北上や大井の下で鍛えられているものの、接近戦が出来る江風のようにすぐさま動けるほど身体能力が高いわけでは無い。
「海風！」
「勿論です！　妹を守るのは、姉の役目ですから！」
砲撃は山風が反応する前に放たれてしまう。直撃は免れない。山風がやられてしまえば、龍驤もそのままやられる。そうなったら、黒幕はもう止まらない。命を燃やし尽くすまでここで暴れ、ここにいる者を皆殺しにする。その後自壊するにしても、これ以上の被害者を出すわけにはいかない。
だからこそ、その砲撃から山風を守ることが出来るであろう、盾を生成出来る２人。春雨と海風が戦場を駆け抜け、山風の前に立ち塞がる。
「海風姉……春雨姉……っ」
「山風、大丈夫だから安心して。私は、私達は、必ず貴女を守るから！」

２人同時に盾を展開。春雨は両腕を使って、一切の隙間なく山風を守る。
その砲撃は強烈な衝撃だったが、２人とも山風と龍驤のために踏ん張り、歯を食い縛る。駆逐艦の小さな身体でも、気持ちだけは負けていなかった。攻撃は通らない。通さない。

そして、
「解析、完了や……ぶっ壊れろ……！」
フラフラの龍驤がニヤリと笑みを浮かべて黒幕に手を翳す。その瞬間、砲撃を放つ主砲が自身の衝撃によって木っ端微塵になった。

その目に映る道

「解析、完了や……ぶっ壊れろ……！」

フラフラの龍驤がニヤリと笑みを浮かべて黒幕に手を翳す。その瞬間、砲撃を放つ主砲が自身の衝撃によって木っ端微塵になった。

ＲＪシステムによる泥の解析が完了し、それを霧散させようとしたものの、流石にそこまでは行かなかった。代わりに、その強固すぎる装甲は隙間だらけとなり、今まで見せていた強度は失われて、自身の砲撃にすら耐えられなくなっている。これならば、もう攻撃を食い止められることはないだろう。

しかし、この渾身の干渉、ハッキングに対して、黒幕も龍驤に干渉してきていたため、龍驤は息も絶え絶え。一度脆く出来たとはいえ、それをずっと維持することは出来ない。その証拠に、ＲＪシステムが積み込まれている山風の艤装の一部は完全にショートしてしまっており、電探が機能しなくなってしまっていた。

「はぁ……はぁ……すまん……ウチに出来るのは……ここまでや……」

もう龍驤は見るに堪えない姿だった。血涙と鼻血で顔を赤く染め、山風の頭の上でも立っていられないくらい。命綱がなければ滑り落ちてしまうのでは無いかと思われる。

しかし、ギリギリ命は繋ぎ止めていた。ここから黒幕がさらに力を得るようならば、さらに解析をする必要がある。

しかし、龍驤はもう限界だ。次なんてない。また解析なんてしたら、それこそ脳が茹って死に至る。明石なら治せるかもしれないが、そういう問題では無いのだ。

「充分すぎます。本当に、よく頑張ってくれました。ありがとう、龍驤さん」

春雨に礼を言われると、龍驤も気分が良かった。導く者に導かれた結果、最善の答えに辿り着けたのだから。

「あとは任せてください。もう、私達は負けません」

一時的にでも装甲が脆くなっているのならば、その時間だけで斃し

てしまえばいい。この龍驤の命懸けのハッキングは、仲間達の闘志をさらに湧き上がらせる。
山風を守るために盾を張っていた春雨と海風も、攻勢に出るために四肢に戻した。もう砲撃は飛んでこないのだ。盾の必要は無い。ここからはもう攻撃が最大の防御になるだろう。
対する黒幕は、まともに砲撃が出来なくなったことですぐさま次の手段に打って出る。破壊された主砲はすぐに捨て、甲板を周囲に飛ばしながら艦載機を一層増やそうと発艦。
「させると思ってるのかな」
だが、それを許すわけがない。艦載機を的確に潰すのは、やはり吹雪である。脆くなったのは主砲だけではなく、黒幕から生じる全てだ。艦載機も先程よりも脆くなり、発艦した瞬間に一網打尽にした。
「見直したわよ龍驤。アンタの命懸けの干渉、評価してあげるわ！」
その発艦によって甲板がバラついたため、次は叢雲による槍の一撃。巨大化させたそれで、黒幕に対して2度目の刺突を繰り出した。
先程は甲板を重ねられたことにより完全に止められ、黒幕自身もびくともしないという散々な結果に終わった。しかし、今は黒幕の何もかもが脆くなっているのだから、この攻撃も甲板を貫く一撃となる。
それを察知したのか、甲板で止めることなく黒幕は回避を選んだ。止めていたら、全ての甲板を纏めて貫いていただろうが、本能的にまずいと判断したか、最も場所的にも優位になれる大穴の上の浮遊を捨てる。
「やっと動いたねぇ！　だったらついでに、底まで落ちてよ！」
それを見計らった白露が、鎖を思い切り振り下ろしていた。その先端に接続された錨は叢雲の槍を参考にしたのかいつもよりも大きく、黒幕の脳天を狙って真っ直ぐ落下する。直撃すれば死に至るだろうし、防御をしても装甲ごと叩き割る程の威力はあるだろう。
その攻撃はどちらかと言えば点の攻撃。回避は容易く、少し体勢を変えることで、錨は黒幕の横を通過する。防御ではなく回避に戦法を切り替えたため、不意をつくことは少々難しい。
だが、難しいは難しいが、出来ないとは誰も言っていない。特に、攻

撃の面積が大きければ大きいほど、攻撃の方向が増えれば増えるほど、その攻撃は当たりやすくなるのは当然のこと。
「叢雲ちゃん、ちょっとそのままにしててね。あ、先端は穴の向こう側に刺しておいて」
「アンタ一体何を……っ」
それだけ叢雲にお願いして駆け出したのは春雨。いや、駆け出したのではなく跳んでいた。さらに同時に動き出したのは吹雪。
脚部艤装の再展開を使った高速移動を駆使した春雨と吹雪は、立ち位置的にちょうど真逆な方向となり、黒幕を挟み討ちするようなポジショニング。背部の艤装は吹雪寄りではあるが、殆ど真横からの攻撃となっている。
「さすが、春雨ちゃんはそうすると思ってた」
「吹雪ちゃんもね」
そして同時に繰り出される黒幕を挟むように放たれた近接戦闘。春雨は下半身に蹴りを、吹雪は上半身に拳を。これが決まれば、黒幕の身体はあらぬ方向に折れ曲がり、そのまま死に至る。
しかし、返り討ちにしてやろうと本能的に考えたのか、両腕に小型の主砲が展開されていた。先程の主砲は戦艦のそれよりも威力の高い陸上施設型の大型主砲だったために、その威力のせいで主砲が噴き飛んだが、小型主砲なら脆くされた艤装でもギリギリ耐えられると踏んだか。
突撃状態、かつ、2人とも空中。回避なんて出来るはずがない状態。狙い撃ちと言われても過言ではない。
「吹雪ちゃん！」
「大丈夫。小型ならまだタイミング合わせられるから」
春雨は蹴りを確実に決めるために腕を盾に変形させる。小型主砲ならば、片手で軽くガードするだけで大丈夫。跳ぶ勢いも込みにしてしまうと砲撃の重みが増すのだが、
吹雪に至ってはその辺りの防御を何も考えていないようにしか見えなかった。
だが、いざ黒幕が砲撃を放った瞬間、吹雪は素手でその砲撃を弾き

飛ばしてしまった。
　正確には、腕に当たる瞬間に艤装を一瞬展開させて、その衝撃で砲撃そのものを弾いた。春雨が単騎で戦っている時に咄嗟に繰り出したものと同じだ。辿り着く者となった今ならば、砲撃を弾くタイミングは手に取るようにわかる。それが威力の小さい小型主砲なら尚更だ。
「行けるね、うん。それじゃあ、せぇの！」
　砲撃を潜り抜けさえすればこちらのもの。しかし黒幕もまだ諦めてはいない。春雨と吹雪に対して甲板を繰り出し、その攻撃を食い止めようとした。叢雲の槍よりは当然ながら威力は小さい。質量が違うのだから当然のこと。脆くなった甲板でも、充分に止められると考えるのは必然。
　だが、黒幕はここで見誤っている。この攻撃を繰り出しているのが、四肢を自由に変形させられる春雨と、ミートした瞬間に強烈な衝撃波が生み出せる吹雪であることを。
　故に、その攻撃を止めたと思った瞬間、甲板が真っ二つに割れた。吹雪は当然ながら拳が直撃した瞬間に艤装を一瞬展開したことによる衝撃波で。春雨は腕ごと再展開をすることで吹雪と同様の衝撃波を発生させて。
　もう春雨もこの攻撃方法のタイミングは完璧に掴んでいた。吹雪に教わったわけでもなく、自分の力で。
「追撃！」
　攻撃を食い止められたことで跳んだ勢いが殺され、春雨と吹雪はそこから穴の底へと落ちていくことになるのだが、それよりも前に仲間達に指示を飛ばした。
　その声を聞く前から、海風は既に動いている。春雨が動いて海風が動かないわけがない。しかし、春雨のように機敏に跳ぶようなことは出来ない。
　そのため、叢雲の槍を足場にして大穴の中央まで突っ込んできていた。春雨が叢雲の槍をそのままにさせたのはこのため。穴の向こう側に先端を突き刺すように指示したのも、流石に仲間がこれを乗って

いくのを支えろというのは酷だから。
「春雨姉さんが作った隙、この海風が見逃すはずが、ありません！」
叩き割られて消滅する甲板の後ろから、海風が右腕を錨に変えて突っ込んだ。これならば、黒幕は咄嗟に3枚目の甲板を海風に対して使わざるを得なくなる。
別に砲撃でも良かった。魚雷でも爆雷でも良かった。それでも腕を錨に変えたのは、この後の攻撃のため。
やはりと言えばいいか、黒幕は海風の攻撃に対して甲板を繰り出す。鎖も使わない錨での直接攻撃は、どう見ても重い攻撃。避ける余裕も与えない連続攻撃だったため、強引にでもガードに持っていかせた。
案の定、海風の攻撃は甲板に阻まれるが、先の2人とは違って甲板を破壊することは出来なかった。重みはあっても、脆くなっていたとしても、衝撃波を出すほどには至らない。海風も右腕の再展開という技が出来るかもしれないが、ここではそれを繰り出すことは無かった。
「私は春雨姉さんほど強くはありませんが、私に甲板を使わせることに意味があるんですよ。そうよね、江風！」
「おうよ！　こっちが隙だらけになるからよぉ！」
同じように槍を渡ってきた江風が甲板の横から飛び出し、ガードをさせないところから渾身の砲撃。甲板を江風に持っていくと、海風の攻撃をモロに受けることになり、甲板を海風のままにしていると江風の砲撃を受けることになる。
だが、そこに被せてきたのは艦載機。自身の近くに数機の艦載機を即座に展開し、それを盾代わりにして江風の砲撃を耐えてしまった。
「マジか……っ」
しかも、それが艦載機であるため盾にならなかったものは射撃もしてくる。回避出来ないレベルのタイミングであるため、江風はその攻撃をまともに受けてしまうことになる。
「江風！」
そこへ文字通り手を出したのが海風。攻撃のための腕をすぐさま

変形させ、致命傷になりそうな場所だけは食い止めた。それでもどうしても射撃が抜けてしまうところがあったため、江風は腕や脚にそれを受けてしまう。
「くっそ……でも、まだ行けるだろ！」
「当たり前よ～。みんなが頑張ってるんだもの、ここでやらないでどうするのって感じよね」
さらに飛び込むのが荒潮である。海風の近接攻撃、江風のほぼゼロ距離射撃と続き、甲板と艦載機まで防御に使わせたところに、荒潮が繰り出したのはまさかの徒手空拳である。
砲撃に対しては瞬時に艦載機が防御に現れるが、近接戦闘に対してはそれがすぐに反応しないことに気付いた荒潮は、ここであえて砲撃を封じた。
「私の先生はねぇ、こういう時に強く出られるように、うんと鍛えてくれたの。だから、それを貴女には受けてもらうわ。こうやって、ね！」
艦載機の反応が遅れ、甲板は寸前のタイミングまで海風が止めている。故に、荒潮の攻撃は防御されない。
艦娘であるため、その一撃が致命傷になることはないだろうが、荒潮の狙いはそこではない。ここでトドメを刺すことが出来ないことを理解した上で、次に繋ぐ一撃。
それは、この黒幕を穴の底に突き落とすこと。浮遊されていることで攻め手が限定されていることが問題なのだ。
故に、荒潮が繰り出したのは真下に叩きつけるような強烈な蹴り。駆逐艦とは思えぬ威力のそれは、今までびくともしなかった黒幕の身体をブレさせ、その場に身体を維持出来なくなる程の衝撃となり、狙い通りに真下に落とされることとなった。
龍驤の干渉により脆くなったのは装甲だけではない。自身を維持する力にも影響を受けていた。そのおかげで、荒潮のこの一撃は綺麗に決まることになった。
そもそも荒潮の格闘の師匠は武蔵である。ここぞという時の攻撃方法は武蔵仕込み。力の発揮の仕方も完璧にマスターしている荒潮には、この渾身の一撃は最高のポテンシャルで叩き込める。

「ブレた！　全員穴の中へ！　白露姉さん！」
「任せろぉい！」
　先の錨の一撃を避けられた白露が、先んじて大穴の下へと降りていた。そこから改めて鎖を投げつけ、荒潮の一撃によって落ちてくる黒幕の脚にそれを巻き付け、強引に引っ張る。
　ここからまた浮かれても困るため、それを止めるためにも地面に叩きつけた。一度ついた勢いは簡単には止められない。黒幕は再び浮上することが出来ず、そのまま穴の底へと叩きつけられた。

　地に足をつけた状態ならば、全員が十全の力で戦える。こうなればもう、終わりまで一気に向かうまで。
　ここにいる者達にはもう、最善の道がその目に映っていた。

自棄

浮遊する黒幕は、荒潮の一撃により体勢がブレた上に、白露が鎖を脚に絡ませて引っ張ることにより、穴の底へと叩きつけることに成功した。これで戦場は、正しく足場がある場所へ。

穴の底は元々泥まみれだったのだが、天井を崩し切ったことによってその泥は全て潰されている。少々踏み込みづらいかもしれないが、泥で滑るようなこともない。むしろ、踏みしめればその分、穴の上と同じくらいに戦いやすい場となっている。

「もう上には行かせない。ここで終わりにする！」

甲板は残り1枚。艦載機は多数。ただし、再展開はあり得る。龍驤のおかげで脆くなっているとはいえ、何度も何度も展開を繰り返されたら破壊し尽くすことは難しいかもしれない。

とはいえ、黒幕も今や命を燃やして戦っている状態。このまま進めば命は潰えるのだから、ここにいる者達を皆殺しにするために躊躇なく全力を出すのだろう。命を燃やしながらも最終的には生き残れるように仕掛けがあるかもしれないが。

「また浮こうだなんて、思ってないわよねぇ！」

穴の底に叩きつけられた黒幕に対しての一番槍は、文字通り槍を振りかぶった叢雲。もう足場として巨大化させた槍を穴の上に立てかけておく必要は無くなったため、そのサイズを普段使いのサイズにまで縮め、真上から刺し貫くために体重までかけて突っ込む。

落下の勢いは凄まじい威力となるのだが、流石にこれは黒幕でも回避が出来る。浮いているから強いというわけではなく、全体的に強化されているのだから。

しかし、叢雲の落下による攻撃は、槍を穴の底に突き立てると同時に怒りによる巨大化まで実行したおかげで、地鳴りが起こる程の威力を発揮した。

僅かに浮くことで体勢を崩すことなく回避したようだが、叢雲を中心に発生した風圧は、近接攻撃では起きない衝撃となって、黒幕に襲い掛かる。

同時に土煙が舞い上がり、黒幕の周囲を包み込み、黒幕の視界をある程度封じた。泥人形にまともに機能している目があるかはわからないが、この戦場をまだ高高度から監視しているのだとしたら、そこから状況が見えなくなるのは確実。
「上からの攻撃は……まだまだ続くよ」
その回避方向を見た後に繰り出されたのは、山風達による爆雷の雨。既に穴の中には何人も降りているが、お構いなしに投げつける。山風の目には、何処に投げればいいのかが光の道として見えているのだから。
「おらおらぁ！　あたいも上からやってやるぜぇ！」
それには山風だけでなく涼風も参加していた。こちらにも光の道が提示されている挙句、辿り着く者となったことで拡張された空間把握能力を使って回避の方向までしっかりと予測しての投擲となる。しかも、穴の中に既にいる仲間達には影響を一切与えない。土煙で見づらくても、涼風には電探があるので全て見えているのだから関係ない。
これは艦載機による爆撃と殆ど同じ威力。叢雲が巻き起こした土煙をより一層増やし、当たらなくても戦場を塗り替えていく。
だが、黒幕もただでは転ばない。艦載機を周囲に激しく回転させ、砲撃を繰り出すことによって風を起こし、土煙を晴らしていく。かなり前、龍驤がまだヒトのカタチを持っていた頃に切り札として使っていた攻撃である。
この行動をとったということは、あの形状でも視界があるということに他ならない。周囲が見えなくなると困るわけだ。
「なら、私も行くよ」
そこへ飛び込んできたのが古鷹だ。まだ穴の上だったが、叢雲と同じように穴の中へと飛び込みつつ、その凶悪な尻尾の艤装を叩きつけるように回しながら黒幕へ突っ込む。
先程までなら戦艦主砲での迎撃があり得ただろうが、脆くされて爆発したという経験から、黒幕はその手段を本能的に避けた。ここで主砲を放とうとしてまた爆発してしまったら、古鷹の攻撃を避けること

も出来なくなる。
故に、また回避を選択。古鷹の攻撃を回避して、カウンターを狙う作戦に打って出た。今の黒幕の周囲には、かなりのスピードで艦載機が渦巻いているため、それを直撃させることで致命傷を与えようと考えていた。
「受けない！」
勿論、古鷹もそれを見越して突っ込んでいる。尻尾を即座に前へと移動させ、盾のようにして艦載機の直撃を防いだ。とはいえこのスピードでの体当たりだ。尻尾はベコベコに凹み、盾を抜けた艦載機が古鷹の肩や脚に掠め、傷を負わせる。
だが古鷹はそんな傷など気にすることなく右腕を包み込む艤装を展開。ここまで来れば殆どゼロ距離と言える場所だ。放てばどこかしらに当たる。
「古鷹さん、下がって！」
しかし、そこで春雨が直感的に危険を察知して指示を飛ばす。そのまま押し込めば黒幕にダメージを与えられたかもしれないが、春雨が下がれと言ったことと、見えている光の道が正面に失われたため、それに従いすぐさまバックステップ。
瞬間、古鷹の足下から泥で出来た鋭利な刃が猛烈な勢いで生えてきた。指示に従わなかったら串刺しになっていただろう。
天井の瓦礫に潰されたとはいえ、床は泥まみれだった。元々は黒幕の身体の一部だ。大分霧散していたとしても、少量なら残されている。それを少しずつ時間をかけて掻き集めていたのだろう。
その一撃は春雨が予測したものの、これが無ければ古鷹は死んでいた。
「ありがとう春雨ちゃん！」
「みんなが生きて帰ってこその勝利です！　私には全員分の道が見えていますから、何かあればすぐ伝えます！」
何と心強いことか。今の光の道を見る力も、春雨がいなければ発揮出来ない力。最善の道へ導く者の力は、今ここでより強くなってきている。

「でも、近付くのが厳しいのは確かかな……」
古鷹が下がったことで、またもや艦載機を自分の周囲に渦巻かせる。再び砲撃が通らなくなったようなもの。あれを突破するには、より強力な威力の攻撃を放つか、艦載機を全て撃ち墜とすしかない。
そしてそれが出来る者が、既に距離を詰めていた。
「ここなら全力で斬れますよ」
古鷹が派手に降りる裏側で、スッと降りてきていた大鳳。この頑丈な足下を踏みしめて、刀を両手で握り、全ての力を使って刀で薙ぎ払う。艦載機の嵐なんてお構いなし。壁を切り開くかのように、渾身の一刀。
その斬撃は艦載機を次々と斬り裂き、黒幕に剣先が届くかと思われた。しかし、黒幕も黙って斬られるわけがない。その手に刀を展開し、大鳳の一刀を滑らせるように払う。その一回だけで黒幕の刀は破壊されるものの、残念ながら黒幕に傷をつけることには失敗。
使い捨てで武器を展開するということを覚えてしまった。そのため、今はもう使い捨てにしている艦載機の一部を刀へと変形させて周囲に振り回し始めた。
「これでは近づけませんね……」
流石の大鳳もこれには距離を取らざるを得なくなる。脆くともそれ自体が抜群の殺傷力を持っているとなれば、様子見はどうしても必要になる。
さらに、先程古鷹を襲った地面からの刃まであるのだ。あの一撃を繰り出した後すぐに引っ込んでしまったが、それがまた何処から出てくるかは今はわからない。
「古鷹さん、大鳳さん、砲撃！」
故にここは春雨が指示を飛ばす。艦載機の形状をしていたために絶妙な耐久力を持っていたが、今の状態ならば砲撃でも破壊出来る可能性が高い。艦載機の方はまだしも、刀の方は間違いなく破壊出来る。
ならば、少し離れつつも砲撃を連射した方がいい。２人の砲撃ならば火力も充分足りている。黒幕にダメージを通すことは出来ずとも、

周囲の攻防一体の浮遊物を破壊していけば、最終的には届くはず。
しかし、その裏側で黒幕も次の一手を切ろうとしている。その手に魚雷を展開していたのだ。龍驤が監視の目を消す前に見ている、魚雷の投擲。それを自分でもやってやろうと考えたようである。
主砲の爆発のように自分に害がなく、小型主砲よりも攻撃力があり、さらには火力が高め。その実績が春雨達によって示されたのだから、使わない理由がない。本能はプライドに勝る。
「それはうちの北上さんの専売特許なんでやめてもらえますか」
しかし、魚雷を手に持った瞬間、吹雪がピンポイントでその魚雷を撃ち抜いていた。当然ながらそれで魚雷は爆発。黒幕の腕ごと持っていく。
今の黒幕に理性と自我と言語が残っていたら、何故だと発していただろう。今の黒幕の周囲には、凄まじいスピードで艦載機と刀が渦巻いているのだ。それに、穴の上には山風と涼風がスタンバイしているので、そちらも警戒していた。それを乗り越えようとしている最中に、この一撃は想定外。
「何驚いた顔してるんです。貴女が浮けるなら、こちらも似たようなことしますよ」
「足場になるくらいへっちゃらへーだね！」
吹雪自身は白露のサポートによって高くジャンプしていた。白露が足場となり、強引に上に放り投げることで、脚部艤装の再展開による跳躍よりも高く跳ぶことに成功している。
正しく言えば浮遊しているわけではないのだが、白露の膂力と吹雪の跳躍力が組み合わさったことで、まるで浮いているかのように滞空していた。
土煙である程度視界を隠していたのが功を奏した。黒幕の周囲は晴れてしまっていても、まだ他の場所は晴れていない。それも活かした手段。
「おまけですよ」
そして、吹雪も魚雷を黒幕に投げつけていた。北上が出来ることなのだから、吹雪もしっかりマスターしているため、見て覚えただけの

黒幕とは精度もタイミングも段違い。
流石にまずいと思ったか、黒幕は捥がれた方とは逆側の手に小型主砲を展開し、その魚雷を撃ち墜とす。
さらには、失われた腕を再構築した。核に大きな傷がついていないからか、肉体も再生可能なようである。
しかし、その腕は今のカタチを取るよりもヒビがより深く刻まれたものになっていた。もうここに使える泥も足りなくなってきている。命が燃やされ続け、さらには龍驤の干渉の影響も残っているのだ。
泥の全てに影響するのなら、その身体にも影響がないわけがない。黒幕を構成する全てが脆くなっている。
「壁も薄くなってきたんじゃないですか？」
かなり近い距離で砲撃を放つ大鳳も、それには気付いていた。勿論古鷹も。
艦載機が破壊されてきている。振り回される刀も脆くなってきている。攻撃を当てれば当てるほど、黒幕の耐久力は確実に失われている。
再構築にはその分泥を使うのは当たり前。同じ数を維持しようとするのなら、その装甲が薄くなっていくのは至極当然。自身の腕の再構築にもガタが来ているのだから、そもそもの泥の量が減ってきているのは明らか。
それに気付いていない黒幕でもない。もう自分に残された時間が少ないことも理解している。それなのに、ここにいる者は誰も折れず、誰も壊れていない。それが嫌で嫌で仕方ない。
――悪意――恐怖――憤怒――憎悪――絶望――
もう既に溢れている感情が、さらに増幅される。特に、敗北の絶望が強く強く。これは、黒幕の発作だった。
あらゆる負の感情が溢れた黒幕は、当然ながら発作のトリガーも多い。溢れ出した感情は暴走するのは施設でもよくあること。
この黒幕は、最後の最後でそれが悪い方向に向かった。いわゆる、自棄である。
ふっと周囲を飛び交う艦載機と刀が消えた。無防備になるような

ものなのに。それがあまりにも不気味で、攻撃を一瞬躊躇ってしまった。
「なっ……」
その瞬間、大鳳が斬られていた。致命傷には届かないものの、胴を袈裟斬りにされるような一撃は、大鳳の目を以てしても見えなかった。本当にギリギリ、殺気を感じたことで身を引いたことが、致命傷の回避に繋がった。
「大鳳さん!?」
それを見た古鷹が手を伸ばそうとするが、その時には砲撃まで放たれていた。咄嗟に右腕の艤装で防御するが、威力が激しく、粉々にされながら噴き飛ばされる。
そこにいた黒幕は、足りない泥を全て補った綺麗な姿になっていた。艦載機や刀に使う泥も、地面に忍ばせていた泥も、全てを自分に集約させた。身体中のヒビも全て修復されているほど。代わりに、もう艦載機も出せない。不意打ちも出来ない。己の身体のみで、最後の戦いに打って出た。
その結果が、今の一撃。防御を捨て、全て攻撃に振り、自棄っぱちになって攻撃を繰り出す。攻撃しただけで身体が崩壊していたが、もう知ったことではないと。
今まではまだ保身が頭の隅に残っていた。だから遠距離の攻撃しかしていなかった。命を燃やしているようで、その実、まだ先があると勝手に考えていた。だが、もう先もいらないと、本能から、本心から願った。それが黒幕の本当に最後のカタチを作った。
「……最後まで自分本位なんですね。私達をさんざん苦しめておいて、自分の番になったら駄々を捏ねるように怒り狂うだなんて。本当に……憐れですよ」
春雨はその黒幕の姿を、ただのワガママな子供だと感じた。戦史では最悪の姫という、その頭脳派な戦術からいい方向の二つ名を貰っていたのに、今やここまで落ちぶれている。
上手く行かないからと駄々を捏ね、癇癪を起こし、自棄になって暴れる。性格も何もかもが、悪い方向に最悪の姫。

そんな黒幕が、あまりにも憐れ。落ちぶれすぎもいいところ。
「単身になったことは褒められますが、もう貴女は生きていちゃいけない。貴女に傷付けられた者達のためにも……」
ふぅ、と息を吐く春雨。そして、同時に周囲に撒き散らされた粒子状のマグマが、春雨に集約する。
黒幕に終わりを齎すため。この戦いに終止符を打つため。傷ついた者達に報いるため。

「終わらせますよ。貴女は長く生きすぎた」

仲間が開く道

「終わらせますよ。貴女は長く生きすぎた」
　周囲に撒き散らした粒子状のマグマを取り込みながら、春雨も今の黒幕に合わせた接近戦のスタイルに切り替える。
　怒りが溢れたことにより手に入れた鉤爪を光らせ、犬耳電探と尻尾の基部も展開。怒りに燃える真紅の狂犬は、導く者となったことにより、全てを終わらせる純白の猛犬と化した。
「行くよ、海風。大丈夫だよね」
「勿論です。お任せください」
「うん、頼んだよ。それに、みんなもいるから！」
　自棄になった黒幕の暴走は止まらない。近接攻撃に打って出たことにより、大鳳と古鷹が傷を負ったが、それでも心は折れていない。
　しかし、大鳳は胴を袈裟斬りにされていたものの、致命傷は回避している。しかし、決して浅くない傷を受けており、このまま戦闘を続けるのは難しい。古鷹は右腕を包み込む艤装が完全に破壊されてしまったものの、尻尾の艤装は健在であるため、大鳳の側へと駆け寄り、すぐに守るための戦いに入る。
　満身創痍とまでは行かないが、現状で戦闘に参加しづらいのは大鳳と江風。江風も黒幕を穴の底に突き落とす際に砲撃を受けてしまっているため、四肢に傷を負ってしまっていた。
　だが、そんなことお構いなしに立ち上がり、手に持つ主砲を反転させ、逆手に持ちながら黒幕に突撃する。
「せっかくの格闘戦なンだからよぉ、江風にもやらせてくれよ！」
　猪突猛進。それを体現するかのように飛び出した江風は、黒幕が主砲を向けた瞬間に逆手持ちの主砲を砲撃。勿論空気弾だが、その砲撃の勢いをそのまま自分に乗せて加速した。
　そして、黒幕の砲撃と同時に、その拳を打ち込む。砲撃を自身の主砲でまともに受けることになるが、その分拳は振り抜けて、黒幕の顔面に叩き込まれた。血塗れの拳であっても、砲撃の衝撃も乗っている分、頭を爆散させるくらいの威力を誇っていた。

しかし、黒幕は泥人形。頭が失われても即座に再生される。核さえ無事ならば、その形状は自由自在。とはいえこれで、黒幕の核が頭に無いことはわかった。
「ンなろぉ、でもまだだぜ……っ」
江風が突撃したことには意味がある。自棄になっているということは、近くの者から攻撃するに決まっている。もう周囲もまともに見えていない。だからこそ、自分を囮にして仲間の攻撃へと繋ぐ。
顔面の修復と同時に、黒幕はもう片方の手に握る刀を江風に向けて振り上げた。今最も近い場所にいるため、そのまま斬られれば真っ二つになってしまう。
江風が自分の命を蔑ろにするわけが無かった。そこにはもう、春雨が来ていたのだから。
「江風、無茶しすぎ。でもありがとう。次に繋がる」
その振り上げた刀は、鉤爪でしっかりと受け止める。相当な強度と斬れ味を持つであろうそれですら、春雨の鉤爪を傷付けることは出来ない。泥とマグマは相反するモノ。マグマは泥を否定する。故に、ぶつかり合っても斬ることはおろか、ダメージにすらならない。
「悪ぃ、でもこれが江風に見えた光の道の終着点だ。春雨の姉貴、頼んだぜ」
「任せて。でもその前に！」
「離れろぃ！」
春雨と江風が同時に黒幕を蹴り飛ばす。それは黒幕の胸に直撃し、距離を取ることに成功。ただし、返しに砲撃を放たれており、春雨の蹴り出した脚が破壊されかける。
だがそこは義脚。破壊されかけてもすぐさま再展開して新品同様へと早変わり。この程度では消耗にもならない。
「あらあら大変、こっちに飛んできちゃった。だったら、ちゃあんと迎撃しなくちゃ、ね！」
続いて荒潮。蹴り飛ばされてきた黒幕に対して繰り出したのは、魚雷の投擲。勿論荒潮もこれをマスターしており、的確に黒幕の胴――核があるであろう場所を狙う。

これだけならば砲撃で撃ち落としてくるだろう。もしくは刀で斬り飛ばすかもしれない。だが荒潮はそれも許さない。
「ダメよ～、それを壊すのは貴女じゃなく、わ・た・し」
魚雷を先制して自らの手で破壊することで、黒幕の測ったタイミングをズラす。そうすることで、再びターンが回ってくる。今度は海風が行動を起こしていた。
爆炎が目潰しとなったことで、黒幕は大きく刀を振り回してそれを振り払ったが、その時には黒幕の脚に海風の鎖が巻き付いていた。
「戻ってきなさい。貴女の相手はこちらにいます」
それを思い切り引っ張ることで、黒幕の勢いを逆に向ける。しかし、黒幕は何を思ったか海風の鎖が絡まる脚を自ら千切った。その程度ならばまた再生するのだから、判断としては間違っていない。
「荒潮さん！」
「大丈夫よ～。予想、してたもの」
既に荒潮は跳んでいた。自ら起こした魚雷の爆発に自ら飛び込むように。
「こういう乱暴なことってよくないと思うのよね～。でも、相手次第よね」
そして、武蔵直伝の強烈な蹴りが放たれた。江風の主砲を使った拳に勝るとも劣らない一撃は、再び黒幕の首を捩ぎ取る。
しかしそれは通用しないということは誰もがわかっていた。どうせまた先程と同じように再生する。核を破壊しない限り、あらゆる四肢が、頭さえも再生してしまうのが厄介極まりない。
ここでもお返しと言わんばかりに砲撃を放ってくるが、かなり強引に身体を捻ることでそれは回避。しかし、背中に負う基部には直撃してしまい、荒潮は機能不全に陥ってしまう。さらにはその破損によって背中に傷を負ってしまい、小さく顔を顰めた。
荒潮もこれによって戦列からは退場。その一撃は首を飛ばすものの、ただ再生を許すのみとなる。
見る者が見れば無駄と思える行為。しかし、荒潮に見えていた光の道はコレである。

「まだまだ！　春雨、あたしはここみたいだ」
「はい、お願いします白露姉さん！」
「荒潮から離れろ！」
　このままだと荒潮が追撃されるだろうが、それは白露が許さない。海風よりも手慣れており、精度が高い鎖の一撃、捕縛を繰り出す。意識を荒潮に向けた瞬間には、白露の鎖が黒幕の胴に巻き付いていた。攻撃に意識を向けているせいで、防御すら疎かになっている。
　脚のように胴を千切るわけにはいかないようで、その鎖を断ち切ろうと刀を振るう。しかし、その前に白露が一本釣りした。鎖が斬られたとしても、勢いだけはついているため、荒潮への追撃は無効にされて、白露の方へと引っ張られる。
　それならばと白露に狙いを定めるが、白露は既に艤装を時雨の艤装に切り替えており、背部の大口径主砲を両手で構えていた。
「核があるの、胴体なんだよね。だったらコイツでぶち抜いてやる」
　砲撃の威力は似たようなもの。黒幕の主砲がインチキみたいなものなのだが、白露もなかなかにインチキである。深海棲艦化によって火力が上がっている上に、大口径であるためにさらに火力が上がっている。もう戦艦と同じくらいだ。
「これで、終わり……っ」
　それが2門あれば、黒幕の砲撃に対して、拮抗どころか上回ることが出来るだろう。
　事実、黒幕の砲撃を呑み込むように白露の砲撃が放たれ、そのまま黒幕に襲い掛かる。
　しかし、黒幕は何処までも往生際が悪かった。胴(核)への白露の砲撃に対して、刀を振るってその砲撃を斬り払ってしまった。
　攻撃こそが最大の防御。盾を形成してガードするのではなく、攻撃そのもので脅威を回避する。自らの勢いを止めずに白露へと接近。
「させませんよ」
　だがそれに立ち塞がるのが春雨。鉤爪を光らせ、その斬撃を食い止める。むしろ、刀ごと持っていくつもりで振り払った。
　その勢いを殺すことは出来なかったようだが、それを逆に利用して

攻撃に転じてくる。身体を捻り、そのまま反動で刀を振るって春雨に襲いかかった。
「ヒトの妹に手ぇ出すんじゃないよ！」
当然、それを食い止めるのは最も春雨の近くにいた白露。刀を振るう腕に強引に掴みかかってその攻撃を止めた。また腕を千切られる可能性があったものの、破壊するのではなくただ止めるだけならば、余計なことをされずに止めることが出来る。
膂力は黒幕の方が上だが、白露が止めたことで進むのは止まらないのだが、最初の勢いが失われたことで、春雨は余裕を持って回避に成功。
しかし、黒幕に密着しているということは、その分危険になるということ。艤装を展開するように掴まれている腕から刃を展開したことで、白露の腹に深々と刺さってしまった。
「つぎ……っ⁉　んなことされても、あたしゃ放さないぞ……。アンタのおかげで、再生能力だけはピカイチなんでねぇ！」
しかし、白露は放さない。痛みを堪えながらも、黒幕を逃がさないと拘束を続ける。手には主砲を展開し、核を狙った。自ら腕を千切る選択をするように。
案の定、白露はどうにもならないと考えたか、自ら拘束されている腕を斬り、同時に白露にも大きなダメージを与えた。両断されることはないものの、胴をバッサリ斬られてしまった。
だが、致命傷でなければ少し時間を使えば治る。だからこそ、白露は自分の身を削る。他の者ならかなり厳しい傷であっても、白露にとっては心が折れなければ擦り傷みたいなもの。
「次は、私ですね。次こそ春雨姉さんに繋ぎます」
腕を再構築している黒幕に対し、次は海風が突撃。海風にやれることは勿論、右腕を変形させての攻撃。そして、ここでやらねばならないことは、さらなる四肢切断。
砲撃を潜り抜け、滑り込むようにその脚を切断する。体勢を崩そうと繰り出したそれだが、崩れる前に脚が再生して踏み留まった。
「私も、ね」

そして春雨も海風と並び、逆側の脚も切り裂く。それすらも即座に再生し、2人に対して同時に反撃を繰り出したが、それはもう当たりもしない。
腕も脚も、もう再生している。ヒトのカタチはまた取り戻している。
しかし、明らかに違うところがあった。
「もう、終わりなんですよ。ここまで、何回再生した」
頭や腕、脚を千切り千切られ、その都度再生を繰り返して、ヒトのカタチを維持し続けてきた黒幕。そうしなければ戦えないからそうしていたのだろうが、春雨の、春雨達の狙いは再生の回数を稼ぐこと。
もう今の状態、命を削って戦っている黒幕は、泥の再生がほとんど間に合っていない。それなのに再生を繰り返した場合どうなるか。
「もう、泥は足りない。足りるはずがない。それだけ消耗したんだ。貴女にはもう、何もない」
核が見えるほどに、黒幕は透けていた。泥が足りない。自分を構築するモノが、もうない。千切り、消され、その存在そのものを否定し続けられた。
全員の力を合わせた攻撃が、黒幕を削り、削り、削り続けたことで、確実な終わりへと近づけた。
だから、これで終わり。
「本当に、本当に苦労させられましたよ」
ダンと聞こえるほどの踏み込みと同時に、春雨の鉤爪が黒幕の腕を斬り飛ばしていた。
もう追いつけない。消耗が激しすぎて、速さも出ない。
だが、反撃するだけの力は残っている。すぐさま腕を再生し、砲撃も斬撃も繰り出して、春雨を迎撃する。もう守りすら捨てて、春雨を殺すことに全ての力を使おうとする。
その腕ももうほとんど透けている状態。泥を何とか振り絞ってヒトのカタチをとっているだけ。主砲と刀に泥を注ぎ込み、出来る限りの最大の力で春雨を始末しようと動く。
その動きは、足りないながらも今までで一番の速さと力だった。

「姉さんに届かせるわけがないでしょう！」
海風の盾がそれを食い止める。しかし、黒幕が命を賭した最大級の火力は、海風の盾をも破壊してしまった。斬撃は届かなかったが、砲撃の衝撃はまともに喰らってしまい、海風に気を失いかけるほどのダメージを与える。
だが、これが海風に見えていた道。春雨を身を挺して守ることで、最後の一手が開かれる。
「姉さん……お願いします！」
「ありがとう、海風。使い切らせた」
再生はもう、追いつかない。自身の砲撃のせいで片腕が失われ、斬撃のせいで片腕が逆に曲がる。もう耐えられない。構築する泥が、もう無い。
「みんなが、この時のために力を使ってくれた。だから、最後の一手を貰った。みんなのおかげ。本当にありがとう。これでおしまいにするから」
ここまで来たら、もう届いた。開かれた道を、ただ突き進むのみ。

「もう二度と、私達の前に現れないでください」
そして、春雨の鉤爪が、黒幕の核に深々と突き刺さった。

最後の導き

「もう二度と、私達の前に現れないでください」

そして、春雨の鉤爪が、黒幕の核に深々と突き刺さった。

春雨達に見えていた光の道は、仲間達と協力しながら黒幕の核を鉤爪で貫くところを示していた。全員が同じ道を見ていたために、連携が全て上手く行った。傷付くところまでが織り込み済みというのは何とも辛いものではあるが、これが最善であるということが見えていたため、誰もが躊躇なくその道を歩んだ。

その結果が、コレである。導かれるように全ての行動がトントン拍子に流れ、最終的には黒幕にトドメが刺された。これが誰もが辿り着きたい場所。これが春雨が導くべき場所。最善であり、かつ、望む答え。

「……嘘……でしょ」

しかし、春雨の表情が変わる。確実にトドメを刺したはずなのだが、何かがおかしい。

核に鉤爪を突き刺した時点で、黒幕という存在は絶命している。そのまま消滅するはずなのだが、一向に消えようとしないのだ。

それどころか、鉤爪が抜けようともしなかった。春雨が強く引っ張っても、ビクともしない。

つまり、黒幕はこの状態で生きているということになる。核が破壊されているというのにだ。流石に透けている身体は核が貫かれた時点で全て霧散しているのだが、その核が失われないのだから何かがおかしい。

「……思い込みはダメ。黒幕が異常なのはいつものことなんだから」

押しても引いても鉤爪がビクともしないのならば、そもそも消してしまえばいい。鉤爪はあくまでも艤装。自分の意思で出し入れが出来るのだから。掴まれている艤装を消して、この状況を次の段階へ持っていく。

これで斃せたと思い込んだら、本来見えるであろう光の道も見えなくなる。知らないことには対応出来ないのが春雨の力の弱点だ。あ

らゆる可能性を網羅することで、次の道を探さなくてはならない。
「どうなるか……」
鉤爪を消しつつ、核につけられた傷を確認する。どう見ても致命傷。この核そのものが黒幕の命の源だというのなら、1箇所どころか数箇所に貫かれた痕が出来上がり、その周辺にはヒビが走っているほど。そもそもコレでカタチが崩れないことがおかしな話である。
だが、春雨か鉤爪を失ったとしても、黒幕の核はその場に浮遊したまま。消えるどころか、その意思が消えていないと考えてもいい。ここまでやって、まだピンピンしているのか、死ぬ間際でギリギリ意思が残っている状態なのかもわからない。自我も理性も言語も無くしている弊害がここで見事に出てしまっている。
「だったら……っ」
龍驤の話していた核に関してのことは明石からの又聞きであり、情報としてはその形状と大きさ程度。
龍驤のそれは、米粒程の大きさで、ボールと言えるくらいの綺麗な球体。飛行場姫などのヒトを器にするためのサイズとして成立している。
島を器にしているというのなら、その分核が大きくなっていてもおかしくない。今、鉤爪で刺し貫いた黒いボールが黒幕の核であると思い込んでも仕方ない。それが導く者（春雨）だとしても。
だから、もう一度鉤爪を展開。この思い込みは危険なモノ。それをどうにかするための光の道を感知した瞬間、即座にもう一度核を破壊した。
刺し貫くだけではダメ。斬り刻むくらいしなければ安心出来ない。そのラインは春雨には見えており、これならば核そのものの形状も変えるほどのダメージを与えることが出来る。
「……まさか……っ」
斬り刻んだ核が自爆するように弾け飛んだ。それを一瞬早く勘付いた春雨が、腕を盾に変形させたものの、完全に展開し切る前に核の破片が春雨に突き刺さる。
「っあっ!?」

多少は展開されていたことで、致命傷になり得る頭や心臓には突き刺さることは無かったが、艤装の接続部分となる二の腕や太腿にはどうしても傷が入れられた。
盾にした両腕で防いだ破片も、弾かれるのではなく盾の表面に止まり、その場で泥になりへばりついた。
「春雨姉さん!?」
「アンタは今はジッとしてなさい!」
「動けるのが動いた方がいいから、今は私達が行くよ」
黒幕の砲撃をモロに受けて盾を破壊された海風は、春雨に駆け寄ることが出来なかった。
ここですぐに動いたのは、まだ消耗が少ない叢雲と吹雪。核の自爆の勢いはそれほど広範囲ではなく、春雨のみを狙った攻撃だったため、2人は難なく春雨の側へと駆け寄ることが出来た。
しかし、近付くなと言わんばかりに手を伸ばす。
「来ないで! 今来たら、2人とも呑み込まれる!」
その言葉で叢雲も吹雪も足を止めた。春雨からの切羽詰まった言葉によって、2人の光の道は開かれた。近付いてはいけないと示された道が。
「最後の最後……本当に最期に、とんでもないことを、仕込んでた……っ」
突き刺さっていた核の破片が、染み込むように春雨の中へと入り込む。盾にへばりついた泥と化した破片も、同じように盾と同化していく。
つまり、侵蝕である。
ただし、春雨には辿り着く者のマグマによって侵蝕には耐性がある。黒幕に侵蝕も支配もされるようなことはない。ただただ体内に泥が入り込むだけとなる。通常ならば。
「これ、侵蝕じゃない……同調だ……!」
侵蝕は、黒幕が生きていてこその行為。意志を泥で塗り潰し、その存在を混沌に染め、自らの駒とする、相手の尊厳を破壊することに特化した、黒幕が生み出した嫌がらせの極致のような能力。敵を自分の

手足にして、その時の記憶すらも残し、そのままならば傀儡、解放されても心にダメージを与える、陰湿極まりない力。
しかし、今春雨に襲い掛かっている力は侵蝕ではない。黒幕が自らの死を覚悟し、それでも上手く行かずに自棄になり、それすらも乗り越えられたことで諦めの境地に達したことで変質した、最期の力。
自分がもう先が無いならば、次の自分に託す。新たな自分を作り出し、それに全てをやらせる。自分は失われてもいい。何処の誰でもいいから、自分のやりたいことを継いでくれればいいのだから。
その結果が、『同調』。それこそ侵蝕に他ならないのかもしれないが、侵蝕とは雲泥の差。泥が意志を塗り潰すのではなく、そもそも同じだったと意志を書き換えていこうとするのだ。上塗りの『侵蝕』ではなく、書き換えの『同調』。コレに対しては、春雨もかなり厳しい。
今この時、黒幕はただの泥では無くなった。死の瞬間にその存在は、ただ生きとし生けるものを使い潰し、自らの積もり積もった憎悪を撒き散らすだけの『概念』と化した。
これではもう、艦娘とか深海棲艦とかは関係ない。生きてすらいない。
「春雨、アンタ……！」
叢雲の表情が歪む。この黒幕からの干渉――同調が、春雨に明確な影響を与え始めていた。
戦闘スタイルである春雨が黒く染まってきている。侵蝕のように塗り潰すのではなく、春雨自身の意志で黒く染めているようなもの。
そもそも春雨の中には溢れた怒りが存在しているのだ。黒幕の憎悪が取り憑く先としては、あまりにも適しすぎていた。その怒りをさらに溢れさせ、この世全てへの憎しみへと書き換え、自らと同じ存在へと昇華しようとしている。
「春雨ちゃん……もしダメそうなら、ちゃんと殺してあげる。手遅れになる前に、黒幕ごと終わらせるから」
吹雪が主砲を春雨に向けた。ここまでの最大の功労者にこんなことをしなくてはいけない悔しさは、表に出すことはなく、ただただ冷酷に現実だけを見て。

「吹雪さん、何を――」
そんな吹雪を見たことで、海風の怒りが爆発しかけるが、吹雪の目を見て考えを改めた。
表には出していなくても、その感情は誰にでも見てわかるものだった。隠しきれない悔しさが滲み出ていた。
しかし、ここでやらねばここまでの苦労が全て水の泡になる。春雨だって、この状況なら死を選ぶ。侵蝕を受けた時に海風も自死を選んだのだから、その気持ちは痛いほどわかった。
だから、吹雪がその汚名を被ろうとしているのは嫌というほど理解出来た。本当なら海風がやるべきことなのかもしれない。しかし、消耗のせいでそれが出来ない。それが本当に悔しくて、海風は涙を流すことしか出来なかった。
「春雨姉さん……春雨姉さんならきっと、きっとそれを覆してくれるはず……ですよね。辿り着く者なんですから……明るい未来に、絶対に、辿り着くんですから」
だから、海風は信じる。春雨の力を。このような絶望的な状況を覆すほどの力を。
今まで全て乗り越えてきたのだから、今回だって乗り越えてくれる。絶対に。

春雨は、頭をグチャグチャに掻き乱す黒幕の感情の奔流に苦しんでいた。肌に突き刺さった核と、盾に染み込んだ核から、地下施設に侵入する際に受けた、黒幕の溢れた感情がさらに叩き込まれるような衝撃。
「私を……貴女にしようとしているんだ……そんな巫山戯たことさせるわけがない……！」
それでも、春雨は耐え続ける。辿り着く者として、導く者として、この最後の戦いを勝利で終わらせるため。
「……だったら、最後の仕上げをここでやるよ。貴女のためにも。終わらせる」

染み込んでくる黒幕の概念は、春雨を確実に書き換えていこうとする。春雨自身も殆ど無意識に自身を黒く染めようとしてしまっている。

流されてしまえば楽になれることは理解している。だが、世界の敵になるだなんて耐えられない。だが、黒幕の概念が春雨に甘く囁いてくる。諦めてしまえと。その怒りに身を任せろと。

だが、その囁きは、春雨にとっては逆効果である。特に怒りに対して語りかけるのは論外。何故なら、その怒りは黒幕に対してのもの。それに靡くわけがないのだ。

故に、ここで仕上げを行なう。春雨がこの戦いが終わったらやろうと思っていたこと。

「この力、貴女にあげるよ。でも、貴女は私の力と一緒に……消えてもらう」

耐えながらも、自身の身体をギュッと抱きしめて、目を瞑る。最後の願い、最後の力。

「私の最後の願い、望みは、この力を捨てること。貴女と一緒に、この世から、消えてしまえ！」

心の底から望んだ。こんな力があったら、この世界は楽しくない。深海棲艦化した春雨は、楽しく生きること。導く者の力は、その世界には邪魔なモノだ。

だから捨てる。だが、捨てるだけでは終わらない。自分と一体化しようとしてくる黒幕という概念諸共、力を捨てる。それでいい。全く後悔はない。

急激に身体から力が抜ける。ここまで自分がこの力に大分依存していたことを理解する。だが、止めることはない。それが春雨の最後の願い。望み通りの答えに辿り着けるのだから、これは絶対に成功する。

矛盾した願いではあるかもしれない。力を捨てるために力を使うということは間違ったことかもしれない。だが、春雨はコレでいいと笑顔になる。

本当に微かに、春雨の耳に断末魔の叫びが聞こえたような気がし

た。導く者の力に絡みついた黒幕の概念は、その力が失われることによって端から霧散していく。この世に留まりたいという最後の望みは、春雨の望みに上書きされて消えていく。
導く者として、黒幕の概念を死へと導く。

「もう、いいでしょ。好き勝手やったんだから」
そして、春雨の持つ力と共に、黒幕の概念も完全に消え去る。同時に、春雨は力尽きるようにその場に倒れた。
力は失われても、自分は失っていない。春雨は春雨のまま、この戦いを終わらせた。
導く者としての最後の力で、この戦いを勝利に導いたのだ。

導かれる者

黒幕は春雨の手によって消え去った。何もかも、一切の残滓もなく。この世から消え去ったことにより、この戦いは終わりを告げる。

だが、それに伴った代償が無いとは言えなかった。最後の黒幕の足掻き、春雨を無理矢理後継者にしようとしたため、春雨はその力を全て失うのと同時に黒幕ごと消した。強大すぎる力を持つ春雨が、その力を失ったのだ。心身共に影響がないわけが無い。

「姉さん……姉さん！　大丈夫ですか！」

消耗している身体を引きずるようにして、何とか春雨の元へと向かう海風。黒幕を消し飛ばしたことで力を失った直後、力尽きるようにその場に倒れてしまっており、海風が声をかけても反応が無かった。

疲れ果てて眠ったというのならまだいい。だが、海風が見る限り、今の春雨はまずいとしか言えない。呼吸はしているが、何処かおかしい。

「姉さん！」

「海風、無理するんじゃないわよ！　アンタだって大分厳しいんでしょうが！」

「私達が確認する。あと、上にいる山風ちゃんと涼風ちゃんもちょっと降りてきて！」

叢雲と吹雪だけでもこの場所から運び出すことは出来るだろうか、そもそもここから動かしていいかもわからない。そのため、まずは周囲に人数を集める。

今この戦場で殆ど無傷に近いのは、ここにいる叢雲と吹雪、そして穴の上で待機していた山風と涼風である。全員多かれ少なかれ消耗はしていても、傷ついていない者となればこの４人であろう。

「山風ちゃんは海風ちゃんに肩を貸してあげて。涼風ちゃんは春雨ちゃんの身体を調べるのを手伝って。妹だから私よりは詳しく見えるかなって」

「合点！　さっきまでとの違いを見りゃあいいんだよね。ならあたいが適任だ！」

穴の端を滑り降りてすぐに駆けつけた２人。山風はフラフラの海風に駆け寄り、涼風は春雨に近寄って触れられそうな場所を触れていく。

核の破片が刺さった二の腕や太腿は致命傷では無いにしても傷だらけであり、それ以外は傷は無くとも消耗が見て取れるくらいに虚ろな瞳。

春雨は意志が失われたかのように目を薄く開いたまま倒れていた。口も半開き。まるで死んでいるように。

「……いや、息は……あるんだよ、な？」

口元に手を置くと、確かに息はしている。だが、それもか細く感じる。すぐにでも止まってしまうのではないかと思えてしまう。それくらい今の春雨は死に瀕しているように見えた。

「死にはしないかもしれないけど、今の春雨ちゃんは何処か抜け殻みたいに見えるんだ。多分……アレだよね、さっきの黒幕との戦いがきっかけで……」

「あたいもそう見えちまう。身体自体はおかしなところは無ぇんだ。だけど、中身が……」

春雨から導く者の力が抜けたということは、今の春雨という存在を構成するモノが失われたということ。深海棲艦としての春雨は、辿り着く者として構築されていたのだから、それがごっそり失われてしまった場合、春雨がどうなるかはわかりやすかった。

その力はこの戦いで導く者としてさらに膨れ上がり、春雨の大半を占めるくらいのモノとなっていた。それこそ、器と中身と言えるほどに。

こうなる前に捨てていたら、こうはなっていなかったかもしれない。だが、ここで黒幕を斃すために力を使って使って使い尽くした。ある意味、燃え尽きてしまったようなものだ。

「姉さん……姉さんは……」

山風に肩を貸してもらいながら春雨の近くまで来ることが出来た海風だったが、その春雨の顔を見た瞬間に心臓が締め付けられるような衝撃を受けた。死んでいないが、死んでいるようなもの。春雨はも

うこのままなのだと感じてしまう。
「嘘……ですよね。春雨姉さんが、あんな黒幕如きにここまでされるだなんて、そんなのあり得ない。今は疲れて眠っているだけでしょう。そうでなくては、そうじゃなきゃ春雨姉さんが報われない。やっと、この長い戦いを終わらせることが出来たのに、そこに春雨姉さんがいないだなんて嘘だ。一番の功労者がこうなるなんて、間違ってる」
　これまで抑え込んでいた感情と言葉が次から次へと溢れ出す。
「姉さん、目を覚ましてください。みんなが姉さんの目覚めを待っています。姉さんのおかげで、みんなが救われたんです。みんなで一緒に帰らないと、この戦いが終わりません。傷を負っていたとしても、辛いことがあったとしても、鎮守府に、自分の居場所に戻って初めて戦いは終わるんです。誰も欠けちゃいけない。ましてや、姉さんが欠けるなんてあっちゃいけない」
　止まらない。海風の言葉は止まらない。言葉と同時に、涙も溢れ出る。
「姉さんが姉姫様に言ったんですよ。誰一人として欠けることなく戻るって。その約束を破っちゃダメです。施設で待っている仲間達もいるんです。姉さんがこの勝利を伝えないでどうするんですか。一番振り回されて、一番苦しんで……もうそんなことも無くなるんです。やっと、やっとですよ。姉さんが姉さんらしく、楽しく生きていけるようになる時が来たんです。またみんなで農作業をしたり漁をしたりしましょう。鎮守府にも戻りましょう。みんなで一緒に、生きていきましょう。だから……戻ってきて……姉さん」
　フラつきながらも、春雨の前に膝をつく。その時には、他の仲間達も春雨の近くまで来ていた。一番重傷を負っているであろう白露も、妹の異変に重い身体を引きずって、血を滴らせながらも、妹の顔を見るために荒い息でココまで来た。
「春雨……アンタが空っぽになってどうするのさ……。姉姫さんみたいに満たされても、それはもうあたし達の知ってるアンタじゃ無くなっちゃうんだよ……。だから、みんなのためにも帰ってきなよ

……」
歯を食いしばり、傷を押さえながら訴える白露。今の春雨は力と共に中身が失われた器。黒幕に中身ごと持っていかれたと言ってもいい。ならば別の何かで満たされてしまう可能性もある。
そうなると、空っぽの姫だった姉姫と同じことになるだろう。本来の在り方から逸脱した存在になる実例があるのだ。それだけは避けたい。
「努力の結果がコレだなんてあんまりだ……春雨姉は何も悪いことしてねぇのに」
「……誰かを犠牲にして勝っても……何も嬉しくない……」
「姉貴がいなくなっちまったら、意味無ぇだろうがよ……」
妹達が次々と春雨に触れる。語りかけても反応が無い。目は開いているのに、息はしているのに、何も答えない。
「姉さん、姉さん、これだけ愛されているのに、戻ってこないなんておかしいですよ。これまで私達をずっと導いてくれたんです。だから、今度は私達が導きます。戻ってこれる道を私達が照らします。私達が灯台になります。だから、こちらに戻ってきてください。誘導しますから」
動かない春雨の手をギュッと握って、溢れる涙を拭うことなく、海風は春雨に向けてその願いを込める。ここにいる仲間達の全員の願いを背に受けて、春雨がここに戻ってこられるための光となる。

春雨は真っ暗な場所にいた。何も見えない。何も聞こえない。何も話せない。何も出来ない。ここが何処かもわからない。
導く者の力ごと黒幕を消し去ったのはいい。これで戦いも終わりだ。しかし、その強大な力が全て失われると同時に、春雨が春雨として成立している重要な部分も一緒に持っていかれてしまった。黒幕の概念がそれを掴んでいるわけではなく、導く者の力がそれだけ春雨を充していたということになる。
――これで戦いも終わり……だよね。

春雨はそんな中でも穏やかな気持ちだった。あの黒幕を斃すことが出来た。二度と自分や仲間達と同じように苦しむ者はいなくなったのだから、それだけでも気分は晴れやかだった。長い戦いは終わり、施設もこれで脅威に脅かされなくなる。

だが、その場所に自分が一緒にいられないことは直感的にわかった。もうその力は失われていても、この直感だけは正解だとわかる。今の自分はもう施設には戻れない。身体はそこにあるとは思うのだが、動かすための力がない。今の自分を伝える言葉も無ければ、みんなの顔を見ることも出来ない。

――ごめんねみんな。でも、みんながこれで幸せになってくれれば、私はコレで良かった。これが私の願い、望み。辿り着けたから。

これも一種の諦めかもしれない。全てが上手く行った。その場所に自分がいなくとも、事件は全て解決したのだ。これが最善だったのはわかっていた。

――ごめんね、海風。でも、こうしないと終わらなかった。あのまま私が黒幕になっていたら、もっと酷いことになっちゃう。だから、これが正しかったんだ。

きっと海風は自分のために泣いてくれているだろう。海風だけじゃない。他のみんなも。だが、何の力もない春雨には、これをどうにかすることは出来ない。自分で望んだことなのだから尚更だ。

これをどうにか出来る者は、この世には存在しない。導く者の力は、この世界の中でも最大級の力。その望みは覆しようがない。

『いえ、正しくありません』

だが、この真っ暗な空間に何者かの声が響く。春雨は驚くことしか出来ない。

『正しくないわね。それは自己満足よ』

2人目の声。何処かで聞いたことがあるような、無いような、そんな声。

『貴女は救われなくてはならない。ちゃんと見てください。貴女の姉妹は泣いていますよ』

『望みを叶える力を持っていたなら、あの子達の最後の望みを叶えて

終わりにしなくちゃいけないわよね』
『貴女に戻ってきてほしいと願っています。叶えずに何が導く者ですか』
見ろと言われたから目を向ける。すると、この真っ暗な場所に一筋の光が差し込んできていた。それが何かわかる。海風の、仲間達の願いの光。自分が目を覚ますことを、心の底から望みの光。
『ほら、その望みを叶えるだけの力は引っ張ってきたから、これを使って目を覚ましなさいな』
声の主に何かを放り投げられたような感覚。米粒ほどの力の塊。それが春雨の中に入り込んだ瞬間、僅かだが力が湧き上がる感覚がした。ほんの少しだけだとしても、それは立ち上がれるだけの力になる。
何も見えなかった目は、うっすらと何かを映す。そこには、見覚えがある2人が立っていた。だが、絶対にここにいるはずのない者。
『貴女はこちら側に来てはいけません。ここから幸せになるのが、貴女の最後の使命です』
『そうそう。これが私達に出来る精一杯。あの子達に呼び出されて、アンタを助けるためにここに立ってるんだから』
この世には覆す者はいない。だが、あの世なら。
海風達の願いがその奇跡を呼び起こしていた。春雨をこちら側に取り戻すため、あちら側からの使者をここに呼び出した。
春雨とは、本当に僅かな繋がりしかない。しかし、その者の命を救うために奮闘し、結果的に無理だったとしても、それを悔やむほどの優しさを見せてくれたのだ。それに報いたい。
たったそれだけのために、この2人は喜んでこの場に現れた。死して概念と化したことで、ここへの干渉が出来るようになっていたのだから。
『さ、最後の望みを強く願って。言わなくてもわかるけどね』
『たった一言でいいのです。その言葉を、強く』
促されて、春雨は呟くように、しかし力強く、その望みを口にした、
――戻りたい。

ただそれだけ。本当にそれだけ。こんな真っ暗な場所から抜け出して、みんなのところへ戻りたい。
その願いは成就する。導く者は最後、導かれる者となった。
『それでいいです。それでは、我々の仕事はこれで終わりですね』
『それじゃあね。瑞鳳と黒潮によろしく言っておいてね』
その2人――不知火と葛城――は、春雨の背中をポンと押して、光が差す先へと押し出した。ここからが生と死の分かれ目。こちら側に来るべきではないと春雨を向こう側に返して、自分達は反対方向に向かって歩き出す。
――はい、必ず伝えます。ありがとうございました。
振り向いたら、もう2人の姿は無かった。前だけを向いていろと言わんばかりに。

そして、春雨の身体がピクリと動き出す。
「姉さん……姉さん！」
海風の声が響く。
「……ごめんね、海風。ただいま」
まだ身体に力は入らなかったが、やんわりとした笑みを浮かべた。

全てが終わり

導く者としての力を放棄し、黒幕諸共この世界から消し去ったことで、春雨はかなり危険な状態となってしまっていたものの、最後の望みが叶ったことによって目を覚ますことが出来た。
「姉さん……よかった、本当によかった……」
「ごめんね海風……ちゃんと戻ってきたから」
先程まで死にかけていたようなモノだったため、海風の感情はグチャグチャ。子供のように泣きじゃくり、春雨にしがみついていた。
春雨への依存で出来ている海風にとって、先程までの春雨は思い出したくも無いくらいのトラウマ。自身が侵蝕されて春雨の敵になっていた時の記憶と同じくらい、海風の心には強く刻まれてしまっている。
「力を捨てたことで、私ごと持っていかれそうになっちゃったみたいでね……さっきまで本当にギリギリだったんだと思う。……でも、海風達が私の辿り着かなくちゃいけない場所を示してくれたんだよね」
海風が力強く頷く。周りの仲間達も笑顔を見せる。海風の『灯台になる』という発言が、春雨の中で実現していたのだ。
春雨がここに戻ってこれたのはそれだけではない。海風を筆頭にした仲間達の願いが、違う奇跡を起こしていた。それが、最後に背中を押してくれた2人の存在。
「……ふふ、ちゃんと黒潮ちゃんと瑞鳳さんに伝えないとなぁ」
「何をですか……？」
「その時に話すよ。でも、みんなのおかげで私は戻ってこれた。本当にありがとう」
春雨の笑顔は、心の底からの満面の笑みだった。寂しさも怒りも溢れていない、純粋な感情からの笑顔。
黒幕を斃し、全ての問題点が失われたことで、負の感情なんて全て消え去った。それ故のこの顔。海風だけでなく、他の者達もほっこりしていた。
「身体に不調はないですか。勿論疲れ切っているとは思います。先程

まで戦っていたわけですし、私達でも出来ない黒幕の消滅まで成し遂げてしまったんですから、何かあってもおかしくないじゃないですか。さっきまでの状態で終わっているのならいいんですが、他にも何かないですか。腕は動かせますか。脚は動かせますか。私の声は聞こえて……いますね、受け答えは出来ていますし。目も見えなくなっているなんてことは無さそうで何よりです。でも、実はもう動かないなんてことは」

「ストップストップ。そこまで酷いことにはなってないから落ち着こうね。傷があるところは痛いけど、そういうのは大丈夫だよ」

海風が止まらなそうだったため、一度ブレーキを掛け、五体満足であることを証明するためにちゃんと四肢を動かした。少し反応が鈍いというか、動きが緩やかではあったものの、それは身体が疲れ切っているのだから仕方ない。

かなりフラつきながらも、その場で立ち上がることは出来た。だが、自力で鎮守府まで戻るのは厳しそうである。肩は海風が貸そうとしたものの、海風自身もかなりキているため、そこは涼風に任せた。海風自身も山風に肩を借りているくらいなのだから、無理をしてはいけない。

「ゆっくり休めば本調子になるよ。というか、私よりも心配しなくちゃいけないヒト達いるよね。特に白露姉さんは」

「ん？　ああ、まだ痛いけど半分は治ってるから気にしなくていいよ」

さっき黒幕に腹を刺された白露だが、既にコレである。最強の治癒能力は伊達ではなかった。

白露はそれでいいかもしれないが、他の者達はボロボロだ。荒潮のように自力で航行すら出来なくなった者もいるし、江風や大鳳のように血を流しすぎている者もいる。死にはしないが、消耗が激しい者がかなり多い。

島の外にいるが、金剛もかなり血を流してしまっているため、黒幕との決戦艦隊は半数以上がまともに航行出来ないのではないかというレベル。

「……何人かはあたしが大発で運ぶよ……戦車隊には少し退いてもら

うけど……」
　傷を負っていない山風が何人かは運べる。戦車隊はそれを搭載している大発動艇を埋め尽くしているわけではないので、何人かは乗ることが出来るだろう。動くことが難しい者はそこに乗るのが一番手っ取り早い。ただ、乗れて3人程度。そこはうまく選択してもらうしかない。重傷者が最優先。
「私は少し島の周りを見てから帰投するよ。これだけやって、まだ黒幕の一部が残ってるとかなったら目も当てられないからね」
「なら私も付き合うわ。あとクズが残ってないことを私の目でも早いところ知っておきたいから」
「ん、ありがとう。2人がかりならすぐに終わるね」
　吹雪は帰投の前に島の確認だけはしていくようだ。核の消滅によって黒幕の要素は島から完全に失われたはずなのだが、ここまでしてもまだ何かしらの影響が残っているというのなら対策まで考えなくてはならない。今すぐここで消せるならいいが、第二第三の黒幕なんてことをされたら困る。
　そのため、まずは警戒を解かずに島の中、周辺を調査し、安全であることをちゃんと確認しておく。吹雪ならば危険なことはないだろうが、1人では時間もかかるだろう。そこで叢雲も便乗する。さっさと終わらせたいという気持ちも無くはない。
「春雨ちゃん達は先に行ってて。そんなに速くいけないだろうし」
「ん、わかった。じゃあ……」
　まだ重い身体ではあるが、気持ちは軽やかだった。達成感から小躍りしたいほどに。喜ぶのはまだ早い。真に戦いが終わるのは、自分の居場所に戻ることが出来たら。
　だから、春雨はとびきり明るい声で、勝利の喜びを仲間達で分かち合うように宣言した。
「帰ろう、みんなのところへ！」

　防波堤として戦っていた者達は、敵の動きが明らかに変わったこと

に気付いていた。無限とも言えるイロハ級の群れの数が減り、融合で泥人形と化す動きが鈍くなったのだ。
　これで確信出来る。黒幕に致命的な何かが起きているのだと。そうでなければ、ここまで途端に勢いが落ちることはない。
「くくく……これは奴らがやってくれたんだろうな。あの黒幕を斃したに違いない……！」
　血塗れではあったが最低限の戦闘を続けていた武蔵が呟く。この戦いの終わりが見えたことで、俄然力が漲ったようである。
「ああもう、無茶しないで武蔵！」
　しかし、興奮するということは出血量が増えるということ。流石にそれは看過されず、側で戦っている大和がいい加減にしろと止める。吹雪もサラトガもここにいない今、戦闘狂の武蔵を止めることが出来るのは、同等の力を持つ大和くらい。コロラドも可能だっただろうが、今は消耗が激しくて動くことも出来なかった。
「こっちは全部終わったみたいよ！」
「潜水艦の反応もおおよそ殲滅し終わったかと」
「増える気配無いぜ。こりゃあついに打ち止めか!?」
　大塚鎮守府からの駆逐艦３人が戦況を確認。増え続けていたイロハ級は完全に止まり、今までと同じ勢いで斃し続けた結果、ついには底を突く。消耗した者を守りながら、不意打ちが無いかを警戒し続けるものの、本当に増えない。
「哨戒機、飛ばしましょうか」
「だね。もう何も無いことを祈るけど」
　千歳と千代田が哨戒機を飛ばし、もう終わったことを確認。少なくとも、今ここからは敵らしき存在は何も見えない。
　そして、水平線の向こう側、黒幕が潜んでいる島の方から、人影が見えた。
「……帰ってきた」
「みんなが帰ってきた！」
　２人の歓喜の叫びに、仲間達も反応。島の方に目を向けると、確かにこちらに向かってくる部隊が見えた。

哨戒機からアレは仲間であると伝えられているため、千歳も千代田も安心するように崩れ落ちた。ここまで必死に粘り続けていたため、疲れもここでピークに。他の者達も、それを知ったことで張っていた気が緩み、その場にへたり込む。
「戻りました。黒幕はもういません。ちゃんと終わらせました」
声が聞こえるくらいにまで近付くことが出来た春雨のこの宣言で、疲れ果てていた仲間達から歓喜の声が上がる。戦いが終わったことへの歓喜もあるが、もうここで戦わなくてもいいという安堵の声にも聞こえた。
「吹雪ちゃんと叢雲ちゃんは、島の周辺調査をしています。それが終わったら、この戦いは完全に終了となるでしょう。警戒はまだ怠らない方がいいですが、流石にもう何もないですよ」
「それはアンタの直感？」
「いいえ、確信です。今の私は、もう直感も利かない普通の存在ですから」
コロラドが怪訝そうな顔をしたものの、元々力を捨てるとは話していたため、ここでそれをやったのだと察した。
今の春雨は何の力もない普通の深海棲艦。導くことも出来なければ、辿り着くことも出来ない。しかし、力を失ったとしても春雨の表情は清々しいものであった。
「全部終わったのね」
「はい。全部終わりました。もう私達を心身共に苦しめる存在は、いません」
それを聞き、そうと息を吐いたコロラドは、より疲れを感じたのかその場に座り込んだ。気を張る必要がなくなり、かつ叢雲もここにいないため、気を抜いたようである。
「そこにいられなかったことが悔しいわね。でも、私の分まで戦ってくれたんでしょ。Ｔｈａｎｋｓ」
「どういたしまして……でいいんですかね」
「いいわよそれで。私も清々したわ」
ここで初めて、コロラドにも笑顔が戻った。戦いは本当におしま

い。ここにいるイロハ級も軒並み排除されたため、静かな海に戻った。
　それから少しして、吹雪と叢雲も合流。勿論、島の周りには何事も無いことを確認出来た。黒幕の痕跡はこれで何も無くなった。
「何も無くてよかったよ。欠片が何処かに逃げ出したとかあったらどうしようかと」
「それなら全部ぶちのめすだけよ」
「はいはい。でも何も無かったのは叢雲ちゃんも見たよね。だったら、もう本当にこれでおしまい」
　これによって、本当に黒幕の痕跡が無くなったことが確定した。
「大和さん、うちの武蔵さんがご迷惑おかけしました。迷惑ついでに、鎮守府まで曳航してもらってもよろしいですか」
「はい、大丈夫です。私も元気いっぱいというわけではありませんが、武蔵を引きずることくらいなら出来ますので」
「おいおい、優しく扱ってくれないか。私も相当貢献したんだがな」
「貢献は評価しますけど、血塗れで脚ガタガタさせてる状態なんですから、素直に言うこと聞いてください。いざという時は気絶させますから」
「今の状態で吹雪のアレを喰らうのはキツいな。はっはは、ならば素直に引きずられるとしよう」
　見た目はアレだがまだまだテンションが高い武蔵に吹雪は溜息を吐く。
「私は島風ちゃんを運ばなくちゃいけませんから。私のせいで脚を壊してしまったようなものですし」
「気にしなくていいのに。でも、脚がダメになっちゃってるのは確かだから、吹雪おねがーい」
　島風も自慢の脚が今は壊れてしまっているため、吹雪に甘えるように抱き着いた。おぶれと言わんばかりである。自立稼働の連装砲ちゃんでは島風を軽く引きずることが限界のようで、流石に鎮守府まで運ぶことは難しい。吹雪もそれを理解しているため、この選択をしていた。

「これで全員ですかね、なら、戻りましょう。勝利を伝えるために」
春雨の言葉に、その場の仲間達が歓声を上げる。疲れ切っていても、勝利は心を癒すものだった。

心穏やかに

黒幕を斃し、傷付いた春雨達は何とか大塚鎮守府へと帰投。流石に自分達の力だけで帰るのは難しいと判断し、鎮守府に連絡を入れて迎えを呼んでいた。こういうこともあろうかと、と鹿島が鎮守府との通信機を持ってきていたのだ。

この戦場に入ってからは黒幕の領域であったため、通信妨害されていた。そのため、どのような状況でも通信なんて出来なかった。だが今なら妨害するようなものは何処にもない。通信も、クリアな音声ですることが出来た。

鎮守府からは、大発動艇が扱える艦娘が数人派遣された。そのおかげで怪我人全員に余計な負担をかけずに運ぶことが出来る。別個体の春雨も、この時には上に羽織るものを持ってきてもらっており、ようやく落ち着けたといえる。

そこからしばらく移動し、ようやく鎮守府が見えてきたというところで、戦場に出ていた者達は本格的に疲れが襲いかかってくる。自力で航行出来た者達も、改めて戦いの終わりを実感したことで、膝から力が抜けるように倒れかけた。

春雨もその中の1人。涼風に肩を借りることでここまで来ることが出来たが、やはり限界を超えていたようである。地下施設を破壊し、命懸けで黒幕を消し飛ばしたのだから無理もない。

「よく戻ってきてくれた。合間合間に鹿島から報告は貰っている。今はまず身体を休めてほしい」

鎮守府に到着すると、大塚提督が入渠ドックや風呂などを準備して待ち構えていた。鹿島が通信機器を持っていたのはこの辺りの時短も兼ねている。効率的に事を進めるのなら、こういった情報を最速で伝えるのがベスト。

黒幕を撃破し、この事件を終わらせたというのに、大塚提督は表情一つ変えずにいつも通りの事後処理に奔走している。

本当ならば、もっと喜びを表に出していてもおかしくないのだが、艦娘達に感情を抑えるように命じている都合上、こういう時もクール

に事を為していくのが大塚提督。こういう大詰めにおかしなことが起きないように慎重に進めていくのが、最高のエンディングに向かえることを理解しているのだ。
「深海棲艦はドックを使えないんだったな。春雨、姉姫にはただ休ませるしかないと聞いているが、それでよかったか」
「はい、それで問題ありません。ゆっくり休めばすぐにではないですが治っていきますので」
今ここにいる中で最も深い傷を負っているのはおそらく白露なのだが、当人が持つ最大級の自然治癒力のおかげで、おそらく誰よりも早く回復する。刃が腹を貫いたというのにである。
そうなると、次に厳しいのは大鳳。斬撃を喰らった傷は浅くなく、今でこそインナーを強めに再展開して止血しているような状態。完治はある程度の時間が必要だろう。
体力の消耗だけならどれだけ危険な状態でも明日には治るが、傷は数日安静にする必要がある。大鳳はそのルートに入った。
「部屋は昨日と同じ場所を使ってくれて構わない。念のため治療のための道具は揃えておいた。姉姫に先んじて聞いておいたからな」
「ありがとうございます。お手数かけます」
「いや、種族の違いを痛感しているところだ。事前に聞いておいたのは正解だった」
とはいえ、事前にしっかり話を聞いており、無事に戻ってこなかった時にするべきことをちゃんと用意している辺りは大塚提督らしい。
やってみればわかることだが、深海棲艦は回復が早い人間みたいなもの。ドックが使えず、傷の治療は人間と同じ手段を使うだけなのだから。
「電、別個体の春雨については任せる。休息もだが、メンタルケアも必要だろう」
「了解なのです。春雨ちゃんはうちの鎮守府に配属で良かったのですか？」
「流れ的にそうなるだろう。わざわざ他の鎮守府に引き渡す必要も無い」

後から説明も入るだろうが、別個体の春雨はそのまま大塚鎮守府所属の艦娘となることが確約された。余程相性が悪ければ他の鎮守府に移籍ということもあるだろうが、大塚鎮守府に限ってそういったことはまず起こらない。
メンタルケアという名の兵器の整備を怠らず、常に最善の状態で維持するという理念がある限り、艦娘がこの環境に文句を言うことはないのだ。堀内鎮守府のような、在り方が違う場所の仲間達を見ても、そちらを羨ましく思うようなことは一切無い。
「では、各々必要な事後処理に専念してくれ。休息が第一だ。パフォーマンスが落ちている状態でまともな思考など出来やしないからな。鹿島、お前も報告は後でいい。まずは身体を休めろ」
「了解しました。では、この戦いの報告は後ほど。他の代表者も選出していただければ」
「ああ、それについても後から聞かせてくれ」
報告は二の次。まずは全員の回復を優先。話を聞く前に他の提督達にも話をするだろうが、詳細については全員に余裕が出来てからとなる。戦場にいたものから直接説明された方がわかりやすい。
「眠るなら風呂に入ってからにしろ。怪我人は応急処置をしてからだ。布団を血塗れにされたら困る。風呂に入れるなら入っておけ。腹が減っているのなら先に補給してから休むんだぞ。空腹は正常な判断を鈍らせるからな」
的確な指示なのだが、それが艦娘を兵器として見ているようには思えない思いやりを感じられるモノであるため、そういうところからも大塚提督に反感を抱く者はいなかった。
あの叢雲ですら、この指示には素直に従うほどだった。

艤装のない部分に受けた傷は軽く処置をした後、食堂で空腹を満たし、しっかりと身体を清めて、与えられた部屋で休息に入る春雨。ここまでの行動で疲れはドッと出てきているが、展開した四肢に軋みなどは無く、五体満足の状態でここまで戻ってこれた。

本当の居場所――施設に戻るのは明日。入渠などもあるため、全員が動けるようになってからここを発ち、堀内鎮守府を経由して施設へと戻る日程。当初の予定通り、２泊３日となる。
「はぁぁ……すごく疲れた……」
部屋に到着するなり、ベッドに倒れ込む春雨。もう気を張る必要もなく、こんな春雨の姿を見る者はそれを知る者しかいないため、力いっぱいダラける。
「お疲れ様でした春雨姉さん。さぞお疲れでしょうし、ゆっくり休んでください。かくいう私も疲れていますが、姉さんほどではありませんから」
海風もその隣に腰掛ける。海風もかなり消耗しているのだが、春雨の側にいる手前、すぐにサポート出来るようにとシャンとしていた。
それを見抜けない春雨ではない。疲れているのに気を張っているだなんて、余計に疲れて最悪体調を崩す。せっかく戦いが終わったのだから、こういう時くらい気を抜かないでどうすると、海風の腕をグッと引っ張って隣に寝かせた。
「ちゃんと寝なくちゃダメだよ。海風だってキツいでしょ。山風に肩を借りてたくらいなんだから」
「……お恥ずかしい限りです。私が姉さんを守らなくてはいけないのに」
「充分守ってもらったよ。海風がいなかったら、私はこっち側に帰ってこれなかったかもしれないんだから」
黒幕を消し飛ばし、その反動で死にかけていた時、ほとんど諦めてしまっていた春雨をこちら側に戻してくれたのは、海風達の願いの光。それが奇跡を呼び、かつて救えなかった２人を使者として顕現させ、最後の光の道標を作り出してくれた。
それが無ければ、春雨は今のように疲れを感じてダラけるようなこともなく、息はしていても目を覚まさない、殆ど植物人間のような存在になっていた可能性が高い。戦いは終わっても誰も救われていないようなもの。
それを救ったのは、海風達の願いの力。それは決して特別な能力と

いうわけではない。一時的に辿り着く者の力を得ていたかもしれないが、それでは起こせない奇跡だ。
　特別な力なんて無くても、心の底から想えば、奇跡を起こせる。その前例を作った。
「海風には感謝してるよ。勿論みんなにも。こうしてまたここにいられるんだからね。本当にありがとう海風」
「そこまで言っていただけるのなら光栄の極みですね。私の命は春雨姉さんのためにあると言っても過言ではありませんから。むしろ、あそこで春雨姉さんを失っていたら、私もどうなっていたかわかりません。以前にも言ったと思いますが、春雨姉さんが命を落としたら、私はおそらく躊躇なく跡を追います。なので、春雨姉さんが生きていてくれれば、私も生きていられます。私の命を救ってくれたようなものです」
　割と過激な発言ではあるのだが、海風としては平常運転。絶望が溢れていたらこんなことにはなっていない。より悪くなっていた。それを知っているからこそ、春雨はこんな海風の言動でも受け入れて、大切な妹として心に強く刻み込んでいる。
「もう辿り着く者でも無くなった私だから、これからはみんなの力をいっぱい借りなくちゃいけないね。直感とか、そういうのも何も無くなっちゃったから」
「ある意味、本当に春雨姉さんに戻ったということだと思います。私が見るに、今の春雨姉さんには溢れた感情がほとんど見受けられません。寂しさも、怒りも」
「……確かに」
　辿り着く者としての力を全て失った時、春雨の発作を起こす原因となる寂しさと怒りも共に失われた。春雨が今の春雨となるために得たものが全て失われたと言うのなら、いいモノも悪いモノも全てが消え去ってもおかしくない。力と共にきっかけが失われるのも間違いではない。
　身体は元に戻らなくとも、精神的なモノがリセットされたと考えれば、春雨は真に艦娘春雨を取り戻したと言える。失ったからこそ、本

当の自分を手に入れた。
「私達は依然として溢れていますが、春雨姉さんはそれをも超越したのでしょう。代償として全ての力を失っていますが、だからといって春雨姉さんが何か別のモノに変わるわけでもありません。だったらこれは喜ばしいことです」
「一度空っぽになりかけたけどね」
「それが活になったのかもしれません。それで元に戻れると言われても、戻ってこれるのは春雨姉さんだけだと思いますが」
クスクスと笑い合う。この戦いが笑い話に出来るようになれば上出来。いい思い出とは到底思えないが、終わったモノとして扱えるのなら良し。
「……もう、心も落ち着いてるね。じゃあ、一眠りしよう。疲れてたら、正常な判断は出来ないからね」
「ですね。今ここでゆっくりさせてもらって、明日に備えましょう。明日は施設に戻れますから」
「だね。そうしたら、この戦いは本当におしまいだ」
四肢を消して、眠る準備をしただけでも、疲れがより襲いかかってきた。だが、これに抗う必要は無い。眠気に任せて、そのまま眠りにつく。

ここまで心穏やかに眠ることが出来るのは、久方ぶりだった。

最後の話し合い

休息していた決戦部隊の面々が目を覚ました時には、外は薄暗くなっていた。それでも充分早い方であり、本当だったらここから翌日まで眠っていてもいいレベルであったのだが、この後にある戦果報告もあるため、なんだかんだでしっかり目を覚ますことが出来た。

それでも一番最後に目を覚ましたのは春雨だったようで、さらには随分と眠そうな表情。ここ最近では見せなかった緩い表情である。

「まだ眠いね……それだけ疲れてたんだなぁ」

「春雨姉さんが疲れていないわけがないですよ。誰が何と言おうと一番の功労者なんですから」

「そう言ってもらえると嬉しいかな」

眠そうに目を擦ると、少しだけ勢いをつけてベッドから起きた。幸いなことに、四肢を展開することにもまともに動くことにも支障はないため、施設での朝のように小さく身体を伸ばしながら立ち上がる。

春雨としても、なんだか久しぶりに心身共にスッキリした気分だった。やはりこれまでは溢れた感情――寂しさと怒りが心の何処かに引っかかっていたため、心の底から真に落ち着いた気分にはどうしてもなれなかったのだろう。そのつっかえが無くなったのだから、清々しくもなる。

とはいえ、少しの間過敏なくらいに反応する直感も失われたため、部屋の前に誰かが来ていようが事前に気付くなんてことはもう出来ない。扉をノックされてビクッと驚くなんてこともとても久しぶりなこと。

『あ、あのー、もう目を覚ましていますか？』

扉越しに聞こえたのは、自分とよく似た声。つまり、別個体の春雨である。大塚鎮守府所属の艦娘となる手続きが終わったようで、艦娘としての初仕事として、今は春雨と海風を呼びに来たようである。

『司令官がお呼びですので、起きていたら、執務室へ来てもらっていいですか？』

「はいはい、大丈夫だよ。ちょうど起きたばかりだから」

扉を開けると、少し縮こまった別個体の春雨がそこに立っていた。当然ながら、ここに所属したので白露型の制服を身に纏って。
昔は自分もこうだったんだと妙な感覚に襲われつつも、先輩として微笑みながらありがとうと礼を言う。対する別個体の春雨は、その場から動けず、愛想笑いを浮かべることしか出来なかった。
「えーっと……うん、まぁ、私達が怖いのはわかるよ。あの戦いの真っ只中で救ったわけだし、いろいろ記憶とかも残っちゃってるんだもんね」
「でも、私達は敵ではありませんから安心してください。仲良くやっていきたいだけです。今でこそ深海棲艦ではありますが、私達は元艦娘ですから」
「い、いえ、あの、怖いとかでは、なくて……」
別個体の春雨はワタワタと手を動かしながら、恐怖を感じているのではという春雨達の言葉を否定する。
黒幕の代弁者として活動させられている時の記憶は器と同様記憶に無いのだが、切り離されてから治療されるまでの僅かな時間は侵蝕された状態であったため、敵意を持っていた。
今はそれも全て失われ、トラウマとして残ってしまっているものの、救ってもらった恩人に恐怖を抱くなんて失礼なことはしない。むしろ逆で、好意的に捉えているくらいである。
なので、この言動は恐怖で震えているわけではなく、緊張で震えているだけ。大好きな芸能人が目の前に現れた時のファンみたいなもの。
「ちゃ、ちゃんと、お礼を言いたくて、私から呼び出しの大役を仰せつかりました。救ってくださって……ありがとう、ございます。はい」
深々とお辞儀。戦場では礼を言う余裕なんてなく、春雨も余裕が無かったため、こうやって面と向かうタイミングすら無かった。だからこそ、こういう互いに落ち着いた時にしっかりと御礼を言っておきたかったとのこと。
「どういたしまして。何事もなくてよかった。後遺症とか残ってないかな」

「は、はい、何事もなく。あの時のことを思い出すと、その、吐き気がしますが……」
どうしてもあの時の経験と記憶がトラウマとして残ってしまっている。今日侵蝕されて今日救われたのだから、今が一番酷いと言える時期。感情を抑えるなど出来る話ではない。
何せ、別個体の春雨は艦娘として生まれたのが昨日という超新人だ。艦娘の心得などがあるわけでもないため、心持ちなどをどうこう言えた話では無かった。
「ああ……それは徐々に慣れていってもらうしかないかな。あんなことを忘れられるくらいに、ここで楽しい体験をすればいいよ。それに、みんなが支えてくれるから、頼れるヒトには頼った方がいいね」
「忌々しいですが私も侵蝕された経験がありますので、相談に乗れるかもしれません。何かありましたら連絡をください」
2人はこれくらいしか助言は出来ない。だが、支えてあげたいという気持ちは本物。今回の事件の被害者のケアは、この事件に関わった者全員でやっていきたいと思っているのだから。
「……ありがとう、ございます、はい」
小さく微笑み、改めてお辞儀した。その表情は何処か嬉しそうで、このほんの少しだけの対話でも満足しているような雰囲気だった。

呼び出しに応じ、別個体の春雨と共に執務室まで来た春雨と海風。そこには既に今回の戦いについての話をするために山風と鹿島、そして吹雪も集まっていた。
比較的無傷であり、最終決戦にも参加した3人。鹿島は別個体の春雨を保護することに奮闘していたが、吹雪は防波堤の戦い――防空巡棲姫との戦いについても詳しい。
「遅くなりました」
「いや、構わない。むしろ無理に起こすことになってしまったか」
「ちょうど目を覚ましたタイミングだったので大丈夫ですよ」
用意された席に最後に腰掛ける。これで全員が揃ったということ

で、いつものタブレットを操作して各所の代表と通信を開始。
「話が出来る者の休息が完了したので、改めて報告をさせてもらおうと思う」
『ええ、先に連絡を貰っているものね。予定通りになるわ』
画面越しに見える全員の表情は何処か明るいように見えた。今までの戦史の中でも屈指の特殊な戦いとなったのだから、それが全て終わったとなれば全員喜ぶのは当たり前のこと。大塚提督はあくまでも表情に出してはいないものの、内心ではホッと安心しているくらいだ。
「金剛と武蔵は現在も入渠中だが、明日には終わる予定になっている。帰投はその後になるが良かっただろうか」
『ああ、問題ないよ。そもそもが明日帰投なんだ。そちらに治療までしてもらってありがたい限りだ』
「これくらいしなければ、うちの鎮守府の仕事が少なすぎるくらいだ。これでもまだ出来ないことがあるんだからな」
その１つが、ショートしてしまったＲＪシステムの修理。最後の戦いで限界を超えた出力をしてしまったことで、ＲＪシステムは龍驤ごと煙を上げてしまった。現在は大塚鎮守府の明石が応急処置をしているものの、その構造は複雑極まりなく、堀内鎮守府の明石でなければどうにも出来ない。通信しながらの処置だとしても、完治は程遠いとのこと。
そのため、今の山風は龍驤を連れてきていなかった。装備を外して工廠で休息させているからである。
「明日、帰投後にそちらに任せる」
『充分だよ』
こんな話が繰り広げられる中、春雨と海風は画面越しの中間棲姫と飛行場姫の姿を見ることが出来たことで、心の底から安心した。
一つ危惧していたのは、黒幕を完全に消滅させることが器である中間棲姫に何かしらの影響を与えないかというところ。黒幕が自ら捨ててておきながら、最後はそれを求めていたという本来の器なのだから、最後の最後に何か遺していくのではという不安は正直あった。

だが、中間棲姫はピンピンしているどころか、出撃前に画面越しに見た時よりも元気にすら思える。悪い繋がりが失われたことで、悪い影響ではなくいい影響を与えたのかもしれない。
『春雨ちゃん、海風ちゃん、無事で良かったわぁ』
「はい、姉姫様。私も海風も、みんなも、誰も失うことなく戦いを終えることが出来ました。どうしても怪我はしてしまいますが、命に別状はありません」
『それなら一安心ねぇ。でも、気をつけてねぇ。大事に至ってなくても、もしかしたら後々……なんてことがあったら悲しいもの』
心の底から安心している中間棲姫の表情に、春雨も海風もほっこりした。農作業などをしていた時の本来の中間棲姫が取り戻されたと思えて、本当に平和を取り戻すことが出来たのだと実感した。
「では、戦場にいた者本人から話をしてもらう。我々は黒幕を撃破したこと以外はまだわからないのだからな」
『一番詳しいのは春雨になるのかしら』
「私が詳しいのは結末だけだと思います。みんなの話を統合して知っていただければ」
ここからは本題。戦場で何があったのか、どう決着をつけたのか。それをここにいる者達に知ってもらう。
『なら議事録は俺が取りましょうかね。諜報班としても、そこの情報はしっかりと押さえておきたいので』
『そうね。戦いが終わったとはいえ、まだ何があるかわからないもの。吹雪がある程度島の周りを調べてくれたみたいだけど、また調査には行ってもらうつもりよ』
『ですね。そういう仕事なら、諜報班の出番でしょうな。お任せください大将殿』
『……何処か軽いのよね……』
後日、黒幕が拠点にしていた島を再調査するとのこと。用心するに越したことはない。
完全に消滅したと思っていても、何かしらの欠片が残っていたら、何が起こるかわからない。そのため、山寺提督もしっかり準備をして

から調査を進める。
「それでは話しますね。この戦いで起きたことを」
ここからはありのままを話していく。どんな戦いが繰り広げられたのか、どんな敵が現れたのか、どんな結末を迎えたのか。
それには今まで培ってきた戦術などが通用するところもあれば、奇跡の産物が無ければ突破出来なかったところもある。
嘘偽りなく全てを包み隠さず説明していくと、提督達の表情は二転三転する。異常すぎる黒幕の特性は、これまでの戦いを完全に引っくり返すレベルのモノ。対策を練るのも難しく、むしろ今は辿り着く者も存在しない。
奇跡は二度と起きない。だが、起こす必要はない。もう黒幕はいないのだから。
『聞けば聞くほど、とんでもない敵だったのだと実感する。だが、勝利することが出来たのだから、ひとまずは安心していいんだろう』
『俺としては不安が残っていないとは思ってないんだがね。だから諜報部隊が島を調査するわけだけど』
『安心だけはしておいていいわ。その安心を確実にするために動いてもらうんだもの』
溜息が出るほどの戦い。これまでの深海棲艦とは一線どころか二線も三線も画しており、もう深海棲艦とすら言えない存在である。砲雷撃戦だけでは確実に勝てなかった。だからといって、搦め手だけでも終わらせることは出来ない。
もうそんな戦いが無いとは言えないだろう。一度そういう敵が現れたのなら、二度目三度目が現れてもおかしくはないのだ。だからこそ、この戦いを念の為ノウハウとして残しておく必要がある。
念には念をというのは人間の知恵だ。故に、用心し続ける。二度とこんなことが起きないように。
『でも、戦いはおしまい。今回の件で、私達もいろいろなことを学ぶことが出来たわ。少なくとも、戦う必要のない深海棲艦の存在を知ることが出来た』
大将の言葉に、姉妹姫が笑顔を見せる。

『ここからはこちらでも動くわ。信用に足る深海棲艦であることは確定しているんだもの。より共存に向けて動けるように、改革を進めていく。姉姫、それで良かったかしら』
『ええ、大丈夫よぉ。鎮守府に戻りたいという子もいると思うもの。残ってくれるなら居場所は提供するし、望みを叶えたいのなら応援もする。みんなの思いに沿えるように進めてくれればいいわぁ』
この戦いが、施設のこれからに繋がる。勿論、平和的な方向へ。

改めて、この戦いが終わったと実感出来る話し合いだった。終始和やかに終わり、絆はより強く結ばれる。

ただいま

翌日は朝から帰投の準備で大忙し。長い入渠と言われていた金剛も武蔵も、朝には治療が終わっており、食べられなかった夕食の分を取り戻すようにモリモリと朝食を食べていたくらいである。

基本的には全員消耗が完治しており、十全の体力で堀内鎮守府へと戻ることが出来そうだった。

唯一懸念点だったのが、入渠ドックが使えず、浅くない傷を負ってしまった大鳳だが、この時には傷は半分以上は治っていた。帰投の時にも激しい動きさえしなければ問題なく、いざという時は山風の戦車隊が搭載された大発動艇を使わせてもらえれば問題なし。

「出向任務、ご苦労だった。我々だけではアレは対処出来なかっただろう」

準備をしつつも、大塚提督が最後に労いの言葉をかけた。

黒幕の拠点に最も近い場所にある鎮守府ということで、決着がつくまでは緊張感もあったであろう大塚鎮守府。ここの力だけでは対処することも出来ず、調査はしても独断で攻め込むということは、１００％敗北を喫することがわかっていたため、援軍を待たざるを得なかった。

しかし、これでもう緊張しなくても良くなる。艦娘達のメンタルにも余計な負荷はかかることが無くなるし、本来の業務から外れた調査に人員を割かなくて済む。

合理的に考えても、黒幕の存在は目の上のたんこぶだったわけだが、それが失われたのは非常に大きい。大半の者のメンタルにダメージを与えられてしまったが、それはまだ乗り越えられることだ。

「これまでは戦友としてだが、これからは共存を望む者として、お前達とは付き合っていくことになる。まだどうなるかわからないが、我が鎮守府に加わりたいということなら、いくらでも門を開いておこう。……まずは古鷹だがな」

名前を出されて、ピクリと反応する古鷹。

「可能でしたら、私もこの鎮守府に戻ろうと思っています。そうでな

くても、またここに来させてください。手続きは必要でしょうが」
「ああ、前にも言ったが、お前の居場所は残してある。だから、戻りたい時に戻ればいい。大本営の考えに口出しは出来ないがな」
「はい、そこは気長に待つことにします」
古鷹も清々しい顔だった。自分が深海棲艦となってしまっていても、この鎮守府は自分を捨てていない。戦いが終わったことで、ここに戻るという目的も実現しそうなのだ。嬉しくないわけがない。
「……あの、深海棲艦の私」
最後にここを去る前にと別個体の春雨が前に出る。
「また、会えますか」
純粋な質問。昨晩も話せるだけ話したりしたが、それだけでは足りないようだ。春雨同士というあまり無い光景ではあるのだが、別個体の春雨は、完全に懐いていると言える。
春雨はクスリと笑いながら手を差し出した。義腕ではあるが、それは非常に温かなモノ。
「勿論。私がここまで来ることは難しいかもしれないけど、今生の別れではないならね。それに、何かあったら相談に乗るって言ったでしょう。直接じゃなくても、通信とかでもいいから、また話そうね」
「はい……っ」
別個体の春雨もその手を両手で掴み、力強く握手をした。むしろ別個体の春雨自身が施設まで向かえるくらいに成長してしまえばいい。
この後、鹿島の遠洋練習航海の航路に、施設のある島を経由するルートが含まれることになるのは、また別の話。

大塚鎮守府からの帰投は順調に進む。こういう時には敵対する者も現れない、実に静かな海。まるで海そのものがこの戦いの終わりを祝福してくれているようにすら思えた。
風もほとんど無く、天気も良すぎるくらいに良い。ピクニック日和とも思えるほど。
「あ、見えてきましたね」

堀内鎮守府が見えてくるところまで来て、春雨が声を上げる。そこには、もう既に五月雨や大淀が待ち構えていることが遠目にもわかった。
「残ってる連中総出で待ってるわよアレ。やたら大人数感知出来るわ」
溜息を吐く叢雲。よく見ると確かに五月雨と大淀だけでなく、提督と大将の他、ここにいるであろう者達が全員そこにいた。
大塚鎮守府を発った後に連絡は行っているはずなので、タイミングを合わせて出迎えに出たようだが、どう見てもかなりの人数がいるのがわかる。防衛線に参加していた者達も今は鎮守府に戻っているため、その全員が決戦に参加した者達の帰投を今か今かと待っていたようだ。
水平線の向こう側に春雨達が確認出来たか、数人はこちらに向けて手を振り始めた。誰一人欠けていないことも確認出来るだろう。春雨も逆に手を振りかえす。
「みんな、お帰り！」
真っ先にその言葉を出したのは、居ても立っても居られずに工廠から飛び出してきた五月雨である。
姉妹の中で自分だけが鎮守府の防衛を任されたことで、ずっとハラハラしていた。だが、もうありったけの感情を出してもいい。全部終わったことを、姉妹と喜んでもいい。
故に、真っ先に突っ込んできた。そして、ちょうどいいところでこけた。
「おぶぅっ!?」
五月雨の頭は見事に白露の鳩尾を抉り、ゴロゴロと転がる。ちょうどそこは黒幕との戦いで負傷した場所だったが、白露の特性のおかげで完治済み。もし他の者だったら傷が開いていた。
とはいえ白露は五月雨の姉。こうなることも少し予想していた。それでもまともにぶち当たる辺りは、五月雨のドジの技量が高すぎる。
「さ、五月雨、落ち着こうね。お姉ちゃんじゃなかったら大変なことに

なってたよ」
「ご、ごめんなさーい！」
部隊は笑いに包まれて、和やかな雰囲気に。こんな穏やかな時間をこの鎮守府で過ごすのも久しぶりに感じた。
そのまま工廠に入ると、叢雲が感知していた通り全員で揃っていた。施設を防衛してくれていた部隊も共に。
「よく無事に戻ってきてくれた。誰も欠けていないことが一番の勝利だ」
「辛く苦しい戦いだったでしょう。でも、これでもう終わりよ。よく頑張ってくれたわ」
提督と大将も非常に穏やかな表情。ここ最近の心労続きで表情も重かったものだが、それから解放されてスッキリした表情である。画面越しでもそうだったが、直に見るとよりそれがわかるもの。
だが、大将に関しては戦いはここからになる。人間と艦娘と穏健派の深海棲艦、三種族の共存が可能であるとわかった今、その先駆けとして、施設との交流をより深めていく必要がある。
誰をも納得させられるように、まずは施設の者達の信頼性を伝え、そこから一部の元艦娘達を鎮守府に戻したり派遣したりと、あらゆる手段を考えている。受け入れられるまでは時間がかかるだろうが、姉姫達の平和を脅かすようなことがないように、大将が矢面に立って進めていくと決意していた。
「時間はまだあるが、どうする。少し休んでいくかい？　それとも」
「……名残惜しさはありますが、まずは施設に戻ります。ここにはまた来れますし、今の私達の居場所は施設ですから」
施設組の代表として春雨が答える。勿論、鎮守府にもう少し滞在したいという気持ちは強い。だが、ここに居続けると帰れなくなってしまいそうだった。だから、まずは施設に向かう。
身体を休めなくてはいけないほど消耗が激しいわけでもないし、朝食もそれなりに食べているため間食が必要というわけでもない。叢雲は大塚鎮守府から間食のためのお菓子を貰ってきているため問題なし。

「また後日、改めてここに来てもいいですか。ここの所属に戻ることはまだまだ難しいとは思いますが、遊びに……というのは聞こえが悪いか、たまに顔を見せに来るのは大丈夫、ですよね？」
「ええ、自由にというのも少し難しいかもしれないけれど、貴女達は１００％の信頼を勝ち取っている特別な深海棲艦だもの。許可も二つ返事で取れるわ。事後承諾でも行けるでしょうね。私がそれを許可してあげるわ」
　大将のお墨付きもついたため、晴れて堀内鎮守府と施設は公然とした付き合いが可能になった。今までの秘密裏な交流も罪になんてなるわけがない。これが勝利の鍵なのだから。
　大本営も頭が柔らかい者ばかりであることが幸いした。使えるものは使う。無益な争いは避けたい。共に生きていけるのならば受け入れる。これに反発が出なかったのは、奇跡に近いだろう。
　勿論、大本営ではないところで反発はあるかもしれない。深海棲艦に恨みを持つ者がいないわけがないのだから。それを納得させることが、大将は自分の仕事だと感じている。
「どうしても貴女達は特別扱いとなってしまうけれど、これをこの世界にいる全ての穏健派に適用出来るように尽力していくつもり。そういう意味では、この戦いの一番の収穫は、姉姫達と出会えたことね。これで確実に戦いを早く終わらせられるんだもの。これも辿り着く者のおかげだったかもしれないわね」
「あはは、どうなんでしょう。もうその力を持っていない私にはわかりませんが、そうだったとしたら嬉しいですね」
　施設に辿り着けたのも辿り着く者の力のおかげかもと言われたら、春雨も少し恥ずかしく感じた。
「さぁ、それならまずは施設に戻ってあげなさい。我々は君達がまたここに来てくれる時を待っているよ。いつでもいいからね」
「はい、ありがとうございます」
　深くお辞儀して、施設組はそのまま鎮守府から施設へと向かう。
　その背中を追いながら、堀内提督はホッと胸を撫で下ろした。春雨が自分の知っている春雨に戻っていることがわかったから。

溢れた寂しさと怒りも失われ、精神的にも落ち着きを取り戻している春雨に、安心と同時に喜びもあった。

施設への航路も、とても久しぶりに思えた。たった2日離れていただけでも恋しくなるくらいに。

本来の居場所は鎮守府なのだろう。だが、施設もかけがえのない場所。第二の居場所であり、深海棲艦化してからの故郷と言っても過言ではない。

「画面越しでも元気そうに見えたから、大丈夫だよね」

「ですね。姉姫様も妹姫様も、みんな帰りを待っていますよ」

少しだけ足が速くなった。平和になった施設に戻るため。

すると、空に1機の哨戒機が飛んできた。これまでもよく見た、飛行場姫の哨戒機。

鎮守府から連絡を受けて、先んじて飛ばしてきてくれたのだろう。哨戒機からも、今か今かと待ち望んでいた雰囲気が見えた。

「妹姫様の哨戒機だ。もうそろそろだね」

水平線の向こう側に小さく島が見え始める。もうすぐそこにある。そう思うと気が逸る。

でも落ち着いて。心穏やかに。せっかく平和になったのだから、最後の最後におかしなことが起きてもらいたくない。

そして、見えた。施設のみんなが出迎えてくれているのが。欠員は誰一人いない。防衛戦で怪我を負った者達も、今や殆ど完治している状態。抵抗なくそこにいる。

だから、春雨は見えたところで叫ぶ。

「ただいま！」

お墨付き

「春雨達の姿を哨戒機が捉えたわ。そろそろ着くわね」
哨戒機を飛ばしている飛行場姫が、隣の中間棲姫に伝える。見た感じ、誰も傷付いていないと聞いたら、中間棲姫も安堵の笑みを浮かべた。実際は大鳳がまだ完治していない傷を負っているのだが、それでもフラつくことなく施設に戻ってきていることが嬉しくて仕方ない。
こちらに向かっているというのは、既に堀内提督からの通信で聞いている。だから頃合いを見てみんなで外に出てきた。防衛戦で深い傷を負った松竹姉妹やリシュリューも、2日も経てば殆ど完治に近いくらいになっている。多少は痛みを感じながらも、平和を取り戻した仲間、戦友の帰投を見るため、誰もが島の岸までやってきていた。
「いてて……まだ痛みは残ってんな……見た目は治ってっけど」
「竹、あまり無理しちゃダメよ。いくら治るのが早いって言っても、私達は結構な大怪我だったんだから」
「だな……まだ骨が軋むような感覚があるぜ」
ボヤきながらも岸にはやってきた松竹姉妹。防衛戦でここまで苦しめられたのだ。それを指揮していた黒幕を討ち倒した英雄の帰還をその目で見たかったというのもある。
他の者も、同じような気持ち。先日の防衛戦で散々な目に遭わされた欧州姫2人の指揮官を斃した仲間達なのだ。すぐにでも労いたいと全員駆け付けている。
「見えて、きましたね」
「ええ、みんな元気そうよ」
目がいいコマンダン・テストと戦艦棲姫が春雨達の姿を捉えた。あちらからも水平線の向こうに島が見え始めた頃だろう。先頭は春雨と海風。その後ろから決戦に向かった仲間達が誰一人欠けることなく帰ってきている。
そんな姿を見ることが出来て、中間棲姫は感無量だった。送り出すとき、握手なんてしたら握って離さないかもしれないと思ってハイタッチにしたくらいだ。そんな仲間達が戻ってきた。それだけでも、

中間棲姫には強い喜びになる。
「ただいま！」
そして、こんなことを言われてしまったら心の防波堤が決壊してしまう。良かった、本当に良かったと、思わず涙ぐんでしまうほどに。
「おかえりなさい、みんな。よく帰ってきてくれたわぁ」
「ああもうお姉、早い早い」
まだ声が届いただけで、誰も島に到着していない。だから泣くのは早いと飛行場姫が苦笑する。感慨深いのは理解出来るが。
少しして、春雨達が島まで到着。その時には、もう中間棲姫は感極まって涙を流しているほどに。
「あ、あれ、姉姫様、どうかしましたか？」
「みんなが無事に帰ってきてくれたことが嬉しいみたいよ。遠征に行ったり旅に出たりするのとは訳が違うもの」
「そうですか……。姉姫様、みんなでここに戻ってこれました。全員無事です。誰も欠けていません。平和を、取り戻してきました」
貰い泣きしかけたが、その前にこれだけは言わなくてはいけなかった。平和を取り戻してきたと。
もうこの施設が悪意に襲われるようなことはない。この施設が戦場になることも、ここにいる者達が傷付くこともない。不安になるようなことは無いのだ。
「ええ、ええ、本当にありがとうみんな。正直ね、ずっと不安だったのよぉ。もしみんなが戻ってこなかったらどうしようって。私の中身がみんなの命を奪ってしまったらって。でも、やってくれると信じてたわ。だから、戻ってきてくれたのが本当に、本当に嬉しくて」
話せば話すほど涙が零れ落ちる。嬉し涙なら否定する必要もない。むしろ、それによって耐えられなくなった。春雨は見事に貰い泣き。他の者も一部は涙目に。
こんなにいい方向に取り乱す中間棲姫を見た者はいない。嬉し涙なんて流したこともないくらいだろう。それが出てきてしまったのだから、この空間を揺さぶるほどになってしまった。
「はい、はい、みんなで戻ってきました。もう怖いことも辛いこともあ

りません。本当に、本当に終わりなんです」
今度はハイタッチではない。手を取り、その感触を伝える。義腕であろうとも、それは生きている証だ。
これがきっかけになって、中間棲姫は子供のように泣き出してしまった。だが、それを止めようとする者は誰一人としていなかった。嬉し涙を止める理由なんて無い。

その後、中間棲姫が落ち着いたことで全員で施設内へ。今日は平和を取り戻したお祝いだと、施設屈指の料理人達が腕に縒りをかけて作るとのこと。食材の在庫を二の次にして、戦いの終わりを喜ぼうという粋な計らい。
決戦も防衛戦もみんなで頑張ったからこそ、この平和を掴み取ることが出来たのだ。1日、夕食の時くらいは、羽目を外してもバチは当たらない。
そしてその結果が、殆どどんちゃん騒ぎである。平和を実感するために何も考えることなく跡片付けも翌日に回して好き勝手食べて飲んで笑い合う。
ただそれだけでも、この島の居心地の良さを享受出来た。こんなことを毎日するようなことは無いが、こういうことが出来るという事実が心に平穏を齎す。
「たまにはこういうのも良いわねぇ……」
祭りの後、時間としてはそろそろ眠る時間。まだ片付いていないダイニングを眺めながら、中間棲姫は呟いた。
この施設を作り出してからもうそれなりに長く時間は経っているが、ここまで大人数で盛大に飲み食いをしたことなんて無かった。この戦いの中で人数が次々と増え、今では春雨が所属した時と比べれば倍以上に増えている。それに、外の者との付き合いまで増えたのだ。交友関係が比べ物にならないほどに拡張された。
これまではその者達とも戦いを終わらせるための付き合いしか出来なかった。だが、これからは違う。単純に仲良くするため。あちら

からしてみれば生態調査の一環かもしれないが、間違いなく仲間として施設のことを尊重してくれる。余所余所しくもない、娯楽としての付き合いもすぐそこにある。
「あ、姉姫様、まだ起きていたんですね」
そこに春雨と海風がやってくる。寝付けないというわけではなく、眠る前にお茶でも飲むかと2人で来たとのこと。
「ええ、でも私もそろそろ寝るわぁ。明日からは普通の……平和な島の生活を再開するんだもの」
「ですね。久しぶりに農作業をすることになります。今から楽しみだったりするんです」
「ここ最近は戦いに明け暮れていましたし、また平穏に畑を耕すのもいいですね。春雨姉さんは大丈夫だと思いますが、私は勘が鈍っていないか心配です」
クスクス笑いながら明日のことを話すというのも、なんだか久しぶりの感覚。いつ襲われてもおかしくなく、実際に深夜に襲撃されているために夜に哨戒をするなんてこともう必要ない。夜は全員揃って寝る時間と出来る。
勿論、本当にそんな毎日が続くかどうかはわからない。だが、今は確実に平和だ。なら、短い時間だろうがこれから永遠に続こうが、一日一日を噛み締めるように過ごしていく。
奇しくも、この戦いを終わらせたことで、今までの平和が本当に貴重なモノであることを理解出来た。故に、これからの毎日をより充実したモノにしたいという欲も出てくる。
「春雨ちゃん達は、許可が貰えたら鎮守府に戻るのかしらぁ？」
これは以前から話していたこと。最初こそそれは絶望的な望みだったかもしれないが、今ならばそう遠くない未来に実現する話。
春雨はほんの少しだけ考えた後、はいと深く頷いた。海風も同様に。
「私は艦娘であり深海棲艦です。艦娘としての故郷はあちらですから、戻りたいという気持ちは強いですね。不可能でなくなった今なら尚更」

「そうよねぇ。なら、それまでの時間はここで楽しく生きてちょうだいねぇ」
「はい、ありがとうございます。深海棲艦としての故郷は確実にこちらですから、度々里帰りさせてください。畑も作りたいですし」
春雨としては、もうどちらも故郷になっている。鎮守府にいたいという気持ちと、施設にいたいという気持ちは、どうしても出てきてしまう。
だが、春雨の身体は1つしかない。どちらを取るかと言われれば、そこはやはり鎮守府を取ってしまう。そちらには心を落ち着かせてくれた姉妹もいるし、かつての仲間達が何人もいる。だから、そこに戻りたい。
勿論、そうしたことで施設との繋がりが切れるわけではないのだ。度々ここに訪れることも出来るはず。鎮守府に所属したらそこから二度と外に出られないなんてことはないのだから。
「畑の方はちゃんと私達が管理しておくから、もし全部やりきれなかったとしても安心してちょうだいねぇ。春雨ちゃんがしたいことをすればいいわぁ」
「ありがとうございます。本当に、私はここに流れ着いて良かった」
死を実感し、寂しさが溢れて繭となり、ここに保護された。それはもう運が良かったとしか言えない。そのおかげでここまで優しい深海棲艦がいることを知り、また失われたと思われたモノも全て取り戻した。
感謝しか出てこない。それこそ、溢れ出してしまいそうなくらいに。
「ところで、そこでずっと見ているだけのつもりかしらぁ？」
「えっ」
中間棲姫の言葉に驚く春雨。すると、ダイニングの扉の向こうから『観測者』が現れた。もう直感も利かない春雨は、そこにいることすら気付かなかった。
思わず海風は春雨の前に躍り出て盾となろうとするが、流石に『観測者』がこの場で春雨をどうこうしようとするだなんて思えない。咄

嗟ではあったが、海風はすぐに引いた。
「彼女に話があってね」
「でしょうねぇ。せっかくだから夕食に来てくれても良かったのに」
「私は中立の者だ。そこまで世話になるわけにはいかないよ」
　相変わらず定義がわからない中立だが、『観測者』には『観測者』のルールがあるのだから何も言えたことではなかった。
「それで、私に話というのは……」
「君の戦い、見させてもらった。その力を失うその瞬間もね」
　元々春雨は『観測者』の監視対象。悪用すれば世界をひっくり返すことが出来るほどの力を持ってしまったのだから、そうなっても仕方ない。だが、春雨は『観測者』に対してはっきりと、戦いが終わったら力を捨てると言い切った。そして、それは黒幕を消し飛ばすというカタチで実現し、今や何の力もない普通の深海棲艦になっている。
「契約は満了と言ってもいいだろう。君への監視は、あの時を以て終わりだ」
「はい、今までお世話になりました」
「世話をしたつもりは無いが、どういたしましてと言っておこう」
　ふっと笑みを浮かべる『観測者』。
「君は晴れて、世界を揺るがす力を持たない、いわば平々凡々の存在へと昇華した。脅威でもなければ、摂理を脅かすこともない、楽しく生きることを定め付けられた1人の存在だ。溢れを完全に克服するというのは私も初めて観測した事象なのだが、最後に辿り着いた場所がそこだったということならば、全て納得出来る」
　長く世界を観測し続けた『観測者』といえど、今回の春雨の力の変動、そして消失と共に壊れていた心すら修復されるという現象は、ここで初めて見たとのこと。
　それほどまでに強い力だったというのもあるが、それが失われる際に発生した力は、今まで見てきた中でも最上位に位置する力だったとも語る。
「本来ならば、君の力が失われることであのようなことか起きることは無かった」

「そう、なんですか？」
「ああ。代償として数日眠り続けるくらいになると予測していたよ。だが、あの場で君の力は強くなりすぎた。自分のみが辿り着く力が、他者を導く者となったんだ。それは世界という単位で見ても屈指の力。失った時の代償は計り知れなくなってしまった。結果がアレだ」
だが、と『観測者』は続ける。あの時に起きた力は、春雨だけの力では無いと。
「あの場にいた全ての者の力が集約した。その結果、奇跡が起きた。アレは、私も初めて見たよ。君は、本当に仲間に愛されているようだ。そうで無ければあんな奇跡は起こらない。起こりようがない。あの時だけは、摂理が完全に無効化されていた」
かつて救えなかった者の声が聞こえ、背中を押された。最後に辿り着かなければならない場所を照らし続けてくれた。それは、春雨だけの力では起こり得ない力。
力を持つ者持たない者全ての思いが結集した、因果すら捻じ曲げる奇跡。それは『観測者』すら予測出来なかったモノ。
故に、中立が崩れたと言ってもいいのだが、監視も何も出来ない。制御も何もない。だから、『観測者』もお手上げだ。
「私にもどうにも出来ないものがあると理解したよ。だから、君達には監視も何もない。世界の摂理を覆すようなことは無い。これまで通り、楽しく生きてくれたまえ」
「はい、ありがとうございました」

『観測者』からのお墨付きも出た。春雨達はこれから、自由に楽しく生きていく。

満たされた姫と賑やかな艦娘

黒幕との戦いが終わったことで、施設は平和を取り戻した。祝勝会の翌日からは通常営業……とはいかず、全員が丸一日をのんべんだらりと過ごすことになった。

ほとんど完治しているとはいえ、松竹姉妹や大鳳のようにまだ本調子とは言えない者達もそれなりにいる。ならば、一度全員でゆっくりして、全員が本調子に戻った後にこの施設での平和な生活を再開すればいい。

そう提案したのは、他ならぬ主人、中間棲姫である。主人がそう決めたのならば、誰も逆らわない。むしろ、逆らうなんて考えないような内容である。

「私と空母は近々旅に出ようと思うわ」

全員が集まる場で今日の方針を決めた後、戦艦棲姫が話し出す。本来の生活に戻るということは、本来の在り方に戻るということ。

戦艦棲姫の本質は旅人。今は施設を守るために力を貸してくれているだけで、実際はここからまた旅に出ようとしていた。それが先送り先送りとなって、ようやく今からそこに戻る。

「すぐとは言わなくても、なるべく早くになるわね。空母にもう少し外のことを教えてから向かう方がいいと思うし」

「ああ、まだ、話はしてほしい。陸では、どう、振る舞えばいい、か」

「そうね。ファッションに関してはいいとして、それ以外はもう少し知識があった方がいいでしょう。今日は勉強会でもしておこうかしらね」

「楽しみ、だ」

この2人も随分と仲良くなったものである。戦艦棲姫からの話を興味津々に聞き、『知る』という楽しみを覚えたことによって、自然と旅人としての気質を手に入れている。旅に出ると聞いて明らかに表情が変わったのは、誰が見てもわかるほど。

「Ｒｉｃｈｅｌｉｅｕ達はまだＥｘｐ（遠）・ｄｉｔｉｏｎ（征）に行けそうにないわね」

「持って行く物が、ありませんからね」
　平和になったのだからまた陸に遠征に向かいたいリシュリューやコマンダン・テストなのだが、作物がまだ育っていないことを考えると、いつもの場所に向かうのは難しい。売り物が無いのだから、お金を稼ぐことは出来ない。
　なるべく早く育つ物を植えているのだが、少なくともあと1ヶ月以上はかかるだろう。その間はどうしても足止めになってしまう。
　道の駅で何か言われたら、自分達の拠点が深海棲艦の被害を受けてしまったと言い訳をするらしい。一応間違いでは無いので、嘘をつくという罪悪感もない。
「明日からは畑の拡張でもいいわねぇ。これだけ人数がいるんだもの。売るためのものと一緒に、自分達で食べるものも作っておきたいから、いっそ拡げちゃいましょうかぁ」
「場所はまだまだあるものね。それこそ、人数を使って耕せばすぐでしょ。確かコロラドは艤装でガリガリ行けたわよね」
「Ｙｅｓ．　任せてちょうだい」
　売り物を増やすという意味でも、明日からの農作業は少々ハードになりそうである。だが、当初と比べれば人手も増えているのだから、その作業だって軽々と終わらせるだろう。
「ええやん、野菜育てんの。うちも楽しませてもらおかな」
「上から水を撒くとかなら、艦載機を使ってバーッてやれないかな。畑を拡げるならそういうのも必要かも」
「そりゃあええアイデアや。瑞鳳はん、それやってみよ」
　この施設の中では一番の新人である黒潮と瑞鳳も、自給自足のための作業と聞いてやる気は出ている。もう戦うことがないというのなら、そういうことに精を出すのもいいと考えられるくらいに余裕があるのは確かだ。
　２人の心臓に寄生している忌雷も歯をカチカチと鳴らしながら同調した。忌雷ももう立派な施設の一員。一部触手を伸ばして作業の手伝いが出来るほど。
「潮も、もう自分の身を守る特訓は必要無くなるわね。これから何を

したい？」
飛行場姫に問われて、ビクッと震えた後、少し考える素振りを見せる。いきなり聞かれてもすぐには答えられない。
とはいえ、今の施設には潮に恐怖を与えるものは存在しない。襲撃なども無いのだから、いくら潮でも心穏やかに過ごすことが出来るだろう。
「そ、その……じゃあ、妹姫さんの……料理の技術を……学んでみたい……なんて」
「いいわよ。リシュコマが遠征行ってる間はどうしても料理人が減るから、出来る子が増えるのは私としてもありがたいのよ。細かいことから大袈裟なことまで全部教えてあげるわ。最後はマグロの解体まで出来るようにさせてあげる」
「か、解体、ですか……!?」
流石に潮もそれは耳を疑ったが、事実なので誰も否定しない。
「大丈夫、潮なら出来る」
「覚えがいい潮だから、何も問題ない」
潜水艦姉妹からの応援もあって、潮は頑張ろうと小さく決意していた。恐怖の払拭は出来ずとも、前を向くことをこの戦いで覚えたのだから。
一度覚えたことを忘れない潮ならば、あの戦いで学んだことも忘れない。生きていくほどに、潮は心身共に強くなる。
「それじゃあ、今日はのんびりするということで、みんなよろしくお願いねぇ」
ここまで来たら、もう満場一致。戦いが終わった翌日なのだから、今日は平和を全力で満喫するのが仕事だ。

丸一日、平和を満喫するために使おうということになった時、春雨は今だからこそと思って提案したことがあった。春雨は施設所属になってから1回くらいしかやったことがないこと。平和だからこそ出来ること。

そのために参加者を募ったところ、所属している者達殆どが参加する運びとなった。まだ少し身体が痛い松竹姉妹はキツいかもしれないと言うので自室に戻る。
幸せアレルギーだけはどうにもならない伊４７は、誘ってくれてありがとうと深くお辞儀をした後にいつも通り近海に潜りに向かった。
ということで、やろうと考えたのは日向ぼっこである。春雨としては印象深い行為だったりする。初めてこの施設を見て回った時に薄雲とジェーナスがやっていたことであり、その後に一度だけ体験してとても気持ちよかったという記憶がある。
まさに平和の象徴。何をするでも無く、ただ寝転ぶだけ。時間があり、何かする必要が無い時にしか出来ないことだ。
「こういうことは鎮守府でも出来ないことだからねぇ。落ち着くっていうよりは、平和だーって実感出来る行為だね」
みんなで持ち寄ったビニールシートの上に腰掛けたり横になったり。白露は早速横になって空を見上げる。そのままグースカ眠ってしまいそうな雰囲気。
白露は元から割とおちゃらけている雰囲気がある者ではあったが、その実、緊張感もしっかり持っている良くも悪くも春雨の姉だった。だがもう緊張感はいらない。寝転がってまったりとしても誰も何も文句は言わない。
「日向ぼっこは気持ちいいぴょーん！　ジェーナスちゃんも寝っ転がるぴょん！」
「そうね、シラツユ、お隣Ｏｋａｙ？」
「おー、おいでおいで」
白露の隣に横になるジェーナスとミシェルも、その気持ちよさにすぐさま眠ってしまいそうになっていた。
この３人は哨戒でチームであったため、仲の良さはそこで育まれている。当時は深夜哨戒がフラグだとか言われていたものの、もうその心配はない。そもそも哨戒なんてしなくてもいいのだから。
「たまにはトレーニングを休んで、ゆっくりするのもいいわね。明日からはまた鍛えなくちゃ」

「大鳳さんは戦いが終わってもトレーニングは続けるんですね」
「ふふ、私の趣味みたいなものだもの。戦う必要が無いとしても、トレーニングが楽しいからするの」
　大鳳も日向ぼっこに興じているものの、明日からはどうやって身体を鍛えようかと考えているようだった。古鷹が苦笑するものの、大鳳はそれが平常運転だと笑顔で返す。
「なら私も付き合わせてください。鍛えておきたいので」
「いいわよ。貴女は戻れるようになったら鎮守府に戻るんだものね」
「はい。それまでに鈍っていたら、提督に迷惑をかけてしまいますから」
　古鷹はもう先のことを見据えていた。今でこそまだ鎮守府に戻ることは出来ないが、遠くない未来に戻ることが出来る。ならば、それまではこの施設で少しでも鍛えておきたい。スタミナ不足はどうしても足を引っ張るため、それを打開するためにも。
「……まぁたまにはいいんじゃないの」
「ですよね。叢雲姉さんも今日一日はまったりしてください。甘いものもしっかり用意させてもらいましたから」
「あら、気が利くじゃない」
　叢雲は横にはならなくとも腰を下ろし、薄雲が用意したクッキーを頬張る。日向ぼっこというよりはピクニック。
　黒幕が消滅したことで叢雲の中で燃え滾る怒りの炎はかなり鎮静化している。ふとした弾みで燃え上がることもあるだろうが、おそらく戦いの時とのギャップが一番あるのは叢雲では無いだろうか。宿敵、怒りの根源がいなくなったことで燃え尽き症候群になるかもと危惧されたものの、そんな自分に対して怒りが向くので心配はない。
　薄雲も叢雲が隣にいれば寂しさが溢れるようなことはないだろう。一種の依存かもしれないが、姉妹の存在が寂しさに大きく影響を与えることは春雨でも実証済み。大きく緩和されているのは確かだ。
「ささ、春雨姉さんもこちらへ。この平和を満喫する権利を最も持っているのは、やはり先の戦いを終わらせた者たる春雨姉さんです」
　みんなが思い思いにまったりしている中、やはりと言えばいいか、

海風が春雨のためにビニールシートを敷いて手を差し伸べる。
「ありがとう海風。一緒にゆっくりしようか」
「お供させていただきます。やはり春雨姉さんの隣が今の海風には一番落ち着ける場所ですから。そう、この太陽の光よりも温かな春雨姉さんの温もりがあれば、海風はそれだけで歓喜に震えてしまいますね。あの戦いで全ての力を失ってしまったとしても、春雨姉さんの威光は消えるどころか増しているくらいです。艦娘の時の優しさや朗らかさを取り戻しつつ、深海棲艦と化して手に入れた凛々しさも残しているのですから、今の春雨姉さんはまさに完璧（パーフェクト）と言ってもいいのではないでしょうか。平和を満喫するためのこの時間を仲間に提供しようと提案したその優しさもそれに繋がりますね。自分以上に仲間のことを気遣うその献身の心も、私としては見習いたいところではあります。ああでも、私は我儘かもしれません。春雨姉さんのその優しさを自分に向けてほしいという気持ちが強くなってしまうのです。分け隔てない愛を持つ春雨姉さんだからこそ、今の春雨姉さんがあるわけですから、私の一存で春雨姉さんの良さを違えるわけにはいきません。なので、今は傍に置いてくだされば私は満足です。常に置いてもらっている状態ではありますが、これからもずっと、ずっとその隣を私にいただけたらなと」
相変わらずだが、これも平和の象徴。海風の口が回れば回るほど、春雨にとっては平和。
海風だって絶対に消えないトラウマを抱えてしまっている。そして、それを癒せるのは春雨だけ。ならば、今この時間でも海風の心のために、春雨が隣に立つことがベスト。
「いいよ海風。ここにいる間、ううん、鎮守府に戻ることが出来ても、一緒にいようね。寂しい思いはさせない。だから、私も寂しくない」
海風の頭をそっと撫でた後、春雨は海風の隣に腰掛けた。ここぞとばかりに海風は春雨に身体を傾け、その温もりを享受し、春雨もそれを受け入れた。
「賑やかになったものね」
その光景を眺めながら、飛行場姫はボソリと呟いた。春雨が一員と

なり、そこからあれよあれよと人数が増え、今や当時の倍以上。そのうち戦艦棲姫と空母棲姫は旅に出るし、遠征にも向かってもらうにしても、人数が増えていることには変わりない。
普段ならここまでワイワイガヤガヤと庭が埋まることはないだろうが、今は当時のことが思い出せないくらいに賑やかだった。
「本当に、楽しい施設になったわぁ」
中間棲姫もニコニコしながらその光景を見ていた。来る者拒まずの精神で受け入れていった結果、被害者全員を救い出して、今や全員が和気藹々と過ごすことが出来ている。そんな光景がとても楽しくて温かい。
目標である『楽しく生きる』ことが、今ここでは正しく再現出来ている。
「最初は空っぽだった私も、みんなのおかげで満たされたわぁ。本当に感謝しかないわねぇ」
「もう姉さんは空っぽなんかじゃないわよ。充分満たされてる。それはもう隙間なくギッチリと」
「ふふ、そうねぇ。みんなが私を埋め尽くしてくれたわぁ。こんなに楽しいんだもの」
ただの器から始まった中間棲姫も、今や満たされた姫。この賑やかな元艦娘達のおかげで、新たなる個を完璧に定着させた。もう元より黒幕が入り込む隙間なんて無かったのだ。
「姉姫様、妹姫様、お二人もゆっくりしませんか？」
「そうねぇ、それじゃあお言葉に甘えて、今日は私達ものんびりしましょう。妹ちゃんもたまには、ね」
「ええ、気を張っても仕方ないもの。今日は何も考えずにグダグダするわ」
春雨に呼ばれて、姉妹姫も庭に寝転がった。滅多にすることのない行動に、今の施設の平和を噛み締めることが出来た。
空を見上げれば、雲一つない青空。施設の行く末を暗示するかのよ

うに明るい。